

# プリキュアオールスターズif

鳳凰009

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

砂漠の王デューンは、完全に力を取り戻し、世界は砂漠化し沈黙した・・・

薫子を救う為、デューンを倒す為、プロツサム達は惑星城を目指す！

そして地上では、歴戦の少女達が動き出そうとしていた・・・

絆を深めたプリキュア達は、新たな仲間達を加えながら、襲いかかる闇の使者達に立ち向かう!!

以前、P i x i v、T i n a m iで投稿していた作品です（現在は削除済み）

尚、十二話、六十三話は今回の為の書き下ろしで、第九章以降は未発表作品になります

# 目次

第一章：砂漠の王とプリキュア達！	
第一話：悪夢	1
第二話：伝説の戦士再び！	6
第三話：新たなる力の目覚め！	19
第四話：挫けぬ心！	35
第五話：集結！プリキュアオールスターズ！！	54
第六話：憎しみの心	75
第七話：HEART GOES ON	104
第八話：凄い事をしてしまった！	
第二章：深まる絆	131
第九話：TAKO、タコ、たこ!?	156
第十話：プリキュアになって・・・	172
第十一話：バラの楽園	181
第十二話：ムーンライト伝説！	198
第十三話：せつなの帰還	239
第三章：闇の救世主！	
第十四話：ひかりの不安	268
第十五話：闇・・・蠢く	274

	第十六話：不協和音	307
	第十七話：プリキュアVSプリキュア	
	(前編)	343
	第十八話：プリキュアVSプリキュア	
	(後編)	365
	第十九話：姉と妹!	407
423	第二十話：プリキュアの逆襲!	
	第二十一話：メロディ覚醒!	465
	第二十二話：カオス!	497
516	第二十三話：光と闇のハーモニー	
	第二十四話：プリキュア引退!?	
	第四章：闇の少女達	551
	第二十五話：甦る少女達	566
	第二十六話：全員集合!	581
	第二十七話：パンドラボックス	
601	第二十八話：思い出を胸に!	624
	第五章：新たなる戦士	
	第二十九話：その名はビート! (前編)	
	(後編)	643
663	第三十話：その名はビート! (後編)	
	第六章：新たなる闇・その名はノイズ!	

	第三十一話：新たな仲間！キュア ミューズ!!	676
	第三十二話：コスプレ大会!?	715
	第三十三話：メイジャーランドを救え	740
	!	
	第三十四話：ハウリング	780
	第三十五話：奪われたキュアモジュー	804
	レ	
	第三十六話：決戦の朝!	845
	第三十七話：ノイズ・・・復活!!	
875	第三十八話：世界に響け！幸せのメロ デイ!!	902
	第七章：三人の魔人とバッドエンド王国	
	!	
	第三十九話：甦る魔	954
	第四十話：伝説の戦士プリキュア!	988
	第四十一話：新たな五つの光!	1019
	第四十二話：妖精会議!	1053
	第四十三話：頼れる先輩	1095
	第四十四話：集え！プリキュアオール スターズ!!	1120
1167	第四十五話：親睦を深める少女達	



ヘンランド！

1709

第六十三話：外伝！時の旅人！！

1723

第八章：絵本の世界の冒険！

第六十四話：なぎさのアルバイト

1767

第六十五話：のぞみとみゆき！

1793

第六十六話：世界絵本博覧会！

1810

第六十七話：プリキュアVS絵本の

キャラクター達！

1856

第六十八話：少女達の冒険！（前編）

1894

第六十九話：少女達の冒険！（中編）

1916

第七十話：少女達の冒険！（後編）

1951

第七十一話：ポップの作戦！

第七十二話：魔王の影

第七十三話：キュアハッピー・・・絵本

の世界に死す!?

第七十四話：みゆきとニコ

第七十五話：笑顔とスマイル

第七十六話：プリキュアショー!?

213620972059

2152

第九章：魔王と王女とバッドエンドプリ

キュア！

第七十七話：悪のプリキュア!?

2196

第七十八話：魔王と少女達（前編）

2221

第七十九話：魔王と少女達（後編）

2269

第八十話：真琴くキュアソードく

2302

第八十一話：捕らわれたプリキュア（前

編）

第八十二話：捕らわれたプリキュア（後

2340

編）

第八十三話：バッドエンドプリキュア

V S ダークプリキュア5

第八十四話：真琴の学校デビュー

2452

第十章：六人目のスマイルプリキュア！

第八十五話：妖精学校からの招待状！

第八十六話：困惑のアン王女

第八十七話：あゆみちゃんって・・・誰

第八十八話：あゆみの涙とエコーの決

!?

意

2555

2529

2498

2481

2364

2408



第八十九話：キュアエコー・・・最後の戦い!? | 2577

第九十話：バッドエンドプリキュアと

プリキュア達（前編） | 2624

第九十一話：バッドエンドプリキュア

とプリキュア達（後編） | 2645

第九十二話：美墨なぎさとバッドエン

ドプリキュア! | 2690

第九十三話：レインボーバーストVS

バッドエンドバースト | 2711

第九十四話：ロイヤルレインボーバ

ースト | 2749

第十一章：プリキュアと魔界の戦士達

第九十五話：魔界からの訪問者!

2790

第九十六話：歌姫VS音姫! |

2815

第九十七話：シーレインの誤算

2842

第九十八話：お婆ちゃんとの思い出!

2870

第九十九話：名乗れぬ者達 |

2896

第一百話：神様からの警告 |

2920

第一百一話：呪われたプリキュア!

2946

第一百二話：プリキュアの為に・・・

2983

第百三話：アンジューキュアエース

3342

第百四話：シャツクスの罠

第百十三話：Wピース

3382

第百五話：三つの誤算

第百十四話：夏休みの終り・・・

3431

第百六話：マーチ！怒りのインパクト

第百十五話：お仕事再開

3463

!!

第百七話：ブラック、ホワイトVS伝説

バッドエンドプリキュア（前編）

3111

の妖精メラン

第百八話：水着泥棒は誰!?

3490

第百九話：少女達は・・・

第百十七話：スマイルプリキュアと

バッドエンドプリキュア（後編）

第百十話：それぞれの特訓

3543

第百十一話：ブルーの大失態

第百十八話：落ちてきた魔法つかい

第百十二話：プリキュア合宿終了

3591

33093261322831833150

第一百十九話：妖怪オールスタース対プ

リキュアオールスタース!? —— 3627

第一百二十話：ニクスとリリス（前編）

3677

第一百二十一話：ニクスとリリス（後編）

—— 3713

第一百二十二話：マザーラパーパ

3742

第一百二十三話：魔界の予言者 —— 3778

第一百二十四話：次世代を担う少女達（前

編） —— 3819

第一百二十五話：次世代を担う少女達（後

編） —— 3877

第一百二十六話：魔法界を救え —— 3933

第一百二十七話：四つ葉町の危機

3977

第一百二十八話：魔王・・・死す!?

4012

第十二章：魔王と魔王

第一百二十九話：魔界の予言者再び

4048

第一百三十話：竜王バハムート ——

第一百三十一話：前代未聞 ——

第一百三十二話：十二の魔宮（前編）

4136

第一百三十三話：十二の魔宮（中編）

41024075

4194 第三百三十四話：十二の魔宮（後編）

4243 第三百三十五話：悪魔王ゼガン |

第三百三十六話：シャイニールミナスと

ミルキイローズ

4345

4300

# 第一章：砂漠の王とプリキュア達！

## 第一話：悪夢

砂漠の王、デューンが遂に完全に力を取り戻し、地球は完全に砂漠化した。心の花を奪われた人々は結晶化し、地上にはデューンが送り込んだ、まるで古代の神話に登場するミノタウロスの身体に、何匹もの大蛇を身に纏ったような姿を想像させる、数十体ものデザートデビルが、我が物顔で闊歩する絶望的な状況であった。

花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつき、月影ゆりの四人は、それぞれ、キュアブロッサム、キュアマリン、キュアサンシャイン、キュアムーンライトに変身し、つぼみの祖母キュアフラワー事花咲薫子の救助、そして、砂漠の王デューンを倒す為、薫子の妖精コツペと共に、デューンの居る惑星城へと乗り込んだ。

時を同じくして・・・

美墨なぎさは、目の前のありえない状況に呆然と立ち尽くしていた。

ドックゾーンでの出来事では無い、現実に一昼夜にして、自分の住んでいたマンションが砂漠化し、愛すべき家族、父岳、母理恵、弟亮太の三人は結晶化していた。何とか

砂地獄を掻き分けて外に出たなぎさに、更なる追い打ちが掛かる。見知った景色はそこに無く、街は完全に砂漠化し、人々の殆どが結晶化するという、非現実的な出来事を……「う、嘘でしょう？何なのよ、これは!?!ありえない……絶対にありえなくらい!!」

頭を抱え、目の前の信じられない状況にパニックるなぎさであった。

なぎさはこの時17才の高校二年、本来ならクリスマスマスも終わり、楽しい冬休みを迎える筈だったのが、砂漠の王デューンの宣戦布告、そして、地球砂漠化の波は、なぎさの住む街をも飲み込み、なぎさの住むマンションも、大切な家族まで結晶化した現実には、ただ呆然とするのみであった。なぎさの怒りの視線の先には、遙か向こうで闊歩する、巨大なデザートデビルに向けられる。

「お前か……!!お前がこんな風に……」

なぎさの目に涙が溜まる……

拳を握りしめ振るわせる……

目の前に敵が居る……

だが、メツプル、ミツプル、ポルン達が、光の園に戻ってから約二年、何度か遊びに来た事はあっても、ジャアクキングとの決戦後以降、キュアブラックに、プリキュアになる事は無かった。

今の彼女は、無力だった……

「目の前に．．．目の前に敵が要るのに、何も出来ない何て．．．ほのかと一緒に、プリキュアにさええなれば、あんな奴．．．そ、そうだ、ほのかは!?! ひかりは!?! みんなは無事なの!?!」

なぎさの言うほのかとは、互いにプリキュアとして戦った大切なパートナー、キュアホワイト事雪城ほのか、ひかりとは、なぎさ達の後輩で、シャイニールミナス事九条ひかりの事である。

右手で涙を拭きながら、なぎさはほのか、ひかりの身を案じた。今は自分の出来る事を最優先させようと、なぎさはほのかの家に向かい走り出した。本来ならほのかの家には、電車で遊びに行く程離れている。しかし街の全ては砂漠化、都市機能は完全に麻痺していた。そこら中には、まるで結晶が墓標のように佇み、なぎさにとって悪夢のような状況が続いていた。

どれくらい走ったのか、なぎさにも分らなかつたが、なぎさの視線の先に動く人影が見えてくる。

(エッ!?! 私以外にも無事な人が．．．あれって、ほのか!?!)

なぎさにとって、見知ったシルエツトが徐々に近づいてくる。長い蒼髪を靡かせ、ほのかもなぎさを見つけて駆け寄る。

絶望な状況の中、なぎさはとほのかは再会した。

この二年の間に二人も成長し、なぎさは、ボーイツシユさは残っているものの、女性らしさを醸しだし、ほのかは更に背が伸び、胸の膨らみも増し、色気を醸し出す女性へと成長していた。

「ほのか、無事だったんだ！良かった・・・良かったよ〜」

「うん、なぎさも無事で良かった・・・でも、この状況は・・・」

ほのかは、なぎさと会えた喜びもつかの間、辺りの状況に眉を潜める。この世の終わりを思わせる、絶望的な風景に・・・

なぎさと出会い、安心したのも束の間、ほのかの心を不安が蝕みはじめ・・・

「どうしてこんな状況になっちゃったんだろう・・・」

ほのかは辺りを見てポツリと呟くと、なぎさもほのかの言葉に同意する。

「本当だよねえ・・・あの戦いの後、平和になったと思っていたのにさあ」

「うん、私達が戦ってきた事は・・・無駄になっちゃったのかなあ!?」

ほのかポツリと本音を漏らすと、なぎさは答えに窮した。プリキュアとしてジャアクキングと戦い、光の園、そして、虹の園と呼ばれる自分達の住むこの世界を守ってきた。だが、この世界は砂漠化した。自分達のしてきた事は、無駄になっちゃったのか？

（そんな事無い！そんな事無いよ!!私が、ほのか、ひかりが、メップル、ミップル、ポ



ルン、ルルン達と戦ってきた事が、無駄になる何て絶対ありえない!!」

「ほのか、ここで悩んでいても仕方ないよ・・・ひかりの所に行ってみよう!」

「そ、そうね・・・ひかりさんの所に行きましよう!」

ほのかも同意し、ひかりの居ると思われる、なぎさとほのかの先輩である、藤田アカネの店TAKO CAFEのある公園に向かおうとした。だがその方角に、巨大なデザートデビルが近づきつつある事に、二人は驚愕する。

「あ、あいつは!?!ひ、ひかりく、アカネさん、ひかる、無事で居てよくく!!!」

「な、なぎさ、あれが街を砂漠化したり、人々を結晶化させた元凶なの?」

ほのかは初めてデザートデビルを見たようで、その巨大さと不気味さにたじろいだ。

「私にもわかんないよ・・・でも、そうとしか思えない!急ごう、ほのか!!」

「うん、ひかりさん、無事で居てね!!」

なぎさとほのかは、急ぎTAKO CAFEに向かい走り出した!!

第一話：悪夢

完

## 第二話：伝説の戦士再び!

九条ひかりは、弟のひかるを左手で庇いながら、近づいてくるデザートデビルに恐怖していた。逃げ出すのは簡単だが、ここにはひかりにとって大切な恩人、アカネが結晶化しているのだ。アカネを置いて逃げる訳にはいかないと、ひかりは考えていた。

「ひかる、あなただけでも此処から逃げて!」

ひかりは、弟ひかるに逃げるように言うが、ひかるはひかりの側から離れようとはしなかった。ひかりは、ひかるの手を握り優しく微笑む。

光の園のクイーンと分離し、一人の女の子、九条ひかりとして生活してきて約二年、ひかりは様々な事を学び、成長してきた。なぎさとほのかと出会い、自分の居場所を見付けたように、弟ひかるも、ひかりという居場所を見付けたのであろう。

(この子を、そして、アカネさんを守らなきゃ・・・クイーン、私に、私に力をお貸し下さい!!)

ひかりは、無駄かも知れないが、心の中でクイーンに祈った。その時、天空に虹色の光が舞い降りる。

「ひかりく・・・会いたかったポポく!!」

ひかりは上空を見上げ、懐かしく、愛しい大切な仲間、ポルンを見付ける。ひかりの口元に自然と笑みが浮かんだ。

「ポルン！来てくれたのね．．．それにメツプル、ミツプル、ルルンも！」

ポルンと一緒に、メツプル、ミツプル、ルルンもやって来た。四人の妖精達は、ひかりとの再会を喜んで居るかののように笑顔を浮かべ、

「ひかり、待たせたメポく！クイーンから、虹の園に危機が迫っていると聞き、駆けつけてきたメポく．．．あれえ!? なぎさとほのかはどこメポ？」

ひかりは首を横に振り、メツプルとミツプルに、なぎさとほのかにはまだ会っていないと答える。

「なぎささんやほのかさんの事だから、無事だと思うけど．．．今はその前にやるべき事があるの！お願いポルン、あの邪悪な者を止める力を、私に貸してえ!!」

メツプル、ミツプル、ポルン、ルルンの四人は、ひかりの視線の先をゆっくり見上げて驚嘆する。

「じゃ、邪悪な気配はあれだったミポ!? お、恐ろしいミポ．．．」

「あれは、ドックゾーンの奴らとも違う感じがするメポ！ひかり一人じゃ．．．なぎさ達は何やってるメポ！」

メツプル、ミツプルが、不安そうにひかりを見る。ルルンは恐怖のあまりポルンに縋

り付き泣き出す。ポルンも泣きそうな表情になるが、

「ひかり・・・変身するポポ!!」

そう言うと、ポルンはタッチコミュニケーションに変化する。ひかりはポルンを手に持ち頷くと、

「ルミナス! シャイニングストーリーム!!」

ひかりの掛け声と共に、ひかりの身体を光が包み込んでいく。神々しい光と共に、シャイニールミナスがその姿を現わす。

「光の心と光の意志、全てをひとつにするために!」

約二年ぶりにシャイニールミナスに変身したひかりだが、二年振りに変身した姿には、少女の姿から少し大人びた雰囲気醸しだし、更なる気品と美しさを漂わせていた。

ルミナスは、後ろをチラッと見ると、

「メツプル、ミツプル、ひかるとルルンをお願い! 何とか私一人で防いでみます!」

メツプルとミツプルは、ルミナスに言われた通り、ルルンとひかるとルミナスから遠ざけると、

「ルミナス、無理はするなメポ! なぎさ達は必ず来てくれるメポ!!!」

「それまで、何とか持たせて欲しいミポ!」

ルミナスは頷き微笑むと、キツとデザートデビルを見つめる。ルミナスの光の力を嫌

がったのか、デザートデビルは凄まじい雄叫びを上げると、ルミナス目掛け攻撃を開始する。巨体から繰り出されるパンチを、懸命にかわすルミナスだが、衝撃波だけで身体が飛ばされそうになる。バリアを張り、衝撃波に懸命に堪えるルミナス、デザートデビルは、ルミナスの張ったバリアを、お構い無しで攻撃し続ける。ルミナスは必死の形相で何とか攻撃を受け続けた。

(な、何て力なの？このままじゃ何時か・・・)

ルミナスは一旦大きく仰け反り、間合いを取った。砂漠化した地上は、足を滑らせやすく、無闇に動き回るのは、かえって危険かも知れないと悟る。

デザートデビルは、両肩の蛇を操り、更なる攻撃を繰り出そうとしていた。咄嗟にルミナスは、ハーティエル・バトンを構え叫ぶ。

「光の意思よ、私に勇気を！希望と力を!!」

ルミナスがバトンをクルクル回転すると、バトンが弓状に変形する。

「ルミナス！ハーティエル・アंकクション!!」

ルミナスは、掛け声と共に、弓状に変形したハーティエル・アंकクションを、デザートデビルに向けて飛ばした。ルミナスの技を受けたデザートデビルの動きが止まる。何事が起こったのかと戸惑うデザートデビルは、更に怒りの雄叫びを上げた。

その時、ルミナスの後ろから頼もしい声が届いてきた。

「ひかりい〜、無事なの!？」

息を切らせながら、なぎさとほのかが到着した。ひかりがルミナスの姿なのに驚いた二人だったが、メツプル、ミツプル、ルルンの姿を見付け、更に驚き、

「メツプル!？」

「ミツプル! それにルルンも!？」

なぎさとほのかは、メツプル達の側に駆け寄ると、メツプルは、宙に飛び上がりながら、

「なぎさ、遅いメポオオ! 話は後メポ・・・変身メポ!!」

「ほのか! ルミナスを助けて欲しいミポ!!」

メツプルとミツプルが、ハートフルコミュニケーションに変身し、なぎさはメツプルを、ほのかはミツプルを受け取る。

「分かってる! いくよ、ほのか!!」

「うん!!」

なぎさとほのかは、互いを見つめ頷きあうと、ハートフルコミュニケーションに手をかざし、互いの手を取り合って同時に叫ぶ。

「デュアル・オーロラ・ウェーブ!!!」

二人の身体をオーロラが包み込み、なぎさとほのかを、プリキュアへと変えていく…

「光の使者・キュアブラック!!」

「光の使者・キュアホワイト!!」

「ふたりはプリキュア!!!」

「闇の力の僕達よ!」

「とつととお家に帰りなさい!!!」

なぎさとほのかは、約二年ぶりにキュアブラック、キュアホワイトに変身した。その姿からは、ジャアクキング率いるドツクゾーンとの戦いを潜り抜けてきた、歴戦の勇士の風格すら醸し出していた。

「ルミナス、お待たせ!」

「ルミナス、無事で良かったわ!あれがブラックの言つてた敵なの!」

ルミナスの前に二人が降り立ち、声を掛ける。ルミナスは、二人を見てホツとした表情になるも、直ぐに険しい表情になる。

「はい、あの者から感じるのは、破壊と殺戮……このまま放置する訳にはいきません!」  
「そうだね、この街を、人々を滅茶苦茶にした事を、あいつに後悔させてやらなきゃね!」  
ルミナスは、ルルンやひかるを守って!あいつは私達で止めてみる!いくよ、ホワイト!!」

ブラックが、デザートデビルの顔面目掛け一気にダツシユする。成長した二人の力

は、以前とは比べものにならない程強くなっていた。だが、巨大なデザートデビル相手に、ブランク空けの二人が戦えるかは未知数であった。ホワイトは、デザートデビルの足に目掛け、強烈な飛び蹴りを当てるも、さしたる手応えは感じなかった。

(これだけの大きな相手に、個々での攻撃じゃ効果は期待出来ないかも知れない……)  
「ブラック、そつちはどう?……って何してるの!」

デザートデビルの両肩に居る蛇から、必死に逃げ惑っているブラックを見て、ホワイトは呆れたように突っ込む……

「だつてえ、蛇が居るなんて聞いてないよおお!無理、ニヨロニヨロ系は、ありえなくくい!!」

逃げ回るブラックを、執拗に追いかけて回す蛇の群れに、ブラックは悲鳴を上げて逃げ惑う。

「ブラック、何やってるメポ〜!」

「私だつて、好きで逃げてるんじゃないわよおお!」

ホワイトはやれやれといった表情で、ブラックを救助に向かう。突進する蛇を捌き、同士討ちにさせたり、絡ませたりしてブラックを援護する。

「ホ、ホワイト、ありがとう……よおし、蛇さえ居なきや……ダアアア!!」

蛇の群れから解放されたブラックが、再び雄叫びを上げ、デザートデビルの顔面に突



進する。

「ダダダダダアアア!!」

ブラックの怒濤のパンチが、連打でデザートデビルの顔面にヒットするも、デザートデビルは五月蠅いとばかりに手で追い払い、ブラックが吹き飛ばされる。

「ブラック！大丈夫!?!」

一瞬間の出来たホワイトに、デザートデビルの蹴りが当たる。

「キヤアア！」

二人は砂漠に叩き付けられるが、幸いにも砂漠がクッションになり、ダメージを軽減する。

「やれやれ、やっぱりブランク明けて、私達身体が鈍っちゃったかな?」

「フフフ、そうね・・・でも!」

更に蹴りを繰り返すデザートデビルの攻撃を、回転しながら躲したブラックは、ホワイトの側に降り立った。

「ホワイト、こうなったら一気にいこう!」

「そうね、持久戦じゃこつちが不利ね・・・」

ブラックの言葉にホワイトも同意し、二人は手を繋ぎ合い目を瞑った・・・

「私達の目の前に、希望を!」

「私達の手の中に、希望の力をー」

ホワイト、ブラックの言葉を聞き入れたように、金色の光が、ブラックとホワイトの下に集まってくる。ブラックの右手に、ホワイトの左手に、スパークルプレスが装着された。アイコンタクトした二人は、手を握りあい叫ぶ!

「ブラック、サンダー!」

「ホワイトサンダー!」

「プリキュアの、美しき魂が!」

「邪悪な心を打ち砕く!」

「プリキュア! マーブルスクリュー・・・」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて前に突き出すと、

「マックスス〜!!」

二人の掛け声と共に、必殺技プリキュア・マーブルスクリューマックスが、デザートデビルに向けて放たれた。凄まじい稲妻のようなエネルギーが、デザートデビルに直撃するも、デザートデビルは、両腕をクロスさせ攻撃を受け止め、ちよつとずつ前に押し戻してくる。

「クツ、こいつ本当に強い! でも、でも、私達は・・・負けれないのよおお!!」

「ええ、負けない! 私達は、絶対に負けない!!」

ブラックとホワイトの繋いだ手に、更に力が込められる。それに呼応するように、二人のスパークルブレスが発動すると、それに合わせるように、二人が再び声を揃えて叫ぶ！

「スパークルクウウ!!」

二人の掛け声と共に、稲妻は虹のエネルギーに代り、強烈な虹は、あつという間にデザートデビルを飲み込んだ。その凄まじき力を受け、デザートデビルは完全に消滅した・・・

「ハア、ハア・・・か、勝った！これで街も元に・・・!?!」

ブラックは肩で荒い呼吸をし、ホツとしたのも束の間、辺りを見渡し険しい表情を浮かべると、

「そ、そんなあ!?!敵は倒したのに・・・何で、何で砂漠のままなの?」

ブラックは膝から崩れ落ち、拳を砂に叩き付け悔しがらる。ホワイトも呆然とし、パートナーのメツプル、ミツプルも、二人に掛ける声が見当たらなかった。

(そんな、敵を倒しても元に戻らないなんて・・・一体どうしたら?)

ルミナスも、どうしたら良いのか為す術も無く立ち尽くす。その時、ルミナスは懐かしい声を聞いた。

「ルミナス、虹の園が元に戻らないのは、まだ憎しみの連鎖から抜け出せて居ないからで

す。憎しみの連鎖を断ち切らない限り、あの敵は何度でも現れる事でしよう！今、この憎しみの連鎖を断ち切る為、あなた方と同じ戦士が立ち向かっています。今あなた方に出来る事を考えて下さい！あなた方プリキュアを、光の戦士の力を必要としている人々が、たくさん居る事を・・・」

光の園の女王、クイーンの言葉を聞き、ルミナスにも大まかに今この世界が置かれている状況が分つてくる。ルミナスは、皆にクイーンの言葉を伝えた。

「クイーンがそんな事を・・・私達と同じ戦士が居た何て!?!」

「そうね、でも、その人達と力を合わせれば、この世界を救える・・・そう思いたい!!」  
ブラックが、ホワイトが、まだ見ぬ同士に思いをよせる。

「不思議な事では無いメポ！メツプル達は光の園で暮らしているけど、妖精の世界は沢山あるメポ！伝説の戦士プリキュア達の力を結集させれば、この状況を覆す事もきっと出来るメポ！」

メツプルの言葉にミツプルも同意する。

この状況はきつと何とか出来る・・・

なら、今自分達が出る事は・・・

「行こう、ホワイト！ルミナス！私達の救いを待っている人達が居るなら、その人達を助けに!!」

「ええ、ここで落ち込んでいても何も解決しない・・・行きましょう、ブラック!!」  
「私も力になりたい!でも・・・」

ホワイトは、ブラックの言葉に同意するも、ルミナスはひかるを見て戸惑った。

「そうだね、危険な所にひかるを連れて行く訳にはいかないよねえ」

ブラックは残念そうだが、ルミナスのいう事も理解出来た。まだ幼い弟一人を、こんな所に置いていく訳には行かない。ましてや、何があるかも分らない危険な場所には尚更である。

「ルミナス、良かったら私の家でひかるちゃんを預かるわ!幸い、家のお婆ちやまは無事で居るし、話せば預かってくれるわ!」

「良いんですか?ひかる、どうする!?!」

ルミナスの問いかけに、ひかるは戸惑いながらも大きく頷き同意する。

「ひかるは良い子メポ!ポルンやルルンにも見習って欲しいくらいメポ!」

メップルの言葉に、ポルンもルルンも不服そうにする。

束の間の再会を喜び合う仲間達・・・

そして、三人と妖精達は、慣れ親しんだ街を後にする。必ずみんなを、街を元に戻してみせると胸に秘め・・・

第二話：伝説の戦士再び!

完

## 第三話：新たなる力の目覚め！

### 第三話：新たなる力の目覚め！

1、

日向咲と美翔舞は、大空の樹の前に座っていた。巨大な樹は、彼女達の出会いを与えた切っ掛けでもあり、彼女達の憩いの場でもあった。ここから見える景色が大好きだった。だが、今の彼女達にとって、ここから見える景色は、深い悲しみを味合わせるだけであった。何故なら、此処から見える景色は、一面の砂漠なのだから……

「こんな事って……昨日まで楽しいクリスマスだったのに」

「うん、たった一日でこんな風になっちゃう何て……私も咲と同じ、信じられないし、信じたくない！」

咲と舞はこの時中学三年、ダークフォールとの激しい戦いも終わり、普通の中学生として暮らしてきた。中学三年の咲と舞に取って、この時期は高校受験という大事な時でもある。クリスマスという一時の安らぎを得た後は、舞、そして、霧生満、霧生薫と一緒に、猛勉強に明け暮れる計画だった。

だが、それも一日にして、非現実的な世界へと叩き落とされた。咲達の住むこの街も、

なぎさ達と同じように砂漠化し、人々は結晶化していた。そう、二人にとって大切な家族さえ……

ただ一匹、無事だった飼い猫コロネを抱き、ポロポロ咲は泣き続ける。

無事だったコロネを抱いて、変わり果てた我が家、ベーカリーPANPAKAパンの前で、呆然とした咲だったが、大空の樹の前に行けば、きつと舞達に会えると信じ、此処で無事だった舞と会った。出会えた喜びも半減、二人は此処で絶望的な景色を眺め泣いた。

「咲〜! 舞〜!」

突然名前を呼ばれ、驚いた二人が下を見ると、満と薫が手を振りながら登ってきた。

「満!」

「薫さん!」

二人の無事な姿を見て、涙を手で拭き、咲と舞は心底喜んだ。

「此処に来れば会えると思った!」

「咲、みのりちゃんは!」

薫の問いかけに、咲は無言で首を振るのを見て、満と薫は瞬時に理解する。

「私達は、ここに来る前に街を調べてきた!」

「街の至る所に、巨大な足跡が残っていたわ!」



満と薫の話は大体こうだった・・・

二人も目が覚めた時、周りが砂漠化していて驚いた。冷静な彼女達は、どうして一昼夜でこのような姿になったのか、その原因を調べる為街を探索した。街の中は完全に砂漠化し、人々は結晶化していた。二人は、結晶化している人々を注意深く調べると、生体反応はあるように感じ、おそらく結晶の中で、仮死状態にあるのではないかと推測した。更に詳しく街を観察すると、巨大な足跡がそこら中にある事が分った。

「じゃあ、その巨大な何かがこんな風に・・・」

咲の問いかけに満は頷き、

「おそろく・・・私達が調べた限りでは、まだ此処までしか分らない」

四人は改めて眼下の砂漠化した景色を眺めた。

(許せない、この素晴らしい街を、海を、人々を・・・)

咲の心に、沸々と怒りが沸き上がる。その時、大空の樹が発光したかと思うと、中から大事な仲間、フラツピ、チョツピ、ムーブ、フープが姿を現わす！思わず咲達四人はそれぞれ仲が良かった妖精達の名を呼ぶ！それに気付き、妖精達も嬉しそうにしていた。

「咲！舞！満に薫も・・・緑の郷に来ていきなり咲達に出会えるとはラツキーラピー！」

「咲、舞、緑の郷に危機が迫ってるから、力になって欲しいとフィーリア王女が言ってた

「チヨピ……」

妖精達は眼下の景色を見て、見る見る表情が曇ってくる。

「ムーブ達、間に合わなかったムーブ……」

「フープ達、役に立てなかったフープ……」

満と薫の周りで漂っていたムーブとフープが、悲しそうに言うのを、

「ううん、そんな事ない! みんなが来てくれただけでも、私達元気を貰えたよ! ね、舞!!」

「うん、ありがとう! でも、フィーリア王女は他に何か言っただけじゃなかった?」

舞がフラツピとチヨツピを見て聞くと、

「ううん、詳しくはフィーリア王女にも分らなかったみたいラピ……ただ、必ずプリキュ

アの力が必要になるから、咲と舞の力になってくれって頼まれて……」

「それでチヨツピ達は、緑の郷に来たチヨピ」

その時、巨大な地響きが、眼下から近づいてくるのを一同は感じ、目を懲らしてよく

見て見ると、そこにはデザートデビルが、まるで獲物を見付けたかのように、大空の樹

に近づいて来ようとしていた。

「な、何なのあれ? あれが満と薫が言ってた、足跡の正体じゃ!」

「た、多分そうよ! まさか、大空の樹も砂漠にしようとしているんじゃない?」

「そんな事絶対にさせない! 舞、変身よ!!」

「うん！」

フラツピとチョツピが、クリスタルコミュニケーションに変化する。それを受け取った咲と舞が、先端のクリスタルを回し、手と手を繋いで同時に叫ぶ！

「デュアル・スピリチュアル・パワー!!」

二人の身体を光が包み込み、咲と舞をプリキュアへと変えていく！

「花開け、大地に！」

「羽ばたけ、空に！」

二人の姿が完全にプリキュアへと変化する。

「輝く金の花！キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼！キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「聖なる泉を汚す者よ！」

「アコギな真似は、お止めなさい！」

ブルームとイーグレットは、満と薫にムープとフープ、コロネの事を頼み、一瞬足下に力を溜めると、一気にデザートデビルに向かい飛翔する。咲のペットコロネは、飛び立つ二人を心配そうに見つめるのだった。

上空から飛んでくる二人のプリキュアに対し、デザートデビルは、両肩の蛇を徘徊さ

せ、プリキュアを威嚇する。二人のプリキュアは、華麗に攻撃をかくぐり、デザートデビルの懐に飛び込み攻撃する。

「タアアア!!」

「ハアアアア!!」

ブルームが連続でパンチを浴びせれば、イーグレットは蹴りを主体に攻め込むが、二人の攻撃にも、全くデザートデビルは怯まない。逆に二人は、デザートデビルの攻撃を受け吹き飛ばされる。何とか空中で体制を立て直し着地するも、受けたダメージはかなりのようでよろめく・・・

「こんな所で・・・負けない! 負けられない!!」

「ええ、これ以上好きにはさせない!」

ブルームとイーグレットが見つめ合い頷く、互いに手を握り叫ぶ!

「大地の精霊よ!」

「大空の精霊よ!」

二人の身体に、精霊の力が集結する。

「今、プリキュアと共に!」

「奇跡の力を解き放て!!」

「プリキュア! ツイン・ストリーム・・・」

「スプラアアシュ!!!」

強烈な精霊の力が解き放たれて、デザートデビル目掛け炸裂する。だが、デザートデビルは両手をクロスさせ耐えると、二人の攻撃を両手で弾き飛ばし打ち消すと、物凄い咆哮を上げた。

「そんな、私達の攻撃を……」

「掻き消す何て!?!」

驚嘆の表情を見せるブルームとイーグレットを尻目に、デザートデビルが凄まじい攻撃を繰り出す。二人はバリアを張り、必死に堪える。だが、徐々にバリアに亀裂が走った。

それを大空の樹から見つめて居た満と薫は、

「このままじゃ、ブルームとイーグレットが……」

「私達に力があれば……」

ゴーヤーンとの決戦後、精霊の力を受けて甦った二人には、嘗てのような闇の力は残っていないかった。今の彼女達は、プリキュアの勝利を信じ、見ているしか出来ないと思われた……

だが……

「プリキュアが危ないムブ……」

「満、薫、プリキュアを助けてププ」

「変身するムプ!!」

「月の力!!」

「風の力!!」

「我らに力を!!!」

ムープとフープが、それぞれクリスタルコミュニケーションに変化する。驚いた満と薫が思わず眩く、

「あ、あなた達……」

「その姿は!?!」

ムープとフープも、自分達を可愛がってくれる満と薫の役に立ちたいと、常日頃考えていた。ゴーヤーンとの最終決戦時に、自分達にもフラツピやチョツピ達と同じような力が使えると悟る。フィーリア王女の助けもあり、ムープとフープは、それぞれブライト、ウインディの守護妖精へと覚醒したのだった。

満の手にムープが、薫の手にフープが握られる。

「私達もプリキュアに!?!」

「咲と舞を救えるなら……喜んで私はプリキュアになる!」

満と薫が頷きあい、先端のクリスタルを回し、手を握りあい叫ぶ

「デュアル・スピリチュアル・パワー!!」

先程の咲と舞のように、二人の身体を光が覆い、満と薫をプリキュアへと変えていく、満の髪は更にボリュームを増し、両肩辺りで左右に跳ね、薫の髪は、ポニーテールのように束ねられた。

「未来を照らし!」

「勇気を運べ!」

二人の姿が完全にプリキュアへと変化する。

「天空に満ちる月! キュアブライト!!」

「大地に薫る風! キュアウインディ!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「聖なる泉を汚す者よ!」

「アコギな真似は、お止めなさい!」

ブライトとウインディが見つめ合い、頷きあうと、

「コロネ、私達はブルームとイーグレットを助けに行くわ!」

「此処で大人しく待っていて! 必ず二人を助けるから!!」

コロネは低い声でニヤと声を出すと、ブライトとウインディは、足下に精霊の力を蓄えると、苦戦しているブルームとイーグレットの側に一気に飛翔した!!

2、

デザートデビルに苦戦していたブルームとイーグレットの側に、ブライトとなった満と、ウインデイとなった薫が駆けつけた。

「満、その姿?！」

「薫さん、あなた達・・・プリキュアになったのね!」

ブルームとイーグレットの問いに、二人は頷き、四人は笑みを浮かべた。

「よっしゃあ、私達四人の力、見せつけてやろう!!」

ブルームの合図と共に、四人のプリキュアが四方に散る。戸惑うデザートデビルは、蛇を使って四人を威嚇しようとするも、

「風よ!!」

ウインデイから放たれた強烈な突風が、蛇を切り刻み、デザートデビルは苦悶する。

「光よ!」

ブライトから目映い閃光弾が照射され、デザートデビルがよろめく、その隙を逃さず、ブルームとイーグレットが懐に飛び込み、怒濤の連続攻撃を繰り返すと、さしもの巨大なデザートデビルも転倒する。四人が見つめ合い、大きく頷きあうと、ブルームとイーグレット、ブライトとウインデイがそれぞれ手を繋ぎ、



「精霊の光よ！命の輝きよ！」

イーグレットとウインディが同時に叫び、

「希望へ導け！二つの心！」

それに応えるように、ブルームとブライトが同時に叫ぶ！

「プリキュア！スパイラル・ハート……」

「プリキュア！スパイラル・スター……」

精霊の力を凝縮させた、四人のプリキュアが同時に放つ！

「スプラッシュシュ!!!」

四人のプリキュアから放たれた、強烈な同時攻撃を前にしては、デザートデビルは為す術もなく消滅した。

「四人揃えば楽勝ナリ！」

「もう、ブルームたら調子に乗るんだから……ウフフ」

ニッコリ笑みを浮かべながらのブルームの言葉に、イーグレットも思わず微笑むが、  
「まだ油断するなラピ……邪悪な気配は、まだ漂ってるラピ」

フラツピの言葉を受け、四人に再び緊張が走る。四人のプリキュアが戦っていた反対側に遠巻きながら新たなるデザートデビルのシルエットが見える。

「全く、まだ居るの？もういい加減にして欲しいよ……行こう、みんな!!」

四人のプリキュアが、足下に力を溜め飛翔し、新たなるデザートデビルの側に近寄ろうとした時、デザートデビルの身体が消滅した。思わず立ち止まった四人は、状況が掴めず呆然とする。それを見たフラツピは目を輝かしながら、

「もしかすると、フィーリア王女の言ってた・・・ブルーム、みんな、あいつが居た側に行くラピ！」

「フラツピ、何か知ってるの? どういう事!？」

「行けば分かるラピ！」

ブルームは膨れ面をしながらも、他の三人と共に、デザートデビルの居た場所に到達すると、そこには三人のシルエツトが見えた。向こうの三人もこっちに気づいたようで、手を振っているのが四人にも分った。ブルーム達が地上に降りると、そこに居たのは、キュアブラック、キュアホワイト、シャイニールミナスの三人であった。

(何だろう、初めて会うのに、何か懐かしい感じがする・・・)

ブルームの思いは、他のプリキュア達も同じ風に思っていた。

(この娘達、何か私やホワイトに似てるなあ・・・)

ブラックは思わずクスリと微笑むと、

「初めまして! 私はキュアブラック!」

「私はキュアホワイト!」

「私はシャイニールミナスです!」

ブラック、ホワイト、ルミナスが四人に自己紹介をする。慌ててブルーム達も自己紹介をして、二組のプリキュアは互いの交流をした。打ち解けた四人は変身を解き、素顔の自己紹介も始めた。

ほのかは、クイーンが言っていた通り、自分達以外にもプリキュアが居た事に驚きつつも、

「やっぱりあなた達もプリキュアだったのね?クイーンが言った通りだわ!!」

「クイーン……ですか?」

聞き慣れない言葉を聞き、咲が思わずほのかの言葉を繰り返した。メップルも頷き、

「そうメポ!メップル達の光の園を治める女王メポ!この世界には、何か憎しみの力が蔓延してるそうメポ」

「それを打ち消すには、プリキュアの力が不可欠ミポ……力を貸して欲しいミポ」

ミップル、メップルの話を聞いていたフラッピとチョッピも会話に加わる。

「君達は光の園の住人だったラピ……噂には聞いてたラピ」

「チョッピ達は、泉の郷の住人チョピ」

妖精達も打ち解けたようで、なぎさも一安心して本題に入った。

「で、咲さん達にお願いがあるんだけど、プリキュアとして、私達と一緒にあいつらと

戦ってくれないかしら？ 私達と同じように、この世界を守ってるプリキュア達が、他にも居ると思うの！ クイーンは言ってた・・・この世界にはプリキュアの力を必要としている人達が居るって・・・このまま砂漠化したままの状況を嘆いているより、私達の出来る事をしようと思うの・・・協力してくれないかしら？」

なぎさの話を聞いていた四人は、顔を見合わせ頷き、

「私達で出来る事なら喜んで！ 早くこの状況を何とかしないと、落ち落ち受験勉強も出来ませんからね！ 本当は、しない方が良いんだけど・・・アハハ！」

「もう、咲ったら・・・それで、なぎささん達は何処に行くんですか？」

舞の問いかけに、なぎさはエツといった表情になり、ドギマギしているのを見て、ほのかが代りに答える。

「なぎささったらもう忘れたの!?! 私達が戦った巨大な敵が、徐々にある一点に集結しそう何ですって、そこに行けば、地上を砂漠化した敵の目的が分るかも知れない。それに、そこに行けば、私達が出会えたように、新たなるプリキュア達とも出会えるんじゃないかと思うの」

「あつ、そうそう、流石ほのか！ ね、ひかり」

いきなり話を振られたひかりは、ただ笑うしかなかった。ひかりは満と薫が気になっていた。何か自分と同じ境遇をした二人に、二人と会話をしてそれは確信に変わった。

「私と同じように、あなた方も咲さんや舞さんと出会って変わったのですね」

満と薫が頷く、咲と舞が愛するこの世界を救いたい！それは、満と薫の心からの思いだった。突然、咲が大声を出す、

「アツ！いつけない、コロネを忘れてた・・・怒ってるかなあ、コロネ？」

「さ、さあ、大丈夫じゃないかしら？」

苦笑を浮かべながら、舞は大丈夫じゃないかと言うと、コロネと言う言葉に直ぐに反応したなぎさは、

「コロネ？私もチョココロネ大好き何だよね！」

「フフフ、なぎさは、チョコレートなら何だって好きでしょう！」

今にも涎を垂らしそうななぎさの表情を見て、苦笑混じりにほのかが突っ込みを入れる。咲も笑いながら、

「いやあ、コロネは家で飼ってる猫の名前何ですけど・・・でも、家パン屋何ですよ！平和になったら、皆さんにも食べに来て欲しいなあ・・・」

七人の少女達の笑い声が、辺りに響いていた。デザートデビルとの決戦を前に、少女達は一時の安らぎを得た・・・

砂漠の王デューンは、違和感を覚えていた。キュアフラワーの後を継いだ四人のプリ

キュア達は、今この惑星城に乗り込んで来ている。だが、地上に送り込んだデザートデビルの数が、減ったように感じたからであった。

(どういふことだ!? まあいい、まだまだこちらには沢山居るのだからな!)

デューンは、ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライト、四人のプリキュアが暮らす希望が花市に向けて、新たに数匹のデザートデビルを射出する。

「プリキュア共よ、貴様達が私の前に現われる時、それは絶望に変わるのだ! フッフ、ハハハハ」

デューンの嘲笑が、辺りに木霊していた・・・

第三話：新たなる力の目覚め!

完

## 第四話：挫けぬ心！

## 第四話：挫けぬ心！

1、

砂漠に埋もれた街の中を、夢原のぞみと夏木りんは、悲しみの表情を浮かべ歩き続ける。二人が見知った風景はそこに無く、歩けど歩けど、砂漠と人々が結晶化した街の中を、二人は彷徨う……

二人もまた、なぎさ達や咲達と同じく、大切な家族を結晶化されていて、二人の心は悲しみに満ちていた。

「りんちゃん……」

「何？言つとくけど、どうしてこうなつちやつたんだろうとか聞くのは止めてよね！私にだって分らないんだからさ！」

「そうだけど……かれんさんやこまちさん、うちらは無事なのかなあ？」

「だから、知らないって……」

少しイライラしながらのぞみに言うりん、彼女にも、この非現実的な出来事を目の前にして、どうすればいいのか分らなかつた。何故こんな出来事が起こったのか？この時

の二人に知る術は無かった。

のぞみは、何かを思い付いたようにりんの顔をまじまじ見つめると、

「りんちゃん、みんなが無事なら・・・きつとあの場所に来るよ！私達の大切な、あの場所！！」

のぞみの言葉を聞き、ハツとしたりんは我に返った。何故今まで思い付かなかったんだらう？

りんは、イライラしていた自分が恥ずかしく思えてくる。

(そうだね、みんなが無事ならあそこに来るよね・・・)

「のぞみの言う通りだね。此処でくよくよしててもしょうがないよね？行こう、ナッツハウスに！」

「よし！ナッツハウスに行くの・・・行ってらいい！！」

のぞみはりんの手を掴むと、一目散に走り出す。みんななら、きつと無事にナッツハウスに集まっていると信じて・・・

そのナッツハウスには、世界中を旅していたシロップから現状を聞き、シロップの背に乗ってココ、ナッツ、ミルクがやって来ていた。のぞみ達五人と、楽しんで生活してきたナッツハウスのあまりの変わりように、四人の妖精達は呆然とし、悲しみに暮れていた。



「ひ、酷いココ・・・シロップから話は聞いてたけど、此処まで酷い何て思ってたなかつたココ・・・」

「あの美しかった池が砂漠になる何て・・・酷いナツ！」

「そうロプ・・・世界中がこんな風になつてるロプ！」

会話し合う三人には信じられない出来事だった・・・

のぞみ達五人と楽しく過ごしたナツツハウス、だが、目の前にあるのは、思い出を打ち消すような、砂漠に埋もれたナツツハウスだった。何故こんな事が起こったのか、彼らにも理解出来なかつた。のぞみ達は無事で居るだろうか？三人の心を不安が蝕んだ・・・

一方、三人の妖精達の会話を尻目に、ミルクはナツツハウスの前に佇む黄色い結晶を見つめ首を捻っていた。前に来た時はあんな物は無かつた筈である。

「シロップ！あれは何ミルク？」

疑問に思ったミルクは、世界中を旅していたシロップなら何かを知っているのではと問い掛けると、ミルクに呼ばれたシロップも首を捻り、

「シロップにも分らないロプ！ただ、世界中に一杯あつたロプ」

シロップにも分からない物と聞き、興味を惹かれたミルクは、結晶に近づき中を覗いて見る。最初は気付かなかつたミルクだが、見ている内に目が慣れてきて、結晶の中に

人が居るのを悟る。驚いたミルクが騒ぎ出す。

「ココ様、ナッツ様! た、大変ミルク! 結晶の中には、人が居るミルク!!」

ミルクの言葉を聞き、仰天したココ達も結晶の前に近づいて来た。最初は気付かなかった三人も、ミルク同様目が慣れてくると、中に誰か居るのが分った。

「ほ、本当ココ・・・一体どうしてこんな事になったココ!?」

「じゃ、じゃあ、世界中にあつた結晶の中にも、人が居るロプ!?・・・た、大変ロプ!!」慌てる三匹を尻目に、冷静に中を観察していたナッツ、これが人だとすれば、何者かが意図的に世界をこんな状況にしたのは間違いないだろう。色々思案しながら結晶を見るナッツの顔色が、突然凍り付き、驚嘆して驚きの声を上げる。

「た、大変ナッツ! ・・・この中に居るのは・・・うららナッツ!!」

「「エエエエエ!!」」

ナッツの言葉<sup>!</sup>を聞き、ココ、ミルク、シロップがナッツに近づき、四人は変わり果てたうららを呆然と見つめて居た・・・

中に居たのは春日野うらら、嘗てのぞみ達と一緒に、ナイトメア、エターナルと戦ったキュアレモネードである。だが、今のうららは結晶の中で眠つたように目を閉じ、全く動く気配は見られなかった。

黄色い結晶を囲むように、四匹の妖精はどうする事も出来ずに居た・・・

暫くして、ナッツハウスに着いたのぞみとりんは、ココ達がこっちの世界に居る事に驚きながらも、見知った顔に出会い、思わず顔が綻んだ。

「ココ〜！ナッツ！ミルク！シロップ〜!!みんな、こっちに来てたんだ」

手を振りながら近づくのぞみとりんを見て、ホッと安堵するも、ココ達が騒ぎ出す。

「のぞみ〜！りん！大変ココ!!うららが、うららが〜!!」

「う、うららがどうかしたの?!」

四人の尋常じゃない様子に、顔色を変えて近づくのぞみとりんを、焦れつつそうにしていたミルクが、人間界での姿、美々野くるみに変化して急かした。

「うららが、うららが結晶化しちゃってるのよ！早くこっちに来なさい!!」

「エッ?うららが・・・そんな!」

言われるまま近づいたのぞみとりんは、変わり果てた姿になったうららの結晶に縋り付き、涙を流した。自分達の家族だけでは無く、大切な仲間の一人まで・・・

のぞみとりんの心を、深い哀しみが漂った。りんは、うららの顔付近に手を当てると、「そんな・・・うらら、私よ、りんよ!!うらら、返事して!うらら〜!!」

りんの必死の呼びかけにも、うららは結晶の中で微動だにしなかった。呆然としながら、フラフラ結晶に触れるのぞみは、

「嘘だよ・・・こんなの、信じられないよ・・・うらら、うらら〜!!」

のぞみの呼ぶ声にも、うららは全く反応する事は無かった・・・

途方に暮れた一同だが、どうかして結晶からうららを救い出そうと、色々試みては見るものの、自分達の家族同様、うららを助ける事は出来なかった。

「ああ、もう・・・こんな時にかれんやこまちが居たら、何か良いアイデアが出るかも知れないのに・・・のぞみ、りん、あなた達、かれんやこまちとは会ってないの?」

焦れたくるみが、のぞみ達にかれんとこまちに会ってないか聞くと、二人は顔を見合わせながら首を振り、

「のぞみと会った以外は・・・」

「うん、私達もまだ二人に会ってないの・・・此処に来れば、みんなに会えると思ってたのに・・・こんな事になる何て・・・かれんさん、こまちさん、無事で居てね!!」

ナツツハウスに居る一同は、此処に居ない、かれんとこまちの身を案じた・・・

シロップは、仲の良かったうららの変わり果てた姿に、深いシヨックを受けるのだつた・・・

2、

水無月かれんと秋元こまちは、何かに追われるように走り続けた。結晶化した人々が少ない場所を目指して、その後を巨大なデザートデビルが追いかける。二人は、まるで態とデザートデビルの標的になるように仕向けている節が見られた。

「こつちよ！あなたの相手は私達よ!!こまち、もうちよつとで結晶の少ない場所に出るわ！もう少し、もう少し頑張りましょう!!」

「ええ、こんな所で戦って、もしもの事があつたら取り返しがつかないものね!」

二人の姿に焦れたように、時折デザートデビルからビーム攻撃を受けるも、二人は辛うじて躲しながら逃げ続ける。ようやく辺りから結晶が見えなくなった時、二人はデザートデビルの方を振り返る。キツと怪物デザートデビルを睨んだ二人は、改めてその巨大さに思わず息を飲んだ。

「私達二人だけで、あんな怪物とどこまで戦えるかは分らないけど・・・こまち、変身よ!」

「ええ、きつとのぞみさん達も気付いて、駆けつけてくれるわ!」

かれんとこまちは、変身アイテムであるキュアモを手に取り、ボタンを押し同時に叫ぶ!

「プリキュア!メタモルフオウくぜ!!」

かれんとこまちの身体を、それぞれのシンボルカラーである青と緑の光が包むと、二人の身体は、徐々にプリキュアへと変身していく。

「安らぎの、緑の大地!キュアミント!!」

「知性の青き泉!キュアアクア!!」

デザートデビルの前にミント、アクアが立ち塞がる。不愉快さを感じたのか、デザートデビルは物凄い咆哮を上げ二人を威嚇する。ミントとアクアは怯まず、顔を見合わせ頷くと、左右に大きくジャンプして分かれ、着地の反動と共にデザートデビルの両腿に蹴りを見舞うも、デザートデビルは微動だにせず、口から強烈なエネルギー波を吐き出す。アクア、ミントは大きく後方にジャンプし攻撃を躲した。生半可な攻撃じゃ効果は無いと感じたアクアは、水のエネルギーを矢に変え、アクアが叫ぶ!

「プリキュア! サファイア・アロー!!」

アクアから、三本の矢と化した水の矢がデザートデビルに連続で放たれるも、デザートデビルは攻撃を避けようともせず、そのまま直撃する。一瞬やったの? と思ったアクアだが、まるでダメージが無いように、デザートデビルは前進してきて二人を驚愕させる。

「直撃したのに、全くダメージが無いなんて・・・」

アクアが驚きの声を思わず上げる。デザートデビルは、四方から二人を威嚇するように蛇を近づける。嫌な予感がしたミントは咄嗟に、

「プリキュア! エメラルドソーサー!!」

ミントは、光を円盤に変え、四方の蛇からの攻撃に備えた。その予感的中し、四方の蛇からの同時レーザー攻撃を受け、最初は攻撃を耐えていたソーサーに亀裂が入り、

脆くもエメラルドソーサーは破壊され、爆風を受けた二人の身体は上空に飛ばされる。獲物を狙うように、二人目掛けて四方の蛇が二人を攻撃する。

(遣られる!?)

アクアとミント、思わず二人が目を瞑ったその時、巨大な鳥が間一髪二人を救出する。それは、巨大な鳥に姿を変えたシロップだった。

「ロプ〜〜!!」

「シロップ！ありがとう!!」

「シロップさん！助かったわ!!」

二人は、シロップを見て安堵の表情を浮かべお礼を言うが、シロップの表情がどこか浮かないのを見た二人は、顔を見合わせ、何かが起こっているのを悟る。

「一旦ナッツハウスに向かうロプ！」

シロップの言葉に二人は頷き、シロップは、怒りの咆哮を上げるデザートデビルを尻目に、アクアとミントを乗せナッツハウスに向かった・・・

「のぞみ〜！みんな〜!!」

シロップの背の中で変身を解除し、かれんとこまちはナッツハウスに到着した。かれんとこまちの無事な姿を見て、一同はホッと安堵するのであった。かれんとこまちもまた、のぞみとりん、そして、この危機的状况に駆けつけてくれているココ、ナッツ、く

るみに心の中で感謝していた。

「かれんさん、こまちさん、無事で、無事で良かったよ〜!!」

泣きながらかれんとこまちに縋り付くのぞみを、二人は優しく抱きしめた。のぞみが側に居るだけで、二人は不安な気持ち少し解消されたように感じ、のぞみの髪を優しく撫でた。二人は一同の顔を見つめると、

「シロップさんが来てくれなかったら、私達遣られていたかも知れないけど・・・それより、話はシロップさんから聞いたけど・・・」

「あの結晶がうららのなの?・・・こまち!」

かれんはこまちに目配せして、二人で変わり果てたうららの結晶の側に近寄る。最初は二人も分らなかったが、徐々に目が慣れてくると、そこには確かに大切な仲間、うらがが居た!かれんとこまちは、何とかうららを元に戻せる手掛かりを求め、色々調べたが、やはりどうすれば元に戻るかは分らなかった。一同に重苦しい空気が流れる。

かれんの頭の中が、目まぐるしく回転していく・・・

今までの戦いの日々を思い出すように・・・

思案が纏まったかれんは、一同の顔を見つめると、

「もしかしたら・・・もしかしたらだけど、あの怪物を倒せば、うららを、結晶化した人々を、元に戻せるかも知れない!あくまで、今までの戦いからの推測だけど・・・」



かれんの言葉に、一同の表情がパツと明るくなった。何も希望が見いだせない状況に、一筋の光明が差し込んだ気がした。のぞみは、微かな期待が湧いた事で一同を見ると、

「うららを、みんなを、元に戻せる可能性があるなら・・・行こう、みんな！かれんさん達が言つてた怪物を倒し、みんなを元に戻して見せる!!待ってね・・・うらら!!」

「デザートデビルの咆哮は、ナツツハウスの直ぐ近くまで来ている事を皆に知らせる。みんな、油断しないで！あいつは今までの敵とは違うわ!!」

「ええ、かれんの言う通りだわ!」

かれん、こまちの忠告に一同の表情が険しさを増す、だが、どんな強大な相手であろうと、必ず勝つ!のぞみの瞳に闘志が宿った。

「みんな、変身よ!!」

のぞみの合図に一同が頷くと、変身アイテムであるキュアモを手に取り、ボタンを押し同時に叫ぶ!

「[[プリキュア!メタモルフオゥゥゼ!!]]」

のぞみの身体をピンクの光が、りんの身体を赤い光が、こまちの身体を緑の光が、かれんの身体を青い光が、それぞれ包み込み四人をプリキュアへと変えていく。

「大いなる、希望の力!キュアドリーム!!」

「情熱の、赤い炎！キュアルージュユ!!」

「安らぎの、緑の大地！キュアミント!!」

「知性の青き泉！キュアアクア!!」

名乗りを上げた四人に続き、くるみも変身アイテムであるミルキイパレットを手にして、タッチペンのようにボタンを押すと、

「スカイローズ・トランススレイト!」

くるみの身体を、紫と青のような光が包み込みくるみを変身させていく。

「青いバラは秘密の印！ミルキイローズ!!」

プリキュア達が砂漠化したナッツハウスの前に勢揃いし、それぞれ一人一人が結晶化したうららに声を掛けると、ココとナッツ、シロップにうららを託し、デザートデビルに向かって戦いに行く。

一同は気付かなかった・・・

うららの目から涙が零れたのを・・・

3、

うららの心の花が奪われたのは、孤独になる恐怖からだった・・・

エターナルとの決戦後、本音で語れたシロップは、配達の仕事で異世界中を飛び回り、旅立っていたココもパルミエ王国に戻り、ナッツ、ミルクと共に王国の繁栄に精魂込め

ていた。

最初こそ互いの世界を歩き来していたものの、国王として忙しくなったココとナツツ、お世話係のミルクと会う機会も減り、かれんとこまちが中等部を卒業し、高等部に進学、二人はそれぞれ医者と小説家を目指し、猛勉強するようになった今では、会う機会も減り、のぞみとりんも、後数ヶ月で中等部を卒業間近で、中等部に一人残る事になるうららの心に、不安がひしひし大きくなっていった。

元々仲の良かったのぞみとりん、こまちとかれんのような友人は、ナツツハウスの仲間達以外に、うららには居なかった。のぞみ達と一緒に過ごす内に、自分を変えたうららが、唯一と言つていい仲が良い森田よしみとも、仕事の関係で中々親交を深めることが出来なかった。

クリスマス、仕事を終えたうららは落ち込んでいた。このまま家に帰る気分になれず、足の向くまま気の向くまままで、ついついナツツハウスに来てしまった。去年はみんな楽しくクリスマスパーティーをしたのになあと、うららは寂しげに池の湖面を見ていた時、デューンの宣戦布告に遭遇してしまったのだ。結晶化したうららだったが、今自分の為に、この世界の為に、再びプリキュアとして、巨大な強敵に戦いを挑む仲間達の声は届いていた。

（みんな．．私、誤解してました！例え離れていても、みんなとは．．心が繋がって

いる事を！みんな、ごめんなさい・・・本当にごめんなさい！)

うららの心の花が再び咲き始めた時、結晶に亀裂が走った・・・

「キヤアア！」

デザートデビルの強烈なパンチを受けて、ドリームが吹っ飛ぶ！アクアとミントが必死にドリームに抱きつくも、三人は砂漠に叩き付けられる。

「ドリーム！アクア！ミント！」

ルージュが絶叫するも、三人はよろめきながらも立ち上がり、ルージュとローズはホッと安堵する。ルージュは、キツとデザートデビルを睨み付けると、

「よくもドリーム達を・・・プリキュア！ファイヤーストライク!!」

ルージュは、炎のボールを蹴り上げ、デザートデビルを攻撃するも、簡単に手で弾かれてしまう。

「クツ、何て奴!?!」

全くダメージを与えられず、思わずルージュの顔が険しい表情を浮かべると、今度は自分の番だとばかり、

「だったら、これはどう？ 邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう！ミルキイローズ・ブリザード!!」

ローズの攻撃は、青い薔薇の花吹雪となってデザートデビルにヒットする。さしもの

デザートデビルもこの攻撃にはよろめく、このチャンスを活かすようにドリームが大きくジャンプすると、

「プリキュア！シューティング・スター〜!!」

ドリームは腕をX字に組み、自らが光と一体化してデザートデビルに突進する。

「うららを、みんなを、守るんだから〜!!」

ドリームは魂の叫びを上げ、デザートデビルに体当たりした。ドリームの気迫を込めたシューティングスターの前に、デザートデビルはたまらず転倒するも、口を大きく開けてエネルギー波を放ち、ドリームに攻撃しようとする。

「ドリームープリキュア！エメラルドソーサー!!」

ドリームのピンチに、ミントが瞬時に光を円盤に変え、ドリームの前に投げつけ、ドリームをバリアで庇う。デザートデビルのタフさに、一同は一旦距離を置き体勢を整えた。

そこにシロップが飛んできた・・・

「シロップ!?!ココにナッツも・・・一体どうしたの!?!」

まさか、うららの身に何かあったのではと、ドリームが不安そうにシロップを見るが、シロップの背から降り立った人物を見て目が輝く。

「!!!!うららら!!」

少しはにかみながら近づいて来るうらららを見て、五人が同時に声を上げる。皆心から嬉しそうにうららの側に駆け寄った。

「皆さん、心配かけてごめんなさい．．．私も、私も戦います!」

「うらら、大丈夫なの?」

アクアが、うららの体調を気にして優しく声を掛ける。さつきまで結晶化していたうららを、危険な目に遭わせるのは避けた方がいいのではとアクアは思ったのだが、

「ハイ!春日野うらら、皆さんに心配掛けた分も、頑張ります!!」

そう言うと、表情を引き締めたうららが、キュアモを手を持ち叫ぶ!

「プリキュア!メタモルフオーゼ!!」

うららの身体を、黄色い光が覆いプリキュアへと変えていく。

「はじけるレモンの香り!キュアレモネード!!」

レモネードが変身を終えたのを見て、ドリームは微笑むと、仲間達に合図を送り、  
「レモ希望の力と未来の光! 華麗に羽ばたく5つの心! Yes!プリキュア5  
!!」

レモネードが加わり、プリキュア達は遂に六人の戦士が揃った。ココ、ナッツ、シロツプは目を輝かせて、六人の戦士を見つめた。

「みんな、行くよ!!」

「「「YES!」」」

六人が二人ずつ別れる。ドリームとローズ、アクアとルージュ、ミントとレモネード、それを見たデザートデビルは、忌々しそうに蛇で威嚇しようとするも、

「プリキュア!プリズムチェ〜ン!!」

レモネードが、光の鎖で四体の蛇をグルグル巻きにして動きを封じる。それを合図に皆が攻撃を開始する。

アクアとルージュが、右からファイヤーストライクとサファイヤアローを当てれば、正面からドリームとローズが肉弾戦を仕掛ける。嫌がったデザートデビルが、残る二体の蛇で攻撃しようとするのを、ミントのエメラルドソーサーで防ぐ。再度肉弾戦を仕掛けたドリームとローズの攻撃を受け、デザートデビルが尻餅を付く。六人が再びデザートデビルの正面に立った時ココが叫ぶ!

「今ココ!プリキュアに、力を!!!」

ココの頭上にパールミエ王国の王冠が現われ、ココの言葉と共に、プリキュア達に更なる力が与えられると、プリキュア5が叫ぶ!

「クリスタルフルーレ!希望の光!!」

「ファイヤーフルーレ!情熱の光!!」

「シャイニングフルーレ!弾ける光!!」

「プロテクトフルーレ! 安らぎの光!!」

「トルネードフルーレ! 知性の光!!」

五人は、取り出したフルーレを合わせると、

「[[プリキュア! レインボー・ローズエクスプローション!!]]」

五人のフルーレから飛び出した五色の薔薇が合体し、巨大な虹の薔薇になりデザートデビルに向けて突き進む。巨大な虹の薔薇は、デザートデビルを飲み込み消滅させた。

デザートデビルを何とか倒した一同だったが、偵察に出ていたシロツプの報告を聞いて愕然とした。空から見た限り、デザートデビルはまだこの近辺に何体も居る事・・・

「そんな、あんな怪物が何体も居るんですか!? 私達・・・勝てるんでしょうか?」

うららの不安ももつともであった。だが、次のシロツプの言葉を聞き、希望が沸いてくる。

「確かに・・・でも、お前達以外にも、あの怪物と戦ってた奴が居たロプ! 近くで見たわけじゃ無いロプ・・・でも、お前達に似てたロプ!」

「エツ?! 私達以外にもプリキュアが?」

かれんが驚きの声を上げる。他の四人も、プリキュアが自分達以外にも居るとは想像した事すら無かった。だが、そんな彼女達とは違い、ココとナツツは顔を見合わせながら頷き、



「不思議じゃないココ！プリキュアとは、それぞれの妖精の国で伝説の戦士と呼ばれているココ！世界の危機に、のぞみ達のようにプリキュアが戦っているのかも知れないココ」

「私達と同じか・・・シロップ！頼みがあるの!!」

「何ロプ？」

のぞみは、持っていたポシエットから紙を取り出すと、懸命に何かを書き始める。自分達と同じプリキュアなら・・・必ず力を貸してくれると信じて・・・

「これを、私達と同じ志を持つプリキュアに届けて欲しいの！きっと、きっとみんな力を貸してくれるよ!!だって、同じ空の下で、この世界の為に戦ってるんだもの!!!」

のぞみの手紙を受け取り、シロップは飛び立つ！

まだ見ぬプリキュア達の下へと・・・

第四話：挫けぬ心！

完

## 第五話：集結!プリキュアオールスターズ!!

### 第五話：集結!プリキュアオールスターズ!!

1、

四つ葉町の商店街、クローバータウンストリート・・・

ここも例外になく砂漠化していた。だが、他の街とは違い、この街に住む人々の大半は、結晶化する事は無かった。

何故なら此処には・・・

「お母さん、出掛けてくるね!」

「こんな状況なのに?無理はしないでよ、ラブ・・・」

桃園ラブは、母あゆみに無理しないよと応えると、幼なじみで親友の蒼乃美希、山吹祈里との待ち合わせ場所に向かった。

メビウスとの決戦から約一年、平和を取り戻したこの街で、ラブ、美希、祈里は、それぞれキュアピーチ、キュアベリー、キュアパインに、プリキュアになる事は無かったが、この街の人々はプリキュアの存在を認識していて、砂漠となったこの世界を、プリ

キュアならば必ず救ってくれると信じていた。この街の人々の心から、希望が失われる事は無かった。街が砂漠に埋もれながらも、人々は協力して何とか最低限の生活を出来る程にしていた。

ラブ達は、一日にして砂漠になったこの世界を、元に戻す手掛かりを探していた。

(みんなが私達を信じてくれてる！必ず原因を突き止めて、元に戻してみせる！)

ラブが集合場所に到着する・・・

そこは、ダンスユニット、クローバーとしていつも練習に使っていた公園であった。何時もなら此処には、ドーナツを売っているラブ達がカオルちゃんと呼ぶ、橘薫が居るのだが、さすがに砂漠化した現状で、店を開いている事は無かった。

「ブッキー！美希たん！お待ちせえ!!」

「ラブ、遅くくい・・・」

少し時間に遅れたようで、美希は、苦笑を浮かべながらからかうと、ラブは頭を掻きながら、

「アハハ！ゴメ〜ン!!あれえ!?ブッキー、その動物は?」

美希と祈里の側に来たラブは、祈里が鳥に似た動物を太股に乗せ、介護しているのに気付く。祈里は、膝の上の鳥を労るように介抱しながら、

「うん、ここに来る途中で見付けたの・・・幸いたいた怪我じゃないから、私が手当し

ただけど・・・」

祈里の言葉を聞き、ラブと美希が、鳥に似た動物に顔を近づける。二人も初めて見る鳥の姿に、思わずラブと美希は顔を見合わせると、

「でも、何の鳥だろうね？」

「鳥じゃなくて・・・ペンギンかしら!？」

ラブも美希も、首を捻って考えるが分らず、家が獣医をされていて、動物に詳しい祈里に聞くも、祈里も見た事無いと、困ったような表情を浮かべながら答える。三人が見た事が無いのも当然で、傷ついた鳥こそ、のぞみに手紙を頼まれ、プリキュアに届けに向かったシロップだったのだから・・・

シロップは、先ずなぎさ達7人を見付け、のぞみからの手紙を渡すも、手紙の内容はプリキュア求むという簡潔な内容で、なぎさに求人募集かと突っ込まれ説明に困り、なぎさ達7人と、妖精達を背に乗せナッツハウスに送った。その後、ラブ達の居る四つ葉町に向かう途中で、デザートデビルに遭遇して攻撃されてしまい、負傷したままなんとか此処まで辿り着いたところで気を失ったのだった。

「ロ・・・ロプ!？」

「あつ、気が付いたみたい・・・でも、変わった鳴き声だね・・・ロプだって」

ラブがニンマリしながら言うのを、美希と祈里も苦笑しながらもシロップを労る。

目が覚めたシロップは祈里を見て、

「エッ！うららロプ！?・・・ち、違ったロプ！」

シロップはキョロキョロ辺りを見回すも、見知らぬ景色に戸惑っていた。ラブ、美希、祈里の三人は、思わず目を点にしながら顔を見合わせ、

「美希たん、ブツキー、今・・・この子喋ったよね!？」

「え、ええ、確かにあたしも聞いたわ！ねえ、ブツキー?」

「うん！この子・・・もしかして、シフォンちゃんやタルトちゃんの知り合いなのかなあ?」

三人は、改めてジツと観察するようにシロップを見つめると、シロップはしまったといったような顔を見ると、慌てて縫いぐるみの振りをするが、ラブに遅いと突っ込まれる。

ラブは、シフォンやタルトの知り合いかも知れないと思うと、

「あなた、ひよつとしてシフォンやタルトの知り合いなの?」

ラブの問いかけに、シロップは首を捻り考えるも、知らないと答える。

「じゃあ、あなたは、スウィーツ王国とは関係ないのね!？」

美希の問いかけに、シロップの表情が嬉しそうになる。シロップは、ラブ、美希、祈里の顔をまじまじ見つめると、

「お前達、スウィーツ王国を知ってるロプ!? ひよつとして・・・お前達、プリキュアロプ?」

ラブ達三人は顔を見合わせ驚いた。何故鳥がプリキュア存在を知っているのか、ラブは改めてシロップに聞くと、

「シロップは、プリキュアを探してたロプ! これを見て欲しいロプ!!」

シロップは、ラブ達にのぞみからの手紙を見せた。プリキュア求むに新たに文字が加えられ、この世界を救う為に、プリキュアの力を合わせましょう! 私達に協力して!! のぞみと書かれていた。

「のぞみさんかあ・・・私達以外にも、プリキュアが居たんだね!」

「知らなかったわ・・・でもこれは、この砂漠化した世界を、元に戻す手掛かりになるかも知れないわね!」

自分達以外にプリキュアが居る・・・

美希と祈里は、顔を見合わせ驚愕していると、ラブは少し思案し、表情を柔らかくして、

「ブツキー! 美希たん! せつなは居ないけど、私達ものぞみさん達に力を貸そう!!」

この世界が、砂漠化した手掛かりになるかも知れない、そう思っていた美希と祈里も、ラブの言葉に大きく頷き、三人はシロップに微笑んだ。

ラブの言うせつなとは、東せつな、元々はメビウス率いるラビリンスの幹部イースだったが、ピーチと戦い和解後、寿命を迎えてしまう。しかし、プリキュアの妖精アカリンの力で、キュアパッションとして転生し、ラブ達クローバーの大切な仲間となった。メビウスとの決戦後は、元幹部の仲間、ウエスター、サウラー達と、ラビリンスに笑顔を溢れさす為に戻って行った・・・

「ありがとロプ！のぞみ達もきつと喜ぶロプ!!」

シロップは嬉しそうに、何度もラブ達にお礼を言った。その時、地響きが四つ葉町に近づいて来る。顔色を変えた三人は、何事が起こったのかと戸惑いをみせた。

「何!?!地震?」

「地震にしては、少しおかしいわ・・・行ってみましょう!」

「ええ、割と近いみたい!」

ラブ、美希、祈里の三人は、顔を見合わせると、様子を見に行こうとする。慌てたシロップは、三人を引き留めると、

「ま、待つロプ!これはきつとあいつロプ!!」

シロップの様子が変わったのを見て、三人はシロップに詳しい事情を聞いた。他のプリキュア達が戦ってきた敵、巨大なデザートデビルの事を・・・

「あいつの強さは、尋常じゃないロプ!くれぐれも油断するなロプ!!」

シロップの忠告に深く頷いた三人は、

「ありがとう、シロップ！この街に手出しはさせない！行こうブッキー！美希たん！！」  
ラブ、美希、祈里の三人は、デザートデビルの下に向かい走り出した。

2、

ラブ達は、擦れ違う人々に避難するように声を掛け、デザートデビルを肉眼で捕らえる距離まで近づいた。その巨大さには、三人も思わず驚くも、

「シロップの言ってた通りだね・・・何て大ききなの!？」

「そうね・・・それに不気味ね!」

「でも、私信じてる！私達は、負けない!!」

ラブ、美希、祈里の三人が、頷き合い叫ぶ、

「「「チェインジ・プリキュア！ビートアップ!!」」」

ラブの身体をピンクの光が、美希の身体を青い光が、祈里の身体を黄色い光がそれぞれ覆い、三人の姿をプリキュアへと変えていく。髪の色も変わり、ラブはレモン色に、美希は紫から薄紫に、祈里は薄いオレンジ色に変化する。

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュ！キュアピーチ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ！キュアベリー!!」



「イエローハートは祈りのしるし!とれたてフレッシュ!キュアパイン!!」

「「レッツ、プリキュア!!」」

変身を終えた三人のプリキュアが、デザートデビルに向かい突進する。デザートデビルの繰り出す強力なパンチを躲した三人が、相手の懐に入ると同時に叫ぶ

「「トリプルプリキュアキック!!!」」

キック後、三人はそのまま反転して、

「「プリキュア!コンビネーション・キック!!!」」

時間差で、順番にデザートデビルにキックを見舞うも、デザートデビルにさしたるダメージは与えられなかった。

上空に飛んで、プリキュアの戦いを見ていたシロップだったが、周囲を見回し愕然とする。まだ距離はだいぶあるものの、四つ葉町に向けて、更に四匹のデザートデビルが近づきつつあった。思わずシロップは急降下し、ピーチ達三人の側に来ると、

「気をつけるロプ!更に四匹近づいて来るロプ!!」

シロップの言葉を聞き、三人のプリキュアに戦慄が走る。この巨大な敵が、更に四匹も近付いて来る。ベリーとパインの表情は凍り付いた。

「う、嘘でしょう!?!こんな奴が、あと四匹も近づいて来るわけ?」

ベリーは心底嫌そうに、パインは不安そうにする。ピーチは、そんな二人を励ますよ

うに、

「ベリー、パイ、今はこいつに集中しよう!・・・タア~~~~!!」

ピーチが力を込めたパンチと、デザートデビルのパンチが衝突する。当然ながら、吹き飛ばされたのはピーチだった。吹き飛ばされたピーチを、シロップが回り込みピーチを背中で救う。

「ありがとう、シロップ!」

ピーチが礼を言い、シロップから飛び降りる。いくらプリキュアでも、三人である人数のデザートデビルを相手にするのは無謀であった・・・

シロップは、何かを決意した表情を浮かべると、

「みんな、待ってるロプ!シロップがのぞみ達を、プリキュアを連れて来るロプ!!」

折角力を貸してくれると言ってくれたピーチ達三人、その三人を救うには、のぞみ達の力は絶対に必要だと感じたシロップは、猛スピードで飛び去った。

(さすがにちよつとヤバイかな!?シロップ、頼むね!)

飛び去ったシロップに、ピーチは心の中で呟くと、

「ベリー!パイ!」

ピーチの合図に、ベリーとパイが頷く、ピーチがピーチロッドを、ベリーがベリーソードを、パイがパイフルートを取り出し、

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！」

「プリキュア！ラブサンシャイン・・・」

「プリキュア！エスポワールシャワー・・・」

「プリキュア！ヒーリングプレア・・・」

「フレ〜ッッシュュ!!!」

ピーチからピンクのハート型の光弾が、ベリーから青いスピード型光弾が、パインから黄色いダイヤ型の光弾が同時に発射される。三人の合体技が放たれるも、デザートデビルは両手で受け止めた。だが、その威力に徐々に後ろに押されていく。勝てると確信した三人だったが、デザートデビルが物凄い咆哮を上げると、三人の攻撃を弾き飛ばした。

「そんなあ?!」

動揺するピーチ、ベリー、パイン、怒ったデザートデビルは、物凄い咆哮を上げ、怒濤の攻撃を三人に対して繰り出した。三人のプリキュア達は、辛うじて躲すだけの防戦一方であった。デザートデビルの口から吐かれた光弾を、三人はジャンプで躲すも、先ずピーチが、デザートデビルの蛇に身体を絡み取られ、締め付けられる。

「し、しま・・・った!?!アアアッ!!」

締め付けられたピーチから、苦悶の声上がる。

「ピーチ!!」

慌てて助けに向かったベリーとパインも、蛇共に身体を絡まれ、締め付けられる。

「アアアアア!」

三人のプリキュアから、悲痛な悲鳴が漏れる・・・

デザートデビルは、三人をいたぶるように徐々に締め付けを強め、残った三匹の蛇が、三人の目の前に移動すると、三人にレーザーで止めを刺そうと攻撃しようとしたその時・・・

3、

美墨なぎさ、雪城ほのか、九条ひかり、日向咲、美翔舞、霧生満、霧生薫の七人と、メツプル、ミツプル、ポルン、ルルン、フラツピ、チョツピ、ムープ、フープの八人の妖精達は、砂漠に埋もれたナツツハウス前にて、のぞみ達と親交を深めた。それぞれ、自分達がプリキュアとして戦ってきた事などを語り合っていた・・・

「フーン、私達がジャアクキングと戦った後でも、そんな事があつた何てね・・・もし知っていれば、応援に行つたのにね!」

なぎさがほのかを見ながら、咲やのぞみ達に言う、ほのかもひかりもなぎさの言葉に頷き、

「そうね、そんな事が起こっていると知っていれば、何か手伝えたかも知れないけど……」  
ほのかも、なぎさと同じ考えを伝える。咲達も、のぞみ達も、他にプリキュアがこんなに居たのには驚いていて、

「私達こそビックリですよ！私達がプリキュアになる前から、なぎささんやほのかさん、ひかりちゃん達は、プリキュアとして戦ってたんですから……ね、舞！」

「ええ、それに、私達が戦ってた同じ頃に、のぞみさん達が戦ってたんですものね……」  
咲の言葉に同意した舞、舞は側に居るのぞみ達を見ると、自分達と同じ頃に、プリキュアとして戦って居たのぞみ達にも驚いた事を伝えたと、

「うん、私もビックリだよ！それにしても、これだけプリキュアが居るなんて……」  
のぞみの目がキラキラ輝き、一同の顔を見た……

こんなに心強い事はなかった……  
そんなのぞみに、りん達は呆れたようにのぞみを見て、なぎさ達と咲達は苦笑し、ひかりと満、薫はキョトンとする。

一方、ココ達妖精達も、噂に聞く、伝説の光の園の住人を目の辺りにして興奮していた。

「ココもナッツも、光の園の噂は聞いてたココ！まさか、伝説の住人……その中でも勇者と呼ばれる方に会えるなんて……光栄ココ！」

「そうナツ！光の園は、特殊な世界で時間の流れが違うナツ！本来なら会える筈は無いのに・・・」

ココとナツが、目を輝かせてメップル、ミップル、ポルン、ルルンを見る。ポルンとルルンは興味無さそうに、フープ、ムーブと砂漠の中を元気にハシヤギ回る。ミップルは少しはにかみながら、

「そんな大した事は無いミポ！ココやナツだつて、国王という立派な立場ミポ！チヨッピやフラツピ達も、泉の郷を救う為に大活躍したミポ」

互いに謙遜しあう妖精達の中、メップルは、伝説の勇者と言われて得意気であつた。それを聞いていたなぎさは、笑いを堪えるのに必死だつた。

（メップルが伝説の勇者だつて!?ありえなくいい！何時も、なぎさく、お腹減つたメポとか、ミップルに会いたいメポとか泣きわめくし、ミップルと会えばイチャイチャしてるし・・・ココ達に真実教えたいよね）

なぎさが思わず昔の出来事を思い出し、変顔で居ると、ほのかは目を点にしながらか、  
「なぎさ・・・その顔怖いよっ」

呆れるほのかと苦笑するひかり、くるみは、本当にこの人プリキュア何だろうかと思ふ不安になる。

「それで、これからどうします？此処で他のプリキュア達からの連絡を待ちますか？」

かれんからの問いに、なぎさとほのかが頷き合い、

「とりあえずは、シロップだっけ？あの子が戻ってきてから決めましょう！みんな、直ぐに出発出来るようにはしておいて・・・」

なぎさの顔が引き締まり、歴戦の勇者の風格に切り替わり、皆に指示を出す。くるみは、自分の思い込みを反省した。

そんな所にシロップが戻ってくる。ナッツハウスを見て安心したのか、上空に來ると、変身が解けて落下してくるのを、咲が見事にキャッチする。シロップは咲を見ると、「ありがとロプ・・・みんな、大変ロプ！ラブ達を、仲間のプリキュアを助けて欲しいロプ!!」

大慌てで話し続けるシロップの話を、真剣に聞いていた一同の顔色が、見る見る変わって行った。自分達と同じプリキュアが、今危機に陥っている。のぞみは、不安がるシロップに言葉を掛けた。

「大丈夫だよ！私達が必ず助けるから!!シロップ、案内して!!」

今、ピーチ達を助ける為に、プリキュアオールスターズが出撃する・・・

4、

デザートデビルに付いている蛇に、身体を締め付けられるピーチ達、デザートデビル

が止めを刺そうとしたその時、三人のプリキュアの姿が忽然と消えた。やられると思っただけだが、一向にデザートデビルが攻撃して来ない事を、不思議そうに目を開いた時、三人の目の前には、シフォンが、タルトが、そして、せつなが居た。三人の顔を見た時、ピーチ、ベリー、パインは思わず目を見開き、嬉しそうに思わず三人に抱き付いた。

「せつな〜！シフォン、タルトも、来てくれたんだ・・・ありがとう!!」

「せつな、シフォン、タルト、あなた達があたし達を助けてくれたのね？」

「またみんなに会えるって・・・私、信じてた!」

三人に取って、大切な仲間が帰って来た!

しかも、自分達の窮地に駆けつけてくれた。ピーチ、ベリー、パイン、三人の目から涙が零れる。せつなも、心から再会出来た事を喜んで居るかのように、三人にニッコリ微笑むと、

「シフォンとタルトが教えに来てくれたの・・・ラブ達が危ないって!」

「ピーチはん、何とか間に合って良かったわ!クローバーボックスに、あんさん達が何やえらいゴツツイのと戦ってる姿が映ったさかい、慌ててシフォンと一緒に、パッションはんに知らせに行ったんやけど・・・シフォン、でかしたでえ!」

タルトに褒められ、シフォンがプリーと嬉しそうに喜んだ。周りを見たせつなは、咆



哮するデザートデビルを見つめると、瞬時に表情が険しくなる。自分の大切な仲間を、愛したこの街を、デザートデビルに滅茶苦茶にされ、拳を握った。

「私の大切な仲間を．．．大切な思い出を汚したお前を．．．絶対に許さない！チェインジ・プリキュア！ビートアップ!!」

せつなの身体を赤い光が覆い、プリキュアへと変えていく。髪の毛の長さが伸び、ピンク色に変化する。

「真つ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュユー！キュアパッション!!」

パッションが登場し、ピーチ達三人に沸々力が沸いてくる。三人は、パッションの脇に立ち、四人のプリキュアが名乗りを上げる。

「プリキュア!!」

先陣を切ったのはパッション、正面からデザートデビルに突っ込んで行くのを、デザートデビルは六匹の蛇を使って攻撃を開始した。だが、パッションは瞬時にテレポーターを繰り返し、デザートデビルを混乱させると、蛇同士の同士討ちを誘発させる。追いついた三人のプリキュアと、パッションが連携技を繰り出す。

「プリキュア！クアドラプル・パンチ!!」

四人のプリキュアが、同時にデザートデビルに強烈なパンチを浴びせる。蹠踉めいたデザートデビルに対し、思いつきり息を吸い込んだピーチが、強烈な右ストレートをデ

ザートデビルの顔面に当てると、デザートデビルは堪らず倒れ込んだ。ここが勝負所と見たパシオンは、ピーチ、ベリー、パインとアイコンタクトすると、

「歌え！幸せのラブソディ！パシオンハープ!!」

パシオンがハープを取り出し、

「吹き荒れよ！幸せの嵐！プリキュア！ハピネス・ハリケーン!!」

パシオンがハープを取り出したと同時に、ピーチはピーチロッドを、ベリーはベリーソードを、パインはパインフルートを取り出した。

「二悪いの、悪いの、飛んでいけ!」

「プリキュア！ラブサンシャイン・・・」

「プリキュア！エスポワールシャワー・・・」

「プリキュア！ヒーリングプレアー・・・」

「フレ〜ッッシュュ!!」

四人のプリキュアの必殺技が、デザートデビルに直撃する。何とか堪えようとするデザートデビルだったが、パシオンが加わった攻撃は、先程を遙かに上回り、強敵デザートデビルを遂に浄化させる。だが、最初の一匹目に時間を掛け過ぎた為、一同の視線に、二体目のデザートデビルも視界に入るまで接近していた。

「このまま戦っても、こっちが不利だわ・・・みんな、一気に行くよ!!」

ピーチの合図に、三人が頷き同意する。

「クローバーボックスよ！私達に力を貸してえ!!」

ピーチの叫びと共に、クローバーボックスから放たれた光が、四人が持つリンクルンに力をもたらした。

「プリキュアフォーメーション!」

ピーチの合図を受け、四人が一斉にしゃがみ込むと、

「レディー・・・ゴー!!」

再びピーチの合図で走り出す四人、

「ハピネスリーフ!セット!パイセン!!」

パッションから始まったハピネスリーフ、パッションはパイセンに投げると、走りながらパイセンがそれを受け取り、

「プラスワン!プレアリーフ!ベリー!!」

受け取ったパイセンが、プレアリーフをセットし、今度はベリーに投げる。走りながらベリーが受け取ると、

「プラスワン!エスポワールリーフ!ピーチ!!」

受けたベリーが、エスポワールリーフをセットし、ピーチに思いを託し投げる。走りながら受け取ったピーチは、

「プラスワン・ラブリーリーフ!!」

ピーチが最後にラブリーリーフをセットし、四つ葉のクローバーマークを完成させる。ピーチが四つ葉のクローバーを、デザートデビル目掛け投げ付けると、四つ葉のマークは巨大化し、四人がそれぞれのリーフの上に乗る、上空からデザートデビルを巨大な水晶に閉じ込めた。

「二ッラッキークローバー! グランドファイナーレ!!」

ラッキークローバー・グランドファイナーレの力は、凄まじい輝きを放ち、デザートデビルを光の輝きの中に包み込んだ!!

四人の強力な必殺技、ラッキークローバー・グランドファイナーレによって、新たなデザートデビルは、為す術もなく浄化された。

だが、四人も大分体力を使ったようで、その場にしゃがみ込み、肩で息をするほどだった。大喜びのタルトだったが、直ぐに悲鳴を上げる。ズシンズシンと、地響きを立てながら、今度は三体のデザートデビルが迫ってくるのだから……

「諦めない……私達は、諦めないんだからあく!!」

何とか立ち上がろうとする四人であったが、ピーチのその言葉も空しく、三体のデザートデビルの口から強力なエネルギー波が放たれた。思わず目を瞑った四人だったが、何故か攻撃は当たらなかった。

不思議そうに目を開けた四人の前に、バリアを張ったルミナスを先頭に、13人のプリキュア達が、ピーチ達を守るようにデザートデビルの前に立ち塞がる。

「アア・・・アア！」

その頼れる後ろ姿を見たピーチ、ベリー、パイン、パッションの瞳が輝いた。

「何とか間に合ったロプ！約束通り、プリキュア達を連れて来たロプ！」

「シロップ！」

振り返った13人のプリキュアが、ピーチ達に笑顔を向ける。思わず涙が零れる四人、

「ありがとう・・・あなた達も、プリキュアなのね!？」

13人のプリキュア達の勇姿を見て、嬉しそうに言うピーチに、

「うん、そうだよ！あなた達と同じ・・・プリキュアだよ！」

ドリームがピーチの手を、ブラックがパッションの手を、ホワイトがベリーの手を、ブルームがパインの手を取り助け起こす。

「話は後々・・・行くよ、みんな！鬼退治と行きましょうか!!」

ブラックの声を合図に、13人のプリキュア達が、三体のデザートデビルに向かって行った。その頼れる後ろ姿を、ピーチ達は眩しそうに見続けるのだった・・・

戦闘後、歴代のプリキュア達と交流を深めたピーチ達は、家族を説得し、皆と共に旅立つ！デザートデビルが集結しつつある、決戦の地を目指して……

一方、惑星城に乗り込んだブロツサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトの前に、クモジャキーとコブラージャが現われる。マリンとサンシャインは、ブロツサムとムーンライトを先に行かせ、クモジャキーにはマリンが、コブラージャにはサンシャインがそれぞれ一対一で戦い始める。

戦いは終局へと動き始めた……

第五話：集結！プリキュアオールスターズ！！

完

## 第六話：憎しみの心

### 第六話：憎しみの心

1、

青く美しい地球は今、地球全土を覆う砂漠化の影響で、黄土色へと変わってしまった。地球砂漠化の現況、砂漠の王デューンを倒す為、そして、つぼみの祖母、薫子を救う為、惑星城に乗り込んだ、キュアブロッサム、キュアマリン、キュアサンシャイン、キュアムーンライトは、それぞれの役目を果たすべく個々に行動していた・・・

そして地上では、四つ葉町に集結したプリキュア達が動き始めていた・・・

地上と宇宙・・・

プリキュア達の戦いは続く・・・

ブロッサムは、無事に捕らわれていた祖母薫子の下に辿り着き、見張っていたスナッキー達の親玉、2人のボスナツキーを、薫子の妖精コツペと共に倒し、無事に薫子を救出した。

「お婆ちゃんー！」

「つぼみ!!」

無事に孫と祖母は対面した・・・

それをモニターで見えていたデューンは、不適な笑みを見せると、

あるスイッチを押しした。ブロッサム達の居る部屋に、突然モニターが現われると、そこに映っていたのは、惑星城の野外、石柱の上で互いに睨み合い、今、正に相對峙しようとしていたムーンライトとダークプリキュアが映って居た。

「ムーンライト!」

ブロッサムは、ムーンライトの援護に向かおうと走り出す。その後ろ姿に、戸惑った表情を浮かべた薫子が声を掛ける。振り向いたブロッサムは、薫子の表情が曇っている事に小首を傾げた。薫子は、

「つぼみ・・・ゆりちゃんとかサバークを戦わせないで・・・お願い!」

ブロッサムには、何故薫子がそんな事を言うのか分らなかつたが、祖母に無言で頷くと、急ぎムーンライトの下に向かった。

一方マリンは、パートナー妖精コフレと共に、砂漠の使徒幹部、クモジャキーと戦い、肉弾まみれる死闘の末に、遂にクモジャキーを浄化する。

サンシャインもパートナー妖精ポプリと共に、砂漠の使徒幹部、コブラージャと戦つ



た。苦戦の果てに、サンシャインもまたコブラー ज्याを浄化する。

合流したマリンとサンシャインだったが、強敵との戦いの代償は大きく、疲労が溜まっていた……

「楽勝！……と言いたいけど、参ったね……こりや！」

「そうだね、早くプロツサム達に合流したいけど……」

壁を背にして共に座り込み、しばし休息する二人だったが、此処は砂漠の使徒の本拠地である惑星城……

当然二人の行動は、敵側に筒抜けであった……

「キイキイキキキ!!!」

不敵な笑みを浮かべながら、スナツキーの大群が現われ、マリン、サンシャインを包囲しはじめた。

スナツキーとは、砂漠の使徒のいわば下級兵士で、非常に弱い敵ではあるが、中身の砂の為、砂さへ補充すれば、何度でも向かってくるタフさを備えていた。今の疲労している二人に取っては、最も出会いたくない相手であろう……

「ああ、こんな時にまた此奴らかあ……全く、弱いくせにしつこいんだからさあ！」

マリンがヨツコラセと立ち上がり首を回す、サンシャインは、そんなマリンを見てク

スリと笑い、

「そうだね・・・スナツキーの諸君、出来れば道を空けてくれないかな？ 私達に勝てるとは思わないけど!？」

サンシャインが攻撃の構えを取り、スナツキーを威嚇すると、思わずたじろいだスナツキー達だが、顔を見合わせると、雄叫びを上げて一斉に二人に飛びかかってくる。マリンとサンシャインの攻撃を受け、呆気なくくらいにやられていくスナツキー達だったが、医者の格好をした二人のスナツキーに、砂を補充してもらい、穴が空いた箇所を、テープで止めては再び向かってくる。

その繰り返しだった・・・

変顔になったマリンは、しつこいスナツキー達に苛々したようで、

「ああ、もうイライラする！サンシャイン、一気に行くよ?。」

「エッ!? あ、うん!!」

「マリ〜ン！インパクト〜!!」

「サンシャイン！イージス・・・インパクト!!」

二人の技を喰らい吹き飛ばすスナツキー達だが、後から後から増強されていく。物量に物をいわせたスナツキー達が、徐々に二人を包囲して行った。勝ち誇ったようにニヤつくスナツキー達が、徐々に間合いを詰めていく。

形勢不利と見たマリンは、小声でサンシャインと妖精達に、作戦会議をしようと呼かける。そして、スナツキー達が一齐に飛び掛かった時、マリンが叫ぶ。

「タ〜ンマ!!」

「タイムでしゅ〜!」

続けて妖精達がタイムを要求する。思わずズッコけたスナツキー達だが、健気に言われた通り待つてやる。ヒソヒソ話でどうするか相談しあう一同は、マリンのアイデアで、取り敢えずスナツキーに化け、この場を乗り切る事に決めた。

「スナツキーの諸君! 待たせたね!!」

サンシャインが構えるが、スナツキー達は手を後ろに回して寛いだり、大あくびをしたりしていた。サンシャインは思わずキョトンとすると、

「キキキイ! キイ、キキキ!!」

一人のスナツキーが、サンシャインを指さし、ジェスチャーを始める。サンシャインは、不思議そうに小首を傾げるも、

「エツ!? 何? . . . 待つてやったんだから . . . スカートを捲つて . . . チラリと . . . 見せるぐらいしろだつてえ! . . .」

自分の言つてる事がサンシャインに通じて、満足そうにニヤニヤするスナツキー達に、思わず顔を真っ赤にして俯くサンシャイン、マリンが不機嫌そうに、

「ハア!? バツカじゃないの? あたし達がそんなサービスする訳無いっしょ!! . . . ン?」  
「キイイ! キキキイキ . . . キイキキキ!!」

今度はマリンを指さし、ジェスチャーを始めるスナツキー、

「ハア? 何言ってるんだか、わ〜かり〜ませ〜ん!!」

マリ手が右手を耳に当て戯けると、怒ったようなスナツキーが、マリ手を指差し先程と同じ声を発する。しようがないなあとばかりに、マリ手が渋々解説する。

「分ったわよ! . . . 何々 . . . お前のは . . . 別に . . . 見なくていいいいだとおお〜!!!」

言葉が通じたようで、再びニヤニヤするスナツキーだったが、マリ手の顔付きが変わり、目に炎が点る。マリ手の迫力の前に、思わず後ずさりするスナツキー達 . . .

「もう完全にあつたまきたああ!! 海より広いあたしの心も、ここらが我慢の限界よ!!」

鼻息も荒く怒るマリ手を、ここで戦つては、さっきの作戦が台無しになってしまうとばかりに、コフレが必死に宥めようとする。

「マ、マリ手、落ち着くですつ! 今立てた作戦が無駄になるですつ!」

マリ手がコフレを睨むと、その迫力の前に、コフレは何でもありませんとスゴスゴ引き下がる。

マリ手はサンシャインに合図を送ると、サンシャインも苦笑しながらも同意する。

「プリキュア！大爆発!!!」

二人の合体技が炸裂して、辺りに大爆発が起こる。変身を解除した二人と妖精達は、その隙に三人のスナツキーから衣装を剥ぎ取り、変装してその場を離れるのであった。「別に、スナツキーの衣装を剥ぎ取らなくても……僕達、この場から逃げれたんじゃないかなあ？」

爆風に巻き込まれ、気絶しているスナツキーの大群を見て、いつきが思わず本音を言うも、一同はプロツサム達に合流すべく、先を急いだ！

「ゆりちゃん……」

捕らわれていた部屋で、沈痛な表情を浮かべながら、ムーンライトとダークプリキュアの死闘を見ていた薫子の下に、三人のスナツキーが現われる。薫子は瞬時に顔色を変えると、

「スナツキー、また性懲りもなく現われたわね！」

薫子が身構えると、三人は手を振って違うとジェスチャーするが、先頭のスナツキーは、覆面を取ろうとするも髪に引っかけたりもがいていた。そんな先頭のスナツキーの前に、薫子の妖精コツペが立ち塞がり、先頭のスナツキーは首をブルブル振った。

薫子は後ろの二人が覆面を取るのを見て、思わず声を出す。

「いつきちゃん!? コフレ、ポプリ! . . . じゃあ、先頭に居るのは . . . コツペ、攻撃しては . . . アツ! ?」

薫子の言葉が終わる前に、コツペのパンチが、先頭に居たスナツキーに直撃して吹き飛ばす! その反動で、覆面が取れた中から顔を見せたのは、お目々グルグル状態のえりかであった。いつきと妖精達は、アチャといった表情を浮かべ、顔色を変えた薫子が、えりかの下に駆け寄ろうとするも、えりかはヨロヨロ立ち上がり、

「コ . . . コツペ様 . . . ひ、酷いよおゝ!!」

「え、えりかちゃん . . . ご、ごめんなさい、私もコツペも、みんなをスナツキーだと思つて . . . えりかちゃん、大丈夫?」

無表情ながらも、コツペも悪いと思つたのか、コツペがえりかを担ぎ、薫子の下に連れて来る。

「さつきはごめんなさい . . . 二人共、無事で良かったわ! でも、大分疲れているみたいねえ?」

薫子の言葉にえりかといつきも頷く、ここまで来るのに、クモジャキーとコブラー ज्याを倒し、スナツキーの大群と戦つて、さすがにヘトヘトだよとえりかが呟くと、薫子は頷きながらコツペの名を呼んだ。

名を呼ばれたコツペは、ココロポットを取り出した。今まで集めてきたこころの種が

輝き、疲れて座り込んでいたえりか、いつき、コフレ、ポプリを癒し、一同の体力を回復させた。見る見る力が漲ってきた事で、一同が立ち上がると、

「おっしやく〜！復活うう!!」

元気にはしゃぐえりかを見て微笑む薫子、画面を見て真剣な表情になったいつきが、えりかを呼んだ。

「えりか、あの画面を見て、ムーンライトが、ダークプリキュアと戦ってるよ!」

二人が画面を見ると、ダークプリキュアの攻撃が直撃し、ムーンライトが後ろに飛ばされるも、ムーンライトは飛ばされながら、ダークプリキュアに連続してエネルギー波を浴びせる。最初の二発を弾いたダークプリキュアだったが、三発目がヒットし、思わずよろめく、ムーンライトはその隙を逃がさず、間合いを詰めてダークプリキュアにかかと落としをヒットさせようとした瞬間、サバークが現われ、ムーンライトにエネルギー弾をヒットさせ、ムーンライトが吹き飛ばされた。

サバークの登場は、薫子の脳裏に、嫌な思い出を甦らせた・・・

ムーンライトが、パートナー妖精コロンを失い、ダークプリキュアの前に敗れさったあの出来事が・・・

(つぼみ・・・急いで!!)

不安がる薫子だったが、その側には、頼れるもう二人のプリキュアが居た・・・

「あんにやろく．．．いつき、あたし達も応援に行こう！」

「うん！」

いつきも頷くと、二人はココロパフュームを手を持った。

「プリキュアの種、行くですっ！」

「プリキュアの種、行くでしゅ！」

二人の妖精から、えりかといつきにプリキュアの種が送られる。

「プリキュア！オープンマイハート!!」

えりかといつきが香水を掛け合うと、掛けられた箇所からどんどんプリキュアへと変化していく。髪も伸び色も変化し、えりかは水色に、いつきは黄色に変化し、ツインテール状態になる。変身を完了した二人が名乗りを上げる。

「海風に揺れる一輪の花、キュアマリン！」

「陽の光浴びる、一輪の花、キュアサンシャイン！」

「お婆ちゃん、ちよつくら行つて来るね！」

「コツペ様、薫子さんをお願いします！」

変身を終えた二人は、薫子とコツペに手を上げて合図を送ると、ムーンライトの援護に向かった!!



希望ヶ花市・・・

嘗て、砂漠の使徒によってデザトリアンにされ、プリキュアに助けられた人々は、結晶化を免れ、唯一砂漠化を免れている薫子が所長を務める植物園に避難していた・・・その中の一人、番ケンジは、砂漠の彼方に、デザートデビル達が闊歩する絶望的な風景を、ぼんやり眺めていた。不意に名前を呼ばれたケンジが振り向くと、つぼみやえりか、いつきと同じファシヨツン部に所属している、志久ななみが立って居た。

「番君・・・私達、どうなっっちゃうのかな？」

不安そうに問うななみを見て、ケンジはフツと笑むと、

「どうにもならんさ、俺達がプリキュアを信じている限り、世界は必ず救われるさ!!」

ケンジの言葉を聞き、何度も頷くななみであった。

だが、そんなケンジの言葉を嘲笑うように、デザートデビルが植物園に近づこうとしていた・・・

ムーンライトに合流したプロツサムだったが、ダークプリキュアとは、一対一で戦いたいとムーンライトに諭され、プロツサムは、二人の戦いをサバークに邪魔させないよう、サバークに戦いを仕掛けた。

「史上最弱のプリキュアの貴様が、この私と戦おうなどと……身の程を知れ!!」

サバークは、連続エネルギー波をブロッサムに浴びせる。ブロッサムは躲しきれず、悲鳴を上げながら吹き飛ばされた。ダークプリキュアと戦いながらも、ブロッサムの事を気に掛けるムーンライトは、

「ブロッサム!」

ブロッサムの名を叫び、援護に向かおうとするムーンライトだが、ダークプリキュアに阻まれて、救助に向かう事は出来なかった。

再び睨み合う両雄……

「そこを退きなさい!」

「ならば、私を倒す事だな!!」

再び開始される、ムーンライトとダークプリキュアの宿命の対決!

そして、勝ち誇ったサバークは、ヨロヨロしながら立ち上がったブロッサムを、弱いと評し、史上最弱と罵った。ブロッサムは、サバークの言葉を否定する事は無かった……

確かに自分は弱い……

でも、えりかやいつき、ゆり達と共に、沢山の人達をプリキュアとして救って来た事で、沢山の事を学んで居た……

えりかやいつきも、そして、強いと思つて居たゆりだって、みんな悩みを持っていた

事を知った。ブロッサムと言葉を聞いていたシプレが、ブロッサムに微笑みかけると、マントに姿を変え、ブロッサムに巻き付く。空を飛び、サバークの攻撃をかくぐつたブロッサムが言葉を続ける。

「今の私には、大切な仲間が居て、愛する家族が居て、大好きな友達が居ます！私はこの世界が大好きです!!ちつぽけでも、史上最弱のプリキュアでも、どんなにあなたに罵られようとも、私達を信じてくれてるみんなの心を・・・必ず守ってみせます!!その気持ちだけは・・・誰にも負けません!!」

ブロッサムの言葉を聞いたムーンライトは、ブロッサムが自分と対等、いやそれ以上かも知れない程に成長した事を知り、思わずフツと口元に笑みを浮かべた。そんなムーンライトを、ダークプリキュアは忌々しげに見つめ、

「私と戦いながら・・・何を笑っている!？」

ダークプリキュアの強力な右パンチを、片手で受け止めたムーンライトが、ダークプリキュアに宣言する。

「決着を付けましょう! 例え此処で私が倒れても、ブロッサムが居る! マリンが居る! サンシャインが居る!」

それは、ムーンライトの本心だった・・・

例えこの場で自分が敗れたとしても、今のブロッサム達三人ならば、砂漠の使徒に勝

利出来るだろうと・・・

激昂したダークプリキュアは、

「戯れ言を・・・言うなくく！貴様を倒した後、そいつらも始末してやる!!」

「あなたに、それが出来るかしら？簡単には倒されない・・・それが私達、プリキュアの絆よ!!」

ムーンライトは、そう言うと表情を引き締め、勝負に出た!!

「集まれ！花のパワー!!」

「闇の力よ、集え!!」

ムーンライト、ダークプリキュア、共にムーンタクトとダークタクトを取り出す。

「プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

「プリキュア！ダークパワー・フォルテツシモ!!」

ムーンライトが白銀の光を帯びれば、ダークプリキュアが赤黒い光を帯びる。変わりが果てた地球を背景に交差する光と光・・・

一方のブロッサムとサバークの戦いも、佳境に入っていた・・・

サバークの一瞬の死角を付き、シプレが妖精姿に戻ると大の字になりながら落下してくる。

「妖精全部パンチ！ですう!!」

サバークの仮面に取り付きサバークの視覚を完全に塞ぐ、そのチャンスを逃すまいと、ブロッサムタクトを取り出したブロッサムが叫ぶ！

「花よ、輝け！プリキュア！ピンクフォルテウエ〜イブ!!」

ブロッサムフォルテウエーブが当たる寸前、サバークから離れるシプレ、ブロッサムとシプレのコンビネーションが見事に決り、サバークに直撃する。サバークが付けていた仮面は、フォルテウエーブの威力で、縦に真二つになり、サバークは両膝を付き、顔を覆って呻き声を上げた。

ブロッサムはシプレの協力の下、遂にサバークを戦闘不能に追い込んだ！

遅れて広場に到着したマリんとサンシャインは、サバークを倒したブロッサムに駆け寄った。二人の出現に表情が和らいだブロッサムは、

「マリーン！サンシャイン！クモジャキーとコブラージャは？」

マリンが親指を立てて笑顔を見せ、サンシャインもニッコリ微笑み頷いた。ブロッサムの表情が見る見る綻び、

「二人共、無事で良かったです！」

「あつたりまえじゃん！それよりブロッサム、やったじゃん！サバークを倒す何てさあ!!」

「本当に・・・凄いやあー！」

マリンとサンシャインに褒められ、少し照れるプロツサムだったが、

「いいえ、私一人の力じゃありません！シプレが、ムーンライトが、そして、マリンやサンシャインが居てくれたから、私はサバークに勝てたんです!!」

プロツサムの言葉に、笑顔を浮かべるマリンとサンシャイン、プロツサムも微笑み返した。そして三人の視線は、死闘を続けるムーンライトに注がれた。

互いの魂をぶつけ合うように、死闘を続けるムーンライトとダークプリキュア、

「勇気、愛、友情、優しさ、悲しみ、喜び・・・たくさんの気持ち、みんなの心、そして仲間との絆・・・命と心 に満ちあふれたこの世界を・・・私は守る!!!」

ムーンライトの魂の叫びに感応するように、フォルテツシモ同士でぶつかり合っていた二人の均衡が崩れる。

「な、何だ!?!ムーンライトのこのパワーは？私が・・・押されているだ!?!ウワアア!!」

ムーンライトのフォルテツシモが、ダークプリキュアを貫き、着地したムーンライトが叫ぶ！

「ハ〜ト・・・キャッチ!!!」

ムーンライトの叫びと共に爆発が起こり、ダークプリキュアは、力なく地上に落下した。

ムーンライトとダークプリキュア、二人の因縁の対決は終焉を迎えた・・・

3、

「ムーンライト!!」

ムーンライトに微笑みながら駆け寄る三人に、ムーンライトは優しく微笑み返した。そんな中、顔を押しえて苦しんでいたサバークが顔を上げる。サバークの方に視線を向けた四人だったが、サバークの顔を見た瞬間、ムーンライトの表情がどんどん曇り、涙を浮かべた。

「そ、そんな!? お、お父さん!」

「「エッ!」」

涙を浮かべながら、サバークに駆け寄るムーンライトに、ブロッサム、マリリン、サンシャインは、訳が分からず呆然とする。

「エ、訳わかんない・・・何でサバークがあ!?!」

「ど、どういう事なの?」

「そんな、サバークが、ゆりさんのお父さんだった何て・・・お婆ちゃんに、ムーンライトとサバークを戦わせないでって言ったのは、この事に気付いていたから?」

三人は複雑な心境で、月影父娘の再会を見守る事になってしまった・・・

「私は……一体何を……!?!」

頭の中が混乱しているかのようには、何故此処に居るのかも分らず、呆然とする月影博士に、ムーンライトが抱き付くと、

「お父さん、私です！ゆりです!!あなたの娘のゆりです!!」

涙ながらに、父月影博士に抱きつくムーンライトと、ムーンライトの言葉に反応する月影博士、それは、悲しき再会だった……

「ゆり、ゆりなのか!?!す、すまない……私は、私はお前に合わす顔が……」

その時、戦闘不能状態だったダークプリキュアが、ゆつくり、ゆつくり、よろめきながらも立ち上がる。ムーンライトを見るその表情には、口惜しさが浮かんでいた。

「キュ、キュアムーンライト!サバーク博士から……私の父から離れる!!」

ダークプリキュアの言葉に、ムーンライトは激しく動揺する。何故、ダークプリキュアが父と呼ぶのか、ムーンライトの頭の中が混乱する。月影博士に縋るような目を向けたムーンライトは、

「父!?!お父さん、どういう事ですか!?!何かの間違いですよね?」

「間違いだ……私を作り上げたのは、サバーク博士だ!その目的は、キュアフラワーの後を継いだ、キュアムーンライト……お前を倒す為だ!!」



口元に笑みを浮かべながら、ダークプリキュアは語った。ムーンライトは、ダークプリキュアの言葉に激しく頭を振った。

「う、嘘よ！そんな、そんなの・・・信じられない!!私とお母さんを置いて、こんな事になる何て・・・お父さん、嘘だと言って下さい!!」

「ゆり・・・すまん、本当にすまん・・・私は、お前を苦しめる為に、ダークプリキュアを作り上げてしまった!」

記憶が徐々に繋がってきた月影博士は、俯きながらもダークプリキュアの言葉を認めた・・・

ムーンライトの頭の中が混乱する・・・

それはそうであろう、親愛なるパートナー、コロンを倒したのはサバーク、宿敵であるダークプリキュアまで、自分を倒す為に父が作り上げたとは・・・

ブロッサム、マリン、サンシャインは、ムーンライトの、ゆりの心情を思うと、涙が溢れ出る。ダークプリキュアがもう一度叫ぶ・・・

「私の父から離れろ!」

ムーンライトは、頭を激しく振り嫌々をするも、月影博士は、一瞬悲しそうな瞳でムーンライトを見ると、

「ゆり・・・私にはもう、お前を抱きしめる資格が無い!私にはもう、お前の父として、

春菜の夫である資格は・・・もう無い!!」

その言葉を聞き、戸惑ったムーンライトを残し、月影博士は、傷ついたダークプリキュアの下に歩を進める。歩きながら、月影博士は語り出す。

「私は、あらゆる心と命を見守る、こころの大樹の秘密を解き明かせば、皆が幸せになれると信じていた。そんな魔法のような物は無い、幸せとは、皆が頑張つて少しずつ掴むものと言う花咲所長の助言さえ耳に入らない程に・・・研究に行き詰まっていた私に、砂漠の使徒がコンタクトを取つてきた。私は、藁をも掴む思いで、その誘いに乗つてしまった。デューンへの忠誠を誓う証として、私はその仮面を被り、砂漠の使徒サバークとなつてしまった!」

よろよろとしながら、自らも月影博士に近づこうとするダークプリキュアを見て、月影博士は更に語る。

「ゆり・・・私は、お前を苦しめる為に、ダークプリキュアを作ってしまった。キュアムーンライトを倒す為に存在する、心の無い人形として・・・」

ダークプリキュアの側に付くと、ダークプリキュアを抱きしめる月影博士、それを見て、ムーンライトは唇を噛んだ。

「もういい・・・もういいんだ・・・ダークプリキュア!もう・・・いいんだ!ダーク、お前もゆりと同じだ!私の、私の大切な娘だ!!」

ダークプリキュアの頭を優しく撫でる月影博士に、ダークプリキュアは幸せそうな表情を浮かべていた。

「ゆり、ダークは、お前の細胞の一部と、こころの大樹を研究して生まれた・・・お前の妹だ！ダーク、ゆりは・・・ムーンライトは、お前のたった一人の姉だ！私は、姉妹同士で傷つけあいをさせてしまった愚かな父だ・・・ゆり、ダーク、すまない!!」

ダークプリキュアの目から涙が零れた・・・

感情の無い戦闘マシーンとして生まれた彼女は、密かに父である月影博士に、娘と呼ばれる日を信じて戦い続けた。常にムーンライトと比べられる事が嫌だった。ムーンライトさへ倒せば、父は自分に振り向いてくれる、そう思っていた。

だが、月影博士は、自らの過ちを悔いていた。自分をムーンライトと同様に、娘と呼んでくれた。ダークプリキュアの中で、今までのムーンライトへの蟠りが消えていった・・・

「お父さん・・・」

そう言つて月影博士の頬に触れた。

心の中で、何度サバークをそう呼びたかつた事か・・・

それが今、自分の口から自然と飛び出た事に、うつすら笑みも浮かんだ。今なら、ムーンライトを姉として受け入れられる気がして、思わずそんな自分がおかしくもあつた。

その時、ダークプリキュアの身体を、徐々に光が包み始める・・・

ダークプリキュアは、ムーンライトの方に顔を向けると、今まで見せた事の無い穏やかな表情でニコリと微笑み、手に持っていた、ムーンライトのプリキュアの種の片割れを渡そうとする。一瞬戸惑ったムーンライトだが、意を決し、ダークプリキュアの下へと走り出す。だが無情にも、光はダークの身体を包み込み、ムーンライトのプリキュアの種の欠片は、地面に落ちコロコロと転がっていった。

「ありがとう・・・」

その場に居た一同の心に、深い悲しみを残し、ダークプリキュアは、散りゆく光と共に、完全に消滅した。

月影博士は、両膝を付き悲しみにくれた・・・

ムーンライトは、舞い上がる光の粒子を見送った・・・

その時、その場に相応しくない拍手が鳴り響く、拍手の鳴る城の塔に顔を向けた一同の視線に、砂漠の王デューンが、遂にその姿を現わした。

4、

「やれやれ、とんだお涙頂戴だったね！茶番はもう終わったのかな？」

デューンは塔から飛び降りると、目の前にあった月影博士が付けていたサバークの仮

面を、踏みにじり粉々にした。

「デューン!!」

月影博士は、物凄い形相でデューンを睨み付けると、デューンは口笛を吹き戯（おど）けた。

「おゝ、怖い、怖い……そんな顔で見ないでくれるかな？ 大体、僕達の仲間になりたいと言ったのは、君の方だよ？ フランスに渡り、研究を続けていた君は、研究に行き詰まった頃、我ら砂漠の使徒の存在を知った。こころの大樹の情報が欲しい君は、自ら僕らにコンタクトを取ったんじゃないか？ もっとも、君には感謝しているよ！ 君の研究成果のお陰で、僕はこころの大樹の守りを破る事が出来たんだからね」

デューンの言葉を、拳を振るわせて聞いていた月影博士が、激昂してデューンの名を叫びながら拳を振るう。だが、デューンは軽く攻撃をいなし、逆に月影博士のボディに強烈なパンチを浴びせる。月影博士がその威力に吹き飛び倒れ込む。

「お父さん！……デューン、よくもお父さんを!!」

ムーンライトの表情が一気に険しくなると、再びデューンは口笛を吹き戯ける。

「おゝ、怖い、怖い……親子揃って、そう僕を睨むのを止めてくれるかな？ むしろ、親子の再会を果たせて上げた僕に、感謝して欲しいぐらいだよ！ フフフ！」

そう戯けながらも、デューンの視線がゆつくりと、ムーンライトからブロッサム、マ

リン、サンシャインへと注がれる。

「さて、プリキュア共！僕の城を土足で荒らし回った報いを、受けて貰おうかな？君達は、この戦いで絶望を知る事になる・・・あの変わり果てた星のように、心の花を枯らすが良い!!」

ブロッサム、マリン、サンシャインの表情が一気に引き締まる！

真つ先にムーンライトが飛び出し、デューンに攻撃を開始した。それを見たマリン、サンシャインも攻撃に向かう。ブロッサムは、足下にあつたダークプリキュアが落とした、ムーンライトのプリキュアの種の欠片を拾うと、遅れて戦いに参加する。

ムーンライトの怒濤の攻撃を、余裕で躲すデューン、加勢したマリン、サンシャインの攻撃をも余裕で捌く、遅れて参加してきたブロッサムだったが、攻撃はデューンにかする事もなく、逆にデューンの攻撃を受ける。

「「キュアアアア！」」

「クッ！ここまで強いとは・・・」

四人のプリキュア達から焦りが生じる・・・

嘗て、植物園で対峙した時のように、このままでは、為す術もなくまた敗れてしまう。「どうした!?!その程度がプリキュアの力か？四人纏めても、キュアフラワールの足下にも及ばんぞ！ハハハハ」

そんな四人の心情を知ったかのように、デューンは四人を挑発し、アイコンタクトした四人は、四方から同時に攻撃を仕掛けた！

だが、デューンに動きを止められる。

距離を取ったデューンは、空間に凝縮したエネルギーを溜め込むと、四人のプリキュアに向けて発射する。四人の目の前で大爆発を起こし、四人のプリキュアは、変身解除の状態になり、変身途中の状態である光輝く白いワンピース姿になって、四人は倒れ込みもがく。

「どうした!? もう終わりか? . . . ならば、死ね!!」

デューンが、再び空間に凝縮したエネルギーを溜め込む、そのエネルギーは先程とは比べものにならなかった。

だが、今の四人にはどうする事も出来なかった. . .

「さらばだ、プリキュア共!!」

変身が解けたつばみ達四人に、強大なエネルギー弾が飛んでくる。だが、四人の前に立ち塞がった者が居た。

月影博士である. . .

博士は、両手でデューンの繰り出した強大なエネルギー弾を止めると、自らの力を加えて相殺させようとした。

「ゆり・・・すまなかつた！お母さんを・・・頼む!!」

何とか立ち上がり、父の下に駆け寄ろうとしたゆりの目の前で大爆発が起こり、月影博士は、ゆりの目の前で消滅した。

「イヤアアアア・・・ア・・・アアア」

絶叫し、呆然と父が消滅した場所を見て、地面に崩れ落ちたゆりは、号泣して地に伏せた。

「あんにやろう!!」

「よくもゆりさんのお父さんを!!」

えりか、いつきの表情も強張り、デューンに対し、憎悪を向けた表情になる。肩を振るわして泣いていたゆりが、徐に顔を上げ、凄まじい形相でデューンを睨み付けると、  
「デュー~~~~ン!!!」

ゆつくり立ち上がったゆりの心は、デューンへの憎悪で一杯だった!

三人を見たデューンは、不適な笑みを見せていた。ゆつくりデューンの下に向かおうとするゆりの腕を、涙を堪えたつぼみが止めた。ゆりは、そんなつぼみに振り向こうともせず、

「・・・離しなさい!!!」

「嫌です！自分の憎しみを晴らす為だけに・・・戦うのは止めて下さい!!!」



ゆりを止めようとするつぼみの言葉を、えりかも、いつきも否定する。

「つぼみ、あんた何言つてんのさ？」

「じゃあつぼみは、あいつに僕達の星を滅茶滅茶にされて、憎くはないの？ ゆりさんのお父さんが、僕たちを庇い、ゆりさんの目の前であいつに殺された事が、憎くはないの？」

「憎しみが力に変わるのなら・・・私はそれを受け入れる!!!」

三人に責められ、一瞬言葉に詰まったつぼみだったが、

「私だつて憎いです！でも、でも、憎しみの心では、デューンにはきつと勝てません！私達は・・・」

「勝てないって何で決めつけるのさ？ そんなのやってみなくちゃ分らないじゃん！」

つぼみの言葉を遮るように、えりかが否定すると、つぼみの目に涙が溜まる。それを見たえりかも、いつきも言い過ぎたかと思いつつも、表情は強張ったままだった。

「情けない事言わないで下さい！お願いです・・・憎しみのまま戦えば、きつと負けてしまいます。悲しみや憎しみは、誰かが歯を食いしばって断ち切らなくちゃ、ダメ何です!! 私達が、今まで頑張つてプリキュアをしてきたのは、一体何の為ですか？ 地上に残った人達が、私達に託したものは何だったんですか？」

大きく深呼吸して、つぼみが大声で叫ぶ！

「月影ゆり！ 来海えりか！ 明堂院いつき！ あなた達が一体何なのか？ 何故ここに居るの

か？何をすべきなのか？何の為に戦うのか？・・・自分で考えて下さい!!」

つぼみに名前を呼ばれた三人は、ハツとした表情になり、つぼみの顔を見る。つぼみは、ゆりの手にプリキュアの種の欠片を手渡した後、三人を見つめる。

つぼみの言葉を聞いていたデューンに、苛立ちが募った！

(あの娘(むすめ)・・・何故憎しみに支配されない!!?何故この状況で、此処まで冷静に仲間を諭せるのだ?・・・邪魔はさせんぞ!!)

「プリキュア共、貴様らの戯れ言など聞く耳は持たん・・・キュアブロッサム！今お前は、地上に残った者が、お前達に託したものは何だったのかとほざいていたな・・・ならば、貴様らに託した者共の、哀れな最期を見せてやろう!!」

デューンが指を鳴らすと、巨大なスクリーンが表示される。そこは、四人の見知った場所、希望ヶ花市！薫子が所長を務める植物園が映って居た。そして、植物園を目指し、数十体にも及ぶデザートデビルが向かって来た。

四人に衝撃が走った!!

「デューン・・・何を!?!」

つぼみが震える声で驚愕するのを見ると、デューンは口元に笑みを浮かべ、

「さあ、その映像を良く見ろ!!」

映像は更に拡大されて、逃げ惑う人物の表情まで映し出された。

「もも姉!？」

「お兄様!？」

「ハヤト君!？」

「番君、みんな!？」

えりかが叫んだもも姉とは、えりかの姉で、ゆりの親友でもある来海ももか、いつきが叫んだのは兄である明堂院さつき、ゆりが叫んだハヤトとは、同じ団地に住むゆりが弟のように可愛がっている少年である。

デザートデビルの攻撃を受け、逃げ惑う彼らの姿が映り、つぼみ達に驚愕が走った。

「さあ、良く見ろ！貴様らが大事に守ってきた者達の最期を!!デザートデビルよ、全てを破壊しろ！皆殺しにしろ!!フッフ、ハハハハハ!!」

デューンの嘲笑が辺りに響き渡った・・・

第六話：憎しみの心

完

# 第七話：HEART GOES ON

## 第七話：HEART GOES ON

1、

デザートデビルの猛攻が開始された・・・

さつきやももか、鶴崎先生達が、逃げ遅れた人々を懸命に植物園に誘導する。逃げ場を失った人々が、次々に植物園に避難してくる。

此処も無事とは言えない・・・

だが人々は、唯一と言つていい、建物が無事な植物園に避難していた。しかし、ケンジは違つていた。彼は、デザートデビルの標的になるように、わざと罠になろうと、砂漠の中を駆け回り続けていた。

（時間を稼げば、きつと、きつとプリキュアがこの世界を救つてくれる！時間を稼ぐんだ！みんなを一人でも多く守るんだ!!）

ケンジは、植物園から一匹でも多く引き離そうと必死だった・・・

「む、無茶です・・・番くん、逃げて下さい!!」

涙ながらに映像を見ていたつぼみが叫ぶ、ゆりが、えりかが、いつきが、デューン

を罵る。デューンは、その罵りの言葉を嬉しそうに聞き入る。

(そうだ、もつと憎め!憎しみの心こそ、我が至福なり!)

一体のデザートデビルは、そんなケンジを目障りに感じたかのように、必死に逃げ回るケンジを追い詰めていった・・・

つぼみから、絶望的な悲鳴が上がる!

追い詰められた番ケンジに、最期の時が迫る!!

つぼみはポロポロ涙を流しながら、

「番君!もう、もう止めて下さい!!何で、何で・・・」

だが無情にも、デザートデビルが番ケンジを踏みつぶそうと、右足を高々と上げた瞬間、つぼみ達四人は一斉に目を背けた・・・

ケンジは目を瞑り、死を覚悟した・・・

だが、一向にデザートデビルが振り上げた足が、ケンジに降りてくる事は無かった。いや、逆に凄まじい音と共に、デザートデビルの呻き声が聞こえた気がした。訝しんだケンジが目を開けると、目の前に二人の姿が目に入った。自分を救ってくれた、プリキュア達と同じような姿をした、二人の姿を・・・

「黒と、白の・・・プリキュア!?あなた達は一体?」

咆哮を上げるデザートデビルに対し、二人が名乗りを上げる。

「光の使者・キュアブラック！」

「光の使者・キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア!!」

「闇の力の僕達よ！」

「とつととお家に帰りなさい!!」

ケンジを救ったのは、キュアブラックとキュアホワイトだった。右足を振り上げたデザートデビルの左足目掛けて、二人は強烈な飛び蹴りをお見舞いし、デザートデビルを吹き飛ばした。

「君、大丈夫？あまり危険な事はしちやダメだよ……でも、みんなが避難する時間を稼ぐ為に、囷になる何て……やるじゃん！」

ブラックが、ケンジに向けて親指を立ててウインクする。ホワイトはクスリと笑い、「あなたの勇氣ある行動が、私達を間に合わせたのよ！後は私達に任せて、あなたも避難していて……あの建物には、私達プリキュアが、プリキュアの誇りに掛けて、絶対危害を加えさせないから!!」

ホワイトの頼もしげな言葉に頷き、植物園の方を見てケンジが驚いた。ケンジの視線の先には、プリキュアが、プリキュア達が、植物園を守るように四方を囲っていたのだ

から・・・

植物園の後方で背後のデザートデビル共に睨みを効かせるのは、キュアブルーム、キュアイーグレット、キュアブライト、キュアウインデイの四人であった。

「輝く金の花・キュアブルーム！」

「きらめく銀の翼・キュアイーグレット！」

「ふたりはプリキュア！」

「天空に満ちる月・キュアブライト！」

「大地に薫る風・キュアウインデイ！」

「ふたりはプリキュア！」

「聖なる泉を汚す者よ！」

イーグレットとウインデイが、デザートデビルを指さし叫べば、

「アコギな真似は、お止めなさい！」

ブルームとブライトが同じようにデザートデビルを指さし応える。

「あんだ達は、私達が此処で食い止める!!」

ブルームの宣言と共に、花鳥風月をモチーフにした彼女達が、後方のデザートデビル共に向けて攻撃を開始する。

植物園の正面から見て左側を守るのは、ドリーム達プリキュア5と、ミルキイローズの六人であった。

「大いなる希望の力・キュアドリーム！」

「情熱の、赤い炎・キュアルージュ！」

「弾けるレモンの香り・キュアレモネード！」

「安らぎの、緑の大地・キュアミント！」

「知性の青き泉・キュアアクア！」

「希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく5つの心、Yes！プリキュア5！」

五人のプリキュアが名乗りを上げる。それに続き、

「青いバラは秘密のしるし・ミルキイローズ！」

「私達が居る限り、これ以上の暴虐は許さない！行くよ、みんな!!」

「[[[[[YES!]]]]」

ドリームの力強い言葉を受け、六人がデザートデビルに立ち向かう。

植物園の正面から見て、右側を守るのは、ピーチ達四人だった。

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュ！キュアピーチ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ！キュアベリー!!」



「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュ！キュアパイン!!」

「真つ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ！キュアパッション!!」

「二「レッツ、プリキュア!!」二」

名乗りを上げた四人の戦士が、デザートデビルを威嚇する。

「私達が来た以上、此処から先には進ませない！行くよ、ベリー、パイン、パッション！」

ピーチの勇ましい言葉を合図に、四人の頼もしい戦士がデザートデビルに突撃する。

「プ、プリキュアがあんなに居た何て・・・アツ!？」

ケンジが沢山のプリキュア達に驚いていた時、デザートデビルが発したレーザーが逸れ、植物園に向かった。だが、植物園にそれが当たる事は無かった。何故なら、植物園の上では、シャイニールミナスが四方を見張り、バリアを張っていたのだから・・・

「光の心と光の意志、全てを一つにする為に！」

ルミナスが両手を広げ、名乗りを上げる。その側には、ルルン、ココ、ナッツ、シロツプ、シフォンにタルトが居て、プリキュア達に声援を送っていた。そして、咲の愛猫コロネも、プリキュア達の奮闘振りを見守る。

「私達が居る限り、これ以上の破壊は絶対に許しません!!」

ケンジは、頼もしいプリキュア達の出現に安堵し、植物園へと避難して行った。

ブラックとホワイトは、避難していくケンジの姿を見送ると、先程蹴り飛ばしたデザートデビルに、プリキュアマールスクリユーマックスを浴びせ倒すと、植物園の正面に移動した。二人は、更なる進撃を開始するデザートデビルを見て、

「クイーンが言つてたように、此処には何かありそうだね？それにしても、いい加減あの顔にも飽きてこない、ホワイト？」

「そうね、たった一日だけど、もうウンザリね！」

二人がアイコンタクトを取り頷くと、

「ブラック、サンダー！」

「ホワイトサンダー！」

「プリキュアの美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

ブラックが、ホワイトが叫び、プリキュアマールスクリユーマックスを再び放つ、更に力を込め、スパークルブレスを回転させると、

「スパークウウ!!!」

二人の叫びと共に発せられた強大な虹の光が、正面に居たデザートデビルの群れを次々と飲み込み、デザートデビルを消滅させていった・・・

デューンは、つぼみ達の存在を忘れたかのように、呆然と画面に食い入るように見入っていた。

(地上にもプリキュアだと?・・・一体どういう事だ!?)

次々に消滅させられていくデザートデビルを見て、先程までの余裕な表情は、完全に消え失せていた。

「貴様らああ!何をしている?こうなれば強行突破だ…正面に戦力を集結し、プリキュア共を皆殺しにしろおお!!!」

苛立ったデューンの指示通り、デザートデビル達は正面に残った戦力を集結させる。それを迎え撃つように、17人のプリキュア達も正面に居並ぶ。

デューンの指示通り、一斉にデザートデビルが口を開き、強力なエネルギー波を放つと、それに負けないぐらい、プリキュア達は互いが誇る最強クラスの必殺技を同時に放つ!

MH組がエキストリーム・ルミナリオを放ち、SS組がプリキュアスパイラルハートスプラッシュと、プリキュアスパイラルスターズプラッシュを放つ!ココとナッツの力を借りたプリキュア5とローズが、プリキュアレインボーローズエクスプロージョンとミルキイローズメタルブリザードを放てば、フレッシュ勢がプリキュアトリプルフレッ

シユとプリキュアハピネスハリケーンの合体技を放つ！

正に強大な闇のエネルギーと、光のエネルギーの激突だった・・・

2、

つぼみ、えりか、いつき、ゆりの四人も、そして、別室でモニターを見て居た薫子も、それぞれ、画面に映った17人のプリキュアの勇士に驚愕していた。

薫子は、地上のプリキュア達を見て、50年前の出来事を思い出していた・・・

プリキュアパレスの試練で、先代のプリキュアを破り、ハートキャッチミラージュを手に入れた時を・・・

「あの時、先代は言っていた！砂漠の使徒と戦って居る私達だけが、プリキュアじゃないって、世界にどうしようもない危機が訪れた時、プリキュアは集う！あの時の私には、よく意味が分からなかったけれど・・・それは、彼女達の事だったの？」

薫子は、モニターを見ながら、植物園を守り続けてくれるブラック達を見て、目を輝かせた・・・

「プ、プリキュアって、あんなに居たの？」

えりかの驚きも最もであった。彼女達にとってプリキュアとは、キュアフラワーを除

けば、自分達以外に居るとは思っても見なかったのだから・・・

それは他の三人にも同じ事だった・・・

(プリキュアがあんなに一杯・・・凄いやあ!!)

いつきはプリキュア達の勇姿を見て、目をキラキラ輝かせた!

(プリキュアがあんなに沢山・・・でも、こんなに心強い事はありません!!)

17人のプリキュア達の勇士が、つぼみの心に変化を与えた事に、まだつぼみ本人も気付いては居なかった。

(どういう事!?でも・・・つぼみに、彼女達プリキュアに・・・私は、目を覚まさせられたわ!)

ゆりの表情に、もう憎悪は見られなかった。

何かを吹っ切ったように・・・

それはえりかといつきも同じだった・・・

「ぜ、全滅だとおお!!?あの街に居た、数十体ものデザートデビルが・・・あんなに呆気なく全滅だとおお!!?バカな・・・そんなバカなああ!!?」

デューンは思わずよろめき、どんどん表情が険しくなる。画面に映るプリキュア達の勇士を見て、憤怒の表情になっていく。デューンは画面を消し、ゆつくりとつぼみ達の方を振り向くと、

「キュアフラワールの差し金か？それとも、貴様らか？」

憤怒の表情で聞くデューンに、一瞬戸惑ったえりかが答える。

「あつたり前じゃん！奥の手つてえのはさ、最後に見せるもんなの！！あんた見たいに調子扱いて、恥じかくような無様な真似しないって！！」

えりかがデューンにアカンベクをする。えりかもいつものえりかに戻っていた。このチームのムードメーカー、来海えりかに……

「そう……か！やはり……貴様らの……し……わ……ざ……か……！！」

激高したデューンが、どす黒いオーラを纏うと、デューンの髪の毛が一段と伸び、つぼみ達に憎悪の視線を向ける。

「絶対に許さん……この手で貴様らを……八つ裂きにしてやる!!!」

デューンの様子を見て、スツとゆりが立ち上がる。

憎しみに囚われたデューンの醜い姿を見て、先程までの自分の愚かさを思い浮かべ、大きく深呼吸するゆり、そして、何かを決意したように叫ぶ！

「つぼみ、あなたの言う通りだわ！私達プリキュアは、憎しみではなく……愛で戦いましょう!!!」

ゆりの言葉に賛同するように、えりかが親指を立ててつぼみにニヤリと笑い、いつきもつぼみに微笑む、それを見て言葉を飲み込むつぼみ、

(みんな、みんなが分つてくれました．．．私、私、)

ゆりの手にあつたプリキュアの種の欠片が、一つになる。

(ダークプリキュア．．．あなたの思いも今、私と一つになった！)

「つぼみ、えりか、いつき．．．変身よ!!」

「はい!!」

えりかといつきが即答で返事をし、

「ハイ!!」

つぼみは涙を拭い、嬉しそうに返事をしてゆりの横に並んだ。正面から見て、一番左にえりか、ゆり、つぼみ、いつきの順で四人が並ぶ!

「「「プリキュア! オープンマイハート!!」」」

四人が同時に叫び変身する．．．

「大地に咲く、一輪の花・キュアプロッサム!」

「海風に揺れる一輪の花・キュアマリン!」

「陽の光浴びる一輪の花・キュアサンシャイン!」

「月光に冴える一輪の花・キュアムーンライト!」

「「「ハートキャッチプリキュア!」」」

「「「ハアアア!!」」」

雄叫びを上げながらデューンに突進していく四人、シプレが、コフレが、ポプリが、それぞれ、ブロッサム、マリ、サンシャインとアイコンタクトを取りマントに変わる。走りながら独自にマントを出すムーンライト、彼女達を迎え撃つように咆哮して突進するデューン、それを見て三方に散るブロッサム、マリ、サンシャイン！

先ず先陣を切つてムーンライトがデューンと対峙する。拳と拳がぶつかり合い、蹴りと蹴りが相殺する。先程と違い、ムーンライトの攻撃が何度かヒットするようになっていた。サンシャインが突進し、デューンに回し蹴りを連続で浴びせ、上空から入れ替わるようにマリがマリンドライブで跳び蹴りしながらデューンに攻撃する。躲すデューンだが、着地したマリが瞬時に振り向き、パンチをデューンにヒットさせる。直ぐに体勢を立て直したデューンに、ブロッサムとムーンライトが、両手をハート型に繋いで、プリキュアインパクトを繰り出す。腕をクロスして何とか攻撃に耐えたデューンは、ブロッサムを見て逆上する。

「貴様だ！貴様が居なければ、あの時点で勝敗は決していた！許さんぞくくく!!!」

デューンが、ブロッサムを集中して狙い始める。咄嗟の判断で空中に逃げるブロッサムと、追うデューン、空中で交差し、互いに攻撃仕合う二人、

「ブロッサム・シユート！」

連続エネルギー弾を放ち、何とか距離を取るブロッサム、入れ替わるようにムーンラ



イトが、飛び回し蹴りでデューンを地上に蹴り飛ばす。地面にめり込みながら、直ぐ体勢を立て直して、地上に居たプロツサム目掛けるデューン、

「あたしの親友に、何しようってえのさ！」

マリンがマリンシュートを放ち、プロツサムを守る。嬉しそうな表情になったプロツサムだったが、デューンが更なる雄叫びを上げ、拳にエネルギーを溜めながらプロツサムに突撃する。

油断していたプロツサムの顔面に、至近距離からデューンの衝撃波が当たりそうになるのを、ムーンライトが、プロツサムの腕を引っ張り避けさせ、デューンにカウンターの回し蹴りを食らわせ吹き飛ばす。デューンは吹き飛ばされながらも、プロツサム、ムーンライトの二人に、強力なエネルギー波を放った。

（直撃だ！）

デューンがフツと笑むが、直ぐにその表情は消えた。サンシャインが二人の前に立ち、サンシャイン・イージスでバリアを張って二人を助ける。バリアに亀裂が入ったのを見て再び三方に散る。

「ちよこまかと・・・目障りな奴らめ〜!!」

再びプロツサム目掛けようとしたデューンに、サンシャインが突っ込むと、デューンは咄嗟にパンチを出す。サンシャインは身を低くして躲し、デューンのボディに連続し

てパンチを決める。蹠踉めいたデューンに追い打ちを掛けるように、ブロッサム、マリ  
ン、ムーンライトの攻撃が連続でヒットする。

「集まれ！花のパワー!!」

ブロッサムが、ブロッサムタクトを、マリンがマリンタクトを取り出し、サンシャイ  
ンがシャイニータンバリンを、ムーンライトがムーンタクトを取り出し、勝負に出る。

「花よ、煌け！プリキュア！ブルーフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

「花よ、輝け！プリキュア！シルバーフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、輝け！プリキュア！ピンクフォルテウエ〜イブ!!」

四人の必殺技が同時にデューンにヒットして爆発する。

「グウウオオ〜!!」

デューンが呻く、それを見たマリンとサンシャインが、アイコンタクトで頷き合い、

「集まれ、二つの花の力よ！プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

マリンとサンシャインの身体が、青と黄色の光に包まれ上昇する。それを見るブロッ  
サムに、ムーンライトが微笑み掛ける。思わず喜ぶブロッサム・・・

「集まれ、二つの花の力よ！プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

ピンクの光に包まれたブロッサムと、銀色の光に包まれたムーンライトが同時に上昇

する。唸り声を上げデューンも赤黒い光を帯びて、青と黄、ピンクと銀、二つの合わさった光を追いかける。だが、二つの光と激突する度にデューンは何度も地面に叩き付けられる。

「グウウオオ〜！おのれ、おのれ〜！！」

更に激高するデューン目掛け、二つの光がデューンの身体を貫き、四人のプリキュアが再び姿を現わす！

「ハ〜トキヤッチ!!」

四人の掛け声と共に爆発するデューン、そして、四人のプリキュアは、デューンとの戦いに決着を付けるべく、ハートキヤッチミラージュを取り出した・・・

### 3、

植物園に避難した人々は、窓越しに見える、日が暮れた砂漠に立つ、17人のプリキュアのシルエットに、賞賛の声を浴びせ続けた。

「ブラック、まだ油断するなメポ！」

「まだあそこから、凄い憎しみの力を感じるミポ」

メップルとミップルが忠告する場所を、ジッと凝視する17人のプリキュア達は、月の光に微かに見える物体に驚く。

「何、あれは？城!？」

アクアが何かに気付いたように指さす、

「あそこから、憎しみの力が溢れだしているのね?」

ホワイトの問いかけに頷く、メップルとミップル、

「怖いルル・・・」

不安がるルルンを優しく抱き上げ、ルルンをあやすルミナスの心に、クイーンが語り掛ける。

「ルミナス、あそこで今四人のプリキュア達が、憎しみに囚われた哀れな王と戦っています。あの者に憎しみの心が残っている限り、虹の園が更なる脅威に晒されるやも限りません。用心して下さい!」

ルミナスは頷き、皆にクイーンからの言葉を伝えると、一同はまだ見ぬ仲間達が戦って居る惑星城を見つめた。

「あそこで、私達のまだ見ぬ仲間が戦ってるんだね!」

ブラックは感觸深げに、空の彼方に浮かぶ惑星城を見続けた・・・

四人のプリキュアは、ハートキャッチミラーージュを取り出し、祈りを始める。

「二二鏡よ、鏡、プリキュアに力を!世界に輝く一面の花・ハートキャッチプリキュア!

スーパースルエット!!」

全員が白色の衣装に、羽衣を身に着けたような姿に変わる。四人が一斉にハートキャッチミラーージュを上空に放ち

「花よ、咲き誇れ!プリキュア!ハートキャッチオーケストラ!!」

四人の呼びかけに応えるように、目を閉じた巨大な女神のシルエットが姿を現わし、四人の叫びと共に行動する巨大な女神のシルエットから、デューン目掛け振り下ろされた愛の拳が直撃する。

「ハアアアア!」

四人が叫びながらタクトを、タンバリンを回し、デューンを浄化させようとする。だが、デューンは両手を握り、力を加えると、

「こんなもので・・・我らの憎しみが晴れると・・・思うな〜!!!」

デューンの絶叫と共に、プリキュアハートキャッチオーケストラは破られ、女神のシルエットが消え失せる。

「そんな、プリキュアハートキャッチオーケストラが効かない何て・・・」

ブロッサムが驚愕の声を上げる。

「我ら砂漠の使徒の憎しみは、こんな事では消えんぞ!貴様らプリキュアさへ居なければ・・・この星はとっくに我らの安住の地となったのだ!貴様らが居なければな!!」

デューンの表情に、一瞬哀しみの心を見たプロツサムは、デューンに問いかけた。

「何故そんなに砂漠化にこだわるのですか？何故私達プリキュアを憎むのですか？」

デューンはチラリとプロツサムを見ると、

「いいだろう・・・教えてやる！我ら砂漠の使徒は、元々闇の存在から生まれた。数億年にも渡る長き流浪の中、闇は知識を得た。何度も代替わりをしながら、我らはこの姿をようやく手に入れた。だが、この姿を保つ事は難しかった・・・我らは急激に数を減らした。だが、遂に知った!!闇から生まれた我らにとつて、乾いた砂漠の空気こそ我らが生きる最良の条件だと知った。そして数百年前、我ら砂漠の使徒にとつて、最良の星であるこの星に巡り会った。この星を砂漠にすれば、我らの悲願は達成される筈だったが、そこにはこころの大樹があった・・・貴様達プリキュアが阻んできた！分るか？目の前に我らの安住の地を見付け、それを拒み続けられた者の怒りが！この暗黒の宇宙を数億年も流浪してきた者の思いが！代々の王に、後事を託された王達の悲願が！目の前で何度も絶望を味わった我らの憎しみが！貴様達が今味わっている苦しみなど、我らに遙かに届かんよ!!」

デューンは昔を思い出したのか、拳を震わせた。

「50年前、砂漠の王となった私は、雌雄を決すべくキュアフラワーと戦ったのだが・・・後は貴様らも聞いていよう・・・さて、決着を付けよう！この地に眠る全ての怒りよ！

全ての世界の砂漠の使徒よ、貴様達の憎しみの全てを……我に差し出せ!!」

デューンの叫びに呼応するように、惑星城が地響きを立て崩れ始める。スナツキー達は、全てを吸い上げられたように、服を残し砂に帰り、地上に残っていたデザートデビルの全てが砂になった。デューンの身体は、憎しみの力を帯びてどんどん巨大化していった。

「な、何て大ききさなの!？」

思わずムーンライトが驚愕の声を上げる。

「つぼみ、ゆりちゃん、えりかちゃん、いつきちゃん、こつちに来て!!」

コツペの結界の中で薫子が一同を呼ぶと、みんなは薫子の下に集った。

「お婆ちゃんが戦った時も、あんなに巨大だったの、あいつ?」

マリンの問いかけに、薫子は首を振り答える。

「私と戦った時でも、あれほど巨大では無かったわ!デューンの憎しみの心が、暴走している……あれではデューンも……」

哀れむようにデューンを見る薫子、デューンは憎しみの姿を吸収しつくし、巨大化を完了させた。地球をも覆いそうな巨大な姿に……

「素晴らしい力だ!まず、地上に居るプリキュア共に先程の礼をせねばな……」

デューンは右拳を振り下ろすと、巨大な鉄拳が、希望ヶ花市に振り下ろされる。ゴ

オオオオという響きと共に、デューンの鉄拳により直径数キロにも及ぶクレーターが出る。

地上に居た17人のプリキュアにも、デューンの巨大な姿が見えていた。

「な、何て大ききなの!?!アクダイカーンの比じゃないわ!」

ブルームが思わずたじろぐ、

「え、ええ、あんな大きな敵に、どうやったら勝てるの?」

アクアが思わず不安がる。呆然とする14人のプリキュア達を余所に、三人のプリキュアがクレーター目掛け突進する。嘗て、巨大なジャアクキングと戦ったブラック、ホワイト、ルミナスである。クレーターの中心に到達したブラックが、

「私達つてさ、何か巨大な者に縁があるよね?」

「フッフ、そうね・・・でも、これ以上この星を傷付けさせない!!」

「はい、守りましょう!!」

デューンが再び拳を振り下ろすのに合わせるように、虹の光を浴びた三人が叫ぶ!

「漲る勇氣!」

ブラックが叫べば、

「溢れる希望!」

ホワイトが応える。



「光輝く絆とともに！」

ルミナスの言葉と共にブラックとホワイトの目の前に虹のハートが現われる。ブラック、ホワイトが上空に向きを変えると、虹のハートも上空に向きを変える。

「エキストリーム……」

「ルミナリオオオオ」

強力なエネルギー波が、デューンが打ち下ろした拳を弾き飛ばす。その行動に勇気づけられた14人のプリキュアも駆けつけ、それぞれの技を繰り出し、デューンの攻撃から地上を守り続けた。

「地上は、私達が必ず守る!!!」

17人のプリキュアの光が、ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトに更なる力を与える。

地上への攻撃を、地上のプリキュア達に防ぎ続かれ、デューンは苛立っていた。

「クッ、プリキュア共々!!!ン!?!」

背後に気配を感じたデューンが、背後を振り向くと、デューンの顔の位置に、左からムーンライト、マリン、ブロッサム、サンシャインが横に並び立つ！シプレ、コフレ、ポプリの妖精達も、それぞれのパートナーの顔の側に浮かんでいた。

「笑っちゃうよね、私達14才の美少女がデュオンと戦う何てさー！」

「美少女は微妙ですっ！」

ンっといった表情でコフレを睨むが、直ぐに笑い合う二人、

「えりか、ゆりさんは17才だよ！」

サンシャインの指摘に、エツと戸惑うムーンライトと、慌ててムーンライトに謝るマリンの和やかな雰囲気には、ブロッサムは思わず微笑む。ムーンライトと目が合い、ブロッサムがムーンライトに先程の行為を詫げる。

「ゆりさん……さつきは年上のゆりさんに、生意気な事を言つてすみませんでした！」  
深々と頭を下げるブロッサムに、ムーンライトは首を振り、

「あなたの優しい気持ちと、思いやりの心が、私に大切なものをくれたのよ！ありがとう……つぼみ!!」

涙ぐむブロッサム、四人の姿を見て心を動かされた薫子が、コツペに頼みコツペと共に四人の側にやってくる。

「お婆ちゃん!？」

花びらの舞が薫子を包み込むと、

「今は……キュアフラワーよ！」

キュアフラワーに変身した薫子が、四人にウィンクする。サンシャインは少し横に退

き、フラワーをブロッサムとサンシャインの隣に招き入れる。

「キュアフラワーだど!?!・・・君は私に、あの時のように憎しみの心をぶつけてくれるのかな?。」

デューンの問いに、ゆっくり首を振るフラワーは、

「50年前の私は、まだ未熟だった・・・あなたの憎しみの奥に眠る哀しみに、気付いてあげられなかった。あなたを倒せば全て終わる・・・そう考えていた。でも、50年の時が過ぎて、それが間違いだったと悟ったわ!まさか、自分の孫に教わる何て思わなかったけどね」

フラワーが優しくブロッサムの頭を撫でると、ブロッサムははにかむ。

「僕たちも一緒に戦うですっ!。」

コフレの言葉にシプレ、ポプリも頷き、それぞれのパートナーにしがみつく。それを微笑ましく見守っていたムーンライトの側に、三つの蛍のような光が近寄ってくる。不思議そうに見ていたムーンライトの顔の側で、ムーンライトのパートナーだったコロンのシルエットが現われ微笑んだ。驚いたムーンライトの左肩に手を掛けて優しく微笑む父、月影博士のシルエットに再び驚愕する。更にムーンライトの右手を取り微笑み掛けるダークプリキュアのシルエットが現われる。ムーンライトの瞳にそれぞれを見て涙が溜まるが、ムーンライトは唇を噛み耐えた。泣くのは、全てが済んでからにしよう

と心に決めた。

(何だ!?!この力は……)

デューンが狼狽えるが、直ぐに咆哮し、両手をクロスして超強力なエネルギー波を放つも、目を瞑ったプロツサムが掲げたハートキャッチミラージュから放たれる光が、強力なバリアを張った。ハートキャッチミラージュに映し出されるデューンの顔、それを悲しげな視線で見つめたプロツサムが、静かに語り出す。

「デューン……あなたの哀しみが終わらないのは、私達の力が足りないから……あなたの憎しみが消えないのは、私達の愛がまだ足りないから……だから……だから……」

言葉に詰まったプロツサムの言葉を、仲間が引き継いでいく。

「だから、私達は力を合わせましょう!」

ムーンライトが仲間達を、フラワーを、妖精達を、父と妹を見て微笑むと、

「無限の可能性が……今花開くわ!」

フラワーの言葉通り、デューンを見たプロツサムが、満面の笑みを浮かべた時、プロツサム、いや花咲つぼみの心の花、桜が満開に花開く!それに呼応するように、ハートキャッチミラージュから強烈な光が溢れ出る。彼女達が光に包まれると、巨大な卵が生まれ、一人の少女の姿に姿を変える。それはつぼみに似て居た……

「宇宙に咲く、大輪の花!無限の力と、無限の愛を持つ星の瞳のプリキュア……ハート

キャッチプリキュア！無限シルエツト!!!」

一同が心を一つにして叫ぶ！

巨大なシルエツトは、デューンと同等なほど大きくなる。その姿を呆然と見ていたデューンに焦りが生まれる。自分に沸いてくる恐怖の心を掻き消すように、デューンは無限シルエツトに、パンチを連続で繰り出すも、無限シルエツトに攻撃が届く事は全く無かった。逆にそのダメージは、自分自身に返ってくるだけであった。

「憎しみは自分を傷つけるだけ……私達の思いを、愛を、あなたに届けます!!」

無限シルエツトが両手一杯に腕を広げ、デューンを抱きしめる。デューンの心にプリキュア達の思いが流れ込んでくる。デューンの目にたくさんの満開の桜が生い茂って見えてくる。その美しい光景を見て、デューンの身体から、黒いオーラが飛び出し、デューンの身体が徐々に、徐々に小さくなっていく。少年の姿に戻ったデューンが小声で何かを呟く、一同には何を言ったのか聞き取れなかったが、唯一人、つぼみには聞こえていたようで、

「私達一人一人が、人間を、動物を、自然を、そして、地球を愛すれば、地球は美しい星のままです！そして、闇と光は互いを尊重する事が出来る筈です……だって同じ、兄弟姉妹ですもの!!」

つぼみの言葉を聞き、デューンが微かに微笑んだように見えた。デューンは光と交わ

り消えていった・・・

そして、無限シルエットの愛は、地球全土を覆う・・・  
地球は、元の青く輝く姿を取り戻そうとしていた・・・

第七話：HEART GOES ON

完

## 第八話：凄い事をしてしまった！

第八話：凄い事をしてしまった！

1、

美墨なぎさは、自宅でプリキュアダイアリーに、デザートデビルとの戦いと、新たな仲間、プリキュアオールスターズとの出会いの日々を書き込んでいた。彼女達との出会いは、なぎさも、ほのかも、ひかりも、心から嬉しかった。自分達と同じような境遇の子達が、あんなに居たとは思わなかったが、彼女達と触れ合う事は、心の底から楽しかった。

親睦を深めた事で、彼女達が自分と近い年齢だとも知り、より一層の親近感をなぎさは持っていた。

高校2年生のなぎさ、ほのか、ゆり

高校1年生のかれんとこまち

中学3年生のひかり、咲、舞、満、薫、のぞみ、りん、ラブ、美希、祈里

中学2年生のうらら、つぼみ、えりか、いつき

くるみとせつなは、今は学校に通っては居なかったが、ひかりと同じ位だと知り、ひ

かりと良い友達になってくれればと思っていた。

「うららやつぼみ達が、亮太と同じ年だとはねえ……亮太にも、あの子達を見習わせた  
いよねえ……」

思わずあの日を思いだし、なぎさの口元に笑みが浮かんだ時、

「なぎさあ、早くお風呂入っちゃいなさいよ!」

「分ってる!もう、相変わらず五月蠅いんだから……でも、本当に元の生活に戻ったつ  
て感じよね!」

母、美墨理恵の相変わらずの口五月蠅さに、なぎさは頬を膨らましながらかも、懐かし  
さを覚えた。

あれから一週間で過ぎた……

正月も過ぎ、人々は、地球が砂漠化した事など、まるで覚えていないようであった。美  
墨家も例外では無かった。

父も、母も、弟も……

だが、プリキュアの仲間達は違う……

誰もがあの時の戦いを覚えて居た!

「楽しみだなあ……明日はまたあの娘達に会えるんだもの!」

なぎさはワクワクしながら風呂場に向かった。



なぎさが部屋を留守にしたのを良い事に、メツプルが妖精姿に変化し、プリキュアダイアリーを覗き見た。

「なぎさも、他のプリキュアとの出会いは、本当に嬉しかったみたいメポ」  
メツプルもあの時を思い出し、ニコニコしながらページを捲る・・・

デューンンの憎しみの心を癒し、四人のプリキュアは、薫子と共に地上に帰還した。

出迎えた人々の歓声が、植物園周辺で木霊していた。少し離れた場所で、戻って来た四人を見つめる17人のプリキュア達、その誰もが、微笑みを浮かべていた。

「やれやれ、どうやら彼女達がやってくれたみたいね・・・みんな、見て！砂漠が徐々に消えていくわ！」

ブラックが地表を指さし嬉しそうに語る。皆、疲労はピークを迎えていたが、この時ばかりは、疲れも吹き飛ぶ程に喜んでいた。その時、グウウと大きな音が響く・・・音がした方を一斉に見ると、音の主はドリームだった。思わず一同から笑い声が漏れると、ドリームも笑いだし、

「エへへへ、安心したらお腹空いちちゃったあ・・・だってえ、朝から殆ど何も食べて無いんだもん！」

ドリームがお腹を摩り、テレ笑いを見せれば、ブラック、ブルーム、ピーチも同意す

る。

「ホント、ホント! お腹減ったよね・・・と言っても、お店やってるかなあ?」

「もう、ブラックだったら、こんな状況でやっている訳ないじゃない! ウフフ」

ブラックの言葉に呆れながらも、ホワイトが微笑みながら突っ込む、ピーチも頷きながら、

「材料あれば、私が愛情たっぷりの特製ハンバーグでも、御馳走しちゃうのになあ・・・」

ピーチのハンバーグと言う言葉を聞くと、目の色を変えたドリームから涎が溢れる。

「ドリーム・・・端無いわよ!」

アクアが呆れながらドリームを窘めると、一同に笑い声が響き渡る。ドリームもエヘへと再び笑い声を上げた。

そんな一同に気付いた薫子は、一同を見て微笑みながら近づいて来た・・・

薫子の妖精コツペは、他の人達に見つからないよう、先に植物園にテレポートしていた。薫子は、17人のプリキュアに一礼すると、

「みんな、ありがとう! あなた達プリキュアが居てくれたから、この世界は復興していくのよ!! みんな、疲れたでしょう? 今夜は、私の勤める植物園に泊まってちょうだい!! あの娘達もきつと、あなた達と語りたいたいだろうから・・・さあ、こちらにどうぞ!!」

17人のプリキュアに礼を言い、人々に囲まれて賞賛されているプロツサム、マリ、

サンシャイン、ムーンライトの気持ちを代弁して、17人のプリキュアを植物園の中に案内しようとした時、移動しようとする一同に気付いたブロッサムは、慌てふためきながら他の仲間達に知らせ、

「アツ！皆さん、待って、待って下さい!!」

ブロッサムが、ムーンライトが、サンシャインが駆け寄ってくる。マリンは、17人のプリキュア、一人一人に抱きつき、

「みんな、ありがとね!」

そう言うと、満面の笑顔を見せる。

(この子……小学生かしら?)

ベリーは、思わず可愛らしいマリンの頭を撫でると、マリンは気持ち良さそうな表情を浮かべた。

「みなさんがこの地上を守ってくれたから、私達は、デューンの憎しみを消し去る事が出来ました!本当にありがとございました!!」

ブロッサムが深々お辞儀をすると、ブラックは手を横に振り、

「ううん、あなた達は、自分達の力で、この世界を救ったんだよ!」

「いいえ、あなた達が居なければ、私は……きつと憎しみの心でデューンと戦い、敗れていたでしょう!あなた達のお陰よ!ありがと!!」

ムーンライトは、微笑みながら右手を差し出し、ブラックに握手を求めると、ブラックもニツコリ笑い握手をする。その握られた二つの手に、次々手を重ねていく19人のプリキュア達……

21人のプリキュアの絆が、一つになった瞬間であった。それぞれの妖精達も、薫子も、嬉しそうにその様子を眺めていた……

2、

人々の姿が見えなくなったので、変身を解く少女達……

中に居たコロネが、咲を見付け近づいて来ると、咲は、満面の笑みを浮かべながらコロネを抱き上げ、喉元を人差し指で撫でて上げると、コロネは気持ち良さそうにしていた。

「コロネ！ ただいまあ!! ちゃんと大人しくしてた?」

「へえ、この猫ちゃん、咲さんの家の猫なの? ふっくらしてて可愛いですねえ!」

祈里は、笑顔を向けながらコロネの頭を撫で、喉元を指で撫でると、コロネは、ゴロゴロ喉を鳴らして気持ち良さそうにする。咲は首を捻りながら、

「うーん、可愛いは微妙だけどね……アハハ!」

キルンを呼び出し、コロネと会話しようとしていた祈里は、

「チエツ、咲の奴、一言多いぜ．．．ン!? あんた、俺の言葉が分かるのか? 俺はコロネだ! ヨロシクな!!」

「あつ、ご丁寧に．．．私は山吹祈里です!．．．って、コロネちゃん、何か渋いですね?」

「まあな、これでも人間で言えば、立派な大人の年齢だそうだからな」

コロネと会話する祈里を見て、咲の目が点になる。

「祈里ちゃん．．．コロネの言葉が分かるの?」

「ええ、私の妖精キルンの力を借りると、動物達とお喋りできるの!!」  
「動物とおお!?!」

祈里の言葉を聞き、咲は心底驚いたようで、変顔をして仰け反る。コロネは、ニヤツと一鳴きするも、祈里には、コロネの言葉がはつきりと聞こえてくる。

「おい、祈里! 咲に伝えてくれ!! その不細工な変顔は、なるべく外で出さないようにしないと、嫁の貰い手が居なくなるって」

(そ、そんな事、私から言えないよおお)

そんな事言える訳が無いと祈里が戸惑っていると、咲は不思議そうに小首を傾げ、  
「祈里ちゃん、今コロネ何って言ってたの?」

「エツ!? エエエとおお．．．」

どう取り繕うかと、苦笑まみれで考え込む祈里であった・・・

その側でいつきは、かれん、こまちと会話していた。かれんも生徒会長をしていたと聞き、いつきはかれんに親近感を持っていた。

「へえ、かれんさんも生徒会長をしてらっしゃったんですか?」

「ええ、と言つても、中等部の頃だけど・・・今は頼まれて、生徒会の手伝いをしているぐらいかしら」

「かれんが中等部で生徒会長をしていた頃、中等部の評判が高等部でも評価されてたみたいで、高等部に進学したら、早速生徒会長さん直々に頼まれたのよねえ?」

こまちは、その時を思い出したのかクスリと笑い、困惑しながらも、生徒会の仕事を手伝う事を約束したかれんの姿を思い出していた。いつきは目を輝かせ、凄いやあと感心する。かれんは照れ笑いを浮かべて、そんな事無いと謙遜し、一年の時から生徒会長をしていた、いつきの方こそ凄いと持ち上げた。

会話をしながら一同の様子を見ていたかれんは、シロップを見付けて呼ぶと、シロップが三人に近づいて来る。

「かれん、こまち、それに・・・いつきだったな!何か用か?」

少年の姿になっていたシロップが、三人に何の用か尋ねると、かれんが何か語り出す。

かれんの言葉を聞いていたこまちといつきは、何度も頷き目を輝かせた。

「それは良いアイデアですね！でも、どうやってそこまで行くんですか？」

いつきが不思議そうに首を捻ると、かれんとこまちは顔を見合わせクスリと笑い合  
い、こまちがシロップを見ると、

「ウフフ、大丈夫よ！ねえ、シロップさん!!」

シロップが頷き、妖精の姿になるのを見て驚くいつき・・・

「エツ!?エエエ?」

「ウフフ、驚いた?」

いつきの反応を見て、思わずクスリと笑ったかれんとこまちは、一同に、いつきやシ  
ロップと一緒に、ちよつと出掛けてくると告げる。慌てたポプリがいつきに抱きつき、  
一緒に行くのと泣き出すと、いつきは優しく頭を撫でながら、かれんとこまちに許可を求  
めると、二人は快諾した。

ひかり、舞、ラブと会話していたのぞみは、慌ててかれん達の方を振り向き、

「エツ!?折角みんなと盛り上がってるのに・・・かれんさん、こまちさん、早く戻つて  
きて下さいよ!」

のぞみに言われて、かれんは直ぐ戻るわと告げ出掛けて行った・・・

「かれんさん達、何処に行ったんでしよう?」

うららが不思議そうに首を捻ると、美希も首を捻り、さあと答える。美希は、さつきから気になっていた事を、えりかに問い掛けてみた。

「ところで・・・さつきあなた達を出迎えた中に、来海ももかが居たわよねえ?羨ましいわあ・・・モデルを目指しているあたしとしては、何時も雑誌で参考にさせてもらっているのよね!」

「本当ですよね、私も共演した事は無いんですけど、ももかさんの人気は、私達の間でも話題になってますよ」

美希とうららが、ももかの事で盛り上がる。美希は、えりかがももかと親しげに話していたのを思い出し、

「そういえば、さつきえりかちゃん、彼女と親しげに話してたわねえ?」

美希が溜息を付きながら、えりかの事を羨ましがるも、えりかは両腕を頭に回しながら、

「そりゃあねえ、だってもも姉は、あたしのお姉ちゃんだもん!今日は植物園に泊まるからって言っただけだよ」

そんな反応も、ある程度慣れっこになっていたえりかだったが、聞いた美希とうららは、顔を見合わせ大いに驚き、

「エエエ!?そ、そうなの?・・・」



えりかの身長と容姿を見て、少し間の空くうららと美希、美希は、マジマジえりかを見つめると、

(えりかかつて、来海ももかの妹だったんだ？あんまり似てないかも!?)

表情に出さないようにしながらも、えりかの事が羨ましいと思う美希とうららだった……

一方つぼみは、同じ花屋仲間のりん、そして、花に興味を持っていたせつなと会話していた。りんの家も花屋だと聞き、つぼみは興味深げにしていた。りんも、同様に感じていたように、

「へえ、つぼみの家も花屋だったとわねえ……やっぱり、つぼみもお店手伝ったりするんだ？」

「はい、今お母さんが妊娠中ですし、私も手伝っているんですよ……あまり役に経つてないかも知れませんが……」

「ううん、そんな事無いと思うな！きつと喜んでるよ……ね、せつな？」

りんに話を振られたせつなも頷き、

「そうね！手伝ってくれて嬉しくない訳ないもの！花かあ……私も、ラビリンズに一杯の花を飾ってみたいなあ……」

せつなはそう言うのと、頭の中でラビリンズにお花畑を作った場面を想像する。それを聞いたりんかつぼみも、せつなの案に大賛成し、

「うん、それ良い!それ良いよ、せつな!!私達も協力する・・・つぼみと私で、ラビリンズに似合いそうな花を選んであげるよ!」

「はい!でも、ラビリンズってどういう所か、詳しく教えて頂けませんか?」

せつなは嬉しそうに、りんとつぼみに、ラビリンズの事、好きな花の事を語りだした・・・

「ほのか、あの子達・・・」

「エツ!」

なぎさとほのかは、仲間通しの和に上手く入れない満と薫に気付き、二人に気さくに声を掛け話し始める。満と薫は、そんななぎさとほのかを見て、咲と舞と一緒に居るようで、心安らぐのだった。咲と舞も加わり、他の仲間とも談笑するようになった満と薫を見て、ホツとするなぎさとほのかだった・・・

どれくらい経ったのか、荷物を一杯持った、かれん、こまち、いつきが、シロップ、ポプリと共に戻って来た。

「みんな、遅くなってごめんなさい！」

「少し遅くなっちゃったかしら!？」

「こまちとかれんがみんなに詫げる。ようやく戻って来たいつきに、変顔をしたえりかは、

「いつき、遅いよ！」

「アハハ、ゴメン、えりか!でも・・・いいのかなあ、そんな事言つて?」

「えりかに謝りながらも、ニコニコしながら言ういつき、かれんとこまちもクスリと笑いだす。不思議そうに荷物の中身を見たえりかの瞳が輝く。

「ウワアア!お菓子だく!!それもこんなに一杯!？」

「えりかの発言を聞き、集まってくる一同もお菓子の山を見て大喜びする。

「どうしたんですか?こんなに一杯お菓子何て!？」

「こんな状況の中で、何処から集めたんだらうと、不思議に思つた舞がかれんに訪ねると、

「ええ、みんなお腹を空かしているだろうと思つて、シロップに頼んで、デザート王国の女王様宛に手紙を書いて、連れて行つてもらつたの!」

「そして、デザート女王に頼んでみたの・・・」

「そうしたら、僕らの頼みを快諾してくれてね!こんなに一杯分けてくれたんだよ!!」

かれん、こまち、いつきの説明に、皆うんうんと頷きながらも、視線はお菓子の山に釘付けだった。

「かれんさくん、こまちさくん、ありがとう!」

「いつきく、でかしたあ!!」

のぞみはかれんとこまちに、えりかがいつきにそれぞれ抱きつき感謝する。

「お、お菓子ミルク?」

戦いの連続で疲れていたくるみは、妖精時のミルクの姿で眠っていたが、お菓子という言葉を聞くや、途端に目が覚める。

「アハハ、ミルクったら食いしん坊さん」

「のぞみにだけは、言われたくないミルク」

のぞみに言われた事が心外だったようで、ミルクはのぞみにソツポを向きお菓子を食べ始める。先を越されたのぞみは頬を膨らませると、

「ああ、ミルクずる〜い!ハイハイ、私も食べる〜」

「あつ、私も、私も!」

「美味し〜い!!」

のぞみとラブもお菓子を食べ始め、互いを見つめて思わずハモリ、幸せそうな表情になる。そんな一同を見たほのかは、

「夜に甘い物食べると・・・太るわよ?」

ほのかが、苦笑しながら言うが、のぞみは人差し指を振りながら、

「ウフフフ・・・ジャジャ〜ン! 何と、デザート王国のお菓子は、いくら食べても太らないんだって! 凄いでしょ?」

のぞみの言葉を聞き、女性陣の目の色が変わった・・・

「「本当!?!」」

「本当ですか?」

なぎさ、咲、ラブ、えりか、つぼみの目が輝く、他のメンバーもお菓子パーティーに加わった。

彼女達の幸せな一時（ひととき）が始った・・・

そんな中、ゆりだけは皆の輪に加わらず、温室の中でボンヤリ夜空を眺め、一人涙していた。薫子がゆりに声を掛けようとした時、お菓子を持ってなぎさとほのかがやって来る。

「どうですか、月影さんは?」

なぎさに聞かれた薫子は、ゆつくり首を振ると、二人はゆりに視線を向けた。なぎさとほのかも、薫子からゆりの辛い現状を聞いて、心配していたのだった。ほのかと顔を見合わせると頷き合い、温室の中へと入っていく。

「月影さん・・・今良いかしら?」

突然ほのかに名前を呼ばれ、ビクツとしたゆりは、慌てて涙を拭い、どうぞと答える。ゆりを挟むように座るなぎさとほのかは、

「これ、かれんとこまち、いつきが、デザート王国っていう妖精の国から貰ってきたんだって・・・しかも、いくら食べても太らないんだってさ!一緒に食べよう!!」

自分の好きなチョコレートを勧め、美味しいよと微笑みながら、ゆりにチョコを差し出したなぎさが言葉が続ける。

「月影さん、私達って、同じ頃からプリキュアやってたんだね・・・もつと早く出会いたかったな!」

「そうね、いろいろ月影さんともお話してみたかったわね」

ゆりもそうねと呟くが、まだ気持ちの整理が付いていないようだった。

「えりかったら酷いのよ!私とほのかが、中二の頃からプリキュアやってるって言ったら、あたしらが小学生の頃からやってるんだ?だって・・・まるでおばさん扱い、ハア、ありえないって感じ」

なぎさの反応が余程面白かったのか、思わずゆりがクスリと笑う。それを契機に、互いのプリキュアでの出来事を語り合う三人、なぎさとほのかは、元々二人はプリキュアになるまで会話もほとんどしない間柄だった事、大喧嘩を契機に親友になった事、キリ

ヤとの出来事、ひかりとの出来事などをゆりに語り出した。

ゆりもまた、キュアフラワーの後を継ぎ、プリキュアとして一人で戦った日々、最愛のパートナーコロンの事、プリキュアの力を失った日々、つぼみ達と出会い、再びプリキュアになった事などを本音で語った。

彼女達を見守っていた薫子は、その様子を見て安心すると、その場を離れて行った。

なぎさやほのかが、ゆりと名前を呼び捨てて呼び合う親友になったのは、この時からだった・・・

### 3、

翌朝、少女達は、それぞれ自分達の住む街に戻る事になった。

そして、妖精達の中で、メップル達とフラツピ達は、それぞれ光の園、泉の郷に帰ると一同に報告した。なぎさ、ほのか、ひかり、咲、舞、満、薫は、名残惜しそうにしながらも、またの再会を誓い、彼らを送り出したのだった。

なぎさ達もそろそろ帰るとつぼみ達に告げると、戻る前に案内したい所があるとおぼみに誘われた一同は、希望ヶ花市にある、丘に来ていた。此処からは街の眺めが一望出来、素晴らしい景色が広がっていた。

「うわあ、良い景色だね！昨日砂漠だったのが嘘みたい・・・」

なぎさは、思いつきり深呼吸して、平和な朝を堪能する。ほのかやひかりも微笑みながら深呼吸をした。舞は、スケッチブックを持ってくれば良かったと、残念そうな表情を浮かべていた。咲は、眺めの良い丘からの景色を見て、大空の樹を思い出していた。「私達の街にも、大空の樹っていう、大きな木がある山があるんだけど、そこから見る景色も最高だよ!今度みんなを連れて行って上げたいなあ!」

咲が満面の笑みを浮かべ皆に言うと、一同は興味深げに聞いていた。少し考えたなぎさは、

「そういえばさ、私達って砂漠になった景色しか見てなかったよね!咲達の街もそうだし、のぞみやラブ達の街もちゃんと見てみたいなあ・・・そうだ!今度みんなで、お互いの街を案内仕合わない?」

なぎさの提案に、一同が微笑みながら賛同する。自分達の街も、みんなに教えて上げたい気持ちは共通のようだった。特にのぞみは大喜びで、

「よくし、みんなの街で美味しい物食べ歩くの・・・けっくいい!!」

のぞみが嬉しそうにはしゃぐと、りに、あんたは結局それが目当てなわけ?と突っ込まれるのぞみであった。

「せつな!まだ、こっちに居られるんでしょう!?!折角来たんだから、家に来てよ!お母さん達も喜ぶから!!」



「そうよ、せつな!」

「うん、おばさんもおじさんも喜ぶと思うよ!」

ラブ、美希、祈里に聞かれたせつなだが、微妙な表情になる。出来る事ならせつなも、親代わりのラブの両親には、会いたい気持ちは当然持っていた。

「一旦は、ラビリンズに戻らなきゃならないの・・・ウエスターやサウラーも、心配しているだろうし、それに、お母さん達の顔見たら・・・きつとラビリンズに戻りづらくなっちゃうわ」

少し憂いを浮かべた表情で、申し訳無さそうに話すせつなに、ラブ、美希、祈里も残念そうに溜息を付くが、

「あら、せつな!ラビリンズにお花畑を作るんでしょう?私とつぼみを選んで上げるって言ったじゃない!ちゃんと私の家にも来てよね!!」

りんがせつなにウインクすると、せつなもそうだったといった表情になる。こまちも会話に加わり、

「その、ウエスターさんとサウラーさんっていう人達に、手紙を書いたらどうかしら?」  
「手紙!?!・・・ですか?」

こまちの言葉にキョトンとするせつな、こまちは、シロップの事を話し始めた・・・りんと呼ばれたシロップが、せつな達の側にやってくる。りとこまちから大体の事

情を聞いたシロップは得意気に、

「任せるロプ！光の園は、時間の流れが違うから無理ロプ・・・それ以外の場所なら、行けない所は無いろプ!!」

せつなは、懐かしの四つ葉町、クローバータウンストリートにある、ラブの家に行く事を決意するのだった。

せつなが家に行くとき、ラブ、美希、祈里は心の底から喜んでいた・・・

一方えりかは、丘の景色を見ながら溜息を付く、元気がないえりかを見て、表情を曇らせたひかりが側に行くと、

「どうしたんですか、えりかさん？」

ひかりが心配してえりかに声を掛けると、えりかはチラリとひかりを見て、

「だってさあ、あたし達、凄い事しちゃったんだよ！世界を救っちゃったんだよ!!」

ドヤ顔で胸を張るえりかに、思わずひかりは目が点になるも、まあそうですけどと苦笑する。

「せめて、プリキュアの人々と居る時ぐらい良いじゃん・・・あたし達は、凄い事をしてしまった!!」

丘の上から街並みを指さし、えりかがドヤ顔で叫んだ！

大声を上げ、ドヤ顔でポーズを決めるえりかの姿を、何か楽しそうに見えたなぎさ、

咲、のぞみ、りん、うらら、ラブ、せつな（ラブに無理矢理）、つぼみ、いつきもえりかに加わり、ドヤ顔で街並みを指さし、ポーズを取る！

「「「「「「私達は、凄い事をしてしまった!!」「「「「「「」

えりかと同じようにドヤ顔で街並みを指さす少女達の姿に、参加しなかった一同は呆然としていた。

「な、なぎさ・・・恥ずかしいよ」

なぎさ達の行動を見て、思わず苦笑するほのかとひかり、舞は目を点にし、満と薫はキョトンとしていた。

「もう、咲ったら・・・ウフフ」

「舞はやらなくていいの?」

「私達もやった方がいいの?」

「私達は・・・遠慮しましょう」

咲と同じように、あのポーズをした方が良いのかと満と薫に聞かれた舞は、苦笑しながらさり気なく拒否する。

「全く、のぞみ達ったらお子様何だからあ」

「あら、そう言ってるくるみも、指がモゾモゾしてるわよ」

「まあ、本当だわ!くるみさんも仲間に加わって来たらどうかしら?」

「じよ、冗談じゃないわよ?」

かれんとこまちにからかわれ、頬を染めて照れるくるみであったが、かれんとこまちに指摘されたように、内心は仲間に加わりたいと思うくるみであった。

「美希ちゃんが行かないの?」

「よしてよ、何であたしが・・・そういうブッキーはどうなのよ?」

「うゝん、恥ずかしいけど・・・みんなでやれば平気かなあ!」

「エツ!」

意外に乗り気な祈里を見て、少し驚く美希であった。

「みんな、昨日の今日で浮かれすぎるのも、良く無いわよ?」

平和を取り戻したとはいえ、浮かれすぎている仲間達を見て窘めるゆりに、なぎさが近づいてゆりの肩に手を回し、

「ゆり、そう硬い事言いっこ無しでさ・・・ほら、ほのかもひかりもこっちおいでよ!!」

無理矢理なぎさに仲間に加えられるのか、ひかり、ゆり、咲やのぞみ、ラブ達もそれぞれ仲間達を加え、21人のプリキュア達が、ある者は自慢気に、またある者は恥ずかし気に丘の上からポーズを取り、

「私達は、凄い事をしてしまった!!」

少女達の声が、丘の上に響き渡った・・・

彼女達は気付いていなかったが、この時の姿を、えりかの父、来海流之助に望遠カメラで写真に撮られていた・・・

「そうメポ、えりかから送って貰ったこの写真を見て、なぎさはありえなくいい何て叫んでたメポ」

当時の事を思い出し、写真を見てニコニコするメツプルの背後から声が掛かる。

「へえ、私がお風呂に入ってる間に盗み見何て・・・いい度胸してるじゃないのよ！コラー！メツプル！！大体あんた達、光の園に帰るメポつとか言ってた癖に、あの日の夜には、私の家にもう戻って来たじゃないよ？」

「な、なぎさ！？それは・・・クイーンが折角だから、もう少し虹の園に居ていいと言ってくれたから・・・あれ、なぎさ、最近益々女らしくなったメポ？」

「誤魔化すな！！」

風呂から出たなぎさに見つかり、きつちりお仕置きを受けるメツプルであった。

一方、なぎさの部屋の前では、母理恵と弟亮太が小声で話し合っていた。

「だろう？またお姉ちゃんが独り言を言い始めてるよ！」

「なぎさだったら、しばらく独り言無くなって安心してたのに・・・まさか、将来が不安になって、また病気が再発したのかしら？」

母理恵に勘違いされるなぎさであった・・・

ほのかもまた、プリキュアダイアリーに書いた出来事を、ミツプルと一緒に見ていた。「あの日は色々凄かったよね、ミツプル！」

ミツプルも頷き、あの時を思い出す。砂漠化した世界を救うべく、なぎさ、ひかりと共にデザートデビルと戦い、同じ志を持つ、沢山のプリキュア達と出会い、世界を救い、プリキュア同士の絆を深めたのだから・・・

襖の外から、ほのかの祖母さなえが声を掛け、ほのかに風呂が沸いたから入るように伝えに来る。ほのかはダイアリーを閉じると、着替えを持って部屋を出た。ミツプルは、ほのかが部屋を出た後、溜息を付いた。

「ほのかにまた言えなかったミポ・・・クイーンが私達を再び虹の園に送った本当の理由・・・闇の根源の復活が近づいて居る事を・・・」

ミツプルは、不安げにほのかの部屋を見渡したが、ある写真を見て元気づけられる。なぎさとメツプルが見ていた、21人のプリキュア達の写真を見て・・・

そして、彼女達21人のプリキュアは、戦士としてしばしの休息に入り、日常生活をそれぞれ楽しむ・・・

完結

## 第二章：深まる絆

### 第九話：TAKO、タコ、たこ!?

第九話：TAKO、タコ、たこ!?

地球砂漠化の現況、砂漠の王デューンを浄化してから一週間が経った・・・

互いに力を合わせて、この世界を守ったプリキュア達の絆は深まり、一同は、それぞれの街を案内する約束をしていた。

この日は、美墨なぎさ、雪城ほのか、九条ひかりが、他の一同を招待し、自分達の街を案内する事になっていた・・・

四つ葉町、クローバータウンストリート内にある桃園ラブの家では、あの日以来、東せつなが泊まっていた・・・

秋元こまちからの提案を聞き入れ、せつなは少しの間こっちの世界に居たい事を、ラピンスに居るウエスター、サウラーに手紙を書き、シロップに託すと、届けに行つたシロップは、二人からの返書をもつたに渡した。二人からは、こっちの事は心配するな、折角だからプリキュア達と楽しんで来い！イース、お土産に兄弟のドーナツは必ず忘れないようにという内容が書かれていて、せつなは苦笑しながらも、久しぶりに桃園家に



居候するのだった。

久しぶりに、娘同然のせつなと再会した桃園夫妻は大変喜び、美希と美希の母レミ、祈里と両親も交えて、歓迎会を開いてくれて、せつなは嬉し涙にくれた。

ラブの母あゆみ、父の圭太郎は、せつなを娘ラブ同様、実の娘のように可愛がつており、せつなが去った後でも、せつなの部屋を嘗てのままにして置き、それを見たせつなは再び嬉し涙を流しながら二人と抱き合った・・・

なぎさ達の街に行く当日、ぐっすり眠りに付くラブを、呆れながらせつなが起こす。

「ラブ、ラブ！そろそろ起きないと・・・ラブ？」

「もう・・・なあにい!? ああ、せつな、おはよう!・・・もう少し、寝かせて・・・」

せつなと目と目があったものの、ラブはそう言っていると、再び布団を頭から被り、

「ラ〜〜ブ!! いい加減に起きないと、遅刻するでしょう?」

もう一度ラブを揺らし、起こそうと試みるせつなだったが、顔だけ出したラブは、ニンマリとしながら、

「大丈夫、私達にはせつなが居てくれるし、いざとなったらアカルンの力でパパッと・・・ね? だからもう少し・・・」

「ラ〜〜ブ!!!」

ムツとしたせつなは、その場でジャンプすると、ラブの上にダイビングして、無理矢理ラブを叩き起こした。せつなに怒られ、ラブは渋々着替え始めるのだった。

「全く、そんなズルしたら、他の人達に悪いでしょう？アカルンは、そんな事じゃ絶対に使わせないわ！」

「ゴメンってば、せつな!!」

ムツとしているせつなを、拝みながら謝るラブ、ようやく着替えが終わったラブを急かし、せつなとラブは、蒼乃美希、山吹祈里との待ち合わせ場所の駅に向かった。駅では既に美希、祈里が待つて居て、

「ラブちゃん、せつなちゃん、おはよう！良い天気になって良かったよね！」

「ラブ、せつな、遅くい！まあ、大方想像は付くけど・・・久しぶりなのに、せつなも苦労するわね？」

美希に凶星を指され、思わずラブは仰け反り、せつなは美希と祈里に、二人からも言つてやつてと、ラブに笑みを浮かべながらからかった。

合流した四人は、なぎさ達の街に向かい出発した・・・

「じゃあ、アカネさん、ひかり、行つて来ます！」

「また後でみんなを連れて伺いますね！」

「わかった！腕によりを掛けて待つてるね!!」

「皆さんに、迎えに行けなくてすみませんと伝えて下さい!」

美墨なぎさ、雪城ほのかは、藤田アカネ、そして店の準備で残った九条ひかりに言葉を掛け、待ち合わせ場所である駅に、一同を迎えに出向くのだった。

「いやあ、昨日は今日の事が楽しみでさ! そうしたら私がお風呂に入ってる間に、メップルったら、私のプリキュアダイアリー勝手に覗き見るし・・・全く、ありえないって感じ!!」

「それは散々謝ったメポ! それなのになぎさは、メップルを散々虐めたメポ!」

「虐めじゃないわよ! お仕置きよ、お仕置き!!」

通行人が近づいて来たので、二人は慌てて言い合いを止めると、口笛を吹きながら誤魔化すなぎさ、二人の様子に思わずほのかはミツプルと微笑むのだった。

駅に着いた二人は、既に改札口前に到着していた日向咲、美翔舞、霧生満、霧生薫、花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつき、月影ゆりを発見し声を掛けた。

「ゆり達、もう来てたんだ! ゴメンね、待たせちゃったみたいで・・・」

「ゴメンなさいね! ようこそ、私達の街に! 歓迎するわ!!」

「気にしないで! 私達も、咲達も、さつき着いたばかりだから・・・中々賑わってるのね?」

なぎさとほのかが一同に謝り、歓迎すると、ゆりは気にしないでと二人を労った。

「ひかりも来たがったんだけど、お店の準備が忙しくてさ……後で合流するから!!」  
「気にしないで下さい!!後で会えるなら全然OKです!!」

「そうそう、その分後で沢山御馳走になるから!」

なぎさがひかりの事を伝えると、つぼみやえりかが、一同の気持ちを代弁するように答えていた。いつきは、えりからしい言葉に苦笑を浮かべていたが……

シプレ、コフレ、ポプリは、ぬいぐるみの振りをするのが益々得意になったようで、それぞれのパートナーの頭にしがみついていた。メップル達のように、こっちの世界に戻って来ていたフラッピ達は、それぞれのパートナーのバックに隠れていて静かだった。

まだ来ていないのぞみ達、ラブ達を待つ傍ら、談笑する一同だったが、なぎさは、咲達が少し大きめの鞆を持っているのに気付き、声を掛けた。

「あれえ!?咲、その鞆邪魔じゃない?ポシエツト程度で良かったのに……」

「いやあ、手ぶらじゃ悪いし、今日は舞、満、薫とみんなで早く起きて、みんなの為に特製のパンを作ってきたんです!」

「そう言えば、咲さんのお家はパン屋さんだったわね?」

「はい!TAKO CAFEにちなんだパンをみんなで作ってきました!!」

咲はそう言うと、舞、満、薫を見て微笑んだ。四人の様子を見たなぎさも笑みを浮かべると、

「へえ、楽しみだね、ほのか？」

「そうね！」

なぎさとほのかもニツコリ咲達を見て微笑んだ。

「あつ、居た居た！おっい、なぎささん！ほのかさん！みんなくっく！！」

聞き覚えのある大きな声が聞こえてきて、一同が振り向くと、両手を広げて手を振る夢原のぞみ、春日野うららと、

「ちよつと、止めてよ！恥ずかしいから！！」

二人を慌てて止めようとする夏木りん、二人の行為を恥ずかしそうに、俯きながら少し離れて歩く秋元こまち、水無月かれん、美々野くるみであった。ココ、ナッツ、シロップは、かれんが持っているバックの中から、時折こっそり顔を出していた。

「のぞみ、りん、かれん、こまち、うらら、くるみ、ココ、ナッツ、シロップも・・・みんな、ようこそ！！」

「皆さん、いらつしやい！」

笑顔でのぞみ達を向かえるなぎさとほのかに、のぞみ達も微笑み返した。かれんは時計をチラリと見ると、

「少し遅れてしまったかしら？」

「誰かさんが間違えて、反対側の電車に乗っちゃったもんで」

「うっ・・・だつてえ、電車が来てたから慌てちゃって・・・エヘヘ！」

かれんが遅れたかと気にして、りんは遅れた原因を一同に語り、のぞみは照れ笑いを浮かべてその場を誤魔化した。一同は、のぞみらしいと苦笑を浮かべていた。なぎさとほのかは、苦笑しながらのぞみをフォローし、

「ううん、全然平気だよ！後はラブ達だけだね！」

「エツ!? 私達の方が早かったんだ？ほくら、りんちゃん！大丈夫だったじゃない?！」

「アハハ・・・全然自慢にならないから！」

なぎさがラブ達はまだ来ていない事を伝えると、自分達が最後じゃ無かったと知ったのぞみは、少し嬉しそうにりんに言うのと、りんは呆れながら、そんな事自慢にならないとのぞみに言い、一同から笑い声がこぼれた。

それから30分ぐらい経って、ようやくラブ達が到着した。

「みんな、ゴメン！」

一同を拝みながら謝るラブと、ペコリと一同にお辞儀して詫びる祈里とせつな、美希は右手でゴメンのポーズを出す。なぎさとほのかは、そんな四人を微笑みながら、

「ううん、ラブ、美希、祈里、せつな、いらっしやい！」

「ようこそ私達の街に!!」

ラブ達四人を歓迎し、改めて遊びに来てくれた一同を歓迎するのだった・・・

なぎさ達は一同をいろいろ案内して回った。

初めてなぎさとほのかがプリキュアになった遊園地、なぎさ達が過ごしたペローネ学園の女子中等部、そして今通っている高等部、ほのかの祖母雪城さなえから教わった、見晴らしの良い坂など等、いろいろな場所を一同に案内した・・・

「じゃあ、みんなもお腹空かせてるだろうから、そろそろひかりが待つてるTAKO C A F Eに行こう!」

「わくわく、賛成!!」

なぎさの言葉に真っ先に大喜びするのぞみ、それとは逆に、少し顔を曇らせた美希は、  
(今、なぎささん・・・たこって言ったような?・・・まさかね?)

きつと自分の聞き間違いだと、心の中で領いた美希であった・・・

TAKO C A F Eに着いた一同を見て、ひかりが手を振りながら駆けより歓迎した。

「皆さん、良く来て下さいました!一緒に居れなくてゴメンなさい!ゆっくりしていつでも下さいね!!」

「ひかりちゃん、お休みなのに偉いね？」

「いえ、普段アカネさんには、ひかる共どもお世話になってますし、これぐらい手伝つて当然です！」

休みの日でもお店を手伝うひかりの姿に、咲は感心ながら思わず声に出すと、ひかりは手伝つて当然と答え、思わずりんはのぞみを見つめると、

「本当に・・・誰かさんに、ひかりの爪の垢でも飲ませてやりたいわ・・・」

「エッ?!りんちゃん、何か言つた？」

「別に・・・ね、ひかり？」

「ア、アハハ！」

休みでもお店を手伝うひかりに感心する一同、りんは、休みになると昼過ぎまで寝てるのぞみに、ひかりの爪の垢でも飲ませてやりたいとつぶやき、ひかりは唯苦笑するのみだった。

アカネが作るたこ焼きに興味を持ち、作る所を観察する咲、のぞみ、うらら、りん、ラブ、つぼみ、えりかだった。

「うわあ、美味しそうだねえ！」

「本当だよ！早く食べてみたいなあ」

咲は香ばしい匂いに鼻をクンクン嗅いで匂いを味わい、ラブは今にも涎を垂らしそう



なぐらいな顔になった。

「早く食べてみたいです．．．ハッ、カレーを掛けたら最強かも!」

「うららはカレーか．．．私は、チョコか卵焼き何か良いかな!」

「うくん、あたしはやっぱりソースだよね! つぼみは?」

「エッ!? さあ、そう言われましても、たこ焼きはソースが掛かったのしか食べた事ありませんし．．．」

たこ焼き談義に話が弾む一同を、確かななぎさ達の友人だねつと笑顔を浮かべるアカネであった。

「はいよ、たこ焼きお待たせ! みんな、なぎさ達がお世話になってるそうで、アリガトね!」

アカネの挨拶に、こちらこそと挨拶を返す一同だった。出来上がったたこ焼きを、ひかりと共になぎさとほのかも運ぶのを手伝いながら、

「みんな、アカネさんが作るたこ焼きは絶品だよ!」

「うん、私もなぎさに連れて来て貰ってから、すっかり虜になってしまったの!」

なぎさ、ほのか、ひかりがニコニコしながら一同の前にたこ焼きを置いていくと、美味しそうな匂いに一同から感嘆の声が漏れる。妖精達も少し離れた物陰で、美味しそうにたこ焼きを頬張るのだった．．．

唯一人を除いて・・・

(う、嘘でしょう!?!よりによってたこ焼き何て・・・)

美希の顔色が見る見る青ざめていく・・・

そんな美希の表情の変化に、せつなと祈里は気付くと、

「なぎささん、ほのかさん、ひかり、実は、美希はたこが苦手なの・・・」

「悪いんだけど、美希ちゃんには、何か他の物をお願い出来るかしら?」

美希がたこを嫌いなのを思い出したせつなが、助け船を出すと、祈里も加わり、美希を気遣い、ひかりに他の物を頼んだ。美希は、二人の行為に感動し、

(ブッキー!せつな!やつぱり持つものは、幼なじみや親友だわ!!)ってラブ・・・何パクパクたこ焼き食べてるのよお?)

祈里、せつなの気遣いに感動する美希だったが、美味しそうにたこ焼きを頬張るラブに、オイオイと心の中で突っ込みを入れる美希であった。

「そうだったんですか? 気付きませんで・・・クレープもありますけど、クレープにしますか?」

「ええ、お願い! ひかりちゃん、ゴメンなさいね?」

「いいえ、ちよつと待ってて下さいね!」

ワゴンに引っ込んだひかりが、クレープを作り始める。美希はホツと安堵するも、美

希の顔をジツとなぎさが見つめ、思わず美希がたじろぐ、

「美希、たこが苦手だったんだ？」

「ええ……」

なぎさの問いかけに、少し申し訳なさそうに美希が返事をする、

「ハアア…… TAKO CAFEのたこ焼きは絶品なのになあ…… 美希、一個だけで

も食べてみない？」

（この人……何言ってるのよ？）

なぎさの無茶振りに、引き攣りながらも遠慮する美希、ほのかは困惑する美希を見かねて、

「なぎさ、無理強いしたら美希さんに悪いでしょう？」

（そうそう、流石ほのかさん！）

「いやいや、なぎささんの言う事も一理あるよ！私やせつなも、よくお母さんに言われるもん……好き嫌いしてたら駄目だって！ね、せつな？」

（ラ〜ラ〜ブウウ!!!）

「そうね……美希の為を思えば、此処は……」

（ちよつ……せつなまで何言ってるの!?!）

雲行きが怪しくなってきた状況に、美希の口元が引き攣り始める。美希の背後に回っ

たラブとせつなは、目と目で合図を送ると頷き合い、美希の身体を押しさえつけた。祈里は、止めようよと言うものの、これも美希の為だと言うラブと、頷くせつな、それを見ただなぎさの口元がニヤリと笑みを浮かべた。

「ちよつと、ラブ、せつな、何のまねよ!? 離しなさ・・・ヒイイ」

高等部に進学してもラクロス部のエースとしてならすなぎさは、爪楊枝に刺したたこ焼きを、美希の口の中に見事に放り込んだ。美希は思わずモグモグと口の中で噛みしめ、ゴクリと飲み込んだ。

「お、美味しい・・・」

「でしよう?」

思わず美味しいと呟いた美希に、なぎさは満足気にウンウン頷き、ラブも苦手を克服した美希を、自分の事に喜んだ。

「やったあ、美希たん!」

「美味しいけど・・・こんな食べさせられ方、嬉しくないわよお!!」

困惑した美希の言葉が、TAKO CAFEに響いた・・・

大騒ぎを起こす美希を、他のメンバーは苦笑しながら見ていたが、咲は自分達も用意していたパンの事を思い出し、

「あつ、忘れてた! 私達も今日の為に作ってきた物があるの!! じゃーん、TAKO CA

FEにちなんで、たこ焼きパン！みんなも食べてみて!!」

「へえ、中々美味しそうに出来たね・・・どれどれ・・・おつ、咲、美味しい！いける、これいけるよ!!」

咲から手渡され、たこ焼きパンを食べて絶賛するなぎさ、ゆりも手に取り食べてみると、

「本当、中々美味しいわね！これ、咲達を作ったの？」

「はい！舞や満、薫と四人で作ったんです!!」

みんなに好評な様子に、咲は、舞、満、薫を見ながら満面の笑みを浮かべると、舞、満、薫も嬉しそうに微笑み返した。

「はいはい、私も今日の為に作ってきた物があるの!」

のぞみがバックからお弁当箱を取り出した。興味深げに見る一同だったが、のぞみが蓋を開けた中身を見た瞬間、一同の顔が引き攣った。

「の、のぞみ・・・念の為に聞いておくけど、これは何？」

「エッ!?何って、卵焼きだよ!」

「卵焼きは分かるけど・・・のぞみ、このはみ出た物体は何？」

「えへへ、咲ちゃん達と考える事は一緒だね！たこの足だよ!!」

のぞみに聞いたりんも、なぎさも、最早何かの生物なような物体に絶句した。今回の

接待役であるなぎさとほのかは、引き攣りながらも折角作ってきたのに食べないのは悪いと、覚悟を決めて食べてみる。震える手で箸を伸ばし、卵焼きを掴み、口の中に入れると、二人はモグモグ食べる。美味しいとまでは絶賛出来ないものの、見た目のグロさを気にしなければ、十分食べられる出来映えではあった。のぞみは、ニコニコしながらジツとなぎさとほのかを見つめながら、

「どうですか?」

「エツ?! え〜と、見た目はともかく・・・中々いけるかな」

「そ、そうね・・・後は見た目さえ気にしなければ・・・」

「いやいや、見た目は大切ですから! のぞみ、料理を作る時は、食べる相手の事も考えないと駄目だよ!」

のぞみをフオローするなぎさとほのかに、りんは少し手厳しい言い方ながら、のぞみにアドバイスを送った。のぞみも納得したようで、今度はもつと美味しそうな卵焼き作るねと笑顔を向けるのだった。

最早何時もの完璧さは何処へやら、半ばやくそ気味に、咲達が作つたたこ焼きパンも食べた美希だったが、のぞみの作つた卵焼きを見た瞬間、美希の顔から血の気が引いた・・・

「美希さん、クレープ出来ましたよ!・・・美希さん!」

美希から何の反応も無い事を、クレープを持って不思議そうにするひかりに、祈里は申し訳無さそうに、

「ゴメンなさいね、ひかりさん・・・美希ちゃん・・・暫く立ち直れそうに無いみたい？」  
「ちよつと、やりすぎちやつたかなあ!？」

「美希、美希、しつかりしてえ!!」

クレープを持ってきたひかりに、祈里が詫び、やりすぎたかとラブが困惑し、当事者の一人であるせつなは、申し訳無さそうな表情で、必死に美希を介抱していた。なぎさもほのかも心配そうに美希の側に居るも、

「美希さん、大丈夫!?!もう、なぎさが無理矢理食べさせるから!」

「エツ!?!私のせい・・・ってそうだよね・・・反省してます!」

ほのかに怒られ、やり過ぎたと反省するなぎさであった。

「やっぱり・・・たこはイヤアア!!」

美希の絶叫が、TAKO CAFEに木霊した・・・

第九話：TAKO、タコ、たこ!?

完

## 第十話：プリキュアになって・・・

第十話：プリキュアになって・・・

蒼乃美希にとって、散々だった美墨なぎさ達の街での出来事も過ぎた・・・

数日後、次に一同が訪れたのは、日向咲、美翔舞、霧生満、霧生薫達の街、海原市夕風町・・・

「本当は、冬より夏に案内したかったんだけど・・・でも、冬の海も中々良いもんでしよう？」

正月休みも終わりに近づいたこの時期に、一同を冬の海に案内する咲、舞、満、薫は、冬の海風が冷たいものの、やはりこの街を案内するのに、海は外せないと一同を案内するのだった。ひょうたん岩の不思議な形に興味を持つ者、冬の海の違った味わいに興味を持つ者が居た。

冬の海岸を散歩する２１人の少女達の中で、花咲つぼみは、特に興味深げに辺りを見ていた。

「私は元々鎌倉に住んでいましたので、とても懐かしく思えます！」

そう言いながら、咲達四人にニッコリ微笑んだつぼみは、海風を大きく吸い込み深呼吸



吸する。鎌倉に住んでいた頃を懐かしく思い出すつぼみだった。つぼみが鎌倉に住んで居たと聞き、咲達は驚きの声を上げる。

「へえ、つぼみちゃん、鎌倉に住んでたんだ？意外とご近所さんだったんだね！」

「本当、何処かで会っていたかも知れないわね！」

つぼみが鎌倉に住んでいた事に驚きながらも、思わずつぼみに話し掛け笑顔を向ける咲と舞だった。つぼみも笑顔を向けると、

「そうですね．．．もつとも、その頃はお父さんもお母さんもお仕事で留守にすることが多くて、お婆ちゃんに預かって貰う事が多かったですが．．．」

「そうだったんだ．．．」

不意に寂しげな表情を浮かべたつぼみに、舞は悪い事を聞いたかしらと思ひ、咲も小さい頃を思い出したのか、

「何となく分かるなあ、家もパン屋だから二人とも忙しくて．．．もつとも、私はお構いなく遊び回ってたけどね。アハハ！でも、妹のみのりは、時々寂しそうにしてたなあ．．．私も中学に入学したら、ソフトボール部に入部して遊んであげられなかったし．．．でも、満や薫が頻繁に家に来てくれるんで、みのりも此処数年は大喜び何だあ！」

「私の方こそ、みのりちゃんの相手が出来て学べる事も多かったですわ！」

咲も、つぼみが言っていた事に共感出来る面があったようだった。

咲は、妹みのりも幼い頃のつぼみのように、寂しそうにしていたが、満、薫というお姉さんが出来て大喜びだと一同に語ると、薫は少し恥ずかしそうにしながらも、自分の方こそみのりには色々教わることがあると答えていた。元々ダークフォルで生まれた二人には、自分達に懐いてくれるみのりという存在が、当初は不思議だった。だが、いつしか二人にも掛け替えのない存在になり始めていた。

同じ思いをした事があるのか、かれんも会話に加わり、

「そうね・・・私の家も、両親が海外に演奏旅行で出掛けている事がほとんどだから、寂しかったわね・・・でも、両親には心配させまいと我慢していて、一人になった時には何度涙を流した事か・・・今思えば、爺やにも心配させたでしょうね・・・」

「うん、私もそうだった・・・私は元々お婆ちやまも一緒に暮らしていたから、他の人達よりは良かったんですけど、やっぱり子供の頃は寂しくて、泣いた事があったわ」  
かれんとほのかも、子供の頃を思い出し一同に語っていた。

つぼみは大きく頷くと、

「はい、私もそうでした！でも、ある時堪えきれなくて大泣きしたんですが、たまたま忘れ物を取りに来た両親がその姿を見て、これじゃいけないと二人で相談して、二人で仕事を辞め、そこで元々花が大好きだった家の両親は、お婆ちやんの家を改装して、お花屋さんを始めたんです。その事が、私がプリキュアになる切掛けになるとは思いもより

ませんでしたか・・・」

かれん、そしてほのかの話に、似た境遇を感じたつぼみはその頃を思い出し、えりか、いつき、ゆり、そして、一同を見つめると、

「でも、そのお陰で私は、えりか、いつき、ゆりさん、そして、大勢のプリキュアの仲間達に出会う事が出来ました!!」

つぼみは満面の笑顔を浮かべ一同を見ると、えりかは大喜びし、一同も朗らかな笑顔をつぼみに向けるのだった・・・

場所を移動した一同は、咲の店、ベーカリーPANPAKAPANに立ち寄り、好きなパンを購入すると、咲達が特に来て欲しいと言っていた大空の樹の下にやって来た。

神秘的な大きな木の下で、少女達は興味深げにそれぞれ過ごしていた・・・

なぎさは、大空の樹から見える眺めに喜び、

「うわあ、良い眺めだねえ・・・前に咲が此処を薦めてたのが分かるわ!」

「本当ねえ・・・色々な季節に此処からの眺めを見てみたいわね」

なぎさの言葉にほのかも同意し、二人は目に焼き付けるように眺め続けた。

「不思議な感じがする木ね・・・この大樹とはまた違う、神秘的な何かを感じるわ!」

ゆりは、大空の樹を直に触れて見ると、指先から伝わる神秘的な力を感じ、このころの

大樹を思い出すのだった。つぼみ、えりか、いつきも、こころの大樹を思い出していたのか、ゆりの言葉に頷いた。

「これが大空の樹・・・私と舞が、子供の頃に偶然出会ったのもこの大空の樹の下だったんだあ！」

「ええ、子供の頃の縁日の日に、蛍のような光に誘われて、一人で大空の樹の下に来た時、同じように咲がやって来たわ・・・」

咲も舞もあの頃を思い出し、互いを見つめ微笑むと、

「そして、舞がこの街に引越して来た時、再び私達はこの樹の下で出会った。その時、フラッピとチョッピと出会い、そして、プリキュアになったの！」

「子供の頃に見た蛍のような光が、フラッピやチョッピだったのもその時知ったのよね！」

咲と舞の神秘的な内容の話を聞いていたなぎさは、

「何か羨ましいなあ・・・私とメップルは、流れ星だと思ってお願いしたら、その光が私の部屋に一直線に向かって来て、最初は躲してただけけど、結局額に当たってバタンって倒れちゃってさあ・・・光は私の部屋で飛び跳ねてて、姿を現わしたのが、携帯電話のような姿をした・・・これ！」

側に居たメップルを持ち上げ、一同に指さすなぎさの姿に、一同から苦笑が漏れる。

メツプルは頬を膨らましなげさに抗議する。

「これとは酷いメポ！」

「ゴメンゴメン！メツプルがミツプルの気配を感じて出掛けたのが、この間みんなに話したあの遊園地！そこでミツプルを手にしたほのかと会って、ふたりでプリキュアになったのよね……」

「ええ、あの時のなげさったら、プリキュアになつてパニックになつてたわね……ウフフ！」

「そりゃあ、なるでしょう……ほのか見たいに楽しいかも、何て普通思わないって!!」  
当時を思い出し二人で見つめ合つて笑い合つたなげさとほのか、ラブも昔を思い出しシフォンとタルトを見ると、

「私も、プリキュアになった事は驚いたけど、シフォンやタルトと初めて会つた時はもつと驚いたよお……フェレットが普通に関西弁で話し掛けてきたんだもん！思わずこれは夢だと、もう一度目を閉じてから開いても、ニッコリ微笑み掛けるタルトが居たんだもん……なげささんの気持ちも分かるなあ!!」

「そりゃあ、わいとシフォンは、プリキュアを探してピーチはん達の街に行つたさかい、プリキュアを見付けて、思わずニコニコになるのもしょうがあらへんわ」

タルトも腕組みしながらその頃の事を思い出し、ラブの話に頷いていた。

「ベリーはん、パインはんも直ぐに見つかり・・・まあ、最初は敵だったパッションはんが、プリキュアだったのには驚いたんやけど」

タルトの言葉に、せつなは苦笑を浮かべながら、あの頃の事を思い浮かべる。ラビリンスの幹部、イースとしてラブ達プリキュアと戦った事、自由に生きるラブ達を、心の底では羨ましく思っていた事、そして、自分がプリキュアだった事・・・

「それは私自身が驚いたわ！私にプリキュアの資格があるとは・・・とても思え無かった。私は幸せを求めちゃいけないと思いつつもしてた。でも、そんな私の心を、ラブが、美希が、ブツキーが晴らしてくれた！もちろんシフォンやタルトもね!!」

せつなは、仲間達を見て笑顔を見せ、ラブ達一同も、せつなに満面の笑顔を向けた：「私も、ココとの出会いは運命的だったんだよ！ねえ、ココ？」

うっとりした目で一同に語ると、ココは苦笑を浮かべ、くるみは不機嫌そうに頬を膨らませていた。

「はいはい、のぞみの妄想はみんな聞きたく無いわよ！」

「何よ！本当だもん!!」

くるみに妄想と言われ、思わず頬を膨らますのぞみに、ココとナッツは溜息を付き、やれやれといった表情でのぞみとくるみを宥めた。

「でも、学校の図書館でのぞみと再会したのは、確かに運命的だったココ・・・あそこで

のぞみはプリキュアに選ばれ、ピンキーを集めてパルミエ王国を復活させると誓ってくれたココ」

「うん、そうだったね！」

互いに見つめ合い、あの時の事を思い出すのぞみとココ、そしてココの視線は、りん、うらら、こまち、かれんに向けられ、

「りん、うらら、こまち、かれん、みんなものぞみに導かれるようにプリキュアになって、ココやナッツの為に頑張ってくれたココ」

ココの言葉にナッツも大いに頷き、

「ナッツに、再び信じる心を教えてくれたのは……のぞみ達ナッツ」

ナイトメアの企みとは気付かず、罠に嵌ってパルミエ王国崩壊の切っ掛けを作ってしまったナッツの心を、再び開いたのはのぞみ達のお陰だった。ナッツは、その頃を思い出して笑顔になった。りんはかれんを見つめると、少し意地悪そうに、

「かれんさんは一度、プリキュアになるの拒否されてましたけどねえ？」

「あれは……もう、りゅん!!」

りんにかからかわれ、見る見る顔を赤くするかれんに、のぞみ達は笑顔を向けた。

「そう考えれば、私達が咲と舞がプリキュアとなったこの場所で、プリキュアになれたのも感慨深いものがあるわね」

「そうね：：ゴージャンとの戦い後、精霊達のお陰で蘇れた私と満は、闇の力を失った」  
「あの巨大な敵と戦う、咲と舞の力になれない事が悲しかった」

「でも、ムーブとフープが、私達に新たな力を目覚めさせてくれたわ」

満と薫は、大空の樹を見ながら、デザートデビルに苦戦するブルーム、イーグレットの為に、プリキュアとして覚醒した時の事を思い出していた。ムーブとフープもあの時を思い出したのか、嬉しそうにフワフワ満と薫の周りを飛び回っていた。

「私達は、プリキュアになれて良かった・・・」

「ええ、咲と舞以外に、こんなに素晴らしい仲間と出会えたんだから・・・」

一同を見る満と薫が、満面の笑みを見せる・・・

この世界に來た頃の彼女達からは、想像も付かない笑顔を・・・

そんな満と薫に、咲、舞を始めとした少女達も、満面の笑みを二人に向けた・・・  
大空の樹は、そんな少女達を見守り、穏やかにサワサワと葉を揺らせていた・・・

第十話：プリキュアになって・・・

完



## 第十一話：バラの楽園

## 第十一話：バラの楽園

本格的に寒さが厳しくなってきたこの時期、ナッツハウスの中で、歓迎会の準備をするのは、のぞみ、りん、うらら、こまち、かれん、くるみ、そして、人間姿のココ、ナッツだった。

皆何処か嬉しそうに、お皿や飾り付けの準備に精を出していた・・・

「羊羹は、このお皿に並べれば良いかしら？」

「いや、食事してからで良いんじゃないですか？」

何時ものように、何処から取り出したのか、嬉しそうに実家の羊羹を皿に並べようとするこまちに、りんは少し呆れながら、食後で良いでしょうと言うと、一同は苦笑を浮かべた。

「大体の準備は終わったね！後は、シロップがみんなを連れて来てくれればOK・・・よし、今日は楽しむぞ～～～決定!!」

のぞみの合図に、手を上げて答える一同だった・・・

今回は、のぞみ達がなぎさ達一同を案内する番だった。のぞみ達にとって、やはりここ、ナッツハウスは外せない、掛け替えのない場所だった。

「なぎささん達や、咲さん達は、ナッツハウスに来た事がありますが、ラブさん達や、つぼみちゃん達は初めてですもんね」

同じ年であるつぼみ、えりか、いつきが、プリキュアの仲間になった事で、うららは大いに喜んでいた。

「そうね、でも、なぎささんやほのかさん、咲さん達が来た時は砂漠化してたから、みんなにも新鮮に映るんじゃないかしら？」

「そうかも知れないわね！」

かれんはこまちの言葉に同意しながら、一同の到着を待ち兼ねていた。

シロップが一同を乗せて戻って来たのは、10時を少し回っていた。のぞみ達は嬉しそうに外に飛び出し、一同を出迎えた。

「お帰り、シロップ！みんな、ナッツハウスにようこそ！！」

のぞみ達に大歓迎されながら、シロップから降りたなぎさ達一同も、のぞみ達に微笑み返し、ナッツハウス、そして目の前の池を眺める。

「みんな、今日はよろしくね！へえ、砂漠化してた時は気付かなかったけど、目の前にもあつて良い所だねえ」

なぎさの言葉に頷いたほのかだったが、キヨロキヨロ周りを見渡すと、

「本当・・・でも、ナッツハウスってお店屋さん何でしょう？・街並みから外れているけど、お店の方は大丈夫なの？」

少し心配そうにほのかのぞみ達に訪ねると、のぞみはウンウン頷きながらも、

「それはバッチリ、お店の事をみんなで売り込んでましたから、大丈夫でしたよ！もつとも、ココもナッツもパルミエ王国に戻っちゃって、今は営業してないけど・・・」

のぞみの言葉通り、ココもナッツもパルミエ王国に戻った事で、一同に取つての大切な此処ナッツハウスは、今では空き家となつては居たが、かれんの好意で、中は当時のままにしてあった。

「そうね、この前の砂漠化した時の影響もあつて、だいぶ中も埃だらけだったわね」

苦笑を浮かべたこまちが、あの後みんなで大掃除した事を一同に語っていた。

「砂漠化した時は大変でしたよねえ・・・家の店も、砂漠化が収まった後は、店の中が埃だらけで大変だったっけえ！」

咲もこまちの言葉に何度も頷いていた。咲の家も例外では無く、満や薫も手伝いに来てくれたものの、後片付けが大変だったのを咲も思い出した。

「のぞみ、私、ちょっとせつなとつぼみを連れて、家に行きたいんだけど、いいかな？」

「エッ!?別に良いけど・・・せつかくみんな集まったのに・・・わかった、りんちゃんこっちは私達に任せて!」

のぞみがりんにウインクしてOKを出すと、りんは嬉しそうにサンキューと言ひ、せつな、つぼみを誘った。せつなとつぼみは、何故自分達だけが誘われたのかキョトンとしていたが、

「ほら、前につぼみのお婆ちゃんの植物園で言ったでしょう!私とつぼみで、せつながラビリンスで育てる花を選んであげるって・・・」

りんの言葉に、あの時の事を思い出し、嬉しそうな表情に変わるせつなとつぼみだった。

「あつ、つぼみ何処行くの?あたしも行くう!!」

「何々、せつな、何嬉しそうにしてるの!?気になるなあ・・・私も行くかな?」

せつなとつぼみが出掛けると聞き、ラブとえりかも一緒に行きたがったが、

「ラブ、えりか、悪いわね!今回は遠慮して頂戴!これ以上人数増やすと・・・」

りんは、ラブとえりかに顔で合図を送ると、二人はそれに釣られて視線を向けた。視線の先には、頬を膨らまして、拗ね始めていたのぞみと目が合い苦笑する。のぞみにジッと見つめられ、困惑したラブとえりかは、

「アハハハ、確かに、今回は遠慮した方が良さそうだね!」

「ウ〜・〜・〜しゃあない！つぼみ、後で何があつたか教えてよね！！」

「はい、分かりました！じゃあ、皆さんちよつと出掛けて来ますね！！」

ラブ、えりかも、接待役ののぞみの顔を立てて断念し、つぼみは一同に出掛けて来る事を伝えると、りん、せつな、つぼみは、りんの家に向かうのだった。

りんの家に向かう間、りんは、せつな、つぼみとこれからの事を語り合つたりしていた。せつなは、ラビリンスを笑顔が溢れる国にする事を、つぼみは、祖母薫子のような植物の専門家になりたい事を語っていたのだが、

「でも、宇宙に行つて少し迷いが出来たんです・・・」

「迷い・・・どうして？」

少し悩むように首を捻るつぼみを見て、不思議そうにせつなが声を掛けると、

「はい、デューンはあるの暗い宇宙を、長い年月を掛けて地球にやつて来ました。もしも、もしも、宇宙にも沢山の花があつたのなら、デューンの心にも、違う感情が沸いていたのでは、と思ひまして・・・」

「宇宙に咲く花かあ・・・つぼみ、凄い発想だねえ」

りんも、せつなも、一瞬呆気に取られ、つぼみの言葉に驚いていた。それを見たつぼみは、変な事言つちやつたかなあと、キョドキョドしながら二人をチラチラ見ると、

「こんな発想・・・可笑しいでしようか？」

りんとせつなは思わず顔を見合わせると、ニッコリつぼみに微笑み、

「ううん、素晴らしいと思うよ！まあ、実現するのは大変だろうけど・・・何だろう、つ

ぼみには、のぞみと同じように、本当に実現させそうな気持ちにさせられるなあ」

「そうね・・・ウフフ」

りんはのぞみを、せつなはラブを、つぼみの姿にダブらせるのだった・・・

りんの家、フラワーショップ夏木にやって来た一同、遅くなると出掛けた筈のりんが戻って来た事を、不思議そうにりんの母、夏木和代がりに訪ねる。

「あら、りん・・・今日はお友達の歓迎会で遅くなるんじゃないの？」

「うん、その友達の中で、お花に興味ある娘を、ちよつと家の店に連れて来たくって・・・」

「あら、そうなの・・・初めまして、りんの母です！」

「あつ、花咲つぼみです！よろしくお願ひします!!」

「東せつなです！」

和代が二人に丁寧挨拶した事で、慌ててつぼみとせつなも挨拶を返すと、りんは簡単に母和代に二人の事を紹介した。つぼみの家が花屋である事、せつなが自分の街で花畑を作りたい事などを話すと、和代も二人を大いに歓迎した。

「そうなの、そういう事ならゆつくり見て行つてね！りん、好きな花を選ぶのも良いけど、花言葉を交えて選ぶのも良いかも知れないわよ！」

「花言葉……か……それも良いね！」

「そうですね！」

和代のアドバイスに、りんもつぼみも頷き、それも選ぶポイントに加えようと、りんとつぼみは張り切るも、せつなは首を傾げながら、

「花言葉!?!……って何？」

「花言葉って言うのは、草や花に込められた、合い言葉みたいなものね。草や花の色から受ける効果や作用、大きさや、刺の有無、花の成長した状態や、香りなどから受ける印象などを、言葉に置き換える事により、様々な種類の草や花を、花飾りや花束を通じて、直接言葉を言わなくても、互いの意志や感情を伝える事の出来る手段として生まれたのよー！」

せつなの問いに、母和代がウインクをしながらせつなに教えると、最初はキョトンとしていたせつなも、見る見る表情が輝いた。

そんな事、ラビリンスに居た頃には、全く考えた事も無かった。この世界はせつなに、人としての感情をどんどん与えてくれるようで、せつなは嬉しく思った。

「素敵ですね……花に込められた思い……か！」

つぼみもニコニコしながら、色々な花言葉をせっせなに教えていた。その都度せっせなは、つぼみの話に何度も頷いていた。

そんな二人を見て、りんは、せっせなやつぼみ、そして、他のメンバーを、ある場所に連れて行きたいと密かに思うのだった・・・

それから暫くして、りん達三人も戻って来たナッツハウスでは、盛大に盛り上がっていた。なぎさ、咲、のぞみ、うらら、ラブ、タルト、えりかが参加した大食い対決、カラオケ大会、そして、受験生の多い事で、ほのか、ゆり、かれんが急遽主催した特別授業、

「エエエ！折角みんな集まつてるのにいい・・・勉強何ていいよおお!!」

のぞみの言葉に、咲、ラブ、えりかも同意し、なぎさは後ろの方で四人をこっさり応援して、ほのか、ゆりに睨まれていた。四人が肩を組んで勉強反対を唱えるも、

「いいえ、これはあなた達を思つての事よ！後で後悔するより、今苦勞をして、後で喜びを味わいなさい!!」

眼鏡を掛け直して、四人を見つめたゆりの迫力の前に、四人は即座にノートを開き勉強を開始する。ココも人間姿で一同に勉強を教えて居た。

「でも、私やりんちゃんは、卒業しても高等部に進学するだけだから、受験勉強何て関係



無いんだけどなあ……」

「のぞみ……あなた、知らなかったの？家の学校は、学期末テストで赤点3つ以上取った者は……高等部に進級出来ないのよ!!」

のぞみがブツブツ言いながら勉強しているのを見たかれんは、苦笑しながらのぞみに追い打ちを掛けた。一瞬呆然としたのぞみの目の色が変わり、必死に勉強に励んでいた……

勉強タイムも終わり、かれんは紅茶を、こまちが和菓子を一同の前に運び、再び和やかな団欒をしていたが、りんはのぞみに向かい、

「のぞみ、ちよつと頼みがあるんだけど？」

「何、りんちゃん？」

「みんなをあの場所に……キュアローズガーデンに連れて行って上げたいんだけど……」  
りんが、のぞみにみんなを連れて行きたいと言った場所、

キュアローズガーデン……

そこは、シロップが生まれた場所でもあった……

赤い薔薇が一面に広がる素晴らしい世界、だが、その扉は固く閉ざされて居た。

エターナルとの戦い後、自らの死期を悟っていた管理者フローラは、自らの後継者にのぞみを指名したのだが……

「それは良い考えね！」

「私も賛成だわ！」

「私もです!!」

かれん、こまち、うららも、りんの言葉に同意を示すも、のぞみは腕を組んで考え込んでいた。のぞみの態度に、りんは少しムツとしながら、

「何よ・・・のぞみ、何か問題でもあるの？」

「エツ? うん、あるよ・・・これだけの人数を、シロップが乗せられるかどうか・・・」  
「そ、そんな事で悩んでた訳？」

のぞみが悩んでいた理由が、シロップがみんなを乗せられるかどうかという単純な理由に、りんは呆れるのだった。のぞみは不服そうに、

「だってえ、シロップに乗れなきや、あの長い階段を上らなきやならないんだもん・・・  
あつ、シロップが三回ぐらいに分けてみんなを運べば・・・」

「ふざけるな!」

のぞみがジト目でシロップを見ると、少年姿のシロップは、たじろぎながらも即座に拒否をする。

何やら問題が発生したようで、せつながのぞみに声を掛けた。

「あのう、もし良ければ、私がみんなをその場所に運ぶけど?」

「そっかあ、アカルン!!」

せつなの進言に、ラブ、美希、祈里はアカルンの力を思い出し、アカルンの事を一同に教えるのだった。そんな便利な機能があると聞かされた一同は、興味深げにし、のぞみは大喜びでせつなに頼むのだった。

「これじゃ、シロップのお仕事も減りそうだねえ?」

「俺は手紙の運び屋だ!!」

のぞみがちよつと意地悪そうな視線でシロップを見ると、シロップは、俺は手紙の運び屋で、人を運ぶのは仕事じゃ無いと言い返していた。

皆を集めたせつなは、アカルンを呼び出すと、

「じゃあ、行くわよ! キュアローズガーデンへ!!」

せつなの言葉を受け、一同と妖精達は瞬時にキュアローズガーデンへと向かった。

唯一匹を残して・・・

「エツ!? 何でわいだけ!?! パッションはあああん、殺生やでええ!!」

大食い競争に参加していて、腹がパンパンに膨れていたタルトは、集まりに遅れ、一同に置いて行かれるのだった・・・

キュアローズガーデンに着いた一同は、辺り一面に咲き誇る神秘的な赤い薔薇の姿、その神秘的な光景に、一同は思わず声を発するのだった。

のぞみ達五人と、くるみが先頭に立って一同に説明を始める。

「此処がキュアローズガーデンだよ!」

「凄い・・・何処を見ても一面の赤い薔薇」

「本当ですう・・・私、感動しました!!」

ほのか、つぼみが感動して思わず声を出す、りんは、せつなの表情が浮かかない事に気付き、眉根を曇らせせつなに声を掛ける。

「せつな・・・あんまり気に入らなかつた?」

「ううん、私の好きな赤い色の花が一杯あつて、とても素敵だわ!!ただ、私何か忘れてるような気がして・・・アツ!」

せつなに、キュアローズガーデンを気に入って貰えなかつたかと心配したりんだが、せつなの表情が浮かかないのは、他の理由だと知り少しホツとするりんだつた。

せつなが何かを思い出した様子なので訪ねてみると、

「せつな、どうしたの?」

「私、タルトを置いて来ちゃつた見たい・・・ちよつと迎えに行つてくるわ!!」

せつなはそう言い残し、大慌てでナッツハウスに戻るのだった。

「タルト、タルト、ゴメン!まさか一緒に行つてなかつたとは思わなくて・・・タルト!」

タルトの名を呼び、探していたせつなは、タルトが部屋の隅で黄昏れているのに気づき、思わず苦笑を浮かべた。タルトはチラリとせつなを見るも、すっかり拗ねていた。

「タルト、ゴメンね！ てつきり一緒に来てると思つて、おいで、一緒に行こう!!」

せつながしやがみ込み、両手を広げタルトを呼ぶも、

「ハア、どうせわいの事何て忘れて、みんなで盛り上がつてるのとちやいますかあ?」

目が虚ろのタルトは、生半可な返事をせつなに返すと、せつなは困った表情を浮かべる。すっかりいじけてしまったタルトに困惑しながらも、あまり時間を割いては、折角招待してくれたのぞみ達にも悪いしと考え込むせつな、

「あまりみんなを待たせるのも悪いし……タルト、来ないなら行つちやうわよ!?! いいの?」

せつなの言葉に、タルトはビックリと反応してせつなの顔を見ると、見る見る内に涙が浮かんでくる。

「待つてええな!! 本当は……わい、わい、寂しかったんやああ!!」

せつなの胸に飛びつき、泣きじやくるタルトを、せつなは優しく微笑みながら撫でてあげるのだった。

キュアローズガーデンに、タルトと共に戻つて来たせつなを見て、ラブ達三人が近づいて来る。三人は、せつながナッツハウスに行つていた事に気付かなかつたようで、

「あれ!?せつな、何処か行つてたの?」

タルトが居なかつた事に全く気付いて居ない三人に、タルトは冷めた視線を浮かべながら周りを見渡すと、

「やつぱり、わいの事何て忘れとつたああ……シフォンに至つては、ムーブ達やシプレ達と遊び回つてるしい……あんまりやああ!!」

再びせつなの胸で泣きじやくるタルトに、困惑したせつなが事情を説明すると、三人は一瞬しまったという表情を浮かべ、苦笑混じりに知らなかつたとタルトに謝罪するのだった。

「はい、タルトもみんなと此処を堪能して来て!」

せつながタルトを地面に下ろそうとすると、タルトは何故か嫌がり、せつなから降りようとしなかつた。何故降りないのか、不思議そうにせつながタルトに訪ねてみる。

「どうしたの?」

「わいは、絶対パッションはんから降りへんでえ!降りたらまた置いて行かれるに違いないわ!!」

せつなの胸に顔を埋めたタルトは、また置いて行かれるかも知れない不安から、頑なに拒み続けて居た。

「そんな事しないってば……ねえ、美希たん、ブツキー、せつな!」

「そうよ、タルト機嫌直してよ！」

「タルトちゃん！」

三人が笑顔混じりにタルトに声を掛けるも、タルトは冷めた視線を三人に送ると、「ピーチはん達の言う事は信用出来へん！何せ、パッションはんが仲間になる前から、何度もわいは置いてけぼりにされてるさかいな」

「あたしは……してないと思うけど？」

「私も……多分……」

美希も祈里も、そんな事はしてないと思うけどと首を捻るも、何度か身に覚えがあるラブの表情が変わり、顔から汗が流れた。

「私は……何度かしました！タルト、ゴメン!!」

ラブは返す言葉が見つからず、タルトに謝り、美希、祈里と顔を見合わせて苦笑を浮かべた。

そこにシフォンが、ムープ、フープ、シプレ、コフレ、ポプリを連れてやって来ると、「タルト、赤ちゃん見たいでしゅ！」

「な、何やてええ!？」

せつなの胸で甘えるタルトを見て、ポプリがタルトを赤ちゃんみたいだと言うと、タルトは顔を真っ赤にしながら否定し、渋々ながら地上に飛び降りた。チラリとせつなを

見るタルトに、せつなは優しく微笑み、帰る時はまた抱っこして上げるからと声を掛け、タルトは安心してキュアローズガーデンを堪能するのだった・・・

かれんとこまちは、なぎさ、ほのか、ゆりを・・・

のぞみは、ひかり、咲、舞、満、薫を・・・

うららは、つぼみ、えりか、いつきを・・・

りんは、ラブ、美希、祈里、せつなを・・・

くるみはミルクの姿に戻り、ココ、ナッツ、シロップ達と一緒に、妖精達を・・・

一同は分散してキュアローズガーデンを案内していった。

「せつなは赤い花が好きだったわね・・・どう？赤い花である薔薇は!？」

「ええ、とっても素敵だわ!」

「赤い薔薇の花言葉は、私と同じ情熱!これからラビリンズに花畑を作ろうと考えているせつなには、似合っていると思うけど?」

せつなは辺りを見渡し、薔薇の花を気に入りりんの言葉にニッコリ頷いた。

りんは、薔薇の種をせつなへのプレゼントの一つにするのを決めるのだった・・・

「みんな、どうだった!?キュアローズガーデンは?」

一同に感想を聞くのぞみに、それぞれからいろいろな感想がでる。



皆、この素晴らしき場所に感嘆していた・・・

中でもつぼみは大変気に入り、祖母薫子も連れて来たいと言うと、のぞみ達は満面の笑顔で喜んでとつぼみにOKを出すのだった。

「キュアローズガーデン！またの名を命の庭!! 私達は、フローラさんから託されたこの場所を守り、そして、次の時代に引き継がなきゃね」

のぞみはキュアローズガーデンを見渡すと一同に満面の笑みを浮かべる。

沢山の薔薇は、少女達を歓迎するように穏やかに揺れていた・・・

第十一話：バラの楽園

完

## 第十二話：ムーンライト伝説!

## 第十二話：ムーンライト伝説!

1、

この日は、一同が再び希望ヶ花市の訪れる日だった・・・

本来なら、待ち合わせ場所を決める所ではあったが、此処、薫子が所長を務める植物園には、砂漠化していた時に一同も来ていたので、せつなは、みんなと待ち合わせした後、みんなと植物園に来る旨を、つぼみ達に伝えて居た。

つぼみとえりかは、薫子に頼まれ、和菓子屋の「はらの」へ大福を買いに出掛けていた。「はらの」の跡取り息子は、嘗てデザトリアンにされたものの、ブロッサムとマリんに救われた経緯があった。今では、自分の未熟さを理解し、祖父、父に負けず劣らずのあんこを作れるようになり、順調に後継者として成長していた。

そして、いつきとゆりは、植物園園長である薫子から、テーブルや椅子、コーヒーカーツプを借り、一同を迎え入れる準備をしていた・・・

「確か、こまちの家は和菓子屋さんだったわよね?」

「はい! ナッツが大福を大好きで、良く持って来てたって言っていましたよ!」

「そう……ダブらなきや良いんだけれど?」

「多分……大丈夫じゃないでしょうか?かれんさんが以前言っていましたけど、こまちさんは、普段良く持ち歩いているのは、羊羹だそうですから」

「そう言えば……TAKO CAFÉでも、大空の樹でも、ナッツハウスでも、こまちは、毎回食後に羊羹をくれたわね?」

「アハハハ!そうでしたね」

和菓子談義で盛り上がっていたいきとゆり、買い出しを終えたつぼみとえりかも合流し、一同はなぎさ達がやってくるのを待ち侘びていた。

それから30分ぐらいいして、アカルンの力を借り、一同が姿を現わした。

「ゆり、つぼみ、えりか、いつき、お待たせええ!」

一同を代表したように、なぎさがつぼみ達に声を掛けると、つぼみ達は皆笑みを浮かべながら、

「皆さん、良くお越し下さいました!」

「みんな、待ってたっしゅ!」

「いらっしやい!」

「良く来てくれたわね!さあ、座って頂戴!!」

つぼみ達は、準備していたテーブルに、一同にランダムに座って貰い、接待役である

つぼみ、えりか、いつき、ゆりの四人は、それぞれバラバラに座り、客人であるなぎさ達を持ってなした。

つぼみと一緒に座るのは、ほのか、舞、りん、せつな

えりかと一緒に座るのは、薫、のぞみ、うらら、美希

いつきと一緒に座るのは、ひかり、咲、くるみ、祈里

そして、ゆりと一緒に座るのは、なぎさ、満、かれん、こまち、ラブ

一同が和やかにティータイムを満喫していると、つぼみは少し緊張気味に一同に話し掛け、

「皆さん、私ちよつと、りんさんとせつなさんを連れて、家に行きたいんですが・・・よろしいでしょうか?」

「エツ!? つぼみ、私とりんに何か用事でもあるの?」

「はい! 前に、植物園やりんさんのお店で・・・」

「エツ!? アア、はい、はい、成る程ね・・・私は良いよ! せつなは!」

つぼみの用事が、せつなにプレセントする花の種の事だと気付いたりんが、ウンウン頷き、せつなに聞くと、せつなも嬉しそうな表情を浮かべ、

「私が拒否する理由が無いわ! でも、良いの?」

「はい! 是非来て下さい!!」

「だったら・・・一時間ぐらい自由時間にでもしますか？」

それなら、折角だから自由時間にでもしましょうかといつきが一同に尋ねると、ゆりもその案に同意し、

「それも良いわね！じゃあ、つぼみ、えりか、いつき、私達で別れて、みんなにこの町を案内しましょう!!」

「はいー!!」

四人がそれぞれこの町を案内してくれると聞き、美希は目を輝かせながらえりかを見つめると、

「ねえ、えりか！あたし、ちょっとえりかの家に行ってみたいんだけど・・・駄目かしら？」

「エツ!?別に構わないよ！そうだ！ゆりさんも一緒に行かない？最近ゆりさんが冷たいって、もも姉がいじけてたからさあ」

「エエエ!?そ、そんな事は無いと思うけど・・・」

えりかの姉ももかが、ゆりに最近冷たくされてると聞き、思わず動揺するゆりだった。なぎさはニヤニヤしながらゆりを見つめると、

「ほのか、私達もえりかの家に行かない？えりかのお姉さんって、私達と同じ年みたいだしや」

「別に良いよ！でも、大人数でお邪魔して、ご迷惑じゃないかしら？」

「大丈夫！大丈夫！家はフェアリードロップっていう洋服のお店やってるし、お客さんが多いのは、寧ろ喜ばれるから！ニヒヒヒ!!」

そう言うと、えりかはニンマリ微笑んだ。のぞみは少し考え込むと、

「私は……何処か美味しいお店にでも行きたいなあ？」

「のぞみ……それはみんなが揃ってからにしましょうね？」

今大福を食べたばかりなのに、もう次の食べ物のを考えて居るのでみに、苦笑を浮かべながらかれんが諭すと、のぞみもそれもそうだねと納得した。

「じゃあ僕は、満さんと薫さん、かれんさんとこまちさんとくるみさん、ラブさんを案内してくるね！」

「いつきの家は、道場をやってるんでしょう？」

「この世界の武道って、興味があるわね！」

「平和になったとはいえ、何かの役に立ちそうだしね！」

「じゃあ、僕の家に行ってみますか？」

満と薫、くるみは、道場というものに興味があるようで、いつきの家に行くのを楽しみにしているようだった。ラブは腕組みしながら、

「道場か……おもちゃの国を思いだすなあ……」

ラブは、おもちゃの国に行った時、双六で止まったマスの影響で道場に飛ばされ、ブルース・リーの真似をしたようなおもちゃと戦った事があった・・・

「じゃあみんな、また一時間後に植物園で！」

ゆりの挨拶で、一同はそれぞれ別れ、自由時間を過ごす・・・

「此処が私の家・・・って、アレエ!？」

自分の家、H A N S A K I フラワー S H O P に、りん、せつな、祈里、ひかり、咲と舞を連れて来たつぼみであったが、家の中に両親が見当たらず小首を傾げると、家中からドタバタ出てきたつぼみの父陽一は、

「オッ！つぼみ、良い所に帰ってきた!!」

「お父さん!?!慌ててどうかしたんですか?」

大慌ての陽一を見て、小首を傾げたつぼみが訳を尋ねると、少し無理をしたのか、妊娠中のつぼみの母みずきが、貧血で倒れたと聞き、つぼみも真っ青になるも、今は奥で休んでいるから大丈夫と聞きホッと安堵する。どうしても出掛けなければならぬ配達があつて、困っていた所だと陽一は語った。つぼみは、後の事は自分に任せてと陽一を送り出すと、

「皆さん、折角来て頂いたのに、ドタバタしてすいません・・・」

「ううん、気にしないで！ねっ、みんな！」

「そうだよ！私達の事は良いから、早くお母さんの様子を見てきて上げなよ!!」

りんと咲の言葉に甘え、つぼみは母の様子を見に部屋の中へと入っていた。ちょうどその時、花を買いに来たお客さんがやって来て、同じく花屋をやっているりんが応対する。そのテキパキしたやり取りに、他のメンバーも感心していたが、そういう時に限って、他にもお客さんがやってきましてしまい、咲は慌ててつぼみを呼びに行こうとするも、「咲、待って！今はつぼみを、お母さんと一緒に居させて上げましょう？いらつしやいませ！何かお探しでしょうか？」

せつなは咲を引き留め、此処は自分達で対応しようと話し掛け、分からない事はりに聞き、客商売に慣れているひかりと咲、不慣れながらも、つぼみの為に奮闘していたせつな、祈里と舞も、花の包装などで懸命にフォローしていた・・・

奥から出てきたつぼみは、自分を心配させまいとお客さんへ対応してくれた一同に、深い感動を覚えていた。

(皆さん・・・私、せつなさんにプレゼントするお花が決まりました！)

目をウルウルさせながら、つぼみはせつなへの花の種のプレゼントを決めるのだった・・・



一方、明堂院家に見学に来た一同……

「私達……何で稽古着を着ているのかしら？」

「エエと……私達、見学に来ただけよねえ？」

「ちよつと……足が痺れてきたんだけど」

明堂院家に見学に来た満、薫、かれん、こまち、くるみ、ラブ、何故か一同は、いつきの祖父明堂院厳太郎より、稽古着に着替えるように言われ、道場の隅で、正座で待機していた。かれんとこまち、そしてくるみは、何故こんな事になったのか、理解に苦しむようだった。

「いつきちゃんのお爺ちゃんって……ちよつと怖そうだよねえ？」

「そう!? 武道家って、あんな感じじゃないの？」

「前に読んだ本のイメージ通りだわ!!」

ラブは、厳しそうな厳太郎に少しビビリながら、満と薫に話し掛けると、二人はイメージ通りだとさしたる動揺はしていなかった。

一同の前では、門下生達が組み手を行っていた……

気合いの籠もった声が、道場に響き渡る。その様子を、正面で威厳漂わせ正座しながら見つめる厳太郎、その隣に立って居た髪の長い青年が、一同に近付いて来ると、

「やあ、いらっしやい！ 話はいつきから聞いています……いつもいつきがお世話になっ

ています！私はいつきの兄で、明堂院さつきと申します!!」

好青年さを醸し出したさつきが、恭しく一同に頭を下げると、一同も礼を返す。さつきは苦笑を浮かべながら、

「お爺様が、ただ見学するだけでは、我が流派を知る事にはならないって仰つて・・・私といつきで、皆さんをご指導致しますので、今回は体験見学という事で・・・」

「体験見学ですかあ!?!」

思わずハモつたかれんとこまちが思わず驚き、改めて練習している門下生を見つめる。自分達もあのような事をやらされるのだろうか？二人の表情が引き攣つた。武道着に着替えたいつきも現われ、苦笑を浮かべながら、

「皆さん、じゃあ折角なので、明堂院流の基本をお教えます・・・よろしくお願ひします!」

いつきとさつきが頭を下げると、慌てて一同もその場で頭を下げた・・・

「やるからには・・・手加減無用よ!」

「エエ、私達も遠慮はしないわ!」

「満ちちゃん!薫ちゃん!勝負じゃないんだからああ?」

「いつき!さつきさん!お手柔らかに・・・」

やる気満々の満と薫を慌てて静止し、ラブとかれんは、引き攣つた笑みを浮かべなが

ら、お手柔らかにと二人に頼んで居た・・・

「ただいまあ！もも姉、ゆりさん来たよ!!」

フェアリードロップにやって来た一同、オシャレな服の数々に、なぎさとほのか、のぞみとうらら、そして美希は、興味津々で店内を見渡した。えりかに呼ばれたももかが、二階から降りてくると、ゆりを見付けるや、猛ダツシユで駆け下り、ゆりを苦笑させる。「もう、ゆりったら久しぶりじゃない！電話しても忙しいって、何度振られた事か・・・アレエ!？」

ももかに気付いた一同も近寄り、ももかに挨拶すると、慌ててももかもお辞儀を返すも、大勢の少女達を見て戸惑った。自分のファンだという少女が、時折フェアリードロップを訪ねてくる事はあったが、どうも見た限りでは、えりかやゆりの知り合いのようで、ももかは小首を傾げた。

「この人達・・・えりかやゆりの知り合いなの？」

「エへへへ！仲間っしゅ!!」

「えりか!・・・まあ、訳あって知り合った友達よ！紹介するわね!!」

ついうっかり、プリキュアの事を喋ってしまいそうなえりかを窘めたゆりは、ももかになぎさ達を紹介するのだった。自分の知らない所で、えりかは兎も角、大勢の友達を

作っているゆりを、羨ましくもあるももかだったが、なぎさは気さくにももかに話し掛け、ほのかを伴い、自分達かももかと同じ年だと伝え、ももかも嬉しそうに談笑する。

えりかは、美希をももかに紹介すると、美希は嬉しそうに目を輝かせ、

「ももかさんの仕事ぶりは、雑誌で参考にさせて貰っています！私も、ももかさんみたいなトップモデルになれるように頑張ります!!」

「エエと、美希ちゃんだっけ?! ウン！大丈夫!! 美希ちゃんのスタイルなら、私以上のモデルに何て、直ぐになれるわよ!!」

何気に奥で子供達のやりとりを聞いていた、えりかとももかの母さくらは、美希の容姿をジイと見て居ると、突然美希に駆け寄り、

「美希ちゃんって言うの? ねえ、あなたのお母さんって・・・ひよつとして、レミさんって名前じゃ?」

「エツ!? 母をご存じ何ですか? 確かに母の名前は、蒼乃レミですけど・・・」

「まあ! やっぱレミさんの・・・美希ちゃん、大きくなつたわねえ? 若い頃のレミさんにそっくりだから、もしかしたらと思つたら・・・ももか、えりか、あなた達も小さい時、美希ちゃんには会つた事あるのよ!!」

「「エエエ!?!」」

「そ、そう何ですか？」

突然のさくらの告白に、美希、えりかとももかの三人は大変驚き、思わず三人で顔を見合わせた。さくらはニコニコしながら頷き、

「もつとも、えりかはまだ一歳だったし、美希ちゃんも二歳ぐらい、ももかも四歳の時だから、覚えて無くても当然かしら？」

さくらの話によれば、若い頃トップモデルだったさくらは、モデルやタレント業をやっていた美希の母、レミと親交があったそうで、互いに家庭を持って忙しくなり、近年は年賀状だけの挨拶になってしまっていたと伝えた。

「これも何かの縁なのかしらねえ？美希ちゃん、何時でも家に遊びにいらっしやい！レミさんにもよろしくね!!」

「は、はい!」

さくらはそう言い残し、やって来たお客さんの応対を始めた。なぎさ達やのぞみ達も、美希とえりかにそんな接点があるのは驚いたようで、

「へえ・・・美希とえりかに、そんな接点があった何てねえ」

「うん! 凄く運命的だよねえ・・・」

なぎさの言葉に、のぞみもウンウン頷き、人の縁を実感していた・・・

合流して一緒に植物園に戻ったつぼみ達とえりか達、先に戻って居たいつき達だったが、かれんとこまち、ラブはテーブルに顔を付き、グツタリし、くるみはミルクの姿に戻ってバテていた。

「皆さん、ただいま戻りました!」

「どうしたの!?! 疲れた顔して?」

つぼみとえりかは、疲れ切っているかれんとこまち、ラブに話し掛けると、いつきが苦笑を浮かべながら、

「アハハハ、かれんさん達は、僕の家道場を見学に来ただけど、ひよんな事から、明堂院流の体験をする事になってね」

「いつき、良い勉強になったわ!」

「ええ、今後の役に立ちそうだわ!」

バテているかれん達と違い、満と薫はいつきに礼を言い、生き生きしていた。ラブはそんな二人を見ると、

「満ちゃん、薫ちゃん、良く平然としてるね? 私何か・・・もうクタクタだよおお」

疲れ切ったラブが、元気そうな満と薫を見て、グツタリすると、一同が笑い声を上げた。

「フッフ、みんな、お帰りなさい!」

そんな一同の声が聞こえたのか、奥からつぼみの祖母薫子が現われ、一同はこの間お世話になった謝辞を述べた。薫子も加わると、一同の顔をマジマジと見つめ、

「こんなにプリキュアが増える何て・・・想像もした事が無かったわあ！あの時は、私とゆりちゃんだけだったし・・・」

感触深げにゆりを見つめながら、薫子がポツリと言葉を漏らすと、のぞみは興味があつたのか、ゆりに話し掛け、

「そういえば、ゆりさんは最初、一人で砂漠の使徒と戦ってたんですよねえ？」

「ええー五十年振りに、再び活動を再開した砂漠の使徒・・・薫子さんの後を継いだ私は、コロンと共に、砂漠の使徒と戦った・・・」

なぎさとほのかは、この前ゆりからプリキュアになった話を聞いていたが、他のメンバーは知らないらしく、身を乗り出して聞く耳を立てた。

「ゆり！折角だから、みんなにも話してあげたら？」

「別に良いけど・・・大した話じゃないのよ？」

「「「聞きたい!!」」」

咲、のぞみ、ラブ、えりかが、ゆりに聞きたいと頼むと、ゆりは目を閉じ、頭の中で整理すると、一同にゆっくりと話し出した・・・

2、

キュアフラワーと、砂漠の王デューンとの戦いから五十年の月日が流れた・・・

今地上に、再び砂漠の使徒が暗躍しようとしていた・・・

月に浮かぶ砂漠の中に、城のような建物があった・・・

その中で、茶色い軍服を着た体格の良い大男が、画面に跪き、会話をしていた・・・

「デザートよ、再び我らが動く時が来た！我らの配下に加わったサバークと共に、今度こ

そここの大樹を枯らし、この星を砂漠に変えるのだ!!」

「ハッ！お任せくださいデューン様・・・必ずやこの大樹を見つけ出し、この星を我らの安住の地にしてみせます!!」

「悔るな！この大樹は、必ずプリキュアを差し向けてくる・・・用心しろ!!」

「ハハアア!!」

デューンとの会話が終わったのを見計らい、背後からデザートに声を掛けた者が居た。

「いよいよ出番ですね？デザート子爵！」

「そうだ！クラゲールよ、直ちにこの大樹を捜しだしてくるのだ！」

「お任せを!!」

薄茶色の軍服のような服を着た褐色肌の男・・・



名はデザート子爵、彼はデューンから全権を任されていた。配下のクラゲールは、茶色いブレイズヘアーをした肌白い細身の男、彼は不敵な笑みを浮かべながら、その場を後にした……

月影ゆりは泣いていた……

大好きな父が、フランスで消息不明になって以来、彼女から微笑みが消えた……

毎日学校から帰って来ては、父から便りがないかポストを開けるも、父から手紙が届く事は無かった……

泣き止んだゆりは、もう17時近い事に気付き、慌てて明堂学園中等部の制服を脱ぎ始めた。ゆりは不意に、誰かの視線を感じ振り向くと、窓に妙な物体が張り付いていた。(な、何?!あの変なのは?)

恐る恐る近付くと、縫いぐるみのように、ゆりはホツと安堵し、窓を開けた。

「ヤァ!僕の名前は……」

「イヤアアア!!」

ゆりは、咄嗟にしゃべり出した縫いぐるみを、手で叩き落とすと、縫いぐるみは地上でピクピク痙攣していた。私服に着替えたゆりは、さっきの縫いぐるみが気になり、下に降りていくと、縫いぐるみはヨロヨロ立ち上がり、

「い、いきなり殴るとは失敬だねえ？ 僕の名はコロン！ ころの大樹の妖精さ!! 突然だけど、君は最近、妙な夢を見た事ないかい？」

「エツ!!? どうしてそれを縫いぐるみが・・・」

「違う！ 僕は縫いぐるみじゃなくて妖精さ!!」

「妖精!!」

ゆりは、突然縫いぐるみが話し出した事にも驚いたが、自分が毎日のように見る夢の事を、コロンと名乗る妖精が知っている事に、更に驚きを見せた。

コロンの言うように、ゆりは毎日同じ夢を見て居た・・・

大きな大木が上空で見守る中、巨大な大男を、光るワンピースを着た女性が、小箱を抱え閃光を放つ夢を・・・

「やっぱりそうだな！ 君こそ、キュアフラワーの後継者に選ばれた、僕のパートナー何だ!!」

「エツ!!? キュアフラワー!!? 後継者!!? 一体何の事?」

頭の中が混乱するゆりに、コロンは植物園に行くように進言する。植物園はゆりも大好きな場所、何度も訪れていたが、この妖精は、自分に何を伝えようとしているのか、ゆりは気になった・・・

ゆりは、植物園に行つて来ますと置き手紙を書くと、コロンと共に向かった。

植物園に着いたゆりは、園長である薫子と親しげに会話するコロンを見て、驚愕の表情を浮かべると、

「え、園長さん……その妖精を知ってるんですか?」

「エッ!? ゆりちゃん? コロン……まさか?」

「キュアフラワー! そう、彼女こそ……こころの大樹によつて、あなたの次に選ばれたプリキュア!」

「ゆりちゃんが、プリキュアに!?!」

薫子は、ゆりの顔を見ると愕然とした……

花を大好きで、頻繁に顔を出していたゆり、植物学者である父の失踪後、ゆりの心は傷ついていた……

そんなゆりを、こころの大樹はプリキュアに指名し、戦わせようというのか? 薫子は胸が痛んだ……

50年前、自分がデューンとの戦いに決着を付けていれば、ゆりを同じ目に合わせなくても良かったのにと……

その時、植物園の近くで大きな物音が響き渡った。顔色を変えて外に飛び出した薫子を、ゆりとコロンもその後を追った。そこには、猫の姿をした大きな怪物が暴れて居た。

「僕は猫が好きなんだああ! でも、飼いたいって言ったら、きつと怒られる……」

「ハアハツハツハ、人間とは、下らん事で悩むものだなあ?」

側に居たクラゲールは、そんなデザトリアンの心の声を嘲笑した。ゆりの心に沸々怒りが沸き上がってきた。誰にでも人に言えない悩みはある。それを嘲笑う何て、許せないと・・・

「デザトリアンにされたのは、この少年だよ!」

コロンは、丸い球体をゆりと薫子の下に持つて来た。球体の中には、膝を抱えた少年が、苦しい様子で呻いていた。ゆりは目を見開いて驚き、

「これは一体!」

「人は皆、心の中に花を咲かせているの・・・私も、ゆりちゃんも、みんなね!」

薫子の言葉を引き継ぐように、コロンはゆりに話し掛け、

「デザトリアンにされた人は、心の花を枯らされ、全ての心の花を枯らせてしまうと・・・二度と目覚める事は、出来なくなってしまうんだ!」

「そんなあ!」

動揺するゆりを尻目に、薫子はクラゲールの前に駆け出すと、

「お止めなさい!」

「ん!? 貴様の胸に掛かっているペンダントは・・・そうか、貴様がキュアフラワーか?」  
クラゲールは口元に笑みを浮かべると、束ねた髪の毛を、触手のようにして薫子に攻

撃を始めた。その時、一陣の花びらが舞うと、眼鏡を掛けた青年が現われ、薫子を抱き抱えると、クラゲールから距離を取った。

「何者だ、貴様!? まあいい……どうした、何故プリキュアに変身せん? クククク、デザート子爵の仰った通りだな! キュアフラワー、貴様はデューン様との戦いで、もうプリキュアになる事は出来ないようだなあ?」

「クッ!」

「ハアハハハハ! プリキュアの居ないこんな世界など、直ぐに砂漠に変えてやる……デザートリアン! もつと暴れてしまえ!!」

クラゲールの言葉を受け、デザートリアンが益々暴れ始める。それと同じように、球体の中の少年が、益々苦しげに呻き始める。

「本当に私に、あの怪物と戦える力があると言うの?」

「うん! 君なら出来るよ……」

ゆりはキツと顔を上げると、ゆりの身体が光に包まれ、目の前に妙な物体が出現した。薫子は目を見開き驚くと、

「あれは、ココロパフォーム! じゃあやつぱり、ゆりちゃんこそ私の後を継ぐプリキュア!!」

「時間が無いから一度しか言わないよ! 僕が君にプリキュアの種を授けたら、手に持つ

ているココロパフュームに嵌めてこう叫ぶんだ……プリキュア！オーブンマイハートつてね!!」

コロンはそういうと、紫色した丸い物体をゆりに射出した。ゆりは片手で受け取るのと、言われるままにココロパフュームにセットし叫んだ。

「プリキュア！オーブンマイハート!!」

香水のように身体に振り掛けていくと、ゆりの身体を、銀色の衣装が覆い始めていく。右手には、紫色をした長い手袋を嵌めていた。髪も薄紫色に変化し、変身を終えたゆりが戸惑っていると、

「さあ、新しいプリキュアの誕生だ！君の好きな名前を付けて!!」

「私の好きな名前?……」

ゆりの視線に、デザトリアンに街灯を破壊され、辺りに光が消えかける。だが、月の光が鮮やかに自分を照らす姿に、ゆりは名前を決めた……

「私の名前は……月光に冴える一輪の花……キュアムーンライト!!」

新たなプリキュア、キュアムーンライトが誕生した瞬間だった!!

3、

「「オオオオオ!!」」

ゆりの話を聞いていた一同が、ムーンライト誕生秘話を聞いて身を乗り出す。薫子は苦笑を浮かべながら、

「私から見ても凄かったわあ！とても初陣とは思えない戦い振りだった・・・」

薫子は目を閉じ、その時の様子を思い出した・・・

素早い動きのデザトリアンだったが、ムーンライトの動きは更に上だった。格闘戦で圧倒するムーンライトを見て、クラゲールは、先程のように自分の髪の毛を触手のように操り、ムーンライトに攻撃する。ムーンライトが必死に避けていると、

「ムーンライト、タクトを使うんだ！」

コロンはそう叫ぶと、ムーンライトにタクトを呼び出す方法を伝えた。ムーンライトは、コロンの言葉に頷くと、

「集まれ、花のパワー！ムーンタクト!!」

タクトを手に持ち、クラゲールの攻撃を弾き続けるムーンライトは、助走を付けて上空にジャンプすると、

「ハアアアア!!」

タクトを右、左に振ると、その風圧は、鎌鼬のようにクラゲールの髪を切り落とした。「バカなあ!?!俺の髪を切り落としただとおお?」

困惑するクラゲールを余所に、ムーンライトは猫のデザトリアンに向き合うと、

「ムーンライト、今だ！フォルテウエーブでデザトリアンを浄化するんだ!!」

「花よ、輝け！プリキュア！シルバーフォルテウエーブ!!」

ムーンライトは、コロンのから聞いた、花の形をした光の光弾フォルテウエーブで、デザトリアンを浄化した。

「クッ！伝説の戦士プリキュア、この時代にも現われやがるとは・・・デザート子爵に報告せねば!!プリキュア、次はこうはいかんぞ!!」

クラゲールは捨て台詞を吐いて撤退した。

コロンは、見事な戦い振りを見せたムーンライトを、笑みを浮かべながら称えていたが、

「これから・・・ハッ!?こころの種が生まれそうだよ!」

何かを伝えようとしたコロンの動きが止まると、こころの種が生まれそうだとムーンライトに伝えた。何の事か分からないムーンライトは困惑し、

「エッ!?こころの種って・・・エエエ?」

「プリプリプリプリリン!」

急にお尻を振り、黄色いこころの種を生み出したコロンの、ムーンライトは絶句する。

薫子は苦笑を浮かべながら、



「こころの大樹の妖精は、デザトリアンが浄化されたこころの花から、種を生み出す事が出来るの！その種が沢山集まると、こころの大樹は一層元気になるわ!!」

「そ、それは兎も角、こころの種を生み出すのは・・・あんな方法しか無いんですか?」  
「それは仕方無いわね・・・私の妖精コツペもそうだったから」

ムーンライトは、呆れたように溜息を付くと、薫子と目が合い、思わずクスリと笑みを浮かべた・・・

初陣を見事にこなしたゆりは、薫子の協力の下、益々力を付けていった・・・

コロンは、デザトリアンの探知能力に優れていて、デザトリアンが現われるや、直ぐにゆりはムーンライトとして駆け付け、デザトリアンを次々に浄化していった・・・

遂には苦戦の末、砂漠の使徒の幹部であるクラゲールさへ、薫子の指導の下で覚えた、フォルテツシモで浄化する事に成功した。ムーンライトは、砂漠の使徒と戦うプリキュア、最大の技とも呼べるフォルテツシモを、一人で使えるまで成長していた・・・

（・・・）まで凄い何て・・・一人でフォルテツシモを扱えたプリキュアは、私を含めても数人だけだったと聞いているのに・・・この子は、私以上のプリキュアになれる素質を持っているわ!!」

薫子は、ムーンライトの急激な成長振りに目を見張った・・・

「これは一体どういう事だ!?僕はサバークと協力しろと命じた筈だが?」

「ハツ・・・ハハア、も、もう一度、私めにチャンスを・・・」

「良いだろう・・・ただし、これが最後のチャンスだという事を忘れるな!!」

数々の失態を見せるデザートに、痺れをきらしたデューンは、怒りを露わにしていた。デザートは大変動揺し、その姿を後方で見て居た、銀の長髪に仮面を付けたサバーク博士は、背後で畏まる三人の人物に対し、

「お前達の出番も近いようだな・・・」

「任せるぜよ!」

「最初からこの僕に任せて貰えれば」

「サバーク博士、出撃の許可を頂きたいですわあ!」

三人は、自分が出撃すると採め始めるも、サバークは、デザートのお手並み拝見とでもいうように、三人に待機を命じた。背後を振り返ったデザートは、

（クツ!サバークめえ・・・貴様は部屋に籠もって研究でもしてれば良いんだよ!!こんなれば、嘗て当時の王に追放されたあの男を捜しだし・・・いや、それでは私が王に反乱した事になってしまう・・・）

デザートは、自らムーンライトと戦う事を誓うのだった・・・

4、

来海ももかは寂しかった・・・

雑誌で表紙を飾る程の売れっ子モデルになったものの、クラスメイト達は、何処か余所余所しく接していた。本来ももかは、えりか同様明るい性格をしているのだが、まるで学校に居る間は、仮面を被って生活しているようで寂しかった。

(どうしよう・・・もうすぐテストなのに・・・)

モデルの仕事で海外に行っていて、一週間学校を休んでいたももかは、テスト間際なのに、何所を勉強すれば良いのか戸惑っていた。パラパラ教科書を捲っていたももかに、スツと何冊かのノートが視線に入ってきた。ももかにノートを差し出したのはゆりだった。

「良かったら、使って！一週間も休んでいたら大変でしょう？」

「月影さん・・・ありがとう！あのう・・・良かったら、教えて貰えるともっと助かるんだけどお・・・」

「フフ、良いわよ！」

「本当?!ありがとう!!」

何処かなぎささとののかの関係を思い起こさせる、ゆりとももかだった・・・

帰り際、鞆の中から顔を出したコロンは、

「ムーンライト、今日はやけに楽しそうだねえ?」

「エツ!? そう? 何時もと変わらないと思うけど……」

コロンは最近ゆりが明るさを取り戻した事を、自分のように喜んで居た。プリキュアになっても、彼女は自分の部屋でよく泣いていた。そんなゆりを眺めているのが、コロンは辛かった。何とかゆりの力になりたいと思つて居た。そんな優しいコロンと触れ合い、ゆりの心も、次第に明るさを取り戻そうとしていた……

そんな彼女達だったが、突然コロンの顔付きが変わつた……

「ムーンライト、デザトリアンの気配を感じる! その側に、得体の知れない気配も……」  
「得体の知れない気配! とにかく行つてみましょう!」

二人はデザトリアンの気配のする方向に駆け出した!

「妻にも、娘にも……会わず顔が無いんだああ!」

「エツ!」

スーツ姿に似たデザトリアンが、自分の妻と娘に会わせる顔が無いと叫んでいる姿に、ゆりは戸惑つた。コロンはそんなゆりを叱咤し、変身するように促すと、ゆりはムーンライトに変身して向かいうつた。

「現われたか、キュアムーンライト! 我が名はデザート子爵……クラゲールの仇、この

俺自ら取らしてもらおうぞおお！」

デザート子爵は、懐から二丁拳銃を取り出すと、ムーンライト目掛けエネルギー波を乱射した。素早い動きで走り、攻撃を避けながら前進するムーンライトだったが、

「娘に会いたい……でも、こんな情けない姿を見せられない……」

(まさか、お父さん!?)

一瞬の油断が、ムーンライトの右足を打ち抜いた。

「キヤアアア！」

「ムーンライト!!」

吹き飛ばされたムーンライトの側に向かうコロンドだったが、デザートは不適な笑みを浮かべながら、照準をムーンライトに向けた。パンと放たれた攻撃を、間一髪コロンドが割って入り、バリアで攻撃を防ぎ続けた。

「ムーンライト、立つんだ！ムーンライト!!」

(私は……何の為に戦っているの？私は……)

デザートリアンに、自分の父の姿を重ねてしまったムーンライトは、戦意を喪失しそうになるも、

「ムーンライト!!!」

コロンドの声がはつきりと聞こえた時、我に返ったムーンライトは、自分を懸命に庇っ

てくれるコロロンに気付いた。

「コロロン！」

自分は何をしていたのか？

この星を砂漠に変えようとしている、砂漠の使徒と戦う事を選んだ筈なのに・・・  
キツと表情を引き締めたムーンライトは、右足の痛みを耐えて立ち上がると、

「ムーンライト、右足を怪我している君には、地上戦は不利だ！空中で戦うんだ!!」

そう言うと、コロロンはマンントの姿に変化し、ムーンライトの首に巻き付いた。ムーンライトはマンントを広げ宙に飛ぶと、ムーンタクトを取りだし、上空からフォルテウエーブでデザトリアンを浄化した。

「チツッ！ムーンライトおおお!!」

デザートも宙に飛び、ムーンライトに肉弾戦を挑んできた。パンチとパンチが、蹴りと蹴りが相殺する。デザートの右ストレートがムーンライトの顔面にヒットすると思われた時、ムーンライトはその場で宙返りし、ムーンサルトキックでデザートを吹き飛ばすと、

「集まれ！花のパワー!!プリキュア！フローラルパワー・フォルテッシモ!!」

瞬時の判断で、空中でフォルテッシモを繰り出すムーンライト、雄叫びを上げながら、フォルテッシモを耐え続けるデザートだったが、遂にフォルテッシモが貫き、地上に着

地したムーンライトが叫んだ。

「ハートキャッチ！ハアアアアアア!!」

「おのれ、おのれえええ!!」

爆発と共に地上に落下するデザートを、タクトをクルクル廻したムーンライトは、砂漠の使徒の大幹部デザート子爵を浄化する事に成功する。妖精姿に戻ったコロロンと微笑み合った時、目の前に四つの人影が現われた。

「貴様がキュアムーンライトか？我が名はサバーク！」

「俺はクモジャキーゼよ！」

「あたしはサソリーナよおん！」

「そして、僕が真打ちのコブラージャさ！」

デザート子爵を打ち破ったのも束の間、目の前にサバーク、クモジャキー、サソリーナ、コブラージャを名乗る人物が現われ、ムーンライトに緊張が走った……

「これは僕からの挨拶代わりさ！」

コブラージャは、自分のプロマイドカードをムーンライトに投げつけるも、ムーンライトは、興味が無さそうに片手で全て払い落とした。

「や、やるじゃないか？次は……」

「待て、コブラージャ！キュアムーンライトよ、今日は挨拶代わりだ……だが、我らを

デザートと同じように思って居たら、痛い目を見る事を忘れるな!!」

そう言い残し四人は姿を消した・・・

「サバーク・・・新たな敵!でも、何処か懐かしさを感じたような・・・」

呆然としながら、ムーンライトは四人が消え去った場所を見つめていた・・・

5、

「あの時は、サバークが私のお父さんだった何て・・・夢にも思わなかった!」

「私が、もつと早く気付いて上げられる事が出来たら・・・」

「薰子さんのせいじゃありません!!」

ゆりの心情を思うと、聞いていた一同は掛ける言葉が思い浮かばなかった。自分の父親が、敵として自分の目の前に現われるなど、想像出来なかった。

そしてキュアムーンライトと、新たに実権を握ったサバークとの戦いが始まった・・・

ムーンライトは強かった!

クモジャキー、サソリーナ、コブラージュ、次々と挑んでくる三幹部を、悉(ことごと)く圧倒した。だがサバークは、それすらも計算にしていたかのように、三幹部にある指令を出していた。



「クモジャキー、サソリーナ、コブラージャ、お前達、キュアムーンライトの細胞の一部を、手に入れてくるのだ。可能ならば、奴を連れ去ってくるのか一番だが、それはおそらく不可能！髪の一毛一本で良い・・・良いな？」

「お任せ下さい!!」

そう言つて自分達の部屋に戻つたものの、三幹部は不満だった・・・

「ムーンライトの髪の一毛ぐらいで、何もあたし達三人掛かりじゃなくても良いんじゃない?」

「そうぜよ!それぐらい、俺だけで十分じゃきい」

「おやあ!?!そういうながら、毎回のように逃げ帰ってくるのは、何処の誰だい?」

「それは、おまんとして同じじやろうがあ!」

仲が良いのか、悪いのか、特にクモジャキーとコブラージャは、よく意見が衝突していた。サソリーナは、呆れたように首をすくめると、真つ先にムーンライトの下へと向かった。

「アアア!?!ま、待つぜよ?」

「抜け駆けとは感心しないねええ?」

サソリーナを追うように、慌てて二人もその後を追つた・・・

(プリキュアの力に対抗できる者・・・それは、プリキュアだ!!)

サバークの仮面の中の瞳が怪しく輝いた!!

ムーンライトに向かって行ったサソリーナ、クモジャキー、コブラージャだったが、連携がなっていない三人の攻撃を利用し、ムーンライトが圧倒していた・・・

「ちよつとおお!このままじゃ、サバーク博士に会わせる顔が無いじゃないよおお!!」  
「クツ・・・こげん強かとは・・・」

「こうなれば・・・スナツキー!!」

コブラージャは、大量のスナツキーをムーンライトに向かわせるも、シルバーインパクトを受けて、一分持たず星になった・・・

「ゲエエ!?何、あの勝ち誇った顔・・・ムカツクウウ!ムカツクわああん!!」

「こうなれば仕方無い、サバーク博士の命令を最優先しよう!」

「仕方ないぜよ・・・サソリーナ!」

三幹部は領き合うと、まずコブラージャがブロマイドでムーンライトに攻撃し、時間差で、サソリーナが髪の毛で攻撃した。その攻撃すら見切ったムーンライトだったが、死角に隠れていたクモジャキーが、抜刀して斬りかかるも、ムーンライトはその攻撃すら躲した。だが、髪の毛を少し斬られ、ムーンライトの表情が険しくなり、クモジャキーをシルバーインパクトで吹き飛ばす。

「何か様子が変だ!? ムーンライト、気を付けて!!」

「大丈夫! 私は負けないわ!!」

タクトを取り出したムーンライトが、フォルテウェーブを放つも、三幹部は這々の体で何とか逃げ帰った……

「良くやった! キュアムーンライトの細胞と、こころの大樹を研究して作り上げたこれを使えば……」

「サバーク博士、それは何ですのおん?」

「これか!? 今はまだお前達が知らなくてもいい!」

サバークは、目の前の機械にムーンライトの髪の毛を、大事そうに入れた……

月日は流れた……

高校生になっていたゆりは、ももかを親友と呼びあう間柄になっていた。プリキュアとして、三幹部が繰り出すデザトリアンを浄化していったムーンライトは、ある日薫子に呼ばれ、植物園にやって来た。そこには、コロンに似た二人の妖精の姿があった。

「君達は!?!」

「シプレですう!」

「コフレですっ!」

コロンに聞かれた二人、シプレとコフレは、フワフワ浮かびながら、一同に挨拶すると、一同も挨拶を返した。

「僕の名はコロン! キュアムーンライトのパートナーさ!! そして、あそこに居られるのが……」

「知ってるですう! コツペ様ですう!!」

「コツペ様は、僕達の憧れですっ!」

コツペは、そんな言葉も耳に入らないかのように、ボーとしていた。

「二人も妖精が生まれたという事は……ゆりちゃん、あなたの活躍で、こころの大樹が元気を取り戻した証拠よ」

「いえ、私は……」

そう謙遜しながらも、ゆりは嬉しかった。自分とコロンが必死に戦ってきた事が報われた気がした。だが薫子は、表情を曇らせると、

「でも、シプレとコフレ……二人のプリキュアの妖精が誕生したという事は、こころの大樹は、危機を感じているのかも知れない」

「危機……ですか!?!」

「ええ、プリキュアの妖精が現われたという事は……ゆりちゃん、あなたと共に戦うプ

リキュアが、誕生しようとしている！」

「私と共に!？」

「それは心強い！ムーンライト、さつそく君の仲間になりそうなプリキュアを捜そうよ!!」

薫子の言葉を聞き、ゆりは複雑な胸中だった。共に戦ってくれる仲間が居るのなら心強い、だがそれは、自分と同じ道を歩むという事を意味していた。

「薫子さん、コロン、私は大丈夫！」

二人を心配させまいとするように、ゆりは笑みを浮かべると、心配そうなコロンは、  
「ムーンライト、君は仲間が居なくて大丈夫なの？」

「大丈夫！今までだって一人で戦って来たでしょう？薫子さんだって、一人で戦って来たんだもの!!」

「それはそうだけど・・・」

「あのサバークと言う男・・・油断はならない！ゆりちゃん、用心して？」

「はい！」

（ゆりちゃんは、自分と同じような境遇の子を作りたくないのね！一人で戦うなら、あの力は必ず必要になるわ!!ゆりちゃんの実力なら、試練を乗り越えられるかも知れない・・・そろそろ彼女を、プリキュアパレスに連れて行く時が来たのかも知れないわね）

薫子は、虚空を見つめながらそう考えた・・・

何時ものように、サソリーナが放ったデザトリアンを倒したムーンライト、毎回のように悔しがりながら撤退したサソリーナと入れ替わるように、黒い衣装を着た片翼でオカッパ頭の少女が姿を現わした。突然現われた少女に、ムーンライトは動揺し、

「あなたは・・・誰?！」

「私の名は・・・ダークプリキュア! キュアムーンライト、お前を倒す為に生まれたプリキュアだ!!」

「ダークプリキュア!? プリキュアが何故私を?」

「私は、サバーク博士によって生み出された存在! サバーク博士の邪魔をするキュアムーンライト・・・お前を倒す!!」

「クッ!」

突進してくるダークプリキュアを、真っ向から迎え撃ったムーンライト、パンチが、キックが相殺し、技と技がぶつかり合った。

「信じられない!?! ムーンライトと互角・・・いや、あの動きは、まるでムーンライトじゃないか? ダークプリキュア・・・恐るべき相手だ!!」

驚愕するコロンの前で、痺れを切らしたムーンライトは、

「生まれ、花のパワー！ムーンタクト!!」

ムーンライトが、ムーンタクトを取り出すのを見たダークプリキュアは、口元に笑みを浮かべるや、

「闇の力よ、集え！ダークタクト!!」

ダークプリキュアが、タクトを軽く振って身構えると、ムーンライトは思わず目を見張った。

「タクトまで!? だったら・・・花よ、輝け！プリキュア！シルバーフォルテウェイブ!!」  
「フツ！ダークフォルテウェイブ!!」

ムーンライトの放った銀色の花の形をした光弾を、ダークプリキュアが放った赤黒い花の光弾と激突し、相殺して爆発する。二人は爆風で飛ばされるも、直ぐに体勢を整え、「クツ！なら・・・生まれ！花のパワー!!プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

「無駄だ！闇の力よ、集え！プリキュア！ダークパワー・フォルテツシモ!!」  
「バカな!! フォルテツシモまで?」

激突し合うフォルテツシモ同士の戦いを見て、コロンは驚愕する。

「ハアアアア!!」

二人のフォルテツシモは互角のぶつかり合いをして、両者は弾き飛ばされ地面に激突

した。

「クツ・・・つ、強い!」

「おのれえ、キュアムーンライトめええ!」

ヨロヨロ立ち上がった二人、コロンは心配そうにムーンライトに駆け寄り、黒い稲妻と共に現われたサバークは、よろめくダークプリキュアを支えたと、

「良くやった!これでお前なら、ムーンライトを必ず倒せると確信した!!今日の所は引くぞ!!」

撤退した二人を見て、ムーンライトは唇を噛んだ・・・

「ムーンライト、痩せ我慢をしてる時じゃ無いよ!シプレとコフレのパートナーとなるプリキュアを、みんなで捜すべきだよ!!」

「コロン、前にも言ったでしょう?私一人で大丈夫!現にキュアフラワーだって、たった一人でデューンを追いつ返したそうじゃない?私は大丈夫!!」

困惑しているシプレとコフレの頭を、微笑みながら撫でるムーンライトを、コロンは心配そうに見つめていた。

今後の事を心配したコロンは、薫子に相談すると、薫子はゆりを呼び寄せ、

「ゆりちゃん、一人で戦うと言うのなら・・・あなたには試練を受けてもらうわ!」



「試練・・・ですか？」

「そう、私も嘗て体験した試練・・・それを乗り越えた時、プリキュアに新たな力が与えられるの！やってみる？」

「はい！よろしくお願いします!!」

薫子は頷くと、植物園の奥へと一同を案内した・・・

こうしてムーンライトは、プリキュアパレスの試練を受ける筈だった・・・

だが、ダークプリキュアは、その行動が分かっていたかのように、このタイピングで襲撃してきた。迎え撃ったムーンライトと、こころの大樹の側で激闘が開始された・・・

中々試練を受けに來ないムーンライトを訝しみ、薫子がコツペに様子を見に行かせた時、全ては最悪な結末を迎えていた・・・

悲しげな表情を浮かべたゆりは、その時を振り返り、

「私は慢心していた・・・一人で戦えると高を括つてた。その結果、私はコロンを失うという、取り返しのつかない事をしてしまった・・・」

そう言うのと、悲しさが甦ってきたのか沈黙するゆり、聞いていた一同の目にも涙が溜まった・・・

「ゆり・・・」

ゆりの気持ちを思うと、なぎさも掛ける言葉が無かった。

「ウウワアアアン! ゆりさんが、ゆりさんが可哀想だよおお」

「グスツ・・・うん」

号泣するラブ、手で溢れる涙を拭い続けるのぞみ、ゆりは顔を上げ、一同を見つめると、

「プリキュアの力を失い、こころの花を枯らしていた私を、つぼみ、えりか、いつきの思いが、私を再びプリキュアへと導いてくれた! そして、なぎさやほのか達みんなが、私にプリキュアとは何なのか、もう一度考えさせてくれる機会を与えてくれた・・・みんな、ありがとう!!」

そう言うのと、ゆりは一同に微笑んだ・・・

今の自分の姿を、魂となったコロンも必ず見守っていてくれると信じて・・・

第十二話：ムーンライト伝説!

完

## 第十三話：せつなの帰還

## 第十三話：せつなの帰還

この日は、ラブ達の街、クローバータウンストリートに一同がやって来る日だった。ラブ達は、自分達の街が最後になる事で、朝早くから一同に楽しんで貰おうと、ラブの家に集まり、色々計画を練るのだった。

シフォンとタルトは、スウィーツ王国に帰っていて、今回も当然来たがったのだが、頻繁に四つ葉町に行くタルトに疑念を持った、タルトの許嫁であるアズキーナに、四つ葉町に好きな人でも出来たのねと泣かれ、渋々断念したタルトだったが、今回参加出来ない事を残念がっていた・・・

「やつぱり、カオルちゃんのドーナツ屋さんには外せないよね？ミユキさんにもみんなを会わせたいけど・・・ミユキさん、今日は隣の県に仕事で出掛けちゃったしなあ」

「そうねえ・・・代りと言っては何だけど、あたし達のダンスを見て貰う何てどう？」  
「エエ!?最近私達、ダンスの練習してないし、大丈夫かなあ？」

ラブ、美希、祈里が相談している最中も、せつなはどうも何かを考えている様子に、三人は顔を見合わせて表情が曇った。

「せつな、どうしたの?」

「エッ!? ううん何でもないの・・・」

何かを思案しているせつなに気付いてはいたものの、せつななら、きっと自分から話してくれるだろうと信じて待つ三人だった。

「話は変わるけど、あたし、この日が来るのを待ち兼ねてたのよねえ! なぎささんに：あの時の仕打ちを返せるこの時を!!」

「み、美希たん・・・まだあの時の事、根に持ってたの?」

嘗てT A K O C A F Eで、なぎさにたこ焼きを無理矢理食べさせられた事がある美希は、なぎさへのリベンジに燃えて居た。気合いが入る美希の姿に、ラブも祈里も、歓迎会何だけどなああと苦笑を浮かべた。

「そこで・・・せつな、お願いがあるんだけど?」

「エッ!? 何、美希?」

突然名前を呼ばれて、驚いたせつなが美希に問うと、美希は少し口元に笑みを浮かべながら、

「悪いんだけど、ラビリンスに居るサウラーを呼んで貰えないかしら?」

「サウラーを? 別に良いけど・・・どうして!」

「それは・・・内緒! じゃあ、悪いけど頼むわね!!」

美希の口元がニヤけるのを見て、ラブ、祈里、せつなは、思わず顔を見合わせて、美希が燃えている姿に目が点になった……

「しかし、イースの奴は中々戻ってこんなあ？」

「まあ、息抜きは必要だ！ 幸いラビリンスの人々も、大分自由を取り戻したことで、笑顔が自然と溢れるようにはなっただからな」

「ああ、最初はメビウスに支配されていた人々が、突然自由を手に入れた事で戸惑っていたからな……我らも苦労したものだ」

ラビリンスに居るウエスター、サウラーが、およそ一年前の出来事を思い出し、当初の苦労を思い返していた。突然手に入れた自由に喜ぶ者、何をしたらよいか戸惑う者、そんな人々の先頭に立つて引つ張ってきたのが、せつな、ウエスター、サウラーだった。当初は、彼らの行いに耳を貸さなかつた人々も、次第に耳を傾け始め、ラビリンスも、ラブ達の街クローバータウンストリートのように、人々が自然と笑顔が出るまでになつてきていた。

そこに光を帯びて、せつなが、ラビリンスにある三人で打ち合わせに使っている部屋に帰って来た。

突然せつなが戻って来た事で、驚いたウエスターは思いつきり仰け反つた。

「イ、イース、ビツクリさせるなあ!!」

「フツ、帰ったのか・・・その割には表情が冴えないが?」

「エツ!? そ、そんな事無いわ! それより、サウラー! 私と一緒に、クローバータウンストリートに行つて貰えないかしら?」

せつなの言葉を、意外そうな表情でサウラーが見つめた。戻つて来て早々、せつなが意外な言葉を発した事に疑問を持った。

「僕に、君と一緒にクローバータウンに來いだって? 一体何の用だい!」

せつなは、美希に頼まれた事をサウラーに伝える。その間、ウエスターは、自分も当然呼ばれているだろうと考え、自分を指差しせつなにアピールしていたが、せつなは無視していた。

「フム、プリキユアには借りがあからな・・・分かった、行こう!!」

サウラーはゆっくり立ち上がり、スイッチオーバーと唱えると、四つ葉町での仮の姿である南隣の姿に変わる。

「イース、向こうの世界に行くなら、この姿の方が良いだろうか?」

「ええ」

サウラーがせつなの側に歩き出す。せつなは、サウラーが了承してくれた事にホッと安堵すると、

「ありがとう、サウラー！美希も喜ぶわ!!」

そんな二人とは対照的に、蚊帳の外にされたウエスターは、不服そうな表情でせつなを見ると、

「ちよ〜と待った！イース！俺は、俺は、誰に呼ばれて居るんだ？」

「誰も呼んでないわよ．．．じゃあウエスター、留守を頼むわね!!」

誰にも呼ばれていないとせつなに冷たく言われ、ショックを受けるウエスターに、せつなは留守番を頼むのだった。

ウエスターを残し、サウラーと共にクローバータウンに戻ろうとしたせつなが、アカルンと呼び出し、今戻ろうとしたその時、

「スイッチオーバー!!待てえ！俺も、俺も一緒に連れて行けえええ!!」

四つ葉町での姿、西隼人になったウエスターが、雄叫びを上げて猛ダツシュしてきた事に驚くせつなとサウラー、無理矢理せつなに抱きついたウエスターは、偶然せつなの胸を触ってしまい、

「キャッ！ちよ、ウエスター．．．何処触ってるのよおお!!」

顔を赤くしながら、ウエスターを引き離そうとするせつなだったが、ウエスターも加えた三人は、そのままクローバータウンストリートへと向かった．．．

カオルちゃんのドーナツ屋で、飲み物を飲みながらせつなの帰りを待つラブ達三人、そこに体勢を崩しながら、三人が現われる。ラブ、美希、祈里は、思わず飲んでいたジュースをそのままに、目を点にしながら呆気に取られていた。

「もう、ウエスター！何のまねよ？呼ばれたのはサウラーだけ何だから、留守番してればいいでしょう！」

「イース・・・冷たい事言うなよ！俺達三人は、一心同体見たいなもんじゃないか？」

ウエスターの言葉に、せつなも、サウラーも、冷めた目をしながら首を横に振り、シヨックを受けたウエスターは、義兄弟であるカオルに慰められ、久しぶりに食べるカオルのドーナツを味わうのだった。

「せ、せつな・・・あれ、いいの？」

カオルに慰められているウエスターを指差し、ラブは目を点にしながらせつなに言うものの、

「いいのよ！勝手に追いて来たんだし・・・美希、サウラーを連れて来たわよ！」

せつなは、少し言い過ぎたかなとチラリとウエスターを見るものの、直ぐに美希に向き直り、サウラーを連れて来た事を報告する。呆気に取られていた美希は我に返り、

「あ、ありがとう、せつな・・・」

「君かい、僕に用があるのは？」



「サウラーは、美希が座っている側に椅子を持ってきて腰を下ろす。美希は口元に少し笑みを浮かべながら、

「ええ、サウラー……あなたにお願いがあるの！あなた、相手の心理を利用して攻撃するの、得意だったじゃない？そこで、ちよつとあたしに力を貸して欲しいの」

美希はそんなつもりで言った訳では無かったが、何か嫌みを言われているように感じたサウラーは、微妙な表情を浮かべるも、

「ま、まあ、それは褒め言葉と受け取っておくよ……で、僕に力を借りたい事って何だい？」

美希はサウラーの耳元で、暖めてきた作戦をサウラーに伝える。サウラーは興味深げに美希の言葉を聞いていると、

「ほう……中々面白そうだが、詰めが甘いね！」

「エッ……そうかなあ!？」

「ああ、先ずはもつと相手の事を調べるべきだと思うが、君の標的の事を詳しく知っている子は居ないのかい!？」

サウラーの忠告に、美希は腕を組んで考え込むと、頭の中に浮かぶのは、ほのか、ひかり、メツプル、ミツプル、ポルン、ルルンだった。

(確かにこのメンバーなら、なぎささんの事を詳しく知ってると思うけど……)

美希が頭の中で整理を始めると、真つ先にポルンとルルンは頭から消え、ミツプルもほのかの事なら知ってそうだがと消し、ほのかとひかりは聞けば教えてくれるだろうが、この事がバレたら、ひかりは兎も角、ほのかに怒られそうだと思ひ悩み始める。

(なぎささんの話によると・・・ほのかさん、怒らせると凄いらしいからなあ・・・)

美希の脳裏に最後まで残ったのはメツプルだった。

「思い当たる人物が居たようだね」

「ええ、後はメツプルが来てからね・・・あたし、完璧!!」

自信満々で拳を握る美希、動じずコーヒを飲むサウラーの二人を見て、呆れながら惚けるラブ、祈里、せつなであった・・・

「うくん、前に来た時はシロツプに連れて来て貰ったし、砂漠化してたからあれだけど・・・この前来た時とは、まったくイメージ違うよね」

四つ葉町の駅でみんなと待ち合わせていたなぎさ、ほのか、ひかりは、咲達、のぞみ達、つぼみ達と合流し、改札を出た後、辺りをキョロキョロする。それもその筈で、前に来た時は、デザートデビルに苦戦するピーチ達を助けるのに必死で、辺りをゆつくり観察する余裕は彼女達には無かったのだから・・・

「えええと、ラブ達は何処かなあ!?!あつ、居た!」

咲が辺りをキョロキョロして探すと、手を振りながら駆け寄ってくるラブ達に気付く、ラブ達は一旦カオルちゃんのだーナツ屋にウエスターとサウラーを残し、一同を迎えに来たのだった。

「みんな、お待たせ！」

「ようこそ、四つ葉町クローバータウンストリートに！」

「楽しんでいってね！」

「精一杯持てなすわ！」

ラブ、美希、祈里、せつなが笑顔を浮かべながら一同を歓迎する。

「四人共、今日はよろしくね！．．．って、あれえ!? シフォンとタルトは？」

なぎさの問いかけに、顔を見合わせたラブ達四人は苦笑を浮かべながら、

「それが、タルトにはスウィーツ王国に許嫁が居るんだけど、最近みんなに会う為に、何度も四つ葉町にタルトが来るのを不審がって、四つ葉町に好きな人でも居るんじゃないかって疑われたらしくてえ．．．今回は誤解を解く為に、泣く泣く欠席するって．．．みんなと集合する時間は教えておいたから、もしかしたら．．．」

ラブが一同に、タルトとシフォンの報告をしていたその時、うらがが持っていたかばんの中に居たシロップとメルポの内、メルポが騒ぎ始める。慌てたうららを庇うように、のぞみ達が周りの通行人から、うららと、騒いでいるメルポを見えないようにカバ-

する。

メルポから一枚の手紙が飛び出し、ヒラヒラ舞い落ちてくるのをえりかがキャッチする。

興味深げに手紙を見つめるえりかが裏を見ると、

「エエと、差出人はタルトからだよ！宛先は・・・プリキユアはんへ・・・だつて！」

えりかが目で開きたいと訴えると、一同は苦笑を浮かべながら許可をし、えりかは嬉しそうに封を開けて手紙を読み始める。

「ブラックはん、ホワイトはん、ルミナスはん、以下省略：：つて、ちゃんと書けえええ!!」

髪を振り乱し、変顔になりながら手紙の内容に文句を言うえりかを、つぼみ、いつきが苦笑しながら、まあまあとえりかを宥め、咲達、のぞみ達は、私達省略されたんだと苦笑を浮かべる。これだけ人数居ればしようがないと感じていたのか、えりか以外は苦笑を浮かべるのみだった。

くるみの表情は引き攣っていたが・・・

えりかから手紙を受け取ったほのかが、後を引き継ぎ読み始める。

「みんな、今回はクローバータウンストリートで、わいにとつても第2の故郷を、みんなに案内出来へんですません！わいやシフォンの分まで、ピーチはん、ベリーはん、パ

インはん、パッションはんが案内すると思うわあ・・・次にみんなが集まる時は必ず行くよって、今回は堪忍やでえ!!タルト・・・ですって」

読み終わったほのかが、手紙を封に戻していると、なぎさが必死に笑いを堪えている顔を目に止め、ほのかは不思議そうに首を捻る。

「なぎさ、どうかした?」

「えっ!?!いやあ、ほのかの関西弁が可笑しくつてさ・・・こんな事二度とお目に掛かれないだろうし」

笑いだすなぎさを見て、ほのかは頬を膨らますのだった。それを見ていた美希の瞳が輝く、

(こ、これはチャンスかも・・・今ならメツプルに聞かなくても、さり気なくほのかさんに聞けば、なぎささんの弱みが分かるかも!?)

さり気なくほのかに接近したつもりの美希だったが、その不可思議な態度は、他のメンバーからは不審がられていた。猫なで声でほのかに話し掛けてくる美希に、思わずほのかも仰け反りながら、苦笑を浮かべるのだった。

美希の行動を不審に思ったなぎさは、ラブ、祈里、せつなの側に近寄ると、

「ねえ、美希・・・変じゃない?」

思いつきりなぎさに凶星を指摘され、戸惑ったラブは、祈里とせつなを見ると、

「アハハハ……ええと、美希たん、今日の事張りきつてたから、その所為かも……ね、ねえ、ブツキー！せつな！」

「エツ!? エエツと、そう……だっけ?」

「そうね、態々サウラーを呼ぶくらい……な、何ラブ?」

相槌をうつつてくれない祈里、美希の計画をばらしそうなせつなを呼び、今回は美希の手助けをしようよと小声で二人に言うラブ、そんな三人に、なぎさは疑惑の視線を向けるのだった……

ラブ、美希、祈里、せつなの四人がクロバータウンストリートを案内する。店の人達が、次々にラブ達に気さくに話し掛ける姿を見て、一同は驚くのだった。

「す、凄いわねえ……此処の人達とみんな顔見知りなの?」

「全員って訳じゃ無いけど、商店街の人とはみんな顔なじみだよ! ねえ、美希たん、ブツキー」

かれんの問いかけに、ラブは、美希、祈里と顔を見合わせて答えると、美希、祈里も笑顔で頷く、物心付いた時からこの街で過ごしてきた三人にとって、この街はとても大切な街だと一同は感じるのだった。

「私が暮らしたのは一年も満たないけど、この街の人達は私を暖かく迎えてくれたわ」

当時を思い出したのか、憂いの表情を浮かべながらせつなが答える。かれんは、せつ

なの表情が曇ったのを見て、悪い事を聞いたかしらと眉根を曇らせた。

公園に着いた一同を、ラブ達がダンスの練習に使っていた場所に案内する。

「此処が私達のダンスの練習場、此処でトリニティのミユキさんにダンスを教わったんだあ！」

ラブは当時を思い出すように、目を瞑って懐かしがる。トリニティという言葉がラブの口から飛び出し、

「トリニティって・・・あのダンスユニットの？」

「ラブさん達、知り合い何ですか？私も出てる情報番組に、トリニティはゲストで出た事ありますよ！」

咲、うららが、トリニティという言葉を聞き、思わず声に出すと、りんも頷き、

「ミユキさんって言ったら、トリニティのリーダーじゃない！そんな人にあんた達教わってたんだ？」

「ねえねえ、折角だからみんながダンスしているところ見て見たい!!」

ミユキにラブ達四人がダンスを教わっていた事を知り、りんは驚愕し、えりかは、折角だからダンスを見せてとラブ達にリクエストすると、他の一同からも見たいと声がかかる。

顔を見合わせたラブ達四人は、苦笑しながらもステージに上がった。簡単な段取りを

決めると、ラブ、美希、祈里、せつなが、一同の前でダンスを披露する。

音楽が無いのは寂しいものの、ラブ達は、優勝した時の切れは無くなっていたが、一同を感心させる程のダンスを披露すると、一同から拍手が鳴り響いた。一同は、笑顔を浮かべながら次々と四人を褒め称えていった。

「上手いわね・・・流石はダンス大会優勝経験者ね」

「本当、素晴らしかったわ!」

ゆり、ほのかも笑顔で四人のダンスを褒めていた。

「久しぶりだったんで、あたし達、完璧!!って訳にはいきませんでしたけどね」

「でも、思っていたよりは身体が付いて行けたよね」

「うん、ビックリしちゃった」

「そうね・・・」

一同に褒められた事で美希、ラブ、祈里は照れながらも喜んでいたが、せつなは何処か寂しげに見えた・・・

ラブ達は、ワゴン車の側に一同を案内すると、

「みんな、此処が私達のよく来る、美味しい、美味しい、カオルちゃんのドーナツ屋さんで〜す!!」

「いやあ、こんなに可愛い娘達が食べに来てくれちゃうなんて、おじさん、張り切っちゃ



おうかな!!」

ラブが、カオルを紹介するも、とても美味しいドーナツを作りそうに見えない風貌に、一回は苦笑を浮かべる。

「へえ、薫と同じ名前じゃない!」

「そ、そうね……」

満に指摘された薫は、微妙な表情でカオルちゃんを見つめていると、ラブも気付いたように、

「そういえば、同じ名前だったよね……カオルちゃん、この娘も薫って言うんだよ!」

「こんな可愛い子と同じ名前何て……おじさん、照れちゃうなあ……グハツ!」

「……」

何とコメントしていいか解らず、薫は無言で呆然としていた……

テーブルに座り、コーヒーを飲んでいるサウラーの側に美希が来ると、サウラーを紹介し始める。

「そして、こちらが南瞬さん……別名サウラー!!」

サウラーは軽く一同に会釈すると、つぼみの目がサウラーを見てハートマークになり、ゆりは少し呆れたように、えりかといつきは顔を見合わせて苦笑を浮かべた。

「それで、あそこでドーナツを食べてるのが……食べてるのが……」

ウエスターは店の前に居ると思っていたラブだったが、ウエスターは、少し離れたベンチに座り、仲間になりたそうにこちらをチラチラ見ていた。思わず目を点にしたラブは、小声でせつなにこつちに呼びなよと言うと、溜息を付いたせつなが、渋々ウエスターを見ると、右手を上げて手招きしながら、

「もう、ウエスター！みんなに紹介するから、こつちに来なさいよ!!」

「本当かああ!!」

ようやく仲間に入れて貰えると、大喜びのウエスターが猛ダツシユで一同に駆け寄つて来た。そんなウエスターを見て、せつなは再び溜息を付くのだった。

「ひよつとして・・・あの人、せつなの彼氏？ちよつと変わつてそうだけど、中々良い人そうじゃない?」

「ち、違うわよ・・・仲間ってだけよ」

りにウエスターを彼氏と間違えられ、激しく動揺するせつなだった。そんな事に気付く事もなく、ウエスターは満面の笑みを浮かべながら自己紹介を始めた。

「俺はウエスター!あつ、こつちの世界じゃ西隼人だ・・・よろしく!!で、イース、この娘達は?」

ウエスターは、ニコニコしながら一同を見つめた。健康そうな笑顔を見たつぼみは、  
「こちらの方もイケメンさんですう・・・」

ウエスターを見たつぼみは、これまたときめいて、えりかはダメだコリヤといったジェスチャーをして呆れていた。

ラブ、美希、祈里、せつなが、一同を一人一人ウエスターとサウラーに紹介していった。最後にせつなが言葉を引き取り、

「みんな、プリキュアの仲間達よ！ 私達の掛け替えのない大切な仲間達!!」

せつなは、一人一人笑顔を浮かべながら見つめていくと、一同もせつなに微笑み返した。ウエスターも何度も頷きながら、

「何だそうか、みんなプリキュアの仲間かぁ・・・エッ!? この娘達みんな・・・プリキュアだとおおお!!?」

大声で驚くウエスターと、これまた動揺を隠せないサウラーが、驚愕した表情を浮かべる。大声でプリキュアだとバラされ、大慌てでパニックるなぎさ達だったが、ラブ達は落ち着きながら、

「あつ、大丈夫だよ！カオルちゃんは、私達がプリキュアだって知ってるし・・・さつき通ってきた商店街の人達も知ってるから」

平然と言うラブに、なぎさ達、咲達、のぞみ達、つぼみ達一同は、口をポカンと開けて驚いていた。我に返った一同、なぎさは慌てながら、

「ちよ、ちよつと待って！この街の人達って、ラブ達がプリキュアだって知ってるの？

ど、どうして!？」

驚いたなぎさがラブ達四人に聞くと、ラブ達四人は顔を見合わせながら苦笑を浮かべると、

「うん、ラビリンスとの決戦の前に、どうしてもお父さんやお母さん達家族には、私達がプリキュアだつて言つときたくて：：本当はこんな事するのはいけない事だとは分かつて居ただけけど、タルトも私達の意思を尊重してくれてOKしてくれたの」

一同の家族や、大事な人達に正体を明かした時、誰しもが驚きの声を上げた。特にラブ、美希、祈里の家族は、家族会議を開いて娘達の今後を語り合っていた。刻一刻と迫るラビリンスの脅威に、ラブ達は家族に内緒で、さつきなぎさ達に説明していた、ダンスの練習場所から、ラビリンスに乗り込もうとしていたが、家族達、そして、商店街の人達が、ラブ達四人を気持ち良く送り出してくれたのだった。

「そんな事があったんだ．．．だからラブ達は、あの時家族に相談しに行つてたんだね」  
なぎさはほのかの顔を見ると、ひかりが現われる前の最初の決戦に向かう時を思い浮かべるのだった。

まるで、仲間との思い出を胸に焼き付けるように過ぎ、夕暮れの中で、強大なドツクゾーンとの最終決戦に向かう決意を、二人で誓いあったあの日を．．．

誰からも見送られず、ほのかと二人で乗り込んだあの時を．．．

「羨ましいなあ……」

「なぎさ……」

愁いを帯びた表情になったなぎさに気付き、ほのかも心配そうに見つめると、

「私も家族には言いたかったなあ……それなのにメップルときたら……駄目メポとか五月蠅くてさ……部屋でメップルと言いかいになる度に、独り言を言ってるって家族からも変人扱い……お陰でこの間何て、危うく精神科に連れて行かれそうになったわよ！」

「しようがないメポ！決まり事何だメポ!!」

「あんたが部屋で大人しくしてくれてたら、こんな事になりませんよくだ」

変顔になりながらメップルと言いかいになる何時ものなぎさに、ほのかは目が点になっっていた。

メップルと言いかいを始めたなぎさを見て、美希の瞳が輝いた。

(キタ〜!!)

口元に笑みを浮かべた美希は、メップルに近付くと、ヒョイツとメップルを抱き上げ、猫なで声でメップルに媚びを売り、少し離れたテーブルで、メップルにドーナツで接待を始めた。当初は不審がっていたメップルも、美希の媚びを受けて上機嫌になった。

「美希・・・何か悪いものでも食べたの？」

「エッ?! いやあ、どうかなあ・・・アハハハ」

美希の不自然な様子に、呆気にとられたなぎさがラブに聞くも、ラブは唯々笑って誤魔化すのだった。

一方、此処に居る全員の少女達がプリキュアだと知って、パニくり続けるウエスターは、

「いやいや、待て、待て! プリキュアってこんなに居るのか? 聞いてないぞおお!!」

ウエスターが頭を抱えながら苦悶するも、せつなは溜息を付くと、

「別に今は敵対してる訳じゃないんだから、それほど驚く事でもないでしょう?」

冷めた目をしながらウエスターに言うせつなに、サウラーもウエスターに加勢し、

「いや、ウエスターが驚くのも無理はない・・・僕だって、まさかプリキュアがこれ程居るとは思わなかった!」

サウラーも驚愕の表情を浮かべ、ウエスターをフォローする。ウエスターは嬉しそうに、

「だよなあ、ほくら見ろ、イース!」

(何かムカツクわねえ・・・)

自慢気にするウエスターを見て、少しイライラするせつなであった・・・

「へえ、そう何だ・・・ありがとう、メップル」

(フッフ、遂に突き止めたわよ、なぎささんの弱点!!)

メップルから仕入れたなぎさの四大弱点、勉強、母理恵、藤P先輩、だがこの三つは今どうにか出来る事では無かったが、残る一つの弱点狙いで美希が動き始める。

「ラブ、ブッキー、せつな」

美希が不気味な笑みを浮かべながら、三人を手招きすると、思わず怯んだ三人は、小聲で止めた方がいいか相談しあうも、もう少し様子を見ようと決め、美希の下に移動する。

「あたし、ちよつと用事が出来たから・・・待っててねえ!」

美希はカオルに何か耳打ちをした後、猛ダツシユで公園から出て行った。

「美希さん、どうかしたんですか?」

心配したひかりが声を掛けるも、ラブ達三人は苦笑を浮かべながら、気にしないでとひかりに答えた。

カオルが一同の前にやって来ると、今日は特別にみんなの好きな物ドーナツにしちゃうとトリクエストを聞き始める。

「本当！私はチョコで!!」

「私も!!」

大喜びでチョコをリクエストするなぎさと、ハモリながらリクエストするのぞみとくるみに、りんは少し呆れながら、

「それは何処でも販売してるでしょう！ほら此処のお店でも売ってるでしょうが」

りんがワゴン車を指さすと、確かにカオルの店でもチョコドーナツは販売していた。くるみは恥ずかしげに頬を染めると、のぞみのせいにしてその場を誤魔化そうとし、のぞみに抗議されるのだった。

うららもニコニコ顔で何かをリクエストしようとし、こまちはポシエツトの中をゴソゴソ漁ると、

「私はカレーが良いですー!」

「じゃあ、私は羊羹を」

うららはカレー味を、こまちは取り出した羊羹をリクエストすると、再びりんが突っ込みを入れ、カレーもあるし、羊羹はアンドーナツ見たいなものでしょうかと突っ込みを入れる。

チラリとかれんの顔を見たりんは、かれんが何か言おうとする前に、

「かれんさん、前もって言っておきますけど、伊勢エビのドーナツ何て言わないでくださ



「いよっ。」

「エツ?! い、嫌あねえ・・・そんなのリクエストする筈ないじゃない・・・オホホホ」  
引き攣った笑みで否定するかれんを見て、咲は、舞と小声で、

「かれんさん、明らかにリクエストしようと思つてたよね?」

「そうね・・・ウッフ」

満と薫は、同じ名前の好（よしみ）でカオルがサービスしてくれたドーナツを食べながら、

「人は見掛けによらないものね」

「そうね・・・こんなに美味しいドーナツを作れる何てね」

二人は穏やかな表情でカオルの作ったドーナツを味わっていた。

りんが妖精達を見ると、思わずココ達はドキッとした表情を浮かべる。

「ココ、ナッツ、シロップ、まさかとは思うけど・・・あんた達も、シユークリームや大福、ホットケーキ何て言わないでよね・・・恥ずかしいから」

りに、先に釘を刺された三人の妖精は、否定していたもののその表情は残念そうだった。

ウエスターはカオルを呼ぶと、

「兄弟、俺のリクエストも聞いてくれるか?」

カオルがOKしてくれた事で、ウエスターは大喜びで何かを買いに出掛けるのだった。

それから暫くして、美希が鼻歌交じりに戻って来ると、カオルに何かの材料を渡し、サウラーの側の席に着く。サウラーはコーヒートを啜りながら美希を見ると

「どうやら、上手くいっているようだね」

「もちろん！あたし、完璧!!」

嬉しそうにする美希に、ラブ、祈里、せつなは、目を点にしながら苦笑するしかなかった。

ウエスターもビニール袋を持って帰って来ると、それを袋のままカオルに渡し、鼻歌交じりにつぼみ達の側の席に座り、嬉しそうに談笑する。

美希達のテーブルに、カオルがドーナツを持ってやって来ると、サウラー、祈里には普通のドーナツを、ラブには赤い粒が入ったドーナツを、せつなには緑の粒が入ったドーナツを置いた。ラブとせつなは、顔を見合わせ首を捻ると、

「あれえ!?カオルちゃん!私とせつなのドーナツだけ違うけど?」

不思議そうにラブがカオルに問いかけると、

「ああ、それは美希ちゃんから二人にだって」

美希からと聞き、首を傾げたラブとせつなだったが、一口ドーナツを食べて顔が青く

なっていく、

「ど、どうしたの!? ラブちゃん、せつなちゃん?」

慌てた祈里が二人に聞くと、渋い表情を浮かべたラブとせつなは、

「み、美希さんに計られた・・・私のは・・・にんじんだよお」

「わ、私のは、ピーマンが入っているわ」

美希は舌をペロつと出すと、

「だってえ、ラブとせつなには、あの時押さえつけられた借りがあるんですものお」

(美希ちゃん・・・結構根に持つタイプなのね?)

祈里は苦笑を浮かべながらも、ラブとせつなを介抱するのだった。

一方、ドーナツをガブツと食べたなぎさの表情が、見る見る変顔になっていくと、

「な、何これええ!? タマネギが入ってるうう! こんな、ぶっちゃけえ・・・ありえなく

しい!!!」

美希になぎさの苦手なものを暴露していたメツプルは、恐る恐る逃げようとしていたが、なぎさに見つかり頭を抑えられ捕まえられる。

「メツプルウウ・・・あんたの仕業かああ!!」

今にもメツプルに被害が及びそうなのを見て、慌てて美希が立ち上がると、

「それはあたしからでくす! なぎささんに、この前のほんのお礼でくす!!」

ペロっと舌を出す美希を見て、なぎさは目に炎を灯し、なぎさから解放されたメツプルはホッと安堵するのだった。ほのかとひかりは、苦笑を浮かべながらなぎさを宥めると、この間のお返しじや仕方ないねとほのかに諭され、渋々ななぎさは席に座り直し、チョコドーナツを食べて口直しをする。

(やった、胸のつかえがスツとしたわ・・・あたし、完璧!!)

美希は嬉しそうに、目の前のドーナツを手に取り食べ始めていると、ウエスターがカオルを呼び、

「兄弟、これは俺がリクエストした、たこ焼きドーナツじゃないぞ?」

「あれえ!?おじさん、誰かに間違えて出しちゃったかな?グハッ!」

ウエスターとカオルの会話が耳に入り、思わず美希の動きが止まる。

(今、たこつて・・・このドーナツ、何時もと食感が違うけど・・・まさか!?)

その直後、美希の悲鳴が辺り一帯に響き渡った・・・

「やれやれ、これじゃ痛み分けだね?」

サウラーは、コーヒーを飲みながら、ピクピク痙攣する美希を見て呟いた・・・

「さて、僕達はこれで帰らせて貰うとするか」

「そうだな、兄弟のドーナツも一杯買ったからな」

サウラーとウエスターはそう言うのと、せつなにラビリンズに送るように頼む。せつなは慌てたように、

「待って、ウエスター、サウラー……みんなに話があるから！」

せつなはそう言つてみんなに声を掛けると、ウエスターとサウラーは顔を見合わせキョトンとするも、直ぐに頷き再び椅子に座つた。

「ラブ、美希、ブッキー、短い間だったけど、またクロバータウンストリートで、ラブの家で過ごさせて、とても楽しかった……みんなの街にも行けたし、今回此処が最後だつて事で、前から決めていたの！ラビリンズに戻るいい機会だつて」

せつなの告白に、ラブ達三人は、せつなが最近、何かを考えている理由がようやく理解出来るのだった。

せつなは前日の夜、ラブが寝た後、前もつて桃園夫妻には話して居て、二人は、せつな の意思を尊重しながらも、また何時でも来るように笑顔を浮かべ、せつなは嬉し涙を浮かべていた。

「そつかあ……せつなが決めた事だもん、尊重しなきゃね」

「せつな……さつきはゴメン！こんな事ならあたし……」

「せつなちゃん……また、何時でも遊びに来てね！私、せつなちゃんがまた来るって、信じてる!!」

「ありがとう、ラブ！ありがとう、ブッキー！美希、気にしないで！あれはあれで良い思い出だから」

四人の目に涙が溜まる・・・

それを見ていたなぎさ達一同の目にも涙が零れた。

なぎさが、ほのかが、ひかりが、咲が、舞が、満が、薫が、のぞみが、うらがが、こまちが、かれんが、くるみが、えりかが、いつきが、ゆりが、そして、妖精達が皆せつなに声を掛ける。

「つぼみ、こつちに来て！」

りんはつぼみを呼ぶと、せつなの前に歩いて行き、

「せつな、前に言ったよね・・・私とつぼみで、ラビリンズで育てる花を選んであげるって・・・これは、私から」

「せつなさん、これは私からです！前に、皆さんが家のお店を手伝ってくれたのを見て選びました・・・受け取って下さい!!」

りん、つぼみから、数十種類の花の種を受け取り、せつなは、涙混じりな笑顔を見せ、

二人に感謝の言葉を述べた。

せつなは心の底から嬉しそうだった・・・

「みんな、見送りまでしてくれてありがとう・・・何時かみんなを、ラビリンズに招待し

たいなあ」

「うん、必ず招待してよ、せつな！それと……たまには会いに来てよね？」

ラブの言葉に、満面の笑みを見せてせつなが頷く、

「みんな、元気でね！さよならは言わないわ……また、会いましょう!!」

せつな、ウエスター、サウラーは、せつなの呼び出したアカルの力で、ラビリンスに帰って行った。

ラブ達一同は、せつな達が消えていった場所を、今日の出来事を振り返るように眺めるのだった……

時は過ぎる……

少女達は知らなかった、闇が再び目覚めた事を……

少女達は気付かなかった、闇が再び動き出した事を……

「我、目覚めたり、全ての光は闇に帰るべし……カオス様の目覚めは近い！我が名はバロム！闇の救世主なり!!」

目覚めた新たな闇が、暗躍しようとしていた……

第二章：深まる絆

完結

### 第三章：闇の救世主！

### 第十四話：ひかりの不安

#### 第十四話：ひかりの不安

地球砂漠化の現況である、デューンとの決戦から四ヶ月が過ぎた・・・

19人のプリキュア達もそれぞれ進級し、新学年での生活を満喫していた。

高校3年生になったのは、美墨なぎさ、雪城ほのか、月影ゆりの三名

高校2年生になったのは、水無月かれんと秋元こまちの二名

高校1年生になったのは、九条ひかり、日向咲、美翔舞、霧生満、霧生薫、夢原のぞみ、夏木りん、桃園ラブ、蒼乃美希、山吹祈里の十名で、この年はプリキュアの当たり年と言えた。

中学3年生になったのは、春日野うらら、花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつきの四名であった。

尚、美々野くるみは、時折顔を出すも、パルミエ王国在住、東せつなも、ラビリンスに居る為、学校に通っては居なかった。

彼女達プリキュアが、世界を救った事も、最早都市伝説と化そうとしていた・・・



そして、彼女達の後輩になる新たなプリキュアが、音楽の街に誕生していた事を、まだ彼女達は知らなかった・・・

ゴールデンウィークを明日からに控えた4月28日、この日TAKO CAFEでは、女子ラクロス日本代表メンバー候補に選ばれた、ペローネ学園女子高等部ラクロス部キャプテン、美墨なぎさの壮行会が開かれていた。学校上げての激励会は既に開かれていたのだが、なぎさ達の学校、並びラクロス部の大先輩になる藤田アカネが、可愛い後輩のなぎさの為にTAKO CAFEで祝ってくれていた。

「いやあ、私も鼻が高いよ！まさか、なぎさが全日本メンバーに選ばれるなんてさあー！」  
アカネが嬉しそうに、なぎさの肩を何度も叩き可愛がる。なぎさは苦笑しながらも嬉しそだった。

「あつ、まだ決定じゃなくて候補ですよ、候補！明日からの九州の熊本合宿での結果見て、更に絞り込むらしいし・・・それに、今回は海外遠征の代表で、世界大会でも無いですからね・・・でも、折角のチャンスだもん・・・頑張る!!」

アカネはうんうん頷きながら、可愛い後輩のなぎさのリックエストに応える為に、車の中に移動した。なぎさの目が輝くのを見て、雪城ほのかも、九条ひかりも、自分の事のように嬉しそうにニコニコしていた。

「なぎさなら、絶対大丈夫だよ！何時もの調子を合宿でも出せれば、絶対に選ばれると思うなあ！」

「ありがとう・・・ほのか！」

なぎさが嬉しそうにほのかにお礼を言う、その目からは、このチャンスを確実に物にしたいという、内なる闘志がほのかにも伝わった。

「本当は、私もなぎさの見送りに行きたかったんだけど・・・」

「ううん、ほのかも出発前日の忙しい中、今日来てくれただけでも、ホントありがたいよ！」

なぎさは心底嬉しそうに、ほのかに微笑を浮かべて感謝する。

ほのかは、この間の誕生日に帰って来た両親からの誘いを受けて、ほのかあこがれである、ブレキストン博士の母校の大学を見学しに、明日から海外に出掛ける事になっていた。

「ゆりもお祝いの電話を掛けて来てくれたんだけどさ、ゆりも明日からフランスに行くんだって・・・前に、つぼみ達とフランス行った時に知り合った人から、相談があるからパリに来てくれて頼まれたとか言ってたよ！」

ジュースを飲みながら、なぎさがほのかとひかりに話すと、ひかりの心に不安が宿る。

ひかりは近頃同じ夢を見て、夜中に何度も目が覚めた・・・

世界が闇に飲み込まれる悪夢を・・・

(なぎささん、ほのかさん、それにゆりさんまで!? 単なる偶然なら良いんだけど・・・)  
プリキュア達のリーダー格である、なぎさ、ほのか、ゆりが、同時に不在になる事に、  
ひかりは一抹の不安を感じるのだった。

ひかりの表情が急に冴えなくなったのを見て、なぎさとほのかは顔を見合わせて首を捻ると、

「ひかりさん、どうかした?」

ほのかの問いかけに、ひかりは我に返ると慌てて首を振り、

「い、いえ、お二人が居ないと、寂しいなあと思ひまして・・・」

慌てて誤魔化すひかりの言葉を二人は信じ、ホッと安堵すると、

「なあんだ! そうだね・・・ゴールデンウィークに、本当はまたあの娘達の街にでも遊びに行きたかったんだけどね・・・ひかり、ちゃんとお土産買って来るからさ! 折角熊本行くんだし、熊の木彫り何かどうかな?」

「なぎさ・・・北海道じゃないんだし、熊の木彫りはちよつと・・・」

「エツ!? そうだっけ? 熊本って言うから、熊の元締めみたいなもんかと・・・」

「・・・」

なぎさの言葉に、思わず目が点になり無言になるほのかとひかり、メツプルは溜息を

付くと、

「なぎさは、合宿より勉強した方が良さそうメポ」

「何ですつてええ!!」

呆れるメツプルに、頬を膨らませ言い返すなぎさだった。

そんな中、シロツプがなぎさ達の前に降りてくる。三人は驚きながらも、久しぶりの再会を果したシロツプに笑顔を向けた。

「シロツプじゃない!久しぶり!!どうしたの?」

突然やって来たシロツプに、驚くなぎさ達三人だったが、シロツプは構わず、相棒メルポから出てきた手紙の山をなぎさに渡す。渡されたなぎさは多いに驚き、

「のぞみ達や、他のプリキユア達から、なぎさに手紙ロプー!」

シロツプから渡され、小首を傾げながら手紙を読み始めるなぎさの目が、見る見るウルウルしてくる。

「な、なぎさ、どうしたの?」

「なぎささん!」

心配そうに脇から手紙を覗き見るのかとひかり、そこには咲達、のぞみ達、ラブ達、つぼみ達から、お祝いと激励の言葉が書いてあった。感動で涙を流すなぎさを、微笑ま

しく見守るのかとひかり、

「ウウウ・・・あの娘達ったら・・・よっしやく、頑張るぞおお!!シロップ、届けてくれてありがとう!良かったら、一緒に食べて行ってよ!!」

なぎさにたこ焼きを勧められ、シロップは大喜びで美味しそうにたこ焼きを頬張るのだった・・・

4月29日・・・

この日、美墨なぎさは九州熊本に、雪城ほのか、月影ゆりは、海外へと出掛けて行った・・・

三人の不在を知ってか知らずか、闇が動き始めようとしていた・・・

プリキュア達にとって、悪夢のような試練が始まろうとしている事を、まだ誰も知らなかった・・・

第十四話：ひかりの不安

完

## 第十五話：闇・・・蠢く

## 第十五話：闇・・・蠢く

## 1、闇の囁き

4月29日、九条ひかりは、午前中に美墨なぎさを見送り、午後には雪城ほのかの出発を見送っていた。その日の夜、ひかりはぼんやり窓から夜空を見ていた。ひかりの様子を心配したポルンとルルンが、妖精姿に変化し、ひかりの側にチョコチョコ寄ってくる。

「ひかり・・・元気ないポポ？」

「なぎさ達が居ないからルル？」

ひかりの事を心配しているポルンとルルンの頭を撫でながら、ひかりは何でもないと微笑み返す。だが、ポルンの表情も何かを感じているように不安気であった。

「ひかり・・・闇が迫ってるポポ・・・怖いポポ」

耳で目を塞ぎ、怖がるポルンを見て、ルルンも何かに怯えたように泣き出す。ひかりは、二人を抱きしめ、大丈夫よとあやし、二人が眠りに付くまで見守った。  
(なぎささんや、ほのかさんが居ない今・・・何事ありませんように!!)

夜空の星に、月に、ひかりは願いを込めると、電気を消し寝床に付いた。

だが、ひかりのこの不安は的中してしまふ・・・

4月29日、霧生満と霧生薫は、日向咲、美翔舞と一緒にシヨツピングを楽しみ、5月1日には、のぞみ達に内緒で、彼女達の街に遊びに行く計画を立てたりしていた。自分達の家に戻った満と薫は、この日の出来事を二人で振り返る。側では疲れたのか、ムーブとフープが気持ち良さそうに寝ていて、満と薫はその寝顔を見て微笑む、

「咲や舞、そして、ムーブやフープと一緒に居ると、心が安らぐわ」

「ええ、そして、あの日以来、私達には沢山の仲間が出来た。プリキュアの絆で結ばれた、大切な仲間達に！彼女達にまた会えるのね!!」

満、薫にとって、プリキュアの仲間達は、学校のクラスメイトや咲と舞の身内以外で出来た、初めての友とも呼べる大切な存在になっていた。出会った期間は短いものの、彼女達と過ごしていると、心に安らぎを覚える二人だった。

夜になり満と薫は、フープ、ムーブと共に、満は薄い黄色のパジャマ、薫は薄い青のパジャマ姿で就寝していた。どれくらい経ったのだろうか、二人は妙な息苦しさに目が覚めた。側でフープとムーブが、何かを見て怯えているのが分った。

「ムーブ、フープ、どうかしたの?」

「何か見えるの?」

満と薫が妖精達に訪ねるが、異変を直ぐに理解した。黒い霧が部屋中を多い、中は一切の光のない暗闇と化していた。直感的にムーブとフープを逃がそうとした満と薫だったが、闇は妖精達をもしっかり捕らえていた。満と薫は、ムーブとフープに声を掛け、怯える二人を励まし続けるも、闇の中に身体を引き込まれていった・・・

闇に飲み込まれた満と薫の耳元に、聞き慣れた声が聞こえてくる。

「満殿！薫殿！闇に生まれし者は、闇に帰りなさい！さあ、闇の世界に帰るのです!!」

「お、お前は・・・」

「そんなバカな!？」

闇は徐々に満、薫、ムーブとフープを完全に取り込み、そして、消滅した・・・

残された満と薫の部屋は、時が止まったように静寂する。

この日から、満、薫、ムーブ、フープは消息不明となった・・・

ラビリンズでは東せつなが、夏木りん、花咲つぼみからプレゼントされた花の種を一杯捲き、その花が今では綺麗に成長して、せつなの心を和ませていた。そんな幸せそうなせつなを見て、ウエスターも嬉しそうにその様子を見守っていた。

「戻って来てからのイースは、大分生き生きしているな?」

「そうだな、プリキュア達に再会して、リフレッシュしたのだろう」



サウラーも同意するが、

「しかし、プリキュアがあんなに沢山居たとは……僕達と戦って居た頃には、想像だに  
しなかったな……」

「確かになあ……」

自分達がラブ達と敵対していた時に、彼女達に出会っていたらどうなっただろうと思  
うと、二人は互いを見てフツと笑むのだった。

その時、せつなが悲鳴を上げる……

咄嗟に表情を変え、せつなの方を振り向いたウエスターとサウラーは、花畑を一面の  
闇が覆おうとしている事に気付き驚愕した。

「な、何だ、これは？」

「イース、大丈夫か!？」

せつなを心配し側に行こうとした二人だったが、闇はウエスターとサウラーの足下に  
まで絡みついてくる。闇に引きずられ、せつなの側にまで二人は連れて来られた。

「ウエスター、サウラー、あれを見て!」

闇に絡まれたせつなの表情は険しかった。ある一点を見つめながら、何とか右手で正  
面の闇を指さすと、闇の中には、三人の見知った顔が浮かんでいた。思わずウエスター  
とサウラーは驚愕する。

「お、お前達は・・・ノーザ！そして、クライン！何故お前達が此処に居る!？」

かつて、ピーチ、ベリー、パイン、パッションに倒された筈の、ノーザとクラインが目の前に現われた事に驚くサウラー、ウエスター信じられないといった表情を浮かべていた。せつなは、ノーザをキツと睨み付けると、

「ノーザ、何の真似？私達を離しなさい!!」

そんなせつなの言葉を、ノーザが低い声で嘲る。

「フッフ、離す？何故!？あなた達も・・・闇に帰るのよ！嘗ては私達と同じ、闇の虜になつたあなた達もね!!」

ノーザの言葉通り、闇が三人を飲み込もうとするが、せつなは渾身の力で、ウエスターとサウラーを捕らえていた闇に蹴りを放ち、二人は闇から解放される。二人はせつなを助けようとするが、闇は、せつなの顔近くまで飲み込もうとしていた。

「ふ、二人共、この事をラブ達に知らせて・・・おね・・・が・・・」

せつなの言葉が終わる前に、闇はせつなを完全に飲み込んだ!

ノーザ達と戦おうとするウエスターを制止し、今はプリキア達に知らせる方が先だと告げるサウラー、ノーザは、闇の意志に反するなら、容赦しないと二人に攻撃を始め。ノーザとクライン、二人からの攻撃を受けたウエスターとサウラーは、深手を負いつつも、辛くもノーザ達の手から逃れ、二人はラブ達の居る世界へと向かった・・・

## 2、月光、パリの闇に冴える

月影ゆりは、現地時間16時過ぎにパリに到着した。日本との時差は8時間、飛行機の中で睡眠を取っていたゆりは、現地に到着後、来海えりかの母、来海さくらが出店したフェアリードロップ2号店の関係者が迎えに来てくれて居た。

ゆりは、パリに所用があつて行くと、えりかの姉、来海ももかに話していたが、ももかはゆりを心配し、母さくらに頼み、ゆりのパリ滞在中のお世話を、店の関係者に頼んでいてくれた。前に皆と来た時に顔なじみであった為、ゆりは少し気が楽になっていた。

ホテルに着いたゆりは荷物を置くと、行きたい所があると言い、関係者と別れ、一人パリ市内を散策する。

(この地で、お父さんは研究に行き詰まり・・・)

一人彷徨いながらも、ゆりの心の中に、父の事が浮かんで来た。ゆりは、父の事を思い出し眉根が曇る。

相談したいと言つてきた相手との待ち合わせ時間は19時、まだ待ち合わせ迄に時間があったが、ゆりは、待ち合わせ場所の20区にあるベルヴィル公園へと歩を進めた。

パリは、1区〜20区の行政区に別れていて、1区を中心に時計回りに構築されてい

た。

有名なエツフェル塔は6区に、凱旋門のあるエトワール広場と、パリ中心部のコンコルド広場を結ぶ、パリで有名なシャンゼリゼ通りは8区に、パリを見渡せるモンマルトルは18区にそれぞれあったが、ゆりが向かうベルヴィル公園は高台にあり、街の景色を一望出来る場所にあつた。この時期の気温は14〜15℃、夜は少し薄着では肌冷えするようで、ゆりも一枚多く上着を着込んでいた。

ベルヴィル公園へ向かつていたゆりは、妙な感覚を覚えていた。人と全く出会わないのである。元々、有名な観光地では無いにせよ、此処まで人と出会わない事に、ゆりは不信感を持った。

(どういふ事かしら?これも彼の差し金!?)

ゆりは警戒しながら更に高台を登って行く……

だが、途中でゆりの歩みが止まり、辺りを警戒する。日が完全に暮れた訳ではない……目的地の筈のベルヴィル公園は、完全なる闇に覆われていた。

ゆりは辺りの気配を探ると、前方で言い争う声が聞こえてくる。意を決し、闇に向かい再び歩を進めるゆりは、闇の中、待ち合わせの相手であるサラマンダー男爵を見付ける。

サラマンダー男爵とは、嘗てパリにおいて、ゆり、つぼみ、えりか、いつきが戦った

相手であったが、死闘の末にサラマンダー男爵を浄化し、サラマンダー男爵は、息子同然のオリヴィエを連れて、世界中を旅に出掛けた筈であった。だが、新学年になって直ぐ、サラマンダー男爵からフェアリードロップ2号店を通じ、えりかの下に連絡が来た。四人のプリキュアに話があると・・・

四人で行くより、万が一に備え、ゆりは自分が一人で行つてみると皆に告げる。当初は反対した他の三人も、ゆりの強い意志を尊重し、ゆりは一人でパリに来た。

「何度も言わせるな！お前達に与するつもりは無い!!」

サラマンダーはきつぱり拒絶するも、相手は強引にでも連れて行こうと必死であった。

「我らも手ぶらで帰る訳にはいかんのだよ・・・」

「そういう事よ・・・確かもう一人、あなたの他に坊やが居た筈だけど?」

サラマンダーを襲撃しに来たのは、嘗てプリキュア5と戦った、ナイトメアのギリンマとアラクネアの二人であった。復活した二人が、何者かの指示の下、サラマンダーとオリヴィエを狙っているらしい事にゆりも気付く、

「残念だったな・・・ルー・ガルは、もうパリには居らんよ!この私が、貴様らの気配に気付かなかつたとしても思つたか?」

サラマンダーは、ステッキをクルクル回し二人を挑発する。コケにされた事に怒り、

ギリンマがカマキリの姿の怪人へと変化する。

「きさまだけでも・・・闇に連れ帰る!!」

砂漠の使徒としての力を失って居るサラマンダーだったが、ギリンマの攻撃をステツキで巧みに躲し続けるが、ギリンマの後ろで、アラクネアが何かを企んでいそうにゆりの目には見えた。

「お待ちなさい!!」

思わず声が出た方を振り向く三人の前で、ゆりが身構える。ゆりの姿を見てサラマンダーはフツと笑み、

「どうやら、待ち人來たりだ・・・お前達では彼女に勝てまい？ さっさと退散する事をお勧めするが・・・」

サラマンダーの忠告に、益々激高するギリンマは、小娘如きに何が出来るかとゆりを睨み付ける。

(まさか、再びパリで変身する事になるとは思わなかったわ・・・)

ゆりは、ココロポットを構え、表情を引き締め叫ぶ、

「プリキュア！ オープンマイハート!!」

ゆりの身体を光が照らし、純白のワンピース姿になり、光がその姿を一瞬でキュアムーンライトへと変貌させた。

「月光に冴える一輪の花・キュアムーンライト!!」

ムーンライトの側の闇が払拭され、ムーンライトの姿を露わにする。

ギリンマとアラクネアの二人は、思わず呆然とプリキュアを名乗るムーンライトを見た。

「こ、この娘（むすめ）もプリキュアだと?」

「あの五人の小娘共以外にも、プリキュアが居たのか?」

ギリンマ、アラクネアに取って、プリキュアとはドリーム達五人以外居るとは思っても見なかった。ムーンライトは、プリキュアの事を知っている様子の二人を見つめながら、

（五人の小娘? ドリーム達の事かしら?!）

ドリーム達プリキュア5の事を思い出し、一瞬穏やかな表情になるムーンライトだったが、二人を無視するようにサラマンダーを見た。後でキチンと話して貰うわよと言うと、ギリンマ、アラクネアを睨み付ける。その迫力の前に、アラクネアも本性であるクモの姿を露わにする。

ギリンマ、アラクネアが、ムーンライトに突進して鎌やパンチを繰り出すも、ムーンライトは、二人の攻撃を片手で捌き、強烈な蹴りをギリンマに浴びせ吹き飛ばす。アラクネアは咄嗟に後ろに大きくジャンプし躲すも、ムーンライトの強さを知り、歯軋りす

る。ヨロヨロ立ち上がったギリンマが、雄叫びを上げ再びムーンライトに突進するも、ムーンライトは華麗に身を躲し、ギリンマに対し怒濤のパンチを連打で浴びせ続ける。

(こいつ・・・強い!!)

強張った表情を浮かべ、アラクネアもムーンライトの動きを封じようとクモの糸を出すも、ムーンライトは攻撃を楽々躲し、美術館の上に降り立つと、

「集まれ、花のパワー!」

ムーンタクトを取り出し、勝負に出たムーンライトは、突進してきたギリンマに対し、「花よ、輝け!プリキュア!シルバーフォルテウェイブ!!」

銀色に輝く、花の形をしたエネルギー弾がギリンマに直撃すると、ムーンライトがタクトを回し、ギリンマを浄化させ闇に返す。

「クツ・・・この借りは必ず返すよ!覚えておいで!!」

アラクネアが撤退すると共に、ベルヴィル公園は元の姿を取り戻す。ムーンライトがサラマンダーの側に降り立つと、サラマンダーは、口元に笑みを浮かべながら、ムーンライトを見つめ、

「流石だな!私を苦戦させただけはある!!」

「お世辞かしら!?!さあ、私を呼んだ理由を説明して貰うわよ?」

「ああ、その為に呼んだのだからね」



サラマンダーは、ムーンライトに、闇が動き出した事を伝え始めるのであった・・・

### 3、オリヴィエと新プリキュア

音楽活動が盛んな街、その名を加音町！

この街では最近、おかしな事件が頻発していた・・・

世界に不幸のメロディを奏でて、世の中を悲しみの世界にしようと企むメフィスト一味と、幸せのメロディを奏でて、人々を幸せにしようとする、メイジャーランドのアフロディテの対立に巻き込まれ、この街に住む北条響と南野奏は、妖精ハミイによって、メイジャーランドに伝わる伝説の戦士プリキュア、キュアメロディ、キュアリズムとして、この世界に散らばった、伝説の音符を求めながらメフィスト一味と戦っていた。

彼女達二人が、プリキュアになる事をあっさり承諾したのには理由があった・・・

四ヶ月前、中学一年だった二人は、砂漠化した世界の中で、心の花を奪われ、結晶化していた。心の花を枯らした原因は、響と奏、小学生の頃まで親友だった二人が、とある理由から仲違いをしていた事だった。両者とも仲直りしたいと思っけていても、顔を見合わせるとつい言い合いになってしまう・・・

そんな状態で心の花を枯らしていた時に、砂漠の使徒の攻撃を受けたのだった。

加音町も例外なく砂漠に埋もれた・・・

地球が再生された時、元に戻った二人は、ネット上で話題になっていた、この世界を救った英雄、プリキュアという名を聞いていたからだ。無論彼女達も全てを信用していた訳ではなかったが、いざ自分達がプリキュアになった時、この世界を救ったプリキュアに、自分達もなれた感動があつた事は言うまでもない。

だが、仲直りした筈のこのコンビ、どこかしくりいっていないようだった・・・

4月30日、この日の午前中、響は女子サッカー部の助っ人として試合に参加し、響の活躍もあつて見事に勝利する。試合が終わり、応援に来ていた奏とハミイの側に来た響は、奏が持つてきてくれた手作りスイーツを見て上機嫌だった。

「ウツヒヤア、こんなに作つてきてくれたんだあ？さつすが奏!!」

「まあね、誰かさんのお腹じゃ、これぐらい無いと文句言われそうだからー」

「チエツ、一言多いんだよな・・・でも、感謝してますって!」

互いに笑い合いながら、響がケーキに手を伸ばそうとしたその時、グラウンドが騒がしくなり、思わず響と奏、すでにカップケーキを食べていたハミイがグラウンドを見ると、マイナーランドの歌姫黒猫のセイレーンと、バスドラ、バリトン、ファルセットの、トリオ・ザ・マイナーの三人が、サッカーボールをネガトーンに変え、不幸のメロディを響かせて要るのを発見する。

(セイレーン……)

嘗て仲が良かったセイレーンの姿を見付けると、ハミイは思わず顔が綻ぶ、一方、デザートタイムを邪魔され、不満な表情の響だった……

メフィスト一味の重鎮、セイレーンは、元々メイジャーランドの歌姫として、人々の幸せを祈る妖精であつた。しかし、友人であるハミイにその座を奪われ妬み、メフィストの下へ去つていたのだつた。だがハミイは、今でもセイレーンを友人と思ひ、出会う度に親しく声を掛け、天然ボケ振りを発揮し、今は敵である筈なのに、セイレーンもつい昔のように突つ込みを入れてしまうという、不思議な関係でもあつた。

セイレーンは配下の三人、トリオ・ザ・マイナーを従え、人間世界に散らばつた伝説の音符を集めるべく、加音町でネガトーンを操り、人々を悲しみに暮れさせようとしていた。

それを阻止すべくやってきた響と奏が、キュアモジュールにそれぞれのパートナーのフェアリートーンをセツトし叫ぶ

「レッツプレイ！プリキュア！モジュールション！！」

二人の全身を光が纏ひプリキュアへと変えていく、響は髪がピンク色へと変化し、頭部にピンクの大きなリボンが付き、ツインテールになる。服装は基本色にピンク、おへそ周りに着衣が無い所は、嘗てのブラックやドリームを彷彿させるデザインで、フリル

が多数付いているのが特徴であった。

一方の奏は、髪が金髪へと変化し、頭部に白い大きなリボンが付く、服装は白を基準として奏の清純さ?を現わすようで、響同様多数のフリルが付いていた。

「爪弾くは、荒ぶる調べ!キュアメロディ!!」

「爪弾くは、たおやかな調べ!キュアリズム!!」

「届け、二人の組曲!スイートプリキュア!!」

響と奏は、それぞれ、キュアメロディ、キュアリズムへと変身を完了させる。

この二人も、なぎさとほのか、咲と舞、満と薫のように、二人揃わなければプリキュアへと変身出来ないプリキュアであった。

しかも、なぎさ達や咲達と違い、喧嘩状態ではプリキュアになれず、二人の心のハーモニーが揃わないと、変身する事も、必殺技を出す事も出来ず、そこをセイレーンに狙われた事もあった・・・

「全く、運動後に奏のカップケーキ食べようとしたのに、邪魔しに来て・・・絶対ゆるさないからねえ!!」

メロディは、デザートを食べるのを邪魔され、お冠状態であった。二人は、メロディの合図で正面からサッカーボールのネガトーンに攻撃を仕掛けるが、セイレーンの指示の下、ネガトーンは、メロディ&リズムの攻撃を回転しながら巧みに躲し続け、二人を

苛立たせる。

「ちよつとメロデイ、動きが読まれてるわよ？」

「うるさいなあ、これから、これから！」

言い合いしながらも、再びコンビで攻撃をするが、躲されてしまう二人だった。

（アハハ、あんた達の攻撃のリズムは、完全に読めてるのさー！）

セイレーンは不適に笑い、ネガトーンに指示を出していたが、何時の間にか、ひよっこりに隣に居て、プリキュアを応援しているハミイに気付き仰天し、ペースを崩される。

「ゲッ！ハミイ！・・・あんた、何時からそこに居るのよ？」

「ニヤプ？そうだニヤア・・・セイレーンの姿が見えたから、一緒にプリキュア応援しようと思ってさつき来たニヤ」

「何で敵のあたしが、あんたと一緒にプリキュア応援しなきゃいけないのよ？このポケ猫!!」

ハミイとセイレーンが漫才をしている間に、プリキュアの攻撃が当たり出し、攻勢へと転じる。

「今よ、メロデイー！」

リズムの合図に頷き、メロデイとリズムは互いの手を叩き合い、二人で踊るように舞うと、両手を繋ぎ、

「プリキュア！パッションナート・ハーマニー！！」

二人の叫びと共に、手から金色の光が発せられ、まるで癒しのメロディを奏でるように、ネガトーンを浄化する。元に戻った伝説の音符の一つを回収し、勝負は付いた……  
筈だった……

ハミイと、撤退しようとしたセイレーンは、互いに上空を見上げると、黒雲が加音町を包み込むように集まって来る。思わず顔を顰（しか）めるハミイとセイレーン、  
「セ、セイレーン、これは何だニヤ？」

「あ、あたしに聞くなあ！こっちが聞きたいわよ……何やら、邪悪な気配がするのは確かだけどさ……こんな所に居たら、巻き添え食らいそうだわ！引き上げるよ！！」

セイレーンは、トリオ・ザ・マイナーを従えその場を離れた。残されたハミイは、名残惜しそうにしていたが、メロディとリズムの側に戻る。メロディとリズムの二人も訳が分からず、

「な、何よ、敵は倒した筈なのに……」

「え、ええ」

戸惑う二人の視界に、前方から何かから逃げるように、銀髪の子供が、右足を庇いながら走って来る。何かに追われていると分った二人は、子供の側へと駆けつける。

「き、君、どうしたの？」

「大変、足に怪我をしているじゃない！」

メロディが少年の両肩に手を掛け、何があつたか訪ねると、少年は顔を上げ二人をジッと見ると、

「僕に構わないで！君達まで巻き添えになっちゃう！」

少年の名はオリヴィエ・・・

嘗て、フランスのパリでつぼみ達と交流を持った少年であつた！

サラマンダーは、闇が動き出したのをキャッチし、つぼみ達四人のプリキュアにオリヴィエを託そうと、彼女達をパリに招こうとして居たのだが、プリキュアからの返事で、来るのはムーンライトのみだと知る。ムーンライトにオリヴィエを託そうと考えたものの、闇の動きは彼の予想より早かつた為、サラマンダーは、日本に残つたつぼみ達の下にオリヴィエを避難させ、自らを囿としていた。

だが、闇はその動きをキャッチし、新たな刺客が動き出した!!

オリヴィエは日本に着いたもの、闇の襲撃を何度も受け逃げ続ける間に、目的の場所である、つぼみ達が暮らす希望ヶ花市から遠のいてしまい、偶然にも此処加音町に逃げ込んで来たのだった。

「構わないでって言ったって、そうもいかないわ！ハミイ、この子と一緒に、何処かに隠れていて！メロディ!!」

リズムの言葉に、ハミイは分ったニヤと頷き何処かに隠れる。それを見て安堵し、リズムはメロデイを見ると、メロデイも頷き、目の前に迫ってくる敵を待った。一人にも、今まで味わった事のない力を感じ、緊張感が漂う。ゆっくり、ゆっくり、威圧感を伴い接近する男、その者の風貌は、何処か歌舞伎役者に通じる雰囲気を持っていた・・・

「何だ、貴様らは!?ここに子供が来ただろう?素直に教えれば、手荒な真似はせんが・・・」

「子供?知らないねえ・・・例え知つても、あんた見たいなのに教える筈無いでしょうが!」

男の言葉を、メロデイがきつぱり断ると、男は不敵に笑い、

「そうか、まあいい・・・どうもお前らを見ていると、あの小娘共を思いだして・・・我が名はピーサード!貴様らは?」

男の名は、ピーサード!

嘗て、プリキュアに成り立ての、なぎさとほのかを苦しめた最初の強敵だった。

メロデイとリズムがプリキュアだと名乗ると、ピーサードは憎らしげに二人を見るや、いきなり衝撃波を二人に浴びせて吹き飛ばす。

「貴様らに恨みはないが、プリキュアを名乗るのなら・・・消えて貰おう!!」

ピーサードの目付きが変わり、メロデイとリズムに嘗て無い危機が迫ろうとしていた・・・



4、完敗・・・そして、意外な助っ人！

ピーサードの猛攻の前に、為す術もなくやられ続けるメロディとリズム

「な、何なの此奴・・・つ、強い！」

「え、ええ・・・私達じゃ全然相手になってないわ」

メロディもリズムも、ピーサードの強さに驚き、自分達が全く相手になってない事に焦りが生じる。余裕の表情のピーサードが、二人を挑発する。

「どうした？その程度が貴様らの実力なのか!？」

ピーサードの挑発に、メロディが唇を噛み悔しがる。自分達も日は浅いとはいえ、プリキュアとして頑張つて来たつもりであった。此処でへこたれている訳には行かなかった。メロディはリズムを見ると、

「リズム、こうなつたら一か八か・・・」

「そうね、パツシヨナートハーモニーで対抗するしか無いわね・・・」

リズムも同じ事を考えて居たようで、二人の口元に笑みが浮かぶ、メロディとリズムが頷き合い、先程ネガトーンを倒した二人の必殺技、パツシヨナートハーモニーで勝負に出る。踊るように手を叩き合い、互いの手を握り合い二人が叫ぶ、

「プリキュア！パツシヨナートハーモニー!!」

二人の合わさった手から、金色に輝く光がピーサードに向けて発射されるも、ピーサードも手から黒いエネルギー波を二人に向けて発射する。互いにぶつかり合う技と技だったが、パッショナートハーモニーは、脆くもピーサードに破られ、二人は地面に叩き付けられ呻き声を上げる。ピーサードは、見下すようにメロディとリズムを見つめると、

「もう終わりか？プリキュアを名乗るなら、もう少し出来ると思ったのだがな・・・さて、あの小僧を・・・ん？」

オリヴィエを捜しに向かおうとしていたピーサードだったが、二人はヨロヨロ立ち上がった。

「ま、まだまだ、ここで決めなきや女がすたるー！」

「そうよ、まだ私の気合いのレシピは見せてないわ!!」

二人の闘争心は、まだ失せては居なかった。その瞳には、燃える闘志が宿っていた。その姿を見たオリヴィエは、メロディとリズムの姿を、つぼみ達に重ねるのだった・・・

「あの子達も、プリキュア？」

「そうニャー！キュアメロディに、キュアリズムニャ!!」

ハミイの言葉を聞き、改めて二人の姿をジッと見つめるオリヴィエ、ピーサードも、二人が此処までのダメージを受けながらも立ち上がる事に驚愕し、

「ほう、その心意気は良し！俺の攻撃を此処まで受けて立ち上がる姿は、素直に評価しよう……だが、威勢が良いだけでは、勝負には勝てんよ!!」

瞬時に動いたピーサードの右肘が、リズムを吹き飛ばし、助けようとしたメロディに、左肘を当てて吹き飛ばす、それでも必死に立ち上がるようにする二人に、ピーサードが止めの一撃を放とうとするのを見てオリヴィエが飛び出す。

「僕は此処だ！その人達に、これ以上手出ししないで!!」

オリヴィエを見付け、ニヤリとしたピーサードは、ゆっくりオリヴィエに近づいて行く。だが、その間にメロディとリズムが立ち塞がる。

「ま、まだ、勝負は付いてないよー」

「この子の下には行かせない!!」

必死の形相で、二人が両腕を広げて阻止しようとする姿に、ピーサードはイライラしたように、

「最早貴様らと遊んでいる暇は無い!!」

ピーサードの目が怪しく光と、メロディとリズムの身体が、徐々に石化を始めた。

「な、何、これは!?!」

「身体が……動かなく……ハ、ハミィ〜、その子連れて逃げてええ!!」

「私達の事はいいから……その子をお願い……」

二人は、自分達の事よりも、ハミイにオリヴィエと共に逃げてと叫んだ。メロディとリズムは、その言葉を最後に、完全に石化した。パニツクになったハミイは、二人の名を叫び、駆け寄ろうとするも、ピーサードの衝撃波を受けて吹き飛ばされる。

(ハミイ!!)

時計台から、この戦いを双眼鏡で覗いていた人間姿のセイレーンは、嘗ての親友ハミイがいたぶられる姿に、心の奥で何かが痛み出していた・・・

「これで、プリキュア達も終わりですなあ・・・」

「『終わりだあ~~~~!!』」

コーラスのようにハモる、バスター、バリトン、ファルセットのトリオ・ザ・マイナーを、セイレーンは、やかましいわと黙らせ、

「あんた達、一先ずメフィスト様の下にお戻りよ！此処に居ると・・・何か、何か得体の知れない事に巻き込まれそうだからさ・・・こつちの世界は、あたしが見張っておくから！メフィスト様にも、今は静観するように伝えておいて!!」

セイレーンの言葉に頷き、三人が去った後も、セイレーンは、ハミイの姿を目で追っていた。ハミイは、自分が痛めつけられながらも、メロディとリズムに言われたように、オリヴィエを守ろうと必死だった。双眼鏡を覗く手が、ワナワナ震えてくるセイレーンは、

「ハミイ……そんな子供見捨てて、さっさと逃げれば良いじゃないか！アアア!? 全く、あのボケ猫……!!」

プリキュアの頼みを聞き入れ、必死にオリヴィエを守ろうとして、ピーソードに痛めつけられるハミイの姿を、セイレーンを見るに堪えなくなつたのか、時計台から姿を消した……

「妖精風情に何が出来る？ 止めをさされたくなければ……そこを退け!!」

「嫌ニャー！メロディを、リズムを、元に戻すニャ……!!この子に近寄るニャ!!」

ピーソードから必死にオリヴィエを庇い続けるハミイに、表情を強張らせたピーソードが、止めの一撃を放とうとした時、上空から一陣の風を伴い、人間姿のセイレーンが現われ、ハミイ、オリヴィエを小脇に抱え逃亡する。

「な、何者だ!? ま、待て!!」

一瞬呆気に取られたピーソードに振り返りもせず、セイレーンは、一目散に加音町から逃げ出し走り続ける。フェアリートーン達は、戸惑いながらもその後を追つた……  
「セ、セイレーン！ 助けてくれたのニャツ？ ありがとニャ！ でも、メロディとリズムが……」

セイレーンが窮地を助けてくれた事に、ハミイは嬉し涙を浮かべるも、メロディとリ

ズムを置き去りにした事に心が咎めていた。セイレーンは戸惑いながらも、

「うっさいわねえ！あんな奴に、今のあたし達でどうやって勝てるって言うのよ？助けてやっただけでも感謝しなさいよね！！ハミイ、一先ず休戦よ!!!」

ハミイは、嬉しそうに何度も何度も頷いた。突然現われたセイレーンに驚いたオリヴィエだったが、ハミイとの会話を聞く限り、セイレーンが一応味方だと知り、ホツとして話し始める。

「ありがとう・・・僕はルー・ガルー！言いにくかったら、大切な友達が付けてくれた、オリヴィエと呼んでくれても良い！僕の為に彼女達は・・・お願い！僕をつぼみ達の所に連れて行って!!つぼみ達なら、プリキュアなら、きつと彼女達を助けてくれる!!」

オリヴィエの言葉に、思わず互いに顔を見合わせたハミイとセイレーンは、

「だから、プリキュアならあそこで石にされて・・・エツ？今あんたプリキュアならって・・・もしかして、そのつぼみとかいうのもプリキュアなの!!」

セイレーンは、恐る恐るオリヴィエに問うと、オリヴィエは首を縦に振り、つぼみ達の事を話し始める。メロディとリズム以外にもプリキュアが居る事を聞き、ハミイの顔は綻び、セイレーンの顔は驚愕の表情を浮かべる。

「そのつぼみっていうプリキュアは、何処に居るのニヤ?」

ハミイの問いかけに、オリヴィエは、ポケットの中からサラマンダーに貰った紙を見

せる。そこには、希望ヶ花市に向かい、そこでプリキュアに助けを求めると書かれていた。

「任せるニャー！オリヴィエを必ず連れて行くニャー!!」

ハミイは胸をポンと叩き、自信満々な態度を取り、それを見たオリヴィエも安堵の表情を浮かべる。ハミイはセイレーンを見つめると、

「という事で、セイレーン！ハミイとオリヴィエを、希望ヶ花市に連れて行って欲しいのニャー！」

「ハア!?あんた、何言ってるのよ?自分で行きなさいよ!!」

「だって、ハミイは希望ヶ花市って、どこにあるのか知らないニャー!」

「あたしだって知らないわよ!大体、何であたしがそんな事しなきゃいけないの……うっ」

ハミイが、目をウルウルさせ、オリヴィエは恨めしそうにセイレーンを見つめる。セイレーンは深い溜息を付くと、

「分ったわよ!探せばいいんでしょう……まったく、このボケ猫と知り合っただのが、あたしの運の尽きだわ……」

ハミイ、オリヴィエ、そして、セイレーンという奇妙なトリオが、つぼみ達の居る希望ヶ花市を探しに向かう……

オリヴェイエに逃げられ、怒り心頭のピーサードだったが、闇の中から声が響いてくる。「ピーサードよ、あの小僧に逃げられたのは失態だったな？だが、プリキュアを倒した功績は評価に値する。あのような小僧を仲間に加えずとも、我ら闇の軍勢は、十分な戦力を要する。これより、光の戦士が眠るこの地を闇の拠点とし、我らが闇の創造主様の復活の地としよう!!我が闇の軍勢共よ、この地に光の戦士とその妖精共を集め、この地に光の最期と共に、闇の世界の復活を・・・行け!!」

闇が加音町を飲み込んでいく・・・

加音町の人々は、闇の中に沈み込んでいく・・・

音楽の栄えた街、加音町は、不気味な闇の街へと変貌してしまった・・・

その闇の中では、ピーサードだけではなく、歴代のプリキュア達が倒してきた強敵達が復活し、雄叫びを上げ散らばって行った・・・

### 5、強襲!パルミエ王国!!

パルミエ王国は、謎の敵からの攻撃を受けていた。ココとナッツ、そして、遊びに來ていたシロップは、住民達を避難させていたのだが、ナッツは、襲撃して來た者が見覚えのある顔だった事に驚く、ココは気付いて居ないようで、

「パルミエ王国を襲ってくる何て・・・一体何者ココ?!!」



「ココ、あれを見るナツ！」

ナツツの指さす方を見たココも、見覚えのある顔を発見する。

「あ、あれは、ナイトメアにエターナルの奴らまで居るココー！」

パルミエ王国を襲ってきたのは、嘗てナイトメアでプリキュア5を苦しめた、鳥をモチーフにした怪女ハデーニャと、イカやタコを連想させる、エターナルのネバタコスであつた。

「一体どういう事ロプ？」

「あいつらは、プリキュア達に倒された筈ナツ・・・どうして!？」

倒した敵の復活と、パルミエ王国への攻撃に、ココとナツツ、シロップに不安が募る。そこにお世話役のミルクがやって来る。

「ココ様、ナツツ様、お下がりにささいミルク！ミルクがあいつらと戦うミルク!!シロップ、ココ様、ナツツ様を頼んだミルク」

シロップは頷き、ココとナツツの手を取り避難しようとする。ココとナツツは心配そうにミルクを見ると、

「ミルク、頼んだココー！」

「無理しないようにナツ」

ココとナツツの言葉に頷き、ミルクは人間界での姿、美々野くるみの姿に変身すると、

「スカイローズ・トランスレイト！」

変身アイテムであるミルキイパレットを取り出し、タッチペンでボタンを押し、ミルキーローズへと変身した。

「青いバラは秘密のしるし！ミルキーローズ!!」

名乗りを終えると同時に、ローズはハデーニヤ、ネバタコスの下に突撃する。

「おやおや、誰かと思えば、あの妖精ちゃんが、プリキュア擬きに変身するとはねえ？」  
「おいおい、俺達は忙しいんだ！遊び相手なら他を辺りな!!」

ローズを小馬鹿にするような態度を取る二人に、ローズは少しムツとしながらも、

「それはこっちのセリフよ！さっさとパルミエ王国から出て行って頂戴!!ハア!!!」

ローズがハデーニヤに右肘を当てて吹き飛ばすも、さしたるダメージは与えてはいないようだった。吹き飛ばされたハデーニヤは、口元に笑みを浮かべながら、

「やれやれ、良いのかい!?あたし達と遊んでて・・・あんな、あいつらのお目付役何だろう?」

二人がニヤニヤする態度に、違和感を持つローズだったが、

「だからこそ、此処であなた達を倒すのよ!!」

ローズが怒濤の攻撃を開始した・・・

避難していたココ達の前に、頼もしい戦士達が姿を現わした。思わず顔が綻ぶココとナッツ、

「せつな、満に薫も！良い所に来てくれたココ!!パルミエ王国が、敵の襲撃を受けているココ」

「今、ローズが一人で戦っているナッツ！力を貸して欲しいナッツ!!」

普段の彼らならば、今までパルミエ王国に来た事が無いせつな達が、パルミエ王国に居る事に疑問を持ったであろうが、この危急に対し、その考えが浮かぶ事は無かった。

三人は無言で頷くと、せつなはシロップを、ココを満が、ナッツを薫が抱き上げ、ローズの下に向かい歩き出す。ホツと安堵するココとナッツと対照的に、シロップは、三人に妙な違和感を感じるのだった・・・

ハデーニヤ、ネバタコスと激闘を続けるローズに、ココ達が声を掛ける。

「ローズ！せつな、満と薫が助けに来てくれたココ！」

「協力して敵と戦うナッツ」

ココとナッツの声に振り向いたローズも、せつな達の姿を見て、思わず安堵の表情を浮かべる。プリキュアの大切な仲間達が、パルミエ王国の危機に現われてくれた。ローズの心に余裕が生まれた。

「応援に来てくれたの？助かったわ・・・さあ、これで形成逆転ね！私達は4人、あなた

達は2人、まあ、あなた達ぐらい、私一人でも倒せるけど?」

何時もの調子に戻り、二人を見下すローズに対し、何故かハデーニヤ、ネバタコスの二人は余裕の表情を浮かべ、ローズを苛立たせる。

「何ニヤニヤ笑ってるのよ?これでも食らいなさい! 邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう!」

ローズが二人に対し、必殺技のミルキイローズ・ブリザードを放とうとすると、さしもの二人からも余裕の表情が消える。口元に笑みを浮かべたローズだったが、その瞬間、背後から攻撃を食らい、ミルキイローズ・ブリザードは不発に終わった。

「クツ、伏兵が居たとは油断したわ・・・一体何処から!?!」

ローズが辺りを見回した時、思わずローズは我が目を疑った。それもそうであろう、ローズを攻撃したのは、プリキュアの絆で結ばれている筈の、せつな、満、薫だったのだから・・・

「あ、あなた達!?!これは一体何の真似よ?」

信じられないといった表情で呆然としながらも、ローズが三人を問い詰めるも、せつな、満、薫の三人は、そんなローズに興味無さそうに、背後のハデーニヤ、ネバタコスに話し掛ける。

「こっちの目的は果したわ! 私達は妖精共を連れ帰る!!」

「後はあなた達の好きにすれば？」

「さあ、お前達、大人しく付いてきて貰うわよ!!」

信じられないといった表情のココ、ナッツ、シロップだったが、せつな達の背後から現われた闇が、ココ達をも飲み込んでいく……

「や、止めるココー!」

「何で君達が……」

「離すロプー!」

闇が完全に覆い、せつな達三人と、ココ達の姿が、完全にパルミエ王国から消え失せた。

呆然とするローズに、背後の二人が嘲笑を浴びせる。

「あらあら、お世話係のくせに、王様を目の前で浚われる何てねえ?」

「とんだお笑いぐさだな!!」

茫然自失したローズは、ハデーニヤ、ネバタコスの二人に散々痛めつけられ解放された。

「ハハハ、いい様だなあ? せいぜいプリキュア共に泣きつくこつたな! 私じゃ、主(あるじ)を守れませんでしたってな!!」

「王の居ないこんな国を、滅ぼす迄もない! いずれ我ら闇に飲み込まれるんだから

ねえ・・・」

二人は、ローズに再び嘲笑を浴びせ、姿を消した・・・  
（守れなかった・・・ココ様を、ナッツ様を、シロップを・・・せつな！満！薫！どうして？どうしてよ～～～!!）

ローズは変身が解け、ミルクの姿に戻ってしまった・・・

傷心のミルクの心に、のぞみ達の顔が浮かぶ、ハデーニヤやネバタコスのように動くのは癪だったが、今のミルクには、のぞみ達に頼るしか方法は無かった・・・

第十五話：闇・・・蠢く

完

## 第十六話：不協和音

## 第十六話：不協和音

## 1、それぞれの再会

5月1日朝、日向咲と美翔舞は、咲の家、ベーカリーPANPAKAパンのテラスで、浮かない表情で語り合っていた。二人が浮かない表情を浮かべているのには理由があった。大切な友達である、霧生満、霧生薫と、昨日から連絡が付かなかったのだから……

「満と薫、どうしたんだろうね？29日は四人で遊びに行つたのに、昨日から連絡取れなくなつちやうなんてさ……」

咲の不安そうな言葉に、舞も頷き、

「ええ、今日は4人で、のぞみさん達の街に内緒で出掛けて、ビックリさせましようつて話だったものね……二人共、どうしちゃつたんだろう？」

そう言うと、二人は思わず沈黙し、何時も満と薫が座っていた席を見つめ、溜息を付いた。フラツピとチョツピも心配しているようで、不安げな表情を浮かべていた。

「咲、舞、何だか嫌な予感がするラピ！」

「ムーブとフープの気配も感じないチョッピ．．．」

咲と舞の妖精であるフラツピとチョッピも、ムーブとフープの気配が感じない事に激しく動揺する。フラツピとチョッピは顔を見合わせると、意を決したように咲と舞に話し始めた．．．

「咲、舞、今まで黙ってたけど、フラツピ達が緑の郷に戻って来たのには、訳があつたら  
ピー！」

「実はファイリア王女が、新たなる闇の目覚めが近づいているのを感じて、チョッピ達は  
また緑の郷に戻って来たチョッピ」

フラツピ達の話聞き、見る見る表情が曇る咲と舞、新たなる闇の目覚め、それは満  
と薫、ムーブ、フープが居なくなつた事に関係するのだろうか？咲の心に益々不安が浮  
かんでくる。

「じゃあ、満と薫に連絡が取れないのも．．．その闇と関係があるってどういうの？」  
「それはまだ分らないラピー！でも、可能性は．．．」

咲の問いかけに答えたフラツピの言葉を聞き、一同は沈黙する。例え関係があつたと  
しても、今の咲達にはどうする事も出来なかつた．．．

情報が欲しい、満達に繋がる情報が．．．

少し考えて居た咲は、何かを思い浮かべ、舞に話し掛ける。



「ねえ、舞……のぞみちゃん達の所に行つてみない？もしかしたら、闇について、何か手掛かりになる事があるかも知れないし……」

「そうね、ここでただ心配しているよりも、その方が何か手掛かりが掴めるかも知れないものね……行きましよう！のぞみさん達の所に!!」

舞も咲の提案に同意するが、チョッピが先にキュアドリーム事、夢原のぞみ達に連絡してからの方がいいと進言し、咲と舞もそれに同意し、咲はのぞみの家に電話を掛けた。「のぞみちゃん？あつ、ゴメン！まだ寝てた見たいね……アハハ」

のぞみが寝ぼけながら電話に出た事で、咲は苦笑しながらのぞみに謝る。のぞみの母、夢原恵美は、既に自分の店に出掛けた後だったようで、のぞみは咲からの電話が来るまで、熟睡していたようだった。

「今からのぞみちゃん達の所に行こうと思ってるんだけど、良いかな？相談したい事もあるし……うん、舞と一緒に、ううん、満と薫は……その事で相談したい事があるんだ！うん、じゃあ、悪いけど、りんちゃんや、かれんさん達にも知らせておいてくれるかな？うん、寝てた所ゴメンね！じゃあ、後で！」

電話を切った咲は、舞の方に向き、のぞみからOKを貰った事を伝える。舞もホッと安堵すると、

「じゃあ、行きましよう！咲!!」

咲と舞がPANPANKAパンの入り口に来た時、店の中から、母日向沙織のありがとうございましたと言う声が聞こえたかと思うと、咲の店で買ったパンの袋を持った、パーカーを着た大男と、派手な衣装を着た女の二人組と遭遇する。一瞬沈黙が流れた後、二人のカツプルは、しまったと言う表情を浮かべるとそそくさと逃げ去った。

「ま、舞・・・今の、キントレスキーと、ハナミズスターレに似てなかった？」

咲の言葉が聞こえたのか、何処か不機嫌そうな表情を浮かべ、派手な衣装を着た女が戻つて来ると、

「あんた、わざと間違えてるでしょう!!キイイ、毎度毎度、腹立つわあ!!!」

派手な衣装の女はかなりご立腹のようで、今にも咲に抗議しようとする姿に、大男が慌てて戻つて来て、派手な女にパンの袋を渡すと、お姫様抱っこして言う、

「おい、ハニー！今は我らの存在を知られる訳にはいかんぞ？此処は撤退だ!!」

「誰がハニーよ、誰が・・・あんた、いい加減に覚えなさいよ！あたくしの名前は・・・」  
咲に名乗ろうとした女は、大男に口を塞がれ、そのまま二人は消え去った・・・

呆然としていた咲と舞だが、

「やつぱり今の、キントレスキーとハナミズスターレだよね!」

「そうね・・・でも確か、ミズ・シタターレって言う名前だったと思うわ!でも、あの二人が何で此処に・・・」

咲と舞は、顔を見合わせ不安げな表情になる。何故嘗て倒した筈のキントレスキー、ミズ・シタターレが此処に居たのか？あの二人の復活は、満と薫が居なくなつた事に關係するのだろうか？

咲と舞は、満、薫、ムーブ、フープの無事を祈りつつ、のぞみ達の住む街へと出掛けて行つた……

花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつきの三人は、つぼみの祖母、花咲薫子が所長を務める植物園の中で、今後の行動に付いて話し合つていた。

「昨日のゆりさんからの電話によれば、オリヴィエはもうとつくに日本に着いている筈ですが……オリヴィエから何も連絡が無いのを見ると、何か遭つたんでしようか？」

つぼみが心配そうに、えりか、いつきに話し掛ける。つぼみにとって、オリヴィエは弟とも呼べる大切な存在であつた。いつきも心配そうな表情で、

「そうだね、昨日みんなで、あれだけ探し回つても見つからなかつた所を見ると、その可能性も否定出来ないね！現にゆりさんは、パリで、サラマンダーとオリヴィエを狙う何者かと抗戦したそうだし……」

いつきもつぼみの言葉に同意し、オリヴィエの安否を気に掛けるも、えりかは、確かにそうかも知れないが、ただ道に迷つて居るだけかも知れないと思うと、

「でもさ、迷ってるだけかも知れないじゃん……全く、サラマンダーの奴も、前もってあたしらに知らせとけば良いのにさ！」

「そうですけど……私、オリヴィエが心配で、心配で……」

えりかの言葉を聞いても、つぼみの不安は消え去らず、ウズウズしたつぼみは、  
「私、もう一度探してみます！」

つぼみがもう一度探しに出掛けようとした時、側でボーと座っていた薫子の妖精コッペが、不意に丘の方を見つめた。そこは21人のプリキユア達と一緒に、元に戻ったこの希望ヶ花市を見つめた丘だった。

「コッペ様、何？あそこにオリヴィエが居るの!？」

「ほ、本当ですか、コッペ様？」

えりかといつきが驚いたように丘の方を凝視する。コッペは相変わらずの無表情だったが、三人は頷き合い、念のため丘を指指して駈けだした。その後を慌てて追う三人の妖精、シプレ、コフレ、ポプリであった。

その丘の上では、ゼエゼエ肩で息をする人間姿のセイレーンと、丘の上から暢気そうに眼下の希望ヶ花市を見下ろすハミイ、見晴らしの良い景色に心を奪われているオリヴィエが居た。

(この街につぼみ達が……待ってて！つぼみ達を連れて必ず助けに戻るから!!)

オリヴィエは、心の中で自分を助ける為に石にされた、メロディとリズムの事を思い浮かべ、必ずつぼみ達を連れて戻ると心に秘めるのだった。そんな二人を不満げに見つめる少女、人間姿のセイレーンはムツとすると、

「あ、あんた達ねえ、少しはあたしにお礼言ったらどうなのよ？ 誰のお陰で無事着いたと思ってるの!!」

「感謝してるニヤー!」

心が込もっているとはとても思えないハミイの言葉を聞くと、セイレーンは少しイライラした様子で、

「あつ、何よ、その軽い言葉？ あんたねえ、このあたしが、ここを見付けるまでに、どれだけ苦勞をした事か・・・こら、ハミイ! ちゃんと人の話を聞けく!!」

マイペースなハミイと居ると、どうもペースを乱されるセイレーンであった。

セイレーンの言うように、希望ヶ花市に無事辿り着けたのは、セイレーンのお手柄であった。猫のハミイが人に道を聞く訳にも、本屋で地図を、ネットカフェで調べる訳にもいかず、かといって人見知りなオリヴィエが、自ら人と接触を持つ事も無く、全て人間姿のセイレーンが調べ上げ、時には先を急ぐ為に、ハミイと怪我をしているオリヴィエを抱え走り続けた結果、無事にこの街に到着したのだから・・・

「もう着いたんだから、あたしは後の事は知らないからね! ああ、くたびれたわ・・・ン

「？」

セイレーンは、丘に登ってくる三人の少女に気付き見つめる。ハミイとオリヴィエも気付き、三人の少女を振り向くと、見る見るオリヴィエの表情が明るくなって来る。

「つぼみ〜！みんな〜！！」

つぼみ達の顔を見るや、オリヴィエの表情が晴れやかになり、ハミイとセイレーンは、ようやく目的の人物と会えたのかとホッとする。

つぼみ達と無事再会し、はにかみながらも笑顔で手を振り続けるオリヴィエ、

「見て、つぼみ！コッペ様の言う通り、オリヴィエが居た！！ありや！？見かけない娘が一緒だね？」

えりかが後ろのセイレーンに気付き、首を捻った。セイレーンもセイレーンで、つぼみ達を見ると、首を捻りながら、

（この娘達がプリキュア？あんまり強そうに見えないけどね・・・）

いつきは兎も角、つぼみとえりかを見てそう思うセイレーンであった。

「オリヴィエ、無事で何より・・・って、足に怪我してるじゃないですか!？」

オロオロしたつぼみは、心配そうにオリヴィエの怪我の具合を見ると、

「え、あつうん・・・こんな怪我、大した事ないよ！それよりつぼみ達に頼みが・・・」  
オリヴィエの言葉が終わる前に、マイペースなハミイが、不意に隣で気さくにつぼみ

達三人に声を掛ける。

「ハミイニヤ！オリヴィエを連れてきたニヤ!!」

胸を叩き得意気にするハミイに、セイレーンがムツとしながら、

「連れてきたのはあたしだ〜!!」

と思わず声を出すのを見たつぼみ達は、顔を見合わせ驚くと、

「い、今・・・その猫喋りましたよね?」

「うん、猫が喋ったね」

思わず顔を見合わせて眩くつぼみとえりか、ハミイはそんな事にお構いなしで自己紹介を始める。

「ハミイはメイジャーランドの妖精ニヤ!こっちのセイレーンもそうニヤ!!二人でオリヴィエを連れて来たニヤ!!」

「だから、連れてきたのはあたし!ハア、疲れた!」

人間時の姿で居たセイレーンは、疲れたのか本体の黒猫姿に変化する。思わず変顔になったえりか、つぼみ、いつきは呆然としながら、

「ね、猫になった?」

「な、なりましたね・・・」

「この子達も、コツペ様や、ココやナツツ達と同じように、人型になれるのかな?」

つぼみ達三人が、顔を見合わせてハミイとセイレーンを凝視する。セイレーンは、何  
見てるのつといった表情で三人を見返すと、つぼみは慌てて両手を振り、

「あつ、オリヴィエを連れて来て頂き、ありがとうございます！ 私は花咲つぼみと言いま  
す！」

「あたしは来海えりか！」

「僕は、明堂院いつきだよ！ よろしくね!!」

「シプレですう！」

「コフレですつ！」

「ポプリでしゅ！・・・猫ちゃん、遊ぶでしゅ!!」

一同がハミイとセイレーンに挨拶を交わすと、シプレ達とハミイはすっかり仲良  
くなって、手を取りながらはしやぎ回っていた。

暢気そうなハミイを見て、思わず溜息をつくセイレーンだったが、つぼみ達を見つめ  
ると、

「ねえ、あたし疲れたから、何処かで休ませてくれない？」

「あつ、ハイ！じゃあ、ここから近い私のお婆ちゃんの植物園にでも行きましょう！オリ  
ヴィエも疲れたでしょう？心配してたんですよ!!」

つぼみは、オリヴィエも疲れているだろうと心配するも、オリヴィエは先程話しそび



れた事が気がかりだったようで、

「うん、色々あつて．．．つぼみ、さっきの続きだけど、僕を助ける為に石にされたプリキュア達を助けて!!」

オリヴィエの言葉を聞き、サツと顔色を変えるつぼみ達三人、

「オリヴィエを助ける為に．．．た、大変です!」

大慌てでパニくるつぼみの脳裏に、プリキュア達の顔がフラッシュバックされていく、一体誰が石にされたんだらうと、悲しげな表情に変わるつぼみだった。ハミイも会話に加わると、目をウルウルさせながら、

「そうニヤ、大変何だニヤ! メロデイとリズムを、助けて欲しいのニヤ．．．」

ハミイの言葉を聞き、三人は思わず顔を見合わせると、首を捻るつぼみ達三人、メロデイとリズム、自分達が知っているプリキュアに、そんな名前の戦士は居なかった．．．「メロデイ? リズム? そんなプリキュア居たの!?!」

えりかがハミイに聞くと、ハミイが二人のプリキュアの誕生した経緯を簡単に説明する。何となくではあるが、大体の状況を理解したつぼみ達の内、えりかは何故か嬉しうだった。自分達が一番新参だったのが、後輩が出来たのだから．．．

「あたし達にも、後輩のプリキュアが出来た何てき．．．あたし達も、遂に先輩って呼ばれる日が来ちゃったかな?」

「えりか、喜んでる場合じゃないと思うけどな！」

いつきに注意され、思わず口を尖らせるえりかであった。つぼみはハミイを抱っこし、オリヴィエに優しく微笑み掛けると、

「大丈夫です！私達プリキュアが、必ずその二人を救って見せます!!」

微笑みの中に、凜々しさが感じられ、思わず頼もしさを感じるハミイであった。セイレーンは不服そうに、

「それはいいから、誰かあたしを抱いてってよ〜!!」

自分だけ蚊帳の外にされそうなセイレーンが、思わず泣き言を言い、ちようどいい高さのえりかの頭の上に乗っかり、丸くなつて一休みするセイレーンであった・・・

水無月かれんは、のぞみからの連絡を聞き、集合場所であるナッツハウスの鍵を持って、先にナッツハウスに向かっていた。途中で秋元こまちと合流し、二人はナッツハウスに向かった。

「咲達、何か相談事があるって言っていたそうだけど、どうしたのかしら？」

「そうね、のぞみさんの話では、満さんと薫さんの事で話があるそうだけど・・・」

かれんどこまちは、妙な胸騒ぎを覚えるのであった。最近、他のプリキュア達と会う事も無かったが、かれんどこまちに取つても、プリキュアの絆で結ばれた仲間の相談

には、出来る限り力になりたいと思つていた。

しばらくしてナッツハウスに到着した二人は、店の前で倒れているミルクを見付け仰天する。思わず二人はミルクに駆け寄ると、

「ミ、ミルク、一体どうしたの!?!・・・大変、怪我をしているわ!こまち、とにかく中にミルクを運びましょう!!」

「ええ、ミルクさん、しつかりして!!」

かれんとこまちが、ミルクをナッツハウスの中に運ぶと、ベッドで寝かせて看病し続ける間に、他のメンバーである春日野うらがが、寝ぼけ眼ののぞみを連れた夏木りんが到着するも、皆ミルクの状態を見て驚き、心配そうに見守った。

りんが、うなされるミルクを心配そうに見て呟く、

「ココ達は一緒じゃない見たいね・・・ミルクの身に、何があつたんだろう?」

「取り敢えず応急処置はしたわ!幸い怪我は大した事無さそうだけど、何か精神的に弱つていそうだわ・・・」

かれんは、ミルクが肉体的より、精神的ダメージの方が強い事を皆に報告する。一同は、心配そうにミルクの事を見守った・・・

少し経つてミルクが気付くと、ミルクは、自分を心配そうに見つめる一同の顔を見ると、涙が浮かび上がってくる。ミルクは涙を堪えると、

「かれん．．．みんな！良かった、みんなに会えたミル．．．みんな、パルミエ王国が襲われて、ココ様やナッツ様、それにシロップが浚われたミル!!」

ミルクの言葉を聞き青ざめるのぞみ達五人、のぞみは思わずミルクに問いかける。

「ココやナッツが!?!．．．一体誰に?」

「襲つてきたのは、のぞみ達が倒した筈の、ナイトメアとエターナルの奴らミル!そして、ココ様達を浚つたのは．．．裏切り者のせつな、満、薫ミル」

ミルクの言葉を聞き、呆然とする一同、共にプリキユアとして戦つた、せつな、満、薫が裏切つたと聞き、誰しもが信じられなかった．．．

「それは本当なの!?!ミルクを疑う訳では無いけど、まさか．．．信じられないわ?」

かれんには、あの三人が裏切つたとはとても信じられなかった。出会つた期間は短いが、共にこの世界の為に戦つた間柄である。それはのぞみ達も同じであつた．．．

「ミルクだつて信じたくないミル．．．でも、ミルクの目の前でせつな達がココ様達を：」  
そう言うと、ココとナッツを守れなかつた事を、ミルクが悔やみ顔を俯く、かれんは少し笑みを浮かべながらミルクの身体を撫で、ミルクの気持ちを落ち着かせた。

ミルクが落ち着いたのを見て、こまちは一同に自分の推察を話し出した。

「もし、ミルクさんの言葉が本当だとしても、きっと満さん、薫さん、せつなさんは：  
何者かに操られていると考えて良いわね!」

「あたしもこまちさんの説に賛成だね！のぞみ、咲や舞はこっちに向かつてるんでしょ？念の為、ラブ達にも知らせた方が良いんじゃない？」

「そうだね．．．私、ラブちゃんに電話してくる！」

りに言われ、のぞみはラブに電話する為、部屋を出て行った。残った一同に沈黙の時間が訪れる．．．

四つ葉町、受験も終わり無事高校生となった桃園ラブは、このゴールデンウィークに行われるダンスコンテストに、蒼乃美希、山吹祈里と、ダンスユニットクローバーとして、久しぶりにエントリーしていた。今日もこれからダンスのレッスンに出掛けようとしていたラブは、携帯電話に着信があり、電話に出ると、それはのぞみからだった。

のぞみから電話が掛かってきた事に、ラブは嬉しそうだった．．．

「あつ、のぞみちゃん、久しぶり〜！元気してた？みんなも元気かな!?こっちは、美希たんもブツキーも相変わらずだよ!．．．エツ、何？」

最初は嬉しそうに話していたラブの顔色が、会話をする内に見る見る曇ってくる。険しい顔付きになったラブは、

「嘘．．．嘘だよ!どうして、せつなが．．．信じられないよ!エツ?操られて．．．そんな、じゃあ、のぞみちゃんも同じ風に思ってるの?．．．うん、分った!みんなとこ

れからナッツハウスに行くよ!!じゃあ!!!」

ピッと携帯を切るラブだったが、直ぐに携帯電話が鳴った。着信者を見ず、慌てて携帯に出たラブは、電話の相手が美希と分かり、思わず先程のぞみから聞かされた話を愚痴ろうとするも、先に美希に用件を言われてしまう。

「エッ、ウエスターや、サウラーが!?!うん、分った!今から美希さんの家に行くから!じゃあ!」

携帯を切ると、ラブは大慌てで家を飛び出して行くのを、母あゆみは、首を捻りながら不思議そうな表情を浮かべていた。

(せつなが、甦ったノーザ達に浚われた?じゃあ、のぞみちゃんが言ってた事は本当だつていうの?・・・せつな・・・私、信じられないよ!)

複雑な表情で美希の家に急ぐラブであった・・・

美希の家の前で祈里と合流したラブは、美希の家に上がると、美希と、美希の母、蒼乃レミに看病されているウエスター、サウラーと再会する。二人は共に両肩を痛めたように、両肩と胸に包帯を巻かれて、痛々しさが目に見えた。ラブは表情を曇らせながら、「二人共・・・酷い怪我、ノーザ達の仕業なのね?」

「ええ、そうみたい!あたしも二人を見付けた時は驚いたわ・・・まさか、ノーザやクラインが復活して、しかもせつなを浚う何て・・・」

「せつなちゃん・・・無事だと良いけど!」

美希と祈里の言葉を聞いたラブは、さっきのぞみから聞いた事を皆に話すべきか悩んでいたが、レミが席を外したのを契機に、一同に話し始める。

「みんな、聞いて! さっき、のぞみちゃんから電話があつたの・・・その内容は、ココ達のパルミエ王国が襲われて、くるみが負傷し、しかも、ココ、ナッツ、シロップが浚われたらしいの! しかも、浚つたのは・・・せつな、満ちゃん、薫ちゃんだつて言うの!!」  
ラブの言葉を聞き、一同に衝撃が走る。俄（にわか）には信じられる話では無かつた・・・

「嘘でしょう? 何でせつな達がココ達を浚う必要があるのよ!? ありえないわ!!」

美希は少しヒステリー気味に否定するのに、ラブも頷き、

「うん、私もそう思う・・・でも、くるみの目の前で起こつた事らしくて・・・のぞみちゃんの話では、せつな達は、誰かに操られているんじゃないかって事だけ・・・」

ラブの話聞いた一同の脳裏に、ノーザが真っ先に思いつく、ノーザならばあり得ない話ではないと・・・思わず沈黙し、皆が沈痛な面持ちになる。ウエスターは悔しそうな表情を浮かべ、拳を握ると、

「クッ、あの時イースを助ける事が出来れば、プリキユア達にもこんな苦しみを与えずに済んだものを・・・」

ウエスターが心の底から悔しがるのを、サウラーがフォローし、

「あの状況では仕方あるまい・・・イースのお陰で、僕達はこうして無事だったのだからな！せめて、プリキユア達に伝えられただけでも、不幸中の幸いと思うべきだろう」

そうは言いながらも、サウラーもウエスター同様、目の前でみすみすつなを浚われた事を悔やんでいるのは明かであった。二人のそんな姿を、悲しげに見つめたラブ達だったが、

「美希たん、ブツキー、咲ちゃんと舞ちゃんも、ナッツハウスに向かつてるそうだから、私達も合流してみよう！ミルクからもつと詳しい事聞きたいしね！」

「そうね、ここであれこれ考えてもしようがないわね・・・行きましよう!!」

「うん、私も良いよ！」

三人は頷き、一緒に行こうとするウエスターとサウラーを宥め、ラブ達はレミに二人の事を頼むと、ナッツハウスへと向かった・・・

## 2、口論

5月1日、昼過ぎに咲と舞はナッツハウスに到着した。

出迎えたのぞみ達の表情が冴えないのを見て、咲と舞は顔を見合わせ不思議そうにする。



「のぞみちゃん、何かあったの？何か浮かない顔してるけど？」

「私達で良ければ話してみても、私と咲に出来る事があるなら、力になるから！」

相談に来た筈だったが、逆にのぞみ達の力になるうとする咲と舞の言葉を聞いたのぞみは、りん、うららと顔を見合わせ頷き合うと、意を決し、満と薫の事を話し始めた。

「二人共……驚かないで聞いて欲しいの！さつき、ミルクがナッツハウスの前で倒れて居たの……ミルクによれば、パルミエ王国が襲われて、ココ、ナッツ、シロップが浚われたそうなの！しかも、浚ったのが……満ちゃん、薫ちゃん、せつなちゃんだって言うの!!」

のぞみの言葉を聞いた咲と舞に衝撃が走る。一昨日まで一緒に遊んでいた満と薫が、よりによって、大切な仲間のココ達を浚う何て信じられなかったし、信じたくは無かった……

「嘘……でしょう!?!どうして満や薫、せつなが、何でパルミエ王国を襲わなきゃいけないのよ?」

少し癩癩を起こしながら、咲がのぞみ達に食って掛かるのを舞が諭す。咲も言い過ぎたかと思いい言葉を止めるも、その表情は険しかった。咲の気持ちはのぞみにも理解出来、なるべく刺激しないように再び話し始める。

「私達も、ミルクに聞いたただだから……私達だって信じられないよ!でも、ミルクの

目の前で起こった事らしいし……こまちさんは、仮に本当だとしたら、三人は操られているんじゃないかって事だけど……」

三人が操られているという言葉聞き、咲と舞は顔を見合わせハツとし、今朝の事を思い出す。倒した筈のキントレスキー、ミズ・シタターレと出会った事を……

「ここに来る前、私達は家の前で、嘗て私達が倒した筈の敵を見掛けたの！29日には私達満と薫と一緒にだつたし、その時は変わった様子も無かつたのを見ると……」

咲の話の途中で、フラツピとチョツピが妖精姿になつて皆の前に出て来る。会話を聞いていたフラツピとチョツピは、咲と舞に話した事を、のぞみ達にも知らせた方が良いと判断したようで、

「みんなに話があるラピー！」

「出来れば、かれんやこまち、ミルクも呼んで欲しいチョピ」

「あつ、うん……でも、ちよつと待つて！ラブちゃん達も、ナツツハウスに来てくれる事になつてから！みんな一緒にの方が良いでしょう？場合によつては、なぎささん……は居ないか、ほのかさん達や、つぼみちゃん達にも知らせるから!!」

のぞみ達は、雪城ほのか、月影ゆりが日本を離れている事を知らなかつた。この時点でもし、九条ひかりに電話をして今回の一件を報告していれば、この後に起こる最悪の事態を防げたかも知れなかつたのだが……

のぞみの言葉に頷くフラツピとチョツピ、

「多分、なぎさ達には、光の園のメツプル達が一緒に居るから、なぎさ達には知らせてくれると思うラピ！」

「つぼみ達には、後で知らせて欲しい、チョピ」

一同の心にモヤモヤ感を残しながら、時間は過ぎて行く・・・

ラブ達三人は、14時過ぎにナツツハウスに到着した。

久しぶりの再会ながら、皆に笑顔は見られなかった。のぞみは、ラブ達が着いた事をかれんに報告すると、ミルクも大分落ち着いたのか、美々野くるみの姿になって、かれん、こまちと共に一同の前に現われた。りんが立ち上がり、心配そうにくるみに声を掛ける。

「くるみ、大丈夫なの？」

「ええ、かれんやこまちが看病してくれたお陰でね！それより、私達に話があるんでしよう？」

くるみがフラツピ、チョツピに向かい声を掛けると、フラツピとチョツピが頷き、テーブルの上にチョココンと乗ると、一同の顔を見つめていき、

「みんなに闇について話すラピ、光の園のメツプル達も、同じ理由で緑の郷に来てる見ただけど・・・闇の根源の復活が近づいているラピ」

「闇の根源!？」

聞き慣れない言葉に、一同が思わず聞き返すと、

「そうチョピ、嘗てゴーヤーンも言ってたように、この宇宙は元々闇だったチョピ! その闇の名は、カオスと言ったそうチョピ」

フラツピとチョツピが語る、闇の根源カオス!

カオスこそは、あらゆる生命の大本とも言える存在で、闇の分身を数々作り出したその中には、ジャアキング、ゴーヤーンが居た・・・

だがカオスは、闇の分身を作っただけではなく、闇の中で大爆発を起こし、ビッグバーンを起こした!

その時、光が生まれた・・・

光の園のクイーンは、その時誕生した!!

カオスはビッグバーンを起こした後、長い沈黙に付き、その間、無法地帯と化した闇の中で、闇の分身達は争い続け、様々な勢力が生まれた。

クイーンはその争いを嘆き、せつかく芽吹いた光の命を消さぬよう、クイーンもまた、光に満ち溢れた世界を作り、沢山の生命を誕生させた。

その中には、フラツピ達の故郷、泉の郷のフィーリア王女や、様々な妖精達も居た。だが、闇はそんな光の発展を認めず、何度も戦いを仕掛けて来た。

クイーンは、非力な妖精達を守る戦士を、それぞれの妖精達に授けた・・・  
伝説の戦士、プリキュア!!

フラツピとチョツピの話聞いていた一同は、プリキュアの名前を聞き驚愕した。  
何故、それぞれの妖精の国にプリキュアの伝説があるのか？

フラツピ達もそれは知らなかった・・・

ファイリア王女は、闇の根源の復活が近い事を悟り、嘗てクイーンに聞かされた理由を、フラツピ達にも教えたのだった。

それぞれの妖精の国を守護する戦士、プリキュア!!

みんなが今まで出会わなかったのも、それぞれ違う国の守護プリキュアだったからだと伝える。

そして、砂漠の使徒の攻撃で、この世界は壊滅的被害を受け、プリキュア達は、それぞれの妖精国では無く、ただ純真に自分の住むこの世界を守りたいという思いが、垣根を越えて、プリキュア同士の絆で結びつけたと語る。

二人の妖精、フラツピ、チョツピの話聞いていた一同、咲、のぞみ、ラブは、所々で話に付いていけなくなり、それぞれ、舞、かれん、美希に時折注意されていた。

くるみも大人しく話を聞いていたのだが、プリキュアの絆と言う言葉にピクリと反応

すると、微妙な表情になり、思わずポツリと眩いてしまう。

「プリキュアの絆……それも、あの裏切り者達の所為で……」

くるみの言葉に敏感に反応し、咄嗟に咲とラブが顔色を変える。キツと睨むように二人はくるみを見ると、

「裏切り者って……まさか、満や薫、せつな達の事じゃないでしょうね!?!ちよつとくるみ!今の言葉取り消してよ!!」

「そうよ、せつな達を裏切り者呼ばわりする何て……許せない!!」

「裏切り者を、裏切り者と言って何が悪いのよ?」

咲、ラブ、くるみが言い合いを始め、険悪な雰囲気と一緒に流れ出す。のぞみ、うらら、祈里はどうしたものかとハラハラし、舞、かれん、りん、美希が三人を止めようとすると、三人の感情に益々火を付けてしまうだけであった。

激しく言い合いを始める三人、その時、ナッツハウスに電話が鳴り響く、こまちが電話に出ると、相手はつぼみからであった。久しぶりに聞くつぼみの声ではあったが……「まあ、つぼみさん!お久しぶり、こまちです。よく此処の電話番号が分りましたね? エツ?かれんの……そう、坂本さんに聞いたのね!それで、うん……エツ!?!そう、分ったわ!場所は?……加音町?確か、音楽で有名な街だったわよね?多分、かれんが知っていると思うわ!幸い、こっちにはみんなの他に、くるみさん、咲さん達、ラブさん達

も一緒だから、みんなで応援に行くわ!! 加音町で会いましょう!! つぼみさん、無理はなさらないでね?」

受話器を置いたこまちが、みんなの所に戻り、つぼみからの電話の内容を伝えると、さすがに口論をしていた三人も押し黙る。

自分達以外にも、また新たなプリキュアが生まれ、そして今、そのプリキュア達は石にされている現状を聞き、口論などしている場合では無い事は重々分かった。

だがラブは、まだ悔しかったのか、更にくるみに食って掛かろうとするのを見て、美希がラブの右頬に平手打ちをする。静まりかえる室内、ラブは殴られた頬を手で撫でながら、呆然として美希を見つめると、

「美希・・・どうして?」

「ラブ、いい加減にしなさい! 今は喧嘩をしている時じゃないの・・・闇の復活、それに、私達と同じプリキュアを助けに行かなきゃならないの!!」

美希は、ラブの両肩を掴みながら、ラブに、今自分達がすべき事を理解させようとする。ラブにもそれは分かっては居たが、大切な仲間であるせつなを、くるみに裏切り者呼ばわりされた事を、否定せずには居られなかった。

「そうだけど・・・でも、でも、私悔しいよ・・・せつなを・・・美希さんは悔しくないの?」

「悔しいわよ！せつなは、ラブだけじゃない！あたしや、ブツキーにとつても、大切な仲間よ!!でも、今は耐えなさい!!プリキュアとしてやるべき事をしましょう・・・そして、あたし達で必ずせつな達を助けましょう!!」

美希も悔しさを耐えている事が分かり、ラブは唇を噛みしめ頷く、それを見てかれんが後を引き取り、

「はい、喧嘩はそこまで！今私達は、プリキュアとして、新たな仲間を助けに行かなきゃならないんだから・・・幸い加音町なら、私も何度か行つた事もあるから、私が案内するわ!!」

つぼみ達への加勢で、加音町に出掛けようとした一同の前に、思わぬ人物が現われた・・・

### 3、不信と信頼

つぼみは、ナッツハウスへの電話を終えた後、ほのかの家に電話をするも、ほのかの祖母、雪城さなえから、ほのかは海外に出掛けていて留守だと聞く。ひかりに電話をして見るも、一步違いで、ひかりは夕方からの店の再開準備で出掛けてしまった所だった。「どうでしょう？咲さん達、のぞみさん達、ラブさん達は来てくれると言つてくれましたが、ゆりさんやなぎささん、ほのかさん、ひかりさんが居ないと、少し心細いですねえ



「？」

「なぐに、あたし達だけでも十分じゃん！これだけのプリキュアが揃えば、無敵だってえの!!」

つぼみの不安とは対照的に、自信満々のえりかであった。えりかの姿を見て、つぼみも元気を取り戻し、

「それもそうですね！お婆ちゃん、ゆりさんがもし戻って来たら、私達、加音町に仲間を助けに向かったと伝えて下さい！オリヴィエをお願いしますね!!オリヴィエ、ちゃんと大人しくしてるんですよ!!」

「分った！その代り、あの人達を必ず助けて上げてね!!」

つぼみ達を心から信頼し、手を振り続けるオリヴィエは、メロディ、リズムの事を頼むのであった。

「みんなも一緒だから、僕達だけでも何とかかなると思いますが、よろしくお伝え下さい！」

「じゃあ、お婆ちゃん、コツペ様、ちよつくら行ってくるね！オリヴィエ、メロディとりズムは、あたし達が必ず助けるから、大人しく待ってなよ!!」

「みんな、気をつけるのよ！」

つぼみ達三人は、薫子、コツペ、オリヴィエに見送られ、ハミイ、セイレーンを伴い、

加音町に向かい出掛けて行った。

「何であたしまで、戻らなきゃいけないの……トホホ」

「また一緒に戻れるニヤ!」

暫くゆっくり出来ると思っていたセイレーンは、道案内の為に、ハミイと共につぼみ達と一緒に戻る事になった。

ナッツハウスに人間姿のココが現われ、一同の姿を見付け安堵したのか、そのまま意識を失った。ソファに横にさせ看病するかれん、ココが無事に戻って来た事に安堵する一同、特にくるみは心から嬉しそうな表情を浮かべ、

「ココ様、ご無事で何よりです……」

くるみは涙を流し、ココの無事な姿を見て安心するも、ナッツとシロップと一緒に居ない事に、一抹の不安を覚える。そんなくるみを見かねたのか、

「もしかしたら、ナッツやシロップもこの辺に居るかも知れないから、私見てきますね!」

うららが外に出るが、うららは直ぐに戻って来て騒ぎ始める。

「た、大変です!外に……満さん、薫さん、せつなさんが居ます!!」

「何ですって!?!」

驚愕する一同が、ココの看病で残った、かれんとこまちを除いて外に飛び出してくと、そこには、うららの言う通り、腕組みしてこちらを見ている、せつな、満、薫の三人の姿があつた。三人の表情は、仲間達との再会を喜ぶでも無く、無表情であつた。

「お前達、さつき此処に逃げてきた男を渡して貰おうか！」

せつなが、無表情で皆に忠告すると、満は左手を、薫が右手を前に出し皆を威嚇する。ラブ達、咲達は、信じられないといった表情で三人を見つめる。くるみは三人を忌々しげに見ると、

「この裏切り者!!ココ様は絶対に渡さないから!!」

くるみがミルキーパレットを取り出すのを、のぞみが首を振りながら止める。のぞみの行為を見て、思わず感謝するラブは、

「ありがとう、のぞみちゃん!もう少し、もう少し待つて!必ずせつなを元に戻すから!!」

咲、舞、ラブ、美希、祈里が、みんなより前に出てせつな達にゆっくり近づいて行くと、

「満!」

「薫さん!!一体何があつたの?」

「せつな、どうしちゃつたの!?!私だよ・・・ラブだよ!!」

「せつな、美希よ！しつかりしなさい!!」

「せつなちゃん!!」

咲、舞、ラブ、美希、祈里が必死に呼びかけるも、三人は無表情さを崩さなかった。のぞみに止められたくるみは不満気に、

「のぞみ、どういうつもりよ？あいつらがココ様達を浚った事実は変わらないのよ？腕

づくでも、ナッツ様やシロップの居場所を吐かせてやりたいのに・・・」

「くるみ、今は咲ちゃんや、ラブちゃん達に任せよう!!」

「任せるって・・・じゃあ、失敗したらどうするのよ？その間にも、ナッツ様達がどんな目に遭っているのか分らないのよ！」

くるみはイライラしてるように、語気を荒げながら言葉を発する。のぞみは何かを決心したような表情で、満、薫、せつなを見つめると、

「その時は・・・力づくでも三人を止めるよ!!」

「のぞみ、あんた・・・」

のぞみの発言を聞き、りんは、のぞみは自分一人が悪者になる手段を取るのでは無いかと心配するのだった。

咲達、ラブ達は、元の彼女達に戻そうと必死に、満、薫、せつなに呼びかける。だが、三人は無表情さを崩さなかった。そこに、かれん、こまちに付き添われ、ココが姿を現

わす。

この瞬間、満、薫、せつな、ココの四人が、目配せした事に気付いた者は誰も居なかった……

「おまえ達、何をやってるんだ！もうそいつらは、昔のお前達の仲間じゃないんだぞ!!」手を掴んでいたかれんとこまちの手を振り解き、ココが叫び始める。何時もと違うココの様子に戸惑うのぞみ達とくるみだった。

「ココ様!」

「僕達のパルミエ王国を襲い、ナッツやシロップを僕の目の前で殺した奴らを、今更説得してどうしようというんだ!!」

ナッツやシロップが、せつな達に殺されたと聞き、一同に衝撃が走る。呆然としながらも、咲と舞は満と薫を、ラブ、美希、祈里は、せつなを信じ、再び説得しようと声を掛け続ける。

「満、薫……嘘、嘘だよね?そんな事してないよね?」

「満さん、薫さん、違うと言って!!!」

涙を流し、満、薫の言葉から違うと出てくるのを期待し続ける咲と舞、ラブは拳を握りしめると、

「せつな……!何とか言ってよ!!お願いだよ……このままじゃ、このままじゃ」

「ラブ・・・せつな、ラブの気持ちが分らないの!?!あたし達は、せつなを信じてる!!」  
「うん、せつなちゃんか・・・そんな事する筈無いもの、私、信じてる!!」

ラブ、美希、祈里も、涙を流しながら必死に諦めず、せつなに叫び続ける。そんな咲達、ラブ達を見たココは、苛立たしさを募らせると、

「クツ、のぞみ、お前達もあいつらと同じ考えなのか?」

「コ、ココ、落ち着いて!」

険しい表情を浮かべるココを、必死に宥めようとするのぞみ、ココはもう頼まないといった表情で、のぞみからソツポを向くと、くるみに視線を向ける。

「くるみ、お前は違うよな?お前はパルミエ王国の人間だ!さあ、くるみ、ナツツ達の敵を討ってくれ!ローズに変身して・・・あいつらを殺せ!!」

「コ、ココ様・・・」

殺気すら滲ませたココの言葉に、くるみとのぞみは戸惑いながら、思わず顔を見つめ合い困惑するのだった。

その時、不意に笑い声が辺りに響き渡る、満、薫、せつなからであった。

「そう、その男の言う通りよ!」

「私達が、妖精達を倒した・・・と言ったら」

「どうするのかしら?」

少女達を挑発するように言うと、三人が三方に散る。

「咲、舞、今は満達を止めるのが先ラピ」

「変身するチョピ」

「そんな、満と薫と戦えって言うの？」

「嫌・・・そんなの嫌よ!!」

否定する咲と舞に、フラツピとチョツピが叱咤激励する。プリキュアとは、戦うだけの戦士では無いと、光の力で闇の力を打ち負かして、三人を元に戻せるかも知れないと・・・

満や薫を元に戻せるかも知れないなら、涙を拭い、頷く二人を見て、二人の変身アイテムであるクリスタル・コミュニケーションに変化するフラツピとチョツピ、決意した咲と舞が、クリスタルを回し、手を取り合い叫ぶ、

「デュアル・スピリチュアル・パワー!!」

咲と舞がプリキュアへと姿を変えていく・・・

「花開け、大地に！」

「羽ばたけ、空に！」

「輝く金の花！キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼！キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

咲と舞がプリキュアに変身した事に、他の少女達から動揺が起こる。

「咲ちゃん、舞ちゃん・・・」

プリキュアに変身した咲と舞の姿を見て、のぞみは二人の心を思うと、胸が締め付けられるような気持ちになるのだった。

(ククク、良いぞ、それで良い!!)

その様子を、次元の狭間から覗いている二つの影に、皆が気付く事は無かった・・・満と薫は、のぞみ達目掛け衝撃派を放つも、ブルームとイーグレットがのぞみ達の前に現われ、バリアーを張り阻止する。満と薫は、まるで二人を誘い込むように、ナッツハウスから少し離れた場所に移動すると、ブルームとイーグレットが、満と薫を追いかける。最早説得は失敗したと判断したくるみは、

「もう、我慢出来ない! 私はあるつらと戦うわよ!! ナッツ様とシロップの敵を取るわ!!」  
くるみがせつな達を攻撃しようとするのに気付き、必死にのぞみ達に頼み込むラブだった。

「お願い、もう少し、もう少しだけ待って・・・お願い!!」

「もう・・・無理だよ・・・」

「エツ!?!」



覚悟を決めたのぞみの目に、強い意志が宿る。のぞみから強い意志を感じたラブに、激しい動揺が走る。

「くるみも、みんなも、手を出さないで！プリキュア！メタモルフオーゼ!!」

「「のぞみ!?!」」

「「のぞみさん!?!」」

止められたくるみ、りん、かれんやこまち、うららも、プリキュアへと変身したのぞみを見て驚愕する。

「そうだ、のぞみ！ナッツ達の敵を取ってくれ!!あいつらを八つ裂きにしろ!!」

「ココ、何て事を!?!」

「ココ、ココ様!?!」

かれんとくるみも、親友のナッツ達を殺された憎しみは理解出来るが、ココがこんな言葉を言うのが信じられなかった。

「大いなる、希望の力！キュアドリーム!!」

「あつ・・・ああ」

のぞみがキュアドリームに変身し、せつなを見つめる険しい視線を見て、ラブはどうしたらいいのか困惑するも、意を決し、険しい表情になると、

「美希たん、ブツキー・・・せつなを、お願い！何とか押さえておいて」

何かを決めたラブの表情を見た美希は不安気に、

「ラブ……一体何を？まさか!?……」

美希の脳裏に、最悪な出来事が過ぎる……

それを現わすように、ラブは変身アイテムであるリンクルンを手握りしめると、

「私は……せつなを信じる!!! チェインジ・プリキュア! ビートアップ!!!」

「ラブ、駄目ええ!」

「ラブちゃん……せつなちゃん、お願い正気に戻って!!!」

美希と祈里が、何とかせつなに抱きつき動きを止める。何故かせつなは何の抵抗も示さず、無表情のままであった。

「ピンクのハートは愛あるしるし! もぎたてフレッシュ、キュアピーチ!!」

変身を終えたピーチが、ドリームの前に降り立つと、ドリームとピーチ、見つめ合う

二人……

今、最悪な出来事が始ろうとしていた……

第十六話：不協和音

完

## 第十七話：プリキュアVSプリキュア（前編）

## 第十七話：プリキュアVSプリキュア（前編）

## 1、ドリームVSピーチ

せつな、満、薫の三人に、目の前でココ、ナッツ、シロップを浚われていたくるみを、もうこれ以上抑えるのは無理だと感じたのぞみは、満と薫を止める為、プリキュアになって二人の後を追った、ブルームとイーグレットの行動に刺激されたかのように、そして、他の者達にこれ以上嫌な気持ちにさせないように、自分がドリームとなって、力尽くでもせつなを止めようと決意した。

例え、それがラブ達に恨まれる事になろうとも……

一方のラブも、のぞみの強い意志を感じて居た……

もう、のぞみを止めるのは無理だと悟るも、せつな達が、ナッツやシロップを殺したとはとても信じられず、ラブもまた、強い意志でせつなを守り、自らの手でせつなを元に戻し、真相を明らかにしようと考えた。

互いに変身を終えた、キュアドリームとキュアピーチの二人が見つめ合う、お互いの気持ちは、痛い程理解出来る二人ではあったのだが……

「ピーチ、そこを退いて！私は・・・せつなを、止める!!」

「嫌、絶対に退かない！せつなは私の大切な仲間だもん!!きつと、きつと、元に戻して見せるから・・・ドリーム、せつなと戦うのは止めて!!」

ドリームは悲しげな表情を浮かべながら首を振り、ピーチの表情が険しくなる。

「ドリーム・・・どうしてもせつなと戦うと言うのなら・・・私が、せつなを守る!!!」

拳を握ったピーチが、意を決しドリーム目掛け突撃した。ピーチは苦悩の表情を浮かべながらも、先にドリームにパンチを繰り出すと、ドリームは何故か避けようとはせず、ピーチのパンチを受けて吹き飛ばされるものの、直ぐに体勢を整える。攻撃を避けないドリームの行動を見て、ピーチは瞬時にドリームの思いを理解した。

ドリームが続いてパンチを繰り出すと、ピーチも避けずドリームの攻撃を受け続ける。うららが、祈里が悲鳴を上げ、二人に戦いを止めるように叫ぶも、二人は戦いを続けた。

互いに攻撃を避けないドリームとピーチの姿に、くるみは呆然とし、

「あの二人・・・互いの攻撃も避けず、一体何を!？」

「分らない？あたしたちに知らしめてるのよ！プリキュア同士で戦う事の愚かしさを・・・お互いの身を持つてね！」

くるみの疑問に、のぞみとは、物心付いた頃から幼なじみのりんが答える。

(拳が・・・痛い・・・)

(殴られているのに・・・ドリームの哀しみが伝わってくる)

互いに相手の深い哀しみが伝わるも、やりきれない思いで戦い続けるドリームとピーチ、美希は目に涙を浮かべながら、押さえつけているせつなを諭すように、

「見なさい、せつな！あなたはあれを見て何とも思わないの？二人の気持ちが分らないの？お願いだから目を覚まして!!」

「せつなちゃん・・・お願い、元のせつなちゃんに戻って!!」

いたたまれない気持ちで二人の戦いを見守りながらも、必死でせつなを説得し続ける美希と祈里、悲しき戦いの姿に、かれんもこまちも沈痛な表情で、

「ドリーム、ピーチ・・・何て、何て哀しい戦いなの」

「でも、私達にはあの戦いを・・・止められないわ」

かれんとこまちも、憂いを帯びた表情で、哀しみの戦いを見守り続ける・・・

そんな二人の戦いを見ていたココは、イライラしたように、

「何をやっている、ドリーム!? 邪魔する者は一緒に殺してしまえ!! モタモタしやがって・・・くるみ、お前も行け!!」

「ココ、ココ・・・様!?!」

ココの過剰な反応に困惑するくるみ、くるみが知る限り、ココからそのような言葉が

漏れる筈は無かった。戸惑うくるみの背後で、邪悪な声が聞こえてくる。

「そうだ、お前も行くんだ！」

「エツ!？」

背後を振り向こうとしたくるみの背中に、激しい衝撃が加わると、くるみの瞳から光が消える。

「さあ、ミルキイローズとやらに変身して・・・あいつを殺すんだ!!」

「はい・・・」

くるみは、無表情のまま声の主に戻事を返すと、ミルキイパレットを取り出し、

「スカイローズ・トランスレイト！」

くるみがミルキイローズに変身した事に困惑するりん、かれん達、

「ローズ?どうしたの一体!？」

変身を遂げたローズの姿を見て、思わず戦いを中断し、ローズの方を見るドリームとピーチ、だがローズは無表情のまませつなに向かい突撃すると、側に居た美希、祈里を弾き飛ばし、

「ウオオオ!!」

雄叫びを上げたローズの必殺技、ミルキイローズ・ブリザードが、せつなに向かい炸裂する。

気付いたピーチは、ローズの攻撃からせつなを守ろうと走り出す。必死に手を伸ばして救おうとするピーチと、ローズの行動に呆然とするドリーム、

「ロ〜ズ！や、止めてええ〜!!せつなああ、逃げてえええ!!」

「キヤアアア〜」

ピーチの叫びも空しく、せつなは断末魔の悲鳴を上げ、青い薔薇の吹雪の中で消失した・・・

ピーチは、跡形もなく消え去ったせつなの姿に呆然とし、その場に膝から崩れ落ちた。せつなを消滅させたローズの姿を見て、ドリームは信じられないといった表情で、

「せ、せつなが・・・ローズ・・・何て事を!？」

「ウワアアアアア!せつなああ!!」

驚愕の表情を浮かべるドリーム、感情剥き出しで激しく泣き叫ぶピーチだったが、  
「ローズウウウウ!!」

怒りと悲しみが入り交じった、険しい表情を浮かべたピーチが顔を上げると、ローズを睨み付ける。だが、ローズはその場に無表情のまま立ち尽くしていた。

「せつな〜!!」

「せつなちゃん!!」

消滅したせつなの下に駆け寄ろうとした美希と祈里の背後で、先程くるみが聞いた声

とは別な邪悪な声が聞こえてくる。

「さあ、お前達も敵を取って来い!!」

「エツ？」

背後を振り向こうとした美希、祈里の背中にも、先程くるみが受けた衝撃が加えられる。美希と祈里の目からも光が消える・・・

「さあ、変身して敵を取って来い!!」

「はい!!」

背後の声の言う通り、美希と祈里は無表情のまま変身アイテム、リンクルンを取り出すと、

「チェインジ・プリキュア！ビートアップ!!」

無表情なままそれぞれキュアベリー、キュアパインに変身した二人が、ココ目掛け突撃する。ローズに続き、ベリーとパインまでプリキュアになった事に、号泣しながら、ローズに今にも襲いかかりそうな勢いだったピーチが、思わずたじろぎ二人を見ると、

「ベリー？パイン？二人共・・・一体!？」

美希と祈里が変身した事に困惑するピーチ、こまちとかれんもさつきから起こる出来事に困惑していた。

「二体、一体さつきから何が起きてるの？」



「二人共、どうしたの？や、止めなさい！」

二人からココを守ろうとした、かれんとこまちは吹き飛ばされる。無表情のベリーとパインがココの目の前に立つと、二人は感情を見せず、一方的にココを殴りつけた。

「ココオオ！ベリー！パイン！止めてえええ!!」

ドリームの絶叫も聞こえないかのように、ベリーとパインは、

「プリキュア！エスポワールシャワー!!」

「プリキュア！ヒーリングブレイザー!!」

ベリー、パインが互いの必殺技をココに向かって炸裂させる。今度はドリームが二人を止めようと必死にココの下に向かうも、二人の技はココを飲みこもうとしていた：：  
「駄目ええ!!ココオオ！逃げてええく!!」

ドリームの悲鳴空しく、ココは断末魔の悲鳴を上げ、光の中で消滅した。ローズ同様、何の感触もなさげにその場に佇むベリーとパイン、ワナワナ身体を震わせたかれんは、ベリーとパインを険しい顔で見ると、

「ふ、二人共・・・な、何て事を!!いくらあなた達でも・・・許せない!!」

かれんの側に集まるこまち、りん、うらら、四人の表情は険しかった。四人の背後で先程と同じ声が聞こえてくる。

「そうだ、憎め！お前達にもそいつらと同じように、氷の心を植え付けてやる!!」

不意を突かれて振り返った四人の前に、笑いながらフリーズン、フローズンの二人が、四人にも氷の心を植え付けた。

フリーズンとフローズン・・・

嘗てなぎささとのほか、ひかりが、ひかりが保護していた鳳凰を巡る攻防で戦った相手であった。ブラックとホワイトも、この二人によって氷の心を植え付けられ、互いに戦い合った事があつた強敵である・・・

「さあ、お前達も変身しろ！そして、殺し合うのだ!!」

「・・・はい」

瞳から光が消えた四人も、変身アイテム、キュアモを取り出すと、

「プリキュア！メタモルフオーゼ!!」

四人もそれぞれ、キュアルージュ、キュアレモネード、キュアミント、キュアアクアへと変身する。フリーズンとフローズンは愉快そうな表情を浮かべると、

「さあ、お前達！殺し合いを始めるのだ!!」

「互いに傷つけ、殺し合うがいい!!」

「・・・はい」

フリーズンとフローズンの合図を受け、雄叫びを上げ戦い合うプリキュア達、ローズとベリー、パインが、ルージュとレモネードが、アクアとミントがまるで互いを憎しみ

遭っているように戦い始める。

仲間通しで戦い始めた一同は、ドリームとピーチと違い、まるで互いを憎み合っているように攻撃し合っていた。

夢なら覚めて欲しかった・・・

ドリームとピーチ、二人の大切な者達は消滅し、そして、大切な仲間達は、仲間通しで争い続ける光景が信じられなかった。

呆然と、仲間通しが戦う姿を見たドリームとピーチが叫ぶ！

「みんな、止めてええ!!」

「ベリー！パイン！みんな!!・・・みんな、一体どうしちゃったの!?!」

二人の声も、仲間達には届かなかった・・・

まるで周りなど眼中に入らず、ローズは全力のパンチをベリー、パインに放つも、二人は辛くも躲し、背後の木々が吹き飛んだ。ルージュは、レモネードの首をへし折らるばかりに締め付けるも、レモネードがもがきながらも、ルージュを投げ飛ばす。親友同士のアクア、ミントも命令には逆らえず、アクアとミントが互いに空中にジャンプし、飛び蹴りを放つとも相殺し、両者弾き飛ばされる。

呆然としながらも、諦めず必死に仲間と呼びかけるドリームとピーチ、せつなとココを失った悲しみに、何時もの力を出せない二人の背後にも、フリーズン、フローズンが

現われる。険しい表情を浮かべたドリームがフローズンを、ピーチがフリーズンを相手にすると、

「お前達の仕業か〜!!」

ピーチの右パンチを、左手で受け止めニヤリとするフリーズン、

「みんなを元に戻してよ!!」

ドリームの右蹴りを、左手で受け止めニヤリとするフローズン、

「さあ、お前達も殺し合うがいい・・・」

二人の力の前に、ドリームとピーチは背中から、氷の心を植え付けられた!

心の中に沸き上がってくる、氷のように冷たい心、消えゆく意識の中で、二人は何とか抗おうとするも、身体は言う通りに動かなくなってきた。

（嫌・・・こんなの嫌だ・・・よ）

（もう・・・仲間同士で戦うのは・・・）

ドリームとピーチ、二人の瞳からも光が消え失せると、ドリームとピーチも無表情になり、その場に立ち続けていた・・・

「さあ、お前達も殺し合いを始めるが良い!!」

「はい・・・」

フリーズン、フローズンの命令を受け、先程とは違う本気の戦いを始めるドリームと

ピーチ、雄叫びを上げたピーチのパンチと、ドリーム蹴りが相打ちとなり、両者激しく吹き飛ばすも、まるでダメージを感じないかのようになり立ち上がり、攻撃を繰り返す両者、他のプリキュア達も同じであった・・・

プリキュア同士の戦いを、笑いながら見続けるフリーズン、フローズンは、

「さあ、あつちの二人にも氷の心を植え付けてやるか？」

「ああ、今頃あいつらが罠に嵌めている頃だろうからな」

フリーズン、フローズンが姿を消した後も、プリキュア達は、凄惨な戦いを繰り返して続けるのだった・・・

## 2、ブルームVSイーグレット

キュアブルームとキュアイーグレットは、元の霧生満、霧生薫に戻そうと、必死に二人に声を掛け続け、二人の攻撃からはバリアーを張って耐え続けて居た。

「お願いだから、元に戻って・・・満くっ!!」

「薫さん!!」

必死に元に戻そうとする二人とは対照的に、満と薫は、時折笑みさえ浮かべながら二人を攻撃していた。

「ブルーム、イーグレット、ナッツハウスの方から闇の気配が漂ってるラピ」

「嫌な感じがするチョコピ．．．」

「エツ!?でも、満や薫をこのままにしておけないよ．．．向こうにはみんなも居るし、きつと何とかしてくれるよ!!」

「だと良いラピ．．．」

不安げにするフラッピとチョコピだったが、今のブルームとイーグレットの頭の中は、満と薫を元に戻すことで一杯だった。だが、一向に状況が変わる気配は無く、二人に焦りが生じる。満と薫からの攻撃から、二人が距離を取って離れた時、二人の間に突然濃い霧が発生し、二人は動揺する。

「な、何?この霧は．．．大丈夫イーグレット!?」

「ええ、大丈夫よ!!」

イーグレットの声が聞こえ、ホッとするブルームに、イーグレットから声が掛かる。「ブルーム、このままでは埒があかないわ!プリキュアツインストリームスプラッシュを仕掛けてみましょう!」

「エツ、二人に攻撃を!?それは．．．」

「でも、このままじゃ埒があかないわ!精霊の力を浴びせれば、二人を元に戻せるかも．．．」

戸惑っていたブルームも少し考えると、イーグレットの案に同意する。

一方のイーグレットには、別の声が聞こえていた。

「イーグレット、このままじゃ意味が無いよ！プリキュアツインストリームスプラッシュを、二人に浴びせてみよう！きつと上手くいくよ!!」

「でも、上手くいくかしら・・・不安だわ!」

「大丈夫、きつと精霊が満と薫を導いてくれるよ!」

「そ、そうよね・・・分ったわ、ブルーム!!」

霧が晴れ、二人の姿を確認出来るようになる、イーグレットがブルームの側に近寄り、二人は頷き合うと、

「大地の精霊よ!」

「大空の精霊よ!」

「今、プリキュアと共に!」

「奇跡の力を解き放て!」

「プリキュア! ツイン・ストリーム・・・スプラッシュ!!」

精霊の力を借りた二人の必殺技、プリキュアツインストリーム・スプラッシュが、満と薫目掛け炸裂した。二人は、満と薫を元に戻せると信じてこの技を放ったのだが、精霊の光は満と薫を飲み込み、二人は断末魔の悲鳴を上げ消滅した・・・

満と薫を助ける所か、自分達の手で倒してしまった現実に、呆然とするブルームと

イーグレットの二人は、共に膝を付き地面に崩れ落ちた・・・

「そんなあ・・・満と薫を救う所か・・・私達の手で」

「嫌・・・こんな信じられない・・・どうして!? どうして?」

「どうしてって、舞が精霊の力を借りればって・・・」

「それは咲の方から言ってきた事じゃない!」

互いに違う事を言い合う二人は、つい感情的になり、変身前の互いの名前で言い合いを始めてしまう。フラツピとチョツピは大慌てで二人を宥めながら、

「ま、待つラピ、これは少し変ラピ」

「そ、そうチョピ、二人とも落ち着くチョピ」

フラツピもチョツピも、互いにブルーム、イーグレットが言っている通りの言葉を聞いている。つまり、二人は嘘を言っていないのである。

「何か嫌な感じがするラピ・・・」

「その通り!!」

フラツピの言葉を肯定するように、フリーズンが姿を現わしブルームの背後に立つと、

「だが、気付くのが遅かったな?」

フリーズンが姿を現わし、イーグレットの背後に立つ、不意を突かれた二人は、為す



術もなく、二人によって氷の心を植え付けられてしまった。

「そうだ、お前は悪くない．．．悪いのはイーグレットだ!!」

「そうだ、お前は悪くない．．．悪いのはブルームだ!!」

「さあ、目の前の敵を倒すのだ!!」

フリーズン、フローズンの言葉に、目の輝きを失った二人が、無表情のまま頷くと、

「はい．．．」

「ハアアア!!」

「イヤアア!!」

ブルームとイーグレットもまた、ドリームやピーチ達と同じように、戦いを始めてしまふのだった。ブルームの渾身のパンチを受け、イーグレットが吹き飛び、体勢を立て直したイーグレットが宙に飛び、上空からブルーム目掛け急降下したイーグレットは、蹴りを放ってブルームが吹き飛ば、木々にぶつかりながらも、直ぐに反撃に転じたブルームと、受けて立ったイーグレットが、激しく殴り合いを始める。

「ふ、二人共、止めるラピ!!」

「お願いチョピ．．．もう、もう止めてチョピ」

フラツピ、チョツピの言葉が耳に入らないのか、無表情の二人は、互いを憎むように攻撃を続けるのだった．．．

## 3、真相

プリキュアVSプリキュアという、光の戦士同士の戦いを、闇の拠点と化した加音町で、闇の軍勢が眺める。その一角より一層の深い闇の中で、その戦いを見続けさせられる者達が居た……

闇の牢獄のような場所に囚われていたのは、満、薫、せつな、そして彼女達とは別な檻に捕らえられた妖精達、ココ、ナッツ、シロップ、ムーブ、フープ、そして、スウィーツ王国から連れ渡された、タルトやシフォンもその中に居た。せつな、満、薫の闇の檻の周りには、何故か等身大程の鏡が三つ立てられて居た。

せつな、満、薫の三人は、沈痛な表情を浮かべながら、大切な仲間達が、仲間同士で戦い合う姿を見せつけられ、涙ぐんでいた……

「ああ、もう、もう止めてええ！みんな……私達のせいで」

涙を流しドリームとピーチ、ローズとベリー、パイン、ルージュとレモネード、アクアとミントの戦いを見せつけられるせつなは、時折見ていられないとばかりに顔を覆い、目を背けた。満と薫も同じような思いを抱いていた……

「止めて、咲！舞！……二人の戦う姿何て、見たくない……」

「みんなを元に戻しなさい!!」

満が悲鳴を上げ、薫が檻の側に居る、キントレスキー、ミズ・シタターレに訴え掛ける。キントレスキーとミズ・シタターレは、思わず顔を見合わせると、

「それは出来んな！だが、お前達が言う事も理解出来る！私とて、このような場面を見せられるよりは、自らプリキュア達と戦いたいからな!!」

「そうね、あたくしもどうせなら、あの小生意気なブルームは、このあたくしの手で倒したいんだけど・・・そうもいかないのよねえ？」

「うむ、甦った我らは、あのお方に逆らう訳にはいかぬからな・・・」

キントレスキー、ミズ・シタターレの二人も、このやり方を気に入ってはいないようであったが、彼ら二人を甦らせた人物に逆らう事を、半ば恐れているようだった。そんな二人とは対照的に、プリキュア同士が戦う姿を、心底愉快そうに眺めている者が居た・・・

ノーザである！

ノーザは、せつなを見て微笑みながら、

「そう!?!私はこのくらいの好きよ!!どうかしら、イース?かつての仲間が殺し合う姿は?ワクワクしてこない?」

「ノ〜ザアア!!」

ノーザの挑発に、拳を震わせるせつなだった・・・

悔しい・・・

みんなを助けない・・・

だが、捕らわれているせつなは、闇の結界の加護を受けた牢獄の中で、アカルンを使えず途方に暮れる。

「どう、私の力も役にたったでしょう？闇の力は偉大よねえ・・・嘗て私が苦勞して得た鏡の国のクリスタルの力を、こうもあつさり具現化出来る何てね。そして、前にその妖精の人型時の姿をコピーしたのも役だったように幸いだわ」

「そうね、シャドウ！あなたのこの力と闇の力で、ここに居る三人のクローンを作り上げ、ハデーニヤ達と共にパルミエ王国を襲わせ、わざとミルキイローズとやらを見逃し、プリキュア同士の絆を崩壊させ、弱まった所で倒すつもりだったけれど、フリーズン、フローズンが、良い余興を思い付いてくれたわ!!もつとも、本来はそこに居る本物の三人を、闇の軍勢に引き入れる筈が、光に守られたこの娘達を従わすのは、容易では無かったからの苦肉の策だったけど」

ノーザが呼んだシャドウとは、嘗てプリキュア5が、鏡の国で戦った相手である。5人のプリキュアのデータを元に、5人以上の力を得たダークプリキュア達を作り出したのも、シャドウであった・・・

「あの人、皆さん・・・お茶が入りましたけど?」

そこに、間の抜けた声で、お茶を入れた作業着姿の人物が入ってくる。その姿を見たココ達が驚きの声を上げる。何度も戦い合った事があるその顔を・・・

「お前は、エターナルの・・・！何で此処に居るココ？」

「あれえ!!お前達こそ何で此処に？」

ブンビー・・・

嘗て、ナイトメア、エターナルに所属し、プリキュア5やミルキーローズと戦った敵だったが、エターナル館長の非情な姿を見て改心し、石にされたプリキュア5の居場所、ローズとシロップを案内して、彼女達を救う切っ掛けを作り和解、その後、オフイスビルの屋上の掘っ建て小屋に、ブンビーカーパニーを創設、カワリーノに似た小生意気な部下と二人で、会社を盛り立てて居た筈であったのだが・・・

「下っ端が、何を騒いでいるの!？」

（おお、怖・・・まるでアナコンデイさん見たいな人だなあ？）

ノーザの人睨みを受け、思わずエターナルに居た頃の上司、アナコンデイを思い出すブンビーだったが、闇の集団に睨まれ、思わず後退りしてココ達の檻の側に来ると、

「君達、私の立場も考えてくれるかな？折角上手く行きかけてた会社から、むりやり連れて来られたかと思ったら、また雑用やらされてる私が、君達と知り合いだと知れたら・・・

ああ、恐ろしい」

「頼むココ・・・ココ達やせつな達を、此処から出して欲しいココ」

小声で会話し合うココとブンビーだが、ココの頼みを聞いて、一応辺りを見回すと、そこには、キントレスキー、ミズ・シタターレ、ノーザ、シャドウの他に、クラインと更に深い闇の中に、もう一人居るようにブンビーには見えた。

「いやいや、無理無理、絶対無理、こっちの命が幾つあつても無理だつてば!!」

即座に首を振り拒否するブンビーに、ココはしよんぼりするが諦めず、

「出してくれたら、きつとお礼するココ!」

「そうナツ、ナツツも約束するナツ!」

ナツツも加わり、ブンビーに必死に頼み込む、ブンビーは迷いながらも、

「いや、そう言われてもねえ・・・」

交渉が難航しているのを見かねたタルトが、三人の会話に加わってくると、

「見た所、あんさんは商売人見たいやなあ・・・どうやる? わいらをここから出してくれたら、あんさんの商売に協力したる!」

「協力? 具体的に言う?!」

「せやなあ、わいは曲芸が出来るし、ココやナツツ、シロップは、イケメンの人間に化けるさかい、女性達の心をハートキャッチ出来るやろう・・・そうや! きつとわいらを助けてくれたと分つたら、プリキュアはん達も、きつとあんさんに力を貸してくれる

わあ!!」

タルトの言葉に、興味深げになったブンビーが身を乗り出し、

「プリキュアが・・・ねえ?」

「そーや! もうそれは、ウツフ〜ンのアツハ〜ンも何でもOKで、男性陣を悩殺KO間違いなしやでえ!!」

「ええ!? ウツフ〜ンやアツハ〜ンもありなの?」

こういう交渉事には、天性の才能を持っているタルトだったが、どんどんエスカレートしていくタルトの暴走に、ココとナッツは呆れるのであった。交渉成立したのか、ブンビーとタルトが握手を交わす、ココとナッツは顔を見合わせると、

「こんな事、のぞみ達にばれたら・・・」

「どんな目に遭わされるか、分からないナツ」

思わず溜息を付くココとナッツであった・・・

「じゃあ、交渉成立と言うことで・・・でも、もうちよつと待つてくれる? 今直ぐつて分けには・・・」

状況が状況なので、ココ達も手筈はブンビーに任せた・・・

だが、そんな現状を嘲笑うかのように、プリキュア達は戦い続ける・・・

第十七話：プリキュアVSプリキュア（前編）

完



## 第十八話：プリキュアVSプリキュア（後編）

## 第十八話：プリキュアVSプリキュア（後編）

1、VSピーサード、ゲキドラゴ

ナツツハウスの前で戦い続けるプリキュア達、拳と拳が、蹴りと蹴りが、互いの身体を痛めつけていった。その姿を笑いながら見続けるフリーズンとフローズンに、闇の中から指令が下る・・・

「フリーズン、フローズン、良い余興を見せてくれた！今、愚かにもこちらに向かっているプリキュア共が居るようだ。そこで、やつらにこの姿を見せつけてやりたいのだが・・・どうだ？こ奴らを、我ら闇の本拠地に連れて来ては？お前達が植え付けた氷の心に、更に闇の力を加えればより一層、プリキュア共の最期と、我ら闇の根源、カオス様の復活に華を添えるというもの」

「なるほど、それも一興ですな！」

「分かりました！こ奴らをあなた様の元に連れ帰ります！」

フリーズン、フローズンの背後から闇が広がると、闇は、戦い続けるプリキュア達を

飲み込み徐々に消えていった・・・

九条ひかりは妙な胸騒ぎを感じ、店の手伝い所では無くなっていた。

（何だろう!?何か、何か嫌な予感がする・・・）

ひかりの心を不安が蝕んでいく・・・

一体何が起こっているのだろうか？・・・

呆然として、動きの止まったひかりを見たアカネは首を捻り、

「どうしたの、ひかり？さっきからポーとしちゃってき・・・何か顔色も悪いし！今日はもういいから、早めに帰って良いよ!!」

従姉妹？の藤田アカネの言葉に素直に従い、先に家路に向かうひかりに、ポルン、ポルンが騒ぎ始める。

「ひかり、嫌な気配が広まってるポポ」

「怖いルル」

捕らえたプリキュア達を得た闇は、力を増し、加音町から闇が全世界に向けて広がって行く。闇に飲み込まれた街では、人々や生き物が眠りに付き、光は一切消え失せていった・・・

（これは・・・嫌な予感が・・・当たってしまったの？）

ひかりは家路に向かわず、闇の気配が強く漂う場所に向かうのだが、ひかりの目の前に立ち塞がる影があった。思わずたじろぐひかりだったが、

「誰!?そこを退いて下さい!私、急いでいるんです!!」

「仲間のプリキュアの所か?それとも、我らが支配する闇の所か?もつとも、両方同じ場所だがな・・・貴様がシャイニールミナスだな?我が名はイルクーボ!お前をこのまますんなり闇の拠点に通す訳には行かないな!!」

イルクーボ・・・

嘗てなぎさとほのかが戦ったダークファイブ最強の戦士で、ブラックとホワイトは、彼の前では為す術もなくやられた強敵である。

「ひかり・・・変身するポポ」

ポルンの言葉に領き、ひかりは変身アイテム、タッチコミュニケーションに手をかざして叫ぶ、  
「ルミナス!シャイニングストーリーム!!」

「輝く命シャイニールミナス!光の心と光の意志、全てを一つにする為に!!」

変身したルミナスを見て、イルクーボは、ルミナスから放たれる光の力を強く感じた。

(これが噂に聞くシャイニールミナスか?あなどれんな・・・)

ルミナスもまた、イルクーボから放たれる、圧倒的な威圧感を感じたじろぐも、

(こんな所でモタモタしてられない・・・みんなもきつと向かっている筈!みんなの所

に行かなきゃ!!」

ルミナスとイルクローボ、睨み合いが続いた・・・

雲の園に居た鳳凰は、ルミナスの危機を感知したのか、突然雄叫びを上げ羽ばたき、何処かに飛び去った。

「長老、鳳凰はどうしたのでしょうか？」

「さあおう・・・虹の園に広がる、邪悪な気配を察知したのかも知れんのう」

雲の園の住人で、ムササビ姿の妖精と、雲の園の長老は、鳳凰の飛び去った方角を心配そうに見つめていた・・・

一方、加音町に着いた花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつきだったが、邪悪な気配が強くなった事を、妖精達は敏感に感じ取り、三人に注意を促す。

「みんな、気をつけるですよ！」

シプレの言葉に三人は頷き、用心深く、更に闇に覆われた加音町の中を進んで行くと、ハミイが何かに気付き、突然走り出すと、墓標のように佇む二つの物に縋りつき、叫び続けた。

「メロディ、リズム、ハミイニヤ！プリキュア達を連れて来たニヤ!!きつと元に戻してあ

げるからニヤ!!」

縫り付いて叫ぶハミイに近づいた三人は、これが石にされたメロディとリズムだと知り驚く、

「こ、これが石にされたお二人の姿!?・・・酷い、酷すぎます!!」

「僕達が、きつと、きつと元に戻して上げるからね!!」

つぼみ、いつきが、石化したメロディ、リズムに約束を交わす。

「何かが近づいてくるですっ!」

コフレの言葉を聞き頷く三人、ハミイとセイレーンは、前にこの感じを感じていた。メロディとリズムを石にした張本人であるピーサード、奴が近づいていると・・・

「セ、セイレーン・・・」

「ああ、これはあの時の・・・あんた達、せいぜい気をつける事ね!これから現われる敵が、プリキュア達を石にした奴だから!!」

セイレーンは、思わずつぼみ達三人に忠告し、つぼみは微笑みながら感謝すると、  
「ご忠告ありがとうございます!敵が近づいていますが、他の皆さんは間に合わなかつたようですね?」

「まあ、しゃあないね!あたしらの実力、見せつけてやろうじゃん!!」

「えりかは、こんな時でもえりからしいや!」

三人の前にゆっくり、ゆっくり、近づいて来る相手、ハミィやセイレーンが言う通り、それはピーサードであった。

「ン？お前はあの時の妖精か!? そうか、仲間を助けに、助っ人を連れて戻って来た訳か・・・もつとも、そんな弱そうな助っ人を連れてきた所で、意味は無いがな!!」

ピーサードは、つぼみとえりかを見て鼻で笑うと、思わず笑われた事に抗議するつぼみとえりかであった。

「アツタマ来た! つぼみ、いつき、行くよ!!」

「はい!」

「分かった!!」

三人がココロパフュームを取り出すと、三匹の妖精達がプリキュアの種を三人に与える。

「プリキュア! オープンマイハート!!」

「大地に咲く、一輪の花、キュアプロッサム!」

「海風に揺れる一輪の花、キュアマリン!」

「陽の光浴びる一輪の花、キュアサンシャイン!」

「ハートキャッチプリキュア!!」

三人が名乗りを上げてポーズを決め、ピーサードと対峙する。プリキュアを名乗る三

人に、ピーソードは不愉快そうにしていきなり衝撃派を放つも、三人は三方に散り攻撃を回避した。

「全く、伝説の戦士と聞くわりには、やけにプリキュアが居るものだな．．．目障りだ！  
貴様らも始末してやる!!」

「やれるものならやってみな！あたしらは、そうそう簡単にはやられないからさ!! たあ  
!!」

マリンが大きくジャンプし、マリンダイブで降下しながら両足で蹴りを放ちピーサー  
ドに攻撃するのを、ピーソードは身を翻し避ける、その背後からブロッサムが、ブロッ  
サムシユートを放ち、何発かの光弾をピーソードに当てる。大きくジャンプしたピー  
ソードが、ブロッサム目掛け衝撃派を放つが、サンシャインがサンフラワー・イージス  
で攻撃を防ぐ、

「なるほど、少しはやるようだが．．．」

「ピーソード、苦戦してるウガ!?! 手伝う．．．ウガ」

「ゲキドラゴか? 余計な手出しは無用!」

ピーソードの助っ人にもう一名現われる。ブロッサムとサンシャインは辺りを見渡  
すが、それらしき人影は見当たらなかった。

「何、新手? 一体何処に!?!」

キョロキョロするマリンのうしろの石像らしき物体が動き出し、変顔になって大慌てでマリんに知らせようとするブロッサムは、

「マリン、後ろ、後ろですー！」

「エツ？後ろ・・・わあ!!」

ブロッサムの忠告で後ろを振り向いたマリンは、石像とばかり思っていた巨大な物体が、動き出した事に思わず驚くのだった。

まるで、体操選手が着ているような、白い衣装を着たモヒカン刈りの大男、その風貌から、とても頭が良さそうには見えないが、パワーファイターなのは目に見えて分かる。ゲキドラーゴもまた、ピーサードの後に、なぎさとほのかと戦った何処か憎めない強敵だった。

新手の出現に、思わず石像化したメロディとリズムの背後に隠れる妖精達、

「あああ、また何か来ちゃったわねえ・・・どこか間抜けそうだけどさ」

セイレーンは、ゲキドラーゴの容姿を見て思わず呟く、ゲキドラーゴは、自慢の筋肉をプリキュア達に見せつけ唾然とさせる。

「何、このゴツイの？ちよつと、あんた！か弱い女の子を背後から脅かす何て最低だよ!! 今、あいつと先に戦ってるんだからさ、邪魔しないでよね!!あんたまで戦ったら、石にされた仲間が壊れちゃうでしょうが!!あんたも戦うんだったら、仲間の石を安全な場所



に移動させるか、元に戻してからにしてよね!!」  
「ウガ?」

膨れっ面をしたマリんに注意され、思わず首を捻り考え込むゲキドラーゴだったが、暫くすると領き、妖精達が隠れていた石にされたメロデイ、リズムを抱え安全な場所まで移動させると、ご丁寧に、二人の為にバリケードまで作るのだった。

「これで、俺も戦って良いか?」

「へ!? ああ・・・良いけどさ・・・何か調子狂っちゃうなあ?」

何処か憎めないゲキドラーゴの行為に、すっかり調子を崩すマリンだった。

「何か、以外に素直な方ですねえ?」

「素直と言うか・・・何と言うか・・・でも、これならメロデイやリズムの事を気に掛けるながら戦わなくて済むね!」

ブロッサムとサンシャインは頷くと、

「マリリン、その方のお相手はお任せします! こっちは私達が引き受けました!!」

「えっ!? あたしがこいつと戦うの?・・・まあ、良いけどさ!」

ブツブツ言いながらも承諾するマリんにクスリと笑い、ブロッサムとサンシャインが再びピーソードと対峙する。

「ゲキドラーゴの奴、俺の応援に来たのか、邪魔をしにきたのか・・・全く相変わらず何

処か抜けてる奴だな！まあ、いい……貴様ら、この俺に勝てると思うなよ!!」

ピーソードが二人に突撃し、肉弾戦を仕掛けてくる。肉弾戦ではブロッサムが押され始めるものの、入れ替わったサンシャインが、今度はピーソードを押し返す。距離を取ったピーソードが、手に力を込めると強力なエネルギー弾を二人に向けて発射する。サンフラワー・イージズで攻撃を防ぐも、ひびが入り破られ、二人は爆風に吹き飛ばされ、壁に激突する。

「ブロッサム！サンシャイン！」

思わず余所見をしてしまったマリンは、ゲキドラゴの強烈なパンチを食らい吹き飛ばされる。

「クツ、まだです！私達は彼女達を救うんです！」

ヨロヨロ立ち上がるブロッサムに、ピーソードが言葉を掛ける。

「分からんなあ……石にされたそいつらと、知り合いでも無いのだろうか？自ら傷ついてまで庇う必要があるのか？」

「彼女達は、自らを犠牲にしてまで、オリヴィエを助けてくれました。プリキュアとして、同じ絆を持った彼女達を守るのは……当たり前です!!今度は、私達が彼女達を……絶対守って見せます!!」

ブロッサムの言葉を受け立ち上がるサンシャイン、そしてマリン、ブロッサムとサン

シャインが再びピーサードに攻撃を仕掛ける。突進した二人に、ピーサードが右拳を繰り出すも、二人は身を屈めて躲しながら、

「プリキュア！ダブルインパクト!!」

ブロッサムとサンシャインの合体技がピーサードに炸裂する。咽せながら弾き飛ばされるピーサード、一方のマリンも、ゲキドラーゴ相手に俊敏に動き回り攪乱したまでは良かったが、思わずマリンダイナマイトで、ゲキドラーゴが折角作ったバリケード事、ゲキドラーゴ、メロデイ、リズムの石像を吹き飛ばしてしまう。

「マリン、何やってるですっ!!」

「アツ、ごめん・・・つい!!」

吹き飛ばされながらもさっきのマリンの言葉を思い出し、思わずメロデイとリズムをキヤツチすると、逆さまながら静かに壁に立てかけるゲキドラーゴの行為を見て思わず感嘆の声をあげるマリン、

「オオツ！あんた、良いところあるじゃん!!」

「ウガ!?!」

何でマリンに感謝されたのか良く分からず、首を捻るゲキドラーゴであった。マリンの戦い方を見て、ブロッサムとサンシャインは目が点になりながらも、

「集まれ！ 花のパワー!!」

ブロッサム、サンシャインが、それぞれブロッサムタクト、シャイニータンバリンを取り出し、勝負に出る。

「集まれ、二つの花の力よ！プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

ブロッサムとサンシャインが、合体技のフォルテツシモを使い上昇する。ピンクと金色の合わさった光がピーサード目掛け炸裂する。ピーサードも反撃するものの弾き飛ばされ、地面に叩き落とされる。そのピーサード目掛け、フォルテツシモが貫き、ブロッサムとサンシャインが姿を現わすと、

「ハ〜トキャッチ!!」

二人の合図と共に爆発が起こり、二人はブロッサムタクト、シャイニータンバリンをクルクル回し、ピーサードを浄化する。

「こんな奴らに、この俺がああ・・・」

光に包まれピーサードは消滅した・・・

「痛え・・・あれ!?私、どうして逆さまに?」

「ちよつ、ちよつとメロディ、重いから退いてよ!」

慌ててスカートを押さえながら座り直す二人は、キョロキョロ辺りを見回すと、メロディとリズムに大喜びのハミイが抱きついてくる。

「メロディ！リズム！良かったニャ!!」

「ハミイ!? 私達・・・そうだ！私達あいつに負けて・・・」

「ええ・・・ハミイ、あの子は無事なの？」

目の前に現われたハミイを見て驚くメロディとリズム、混乱していた記憶が、徐々に繋がってくると、メロディとリズムは顔を見合わせ合い、

「大丈夫ニャ！セイレーンが助けに来てくれたお陰で、無事に逃げきれたニャ!!」

「セイレーンが!?!」

セイレーンがハミイ達を助けてくれたと聞き、思わず二人はセイレーンを見ると、一瞬照れたセイレーンはソツポを向きながら、

「フン、別に助けた訳じゃないわよ・・・偶々利害が一致しただけよ！ちなみに、今は休戦協定中だから、あたしに攻撃して来ないでよね!!」

セイレーンの言葉を聞き、苦笑するメロディとリズムだったが、ある疑問が頭を過ぎった。

「でも私達、どうして元に戻れたのかしら？」

「そうだよねえ・・・確かあいつに石にされたような？」

元に戻れた事が不思議でしょうがないリズムの言葉に、メロディも同意して頷くも、「プリキュアニャ！オリヴィエの知り合いのプリキュアが・・・助けに来てくれたニャ!!」

「エツ？プリキュアが!？」

メロディとリズムが、ハミイが指さす方向を見ると、マリンに合流したプロツサムとサンシャインが、今まさに、ゲキドラーゴとの戦いに終息を迎えようとする所だった。

「集まれ、二つの花の力よ！プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

今度はプロツサムとマリンが、フォルテツシモをしてピンクと青の光が上昇する。

「花よ、舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

サンシャインが、ゴールドフォルテバーストの力で、太陽のような光のゲートを空中に作り出すと、それ目掛けて突入するフォルテツシモ状態のプロツサムとマリン、二人の身体が金色に輝いた。

「プリキュア！シャイニング」

サンシャインが言葉を発し、

「フォルテツシモオオ!!!」

プロツサムとマリンが続くように叫ぶ！

三人の合体技、シャイニングフォルテツシモが、ゲキドラーゴ目掛け炸裂する。三人がタクトとタンバリンを回し、ゲキドラーゴもまた、ピーサード同様に浄化され消滅した。

「何かあいつは、悪い奴じゃ無さそうだったんだけどさ・・・」

「そうですね、誰かさんのせいで、危うくメロディとリズムまで助けそこなりそうになりましたもんね！」

「もう、ブロッサム、それは言いつこ無しでしょうが!!」

笑い合った三人が、元に戻ったメロディとリズムの側に近づいてくる。メロディとリズムは、憧れのプリキュアを見て目を輝かせるのだった・・・

「大丈夫ですか？立てますか?!」

ブロッサムがメロディに右手を差し伸べ、サンシャインがリズムに右手を差し出すと、顔を見つめ合ったメロディとリズムは、満面の笑みを浮かべながら、

「はい、ありがとうございます!!」

その手をしっかりと掴み立ち上がった。その光景を妖精達は嬉しそうに眺めるのだ。ただ一匹、セイレーンは興味が無さそうにしていたのだが・・・

一方、先輩として自慢気にしていたマリンドったが、メロディはマリンをジッと見つめると、

「へえ、プリキュアって、小学生でもなれるんだ?」

「な、しよ、小学生!?誰の事よ、誰の!」

メロディの言葉を聞き、頬を膨らませて不機嫌になるマリンド、

「えっ、あなたの事だけど?」

「あたしは中学生だ!!」

変顔になりながらメロディに文句を言うマリン、ブロッサムとサンシャイン、リズムが

「マ、マリン、落ち着いて下さい!」

「マリン、冷静になりなよ」

「メ、メロディも、先輩に対して・・・ちゃんと謝って!」

ブロッサムとサンシャイン、そしてリズムがお互いのパートナーを窘めるも、メロディは申し訳無さそうな表情を浮かべるも、

「ゴメン!・・・でも、しょうがないじゃん、小学生に見えたんだもん・・・」

マリンが更に文句を言おうとするのを、慌てて押さえるブロッサムとサンシャインだったが、闇は、この二人の光景を見逃しては居なかった・・・

## 2、マリンVSメロディ、リズム

海外に居るほのかの下にも、闇は広がりを見せていた。側に居た人々が次々に地面に倒れていく姿を見て、ほのかの表情が険しくなる。ミップルは、少し不安そうにほのかに話し掛け、

「ほのか、邪悪な気配が、虹の園中に広まっているミポ」



「じゃあこれは、ミツプルが言つてた、闇の根源と何か関係があるの?」

「それは分からないミポ!でも、その可能性は大いにあるミポ!ほのか:なぎさとメツプルの下に行つて欲しいミポ!」

「そ、そんな事言われたつて、無理よ!」

闇の広がりには世界を飲み込み、世界の都市機能は、嘗ての砂漠化の時のように麻痺していた。ほのかは、日本に戻りたくても戻れない状態であつた。

(一体、何が起きているの!?私も、なぎさも、今のままじや何の力にもなれない!パリに居るゆりも恐らく・・・ひかりさん!咲さん、舞さん、満さん、薫さん、のぞみさん

りんさん、うららさん、こまちさん、かれんさん、ラブさん、美希さん、祈里さん、つぼみさん、えりかさん、いつきさん・・・願わくわ、くるみさんやせつなさんが居てくれれば、尚更心強いけど・・・みんな、みんな頑張つて!!)

今のほのかには、仲間のプリキュアを信じるしか手段は無かつた。

だが、その時・・・

そして闇は、希望ヶ花市をも飲み込もうとしていた。植物園の周りに結界を張つたコツペのお陰で、植物園は無事であつたが、薫子に不安が過ぎる。

(これは・・・何か嫌な予感がするわ)

不安がる薫子の心に話し掛けてくる者が居た。薫子は、その聞き覚えのある声に驚き、思わず声を上げる。

「あなたは・・・デューン!？」

（そう、僕さ！キュアフラワー、君に一つ忠告して上げようと思ってね）

「忠告?」

（そう、世界が闇に覆われたのは、闇の救世主を名乗る者の仕業さ！彼は愚かにも、この僕にまで再び生を与えてやるから、我に従えと語り掛けた。勿論、僕は即座に断つたがね！我ら砂漠の使徒は、誇り高き種族、そのような戯れ言を聞き入れる者など居ない!! だが、闇はさまざまな場所に存在する。僕の邪魔をしたプリキュア達が、今まで倒した敵の中にも、奴の戯れ言を聞き入れた者が居るかも知れない！用心する事だね!!）

デューンの言葉を聞き、加音町に向かったつぼみ達の身を心配する薫子に不安が過ぎる。デューンは更に言葉を続けると、

（奴は、プリキュア達を捕らえ、互いに争わせる事で闇の力を増大させた。光の戦士が争い合う事で、今、闇の根源がこの地に引き寄せられている。奴は、闇の根源である力オスを降臨させ、再び全宇宙を闇に返そうとしているようだよ！さて、忠告はした・・・後は君達しだいさ!）

プリキュア達が捕らわれ、互いに争わされていると聞き、薫子の表情に哀しみが宿る。

だが薫子には、何故敵である自分に、デューンがその事を伝えるのか、真意が理解出来なかった。

「待って！何故私にその事を教えてくれたの？」

（フツ、見てみたくなつたのさ！嘗て僕に言った、キュアブロッサムという言葉の行く末をね！！光と闇が、本当に共存出来るのか・・・）

デューンは、それだけ薫子の心に語り終えると、存在が辺りから消えた。急に呆然とした薫子の様子を見て、コツペも、オリヴィエも心配そうに見つめる。我に返った薫子は、コツペを見つめると、

「コツペ、あなたに頼みたい事があるの・・・」

薫子からの言葉を聞いたコツペは、何処かにテレポートして消え失せた・・・

石化していたメロディとリズムが元に戻り、ブロッサム達は当初の目標を無事に果した。だが、自分達の住む街、加音町のあまりの変わりように、メロディも、リズムも、哀しげに街中を見渡すのだった。

「酷い、一体どうしてこんな目に・・・」

「私達にも、詳しい事は分らないんですが・・・とにかくもつと調べてみましょう！」  
ブロッサムの言葉に一同が頷き、闇の街と化した加音町を探索する。

一同がある場所に着いた時、妖精達が騒ぎ出す。

「みんな、この中から何か嫌な気配を感じるですつ」

「用心するですう」

シプレ、コフレの言葉を聞いたメロデイとリズムは、呆然としながら、

「ここ、此処は、私達の学校じゃない!？」

「ここ、この中に一体何があるっていうの?」

闇に包まれては居たが、自分達の通う学校を見間違える筈も無く、メロデイ、リズムの表情に戸惑いが浮かぶ、何故こんな事に!?!二人が今にも先走って中に入りそうな状態に気付いたプロツサムは、

「二人共、落ち着いて下さい! 皆さん、何が起こるか分かりません…：慎重に行きましょう!!」

プロツサムの言葉に頷く一同、メロデイとリズムがこの学校の生徒ということで、先頭を歩いてプロツサム達を案内する。慎重に歩くメロデイとリズムだったが、突然メロデイが叫び声を上げて転倒する。思わずビクリとして辺りを伺うプロツサム、サンシャイン、リズム、妖精達は互いに引っ付き狼狽していると、

「あつゴメン、ゴメン! あんまりメロデイがゆっくり歩いてるから、引っかけちゃった!!  
テヘ」

マリリンが自己申告して、みんなに謝ったのを受け、何だとホツとする一同に反し、立ち上がったメロデイが、マリリンに振り向くと、

「あんた、さっき私が小学生って言った事根に持って、わざとやったでしょう?」

「ハア!? そんな事する訳ないじゃん!」

「嘘!!」

マリリンに食って掛かるメロデイを見て、慌てて両者の間に入り宥めるブロッサム、

「メ、メロデイ、落ち着いて下さい! マリリンは、そんな事で根に持つタイプじゃありませんから! ほら、マリリンもちやんとメロデイに謝って下さい!!」

「ゴ、ゴメン・・・」

ブロッサムに間に入られ、メロデイも渋々納得し、再び歩き始める。校庭の方で激しく戦いあうような気配を感じた一同は、そちらの方に歩を進める。

「もしかしたら、のぞみさん達が先に着いていたのかも知れませんか?」

もしかしたら、のぞみ達が先に来いるのではと思うブロッサムに対し、サンシャインは首を捻ると、

「うーん、それはどうかなあ!? それだったら連絡してあつたんだから、誰かメロデイやリズムの側に居てくれてただろうし・・・」

「それもそうですね・・・じゃあ、誰が戦ってるんでしょう?」

サンシャインの言葉を受け、それもそうだと納得するブロッサム、

「もしかして、キュアミューズかも!？」

「ありえるわね!」

「「キュアミューズ!?!」」

メロディとリズムは、自分達を助けてくれる覆面の戦士、キュアミューズなのではと思うも、ブロッサム達は初めて聞く名前に首を捻った。大体の説明をメロディとリズムに聞いた一同は、確認する為更に歩を進めるが、一同は、闇のドームらしき物体の近くで、思わず立ち止まり呆然としてしまう。

「あ、あれは、プリキュアのみんな!?!何でみんなが、プリキュア同士で戦っているんですかあ?」

「一体どういう事?」

驚愕するブロッサムとサンシャイン、マリンは大声を出し、みんなに声を掛け止めさせようとする。だが、マリンの声など聞こえないように、戦い続ける一同だった・・・

「みんな、一体どうしちゃったのさ?」

闇のドームの中で、互いに争い続けるプリキュア達を見て困惑する三人と、シプレ、コフレ、ポプリの妖精達、セイレーンは思わず目を輝かせると、興味深そうに身を乗り出し、

「何々、プリキュア同士って仲悪いわけ!? そういえば、こいつらもよく喧嘩してるっけ？」

「メロディとリズムのは・・・痴話喧嘩ニヤー！」

セイレーンとハミイの言葉に、メロディは思わず変顔になりながら五月蠅いなどボヤクも、憧れていたプリキュア達の今の姿を見て、思わずメロディは落胆の声を上げてしまふ。それを聞いたマリリンが、目の色を変えてメロディに噛みつく、

「ちよつとあんた! みんなの事何も知らない癖に、何言つてんのよ!!」

「こんな姿見せられれば、しょうがないでしょう?」

再び言い合いになるマリリンとメロディに困惑し、それぞれのパートナー、ブロッサムとリズムが間に入って止めようとした時、メロディの様子がおかしくなる。

「メ、メロディ!? どうしたの?」

思わず心配して声を掛けるリズムを、メロディは突き飛ばし、メロディがマリリンに攻撃してくる。マリリンは、何すんのよと攻撃を躲し続けるも、メロディの様子は、前方で戦っているドリーム達のようなだった。

「お、おかしいよ、これは・・・み、みんな、気をつけてー!」

サンシャインが一同に忠告するも、マリリンの背後にフリーズンが現われ、氷の心を植え付けてしまふ。不意を突かれたマリリンの心に、氷の心が芽生えてくる・・・

「マ、マリンド!? しっかりしてください!!」

ブロッサムという言葉聞き、一瞬ブロッサムの方を見たマリンは、最後の自我を振り絞って、逃げてと眩くも、マリンの瞳からも光が消え失せるのだった。

「さあ、お前もあいつと戦うのだ!!」

「はい……」

無表情なマリンドが、メロディに怒濤の攻撃を開始する。マリンドの連続パンチを食らいメロディは吹き飛ばされ、起き上がりにマリンドの跳び蹴りを食らいよろめく、マリンドとメロディでは、今までの経験の差か、メロディは一方的にマリンドにやられていた。顔を真つ青にし、マリンドに痛めつけられるメロディの姿に、悲鳴を上げたリズムは、縋るような目でブロッサムとサンシャインを見つめると、

「メロディ!! ブロッサム、サンシャイン、マリンドを、マリンドを止めて下さい!!」

リズムに言われる迄もなく、必死にマリンドを止めようとする二人だったが、自我を失っているマリンドを止めるのは難しかった……

「マリンド! しっかりして下さい!!」

「クツ……みんなに何をしたの?」

ブロッサムは必死にマリンドを正気に返そうとするも、マリンドの自我が元に戻る事は無かった。マリンドに氷の心を植え付けたフリーズンを、険しい表情で問いただすサンシャ



インだったが、更に違う方向から声が掛かり、

「これでは話にならないなあ．．．お前、あいつの相棒なんだろう？ さあ、お前も行け!!」  
「エツ!!」

不意を突き、リズムの背後に現われたフローズンは、リズムにも氷の心を植え付けた！ 不意を突かれ、後手に回ったサンシャインとブロッサムは、

「しまった!!」

「リズム！ しつかりして下さい!!」

そんな声も届かず、リズムの瞳からも光が消え、メロディの隣に並ぶと、メロディと共に、マリんに攻撃を開始した。無表情のメロディ、リズムの攻撃は、バラバラのようだが、時折良いコンビネーションを見せ、マリんに攻撃をあてる事もあった。メロディとリズムが、コンビでマリンを攻撃する事で、ようやくマリんと戦いらしい戦いになった．．．

困惑したハミイは、メロディとリズムを必死に止めようとするのだが、

「メロディ、リズム、どうしたニヤ？ しつかりするニヤ!!」

「無駄よ！ よく分からないけど、そいつらも向こうのプリキュア達同様、あいつらに操られている見たい．．．やれやれ、これじゃお手上げね!! ハミイ、此処に居たら、あんたも巻き添え食うわよ!!」

逃げようとするセイレーンに抱きつき、一緒にプリキュア達と居るニヤと泣きつくハミイだったが、

「その方の言う通りです！シプレ、コフレ、ポプリ、あなた達も、少し離れていて下さい！！」

ブロッサムとサンシャインの表情が、いつにもまして深刻なのを見て、シプレ、コフレ、セイレーンは、嫌がるポプリとハミイを、強引に少し離れた場所に連れて行く。

それを見たブロッサムとサンシャインが、フリーズン、フローズンと対峙する。

「ほう、俺達と戦おうと言うのか？」

「最強のコンビである、この俺達と戦うと言うのか？」

「面白い!!!」

フリーズンとフローズンは、笑いながらブロッサムとサンシャインに攻撃を仕掛けるのだった……

### 3、嘲笑

闇は、九州熊本で合宿していた美墨なぎさの所にも広がっていた。練習の最中、急に倒れて眠ったようになる仲間達に戸惑うなぎさだった。

「一体、どうなってるのよ!?!こんなの、ありえなくいい!」

「なぎさ、邪悪な気配が漂ってるメポ！」

「エツ!!」

メツプルの忠告を聞き、辺りを見回すなぎさだが、ほのかの居ない今は、プリキュアになれない事に焦りが生じる。なぎさは不安そうな表情で、

「こんな所で敵に襲われても、ほのかの居ない今じゃ、プリキュアになれないし……」

「そうね、今襲われたら、一溜まりも無いわよね?」

「エツ!!」

思わず声が出た方を見たなぎさは、驚愕の声を上げる。それもその筈で、目の前には、海外に行った筈のほのかが立って居ただけだから……

ほのかが居る事に、呆気にとられていたなぎさが我に返ると、

「エツ? ほのか?! 海外に行ったんじゃないの?」

「そう……私は今海外に居るの? フーン、知らなかったわ」

ほのかの返事を聞くと、なぎさの表情が険しくなっていた。容姿こそほのかであったが、その中身は別人であるとなぎさは見破り、

「ち、違う……ほのかじゃない! ちよつとあんた、一体誰よ!? 何でほのかに化けてるのよ?」

ほのか……の姿をした何者かがニヤリと笑うと、正体を露わにする。その見知った

容姿を見ると、なぎさは指を指しながら驚愕し、

「あ、あんたは……ポイズニー!? 何であんたが?」

ポイズニー……

嘗てダークファイブの紅一点として、ゲキドラゴの次になぎさとほのかが戦った手で、ほのかと心の交流を持った、キリヤの姉でもある。紫色のボディースーツに黒いマント姿という、少し変わった格好で活動していた。

人に化けるのが得意で、その変装術には、なぎさとほのかも何度も騙された。しかし、何処か憎めない性格で、弟キリヤに、駅のホームで会いに来た時は、人間と同じ大きさの二足歩行した犬に化け、弟キリヤを啞然とさせたり、家族旅行に来ていたなぎさとほのかの後を追ひ、旅館のダンスに隠れたり、ポイ子と名乗って仲居に化けたりと、お茶目な性格をしていた。

「別にあたしは、あんたに会いに来る気は更々無かったんだけどお、どっちかと言えば、あんた達には恨みがあるのよねえ……けど、キリヤに頼まれちゃってさあ」

「エツ、キリヤくん!?!」

「そう、あの子は私達と違って、あんた達光の力に憧れ、闇の力を失った訳、その所為で、今回闇の力で甦る事は出来なかった! そのキリヤが、しつこくあたしの心に頼み込むのよ、虹の園の危機を、プリキュアに知らせてくれって……もちろんあたしも断ったん

「ただどねえ！そんな事したら、あたしの身がマジヤバじゃん？まつ、もう二度と会わない弟の最後の頼みくらいは、叶えてあげようとして来た訳だけど・・・そう、あなたの相棒は居ないんだ？とんだ無駄足だったわ・・・じゃあねえ！」

「あつ、ちよ、ちよつと待つて・・・お願い、もつと詳しく教えて？」

立ち去ろうとしたポイズニーを、慌てて引き留めるなぎさに、ポイズニーは口元に笑みを浮かべながら、

「そうね、折角来たんだし・・・で、お客様にお茶のお持てなしぐらい無いわけ？」

「うっ・・・は、はい、ただ今お持ち致しますので、あちらの部屋でお待ち下さい・・・つて何で私が！トホホ」

ポイズニーから情報を得る為、なぎさは変顔になりながら、渋々ポイズニーを合宿所の食堂に案内するのだった・・・

ブロッサムとサンシャインは、最強のコンビを自負するフリーズン、フローズンと対峙する。最強を名乗るだけあり、二人の連携はスムーズで、ブロッサムの攻撃も、サンシャインの攻撃も、共に有効打を放つには至らなかつた。連戦の疲れもあつてか、次第に押されるブロッサムとサンシャイン、

「サンシャイン、このままでは・・・」

「クツ、確かにまずいね・・・」

アイコンタクトで頷き合う二人は、

「集まれ！ 花のパワー!!」

ブロッサムタクト、シャイニータンバリンを取り出すと、

「花よ、輝け!!プリキュア!ピンクフォルテウェイブ!!」

「花よ、舞い踊れ!!プリキュア!ゴールドフォルテバースト!!」

ピンク色の花の形のエネルギー弾と、ひまわり形のエネルギー弾が、フリーズン、フ

ローズン目掛け炸裂する。

「ほう、中々の威力のようだな?」

「ああ、そうだな・・・だが、我らの敵では無い!!」

「我ら、最強のコンビの技を受けて見ろ!フリージング・・・ブリザード!!!」

フリーズン、ローズンの合体攻撃、フリージングブリザードが炸裂する。その威力は凄まじく、フォルテウェイブ、フォルテバーストを圧倒し、ブロッサム、サンシャインを吹き飛ばした。

「キヤアアア」

「ウワアア」

吹き飛ばされ激しく地面に叩き付けられた二人に、ゆっくり近づいて来るフリーズ

ン、フローズンの二人、何とか立ち上がろうとするブロッサムとサンシャインだったが、「さあ、お前達も仲間と戦うがいい!!」

無情にも、フリーズン、フローズンによつて、ブロッサムとサンシャインも氷の心を植え付けられてしまう・・・

ブロッサムとサンシャインも、氷の心を植え付けられ、二人もまた闇のドームの中に無表情のまま入ると、プリキュア同士の戦いに参加し、戦い始めた・・・

「ご覧下さい、バロム様！もはやプリキュアは、互いに仲間と殺し合う愚かな戦士、仲間

に殺されるのが先か、闇に身体を蝕まれ消滅するのが先か・・・」

「見物でございましょう?」

「ハハハハハハハ!!」

フリーズンとフローズンの嘲笑が辺りに響き渡った・・・  
妖精達は、言葉を発するのを我慢しながら、その目からは大粒の涙を零し続けた・・・  
闇のドームの中で、プリキュア同士の戦いは続く・・・

4、私は諦めない!!

美墨なぎさを見送ったポイズニーは、のんびりなぎさの合宿所でティータイムを満喫していた。

「不思議ねえ．．．プリキュアっていうのは、奇跡を可能にする力でもあるのかしらねえ？」

なぎさが去っていた方角を見ながら、紅茶を飲むポイズニー、  
「キリヤ．．．これで約束は守ってやったからね！さて．．．と、うくん、中々美味しいじゃない！虹の園も、中々捨てたもんじゃないわね．．．ん？」

寛ぐポイズニーの下に、時空が歪み、イルクーボが姿を現わした。ポイズニーはチラリと見ると、

「あくらら、見つかったちゃったみたいね．．．どうせ殺されるなら、知らない奴よりは、あんたの方がマシかしらねえ？」

「勘違いするな、別に俺は、お前を殺しに来た訳では無い．．．」  
「へえ．．．」

闇を裏切った末路を知っているポイズニーは、殺される覚悟を決めていたのだが、意外にもイルクーボは否定した。イルクーボは、ポイズニーが飲んでいる物に目を向けると、

「俺にも一杯貰おうか？」

「ハア!? 虹の園の飲み物飲む何て．．．あんたも変わったわねえ、イルクーボ？」

「俺も、貴様と同じだ．．．光も満更悪くは無いな！キリヤの気持ちだが、少しは分かった



ようだ……」

嘗て絶対的な主、ジャアクキングの下に使えた二人だったが、ポイズニーは弟キリヤや虹の園の文化に触れ、知らぬ間に感化されたようだった。一方のイルクーボも、ブラック、ホワイトのプリキュアや、キリヤ、そして、ルミナスと出会い、知らぬ内に何かに惹かれていた。

「光のクイーンの分身とも呼べる、シャイニールルミナスと会って理解したよ……キリヤが光の力に憧れたのも、今更だが少しは理解出来た……」

ルミナスと接触したイルクーボは、当初は命令通りルミナスを倒そうとしたのだが、ルミナスと接触している内に、光の存在に興味を持ち始める。イルクーボは、ルミナスに現状を教えてやり、ルミナスをそのまま行かせたのだった……

「あくらら、それじゃあ、あたしと一緒に、マジヤバじゃん?」

「ああ、どうせ一度は失った肉体だ、惜しくはない!!」

二人の危惧する通り、次元を引き裂き、白髪の老体、サラリーマン風の男、どこか地味な感じの女が姿を現わした。

「お前達、覚悟は出来ているな?」

「我々が出向いたのだ!」

「……………」

最後の女が何と言ったのか聞こえず、思わず聞き返す一同、再度何か言うものの、やはり何を言ってるのか聞こえず、イライラしたポイズニーが再度大声で聞き返す、

「ハア!? もっと大声で喋ってくれるう? 何言ってるんだか分からないわよ!!」

「だから、覚悟しろって言ってるんだろがああ!!!」

急にデカイ声を出され、思わず、カップを落として割ってしまうポイズニーとイルクーボ、そして、思わず怯む連れの二人、

「ま、まあいい……では、お前達の処刑を始めよう……」

三人が雄叫びを上げ変身を遂げた!

三人の名は、ベルゼイ、ジュナ、そして紅一点のレギーネ、嘗て、ジャアクキングの分身として仕えていたが、プリズムストーンを手に入れ三人は合体し、ジャアクキングに反旗を翻したが、最終的には吸収されてしまう。

最期まで、ジャアクキングの為に行動したポイズニーとイルクーボ、自らの為にジャアクキングに反旗を翻した三人、今度は互いが違う立場になるとは……

ポイズニーとイルクーボ、二人は何ら抵抗を見せず、闇と共に完全に消え失せた。だが消える直前、二人の顔は何処か満足気だった……

夜になり、ルミナスは、闇の拠点加音町に遂に到着した……

邪悪な気配が多数蠢く、不気味な街に・・・

妖精、ポルンとルルンは無性に怯え、恐怖するのだった・・・

（あの人の話では、みんなが此処に・・・みんな、待っていて下さい！なぎささん、ほのかさんの分まで、私が、私が・・・）

なぎさとほのか、二人の分まで頑張る決意のルミナスだが、闇は不気味に静まりかえっていた。

（これは、まるで私を誘き寄せているような!?）

「ひかり・・・あっちの方から何か嫌な感じがするポポ」

「ルルンも感じるルル」

涙目の妖精達の言葉に頷き、その方角に進むルミナスは、巨大な闇のドームの前に辿り着き驚愕する。ルミナスの姿を見付け、泣きながら縋り付いてくるシプレ、コフレ、ポプリ、そして、ルミナスが初めて会った泣き顔のハミイと、不思議そうな表情を浮かべるセイレーン、

「ルミナスう、みんなを、みんなを、助けてですっ!」

ルミナスは、妖精達に頷くと、妖精達に何処かに隠れているように伝えた。闇のドームの中で、互いに戦い合うプリキュアの仲間達を見て、険しい表情に変わった。

「こ、これは・・・あの人が言っていたのは、この事だったの?そんな・・・プリキュア

のみんなが、味方通しで戦っている何て・・・みなさん、しっかりして下さい！目を覚まして下さい！！」

ルミナスが皆に声を掛けるも、ドームの中でプリキュア達は戦い続ける。自らの身体が、闇に蝕まれ始めているのにも気付かずに・・・

「このままでは、みんなは・・・」

どうすればみんなを助けられるか思案するルミナスに、闇の中から声を掛ける者があつた。

「良く来たな、シャイニールミナスとやら・・・我が名はバロム！闇の救世主なり！！」

闇深くに覆われ、声の主の姿を確認出来ないものの、ルミナスは、今回の首謀者らしきバロムの出現に危機感を覚える。

「あなたがみんなを!? みんなを元に戻して!!」

「元に戻す? このような楽しき余興を、何故止めねばならぬ!? 見よ、光の戦士共の無様な姿を、我ら闇の軍勢を、幾度も闇に返してきたプリキュアの最期と共に、この地に我らが創造主を迎えて、全宇宙は再び闇に帰る時が来たのだ!!」

「そんな事は、させません!!」

必死の表情で、バロムの言葉を否定するルミナス、

「お前一人で、この軍勢に勝てると言うのか?」

バロムが指をパチリとならすと、ドームの周りに、歴代のプリキュア達が倒した敵達  
が現われる。ポイズニー、イルクーボを処刑し、舞い戻ったベルゼイ、ジュナ、レギー  
ネ、ナイトメアのアラクネア、ハデーニヤ、カワリーノ、ブラツデー、エターナルのス  
コルプ、ネバタコス、シビレッツタ、イソーギン、ヤドカーン、ムカーディア、そして、魔  
女、フリーズン、フローズン、サーロイン、シャドウが姿を現わす・・・

「貴様一人で、これだけの人数を相手に勝てるとは思えんがなあ？ お望みとあれば、ド  
ムの中に居るプリキュア共も、貴様の相手にさせてやるが・・・ハハハハ！」

バロムの言葉を受け、フリーズン、フローズンが頷き、プリキュア達の戦いを止めさ  
せると、ドーム内に居るプリキュア達全員が、無表情のままルミナスを見つめる。変わ  
り果てた仲間の姿を見たルミナスは、一同の身体が闇に蝕まれ、身体の一部が消えか  
けている箇所があるのに気付く、

（こ、この闇のドームを何とかしなければ・・・）

意を決したルミナスは、

「光の意思よ！ 私に勇気を！ 希望と力を！！」

ハーティエルバトンを発動させたルミナスは、

「ルミナス！ ハーティエル・アंकシヨン！！」

ハーティエルバトンが、闇のドームを貫き、闇を中和して収縮減少を一時止めた間に、

ルミナスは、プリキュア達が居るドーム内に突入する。

「ほう、自ら死を選ぶか？その闇のドームが収縮を完了した時、プリキュア達の肉体は消滅し、闇の一部と成り果てる。貴様もその死を選ぶか？シャイニールミナス!!」

「違う・・・私は、諦めない！みんなを必ず元に戻し、此処からみんなと出る為に、私はこの中に入った!!私は、私は、絶対に諦めない!!」

ルミナスの心に感応したのか、ハーティエルブローチエは凄まじい光の輝きを放つと、

「・・・ス、ルミナス!?!・・・」

「・・・し達は、一体何を?」

氷の心を植え付けられていたプリキュア達の心から、光の暖かさにより、氷の心が溶け始める。ドリーム達が、ピーチ達が、ブルーム達が、そして、プロッサム達、メロディ達も、自我を取り戻し始める。思わず動揺するフリーズンとフローズンは、

「な、何だと!?!」

「我らの氷の心を溶かしたのか？だが、まだ身体の自由は効くまい・・・貴様ら、ルミナスを先に殺せ!!」

自我を取り戻しつつあるものの、身体の自由はプリキュア達の意思に反し、ルミナスに攻撃を与えてしまう。

「キヤアア!」

攻撃されてもバリアーを張り続け、闇の収縮を止めようとするルミナス、

「ウウウウ・・・ウウウオオ!!!」

何かを振り切るように、雄叫びを上げたドリームの瞳に、光が完全に戻る。

「ルミナス・・・ありがとう!あなたの思い、私達に伝わったよ!!」

「もう、あんた達の思い通りにはならない!!もう、もう、プリキュア同士で戦うのは、絶  
対嫌・・・」

ピーチの瞳にも光が戻る、皆の瞳に光が戻った・・・

徐々に意識を取り戻していく仲間の姿に、思わずルミナスから笑みが溢れた。だが、  
ルミナスは敏感に仲間達の異変を感じ取っていた・・・

(みんな、どうしたんだろう?)

互いに距離を取り、視線を避けるドリーム達とピーチ達、ブルームとイーグレットの  
間に、微妙な距離感を感じ、思わずルミナスは戸惑うのだった・・・

「私達は、もうあんた達の思い通りには絶対にならない!!!」

ピーチの宣言と共に、16人のプリキュア達がフリーズン、フローズンを睨み付ける。  
その迫力に思わずたじろぐフリーズンとフローズンだったが、

「狼狽えるな!闇に蝕まれたプリキュアが、闇の意思に反し動く事など不可能!プリ

キュア同士で自滅させる事は敵わなかったが、所詮、闇に飲み込まれる運命は変わらんですよ!!フフフフ」

バロムはフリーズンとフローズンを窘め、自我を取り戻したプリキュア達を嘲笑う、バロムの言葉通り、思うように身体を動かせないプリキュア達に焦りが起こる。

「さあ、自分の身体を良く見て見ろ!!!」

バロムの言葉を受け、プリキュア達は自らの身体を調べ始めるが、

「な、何ですかこれは？手、手が、消えかけてます!？」

「そんな、足が……」

自らの身体が消失しかけているのを見て、プロツサムが、メロデイが驚愕し、他のプリキュア達も少しパニックを起こした。

「当然だ……貴様らの身体は、闇に蝕まれて居るのだからなあ？ジワジワと消え去る自分を眺めるが良い!!」

バロムの言葉を受け、闇の軍勢からプリキュア達を嘲笑し、罵る声が浴びせられる。

その時……

「花よ、輝け！プリキュア！シルバーフォルテウェイブ!!」

意表を突いた攻撃を、咄嗟に闇の中に居たバロムが強大なエネルギー波で相殺すると、



「何者だ!？」

バロムは、不快そうに攻撃した者を問い詰める。

「月光に冴える一輪の花、キュアムーンライト!!」

ムーンライトが姿を現わすと、ルミナスが、ブロッサム達が驚愕しながらも感嘆の声を上げる。

「ムーンライト!来てくれたのですね?でも、パリに居た筈では!?」

ルミナスの疑問に、ムーンライトが答え始める。

「ええ、日本に帰る手段を失った私だったけれど、薫子さんが、コツペ様を迎えに寄越してくれたの!それで、サラマンダー男爵と一緒に日本に戻って来たわ:サラマンダー男爵も、今回私達に協力してくれている。薫子さんとオリヴィエの側には、コツペ様と男爵が居てくれる。だから私は、みんなの加勢に来ただけれど:みんな、油断したよね?ルミナス、あなたの光の導きが、みんなを元に戻す切っ掛けを作ったのよ!」

ムーンライトは、口元に笑みを浮かべながら、ルミナスを称えるも、直ぐに表情を引き締め、

「ルミナス、時間を稼いで!此奴らは:私が倒す!!」

闇の軍勢を睨み付けるムーンライトだが、敵の強大な軍勢を前に、たった一人でどう戦うのか:.

第十八話：プリキュアVSプリキュア（後編）  
完

## 第十九話：姉と妹！

## 第十九話：姉と妹！

## 1、孤軍奮闘

闇の牢獄から、どうやってせつな達三人と、妖精達を助けるか思案し続けて居たブンビーだったが、闇に蝕まれたプリキュア達を知り、焦りが生じて居た……

（不味いぞ!?このままじゃプリキュア達は……しかし、何時の間にプリキュアはあんなに増えたんだろなあ?）

ブツブツ言いながら辺りを見回すブンビー、まだせつな達の牢の近くには、ノーザ、クライン、キントレスキー、ミズ・シタターレの姿があつた。これ以上の時間のロスは不味いと考えたブンビーは、最悪、実力行使に出るしか無いだろうと判断するも、

（でも、あいつら強そうだよなあ……だが、プリキュア達をこのままにも出来んだろう）  
意を決したブンビーが、せつな達の牢に近づこうとした時、ブンビーの肩に背後から手を置く者が居た。思わずドキツとし、恐る恐る引き攀つた笑みを浮かべながら振り返ったブンビーは、オカツパ髪の黒い衣装を着た少女の姿を目にした。

少女から発せられる威圧感に、思わずゴクリと唾を飲み込んだブンビーは、殺される

かもと、内心冷や冷やしたが、少女は意外な事を話し出した。

「早まるな、それでは無駄死にするだけだ! ムーンライトの登場は、事態を好転させるだろう・・・それまで待つのだな!!」

「エツ? あんた、一体!?!」

それだけ言い残すと、黒き衣装を身に纏った少女は闇の中に消えて行った・・・

ブンビーは、呆然と少女が消え去った闇を見つめ、

(あの女、一体何者何だ!?!)

このまま無駄死にするよりは、誰かは知らぬが、あの女の言葉に掛けてみようかと判断するブンビーであった・・・

シャイニールミナスの光の導きにより、自我を取り戻したプリキュア達だったが、闇に蝕まれた身体を、思うように動かせる事は出来なかった。

助けに来たキュアムーンライトであったが、強大な敵を前に、圧倒的不利な状況は変わらなかった・・・

「たった一人で、この軍勢を倒すだ?! 随分勇ましいな・・・では、貴様の愚かな思い上がり、見せて貰おうか?」

闇の中、闇の救世主を自称するバロムが指を鳴らすと、アラクネア、スコルプ、ネバタコス、ハデーニヤがムーンライトの四方を取り囲み包囲する。

「ムーンライト、気をつけて下さい!!」

キュアブロッサムが、動けない身体ながらもムーンライトに声援を送る。ムーンライトは無言で頷き、四方を囲む闇の戦士を見た。

先ず正面と右側面から、アラクネアとスコルプが、ムーンライト目掛けパンチの連打を浴びせるも、ムーンライトは体勢を入れ替え、二人の攻撃を両手で防ぎ続ける。

「おいおい、俺も居るのを忘れて貰っちゃあ困るぜ!」

背後からネバタコスが、触手でムーンライトの身体を捕らえるも、ムーンライトが華麗に身体を捻り、触手から逃れ距離を取る。

「パリでの借り……今こそ晴らしてやるわ!!」

パリで屈辱を味わっていたアラクネアが、凄まじい咆哮を上げると、ムーンライトの周辺に蜘蛛の糸を巻き散らすのを、ムーンライトは辛うじて躲し、蜘蛛の糸は、反対側に居たネバタコスに絡みついた。

「貴様あ、何しやがる!」

「す、済まない……おのれえ!!」

アラクネアが、俊敏な動きでムーンライトに執拗に攻撃を仕掛けるも、ムーンライト

は攻撃を完全に防ぎ、アラクネアは鬼気迫る表情を浮かべると、

「貴様さへ居なければ……私は、このような屈辱を味わう事など無かったのだ！私に恥をかかせた報い……思い知れえええ!!」

アラクネアの闇の力が暴走し、巨大な蜘蛛へと変貌する。八本の足が不気味に蠢き、連続して放たれる蜘蛛の糸が、ムーンライトの足場を封じていく。

スコルプがアラクネアを援護し、連続光弾をムーンライトに浴びせ続け、背後から突進してきたハデーニヤの攻撃を、躲しきれないと判断したムーンライトは、ハデーニヤとガツプリ両手を組み合い、力比べの状態になる。

「あたしと力比べをしようって言うのかい？」

ハデーニヤは、思わず口元に笑みを浮かべ力を込めると、ハデーニヤの怪力に片膝を付くムーンライトだったが、右足払いでハデーニヤを転ばし蹴り上げる。俊敏に蜘蛛の糸を移動しまくるアラクネアに対し、ムーンライトは、アラクネアの懐に飛び込むと、  
「プリキュア！シルバー、インパクト!!」

光のエネルギーを掌底に集め、アラクネアに叩きつけ吹き飛ばす。よろめくアラクネアを見て、ムーンタクトを取り出したムーンライトが勝負に出る。

「花よ、輝け！プリキュア！シルバーフォルテウェイブ!!」

アラクネアの側に居たスコルプが、慌ててその場を離れる。ムーンライトから放たれ

た銀色の巨大な花が、アラクネアを包み込むと、

「ハアアアア!!」

タクトをクルクル回し始めたムーンライトが、アラクネアを浄化させる。

(先ず、一人!)

ムーンライトは次に備え、スコルプ、ハデーニヤ、ネバタコスを厳しい視線で見つめていたが、

「ほう、中々やるではないか?それに比べて、貴様らの不甲斐ない事よ・・・もうよい、貴様らは他の者共と協力して、動けないプリキュア共を始末しろ!このまま放置しては、何れわれらの災いに成り兼ねん・・・キントレスキー、ミズ・シタターレ、お前達は、嘗ての仲間共と合流して指示を待て、お前達の出番は無いとは思いますが、念の為に!ノーザ、クライン、お前達が代わりにムーンライトと戦え!そして、あの者を呼べ!!」

不機嫌そうに闇の中から指示を出すバロムに、スコルプ、ハデーニヤ、ネバタコスの三人は、不本意ながらも指示通りドームの側に移動する。

「お待ちなさい!!」

後を追ったムーンライトの前方にノーザが現われ、ムーンライトに強力なエネルギー弾を放つ、咄嗟にバリアーを張ってダメージを軽減させるものの、ムーンライトは壁に激突する。そのムーンライト目掛け、クラインも上空からエネルギー弾を放つ、何とか

躲したムーンライトは、ムーンライトを挟むように地上に降り立ったノーザとクライ  
ン、二人と睨み合いになる。

(この二人・・・強い!!私の読みが甘かったようね・・・どちらかと1対1なら兎も角、  
2対1では・・・私は、負ける!!)

ムーンライトに焦りの色が浮かぶ、そして、その表情はある人物を見て驚愕へと変  
わった。不敵な笑みを浮かべたダークプリキュアが、ムーンライトの視線の先に居  
た・・・

ダークプリキュアの出現は、ムーンライトに激しい動揺を与えるのだった・・・  
「あ、あなたは・・・ダークプリキュア!?あなたまで甦って居たなんて・・・」

ダークプリキュア・・・

ムーンライトの父、サバーク博士が、対ムーンライト用に作りだした存在で、ゆりの  
細胞の一部と、こころの大樹の研究の成果を上手く融合させて作り上げた人工生命体で  
あり、父、月影博士曰く、ゆりの妹であった。彼女が消滅する寸前、ムーンライトとダー  
クプリキュアは、和解した筈だったのだが・・・

「ムーンライト!!」

動けないプリキュア達から声が掛かる。



ムーンライトの危機を助けに行きたい……

だが、身体は言う事を効かなかった……

「ルミナス、私達は良いわ！私達の事は……もういいから、ムーンライトの援護に向かつて!!」

「そ、そんなあ……みなさんを置いて何て行けません!!」

アクアは、役に立てない自分達の事より、ムーンライトの援護に向かつてくれとルミナスに伝える。他のプリキュア達も同じ気持ちであったが、ルミナスは拒否した。

（こんな時に、ブラックとホワイトが居てくれたら……でも、ムーンライトなら……きつと、きつと、何とかしてくれる!!）

心の中で、こんな時に、ブラックとホワイトが居てくれればと思いつながらも、ルミナスはムーンライトを信じ、必ずこの窮地を乗り切ってくれると信じるのだった。

ノーザ、クラインが、同時にムーンライト目掛け突進を開始する。それを見たダークプリキュアも、ムーンライト目掛け突進を開始した。

ダークプリキュアの出現で、反応が遅れたムーンライトに危機が迫ろうとしていた……

## 2、共闘

ブンビーに最大のチャンスが訪れた!

牢を見張っていたノーザ、クライン、キントレスキー、ミズ・シタターレは、バロムの指示を受けこの場を離れた。ノーザよりこの場をしっかりと見張っているように申しつけられたブンビーは、威勢良く「はい」と答えるものの、内心はガッツポーズを取っていた。

(あの女の言った通りになったな・・・一体何者何だ!?)

ブンビーに忠告した者こそダークプリキュアだったのだが、ブンビーがそんな事を知る由もなく、ブンビーは、遂に捕らわれたココ達を助け出す。

「助かったココ!」

「この恩は忘れないナツ!」

「いやあ、忘れて貰っちゃ困るよ! さて、後はプリキュア達を助けてと・・・」

「ホンマおおきに・・・さあ、パッションはん達を助けな!!」

妖精達の牢が騒がしいのに違和感を抱く、せつな、満、薫だったが、ココ達がブンビーと共に姿を現わしたのを見て、三人は驚愕する。

「タルト、シフォン、ココ達も無事で・・・でも、一体どうやって牢から出られたの?」

「ブンビーのお陰ココ!」

「パッションはん達からも礼を言つてあげてえな」

ブンビーが牢の鍵を見せ、せつな達に輝く歯を見せてニツコリする。その不気味さに思わずたじろいだせつなだったが、

「わ、私達も出してくれるの？ありがとう……」

せつなが深々お辞儀するのを見て、満、薫も同じように頭を下げる。

「いやいや、そんな事より早く行こう！プリキュア達が危ないようだ!!」

ブンビーの忠告を聞き、直ぐに真顔に変わるせつな、満、薫、

（待ってて、ラブ……みんな、今助けに行くから!!）

ブンビーが皆を案内しながら牢から脱出を試みるが、ノーザの策略により出口は消え失せていた。

「あれえ、出口が……無い？エエエ!？」

動揺するブンビーを見て、これじゃまだ捕らわれたままだと落胆するココ達に、タルトはシフォンを呼び、皆をプリキュア達の居る所に案内してくれと頼むのだった。

「闇の牢におつた時は、結界によってシフォンやアカルンでも無理やったが、牢さえ出ればこつちのものや！頼むでえ、シフォン！」

シフォンは「プリー」と頷くと、シフォンの力で一同が消え失せた……

ノーザ、クライン、そして、ダークプリキュアがムーンライトに迫る。

ノーザが真つ先に、研ぎ澄まされた爪でムーンライトを切り裂こうとしたその時、突進してきたダークプリキュアの蹴りを受け、ノーザが吹き飛ばされる。

ダークプリキュアの思わぬ行動を見て、思わず呆然とするムーンライトに、ダークプリキュアはムーンライトを叱咤し、

「何を惚けている!?!キュアムーンライト!」

ムーンライトの右腕を引つ張り、クラインからの攻撃を避けさせると、カウンターの回し蹴りでクラインを吹き飛ばすダークプリキュア、

「ダークプリキュア・・・あなた!」

驚愕の表情を浮かべながらも、何処か嬉しそうな表情をするムーンライトの反面、吹き飛ばされたノーザの表情が醜く歪む、

「これは一体何の真似? 何故あなたがムーンライトを庇う!」

「貴様らこそ何を勘違いしている? キュアムーンライトは・・・私の姉だ!! 妹が姉の危機を助けるのは・・・当然だろう?」

「姉・・・ですって? バ、バロム様、これは一体!」

ダークプリキュアの思わぬ反乱により、闇の中のバロムに少なからず動揺が起こる。バロムの怒りに呼応するように闇がざわめく・・・

「おのれ、ダークプリキュア！闇が光の味方をするなど……ありはしない!!! ノーザ、クラインよ……構わん、ムーンライト事その裏切り者を消し去れ!!!」

バロムの怒りに、ダークプリキュアは薄ら笑いを浮かべると、

「勝手に私を生き返らせたのはお前だろうか？ムーンライトへの切り札のつもりだったらしいが、誤算だったな！」

「ダークプリキュア……礼は言わないわよ？」

「必要無い!!」

口元に笑む姉と、笑み返す妹、その姿を見たプロツサム、サンシャイン、マリンから感嘆の声が沸き上がる。

「す、凄いです!」

「まさか、ムーンライトとダークプリキュアの共闘を見られる何てね……」

「ありやりや、こりやあ凄いや……あの二人が組んだら、無敵じゃない？」

だが、即座にピーチ達が反論する。

「ノーザ達を甘く見ない方が良いわ!まだ彼女達には……奥の手がある!!」

「「奥の手ええ?」」

闇に身体の自由を奪われ、動きが取れないプリキュア達は、再びその視線をムーンライトに向けてのだった。

「所詮は出来損ないという事でしよう……」

「そうね……。私達を本気にさせた事を後悔させてあげましょう!!」

クラインの言葉に頷き、ノーザは隠し持っていたソレワターセの実を食べると、嘗てピーチ達を苦しめた超獣ノーザへと変化する。大樹に大きな頭が付いたような、どこか違和感を感じるその姿、変化前のノーザは、美人と称する事の出来る顔立ちだったが、超獣化したノーザは、まさに化け物であった。

一方のクラインも、戦闘形態である龍人とも呼べそうな龍形態に変化する。二人の闇の力が増大したことを認め、ムーンライトとダークプリキュアに緊張感が漂う……

「ダークプリキュア、そっちは任せて良いかしら?」

「フツ、誰に言っている!」

ムーンライトが龍人クラインに、ダークプリキュアが超獣ノーザにそれぞれ突進を開始するが、ムーンライトは怒濤の攻撃を仕掛けるも、意外にも俊敏な動きを見せるクラインに攻撃を当てる事が出来なかった。逆に何度もクラインの攻撃を受け、反撃の右回し蹴りもクラインに止められると、そのまま、思いつきり地面に叩き付けられそうになる。何とか体勢を立て直し、距離を取るムーンライトだった。

一方のダークプリキュアも、ノーザから放たれる無数の触手に苦戦していた。切っても、切っても再生される枝のような触手、何度か攻撃を受けるも、何とか距離を取った

ダークプリキュアは、ムーンライトと背中合わせになる。

「苦戦しているようね？」

「お前こそ！」

押されている二人だったが、何処かまだ余裕が感じられた。まるで攻撃を示し合わせたように、二人が同時に叫ぶ、

「集まれ！花のパワー！！」

「闇の力よ！集え！！」

「プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ！！」

「プリキュア！ダークパワー・フォルテツシモ！！」

ムーンライト、ダークプリキュアが、フォルテツシモ状態となって上昇する。二つの輝きが龍人クライン、超獣ノーザと激しくぶつかり合うと、二人の心が重なった時、銀の光は龍人クラインを貫き、赤黒い光は超獣ノーザを貫いた。再び姿を現わした光と闇、二人のプリキュアが同時に叫ぶ、

「ハートキャッチ！！」

二人の掛け声と共に、龍人クラインが、超獣ノーザが爆発して地上へと落下する。

闇の中で苛つくバロムが、配下の者達を叱咤する。その凄まじい怒りは、闇の中で激しい轟音を発し、配下の者達は恐怖した。

「貴様らは一体何をやっているのだ？ ノーザ、クライン、今一度だけチャンスをやろう！」

「あ、ありがとうございます……クライン、こうなれば嘗てのように、私達を一つにしてプリキュア共を……」

瀕死ながらもバロムから与えられた闇の力を使い、龍人クラインと超獣ノーザが一つになる。化け物のような姿は成りを潜め、羽と尻尾が生えた姿になり、腹部にはソレワターセの目のような物が加わった。

力を増した事で、パワーを制御出来ないのか、超獣ノーザクラインは無差別に攻撃を開始する。スピードも段違いに上がり、再び劣勢になるムーンライトとダークプリキュア、動けないプリキュア達に当たりそうな光弾を、ムーンライトリフレクションで辛うじて跳ね返す。凄まじい攻撃力の超獣ノーザクラインの前に、ムーンライトとダークプリキュアは何度も攻撃を食らい、二人はよろめきながらも立ち上がる。

「ダークプリキュア、私達に残された体力もそう多くない……一気に決めるわよ!!」

「ああ、まだ奴の相手が残っているのだから!!」

ムーンライト、ダークプリキュアが、闇の中で蠢くバロムを睨み付ける。再び花の力と、闇の力を集めたムーンライトとダークプリキュアが叫ぶ、

「プリキュア！ フローラルパワー」



「プリキュア！ダークパワー」

「フォルテツシモ!!」

光と闇、二つの光が一つになり上昇していく、

「ま、まさか、ムーンライトとダークプリキュア、二人でフォルテツシモするなんて…」

「す、凄いやあ!!」

「ずるううい！あたしはまだ、ムーンライトとフォルテツシモした事無いのにい〜」

感嘆の声を上げるプロツサム、サンシャインに反し、まだ自分と一緒にフォルテツシモをやった事の無いマリンが悔しがる。

二人のフォルテツシモが、超獣ノーザクラインと互角のぶつかり合いを何度も続ける。

「私達は・・・負けない!!」

「ハアアアアアア!!」

ムーンライト、ダークプリキュアの雄叫びと共に、パワーを増していくフォルテツシモが、遂に超獣ノーザクラインを貫く！

再度姿を現わし、タクトを構えて並び立つムーンライトとダークプリキュア、

「ハ〜トキヤツチ!!」

先程と同じように超獣ノーザクラインに爆発が起きる。ムーンとダーク、共にタクト

を回し、超獣ノーザクラインの二人を、元の姿に変え、二人は光と共に消え失せた。  
姉と妹、二人のプリキュアが、美しい輝きを見せた!!

第十九話：姉と妹!

完

## 第二十話：プリキュアの逆襲！

## 第二十話：プリキュアの逆襲！

1、勢揃い！プリキュアオールスターズ!!

キュアムーンライトとダークプリキュア・・・

嘗ての宿敵同士が、共に戦う姿にプロツサム達は興奮し、嘗て自分達を苦しめたノーザとクラインを破った二人を見て、ピーチ達は驚愕した。

「凄い！私達四人が苦戦したノーザとクラインを、たった二人で倒す何て・・・」

「ええ、でも今の攻撃は、かなり二人には負担だったようね・・・見て、二人のあの疲れよう」

ピーチの言葉を受け、ベリーは、ムーンライトとダークプリキュア、共に体力の限界が近づいている事に気付いた。ベリーの言葉を現わすかのように、激しく呼吸を整えるムーンライトとダークの二人であった。

闇の中のバロムは、二人の状態を見ると口元に笑みを浮かべ、

（手こずらせてくれたが・・・最早奴らに我に刃向かう力は残っていない？）

「さあ、闇の軍勢共よ！最早我らに逆らう力を持った者は居らん・・・光の戦士の最期と

共に、この地に闇の創設者、カオス様の降臨を!!!」

「オオオオオ!!」

闇の中で響き渡る闇の戦士達の声、身体が効かないプリキュア達に焦りが生じる……

その時、闇のドームの側にブンビーが落下してくる。続いて、ブンビーの頭にお尻からせつなが、背中に満が、腰に薫が落ちてくる。その都度思わず悲鳴を上げるブンビーに、

「失礼ね! 私達、そんなに重くないわよ? でも、ありがとう! ブンビーさん!!」

「あのお……お礼は良いから、早く退いてくれるかなあ?」

苦笑しながらもブンビーにお礼を言うせつな、満と薫も立ち上がり、捕らわれたプリキュア達と、ルミナスの方を見つめる。三人の目に涙が溜まった。

せつな、満、薫の姿を、呆然としながら見つめたピーチ、ベリー、パイン、ブルームとイーグレット、プリキュア5も、ローズも、同じように呆然とするも、

「せ、せつなあああ!! 本当に、本当に、せつなの?」

「無事だったのね!?!」

「せつなちゃん……」

「満ううう!!」

「か、薫さん!?良かった、無事だったのね・・・」

三人の無事な姿を見て、ピーチ、ベリー、パイン、ブルームとイーグレットが涙ながらに感嘆の声を上げた。ドリーム達も、三人の無事な姿を見て嬉しそうな表情になる。そのドリーム達目掛け、闇の上空から声が響き渡ってくる。

「ドリーム!みんなああ!!」

妖精達はシロップの背に乗り、ゆつくりと姿を現わすと、みんな無事な姿を、手を振りながらプリキュア達に知らせるのだった。

「ココおお!!」

「ココ様・・・ナッツ様!!」

「シロップ・・・」

「ナッツさん・・・無事で、無事で良かったわ!」

「みんな、無事だったのね!」

「あんだ達・・・本当に無事で良かった!!」

ココ達の無事な姿を見たドリーム、ローズ、レモネード、ミント、アクア、ルージュも、一同の無事な姿を見て目を輝かせた。

「ムープもフープも」

「タルトにシフォン・・・みんな、みんな」

ブルームが、ピーチが、仲間の妖精達の無事な姿を見て微笑んだ。プリキュア達は、闇のドーム越しながらも、せつな、満、薫、そして妖精達の無事な姿を見て、久しぶりに心の底から、涙ながらも笑顔が溢れていた。

闇のドームに近付いたせつな達は、今までの出来事をみんなに伝えると、一同は敵の策略に嵌り、偽物を本物の三人だと勘違いしていた事を知らされ驚愕した。次々にせつな、満、薫に詫げるブルーム達、ドリーム達、ピーチ達、ローズは、三人の顔をまともに見る事が出来ず俯いていた。ピーチは、ドリーム達を見つめると、

「ドリーム！みんな！ゴメン!!私をもっと早く気付けば・・・」

「ううん、それは私達だって同じだよ・・・」

ピーチ達とドリーム達、互いの誤解は今打ち解けた・・・

「舞・・・あの時はゴメン！私、あの時すっかり気が動転しちゃって・・・」

「私の方こそ・・・敵の策略に掛かって、咲を疑う何て・・・本当にゴメンなさい!!」

そして、ブルームとイーグレットの心も再び繋がった・・・

せつな、満、薫は、自分の事のように、和解した一同を見てホッと安堵するのだった。意を決したローズは、申し訳無きような視線を三人に送ると、

「あ、あのう・・・ごめんなさい！私は、真っ先にあなた達を疑ってしまった。共に戦い合った仲間の事を信じもせず、ましてや、裏切り者などと酷い言葉を・・・」

涙ながらに深々と頭を下げたローズが言葉に詰まる・・・

せつな、満と薫は、プライド高いローズが、自分の非を認め、涙ながらに謝罪する姿を見るや、首を横に振ると、

「ローズ、あなたが気にする事は無いわ!」

「私達が、オメオメ敵に捕らわれた事が発端ですもの!」

「ええ、一番悪いのは私達よ! 情けなくも真つ先に捕らえられ、みんなに耐え難い苦痛を与えてしまった・・・本当にごめんなさい!!」

逆に皆に謝る、満、薫、せつなだったが、ブンビーは慌てたように、

「君達、再会の挨拶は後にした方が・・・って、うわあこっち見ないでええ!」

闇の軍勢が、ギロリと裏切ったブンビーを見つめ、ブンビーは慌てて逃げ出そうとする。そのブンビーにドリームが声を掛ける。

「ブンビーさん・・・みんなを助けてくれてありがとう!! また、助けられちゃったね?」

「まあ、そう思うんなら、今度は私に協力して欲しいがねえ!」

「喜んでええ!!」

意外にも、ドリームを始めとするプリキュア達が、タルトの言うように協力を約束した事に驚くも、プリキュア達を利用したビジネスを頭の中で考えるブンビーであった・・・

「私達の大切な仲間達をよくも……私は、絶対あなた達を許さない!チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!」

せつなが、キュアパッションへと変身していく。

「真つ赤なハートは幸せの証!熟れたてフレッシュユ、キュアパッション!!」

ムープとフープが満と薫の側に飛んでくると、

「満、薫、変身するムプ!月の力!!」

「風の力!」

「我らに力を!!」

クリスタル・コミュニケーションに変化した妖精達を、満と薫が受け取ると、

「デュアル・スピリチュアル・パワー!!」

満と薫がプリキュアへと変化していく、

「未来を照らし!」

「勇気を運べ!」

「天空に満ちる月!キュアブライト!!」

「大地に薫る風!キュアウインディ!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「聖なる泉を汚す者よ!」



「アコギな真似はお止めなさい！」

動けないプリキュア達を庇うように、闇の軍勢と睨み合うパッション、ブライト、ウィンデイ、そこにムーンライト、ダークプリキュアも加わる。

「フン、たかが三人増えた程度で勝ったつもりか？」

「そういう事だ……」

スコルプの言葉にベルゼイも同意すると、一気に攻撃を開始する闇の戦士達、迎え撃つムーンライト、ダークプリキュア、そして、パッション、ブライト、ウィンデイ、

「風よ！切り裂けええ!!」

近づいて来たブラツデイ、ハデーニヤを、凄まじい突風で吹き飛ばすウィンデイ、

「光よ……輝けええ!!」

上空に巨大な光弾を溜めるや、プリキュア目掛け破壊光線を出して攻撃したシャドウの攻撃を掻き消すブライト、ムカーディアと肉弾戦を繰り広げるパッションが、

「みんなが味わった苦しみ……倍にして返して上げるわ!!」

「おやおや、勇ましいですねえ……ですが!!」

口元に笑みを浮かべたムカーディアが、パッション目掛け無数の触手で攻撃を開始するも、パッションは瞬時に瞬間移動で背後に回り、ムカーディアを吹き飛ばす。体力を失っているムーン、ダークは、カワリーノと二対一の戦いでようやく互角の劣勢であつ

た。

「どうしました？先程の威勢は口だけだったようですねえ」

「黙りなさい！」

まだバロムとの戦いが残って居るのに、此処での苦戦に、ムーンもダークも焦りを浮かべた。人数的にもまだ不利なプリキュア達、五人の隙を付き、ベルゼイ、ジュナ、レギーネが、闇のドームの背後に回り込み、ドーム内に居るプリキュア達へと攻撃しようとしたその時……

闇の中からけたたましい声が響き渡ると、何事かと上空を見上げる一同に、雄叫びを上げた鳳凰が舞い降りてくる。

「あれは、ヒナタポポ」

鳳凰を見て、仲が良かったポルンが嬉しそうにすると、ルミナスも懐かしそうにその姿を見つめる。その時、鳳凰の背中から声が響き渡る。

「ちよおおっと待った！行くよ、ほのか!!」

「うん!!」

「デュアル・オーロラ・ウェイブ!!」

遂になぎささとのほのかも、闇の本拠地と化した加音町に到着した。

ルミナスの危機を感じた鳳凰は、メップル、ミップル達光の園の妖精達の気配を頼り

に、先ずほのかを迎えに行き、そして、九州のなぎさの下にやって来た。ポイズニーが言った奇跡を可能にすると言った事はこの事であった。

「光の使者！キュアブラック!!」

「光の使者！キュアホワイト!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「闇の力のしもべ達よ！」

「とつととお家に帰りなさい！」

ベルゼイ、ジュナ、レギーネの目の前に舞い降りた二人は、格闘戦で三人を圧倒し、吹き飛ばすと、ドーム内のプリキュア達から歓声が沸き起った。

「此奴ら……あの時より力を付けている？」

「クツ……一先ず距離を取るぞ!!」

ジュナが驚愕し、ベルゼイの指示の下、一同が一先ず引くと、ルミナスは嬉しそうにブラックとホワイトを見て、

「ブラック！ホワイト！来てくれたのですね!!」

ルミナスは心の底から喜び、二人を称え、ブラックは親指を立てながら

「ルミナス！みんな、お待たせ!!」

振り向いたムーンライトは、口元に笑みを浮かべながら、

「ブラック、ホワイト、遅いわよー！」

「ゴメンなさい・・・でも、これでも急いで来たのよ！」

苦笑を浮かべたホワイトが、ムーンライトに弁明をする。

ブラックとホワイトは、上空を舞っている鳳凰を見上げ、

「ありがとう、ヒナタ！」

「ここは危険だから、少し離れていて！」

ブラックとホワイトの言葉を受け、雄叫びを上げた鳳凰は、少し離れた場所に降り立った。

二人は闇のドームの中に居る一同を凝視すると、その表情が見る見る険しくなり、

「私達が居ない間に、大切な仲間達を・・・よくも痛ぶつてくれたわね！」

「覚悟しなさい!!」

ブラックとホワイトの参戦により、勢いが増すプリキュア達、ホワイトは、闇のドームに居る捕らわれたプリキュア達を見ると、嘗て自分が受けた、闇に蝕まれた症状と同じだと見抜いた。

「ブラック、先ずはみんなから闇の力を引き離しましょう！」

「エッ!?!・・・う、うん分かった!!」

「ルミナス、闇のドームにハーティエル・アンクシオンを放って見て！」

ホワイトに何か考えがあると悟ったルミナスが、再び闇のドームに対してハーティエル・アंकションを放つと、

「今よ、ブラック！」

「分かった！ブラック、パルサー！！」

「ホワイト、パルサー！！」

「闇の呪縛に囚われし者たちよ！」

とホワイトが叫べば、

「今、その鎖を断ち切らん！！」

とブラックが応える、

「プリキュア！レインボー・セラピー！！」

ブラックとホワイトから、半球形の虹のオーラが放たれると、中和されていた闇を打ち消していく。闇に蝕まれて居たプリキュア達から、闇の力が完全に抜けた・・・

「ああ、身体が動くわ！」

「本当だ、身体が軽いや！！ありがとう、ブラック、ホワイト！」

ベリーが、マリンが、嬉しそうに身体を動かし、仲間達が次々とブラックとホワイトに感謝の言葉を述べると、ブラックは、親指を立ててどう致しましてと答える。

「凄い！プリキュアが、こんなに居る何て・・・」

「本当・・・私達が共に此処に居る事自体、夢みたい!」

キョロキョロ周りを見渡し、一堂に会したプリキュア達を見て、メロディとリズムは目を輝かせて居た。二人は、歴戦の戦士達に改めて自己紹介をすると、一同は二人を暖かく迎え入れた。

ダークプリキュアも加わり、24人のプリキュア、プリキュアオールスターズが、闇の軍勢との決戦を迎えようとしていた・・・

## 2、 猛る! 花鳥風月!!

復活したプリキュア達を見て、隠れていたシプレ、コフレ、ポプリ、ハミイが大喜びではしゃぎ回る。あまりにも人数の多いプリキュア達を見て、セイレーンは顔中に汗をかき、激しく動揺する。

(な、何て数よ?! い、今は敵じゃなくて良かったわ!)

シプレ達に気付いたシロップ達が近寄って来る。シロップも元の姿に戻り、妖精達は再会を喜び合う。

「シプレ、コフレ、ポプリ、久しぶりココ! そっちの二人は誰ココ?」

「ハミイニャ! こっちはセイレーンニャ! 二人共メイジャーランドの妖精ニャ!! セイレーンは家出中だけどニャ!!」

「家出じゃないわよ、このボケ猫！あんた達とは袂を分かったの！一緒にしないでよね！！」

何か複雑な事情がありそうなので、ココもナッツも深くは聞かなかつたが、

「メ、メイジャーランドと言えば、音楽で有名ココ」

「ナッツも何度か聞きに行った事があるナツ」

ハミイはメイジャーランドの事を知っているココ達に、嬉しそうにして話し始める。

「メイジャーランドを知ってるニヤ？ハミイとセイレーンは、メイジャーランドの歌姫何だニヤ！！」

「ええ、それは凄いココー！」

噂に聞くメイジャーランドの歌姫、しかも二人もこの場に居る事に、ココもナッツも大いに驚き、戦いが終わったら、二人の歌声を是非聞いてみたいと思うのだった。だが、セイレーンが複雑な表情を見せるのに気付き、深くは聞く事を遠慮するのだった。

「おおおい、君達もそんな所で会話しないで、もうちよつと此処から離れようよ！もうすぐ、プリキュア達と闇の軍勢の戦いが始まるぞお！！」

ブンビーの言葉通り、戦いが始まりそうなのを見て、ブンビーと共にその場を離れる妖精達であった。

睨み合うプリキュアと闇の軍勢、その中でブラックは、ダークプリキュアを見てニンマリするのだった。

「何だ!?! ニヤニヤ私を見て・・・何か用か?」

「ううん・・・いやあ、私と同じ、黒をシンボルにしたプリキュアが居る何て・・・嬉しいくなつちやつてさ!」

「ブラック・・・」

決戦を前に緊張感が無いブラックを見て、目が点になりながら呆れるホワイト、ブラックはそれを見てちよつと不満気に、

「エエエ、ホワイトだつてそうでしょう? その娘・・・ええと確か、キュアリズムだったよね? その娘が白をシンボルにして嬉しいうでしょう?」

「わ、私は別に、何とも・・・だけど?」

二人の会話を聞き、プリキュア達からクスリと笑う声が思わず漏れる。メロディはチラリとからかうような視線をリズムに向けると、

「何とも・・・だつてさ?」

「メロディ・・・五月蠅い!!」

リズムは頬を膨らまし、メロディに五月蠅いと返すも、思わず互いに笑みを浮かべた。メロディ、リズムも、今までの緊張感が嘘のような雰囲気を持ち込む、ブラックとホワ



イトを見て和むのだった。

自分と同じシンボルカラー、緑のプリキュアの居ないミントも、苦笑を浮かべアキラと笑い合っていた。それに気付いたブラックが、

「大丈夫、大丈夫、その内ひよっこり緑をシンボルカラーにしたプリキュアが現われるからさー！ 元気出していこう!!」

「私は別に、その事で落ち込んで居ないですよ?」

ミントが益々苦笑を浮かべる姿を見て和む一同、それを見たダークプリキュアが思わずムーンライトに訪ねる。

「何だ、この緊張感の無さは?」

「そうね・・・でも、場を和ませる事の出来るブラックは・・・貴重な戦士よ!」  
そんなものなのかと首を捻るダークプリキュアだった。

24人のプリキュアの数を見て、闇の軍勢に焦りが生じる。

「き、貴様ら、卑怯だぞ? な、何て数だ!」

「お前ら、伝説の戦士じゃないのか!? そんなに大勢居るのに、どこが伝説の戦士だ?」

思わず圧倒的なプリキュアの数を見て、愚痴を零すフリーズンとフローズンだったが、ブラックとホワイトを指差し、

「貴様ら、あの時の借りを返してやる!」

「我ら最高のコンビを見下した償い、させてやる!」

だが、ブラックは首を傾げ、ホワイトに「知ってる?」と声を掛けると、ホワイトは少し呆れたように、前にヒナタを亡き者にして、世界を暗闇に変えようとしてた二人組だと答える。

「ああ、思い出した!あの嘘っこ友情コンビね!!最強、最強、言つてた割に、自分達が不利になると仲間割れしてた……」

ブラックの言葉を聞いている内に、見る見る表情を強張らせ、益々激高するフリーズンとフリーズンは、

「馬鹿にしゃがって!我らが最強のコンビだったと直ぐに思い出させてやる!行くぞ、フリーズン!!」

「オオ!!」

ブラックとホワイトに対し、攻撃を開始しようとした二人の側に、古代ギリシヤの服装のような格好をした二人組、イソーギンとヤドカーンがやって来る。

「最強のコンビは……俺達だよな?」

「俺達だよな?」

ゆつたりしたマイペースなしゃべり方でフリーズン、フリーズンに意見する。薄気味

悪そうな表情で二人を見ていたフリーズンとフローズンだったが、

「何だ?!最強は俺達コンビだ!」

「よし、そこまで言うならどっちが最強のコンビか決めようじゃないか・・・どっちがより多くのプリキュアを倒すか・・・勝負だ!!」

「勝負・・・だな?」

「ああ、勝負・・・だな?」

イソーギン、ヤドカーンも承諾する。二人が雄叫びを上げると合体し、下側はまるでヤドカリーを彷彿させ、上側はイソーギンチャクが漂う姿を連想させる。

「良いわ!相手になって・・・エッ!」

戦おうとしたブラックとホワイトの前に出る四人組が居た。花鳥風月をモチーフにしたブルーム、イーグレット、ブライト、ウィンディである。

「ブラック、ホワイト、あいつらとは私達に戦わさせて!」

「みんなの分も、私達を弄んだ償いをさせたいの!」

ブルーム、イーグレットの強い意志を感じたブラック、ホワイトも頷き、その場を離れる。それを見たフリーズン、フローズンが逃げるのかと挑発するも、

「あんだ達の相手は私達よ!」

「最強コンビの称号何て、欲しければ上げるわ!でも、大切な仲間との心を踏みにじった

あなた達を・・・絶対許さない!!」

「ブルームとイーグレット、そして、プリキュアのみんなを悲しませたお前達を・・・」  
「私達も絶対に許しはしない!!」

花鳥風月の四人の思いに応えるように、闇に怯えていた精霊達が、次々四人に力を貸していく・・・

見る見る光に包まれていくブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディの四人の姿に、フラッピ、チョッピ、ムープ、フープも、嬉しそうな表情を浮かべた。

「す、凄いラピ・・・プリキュア同士の戦いを悲しんで、弱まっていた精霊の力が、見る見る強まっているラピ」

「精霊達が、四人の心が一つになった事を、喜んでいるみたいチョピ」  
足下に力を込めた四人が、一気に敵に向かい飛翔する。

フリーズンにブルームが、フローズンにイーグレットが激しい攻撃を繰り返す。

「これは、ドリーム達に分!!」

フリーズンの顔面に、パンチの連打を浴びせ続けるブルーム、

「これは、ピーチ達に分よ!!」

フローズンのボディにパンチの連打を浴びせ、回転蹴りで吹き飛ばすイーグレット、

「まだまだ、これはプロッサム達に分!!」

回し蹴りでフリーズンを吹き飛ばすブルーム、

「これは、メロディとリズムの分よ!!」

上空に舞い、猛スピードで下降するや、かかと落としを決めるイーグレット、

「お、おのれえ、調子に乗りやがってええ」

「俺達の方・・・見くびるなよおお！」

怒るフリーズン、フローズンに怯むこともなく、ブルームとイーグレットがすかさず身構え、再び攻撃を開始した・・・

一方、合体したイソーギン、ヤドカーンに対し、ブライトとウインディが怒濤の攻撃を繰り返していた。俊敏に動く二人の動きを、ウインディは風の力で鈍らせるや、瞬時にブライトが突っ込みパンチの連打で吹き飛ばす。体勢を整えたイソーギンが繰り出す触手を、ウインディは強烈な突風を浴びせて切り裂き、ブライトは月の力でヤドカーンの動きを鈍らせるや、再び肉弾戦を仕掛け、圧倒するブライトとウインディ・・・  
精霊の凄まじい力を得た、本気になった花鳥風月の強さは、最強コンビを名乗る二組を圧倒していた・・・

「な、何だ?!俺達が・・・押されているだど?クツ、フローズン、何をやっている!」  
「お、お前こそ何をやっているフリーズン!」

嘗て、ブラック、ホワイトと戦った時のように、劣勢になり息が合わなくなるフリー

ズンとフローズン、それとは逆に絶妙なコンビネーションで攻撃し続けるブルームとイーグレット、

「私達が味わった苦しみは……こんなものじゃないわ!」

「プリキュアのみんなもそうよ……」

二人に操られ、プリキュア同士で戦わされた事を思い出し、更に表情を険しくした二人は、追い打ち攻撃を仕掛けるように、ブルームのパンチが、イーグレットの蹴りが二人を吹き飛ばす。そして、空中からウインデイが、地上からブライトが、イソーギンとヤドカーンを追い込んでいく、花鳥風月の四人が横に並び立つと、妖精達の叫びと共にプリキュア!スパイラル・リングが姿を現わし、ブルーム、イーグレットがハート形の中心部分にリングを装着し、ブライトとウインデイが、星形の中心部分にリングを装着する。

「これは、私達の分……」

「覚悟しなさい!!」

ブルームとイーグレットが、フリーズン、フローズンを指差し宣言すると、

「精霊の光よ!命の輝きよ!」

イーグレットとウインデイが叫べば、

「希望へ導け!二つの心!」

ブルームとブライトが叫ぶ、

「プリキュア！スパイラル・ハート……」

「プリキュア！スパイラル・スター……」

「「「スパラッッシュー!!!」」」

スパイラルハートスパラッシューが、フリーズン、フローズンに、スパイラルスターズ  
プラッシューがイソーギン、ヤドカーンにそれぞれ発射される。

「おのれ、このままオメオメやられんぞ！行くぞ、フローズン!!」

「おお、我らの技……受けて見よ!!」

「フリージング……ブリザード!!」

激突する両者の技と技、一方、イソーギンとヤドカーンは、ブライトとウインディか  
ら放たれた技を、どつちに避けるか揉めている間に直撃し、呆気ない最期を迎えた。

「ウオオオ……お、押されているぞ!?!もつと力を入れる!!」

「何を、お前こそ!!」

「あんた達みたいな奴らに!」

「私達は負けないわ!!」

更に力を込めたブルーム、イーグレットの技が、フリーズン、フローズンを飲み込み  
勝負は付いた……

## 3、VS闇の軍勢

花鳥風月の四人が、フリーズン、フローズン、イソーギン、ヤドカーンと戦闘に入ったのを合図に、プリキュア達と闇の軍勢との全面対決が始まった。

ミルキーローズは、ハデーニャ、ネバタコスを見付けるや突撃し、二人に攻撃を仕掛ける。

「あなた達には、パルミエ王国での借り、返させて貰うわよ！ハアア!!」

「黙れ、貴様らの所為で、俺様はバロム様の信用を失っちゃまったじゃねえか!」

「あんたを倒して、バロム様の信用を取り戻してやるわ!」

激突するローズとハデーニャ、ハデーニャは赤い羽根を連射して、ローズに攻撃を加えるも、ローズはその攻撃をかくぐり、強力な右肘をハデーニャのボディに与え、ハデーニャが苦悶の表情を浮かべる。

更にローズは、ネバタコスをハイキックで吹き飛ばした。

怒りに我を忘れた二人の闇の力が暴走し、二人は理性を無くし、がむしやらにローズ目掛け攻撃を繰り返す、巧みに躲し続けるローズだったが、ネバタコスの触手を受け転倒した所を、二人に狙われる。

(しまった!?)



動揺したローズだったが、二人の前にパッションが現われると、瞬間移動を繰り返して、二人を混乱させ、ローズが体勢を整えるのを援護する。ローズはパッションを見て笑みを浮かべると、

「ありがとう、パッション！」

「ううん・・・一緒に戦いましょう!!」

「ええ!!」

パッションが加わり、ローズがネバタコスと、パッションがハデーニヤとそれぞれ対峙する。攻撃を繰り返すハデーニヤを、嘲笑うように優雅に躲し続けるパッションが、隙を見付けるや連続してパンチを繰り出し、回転キックでハデーニヤを吹き飛ばせば、ローズは、ネバタコスの攻撃をパンチ、キックで弾き返し、動揺するネバタコスに加速を付けた強烈なパンチで吹き飛ばす。互いに見つめ微笑み合ったローズとパッションは、

「歌え！幸せのラプソディ、パッションハープ!!」

先ずパッションが、パッションハープを取り出せば、続いてミルクイパレットをフル稼働させたローズが、

「邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう！ミルクイローズ・ブリザード!!」  
殆ど同時にパッションも、

「吹き荒れよ！幸せの嵐・・・プリキュア！ハピネス・ハリケーン!!」

二人の合体技、青い薔薇と赤いハートの吹雪がハデーニヤ、ネバタコスを含み込むと、巨大な青い薔薇の背後に巨大なハートが重なり合い、ハデーニヤ、ネバタコスを浄化した。

ローズとパッションが、ハイタッチでお互いの健闘を称え合うのであった。

キュアブロッサム、キュアマリンは、キュアアクア、キュアミントと共に、カワリーノ、ムカーディアと戦っていた。ブロッサムとマリンを見たカワリーノは、思わず失笑し、

「おやおや、随分可愛らしいお嬢さんだ事、まるであなた達は、子供と保護者見たいですねえ?」

「君、上手いこと言うね！確かに保護者と子供のようだ・・・子供はもう、寝る時間ですよ?」

ムカーディアもほくそ笑み、カワリーノの意見に同意し、二人は、ブロッサム、マリンを子供扱いし、アクア、ミントを、保護者呼ばわりして四人を挑発する。

「あたしを子供扱いするなあ!!海より広いあたしの心も、ここらが我慢の限界だよ!!」  
子供扱いされて怒るマリンを、アクアは宥めに掛かると、

「マリリン、落ち着いて！残念だったわね．．．私とミントは、保護者呼ばわりされる事は、ドリームとレモネードと一緒に居る時で慣れてるわ！」

「そんな事で挑発しても無駄よ！あなた達こそ、私達を挑発しなければ、戦へ無いのかしらっ。」

逆にカワリーノとムカーディアに、挑発仕返すアクアとミントだった。

「おやおや、少し見ない間に、口だけは達者になったようですねえ．．．良いでしょう！我々を本気にさせた事を．．．」

「後悔させてやる!!」

忌々しそうにしたカワリーノとムカーディア、プロツサムとマリリンに攻撃しようとしたカワリーノだったが、先にプロツサム、マリリンコンビの、意表を突いたダブルおしりパンチの先制攻撃を食らってしまふ。

「な、何という下品な技ですか？」

顔色を変え、思わず不愉快そうな顔になるカワリーノに、マリリンは頬を膨らませると、  
「失礼な！ちゃんとお尻は洗ってるしゅ!!」

「いえ、そういう事じゃないと思うわ！」

少々呆れながらも、マリリンに突っ込むアクアだったが、

「こっちにも居る事を忘れない事だね！」

「意表を突く攻撃のお返しとばかり、ムカーディアのトリツキーな攻撃に苦戦するアクアとミントだったが、ミントがエメラルドソーサーを出して攻撃を防御して体勢を整え、アクアが反撃に転じる。」

「プリキュア！ サファイア・アロー!!」

アクアが放ったサファイアアローを、嘲笑うかのように攻撃を躲すムカーディアは、「やれやれ、またその技ですか？ 私にそう、同じ技は通じませんよ!!」

逆にアクアに、触手で攻撃を仕掛けるムカーディアだったが、「それはどうかしら？」

再びサファイアアローを仕掛けたアクアは、水の弓矢を連射する。こんなもの、目を瞑っても避けられると過信したムカーディアだったが、

「掛かったわね！ 今よ、ミント!!」

「プリキュア！ エメラルド・ソーサー!!」

アクアが放ったサファイアアローが、エメラルドソーサーの軌跡を読めなくする。鋭く回転するエメラルドソーサーは、見事にムカーディアの触覚を切り裂き、ムカーディアは地面でのたうち回る。

「何をやっているのですか、あなたは？」

アクア、ミントのコンビに苦戦するムカーディアを見て、呆れるように呟くカワリー

ノの側で、呼吸を荒くして苦戦するブロッサムとマリン、カワリーノは口元に笑みを浮かべると、

「さあ、あなた方にも、絶望を味合わせてあげましょう!!」

「ハア!? こんな事であたし達が、絶望すると思ってるの? ちゃんちゃら可笑しいわ!」

「そうです! 私達は、今までどんな苦難も乗り越えて来ました!! こんな事ぐらいで、絶望なんて絶対しません!!」

ブロッサムとマリンに否定され、感情的になったカワリーノが、二人に近づこうとしたその時、

「プリキュア! 大爆発!!」

二人の合体技、プリキュア大爆発を食らい、吹き飛ばされるカワリーノが、ムカーディアの側に落下する。

「ミント、ブロッサム、マリン、プリキュア同士の力を合わせましょう!!」

アクアの横にミントが、二人の横にブロッサムとマリンが並ぶと、四人が叫ぶ!

「希望に溢れる乙女の思い、受けてみなさい! プリキュア! コンビネーション・シャワー!!」

カワリーノ、ムカーディアに向けて、四人の重ね合った手から、青、水色、緑、ピンクの光弾が、シャワーのように浴びせ続けられる。止めとばかりに四人でハート形に合

わせた巨大な光弾が二人を包み込む。

「こ、こんな所で!」

「また、また、闇に帰るのか．．．ウワアアア!!」

アクア、ミント、ブロッサム、マリンの四人が声を揃えて

「[[[ハート．．．キャッチ!!]]]」

四人は、見事に合体技で敵を打ち破った．．．

ブラック、ホワイト、ルミナスは、ベルゼイ、ジュナ、レギーネと戦い!

ムーン、ダークは、サーロインと!

ピーチ、ベリー、パイン、は、ブラッディ、シャドウ、スコルプと!

ドリーム、ルージュ、レモネードは、魔女、シビレッタと!

サンシャイン、メロディ、リズムは、シャドウが作り出した大量の鏡の傭兵と戦って

居た．．．

プリキュア達一同は、闇の軍勢を圧倒していった．．．

#### 4、魔神襲来!

プリキュア達の逆襲により、配下の軍勢を壊滅寸前にまで追いやられたバロムは、復

活させた闇の軍勢の不甲斐なさに、闇の中に聳え立つ、巨大な闇の門を開放する。

ギイイイイと不気味な音を響かせながら開かれた巨大な闇の門・・・

バロムは、門の中に話し掛けるかのように、

「さあ、魔神よ・・・眠りから目覚めるが良い！貴様を闇に堕とした、プリキュアへの復讐の時は来た!!」

その言葉を受け、闇の門より灰色と紫・・・禍々しい翼を持った魔神が、闇の門を潜り、プリキュア達に向かって行つた。

(この者と戦い、プリキュア達が無傷で済む事はあるまい・・・例え魔神を倒しても・・・いや、それはありえんな・・・)

再び闇の中で冷静さを取り戻すバロムだった・・・

「まったく忌々しい奴らだわね・・・でも、何もプリキュアだけを狙う必要は無いわよねえ？」

「おやおや、奇遇だね！あたしも今同じ事を考えていたよ・・・」

「あたしもよ・・・じゃあ、三人で！」

魔女、シビレッタ、シャドウの三人は戦法を変え、プリキュアには目も向けず、離れて応援していた妖精目掛け突撃する。

「アツ!?逃がしませんよ!プリキュア!プリズム・チェーン!!」

三人の動きに気付いたレモネードが、プリズムチェーンで捕らえようとするも、それはシャドウの作った鏡の残像だった。

「しまった!?みんな、逃げて!!」

追いかけている三人の後ろを追うレモネードの叫びに気付き、ベリー、パイン、ルージュの三人が後を追うも、ブラッディ、スコルプが立ち塞がる。他のプリキュア達も、ベルゼイ、ジュナ、レギーネ、サーロイン、そして、シャドウの作り出した鏡の傭兵達に行く手を遮られ、妖精達の援護に行けなかった。

「ちよつと、そこを退きなさいよ!!」

「これ以上貴様らの好きにさせては・・・我らの身が危ういのでな・・・」

ブラックの言葉に、背水の陣の覚悟で挑むと宣言した、ベルゼイの言葉を露わすように、闇の軍勢は、総力を挙げてプリキュアを食い止めに掛かった。

ベリー、パイン、ルージュ、レモネードの四人は、妖精達に逃げるように叫ぶと、妖精達はパニツクに陥る。

「何てこつちや・・・折角逃げて来たわいらを狙ってきおった」

魔女は、プリキュア達の前で妖精達を皆殺しにしようと、真の姿、デビルとなつて襲い掛かるうとするのを、こちらも蜂の怪人のような姿になつたブンビーが、妖精達を庇



いながら攻撃するものの、三体一ではどうする事も出来なかった。

「くそう……これじゃ、勝ち目が無いぜえ?」

腕の機関銃見たいな武器で攻撃するブンビーだったが、三人は笑いながら攻撃を仕掛けてくる。ポプリが前に出て、バリアーを張ってみんなを必死に守るも、徐々に押され始める。

「ポプリ!今、今行くからね!!」

救出に向かおうとするサンシャインの前に、ジュナが立ち塞がり妨害する。

「そこを退いて!今はあなたに構っている暇は無いの!!」

「なら、腕づくで退かすことだな!!」

ジュナの強力な攻撃を受けて、救助に向かえないサンシャインに焦りが生じる。ムーンライト、ダークプリキュアも駆けつけ、サンシャインを援護するも、ノーザ、クライオンと戦った疲労は拭えず、三対一でようやくジュナと互角とも呼べる戦いになる。

「も、もう、ダメでしゅうう」

ポプリのバリアーが限界を向かえたその時、ポプリの耳に親しんだ声が聞こえてきた。

「ポプリ、良く頑張ったわね!コッペ!!」

雄叫びを上げたコッペの強力な一撃が、デビルを吹き飛ばす。妖精達は、その頼れる

姿に歓喜の声を上げるのだった。

「お婆ちゃん！コツペ様！」

妖精達を守るように立ち塞がるコツペの勇姿と、妖精達を労る薫子の姿を見て、ブロッサムが歓喜の声を上げる。

更にサラマンダー男爵、オリヴィエも駆けつけ、男爵は、シビレッタを得意のステッキで威嚇する。

「君達に恨みは無いが、今回はプリキュアに借りがあるのでねえ？向かってくるのなら・・・容赦はせんよ!!」

「男爵、オリヴィエ」

ブロッサム達は、加勢に来てくれた二人を見て微笑む、更に二つの人影が現われると、「プリキュア、此処は俺達に任せておけ」

「僕達も君達を援護しよう!!」

「ウエスター！サウラー！」

まだ完全に怪我が完治していない二人も駆けつけ、妖精達の援護に入る。その姿にピーチ達四人は、心配そうにしながらも頼もしさを感じる。

ようやく追いついたルージュ、レモネード、ベリー、パインが、デビル、シビレッタ、シャドウに立ち向かう。

「うわあ、何だか知らないが助かったあ！」

思わず安心したブンビーは、元の間奏姿に戻り、ホツとするのだった。

「ココやナツツ達を狙う何て・・・許せない！プリキュア！ファイヤー・ストライク!!」  
ルージュは、3発のファイヤーストライクを出して、三人に攻撃する。三人は攻撃を弾き返すも、

「甘いわよ！」

その弾き返した攻撃を、ベリー、レモネード、パインが再び蹴り返し、三人に攻撃を命中させる。レモネードが今だとばかり、プリズムチェーンで三人を捕獲すると、

「ベリー、パイン行くよ！」

「OK！」

「任せて！」

「プリキュア！ファイヤー・ストライク！」

「エスポワールシャワー・・・」

「ヒーリングプレアー・・・」

ルージュのファイヤーストライクの軌跡に、青と黄色の光が重なり合う。三色の光の合わさった巨大な球が、デビル、シビレッタ、シャドウを飲み込み、輝きを放つと、

「フレ〜ッシュウウ!!」

ルージユ、ベリー、パインの掛け声と共に、三人が光に包まれ消滅する。

ドリームとピーチ、互いに身構える視線の先には、本性を現わし、巨大な闘牛のような容姿に変化したサーロインが居た。

「行くよー！ピーチ!!」

「うん、ドリーム!!」

雄叫びを上げ突進して来るサーロインに対し、ピーチはピーチロッドを取り出すと、「悪いの、悪いの、飛んでいけー！プリキュアー！ラブサンシャイン・・・フレ〜ッッシュュ!!」ピーチから放たれたハートの光弾が、サーロインの動きを封じる。サーロインは藻掻き、そのパワーでピーチの攻撃を弾き消そうと試みる。

「今よ、ドリーム!!」

ピーチの合図に頷いたドリームは、腕をクロスさせると、

「プリキュアー！シューティング・スター!!」

上空に舞い上がり、腕をエックス字にして突進し、サーロインを突き抜けた。

「ハアアアアア!!」

ロッドをクルクル回転させたピーチが、サーロインを浄化し、勝負は付いた!!

ドリームとピーチ、互いの健闘を称え合い、ニッコリ微笑み合った・・・

「凄い！これがプリキュアのみんなの力・・・」

「私達とは、次元が違うような・・・」

プリキュア達の勇姿を目にしたメロディとリズムは、自分達は彼女達の足手纏いになっっているのではと戸惑うのだった・・・

「おのれ、プリキュア共めええ・・・」

「もう、あんた達に勝ち目は無いよー」

追い詰められたベルゼイ、ジュナ、レギーネ、ブラッディ、スコルプが激しく動揺する。ブラックが一同を指差し、もう勝負は付いたと宣言するも、

「ブラック、みんな、気をつけるメポ！邪悪な心を持った何か近づいて来るメポ」

「恐ろしい恨みを持ってそうミポ・・・」

メツプル、ミツプルの忠告を聞き身構えるブラック、ホワイトも、闇の奥から近づいて来る何かに気付き緊張が走る。生き残った闇の軍勢、ベルゼイ、ジュナ、レギーネ、ブラッディ、スコルプ、の身体が、何かに引き寄せられるように闇の中に吸い込まれた。

「な、何だ、これは？バ、バロム様！これは一体!?」

ベルゼイの言葉に、バロムが答え始める。

「今までご苦労だった・・・最早貴様ら個々の力では、プリキュアに勝てまい？ 貴様らの全てを・・・あの男に吸収させる！ 最期に私の役に立てる事を、光栄と思うのだなあ？」

断末魔の叫び声を上げながら、闇の中に消えたベルゼイ達は、魔神を見て恐怖の表情を浮かべながら、魔神に吸収された。吸収した魔神の容姿が、更に禍々しさを発する。

「みんな、気をつけて！ 来るよ!!」

ブラツクの叫びと共に、プリキュア達の背に一瞬悪寒が走ると、24人のプリキュア達は、爆風を受け弾き飛ばされる。何時攻撃されたのか分からない程だった・・・

そして、24人のプリキュア達の前に佇む魔神、額からはバツファローのような二本の角を生やし、髪は白色、背に灰色と紫、二つのコウモリのような翼を生やし、下半身は獣のように毛に覆われ、尻尾はまるで蛇のように蠢き続け、不気味さを醸し出していた。それはまさにデーモンと呼ばれた。

「貴様ら・・・答えよ！ 我は、誰だ!？」

「ハア？ そんなの知る訳・・・キヤアア」

マリンの返事が終わる前に、強烈な爆風が魔神を中心に巻き起こる。

「あなた達、もつと離れましょう・・・私達が此処に居ては、返ってプリキュア達の邪魔になってしまうわ!!」

薫子の忠告を受け、プリキュアを信じ、その場を離れる妖精達やブンビー達、

(何か、今の魔神……エターナルの館長にどことなく似てたような?)

ブンビーには、あの魔神がエターナルの館長に、何処か似ているように思えるのだった。

ブラック、ブルーム、ドリーム、ピーチ、ムーンとダークが真つ先に攻撃を仕掛けるが、6人の攻撃が、魔神の肉体に届く事はなかった。

逆に悲鳴を上げながら、六人が弾き飛ばされる!

「気をつけて、無闇な攻撃をしても、効果が無いわ!恐らく、強力な結界の類が、あの魔神の周りには張り巡らされている。あれを先ず何とかしなければ、ダメだと思う!」

ホワイトの忠告に緊張感が走るプリキュア達、咆哮し攻撃に転じる魔神の前に、プリキュア達は次第に追い込まれていく。倒されても、倒されても、不屈の闘志で立ち上がるプリキュア達、そんな中ローズは、何処からか微かに声が聞こえたような気がするのだった。

「あの人を、館長を救って」と……

「あれは、エターナルの館長だと言うの?」

「どうしたの、ローズ?」

ローズの独り言を気にし、アクアが声を掛けると、ローズは、アクアを、一同を見つめると、

「今……エターナルの秘書が言ってたわ!あれは、エターナルの館長だって……闇の力に飲み込まれ、自我を失っているみたい……」

ローズの言葉を受け、館長との戦いを思い出すプリキュア5、あの時もバリアーを張られ苦戦したものの、6人の力を結集し、強力なバリアーを崩壊させた事を……

「みんな、私達プリキュアの力を一点に集中させれば、きっとあの強力なバリアーを無効に出来る筈!!」

「そうだね、私達の力を結集させれば」

「出来ない事は無いよね!!」

「やろう、みんな!!」

ドリームの言葉に、ピーチが、ブルームが、そして、ブラックが同意する。円を組むように手を繋ぎ始めるプリキュア達……

そんな中、未熟な自分達が加わったら迷惑になるのではと戸惑うメロディとリズムだったが、ブラックがメロディの手を、ホワイトがリズムの手を取り微笑み掛ける。自信を取り戻したメロディとリズムが手を繋ぎ、

「私達の思いを一つに!プリキュア!レインボー・フラッシュシュ!!」

プリキュア達一人一人から発せられる強力な光が一つになり、魔神に突き進むと、魔神の周りのバリアーが激しく揺らぎ、そして消え去った。だが、プリキュア達の疲労も



相当なもので、しゃがみ込む者も居た程だった。真つ先に魔神に飛び込む者が居た。キュアドリームである。

「プリキュア！ シューティング・スター!!」

光を帯びて魔神に突っ込むドリーム、

(我は……この技を知っている?)

魔神は右手でドリームを弾き飛ばすのを、ピーチとパッションが受け止める。メロデイとリズムが領き合い、

「プリキュア！ パッションナートハーモニー!!」

例え効かないまでも、自分達をプリキュアとして暖かく迎え入れてくれたみんなの為に、少しでも役立つとうと、必死に頑張るメロデイとリズムの二人だった。二人が放った不思議な感じがする技に、魔神に戸惑いが生まれた。

(これは……何だ!? 我は……)

此処を勝負所と見たピーチが叫ぶ、

「行くよー! ベリー、パイン、パッション! みんなも力を貸して!! クローバーボックスよ、私達に力を貸して!!」

クローバーボックスから放出された光が、リンクルンに力をもたらず。魔神を包み込むように円形の輪になったプリキュア達、

「プリキュアフォーメーション！レディーゴー!!」

ピーチの合図で、パッションから始まったハピネスリーフに、ローズとプリキュア5が力を加えると、続いてドリームから受けたパインが、プレアリーフをセットし、メロディ、リズム、ハト組の五人に回す、続いてプロツサムから受けたベリーが、エスポワールリーフをセットし、花鳥風月に託す、四人が力を加え、ルミナス、ホワイト、そしてブラックが力を加え、ピーチに思いを託し、ラブリーリーフを加えた強力なクローバーマークを完成させる。クローバーマークは、マークの中心部で魔神を巨大な水晶の中に閉じ込めた。

プリキュアの力を結集させた、ラッキークローバー・グランドファイナーレスペシャルの力は、凄まじい輝きを放ち、魔神を浄化させていく。

(そうか、思い出した．．．私は．．．)

消えゆく魔神を労るように、光の中からアナコンデイに似たシルエットが、魔神を抱きしめ浄化させる。

「ほう、あの魔神を倒すとわな．．．流星は伝説の戦士と言うところか?」

何とか魔神を倒したプリキュアの前に、遂に闇の救世主バロムがその姿を現わす。肩まで伸びる深淵の闇を思わせる黒髪の長髪、相手を震え上がらせそうなたり上がった眼

光、まるで生命を感じさせないような蒼白な肌、その肌を隠すように、全身に覆われた法衣のような黒服、黒い靴、先程の魔神のような見た目からの不気味さではなく、心の底に響いてくるような不気味さを、バロムは持っていた。

「あんたが、バロムね？この世界を二元に戻しなさい!!」

ブラツクの言葉を嘲笑うように、バロムが言葉を続ける。

「戻す!?!それは敵わん願いだな…最早カオス様を止める事は不可能!!そして、プリキュア共!お前達は私と戦う前に、此奴らと戦い朽ち果てるのだ!!」

バロムが指をパチリと鳴らし現われる人物達、バルデスを筆頭に、サーキュラス、ウラガノス、ビブルス、真の姿を露わにしたゴーヤーンを筆頭に、キントレスキー、ミズ・シタターレ、ドロドロロン、モエルンバ、カレハーンが勢揃いする。

「バルデス!?!」

「ゴーヤーン迄…一体どうなってるの?」

「今迄の敵は、私達を疲弊させるまでの捨て駒とでもいうの…」

ブラツクが、ブルームが、そして、ホワイトが、嘗ての強敵達が、今のタイミングで出て来た事に危惧を感じる。

「お久しぶりですね!皆さん方、暫く見ぬ間に、随分お仲間を増やされたんですね…ですがい!」

「ハアアアアアア!!」

ゴーヤーン、バルデスの強烈な雄叫びで地響きが起こり、闇の底に落下するプリキュア達が居た。

「メロデイ!!」

落下していくメロデイを助けようとするリズムだったが、リズムの手から悲鳴を残して落下していくメロデイ、

「イヤアアア!!」

「落ち込むのは後になさい!今は、目の前の敵に集中しなければ・・・やられるわよ!!」  
落ち込んでいたリズムは、ムーンライトに注意される。

目の前に居る四天王、バルデス、サーキュラス、ウラガノス、ビブルスが、自信满满的な表情で、地上に残ったプリキュア、ムーン、ダーク、サンシャイン、リズム、ピーチ、パッション、ドリーム、ルージュ、レモネード、ブルーム、イーグレット、そしてルミナスを見つめる。

プリキュア達は地上と地下、二手に分断されてしまうのだった・・・  
力が残っていないプリキュア達に、危機が迫る・・・

第二十話：プリキュアの逆襲!

完

## 第二十一話：メロディ覚醒！

### 第二十一話：メロディ覚醒

#### 1、VSダークフォール

闇の救世主を名乗るバロムの方で、復活を果たしたバルデス達四天王、ゴーヤーン率いるダークフォールの五戦士、バルデスとゴーヤーンの力によって、プリキュア達は地上と地下の二組に分断されてしまう・・・

そして、地下に落下していくプリキュア達は・・・

「ワアアア!!」

薄暗い闇の中を、スカートを押さえ落下していくメロディは、地面に激突するも、思ったより地面は固く無く、さしたるダメージは無かった。

(あああ、し、死ぬかと思つた・・・)

思わず身体中を触り、無事なのを確認して安心するメロディだったが、

「キヤアア!!」

メロディ同様、悲鳴を上げながら落下してくるプリキュア達、嫌な予感が漂つたメロディは、ふと上を見上げると、自分の上にマリンが落ちてくるのを見付け、慌ててその

場を離れる。

(か、勘弁してえ……危なく下敷きになるところだったわ……)

メロディが案じた通り、さつきまでメロディの居た場所にマリリンが落下し、その上にブロッサム、ベリー、パイン、ブライト、ウインディが落ちてきてマリリンが地面にめり込む。

メロディは、変顔になりながらもホツとしたのも束の間、メロディの上にミント、アクアが落下してきて、メロディを押しつぶす。

(せつ、折角避けたのにいい)

そして、ブラックの上にはローズと、お約束通りホワイトが落下する……

「ウゲエエエ！」

ブラックは変顔になりながら思わず叫ぶ……

上に居たメンバーが申し訳なさそうに次々退くと、下の三人はお目々グルグル状態であった……

「ゴ、ゴメンなさい……三人共、大丈夫？」

ホワイトが苦笑混じりに代表して三人に謝るも、

「大丈夫じゃな〜い!!」

思わず変顔になりながら一同に抗議するブラック、マリリン、メロディの姿に、思った

より三人共元気そうな姿を見て、思わず苦笑しながら詫びるホワイト達だった・・・  
「それにしても・・・何処だろう？加音町にこんな地下何か無い筈だし・・・」

首を傾げるメロディにたいし、元々ダークフォールの戦士だった、ブライト、ウィンディは、辺りを見回すと、何処か懐かしさを覚える風景だった。

「もしかしたら・・・此処はダークフォールなのかも知れない！」

「ダークフォール？」

ブライトの言葉を聞き、何処かで聞いた事はあったようなと、ブラックがオウム返しのようにポツリと呟くと、ブライトとウィンディが頷いた。

「ゴーヤーン達が住処にしていた場所よ！嘗て、私達が生まれた場所でもある・・・」

ウィンディの言葉を聞き、一同に緊張感が走ったその時、

「その通り！と言いたいが、違うな、薰よ！おっと、今はプリキュアだったな!!此処は、闇に飲み込まれた哀れな世界の成れの果て・・・貴様達の世界も、直にこうなる運命!!」

一同の前にゴーヤーンと共に、ダークフォールの戦士の内、キントレスキー、ミズ・シタターレ、モエルンバ、カレハーンが姿を現わす。ブライトは、ドロドロンの姿が見えない事を訝かしむと、

「気をつけて！何処かにもう一人、ドロドロンが隠れている筈だわ」

ブライトの忠告を受け、辺りを探すプリキュア達だったが、ドロドロンの姿は見えない

かった。思わずマリンは、腰に手を当て踏ん反り返ると、

「あたし達に恐れをなして、逃げ出したんじゃないの?」

だが、マリンの言葉に反論するように、何処からかドロドロンの声が聞こえてくる。

「失礼な、僕ならさつきから此処に居るぞおお!」

不意に下から声が聞こえ、思わず下を見たメロディは、地面と融合していたドロドロンと目が合い、一瞬の沈黙の後、思わず悲鳴を上げる。

「イヤアア!この変態!!」

まるでドロドロンに、スカートの足を覗かれたように感じたメロディは、表情を強張らせながら、ドロドロンを何度も踏みつけた。ドロドロンは、逃げるように移動するも、各プリキュアのスカートの中を覗き込むように移動し、気味悪がった他のプリキュア達にも踏みつけられるのだった。仲間達の下に戻ったドロドロンは、不機嫌そうに姿を現わすと、

「お前達、僕の顔を踏みつけたなあ!?許さないぞお!」

「踏みつけられるような真似、あんたがするからでしようが!」

思わず味方ながら、ミス・シタターレもドロドロンを気味悪がり、隣に来るのを嫌がった。ドロドロンは地団駄踏んで悔しがると、

「何だよお、お前まで・・・味方じゃないかよおお!もういいよ・・・おいお前、よくも



沢山僕の顔を踏みつけたなあ！お仕置きしちやうからなあ!!」

ドロドロンはメロディを指差し、メロディを攻撃するのを宣言する。見る見る表情が強張っていくメロディは、

(じよ、冗談でしょう!?!あんな気味悪いのと戦いたくないよおお・・・)

ドロドロンを気味悪がったメロディは、戦うのを嫌がり、プリキュアの仲間達に縋るような目を向けると、誰か代わってと頼み込んだ。他のメンバーは顔を見合わせると、

「しようがないなあ、あたしとプロツサムが変わってあげるよ!」

「私とミントで引き受けるわ!」

「そうね、ドロドロンは私達も因縁ある相手・・・私とウィンディで戦ってあげても良いわよ?」

「やっぱり、私とホワイトで戦おうか?」

「あたしは・・・遠慮しとくわ」

マリン、アクア、ブライト、ブラックが代わって上げようかと言い、ベリーは苦笑しながらさり気なく拒否をする。何かみんなに迷惑を掛けているように感じたメロディは、申し訳無さそうにしながら、

「あのお、みんなに迷惑だから・・・やっぱり私が戦うわ!」

「どうぞ、どうぞ!!!」

「エエエ!?!」

予想に反して、あっさりメロディに譲った他のプリキュア達を、メロディは恨めしげに見つめるのだった・・・

「それで、私の相手は誰だ?・・・うむ、お前達の面構え、中々気に入ったぞ!!」

キントレスキーが先陣を切り、真っ先にブラックとホワイトに攻撃を仕掛けると、ブラック、ホワイトも受けて立ち、互角の殴り合いを繰り返す。

(何!?!此奴・・・強い!)

疲れがあるとは言え、ブラックはキントレスキーの強さを実感して、ホワイトに注意を促す。

「此奴、強いよ!ホワイト、気をつけて!!」

「ええ、ハア!!」

ホワイトにもキントレスキーの強さは実感していた。今まで戦ってきた敵の中でも、上位に入るだろうとホワイトも考えていた。

だが、ブラックとホワイトが押し返すと、キントレスキーは満足気な表情になり、

「おお、良いぞ!そうだ、鍛えた肉体と肉体で戦ってこそ意味があるのだ!!」

「何訳分らない事言ってるのよ!?!」

「私は肉体派じゃないわ!!」

ブラックとホワイトとの戦いを、心の底から楽しむキントレスキーであった。

それを合図にプリキュアVSダークフォール戦士との戦いが切つて落とされる。

「あらあ?小生意気なブルームの奴は、こつちじゃ無かつたの!?残念ねえ・・・おやあ?ちよつとあんた!何あたくしの髪型真似してんのよ?」

ベリーを見たミズ・シタターレは、自分の髪型に似ているようなベリーに対し、対抗意識を燃やした。ミズ・シタターレに因縁を付けられたベリーは、一瞬怯んだものの、「何処が同じよ!よく見なさいよね!!あたしは、巻いた髪を後ろに流してるでしょう?あなたは、両脇がグルグル巻いてあるじゃないのよ!」

モデルを目指しているベリーとしては、真似されると因縁を付けられるのを非常に嫌がったようで、ミズ・シタターレと口喧嘩で火蓋を切る・・・

(いいのかな、こんな戦い方で・・・)

思わず、言い合いを続ける二人に呆れるパインだった。

ミントは二人の髪型をジツと見つめると、

「そうね、脇で巻いた髪は、ベリーより、どちらかと言えば、レモネードの方に似ているよ。よな気もするわよね!」

「ミント、レモネードとは全く似てないわよ……と言うより、今は髪型の話をしてる場合じゃないでしょう?」

ミントがアクアに同意を求めると、思わずアクアはミントに呆れ、レモネードとは似てないし、今はそんな場合じゃ無いと窘め、苦笑しながら謝るミントだった……

「お前達、何辛気くさい顔してるんだ? チャツチャアと明るく行こうぜ!!」

ブライト、ウィンディと戦うモエルンバが、思わず二人に明るく戦おうぜと話し掛け、腰を振り踊り出すも、二人はモエルンバのペースに巻き込まれず、モエルンバを無視するように身構えた。無視されたように感じたモエルンバは、二人に苛だちを覚える。

「だああ、昔からお前達はそうだった! 多少は明るくなつたようだが……まだまだだな! 俺の炎で、明るく燃やしてやるぜえ……チャツチャ!!」

再び腰を振りながら、踊り続けるモエルンバを無視するように、ブライト、ウィンディが攻撃を仕掛けた……

カレハーンと対峙したのは、ブロッサムとマリン、敵ながら何処かフレンドリーに話し掛けるカレハーンであった。

「俺はカレハーン! カレッツチと呼んでくれ!」

「カレーパン!？」

マリンにはカレーパンと聞こえたようで、思わず首を捻ると、

「違〜う!カレーパンじゃない、カ・レ・ハーンだ!!まあ、確かにカレーパンは嫌いじゃないが……」

「カレーは美味しいですからね!で、カレーさん、どうしても私達と戦うんですか?」

「だから、カレーじゃないってば、カレハーンだ!!縮めるなら、カレーさんじゃなくてカレッチと呼んでくれ!!」

まるでトリオ漫才のような掛け合いをするプロツサムとマリン、そしてカレハーン、さつきまでと違うコミカルな敵達を見て、ローズは呆気に取られ眺めていたが、

「あなた達、もつと真面目に戦ってよね!こっちまで調子狂っちゃうわ!!」

ローズの視線の先に、ゴーヤーンの姿が目飛び込んでくると、ローズはゴーヤーンをキツと睨み付け、戦いを仕掛けた。ゴーヤーンは口元に笑みを浮かべると、

「おやおや、勇ましいですねえ……ですが、私に一人で向かって来るとは……無謀ですねえ!」

ゴーヤーンが右手を前に突き出すと、強烈な衝撃派が発生し、吹き飛ばされるローズ、(何……此奴、強い!?)

体勢を立て直したつもりだったローズだが、勢いを止められずそのままブライト達の

方まで転がった。ゴーヤーンは、ローズを見下したように、

「私と一人で戦おうとは……思いつくのも大概にする事だな!!」

ゴーヤーンに見下され、ローズは悔しそうな表情を浮かべ、ヨロヨロ立ち上がろうとする。

「ローズ!!」

他のプリキュア達が、吹き飛ばされたローズを心配し声を掛けるも、吹き飛ばされたローズは、ゴーヤーンの強さをその身を持って思い知らされた……

闇の力によつて、まるで炎の化身となったモエルンバの火炎攻撃の前に、防戦一方となるブライト、ウインディ、

「ウインディ、あまり体力のない私達が」

「ええ、此処で手間取る訳にはいかない……」

バリアーを張つてモエルンバの攻撃に耐える二人だったが、威力を増すモエルンバの攻撃に、バリアーは破られ、二人が吹き飛ばされる。モエルンバは宙に浮かびながら、「どうだい、セニョリータ!俺のチャツチャと燃える炎は、お気に召したかい?」

再び腰を振りながら、二人に炎の感想を聞き始めるモエルンバ、ヨロヨロ立ち上がった二人の目は、希望を失つては居なかった。

「あなたに何か・・・負けない！」

「ええ、あなたを、ゴーヤーンを倒し、みんなと再び会うんだから!!」

スパイラルリングをセットし、プリキュア!スパイラルスター・スプラッシュを放つ  
ブライト、ウインディだったが、体力の弱まった二人は、モエルンバを追い込むものの、  
後一步の力が足りず、モエルンバに押され始めてくる。再び全身を炎と化し、勢いを増  
すモエルンバに押され出したその時、二人の背後にローズが近づくと、

「私の力も使って!ハアア!!」

二人の後ろに立ち、両手を突き出しエネルギー波を加える。

「ローズ!ありがとう!!」

「あなたの思い、無駄にしない!!」

三人の力が結集し、勢いを増したスパイラルスター・スプラッシュは、モエルンバを  
飲み込み闇に返すも、力を使い果たした三人は、その場にしゃがみ込んでしまうのだっ  
た・・・

「花をモチーフにしている貴様達と戦うのは忍びないが、これも宿命・・・覚悟して貰お  
う!」

カレハーンの心の中にも、微かに花を愛する気持ちがあると感じたブロッサムは、

「分かりました・・・受けて立ちます！マリン、メロディの援護に回って下さい！この方とは、私が一人で戦いたいんです!!」

「ええ？大丈夫!？」

心配するマリンに笑顔で頷くブロッサムを見て、成長したねと頭を撫でるマリン、  
「じゃあ、あたしはメロディの応援に行くね!」

「はい、お願いします!!」

マリンがメロディの下に向かったのを見送ったブロッサムは、カレハーンを見つめると、

「お待たせしました！行きますよ!!」

カレハーンが頷き、ブロッサムの戦いが始まった・・・

これまでの戦いで成長したブロッサムからは、嘗て史上最弱などと言われた面影は、もう何処にも無かった。互いの技と技をぶつけ合い好勝負を続ける二人、ブロッサムが、花びらの舞であるブロッサムシャワーと、カレハーンの攻撃である枯れ葉の舞が激突する。

「やるな!」

「あなたこそ!」

互いにニコリと微笑み会う二人、今度はカレハーンのパンチと、ブロッサムインパク



トが相殺する。

「やはり、出来るならお前とは戦うのが僥びがたいものだ．．．キュアブロッサムと言ったな．．．お前の持てる力の全てを俺にぶつけてこい!!俺もそれ相当の力で迎え撃とう!!」

「分かりました．．．集まれ!花のパワー!!」

ブロッサムが、ブロッサムタクトを取り出すと、カレハーンも己が持つ力の全てを解放する。

「花よ、輝け!プリキュア!ピンクフォルテウェイブ!!」

タクトから射出したピンクの花の形をしたエネルギー弾が、カレハーンに向けて突き進む。

「うむ!良い技だ!!俺の最期を飾るに相応しい技だな．．．」

カレハーンは微笑むと棒立ちになり、あえてフォルテウェイブにその身を委ねた。

「カレッチ．．．さん!どうして?」

「ほう、初めて呼んで貰えたな．．．お前と戦っていて、光も悪くはないと思えてな!さあ、その花で俺を．．．」

「．．．はい．．．」

涙混じりにタクトを回すブロッサムは、カレハーンを浄化すると、ブロッサムの側に

枯れ葉が一枚ヒラヒラ舞い降りる。それを手に持ったブロッサムの目から涙が零れた……

「やつぱり、此奴と戦うのは……嫌だああ!!」

メロディは、ドロドロンから逃げ回っていた……

ボソボソ喋り、何処か気色悪げなドロドロンに触れたとき、メロディは悪寒が走った。

(リズムが居れば、まだ戦う気になれたけど……一人じゃ)

「絶対、嫌ああ!!」

逃げ回るメロディを、楽しそうに追い回すドロドロンは、

「エへへ……絶対捕まえるもんね……捕まえたらどうしよっかなあ?」

メロディを捕まえた後の事を考え、ニヤニヤするドロドロンを見て、ますます拒否反応を起こすメロディだったが、ドロドロンが撒いていた泥に足を取られ思わず転んでしまった。

「イテエ……あつ!?!」

メロディの右足を捕まえ、そのまま持ち上げるドロドロンは、逆さまにしたメロディを振り回しはしやいでいた。メロディはスカートを押さえながらムツとすると、

「離してよ！この変態!!」

「あれえ、僕にそんな事言うの？生意気だな・・・どうしようかなあ!?このまま足をもいじやおうかな!?うゝん、それじゃ面白くないな・・・お前が一番嫌がりそうな事は・・・そうだ！裸にしてえ・・・このまま股裂きっていうのも面白いかもな！」

嬉しそうなドロドロンに対し、メロディは激しく首を振り嫌々をすると、更に興奮したドロドロンが、メロディのスカートに手を掛ける。

「イヤア・・・助けて、リズム!!」

涙目になり、思わずリズムに助けを求めてしまうメロディだったが、直ぐに此処にはリズムが居ない事を思い出す。ドロドロンがメロディのスカートを引き千切ろうとしたその時、

「止めな、この変態!!」

救援に来たマリンの跳び蹴りを顔面に食らい、吹き飛ぶドロドロンは、思わずメロディを離してしまう。メロディはホッと安堵しながら、空中でクルクル回転し着地すると、

（た、助かったあ・・・）

「あ、ありがとう・・・マリン！」

心の底から喜んだメロディは、マリンに感謝する。少し照れたマリンだったが、

「全く、逃げ回ってるから、あの状態が調子に乗るんだよ！あたしが手を貸すからさ！チャツチャとやつつけるよ!!」

頼もしいマリンの出現は嬉しいのだが、メロディは、リズムの居ない自分が戦力になれるか不安がる。マリんにその事を打ち明けると、笑われると思っていたメロディは、「大丈夫！もつと自分に自信持ちなよ!!あんたのパートナーの代りは、あたしがしてあげるからさ!!あんたは、今まで戦ってきた通りの事をすれば良いじゃん！此奴ら倒して、みんなの所に戻ろう!!」

マリンの励ましを受け、少し元気を取り戻したメロディは、  
 (そうだ、そうだよね、マリンの言う通りだ・・・こんな所で躓いてたら、リズムに笑われちゃうよね！リズムだって頑張ってるんだ！私も・・・頑張る!!)

「ここで決めなきや、女がすたる・・・よろし!!」

気合を入れるメロディ、その時、メロディに異変が起こる。

・・・心に、何かが沸き上がってくる・・・

・・・これは、何?・・・

戸惑いながらも、自分の気持ちに素直になるメロディ、胸のモジュールが輝いたその時・・・

・・・何故だろう、解る、私、解るよ!!・・・

メロデイは舞いながら両手の指をパチンと鳴らすと、

「奏でましよう、奇跡のメロデイ！ミラクルベルデイエ!!」

メロデイが、新たな力に目覚めた瞬間だった・・・

プリキュア達を心配する妖精達、自分への危機は取り敢えず去ったようで安心していったセイレーンだったが、隣に居るハミイを見ると、何故かハミイが泣き出しているのを見てセイレーンが驚く・・・

「ハミイ・・・あんたどうしたのよ？泣き出したりしてき・・・」

ハミイはセイレーンに抱きつき、セイレーンの手を取り踊り出すと、セイレーンは、「止めんか、このポケ猫！」と、ハミイの手を振り解くのだった。

他の妖精達はどうしたのだろうとポカンとしていた。

「ハミイには解るニヤ！メロデイが新たな力に目覚めたニヤ!!こうしちや居られないニヤ!!」

ハミイはセイレーンの手を引っ張り、プリキュア達の戦っている方向に駆け出す。

「イヤアア!!行くなら、一人で行きなさいよ!あたしを・・・巻き込むなああ!!」

セイレーンの叫び声は、闇の中へと消えていった・・・

嬉しそうに舞い踊るメロディに、マリンは啞然としていたが、メロディの様子を見てニコリとすると、ドロドロンに攻撃を仕掛け、メロディのフォローにまわった。

・・・ありがとう、マリン・・・

・・・マリンの気持ちに応える為にも・・・

メロディのリズムカルな舞に誘われるように、フェアリートーンが姿を現わす。

「おいで、ミリー！」

メロディの誘いを受け、フェアリートーンの内、ミリーが嬉しそうにメロディの側に寄ってくる。メロディはやってきたミリーを、新アイテム、ミラクルベルティエに装着すると、

「駆け巡れ、トーンのリング！プリキュア！ミュージックランド!!」

円を描くようにしてエネルギーリングを作るメロディは、マリンを見ると、マリンはメロディのしようとする事が解るように、ドロドロンをメロディの方に誘導し、メロディの横に降り立つと、

「やるじゃん、こんな時に新しい力に目覚める何てき・・・よくし、あたしも負けてられないよ！行くよ、メロディ!!」

マリンはマリンタクトを取り出すと、ドロドロンに対し、ブルーフォルテウェイブを放つ、メロディは嬉しそうに頷くと、エネルギーリングをドロドロン目掛けて投げつけ

た。

「ウワァ・・・何だよ、これは？」

二人の合体技に動揺するドロドロロンだが、ブルーフォルテウェイブが、ミュージック  
ロンドがドロドロロンを包み込む。

「ハアアア！」

「三拍子！1・2・3！」

タクトをぐるぐる回すマリんと、ミラクルベルテイエを、嬉しそうに指揮棒のように  
振るメロディ、ドロドロロンの目がうつらうつらしてくると眠りに付く・・・

「ファイナーレ!!」

メロディの合図と共に爆発が起こり、マリんとメロディは見事ドロドロロンを浄化する  
事に成功する。

「やったじゃん、メロディ！」

「ありがとう・・・これもマリンのお陰だよ!!」

メロディとマリン、二人が笑顔で両手を合せた・・・

「なくにが、完璧よ！完璧よ！完璧よ！完璧よ！完璧よ！完璧よ！完璧よ！完璧よ！完璧よ！完璧よ！  
でた者を言うのよ・・・おわかり？」

胸の谷間を見せつけ、更にトークで、そして水芸で、何故か観客のようになっていくアクア、ミント、パインにアピールするミズ・シタターレ、思わずそのセンスに拍手を送ってしまう三人に、

「あなた達、どっちの味方よ!? いい事、あなたのやってる行為、そういうのをよこれって言うのよ!!」

「キイイ!言わせておけば・・・ブルームの小娘も生意気だけど、この娘も非常に腹立つわ!!」

「アクア、ミント、私達・・・どうしたら良いんでしよう?」

ベリーとミズ・シタターレの、醜い女の戦いを見せられ、ウンザリしてきたパインが思わずアクアとミントに訪ねる。アクア、ミントも首を捻りながら、

「どうしたらと言われても・・・ねえ?」

「そうねえ・・・似たもの同士は唾み合うとも聞くわね!」

「似てないわよ!!」

思わずハモってミントに文句を言う二人に、三人はやっぱり似ているかもと心の中で思うのだった。

「ああ、もうウザいわ・・・こうなったら実力勝負よ! その貧乳共と一緒に、纏めて相手して上げるわ!!」



(・・・貧乳・・・ですってえええ!!)

貧乳という言葉聞き、アクアの目の色が変わる・・・

「私はまだ成長途中なの！今の言葉、許せない!!プリキュア!サファイア・アロー!!!」

同時に三本の水の矢が、シタターレ目掛け放たれる。シタターレは水の力で辛うじてアクアの技を無効化すると、少し焦りながら、慌ててアクアに抗議するも、

「ちよつ、ちよつと、行き成りは卑怯でしょう?つて、ハハアン・・・結構、気にしてたよね?オホホホ!ゴメンあそばせ・・・あたくし、正直な者でつい・・・ね!」

アクアを嘲笑うように、自慢気に胸の谷間を見せつけるシタターレに、益々冷静さを欠いていくアクア、思わずミントが宥めるも、

「ア、アクア、落ち着いて!あなたまで敵のペースに・・・」

「ミント、ベリー、パイン、これ以上戯れ言に付き合いきれないわ!一気にいくわよ!!」

「そうね、あの色物キャラに、あたし達の完璧な実力、見せてやりましょう!!」

手と手を取り合い、気合いが入るアクアとベリーに反し、ミントは苦笑混じりに、パインは溜息を付き、(もう・・・どうにでもして)と呆れかえるのだった。

ようやく戦いらしい戦いに入ったのを、腕組みしながら見ていたゴーヤーンは、(何をやってるんだ、あいつらは?)と呆れかえりながら見つめていた。

「誰が色物キャラよ!全く小生意気な小娘共ね・・・さあ、本気で行くわよ!!」

ミズ・シタターレは、得意の水を使った攻撃でプリキュア達を責め立てた。自在に水を操りプリキュア達を翻弄するシタターレ、その威力は凄まじく、プリキュア達は何度も地面に叩き付けられた。

「オホホホ！何よ、口だけじゃない……さあ、さあ、さあ！」

シタターレの操る水に、身体事持ち上げられ弄ばれる四人は、突然水を消され地上に落下する。お尻から地面に落ち、思わずお尻を摩る四人、

「何するのよ！見てなさい……」

ベリーは、パインに目配せして、二人はベリーソード、パインフルートを取り出す。一方のアクア、ミントはベリーと対局の位置に移動し、シタターレに陽動を仕掛け攻撃を繰り返す。シタターレが、アクア、ミントに意識を奪われた時、

（掛かった！）

ベリーはチャンスとばかりに、パインに合図し、

「響け！希望のリズム！プリキュア！エスポールシャワー……」

「癒せ！祈りのハーモニー！プリキュア！ヒーリングプレーア……」

「フレ〜ッッシュュ!!」

青いスピードの光弾と、黄色いダイヤの光弾がシタターレ目掛け照射される。背後を振り返ったシタターレの表情が見る見る強張っていった。

「しっ、しまった!? あたくしとした事が・・・」

不意を突かれたシタターレは、思わず顔を腕で覆い、攻撃に備えたのだが、幾ら待っても攻撃が当たる事は無かった。

(あらあ、どういう事かしら?)

不思議そうに顔を上げたシタターレ、攻撃を放ったベリーとパイン、それを見ていたアクアとミント、五人は思わず目が点になる。二人の必殺技は、シタターレに届く遙か手前で威力を失速し、地面を攻撃しているような状況だった。呆然とするベリーとパイン、

(しまった!? 思ってた以上に、あたし達、疲労してたって事?)

ベリーの表情が口惜しきで歪む、それを見たシタターレは、

「オウホホホホ! 全く、一時はどうなるかと冷や冷やしたわ・・・敵を驚かせるだけの技何て、あなたらしくてお似合いよ? オウホホホホ!!」

シタターレに見下され、大笑いされたベリーの心は、屈辱感で一杯だった・・・

(こんな奴に・・・見下される何て!)

ベリーは拳を震わした・・・

悔し涙を流しそうな程に・・・

そんなベリーを見たパインは、ベリーの心境を思うと、自分の事のように哀しくなっ

てくる。ベリー・・・いや美希とは幼なじみで、彼女の心中は理解出来るのだから・・・  
(ベリー・・・)

「大丈夫、ベリーなら出来るよ!私、信じてる!!」

「パイン・・・」

パインの言葉を受け、少し気が楽になったベリーに、アクアとミントが助言を与える。

「大丈夫よ!私達がフォローするわ!」

「届かないなら、届かせれば良いのよ!!」

助言を与えるや、ニツコリとベリーとパインに微笑んだミントとアクアは、再びシタターレに陽動攻撃を仕掛ける。

(届かなければ・・・そうか!!)

何かが閃いたベリーは、パインに耳打ちすると、パインの表情も明るくなり、大きく頷いた。シタターレ目掛け走り出す二人を見て、シタターレは、二人が自暴自棄になつたと判断し、最早相手をするまでも無いと油断していた。

アクアとミントを狙い、水の波状攻撃を放つも、ミントのエメラルドソーサーがそれを防ぐ、

「全くイライラさせる技ね・・・いい加減オネンネしなさい!!」

アクアと、ミントに止めをさそうと力を込めたその時、シタターレの直ぐ側にベリー

とパインが到達する。

「あらく、今度はどんな余興を見せてくれるのかしら?」

鼻で笑いながら、ベリーの事をほくそ笑むシタターレだったが、ベリーの口元に笑みが浮かんでいる事に気付き、

「何笑つてるのよ!?!」

「油断したわね! 届かなければ・・・届かせれば良いのよ!!」

ベリーの言っている意味が解らず、思わず「ハア?」と聞き返したシタターレだったが、

「プリキュア! エスポワールシャワー・・・」

「プリキュア! ヒーリングプリアー・・・」

「フレ〜ッッシュュ!!」

ベリー、パインはシタターレに密着した状態で必殺技を放つ、驚愕の表情を浮かべたシタターレに、二人の攻撃が命中する。何とか堪えようとするシタターレに、アクアのサファイアアローが、ミントのエメラルドソーサーが追い打ちを掛ける。

「ガハア・・・、これを狙って・・・よくも・・・」

これでは避けようもなく、さしものミズ・シタターレも、四人の合体技の前に敗れ去った。

「やったわね! ベリー! パイン!」

「ありがとう…:アクアとミントがフォローしてくれたからよ!そして、ありがとう…:パイン!!」

ベリーは心から仲間達に感謝した…:

「ミズ・シタターレ!!お、おのれ、プリキュア共…:よくも、よくもおお!!貴様らあ、絶対に許さんぞおお!!」

ブラック、ホワイトと満足気に戦っていたキントレスキーだったのだが、ミズ・シタターレが倒されるのを見て逆上する。自慢の筋肉は更なる発達を見せ、トレードマークのモヒカンヘアと髭迄パワーアップを果すキントレスキー!

「又ウウオオオオ!!」

キントレスキーが地面に思いつきりパンチをすると、まるでマグマが吹き出すように、闇の中に不気味な赤が浮かぶ、咄嗟に躲したブラックとホワイトだったが、背後でプリキュア達の悲鳴が響き渡る。

…:みんな!!…:

慌てて背後を振り返ったブラックとホワイトは、二人を除いたプリキュア達が、キントレスキーの強烈な一撃を受け、倒れている仲間達の姿を見て顔色を変えた。険しい顔

をしたブラックが、キントレスキーに抗議する。

「あなたの相手は私達でしょう！みんなに手出ししないでよ!!」

「黙れ！他の奴らは兎も角、ミス・シタターレを葬った事、万死に値する!!こ奴らを同じ目に合わせねば・・・私の気が済まぬ!!」

激怒して、何時もの紳士的な振る舞いも影を潜めたキントレスキーに、ブラック、ホワイトが果敢に攻撃を仕掛けるも、逆にキントレスキーの強烈な一撃を受けて吹き飛ばされる。

・・・あきらめない・・・

・・・私達は・・・

「絶対に諦めない!!」

満身創痍になりながらも、ヨロヨロ立ち上がり固い決意を述べるブラックとホワイトを見て、キントレスキーは再び笑みを浮かべ、冷静さを取り戻した。

「礼を言う・・・貴様達のその闘志が、私を我に返してくれた！せめてもの礼に、私の最強の一撃でお前達を葬ってやろう！ヌウウオオオ!!」

力を更に込めるキントレスキー、それを見たブラックとホワイトが手を握り合い、

「私達の目の前に、希望を！」

「私達の手の中に、希望の力を！」

ホワイト、ブラックの言葉を聞き入れたように、闇の中に金色の光がブラックとホワイトの下に集まってくる。ブラックの右手に、ホワイトの左手に、スパークルプレスが遂に装着される。アイコンタクトした二人は、

「ブラック、サンダー!」

「ホワイトサンダー!」

「プリキュアの、美しき魂が!」

「邪悪な心を打ち砕く!」

「プリキュア! マーブルスクリュー・・・マックス!!」

二人の必殺技、マーブルスクリューがキントレスキーに発射される。キントレスキーは両手で受け止めると、嬉しそうな表情を浮かべ、徐々に二人の方に押し返して歩き出す。

「良いぞ! もつとだ、お前達の力は、まだまだこんなものでは無い筈だ・・・この私に、見せてみる!!」

「ハアアア!!」

「ヤアアア!!」

・・・負けない、こんな所で負けられない・・・

・・・まだ、私達にはしたい事が山程あるの・・・



二人の闘志に応えるように、スパークルプレスが激しく回転し出すと、虹色の光が稲光のようにマールブルスキーユに加わっていく。

「スパークウウウ!!!」

二人の掛け声と共にどンドン威力を増し、オーロラを纏ったマールブルスキーユを受け、キントレスキーがどンドン後ろに押し返される。

「又ウウオオ!す、凄まじい攻撃だ・・・貴様らと戦えた事・・・誇りに思うぞおお!!!」  
正面から直撃を食らったキントレスキーだったが、その最期は満足気だった・・・

「やれやれ、折角生き返ったというのに・・・仕方がありませんねえ!この私が相手をしてましよう・・・覚悟なさい!私は今迄の奴らのように、甘くはありませんよ!!!」

凄まじい闘気を纏い、ゴーヤーンが遂に動き出す・・・

「みんな、大丈夫・・・みんな!」

ブラック、ホワイトが背後を振り向いた時、体力の限界に近かったプリキュア達は、先程のキントレスキーの攻撃を受け、最早戦闘に参加出来る状態では無かった・・・

・・・これからっていうのに、私は・・・

ローズが、

・・・身体が、いう事を効かない・・・

アクアが、

・・・みんなを守らなきゃ、みんなを・・・

ミントが、

・・・あの時、私達を闇に飲み込んだゴーヤーンに、一矢も報えないなんて・・・

ブライトが、

・・・ゴーヤーンを倒して、みんなと、みんなと、合流しなきゃ・・・

ウインディが、

・・・あと一人、あと一人倒せば、ピーチ達に合流出来るというのに・・・

ベリーが、

・・・ピーチやパッション達に会う為にも、ここで倒れる訳には・・・

パインが、

・・・まだ、倒れる訳には、いかないんです・・・

プロツサムが、

・・・何で、動いてくれないのよ！あたしは、まだ戦いたいのに・・・

マリンが、

・・・リズム、あいつを倒せれば、また会えるのに・・・

メロディが、

皆、立ち上がろうと何度も試みるも、起き上がる事は出来なかつた・・・

「おやおや、無様ですねえ・・・これじゃ私が戦う迄もありませんね!」

ゴーヤーンが自分達の仲間を嘲笑するのを聞き、ブラックの全身が震えを起こした。拳をギュツと握つたブラックは、

・・・仲間を!プリキュアのみんなを!!・・・

「笑うなあああ!!!ダダダダダダ!!!」

ブラックが単身ゴーヤーンに突つ込み、顔面に強烈なパンチの連打を浴びせると、堪らずゴーヤーンが吹き飛ばされる。

(何だ?!?此奴にまだこんな力が残っていたのか?・・・だが!)

直ぐに立て直したゴーヤーンが、お返しとばかり、ブラックの顔面を殴ろうとする右手をホワイトが掴み、合気道のように投げ飛ばす。地響きたてて叩き付けられるも、さしたるダメージは無さそうに、平然と立ち上がるゴーヤーン、そんなゴーヤーンに怯む事もなく、

「みんなの分まで・・・私達が戦う!!」

ブラックとホワイトが、ゴーヤーン相手に身構えるも、体力の少ない二人に取つて、それは無謀とも呼べる行為だつた・・・

第二十一話：メロディ覚醒！  
完

## 第二十二話：カオス！

## 第二十二話：カオス

## 1、シャイニングスター

時を同じくして、地上に残ったプリキュア達は、バルデス達四天王と対峙していた。四天王は凄まじく強く、体力を失っているプリキュア達が、1対1で戦えるレベルの相手は居なかった。何度も倒されそうになるも、体力の少ないプリキュア達に取って、ルミナス、サンシャインの防御技が、何度も一同の危機を救う。

「今の私達に、彼らと個々に戦うのは無理！みんな、何人かで組んで戦いましょう・・・サンシャイン、ルミナス、あなた達は、みんなのサポートをお願い!!」

キュアムーンライトの指示の下、一同は何人かで組み四天王と戦う・・・

だが、バルデスは後方に下がり、他の三人にプリキュア達の始末を任せ闇の中に消える。

ムーン、ダークが追おうとするのを、サーキュラスが阻止する。

「自惚れるな！貴様ら如き、バルデスが相手をするまでも無い!!又ウウオオ!!」

サーキュラスの強力な一撃を食らい、吹き飛ばされるムーンとダークは、体勢を整え

る。

・・・何て凄まじい力なの・・・

劣勢のムーンとダークに、ドリームが加わった。

ムーン、ダーク、ドリームがサーキュラスと戦い、

ブルーム、イーグレット、ルージュがビブルスと戦い、

ピーチ、パッション、レモネードがウラガノスと戦う、

ルミナス、サンシャインが皆をサポートする中、唯一人、リズムはどうすれば良いのか戸惑っていた。

・・・みんなが、戦っている！でも、でも、メロディが居ないのに私は・・・

メロディの居ない不安から、リズムは戸惑い、戦いに尻込みしていた。そこにハミイとセイレーンが現われるが、戸惑っているリズムを見たハミイは不思議そうに、

「リズム、何してるニヤ？他のプリキュア達は戦ってるニヤ!？」

「ハミイ！分かってる・・・私にだって分かってる！でも、メロディが居なければ私は・・・何も出来ない・・・」

目を伏せ項垂れるリズム、それに気付いたウラガノスは、リズムを見て大笑いする。

「何だ？貴様、我らに恐れをなして震えて居るな・・・こりや傑作、プリキュアにも臆病者が居るのだな！ブウワツハハハ!!」

ウラガノスに大笑いされ、リズムは自分の不甲斐なさに涙が出そうになる。だが、プリキュアの仲間達は、そんなリズムを励ます！

ブルーム、イーグレットが、最初にプリキュアになった頃の事、二人が敵の策略で離れ離れにされた時の心細さの事を・・・

ドリーム、ルージュ、レモネードが、自らの不注意が原因で、ナイトメアに絶望の仮面を付けられ時の事、仲間を頼る事は全然恥ずかしい事じゃ無い事を・・・

ピーチ、パッションが、敵だったパッションを、ピーチ達が導いてくれた事を、仲間を信じる事、自分を信じる事の大切さを・・・

サンシャインが、大切なのは自分で変わろうと思う事を・・・

ルミナスが、自分の存在の疑問を、なぎさとほのかという大切な人達が導いてくれた事を・・・

「そうニャー！すっかりするニャ・・・メロディは、他のプリキュアと一緒に戦いながら、新たなる力に目覚めたニャ!!」

ハミイの言葉を聞き、リズムは驚き自問する。

・・・メロディは、私が居なくてもプリキュアとして、今、すべき事を頑張っている！なのに、私は・・・

リズムの迷いを知ったムーンライトは、

「誰でも最初の頃は、プリキュアとしての自覚に悩む時があるもの！私とてそうだった・・・キュアリズム！あなたも今までプリキュアとして戦ってきた筈・・・今、自分がすべき事を、自分で考えなさい!!」

・・・強敵と戦いながらも、私の事を気に掛けてくれる仲間達、メロディは側に居ないけれど、私にはこんなにも素晴らしい仲間達が側に居てくれる・・・

「ありがとう、みんな・・・ありがとう、ハミィ！気合のレシピ、みせてあげるわ!!」  
リズムの表情が晴れ渡ると、リズムにもまたメロディと同じように変化が訪れる。

・・・何だろう、この溢れ出してくる感覚は・・・

リズムの表情が晴れやかになつてくる。その時、メロディ同様、リズムの胸のモジューレが輝く。リズムもまた、メロディ同様嬉しそうに舞い始め、

「刻みましよう、大いなるリズム！ファンタスティックベルティエ!!」

リズムが新たな力に目覚める・・・

それを見つめるハミィとプリキュア達は、心から嬉しそうに、セイレーンは、驚愕の表情を浮かべるのだった。フェアリートーンも喜びの踊りを踊り、リズムはその中のフェアリーを見付けると、

「おいで！フェアリー!!」

フェアリーは嬉しそうにリズムの側にやって来る。フェアリーを新アイテムファンタス



ティックベルテイエに装備したリズムは、ピーチ、パッション、レモネードに加わり先程大笑いされたウラガノスと戦う、

「あなたに、私の気合いのレシピ、みせてあげるわ!!」

ピーチ、パッション、レモネードがリズムを見てニコリと微笑み、リズムも三人を見つめニコリと微笑み返す。

「これは私達も負けてられないね・・・行くよ!パッション、レモネード!」

パッション、レモネードも大きく頷くと、ピーチロッド、パッションハープを取り出し、レモネードが、プリキュアリズムチェーンでウラガノスの動きを封じる。しかし、ウラガノスの怪力は、それをものともせぬようにレモネードを引き吊る。

「何だ、そんな事で俺に勝てると思うなよ!!」

鼻息荒く気合いを入れるウラガノスに、ピーチとパッションは見つめ合い頷く、二人がリズムを見ると、

「行くよ!リズム!!」

「はい!!」

二人にリズムが微笑み、メロディと同じように、

「駆け巡れ、トーンのリング!プリキュア!ミュージッククロンド!!」

円を描くようにエネルギーリングを作ったリズム、

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！プリキュア！ラブサンシャイン・フレッシュシュ!!」  
「吹き荒れよ！幸せの嵐！プリキュア！ハピネス・ハリケーン!!」

ピーチのハート形の光弾が、パッションの赤いハート型の連続エネルギー光弾が、そして、リズムが放ったエネルギーリングが、ウラガノス目掛け突き進む。驚愕の表情を浮かべながらも、

「な、何だあ！こんな物でこの俺が・・・」

リズムの「ファイナーレ！」の言葉を合図に、ウラガノスは消滅する。

リズムに近寄り微笑むピーチ、パッション、レモネード、その光景をハミイは満足気に、セイレーンは何処から取り出したのか、手帳にメモしていた・・・

「よくもウラガノスを・・・お前達、覚悟しろ!!」

ウラガノスを倒され、ビブルスの凄まじい攻撃が続く、追い込まれたブルーム、イーグレット、ルージユだったが、ルミナスのバリアーが三人を援護する。

「敵の攻撃は私が防ぎます！みなさんは、攻撃に集中して下さい!!」

「ありがとう、ルミナス！イーグレット！ルージユ！行くよ!!」

上空に舞うブルームとイーグレットが、精霊の力を集約させる。その間をルージユはファイヤーストライクの連続蹴りで時間を稼ぐ、だが、ビブルスはルージユの技を悉く

跳ね返し、強力な衝撃派をルージユに浴びせようとすることも、ルミナスがルージユの前に立ち塞がり、ビブルスの攻撃を無効化する。何度もルミナスに攻撃を邪魔され、ビブルスの苛立ちは頂点に達しようとしていた。

「また貴様か・・・あの時から我らの邪魔をし続けるシャイニールミナス・・・貴様から葬ってやる!!!」

ルミナスへの積年の恨みから、ルミナスに怒濤の攻撃を仕掛けるビブルス、だが、レモネードのプリズムチェーンが、ピーチ、パツシヨン、リズムが攻撃に加わり援護する。「ええい、次々沸いて来やがって・・・纏めて葬ってやる!!!」

ビブルスの闇の力が暴走する・・・

「それではあなたの身だって持ちません!!」

ルミナスの忠告を、五月蠅いと払拭するビブルス、上空で力を溜めたブルーム、イーグレットが、

・・・生半可な攻撃じゃ、あいつは倒せない・・・  
・・・残った全ての力を此処に・・・

ブルーム、イーグレットが見つめ合い、力強く頷き合うと、

「精霊の光よ!・命の輝きよ!」

「希望へ導け!・二つの心!」

「プリキュア! スパイラル・ハート・・・スプラ〜ツシュ!!!」

上空からの、二人の強力な一撃がビブルスに発せられた。ビブルスは両手を上に上げ攻撃を堪えていたが、地上のルージュ、ピーチ、パッション、リズムの攻撃を受ける。

「おのれええ・・・プリキュアアアア!!」

強敵ビブルスを遂に打ち倒したが、地上に舞い降りたブルーム、イーグレットはその場にへたり込み、肩で激しく呼吸を整え、ルミナス達も、立ち上がるのが困難になるほど疲れ切っていた。

力を出し切った一同は、その場でうずくまってしまっていた・・・

疲労激しい状態ながら、サーキュラスと激しく肉弾戦を続けるムーン、ダーク、ドリム、サンシャインも加わり総力戦を仕掛ける。

「その程度で、この俺に勝てると思うなよお!!」

サーキュラスが雄叫びを上げ、強力な衝撃派で四人を吹き飛ばす。激しく地面に叩き付けられる四人、

・・・みんなと、また会うんだから・・・

「あんた何かに・・・負けないんだからああ!!」

ヨロヨロとドリムが立ち上がる。

．．．まだよ！こんな所で立ち止まるわけには．．．  
「行かないわ!!」

ムーンライトが立ち上がる。

「まだ、終わるかああ!!」

ダークプリキュアが立ち上がる。

．．．みんな、みんな、頑張ってる．．．

「私も、こんな所で倒れていられない!!」

サンシャインが立ち上がる。

「しぶとい奴らめえ．．．だが、これで終わりだああ!!!」

サーキュラスが更に雄叫びを上げ、力を込める。それを見たムーンは、

「ダークプリキュア．．．もう一度二人でフォルテツシモしてみましよう！でも、今の私

達の手だけでは．．．サンシャイン!!」

ムーンライトは、サンシャインにある方法を語る。サンシャインは頷くと、

「プリキュア！フローラルパワー」

「プリキュア！ダークパワー」

「フォルテツシモ!!」

ムーンとダーク、二つの合わさったフォルテツシモが上昇する。それに合わせるかの

ようにサンシャインが、

「花よ、舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

サンシャインが、ゴールドフォルテバーストの力で、太陽のような光のゲートを空中に作り出すと、ムーン、ダークのフォルテツシモがゲートに向かい突撃する。金色に輝く二人の身体が、サーキュラス目掛け突き進む、

「プリキュア！シャイニング」

「フォルテツシモ!!」

サンシャインが叫び、ムーンとダークがそれに応える。黄金のフォルテツシモが、サーキュラスと激突する。

「又ウウ、まだこれほどの力が・・・だが!!」

更に気合いを込めて、両手でフォルテツシモに堪えるサーキュラス、

(あと少し、あと少しなのに・・・)

ムーンとダークも力を込めるも、あと一歩追い込む事が出来なかった。それを見たドリームが動く、

「サンシャイン、そのままに居て！プリキュア！シューティング・スター!!」

ドリームがシューティングスターで上昇すると、サンシャインが作った光のゲートに突入する。ドリームの身体が金色に輝く、

（ドリーム!?この娘、初めてこの技を見た筈なのに?）

ムーンライトは、ドリームの状況判断力に舌を巻き、その頼もしさに思わず口元に笑みを浮かべた。

「プリキュア!シャイニング・スター〜!!」

ドリームとサンシャインの合体技、シャイニングスターも加わり、力を増すプリキュアの攻撃力、

「な、何だとおお!?グウウオオ!!」

サーキュラスの腕が弾かれて、フォルテツシモ、シャイニングスターがサーキュラスの身体を突き抜ける!!

「ハ〜〜ト・・・キャッチ!!!」

三人の掛け声と共に、強敵サーキュラスを遂に撃破する四人、

「ドリーム・・・全くあなたって娘は・・・」

「エへへへ」

ドリームに笑い掛けるムーン、ダーク、サンシャイン、そして満面の笑みで微笑み返すドリーム、だが、闇の中からバルデスが再び姿を現わす。

キツとバルデスを見つめる四人、そして、ルミナス、ピーチ達もヨロヨロ立ち上がり、ムーンたちの側集まる。

「ほう、サーキュラス達を倒したか……だが、そんな身体でこの私に刃向かおうとはな……身の程を知れ!!」

ボロボロのプリキュア達を庇うように、ルミナスが前に出る。

「シャイニールミナスか……いくら貴様でも、その状況で何とか出来るとは思っていないだろうなあ!? ハアアア!!」

バルデスが力を込めた時、周りが吹き飛び、地上に居たプリキュア達も、悲鳴を上げながら闇の底へと落下していく……

「リズム! みんな……大変ニヤ! セイレーン、ハミイ達も行くニヤ!!」

「エツ!? イ、イヤアアア!! もう、イヤアアア!!」

闇の底から、強引にハミイに道連れにされたセイレーンの悲鳴が木霊した。

プリキュア達の気配が弱まっているのを感じた妖精達が騒ぎ始める。

「た、大変ココ、プリキュア達の気配を感じないココ……」

どうすれば良いのか、妖精達にも分らなかつた。けたたましい鳴き声を発した鳳凰が、何かをしようとするのを感じたココとナツツが、鳳凰の背に乗ると、それにつられるように妖精達もシロップの背に乗り、鳳凰とシロップは、ハミイ達同様、闇の底へと向かった。

側に居たウエスター、サウラー、サラマンダー、オリヴィエ達も、プリキュアの助つ



人に向かおうとするも、

「これ以上、何が起こるか分らないわ．．．信じましょう、彼女達を．．．」

自分も駆けつきたい気持ちを抑え、薫子は地上の事を考え、この場に踏みとどまった。

「バルデス、貴様まで来るとはどういう事だ？」

「ふん、せめて仲間の側で死なせてやろうと思つた迄よ．．．で、ゴーヤーンよ、こちらのプリキュア共も、最早動く事もままならないようだな？」

「当たり前だ、この私自ら動いたのだから．．．」

バルデス、ゴーヤーンの前で、力を使い果たしたように地面に倒れ込む24人のプリキュア達、最早彼女達に立ち上がる力は残って居なかつた．．．

落下してきたハミイ、セイレーンは、この絶望的状况に呆然とする。その時、上空から急降下してくる物体が居た。鳳凰、そして、シロップである．．．

「ああ、プリキュア達が．．．」

「な、何て事ナツ．．．」

瀕死状態のようなプリキュア達を見て、哀しげに声を張り上げる妖精達、

鳳凰は地上に舞い降りると、哀しげな声を上げ、自らの力をプリキュアに分け与えるかのように暖かな光を発した。

(この子……自分の身を犠牲にしてまで、プリキュアを助けようというの?)

セイレーンは、鳳凰の行為を見て、自分でも分らないが涙を流していた。

……あれ、あたし、何で泣いてるんだろう……

「もう、もう止めなよ? あんた、死んじゃうよ!」

「セイレーンの言う通りニャ……それ以上続けたら……」

セイレーン同様、ハミイは涙を流しながら鳳凰を止めようとする。だが、鳳凰はまだ続けようとした時、24人のプリキュアが立ち上がった!!

「何だ?! まだ立ち上がる力が残っているというのか?」

「鳳凰の仕業か……邪魔しておって!!」

ゴーヤーンが驚愕し、バルデスが鳳凰に攻撃するのを、ルミナスがバリアーで防ぐ、  
「ひなたに手出しはさせない!!」

ルミナスの力が、金色の輝きを増し、凄まじい輝きを見せる……

ルミナスは鳳凰を見て笑みを浮かべた。他のプリキュア達も溢れ出してくる力を受

け入れると、

……力が溢れてくる……

……ひなた、ありがとう! あなたの思い無駄にしない!!……

今、二十四人の黄金のプリキュアが、バルデス、ゴーヤーンの前でポーズを決めた。

「ひなた！私達はもう大丈夫．．．あなたに素晴らしい力を分けて貰えたわ!!あなた達、ひなたをお願い!!」

ブラックは妖精達に、力を使い弱っている鳳凰を頼み、ルミナスに妖精達を守るように頼むと、

「行くよ！みんな!!」

ブラックの合図と共に、力を解放するプリキュア達．．．

ブラック、ホワイトの背中に、まるで天使の羽のような翼が加わる。金色のオーラを纏った二人の力が漲る．．．

花鳥風月の四人は、まるで衣装に羽衣を纏ったような姿になり四人も金色のオーラを纏う．．．

プリキュア5の背には、まるで蝶のような美しい羽が羽ばたく、プリキュア5、ローズ共に金色のオーラを纏う．．．

ピーチ達、四人は正に天使と呼ぶに相応しい、白をベースにしたキュアエンジェルへと変化し、金色のオーラを身に纏う．．．

ブロッサム達四人はスーパーシルエットに、そしてダークプリキュアさえも、金色に輝く状態に変化する．．．

「リズム、私達!？」

「ええ、凄い……力が漲ってくる……」

メロディ、リズムにも天使のような羽が付き、金色のオーラを纏った。

24人のプリキュア達が、バルデス、ゴージャーンに攻撃を仕掛ける。

「その程度で……」

「我らに勝てると……」

「思うなよ!!!」

闇の力を解放して攻撃してくる二人、迎え撃つプリキュア達が激しくぶつかり合う!

パワーアップを果したプリキュア達だったが、バルデス、ゴージャーンは強く、何度も、何度も吹き飛ばされるプリキュア達、だが、諦めないプリキュア達は何度も食らいつき、バルデス、ゴージャーンにダメージを与えていく……

「ええい、しづとい奴らめー!」

「貴様と力を合わせるなど癪だが……致し方あるまい!!」

バルデス、ゴージャーンが共に力を込め、凄まじい大爆発を巻き起こすも、ルミナスが力を解放し、何とか皆を救うが、ルミナスも膝をつき荒い呼吸を繰り返す。

「最早ルミナスの助けは受けれんぞ……覚悟しろ、プリキュア共!!」

バルデス、ゴージャーンが再び力を込めると、

「ルミナス、ありがとう……みんな、私達も力を結集させましょう!!」

ブラックの言葉に頷いた一同が、それぞれの必殺技を放つ、

「プリキュア！ マーブルスクリュー・・・マックス!!」

「スパ〜〜ク!!」

「プリキュア！ スパイラル・ハート・・・スプラッシュ!!」

「プリキュア！ スパイラル・スター・・・スプラッシュ!!」

「プリキュアに力を！」

「ミルキイローズに力を！」

ココとナッツの叫びと共に、プリキュア5がキュアフルーレを装備し、ローズはミルキイミラーを構える。

「プリキュア！ レインボー・ローズ・エクスプロージョン!!」

「邪悪な力を包み込む、煌くバラを咲かせましょう！ ミルキイローズ！ メタル・ブリザード!!」

「想いよ、届け！ プリキュア！ ラビング・トゥルー・ハート!!」

「ダークフォルテウェイブ!!」

「花よ、咲き誇れ！ プリキュア！ ハートキャッチ・オーケストラ!!」

「プリキュア！ パッションナートハーモニー!!」

奇跡とも呼べる虹が、オーロラが、赤と青の巨大な薔薇が、巨大なハートが、黄金の

光が、そして、それを導くように巨大な女神が、バルデス、ゴーヤーンに向かい放たれる。さしもの二人から驚愕の声漏れる。

「な、何だ、この力は!？」

「これが、プリキュアの・・・」

二人は散りゆく間際に、まるでビッグバーンと同じような輝きを見た・・・

「見事だった!プリキュア共・・・お陰で、遂にカオス様が覚醒された!!」

漆黒の髪、色白の肌、それを隠すような漆黒の法衣、バロムがプリキュア達の目の前に現われる。

「どういう事?」

思わず、アクアがバロムに聞き返すと、

「お前達の凄まじい光の力が、カオス様を目覚めさせたと言ったのだ・・・さあ、貴様らも共に、世界の終焉を見るが良い!!」

「そんな事・・・絶対にさせない!!みんな、もう一度力を合わせるわよ!!!」

再びブラツクの合図の下、ルミナスを除く23人のプリキュア達が、先程バルデス、ゴーヤーンを葬った最強の技をバロムに向けて放つ、だがバロムは、闇の結界でそれらを無効化した。呆然とするプリキュア達に、バロムは口元に笑みを浮かべると、

「無駄だ！最早貴様らの役目は終わった!!」

素早く動き出したバロムが、23人のプリキュア一人一人に次々攻撃を与えていくと、攻撃を受けたプリキュア達は、皆変身解除の状態にされる。

「そ、そんなあ!?!」

一同は、光輝くレオタードのような姿になって倒れ込む・・・

唯一人、ダークプリキュアだけは、元の状態に変わるだけだったが、激しく体力を消耗していた・・・

「さあ、見るが良い！世界の終焉を!!」

バロムの言葉通り、地球は完全にカオスに飲み込まれ、闇に喫した・・・  
目覚めたカオスによって、全宇宙から光が消えようとしていた・・・

第二十二話：カオス！

完

## 第二十三話：光と闇のハーモニー

### 第二十三話：光と闇のハーモニー

#### 1、歌姫達の奇跡

光の園・・・

クイーンが治める光溢れるこの世界も、闇に蝕まれようとしていた。女王の間にて、巨大なクイーンの前で、長老と石の番人ウイズダムは、世界の終わりとも思える光景に絶望の声を上げていた。

「何たる事じゃ・・・この光の園を、嘗てのように闇が覆う事になるとは・・・けい子さんとよし子さん達は、カオスを止める事が出来なかったか・・・」

「長老・・・なぎさとほのかですってば！ああ、プリキュアの力を持つてしても、カオスを止める事は出来ないなんて・・・クイーン、これから世界はどうなってしまうのでしょうか？」

二人の嘆きに対し、クイーンは掛ける言葉を失っていた。

（もう、この事態になつては、私の力だけではどうする事も出来ない・・・せめて、一分でも、一秒でもこの世界を存続させる為に・・・）



憂いの表情を浮かべながらも、クイーンは自身の全てを掛けて、カオスに飲み込まれる時間を遅らせようと決意する……

泉の郷……

世界樹の側で、フィーリア王女も憂いの表情を浮かべていた。精霊達も闇の力に怯え、震えていた。

（世界が……終わる！私は、何と無力なのでしよう……）

闇が覆う空を見上げ、フィーリア王女は涙を流していた……

パルミエ王国……

闇の襲撃を聞いた四大国王、ドーナツ国王、ババロア女王、クレープ王女、モンブラン国王が駆けつけ、パルミエ王国のパパイヤと共に、不安がる国民を沈静化させたが、今、この空を闇が覆った事に焦りを覚えていた。

「いったい、何が起きているドナ？」

「強大な闇の力が世界を覆っているロロ……」

ドーナツ国王、ババロア女王の言葉を受け、クレープもモンブランも、世界の終焉のようなこの景色を見て不安がっていた……

スウィーツ王国・・・

タルトの両親でもあるワツフル国王、マドレーヌ女王も、上空を覆う深い闇に畏怖していた。

「何ちゆうこつちや・・・一体何が起きとるんや？タルトやシフォンは無事何やろうな!」  
長老ティラミスは、この絶望的状况に戸惑っていた・・・

メイジャーランド・・・

ハミイ、セイレーンの生まれ育ったこの国でも、闇の侵攻は始まっていた。女王アフロデイテも、この絶望的な状況を嘆き、敵対しているマイナーランドの王、メフィストに親書を送り、今は敵対している場合ではない事を訴えるも、メフィストからの返書は来なかった。

(ハミイ・・・地上では今、一体何が起きているのですか?)

地上に居る歌姫、ハミイの身を案じるアフロデイテであった・・・

おとぎ話の世界に出てくる妖精達が暮らす国・・・

突然闇に覆われたこの国では、妖精達が右往左往していた・・・

この国の女王は、光の園のクイーン程では無いが、巨大な姿をしていて、慈愛に満ちた女神のようなその姿は、国民達からは母のように慕われていた。女王は、国民達を励ましつつも、闇に覆われた現状を、心の中で嘆いていた・・・

(世界に何かが起きています!?でも、わたくしはこの国を動く事は出来ない・・・古き友、プリキュア達よ!あなた達が無事に元の時代に帰れて居たならば・・・)

女王は、闇に包まれた空を見上げ、嘗てこの国の危機を救ってくれた、二人のプリキュアの事を思い出していた・・・

とある王国・・・

闇に覆われた空を訝しみ、この国の姫は、三種の神器の一つと呼ばれる、光の槍が祭られている場所へとやって来た。ピンクのウエーブがかった長い髪、薄いブルーの衣装に身を包んだ姫は、槍が何かに共鳴しているかのように、音を発している事に驚きを隠せなかった。

「ミラクルドラゴングレイブが、何かに共鳴している!?この闇は一体?」

「姫様、こちらに居られましたか・・・王がお呼びでございますぞ!」

「お父様が!?分かりました!今行きます!!」

姫は、後ろ髪惹かれる思いを残しながら、この場を後にした・・・

とある島・・・

静まりかえる島内、その洞穴の中で、亀の甲羅のようなものを背負った一人の老妖精が、祭られていた鏡に話し掛けていた・・・

「エンプレス、この水晶の鏡を託す事が出来る、プリキュア達が現われる前に、この世界は終焉を迎えるようだ・・・これも運命なら、受け入れるしかないだろうねえ？」

妖精に話し掛けられた鏡の中に、黄緑髪の少女の姿が浮かび上がると、少女は口元に笑みを浮かべながら、ゆっくり首を横に振った。妖精はハツとすると、

「エンプレス・・・お前まさか、この闇に覆われた世界を救う為、戦って居る者が居ると言うのかい？」

その問いに答えるように、鏡は何か共鳴し、音を発しだした。妖精は洞穴から外に出ると、闇に覆われた空を見上げた。

とある鏡に覆われた部屋・・・

その中に、薄いブルーの髪をした一人の青年が、闇に覆われた無数の鏡の前で、憂いの表情を浮かべていた・・・

「二万年前、この世界は三人のプリキュアに救われた。そして、千年前・・・僕では、あ

の時のように、闇に覆われたこの世界を救う事が出来ない！僕は・・・無力だ!!」  
青年は、その場に膝から崩れ落ちると、自分の無力さを嘆いていた・・・

「そんな、私達が、私達がプリキュアとして戦ってきた事が、無駄になったって言うの!?  
そんなの、そんなのありえないよ!!」

なぎさは、闇に飲み込まれた地球を、バロムに見せつけられた現実を受け入れられず  
に居た。他のプリキュア達も同様であった・・・

今までの戦いが無駄になる・・・

そんな事考えたくも無かった!

だが・・・

「どうだ、プリキュア共よ！カオス様に飲み込まれたこの世界は、闇に喫す・・・直ぐに  
この世界に生きる者共は、闇に身体を蝕まれ、やがて闇に溶け込む!」

プリキュア達は、身を持って、闇に蝕まれた肉体がどうなっていくかを実感していた。  
世界の生命が、闇に溶け無に返る・・・

「そんな事・・・絶対にさせない!!」

歯を食いしばり立ち上がるのぞみ、それに刺激されたように立ち上がるなぎさ達、咲  
達、りん達、ラブ達、つぼみ達、そして、響と奏も立ち上がる。

「ほう、そのような姿のお前達に、一体何が出来ると言うのだ？」

変身を解除され、光るレオタードのような姿の少女達一同をあざ笑うバロムは、手の前に出し、なぎさ達に衝撃波を放つ、だが、その衝撃波はダークプリキュアが両手を広げ、身を持って阻止する。

「プリキュア達に・・・手出しはさせない!!」

「ダークプリキュア!無茶しないで!!」

自らの肉体で、なぎさ達を庇い続けるダークプリキュアに、姉であるゆりが悲痛の声を掛ける。

「ダークプリキュア・・・闇の力で甦った貴様には、少しは耐性があるという事か・・・闇が光と共にあるなど認めん!貴様には、その身を持つて思い知らせてやる!!」

粛正するようにダークプリキュアを蹴り続けるバロム、ダークの呻き声が辺りに響き渡る。咄嗟にゆりが助けに向かおうとするのを、ダークが止める。

「来るな!お前達が無事な限り・・・私は、私は、まだこの世界を救えると信じて・・・いる」

「でも・・・」

今の自分達にはどうすることも出来ない現実には、ゆりは拳を震わせる。

その時、弱っている鳳凰が、再びプリキュア達に力を分け合おうとするのを、側に居

た妖精達が必死に止める。

「だ、駄目ココ!!」

「そうナツ・・・これ以上続けたら、本当に死んでしまうナツ!」

だが、鳳凰が訴える・・・

闇に世界が覆われた以上、自分の存在意義は無いに等しい、プリキュアが、クイーンが居れば、光は再び訪れると・・・

ポルン、ルルンが妖精姿になり鳳凰に縋り付き泣きじゃくり始める。

「ひなた! 駄目ポポ・・・死んじゃ駄目ポポ!! また、一緒に遊ぶポポ」

「ルルンも一緒に遊ぶルル・・・」

鳳凰は哀しげに首をもたげ、愛しそうにポルン、ルルンに顔を擦りつける。なぎさ達の目にも涙が浮かび、その光景を見ていたセイレーンは、何かを思案しているような表情を浮かべるのだった。

「ひなた・・・私達が不甲斐ないばかりに・・・ゴメン・・・本当ゴメン!! でもね、あなたを犠牲にしてまで、私達・・・プリキュアになりたいとは思わない!! きつと、きつと、何か方法が有るはず・・・お願い、ひなた・・・私達を信じて!!」

なぎさにも根拠は無い、だが、鳳凰を犠牲にしてまで、プリキュアになろうとはとても思えなかった。

最早プリキュア達に為す術は無いと判断したバロムは、

「フハハハ！どうした!? もう抵抗は止めか?」

「やつかましいわああ!!!」

なぎさ達を嘲笑するバロムに対し、やかましいと怒鳴りつけた者が居た。それは、意外にもセイレーンであった・・・

23人のプリキュア達、妖精達もその光景を見て驚く、ただ一人、ハミイは嬉しそうに目を輝かせながら、セイレーンを見つめていた。険しい顔を浮かべたバロムを、キツと睨み付けたセイレーンは、

「あんた、いい加減鬱陶しいのよ！抵抗は止めかですつて? 抵抗してやろうじゃないのよ!! ハミイ、あんたも歌姫なら、癒しのメロディ・・・覚えてるでしょうね?」

突然セイレーンに名前を呼ばれ、驚いたハミイだったが、嬉しそうに頷くと、

「ならいい・・・いい事、前みたいにあたしの足引つ張らないですよ? 行くよ、ハミイ!!」  
「分かったニヤ!!」

「ラアラアララ・・・」

突然歌い出すハミイとセイレーンに、その場に居た一同は呆然としたものの、二人の歌が闇の中に響き出す。

一同は気付かなかった・・・



ハミイとセイレーンの歌声に、カオスの侵攻が止まった事を・・・  
皮肉にも、カオスを通じて闇の中から、ハミイとセイレーンの癒しのメロディが、異世界に、世界中に響いて行つた・・・

光の園でも・・・

・・・これは、何という安らぎを与える歌声でしょう・・・

クイーンは、闇の中から響き渡る歌声に驚嘆しつつ、今の現実を忘れさせてくれるような癒しのメロディを聴き、絶望的な気持ちになつていた自分を恥じた。側では、長老とウイズダムが、歌声に引きずられるようにメロディを口ずさむのだった・・・

泉の郷でも・・・

(精霊達がこの歌声を聴いて喜んでいる!?これは、もしかしたら、メイジャーランドに伝わるという・・・)

フィーリア王女もまた、闇の中から響き渡る歌声に勇気づけられていた。その側では、精霊達の歌声が響き渡るのだった・・・

パルミエ王国でも・・・

「な、何で、闇の中から歌声が聞こえてくるドナ？」

「不思議クク!?」

「何と清々しい歌声ロワ!!」

四大国王達も、耳に心地よく響いてくる歌声に、知らず知らずの内にメロディを口ずさむのだった・・・

スウィーツ王国でも・・・

「はて？何や知らんが、えらい癒されるメロディやなあ・・・」

長老ティラミスも、この不可思議な現象に首を捻りながらも、スウィーツ王国中から歌声が響き渡るのだった・・・

メイジャーランドでは・・・

「この癒しのメロディは、ハミイ！そして・・・ああ、セイレーン！あなたなのですね」  
ハミイとセイレーン、新旧の歌姫が発するメイジャーランドに伝わる癒しのメロディの美しき歌声に、アフロディテは嬉し涙を流す。

「セイレーン！あなたは、本当は心優しい娘！この世界の今の姿を嘆き、どうにかしたいと思ったのですね」

「お父様．．．そして、私の愛しき娘．．．あなた達にも届くと信じて、私も歌いましょう!!」

闇の中に響き渡る歌声に合わせるように、女王アフロデイトも口ずさむ．．．

マイナーランドでは．．．

「ウギヤア〜!!な、何だあ!?!このメロディはああ?ええい、いくら闇に世界が飲み込まれそうだとはいえ、何と不快な．．．まさかとは思うが、セイレーンの奴．．．」

耳を押さえながら転げ回るメフィストは、セイレーンが裏切ったのではと危惧する。その様子を背後から眺めていたトリオ・ザ・マイナーのバストラ、ファルセット、バリトンは、ガッツポーズを取るのだった。

「良いぞ!このままセイレーンが失脚すれば．．．」

「再び我らがメフィスト様の側近．．．」

「あんな猫に媚びへつらう事も無くなるというもの．．．」

思わず嬉しそうにハモリ出すトリオ・ザ・マイナーに、メフィストは、

「貴様ら、我が輩が苦しんでいるのに喜ぶとはどういう見だあ!!」

メフィストに怒鳴られ、しよげる声もハモらせるトリオ・ザ・マイナーであった。

だが、メフィストの心の奥底では、この歌声に癒されて居た事を、本人は気付いては

居なかつた・・・

とあるおとぎ話の国でも・・・

「この歌声は!?何て心が休まるのでしょうか・・・」

闇に覆われた現実を忘れさせてくれるような歌声に、女王もまた自然と歌を口ずさんでいた。古き友、プリキュア達に届くように、この国に覆われた闇が晴れるように・・・

とある王国でも・・・

「お父様、この歌声はもしかして、メイジャーランドの?」

「ウム!確かにメイジャーランドに招かれた時、聞いた歌に似て居る・・・しかし、何と  
いう心地良い歌声か・・・」

「同感ですわ!ラアラララ・・・」

歌声に釣られたように、王女も自然と歌を口ずさんでいた・・・

とある島では・・・

闇の中から聞こえてくる歌声に、老妖精は驚きを隠せなかつた。まだ希望は失われては居ないのかと・・・

「まさか、エンプレスはこの事を言いたかったのか？という事は……この時代のプリキュアが、闇と戦っている!？」

老妖精はハツとしながら、再び歌声が聞こえてくる闇の空を見上げた……

とある鏡に覆われた部屋……

青年はハツとすると、とある鏡の中に吸い込まれるように消えて行つた。鏡から現われた青年は、闇に覆われたどこかの国にある城の前にやって来ると、

「やはり、黄金の冠が共鳴している……この世界の為に戦ってくれているプリキュア達が、今再び立ち上がってくれたのか？」

青年はキツと闇の空を見上げると、

「すまない……1000年前に、彼女にプリキュアの力を与えて以来、僕は力を失つてしまった……せめて、僕も歌おう!この世界が救われると信じて!!」

青年も闇の空に向かって歌い出していた……

地上に居る薫子、コツペ、サラマンダー、オリヴィエ、ウエスター、サウラー、そして、ブンビーにもこの美しい声は響いていた。

「何と癒される歌声でしょう!まるで、闇の中に居る事を忘れさせられる程だわ」

薫子は思わず声に出して、素晴らしい歌声に賞賛を送る。サラマンダーも同意し、

「同感ですね・・・しかし、一体誰が!？」

「プリキュア達かも知れんな？」

「いやあ、彼女達は戦いで歌どころでは無いだろう!？だが、本当に素晴らしい歌声だ!」

ウエスター、サウラーも、この歌声に聴き入り、感嘆の声を上げる。少し考えていたオリヴィエが、

「もしかしたら、ハミイ達かも知れない・・・メイジャーランドの歌姫だつてつぼみ達に言つてたから!」

オリヴィエの言葉を聞き、妖精界の歌姫と呼ばれる者達なら領けると納得する一同だった。ブンビーも歌声に誘われるように歌い出すも、それはお世辞にも上手いとはとても言えなかった。思わず耳を塞ぎながら、サラマンダーがブンビーに忠告する。

「君、君は歌わない方が良いんじゃないかね?」

「エエエ!? どうして? 意味わかんないんだけど!？」

自分が音痴だとは気付いていないブンビーに、呆れるサラマンダーだったが、

「ウフフ、良いじゃない? 歌は気持ちも籠もっている事が一番だもの!! 私達も歌いましょうか! この歌が、プリキュア達の力になると信じて!!」

薫子の言葉に同意し、一同も歌い出す・・・

歌姫達から始まった歌声が、人々の、妖精達の思いを乗せて、闇の中から響き渡るのだった……

……何だろう、不思議だなあ？この歌声を聴いているだけで、疲労が消えて行くみたい!?!

なぎさが、みんなが、闇の中に響き渡る歌声を聴き、元気を取り戻しつつあるのに気が驚く、妖精達も美しい歌声に誘われるように、何時しか歌い出していた。

「妖精風情が……いいだろう！貴様らから葬ってやる!!」

バロムの攻撃目標が、ハミイとセイレーンに変わる。再びダークがバロムの攻撃からハミイとセイレーンを守り続ける。それに続けとばかり、ポプリが、ココとナッツが、賢明にバリアーを張り、ハミイとセイレーンを守り続ける。バロムは、強力な力を両手に込めると、凄まじいエネルギー波を発し、ダーク、妖精達を吹き飛ばした。

「ダークプリキュア!」

「ポプリ、大丈夫?」

「ココ、ナッツ!!」

ゆりが、いつきが、のぞみが心配して声を掛けるも、ヨロヨロ立ち上がる妖精達、皆に守られながら歌い続けるハミイとセイレーン、彼女達の額のハートのような模様が輝

きを発した時、なぎさ達23人の少女達の身体を、光の輝きが覆う。

（何だ？何が起こったというのだ・・・これ以上・・・）

「好きにはさせんぞおお!!!」

不愉快そうにしていたバロムは、闇の凄まじい力を両手に込め、ハミイとセイレーンに狙いを付けると、再びヨロヨロと立ち上がったダークプリキュアが、彼女達を守るように両手を広げた。

「死に損ない諸共・・・消えて無くなれ!!」

バロムの強烈なエネルギー波が放出されたその時・・・

ダークプリキュアも、次の攻撃を防ぎきる事は出来ないだろうと思っていた。朦朧とする意識の中に、何者かが訴え掛けてきた。

「あなたもダークプリキュアと言うのね？私達と同じ・・・」

（何?）

戸惑うダークの前に、闇が流れてきた・・・

闇は、バロムからの攻撃を無効化すると、意識があるように蠢き、まるで人のような形を露わにする。

一人、二人・・・闇のシルエットは、徐々に数を増やしていく・・・



闇のシルエットの判別が出来る程になった時、響、奏を除いた21人の少女達から、驚嘆の声が響き渡る。

「あんた達は・・・ポイズニーにイルクーボ!？」

「何故、あなた達が!？」

「あなたは、あの時の・・・」

なぎさとほのか、ひかりが、二人の姿を見て驚く・・・

「あくらら、落ち落ち寝てられないわね・・・あんた達、しつかりしてくれるう?」「同感だな!我らも協力してやる・・・決着をつけて来い!!」

ポイズニーとイルクーボが、なぎさ達三人を見つめ口元に笑みを浮かべる・・・

「キントレスキー!？」

「カレハーンも居るわ!？」

「これは一体?」

「どういう事なの!？」

咲、舞、満、薫が、敵である筈の二人が、まるで自分達を庇うような行動を取るのに驚く・・・

「どうした、お前達の力・・・まだまだこんなものでは無い筈だ!! 気合いが足りんで、プリキュア共よ!!」

「俺達に知らしめたプリキュアの力を、バロムの奴に知らしめてやれ!!」

肉体を失った事で、バロムの呪縛から解放されたキントレスキー、カレハーンが、腕組みしたままバロムを睨み付ける。

「あなた達は・・・ダークプリキュア5!?!」

驚くのぞみ達5人に、微笑み掛ける闇の5人・・・

「また、あなた達に会えるなんて思わなかった・・・」

「その妖精達の歌声が、我々を導いてくれた!」

「あなた達にはまだやるべき事が有るはず!」

ダークプリキュア5は、それぞれ自身の分身と言えるのぞみ、りん、うらら、こまち、かれんを見つめ微笑みを向けた。

「あなたは、エターナルの?」

「アナコンデイ!?! どうして此処に居るロプ?」

くるみ、シロップも驚愕の声を上げる・・・

「あなた方には、館長を救って貰った．．．その恩は返させて貰うわ！」

嘗てのような厳しい眼光は消え、穏やかな目をくるみやシロップ、そして、のぞみ達に向けるアナコンディ．．．

「エツ、これって？」

「みんなの敵だった人って事？」

「でも、凄い．．．敵対してた人達と分かり合えるなんて．．．」

「そうね．．．私やウエスター、サウラーと同じように．．．」

ラブ、美希、祈里、せつなも、皆の敵だった人物が、肉体を失ってまで、この危機的状況に加勢に来てくれた事に心強さを覚える．．．

「何だど!?何故貴様ら闇が、光の者に手助けをする?我は闇の救世主なるぞ!!」

「黙れ、貴様などが闇の救世主を名乗るなどおこがましい．．．プリキュア達よ、我が配下達が、バロムとやらの誘いに乗り、そなた達に迷惑を掛けたな．．．」

一同の心に語り掛けてきた者が居た．．．

「この声は．．．あなたは、デスパライア!あなたがみんなを!!」

デスパライア．．．

嘗て、のぞみ達プリキュア5と戦ったナイトメアの長である。ドリームコレットの力で、永遠の命と若さを手に入れたものの、プリキュア5の、妖精達の、希望の思いに感化され、自らの非を詫び、自ら望んで封印の眠りに付いた筈であった……

「私は未だ封印の眠りに付いている身、彼の手助けをしたまでに過ぎぬ……」

デスパライアの言葉を表すように、闇の助っ人達の最前列のシルエットを見た時、つぼみ達に動揺が走る。

「あなたは……」

「砂漠の王……」

「デューン!?!」

「何であんたが此処に居るのぉ?」

つぼみ、いつき、ゆり、えりかがデューンの姿を見て思わず眩く、

「久しぶりだね、プリキュアの諸君!地上で僕の邪魔をしたプリキュア達とは、お初にお目に掛かるね!」

響、奏を除く、21人の少女達の顔色が変わるも、デューンはニッコリ微笑むと、

「安心したまえ、君達と敵対する気は無いよ……さて、バロムよ!貴様の勝手な振る舞い、これ以上許すわけにはいかんな……カオスは今の目覚めを望んでは居ない!全て今回の出来事は、貴様の身勝手な思い上がりから起こった事だ!!」

デューンの鋭い視線が、バロムに突き刺さるも、バロムは鼻で笑い、「フツ、何を言い出すかと思えば・・・肉体を持たない精神体の貴様らに、一体何が出来ると言うのだ？」

「愚かだな・・・確かに我らは肉体を持たぬ！だが、此処に闇の力を受け入れる者の存在を忘れていたようだな？」

(ダークプリキュアか)

デューンの言葉を聞き、バロムの表情が醜く歪む、

「ダークプリキュアよ、貴様にも分かっているだろうが、バロムを倒せばお前も・・・」

デューンがダークを見つめ、穏やかに話し掛けると、ダークは頷き、

「ああ、分かっている！お前達の思い、私が受け取る!!集まれ!闇の力よ!!」

ダークの掛け声と共に、闇の戦士達はダークと融合を果すのだった・・・

癒しのメロディを歌い終え、ゼエゼエ呼吸するハミイとセイレーンは、

「此処までしてやったんだ!絶対勝ちだよ!!」

「セイレーン、大丈夫ニャ!プリキュア達なら、きっと何とかしてくれるニャ!!」

何時以来だろうか・・・

ハミイとセイレーンが、互いを見つめニッコリ微笑み合った。二人の歌姫の頭を撫で

た響と奏は、二人に感謝する。

「ありがとう、ハミィ、セイレーン！あなた達の、みんなの歌声が、私達に再び力を与えてくれた！私達は諦めない！！いくよ、奏！！」

「OK、響！！」

「レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！！」

再びプリキュアへと変身を遂げるメロディとリズム・・・

そして、なぎさ達21人の少女達も・・・

「デュアル・オーロラウェイブ！！」

「ルミナス！シャイニングストリーム！！」

「デュアル・スピリチュアルパワー！！」

「プリキュア！メタモルフオーゼ！！」

「スカイローズ・トランスレイト！！」

「チェインジ・プリキュア！ビートアップ！！」

「プリキュア！オープン・マイ・ハート！！」

光の園のプリズムストーンが、目映い光を放ち、虹の園へと照射される。凄まじい光がプリキュア達と融合を果すと、裸体にそれぞれのシンボルカラーを模した、光の羽衣を纏ったかのような、23人のプリキュア達が姿を現わす。ダークプリキュアも再び加

わると、

「光と闇の絆の下に・・・我ら、プリキュアオールスターズ!!」

24人のプリキュア達と、バロムとの最終決戦が始まった・・・

2、プリキュア！無限シルエツトレクイエム!!

光の天女と化した23人のプリキュア達、そして、闇の力を集い、覚醒したダークプリキュアを見てバロムが逆上する。

「光と闇の共存など・・・認めん・・・断じて認めん!!ウウウウオオオオ!!」

凄まじい咆哮を上げたバロムの姿が醜く変化していく。長い漆黒の黒髪は、まるで生きているかのように蠢くと、左右に分かれバロムの頭部を覆うと、まるでコウモリが羽ばたいているかのような姿へと変貌する。目は更につり上がり、口は醜く耳元まで裂け、上下から牙を生やす。黒の法衣はバロムの肉体と融合し、蠢きながらバロムの身体を覆い尽くす。魔神と化したバロムが姿を現わし、

「闇の力!!思い知れ!!!」

バロムとプリキュア達の死闘が開始される。

バロムに真っ先に突撃し、肉弾戦を仕掛けるのは、ブラック、ホワイト、ムーン、ダークの四人、

(身体が・・・軽い!?)

身体に羽衣を纏っているだけなのに、何時も以上の力を感じ、ブラックは戸惑うものの、バロムの繰り出す攻撃を、嘲笑うかのように優雅に躲し続けていった。黒き天女は、雄叫びを上げると、

「ダダダダダダ!!」

パンチの雨霞が、容赦無くバロムに炸裂する。小賢しいとばかりに、バロムが手で払い除けようとするのを、白き天女がその手を掴み、頭上高く投げ飛ばすと、銀の天女が優雅に舞いながら、強烈な蹴りで地上に蹴り落とした。

「フツ、流石だな・・・ハアアア!!」

ブラック、ホワイト、ムーンライト、三人の天女の戦い振りを見たダークプリキュアは、口元に笑みを浮かべると、雄叫びを上げながらバロムに怒濤の連続蹴りを浴びせた。

バロムと激しい肉弾戦を続ける四人を援護するように、上空に舞うブルーム、イーグルレット、ブライト、ウインディは力を溜め始める。それに気付いたバロムが、上空の四人に対し凄まじい攻撃を放とうとするも、レモネードがプリズムチェーンでバロムの足を捕らえ、それを合図にしたかのように、ジャンプしたドリーム達四人とローズ、ピーチ達四人、メロディとリズムが強烈な跳び蹴りを食らわせ吹き飛ばし、バロムの攻撃を外させる。



「グウウオオ!!」

プリキュア達に阻まれ、思うような攻撃が出来ず苛立つバロム、上空からブルーム達  
が、スパイラルハートスプラッシュとスパイラルスタースプラッシュの強力な合体技が  
放たれる。

「こ、こんなもので・・・我を倒せると思うなああ!!」

力を込めたバロムが攻撃を耐え凌ぐが、直ぐにブラック達四人に、ブロッサツム、マ  
リン、サンシャインも加わり強烈なパンチを浴びせバロムが吹き飛ばされ、膝を付く：  
「おのれええ・・・プリキュアアアア!!」

怒りの咆哮を上げるバロムの気が一気に膨れ上がると、表情を変えたルミナスが一同  
に話し掛けると、

「皆さん・・・今こそ光と闇の心を一つに・・・」

ルミナスの合図に領き、ルミナスの前方でハート形に陣形を組むプリキュア達、中心  
の後方に居るルミナスから凄まじい虹の光が一同に照射されると、

「漲る勇氣!!!」

ブラック、ブルーム、ブライト、ドリーム、ルージュ、ピーチ、ブロッサム、サンシャ  
イン、メロディが叫べば、

「溢れる希望!!!」

ホワイト、イーグレット、ウインディ、アクア、ミント、レモネード、ベリー、パイ  
ン、マリン、リズムが返し、

「光と闇の絆と共に!!!」

ルミナス、ローズ、パッション、ムーン、ダークが応える・・・

「エキストリーム!!!」

「ルミナリオ!!!」

巨大なハートの陣形から、強大なハート形の虹色のエネルギー波が照射される。バロムからも、強大な負のエネルギーが照射され、激しく空間でぶつかり合う技と技・・・

「みんなの思い・・・無駄にはしない!!」

「あなたに何か、絶対に負けない!!」

「光と闇の絆・・・受けてみなさい!!」

「私達は・・・負けないんだからあああ!!!」

ブラックが、ブルームが、ドリームが、そしてピーチが魂の叫び声を上げ、虹の輝き  
が一層激しさを増すと、

「シャイニング・・・ハア~~~~ト!!!」

24人の思いが一つになり、バロムからの強大なエネルギー波を無にしながら、虹の  
ハートがバロムを飲み込んだ。

「グウウオオ!!こ、これで、勝ったと思うなよ・・・最早、カオス様の目覚めによつて、全宇宙は無に帰すのだ・・・フフフ、ハハハハハ!!」

バロムは、嘲笑しながらその身体を闇の中で無に喫した・・・  
だが、それは哀しい別れの始まりでもあった・・・

バロムに打ち勝ち喜び合うプリキュアと妖精達、ムーンの口元にも笑みが浮かび、妹、ダークの方を見た瞬間、ムーンの表情が哀しげに変わる。

「ダークプリキュア!?そんな、どうして?」

ゆっくり、ゆっくり消えかけていくダークの姿に、プリキュア達は呆然とする。

「そんな哀しげな目をするな!お前達はバロムを倒したんだ!!私は、バロムの力で偽りの肉体を与えられたに過ぎん・・・バロムが無に喫したお陰で、ようやく私も・・・お父さんの所に戻れる・・・」

ダークプリキュアの視線がゆっくり、ゆっくり、プリキュア一人一人に向けられると、それぞれのプリキュア達の目からは涙が零れる。

「でも、でも・・・」

姉であるムーンは、特に沈痛な表情を浮かべていた。

「さあ、お前達にはまだしなければならぬ事があるだろう?私達に見せたお前達の光

の思い、カオスにも知らしめてやれ!!」

ダークの周りを一つの小さな光が飛び回っていた。ダークは光を見て穏やかな表情を見せると、

(お父さん……)

「迎えが来たようだ……プリキュア達よ、お前達と一緒に戦えた事……私は誇りに思う!そして……ありがとう、姉さん!!」

ゆつくり、ゆつくり、そして、ダークプリキュアの肉体は消滅した。消滅する瞬間、力を貸した闇の戦士達も、プリキュアに微笑みながら消えていった……

「行きましょう!カオスを止める為に!!」

涙を拭い、強い意思で立ち上がるムーン、その言葉に力強く頷くプリキュア達だったが、

「でもさ、カオスって何処に居るの?」

首を捻りながら一同に質問するマリリン、

「そういえば……ど、どうしよう!?!」

確かにマリリンの言う通りだと思い、激しく動揺するメロディに対し、セイレーンは溜息を付くと、

「何、狼狽してるのよ？バロムの奴が言ってたでしょう……カオスは闇の根源だって！この闇だって、カオスそのものって事でしようが！」

セイレーンの言葉に、一瞬目を点にして見つめ合ったマリんとメロディは、思わず手をポンと叩いて納得するのだった。

「あの二人、意外に良いコンビですね」

「そう見たい……ですね！」

ブロッサムとリズムは、苦笑しながらお互いのパートナーを見つめた。ブロッサムは真顔になると、一同にある提案をする。

「みなさん、デューンが言ってたように、カオスの本心はまだ闇が世界を覆う事を望んでいないのなら……私達の思いを伝えれば、分かってくれるかも知れません！皆さんの力、私達に貸して下さい!!」

ブロッサムの言葉に一同が頷くと、ブロッサム達を中心に二列になり、闇を見る23人のプリキュア達、その側集まる妖精達、メツプル達、フラツピ達も妖精の姿になりそれぞれのパートナーの近くに並び立つ……プリキュアの、妖精達の思いが一つになり、ハートキャッチミラーージュが凄まじい輝きを発し上昇していく。

「闇に咲く大輪の花！」

強烈な光が辺りを覆った時、嘗てデューンを包み込んだ巨大なつぼみに似たシルエツ

トが浮かび上がる。

「無限の力と無限の希望！そして、無限の愛を持つ星の瞳のプリキュア！プリキュア！！無限シルエツト！！！」

聖なる光のワンピースを着た、つぼみに似た巨大な女神がカオスに訴え掛ける。

「カオス．．．この宇宙の生命の源よ！あなたを利用しようとしたバロムは滅びました。もう、あなたの眠りを妨げる者は居ません．．．私達の愛が、思いが、あなたの思いを包みます．．．」

巨大な女神が両手を広げ、闇を包み込んだその時、23人のプリキュア達の思いと、カオスの長きに渡る思いが共鳴する。

それは、暗い、暗い、孤独の中．．．

光も無い、音も無い、孤独の世界．．．

その孤独な世界の中に一人の少女が佇んで居た．．．

年格好を見れば、その少女はプリキュア達と同じくらいに思われた．．．

だが、その少女からは妖艶さも醸し出していた．．．

足まで伸びた長い黒髪、それを際立たせる白い裸身の少女が．．．

少女の瞳に映る虚無が、プリキュア達一人一人の心を覆い尽くして行つた．．．

カオスの無限の闇の前では、無限の愛も、カオスの心を完全に包み込む事は出来な

かった・・・

「歌・・・歌だよ！そうだ、歌だよ!!」

突然叫び出すメロディに、リズムが驚く、

「どうしたの、メロディ?」

「歌、歌何だよ！さっきのハミイとセイレーンの歌声を聴いてて分かった・・・愛だけじゃ駄目何だよ・・・」

メロディの言葉を聞き、考え込む一同・・・

確かにメロディの言うように、歌は心に響く力を持っている。高揚させたり、悲しませたり、目覚めさせたり、眠くさせたり・・・

「やってみる価値はありそうね・・・ハミイ、セイレーン、もう一度私達に力を貸してくれる?」

ホワイトの言葉に、照れながらも同意するセイレーン、またセイレーンと歌えると大喜びのハミイ、無限シルエットの姿がなぎさに似た少女に変わると、

「カオス、あんたは一人じゃないよ・・・タアアア!!」

無限シルエットの拳が、闇に自分達を知らしめる。無限シルエットが響に似た姿に変わる。

「私達の力、思い、希望、夢、そして、愛……全てをこの歌に込めるわ……プリキュア！無限シルエツトレクイエム!!!」

ハミイ、セイレーンを中心に、23人のプリキュア、妖精達の歌声が闇の中に響き渡る。再び聴こえる歌声に、世界中から加わった歌声が闇の中に響き渡った。

闇の中の少女は、その歌声を喜んでいくかのように口元に笑みを浮かべると、周りの闇が蠢き、まるで少女の体内に吸い込まれて行くように、闇は徐々に徐々に縮小していった……

カオスは再び体内に闇を吸収し、この宇宙を再び解放した……

地球を飲み込んだ闇も消え失せ、地球は再び青く輝く姿を現わした……

「闇が消えようとして居る……此処に止（とど）まるのは危険だわー!」

ムーンライトの言葉通り、闇に蝕まれて居た地表が脆くも崩れ始める。

歌姫達の歌声で元気を取り戻した鳳凰、そして、シロップの背に乗り、プリキュア達と妖精達が、闇の門を潜り地上へと飛び立つ、その姿を見送るかのように、闇の門は静かに次元の狭間へと消えていった……

消えゆく闇の中に、少女の笑う姿が見えた気がしたブラックとホワイトは、一瞬呆然とするも、仲間達の声で我に返った……



地上へと戻ったプリキュアと妖精達、ブラックは空を見上げ落胆の声を上げた。

「そ、そんな、全てが終わった筈なのに……何で、何で、闇がまだ覆っているの?」

ブラックの言葉通りの景色を見て、ブルームも、ドリームも、ピーチも動揺を隠しきれなかった……

ホワイトは目を点にしながら、

「ブ、ブラック……今、0時近く何だから、空が暗いのは当然よ!」

「エツ?そ、そうだっけ!?イヤア、戦い続きで、時間の事すっかり忘れてた……アハハ!!」

ホワイトの言葉を聞き、照れながら頭を掻くブラックを見て、一同から笑い声が漏れるのだった。

闇から解放された地上で、一同の帰りを待ち侘びていた薫子達は、プリキュア達、妖精達の気配を感じて出迎えに向かう。

「みんな……まあ!?ウフフ、余程疲れてたのね……みんな、ご苦労様!!」

薫子達の視線の先には、鳳凰に寄りかかるように、みんなで横たわって眠りにつく23人の少女達と妖精達の姿があつた。

その寝顔は、正に天使のようだった……

5月1日、プリキュア達にとって、長い、長い1日が終わりを告げた・・・

第二十三話：光と闇のハーモニー

完

## 第二十四話：プリキキュア引退!!

## 第二十四話：プリキキュア引退!?

1、ありえなくらい

5月4日、TAKO CAFEのテラス席で、なぎさとほのかはテーブルに顔を付けて頂垂れていた。その姿をひかりは申し訳なさそうにして見ていた。

「なぎさ、何時までしょげてるのよ! 全く、いくら練習がきつかったからって、逃げ出すなんて、なぎさらしく無いじゃない!!」

なぎさは、アカネの言葉に不満そうに口を尖らせながら、

「これにはいろいろ訳が・・・」

「ほのかも、心配したわよ! 海外で行方不明になったつてニュース見た時は驚いたわ!! ちゃんと出掛ける時は、誰かに言つとかなきや駄目だよ!!」

ほのかも溜息を付きながら、

「はい・・・でも、これには深い訳が・・・」

「まあ、過ぎた事はしようが無いか・・・はい、たこ焼きお待たせ!! まあ、これでも食べて、元氣出しなねえ!!」

アカネは苦笑を浮かべながら、車の中に入っていった。目の前に置かれたたこ焼きを見ながら、再び溜息を付くなぎさとほのか、二人の視線が重なる時、

「ほのかぁ・・・」

「なあにいく？」

「こんな事つて、ぶつちやけ・・・」

「ありえなくらい」

なぎさとほのかは顔を見合わせ苦笑すると、再びテーブルに顔を埋めて溜息を付いた。

ひかりの側に居る妖精達、メップル、ミップル、ポルン、ルルンも、なぎさ達を心配していた。

「何で元気ないポポ？」

「ポルン、ルルン、そつとしてやるメポ」

「なぎさやほのかには、可哀想だったミポ」

(なぎささん、ほのかさん、ごめんなさい・・・私がつとしつかりしていれば、お二人をあの戦いに巻き込まないで済んだかも知れないのに・・・)

ひかりは、元気の無いなぎさとほのかを見て、益々落ち込むのだった・・・

「なぎさ、ほのか、そんなに落ち込んでいたら、ひかりが責任感じちゃうわよ?」

苦笑を浮かべながらゆりがTAKO CAFEにやって来た。突然やって来たゆりに驚いた二人は、

「ゆり! えっ、ひかりが!」

「ひかりさんが責任感じるって……どうして?」

「ひかりだけじゃ無いわよ……あなた達、そこで申し訳なさそうにしてないで、こっちにいらっしやい!!」

ゆりに呼ばれて、これまた申し訳なさそうに姿を現わす咲達4人と妖精達、のぞみ達5人とくるみ、人間姿のココ、ナッツ、シロップ、ラブ達4人とシフォンにタルト、つぼみ達三人とシプレ達が居た。

「みんなも来てたんだ! あれえ!? 美希も居る? ……しばらくTAKO CAFEには来たくないって言ってなかったっけ?」

「いえ、あれと……これとは、別だし……」

美希は、みんなでTAKO CAFEで親睦会を開いた時、裏切ったラブ、せつなによつて、なぎさにたこ焼きを食べさせられ、おまけに咲からはたこ焼きパンを、のぞみからは、卵焼きからたこの足が飛び出した、最早何かの生物のような見栄えの卵焼きを、食べさせられるという散々な目に合った事……

「あなた達が落ち込んでいては、彼女達まで落ち込んでしまうわよ?」

ゆりの言う事にも一理あるのはなぎさにも、ほのかにも分かっていった。のぞみ達は、自分達が敵の計略に掛かり、なぎさ、ほのか、ひかり、ゆりに迷惑を掛けた事を後悔していたのだから……

だが……

「そんな事言つたつてさ……ゆりは良いよ!コツペ様にパリまで送つて貰えたから……私とほのかは……ひなたは先に帰つちやつたし、シロップはココ達送つてパルミエ王国に行つちやうし、シフォンはタルトと自分の国に帰つちやうし、せつなも、ウエスターとサウラー送りにラビリンズに帰つちやつて……気付いた時には私達、元居た場所に戻れなくなつてたんだもん」

「戻つた時に、あんな騒ぎになつてる何て……」

やつとの事で合宿所に戻つたなぎさを待つていたのは、無情にも練習が辛くて逃げ出した事にされる現実、なぎさはメンバーから外された……

一方のほのかも、2日夕方になつてようやく戻つて来たシロップに乗つて戻つたものの、帰つて来ないほのかを心配した両親が、現地の警察に連絡、騒動になり、邦人女性行方不明とされニュースに取り上げられた後だった……

なぎさとほのかは顔を見合わせると、また溜息を付くものの、

「でも、何かみんなの顔見てたら元気出てきた!!アカネさん、みんなの分もたこ焼き追加お願い!!」

「あたしは、クレープでお願いしま〜す!」

慌ててクレープを頼む美希に、一同からクスリと笑い声が漏れる。

「みんなが気にする事なんて無いんだよ!こうなる事が分かってたら、バロムの奴をもっとボコっておけば良かったかな・・・なあんちやつて!」

「そうそう、ひかりさんも気にしないで!私となぎさも、みんなの顔見て元気貰ったから!!」

何時もの調子を取り戻したなぎさとほのかを見て、ひかりも元気を取り戻す。

「あつ、居た居た・・・オオイ!」

「あれ!?ブンビーさんじゃない?」

手を振りながら近づいて来る、作業着姿のブンビーにのぞみが気付くと、ココ、ナツツ、シロツプ、タルトの挙動が不自然になった。

「いやあ、探したよ、君達・・・実は、この間の件の事何だがね!ようやく君達に合いそうな仕事の依頼が入ってね!!」

「仕事って?」

のぞみの質問に、ブンビーは何枚かの紙を用意して説明を開始する。

「今から幾つか仕事の内容言うから、気に入った仕事に協力して欲しいのよ！一つ目は・・・あつ、その前に君達の写真撮らせてくれる？」

ブンビーが21人の少女達一人一人の写真を撮り始める。

「この前言つてた協力つて、写真撮らせる事だったの？だったらお安いご用だよ!!」

ニツコリ微笑み、カメラに向かいピースするのぞみを見て、

「いやいや、写真はあくまでも前振り・・・ええ、コホン！まず一つ目、彼女の居ないあなた達に幸せを届け・・・」

「ちよつと待つて・・・何か嫌な予感がするナリ」

「そうだね、ちよつと見せてみて」

咲とラブが、ブンビーが持つていた紙を取り上げる。内容を読んだ咲とラブは、ジロツとブンビーを睨むと、他の仲間達に取り上げた紙を手渡した。次々と手渡され、手紙を読んだ少女達の目が、変質者を見るような視線をブンビーに送る。

「あれえ!?!何か・・・その視線痛いんですけど?」

テーブルを思いつきり叩いたゆりが、凄みをきかせてブンビーに詰問する。

「どういう事かしら!?!納得いく説明をしてくれるんでしょね?」

「ブンビーさん・・・この間の事は感謝してるけど、これを私達にさせるのが目的だった



の?」

せつながジッとブンビーを見つめる。

「まったく、また新手の変態が出たよ……」

ハアと溜息を付くえりか、

（へ、変態つて、酷い言われ方だな……あれえ!?何か私……極悪人みたいな扱いにされてるような……）

額に汗をかきながら、一同からの痛い視線を浴びるブンビーは、慌てて両手を振り、「あつ、気に入らないなら良いんだよ!強制している訳じゃ無いし……でもおかしいなあ!?君達、その妖精達から何も聞いてないの?」

ブンビーが、ココ、ナッツ、シロップ、タルトの方を見ると、妖精達は皆ドキツとしたような表情になる。

「ココ……まさか!?!」

「ナッツさん……ちゃんと説明してくれるんでしょうね?」

「シロップ!どういう事?」

「ココ様、ナッツ様、あんなイヤらしい真似をあたし達に……」

のぞみ、こまち、うらら、くるみに責められ、更にりんやかれん、他のメンバーからも疑惑の視線を向けられたココ達は、思わず妖精姿に戻り、地面の上で駄々をこねなが

ら否定する。

「ち、違うココ・・・ココはお礼するとは言ったけど、そんな変な約束はしてないココ!!」  
「違うナツ、違うナツ! ナツツだって、そんな変な約束はしてないナツ!!」

「シロツプは、約束自体してないロプ」

ココ達が否定する中、こっそりその場を離れようとしたタルトだったが、美希に首を掴まれ持ち上げられる。ラブとせつなも近づき、三人はタルトを物凄い形相で見つめると、タルトは顔中に汗をかき狼狽えた。

「アワワワワワ・・・ピ、ピーチはん、ベリーはん、パッションはん、そう興奮せんと・・・」

「あゝら、タルト!? 何処に行こうというのかしら?」

「タルト・・・怒らないから・・・正直に言っごらん・・・」

「さあ・・・タルトおおお」

美希、ラブ、せつなが、ジワリジワリとタルトに顔を近づけていくと、

「ヒイイイ・・・か、堪忍やあ! あの場合では仕方なかったんやあ」

ラブ、美希、せつなに反省させられるタルトであった・・・

不意に落ちていた紙を拾ったなぎさは、内容を読み始めると、

「あつ、これ良い! これなら良いよ!!」

なぎさが乗り気なのを見て驚く一同、一人でも乗り気な娘が居た事にニンマリするブンビーだったが、

「あつ、いいのあつた!?!どれどれ・・・エエと・・・加音町復興支援・・・あつ、これは別に・・・」

「加音町つて、響達の・・・何だ、まともなものもあるんじゃない!これなら私達もOKよ!!」

「はい、私もアカネさんに加音町に出張して貰えるように頼んでみます!!」

咲、ひかりもこれなら喜んで協力すると申し出る。

(うわあ・・・よりによってボランティアの依頼だったんだけどな・・・まあ、いいか) たいした儲け話にはならないだろうが、ブンビーは正式に21人の少女達に依頼するのだった。

「よし、加音町でボランティアするぞ〜決定!!」

のぞみの言葉に、一同も手を上げ返事を返すのだった・・・

## 2、世代交代!?

5月5日朝、時計台の中、セイレーンは、戻つて来たトリオ・ザ・マイナーと共にメフィストの説教を聞いていた。

「いやあ、この前は大変だった：闇が広がる中、突然不快な歌が響きだしてきてな：」

メフィストの嫌みに、顔中から汗が噴き出すセイレーン、

「我が輩、世界の終わりの前に、あの歌で死ぬかと思つた程だ：：一体あんな歌、誰が歌つてたんだらうなあ．．．セイレーンよ!？」

「さ、さあ?」

メフィストの嫌みに、首を傾げながら惚けるセイレーンであつたが、

「惚けるな!!お前だろうがああ!!!．．．ウワアア」

興奮しすぎて思わず泉に落ちたメフィストだったが、何とか泉から這い出ると、顔面ドアップでセイレーンを脅し出す。

「まあ、今回だけは多めに見てやる．．．さっさと音符集めを再開せんか!!」

「は、はい!」

慌てて、返事を返すセイレーン、その背後で含み笑いを浮かべるトリオ・ザ・マイナーであつた．．．

響と奏も、街の復興フェスティバルの手伝いで朝から頑張つていた。加音町は闇の中心地と化した事もあり、至る所に闇の傷跡が残つていた。

「あつ、居た居た!響!奏!手伝いに来たよ!!」

「なぎささん、ほのかさん、それにもんなも．．．ありがとう!!」

数日振りの再会を果し、響達も嬉しそうになぎさ達一同と語らっていた・・・

フェスティバルには、いろいろな街からも参加していた。アカネのTAKO CAF E、咲の家のベーカリーPANPAKAPAN、久しぶりに出張出店したナッツハウス、カオルちゃんのドーナツ屋、えりかの家フェアリードロップ、りんとつぼみの家からは合同で花屋を開いていた。この街の店、奏の家Lucky Spoonもケーキを出店していた。

皆商売度外視で、このフェスティバルの収益は、加音町に全額寄付を申し出ていた。加音町の人々は、皆の行為に感謝した・・・

この賑わいに刺激されたのか、音符達も何体か集まっていた。

「やはりこの賑わいに刺激されたわね・・・出でよ、ネガトーン!!」

セイレーンは音符を見付けてネガトーンに変える。その数三体・・・

その時、騒ぎを聞きつけ響と奏、そしてハミイが駆けつけた。

「セイレーン、何でこんな事するんだよ! 私達、一緒に闇からこの世界を守ったじゃない!!」

「五月蠅いわね・・・もう、休戦協定は終わったのよ!! さあ、ネガトーン共、不幸のメロディを撒き散らしなさい!!」

ネガトーンから発せられるメロディが、人々を悲しみに陥れる。満足そうに観客席を

見渡すセイレーンだったが、

「良いわよ！もつと悲しみを．．．エツ．．．エエエエ!?な、何であの娘達が居るの？」  
なぎさ達21人を見付け、顔中に汗を掻くセイレーンは激しく動揺する。

「ねえ、あの猫．．．私達と一緒に戦ったセイレーンじゃない?」

「本当だわ．．．どういう事?」

かれんとかまちがセイレーンを見て困惑する。

側に居たハミイが、一同に大体の説明をすると、一同がセイレーンを見つめる。セイレーンは口を大きく開け惚けていると我に返り、

(まずい．．．非常にまずい．．．何でよりによつてこんな時に此処に現われるのよ?)

「しゃあない、セイレーンと戦うのは気が引けるけど．．．」

響達の加勢に向かおうとするえりかに、

「待って！ここは私と奏に任せて!!行くよ、奏」

「OK、響!」

「レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!」

「爪弾くは荒ぶる調べ!キュアメロディ!!」

「爪弾くはたおやかな調べ!キュアリズム!!」

「届け、二人の組曲!スイートプリキュア!!」

メロディ、リズムが三体のネガトーンに立ち向かうのを見る一同、  
「敵は三体居るのに、大丈夫でしょうか？」

不安がるつぼみにたいし、なぎさとほのかは笑顔を浮かべ、

「あの娘達なら、きつと大丈夫!!」

「そうね、彼女達も随分成長した筈だものね」

なぎさとほのかは、彼女達の戦い振りを見届けた・・・

なぎさ達の言葉通り、メロディ、リズムは格段に強さを増していた。

格闘戦で素晴らしいコンビネーションを繰り出し、二人の新技、ミュージッククロンド  
が、パッションアートハーモニーが、ネガトーンを打ち破り、音符を元の姿に変え保護を  
する。

「キイイ・・・覚えてらっしやい!!」

撤退するセイレーンの姿を、寂しそうに見送るハミイを、ゆりが抱き上げ優しく撫で  
る。

「大丈夫、あの娘は、本当は心の優しい娘・・・きつと、またあの時みたい一緒に歌え  
る日が必ず来るわ!!」

ハミイはゆりの言葉に嬉しそうに何度も頷いた。

(あの娘達も、もう立派にプリキュアとして戦っていけるわ)

メロディ、リズムの成長振りを見届けたなぎさ、ほのか、ゆりは、ある決意をするのだった……

「プリキュアを辞める!?!そ、そんな……」

なぎさ、ほのか、ゆりからの引退宣言とも取れる言葉を聞き、かれんは激しく動揺する。

「ううん、辞めるわけじゃないわ……ただ一線を引くって事!」

「あなた達は、もう私達が側に居なくても十分戦っていけるわ!」

「今まで戦ってきたようにね!」

ほのか、ゆり、そしてなぎさが、20人の仲間達をニッコリしながら称えた。

「でも、みなさんが不在だった今回の事のような事が起きたら……」

ひかりは、不安な本心を打ち明けるも、三人は苦笑を浮かべながら、

「私達だって、みんなを見捨てた訳じゃないわ!もしもの時は……きつと駆けつける!!」

「それにさ、私達ももう、高三だしね!」

「大丈夫、あなた達はそれぞれがこの世界を守ってきた戦士!自信を持って良いはずよ!!」

そう言うと、仲間達を見てニッコリ微笑むほのか、なぎさ、ゆり……



三人は、プリキュアの活動を後輩達に託そうとする・・・  
そして、後輩達も、彼女達の思いを受け取った・・・

だがこの世界は、なごさ、ほのか、ゆり、まだ彼女達三人の力を必要としていた・・・

第三章：闇の救世主！

完結

## 第四章：闇の少女達

### 第二十五話：甦る少女達

プロローグ

深い、深い闇の中・・・

眠り続ける少女の心に話し掛ける者が居た・・・

遠くから聞こえてくる声に、少女は不思議そうに問いかける・・・

「私に話し掛けるあなたは・・・誰？」

ゆつくりと、穏やかな声が少女の心に聞こえてくるが、少女にとって声の相手からは安らぎを感じた・・・

「あなた達5人に、再び生を与えましょう・・・どうか、私に力を貸して下さい！」

少女は不思議そうに首を傾げる・・・

（生!? 生って何? 生きる・・・私が?）

少女の意識が活性化されていく・・・

ゆつくり瞼を開けた少女の側には、同じように横たわる四人の少女達が居た・・・

「あなた達は・・・あなた達もあの声を聞いたのね？」

ピンクの髪の少女が一同に話し掛ける・・・

「そう、私も聞いたわ・・・ドリーム！」

赤髪の少女が頷き、返事を返した。黄色の髪、緑の髪、青い髪をした少女達も無言で頷き返す。

五人の少女達は、皆似たような黒い衣装を着ていた。五人はゆっくり立ち上がると、  
「私達・・・ダークプリキュア5を呼んだ者が居るようね・・・」

青い髪の少女が不思議そうに皆に語る。少女達が辺りを見回すと、何処か暗い室内の中にでも居るのか、辺りは薄暗かった・・・

ダークドリーム、ダークルージュ、ダークレモネード、ダークミント、ダークアクア、5人の少女達が、何者かの力で再び肉体を与えられ目覚めた！

ダークプリキュア5とは、それぞれ、キュアドリーム、キュアルージュ、キュアレモネード、キュアミント、キュアアクアの姿を模した闇のプリキュア達である。嘗て、鏡の国のクリスタルの力を使い、シャドウが作り出した戦士達で、それぞれプリキュア5と戦い散っていった。中でもダークドリームは、キュアドリームと戦い合う内に、彼女の光の心に触れ、最期はドリームを庇い散っていった・・・

光の暖かさに触れた彼女達は、闇の中で眠っていた時、ハミイ、セイレーンの歌声に導かれるように、闇の救世主パロムに苦戦するプリキュア達の助人に來た後、彼女達は

再び闇の中で眠りについた・・・

だが、再び彼女達の力を必要としている者が現われる・・・

目覚めた彼女達五人は、目の前に突然現われた神々しい姿に驚愕する・・・

### 第二十五話：甦る少女達

1、闇の少女達の誘い

バロムとの決戦から二ヶ月が過ぎた・・・

季節は梅雨明け間近な7月中旬・・・

プリキユアとしての活動を、後輩達に託した、美墨なぎさ、雪城ほのか、月影ゆりの

三人は、図書館で大学受験に備えて勉強していたのだが、焦れたなぎさの提案でTAK

O CAFEで束の間の息抜きをしていた・・・

なぎさ達の後輩九条ひかりは、TAKO CAFEの主、藤田アカネに頼まれ買い出

しに出掛けていた。

「ああ、暑い・・・もう、最悪かも！」

だらしなく胸元をはだけさせて風を送るなぎさの姿に、ほのかもゆりもクスリと笑

う。

「なぎさ、だらしないわよ！下着見えちゃうよ・・・」

ほのかに注意され、エツという表情になったなぎさは、辺りを見回すとホツとしたようにまた胸元をはだけさせて風を送り始める。

「大丈夫、大丈夫、誰も居ないからさ！ ああ、省エネで図書館の冷房もあんまり効いてないし、勉強はかどらないよねえ！」

なぎさの言葉を聞き、思わず顔を見合わせたほのかとゆりはクスリと笑い合う。二人の反応に目を点にしたなぎさは、

「何よ、二人共!!」

思わず、不満そうに口を尖らせたなぎさは、目の前のオレンジジュースをストローでブクブク拭きながら変顔になりながらほのかとゆりを見つめる。二人は益々口元に笑みを浮かべた。笑いを堪えながら、ゆりはなぎさをからかうように、

「なぎさ、はかどらないのは何時もの事じゃなくって?」

「ゆりの言う通りメポ! なぎさの勉強はかどらないのは・・・何時もの事メポ」

「やかましい! 大体、あんただって、暑いメポ、死んじやうメポとか散々喚いてたじゃない!」

顔を近づけて変顔で睨み合うなぎさとメップルの姿に、ほのかとゆりは苦笑を浮かべる。

そんな三人の側に、突然現われたように一人の少女が立って居た。何時現われたのか

全く気付かなかった三人、なぎさは慌ててメップルを隠した。

思わずその少女を見つめたなぎさ達三人は、その少女の姿を見て驚く、

「エッ!? ドリーム? でも、ちよつと違うような……」

なぎさの言葉に同意するほのかとゆり、三人の反応を楽しむように見ていた、ピンク髪に黒き衣装を身に纏った少女がクスリと微笑む……

「美墨なぎささん、雪城ほのかさん、月影ゆりさんですね? 私は……ダークドリーム!」  
ダークドリームと名乗った少女の出現に戸惑うなぎさ達三人、三人もダークドリームの事は、のぞみ達から聞いた事があつた。そして、バロムとの戦いの時に、救援に来てくれた事も知らされて居た。

「のぞみさん達から聞いたわ! あなたもバロムとの戦いの時に、私達の救援に来てくれたのよね! あの時は、ありがとう……でも、あなた達、実体を失っていた筈じゃ!」

ほのかの問いに頷くダークドリームは、

「ええ、私達は確かにあの時肉体を失っていました。ですが、あるお方のお力で、再び肉体を得ました。私が皆さんの前に現われたのには理由があります! なぎささん、ほのかさん、ゆりさん、あなた方に会わせたいお方が居ります。私と一緒に来ては頂けないでしょうか? これは、プリキュアとしてこの世界の為に戦って来た、あなた方にも関わりある事なのです!!」

ダークドリームの言葉を聞き、見つめ合う三人だったが、プリキュアとして戦って来た自分達にも関係のある話と聞き、表情が引き締まる。彼女の表情を見る限り、悪意があるとも思えず、三人は頷き合うと、

「分かったわ、あなたの言葉を信じましょう・・・では、私達を案内して頂戴!!」

ゆりが代表して、ダークドリームに承諾の返事をする、ダークドリームはニコリと微笑んだ。その姿は、キュアドリームに酷似していた・・・

「ただいまーアカネさん、頼まれていた物買ってきて来ましたー!」

ひかりが一杯荷物を抱えTAKO CAFEに戻って来た。

「おかえりー! ひかり、なぎさ達来てたけど、もう会った?」

「エッ!? なぎささんやほのかさんが来てらしたんですか? でも、テーブルには誰も居ませんでしたよ?」

不思議そうに首を捻るひかりを見て、アカネも首を捻る。ワゴン車の中からテーブル席を覗いてみると、ひかりの言うように確かに誰も居なかった・・・

「変ねえ・・・なぎさ達なら黙って帰る筈ないんだけどなあ!?!」

アカネの言葉を聞き、ひかりは誰も居ないテーブル席を見つめるのだった・・・

ソフトボール部の練習に精を出す日向咲、その姿をスケッチする美翔舞、咲の練習風景を眺める霧生満、霧生薫……

まだ1年の咲は、レギュラーになれるかどうか微妙な立場であったが、三人は咲なら絶対にレギュラーになれると信じていた。

「舞、もう少し日陰に移った方が良いんじゃない？」

「身体に毒よ！」

額にビッシヨリ汗を掻きながら、絵を描き続ける舞を気遣い、満と薫が声を掛けるも、「ありがとう！満さん、薫さん、もうちよつとで描き終わるから……」

舞は二人の方を見てニッコリ微笑む、満と薫は顔を見合わせ、再び舞を見ると、

「そう、無理はしないでね！」

「私達、飲み物買ってくるね……舞もお茶で良い？」

「うん……ありがとう、満さん、薫さん！」

舞をその場に残し、構内の自動販売機に向かった二人は、何者かの気配を感じ辺りを見る。

「フーン、流石ね……驚かせるつもりじゃなかったんだけど？」

満と薫の前に、赤髪の少女は頭を掻きながら現われ、その直ぐ後で黄色い髪の少女が姿を見せた。黒き衣装に身を包んだ、二人の見覚えのある姿に、満と薫は困惑する。満



は小首を傾げながらも二人に問いかけると、

「あなた達は、あの時の闇のプリキュア!? 何故あなた達が此処に?」

満の問いかけに、少し口元に笑みを浮かべた二人、ダークルージュとダークレモネードが話し掛ける。

「流石ですね・・・話が早く済みそうでこちらも助かります! 私達も、色々答えてあげたいんですけど・・・時間がないの!」

ダークレモネードは、飲み込みが早い満と薫に、心底感心したように口元に笑みを浮かべながら喋ると、ダークルージュも頷きながら言葉を続け、

「満、薫、お願い! 何も言わず私達と一緒に来てくれないかしら? 今頃は、ブラックやホワイト達も着いている頃の筈・・・あなた達も・・・」

ダークルージュの言葉に疑問があつた薫は、ダークルージュの言葉を遮り、

「ブラックやホワイトも!?! 彼女達は、プリキュアとしての活動を、私達後輩プリキュアに託して一線を引いた筈・・・」

「ええ、でも彼女達の力も借りなければならぬ・・・詳しい事は私達のマスターに会ってくれれば分るわ!」

見つめ合つた満と薫は頷き合うと、ダークルージュ、ダークレモネードの誘いに同意する。ちょうど通りかかった健太に、舞にお茶を渡しておいてあげると頼むと、二人は

姿を消した・・・

「お〜い、美翔！ほらよ、お茶持って来てやったぞ!!」

「えっ?! あつ、ありがとう・・・でも、何で健太くんが!? 満さんと薫さんは?」

「さあ!? 何か変な格好した二人組とどっか行っちゃまったぜ・・・」

健太の話を聞き、妙な胸騒ぎを覚える舞であつた・・・

ラビリンズに作った花畑の手入れに精を出していた東せつなだったが、ウエスターに、兄弟（橘 薫）の作ったドーナツを買って来てくれと泣きつかれ、渋々四つ葉町にあるカオルちゃんのだーナツ屋に買いに来ていた。久しぶりに店に来たせつなを見て、カオルも嬉しそうにせつなと話し込む。

「全く、ウエスターのだーナツ好きにも困ったものね・・・まあ、私も大好きだから良いけど」

「嬉しいねえ! どうだい、もう一人の兄弟は元気かい?」

「ウエスターなら相変わらずよ! 元気過ぎて、私もサウラーも困ってるぐらいだわ・・・こっちはどう!? ラブ達も元気にしてます?」

「美希ちゃんは最近仕事が忙しいみたいで、たまにしか来ないけど、ラブちゃん達は・・・」

週に4、5回は来てるかな・・・はいよ、お嬢ちゃん！カオルちゃん特製ドーナツお待たせえ！グハツ!!」

何時もの調子でドーナツを渡すカオルに、引き攣った笑みを浮かべて受け取ったせつなは、店の前のテーブルに座り、シンプルタイプのドーナツを食べ始める。数ヶ月振りに味わうドーナツの味は格別で、自然とせつなの表情に笑みが溢れてくるも、カオルが言っていた言葉を思い出し、

（そっかあ、美希は忙しいんだ・・・響達の街にみんなで行って以来、四人で会う機会も無かったし、みんなにも会いたかったんだけど・・・）

少し寂しげな表情を浮かべながら、ドーナツを食べるせつなだったが、

「ご一緒して良いかしら？」

突然話し掛けられ慌てたせつなは、どうぞと答えるも、目の前に座った青い髪に黒き衣装を身に纏った姿を見て、せつなは思わず驚きの声を発した。

「あなたは・・・アクア!?」

「ええ、ただし闇のプリキュア・・・ダークアクア！あなたがこちらの世界に来てくれたのは幸いだったわ!」

ダークアクアの口元に笑みが浮かぶ、せつなは、ダークアクアの突然の登場に少し警戒心を持って接した。

「あなたは、バロムとの戦いの時に加勢に来てくれたわね……あの時はありがとう！でも、肉体を失っていたあなたが、こうして私の目の前に現われたのは……どうして？」

せつなの目の前に現われたダークアクアを見て、せつなの心に疑問が浮かび上がる。

ダークアクアは、せつなの疑問を聞き、口元に笑みを浮かべると、

「それについては、私からではなく、直接私達を甦らせてくれたマスターに聞いてくれた方が良いと思うわ！東せつなさん、あなたに私達に協力して貰いたいのか？あなたも、この世界に混乱を招いた一人として、この世界の為に……」

ダークアクアの言葉を受け、一瞬硬い表情になったせつな、確かに嘗てせつなは、ラブリンスの総統メビウスの下僕として、四つ葉町に混乱を招いた一人だった。せつなは心の中で、ダークアクアの登場した意味を考え始める。だが、答えは導き出せず、今の言葉の全てを結び付ける為には、彼女の言うように、彼女達を甦らせた人物に会うのが一番早いだろうと思索を纏めた。

「分かったわ！でも、協力するか、しないかは、あなたがマスターと呼ぶ人に出会ってから判断するわ！それでも良いかしら？」

「ええ、良いわ！では、案内するわ!!」

立ち上がったダークアクアに、ちよつと待ってと告げたせつなは、カオルにドーナツを預けるのだった。

「後で取りに来ますんで……もしラブ達が来たら、会わないで行つちやつてゴメンと伝えておいて下さい!!」

慌ててダークアクアの側に戻ると、二人の姿がその場から消えた……

「風と共に去りぬ……か……グハツ!」

カオルは、消え去った二人を見つめポツリと眩き、せつなから預かったドーナツを店の中に置くのだった。

希望ヶ花市、勤め先の植物園で植物達の世話をしていた花咲薫子、その側で、置物のようにジツとして動かない薫子の妖精コツペであった。

「素敵な植物達ですね……不思議だわ、此処に居ると穏やかな気分になれる……」  
突然話し掛けられ振り返った薫子は、植物を手に取り、穏やかな表情を見せる緑髪に黒い衣装の少女と出会った。

（何か不思議な感じのする娘ね?）

少女から感じる不思議な感覚に戸惑いながらも、少女に声を掛けると、

「あなた、植物が好きなの? ゆっくり見ていつて頂戴! 他にも色々な植物達が一杯居るから!!」

微笑みながら少女にそう話した薫子だったが、少女は首を振ると薫子に話し掛けてく

る。

「いいえ、そうしたいのは山々だけど、私には時間が無いの……私は、ダークミント！  
花咲薫子さん、いえ、キュアフラワー！あなたに会って欲しい方がいらつしやいます！  
私と一緒に来てくれませんか？」

自分の名前だけでなく、キュアフラワーの事も知っている少女に、警戒感を持った薫子の表情が曇ると、側に居たコツペが立ち上がり、薫子を庇うようにダークミントの前に立ち塞がる。ダークミントは、思わず口元に笑みを浮かべると、

「フッフ、余程その人が大事なのねえ？安心して、危害を加えるつもりは無いから！薫子さん、プリキュアとして戦って来たあなたにも関わりがある話なのです！ぜひ、一緒に来て下さい!!」

ダークミントの表情を読み取り、悪意がない事を悟った薫子は、コツペを下がらせる  
と、

「どうやら訳ありのようね……分かったわ！ちよつと他の職員に後時を頼んでくるから、  
此処で待っていて頂戴!!」

薫子はそういうと奥に消えた……

少しして戻って来た薫子は、コツペ、そしてダークミントと共に、その姿を植物園から消した……

当初の目的を果したダークプリキュア5は、それぞれが案内してきた人物を、とある大広間に招き入れると、連れて来られた一同は、互いを見て驚きの声を発した。

「エッ!? 満に薫、せつなも・・・あなた達もこの娘達に呼ばれたの?」

「薫子さん迄?」

なぎさやゆりの言葉に頷いた四人は、

「私達は、なぎさやほのかが来ているのは聞いてたけど、ゆりやせつな、つぼみのお婆さんまで居るとは知らなかったわ」

「私は、みんなが居るのに驚いたわ・・・」

満、せつなも驚きの声を発した・・・

「ゆりちゃん達も居る何てねえ・・・」

薫子は周りの様子を伺う、コツペも現われた事でそれぞれの妖精達、メツプル、ミツプル、フープ、ムーブもコツペの側に集まる。フープとムーブは楽しそうにコツペに戯れていた。その姿を微笑ましく見守っていた一同だったが、

「で、私達に会わせたい人物とは、何処に居るのかしら?」

ゆりがダークプリキュア5に問いかけると、五人の少女達はクスリと笑い合い、

「すでに皆さんの目の前にいらっしやいますよ!」

ダークドリームの言葉に、辺りを見渡した一同だったが、それらしき人物は見当たらなかった。からかわれている？ そう思ったなぎさだったが、上を見上げたほのかが、上空を指差し一同に教える。

「見て、みんな！ 確かに私達の目の前に居たわ・・・でも、あれって、なぎさ!」  
「嘘お!?!・・・こんなの、ぶっちゃけありえなくない!!」

その人物を見た時、なぎさとほのかは特に驚愕の表情を浮かべた。ゆり、満、薫、せつな、そして薫子も、妖精達も、その巨大な姿に驚きの声を上げる。

なぎさ達の反応を楽しむように、クスリと笑い合うダークプリキュア5だった・・・

なぎさ達の目の前に現われた人物が、全てを語り終わった時、なぎさ、ほのか、ゆり、薫子は、それぞれを見て頷き合い、満、薫、せつなの表情は険しさを漂わせながら、ダークプリキュア5に頷き掛ける。

ダークプリキュア5も頷き、一同は何かを決意しながら、目の前の人物の話しに同意した事を伝えるのだった・・・

第二十五話：甦る少女達

完



## 第二十六話：全員集合！

## 第二十六話：全員集合！！

## 1、なぎさ達からの手紙

ナッツハウスで個々の用事に勤しむ、夏木りん、春日野うらら、秋元こまち、水無月かれん、そして、暑さの為に何もする気が起きず、だらけきっている夢原のぞみ・・・のぞみがテーブルに顔を付けてぐったりしていると、りんは呆れたように、

「のぞみ、何だらけてるのよ？ 大体、たまにはみんなでナッツハウスに集合しようよって提案したのは・・・あんたでしょうが！」

のぞみに注意するりんだったが、のぞみは変顔になりながら顔を持ち上げると、  
「だつてえ〜・・・暑いんだもん」

そう言うと、のぞみは再びテーブルに顔を付けて怠そうにする。そんなのぞみの声が聞こえたのか、

「全く、ココ様やナッツ様も忙しいんだから、大した用事無いなら呼ばないでよね・・・みんな、冷たい飲み物持ってきたわよ！」

階段を上がってきた美々野くるみが、お盆に乗せたジュースをテーブルに置くと、一

同が集まってくる。

「ココ様、ナッツ様、シロップ、冷たい飲み物どうぞ！」

くるみに呼ばれ、下から人間姿のココ、ナッツ、シロップが上がってくる。

のぞみは嬉しそうに飛び起き、コップに手を伸ばすと、

「ヤッター！ー！いただきま〜す!!」

美味しそうにゴクゴク喉を鳴らし、一気にオレンジジュースを飲み干すのぞみに一同が呆れ、笑い声が響いた。

その時、シロップの相棒メルポが騒ぎ始める。

「どうした、メルポ？」

シロップがメルポを訪ねると、メルポから手紙が飛び出す。手紙を手にしたシロップが宛名を見ると、

「これは・・・プリキュア宛の手紙！差出人は・・・なぎさ、ほのか、ゆり!!」

「えっ、なぎささん達から？何だろう!!」

なぎさ達から手紙が届いた事に驚き、近寄って来る一同、のぞみはシロップから手紙を受け取ると、首を捻りながら封を開けた。

手紙の内容にはこう書かれていた・・・

・・・みんな、暫くね！急で悪いけど、プリキュアオールスターズのみんなを、ナツ

ツハウスに集合させて欲しいの！満、薫、せつなは、私達と一緒に居るからって、咲やラブ達には伝えといて！では、後で!!・・・

「どういう事かしら!?!何か急用なようだけど・・・」

かれんが首を捻ると、こまちも頷き、

「そうね・・・でも急用なら、他のみんなにも急いで知らせた方が良いわよねえ?」

「そうだね・・・電話してみんなに来て貰ってからじゃ時間掛かつちゃうし・・・シロップ、他のみんなを一緒に呼びに行くの、頼めるかな?」

こまちの言葉に頷いたのぞみがシロップに頼むと、面倒くさそうにしながらも、シロップは妖精姿に戻り、外に出ると巨大化した。

「じゃあ私、みんなを呼びに行ってくるね!」

のぞみを乗せたシロップは、猛スピードでナツツハウスから飛び去った。のぞみとシロップが去った後、もう一度手紙を見る一同だったが、突然うらがが立ち上がり、

「分かりました!きつと引退宣言の撤回ですよ!!芸能界にはよくある事です!!」

うららはそう言うのと、自分の想像に自信があつたのか、ウンウン頷く、少し呆れ顔のりんがすかさず突つ込みを入れ、

「いやいや、あの人達、芸能人じゃ無いから!」

うららの閃きを、手を横に振りながらりんが即座に却下する。

「満や薫、せつなが一緒に居るしね……まあ、来れば分かるでしょう! 今日みんなが集まった事が幸いしたようね……」

くるみの言葉に同意する一同であつた……

「エツ、満と薫が?」

「そうなの、健太くんの話じゃ、おかしな格好した二人組と何処かに行つたんだつて……夕風高校ソフトボール部の練習が終わった咲に、さっきの出来事を話した舞は、不安そうだった。」

咲も表情を強張らせ考え込むも、不安がる舞に気づき笑顔を向け、

「大丈夫だよ! 満と薫の事だし、何か考えがあつての事だよ! 舞、信じよう、二人を!!」

「そ、そうよね、満さんと薫さんの事だものね!」

舞も咲の言葉を受け少しホツとした矢先、上空から何か悲鳴に似た声が聞こえた気がした二人は、同時に空を見上げると、見る見る二人は変顔になつて驚く、

「エツ! エエエ!」

「さ、咲、あれつて、シロップ!」

学校というこんな人目に付く場所では不味いと思つた咲と舞は、大慌てで走り出し、人影が無い校舎の影にシロップを誘導した。シロップもそれに気付いたのか、咲と舞の

後を追った。

「の、のぞみも居たんだ．．．もう、人に見つかったらどうするのよ?」

咲は少し顔をしかめ、舞は苦笑すると、のぞみは頭を掻きながら舌を出し、

「エへへ、ゴメ〜ン! 実はなぎささん達が、プリキュアオールスターズ、大急ぎでナツツハウスに全員集合! つて、手紙寄越したから、シロップに頼んでこうしてみんなを迎えに行く所なの! 咲ちゃん、舞ちゃん、早く乗って!!」

のぞみに急かされ、半ば無理矢理シロップの背に乗せられる咲と舞の二人、

「ちよつと、私まだユニフォームのままだよ! そんなに急ぐの?」

「うん、何せこれからひかりちゃん、ラブちゃん達、つぼみちゃん達、響ちゃん達も迎えに行かなきゃならないんだもん．．．あつ、そうそう、満ちゃんと薫ちゃんは、なぎささん達と一緒にだから安心してだつて!」

「満や薫、なぎささん達と一緒になんだ? なくんだ、心配して損しちゃった!」

のぞみの言葉を聞いて、ホツとする咲と舞は互いを見つめ合い笑顔を見た。

「健太くんだったら、なぎささんとほのかさんを見て、変な二人組でも思つたのかしら?」

思わず顔を見合わせてクスリと笑い合う咲と舞だつた．．．

「ひかり、そろそろ休憩してきていいよ！」

「はい、アカネさん！お先に休ませて貰います!!」

TAKO CAFEのエプロンをしたまま、ひかりが休憩に入ると、ポルン、ルルンも、待ってましたとばかり妖精姿になってひかりに戯れてきた。ニコニコしながらポルンとルルンをあやしていたひかりだったが、

「ひかり・・・何か来るポポ」

ポルンが上空を見上げると、つられるようにひかりとルルンも上空を見上げた。梅雨明け前でどんよとした雲が覆っているものの、時折晴れ間も見えた。その時、上空から猛スピードで何かが接近してくるのが目に入る。

「な、何、あれは!?!」

思わず不安そうにするひかりだったが、物体が近づくと嬉しそうな表情を見せた。

「あれは、シロップ！背中に誰か乗ってるわ!!」

「おおい、ひかりちゃん！」

のぞみ、咲、舞がひかりに手を振ると、ひかりも笑顔を向けながら三人に手を振り返す。シロップが降り立つと、ポルンとルルンは嬉しそうに、シロップに対して遊ぼうと突っつき回し、シロップは止めるロブと迷惑そうにしていた。ひかりが苦笑しながらポ

ルンとルルンを抱き上げると、

「みなさん、どうしたんですか？何か私にご用ですか？」

ひかりの問いかけに、のぞみは咲達に言った事と同じ事をひかりに伝えると、ひかりの表情が曇る。

「なぎささん達、TAKO CAFEに居たらしいのに、どうしたんだろう？・・・わかりました、ちょっと待ってて下さい！アカネさんに許可貰ってきますんで!!」

ひかりは慌ててアカネに承諾を貰うと、シロップの背に乗り込み飛び立った・・・

「エエ!?せつな来てたの?」

カオルから、数十分前までせつなが居た事を聞いたラブと祈里は、残念そうな表情になる。テーブルに座りドーナツを食べ始めた二人は、

「折角だから、せつなちゃんに会いたかったね?」

「本当だよ!もう、せつなったら・・・あつ、美希たん!」

ガツカリしていたラブと祈里だったが、今日は仕事がOFFだったようで、美希も公園にやって来た。美希は、浮かない顔をしているラブと祈里を見て首を傾げ、

「ラブ、ブツキー、どうしたの!?浮かない顔して?」

「美希たん、聞いてよ!せつなったら酷いんだよ・・・せつかくカオルちゃんの店にドー

ナツ買いに来たのに、私達に会わないでどっか行っちゃったんで……」

膨れっ面したラブが、美希に思わず愚痴ると、美希は苦笑を浮かべる。

「いやあ、せつなちゃんもみんなに会いたそうだったんだけどね、何やら事情ありそうな娘がやって来て、せつなちゃん連れてどっか行っちゃったんだよ！見た事無い娘だったなあ……で、美希ちゃんもドーナツ食べる？グハッ」

カオルがドーナツの穴から美希の顔を覗き込むと、苦笑した美希がドーナツを頼む、  
「せつなを連れてった娘って誰だろう!?ラブ、心当たり無いの?」

「エッ!?う〜ん、思い浮かばないなあ……」

美希に聞かれ、腕組みしながら考え込んだラブだったが、身に覚えが無かった。

その時、上空からロプ〜と聞こえたラブ達は、一斉に空を見上げて驚く、

「エッ、シロップ?ま、また大胆な登場の仕方するなあ……」

「まあ、此処にはあたし達と、シロップ達の事も知ってるカオルちゃんしか居ないから良いけど」

ラブは驚きの声を上げ、美希は思わず苦笑する。ジツと見ていた祈里は何か気付くと、

「見て、ラブちゃん、美希ちゃん、シロップちゃんの背に、誰か乗ってるよ!」

祈里が指さす場所に、確かに人影が見えた。見知った大切な仲間達が乗っている事に



気付いたラブ達が、一同に手を振ると、向こうのメンバーも手を振り返す。

「ラブちゃん、美希ちゃん、祈里ちゃん、お久々！みんな、急いでシロツプの背に乗って!!・・・出来れば、そのドーナツも一緒に乗せてくれると嬉しいなあ!!」

「のぞみちゃんったら・・・とここで、どうしたの？シロツプの背に乗ってって言われても、何が何だか・・・」

のぞみの言葉の意味がイマイチ理解出来ず、首を捻るラブだったが、取り敢えず言われたようにシロツプの背に乗り込むラブ、美希、祈里だった。三人が乗り込むと、再びシロツプが大空に舞い上がり、猛スピードで四つ葉町を飛び去った。

のぞみの説明を受けたラブ達だったが、やはり咲達、ひかり達同様、何の用かは分かりかねたが、せつながなぎさ達と一緒に知り、顔を見合わせ微笑むと、ナッツハウスで再会出来ると喜んだ・・・

「ホラホラ、ふたばちゃん、イナイイナイ・・・バア!!」

変顔をした来海えりかが、花咲つぼみの生まれて間もない妹、ふたばをあやす。キヤツキヤツと喜ぶふたばの表情が可愛らしく、えりかはふたばのプヨプヨした頬を指で突つつくと、変顔になったつぼみがえりかを睨み、

「もう、えりか！ふたばは私の妹何ですからね!!ふたば、あんまり変なお姉ちゃんに影響

されたら駄目ですよ!」

「何よ、つぼみは何時だつてふたばちゃんと遊べるんだからいいじゃん!」

「駄目です!!」

変顔で睨み合うつぼみとえりかを見て、ふたばがグズリ出すと、明堂院いつきがふたばを抱き上げ、あやし始める。

「ほらほら、ふたばちゃん、大丈夫だよお! 困ったお姉ちゃん達だねえ・・・」

いつきが、つぼみとえりかにメツと注意すると、慌てた二人は、

「あわわ・・・ふ、ふたば、お姉ちゃん達喧嘩してた訳じゃないんですよ!」

「そうそう、ふたばちゃん、お姉ちゃん達、こくくんなに仲良いんだよお!!」

お互いのホツペタを引っ張り合つたつぼみとえりかの顔が面白かつたのか、ふたばはキヤツキヤツとはしゃいでいた。

そこに上空からシロップに乗つたのぞみ達がやって来た。驚いたつぼみ達だったが、数ヶ月振りの再会に嬉しそうであつた。

「みなさん、一体どうしたんですか?」

つぼみがのぞみ達に声を掛けると、

「うん、なぎささん達が、プリキュアオールスターズ、大急ぎで全員ナツツハウス前に集合つて、手紙が来たから、こうしてみんなを呼びに来ただけど・・・イヤアン、その

赤ちゃん可愛い!!」

のぞみの表情がデレデレになって、いつきが抱いていた赤ちゃんに視線を集中させる。

「どれどれ、あつ、本当だ!その子がつぼみちゃんの・・・」

「はい、妹のふたばです!!」

咲の問いかけに、ドヤ顔になったつぼみが自慢気に妹を一同に紹介する。

「キヤア可愛い!ネエネエ、私達にも抱っこさせてえ!!」

ラブもメロメロの表情で、抱っこさせてとつぼみに頼むのだった。

急用の用事を忘れたようにシロツプから降りた一同は、まるでふたば鑑賞会の様相を呈していた。シロツプは、渋い表情を浮かべながら少女達を見ていた・・・

「家にも妹が居るけど、やっぱり生まれた時は嬉しかったなあ!」

咲も、妹みのりが生まれた時の事を思い出し、頬を崩した。中々戻ろうとしない少女達に、シロツプは見る見る顔色を変えると、

「お前達、いい加減にするロプ!急用はどうしたロプ?」

シロツプに注意され、用事を思い出したのぞみは、苦笑を浮かべ、頭を掻きながらシロツプに謝った。

「アツ・・・ゴメンゴメン、みんなシロツプに戻って!つぼみちゃん達も悪いけど、一緒

に来てくれるかな?」

「わかりました!じゃあふたば、お母さんの所に戻りましょうね!!」

「バイバイ、ふたばちゃん!!」

つぼみがふたばを抱っこして家の中に消えるまで、一同は手を振り続けた。戻つて来たつぼみを乗せ、シロップは希望ヶ花市を後にする……

「ふざけないでよ!何であたしがあんたと仲良くしなきゃいけないのよ?」

「セイレーン……何で、ハミイの事嫌うニヤ!?この前は一緒に歌えて、ハミイはとっても、とっても嬉しかったニヤ!!」

「一緒に?このあたしがあんたと!?何であたしがあんた何かと一緒に歌を歌わなきゃ……一緒に?あたしが……ハミイと!?」

「そうニヤ!セイレーン、忘れちゃったニヤ!?」

公園で出会ったハミイとセイレーンだったが、セイレーンは顔も見たくないといった表情で、その場を立ち去ろうとした。思わず呼び止めたハミイだったが、セイレーンの反応は冷たかった……

その様子を、少し離れた場所で、二人の成り行きを見守る北条響と南野奏だった……

「何かセイレーンの様子、変だよねえ?」

「そうね・・・王子先輩に、あの時何をしようとしたのか・・・」  
「いや、そうじゃないでしょうが!!」

奏の妄想劇場が始まりそうな気配を感じ、響が慌てて奏を現実引き戻す・・・  
（あたしが!?!ハミイと一緒に・・・そうだ!闇の中でハミイと一緒に、プリキュアの為に癒しのメロディを歌ったんだっただわ!何で忘れてたんだらう!?!）

バロムとの戦いの時の記憶を呼び覚ましたセイレーンであったが、  
「アアア・・・い、痛い・・・あ、頭が・・・」

動揺したセイレーンだったが、激しい頭痛に襲われ苦しみます。慌てたハミイはオロオロしながらセイレーンに声を掛ける。

「せ、セイレーン!?!ど、どうしたニヤ?」

どうしたらいいか分からず激しく動揺するハミイと、セイレーンの様子がおかしくなったのを見た響と奏が、心配そうに駆け寄ってくる。

「セイレーン、どうしたんだよ!?!どっか悪いの?」

響が心配そうにセイレーンに声を掛けると、

「う、五月蠅い・・・あ、あんた達の顔見てたから、具合が悪くなったのよ!!」

セイレーンは逃げるようにその場から走り出すと、その後ろ姿が見えなくなるまで、ハミイは寂しそうに見送っていた・・・

「ダークドリーム、良いの？彼女も誘いに来たんでしよう!?」

「そうね．．．少し彼女と話してみましよう!」

響達から少し離れた木の陰から、今の状況を見ていたダークドリームとせつなは、響達にはれないようにセイレーンの後を追うのだった．．．

「誰!?何よ、あんた達は．．．あたしに何か用?」

何者かの気配に気付いたセイレーンは、人間姿のエレンに変身し、せつなどダークドリームを睨み付けると、

「セイレーン、私よ!バロムとの戦いの時に、一緒に居た東せつな、キュアパッションよ!こっちは．．．ダークドリーム!私達、あなたに用があつて来たんだけど．．．」

せつなも、今のセイレーンの様子を見て、イース時代の自分を見ているような気がして哀れみの心が浮かんだ。

「バロム!?!．．．そう、そんな名前の奴だったわね．．．それで、あたしに用つて?」

セイレーンは警戒心を抱いたまま二人に用件を聞くと、

「あなたにも、私達に力を貸して貰おうと思つてこうして訪ねて来たけど．．．今のあなたは、まだ目覚めてないのね?」

「ハア？目覚め!? あんた、何言ってるの?」

ダークドリームの言葉の意味が理解出来ず、問い返したセイレーンだったが、ダークドリームは口元に笑みを浮かべると、

「直に分かるわ、直に・・・ね!」

「セイレーン・・・あなたの本心は、ハミイを、響達を、必要としている!! 自分の気持ちに正直になって! あの娘達なら、あなたの心の闇をきつと、きつと晴らしてくれるから!!」

ダークドリームとせつなは、それだけ伝えると、せつなの妖精、アカルンの力で何処かに瞬間移動して消え失せた。

セイレーンは、呆然と二人の消え去った場所を眺めていた。セイレーンの心に、せつなの言葉が思い出される・・・

(あたしが、ハミイを、プリキュア達を必要としている・・・だと?)

セイレーンの顔に困惑の表情が芽生えた・・・

一方、落ち込むハミイを励ましていた響と奏の下に、シロップに乗ったのぞみ達が到着する。

「響ちゃん、奏ちゃん! 久しぶり!!」

「のぞみさん！みんな、どうしたの？」

みんなの突然の登場に驚いた響と奏だった。

二人の表情が冴えないのに気付いた一同は、表情を曇らせると、

「響さん、奏さん、何かあったんですか？元氣無いみたいですが・・・」

「うん、ちよつとね・・・」

ひかりの問いかけに、響はハミイの方を見ると、

「ハミイ、大丈夫だよ！ほら、折角みんなが会いに来てくれたんだからさ・・・」

「ハミイ、後でカップケーキ御馳走してあげるわ！元氣出して!!」

「本当かニヤ!!」

響と奏に励まされ、カップケーキの魔力で忽ち何時ものハミイに立ち直る。ラブは思わず呆気に取られると、

「立ち直り早！ハミイ、久しぶり！ドーナツ食べる？」

ラブからドーナツを分けて貰えて益々元氣になるハミイだった・・・

さすがに12人の少女達に乗せたシロップは、この熱さも災いし、辛そうにしながらもナッツハウスに向かって飛び続けた。

「フーン、なぎささん達、私達に何の用だろうね？」



シロップの背の中で事情を聞いた響達も、首を捻りながらも、互いの近況を報告しあっていた。

そうこうしている内に、シロップはナッツハウスに舞い戻り、一同を下ろすと妖精姿に戻りバテていた。

「お前達、シロップ使いが荒いロブ!!」

「ゴ、ゴメンね! ありがとう、シロップ!!」

のぞみ達、シロップの背に乗っていた一同がシロップに礼を言うと、戻って来た一同に気付き、ナッツハウスの中から皆が顔を出し、再会を喜び合った。シロップの労をねぎらい、かれんとこまちはシロップに冷たいジュースを飲ませて上げて、うらら、ひかり、祈里は、ナッツハウスにあったうちわでシロップを扇いであげた。

「どうやら、みんな揃ったようね!」

突如どこからか声が聞こえ、辺りを見回す一同だったが、声の主を見付けられなかった。

「私は……よー!」

ナッツハウスの上に座っていたダークドリームが、一同に居場所を教えると、一同が彼女の姿を見て驚きの声を上げる。

「あなたは、ダークドリーム?」

懐かしい顔を見て、のぞみの表情が緩むと、ダークドリームも、生身の身体での久しぶりの再会を喜ぶように微笑む。

「私だけじゃ無いわ！」

立ち上がったダークドリームが、ジャンプしてナッツハウス前の池の畔に降り立つと、その側には四人の少女達が居た。

「あなた達は・・・ダークプリキュア5!？」

「あなた達も甦って居たのね？」

かれん、こまちが少女達を見て驚きの声を上げる。

「そうよ、私達もある方の力で甦ったの！」

「あなた達プリキュア5には、色々教えて貰った・・・」

ダークアキラ、ダークミントも笑みを見せると、

「私も、あなた達にはちゃんとあの時の礼を言いたかったの！この前はありがとう!!」

のぞみは、バロムとの戦いの時に助けに現われてくれた事への礼を言うと、ダークプリキュア5は皆、首を捻り礼には及ばないと告げるのだった。

「へえ、あれがダークプリキュア5かあ・・・何かみんなより大人っぽくて、色っぽいよね？」

えりかの何気ない一言に、のぞみ達五人は、それぞれ複雑そうな表情でえりかの方を

向くと、それは言わない約束でしようみたいな表情を浮かべる・・・

その時、せつなの力で瞬間移動して来た、なぎさ、ほのか、ゆり、満、薫、薫子、コツペが、ダークプリキュア5の側に姿を現わす。

「みんな、急な呼び出しに応じてくれてありがとう！」

なぎさが集まってくれた一同に礼を言うと、気付いたメンバーがそれぞれの仲間に話し掛けた。

「なぎささん！ほのかさん！」

「ゆりさん！それに・・・お婆ちゃんとコツペ様まで？」

「エエ！何でつぼみのお婆ちゃんまで居るの!？」

ひかり、つぼみ、えりかが思わず叫び、

「満、薫、その姿は一体!？」

「あれって、闇の力を使っていた時の・・・ど、どういう事なの!？」

「せつな！もう、こつちに来てるんなら、ちゃんと連絡してよね!？」

「せつな、久しぶり！ウエスターやサウラーは元気かしら?」

「せつなちゃん!!」

咲達、ラブ達も互いの大切な仲間へ声を掛けると、満、薫、せつなは複雑そうな表情を浮かべると、

「ゴメン・・・咲、舞」

「今の私達は・・・」

満と薫は、咲と舞に視線を合わせるのも申し訳なさそうな表情になり、せつなもまた憂いの表情を浮かべると、

「ラブ・・・美希・・・ブッキー・・・ゴメン！今の私は、東せつなでも、キュアパッションでも無いの・・・スイッチ・オーバー!!」

手を摺り合わせたせつなの姿が、嘗てのラビリンズ時代のイースへと変貌を遂げる。驚愕したラブ達は、目の前で何が起きているのか理解出来ず、激しく動揺する。

「せつな、その姿は・・・どうして!?何で?せつなが・・・イースの姿に!」

呆然とするラブ達に、ダークドリームが穏やかに語り掛ける。

「彼女達に、再び闇の力を与えたのは・・・我らのマスターよ!ある目的の為にね!!そして、それには・・・あなた達プリキュアと、私達が戦うしか方法が無いの!!」

ダークドリームの宣言を受け、のぞみ達一同は激しく動揺する・・・

第二十六話：全員集合!

完

## 第二十七話：パンドラボックス

## 第二十七話：パンドラボックス

## 1、戦いの中で

ダークドリームの言葉を受け、呆然としたのぞみ達一同・・・

何故戦う必要があるのか？

彼女達には到底理解出来るものでは無かった・・・

そして、困惑する彼女達を、複雑な表情で見つめるなぎさ達一同だった・・・

「私達が・・・戦う!?ど、どうしていきなり戦わなきゃならないの?嫌だよ!!」

「私も嫌・・・もう、あの時みたいな思いは沢山!!」

のぞみも、咲も、フリーズン、フローズンに操られ、プリキュア同士で戦わされた事を思い浮かべ、心から戦う事を嫌そうに否定したが、

「あなた達がそう思うのは構わない!私達だって・・・でも、これは仕方が無い事なの!」  
ダークドリームもまた、憂いの表情を浮かべるも、直ぐにキツとのぞみ達一同を見つめた。

「せつな……嫌だよ！何でまた私達で……」

「ゴメン……私も、嫌！でも!!」

ラブの叫びに、イースと化したせつなも、沈痛な表情を浮かべるも、ラブ、美希、祈里を見つめ返した。

一同のやりとりを見ていたなぎさとほのかも、憂いの表情を浮かべるも、

「満、薫、せつな、あなた達、咲や舞、ラブ達と戦うのは気が引けるでしょう？あなた達は、つぼみ達や響達をお願い、ゆりや薫子さんも……」

言いかけたなぎさだったが、

「プリキュア！オーブンマイハート!!」

突然、憂いの瞬間を破るように、ゆりがココロポットを手に取り変身する。

「月光に冴える一輪の花！キュアムゥゥンライト!!」

真つ先に変身を終えたキュアムーンライトは、変顔をしながら驚くなぎさを笑み、

「なぎさ、心配無用よ！私は平気!!もつとも、彼女達はそうもいかないようだけど」

つぼみ、えりか、いつきのパニックだった顔を見て、少し哀れみの視線を送るムーンライト、薫子も憂いの表情を浮かべながらも、

「つぼみ、えりかちゃん、いつきちゃん、そしてみんなも！今は私達の言う通りにして頂

戴!!コツペ、もう一度力を貸して!お願い!!」

コツペに頼んだ薫子の身体を、花吹雪が覆うと、その中から、つぼみ達以外見た事が無い戦士が現われた。

「聖なる光に輝く一輪の花、キュアフラワー!」

気品さを漂わせるプリキュア、キュアフラワーが姿を現わすと、一同から驚愕の音が漏れ出す、

「エッ!?あれが、キュアフラワー?・・・って言うか、ほとんど別人何ですけど?」

「あり!?そんなのありな訳?」

呆気に取られた響、そして、りんが思わず本音をぶちまけると、フラワーの口元に微かに笑みが浮かんだ。

「ゆり、早!少しは戸惑ってよね!そして、あれが薫子さんの・・・私達も年取ってプリキュアに変身すれば、若返るのかなあ?・・・って、そんな場合じゃないよね!じゃあほのか、私達も行きますか!ひかり、咲、舞、変身しなさい!あなた達の相手は・・・」

「私達よ!!」

なぎさとのほのか、ひかり、咲、舞をキツと見つめると、三人は首を振り嫌々をする。何故プリキュアに変身してまで戦う必要があるのか?

もしかしたら、なぎさ達は操られているのでは?

色々な疑問が沸いてくるひかり、咲、舞だった……

「なぎさ、本当に良いメポ？」

「ほのか……大丈夫ミポ？」

「二人共、あなた達も今の地球の状況見たでしょう？しっかりして！」

なぎさは、イマイチ乗り気じゃない自分達の妖精、メツプルとミツプルを励ますと、ほのかとアイコンタクトを取り、

「デュアル・オーロラ・ウェイブ!!」

手を握りあつたなぎさとほのかが同時に叫ぶと、オーロラが二人を包み込みプリキュアへと変貌させていく。

「光の使者・キュアブラック！」

「光の使者・キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア!!」

「闇の力の僕達よ！」

「とつととお家に帰りなさい!!……つてこの場合、闇の力の僕つて……私達になるんだよね？」

「そ、そうね……つて、ブラック！そんな事言つてる場合じゃないでしょう？さあ、あなた達も変身して!!」



ブラックとホワイトのやり取りを見る限り、操られているとも思えず、益々困惑するひかり、咲、舞だった・・・

「ひかり、変身するポポ！」

「ポルン、何て事を言うの？二人と戦う何て、私には出来ない!!」

「ひかり、みんな、大丈夫ポポ！プリキュラ達の言う通りにするポポ・・・そうすれば、闇が晴れるポポ!!」

ポルンの言葉を受け困惑するひかり達だったが、妖精達はポルンの言葉に同意をする。

「咲、舞、変身するラピ！」

「のぞみ、みんな、変身するココ！」

「そうすれば、この世界に来て感じたモヤモヤの原因が分かりそうな気がするナツ」

数ヶ月振りにこの世界に来たココとナツは、世界を靄（もや）が覆っているような感覚を覚えていた。その鍵をダークプリキュア5が握っているように感じたココとナツも、ダークドリームやブラック達の言葉通りにするよう助言するのだった。

それでもまだ、躊躇していた一同を、のぞみが激励する。

「みんな、やろう！彼女達が、理由も無くこんな事をする何て思えない！きつと何か考えがあるんだよ・・・私達は、彼女達を信じ、自分達の出来る事をするだけ・・・りんちゃ

ん、うらら、こまちさん、かれんさん、くるみ、そして、みんな・・・行くよ!!」

モヤモヤした一同の心を、のぞみの言葉が動かした・・・

(やはりのぞみには、みんなを纏め上げる不思議な魅力があるようね・・・)

ムーンライトは、フラワー、ブラックとホワイトと見つめ合うと、一同はのぞみを見て口元に笑みを浮かべる。

「やれやれ、なぎささん達、後でちゃんと説明して下さいよ?」

りんはのぞみに頷き掛け、他の仲間も頷き合うと、

「[[[[プリキュア!メタモルフオーゼ!!]]]]」

「[[[[スカイローズ・トランスレイト!]]]]」

「[[[[ルミナス・シャイニング・ストリーム!]]]]」

「[[[[デュアル・スピリチュアル・パワー!!]]]]」

「[[[[チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!]]]]」

「[[[[プリキュア!オープンマイハート!!]]]]」

「[[[[レッツプレイ!プリキュア・モジュレーション!!]]]]」

17人のプリキュアが、変身を完了させナッツハウス前に勢揃いすると、頼もしき先輩達の姿を改めて見て、ブラック、ホワイト、ムーンライトの胸中に万感の思いが沸き上がった・・・

(先ずはローズを、ドリーム達から引き離すのが先ね・・・)

真つ先に一同に突撃したのはムーンライト、彼女はローズに攻撃を仕掛けると、プリキュア5と引き離し、ピーチ達の方に追い詰める。

「ローズ！待ってて、今援護に・・・」

奇襲を受け、押されるローズの援護に向かおうとするピーチだったが、フラワーはピーチ達の動きを察知して、

「そうは行かないわよ・・・プリキュア！フラワーカーニバル!!」

援護に向かおうとしたピーチ達に、フラワーが放った四枚の花弁から四人のフラワーが姿を現わし、ピーチ、ベリー、パイン、そしてローズを攻撃して吹き飛ばす。

(何!?この人・・・強い!!)

吹き飛ばされた瞬間、ピーチはフラワーが持つ強さを実感していた。その思いは、ローズ、ベリー、パインも同じだった・・・

「本気で掛かってらっしゃい!私とムーンライトは・・・甘くは無いわよ!!」

並び立ったムーンライトとフラワーの勇姿に、表情を変えるローズ、ピーチ、ベリー、パインの四人のプリキュア達だった・・・

それを合図にしたように、ブラックとホワイトが、ルミナス、ブルーム、イーグレッツ

トを引き離し、満と薫、イースと化したせつなが、ブロッサム、マリリン、サンシャインを、メロディとリズムの方に追い詰めて分散させていく。

「みんなが引き離してくれた・・・私達も行くわよ!!」

ダークドリームの合図に領き、プリキュア5に向かっていくダークプリキュア5、  
「みんな、来るよ!」

「「「YES!」」」

ドリームの合図を受け、散らばったプリキュア5だったが、動きを読んだように、ダークプリキュア5も散り、それぞれのモデルとなった人物達と対峙した・・・

「さあ、どうしたの?あなた達の力はそんなものじゃ無いでしょう!?!私に見せてみなさい!!」

イースと化したせつなの攻撃が、ブロッサム、マリリン、サンシャインに炸裂する。サンシャインが、サンシャインイージズで攻撃を防ぐ間に、左右に散ったブロッサムとマリリンが、プリキュアインパクトで左右から攻撃を仕掛けると、イースは攻撃を見切ったように寸前で躲し、二人を同士討ちにさせる。

「イテテエ・・・やってくれるじゃん!あたし達のコンビネーション見せるよ、ブロッサ

ム!!」

「はい!行きますよ・・・ハア!!」

ブロッサムシユートを放ち花弁の舞がイースを襲うも、甘いと躲すイースに、上空からマリンダイブで跳び蹴りをするマリン、辛くも反転して躲したイースの着地の瞬間を狙い、サンシャインがしやがみながらの回し蹴りで、イースの臍に攻撃を当てて体勢を崩すと、ブロッサム、マリンのプリキュアダブルインパクトでイースを吹き飛ばす。

「やるじゃない!流石ね・・・でも!」

イースも直ぐに体勢を立て直し、三人に凄まじい攻撃を繰り広げた。

「大丈夫、リズム?」

「ええ、あの二人・・・プリキュアになっていないのに、何て強さなの!」

満と薫の繰り出す闇の力の前に、防戦一方となるメロディ、リズム、

「メロディ、リズム、避けてばかりじゃ勝負にならないわよ?」

「あの時の戦いを思い出しなさい!!」

「うるさくいい!今は敵のあなた達の言う事何か、聞かないんだからねえ!!」

メロディが膨れっ面で、満と薫に文句を言うのと、思わず二人は顔を見合わせてクスリと笑った。満と薫が手を繋ぎ、闇の衝撃派がメロディとリズムに炸裂する。強力な合体

攻撃を繰り広げるも、直接狙っているというよりは、敢えて的を外しているように、メロデイとリズムには思われた。

（私達からの攻撃を誘っているとしてもいいの？）

一瞬迷いが生じたリズムだったが、メロデイと顔を見合わせ領き合うと、息のあったコンビネーションを見せ、満と薫の攻撃を押し返す、勢いに任せ上空高くジャンプしたメロデイとリズムだったが、

「そう、その息の合わせ方は良いわね！」

「でも、それだけじゃ私達には敵わない!!」

地上に着地した満と薫が間髪入れず飛び上がり、無防備になったメロデイとリズムを地上に叩き付けた・・・

「ブルーム、イーグレット、どうして防御しかないの？あなた達も覚悟を決めたんじゃないの？」

「そんな事言われても・・・やっぱりブラックやホワイトと戦うのは・・・」

ブラックに発破を掛けられても、ブルームもイーグレットも、もちろんルミナスも、戦う事に躊躇（ちゆうちよ）してしまふ。

「そう・・・じゃあ、こっちは本気で行くよ!!ダダダダダ!!!」

ブラックの怒濤の連続攻撃を、前方にバリアーを張って耐え凌ぐブルーム、イーグレットだったが、ホワイトが裏に回り込むと、二人の手を掴み、合気道の投げのように二人を投げ飛ばし、突進したブラックが二人に追い打ちを掛ける。

「ルミナス、何をしているの？今のはあなたが、二人をカバーしなきゃ・・・」

ホワイトに注意され、思わず「ハイ」と返事を返したルミナスは、

（やっぱり、ブラックもホワイトも何か考えがあるようね・・・）

「ブルーム、イーグレット、守りは私に任せて、お二人は攻撃に集中して下さい!!」

「ルミナス・・・わかった！やろう、イーグレット!! 私達のコンビネーション、二人に見せて上げよう!!」

「わかったわ、ブルーム!!」

三人の顔から迷いが吹っ切れ、ブラック、ホワイトに笑みすら見せた。ブラック、ホワイトは満足そうに顔を見合わせると、

「ホワイト、あの子達、迷いが吹っ切れたようだね!」

「ええ、他のみんなも吹っ切って戦っている・・・」

ブラック&ホワイト、ブルーム&イーグレットがお互い一步も引かない攻撃を繰り返した・・・

ムーンライト、フラワールの前に防戦一方となるローズ、ピーチ、ベリー、パイン、  
「まだまだああ！」

拳を握り、フラワー目掛け突進するピーチのパンチを、フラワーは当たる寸前で見切り、ピーチが体勢を崩すとそのまま投げ飛ばす。上からベリーがかかと落としを狙うも、フラワーはこの攻撃も見切り、ベリーに掌底を当てて吹き飛ばすと、パインがベリーを抱えダメージを軽減させた。

（この子達、良いコンビネーションを見せるわね・・・それに、ピーチはパンチ、ベリーはキック、そしてパインは、見掛けによらない頑丈さを持っている。彼女達に、せつなちやんが加わって居たら、私も危ないかも知れないわね・・・まだまだ彼女達なら伸びそうだな！）

フラワーは、ピーチ達の戦い振りを満足気に見つめた・・・

「流石にやるわね・・・でも、まだまだこれからよ！」

ムーンライトと戦うローズ、一度は奇襲を受け防戦となるも、体勢を整えると反撃に転じるローズ、ムーンライトも真つ向から受けて立ち、拳と拳が、蹴りと蹴りが相殺する。意地になったローズが更に力を込めたパンチを繰り返すと、ムーンライトは体を入れ替え、ローズの背中をポンと押すと、プリキュアインパクトでローズを吹き飛ばす、



「ローズ、あなたは確かに強い！でも、意地になって攻撃を仕掛ける癖は直した方が良いわね・・・敵につけ込まれるわよ？」

「クッ！」

ムーンライトに忠告され、ローズは口惜しさを浮かべた・・・

「キュアアクア！あの時、あなたを見下していた事を謝るわ・・・あなたの言う通りだった。一人では、孤独では、私は成長していなかった・・・あなた達と触れた私達は、成長した！仲間が、友達が居るから、私は成長した・・・その姿、あなたに見せる!!」

ダークアクアは、ニツコリとキュアアクアに笑みを見せた。それは彼女の偽らざる素直な気持ちだった。

「ダークアクア、あなた・・・わかったわ!!」

彼女の思いを知ったキュアアクアもまた、あの時の自分の言葉を受け入れてくれたダークアクアに、ニツコリと笑みを受けた。

二人のアクアの拳と拳が交差した・・・

「キュアアルージュ、あなたは友達の大切さを私に教えてくれた。私の偏った思いを、その身を持って私に知らしめてくれた。ありがとう、仲間の、友達の大切さ、今なら私にも

分かる!!」

「そんなたいしたこと言ってないよ……でも、やっぱりあんたはもう一人の私自身だね。あなたが知った思い……私に見せてみて!!」

「プリキュア、ファイヤー・ストライク!!」

「ダークネス・シュート!!」

微笑みあつた二人のルージュから、熱い技と技が激突した……

「キュアミント、あの時あなたは、敵である筈の私すら守りたかつたと言ってくれた。人を思いやる心、誰かを守りたいと思つた時、人はより一層強くなる事を私も悟つた。今の私は、仲間達の大切さを、彼女達を守りたい思いを知つた……あなたにも、私の成長した姿を見て欲しい!!」

ダークミントの言葉を受け、キュアミントはとても嬉しかつた。

人を思いやる素晴らしさを、彼女は理解してくれた。

頷き合つた二人は、同時に相手に向かつて行つた……

「キュアレモネード、あなたは言つた……歌は人を喜ばせる為だと!今なら私にも分かる。あの時、その妖精と、もう一人の妖精達の歌声に導かれた時、それは確信に変わつ

たわ。あの時の私は愚かだった・・・」

「分かって貰えて嬉しいです！あなたにも歌の素晴らしさを知って貰えて・・・」

「戦いが終わったその時には・・・」

「分かりました！ダークレモネード、是非あなたの歌声を聴かせて下さい!!」

二人のレモネードの思いが弾けた・・・

「キュアドリーム、あなたは本当に素晴らしい人だわ・・・私はあなたを元に作られた事を誇りに思う!!」

「ううん、違うよ！あなたにも立派な心があるじゃない！あの時も言ったけど、あなたは私のコピー何かじゃない！私の大切な友達の一人、ダークドリームだよ!!」

互いに微笑み合う二人のドリーム、

「あの時、あなたは言った！昨日の自分よりも、一時間前、一分前の自分よりも成長してる筈だって・・・あなた達五人に、私達が成長した姿を見て欲しい!!そして、それは・・・」

言いかけたダークドリームだったが、言葉を中断する。

「分かった、あなたの思いに応えるためにも・・・私も本気で行くよ!!プリキュア！シユールディング・スター!!」

「ありがとう、キュアドリーム・・・ダークネス・スター!!」

光と闇の突進技が激突した・・・

## 2、戦いの行方

互いの力と力、技と技をぶつけ合い戦い続けるプリキュア達だったが、嘗てのように操られ、プリキュア同士戦った時のような凄惨さは無く、むしろ清々しささへ感じられた。

一同の戦いを見守り続ける妖精達は、大気を揺るがすような悪しき気配を感じていた。

「こ、これは、どういう事ココ？」

「みんなの戦いに刺激されたように、悪しき気配がナッツハウス周辺に集まっているナッツ！」

「一体どうなってるニヤ？」

ダークプリキュア5達は、一体何をしようとしているのか？

妖精達にも分からなかったが、この戦いが何かの切っ掛けになろう事だけは理解する一同・・・

「ダークドリーム、これがあの人の言ってた？」

ムーンライトの言葉に頷いたダークドリームは、

「はい、もう直ぐです！みんな、これから、最終段階に移ります・・・」

ダークドリームの言葉を受け、再び集結する闇側の戦士達、17人のプリキュア達も、この世界に起き始めている異変に気付き始めていた。

「あなた達、一体何を!？」

言いかけたアクアだったが、ダークドリームの動きを見て思わず言葉を止める。

「さあ、この世界にくすぶる負のエネルギーよ、全てをこの箱に結集させよ！目覚めよ、パンドラボックス!!」

ダークドリームが、空中に両手を挙げて放った凄まじい光の中に、まるで巨大な宝箱のような姿の物体が現われると、ギイイとゆっくり開いていく。まるで、箱に吸い寄せられるように、負のエネルギーが集まり箱の中に吸い込まれていった。

「何？何が起きているの!？」

「これは・・・ダークドリーム、これは一体!？」

イーグレット、ベリーの問いかけに、ダークドリームの代わりにホワイトが語り出す。「これこそが私達の目的なの・・・みんなもこの世界でプリキュアとして戦ってきたでしょう？光と闇の戦いは、それこそ千年、いえ、数千年、それ以上かも知れないけど、この世界の中で行われてきた。その度に、この世界には負のエネルギーが蓄積されていった・・・」

ホワイトの話はこうだった・・・

光と闇の戦いは、長きに渡って続けられ、その都度、負のエネルギーは地球上に蓄積された。千年前、一度浄化を試みた地球の神だったが、それは、当時のプリキュアを犠牲にする事で成し遂げた苦肉の策だった。

神はその行為をおおいに嘆き、その力を失った・・・

だが、闇との戦いは終わる事は無かった!!

数百年前からの砂漠の使徒とプリキュアとの戦い、そして、近年のドツクゾーン、ダークフォルム、ナイトメア、エターナル、ラビリンズ、そして、今尚続く、マイナーランドとの戦い、そして、最悪な事に、カオスによって一度は闇に消えたこの世界は、負のエネルギーの蓄積に耐えられなくなっていた。

このままにしておけば、負のエネルギーが暴発し、地球は死の星と化してしまうと・・・

「それに気付いた方がいらっしやっただけ・・・我々のマスター、ダーククイーン!!」

「ダーククイーン!?!」

ダークアクアの言葉を聞き、一同は思わず聞き返した。

「そう、ダーククイーン、光の園のクイーンと対極をなす存在・・・闇の根源カオスが生ま出し、再生を司るお方!!」

ダークアクアは、その名を誇らしげに再び一同に教えた・・・ダークアクアの言葉を

引き継ぎ、ブラックとホワイトが語り出す。

「私とホワイトも、最初に見た時は驚いたよ……何で此処にクイーンが居るの？つてね！だって、光の園のクイーンとソックリ何だもん……身体の大きさまでね。違いは黒き衣装を身に纏っていたぐらいかなあ!？」

ブラックがその時の事を思い出し、ホワイトも頷くと、

「ええ、そして、闇のクイーンから現状を聞いたの……これを防ぐには、蓄積された負のエネルギーを一つに集め、それを闇と光、二人のクイーンのお力で相殺させ、無にするしか無いと、でも、それには問題があった……」

ホワイトが語った問題……

それはただ、光の戦士プリキュアと、闇の勢力が戦えばいいと言う事では無かった。

それでは今までと変わらないのだから……

そこで、闇のクイーンはある人物達に白羽の矢を立てた。

闇に生まれながら、プリキュアを名乗り、且つ光の戦士の心を併せ持つ戦士達、ダークプリキュア達である。

ダーククイーンは、闇の中で眠りについていた彼女達に語り掛け、再び肉体を与えた。彼女達は、ダーククイーンの話に賛同し、力を貸す事を誓うのだった。

そしてもう一人、ムーンライトの妹でもあるダークプリキュアにも協力を求めたもの

の、ダークプリキュアは断った。

ダークフオールルの戦士だった満と薫、ラビリンスのイースだったせつな、そして、光の歌姫ながら、闇に走ったセイレーンに協力を頼むよう指示したのもダーククイーンだった。

セイレーンに協力を要請したのは、彼女の心には光の戦士と同じ強い思いがあるように思えたからだだった。

更にダーククイーンは、ドツクゾーン、砂漠の使徒と戦っていた戦士、キュアブラック、キュアホワイト、そして、断られたダークプリキュアの代理として、キュアムーンライト、そして、キュアフラワーに協力を頼むよう指示するのだった。

光と闇の戦いながら、憎しみの戦いでは無いこの戦いを否定し、飲み込もうと動くであろう負のエネルギーを集める為に、ダーククイーンは、ダークドリームに、負のエネルギーを閉じ込めるパンドラボックスを託した・・・

「みんなゴメンね！でも、全てを話して協力を仰いでも、あなた達は本気では戦へ無い！そこで、ダークプリキュア5達とこうする事で、あなた達と戦う事を決めたの・・・」  
「満さん、薫さん、せつなさんには、再び闇の力で仲間と戦うという辛い思いをさせてしまった・・・」

ブラックとホワイトは、17人の後輩達、そして、辛い思いをさせた満と薫、せつな



を労った。

「そうだったんだ・・・せつなく、一時はどうなるかと思ったよおお」

思わずイースの姿のせつなに抱きつき、安心したピーチ、ベリー、パイも近づき、抱き合うと、せつなの目から嬉し涙が零れる。

「咲、舞、ゴメン！」

「また、心配させちゃったね・・・」

満と薫は、ブルーム&イーグレットの側に行くと二人に謝る。

「ううん、気にしないで！二人の方が辛かったんだもん」

「ええ」

ブルーム&イーグレットも満面の笑みで二人を見つめた。

「パンドラボックスよ、私達が授かった闇の力を返すわ!!」

満、薫、せつなが、両手をパンドラボックスに向けると、三人の身体から闇の力が抜けていき、満と薫は制服姿に、せつなは私服姿へと戻っていた。

「これで、世界は救われるんだね・・・」

負の力を吸い込んでいくパンドラボックスを見上げたドリームだったが、

「そうはさせませんぞ・・・この力で再び世界を闇にしてやる!!!」

突然辺りに響き渡る邪悪な声に、一同に緊張が走った・・・

「みんな、気をつけるココ」

「凄まじい怨念の塊が・・・パンドラボックスに近づいているナツ」

ココとナツの言葉を受け、ダークプリキュア5の顔付きが変わる。

「ダークドリーム、不味いわ・・・」

「ボックスを閉じましょう！」

ダークアキラ、ダークミントの言葉に頷き、

「パンドラボックスよ！その力で、悪しきエネルギーを封印・・・」

ダークドリームの言葉が終わる前に、

「そうはさせんぞ！この力、私が頂く!!!」

パンドラボックスの中に入った邪悪なエネルギー体は、パンドラボックス事負のエネルギーを取り込み実体化していった。

実体化していく姿を見た時、プリキュアオールスターズ達から、悲鳴にも似た驚愕の声が漏れ出す。それもその筈で、実体化したその姿こそ、光と闇の力を結集させ、何とか倒せたバロムが怪物化した姿と酷似していたのだから・・・

「あ、あんたは、バロム!?!」

「そんな、あの時私達が倒した筈なのに!?!」

ブラックが、ホワイトが、予想だにしないバロムの出現に驚きの声を上げる。

「そう、確かに我はあの時貴様らに倒された・・・だが、闇に喫す寸前、この世界に蓄積する負のエネルギーの中で眠りに付き、時を待った!!時は来たり、貴様らへの復讐と、再び絶望を味合わせる為に、我は帰ってきた!!さあ、プリキュア共よ、絶望の宴を味合わせせてやるぞ!!!」

甦ったバロムは、獲物を求めるようにゆっくり辺りを見回した・・・

プリキュアオールスターズは、嘗てのバロムとの戦いを思い出し、皆表情を険しくしていった・・・

## 第二十七話：パンドラボックス

完

## 第二十八話：思い出を胸に！

### 第二十八話：思い出を胸に！

1、バロム再び！

今、プリキュア達の目の前で、悪夢にも似た光景が起こっていた・・・

一同が苦戦した、闇の救世主を名乗ったバロム！

そのバロムが、再び姿を現わしたのだから・・・

だが、少女達は恐れない！

甦ったバロムを睨み付けた満と薫、せつなは、変身アイテムを手に持つと、

「デュアル・スピリチュアル・パワー!!」

「チェインジ・プリキュア！ビートアップ!!」

プリキュアへと変身を遂げた三人は、それぞれの仲間達の側に合流し、臨戦態勢を取るのだった。

「先ずは・・・その建物でも破壊してやるか!!」

地上に降りたバロムが、右手をナッツハウスに向けて構えると、プリキュアオールスターズが並び立ち、阻止しようと待ち構える。バロムは面白いとばかりに攻撃を放つ

と、真つ先に動いたのは、キュアミント、そしてダークミントだった。ミントのエメラルドソーサーにダークミントが力を加え、二人の守りの力は、バロムからの攻撃を辛うじて防ぎ、ナッツハウスを守った。

(どういう事だ!?!あの程度の防御技、我なら簡単に破れる筈……何故力がセーブされている?)

思った以上に力が出ない事に、バロムは不満そうに自らの身体を見つめた。

「残念だったわね? パンドラボックスは、負の力を吸収する。パンドラボックス事、負のエネルギーを吸収したのが……あなたのミスよ!!」

ダークドリームが、バロムに対して啖呵を切ると、バロムは忌々しそうにダークドリームを睨み付ける。

「そうか……では、方法を変えよう! ハアアアア!!」

バロムの身体から、まるで石油のようなドロドロした液体が地表に広がっていった。まるで地表を飲み込むように、バロムから放たれた液体は、プリキュア達始め、ナッツハウス周辺事飲み込もうと迫ってきた。

「ダークプリキュア5は、プリキュア5、そして、他のプリキュア達に笑みを浮かべると、

「皆さん、私達に協力してくれてありがとう! 後は私達の仕事です! 此処で奴を倒して

も、負のエネルギーの暴発は免れない、私達が次元の狭間に運び・・・」

ダークドリームの言葉を受けたドリームは、顔色を変えて首を振り、

「そんなの駄目、折角蘇れたのに・・・命を粗末にしないで!!」

「でも、他に方法が無いもの! 私達の思いは、あなた達に伝えられた・・・それだけで満足よ! 行くよ! みんな!!」

「「「YES!!」」」

飛び出したダークプリキュア5は、バロムからの攻撃をかくぐり、何とかバロムを包囲し、バロム事自分達共々次元の狭間に送ろうと試みるも、バロムがただじつとしている筈はなく彼女達に、無差別に攻撃を開始する。

「みんなの大切な場所を・・・滅茶苦茶に何てさせない!」

ダークドリームの言葉に同意するかのように、他の四人も必死にバロムの力を押さえ込み、何とかバロム事、次元の狭間へと転移をさせた・・・

「そんなあ・・・折角、折角蘇れたのに・・・こんなお別れ、嫌だよおお!」

ドリームが膝を付き崩れ落ちる、ドリームに近づき、共に互いの分身達の安否を心配するルージュ達一同であった。立ち上がったドリームは、四人の仲間達を見つめると、

「ルージュ、レモネード、ミント、アクア・・・行こう! 彼女達を助けに!!」

「「「YES!!」」」

気色ばむプリキュア5を見て、ローズは慌てて言葉を挟んだ。

「待ってよ!?!行くって、どうやって彼女達の下に行くのよ?何か方法でもあるの?」

思わず言葉に詰まったドリームだったが、

「それは私に任せて!ドリーム、あなた達だけで行こう何て、あんまりじゃない?私も、ううん、私達も一緒に行くわ!!」

「パッション!」

驚愕の表情を浮かべたドリームに、パッションと共にピーチ、ベリー、パインがウインクし、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディが満面の笑顔を向ける。変顔ながら自信満々で腕組みするプロツサムとマリリン、苦笑するサンシャインとムーンライト、親指を立ててウインクするメロディとリズム、微笑みを向けて一同を見るルミナス、ドリームの肩を叩いたブラックとホワイトは、

「決まりね!行こう、私達の大切な仲間を助けに!!」

「はい!!!」

涙混じりに満面の笑顔を見せるドリームだった・・・

「ウフフ、コツペ、私達も行くわよ!私はまだ大丈夫!!」

妖精達も加わり、パッションのアカルの力を使い、プリキュアオールスターズはその場から姿を消した・・・

何とかバロムを次元の狭間に送ったダークプリキュア5だったが、彼女達五人の力だけでは、バロムと対等に戦える力は無かった・・・

「ククク、どうした!? さっきの勇ましさはハツタリか? 所詮貴様らは、出来損ないのプリキュア擬き・・・」

「違う、私達は彼女達と出会えて変わったの! あなたの思い通りに何かさせない!!」

バロムの攻撃を受け、何度も倒れながらも諦めないダークプリキュア5だが、バロムはそんな五人を忌々しげに見つめると、

「ならば、死ね!!」

バロムは、両手に邪悪なエネルギーを溜め始めた時、ダークプリキュア5達の目の前に、プリキュアオールスターズがテレポートしてきた。

瞬時に状況を理解し、バロムからの攻撃を阻止しに動く、ブラックとホワイト、ムーンライト、フラワーとコツペだった。

「ドリーム、みんな、バロムの攻撃は私達が防ぐ!」

「あなた達は、自分達が思った通り動いて!」

「行きなさい!!」

ブラック達先輩プリキュア達の励ましを受け、頷くドリーム、



「ドリーム、みんな・・・あなた達、どうして来たの？バロムは私達がこの命に代えても・・・」

「そんなの、駄目だよ！大丈夫だよ！私達みんなの力を合わせれば、きつと勝てるよ!!」  
ドリームがニッコリとダークドリームに微笑む、

「私達もドリームと同じ考えよ！」

「今度は、プリキュアとしてあなた達に協力するわ！」

「私達と同じ、プリキュアの絆で結ばれた仲間としてね！」

ブライトとウインディ、パッションもドリームの言葉に同意し、ダークプリキュア5に微笑んだ。

「ふざけるな、小娘共!!」

「ふざけているのは、あなたの方よ！彼女達に手出しはさせないわ！プリキュア！フラワーキヤンドル!!」

フラワーの技が、バロムに向けて炸裂する。バロムの足下に円状のフィールドを展開し、フィールド内部の花冠を高速回転させると、バロムは目も回さんばかりに体勢を崩した。

「あの時、あんたをボコリ足りないと思ってたのよね・・・ダダダダダダ!!!」

バロムに対し、追い打ちのように怒濤の連続パンチを繰り出し吹き飛ばすブラック、反対側に居たムーンライトが、バロムを上空に蹴り飛ばすと、その勢いを利用したホワイトがバロムを投げ飛ばす。

蹠跟めきながらも体勢を整え、激高したバロムの攻撃が炸裂して苦戦するブラック達、ブルームとイーグレット、ブライトとウィンディ、ブロッサム達三人、七人のプリキュアが、上空に舞い援護し、バロムに小刻みに攻撃を与えていった。

フラワーを攻撃され、逆上したコツペがバロムに攻撃を仕掛けるも、

「妖精風情が・・・消えろ!!」

「消えるのは、あんたの方よ!プリキュア!クアドラブル・パンチ!!」

ピーチ達四人の強烈なパンチで吹き飛ばすバロム、追い打ちに動いたメロディとリズムだったが、

「調子に乗るなよ、小娘共!!」

「キヤアア!」

バロムの右手にメロディが、左手にリズムが、首を掴まれジタバタ藻掻く、

「先ずは貴様らの首・・・引き千切ってやる!!」

更に力を込めようとしたバロムに、そうはさせないとばかり、ダブルレモネードがバロムの両腕を、プリズムチェーンとダークネスウィップで捕らえると、ダブルアクアが

放ったサファイアアローとダークアローがバロムの腕を貫き、メロディとリズムを解放する。

「みんな、ありがとう!!」

「さつきのお返しよ!行くよ、リズム!!」

「プリキュア!スイートハーモニーキック」

上空にジャンプし、同時に跳び蹴りを放つメロディ&リズム、そして・・・

「私達のコンビネーション、バロムに見せつけてやろう!」

「そうね・・・ドリーム!」

「プリキュア!ダブルシユールディングスター!!」

二人のドリームが、強力な合体技でバロムに大ダメージを与える。バロムは何とか踏み止まると、

「こうなれば、全ての力を解放して貴様ら事吹き飛ばしてやる!!」

逆上したバロムの負の力が暴走を始める・・・

悪しき力が辺りを包み始める・・・

「いけない、このままじゃ・・・やはり私達が犠牲になる以外・・・」

「駄目、そんなの、駄目だよ!!」

ダークドリームに飛びつくドリーム、他のメンバーもそれぞれのダークプリキュア5

に抱きついた。

「あなた達……」

「大丈夫だよ！あなた達が支えてくれるもの……あなた達は私達が支える!!そして、プリキュアのみんなもね」

ドリームの言葉に同意したように、他のプリキュア達もダークプリキュア5にウィンクする。

「ルミナス！ハーティエル・アंकシヨン!!」

バロムに向けてハーティエルアंकシヨンを放つルミナス、バロムの動きが止まったその時、巨大な光と闇が一同の前に現われた……

2、また会う日まで……

一同の目の前に姿を現わしたのは、光の女王と闇の女王であった。その酷似した姿に、特にルミナスは驚くのがあった。

「バロム、これ以上の振る舞いは、私達が許しません!!」

「黙れ、よもや貴様まで目覚めたとはな……邪魔をするな、ダーククイーン!!」

「いいえ、この世界を存続させたのはカオスの意思、私はその思いを引き継ぐ者……あなたこそ闇に帰りなさい!!」

「プリキュアの皆さん、バロムへの結界は、私達二人が行います！あなた方は、負のエネルギーを、光のエネルギーで中和して下さい!!」

光と闇、二人の女王によって思うように動けず、咆哮を上げるバロム、ブラック&ホワイト、ムーンライトも一同の下に駆けつける。フラワーは力を使い果たし、薫子の姿に戻り、コッペに介抱されていた。

「年寄りが出しゃばりすぎたようね・・・後は彼女達に任せましょう!!」

後輩プリキュア達を、穏やかな視線で見守る薫子だった・・・

「漲る勇氣!」

「溢れる希望」

「光輝く絆とともに!」

「エキストリーム」

「ルミナリオオオ!!」

ブラック達三人が、合体技エキストリーム・ルミナリオを放てば、

「精霊の光よ!」

「命の輝きよ!」

「希望へ導け!」

「全ての心！」

「プリキュア！スパイラル・ハート・・・」

「スプラッシュ・スター!!!」

花鳥風月の四人が、最強技スパイラルハートスプラッシュスターを放つ、

フレッシュ勢はそれぞれ、ピーチロッド、ベリーソード、パインフルート、パッショ  
ンハープを取り出すと、

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！プリキュア！トリプル・フレッシュ!!!」

「吹き荒れよ！幸せの嵐！プリキュア！ハピネス・ハリケーン!!!」

四人の合体技を放ち、

ミラクルベルティエ、ファンタステイクベルティエを取り出したメロディとリズム  
は、

ミラクルベルティエ・クロスロッド、ファンタステイクベルティエ・クロスロッド  
をセツトし、

「駆け巡れ、トーンのリング！プリキュア！ミュージッククロンド・スーパーカルテット  
!!!」

二人から放たれた薄い青色、薄い橙色、ピンク、薄いピンク、薄い黄色、5本のエネ  
ルギーリングが出現し、ハート形の光と共に螺旋の光波を描きながらバロム目掛け飛び

出せば、

「鏡よ、鏡、プリキュアに力を！世界に輝く一面の花！ハートキャッチプリキュア！スーパーシルエツト!!」

スーパーシルエツトに変化した四人は、

「花よ、咲き誇れ!!プリキュア！ハートキャッチ・オーケストラ!!」

巨大な女神が、バロム目掛け飛び出した・・・

奇跡の光がバロムに炸裂し、聖なる拳がバロムに振り下ろされる。

「グウウウ、力さえ、力さえ、抑えられねば、この程度の攻撃・・・」

何とか堪え続けるバロムを見た技を放った一同は、

「今よ、ドリーム!」

一同の言葉に頷いたドリームとダークドリーム、ココとナッツの力を借りフルーレ、ミルキイミラーを装備した6人、そして、ダーククイーンの力を借り、ダークフルーレを装備したダークプリキュア5、

「邪悪な力を包み込む、煌くバラを咲かせましょう!ミルキイローズ!メタル・ブリザー

ド!!」

「5つの光に!」

「「「勇気をのせて!」」」

「プリキュア! レインボー・ローズ・エクスプロージョン!!」

「5つの闇に!」

「希望を乗せて!」

「プリキュア! ダーク・ローズ・エクスプロージョン!!」

青い薔薇が、虹の薔薇が、そして黒い薔薇が、うねりを上げてバロムに放たれた。合  
わさった奇跡の薔薇に飲み込まれたバロムは、負のエネルギーと共に完全に消滅した。  
負のエネルギーが晴れた時、曇天は晴れわたり、関東地方は梅雨明けした。

ナッツハウスの前に戻った一同、彼女達の目の前には、池の畔の前にダーククイーン  
が佇み、愛しそうな視線をダークプリキュア5に向けていた。

「本当に良いのですか? あなた方はもう自由なのですよ! 再び私の下に来る必要は無い  
のですよ?」

「いえ、私達5人で決めた事です! 私達ダークプリキュア5は、これからもダーククイ  
ーンの側に居させて下さい!!」

「そうですか、わかりました! …では明日の夜、この場所にあなた方を迎えに来ます  
!」

戦い後、ダークプリキュア5は、ダーククイーンと共に生きる事を決断する。寂しそ



うにしていたのぞみだったが、彼女達の決断を尊重し、せめてみんななどの思い出を作つて欲しいと考え、ささやかなパーティーを行う事を決めた・・・

「みんな、年寄りはそのそろそろお暇するわ！あなた達も元気でね!!そうそう、ラブちゃん、美希ちゃん、祈里ちゃん、せつなちゃん、もし気が向いたら、私を訪ねていらつしやい！色々アドバイスしたい事もあるしね」

薫子は、フラワールの姿で長時間戦つた事が影響してか、大分疲れた表情をしていたが、ダークプリキュア5に労いの言葉を掛け、ラブ達に声を掛けた。

「エッ!?アドバイス・・・ですか?」

思わずキョトンとするラブ達に、薫子は意味深な笑みを浮かべて頷くと、

「機会があるなら、薫子さんに教わると良いわ!私もプリキュアに成り立ての頃は、薫子さんに頻繁にアドバイスを受けたものよ!」

ゆりも昔を思い出したのか、薫子と見つめ合い微笑んだ。

「ゆりさんも薫子さんからアドバイス受けてたんだあ・・・分かりました!四人の都合が付けば、一度伺いますね!」

ラブ、美希、祈里、せつなは、顔を見合わせ頷き、一度は何うと薫子に伝えると、薫子は満足気に頷いた。

「みんなも何かあったら、何時でも植物園の方にいらつしやい!つぼみ、陽一達には私の

方から話しておくから、ゆっくりしてらっしやい!!じゃあ、私達はこれで・・・コッペ  
!!」

薫子はそう言い残し、コッペと共にナッツハウスを後にするのだった・・・

ダークプリキュア5の壮行会の為に、ナッツハウスで準備を始める一同・・・

「じゃあ、料理担当は私とほのか、舞にラブ、えりか、デザート担当は、こまちにひかり、  
咲、奏ね!飾り付けは、かれんとりん、つぼみ、いつき、祈里!後の人達は買い出し要  
員ね!ゆり、せつな、美希、頼むわよ!あなた達に買い出し要員になって貰ったのは:」  
そう言うところのみは、なぎさとのぞみに視線を向ける。

「ちよつと、くるみ、何よその視線は!」

「そうだよ、失礼しちゃう・・・ねえ、なぎささん!」

「あなた達に任せたら、料理の食材より、お菓子の方が多くなりそうだから心配してるの  
よ!!」

くるみに突っ込まれ、思わず考えた二人は、顔を見合わせると頭を掻きながら、そう  
かもと苦笑を浮かべた。

(全く、否定しないのね・・・)

ゆりは少し呆れながらも、クスリと笑った。

「私達は何をすれば良いの？」

「あなた達は主役だから特に手伝わなくても良いんだけど……そうね、折角だからモデルになった人達と行動を共にするのも良いかも知れないわね」

ダークプリキュア5は、それぞれのモデルとなったのぞみ達と行動を共にする。

「うーん、何かその衣装、今は合わないよねえ？」

「な、何？私達に何か用!？」

えりかスコープで見つめられたダークプリキュア5は、何か得体の知れない悪寒に襲われながら、えりかの行動を見守っていた。

「よっしやあ、分かった!!みんなのサイズは……やっぱり本家の5人よりスタイル良いよね!!」

ピクリと反応したのでぞみ達五人の顔を見たえりかは、思わず変顔になり後退ると、逃げるように美希の側に近寄った。えりかは、美希に何やら耳打ちすると、

「分かったわ!出てきて、ブルン!!」

美希の妖精、ブルンの力を使いダークプリキュア5達に衣装を出して上げるのだった。その衣装は五人お揃いのワンピースながら、それぞれの色をモチーフにした五色の色合いが一同の目を引いた。

「へえ、中々似合っているじゃない!」

「そうね、素敵だわ!!」

りんとこまちが感嘆の声を上げると、ダークプリキュア5は皆恥ずかしそうにするのだった……

ささやかなパーティは始まった……

一同は心からダークプリキュア5を歓迎し、持てなした。

カレーの美味しさに目を輝かせ、そして、楽しそうにうららとデュエットして歌うダークレモネード……

怖い話をなぎさとこまちに聞かされ、手を握り合って怖がるりんとダークルージュ……

こんな事もあろうかと、こまちが持参していた羊羹を貰って食べて美味しいと微笑むダークミント……

かれんから、傷の手当ての仕方を習って練習し、実験台のシロップをミイラのように包帯でグルグル巻きにして、照れ笑いを見せるダークアクア……

ひかり、奏、咲、こまち達が作ったデザートをのぞみと一緒に食べまくり、口の周りをクリームでベタベタにしながらも幸せそうにするダークドリーム……

何か意味深な表情をしているせつなに気付いたラブが話し掛ける。

「ど、どうしたの、せつな?」

「うん、私・・・何か忘れてたような気がするんだけど!?!・・・まあ、忘れるくらいだから、大した事じゃないわね!」

一方、ラビリンスでは・・・

「遅い! イースの奴、何をモタモタしてるんだ? ああ、腹減った!」

せつなの帰りを、今や遅しと、花畑で待っている腹ぺこのウエスターだった・・・  
幸せな一時は、ナッツハウス中に笑い声を響かせて過ぎていった・・・

### エピローグ

「のぞみ、どうしたの? 空を見上げて!」

皆が戻り、何時ものメンバーのみのナッツハウス、窓からぼんやり空を見上げるのぞみに気付き、かれんが声を掛けると、

「うん、今頃彼女達、どの辺りに居るんだろうって思っで・・・」

「そうね・・・でも、彼女達に思い出を作って上げられて良かったわね!!」

りん、うらら、こまち、くるみ、そしてココ&ナッツ、シロップも集まり、一同は空を見上げた・・・

「ダークドリーム、何を見ているの?」

ぼんやりとしていたダークドリームに気付き、ダークアクアが声を掛けると、

「うん、写真を見てたら、昨日の事を思い出しちゃって・・・みんな、良い人達だね」

「そうね・・・彼女達には素敵な思い出を頂いたわね!!」

ダークルージュ、ダークレモネード、ダークミントも近づいて来ると、一同は彼女達  
が住む地球の方角を懐かしそうに見るのだった。

「また、会えるよ!!」

ダークドリームは満面の笑顔で仲間達を見つめた・・・

彼女達に乗せた巨大な隕石のような物体は、深い、深い宇宙へと消えていった・・・  
またの再会を心の中で誓いながら・・・

第四章：闇の少女達

完結

## 第五章：新たなる戦士

### 第二十九話：その名はビート！（前編）

第二十九話：その名はビート！（前編）

ダークプリキュア5達が、ダーククイーンと共に、宇宙の果てに旅立つてから2週間が過ぎた・・・

それぞれ夏休みを堪能していた少女達だったが、ある日、北条響と南野奏から、みんなに会わせたい人が居るので、会えないかと一同に連絡が入った。当然一同に断る理由も無く、一同は集合場所をナッツハウスと決め、響と奏にOKの連絡を入れるのだった。

それから数日が経った約束の日・・・

賑やかな話し声が聞こえてくるナッツハウスで、まだ来っていない仲間達を待つのは、夢原のぞみ、夏木りん、春日野うらら、秋元こまち、水無月かれん、そして、早めにナッツハウスにやって来た、美墨なぎさ、雪城ほのか、九条ひかり、日向咲、美翔舞、霧生満、霧生薫、一同は、他のメンバーがやってくるのを団欒しながら待っていた・・・

「ココ達にも連絡入れたし、ラブちゃん達も、せつなちゃんに連絡付けてくれたみたいだ

から、またみんなに会えるね！」

のぞみは、集合場所のナッツハウスでウキウキしていた。響と奏から会わせたい人が居ると聞き、期待でワクワクするのがぞみを見て、苦笑を浮かべるかれんとこまち、のぞみと一緒にしゃぐうらら、

「全く、あんた達ははしやぎすぎ・・・」

そんな二人を、呆れながらも突っ込みを入れるりんだったが、のぞみは少し不満そうに、

「エエ!?だつてえ、また私達の仲間が増えるかも知れないんだよ?」

「そうですよ!私、凄く楽しみです!!」

「そりゃあ、そうかも知れないけど・・・」

のぞみがりに抗議すると、うららもウンウン頷きながらのぞみに加勢する。思わずりんは苦笑を浮かべていた。かれんとこまちが入れてくれた、紅茶を飲んでいたなぎさも会話に加わり、

「まあ、のぞみの気持ちも分からないでも無いよね!私達に会わせたい人かあ・・・そういえば、前に響達が言ってた覆面のプリキュア、キュアレスラーの事かも知れないね?」

「なぎさ・・・それを言うならキュアレスラーじゃなくて、キュアミューズでしょう!」

「アレエ!?そうだっけ?覆面と聞くと、ついレスラーを想像しちゃって・・・アハハハハ



！」

なぎさのボケに、間髪入れず突っ込みを入れるのかと、二人を見て苦笑するひかり、大笑いする咲、ナッツハウスから見える景色をスケッチしている舞と、その様子を眺める薫、咲の家、ベーカーリーPANPAKAPANで貰った、お土産のメロンパンを食べながら一同の話を聞く満、そして、メップル達、フラッピ達がナッツハウスに集まっていた。

「そう言えば、満は今、咲の家でバイトしてるんでしよう？」

りんの問いかけに頷いた満は、

「ええ、前に響達の住む街に、みんなでボランテニアに行ったでしょう？あの時、PANPAKAPANが出張したんだけど、好評だったようで、最近お客さんが増えたらしくて・・・」

「それで人手が足りなくてさあ・・・私はソフトボール部があるから手伝えなくて・・・そんな話を舞、満、薫に話したら、満が手伝ってくれるって言ってくれてさ！舞も手が空いた時には手伝ってくれるし、薫もみのりの事見てくれるから、家の両親も大助かりで喜んでるんだあ!!」

咲がニコニコしながら一同に語ると、舞はニコニコしながら、

「咲ったら、私達友達じゃない！困った時はお互い様でしょう！ねえ？満さん、薫さん

！」

「ええ、咲、気にする必要は無いわ！」

「私も、みのりちゃんとお喋り出来て充実しているわ」

「舞、満、薫・・・ありがとう!!」

舞、満、薫の言葉を聞き、咲は心から嬉しそうに満面の笑みを見せた。

「へえ、咲、良かったじゃない！そう言えばひかり、アカネさんも遠くから買いに来てくれるお客さんが増えたとか、喜んでたよねえ？」

「はい、最近売り上げが好調だって、アカネさんも喜んでました！」

なぎさに聞かれたひかりも、嬉しそうに答えていた。りんは、アルバイトの話題で何かを思い出したのか、

「そう言えば、誰かさんもブンビーの所にアルバイトに行って、初日でクビになったのが居たっけ？」

少し意地悪そうな視線を、のぞみに向けながらりんが言うと、のぞみは思わず変顔を浮かべると、

「だってえ、ブンビーさんったら、あんな大きな犬を、私一人で散歩させてきてって言うんだもん・・・」

その時を思い出したのか、のぞみが頬を膨らませた。

のぞみが散歩させた犬とは、セントバーナード・・・

セントバーナードと聞くと、多くの人は、雪山での遭難救助犬を想像すると思うが、大きな体格な割りには、優しい性格で、普通にペットとして飼う家も居る。ブンビーカンパニーに入った依頼は、最近運動不足のセントバーナードを、思う存分遊ばせてやって欲しいという事だった。ブンビーは、相変わらず社長より偉そうなカワリーノに似た社員に頼みづらく、バイトに來たのぞみにこの仕事を押しつけた。

意気揚々と散歩に出掛けたまでは良かったが、セントバーナードの体格を支えきれず、手から綱が放れてしまい、セントバーナードは、久々の自由を満喫し、何処かへとその姿を消した・・・

のぞみが半べそになった事は語る迄もない・・・

「そう言えば、のぞみに泣きつかれて、みんなで逃げた犬を探し回った事があったわね！」

「あの時は大変だったわね？ ラブさんと祈里さんにも協力して貰って、何とか見つかったのよねえ？」

かれんも思い出したのかクスリと笑い、こまちも相槌を打ちながら、当時の事を思い浮かべて居た。あの時、半ばパニックになっていたのぞみは、祈里が獣医を目指している事を思い出し、シロップに頼み込み、祈里を迎えに行った。偶々一緒に居たラブも加

え、祈里は嫌な顔せず、キルンを巧みに利用しながら、セントバーナードを見付け話し相手にもなり、無事に戻ったものの、飼い主から、中々戻ってこない事でブンビーカンパニーにクレームが入り、哀れのぞみは初日でクビになった・・・

りんもウンウン頷き、

「いやあ、実際祈里が居てくれて良かったですよ！あの子、獣医を目指してるから、動物の扱いにも慣れてたし・・・それに引き替え」

りん、かれん、こまちの視線が、再びのぞみに向けられると、

「もう、りんちゃん！かれんさんやこまちさんまでえ・・・みんなの意地悪うう!!」

再び変顔になりながら膨れっ面になるのぞみに、一同から笑い声が漏れた・・・

少しすると表の方が騒がしくなり、外に出た一同は、シロップの背から飛び降りたココ、ナッツ、ミルクと再会する。

「全く、いちいち呼ばないで欲しいミルク！ココ様やナッツ様は忙しいミルク!!」

「何よ、せっかく教えてあげたのに・・・そんな態度取るなら、ミルクにだけは今度から教えてあげないんだから!」

ツンとした態度でのぞみに接するミルクに、のぞみは変顔になりながら文句を言い、頬を膨らます。

「まあまあ、のぞみもミルクも喧嘩しないココ！」

「そうナツ！ナツツも、新たなプリキュアに出会えるかも知れないと思うと、楽しみナツ！！」

「コ、ココ様やナツツ様がそう言われるなら・・・で、響達はまだ来てないミルク？」

忙しなく辺りをキョロキョロするミルクに、りんは呆れながら、

「ミルク、あんたが一番楽しみにしてそう何だけど？」

「そうロプ、来る途中一番会えるのを楽しみにしてたのは、ミルクロプ！」

りんにつつまれ、シロツプに暴露され、のぞみはジト目でミルクを見つめると、

「ほくら、ミルクだつて楽しみにしてたじゃない？残念でした！まだ、響ちゃん達来てないよ！！」

「う、うるさいミルク！」

顔を赤くしながら狼狽えるミルクの姿に、一同から笑い声が漏れる。

「後はラブちゃん達、つぼみちゃん達、響ちゃん達かあ・・・」

「ゆりの話によれば、ゆり達はラブ達と待ち合わせて一緒に来るつて言つて・・・ワアアア！！」

のぞみの言葉を受け、なぎさが一同にゆり達がラブ達と一緒に来ると話していた最中、一同の目の前が光輝いたかと思つた時、桃園ラブ、蒼乃美希、山吹祈里、東せつな、

花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつき、月影ゆりの8名と、シフォン、タルト、シプレ、コフレ、ポプリの妖精達が一斉に現われた。

「アイタタ・・・もう、せつな！ちゃんと連れて来てよね？」

「何言ってるのよ！転んでるのはラブぐらいな・・・アツ!？」

「す、すいません・・・此処にも居ますう・・・」

転んでせつなに文句を言うラブ、言い返すせつな、そして、申し訳なさそうにしながら転倒していたつぼみだった。他のメンバーはその様子を苦笑しながら見ていた。

「そうか、せつなの妖精の力で瞬間移動してきたんだ・・・いきなり現われたから驚いたじゃない！」

「ウフフ、ごめんなさい！ところで、私達で最後かしら？」

後退さっていたなぎさが照れ笑いを浮かべながらせつなに話し掛けると、せつなも笑みを浮かべながら、自分達が最後か確認する。こまちが、まだ響達が来てないと言うと、「言い出しつぺの割には、響達遅いねえ・・・此処は先輩として、ビシツと注意しなきゃね!!」

鼻の穴を広げ、えりかが得意気にすると、

「えりか、私達が遅くなった理由・・・忘れて無いわよね？」

「人の事、注意出来る立場じゃ無いんじゃないかなあ？」

「ウツ．．．ゆりさん、いつき、その事は勘弁してえ!!」

変顔になりながら両手で拝むようにゆり、いつきに頼み込めりかだった。

暑さでだらけきつていたえりかは、今日の事をすっかり忘れていて、朝から涼みに出掛け、待ち合わせ時刻に遅刻していた。

「でも、確かに遅いわね．．．」

かれんがナツツハウスに掛かっている壁時計を見ると、待ち合わせ時間はとつくに過ぎていた。美希の脳裏に最悪な出来事が過ぎり、少し顔色を変えると、

「ねえ！響達は、昔のあたし達みたいに、今でも敵と戦ってるんでしよう？ひよつとして．．．」

「うん、そうだね．．．響さん達の事だから、大丈夫だとは思うけど．．．」

二人の身を案じる美希と祈里の言葉を受け、一同の顔付きが変わる。確かに響と奏は、今でもマイナーランドとの音符争奪戦を繰り広げている筈だと思ひ浮かべる。もしや、何かあったのでは無いか？

「そうだね．．．あの娘達の事だから大丈夫だとは思うけど、連絡が無いのはちよつと気になるよね？」

「そうね．．．ここで待つてるくらいなら．．．」

「私達で加音町まで迎えに行っちゃおうか？」

なぎさ、ほのか、そしてラブの言葉に頷いた一同がせつなを見ると、せつなも頷きアカルン呼び出すと、もしもの時は、響達に加勢すべく、一同は光に包まれナツツハウスから消え去った・・・

なぎさ達一同が案じていたように、響と奏は、キュアメロディとキュアリズムに変身し、バズドラ、バリトン、ファルセットのトリオ・ザ・マイナー、そして、バズドラが呼び出した風鈴のネガトーンと対峙していた。

だが、バズドラ達の策略で、ハミイを猫質に取られ、おまけにネガトーンが発した不幸のメロディを聞いた人々が、近くで悲しみに囚われ、抵抗すれば攻撃を加えると脅され、二人は苦戦していた。

「セイレーン！何処かで見ているのだろうか？お前も見ての通りだ！貴様が姿を見せ、我らに今一度忠誠を誓わねば、この猫、そして、悲しみに暮れているこいつらがどうなるか・・・分かって居るだろうなあ？」

勝ち誇ったバズドラの脅しに、物陰で様子を伺うセイレーン事、黒川エレンに焦りが生じる。当初は真つ先に出て行こうとしたエレンを、エレンが出て行つては敵の思う壺だと制止した響と奏が、エレンに代わってバズドラ達と対峙したのだが、状況は最悪だった。



迂闊に攻撃できないメロディとリズムを、容赦なくネガトーンの攻撃が襲う。ネガトーンは、強烈な風を吹かせて二人を何度も壁に激突させ、メロディとリズムはダメージを負った。

「メロディ！リズム！クツ、このままじゃ二人は……」

翻弄される二人を見続ける、エレンの心は今にも張り裂けそうだった。二人は、自分の身代わりとなって、ネガトーンに痛めつけられているのも同然だとエレンは思った。このまま二人を、自分の目の前でむぎむぎ倒させはしない。エレンは覚悟を決め、飛び出そうとしたその時、なぎさ達一同がエレンの近くにテレポートして来た。

「な、何?!あなた達は一体?」

突然目の前に現われた一同を見て、驚いたエレンが思わず一同に声を掛けると、声を掛けられた一同は、エレンを見て不味い所を見られたと思ったものの、つぼみ、えりか、いつきの三人は、エレンを見て何処かで見たようなあと首を捻り、せつなはニツコリ微笑み、エレンに話し掛けた。

「セイレーン、あの時以来ね!」

「あなたは……あの時の!」

エレンも、自分がまだマイナーランドの歌姫だった時に、自分を訪ねてきた二人の内  
の一人がせつなだと悟る。

「エエ!?この娘、セイレーンなの?」

なぎさが驚き思わず声を出し、何かを思い出したのか、つぼみもポンと手を叩くと、

「思い出しました!オリヴィエを連れて来てくれた時、確かにこの姿でした!!」

「そういえば、そうだね!」

「あたしも思い出した!!」

いつきとえりかも、エレンと出会っていた事を思い出す。呆気に取られていたラブは我に返り、せつなを見つめると、

「せつなだったら、セイレーンが人間姿になれるの、知ってたんだ?」

「ええ、この間ダークドリームと一緒に、彼女を訪ねた時に知ったの!」

ラブの問いかけに、せつなが苦笑混じりに答える。ダークドリームの名前が出た事で、のぞみは彼女の事を思い出したのか、

「彼女達も連れて来たかったなあ・・・」

少し寂しげな表情を浮かべるのぞみに、くるみ、うらら、かれんは顔を見合わせると、のぞみに話し掛け、

「仕方無いでしょう!彼女達は、宇宙の果てに旅立ちちゃったんだからあ」

「連絡のしようもありませんね!」

「のぞみ、彼女達にはまた必ず会えるわ!」

のぞみも、彼女達には必ず再会出来るような気がしていた。  
「うん！そうだね!!」

のぞみがかれんの言葉に頷いたその時、メロデイとリズムの悲鳴が一同に聞こえてくる。事情が分からない一同は顔色を変え、エレンに現状を問うと、エレンは簡潔に一同に説明した・・・

「今言った通りよ！待ち合わせ場所に行けなくて悪かったけど、今はそれどころじゃ無いの・・・私は、彼女達を、ハミイを、悲しみに暮れる人達を・・・助ける!!レッツプレイ！プリキュア！モジュールーション!!」

エレンの身体を、リボンのような光の衣が覆っていくと、徐々にエレンの身体がプリキュアへと変身していく。

「爪弾くは、魂の調べ！キュアビート!!」

エレンがキュアビートへと変身した姿を見て、一同から感動の声が上がった。響達が紹介したがっていたのは、新しいプリキュアの仲間であるセイレーンの事だったのかと・・・

「キュアビート!?!」

「まさか、セイレーンがプリキュアになったなんて・・・」

「ダークドリームが言った通りだったわ!」

ラブ、なぎさ、せつなが、そして一同が驚愕の表情を浮かべながら、変身した新たな仲間、ビートを見つめた。

ビートの髪は、紫色をしていて、左側には、白い羽毛、青いハートとリボンがついた髪飾りで束ねた、淡い紫色の長いサイドポニーに変わり、その毛先はカールしていた。瞳の色は、エレンの時とあまり変化が無かった。

ビートのコスチュームの基本色は、紫に近い青色で、袖が半袖になっている。後ろの腰付近には、細長い水色のリボンが付いていた。腕のカバーは、手の甲を覆うデザインとなっていて、メロデイとリズムのようなりボンは付いていない。スラリと伸びた足には、青いニーハイブーツを履いていて、足首に白いリボンが巻かれていた。ビートのスカートはフリルは、メロデイとリズムより多い、6層となっている。アクセサリーとしては、イメージカラーと同色のハートのイヤリングを付けている。ビートがプリキュアになった容姿は、エレンの時より大人びた印象を与える。

「みんな、悪いけど・・・今後はセイレーンと呼ぶのは止めて欲しいの！今の私は、黒川エレン！キュアビートよ!!」

ビートは、セイレーンと呼ばれる事に不安を覚えていた・・・

加音町の人々を、ネガトーンを操り、悲しみに沈ませて来たマイナーランドの歌姫セイレーン、まだプリキュアに成り立てのビートでは、洗脳されていたとはいえ、過去の

過ちを犯した自分を、まだ見つめ直す事は出来なかった・・・

少し悲しげな視線を一同に送ったビートを見て、特にせつなは、昔の自分を見ているようで、少し涙ぐむのだった・・・

せつなはビートを呼び止めると、

「待って、ビート！このまま敵の前に出て行っても、敵の思う壺だわ!!」

「それはそうだけども・・・でも、このままじゃメロディとリズムが・・・」

せつなの言葉に、メロディ達が心配なビートが焦れたそうにしていると、何かを思案していた美希が顔を上げると、

「ビート、あたしに考えがあるわ！みんなも聞いて!!」

美希が一同に語った作戦とは・・・

一同は、美希の作戦に同意すると、

「OK！じゃあみんな、お先に！チェインジ・プリキア！ビートアップ!!」

変身したベリーは、ビートの右肩をポンと叩くとウインクし、ベリーは素早く行動に移るのだった・・・

バスドラは、中々姿を見せないセイレーンに苛立っていた。このままでは、再びメフィストに叱責されてしまうと感じ、バスドラに焦りが生まれた。

「おのれ、セイレーンめ……いいだろう、ネガトーン！プリキュア共に止めをさしてやれええ!!」

我慢の限界を迎えたバズドラは、ネガトーンにプリキュアを倒せと指示を出した。風鈴姿のネガトーンが、メロディとリズムを葬るべく動き出す。

その時……

「待ちなさい!!」

バズドラ達から、少し離れた場所に現われた戦士を見て、バズドラがニヤリとし、メロディとリズムは、何故出てきたのかと困惑した表情を浮かべた。

「ようやく現われたか、セイレーン!」

「ビート、何で出て来たの?これじゃあいつらの思う……あれえ!」

「どうしたの、メロディ?」

「いや、あれってビートじゃ無くて……ベリーだね!」

「エツ!……ほ、本当だわ!でも、どうして?」

二人がビートだと思って話し掛けた人物、良く目を凝らせば、それはプリキュアの先輩であるベリーであった。

何故ベリーが此処に居るのか?

訳が分からず、呆然とするメロディとリズムの二人に、ビートに扮したベリーが、メ

ロデイとリズムにウインクすると、メロデイとリズムも、ベリーに何か考えがあるのでろうと悟ると頷き、芝居を始めた。

「ビート、何で来たんだよ?」

「そうよ、これじゃ敵の思う壺じゃない?」

二人の演技、だがそれは、見るに堪えない棒読み演技であった・・・

ベリーは思わず変顔になり戸惑うと、

(あの娘達つたら・・・これじゃ、あたしの考えた完璧な作戦がパーになるじゃない!?しやうがない、此処は時間を稼いで・・・)

「オーホホホ!そんな脅迫に屈するあたしじゃなくつてよ?」

口に手を置き、トリオ・ザ・マイナーを挑発するベリー、なるべく時間を稼ぎ、相手の油断を誘おうとする。

だが・・・

「ちよつとおお!私は、あんな変な笑い方しないわよ!!!」

「お、落ち着いてビート!ベリーも、あなたの笑い方まではわからなかったんだから」

「そうだよ!ねっ、もう少しだからあ」

「もう・・・分かったわ」

ベリーの作戦通り、ジツと我慢して成り行きを見守っていてビートであったが、ベ

リーに変な笑い方をされ、不機嫌な表情を浮かべると、今にもベリーに抗議に向かいそうな勢いだった。慌ててビートを必死に押さえつけるせつなとラブ、ビートは渋々その場を耐えた。そんなビートを見たなぎさは、苦笑を浮かべながら、

「でもさあ、普通、あんな笑い方思いつかないよねえ？」

「うんうん、かれんさんぐらいですかねえ?!」

「りん！何ですってえ？」

なぎさの言葉で思い出したのか、りんは領きながらかれんの名を出すと、キツとかれんがりんを一睨みする。即座に二人の相棒のぞみとこまちが、半笑いしながら二人を宥めた。

作戦が上手くって居るようで、ベリーの事をビートと思い込んでいるような、トリオ・ザ・マイナーに隙が出来たのを見たゆりは、

「じゃあみんな、そろそろ行動に移りましょう！」

「私とほのかとゆりは、あそこに居る人達を避難されるわ！」

「ひかりさん、万が一に備えて、私達と一緒に来て！」

ゆり、なぎさ、ほのかが行動を開始する。ほのかに頼まれたひかりは領くと、

「分かりました！ルミナス！シャイニングストリーム!!」

ひかりがルミナスに変身すると、なぎさ、ほのか、ゆりと共に移動を開始した。それ



を見届けたのぞみは、

「みんな、私達も行くよ！」

のぞみの言葉に残ったメンバーが頷くと、

「「デュアル・スピリチュアルパワー!!」」

咲、舞、満、薫が、

「「プリキュア!メタモルフオーゼ!!」」

のぞみ、りん、うらら、こまち、かれんが、

「スカイローズ!トランスレイト!!」

くるみが、

「「チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!」」

ラブ、祈里、せつなが、

「「プリキュア!オープンマイハート!!」」

つぼみ、えりか、いつきが、

一同がプリキュアへと変身を完了する。

「ビート、行くよ！」

「分かったわ!待ってて、ハミイ!今助けるから!!」

ドリームという言葉に頷いたビートは、俊敏に動き始めた。

今、一同が行動を開始した・・・

第二十九話：その名はビート！（前編）

完

## 第三十話：その名はビート！（後編）

## 第三十話：その名はビート！（後編）

ハミイを猫質に取り、メロデイとリズムを追い詰めるトリオ・ザ・マイナーであったが、バスドラは、助けに現われたベリーをビートだと思い込むも、何処か違和感を感じていた……

「おい、バリトン！ファルセット！セイレーンがプリキュアになった姿って……あんな感じだったか？」

何やら三文芝居を見せられているようなバスドラは、首を捻りながらバリトン、ファルセットに問いかけると、聞かれた二人も、改めてベリーをジイと見て微妙な表情で首を傾げた。まだセイレーンがプリキュアになってから日が浅く、二人もそこまでハッキリとは覚えては居なかった。

「さあ!? あんな感じだったような、違うような?」

「ですよねえ……でも、どっちでも良いじゃないですか? こっちが優勢なのは変わらな  
いんですから!!」

バリトンとファルセットの言葉を聞き、バスドラは、確かに今は自分達の方が優位に

立っているのを思い出し、

「それもそうだな・・・やい、セイレーン！俺様に逆らうとどうなるか教えてやる。お前が抵抗すれば、この人・・・いや、猫質がどうなるか分かって居るな？ネガトーン、中々現われなかった見せしめに、そいつもそっちの二人と同じ目に合わせてやれ!!」

網に捕らえたハミイを振り回し、ネガトーンに指示を出したバスドラだったが、腰のリボンを靡かせながら、疾風のようにビートが現われ、バスドラの頭を踏みつけると、思わず手を放したバスドラから、ハミイを見事に救出する。ビートは網からハミイを救い出すと、ニッコリ笑みを浮かべた。救われたハミイは、嬉しそうにビートの顔を見ると、

「セイレーン！・・・アツ、今はキュアビートだったニャー！ありがとニャ!!」

「ううん、私の方こそ巻き添えにしてゴメンね・・・ハミイ!!それに、助けに来たのは、私だけじゃないのよ?」

ビートはそう言うとハミイにウィンクし、ビートの言葉にエツと嬉しそうな表情になるハミイであった。

「な、何い!?!何故此処にセイレーンが?じゃあ、あいつは一体?!!」

「残念だったわね!ベリーは囿よ!!」

「何だとおおお?!」

向こうに居る筈のビートが現われ、驚愕するバスドラに、ピーチの声が追い打ちを掛

ける。ピーチ達、ブルーム達、ドリーム達、ブロツサム達、次々に姿を現わすプリキュア達が、トリオ・ザ・マイナーとネガトーンを包囲する。キヨロキヨロ周りを見渡した三人の顔から、脂汗が滴り落ちた。プリキュア達の人数に圧倒されるトリオ・ザ・マイナーだった・・・

「お、おのれ、何て数だ!?!」

「だから、私をリーダーにすれば良かったのに・・・」

「何だとおお!?!リーダーは俺様だ!!」

「二人共、今はそんな事してる場合じゃないですよおおー!」

不利な状況になり、仲間割れをし始めるバスドラとバリトン、ファルセットは包囲しているプリキュア達を見て及び腰だった。

「皆さん、プリキュアが来てくれました!」

「こちらに避難して下さい!!」

「慌てなくても大丈夫ですよ!!」

ゆり、なぎさ、ほのかが、少し回復した人々を誘導して避難させる。それに気付いたバスドラが、慌ててネガトーンに指示を出し攻撃するも、なぎさ達の護衛に来ていたミナスが立ち塞がり、バリアでネガトーンの攻撃を完全に防いだ。思わず口を開けて放心するバスドラとネガトーン、動揺したネガトーンの間隙を、ウィンディは見逃さず、

「風よ！吹き荒れよ!!」

ウインディがお返しとばかりに、強烈な突風をネガトーンに浴びせて、トリオ・ザ・マインナーの側に、ネガトーンを吹き飛ばすと、三人は思わず上空から落ちてくるネガトーンを見て仰け反り、何とかネガトーンの下敷きになるのを免れた。

「ミューズ、どうやら加勢は必要無いみたいドド」

プリキュアが優勢になったのを、民家の屋根から見ていた覆面の戦士キュアミューズは、踵を返すと、マントを翻しながら、無言のまま何処かへ消え去って行った・・・

加勢に来てくれた他のプリキュア達の勇姿に、自然と顔が綻ぶメロディとリズム、側に駆け寄ったベリーに、メロディはニコツと笑みを浮かべると、

「ベリー！みんなも、ありがとう！よくも散々私達をいたぶってくれたわね!!」

「タツプリお返しさせてもらうわよ!!」

「ここからは、あたしも参加するわよ!」

ベリー、そしてメロディとリズムも加わり、プリキュアフルボツコタイムが開始された・・・

先陣を切ったのはキュアビート、ハミイを猫質に取った恨みとばかり、

「バスドラ、よくもハミイを．．．タアア!!」

ビートの俊敏で鮮やかな攻撃が、バスドラに降り注ぐ、パンチの連打を受け、前のめりになったバスドラを、回し蹴りで吹き飛ばしたビートは、直ぐにネガトーンに向き直ると、助走を付けてジャンプし、空中からパンチの連打を食らわした。ジャンプしたメロディとリズムが、上空からスイートハーモニーキックで追い打ちを浴びせ、再びビートの連続攻撃の連携に為す術もなくなり、ネガトーンの動きが弱まった。

それを見たビートが勝負に出た!

「弾き鳴らせ、愛の魂! ラブギターロッド!」

ビートがアイテムであるラブギターロッドを取り出すと、

「おいで、ソリー!」

フェアリートーンの内ソリーを呼ぶと、ラブギターロッドに装着される。

「チェンジ! ソウルロッド!」

そして、ラブギターロッドからソウルロッドへと変化する。

「駆け巡れ、トーンのリング! プリキュア! ハートフルビート・ロック!!」

トーンのリングをセットし、ソウルロッドのトリガーを引くと、ソウルロッドから勢いよくネガトーンに向けて射出されたトーンのリングが、ネガトーンを捕らえた。

「ファイナーレ!!」

ビートの合図と共に爆発が起こり、ネガトーンは浄化され、音符と風鈴の姿に戻った。更に振り向いたビートが、険しい顔でトリオ・ザ・マイナーを睨み付けると、三人は思わずドキツとした表情を浮かべる。リーダーとしては、二人に無様な姿は見せられないと感じたバスドラは、

「な、何だセイレーン!? 俺様に向かってその生意気な顔は?」

「あんたはデカイ顔でしょうが! 行くよ、ブロッサム、サンシャイン!」

「プリキュア、トリプラインパクト!!」

マリンの合図と共に、バスドラ目掛け三人の合体技が炸裂すると、バスドラは目が飛び出るかと思うほどの衝撃を受け、巨体が宙に浮いて吹き飛び、フレッシュ組がバリトンを、プリキュア5とローズがファルセットを攻撃する。

「ちよ、ちよつと待て! リーダーはあいつだあ!!」

「そ、そうです! 僕達は、リーダーのバスドラの命令を聞いただけで・・・」

「アア!? 狡いぞ、お前らああ?」

二人はフルボッコにされながらも、リーダーはあいつですとバスドラを指さした。呆れながらもSS組がバスドラに追い打ち攻撃を掛けると、追い詰められた三人は、益々言い合いを始め、責任を擦り付けあい、プリキュア達はそんな三人を見て思わず啞然とする。



プリキュア達に隙が出来たのを見た三人は、

「此処は何時ものように……」

「この状況じゃしようがない……」

「お前達……」

「「オ・ボ・エ・テ・イ・ロ・ヨオオ!!!」」

ハモらせながら、この場から逃げ出すトリオ・ザ・マイナーに、益々呆然とするプリキュア達であった……

「みんな、お疲れ様!」

「美希、中々良い作戦だったわよ!」

なぎさ達が戻って来て一同を称え、作戦の立案者美希を、ほのかとなぎさが褒め称える。

「まあ、あたし、完璧ですから!」

腰に手を当て、得意気にする美希に、エレンは些（いささ）か不満気な視線を向けると、

「でも私、あんな変な笑い方しないからね!」

美希を見て少し膨れっ面になるエレンを見て、一同から笑みがこぼれる。笑い声が収

まると、響と奏が一同に謝り始めた。

「みんな、私達から会いたいわって言ったのに・・・ゴメンね！」

「本当にすいませんでした・・・」

「ううん、この状況じゃ仕方ないわ！」

「それに、こうして無事エレンさんにも会えたんだし!!」

謝る響と奏を制止して、ほのかと祈里がフオローすると一同も同意する。

「じゃあ、遅くなっただけど、これからナッツハウスで、エレンの歓迎会を始めましょう!!」

「賛成!!!」

なぎさの提案に賛成する一同だった・・・

せつなのアカルンの力で、再びナッツハウスに戻った一同は、料理作りに、デザート作りに、盛り上がった。一方妖精達は、テラスに出て料理の出来上がりを待っていた。話の中心には、セイレーンと仲直りする事が出来たハミイが居た。

「ハミイ、セイレーンと仲直り出来て良かったミポ」

「セイレーンも、すっかりなぎさ達と打ち解けたようで安心メポ」

ミップルとメップルも、仲直りしたハミイとセイレーンの関係を、自分の事のように喜んでいた。ハミイも嬉しそうに、心配してくれて居た妖精達に感謝するのだった。

「みんな、ありがとうニャー！でも、ハミイとセイレーンは昔から仲良しだったニャー!!これで、ハミイの夢がまた一步近づいたニャー!!」

「夢・・・ラピ？」

「ぜひ、聞かせて欲しいコゴー!」

フラツピとチョツピに聞かれたハミイが目を瞑ると、

「バロムとの戦いの時、ハミイはセイレーンと一緒に歌えて、凄く、凄く嬉しかったニャー!今度はセイレーンと一緒に、幸せのメロディを歌って、みんなを幸せにするのが、ハミイの夢ニャー!!」

ハミイはその日の場面を思い描いて、満面の笑みを浮かべた。そんなハミイを見た妖精達の顔も、自然と笑顔が溢れていた。

「ハミイ!みんな!奏達が、デザート出来たからおいでだつて!みんなにも色々心配掛けてゴメンね!」

妖精達を呼びに来たエレンは、心配してくれていた妖精達にも謝った。そんなエレンに、妖精達は皆優しい言葉を掛けるのだった。

和やかな食事会も終わり、片付けも大方終わらせ一段落すると、なぎさはラブを手招きし、

「ラブ、頼んでいた物、出来たかな？」

「まっかせて下さい！お父さんの会社が、精魂込めて作りましたから!!」

なぎさに言われたラブが、紙袋から何か取り出すと、一同の目が点になる。ラブが取り出したのは、黒髪のかつらだったのだから・・・

「か、かつら!?!」

「なぎさ・・・かつら何て何に使うの?」

ほのかは思わず目を点にし、なぎさが何を考えているか分からず、思わずゆりが問いかけると、

「フフフ、付け髭もあるよ！さて、今年は電力不足でこの夏の暑さも大変な状況ですが、こんな時こそ・・・心の底から冷たくなるようよって言う事で・・・ジャーン!!」

かつらと付けヒゲを付けたなぎさの姿に一同が笑いだす、なぎさも口元に笑みを浮かべながら、

「いや、笑うんじゃない、怖がって貰わなきゃ・・・はい、皆さん稲川なぎさです!!」  
「アハハハ！何それええ!!」

ホラー話で有名な、稲川淳二のマネで怪談を話だすなぎさを見て、えりかがお腹を抱えて笑いだすも、なぎさの行動を見たりんが慌てて遮ると、

「ま、またそれですかあああ!?!この間、ダークプリキュア5の壮行会でもやったじゃない

ですかあ？」

ビビリ顔のりんがなぎさに抗議するも、なぎさは口元にニヤリと笑みを浮かべ、怪談を続けた……

なぎさは、ひかりも世話になつてゐる、藤田アカネから大量に怪談を仕入れたようで、ノリノリで怪談を続けた。こまちも加わり、二人は楽しそうに怪談話を一同に聞かせ続けた……

「ハ、ハミイ、怖そうにしてるわね!?しよがない、私が抱っこしてあげるわ」

怪談話を聞かされる度に、顔色が悪くなつていくエレンは、怪談よりデザートを食べまくつていたハミイを、震える手で抱き上げると、引き攣りながら怪談を聞いていた。時にはハミイの両手を使って自分の耳を塞ぐ行為に、

「セイレーン……顔色が悪いニヤ！そう言えば、セイレーンは怖い話や……」  
「ワアアア！やかましいわ！やかましいわ！やかましいわ！こ、怖く何てないわよ！」

ハミイの言葉を、大声で引き攣りながら否定するエレンを見たりんは、涙目になりながら、仲間が居たと引き攣った笑みを浮かべると、エレンもそんなりんを見ると、仲間が居たと、引き攣った笑みを浮かべ返し、思わず二人はホッと安堵するのだった……  
そんなりんとエレンを見て、なぎさは不気味な笑みを浮かべると、突然真顔でエレンを指差し、

「あれえ!? エレンの後ろに、白い服を着た女の人が・・・」

「ギヤアアア!!」

エレンとりんが絶叫し、その声に、咲と舞、のぞみ、うらら、かれん、ラブと美希、つぼみとえりかも驚き騒ぎ始める。エレンは、ハミイを潰れそうなくらい抱きしめ震え出すと、それを見たほのかは、表情を曇らせながらなぎさを肘で突つつき

「なぎさ、質悪いよ! ゴメンなさいね、エレンさん!」

「ゴメンゴメン! そこまで怖がるとは・・・」

「覚えてなさいよお!!」

ほのかが暴露して、なぎさが言った事が嘘だと分かったエレンは、涙目になりながら、なぎさを見つめて抗議するのだった。

そうは言っても、エレンにも、なぎさが自分を仲間の輪に入りやすくする為、こんな行動をしているだろう事は分っていた。改めて仲間達を見渡したエレンは、

「みんなと初めて会った時は、こんな風になるなんて想像出来なかった・・・でも私は、またハミイと一緒に居れて、響と奏に会えて、そして、プリキュアになれて・・・本当に良かった! みんなとこうして仲良く慣れたから・・・みんな、今日はありがとう! これからもよろしくね!!」

「(イ)ち(イ)そ!!」

エレンの挨拶に、盛大な歓声で答える23人の少女達だった・・・  
24人の少女達は、新しき仲間を加え、思い思い語り続けて居た・・・  
時間を忘れながら・・・

第五章：新たななる戦士

完結

第六章：新たなる闇・その名はノイズ!

第三十一話：新たなる仲間!キュアミューズ!!

第三十一話：新たなる仲間!キュアミューズ!!

1、メフィストを救え!

キュアビート事、黒川エレンが、プリキュアオールスターズの面々と親睦を深めてから、早三ヶ月になろうとしていた・・・

その間にも、響、奏、エレンは、メフィスト率いるマイナーランドとの音符争奪戦を繰り広げ続けた・・・

10月も終わりを迎えようとしていたこの日、キュアメロディ、キュアリズム、そして、キュアビートの三人は、自らの手で音符を全て集めるべく現われたマイナーランドの王、メフィストが呼び出した三つ首のネガトーンと死闘を繰り広げていた。

一同が持っていた音符は全て奪い取られ、メフィストによつて奪われた音符はマイナーランドへと送られてしまい、三人は絶対的な危機に陥るのだった・・・

響達の誘いを受け、加音町に遊びに来ていた花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつきの三人もプリキュアに変身し、苦戦する三人の援護に向かった。



加勢に来てくれたプロツサム達のお陰で、何とかネガトーンを倒したものの、自らプリキュアと雌雄を決するべく、メフィストは六人のプリキュアに攻撃を始める・・・

「おのれ、プリキュア共めえ・・・」

六人のプリキュアと死闘を続けるメフィストだったが、成長した彼女達は強さを増しており、メフィストは徐々に押され始め、怒りの咆哮を上げた。メフィストの咆哮に応えるかのように、邪悪なオーラがメフィストを包み込むと、メフィストは見る見る巨大化し、六人のプリキュアと再び死闘を繰り広げる。

パワーを増したメフィストの前に、何度も攻撃を受け弾き飛ばされるプリキュア達、その時、空に鍵盤の回廊が出現したかと思うと、メイジャーランドの高貴なる女王、アフロディテが一同の目の前に降臨する。

「アフロディテ様!?!」

「どうして此処に?」

「メフィストとは、私も因縁有る間柄、このままあなた方に任せたままでは居られません・・・メフィスト、いい加減に目を覚ましなさい!!」

ビット、メロディの問いに、アフロディテが答えると、毅然とした表情を浮かべメフィストを睨み付けた。メフィストはアフロディテを見て鼻で笑い、

「フン、態々自らお出ましとは・・・丁度良い!アフロディテよ、お前もプリキュア同様に始末してくれる!!」

「メフィスト・・・あの時のようには、もう戻れないのですね・・・」

メフィストの言葉に、悲しそうな表情になるアフロディテだったが、直ぐに毅然な態度で再びメフィストを睨み付けた。

「ミューズ・・・このままでいいドド?今こそプリキュア達に全てを語り、共に協力する時ドド」

「・・・」

その戦いを、民家の屋根の上から、複雑な胸中で見守るのは覆面の戦士、キュアミューズだった・・・

パートナー、ドドリーに助言されるも、ミューズの頭は混乱していた・・・

私はどうすればいいのか?・・・

ミューズは戸惑い続ける・・・

「ゆりさんが居れば、ハートキャッチオーケストラで、髭オヤジ何てちよちよいのちよいだったのいいい!」

「仕方ないです……ゆりさんは今、大事な時期何ですから……」

「そうだよ、マリリン！それに、ゆりさんやなぎささん、ほのかさんは、私達にプリキュアの活動を託してくれてるんだし、ゆりさんの分まで、私達がメロディ達の力になろう!!」  
変顔したマリリンが思わず愚痴を零すも、ブロッサム、サンシャインに窘められ、思わずマリリンは口を尖らし、ブロッサム、サンシャイン、メロディ、リズム、ビートは苦笑を浮かべる。

ブロッサム達の中心的存在の月影ゆりは、大学受験に向けて美墨なぎさ、雪城ほのかと共に、大事なこの時期を過ごしていた。

バロムとの戦い後は、後輩達にプリキュアとしての活動を託し、なぎさ、ほのか、ゆりは、なるべくプリキュアになる事を控えていた。

もう、自分達の力が無くても、後輩達ならプリキュアとして安心して任せられると彼女達は考えて居た。だが、彼女達も無責任に戦いを放棄した訳では無く、もしもの時は彼女達に加勢する覚悟は持ち続けていた。

響達とマイナーランドとの戦いも、佳境に入った事を知ったのぞみ達一同は、彼女達を気に掛け、順番に時折加音町を訪れていた。

加音町で、明日ハロウィンパーティーが開かれると聞き、今回響達に誘われたつぼみ、えりか、いつきが一同を代表して様子を見に来たこの日、メフィストとの戦いに遭遇し

ていた……

「まつ、いつかあ!でつかなくなったお陰で、的が大きくなって戦いやすいや……みんな、決着付けるよ!」

巨大化したマイナーランドの王、メフィストを見て、デューンとの戦いを思い出したのか、手間が省けたと拳を叩き、気合いを入れるマリンが一同に声を掛けると、一同が頷き返す。アフロディテも頷くものの、

「プリキュアの皆さん、メフィストを……倒して下さい!!」

何かを決意したように、プリキュア達にメフィストを倒してくれと頼むアフロディテ、その瞳の中に、悲しげな光が宿るのにビートが気付く、

「アフロディテ様……」

「うん、ここでケリを付けなきゃ……メフィスト、覚悟!!」

「黙れ、小娘共!何人居ようが……返り討ちにしてくれる!!」

メロディの言葉を忌々しげに、メフィストが苛立ちを募らせるも、メロディ、リズム、ビートは頷き合うと、

「「出でよ!全ての音の源よ!!」」

三人は、ヒーリンググチェストからクレッシェンドトーンを呼び出す。初めて見るブ

ロッサム達は、三人が呼び出したクレッシェンドトーンに驚きつつも、

「ブロッサム、サンシャイン、先輩として負けられないよ！」

「はい！マリリン、サンシャイン、行きますよお・・・」

ブロッサムタクト、マリインタクト、シャイニータンバリンを取り出した三人が勝負に出る。

「集まれ、二つの花の力よ！プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

ブロッサムとマリリンがピンクと青の光に包まれ上昇すると、それを合図にしたようにサンシャインが、シャイニータンバリンを構え、

「花よ！舞い踊れ!!プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

キュアサンシャインが、ゴールドフォルテバーストの力で太陽のような光のゲートを空中に作り出すと、それ目掛けて突入するフォルテツシモ状態のブロッサムとマリリンの身体が金色に輝く。

「プリキュア！シャイニング」

「フォルテツシモ!!!」

三人の合体技、シャイニングフォルテツシモがメフィスト目掛け下降する。一方、クレッシェンドトーンを呼び出した三人は、

「届けましょう！希望のシンフォニー!!」

両腕をクロスしたメロディ、リズム、ビートが、クレッシェンドトーンと一体化する。

「プリキュア!スイートセツシオン・アンサンブル!!」

クレッシェンドトーンの黄金の光と、一体化して突撃するメロディ、リズム、ビート、黄金のフォルテツシモが、黄金のスイートセツシオン・アンサンブルが、二組の黄金の技のハーモニーが、メフィストが放つ攻撃を掻き消しながら、メフィスト目掛け突き進んだその時・・・

「止めてえええ!!」

まるでメフィストを庇うかのように、プリキュア達に両手を広げ攻撃を止めさせようとするキュアマミューズ、クレッシェンドトーンは、咄嗟に反応して緊急回避をし、その煽りを食らい、メロディ、リズム、ビートは地上に墜落し、プロツサムとマリも同時に躲すも、その勢いにミューズの覆面が弾き飛ばされる。

覆面が取れ、素顔を晒したキュアマミューズを見た時、メロディ、リズム、ビート、アフロディテ、そして、敵である筈のメフィストが激しく驚愕した。

「やはり、ミューズの正体は・・・アコ、あなただったのですね!」

「あの顔・・・もしかして、アコちゃん?」

「嘘!?アコちゃんが・・・」

「生意気なあの子がキュアマミューズなの?・・・って言うか、あの顔、私何処かで見たよ

うな……」

アコがミューズと知り戸惑うアフロデイト、メロデイ、リズムに対し、ビートは何処かで見たようなと小首を傾げる。ミューズは覆面が取れたのを契機に、衣装を脱ぎ捨てると、中からは黄色い衣装のあどけなさが残るミューズが姿を現わす。

「嘘おお……あのブーツは反則っしょ!!」

「もう、マリナー!」

「今はそんな場合じゃないよ!」

ミューズの足底ブーツを見て羨ましがるマリナーに、呆れかえるプロツサムとサンシャイン、ハミイも口を大きくアングリ開けて驚くも、

「ニヤンですとおお!?!キュアミューズのあのスタイルの良さは、あのおっぱいは……偽物だったのかニヤアア!?!」

「ハミイ……驚くのはそこじゃないシン」

フェアリートーン達は、ハミイの相変わらずさに呆れながらも、成り行きを見守る。

「ママ!みんな!もう、もう、止めてえ!パパを、パパを虐めないでええ!!パパ、アコです!私……アコです!!パパ……あの頃のパパに……戻ってええええ!!」

「アコ……アコなのか?私是一体!?!」

メフィストの事をパパと呼ぶミューズの姿に、プリキュア達は混乱し、成り行きを呆

然と見つめていた……

アコと名乗るミューズを見て、メフィストは戸惑いながらも、徐々に記憶が甦りつつあった。自分は何故此処に居るのか? 何故目の前で、愛する娘アコが悲しそうな顔をしているのか、メフィストの頭が混乱する。マイナーランドでその様子を見ていたバスドラ、バリトン、ファルセットにも異変が起きていた。

「お、おい、あの娘……もしかして?」

「確かに見覚えがある……」

「そうですよ、僕達も遊んで上げた事がありましたよ!」

トリオ・ザ・マイナーの三人も、臆気ながらミューズの素顔を見て徐々に記憶が甦りつつあった。だが、玉座の背後にある化石のような物体の目が輝き、状況は一変した:

「アコ……お前がどうして此処に? そうだ、私は一体何を!」

「パパ! 記憶が、記憶が戻ったのね?」

思わず嬉しそうな表情を見せたミューズであったが、メフィストは記憶が戻ったと言われ、戸惑いの表情を見せながら、

「記憶?! 私……そうだ、魔響の森に入り其処で……グウウオオオ!!」

記憶を取り戻しそうになったメフィストであったが、突然耳に付く貝殻のようなヘツ



ドフォンからの悪のノイズが、再びメフィストの心を悪へと導く。

「あれは・・・そうか、そうだったんだ！メフィストも・・・ううん、メフィスト様も、あれに操られて居たのね・・・私同様に!!」

苦しむメフィストの様子を見て、思わずビートが叫ぶ、メロディもリズムも首を捻り、

「ビート、どういう事?」

「メフィストが操られて居るって本当なの?」

呆気にと取られながらビートに問い掛けるメロディとリズムに、ビートは頷きながら、  
「ええ、元々メフィスト様は、メイジャーランドの王様だったの!つまり・・・アフロディテ様と夫婦って事ね!バストラ、バリトン、フルセットもそう・・・彼らはメイジャーランドの三銃士として、王国の民から慕われていた。でも、ある日突然彼らはメイジャーランドに反旗を翻し、マイナーランドを建国した。そして、ハミイが今年の幸せのメロディの歌い手に選ばれた事で、メフィスト様に私の中にあつた妬みの心を利用され、私もあのヘッドフォンで洗脳され、ハミイやあなた達と敵対した。メフィスト様の耳に付いているあれがそうよ!・・・あれ?今アコつてあなた達やミュージズ、メフィスト様は言つてたわよね?って事は・・・キュアミュージズの正体つて、アコ姫だったって事!」

仰天してミュージズの顔を見るビート、そして、フェアリートーン達、ハミイは首を傾

げる。セイレーンも、フェアリートーン達も何をそんなに驚いているのだろうかとハミイは不思議に思った。ハミイは疑問を解消するべくビートに問い掛ける。

「セイレーン、何がどうなってるのニヤ？」

「だから、メフィスト様も、トリオ・ザ・マイナーも、何者かに操られて居ただけで、倒すべき者は他に居るって事よ!おまけに、ミューズはメイジャーランドのお姫様だったの!ハミイも、私の付き添いでお城に来た時、アコ姫と会ってるでしょう?」

「ニヤンですとおお!?!・・・ハミイは、すっかり忘れてたニヤー!」

嘗て歌姫に選ばれたセイレーンの付き添いで城に招待された時、ハミイもアコはもちろん、メフィスト、トリオ・ザ・マイナーにも出会っていた事をようやく思い出す。

相変わらずの天然振りを発揮するハミイに、メロディとリズムも思わず苦笑するも、直ぐに表情を引き締め、

「それが本当なら・・・アコちゃん!私達も、あなたのパパを救って上げたい!!私達と一緒に・・・メフィストを救って上げよう!!」

「でも・・・パパと戦うなんて私・・・」

メロディの言葉に、メフィストと戦う事に躊躇するミューズ、ミューズに近づき、そつと肩にブロッサムが手を置き優しく微笑むと、

「アコちゃん、プリキュアは戦うだけが全てじゃないの・・・道を踏み外している人が居

るなら、正しい道に導いて上げる。それもプリキュアの使命だと、私は思います。私達の大切な仲間達もそうしてきました・・・そして、嘗て闇の救世主を名乗る者との戦いの時、彼らは私達に力を貸してくれました。アコちゃん、ここにはあなたも含めて、七人のプリキュアが居るんですよ！必ずあなたのお父さんを・・・救つて見せます!!」

プロツサムが微笑み、その背後でマリリンがドヤ顔でニヤリとし、サンシャインが頷く、反対側ではメロディ、リズム、ビートが微笑みながら頷いた。

ミュージズの目に、アフロディテの目に涙が溜まる・・・

「みんな、みんな、パパを・・・パパを助けて上げて!!」

「うん！必ず助けよう!!」

メロディがミュージズに頷き、一同にアイコンタクトをすると、一同が頷き返す。今、一同の思いが一つになった・・・

ミュージズもメロディの隣に並び立ち、七人のプリキュアが横に居並ぶと、ギロリとメロディが唸り声を上げながら一同を睨み付ける。

「パパ、その苦しみ・・・私達が晴らして見せる!!」

「ミュージズは、メロディに話し掛け続けて!」

「ミュージズは、メロディに話し掛け続けて!」

メロディ、リズムの言葉に頷き、巨大なメロディ目掛け走るミュージズ・・・

それを合図にしたかのように、一同が行動を開始した……

思いは一つ、メフィストを元に戻し、ミューズの笑顔を取り戻す事……

「花よ、輝け!プリキュア!ピンクフォルテウエイブ!!」

「花よ、煌け!プリキュア!ブルーフォルテウエイブ!!」

「花よ、舞い踊れ!プリキュア!ゴールドフォルテバースト!!」

ブロッサム、マリン、サンシャインが、

「翔けめぐれ、トーンのリング!プリキュア!ミュージッククロンド!!」

「翔けめぐれ、トーンのリング!プリキュア!ミュージッククロンド!!」

「翔けめぐれ、トーンのリング!プリキュア!ハートフルビート・ロック!!」

メロディ、リズム、ビートの技が、六人のプリキュアの力がメフィストの動きを封じる。

ミューズは大きくジャンプし、メフィストの肩に飛び乗ると、

「パパ!私、私、パパが大好きだよ!私のパパに戻って……私、またパパと、ママと、

また、一緒に、一緒に、暮らしたいいいいい!!」

涙に濡れたミューズの拳がメフィストの顔に炸裂する。

「メフィスト……あなた、お願い……あの頃の、あの頃の優しいあなたに戻ってえええ!!」

その愛の拳が、愛の言葉が、ミューズ、アフロディテの思いが、メフィストの心に、忘れ去られた思いを甦らせていった・・・

メフィストの脳裏にかつての光景が蘇る・・・

大きな木の陰に隠れたアコ、メフィストは笑みを見せながらアコを見付けると、見つけられたアコは喜びながら 父の胸に飛び込み抱きつく。その姿を見て幸せそうに笑うアフロディテと音吉、幸せな家族の風景・・・

（私は・・・私は、何をしているのだ・・・愛する娘を、愛する妻を・・・アコ、アフロディテ、そして、プリキュア達よ・・・ありがとう！最早、このような悪のノイズになど・・・私は負けん!!!）

「ヌウウオオオオオ!!!」

メフィストの気迫の籠もった雄叫びと共に、悪のヘッドフォンは飛び落ち、メフィストの容姿が元の姿へと戻っていった。

「パパアアア!!!」

「あなた!!!」

「アコ、アフロディテ・・・心配掛けたね！もう、もう、何処にも行かないよ!!!」

抱きついて泣くミューズを、アフロディテを、メフィストは愛しそうに力強く抱きしめた。その姿に、メロディ、リズム、ビートは涙ぐみ、ブロッサム、マリン、サンシャ

インは、救えなかったゆりの父、月影博士の事を思い浮かべるのだった・・・

「響さん、奏さん、セイレーン、ハミイ、そして、つぼみさん、えりかさん、いつきさん、ありがとう！あなた方には何とお礼を申し上げれば良いやら・・・」

大きな身体を窮屈そうにしながら深々と頭を下げるメフィスト、とてもさつき戦った相手とは思えぬ程腰が低かった。

「もう、パパ！早くお家に帰って着替えてよ！そんな衣装じゃ・・・私、恥ずかしいよお！」

「本当よ・・・一先ずお父様の下に参りましょう！」

「そ、そうか？いやあ、私も何でこんな姿なのか理解出来んが・・・こら、アコ、そう急かすな・・・じゃあ、皆さんまた改めまして！」

取り戻した親子の団欒・・・

嬉しそうなアコ、アフロデイトとメフィストの姿を、笑顔を向けながら見送る一同だった・・・

「アコちゃん、嬉しそうでしたね！」

「うん・・・これもみんなが手助けしてくれたお陰だよ！」

つぼみの言葉に頷き、響、奏、エレンが、つぼみ、えりか、いつきに感謝の言葉を述

べるも、つぼみもいつきも、同じ仲間同士当然だから気にしないでと微笑み返し、一人踏ん反り返って腰に手をあてていたえりかであった・・・

「でも、これからが本番よ！メフィスト様を操っていた敵は・・・きつと表舞台に現われる筈だわ!!」

エレンの言葉に表情を引き締める響と奏、つぼみ達三人も頷き返すも、ハミイは暢気そうに、リュックからカップケーキを取りだし食べ始める。

「ハミイ！もう、私達持っていた音符を全て取られちゃったのに・・・」

「大丈夫ニャー！また集めればいいのニャー!!」

エレンはハアと溜息を付くも、ハミイの前向きな考え方に励まされるのだった・・・  
「私達も力になります！・・・そうだ、アコちゃんも仲間に加わった事ですし、ハロウィンパーティーには、他の皆さんにも来てくれるように頼んでみましょう!!」

つぼみの提案に一同は同意し、シロップを通じ、プリキュアオールスターズ一同に新たな仲間、キュアミューズの事が伝えられるのだった・・・

「メフィスト、ようやく正気に返ったか・・・」

「お義父様・・・申し訳ありません！」

「うむ・・・だが、アコやアフロディテのその嬉しそうな顔を見せられては小言も言えん

わい・・・お前をそんな姿に変えたのは・・・やはり、ノイズか!!」

「恐らく!魔境の森に入った私は、ゴレムの襲撃に遭い敗れました。その後の記憶は定かではありませんが、思い返せば・・・」

「そうか・・・プリキュア達にも、ノイズの事を話す時が来たのかも知れんなあ・・・」  
髭を撫でながらノイズと戦った時の事を思い出した音吉は、複雑そうな表情を浮かべた・・・

## 2、ハロウィンパーティー

ハロウィンパーティー当日の早朝、南野家・・・

奏の父、南野奏介は何時も以上に早起きをし、ハロウィンパーティーで出すカツプケーキ作りに精を出す。奏の母、美空は、奏に頼まれ早朝から、奏の部屋でハロウィンでのコスプレ衣装作りを手伝っていた。

「出来た!何とか間に合って良かった・・・ありがとう、お母さん!」

「ううん、じゃあ早速試着してみたら?」

「そうね・・・折角だからお母さんも着てみたら?」

二人はパジャマを脱ぎ、奏は白い下着姿に、美空はピンクの下着姿になり、ハロウィンで着る衣装合わせをしようとしたその時、奏の部屋の窓がノックされる。奏と美空は



顔を見合わせるも、

「きつと響だわ！窓から来る何て．．．最初に私を驚かせようって魂胆ね!!」

クスリと笑い合う奏と美空が、共にカーテンを開けた時、窓の外には、満面の笑顔を浮かべたスーツ姿のメフィストの顔が合った．．．

一瞬の間の後、メフィストの視線が、奏と美空の下着姿を見て顔を赤らめると、奏と美空は手を取り合い悲鳴を上げる。

「キヤアアアアア!!」

「ウワアアア!!」

奏と美空の悲鳴が南野家に響き渡ると、驚いたメフィストは梯子から地上に転落して失神し、奏介と奏の弟奏太が奏の部屋に駆けつける。奏介は警察に電話し、奏太はバットを持って外に飛び出し、失神しているメフィストをバットで突つついた．．．

「アフロデイテ、お前も一緒に行かんのか?」

「結構です!!私という妻が居ながら、他の女性を覗きだなんて．．．私、メイジャーランドに戻ります!!お父様、メフィストには．．．メイジャーランドに帰って来なくて結構と伝えて下さい!!」

「あつ、待て、アフロデイテ！アフロデイテ!!」

音吉が止めるのも聞かず、ムツとしながらアフロディテはメイジャーランドへと帰って行った……

音吉は、去って行ったアフロディテを見て溜息を付くと、

「やれやれ、ちゃんとメフィストの話しを聞いてやらんとわな……さて、では人騒がせな媚を迎えに行くとするか……」

音吉は愛用の自転車に跨がると、警察に連行されたメフィストを迎えに出掛けた……

「奏、大変だったね……」

「まあね……メフィストの話しによると、奏太の部屋と間違えたらしいの、私も大騒ぎにはしたく無かったんだけど、お母さんも居たから、お父さんが動揺しちゃって……お母さんは気にしてないって言ってくれたから、直ぐに釈放されるとは思うけど……」

「メフィスト様もうっかりした所があるから……アコ姫も大変ね」

奏の連絡で交番に駆けつけた響とエレン、三人の視線が、交番の中で警官に事情聴取されるメフィストと、隣に座り、父のチンプンカンな話しをフォローするアコの姿に向けられる。

つぼみ、えりか、いつきは、今日の仮装衣装とゆりへの報告もあり、昨日の内に希望ヶ花市へと帰っていた。

加音町の實力者でもある音吉の計らいで、何とか釈放されたメフィストは、奏を見付けるや抵当平身で謝り、奏、響、エレンは苦笑を浮かべる。メフィストは奏太を見付けるや目を輝かし、奏太の両手を握りしめ、

「いやあ、君が奏太くんかい！是非君とは話しをしたいと思つて君の家に向つたんだが、部屋を間違えてしまつて、先程は失礼したね……アコが大変お世話になつたそうで、ありがとう、感謝しているよ！私はアコのパパです!!」

「アコの!?!あつどうも、南野奏太です!」

突然アコのパパと名乗るメフィストに話し掛けられ戸惑う奏太だったが、メフィストはお構いなく奏太に話を続けた。

「実は、私達は今日のハロウィンパーティーとやらが終わつたら、メイジャーランドに帰る事になつてね」

「メイジャーランド? 外国かどつか!?!」

「もう、パパ! 奏太には私から説明するから向こうに行つてよ!!」

膨れつ面したアコが慌ててメフィストを奏太から引き離すと、メフィストは表情を曇らせ、響、奏、エレンの側に来ると落ち込みながら階段に腰を下ろした。

「私は……アコに駄目なパパと思われているのだろうか?」

「そりゃあねえ……この間まで悪い事をしてきたんだし、今日は今日で……」

「そうね．．．でも、これから挽回すれば良いんじゃない?」

響と奏の言葉を聞きながら、仮装をした娘と楽しげに歩く父親を見たメフィストは、羨ましげに溜息を付いた．．．

「アコ、お前何処か引越すの?」

「うん．．．離れて暮らしてたパパが戻って来たから、私達、パパとママと三人で暮らす事になったの!」

アコが嬉しそうに語る事に、奏太に戸惑いが生まれる。離れて暮らしていた親と共に暮らせる喜びは、奏太にも理解出来る。でも、もうちよつと寂しそうにしても良いんじゃないのか? 奏太はアコの反応にイライラが沸き起こってくる。

「お前．．．ここを離れるのに寂しくないのかよ?」

「エツ!?それは寂しいけど．．．それ以上にパパやママと暮らせる．．．」

「もういいよ!じゃあな、元気で暮らせよ!!」

奏太はそう言い残すと、その場から駆け出し去っていった。アコは呆然とその後ろ姿を見送った．．．

「奏太、相当ショック見たいね．．．」

「そうだね、奏太はアコちゃんと仲が良かったから尚更ショックだろうね．．．」

走り去った奏太を見て、姉の奏と響が奏太の気持ちを思い心配する。エレンも奏太に同情しながらも、

「でも、仕方が無いわよ・・・アコ姫は、メイジャーランドのお姫様ですもの」

「エレン、ハミイ、それ何だけど・・・あなた達、アコちゃんを見て今まで気付かなかったの?」

響に突っ込まれ、思わず顔を見合わせたエレンとハミイは、

「まゝたく気づかないニヤ!」

「私もそう・・・だって、あの頃の姫様は眼鏡何か掛けてなかったし、髪も長かったし、それに・・・あんなに生意気じゃなかったし・・・」

エレンの言葉を聞き、不意に落ち込んでいたメフィストが顔を上げると、

「コラ、セイレーン!可愛いアコに対して、生意気とは何だ!!」

「ゴ、ゴメンなさ〜い!!」

メフィストに怒られ、思わず動揺したエレンが、ハミイを抱きながらメフィストに謝るも、側にやって来たアコは、

「別に良いわよ!気にしてないし・・・それより、姫様って呼ぶの止めてくれない?」

「エツ?でも、私やハミイに取っては姫様ですし・・・」

「アコちゃんの言う通りだよ、エレン!私達、プリキュアの仲間何だしさ」

「そうそう、エレンも私達と接するように、アコちゃんと接しなきゃ」

アコに注意され、響と奏にも言われたエレンが、アコと呼ぼうとするも、アコの背後に居るメフィストが凄い視線をエレンに向けて、思わずエレンがビビリ仰け反る。エレンの反応に気付き、後ろを振り向いたアコは、メフィストに冷めた視線を浴びせ、メフィストは益々落ち込みを見せた。

「暫く会わない内に……アコは難しいお年頃になってしまった……」

「なぐに、アコはまだまだ子供じゃよ!」

髭を撫でながら一同の下にやつて来た音吉を見て、メフィストは慌てて立ち上がり、音吉の両手を取り詫び始める。

「お義父様、この度はとんだご迷惑をお掛け致しまして……何とお詫び申し上げればよいやら……」

「もう済んだ事じゃ……それより、父親として、夫としての威厳を取り戻す事じゃな!」  
音吉は、アフロデイテが今回の顛末に腹を立てて、メイジャーランドに帰った事を伝えると、メフィスト、アコは驚愕し、響、奏、エレンも顔を見合わせ驚くも、まあそうかも知れないと苦笑を浮かべる。

「アフロデイテ、誤解だ!誤解だああ!!こうしてはおれん、直ぐにメイジャーランドに連絡をせねば……」

慌てたメフィストがメイジャーランドに連絡するも、一瞬間が映ったアフロデイテは、不機嫌そうにコンタクトを解除する。

「何とした事だ．．．急いでメイジャーランドに戻らねば．．．」

「まあ、慌てるな！今帰っても門前払いされるだけじやろう．．．全く、アフロデイテの奴も、まだまだ子供じみた所があるのお．．．まあ、今日はハロウィンパーティーの日じゃ、終わってからメイジャーランドに帰れば、いくらかアフロデイテも頭が冷えるじやろう」

「ハア．．．お義父様の言葉に従います！」

「パパ、私も取りなして上げるから、ちゃんとママに謝ってよね!!」

娘のアコにも注意され、益々父親としての尊厳を失った気がするメフィストであった．．．

「ラブ、ブツキー、どんな衣装にしたの？」

「内緒だよ！でも、また私達に新たな仲間が出来た何て楽しみだよねえ？」

「そうだね．．．それに、せつなちゃんにまた会えるのも楽しみだよね！」

「うん！せつなは、ラビリンズからそのまま加音町に向かうって連絡あつたし、またみんなに早く会いたいなあ．．．」

「せやなあ・・・わいの自慢の仮装も、みんなにはよお見せたいわあ・・・なあ、シフォン！」

「プリップウウ!!」

加音町へ向かう電車の中で、桃園ラブ、蒼乃美希、山吹祈里は、仮装用の衣装のバックを持ち、バックの中にはカボチャのコスプレをしたシフォンと、牙を付けて狼男のコスプレをするタルトも居た。タルトは、本当は祈里に協力を頼み、以前テレビで観た名探偵を祖父に持つ少年の仮装をしようとするも、祈里に苦笑混じりに断られ、ラブと美希からも、それじゃただのコスプレだと注意され、狼男の仮装をしていた。

ラブ達は、せつな、新しい仲間のミューズ、そして、プリキュアの仲間達との再会を待ち侘びるのだった・・・

「ねえ、咲、舞、私達も本当にこんな姿にならなきゃいけないの?」

「出来れば遠慮したいけど・・・」

加音町に向かう電車の中で、バックの中の衣装を見て思わずキョトンとする満と薫が咲と舞に訪ねると、舞も引き攣った笑みを浮かべながら、

「出来れば私も恥ずかしいから遠慮したいけど・・・復興した加音町のお祝い事だからって、えりかさんからは是非によって頼まれてるし・・・」



「そうラピ！折角の誘いを断るのも悪いラピ」

「チョツピも頑張るチョピ」

長い付け鼻と、頭にゴーグルを身に付けたフラツピ、ドレス姿に扇子を持ったチョツピがニコニコしながらバックの中から声を掛ける。

「ムープとフープは仮装をしないの？」

「ムープ達はこのままで良いムプ！」

「フープ達はもう仮装してるププ」

満の問い掛けに、ムープとフープは、顔を見合わせて楽しそうにこのままで仮装はOKだと語り、満と薫は顔を見合わせ首を傾げた。

「そうそう、やってみると楽しいもんだよ！前に文化祭でオバケ屋敷やった事を思い出すなあ・・・満と薫は初めて何だし、きつと楽しいなりイ〜!!」

満面の笑みを浮かべた咲が、満と薫にきつと楽しいよと語るも、満と薫は再び顔を見合わせ、そんなものなのだろうかと小首を傾げた。

「あなた達、本気なの？息抜きは必要だから、加音町に行く事は構わないけど・・・仮装何て、恥ずかしくて嫌よ!!」

「エエ・・・折角ゆりさんの分も作ったのにいい!!なぎささんはノリノリでOKしてくれ

たよおお!!」

「ほのかさんには・・・笑いながら考えておくわって即答を避けられましたけど、なぎささんが説得してくれるって言うてくれました!!」

「ゆりさん・・・復興した加音町のイベントを、僕達も盛り上げましょう!!」

加音町で行われる、ハロウィンパーティーに参加する事はOKしたゆりだったが、参加者は皆仮装する事を聞き、ゆりは戸惑いを見せた。えりか、つぼみ、いつきに尚も誘われ、ゆりは困惑する。

ゆりの眼鏡が曇る・・・

「ゆりちゃん、気分転換になるかも知れないわよ? やってみたら? 私ももう少し若かったら、オレンジ色のレオタードでも着て、美女怪盗の仮装何かやりたかったわあ・・・ウフフ」

つぼみの祖母、キュアフラワー事花咲薫子の冗談とも本気とも取れる発言に、一同が一瞬間まるも、我に返ったゆりは、

「もう、薫子さんまで・・・まあ、折角衣装を作ったって言うし・・・見るだけなら・・・」

薫子にも参加を勧められ、困惑するゆりだったが、渋々ながらも見る事には同意した。つぼみ、えりか、いつきは顔を見合わせ微笑み合うと、バックから衣装を取りだし始める。

「ジャーン！ゆりさんには・・・小悪魔風ファッション!!」

えりかがバックから取り出した衣装を見て、再びゆりの眼鏡が曇る。

「えりか、何の真似かしら？その衣装は・・・ダークプリキュアじゃないの!?!」

「うん、小悪魔風ファッションにピッタリ!!」

目をパチクリしながら、自分の会心の出来に何度も頷くえりかに、ゆりは深い溜息を付いた。つぼみも衣装を取りだし、

「でしたら、こちらの水色のセーラー服は如何でしょうか?」

「腰のリボンもオシャレですよ!」

「オオ！昔テレビでやってた、美少女戦士見たいだねえ!!」

「こんなミニスカートを・・・私に着ると言うのかしら?」

「似合うと思うんだけどなあ・・・」

「似合う！似合う!」

「あなた達ねえ・・・」

ゆりは再び深い溜息を付くのだった・・・

「響、奏、エレン・・・恨むわよおお！何でよりもよって態々ハロウィンパーティーの日に・・・招待するのよおお!!」

「まあまあ、りんちゃん!折角誘ってくれたんだからさ・・・ハロウィンってえ、お菓子もくれるありがたい日何だかってえ!!はい、こまちさんが用意してくれたりんちゃん衣装!!」

「のぞみ、あんたはお菓子目当てなだけでしよう?」

「そんな事無いもん!ちゃんとみんなとの再会を楽しみにしてるよ!!でも・・・やつぱりお菓子も楽しみだけど・・・アハハハ」

ナッツハウスに集合した夢原のぞみ、夏木りん、春日野うらら、秋元こまち、水無月かれん、そして、パルミエ王国からやって来たココ、ナッツ、シロップ、メルポ、ミルク事美々野くるみの面々、りんは、苦手なオバケの仮装が行われるハロウィンの日に、響達に招待された事に激しく動揺していた。のぞみから手渡された仮装を見て、りんの顔が引き攣る。

「こ、こまちさん・・・これを私が!」

「ええ、きつとりんさんに似合うと思うわ!!」

ニコニコしながらりに似合うと思うこまちの言葉に、りんは益々狼狽えた。うららもこまちが用意した衣装を興味津々で覗き見、くるみはそんな一同を呆れながらも、自分の衣装を念入りに調べていた。

(ハロウィンって・・・こんな格好したかしら?)

かれんは、こまちに渡された衣装を見て思わず考え込むのだった・・・

「ほのか、ひかり、準備は良い？そろそろ出掛けよう！」

「良いけど・・・何で私は人魚なの？」

「エッ!?そう突っ込まれると困るけど、何となく・・・他には若作りな50過ぎのナイスバディな超能力者とか、背の高い気弱な副隊長とか、長い銀髪と灰色の瞳をした軍人の美少女とか、緑の髪と金色の瞳の容姿をした不老不死の少女とかどう？ラブが一杯かつら持つてくるって言ってたし・・・」

「・・・・・・・・・・」

何故自分は人魚の仮装なのだろうかと疑問に思ったほのかが問い掛けると、なぎさの答えは何となく思っただけだと言い、更にほのかに似合いそうな仮装を提案するも、ほのかには何の事だかさっぱり分からず、ほのかは溜息を付く。

「もう、なぎささつたらTVの見過ぎ・・・人魚で良いわ！ひかりさんは？」

半ば呆れながら人魚で良いと呟き、ひかりに話を振ると、

「はい・・・丈の短い和風の衣装に陣羽織見たいな衣装を纏った歌姫って設定の少女・・・らしいです」

「ルルンは、そのお供ルル！ひかり、元氣ルル？」

ピンクのボールから顔を出したルルンが、楽しそうにひかりの周りをクルクル回りながらハシヤグ姿に、ひかりも目を細める。

「メツプルは・・・俺のこの手が真つ赤に燃えるメポ!お前を倒せと轟き叫ぶメポ!メツプルは格闘チャンピオンメポ!」

「ミツプルは・・・ちよつとおませな幼稚園児ミポ!」

「ポルンは・・・二重人格のお嬢様ポポ!でも、ポルンはもつとカッコイイ役が良いポポ!!」

意外とノリノリなメツプルとミツプル、ポルンはあまり乗る気ではなく駄々を捏ね始めると、ほのかは引き攣りながら、

「ひかりさんの衣装も、ミツプル達の衣装も、なぎさが勝手に決めたんでしよう?もぅ・・・なぎさはどんな衣装なのよ!!」

「私!?私は・・・優秀な戦術予報士でナイスボディな大酒飲み!」

「さつきから思ってたけど・・・その設定、ハロウィンと関係あるの?」

「エツ?特に無いけど・・・でも、ほら、折角仮装するんだしさ・・・何か格好良いでしょう!駄目?」

「却下!!」

少し頬を膨らましながら、ほのかはなぎさに駄目出しをするのだった・・・

「みんな、どんな衣装で来るんだろうね？」

「そうね．．．そろそろ私達も着替えましょう！エレン、部屋で着替えさせてね！」

「どうぞ！じゃあ、私も着替えようつと．．．ハミイはどうする？」

「ハミイも仮装するニヤ！ハミイは前から月を見て思ったニヤ．．．あんな綺麗な月のお姫様みたいな格好を．．．」

「ゴメン！ハミイに合うサイズの服無いわ．．．セーラー服ならあるけど．．．」

「ニヤンですとおお!!?しょうがないニヤ、それで我慢するニヤ！」

「何でハミイが着れるセーラー服があるの？」

「さあ？音吉さんに言ったら、これなら有ったって持つてきてくれたんだけど」

響の問いに、エレンも首を捻りながら返事を返し、奏は音吉の事が益々分からなくなるのだった。

午後になり、調べの館のエレンの部屋で、そろそろ自分達も着替えを始めようとする響、奏、エレン、そして、ハミイ、フェアリートーン達も仮装すると言うものの、街のみんなにバレちゃうからと響と奏に止められ、フェアリーは地面を叩いて悔しがるのであった．．．

「どう? 私の衣装! 世界名作劇場にでも出てきそうな、旅の一座で生活しながら、家族を捜して世界を旅する、薄幸の少女って感じで素敵じゃない?」

その場でクルクル回りスカートを靡かせる響、エレンとハミイは何度も頷き、可愛いと賞賛するも、奏は微妙な表情を浮かべると、

「ウーン・・・響に似合ってると言えば似合ってるけど、響なら、こっちの衣装の方が似合ってるんじゃない?」

奏はそう言うと、衣装棚から丈の短いセーラー服を取り出して響に手渡した。これを着るのと小首を傾げながらも、響がセーラー服を着てみると、上は右胸辺りに目のようなポイントが付きヘソ出し、リストバンドで下のスカートと繋がっており、スカートは超ミニで、響の白いパンティが丸見えだった。

「ちよつとおお! パンツ丸見えじゃない? こんな服、人前で着れないよおお!!」

「確かに・・・音吉さんの本で読んだ、スケ番って人見たいね?」

「響に似合うと思ったんだけどなあ・・・ところで、私のはどう?」

今度は奏が一同に自分の衣装を披露する。全身黒い和風装束、腰の差物を抜き、刀を構えポーズを取る奏、

「ハロウインにちなんで、和風な死神姿をイメージしてみました! エイツ、ヤア! このたわけめ!!」



刀を振るう奏の勇姿に、一同が拍手を送る。

「普段の奏からは想像出来ないから、みんなも驚くと思うわ・・・私のはどう？音吉さんの本を読んで参考にしたの」

次に披露するのはエレン、黒のノースリーブとピンクのミニスカートを靡かせるも、エレンの下着が見える事は無かった・・・

「ハロウインにちなんで・・・私はモンスター使い！ハミイ、引っ掻き!!」

「任せるニヤ！って、何させるニヤ!!でも、セイレーンの衣装も可愛いニヤ!!」

「ありがとう！ハミイも可愛いわよ!!」

「本当かニヤ！月に代わってお仕置きニヤ!!」

エレンの部屋で、楽しそうな一同の笑い声が響き渡った・・・

「響、奏、エレン、居る?」

「あつ、誰か調べの館に来たわ!」

窓の外から響達を呼ぶ声に、一同が窓から外を覗くと、響と奏が思わず驚きの声を上げる。セミロングの銀髪に黒いカチューシャをし、赤と黒のボンテージ風の衣装を身に纏った少女が佇んでいた。

「私を待たせるなんて、良い度胸ね！我が名はイース！ラビリンス総統メビウス様の忠

実な下僕!!……って、こんな格好でも良いのかしら?」

嘗てのイース時代の口癖をするせつな、思わず照れくさそうにしながら一同にこんな仮装でも良いか聞いて見るのだった。

「うわあ……せつなさん!いらっしやい……一瞬驚いたよ……また、闇の力に目覚めたのかと……」

「本当ね……でもその格好には抵抗あつたような気がしましたけど?」

「でも、全然有りですよ!!」

響と奏が、せつなを見て苦笑を浮かべながらもOKだと言うと、せつなはホッと安堵した表情になる。エレンは初めてイースの姿を見たのでポカンとしていたが、

「ひよつとして、その姿はせつながラブ達と戦つてた頃?」

「ええ、私がラビリンスの、メビウスの下僕として戦つて居た時の姿!仮装なんて全然分らないし、ウエスターやサウラーに相談したら、イースの姿はピツタリだろうって言われて……前まではこの姿には抵抗があつたわ!でも、この前にイースの姿になつた時思つたの、この姿も私の一部って事を認めてこそ先に進めるってね!!それで、ちよつとラブ達も驚かしちやおうかなあつて思つてこの姿を選んだの!!」

せつなの言葉を聞き考え始めるエレン、自分も今は猫の姿にはなれないが、あの頃の気持ち忘れてはならないのではないかとエレンも感じ、

「うくん……ちよつと待つてて！私も衣装変えようつと！響、奏、先にせつなの所に行つてて！」

エレンはせつなの姿に刺激され、衣装を着替え始めるのだった……

マイナーランド……

メフィストが記憶を取り戻し、マイナーランドを去った為、後継のリーダーを決めるべく話し合うバストドラ、バリトン、ファルセットだったのだが……

「リーダーは俺様こそが相応しい！」

「何を馬鹿な……バストドラは、さんざんリーダーをやつて成果を上げられなかつたじゃないか！此処はやはりこの私が……」

「二人共、狡いですよお！僕はまだリーダーになつた事無いんですからあ、僕にやらせて下さいよお!!」

三者三様の事を言い、中々意見が纏まらないトリオ・ザ・マイナーの三人であつた。その時、玉座の後ろにある化石のような物体の目が輝くと、辺り一帯を凄まじい稲光が轟き、思わずバストドラ、バリトン、ファルセットは身を寄せ合つて何事が起こつたのか戸惑つた。玉座の前には五つの人影が佇み、思わず三人は顔を見合わせ首を傾げた。

「やい、お前達は何者だ!?!」

「此処は我らの本拠地マイナーランドだ!」

「出て行つてくれないか!」

バズドラ、バリトン、ファルセットの言葉に、五つの人影から笑い声が響き渡ると、その内の三人が一步前に出て、その素顔をトリオ・ザ・マイナーの三人に晒すと、全身赤色で、頭部から肩に掛けて鋼のような分厚い針を纏った鬼のような男、全身青色で鬼のような黒髪の筋肉男、全身緑色をしたイノシシのような巨体な男が居た。

「フン、その貴様らが不甲斐ないから、ノイズ様は我らを召喚なされたのだ!」

「本来なら貴様らなど用済みなのだが・・・」

「ノイズ様の計らいにより、再び貴様らに力を与えてやろう!!」

「二さあ、受け取るがいい!!」

口元に笑みを浮かべながら、赤き魔物、青き魔物、緑の魔物が、順々にバズドラ、バリトン、ファルセットを見つめると、再び化石の目が光輝き、バズドラ達三人を黒い稲光が包み込む。三人の身体は巨大化し、化け物のような姿へと変わって行った・・・

「バリトン、ファルセット、お前らその姿は?」

「そういうバズドラだって・・・」

「ど、どうなってるんですかああ!?!」

自分達の身体をまさぐる三人、バリトンは持っていた鏡で自分を見つめると、思わず

クラクラとその場にへたり込む。慌てて両脇からバリトンを抱えるバスドラとファルセット、三人がショックを受けるのも当然で、バスドラは巨大な緑色の蛙を思わせる姿に、バリトンは水色の半魚人のような姿に、ファルセットはピンク色のウーパールーパーのような容姿に姿を変えられたのだから……

「我らが盟主ノイズ様の復活は近い！ さあ、貴様らは下界へと赴き残りの音符を全て集めて来い！！」

赤き魔物が三人に指示を出すも、バリトンは自分の醜い姿に崩れ落ち泣き続ける。

「ヤイ、泣いちゃったじゃないかよ〜！」

「バリトンに謝って下さいよおお！！」

「黙れええ！！」

バスドラ、ファルセットも、仲間のバリトンを庇うように抗議するも、青き魔物が一喝し、三人の身に雷が降り注ぎ、三人を痺れさせる。

「貴様らに選択権は無い！ さあ、行くがいい！！」

バスドラ、バリトン、ファルセットは、慌てて逃げるようにその場を後にするのだった。

「フン、仕えない奴らめ！」

「だが、陽動の役には立つだろうよ」

「ああ、では我らも出掛けるとするか・・・後は頼むぞ!!」

残る二人の戦士に後時を託し、三匹の魔物は何処化へと去っていった・・・

第三十一話：新たなる仲間!キュアミューズ!!

完

## 第三十二話：コスプレ大会!?

### 1、仮装する少女達

加音町復興記念のハロウィンパーティーが盛大に幕を開けた・・・

賑やかな音楽が鳴り響き、人々の仮装の群れが加音町を楽しげに行き来していた・・・  
調べの館の前に集合した24人の少女達と妖精達、一同は和やかに久々の再会を喜ぶも、皆それぞれの仮装姿に驚いたり、称えたりして盛り上がっていたが、アコはまだ来ては居なかった。

格闘チャンピオンのメツプル、幼稚園児のミツプル、二重人格のお嬢様のポルン、ロボットシリーズのマスコトのルルン、海賊のようなフラツピ、王女様のようなチョッピ、自称火の玉のムーブとフープ、巨大な剣を背中に背負った戦士のようなココ、Tシャツに短パン姿のラフな格好をしたナッツ、右手と左足に鎧を嵌めたシロツプ、大きなポケットを付けたメルポ、カボチャのマスクを被りご機嫌なシフォン、関西弁で狼の遠吠えをするタルト、三人合わさってスナツキーの格好をするシブレ、コフレ、ポプリ、セーラー服美少女戦士の真似をするハミイの妖精達、フェアリートーン達は、やっぱり自分達も仮装すれば良かったと悔やむのだった・・・

妖精達は、楽しそうに仮装姿を楽しみあっていた・・・

一方の少女達と言えば・・・

「全く・・・何でラブ、美希、ブツキーまで、私と同じイースの姿になってるのよ？折角驚かせようと思ったのに、私の方が驚いたじゃない!!」

「アハハハ！いやあ、この前はせつなに驚かされたから、仕返しに思ってたら・・・まあ私達、考える事も一緒って事で」

「本当、まさかラブやブツキー、おまけに本人のせつなまで・・・」  
「せつなちゃんまで仮装するとは思わなかったよね？」

ラブ達は、髪型は元のままだが、四人のイースという異様な姿が語り合う姿に、他のプリキュアメンバーも苦笑を浮かべる。

「まだラブ達はマシよ！何で私達は・・・こまちさん、忍者ってハロウィンとは全く関係ないと思うんですけど!!」

「本当よ・・・私の仮装は陰陽師・・・まあ、妖怪退治が本業らしいから、ハロウィンから外れては居ないと思うけど・・・こまち、あなたのその姿は一体何なの？」

ラブから借りた金髪のかつらを被ったりんが、引き攣りながらこまちに突っ込む、陰陽師のような白い和装をした凜々しい姿のかれんが、ラブから借りた赤い髪のかつらを



被り、赤と黒を基本とした、胸元の開いたセクシーな衣装を着たこまちを見て、思わず声を掛けると、こまちは苦笑を浮かべながら、

「私のは、子供の頃にアニメで見た七変化する愛の戦士よ！でも、こんな姿にはこういう機会じゃないとなれないと思って、チャレンジしてみたの・・・ナッツさん、どうかしら？」

突然こまちに話を振られ、ラフな格好をしたナッツは思わず咳き込み赤面した。チラリとこまちを見ると、こまちは恥ずかしそうに俯く。

「あ、ああ、似合っていると思う！今後のこま치의小説にも、今日の出来事は役立つんじゃないか？」

「ありがとう、ナッツさん！」

「ナッツ、何照れてるんだ？」

「うるさいぞ、ココ！」

こまちは満面の笑顔でナッツに礼を言うと、ナッツは照れてその様子をココにからかわれる。

そんな一同とは逆に、のぞみ、うらら、くるみは頬を膨らませながら、

「こまちさん、私やうらら、くるみは何であの時と同じ何ですかああ？」

「そうです・・・私もそういう格好してみたかったです！」

「私は遠慮するけど、化け猫の仮装って・・・私はエレンかあ！そっちの方が遙かにマシよ!!」

「ちよつとくるみ！私は化け猫じゃないわよ！それに、猫を馬鹿にすると・・・崇るわよ!!」

河童姿ののぞみ、化け猫のくるみ、うららは悲惨な事にぬりかべ、三人は、こまちゃりんのような格好が良かったと少し拗ねるのだった。

黒猫時代を彷彿させる黒い猫耳に、黒猫衣装を着たエレンは、猫姿を嫌そうにするくるみに思わず文句を言うのだった・・・

「みんな、ハロウィンにちなんだ格好と言うよりは・・・コスプレに近いかな？」

「そ、そうね・・・何か私達の格好が普通に見えてくるわね」

カボチャのお面を頭から被った咲、魔女のように長い付け鼻と黒い衣装を身に着けた舞が苦笑する。共に嘗て文化祭のオバケ屋敷で演じたような格好をしていた。

「ハロウィンって・・・不思議な事をするものなのね!？」

「そうね・・・態々こんな格好するなんて・・・」

「満ちゃん、薫ちゃん、その姿からすると・・・ドラキュラかな？歯にも牙とか付けてるの?」

一同の仮装姿を不思議そうに眺める黒いタキシードに黒いマントを着た満と薫、ラブが二人に話し掛けると、二人は領き、口をカアツと開くと二人の上の歯から立派な牙が見えた。迫力ある二人の姿に、思わずりとエレンは一步後ろに下がり怯むのだった。

「なぎさ……人魚の姿じゃやっぱり歩きにくいよお」

「そうだね……台車でも借りて押して上げようか？」

「それじゃ益々晒し者じゃない！」

人魚姿のほのかは、上手く歩けずピョンピョン跳ねるように移動するのに疲れたようで、思わず愚痴が出る。紫色のジャケツトの下に、白いライダースーツのような格好をしたなぎさもそこまで考えて居なかったようで、台車を借りようとするも、捕まった人魚のようなイメージがほのかの頭に過ぎり、慌てて拒否をする。それを聞いていた、背中から四枚の羽根を生やした、水の妖精をイメージした姿のえりかが、二人の会話に加わり、

「じゃあさ、此処に少し切り込みを入れて……こうすれば……」

えりかは、手際よく尾鰭の辺りに少し切り込みを入れ、目立たないようにしながらもほのかが歩きやすいように工夫を施すと、

「これなら歩けるわ！ありがとう、えりかさん!!」

「ヨッ！流石ファッション部部长!!」

「へへん！これくらい、訳ないっしゅ!!」

なぎさとほのかに褒められ、えりかが得意気にする。ラブから借りたピンク髪のかつらを被ったひかりが、微笑みながら見ていると、ダークプリキュア姿のゆりは、ひかりの衣装が分ならず首を捻りながら、

「ひかり・・・あなたは一体何の衣装なの？」

「さあ!?!私は分からないんですけど、なぎささんが、有名なロボットシリーズ物の作品に出ってくる歌姫って言ってました!?!なぎささんは、違うシリーズの衣装だそうですね・・・」

ひかりの側で楽しそうに転がり回るルルンを見て、エルフの格好をしたいつきがニコニコしながら、

「分かった！お兄様が見ている、僕もそのロボット作品シリーズ好きだよ!!僕はひかりさんが着ているキャラが出てる作品が好きかな」

「私は、良く分かりません・・・」

何処かギザギザした白い猫の着ぐるみ姿のつぼみは、話しについて行けず困惑する。つぼみがイジイジしていると、ゆりはつぼみの肩に手を置き、

「つぼみ・・・それで良いのよ!?!何かハロウインの衣装と言うか、何処かの街のコスプレ

大会に出ている気分だわ……ところでつぼみ、着ぐるみのお腹の綿が少し出てるわよ……ハロウィンらしいけど、ちよつとグロテスクね」

「昨日戻って慌てて完成させたから……でも、ハロウィンなら良いですよね！」  
自分に言い聞かせるように大きく頷くつぼみだった……

近づいて来たなぎさに、ゆりが思わず苦言を呈す、

「なぎさ、ほのかの衣装とひかりの衣装、あなたが決めたんでしよう？ 全く……ひかりの衣装はハロウィンと何の関係もないじゃない……二人共途方に暮れてるわよ！」

「何よ、ゆりだつて何だかんだ言いながら、ダークプリキュアの衣装着てるじゃない？ ゆりだつて、ハロウィンの仮装と言うよりコスプレでしょうが！」

「これは……聞かないで頂戴!!」

眼鏡を曇らせたゆりが、恥ずかしそうになぎさから視線を外した姿に、一同から笑みが溢れた……

「やや、少し遅れてしまったようだぞ……急ごう、アコ！」

「もう、パパ！ 来なくていいって言ったのに……此処からは私一人で行くから良いよ!!」  
お姫様姿のアコは少し頬を膨らますと、スーツ姿のメフィストに付いてこないで言い残し、みんなの下へと向かった。メフィストは心配そうにハラハラして、一同の反応

を覗き見るのだった。

「あつ、来た来た！やつほくアコ!!」

「まあ、お姫様の姿だなんて・・・アコったら!」

「姫様、お似合いです!!つて、当たり前か、本物の姫様だもんね」

響、奏、エレンが遅れてやって来たアコに気付き、手招きしながら一同に紹介を始める。アコは少し恥ずかしそうにしながら、顔を横に向け照れる姿に一同から可愛いと声が掛かり、益々顔を赤らめるアコであった。

「みんな、この方は私とハミイの国、メイジャーランドのお姫様でアコ姫事、キュアミューズです!」

「アコちゃんは何と・・・まだ9歳の小学生プリキュア何ですよ!」

「仲良くして上げて下さいね!!」

エレン、響、奏の順番でみんなに紹介すると、一同から拍手が鳴り響くも、なぎさ、ほか、ゆりは微妙な表情で顔を見合わせ合うと、

「響、奏、エレン・・・あなた達、まだ年端もいかない彼女を、プリキュアとして戦わせる事に抵抗は無いの?」

「エッ!?!それは・・・でも、アコちゃんは」

そこは響にとっても痛い所を付かれる言葉だった・・・

確かにゆりの言うように、まだ9歳のアコがプリキュアとして戦う姿はどうかという疑問も沸くとは思う・・・

でも、アコは自らの意思で、プリキュアとして、父メフィストを救う為、そして、みんなの笑顔を守る為に戦う事を決めた！その意思は尊重させたいと響は思う。それに気付いたのか、なぎさとほのかも会話に加わり、

「ううん、別に私達、アコちゃんをプリキュアとして認めないって言ってる訳じゃ無いよ！」

「ただ、幼い彼女を・・・戦いに巻き込むのは・・・ゆりやなぎさが言うようにどうかと思う・・・」

ゆりが、なぎさが、ほのかが、まだ幼さの残るアコをプリキュアとして戦わせて良いものか疑問を呈すも、

「別に良いじゃない！私が決めた事だもの!!それに・・・小学生ならそこにも居るじゃない!!」

アコがえりかを指さすと、一同は目を点にして表情が凍り付く、指されたえりかはキョトンとして呆然とするも、直ぐにアコが自分を小学生と勘違いしている事に気付

き、

「ちよつとおお！昨日一緒に戦ったでしょうが・・・あたしは、響達より年上の・・・中

学生だ!!!」

口を尖らせアコに文句を言うえりかを、アコは意外そうな表情で見つめ、口元に笑みを浮かべた。慌ててえりかを、つぼみといつき、美希が止めるも、えりかの目には炎が点った。

「そういうえば・・・前に響にも言われたよね?」

嘗て此処加音町で響に初めて会った時に、響に小学生と言われた事を思い出し、燃える目を響にも向けるえりか、響はしまったという表情になり狼狽えた。話を逸らすように、響は奏とエレンと共にアコを宥めに掛かる。

アコはその様子を見ていて、えりかを見下したように、

「そういう所が、お子様に見られるのよ!」

「ムツキイ〜!!上等じゃん!ならさ、どっちが大人つぼいか、みんなに決めて貰おうじゃない!アコ、勝負よ!!」

「良いわよ!」

バチバチ目と目から火花を散らすえりかとアコに、他のメンバーは必死に二人を宥めに掛かる。ハアと溜息を付きながらも、美希がえりかの右肩に手を置き、

「えりか、止しなさいよ!」

「止めないで、美希姉え!!」



えりかは美希を姉のように慕い、美希姉えと呼ぶようになっていた。前に美希がえりかの家に遊びに行った時、美希の母レミと、えりかの母さくらが、若い頃モデルの仕事で交友があつた事が分かり、今では蒼乃家と来海家は、家族ぐるみの付き合いをしている。美希は、えりかを妹のように可愛がり、ももかの事は、モデルの目標にする頼りになる姉と慕い、ももかも美希を妹のように可愛がり、モデルとしてのアドバイスを与えていた。この事も幸いしてか、美希のモデルとしての評価は上がり、仕事も順調に増えたのだった。

「えりか、馬鹿な事はしないの！アコちゃんより年上のえりかが勝つたって、何の得にもならないでしょう？アコちゃんは9歳なのよ！えりかがそこは大人の余裕を見せなきゃ・・・ね？」

「ウ〜〜！でもさあ・・・」

「美希さんの言う通りです！えりか、これぞ大人という態度を・・・ビシツと見せて上げて下さい!!」

つぼみの煽てに、大人という言葉に敏感な反応をしたえりかも、満更でもなさそうな表情になると、美希とつぼみは顔を見合わせ微笑み、ホツと安堵するのだった。

なにやらアコが一同と上手くいってない様子に、メフィストはオロオロしていた。このまま自分が出て行くべきか、だが、そうすれば益々アコに駄目なパパと思われてしま

うのでは、メフィストの心は葛藤する。不意に視線の先にエレンの姿を見付けたメフィストは、何やらエレンに対し、ジェスチャーを始めだした。

「な、何、あの人!？」

咲がメフィストに気付き、不審者を見つめるように見ていると、エレンも気付き、

「あれは、メフィスト様!一緒に来てたのね・・・あれ?」

何やら自分に合図を送っていると気付いたエレンが解読に掛かる・・・

「エッ!?あの人メフィストって人なの?あの人昨日まで、響ちゃんや奏ちゃん、エレンちゃんと戦ってたんだ?」

「とてもそうは思えないわね・・・」

のぞみの言葉にかれんも頷きながら同意する。何処か愛嬌のあるメフィストに、思わずのぞみとかれんは微笑んだ。ジツとメフィストのジェスチャーを見つめるエレンは、メフィストの真意をようやく理解する。

(セイレーン・・・お前がこの場を・・・何とかしろですってええ!?)

エレンはメフィストの指示に、一応周りを見て見るも、アコとえりかはまだ少し言い合いをし、ゆりはまだ承服しかねるような表情をしていた。エレンはどうしたものかと、チラリと響、奏を見るも、二人はアコを宥めるのに必死、ならばとハミイを捜してみると、ハミイは妖精達との寸劇を楽しんでいて、この状況に全く気付いて居なかった。

エレンは涙目になりながら、直ぐにメフィストにジェスチャーを返すと、  
(メフィスト様……無理! 私には無理です!!)

だが、メフィストからの返事は先程と同じで、更に親指を突き出しエレンにウインクする。思わずドン引きしたエレンは、他に頼りになりそうな人物を見渡すも、皆騒動に夢中で、自分に気付く人は居なかった。思わずガツクリ首を垂らすエレンであった……  
そんなエレンに気付いた者が居た。せつなである……

「エレン、どうしたの?」

「ウウウ……良かった! 気付いてくれた人が居て……せ、せつな、私と一緒に、えりかとアコ姫を止めて欲しいの!」

「止めれば良いの? でも、大丈夫よ! 此処には、頼りになる私達の大切な仲間達が居るもの!!」

せつなはエレンを安堵させるように微笑むと、エレンはもう一度辺りを見回した。

アコを響と奏、ラブ、のぞみ、うらら、咲が、えりかを美希とつぼみ、かれん、こまち、りん、祈里が宥め、二人は笑顔を見せる程になっていた。一度打ち解ければ、えりかはさっぱりした性格である。えりかは、アコを手招きし、つぼみ、いつき、響、奏を伴い、ゆり、なぎさ、ほのかに、アコのプリキュアとしての思いを語っていた。アコの本心を知り、ゆり、なぎさ、ほのかも心の底からアコを受け入れた。

「よ、良かった・・・これでホツとしたわ!」

「でしよう・・・私達の事だつて受け入れてくれたみんなだもの、例え蟠（わだかま）が起ころうとも、直ぐに笑いあえるわ!」

「そうね・・・ありがとう、せつな!!」

思わず顔を見合わせ笑い合うエレンとせつなだったが・・・

## 2、三銃士

「ちつとも楽しくない!!」

「ウツウウウウ!」

「バリトン・・・もう、泣かないで下さいよ!!」

25人の少女達の前に姿を現わしたバスドラ、バリトン、ファルセット、一同は怪物なような三人に驚き、

「あんた達まで仮装してる何て・・・」

「何も、あなた達まで仮装する必要無いでしょう?」

響と奏は首を捻りながら三人に言うも、三人はハモリながら、

「「仮装じゃ無い!!」」

「ウツウウウウ」

その場に蹲（うづくま）り、顔を隠すように泣き出すバリトンを労るバスドラとファルセットは、少女達を指差し、

「お前ら、バリトン益々泣いちゃったじゃないかよお!!」

「鬼、悪魔、何て酷い事を言うんだ君達は・・・バリトンに謝ってくださいよお!!」

バスドラ、ファルセットに指を指された響、奏、エレンは思わず動揺するも、響はムツとしながら、

「な、何で私達が悪いように言うのよ? あんた達が勝手にその姿で現われたんでしようが!」

「誰が好きこのんでこんな姿になるかああ! こうなれば、鬱憤をお前らで晴らしてやる・・・バリトン、ファルセット、プリキユアを痛めつけてやろうぜ!!」

トリオ・ザ・マイナーと睨み合いになる25人の少女達、異変を察したメフィストが近付くと、

「バスドラ、バリトン、ファルセット、お前達のその姿は・・・まさかノイズの仕業か?」

「ゲツ!? メフィスト・・・様? いや、あんたはもう俺様達の上司じゃない!!」

「私達は、ノイズ様に仕える事にしたんだ!」

「邪魔はさせませんよ!!」

変わり果てた三人の姿を見たメフィスト、メフィストの姿を見たバスドラ、バリトン、

ファルセットが動揺するも、ノイズに忠誠を誓った三人は、メフィストにさへ凄みを見せる。だが、メフィストは諦めず、

「お前達、もう止めんか！お前達もノイズに利用されているだけなのだぞ？目を覚ましてくれ!!バスター、バリトン、ファルセットよ!!」

「メフィスト様の言う通りよ！三銃士と呼ばれていたあの頃の自分達を思い出して!!」

思わず顔を見合わせる三人、何故メフィストが、エレンが、必死になつてまで自分達を説得しようとするのか首を捻る。メフィストは三人の心中を察したのか、

「バスター、バリトン、ファルセット、それにプリキュア達も聞いて欲しい・・・嘗て私は、魔境の森と呼ばれる魔の森に封印された、ヒーリンググチェストを復活させる為、単身魔境の森へと挑んだ。だが、そこに現われたノイズの配下、ゴーレムの前に敗れ去り、私は悪の心を植え付けられた。宮殿に戻った私は、お前達、メイジャーランドが誇る三銃士を仲間に取り込むべく、悪のノイズで洗脳し、配下に加えた・・・セイレーンも覚えて居るだろう?」

メフィストの言葉に無言で頷くエレン、メフィストも頷き返し、

「そして、マイナーランドを建国した私は、お前達を従え、アフロディテに反旗を翻した。アコ、セイレーン、そして三銃士よ！お前達には辛い思いをさせてしまった・・・だが私は、アコ、アフロディテ、そしてプリキュア達のお陰で、元の私を取り戻せる事が出

来た。だが、三人は・・・私は、メイジャーランドの王へと戻る前に、三銃士達に償いをせねばならん!! お前達をその醜い怪物へと変えたノイズの力を・・・私の中へと取り込み、中和する!!!」

メフィストは三人に近づき、呆気に取られるトリオ・ザ・マイナーに触れ、気合いを込めると、

「さあ、三人に取り憑く悪しき力よーこの私の身体を取り込むが良い!!」

メフィストの叫びに呼応するように、三人からメフィストへと悪の力が注ぎ込めれていく。

「グウウウオオオオオ!!」

その絶対的な力に絶叫するメフィスト、だがメフィストは、トリオ・ザ・マイナーから手を離すことはしなかった・・・

「メ・・・メフィスト・・・様」

「私達の為に・・・」

「もう、もう、止めて下さい!!」

バスドラ、バリトン、フアルセットの目から涙がこぼれ落ちる・・・

まるで悪の心を洗い流すように・・・

元の姿へと徐々に戻っていく三人、逆にメフィストの目は吊り上がり、凶悪さを時折

滲ませた表情になる。

「グウウ……わ、私の予想以上の力だ!?このままでは……アコ、すまない!もう、これしか方法が……無い!私の身体事、悪の力を吹き飛ばす!!」

「イヤアア!パパアア!!」

アコの絶叫が響き渡ったその時、瞬時に三人の少女達が行動を開始した……

ゆりはココロポットを構え、なぎさとほのかは、メツプルとミツプルの名を絶叫し呼ぶと、

「プリキュア!オープンマイハート!!」

「デュアルオーロラウエーブ!!」

「月光に冴える一輪の花、キュアムゥゥンライト!!」

「光の使者、キュアブラック!」

「光の使者、キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!!」

涙目のアコも、他のメンバー達も、瞬時に変身した三人に驚愕した。三人は何をしようというのか理解出来なかった……

「アコ、あなたを私と同じ思いになど、私の目の前で絶対にさせない!あなたのお父さんは……必ず救って見せる!!」



自分と同じ思いには絶対にさせない、ムーンライトはアコに微笑み掛けると、ムーンタクトを取りだし、

「花よ、輝け！プリキュア！シルバーフォルテウェイブ！！」

ムーンライトの思いを乗せ、メフィスト目掛け、銀色の花の形をしたフォルテウェイブが飛び、フォルテウェイブに包まれたメフィストが、一瞬の安らぎを得る。

「ブラック、ホワイト、今よ！！」

ムーンライトの合図に領き、ブラックとホワイトが手を握り合うと、

「ブラック、パルサーー！」

「ホワイトパルサーー！」

「闇の呪縛に囚われし者たちよ！」

ホワイトが叫び・・・

「今、その鎖を断ち切らん！」

ブラックが応える・・・

「プリキュア！レインボー・セラピー！！」

ブラックとホワイト、二人から発せられた半球形の虹のオーラが、メフィストとトリオ・ザ・マイナーを包み込んでいく。

「ハアアアア！！」

それに合わせるかのように、タクトをクルクル回すムーンライト、メフィストは幸せそうな表情に包まれ宙に浮かび、バスター、バリトン、ファルセットも、元の容姿へと戻っていった・・・

「「ポワワワワッン」」

四人は幸せそうな表情で、闇の力から解放された・・・

「パパアア!!無茶、無茶しないでええ!!」

「済まないアコ・・・またプリキュア達には助けられてしまったな」

少し疲れた表情をしながらも、メフィストは優しく泣きじやくるアコの頭を撫で、三人のプリキュアに頭を下げた。

「三人共、凄いですう!!」

「本当、流星は年の功だね」

つぼみとえりかは、瞬時に行動を起こしたブラックとホワイト、ムーンライトを称えるも、

「えりか・・・年の功は余計!!」

ブラックが口を尖らし、えりかに文句を言うのと、一同から笑い声が響き渡った。

「三人共、パパを助けてくれてありがとう・・・さつきは、生意気な事言つてゴメンなさ

いー！」

アコがペコリと三人に頭を下げる姿は気品に満ち、とてもさつきと同一人物に見えず、三人は苦笑する。

「メフェイス様……」

「アコ姫……」

「プリキュアの皆さん……」

「「「今まで……」」」

元の姿に戻り、ノイズの呪縛から解放された三人だったが、言葉の途中で加音町一帯に凄まじい不協和音が鳴り響く……

その耳障りな音に、思わず一同は耳を塞ぎ、何事が起こったのか呆然とする……音が収まった後、音楽に賑わっていた加音町が不気味に静まりかえる……

辺りを見回した一同は、バスドラ、バリトン、ファルセットが石化していて、一同は驚愕する。

「そんな……バスドラ、バリトン、ファルセット、どうして!?!」

エレンは、嘗ての部下であった石に変えられた三人を触り涙する。

「みんな、気をつけて！何か居る!!」

ムーンライトの言葉に、サツと顔色を変える少女達、メフィストは石にされた三人に触れると、

「何者だ！姿を見せろ!!」

握り拳をしながら絶叫する。折角救えた三人を、目の前で石に変えられ、メフィストの怒りが何者かへと向けられる。そんなメフィストを嘲笑うように、辺りに笑い声が響き渡った……

「役立たず共を排除したまでだ……そう怒鳴るな、メフィスト！そして、伝説の戦士プリキュアとやら……」

時計台の上に赤き魔物が仁王立ちし、一同を睨み付ける。即座に迎撃に向かうムーンライト、ブラック、ホワイトだったが、敵を擦り抜けてしまった……

（これは……フォログラムとでも言うの？）

唇を噛み、出し抜かれた事に口惜しさを浮かべるムーンライト、辺りを伺う三人だったが、敵の姿は見当たらなかった……

「これは、メイジャーランドに何か異変が起きたのかも知れんのか……」

髭を触りながら、難しそうな表情を浮かべた音吉が姿を現わす。メイジャーランドに異変……響、奏、エレン、アコ、ハミイ、フェアリートーン、そしてメフィストが動

播する。メフィストが慌ててメイジャーランドにコンタクトを取ろうとするも、邪悪な紋章に阻まれ、連絡を取れなかった。

「うむ、恐らくノイズに違いあるまい……此処にプリキュアが居てくれたのは、不幸中の幸いか……皆、聞いてくれ！ノイズとは……」

音吉が一同に説明を開始する……

今回の黒幕はノイズ！

嘗てメイジャーランドを襲い、全ての音楽を消し去ろうとした悪しき存在……

音吉は、クレッツシエンドトーンと協力し、何とかノイズを封じるも、ノイズもクレッツシエンドトーンを魔境の森に封じ込め、戦いは痛み分けに終わった事を教える。

「近年の動きから見るに……ノイズ復活は近い!!」

「では、お義父様、私はこれより石にされた三人も連れ、メイジャーランドに戻ります!!」  
「待ってパパ、私も行く！ママが心配なもの!!」

「しかし……」

困り顔のメフィストに、尚も食い下がりがアコは自分も行きたい事を告げる。

「私達も、姫様にお供します！ですから、ご安心を!!」

険しい表情を浮かべたエレンがメフィストに進言すると、背後の少女達が頷き返し

た。メフィストは渋々なながらも同意すると、

「ウム・・・分かった！だが無茶はしないでくれよ!!」

「待て！何人か残ってはくれまいか？敵の陽動の恐れもある・・・ノイズの狙いは、全ての音を消す事じゃ！この加音町も標的かも知れん・・・オルガンがまだ完成せん今、プリキュアの力が唯一の対抗手段なのだからのお!!」

音吉は、陽動の可能性も否定できぬ事から、何人か残って欲しいと頼むと、ムーンライトは、ブラックとホワイトと頷き合い、

「分かりました、私達が残りましょう！敵の規模が解らない以上、向こうの戦力は多い方がよい・・・つぼみ、えりか、いつき、ひかり、咲、舞、満、薫、りん、うらら、こまち、かれん、くるみ、ラブ、美希、祈里、せつな、響、奏、エレン、アコ、向こうを頼むわよ！のぞみ、みんなをお願いね!!」

「うん、これだけのプリキュアが揃ってるもん・・・必ずアコちゃんのママを、メイジャーランドを救って来ます!!」

のぞみは力強く頷き、背後の一同に微笑み掛けると微笑み返す一同、

「ムーンライト、ブラック、ホワイト、加音町を・・・私達の大切な街をお願いします!!」

「うん、響、加音町は任せて!!」

「みんな、無事に帰って来てね!!」

響の言葉に頷いたブラックが、加音町は任せてと言い、ホワイトは一同に語り掛け無事に帰って来るように伝えた。ムーンライトはシロツプを見ると、

「それと、悪いけどシロツプも一緒に残って貰えるかしら？もしもの時に備え、メイジャーランドに向かえる手段は残しておきたい・・・」

「分かったロプ！シロツプは加音町に残るロプ」

シロツプはムーンライトの言葉に同意し、加音町に残る事にする。

「じゃあみんな、出発するよ！決定!!」

のぞみの合図と共に、メフィストが虹色の鍵盤の橋を架け、仮装姿の一同が手を振りながらメイジャーランドへと旅立つと、ムーンライト、ブラックとホワイト、メツプルとミツプル、シロツプとメルポ、音吉が一同に手を振り見送った・・・

### 第三十二話：コスプレ大会!?

完

## 第三十三話：メイジャーランドを救え!

### 1、茨のトンネル

異変が起こったメイジャーランドを救う為、なぎさ、ほのか、ゆりを除く、仮装姿をした22人の少女達は、メフィストが作り出した錠盤の橋を通り、メイジャーランドへとやって来た。

薄暗い部屋の中で、狂喜の笑みを浮かべたアフロディテが、側に居る三つの影に指示を出すと、影はその姿を消した。

「ネズミには・・・消えて貰いましょう!!」

アフロディテの口から発せられた、不快なハウリング音がメイジャーランドに響き渡ると、メフィストが作り出していた錠盤の橋は、バラバラと音を立てて崩れ落ちた。

「な、何だ!?!このハウリング音は?・・・みんな、気をつける!!」

「キヤアアアア」

メフィストは、突然消え去った錠盤の橋に驚愕し、少女達と妖精達は、悲鳴を上げながら地上へと落下していった。

「アワワワ、エライこっちゃでえ・・・シフォン!!」



タルトは咄嗟にシフォンにみんなを助けるように頼むと、シフォンの耳が動き、シフォンの力によって、一同は怪我する事なく無事に地上へと降り立った。

「ありがとう、シフォン！此処がメイジャーランド!!」

ラブは、かぼちやの仮装をしたシフォンを抱きしめ感謝し、一同も笑顔を向けながらシフォンに感謝すると、シフォンは嬉しそうに微笑み返し、発案者のタルトは少しじけるのだった。

メイジャーランドの王、メフィストの帰還、そして、異様な出で立ちの少女達の出現は、本来ならばメイジャーランドの人々にとっては一大事であったであろう・・・

だが、音楽溢れるメイジャーランドは、まるで墓場のように静まりかえっていた・・・  
メフィストは連れて来た石化したバスドラ、バリトン、ファルセットを一先ず広場に置くくと、

「三人共、必ず元に戻してやるからな!!」

「ええ、バスドラ、バリトン、ファルセット、待っててね!!」

エレンもメフィストの言葉に同意し、三人を元に戻す事を誓うのだった・・・

「此処がエレンやアコ、ハミイの国・・・」

せつなは表情を曇らせメイジャーランドを見渡すも、聞いていたイメージとは遙かに掛け離れていた。

「こんな事が・・・一体メイジャーランドに何が起こったと言うのだ!」

動揺するメフィストが辺りをキョロキョロ見渡すと、メイジャーランドの住民達は、バスター、バリトン、ファルセットのように石化していた。

「そんなあ・・・メイジャーランドの人々まで石に・・・マ、ママは無事なの?」

涙目になって動揺するアコを、メフィストは優しく抱きしめるも、その表情は険しかった・・・

「ニヤンですとおお?」

「これは一体・・・アフロディテ様が心配だわ! 急ぎましょう!!」

変わり果てた故郷に、ハミイとエレン、フェアリートーン達は呆然とする。エレンはこの状況に危機感を感じ、アフロディテの下へ急ぐように進言する。

「そうね・・・でも、みんな用心して! どんな罠があるかも分からない!!」

「かれんの言う通りね・・・」

「うん・・・みんな、何が起こるか分からない・・・今の内にプリキュアに変身しておこうよ!!」

かれん、こまち、そしてのぞみの言葉に頷く一同が、それぞれの変身アイテムを手にとると、

「ルミナス! シャイニングストリーム!!」

ひかりが、

「デュアルスピリチュアルパワー!!」

咲、舞、満、薫が、

「プリキュア!メタモルフオーゼ!!」

のぞみ、りん、うらら、こまち、かれんが、

「スカイローズ!トランスレイト!!」

くるみが、

「チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!」

ラブ、美希、祈里、せつなが、

「プリキュア!オープンマイハート!!」

つぼみ、えりか、いつきが、

「レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!」

響、奏、エレン、アコが、

一同がプリキュアへと変身を完了する・・・

その時、プリキュア達の行く手を阻むように、茨の触手がメイジャーランドを覆い尽くして行く。

「これは一体!? みんな、気をつけて!!」

ビートの表情が険しくなる。自分が知る限り、メイジャーランドにこんな物は存在しては居ない。何かノイズに関わる力が働いて居るのでは無いか? ビートの心を不安が蝕んでいった。

茨の触手は、まるで四つのトンネルのような物を作り出すと、その中から三つの姿がプリキュア達の前に姿を現わした。

「ほう、伝説の戦士プリキュア・・・随分居るものだな?」

「ああ、だが烏合の衆かも知れんぞ!」

「どちらでも構わん・・・どうせ我らに勝てる筈が無いのだからな!」

全身赤色で、頭部から肩に掛けて鋼のような分厚い針を纏った鬼のような男、全身青色で鬼のような黒髪の筋肉男、全身緑色をしたイノシシのような巨体な男、赤い魔物、青い魔物、緑の魔物の出現に緊張が走る一同、

「侮るな! 仮にも闇の力を追い返して来た戦士達、こちらもそれなりの策は講じなければなるまい・・・プリキュア共よ! 一つ教えてやろう・・・メイジャーランドの女王、アフロディテの命は・・・後1時間も持つまい!!」

赤い魔物の言葉に、アコとメフィストに衝撃が走る・・・

「何だと！どう言う事だ!? お前達、アフロディテに何をした？」

険しい表情を浮かべたメフィストが魔物達を問いつめるも、三人の魔物は口元に笑みを浮かべながら、

「さあな．．．自分の目で確かめたらどうだ？尤もそう簡単には辿り着けんがね．．．」  
「ああ、ここに四つの茨のトンネルを作り上げた。この四つのトンネルは、何れもアフロディテの居る宮殿へと通じている」

「だが、我らがお前達の行く手を阻む！だが、我らは三人しか居らん．．．どれか一つは無傷のまま宮殿に行けるかも知れないぜ？」

赤い魔物、青い魔物、緑の魔物の順に、一同の反応を楽しむように語ると、

「全員が一丸となって一つのトンネルに入るもよし、分散して入るもよし、まあ、この狭い空間で、それだけの人数で行動出来るか分からんがな．．．さあ、ゲームを始めようか!!」

赤い魔物の一方的な宣言と共に、三匹の魔物は姿を消した．．．

罫かも知れない．．．

だが、もし本当ならば、アフロディテの命は後一時間で尽きると言う、一同に選択の余地は無かった．．．

「みんなはメイジャーランドに初めて来たし、プロツサム達以外アフロデイテ様の事も知らない・・・リズム、ビート、ミューズ、私達が一人ずつ別れてみんなを案内して進もう!!」

「そうね、みんなで一つのトンネルを進むのも手だけれど、逆にこれだけの大人数ではあの狭い中で戦うのもリスクが伴うわね・・・分散すれば、戦いやすいのも事実!」

「尤も、敵の言葉を信じればだけれど・・・」

「でも、行くしかない! 私は、一刻も早くママの所に行きたい!!」

メロデイ、リズム、ビート、ミューズの言葉に頷く一同、

「じゃあ、メロデイの案で行きましょう! でも、メロデイ達が分散して進むとなると、彼女達に付いていくメンバーは、それぞれの仲間内で行く方が良いわね! ルミナスはプロツサム達と行動してあげて!!」

アクアの提案により、メロデイと共に進むのは、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインデイの四人とそれぞれの妖精達・・・

リズムと進むのは、ドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、アクア、ローズの六人とそれぞれの妖精達・・・

ビートと進むのは、ピーチ、ベリー、パイン、パッションとそれぞれの妖精達にハ  
ミイ・・・

ミュージズと共に進むのは、メフィスト、ルミナス、ブロッサム、マリィン、サンシャインと妖精達……

一同が手を繋ぎ合おうと、険しい表情を浮かべながらも、

「みんな、必ずアフロディテ様の下で会いましょう!!」

「うん!!」

メロディの言葉に一同が頷くと、それを合図に、一同はそれぞれのチーム事に四つのトンネルへと突入して行った……

## 2、花鳥風月

茨の触手が不気味に組み合わさる道を突き進むメロディとブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディ、五人の行く手を阻むように、何処かモアイ像に似た物体が行く手を遮った。

「あれがゴーレムよ!前に私達も戦った事がある……油断しないで!!」

メロディの言葉に、ブルームは心の中でゴーレムって言うより、モアイって名前の方が似合っつてそうと突っ込みを入れるのだった。

「奏でましょう、奇跡のメロディ!」

メロディはミラクルベルティエを取り出すと、ミリーを呼び装着すると、

「今は・・・あんた達に構ってる時間は無いの! 翔けめぐれ、トーンのリング! プリキュア! ミュージッククロンド!!」

メロディのミュージッククロンドを食らい動きを封じられるゴーレム、

「何だ、この程度の攻撃にモタモタしやがって・・・邪魔だ!!」

ゴーレムの背後からイライラした声が聞こえると、燃えさかる火炎がゴーレムを消し去り、プリキュア達の目の前に赤き魔物が姿を現した。赤き魔物は口元に笑みを浮かべながら、

「よう、お前らが俺の相手か? 俺の名はシャープ! 炎の魔神とでも覚えておけ!! で、お前らの名は?」

「爪弾くは、荒ぶる調べ! キュアメロディ!!」

「輝く金の花! キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼! キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「天空に満ちる月! キュアブライト!!」

「大地に薫る風! キュアウインディ!!」

「ふたりはプリキュア!!」



シャープと名乗った赤き炎の魔神に対し、名乗りを上げる五人のプリキュア．．．  
シャープは口元に笑みを浮かべると、炎を手に纏い一同に投げつける。五人のプリキュアは攻撃をかくぐぐるも、炎が茨に燃え移り、一同に炎が迫ってくる。

「風よ！吹き荒れよ!!」

ウィンディの強烈な突風で炎を吹き飛ばし、何とか危機を脱するも、

「ほう、やるじゃないか．．．だが、これはどうだ！メガ・ファイヤー!!」

炎となったシャープの体当たりを食らい、吹き飛ばされた五人が茨を突き抜けダメージを負うも、ヨロヨロ立ち上がる。

「こんな所で時間を潰す訳には行かない．．．メロディ、あなたは先に行つて!!」

「私達がこの敵を食い止めるわ!」

ブルーム、イーグレットの言葉に戸惑うメロディ、険しい表情をしたブライト、ウィンディも、

「何をモタモタしているの！さっさと行きなさい!!」

「私達も必ず追いつくから、あなたはミューズのお母さんの下に急いで!!」

「ブルーム、イーグレット、ブライト、ウィンディ．．．分かった！必ず、必ず来てよ!!」

「うん、必ず追いつくから!」

「さあ、メロデイ、急いで!!」

ブルームが、イーグレットが、メロデイに必ず追いつくと約束し、ブライト、ウインデイも無言で頷く、メロデイも頷き返すと、全速力で先に向かう為に駆け出す・・・

四人を信じ、振り向かずに・・・

「ああ？ 蛆虫め、逃げやがったか!？」

シャープの言葉を聞き、目の色を変えたブルームとブライトが同時に突っ込み、シャープのボディに強烈なパンチを浴びせると、口を大きく開け苦悶の表情で吹き飛ばし、シャープ、入れ替わるように同時にジャンプしたイーグレットとウインデイが、ダブルキックで追い打ちをすると、口から涎を垂らしながら無様に吹き飛ばされるシャープが、背中から地面に叩き付けられる。

「メロデイを馬鹿にする事は・・・私達が許さない!!」

四人が横一列に並び、ブルームはシャープを指差し、鋭い眼光で睨み付けた・・・

「テ、テメエら・・・許さねえぞ!! 黒こげになりやがれ!!」

立ち上がったシャープは、目の色を変え、怒りに我を忘れたシャープが、炎の連打を四人に浴びせるも、四人は必死にバリアーを張り堪え続ける。

「調子に乗るんじゃねえよ! 蛆虫共!! メガ・ファイヤー!!!」

益々激高したシャープの身体の炎が勢いを増し、四人は悲鳴を上げながら吹き飛ばさ

れ大ダメージを受ける。

「あいつ・・・大口叩くだけあって強いね・・・」

「でも、ここで負けられないわ」

「ええ、私達はメロデイと約束したもの」

「必ず追いつくってね」

ヨロヨロ立ち上がった四人を、シャープは嘲笑いながら、

「バアゝカ、調子に乗るからそんな目に遭うんだ！さあ、止めを刺してやる・・・メガ・ファイヤー!!」

再び全身に猛烈な炎を纏うシャープに対し、ブルームはベルトに、イーグレットは左手に付いているハート形の中心部分にリングを装着し、ブライトはベルトに、ウインディは左手に付く星形の中心部分にリングを装着する。

「精霊の光よ！命の輝きよ！」

イーグレットとウインディが叫べば、

「希望へ導け！二つの心！」

ブルームとブライトが叫ぶ、

「プリキュア！スパイラル・ハート・・・」

「プリキュア！スパイラル・スター・・・」

「「スプラッッッシュュ!!!」」

猛烈な炎と、四人のプリキュアから発射された強大な光が激突する……

互いに力を込め合う両者……

「グウウウウ!こ、この野郎おお!!」

徐々に押され始めたシャープが憎まれ口を叩き出すも、

「あんたに何か……負けない!!」

「例え何度も倒れようと」

「私達は諦めない!!」

「メロディとの約束は、必ず守る!!」

「「ハアアアア」」

四人の雄叫びと共に、光が完全にシャープを飲み込んだ……

「ウワアアア!!だ、だが、これで勝ったと……思うなあああ!!」

シャープは光に包まれ闇に帰るも、闇はまるでメロディの後を追うように飛び去った。

「か、勝った……でも、ちよつと……ちよつとだけ休ませて」

ブルームの言葉と共に、四人はその場に倒れ込んだ……

## 3、赤い薔薇と青い薔薇

茨のトンネルを突き進む7人のプリキュア達、リズムを先頭に宮殿目掛け突き進んでいく……

「急がなきゃ……エッ?」

行き成り目の前に青い稲妻が輝き、リズムを吹き飛ばす、咄嗟にアクアとミントがリズムを抱えダメージを軽減する。

「みんな、気をつけて!何か待ち伏せしてる!!」

ローズの言葉に一同の表情が険しくなる。目の前からゆっくり姿を現わした青き魔物は、

「俺の名はナチュラル!マイナーランドが誇る青き雷の魔神なり!!貴様らは?」

「爪弾くは、たおやかな調べ!キュアリズム!!」

「大いなる、希望の力!キュアドリーム!!」

「情熱の、赤い炎!キュアルージュ!!」

「弾けるレモンの香り!キュアレモネード!!」

「安らぎの、緑の大地!キュアミント!!」

「知性の青き泉!キュアアクア!!」

「……希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく5つの心！Yes！プリキュア5!!」  
 「青いバラは秘密のしるし！ミルキイローズ!!」

7人のプリキュアが名乗りを上げると、ナチュラルと名乗る青き魔神は口元に笑みを浮かべ、

「では、貴様らの力……試させて貰うぞ!!」

指をパチリと成らすと、凄まじき青き雷が一同に降り注ぐ、

「このままじゃ……プリキュア！エメラルドソーサー!!」

ミントがバリアーを張り、ナチュラルからの攻撃を防ぐものの、亀裂が入り吹き飛ばされる。何とか体勢を整える一同だったが、ナチュラルの攻撃が容赦なく続く。

避けるのに必死な一同を嘲笑うように、ナチュラルは一人一人に格闘を仕掛け吹き飛ばし、一同の動きを止めると、

「さあ、俺の技を食らえ！ギガ・サンダー!!」

強大な青き稲妻が一同を直撃し、7人のプリキュアの意識が遠のいていく……

一人、また一人地面に倒れ込んでいく一同を、ナチュラルは嘲笑する。

「ケツ！やはり鳥合の衆じゃねえか……態々俺が出向く迄も無かった……ん？」

ヨロヨロと立ち上がるドリム、その目は輝きを失う事はなかった……

「私達は……同じプリキュアの絆で結ばれているの！あなた何かに……私達は負けな

い!!」

ドリームという言葉を受け次々立ち上がる戦士達・・・

「ドリームの言う通りよ! あんたよりも強い者と戦い、私達は打ち勝ってきた・・・プリキュア! ファイヤー・ストライク!!」

ルージュが・・・

「私達の絆は、寄せ集め何かじゃありません! プリキュア! プリズムチェーン!!」

レモネードが・・・

「私達は、ミューズのお母さんを・・・救って見せるわ! プリキュア! エメラルドソーサー!!」

ミントが・・・

「私達プリキュアを・・・甘く見ない事ね! プリキュア! サファイア・アロー!!」

アクアが・・・

「みんなの言う通りよ! メロディと約束したの・・・必ずアフロディテ様の下で会うって! 邪魔をしないで!! 刻みましょう、大いなるリズム!」

リズムは、ファンタステックベルティエを取りだしファリーを呼び出し装着すると、

「翔けめぐれ、トーンのリング! プリキュア! ミュージッククロンド!!」

ルージユ、レモネード、ミント、アクア、そして、リズムの技のハーモニーが、ナチュラル目掛け炸裂した!

ナチュラルはファイヤーストライクを弾くも、プリズムチェーンで右手の動きを封じられた所に、エメラルドソーサーとサファイアアローの攻撃を受け、更にミュージックロンドを受け、身体の動きを封じられると、

「プリキュア! シューティングスター!!」

その隙を見逃さず、ドリームがシューティングスターで突撃し、ナチュラルを吹き飛ばす。茨を突き抜け無様に転がるナチュラルだったが、ゆつくり立ち上がり、ギロリと一同を睨み付けると、身体から凄まじい放電が放たれる。それを見たローズは、

「此処で時間を掛けるのは不味いわね……リズム! 後は私達に任せて先に行きなさい!」

「エツ? でも、私も残って……」

「いいから! 行きなさい!!」

戸惑うリズムに、ローズの叱咤が飛ぶ、プリキュア5も頷きながら、

「リズム、此処は私達に任せて! 直ぐに後を追うから!!」

微笑みながら、ドリームもリズムに先に行くよう促すと、覚悟を決めたリズムが頷き、

「分かりました! 後で……必ず会いましょう!!」

リズムは走る……



振り返らずに……

「おいおい、一人逃げやがったか？だが、逃がしはしないぜ!!」

「リズムに攻撃などさせない！ハアア!!」

走るリズムに攻撃を加えようとするナチュラルルに突進し、肉弾戦を仕掛けるローズだったが、ナチュラルルの周りに発せられる放電を受け悲鳴を上げる。

「ローズ！みんな、無闇にあいつに格闘を仕掛けるのは危険だわ……離れて戦いましよ  
う!!」

アクアの言葉に頷いた一同が、ナチュラルルから距離を取り体勢を整えるも、益々ナチュラルルの身体が放電を発すると、ココとナツツの顔に冷や汗が垂れる。

「みんな、このままじゃ不味いココ」

「力を合わせるナツツ!」

「プリキュアに力を!」

「ミルキイローズに力を!」

ココ&ナツツの頭上にパルミエ王国の王冠が現われ、プリキュア5とローズに力を与える。

「クリスタル・フルーレ！希望の光!!」

「ファイヤー・フルーレ！情熱の光!!」

「シャイニング・フルーレ! 弾ける光!!」

「プロテクト・フルーレ! 安らぎの光!!」

「トルネード・フルーレ! 知性の光!!」

プリキュア5の手にキュアフルーレが装備される。そして、ミルキイミラーがローズの手に現われる。六人のプリキュア達が構えると、

「邪悪な力を包み込む、焔くバラを咲かせましょう! ミルキイローズ! メタル・ブリザード!!」

「5つの光に!」

「勇気をのせて!」

「プリキュア! レインボー・ローズ・エクスプロージョン!!」

青い薔薇の吹雪が、五色の薔薇が合わさり虹色の薔薇が、ナチュラル目掛け飛ぶ：：「小賢しい真似をするんじゃないやねえよ! 食らえ、ギガ・サンダー!!」

強大な力と力が激突する．．．

青い薔薇と虹の薔薇がナチュラルを包み込み、青き強大な稲妻が六人のプリキュアを直撃する。悲鳴を上げ倒れ込むプリキュア達、

「畜生! まだ．．．終わらんぞおお!!」

憎まれ口を叩くも、ナチュラルの身体は消滅し、闇に帰る。

ナチュラルは倒した・・・

だが、闇はリズムの後を追うように移動する・・・

(・・・お願い！)

薄れ行く意識の中でそれを見たドリームは、誰かに託すようにその場に倒れ込み、ココとナツは一同の名を叫び続けた・・・

#### 4、クローバー

ハミイを抱いたビートを先頭に走り続けるピーチ、ベリー、パイン、パツシヨン、そして、シフォンを背負ったタルト、茨のトンネルの脇には太鼓や鈴のような物が見え隠れしていた。

「此処は音の森よ！本来なら自然と楽器達が、美しい音色でみんなを向かえてくれるんだけど・・・」

悲しげな視線を森に浮かべるビートとソリーとラリー、ハミイはビートの悲しげな顔を見るのが辛いようで、

「じゃあ、代わりにハミイとセイレーンが歌うニャー！」

「もう、ハミイ！そんな場合じゃ無いでしょう!!」

「ゴメンニャー！」

ビートに注意され頭を掻き照れ笑いを浮かべるハミイに、ピーチ達四人も苦笑を浮かべる。

「私達も聞いて見たかったなあ・・・アフロデイトさんを助けて、メイジャーランドを元に戻そう!!」

「うん!」

ピーチの言葉に満面の笑みで大きく頷くビートであったが、

「そいつは適わぬ願いだな・・・何故なら、お前達は此処で俺に倒されるんだからな!!」

イノシシのような緑の魔物が現われ、五人のプリキュアを威嚇する。

「俺の名はフラット!緑の魔神なり!!貴様らの名を聞いておいてやろう・・・名乗れ!!」

「爪弾くは、魂の調べ!キュアビート!!」

「ピンクのハートは愛あるしるし!もぎたてフレッシュ、キュアピーチ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし!つみたてフレッシュ、キュアベリー!!」

「イエローハートは祈りのしるし!とれたてフレッシュ、キュアパイン!!」

「真っ赤なハートは幸せの証!熟れたてフレッシュ、キュアパッション!!」

「[[[[レッツ!プリキュア!!]]]]」

ビート、ピーチ、ベリー、パイン、パッションが名乗りを上げると同時に瞬時に行動

を移した。ビートとパッションが左右に別れ、フラットを素早い動きで牽制すると、フラットはそのスピードを追い切れず、隙を浮かべる。その隙を逃さずピーチ、ベリー、パインがジャンプし、

「「トリプルプリキュア・・・キッック」」

三人のキックがフラットの腹にめり込むも、フラットは口元に笑みを浮かべ腹筋に力を込めると、めり込んだ三人の顔色が変わる。

「ちよ、何これ、足が抜けないわ!」

「クツ、このおお!!」

「何で抜けないのお?」

ベリー、ピーチ、パインが動揺するのを鼻で笑い、フラットは自分の腹を思いつきり叩くと、三人は物凄い勢いで吹き飛ばされ、茨に激突して悲鳴を上げる。

「ピーチ、ベリー、パイン」

「三人共、大丈夫?」

パッションとビートが三人の元に駆け寄り抱え起こすと、少しよろめきながらも三人は大丈夫だと答える。フラットは一同を嘲笑い突進してくると、

「弾き鳴らせ、愛の魂! ラブギターロッド!!」

ビートは咄嗟にラブギターロッドを取りだし、ロッドを弾いて正面にバリアーを張

り、フラットの攻撃を防ぐ。だが、そんな事もお構いなく、フラットはがむしやらにパ  
ンチを繰り広げ続けた。

「な、何てパワー……このままじゃ持たない!!」

バリアーに罅が入りビートバリアは砕け散り、一同は悲鳴を上げながら宙に吹き飛ぶ  
と、

「まだまだ、食らえ! テラ・ボール!!」

緑色の光弾が追い打ちのように炸裂し、一同が激しく地面に叩き付けられ藻掻くのを  
鼻で笑うフラット、

「そんなもんか? プリキュア何て大した事無いな……ン?」

ヨロヨロ立ち上がった一同の目から、輝きは失せて居なかった……

「もつと広い場所じゃなきや……そうだ! パッション、ビート、もう一度あの魔物を引  
き付けて! 出来ればこの周りの茨を、あいつの攻撃で破壊させるように……」

「分かったわ! ビート、行くわよ!!」

「任せてよ!!」

ピーチの閃きを受け、再び左右に散るパッションとビート、フラットは、素早く動き  
回る二人にイライラしたように、がむしやらにテラ・ボールを発射し続けると、周りの

茨が破壊されていく。再び集結する戦士達、

「ありがとう、パッション、ビート、これだけ広ければ・・・行ける!!」

「そうか! ピーチにしては中々のアイデアじゃない!!」

ピーチの閃きを、苦笑を浮かべたベリーが称える。パイン、パッションも無言で頷くと、ビートは何の事か分からず首を捻る。

「ビート、先に行って! これだけ広ければ、私達の技であいつは必ず倒すわ!!」

「でも、あなた達を置いては・・・」

ピーチの言葉に戸惑うビートであったが、

「ビート、私の能力を忘れたの? あなたが先に付いていてくれれば、アカルンの力で私達は直ぐに加勢に向かえるわ・・・だから、此処は私達に任せて!!」

笑顔を向けてビートに先に行くよう訴えるパッション、ビートもパッションの能力を思い出し頷くと、

「そう言う事なら・・・四人共、必ず来てよ! ハミイ、ソリー、ラリー、行くわよ!!」

疾風のように駆け出すビートが直走る・・・

仲間を信じ、振り返らずにアフロデイトの下へ・・・

「野郎、ちよこまかしてると思えば逃げやがった! こうなったら、貴様らから血祭りに上げてやる!!」

「それはこっちのセリフよ！私達の方、思い知らせてあげるわ!!」

地団駄を踏むフラットに、腕組みしたピーチが力強く宣言すると、四人はダツシユでフラットに近づき肘を当てて、宙に飛ぶと、時間差でキツクを浴びせる。

「プリキュア！コンビネーション・キツク」

蹠踏めくフラットに宙返りした四人は、すかさず追い打ちに動くと、

「プリキュア！クアドラプルパルスンチ」

四人の同時のパンチを食らい吹き飛ぶフラット、この隙を逃さずピーチが勝負に出る。

「行くよ！ベリー、パイン、パッション！クローバーボックスよ、私達に力を貸して!!!」

クローバーボックスから放出された光が、リンクルンに力をもたらした・・・

「プリキュアフォーメーション！」

ピーチの合図を受けると、四人が一斉にしゃがみ込み構えると、

「レディー・・・ゴー!!」

再びピーチの合図で走り出す四人、立ち上がったフラットは何事かと度肝を抜かれる。

「ハピネスリーフ！セット！パイン!!」

パッションから始まったハピネスリーフ、パッションはパインに投げると、



「プラスワン！プレアリーフ！ベリー!!」

受け取ったパインが、プレアリーフをセットしベリーに投げる。

「プラスワン！エスポワールリーフ！ピーチ!!」

受けたベリーが、エスポワールリーフをセットし、ピーチに思いを託し投げる。

「プラスワン！ラブリーリーフ!」

受け取ったピーチは、ラブリーリーフをセットし、四つ葉のクローバーマークを完成させる。ピーチが四つ葉のクローバーマークを投げると、それは巨大化し、四人はそれぞれのマークの上に乗って、クローバーの中心部に居るフラットの上で下降し、フラットを巨大な水晶の中に閉じ込めた。

「な、何だ、これは・・・う、動けねえ!？」

思うように動けず、焦りが生じるフラットに、

「**二**「ラッキークローバー! グランドファイナー!!」**三**」

ラッキークローバー・グランドファイナーの力は凄まじい輝きを放ち、フラットを光の輝きの中で包み込んだ!!

「畜生! 畜生! このままじゃ・・・終わらんぞお!!」

捨て台詞を残し、フラットは闇に帰る。だが、闇は宮殿へと向かい飛び去った・・・

「何か嫌な予感がする・・・私達もビートの後を追うよ!」

ピーチの言葉に頷き、四人が駆け出した瞬間、

「ペタ・ハリケーン!!」

突然の背後からの強烈な風の攻撃を受け、不意を突かれた四人は為す術無く上空高く舞い上がり、地上に叩き付けられ気を失った・・・

「ピーチはん、ベリーはん、パインはん、パッションはん・・・」

倒れる四人の下に駆け寄り名を呼ぶタルトと、悲しげに泣くシフォン、新たなる敵はそんな一同を気にせず、

「シャープ! ナチュラル! フラット! まさか、三人揃って敗れるとわな・・・この俺も出向く事になるとは・・・」

黄色い鳥のような魔神は、倒れ込むピーチ達や側に居るタルトとシフォンを無視し、ビートの後を追った・・・

## 5、繋がる心

(ママ、ママ、どうか、どうか無事で居て!!)

ミューズは無言で走り続ける・・・

母アフロディテの無事を祈りながら・・・

「アコ! 一人で先走りすぎるな!!」

メフィストがミューズを窘めるも、ミューズの耳には届かない……

宮殿がもう目の前に見えてきた事で、ミューズは我を忘れ、一目散に駆け続けていた。

「ミューズ、無茶しないで！」

「無理ありません……お母さんの命が後一時間持たないなどと言われては……」

「それに、あいつらが言つてた通り、あたしらは敵と会わずに此処まで辿り着いたからね……ミューズが無我夢中になるのも分かるよ」

サンシャイン、ブロッサム、マリンが一人先走るミューズの気持ちも理解出来るが、一抹の不安を覚える。

「でも、あの宮殿から発せられる邪悪な感じは……私達も急ぎましょう!!」

宮殿内から発せられる邪悪な気配に気付いたルミナスが、三人と共にミューズに追いつくべく急ぎ後を追う。

数年振りに戻つて来た宮殿、ミューズにとって懐かしき場所は、茨に覆われた無残な姿へと変わつていた。

平和に暮らしていた思い出が、ミューズの臉に思い出されてくると、ミューズの目に涙が浮かんだ……

一気に階段を駆け上がり、アフロディテが居るであろう部屋へと突入するミューズ、

そこは不気味に静まりかえり、茨が部屋中を覆っていた。

「ママ、ママ、何処？居るんでしよう！ママ!!」

辺りをキョロキョロ見回したミュージズは、椅子に腰掛けるアフロデイトを見付けホツと安堵した表情を浮かべ近寄ると、無表情だったアフロデイトの口元に笑みが浮かぶと、ミュージズの背後から現われた闇が広がりミュージズを飲み込んだ・・・

(これは・・・ママ、く、苦しいよ！)

息苦しさがミュージズを襲う・・・

不安がミュージズの心を蝕んでいく・・・

ミュージズの目が、母アフロデイトを見つめるも、アフロデイトは動かない。ミュージズの目から涙が零れた。不意にアフロデイトが口を開くと、

「シャープー！ナチュラル！フラット！さあ、お前達の怒りの矛先を・・・この娘に浴びせるが良い!!」

闇に返った三人の集合体がミュージズを飲み込み、不快なノイズがミュージズの鼓膜を襲うと、ミュージズから悲鳴が漏れる。

「アコおお！アコおお!!アフロデイト、これは一体何の真似だ!」

遅れて到着したメフェイス、ルミナス、ブロツサム、マリン、サンシャインは、闇に捕らわれたミュージズを見つめて驚愕する。

アコの名を呼びながら、闇に近づいたメフィストだったが、闇は接触を拒むように、メフィストは闇の中に入る事が出来なかった。

(ママ、パパ、苦しいよ……)

「アコおお!!アフロディテ、しつかりしろ!お前はアコが苦しむ姿を見て……何とも思わんのかああ!!」

メフィストの叱咤がアフロディテに飛ぶと、アフロディテの目から止め処なく涙が溢れてくる。だが、それとは逆にアフロディテの口からは不気味な声が聞こえ出した。

「無駄だ!この女の肉体は私が頂いた!!間もなく、もう間もなくこの女の肉体は醜く変貌し、我が一部と成り果てるのだ!!」

「何だとおお!!アフロディテ、アコ、今、今助けてやるからなあああ!!」

「私達もメフィストに手を貸すよ!」

マリンの言葉を受け駆け寄り四人のプリキュア達だったが、茨がまるで生きているように蠢き、アフロディテの身体に近づけさせまいと、プリキュア達を攻撃していった……

「リズム!ビート!二人共無事で良かった……あれ、ドリーム達やピーチ達は?」

「ドリーム達は、私を先に行かせて青い魔物と戦って居るわ!」

「ピーチ達もそう……でも私達が宮殿に居れば、敵を倒した後パッションの力で瞬間移

動してくる筈よ!とこゝろで、ブルーム達の姿が見えないけど?」

「ブルーム達も私を先に行かせてくれて・・・」

再会したメロディ、リズム、ビートが頷き合うと、三人は宮殿内部に突入していった。

「ほう、何人かは宮殿内に入ったか・・・無駄な事をする」

黄色い魔物が羽ばたき、宮殿上空へと舞い上がった・・・

ミューズは、息苦しさの中意識が遠のいく・・・

そんなミューズの耳に、歌声が聞こえてくる・・・

それは、自分が幼い頃に、父メフィスト、母アフロディテが歌ってくれた歌で、ミューズが大好きな歌だった・・・

(アコ、アフロディテ、聞こえるか?ノイズは音楽を忌み嫌う・・・ならば、音楽こそお前達を救えると私は信じる!!!)

メフィストの歌声が、部屋中に響き渡った・・・

アフロディテに憑依した何者かが、忌々しそうにしながら頭を抱え苦しむ姿を見たルミナスは、

「今なら・・・ルミナス!ハーティエル・アンクシオン!!」

バトンをクルクル回し、体勢を低くして構えたルミナスの技が、闇を中和する。

「メフィストさん、今です!!」

「又ウオオオ!!」

ルミナスの合図を受け、闇の中に突撃したメフィストが、ミューズを抱えて救出し、一同から歓声上がる。

「よっしやあ!後はあたし達が・・・花よ、煌け!プリキュア!ブルーフォルテウエイブ!!」

「花よ、輝け!プリキュア!ピンクフォルテウエイブ!!」

「花よ、舞い踊れ!プリキュア!ゴールドフォルテバースト!!」

「グウウウオオオオオ!!」

マリン、ブロッサム、サンシャインから放たれたフォルテウエイブ、フォルテバーストが炸裂し、闇は断末魔の悲鳴を上げながら無に帰ると、宮殿内の茨が一掃され元の姿を取り戻した。

「パパ・・・パパの歌、私にもちゃんと聞こえたよ!私・・・やつぱり歌が大好き!!またパパとママと三人で歌いたい・・・」

「ああ、ママにも聞こえた筈だ!さあ、ママと一緒に助けよう!!」

蹠踏めきながらも立ち上がるミューズを、メフィストが優しく微笑み支えた。

「みんな、大丈夫!!」

息せき切って階段を駆け上がったメロデイ、リズム、ビートの姿を見て、一同はホッと安堵するも、

「他の皆さんはどうしましたか？」

不安そうなブロッサム表情に、メロデイ達は、他のメンバーは三人の魔物と抗戦している事を伝え、三人は、みんななら必ず此処に来てくれると語った。

「さあ、お前の負けだ！大人しくアフロデイテを解放しろ!!」

メフィストが、アフロデイテに憑依する何者かに訴え掛けるも、突如天井の窓ガラスが割れ、黄色い魔物が舞い降りて来た。

赤い鶏冠（とさか）のような物が頭に付き、鋭い嘴、背から生える巨大な翼が威圧感を与える。

「そいつはどうか？お前らの仲間は向こうでオネンネしてるぜ！ハウリング様、此処は私めに任せてこの場はお離れ下さい!!」

「ああ、任せたぞ・・・テンペストゾ!!」

テンペストゾと名乗る全身黄色い鳥のような魔物が、この場を引き受けると伝えると、アフロデイテは割れた天井から外へと飛び出した。逃がすまいと瞬時に追うメフィスト、それを見たブロッサム達は、



「メロディ、リズム、ビート、ミュージズ、あなたたちも行つて下さい!!」

「こいつはあたし達が引き受けた!」

「ルミナス、あなたも一緒に行つてみんなを守つて上げて!アフロディテさんをお願い!!」

ブロッサムが、マリリンが、サンシャインが、メロディ達にアフロディテの後を追うように進言すると、

「分かった・・・三人共、後で必ず来てね!行くよ、リズム、ビート、ミュージズ、ルミナス」

メロディ達四人が、ルミナスが、メフィストに続いてアフロディテの後を追つた：「今更手遅れだ・・・奴らではハウリング様には適うまい!では、俺は貴様らを倒すとするか・・・俺はテンペストゾ!貴様らの名は?」

「大地に咲く一輪の花・キュアブロッサム!」

「海風に揺れる一輪の花・キュアマリン!」

「陽の光浴びる一輪の花・キュアサンシャイン!」

「ハートキャッチプリキュア!!」

今、ブロッサム、マリリン、サンシャインが名乗りを上げ、シプレ、コフレ、ポプリが、それぞれのパートナーと同じようにポーズを決める。

「フン、我が翼の前に朽ち果てるがいい!!」

テンペストーズが不気味にニヤリと笑うも、三人が怯むことはなかった。逆にプロツサムは、テンペストーズを睨み付けながら指を指すと、

「やつと取り戻した親子の絆を引き裂こうとするなんて・・・私、堪忍袋の緒が、切れませんでしたあ!!」

「おお、久々出ました!プロツサムの堪忍袋お!!」

テンペストーズの言葉に、プロツサムは親子の絆を引き裂こうとする一同に怒り、マリンは久々に聞いたプロツサムの言葉に高揚し、サンシャインは苦笑を浮かべた。

「黙れ!貴様ら如きが俺に適うものか・・・」

テンペストーズが羽ばたき、広い宮殿内を変幻自在に飛び回り一同を翻弄する。プロツサムシヤワーも、マリンシユートも、サンシャインフラッシュも変幻自在に避け、逆に翼からの突風を浴びせ一同の動きを封じると、

「食らいやがれえ!ペタ・ハリケーン!!」

猛烈な竜巻が巻き起こり、三人を巻き上げそのままの勢いで叩き付けると、三人から悲鳴が沸き起こる。妖精達が心配そうに駆け寄るも、三人は大丈夫と言いながらヨロヨロ立ち上がった。

「あのスピードに対抗するには、今のあたし達じゃ・・・フォルテツシモつきやないね!」

「分かりました・・・サンシャイン！」

「うん、これで決めよう!!」

マリンのアイデアに頷いた二人、ブロッサム、マリノがタクトを取りだし、サンシャインがシャイニータンバリンを取り出すも、テンペストーゾは不気味な笑みを浮かべ続けた。

「ニヤロウ、その薄気味悪い笑いを止めさせてやる・・・」

ムツとしたマリノとブロッサム、サンシャインがアイコンタクトを取ると、

「集まれ、二つの花の力よ！プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

ブロッサムとマリノが、ピンクと青の光に包まれ上昇すると、それを合図にしたようにサンシャインが、シャイニータンバリンを構え、

「花よ！舞い踊れ!!プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

サンシャインが、ゴールドフォルテバーストの力で、太陽のような光のゲートを空中に作り出すと、それ目掛けて突入するフォルテツシモ状態のブロッサムとマリノの身体が金色に輝く。

「プリキュア！シャイニング・・・」

「フォルテツシモ!!!」

三人の合体技、シャイニングフォルテツシモがテンペストーゾ目掛け飛ぶ！だが・・・

「それがどうした？ペタ・ハリケーン!!」

テンペストゾが発したペタ・ハリケーンは、フォルテツシモを飲み込み、更に地上に居たサンシャイン、妖精達をも飲み込み巻き上げる。

「「キヤアアアア!!」」

高速に上空に巻き上げられ再び地上に叩き付けられそうになると、三人は、それぞれのパートナー妖精を庇うように抱き地上に墜落した。ピクピク動くもダメージはかなりなものがあった。テンペストゾは上空で腕組みしながら、

「たわいもない・・・そらよ、オマケだ！ペタ・スラッシャー!!」

上空から発せられた黄色い羽根手裏剣が三人目掛け飛ぶ、その時・・・

「ムーンライト・・・リフレクション!!」

三人の前にバリアーが現われ、ペタ・スラッシャーを跳ね返すと、もう一枚のバリアーが更に跳ね返し、テンペストゾへと攻撃を跳ね返した。

「グオオオ！チツ、誰だ!!」

自分が放った攻撃で自分がダメージを負う屈辱に、激高したテンペストゾが辺りをキョロキョロ見回すと、ブロツサム、マリン、サンシャインを庇うようにその前に降り立った戦士を見て、三人の表情が緩んだ。

「月光に冴える一輪の花、キュアムゥゥンライト!!」

テンペストーズを睨み付けるムーンライト、背後から喜びながらも不思議そうにブロッサムが声を掛ける。

「ムーンライト、来てくれたんですね!でも、加音町に残った筈では?」

「ええ、加音町にブラックとホワイトと共に残って居ただけけれど、メルポを通じて、私達宛にドリームからの手紙が届いたの……メイジャーランドの尋常じゃない事態に、ブラックとホワイトは、自分達が残るから、私に援護に行くように二人に頼まれ、私はシロップと共にメイジャーランドに来たの!今、シロップがみんなの下に向かっている筈よ!!」

ムーンライトの出現に元気づけられた三人が立ち上がると、ムーンライトは三人を見て笑みを浮かべるとマントを取りだし、上空にいるテンペストーズに攻撃を開始した。シプレ、コフレ、ポプリは、無言のままそれぞれのパートナーにしがみつくマントに変化し、三人もムーンライトに続いた。

テンペストーズは、ムーンライトのパンチ、キックの怒濤の連打を躲し続けるも、急上昇してきたブロッサム、マリリン、サンシャインの合体技、プリキュアインパクトを食らい壁に激突する。

「グウハアア……畜生!畜生!!もう一度食らえ!ペタ・ハリケーン!!」

だが、プリキュア達は巧みにペタ・ハリケーンをかいくぐった。

「そう何度も同じ攻撃を食らいますかってえの!」

マリリンがドヤ顔でテンペストゾにニヤリと笑むと、ムーンライトはマリリンを窺め、

「マリリン、敵を見下す前に・・・決めるわよ!!」

ムーンライトがタクトを取り出すと、マリリンの目が輝きを放つ、

「良いの? ヤッター! ようやくあたしもムーンライトとフォルテツシモ出来るうう!!」

大喜びをするマリリンを尻目に、お先にとばかりブロッサムとサンシャインがフォルテシモを仕掛け、ピンクと金、二つの光が上昇する。ムーンライトが頷くと、マリリンが満面の笑みで頷き返すと、

「集まれ、二つの花の力よ! プリキュア! フローラルパワー・フォルティシモ!!」

四色の光がテンペストゾ目掛け飛ぶ・・・

「グウウ、この程度の攻撃いい・・・は、速い!」

反撃を試みたテンペストゾだったが、フォルテツシモの凄まじき力はテンペストゾの身体事壁を突き破り、地上へと墜落するテンペストゾを貫き、動きを止めると、

「ハート・・・キャッチ!!」

現われた四人の叫びと共にテンペストゾは大ダメージを食らった・・・

「鏡よ、鏡、プリキュアに力を! 世界に輝く一面の花! ハートキャッチプリキュア!!」

スーパーシルエット!!!」

此処を勝負所と見た四人はスーパーシルエットへと変身すると、

「「花よ、咲き誇れ!プリキュア!ハートキャッチ・オーケストラ」」

巨大な女神のシルエットが現われると、テンペストゾの表情が恐怖に歪み、

「な、何だ、あれは・・・ウワアアアア!!」

巨大な女神のシルエットから放たれる愛の拳が、テンペストゾに振り下ろされると、テンペストゾは闇に帰った・・・

第三十三話：メイジャーランドを救え!

完

## 第三十四話：ハウリング

## 1、黒と白の稲妻

アフロディテに追いついたメフェイスとプリキュア達だったが、アフロディテは不敵な笑みを浮かべ続けていた。

「今、プロツサム達がハートキャッチオーケストラを放ったわ!」

「あの黄色い魔物も、彼女達に倒されたって事よ!」

「さあ、観念してアフロディテ様から離れなさい!!」

メロディが、リズムが、ビートが、アフロディテに憑依する何者かに解放するよう訴えるも、

(まさか、テンペストローズまで倒されるとはな・・・だが!)

「クククク、馬鹿め、それで勝ったつもりか? このハウリングが何の手段も用いず、こんな所までただ逃げたとも思ったか? お前達は人質を取られているも同然なのだぞ!!」

まるで、ハウリングと名乗った者の意思に通じたように、茨の群れがメイジャーランドの市民が石化する広場へと進軍を開始する。

「クククク、良いのかメフェイス? 貴様の大事な民を見殺しにしても?」



「おのれええ!!」

口惜しそうに拳を振るわすメフィストに、メロディ達は自分達が向かうと告げるも、  
「その必要は無いロプ!あれを見るロプ!!」

「エツ?シロップ!?!どうして此処に居るニヤ?」

上空から飛来したシロップが一同に話し掛けると、加音町に居る筈のシロップがメイ  
ジャーランドに居る事に首を捻るハミイに、シロップは、ドリームからの救援要請を受  
けてムーンライトを連れて来た事を語った。そのシロップの背にはココ、ナッツ、タル  
ト、シフォンが乗っていた・・・

「何だと・・・どういう事だ?茨が次々枯れ果てていくとは!?!」

アフロディテに憑依するハウリングが驚きの声を上げるも、

「簡単な事よ・・・私達プリキュアが、あなたの企みを阻止しているだけよ!!」

「二「ムーンライト!!」二」

上空から舞い降りたムーンライトが、アフロディテの背後に降り立ち声を掛けると、  
メロディ達が顔を綻ばせるのに頷くムーンライト、遅れてプロツサム、マリン、サンシャ  
インが降り立つ、更に茨を排除しながら徐々に姿を現わす14の影・・・

「ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディ」

「ドリーム！みんな、無事で、無事で良かった!!」

メロディ、リズムの言葉にニコリと微笑み頷くブルーム達とドリーム達、

「約束通り来たわよ！ビート!!ちよつと遅くなっちゃったけどね」

「パッション！ピーチ！ベリー！パイン！もう、心配したわよ!!」

パッションの言葉に少し涙ぐみながらも安堵するビート、それを見て微笑み掛けるピーチ、ベリー、パイン、パッション、

「メイジャーランドの人達に手出しはさせない!!」

ドリームの言葉を表すように、アフロディテに潜むハウリングに対し一同が身構える  
と、

「フフフフ．．．ハアハハハハハ！大人数でござ苦勞な事だな．．．だが、お前達は勘違いしているようだな？メイジャーランドだけが、我らの目的だとも思ったのか？これは陽動だ!!今頃、我が配下最強のトランクイツロが、我らの宿敵、音吉の居る加音町に、ゴーレムの大部隊を向かわせた頃だろう．．．邪魔な奴の企みを討ち滅ぼしアフロディテ、音吉、共に死に絶えるのだ!!」

「そんなあ．．．お爺ちゃん!!」

ハウリングの言葉に動揺するミューズとメフィスト、愛する母を、そして祖父を救わなきやとミューズが飛び出そうとするのを、ルミナスとムーンライトが制止する。

「加音町は大丈夫です！あの街には・・・ブラックとホワイトが居ます!!」

「ルミナスの言う通りよ！ミューズ、仲間を・・・ブラックとホワイトを信じなさい！あの二人なら・・・必ず約束を守ってくれるわ!!加音町は大丈夫!!私達は、今出来る事をしましょう!!」

（ブラック、ホワイト、加音町は任せたわよ!!）

ムーンライトはブラック、ホワイトに加音町を託し、ハウリングとの決戦に備えるのだった・・・

「ねえ、ホワイト！メイジャーランドは大丈夫かなあ？」

「ムーンライトも向かったし、大丈夫よ!」

調べの館の前で待機するブラックとホワイト、音吉はオルガンの完成は急務と館の中で作業を続けていた。その時、加音町に地響きが起こり、メツプルとミツプルが騒ぎ始める。

「ブラック、嫌な感じがするメポ」

「邪悪な感じが一杯現われたミポ」

ブラックとホワイトが辺りを見回しフツと上空を見上げると、二人は思わず変顔になりながら叫ぶ

「な、何、あの変なの？色とりどりのモアイ像が降ってくる何て……ありえなあゝい」  
「モ、モアイ像かどうかは別として……あれはやっぱり敵!？」

動揺するブラックとホワイトの下に、中から音吉が慌てて飛び出してくると、

「二人共、用心せい……あれはゴーレムの大群……これはきつとノイズの手の者の仕業じゃー!」

音吉の言葉に頷いたブラックとホワイトが顔を見合わせると、

「やっぱり、音吉さんが言ってた通りだったね」

「ええ、響さんとの約束は守らなきゃね……」

「加音町は……私達が守って見せる!!」

ゴーレムの群れに突っ込むブラックとホワイト、それに気付いたゴーレム達が合体し、巨大な姿に変化すると、二人も少し驚いた表情を浮かべ、

「ウワア、合体しちゃったよ……でも、その方が戦い易いかもね?」

「そうね……」

目で合図しあつたブラックとホワイトは、勢いよく大きくジャンプした。ジャンプした二人に対し、ゴーレムはパンチを繰り出すも、ホワイトが高速回転しながらパンチを捌き、蹠踏めいたゴーレムの顔面に、ブラックが地団駄を踏むようにキックの雨霰を浴びせると、堪らずゴーレムは尻餅を付く。地上に降り立った二人が手を握り合うと、

「ブラック、サンダー！」

「ホワイトサンダー！」

「プリキュアの、美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「プリキュア！マーブルスクリュー！」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて一旦引いた手を前に突き出すと、

「マックス〜!!」

ギョツと握り合った手と手・・・

二人の絆の強さを現わすように、巨大なゴーレムを一蹴する二人だったが、更なる新  
手の、色取り取りのゴーレムが再び降ってくる、二人は目を点にしなが、

「また出た！全く、パズルゲームかああ・・・ホワイト！」

「うん、これじゃ切りがないものね・・・」

再び手を繋ぎ合う二人が目を閉じると、

「私達の目の前に、希望を！」

「私達の手の中に、希望の力を！」

ホワイト、ブラックの言葉を聞き入れたように、まるで生命の息吹を感じさせるよう

な金色の光が、ブラックとホワイトの下に集まってくる。ブラックの右手に、ホワイトの左手に、スパークルプレスが装着される。漲ってくる力を現わすように、腕を回しながら構えたブラックとホワイトの姿に、音吉は思わず呻き声を上げた。

「な、何という凄まじい力じゃ？あの二人……まさかこれ程までの力を持つて居るとは思わなかったわい」

髭を触りながらも、二人の姿を頼もしげに見つめる音吉だった。

「パズルゲームの通りなら、同じ色を重ねれば消えるんだけどねえ？」

「ウフフフ、そう上手くはいかないようねえ？」

雄叫びを上げたブラックとホワイトが、全速力で降ってくるゴーレムの群れ目掛け駆け出すと、スパークルプレスが回転し、大きくジャンプした二人を、黒と白の稲妻が覆った……

「ダアアアアア!!」

「ヤアアアアア!!」

稲妻を纏った二人の蹴りが、ゴーレムの群れを駆逐していった……

## 2、黒き薔薇の帰還

ゴーレムの大群を一蹴し、地上に着地したブラックとホワイトは、フウと大きく息を

吐くと、互いを見つめ合い微笑んだ。その時……

「あのゴーレムの集団を倒したのか？しかも、たった二人で……信じられん？」

上空から飛来する人影が、調べの館前に降り立つと、ブラックとホワイトが身構える。

「我が名はトランクイツロ！マイナーランドの戦士也!! 貴様らに敬意を表し、名を聞かせて貰おうか？」

赤い髪に、巨大な尻尾、身体を茶色の鱗に覆われた魔神、トランクイツロが姿を現わすと、不気味な妖気を漂わせる。何処かワニを連想させる容姿に、ブラックは薄気味悪そうな表情を浮かべるも、

「光の使者・キュアブラック！」

「光の使者・キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア!!」

「闇の力のしもべ達よ！」

「とつととお家に帰りなさい!!」

ブラックとホワイトが、トランクイツロ相手に名乗りを上げた!

トランクイツロはギロリと二人を見回し、四つん這いになると、素早い動きでブラックとホワイトに向かってきた。二人はジャンプして躲すも、尻尾が切り離され、二人の足を捕らえると、ブラックとホワイトを地面に叩き付けた。

「キヤアアア！コノオオオ!!」

力を込めるブラックとホワイトが、何とか尻尾を外し蹴り飛ばすと、尻尾は生きているかのようにトランクイツロに再び装着された。

「我が尻尾の攻撃に耐えるとはな・・・これならどうだ！エクサ・フリージング!!」

トランクイツロの口から、冷気が吐き出される。ブラックとホワイト、二人の足下が凍り付いていく。

「気をつけて、あいつの技は冰雪系のようなわ！下手に攻撃を受ければ、致命傷になりかねない!!」

ホワイトの声を聞いて、ブラックは分かったと応えようと、二人は様子を伺うように距離を置いた。それを見たトランクイツロの口元がニヤリとし、調べの館の前に居た音吉目掛け突進すると、

「掛かりやがった！俺の目的は・・・音吉、貴様とオルガンの破壊だ!!」

トランクイツロは、調べの館事音吉を葬ろうとするかのように、両手に気を溜めると、  
「死ねええ、音吉！エクサ・ブリザード!!」

先程のエクサ・フリージングとは、比べものに成らない程強力な吹雪が、音吉目掛け発射された。音吉は身構え、死を覚悟した。だが、音吉の前にブラックとホワイトが割って入り、二人の身体は、エクサ・ブリザードの直撃を受け、徐々に氷に覆われていっ



た。

「お前達、わしなどの為に．．．何故じゃ!？」

「や、約束．．．した．．．もの」

「守る．．．つて．．．」

寒さで上手く口も回らないブラックとホワイトだったが、響達との約束は守ると、身を挺して音吉と調べの館を守った．．．

完全に凍り付き、固まるブラックとホワイトの姿に音吉は呆然とし、トランクイッロは嘲笑を浮かべた。

「クククク、馬鹿め！音吉の死ぬ時間が少し延びただけの事．．．これで貴様らを倒す手間が省けた！最早俺の邪魔をする者は居ない！音吉よ、お前が愛したこの街の最後を見ろ!!」

トランクイッロが、尻尾を地面に叩き付けると、再び上空よりゴーレムの群れが降ってくる。拳を振るわす音吉と、高笑いを続けるトランクイッロだったが、その時、空間に亀裂が走った．．．

「おのれ、まだ戦力を残して居ったのか．．．アコ、みんな、スマン！」

最早この街を、オルガンを、守る手段は無いと、音吉の心を深い哀しみが覆う．．．  
だが．．．

（これは、何だ!?こんな空間・・・俺は知らんぞ?何が現われるというのだ?)

呆然と空間の亀裂を見つめるトランクイッロの視線に、亀裂の中から五つの影が映った。五つの影は加音町に降り立つと、辺りをキョロキョロし、

「変ねえ!?プリキュア達の姿が見えないけど?」

「マスターの話しでは、この街に闇の気配が漂っていると言う事だったわね?」

「うん、プリキュア達も戦って居るような事を言ってたよね?」

「見て、ダークドリーム!あれ、ブラックとホワイトじゃない?」

「そんな!?ブラックとホワイトが凍り漬けに?」

現われた黒き衣装を身に纏った五人の少女達、ダークプリキュア5!

ダークアクア、ダークミント、ダークレモネード、ダークルージュ、そして、ダークドリーム、再び発生した闇の気配を感じ、ダーククイーンの命を受け、闇の気配のするこの街に現われた少女達は、上空から降ってくるゴーレムの群れに気付くと、

「成る程、あれね・・・みんな、行くよ!!」

「ブラックとホワイトはいいの?」

「あの二人なら大丈夫!自分達の力で何とかする筈だわ!!」

ダークドリームの言葉を受け、ダークアクアは心配そうにブラックとホワイトを見て、助けはないのかダークドリームに問い掛けるも、ダークドリームは二人なら自力で必

ず打ち破ると信じていると告げる。他の四人がチラリと二人を見ると、凍り漬けにされた二人の氷に亀裂が走った。

「待て！貴様ら何者だ!？」

「私達は・・・闇に生まれ、光の暖かさに触れ生まれ変わった戦士！ダークプリキュア5  
!!」

「ダークプリキュア5だと!?!・・・良いだろうこの俺が相手をしてやる!!」

だが、ダークプリキュア5はトランクイッロを無視し、口元に笑みを浮かべると、ゴーレムを迎撃に向かった。

「な、何だと!?!貴様ら、この俺を無視するとは・・・ならば望み通りこの街と・・・」

「勘違いしないで！私達が相手をするまでも無く、あなたの相手なら目の前に居るわ!!  
ブラックとホワイトが、その程度の攻撃でやられるものですか！彼女達を甘く見ない事  
ね?」

無視されたトランクイッロが激高し、再び加音町事攻撃しようとするも、ダークド  
リームは、ブラック達を信じ、ゴーレムを迎撃に向かった。

「あの五人は一体!?!味方・・・のようじゃが?」

音吉は、ダークプリキュア5の事を知らない・・・

だが、ゴーレムの群れと戦い始めた五人の少女達を、頼もしげに見つめるのだった・・・

ピシピシつと氷に罅が入ると、バリンと言う音と共に、ブラックとホワイトが氷を内側から壊し解放される。

「ウウウ・・・さぶいいい！寒くて死ぬかと思っちゃった・・・」

ブラックは寒そうに身体を縮込めながら、その場で足を動かし身体を温める。ホワイトは両手で身体をまさぐり暖めていると、音吉は目を輝かせ、無事な二人を見て喜ぶと、「おお！お前達、無事じゃったか！あの五人もお前さん方の仲間なのか？」

音吉が指さす先に視線を移すと、ブラックとホワイトの表情が輝いた！

「ダークプリキュア5!?あなた達・・・帰って来たんだね!!」

「また会えるなんて・・・しかも、良いタイミングで来てくれたわ!!」

微笑みながら再会を喜ぶブラックとホワイト、ダークプリキュア5もニッコリ微笑むと、ダークドリームは表情を引き締め仲間の四人を見ると、

「再会の挨拶は後にしましょう！そっちは任せたわよ!!みんな、一気に決めるわよ!!」

「「「YES!!」」」

「我らがマスター！ダーククイーン・・・私達に力をお貸し下さい!!」

目を瞑り精神を集中するダークプリキュア5の心に、気高き声が聞こえてくる。

（親愛なるダークプリキュア5！例え離れていようと、あなた方の声は私に聞こえています!!さあ、あなた方に力を授けましょう・・・）

ダークプリキュア5の頭上が輝くと、五人の手にフルーレが装着される。五人は軽くフルーレを振ると、

「5つの闇に！」

「希望を乗せて！」

「プリキュア！ダーク・ローズ・エクスプロージョン！！」

五人から放たれた黒い薔薇が合わさり、巨大な黒薔薇が、ゴーレムの群れを次々飲み込み闇に返した・・・

トランクイッロは呆然とした・・・

あの大部隊をたつた7人で壊滅され、そして自身の最強の技、エクサ・ブリザードをまともに食らった筈が、再び立ち塞がるブラックとホワイトの姿が信じられなかった。

「何故だ!?何故俺の技を食らいながら・・・おのれええ！もう一度食らえ!!エクサ・・・」  
「遅い!!」

技を出そうとしたトランクイッロの懐に入り込んだブラックが、怒濤のパンチを繰り出す、

「ダダダダダダダダダ!!」

ブラックのパンチの連打を食らい、無様に押されるトランクイッロだったが、辛うじて距離を取る。怒りで全身を振るわせるトランクイッロは、

「もう、もう許さねえええ!!この街事、凍り漬けえ!!エクサ・ブリザード!!!」

「そんな事・・・させるもんかああ!行くよ、ホワイト!!」

「うん!!」

ギユツと手を握り合うブラックとホワイトが叫ぶ、

「ブラック、サンダー!」

「ホワイトサンダー!」

「プリキュアの、美しき魂が!」

「邪悪な心を打ち砕く!」

「プリキュア!マーブルスクリュー!」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて一旦引いた手を前に突き出すと、

「マックスス〜!!」

二人の必殺技、マーブルスクリューと、トランクイツロのエクサ・ブリザードが真っ向からぶつかり合う・・・

互いに渾身の力を込める両者だったが、ブラックとホワイトが押され始めるも、

「加音町はああ・・・」

「私達が・・・」

「守って見せるううう!!」

「スパークウウウ!!」

握り合った手と手に更なる力がこもると、スパークルブレスが激しく回転し、稲光がマールスクリューと交わると、オーロラを纏い一気にトランクイツロを飲み込んだ。

「バカなあああ!!?ハウリング様ああああ!!」

ブラツクとホワイトは、トランクイツロを闇に返し、ダークプリキュア5 一人一人と手を握り合い、再会を喜び合うのだった・・・

### 3、意外な結末

(これは・・・加音町に居る筈のトランクイツロの気配が・・・消えた!?)

アフロディテの表情が険しく歪む、愛する妻のそんな姿を娘のアコには見せたくは無いとばかり、隙を付いたメフィストが单身突っ込むと、一同の目の前でアフロディテに口付けをする。

「エエエ!?、こんな場面でえええ?」

思わず顔を赤くして激しく動揺するメロディ・・・

両手で顔を覆いながらも、バツチリすき間から見るパインとリズム・・・

あごが外れるかと思うほど口を開け驚くブルームとルージュ、そしてベリー・・・

恥ずかしそうに視線を逸らすイーグレットとルミナス・・・

何が起こったのかと呆然として途方に暮れるブライト、ウィンディ、ローズ、パツシヨン、ビート……

「凄おおい!!」

興奮気味に身を乗り出すドリーム、レモネード、ピーチ、ブロッサム、マリリン、サンシャイン……

小説のネタになりそうなのか、熱心に観察するミントと、それを見て呆れるアクア：「ねえ、パパは何してるの？私も見たい!!」

「ミューズ……もうちよつと我慢なさい!!」

慌ててミューズの両目を隠すも、呆然とするムーンライト……

「成る程、メフィストは考えましたねえ……愛の力ならばあるいは……」  
「エツ!?クレツシエンドトーン……何時起きたの?」

何時目覚めたのか、ヒーリングチェストの中で眠りに付いていた筈のクレツシエンドトーンが目覚め、メフィストの行為を見ている事にメロディは驚くも、視線は再びメフィストとアフロディテへと向けられた。

「私達夫婦の絆は……貴様などに断じて負けん!アフロディテ……お前が好きだああ!!必ず、必ず救ってやるからなあ!!」

アフロディテの両目から、再び止め処なく涙が溢れ出すと、



「グウウウ・・・何だ、この不快な感じは・・・これは堪らん!!」

まるで愛の力を不快に感じるように、闇がアフロディテの身体から離れ上空へと舞い上がった。

「これは・・・奴め、アフロディテから離れたのか？アフロディテ、しつかりしろ！アフロディテ!!」

メフィストの呼び掛けにより、アフロディテが目を開ける・・・

そこには愛する夫、メフィストが心配そうに覗き込んでいた。アフロディテは頬を赤らめるも、周りでプリキュア達が興味深げに見ているのに気付くと、益々真っ赤になり、「な、何も子供達の前で・・・バカ」

恥ずかしそうに俯くアフロディテに、メフィストは満面の笑顔を浮かべ何度も頷いた。

「おのれ、メフィスト！おのれ、プリキュア共！ゆるさん・・・ゆるさんぞおお!!」

上空の闇に不気味な顔が浮かび上がると、一同が上空の闇を険しい表情で見つめる。

「それはこっちのセリフだ！アフロディテを、アコを、三銃士を、そして、メイジャーランドの民を・・・この私が成敗してくれる!!」

メフィストが上空高くジャンプし、ハウリングに怒りの鉄拳を振るうも、闇を突き抜けメフィストはそのまま叫び声を上げ地上に落下する。

「あなたああ!!」

慌ててアフロディテが錠盤の橋を作り、メフィストが地上に落下するのを防ぐ、

「よくもパパを……プリキュア! スパークリング・シャワー!!」

ミューズの光のシャワーが、ハウリングに炸裂するも、ハウリングにさしたるダメージは与えられない。

「その程度の力で俺様を倒せると思っているのか?」

ハウリングがミューズの攻撃を嘲笑するのを受け、

「一人が駄目なら、二人! 二人が駄目なら……行くよ! みんな!!」

ドリームの指示を受け、ハウリング目掛け攻撃を開始する一同、

ウインディの突風が、ブライトの光の光球が、ハウリング目掛け飛ぶ……

ルージュ、アクアのファイヤーストライクとサファイアアローが……

プロツサム、マリン、ムーンライトのフォルテウェイブとサンシャインのフォルテバーストが……

ピーチ、ベリー、パインのトリプルフレッシュとパッションのハピネスハリケーンが……

ブルーム、イーグレットのスパイラルハートスプラッシュが……

そして、ドリームのシューティングスターがハウリング目掛け飛ぶ・・・

「ミューズ、一緒に戦おう！」

「うん」

「「出でよ、全ての音の源よ！」」

フェアリートーン達の力を受け、クレッシェンドトーンを召喚した一回は、

「「届けましょう、希望のシンフォニー!!プリキュア!スイートセツシヨン・アンサンブル・クレッシェンド!!!」」

両腕をクロスした四人が、クレッシェンドトーンの金色の光の炎と一体化し、ハウリング目掛け突撃した・・・

「グウオオオオオ!!おのれ、おのれえ、プリキュア共・・・この俺様を・・・この俺様を、本当に怒らせたなあ!!!」

闇はグルグル高速に回転すると、実体化しだした・・・  
どこか狼を連想させる金色の髪をした紫色の魔獣・・・

「プリキュア達のあれだけの攻撃を受けて、あいつはまだ動けるのか？」

「ええ、しかも、実体化した事で、今までのダメージが消えています・・・逆にプリキュア達の疲労は・・・」

メフィストが、アフロディテが、激しく呼吸するプリキュア達を不安そうに見つめた。  
「ゼタ・ファイヤー!!」

猛烈な炎がプリキュア達を襲った・・・

それは、シャープが放ったメガ・ファイヤーなど、比べものに成らない威力を持つていた・・・

咄嗟にミント、サンシャイン、ビートが、エメラルドソーサー、サンシャインイージス、ビートバリアを張るも、呆気なく破られプリキュア達は大ダメージを受ける。

「ゼタ・サンダー!!」

ナチュラルが放った、ギガ・サンダーの数倍の威力を誇る、紫色の雷が一同を襲うも、ルミナスが力を解放し、強烈なバリアーを張りハウリングの攻撃を押し返した・・・

「こ、これ以上・・・みんなを傷付けさせない!!」

「ありがとう、ルミナス! みんな、まだ行けるよね?」

苦しいながらも笑みを浮かべ一同に問い掛けるドリームに、他のプリキュア達ももちろん答える。その時、ミューズは何かを発見し、顔色を変え駆け出した。

「ミューズ、どうしたの?」

「あそこに、あそこに、何かが居るの! あれは・・・鳥?」

メロディの問い掛けに、ミューズは鳥らしき者を見掛け走り出した。ミューズは、パ

タパタ跳ね回るシロップぐらいの大きさの鳥を見付け、保護をすると、その鳥は翼を少し怪我しているようであった。ミューズは鳥を抱え一同の下に戻って来ると、それを見たハウリングの顔色が変わった。

(あれは、まさか!?!・・・そうか!!)

ハウリングは何かに気付き頷くと、

「プリキュア共、決着は暫し預けてやる!次に会う時こそ・・・貴様らの最期だ!!」

ハウリングはそう言い残すと、メイジャーランドより撤退した・・・

プリキュア達は、呆然とハウリングが消えた場所を見つめた・・・

「奴め、どういいうつもりだ?」

「ええ、あの者にはまだ与力があつた筈なのに・・・」

「だが、石化せずに居たメイジャーランドの民が居たのは不幸中の幸いだな」

「そうね・・・」

メフィストとアフロディテは、ミューズが抱えている鳥を見つめた・・・

「はい、怪我は大した事無いわ!少し安静にすれば直ぐに飛べるようになるわ!」

「ありがとう、パイン!良かったねえ、ピーちゃん!!」

「ピィィ!」

パインが応急処置をし、ミューズが安心した顔で鳥をあやすと、鳥は嬉しそうにミューズの周りを歩き続けていた。

「へえ、何かこの鳥・・・シロップに似てない？」

「本当、もしかして兄弟だったりして？」

「何処がロプ！シロップはこんな不細工じゃないロプ!!」

ブルームとピーチの言葉を聞き、シロップはムツとしてそっぽを向くと、一同から笑い声が漏れた・・・

「我々はメイジャーランドに残る！石にされた民を、このまま置き去りには出きんからな!!」

「ハミイ！セイレーン！そして、プリキュアのみなさん、アコをお願いします!!」

「パパ、ママ・・・行ってきます！必ず残りの音符を手に入れて、ハウリングから音符を取返すから・・・」

ピーちゃんと同名付けた鳥を抱いたアコが、固く決意を二人に語ると、二人も頷き返した。メフィストとアフロデイトが、共同で錠盤の橋を作り上げ、一同が加音町へと戻って行く姿に、アフロデイトとメフィストは手を振り続け見送った。

（バズドラ、バリトン、ファルセット・・・ゴメンね！もう少し待ってて！必ず、必ず救うから!!）

エレンは心の中で三人に詫び、一同は後ろ髪惹かれる思いながらメイジャーランドを後にした・・・

第三十四話：ハウリング

完

## 第三十五話：奪われたキュアモジューレ

1、お帰り！

加音町・・・

調べの館の中で、一同の帰りを待ち侘びるなぎさとほのか、そして、ダークプリキュア5、彼女達7人の活躍で、加音町は事無き得た。音吉は、一同に暖かいコーヒーを持ってきて話しに加わった。加音町に来た時の普段着に戻ったなぎさとほのかは、暖かいお茶の差し入れを、

嬉しそうに手に取ると、

「ありがとうございます！さつき凍り漬けにされたから・・・ハア、暖まるうう!!」

「本当ねえ！でも何処かで身体の底から暖まりたいわねえ？」

「だよねえ！」

音吉が差し入れてくれたコーヒーの温もりに、なぎさとほのかは心底嬉しそうだった。一口、二口と、コーヒーを啜るも、まだ寒そうにしながら会話するなぎさとほのかの姿に、音吉は髭を触りながら少し考えると、

「おお、それなら加音町のスーパ―銭湯にでも行ってきたら良い！みんなが帰って来た



ら一緒に行つてきなさい・・・今日はハロウインの日じゃし、営業はしておらんが、わしから電話をして頼んでみよう！貸して切りにでもして貰うかのお？」

音吉はそう言い残し、奥に立ち去つた。

なぎさとほのかは顔を見合わせニコリとするも、ダークプリキュア5はキョトンとしていた。彼女達に取つては、銭湯など聞いた事も無かつたのだから・・・

「そつかあ、みんなはスーパー銭湯何か知らないよね？大きなお風呂があつて、みんなで一緒に入れるんだあ！何種類かのお風呂もあるんだよ！お店によつて違うけどね・・・まあ、所謂（いわゆる）裸の付き合いつて奴ね!!」

「ハア・・・」

なぎさの語るスーパー銭湯談義に、ダークドリームはイマイチ分からず首を捻つた。他の四人も何の事か分からず、キョトンとするダークプリキュア5だった。ほのかはクスリと笑み、

「フフ、行つてみたら分かるわ！ねえ、なぎさ？」

「うん!!早くあの子達帰つて来ないかなあ・・・」

なぎさとほのかは、一同の帰りを待ち侘びた・・・

「加音町は無事見たいだね！」

「ええ、音楽も元通り鳴り響いてるわ!!」

「なぎささんとほのかさんには感謝しないとね!」

加音町に戻って来た一同は、再び音楽と仮装で賑わう加音町の姿に安堵する。響と奏は、なぎさとほのかが、約束通り加音町を守ってくれた事に感謝するのだった。

エレンは、そんな二人とは対照的に落ち込んでいた・・・

なぎさとほのかは、約束通り敵の手から加音町を守ってくれた。

でも、自分達は・・・

エレンは、二人にどんな顔をして会えばいいのだろうかとうと表情を曇らせる。そんなエレンに気付いたハミイは、不安そうにエレンに話し掛けた。

「セイレーン、どうしたニヤ?」

「エツ!? ううん・・・二人は約束を守ってくれたけど、私達は・・・」

ハミイにまで心配させている・・・

そう思っても、エレンの心は複雑だった。思わず心の声が出た。落ち込むエレンの肩を、せつなとゆりが叩き、

「そう落ち込まないで! アフロディテ様は救えたんだもの!!」

「ええ、落ち込んでいては、次の戦いに影響するわよ?」

二人の言葉を受け、エレンは考え込む・・・

確かに二人の言う通り、こんな気持ちで再びハウリングと戦っても、勝てる筈がない！ エレンはコクリと頷き、二人に、そしてハミイに笑顔を見せた。

「プイイイ！」

「どうしたの、ピーちゃん?!」

「きつとメイジャーランドから出たこと無いから珍しいんだよ！」

アコに懐き、一緒に来たピーちゃんがプイプイ鳴きながら辺りを見回す姿に、アコは不思議そうにするも、響の言葉を聞き、そうかも知れないなあとアコは頷く。

「ピーちゃん、後で加音町を案内してあげるからね！」

アコは、新しい友達のピーちゃんに満面の笑顔を浮かべる。その姿を見る限り、アコの子供らしい一面が見れて、一同は心を和ませるのだった。

姿が見当たらないなぎさとほのかに、途中まで一緒に居たゆりが、きつと調べの館の中に居るのだろうと伝えると、一同は調べの館へと歩き出した・・・

調べの館の付近には、戦いの後の痕跡が所々に残っていた。

一同は、死闘が行われたであろうその様子に眉根を曇らせる。響を先頭に調べの館へと入っていく一同、

「あつ、帰って来た！ みんな、お疲れ様!!」

「お帰りなさい！ みんなを待ち侘びて居た人達が、私達以外にも居るのよ!!」

なぎさとほのかが満面の笑みを浮かべながら、ダークプリキュア5達が戻って来た事を伝えると、一同は微笑みを向け、のぞみ、りん、うらら、こまち、かれんは特に喜び、一同に駆け寄ると、ダークプリキュア5は、一同の仮装姿を見て驚くも、直ぐに満面の笑みを浮かべ微笑み返した。

数ヶ月振りの再会・・・

のぞみ達とダークプリキュア5にとつては、まるで数年振りにあったように、懐かしさが心の底から湧いてくる。そんなのぞみ達とダークドリーム達の再会を見守ったなぎさとほのかは、

「みんなからお礼を言ってお上げてよ！彼女達が加勢に来てくれなかったら、私達・・・やばかったかも!?!」

「ええ、加音町を守りきれなかったかも知れないわ!」

なぎさとほのかの言葉を受けざわめく一同、これを契機にメイジャーランド、加音町で起こった出来事を語り合う一同だった・・・

「セイレーン！今は黒川エレンだったわね・・・やはりあなたもプリキュアになれたのね？」

「ええ、響や奏、ハミイのお陰よ！今ならあの時、あなたやせつなが言おうとした事が理

解出来るわ!」

ダークドリームの言葉に、嘗て自分を訪れた時に、ダークドリームとせつなが語った言葉を思い出し、エレンはあの時を振り返った。

「ねえ・・・あなた達、まだしばらくここに居られるの?」

「みんなの話を聞く限り、まだしばらくはここに居た方が良いかも知れないわね・・・」  
かれんの言葉を聞き、今の現状を見る限り、自分達も地球に居た方が良いでしょうとダークアクアも頷いた。

その時、なぎさが手を鳴らし一同の注目を浴びると、

「さっきも言ったように、私とほのかは凍り漬けにされてさあ・・・音吉さんが気を利かせてくれて、スーパー銭湯を貸しきりにしてくれるように頼んでくれたから・・・みんなで行かない?」

なぎさの言葉にざわめく一同、確かに戦闘の連続で埃まみれにもなっていた・・・

「そうね・・・私は異存ないけれど」

「うん、私も良いよ!みんなは!?!」

ゆりものぞみも賛成し、のぞみが一同に問い掛けると、一同も賛成をし、少女達はスーパー銭湯へと向かった・・・

「此処の銭湯は、加音町らしく、音楽を聞きながらお風呂に入つて癒されるの!」

響の説明を受け、興味深げに少女達の中に入ると、恰幅良い女店主は、なぎさとほのかを除く、仮装した一同に苦笑を浮かべながらも、既に音吉に聞いていたのか、快く一同を中に手招き、

「じゃあ、出るときは其処のロビーの電話で知らせておくれ!じゃあ、ごゆっくり!!」

少女達を気遣つてか、女店主は奥へと引つ込んで行つた。一同が興味深げにワイワイ話して居ると、アコは、キョロキョロしているピーちゃんを見るや、微笑みながら話し掛け、

「さあ、ピーちゃんも綺麗にしなきゃねえ?」

「パイ!?!」

アコに話し掛けられ、首を傾げるピーちゃんは、アコに抱かれ女湯へと入つていった。

「どうしましょう・・・衣装がドアに引つ掛かつて中に入れませんか!」

「横になつて入れれば良いでしょう?」

「そっかあ!」

ぬりかべの仮装のうららが、入り口で引つかかり藻掻くのを、後ろに居たくるみがかさず突つ込みを入れる。うららは照れながら舌をペロリと出し、身体を横にして中に入った。脱衣所に入り、仮装した衣装を脱ぎ始めたのぞみ達、のぞみはとある事を思い

出し、

「そう言えば、くるみつてお風呂に入る時、どっちの姿で入るの？」

「そんな事決つてるでしょう！」

のぞみの問いに、くるみはミルクの姿に戻ると、

「お風呂に入る時は、ミルクの姿ミルク！その方が石鹸も、お湯も少なく済むミルク」

「な、何か、貧乏くさいね・・・」

「うるさいミルク！お世話役は、ちゃんと節約も心がけてるミルク!!のぞみとは違うミルク!!」  
どうせのぞみはお湯を無駄使いし、石鹸も一杯使っているんだらうと、ミルクはニヤリとしながらのぞみを見つめるも、中の広さを見て目を輝かせると、

「ま、まあ、たまにはこの姿で入るのも悪くないわね？」

再びくるみの姿になると、大浴場を興味深げに見つめた。

続けて入ってきたかれんは、キョロキョロ中を見回すと、

「家のお風呂と同じぐらいの広さねえ・・・」

「エッ!?家と同じって・・・此処、スーパ―銭湯よ?」

「僕の家も道場をやつてから、お風呂は広い方だと思うけど、此処まで大きくはないなあ・・・」

「そうですねえ・・・こんなに広いと・・・掃除も大変そうですねえ」

「ゆりさん、いつきさん、つぼみさん、気にしないで下さい！かれんの家が特別なだけですから」

自分の家と同じくらいな大きさに、かれんが思わず声を出すと、一同はキョトンとし、ゆりは思わず聞き間違いかと問い返すと、こまちが苦笑を浮かべながら気にしないで下さいとフオローする。

「此処が・・・お風呂？」

「そうだよ！驚いた？」

「私と薫も、最初にお風呂に入った時は驚いたから、あなた達の気持ちは分かるわ・・・ねえ、薫」

「そうだったわね・・・でも、気持ち良いものよ！さあ、あなた達も服を脱いで入りましょう！」

不思議そうにキョロキョロ辺りを見回すダークプリキュア5に、咲、満、薫が声を掛ける。舞は少し恥ずかしそうにしながら、みんなから隠れるように服を脱ぎ始めると、気付いた咲に手を引つ張られ、頬を赤らめる。

満や薫も、元々はダークフオールで生まれた戦士である。お風呂など知らなかったが、咲や舞との出会いを切掛けに、様々な事を学んでいた。



ダークプリキュア5は、不思議そうにしながらも、誘われるまま衣装を脱ぎ始めた：

「こうしてみんなとお風呂に入るなんて・・・修学旅行の時を思い出すわ」

「本当ですね、私も最初は戸惑いましたけど、今では楽しい思い出です」

ほのかの言葉にひかりも同意し、当時の事を思い浮かべる。ひかりは、なぎさとほのかの修学旅行にも途中で合流した事があったので、実質中学時代に二度体験しているのだが・・・

「アコ、宮殿のお風呂もこんな感じ何じゃないの？」

「そうよね、お城のお風呂何て、想像したら広くて豪華そうなものね・・・黄金風呂や、生演奏を聴きながらお風呂に入ったりして」

「それはそれで恥ずかしいでしょう・・・で、どうなの？」

「エッ!? うくん、私は小さかったから広くは感じてたけど、此処まで大きくは無かったよ  
うな?」

響と奏に話し掛けられたアコが当時を思い浮かべる。アフロデイトやメフィスト、時々祖父音吉に入れてもらったが、他のお風呂と比べた事は無く、アコは首を捻る。

「私達は、熱いの嫌いだし、大体水浴びで済ませてたよね」

「そうニヤ、ハミイとセイレーンは、泉で水浴びしてたニヤ!」

「そっかあ、その頃エレンは猫の姿だったもんね」

「今でも熱いのは嫌いだけど、ぬるま湯なら大好きよ！ねえ、ハミイ!!」

エレンの言葉にハミイも頷き、二人は笑顔を浮かべながら見つめあった。

「ポルン、ルルン、あんまり走り回ると危ないミポ」

「ムープもフープも、おとなしくするチョピ」

「シフォン、前をよく見ないと、危ないわよ!」

ポルン、ルルン、ムープ、フープ、シフォンは、楽しそうに脱衣所の中をはしやぎ回っていて、ミップル、チョッピ、せつなに注意されるもお構いなしだった。

前を見ていなかったルルンが柱にぶつかり泣きそうになるのを見付けた祈里が、ルルンに近づきしやがみ込むと、

「大丈夫?・・・うん、何処も怪我は無いです!」

ニコニコしながらルルンの頭を優しく撫でると、ルルンも笑顔をとり戻し、再びポルンの後を追いかけて回り始める。

「あの子達、楽しそうね・・・」

「うん、こんなに大勢で入るのって、初めて何じやないかしら?」

せつなど祈里は、目を細めながら幼い妖精達を見守った・・・

衣服を脱ぎ、裸になった少女達が、次々と脱衣所から女湯に入って行った・・・  
ちよつと遅れた妖精達、メツプル、フラツピ、タルト、コフレが脱衣所に入ろうとすると、

「み、みんなあ、待つココー！」

「そつちは女湯ナツ！」

「お前達、戻るロプ！」

女湯に行くこうとするメツプル達を、ココ、ナツツ、シロツプは慌てて呼び止めようとするも、メツプル達は気にせず中に入ろうとすると、目の前になぎさ、りん、ラブ、美希、えりかが立ち塞がり、

「あんた達はあつち！」

「何でメポ？」

「あんた達は一応男でしようが!!」

なぎさに男湯を指さされ首を傾げる一同、りんにも、あんた達は一応男でしようと言われると、メツプルとフラツピは頬を膨らまして、

「狡いメポ！ポルンやムープだって男メポ!!」

「そうラピ、差別ラピ!!」

「あの子達はまだ小さいから良いの！」

「そうそう、つべこべ言わない!!」

食い下がるメツプルとフラツピに、美希とラブも駄目だしをする。タルトも不服そうに会話に加わり、

「じゃあ、ピーちゃんは何でエエンや？わいらだけ、差別やでえ！」

「アコちゃんが自分できれいにして上げたいようだし、ピーちゃんは怪我もしてるし、特別・・・いいからさっさと行つた行つた！」

「そうそう、ほら、コフレ！あんたもだよ!!」

なぎさとえりかは、ふて腐れるメツプル、フラツピ、タルトそして、コフレを追い払い、一同は女湯に消えていった・・・

「えりか、酷いですっ！僕はえりかのパートナーなのにいい!!」

頬を一杯に広げふて腐れるメツプル、フラツピ、タルト、コフレに、ココとナツツ、シロップが呆気に取られていると、

「何じゃ、そう落ち込むな！男は男同士、身体の洗いっこでもするかのう？」

男湯から白い禪姿の音吉が現われ、妖精達は呆然とその場に固まり、女湯からは、楽しそうな少女達の声に混じり、ピーちゃんの悲鳴にも似た叫び声が響き渡った・・・

## 2、不気味な沈黙

帰つて来たダークプリキュア5は、ココとナッツにこつちに残るように頼まれたくるみと共に、ナッツハウスで生活する。

せつなも、一旦ラビリンスに戻ったものの、エレンの事を気に掛け、調べの館の一室を借り、加音町に暫く住む事を決めた。

11月に入り、音符探しを再び開始する響、奏、エレン、アコ、せつなと、ハミイ、フェアリートーンとピーちゃん、週末になると交代で、咲達、のぞみ達、くるみとダークドリム達、ラブ達、つぼみ達が加音町へとやって来て手伝つてくれて、音符も日に日に集まってきた。

だが、ハウリングは不気味な沈黙を続け、襲つて来ようとはしなかった・・・  
「何でハウリングは襲つて来ないんだろぅね？」

「そうね・・・でもこの沈黙はかえって不気味よね」

「何かを企んでいる・・・そう考えて良さそうね！」

響、奏、エレンは顔を見合わせ頷き合った・・・

12月に入つてもハウリングは沈黙を続けていた・・・

12月中旬、加音町はクリスマスコンサート準備を始めていた。この日も学校の帰

りに音符集めをする響、奏、エレン、アコは、先に探索していたせつな、ハミイとフェアリートーン達と合流し、音符探しを開始した。

ピーちゃんはそんな一同をジツと見つめていた。

「ハミイ、私にはよく分からないけど・・・音符はまだまだ居るの?」

大分捕まえたところ機嫌のハミイに聞いたせつなに、ハミイはもうすぐ全て集まる筈だと答える。

「でも、あと少しとなると・・・捜すのも大変じゃない?」

「せつなの言う通りね・・・まして音符の姿は、私とハミイ、アコ、フェアリートーン達メイジャーランドの人にしか見えないし・・・」

エレンもせつなの言葉に同意し、数が減れば、それだけ捜すのも大変だと響と奏に伝える。

「うくん・・・そうだ!前に音吉さんがオルガン弾いた時に、大量の音符が現われた事があつたじゃない!」

「そういえばそんな事があつたわね」

「でしよう!危険ではあるけど・・・音吉さんに頼んでみようよ!どうかな?」

響の閃きを聞き、奏もその事を思い出した。響は一同に聞いて見ると、

「私はよく分からないし、それで良いけど・・・」

「私も良いわ!」

「当てもなく捜すよりはマシね」

せつな、エレン、アコも同意し、奏も無言で頷くと、一同は揃ってオルガン完成間近の音吉に交渉を始めた……

「何じやと、オルガンを?」

「ええ、お願いします!音吉さん!!」

渋い表情を浮かべる音吉に、頭を下げる五人の少女達、音吉は髭を触りながら考え込む、

「残り少ないとなると……奴が現われる可能性も高いぞ?」

音吉の言葉に頷く少女達を見て、音吉は無言で頷くとオルガンの前の椅子に腰掛け弾き始めようとする。

「ピィィィ!!」

ピーちゃんは逃げるようにその場を飛び去って行った……

調べの館から鳴り響くオルガンの音が加音町に響き渡る……

少女達は真剣な眼差しで辺りを見回す、そんな中せつなは、このまま自分だけが参加しているより、ラブ達にも協力して貰った方が良いのではないかと考えると、

「ねえ、私、念の為ラブ達を呼んでくるわ！もうラブも学校から帰ってる頃だと思っし……」

「確かに、その方が良いかも知れないわね！ハウリングが何時襲ってきてもおかしくないし……」

せつなの言葉にエレンも同意すると、響、奏、アコも頷く。せつなは忙しく電話を掛けると、ラブと何やら会話し、アカルの力で消え去った。一人でも多くの仲間が来てくれるのは、響達に取っても有り難かった。ましてやせつなは、アカルの力で自在に瞬間移動を仕える。

四人の心に油断が生まれた……

「じゃあ、私達は音符を探しに行こう!!」

四人とハミィは、再び音符を探しに街を探索するのだった……

「せつな、急用ってどうしたの？何か異変でも!？」

「本当、ラブちゃんに聞いて驚いたわ……何かあったの?」

「ええ、音符も後僅かになった事で、音吉さんのオルガンの力を借りて、残りの音符を一気に集めようと思うの!でも、あのハウリングが現われる可能性も高いから、出来ればラブ達にも力を貸して欲しいと思って……」



せつなに急用があると電話で呼ばれたラブは、カオルちゃんのドーナツ屋でせつな、祈里と待ち合わせし、テーブル席でせつなの話しを聞いていた。ラブは、せつなの話しに何度も頷き、

「うん、分かった！そういう事なら私も協力するよ!!でも、美希たんは今日モデルの仕事が入ってるって言うてたし、なぎささん、ほのかさん、ゆりさんは、今大事な時期だし、ひかりちゃんはお店のお手伝い、満ちゃんや薫ちゃんも、咲ちゃんの家でお手伝いしてるし、うららちゃんもお仕事だろうし、他の人達も部活があるだろうし・・・くるみとダークプリキュア5ならナッツハウスに居ると思うけど、後暇そうな人と言えば・・・のぞみちゃん!!」

「ラブちゃん、そんな事言ったらのぞみちゃんに悪いよ!」

「エツ!!?そうかなあ・・・アハハハハ」

ラブの脳裏に真つ先にのぞみが思い浮かぶ、祈里に注意されると、ラブは苦笑を浮かべながら、せつなに、くるみやダークプリキュア5、そしてのぞみも呼ぼうと伝え、三人は何処かへと消え去った・・・

加音町を探し回る響、奏、エレン、アコ、そして、ハミイとフェアリートーン達は、何個かの音符達を見付け保護していた。ハミイは、フェアリートーン達の中に保護してあ

る音符達を眺めご機嫌だった。

「後は、ハウリングから伝説の楽譜と音符を取り戻せば万々歳ニヤー！」

そんな一同の様子を木の上から眺めていたピーちゃん、両目が妖しく光と、響達の周りだけ時が止まったように静まりかえる。フェアリートーン達が保護していた音符が何かの力に吸い寄せられるように出てくると、音符達は羽ばたいて飛び去ったピーちゃんの後、釣られるように飛び去っていった・・・

### 3、狙われたキュアモジュール

「のぞみ、あんたも随分暇なのね？」

「エッ!? べ、別にそんな事ないもん！」

りんは部活、かれんは生徒会の手伝い、こまちは図書館で勉強、うらはは仕事、くるみやダークプリキュア5がナッツハウスで生活しだしてから、のぞみは昔のように、学校帰りにナッツハウスに顔を出すのが恒例となっていた。

「私は来てくれて大歓迎よ！」

「ダークドリーム、あなたもその内また来たの?と思うようになるわよ！」

「くるみと違うもん・・・ねえ！」

くるみには頬を膨らまして舌を出すも、ダークドリームに相槌を打つのぞみに、ダー

クドリームは苦笑を浮かべる。

カランカランと玄関のドアのベルがなると、のぞみは階段を下りながら、

「すいません！今は営業してないんです……って、ラブちゃん、せつなちゃん、祈里ちゃん、どうしたの？」

「アハハハ、やっぱりのぞみちゃん来てたね！」

「本当に居るとは思わなかったわ！」

「二人共、のぞみちゃんに悪いよ！」

「エツ!? どういう事?もしかして……ラブちゃんやせつなちゃんも、くるみと同じ事考えてたでしょう?」

口を尖らせて拗ね始めるのぞみに、ラブとせつなは顔を見合わせ苦笑し、祈里は申し訳なさそうな表情をするのだった。

「のぞみちゃん、そう拗ねないで!はい、ドーナツの差し入れ!のぞみちゃん、くるみやダークドリーム達も一緒?」

「やったく!うん、みんな居るよ!!さあ、上がって、上がって」

「ちよつとのぞみ、勝手に仕切らないでよね!全く……三人共いらつしやい!何か用事?」

二階から顔を出したくるみが三人に声を掛けると、階段を上がりながら、真顔になっ

たせつなが音符の事を伝える。のぞみもくるみも、ダークプリキュア5達も、真剣にせつなの話しを聞くと、

「確かにそうね・・・せつな、私からの提案だけど・・・ひかりも呼んだ方が良いわ!」  
「ひかりを?でも、ひかりはお店の手伝いがあるから無理強いは・・・」

「今はそんな場合じゃないでしょう?良く考えて!私達、メイジャーランドでハウリングと戦った時、ミント、サンシャイン、ビートが張ったバリアーさえも、あいつの攻撃の前には通用しなかった・・・でも、ルミナスのバリアーは奴の攻撃を防いだ!これは非常に重要な事よ!!」

くるみからの提案を聞き、あの時の戦いを思い浮かべるのぞみ、ラブ、せつな、祈里、確かにハウリングとの戦いが起こった時を考えれば、ルミナスが居る、居ないでは大分違う事を理解する。

「分かった!せつな、ひかりちゃんにも協力して貰おう!じゃあ、私達これからTAKO CAFEに行くてくるから、のぞみちゃん達は此処で待機してて・・・行こう、ブツキー!せつな!」

「うん!」

「分かったわ!」

せつなはラブと祈里と共に、ひかりを迎えに瞬間移動をして消え去った。くるみは腕

を組みながら、

「正直、このタイピングでハウリングに現われて欲しくはないわね・・・もし戦うとなれば・・・かなりの苦戦をする事を覚悟した方が良いわね！」

「あなた達がそれ程警戒するなんて・・・それ程の相手なの？」

くるみの言葉を受け、ダークミントがそれ程の相手なのか問うと、無言で頷くのぞみとくるみ、まだ会った事はないが、ダークプリキュア5にもハウリングの凄さが伝わってくる。

だが、少女達のその瞳には、正義の闘志が燃えていた・・・

「アア、ニャー！ウウ、ニャー！」

フェアリートーン達の中で保護している音符を覗き見たハミイは、激しく動揺していた。さつきまで有った音符達が、全て居なくなっていたのである。挙動不審な態度を取るハミイに、四人は顔を見合わせ首を捻り、エレンがハミイに問い掛ける。

「ど、どうしたの、ハミイ？」

「セイレーン・・・音符が、音符が、消えちゃったニャアアア!!」

「「「エエツ!?!」」」

まるでムンクの叫びのような表情で告白したハミイに、四人が思わずハモリながら驚

く、さつきまでは確かに有った筈の音符は、やはり何処かに消え去っていた。

「そんなあ・・・私達が気付かない間に居なくなつたつていうの?」

「でも、それならフェアリートーン達が気付く筈よ!」

響の言葉に奏が反応し、フェアリートーン達を見ると、フェアリートーン達も悄気返りながら、何時消えたのか分からないと答える。音符は一体何処に消えたのか?もう一度辺りを見回すも、見つかる事は無かつた・・・

「これは・・・どうも1月からパイプオルガンの音がズレとる!直しても、直しても、日に日に音のズレが酷くなつておるような・・・」

音吉は、オルガンの前で調整を行つていたのだが、直しても、直ぐに音がズレる事に表情を曇らせていた。これもハウリングのせいなのか?それとも・・・音吉の心に警戒心が沸き起る。

その時、バサバサ羽を羽ばたかせながら、ピーちゃんがピアノの上に止まる。

「おお、ピーちゃんか、アコ達と一緒にでは無いのか?」

微笑みながらピーちゃんに話し掛けた音吉に、ピーちゃんの目が妖しく輝くと、オルガンのパイプがミシミシ軋み始め、加音町一帯にオルガンから不快な音が響き渡つた。

「(、これは一体!?!まさか、お前は・・・)」

「ギャアアス!!」

驚愕する音吉を、ピーちゃんはまるで嘲笑うように一鳴きした。そこにドアを勢よく開けて、響、奏、エレン、アコ、ハミイとフェアリートーン達が駆けつける。

「音吉さん、今の音は一体!?!」

「音吉、今調べの館から、一瞬邪悪な気配を感じましたが?」

響、そしてヒーリングチエストから顔を出したクレッシェンドトーンが、音吉に問い掛ける。アコも慌てて音吉に話し掛けたのだが、

「お爺ちゃん・・・エツ!?!ピーちゃん、何時戻って来たの?」

ピーちゃんは四人の側にやって来ると、甘えるようにピーピー鳴いて辺りを歩き回る。思わず顔を綻ばせる四人に、音吉が叫ぶ、

「騙されるな!!ピーちゃんの正体は・・・ノイズじゃったんじや!!」

「!!エツ!?!」

音吉の言葉を受け、ピーちゃんを瞬時に見つめる四人、目の前のピーちゃんは、継ぎような目を四人に向けた。

俄には信じられない話だった・・・

だが、音吉が嘘を言う筈がない・・・

一同の心に、ピーちゃんへの疑惑が沸き起った・・・

「ギャアハハハハ!!」

ピーちゃんはそのれに気付いたのか、不気味な笑い声を響かせると、窓を割り外へと飛び出した。直ぐに後を追う四人の前に、遂に沈黙を破り奴が現われる・・・

どこか狼を連想させる金色の髪をした紫色の魔獣・・・ハウリング!!

ハウリングは伝説の楽譜を手に持ち、ノイズが奪った音符を楽譜に戻すと、

「ノイズ様、音符は全て集まりました!後は・・・」

ギロリと四人を睨み付ける真つ赤な瞳、四人はキュアモジュールを手に持つと、

「せつなさんは間に合わなかつたけど・・・私達だけで、行くよ!!」

「ええ、私達だけでも、ハウリングから取り戻しましょう!!」

響、奏の言葉に無言で頷くエレンとアコ、それぞれパートナーを呼ぶと、

「[[[[レッツプレイ!プリキュア!モジュールション!!]]]]」

四人の身体を、リボンが全身を覆っていくように衣装を身に着けていく。

「爪弾くは、荒ぶる調べ!キュアメロディ!!」

「爪弾くは、たおやかな調べ!キュアリズム!!」

「爪弾くは、魂の調べ!キュアビート!!」

「爪弾くは、女神の調べ!キュアミューズ!!」

「[[[[届け!四人の組曲!!スイートプリキュア!!!]]]]」



変身を終えた四人が、ノイズ、そしてハウリングに対しポーズを取った。

「何だ!? この俺様を相手に・・・たった四人で戦おうと言うのか? まあいい、俺様も貴様らに用があるからな・・・」

「どういう事?」

ハウリングの言葉が引つ掛かり、思わずメロデイが聞き返すと、

「な〜に、これだけではまだ不幸のメロデイを完成させる事は出来ない! あと四つ・・・貴様らの胸に輝くキュアマジューレ! その中にあるハートのト音記号・・・それさえ奪えば・・・不幸のメロデイは完成する!!」

ハウリングが話した内容を、メロデイ達四人は知らなかった・・・

アフロディテは、敵を欺くために、その事を黙っていたのだが、ハウリングに体内に入られた時、その秘め事は無残に敵に知れ渡ってしまった。

「あんな達に渡さなければ済む事よ!!」

ハウリング目掛け一斉にジャンプした四人に対し、

「ゼタ・ファイヤー!!」

大きく口を開けたハウリングから、猛烈な炎がプリキュア達を襲った・・・

直撃は免れたものの吹き飛ばされる四人、ハウリングは、先ずリズムを左手に捕らえると咆哮する。顔を強張らせ何とか脱出を試みるも、リズムはハウリングの手から逃れ

る事が出来なかった。

「リズムウウ!!ハウリング!!リズムを離してえ・・・離さない!!」

立ち上がったメロディは、ハウリングの顔面目掛け突進する。ヨロヨロ立ち上がったビートとミュージズは、その無謀ともいう行為に無茶だと叫ぶも、メロディの耳には届かない。

「せつなああ!早く、早く戻って来てええ!!」

絶望的な展開に、思わず叫び、せつなを呼ぶビートだった・・・

「離せ、離してよ!リズムウウ!!」

「メロディイイ!!」

必死に手を伸ばし合う二人、ハウリングはそんな二人を嘲笑うように、メロディに強烈な右アッパーカットを浴びせ、上空に飛ばされ朦朧としたメロディを右手で掴むと、今日の所はこいつらで我慢しておこう!ノイズ様、マイナーランドに戻りましょう!!」

「ギャアアス!!」

ノイズはハウリングの肩に留まると、上空の空間が歪む、

「待つて!メロディを、リズムを返してええ!!」

「そんなああ」

「ビートオオ!ミュージズウウ!」

「メロディイイ！リズムムウ！」

互いに呼び合う名と名、だが無情にも、メロディとリズムは、ノイズ、ハウリングと共に空間の中に消え去った……

その場に崩れ落ち、ビート、ミューズ、そして、ハミイとフェアリートーン達は泣き叫んだ……

「エッ、一緒に行ってくれるの？ありがとう、ひかり！」

ひかりを訪れたせつな、ラブ、祈里の申し出を、ひかりは快く承諾した。せつなは嬉しそうな表情を浮かべひかりの手を握り感謝する。ひかりは首を振り、

「礼には及びません！こういう時ですし、アカネさんには、前もって頼んでありますから……それより、嫌な予感がします！急ぎましょう!!」

ひかりの言葉を受け三人は頷くと、ナッツハウスに舞い戻った。

マイナーランド……

不気味さ漂うこの国に浚われたメロディとリズムは、キュアモジューレを奪われ、ハートのト音記号を奪われると、二人のキュアモジューレは、役目を終えたように石化していた。

もう、変身する事は出来ない……

響と奏の心を不安が迸る……

響は、そんな心を払拭するようにハウリングに対し、

「ハウリング、私達をどうする気？もう、私達に用は無いでしょう!!加音町に帰して!!!」

「ああ、帰してやるさ……ただし、我がマイナーランドの戦士としてな!!」

ハウリングの目が妖しく光と、響と奏の頭部を闇が覆った。

「な、何、これは、前が見えない!何も聞こえない!!奏、奏何処?」

「響いい!嫌……一人にしないでえ!!」

闇によつて視界を遮られ、音を奪われた響と奏は、パニックを起こしていた。そんな

二人を嘲笑うハウリング、

「さあ、北条響、南野奏、復讐の時は来たぞ!お前達を見捨てたキュアビート、キュア

ミューズ、奴らのキュアモジューレを奪い取るのだ!!」

「違う!二人は私達を見捨てたり何てしない!!」

「ビートも、ミューズも、私達の大切な仲間よ!!」

響も、奏も、お互いを感じない状況下であっても、二人の心は一緒だった。だが、ハ

ウリングの言葉が、悪のノイズが、二人の耳に呪文のように繰り返されていく……

「ビートも、ミューズも、お前達を……見捨てた!見捨てた!見捨てた!見捨てた!見捨てた!見

捨てた………」

響と奏の瞳から、徐々に光が消え去ろうとしていた……

「ビートも、ミュージズも、私達を……見捨てた」

「復讐の時は……来た!!」

「そうだ! それでいい!!」

何かの暗示に掛かったように、二人がポツリと言葉を漏らす。ハウリングはニヤリとしながら響と奏を見つめていた……

三人がひかりを連れて戻って来た事で、のぞみ達7人も加わり、せつなは再び加音町の調べの館へと戻って来た。だが……

「これは一体?!」

11人の少女達の前では、膝を抱え泣きじゃくるエレンとアコ、ハミイとフェアリートーン達の姿があった。

「エレン、アコ、一体何があったの?」

せつなは、泣きじゃくるエレンとアコに優しく話し掛けるも、せつなを見つめるエレンの目は険しかった。

「どうしてえ!? どうしてもっと早く来てくれなかったのおお?」

「ゴ、ゴメンなさい・・・エレン、落ち着いて!!」

「落ち着ける訳無いじゃない! 響を・・・奏を・・・ハウリングに浚われて・・・落ち着ける訳・・・無い・・・」

響と奏をハウリングに浚われたと聞き、のぞみ達の表情が一気に険しさを増した。悲し気な表情を浮かべたハミイは、

「セイレーン・・・せつなの所為じゃ無いニヤ!」

ハミイに窘められたエレンは、再び溢れる涙を拭いながら、

「分かつてる、私にだって分かつてる! 目の前で二人を浚われた私が、一番悪いのは分かかってる! でも・・・でも・・・」

再び止め処なく涙が溢れ出すエレンの身体を、せつなは優しく抱きしめ謝ると、感極まったエレンは、せつなに縋り付き、ゴメンなさいと謝りながら泣き続けた。のぞみ達、ラブ達も、沈痛な面持ちでその様子を見守り続けた・・・

ラブは、ギユツと拳を握りしめる・・・

ラブは心の中で、嘗て目の前でシフォンを、ノーザに連れ浚われた事を思い出していた。

(二人の悔しい気持ちは・・・私にも分かるよ!!)

「エレン、アコちゃん、泣いてたって始まらない・・・行こう、マイナーランドに! 響ちゃ

んと奏ちゃんを助けに!!」

何かを決意したように、ラブが口を開くと、ハツする一同、

「待つてよ、ラブ! 気持ちは分かるけど……」

くるみにも、ラブが言いたい気持ちは理解出来た。以前、満と薫、せつなの偽物に、目の前でココとナツツ、シロップを浚われた事があったのだから……

あの時の深い哀しみを思えば、今のエレンとアコの気持ちは当然理解出来た。だが、あの時と違い、敵の本拠地にこの少人数で乗り込めば、下手をすれば全滅する可能性も否定できなかつた。

「くるみ、私もラブちゃんと同じ意見だよ!!」

「はい、敵も油断している筈です! 其処を付けば、二人を助け出す事も……きつと出来る筈です!!」

躊躇（ちゆうちよ）するくるみに、のぞみとひかりもラブの意見に同意する。ダークプリキュア5も頷くと、くるみはハアと溜息を付くも、直ぐに気持ちを切り替え、目を輝かせると、ラブの案に同意した。エレンとアコは、改めて一同の顔をマジマジと見つめると、

「みんな……一緒に行ってくれるの?」

「本当に良いの?」

「当たり前でしょう！行こう、エレン、アコ、響と奏を助けに!!」

「うん」

せつなの言葉に、エレンとアコは涙を拭い領いた。ラブは祈里を見ると、

「ブツキー！悪いけど、ブツキーは加音町に残って、他の人達はこの事を知らせておいてくれるかな？」

「エツ!!?・・・うん、良いけど、私も行かなくて大丈夫？」

「今回は、ハウリングと戦う事が目的じゃなく、響ちゃんや奏ちゃんを救う事が目的だから・・・後をお願いね！」

「分かったわ！みんな、気を付けてね!!」

ラブの言葉に同意し、祈里は他のメンバーに連絡を取る為加音町に残る。

「じゃあ、みんな！行くよ!!」

のぞみの言葉に領いた一同が変身アイテムを手に取ると、

「プリキュア！メタモルフオーゼ!!」

「スカイローズ！トランススレイト!!」

「チェインジ・プリキュア！ビートアツプ!!」

「ルミナス！シャイニングストリーム!!」

「レッツプレイ！プリキュア！モジュールシヨン!!」



「みんな、響さんと奏さんを救出して無事に戻って来るって……私、信じてる!!」  
ドリーム、ローズ、ピーチ、パッション、ルミナス、ダークプリキュア5、そして、ピートとミューズの12人のプリキュアが、響と奏を救出する為、マイナーランドへと向かい、祈里は、そんな一同が無事に戻って来るように、心の底から思うのだった・

#### 4、悲痛な決意

「ちよつと、落ち着いてブツキー! 一体どうしたの!? 何があつたの?」

「だから、響さんと奏さんが、ハウリングに浚われちゃって……ラブちゃんとせつなちゃん、のぞみちゃんとかるみさん、ひかりさん、ダークプリキュア5達が、浚われた響さんや奏さんを助けに……マイナーランドに乗り込んだの!! 美希ちゃん、悪いけどここに来れないかなあ?」

電話の向こうで、祈里が激しく動揺しているのが分かった美希は、祈里に落ち着くように伝える。少し落ち着いた祈里の言葉を聞き、頭の中で整理を終えた美希の顔色が変わる。

「全く、ラブ達無茶すぎよ! 分かったわ! ブツキー、えりかにはあたしから連絡入れるから、ブツキーはなぎささん達、咲達、かれんさん達に連絡入れといて、あたしも調べの館に向かうわ!!」

「ゴメンね、美希ちゃん・・・お願い!!」

美希が加音町に来てくれると聞き、祈里はホツと安堵すると、なぎさ達に連絡を試みた・・・

マイナーランド・・・

不気味な祭壇のような場所に現われた一同が、辺りをキョロキョロしていると、

「ほう、貴様らの方から現われるとは・・・正直驚いたぞー!」

ノイズを肩に乗せながらゆっくり姿を現わすハウリング、ビートは険しい表情になると、

「ハウリング! 響と奏を帰して!!」

ビートがハウリングを指差し、響と奏を帰してと問い詰めるも、ハウリングは不気味に笑い、

「帰してやってもいいぞ? お前達のト音記号を渡せばな!!」

「ふざけないで! 誰があんた何かに・・・」

身構えるビートの呼吸に合わせるように、他のプリキュア達も身構えた。

「北条響、南野奏、態々向こうから来てくれたぞー!」

ハウリングの言葉を受け、ゆっくり、ゆっくり、姿を現わした響と奏の姿を見て、一

同はホツと安堵する。

「響、奏、良かった・・・無事で良かった!」

目頭に涙を浮かべたビートだったが、二人の表情は険しかった。それどころか、ビートとミュージズを見つめる視線には、憎悪すら浮かんでいた。

「ビート、ミュージズ、お前達二人は・・・私達を見捨てた!!」

「エツ?!」

「自分達が助かりたい為に・・・私達を見捨てた!!」

「ふ、二人共、一体何を言ってるのよ!!」

「私達、そんな事思つて無いよ!」

怒みの籠もつたような目で、ビートとミュージズを見つめる響と奏に、ビートとミュージズは顔を見合わせ驚愕する。ビートは慌てて首を振りながら、

「ち、違う! 違うわ!! 確かにあの時あなた達を救えなかったけど・・・見捨てた何て・・・酷い!!」

「現にお前達は、私達より自分のキュアモジュールを選んだじゃないか?」

「そう・・・それがあなた達の本心なのよ!」

ビートの言い訳を、指を指しながら否定する響と奏、ビートとミュージズは困惑しながら、必死に二人に弁明するも、響と奏には通じない。そんな四人の姿を、ハウリングと

ノイズは楽しそうに見つめていた。

「ビート、ミュージズ、響さんと奏さんは……ハウリングに操られて居るようです！」  
「響と奏か？ そんなあ……」

ルミナスの言葉を受け、益々動揺するビートとミュージズ、

「あれが……ハウリング？」

「ええ、そして、メイジャーランドの妖精だと思っていたピーちゃんこそが、ノイズ!!」  
初めて見たハウリングからの不気味な気配に、ダークプリキュア5達に緊張が走った。ミュージズの言葉で、ピーちゃんこそがノイズという事も分かり、表情が険しくなる。

「二人を利用する何て、許せない!!ビート、そしてミュージズは、響ちゃんと奏ちゃんをお願い! 私達がハウリングを食い止める間に、何とか二人を元に戻して!! 行くよ、みんな!!!」

ドリームの言葉を受け、ハウリングに攻撃を開始する一同、ノイズは素早く羽ばたき、柱の上へと降り立った。

ローズとピーチが格闘攻撃を仕掛けるも、ハウリングは二人の攻撃を余裕で捌き、シューティングスターで突撃したドリームの攻撃をも跳ね返した。ならばと、ダークレモネードのダークネスウィップでハウリングの両手を絡めるも、逆に上空高く振り回され地面に叩き付けられる。

「そんな攻撃、ビクともせん．．．食らえ、ゼタ・ファイヤー!!」

大きく口を開けたハウリングから、猛烈な炎が吐き出されるも、前に出たルミナスが、バリアーを張り何とか堪える。

ルミナスに攻撃を止められ、一瞬のハウリングの動揺を見逃さず、上空からダブルドリムがシューティングスターとダークネススターで突っ込み、ローズ、ピーチ、パッションがパンチを繰り出しハウリングを吹き飛ばした。

「チッ！俺様に逆らうか？貴様らが攻撃するなら．．．あの二人に殺し合いをさせても良いんだぞ？」

ハウリングの言葉を表すように、響と奏が互いの喉元にナイフをあてる。

「卑怯よ!!」

「さあ、お前達も向こうでおとなしくしてもらおうか？」

ドリム達は唇を噛みながら、ハウリングから距離を取った。

「お前達のキュアマジューレを．．．私達に差し出せ!!」

響はビートの、奏はミューズの本ジューレを奪おうと試みる。ビートもミューズも涙ながらに止めるように訴えるも、二人の耳には届かない．．．

ビートは、ミューズに目で何か訴えると、ミューズも頷き、二人は変身を解き、エレンとアコの姿へと戻った。その行為には、響と奏も驚愕の表情を浮かべた。

「もう・・・止めよう！響や奏、ハミイが居てくれたから、今の私は居る。あなた達が苦しみから解放されるなら・・・キュアモジュールは、渡すわ!!」

「エレン、あなた何言つて・・・ドリーム?」

ローズがエレンを止めようとするのを、ドリームが無言で制止し、成り行きを見守る。

「私も・・・響や奏、プリキュアのみんなが居てくれたから、パパもママも救えた！そして、私もありのままの自分を出せたんだよ！今度は二人を・・・私が救いたい!!」

「ハウリング、キュアモジュールは渡すわ！その代り、響と奏にこれ以上・・・もうこれ以上酷い事はしないで!!」

そう言うと、エレンとアコは響と奏を抱きしめ、ゴメンねと謝り涙を流す。二人の涙が響と奏に溢れた時、響と奏の瞳からも、止め処なく涙が溢れ出していた・・・

「良いだろう！さあ、モジュールをこちらに投げろ!!」

ハウリングの言葉に頷き、エレンとアコがモジュールを投げると、二人のモジュールからト音記号が現われハウリングの手に渡った。今、伝説の楽譜に不幸のメロデイが完成する・・・

「フハハハハ、遂に、遂に、不幸のメロデイが完成した!!」

「ギャアアス!!」

「最早このマイナーランドも無用の長物、不幸のメロディに相応しいステージで、全世界に響かせてくれる・・・その前に、もうお前らに用は無い！死ぬ!!」

ハウリングからのエネルギー波が、響と奏に発せられる。エレンとアコは、二人を庇い吹き飛ばされる。目の前で飛ばされるエレンとアコの姿を見て、響と奏の瞳に光が完全に戻った！

「エレン！アコ！ゴメン・・・ゴメンね！」

「二人共、私達のせいだ・・・」

「響、奏、良かった・・・元の二人に戻って！」

「本当にゴメン・・・」

「ううん、謝るのは私の方、響、奏、辛い思いをさせてゴメンね！」

響が、奏が、エレンが、アコが、四人が抱き合いながら泣き崩れた・・・

そんな四人を見たハウリングは、鼻で笑うと、

「止めだ！消えろ!!」

「させるもんですかああ!!」

四人を庇うように立ち塞がるドリーム、ピーチ、パッション、ローズ、ルミナス、ダークプリキュア5、自分達を助ける為に、ビートとミューズと共に、危険を承知で駆け付けてくれたドリーム達を見て、響と奏は、顔をクシャクシャにして泣きじゃくりながら、

「みんなぁ……」

「みんなにも迷惑掛けて……」

「私達……取り返しの付かない事を……」

泣きじやくる二人に、振り向いた一同は穏やかな表情で、無事で良かったと二人に話すと、

「みんな、響ちゃんと奏ちゃんは救えた……一旦引くよ!!」

ピーチの言葉に一同が頷くと、パッションの力で加音町へと瞬間移動した。

「逃げたか……まあいい!最早、マイナーランドなど不要!!行きましょう、ノイズ様!あなたの復活に相応しい次なるステージへ!!」

「ギヤアアアアス!!」

ハウリングの言葉に満足そうに一鳴きし、二人は何処かへと消え去った……

第三十五話：奪われたキュアモジュール

完



## 第三十六話：決戦の朝！

1、もう、プリキュアにはなれない・・・

調べの館に戻った一同を待っていたのは、祈里だけでは無かった・・・

深刻な顔をした、大切な仲間達がそこには居た・・・

「ラブ、せつな、何であたし達に直ぐ連絡しなかったの？」

「のぞみも、くるみもだよ・・・あんた達、無茶しすぎだよ!!」

「ひかりも！あんた達の事、みんな心配してたんだよ？・・・でも、響と奏は無事に助け出したんだね」

美希が、りんが、そしてなぎさや他の一同が、無事な響と奏の姿を見て、ホッと安堵の表情を浮かべた。

ラブ、せつな、のぞみ、くるみ、ひかりは、申し訳無さそうに一同に謝ると、慌てて響が言葉を挟み、

「みんな、違うの！みんなは、敵に浚われた私達の為に、危険を承知で駆けつけてくれた・・・悪いのは私達なの!!私達の所為で・・・不幸のメロディが、不幸のメロディが完成しちゃったの！どんなに謝っても許されないけど・・・ゴメン、本当に・・・」

止め処なく涙が響と奏から溢れる・・・

何度謝つても許される事では無いと、二人は泣きながら謝り続ける・・・

そんな二人をえりかが遮ると、

「ストゥ〜プ!! あたし達、誰も響や奏を責めてないよ! 悪いのはあいつら何だしさ!」

「えりかの言う通りです! 響さんや奏さんが気に病む事何てありません!! こんな非道な行ないをするなんて・・・私、堪忍袋の緒が・・・切れましたああ!!」

えりかが、つぼみが、一同に泣きながら謝り続ける響と奏を庇い、目に炎を灯らせて悪いのはハウリングとノイズだと文句を言い、いつきは苦笑を浮かべるも、直ぐに真顔になり一同を見ると、

「みんな揃ったし、これからマイナーランドに乗り込みますか?」

いつきの言葉に反応し、慌てて響が申し訳なそうに、

「みんな、私と奏、エレンとアコは・・・ハウリングにト音記号を奪われた事で・・・もう、プリキュアになる事は出来ないの・・・」

響の言葉にざわめく一同、ゆりは険しい顔で、

「それは本当なの!? なのに、ハウリングが現われないのは何故かしら?」

「そうね・・・不幸のメロデイが完成したのなら、音吉さんのオルガンを忌み嫌うノイズの事、真っ先に襲ってきそうな気もするけれど・・・」

ゆりの言葉にほのかも同意し、何故襲つて来ないのか疑問が沸き起つていた。

「ハウリングはこんな事を言っていました。最早このマイナーランドも無用の長物、不幸のメロディに相応しいステージで、全世界に響かせてくれるつて」

ひかりの言葉を聞き考え込む一同、ほのかの脳裏を、ある催しが思い描かれる。

「クリスマス・・・そうよ、クリスマス何だわ！」

「ほのか、どう言う事？」

「不幸のメロディに相応しいステージとは・・・加音町で開かれるクリスマスコンサート  
の事じゃないかしら？」

ほのかの思い付いた事がイマイチ理解出来ず、なぎさが問い返すと、不幸のメロディを、幸せの絶頂であるクリスマスの日に歌えば、幸せから不幸に、人々の悲しみの心は一層深まるだろうと語る。

ほのかの予想に、ゆりもかれんも同意する。

「ノイズ、ハウリングとの決戦は・・・加音町のクリスマスコンサート!!」

ほのかの言葉に頷く一同、響は、自分達はプリキュアにはなれないが、みんなのサポートをする事を心の中で誓った・・・

2、それぞれの思い

そして、加音町クリスマスコンサート当日を迎えた・・・  
少女達は今・・・

美墨なぎさ・・・

「メリークリスマスアアス!!」

24日、朝からテンションの高いなぎさに、父岳、母理恵、弟亮太は顔を見合わせキョトンとした顔をする。

「なぎさ、浮かれるのは良いけど、勉強の方、大丈夫でしようね?」

「アハハハ、ほのかとちゃんとしてるし、大丈夫・・・かな?」

「まあまあ、お母さん、なぎさもクリスマスくらい、苦しみますから解放されたいよなあ?」

「お父さんったら、クリスマスと苦しみますを掛け合わせるなんて・・・最高!!」

「何処が?」

笑い合う岳と理恵に、亮太は冷めた視線を浴びせる。なぎさはそんな光景を胸に焼き付けるようにジッと見つめていた。

本来なら、センター試験間近で大変な時期である。受験生に取ってはクリスマス所では無いであろう・・・

だがなぎさは、ほのかとゆりと共に、プリキュアとしての使命を優先する事を選んだ……

部屋に戻ると、心配そうにメップルが話し掛けてくる。

「なぎさ、何か変メポ……」

「しよが無いじゃない！これから、私達にはしなければならぬ事があるんだよ！」  
響達四人の分まで、自分達が戦って見せると、なぎさは心に誓いを立てた……

月影ゆり……

ゆりは朝早くから起き、父の写真の前にご飯を盛りつけ拝んでいた。

(こんな時に、ダークプリキュア！あなたが居てくれたら……)

不安な心がそう思わせたのか、ゆりは思わずダークプリキュアの事を思い出した。  
ダークプリキュアが居てくれれば心強い、そう思った時、ゆりの母春菜がゆりに声を掛けた。

「ゆりちゃん、おはよう！早いよね？あらあ、お父さんにご飯の用意をして……そうね、クリスマスぐらいは良いわよね」

「お母さん、おはよう！ゴメンなさい、ちよつとお父さんと話したくて……」

「ううん、良いのよ！じゃあ、朝ご飯にしましょう!!」

春菜が台所へと向かうと、先程中断した父、そしてダークプリキュアへの報告をする為、ゆりはもう一度父の写真を拝み、

（お父さん、あの時交わしたお父さんとの約束・・・お母さんを頼む！もしかしたら、果たせないかも知れませんが・・・でも私達は、プリキュアとしてこれから決戦の地へと向かいます！・・・駄目ね、こんな弱気になる何て・・・お父さん、ダークプリキュア、私達を見守って下さい!!）

ゆりはキツと目を開けると、母の手伝いをする為台所へと向かった・・・

九条ひかり・・・

「ゴメンなさい、アカネさん・・・クリスマスなのに・・・」

「いいって！どうせクリスマスに、たこ焼き買う人何てそんなに居ないからさ、毎年この時期は忙しくないし、息抜きしておいで!!」

「お姉ちゃんの分も、僕が手伝うから大丈夫だよ!」

「ありがとう・・・アカネさん、ひかる」

ひかりは、二人に満面の笑顔を浮かべた・・・

この平和な一時を奪う事はさせない・・・

ひかりは固い決意を胸に秘めた・・・

美翔舞・・・

朝の美翔家の食卓、自分の夢への思いを果たす為、毎日欠かさない牛乳を飲みながら朝食を取る和也、新聞を読みながらコーヒーを啜る父弘一郎、夕べも遅くまで仕事をしていたのか、まだ眠たそうに時折欠伸をする母可奈子、そんな家族の様子を、舞はスケッチブックに描き続けていた。

「何だ、舞!?!熱心に描いて・・・何時も見慣れている光景だろうか?」

「そうだけど・・・ちよつとね!」

和也が首を捻りながら舞に訪ねると、舞は恥ずかしそうにしながらも、再び熱心に家族の姿をスケッチし続けた。まるで、家族との思い出を胸に焼き付けるように・・・

「舞、熱心に描き続けるのは良いけど・・・咲ちゃん達と約束してるんじゃないの?早く食べないと、待ち合わせに遅れるんじゃないの?」

可奈子に注意された舞が時計を見ると、舞は慌ててパンをかじり、咲の家へと出掛けて行った・・・

日向咲、霧生満、霧生薫・・・

「ゴメンなさい!本当に、ゴメンなさい!!」

「其処まで必死に頼まれちゃしようがないなあ・・・」

「そうね、舞ちゃんや霧生さん達も一緒なのかい？」

「うん、此処で待ち合わせしてるから・・・みんな揃ったら出掛ける!」

咲の両親が営むベーカリーPANPAKAPANは、ケーキも販売していて、クリスマスの日々23日と25日は特に大忙しで、咲も本来なら手伝いをしなければならないのだが、咲は、父大介、母沙織に必死に頼み込み、今年は免除してもらっていた。

「おはようございます!」

「この声は、薫お姉ちゃんと満お姉ちゃんだあ!」

嬉しそうな咲の妹みのりが、咲より早く飛び出し、薫に抱きつき出迎えた。薫も満もみのりを見てニツコリ微笑み、

「みのりちゃん、メリークリスマス!」

「メリークリスマス!!ねえ、薫お姉ちゃん、みのりも一緒に行つて良いでしょう?」

「エッ!?それは・・・」

みのりの言葉に顔を見合わせ戸惑う満と薫、遅れてやつて来た咲は、そんなみのりを窘めた。

「こら、みのり!お姉ちゃん達は、大切な用事があるから出掛けるんだよ!みのりは私の分まで、お父さんやお母さんを手伝つて上げなきゃ駄目じゃない!!さあ、向こうに行つ



た、行った!!」

「ブウウウ!お姉ちゃんのケチ!!」

みのりは、頬を大きく膨らみしながら奥へと引つ込んだ。満と薫は、微笑みながらその後ろ姿を見つめると、

「みんなの大切な日を・・・守らなきゃ」

「ええ、世界に不幸のメロディを響かせる何て・・・絶対にさせない!!」

満と薫、二人の思いに咲も同意し、

「うん、私達プリキュアが・・・」

「「守って見せる!!」」

咲、満、薫は胸に闘志を浮かべた・・・

夢原のぞみ・・・

「はいはい、今日は私が朝ご飯作つたんだよ!食べて、食べて!」

満面の笑顔を浮かべたのぞみ、その顔には卵の黄身が所々付いていた。母恵美と童話作家の父勉は、

「ほう、のぞみの手料理なんて・・・」

「のぞみ・・・全部卵焼き何だけど?」

「アハハハ、エエと、まだこれぐらいしか上手く出来なくて……」

のぞみが進んで手料理を作った事に驚くも、おかずは卵焼きスペシャルとでも言うべき、卵焼きのフルコースに苦笑を浮かべる。

「のぞみもそろそろ、もうちよつとお料理を覚えないとね……」

「そうだね、お母さんの親友の、料理上手な和代さん見たいに、のぞみにはりんちゃんが居るんだから、教わると良いよ!」

「お、お父さん!!」

勉は、りんの母、和代から料理を教わって覚えた恵美の事を思い出し、のぞみもりに習うと良いと微笑むと、娘の前で暴露され、恵美は慌てふためく、

「エツ?!りんちゃんに習って卵焼き覚えたんだよ!!」

のぞみの言葉に、顔を見合わせ無言になる恵美と勉、

(のぞみ、ゴメンね……お母さんに似ちゃったのね……)

トホホ顔でのぞみの頭を無言で撫でる恵美であった。

のぞみは二人に笑顔を向けると、

「私、もつと、もつと、上手になって、お父さんやお母さん、将来のお婿さんに手料理を御馳走するんだあ!!」

のぞみの脳裏に、人間姿のココに手料理を振る舞う姿が思い描かれ、ウツトリするの

ぞみ、だが直ぐに表情を引き締めると、

(その為にも・・・私達は負けない!!)

のぞみの瞳に、闘志が燃え上がった・・・

夏木りん・・・

「ゆう、あい、クリスマススイブだからって浮かれてないで、さつさと片付けしちやいなさい！お父さんも、お母さんも忙しいんだからね！お姉ちゃんも出掛けなきゃならないんだから、あんた達、自分の事は自分でするようにしなきゃ駄目だよ!!」

朝からりん小言を言われ、弟ゆう、妹あいはい、りに舌を出しアカンベエをすると、コノオとばかりに怒ったりりに追い回される。

「りん、朝から何騒いでるの？お母さん達、これから配達に行くから、悪いけど、出掛ける前にお店の前掃いといてくれない？」

「分かった！ほら、あんた達もちゃんと片付けるんだよ!!」

母和代に頼まれ、エプロンをしたりんが店先の清掃を始める。ごく有り触れた何時もの日常、この平和を壊すわけには行かない。りんはこの平和を守る為に戦う事を改めて心の中に誓った・・・

春日野うらら・・・

「はくい、お父さん、お爺ちゃん、うらら特製カレー出来たよお!!」

「おお、これは美味そうじゃ!」

「本当ですねえ・・・うららのカレーは絶品ですからねえ・・・いただきま〜す!!」

朝早くから、母親の残したレシピで作り上げたカレーを作ったうらら、祖父平三、父ミシエルが、美味しそうにガツガツ食べ始める姿を見つめ、うららは微笑みを向けた。

「私の友達のお母さんの名前も、まりあって言うの!最初聞いた時は、驚いちゃったなあ・・・」

うららは、響の母で、かれんの両親と同じく世界的なバイオリスト、北条まりあ的事を二人に語って聞かせると、ミシエルはまりあ的事を薄々知っているようで、

「北条まりあ? うん、耳にした事があるね! のぞみちゃんのお父さんは童話作家、かれんちゃんのご両親も音楽家、そして、亡くなったまりあは舞台女優! うららは才ある人と出会う運命なのかも知れないねえ・・・」

ミシエルはウンウン頷きながら感動するも、直ぐさま再びカレーをガツガツ食べ始める。

うららは二人の食べっぷりを、ニコニコしながら見守り、

(そう、私はのぞみさんと出会えた事で、沢山のひと知り合う事が出来た! もっと、もっと

と、私は色々な人と出会って見たい!!そして、自分の夢を叶えたい!!その為にも・・・  
うららは、心の中で戦い抜く覚悟を改めて誓った・・・

秋元こまち・・・

「こまち、どういう風の吹き回しだい?何か小説の題材でも思い付いたのかい!」

「ううん、そうじゃないの!でも、私もたまにはお姉ちゃんのお手伝いをしたいと思つて・・・」

こまちの実家の和菓子屋小町は、老舗で美味しいと評判だった。こまちの姉まどかは、和菓子屋の後を継ぐ事を決め、大学に通いながらも、熱心に和菓子作りを覚えようと必死だった。そんなまどかを、こまちの両親も口には出さないが、嬉しそうに仕込みの仕方を教えて居た。

(お姉ちゃんの夢は、和菓子を通じてみんなを幸せにする事、私は、小説を通して、みんなに感動を与えるような作品を書く事、道は違うけど、思いは同じ!私達の思いは：)  
不幸のメロディなど歌わせてはいけない・・・

こまちの瞳に強い意志が宿る・・・

水無月かれん・・・

「お母様、いえ、特に用事と言う訳ではないんですけど、久しぶりにお声を聞きたいと思ひまして・・・はい、エツ!? 日本に!? 本当ですか?」

決戦を前に、両親の声を聞きたいと思ったかれんは、悪いと思ひながらも両親の下に電話を掛けると、かれんの母は、正月公演を日本で行うから、年内に日本に帰ってくる事を伝えると、かれんの表情が輝く、電話を切ったかれんの嬉しそうな表情を見て、執事である坂本も、自分の事のように笑顔を向けた。

「よろしゅうございしましたねえ、お嬢様?」

「ええ、ありがとう・・・お父様とお母様が帰ってらっしゃる!!」

満面の笑顔を浮かべるかれんだったが、一口紅茶を口に含むと表情を改め、

(その為にも・・・ノイズの、ハウリングの、好きにはさせないわ!!)

かれんの瞳に、正義の炎が燃え上がった・・・

美々野くるみとダークプリキュア5・・・

「ココ様とナツツ様まで来て頂けるなんて光栄です!」

「気にする事は無いココ!」

「そうナツ、決戦が起こるこの日に、暢気に何かしてられないナツ」

「そうロプ、何が起こるか分からないロプ! シロップ達も、プリキュアの側に居るロプ」

決戦を前にナッツハウスにやって来たココ、ナッツ、シロップ、ナッツは会話をしながらも、小型の懐中電灯のような物を懸命に弄っていた。

「ナッツ様、それは一体?!」

不思議そうに見つめるくるみに、ナッツは組み立て途中の物体を渡すと、受け取ったくるみが色々弄くり回すも、何に使うかは理解出来なかつた。

「それは、ミラクルガイドライト・・・このアイテムを使えば、邪悪な者が現われた時、先端のハートマークが点滅し、異変を知らせるナッツ!そして、このスイッチを押すと: このアイテムを持っている他の者達に、光の道標を示してくれるナッツ」

「それは凄いですねえ・・・これがあれば、仮に誰かが邪悪な何者かと戦って居る場所まで、知らせてくれる・・・と、言う事ですか?」

くるみの言葉に頷くナッツ、だが、その表情は何処か冴えなかつた・・・

「理論的にはそうナツ・・・でも、まだ何かが足りないナツ」

ナッツは、アイテム作りに行き詰まっているようだった。ココは、そんなナッツを心配そうに見つめるも、話題を変えて、少しナッツの気も晴らしてやろうと考えると、

「所で、ダークプリキュア5はどうしてるココ?」

「ええ、彼女達も、此処での生活にすっかり慣れ親しんだみたいです。ああして見ると、普通の人と同じに見えますね・・・」

りんのように、ナッツハウスにある花に水をやり労るダークルージュ、この世界の知識を得るように、ナッツハウスに置いてあった本を読み耽るダークアクア、ナッツハウスの周りを清掃するダークミント、洗濯をするダークレモネード、そして・・・

「はい、くるみに教わって作ってみたの！ホットケーキよ、良かったらどうぞ!!」

ダークドリームは、くるみに教わったと言いながら、今焼き上がったホットケーキを持ってくるとテーブルに置いた。テーブルに置かれた沢山のホットケーキに、シロップは人間姿に変化すると、

「ホットケーキ!!美味そうだなあ・・・頂きまああす」

口に放り込み、モグモグ頬張るシロップの表情が輝く、

「美味しい！ココ、ナッツ、お前らも食って見ろよ!!ダークドリーム、お前料理のセンスあるなあ!!」

そう言いながら美味しそうに食べ続けるシロップ、褒められて少し頬を赤くするダークドリームに、

「本当、誰かさんと違って教え甲斐あるわ!!」

名前は出さずとも、ココ、ナッツ、シロップの脳裏に真つ先に浮かぶ人物、のぞみ!!

「く、くるみ、そう言う事は・・・」

「言わない方がいいナツ」



「そう言うお前らも、真っ先にのぞみの事思い浮かべただろう?」

シロップに凶星を指され、ココとナッツは狼狽えた。一同が笑顔を向ける中、他の四人も戻って来ると、くるみは表情を引き締め、

「こんな日常を無くさない為にも・・・」

「ええ、その為に私達は帰って来たんだから!!」

六人の少女達は、この世界を守る事を誓い合った・・・

蒼乃美希・・・

「美希ちゃん、最近忙しそうだけど、大丈夫なの? ママ心配よ!」

「大丈夫よ、ママ! これくらいで音を上げてたら、一流モデル何て夢のまた夢! そうでしよう、ママ?」

「それはそうだけど・・・何かあったら、さくらさんの所のももかちゃんに相談するのよ?」

「はいはい、ママは心配性何だから・・・」

「だつてええ・・・和ちゃんも最近あまり会いに来てくれないし、美希ちゃんも忙しいし・・・ママ寂しいわ!!」

「もう、ママったら、和希にも時々は会いに来るように言っとくから、今日はクリスマス

イブだし、和希もきつと顔を出すわよ！ねっ!!」

美希の母レミは、最近忙しい美希の事を心配するも、これぐらいで根を上げていては、一流モデルの道は厳しいと美希は思う。子供達がどんどん自分の手から離れていくように、レミは不安を募らせていた。そんなレミを美希が励ます。まるでどつちが母親だか分からない光景であった。

「それじゃ、出掛ける準備があるから!」

美希は自分の部屋に戻ると、大好きな香水をアレンジし、テンションを高めた。

「あたし、完璧!!待ってなさい、ノイズ!ハウリング!あなた達の好きなようにはさせないんだから!!」

美希の瞳に気合いがこもった・・・

山吹祈里・・・

クリスマススイブのこの日も、祈里の家は賑やかな朝を迎えていた。預かっている動物達がある者は吠え、ある者は鳴く、

「みんな、おはよう!昨日はちゃんと眠れた?」

そんな入院している動物達に挨拶して回る祈里、祈里の側にはキルンが飛び回り、動物の話す言葉が祈里の耳に入ってくる。祈里はウンウン頷きながら、動物達との会話を

楽しんでいた。

「祈里、朝ご飯出来たわよ！」

「ハアイ！今行きます!!」

母尚子に呼ばれ、祈里は手を洗い朝食を食べ始める。体格の良い、髭もじやの祈里の父正は、「豆腐の味噌汁を啜りながら、

「祈里、今日は遅くなるのかい？」

「うん、もしかしたら・・・泊まりになるかも!」

祈里の言葉に、思わず飲んでいた味噌汁が器官に入り咽せる正と、不安そうな表情で祈里を見る尚子、祈里は慌てて首を振ると、

「お父さんもお母さんも、勘違いしてるでしょう? ラブちゃん、美希ちゃん、せつなちゃんも一緒だから安心して!! 前に遊びに来た事がある女の子の友達ばかりだから・・・」

「な、何だそうか! 祈里、脅かさなくてくれよ!! ハハハハハハ」

豪快に笑い飛ばす正と、ラブ達と一緒にならとホッと安堵する尚子、祈里はゴメンなさいと苦笑を浮かべると自分の部屋へと戻った。

「さあ、支度しなくちゃ・・・響ちゃん達に分まで、私達が頑張らなくちゃ!!」

プリキュアになれない響、奏、エレン、アコに分まで、頑張る覚悟をする祈里であった・・・

桃園ラブと東せつな・・・

「いやあ、タベからせつちゃんに来てくれる何て・・・嬉しくて、嬉しくて!」

「本当、前もって知らせてくれたら、せつちゃんの好きな料理でも用意して待つてたのに・・・」

「ゴ、ゴメンなさい! 急に来て迷惑でした?」

「何言ってるの! ここはせつちゃんの家何だから、好きな時に帰って来てくれれば良いのよ!!」

「そうだぞ、せつちゃん!」

「はい!!」

せつなが帰って来た事で、ラブの父圭太郎、母あゆみも大いに喜んでいた。せつなも嬉しそうにあゆみが用意した朝食を食べ始める。そんなやり取りを微笑ましく見守っていたラブは、足下の二人に視線を移すと、

「アハハハ、あのう、タルトやシフォンも居るんだけどおお?」

「エエンや・・・わいら何て、所詮オマケ何や・・・」

「ブウウウウ」

拗ねるタルトとシフォンの頭を撫でたあゆみは、

「オマケ何て思う筈が無いでしょう？タルトちゃんも、シフォンちゃんも・・・せつちやんと同じ、家の大事な家族何ですから!!」

そう言ってあゆみが微笑むと、シフォンとタルトは感動してあゆみの胸に飛び込んだ。

「アハハハ、タルトもシフォンも意外と単純だね・・・」

「ピーチはんには言われたくないわ・・・隙ありやああ!!」

ラブが最後に取っていたコロツケを奪い取り、代わりに人参を置いたタルトを追いかけ回すラブ、

「タルトおお、私のコロツケ返せええ!!」

「もう食べてしもうたわあ！代わりに人参を置いて上げたやろう?」

「私が人参嫌いなもの知っててやったなあ!!」

ドタバタ追いかけてつことを続けるラブとタルトに、あゆみはシフォンの名を呼ぶと、シフォンの力によって、二人は強制的にテーブルに引き戻され、あゆみにゴメンなさいをする。

そんな二人を見て、せつなが、あゆみが、圭太郎が笑いだすと、ラブとタルトも笑い合った。何気ない日常かも知れないが、ラブとせつなは、こんな光景を失わさせないようになければと、決意を新たにするのだった・・・

来海えりか・・・

「えりか、珍しいわねえ! あんたが早く起きる何て・・・雪でも降るんじゃないかしら?」  
「もう、いいじゃん! やりかけた衣装が残ってたから作ってたの!! そうだ、もも姉え! 美希姉えが感謝してたよ!」

「エツ!?! 美希ちゃんか?・・・何かしら?」

「ほら、美希姉えに急用が出来たから、その穴埋めにもも姉えが出てくれた事があつたじゃない!」

「ああ、先週の事? それなら美希ちゃんに直接電話でお礼言われたわよ!」

「本当は直接お礼に行きたいんだけど・・・」

ももかが美希の代わりを勤めたのは、ちょうど響と奏がハウリングに浚われた時である。美希は、スタッフに無理に頼み込んであの場に駆けつけていた。別のスタジオで撮影を終えていたももかは、その事を知ると美希の代りを引き受け、その場を乗り切った事があつた。

「もも姉え、完成したら着てみてくれない?」

「エツ、私が!?!」

「そう、あたしがデザインした服を、もも姉えに着て貰いたかつたんだ・・・」

「フウン……」

ももかも、えりかのファッションの才能を認めていた。前に文化祭でゆりと共に特別出演した時、妹ながら、えりかのデザインは抜きん出ていると感じていた。

「えりか、そろそろ朝ご飯食べちゃってよ！」

下から母さくらに大声で呼ばれるえりか、ももかは思い出したのか、

「あつ、いけない！えりかを呼びに来てすっかり忘れてた……ほら、えりか行くよ!!」  
「分かった！さてと……」

えりかは自分の夢の為にも、今日の決戦、必ず勝つぞと気合いを入れた……

明堂院いつき……

「熊本さん、一手お願いします！」

「分かりました……デヤアア!!」

「タアア！」

何処か砂漠の使徒の幹部、クモジャキーに似た赤髪の青年に、組み手を頼んだいつきが鍛錬を行っていた。ただ黙って時を待つより、身体を動かす方がかえって落ち着ける状態だった。

「いつきも髪を伸ばし出したりして、大分本当の気持ち表面に出し始めたわね……」

「そうですね・・・私がもつと早く手術を決断していればと悔やまれます」  
「さつき、気に病む事は無いのですよ!」

いつきの母つばき、いつきの兄さつきが、そんないつきの稽古の様子を見守る。さつきは手術のお陰もあって、再び明堂院流の稽古を出来るほど回復していた。元々さつきも才あるものだったのである。今ではいつきをも上回る技量を身に付けていた。

(僕達プリキュアが取り戻した平和を・・・再び闇の好きにはさせない!!)

自己の鍛錬をし、今日の決戦に備えるいつきだった・・・

花咲つぼみ・・・

背中に背負った妹ふたばと共に、庭の花壇に水をやるつぼみ、ふたばはまだ起きるのは早かったのか、つぼみの背でスヤスヤ眠っていた。

「ふたば、どうですか?綺麗でしょう!お花は心を和ませてくれるんですよ!きつとふたばも好きに・・・って、寝てるし!」

「しょうがないですう!まだまだ赤ちゃんですう!!」

「そうですね、ちよつと早く起こしすぎましたね・・・私も本当はもつと寝ていたかったですけど・・・」

パートナー妖精のシプレと会話するつぼみに、出勤前の薫子が声を掛けると、



「つぼみ、みんなに油断しないように伝えて頂戴！私も力になりたいのだけれど・・・」  
「大丈夫です！お婆ちゃん、みんなの力を合わせれば・・・きつと勝てる筈です!!」

薫子は、心に一抹の不安が過ぎっていたが、あまり不安がらせるのも不味いと思うと、  
「そうね、ゆりちゃん達も参加してくれるし・・・つぼみ、世界を頼んだわよ!!」

「はい!!」

つぼみは薫子に返事を返すと、薫子は満足気に頼もしい孫に微笑みを向けた。

「つぼみ、まだ早いから、ふたばはもう少し寝かせて上げて!」

「はい!今戻ります!!じゃあ、お婆ちゃん行ってらっしゃい!!」

つぼみは、薫子を見送ると、母みずきに言われたように、ふたばを再び寝かす為、家  
に戻ると、

(ふたば、お姉ちゃん頑張ってくるからね!)

スヤスヤ気持ち良さそうに眠るふたばのおでこにキスをし、つぼみは気持ちを新たに  
引き締めた・・・

調辺アコ・・・

アコは不安だった・・・

プリキュアになれない自分達は、一体どうしたらいいのか？朝食の支度を終えた音吉

に、その不安な心を打ち明けると、

「アコ、闇雲に不安がついては、勝てる戦いも勝てなくなってしまうぞお？ お前達には、頼もしい仲間達が付いておるじゃろう……違うか？」

「ううん！お爺ちゃんの言う通り、私達には……大勢のプリキュアの仲間達が居てくれる!!」

アコは音吉に微笑むと、朝食を食べ始めた。例え、自分達がプリキュアにはなれなくても、みんなならきつと何とかしてくれると信じて……

北条響と南野奏……

L u c k y S p o o nでは、クリスマスコンサートで配るカップケーキ作りにてんてこ舞いだった。奏の父奏介、母美空、そして奏がカップケーキを作り、弟の奏太も出上がったカップケーキを袋詰めしていた。

「おはようございまあす！何か手伝う事あれば、手伝いますけど？」

「響、おはよう！」

響は、決戦の今日、中々熟睡する事が出来ず、だったら奏の店の手伝いをしていた方が気が紛れると、L u c k y S p o o nへとやって来た。出迎えた南野家の面々、奏は、響の顔を見るや、自分と同じように、ただ黙って時を待つより、何かをして気を紛

らわしたいんだろうと理解して、思わずクスリと笑んだ。

「じゃあ、響には・・・奏太と一緒に出来上がったカップケーキに、ラッピングでも頼もうかしら?」

「OK!任せて!!」

腕まくりをすると、早速ラッピングを始める響、奏介も美空も、人手が増えるのは心底嬉しかったが、

「響ちゃん、良いのかい?」

「数ヶ月振りにお母さんも帰ってるのに、悪いわあ・・・」

「いやあ、家はまだ二人共寝てるし、ちよつと身体を動かしたい気分だったから・・・」  
テレ笑いを浮かべた響に、奏は、作り終えたカップケーキをお盆に乗せ、響の下に持つてくると、

「それは助かるわ・・・ハイ!追加!!」

「ウツ!?本当に扱き使う気でしょう?」

「まあね!ところで、ハミイは!?!」

「ハミイなら、エレンの所に行つて行ってき!」

響、奏、エレン、アコは、加音町クリスマスコンサートの関係者として、夕方からのコンサート準備に行く事になっていた。着替えは、調べの館の一室を借りているエレン

の部屋でする事を決めた四人、ハミイは、エレンを心配し、先に調べの館に出掛けていた。

「このカップケーキを・・・大勢の人達に笑顔で食べて貰いたいよね?」

「ええ、今の私達じゃ、みんなの役には立てないかも知れないけど・・・」

「私達は、今出来る事をしよう!」

「ええ、みんなを信じて!!」

見つめ合った響と奏、二人は仲間を信じ、再びカップケーキ作りに精を出した。

黒川エレン・・・

「ハミイ、外は寒かったでしょう?こたつで暖まって!」

「セイレーン・・・昨夜は眠れなかったのかニヤ!」

心配そうにエレンの顔を見つめるハミイ、エレンの目の下には隈が出来ていた。エレンはコクリと頷くと、

「何時、ノイズとハウリングが襲ってくるかと思うとねえ・・・」

心配げな表情を浮かべるエレンに、ハミイはエレンの隣に移動すると、

「セイレーン、他のプリキュアのみんなを信じるニヤ!今は、ゆっくり休むのも大切ニヤ!!」

「ありがとう、ハミイ！そうよね．．．みんなが来てくれれば！」

ハミイの言葉に元気づけられたエレンは、ハミイと一緒に顔だけこたつから出すと、二人は楽しげに会話をし、やがて眠りに付いた．．．

雪城ほのか．．．

「お婆ちやま、お肩を揉ませて下さい！」

「おやおや、急にどうしたのかしら？じゃあ、お願いしましょうかねえ．．．」

ほのかは頷き、労るように祖母さなえの肩を揉み始める。外では、愛犬忠太郎がさなえの部屋の前で眠っていた。

「これからなぎささん達と出掛けるんでしょう？」

「うん！今日は遅くなるかも知れないけど．．．」

「ええ、気をつけて行ってらっしゃい！ほのか．．．あまり思い詰めては良い結果は得られませんよ？何時もの通りが一番です!!自分が、自分がなどと思わず、何時もの通りにね．．．ああ、ありがとう！お陰で楽になりましたよ!!」

まるで全てを知っているようなさなえの言葉に、ほのかはハツとするも、さなえはほのかに微笑みながら、肩を揉んでくれた事を感謝する。ほのかの脳裏に今のさなえの言葉が思い出される。

（何時もの通りに：：確かにお婆ちやまのいう通りね！でも、響さん達の事を思うと：：）  
さなえの言う事は分かる・・・

だが、プリキュアになりたくてもなれない響達の事を思うと、ほのかはやはり、自分達がしっかりしなければと表情を引き締めた。

そんなそれぞれの思いを胸に、少女達は今、決戦の地加音町へと旅立つ・・・  
必ず世界を救うと誓いながら!!

第三十六話：決戦の朝！

完

## 第三十七話：ノイズ・・・復活!!

1、不幸のメロデー

遂にクリスマススイブを向かえ、加音町はこの日、調べの館に於いてクリスマスコンサートを行う・・・

ミニスカサンタの格好をした響、奏、エレン、アコは、クリスマスコンサートのスタッフとして参加していた・・・

会場に、夫の団と共に現われた、赤いドレス姿の響の母まりあは、娘響の浮かない顔を見て表情を曇らせ、響の側に近付くと、

「響、浮かない顔をしてどうかしたの?」

「ママ・・・ううん、何でもないよ!」

「そう、なら良いけど・・・じゃあ、打ち合わせがあるから、私達は行くわね! 奏ちゃん達も頑張つてね!!」

まりあは、元気のない響を気に止め声を掛けるも、響は作り笑いを浮かべ、何でもないと答える。まりあにも響が無理をしている事は分かったが、無理に聞き出す事はせず、奏、エレン、アコに微笑み掛けると、夫の団と共に調べの館の中へと入って行った。

受付で参加する響、奏、エレン、アコ、一同は、来場したお客さんに、奏の店Lucy Spoonのカッププケーキを手渡しながらも、何時ハウリング、そしてノイズが現われるのか、四人は気が気では無かった。

今の自分達は、プリキュアになる事は出来ないのだから・・・

だが、そんな心境の四人の心を癒すように、加音町に駆けつけてくれた仲間達が居た・・・

「響、奏、エレン、アコちゃん、メリークリスマス！どう、まだ変わった事は無い？今、なぎささん、ほのかさん、ひかりとも行き会ったんだけど、三人は時計台を調べてから来るって言ってたよ！」

「咲さん、舞さん、満さん、薫さん、ええ、今はまだ大丈夫です！なぎささん達、もう着いてたんですね」

色違いのダウンジャケットを着た咲達四人が響達に声を掛ける。先ず咲達、なぎさ達が駆けつけてくれた。顔を見合わせホツとする響達だった。

「開演は何時からなの？」

「18時半です！」

「まだ少し時間があるわね・・・どうする、咲？」

満の問い掛けに奏が18時半だと答えると、時計台の時計を見る薫、まだ17時半、少



し時間があるがどうするか咲や舞と相談すると、

「うーん、みんな来るまで待った方が良いよね．．．って、のぞみ達も来たよ!!」

咲がのぞみ達に気付き手を振ると、大声で咲や響達の名を呼びながら、手を振つてのぞみが駆け出し、見事に転んだ．．．

「のぞみーいきなり走り出すから．．．」

「ウウウ、痛いいい．．．」

りんが呆れ顔で窘め、のぞみは変顔を浮かべながらも照れ笑いを浮かべた。咲が近寄り手を差し出すと、のぞみも嬉しそうに咲の手を握り立ち上がる。

「のぞみらしいね!アハハハ」

「エヘヘへ、咲ちゃん達、響ちゃん達、メリークリスマス!!」

「みんな、メリークリスマス!今の所、まだノイズ達に動きはありません!」

響の言葉に真顔になるのぞみ達とダークプリキュア5、一体何処から現われるか、一同は辺りを見回すも、加音町には楽しい音楽が響き渡っていた。

少し経つてからラブ達とつぼみ達が、途中で合流したなぎさ達三人と共に現われた。

「みんな、メリークリスマス!こうして見る限り．．．これからあいつらが現われるとは、とても思えないよねえ．．．」

「ええ、でも必ず来ると思う!!」

なぎさの言葉にほのかは苦笑を浮かべるも、必ず来ると表情を引き締めた。

「じゃあ、中に入るグループと、外で待機するグループに別れましょう!」

「そうだね・・・どう分ける?」

ゆりの提案になぎさも同意し、どう分けるか一同で話し合った結果、

外で待機するのは・・・

なぎさ、ほのか、ひかり、のぞみ、りん、うらら、こまち、かれん、くるみ、ラブ、美希、祈里、せつな・・・

調べの館で待機するのは・・・

咲、舞、満、薫、ダークプリキュア5、つぼみ、えりか、いつき、ゆり・・・

「じゃあ、お互い何かあったら連絡しましょう!」

「分かった!響達はどうする?」

ゆりの言葉に頷く一同、なぎさは響達を見ると、どっちの組みに入るか聞くと、響達四人は顔を見合わせ合うと、再びなぎさを見つめ、

「私達は、今回のコンサートの係何で、時間が来たら会場内に入ります」

「分かった!じゃあ、みんなまた後で!!」

一同が行動を開始した・・・

中に入った室内組、既に調べの館には沢山の人が集まっていた。皆、今から始まるクリスマスコンサートを楽しみにしていて、あるものはパンフレットを熱心に見、ある者は、響達に貰ったカップケーキを食べながら笑顔を浮かべていた。

「みんな幸せそうですね・・・」

「ええ、だからこそみんなの笑顔を守らなければ・・・みんな、周りに気を配っていて！何処から現われるか分からないから」

つぼみは、人々の笑顔を見て思わず言葉を漏らすと、ゆりも頷き一同に注意するよう指示する。

「現われるとしたら・・・私達の居る後ろ」

「後は、舞台のステージって所かしら？」

「この二カ所は特に注意した方が良いわね！」

満と薫、そして、ダークアクアの言葉に、その可能性は大いにあると同意するゆり、えりかは、響に貰ったカップケーキを階段に座って食べ始めると、つぼみは大慌てでえりかを注意し始める。

「え、えりか！私達、遊びに来たんじゃないんですよ！」

「分かってるってば！まだ時間あるし、戦の前に腹ごしらえってね!!」

つぼみといつきは、トホホ顔でえりかを見て溜息を付くも、

「それもそうだね・・・私も食べておこうっ!!」

咲もお腹が減っていたのか、えりかの脇に座りカップケーキを食べ始める。想像以上の美味しさだったようで、えりかと咲は互いを見つめ、美味しいねえと目を輝かせた。

緊張感が無い二人を見たダークドリームは、少々呆れたように、

「随分緊張感無いのね?」

「ゴ、ゴメンなさいね!」

ダークドリームの言葉に、これまたトホホ顔の舞が、咲の代わりに謝り、思わず一同から笑い声が漏れた。

開演まで、後10分を切ろうとしていた・・・

調べの館、外では・・・

「じゃあ、私達そろそろ中に入ります!」

「ええ、何かあったら知らせてね!」

「分かりました!」

中に入ると伝える響に、ほのかは頷き、何かあったら知らせるように言うと、奏がほのかの言葉に頷いた。なぎさは何かに気付いたように、慌てて四人を呼び止めると、

「あつ、待って!はい、差し入れ!!」

「うわあ！チョコレート．．．ありがとうございます!!」

喜ぶ響とそれを見て微笑む奏、エレン、アコ、こまちもゴソゴソカバンを漁ると、  
「私も羊羹の差し入れを．．．あらあ!?!切ってくるのを忘れたようだわ．．．」

「こまち．．．」

こんな時にも羊羹を持っているこまちに、かれんはトホホ顔でハアと溜息を付く。  
響、奏、エレン、アコは、一同に手を振り、調べの館へと入って行った。

なぎさは一同にも差し入れを渡すと、貰った一同は差し入れの文字を見て驚く、

「ブ、ブラックサンダーって．．．こんなチョコレートあつたんですか?」

「うん、私も偶々コンビニで見付けてさあ．．．試しに買ってみたら美味しくて!今思い出したんで、中のみんなに渡し忘れちゃったあ．．．後で渡せば良いよね!みんなも食べてみて!!」

のぞみが驚き思わず声に出すと、なぎさもチョココを食べながら、一同に勧める。くるみは目を輝かせながら美味しそうにチョココを食べ、ほのかも苦笑しながら食べ始める。

「そう言えばさあ、私達もよく見掛けるよねえ!何かピーチとか、ベリーって」

「そりゃあ、あんた達は果物の名前だもん、あるでしょう!私達は、ドリーム、ルージュ、アクア．．．ミントとレモネードはありそうだけどね」

ラブの言葉に、りんが突っ込みを入れ、自分達はそういう物は無いと思ったのも束の

間、ミントとレモネードならあるかもと言うと、うららは凄く喜び、

「本当ですか？今度捜してみようっと！」

「他にも、ムーンライトってクッキーが売ってたよ！後でゆりにも教えてあげようっと」

「な、なぎさ・・・」

「オイオイ！みんな、緊張感無さ過ぎ!!」

ラブ、りん、うらら、なぎさの言葉に、苦笑を浮かべるのかとひかり、美希の溜息混じりの突っ込みに、一同から笑い声が溢れた・・・

開演まで、後3分を切った・・・

そして、遂にクリスマスコンサートが開幕する・・・

壇上のカーテンが開くと、壇上には北条夫妻が、王子達、選抜された音楽隊がお辞儀をする。鳴り響く拍手が会場を包み込むと、響も壇上に居る両親に声を掛ける。

「パパ、ママ、みんなを最高の音楽で楽しませて上げてええ!!」

響の声が聞こえたかのように、北条夫妻はニツコリ微笑んだ。

「これより、加音町クリスマスコンサートを開幕します!!」

司会者の言葉を受け着席する音楽隊が、楽器を手に持ったその時、会場の電気が一斉に消え、会場内は闇に包まれた・・・

会場中に響き渡るハウリング音が、ざわめく人々の声が、悲鳴が、辺りに響き渡る：会場内に居た少女達は、慌てて辺りを見回したその時、再び会場に明かりが点る。少女達の目は、壇上に釘付けになった。そこには紫色の魔獣ハウリングが、伝説の楽譜を手に持ち佇んで居たのだから・・・

会場に居た人々は、何かの力を受け皆倒れ込み、意識を失っていた。響達四人も意識を失いそうになるも、クレツシエンドトーンの力の加護を受け、何とか意識を保っていた。

「さあ、これより不幸のメロディの開演だ!!」

「そんな事はさせないわ!みんな、行くわよ!!」

不幸中の幸いで、周りの人々は気を失っており、ゆりの指示の下、一同が変身アイテムを手を持ち身構えた。

「[[デュアル・スピリチュアルパワー!!]]」

「[[プリキュア!オープンマイハート!!]]」

「輝く金の花!キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼!キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「天空に満ちる月!キュアブライト!!」

「大地に薫る風！キュアウインデイ!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「大地に咲く一輪の花・キュアプロツサム！」

「海風に揺れる一輪の花・キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花・キュアサンシャイン！」

「月光に冴える一輪の花・キュアムーンライト!!」

「ハートキャッチプリキュア!!」

「闇に生まれ、光の暖かさに触れ生まれ変わった戦士！」

「**13**「**1**「**2**「**3**「**4**「**5**!!」」」」」

13人の少女達が、変身を終えポーズを決めた!!

「響、奏、エレン、アコ、あなた達は、外に居るなぎさ達を呼びに行つて頂戴！」

「分かりました!!行こう、奏、エレン、アコ、ハミイ!!」

ムーンライトの指示を受け、外に居るなぎさ達を呼びに向かう響達、四人が外へと飛び出そうとするも、

「キャア・・・み、みんなあ、どうしたの？」

響達の行く手を遮るように、加音町の人々が道を塞ぎ、響達四人に群がり動きを封じ



る。

「み、みんな、止めて！和音、どうしたの？」

「聖歌先輩、どうしたんですか？」

「これは……まるであの時の響や奏のようだよ！」

「ええ……ちよつと、奏太！しつかりしなさいよ!!」

響、奏、エレン、アコは動きを封じられ外に出る事が出来なかつた。それに気付いたムーンライトの指示の下、一同がハウリングに攻撃をしようとしたその時、響達同様加音町の人々がプリキュア達に群がってきた。

「これは……や、止めなさい！ハウリング、みんなに何をしたの？」

ムーンライトは、忌々しげにハウリングを睨み叫ぶも、ハウリングは口元に笑みを浮かべながら、

「なくに、此奴らはこれから始まるショーの重要な奴らだ……手荒な真似はせん！だが、お前達には、これから始まる素晴らしいショーが終わるまで、おとなしくして貰おうか!!貴様ら、しつかり抑えておけよ!!」

ハウリングの命を受け、プリキュア達に群がり、身体を押さえに掛かる加音町の市民達、振り解くのは簡単だが、何の罪もない人々を振り解く事に、プリキュア達は躊躇する。ハウリングはそんな一同を嘲笑い、

「クククク、此処で俺様を待ち伏せしていた事は褒めてやろう・・・中々鋭い勘をしている奴が居るようだ！だが・・・お前達はまだ一つ忘れてる!!」

「何の事？」

「私達が何を忘れてるって言うの？」

ブライト、ウィンディは、ハウリングが何を言っているのか理解出来ず問い返すと、ハウリングは伝説の楽譜を指差し、エレンの方を向くと、

「セイレーン！何故お前がマイナーランドの歌姫に選ばれたか・・・分かっているだろうか？」

「メイジャーランドの歌姫だった私に、不幸のメロディを歌わせるのが目的だったんでしよう！その為に私を・・・まさか!？」

エレンの表情が一層険しさを増した。

（何故気付かなかったんだろう・・・ハウリングは、不幸のメロディを歌わなかったんじゃない・・・歌えなかったんだ!!）

「みんな、ハウリングの目的は、この会場の人々に・・・不幸のメロディを歌わせるのが目的なのよ！何故なら、ハウリングは自らでは不幸のメロディは歌えない!!奴は音楽を忌み嫌う者、だから奴らは、私やメフィスト様、三銃士達、メイジャーランドの人間を配下に加えようとしていたんだわ!!」

「本当なの、エレン!？」

響が、そして他の一同が、エレンの言葉に驚いた・・・

「だったら、今こそあなたの目的を阻むチャンス！みんな、行くわよ!!悪いけれど・・・少し手荒な真似をするわよ・・・」

力を込めたムーンライト、側に居た人々が飛ばされる。他の一同も謝りながらも力を込めて人々から解放されると、ハウリング目掛け攻撃を開始する。真つ先に突撃するムーンライトが肉弾戦を仕掛け、宙に舞ったブルーム、イーグレット、ブライト、ウインデイが、頭上からムーンライトの攻撃を援護する。だが、ハウリングにダメージを与えられない。

「効かんなあ・・・食らえ、ゼタ・サンダー!!」

ハウリングの周りに紫色の雷が降り注ぐと、駆けつけたサンシャインが、

「やらせないよ!サンフラワー・プロテクション!!」

ドーム型のバリアーを、自身の周囲に発生させムーンライトを援護する。直ぐに罅が入り、バリアーは碎け散るも、サンシャインとムーンライトはその場を離れて躲す。ジャンプしたダークプリキュア5が、必殺技の連係攻撃でハウリングに攻撃を開始する。

「ダークアロー!」

「ダークネス・シュート!」

「ダークネス・プラズマ!」

「ダークネス・ウィツプ!」

ダークアクアの黒き矢が、ダークルージュの黒き炎のボールが、ダークミントから放たれた黒き閃光が、ダークレモネードの黒き鞭が、ハウリング目掛け突き進む、だがハウリングは、口からゼタ・ファイヤーを放ち一蹴する。

「流石にやる・・・でも・・・プリキュア!ダークネス・スター!!」

ダークドリームが、黒き流星となってハウリングに突進するも、ハウリングは片手で受け止め、ダークドリームの顔面に衝撃波を放とうとするのを、プロツサムとマリンがダブルインパクトで辛くも方向を変え、ダークドリームを援護した。

「全く、チョロチョロとうるさい奴らだ・・・だが、貴様らの負けだ!さあ、歌え!!不幸のメロディを!!」

ハウリングは両腕を高々と上げると、無表情の人々は一斉に口を開け、

「アア、アアアアアア・・・」

ハウリングの命を受け、会場内に居た人々が一斉に歌い始める・・・

響の両親が、奏の家族が、王子が、和音が、聖歌が、加音町の人々が・・・

「い、い、これは何事じゃ!?!」

「お爺ちゃん、ハウリングが・・・」

騒ぎを聞き付け、音吉が現われた。アコは、音吉にハウリングが人々に不幸のメロディを歌わせている事を語ると、険しい表情を浮かべた音吉は、

「おのれえ、お前達の好きにはさせんぞおお!!」

音吉は急ぎオルガンに座ると、オルガンを奏でようとするが、歌いながらも人々が音吉を襲い、オルガンを弾けないように邪魔をする。群がる人々の群れの重さに耐えかね、オルガンのパイプがミシミシ軋み始める。

「残念だったなあ、音吉!!?そして、プリキュア共!!」

「おのれええ!!」

「クツ、防げなかった・・・」

音吉とムーンライトは、力及ばず、不幸のメロディが歌われる事を、阻止できなかつた事に悔しさを滲ませる。ハウリングの嘲笑が、不幸のメロディに混じり会場に響き渡ると、

「パパああ!ママああ!み、みんな、止めてえええ!!」

響の絶叫が、会場内に空しく響き渡った・・・

調べの館の天井が吹き飛び、不気味なハーモニーが、不幸のエネルギーが、調べの館から加音町に轟いた・・・

「な、何、今の音!?それに、この歌は?」

「まさか・・・これが不幸のメロディ?」

「なぎさが、この街全体に邪悪な気配が漂ってるメポ」

「ほのか、早く止めないと大変な事になるミポ」

なぎさが、ほのかが、メツプル、ミツプルの忠告を聞き険しい表情を浮かべる。不気味な歌声が響き渡る調べの館を振り返り、呆然とする一同・・・

その時、バサバサ翼を羽ばたかせ、ノイズが一同の前に姿を現わす。

身構える一同を余所に、上空高く飛んでいくノイズは、

「ギヤアアアス!!」

勝ち誇ったように雄叫びを上げ、辺りにノイズの音が響き渡る・・・

不幸のエネルギーを歌われた音符達は、まるで吸い取られていくかのように、ノイズに吸収されていくと、ノイズの容姿が変わって行った・・・

防げなかった・・・

なぎさが、ほのかが、一同が拳を握りしめる。皆表情は険しかった・・・

だが、彼女達は諦めない・・・

「みんな、変身よ!!」

なぎさの絶叫に一同が頷くと、

「デュアルオーロラウェーブ!!」

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」

「プリキュア!メタモルフォーゼ!!」

「スカイローズ!トランスレイト!!」

「チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!」

「光の使者・キュアブラック!」

「光の使者・キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!!」

「闇の力の僕達よ!」

「とつととお家に帰りなさい!!!」

「輝く生命、シャイニールミナス!光の心と光の意志、全てをひとつにするために!」

「大いなる、希望の力!キュアドリーム!!」

「情熱の、赤い炎!キュアルージュ!!」

「弾けるレモンの香り!キュアレモネード!!」

「安らぎの、緑の大地!キュアミント!!」

「知性の青き泉!キュアアクア!!」

「「「希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく5つの心！Yes！プリキュア5!!」」」  
「青いバラは秘密のしるし！ミルキイローズ!!」

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュ、キュアピーチ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ、キュアベリー!!」

「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュ、キュアパイン!!」

「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ、キュアパッション!!」

「「「レッツ！プリキュア!!」」」

変身を終え身構える少女達の前に、黒き翼竜とも言うべき、ノイズの真の姿が現われた・・・

## 2、スイートプリキュア♪

「良くやった、ハウリング！我、再び力を取り戻したり!!私を不快にさせる忌々しい音楽よ！鼓動よ！全て・・・全て、消えて無くなれええ!!」

ノイズの身体から凄まじい負のエネルギーが照射された・・・

それは、世界を駆け巡った・・・

世界中の人々は、何が起こったのか分からぬ内に、メイジャーランドの住人のように石化した・・・



プリキュア達の肉親も、友人達も、嘗て闇との戦いで力を貸したブンビー、サラマンダー、オリヴィエも例外なく・・・

異変を察知したコツペによつて、薫子とコツペは難を逃れていた・・・  
そして・・・

「これは一体?!世界中の人々が石になるとは?今の僕は、ここで見て居る事しか出来ない・・・また、君達に縋るしか無い!伝説の戦士達よ!!」

鏡に覆われた部屋で、世界の様子を見て居た地球の神は、悲しげな瞳で、鏡に映るプリキュア達に願いを託した。

とある無人島・・・

亀の甲羅を背負った妖精は、三種の神器の一つ、水晶の鏡の前で表情を曇らせていた。「水晶の鏡がまた曇った・・・やれやれ、また厄がやつて来たのかい?この時代のプリキュアは、本当によく闇を引き寄せるものだ・・・」

憎まれ口を叩きながらも、妖精は心の中では、再び厄に立ち向かうであろう、この時代のプリキュア達を信じて居た・・・

ノイズ、完全復活から約5分・・・

世界中の人々は一部を除き石化した・・・

「そんな・・・パパ、ママ」

「お父さん、お母さん、奏太・・・」

響が、奏が、変わり果てた家族を見て涙を流す。

「フハハハハハ！いい静けさだ・・・さあ、今度こそメイジャーランドから全ての音を奪ってくれる!!・・・何!?!」

高笑いを浮かべるノイズに対し、ブラックとホワイトの二人から、マーブルスクリューマックスが飛ぶ、ノイズはその威力に後ろに押されるも、何とか攻撃を耐え抜き、忌々しげにブラックとホワイトを睨み付けるも、その側に仲間達が合流し、

「そんな事、私達プリキュアが絶対にさせない!!」

ブラック達、ドリーム達、ピーチ達が、ノイズに対し身構えた。

「全く目障りな奴らめ・・・良いだろう！さあ、決着を付けてやる!!行くぞ、プリキュア共おおお!!!」

ノイズもプリキュアとの戦いを優先すべく、一同を威嚇するように咆哮した

一方調べの館では、勝ち誇ったハウリングが雄叫びを上げる。険しい表情を浮かべた

ムーンライトが辺りを見渡すと、

「此処では石にされた人々が・・・みんな、外に出てなぎさ達と合流するわよ!」

ムーンライトの指示の下、響達を先頭に外へと飛び出し、殿（しんがり）をムーンライトが勤め、ハウリングを石にされた人々に接触させないように外へと導いた。

「お、おのれ、ノイズ!だが、オルガンがある限り・・・お前の好きにはさせませんぞお!!」  
音吉は急ぎオルガンの修復に取りかかった・・・

「ブラック、ホワイト、みんな、ゴメン・・・防げなかった!」

調べの館から駆け出してきた室内組、悲しみの表情を浮かべながら謝る響に、ホワイトもブラックも首を振り、

「今はこの状況をどうにかする事を考えましょう!」

「今、私達もノイズと戦っていた所だよ・・・見て、あれがノイズの真の姿見たい!!」  
ホワイト、ブラックの言葉を受け、室内組は目の前に聳える巨大な龍、ノイズを見て驚愕する。前にはノイズ、そして、後方からムーンライトと戦いながら現われるハウリング、プリキュア達は、強大な敵二人に挟み撃ちにされた格好になる。

「響、奏、エレン、アコ、プリキュアになれないあなた達は、巻き込まれたら危ない・・・少し離れていて!!」

ローズの言葉を受け、戸惑いながらもその場から離れようとする四人に、

「おっと、お前達にはこれを返さなければな・・・受け取れ、伝説の楽譜だ！ネガトーン  
!!」

ハウリングの咆哮を浴びた伝説の楽譜は、ネガトーンとなつて響達の前に立ち塞がった。

「響、奏、エレン、アコちゃん・・・クッ！」

ダツシユで援護に向かおうとするブラックを、ノイズの羽ばたきが凄まじい強風を巻き起こし阻止する。足を踏ん張りその攻撃を耐えたブラック、ノイズとハウリングに邪魔をされ、響達を助けに行けない事に一同から焦りが生じる。ピーチは、険しい表情でパッションを見つめると、

「パッション！」

「ええー！」

ピーチの言葉に素早く反応したパッション、二人の間に言葉は不要だった・・・

だが、瞬間移動で援護に向かおうとするパッションに気付いたノイズは、させんとばかりに衝撃波をパッションに放ち吹き飛ばす。

「キャアアア！」

吹き飛ばされるパッションを、アクアとミントが支えるも、三人が吹き飛ばされる。

「コノオオオ!!」

ピーチが突っ込み、ノイズの顔面に一撃入れるも、うるさいとばかりに弾き飛ばされたピーチを、ベリーとパインが盾になりダメージを軽減させる。

ノイズ、ハウリングの前に、徐々に追い込まれていくプリキュア達は、響達の加勢に向かえなかった・・・

プリキュアになれない響達は、ネガトーンの攻撃の前に為す術は無かった・・・

幸せを奏でる筈の伝説の楽譜が、ネガトーンとなり暴れている姿に、響の目から涙が零れた・・・

「ゴメン・・・ゴメンね、伝説の楽譜！私達に力が足りなかったから・・・あなたをそんな姿に・・・」

立ち上がった響は、一人ネガトーンへと、一步、また一步近づいて行つた。その姿に、思わずネガトーンはたじろぎ攻撃を躊躇する。響に刺激されたのか、奏が、エレンが、アコが、みな響と同じようにネガトーンに向かい歩み出す。

「何やつてるの!?!あなた達、早く逃げなさい!!」

ローズの叱咤が飛ぶも、四人は歩みを止めない・・・

四人が涙を流しながら謝る姿を見たネガトーンは、戦意を失い棒立ちする。

「何をやっている!? まあいい、貴様がやらないのなら・・・ゼタ・ファイヤー!!」

ハウリングから放たれた猛烈な炎が、響達四人を襲うも、反応が遅れたプリキュア達は、彼女達を救助に向かえなかった。

「逃げてええ!!」

ドリームの空しい叫び声が響き渡ったその時・・・

響、奏、エレン、アコは、呆然としてネガトーンを見た・・・

ネガトーンは、まるで響達を庇うように、ハウリングからの攻撃をその身に受けたのだから・・・

「私達を・・・助けてくれたの?」

「だのに、私達は・・・」

「私達、みんなに守られる事しか出来ないの?」

奏が、エレンが、アコが、肩を振るわせ涙を流す。悔しい、このまま何も出来ない自分が悔しい、四人が拳を握ったその時、彼女達の鼓動が激しさを増した。響は、キツと顔を見上げると、

「このままじゃ、終われない! 私達の鼓動が刻まれる限り、終わってない!! だから私達は・・・」

「二「絶対に、諦めない!!」二」

響の言葉に同意するように、四人の言葉がハモったその時、ネガトーンと化した伝説の楽譜がパラパラページを捲っていくと、空白のページから新たなト音記号が浮かび上がった。それに呼応するように、響、奏、エレン、アコの胸に、ハートのト音記号が浮かび上がり、再びキュアモジュールは輝きを取り戻した。

響が、奏が、エレンが、アコが、そしてプリキュア達の表情が輝く、

「な、何故だ!? 全ての音符はこの私を取り込んだ! 世界から音は消えた!! 何故だ!」

「ノイズ、あなたも私も、大切な事を忘れていたのです。音楽は、今あるものが全てではありません! 新しく生み出すことが・・・出来るのです!! ハートのト音記号は・・・音楽の始まり! 今、彼女達は新たなメロディを奏で始めたのです!!」

「な、何だとおお!」

困惑するノイズに対し、ハミイの持っていたヒーリングチェストから、姿を現わしたクレッシェンドトーンがノイズに話しかける。クレッシェンドトーンという言葉聞いたノイズは、信じられないといった表情を浮かべた・・・

響が、奏が、エレンが、アコが、四人が顔を見合わせ微笑み合うと、それを見ていた伝説の楽譜が、ハウリングの力を更に受け凶暴化を始める。四人は悲しげな表情を浮かべると、

「あなたの苦しみ・・・私達が今取り除いてあげるからね・・・」

響の言葉に頷く三人、キュアモジューレを手を持った四人が叫ぶ、

「プリキュア！プリキュア！モジューレ！モジューレ！モジューレ！！」

四人の身体を、リボンのような光が全身を覆っていくように衣装を身に付けていくと、四人をプリキュアと変えていった。

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！！」

「爪弾くは、たおやかな調べ！キュアリズム！！」

「爪弾くは、魂の調べ！キュアビート！！」

「爪弾くは、女神の調べ！キュアミュージズ！！」

「プリキュア！四人の組曲！！スイートプリキュア！！」

四人のプリキュアがポーズを決めた！

四人は再び暴れ出したネガトーンを見ると、

「出でよ、全ての音の源よ！！」

クレッシェンドトーンを召喚した四人、

「届けましょう、希望のシンフォニー！！」

両腕をクロスしたまま、クレッシェンドトーンの金色の光の炎と一体化した四人は、

「プリキュア！スイートセッション・アンサンブル・クレッシェンド！！」



「「ファイナーレ!!!」」

四人の合体技を受け、伝説の楽譜は元の姿を取り戻し、空から降ってきた伝説の楽譜をハミイが受け取り、妖精達から歓声が沸き上がった・・・

遂にメロディ達四人も、プリキュアの力を取り戻し、戦いに参戦した!

第三十七話：ノイズ・・・復活!!

完

## 第三十八話：世界に響け！幸せのメロディ！！

1、ノイズとプリキュアオールスターズ

合流したメロディ、リズム、ビート、ミュージックを、仲間達は笑顔浮かべ向かえた：  
「これで、戦いに集中出来るね！」

「ええ、と言つても、こちらが不利なのは変わらないけど……」

ブラックの言葉にホワイトも頷くものの、直ぐに表情を引き締める。ドリームは、嬉しそうにメロディの肩を抱きながら、

「みんな揃ったんだもん、何とかなるなう！」

「ドリーム、全く……」

ドリームの楽天的な言葉に、思わずルージュはハアと溜息を漏らすも、直ぐに笑みを浮かべた。

「な、何だ、こいつら？この状況で……」

メロディ達が加わった事で、一気にテンションが変わったプリキュア達を見て、ノイズは驚く、不意にマリンが何かを思い出したようにノイズを指さすと、

「そうだ！ノイズはあだし達の裸、ただで見てるんだよねえ？やい、エロノイズ！嫁入り

前の、若いピチピチな女の子達の裸を見る何て・・・許さないよ!!」  
「そう言えば、そうだね・・・あいつ、以外と変態だよね？」

マリンの言葉に、ブルームもウンウン頷きながら同意すると、イーグレットは苦笑を浮かべ、呆気にと取られていたノイズが怒り、

「ふざけるなあ！大体、嫌がる私を無理矢理女風呂とやらに連れ込んだのは、その娘だろっ？」

ノイズがミュージズに視線を向けて文句を言うも、

「汚れてたから綺麗にして上げようとしただけじゃない！そんなに大きいと分かってたら、一緒に入れないわよ!!」

「そうそう、態々怪我した振りまでして・・・完璧に怪しいわねえ？」

「何か継るような目もしてたよね・・・怪しい」

「そうね・・・」

「あの時、キルンと一緒に話し掛けて見れば良かったかなあ？」

ミュージズの言葉に、ベリーもピーチも同意し、パッションとパインもジツと疑惑の視線をノイズへと向けた。

口喧嘩を始めるノイズとプリキュア達、ノイズは愚弄された事で心底怒り出し、

「黙れ、黙れ、黙れええ！この私を此処まで愚弄するとは・・・絶対に許さんぞお!! 大体、

貴様らのその胸だか背中だか分からない身体に・・・興味など持つかあ!!!」

「二二何ですつてえええ!!!」

ノイズの言葉に、頬を大きく膨らまして、ブラック、ブルーム、ドリーム、メロディが抗議する。

「ねえ、ブロッサム・・・あたし達って」

「まな板何でしようか？」

自分の胸を両手で触り、トホホ顔を浮かべたマリンとブロッサム、そんな二人を見たブルームは、困惑気味に慌てて二人の肩に手を乗せフオローし、

「ブ、ブロッサム、マリン、そ、そ、そんな事、無い無い!」

「ブルーム・・・声が震えてるわよ？」

ブルームは、二人を励ましながらも、自身もかなり動揺しているようで、ローズに突っ込まれる。ドリームとレモネードは、自分の胸をマジマジ見つめると、

「そりゃあ、ピーチ達と比べたら、小さいけど・・・それなりにはあるもん!」

「でも確かに、ピーチ、ベリー、パイン、パッションと比べたら・・・」

「あたし達は、胸の大きさでは適わないわね？」

苦笑しながら、レモネードとルージュが言葉を発する。ドリームは、自分の胸とピーチ達の胸を比べると、小声で負けたと呟き、三人の会話が耳に入ったのか、

「ジイイイ」

マリんとブロッサムは、羨ましげにピーチ達の胸に視線を集中させる。二人の視線に困惑したピーチは、思わず両手で胸を隠し、

「ふ、二人共、何所見てるのよおお!? ノイズはあっち!!」

「全く・・・ノイズの言葉に惑わされないの!」

「大丈夫! その内あなた達も大きくなるわ!!・・・保証は出来ないけど」

「エエとお・・・二人共、あまり気にしない方が良いと思うの?」

ブロッサムとマリンは、ピーチとベリーに、頭を持たれて、ノイズの方に顔を向けさせられ、苦笑を浮かべながらパッションとパインが二人を励ました。メロデイは、自分の胸を触りながら、

「私・・・リズムよりはあるもん!」

ピクリと反応したリズムは、自分の方がメロデイより胸はあると言いたげに、

「メロデイ、どさくさに紛れて捏造しないで!」

「捏造じゃないもん!」

互いに頬を膨らませるメロデイとリズム、ブラックが二人の間に入り窺めるも、  
「メロデイ、リズム、あんた達、胸の話で喧嘩しない! 大体、ピーチ! あんた達だけ、胸を強調するような衣装着てるから・・・」

「エエエ!?それは言い掛かりだよおおおお?」

ブラックに胸元を指で指されたピーチが、再び胸を隠して益々困惑する。そんなピーチ達やブロッサム達、ドリーム達、ブラックと違い、険しい表情を浮かべたアクアは、上空高くジャンプすると、

「プリキュア!サファイア・アロー!!」

プリキュア同士の内輪揉めを見て、呆然としていたノイズ目掛け、アクアのサファイアアローの乱れ撃ちが飛んだ。ノイズは不意を突かれたものの、翼でサファイアアローの連射に耐えきった。

「クツ!?やってくれたな、小娘!」

「19、20、凄い!20連射!?アクアのサファイアアローって、あんなに連射出来たんだ!」

「さあ!?ここまでの連射は・・・私達も初めて見たような気がします?」

ブラックが驚き、ドリーム、ルージユ、レモネード、ミント、ローズを見つめて問うと、五人は一斉に首を捻り、レモネードが初めて見た気がするかと答えた。アクアはスツと着地し、ノイズをキツと睨み付けると、

「ノイズ!あなたに一言言っておく事があるわ!!」

「何だ!」

「私達の胸は……まだまだ成長途中なのよ！」

「オオオオ！」

先程のノイズの一言が、アクアの癩に障ったのか、アクアがノイズを指差し、啖呵を切ると、他の一同からオオオと感動の声上がり、拍手が鳴り響いた。

「……………」

ノイズは、そんなプリキュア達を見て呆然とするのだった。ミントはクスリと笑うと、

「余程アクアの癩に障ったのねえ？ さあ、私達もアクアに続きましょうー！」

苦笑を浮かべたミントが一同に促し、そんな仲間達を見たホワイトは、祖母さなえの言葉を思い出す。平常心が一番だと言う言葉を……

(これも、平常心……なのかなあ?)

ホワイトの表情が段々曇り、苦笑を浮かべた。

「全く、あの子達は何をしているのかしら？」

「本当！ ハウリングを食い止めてるこっちの身にも……なってもらいたいわね？」

「彼女達らしいといえそうだけど……」

ムーンライトの言葉に、ブライトとウインディも頷く、ハウリングと戦い、足止めさ

せるムーンライト、ブライト、ウィンデイ、サンシャイン、ダークプリキュア5、ノイズと戦って居るわりには、何時ものような調子の一同を見て少し呆れていた。

「でも、何かメロディ達に加わって、何時ものみんなに戻ったようですよ？さつきまでは、私達もそうでしたけど、悲壮感が漂ってましたから・・・」

「こんな状況じゃ、悲壮感が漂うのが当然なのだけけど・・・」

ノイズの力によって、加音町の住民は石化した。おそらく世界中がこのような現象になっただろう。その不安につけ込まれない為にも、あえて明るく振る舞っているのかも知れないが、そうムーンライトは思うも、

（そうは見えないのよね・・・）

ムーンライトは口元に笑みを浮かべ、再びハウリングに肉弾戦を仕掛けた。

「この俺様相手に・・・余所見とは、余裕のつもりか？直ぐに後悔させてやる！ゼタファイヤー！！」

背後でノイズと戦う仲間達を見て、時折笑みすら浮かべるムーンライト達を見て、ハウリングは忌々し気に、ゼタファイヤーを一同に放つ、

「やらせない！風よ・・・吹き荒れよ！！」

「ムーンライトトリフレクション！！」

ウィンデイが強烈な突風でハウリングの攻撃を弱めたのを見たムーンライトは、二枚



のバリアーでハウリングの攻撃を跳ね返した。

「な、何だ?!?この俺様の攻撃を、跳ね返したただとおお?」

信じられないといった表情を浮かべたハウリングの隙を逃さず、ムーンライト、ブライト、ウインディ、サンシャインが空中から、そして、ダークプリキュア5が地上から突っ込み、ハウリングを吹き飛ばした・・・

再び開始されたプリキュアとノイズの戦い・・・

クレッシェンドトーンも姿を現わすと、

「ノイズ、あなたとの長きに渡る戦い・・・決着を付ける時が来たようですね!」

「それはこちらのセリフだ!貴様と音吉への怨み・・・忘れた事は無いぞ!!」

ノイズと、クレッシェンドトーン、二人にどんな因縁があったのか、プリキュア達は知らない。クレッシェンドトーンは昔の話だと前置きしながら語り出した・・・

「もうどれくらいになるでしょうか・・・嘗てメイジャーランドに現われたノイズによって、メイジャーランドは壊滅的被害を受けた事がありました。当時の王、音吉と私が協力し、死闘の末何とかノイズを封じる事は出来ましたが、私もノイズの力によって傷つき、眠りに付いた私は、ノイズによって作り出された魔境の森に封じられました」

「貴様らによって封じられてから・・・この日が来るのをどれ程待ち望んだ事か・・・遂

に長年の怨みを晴らす時が来たのだ!!」

ノイズとクレッシェンドトーンの話しに、ビートとミュージックが割って入った。二人の表情は険しかった。

「ノイズ、ママがどんな辛い思いをしたのか、パパがどんなに苦しんだか・・・あなたに分かる!？」

ミュージックの拳がノイズの顔面にヒットするも、ノイズは微動だにしなかった。ノイズはミュージックの言葉に嘲笑うように、

「そんなもの、分からんなあ?」

「バスドラ、バリトン、フアルセットだってそう・・・みんなも音楽を愛していた・・・それをあなたは利用した!許せない!!」

ビートのかかと落としがノイズに炸裂するも、

「愚か者め、人の心など簡単に染まる・・・貴様とてそうだったのだろうか?」

「違うニャー!セイレーンは、優しい心を完全に失って無かったニャー!」

ノイズは、ビートも闇に染まって居ただろうと問うも、ハミイが真つ向から反論する。「そうだよ、あんた達は人の心につけ込んだだけ・・・私やリズムも、ハウリングに操られた事があるから分かる!!」

「例えば人を操ろうとも、人の心の絆までは・・・あなたには壊せない!!」

メロデイのミュージッククロンドが、リズムのミュージッククロンドが、ノイズ目掛け炸裂するも、ノイズはその攻撃を跳ね返す。ノイズの攻撃を受け蹠踉めく四人を庇うように、ファイヤーストライクが、サファイアアローの乱れ撃ちが飛ぶ、レモネードのプリズムチェーンが、ミントのエメラルドソーサーが、ドリームのシューティングスターが、フレッシュ勢のクアドラプルパンチが、一同がメロデイ達を援護する。

「調子に乗るなよ！ 貴様らの攻撃など効くか!!」

更なる雄叫びを上げ、ノイズがプリキュア達に怒濤の攻撃を続ける。

調べの館の中でパイプオルガンを直していた音吉の表情が輝く、想像以上に壊れた箇所は少なく、これならばノイズを倒せる筈だと自信があつた。

「みんな、よく堪えてくれた・・・食らえ、ノイズ!!」

調べの館からオルガンの音色が響き渡ると、ノイズが苦悶の表情でのたうち回る。それに合わせるように、プリキュア達の攻撃が炸裂し、ノイズは更なるダメージを受けた。

「ハ、ハウリング、何をしている！ 音吉を・・・奴を・・・」

「め、面目次第もございませぬ・・・プリキュア共の相手が精一杯で、音吉までは手が回りませぬ!!」

以前よりも、プリキュア達の強さが増して居ると感じたハウリングがノイズに答える。

自らが何とかせねばと、ヨロヨロ立ち上がったノイズは、忌々しげに調べの館を見つめると、

「音吉いい！調子に乗るなよお!!」

口を大きく開いたノイズから、凄まじい破壊光線が発せられた。音吉はバリアーを張り、石にされた人々を庇うも、苦心して作り上げたパイプオルガンは、無残に崩壊していた。

「な、何たる事じゃ・・・き、貴様、何時の間か?」

オルガンを破壊され、意気消沈していた音吉の前に、ハウリングが現われ音吉をノイズの居る場所に蹴り飛ばす。

「グウウオオオ!」

「お爺ちやあああん!!」

ミュージックが飛び出し、音吉を助けようと試みるも、後一步届かず、ノイズの手に落ちる。

「殺すなら、殺せ!だが、必ずプリキュア達が・・・お前の企みを阻止してくれるとわたしは信じて居る!!アコ、みんな、後は頼むぞ!!」

「なあに、殺しはせん・・・貴様にも味わって貰おう!封印された者の苦しみをなあああ!!」

ノイズの身体が、まるでブラックホールのように周りの物を吸い込み始める。音吉は、プリキュアに後を託しながら闇の中へと消え去った。泣き叫ぶミュージズを庇うように、ビートは、ミュージズの身体を一同の側に連れて来る。消えた音吉は、マイナーランドへと送られ、ノイズが封印されていたように壁の中に埋め込まれた・・・

だが、ノイズもかなりのダメージを食らい、起き上がっているのがやつとの状態であった。今しかない！プリキュア達が総攻撃を開始しようとしたその時、ノイズの前にハウリングが現われ、

「ノイズ様、何たる痛ましいお姿・・・この私を吸収して頂きたい！そうすれば、体力も回復する筈です!!」

「何だ?!しかしハウリング、それではお前が・・・」

「構いません!むしろ、ノイズ様のお役に立てれば光栄です!!」

「ハウリング・・・」

ハウリングの申し出にノイズも頷き、ノイズは、ハウリングを体内へと吸収を始めた・・・

「グアアアアオオオオオオ!!」

ノイズの身体が闇の球体へと変化し、不気味に収縮を繰り返し始める。

「な、何？何が起きているの!？」

「みんなあ、用心するココ」

「邪悪な気配が、その中から酷く漂ってるメポ」

アクアが驚きの声を上げ、ココとメツプルが、闇の球体から邪悪な気配が強さを増して居て、一同に警戒するように注意が飛んだ。

闇の球体は、徐々に人のシルエツトへと変化していった・・・

## 2、究極体

ノイズの姿は、人間の形へと姿を変えた・・・

血のような色をした赤い髪、背中から生えた二枚の翼、人のような腕も生え、全身を灰色に覆われ、三本指の足で立ち尽くすノイズ、大きさは人と同じ程度の身長になったものの、ノイズの体内から発せられる負の力は、今までと比べものに成らなかった。

ノイズ、究極体とも呼べる姿が、プリキュア達の前に姿を現わした・・・

ノイズは、自らの身体を確かめるように、指先を見て指を動かす。

（馴染む、実に馴染む）

ノイズが軽く腕を振ると、辺りに凄まじい衝撃が巻き起こる。先程までのダメージは消え去っていた。

「最早、自らメイジャーランドに乗り込む必要もない……全ての音よ、消え去るが良い!!」

ノイズが気力を為、一気に解放した時、その凄まじき力は、異世界をも飲み込んだ!

「この力は?!?!…ハアアアア!!」

顔色を変えた光の園のクイーンは、咄嗟に力を解放し、ノイズの負の力から光の園の民を守り通した。

「クイーン、今のおぞましき力は一体?!」

光の園の長老は、おぞましき力を感じ驚愕し、クイーンに問うも、クイーンにも確かな事は分からなかった。

「私にも分かりません……ただ、その側からプリキュア達の力を感じます!彼女達が、再び闇に立ち向かってきてくれているようです……」

クイーンは、プリキュア達の勝利を光の園から祈った……

クイーンのように、異変を察知したファイリア女王や、絵本の世界の女王、光の槍と黄金の冠の加護に守られた二つの国もまた、辛くもノイズの負の力から民を守った。だが、ノイズの目的であった、メイジャーランドに残って居たアフロデイトとメフェイス、ラビリンズに居るウエスターとサウラーを始めとした民達、パルミエ王国を始めとした

四大王国も、音を奪われ皆石化した・・・

「な、何?! 一体何をしたの?」

驚愕の表情を浮かべたイーグレットがノイズに聞いただと、ノイズは口元に笑みを浮かべ、

「なあに、全ての世界から音を奪ったまでだ・・・この世界の者共のようになあ!」

「そんなあ?! パパ、ママ」

動揺するミュージズだったが、メロディはミュージズの肩に手を乗せながら、

「ノイズ、私達は・・・負けない!!」

ノイズから発せられる威圧感を払拭するように、メロディはミラクルベルティエを、リズムがファンタステイックベルティエを装備すると、

「溢れるメロディの、ミラクルセツション！プリキユア！ミラクルハート・アルペジオ!!」

「弾けるリズムの、ファンタステイックセツション！プリキユア！ファンタステイック・ピアチェーレ!!」

メロディはハートを描くようにピンクとオレンジ、二色の炎を、リズムもハートを描くように白と黄、二色の炎をノイズ目掛け発射する。メロディとリズムの行動に勇気づけられたように、ビートとミュージズも頷き合うと、



「弾き鳴らせ、愛の魂！ラブギターロッド!!おいで、ソリー!!」

ソリーを呼んだビートが、ラブギターロッドにソリーをセットすると、

「チェンジ！ソウルロッド!!翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア！ハートフルビート・・・ロック!!」

緑色のエネルギーリングをセットし、ロッドのトリガーを引くと、リングがノイズ目掛け飛んで行った。

「シ、の音符のシャイニングメロディ！プリキュア！スパークリングシャワー!!」

大量の音符のような泡がノイズ目掛け飛ぶ、ノイズはそれらの攻撃を微動だにせず受けるも、何事も無かったようにギロリとメロディ達を見つめ、腕を振ると四人が吹き飛ばされ地面に激しく激突する。

「あれだけの攻撃に・・・私達も行くよ!!」

ピーチ達が、ドリーム達、ダークプリキュア5が行動を開始する。ブルーム達は足下に力を溜めると一気に飛翔し、ノイズに対し上空から攻撃を開始する。

ノイズが右手に力を込めると、ノイズを中心に爆発波が発生し、攻撃に向かった一同が吹き飛ばされた。

「みんな、大丈夫!?!」

「あれくらい、へっちゃら、へっちゃら!」

心配そうに仲間へ声を掛けるブラックに、右手を挙げて大丈夫と応えるドリーム、ブラックはホッと安堵するも、それを見たノイズはニヤリと笑い、

「お前達、あれが私の本気だとも思ったのか？まだ30%程度ぐらいしか出して居ないのだぞ・・・さあ、次は50%！」

次の行動を開始したノイズの動きを読み、真っ向から迎え撃つムーンライト、だがノイズはムーンライトの攻撃を見切り、躲し続けたノイズはムーンライトに強烈な右ストレートを放つと、辛うじてノイズの拳を受け止めたムーンライトだったが、その勢いを完全に止める事は出来ず、激しく横回転しながら吹き飛ばされる。

「キャアアア！」

「ムーンライト！！」

ブラックとホワイトが、咄嗟にムーンライトを受け止め、何とかダメージを軽減させる。

「ふ、二人共、ありがとう・・・油断しないで！！」

顔色を変えたムーンライトを見て、頷くブラックとホワイトの視線がノイズに向けられる。

「どうした!?まだ半分のだぞ?次は、80%だ!!」

ノイズの姿が消える・・・

現われた時には懐に入られ、プリキュア達一人一人に攻撃を加えダメージを与え続ける。

ノイズの両手から、凄まじいエネルギー波がプリキュア目掛け発射された。

咄嗟にルミナス、ブルーム達四人、ミント、サンシャイン、ビートが協力してバリアーを張り、何とか堪えるも、瞬時にノイズは戦法を変え、肉弾戦をルミナス達に仕掛けバリアーを張れなくすると、再び爆発波が発生し、吹き飛ばされたプリキュア達が、激しく地上に叩き付けられた。

「さあ、100%の力を受けよ!!」

下降したノイズが再び爆発波を放つも、その威力は桁違いだった・・・  
吹き飛ばされたプリキュア達は、地上に激しく打ち付けられ倒れ込む。

プリキュア達の危機を感じたクレッシェンドトーンが現われ、ノイズの攻撃から辛くもプリキュア達を庇うも、大ダメージを受ける。ノイズは口元に笑みを浮かべながら、「哀れだなあ、クレッシェンドトーン・・・最早お前に、何の脅威も感じません! 貴様も・・・音吉と同じ目に合わせてくれるううう!!」

ノイズの胸元が開くと、クレッシェンドトーンが吸い込まれて行く、

「クレッシェンドトーン! 今助けに・・・」

「後は頼みましたよ! プリキュア!! キャアアア!!」

助けに向かおうとしたメロディに首を振り、後を任せたクレツシエンドトーンは、闇の中に吸い込まれ、音吉と同じようにマイナーランドの壁に封印された・・・

プリキュア達を見下すように、ゆっくり宙に浮かんだノイズは、ヨロヨロしながらも立ち上がろうとするプリキュア達を見て、不思議そうに首を傾げ、

「お前達、何故そんな目に遭いながら立ち上がるのだ？」

「当たり前じゃない！」

「みんなと音楽を守る為なら・・・私達は何度だって立ち上がるわ!!」

真つ先に立ち上がったドリーム、みんなと音楽は必ず守って見せるとメロディが、ノイズの問いに答える。ノイズは、音楽も守るといふプリキュア達の言葉に興味深げに反応すると、

「何故音楽を守るのだ？」

「大事なものだから！」

「そう、だからこそあなたから守って見せる!!」

再び問うノイズの言葉に、ブルームとリズムが答える。ノイズは意外そうにプリキュア達一人一人の顔を見ると、

「お前達、音楽が幸せをもたらすと・・・本気で思っているのか？」

「当たり前でしょう!!」

再び問うノイズに、不機嫌そうにアクアが答えると、そうかと呟くノイズ、

「一つ教えてやろう．．．そもそもこの争いの始まりは何だ？伝説の楽譜．．．そう、音楽が原因だ！音符に悪が宿れば不幸のメロディとなり、少し並び替えれば幸せのメロディとなる。そうだろう？だが、それも悪い心が宿れば、すぐに不幸に変化する。そんなどちらにでも変わるような曖昧な物、無い方が良い!!音楽など無意味な存在なのだ!!!」

ノイズの言葉を呆然と聞くプリキュア達、まさかノイズがこのような事を言うとは、誰一人として思っても見なかった。ビートは、ノイズを悲しげな視線で見つめると、

「そんな事無いわ!だって、音楽が無い世界なんて、寂しすぎるでしょう?」

「寂しいだど!?寂しさなど感じては居ない!誰も、何も、感じては居ない!喜びも、悲しみも．．．全ての音が消え去れば、苦しみも消える!何も感じない平穏な世界．．．これこそが、究極の理想の世界だ!!」

ノイズの告白を聞き、ブルーム達四人はある人物を思い出していた。その名は、ゴーヤーン!だが、ノイズの考えは、ゴーヤーンの望んだ無とも違う気がする四人だった。

「さあ、問答は終わりだ!後はお前達と、その妖精共を片付ければ．．．私の望む世界が実現する!!」

「そんな事、させない・・・音楽の無い世界何て・・・」

メロディは拳を握りしめて身構えると、ノイズは口元に笑みを浮かべ、  
「なら、実力で証明して見せるのだな!!」

ノイズの宣言に、メロディ同様身構えるプリキュア達・・・

ノイズが再び力を込めると、辺りに爆発波が発生する。止めようと動き出すプリキュア達だったが、ノイズは強く、プリキュア達は何度も吹き飛ばされた・・・

本気を出したノイズの攻撃力は桁違いに強く、プリキュア達の数々の必殺技さへも、有効打には至らなかった・・・

「どうした!?もう終わりか?プリキュア、所詮貴様らに・・・音楽を守る事など出来んのだ!見ろ、この静けさを・・・」

口元に笑みを浮かべるノイズに、ハミイとフェアリートーン達はゆっくり首を振る。フェアリートーン達一同は、静寂なる中で微かな音色を奏でた・・・

(心が、安らいでいく・・・)

ブラックは目を閉じて、奏でられる音色に耳を傾けた・・・

「自分達だけでは、今はこれが精一杯ドド」

「でも、プリキュアのみみんなが力を貸してくれば、もつと、もつと大きな音を奏でられるレレ」

「もっと、沢山の音を出したいソソ」

「みんなが一緒なら・・・もっと沢山の音色を奏でたいドド」

フェアリートーン達は、プリキュア達の周りを飛び回り続けた。ハミイも頷くと、「伝説の楽譜は真つ白ニャー!どんな曲でも、また新しく創れるニャー!ハミイは、セイレーン、響、奏、アコ、そしてプリキュアのみんなが創った音楽が聴きたいニャ・・・」

妖精達の励ましを受け、沸々と気力を充実させていくプリキュア達・・・

「そうだよね・・・私達の鼓動は、まだ生きている!だから音楽は無くならないよね・・・絶対!!」

「ノイズに消されたって創ればいいよね、何度でも・・・みんなと一緒に!!」

「創りたい、そしてメイジャーランドのみんなとも一緒に演奏するの!!」

「唄いたいなあ・・・みんなと、思いつきり声を張り上げて!!」

「うん!聴かせてやろうよ、ノイズに、私達プリキュアのハーモニーを!!」

メロディが、リズムが、ビートが、ミュージックが、そして、ドリームが、他の一同も頷き合うと、

「私達は絶対に諦めない!!!」

プリキュア達の思いが合わさった時、フェアリートーン達は光輝き、その光は、メロディ、リズム、ビート、ミュージックを照らした・・・

肩や頭頂部のリボン状の部分が、羽のような衣装に変わり、背中には金色の羽が追加され、腰の周辺から尾羽が付いた。

今、メロディ達四人は、クレツシエンドキュアメロディ クレツシエンドキュアリスム クレツシエンドキュアビート クレツシエンドキュアミューズとして舞い降りた・・・

そんな彼女達を見たプリキュア達は、再びその目に闘志を燃やした!!

### 3、ノイズの本心

ノイズは、更なる進化を遂げたメロディ達、再び立ち上がったプリキュア達を見て驚くも、

「その程度の力で・・・私を倒せると思うなよおお!!」

急降下してきたノイズを、迎え撃つメロディ達四人が羽ばたく、空中戦を繰り広げるメロディ達だったが、進化した彼女達四人を持つてしても、ノイズが優勢に戦いを進めていた・・・

「私達も・・・行くよ!!」

ドリームが仲間達に声を掛け戦いに加わる・・・

ブルーム達が、足下に力を溜め飛翔する・・・



ブロッサム達がマントを纏い宙に飛ぶ・・・

戦いに参加したプリキュア達と共に、ノイズにダメージを与えていくメロディ達、ノイズは急降下して距離を取るも、地上に居たブラック達、ピーチ達が突進し、ノイズが体勢を整えるのを阻止する。

「クツ・・・この私を此処まで追い詰めるとは・・・だが、例えこの場で私を倒そうとも、私は何度でも甦って見せるぞ!!必ず、私の理想・・・究極の無の世界を作ってやるうう!!」

再び急上昇し体勢を整えるノイズの表情に、一瞬悲しみが見えたメロディは戸惑い、今ならノイズを倒せると、行動に移ろうとするプリキュア達の前に降り立つと、ノイズを見つめた。

ジイと悲しげな視線でノイズを見ているメロディに気付き、ノイズは首を傾げた。何故そんな瞳で自分を見るのか、ノイズには分からなかった。

(そんな世界を作って・・・ノイズは何がしたいんだろう?)

メロディは、その疑問をノイズにぶつけて見たくなかった。メロディは一同にノイズと話をしたいから、戦う事を待って欲しいと伝えると、一歩、また一歩ノイズへと近づいて行った。

「ノイズ!それって・・・悲しくない?」

「悲しいだど!? 全て消えれば、悲しさだつて消え失せる」

「音も無い、誰も居ない、何も無い世界で・・・あなたは何をやるの?」

「何もしないさ・・・そして、私もいずれ消え去るさ」

メロディは首を激しく振ると、

「どうして!?! あなたの理想の世界なのに、自分は消えてしまうの? 何それ、あなた、何がしたいの? 私には分らないよ! あなたは一体何なの!?!」

ノイズはイライラしたように大声で超音波を奏でると、プリキユア達は一齐に皆耳を塞いだ。一瞬寂しげな視線を一同に向けたノイズは、

「それだ! 何時もそうやってお前達は・・・私を忌み嫌つてきた!! 私が何なのかだと!?! そんな事・・・私の方が知りたい!! 大体、この私を産み出したのは・・・お前達人間だ!!」

ノイズの告白に、一同は呆然としながらノイズを見た・・・

ノイズを産み出したのは、私達人間!?!

プリキユア達には、その言葉の意味が理解出来なかった・・・

ノイズはゆっくり語り始める・・・

「この世界は、決して楽しい事ばかりではない! 楽しい事もあれば、同じように悲しい事がある。その悲しみの中から・・・私は生まれた!! 私、悲しみそのもの・・・お前達人間の悲しみの結晶だ!」

ノイズの言葉を聞いていたメロディは、ある事に気付く、ノイズは、音楽が嫌い何かじゃない……と、

「ノイズ……あなたは、音楽を嫌い何かじゃない！あなたは……歌を忘れたカナリヤ何だね!!」

「黙れ！」

ノイズは、警告するかのよう、メロディの目の前に衝撃波を放ち威嚇するも、メロディは怯まない。

「独りぼっちだと思ったんだね！」

「黙れ、黙れ！」

イライラしたように、ノイズは両手を振り衝撃波を放ち、メロディに攻撃を当てるも、ヨロヨロ立ち上がったメロディは尚も言葉を続ける。

「さえずる事を止めたんだね……」

「黙れと言っているのが、わからんかああ!!」

激昂しながらも、ノイズの心の中に、昔の記憶が甦ってくる……

私は……何時生まれたのだろう……

何故私は此処に居るのだろう……

何故私の心はこんなにも空しいのだろう・・・

何故私の心の中は悲しみで一杯なのだろう・・・

誰か、私に教えておくれ!・・・

何だ!?この美しき音色は・・・

小鳥達よ、その歌声で私を癒しておくれ・・・

私も君達と共に歌おう・・・

小鳥達よ・・・

何故私の声を聞いて怯えるのだ?・・・

全ての生き物達よ・・・

何故私の声に怯えるのだ?・・・

「貴様らとて同じだああ!!誰が、誰が私の耳障りな歌を聴くものかああ!!!」

ノイズの心からの叫びを、思いを知ったメロディを始めとするプリキユア達は、両手を広げ、慈愛に満ちた目を浮かべた・・・

「私達は、もう耳を塞がない!」

ブラックが、ホワイトが、ルミナスが、

「あなたに、音楽の素晴らしさを!」

ブルームが、イーグレットが、ブライト、ウインディが、

「「「「歌の素晴らしさを！」」」」

プリキュア5が、ローズが、

「「「「仲間の素晴らしさを！」」」」

ダークプリキュア5が、

「「「「思い出させてみせる!!」」」

ピーチが、ベリーが、パインが、パッションが、

「「「「あなたは独りぼっちじゃないって」」」

ブロッサムが、マリンが、サンシャインが、ムーンライトが、

「「「「私達プリキュアが、もう一度信じさせて見せる!!」」」

メロディが、リズムが、ビートが、ミュージアが・・・

「ノイズ！あなたの思いの全てを・・・私達が受け止めて見せる!!」

メロディの言葉に頷いたブロッサム達は、スーパーシルエットに変身すると、ブロッサム達を中心に二列になるプリキュア達、その側に集まる妖精達、メツプル達、フラッピ達も妖精の姿になりそれぞれのパートナーの近くに並び立つ・・・

プリキュアの、妖精達の思いが一つになり、嘗てのようにハートキャッチミラージュが凄まじい輝きを発し上昇していく。

「これは一体!?!」

呆然と光を見つめるノイズだったが、何故か不快感は全く無かった……

「無限の力と無限の希望！そして、無限の愛を持つ星の瞳のプリキュア！プリキュア!!

無限シルエツト!!!」

「無限……シルエツトだと!?!」

ノイズは呆然としながら、星の瞳を持つ巨大な女神のようなシルエツトを見つめた……

無限シルエツトの姿が、響に似た少女の姿を露わにする。

「私達の力、思い、希望、夢、そして、愛……全てをこの歌に込めるわ……プリキュ

ア！無限シルエツトレクイエム!!!」

嘗て、カオスを鎮めた無限シルエツトレクイエムがノイズに発せられる。その穏やか

な光が、安らぎの歌声が、ノイズの心に安らぎを与えていった……

（私にも……まだこんな穏やかな気持ちだが、残っていたのだなあ……）

ノイズはその美しき歌声に耳を傾けた……

ノイズの心が癒されていくように、戦いで荒廃した加音町が元に戻っていった……

無限シルエツトが消え去り、メロディは飛ぶ！

まるで、ノイズを迎えに行くように・・・

「ノイズ、ごめんね！今まで私達、あなたを倒す事しか考えてなかった。でも、そうじゃない！そうじゃなかった・・・」

「・・・・・・・・・・」

光に包まれ出したノイズは、穏やかな表情でジツとメロデイの言葉を聞いていた・・・  
「そうよ、ノイズ・・・あなたはあなたなの！その声も、羽の音も、あなただけの立派な音楽なの！！みんなと違って良かったって良いじゃない！みんなだって、それぞれ自分だけの音楽を持っているの・・・いろんな人がいて、いろんな音楽があつて、喜んだり悲しんだり、きつとそうやってみんな繋がつてこの世界は出来ている。この世界が一つの組曲何だよ！！ノイズ、あなたもその一部なの・・・だから私達は、あなたを消す事何て出来ない！！」

メロデイの言葉を表すように、両手を広げたプリキユア達は、まるでノイズに早く降りておいでとでも言っているようだった・・・

「お前達・・・何故そこまでする？私は音楽を奪い、お前達を倒そうとしたのだぞ!」  
「そんなの決つてるじゃない!」

ブラックが・・・

「私達プリキユアは、戦うだけが全てじゃないんだよ!」

ブルームが・・・

「みんなの笑顔を守る事・・・」

ドリームが・・・

「それもプリキュアの使命なの！」

ピーチが・・・

「道を踏み間違えている人が居るのなら、手を差し伸べて正しい道に導いて上げる・・・  
それもプリキュアの使命何です!!」

ブロッサムが・・・

「あなたの笑顔も守らなきゃ・・・プリキュアの名がすたるでしよう？」

メロディがノイズにウインクすると、

「ハハハハ・・・全く・・・お節介な奴らめ！」

ノイズは、心の底から笑い、穏やかな表情で光と共に舞い上がった・・・

ノイズの心が、深い哀しみから解放された瞬間だった・・・

プリキュア達は、光に包まれ消え去ったノイズを見つめ続けた・・・

4、幸せのメロディ！！

プリキュア達の導きを受けたノイズは、光と共に消えた・・・



プリキュア達は変身を解き、それぞれ光が消え去るまで見つめていたが、一同は上空から沢山の何かが降ってきた事に気付くと、驚きの声を上げる。

「な、何あれ!?!」

「あれは・・・音符、音符だわ!!」

「分かったニヤ!あれは、ノイズに吸収された音符達が解放されたのニヤ!!」

驚くなぎさ、ジツと見つめて音符だと気付くエレン、解放された音符達だと喜ぶハミイ、少女達は降り注ぐ音符達を見つめ微笑んだ。

「ありがとう、ノイズ! 私達の言葉を受け入れてくれたんだね・・・私達、待ってるからね!!あなたが戻って来るのを・・・この場所で!!!」

満面の笑みを浮かべながら、上空を見つめる響、奏は響の右腕に手を回し、気付いた響と見つめ合い微笑むと、二人は再び上空を見つめた・・・

伝説の楽譜に、今幸せのメロデイが加わった・・・

「これは一体!?!何でみんな元に戻らないの?」

ノイズを浄化したものの、加音町はいまだ静まりかえり、人々の石化が解ける事は無かった。なぎさは呆然と辺りを見回すのだった・・・

この世界に、音楽が戻る事は無かった・・・

世界の人々が、元に戻る事は無かった・・・

少女達は、為す術もなく呆然とその場に立ち尽くしていた・・・

「もしかしたら・・・ハミイ、幸せのメロディを歌えば、みんなを、音楽を、再び甦らせられるんじゃないかしら？」

「エレン、どういう事？」

エレンの閃きの意味が分からず、響が問い返すと、エレンは自身の推察を一同に話し始める。

「考えてみて、ノイズは、不幸のメロディを聴いて復活し、音符達を吸収したノイズの力で、世界から音楽は消え、人々は石化した・・・裏を返せば、幸せのメロディを歌えば、人々を、音楽を、元に戻せるって事じゃないかしら？」

エレンの言葉を聞いていた一同、なぎさ、咲、のぞみ、ラブ、えりか、響は理解出来ず、挙動不審な態度になると、なぎさはほのかとゆりを、咲は舞、満と薫を、のぞみは、りんとかれんを、ラブは、美希、祈里、せつなを、えりかはつぼみを見て、響は奏、エレン、アコに縋るような目を向けた。

なぎさ達は、私達に分かるように教えてと合図を送り、一同は溜息を付きながら、分かりやすく説明をするのだった・・・

「うん！ エレンの言う通りだね．．．試してみよう!!」

「なぎさ．．．あなた、本当に理解してるの？ ウフフ、まあいいわ!!」

ほのかとゆりの説明を聞き、理解したのかしないのか、なぎさはエレンの案を試してみようと言うも、エレンは、アコと共に疑惑の視線をなぎさに浴びせると、思わずなぎさが怯み、エレンは思わずクスリと笑い、

「でも、此処で幸せのメロディを歌つても意味は無いかも知れない．．．みんな、メイジャーランドに行きましょう!」

「待つて、エレン！ まだ、待ちましょう．．．ノイズは、きつと帰ってくる!!」

「そうよね．．．待ちましょう!!」

「きつと帰ってくる！ 私、信じてる!!」

エレンにもう少し待つように言う響、エレンも頷き、祈里も信じ、少女達が再び空を見上げて居ると、

「来た！ みんな、帰つて来たわ!!」

せつなが嬉しそうな表情を浮かべ、大空を指差すと、一同の視線がその方角に釘付けになった．．．

翼を懸命に羽ばたかせ、ピーちゃんとなつてノイズは再び戻つて来た．．．

まるで悪の心を洗い流したかのように、真っ白になつて．．．

「お帰り・・・ピーちゃん!!」

響が満面の笑顔を浮かべ両手を広げると、ピーちゃんは嬉しそうにその胸に飛び込み、  
パイパイ鳴き、少女達に微笑みを向けた。一同は待ち侘びていたように、お帰りと次々  
声を掛けると、ピーちゃんの目からは、涙が零れた・・・

「でも・・・何で白くなってるんだろう?」

「全てを洗い流して・・・生まれ変わって帰って来た・・・って事かしら?」

なぎさは、何故白くなってるのか疑問に思うも、ほのかの言葉に何となく同意するの  
だった・・・

「ピーちゃんも戻って来たし・・・改めて、メイジャーランドに行きましょう!!」

エレンの言葉に同意し、少女と妖精達は、メイジャーランドへと向かった・・・

静まりかえる音楽の国、自分と、自分の配下達のでかした行為を思い返し、ピーちゃん  
は悲しげな視線を浮かべるも、響はピーちゃんの頭を撫でると、

「大丈夫だよ、ピーちゃん!」

「パイパイ!?!」

尚も不安げにするピーちゃんを見たハミイは、何かを思案するようにジツと見つめて  
いた。

宮殿内に入った一同は、静まりかえる宮殿内の中で、寄り添うように石化しているアフロディテとメフィストを発見する。顔色を変えて駆け寄るアコは、

「パパ・・・ママ・・・」

アコは涙を流しながら抱きつくも、直ぐに二人から離れて涙を拭い、

「待ってて・・・今、今、元に戻して見せるから!!」

アコと目が合い、ピーちゃんは詫びているのか、パイイと一鳴きすると、アコはピーちゃんを抱き上げ、

「気にしないで・・・だって、ママもパパもお爺ちゃんも・・・みんな、みんな、これから必ず元に戻るんだから!!」

「ええ、アコの言う通りよ!行きましょう、私達の戦いの始まりの場所・・・コンサートホールへ!!」

エレンに導かれ、一同はコンサートホールへと向かった・・・

誰も居ない静まりかえったホール・・・

今、ハミイは伝説の楽譜をセツトし、一同は、これからハミイが歌う幸せのメロディを、今か、今かと待ち侘びていた。大きく息を吸い込むハミイ、一同が始まると思った

その時、

「その前に・・・みんなに言っておきたい事があるニヤ!!」

歌うと思っていた一同はタイムリングを狂わせ、その場で転ける・・・

「もう、ハミイったら・・・私達に言っておきたい事って何？」

苦笑を浮かべたエレンがハミイに問うと、珍しく真顔のハミイを見て、エレンも顔色を変えた・・・

「ハミイは本来、年始めのあの時、幸せのメロディを歌う筈だったニヤ・・・でも、ハミイは楽譜を奪われてしまったニヤ!だから、ハミイは・・・今年の幸せのメロディを歌う資格は・・・無いのニヤ!」

「そんなあ・・・それは、ハミイのせいじゃないわ!!それは私が・・・」

エレンが、それはハミイのせいじゃなく、操られて居た自分の責任だと告げると、ハミイはゆっくりお辞儀をし、

「セイレーン、ハミイを庇ってくれてありがとうニヤ!もし、このままハミイが歌っても良いのなら・・・ハミイは、セイレーンと、プリキュアのみんなや、妖精のみんなと一緒に歌いたいニヤ!もちろん、ピーちゃんも一緒ニヤ!!」

ハミイの言葉にざわめく一同、特にピーちゃんは激しく動揺していた・・・

「そういえば、前にハミイは言ってたココ・・・幸せのメロディを、セイレーンと一緒に

歌うのが夢だつて……」

「そうだったメポ……」

ココやメツプルの言葉を聞き、呆然とするエレン……

「ハミイがそんな事を……」

エレンが楽譜の前で佇むハミイと視線が合うと、ハミイはニツコリ微笑み、エレンも微笑み返すと、

「分かつたわ、ハミイ！みんな、ハミイの言う通り……みんなで歌いましょう!! 幸せのメロディは……みんなで歌ってこそ価値があると私も思う!!」

そう言うと、エレンはハミイの下に走り出した……

「いきなりそう言われても……どうする?」

「どうするって言われても……どうしよう!」

なぎさとほのかは顔を見合わせ困惑するも、響が二人の背を押すと、

「どうするって……決つてるでしょう! 行きましよう、幸せのメロディをみんなで歌いに……」

「そうだね……行こう、みんな!!」

なぎさとほのかも頷き、ステージへと駆け出す……

響に、奏に、アコに、次々背中を押された一同が、ハミイが待つステージへと駆け出

す・・・

尚も不安げな表情を浮かべるピーちゃんに、笑顔を浮かべる響、奏、アコ、「ピーちゃん、私達もピーちゃんの歌声が聴きたい！ピーちゃんにしか歌えない、ピーちゃんの音楽を、私達に聴かせて!!」

ピーちゃんは嬉しそうな表情を浮かべ、ハミイと少女達の下へ羽ばたく、響、奏、アコも笑顔を浮かべながらそれに続いた・・・

「じゃあ、行くニヤア!!」

ハミイの合図と共に、少女達が、妖精達が、幸せのメロディを歌い始める・・・

ステージから、響き渡る歌声は、メイジャーランド、マイナーランド、全ての世界へと響き渡った・・・

世界に響け！幸せのメロディ！！

5、また会う日まで！

世界に響き渡った、少女達が歌う幸せのメロディ・・・

光の園のクイーンが、泉の郷のフィーリア王女が、ダーククイーンが、希望が花市の植物園に居る薫子が、鏡の部屋に覆われた地球の神が、響き渡る歌声を聞き微笑む・・・



そして、深淵の闇の中・・・

歌声に微笑む少女の姿があった・・・

(また一つ、光と闇が融合した！でも、光の力が輝きを増しているのは・・・もう少し、このままあなた達プリキュアの行く末を見させてもらおうわ!!それによつては・・・)  
そう言うのと、闇の中の少女は姿を消した・・・

少女達の、妖精達の歌声は、石化していた人々を次々と元に戻して行つた・・・

アフロデイト、メフィストを始めとするメイジャーランドの人々が・・・

ウエスター、サウラーを始めとするラピリンスの人々が・・・

四大国王と住民達が・・・

世界中の人々が元に戻つていった・・・

「我々は一体!?!」

「ええ、不気味な声が聞こえたかと思つたら、今度は・・・」

思わず顔を見合わせ、キョトンとするメフィストとアフロデイト、

「あなた・・・この歌は、幸せのメロデイト!」

「そうだな・・・だが、大勢の歌声が聞こえてくるのは、一体どういう事だ?」

「ええ・・・あなた、行ってみましよう!!」

アフロディテが、笑みを浮かべながらメフィストに話し掛けると、メフィストも満面の笑顔を向け、歌声が聞こえるコンサートホールへと歩き出した・・・

「あれえ!?!何でメイジャーランドに居るんだ?」

「確か私達は・・・加音町に居た筈だが!」

「ああ、不気味なハウリング音を聞いて、そこからの記憶が・・・」

「ひよつとしたら、私達はプリキュア達に救われたのでは?」

「プリキュアに?そうか・・・またセイレーン達に俺達は・・・」

「二人共、それより耳を澄まして下さいよ!素晴らしい歌声が聞こえてますよ!!」

元に戻ったバストラ、バリトン、ファルセットの三人、バストラとバリトンは、エレン達プリキュアのお陰だと悟り感觸深げにしていると、ファルセットは、響き渡る歌声を二人にも知らせ、二人も歌声に気付くと、聞き惚れるように穏やかな表情を浮かべた。

「バストラ、バリトン、僕達もプリキュア達の下に向かいますよ!!」

「そうだなあ・・・行くか?」

「ええ、彼女達には・・・直に会ってお礼を言いたいしね」

三人は顔を見合わせ合うと微笑み、声が響き渡るコンサートホールへと走り出し

た．．．

「はて!?!わしはノイズに敗れた筈では．．．」

「おそらく、プリキユア達がノイズを倒してくれたのでしよう!そして、この歌声は：：  
幸せのメロディ!!」

まるで歌に導かれたかのように、マイナーランドに封印されていた音吉とクレツシエ  
ンドトーンは、封印から解放されると、光に導かれるようにメイジャーランドへ来てい  
た。国中に、いや、世界中に響き渡る歌声に、二人は笑みを浮かべる。

「音吉、彼女達を称えに向かいましょう．．．」

「そうですねあ．．．みんな、よくやってくれたわい!」

二人は、歌声が響き渡るコンサートホールへと向かった．．．

響き渡る歌声．．．

今、世界に響き渡った幸せのメロディが、歌い終わろうとしていた．．．

コンサートホールに次々と集まってくるメイジャーランドの人々、皆、少女達と妖精  
達の歌声に聞き惚れていた．．．

「アコ．．．立派に、立派になって．．．」

号泣するメフィストを見て、少々呆れるアフロディテだったが、思わずクスリと笑む。

「お、おい、あそこで泣いてるの・・・メフィスト王じゃないか?」

「ほ、本当だ!い、何時お戻りになられたんだ?」

「おい、あそこに居るのは、三銃士のバストラ様、バリトン様、ファルセット様じゃないか?」

「あちらには先代王、音吉様までいらつしやられるぞ・・・一体どうなってるんだ?」

「今年の歌姫、ハミイと共に幸せのメロディを歌う彼女達も気になるな・・・一体何者何だ?」

幸せのメロディに聴き惚れていた人々は、目の前に次々に現われる王族関係者に度肝を抜かれた。そして、幸せのメロディを歌う、歌姫ハミイと共に歌い続ける少女と妖精達を見て驚くも、幸せのメロディは、いよいよクライマックスを向かえようとしていた・・・

「ラ〜ララアアア!!!」

一同が歌い終わった時、コンサートホールに鳴り響く拍手の渦・・・

少女と妖精達は、照れくさそうにしながらも、皆表情は晴れやかだった・・・

「アコオオオ!パパは、パパは感動したぞおお!!」

「パパ!?ママ!?!・・・良かった、元に戻れたんだね!!」

アコが走り出し、メフィストとアフロディテに嬉し涙を流しながら抱きつくくと、二人は満面の笑顔を浮かべアコを抱きしめた・・・

「バスター！バリトン！ファルセット！良かった・・・あなた達も無事に・・・キヤアアアア！！」

三銃士の三人がエレンを見付けるや、嬉しそうに全速力で駆け出し、近付いて来る姿を見たエレンは、無事な三人を見て涙ぐむ、三人はそのままエレンに飛びついて、驚愕の表情を浮かべるエレンを押しつぶした。

「ウウウオオ！セイレーン・・・ありがとう！ありがとう！！」

「一生付いて行きます！一生付いて行きます！」

「今まで悪い事してきて・・・ごめんなさい！ごめんなさい！一生僕達の上司で居て下さい！！」

「やっかましいわああ！さっさとドカンかああ！！」

感動の再会も何処へやら、三人に押しつぶされたエレンは、嘗てマイナーランドに居た頃のように三人に接するのだった・・・

「まさか・・・何故ノイズがプリキュア達と共に居るのだ？」

「これは一体!？」

そんな一同とは別に、音吉とクレツシエンドトーンは、響が抱いている白い妖精ピーちゃんを見て呆然とするのだった・・・

「お前達、何をして居る!? そいつはノイズじゃぞ!!」

険しい顔をして響が抱いているピーちゃんを指さす音吉、ピーちゃんは悲しげな声でパイと鳴く、音吉の言葉を受け、メフィストとアフロディテ、三銃士の表情が強張る。

「音吉さん、いくら幸せの世界になっても、悲しみや苦しみは・・・全て消えるわけじゃないわ」

「私達プリキュアは、ピーちゃんを受け入れた上で前に進みたいの」

「悲しみを見ない振りをするのは、幸せとは言えないもの」

「よく見れば可愛いよ・・・ねえ、ピーちゃん!」

響、奏、エレン、アコがピーちゃんを庇う、他の一同も次々とピーちゃんを庇い、

「ピーちゃん、これからはずっと一緒だからね」

響がピーちゃんに頬擦りすると、ピーちゃんの目からは、止め処なく涙が零れた・・・

「何という事じゃ・・・」

「あの子達は、ノイズを受け入れ、共に歩む事を決めたようですね・・・私も忘れていました! 嘗て、あの子達と同じ気持ちを持っていた事を・・・見守りましょう! あの子達を!」

「そうですなあ……まさか、あの子達から教わる事になるとは……」

クレッシェンドトーンの言葉に頷いた音吉は、髭を摩りながら頼もしくなった少女達を見て微笑んだ……

「みんな、私達はマスターの下に戻るわね！」

「少しの間だったけれど、またあなた方と過ごせて楽しかったわ！」

「一緒に歌も歌えたしね！」

ダークアクア、ダークミント、ダークレモネードが先ず一同に語り掛けると、かれん、こまち、うららが近づき、またの再会を誓い合い語り合つて居ると、困惑した表情のメフィストが近づいて来る。

「それは困る……もう少しゆっくりは出きんのか？ 礼も兼ねて、プリキュア達には盛大な宴でも……」

「ご心配には及びません！ 私達は元々、この世界に現われた闇の調査にやつて来たのですから……お気持ちだけ頂きます!!」

メフィストに引き留められたダークプリキュア5だったが、ダークドリームが一同を代表し、気持ちだけ受け取るとメフィストに伝えるも、メフィストはまだ承服しかねる表情を浮かべ、

「ウム・・・しかし・・・だが、無理強いも出来んか・・・分かった！五人共、よく協力してくれた。感謝する！道中気をつけてな！！」

メフィストは、五人の少女達一人一人と握手し感謝を込めた・・・

「今回は怖い話を聞かされずに済みそうね・・・」

「ダークルージュ、そう言う事は言わない！直ぐに実行しそうな人が居るんだからあ！！」  
怖い話を聞かされる事もなく帰れそうな様子に、思わずホツとしながらダークルージュがポツリと呟くと、りんは大慌てで人差し指でシツとジェスチャーをすると、表情を強張らせながら、なぎさとこまちの様子を伺う。なぎさもこまちも、今回はそんな余裕もないのか、なぎさは、ほのか、のぞみと共にダークドリームと語り合っていて、こまちもかれん、うららと共にダークアクア達三人と語り合っていた。

それを見て思わずりんはホツと安堵し、ダークルージュと見つめ合い笑みを浮かべた。

「あなた達、気をつけてね！ダーククイーンにもよろしく言っておいて！助かりましたってさ！！」

「ダークドリーム・・・きつとまた来てね！！」

「ええ、必ず！！のぞみ、みんな、元気だね！！みんな、行くよ！！」

「「「YES！」」」



なぎさの言葉に無言で頷くダークドリームがニツコリ微笑みを向ける。固い握手をしたのぞみとダークドリームは抱き合い、またの再会を誓いあった・・・

仲間を促したダークドリームは、五人の力を合わせ空間に歪みを生じさせると、次元の狭間へと消えていった・・・

一同は、次元の歪みが元に戻るまで、手を振り続けていた・・・

「皆の者、これよりプリキュア達への感謝を込めて宴を開く、直ぐに準備を・・・」

王宮関係者に指示を出すメフィストに気付いた響は、慌ててメフィストに近付くと、  
「待って、メフィスト・・・王！私達はこのまま加音町に戻るわ!!」

「な、何いい!?!お前達まで戻ると言うのか? いや、しかしそれでは・・・」

「私達、戻って加音町のクリスマスコンサート続きをしなくちゃ・・・」

響は、メフィストがメイジャーランドの王様だと思いだし、慌てて敬称を付ける。困惑するメフィストに、響はクリスマスコンサート続きがあるからと告げるも、メフィストはそれでは気が収まらないから考え直すように頼む、アフロディテはメフィストの肩に手を乗せると、

「あなた、無理強いするのも悪いですよ！また彼女達の都合が良い日に招待すれば良いのでは?」

アフロディテの言葉に、ウムと考え込み承諾するメフィスト、アコが二人に近付いて来ると、

「パパ、ママ、私・・・もうしばらく加音町で、お爺ちゃんとピーちゃんと暮らしたいんだけど・・・ダメかなあ!？」

「な、何いいい!?!アコオオ、もうメイジャーランドに帰って来ても良いんじゃないか? なあ、アフロディテ!?!」

お前からアコを引き留めると、困惑した表情のメフィストが目で訴えると、アフロディテはクスリと笑い、

「そうね・・・でも、アコが望むようにしてあげましょう!!それが、今後のアコの為になると思います・・・お父様、アコをもうしばらくお願いします!!」

アフロディテが父音吉に頭を下げると、音吉は髭を触りながら無言で何度も頷く、  
「ウム・・・アコがそう言うなら・・・しょうがない、此処は私も加音町に!」

「あなたああ!!」

キツとアフロディテに睨まれ、トホホ顔のメフィストが悄気返る。一同はそんなメフィストを見て微笑みを浮かべた・・・

一同が支度を終え、メフィスト、アフロディテ達の下にやって来る・・・

「それじゃあ、私達帰り．．．あれ!? エレン、ハミイ、どうしたの?」

メフィストは、アコに何時でも帰っておいでと今にも泣き出しそうな顔を浮かべ、三銃士は、プリキュアバンザイ!と大声で何度も叫び、エレンにやつかましいわと怒られる。その様子をハミイとソリー、ラリーが見つめ笑っていた。響は、何故エレンとハミイがこつちに来ないのか首を捻り問うと、エレンは少し真顔になってハミイと顔を見合わせると、

「私とハミイ、それにソリーとラリーは．．．メイジャーランドに残るわ!!」

「そんなああ!?!」

「エレン、ハミイ、急にどうしたの?」

「．．．．．」

突然のエレンの告白を受け、響と奏は呆然とし、なぎさ達一同が驚愕する。慌ててエレンに真意を聞く響に、エレンはハミイと顔を見合わせ意味深な表情を浮かべると、  
「元々私達は、音符を探しに加音町に来たし．．．音符が全て伝説の楽譜に戻った今、私達の加音町での役目は終わったの．．．それに、私が加音町に行くと．．．」

エレンが背後のバスドラ達三人を指さすと、三人はエレンが加音町に行くなら、自分達も行くと騒ぎ、メフィストを困らせていて、響と奏は苦笑する。

「寂しくなるね．．．」

「二度と会えない訳じゃないわ！私も、ハミイも、また必ず加音町に遊びに行くから！！みんなも今までありがとう！！特にせつなにはお世話になっちゃって・・・」

「ううん、二度と会えなくなる訳じゃないし、サヨナラは言わないわよ・・・エレン！！」  
エレンとせつな、互いに笑みを浮かべながら握手を交わす・・・せつなの言葉にニコリ微笑みながらエレンが頷くと、なぎさ、ほのか、ゆりを見つめ、

「なぎさ、ほのか、ゆり、受験頑張つてね！！」

エレンの言葉で思い出したのか、なぎさは頭を抱え悶え、ほのかに頭を撫でられる。ゆりはそんななぎさを見て、呆れたように溜息を付いた。エレンはクスリと笑うと、響達を見つめ、

「響、奏、アコ、他のフェアリートーン達や、ピーちゃんをヨロシクね！！みんなも気をつけて帰ってね！！」

「うん、エレンもハミイも元気でね！」

互いに少し涙ぐみながら、別れの挨拶を交わしたエレンと響、奏、ハミイはピーちゃんに近付くと、

「ピーちゃん、ハミイの分までみんなに可愛がられるニヤー！」

「大丈夫よ、ピーちゃんは可愛いもの！」

ハミイの言葉にアコは微笑みながらピーちゃんの頭を撫でると、ピーちゃんは微笑み

ながらピイピイ嬉しそうに鳴く、ハミイも嬉しそうに何度も頷いた・・・

「それじゃあ、私達戻ります！エレン、ハミイ・・・また会いましょう!! みなさんもお元気です!!」

「元気でねえ!! また会いましょう!!!」

一同がエレンとハミイに駆け寄り、抱き合う者、握手をする者、それぞれが大切な仲間との別れを惜しんだ・・・

音吉が作り出した錠盤の橋を通り、少女達は自分達の住む世界へと帰っていた・・・

その姿を、メイジャーランドの人々は、手を振りながら見送った・・・

その背に向けて、エレンとハミイが歌う・・・

みんなに幸せが訪れるように・・・

第六章：新たなる闇・その名はノイズ

完

## 第七章：三人の魔人とバッドエンド王国！

### 第三十九話：甦る魔

プロローグ

ノイズとの戦いから約三ヶ月が経った・・・

訪れた平和・・・

美墨なぎさは、T学芸大学教育学部に何とか合格、後輩プリキユア達との交流を通じ、なぎさは、自分の得意分野を次の世代に教えてみたいと考え、体育教師を目指し、新たな目標へと突き進む・・・

雪城ほのかは、名門T大学理学部に合格、ほのか憧れのプリキストン教授のような研究者を目指し、新たな目標へと突き進む・・・

月影ゆりは、名門T大学農学部へ合格、亡き父、そして、尊敬する薫子と同じ植物の研究者を目指し、新たな目標へと突き進む・・・

無事に合格した三人は、合格祝いを兼ねTAKO CAFEで久しぶりの息抜きをしていた・・・

「なぎさ、無事に合格できて良かったね！」

「本当、試験が終わった後、送られてきたメールに、私の人生は終わった！何て送られてきたから心配したわよ……」

ほのかとゆりがその時を思い出したのかクスリと笑い合う、なぎさはテレ笑いしながら頭を掻き、

「いやあ、二人が合格するのは当然と言えば当然だけど、私何か、自分で言うのも何だけどさあ……奇跡だよねえ!!何せあの時は、勉強所じや無かったし……二人には感謝してます!!」

12月中旬からクリスマスに掛けては、ノイズ、ハウリングとの決戦に備え、三人は勉強所では無かった。日頃から予習復習をしているほのか、ゆりと違い、なぎさが合格出来たのは、正に奇跡かも知れなかった……

「それに……あの子達からの応援メッセージも励みになったよね……」

なぎさは大事そうにカバンから沢山の手紙を出すと、ひかり、咲達、のぞみ達、ラブ達、つぼみ達、響達、そして、異世界に居るせつな、くるみ、エレンからも、三人はシロップを通じて励ましのメッセージを貰っていた……

「本当ねえ……私もこの手紙には何度も励まされたわ!!」

「ええ、私もよ……」

自分と同じ考えを持つているほのかとゆりを見て、なぎさはたこ焼きを頬張りながら何度も頷き、

「でしよう！だからさあ・・・今度は、あの子達を私達で持てなして上げない？」

「そうね・・・みんなに直接お礼も言いたいよね!!」

「つぼみ、えりか、いつきには、時々植物園で会っているとはいえ、こういう事はキチンとしておきたいわね・・・」

ほのかもゆりも同意してくれて、なぎさは満面の笑みを浮かべると、

「本当は、TAKO CAFEでも考えたんだけどさあ、美希がたこ苦手でしょう？で、お父さんが横浜中華街で美味しいお店が何件かあるって言ってたんだけど、みんなを招待して食べに行かない？」

「中華街!?美味しいとは思うけど・・・お店にもよるんでしょうけど、高いんじゃないの？」

「さすがに、みんなの分も私達三人でとなると・・・」

店屋にも寄るだろうが、中華街と聞き、ほのかとゆりは美味しいだろうが値段もその分張るのではないか？そう不安そうに口に出すと、意外にもなぎさは涼しげな表情を浮かべ、

「大丈夫、大丈夫、ここのお店、美味しい中華まん屋だから!」



なぎさの言葉に目が点になるほのかと、眼鏡を曇らすゆり、

「な、なぎさ、態々中華街までみんなを招待して・・・中華まんつて言うのはどうかと思うけど？」

「みんなの落胆した顔が目には浮かぶようだよ・・・」

「エッ!? そうかなあ?」

「なぎさらしいメポ! 相変わらずのドケチ振りメポ!!」

「誰がドケチよ! 誰が!!」

聞いていたメツプルは、なぎさらしいケチ振りだと溜息を付いてなぎさと言い合いになる。ほのかもゆりも、そんな二人を見てクスリと笑い、ひかりは、受験から解放された三人を、ワゴン車の中から見て微笑みを向けた・・・

だが、この時の彼女達には、大学入学前に再びプリキュアになって、横浜の街を守る為に戦う事になるとは思いもよらなかつた・・・

### 第三十九話：甦る魔!

#### 1、解かれた封印

メルヘンランド・・・

なぎさ達が受験に追われていた頃、女王ロイヤルクイーンが治める絵本の国は、悪の

皇帝ピエーロ率いるバッドエンド王国の強襲を受けた。

巨大なる巨人から逃げ惑う住民達、ロイヤルクイーンは、自ら先頭に立ち、バッドエンド王国に立ち向かった！

だが・・・

ロイヤルクイーンとピエーロの戦いは痛み分けに終わり、ピエーロは封印され、バッドエンド王国は撤退したものの、ロイヤルクイーンもまた、力の源キュアデコルをバッドエンド王国に奪われ、その力を封じられた。

眠りに付く女王ロイヤルクイーン・・・

混乱極まるメルヘンランド・・・

メルヘンランドの住民達は、眠りに付いた女王を嘆き悲しみ、滅多に外に出ようとはしなかった。

ごく一部を除いて・・・

そんなある日、メルヘンランドで更なる事件は起こった・・・

近付く事を禁じられ、禁断の森とされている封印の森・・・

家に籠もりつきりな毎日など耐えられないとばかり、悪戯好きな狐に似た妖精アンデは、羊に似た妖精キャンデイ、山羊に似た妖精ルセンを連れ、この日もメルヘンランド

を駆け回っていた。

「キャンデイ、ルセン、此処が禁断の森と言われてる封印の森デデ！」

「アンデ・・・お兄ちゃんが、此処には絶対近寄っちゃ駄目だって言ってたクル・・・もう帰るクル!!」

「キャンデイの言う通りセセ・・・」

キャンデイとルセンは、今にも泣きそうな顔を見ると、アンデにもう帰ろうと訴えるも、アンデは、キャンデイとルセンを意気地無しだとあざ笑ひ、自分はこんな所怖く何か無いと大見得を張る。

「おいでえ〜！おいでえ〜！」

その時、森の中から微かに聞こえてくる優しい女の声、アンデは不思議そうに首を捻り、キャンデイとルセンは思わず互いを見つめ驚いた。怖がるキャンデイとルセンを尻目に、アンデは、声に導かれるように森の中を突き進んで行き、慌ててアンデを止めようと、ルセンもその後を追った・・・

「アンデ！ルセン!!森の中に行っちゃ駄目クル〜!!アンデ？ルセン？・・・」

何度アンデとルセン、二人の名を呼んでも、森の中からは返答がなかった・・・

「キャンデイ、悪くないクル・・・ウワアアアン！お兄ちゃあああああん!!」

怖くなったキャンデイは、思わず後退り、泣きながらその場を走り去った・・・

一方、森の中へと歩を進めたアンデと、追いついたルセンの二人は、噂に聞いていた禁断の森の姿に驚愕していた・・・

それは、青々と生い茂る沢山の木々、鳥の囀（さえず）り、これの何処が禁断の森と呼ばれるのか、アンデとルセンには分からなかった。

更に歩を進める二人は、小さな小川をヒヨイとジャンプして向こう側に渡る。

だがその瞬間、さつきまでの景色は一変した・・・

木々は枯れ果て、生命の息吹が感じられない不気味な景色がそこにはあった・・・

二人の表情は見る見る引き攣り、互いに見つめ合うと、帰ろうかと頷き合い、二人が背後を振り向くと、小川は消え去り、辺りは薄気味悪い闇が広がり始めた・・・

「な、何だよ、これはああ！一体何デデ？」

「アンデ・・・怖いセセ」

不安そうにルセンはアンデの背にピツタリ寄り添う、不安が心を蝕んでいく・・・

そんな二人に再びさつきの女の声が響いてくる。

おいでえ、おいでえと・・・

戻る手段を見付けられず、アンデは意を決すと、声が聞こえてくる奥へと再び歩を進めた。ルセンは離れまいとその後を追った・・・

どれくらい歩いたのか、二人は朽ち果てた祠を見付けた。祠は嚴重に茨の鎖で縛られていて、声はどうやらこの中から聞こえてくるようだった・・・

「何だよ、この祠は？こんな場所あつたんだあ・・・随分古そうデデ」

「アンデ、この鎖・・・簡単に外せそうセセ」

祠の周りを興味深げに調べるアンデに、ルセンは、鎖は簡単に外せそうだけどうするか問う、アンデもどうするか考えて居ると、再び声が聞こえてくる。

「フッフ、あたしの声が聞こえる何て・・・大分封印の効力も切れているようだねえ？ねえ、その鎖を解いてくれない？そうすれば・・・あなた達の望む願いを、一つだけ叶えて上げるよ！」

「エツ、ボク達の願いを・・・何でも叶えてくれるつて？」

「ええ、そうよ！私達を此処から出してくれるならねえ・・・さあ、早く出しておくれ！出せ!!出せえええ!!!」

最初は優しげに声を掛けていた封印されていた何者かは、どんどん焦れてきたのか、二人に命令口調で此処から出せと声を荒げる。

アンデとルセンはブルブル震え出すも、何かに取り憑かれたように、祠を覆う茨の戒めを解いた・・・

ギイイイとゆつくりと不気味に扉が開いていくと、光を掻き消すように、上空にド

又黒い光が巻き起こった・・・

「何事(なに)で(なに)ござる?」

宮殿に居たライオンの容姿のようなキャンデイの兄ポップは、メルヘンランドを覆うように、悪しき気配が漂う事に驚愕する。まさか、バッドエンド王国が再び攻撃を仕掛けてきたのか? ポップに動揺が走る・・・

だが、悪しき気配が漂う場所、それは封印の森からだった・・・

「これは一大事(いちだいじ)で(なに)ござる・・・」

ポップは大慌(おほ)てで宮殿内を駆け回り続け、宮殿を守護する警備隊一同に注意を促すと、封印の森の様子を見に行こうとする。その時・・・

「お兄(にい)ちゃんあああん!!」

出掛けようとしたポップは、泣きながら駆け寄って来たキャンデイの体当たりをモロに食らい、その場に後頭部から倒れ込んだ・・・

「グウオオ・・・キャ、キャンデイ!? 何事(なに)で(なに)ござる?」

「お兄(にい)ちゃんあああん! アンデとルセンが・・・消えちゃったクル!!」

何時(いつ)バッドエンド王国が再び攻撃してくるか分からず、宮殿には近付かないように妹キャンデイに注意をしていたポップだったが、キャンデイの尋常(じんじょう)でない様子(ようす)に表情(へいしやう)を引

き締めると、

「キャンデイ、何があつたでござる？詳しく拙者に話してみるでござるー」

優しくキャンデイに話し掛けるポップ、キャンデイは伏し目がちに、怒らないか聞くと、ポップは怒らないから安心して話すように伝えた。

キャンデイはホツと安堵したのか、素直に話し始めた・・・

アンデとルセンと遊んでいて、封印の森の近くまで来た時、声が聞こえて、アンデとルセンが、封印の森に入ったきり出て来ない事を告げた。

「やはり、封印の森が原因でござったか！確か、あそこには・・・」

キャンデイの話を聞いていたポップは、昔ロイヤルクイーンに聞いた話を思い出すのだった・・・

昔、昔、メルヘンランドに邪悪なる三人の魔人が現われた事があつた。魔人は、メルヘンランドの妖精達を、悪しき存在に変え蹂躪したという。

ロイヤルクイーンは悲しみ、魔と対峙するも、三人の魔人、そして、三人が繰り出した巨大な魔物に苦戦する・・・

その時、光の園のクイーンの命を受け、二人の伝説の戦士が駆けつけ、ロイヤルクイーンと共に、魔物にされた住民達を元に戻し、巨大な魔物を追い返し、三人の魔人を森の

中に封じ、メルヘンランドに光の園の加護を授けたという……

その二人の名は……プリキュア！

伝説の戦士！プリキュア！！

以来、光の園の加護を受けたメルヘンランドは、ロイヤルクイーンの力と重なり合い、五つの光に導かれた新たなプリキュアの加護を受けたという……

「伝説の戦士……プリキュア！もし、あの時プリキュア達が居てくれたなら、ロイヤルクイーン様もキュアデコルを奪われ、その力を封じられる事も無かったでござろう……」  
「キャンディ……よく分からないクル」

「キャンディに話すには、まだちと早かったでござるかな？……キャンディ、拙者はこれより封印の森を調べて参る！かつてロイヤルクイーン様が、プリキュアと共に悪しき魔を封印した地、封印の森!!そこで何かが起こったとすれば……キャンディは此処で待っているでござるぞ!!」

ポップは、キャンディを宮殿内に待たすと、封印の森へと向かった……

その封印の森では、禍々しい一冊の本の中から、アンデとルセンの前に三人の人影が現われた……

皆褐色の肌をしており、一人は坊主頭で、ヒョロつとした2メートルはありそうな大



男、もう一人は、紫色のボンテージ風の衣装を着、黒いマントを羽織ったスタイルの良い赤い短髪の女、もう一人は、見た目小学生のような身長ながら、白髪塗れで顔は老人のような男……

三人は解放された祠の前で、背伸びをしたり、大欠伸（おおあくび）をしたりしていた。アンデとルセンは呆然と三人を見つめていた。その足下に落ちていた絵本のタイトルは……絵本の中の悪魔!!

アンデとルセンは、タイトルを見ただけで全身に悪寒が走るのだった……

「フフフフ、ご苦労様！一応、あんた達にはお礼を言わなきゃねえ……あたしの名前はサデイス」

「俺の名は……ベガ！」

「我が名は……デイクレだ!!」

女はサデイスと名乗り、大男はベガ、老人はデイクレと名乗りを上げる。三人はアンデとルセンを見て不気味に微笑むと、サデイスがニユツと顔をアンデとルセンに近づけるや、二人の額に五芒星のマークを貼り付け、二人の額のマークに手を翳すと、目を瞑り何かを念じた……

その時間およそ一分、サデイスが再び目を開くと、背後を振り向き、

「ねえ、ロイヤルクイーンの奴、バッドエンド王国のピエーロとかいう奴に、力を封印されてるんだってき！折角、あたしらを封印してくれたご挨拶にでも伺おうと思ってたのにねえ・・・プリキュアの奴らも此処には居ないようだし、どうする？」

アンデトルセンの記憶を読み取ったかのように、サデイスはメルヘンランドの現状を知ると、背後の二人に知らせた。サデイスの言葉を聞き、二人は意外そうな表情を浮かべると、ベガは上空を見上げニヤリと笑み、

「ほう、ロイヤルクイーンは力を封じられているというのか？では、嘗ての続きを・・・この国を滅ぼすとするか・・・」

嬉々として、今にもメルヘンランドを滅ぼしかねないベガを見て、サデイスはやれやれといった表情を浮かべると、

「それも良いけどさ、もう少し楽しまない？折角久しぶりに自由に動けるんだしき！！」

サデイスは、滅ぼすのは何時でも出来ると考えて居た。せっかく手に入れた自由をもっと堪能したいと思った。そんなサデイスの考えに気付いたのか、ディクレはサデイスの言葉に頷くと、

「良からう・・・では、一先ず魔界に戻るとしよう！！何時以来だろうか・・・我らが生まれし地、魔界に戻るの・・・」

ディクレは目を閉じ、魔界での日々を思い描いていた・・・

（やれやれ、年寄りはいれだから困るねえ！でも、ただこのまま戻るのも癪だし・・・それに、あたしたちの事が王の側近連中の耳に入れば・・・）

サデイスがさてどうしたものかと思案していると、アンデとルセンの存在を思い出し、

「ああ、忘れてた！あんた達にお礼をしなきゃねえ・・・ウフフ！良い事思い付いた！！」

サデイスは胸の谷間に右手を入れまさぐり、ミミズのようなウネウネ動く物体を取り出し、震えるアンデの額の五芒星に物体を当てると、物体は吸い込まれるようにアンデの体内に入り込み、アンデはビクビク痙攣すると、その容姿は無残にも黄色いナマコのように変えられた。ルセンは悲鳴を上げ、アンデの名を叫ぶも、アンデは答えない・・・「うくん！クライナーを使うのも久しぶりだわあ・・・さあ、あんたもクライナーになって貰うわよ・・・」

「イヤア!!!」

悲鳴を上げながら逃げ惑うルセンの反応に刺激され、サデイスは舌をペロリと舐めながらルセンを追いつめ、アンデ同様、ルセンも白いナマコのようなクライナーに変えられてしまった・・・

「これがあたしからのお礼さ！お前達にクライナーの力を授けてやる・・・さあ、お前達

「この時代にも必ずプリキュアが居る筈だ・・・必ず見つけ出し、あたし達に知らせるんだよ!!行け!!」

サデイスの命を受け、クライナーと化したアンデとルセンは、その姿を地中へと消した・・・

クライナーとは、吸収した物体を糧に、姿を次々変えていく人工生命体で、嘗て三人の魔人がメルヘンランドを襲った時、妖精達を次々クライナーへと変えた。クライナーと化した妖精達は、ある者は自然を食い荒らし巨大化し、ある者達は、合体して巨大化していった。

力を付ける度に凶暴さが増すクライナー・・・

ロイヤルクイーンは、元はメルヘンランドの民を攻撃することも出来ず劣勢になった時、光と共に伝説の戦士プリキュアが現われ、クライナーを浄化し、メルヘンランドを救った事があった。

今、そのクライナーが復活し、メルヘンランドの妖精アンデとルセンを、悪しき存在に変えてしまった・・・

「お前も物好きよなあ・・・では、サデイス、ベガ、魔界に戻るぞ!!」

「ダイクレ・・・封印されていたあたし達が、何の手土産も持たずに魔界へ戻れば・・・」

「そうだな・・・光の墮天使である王は、我々をどう扱うか・・・」

「案ずるな！私は魔界を統べる十二の魔神達の何人かと交流がある！！彼らを頼り、現在の魔界の状況を知っておくのも悪くは無い！！」

三人が空間に五芒星を描くと、空間に亀裂が生じ、禍々しい空気を流れ出す不気味な姿が見えてくる。嘗てのドツクゾーンに何処か似ていた・・・

三人は宙に浮かぶと、魔界へとその姿を消した・・・

「禍々しい気が消えたとは・・・妙でござるな!？」

鷲の姿に変化し、封印の森へと向かっていたポップは、禍々しい気が消えた事に戸惑うも、急ぎ封印の森へと向かった・・・

封印の森に着いたポップは、荒れ果てた祠を見付ける。辺りを伺うも人の気配は無く、生命の息吹を感じず沈黙する場所だった・・・

「アンデー・ルセン！何処でござるかああ?」

大声を出してアンデとルセン、二人の名を呼ぶポップだが、二人から返事は帰って来なかった。

「二人の身に一体何が!?バッドエンド王国の襲撃で、三人の民が行方不明になって間もないのに、今度はアンデとルセンまで、無事で居てくれれば良いでござるが・・・」

ポップは空を見上げ、何事も起こらなければ良いのだがと険しい顔を浮かべていた……

「何か嫌な予感がするでござる！バッドエンド王国に加え、封印されていた何者かも復活したようでござるし……伝説の戦士、プリキュアの力を借りる時が来たのかも知れぬでござる……」

ポップは何かを思案するように、再び宮殿へと戻っていた……

## 2、横浜中華街

三月に入り、なぎさ、ほのか、ゆりは、高校を卒業した……

三人はこの日、仲間達を中華街に招待する為、TAKO CAFEで待ち合わせをして居た。

制服から卒業した三人は、一段と大人びて見えていた……

なぎさは、黒のシャツの上に表面は黒地で、腕の部分が透けて、裏は薄いグリーンのシヨール風カーディガンを纏い、下はボトム風のシヨートスカートを履いていた。

ほのかは、フロントにフリルが付いた水色のワンピースを着て、その上に白いロングカーディガンを羽織っていた

ゆりは、長い髪に少しエアパーマを掛けて居て、薄いブルーのロングカーディガンに、

下はジーンズを履いていた。

大学生生活間近もあつてか、三人は何時もと印象が変わつて、大人びた雰囲気醸し出してた。

ひかりが支度を終えるまでの間、三人は雑談に興じていた・・・

「でさあ、折角だし三人で卒業旅行とか行かない？」

徐に発言したなぎさの言葉に驚くほのかとゆりだったが、その顔からは、嫌がついてい  
るようには見えなかった。

「そうねえ・・・でも、今から予約取れるかなあ？」

「場所も決めなきや行けないし・・・」

「そう何だよねえ・・・今から海外は無理としても、国内なら行けないかなあ？」

国内ならば、ツアーじゃなくても、個人旅行で良いかも知れないとほのかとゆりも頷  
き、三人は卒業旅行の企画を練り始めた。

そんな三人だったが、何時しか話題はプリキュアの事になつてた。

三人の胸中に色々な思い出が甦ってくる・・・

「私とほのかは、ドックゾーンと・・・」

「私は、薫子さんの後を継いで、コロンと共に、再び活動し始めた砂漠の使徒と戦つ

た・・・」

「二度は退けたものの、ジャアクキングは再び分身をこの世界へと放った！そこで私達はひかりさんと出会い、ドックゾーンとの戦いに決着を付けた!!」

中学時代に、それぞれ三人はキュアブラック、キュアホワイト、キュアムーンライトとして、ドックゾーン、砂漠の使徒と戦い、そして、高校になつて沢山のプリキュアの仲間達と出会い、この世界を救う為に戦った日々を思い浮かべる。

「戦いの最中、私の前にダークプリキュアが現われ、幾度となくぶつかり合った私は、コロンを失い、心の花を枯らせ、ダークプリキュアに敗れプリキュアの力を失った・・・そして、つぼみ、えりか、いつきが私の後を継いで、砂漠の使徒と戦ってくれた！彼女達の思いが、私を再びプリキュアとして導いてくれた!!そして、デューンとの決着を付けるに、惑星城に乗り込んだ時、なぎさとほのかを始めとする、沢山の仲間達が居る事を知った・・・」

ゆりが、なぎさとほのかを見て微笑むと、二人も微笑み返し、

「私達も驚いたよ！あんなにプリキュアが居る何てさ・・・」

「ええ、そして私達は絆を深め、バロムやノイズと戦った」

「ノイズがピーちゃんとして戻って来た時は、嬉しかったなあ・・・」

「そうね・・・プリキュアをやっていて良かったと思えたわ!!」



青春時代を振り返るように、懐かしげに語り合う三人だったが、ひかりが支度を終え側にやって来ると、

「なぎささん、ほのかさん、ゆりさん、お待たせしました!!」

「アツ、もうこんな時間だ・・・じゃあ、そろそろ待ち合わせ場所に行こうか!!」

なぎさが慌てて時計を見ると、そろそろ出掛ける時間になっていた。ゆりもほのかも身支度を整えながら、

「せつな、くるみ、エレンが来られないのは残念だったわね・・・」

「ええ、エレンさんはメイジャーランドに戻ってまだ日が浅いし、くるみさん、せつなさんは都合が悪いみたいだし・・・でも、頻繁にこちらの危機を救いに来てくれてるし、きつとまた遊ぶに来てくれるわ!彼女達がまたこちらに来た時にでも招待しましょう!」

くるみ、せつな、エレンは、今回の申し出を断っていた・・・

三人も本心では来たがっていたのだが、御馳走になる為だけにこちらの世界に来るのは憚られていた・・・

ひかりも加え、四人はアカネに声を掛けると、待ち合わせ場所である横浜へと出掛けるのだった・・・

京浜東北・根岸線の駅である石川町・・・

横浜中華街から程近い駅を集合場所と決め、18人の少女達が集合していた・・・

中華街で食事が出来ると聞き、朝から何も食わずにグウグウお腹を鳴らし楽しみにするのは、咲、のぞみ、りん、うらら、ラブ、えりか、響の七人、七人は楽しみすぎて、今にも涎を垂らしそうな表情を浮かべ、満、薫、かれん、美希、つぼみ、いつき、奏、アコに呆れられていた。舞、こまち、祈里は、そんな七人を見て苦笑を浮かべるのだった・・・

「あなた達、折角中華街でお食事するんだから・・・あまり恥ずかしい真似はしないでよね！」

何時もの衣装と違い、上は薄い紫色のシルク綿のブラウスト、下は黒、白、紫色のドット柄をした薄いスカートをなびかせ、モデルらしさを醸し出す美希が、一緒に居るのを恥ずかし気に注意する。

「エエエ！美希たん・・・折角のお食事会だからさあ」

「そうだよ、美希姉え！」

「ウくく・・・だつてええ、お腹ペコペコ何だもん・・・」

ラブ、えりか、のぞみに恨めしげにジツと見つめられ、思わず美希は仰け反り溜息を付いた。

「ハイハイ・・・全く！あつ、電車が来たわ!!」

銀色の車体に、青いラインが入った電車がホームに入ってくる。駅に止まり、続々人が降りてくる中に、見慣れた四人の姿を見付け、一同はニコリとしながら手を降ると、降りてきた四人も微笑みを向けて一同に駆け寄った。

「みんな、お待たせ！良く集まってくれたわね!!」

「なぎささん、ほのかさん、ゆりさん・・・」

「大学合格、おめでとうございまあす!!」

ひかりも加わり、一同がニコリと拍手しながら、おめでとうございますと声を掛けると、三人は照れながら一同に感謝するのだった・・・

「みんな、ありがとう!!」

「あなた達からの手紙・・・とても励みに成ったわ!!」

「今日はみんなに感謝を込めて、ささやかなお礼を私達三人からみんなに送るね!!」

ほのか、ゆり、なぎさが、一同を穏やかな目で見つめた・・・

「イヤア！受験から解放されるって・・・清々しいねえ!!」

「ハハ・・・その代り、今度は私とこまちが受験生ですけど・・・」

受験から解放されたなぎさが、思わず爽快そうに本音を漏らすと、今度は自分とこまちの番だとかれんが引き攣った笑みを浮かべ、困惑したなぎさが、ほのかとゆりに縋るような目を向けると、ほのかとゆりがかれんに近付き、

「大丈夫！かれんさんどこまちさんなら、きつと合格出来るわ！かれんさんの成績なら、私とゆりの通う事になるT大でも大丈夫だと思っわ!!」

「T、T大!?無理、無理無理、絶対無理です!!」

「あら、私もかれんならT大の医学部を十分狙えると思っわよ!!」

「もう、ほのかさん、ゆりさん、からかわないで下さい！私は、地元の国立医科大でも受験しようと思ってるんですから!!」

「うーん、からかつてるつもりは無いんだけど・・・」

「無理強いはしないけど、頭には入れておいて!」

ほのかとゆりにT大を十分狙えると言われ、かれんが益々動揺すると、なぎさはポンとかれんの肩を叩き、

「もう、ほのかもゆりも、かれん、困ってるじゃない！でも私も、かれんやこまちなら志望校に合格出来ると思うよ!!何かあったら私達も相談に乗るからさ!!」

三人はかれんどこまちなら大丈夫、何かあったら協力するからと励ました。

「じゃ、じゃあ、行こうか!」

なぎさは話を誤魔化すかのように、まだ動揺が残るかれんの背を押しながらみんなに合図し、一同は石川町を後にした・・・

(カンジル・・・ボクヲ・・・スクツテクレル・・・チカラ・・・)

(アンデ・・・ダメ、イマノワタシタチハ・・・)

アンデとルセンは、サデイスの命に従わず、いまだにメイジャーランドに残つて居た・・・

女王ロイヤルクイーンの力の加護か、二人は醜い姿に変えられたものの、何とか自らの意識を保つ事が出来た。メルヘンランドに伝わるといふ伝説の秘宝、ミラクルジュエルの力ならば、元に戻る事も出来るかもと考えた二人だったが、この姿のまま、メルヘンランドを彷徨(さまよ)う事も出来ず、二人は途方に暮れた・・・

その内の黄色いクライナーは、光の力の気配を感じるや、大慌てでメルヘンランドを飛び出して行った・・・

(アンデ・・・メルヘンランドヲデテハ、ワタシタチハ・・・キツトシヨウキヲタモテナイ)

白いクライナーはモゾモゾ地上に現われるも、キューンどもの悲しげな奇声を発した・・・

この事を、ポップもキャンデイも知る事は無かつた・・・

日曜の午後という事もあつて、横浜中華街は平日以上の賑わいを見せていた。沢山の

観光客が中華街を散策していた・・・

駅から中華街入り口の一つである善隣門を潜り、中華街へと入った一同、三国志で有名な、関羽雲長を祭っている関帝廟通り方面へと歩みを進めていた・・・

ほのかが、三国志の関羽に付いてうんちくを述べるも、腹ぺこ軍団にはほのかのうんちくより、美味しい匂いの方が勝っていた・・・

「うゝ、あれも美味しそう・・・あつ、こつちも・・・」

「もう、響！食べ物ばかり見てないで、ちゃんと歩きなさいよ!!」

左右から流れてくる美味しい食べ物の匂いに釣られ、響は鼻でクンクン美味しそうな匂いを嗅いで、出てくる涎を慌ててすすり上げる姿に、奏は呆れながら注意する。ピーちゃんを抱いたアコも奏に同意し、

「本当、全くお子様何だから・・・ねっ、ピーちゃん!」

「ペイイ!!」

アコに話し掛けられ、ピーちゃんも響の姿を見て呆れたような視線で見つめて居たが、フと視線を上空に向けると、ペイ?と小首を捻った。

「どうしたの、ピーちゃん?」

「ペイイ・・・ピ?」

ピーちゃんが何と言ってるのか気になったアコは、祈里を呼ぶと、

「ねえ、ピーちゃんが何か感じてるみたいなの！ピーちゃんが何て言ってるのか・・・聞いて見てくれない？」

「ピーちゃんが!?!・・・分かった!ちよつと聞いて見るね!!」

一同も気付き、祈里とアコを他の人達から見えないようにガードすると、祈里はキルン呼び出し、ピーちゃんに話し掛け始める。他の一同も興味深げに祈里からの回答を待っていた。

「うん、それで!うん・・・エツ!?うん、分かった!ピーちゃん、忠告ありがとう!!」

ピーちゃんとの会話を終えた祈里は、アコ、そして一同を真顔で見つめると、

「ピーちゃんの話によれば、空の彼方から、嘗ての自分と同じように、悲しみの心に満ちた何かが近づいて居る気がするって言ってるの!!念の為、用心してだって・・・」

祈里の話を聞いた一同は顔色を変える・・・

この約三ヶ月、何事も無く過ごしてきた平和・・・

その平和も脆くも崩れようとしているのか？

だが、そんな不安を打ち消す音が、グウウウと辺りに響き渡った・・・

「そ、それは兎も角・・・なぎささあん、ほのかさあん、ゆりさあん・・・そろそろ限界だよおお!!」

のぞみがその場に座り込み、お腹減ったよおと訴えると、咲、りん、うらら、ラブ、え

りか、響の腹ぺこ軍団ものぞみに同意し、哀願するようになぎさ達を見つめた・・・  
「アハハハ！もう少しだから・・・このお店は、中華街に何件か出店してる系列の一つなの！」

「それは凄く楽しみですうう!!」

なぎさの話の聞いて、目を輝かせるつぼみ、うららもいろいろ想像して居るようで、  
「美味しいカレーもあると良いなあ!!」

「うらら・・・中華街に来てまでカレーは無いでしょう？カレーは・・・」

「エへへ・・・そうですねえ」

りにダメ出しされ、照れ笑いを浮かべるうらら、こまちも少し考えながら、

「羊羹が入った料理は・・・」

「無い無い・・・絶対に無いですから！」

最早ツツコミも面倒とばかり、りんが右手を振りながらこまちにダメ出しをすると、  
こまちは苦笑を浮かべる。

「アハハハ！こまちさんらしいねえ・・・私はやっぱり中華といえばラーメンだなあ・・・」  
「チャーハンも捨てがたいかも!？」

咲はラーメンを、ラブはチャーハンを想像し、互いを見つめて嬉しそうに語り合う、かれんはそんな一同の言葉に首を傾げ、



「そう!? 中華と言えば……フカヒレじゃないかしら? 他には、燕の巢や鮑（あわび）を使った料理の数々など……」

かれんの言葉を聞き、なぎさ、ほのか、ゆりの顔色が変わる……

「イヤイヤ、フカヒレや鮑も間違いないですけど……私達じゃ中華料理といえば、普通ラーメンやチャーハンなど思い浮かぶものですよ!」

「チャーシューメン頼むだけでも、リッチな気分になるよねえ?」

「それはそれで貧乏くさい気もするけど……」

「何はともあれ、楽しみだよねえ!」

かれんの言葉に反応し、りん、のぞみ、ラブ、咲が苦笑混じりに言葉を漏らすと、なぎさ、ほのか、ゆりはホツと安堵したような表情を浮かべ、かれんはそんなものかしらと小首を傾げた。

他の一同からも、どんな中華料理が出て来るのかなあと聞こえてくると、一同がとも楽しみにしているのが感じられ、思わずお互いに顔を見合わせたほのかとゆりは、俯きながら溜息を付くと、どんどん寡黙になっていった……

そんな二人を見て、ひかり、満と薫は、思わず不思議そうに小首を傾げるのだった……

「みんなあ、お待たせ! 此処が私が言った……どうしたの?」

なぎさが一同に案内したお店を見て、一同は呆然と佇んだ……

行列も出来て居て、美味しいだろうとは理解出来るものの、明らかに彼女達の想像とは掛け離れていた……

「ひよ、ひよつとして、あたし達を中華街に招待したのって……」

目が点になった美希が、なぎさ、ほのか、ゆりを見つめながら店を指さすと、なぎさは満面の笑みを浮かべながら大きく頷き、ほのかとゆりは、俯きながらコクリと小さく頷いた。

（ゲツ!?ま、まさか、中華まんだった何て……こんな格好してこなければ良かったわ）  
見る見る引き攣った笑みを浮かべる美希、咲とラブも呆気に取られ、えりかと響はうつすら涙目になっていた……

「あれえ!?何か反応がイマイチなような?」

頭に右手を乗せ、反応の鈍い仲間達を見て戸惑うなぎさ、喜んで貰える……そう思いつたじゃないと言いた気な視線を浴びせた。

「当たり前メポ!こんな場所に招待されたら、誰だつて期待するメポ!」

「ウウウ……」

ほのかとゆりにも冷たい視線を浴び、メップルにもダメ出しされたなぎさが顔色を変

える中、

「エツ?! そんな事無いよ! どれも美味しそうだよおお: ブタまん、豚角煮まん、ウワア、幸福ブタまんだつてえ、何か良い事ありそう!!」

ガツカリする一同を余所に、大喜びののぞみが店頭で商品の物色に専念する。のぞみに喜ばれ、見る見る表情を綻ばせるなぎさは、

「でしよう! 流石のぞみ!! 好きな物頼んで良いからねえ!!」

「うん!! どれにしようかなあ. . .」

上機嫌になったなぎさがのぞみに好きな物頼んで良いよと言うと、のぞみは嬉しそうにどれにしようか悩み始める。腹ぺこ軍団も背に腹は代えられず、のぞみ同様店頭陣取り、どれにしようか悩み始める。

「うん、決めた! すいませえん!! 取り敢えず、幸福ブタまん五個と、楊貴妃まん二個、後、すき焼きまん三個下さああい!!」

「エツ?!」

嬉しそうに店員に注文するのぞみ、最初はニコニコしていたなぎさも、のぞみが注文した個数を聞き、思わず驚く、

「あつ、のぞみさん狡いです. . . すいません! カレーまん8個下さい!!」

「うらら、だから違うのも頼みなさいったら: すいません、私は、ブタまん二個と:」

あつ、かれんさん、フカヒレまんもありますよ!!フカヒレまん二個と、楊貴妃まん三個とあんまん一つ下さい!!」

「エツ!？」

うららとりんものぞみ同様多数注文し始めると、それに続いたように、咲、ラブ、えりか、響の腹ペこ軍団が次々に中華まんの注文を始める。ただ、えりかは、その容姿もあつてか、他の腹ペこ軍団の半分の個数を注文に止まっていたが・・・  
なぎさの顔は、困惑の度合いを増して行くのだった・・・

「羊羹まんはあるかしらあ?」

「うくん、私は聞いた事無いけど?」

「僕も無いなあ・・・」

こまちが真剣な表情で商品を見て羊羹まんがあるか物色する。話し掛けられた祈里といつきも聞いた事が無く小首を傾げる。かれんは溜息を付くと、

「こまち・・・いい加減羊羹から離れなさい!」

かれんに注意されたこまちは、両頬を膨らまし、少し不満気にすると、慌てたつぼみがこまちを宥めるように、

「こまちさん・・・あんまんじゃ駄目何ですか?」

「羊羹の歯応えが良かったんだけど……」

「こだわりがあるんですね？」

つぼみがあんまんじや駄目なのかこまちに聞くと、真剣な表情のこまちが、羊羹の歯応えが良いと答え、こまちのこだわり具合に、舞が苦笑する。

「みんな、子供みたい！ねえ、ピーちゃん」

「ピイイ」

「みんなも……アコに言われると堪えるわね……」

アコが一同を見て呆れていると、奏が苦笑を浮かべた。そんな一同を少し離れて見つめるひかり、満、薫は、

「みなさん、やけに真剣に選んでますね？」

「ええ……理解出来ないわね」

「私達は別にどれでも良いんだけど……それより、なぎさの表情が見る見る青ざめてるけど、大丈夫かしら？」

三人の視線が顔色を変えるなぎさへと注がれた……

次々と一同の前に現われる中華まんの数々を見て、見る見るなぎさの顔が引き攣ってくる。

「中華料理だと遠慮して一杯注文できないから、私は中華まんて良かったあ……うわあ、美味しそう!! よくし、まだまだ食べ尽くすぞおお……決定!!!」

のぞみの言葉を合図にしたように、ムシヤムシヤ食べ始める腹ぺこ軍団、会計するなぎさは、口を尖らせて変顔になると、

「コラア〜! 決定じゃなああい!! 一人一個……もしくは二個までで計算して来たのにいい……こんなのありえなああい!!!」

なぎさの悲鳴が店先に響き渡った……

「どうやらのぞみさん達の方が、なぎさより一枚上手だったようね?」

「ええ、最も私達も人事では無いけれど……せめて、帰りの電車賃は残る程度にはして貰わなきゃね?」

「そうね……ウフフ」

腹ぺこ軍団に翻弄されるなぎさを見つめ、思わずクスリとするほのかとゆりだったが、溜息を付いた美希に気付くと、

「みんな、ごめんなさいね! 期待してたのに……」

「この埋め合わせは、必ずするから……今日は許して頂戴!」

かれん達や美希達を見つめると、ほのかとゆりが申し訳無さそうに謝るも、残った一同も、たまにはみんな、ピクニック気分を外で食べるのも良いかもと二人をフォロ

した。

逆に後輩達に励まされたようで、ほのかとゆりは顔を見合わせ、苦笑を浮かべるの  
だった・・・

少女達はまだ気付かなかった・・・

新たなる厄が、直ぐ側まで近付いて居る事に・・・

第三十九話：甦る魔

完

## 第四十話：伝説の戦士プリキュア!

### 1、謎の少女達

横浜中華街から程近い場所にある横浜みなとみらい・・・

ランドマークタワーや、日本丸パーク、赤レンガ倉庫、コスモワールド、クイーンズスクエアなどで有名な近代都市で、毎年7月と8月には花火大会が行われることでも有名で、山下公園も直ぐ側にあり、更なる発展を期待される大型都市である。

この日も家族連れや、カップル、仲間同士など、多くの人々が訪れていた・・・  
道行く人々からは楽しげに笑顔が溢れていた・・・

そんなみなとみらいに、ゆっくり、ゆっくり下降してくる物体があった。物体は、ランドマークタワーの天辺に降りると、景色を一望するかのように眼下の景色を眺めた。楽しそうな人々の声が頭の中に響いてくる。

(ボクガコンナニクルシンデイルノニ・・・ナニガタノシンダアアア!!)

降り立ったのは、クライナーと化したアンデであった。アンデは、まるで憎しみの虜になったかのように、黄色い身体が徐々に黒ずんで行った・・・



(コンナマチ・・・キエチャエエエ!!)

まるでアンデの意思を吸い取ったかのように、クライナーが無数に分裂すると、みなとみらいに降り注いでいった・・・

ポトリ、ポトリと落ちてくる無数の物体・・・

当初、人々は雨かと思いい上空を見つめるも、肌に触れる物体を見て人々は悲鳴を上げた・・・

「な、何だこれは・・・う、動いてるぞおお!？」

「キヤアアアア! 誰か、誰か、これ取ってええ!!」

悲鳴を上げながら逃げ始める人々、黒い物体はそんな人々を気にせず、みなとみらいの地を蠢く・・・

(コンナマチ・・・スベテクイツクセ!)

アンデの意思が伝わったかのように、クライナーは辺りの物体を体内に取り込み始める。建築物、木々、昆虫など、次々に体内に取り込んでいく・・・

その中には、シンボルのな存在、日本丸も含まれていた・・・

「見て・・・何か大きくなってない?」

何人かの人が、クライナーが大きくなっている事に気付く、クライナーは不気味にモゾモゾ動く、融合してどんどん巨大化していった・・・

「コンナマチ・・・ボクガアトカタモナクコワシテヤル!!」

アンデの意思を更に汲み取ったかのように、クライナーはモゾモゾ更に巨大になると、何処か船を思わせる容姿に変化した。黒い船のような出で立ちは、まるで、横浜開港150周年記念のマスコットキャラであった、ペリー・テイトくんを更に凶暴そうにしたようでもあった。

船の形の両脇から腕を生やし、下方に二本の足を生やし、逃げ惑う人々を追いかけるクライナー、アンデの理性は完全に崩壊した・・・

「ひかり・・・何か妙な気配を感じるポポ」

「ルルンも・・・感じるルル」

「二人共、妙な気配って?」

「分からないポポ・・・でも悲しくて暴れてるポポ」

ポルンとルルンは、妙な気配を感じひかりに知らせると、ひかり、側に居た満と薫の顔色も変わる。二人の妖精は何を感じたのか・・・

最早自棄気味に、自らも中華まんを頬張るなぎさであったが、ほのかとゆりに、店の迷惑になるから、場所を変えましょうと促され、移動しようとした矢先、山下公園方面

から人々が逃げ惑う姿が飛び込んでくる。

「何だろう!?!何かあったのかなあ?」

「いちゆきい・・・向こうの方で、何か嫌な感じがするでしゅ!」

逃げ惑う人々を見たいつきが小首を傾げると、ポプリがいつきに抱きつき、何か嫌な感じがすると伝える。さつきのポルンとルルン、そして、ピーちゃんの忠告もあって、咄嗟に顔色を変える少女達は、

「気になるわね・・・さつきのピーちゃんの忠告もあるし、行ってみましょう!!」

ゆりの言葉に頷く一同、のぞみは手に持っていた中華まんを一気に頬張り、喉に詰まらせ、りん背中を叩いて貰う。

「全く・・・ほら、お茶でも飲みなさい!!」

のぞみは、りんから貰ったペットボトルのお茶を飲み干すと、

「あ、ありがとう、りんちゃん・・・おじさん、また後で食べに来るからねえ!!」  
店員に手を振りながら、のぞみが一同の後を追った・・・

巨大な船のような姿になったクライナーは、汽笛部分から黒煙を吐き、横浜の空を黒く覆っていく。逃げ惑う人々が悲鳴を上げる。楽しい一時は終りを告げ、非現実的な事態が目の前で起こっていた。

「一体、何が起こっているの?」

不安そうに、黒煙に覆われていく横浜の空を見上げる女性が呟く、泣きじやくる子供が母親に縋り付く、

「に、逃げろ!津波だあ!!黒い津波が・・・」

バイクに乗った男が、大声を張り上げながら逃げ惑う人々に、津波が来るから逃げろと知らせる。更なるパニックが一同を襲う・・・

「な、何!?あれは・・・空が!?!」

「なぎさ!闇の気配がするメボ」

「みんな、嫌な気配がするラピ」

驚くなぎさにメツプルが、一同に忠告するようにフラツピが、闇の気配を感じると告げると、少女達は無言で頷き合い、人の少ない場所に向かい走って行き、辺りに人氣が無いのを確認すると、

「デュアル・オーロラウエーブ!!」

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」

「デュアル・スピリチュアルパワー!!」

「プリキュア!メタモルフオーゼ!!」

「「チェインジ・プリキュア！ビートアップ!!」」

「「プリキュア！オープンマイハート!!」」

「「レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション!!」」

少女達の身体が、忽ち光の中に包まれていった・・・

(スベテノミコンジャエ!!)

クライナーから吐き出された黒いオイルのような物体が、みなとみらいを津波のように飲み込んで行った・・・

「ママ！怖いよおお!!」

「大丈夫、ママが、ママが付いてるからねえ!!」

しがみつく幼女を抱きしめる母親、このままでは黒い波に飲み込まれる!

そう思った母親は、思わずギュッと娘を抱きしめるも、波に飲み込まれる事は無かつた・・・

幼女が恐る恐る目を開けた時、幼女の目の前で、黄色い髪の少女が、バリアーを張って黒い波を止めていた。少女は背後を振り向き、母子に声を掛け、

「大丈夫ですか？今の内に此処から離れて下さい!!」

「は、はい・・・ありがとうございます!!」

母親は驚くも、素早く立ち上がると、一目さんに走り出し、幼女は手を振って少女にありがとうと笑顔を向けた。

「これ以上、この街を滅茶苦茶に何てさせません!!ハアアア!!」

母娘を救ったのはシャイニールミナス!

ルミナスが更なる気を高めると、光のバリアーが輝きを増し、黒い波を押し返して行った。それを見届けたルミナスは、上空高くジャンプした。

「俺達、助かったのか?」

逃げ惑っていた人々は、黒い波が押し戻されていく様子を見て呆然として思わず立ち止まった。何故助かったのか、理解出来なかった・・・

「お、おい、あの化け物・・・またこっちに向かつてくるぞ!!」

「警察・・・いや、自衛隊はまだ来ないのか?」

「い、いや、待て・・・おい、見ろ!観覧車の上に・・・誰か居るぞ!」

逃げ惑っていた人々は、向かってくるクライナーの前にある、観覧車の上に佇む少女達を見付けた。少女達は、向かってくるクライナーに怯みもせず、観覧車の上で迎え撃とうとするかのように佇んで居た・・・

その数、一人、二人、五人、十人、いや、それ以上の少女達の姿が・・・

総勢22人の少女達が、観覧車の上で佇んで居た・・・

「あの後ろ姿・・・見覚えがある！俺が幼い頃に見た少女に・・・」

「おじさん・・・あの子達を知ってるんですか？」

少女達の姿に見覚えがあると云った60前後の茶色いジャケット姿の男性に、側に居たカメラを首に提げた下は赤いスキニーパンツ、上はブラウン系のロングブラウスを着た眼鏡の少女が問い掛けると、男性は少女を見て頷き、

「ああ、似たような少女を知っている！最も、50年ぐらい前の話だが・・・俺が子供の頃、俺は一度化け物になったような夢を見た・・・」

男性が語った内容は大体こうであった・・・

幼い頃、彼は夢の中で化け物になったような気がした。目の前のクライナーのように暴れ回る彼の前に、一人の少女が立ち塞がった。ピンク色の衣装を纏った少女は、圧倒的強さで化け物となった彼を弱らせると、花の輝きを放った。その光に包まれた時、非常に安らいだ心になったのを覚えて居ると語った。

「目を開けた俺に、目の前に居た少女は、微笑みながらこう言ったんだ・・・大丈夫、あなたのごころの花は枯れて居ないわ・・・とね」

その当時、彼を救ったのは、つぼみの祖母である花咲薫子、キュアフラワーであった

!!

薫子は、砂漠の使徒によってこのろの花を奪われ、デザトリアンにされた彼を救ったのだった……

「そんな事が……私もあの中の5人に救われた事があるんです！彼女達はこう言っていました……プリキュア！プリキュア5つて!!」

眼鏡の少女がカメラのファインダー越しに、自分を救ってくれた五人のプリキュア達を見つめ、シャッターを押しながら男性に語った。

少女の名前は、増子美香！

のぞみ達と同じ、サンクルミエール学園高等部の生徒である。高校生になった彼女は、高等部でもサンクルミエール通信を発行していた。美香は、みなとみらいで開催されていた写真展を見に来ていて、この場面に遭遇していた。こんな状況にあっても、写真を撮りまくるのは、流石と言えば流石であった……

「プリキュア？私も聞いた事ある！確か、世界が砂漠になった時、世界を救ってくれたのがプリキュアだって、ネットで見た気がするわ!!」

「私が知り合いから聞いた噂は……四つ葉町って街の危機に、必ず現われた少女達がプリキュアって聞いたけど？」

プリキュアと言う名を聞き、美香の周りの人々からざわめきが巻き起こった。都市伝



説で聞いた事がある、世界を救った英雄、プリキュアという名が、今現実にも目の前に現われたのだから・・・

プリキュアの伝説・・・

それは本当の事だったのか？人々の視線が、目の前の観覧車の上で佇む謎の少女達に向けられた・・・

「やれやれ、たまたま来ていた横浜で、プリキュアになるとは思わなかったね？」

「ええ、でも私達が来た以上・・・これ以上好きにさせない!!」

「み、皆さん・・・何故観覧車の上に陣取るんですか？」

「そう言えば、プロッサムは高い所苦手だったっけ？」

ブラックとホワイトの会話に、ビビリ顔のプロッサムが一同に尋ねると、マリンはプロッサムが高い場所は苦手だったと思い出し、ポンと手を叩いた。

「みんな・・・行くわよ!!」

「エエエ!!」

ムーンライトは口元に笑みを浮かべると、一同に合図を送った。合図と共に観覧車から飛び出した一同、置いて行かれたプロッサムは動揺するも、直ぐに一同の後を追った。

「お、おい、あの子達・・・あの怪物と戦う気だぞ!」

プリキュア達がクライナーに対し攻撃を開始すると、人々から響（どよ）めきが沸き起った。

「ヒカリノチカラ・・・ナゼボクライジメル!!」

ランドマークタワーの天辺に居るアンデは、自分の分身とも言えるクライナーを攻撃してくるプリキュア達に苛立ちを覚えて居た。苛立ちを鎮めるかのように、クライナーが益々暴れ始めると、

「ピーイイイ!!」

何かを感じたのか、観覧車の上に止まっていたピーちゃんは、上空に飛び上がるとランドマークタワー目掛け羽ばたいた。

「ピーちゃん!? 一人で行ったら危ないよ!!」

羽ばたくピーちゃんの後を追うミューズを見て、メロディとリズムもその後続いた。

ランドマークタワーの天辺に居るアンデ目掛け、懸命に羽ばたくピーちゃんであったが、アンデの意思はそれを拒み、ピーちゃんは、クライナーが放った、散弾銃のような黒い塊の攻撃を受けそうになるも、顔色変えたミューズが、咄嗟にピーちゃんを庇うように、錠盤のバリアーを放ち、何とか攻撃を防いだ。

「ミューズ、ピーちゃん、大丈夫!？」

「ええ、何とかね!よくもピーちゃんを・・・」

メロディの言葉に大丈夫と応えるミューズと、ピイと一鳴きしたピーちゃんを見て、メロディとリズムはホツと安堵する。

ピーちゃんに危ないから離れているように伝えた三人は、クライナーが再び吐き出した黒い塊を、パンチやキックで弾き返し、援護に来た他の一同と共に、クライナーに再び総攻撃を開始した。

ピーちゃんは、名残惜しそうにランドマークタワーを見上げるも、ミューズに言われたように、少し離れたビルの上から、プリキュア達の戦いを見守るのだった・・・

「このまま街中で戦わせるのは、得策じゃないわ!海に追い込みましょう!!」

「分かりました!ブロッサムウウ・シャワー!!」

ホワイトの提案に同意し、ブロッサムがブロッサムシャワー、マリンがマリンシユート、サンシャインがサンシャインフラッシュで牽制し、アクアとルージュが、サファイアアローとファイヤーストライクを放ち、レモネードがクライナーの足をプリズムチェーンで絡め取る。

不愉快そうに奇声を発しながら、クライナーが再び散弾銃のように黒い塊を放出する

と、ミントがエメラルドソーサーを、サンシャインがサンシャインイージスを、ブルーム達四人が手を繋ぎ合い、バリアーを放ち防御する。逸れた攻撃にはルミナスが対処に辺り、クライナーの攻撃が、みなとみらいにダメージを与える事は無かった・・・

「ルミナス、後をお願い!」

守りをルミナスに託すと、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディの四人が、足下に力を溜め、上空高く飛ぶ、それを見たクライナーが、四人に対し汽笛から大砲のように黒い光球を発すると、四人は手を握り合い、バリアーを張りながら降下してくる。攻撃を全て受けきると、両端に居たウインディとブライトが、ブルームとイーグレットから手を離し、

「風よ! 吹き荒れよ!!」

「光よ! 闇を打ち消せ!!」

ウインディとブライトが、下降しながら風の力と光の力でクライナーを怯ませると、見つめ合ったブルームとイーグレットは頷き合い、

「精霊の光よ! 命の輝きよ!」

イーグレットが叫べば、

「希望へ導け! 二つの心!」

ブルームが叫ぶ、

「プリキュア！スパイラル・ハート・・・」

「スプラッシュシュ!!!」

更なる下降を始めたブルームとイーグレットが、スパイラルハートスプラッシュを空中から浴びせると、クライナーは、その威力に海辺に押し出されて行った。

「もう一息！行くよ、ベリー！パイン！悪いの、悪いの、飛んでいけえ！プリキュア！ラブサンシャイン!!」

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！プリキュア！エスポワールシャワー!!」

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！プリキュア！ヒーリングプレア!!」

ピーチ、ベリー、パインが必殺技を放てば、それに合わせるように、メロディ、リズム、ミュージズの三人が手を繋ぎ合い、

「私達も続くよ！」

「プリキュア！パッションナートハーモニー!!!」

六人のプリキュアの攻撃で蹠踉めいたクライナーの隙を逃さず、ブラック、ホワイト、ムーンライト、ドリームがクライナーに突っ込むと、

「ダダダダダダダ!!」

「ヤアアアア!!」

「プリキュア！フロールパワー・フォルテツシモ!!」

「プリキュア！シューティングスター!!」

ブラックとホワイトの怒濤のパンチとキックの連打が、ムーンライトのフォルテツシモが、そして、ドリームムのシューティングスターがクライナーに炸裂する。

四人の波状攻撃を受け、クライナーは完全に海中に押し出され、水飛沫が巻き起こるのを見た人々から、大歓声が湧き上がった・・・

「良いぞ！プリキュアアア!!」

「プリキュア！プリキュア！プリキュア!!」

鳴り響くプリキュアコールに應えるかのように、少女達が埠頭に集結すると、

「みんな、これで決めるよ!!」

ブラックの合図に頷く一同、

ルミナスから発せられた虹の光が、ブラックとホワイトを包み込む。

「漲る勇氣!」

手を回転させながらブラックが構え、

「溢れる希望!」

ブラックと同じように手を回転させホワイトが構えた。

「光輝く絆とともに!」

ハーティエルバトンを構えたルミナスが、そして足を広げ踏ん張るブラックとホワイトが気合いを込め、ブラックとホワイトの前方に巨大なハートが浮かび上がると、

「エキストリーム!!」

「ルミナリオオオ!!」

ブラックとホワイトの叫び声がハモリ、気合いを込めたルミナスの叫びが響き渡る……

ブルームはベルトに、イーグレットは左手に付いているハート形の中心部分にリングを装着し、ブライトはベルトに、ウインディは左手に付く星形の中心部分にリングを装着する。

「精霊の光よ! 命の輝きよ!」

イーグレットとウインディが叫べば、

「希望へ導け! 二つの心!」

ブルームとブライトが叫ぶ、

「プリキュア! スパイラル・ハート……」

「プリキュア! スパイラル・スター……」

「スプラッシュシュ!!!」

四人のプリキュアから発射された強大な光が、クライナー目掛け突き進む・・・

ブロッサムが、ブロッサムタクトを、マリリングがマリリングタクトを取り出し、サンシャイ  
ンがシャイニータンバリンを、ムーンライトがムーンタクトを取り出し、勝負に出る。

「花よ、輝け！プリキュア！ピンクフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、煌け！プリキュア！ブルーフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバススト!!」

「花よ、輝け！プリキュア！シルバーフォルテウエ〜イブ!!」

四人から放たれたフォルテウエイブが、クライナー目掛け飛ぶ、

「ベリーー！パイーン！」

ピーチの合図にベリーーとパイーンが頷く、ピーチがピーチロッドを、ベリーーがベリー  
ーソードを、パイーンがパイーンフルートを取り出し、

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！」

「プリキュア！ラブサンシャイン・・・」

「プリキュア！エスポワールシャワー・・・」

「プリキュア！ヒーリングプリアー・・・」



「フレ〜ッッシュ!!!」

ピーチから桃色のハート型の光弾が、ベリーから青いスピード型光弾が、パインから黄色いダイヤ型の光弾が同時に発射される。三人の合体技プリキュアトリプルフレッシュが放たれる。

「リズム、ミューズ、私達も続くよ! 翔けめぐれ、トーンのリング! プリキュア! ミュージッククロンド!!」

「翔けめぐれ、トーンのリング! プリキュア! ミュージッククロンド!!」

「シ、の音符のシャイニングメロディ! プリキュア! スパークリングシャワー!!」

メロディ、リズムのミュージッククロンドが、ミューズのスパークリングシャワーがクライナー目掛け飛んでいく。

「ルージュ、私達も援護しましょう! プリキュア! サファイア・アロー!!」

「了解! プリキュア! ファイヤーストライク!!」

ココがこの場に居ない為、フルーレを出せないプリキュア5、アクアとルージュが、一同の援護にと技を繰り出す。

プリキュア達の必殺技が合わさり、光となってクライナーを覆い尽くした・・・

「チカラガ．．．ボクノチカラガ．．．ヌケテイク!」

縮小していくアンデの身体に合わせるように、クライナーは光に交わり分裂し、横浜の海底に沈んでいった。そしてアンデは、クライナーの姿のまま地上に落下し、その姿を横浜の地へと消した．．．

プリキュア達の背後で、人々の歓声が響き渡る．．．

「どうやら終わったみたい．．．さあ、戻って中華まんの続きを．．．」

笑顔を浮かべたドリームが、戻って中華まんを食べようよと言おうとしたのを遮ったブラックは、

「みんな、こんなに人が居たら、誰かに見られるとも限らない! 今日はお開きにして、横浜から離れるよ!!」

「エエエ!? そんなああ．．．」

ブラックの言葉に、今にも泣き出しそうな表情のドリームが、ブラックに泣きつくも、「ゴチャゴチャ言わない! さあ、みんな行くよ!!」

「まだまだ、食べれるのにいいいい!!」

ドリームの絶叫を残し、プリキュア達は横浜の街から姿を消した．．．

## 2、スクープ

翌日・・・

少女達一同は、そのニュースを目にする事になる・・・

横浜の街に怪物出現!?

テロ!?それとも・・・

謎の少女達、横浜を救う!!

新聞、TVで、トップニュースで紹介される内容に、少女達は皆驚き、仲間と連絡を取り合った・・・

「ほ、ほのか、今朝の新聞見た？」

「え、ええ・・・まさか、あの戦いを写真に撮られていた何て・・・」

ハッキリとは写っていないものの、自分達が戦って居る姿を写真に撮られた事に、電話口で会話するなぎさとほのかは、激しく動揺していた・・・

「へエ、この子達がねえ・・・プリキュアかあ、何処かで聞いた事あるような？確か、ブラックとかホワイトとか居たような・・・さつさとお家に帰りなさああい！とか言って

たようなの!」

「ア、アハハハハ．．．そ、そうですね? 私は．．．初めて聞きましたよ!」

朝食を取りながらニュースを見るアカネとひかり、ひかるはまだ眠っているようで食卓には二人が座っていた。嘗て、なぎさとほのかのクラスメートだった越野夏子、森京子が、ブラックとホワイトの衣装を作り、プリキュアだと名乗ったのを目撃したの思い出したアカネが、その時の言葉を思い出し真似すると、ひかりは苦笑を浮かべながら惚けて見せるも、内心激しい動揺をしていた．．．

「やっと繋がった．．．ラブ、おはよう! 今直ぐTV付けてみて! 多分何処のチャンネルでもやっているとと思うけど．．．」

「ウーン．．．美希たんおはよう．．．って、まだ6時半だよ! TVって．．．」

不満そうに美希と電話しながら下に降りたラブに、母あゆみと、父圭太郎はTVを指差しながら、

「ラブ、おはよう! ねえ、あなた達、昨日横浜に行くって言ってたけど、また危険な事を．．．」

「ラブ、ビックリしたぞ! それより、このナレーターの女性、せつちゃんの声に似てないか?」

「あらヤダ、本当！せつちゃんの声に似てるわね？」

「本当、せつなそっくりだね！．．．せつな、今どうしてるかなあ？」

電話口で聞いていた美希は、何故桃園家でせつなのお話が出ていたのか首を捻るも、  
「せつなって!?!まあ良いけど．．．それより、さつきブッキーとも話したんだけど、どうやらあたし達が昨日戦って居る姿、誰かに撮られてたみたいなのよ！」

「エエエ!?本当、美希たん？アツ！本当だ、みなとみらいが映ってる．．．」

画面に映る黒い巨大な船のような怪物、それと戦う少女達の姿．．．

少女達が光のエネルギーをぶつけると、化物物は光と共に消え去った．．．

「TVをご覧の皆様、これは特撮ではありません！現実には、昨日起こった事なのです!!」  
司会者が視聴者に対してこれは真実だと告げると、レポーターが横浜の街から昨日の戦いの模様をレポートする。

「お、お爺ちゃん、どうしようっ？」

「フム、まあこんな事もあるじやろう．．．慌てる事もない」

「でもお．．．」

不安がるアコが音吉にどうしようと相談するも、音吉はさして気にも止めず、朝ご飯

を食べ続けた。ピーちゃんは、横浜からの中継画面をジッと見つめると、首を捻ってピツ?と一鳴きするのだった。

北条家……

響はまだ寝ているだろうと思った奏は、響の家に朝早くから来て響を無理矢理起こすと、二人でTV画面を見つめて呆然としていた……

「こんな大騒ぎになってるなんて……」

「ええ……でも、ハッキリとは映ってないし……」

響と奏も、アコ同様画面に映る自分達の姿に驚愕する。響の父、団は、まだ眠っているのかその場には居なかった……

咲は眠っていた……

昨日の疲れもあつてか、グッスリと眠っていた。その側では丸くなったコロネと、コミュニケーション姿のフラツピも気持ち良さそうに眠っている。

「咲、咲! 舞ちゃんと、満ちゃん、薫ちゃんが来てるわよ! 咲!!」

下から母沙織に名前を呼ばれた咲だが、まだ寝ぼけているのか目を擦りながら大あくびをする。咲の妹みのは、大好きな薫が来ているのに気付かず、スヤスヤ眠り続ける。

咲が起きた為、コロネも飛び起きると、部屋から出て行った。寝ぼけ顔の咲が玄関に現われると、舞、満、薫は思わず苦笑を浮かべる。

「ゴ、ゴメンね、朝早くに・・・咲、大変よ！昨日の私達が戦ってた姿、誰かに撮られてみたいで、大騒ぎになってるの!!」

「ドヒヤアア！本当なの、舞？」

舞から聞き、慌てた咲が一旦引つ込み、新聞を持って再び現われると、

「し、新聞にも載ってるね・・・私達、有名人になっちゃった？」

「もう・・・咲ったら！」

「あまり目立つのもどうかと思うけど？」

「そうね・・・」

変顔しながら有名人になっちゃったと驚く咲に、舞、満、薫は呆れながら思わず呟いた・・・

「そして、我々の下に、彼女達の正体を知っている方が駆けつけてくれました！彼女達は、こう呼ばれているそうです・・・この世に邪悪が蔓延（はびこ）る時、必ずや現われると言われる希望の戦士！伝説の戦士プリキュア!!」

司会者の男が、大げさなジエスチャーを交えてプリキュアの名を告げるも、照れくさ

かったのか、右手で口を隠し、笑いを堪えた表情を見せる。

「さあ、8時またぎのコーナーに登場して頂きましょう！プリキュア達のリーダーに!!!」  
司会者の合図と共に番組はCMへと変わった・・・

フェアリードロップ・・・

「エツ!? エエエエ!?」

えりかの家でTVを見ていたつぼみは、思わずえりかと一緒に大声を出して驚くと、側に居たももかがコーヒーを飲みながら、

「えりか、つぼみちゃんも、何驚いてるのよ? あなた達もプリキュアは見てるんでしよう? 思い出すわねえ・・・砂漠化した地球を救う為、私達の前から飛び立ったプリキュア達を見送ったのを・・・」

ももかはそう言うのと、もう一口コーヒーを啜った。つぼみとえりかはヒソヒソ話を始めるのと、

「プリキュアのリーダーと言えば・・・やっぱりゆりさん、なぎささん、ほのかさんですかねえ?」

「普通に考えればそうだよねえ・・・」

二人は興味深げにTVを見続けていた・・・



ゆり、いつきもTVや新聞でこの事を知り、内心穏やかでは無かった。ゆりは薫子に電話し助言を求めるも、この騒ぎは一時的なものだろうから、あまり心配しなくても大丈夫でしょうと返答される。

そうあつてくれれば良いんだけど、そう思うゆりであつた・・・

一方、プリキュア5の五人、のぞみ、りん、うらら、こまちは、8時近くになりかれんの家に集合していた。執事の坂本から紅茶を入れてもらい、一同は大型TVに釘付けになっていた・・・

「プリキュアのリーダーって・・・まさか、なぎささん、ほのかさん、ゆりさん!」

「でも、TVに出るような事するかしら?」

うららの言葉にこまちは小首を傾げると、りんも頷きながら、

「そうですね・・・なぎささんなら有り得なくは無い気もしますけど」

「いくらなぎささんでも、そんな事は・・・しないとと思うわよ?」

りんの言葉にかれんは苦笑を浮かべながらやんわり否定する。のぞみは人差し指を立ててシツツとジェスチャーすると、

「みんな、いよいよ登場するよ!!」

五人の視線が画面に釘付けになった・・・

「さあ、登場して頂きましょう！プリキュアのリーダーは・・・この方です!!」

司会者の合図と共に中に入ってくる人物、満面の笑みを浮かべながら一人一人に頭を下げる。黒いスーツに身を包み、胸元のポケットからは白いハンカチがチラリと見える。金髪の髪をオールバックで固めたその人物・・・

「あつ、どうも！私がプリキュア達のリーダー・・・文尾（ぶんび）です!!!」

((((あんたかあああ)))

TVの画面にドアップで登場した文尾と名乗ったブンビーを見て、のぞみ達は思わず心の中で叫び、前のめりになりずっこける。

「な、何で、ブンビーが出てるのよおお!?!」

「有り得ないわ!!」

りんとかれんが変顔を浮かべながら、ブンビーがプリキュアのリーダーを名乗る事を不愉快そうに話すと、こまちは小首を傾げ、

「前にもこんな事があつたような?」

「はい！エターナルで嫌な事があつたらしく、私達のリーダーになってあげるとか言っ

てました」

「うんうん、あつた、あつた！何言ってるんだろう、この人？とか思ったよねえ」

うらら、のぞみも、前にブンビーがプリキュア5のリーダーになってやっても良いと言っていたのを思い出すと、かれん、りんも、あつた、あつたと頷いた。

ブンビーが更に饒舌に語り続ける・・・

「いえねえ、私は遠慮したんですよ！でも、必死になってお願いする彼女達を見てたら、断れなくてねえ・・・リーダーを承諾した訳何ですよ!!」

「「「嘘よおおお!!」」」

思わず見ていたTVに突っ込みを入れるのぞみ達五人、だが画面上では、饒舌にブンビーが話し続けていた・・・

「どうやら・・・キツチリ話を聞く必要がありそうね!!」

「そうですね・・・とつちめてやらないと!」

放送後、かれんとりんは険しい表情を浮かべると、のぞみは苦笑を浮かべながら、

「まあまあ、りんちゃんも、かれんさんも・・・後でブンビーさんの所に行ってみようよ

！」

「ええ．．．二度とこんな真似しないように．．．懲らしめてやりましょう!!」

「アハハハ．．．話し合いに行くんですけど．．．」

更に気色張るかれんとりん、のぞみは、うらら、こまちと顔を見合わせ苦笑を浮かべた。

この後、戻って来たブンビーが、五人に平謝りしたのは語る迄もない．．．

「プリキュア．．．格好良いなああ!!」

「あゆみ、TVばかり見てないで、荷造り早く終わらせちゃいなさい!明日から荷物向こうに送るんだから!」

少女の名前は坂上あゆみ．．．

あゆみは、画面に映るプリキュア達の勇姿を見て目を輝かせて居た．．．

自分とそれほど変わらない年頃の少女達が、色とりどりのドレスのような衣装に身を包み、怪物と戦う姿を見て目を輝かせて居た。

怪物に怯む事なく立ち向かう姿を見て、あゆみの胸はときめく．．．

自分も、あの子達のようになれたらなあ．．．そう現実離れた妄想をしていたのも

東の間、母親に現実に引き戻された。

「お母さん……本当に引つ越さなきゃ駄目なの？ほら、私達が今度引つ越す横浜には、怪物も出るようだし……」

「何言ってるの!?!お父さんの転勤の都合何だから仕方がないでしょう?それに、日本には警察も自衛隊も居るの!だから安心しなさい……さあ、荷造りしちやって!!」

母に訴えたものの、母は、お父さんの転勤なんだから仕方がないとあゆみを諭し、荷造りをするように伝えると、あゆみは渋々自分の部屋に戻った。

(嫌だなあ……引つ越し何てしたくないよ!!)

あゆみは溜息を付くと、渋々荷造りを再開した……

「へえ、プリキュアかああ……どんな人達何だろう?」

「画面を見る限り、みゆきとそうは違わなさそうね!」

「そうだね!さてと、引つ越しの準備続けなきゃ!!ねえ、お母さん、お婆ちゃんは本当に一緒に暮らさないの?」

「ええ、声は掛けたんだけど……また落ち着いたら声を掛けてみましょう!」

「うん!!」

少女の名前は星空みゆき……

居間でテレビを見ていたみゆきが、母育代との会話を終えると、自分の部屋に戻り荷造りを始める。既に粗方片付いていたものの、本棚にはまだ絵本が沢山入ったままだった。

みゆきにとって、一日一冊、絵本を読むのが習慣になっていた。

「七色ヶ丘中学校かああ．．．素敵な出会いがあると良いなああ！楽しみだなあ!!!」

みゆきはウキウキしながら荷造りを再開すると、まだ見ぬ学校を想像し、目を輝かせて居た。

みゆきとあゆみ、共に転校する身でありながら、違う感情を持つ二人．．．

二人の出会いが、プリキュアオールスターズに何をもたらすのか、まだ誰も知らなかった．．．

第四十話：伝説の戦士プリキュア!

完

## 第四十一話：新たなる五つの光！

## 1、少女と妖精

横浜の街で、プリキュアオールスターズの面々が、クライナーと戦ってから二週間に  
なろうとしていた・・・

薫子が言っていたように、二週間も経つと、人々の関心は次第にプリキュアから離れ  
ていった・・・

そして、少女達も新たなる生活を向かえていた・・・

大学一年生となったのは、美墨なぎさ、雪城ほのか、月影ゆり

高校三年生になったのは、水無月かれんと秋元こまち

高校二年生になったのは、九条ひかり、日向咲、美翔舞、霧生満、霧生薫、夢原のぞ  
み、夏木りん、桃園ラブ、蒼乃美希、山吹祈里

高校一年生になったのは、春日野うらら、花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつき

中学三年生になったのは、北条響と南野奏

小学四年生になったのは、調辺アコ

進級した少女達だったが、新たなる戦いが待っている事をまだ知らない・・・

メルヘンランド・・・

石化したように眠り続けるロイヤルクイーンの前に、ポップとキャンデイが佇んで居た。発光し続けるロイヤルクイーンの身体から、ピンク、赤、黄、緑、青の五つの光が浮かび上がると、五色の光は、何かに導かれるようにメルヘンランドを飛び出して行った・・・

「ロイヤルクイーン様は、バッドエンド王国に何か動きがあるのを感じたのかも知れないでござるなあ・・・五色の光が飛び去ったと言う事は、メルヘンランドに伝わる伝説の戦士プリキュア、その復活も近いのかも知れぬでござる！あわよくば、他の国のプリキュア達にも力を貸して貰えれば幸いでござるが・・・キャンデイ、本当に大丈夫でござるか？」

「お兄ちゃん、任せてクル！」

キャンデイはポンと胸を叩くと、安心してと兄ポップに宣言する。ポップは、自信満々のキャンデイを見ると、

(その自信がちと不安でござるが・・・)

だが、ロイヤルクイーン不在の今、責任者である自分が長期間宮殿を離れる訳にも行



かず、妹キャンデイに託し、信じるしかないと思うポップであった。

バッドエンド王国の野望、そして、復活した邪悪な者を阻止する為には、闇と戦い続けるプリキュア達、若しくはメルヘンランドに伝わる伝説の戦士、五人のプリキュア達の力が必須、まだ幼く羊に似た妖精妹キャンデイを送るだけでは不安なポップだったが、キャンデイに託す以外方法は無かった・・・

別れが近付いて来ると、キャンデイの心に寂しさが沸き起り、思わず涙を零すと、ポップはキャンデイの涙を拭ってやり、

「キャンデイ・・・お別れする時は、笑顔でござるぞー！さあ、拙者と約束するでござる!!」  
微笑みながらキャンデイの頭を撫でるポップに、キャンデイは涙を堪え笑顔を浮かべると、ポップは微笑みながら何度も頷いた。

キャンデイは、兄ポップに別れを告げ本の中に入ると、本はまるで翼のように羽ばたき、メルヘンランドを飛び出して行った・・・

「キャンデイ、頼むでござるぞー！アンデとルセンは、拙者が何とか見付けるでござる!!」  
ポップは、キャンデイの消えた方角を見送り続けた・・・

プリキュアが居るとされる世界に向けて進むキャンデイだったが、妙な笑い声が耳に入ってくる。

「ウルツフツフツフ！子羊ちゃん、何処に行こうとしてるのかなあ？」

「逃がさないオニ!!」

「イイヒツヒツヒツヒ、何を企んでいるのか知らないけど、あたし達が気付かないと思っ  
たかい？」

羽ばたくキャンデイが入った絵本を取り囲むのは、バッドエンド王国の三幹部、狼の  
ようなウルフルン、巨体に棍棒を持った赤鬼アカオーニ、そして、緑色のフードを被つ  
た老婆マジヨリーナ、三人に道を塞がれ、絵本の中のキャンデイは、今にも泣きそうな  
表情を浮かべる。

その時・・・

「キュウウウン」

「何だ!?何の音だ?」

妙な音にキョロキョロするウルフルンは、白く発光した物体がこちらに迫ってくるの  
を見付ける。他の二人も気付き、アカオーニは棍棒を振りかぶると、

「邪魔オニ！俺様が叩き潰すオニ!!」

こちらに向かってくる物体を棍棒で叩き潰そうとする。だが、白い物体は巧みに攻撃  
をかいくぐり続け、疲れたアカオーニがその場でハアハア荒い呼吸を繰り返した。

「何やってやがる！このおお!!」

変わったウルフルンが白い物体を捕まえようとすると、物体はこれまた躲し続けウルフルンを疲れさせる。

「さつきから何やつてるだわさ！今度は・・・おや？」

「アアン、どうした？」

「しまった！この隙に妖精に逃げられただわさああ!!」

「何いいいい!!」

白い物体に三人が気を取られている隙に、キャンデイはこの場を大急ぎで離れるのだった。

キャンデイを逃がしたのは、白いクライナーに変えられたルセンだった・・・

ルセンは、キャンデイがメルヘンランドを旅立ったのを知ると、アンデの消息も気になり、覚悟を決めてキャンデイの後を追ったのだった。

キャンデイが無事に逃れたのを見届けたルセンも、キャンデイの後を追うも、トランプの舞いが目の前に現われると、一人の人物が姿を現わし、ルセンを楽々捕まえた。

（これは・・・確かクライナー!?成る程、メルヘンランドに妙な気配が漂っていたのは、こういう事ですか・・・）

赤、青、黄、三色の髪をし、何処かピエロを思わせる派手な姿の人物、その名はジョーカー、不気味さ漂わずジョーカーを見て、三幹部は微妙な表情を浮かべる。

「三幹部のみなさん、ご機嫌よう! どう致しました? こんな所でこんな者を相手にするより、ピエーロ様にバッドエナジーを捧げて欲しいんですけどねえ?」

捕まえたルセンを三人に見せ、口元に笑みを浮かべるジョーカー、三人はムツとしながら不満そうな表情を浮かべると、

「そんな事、お前に言われるまでもねえ!!」

ウルフルン是不機嫌そうに姿を消し、キャンデイの後を追った。アカオーニ、マジョリーナも、不機嫌そうにしてバッドエンド王国へと戻って行った。

三人が消え去った後、ジョーカーは捕らえたクライナーを見つめ口元に笑みを浮かべると、

「クライナーですか．．．これは利用出来るかも知れませんか?」

ジョーカーは、含み笑いを浮かべながらその姿を消した．．．

「遅刻う〜!!」

懸命に走り続ける少女、星空みゆきは、転校初日から寝坊し、大急ぎで学校目掛け走り続けていた。

「もう、お母さんももつと早く起こしてくれば良いのにいい．．．ハップップ〜」

口を尖らせ、変顔を浮かべながら走り続けるみゆきだったが、新しく自分が住むこの

街の青空を見て思わず心が和んだ。

「初日からこの青空！私は元気だし・・・何かウルトラハッピーな事が起こりそうだなあ！！」

みゆきは遅刻しそうなのも忘れたように、その場でスキップを始める。スキップを続けていくと、川沿いの道の直角な曲がり角が目飛び込んでくる。みゆきは目を輝かせると、

「絵本なら・・・こんな場面で素敵な出会いがあるのになあ・・・」

期待を込めて曲がり角を曲がって見るも、そこには何も無かった。絵本の通りには行かないよねとペロっと舌を出し、再びスキップを始めたみゆきは、上空から何かがちらに向かって飛んでくるのを目にする。

「何だろう?!鳥?」

ジッと見つめるみゆき目掛け飛んでくる物体、避けようとした時には遅く、みゆきは物体と顔面衝突すると転倒する。

「イタタタタ・・・あれえ?」

みゆきの側に縫いぐるみのような物体が落ちていた。こんなものあったかなあと思ってたみゆきだが、縫いぐるみを手に持ってみると、縫いぐるみは目をグルグルンさせる。と我に返り、動き出してみゆきを驚かせる。だが、その可愛らしい容姿に目を輝かせた

みゆきは、

「可愛い縫いぐるみ!!ましてや動く何て・・・」

頬擦りするみゆきに、縫いぐるみは嫌そうな表情を浮かべると、みゆきの手を振り解き目の前に降り立つと、

「縫いぐるみじゃないクル!名前はキャンデイ!絵本の国、メルヘンランドの妖精クル!!」

「え、絵本の国!?!本当にそんな所あるの?」

「あるクル!!」

みゆきの目の前に現われたのはキャンデイ、何とかウルフルンの追撃を逃れ、何かに導かれたかのように、ここ七色々丘まで逃げてきたのだった・・・

みゆきは、目の前に現われた絵本の妖精を見て目をキラキラ輝かせると、再びキャンデイを抱きしめ、

「絵本が好きなのが、絵本の国の妖精さんと出会える何て・・・ウルトラハッピー!!」

「離すクル!キャンデイは忙しいクル」

再びみゆきから離れると、キャンデイはその姿を消した・・・

呆然としていたみゆきは我に返り、

「夢・・・じゃないよね!?!あれえ?」

みゆきは、キャンデイが入って来た絵本を拾うと、やはり夢じやないと分かり表情を輝かせた。期待に胸躍らせ絵本を開いて見るも、中は真っ白で、みゆきは小首を傾げる。だが、みゆきを現実に取り戻す、学校のチャイムが聞こえると、大慌てで走り出すも、その表情には満面の笑みが浮かんでいた。

「これから・・・とびつきりハッピーな事が、始まる気がする!!!」

みゆきは、嬉しそうに絵本を抱えながら走り続けた・・・

七色ヶ丘中学校、2年2組・・・

「エエ、本当は今日からみんなと一緒に勉強をする、新しい仲間を紹介する筈でしたが、まだ来ていないようですので、このままホームルームを始めます!」では、出席を取ります!!」

2年2組の担任教師、佐々木なみえ先生、担当は英語を受け持っていて、髪形はポニーテイルで、上下クリーム色のジャケットを着こなすキャリアウーマンのようで、生徒達からの人気も高かった。

佐々木先生の話を聞いた生徒達はザワザワし、窓側の席の後ろから二番目に座る、赤髪の少女日野あかねは、紙に何かを書いて丸めると、真ん中の席に座る大きな黄色いリボンで、髪をポニーテイルにしている緑髪の少女、緑川なおにコツンと当てた。なおは

キツとあかねを睨むも、あかねのジエスチャーを見て、澁々丸まった紙を拾って読んでみると、

「転入生やて!どんな子やろうなあ?」

紙にはそう書かれていた。なおも本心では気になるようで、隣の席に座るなおの幼馴染みで、このクラスの委員長、青木れいかにあかねの紙を見せながら、

「ねえ、れいかは何か聞いてるの?」

「さあ!?!私も今初めて聞きましたし……でも、転校初日からいらつしやらないのは、少し気になりますねえ?」

小声で話し合うなおとれいか、その時、廊下をバタバタ走る足音が聞こえてきて、怪訝な表情を浮かべた佐々木先生が、ドアを開けて廊下を覗いてみると、

「ウエエエン!私のクラスは何所おおお!?」

佐々木先生は、半泣きしながら廊下を走るみゆきを見ると溜息を付き、

「あなたが星空さんね!?!全く、転校初日に遅刻してくる何て……あなたのクラスは此処よ!みんなに紹介するから、中に入りなさい!!」

呆れながら、みゆきをクラスの中に手招いた佐々木先生、みゆきは緊張しながら中に入ると、

「あんたあ、転校初日に遅刻とは……大物やないのお?」



笑いながらあかねにからかわれ、みゆきはエへへと頭を掻くと、クラス中からドツと笑い声が響いた。

「気にしないでね！あかねちゃんって・・・ああいう子だから!!」

教壇の目の前に座る、白いカチューシャを付けた黄色髪 of 少女、黄瀬やよいに話し掛けられる。

「皆さん、お静かに！」

クラス委員のれいかが場を静め、緊張しながらみゆきが自己紹介を始めると、再びあかねが合いの手を入れ笑いを誘い、みゆきはクラスの人々から受け入れられていった・・・

転校初日とはいえ、みゆきは、同じクラスでバレエ部の日野あかねと仲良くなった。あかねはクラスでも中心的一人だったようで、あかねは、ちよつと泣き虫だが、絵を描くのが大好きな黄瀬やよい、スポーツ万能のサッカー少女緑川なお、クラス委員長で弓道部、且つ生徒会副会長の青木れいかを紹介してくれて、みゆきは三人とも仲良くなり、四人が放課後、学校を案内してくれる事となった。

「転校初日に、一杯友達が出来る何て・・・ウルトラハッピー!!」

大喜びなみゆきであった・・・

放課後になり、部活などで学校に残った仲間達の帰りを待つ為、みゆきは学校の図書室に立ち寄った。図書室には図書委員しかおらず、みゆきは興味が有りそうな本を探し始める。みゆきが本を物色している内、図書委員は用でも出来たのか、その場を離れた。本を探すみゆきは、本棚の一角が光っている事に気付くと、不思議そうに首を捻り、本を取り出して見る。本を取り出すと、棚の奥が光って居るのに気付き、本を手で避けると、カチリとスイッチが入るような音が聞こえてくる。

「あれえ!?何の音だろう?」

みゆきは小首を傾げながらも、右、左、左、右と本を動かしていくと、偶然なのか、何かの意図があったのか、本棚全体が光出すと、みゆきはその中へと吸い込まれて行った……

一方、プリキュアを探し続けるキャンディであったが、それらしき人物を見付けける事は出来なかった。なぎさ達一同が、バッドエンド王国の事など、まだこの時知る由も無かった。キャンディの心の中に不安が沸き上がると、寂しさが沸き上がり、思わず涙ぐみ、兄ポップの名を呟くのだった……

「ウルツフツフフー!さあて、何奴からバッドエナジーを集めるとするか……」

その時、上空から響き渡る笑い声に、キャンデイが気付き見上げると、そこにはウルフルンが浮かんでいた。ウルフルンは、獲物を見付けるように周囲を見渡すと、賑やかな声が響き渡る、七色ヶ丘中学校に目を付けた。

「ウルツフツフツフ！よし、あの場所でバッドエナジーを集めるとするか!!」

「あれは、ウルフルンクル．．．大変クル!!」

キャンデイは、ウルフルンに見つからないように柱の陰に隠れると、今は落ち込んでいる場合じゃ無いと、再びプリキュアを探しに向かった．．．

「キヤアアアア!!」

スカートを抑えながら、光のトンネルを落ちていくみゆきは、妙な場所へと導かれた。キヨロキヨロ辺りを見渡したみゆきの表情が輝く、それもその筈で、この場所には沢山の本が置かれていたのだから．．．

近づいたみゆきは、本棚の本を見てある事に気づき、朝拾った本を鞆から取り出すと見比べてみる。

「うん、やっぱりそうだ！この本．．．ここに置いてある本と同じ種類何だね」

そう言うと、みゆきは手に持っていた拾った本を棚に戻す。すると棚が光り出し始めた。みゆきは不思議そうに光輝く棚に近付くと、本のすき間から奥を覗いてみた。

スペースが狭くてよくは見えなかったが、光の中に浮かび上がった映像には、朝に出会った妖精キャンディが映っていた。

「うくん、見にくいなあ・・・」

映像が見にくかったのか、みゆきは本を何冊か動かすと、カチリと再びスイッチが入り、みゆきは光に包まれ、再び光のトンネルに吸い込まれた。光が止んだ時、目を開けたみゆきは、再び学校の図書室にワープして来た事を悟り驚愕する。

「ま、また戻って来たの!?! そうだ! キャンディは!?!」

慌てて校庭に飛び出し、辺りをキョロキョロ見回すと、生徒達に見つからないように、チヨコチヨコ駆けて居るキャンディを発見し、みゆきは後を追うと、キャンディを捕まえた。

「妖精さん、また会えたね!」

みゆきがキャンディにニッコリ微笑むも、キャンディはそれどころじゃないと言い、みゆきにも逃げろと伝える。首を捻るみゆきの前に、笑い声が聞こえてくる。

「ウルツフツフツフ! こんな所に居たのかい、子羊ちゃん?」

「エツ!?! 狼さん? こんなにちは! 私は星空みゆき!!」

ウルフルンは、自分の姿を見ても動じず、自己紹介を始めるみゆきを見て呆気に取られるも、

「何で俺様を見て驚かないんだ!? まあいい、お前も含めて、ここらに居る人間共からバッドエナジーを吸い取るとするか・・・世界よ! 最悪の結末、バッドエンドに染まれ! 白紙の未来を黒く塗りつぶすのだ!!」

ウルフルンは、闇の絵本とでも呼ぶべき本を開くと、白紙のページに、黒い闇の絵の具を叩き付け塗りつぶすと、空には白い満月が浮かび上がり、淀んだ空気が流れる不気味な姿を現わした。生徒達はその場にしゃがみ込み、ネガティブな言葉を発した。人々から発せられたネガティブな感情は、バッドエナジーとなつて闇の絵本に吸い込まれていった。その中には、部活動や用事を終え、みゆきの下に向かおうとしてた、あかね、やよい、なお、れいかの姿もあった・・・

「そんなあ・・・あかねちゃん達まで!」

「ウルツフツフツフ! 人間共が発したバッドエナジーが、悪の皇帝ピエーロ様を呼び覚ますのだ!!」

高笑いを浮かべるウルフルンと対照的に、みゆきとキャンディの表情が引き攣る。周りの生徒達はどうなってしまったのか?

「人間共のネガティブな感情からは、バッドエナジーと呼ぶ力が照射される。それをこの本が吸収し、ピエーロ様に送られる! 封印されているピエーロ様の前に置かれた目盛りが一周したその時・・・ピエーロ様は復活し、全宇宙はバッドエンドな世界へと変わ

るのだ!!ウルツフツフ!!」

ウルフルンの高笑い響き続けると、みゆきとキャンデイの表情が益々驚愕の表情を浮かべた。

「ど、どうしよう!?!あの狼さん、悪い人なの?」

キャンデイはみゆきに頷くと、ウルフルンの前にチヨコチヨコ歩いて行くと、

「止めるクル!世界をバッドエンドに何かしちやいけないうクル!!」

「アアアン!?!この俺様に説教か?ケツ!お前が何を言おうと、未来は全てバッドエンドになる。頑張っても無駄なだけだ!バッドエンドに染まるんだよ!!」

キャンデイの説得に耳を貸さず、逆に威嚇を始めるウルフルン、みゆきの脳裏に絵本の話が浮かんでくる。最後には退治される狼の話が・・・

（それは、狼さんの事なの?狼さんが絵本の中で必ず負け、虐げられ、悪者にされる未来の事?）

「そんな事ないクル!頑張ったら、未来はきつとハッピーエンドになるクル!!」

キャンデイの言葉を聞き、みゆきはハツとすると、キャンデイを抱き上げ、ウルフルンを見つめると、

「キャンデイの言う通りだよ!私、今日転校初日なのに遅刻しちやって・・・でも、そんな私を、あかねちゃんや、クラスみんなが励ましてくれた!頑張り続ければ、何時か

ハッピーになるんだよ!!」

ウルフルンは困惑した表情を浮かべるも、みゆきを見てある事を思い出し驚愕する。

「そ、そういえばお前・・・何でバッドエンド空間で自在に動けるんだ?バッドエンド空間に取り込まれた者は、ネガティブな感情に支配され、動ける筈が無いのに・・・」

「エツ!?そんな事言われても・・・」

「まあいい、邪魔なお前達を・・・食ってやろうか?」

ウルフルンは口を大きく開け、鋭い牙でみゆきとキャンディを威嚇すると、キャンディは震え、みゆきはジイとウルフルンを見つめると、

「お、狼さんって・・・変態さんだったの?」

「変態だど!?そりゃあ、確かに赤ずきんを食べる為に婆さんに化けた事は・・・って、そうじゃねええ!!お前達を、ガブリと食べてやるって事だ!!」

口を大きく開け閉めすると、ウルフルンの真意に気付き、キャンディを抱いたまま逃げ出すみゆき、執拗に追ってくるウルフルンに、思わずキャンディは涙ぐみ、

「プリキュア!何処クル?プリキュアアア!!」

「エツ!?プリキュアって言ったら・・・」

プリキュアの名前を叫ぶキャンディ、プリキュアという名を聞き、みゆきの脳裏に、横浜の街を救った少女達の事が思い出されてくる。キャンディは、みゆきがプリキュアを

知っているような様子を見て目を輝かせると、

「プリキュアを知ってるクル?」

「うん、名前だけは・・・TVでチラッと姿も見たけど! キャンディは、プリキュアを捜しているの?」

みゆきがTVで見た事を伝えると、キャンディは、直接みゆきが知っている訳では無いと知り、ガツカリした表情を浮かべる。みゆきは申し訳無さそうな表情を浮かべるも、

「私も一緒に捜してあげるよ! さつきキャンディも言ってたじゃない! 頑張れば・・・必ず見付けられるよ!!」

「そいつはどうかなあ!?! お前達は・・・此処でバッドエンドな結末を向かえるのさ!!」

一緒にプリキュアを捜すと言ったみゆきだったが、追いついたウルフルンの一撃を受け、転倒するみゆき、ウルフルンは勝ち誇ったようにゆっくり近付いて来る。

「諦めない! 私、頑張るって決めた事は・・・絶対に、絶対に、最後までやるんだもん!!  
それが私の・・・それが私の・・・ハッピー何だからああああ!!」

ウルフルンの鋭い爪がみゆきに伸びたその時、みゆきの叫びに感応したように、みゆきの身体をピンクの光の柱が覆った・・・

「な、何だ、これは!?!」



驚愕するウルフルンの目の前で、光に包まれるみゆきとキャンディ、みゆきの目の前にコンパクトが現われると、キャンディの目が輝く、

「ちみが伝説の戦士・・・プリキュアだったクル!!」

「エツ!?ち、違うよ、私じゃなくて・・・」

みゆきの事をプリキュアだというキャンディに、みゆきは自分じゃなくて他に居ると伝えるも、

「そのスマイルパクトが何よりの証クル!ちみは、メルヘンランドに伝わる・・・伝説の戦士プリキュアクル!!」

「私が・・・プリキュアアアア!?!」

憧れては居た・・・

だが、実際に自分がプリキュアだとキャンディに伝えられるも、みゆきには信じられなかった。尚もキャンディは言う、スマイルパクトを開き、キュアデコルをセットし、プリキュアスマイルチャージと叫べと・・・

「何だか良く分からないけど・・・私、やってみる!!」

みゆきは頷くと、スマイルパクトを開き、キュアデコルをスマイルパクトにセットすると、

「プリキュア!スマイルチャージ!」

みゆきはそう叫ぶと、スマイルパクトのパフを、身体の光輝く場所に付けていく。みゆきの身体を光の衣装が纏っていった。頭のカチューシャの両脇には翼のような飾りが付き、ピンクの衣装が全身を覆った。光が収まり、変身を終えたみゆきが、再びウルフルンの前に現われると、ウルフルンは呆気に取られる。

「キラキラ輝く、未来の光！キュアハッピー!!」

名乗りを上げた新たなるプリキュア、キュアハッピー!

「プリキュアだとおお!!? そう言えば、前にジョーカーの奴が言ってたな・・・面白え!!」  
ウルフルンは、目の前に現われたハッピーを見て闘士を漲らせるものの、ハッピーはキャンディに対し、

「戦へって言われたって・・・怖いよおお!!」

「ちみは伝説の戦士クル〜! しっかりするクル!!」

「そんな事言われたってえ・・・」

やる気満々だったウルフルンは、戦いに消極的なハッピーを見て、思わず目を点にしながらハッピーを見つめると、

「だったら、俺様が楽にしてやるよ!!」

再び鋭い爪で突進してくるウルフルン、ハッピーは、キャンディを抱いて人気の無い方に逃げ出す。執拗に追いかけるウルフルンであったが、逃げてばかりのハッピーに呆

れ返り、

「何だかバカバカしくなってきたぜ・・・お前らに俺様のもう一つの力を見せてやる・・・いでよ、アカンベエ!!」

ウルフルンは、自分自身で戦うのがバカらしくなり、赤い玉を持った右手を上げ闇の力を召喚すると、グラウンドを囲うブロック塀の一角は、赤い鼻を付けた怪物へとその姿を変えた。

「このアカンベエは、キュアデコルの力をバッドエナジーで変えて生み出した存在・・・さあ、行けえ!!」

ウルフルンの指示を受け、ハッピーにパンチを繰り出すアカンベエ、ハッピーは、キャンディを抱いたまま大ジャンプで躲すと、大空高く飛び上がった。

「す、凄いジャンプ力・・・だけどこの後、私達どうなるのおおおお!!」

「そんなの・・・落ちるだけクルウウウウウ!!」

ハッピー、そしてキャンディの叫びと共に、上空から地上に落下していくハッピーとキャンディ、幸か不幸か、ハッピーとキャンディは、アカンベエの上に落下する。思わずお互い無事な姿を見て笑い合うハッピーとキャンディだが、猛ダツシュでアカンベエから逃げ出し、それを見たウルフルンは、

「な、何なんだ、あいつら!?!」

半ば呆然とするも我に返り、アカンベエに止めをさせと命令する。アカンベエは命令通りハッピーに向けて動き出すと、ハッピーがどうしたらいいのか戸惑い始める。

「ハッピー！ハッピーシャワーで、アカンベエを浄化するクル！」

「何だか良く分からないけど……やってみる!!ハッピーハッピー、ハッピーシャワー!!」  
しかし、何も起こらなかった……

色々なポーズを取りながら、ハッピーシャワーをアカンベエとウルフルンに放ったハッピーだったが、攻撃した筈のハッピーも、攻撃を受けた筈のウルフルンとアカンベエも、皆目をパチクリして小首を傾げた。

「ダアアアア！さっきから何なんだあいつは!?!アカンベエ、怯むな！やっちゃまええ!!」

再び指令を出すウルフルンの言葉通り、攻撃を始めるアカンベエ、技を出せず動揺するハッピーは、キャンディに抗議するように問い掛けると、キャンディは気合いが足りないからだと告げる。

「嘘おお!?!私、超やる気だったもん!だから、技が出なくて超恥ずかしかったもん!!」

頬を赤くしながら、不満そうにキャンディに文句を言うハッピーだったが、目の前に迫るアカンベエを見てそれどころでは無いと悟り、

「こうなったら……気合いだ!気合いだ!気合いだ!!」

力を込めるハッピー、スマイルパクトは、ハッピーの力を吸い取るように、その力を

吸収していく。キャンディは、もっと気合いを込めるようにハッピーに言う、ハッピーが更に気合いを込める。スマイルパクトの輝きが増すと、キャンディが今だと叫ぶ、それに合わせるように、

「プリキュア！ハッピー〜〜〜〜シャワ〜〜！！」

両手で組んだ腕を前に突き出すと、ハッピーの手からピンク色の光の輝きがあかンベエ目掛け飛ぶ、アカンベエは為す術もなく、光の輝きの中でその身は浄化された：：赤鼻が浄化されると、元のブロック塀に戻り、浄化された時に、キュアデコルが降ってきてキャンディが大喜びする。

「チッ！プリキュアか。。。覚えてろよ!!」

姿を消すウルフルン、すると街も元通りになり、ハッピーはホッと胸を撫で下ろした。だが、必殺技を放った後、荒い呼吸をするハッピーに、キャンディはハッピーシャワーを放つには、気合いを溜めなければならぬと伝え、技を放った後は、疲れてしまい、次に放つには休息が必要だと告げる。

ウルフルンを追い返したハッピーを見て、改めて目を輝かせるキャンディは、大喜びでハッピーに抱きつく、

「やったクル！ハッピー、その力でキュアデコルを集め、メルヘンランドを救って欲しいクル!!」

「何だかまだ全然分かんないけど・・・面白そう！何だろう、とびつきりハッピーな事が、始まっちゃったかも知れない!!」

ハッピーは、キャンディの頭を優しく撫で、嬉しそうに微笑んだ・・・

変身を解いたみゆきは、キャンディに縫いぐるみの振りをしているように伝え、あかね達の下へと駆け付けた。

「みんなあ！大丈夫?」

「アレエ!?ウチ、何でここに倒れてたんやろう?」

「私達・・・星空さんの下に向かおうとしてたら・・・」

「何だか急に空が暗くなって・・・」

「眠ってしまったみたいですねえ?」

キョトンとしながら顔を見合わせた四人だったが、四人はプリキュアのような姿をした少女を見た気がしていた。みゆきの声に似た少女を・・・

あれは、夢だったのだろうか!?

あかね達は、ルンルン気分て前を歩くみゆきを、不思議そうに見つめていた・・・

時を同じくして・・・

横浜みなとみらいの地を、俯きながらトボトボ歩く一人の少女の姿があった・・・

少女の名は坂上あゆみ・・・

あゆみは、横浜の学校に転入したのだが、この学校の生徒達とは、微妙に距離感があるような気があゆみにはしていた・・・

(前の学校は楽しかったなあ・・・)

みゆき同様、転校初日のこの日、最初こそ何人かのクラスメイトが話し掛けてはくれたのだが、あゆみの反応を見て、次第に興味が無くなったようにあゆみには感じられていた。

授業中も孤独感を感じたあゆみ、あゆみは授業終了後、まるで逃げるように足早に学校を出て行った。真っ直ぐ帰る気にならなかつたあゆみは、TVで見たプリキュアの事を思い出し、このみなとみらいの地へと歩みを向けた。

(あの観覧車の上に居たんだよね・・・プリキュアかあ)

あゆみは観覧車を見上げると、プリキュア達に混じり、観覧車の上で楽しそうに微笑む自分の姿を見た気がして涙が浮かんできた。

(私も・・・プリキュアになれたらなあ)

溜息を付いたあゆみは、そろそろ帰らなければお母さんが心配すると、再び歩き出す。一度は通った筈だったのだが、あゆみは道を間違えたのか、ランドマークタワーの裏側の通りに出て困惑する。

(あれえ、確か此処を曲がれば・・・まあ、大丈夫よね!)

道は間違えたものの、きつと大通りに繋がっている筈だとそのまま歩み続けたあゆみは、足下に何かが蠢くのを見付けて小首を傾げる。

しやがみ込み覗いてみると、スーパールのビニール袋に絡まって藻掻いている生き物を見付けた。あゆみは、そつと右手を出してビニールを退かすと、そこには黄色いなまこのような生き物がピョンピョン飛び跳ねていた。あゆみはその仕草を見ると笑みを浮かべ、掌を差し出すと、なまこのような生き物はピョンとあゆみの掌の上に乗っかり、ピョンピョン飛び跳ね続ける。

「ひよつとして・・・私にお礼をしているの?」

黄色いなまこのような生き物は、まるでそうだと言っているようにコクコク身体を曲げる仕草は、人間の言葉が分かるかのようにだった・・・

「どう致しまして! 私は坂上あゆみって言うの・・・あなたは?」

「キュウウウ!」

なにかを訴え掛けるような言葉を発するも、あゆみに分かる筈も無く、あゆみはこの生き物にキューちゃんと言付け、そのままキューちゃんを連れ家路に着くのだった・・・

## 2、新米プリキュアの戦い



キャンデーは、初めて会った人間、星空みゆき事キュアハッピーと共に、日野あかね事キュアサニー、黄瀬やよい事キュアピース、緑川なお事キュアマーチ、青木れいか事キュアビューティを見つけ出し、メルヘンランドに伝わる伝説の戦士プリキュアを全て集めた。

転校早々仲良くしてくれたあかね、やよい、なお、れいかが、同じプリキュアの仲間だと知り、みゆきの心はウルトラハッピーであった・・・

五人のプリキュアは、人間達のバッドエナジーを集め、悪の皇帝ピエーロを復活させようと企むバッドエンド王国の三幹部、ウルフルン、アカオーニ、マジヨリーナと戦い続ける。

だがこの五人、歴戦の戦士達に比べ、何処か戦士としての自覚に欠けた面があった：

この日も、バッドエナジーを集めに来たアカオーニと対峙する五人、アカオーニは、みゆき達の学校、七色ヶ丘中学校の校庭に現われると、この前のウルフルン同様、部活をしていた生徒達からバッドエナジーを集めていた。アカオーニが発したバッドエンド空間は、まるで燃えるように赤く染まって居た。

ハッピー達五人は、五人揃った事で、チーム名をスマイルプリキュア！と決め張り切って戦いに出たのだが・・・

「気合いだ！気合いだ！気合いだ！プリキュア！ハッピーくく・シャワくくく！！」

気合いを込めたハッピーシャワーが炸裂するも、野球バットが変化したアカンベエは、ハッピーの攻撃を転がりながら躲した。

「ガア〜ン!?そ、そんなあ・・・避けちゃった」

必殺技が外れたハッピーは、力を使い過ぎた為、その場に跪き荒い呼吸をする。

「でかしたオニー！そのままプリキュアを倒すオニー!!」

アカオーニは大喜びしながら踊り、その勢いで他のプリキュア達も倒せと命令を与える。ハッピーを庇うように前に出たサニーは、

「そんなら、次はウチの番や・・・プリキュア！サニーファイヤー!!」

続いてアカンベエに攻撃を仕掛けるのは、日野あかねが変身したキュアサニー!!

赤髪のお団子頭をしていて、衣装はオレンジが主体で、赤いラインが入っていた。イメージカラーは赤！バレー部に所属しているあかねを現わすように、サニーの必殺技は、炎のバレーボールとでもいうように燃えさかり、それをサニーがスパイクする荒々しい技であった。

アカンベエは起き上がると、向かってくるサニーファイヤーをカキーンと打ち返した。打ち返されたサニーファイヤーが脇を通り過ぎ、サニーの表情が呆気に取られる。

「アホオオ！野球とちやうわああ!!」

打ち返されて悔しがるサニーもまた、力を使いすぎ荒い呼吸をする。

「こ、今度は私が・・・プリキュア！ヒイイイ」

次にアカンベエに攻撃しようとするのは、黄瀬やよいが変身したキュアピース、黄色を主体とした衣装を身に着けていた。イメージカラーは黄！ピースは、雷を両手の人差し指と中指に蓄えようとするも、その衝撃にビビリ、涙目になる。何とか泣くのを堪えたピースは、

「プリキュア！ピース・・・サンダー!!」

ピースサンダーをアカンベエに放とうとした瞬間、アカオーニとアカンベエに怖い顔で睨まれ、ビビったピースは誤って四人の仲間を雷で攻撃してしまう。

「二「キヤアアア」」

ピースサンダーを浴びて感電する四人から悲鳴が漏れると、ピースは涙目になりながら、四人に頭を下げ謝り続ける。

「ゴメンなさい！ゴメンなさい！ゴメンなさい！」

「アホかあ！味方を攻撃してどないすんねん!!」

「だつてええ・・・あの人達、怖い顔で睨むんだもん」

サニーに怒られ、益々泣きそうになるピースを見て、アカオーニは腹を抱えて大笑い

する。

冷静に状況を分析した青木れいかが変身したキュアビューティ、高貴な雰囲気醸し出すビューティは、青の衣装を身に付けていた。イメージカラーは青!

ビューティは、隣に居る緑川なおが変身した、キュアマーチをチラツと見ると、

「どうやら、闇雲に攻撃しても……ってマーチ?」

闇雲に攻撃しても、攻撃を躲されるかも知れないと、ビューティがマーチに慎重に戦おうと言おうとしたのも束の間、マーチは漲る闘志を隠さず、

「今度はあたしの番だ!直球勝負!!プリキュア!マーチシユートオオ!!」

マーチは、緑の衣装に身を包んでいて、髪の毛のボリュームは、五人の中で一番あった。イメージカラーは緑!ハッピー同様、五人のプリキュアの頭には、天使の羽のような飾りが付いていた。

サッカー部に入っているなおを現わすように、マーチの叫びと共に、緑色に輝く球体をアカンベエ目掛け蹴り飛ばす。球体は、唸りを上げてアカンベエ目掛け飛んでいく、アカンベエはサニーにしたように身構えると、

「行けええ!!」

マーチの思いと共に突き進むマーチシユート、アカンベエがバットを振って勝負してくると思いきや、アカンベエはマーチシユートをそのまま見送り、マーチシユートは空

しく彼方に飛び去り、マーチは目を点にしながら呆然とする。

「直球勝負って言ったじゃない!? 何で勝負しないのよおお?」

悔しがるマーチを見下すように、踊るアカンベエとアカオーニ、

「良いぞ、アカンベエ! 後一人! 後一人オニ!!」

必殺技を使い果たし、ハアハア荒い呼吸を繰り返すハッピー、サニー、ピース、マーチは、アカンベエが放つ、まるで野球のノックのように飛び交うボールを避けきれず、次々にダメージを負う。

「このままでは……こっちはです!!」

ビューティは、仲間に攻撃させないようにアカンベエを誘導する。アカンベエは、釣られたようにビューティの後を追い攻撃を放つも、何とか躲し続けるビューティ、だが、中々攻撃に転じる事は出来なかった。

(私が攻撃を外せば……全てが終わってしまう! それだけは……)

何とかアカンベエの隙を作ろうと戦い続けるビューティ、その時……

ビューティとアカンベエの戦いを不安そうに見つめるキャンデイの視線に、羽ばたきながら近付いて来る物体が見えてくる。キャンデイは不思議そうに小首を捻るも、本の中から現われた人物を見て、キャンデイの目が輝いた。

「あれは・・・お兄ちゃんクル!!」

本の中から現われたのはキャンディの兄ポップ、ポップは瞬時に状況を理解したのか、

「援護するでござる! ドロンでござる!!」

何か巻物のような物を口に咥え、煙に包まれたポップが再び姿を現わすと、ポップは巨大な手に変化し、アカンベエを捕らえ振り回すと、アカンベエは目を回し動きが鈍る。

「今でござる!!」

「プリキュア! ビューティ・ブリザード!!」

ポップの合図に頷いたビューティは、右手に冷気を球状に凝縮し、左手で空中に雪の結晶を作った後、雪の結晶と氷の球を合わせてアカンベエ目掛け冷気の技を繰り出した。目を回して居たアカンベエは、ビューティブリザードを避ける事が出来ず浄化される。

「「ヤッター〜!」」

喜ぶハッピー、サニー、ピース、マーチに微笑み掛けるビューティ、アカンベエを浄化し、また一つキュアデコルを取返した少女達から笑顔が溢れた。

「ウ〜、でも面白かったから・・・満足オニ!!」

アカオーニは、先程のプリキュア達の無様な姿を見て、満足そうに帰って行った：

アカオーニが撤退した事で、グラウンドに張られたバッドエンド空間は解除され、元の景観を取り戻した。

「この方に手助けして頂かなければ、危なかつたですねえ・・・感謝致します!!」

ポップに深々と頭を下げるれいかに、ポップは礼には及ばないと告げる。そのポップ目掛け大喜びのキャンデイが体当たりし、ポップは後頭部から地面に倒れ苦悶の表情を浮かべた。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん!!」

今にも泣きそうな顔でポップに抱きつくキャンデイを、起き上がったポップは優しく頭を撫でて上げた。みゆき達五人は、そんな二人を微笑みながら見つめた。ポップはみゆき達五人の顔をじっくり見つめると、

「この五人が、メルヘンランドに伝わる伝説の戦士プリキュアでござるな・・・キャンデイ、良く頑張つて見付けてくれたでござる!」

「ござるって・・・何や時代がかつとるなあ!でも、可愛いやん!!」

あかねの言葉を聞いていたポップの顔色が変わり、あかねがポップの頭を撫でようとした手を払いのけると、

「無礼でござろう!拙者は武士(もののふ)・・・その拙者に可愛いなどは、失礼千万

でござる!!」

「そ、そないに怒らんでもええやん!」

ポツプが怒った事で、あかねが少し動揺を見せると、ポツプを見ていたやよいがポツプとカツコイイと言うと、ポツプは顔を赤らめ、

「せ、拙者が・・・カツコイイと!?!」

「うん、男らしくて!」

「勇敢で!」

「妹思いで」

「とても頼りがいがあるお方ですわ!」

やよい、なお、みゆき、れいか、四人が次々ポツプを褒め称えると、益々動揺したポツプは二、三步後退り転んだ。まだまだ、修行が足りないと言うポツプに、一同は苦笑を見せるのだった・・・

第四十一話：新たなる五つの光!

完



## 第四十二話：妖精会議！

### 1、プリキュア物語

場所をみゆきの部屋に移した一同は、改めてポツプを歓迎していた・・・

「でも、ポツプさんが来てくれて、ちょうど良かったですわ！実は私達、プリキュアの使命について、キャンディに聞いていたのですけど・・・」

「そんな最中にアカオーニの奴が現われたから、キャンディに聞きそびれちゃって・・・」  
「キャンディ・・・良く分からないクル！」

和んだ雰囲気の中、れいかとなおがポツプを見て話し掛けると、キャンディは照れ笑いを浮かべながら、ポツプに擦り寄り、お兄ちゃん教えてと頼んだ。ポツプはキャンディの頭を撫でながら、

「しようがないでござるなあ・・・では、プリキュアの使命に付いて話すでござる！その前に、キャンディ、プリキュアの絵本はどうしたでござるか？」

ポツプに聞かれたキャンディは、一瞬キョトンとするも、直ぐに思い出したのか涙目になると、

「お、落としたクル・・・」

「『『『『『エエエ!』』』』』」

キャンディが本を落としたと告げると、一同が驚きの声を上げる中、みゆきはキャンディと初めて出会った時を思い出し、

「もしかしたら……私、キャンディと出会った時、絵本を拾ったの!学校の図書館から、何処かの本が一杯ある場所に移動しちやって……そこには、その本と似たような絵本が沢山あったから、そこに置いてきたんだけど……」

みゆきの話を聞いていた、あかね達四人にはチンプンカンプンだったが、ポップはマジマジみゆきの顔を見つめると、

「それは、不思議図書館の事でござるな?しかし、知らない者が不思議図書館に辿り着くのは、至難の業なのに……何故みゆき殿が!?!いや、今は皆の衆にプリキュアの使命を話すのが先でござるな!では皆の衆、不思議図書館に向かうでござる!!不思議図書館には……配置さえ覚えれば、本棚がある場所なら、何処からでも行けるのでござるよ!!」

ポップはそう言うと、みゆきの部屋の本棚の前に移動し、本の配置を変えていくと、嘗てみゆきが偶然したように、カチリと音がし、一同は吸い込まれるように本棚の中に消えて行った……

「みゆき、お菓子とジュース持ってきたわよ!みゆき!」

みゆきの部屋をノックし、中に入ってきたのはみゆきの母育代・・・  
ピンクのリボンで髪をポニーテイルで纏め、クリーム色の七分シャツ、タイトスカートの下に紺色のジーンズを着ていた。とても美人で、みゆきと一緒に居ても、お姉さんと言われても通用しそうな若々しさを持っていた。みゆきにとって、優しくて自慢の母親である・・・

「変ね？さつきまで居たと思ったのに・・・何処に行つたのかしら!？」

育代は首を傾げながらも、その内戻つて来るでしようとお楽観し、持つてきたお菓子とジュースを部屋に置くと、下へと降りていった・・・

不思議図書館に着いた一同、あかね、やよい、なお、れいかは、初めて見る光景に思わず感動していた・・・

「此処には、世界中のメルヘンが集められているのでござるよ・・・それに、プリキュアの本にも種類があつて、これから皆の衆に語るプリキュアの話は、メルヘンランドに伝わる伝説の戦士プリキュアの話！他に、光の園、泉の郷、パルミエ王国、スウィーツ王国、こころの大樹、メイジャーランドなど、それぞれの場所に伝わる伝説の戦士プリキュアの話も、此処には納められているのでござる・・・興味があつたら、読んでみると良いでござるよ!？」

ポップの話聞いていた一同、あかねはポップの話聞いていて、

「そう言えば、プリキュアってウチらだけじゃないもんなあ?」

「うん!前にTVで見たけど・・・超カッコイイんだよ!!」

あかねの言葉に、TVで見たのを思い出したのか、やよいが目を輝かした。なおは苦笑を浮かべながら、

「あたしは・・・あれ見ても本当の事とは思えなかったよ!いざ自分がプリキュアになってみて、初めて本当の事だったんだって思ったよ!」

「私もそうでした・・・でも、先人のプリキュアの方々のお話も、きつと私達のこれからに役立つ筈ですね!」

なおの言葉に同意したれいかも、当初は現実の話だと信じられなかった。だが、みゆき達にプリキュアに誘われ、それが事実だと悟った。先人のプリキュア達の話は、必ず役に経つと思うれいかだった。みゆきは大きく頷き、

「うん!プリキュアの本もそうだし・・・私は此処にある本、全部読んで見たいなあ!!」  
目を輝かしながら不思議図書館を見回すみゆきを見て、一同が微笑む。ポップは、心の底から本が大好きなみゆきなら、この不思議図書館に導かれても不思議では無いと悟った。

「みゆき殿は、本当に絵本が大好きでござるなあ・・・不思議図書館に来られた理由が、

分かるような気がするでござるよ……さて、皆の衆！では、メルヘンランドに伝わる、伝説の戦士プリキュアの……始まり、始まり!!」

ポップがプリキュアの絵本を取り出すと、みゆき達一同が盛大に拍手をする。ポップは一同に対し一礼し、絵本を開き話し始めた……

「昔、昔、メルヘンランドに、三人の悪い魔人が現われ、メルヘンランドの住民達を魔物に変えて襲つて来た事がござった……メルヘンランドの女王、ロイヤルクイーン様は悲しみ、三人の魔人、そして、魔に変えられた者達を救うべく戦つたのでござるが……」  
そう言うと、ペラッとページを捲るポップ、一同はまるで紙芝居を見ているかのよう  
に、ポップの話に引き込まれていった。

「元はメルヘンランドの民を攻撃する事が出来ず、苦戦するロイヤルクイーン様、その時、メルヘンランドに光の輝きが降臨すると、その中から、光の園の伝説の戦士！二人のプリキュアが現われたのでござる!!二人のプリキュアは、魔物に変えられたメルヘンランドの住民達を、虹色の輝きで元に戻すと、ロイヤルクイーン様と共に、三人の魔人と戦つたのでござる!!」

「それで、それで、どないなつたん?」

「あかねちゃん……そう急かしちゃ悪いよ?」

続きが気になったあかねが先走り、ポップに聞こうとするのを、みゆきが慌てて止める。あかねもそれはそうだと納得すると、ポップに続けるように促す、ポップは苦笑を浮かべながら、

「徐々に追い詰められた三人の魔人は、魔界から巨大なる大蛇（オロチ）を召喚するも、死闘の末、二人のプリキュアは大蛇を魔界に追い返し、ロイヤルクイーン様と共に、三人の魔人をメルヘンランドのとある森の中に封印したのでござった・・・二人のプリキュアから、光の園の加護を受けたロイヤルクイーン様は、自身の力を交え、メルヘンランドを守護するプリキュアの力を、五つの光に分けたのでござる・・・」

「その五つの光が、今の私達に伝わると云う事ですね？」

「そう考えると感触深いねー」

ポップの話の聞き、その五つの力が今、自分達が授かっている事に、れいかとなおは感触深げにするも、やよいは目をキラキラ輝かせながらポップを見ると、

「それで、それで、プリキュアはどんなビーム出して大蛇を追い返したの？」

「エッ!? ビームでござるか? さあ、そこまで詳しくは書いてないでござるなあ・・・」

「そこまで詳しくは書かれていないと知り、やよいは残念そうな表情を浮かべ、ポップを苦笑させる。

「そして、時は流れ・・・妖精達が楽しく毎日を暮らすメルヘンランドは、再び悪の脅威

に脅かされたのでござる！悪の皇帝、ピエーロ率いるバッドエンド王国が、メルヘンランドを襲撃してきたのでござる！！プリキュアが居らぬ状況下、ロイヤルクイーン様は、悪の皇帝ピエーロの封印と引き替えに、ご自身の力の源、キュアデコルを全てバッドエンド王国に奪われてしまったのでござる・・・しかし、今まさに伝説の戦士は復活したのでござる！！キュアハッピー、キュアサニー、キュアピース、キュアマーチ、キュアビューティ・・・」

ポップが捲った絵本に載っているのはハッピー達五人、みゆき達は、自分達が変わ身した姿が絵本になっているのに驚くも、皆目を輝かせた。更にポップがページを捲るも、そこから先は白紙になっていた。驚愕する一同にポップは語る・・・

そこから先のページは、みゆき達五人の行動に掛かっていると・・・

「皆の衆、キュアデコルを集め、ロイヤルクイーン様を復活させて欲しいでござる！」

ポップがみゆき達五人に頭を下げると、みゆき達は顔を見合わせ頷いた。ポップは嬉しそうにキャンディと顔を見合わせると、今一度、五人の少女達に深々と一礼するのだった・・・

## 2、妖精会議開幕！

翌日・・・

キャンディ同様、一泊みゆきの家に泊めて貰ったポツプは、一同を再び不思議図書館に集めると、自分がこっちの世界に来た理由を語り始めた・・・

ポツプがこちらの世界に来たのには、今一つの訳があった・・・

ポツプは、他の世界のプリキュアの絵本に描かれている、伝説の戦士プリキュアの力も、メルヘンランドの為に、何とか借りる事は出来ないだろうかと考えて居た。メルヘンランドに封印されていた何者かの復活、アンデとルセンの失踪、そして、バッドエンド王国の襲来・・・

キャンディが、メルヘンランドに伝わる五人の伝説の戦士プリキュアを見付けては居るが、もし、復活した何者かまでが、襲つて来たら、五人は凌ぐ事が出来るのか未知数であった。しかも、彼女達五人は、プリキュアに成り立てで経験が不足している。

ポツプは、何度かメルヘンランドに手紙を配達に来ていたシロツプに相談してみると、意外にもシロツプがそれぞれの妖精国と交友があるのを知り、ポツプは会えないか打診すると、妖精達は快く快諾してくれて、会合の場所をパルミエ王国と決め、この日、妖精会議が行われるとみゆき達に語った・・・

「そして、キャンディ！キャンディも他の妖精達と親しくなっておくのも良いと思い、特



別に連れて行こうと考えて居るのでござるが・・・キャンデイ、どうする?」

「お兄ちゃんが一緒なら安心クル!」

キャンデイは、ポップも一緒なら安心だからと、妖精会議に出る事を承諾した。ポップは頷き、一同にキャンデイと自分が少し留守にする事を伝えた。

子供達の笑い声が響き渡る公園・・・

ある者は野球を、ある者はサッカーを、ある者は遊戯具で遊んでいた・・・

そこに、緑色のフードを被った風変わりな老婆がやって来て、辺りを見回していると、子供が蹴ったサッカーボールが老婆に当たる。

「何するだわさ!」

老婆が喚き散らすと、子供はゴメエ〜ンと一声掛け、サッカーボールを拾うと走ってサッカーの続きを始めた。

「キイイ!もう、容赦しないよ!!お前達からバッドエナジーを奪ってやるだわさ!!」

地団駄踏んで悔しがるのは、三幹部の一人マジヨリーナ!

「世界よ!最悪の結末、バッドエンドに生まれ!白紙の未来を黒く塗りつぶすだわさ!!」

マジヨリーナは、闇の絵本とも呼ぶべき本を開くと、白紙のページに、黒い闇の絵の具を叩き付け塗りつぶすと、空は緑掛かり、宙には無数の蜘蛛の巣が散りばめられ浮

かび上がり、淀んだ空気が流れる不気味な姿を現わした。子供達はその場にしゃがみ込み、ネガティブな言葉を発した。

「人間共が発したバッドエナジーが、悪の皇帝ピエーロ様を呼び覚ますだわさ!!」

人々から発せられたネガティブな感情は、バッドエナジーとなつて闇の絵本に吸い込まれていった……

「これは……大変でござる!人々のバッドエナジーが、吸われているでござる!!」

「……エツ?」

これから出掛けようとしていたポップは、バッドエンド空間が発生した事を一同に告げると、みゆき達は驚きの声を上げた。ポップは五人に、本の扉を使いバッドエナジーを吸われている人々を助けてやって欲しいと伝えると、簡単な説明を一同に告げた。

行きたい場所を心に念じ、本の扉を通ると、念じた場所に行けると告げた……

「キャンディとポップは、そのまま妖精さんの国に行つて!後は私達が何とかするから!!」

「分かったでござる……」

みゆきは、キャンディとポップに、妖精会議が行われる場所に行くように言うと、仲間達を振り返り、本の扉を一人一人進んで行つた……

「みゆき、みんな・・・」

「キャンデイ、皆の衆を信じるでござる！では、拙者達も参ろう!!」

不安そうにするキャンデイの頭を撫でたポップは、みゆき達を信じようと伝え、キャンデイとポップは、絵本の中に入ると、妖精会議が行われるパルミエ王国へと飛び去っていった・・・

四つ葉町、クローバータウンストリート・・・

「でも、この前は驚いたよねえ？まさかプリキュアのリーダーが、ブンビーだったとは・・・気付かなかったよおお!?」

「フッフ、気付く訳無いでしょう！全く、あたしも度肝を抜かれたわ・・・まあ、かれんさん達がこっぴどく釘を刺したって言ってたから、二度とあんな真似しないとと思うけどね」

ラブが変顔を浮かべながら、気付かなかったねと苦笑を浮かべると、かれん達に怒られたと聞いたのを思い出したのか、美希がクスリと笑い、祈里は少し考えながら、

「でも、私達もブンビーさんには前にお世話になったから・・・ちよつと可哀想な気もするけど・・・」

「しない、しない!!」

変顔をしたラブと美希が、ハモリながら可哀想な気などしないと手を左右に振りながらジエスチャーし、祈里は苦笑を浮かべた。

ラブ、美希、祈里は、談笑しながらカオルちゃんのドーナツ屋に向かっていると、視線の先に、カオルと談笑している何処かで見えたような二人組の後ろ姿を見て驚いていた。

「ねえ、美希たん、ブツキー、あの二人・・・ウエスターとサウラーに似てない?」  
「って言うか、その二人以外の何者でも無いと思うわよ?」

美希が言うように、体格の良い青年と、長髪の青年、確かに二人が四つ葉町での仮の姿として過ごしていた、西隼人、南瞬の姿をしたウエスターとサウラーその人であった。「二人が来て居るって事は・・・せつなちゃんも来てるのかなあ?」

祈里は嬉しそうに周りを見渡し、ラブと美希も嬉しそうに辺りをキョロキョロ見回すも、何時もと変わらない公園の中に、せつなの姿は何処にも無く、少し落胆する三人だった。気持ちを入れ替えた三人、ラブは笑顔混じりに、

「ウエスター! サウラー! 久しぶりい!! 元気だった?」

ラブが右手を挙げながら二人に声を掛けると、振り返った二人も、三人を見て微笑みながら近寄り、

「おお、お前達！久しぶりだなあ!!」

「この町に来る度に君達に会って居たから、また会うような気もしていたがね」

笑い合う一同を見て、カオルも微笑を浮かべながらラブ達に注文を聞くと、三人は思いついたかのように、ドーナツを注文し、一同はテーブル席に座り、会話の続きを始めた。

「今日はどうしたの？またウエスターがドーナツ食べたくなって来たとか？」

「まあ、それもあるが・・・僕達三人は、パルミエ王国から招待を受けてね・・・」

「手ぶらで行くのも悪いからな！兄弟のドーナツを、妖精達にも食べさせてやろうと思ってるな！」

少しからかうようにウエスターを見ながら美希が聞くと、二人は苦笑を浮かべながら、パルミエ王国に招待されたと言い、ラブ、美希、祈里は少し驚いた表情を浮かべた。「パルミエ王国に!?!でも、せつなの姿が見えないようだけど？」

「イースなら、他にも招待されているメイジャーランドの友達を迎えに行つて、そのまま友達と一緒にパルミエ王国に行くと言つてたぞ！」

問い掛けたラブに、ウエスターが答えると、見る見るラブの頬が大きく膨れ上がる。

ちよつとぐらい顔を見せに来てくれてもいいのに、何でせつなは来てくれないんだろ  
うか？ラブの心にフと寂しさが沸き上がっていた。

思わず顔を見合わせたサウラーとウエスターは、美希と祈里に小声で問い掛け、

「彼女はどうしたんだい？」

「何か俺……悪い事でも言ったか？」

美希と祈里は、少し落ち込むラブを見るも、

「うーん、気にしないで！せつながあたしたちに会いに来ないで、メイジャーランドに行った事で拗ねてるだけだから……」

「ラブちゃん、別にせつなちゃんに悪気がある訳じゃ無いよ！私達は今回、パルミエ王国に招待されてる訳じゃないんだし……」

「それはそうだけど……そうだ！ねえ、ウエスター、サウラー、お願いがあるんだけどおお？」

ラブは何かを思い付くと、目をキラキラ輝かせながら、両手を組んで縋るようにウエスターとサウラーを見つめる。美希と祈里は何事かと驚き、ウエスターとサウラーの二人は思わず怯むのだった……

バッドエナジーを集め、ご満悦なマジヨリーナであったが、公園の近くの図書館から五人の少女達が駆けつけた。

「いくらお婆ちゃんでも・・・みんなのハッピーを奪うなんて許せない!!」

「あたしや、お婆ちゃんじゃないよ! 全く、失礼な子だねえ・・・」

「そない言うたつて・・・どう見ても婆さんやん?」

みゆき、あかねとマジヨリーナの何処か緊張感の無い会話に、れいか、なお、やよいは苦笑混じりの顔になり、悔しそうに地団駄踏んだマジヨリーナは、

「生意気な小娘共だねえ・・・アカンベエ!!」

マジヨリーナは、側に合った空き缶をアカンベエとして出現させると、

「みんな、行くよ!!」

みゆきの言葉に頷く四人は、スマイルパクトを取り出すと、キュアデコルをスマイルパクトにセットし、

「二二プリキュア! スマイルチャージ!!」二二

五人の少女が、パクトのパフを塗っていき、プリキュアへと変身していく・・・

「キラキラ輝く未来の光! キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー! キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん! じゃんけん・・・ポン! キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負! キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心! キュアビューティ!!」

「「「5つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア!!」」」

五人のプリキュアが、マジヨリーナ、アカンベエに対しポーズを決めた！

プリキュアが現われると、上空にトランプの舞が巻き起こり、街灯の上に現われたのは、バッドエンド王国のジョーカー……

（まあ、妖精の方は後回しにしましょうか、すでに何処に向かったのか、大凡（おおよそ）見当は付いて居ますからねえ！ほう……あれがプリキュアですか？お手並み拝見としましょうかねえ……）

ジョーカーは、メルヘンランドから飛び出したポップの気配に気づき、何かを企んでいると感づくくと、動向を伺っていた。ポップが再び動き出した事に気づき、後を追おうとするも、プリキュア達の現われた事を知り、プリキュアの力を確かめるべく、街灯の上から高みの見物を始めた。

それに気付く者は誰も居なかった……

アカンベエは、口からマシンガンのように液体を吐き出し、プリキュア達を攻撃していた。キヤーキヤー、悲鳴を上げながら逃げ惑う姿は、とても伝説の戦士とは思えず、見ていたジョーカーは、口元に薄ら笑いすら浮かべていた。



(無様ですなぁ．．．あれが、伝説の戦士と呼ばれる者の実力という事ですかねぇ?)

ジョーカーは、両手で抱えていたルセンが変えられたクライナーを弄くり回し、

「クライナーの実力．．．試してみますか！さあ、あなたも行つてらっしゃい！ハアアア！！」

ジョーカーがクライナーにバッドエナジーを加えると、クライナーは分裂し、その一体が地上に落ちると、辺りの物を体内に吸収し始めた。

「さあ、あなたも憎しみの心に身を委ね、プリキユアを倒してらっしゃい!!」

ジョーカーの顔が狂気の表情を浮かべる。ルセンが変えられた白いクライナーも、嘗てのアンデ同様、どす黒く変色していった．．．

魔界．．．

不気味さ漂う空間の中、生い茂る奇妙な森の中で胡座(あくら)をかきながら瞑想する赤髪の褐色の女サデイス．．．

瞑想していたサデイスがカツと目を見開くと、側に居た小学生のような体格をした老翁(おきな)デイクレ、スキンヘッドの大男(おお)ベガは、サデイスの反応に気付き声を掛ける。

「どうした？何か異変でも感じたのか？」

「アア．．．何処の何奴か知らないが、あたしのクライナーを勝手に操った奴が居るよう

だねえ．．．ちよつと、挨拶してやらなきやね．．．」

サデイスは舌で唇を舐めると、空間に亀裂を起し、亀裂の中へと消えていった．．．

マジヨリーナが繰り出したアカンベエに苦戦する五人のプリキュア達、

「アカンベエ、そのままプリキュアを．．．ン!? あれは、何だわさ?」

マジヨリーナの視界に、黒く蠢く物体が現われた。マジヨリーナは小首を傾げるも、黒い物体はアカンベエの直ぐ側まで来ると、その身体を伸ばし一気にアカンベエを飲み込んだ．．．

逃れようとするアカンベエが暴れ、黒い物体が収縮を繰り返すも、何時しかその動きは止まり、黒い物体は、先程のアカンベエのような空き缶姿に変わり、巨悪そうな目付きでジロリとマジヨリーナと五人のプリキュア達を見つめた．．．

「な、何あれえ!? あれも敵なのかなあ?」

新たに現われた黒い物体．．．

ハッピーが小首を傾げるも、アカンベエを吸収し、より凶悪そうな表情を浮かべる黒い物体．．．

不気味に蠢く、黒い物体を見た五人のプリキュア達から冷や汗が流れる．．．

「これは一体どういう事だわさ!」

「マジヨリーナさん、この場は撤退なさい！戦いに巻き込まれてしまいますよ！！まだ、ク  
ライナーを完全に操るには時期尚早だったようですね・・・」

狼狽えるマジヨリーナの前に、突然現われた正体不明の男に、ハッピー達五人に緊張  
が走った・・・

「おやおや、そう言えばあなた方にまだ挨拶をしていませんでしたねえ？私は、バッドエ  
ンド王国のジョーカー！」

バッドエンド王国の者だと名乗った事で、五人は益々表情が強張る。アカンベエを謎  
の物体に吸収されたマジヨリーナは、姿を現わしたジョーカーが、マジヨリーナに撤退  
するよう指示を出した事に憤慨する。

「お前は・・・ジョーカー!?何で此処に居るだわさ?アカンベエをあんな姿に変えられて、  
黙ってる訳には行かないだわさ!!」

文句を言うマジヨリーナであったが、何時にたく発せられるジョーカーの気迫に押さ  
れ、渋々ながらその場を撤退し、バッドエンド空間が解除される。

(どうやら、私の存在に薄々感づいたようですね・・・)

ジョーカーは、ハッピー達を無視すると、視線を一点に集中される。視線の先の空間  
が歪み、亀裂が巻き起こると、中から紫色のボンテージ衣装に身を包み、黒いマントを  
靡かせた褐色肌の赤髪の女が、険しい表情を浮かべながらジョーカーを睨み付けた。

「どんな奴かと思ったら・・・おい、お前!あたしのクライナーを、よくも好き勝手にしてくれたねえ・・・」

「いえいえ、どんな者かと試した次第・・・しかし、私には操る事が出来ませんでしたので、どうしたものかと途方に暮れていた所、こうして持ち主の方にお会い出来たのは幸運というもの・・・初めまして!私はバッドエンド王国のジョーカーと申します!!以後、お見知り置きを!!」

ジョーカーは、右手を前に、左手を後ろに引き、サデイスにお辞儀をして挨拶をする。「バッドエンド王国!?ああ、メルヘンランドのロイヤルクイーンの力を奪ったとかつていうのは、お前達だったのか?」

互いの手の内を探るように会話をするジョーカーとサデイス、サデイスは、ジョーカーが発する不可解なプレッシャーを感じ、自分達と同じ魔に通じるような感覚を受け戸惑う。そんなサデイスの心情に、気付いたのか気づかないのか、ジョーカーは、意味深な笑みを浮かべながら、

「クライナーはお返し致します!そうそう、あそこでクライナーに睨まれて怯んで居る五人組こそ、メルヘンランドの伝説の戦士プリキュア達・・・どうです、御自分の目でお試しになつては?」

「プリキュアだとお?」

ジョーカーは、手に持っていたクライナーをサデイスに渡すと、あそこに居る五人組がプリキュアだとサデイスに教えた。プリキュアという言葉聞き、サデイスの目が一層険しさを増し、地上に居る五人のプリキュア達を見つめる。ジョーカーはそんなサデイスを見て口元に笑みを浮かべると、

「何かありましたら、私達も協力致しますよ！では、ご機嫌よう!!」

トランプの舞が巻き起こり、ジョーカーはその姿を消した・・・

「胡散臭い奴だねえ・・・まあ、プリキュアに会わせてくれた事は感謝してやるか！クライナー、プリキュアと遊んでやりな!!」

サデイスは、手に持っていたルセンが変えられたクライナーをギュッと掴むと、空き缶姿の黒いクライナーが咆哮を上げる。

アカンベエを吸収し、力を増したクライナーの前に、ハッピー達五人は次第に追い詰められていった・・・

メイジャーランド・・・

アフロデイテ、メフィストの御前に居るのは、エレンとハミイ、そして、エレンを迎えに来たせつな！エレンとハミイは、メイジャーランドの代表として、今パルミエ王国

に向かおうとする所だった……

「それでは、アフロデイト様、メフィスト様、行つて参ります!」

エレンとハミイが二人に頭を下げ挨拶すると、真顔になった二人は、

「セイレーン、ハミイ、気をつけて! アコの話によれば、地上は何者かの襲撃を受けたとか……」

「ウム! 嫌な予感がする……セイレーン、お前が申請していた通り、パルミエ王国に行つた後は、再び向こうの世界に行く事を許可しよう! 何かあれば報告するのだぞ?」

メフィストの許可を受け、顔を見合わせたエレンとハミイの顔色が明るくなるも、直ぐに真顔になり、

「ハイ! 何か起これば必ず……では、行つて……」

「アツ!? ま、待て! セイレーン!!」

慌ててエレンを呼び止めたメフィストは、エレン達を手招きし、近くに来いとジェスチャーすると、隣に居たアフロデイトは不思議そうに小首を傾げた。メフィストは小声でエレンに話し掛けると、

「良いか、セイレーン! 加音町に行つたら、アコの前で……みんなが戻つたメイジャーランドは、楽しいわああと、一日一回必ず言う事! 良いな?」

「エエエ!? 一日一回?」

「何だ、不満そうだなあ、セイレーン!? 加音町に行かせるの・・・止めちやおうかなあ?」  
「ウツ・・・わ、分かりました!」

困惑気味に、メフィストの申し出を受けようとしたエレンだったが、

「セイレーン! バカな国王の言う事など、聞かなくて良いですからね? あなた! 公私混同も大概にして下さい!!」

「アフロディテ!? き、聞こえておったのか?・・・だって、アコに・・・」

「あなたああ!!」

「ハイ・・・オツホン! セイレーン、さっきのは冗談だ!!」

(絶対、本気だった!)

アフロディテに怒られ、慌てて咳払いをして誤魔化すメフィストを見て、絶対に本気だったと思う、エレン、ハミイ、せつなだった。

「では改めまして、行って参ります!! ハミイ、せつな、行きましょう!!」

「行って来ますニヤ!」

「ええ、それでは、お二方行って参ります!!」

エレンの言葉に頷き、三人は瞬時に赤い光に包まれパルミエ王国へと向かった・・・  
「何事も起こらなければ良いのですが・・・」

「ああ、今年の幸せのメロディは、ノイズによって石にされた人々を、元に戻す為に歌わ

れたようなものだからな・・・何か嫌な予感がする」

アフロディテとメフィストは、心配そうに顔を見合わせた・・・

パルミエ王国・・・

妖精会議の舞台であるパルミエ王国は、歓迎の宴の準備で大忙しであった。お世話役のミルクも張り切り、一同に指示を出し、準備に追われていた・・・

「みんな、ココ様や、ナッツ様が、恥をかかないようにするミル！」

アタフタしながら次々にテーブルに置かれるパルミエ王国で取れた果物、そんなミルクの下に、懐かしげな声が聞こえてくる・・・

「コラーポルン、ルルン、走るなメポ」

「フープもムープも、騒いじゃ駄目ラピ！」

「この声は・・・メツプル達に、フラツプ達ミル！」

ミルクの表情が緩み、声が聞こえる廊下へと出向くと、パイヤに案内されながら近づいてくるメツプル達、フラツピ達を見て駆け寄り、ミツプル、チョツピと手を取り合っている、ミルクは一同との再会を喜び合った。

「ミルク、久しぶりメポ！他のみんなはもう来てるメポ？」



「まだミル！話はゆっくり中で聞くミル!!」

ミルクが一同を自ら案内し、会場へと入っていった・・・

二人の王ココとナッツ、ナッツは懸命に目の前に十数個ある小型の懐中電灯のような物を弄っていた。それは、嘗てノイズとの決戦前に、ナッツハウスで作っていたアイテム、ミラクルガイドライト！行き詰まっていたナッツだったが、ババロア女王やほのかの助言もあり、遂に完成に辿り着けていた。

「ナッツ、遂に完成したココ？」

「ナツ・・・何とか今日みんなが集まる日に、間に合つて良かったナツ」

ナッツがミラクルガイドライトのスイッチを入れると、先端のハートマークが激しく点滅を繰り返していた。ナッツは驚き、

「これは・・・もしかしたら、今正にプリキュアの誰かが戦つて居るのかも知れないナツ」  
「それは大変ココ！でも、誰が戦つて居るか分からなければ、応援にも行けないココ・・・」  
点滅を繰り返すミラクルライトガイドを見て戸惑う二人だったが、ドアをノックし、パイヤが入ってくると、二人は誤魔化すように愛想笑いを浮かべた。パイヤは、四大国王、メツプル達、フラツピ達、タルトとシフォン、せつな、シプレ達、エレンとハミイが到着したのを知らせるも、困惑したように、

「せつな殿のお仲間の、ラベリンズの方々も到着致したのですが……」

パイヤの反応に小首を傾げた二人は、パイヤの報告を聞くと笑顔を浮かべ、中に通すように伝えるのだった……

久しぶりの仲間達との談笑……

せつなは、シフォンとタルトとの再会を心から喜び二人を抱きしめ、ミルクや、メツプル達、フラツピ達との再会にも嬉しそうに語り、エレンとハミイも、数ヶ月振りの仲間達との再会を喜び合った……

せつなとエレンは、妖精達との再会に顔を綻ばせながら話していたが、互いに顔を見合わせ表情を曇らせると、

「ねえ、向こうの世界に、謎の敵が現われたそうだけど……」

「此処にメツプル達、フラツピ達、シプレ達も来てるから大丈夫何でしょうけど、一体どんな敵だったの？」

せつなとエレンに聞かれたメツプル達、フラツピ達、シプレ達の表情が曇る。互いに顔を見合わせると、どう説明するべきか困惑しているようだった。ミルクは初めて聞いたように、驚いた顔をして、せつなとエレンの顔を見た。

「敵の正体は、結局分からなかったミポ……でも、みんなの活躍で浄化された筈ミポ！」

「ただ・・・何か嫌な予感がするのも確かチョコピ・・・」

ミッブルとチョコピの言葉を受け静まりかえる会場・・・

その沈黙を打ち破る大声が廊下から聞こえてくる。

「オオイ！イース、来たぞおお!!」

「ウエスター!?!全く・・・相変わらず空気を読めないんだから」

ウエスターとサウラーは、ラビリンズで過ごす白い制服に白いマントを靡かせ足早に会場目掛け歩いていた。謎の敵に付いて話していた会場内とは、明らかに違うテンションでこちらに向かってくるウエスターに、せつなはハアと溜息を付くと、廊下に駆け寄り、

「ウエスター! 此処はラビリンズじゃないんだから、みんなの迷惑に・・・エツ!?! ラブ、美希、ブッキー!?! どうしてパルミエ王国に? ウエスター、サウラー、これは一体!?!」

ラブ、美希、祈里が、ウエスターの背後からひよっこり顔を出しせつなを驚かせた。ウエスターとサウラーも背後を見て苦笑を浮かべながら、

「彼女達に、一緒に連れて行つて欲しいと頼まれてね・・・」

「ホホエミーナに乗せて、一緒に来たつて訳だ!!」

思いがけないラブ、美希、祈里までが一緒に居る事に、せつなは呆然とし、ウエスター、サウラーに問い掛け、二人からラブ達が来たがっていたのを聞き、呆れたような表情を

見せる。せつなは、全くと溜息を付くと、瞬時に顔色を変えたラブが、ツカツカ歩いてせつなに近付き、口元に引き攣った笑みを浮かべたラブは、せつなの顔に自分の顔を近づけるや、

「この口が言うかあ〜！折角来て上げたのにいい!!」

ラブは、不満そうな表情を浮かべながら、両手でせつなの口を横に引つ張ると、上手く言葉にならないながらも、せつなは両手でラブの腕を払いのけようとしながら、ラブに止めるように言う、

「ラブ・・・やふえなさひい!!ラブ・・・いい加減に・・・しろおおお!!!」

ラブに口を引つ張られていたせつなは怒り、無理矢理ラブを引き離し、ラブとせつなは二人で睨み合いながら舌を出し合い、

「べべべべのべえく〜だ!!」

フンと互いにソツポを向けるラブとせつな、祈里とウエスターはどうしたものかとお口お口し、サウラーと美希はヤレヤレと言った表情で苦笑を浮かべる。

「何よ！せつなが会いに来てくれないから、こっちから会いに来たのに・・・私達は、四人揃ってこそ、本当のクローバーなのにい・・・」

せつなに背を向けながら本音を洩らすラブ、せつなは思わずラブの方に向き直り、改めて自分は、ラブ達に心から大事な仲間の一人と思われて居る事に、目頭が熱くなった。

「ラブ・・・美希も、ブッキーも、ゴメン！言い訳になるかも知れないけど、会いに行かなかった訳じゃないの！今日のパルミエ王国での会議の内容を聞いた後に、クローバータウンストリートには行くつもりだったの！！ラブ達が戦った、謎の敵の事も知りたかったし・・・私の事を気に掛けてくれてありがとう・・・ラブ!!」

せつなは、落ち込むラブに背後から抱きつき謝ると、忽ち上機嫌になるラブ、美希はそんなラブを見てクスリと笑い、

（フッフ、相変わらずラブは単純何だから・・・）

仲直りをしたラブとせつなを見て、美希と祈里も心から微笑んだ。

廊下が騒がしかったので様子を見に来たエレンと妖精達、タルトとシフォンは、思いがけないラブ達との再会に喜び、

「ピーチはん、ベリーはん、パインはん・・・それに、それに、兄く弟!!」

シフォンはラブの胸に飛び込み、タルトは、ラブ、美希、祈里、一人ずつに声を掛け、ウエスターとサウラーの前に行くと、

「スイーツハートは!」

「旨さの印!」

「揚げたてフレッシュ!」

「俺達、ドーナツブラザーズ!」

サウラーを真ん中にして、まるでプリキュアの口上のようにポーズを取って構えるウエスターとタルト、サウラーは額から汗を流しながら、

「ぼ、僕を巻き込むのは、止めてくれないかな？」

「何を言う、サウラー！お前も立派に・・・」

「ドーナツブラザーズさ!!」

再びポーズを取るウエスターとタルト・・・

困惑しながら呆然とするサウラー、それを見て笑うラブ達、エレン、妖精達だった。せつなは、そんなウエスターを見て頭を抱え、やはりウエスターは、一緒に連れて来なければ良かったと後悔するのだった・・・

王の間で支度を終えたココとナッツが、部屋を出ようとした時、ドアをノックしシロップが現われた。手短に二人に挨拶を終えたシロップは、ドアの向こうに手招きし、シロップに導かれ、ポップとキャンデイが姿を現わした。

「ココ、ナッツ、この二人がメルヘンランドから来た・・・ポップとキャンデイロプ」  
「拙者はポップと申す！この度は、拙者の勝手な申し出をお受け頂き、感謝するでござる！隣に居るのは拙者の妹、キャンデイでござる！兄妹揃ってよろしくお頼み申す!!」

ポップが深々とお辞儀をし、キャンデイは少し照れたように、ポップの後ろに隠れな

がら挨拶した。ココとナッツは微笑みながら手を差し伸べ、二人と握手をすると、  
「遠い所、良く来てくれたココ！」

「もう、みんな揃って居るナツ！さあ、みんなの所に一緒に行くナツ!!」

ココとナッツに促され、ポップとキャンディも笑みを浮かべながら部屋を出て行つた・・・

遂に開幕した妖精会議・・・

光の園の代表者、メツプル、ミツプル、ポルン、ルルン

泉の郷の代表者、フラツピ、チョツピ、ムープ、フープ

四大国王、ドーナツ国王、ババロア女王、クレープ王女、モンブラン国王

スウィーツ王国の代表者、タルトとシフォン

ラビリンズの代表者、東せつな、ウエスター、サウラー

こころの大樹の守護妖精であるシプレ、コフレ、ポプリ

メイジャーランドの代表者、黒川エレンとハミイ、ソリーとラリー

一同に頼みに来たメルヘンランドのポップとキャンディ

主催者であるパルミエ王国のココとナッツ、同席しているミルクとシロツプ

そして、特別参加の桃園ラブ、蒼乃美希、山吹祈里・・・

ココとナッツは、ポップとキャンディを一同に紹介すると、一同は、ポップとキャンディを温かく迎えた・・・

「皆の衆、勝手なお願いをしに参った拙者達を、暖かく向かえて頂き感謝致す! 皆の衆のプリキュア達のお力を、拙者達の国、メルヘンランドの為に・・・貸しては頂けないでござろうか?」

「私達は構わないよ! ね、美希たん! ブッキー! せつな!」

「もちろん! OKよ!!」

「みんなも私達と同じ考えだと、私、信じてる!!」

「ええ、精一杯頑張るわ!!」

ポップが深々とお辞儀をし、力を貸して欲しいと頼むと、ラブ達が真っ先にポップの申し出を受諾する。思わず目頭を熱くしながら、顔を見合わせ喜ぶポップとキャンディ、

「流石ワイらのプリキュアや!」

「プリー!」

満面の笑顔で腕組みしながら何度も頷くタルト、嬉しそうにはしゃぐシフォン、

「ポップもキャンディも、みんなの大切な仲間ココ! のぞみ達プリキュアも、きつと協力



してくれるココ!!」

「ミルクも協力するミルク!」

「ええ、私も喜んで協力するわ!響達も、ポップとキャンディに必ず協力してくれる筈よ!ねえ、ハミイ?」

「もちろんニヤ!だから、安心するニヤ!!」

ココ、ミルク、そして、エレンもラブ達同様、仲間の為なら喜んで他のプリキュア達も力を貸してくれると伝え、ハミイは、キャンディを安心させるかのように、手を取り微笑んだ。

「兄弟のドーナツを共に口にしたからには、俺達はもう兄弟同然だ!なあ、サウラー?」  
「それは兎も角・・・僕達もこうして参加したからには、協力させて頂く・・・」

ウエスターは、ドーナツを頬張りながらサウラーに同意を求めると、サウラーも協力する事を約束した。

「なぎさやほのか、ひかりも必ず協力してくれるメポ」

「咲達もそうラピ!」

「つぼみ達も、必ず力を貸してくれるですう!」

メップル、フラッピ、シプレも、自分達のプリキュアも、必ず力を貸してくれるとポップとキャンディに微笑みを向けた。

「皆の衆・・・忝（かたじけ）ない、忝ない・・・」

一同に何度も頭を下げるポップの瞳から、大粒の涙が零れた・・・

初めて会う自分達を、一同は何の疑いも持たず向かい入れてくれ、仲間の為なら喜んで力を貸すと約束してくれた事に、ポップは感銘を受けた・・・

「泣かずともよい！それより、お主達の国が戦って居るといふ敵の事を、詳しく皆の者に語るドナ!!」

ドーナツ国王に促されたポップは、バッドエンド王国と、復活した悪しき魔に付いて、知る限りの情報を教えるのだった・・・

### 3、フレツシユプリキュア！

ポップから聞いたバッドエンド王国、そして、封印されていた魔の復活・・・

一同は、新たな敵の出現に緊張が走った・・・

妖精会議も無事に終わり、最後にナッツは一同にミラクルガイドライトを手渡すと、「みんなにこれを渡すナッツ！これはミラクルガイドライトナッツ・・・このスイッチを入れると、邪悪な者が現われた時反応して点滅するナッツ!!」

そう言うのと、ナッツはカチリとスイッチを入れた。見る見る先端のピンクのハートが激しく点滅を繰り返し、それを見た一同からざわめきが巻き起こる。

「恐らく、今正に何処かで邪悪な者が現われ、プリキュアの誰かと戦って居るナツ！」  
ナツツの言葉に再びざわめく室内、ポップは手渡されたミラクルガイドライトを見ながら、

「それは恐らく、我々メルヘンランドのプリキュア、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの五人でござろう…拙者達をこの場に参加するように言うと、五人はバッドエンド王国の野望を阻みに向かったのでござる…」

「それだけではありませんけどねえ？」

ポップが、ハッピー達が戦って居る事を一同に教えた時、不意に室内に何者かの声が響き渡り、一同は辺りを見渡す。扉の前にトランプの舞が降り注ぐと、ジョーカーが姿を現わし、不気味な笑みを浮かべた。

突然現われたジョーカーの出現に、響（どよ）めく妖精達…

ラブ、美希、祈里、せつな、エレン、ウエスターとサウラーが、妖精達を庇うように一歩前に出てジョーカーを睨み付ける。

「お前はジョーカー！何故此処に居るでござる？」

「フフフフ、あなたの行動はこちらでも把握していましたがねえ…此処を見つけ出すのに、さしたる苦勞も致しませんでしたよ!!」

ポップの顔色が変わった…

迂闊だった・・・

自分の行ないが、パルミエ王国を始めとする妖精達を、危険に巻き込んでしまった事に、ポップは自分を恥じた・・・

「皆の衆、逃げて下され！こ奴が此処に現われたのは拙者の不徳・・・この命に代えても！！」

この償いは、自分の命に代えてもと血相を変えるポップに、ジョーカーは笑みを浮かべながら、

「そう、焦らないで下さい！あなたが希望を託した五人のプリキュア・・・今頃どんな目に合っているでしょうねえ？」

「どういう事!？」

「あなた、彼女達に何をしたの?」

ジョーカーの言葉に、ラブと美希が反応し真偽を問うも、ジョーカーは薄ら笑いを浮かべるのみだった。そんなジョーカーの態度に怒り、ミルクはくるみの姿に変化すると、

「勝手にパルミエ王国に乗り込んで来て・・・此処から叩き出して上げるわ！スカイロース！トランスレイト!!」

くるみがミルキイロースの姿になると、ジョーカーは意外そうな表情を浮かべる。

(ほう、妖精もプリキュアになれるんですねえ?)

「青いバラは秘密のしるし!ミルキイローズ!!」

「ローズ、私も戦うわ!レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!」

ローズに続けとばかり、エレンはラリーを呼ぶと、キュアモジュールにセットし、プリキュアへと変身を始める。

「爪弾くは、魂の調べ!キュアビート!!」

変身したローズとビートが、ジョーカーに鋭い視線を向ける。アイコンタクトしたラブ、美希、祈里、せつなが、リンクルンを取り出すのを見たローズは、

「ラブ、美希、祈里、せつな、こっちは私とビートの二人で何とかする!あなた達は、ポツ、キャンディと共に、新たなるプリキュアの応援に行つてあげて!!」

「ローズ……でも……」

ジョーカーから発せられる得体の知れないプレッシャーを感じ、このまま自分達も戦つた方がよいのではと戸惑うラブ達、ウエスターとサウラーが、ローズとビートの横に並び、ラブ達に顔を向けると、

「そのプリキュアの言う通りだ!お前達は、新しいプリキュアの応援に行つてやれ!!」

「此処には僕達も残る!安心して行つて来たまえ!!」

「ウエスター!サウラー!……分かったわ!ラブ、美希、ブッキー、此処はローズとビー

ト、ウエスターとサウラーに任せましょう!! ポップ、キャンディ!!」

「ちよい待ち! こんな事もあるうかとクローバーボックスを持ってきたんやあ・・・持つてつてえな!!」

「タルト・・・うん、ありがとう!!」

一同の思いを受け、せつなは言われた通り、新しいプリキュア達の応援に向かおうとラブ達に言い、ポップとキャンディを呼ぶ中、タルトは持つてきたクローバーボックスをラブに手渡し、ポップは後ろ髪惹かれる思いながら、キャンディと共にせつなの下に来ると、

「皆の衆、後で、後で必ず戻って来るでござる!!」

せつなはアカルンを呼び出すと、ラブ達は赤い光と共に消え去った・・・

「おやおや、逃げられましたか? まあ、良いでしょう! あなた方の実力・・・試させて頂きましょう!! 出ですよ! アカンベエ!!」

ジョーカーは右手に赤い玉を持つと、会場内にあったマンゴーのような果物を、アカンベエに変えた。

「望む所よ! ハミイ、みんなと隠れていて!」

「合点ニヤ!」

ビートは臨戦態勢を取ると、ハミイに妖精達と一緒に隠れているように伝えるも、

ジョーカーは口元に右手を置き、含み笑いを浮かべると、  
「ウフフフ！この私から逃げられると思ってるんですかあ？」

ジョーカーは、トランプを手裏剣のように妖精達目掛け放つも、ウエスターとサウラーが疾風のように駆け、妖精達の前に立ち、トランプを素手で叩き落とすと、妖精達から歓声が沸き上がる。タルトは両腕を組みながらウンウン頷き、

「流星やでえ、兄弟!!」

「兄弟、お前はイース達と一緒にいなくて良かったのか？」

パルミエ王国に残ったタルトとシフォンを見て、ウエスターは一緒にいなくて良かったのか問うと、

「当たり前や！兄弟が、大切な仲間達が残つとるのに、ワイらだけ行けまっか・・・兄弟の活躍・・・この目に焼き付けたるわい!!」

タルトの啖呵を聞き、ウエスターとサウラーは顔を見合わせ笑むと、

「ホホエミーナ、我に仕えよ！」

ウエスターは、ドーナツをホホエミーナに変えると、妖精達を守るように命令し、妖精達にはホホエミーナの側から離れないように伝える。ローズはウエスターに頭を下げ、

「ありがとう！これで心置きなく戦いに集中出来る!!」

ローズ、ビート、ウエスター、サウラーの四人が、鋭い視線をジョーカー、そして、アカンベエに向けた……

クライナーと戦つて居たハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティは、必殺技をクライナーに吸収され、大ピンチを向かえていた……

「そんなあ、私達の攻撃を吸収しちゃう何て……」

「あないな敵に、どないせえちゆうねん？」

ハッピーが、サニーが呆然としながら思わず眩き、ピースは涙ぐみ、マーチは悔しそうに拳を振るわせ、ビューティは思考を目まぐるしく回転させるも、この逆境を覆す考えは浮かばなかつた。ハッピーシャワー、サニーファイヤー、ピースサンダー、マーチシユート、そして、最後の砦ビューティブリザードさへ吸収し、更に力を付けたクライナーの前に、五人はどうすればいいのか戸惑う……

「無様だねえ……プリキュア！そろそろお仕舞いにしようか？」

サデイスは舌をペロリと舐め、クライナーに指示を出すと、口から液体をマシンガンのように連射し、直撃を受けた五人が吹き飛ばされ地面に倒れ込む。クライナーは止めとばかりに、再び五人に照準を合わせたその時、ハッピー達五人の前方が赤く輝くと、ポップとキャンディ、そして、ハッピー達が見た事の無い四人の少女達が佇んで居た。



「ハッピー！みんなあ！大丈夫クル？」

「皆の衆！何とか間に合って良かったでござる！！」

「キャンデイ！ポップ！その人達は一体!?」

「プリキュアクル〜！プリキュアが、みんなを助けに来てくれたクル〜!!」

「[[[[エツ?!]]]]」

キャンデイの言葉に驚き戸惑いながら、四人の少女達の後ろ姿を見るハッピー達、四人の少女達は振り返ると笑みを浮かべ、

「あなた達五人が、私達の新しい仲間何だね・・・美希たん、ブツキー、せつな、彼女達を・・・守るよ!!」

ラブの合図に三人が頷くと、四人がリンクルンを取りだし、

「[[[[チェインジ・プリキュア！ビートアップ!!]]]]」

ラブ、美希、祈里、せつなの身体が輝き、プリキュアへと変化していく・・・

(この小娘共も・・・プリキュアだとおお!?)

険しい表情を浮かべるサデイス、嘗て自分達が戦ったプリキュアは二人だった・・・

一体何人居るのか？サデイスは戸惑いの表情を浮かべた。

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュユ、キュアピーチ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし! つみたてフレッシュ、キュアベリー!!」  
「イエローハートは祈りのしるし! とれたてフレッシュ、キュアパイン!!」  
「真つ赤なハートは幸せの証! 熟れたてフレッシュ、キュアパッション!!」  
「レッツ! プリキュア!!」

変身を終えたピーチ達四人が、クライナーとサデイスを睨み付ける・・・  
ハッピー達五人は、その頼れる後ろ姿を眩しそうに見つめるのだった・・・

第四十二話：妖精会議!

完

## 第四十三話：頼れる先輩

### 1、対決！

ハッピー達五人の窮地に、キャンデイ、ポップと共に駆けつけたピーチ、ベリー、パイン、パッション、後輩プリキュアを守る為、今、黒い空き缶姿のクライナーとの戦いが始まった……

一方、ポップの行動を読み、パルミエ王国に現われたジョーカーは、ローズとビートの力を計るかのように、アカンベエを繰り出した。迎え撃つローズとビート、ウエスターとサウラー、今ジョーカーとの戦いが始まるうとしていた……

「ビート！そっちの怪物をお願い!!」

「分かったわ！でもローズ……無茶はしないでね！」

互いに軽く拳を合わせたローズとビートは、瞬時に行動を開始し、ローズはジョーカーと、ビートはマンゴー型アカンベエと対峙した。それを見たサウラーは、

「ウエスター！君はそっちの青紫のプリキュアの援護を頼む！僕は紫のプリキュアの援護に回る！」

「了解だ！久々に大暴れしてやろうぜ!!」

サウラーの言葉に同意し、指をポキポキ鳴らすウエスターを見たサウラーは、口元に笑みを浮かべながら、

「張り切るのは構わないが、あまり派手にはしない事だね！此処はパルミエ王国の宮殿内だという事を忘れないでおきたまえ！」

「オオ、任せておけ！プリキュア、俺も手を貸すぜ!!」

俊敏に動き回り、アカンベエを混乱させるビート、宙に飛び、アカンベエと肉弾戦を始める中、雄叫びを上げたウエスターの重い拳が、アカンベエのボディに炸裂し、思わずアカンベエの表情が歪んだ。

（敵の動きが鈍った！今なら私だけでも・・・）

アカンベエの顔に蹴りを放ち、その反動で宙返りしたビートは、

「弾き鳴らせ、愛の魂！ラブギターロッド！」

ビートが、アイテムであるラブギターロッドを取り出すと、ラブギターロッドを弾いて光の音符を複数出現させ、それを矢の形に変えると、ビートソニックを繰り出し、アカンベエに無数の光の矢で攻撃を始めた。

（流石に戦い慣れているようですねえ・・・）

ローズの攻撃を捌きながら、チラッとビートの戦い方を見つめるジョーカー、ローズは、自分を見下すような態度を取るジョーカーに苛つき、

「余所見をしてる暇は無いわよ．．．ハアアア！」

強烈な肘打ちをヒットさせたかに見えたが、ジョーカーは巨大なトランプを反転させて回避し、現われるや含み笑いを浮かべ、益々ローズを苛立たせる。がむしやらにパンチを繰り出すローズの攻撃を躲したジョーカーは、すれ違い様にローズの髪を撫でながら、

「ほう、妖精にしては綺麗な毛並みですねぇ？」

「私の髪に．．．触るなあああ!!」

ジョーカーに髪を触られた時、ローズの全身に鳥肌が立った。今まで幾多の敵と戦って来たローズだったが、こんな事は初めてであった．．．

「冷静になりたまえ！それでは益々奴のペースに乗せられるぞ!!」

サウラーは、益々冷静さを欠いていくローズに忠告を与えるも、ローズは、サウラーの言葉が耳に入らないかのように、ジョーカー目掛け突進する。

(ウフフフフ．．．まだまだ甘いですねぇ！)

含み笑いを浮かべたジョーカーが、何かを企んでいる事に気付いたサウラーは、パンチを繰り出そうとしたローズの肩を掴み、強引にローズの動きを止めた。ローズは不服

そうに、

「何で止めるのよ!？」

「冷静になりたまえ！僕が止めなければ・・・今頃君は、串刺しだった所さ!!」

サウラーの言葉に何を言っているの?と聞いたげなローズだったが、ジョーカーを見て顔色を変えた。

「おやおや、もう少しで串刺しに出来たんですがねえ?」

ジョーカーは、ゆっくり右手に握られているレイピアのような細身の剣を取り出す。もしあのまま気付かずジョーカーに向かっていたら、自分はその剣に貫かれていただろうと気付き、ローズの表情が凍り付く、

(全く、得体の知れない奴ね・・・)

だが、ローズの戦意が喪失される事など無く、むしろ益々闘志を燃やすローズだった。ローズはサウラーを見ると、

「一先ず礼を言っておくわ!」

「どう致しまして・・・此処は連係攻撃で行くべきだと思いがね?」

「そうね・・・どうする?」

此処は、観察力に優れるサウラーの言う通りに動くべきだろうと判断したローズ、サウラーが何かローズに呟くと、ローズは口元に笑みを浮かべ頷いた。

（おやおや、何を企んで居るのか知りませんけど・・・）

そんな二人を、ジョーカーも笑みを浮かべながら見つめていた・・・

「さあ、今度は僕から仕掛けさせて貰うよ！」

サウラーが宙に飛び、ジョーカーに連続蹴りを放つのを、軽く躲したジョーカーは、お返しとばかり、レイピアでサウラーを突き刺そうとするかのように攻撃を加える。ヒュンヒュンと剣先が唸り、サウラーはその攻撃をすんでの所で躲し続ける。

「どうしました!? それでは私を倒す事など出来ませんよ?」

そうは言いながらも、ジョーカーは、ローズが攻撃に加わらない事に違和感を覚えて居た。

（あのプライド高そうなプリキュアが、このまま大人しくしているとも思えませんけど・・・）

そう思いながらローズの姿を目で追うも、ローズの姿はその場から消えていた。一体何処に消えたのか? ジョーカーに惑いが生まれた時、サウラーは口元に笑みを浮かべると、

「今だ!!」

「ミルク!!」

サウラーの背に張り付いていたミルクが、瞬時にローズへと戻ると、呆気に取られて

いたジョーカーに、強烈な肘打ちをヒットさせて吹き飛ばした。何とか体勢を整えたジョーカーだが、不意打ち攻撃をまともに受け、思わずよろめき膝を付いた。

「バ、バカな!? そのような事が・・・」

出し抜かれたジョーカーは、口惜しそうに歯軋りしながら、ローズとサウラーを睨み付けた。

「食らいやがれええ!!」

地上からウエスターが咆哮しながら、怒濤のパンチをアカンベエに浴びせビートを援護する。ウエスターの攻撃に押されたアカンベエが蹠跟めくと、

「チエンジ！ソウルロッド！」

俊敏に動き、アカンベエの上半身にダメージを与えたビートは、此処を勝負所と見てソリーを呼ぶと、ラブリギターロッドにセットし、ソウルロッドへと変化させる。

「駆け巡れ、トーンのリング！プリキュア！ハートフルビート・ロック!!」

トーンのリングをセットしたソウルロッドのトリガーを引き、ソウルロッドから勢いよくアカンベエに向けて射出されたトーンのリングが、アカンベエをリングの中心に捕らえると、

「ファイナーレ!!」



ビートの合図と共に爆発が起こり、アカンベエは徐々に消滅し、元のマンゴーのような姿に戻った。

「ヨッシャ〜!!流石だぞ、プリキュア!!」

「あなたこそ、援護してくれてありがとう!」

ウエスターに笑みを向けたビート、その背後で、ドーナツに似たホホエミーナに守られた妖精達の歓声が沸き起る。上空からゆっくり落ちてきた物体を、ビートは掌に乗せ凝視すると、そこには象の顔が描かれていた。何の事か分からず思わず首を傾げるビートだったが、それをギョツと握ると、ジョーカーと戦うローズの援護に向かおうとする。(アカンベエを倒しましたか!此処は・・・)

ジョーカーの一瞬の隙を逃さず、ミルキイパレットをフル稼働させたローズが、

「邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう!ミルキイローズ・ブリザード!!」

青い薔薇吹雪がジョーカー目掛け飛んで行く・・・

「しまった!?!・・・なあってね!皆さん、勝負は預けましたよ!!」

ミルキイローズ・ブリザードを上空にジャンプして躲したジョーカーの姿が、トランプの舞の中に消え去った・・・

「どうやら追っ払えたようね・・・でも、あの男は一体!?!」

「ロ、ローズ・・・その傷は?」

思わず驚いた表情を浮かべたビートが、ローズに駆け寄り大丈夫か問い掛けると、ローズも、自分の左腕に傷が付いて居る事に気付き、驚きの表情を浮かべた。

「何時の間に!?!:大した傷ではないけど、ミルキーローズブリザードの間隙をぬって、私は攻撃を受けていたっていうの?」

ジョーカーが消え去った場所を、複雑そうな表情で見つめるローズとビートだった……

一方、クライナーと戦いを開始したピーチ達四人は……

クライナーは、ハッピー達を追い込んだ液体を、マシガンのように連射する攻撃を放つも、ピーチ達四人は四方に散って躲し続ける。アイコンタクトした四人、ピーチは、わざとクライナーの注意を自分に向ける。クライナーがピーチに気を取られた隙に、ベリー、パイン、パッションが、時間差でキックを放ちクライナーを蹠踉めかせると、すかさず合流した四人が、一気に加速を付けてクライナーに近付き、

「プリキュア!クアドラプル・パアンチ」

四人が同時にパンチを放ち、クライナーを吹き飛ばし、更に起き上がろうとするクライナー目掛け、大きくジャンプした四人は、

「プリキュア!クアドラプル・キック」

四人が急降下しながら跳び蹴りを放ち、コロコロ転がり動きが鈍るクライナー、此処を勝負所とみたピーチ達が、何か技を放とうとしているのに気付いたビューティは、表情を険しくすると、

「いけません！その敵は、私達の必殺技を吸収し、力を付けました・・・」

ビューティの言葉を表すように、背後で、その時の真似をするハッピー、サニー、ピース、マーチ、その姿は最早コントをしているようで、ピーチ達四人の目が点になる。

「後ろで何してるのかしら!?!あの娘達?」

「アハハハ、まあ、何か私達に伝えようとしているのは分かるけど・・・」

「あの青いプリキュアの娘の話で、あの敵は技を吸収するのは理解したわ!」

「迂闊な攻撃は、出来ないって事ね!」

少々呆れたようにハッピー達を見つめたベリー、ピーチ、パッション、パインの四人、ビューティの言葉で、目の前の敵は、技を吸収して自分の力に変えると知る。だが・・・技を吸収されるなら・・・吸収出来ない技を放てば良い!!

四人の考えは同じようで、アイコンタクトをして頷き合うと、

「行くよ!ベリー、パイン、パッション!クローバーボックスよ、私達に力を貸して!!!」  
ポップが預かっていたクローバーボックスから放出された光が、リンクルンに力をもたらし、思わずポップとキャンデイが驚きの声を上げた。

「プリキュアフォーメーション！」

ピーチの合図を受け、四人が一斉にしゃがみ込み構えると、ハッピー達五人は何事かとキョトンとする。技を吸収する敵に、先輩達は何をしようとするのか、五人の視線が四人を凝視した。

「レディー……ゴー!!」

再びピーチの合図で走り出す四人、立ち上がったクライナー、そして見ていたサデイスも、何事かと度肝を抜かれる。

「ハピネスリーフ！セフト！パイン!!」

パッションから始まったハピネスリーフ、パッションはパインに投げると、

「プラスワン！プレアリーフ！ベリー!!」

受け取ったパインが、プレアリーフをセフトしベリーに投げる。

「プラスワン！エスポワールリーフ！ピーチ!!」

受けたベリーが、エスポワールリーフをセフトし、ピーチに思いを託し投げる。

「プラスワン！ラブリーリーフ!!」

受け取ったピーチは、ラブリーリーフをセフトし、四つ葉のクローバーマークを完成させる。ピーチが四つ葉のクローバーマークを投げると、それは巨大化し、四人はそれぞれのマークの上に乗って、クローバーの中心部に居るクライナーの上で下降し、クラ

イナ―を巨大な水晶の中に閉じ込めた。

「「ラツキークローバー！ グランドファイナーレ!!」」

ラツキークローバー・グランドファイナーレの力は、凄まじい輝きを放ち、クライナーを光の輝きの中で包み込んだ!!

「お見事です！ あれでは技を吸収する事も出来ませんね!!」

「ウワアア・・・スゴオオオイ!!!」

ビューティは笑みを浮かべながら、先輩達の行動を見て尊敬の眼差しを浮かべ、ピースは目をキラキラ輝かせて四人の合体技、ラツキークローバー・グランドファイナーレを見つめ、仲間達を振り返ると、私達もあんな技作ろうよと提案するのだった・・・

クライナーは浄化され、取込んでいたアカンベエも浄化された事で、苺のキュアデコルをゲットするピーチ、不思議そうに首を傾げ、キュアデコルを見つめるピーチに、ポツポツが簡単な説明をすると、ピーチは頷き、持っていたキュアデコルをキャンデイに手渡すのだった。

一方、サデイスが持っていた、ルセンが変えられた本体ともいうべきクライナーは、元の白さを取り戻す。サデイスは目を血走らせると、持っていたクライナーを地上に叩き付けて悔しさを紛らわせる。クライナーは、ピクピクしながらもキャンデイの下に躍り寄って行った・・・

「キャンデイー！」

キャンデイを庇うように前に出たハッピー達五人とポップ、クライナーは動きを止めると悲しげな声を発した・・・

「あの子・・・泣いてる!？」

パインは、クライナーの悲しげな声を聞くと、キルンを呼び出しクライナーに近づいて行った。

「余所見をするとは・・・余裕だなああ!!」

自分を無視するように、クライナーに近づいていくパインを見たサデイスは、目の色変えてパインに襲いかかろうとするのを、ピーチ、ベリー、パッションが割って入り、サデイスと小競り合いを始める。パインは三人にありがとうと呟き、クライナーの前にしゃがみ込むと、

「こんにちは！どうしたの？悲しそうな声を出して・・・」

パインがクライナーと会話を始めた事に驚くハッピー達、話し掛けられたクライナーは、まるで喜んでるように、パインに懸命に何かを訴えると、パインはウンウン頷き、「そんな酷い事を・・・うん、うん・・・キャンデイちゃん！こっちに来て!!」

パインに名前を呼ばれたキャンデイはビクリとすると、嫌々をして、ポップの背後に隠れる。パインは悲しげな表情を浮かべながら、

「キャンディちゃん……この子は、あなたのお友達の……ルセンちゃん何だよ!!」  
パインの言葉を聞き、固まるキャンディとポップ、キャンディの目が見る見る涙目になっていく。ポップは俄には信じられないといった表情で、

「パイン殿、それは誠でござるか?」

「うん! ルセンちゃんの話だと、アンデちゃんっていう妖精さんと一緒に、ピーチ達が戦って居るあの人に、今の姿にされちゃったんですって……」

「な、何という事を……ルセン、気付いてあげられずスマンでござる」

「ルセン……本当にルセンクル!」

ポップは、気付いてあげられなかった自分の情けなさに、拳を振るわしながら謝り、キャンディは、本当にルセンかどうか恐る恐る訪ねると、クライナーはピョンピョン跳ねた。その仕草に、確かにキャンディは身に覚えがあった……

「ま、間違いないクル……ルセンクル〜」

キャンディは大粒の涙を零しながら駆け出すと、クライナーの姿に変えられたルセンと抱き合い号泣する。

「そんなあ……キャンディのお友達だったなんて」

「知らなかったとは言え、ウチらは……キャンディの友達と戦ったんか?」

「気に入らないねえ……こんな酷い事を平気でする何て!」

友達だと気づけなかった事に、キャンディは号泣しながらルセンに謝り続けるのを見た

ハッピー、サニー、マーチの目にも涙が浮かぶ・・・

「気に入らないならどうする!?!お嬢ちゃん達?」

ピーチ達から距離を取ったサデイスが、今の言葉に反応すると鼻で笑い、ハッピー達を挑発するように声を掛けると、

「お黙りなさい!!このような非道な行ない・・・許しません!!!」

「キャンディのお友達を、元に戻してよ!」

非人道的行為を目の前で見せつけられ、ビューティが烈火の如く怒りを露わにし、ピースはルセンを元に戻すようにサデイスに抗議するも、サデイスは再び鼻で笑い、

「だったら・・・実力で証明して見せな!!」

サデイスの瞳が金色に輝くと、サデイスの周囲に凄まじい負の力が発生する。まるで蛇に睨まれた蛙のように、サデイスの発する負の力の前に、身動き出来ず押され出すハッピー達だったが、

「私達も、あなたの行ない・・・許しはしない!!」

ピーチ、ベリー、パイン、パッションの四人がハッピー達五人の側に並ぶと、ハッピー達の心に余裕が生まれ、光の輝きが強さを増した。再び身動き出来るようになり、思わ



ず手足を動かすハッピー、サデイスは忌々しげにプリキュア達を一人一人見つめると、  
「チツ！さすがにこれだけのプリキュア相手では分が悪いねえ．．．今日の所は退くか！  
その役立たずは、貴様らに返してやるよ!!最も、もう元に戻す事は不可能だけどね．．．  
だが覚えておきな！クライナーは、まだこの地に居るんだ！プリキュア!!次に会った時  
は．．．覚えてな!!!」

サデイスは時空の歪みの中に消え失せると、周囲を覆っていた負の力が消え去り、辺りに何時も通りの景色が戻った。

## 2、美希の推測

サデイスを追い返した少女達は、互いに自己紹介をして親睦を深めた．．．

「何とか間に合つて良かったよお．．．私は、キュアピーチ事桃園ラブ！ヨロシク!!」

「あたしは、キュアベリー事蒼乃美希！あなた達を見て居ると、プリキュアに成り立ての頃を思い出すわねえ．．．」

「私はキュアパイン事山吹祈里です！みんな、よろしくね!!」

「私の名前は、キュアパッション事東せつなよ！ポップから話は聞いているわ．．．私達四人もあなた達に協力するわ!!」

先輩であるピーチ達が先ず自己紹介を始めると、変身を解いたみゆき、あかね、やよ

い、なお、れいかが四人の挨拶に畏まって頭を下げる。

「ご丁寧に……私は、キュアハッピー事星空みゆきです！絵本やおとぎ話が大好き、勉強は……ハッピーな中学二年生です!!」

「何や、そないな事も言うんか？ウチはキュアサニー事日野あかねです！ウチの店は大好き焼き屋をやってますんで、今度食べに来て下さい！よろしゅうお願いしますわ!!」

みゆきとあかねの挨拶を聞くと、思わずピーチ達は顔を見合わせ驚き、

「みゆきちゃんに、あかねちゃんかあ……アハハハ！私達の知り合いと同じ名前だねえ」  
「本当！それに、みゆきちゃんは絵本やおとぎ話が好き何だ？のぞみのお父さんは童話作家だから、のぞみとは気が合いそうねえ？」

「ええ、それにあかねは、タルトと似たような言葉を喋ってるから、タルトと気が合うかも知れないわね」

「本当ねえ……早くみんなにもみゆきさん達の事も話してあげたいね」

ピーチ、ベリー、パッション、パインが、みゆきとあかねの自己紹介を聞き感想を述べる。何時自分が話せばいいのかタイミングが掴めず、少し涙目になったやよいに気付いたあかねが、やよいを指さすと、

「ほんで、あそこで泣きそうになつとるんが……ほらやよい、自己紹介せな！」

「プンスカプン！泣いてないもん!!……初めまして！私はキュアピース事黄瀬やよいで

す!!絵を描くのが大好きです!よろしくお願ひしまあす!!」

「後、やよいはヒーローオタクでえ〜す!・・・ああ、ロボットアニメも好きやったなあ?」

「もう、あかねちゃん!!」

あかねにからかわれ、益々涙目になるやよいであったが、ピーチは苦笑を浮かべながらも、自分もヒーロー物は大好きで、小さい頃は、美希や祈里を巻き添えにして、ヒーローごっこをしていた事を伝えると、やよいの目はキラキラ輝き、

「あのお・・・後でサイン貰って良いですか?」

「エツ!?サイン?私達・・・同じプリキュア何だけどなあ?」

やよいの発言に思わず苦笑を浮かべるピーチ、一同は思わずクスリと笑んだ。

「あたしは、キュアマーチ事緑川なおです!先輩達、どうぞよろしく!!」

「なおはスポーツ万能何やけど・・・恐がりやねん!」

「あかね!恐がりは余計だろう・・・全く!!」

「でも、事実ですものね・・・ウフフ!初めまして!私はキュアビューティ事青木れいかと申します!!以後お見知り置き願ひます!!」

「れいかは、頭脳明晰でクラス委員、おまけに生徒会副会長をしてんねん!ウチらのチームの頭脳って所やね!!」

「へえ、なおはスポーツ万能何だ？ なぎささん、咲、りんや響もスポーツは得意よ！」

「そういうパッションも得意な方じゃない？」

「あの人達程じゃないわ・・・それなりって所かしら？」

パッションの言葉を受け、ベリーは、パッションもスポーツは得意じゃないと振るも、パッションは、なぎさ達程じゃないと謙遜する。

「れいかさんは生徒会副会長なの？ 凄いねえ・・・私達の仲間の、かれんさんやいつきさんも生徒会長をやつてたから、れいかさんは二人と気が合うかも知れないわね？」

「そうだね・・・ああ、早くみゆきちちゃん達をみんなに紹介したいなあ・・・」

パインの言葉にピーチも同意し、早くみんなに合わせてあげたいとピーチは思うのだった・・・

みゆき、あかね、やよい、なお、れいか、五人の自己紹介を聞き終え、ピーチ達四人の脳裏にのぞみ達の事が思い出されてくる。

「みゆきちちゃん達を見てみると・・・のぞみちゃん達を思い出すよねえ？」

「そうね・・・しかも同じ五人組だし」

「ピーチ、ベリー、自己紹介はこれくらいにして、あの子を何とか助けてあげましょう!!」  
「ええ、パインの言う通りね！ 何とか元に戻せれば良いんだけど・・・」

四人の視線がキャンディとルセンに向けられる。四人はルセンを元に戻す為に、先ず

パインがヒーリングプレアを、次にベリー、ピーチ、パッションの順に技を放つも、ルセンを元の姿に戻す事は適わなかった……

「私達はこのままパルミエ王国に戻るけど……みゆきちゃん達にその子の事、任せて良  
いかな？」

「向こうに現われた、ジョーカーという敵も気になるの」

「他のプリキュア達なら、その子を元に戻せる事が出来るかも知れない……」

「キャンディちゃん、ルセンちゃん、決して希望は捨てないでね!!」

ピーチは、キャンディが泣きながら抱きついていているルセンを見て、心を痛めていた。  
ピーチ、ベリー、パッション、パインがそれぞれ技を放ち浄化を試みたものの、サディ  
スが言ったように、ルセンを元の姿にする事は出来なかった。パルミエ王国に現われた  
ジョーカーの事も気に病み、みゆき達に後時を託し、ピーチ達はポップと共に再びパ  
ルミエ王国へと戻って行った……

「行っちゃったね……私達も戻ろうか？」

「せやな……何時までも此処に居てもしやあないし」

「キャンディ、一先ず不思議図書館に戻ろう！」

「不思議図書館にある本の中に、ルセンさんを元に戻す手掛かりがあるかも知れません」  
「そうだね・・・キャンディ、ルセン、辛いだろうけど・・・あなた達にはプリキュアが付いて居る事を忘れないで！」

やよい、あかね、なお、れいか、そしてみゆき、五人の少女達に励まされ、キャンディをみゆきが、ルセンをれいかが抱え、一同は不思議図書館へと戻っていった・・・

パルミエ王国にポップと共に戻って来たピーチ達は、ジョーカーを追い払ったミルクとエレンからの報告を聞いていた・・・

「皆の衆、ご無事で何よりでござる！ハッピー達も、ピーチ殿、ベリー殿、パイン殿、パツシオン殿のお陰で、事無き得たでござるよ!!」

「そう、無事で良かった！こっちもラビリンスの二人が居てくれて助かったわ!!所で、あのジョーカーっていう奴が放った怪物を倒した時、こんな物が落ちてきたんだけど・・・」  
エレンは、ウエスターとサウラーの活躍を告げ、先程手にした象のキュアデコルの事をピーチ達に伝えると、ピーチは、キュアデコルをポップに渡すように伝え、エレンは言われるままポップに手渡した。

「忝ない・・・これはキュアデコルと言って、我らが女王、ロイヤルクイーン様を復活させる

為に、絶対必要な物なのでござる!!」

ポップはキュアデコルを見つめながら、一同に謝辞を述べた。変身を解いたラブ、美希、祈里、せつなだったが、美希は何かを思案するように考え込んで居た。

「どうしたの、美希たん?」

ラブの言葉に我に返った美希が一同を見渡すと、

「ねえ、これはあくまで推測何だけど、あたし達が横浜で戦った敵っていうのは・・・あのルセンって言う妖精と一緒に怪物にされた・・・アンデって言う妖精何じやないかしら?」

「何とーそれは誠でござるか?」

ポップが驚き、美希の顔をマジマジ見つめると、美希はコクリと頷き、

「確証はないわ!でも・・・ラブ、ブツキー、思い出してみて!あの時ピーちゃんは、悲しみの心に満ちた何かが近づいて居る気がするから、念の為用心してって、あたし達に忠告してたわ!」

「そういえば・・・」

「うん、確かにピーちゃんはそう話してた」

ラブと祈里も当時の事を思い出したのか、確かにそんな事があつたと美希の言葉に同意する。エレンと顔を見合わせたせつなは、

「美希が言ってる通りだとすると……さっきの奴が私達に言ってた、この地にまだクライナーが居るって言ってたのは……」

「あなた達が戦った敵って事!？」

「ええ、そう考えた方が良くも知れない!確かにあたし達は、横浜の地である敵を倒したわ……でも、光に交わり分裂して、横浜の海底に沈んで行ったの」

「その後、私達はその場を直ぐ離れたものね……」

「せつなとエレンの言葉に同意する美希と祈里、ラブも領くと妖精達がざわめき始める。少し考えて居たサウラーは、思案を纏めると、

「君達の話聞く限り、君達が横浜の地で倒したと思ってる敵は……確かにまだ健在している可能性が高いね!」

「どういう事だ!?プリキュア達は倒したんだろう?」

「ウエスター、彼女達は今こう言ってたじゃないか……光に交わり分裂し、横浜の海底に沈んで行ったとね……つまり、消滅はしていないって事さ!まだ、あの地に居る可能性も否定できない!!」

美希とサウラーの推測にラブ達も、その場に居たメップル達、フラッピ達、シプレ達も同意する。

「私達、週末にでも横浜を調べてみる!」



「せつな、あなたも協力して貰えるかしら？」

「ええ、もちろんよ！私もまた暫く向こうで暮らす事にするわ……ウエスター、サウラー、後の事はよろしく!!」

ラブは、週末にでも横浜に向くと一同に伝え、美希はせつなに協力を求めると、せつなは快諾し、またしばらく四つ葉町で暮らす事を伝え、ラブ、美希、祈里は嬉しそうに微笑んだ。せつなに話を振られたウエスターとサウラーだったが、

「イース、君はプリキュア達の手助けをした方が良いだろうね……ラビリンズの方は、もう我らが付いて居なくても、大方大丈夫だろう！それより、さっきの敵の出方が気になる」

「そうだな……胡散臭そうな奴だったな？」

「パルミエ王国の場所を知られたからには、再び攻撃をして来る可能性もある……僕達は、暫くパルミエ王国に残る事にするよ！」

サウラーの言葉に同意するウエスター、ココとナッツは表情を綻ばせ、それは助かると伝え、二人に感謝する。

「じゃあ、せつなも来てくれるから、私達週末に……」

「待って、ラブ！私もハミイも、この後加音町に行くから、響達に話しておくわ！」

もう一度横浜に行き周辺を調べてみるというラブに、エレンは自分達も加音町でしば

らく暮らせるから、響達にも知らせると告げる。ココとナッツも頷くと、

「ココ！人数は多い方が良いココ・・・ミルク、シロップと一緒にのぞみ達に知らせて欲しいココ!!」

「お任せ下さいミル！必ずのぞみ達に知らせるミル」

「ウエスターとサウラーがパルミエ王国に残ってくれる事で、ナッツ達も、用事を片付けたら必ず行くナッツ！」

ココとナッツの言葉に同意するミルクとシロップ、メップル達、フラッピ達、シプレ達も、なぎさ達、咲達、つぼみ達に知らせると告げる。

「拙者も戻ってみゆき殿達に協力を仰ぐでござる！」

こうして、妖精会議は終了を向かえた・・・

みゆきの部屋に戻って来たポップから、妖精会議の報告を聞いたみゆき達は、

「分かった！先輩達に会える何て緊張するけど・・・私達も、アンデ搜索に力を貸すよ！

ねえ、みんな？」

みゆきの言葉に一同が同意する。ポップは満足気に頷くも、

「あまりメルヘンランドを留守にする訳にもいかず、それがしは、大変心苦しいでござるが、メルヘンランドに戻るでござる！」

「エエエ!? お兄ちゃん、帰っちゃ嫌クルウウ!!」

泣きながらポップに抱き付くキャンデイ、ポップはキャンデイの頭を優しく撫でながら、

「キャンデイ、前に約束したでござるなあ? お別れする時は……笑顔でござるって! また用事を済ませれば、拙者も必ずまた来るでござる!!」

「本当クル!?!」

ポップは頷きながら、キャンデイの頭を、そしてルセンを撫でると、

「皆の衆、キャンデイとルセンの事、よろしくお頼み申す!」

「うん、分かった! ポップ、またね!!」

「皆の衆、さらばでござる!!」

ポップは、絵本の中に入ると、窓から夕暮れの空に飛び立っていた。一同は、その姿が見えなくなるまで、手を振り続けた。

第四十三話：頼れる先輩

完

## 第四十四話：集え！プリキュアオールスターズ！！

### 1、横浜大捜索

クライナーとされたアンデの捜索の為、再び横浜にやって来た少女達は、数組に分かれながら横浜の地を捜す事を決めた。

横浜駅方面を捜すのは、なぎさ、ほのか、ゆり、ひかり・・・

みなとみらい地区を捜すのは、咲、舞、満、薫・・・

横浜中華街を真っ先に選んだのは、のぞみ、りん、うらら、こまち、かれん、くるみ・・・  
港の見える丘公園周辺を捜すのは、ラブ、美希、祈里、せつな・・・

桜木町駅を降りたまでは良かったが、えりかが方角を間違え、海側とは反対側の野毛山周辺を捜すのは、つぼみ、えりか、いつき・・・

山下公園を捜すのは、響、奏、エレン、アコ・・・

そして、みゆき、あかね、やよい、なお、れいかの五人は・・・

「ウワア！大きな球場だねえ・・・」

「横浜スタジアムやな・・・ウチは関西出身で、横浜の野球場にはあんま興味あらへんけ

ど」

「あたしは横浜スタジアムより、日産スタジアムの方が興味あるなあ」

「なおはサツカーの方が好きですものね」

「ウワアゝゝゝ横浜って、太陽マンでもロケに使われた事があるんだよ！」

「どうでもいい!!」

「すゝぶるどうでもいい!!」

ポップから話を聞いたみゆき、あかね、やよい、なお、れいかの五人、ラブ達から馬車道方面を捜して欲しいと頼まれた一同は、キャンデイとルセンを連れ関内駅を降り立ち、先ず横浜スタジアム周辺を探索していた。初めてやって来た横浜の地を、五人は興味深げに見渡していた……

「どう、お友達の気配は感じる?」

れいかのバックの中に居るルセンに声を掛けるみゆきだったが、ルセンはキューンと声を発するのみで、一同には何と云っているのか全く理解出来なかった。

「困りましたねえ……この間私達を助けてくれた、パインさんが居てくれれば、ルセンさんの言葉が分かるのですが……」

れいかの言葉を受け、考え込む一同だったが、横浜スタジアムのライトスタンドの方に来た時、目の前から聞いた事があるような声が聞こえてくる。

「いい！今年こそはクライマックスシリーズに出られるように……私達も応援するわよ！！」

「ハイ！！」

気合いが籠もったハツピ姿の一団が、ライト側スタンド入り口前で佇む、れいかは、その中のベイスターズのハツピを着た、ポニーテール姿の女性の後ろ姿に見覚えがあるように、うで、

「あの方……佐々木先生に似ていませんか？」

「……エッ!?」

れいかが言った佐々木先生とは、みゆき達の担任である佐々木なみえ先生の事である。美人で、生徒の意思を尊重する先生で、みゆき達からも好かれていたが、当の佐々木先生は、みゆきが転入してきてからは、何かと手を焼かされているようであった……（何処かで聞いた事のある声のような!?）

恐る恐る背後を振り向いた佐々木先生、ハツピの中には、ベイスターズの18番、ママの番長と呼ばれる三浦投手のホーム用ユニフォームのレプリカを着ていて、みゆき達には思わず呆然と佐々木先生を見つめた。まさか、佐々木先生にこのような一面があったとは、五人の視線が下から上へと佐々木先生を凝視した。一方の佐々木先生も、みゆき達五人を見て思わずその場で仰け反ると、

「あ、青木さん、緑川さん、日野さん、星空さん、黄瀬さん・・・な、何であなた達が此処に!？」

「先生、おはようございます! 私達は、ちよつと横浜に用事がありましたので・・・」  
れいかが恭しく佐々木先生に挨拶すると、他の四人もペコリとお辞儀して笑顔を向けた。

(な、何で彼女達が・・・)

佐々木先生は、不味い所を見られたと思うと、顔に冷や汗が浮かんでくる。引き攣つた笑みを浮かべながら五人に近付くと、一同を手招きし小声で話し始める。

「皆さん・・・今日見た事は、学校では絶対言わないでね?」

「はい! 先生はベイスターズのファンだったんですね!」

「物心付いた時、横浜大洋ホエールズの頃からのファンよ!!」

なおの言葉に、腕まくりしながら気合いを込めて、昔からのファンだったと告げる佐々木先生、一同は思わず苦笑するのだった。

「ベイスターズちゆうと・・・万年最下位で、先生も苦労しますねえ?」

「お黙り! 97年には2位、98年にはちゃんと優勝もしています!! 99年〜2001年、2005年にはちゃんとAクラスの3位になってるわよ!!」

あかねの言葉に嘸みつき、ちゃんと優勝した事もあるし、Aクラスにもなっていると

告げる佐々木先生の迫力に、何時もの佐々木先生と違うと、一同は困惑するのだった：

「じゃあ、私達は用事があるのでこれで！先生、さようなら！！」

「ええ、なるべく早く帰るんですよ！！」

「！！ハアイ！！！！」

佐々木先生と別れ、球場を後にしようとした五人だったが、見た事のあるような緑色のフードを被った老婆を見掛けたあかねが、

「ひよつとして・・・あれ、マジヨリーナちゃんか？」

あかねが指さす方を見た一同は、また何かを企んで居るのでは？そう判断すると、マジヨリーナの後を付けて行つた。その先にはウルフルン、アカオーニが居り、三人が何か企んで居るのは明白だった。

「待ちなさい！！」

みゆきの言葉と共に三幹部の前に現われた五人、三幹部は何故こんな所にプリキュアが居るのか驚くも、

「ケツ、見つかったからにはしようがねえ・・・世界よ！最悪の結末、バッドエンドに染まれ！白紙の未来を黒く塗りつぶすのだ！！」

みゆき達に見つかった為、計画を変更したのか、ウルフルンはバッドエンド空間を出現させると、空に満月が浮かびどんよりと辺りを濁らせ始めた。



「ウルツフツフツフ！人間共が発したバッドエナジーが、悪の皇帝ピエー口様を呼び覚ますのだ!!」

球場近くに居た人々から、バッドエナジーが発生する。側に居た佐々木先生も例外なく……

「此処には佐々木先生も居るのに……みんな!」

「『ええ!!』」

みゆきの言葉に頷いた一同、五人はスマイルパクトを取りだすと、キュアデコルをセツトし、

「『プリキュア!スマイルチャージ!!』」

五人の少女が、パクトのパフを塗っていき、プリキュアへと変身していく……

「キラキラ輝く、未来の光!キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー!キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん!じゃんけん……ポン!キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負!キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心!キュアビューティ!!」

「『5つの光が導く未来!輝け!スマイルプリキュア!!』」

五人のプリキュアが三幹部に対しポーズを決めた!

「じゃらくせえ！返り討ちにしてやる・・・出でよー！アカンベエ！！」

ウルフルンが赤玉を右手に持ち、空に掲（かか）げると、転がっていたメガホンはアカンベエへと変化を遂げた。鼻息を荒くしたアカオーニも、

「俺様もやるオニー！出でよ、アカンベエ！！」

アカオーニも赤玉を持った右手を高々挙げると、メガバットというバットの形をした応援グッズをアカンベエへと変えた。

「ヒヒヒヒ、総力戦と行くだわさー！出でよ、アカンベエ！！」

マジヨリーナも赤玉を持った右手を掲げると、ベイスターズのマークが付いたフラッグをアカンベエへと変えた。

三匹のアカンベエが、五人のプリキュアを睨み付ける。マジヨリーナは更なる不適な笑みを浮かべると、

「本当は、野球選手で実験しようと思ってたんだけどねえ・・・お前達で試させてもらうだわさ！！」

マジヨリーナはそう言うのと、銃のような形をした物体を取りだし、プリキュアに照射すると、円を描いた紫色の光がハッピー達を包み込んでいった。

「な、何これえ!?!やあられたあああ・・・って、あれえ!?!何ともない?！」

ハッピーは、思わずまともに食らって苦悶の表情を浮かべたものの、五人はさしたる

変化もないようで、思わず互いの無事な姿を見て安堵するのだった。ウルフルンとアカオニは、冷やかな視線をマジヨリーナに向けると、

「何だ!? 何にも起こらねえじゃねえか?」

「そうオニ! 失敗オニ!!」

「慌てるなだわさ! これはアタラナクナルと言って、この光線を浴びた者は……まあ、見てれば分かるだわさ!!」

自信満々のマジヨリーナが、口元に笑みを浮かべながらハッピー達五人を見つめた。

「さあ、アカンベエ、プリキュア達を可愛がってやるだわさ!」

「みんな、行くよ!!」

ハッピーの合図と共に飛び出した一同、ハッピー、ピースはメガホンのアカンベエに、サニーとマーチはメガバットのアカンベエに、ビューティはフラッグのアカンベエに攻撃を仕掛けるのだが、一同の攻撃はアカンベエに当たりそうになると、その方向を突然変えてしまい、アカンベエに攻撃が当たる事は無かった。

「な、何で攻撃が当たらないの?」

「確かにおかしいですね……あの体勢から攻撃を外す何て、ありえませんか!」

ハッピーの言葉にビューティも同意するも、マジヨリーナは愉快そうに大笑いし、

「ヒイヒイヒ、これで分かったかい? アタラナクナルを浴びた者の攻撃は……当たら

ないんだわさ!!」

「「ガクン」」

思わずシヨックを受け、その場で膝を付く程シヨックを受けるハッピー、サニー、ピース、マーチの四人、ビューティは小首を傾げながら、

「それは困りましたねえ……でも!」

何かを閃いたビューティは、一人三匹のアカンベエの前にゆっくり歩いて行くと、四人は大騒ぎしながらビューティの名を呼び、危ないよと引き留めようとする。

(私の推測が正しければ……)

尚も歩みを止めないビューティに、思わず怯む三匹のアカンベエ、ウルフルンとアカオーニは苛々したように、

「何してやがる!お望み通り、さっさとキュアビューティを踏み潰しちまえ!!」

「そうオニ!踏みつぶすオニ!!」

二人の指示を受け、三匹のアカンベエがビューティを踏みつぶそうとする。ビューティは、まるでわざと踏まれようとしているかのように、アカンベエの足下で立ち止まった。

「「ビューティ!」」

顔色変えてビューティを助けに向かおうとするハッピー、サニー、ピース、マーチだつ

だが、アカンベエの振り下ろした足が、ビューティを踏みつぶすかと思われたが、ビューティはその場で平然とした表情で立ったまま涼しげな顔を浮かべる。アカンベエは悔しそうに何度も踏みつぶそうとするも、攻撃は当たらず、逆に体勢を崩して尻餅を付く、「な、何だ!?!何でプリキュアに当たらないんだ?」

「不思議オニ?」

小首を捻ってポカンとするウルフルンとアカオーニ、マジヨリーナはようやく状況を理解したのか、ポンと手を叩き顔色を変えると、

「し、しまっただわさ! 確かにプリキュアからの攻撃は当たらないだわさ!..でも逆に、こっちの攻撃もプリキュアには当たらないんだわさああ!!」

「何いいい!」

頭を抱えて思わず声を上げるマジヨリーナ、ウルフルン、アカオーニも思わず変顔を浮かべながらマジヨリーナを見つめる。合流した仲間達に微笑むビューティであったが、顔色を変えると、

「ですが、これではお互いに手を出せない状況です。このままバッドエンド空間が続いては、不味いですね...」

顎に右手を当て考え込むビューティ、キャンディは何かを閃くと、

「そうクル! ナッツからこれを貰ったクル!!」

キャンディは、パルミエ王国でナッツに貰った、ミラクルガイドライトを手にしてス  
イツチを入れた。ハートの先端が点滅を始め、虹色の輝きが上空に浮かび上がる。ハッ  
ピーは目の前の光景に驚きながら、

「キャンディ、それは一体!?!」

「内緒クル!」

「キャンディ、ずる〜い!!」

キャンディが内緒にした為、思わず頬を膨らますピース、キャンディは、ニコニコし  
ながらミラクルガイドライトを降り続けるのだった・・・

みなとみらい・・・

アンデの探索をしていた咲、舞、満、薫だったが、分裂したクライナーも、アンデの  
手掛かりも見つからず、一先ずベンチに腰を下ろし一息入れていたのだが・・・

「ああ、もう最悪!ちつとも見つからないじゃない・・・絶不調なりい!」

「まだ探し始めたばかりだし・・・もう少し頑張らしましょう!!」

搜索するものの、手掛かりが見つからず、ハアと溜息を付く咲、舞は苦笑を浮かべな  
がら咲を諭した。満と薫はある一点を凝視すると、

「ねえ、咲、舞、見て!空が淀んでない?」

「ええ、何か嫌な気配がするわね・・・」

満と薫が指さす方向、それは横浜スタジアムのある辺りであった。咲と舞は顔を見合わせ、横浜の地図を見て見るも、咲には今どの辺に居るか分からず、思わず変顔を浮かべる。

「エエと・・・私達は、今何処に居るんだっけ?」

困惑する咲を見かねたかのように、満と薫が現在地を指差し、嫌な気配がするのは、横浜スタジアムがある方向だと告げた。

「確か横浜スタジアムの方は・・・ラブ達が言ってた、新しいプリキュア達が調べてたんじゃなかったっけ?」

「ええ、ラブさん達はそう言ってたわ!!」

咲に聞かれた舞が、確かにラブ達はそう言っていたと同意する。

フラッピが妖精姿になって現われるや、ミラクルガイドライトを取りだしスイッチを入れると、先端のハートマークが点滅し、虹色の輝きが、まるで咲達の向かうべき場所を示すように、横浜スタジアム方面へと照らしていった。

「間違いないラピ!今あの場所でプリキュア達が戦ってるラピ!」

「本当なの、フラッピ?横浜スタジアムなら・・・多分私達が一番近い!舞、満、薫、行こう!彼女達の下に!!」

咲の言葉に頷いた三人、立ち上がった四人は、急ぎ横浜スタジアムへと走り出した：

横浜駅で降りたなぎさ達、歩きながら海辺にあるショピングモール、横浜ベイクォーター方面を経由し、みなとみらい大橋へと向かっていたが、土曜日この日、人混みの中でアンデ、分裂したクライナーの行方を捜すのは困難であった。人混みが薄れて来た時、一同の話題は、何時しかみゆき達へと変わって行った・・・

「いやあ、メップル達に聞いて驚いたよねえ・・・また私達に新しい仲間が増えてる何てさー！」

「そうですね・・・ラブさん達の話では、新しいプリキュアの方々は、五人共響さん達より一つ下の、中学二年生だそうですよー！」

なぎさの言葉に同意したひかりから、新しいプリキュアは中学二年生だと聞き、なぎさは思わず変顔を浮かべる。

「五人も居るの？のぞみ達と一緒にだね・・・それに、また中二なの？私とほのか、ゆりも、プリキュアになったのは中学二年の時だし、咲と舞もそう、のぞみとりんもそう、ラブ達もそう、つぼみ達も、響達も・・・何か呪われているのかしら、私達？」

「呪いって・・・変な言い掛かりメポ！」

なぎさの言葉に、言い掛かりだと言うメップル、ほのかとゆりは顔を見合わせてクス



リと笑い、

「確かに言い掛かりね！なぎさ、あなたにプリキュアの力を託してくれた、光の園のクイーンが聞いたら嘆くわよ！」

「だってさああ・・・」

「さしたる意味は無いと思うよ！満さんと薫さんは、砂漠化した時にプリキュアになったって言ってたし、アコちゃんは小学生からやってるし、薫子さんは高校の頃だったそうだし・・・」

ゆりやほのかにも、ただの偶然でしようと諭されるも、些か納得しかねぬ表情をするなぎさは、

「でもこう続くとねえ・・・ん？どうかした、メツプル？」

「ミツプル？」

「何だか、邪悪な気配が漂ってるメポ！」

「ここからそう遠くない所で感じるミポ」

なぎさの言葉の途中で、メツプルとミツプルが騒ぎ始める。なぎさ達は慌てて人気の無い場所に移動すると、二人は妖精姿になる。メツプルはミラクルガイドライトのスイッチを入れた。先端のハートマークが点滅すると、虹色の輝きが横浜スタジアム方面へと延びていった・・・

「このアイテムって、前にほのかがナッツにアドバイスしてた奴じゃない？」

「ええ、ナッツさんが悩んでいたのを見て、少しアドバイスしたんだけど・・・確か、邪悪な者が現われた時に、先端のハートマークが点滅するとか言ってたと思っただけど・・・」

なぎさの言葉にほのかが頷き、前にナッツにアドバイスを送った物で、邪悪な者が現われた時に、先端のハートマークが点滅すると答えると、ゆりとひかりはミラクルガイドライトを見つめ、

「それが事実だとすれば・・・今メップルとミップルが言っていたのは、邪悪な何者かが現われたって事ね」

「ひよつとして、あの虹の光は・・・私達を導いているのでは？」

なぎさ、ほのか、ゆり、ひかりの顔色が素早く変わる。再び横浜に危機が迫っているのか？ 四人は見つめ合い頷くと、虹色の光が示す場所へと走り出した・・・

「えりかああ・・・本当にこっちで良かったんですかあ？」

歩き疲れたのか、頬を膨らまして不満そうにえりかを見つめるつぼみ、いつきは苦笑を浮かべながら、

「ハハ・・・でも僕達は、確かにどんどん坂道を登ってるような気がするよ」

「大丈夫、大丈夫、坂を登れば降りるだけじゃん！後は海沿いまで一直線!!」

マイペースのえりかは、このまま進めばOKだと尚も歩き始める。三人の妖精、シプレ、コフレ、ポプリは、それぞれのパートナーの頭の上で、ぬいぐるみの真似をしながら呆れ、

「絶対に道を間違えてるですっ」

「ん!? コフレエ・・・何か言った?」

口を尖らせながら、コフレの言葉に不満気にするえりか、ポプリはミラクルガイドライトを取り出すと、

「これで、ゆりしやん達に向かえに来て貰うでしゅー!」

「ポプリ、それは邪悪な者の存在が居る在処を示す道具で、ただ使っても意味は無いですう」

シプレに諭されるも、ポプリは不満気に頬を膨らませる。そんなのやって見なきゃ分からないと言って、ライトのスイッチを入れた。ライトの先端のハートマークが激しく点滅し、虹色の光が現われるや、つぼみ達の進むべき道を示すように、横浜スタジアム方面へと伸びていった。

「た、大変ですっ! 今誰かが虹の輝きの下で、悪い奴と戦ってるですっ!!」

「「エエエ!?」」

つぼみ、えりか、いつきは、虹色の輝きが見す方を見つめる。それは、自分達が進ん

でいる道とは正反対の方角であった。見る見る変顔を浮かべるつぼみといつき、つぼみは目に炎を点してえりかを見ると

「えりかああ! やつぱり反対方向だったじゃないですかあ!!」

「エツ!?・・・ドンマイ!!」

「ドンマイじゃないですよお!!」

「まあまあ、僕達もあそこに行ってみよう!!」

いつきの言葉に頷くと、三人は元来た道を引き返して走り出した・・・

山下公園の中を、虫眼鏡で搜索する響、その頭の上には、呆れ顔のピーちゃんが止まっていた。奏も呆れたように、

「響・・・虫眼鏡で地面を見て、何してるの?」

「何って、どんな些細な事も見逃さない・・・名探偵響とは、私の事だああ!!」

「ピギヤアアア!!」

ポーズを取る響の上で、真面目に捜せとばかりに、ピーちゃんが響の頭を嘴で突つき、響が逃げ回りながら謝る。

「何やってるんだか・・・で、エレンの格好は何か意味がある訳?」

奏同様呆れた視線でエレンを見つめるアコ、その視線の先には、探偵ドラマでお馴染

みの、金田一耕助のような格好をしたエレンが、ハミイと共に辺りをキョロキョロしていた。

「音吉さんの本で読んだの！響の言う通り、捜し物は名探偵に限るわ!!身だしなみから真似すれば、何か見つきりそうな気がしてこない？」

「ハア・・・それで見つかるなら、みんなも苦労してないと思うわよ？」

「さつきから、擦れ違う人に笑われて・・・恥ずかしいんだけど」

「ピギヤアアス!!」

冷めた視線の奏とアコに見つめられ、ピーちゃんにも怒られ追い回され、響とエレンが山下公園を逃げ惑う。ハミイは慌ててエレンを追いかけ、

「ピーちゃん、セイレーンは許して上げて欲しいのニヤ！」

「ハミイ！私を見捨てないでよお!!」

自分の事も許すように頼んでよと、響が逃げながらハミイに文句を言うのだった。

（何だろう、何か楽しそう・・・でも、妙な人達！あまり関わらない方が良いよね）

「行こう！キューちゃん！」

ツインテールの髪型をした少女あゆみは、楽しげな響達を見て、一瞬羨ましがな表情を見せるも、ポシエットの中のアンデに話し掛けると、その場を通り過ぎて行つた。あゆみと擦れ違った瞬間、ピーちゃんは何かの気配を感じ戸惑うと、響とエレンを追いか

け回すのを止め、そのまま地面に降りると、首を捻ってあゆみの後ろ姿を見つめた。

「ピーちゃん、どうしたの？」

「誰かさん達と違って、ピーちゃんはもしかしたら、何か手掛かりを見付けたんじゃない？」

顔を見合わせたアコと奏は、ピーちゃんの下へと駆け寄った。

「エレン・・・私達、立場無いね？」

「名探偵への道は・・・厳しいわね！」

トホホ顔の響とエレンも、ピーちゃんの下へと駆け出した。その時、フェアリートーン達が何かに気付き騒ぎ始める。

「大変ソソ！向こうの方向で、虹の光が輝いてるソソ」

「あれは、パルミエ王国でナッツが言ってた状態に似てるララ」

「ニヤンですとおお!?確かめてみるニヤ!」

ソリー、ラリーに言われたハミイが、確認の為にミラクルガイドライトのスイッチを入れると、先端のハートマークが激しく点滅し、虹の光が横浜スタジアム方面へと延びていった。

「セイレーン！響、奏、アコ、ピーちゃん、大変何だニヤ！向こうの方で、何かが現われたニヤ!!」

響達の下に駆け寄ったハミイから詳細を聞いた一同、

「ピーちゃんのリ応と、何か関係があるかも知れない……」

「そうだね……行こう!!」

奏の言葉に頷いた響は、一同の顔を見つめ頷き合うと、横浜スタジアム方面へと駆け出した。

横浜中華街、くるみも加えた六人と、ココ、ナッツ、シロップ、そしてもう一人……君達……捜し物をしてたんじゃ無かったの?もうそろそろ、食べるのは止めにしたくない?」

財布の中身を気にしながら、ブンビーがブツブツ何か呟くも、

「エツ!?だつてえ、まだまだ食べれるもん……ただ捜すより、美味しい物食べながら捜した方が効率良いと思うよ?」

「そうですよ!もしかしたら、匂いに釣られて、出てくるかも知れないじゃないですか!」

「うんうん、そうだよ!うらら、良い事言うねえ?」

「エエエ!?それは関係無いでしょうにいい!!」

両手に中華まんを持ったのぞみとうららが、ブンビーに答える。ブンビーはハアと溜

息を付くも、両脇に居るかれんとりんから、痛い視線を感じ、思わずブンビーは二人を引き攣った笑みで見つめた。

「あらあ!?プリキュアのリーダーともあろうお方が、愚痴ですか?」

「そうねえ、リーダーらしい所を、ビシッと示して貰いたいわね!」

この間のTV局において、プリキュアのリーダーだと捏造したブンビーにも手伝わせようと、一同は半ば無理矢理ブンビーを横浜中華街へと連れて来ていた。

「私やココ様、ナッツ様、シロップ様が留守にしている間に、そんな事があつた何てね:」  
「ええ、TVを見ていて、みんなで前にもあつたねって話していたのよ」

くるみの言葉に、こまちが苦笑を浮かべながら、以前にブンビーが、プリキュアのリーダーになってやっても良い発言の事を喋ると、くるみ、ココ、ナッツ、シロップも、あつた、あつたと思いだし、ジツとブンビーを見つめた。

「何、何なのお前達まで!?この間の事は散々謝つたじゃない!もうこの辺で、私はお役御免でも良いと思うんだけど・・・どう?」

「駄目よ!みんなの前でもキッチンと謝って貰うまでは、帰しませんから!」

「そう、そう、あんたと知り合いのあたし達は、みんなに会うの・・・凄く恥ずかしかったんだからねえ」

もう帰って良いか問うも、かれんとりんは、キツとブンビーを見つめ、みんなの前で



キチンと謝るまでは帰さないと伝える。思わずトホホ顔で悄気返るブンビーだったが、

「何か感じるココー！」

「ナツッ！」

ココとナツツが何かの気配を感じ、ナツツはミラクルガイドライトのスイッチを入れた。先端のハートマークが激しく点滅し、虹の光が横浜スタジアム方面へとぞみ達を導くように延びていった・・・

瞬時に顔色を変えたのぞみは、一同を見つめると、

「みんな、行くよ!!」

「[[[[ええ!!]]]]」

虹色の輝きを示す、横浜スタジアム目掛け走り出す一同、共に走り出したものの、直ぐに歩みを止めたブンビーは、のぞみ達の背に手を振りながら、

「やれやれ、やっと解放された! ああ、疲れた・・・帰ろう!!」

首をゆっくり回りながら、ブンビーはのぞみ達に会わないように、石川町駅方面へと逃げるように去って行った・・・

## 2、集結! 横浜スタジアム

なるべく被害が出ないように、まだ選手も観客も入場していない球場内へ、三幹部と

アカンベエを誘導した五人、互いに手を出せず睨み合いが続いていた・・・

「おい、どうすんだよ！このままじゃこっちからも手を出せねえじゃねえか!!」

「うるさいだわさ！今改良してるから、ちよつと待つてるだわさ!!」

ウルフルンに文句を言われ、マジヨリーナはブツブツ言いながらアタラクナルを弄くる。アカオーニは野球ボールを見付けるや、棍棒でノックのようにボールを打って暇を潰していた。

「コラー！勝手に球場内の品物使っちゃ駄目だろう!!」

「うるさいオニ！俺様の勝手オニ!!」

マーチに文句を言われるも、鼻息荒く言い返すアカオーニ、その時ようやく改良が成功したマジヨリーナは、再びプリキュアへと照射する。一瞬避けた方が良いのではと頭を過ぎるも、元に戻る可能性も捨てられない為、一同は一か八かそのまま光線を浴びた。

「さつきと変わらない気もするけど・・・」

「せやなあ・・・婆さん、また失敗何やちやうの?」

ハッピーとサニーにジト目で見つめられ、マジヨリーナは地団駄踏んで悔しがると、「キイイイ！アカンベエ、試しにキュアハッピーとキュアサニーを攻撃してみるだわさ!!」

メガバット型のアカンベエが、そのままハッピーとサニー目掛け倒れ込むも、二人は過信し、そのまま避けずに立って居たものの、押しつぶされてピクピク痙攣する。

ビューティとマーチが大慌てで二人をその場から助け起し、アカンベエから距離を取る。ピースが援護のピースサンダーを放つものの、アカンベエに攻撃が当たる事は無かった。ビューティは額に汗を浮かべながら、

「裏目に出ましたね・・・このままでは、こちらに勝機はありません」

「ヒイヒヒヒ！これで均衡は破れただわさ・・・アカンベエ、プリキュア共をギツタンギタンにしてやるだわさ！」

「こりゃあ良い！俺様も加わるか」

「愉快オニ！」

徐々に追い詰められていくハッピー達五人、キャンディは泣きそうな表情を浮かべながら、必死にミラクルガイドライトを降り続けた・・・

その時、三塁側入り口から球場内に現われた四つの影、咲、舞、満、薫がグラウンド内に入ってくる。三幹部も、プリキュア達も驚いて四人を見つめる中、妖精姿に変化したフラッピーとチョッピー、ムーブとフープは、

「キャンディ！待たせたラピ！！」

「咲、舞、満、薫、キャンディ達を助けて上げて欲しいチョッピー！！」

「フラッピ、チョッピ、ムーブ、フープ、ありがとクル！ハッピー達を助けてクル！！」  
妖精達は頷きコミュニケーション姿に変化し、咲達四人がクリスタルコミュニケーションを手にする  
と、

「何だかまだよく事情が飲み込めないけど・・・舞、満、薫、あの子達を助けよう！！」

「「エエ！！」」

咲の合図に三人が頷く、咲と舞が、満と薫が手を握り合い叫ぶ・・・

「「デュアル・スピリチュアル・パワーツ！！」」

「花ひらけ大地に！！」

「はばたけ空に！！」

「未来を照らし！！」

「勇気を運べ！！」

「輝く金の花！キュアブルーム！！」

「きらめく銀の翼！キュアイーグレット！！」

「ふたりはプリキュア！！」

「天空に満ちる月！キュアブライト！！」

「大地に薫る風！キュアウインディ！！」

「ふたりはプリキュア！！」

「聖なる泉を汚す者よ！」

イーグレットとウインデイが三幹部を指差し、

「あこぎなマネは、おやめなさい!!」

ブルームとブライトが、アカンベエに鋭い視線を向けた。現われた新しいプリキュアに驚愕する三幹部の前に、レフト側入り口から更なる四つの人影が現われた。

「見て、ブルーム達も居る・・・じゃあ、あれが今回私達を導いた敵って事?」

「どうやら、そうみたい!」

呼吸を整えながら状況を整理する響と奏、

「ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインデイ、久しぶりい!!」

「エレン、再会の挨拶は後にしましょう・・・」

久しぶりの再会に、思わず両手を振ってブルーム達に挨拶するエレンとハミイ、窘めるアコ、ブルームは四人を見て満面の笑顔を浮かべるも、直ぐに表情を引き締め、

「響、奏、エレン、アコ、手を貸して!あの子達を・・・守ろう!!」

「分かりました!あんだ達、悪さをしようと言うなら、私達が」

「「絶対!許さない!!」」

四人が三幹部とアカンベエを見つめながら啖呵を切り、キュアモジューレを手を持つと、

「二」レッツツプレイ！プリキュア！モジユレーション！！」

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！！」

「爪弾くは、たおやかな調べ！キュアリズム！！」

「爪弾くは、魂の調べ！キュアビート！！」

「爪弾くは、女神の調べ！キュアミューズ！！」

「二」届け！四人の組曲！！スイートプリキュア！！」

四人のプリキュアがポーズを決めた！

「ま、また現われやがった・・・一体どうなつてやがるんだ!？」

「何だか嫌な予感がするだわさ・・・アカンベエ、今の内にそいつら諸共、プリキュア達を倒すだわさ!!」

顔中から汗が流れ出す三幹部達、マジヨリーナは、嫌な予感が当たらない内に、攻撃を仕掛けるようにアカンベエに指示を出した。迎え撃つブルーム達、メロディ達、メガホンのアカンベエをブルーム達が、メガバットのアカンベエをメロディ達が迎え撃つ、フラッグのアカンベエの攻撃から、逃げ惑うばかりのハッピー達を、ウィンディとミューズはチラリと見ると、怪訝な表情を浮かべ、

「あなた達、さつきから何をやっているの？」

「さっさとあなた達も戦闘に参加しなさい!!」

ウインデイとミューズの発破を受け、思わず顔を見合わせ合うハッピー達五人、五人を代表したビューティは、申し訳無きような表情を浮かべながら、

「申し訳ありませんが、私達は敵の攻撃を受けて、攻撃を敵に当てる事が出来ない状態なので……」

ビューティの説明を聞き、思わず溜息を付くウインデイとミューズ、ハッピー達に迫る攻撃を、ウインデイの突風が、ミューズのスパークリングシャワーが遮り、ハッピー達を援護する。思わず感謝の言葉を述べるハッピー達五人、ブライトはハッピー達を見ながら、

「でも、彼女達を守りながらの戦いでは、こちらが不利ね……」

ブライトの言葉に振り向いたブルームは、満面の笑みを浮かべながら、

「ブライト、大丈夫だよ! 横浜には、私達の頼もしい仲間達がまだまだ居るもの……みんなもきつと駆けつけてくれる!!」

「そうね……じゃあ私達は、私達のすべき事をしましょう!」

ブルームの言葉に納得し、今自分達の出来る事を優先させようと、アカンベエに対し、光を交えた戦い方を繰り広げていくブライト、風を使った攻撃を繰り広げるウインデイ、

「あんな攻撃の仕方があるんだ・・・」

「ホンマや・・・ウチらの戦い方にも、何や参考になりそうやなあ」

マーチとサニーは、先輩達の戦い方を見て、二人は勉強になるようにで熱心に見入っていた。

怒濤のラッシュで、メガホンのアカンベエに猛攻を掛けるブルーム達四人、巧みな連係攻撃で、ハッピー達からメガバットのアカンベエを引き離していくメロディ達、

「クウ、情けないオニー！俺様が直接やってやるオニー!!」

アカンベエの不甲斐なさに苛立ち、自ら棍棒を抱えハッピー達にノックの雨霰を浴びせるアカオーニだったが、

「ちよおつと待ったああ!!」

「あれが新しいプリキュア・・・良かった、ブルーム達、メロディ達が、私達より先に到着して居てくれたわ!」

アカオーニの攻撃に、三塁側入り口から待ったを掛けたのはなぎさ、ほのか、ゆり、ひかりの四人、更にライト側入り口からは、

「もう戦いが始まつてるわ！私達も急ぎましよう!!」

こまちの言葉に直ぐに反応するのぞみ達、三幹部は更に現われた10人の少女達を見て呆気に取られ、



「ま、まだ出てきやがるのか?」

「ゴキブリみたいオニ!」

「コラア! 私達をゴキブリ扱いするなあああ!! ほか、ひかり、ゆり、のぞみ達も・・・  
変身するよ!!」

現われたなぎさ達やのぞみ達を見て、ウンザリした表情になるウルフルンとアカオー  
ニに、ゴキブリみたいだと言われたなぎさは、烈火の如く怒りを露わにする。のぞみも  
頬を膨らまし、なぎさの言葉に同意すると、

「うん、私達をゴキブリ扱いするなんて・・・許せないんだからああ! みんな、行くよ!!」  
「[[[[YES!!]]]]」

のぞみの言葉に同意するりん達とくるみ、10人の少女達が変身アイテムを構える  
と、

「[[デュアルオーロラウエーブ!!]]」

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」

「プリキュア! オープンマイハート!!」

「[[[[プリキュア! メタモルフオーゼ!!]]]]」

「[[[[スカイローズ! トランスレイト!!]]]]」

「光の使者・キュアブラック!」

「光の使者・キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア！！」

「闇の力の僕達よ！」

「とつととお家に帰りなさい！！」

「輝く生命、シャイニールミナス！光の心と光の意志、全てをひとつにするために！」

「月光に冴える一輪の花・キュアムゥンライト！！」

「大いなる、希望の力！キュアドリーム！！」

「情熱の、赤い炎！キュアルージュ！！」

「弾けるレモンの香り！キュアレモネード！！」

「安らぎの、緑の大地！キュアミント！！」

「知性の青き泉！キュアアクア！！」

「「「希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく5つの心！Yes！プリキュア5！！」」」

「青いバラは秘密のしるし！ミルキイローズ！！」

変身を終えた少女達がグラウンドに降り立つと、ハッピー達五人は、次々この場に現われて来る先輩達の姿を見て、目を輝かせるのだった・・・

一方、港の見える丘公園を搜索していたラブ達は・・・

「ラブだったら……あたし達、遊びに来た訳じゃ無いのに……」

「ラブちゃん……あの子達を見て、昔の自分を思い出したのかも知れないね？」

「でも、今はそれどころじゃないわ……ラブ、いい加減にして！」

美希、祈里、せつなの視線の先に居るラブは、ジャージ姿の地元中学の三人組の女の子達に、ダンスのアドバイスをしていた。ラブは、一生懸命ダンスの練習を頑張る彼女達を見ていると、ミユキにダンスを習っていた自分達の事を思い出し、ついアドバイスをしてしまっていた。

「ゴメ〜ン！じゃあみんな、私達用事があるからこれで……ダンスの練習頑張ってね！」  
女の子達に声を掛け、ラブが頭を掻きながら三人の下に戻って来ると、タルトはそんなラブを見て昔を思いだし、

「ピーチはん、ホンマにダンスの事好き何やなあ？」

「うん！私、ミユキさんみたいになるの、今でも夢だもん!!」

タルトの言葉に満面の笑みを浮かべて微笑むラブ、

「ミユキさんと言えば……もう一人のみゆきちゃん達は大丈夫かしら？」

「そうね、私もそうだけど、彼女達もクライナーについては詳しくは知らないんでしょう？」

美希はもう一人のみゆきを思いだし、ちゃんと搜索出来て居るか心配すると、せつな

も少し心配そうにしていた。その時、祈里が抱いていたシフォンが目を覚ますと泣き出し、一同は慌ててシフォンをあやし始める。

「何や、シフォンの様子がおかしいなあ・・・もしかして!？」

訝しんだタルトが、ミラクルガイドライトを取りだしスイッチを入れると、先端のハートマークが激しく点滅を始め、虹の光が横浜スタジアム方面に延びていった。

「これって、パルミエ王国でナッツが言ってた・・・」

「ええ、それにあの方角は、みゆきちゃん達が調べてる横浜スタジアムの方角だわ!」

「みゆきさん達、大丈夫かなあ!？」

ラブ、美希、祈里、タルト、シフォンがせつなを見つめると、頷き返すせつな、

「行きましょう!彼女達の下に!!」

せつなはアカルンを呼び出すと、一同は赤い光と共に消え去った・・・

目の前に次から次へと現われてくるプリキュア達を見て、動揺する三幹部達であったが、

「チツ、プリキュア何ぞ、何人集まろうが俺様の敵じゃねえんだよ!10人だろうが、20人だろうが、纏めて相手になってやるぜ!!」

「そうオニ!返り討ちにしてやるオニ!!」

「いや、もう此処に居るだけで．．．20人を超えてるだわさ」

「エエエ!？」

気合いを込めるウルフルンとアカオーニに、マジヨリーナが冷静な突っ込みを入れると、二人は激しく動揺する。そして、更なる追い打ちが三幹部を待っていた．．．

三墨側入り口からゼイゼイ息を切らせながら駆けつけたつぼみ、いつき、えりか、そして、ハッピー達五人の前に、あの時同様瞬間移動で現われたラブ、美希、祈里、せつな、

「つぼみ、えりか、いつき．．．遅いわよ!」

「ムーンライト!もう駆けつけてたんですね．．．って、みんな来てるし」

遅れた原因のえりかを思わず睨むつぼみ、えりかは口笛を吹きながら視線を逸らし、思わずいつきが苦笑を浮かべる。ムーンライトも口元に笑みを浮かべながら、つぼみ達三人を見つめた。

「私達が一番最後になっちゃったね．．．でもハッピー達が無事で良かった!美希たん、ブッキー、せつな、つぼみちゃん達も．．．行くよ!!」

「「ハイ!!」」

ラブの合図に頷き、遅れてきた一同が変身アイテムである、リンクルンとココロパフュームを手に取り身構えると、

「「「チェインジ・プリキュア！ビートアップ！！」」」

「「「プリキュア！オーブンマイハート！！」」」

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュユ、キュアピーチ！！」

「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュユ、キュアベリー！！」

「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュユ、キュアパイーン！！」

「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュユ、キュアパッション！！」

「「「レッツ！プリキュア！！」」」

「大地に咲く一輪の花・キュアプロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花・キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花・キュアサンシャイン！」

「「ハートキャッチプリキュア！！」」

変身したピーチ達、プロッサム達も加わり、今、横浜スタジアムにプリキュアオールスターズが集結した！！

### 3、 出会い

目の前で身構える先輩達の多さに、ハッピー達は呆気に取られるも、

「プリキュアって・・・こないに居たんかあ!？」

「10、20・・・アアン、指が足りないよおお！」

「私達に・・・ピーチ達以外にもこんな大勢、頼りになる先輩達が居た何て」

「はい！私達も含めて、総勢30人・・・心強い事です!!」

「うん、こんなにプリキュアのみなどと出会えて・・・私、ウルトラハッピー!!!」

目を輝かせながら先輩プリキュア達の勇姿を見つめるサニー、ピース、マーチ、ビューティ、そしてハッピー・・・

マリンは少し意地悪そうに、口元に笑みを浮かべ右手人差し指を振ると、

「チツチツチー！他にもまだ五人居るし、ブロッサムのおばあちゃんもプリキュア・・・まあ、何れ会えるかもね？」

「エエエ!?そう何ですか?」

「うん、私達と似てる女の子達が居るんだよ！ダークプリキュア5つて言って、今は地球に居ないけど・・・私達の大切な仲間なの!!」

マリンの言葉に驚くハッピーに、優しく微笑み掛けるドリームが、ダークプリキュア5の事を教えるも、

「ドリーム！今はそんな世間話をしている時じゃないでしょうが?」

ルージュに怒られ、思わず髪をポリポリ掻いてゴメンと謝るドリーム、そんなドリームを見て、ハッピーは親近感が湧くのだった・・・

「おのれええ、何て数だ・・・」

「アカンベエ、何してるオニ！プリキュア達を倒すオニ!!」

あまりの人数の多さに焦り出すウルフルンとアカオーニ、二人がアカンベエに指示を出すも、ブルーム達が精霊の輝きを見せつけ、メガホンアカンベエを圧倒すれば、メロディ達が、ハーモニーパワーでメガバットアカンベエを追い込んでいく。

「精霊の光よ！命の輝きよ！」

イーグレットとウィンデイが叫べば、

「希望へ導け！二つの心！」

ブルームとブライトが叫ぶ、

「プリキュア！スパイラル・ハート・・・」

「プリキュア！スパイラル・スター・・・」

「プリキュア！ツッシュ!!!」

四人のプリキュアから放たれた精霊の光が、アカンベエを飲み込んで行く。赤玉が消え去り、星のキュアデコルが振ってくるのを手にするブルーム、それを見てキャンディは大喜びするのだった。



メガバットアカンベエは、メロディ達の攻撃を受け、大ダメージを負っていた。此処を勝負所と見たメロディ達は、

「出でよ、全ての音の源よ!!」

クレツシエンドトーンを召喚した四人、

「届けましょう、希望のシンフォニー!」

両腕をクロスしたまま、クレツシエンドトーンの金色の光の炎と一体化した四人は、

「プリキュア! スイートセツション・アンサンブル・クレツシエンド!!」

「ファイナー!!!」

四人の合図と共にアカンベエの負のエネルギーが爆発し、アカンベエを浄化した。上空からキラキラ舞い降りてきた、イルカのキュアデコルを手に入れたメロディが不思議そうに見つめる。

「またまた、キュアデコルを手に入れたクル!!」

キャンディの目がキラキラ輝き、二組のプリキュアの技を見たピースの目も、キラキラ輝き続けた。

「ダダダダダダダダ!」

「ヤアアアアアア!!」

ハッピー達を狙っていたフラッグのアカンベエを見るや、ルミナスがバリアーを張りアカンベエの攻撃を防ぎ、瞬時に動き怒濤の連打でアカンベエを攻撃するブラックとホワイト、二人のパワーの前に、忽ちライトフェンスまで押されるアカンベエ、

「や、野郎、何てパワーだ・・・アカンベエ、負けんじゃねえ!!」

ウルフルンの発破を受け、アカンベエが右パンチを繰り出すも、回転したホワイトに腕を掴まれ投げ飛ばされる。ブラックは右手を、ホワイトは左手を高々と掲げると、

「ブラック、サンダー!!」

「ホワイトサンダー!!」

「プリキュアの、美しき魂が!」

「邪悪な心を打ち砕く!」

「プリキュア! マーブルスクリュー!!」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて一旦引いた手を前に突き出すと、

「マックスス〜!!」

ブラックとホワイト、二人のマーブルスクリューの直撃を受け、アカンベエは倒され、ブラックは口紅型のキュアデコルを手に入れた。

プリキュア達の前に三体のアカンベエを倒され、口を開けて呆然とする三幹部、

「クッ! こうなればハッピー達だけでも・・・」

「痛めつけるオニ!!」

ハッピー達目掛け突撃するウルフルンとアカオーニだったが、ドリーム達、ブロッサム達が立ち塞がり、サファイアアローが、ファイヤーストライクがウルフルン目掛け飛ぶ、何とか攻撃を躲したウルフルンだったが、ドリームのシューティングスターを受け、悲鳴を上げながら吹き飛ばされる。

一方のアカオーニ、涙目になりながら逃げ惑うピース目掛け棍棒を振り下ろすも、割って入ったムーンライトが、右手で棍棒を掴み、アカオーニの動きを封じると、ジャンプしたブロッサムとマリリンが、ブロッサムシャワーとマリリンシュートを、接近したサンシャインがサンシャインインパクトを放ちアカオーニを吹き飛ばした。

「凄おおおおい!!」

益々目を輝かせるハッピー、ピース、キャンディ、

「何ちゆう強さや!?!ウチら、良いとこ無しやなあ?」

「そうだね・・・でも、先輩達の戦い方、参考になつたよ!」

サニの言葉を受けたマーチの言葉に、微笑みながら無言でビューティも頷いた。

脇からプリキュア達目掛け、アタラナクナルを撃とうとしたマジヨリーナの前に、ピーチ達が前を塞ぐや、アタラナクナルを破壊した。マジヨリーナは悲鳴を上げながら逃げ惑い、徐々に追い詰められた三幹部は背中合わせになると、

「お、お前らああ、覚えてろ!!」

「次は負けないオニ!!」

「必ずお前達に赤っ恥をかかせてやるだわき!!」

三人は、這々の体で横浜スタジアムから逃げ帰るのだった・・・

「み、皆さん、私達を助けてくれて・・・」

「「「「ありがとうございます!!」」」」

先輩プリキュア達に頭を下げてお礼を言うハッピー達に、一同は笑顔を浮かべ、

「ウウン、同じプリキュアの仲間ですもの、気にしないで!!それより、早く変身を解除して此処から出ましょう」

苦笑を浮かべながらホワイトが一同に話し掛けると、一同も気付き、大慌ての少女達  
が変身を解いて出口へと向かった・・・

「ウウウン・・・私、どうして・・・あらあ？あれは・・・」

意識を取り戻した佐々木先生の視線に、数十人の少女達の一団がライト側入り口から出てくるのが目に入った。その中には、自分のクラスの教え子であるみゆき達五人の姿もあり、見る見る佐々木先生の表情が引き攣ってくる。

「青木さん！緑川さん！日野さん！星空さん！黄瀬さん！ちよつとこつちに來なさい！！」

「どうしよう．．．あそこに居るの、私達の担任の先生なの！きつと勝手に中に入った事に氣付いて．．．怒られちゃうよお！！」

名前を呼ばれた五人の顔が引き攣り、みゆきはどうしようとパニクリ、先輩達に助けを求めた。みゆき達から咲達に、咲達からのぞみ達、のぞみ達からラブ達、ラブ達からつぼみ達、つぼみ達から響達、響達からひかりに、そして、困惑する一同の視線が、一斉になぎさ、ほのか、ゆりへと向けられる。

「エッ!?私達が一緒に行くの?」

「仕方が無いわね．．．」

「彼女達の為だものね．．．そうだわ!タルト、ハミイ、ピーちゃん、ちよつと協力して欲しいんだけど?」

なぎさ、ゆり、ほのかも覚悟を決め、ほのかは何か考えが浮かんだのか、タルト、ハミイ、ピーちゃんに協力を仰ぐのだった。

「あなた達、一体どういうつもりですか?勝手に中に入ったら駄目でしょう!!」

「!!!ゴ、ゴメンなさい．．．!!!」

佐々木先生に怒られ、悄気返りながら謝る五人、なぎさがピーちゃんを、ゆりがハミイを、ほのかがタルトを手に抱え、みゆき達を庇うように前に出ると、

「彼女達を叱らないで上げて下さい……実は、私達のペットのフェレット、猫、鳥が、球場内に逃げ込んでしまつて……彼女達も私達に協力してくれただけ何です！」

（わいは、可愛い、可愛い、妖精さん何やけどなあ……）

タルトは心の中でそう呟いたものの、ほのかの言葉に合わせるように、タルトがハミイに合図を送り、ハミイとピーちゃんが騒ぎ暴れ出す。なぎさとゆりもほのかの話に合わせてるように、

「よしよし、もう大丈夫だからねえ……アハハハハ、すいませんー！ご迷惑掛けちゃつて」

「これから協力してくれたお礼に、彼女達を食事に誘つていた所何です。ですから、彼女達の事を……」

「叱らないで上げて下さい」

「よろしゅ……フガアア」

「ニャー！」

「プイイ」

なぎさ、ほのか、ゆりが謝ると、三人に釣られるように、タルトが言葉を喋りそうになり、慌ててほのかが口を塞ぎ、ハミイとピーちゃんも佐々木先生に頭を下げる。

(そういう事だったのね！でもこの猫と鳥、人間の言葉が分かつてるような気もするわねえ？フェレットに至っては、喋ってた気が・・・きつと気のせいね!!)

佐々木先生は納得すると、みゆき達に微笑み掛け、

「分かりました！人助けしたのは良い事ですけれど、二度と勝手に中に入ったりしたら駄目ですからね!!」

「「「「はあい！」」」」

何とか佐々木先生を誤魔化した一同、仲間達と合流すると、流石年長者と嬉しくない褒め言葉を掛けられ、なぎさ達三人は苦笑を浮かべるのだった。

「そうだ！みんなにみゆきちちゃん達の事を紹介するね！」

ラブは、みゆき達五人を中心に持つてくると、仲間達にみゆき達の紹介を始めるのだった・・・

親睦を深め合う少女達から、笑い声が溢れていた・・・

「くるみ、せつな、エレンも揃ってるし、みゆきちゃん、あかねちゃん、やよいちゃん、なおちゃん、れいかちゃんの歓迎会も兼ねて、この間の続きでもやろうか？」

「そうね・・・じゃあ、一先ず捜索は中断して、歓迎会でもしましょう！」

なぎさの言葉にほのかも同意すると、真つ先にのぞみが大喜びしてバンザイをする。

そんなのぞみを、醒めた目で見たなぎさは、

「アツ、言い忘れてたけど・・・くるみ、せつな、エレン、妖精のみんなと、みゆきちやん達以外は・・・自腹だからね!!」

「「「エエエエエエ!!」」」

なぎさの言葉に、咲、のぞみ、うらら、ラブ、響が泣き出しそんな顔で嫌々をする。

「あんた達、この間散々食べたでしょう!?!お陰で私達・・・卒業旅行行けなかつたんだからねえ!!」

なぎさは口を尖らせ、縋り付くのぞみ達に、断固驕らないと拒否をすると、一同から苦笑が漏れた。

「のぞみ!..こういう時こそブンビーに・・・って、そう言えば、ブンビーの姿が見当たらないわねえ?」

りんがブンビーの事を思い出すも、ブンビーの姿が見当たらず、りんはかれんと顔を見合わせると、

「逃げたわね!!」

「ブンビー、来てたんだ?」

なぎさの言葉に、渋い表情を浮かべたかれんは、

「ええ、みんなの前でも謝らせようと思って・・・全く!」



「まあまあ、かれん！これから歓迎会を始めるんだし、その件は忘れましょう・・・ブンビーさんだって、私達に協力してくれたんだし」

「それはそうだけど・・・そうね、せっかくの歓迎会ですものね・・・なぎささん！今回は私とこまちも支払いますから、みんなにも御馳走して上げましょう!!」

「本当!?!流石かれんさんにこまちさん!!」

大喜びののぞみ達が、かれんとこまちに抱きつき感謝する。なぎさはハアと溜息を付くものの、可愛い後輩達が大喜びする姿に目を細めるのだった。

魔界・・・

不気味さ漂う森の中、瞑想しているサデイスを見つめるベガとデイクレ、サデイスは目を見開くと、

「微かにクライナーの感覚があるね・・・幸か不幸か、あの忌々しいプリキュア共の力も感じた・・・」

「ほう、我らも見ておく必要があるな・・・なあ、デイクレ?」

「そのようだな・・・あの時と違い、プリキュア共はその数を増やしたと言うからな!!よし、我らも今回は出向くでしょう!!」

サデイス、ベガ、デイクレが右手を挙げると、空間が歪み始める。三人はその歪みの

中に消え去った・・・

プリキュアオールスターズは、まだこの事を知る由も無かった・・・

第四十四話：集え！プリキュアオールスターズ！！

完

## 第四十五話：親睦を深める少女達

### 1、東の間の休息

横浜の地に集結したプリキユア達、バッドエンド王国の三幹部を追い返し、横浜スタジアム隣の、横浜公園で東の間の息抜きをしていた・・・

前にラブ達が想像していたように、なおは、なぎさ、咲、りん、響達とスポーツ談義をして盛り上がっていた。そんな一同を、ゆりと奏はクスリとしながら見つめていた。なおは一同を見つめながら、

「なぎささんは、ラクロス！咲さんはソフトボール、りんさんは、部活の助っ人の末フットサル、響さんは、昔のりんさん見たいに部活の助っ人・・・」

「へえ、詳しいねえ・・・最も、私は高校卒業したから、もうラクロスはやって無いんだけどね」

「私達は高校でも続けてるよね」

高校になっても、共にソフトボールとフットサルを続けている咲とりん、咲の言葉にりんも頷くも、

「ほら、最近女子サッカーがブームでしょう？私も本当はサッカーの方が良かったんだけど、うちの学園はフットサル部しかないから、なおが羨ましいわね・・・そういうえば、響の学校もサッカー部あったよね？」

「ええ、でも私達も中三だし、部活の助っ人は、もう引退かなあ・・・私、出来れば高校に行ったら、音楽の方を中心にしたいなあと思ってるんですけどね・・・」

「響・・・音楽も良いけど、その前に勉強ももつと頑張らないとねえ？」

「奏・・・五月蠅いよ！」

奏に凶星を指摘され、響が口を尖らせて文句を言うのと、思わず一同から笑い声が響き渡った。

「これだけ仲間が増えたし・・・今度、スポーツ大会でもやろうか？」

「へえ、面白そうじゃない・・・私、賛成!!」

「良いですねえ！面白そう!!」

「私も賛成!!」

咲の提案に、りんが真っ先に同意し、なおと響も賛成するも、奏はエエといった表情を浮かべると、響は先程の仕返しとばかりに、

「奏は運動ウンチだからねえ・・・」

「響、下品よ！せめて運動音痴って言うってよね!!」

「それは響と比べてるからであつて、私から見ても、奏はそれほど運動が苦手には見えないわよ?」

今度は逆に奏が口を尖らせて響に文句を言うのと、苦笑を浮かべながらゆりが奏のフォローをする。なぎさは似たような仕草をする響と奏を見て思わず笑い、

「アハハハ! 響、奏、あんた達、相変わらず仲良いね! でも、確かにこれだけ人数増えたし、面白そうかもね・・・ああ見えて、ほのかやゆりもスポーツ得意な方だし、他の子達の意外な面が見られるかもね・・・ねえ、ゆり?」

「エツ!? そうね・・・悪い案では無いとは思うけど、乗り気な響はともかく、受験生のかれんやこまちに、無理強いするのはどうかと思うわよ?」

突然名前を呼ばれたゆりは驚きつつも、咲の提案自体には異論は無いものの、受験生のかれんやこまちを、無理矢理誘うのは止めた方がいいとなぎさに釘を刺した。なぎさは頷きながら、

「ゆり、大丈夫! かれんとこまちに無理強いはいしないよ!」

「そう・・・なら良いんだけど」

「じゃあ、今度みんなに話してみよう!! 実現できるかどうかは分からないけどさ・・・」  
なぎさも、咲の提案に同意し、今度みんなに話してみようと言うと、苦笑を浮かべる

ゆり、変顔を浮かべ困惑する奏を除いたスポーツ組は、異議無しと言いながら微笑んだ。

「へエ、ひかりさんの従姉って、ウチと同じ名前何や？それにたこ焼き屋何て・・・その人、やるやん!!」

あかねはウンウン頷きながら、今度連れてつてとひかりに頼み込み、ひかりは満面の笑顔浮かべながら頷き同意する。

「きつとアカネさんも喜ぶと思いますよ！関西の方の意見も聞いてみたいって、前に言っていましたから・・・」

「ホンマア？その人、話分かるわあ！ウチ、その人のたこ焼き食べてみたいわあ・・・でも、ウチはたこ焼きにはちとうるさいよ！」

あかねは、ひかりの従姉が自分と同じアカネと言う名前だと知り、且つたこ焼き屋をやっていると聞き、興味深そうにひかりの話聞いていた。エレンとうららも会話に加わり、

「実は、私もまだTAKO CAFEには行った事無いのよねえ・・・あの頃はマイナールランドと戦ってたし、戦いが終わったら、ハミイと一緒にメイジャーランドに帰ったし・・・私も食べてみたいなあ・・・アツ、私、猫舌だから、熱いのは苦手何だけど・・・」

「エエエ!? たこ焼きは、熱々を食べてこそ美味さが分かるんやでえ・・・」

エレンが熱い食べ物は苦手だと言うと、あかねは目を点にし、たこ焼きは、熱い出来

立てを食べてこそ、美味さが分かるとエレンに講釈を始める。根が真面目なエレンは、ウンウン頷きながらあかねの話を熱心に聞いていた。

「本当に美味しいんですよおお！何せ、たこ嫌いな美希さんだって、美味しいって言ったぐらいですから・・・ねっ、ひかりさん？」

うららはニコニコしながら、嘗てTAKO CAFEで、美希が無理矢理ながら渋々たこ焼きを食べた時に、美味しいと言つてた事を伝えるも、ひかりは苦笑を浮かべながら、

「アハハハ！でも美希さん、結局その後、やつぱりたこは嫌だつて言つてましたけど・・・」  
会話の最中、美希のくしやみが聞こえ、思わず顔を見合わせた四人は、クスリと微笑んだ。

やよいは、アコが小学生だと知り、小学生なら特撮やアニメを見ているだろうと、アコに話し掛けたものの、

「何それ？そんなお子様のテレビ何て見ないわよ！そう言えば、奏太なら見てたわね・・・でも、あなたも中学生なら・・・ニュースぐらい見たらどう？」

「エエエエエ？」

お子様を見る番組何て見ないと蔑んだ目でアコに言われ、逆にニュースでも見ればと

言われ動揺したやよいだが、微かな光明を見だし、恐る恐るアコに再び話し掛けると、  
「あのお・・・奏太さんって？」

「奏太？奏の弟の名前よ！ほら、向こうで響達と一緒にいる子、あの子が奏太の姉の奏  
!!」

奏太の事をアコに聞いたやよい、弟が見ているのなら、姉である奏も見ているのでは  
と、キラキラ輝く視線を奏に浴びせるやよい、奏は思わず背筋に悪寒が走るのだった。

アコは呆れた表情を浮かべながら、

「言っておくけど・・・奏はあなたと違って、そんな番組見ないから！」

「ガアアアアン」

その場で膝を付きそうなくらいショックを受け玉砕し、涙目になるやよいであつ  
た・・・

そんなやよいを見兼ねたラブ、せつな、つぼみは、

「やよいちゃん・・・相当ショック受けたみたいだね？」

「まあ、アコもきつい所があるから・・・悪気は無いんだけど」

「そうですね・・・やよいさん、大丈夫でしょうか？」

何とか励ましてあげようと相談し合う三人、せつなはラブを見ると、

「ラブ、ラブは前にヒーロー物見てたって言ってたから、それとなく話し掛けてみれば



「？」

「エエ!?私が見てたのは子供の頃だから、最近のは全く分からないよ……」

「私はそういう番組は見た事無くて……チンプンカンプンですう」

思わず三人で小首を傾げるラブ、せつな、つぼみ、ラブは何かを閃くと、

「そうだ!やよいちゃん、絵を描くのも好きだって言ってたよね……舞ちゃん!ちよつと良いかな?」

「なあに、ラブさん?」

やよいが絵を好きな事を思い出し、やよいと同じ絵を描くのが好きな舞に、やよいの事を教えると、舞は苦笑を浮かべながらも、励ます事に同意し、四人は苦笑混じりにやよいを慰めた。

「私、お兄ちゃんが居るから、小さい時なら一緒に見てたけど……」

「そう言えば、舞のお兄さんって、宇宙飛行士目指してるのよね?」

「ええ、そうよ!今でも宇宙飛行士目指して頑張っているわ!!」

せつなは、舞の兄和也の話題を振ると、舞もニコニコしながら兄の事を語っていたのだが、

「宇宙キタ~~~~!!」

突然目をキラキラさせたやよいが、両腕を挙げながら叫び、思わず目が点になるラブ、

せつな、つぼみ、舞、一方アコは冷ややかな視線をやよいに浴びせると、やよいはアレ？という表情を浮かべ一同を見渡した。

「あのお・・・舞さんのお兄さんって、ヒーロー番組見て宇宙飛行士目指してるんじゃない？」  
「エツ!?家のお父さん、天文学者だから、私もお兄ちゃんも、小さい頃から星に興味を持つていたから・・・」

苦笑混じりに舞がやよいの想像を否定すると、やよいは涙目になりながら失敗したと心の中で呟き、アコとせつなは冷めた視線をやよいに浴びせた。

(何だかこの子、ウエスターとは別の意味で疲れるわねえ・・・)

思わず厄介な仲間が増えたものと溜息を付くも、苦笑混じりにやよいを慰めるせつなだった・・・

「ラブ達から聞いてたけれど、れいかさん、生徒会副会長を為さっているそうね・・・私も経験あるけど、大変じゃないかしら？」

「そうですね・・・みんなの意見を纏めるのも大変じゃないかなあ？」

れいかは、生徒会副会長の要職に付いて居る事をラブ達から聞き、かれんといつきは、れいかも苦労しているのではないかとそれとなく問い掛けると、れいかも神妙な面持ちで頷き、

「はい、苦勞することも多々ありますが、皆さんの笑顔を見た時の充実感がありますね」「れいかさんは、生徒会活動が合ってるのかも知れないわね・・・」

ベローネ学園中等部の時に、生徒会をやっていたほのかも会話に加わり、れいかの発言を聞いていて、れいかは生徒会の活動が合っていると思うほのかだった。

れいかは、生徒会の話題が出た事で、自分の悩みを先輩達に問い掛けてみようと言りはじめた・・・

「でも、時々迷う事もあるのです・・・私達生徒会は、良かれと思ってやっている事も、皆さんにはちゃんと伝わっているのだろうか・・・」

「そうね、こちらが考えて居る通りには行かない事もあるわよね・・・私も嘗て、部活動の予算で悩んだ事があったわね。あらかじめ予算は決っているから、出来ればその予算内で活動してくれば良かったんだけど、消耗品もあつて中々ね」

「そうよね・・・うちの生徒会は、男子部と女子部が合同でやってたから、うちの生徒会も苦勞してたものね・・・」

かれんの言葉にほのかも同意する。いつきは苦笑を浮かべながら、

「僕の学校は、お爺さまが理事長をしてましたから、困った時には相談してましたね」

「ええ、私も理事長に掛け合ってみようとしたんだけど、結局は駄目だった・・・後で知つただけけれど、理事長は、他にまだ出来る事を見通していたのね！悩んだ私に、こま

や、のぞみ、りん、うららが協力してくれて、違う部活同士、上手くやりくり出来る案を活かして乗り切った事があるわね」

「私もプリキュアになる前、生徒会の試みで、子供達に人形を使った朗読会をしたんですが、生徒会長が熱を出し、人数が足りず困り果てていた私達を、なおやみゆきさん、あかねさん、やよいさんが力を貸して下さり、乗り切った事がありました！その事が、私がプリキュアになる切っ掛けにもなったのですが・・・」

「ええ、時には友達のを借りる事も、決して間違いない筈よ！」

時には仲間達の支えが大事な事を、身を持って経験していたかれんは、思わずごまち、のぞみ、りん、うららを見つめて目を細めた。かれんは、れいかに参考になればと、自らの経験談を再び語り始めた。

「後、私は、目安箱を設置して、生徒達の意見を募った事があったわね。ほら、口では言えないけれど、文字にしてなら伝えられる人も居るじゃない？それで試しに設置してみたら、意外と好評だったわ！機会があれば、れいかさんの学校でも試してみたらどうかしら？」

れいかは、生徒会で活動していたほのか、生徒会長だったかれんといつきにアドバイスを貰い、嬉しそうに何度も頷くのだった。

そして、みゆきは・・・

「ラブさん達に聞いたんですけど・・・のぞみさんのお父さんって、童話作家さん何ですか?」

「うん、そうだよ! ひよつとして、みゆきちちゃんってえ、童話に興味あるの?」

「はい! 私、絵本やおとぎ話を読むのが・・・子供の頃から、大、大、大好き何です!!」  
鼻息荒く、目をキラキラ輝かせながら、絵本とおとぎ話が大好きだとのぞみに伝えるみゆき、それを聞いたのぞみも目を輝かし、

「本当?じゃあ、今度私の家遊びにお出でよ!お父さんが聞いたら大喜びするよ!!  
あつ、私のお父さん、夢原勉って言う童話作家なの・・・そんなに有名じゃないかも知れないけど、本屋さんで見掛けたら読んで見てね!!」

「はい!絶対、絶対、絶くく対読みます!!」

目をキラキラ輝かせるみゆきに、ありがとうとみゆきの手を取り、目をキラキラさせるのぞみ、遠目に見ていたこまち、くるみ、満、薫、美希、祈里、えりかは、

「あの二人・・・似てるわね?」

「ええ、何だか他人って気がしないわね・・・」

「本当、姉妹って言われても、納得しちゃうよね」

「二人共、ドジっぼい所もそっくりよね・・・」

顔を見合わせて頷き合う満、薫、えりか、くるみを見て、こまちは苦笑を浮かべると、  
「満さん、薫さん、えりかさん、くるみさん、ドジっぼいは……言い過ぎだと思っわよ  
？」

側に居た美希と祈里もそんなやり取りに苦笑しながら、

「まあ、あたし達も最初に会った時、みゆきちちゃんは、のぞみそっくりな気はしたんです  
けどね」

「確かにそうだけど……でもあの二人、本当に楽しそう！」

一同の視線が再びのぞみとみゆきを見つめる。そんな一同に気付かず、のぞみとみゆ  
きは共に親近感を覚え、一層仲良くなるのだった。

先輩達と親睦を深め合ったみゆき達、一同は、横浜スタジアムの隣にある横浜公園を  
出ると、大さん橋通りを通り、玄武門を潜り、善隣門から横浜中華街へと入って行っ  
た……

今回は急遽決った事もあり、色々歩き回りながら、三十人の大所帯が入れそうな広東  
料理の中華店を選ぶと、少し早めの昼食を取った。まだ開店して間もなかった為か、3  
0人の大所帯で中華料理店に入っても、待つ事なく席に座れた。なぎさがみんな仲間だ  
と伝えると、店の人達が親切な人で、座席数が40人分しか無いからと、一同の貸し切

りとしてくれた。

歓迎会の幹事であるなぎさ、ほのか、ゆり、かれん、こまちの五人が、それぞれ別れてテーブルに座り、仲間達がランダムに五人ずつ座った。

なぎさと同じテーブルに座るのは、満、のぞみ、くるみ、美希、えりかの五人

ほのかと共に座るのは、舞、うらら、つぼみ、奏、あかねの五人

ゆりと共に座るのは、薫、りん、せつな、アコ、やよいの五人

かれんと共に座るのは、咲、祈里、いつき、響、れいかの五人

こまちと共に座るのは、ひかり、ラブ、エレン、みゆき、なおの五人

「前は失敗したからねえ．．．かえってラーメンの方が安上がりだったと悟ったわ！」  
 「なぎさ．．．みつともない事言わないで！折角お店の人達が気を効かせてくれたのに．．．  
 恥ずかしいよお!!」

ほのかは恥ずかしそうに俯きながら、隣のテーブルに居るなぎさを注意するも、

「エエ、でもさあ．．．みんな、ご飯のお代わりは自由だから、ご飯は遠慮無く食べてねえ  
 !!他ののは、絶対駄目だよ!!!」

なぎさが特にのぞみ達を見つめて念を押すと、ほのかは益々恥ずかしそうに俯き、頬を膨らませてなぎさを見つめた。

ゆりは溜息を付くと、ほのか、かれん、こまちを手招きし、同意を得ると各テーブル

3000円のコース料理を注文する。なぎさはエエと驚くも、ほのか達に、コース料理の方がお得でしょうと諭されると、そんなものかしら？と小首を傾げながらも同意した。

回転テーブルの上に次々に運ばれてくる中華料理の数々に、一同から歓声が沸き上がる。えりかは嬉しそうに回転テーブルをグルグル回し、くるみと美希に怒られたり、なぎさ、咲、のぞみ、うらら、りん、響、なおは、美味しい中華料理の数々に食欲が進み、見る見る料理が減っていく、同席している他のメンバーが呆気にとられるなど、少女達は、中華料理を和気藹々と味わいながら、新たなる仲間、みゆき達五人を歓迎するのだった……

そして、妖精達もテーブルの下で、ルセンも交えて親睦を深めていった……

2、みゆき、☒（はぐ）れる……

楽しい食事会も終り、一同は中華街に別れを告げると、再びアンデ搜索の為、山下公園方面へと向かって歩いていった。

「あんだ達の胃袋は化け物かあ！合流する前にも中華街で食べてたそうじゃない！かれんとこまちが居てくれなかったら……今月のお小遣いがペアになる所じやないよ!!」  
変顔を浮かべながら、なぎさがのぞみ、りん、うららを見つめ文句を言うのと、



「いやあ、奢りと聞くと、お腹の方が何時も以上に元気になって・・・ねえ、のぞみ！」  
「うん！凄く美味しかったよ!!でも、もうちよつとデザートはいけたかも!」

「そうですね、デザートは別腹ですし!」

「まあ、確かに奢りだと何時も以上に食欲出るよねえ・・・」

ウキウキしながら先程の料理の事を思い出す三人、なぎさもウンウン頷くと、かれんとこまちは苦笑を浮かべながら、

「でも、のぞみさん達に負けず劣らず、なおさんも結構大食漢なのね?」

「そうね、のぞみ達と良い勝負する人なんて・・・なぎささんや、響ぐらいなものだと思つてたわ」

「イヤア・・・育ち盛りなもので!」

こまち、かれんが苦笑を浮かべながらなおを見つめると、なおは少し照れながら、右手で髪を撫でると、変顔を浮かべたあかねが呆れたように、

「ホンマ、よう食つとたなあ・・・見てたウチらまで食い過ぎた気がしたわ」

「なおは昔から食欲旺盛でしたから・・・」

「ええ、そうかなあ!?!れいかがあんまり食べないんじゃないの?」

小首を傾げるなおに、あかねとれいかは苦笑を浮かべた。のぞみは何か気付いたかのように、なおとれいかに話し掛けると、

「そう言えば、なおちゃんといれいかちゃんって、幼馴染みの？」

「エッ!?はい、幼馴染みです！親同士も知り合いだっただけですし……」

「なおのお父様が、私の家の改築にいらした頃からの知り合いだとか、お母様達と年も近かったそうで、家族ぐるみの交流をしていて、私となおは、同じ年と言う事もあって、物心付いた時には一緒に遊んでいました！」

当時を思い出すように顔を綻ばせていくなおといれいか、なおの父親である源次は、若い頃から腕の良い大工職人だったようで、その腕前を、れいかの祖父曾太郎は大変気に入り、何かあれば源次に仕事を頼み、緑川家と青木家は家族ぐるみの交流をするようになっていた。なおの母とも子と、れいかの母静子も気が合うようで、二人は、幼いなおといれいかをだしに、お互いの家に行き来していた程であった。

「鬼ごっことか良くやったよねえ」

「あの頃からはおは脚が速かったですから、ほとんど私が鬼になってましたけど」

「アハハ、見かねた家のお父ちゃんや、れいかのお爺ちゃんやお兄ちゃんが鬼になって遊んでくれたっけ？」

「私のお母様や、なおのお母様にも遊んで貰いましたね！」

「家のお母ちゃんは、今程じゃないけどあの体型だから、先ず捕まらなかつたけど、れいかのお母さんは凄かったよねえ……まるで動きを読まれているかのように、あたし達、

直ぐ捕まったよね！」

「お母様は、合気道をやってますから・・・」

なおは、そうそうと言いながら笑みを浮かべ頷いた。更に思い出話は続き、

「小さい頃は、良くれいかのお爺ちゃんにお菓子とか貰ったなあ・・・」

「お爺様は、なおの事がお気に入りのように、中学生になつてからあまり家に来なくなつたのを、寂しがつてましたよ」

「そうなの？あたしも弟や妹達の面倒見なくちゃいけないから、れいかの家にも殆ど行かなくなつたからねえ・・・また、遊びに行きますつてお爺ちゃんに伝えておいて！」

「はい！お爺さまも喜びますわ!!」

なおの言葉にニコニコ微笑むれいかだったが、祖父の話題が出た事で何か思い出したのか、

「お爺さまと言えば、勝手に二人でお爺様の部屋に入った時、お爺さまが戻られて慌てて隠れた事がありましたねえ・・・」

「そんな事もあつたね・・・かくれんぼと言えば、れいかの方が得意だったじゃない！」

「ええ！なおはあの頃から虫嫌いで、隠れていても悲鳴を上げていましたから、直ぐ分かりました!!」

「もう！虫嫌いになつたのは、れいかにも責任あるんだからねえ？」

「エッ!? そうだったかしら?」

顔を見合わせ、昔を思い出して笑い合うなおとれいか、そんな和やかなやり取りを見たのぞみとりんは、自分達も幼い日を思い出したかのように、顔を見合わせ微笑むと、「へえ、私やりんちゃんと一緒にだね! 家のお母さん達、学生時代からの親友だった縁で、私とりんちゃんも、物心付いた頃からの幼馴染み何だよ! ねえ、りんちゃん!!」

「そう、腐れ縁って奴よね・・・ラブ、美希、祈里もそう、響と奏もそうだし」

「私とハミイもそうよ! ねえ、ハミイ?」

エレンがハミイを抱き上げ微笑み掛けると、ハミイも嬉しそうに微笑み返した。あかねはそんなエレンに驚いたようで、

「ね、猫と幼馴染みって・・・何やねんそれ?」

「ああ、エレンは今でこそこの姿だけど、元々はメイジャーランドの妖精で、黒猫の姿をしてたんだあ・・・」

「「エエ!」」

響がエレンとハミイの関係をあかね達に語ると、あかね、やよい、なお、れいか、四人は顔を見合わせ驚くも、ある事に気付き驚愕する。辺りをキョロキョロ見渡すと、

「あれ!? そういえば、みゆきが居らへん・・・みゆきいい! 何処や?」

「「みゆきちやああん!!」」

「みゆきさああん!!これだけ呼んで返事が無いという事は・・・」

あかね、やよいとなお、れいかがみゆきの名を叫ぶものの、みゆきからの返事は返つて来なかつた。四人は見る見る顔色を変えると、

「アカン・・・みゆきの奴、迷子になりおつた!!」

「エエエエエエ!!」

辺りをキョロキョロするも、みゆきの姿が見つからず、額から冷や汗を流しながらあかねがパニクると、他のメンバーも一斉に驚きの声を上げた。

「エツ!?何時はぐれたんだろう?」

「お店を出た時には、確かにみゆきさんが居たのは覚えているのですが・・・」

なぎさが何時はぐれたのか記憶を辿らせていると、中華料理店を出た時には確かに居たとれいか答える。

少女達は歩みを止め、後ろを振り返り呆然としていた・・・

その頃、みゆきはまだ一人中華街に残つて居た・・・

何気に見た、店先の看板に出ていた絵本の文字に釣られたみゆきは、ヒョイと店内に入ると、中国の絵本が目に入り、興味深げに本を手に取り表紙と睨めっこをしていた：「へエ、中国の絵本何て初めて見たあ!うくん、でも漢字ばかりでよく分からない

なあ・・・」

絵本を元の場所に戻し、店内を一通り見た後店を出たみゆきだったが、仲間達の姿は消え失せていた。

「エエエ!!みんな、何処行っちゃったの?」

不安そうに辺りをキョロキョロするみゆき、まだこの辺に居る筈だとみゆきは急いで走り出した。だが、地理に詳しくないみゆきが走り出した方角は、山下公園では無く、元町シヨピングモールへと向かっていた。

「ウエエエン!みんなあ、何処?」

半べそ掻きながら走り続けるみゆきは、一人の少女とぶつかってしまい転倒する。

「ゴ、ゴメンなさい!」

ツインテールの少女がみゆきに謝ると、その場から逃げるように足早に去って行った。みゆきは起き上がると、服に付いた汚れを払い、

「あつ、待つてええ!!」

足早に去った少女を、何故か追いかけて始めたみゆき、少女は後ろを振り向くと、血相変えたみゆきを見て驚き、思わず走り出し逃げ出した。

(な、何?!私、ちゃんと謝ったよね?何で追ってくるのおお!!)

逃げている少女は坂上あゆみ、あゆみは、キューちゃん事アンデに話し掛けていてみ

ゆきにぶつかつたと思い、アンデを慌ててポシエットに隠しその場を去つたのだが、ぶつかつたみゆきが追いかけてくる。あゆみはそんなに脚が速い方では無かつたが、懸命にみゆきから逃げ続ける。

一方、みゆきを捜していた一同、人数を三グループに分けてみゆきを探索していた。なおはれいかと共に、咲と舞、のぞみとりん、美希、つぼみとえりか、響と奏達と、元町方面を捜していた。

「みゆきちゃん……何処に行つたんだらう?」

「ええ、無事で居てくれれば良いのですが……」

「みゆきちゃん……大丈夫かなあ?」

みゆきの身を案じるなおとれいか、のぞみも心配そうに辺りをキョロキョロしていると、変顔を浮かべたえりかが、何かに気付き指さし、

「ねえ、あれつて……みゆきじゃないの?」

「エツ!?!ど、何処?」

なおとれいか、顔色変えてえりかが指さす方を見ると、道路を挟んだ反対側の通りを、みゆきが全速力で走っている姿が目に入った。

「何か、前の女の子を追いかけているみたいですねえ?」

「ひよっとして、あの女の子に何か盗られたとか？」

つぼみと奏の言葉に即座に反応し、なお、咲、りん、響が、みゆきの後を追って走り出す。

「アツ、まだそうと決った訳じゃ・・・って、行っちゃったわ」

「私達も追いかけましょう!!」

「エエ!? 響達に追いつけるかなあ?」

美希は、みゆきの後を追った一同を呆れ顔で見つめ、舞が自分達も後を追おうと告げるも、奏の言葉を受け、確かに、足の速いあのメンバーに追いつけるだろうかと思うのだった・・・

ハアハア呼吸を荒くしながら逃げ続けるあゆみ、もう振り切ったかと後ろを向くと、みゆきはまだ追って来ていた。しかも、その後ろから物凄い速さで駆けて来る集団を見て、あゆみの顔が引き攣ってくる。

「な、何か増えてるよおおお!」

イヤアアアと叫びながら逃げ続けるあゆみ、待ってえと叫びながら追うみゆき、雄叫びを上げながら、みゆきに追い付こうと必死ななお、りん、響、少し遅れて咲、その一団を、美希からの知らせを聞いて元町にやってきた他のメンバーが見付ける。



「見付けた！あれね・・・ヨツシヤア！私も行くよ・・・ドリヤアアア！！」

変顔を浮かべたなぎさが、雄叫びを上げながら物凄い速さでなお達に合流する。みゆきを探しに来た筈が、駆けっこをしているような一同を見て、思わずこまち、かれん、ひかり、満、薫、祈里、アコ達は呆然としていた。

「止めなくて良いのかなあ？」

「放っておきなさい・・・その内目的に気付いて戻って来るわよ！それより、つぼみ達やほのか達と合流する方が先よ」

キョトンとした顔をするいつきに、ゆりは、放っておけばその内戻って来るでしょうと苦笑混じりに呟いた。

「「ドリヤアアアア！！」」

なぎさ、りん、響、なおの四人が、一気にみゆきを追い抜き、あゆみを抜き去り前に出ると、素早く振り返りあゆみの行く手を阻んだ。

「キヤアアア！」

あゆみはスピードを緩め思わずしゃがみ込み、みゆきを抜いた暁は、立ち止まっている四人に気付कि、変顔を浮かびながら、

「エッ!?みんなああ！退いてええええ!!」

勢いを止められない咲が、そのまま四人にぶつかり転倒すると、目を回すなぎさは、咲りん、響、なおの五人、ハアハア荒い呼吸を繰り返しあゆみに追いついたみゆきは、「よ、ようやく追いついたあ：ハア、ハア、さ、さつきはゴメンね！荷物、大丈夫だった？」

「エツ!?ひよつとして・・・それを言う為にわざわざ追いかけて来たの？」

「うん！何か大事な物でも入ってるのかなあと思つて・・・」

ニツコリ微笑みながら謝るみゆきを見て、あゆみは思わず呆然としていると、

「な、何だあ！あたし達、てつきりみゆきちゃんがその子に何か盗られて追いかけて居るのかと・・・」

「エツ!?違う、違う！」

背後の方で安堵したようになおが声を掛けると、みゆきは慌てて首を振つて否定する。なぎさは、気まずそうな表情を浮かべながら、あゆみに近づき声を掛けると、

「驚かせてゴメンね！もう、咲、りん、響、なお、反省しなさい!!」

「エエ!?なぎささんだつて、一緒に叫びながら追いかけてたじゃないですかあ？」

響が恨めしそうになぎさに文句を言うのと、咲、りん、なおが、変顔を浮かべながら無言で響の言葉に同意して何度も頷く、なぎさはアハハと誤魔化し笑いを浮かべながら、「イヤア・・・つい夢中になつて・・・」

「二三脅かしてゴメンなさい!!」二三

なぎさ、咲、りん、響、なおが、改めて頭を下げて詫びると、あゆみは苦笑を浮かべながらいいえと言って五人に答えた。

「じゃ、じゃあ、急いでますんで!」

あゆみは慌ただしくその場を去ろうと、みゆきと擦れ違った時、みゆきの視線に、あゆみのポシエツトの中から、ルセンと似た黄色い物体を見て思わず驚く、その間にもあゆみは歩を進め、港の見える丘公園方面へと去って行った。

呆然としながらあゆみの去った場所を見ていたみゆきに、

「もう、みゆきちちゃん!何処行つてたの?心配したんだからね!!」

「せめてどっか寄るなら、誰かに声を掛けなきゃ・・・」

膨れっ面したなおがみゆきを窘め、りんからも注意され、トホホ顔を浮かべたみゆきが、五人にゴメンなさいと謝る。

「まあ、無事に見つかつて良かった・・・じゃあ、みんなの所に戻ろう!!」

なぎさの言葉に頷き、なおはみゆきの肩に手を触れ微笑み掛ける。再び元来た道を戻り始めた五人に、後ろを振り返つたみゆきは、何かを決心すると、

「皆さん!私、さっきの子にまだ用事があるので、あの子の後を追いかけてみます!!」

みゆきが再び走り出すと、五人は慌てながら振り返り、りんはみゆきの行動を見て、

「全く、あの子はのぞみに似て・・・みゆき！そっちの方角に港の見える丘公園ってあるから、その入り口に居なさい！！みんなを連れて向かうから！！」

「はい！分かりました！！」

りんの言葉に、後ろを振り返り手を振ったみゆきが、あゆみの後を追い始める。りんは、その後ろ姿を渋い表情を浮かべながら見つめると、

「場所さへ分かっていたら、最悪せつなのアカルンの力で、何とかみゆきを見付けられると思うけど・・・」

「そうだね、取り敢えずみんなを呼ぼう！」

なぎさは携帯を手にとると、ほのかに電話を掛け、今までの顛末を報告し、こちらに来るように伝えるのだった・・・

第四十五話：親睦を深める少女達

完

## 第四十六話：みゆきとあゆみ！

## 1、あゆみの思い

港の見える丘公園・・・

眼下に広がる横浜の港や横浜ベイブリッジを見渡しながら、あゆみはさつき出会った少女達の事を考えて居た。楽しそうに仲間と行動していた一同を、心の中では羨ましく思っていた。

横浜の地に来て一ヶ月、ゴールデンウィークも目前に迫っているものの、あゆみには、この街に友と呼べる人物は居なかった・・・

いまだに友達が出来ないあゆみに、母は自分から積極的に話し掛けなきや駄目よと注意し、あゆみも話し掛けようとした事はあつたが、何時もタイミングを逸し、嫌な思いをするのみだった。

越して来たマンシヨンの側、近所の犬には顔を会わせる度に吠えられ、学校に向かえば、周りは仲良さそうな友人達と、楽しげに登校する姿を見ながら、一人黙々と歩く自分が悲しかった。前の学校では、あゆみにもちやんと仲の良かった友達も居たが、この街では孤独だった・・・

そんなあゆみの唯一の支えは、アンデだけだった……

「キューちゃん……私、この街嫌い!前に住んでた所は楽しかったなあ……」

思わず前に住んでいた場所を思い浮かべ涙するあゆみ、アンデはキューンと発しながら、心配そうにポシエトから顔を出すと、あゆみはアンデの心遣いに、嬉しそうな表情を浮かべると、アンデに頬擦りしてありがとうと呟いた。

「アツ!見く付けた!」

突然背後から声が掛かり、後ろを振り向いたあゆみは、先程の少女が微笑みながら立って居る姿を見て驚く、

「あなたは……まだ私に何か用なの?」

「うん!私、星空みゆき!中学二年の14歳!!私の事は、みゆきって呼んでね!!あなたは?」

満面の笑みを浮かべながら、突然自己紹介を始めたみゆきに、あゆみは呆気に取られながらも、

「わ、私?私は、坂上あゆみ……あなたと同じ中学二年生だけど!」

「私と同じ年なの!?!あゆみちゃんかあ……よろしくね!!」

(な、何なの、この子は!?)

困惑するあゆみに、みゆきは隣に立つと、横浜の港を見ながら感嘆の声を上げた。

「ウワア！良い眺めだねえ．．．私、横浜つて今日初めて来たの！あゆみちゃんは、この街に住んでるの？」

ニコニコしながらあゆみに声を掛けるみゆきに、あゆみは随分馴れ馴れしい子だなあと思いつながら、みゆきと話していて、嫌な気持ちにならない自分が不思議だった。

「うん！今年の春に、この街に越して来たんだけど．．．私はこの街．．．嫌い!!」

寂しげな視線を眼下の景色に向けるあゆみ、みゆきはそんなあゆみを見て、同じように眼下の景色を見つめると、そっかあとポツリと呟く、

「あゆみちゃんは、まだ不安だね！私もね、今住んでる街に、この春越して来たばかりなの!!」

「エッ!? そうなの？」

「うん！同じ転校生だね!!」

あゆみにニッコリ微笑むみゆきを見て、あゆみの中でみゆきに対して親近感が沸き上がった．．．

この子も自分と同じなのかと、だが．．．

「私もね、最初は不安な面もあったけど、それ以上に、どんな出会いがあるのか楽しみだった．．．あかねちゃん、やよいちゃん、なおちゃん、れいかちゃんと知り合う事が．．．」

「私とは違う！私はあなたとは違うもの!! 私には友達何て．．．」

みゆきの言葉をあゆみは遮った……

みゆきには大勢の友達が居る……

でも、自分には……

あゆみの心が、みゆきを拒絶しようとした時、ポシエットの中のアンデの色が黒く変化しようとした。あゆみを虐める悪い奴、アンデはみゆきをそう認識しようとした。

だが……

みゆきは、微笑みながらあゆみの両手を取ると、

「此処に居るよ！学校も、住んでる場所も違うけど、私は、あゆみちゃんと友達になりたいの!!」

「エッ!？」

みゆきの言葉に、あゆみは虚を付かれた。今日初めて会ったのに、この子は何を言ってるんだらうと、あゆみは呆然とする。

「それに、そのポシエットの中のお友達もね!」

「なっ!？」

みゆきがニッコリ微笑みながら、ポシエットの中のアンデの事まで知っている事にあゆみは動揺する。

(この子、何でキューちゃんの事を……)



何とか誤魔化そうと考えるあゆみだったが、言い訳が見つからず戸惑っていると、「私達も、あなたのお友達と似た子とお友達なの：名前がルセン！そして、あゆみちゃんのお友達の名前は：アンデ！そして、ルセンとアンデのお友達のキャンデイとも、私達はお友達なの!!」

みゆきの言葉を聞き、ポシエツトの中のアンデが激しく動揺する。目の前のこの子は、自分の名前も、ルセンの名前も、キャンデイの事も知っている。一体何者なのか!?! 「な、何を言ってるの?この子は：：：」

ポシエツトをみゆきから隠そうとしたあゆみ、その背後で低い女の不気味な声が聞こえた：：：。

「見つけた!」

何時現われたのか、振り向いたあゆみの後ろに、褐色の肌をした三人が立って居た。一人は坊主頭で、ヒョロつとした2メートルはありそうな大男ベガ、もう一人は、紫色のボンテージ風の衣装を着、黒いマントを羽織ったスタイルの良い赤い短髪の女サデイス、もう一人は、見た目小学生のような身長ながら、白髪塗れで顔は老人のような男ダイクレ、三人の魔人が、アンデの気配を見付け姿を現わした：：：。

## 2、誕生！魔の戦士!!

「あなた達は一体!?!」

後退るあゆみに、笑みを浮かべるサデイス、ベガ、デイクレ、みゆきはサデイスを見て表情を険しくすると、

「あゆみちゃん、その人達から逃げてえええ!!」

あゆみを庇うように前に出ると、あゆみに逃げるように叫ぶみゆき、尋常じゃないみゆきの様子に、あゆみは二歩三歩とその場を後退る。サデイスは、不気味な笑みを浮かべながらみゆきを見つめると、

「あらあら、連れない言葉を言ってくれるじゃない?」

「一体、あゆみちゃんに何をしようと言うの? 私の友達に・・・手を出さないで!!」

みゆきはスマイルパクトを手にとると、

「私のお友達に、手出しはさせない! プリキュア! スマイルチャージ!!」

「エッ!?!」

みゆきがキュアデコルをスマイルパクトにセットし、身体にパフを塗っていきプリキュアへと変化していく、あゆみは呆然とみゆきの変身する姿を見つめていた。

「キラキラ輝く、未来の光! キュアハッピー!!」

「何!?! お前がああの時のプリキュアだったのか?」

みゆきが変身したハッピーを見て驚くサデイス、ハッピーは再びあゆみに振り向く

と、

「あゆみちゃん、アンデと一緒に逃げて!!」

「は、はい……」

（あの子が……プリキュアだったなんて!）

ハッピーの言葉通り駆け出すあゆみ、あゆみは何度も振り返り、ハッピーの姿を見つめた。

身構えるハッピーに、三人の魔人は口元に笑みを浮かべていた。

「サデイス、これが今のプリキュアなのか?」

「ああ……だが他にもこいつの仲間が居る! 何時現われるとも限らない……甘く見ない方が良い!!」

ベガは、ハッピーを見て拍子抜けしたかのように、腕組みしながら問うと、サデイスも鼻で笑うようにそうだと答えるも、まだ仲間が居るから甘く見ない方がいいと忠告する。

「成る程な……では、こ奴を痛めつけ、仲間の居場所でも吐かせるとするか! フウウン!!」

気合いを込めたデイクレの周辺から、負の力が巻き起こり、突風が辺りを吹き荒れる。思わず顔をしかめ、突風に耐えたハッピーだが、目を開けた時にはデイクレの姿は消え、

気付いた時には背後に回られ、回し蹴りを浴び吹き飛ばされる。

「クウウ・・・あゆみちゃんを、アンデを、守るんだからああ!!」

ヨロヨロ立ち上がるハッピーの横に現われたベガは、

「そんなにあの娘が大事か?なら・・・お前の目の前で、消してやるよ!!」

ニヤリと微笑むと、一気にあゆみ目掛け距離を詰めるベガ、助けに向かおうとするハッピーを颯のように、デイクレが掌底で吹き飛ばし、サデイスが飛んできたハッピーをデイクレに蹴り返す。

「キヤアアア!」

そのまま地面に滑り込むも、ヨロヨロ立ち上がるハッピー、その視線の先には、震えるあゆみの顔に、ベガの右手がゆっくり迫る。

あゆみを守る!!

ポシエツトから飛び出したアンデが、ベガに体当たりをするも、今の状態では何の力も持たず、ベガに弾き飛ばされる。

(クライナーがあたしらに刃向かうとは!?)

サデイスは、アンデが必死に守ろうとするあゆみに興味を持ち始めた。ベガは、目障りとはかりアンデを消し去ろうとするも、あゆみが必死にアンデを庇いながら抱き上げ、恐怖に震えながら後退る。

「止めてええ！気合いだ、気合いだ、気合いだ、気合いだああ!!プリキュア！ハッピー……シャワー……!!」

あゆみを救うべく、気合いを込めて放たれたハッピーシャワーは、何時も以上の輝きを放ち、ベガへと飛んでいく。ベガは両手でハッピーシャワーを止めるも、その威力に徐々に後ろに押され出す。

「グウウ、こいつ!?ヌウウオオオ!!」

ベガは、ハッピーシャワーを堪えきると、負の力と共に掻き消すも、荒い呼吸を繰り返した。デイクレは、意外そうにハッピーを見つめると、

「こ奴……少し悔りすぎたか!?流石はプリキュアを名乗るだけはあるようだ!!」

「デイクレ、俺にやらせろ!この俺に手を出した事を……後悔させてやる!!」

ベガの目が金色に輝くと、負の力が辺りに立ち込み始める。気合いを込めたハッピーシャワーを放ち、力を使いすぎたハッピーは、荒い呼吸を繰り返し、迫るベガへ攻撃する力は残って居なかった。

(わ、私のせいだ……私を助ける為に……)

あゆみは意を決すと、ハッピーを庇うように前に出て両手を広げると、アンデもあゆみの頭の上に乗る、ハッピーを庇う仕事をした。

「あ、あゆみちゃん!アンデ!私は大丈夫だから、早く逃げて!!」

最早面倒とばかり、纏めて葬ろうとしたベガの右手をサデイスが掴むと、

「ベガ、待ちな!この子・・・使えそうだよ!!」

「何だ?!?どう言う事だ、サデイス?」

ベガに暫く待てと言うと、サデイスがゆっくりあゆみに近づき始める。サデイスが何か念じると、あゆみの額に五芒星のマークが浮かび上がる。サデイスは恐怖に引き攣るあゆみの額に自分の額を合わせると、

「フッフ、お前・・・この街が嫌い何だねえ?」

「エツ!?そ、それは・・・」

自分の心の中を見透かされたようで、あゆみは思わず虚を突かれた。アンデは、嘗て自分とルセンが、目の前のサデイスにされた事を思い出し震えていた。

「このクライナーは、お前の言う事なら聞きそうだねえ・・・お前に力を与えようじゃないか?」

サデイスは口元に笑みを浮かべると、黒いマントを何度も翻し、両手を天に構えると、「魔よ!この地に現われ、この女の心の妬みを増幅させよ!!我は求め・・・訴えたり!!」

サデイスの両手がサツと下がると、あゆみの額にある五芒星のマークが光だし、上空に現われた黒煙が、あゆみの身体を包み込む、あゆみは悲鳴を上げながらも、心の中の怒りが増幅してくるのを感じていた。

私を受け入れないこの街を……

私を認めない学校の者を……

私の頼みも聞かない両親も……

「みんな、みんな、消えてしまえええ!!」

憎しみの心があゆみを支配した時、あゆみの肉体は魔に取り憑かれ、ツインテールの髪は解け、乱雑に長い髪が靡き、優しげな目は激しく吊り上がり、瞳は妖しげに赤く輝き、上瞼には紫のアイシャドウが加わった。衣装はサデイスと色違いの黒いボンテージ衣装、赤いマントを靡かせていた。

「あ……あゆみちゃん!」

驚愕するハッピーがあゆみの名を呼ぶも、振り向いたあゆみは、ハッピーに衝撃波を浴びせて吹き飛ばすと、

「あゆみ!? 違う! 私は、この世界に憎しみを広げし者……私の名は、ヘイト!!」

魔人と化したあゆみは、ヘイトと名乗り上空に浮かび上がると、震えるアンデに負の力を浴びせ、アンデは再びどす黒く変色していった。

アンデの心も、嘗てと同じように憎しみが支配していった……

「さあ、クライナーよ! この地に憎しみを撒き散らせ!!」

「あゆみちゃん! あゆみちやあああん!!」

必死に叫び、あゆみの名を呼ぶハッピーだったが、あゆみの耳には届かない、新たな魔人ヘイトは、マントを靡かせマリントワーの上に移動すると、アンデを高くと天に掲げた。それに刺激されたかのように、横浜の海底から、無数の黒き物体が横浜の空を覆いだした……

港の見える丘公園目指すなぎさ達一同であつたが、横浜の空を覆った黒き物体に戦慄する。

「な、何、これは!？」

「なぎさああ! 嫌な気配が、この街全体を覆っているメポー!」

「凄まじい憎しみの力を感じるミポ……」

ざわめき始める妖精達……

一同は、顔を見合わせ辺りの様子を伺うと、幸い人影は見当たらなかった。

「みんな、行くよ!!」

なぎさの掛け声に返事を返した一同が、変身アイテムを手にして叫ぶ……

「デュアル・オーロラウエーブ!!」

「ルミナス! シャイニングストリーム!!」

「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」



「[[[[プリキュア！メタモルフオーゼ！！]]]]」

「スカイローズ！トランススレイト！！」

「[[[[チェインジ・プリキュア！ビートアップ！！]]]]」

「[[[[プリキュア！オープンマイハート！！]]]]」

「[[[[レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション！！]]]]」

あかね、やよい、なお、れいかの四人は、次々にプリキュアへと変身していく先輩達に目を輝かせると、

「ウチらも負けてられへんでえー！」

あかねの言葉に、頷くやよい、なお、れいか、四人はスマイルパクトを手に持つと、

「[[[[プリキュア！スマイルチャージ！！]]]]」

四人の身体がプリキュアへと変化していく・・・

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー！！」

「ピカピカぴかりん！じゃんけん・・・ポン！キュアピース！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ！！」

「しんしんと降り積もる、清き心！キュアビューティ！！」

ピースの名乗りを聞いた時、先輩プリキュア達は思わず呆然とするも、マーチ、ビュー

ティが続けて名乗り、四人がポーズを決めた!!

「サニー、マーチ、ビューティは分かるよ!でも、何!?何なのよ!ピースのジャンケンつて?」

ルージユの突っ込みに、「エエ!」と激しく動揺するピース、

「アハハハ：まあ、ウチも最初に聞いた時は、何やそれえ?つて、思うたんやけど：」  
サニーが苦笑を浮かべながら、確かに最初は自分も思ったと告げると、ルージユは、更に言葉を続け、

「うちのレモネードの、はじけるレモンの香りも、最初に聞いた時は何それつて思ったけど・・・ジャンケンは無いわ!それ以上に無いわ!!」

「エエエ!?ルージユ、何気に酷いです?」

レモネードは頬を膨らまし、ルージユに抗議すると、ルージユは苦笑いを浮かべながら、ゴメンゴメンと謝る。ミューズも醒めた目をピースに向けると、

「本当・・・一緒に居るのが恥ずかしくなってるよねえ?」

「ミューズ・・・少し言い過ぎよ!」

「だつてええ!」

ホワイトに窘められ、ミューズは頬を膨らませると、マリンもウンウン頷き、

「そうだねえ・・・ジャンケンは無いよねえ!何か場違いつて言うかさ、これから戦いま

すよって言うより、これからゲームしますよって感じじゃん！こんなの……うちのムーンライトが黙ってないよ!!」

「エッ!?!」

いきなりマリんに話を振られたムーンライトは、困惑の表情を浮かべ、ピースは涙目を浮かべながら、ムーンライトにペコペコ頭を下げる。ムーンライトはフツと笑むと、

「ピース……大丈夫、気にしないで！私は何とも思っていないわよ！それより……」

ムーンライトは、ルージユとミューズの頭を拳でグリグリし、痛いと頭を摩る二人、更にマリんの頭を、二人より強めにグリグリすると、

「い、痛い！背が縮んじやうよお!?」

変顔浮かべながら、両手で頭を撫でるマリン、ムーンライトは、そんな三人を厳しい視線で見つめると、

「全く……同じプリキュアの仲間に、そんな事を言うものじゃなくってよ？三人共、ピースに謝りなさい!!」

「「はあい……」」

「ピース、ゴメンね！確かに言い過ぎだったわ」

「生意気言ってゴメンなさい」

「でも、本当の……ウワアア！ゴメン、反省してます!!」

ルージユとミューズは素直に謝るも、マリンは少し不満気にし、その態度にキツと睨む。ムーンライトに加え、ブラックとホワイトが咳払いを、やれやれといった表情を浮かべたベリーに頭を抑えられ、マリンは慌ててピースに謝った。

ピースは、ブルブル頭を振り、気にしてませんと答え微笑むと、マリンがピースの肩に手を回し、感謝の言葉を述べる。ピースを庇おうとしたサニー、マーチ、ビューティは、ホツと胸を撫で下ろし、ピースも笑顔を向けた。

「さあ、仲直りも済んだところで・・・みんな、行くわよ!!」

ムーンライトの言葉に、瞬時に表情を引き締める面々、サニーは一同を見つめると、「ウチら、みゆきが心配何で、この辺捜してみますわ!」

「分かったわ! 私達は、四方に散つてこの邪悪な物体を調べてみる。サニー、ピース、マーチ、ビューティ、みゆきさんをお願いね!!」

ホワイトが四人にみゆきの事を託すと、四人は領き、港の見える丘公園へと急ぎ走り出す。それと同時に行動を起こした他のプリキュア達だったが、ドリームは、不安げな表情で四人の後ろ姿を見つめていた。

(みゆきちゃん・・・大丈夫かなあ!?)

「ドリーム! 何してるの? 私達も行くわよ!!」

アクアがドリームに声を掛けると、ドリームは名残惜しそうにしながらも、アクア達

の下へと歩き出す。ルージュは、そんなドリームを見つめると、アクア、ミント、レモネード、ローズに何かを頼むのだった……

「あゆみちゃんに、何をしたの？あゆみちゃんを元に戻して!!」

涙ぐみながらサデイス、ベガ、デイクレにあゆみを元に戻すように訴えるも、三人は笑みを浮かべ、

「ハア!?あたしはあの子の望んでいる事に手を貸してあげただけ……おわかり?」

「違う!あゆみちゃんは……本当はそんな事望んでない!!」

あゆみが飛び去ったマリインタワーへと向かおうとするハッピーに、ベガの鉄拳が炸裂し、ハッピーが吹き飛ばされる。

「おいおい、俺達を置いて何処に行こうっていうんだ?」

「あの娘の所に向かいたければ……我々を倒す事だな!」

「最も、出来れば……だけどね?」

三人の嘲笑がハッピーに向けられるも、ハッピーにはそんな笑い声も耳には入らない……

あゆみを救いたい、それだけだった……

ヨロヨロ立ち上がり、マリインタワーを再び目指そうとするハッピーの背後に、掌底に

負の力を交えたベガが衝撃波を放つ、だが、ハッピーの背後に氷の膜が現われ衝撃波を防ぐと、突然現われた炎がベガの行く手を遮り、突風がサデイスの髪を靡かせる。雷がデイクレの動きを封じた……

「あんたら、ウチらの仲間に何してるんや?」

「あたし達が来た以上……好きにはさせないよ!!」

「私……怒ってるんだからねえ!」

「ハッピー、遅れてすいません……私達も一緒に戦います!!」

振り向いたハッピーは、掠れる瞳に徐々に移る四人を見て、止め処なく涙が溢れてくる。

「サニー、ピース、マーチ、ビ्यूティ……」

「何や!?!泣いてるんか?もう、心配いらんでえ!!」

サニーがハッピーにウインクすると、ハッピーは涙を拭い何度も頷いた。

「みんな、私に力を貸して!私、その人達に悪い人にされた友達を助けたいの!!私、マリントワーに居る友達に……」

ハッピーの言葉に、四人は顔を見合わせると、サニーはゆっくりハッピーに近付き、ハッピーの左肩に右手を乗せると、

「ハッピー……それはちやうで!」

「エッ!？」

「ハッピーの友達は・・・」

「私達にとつてもお友達ですわ!」

「だから、泣かないで!」

「うん!」

マーチが、ビューティが、ピースが、ハッピーに近付き微笑み掛ける。

「ほな、決まりやな!此奴ら、倒して・・・ウチらの友達、救いに行くでええ!!」

「キャンデイも居るクル!」

「キューン」

「キャンデイ、ルセンまで・・・うん!!」

四人と妖精達に、満面の笑みで頷き返すハッピー、サデイス、ベガ、ディクレは、忌々しげに五人を見つめると、

「ハア!?あたし達を倒す?」

「自惚れるなよ!小娘共!!」

「直ぐに身の程知らずだったと・・・後悔させてくれる!!」

三人の魔人の周囲に負の力が巻き起こる・・・

「みんな、行くよ!!」

ハッピーの合図と共に、三人の魔人目掛け駆け出す五人・・・  
あゆみを救えるか、スマイルプリキュア!!

第四十六話：みゆきとあゆみ！

完



## 第四十七話：あゆみを救え！

## 1、プリキュア5

坂上あゆみは魔に憑依され、憎しみの感情を増幅させた魔の戦士ヘイトと化し、横浜の地を憎しみに溢れさせようと行動を移した。分裂して横浜の海底に沈んでいたクライナーは、アンデの意思に従うように、横浜の空を暗闇に覆った・・・

あゆみを元に戻そうと、あゆみの下へと向かおうとするハッピーを、三人の魔人が襲う。駆けつけたサニー、ピース、マーチ、ビューティも加わり、五人のプリキュアと、三人の魔人との戦いが始まった・・・

「フハハハハ！どうした!? さっきの威勢は虚勢か？」

ベガと戦うのはサニーとマーチ、瞳が金色に輝き、本気を出したベガの前に劣勢であつた。

「まだまだこれからや！行くで、マーチ!!」

「了解!! タアアア!!」

互いに重心を低くし、サニーは左手に、マーチは右手に、炎と風を纏った拳を繰り出

すと、轟音を発しながら二人の合わさった拳がベガへと炸裂するも、ベガはその威力に後退りながらも、両手で二人の拳を止める。

「ほう、少しはやるようだ．．．だがなああ!!」

気合いを込めたベガの負の力を受け、サニーとマーチが吹き飛ばされた。

「キヤアアア!」

デイクレの衝撃波を受け吹き飛ばされるビューティ、直ぐに受け身を取り体勢を整えると、

「まだです!この程度の攻撃で!!」

(でも、此処でビューティブリザードを使ってしまつては、今後の戦いに支障が．．．) ビューティは考えを纏め、ビューティの周囲に冷気が巻き起こると、ビューティはフウと息を吹きかけ、冷気はデイクレへと流れていった。

「何だ、これは!」

自分の周囲に発生した冷気に驚愕するデイクレ、足下を見ると、デイクレの足下が凍り付いていった．．．

「成る程、私の動きを止める算段か．．．良い考えだが、まだまだ力が足りん!!ヌウウン!!!」

気合いを込めたデイクレの前に、氷は砕け散り、ビューティの目論見は砕けた。

「ハッピー、大丈夫?」

「うん、みんなが来てくれたお陰で、大分体力も回復出来たよ!」

サデイスの前で身構えるハッピーとピース、サデイスは愉快そうに笑い、

「アハハハハ! キュアハッピーとか言ったね!? あんた、私達と戦っていいのかい?」  
「何!? どう言う事?」

「一つ教えて上げようか? 私が魔に変えたあの娘・・・後30分足らずで、二度と元の姿には戻れなくなるのさ!!」

サデイスの告白を受け、驚愕するハッピーとピース、サデイスの背後にあるマリントワーを見つめるも、黒い塊は粒子となつて横浜の街を覆い尽くし、マリントワーを肉眼で見る事は出来なかった・・・

「あのクライナーに変えた妖精と同じように、もう二度と人の姿に戻る事は出来ない!・・・あの娘も、後30分足らずで、正式にあたしら魔族の仲間入りって訳さ!!」

「そんなあ・・・あゆみちゃん!!」

サデイスの言葉に激しく動揺するハッピー、あゆみの下に行かなくちゃ、ただそれだけが頭の中に浮かんでくる。それには目の前に立ち塞がるサデイスを突破する事が急

務であった。駆け出すハッピーに、遅れたピースが後を追ひ、二人でサデイスにパンチを放つも、サデイスは宙返りしながら、逆に二人を蹴り飛ばす。何とか体勢を整えたハッピーは、ベガ、デイクレと戦うサニー、マーチ、ビューティを見ると、

「みんなあ、力を貸してえ！早くあゆみちゃんの下に辿り着いて元に戻さないと、あゆみちゃんは、あゆみちゃんは、二度と元に戻れなくなっちゃう・・・」

動揺するハッピーの下へ、ベガ、デイクレから距離を取ると、仲間達が集結する・・・  
「時間が無い・・・ちゆうこつちやな！」

「だったら、真つ向勝負！一点突破しか無いよ!!」

「危険ではありませんが、実力は向こうの方が上！その方法が、この場を突破できる確率が一番高そうですね」

「そうと決れば・・・」

サニー、マーチ、ビューティ、ピースがハッピーを見て頷くと、頷き返すハッピー、五人は三人の魔人を突破しようと駆け出すも、

「バアカ！それはこちらの思う壺・・・デイクレ！ベガ！」

サデイスの合図に同意し、三人が三方に散ると、三人から発せられた負のエネルギーが、ピラミッドのように闇のトライアングルと化し、ハッピー達を中に捕らえると、急速に収縮していく。闇のトライアングルの中に閉じ込められ、思うように動けず、トラ

イアングルはどんどん縮まり、五人を圧迫していった。闇のトライアングルの中は息苦しく、五人の表情が見る見る苦しげになっていく。

「「「キヤアアアアア!!」」」

段々圧迫されていく恐怖が、五人の心に浮かんでくる。

「ハッピー、みんなああ・・・」

「キュ～～ン」

何とか五人を助けたい・・・

だが、キャンディとルセンには為す術が無かった・・・

「そのまま闇のトライアングルに飲み込まれ、溶けて消えちまいな!!」

口元に笑みを浮かべながら、五人を見つめるサデイス、ベガ、ディクレ、闇のトライアングルの中、ハッピー達の意識が遠ざかっていく・・・

「アアアアアア!」

このままあゆみも救えず、この場でやられるわけには行かない・・・

何とか堪えようと力を合わせる五人だったが、収縮を抑える事は出来なかつた・・・

勝利を確信したサデイス、ベガ、ディクレが、ハッピー達に嘲笑を浴びせたその時、上空から急降下したピンクの流星が、闇のトライアングルを突き抜け粉砕する。解放されたハッピー達は、跪きながら荒い呼吸を繰り返し、呆気に取られたサデイスの周囲に、数

本の水の矢が上空から降り注ぎ、困惑するベガに炎のボールが炸裂し、ベガが右手で払いのける。

「何だ、何事だ!？」

一体何が起こったのか？動揺するデイクレの右手を、光の鎖が捕らえ、体勢を崩したデイクレの背に、何者かの肘打ちが炸裂し、デイクレを吹き飛ばす。

「調子に……乗るなああ!!」

直ぐに体勢を立て直し、光の鎖を外したデイクレが、自分を攻撃した方角に衝撃波を放つも、緑の円状のシールドが、その攻撃を防ぎきる。

ヨロヨロ立ち上がったハッピー達五人を庇うように、その目の前には、ドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、アクア、ローズが、サデイス、ベガ、デイクレに鋭い視線を向け威嚇する。その頼れる姿を見て、ハッピー達五人の目が輝く、

「皆さん……どうして此処に!？」

「確か、他のみんなと一緒に横浜の街に向かった筈じゃ?」

この場に助けに現われてくれた六人を見て、ビューティとマーチが問うと、ルージュは二人に向き直り、

「いやあ、ドリームがあんた達の事を気に掛けていたから……こうして様子を見に来ただけだ」

「どうやら正解だったようね!」

アクアも後ろを振り返り、笑みを浮かべる。ハッピーは目に浮かぶ涙を拭いながら、「皆さん、ありがとう．．．皆さんの力を、私達に貸して下さい!私、あの人達に悪い人に変えられた友達を救いたいんです!!でも時間が無くて、それにこの暗闇の中じゃ、あゆみちゃんが居るマリインタワーに向かうのも．．．」

もう、マリインタワーがある方角も、今の自分には分からない．．．

ドリームは、俯くハッピーに近づくと、両肩に手を乗せ優しく微笑み掛けた。ドリームの両肩に乗ったココとナッツが、ミラクルガイドライトを使うようにキャンデイに伝えると、キャンデイはミラクルガイドライトを取りだし、スイッチを入れた。虹色の輝きが闇の中に浮かび上がる。ドリームは大きく息を吸い込むと、

「プリキュアのみんなあ!ハッピー達に力を貸してええ!!ハッピー達が、友達の居るマリインタワーまで向かう道のりを．．．照らしてあげてええ!!」

ドリームの声が、暗闇の中に響き渡った時、まるで了解したとばかりに、白い稲妻と黒い稲妻が辺りを照らし、虹の光が輝いた。ドリームはニッコリ微笑むと、

「大丈夫だよ!あなた達には、私達プリキュアが付いて居るから!!必ずあなた達を、目的地まで送り届けてくれる．．．此処は、私達に任せて!!行くよ、みんな!!!」

「[[[[[YES!!]]]]」

プリキュア5とローズが二組ずつ別れ、サデイス、ベガ、デイクレに攻撃を開始する。ハッピー達五人は、ドリーム達にペコリと頭を下げると、虹色の輝き目指し駆け始めた。

「サデイス、こいつらがお前の言っていた、あいつらの仲間か!」

「いや、あたしもこいつらを見るのは初めてだ!」

「二体、この時代のプリキュアは何人居ると言うのだ?」

加勢に来たプリキュア5、ローズの六人と戦いながらも戸惑うベガ、サデイス、デイクレ、ドリームとルージュがサデイスと、アクアとミントがデイクレと、レモネードとローズがベガと対峙する。三人は、ドリーム達がハッピー達よりも戦い慣れている事に驚くも、

「だが、我らを相手にして、その程度で倒せると思うなよ!サデイス、ベガ、此奴らを蹴散らすぞ!!」

「ああ」

三人の瞳が金色に輝き、辺りに負の力が立ち籠める。ココ、ナッツ、シロップは、三人から発せられる邪悪な力に戦（おのの）き、

「みんなあ、油断するなココ!」

「邪悪な力が増してるナツ!」



二人の忠告に頷いた六人だったが、彼女達にも目の前の三人から発せられるプレッシャーが、一段と強さが増した事は感じていた。

「この街をこれ以上・・・好きにはさせない!!」

ドリームとルージュが、サデイス目掛けジャンプし、空中からキックを放とうとする時、サデイスは手に負の力を集め、二人に強烈な衝撃波を放った。

このままでは直撃する!!

ドリームとルージュは、瞬時に互いの足の裏と足の裏を蹴り合い、その反動を利用して攻撃を回避し地上に着地する。気合いを込めたルージュの周りに、炎のボールが五個浮かび上がり、ルージュはボールの群れにジャンプすると、

「プリキュア!ファイヤーストライク!!」

連続で五発のファイヤーストライクをサデイス目掛けて蹴り飛ばすルージュ、炎のボールが合わさり、巨大な炎のボールとなって、サデイス目掛け突き進む、

「ウウウウウオオオオオオオオ!!」

炎の巨大なボールを、雄叫び上げたサデイスが両手で押さえ、その勢いを止めたその時、

「プリキュア!シューティングスター!!」

ピンクの流星が巨大な炎のボールに突撃し、ドリームの周りを炎が囲み、そのまま突

き抜けると、抑えていたサデイスに命中させ吹き飛ばす。

「ギャアアア・・・お、おのれええ、プリキュア!!」

直ぐに立ち上がったサデイスは、二人を憎らしげに鋭い眼光を向けるのだった・・・

「「キヤアアア!!」

デイクレの強烈なパンチを受け吹き飛ばされたアクアとミントだったが、互いに手を握り合いながらクルクル回転して勢いを止め、地上に着地する。

「強い・・・でも、あなた達には絶対に負けないわ!プリキュア!サファイアアロー!!」  
目を閉じたアクアが、カッと目を見開き、水の矢であるサファイアアローの乱れ打ちがデイクレ目掛け飛んでいく。デイクレは腰を落とし、気合いを込めた衝撃波でサファイアアローを粉碎し、辺りに水飛沫が巻き上がる。

「その程度で、この我を・・・何?」

口元に笑みを浮かべたデイクレだったが、アクア、ミントは、デイクレの油断を見逃さず、宙に飛び足下に水気を含んだダブルキックをデイクレに浴びせた。

「私達を見くびらないで!」

(今の感覚・・・今後の戦いで活かせそうな気がする)

ミントがデイクレに啖呵を切り、アクアは、今足下に蓄えた水を纏いながらのキック

を放った時、この技に磨きを掛ければ、今後の戦いで役立つのではと考えるのだった。「グウウ……調子に乗りおつて！」

デイクレが、アクア、ミントを睨み付けた……

レモネードのプリズムチェーンがベガを捕らえると、ローズはベガに突進し、近距離での格闘戦を仕掛けた。ベガもプリズムチェーンを振り解き、両者が正面から激突する。

「ハアアアアア!!」

「又ウオオオオオ!!」

拳と拳が、蹴りと蹴りが交差する。一層雄叫びを上げたベガが

「食らえ! ダークネス……ボンバー!!」

自らの身体に凄まじい負のエネルギーを纏わせると、ベガがローズ目掛けショルダータックルを仕掛けた。両手で受け止めたローズだったが、その威力を止めきれず吹き飛ばされる。

「キャアアアア!」

「ローズ!」

悲鳴を上げながら吹き飛ばされたローズの左手を、プリズムチェーンが巻き付き、

ローズの勢いを弱めると、ローズはそのまま受け身を取り身構える。

「ローズ、大丈夫ですか?」

「ええ、大丈夫! ありがとう! レモネード!! 今度はこっちの番よ……邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう! ミルキイローズ・ブリザード!!」

ローズの青いバラ吹雪がベガ目掛け飛んでいく。

「何だ!? こんなものでええ!!」

そのまま受け止めようと身構えるベガだったが、

「馬鹿者! そのままともに受ければ、貴様といえどただでは済まぬぞ!! 躲せ! ベガ!!」  
デイクレの叱責がベガに飛ぶ、ベガは忌々しげにしながらもデイクレに言われた通り、ミルキイローズブリザードを回避した。

想像以上にプリキュア5に手こずるサデイス、ベガ、デイクレだったが、その時、港の見える丘公園の上空に亀裂が走った……

闇の中の亀裂から、一瞬巨大な目がギロリと動いた気が、プリキュア5とローズには感じられた。亀裂の中から、まるで白い軍服のような衣装を着た一人の男が舞い降りる。サデイス達三人と同じように、褐色の肌が白い軍服を一段と引き立てるその男は、右目が見えないのか、黒いアイパッチをしていた。耳まで裂けた口の下から生えた二本

の牙が見え、プリキュア達はその不気味さに思わず唾を飲み込んだ。

男は一旦帽子を脱ぎ、緑色の短髪を露わにさせるも、埃を払うような仕草をみると、直ぐに帽子を被り直し、戦い合っている一同を観察するように見比べた。

「オオ！貴公は……魔界が誇る十二の魔神の一人、バルガン殿!!」

（魔界!!）

デイクレが現われた人物を見て表情を緩めるも、アクアはベガが発した魔界と言う言葉に引つ掛かっていた。

「デイクレよ……これはどういう事か？メルヘンランドとやらにお前達が封印されて居た事は聞いた。だが、勝手な振る舞いをして貰っては困るぞ？王の方針により、我らは人間共の住む世界には……干渉する事は禁じられているのだぞ!!お前にも、その事は伝えてあつた筈だが？」

まるで詰問するようにデイクレに問いたただすバルガンと呼ばれた男、デイクレ、サデイス、ベガは、恐れおののくようにその場に跪くや、

「も、申し訳ございません……こ奴らはプリキュアと言って、我ら三人を嘗て封印した二人組のプリキュア、その者達を受け継いだ現代のプリキュア！我らはその力を確かめたく……」

デイクレの額から冷や汗が溢れ出す……

サデイス、ベガも同様だった・・・

あの三人組を、此処まで動揺させる魔界の魔神の一人バルガン・・・

ドリーム達は、この者から発せられるプレッシャーを受け、身動き出来ずに居た・・・

## 2、虹が導く道

一方、プリキュア5とローズに救われたハッピー達五人は・・・

「この方角にマリインタワーがあるんだね！」

「見て、あそこで戦ってるの、ブラックとホワイト、ルミナスだよ！」

キャンディをハッピーが、ルセンをビューティが抱きながら、マリインタワー目掛け走り続ける五人だったが、あちらこちらで戦闘が行われている為、ミラクルガイドライトの虹の光の導きをあてにするだけでは埒があかなかつた。ピースはブラック、ホワイト、ルミナスを見付け指を指すと、ブラック達も気付き手を挙げるや、

「あの子達が来たね・・・ホワイト、行くよ！」

「ええ、ルミナスは念の為、ハッピー達にこの闇の物体が攻撃を加えないように援護して上げて！」

「分かりました!!」

ホワイトの言葉通りハッピー達の側で辺りを警戒し始めるルミナス、ブラックは右手

を、ホワイトは左手を高々と掲げると、

「ブラック、サンダー！」

「ホワイトサンダー！」

「プリキュアの、美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「プリキュア！マーブルスクリュー！」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて一旦引いた手を前に突き出すと、

「マックス〜!!」

ブラックとホワイトは、駆けつけて来た五人を見ると、マーブルスクリューを闇に蠢くクライナーの群れの中に向けて撃ち放った。マーブルスクリューの虹の輝きが、闇を蹴散らせ辺りを照らし、ハッピー達の前方の視界を切り開く、

「さあ、今の内に行って！」

「私達も後から応援に向かうわ!!」

どうやらハッピー達に攻撃してくる気配は無さそうで、ルミナスも歩みを止め、

「みなさん、気をつけて下さいね！」

ブラックが親指立てながら五人に微笑み、ホワイトとルミナスも笑顔で五人に頷き掛ける。

「ありがとうございます!!」

ビューティが声を掛け三人に頭を下げると、ハッピー、サニー、ピース、マーチがそれに習って頭を下げた。五人はブラック、ホワイト、ルミナスに手を振りながら再び走り始める。それを見届けると、ブラックが大きく息を吸い込み、

「ハッピー達が行ったよ!ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディ、後をヨロシク!!」

闇の中にブラックの声が響き渡ると、精霊の光が輝き四人のプリキュアに集まっていった……

「了解!みんな、精霊の力で、ハッピー達を導いて上げよう!!」

「分かったわ!」

「了解よ!!」

ブルームの合図に頷き同意すると、

「精霊の光よ!命の輝きよ!」

イーグレットとウインディが叫べば、

「希望へ導け!二つの心!」

ブルームとブライトが叫ぶ、



「プリキュア！スパイラル・ハート……」

「プリキュア！スパイラル・スター……」

「「「スプラ〜ッッシュ!!!」」」

四人から放たれた必殺技が、闇の中に螺旋の渦を浮かべながら突き進んでいく。現われたハッピー達は、労せずしてまた一步マリインタワーへの道を切り開いて貰った。

「先輩方、おおきに!!」

サニーが、右手を額に近づけながらブルーム達に敬礼すると、他の四人も同じような仕事をしながらその場を走り抜けて行く。ブルームは笑みを浮かべるも、大きく息を吸い込み、

「次はあなたたちの番だよ！メロディ、リズム、ビート、ミュージズ!!」

ブルームの声が闇の中で響き渡った……

「了解！私達のハーモニーパワーで、ハッピー達を援護しましょう!!」

「「OK」」

メロディの合図に力強く頷きながら返事を返すリズム、ビート、ミュージズであったが、メロディは頭を右手で掻きながら、

「所で……マリインタワーって、どっちだっけ？」

「エエエ!?もう、メロディたら・・・ビート、教えて上げて!!」

「エエエ!?わ、私?エツと・・・こつちね!!」

マリインタワーがどつちの方角か三人も良く分からないように、ビートが山勘である方角を指さすと、ミューズは醒めた視線をメロディ、リズム、ビートに向け、

「そつちは中華街でしょう!こつちよ!!」

「ピギヤア・・・」

ミューズがマリインタワーの正確な位置を教えると、メロディ、リズム、ビートの三人が、右手で頭を掻きながら苦笑を浮かべ、ピーちゃんは呆れたように溜息を付く、  
「では、気を取り直して・・・って、もうハッピー達来ちゃったよおお!!」

闇の中、視界に見えるぐらいまでハッピー達が近づいて居るのに気付き、メロディが大慌てをしながら、他の三人にアイコンタクトを浮かべると、頷き返す三人、

メロディ、リズム、ビート、ミューズの四人が手を繋ぎ合い、

「二二プリキュア!パッションナート・・・ハーモニー!!」

四人から発せられたハーモニーパワーが闇の中で輝き、ハッピー達に道を示した。

「メロディ、リズム、ビート、ミューズ、先輩達、ありがとう!助かりました!!」

マーチが右手を上げ四人に合図を送ると、他の四人も同じような仕草をしてその場を駆け抜けていく。

「いやあ……間に合って良かったよね！」

「あなた達……今戦ってる場所ぐらいは覚えておいてよね！」

「「面目ない……」」

ミュージズに注意され、メロディ、リズム、ビートが俯きながら頭を下げるも、メロディは思い出したように、大きく息を吸うと、

「今、ハッピー達がそちらに向かいました！ムーンライト、ブロッサム、マリリン、サンシャイン、後をお願いしまあぁす!!」

「了解！了解！そんなじゃあ、あたしらも先輩の強さを見せてやりますか!!」

「マリリン……上から視線ですっ」

「何よおお!!」

パートナー妖精コフレに変顔で見つめられ、マリリンが口を尖らせながら文句を言うも、ムーンライトは呆れたような視線をマリリンに向け、

「マリリン……遊んでる暇は無いわよ！」

「そうだよ、マリリン！」

「本当にマリリンはしようがないですねえ……」

「何よ、ブロッサムだって上から視線じゃん！」

変顔を浮かべながら睨み合う二人を無視するように、ムーンライトと、サンシャインがタクトとタンバリンを取り出すと、

「花よ、輝け！プリキュア！シルバーフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

ムーンライト、サンシャインのフォルテウエーブ、フォルテバーストが闇に蠢く物体に飛んでいく、

「エエエ!?!」

出遅れた二人は目を大きく見開いて驚き、慌ててタクトを取り出すと、

「花よ、輝け！プリキュア！ピンクフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、煌け！プリキュア！ブルーフォルテウエ〜イブ!!」

プロツサム、マリンのフォルテウエーブが、後を追うように輝きを放った。

「ワア・・・凄おおい！あのお、皆さん、ありがとうございまして!!」

ピースがペコペコ頭を下げながら、プロツサム達四人の横を通過していくと、他の四人も同じようにペコペコ頭を下げながら通り過ぎて行った。

「ジャンケンでもされたら、どうしようかと思っただよ・・・」

「マリン・・・また頭をグリグリされたのかしら?」

ムーンライトは、拳でグリグリするポーズをマリンに見せると、

「エエエ!?もう、勘弁してええ!本当に背が縮んじやうよおお!!」

マリンが変顔をしながら頭を庇い、笑い合う一同、直ぐに表情を引き締めると、ブロッサムは大きく息を吸い込み、

「ピーチ、ベリー、パイン、パッション、後はお任せしましたああ!!」

ブロッサムが顔を真つ赤にしながら精一杯の大声を張り上げ、マリントワーの側に居るピーチ達に声を掛けた・・・

ハッピー達の前方、光輝く先にマリントワーが確実に視界に見えてくる。あと少し・・・

そして、一同の視界にピーチ、ベリー、パイン、パッションの姿が目飛び込んでくると、五人は安堵の表情を浮かべた。だが・・・

「ピーチ、ハッピー達が到着したわ!」

「うん、彼女達をこの先に行かせるには、あいつを何とかしなきゃね・・・」

ピーチ、ベリー、パイン、パッションの視線の先には、一人の男が立ち塞がっていた。嘗てパルミエ王国を強襲したジョーカーである。ジョーカーは意味深な笑みを浮かべながら、マリントワーの入り口に佇んで居た。

到着したハッピー達は、ジョーカーがこの場所に居る事に驚きを隠せなかった。

「あれはジョーカー!? 何で此処に?」

「ええ、私達も驚いたわ! 何を企んで居るのか・・・」

ハッピーの言葉に、パッションも同意する。このままジョーカーと戦って居ては時間が間に合わなくなる。ハッピーに焦りの色が浮かんでくる。ピーチはチラつと動揺するハッピーを見ると、

「パッション、こうなったら、ハッピー達をマリインタワーの上まで送って上げて! 私達があいつを引きつけてる内に・・・」

「確かに、時間が無いならその方が良いわね・・・」

「うん、ハッピー! ルセンちゃん! お友達を取り戻せるつて、私、信じてる!!」

ピーチが、ベリーが、パインが、パッションにハッピー達をマリインタワーの上にするように進言すると、パッションが無言で頷く、

「先輩方皆さんのお陰で、此処まで来る事が出来ました! 本当にありがとうございます  
!!」

「ううん、最後はあなたが決めて! ハッピー!! 幸せ・・・ゲットだよ!!」

「ハ・・・ハイ!!」

ピーチが親指を立てながら、ニッコリハッピーに微笑み、ハッピーが涙を拭いながら微笑み返した。

「ベリー、パイン、行くよおお!!」

ピーチの合図と共にジョーカーに突っ込み攻撃を仕掛ける三人、ジョーカーは三人の攻撃を捌きながら、隙を見て三人に反撃を繰り出す。

「みんな、行くわよ! マリントワーの頂上へ!!」

パッションを中心に赤く輝くと、一同は瞬間移動で消え失せた・・・

(ほう、何か企んでいるようですねえ・・・こちらもそれなりの戦力は出しておいた方が良さそうですねえ!)

ジョーカーは、トランプの舞と共に姿を消した・・・

「消えた!?!」

「まさか、パッション達の下に向かったんじゃ?」

「うん・・・」

ジョーカーが消えた事で、ピーチ、ベリー、パインは改めてジョーカーの不気味さを思い知らされた・・・

### 3、あゆみの本心

あゆみが、サデイスによってその姿を変えられ、誕生した魔人ヘイト!ヘイトは、再び黒いクライナーへと変化したアンデに命じ、この世界に憎しみを広げようとマリント

ワーの上で指示を出し続けていたが、虹の光が輝く度に、負の力が失われていくのを感じていた。

「何だ、あの輝きは・・・不愉快な光め!!」

「居た! あゆみちゃん!!」

ヘイトの背後が赤く輝くと、パッションと共に姿を現わすハッピー達五人にキャンデイとルセン、ハッピーはヘイトに声を掛けるも、振り返ったヘイトは不愉快そうに眉根を曇らせるのだった。

「じゃあ、私は戻るわね! ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、それにキャンデイもルセンも、あなた達なら必ず出来るわ!! 直ぐに応援に来るから!!!」

再び赤く輝き、パッションはピーチ達の下へと戻っていった。

五人のプリキュアが、ヘイトを険しい表情で見つめると、ヘイトも忌々しげに睨み返す。

「また貴様か・・・目障りな奴め!」

「あゆみちゃん・・・迎えに来たよ! みんなもね、あゆみちゃんが私の友達だって行ったら、それなら自分達にとっても友達だからって、一緒に迎えに来てくれたんだよ!!」

「友達!?! 黙れ、私はこの世界に憎しみを広げる者だああ!!」



ヘイトは、ハッピーの言葉を否定するかのように両手を高々と上げ、辺りに漂うクライナー達からヘイトの周囲に負の力が集まり始める。ルセンは慌ててビューティの手から飛び出すと、真つ黒く変わったアンデに必死に何かを訴え掛けるものの、その言葉も届かない。アンデはヘイトと同じように負の力を体内に集め始めるも、

「ギユウウウン!!」

まるでその衝撃に耐えられないかのように、アンデがのたうち回った。ルセンはアンデを庇うようにするも、ルセンの身体も黒く染まり始める。キャンデイが怯えながら二人の名を叫び、ハッピーの目からも涙が溢れてくる。

「もう、もう止めてえええ!!」

ハッピーは涙混じりに叫ぶと、ヘイトに飛びつき両者が倒れ込む。駆け寄ろうとするサニー、ピース、マーチを制したビューティは、

「此処は・・・ハッピーに任せましょう! 私達は、この場に集まってくるこの憎しみの集合体を排除しましょう!!」

ビューティの提案を受け入れ、四人は四方に散り、

「先輩達の攻撃が通用してたつちゆう事は、今回は吸収されへんなあ・・・ヨツシャ〜! それなら、特大のおみまいしたるでえ!! プリキュア! サニー・・・ファイヤー!!」

サニーの身体から炎が沸き上がると、炎はボールの形になり、サニーがそれを思いつ

きり叩き付け、周囲に炎が巻き起こり、辺りを赤く染めた。

サニーファイヤーが、ピースサンダーが、マーチシユートが、そして、ビユータイプリザードが、憎しみの集合体を排除していった・・・

四人が、マリンタワーに憎しみの集合体が近づくのを許さず、奮闘するのを見たハッピーは、再びあゆみを元に戻すべく説得を続ける。

「あゆみちゃん・・・あゆみちゃんは、あの時身を挺してアンデの事を庇ってたじゃない！キユーちゃんは私の大切なお友達だって・・・そのお友達があんなに苦しんでるのに、あゆみちゃんは何とも思わないの？あゆみちゃん!!」

「私は・・・ヘイト！あゆみじゃ・・・」

「違う！あゆみちゃんだよ!!あゆみちゃん、もう一度アンデを良く見て！この街を良く見て！これが本当に・・・あなたが望んでいる事なの？あゆみちゃん!!」

ハッピーの言葉が、ヘイトの心の奥底に眠る、あゆみの良心を刺激する。ヘイトはハッピーの言葉の通り、苦しむアンデを、そのアンデを助けようとして同じように苦しむルセンを、闇に覆われた横浜の街を見つめた。

これが私の望んだ事・・・

これが私の本当に望んだ事・・・

違う!!私・・・

私は……

「あゆみちゃん!!」

ハッピーの瞳から流れた涙が、ヘイトの頬にあたる。ヘイトの心の中に、アンデと出会った日々が浮かんでくる。

寂しい心を埋めたくれたアンデとの日々が……

そして、出会って間もない自分の事を、必死になつてくれるみゆきの事が……  
ヘイトの目からも涙が零れてくる。

「あゆみちゃん……答えてーこれは……本当にあなたが望んでいる事なの?」

「私は……私は……本当は……寂しかっただけなのとおお!!私、こんな酷い事を……したく……無い!! キューちゃん……ゴメンね……ゴメンねえ!!」

ヘイトの瞳から止め処なく涙が溢れてくる。ハッピーの心からの叫びが、ヘイトの心に増幅された憎しみの心を浄化していった……

#### 4、レインボーヒーリング

サデイス、ベガ、デイクレと対峙していたプリキュア5とローズだったが、突然現われたバルガンと名乗る者の前で、三人は跪き震えているようにドリームには見えたのだった。

「デイクレよ、カイン殿とアベル殿はお怒りだ!! 封印などされ、魔界の名を汚したお前達には死を与えよと申された．．．お前達も噂は聞いた事があるだろう? カイン殿とアベル殿は、元々我らの魔界を支配し方々、現王にその支配を委ねたとはいえ、その影響力は計り知れない!! 我ら十二の魔人と呼ばれし者の中でも、このお二方とアモン殿、シーレン殿は別格、四神と呼ばれている事は知っているな? そのお二方が下した決断だ!!」

バルガンの通告に、デイクレ、サデイス、ベガの表情が凍り付いた．．．

「お、お待ちを!! 我々は．．．」

バルガンは、慌てて言い逃れをするデイクレを制すると、

「まあ待て、デイクレ! お前とは知古の間柄、私も必死に嘆願したところ、シーレン殿だけは私の言葉を聞き入れて下さった。シーレン殿は、魔界の中でも慈悲深きお方、お前達を処刑するまでもないとお二方に進言して下さい、お前達の命だけは免除! 魔界からの追放と決った!! 感謝するのだな!!」

「ハッ．．．ハハア!!」

バルガンに深々と頭を下げた三人だったが、バルガンの言葉が心の中で繰り返される。魔界からの追放．．．

故郷を追われた三人の心に、プリキュアへの憎しみが沸々沸き上がってくる。呆然と

するドリーム達に顔を向けた三人は、

「プリキュアアアアア！貴様らの所為で我らは・・・」

「この手で八つ裂きにしてやる!!」

「絶対に許さないよおお!!」

ゆつくり立ち上がり、ドリーム達を睨み付けるデイクレ、ベガ、サデイス、バルガンは口元に不気味な笑みを浮かべると、三人を制止し、

「待て！私の目の前でこの世界の人間との衝突をさせる訳にはいかん・・・一先ずこの場を去れ!!私が去った後は、貴様らの好きにするがいいさ・・・」

サデイス、ベガ、デイクレは、口惜しそうにしながらもバルガンの言葉を受け入れ、上空に舞うとその姿を消した・・・

「待ちなさい!!」

「プリキュアと言ったな!!私はお前達と此処で争う気は無い!だが、お前達が我ら魔界の者に手を出した時は・・・我ら魔界と全面対決になる事は肝に銘じておくのだな!!」

三人が飛び去るのを止めようとしたローズだったが、バルガンが話し掛けてきた事だと思わず沈黙する。ドリーム達は、険しい顔を浮かびながらバルガンの言葉を聞き終わると、

「私達だって、あなた達と戦おうとは思わない!だけど、あなた達が私達の世界を、妖精

達の世界を、滅茶苦茶にしようとする時は・・・私達プリキュアは、あなた達を阻止してみせる!!」

ドリームが強い意志でバルガンに宣言すると、バルガンは口元に笑みを浮かべ、  
「フフフフ、勇ましいいな・・・その言葉、覚えておこう!!」

ゆっくり上空に浮き上がり、次元の裂け目に吸い込まれるように消え去ったバルガン、ドリームは一同を促し、ハッピー達の居るマリンタワーへと向かい駆け始めた・・・

「あゆみちゃん・・・良かった！今、今私達が元のあゆみちゃんに戻して上げるから！必ず元に戻して上げるから!!」

ハッピーが手を差し伸べると、ヘイトはハッピーの手を掴みゆっくり立ち上がった。ヘイトは、苦しむアンデとルセンをその手に抱き上げ、涙を流しながらゴメンねと何度も謝り続けていた。

だが、どうすれば元のあゆみに戻せるのか？しかし、ハッピーに悩んでいる時間は無かった・・・

「みんなあ、力を貸してええ!!あゆみちゃんを元に戻せる力を・・・みんなの力を貸してええ!!」

ハッピーの叫び声に一齐に振り返るサニー、ピース、マーチ、ビューティは、ハッピー

の側でアンデとルセンに頬擦りするヘイトを見て、笑みを浮かべながらハッピーの元へと集った。

「ハッピー！やったやないか!!」

「うん！ハッピーの心が通じたんだね!!」

「あたし達も嬉しいよ!!」

「はい、ですが急ぎましよう!!時間がありません・・・」

だが、その時、上空から拍手が鳴り響き、思わず上を見上げた一同は、ジョーカーを見て驚愕する。

「あなたは・・・どうして此処に!?!」

ジョーカーは、ピーチ達と戦って居た筈であった・・・

ピーチ達が負けるとは思わないものの、一同の心に不安が沸き起った。

「トレビアン！友情の力で、魔に変えられた友達を救おうとは・・・素晴らしいですよ!!  
ですがね、そうハッピーエンドにはなりませんよ・・・出ですよ!アカンベエ!!」

ジョーカーは青い玉を右手で空に掲げると、マリンタワー本体をアカンベエへと変化させた。ハッピーとサニーがヘイトを、ピースがキャンディを、マーチがアンデを、ビューティがルセンを抱き抱えながら、一同はマリンタワー上空からダイブし、下に居たピーチ達と合流する。

「ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、無事で良かった．．．その子はもしかして!？」

「はい!この子が私のお友達のあゆみちゃん、みなさんのお陰で、あゆみちゃんも、アンデも取り戻す事が出来ました!!でも、あゆみちゃんを元の姿に戻そうとした時、ジョーカーが現われて．．．」

ピーチ達四人の顔が強張る．．．

自分達が見す見すジョーカーを逃がしたばかりにと、そんなピーチ達的心情を揶揄するかのよう、トランプの舞がプリキュア達の前に降り注ぐと、

「さあ、あなた方との続きを始めましょうかねえ．．．アカンベエ!あなたはキュアハッピー達と遊んで差し上げなさい!!」

ジョーカーは、トランプを手裏剣のようにピーチ達四人に投げつけ、その攻撃を躲し続けるピーチ達は、どんどんハッピー達から遠ざかって行った．．．

（これで邪魔者は近づけませんねえ．．．フッフ、五人のプリキュア達の驚く顔が目につかぶようですねえ!）

ジョーカーの口元に笑みが浮かぶと、ピーチ達は苛々したようにジョーカー目掛け再び攻撃を開始するのだった．．．



「見て下さい！アカンベエの鼻が・・・何時もと違い青いです!!」

ビューティがアカンベエの変化に気づき指を指すと、一同も何時もと違うアカンベエを見て驚きの声を上げた。

「本当だ！何時もと違うねえ・・・あゆみちゃん、キャンデイ、ルセン、アンデ、みんなは私達から少し離れてて!!」

「う、うん!」

ハッピー達に促され、ヘイトは少し離れた大きな木の陰からハッピー達を見守った。

「みんな、もうあまり時間が無いわ!」

「ほな、派手にいこうやないかあ!!」

サニーの合図に一同が頷くと、

「プリキュア!ハッピー〜・シャワ〜!!」

「プリキュア!サニーファイヤー!!」

「プリキュア!ピース・・・サンダー!!」

「プリキュア!マーチシュートオオ!!」

「プリキュア!ビューティ〜・ブリザ〜ド!!」

もうあゆみを元に戻す為の時間が無い!

一同は一気に勝負に出ると、五人の必殺技を同時に放ち勝負に出た!!

これであゆみを元に戻す事に専念出来ると考えた。だが……

アカンベエは動じず、更にプリキュア達に攻撃を仕掛けてくる。疲弊しているプリキュア達は、アカンベエの攻撃を受け大苦戦に陥った……

「そんなあ……私達の攻撃が効かない何て?！」

自分達の必殺技は、このアカンベエには効かない……

頼れる先輩達も、今この場には誰も居ない……

もう時間が無いのに……

ハッピー達五人の心は激しく乱れた……

「アア……プリキュアが！」

あゆみは、今の自分の姿ならば、プリキュア達を手助け出来るのではと考えると、妖精達に待っているように伝え走り出した。

「今度は私みんなの力になってみせる……」

ハッピー達の前に出たあゆみを見て、ハッピーは驚愕し、

「あゆみちゃん!? 駄目だよ! 負の力を使ったら、また……」

「だい……丈夫! 私、あなたと出会って勇気を貰えたもの! 私、悪い心になんか負けない!!」

あゆみの周囲に負の力が集まり始める。あゆみはその力を糧とし、アカンベエの攻撃からハッピー達を庇い続ける。

キャンデイも、弱っているハッピー達を見ると、居ても経っても居られなくなっていた。自分もプリキュア達を、アンデとルセンを、そして、アンデを助けてくれていたあゆみの事も救って上げたいと……

意を決したキャンデイは、

「キャンデイも、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティを救いたいクル!! アンデを、ルセンを、助けていクル……ハッピー達の力に……なりたいクルウウウウ!!!」

キャンデイの身体が光輝いた時、額から発せられた光が、ハッピー達五人に新たなるデコルを与えた。

「キャンデイ、これは一体……キュアデコル!？」

「でも、みんな形がバラバラやな……ウチのは丸形や!」

「本当! 私は星形で、ハッピーはハート形」

「あたしは菱形で、ビューティは……ダイヤ形つて所かな?」

「もしかしたら、私達に新たなる力を授けてくれるのでは?」

五人がスマイルパクトに新たなるデコルをセットすると、五人の額に黄金のティアラ

が装着された。その姿は、まるで五人がお姫様になったかのようなようだった。

「キャンディ、ありがとう！キャンディの思い、私達に伝わったよ!!みんな!!」

ハッピーは、キャンディに微笑むと、キャンディも嬉しそうに目をキラキラ輝かせた。自分もみんなの役に立てた事が嬉しかった。ハッピーの掛け声に合わせるかのように、五人が右手を前に重ね合うと、五人の中に言葉が浮かんでくる・・・

「二二プリキュア！レインボーヒーリング!!」

五人の身体から、虹の輝きが広がっていく・・・

何処かブラックとホワイト、二人のレインボーセラピーを連想させる五人の合体技が、アカンベエの姿をしたマリインタワーに、虹の輝きを浴びせた・・・

ハッピー達が発したレインボーヒーリングの輝きは、あゆみの身体を、アンデとルゼンを、そしてマリインタワーの空を覆い、憎しみに満ちたマリインタワー上空に、再び青空を取り戻した・・・

第四十七話：あゆみを救え！

完

## 第四十八話：消滅！

## 1、消えゆく光

プリキュア達一同は、マリインタワーの上空に青空が現われたのを見て笑顔を向ける。

「ホワイト、ルミナス、あの子達がやってくれたようだね！」

「ええ、まさか此処までの力を持つて居る何てね……」

「はい！でも、まだこの街には憎しみの意思が残って居るようです……憎しみの意思が、ハッピー達に迫っている気がします……私達もマリインタワーに向かいましょう!!」

ルミナスが何かを感じ、ブラックとホワイトにマリインタワーに向かおうと進言すると、二人は顔を見合わせると頷き、三人はマリインタワー目指して全速力で走り始めた：

（今の輝きは!?!ひよつとすると、ミラクルジュエルの手掛かりが掴めるかも知れませんかえ……）

ピーチ、ベリー、パイン、パッションと戦って居たジョーカーは、レインボーヒーリングの輝きを見ると、戦いを中断し、ピーチ達から距離を取った。上空から観察したジョーカーは、その力をプリキュアに与えたのは、どうやらキャンディである事を見抜

くと、

(あの妖精……どうやら更に観察する必要がありませんねえ!それには、ウルフルンさん、アカオーニさん、マジヨリーナさんだけでは……さてどうしたのですかねえ?)

顎に右手を乗せ考え込むジョーカーは、この場所に近づく憎しみの力を感じると目を見開き、

「これは使えそうですねえ……三幹部の皆さん!お待たせ致しました……さあ、プリキュア達に先程の借りを返してらっしゃい!!

ジョーカーが指をパチリとならすと、巨大なトランプカードがブルーム達、メロディ達、ピーチ達の前に現われ、カードが一回転すると、ブルーム達の前にウルフルンが、メロディ達の前にアカオーニが、ピーチ達の前にマジヨリーナが現われた。

(さて、私はあの三人の出方を伺うとしますか……)

ジョーカーは、トランプの舞と共にその姿を再び消した……

「あんたは、さっきの犬男!」

「犬じゃねえよ!どう見ても狼だろうが!!」

「どつちでも良いような気もするけど……」

「良くねえよ！この俺様が、犬呼ばわりされて黙って居られるか!!」

ブルームに犬と間違われてご立腹のウルフルン、イーグレットにもどつちでも良いと言われ、地団駄踏んで悔しがる。

「ブルーム、イーグレット、バカの相手をしている暇は無いわよ!!」

「さつきとみんなと合流しましょう!!」

ブライトにはバカ呼ばわりをされ、ウインディには無視をされ、益々腸（はらわた）が煮えくりかえるウルフルンだったが、

「テメエら、コケにしやがってえ！プリキュア共、さつきは油断したが・・・今度はそうはいかねえぜ!!出でよ！アカンベエ!!」

目の色変えたウルフルンに身構えるブルーム達、ウルフルンは、道端に落ちていた漫画雑誌をアカンベエに変えるや、ブルーム達に挑み掛かった・・・

「何かデカイのまた出た!!」

「ガアアア！俺様はアカオーニだ・・・さつきの借りを、お前達で返すオニ!!」

ミューズが少し嫌そうな顔でアカオーニを見ると、アカオーニは棍棒を地面に二度三度と突き、プリキュア達を威嚇するも、

「直ぐにウドの大木だって事を、思い知らせて上げるわ！」

「エエ、私達のハーモニーパワー！見せつけて上げましょう!!」

リズムとビートがアカオーニに対して身構えると、アカオーニは頭を掻きながら、  
「難しい事は、良く分からないオニ・・・」

「私も、良く分からないや・・・」

「ハミイもそうだニヤー!」

思わず互いの顔を見て笑い合うアカオーニとメロデイ、ハミイ、リズムはトホホとぼやき、ミュージズは醒めた視線を二人に向け、ビートは苦笑を浮かべた。

「何かお前とは気が合うオニ！でも、これも戦いオニ・・・行くオニ！出でよ、アカンベエ!!」

アカオーニは、立て看板をアカンベエに変えてメロデイ達に攻撃を始めた・・・

「何か、相手がお婆ちゃんだと戦いにくいね・・・」

「何かこつちが悪者みたいだわ・・・」

困惑気味に目の前に現われたマジヨリーナを見つめるピーチ達四人、ピーチとベリーが、マジヨリーナ相手だと何かこちらが悪者みたいだと苦笑を浮かべると、

「失敬だわさ！あたしや、まだまだお婆ちゃんじゃ無いだわさ!!」

「つて言われても・・・ねえ?」



「そうね、どう見てもお婆さんよね!!」

パインの言葉に相槌をうつパッション、マジヨリーナは顔を真っ赤にして怒り始める  
と、

「忌々しい奴らだわさ・・・出でよ!アカンベエ!!」

マジヨリーナは、山下公園のベンチをアカンベエに変え、ピーチ達に襲いかかった:

ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、そしてキャンデイの目がキラキラ輝いた。目の前には、坂上あゆみが、妖精の姿に戻った狐に似たアンデ、山羊に似たルセンが、元の姿を取り戻したのだから・・・

「あゆみちゃん・・・良かった!良かったよおお!!」

「ありがとう・・・あなた達プリキュアのおかげよ!!」

思わず互いに正面から抱き合い、嬉し涙にくれるハッピーとあゆみ、

「アンデルセン!良かった・・・良かったクル〜!!」

「キャンデイ!!おいら達・・・元に、元に戻れたんだね?」

「アンデ・・・私達元の姿に戻れたセセ!」

「これもキャンデイと、プリキュア達のお陰デデ!」

三人で手を取り合いジャンプしながらクルクル回り続ける三人の妖精達、サニー、

ピース、マーチ、ビューティも嬉し涙にくれた。

アンデとルセンは、あゆみの下に歩み寄ると、あゆみはしやがみ込み、目線をアンデとルセンに合わせ微笑みを向けた。アンデとルセンも嬉しそうに微笑みながら、

「あゆみ・・・やつとあゆみとお話しする事が出来たデデ」

「キューちゃん・・・それがあなたの本当の姿なのね？」

「そうデデ！これがボクの本当の姿、メルヘンランドの妖精アンデ！隣に居るのはルセン！」

アンデに紹介されたルセンが、ペコリとあゆみにお辞儀をすると、

「あゆみ、アンデを助けてくれてありがとうとセセ！」

「あゆみが居たから、ボクはあの姿になっても耐えられたのかも知れない・・・あゆみ、ありがとう!!」

「私の方こそキューちゃん・・・ううん、アンデが居てくれたから今の生活にも耐えられたのかも知れない・・・アンデ、ルセン、さつきは酷い事をさせてゴメンなさい!!」

「あゆみのせいじゃ無いデデ！」

「そうセセ！悪いのは、あの人セセ!!」

ルセンは頬を膨らませて、自分達を怪物に変えたサデイスを思いだし、あゆみのせいではないとフオローする。

「伝説の戦士プリキュア！何と感謝すれば良いのか分からないけど・・・本当にありがとう  
デデー!!」

「このご恩は決して忘れないせせ！」

アンデとルセンがハッピー達五人に深々とお辞儀をすると、ハッピー達は照れくさそうに苦笑を浮かべた。

あゆみを、アンデとルセンを元に戻せた事を、早く先輩プリキュア達にも伝えたいと思つたハッピーであつた・・・だが!!

ハッピー達が取り戻したマリインタワー上空の青空が、瞬時に禍々しい闇に覆われた・・・

憎しみの闇がマリインタワー上空に再び漂う・・・

「これは、あの時と同じデデー！」

「またあの怖い人達が現われるせせ！」

嘗て、メルヘンランドの禁断の森で出会つたサデイス達三人の気配が、再び間近に迫っている事を感じたアンデとルセンが、ブルブル震え出す。キャンデイも不安そうに辺りをキョロキョロすると、上空を指差し、

「だ、誰か居るクル!」

キャンディの言葉を受け、一斉に空を見上げた一同の視線に、サデイス、ディクレ、ベガの三人が、鋭い視線で眼下の一同を睨み付けた。

「全く忌々しい奴らだ・・・プリキュアアアア!!」

「あたしのクライナーを、魔界の戦士を、元の姿に戻したっていうのか?」

「一度魔に染まった者は・・・元に戻る事など不可能だと教えてやるよ!!」

上空から三人が強烈な衝撃波を浴びせて一同を吹き飛ばす、吹き飛ばされたあゆみの目前にベガが現われると、あゆみにパンチを浴びせようと拳に負の力を蓄え始める。

「あゆみちやああん!!」

絶叫するハツピーが援護に向かおうとするも、サデイス、ベガが五人を威嚇し、あゆみの下へと向かう事を阻止する。

震えるあゆみ目掛け、ベガの右ストレートが炸裂するも、アンデとルセンがあゆみの前で手を握り合い、バリアを張って攻撃を防いだ。

「あゆみに・・・手出しさせないデデ!!」

「今度は、私達を守るセセ!!」

「アンデ・・・ルセン・・・」

二人に守られたあゆみの瞳から、ポロポロ涙が零れてくる。ベガが咆哮すると全身が

ドス黒く輝き、

「くたばれえええ!!ダークネス・・・ボンバー!!」

ベガの気合いを込めたシオルダータックルを受け、アンデとルセンのバリアは砕け散り、二人は闇の力を浴びて、絶叫しながら地面に叩き付けられる。

「アンデ・・・ルセン・・・イヤアアアアア」

あゆみもまた、絶叫しながらアンデとルセンの下へと駆けつけると、二人を愛しそうに抱き起こし、声を掛ける。だが、瀕死の二人は息も絶え絶えで、言葉も上手く出てこなかった・・・

「アンデエエー!ルセン!ハッピー、みんなああ!!アンデとルセンを助けてクルウウウ!!」  
キャンディの悲痛な叫びが、五人のプリキュアの耳に痛い程響いてくる。だが、ディクレ、サデイスの攻撃を受け続け、次々にダメージを負っていった・・・

度重なる連戦は、想像以上にハッピー達五人の体力を奪い去っていた・・・

「あ、あゆみ・・・大丈夫?」

「私達・・・あゆみを守れたセセ?」

「うん、うん、私は二人のお陰で大丈夫だよ!だからしっかりして・・・アンデ!ルセン!  
!」

声を掛けて励ますあゆみの下にキャンディも到着し、アンデとルセンに必死に声を掛

けるも、二人の身体は徐々に半透明になっていった。

「アンデエエエ！ルセン！退いてええ!!そこを退いてええええ!!」

血相を変えたハッピー達が、二人に駆け寄ろうとするも、サデイスの衝撃波の乱れ撃ちが、五人を吹き飛ばし近づけさせない。

「あゆみ・・・キャンディを頼むデデ！キャンディは寂しがり屋だから・・・」

「あゆみも私達の方まで・・・」

「分かったから、もう喋らないで！今手当を・・・」

二人はゆっくり頭を振ると、笑みを浮かべながら、

「最期に・・・元の姿に戻れて・・・良かった!」

「ロイヤルクイーン様・・・聞こえていたら、ボク達の最期の願いを・・・」

顔を見合わせたアンデとルセンは、笑みを浮かべ合うと、

「あゆみの力になれますように・・・」

そう言い残し、二人の身体は光と共に消え失せた・・・

「アンデ・・・ルセン・・・そんなああ、そんなああ」

二人の消えた場所を呆然と見つめたあゆみ、その手の中には光輝く小さな球体が二つ、まるでアンデとルセンの形見のように輝き続けていた。

あゆみはその場で嗚咽しながら泣き崩れた・・・

拳を握り、地面を叩き続けた・・・

自分に力があれば・・・

プリキュアになれたら・・・

アンデとルセンを、ハッピー達を守る力があれば・・・

(あゆみ、悲しまないで！ボク達は、あゆみと何時も一緒に居るよ!!)

(ロイヤルクイーン様が・・・私達の最期の願いを叶えてくれた!)

(あゆみは、こんなに優しいんだもの・・・あゆみの夢はきつと叶うよ!!)

(今はまだ、その力に気付いて居ないけど・・・)

(あゆみなら、必ず・・・プリキュアに!!!)

(あゆみ、ボクらの分まで・・・キャンディの事を見守って上げて!!)

心の中に語り掛けてくるアンデとルセンの声・・・

それはあゆみの幻聴なのか、それはあゆみにも分からない・・・

あゆみは顔を上げると、泣きじやくるキャンディを抱き上げ、悲しい気持ちを堪え、キャンディを励ました。

そんなあゆみに、再びベガが迫るも、あゆみは気丈にキャンディを庇いながらベガを睨み返した。

ハッピー達を戦闘不能寸前まで追い詰め、デイクレとサデイスもあゆみに迫る。

「さあ、妖精は始末した！一度魔界の者となったお前を・・・裏切り者として殺し、プリキュア共を始末すれば、少しは我らの気も晴れるというもの」

ヨロヨロ立ち上がった五人が、あゆみとキャンディの下へと歩を進めようとするも、身体は中々言う事を聞かず、ハッピーは自分の足を叩きながら、

「動いて！動いて！お願い、動いてええ!!」

気合いを入れてゆつくり歩を進め出すのを見たサデイスは、

「チツ、面倒だねえ・・・纏めてその女と一緒に始末してやるよ!!」

ベガに顎で合図を送ると、ベガが拳を鳴らし、あゆみに再び近付いて来る。あゆみは咄嗟にキャンディを逃がしたものの、ベガはあゆみを掴むとハッピー達の下へと投げ飛ばした。

「キヤアアア！」

「あゆみちゃん！」

ハッピーは身体事あゆみを受け止めるも、そのまま地面に倒れ込む。

「纏めて消えちまいな！プリキュアと共に!!」

サデイス、ベガ、ディクレが両拳に力を込めると、負の力が拳に集中し、三人が一気に拳を突き出すと、黒い渦を発しながらハッピー達とあゆみ目掛け飛んでいく。

「ハッピーー！みんなあああ!!」



号泣しながら一同の名を叫ぶキャンデイ、その目の前を二つの影が横切ると、瞬時に手を握り合い、三人の魔人の攻撃を受け止めた。

「よくもハッピー達をいたぶってくれたわね!!」

「ルミナス!あなたはハッピー達の援護に回って!!」

険しい表情を浮かべながら、駆けつけたブラックとホワイトが、手を握り合いながらバリアを張り、ハッピー達一同を庇った。ルミナスは頷くと、

「はい、分かりました!!ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、大丈夫ですか?」

助けに来てくれたブラック、ホワイト、ルミナスを見た一同は、堪えていた感情が一気に爆発し号泣する。

「何?!どうしたの?ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ?」

「一体、何があったの?」

ブラックとホワイトは、チラリと背後のハッピー達を見ながら優しく声を掛けると、  
「アンデとルセンがああ、その人達にやられて・・・」

「むぎむぎ私達の目の前で、消滅させられて・・・」

「ウチ・・・悔しいわああ!」

「あたし達・・・折角二人を元の姿に戻す事が出来たのに・・・」

「救えなかった……」

ハッピーが、ビューティが、サニーが、マーチが、ピースが、皆俯きながら泣きじやくり、

「私のせい何です……私の……二人は私を庇って……」

顔を覆つてその場に泣き崩れるあゆみを労り、ルミナスは優しく声を掛けた。ブラックとホワイトは正面を向き直すや、キツと三人の魔人を睨み付けた。二人の闘志が、三人の魔人を飲み込むと、三人はブラックとホワイトに気圧された。ブラックとホワイトは、一気に距離を詰め、呆然としていたサデイス、ベガ、デイクレの三人に、怒濤の連打を浴びせ吹き飛ばした。

「あんたら……絶対許さない!!」

「アンデとルセンの無念……私達が晴らしてみせる!!」

ブラックとホワイトの啖呵を聞くや、全身を痙攣させるサデイス、ベガ、デイクレ、  
「その声……やはりそうか!まさか……貴様達までこの時代に居たとは?」

「ああ、正直驚いた!」

「その顔……その容姿……そして、その声……忘れはしないよ!!」

「我ら三人を、ロイヤルクイーンと共に封印した貴様ら二人!!今こそあの時の怨み、晴らしてくれるうううう!!」

「デイクレ、ベガ、サデイス、三人の魔人の瞳は金色に妖しく輝き、その口は醜く耳元まで裂けた・・・」

「何?! こいつら、一体何を言ってるの?」

「分からない・・・多分、私達を誰かと勘違いしているんだと思うけど・・・」

三人の異変を受け、困惑するブラックとホワイトであったが、二人も鋭い視線を三人に浴びせ続ける。

三人の魔人は上空高く浮かび上がると、

「貴様らが居るのなら、最早小細工はせん・・・この街事消えて無くなれええ!!!」

「デイクレの言葉に合わせるように、三人が右手を重ね合うと、負の力が一気に増幅し始め、辺りを禍々しい気が覆い始めた・・・」

## 2、虹の輝き

各地で闇、そして、アカンベエと戦って居たプリキュア達にも、直感的に嫌な気配がマリインタワーから流れてきた事を感じるや、皆表情を変えた・・・

「何?! 今の感じは・・・みんな、急ぐよ!! ココ! ナッツ! 力を貸して!!」

ドリームの言葉に頷いたココとナッツが念じ始めると、

「プリキュアに力を!」

「ミルキイローズに力を！」

ココ&ナツツの頭上にパルミエ王国の王冠が現われ、プリキュア5とローズに力を与える。

「クリスタル・フルーレ！希望の光!!」

「ファイヤー・フルーレ！情熱の光!!」

「シャイニング・フルーレ！弾ける光!!」

「プロテクト・フルーレ！安らぎの光!!」

「トルネード・フルーレ！知性の光!!」

プリキュア5の手にキュアフルーレが装備される。そして、ミルキイミラーがローズの手に現われる。六人のプリキュア達が構えると、

「邪悪な力を包み込む、煌くバラを咲かせましょう！ミルキイローズ！メタル・ブリザード!!」

「5つの光に！」

「「「勇気をのせて！」」」

「「「プリキュア！レインボー・ローズ・エクスプロージョン!!」」」

青い薔薇の吹雪が、五色の薔薇が合わさり虹色の薔薇が、前方の闇に蠢く群れを飲み込み駆逐した……

「な、何だ!?此奴ら、急激に力が上がりやがっただとお?」

ブルーム達四人の精霊の輝きが一層力を増し輝くと、ウルフルンはその力を目の当たりにして驚愕する。

「あんたと戦つてる暇は無いの!!イーグレット、ブライト、ウインデイ、一気に決めるよ!!」

「「エエ!!」」

ブルームの合図を受け、横一列に並んだ四人は、

「精霊の光よ!命の輝きよ!」

イーグレットとウインデイが叫べば、

「希望へ導け!二つの心!」

ブルームとブライトが叫ぶ、

「プリキュア!スパイラル・ハート・・・」

「プリキュア!スパイラル・スター・・・」

「「「スプラ〜ッッシュ!!!」」」

ブルーム達の必殺技が、ウルフルンとアカンベエに迫る。その威力の前に堪らずウルフルンは撤退し、アカンベエは浄化され、ブルームがバナナのキュアデコルをゲットす

るも、四人は足下に力を込め、マリンタワー目指し飛翔した。

「何か嫌な予感がする・・・メロデイ、リズム、ミユーズ、一気に決めましょう! ハミイ!!」

「合点ニヤ!!」

ビートの言葉に反応したハミイは、預かっていたヒーリングチェストを取り出すと、  
「出でよ、全ての音の源よ!」

フェアリートーン達の力を受け、クレッシェンドトーンを召喚した一同は、

「届けましょう、希望のシンフォニー!!プリキュア!スイートセツシヨン・アンサンブル・クレッシェンド!!!」

両腕をクロスした四人が、クレッシェンドトーンの金色の光の炎と一体化し、慌てて逃げるアカオーニを尻目に、アカンベエ目掛け突撃した・・・

「ファイナレ!!!」

四人の合図と共に、アカンベエの負のエネルギーが爆発し、アカンベエを浄化したメロデイは、蝶のキュアデコルをゲットする。

「行こう!ハッピー達が居るマリンタワーに!!」

メロデイの合図と共に駆け出すメロデイ達だった・・・

「凄まじい憎しみの力を感じるわ・・・私達もマリンタワーに行くわよ!!」

「はっ!!」

ムーンライトの言葉に頷いたプロツサム、マリン、サンシャイン、プロツサムタクト、マリンタクト、シャイニータンバリン、ムーンタクトを取り出し、勝負に出る。

「花よ、輝け!プリキュア!ピンクフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、煌け!プリキュア!ブルーフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、舞い踊れ!プリキュア!ゴールドフォルテバススト!!」

「花よ、輝け!プリキュア!シルバーフォルテウエ〜イブ!!」

四人から放たれたフォルテウエーブ、フォルテバスストが闇の中に輝く花を咲かせた。ムーンライトがマントを取り出すと、シプレ、コフレ、ポプリの妖精達もマント姿に変わり、四人は上空に飛翔した。

「ベリー、パイン、パッション、急いでハッピー達に合流するよ!!」

ピーチの合図を受け、ピーチロッド、ベリーソード、パインフルート、パッションハーブを四人が取り出すと、

「吹き荒れよ!幸せの嵐!プリキュア!ハピネス・ハリケーン!!」

「悪いの、悪いの、飛んでいけ!!」

「プリキュア!ラブサンシャイン・・・」

「プリキュア!エスポワールシャワー・・・」

「プリキュア!ヒーリンググプレアー・・・」

「フレ〜ッッシュユ!!」

四人の合体技を受け、浄化されたアカンベエ、ピーチはボールの形をしたキュアデコルをゲットするも、一同がキツとマジヨリーナを睨み付けると、

「アワワワワワ!お、覚えておいで!!」

マジヨリーナは逃げるようにその場から撤退する。ピーチ達は背後を振り向くと、再びマリインタワー目指して走り始めた・・・

上空に浮かぶ三人の魔人から、強大な負の力を込めたエネルギー波が地上目掛け放たれた。咄嗟にルミナスがバリアを張ろうとするのを、ブラックとホワイトが止めた。

「ルミナス、あなたはハッピー達を守って!!」

「みんな、大分疲れてる・・・此処は私とホワイトで食い止めてみる・・・行くよ、ホワイト!!」



ギユツと握り合う手と手、ブラックとホワイト、二人の身体から発せられた虹色の光が、虹色の球体の巨大なバリアとなって広がっていく……

マリンタワー上空で激しくぶつかり合う光と闇の力……

「グウウウウウ……プリキュアアアア!!」

「あたし達の目の前から……消えて無くなれええ!!」

「ハアアアア!!」

デイクレが、サデイスが、ベガが、一層の雄叫びを上げ威力が増していく。負けずとブラックとホワイトの握り合う手と手に、ギユツと力が加わっていく。

「メツプルウウ!!」

「ミツプルウウ!!」

「あなた達もルミナスの側に行つてええ!!」

「ブラック、ホワイト、何言つてるメボ」

「私達も一緒に……」

「いいから早くうう!!」

二人に怒鳴られ、慌てて妖精姿になったメツプルとミツプルは、ルミナスの下へと避難する。それを見届けた二人は、

「あんた達何かに、絶対負けなからあ!!」

「この街も、ハッピー達プリキュアのみんなも」

「守ってみせるううう!!」

更にギュツと握り合う手に力が加わると、虹の球体は凄まじい輝きを発し、三人の魔人が放った一撃を粉碎し、三人を吹き飛ばした・・・

「バ、バカな!!我ら三人が押されているだとお?」

「畜生!!」

「おのれ、プリキュアアア!!」

力を使いすぎ落下したデイクレ、ベガ、サデイスは、荒い呼吸を繰り返す。凄まじい光で輝く虹の球体が、憎しみに包まれた闇を完全に排除し、横浜の空に、再び青空を完全に取り戻した・・・

徐々に集結したプリキュア達も、再び横浜の空に青空が戻った事にホッと安堵する。

だが、虹の輝きが収まった時、そこには誰も居なかった・・・

「エツ!?ブラック、ホワイト、何処ですか?」

ルミナスは辺りをキョロキョロ捜すも、視線に映るのは他のプリキュアの仲間達とあゆみと妖精達、そして、疲労困憊している三人の魔人だけだった・・・

駆けつけたムーンライトは、ルミナスに近付き手短かに状況を聞くと、ハッピー達を労りながらも、姿が見えないブラックとホワイトを必死に目で捜す。

「ブラック！ホワイト！冗談は止めて．．．早く姿を見せて!!」

だが、二人は答えない．．．

駆けつけたプリキュア達に動揺が沸き起った。

「ブラック．．．なぎさああ!!」

「ほのかああ!!」

今にも泣き出しそうな声で、必死に二人の名を呼ぶメップルとミツプル、それでも二人は答えない．．．

「ハ．．．ハハハハ！消えた．．．消滅しやがった!!」

「勝った！我らは勝ったのだ!!」

「この時をどれ程待ち望んだ事か．．．」

ベガが、ディクレが、サデイスが、積年の恨みを晴らし、歓喜の声を上げる。三人の声が聞こえるやムーンライトは呆然とし、そのまま膝から崩れ落ちると、

「ブラックウウ！ホワイトオオ!．．．なぎさ．．．ほのか．．．嘘、嘘よ．．．イヤアアアアア!!」

ムーンライトの悲痛な叫び声が、マリインタワーに響き渡った．．．

#### 第四十八話：消滅！

完

## 第四十九話：悪の同盟！

### 1、鬼神

ハッピー達は、新たなるカレインボーヒーリングで、あゆみ、アンデとルセンを元の姿に戻す事に成功したものの、強襲したサデイス、ベガ、デイクレの前に、アンデとルセンはあゆみを庇い消滅し、危機を救ってくれたブラックとホワイトもまた、虹の輝きと共に消え失せた・・・

一同の心に深い哀しみが覆う中、三人の魔人の嘲笑が響き渡る・・・

ムーンライトの瞳から、止め処なく涙が零れてくる・・・

出会った期間はほんの数年、だがその数年が、ムーンライトには何十年もの知古のよう感じられていた。

親友ならえりかの姉もかも居る・・・

プリキュアとしての先輩なら薫子も居る・・・

同じ苦しみを乗り越えた、ブロッサム達沢山の後輩プリキュア達も居る・・・

だが、月影ゆりとして、キュアムーンライトとして、対等の立場で話の出来る親友は、

ブラックとホワイト、なぎさとほのかだけだった・・・

同じ時期からプリキュアとして戦い、自分の事を理解し、励ましてくれた大切な親友であり、戦友でもあった。

ムーンライトも、本当は優しく繊細な心を持つ少女である。プリキュアとしての使命感から気丈に振る舞う彼女だったが、精神的支えでもあるブラックとホワイトが居ない現状で、後輩達を導いていける心の強さは無かった・・・

嘗て、父を目の前でデューンによって消滅させられていたムーンライトにとって、親友を同じように失う悲しみは耐えられなかった・・・

後輩プリキュア達は呆然としていた・・・

キュアムーンライトは、クールで頼りになる先輩プリキュア、そのムーンライトが、今まで見せた事の無い姿で動揺し、号泣する姿を見て、後輩達は掛ける言葉を失っていた。ただ、プロツサム、マリン、サンシャインは、デューンの手に掛かり、消滅したゆりの父月影博士を見ていた。三人の心も、あの時と同じように悲しみが満ちていた・・・

そんなプリキュア達に、サデイス、デイクレ、ベガの嘲笑が容赦なく浴びせられる。ゆつくり立ち上がったムーンライトは、流れる涙を拭いもせず、キツと三人を睨み付けて、無言で三人目掛け歩み始める。

「ムーンライト、無茶です！」

ブロッサムが止めるのも聞こえないかのようには、ムーンライトは歩み続ける。三人の魔人を、鋭い視線で睨み付けながら・・・

「何だ!? 次は貴様があの者達のように、無様に消滅するか?」

鼻で笑うデイクレに対し、ムーンライトの理性が崩壊した・・・

「ウワアアアア!!」

雄叫びを上げながら突進するや、三人に怒濤の攻撃を繰り返すムーンライト・・・

パンチが、キックが、サデイス、ベガ、デイクレを容赦なく打ちのめしていく。

「こ、この野郎! 調子に乗るんじゃないやねえ!!」

背後から雄叫び上げて殴りかかるベガを、振り向きもせず右手の裏拳で吹き飛ばす。

その姿は、鬼神とも呼ぶ姿をしていた。鬼気迫るムーンライトの攻撃はサデイスにも浴びせられ、堪らず地面にうつ伏せに倒れたサデイス、ムーンライトは、雄叫びを上げたまま容赦なくサデイスの後頭部を蹴り続けた。

「ム、ムーンライト・・・」

その鬼気迫る迫力は、他のプリキュア達に近付く事を許さない凄みを放っていた。

「な、何だ!? コ奴、体力を失っているとはいえ、我ら三人を相手に・・・」

デイクレは、体力を失っているとはいえ、自分達三人を圧倒する力に驚愕する。ゴロゴロ転がり、辛くもムーンライトから逃げたサデイスは、

「ガハア……ち、畜生おお!!だ、だが、こいつは使える!こいつの心は、あたしらに對しての憎しみで一杯だ!!」

三人は頷き合うと、ムーンライトを中心に置くと、三方に散り、黒いエネルギー波がうねりを挙げてムーンライトを捕らえる。サデイスが念を込めると、ムーンライトの額に五芒星が浮かび上がってくる。

三人の魔人は、ムーンライトに魔を憑依させ、自分達の忠実なる魔へ変えようと試みる。何時もの冷静沈着な彼女なら、このような攻撃を迂闊に食らうことは無い、だが、今のムーンライトは、三人の魔人を目の敵にし、この手で倒さずには居られないといった状態だった。

「ウワアアア!!」

それでもムーンライトは、がむしゃらに暴れ、三人に攻撃を加えようともかくも、黒いエネルギー波は、まるで鞭のようにムーンライトに巻き付き、動きを封じる。

「貴様のその憎しみの心、利用させて貰う……さあ、貴様も魔となり、我らが軍門に下るがいい!!」

サデイスは、黒いマントを何度も翻し、両手を天に構えると、

「魔よ!この地に現われ、この女の心の憎しみを、もつと、もつと増幅させよ!!我は求め……訴えたり!!」



サデイスの両手がサツと下がると、上空に現われた黒煙がムーンライトの身体を包み込む、ムーンライトは悲鳴を上げながらも、心の中の憎しみが増幅してくるのを感じていた。

ムーンライトは膝から崩れ落ちた・・・

心の中の闇と格闘を始めたかのように・・・

「ウワアアアアアア!!」

雄叫びを上げるも、放心したかのように動きが止まるムーンライト、ハッピーはその姿を見るや、先程あゆみが受けた状態と似ている事に気付くや、

「あれは、あの時のあゆみちゃんと・・・ムーンライト、逃げてええ!!」

ハッピーの絶叫を聞き、瞬時に行動を移したプリキュア達、アクアのサファイアアローが、ビートのビートソニックが、ウィンディの凄まじい突風が、ムーンライトを捕らえていた黒いエネルギー体を断ち切れば、ドリームのスューティングスターがサデイスに、マリんとサンシャインのフォルテツシモがベガに、ピーチ達四人のクアドラプルパンチがダイクレを吹き飛ばす。

「あなた達の好きにはさせない!ムーンライトは、私達が守つて見せる!!」

ドリームの言葉を表すかのように、ムーンライトを庇うようにその周りで身構える一同、ブロッサムは、放心状態のムーンライトの両肩を激しく揺さぶりながら、

「ムーンライト、しっかりして下さい!あなたが信じないでどうするんですか!!ブラックも、ホワイトも、きつと、きつと無事で居ます!!」

目の焦点が合っていないなかったムーンライトだったが、ブロッサムという言葉が、次第にムーンライトの理性を再び取り戻させる。

「ブロッサム!?!みんな?でも・・・でも・・・」

額に浮かんだ五芒星も消え去り、再びムーンライトの心に理性が完全に戻るも、ブラックとホワイトが居なくなつた現実が思い浮かんでくる。再び止め処なく涙を流すムーンライトに、

「ブロッサムの言う通りです!ブラックも、ホワイトも、こんな事で消えたり何か・・・しない」

「ルミナス・・・」

涙を堪えるようにグツと拳を握つたルミナス、自分より二人と過ごした時間が長いルミナスや、メツプルやミツプルも悲しみに耐えている。

なのに、自分は・・・

ムーンライトは涙を拭い立ち上がった!

今は悲しんでいる時ではないと・・・

ポルンとルルンは、心配そうに妖精姿になつてルミナスの顔を見つめていると、

「ポポ!？」

「ルル!？」

突然上空を見上げたポルンとルルンが、一点を凝視するや、目を閉じて何かの気配を探るように集中し始める。

「ポルン、ルルン、どうしたメポ?」

「感じるポポ! 遠い、遠い所で、なぎさとほのかの気配を感じるポポ!!」

「メポ!？」

「ミポ!？」

ポルンの言葉を受け、衝撃を受けたメツプルとミツプル、そしてプリキュア達は、顔色を変えポルンとルルンの側に集まってくる。

「ポルン、ルルン、それは本当なの!？ど、何処に居るの?」

驚愕の表情を浮かべながら、ポルンとルルンに問い掛けるムーンライトに、ポルンもルルンも首を振りながら、

「分からないルル・・・でも、遠い、遠い所で、なぎさとほのかを、ルルンも感じるルル」

その言葉を聞き、プリキュア達、妖精達の顔が綻ぶ、この場所に居なくても良い、二人が無事で居てくれるなら・・・

「ブロッサム・・・またあなたに立ち直らせて貰う何て、まだまだ私もプリキュアとして

未熟なようね！ありがとう・・・もう大丈夫!!」

ムーンライトは、口元に笑みを向けながらプロツサムに頷くと、プロツサムも頷き返した。

プリキュア達の視線が、三人の魔人サデイス、ベガ、デイクレへと向けられる。

「コ奴、立ち直ったか・・・」

「どうする!?!今のあたし達の体力じゃ、此奴ら相手に・・・」

「クソオオ!魔界にさえ戻れば・・・」

今の自分達の体力では、これだけのプリキュアを相手にして勝てる見込みは0だった。最早帰る場所の無い三人に取って、此処を死に場所と決め、一人でも多くのプリキュアを道連れにするよりないと覚悟を決めようとしたその時、

「お困りのようですねえ・・・どうです!?!我らバッドエンド王国と手を結びませんか?」

突然空中から声が響き渡るや、トランプの舞が上空から降り注ぎ、姿を現わすジョーカー、神出鬼没のその姿に、プリキュア達も、三人の魔人も驚愕する。

「お前は・・・確かバッドエンド王国の!?!」

「はい、ジョーカーと申します!?!どうでしょう・・・我々に協力して頂けるなら、あなた方を、我らバッドエンド王国の大切なお客様として、バッドエンド王国にご招待致しますか?もちろん、好きなように過ごして頂いて結構です!!共にプリキュアを敵と見なす

私達なら・・・悪い話では無いと思うんですけどねえ？」

ジョーカーは口元に笑みを浮かべながら、三人の魔人に対し同盟を提案してくる。その意外な提案に三人も虚を突かれた。デイクレは、ジョーカーの真意を探るようにジョーカーを見つめるや、

「なるほどな・・・確かに我々はプリキュアを敵と見なしている。サデイスの話によれば、お前達はロイヤルクイーンを封じたとか・・・良からう！我々に取って悪い話では無い!!我々はどうせ何処にも行く宛も無い・・・ならば、貴様に協力するのも、結果的には我らの目的にも通じる・・・良いな？サデイス！ベガ！」

「どうもこいつは胡散臭そう何だけど・・・仕方が無いね！了解した!!」

「ああ、俺も依存は無い!!」

三人が同意した事に、ジョーカーは嬉しそうにクルクル回転して三人にお辞儀をし、プリキュア達を振り向くと、

「と言う事で、我々の目的は一致致しました!!今日の所は一先ず退散致しますが、次からは覚悟していて下さい!!さあ、皆さん方を我らバッドエンド王国へとご招待致しますよ  
う!!!」

今、プリキュア達の目の前で、バッドエンド王国と三人の魔人が手を結んだ・・・

プリキュア達の表情が一層険しさを増していく。

「待ちなさい！このまま黙って行かせると思っているのかしら？」

見す見すこのまま見逃したりはしない！ブライトは気合いを込めると、光を頭上に集め巨大な球体を作り上げるや、ジョーカー、そして、三人の魔人目掛け強烈な一撃を放った。ジョーカーは、トランプカードを手に取り前が出るや、ブライトの攻撃をトランプの中へと吸収した。

「そ、そんなあ!？」

思わず目を見張るブライト、今まで幾多の敵と戦ってきた彼女であったが、こんな状況は初めてだった。ジョーカーは、ブライトの動揺する姿を見て口元に笑みを浮かべると、

「凄まじい攻撃ですなあ……まともに食らえば、私も大ダメージを受けていたかも知れませんが……さあ、ご自分でも受けてみなさい!!」

ジョーカーが手に持つトランプから、ブライトの放った攻撃は、巨大な闇の球体となつてブライト目掛け発射された。

（そんなあ……私の攻撃を、更に力を加えて跳ね返す何て!?)

虚を突かれ反応が遅れたブライトに、ブライトの名を呼びながらブルーム、イーグレット、ウインディが近づき、バリアを張つて攻撃を防ぐと、ブライトも我に返り、四人は闇の球体を両手で押さえ受け止めるも、その威力を止めきれず徐々に四人が後方に

押され始める。

「クウウウ・・・」

力を込めるものの、その威力は止めきれず、四人の体力をジワジワと奪っていく。

「これ以上、大切な仲間を失わせせない!!」

苦戦する四人を見たムーンライトの指示の下、プリキュア達全員が巨大な闇の球体を抑え、動きを止め、ムーンライトはルミナスを見ると、

「ルミナス！今の内にこの球体を光の力で中和して!!」

「分かりました！ハアアア!!」

ルミナスは光の力を解放すると、ルミナスの体から凄まじい光の輝きが溢れ出し、巨大な闇の球体を、光の力で中和し消滅させた。

「みんな、ありがとう！まさか、あのジョーカーと言う者に、これ程の力があるなんて・・・」

「用心しましょう！私もパルミエ王国で身を持って体験したから分かる！」

ブライトが一同に感謝を述べ、パルミエ王国で戦った事があるローズが、一同にジョーカーには気をつけるように忠告を与えた。

プリキュア一同はハアハア荒い呼吸を繰り返しながらも、ジョーカーと三人の魔人を険しい視線で見つめ続ける。

(流石は伝説の戦士・・・と言った所でしようか)

今の攻撃を受け止め、消滅させた力を見て、ジョーカーの顔色が変わった。やはりプリキュア達は、一筋縄では行かない相手だと認識する。

「今日の所はこれで退いてやる・・・だが、覚えておきな!一度魔に魅入られた貴様は、必ず私達が始末してやるからねえ!!」

サデイスの鋭い視線があゆみに向けられると、思わずあゆみは身が竦んだ。そんなあゆみを庇うように前に出るハッピー達五人、アンデとルセンの分まで、あゆみの事は守って見せると固く心に誓った・・・

「あなた達こそ!あなた達がアンデとルセンにした酷い仕打ち、この街を滅茶苦茶にしようとした行為、ハッピー達や、その友達にした行為を・・・私達は、決して許さない!!」

ドリームが、一同の心を代弁するかのようになり、ジョーカー、三人の魔人に対し宣言すると、ジョーカーはニヤリと笑みを浮かべ、

「ウフフフフ!肝に銘じておきましょう・・・では!!」

トランプの舞がジョーカーを、サデイス、ベガ、デイクレを包み込むと、四人はその場から姿を消し去った・・・

プリキュア達は飛び去っていくトランプカードを険しい視線で見つめ続けた・・・



長かった横浜の戦いは、こうして幕を下ろした・・・  
失った命、消えた仲間・・・

一同の心には、深い虚無感が沸き上がっていた・・・

大切な友達を失った、キャンデイの心の傷も深かったが、みゆき達を始めとしたプリキュアの仲間達、妖精達が、その心の傷を少しずつ埋めていく事だろう・・・

少女達は前へ進む・・・

悲しんでばかりは居られないのだから・・・

## 2、報告

変身を解いた少女達は、山下公園で今後の事を話し合っていた・・・

「なぎささとのほか、どこかで無事だと分かった事だけは幸いだけど・・・二人の家族に、何と報告すれば良いのか・・・」

困惑するゆりが頭を抱えると、ひかりも神秘的な面持ちで、

「はい、なぎさささんや、ほのかさんのご家族の方達に、連絡しない訳にも行きませんか  
ら・・・」

困惑するゆりとひかり、確かに二人の家族に何の連絡も入れないのは、警察沙汰にな

る騒動に成りかねなかつた。思案する少女達の中で、つぼみは何かを閃くと、

「ゆりさん、ひかりさん、家のお婆ちゃんに相談してみましようか？」

「そうね・・・薫子さんなら、何か良いアイデアを出してくれるかも知れないわね！」

ゆりは、つぼみの言葉に同意すると、携帯を手に取り薫子に電話を掛け助言を求めた。

薫子も、事の次第を聞き大変驚き思案すると、

「じゃあ、こうしましょう・・・なぎさちゃんとはのかちゃん、私の研究のお手伝いをしてくれると言う事で、地方の研究施設に行っている事にするわね。私からも二人のお家には電話を入れるから、なぎさちゃんとほのかちゃん、二人のお家の電話番号を教えてくださいませんか？でも、二人から全く連絡が無いとなると問題だけれど・・・」

ゆりは、薫子に言われた通り、なぎさとほのかの家の電話番号を教え、薫子にお願いし電話を切つた。みんなに薫子の言葉を伝えると、一同が考え込む・・・

そんな中、えりかが何かを閃くと、

「そうだ！誰かがさ、なぎささんとはのかさんの振りして、二人のお家に電話すれば良いんだよ！」

「エッ!? 一体誰が？」

えりかの閃きに、不安そうなたつぼみは誰が電話を掛けるか聞くと、えりかは咲の顔をニンマリしながら見つめ、一瞬キョトンとした咲は、自分を指差し、

「エッ!?わ、私?無理、無理、なぎささんの真似何か無理だよお!!」

変顔を浮かべた咲が、ブルブル首を振ってなぎさの真似なんて無理だと拒否をするも、ゆりとひかりも咲に頭を下げるや、

「咲・・・お願い!これもなぎさの為だと思つて、協力してくれないかしら?」

「咲さん・・・私からもお願いします!!」

「ウツ・・・そこまで言われたら・・・分かりました!やつてみます!!」

ゆりとひかりからも懇願され、困惑しながらも咲は承諾した。頼まれたら嫌とは言えない咲の性格は、確かななぎさに似ていた。咲は、ひかりになぎさの真似をして話してみると、ひかりは何とかなると思ひますと苦笑を浮かべる。

「ほのかさんはおつとりした所あるし、れいか!お願い!!」

続いてえりかが指名したのはれいか、困惑した表情を浮かべたれいかは、小首を傾げながら、

「私ですか?あいにく、私はほのかさんの事を、まだ良く存じませんが・・・」

「大丈夫、相手はほのかさんのお婆ちゃんだからさあ!」

「ハア・・・一応やつてみますが・・・」

困惑しながらもれいかも承諾し、なぎさとほのかの家に電話を掛けようと、咲、れいか、ゆり、ひかりは、一同をその場に残して公衆電話へと移動を開始した。

最初に掛けたのは咲、隣でゆりとひかりが、咲にアドバイスをしながらなぎさの家に電話を掛ける。

「あつ、もしもし、お母さん!なぎさですけど!!実は、知り合いの研究所の手伝いを頼まれちゃつて、暫く手伝いたいんだけど、良いかな?」

咲は、額に汗を浮かべながら、何とかなぎさの口まねをするも、電話口のなぎさの母理恵は、

「なぎさ?!何時もと声が違うけど、まさかあなた、振り込め詐欺じゃないでしょうね?」

と咲を疑い、変顔を浮かべた咲が、しどろもどろの言い訳をしながら動揺するのを見て、益々疑惑を募らせる理恵、慌ててゆりとひかりも電話に出て、なぎさ本人で、少し風邪気味なので声が違うのではとフォローし、咲が再び電話に出ると、理恵は怒りながらも、なぎさの事を心配そうにしながらも承諾し、頻繁に連絡を入れるように伝え、咲は何とかこの場を乗り切った・・・

「咲、お疲れ様!」

「ああ、緊張したあ・・・ソフトの試合の方が数倍楽だよ!」

変顔を浮かべた咲が、ホツと吐息を漏らし、胸を撫で下ろした。

「なぎささんのお母さんに、悪い事をしましたね・・・」

「そうね・・・しようがないとはいえ、良心が痛むわね・・・」

ゆりとひかりは、顔を見合わせ思わず溜息を付いた・・・

続いてれいかかほのかの家に電話を掛ける。電話に出たほのかの祖母さなえに、

「あつ、お婆様・・・ほのかですが」

直ぐに側に居たひかりとゆりが顔色を変え、小声でれいかに、

「ほのかは、お婆ちやまって呼んでるの!」

「あまり丁寧な言葉遣いだと、返って怪しまれてしまいます」

「ハア・・・難しいものですねえ・・・」

れいかは小首を傾げながら、言われた通りにさなえに話し掛けるも、そんなやりとりが聞こえたのかどうか、電話口のさなえはフッフッフと笑いだし、

「あなた、ほのかのお友達? 何があつたかは知りませんが・・・ほのかの事でご迷惑を掛けたようですねえ・・・ありがとう! こちらの事は心配しなくても大丈夫ですよ!! さつき、植物園の園長さんからも連絡を貰いましたから・・・皆さんにもよろしくね!!」

まるで全てを悟っているかのように、返ってこちらの事を気に掛けてくれたさなえの言動に、れいかも、れいかから聞いたひかりとゆりも驚くのだった・・・

なぎさと、ほのかの家族への連絡も付け、次に一同は、あゆみをどうするか話し合  
う・・・

あの三人の魔人は、自分達同様、あゆみの事も狙っている事は確かであり、このまま

あゆみと別れる訳も行かず、どうするか話し合い始めた。

（みゆきちゃんを始め、此処に居る人達がみんな、プリキュアだった何て！凄いい!!でも・・・）

あゆみは、憧れていたプリキュア達一同と知り合えて嬉しかったのだが、アンデとルセンを失った悲しみもあり、素直に喜ぶ事も出来なかった・・・

そんなあゆみを見たゆりは、

「あゆみちゃんって言ったわね？あの三人が、私達プリキュア同様、あなたを目の敵にしている以上、このままお別れする訳にも行かないわ・・・」

ゆりの言葉を聞くや、真っ先にみゆきがあゆみに語り掛け、

「あゆみちゃん、私の連絡先教えるね！何時でも連絡して!!」

真っ先にあゆみに連絡先を教えたのはみゆき！

みゆきはポシエツトからペンと紙を出し、自分の連絡先をあゆみに教え、あゆみもみゆきに連絡先を教えた。みゆきは何時でも七色ヶ丘に遊びに来てねと声を掛け、また横浜にもみんなで遊びに来るからと、みゆきがあゆみにニッコリ微笑み掛けると、あかねはあゆみの肩に手を回し、

「もう、ウチら友達やん！」

「そうそう、何時でも来てね!!」

「私達も、今度はゆっくり横浜観光がしたいですしね！またこちらに伺います!!」

あかねが、なおが、れいかが、みゆき同様あゆみに微笑み掛ける。やよいは目をキラキラ輝かせると、

「太陽マンのロケがある時は、絶対教えてね!」

「太陽マン!?!」

「どうでもいい!」

「すくぶるどうでもいい」

「エエエ!?何で私だけええ」

あゆみには、太陽マンの事は知らないらしく首を捻られ、あかねとなおには、醒めた目で見つめられ、やよいが涙目になりながら頬を膨らませると、一同から苦笑が巻き起こる。咲も気さくにあゆみに話し掛けると、

「あゆみちゃん、横浜に住んでるんでしょう?」

「はい、この近くに……」

「だったら、私達は湘南に住んでるから、みんなよりは近いかもね……私の家の連絡先も教えておくよ!家は海原市夕風町で、PANPAPAパンっていうパン屋やってるから、良かったら遊びにお出でよ!!美味しいケーキもあるんだあ!!」

「エッ!?は、はい……」

ニツコリ微笑みながら、あゆみを家に誘う咲、あゆみは虚を突かれ驚くも、思わず嬉しそうにはいと答える。咲は、みゆき達五人も見つめると、

「みゆきちゃん達も、良かったら遊びにお出でよ！何時でも歓迎するよ!! そういえば、響と奏、エレンやアコちゃんも家にはまだ来た事無かったよね・・・みんな纏めて歓迎するよ!!」

「そうね、他のみんなには教えたけど、大空の樹にも連れて行ってあげたいわね!」

「うん!!」

咲、舞、満、薫もあゆみに微笑み掛け、あゆみの不安な胸中を和らげようと声を掛けた。

「デザートと言えば、奏の店のカップケーキも凄く美味しいんだから! みゆきちゃん達も、あゆみちゃんも、何時でも加音町に遊びにお出でよ!! サービスするから!!」

「ちよつと響! 勝手に家の店の商品、サービスしないでよ!!」

「エエ!? いいジャン! 奏のケチ!!」

「ケチじゃないわよ! ちゃんとみんなが来たらサービスするわよ!!」

舌を出し合い、言い合う響と奏を見て、みゆき達とあゆみはオロオロし、他のメンバーは苦笑を浮かべ、

「また始まったわね・・・響と奏の痴話喧嘩」



「本当、本当」

美希はクスリと笑い、えりかがニンマリする。

「二人共・・・飽きないわね」

「でも、これが始まらないと響と奏らしくもないわね・・・みゆき達も、あゆみも、気にしないで良いわよ！毎度お馴染みだから!!」

アコと顔を見合わせたエレンが、苦笑を浮かべながらみゆき達とあゆみに声を掛け、一同を安堵させる。

「困った時は、私達プリキュア宛に手紙を書いてくれれば、シロップが配達してくれるから・・・ねえ、シロップ?」

「ロプ！何時でもプリキュア達に届けるロプ!」

「みゆきちゃん達も、あゆみちゃんも、私達の街にあるナッツハウスにも是非遊びにいらっしやい!!」

「今は営業してないけれど、今でも私達はあの場所で度々集合してるのよ!」

「連絡くれれば、シロップを迎えに行かせるから!」

「待つロプ！シロップは手紙の運び屋ロプ!!」

のぞみ達一同もニッコリ微笑みあゆみに声を掛けた。

「私も、あゆみに携帯とアドレス教えて置くわね！私はアカルの力で瞬間移動が出来

るから、緊急時には直ぐに駆けつけられるわ!!」

せつなは、あゆみに連絡先を手渡しニツコリ微笑む中、ラブは腕を組んで考え込むポーズを見せながら、

「ウーン・・・あゆみちゃんかあ・・・家のお母さんと同じ名前だから、混乱するなあ・・・アハハハ!!」

「そういえばそうね!しかも、みゆきちゃんに、れいかちゃんも居るし、後一人、ななちやんでも居たら・・・トリニティが出来るわね」

「そういえばそうだねえ・・・みゆきちゃん達とは、何かの因縁を感じるよねえ」

苦笑を浮かべる美希に、ラブも腕組みしながら頷く、美希はあゆみとみゆき達を見ると、

「ねえ、あゆみちゃん!みゆきちゃん達も!今度、四つ葉町のクローバータウンストリートにも遊びにいらつしやい!歓迎するから!!」

「うん!美味しいドーナツ屋さんも紹介してあげる!!」

「ちよつと変わってるけどね・・・」

ラブ、美希、祈里、せつなも、あゆみを気に掛け気さくに声を掛け励ます。

「洋服の事なら、あたしの店フェアリードロップにお任せだよ!何ならあたしが、みゆき達や、あゆみの服もコーディネートしてあげるよ!!」

(フェアリードロップ!? 何処かで聞いた事あるような?)

えりかが自分の家のフェアリードロップの名を出すと、やよいは何処かで聞いた事がある気がして小首を傾げる。それもその筈で、やよいの母千春は、ファツション関係のスタイリストをしていて、えりかの母さくらには大変お世話になっていて、来海先生と呼ぶ程尊敬しているのだが、娘のえりかとやよいはその事はまだ知らない・・・

「身体を鍛えるなら、僕の家でいつでも教えてあげるからね!」

「それはどうでしょうか?」

えりかは服の事を、いつきは武道の事でみゆき達やあゆみに何時でも来るように声を掛けると、つぼみは、身体を鍛えるのはどうかと思うと言い、微妙な表情を浮かべるのだった・・・

次々にあゆみを心配し、声を掛けてくれる一同の心があゆみには嬉しかった。

「皆さん、ありがとう・・・私、私・・・転校したばかりでこの街で一人も友達が出来なくて・・・」

嬉しさのあまり、つい一同に悩みを洩らすあゆみ、あゆみの言葉を聞いた転校した事があるメンバーが頷くと、

「分かります! 私も不安でしょうがありませんでした!!」

「ええ、私も住んでいた街に戻って来たとは言え、転校する時は緊張したわ! でも、睨が

同じクラスに居てくれたから・・・」

「私もラブのクラスに転校したから、気分的には楽だったわね」

「私は響と奏のクラスだったけど、緊張で・・・一睡も出来なかったわ」

つぼみと舞が当時を思い出したのか、感触深げに目を閉じ当時を振り返ると、せつなとエレンも話しに加わり、当時を思い出し苦笑気味に一同に語った。くるみは少し自慢気にし、

「私は緊張しなかったわね! 謎の美少女として・・・」

「はいはい、そんな事思うの、くるみぐらいだから」

「何よおお!!」

りんは邪険にされ、頬を膨らますくるみ、満と薫は顔を見合わせると、

「私達は、当時咲と舞を観察する目的で転校したから、あまり覚えて無いわね?」

「ええ、あまり自己紹介にも興味無かったわね」

あゆみは、みゆきも転校したばかりだと言っていたのを思い出し、

「こんなに転校された方々が居る何て・・・みなさん、私と同じような気持ちだったんですねえ・・・」

「最初はそうですよね・・・私も自分で考えていた自己紹介をしようとして、誰かさんのせいで滅茶苦茶になりましたから・・・」

「何それ、あたしの事!？」

「はい! えりかの第一印象・・・最悪でした!! でも、今では掛け替えのない親友です!!」  
えりかは不満気に頬を膨らますも、つぼみのフォローで忽ち上機嫌になつていった。

「あゆみさん・・・勇気を出して、自分から話し掛けて見て下さい!!」

「うん、つぼみさんの言う通りだよ、あゆみちゃん! 私達とだつてお友達になれたんだもの、直ぐにこの街でもお友達が出来るよ!!」

みゆきもつぼみの言葉に同意した。あゆみの目から、ポロポロ嬉し涙が溢れてくる。嫌っていたこの街で、友達が沢山出来た事が嬉しかった。自分の事を気に掛けてくれて、アドバイスまでしてくれる沢山の友達が出来て嬉しかった。

(アンダーセン! あなた達が心配しないように・・・私も頑張るからね!!)

あゆみは、二人の形見とも呼べる球体に誓い、一同に満面の笑みを浮かべながら、「はい!」と答えた・・・

#### 第四十九話：悪の同盟！

完

## 第五十話：修学旅行（前編）

1、ゴプリキユア、西へ!!

4月28日土曜日朝・・・

あれから一週間が過ぎた・・・

なぎさもほのかも、まだ戻って来ては居なかった・・・

あゆみはみんなに励まされ勇気を貰い、学校のクラスメイト達に思い切って声を掛けると、何人かの子と仲良くなる事が出来た・・・

あゆみは何時もの通り机の前に座り、アンデとルセンの形見とも呼べる、小さな光輝く球体に話し掛けて居ると、

「あゆみ！星空さんって人から電話よ！もう、ちゃんと友達出来たんじゃない・・・今度家に連れてらっしやい!!」

「星空さん!?!・・・みゆきちちゃん!!」

あゆみは嬉しそうに立ち上がると、部屋を出て電話へと向かった。

引越して来てから、あゆみに元気が無い事を心配していたあゆみの母は、嬉しそう

に電話に出るあゆみを見て目を細めた。

「もしもし、みゆきちゃん！」

「うん！あゆみちゃん、おはよう！あれから何ともない？」

「うん、今の所大丈夫！あのせつなさんって言う人が、一日一回様子を見に来てくれるし・・・お土産にドーナツも貰ったの!!」

「エエ!?良いなあ・・・私達、まだ食べた事無いんだよおお・・・所で、話は変わるんだけどお！行き成りだけど、私達明日から、二泊三日の修学旅行で京都と大阪に行くんだけど・・・あゆみちゃん、お土産何が良い？」

「エツ!?そんな、悪いよ・・・でもみゆきちゃん達、私と同じ中二って言ってたけど、もう修学旅行行くの?」

「うん！家の学校は、中二の時に行くんだって！あゆみちゃんの学校は？」

「私の所は中三になったらだから来年なの！」

楽しそうに電話で会話するあゆみとみゆき、あゆみの母は、笑みを浮かべながらその場を立ち去った。

修学旅行・・・

学生なら誰しも一度は経験する行事・・・

みゆき、あかね、やよい、なお、れいかの五人も楽しみにしていた・・・

日中にみんなで修学旅行の買い物をしたみゆき達、休憩を兼ねて公園のベンチに座り、ジュースを飲みながら談笑をしていた・・・

大阪で育ったあかねは特に大はしやぎで、一同に大阪の街を案内すると気合いが入る。あかねは、一同に大阪講座を始め出すと、

「大阪といえば・・・」

「大阪城！太陽マンがドクガーと戦った・・・」

あかねは変顔を浮かべながら、やよいが目をキラキラ輝かせながら喋るのを遮り、

「何やそれ？・・・まあ、太陽何とかは要らんけど、確かに大阪城は定番や！他には通天閣、道頓堀・・・あっそうそう、阪神甲子園球場を、大阪にある思うてない？甲子園は大阪ちやうでえ！兵庫県やから!!間違わんといてえ!!」

「東京デイズニーランドが、千葉県にあるような感じでしょうか？」

「どうかなあ!？」

「似ているような・・・似てないような・・・」

あかねの言葉に、れいかがデイズニーランドの話題を振ると、一同は首を捻りながら、似ているような、似ていないようなと小首を傾げる。



「キャンデイ、よく分からないクル・・・」

キャンデイも何の事か分からず小首を傾げると、あかねもデイズニーランドの事はそれ程詳しく無いようで、

「ウチも・・・って、デイズニーランドは関係あらへん！ウチらが行くのは関西！京都、大阪や!!どうせなら、デイズニーランドや無く、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンって言つてえな!!それに、大阪と言えば・・・食い倒れの街やああ!!!」

拳を振り上げ気合いを込めるあかねに、少し驚いた表情をしたれいかは、

「あかねさんが・・・燃えてます!」

「当たり前やあ!ウチが大阪の美味しい物、教えたる!!お好み焼き、たこ焼き、串カツ、きつねうどん!これらを食べなきゃ大阪に来た意味無いでえ!!」

更に気合いが入るあかねに、れいかは少し恥ずかしげに、

「私・・・たこ焼きという物を、まだ食べた事が無いんです!」

「ホンマア?ならウチが、たこ焼きの美味しい所案内したる!れいかのたこ焼きデビューを、みんなで祝おうやないか!!」

「「オオ!!」」

話を振ったあかねだったが、何かを思い出すと、変顔を浮かべながら慌てて前言撤回し始め、

「アカン．．．れいか、悪いんやけど．．．たこ焼きは別な日にくれへんか？ウチ、ひかりさんと約束してんねん！ひかりさんの店のたこ焼き食べに行くって．．．どうせなら、れいかのたこ焼きデビューは、ひかりさんの店って事にせえへんか？」

「私は構いませんけど？」

「悪いなあ．．．みんなも、大阪でたこ焼きは勘弁してやあ！」

「「うん!!」」

みゆき、やよい、なおも同意し、

「その代り．．．美味しい店案内してよ！」

「任しときい!!」

なおの言葉に、腕まくりして任せてとニンマリ微笑むあかねだった．．．

その夜の星空家．．．

「お母さん、お土産．．．何が良い？」

「エツ!?そうねえ．．．これといって頼むような物は．．．みゆきが良いと思う物を買ってきてくれたら、それで嬉しいわ!!」

パジャマ姿になり髪を下ろしたみゆきが、リビングで椅子に座って寛ぐ、母育代に甘えるようにお土産の話題を振ると、育代はみゆきを買ってきてくれた物なら何だって嬉

しいと微笑みを向けた。

「分かった！可愛いお土産買ってくるからねえ!!」

「エエ、楽しみにしてるわね!」

「じゃあ、お休みなさい!」

「お休み、みゆき!」

博司はまだ帰って来ていないようだったが、母と娘は微笑み合いながら会話を終えた……

ちようどその頃、みゆきの部屋ではキャンデイが、メルヘンランドに居る兄ポップに電話デコルで話をしていた……

「そうでござったか……キャンデイ、気持ちに分かるでござるが、悲しんでいるだけでは、アンデモルセンも心配してしまうでござるぞ?せっかくみゆき殿達が、キャンデイを修学旅行とやらに連れて行ってくれるのでござるから、キャンデイも息抜きをするでござる!」

「分かったクル……」

ポップの言葉にキャンデイが素直に頷き、ポップはホツと安堵した表情で何度も頷いた。

「所で、みゆき殿達は何処に旅行に行くのでござる？」

「キャンデイ、よく分からないクル．．．ちよつと待つてるクル！」

キャンデイは、みゆきの旅行カバンをゴソゴソ漁ると、修学旅行のしおりをポップに見せ始める。キャンデイがペラペラ捲る中身を見ていたポップは、ある場面を見て目を輝かせると、

「こ、これは．．．キャンデイ！みゆき殿は、何時に出発すると言つてたでござる？」

「クル!?確か．．．7時に駅前集合とか言つてたクル」

「7時に駅前でござるな?こうしてはおれんでござる．．．キャンデイ、さらばでござる!!」

「アツ、お兄ちゃん、お兄ちゃああん!．．．切っちゃったクル」

慌ただしく電話を切ったポップに、キャンデイは不満気に頬を膨らませるのだつた．．．

「キャンデイ、どうしたの?」

部屋に戻ってきたみゆきに、キャンデイはポップと話してたら、一方的に切られたと頬を膨らませ愚痴ると、みゆきはベッドに飛び乗り寝転びながら、

「そつかあ．．．ポップも忙しいんだろうね!キャンデイ、明日は早く起きなきゃならぬいし、もう寝よう!!」

「分かったクル!!」

二人は少し会話した後、寝息を立てる・・・

明日の修学旅行を楽しみにしながら・・・

翌29日、みゆき達修学旅行当日・・・

この日は快晴で、集合場所の駅前には、七色ヶ丘中学校の二年生達がワイワイしながら集まっていた・・・

「みゆきの奴、遅いなあ?」

「もうすぐ、点呼を始めてしまいますね・・・」

「私、みゆきちゃんのお家に電話してこようかなあ!?!」

「あつ!噂をすれば・・・みゆきちゃああん!!」

あかね、れいか、やよい、なおが、中々来ないみゆきを心配していると、みゆきは走りながら手を振り、

「ゴメエエン!遅くなっちゃった・・・」

「星空さん・・・修学旅行の時くらい、もつと余裕を持って来ましょうね!」

「ハアアイ!」

苦笑を浮かべた佐々木先生に注意され、みゆきは頭を掻きながら返事をする、一同

が苦笑する。

こうして、みゆき達は、新幹線で京都へと旅立って行った……

2、ふたりは大凶！

新幹線の中は、ゴールデンウィーク初日という事もあつて混雑していたが、生徒達は、これから始まる修学旅行の旅を想像し、期待に胸を躍らせていた……

「星空さん！座席の上で踊らない!!」

「ハアアイ！」

嬉しさのあまり、座席の上ではしゃいでいたみゆきを注意する佐々木先生だった……

京都に着いた一同は、目の前に聳える京都タワーを見て感嘆の声を上げていた。

「凄おおい！あれがあかねちゃんと言つてた……通天閣!!」

「ちやうわ!!」

「みゆきさん……あれは京都タワーで、通天閣があるのは大阪です!」

みゆきのボケに、間髪入れず突つ込むあかねとれいか、

（京都タワー……まだ太陽マンでは出てないなあ……）

（やよいちゃん……顔が怖いんだけど……）

早く太陽マンのロケ地に行ってみたいやよいは、些か不満気にし、なおは苦笑を浮かべながら隣のやよいを見た。

「あなた達・・・遊びに来た訳じゃ無いんですからね！ちゃんと先生達の話は聞くように！！」

「すみません」

「「「ハイ！」」」

先生の話も聞かず、談笑している五人は佐々木先生に怒られ、れいかが先ず謝り、四人も頭を下げた・・・

一行を、セミロングの青い制服姿のバスガイドさんが出迎え、観光バスへと乗車し、一同は京都見物へと出掛けて行った・・・

最初に到着したのは金閣寺・・・

荘厳な佇まいに簡単な声を上げるみゆき達、れいかは、金閣寺を背に向けながら、「金閣寺の正式名称は鹿苑寺と言ひ、相国寺の塔頭寺院の一つで、舍利殿「金閣」が特に有名な為に、一般的には、金閣寺と呼ばれています。元は鎌倉時代の公卿、西園寺公経の別荘だったので、室町幕府三代將軍の足利義満が譲り受け、山荘北山殿を造った事が始まりとされています。金閣を中心とした庭園・建築物は、極楽浄土をこの世に現

わしたと言われています。この時代の文化は、北山文化といい、義満の死後、遺言によりお寺となり、夢窓国師を開山とし、義満の法号鹿苑院殿から二字をとって鹿苑寺と名づけられました!!」

れいかの語りを聞き、みゆき達も、他の生徒達も、他の観光客も驚き、歓声を上げると、立場を失ったバスガイドさんが苦笑を浮かべる。

「青木さん……長い解説ありがとう!でも……此処はバスガイドさんの話を聞きましようねえ?」

引き攣った笑みを浮かべながら、れいかを諭す佐々木先生に、れいかはしまったという表情を浮かべると、佐々木先生とバスガイドに深々と頭を下げ、

「も、申し訳ありませんでした……」

「いえ、勉強熱心なのは素晴らしい事よ!!」

「ほんに、此処まで教養のある生徒さんは、私も始めてですわ!」

苦笑を浮かべながらも、バスガイドもれいかを褒め称えるのだった……

「黄金の金箔何て……全部でナンボ掛かったんやろうなあ?」

「20万枚の金箔、現在の価値で7億円以上は掛かったと言ひ伝えられています!」

「7億!?!ドヒャア!!」

あかねの疑問にれいかが即答し、あかねはその金額を聞き驚く、なおは別の意味で驚



いたようで、

「ねえ、れいか……どれくらい予習したの？」

「ウフフフ……内緒です！私、楽しみにしていましたから!!」

照れ笑いを浮かべるれいかに、なおはれいからしいやと苦笑を浮かべた。

みゆきは柵越しに池を覗いていると、沢山の鯉が泳ぐ姿を見つめる。

「ワア！一杯泳いでるねえ……」

「本当クル！」

「エツ!? キャンディ、駄目だよ！ぬいぐるみの振りしてなきや!!」

「キャンディも、良く見たいクル!!」

動き回るキャンディを捕まえようとしたみゆきはバランスを崩し、柵を乗り越え池に落ちそうになると、

「ほ、星空さん!？」

気付いた佐々木先生が、大慌てでみゆきの手を掴むも、哀れ二人はそのままバランスを崩し、水飛沫を上げながら池に落下し、鯉は驚いて跳ね上がり、そのまま泳ぎ去って行った……

金閣寺の集合写真……

制服を着た一同の中で、体操服姿の生徒と教師が一名ずつ写っていた……

不動堂を歩くみゆき達一同、一人落ち込むみゆきを見て、あかね、やよい、なお、れいかは、みゆきの気持ちをリフレッシュさせて上げようと考えたと、

「あつ、みゆきちゃん！あそこにおみくじがあるよ！みんなで引いてみようよ!!」  
「本当!?うん!!」

やよいの言葉に上機嫌で頷き、一同はおみくじ販売機でおみくじを引くと・・・  
やよいとれいかは大吉・・・

「ヤッター！何かヒーローに会える予感!!」

「大吉とは縁起が良いですね!」

なおは中吉・・・

「あたしは、まあまあかなあ!」

あかねは末吉・・・

「末吉・・・何や良いんか、悪いんか、よう分からんわ・・・」

そして、みゆきは・・・大凶!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

みゆきの周囲で時が止まった・・・

我に返った四人は、みゆきの大凶くじを見せて貰うと、頭上注意、足下注意、持ち物

注意、食べ物注意、水に注意と、見ている自分達にまで災難が降りかかりそうな内容が書かれていた・・・

思わず固まるあかね、やよい、なお、れいかだったが、慌ててみゆきのフォローに回り、

「ぎゃ、逆に凄いいんじゃないかなあ？」

「せ、せやなあ！」

「そ、そうだよ！」

「今が一番悪い分、これから良くなりますわ！」

なお、あかね、やよい、れいかの励ましを受け、みゆきも段々元気を取り戻すと、

「そ、そうだよねえ？うん、みんな！ありがとう!!」

だが、キャンデイがみゆきの頭の上から、飛んでいた鳩をからかっていたのだが、鳩は仕返しとばかりキャンデイ目掛け糞を放つと、キャンデイは上手く躲したものの、みゆきの頭にヒットし、再びみゆきの周囲で時が止まった・・・

一方、おみくじを引いた佐々木先生は、おみくじの結果を見てワナワナ震えていた・・・

そこには、みゆきと同じく大凶と二文字書かれていた・・・

そして、そこには、足下注意、食べ物注意、水に注意、と書かれていて、顔面蒼白に

なっていた。

（大凶つて……もつと早くおみくじ引いておけば良かった！）

金閣寺で、みゆきと共に池に落ちていた佐々木先生は、ガツクリ項垂れるのだった：

一行は、金閣寺側にあるお食事処金鶴に入り、絶品京料理バイキングの文字を見て興味深そうにしていた。

「ウワア……食べ放題だつてえええ!!」

「なお……涎が出てますよ!」

食べ放題だと聞き、目をキラキラ輝かせるなおは、涎が出ているのに気付かず、苦笑を浮かべながらいかがが、ハンカチでなおの口の周りを拭いて上げた。

「何時もはオカンっぽいのに、食べ物食べてる時や、虫見た時は、なおは子供やなあ!」

「あかね……これから食べる時に、虫の話は止めてよおお!!」

思わず頬を膨らましたなおに、一同は苦笑を浮かべた。

京野菜のおひたしやきんぴら、焼き魚や湯豆腐、海老の天ぷらに舌鼓をうつ、みゆきは揚げたての海老の天ぷらを食べて熱くて悶絶するも、その美味しさに涙目になりながらも満足するのだった。デザートは、白玉善哉、手作りプリン、フルーツカクテル、ゴマ団子、ヨーグルト＋手作りジャムなどがあり、一同は色々なデザートを味わった。特

にデザートは女子に好評で、みゆき達五人も堪能するのだった・・・

しばしの自由時間の間、みゆき達は近くの土産物に入ると、商品を物色した・・・

「ウワァー！このこけし可愛い!!お母さんのお土産にしよう!!」

みゆきは母育代へのお土産に、オカッパ頭のこけしを購入し、あかね、やよい、なお、れいかも小物を購入するのだった。

昼食後、続いて一行が向かったのは嵐山・・・

桜や紅葉の名所でもあり、日本さくら名所100選にも選定されている場所である。トロツコ列車や保津川下りは有名で、観光客にも有名なスポットである。

「じゃあ、此処からは2時間の自由行動になります!2時間後に必ず此処に戻ってくるようにして下さい!!」

引率の堀毛先生から注意事項が述べられ、七色ヶ丘生徒一同は、それぞれ自由行動を開始した・・・

「渡月橋(とげつきょう)の南にそびえる標高375mの嵐山、美しい自然に囲まれている、桜と紅葉の名所としても有名で、渡月橋はその嵐山の中心を流れる桂川(かつらがわ)に架かる全長155mを誇る橋の事です!!」

渡月橋を歩く一同、れいかのバスガイド泣かせの解説が再び輝いた。

「お嬢ちゃん、若いのに物知りねえ・・・はい、これ！教えてくれたお礼よ!!」

「そんな・・・返って申し訳ありません!」

れいかの解説に聞き惚れていた三人組の老女達から、れいかは京土産の定番である八つ橋を箱事貰った。困惑するれいかだが、老女達にお礼を言い、一同は早速八つ橋を五人で分け合い食べるのだった・・・

「れいか、早速大吉の効果があつたじゃない!」

「どうでしょう?」

なおに大吉の効果じゃないと言われ、れいかはそうだろうかと小首を傾げた。

「ねえねえ、せっかくだからみんなで記念写真撮ろうよ!!」

「エエな!せっかくやし、誰かに五人一緒の写真撮って貰おう!!」

みゆきの提案にあかねが真っ先に賛成し、やよいは辺りをキョロキョロし、二人組のお婆さんに声を掛け写真を撮って貰うのだが、出来映えを確認すると、みゆきの顔はフレームから外れていた・・・

「まあ、こんな事もあるわ!あつすんませえん!!写真撮って貰ってもエエかなあ?」

若い子なら大丈夫だろうと、同じぐらいの他校の生徒に写真を撮って貰うと、体操服姿のみゆきを見て笑い、手元がずれてこれまた失敗、他にも何人か試すも、ピンぼけ、ま

ともに取れた写真も、みゆきは思わず目を瞑り、カメラのバッテリーが切れ、写真撮影は終了した・・・

「ま、まあ、良くある事だよ！」

「そ、そうだよ！これから何処行こうか？」

「トロツコ列車や、保津川下りは乗って見たいですが、時間が限られていますからねえ・・・」

引き攣った笑みをみゆきに向けながら、なおとやよいがみゆきをフォローし、れいかは、トロツコ列車や、保津川下りも有名で、行つてはみたいものの、時間的に厳しいようだと一同に伝えた。一同は、ガイドブックを手にしながら次に何処行こうか相談し合うと、

「映画村が良いでござる！」

何処かから聞き覚えのある声が聞こえ、一同は顔を見合わせ驚き、

「イヤネ！」

「何や・・・嫌な予感がするなあ」

なおとあかねが表情を曇らせ辺りをキョロキョロすると、みゆきのカバンの中身がゴソゴソ動き始め、

「エッ!?私のカバンの中に・・・何か居るよお?」

ゴソゴソ動きだした何かが、カバンから顔を出したのはキャンディの兄ポップ、

「皆の衆、元気にしてたでござったか？」

「お・・・お兄ちゃああああん!!」

大喜びのキャンディがポップに体当たりし、その反動でポップはカバンから放り出され、地面に後頭部から落下し悶絶する。

「ポップ・・・大丈夫!？」

「フッフ・・・何のこれしき!」

みゆきが心配そうに声を掛けるも、ヨロヨロ立ち上がったポップは口に笑みさえ浮かべ、

「所で・・・何でポップが此処に居んの!？」

「何時の間に私のカバンの中に入ったんだらう?」

あかねとみゆきは、ポップが居る事に大変驚き問うと、ポップは目を輝かせながら、「ああ、拙者・・・キャンディの事が心配だったのもござるが、他のプリキュアの方々にも、この間のお礼を兼ね挨拶しようと考えて居たでござる。ちょうどこちらの世界は休みに入ったとか・・・これは幸いとこちらの世界に来た時、走っていたみゆき殿を見付け、体当たりをしてみゆき殿が転んだ間に、カバンの中に入り込んだのでござる!」

「あの時私が転んだのは・・・ポップの所為だったの? だったら声を掛けてくれれば良



かったのにいい・・・ハッピーッ

遅刻しそうになった原因は、ポップのせいだったと知り、みゆきが変顔を浮かべる。ポップは苦笑を浮かべながらみゆきに謝り、真顔になると、

「皆の衆・・・実は！」

「「「実は!?!」」」

「拙者・・・映画村に行きたいでござる!!」

目を輝かせるポップに、思わず五人が転げる。

「ホンマは・・・それ目当てで来たんとちゃうの？」

「し、失敬でござるなあ・・・とはいえ、否定はしないでござるが・・・」

「否定せんのかい？」

あかねの突っ込みに返す言葉も無くなるポップ、一同は苦笑を浮かべる。やよいはガイドブックを開き調べていると目を輝かし、

「ウワア! 此処にはスーパヒーローランドもあるよおお!! 私も行きたい!!!」

「オオ! やよい殿も同意してくれるでござるか?」

「うん!!」

二人で目をキラキラ輝かせながらガイドブックを見るやよいとポップ、あかねとなおは、そんな二人を見て醒めた視線を向けるのだった。

れいかはガイドブックを手に取ると調べ始め、

「東映太秦映画村の事ですね！此処からだど……京福電鉄に乗れば、比較的早く付けそ  
うですが、集合時間の16時までに戻って来るには……あまりゆつくり見ている時間  
はありませんねえ……」

「エエエエ!?!」

れいかの言葉に、この世の終りのような表情で悲しそうにするやよいとポップ、あか  
ねとなおは、れいかの肩に手を乗せながらウンウン頷き、

「れいかの言う通りやなあ！いくら自由時間ちゆうても、集合時間に間に合うように行  
動せなあ!!」

「そうそう、仮にそこに行つたとしても、慌ただしく見ても意味無いよ!!」

あかねとなおは行くのに反対しているようで、縋るような目をみゆきに向けるやよい  
とポップ、

「やよいちゃん！ポップ！れいかちゃんやあかねちゃん、なおちゃんの言う通り、今回は  
諦めよう！またみんなで来ようよ!!その時はゆつくり映画村見ようね!!」

「そ、そんなああ……」

「む、無念でござる……」

同じような姿で膝から崩れ落ちる二人、

(私の大吉は・・・何だったのおおお)

心の中で叫ぶやよいであった・・・

「ねえねえ、此処から割と近くに、嵐山モンキーパークつてあるけど・・・行つてみない？」

「モンキーパーク・・・エエなあ!!」

なおの提案にノリノリのあかね、れいかはガイドブックを手にすると、

「そうですね、此処からなら割と近いですし・・・行つてみましょうか?」

「うん! 私も良いよ!」

(お猿さん何て、何時でも見れるのに・・・)

みゆきも同意し、少し不満気なやよいであったが、一同はモンキーパークへと向かった。

嵐山の渡月橋の南端を上流に少し歩くと、左側に櫟谷宗像(いちたにむなかた)神社が見え、鳥居をくぐって左に進んで行くと、嵐山モンキーパークいわたやまの入口が見えてきた。なおとあかねは大はしやぎで中に入り、約20分掛けて山を登って行くと、一行は山頂に着いた。

この嵐山モンキーパークいわたやまは、1954年、京都大学の研究の為に、野生の

ニホンザルが餌付けされたのが始まりだそうで、1957年から一般に公開され、研究目的の餌付けであった為、そのルールは徹底されており、サル達も人間が危害を与えないことを認識するようになったそうである。この為、ここでは人間がそばにいても怖がらず、人間に危害を与える事もまず無いそうである。ただし、ごく近くで目を見つめたり、サルに触るなどの行為は厳禁という事である。

「エエ!? 柵が無いよ!!」

「ホンマや! お猿さんが・・・ウチらの前を平然と横ぎつとるうう」

なおとあかねが目キラキラさせながら猿を見つめる。

「キャンデイも見たいクル!!」

ピョンと飛び降りたキャンデイを見て、見慣れない生物を見て興奮したのか、猿達が徐々に増えてくる。

「な、何か・・・ヤバイんちゃうか?」

「み、みゆきちゃん、キャンデイを抱いておいた方が・・・」

「そ、そうだね!!」

あかねとなおの言葉を聞き入れ、キャンデイを抱き上げようとしやがみ込んだみゆきは、猿と目が合い・・・

「お、お猿さん・・・こんにちは!!」

「ベエ~~~~」

みゆきは、引き攣った笑みを目が合った猿に向けると、キャンデイが舌を出す。キャンデイ、止めてえとみゆきが言うのと、一匹の猿が興奮したのか、みゆきの下にダツシユし、みゆきは思わず逃げ出し、猿に追い回された・・・

「こんなにおとなしいのですが・・・」

れいかの直ぐ側で小猿が寝転び、思わずれいかは小猿に微笑むのだった・・・

「あつ、佐々木先生ですわ!」

モンキーセンターから、再び渡月橋に戻って来た一同、れいかが体操服姿の佐々木先生を見付け、一同が佐々木先生に駆け寄る。みゆきは申し訳無さそうにしながらも、自分と同じような格好をしている佐々木先生を見ると、同士に出会えたように嬉しさが込み上げていた。

佐々木先生は、渡月橋の直ぐ側のお店で抹茶ソフトを買おうとしていたようで、

「あら、青木さん達もこの辺を見学していたのね」

「はい、映画村にも行きたかったのですが、ゆっくり見る時間がありませんので、断念致しました」

「それで、モンキーセンターを見てきました!!」

れいかとなおの報告を聞いた佐々木先生は何度も頷くと、

「そうね、自由時間が二時間じゃ、映画村は回りきれないわね・・・」

抹茶ソフトを定員から貰い舐め始める佐々木先生、美味しそうに見えた一同も抹茶ソフトを購入しようとする、

「良いわよ、私が奢って上げる!」

佐々木先生に御馳走になり、五人と佐々木先生は抹茶ソフトを食べながら談笑していると、

「何やみゆきと先生が、ジャージ姿で隣同士抹茶ソフト食べてんみると・・・母娘見たいやなあ?」

あかねの言葉に反応し、思わず顔を見合わせるみゆきと佐々木先生、みゆきの母に見えると言われ、些か取り乱した佐々木先生は、

「ちよ、ちよつと日野さん、止めてよ!!」

「確かに、仲睦まじい母娘に見えますね!」

「そうかなあ?」

「せめて、姉妹って言って頂戴!」

れいかにも言われ、みゆきは照れ笑いを浮かべる。苦笑を浮かべながら、佐々木先生

はせめて姉妹と呼んでと言って一同を笑わせた。みゆきと佐々木先生が抹茶ソフトを舐めようと顔に近づけた時、観光客の荷物が二人に当たり、二人は顔面で抹茶ソフトを味わう・・・

二人の周囲で時が止まった・・・

一行は、佐々木先生と別れて竹細工のお土産屋に入り、何か良いものは無いか見ていると、

「アツ！これなんか京都らしくて良いかなあ・・・」

みゆきは手に取った竹で出来たティーカップをあゆみへのお土産に購入する。他の四人もせっかく寄ったからと、竹細工の小物類を購入し、店を出た。

竹林に覆われた道を歩く一行は、のどかな景色を堪能しながら歩いていると、キャンデイは、みゆきに読んで貰ったかぐや姫を思い出し、竹に登り始め、

「これ、みゆき！お菓子を持って!!」

「ちよつとキャンデイ！かぐや姫はそんな話しじゃないよ！それに、危ないから降りてきなよ!!」

「みゆき殿の言う通りでござるぞ！キャンデイ、降りるでござる!!」

「嫌クル〜！」

駄々を捏ねていたキャンデイが落ちそうになり、慌ててみゆきがキャンデイの下に向かおうとした時、手から荷物飛び去り、鈍い音が響き渡った。

キャンデイは体勢を整えると、自分で降りてきて一同はホッと安堵したのだが、みゆきは、紙袋の中から母育代、あゆみに買ったお土産を手にとると、中からカタカタさつきまでしない音が聞こえ、恐る恐る中を調べてみると、こけしの髪は真二つに割れ、上手い具合に髪の毛が取れ、ティーカップは取つてが折れ、湯飲みのようになっていた。あかね、やよい、なお、れいか、ポップとキャンデイも呆然とし、沈黙する……

「お母さんとあゆみちゃん……怒らないかなあ？」

涙目になったみゆきが、一同に哀願するような目を向けると、一同は顔を見合わせ、

「だ、大丈夫じゃないかなあ？」

「せ、せやなあ……こけしは大体髪の毛かあらへんし、ティーカップは湯飲みになっただけや」

「うん、大丈夫だよ！」

「お母様も、あゆみさんも、きつと喜んでくれますわ!!」

「そうかなあ!？」

なお、あかね、やよい、れいかがフォローするも、みゆきは不安そうにこけしとティーカップを見つめていた……



「クシヨン！」

「あゆみ、風邪でも引いたの？」

「花粉症かしら？」

「誰かに噂されてるんじゃないの？」

この日あゆみは、やって来たせつなに誘われ、クローバータウンストリートに遊びに来ていた。美希はモデルの仕事らしく不在だったが、せつなと共に、ラブ、祈里があゆみを歓迎してくれていた。カオルちゃんのドーナツ屋で談笑していた四人の話題は、何時しかみゆき達へと移った。

「でも、ゴールドデンウィークに修学旅行何て、大変だよねえ？」

「人も一杯居るもんね」

ラブの言葉に頷く祈里、ラブとせつなが、沖繩に修学旅行に行った時は秋・・・

その時も旅行シーズンではあったが、大型連休の時じゃ、それ以上だろうと想像する。

「エレンに聞いたけど、エレン、響、奏も、今日から修学旅行に行ってるそうよ！」

「エッ!? そうなの? 最近ゴールドデンウィークに行くのって、流行ってるのかなあ？」

「さあ、どうかしら？」

四人は顔を見合わせ首を捻る中、あゆみはタルトとシフォンが居ない事に気付き、

「せつなさん、ラブさん、祈里さん、そういえば、この間横浜で見たフェレットと、もう一人の妖精さんの姿が見当たりませんか!?」

「ああ、タルトとシフォンの事？二人はスウィーツ王国に一先ず帰ってるの！」

「私みたいに、面倒だからこつちに残ればって言ったんだけどねえ・・・」

「色々事情があるそうなの・・・また来るって言ってたから、その内来ると思うけど」

タルトとシフォンにも、慰められていたのを思い出し、お礼も言いたかったあゆみだが、またの機会にと気持ちを切り替える。一同はドーナツを食べ再び幸せそうな表情を浮かべた・・・

今日の宿泊先、三条通りに在るほへと旅館に着いた七色ヶ丘中学一行・・・

旅館の人々に出迎えられ、一同は班ごとに分けられた自分達の部屋へと荷物を持って入って行つた。みゆき、あかね、やよい、なお、れいか達の部屋は316号室、七色ヶ丘生徒達は、暫しの自由時間後、旅館内にあるレストランに移動し、夕食を食べ皆ご機嫌だったが、みゆき一人はまだ何処か浮かない素振りであった・・・

クラス事に決められた入浴時間になり、みゆきとなおはりボン、あかねとれいかはピン留め、やよいはカチューシャを取り、一同はポップにキャンデイの事を託すと、大浴

場へと向かった。

ほへと旅館の大浴場は、観月の湯、蓮見の湯、朝顔の湯、菖蒲の湯の四種類の大浴場があり、みゆき達女生徒は、蓮見の湯を使っていた。

中に入ると、脱衣所も洗面台も明るく、中々オシャレなデザインで、生徒達はキャツキヤツ騒ぎながら、衣服を脱ぎ蓮見の湯に入っていた。みゆき達が着いた頃には、クラスメートの柏本まゆか、木角まゆみ、藤川あみ、本田あや達は既に入り終え、着替えている最中だった。

「みんな、早いねえー！」

「うん、少し旅館の中を見て見たくて……じゃあ、お先にねー！」

なおの問い掛けにまゆかが答え、四人は体操着姿に着替え脱衣所を出て行った。弟や妹達を風呂に入れる事で慣れているのか、なおは素早く衣服を脱ぎ、籠にしまい、あかねも素早く衣服を脱ぎ籠に乱雑に入れ、れいかはキチンと折り畳み籠にしまう。やよいは少し恥ずかしそうにみんなに背を向けて脱いでいると、あかねにからかわれ、頬を膨らませながら衣服を脱いだ。

「今日是最悪な一日でした……ハップップ〜」

みゆきが、ハアと吐息を漏らしながら衣服を脱ぎ籠にしまう。五人の少女達は、中学生らしく白の下着姿のまま、みゆきを慰めていると、その背後で、

「同じく……今日は最悪な日だったわ……ハア」

「せ、先生!？」

「この時間は、生徒だけが入浴時間では？」

教師である佐々木先生が入ってきた事で驚くなおとれいか、佐々木先生は苦笑を浮かべながら、

「本当はそう何だけど、ほら、私も星空さんと一緒に池に落ちたでしょう？堀毛先生が、風邪を引くとイケナイから、先に入ってらっしゃいと言って下さって、お言葉に甘えたってわけ！」

そう言いながら、体操服を脱ぐ佐々木先生、薄いブルーのブラとショーツが露わになり、ブラに覆われた丰满な胸、ショーツから溢れ出しそうな丸みを帯びたヒップ、教師にしておくのは勿体無いプロポーシヨンが目の前に現われ、みゆき達五人は目を輝かせジッと見つめていると、五人の視線に気付いた佐々木先生は苦笑を浮かべながら、

「ねえ、いくら女同士とはいえ……あまりジッと見つめられると、恥ずかしいわ」

「お、大きい!!」

「普段スーツ姿を見慣れてるせいか……新鮮や！」

「確かに……憧れてしまいますねえ」

「先生……胸を触っても良い？」

「私も触りたああい!!」

「ハア!? 何バカな事言ってるんですか! さあ、さつさとあなた達も下着を脱いで! 中に入りなさい!!」

少し頬を染め、ジツと見つめる、なお、あかね、れいか、みゆき、やよいの言葉に、益々顔を赤くした佐々木先生は、さつさと浴室に入りなさいと注意を与え、一同は下着を脱ぐと、五人の少女達は、発育途上の健康的な裸身を露わにし、佐々木先生は、色気漂う成人女性の裸身を晒し、再び少女達が下から上へと佐々木先生を凝視する。佐々木先生は一同を促すと、浴室へと入っていた・・・

みゆきと佐々木先生が先頭で中に入ると、二人はほとんど同時に足を滑らせ、

「キヤアアア!!」

大股開きでドスンと尻餅を付くみゆきと佐々木先生は、同じように渋い表情を浮かべながら顔を見合わせた。

「確か、みゆきのおみくじには・・・足下注意もあつたなあ?」

「うん・・・あつたね!」

此処までおみくじの内容が当たる事に、逆に恐怖を感じて顔が引き攣るあかねとなお、

「みゆきさん! 先生! 大丈夫ですか?」

慌てて近寄るれいかとやよい、みゆきと佐々木先生は、恥ずかしさと痛さが相容れる複雑な表情を浮かべながら、ガツクリ項垂れるのだった・・・

大浴場から出て、旅館の浴衣を着て部屋で寛ぐ一同、れいかはドライヤーで髪を乾かしながら、

「とても良い湯加減でしたねえ・・・」

「池の水は、とても冷たかったです・・・」

「……………」

れいかの言葉に、部屋の隅で体育座りをしていたみゆきは、金閣寺の出来事を思い出したのか、ポツリと呟く、やよいは話題を変えようと、

「お、お土産に買った簪・・・ママ気に入ってくれると良いなあ!!」

「お母さんとあゆみちゃん・・・本当に怒らないかなあ?」

「……………」

髪のが取れたこけしと、取つてが取れたティーカップを見つめるみゆきに、今度はなおが話題を変えて

「モ、モンキーセンターのお猿さん達、可愛かったよねえ?」

「お猿さんに、追いかけられました・・・」

「……」

モンキーセクターの猿達の話題を出したなおだったが、みゆきは猿に追いかけられた事を思い出し、ポツリと呟く、引き攣った笑みを浮かべたあかねは、

「ま、抹茶ソフトは美味しかったやん！先生の奢りやし!!」

「先生と一緒に……顔でも食べました……」

「……」

どんどんブルーになっていくみゆきに、キャンディとポップを交えた一同が小声で話し合う……

「みゆき殿はどうしたでござるか？」

「まあ、今日のみゆきは厄日やったしなあ……」

ポップが小声で一同に聞くと、みゆきの今日一日の不運振りを伝え、再び一同の視線がみゆきへと向けられる。ハアと溜息を付くみゆきの後頭部に、ドスンと枕が当たり、振り向いたみゆきにあかねは、

「何や、何や、辛気くさい！そんな顔しとつたら……ハッピーが逃げてまうでえ!!」

「そういう事……」

あかねとなお、二人がニッコリ笑みを浮かべ枕をバシバシ叩くと、みゆきは徐々に表情を綻ばせ、

「ハッピーが逃げちやう．．．そうだねえ!!」

笑みを浮かべたみゆきが、あかねに枕を投げ返すと、あかねは嬉しそうに笑い、  
「シシシシシ！それでこそみゆきやあ!!隙有りい!!」

みゆきが元氣を取り戻した事にホツと安堵する一同、あかねは無防備なやよい目掛け枕を投げると、やよいの顔面に当たり、やよいが涙目になりながら頬を膨らませ、枕を手に持つ、れいかはオロオロしながらみんなを止めようとし、

「皆さん、もう消灯時間ですし、端無い真似は．．．キャア！」

「れいか！隙有りだよ!!」

「なお．．．お返しします!!」

なおに枕を投げられたれいかも参戦し、316号室は枕投げの戦場と化し、ポップはキャンディと共に、ポップが入ってきた絵本の中へと避難するのだった．．．

「あなた達、何時まで騒いで．．．キャアアア！」

みゆき達の部屋が騒がしく、様子を見に来た浴衣姿の佐々木先生の顔面に、みゆきが投げた枕が直撃する。思わずシーンとする室内、佐々木先生は枕を手に持つと、

「あなた達．．．枕投げで私に勝てる．．．思ってるのおお!!」

意外な事に、佐々木先生も枕投げに参加した。ベイスターズのファンである佐々木先生は、投げる事に慣れているのか、コントロール良く、やよい、みゆきの顔面に当て、二



人をKOし、あかね、なお、そして、巧みに躲すれいかと激しい攻防を繰り広げる。

「あなた達、何時まで騒いで．．．キヤアアア！」

様子を見に来た堀毛先生がドアを開けた瞬間、佐々木先生の投げた枕をれいかが躲し、堀毛先生の顔面に直撃する。佐々木先生はしまったという表情を浮かべると、

「堀毛先生も．．．参加されます？．．．なんちゃってえ！アハ、アハ．．．すいません！」

「佐々木先生!!引率のあなたが．．．何をしてるんですかああ!!!」

「おっしやる通り．．．すいません！」

堀毛先生に怒られ、佐々木先生はみゆき達にもう寝なさいと言い残すと、堀毛先生に小言を言われながら去って行った。

「先生に悪い事したなあ．．．」

「明日、みんなで謝りましょう!!」

「せやなあ．．．」

布団を直し、一同が布団の中に潜り込むも、中学生がそう易々寝る筈も無く、恋愛話や、プリキュアの事などを小声で話し合う．．．

みゆきは、四人の優しさに触れ、ハッピーを取り戻した気がするのだった．．．

第五十話：修学旅行（前編）

完

## 第五十一話：修学旅行（中編）

1、八人のプリキュア

翌朝、バッドエンド王国・・・

「アア・・・退屈オニ！」

アカオーニは、暇そうにしながら横になってテレビを見ていると、そこにスキンヘッドのベガが現われる。

「おい、アカオーニとか言ったな・・・その箱に映ってる物は何だ？」

「これオニ？これはテレビオニ！人間共が暇な時に見る物オニ!!」

「ほう・・・」

ベガは、テレビに興味を持ったのか、アカオーニの背後で一緒に見て居ると、ゴールデンウィークの旅行情報をやっていた。

「人間とは不思議な者だなあ・・・態々こんな人混みに出掛けるとは・・・ン!?」

ベガの視線が一点に凝視された・・・

ジツと目を懲らすベガ、そこには観光客に混じって、嵐山を歩いて居たみゆき達の姿を見付けた。

（あいつは・・・確か、キュアハッピーとか言ったな！）

ベガの口元がニヤリと笑むと、アカオーニを見つめ、

「おい、あのテレビって物に映っている場所は・・・何処だ!?」

「オニ!? あれは京都オニ! 京都と言えよ・・・この本にも沢山の鬼達が居る筈オニ!!」

アカオーニは側に置いてあつた絵本を閉じると、

「そうだ! 京都に行くオニ!!」

「フツ、面白そうだな・・・俺も付き合おうぜ!!」

アカオーニとベガ・・・

二人の意外なコンビが、みゆき達の居る京都へと向かった・・・

ほへと旅館・・・

佐々木先生に呼ばれたみゆきは、二人でバスガイドの到着を今か今かと二階のロビーで待っていた。

「みゆきと佐々木先生・・・何してんやろう?」

「何でも、昨日池に落ちて濡れた二人の服を、バスガイドさんがクリーニングに出してくれたそうで、朝に届けに来るらしいですけど」

あかねが不思議そうに小首を傾げると、れいかがみゆきと佐々木先生の会話を思い出し、一同に伝える。

「だからあんなに嬉しそう何だ！」

「二日目も体操服何て、嫌だもんね」

なおとやよいも嬉しそうな二人を見て頷き合うと、四人は顔を見合わせ微笑んだ。

「おはようございます！本日もよろしくお願い致します!!」

やって来たバスガイドを見るや、目をキラキラさせながら駆け寄る二人、バスガイドは、苦笑を浮かべながら持つて来た二人の服を手渡すと、

「ありがとうございます!!」

「ガイドさん……ありがとうございます!!」

「どう致しまして！」

みゆきは嬉しそうに踊りながら四人の側に来ると、四人も笑みを浮かべながら部屋へと戻って行った。佐々木先生は領収書を貰い、二人分の代金を払うと、嬉しそうに自分の部屋へと戻って行った。

嬉しそうに制服に着替えたみゆきに、あかね、やよい、なお、れいかもホツと安堵し、まだ少し早いから、この辺を散歩しましょうというれいかの提案を聞き入れ、一同は外

へと外出した。

空はこの日も快晴だった・・・

みゆきは、昨日の不運を吹き払うように大きく深呼吸すると、口の中に虫が飛び込み、思わずペツペツと唾を吐き咳き込む、心配したなおがみゆきの背を摩りながら、

「み、みゆきちちゃん・・・大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫！」

昨日と打って変わり、まるでウルトラハッピーのような笑顔を浮かべるみゆきに、思わずあかね達四人は首を捻るのだった。

五人は周辺を少し散歩すると、旅館へと戻って行った・・・

ほへと旅館で朝食バイキングを食べた一行は、荷物を持って外へ出ると、

「じゃあ、出発するわよ！」

佐々木先生に促され、バスに乗った一同は二日目最初の観光地、清水寺へと向かった・・・

清水寺・・・

誰もが京都に旅行したら、一度は観光に行くと言われる程有名な場所である。近年、年末になると今年の世相を、漢字一文字に現わした今年の漢字は、耳にした事がある人

は多いと思う・・・

「世界文化遺産にも登録されている清水寺は、奈良時代末期、778年に僧延鎮が開山し、平安建都間もない延暦17年（798年）坂上田村麻呂が仏殿を建立したと伝えられています。現在の建物の多くは、寛永8年〜10年（1631年から1633年）、徳川家光の寄進によつて再建されたものです」

本当はれいかも知っていて、仲間達に話したそうにしていたが、昨日の反省をし、グツと堪え、バスガイドの話を聞くれいかの姿を見て、あかねとおおが苦笑する。

本堂から眼下の景色を見渡し、その見晴らしに興味を持つ生徒も居れば、つまらなさそうにする男子生徒の姿もチラホラ見られた。

「清水の舞台つて、傾いてるんだね？」

「コケたら・・・転げ落ちそうやなあ」

しやがみ込み、傾いている床を見ていたあかねとなおの背後で、キヤアアと悲鳴が聞こえ、振り向いた二人は、ゴロゴロ転がるみゆきを見て顔面蒼白になり、素早くなおが行動を起こし、何とかみゆきを受け止める。

「アハハハ・・・転んじやつたあ！」

苦笑を浮かべながらも、みゆきは笑みを浮かべ、一同はみゆきが何処も怪我をしていないようにホッと安堵するのだった。佐々木先生も顔色を変えると、あかね達四人を呼

び、

「私も注意するけど、あなた達もしっかり星空さんの事見ていてあげて！何だか・・・昨日の不運が続いているようだから・・・」

「そのようですね・・・」

れいかも頷き、四人と佐々木先生は、他の生徒達にからかわれ、苦笑を浮かべているみゆきをジッと見つめた。

一同の不安は的中し、みゆきは、産寧坂（三年坂）で、散歩していた犬が逃げ出し追いかけられたり、排水溝に落ちたり、土産物屋の置物の下敷きになったり、不運は続いてきた・・・

「みゆきちゃん・・・京都に来てるし、お祓いでも頼む？」

心配して声を掛けるなおに、あかね、やよい、れいかも思わずその方が良いかも知れないと声を掛けるも、

「大丈夫！大丈夫！」

みゆきはニツコリ微笑み、一同に大丈夫だと伝えると、先頭きつて歩き出す。四人は顔を見合わせ、大丈夫だろうかと不安そうにみゆきの背を見つめた・・・

続いて一行がやって来たのは祇園・・・



祇園は、八坂神社の門前町として鴨川から東大路通、八坂神社までの四条通の南北に發展し、京都有数の舞妓が居る事でも有名である。

「では、此処からは班ごとの自由行動にします!」

佐々木先生の言葉でちりぢりに散つていく生徒達、佐々木先生はれいかを呼ぶと、

「星空さんの事・・・お願いね!」

「はい!では、行つて参ります!!」

れいかは佐々木先生に一礼し、五人も祇園見学に出掛けた。

やよいは、舞妓に会うのを楽しみにしているようで、何時出会つてもいいように、黄色いデジタルカメラを手に持ち準備を整えた。だが、祇園の街を歩き回るも、一向に舞妓に出会う気配は無かった・・・

「さっきの舞妓さん、超キレイだったよねえ!」

すれ違う生徒達の声を聞き駆けつけるも、既に舞妓さんは居なくなつていて、一同は落胆する。

「まあ、必ず会える訳じゃ無いしね!」

「せやな・・・まあ、気楽にこの辺散策しようや!」

「そうですね!見る所は沢山ありますから!!」

「うんー！」

なおが、あかねが、れいかが、やよいが、舞妓に会えるのは運だろから、気にせず散策しようと歩き出す中、みゆきの足が止まった・・・

「ゴメン・・・やっぱ、無理！」

思わず小声でポツリと呟くみゆき、ジワツと目に涙が浮かんでくる・・・

みゆきは、昨日の出来事を反省し、一同が楽しく修学旅行を送れるように、自分の不幸な出来事にも堪えていたが、自分が一緒に居ては、みんなが楽しみにしている舞妓さんには会えないと思い、堪えていた思いが溢れ、みゆきは一同から離れるように走り去った・・・

四人がみゆきの異変に気付き、振り返った時には、みゆきの姿は観光客に遮られ、視界から見えなくなる間際だった。

「みゆきいいいー！」

「みゆきちやくん!!」

「みゆきさああん!・・・なお、追いかけて!!荷物は私が!!」

「うん!れいか、お願い!!」

なおは荷物をれいかに渡すと、みゆきの後を追って走り出す。だが、観光客が多く、みゆきの姿を見失い途方に暮れている所に、あかね、やよい、れいかと合流し、四人はみ

ゆきの身を案じ、不安そうな表情を浮かべながら辺りを見渡し続けた・・・

祇園のお土産屋では、新撰組のハッピを着た一人の少女が注目を浴びていた・・・

「エレン・・・何も此処でも着なくて良いじゃない!」

奏は、自分達が周りの観光客からクスクス笑われ、思わず頬を染めながらエレンに文句を言うも、

「エエ!? だってえ、折角昨日買ったし・・・京都らしくて良いでしょう? 京都に居る時は、この姿で過ごそうかと思ってるんだけど」

「京都は京都でも、祇園は舞妓さんで有名なの!」

響、奏、エレンの三人は、祇園の商店街の扇子などの小物を扱う土産物屋で、家族やアコ、音吉へのお土産を捜していた。響は入り口付近の商品を物色していると、

「いよっ! 日本一!!」

エレンと奏の視線が、店先で見本の扇子を開き、ポーズを決める響へと向けられる。思わず溜息を付く奏は、もう一人問題児が居るのを改めて思い知らされ、ガクツと項垂れる。響は扇子を気に入ったのか、色々手に取り構えていると、視線の先に見た事のある少女の姿を見て思わず驚き、

「あれ!? あの子、もしかしてみゆきちゃん!?」

「エッ!?」

響が見つめる方を見た奏とエレン、確かにみゆきに似た子が、泣きながら店先を走って行くのが見えた。三人は咄嗟に表情を変えると、響は持つて居た扇子を戻し、みゆきの後を追って走り出した。

「響!・・・行っちゃった」

「私達も追いかけましょう!!」

少し経って、手に持っていた土産の会計をしたエレンと奏が外に出ると、みゆきを探しに来たあかね達と合流する。互いに驚く両者達は、

「アレ!? 奏さん、エレンさん、どうして此処に?」

「あなた達こそ・・・私達は昨日から修学旅行で来てるんだけど、もしかしてあなた達も?」

「はい! 私達も昨日から修学旅行で京都に・・・あのお、みゆきさんを見掛けませんでしたか?」

奏とエレンを見付けたなおが驚きの声を上げると、奏も一同が居る事に驚きつつも、修学旅行で来た事を教えると、れいかが自分達も修学旅行で来ていると教える。れいかは、みゆきを見なかったか二人に問うと、奏とエレンは渋い表情を浮かべ、

「あなた達・・・みゆきと喧嘩でもしたの?」

「さつき泣きながら、店の前を走り去って行ったわよ!」

エレンと奏の報告を聞き、四人の表情が強張る・・・

何かみゆきの気に触る事をしたのだろうか?と思つたものの、心の中に思い浮かぶ事は無かつた。あかねはブルブル首を振ると、

「喧嘩!?滅相もない!ウチら、みんなで舞妓さん探ししながら、祇園を歩いてたら・・・」  
突然みゆきちゃんが走り去つちやつて・・・」

やよいも心配そうな表情で、奏とエレンに訴える。二人は顔を見合わせると、

「ねえ、良かったら何があつたか・・・詳しく私達に話してみて」

「みゆきちゃんの後を、直ぐ響が追いかけて行つたから、今頃追いついていると思うわ」

エレンと奏から、響がみゆきの後を追いかけてくれたと聞き、思わずホツと安堵する

一同、あかね達は、昨日からの出来事を奏とエレンに話すと、

「なるほどね・・・」

「エツ!?エレン、何か分かつたの?」

ウンウン頷くエレンを見て、奏は何か分かつたかエレンに問うと、エレンは一同を見渡しながら、

「ええ!みゆきは・・・あなたたちに心配させまいとして強がつてたのよ!自分が落ち込

んでいたら、あかね達が旅行を楽しめないんじゃないかと思つてね……」

「そんな事思つてないのに……」

エレンの推測に、なおは悲しそうな表情を浮かべると、

「私はまだ、みゆきの事をそれ程詳しく知つてゐる訳じゃ無いけど、あの子は優しい子よ！  
運が無い自分が一緒に居たら、みんなが舞妓さんに会えないんじゃないかと思つたの  
ね……」

「だから、あの時みゆきさんは……」

エレンの推測に、れいかは納得いく面があるようで、困惑の表情を浮かべる。

トラブルに見舞われても、笑顔を浮かべていたみゆき……

それは、自分達を心配させまいとするみゆきの優しさだったと気付く……

「心配だろうけど、此処は響に任せましょう！何か連絡がある筈だし、かえつて動かない  
方が良いかも知れない」

奏の忠告を聞いた四人だったが、みゆきの事が心配でならなかった……

みゆきは、白川に掛かる巽橋（たつみばし）の上で、ぼんやり流れる白川を見つめて  
いた……

異橋・・・

祇園の北側を流れる、白川に掛かった異橋を中心とした地区は、伝統的建造物群保存地区に指定されていて、古き美しい街並みが佇んだ場所である・・・

「みゆき・・・どうしたクル？」

「みゆき殿・・・」

みゆきの事を心配したキャンデイとポップも、みゆきのリュックから顔を出し話し掛ける。

「二人にも迷惑掛けちゃったね・・・ゴメン」

そう言うと、再び白川をぼんやり見つめるみゆき、不意に右隣に誰かが立ち、みゆきが視線を向けると、横に立った人物を見て思わず驚く、

「エッ!?響さん?どうして此処に!?!」

驚くみゆきに、響は優しく微笑み掛け、

「修学旅行で京都に来ててね・・・みゆきちゃんもそうなの?」

「は、はい・・・」

「そっかあ・・・あれ、キャンデイ!それと、もしかしてあなたがキャンデイのお兄さんの?」

響は、みゆきを労っていると、背中のリュックから顔を出しているキャンデイと、見

た事が無い妖精に驚くも、ハミイから聞いていたキャンディの兄ではないかと声を掛ける」と、

「如何にも、拙者はキャンディの兄ポップでござる！拙者を見ても驚かないそなたは：プリキュア殿でござるか？」

「うん！私は、北条響事、キュアメロディ！ポップ、よろしくね!!」

「オオ！響殿と言えば、エレン殿とお仲間の・・・お会い出来て光栄でござる!!」

「響・・・ハミイやピーちゃんはどうしてるクル？」

「ハミイなら、エレンのリユックの中に居るよ！ピーちゃんは・・・あたし達と一緒に来る？つて誘ったんだけど、アコが絶対駄目ってむくれちゃったから、加音町でお留守番してるよ！」

響がニッコリしながら、キャンディとポップと会話する。その様子をボンヤリしながら見ていたみゆきを見た響は、

「ねえ、みゆきちゃん！お友達と・・・喧嘩でもしたの？」

「エッ!？ち、違います！」

響の突然の問い掛けに、ブルブル首を振るみゆき、響はホッと安堵したようで、

「そつかあ、なら良かった！みゆきちゃんが、泣きながら走ってたから気になって」

「み、見てたんですか・・・」



みゆきは恥ずかしくなり俯き、視線を白川に向けた。響も白川の流れを見つめると、「心が和む良い景色だよねえ！ねえ、みゆきちゃん……私で良ければ、何があつたか話してくれない？」

まるでみゆきの心を優しく包み込むように聞く響の言葉に、みゆきは昨日からの自分の身に起こる不運振りを伝え、自分と一緒にでは、あかね達が修学旅行を楽しめないんじゃないかと思つた事を告げた……

「それは違うよ、みゆきちゃん！」

「エツ!？」

自分の言葉を、響は優しく否定し、

「あかねちゃんも、やよいちゃんも、なおちゃんも、れいかちゃんも、みんな、みゆきちゃんも含めた、五人一緒に行動出来る修学旅行だから楽しいんだよ！私もそう……奏やエレン、クラスのみんなや、学校みんな、みんなと一緒に来たから楽しいんだよと思う」

「……………」

「それに、もしみゆきちゃんが逆の立場だつたらどうする!?!その子が笑顔になるようにして上げるんじゃないかなあ？」

響の言葉を聞いて、昨夜の事を思い出すみゆき、落ち込むみゆきを励ますように、枕投げを始めたあかねとなお、布団に潜りながら、色々な話で気持ちを和ませてくれたや

よいやれいかの事を思い出し、目に涙が浮かんでくるみゆき、

「私、私、私が居ると、みんなが舞妓さんに会えないと思つた．．．私が居なければ、みんなは舞妓さんに会えて、ハッピーになれると思つてた．．．」

「みゆきちゃんは優しいね．．．でもみんなは、みゆきちゃんも含めた全員で、舞妓さんに会える事が楽しみ何だよ！誰か一人掛けた状態で舞妓さんに出会つても．．．四人はきつと喜べないと思う!!」

「．．．．．」

「みゆきちゃん．．．帰ろう！きつとみんなも心配して探し回つてるよ!!」

「は．．．い」

ポロポロ涙が零れてくる．．．

響はみゆきを引き寄せ、みゆきの頭を自分の胸で支えようと、みゆきは響の胸の中で涙を流した．．．

自分の軽率な行動が、逆にあかね達に嫌な思いをさせたと気づき、みゆきは泣いた．．．  
響は、みゆきが落ち着きを取り戻すまで、黙つてみゆきの頭を優しく撫でるのだった．．．

響は、嘗て母まりあがしてくれた行為を、無意識の内にみゆきへと行つていた．．．

みゆきも落ち着きを取り戻し、ホツと安堵する響とキャンデイ、ポップ、いざ戻ろうとした時、響の額から汗が滴り落ちると、

「ところでみゆきちゃん！私達・・・どっちから来たっけ？」

「エエエ!? 私は夢中で走つてたもので・・・分かりません」

「私も、夢中でみゆきちゃんを追いかけてたから・・・分からないや」

思わず顔を見合わせ困惑する響とみゆき、響は何かを思い付くと、指笛を鳴らした。すると、何処から現われたのか、アリア学園の制服を着た短髪の青い髪の少女が、笑みを浮かべながら二人に駆け寄つて来ると、

「響！呼んだ？」

「和音！ねえ・・・奏とエレンに会わなかった？」

「うくん、会わなかったけど・・・捜して来ようか？」

「お願い、和音！まだ、扇子売つてるお土産屋の前に居ると思うけど・・・私達、巽橋に居るって言つてくれれば、奏は分かると思う」

「OK！響の頼みとあらば・・・ちよつと待つてね!!」

少女の名前は西島和音・・・

響と同じくスポーツが得意で、和音は今でも部活の助っ人を続けて居る。響とは、同じスポーツ好き、共に勉強が苦手という共通点が合つて気が合うのか、仲が良かった。

和音はそう言い残し、奏とエレンを求め、祇園の街中へと消えて行った・・・

指笛で現われ、爽やかな笑顔を浮かべながら去って行った和音を見て、呆然とするみゆき、和音が去った方角を指差しながら、

「響さん・・・今の方は？」

「私の友達！和音に頼んだから、奏やエレンが迎えに来てくれる。それまで此処で待つてよう！その後、あかねちゃん達を探しに行こう!!」

「はい！」

響の言葉に頷くみゆき、早く戻って四人に謝りたいと思うみゆきであったが、

「そいつは残念だったなあ・・・お前達は、此処でこの俺に消されるのさ!!」

「!?!」

突然野太い男の声が辺りに響き渡り、響とみゆきが辺りを伺っていると、

「みゆき殿、響殿、上、上でござる!!」

リュックの中からポップが上空を指差しし、上空に居る人物を見てキャンデイが震えた。

上空から、響とみゆきを見つめるスキンヘッドの男ベガ!

アンデトルセンを消滅させた張本人を見て、キャンデイは怯えた。みゆきは、怯えるキャンデイに、

「キャンデイ、大丈夫！私があなたとポップを守るから!!」

スマイルパクトを手に持ち身構えるみゆき、響は困惑しながら、

「みゆきちちゃん、ゴメン・・・私は、奏と一緒にやないとプリキュアには・・・」

「エッ!?!・・・分かりました！私が奏さんとエレンさんが来るまで時間を稼ぎます!!プリキュア！スマイルチャージ!!」

みゆきの身体が光に包まれキュアハッピーへと変化していく・・・

「キラキラ輝く、未来の光！キュアハッピー!!」

ハッピーに変身し、上空に居るベガに身構えるハッピー、ベガは口元に笑みを浮かべるも、一緒に来た筈のアカオーニの姿が見当たらず、上空からキョロキョロ辺りを捜すと、アカオーニは、辰巳大明神の鳥居の前で、七色ヶ丘中学の男子生徒のリクエストを聞き、様々なポーズを取って、写真撮影に興じていた・・・

「バカか、お前は!?!プリキュアが現われたんだぞ！きつきとこつちに来て!!」

上空からベガに怒られたアカオーニは、

「プリキュアオニ!?!こんな事してる場合じゃ無いオニ・・・世界よ！最悪の結末、バッドエンドに染まるオニ！白紙の未来を黒く塗りつぶすオニ!!」

アカオーニは、写真を撮っていた生徒達からバッドエナジーを吸収すると、巽橋へとやって来た。

（この場所で戦ったら・・・）

「ハッピー、場所を変えよう！この場所を滅茶苦茶にさせる訳にはいかない!!」

「はい、分かりました!!」

このキレイな街並みを、戦いで汚すわけにはいかない。響は、みゆきのリュックを背負うと、場所を変えようとハッピーに進言し、アカオーニとベガを誘導するように白川沿いを走り出した・・・

逃げ続ける響とハッピーだったが、白川南通で前方にベガ、後方にアカオーニに挟み撃ちにされた・・・

「此処は私に任せて下さい!!」

「ハッピー、頑張るクル!」

「キャンディ、危ないよ!!」

顔を出したキャンディに、響は危ないからリュックの中に隠れているように伝えるも、リュックからヒラヒラ何かが舞い上がり、アカオーニの側に落ちた。アカオーニは不思議そうに落ちた紙を拾うと、それを見たハッピーは動揺し、

「あれは・・・返してええ!!」

「これは、おみくじオニ!?・・・プツハハハハハハ！プリキュアが・・・大凶オニ？これは傑作オニ!!」

アカオーニは腹を抱えて笑いだすと、ハッピーは俯き、戦意を喪失する。

(折角ハッピーが立ち直り掛けたのにいい・・・あのバカオニイ!!)

響は、余計な事をしたアカオーニを見て、頬を膨らませながら睨み付けた。アカオーニはそんな事にはお構いなく、

「丁度良いオニ！これをアカンベエに変えるオニ!!出でよ！アカンベエ!!」

アカオーニは、みゆきの大凶くじを青鼻のアカンベエに変えた。ハッピーは激しく動揺し、ベガはそんなハッピーを、容赦なく背後から蹴り飛ばし、ハッピーを白川に叩き落とした。

「ハッピー!!クツ、このままじゃハッピーが・・・奏！エレン！お願い、早く、早く来て!!」

キュアモジューレを手にもつても、変身出来ない響は苦悶の表情を浮かべた・・・

「セイレーン！何かミラクルガイドライトが激しく点滅してるニヤー！」

突然リュックからハミイの声が聞こえ、エレンは道端に張り付くような格好をしながら、

「ハミイ、突然喋らないで！所で・・・どうしたの？」

リュックから顔を出したハミイが、ミラクルガイドライトを取り出すと、虹の輝きが

赤く染まった上空に向かって輝いた。

「まさか、響達の身に何か?!」

動揺する奏とエレン、あかね達四人は顔を見合わせ合うと、一目散に虹の輝き目指して駆け出した。奏とエレンも向かおうとした所に和音が現われ、響からの言伝を聞いた二人は、やはり響達の身に何か危険が迫っている事を察した。

「ありがとう!」

二人は和音に礼を述べると、走り出した・・・

「ハッピー、大丈夫!?!」

白川に落とされヨロヨロ立ち上がったハッピーに響が声を掛けると、

「響さん・・・ゴメンなさい!私と一緒に居たから響さんまで・・・」

「何言ってるの!?!そんなの関係無い!!」

戦意を失ったハッピーに、容赦ないベガの攻撃が加えられる。爆風で上に吹き飛ばされゴロゴロ転がるハッピー、ベガは勝ち誇ったようにハッピーにゆっくり近づいていくと、

「痛いかな?苦しいかな?今楽にしてやるよ!ダークネス・・・ボンバー!!」

負のオーラがベガの身体に集まると、ベガはハッピー目掛けシオルダータックルを仕



掛けるも、

「ヤッセンでいざー！」

ポップは巨大な盾に変化し、ハッピーを庇うも、ダークネスボンバーの威力の前に吹き飛ばされるが、響がジャンプしポップを受け止める。おみくじアカンベエが背後から近づくと、今度はキャンデイが象デコルを使い、象の鼻からアカンベエ目掛け水を撒き散らす、

「ポップ・・・キャンデイ・・・」

懸命に自分の事を守ろうとしてくれるポップとキャンデイ、響もハッピーを庇うように前に出てベガを睨み付けると、

「あんた達・・・いい加減にして!!」

「それはこちらのセリフ・・・面倒だ、全員纏めてくたばれ!ダークネス・・・ボン・・・何いい!?!」

響とハッピーに止めを刺そうとしたベガの足下が凍り付き、ベガの動きが封じられると、一筋の疾風がベガを横切り蹴り飛ばした。背後から襲うアカンベエに対し、紅蓮の炎がその行く手を遮り、たじろいだアカンベエ目掛け雷が降り注ぐ、険しい視線をベガ、アカンベエ、アカオーニに向けるサニー、ピース、マーチ、ビューティ、響は、現われた四人を見てホッと安堵を浮かべた。

「ビュートイ・・・マーチ・・・サニー・・・ピース」

ハッピーの視線に四人の仲間達の姿が目に見える・・・

「私、みんなと一緒に居てくれるから、大凶でも頑張れた。でも、私が一緒に居たせいで、みんなや響さんまで大凶に巻き込んだじゃった・・・」

「ハッピー・・・ちやうでえ!!」

「あたし達・・・巻き込まれて何てないよ!!」

ハッピーの言葉を、サニーとマーチが否定する。

「私達・・・ハッピーと一緒にだから、楽しんだよ!!」

「それに・・・こんな事、大凶に入りませんわ!!」

ピースもビュートイもハッピーを励まし、

「「五人が揃えば、大凶なんて・・・吹き飛ばせる!!」」

「みんなあ・・・」

四人からの励ましを受け、ハッピーは目から流れる涙をゴシゴシ擦り

「うん!みんなあ・・・ありがとう!!」

満面の笑みを浮かべるハッピーに、仲間達も頷き返した。それを見た響も、キャン  
デイも、ポップも笑みを浮かべる。だが・・・

「小賢しい真似しやがって・・・ヌウウオオオオ!!」

ベガが咆哮を上げ、身構える五人のプリキュアを制した響は、

「あなた達は、アカンベエをお願い！ハッピーエンドの邪魔は・・・させない!!」

変身出来ない響の言葉に動揺する五人だったが、響に言われた通りアカンベエ、そしてアカオーニと対峙した。

「フツ・・・変身出来ない貴様が、この俺に適うと思ってるのか?」

「勘違いしないで!私達だって、ハッピー達に負けないぐらいの・・・ハーモニーパワーを持つて居るんだからああ!!」

響の言葉を頷けるように、エレンが、奏が、響の名を呼びながら駆け寄って来ると、  
「奏、エレン、行くよ!ハッピーエンドの邪魔をしようだなんて・・・」

「絶対許さない!!」

奏とエレンもキュアモジューレを手に持ち、ドリー、レリー、ラリーが三人の下に飛んでくると、

「レッツプレイ!プリキュア!モジューレクション!!」

「爪弾くは、荒ぶる調べ!キュアメロディ!!」

「爪弾くは、たおやかな調べ!キュアリズム!!」

「爪弾くは、魂の調べ!キュアビート!!」

「届け!三人の組曲!!スイートプリキュア!!!」

「ハアアア!!」

三人のプリキュアが、まるでハモるように雄叫びを上げながら、ベガへと立ち向かった……

## 2、疑惑

みゆきの事を心配していた佐々木先生は、生徒達の様子を見守りながら、みゆき達を捜して祇園を歩いて居た……

「青木さん達が一緒だから、大丈夫だとは思うけど……」

キョロキョロ辺りを見渡していた佐々木先生は、白川の辺りの上空が、赤く素まつて居る事に気付き、小首を傾げた。

（変ねえ？日が暮れるには早すぎるし……）

佐々木先生は、みゆきを捜す傍ら、空が赤く染まつて居る白川南通へと歩き出した……

「プリキュア！サニー・ファイヤー〜!!」

アカンベエ目掛けサニーのサニーファイヤーが飛ぶ、だが、アカンベエは攻撃に怯む事無く再び向かってきた。

「やはり私達の技は、あの青い鼻のアカンベエには効かないようですねえ……」

サニーの必殺技が効かない、やはりこの青い鼻のアカンベエは自分達の技が効かないように改良されているようだというビュウティの言葉を受け、五人はキャンディを見つめると、マーチが、

「だったら、あの時のように・・・」

「うん！キャンディ、私達に力を貸して!!」

そしてハッピーが、キャンディに力を貸して欲しいと頼むと、キャンディは大きく頷き、キャンディから発せられた光から、レインボーキュアデコルを使用し、プリンセスティアラを装着した五人は手を重ね合わせ、虹色の光波を放って敵を浄化する合体技レインボーヒーリングを放った。

（この力！キャンディ、そなたは・・・）

ポップは、初めて見たプリキュアの新たななる力を、キャンディが生み出している事に気づき、驚愕の表情を浮かべた・・・

レインボーヒーリングの輝きは、アカンベエを浄化し、消滅させた。

「クウウ・・・次こそは負けないオニ!!」

アカオーニが撤退すると、バッドエンド空間は消滅した・・・

（あら、空が元に戻ったわ・・・一体さっきのは何だったのかしら!?)

「徐々に白川南通に近づいた佐々木先生は、遠くの方で聞こえる震動に眉根を曇らせる。何の音なのか？少し早足で歩く佐々木先生の視線に、嘗てニュースで見た少女達の姿が目飛び込んできた。

（あれは、前に横浜に現われた怪物と戦ったっていう・・・プリキュア!）」

佐々木先生は思わず驚き、立ち止まって呆然とした・・・

何故プリキュアが京都に居るのだろうか？

佐々木先生の頭の中は混乱する・・・

メロディ、リズム、ビートの三人と肉弾戦をするベガ、三人のハーモニーパワーの前に、ベガが押され始める。

「クツ！調子に乗りやがってええ・・・」

「さあ、後はある一人だよ！」

「今度こそ、アンデとルセンの無念・・・私達が晴らして見せる!!」

メロディが、リズムが、アンデとルセンの無念を晴らすべく、ベガと決着を付けようと身構える。ビートはハミイを見ると、

「ハミイ、今よ！ヒーリンググチェストを!!」

「合点ニヤ!!」

ヒーリンググチェストを使い、クレツシエンドトーンの力を借りて、勝負を付けようとしたメロディ、リズム、ビートの三人だったが、ハミイは変顔を浮かべると・・・

「みんなあ、忘れてきたニヤ!・・・ゴメンニヤ!!」

「「エエエエ!」」

頭をポリポリ掻きながら、三人に謝るハミイを見て困惑し、変顔を浮かべたメロディ、リズム、ビートの三人、だが、此処に無い物を頼る訳にいかず、メロディはミラクルベルティエを、リズムはファンタステイクベルティエを、ビートはラブギターロッドを取りだし、

「翔けめぐれ、トーンのリング!プリキュア!ミュージッククロンド!!」

メロディとリズム、二人は呼吸を計ったかのように、互いにミュージッククロンドを放ち、

「翔け巡れ、トーンのリング!プリキュア!ハートフルビート・ロック!!」

それに合わせるようにビートの技が放たれた。三人の技が、三重奏を奏でるかのようになり、三つのリングがベガを捕らえるも、ベガは渾身の力を込め、雄叫びを上げると、辛うじてリングを打ち破り、空中へと逃れた。

「クツ・・・覚えてやがれ!!」

ベガも姿を消し、八人のプリキュアは、互いの無事な姿を見て微笑み合い、ハッピーは七人のプリキュア一人一人に抱きつき、感謝の言葉を述べるのだった……

変身を解いた少女達は、目の前から二人の舞妓さんが歩いてくるのを見付けて目を輝かせると、舞妓さんをお願いし、記念写真を撮らせて貰うのだった……

「みゆき……前にせつなから聞いたけど、占いつてね、常に運勢が変わるんですって！」  
エレンは、前にせつなから聞いていた占い講座を思い出し、みゆきに語って聞かせる  
と、

「エッ!?じゃあ……私の大凶は!?!」

「そんなん、決まってるやん!」

嬉しそうに目を輝かすみゆきに、あかねが微笑み掛け、響、奏、エレンも加わった他のメンバーも笑みを浮かべながら、

「……今は、みんなウルトラハッピーの大吉だよ!!」

「うん!!」

みゆきは、満面の笑みで仲間達に微笑み返すのだった……

（ど、どういう事!?プリキュア達が脇道に消えて直ぐ、青木さん達が現われた何て……



まさか!?)

木の陰から隠れて見ていた佐々木先生の脳裏に、みゆき達に対し、ある疑惑が浮かび上がるのだった・・・

第五十一話：修学旅行（中編）

完

## 第五十二話：修学旅行（後編）

### 1、大阪見物

修学旅行三日目である5月1日・・・

一年前、先輩プリキュア達が、闇の救世主を名乗る、バロム率いる闇の軍団達と戦った日であった・・・

七色ヶ丘中学の面々は、朝食を済ませると、お世話になったほへと旅館の人々に挨拶し、バスに乗り込むと、あかね念願の大阪へと向かった・・・

「いよいよ、大阪やでえ！」

「あかねちゃん・・・張り切ってるねえ？」

「当たり前やあ!!」

みゆき、あかね、やよい、なお、れいかの五人は、大阪見物をワクワクしながら楽しそうに語らう。その姿を、時折振り返り見つめる佐々木先生の目には隈が出来ていた・・・

（昨夜はあまり眠れなかったわねえ・・・あの子達に直接聞くべきかしら!?でも・・・）

もしかしたら、昨夜見たプリキュアとは・・・みゆき達五人なのでは？という疑念が頭から消えず、布団の中でも考えて居た佐々木先生は、寝不足に陥っていた・・・

(今日は修学旅行最終日！教師の私が、こんな事じゃ駄目ね・・・)

佐々木先生は、その事は一先ず忘れ、無事修学旅行が終われるように尽くそうと思いを直した。

大阪城に着いた七色ヶ丘中学の面々、クラス事に大阪城内に入り見学を開始する。

「豊臣秀吉は、石山本願寺の跡地を手に入れ、全国統一の本拠地を、この地大坂と定め、天正11年(1583)、織田信長の居城だった安土城を越えるべく、雄大極まりない大坂城の建築に着手しました。完成には、約15年もの歳月を要し、その規模は、面積が現在の4〜5倍という広大なもので、本丸中央には金色に輝く天守が聳(そび)へ立っていました。

しかし、慶長20年(1615)、大坂夏の陣で豊臣家滅亡と共に、大坂城はすべて焼失し、江戸時代に入った元和6年(1620)、徳川幕府は大坂城の再建に乗り出しました。10年の歳月と、幕府の威信を掛け再建された大坂城は、全域に渡る大規模な盛土と、石垣の積み上げ、堀の掘り下げなどが行われ、天守閣も15m高くなり、豊臣秀吉が建築したものは全く異なったものとなりました・・・」。

なおは、バスガイドの解説を聞きながら、

「ウーン・・・あたしはあまり歴史得意じゃないからなあ・・・」

「でも、豊臣秀吉ぐらいいは聞いた事あると思いますけど?」

「うん! あだ名がお猿さんでしょう? それは覚えてる!」

「なおは昔から動物が好きでしたものねえ・・・」

歴史が苦手なおだが、信長に猿と呼ばれていた秀吉の事は知っているようで、ニンマリしながられいかに答えると、れいかは苦笑混じりになおに微笑んだ。

「みゆきちゃん・・・この天守閣の上で、太陽マンと怪人ドクガーが空中戦を繰り広げたらだよおお!!」

「エエエ!? この上でえ?」

「ウン! 凄いでしよう!!」

やよいに取っては、豊臣秀吉より太陽マンのロケ地、大阪城であった・・・

バッドエンド王国・・・

「無い、無い、無い・・・無いだわき!!」

自分の部屋の中を隅々まで探し回るマジョリーナであったが、お目当ての物は見つからず、困惑の表情を浮かべていた。

「何だ!? 捜し物か?」

マジヨリーナに本を借りに来たデイクレは、捜し物をするマジヨリーナに声を掛ける  
と、

「あんた、あたしの納豆餃子餡を知らないだわさ?」

「餡!?! . . . ああ、あの狼男が袋事持っていた物の事か? それなら . . . 不味いと言いな  
がら捨てていたぞ」

「エエエエ!?!」

鼻水垂らしながら驚愕するマジヨリーナは、ブツブツ文句を言い出すと、

「折角買いに行つたのに . . . また大阪まで買いに行く事になるとは思わなかつただわさ」

出掛ける準備をするマジヨリーナに、デイクレは口元に笑みを浮かべながら、

「退屈しのぎに、我も付き合つてやろう . . .」

マジヨリーナとデイクレ、二人がみゆき達の居る大阪へと向かつた . . .

大阪城で集合写真を撮つた一同、今回はみゆきと佐々木先生も、ちゃんと制服やスー  
ツを着て写り、みゆきは満面の笑みで写真に写っていた . . .

「では、此処からは班ごとに分かれて、自由時間になります! 15時迄に、ここ大阪城に  
戻つてきて下さい!! 帰りの電車の時間にも関わりますから、時間厳守ですよ!!」

佐々木先生の言葉を聞き、散り散りになつていく生徒達、みゆき達五人も、あかねを先頭に大阪の街へと繰り出して行つた……

（うくん……やつぱり気になる）

「佐々木先生……どうかしました？」

突然背後から堀毛先生に声を掛けられ、佐々木先生は引き攣つた笑みを浮かべながら、

「な、何でもありません……さあ、私も生徒達の様子を見回らなくっちゃ！」

佐々木先生は、苦笑を浮かべながら大阪の街中へと消えて行つた……

「でも、うちの学校って、自由時間多いよねえ？」

なおは苦笑を浮かべながら、自由時間の多さに苦笑を浮かべると、あかねは、

「まあエエやん！その分ウチらの行きたい所に行けるし……先ず何処行きたい!!」

「はいはい！あたし、先ずは何か美味しい物食べたい!!その後、天王寺動物園行きたいなあ!!」

「いきなり食事かあ!!まあ、小腹は空いてるけど……動物園はエエなあ、ウチも賛成や!!」

なおの提案に苦笑浮かべるあかね、じゃあ、軽く何か食べ、動物園にも行こうと同意

し、

「ほな、他には!？」

「私はねえ．．．太陽マンショーに行きたい!昨日も言っただけど．．．本日14時から通天閣3階の特設会場で、太陽マンショーがあるのおお!!」

「どうでもいい．．．」

「すこぶるどうでもいい．．．」

目をキラキラ輝かせるやよいを、醒めた視線で見つめるあかねとなお、やよいは大きく頬を膨らませると、れいかは宥めるように、

「やよいさん．．．よく調べましたねえ?」

「うん!駄目元で調べてみたら．．．何と、ちょうど太陽マンショーにぶつかつたんだもん!運命を感じる!!」

再び目をキラキラ輝かせるやよいに、流星のれいかも苦笑を浮かべるのみだつた．．．  
「まあ、時間が合つたらつて事で．．．みゆきは!？」

「私、私はあ．．．絵本専門の本屋さん何か良いなあ!!」

「修学旅行に来てまで見たいんか?」

「エエ!?だつてえ、こういう機会じゃないと、大阪何て中々来れないもん」

みゆきが口を尖らせると、あかねは分かつた、分かつたと言いながら、れいかを見る

と、

「れいかは?！」

「私は特に・・・一番行きたかったのは大阪城ですし、目的は果たせましたから、皆さんが行きたい場所で構いませんよ!!」

「ヨッシャー!じゃあ、取り敢えず、軽く何かこの辺で腹ごしらえしてこかあ!」

五人は大阪城敷地内にあるうどん屋に入ると、きつねうどんを食べ笑顔を見せた。なおだけはお代わりをしていたが・・・

次に一同が向かったのは、みゆきのリクエスト絵本専門店、だが、さすがにあかねもその場所は分からず、通りすがりの三人組のおばさんに声を掛けると、

「あらあ、お嬢ちゃん達、修学旅行?」

「ええなあ・・・おばちゃん達も修学旅行なんよ!」

「誰が老人ホームの修学旅行やあ!」

おばちゃん達のトリオ漫才を見て笑うみゆき、あかね、やよい、なおの四人、れいかは、何が可笑しいのか小首を傾げるも、そんなれいかにお構いなく、おばちゃん達は力パンをゴソゴソ漁ると、

「飴さん上げるわあ!ほな、楽しんでやあ!!」



おばちゃん達が立ち去り、飴を貰った一同、みゆき、あかね、やよい、なおは、笑みを浮かべながら直ぐに飴を舐め始める中、一人冷静なれいかは困惑しながら、

「皆さん・・・私達、あの方達に絵本専門店の場所を聞きに行ったのでは？」

「「アツ!!」」

四人は思わず要件をお思いだし、舐めていた飴を思わずゴクリと飲み込んだ・・・

絵本の専門店をようやく見付けた一同は、中に入ってみると、沢山の絵本の数々が本棚に並んでいて、みゆきは目をキラキラ輝かせた。

「見て来て良いよねえ？」

「あんまり長居は出来へんでえ！」

「うん！」

みゆきは、ニコニコしながら絵本の数々に、目を細めて見ていると、

「アア!? 夢原さんって作者、見付けたあ!!」

みゆきは、のぞみの父である童話作家、夢原勉の本を見付け、嬉しそうにレジに持っていった。

「購入するとは思わなかったなあ？」

「みゆきちちゃんって・・・結構義理堅いよね？」

「でも、スツゴク楽しそうな顔してるよ！」

「そうですね、昨日、一昨日の事もありましたから、ホツと致しますねえ」

あかね、なお、やよい、れいかは、みゆきを見て目を細めるのだった・・・

続いて一行が訪れたのは、天王寺動物園・・・

「天王寺動物園は、大正4年（1915年）1月に、日本で3番目の動物園として開園しました。開園当時と比べると面積も増加し、現在約11ヘクタールの園内に、およそ230種1,000点の動物が飼育されているそうですよ」

「へえ・・・れいか、天王寺動物園の事まで調べてたんだ？」

「はい！訪れた場所を詳しく知っていた方が、より楽しめるだろうと思ひまして・・・」

れいかは、京都、大阪の観光スポットの事は、粗方調べていたようだった・・・

「ちなみに、ここの動物園の人気者は、コアラ、ホッキョクグマ、シシオザル、ワライカワセミ、キウウイだそうです」

れいかが天王寺動物園の事まで調べていた事に驚くなお、更にれいから人気がある動物達を聞くと、なおはれいかの博識振りに感心しながら、

「へえ・・・出来れば全ての動物達を見て見たいなあ・・・」

「14時迄に通天閣に行くんだからね！」

「まだ昼前やん．．．大丈夫やて！」

やよいは絶対に太陽マンシヨーを見ると心に決めているのか、鼻息荒く14時迄には通天閣に行くんだからと一同に念を押し、あかねは苦笑を浮かべながら、昼前だから大丈夫だと伝えた。

「拙者達も、折角だから見たいでござる！」

「キャンデイも見たいクル!!」

キャンデイをみゆきが、ポップをれいかが抱っこしながら、一同は、沢山の動物達を見て心を和ませるのだった．．．

動物園を出た一同は、やよいにせがまれ通天閣へと向かおうとしていたのだが．．．

「まだ早いし、道頓堀でも見学してくう？」

「そうだねえ、もうお昼過ぎだし．．．食い倒れの街を味わいたいなあ．．．」

「ほな、行こか！」

あかねに聞かれた一同、なおは大きく頷き、何か食べたいと言うと、あかねは先頭に立ち、一同を巨大な親父の看板と、「ソースの二度付けは禁止やで」と書いた札を持つ人形が目印の串カツ屋へと案内する。

「この店は、ホンマは通天閣近くにもチェーン店があるんやけど、どうせなら、みんなに

この看板見せよう思うてなあ．．．どや、目立つやろう？シシシシシ」

あかねはインパクトのある巨大な親父の看板と、人形を見せ、一同の反応を楽しむと笑いだす、れいかとみゆきは度肝を抜かれて驚き、

「ほ、本当ですねえ．．．」

「な、何か怖そうな人が居たりして．．．」

「大丈夫や！さあ、入るかあ!!」

一同は店内に入り席に着く、表の看板のイメージとは違い、中々キレイな室内に好感を持ち、串カツの種類の多さに驚いた。なおは大喜びで色々な種類を片っ端から頼み、満足そうに串カツを頬張り、一同は笑顔を浮かべながら串カツを味わうのだった．．．

## 2、覚悟の変身!

そして一同は、やよいの念願だった通天閣に到着する。みゆきは感触深げに通天閣を見上げると、

「凄おおい！これがあかねちゃんが言ってた．．．通天閣！」

「何や、前にも聞いたような、セリフやなあ？」

「京都タワーを見た時も、みゆきさんは言っていましたよ．．．ウフフフ」

あかねとれいかに苦笑まみれに突っ込まれるみゆきだった．．．

「通天閣・・・キタアアア!!」

大声を出しながら両手を高々と上げるやよいに、なおは恥ずかしきで頬を染めながら、慌ててやよいを止めると、

「や、やよいちゃん、嬉しいのは分かったから、もうちよつと静かに・・・ね?」

「うん・・・ねえ、先に中に入ってて良い?」

「ン? エエンちゃう・・・なあ!」

「うん、私達はもうちよつと、この辺散策してるよ!」

あかねとなおは、太陽マンションを見る事に乗り気では無いので、もう少しこの辺を見てから行くと伝えると、やよいはみゆきとれいかを誘うも、

「私も、もう少しこの辺を見てから行きますね!」

「じゃあ、私はやよいちゃんと先に行ってるねえ!」

「行こう! みゆきちゃん・・・太陽マンが、私達を呼んでいる!!」

「オオ!」

みゆきとやよい、二人はスキップでもしそうな喜びようで通天閣内へと消えて行つた・・・

その様子を醒めた目で見ていたあかねとなおは、

「何や、みゆきの奴も感化されとったなあ?」

「そうだね・・・」

「何でも、やよいさんから太陽マンのDVDを貸して上げると渡されたそうで、キャンデイと一緒に見てたそうです・・・今度は、私達に貸すんだと言っていたそうですよ」

れいかの話聞いたあかねとおおは、興味無さそうな表情を浮かべると、

「そんなん・・・どうでもいいなあ？」

「うん、すこぶるどうでもいいよね？」

「まあ、私も興味は無いのですが・・・」

れいかの言葉に、ウンウン頷くあかねとおおであった・・・

マジヨリーナは、通天閣周辺の商店街で呆然としていた・・・

買いに来た納豆餃子飴は既に完売し、マジヨリーナのイライラは爆発寸前だった。

デイクレは肩をすくめ、そんなマジヨリーナに呆れていたが、不意に通天閣の一角に、光の気配を感じたデイクレは、ジイと通天閣を凝視すると、デイクレの視力が、まるで望遠レンズのピントを合わせるように、通天閣をズームアップしていく。ピントが合った時、窓に映ったそこには、見知った髪型をしたみゆきの姿があった・・・

「あれは・・・おい、マジヨリーナ！あのタワーにプリキュアが居るぞ!!」

「エエ!?・・・丁度いいだわさ、プリキュアで憂さ晴らしするだわさー!」

マジヨリーナは、通天閣一带にバッドエンド空間を作り出すと、人々からバッドエナジーが放出される。

「あのデカブツをアカンベエに変えるだわさ!出でよ!アカンベエ!!」

マジヨリーナは、通天閣を青鼻のアカンベエへと変えると、これでプリキュアは出られないだわさと高笑いを始める。

「待て!念には念を・・・我がアカンベエの体内に入り、直接始末してくれる!!」

デイクレはそう言い残し、アカンベエに近付くと、口を開けるように指示し、中へと入っていった・・・

あかね、なお、れいかの三人は、突如発生したバッドエンド空間を見て、

「クツ、こないな時に・・・」

「みゆきちゃんとかやよいちゃんが中に居るのに・・・」

あかねとなおは、青鼻のアカンベエとなった巨大な通天閣を見上げ、みゆきとかやよいの身を案じ、れいかはスマイルパクトを手に持つと、

「なお!あかねさん!私達だけで、何とか食い止めましょう!」

れいかの言葉に頷き、二人もスマイルパクトを取り出すと、

「プリキュア！スマイルチャージ!!」

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

「勇氣リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心！キュアビューティ!!」

三人のプリキュアがポーズを決めた・・・

「何や、三人やと締まらんなあ？」

「そうだね・・・」

「二人共、アカンベエをなるべく人の少ない方に誘導しますよ!」

ビューティの指示に頷き、三人はアカンベエを挑発するように、人の少ない方向に誘導を始めるのだった・・・

通天閣に居た人々も、バッドエナジーを奪われ床に跪いていた。その中には、佐々木先生の姿もあった。

「みゆき殿、やよい殿、バッドエンド空間が現われたでござる!」

「うん、やよいちゃん!」

「みゆきちゃん・・・あそこに佐々木先生が!」

スマイルパクトを手に持った二人だったが、佐々木先生を見付け、駆け寄ろうとした



とき、突然現われたデイクレの強襲を受けた二人は、手を弾かれスマイルパクトを床に落としてしまう。慌てて拾おうとする二人だったが、デイクレはスマイルパクトを蹴り飛ばし、スマイルパクトは、クルクル床の上で回転しながら、佐々木先生の側へと滑っていった。

デイクレは、スマイルパクトさへ破壊すれば、もうみゆきとやよいがプリキュアになる事は出来まいと考えると、側に居る佐々木先生事消し去ろうと右手に力を込める。

「先生！佐々木先生!!」

佐々木先生の下に駆けだすも、デイクレは口元に笑みを浮かべながら、

「その女事消えろ！プリキュア!!」

デイクレのプリキュアと言う言葉に、ピクリと反応した佐々木先生は、みゆきとやよいが、必死に何か叫びながら駆け寄って来るのに気付き、

(今、あの人プリキュアって!?!星空さん、黄瀬さんがあの人の前に居るって事は……)

佐々木先生の意識が活性化してくる……

バッドエンド空間の支配を断ち切り、立ち上がった佐々木先生は、

「星空さん、黄瀬さん、あなた達、此処で何を!?!」

「先生!!目の前のスマイルパクトを、私とやよいちゃんに!」

「みゆきちゃん!?!」

「お願い、先生!!」

みゆきの叫びにやよいは驚くも、みゆきは構わず佐々木先生にスマイルパクトを渡してと頼む。佐々木先生は、何の事か分からなかったものの、みゆきの言葉通り目の前のスマイルパクトを拾うと、みゆきとやよいに渡そうとする。

「おのれえ! そうはさせんぞ!!」

デイクレの衝撃波が佐々木先生目掛け放たれるも、ポップが瞬時に盾に変化し、吹き飛ばされながらも何とか攻撃を防ぎきる。キャンデイは泣きながらポップに駆け寄ると、

「大丈夫でござる! キャンデイ、それよりミラクルガイドライトを使うでござる!!」

「分かったクル!」

キャンデイはミラクルガイドライトのスイッチを入れると、虹の輝きは、通天閣アカンベエの窓を突き抜け上空に虹色に輝いた。

「何?! この生き物達は一体?」

呆然としながらポップとキャンデイを見た佐々木先生だが、みゆきに言われた通り、スマイルパクトをみゆきとやよいに手渡すと、

「二人共、後でちゃんと説明して貰いますよ?」

「はい……でも、今は危ないので少し離れていて下さい! やよいちゃん!!」

「本当に良いの？」

「うん!!」

不安そうな表情のやよいに、力強く頷いたみゆき、やよいも頷き返すと、

「プリキュア!スマイルチャージ!!」

(エツ!?)

佐々木先生の前で、今覚悟を決めたみゆきとやよいが、プリキュアへと変身を始め  
る……

「キラキラ輝く、未来の光!キュアハッピー!!」

「ピカピカぴかりん!じゃんけん……ポン!キュアピース!!」

「あなた達……その姿!」

変身を終えたハッピーとピース、二人を見た佐々木先生は、呆然としながら、自分の  
想像が、現実であつた事を思い知らされた瞬間だつた……

奈良……

鹿が沢山生息している事でも有名な、奈良公園に来ていた響、奏、エレン、エレンは  
寄ってくる鹿に鹿センベイを上げると、鹿達が喜んで食べる姿を見て目を細めていた。

「エレン．．．楽しそうね！」

「そうだねえ．．．でも、私もみゆきちゃん達見たいに大阪の方が良かったなあ．．．お好み焼きでしょう！たこ焼きでしょう！串カツに、うどん．．．」

「もう、食べ物ばかりじゃない！奈良も良い所よ！！東大寺の大仏様も良かったでしょう？」

「私は大仏より、美味しい食べ物の方が良いかなあ．．．」

響に取っては歴史より食い気のように、奏は思わずハアと溜息を付いた。

「でも、あれからもう一年も経つ何て．．．早いよねえ？」

「エツ!?何の話？」

「もう、響ったら．．．一年前の今日、私達は他のプリキュアのみんなと一緒に、加音町でバロムと戦ったでしょう！」

「そうだ！早いよねえ．．．あの時エレンは、まだプリキュアじゃ無かったけど、私達に協力してくれたんだよね」

「ええ！」

響と奏は、一年前の事を思い出しながらエレンを見つめた．．．

エレンは、そんな二人の視線に気付いたのか、響と奏の下に行こうとした時、ハミイがリュックからひよっこり顔を出し、

「セイレーン……またミラクルガイドライトが、何かに反応してるみたいニヤ！」

ハミイがミラクルガイドライトを点灯させると、虹の輝きが上空に浮かび上がり、大阪方面へと勢いよく延びていった……

「これは、またみゆき達の前にあいつらが……響！奏！」

エレンは表情を強張らせると、響と奏の下へと駆け寄り、響と奏も異変に気付いたものの、

「みゆきちゃん達は大阪、私達は奈良、向かえない距離じゃないけど、もう集合時間だし……」

「おい、響！南野さん！黒川さん！そろそろ集合時間だよ！」

集合時間が近づき、響の父でアリア学園の講師である団に、そろそろ集合場所に行くと言われ困惑する。

「どうしよう……」

「私に考えがあるわ！ねえ、みゆき達は、大阪のどの辺に行くか分かってる？」

困惑の表情を浮かべる響と奏に、エレンは考えがあると伝え、みゆき達が居そうな場所を問うと、

「大阪城行つた後は、自由行動になるとか言ってたよ！」

「そういえばやよいちゃんが、14時から始まる太陽マンショーを、通天閣でやるから見

たいとか何とか言ってたような？」

「通天閣ね!？」

響と奏の言葉に頷いたエレンは、携帯を取りだし、何処かにメールを送信するのだった……

巨大なアカンベエに肉弾戦を仕掛けるサニー、マーチ、ビューティだが、決定打にはいたらず困惑する。

「あの青鼻のアカンベエには、あたし達の攻撃は通じないんだよね？」

「はい、前回、前々回の戦いを見る限りは……」

「みゆきとやよいが、上手くアカンベエから脱出出来ればエエンやけど……」

ビューティは何かを閃くと、ビューティーブリザードをアカンベエの足下に発射し、動きを封じた。

「技は効かなくても、動きを封じるぐらいなら……これで時間を稼げる筈です！」

マーチ、ビューティ、サニーは、中に居る二人の身を案じた……

デイクレと戦うハッピーとピース、だが、佐々木先生やバッドエナジーを吸われる

人々を守りながらの戦いは劣勢だった・・・

「キヤアアア」

デイクレのパンチを受け吹き飛ばされるハッピーとピース、佐々木先生は堪らず二人に駆け寄ると、

「星空さん！黄瀬さん！大丈夫？ちよつとあなた！私の生徒に何て事するのよ!!」

表情を強張らせデイクレに文句を言う佐々木先生、デイクレは目障りとばかり腕を前に振ると、風が巻き起こり佐々木先生を吹き飛ばす。

「キヤアアア！」

「先生!!」

咄嗟にハッピーがジャンプし、佐々木先生を受け止めると、優しく床に降ろした。佐々木先生は驚愕の表情を浮かべながら、

「星空さん、黄瀬さん、あの人は一体!?!」

「先生、私達、あの人やバッドエンド王国っていう人達から、この世界を守ってるの!」  
「守る!?!あなた達は中学生ですよ!何故あなた達が・・・そういう事は、警察に任せれば良いんです!?!」

自分の教え子達が危険な目に合っていると知り、佐々木先生の心は張り裂けそうだった。何故平凡な中学生の彼女達が、プリキュアとして戦わなければならないのか、理解

出来なかった・・・

そんな問答を聞くのも目障りとはばかり、デイクレはダツシユで三人に近づくと、ハッピーを回し蹴りで、ピースをパンチで吹き飛ばし、二人は激しく壁に激突し、ゆっくり床にずり落ちる。

デイクレは、止めを刺そうとゆっくりハッピーの側に近寄り、拳を振り上げると、

「させんでござるー！」

「止めるクルウウウ!!」

ポップとキャンデイがデイクレの腕にしがみつき、ピースが這いながらデイクレの右足を掴み止めさせようとする。

「エエイ・・・目障りな奴らめ！ハアアアア!!」

デイクレが気合いを込めると、爆発が起こり、一同が吹き飛ばされる。デイクレが右手でハッピーの首を、左手でピースの首を掴み持ち上げると、口元に笑みを浮かべながら、

「さあ、その素っ首引き千切つてくれる!!」

「星空さん！黄瀬さん！止めてええ!!」

涙を流しながら、佐々木先生が二人の下に駆け寄ろうとしたその時、前方が赤く輝き、二人の少女が突然現われた。



「あれは、ハッピー！ピース！．．．せつな!!」

「ええ!」

現われたのは桃園ラブと東せつな、自宅に居た二人は、せつなに届いたエレンからの救援メールを受け、此処通天閣に現われた。二人は背後に佐々木先生が居るのに気付かず、リンクルンを手に取ると、

「チエインジ・プリキュア!ビートアップ!!」

「ピンクのハートは愛あるしるし!もぎたてフレッシュユ、キュアピーチ!!」

「真っ赤なハートは幸せの証!熟れたてフレッシュユ、キュアパッション!!」

「レツツ!プリキュア!!」

(エツ!?!．．．この子達もプリキュア?)

変身したピーチとパッションを見て、困惑する佐々木先生だったが、直ぐに我に返り、「お願い、私の生徒を．．．星空さんと黄瀬さんを助けてええ!!」

今の自分には二人を助けられる力はない．．．  
縋るような思いで、目の前に現われたピーチとパッションに二人の教え子の事を託した．．．

背後を振り返ったピーチは、後ろに佐々木先生が居た事に驚くも、直ぐに笑みを浮かべ、

「安心して下さい・・・私達プリキュアが、助けます!!」

「ダブルプリキュアペアアンチ!!」

ピーチとパッションが、呼吸を合わせたかのようにディクレ目掛けパンチを放ち、力が弱まった手にハッピーとピースがキックを放ち、ディクレから解放される。

「ピーチ! パッション! どうして此処に!?!」

「エレンから救援メールが来てね・・・それより、サニー、マーチ、ビューティは?」

「多分、外でアカンベエと戦って居ると・・・」

「分かったわ・・・取り敢えず此処から出ましょう! ポップ、キャンディ、先生もこちらに!!」

「エツ!? は、はい!」

佐々木先生もパッションに言われるまま近づくと、パッションは瞬間移動で消え去った・・・

「逃げたか!?! いや、この中にはまだ人間共が残って居る・・・」

ディクレは、バッドエナジーを取られた人々が、まだ通天閣内に居る事で必ず戻って来る筈だと確信した・・・

サニー、マーチ、ビューティの前方が赤く輝くと、姿を現わすピーチ、パッション、ハッ

ピー、ピース、佐々木先生、

「ハツピー！ピース！無事で何よりや!!」

「ピーチ、パッション、どうして此処に!？」

ハツピーとピースの無事な姿を見てホッと安堵するも、ピーチとパッションがこの場に居る事に驚き、マーチが二人に声を掛けるも、

「話は後！私とパッションは通天閣に戻り、残った人達を救助してくるわ!」

「五人共、アカンベエをお願い!!」

再び前方が赤く輝き、ピーチとパッションは通天閣内へと戻って行った・・・

佐々木先生は、ゆっくりサニーに近づくと、

「関西弁を喋って居たって事は・・・あなたが日野さん!」

「エツ!？」

名前を呼ばれたサニーは、激しく動揺し仰け反り、佐々木先生は次にマーチに近付き、

「あなたが緑川さんね!」

「せ、先生・・・どうして!？」

正体を知られている事に、マーチも激しい動揺を隠せなかった。佐々木先生はビューティにも近づき、

「そして、あなたが青木さん・・・」

「佐々木先生がどうして!? ハッピー、ピース、これは一体?」

ビューティも激しい動揺を見せて、俯くハッピーとピースに問うと、

「みんな、ゴメンね・・・通天閣の中に、あの時の三人組の一人が現われて・・・」

「もう、先生に隠し通せる状況じゃなかったの・・・私達が先生の目の前で変身したから」  
サニー、マーチ、ビューティに謝るハッピーとピース、三人は驚きの表情を見せながら顔を見合わせるも、直ぐに笑顔を浮かべ、

「エエんや! みんな無事やったんなら」

「そうだよ! それより、今は・・・」

「エエ、アカンベエを浄化するのが先ですね・・・」

五人は、心配そうにしている佐々木先生に微笑み掛けると、アカンベエの前に移動し、五人はキャンティの力を借り、レインボーヒーリングでアカンベエを浄化し、通天閣を元に戻した・・・

「キイイイ! 納豆餃子飴は買えないわ、散々だわさ!」

悔しそうにしながらマジヨリーナが撤退し、バッドエンド空間は解除され、バッドエナジーを奪われていた人々は解放された・・・

（あの子達に、こんな力が・・・）

佐々木先生は、目の前で起こった非現実な数々が、事実であった事を再認識するの

だった・・・

「ハアア!!」

再び通天閣内に戻ったピーチとパッションは、デイクレと激しい肉弾戦を繰り広げる。デイクレは忌々しげにしながら、パンチとキックの連打で二人を攻撃するも、ピーチもパッションも巧みにその攻撃を捌き続け、一進一退の攻防を繰り広げる。

「おのれえ・・・貴様らが邪魔をしなければ、ハッピーとピースは片付けられたものを・・・」  
「そんな事、私達プリキュアが・・・させはしない! パッション!!」

ピーチの合図に領き、ピーチはピーチロッドを、パッションはパッションハープを取り出すと、

「悪いの、悪いの、飛んでいけ! プリキュア! ラブサンシャイン・・・フレ〜ッッシュュ!!」  
「吹き荒れよ! 幸せの嵐! プリキュア! ハピネス・ハリケーン!!」

二人の技が重なり合い、巨大なハートのハリケーンとなってデイクレ目掛け突き進む、デイクレはその攻撃を受け止めるも、

「チツ、覚えて居ろ!!」

デイクレは飛び上がり、通天閣より撤退した。ピーチとパッションは、人々が意識を取り戻すのを見て、通天閣から姿を消した・・・

変身を解いた少女達が、佐々木先生の前に勢揃いする。ラブとせつなは、少し離れた場所で成り行きを見守っていた・・・

「あの子達・・・先生にプリキュアだってバレて、大丈夫かしら？」

「大丈夫だよ！あの先生なら、みゆきちやん達の正体を知っても、きつと今まで通り接してくれる。クローバータウンストリートの人達のように、きつとみゆきちやん達を理解してくれるよ!!」

「そう・・・そうよね！」

ラブの言葉に何度もせつなは頷き、二人は佐々木先生とみゆき達を見つめた・・・

沈黙の時間が流れる・・・

お互いどう話せば良いのか、言葉が見つからなかった・・・

最初に沈黙を破ったのは、意外にもポップだった・・・

「先生氏、みゆき殿達を責めないで下され！彼女達は、拙者達の故郷メルヘンランドを、そして、この地上の世界をも、バッドエナジーで溢れさせようとする、悪の皇帝ピエーロ率いるバッドエンド王国から、この世界を守る伝説の戦士プリキュアとして、戦ってくれているのでござる!!」

「で、あなたとこのぬいぐるみっぽい子が・・・妖精っていう事なのね？大体の事情は

分かったけど・・・何故、この子達が戦わなければならないの？彼女達はまだ中学生です!!」

「それは・・・プリキュアの力に選ばれたとしか答えようが無いでござるが・・・」

ポップも、何故と聞かれても、プリキュアの力に選ばれたから、そう答えるしか無かった。おそらくは、なぎさ達も、咲達も、のぞみ達、ラブ達、つぼみ達、響達もそうであろうと、

「出来るなら・・・代わって上げたい！まだ中学生のあなた達を、私の可愛い教え子を、危険な目に何か・・・合わせたくない!!」

「せ、先生・・・」

それは佐々木先生の本心だった・・・

自分の教え子達が、さつきのような怪物達と戦うなど、承知出来る筈は無かった。

「あなた達の担任として！これ以上、あなた達五人を、プリキュアとして危険な目に合わせる訳には行かないわ!!」

「ま、待って下さいー!」

れいかが慌てて反論しようとするのを制した佐々木先生は、周りを見渡すと、さつきまでの戦いが嘘のように、街並みに賑わいが戻り、人々から笑顔が溢れていた。佐々木先生は笑みを浮かべながら五人を見ると、

「あなた達は、この人達の笑顔も守って戦って居るのねえ……その二人！」

突然呼ばれたラブとせつなは、ギクリとしながら近付いて来ると、

「あなた達もプリキュアだって事は……横浜スタジアムで会った子達、みんなプリキュア何でしょう？」

「ア、アハハハハ……はい！」

誤魔化すべきか悩んだものの、ここは正直に打ち明けるべきだと判断したラブは、真顔になって頷くと、佐々木先生はラブとせつな、みゆき、あかね、やよい、なお、れいか、一人一人見つめると、

「ありがとう……佐々木なみえ個人としては、あなた達プリキュアには何度感謝しても足りません！私の教え子達を……よろしくお願いします!!」

「いえ、彼女達の事を理解してくれて……ありがとうございます!!」

みゆき達にも、頼もしい理解者が出来た事に、せつなは満面の笑みを浮かべ、佐々木先生に頭を下げた。みゆきは、恐る恐る佐々木先生に話し掛け、

「あのう……他の人には……」

「分かってます！あなた達と私との秘密にします!!私に出来る事があるなら……何時でも相談にいらっしやい!!」

「「「「はー!!」」」」



みゆき達五人も顔を見合わせ微笑むと、ラブとせつなはホツと胸を撫で下ろし、戻ろうとすると、佐々木先生からお土産として、大阪名物くだおれ太郎の顔をしたプリンを貰い、目が点になるラブとせつな、

「ア、アハハハ！ありがとうございます!!じゃあ、みゆきちゃん達、先生！私達はこれだ!!あつ、そうだ！ねえ、5月5日に、私達みんなで響ちちゃん達の街、加音町に行くんだけど、みゆきちゃん達も来ない？」

「加音町ですか？分かりました！伺います!!」

帰る間際に思い出し、ラブはみゆき達を加音町に一緒に行かないか誘うと、みゆきは行く事に同意した。

「佐々木先生もよろしければ!!じゃあ!!」

「ええ、お誘いありがとう！みなさんにもよろしく!!」

ラブとせつなは、一同に手を振りながらクロバータウンストリートへと戻って行つた……

「さあ、私達も戻りましょう!!そろそろ戻らないと、集合時間に遅れるわよ!!」

「「「はああい!!」」」

佐々木先生と共に歩き出すみゆき、あかね、なお、れいか、ポップとキャンディもみゆきのリュックの中に戻り、一同が歩み始めた中、何かに気付いたやよいは呆然としな

がら通天閣を振り返り、

「た、太陽マンショー……見るの忘れたあああああ!!」

涙目になりながら、ムンクの叫びのポーズで絶叫するやよいの声が、通天閣周辺に響き渡った……

こうして、みゆき達の修学旅行は終りを告げた……

新たなる協力者、佐々木なみえ先生を加えたみゆき、あかね、やよい、なお、れいかの五人、そして、プリキュアオールスターズと、バッドエンド王国、三人の魔人との戦いはまだ続く……

第五十二話：修学旅行！（後編）

完

## 第五十三話：咲とみゆきがイレカワール！

## 1、招待

色々あった修学旅行も終わり、家に帰ったみゆきは、母育代に申し訳無さそうにお土産のこけしを手渡した。育代が笑顔を浮かべながら箱を開けると、

「あらあ、可愛いこけしねえ．．．みゆき、ありがとう！」

「アハハハ！髪が着脱式のこけしとは．．．凄いなあ！」

育代は心から嬉しそうに喜び、博司は、笑いながらこけしの髪を着脱させ遊び、みゆきは頬を膨らませた。

部屋に戻ったみゆきは、キャンデイと遊んであげていたポップに目を細め、

「ねえ、ポップは何時までこつちに居られるの？」

「もうすぐキュアデコルが16個集まるでござるし、もう暫くこちらに居ようかと考えて居るでござるが」

ポップの返答を聞き、キャンデイは嬉しそうに兄ポップに甘え、みゆきはその姿を見て微笑んだ。その時、下から母育代の声でみゆきに電話だと知らせが入り、みゆきが電

話に出ると、相手はあゆみからだつた。聞き耳立てていた博司は、電話の相手が女の子だと分かり、ホッと安堵すると、育代はそんな博司を見てクスクス笑つていた。

「みゆきちゃん、咲さんから、3日の日に遊びに来ないかって誘われたんだけど、みゆきちゃん達も一緒に行かない？」

「咲さんの所つて・・・確か湘南だよね？うん、私は良いよ！じゃあ、みんなにも知らせてみる!!」

電話を切つたみゆきは、あかね、やよい、なお、れいかに電話をして、あゆみから咲達の街に遊びに行こうと誘われた事を伝えると、他の四人も同意してくれて、今度はみゆきからあゆみに電話を掛け、五人で行く事を伝え、あゆみとの待ち合わせ場所を横浜駅と決めた・・・

5月3日・・・

この日、咲は珍しく早起きし、あゆみとみゆき達五人を迎える歓迎会の準備をしていた・・・

咲は、なぎさとほのかが戻らず何処か元気の無いひかり、夕風町に来た事が無い響達も誘つたのだが、ひかりは店の手伝い、響達は、5日に加音町で行われる、加音町復興式典の準備の手伝いがあり、遊びには行けないと連絡があつた。

「ひかりや響達が来れないのは残念だけど、明後日にはみんなで加音町に行くし、まっ  
いつかあー！」

鼻歌交じりに庭のテーブルを飾り付けていると、

「咲！おはよう！！」

「舞！おはよう！！」

紙袋を持った舞がやって来て、テーブルの上に紙袋を置くと、フラツピとチョツピも  
妖精姿になって紙袋の中身を取りだし、飾り付けの手伝いを始めた。

「咲、舞、おはよう！」

「ちよつと遅れたみたいね・・・」

「満、薫、おはよう！ううん、ちつとも遅れてないよ！」

「満さん、薫さん、おはよう！じゃあ、飾り付けの方は私と薫さんでやっておくわね！」

「分かった！じゃあ、私と満でケーキ作りの方、完成させてくるから！！行こう、満！！」

「ええ、じゃあ、二人共こっちの方をお願いね！」

店内へ入っていった咲と満、ムープとフープは、忙しそうに動き回る面々を見ると、

「ムープ達は何するムープ？」

「邪魔しなければ、それで良いラピ！」

「嫌ププ！フープ達も何か手伝うププ」

自分達だけ除け者にされたように感じ、ムープとフープは自分達も手伝いたいとテーブルの周りをクルクル浮遊する。舞と薫は顔を見合わせクスリと笑い、

「じゃあ、お手伝いを頼もうかしら?」

「フープ!ムープ!それじゃあ、この横断幕を物干し台に掛けて貰える?」

舞と薫に手伝いを頼まれ、二人は嬉しそうに宙に浮かび、横断幕を物干し台に掛けた。

一方、室内に入った咲と満は、予め作っておいたスポンジ生地に、咲の店でバイトをしている満が、慣れた手付きで生クリームを絞り乗せていく。咲は苺を乗せながら、満の手慣れた手付きに感心し、

「満、本当に上達したよねえ・・・満つて、パティシエールになれるんじゃない?」

「パティシエール!?!・・・ああ、お菓子職人の事ね!」

「うん!奏もお父さんと同じパティシエ目指してるそうだけど、満もなるんじゃないかなあ!家のお父さんとお母さんも褒めてたよ!!」

「そんな事無いわ!咲のお父さんとお母さんの教え方が上手なだけよ!」

咲に褒められ、満は顔を赤らめながら謙遜するも、

「ありがとう、咲!・・・本当言うかね、薫とも話していたんだけど、何れは私達二人で、お店でもやりたいねって言っていたの!」

「本当!? 凄いやない!」

「まあ、出来ればだけどね・・・当分先だけど」

満はクスリと咲に微笑んだ・・・

それを奥から見ていた咲の父大介と、母沙織は、顔を見合わせ微笑んだ。

満と薫・・・

ダークフォールで生まれた彼女達が、精霊達の力で新たなる命を与えられ、この世界の住人として暮らしていく内に、彼女達にも夢というものが生まれていた・・・

咲や舞を始めとする、沢山のプリキュアの仲間達とこの世界を守り、親睦を深め、沢山の事を学んだ彼女達は、希望に向かって歩み始めようとしていた・・・

バッドエンド王国・・・

「無い、無い、無い、無いだわさあ!!」

大騒ぎをするマジヨリーナを、呆れ顔で眺めるのは、ウルフルン、アカオーニ、サディス、ベガ、ディクレ、

「この前も、そのような事言いながら何か捜して居たな? 今度は何を無くしたと言うのだ?」

呆れ顔のディクレに問い掛けられたマジヨリーナは、一同の顔を見渡すと、

「はめた人間の中身を入れ替える指輪、その名を……パンパカパーン!世紀の大発明!イレカワールだわさあ!!」

「ハア?イレカワールだあ!」

「無いオニ……その名前は無いオニ」

「あんた……センス無いね!それより、そんな指輪作って……まさか、あたしと入れ替わって、このピチピチボディを手に入れようと考えたんじゃ無いだろうねえ?」

「失敬だわさあ!あんたの身体を奪わなくても、あたしや、ピチピチボディだわさあ!!」  
マジヨリーナが文句を言うと、腹を抱えて笑いだすウルフルン、アカオーニ、サデイス、一方デイクレは額から汗を流しながら、

(イレカワール!分かりやすい名前だと思いが……今は言うのを止めておこう)

デイクレ的には良い名前だと思つたようだが、一同からの不評を聞き、無言で通すデイクレ、ベガは興味が無さそうにその場を立ち去つた。

「何で笑うだわさああ!!全く……その世紀の大発明、イレカワールが、このテーブルの上に置いてあつたのに……消えたんだわさああ!!」

マジヨリーナが目の前テーブルをバンバン叩き、ここに置いてあつたのが消えたと訴えると、四人が首を捻り、

「俺は知らねえぞ!指輪なんて興味もねえ!!」



「私もそのような物は見なかったぞ？」

「あたしも知らないよ！」

ウルフルン、ダイクレ、サデイスの三人がそんな物は知らないと答え、

「俺様も知らないオニ！ただ、この上にあつた物を眺めてて、クシヤミをしたら何かが飛んでいっただけオニ!!」

「二二二二二二二二二二二二二二」

アカオーニの言葉を聞き、沈黙が流れる室内・・・

「お前じゃねえか！」

「オニ!？」

「あんたがやったんじゃない！」

「オニ!？」

「ウム・・・お前の仕業だな！」

「オニ!?!俺様だったオニ？なくんだ!!」

「二二二二二二二二二二二二二二」

ウルフルン、サデイス、ダイクレに、お前の仕業だと言われ、ようやく気付いたアカオーニ、四人が顔を見合わせ笑い合う中、マジヨリーナは顔を真っ赤にして怒り出し、  
「笑い事じゃないだわさああああ!!ウルフルン！あんた、捜してくるだわさああ!!」

「ハア!? 何で俺様が行かなきゃならねえんだよ?」

「あんた、この間あたしの納豆餃子飴を……捨てたんだろう?」

思わずギクリとするウルフルン、口笛を吹きながら誤魔化そうとするも、

「惚けたつて無駄だわさあ! ちやあんとお見通し何だからねえ……それと、これを持って行くだわさあ! これはモトニモドールつて言つて、入れ替わつた者を唯一元に戻せるアイテムだわさあ!! 仮に何者かが嵌めてた場合、これを使つて奪つてくるだわさあ……さあ、さつさど行つて、その自慢の鼻で嗅ぎ当てて見付けてくるだわさあ!!」

「お、俺様は犬じゃねえ!!」

マジヨリーナにブツブツ文句を言うも、納豆餃子飴を捨てた事は事実の為、ウルフルンは渋々イレカワールを探しに向かった……

「咲さん、舞さん、満さん、薫さん、おはようございます!!」

先頭切つてルンルン気分で見られたみゆき、その直ぐ後からあかね、やよいが現われ、あゆみと話ながらなおとれいかが現われた。

待ち合わせ場所の横浜駅で、みゆきが恐る恐る渡した京都のお土産を見たあゆみは、意外にも喜んでくれてみゆきはホッと安堵し、修学旅行での話をあゆみに聞かせた。一方のあゆみも、せつなにクローバータウンストリートに招待され、せつな、ラブ、祈里

と共に楽しんだ事を伝えた。

あゆみが喜んでくれた事で、みゆきの心はハッピーだった・・・

一同が次々咲達四人に挨拶すると、咲達四人も嬉しそうに遊びに来たみゆき達を歓迎する。ポップとキャンデイもみゆきのカバンから出ると、フラツピ、チョツピ、ムープ、フープとの再会を喜び合い、ポップは、咲達四人も協力してくれている事に感謝を込め挨拶をした。四人は微笑みながら、

「みんな、ようこそPANPAKKAパンへ！」

「さあ、席に着いて!!」

「今、パンとケーキを持ってくるわね！」

「満、私も手伝うわ！」

咲と舞は、みゆき達をテーブルに座らせると、満と薫が店内に入り、ケーキやパンを取りに行く。何が出てくるのか楽しみなみゆき達は、ワクワクしながら待っていた。みゆきは思い出したようにかばんをゴソゴソ漁ると、

「これ、どうぞ！私達が修学旅行で行った京都のお土産です!!皆さんで分けて食べて下

さい!!」

「エッ!?こつちが招待したのに・・・ウワア!八つ橋だあ!!」

「咲、行き成り開けるなんて・・・ゴメンなさいねえ、修学旅行のお土産まで気を使わせ

ちやつて!」

咲は、折角貰ったからと箱を開けると、中には八つ橋が入っており、思わずニンマリ笑顔を見せる。舞は苦笑しながらも、みゆき達に感謝を述べると、何故かみゆき達五人は微妙な表情を浮かべながら、

「「「い、いいえ……」」」

「みゆきちゃん達……どうしたの?」

あゆみも不思議そうに小首を捻ると、五人は苦笑を浮かべた。みゆきは額から汗を流しながら、

(い、言えない……今日遊びに行くから、昨日慌てて不思議図書館を使って、京都で買ってきた何て言えない……)

「昨日みんなで京都に……」

うっかり喋りそうなキャンデイの口を、慌てて塞いだみゆき、みゆき達五人が苦笑を浮かべると、咲と舞は顔を見合わせ、小首を捻った。

「私もお土産持つて来ました!横浜と言えばシユウマイらしいので、シユウマイを買ってきました!!」

あゆみは、紙袋から赤い箱に入ったシユウマイを咲と舞に渡し、

「後で満さんと薫さんにも渡して下さい!!」

「みんな、悪いね……」

「返つて気を使わせちゃつて、ゴメンなさいね」

満と薫の分のシユウマイをあゆみから貰い、思わず苦笑を浮かべる咲と舞、咲はキャンデイに視線が向いた時、キラキラ輝く物体を見て小首を傾げ、

「キャンデイ……何持つてるの？」

「これクル？来る途中で拾つたクル!!」

そう言つてチヨコンとテーブルに飛び乗ると、咲の前に移動し、手に持っていた物を渡した。咲は興味深げにキャンデイから渡された物を見てみると、

「指輪……かなあ？」

咲は、試しに指輪を嵌めてみる。キャンデイはもう一つ同じ物を持っており、みゆきがかバンをゴソゴソ漁ると、指輪を手に取り、

「キャンデイ、さつき拾つてたもんね……でも、おまわりさんに……」

そう言いながら指輪を嵌めたみゆき、咲とみゆき、二人は一瞬身体に違和感を覚えるも、直ぐに元に戻り、

「届けた方が良いよ！」

みゆきが喋つて居た言葉を、突然咲が続けたので舞は驚くも、苦笑を浮かべた。

そこに、パンとケーキを持った満と薫が戻ってきて、テーブルの上に置くと、そこにはチョココロネを始めとした、PANPANKAパン自慢のパンの数々が籠の中に溢れるほど入っっていて、更に満と咲が作ったケーキが置かれ、なおは目をキラキラ輝かせた。

「さあ、みんな！遠慮しないで食べてね!!」

「はい！いただきま〜す!!」

そう言っただけであかね、やよい、なお、れいか、あゆみが手に取るのをニコニコしながら見ていた舞、満、薫だったが、

「ちよ、ちよつと咲！何であなたが食べるのよ?」

咲が一同と同じようにパンに手を伸ばし、慌てて満が咲を止めると、咲は困惑気味に、

「エツ!?私のみゆきですよお!!」

「ハア!?!」

「満だったら、何冗談言ってるのよ?咲は私でしょう!!」

「」「」「」

パンを食べていたあかね達、接待していた舞達は、思わず目が点になり沈黙する。咲の容姿と声をした方がみゆきと名乗り、みゆきの容姿と声をした方が咲だと名乗ったのだから・・・

だが、言っていた本人達も違和感を覚え、互いの顔を見ると、

「エツ!? 何で私があつちに???」

「エエエエエ!? 私が居る・・・」

お互いを指差しし困惑する咲とみゆき、もちろん見ている方はもつと混乱し、

「な、何や、何や!? みゆきが咲さんで、咲さんがみゆき? ウチ・・・頭が混乱してきたわ」

あかねが頭を抱えると、なおは引き攣つた笑みを浮かべながら、

「ハ、ハハ・・・大丈夫、あたしも混乱してるから」

やよいは目をキラキラ輝かせると、

「スゴオオオオイ! こんな事起こるんだねえ!」

「やよいさん・・・喜ぶ所では無いと思うのですが?」

目を輝かせるやよいの反応を見て、れいかが苦笑混じりに窘める。

「みゆきちやんと咲さん・・・一体どうしてこんな事に?」

あゆみは心配そうに交互に二人の顔を見比べ、舞も不安げに二人を交互に見比べた。

「二人共、さつきは何ともなかったのに、どうして急に?」

「私達が離れている間に・・・何かあつたの?」

満と薫に聞かれた咲とみゆきは、お互い顔を見合わせながら、

「そう言われると・・・キャンデイに見せて貰った指輪を付けた時」

「何か違和感がありましたけど・・・」

みゆきの容姿をした咲と、咲の容姿をしたみゆきが答えると、満と薫は顔を見合わせ  
頷き合い、

「きつとその指輪が原因ね・・・」

「ええ、二人共、その指輪を外せば元に戻れるかも知れないわよ?」

「本当!?!」

満と薫の推測を聞き、咲とみゆきは言われたように指輪を取ろうと試みるも、指輪が  
外れる事は無かった・・・

## 2、ハッピーブルーム

ウルフルンは、澁々ながらもイレカワールを捜している内に、咲達の町、夕凧町にやつ  
て来た・・・

「たく、マジヨリーナの野郎・・・ん!?何かこの辺りから、バッドエナジーを微妙に感じ  
やがるなあ・・・」

クンクン匂いを嗅ぎ、辺りをキョロキョロするウルフルン、堂々と街中を歩く彼を、  
人々は着ぐるみだと思ひ込んでいた。そんな彼の鼻に香ばしい匂いが漂って来て、思わ  
ずポワンとした表情で、匂いに釣られ歩き始めるウルフルン、本能なのか、彼の尻尾は  
左右にパタパタ揺れていた・・・



「どうしよう・・・取れなくなっちゃった?」

変顔を浮かべた咲・・・いや、中身がみゆきは、一同にすがるような目を向ける。

「それは困りましたねえ・・・」

れいかも困惑気味にどうしたものかと思案する中、薫は、ケーキを切り分けるナイフを手に持つと、

「いつそ、二人の指を切り落とす?」

「薫うう!!」

「止めてえええ!!」

涙目になったみゆき（咲）と、咲（みゆき）が激しく首を振ると、

「冗談よ!」

薫は、持つて居たナイフを再びテーブルに戻しクスリとする。舞は苦笑混じりに、

「か、薫さん、冗談を言う状況じゃ無いと思うけど・・・それより、困ったわねえ?」

「エエ・・・みゆきの声で呼び捨てにされるのも違和感があるわね!逆に、咲の声でさん付けで呼ばれるのも違和感あるけど」

満も困惑気味に戸惑いを見せた・・・

「クンクン!」ここから美味そうな匂いが・・・って、アアアア!」

突然庭先に現われたウルフルンは、一同を見て驚き、みゆき（咲）は、

「あんたは、あの時の犬男!?!」

「犬じゃねえよ!?! って言うか・・・お前、最初にあつた時から狼つて言つてたじゃねえか!?! 俺様の事、最近ではウルフルンつて呼んでただろう?」

「あつ、そつちは私じゃなくて・・・いや、私何だけど、私じゃ・・・あれえ!?! 訳分らなくなつてきたああ?」

咲（みゆき）がウルフルンに説明しようとしたものの、自分でも訳が分からなくなり混乱する。満と薫はウルフルンをキツと睨むと、

「咲とみゆきがこんな状況になつたのは」

「あなたの仕業ね!?!」

満と薫に指を指されたウルフルンは、何の事か分からず首をブルブル振るも、他の一同も満と薫に次々同意し、

「せやなあ・・・どうもおかしい思うたんや!」

「こんな事思い付くの、あんた達ぐらいだからねえ!」

あかねとなおにも凄まれ、思わずウルフルンは後退るも、

「う、うつせええ!! 訳分かんない事ゴチャゴチャ言いやがつて・・・ちようどいい、纏めて相手してやらあ!! 世界よ! 最悪の結末、バッドエンドに染まれ! 白紙の未来を黒く塗

りつぶすのだ!!」

ウルフルンはヤケクソ気味にバッドエンド空間を発生させると、咲の家族大介、沙織、みのり、周辺に居た人々からバッドエナジーを集め出し、

「出でよ!アカンベエ!!」

ウルフルンは青玉を高々と掲げると、目の前のパンを青鼻のアカンベエへと変化させた。フラツピ達はコミュニケーション姿に変化し、それぞれのパートナーの手に握られるも、

「何か複雑な気分フラピ・・・」

何時もと違う感触に戸惑うフラツピ、みゆき（咲）は険しい表情を浮かべると、

「折角の歓迎会をよくも・・・舞!」

「エツ!?だ、大丈夫なの?」

「そっかあ、私、今みゆきちゃんの身体だった・・・」

みゆき（咲）が思わず身体を見回し、これじゃ変身出来ないかも知れないと戸惑うと、

「あゆみ、ポップとキャンデイと一緒に少し離れてて!薫、あかね達も、行くわよ!!」

「ええ」

「「「はい!!」」」

満の合図に頷く薫とあかね達、あゆみは言われた通り、キャンデイとポップを抱き上げ、物陰に隠れると、それを見届けた六人は変身アイテムを手に取り、

「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」

「プリキュア! スマイルチャージ!!」

ブライト、ウインディ、サニー、ピース、マーチ、ビューティが、ウルフルンとアカンベエに對し身構える。みゆき（咲）は、物は試しとばかり、

「みゆきちゃん、スマイルパクトを貸りるよ! 試しに変身してみる!!」

「エツ!? は、はい!」

「プリキュア! スマイルチャージ!!」

咲（みゆき）の許可を貰い試して見たものの、何も起こらなかった・・・

「クツ、やつぱ駄目かああ・・・」

「当たり前ラピ! プリキュアになるのは外見じゃないラピ・・・その人が持つ心が大切なんだラピ!!」

（その人が持つ心・・・そうか!）

変身出来ず困惑するみゆき（咲）に、フラツピが助言を与えると、みゆき（咲）は何か気付くと、

「みゆきちゃん! スマイルパクトを受け取って!! 舞、みゆきちゃん、変身してみよう!!」

咲（みゆき）にスマイルパクトを渡したみゆき（咲）は、舞と咲（みゆき）に変身してみようと訴えると、不安そうにしながらも、舞も咲（みゆき）も同意し、

「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」

「プリキュア!スマイルチャージ!!」

何時もと違う感覚・・・

だが、三人の身体をプリキュアへと変えていった・・・

「輝く金の花!キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼!キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

ハッピーの容姿をしたブルームと、イーグレットがポーズを決めた・・・

「な、何か違和感が・・・」

「一番あるのは私だよ!!」

互いに顔を見合わせ苦笑しあうイーグレットとブルーム、

「キラキラ輝く、未来の光!キュアハッピー!!」

ブルームの容姿をしたハッピーがポーズを決める。ポップとキャンディは、その姿を

見て微妙な表情を浮かべ、

「これは・・・ある意味新鮮ではござるが」

「何か変クル・・・」

「二人共、しょうがないでしょう!ハツプツプ〜!!」

ハッピーは頬を膨らまして変顔を浮かべると、ブルームはハッピーを見て、

(私ってば、頬を膨らませるとあんな顔になるんだあ……和也さんには絶対見せられない!!)

思わず引き攣った笑みを浮かべたブルーム、三人がブライト達と合流を果たした。

「な、何や隣に先輩が居るみたいでやりにくいなあ……」

「何時もと違うもんねえ……」

サニーとピースが、隣に居るブルームの容姿をしたハッピーを見て困惑気味にポツリと呟き、ブライトも困惑気味に、

「確かに、私達に混ざってハッピーが居るようで混乱するわね……」

「ハッピーブルーム、戦えそうなの？」

ウインディは、二人を合わせた名前でブルームを呼び、

「名前まで合体させなくて良いよおお!大丈夫!!何とかいけそう……行くよ、イーグレット!!」

「エツ……エエ!!」

困惑気味に頷いたイーグレット、まるで、ハッピーと一緒に戦って居るような違和感を覚えて居た。四人が真っ先にアカンベエ目掛け戦いを仕掛けた。

ブライト、ウインディが肉弾戦を仕掛けた後ジャンプし、キックでアカンベエを転倒

されれば、起き上がりにブルームが突っ込み、

「ダダダダダ!!」

まるでブラックのような雄叫びを上げ、アカンベエにパンチの連打を浴びせ、ジャンプしたイーグレットがかかと落としを決める。

(ハッ、ピーの野郎・・・何時も以上に攻撃的だなあ?)

困惑気味にしていたウルフルンは、アカンベエに負けんじやねえと指示を出し、アカンベエは、口からクロワツサンや、チョココロネのような形をした物体を吐き出し、一同を威嚇した。

「今度はウチらの番や!」

サニーとマーチが左側から、ビューティとピースが右側から跳び蹴りを放ち、ハッピーがジャンプし、パンチをしようとすると、何時もと違う身体だからか、タイミングを狂わせ、アカンベエに頭突きをする。

アカンベエの動きを止めた所で、新たなるデコルをセットし、黄金のティアラを装着する五人、

「ウワァ! 私の髪に黄金のティアラが付いてるよ!!」

「何か不思議ね・・・」

ブルームは、自分の容姿に黄金のティアラが装着されたのを見て目を輝かし、イーグ

レットは苦笑を浮かべた。

「な、何だ!? 何で、ハッピーじゃなくてあいつに!?」

「二「プリキュア! レインボーヒーリング!!」三」

驚くウルフルンを尻目に、ハッピー達はアカンベエをレインボーヒーリングで浄化した。合流したブルーム達が微笑み、一同はウルフルンに身構えると、

「どうもおかしいと思つたら・・・お前ら、イレカワールを付けてやがったな!? 返しやがれ!!」

ウルフルンも、ブルームとハッピーの異変に気付いたようで、イレカワールを持って居るのがブルームとハッピーだと気付き、イレカワールを返せと凄むと、

「やっぱあんたらの仕業やないか!」

「ブルームとハッピーを元に戻して!!」

サニーとイーグレットがウルフルンに文句を言い、

「取れないんだからしようがないでしょう! こんな要らないもん・・・」

ハッピーが涙目になりながらウルフルンに抗議する。ウルフルンは何かを思い出したようにボンと手を叩き、

「そーいやあ・・・このモトニモドールを使わなきや取れねえとか、マジヨリーナの奴言つてやがったなあ・・・」



「モトニモドール!」

「プツ! ダサイネーミングやなあ!!」

「だろう? 俺様もそう思つて・・・じゃねえ!」

ブライトが怪訝そうに、サニーは名前に思わず吹き出すと、ウルフルンもウンウン頷き、そうだとするも、直ぐに我に返り、

「面倒くせえ・・・お前らを倒してゆつくり取り上げてやらあ!!」

「そんな事、させない! イーグレット!!」

ブルームの合図に領いたイーグレット、二人は横に並ぶと、

「精霊の光よ! 命の輝きよ!」

「希望へ導け! 二つの心!」

「プリキュア! スパイラル・ハート・・・」

「スプラ〜ツシュ!!!」

ブルームとイーグレットから放たれたスパイラルハートスプラッシュが、ウルフルン目掛け炸裂した。ウルフルンは抑えに掛かるも、モトニモドールが入った瓶をその場に落とし動揺すると、二人の技の前に押され始めた。

「ヤベエ! 覚えてろおお!!」

慌ててジャンプして躲して撤退するウルフルンを見て、一同は笑みを浮かべた・・・

「やったあ!元に戻れたああ!!」

サニー以外が変身を解き、ウルフルンが落としていったモトニモドールを使い、咲とみゆきは指輪を外し、無事元に戻りホッと安堵した。一時はどうなるかと思つた一同も、二人の喜ぶ姿を見て目を細めた。やよいは不思議そうに、何でサニーは変身を解かないか問うと、

「そないな指輪が残つとつたら、また被害が出るやろ?ウチが燃やしたるわ!!」

「そうね・・・その方が良いわね!!」

「うん!お願い、サニー!!」

サニーの言葉に満も頷き同意し、咲とみゆきはサニーに指輪を渡すと、サニーはイレカワールを上空に投げ、炎でイレカワールを消滅させた・・・

「じゃあ、思わぬトラブルに見舞われたけど・・・歓迎会の続きを始めよう!!」

「二二オオ!!」

みゆき、あかね、やよい、なおが右手を挙げながら返事をし、中断していた歓迎会は開かれた。美味しいパンの数々、咲と満が作ってくれたケーキを、みゆき達とあゆみは美味しそうに味わうのだった・・・

場所を大空の樹に移した一同、キャンディとポップは、メルヘンランドを思わせるような大空の樹を見て、心の底から喜んでいた・・・

「何か心が和むでござるなあ・・・良いところだござるー！」

爽やかな風を浴びながら、目を閉じるポップ、みゆき達もこの場所を気に入ったようだった。

少女達は、大空の樹の下で楽しそうに過ごすのだった・・・

第五十三話：咲とみゆきがイレカワール！

完

## 第五十四話：加音町パニック!透明人間現わる!?

1、ミエナクナール

5月5日・・・

音楽の町加音町は、一年前、闇の救世主を名乗るバロムによって闇に覆われた・・・  
プリキユア達の活躍によって、闇から解放された加音町だったが、そのあちらこちらに甚大な被害の後が残っていた・・・

加音町復興を手助けしようと思集まった人達が、盛大に催し物を開いた・・・  
あれから一年・・・

加音町は、嘗てのような音楽の町の姿を完全に取り戻していた・・・

加音町では、町民一同が朝から復興祭準備で大忙しだった。もちろん、響、奏、エレ  
ン、アコも、広場の前で参加するフリーマーケットの準備をしていた・・・

「みんなも品物持って来てくれるって言ってたし、少し大きめにスペース取って置いた  
のが幸いしたね!」

「ええ、みんなが何を持って来てくれるのか楽しみよね!」

響と奏は、プリキュアの仲間達がどんな物を持って参加してくれるのか、楽しそうに顔を見合わせ微笑んだ。エレンは紙袋から取り出した衣装を並べ始めると、アコはジツとエレンの並べた衣装を見つめ、

「ねえ・・・そんな派手な衣装、誰か買うの？」

「エッ?!?分らないけど、私はこんなの二度と着ないし・・・」

困惑気味に目の前の衣装を見つめるエレン、嘗てマイナーランドの歌姫だった時、テレビカメラが来ているのを知るや、サンバのような衣装を着た事があった。その時の衣装を売りに出そうとしていた。響と奏は、その時を思い出したのかクスクス笑いだし、「エレンったらTVカメラの前で、この衣装着てドヤ顔でポーズ取ってたよね？」

「そうそう!」

二人に思い出し笑いをされ、エレンは顔を真っ赤にすると、臍気ながらその時の事を思い出し、

「し、仕方無いでしょう!あの時は・・・もう、響!奏!」

顔を真っ赤にしたエレンは、からかう響と奏を追いかけ始め、アコとピーちゃんも顔を見合わせ溜息を付くも、そんな三人を見て笑いだす。ハミイとフェアリートーン達は、そんな騒動も気づかぬように、奏の差し入れのカップケーキを食べるのに夢中だった・・・

「ウワア……ここが加音町!」

みゆき、あかね、やよい、なお、れいかは、キャンディとポップ、あゆみ、そして、プリキュアの事を知っている佐々木先生と共に、ここ加音町にやって来ていた。まるで一同を歓迎するように、響き渡る優しいメロディに、皆心が和むような気がした。

「良い音色ね……音楽の町とは聞いていたけれど、ここまでとは想像してなかったわ!」  
佐々木先生も辺りを見回し、加音町が音楽の町と呼ばれる理由が分かるような気がした。

（この間、通天閣であつた子達に誘われて来たもの……プリキュアのみんなに会つたら、どう挨拶しよう……）

当初、佐々木先生は加音町に来るつもりは無かつた。だがみゆき達から、プリキュアのみんなには危ない所を何度も助けられていると聞き、彼女達の担任として、一言お礼を言うべきであろうと判断し、こうしてやって来ていた……

「みゆき・あかね・やよい・なお! れいか! あゆみ!」

名前を呼ばれた六人の少女達が振り返ると、そこにはつぼみ、えりか、いつき、ゆり、ひかりが居た。えりかが右手を大きく振り、みゆきがそれを見て振り返す。佐々木先生はゆりを見ると、横浜スタジアムでみゆき達を庇つた三人組の一人だと思ひだし、

(ああ、彼女達も・・・プリキュア!!)

一方のゆりも、ラブから電話で、みゆき達の担任の先生には、自分達がプリキュアだという事は知られている事を聞いており、挨拶しておくべきだろうとは思っていた。

「この前はどうも！私は、彼女達の担任の佐々木なみえと申します！あなた達もプリキュアだったのね・・・あの時は気付かなかったわ!!」

「いえ、気付かれたら拙いんですが・・・私は月影ゆりと申します！あの時は、嘘を言って申し訳ありませんでした！」

他にも人が居るので、小声で話しあう佐々木先生とゆり、佐々木先生はつぼみ、えりか、いつきの頭の上に居るぬいぐるみのような物を見ると、

「ひよつとして・・・あの子達も妖精?」

「はい！名前はシプレ、コフレ、ポプリ、彼女達のパートナー妖精です!!」

「パートナー!?!・・・じゃあ、横浜スタジアムであなたが抱いていた白い猫、あの子があなたのパートナーなのね？」

「いえ、あの子はハミィと言つて、シプレ達とは違う国の妖精です！あの場を誤魔化す為に、協力して貰ったんです。私のパートナーは・・・」

そう言いながら悲しげに視線を落としたゆりを見て、佐々木先生は拙い事を聞いたと瞬時に理解した。ゆりは周りを見ると、

「場所を変えませんか?ここは人が多すぎますので・・・」

「そうね・・・そうしましょうか!」

佐々木先生も同意してくれて、ゆりは、つぼみ達、ひかり、みゆき達に、先に響達の所に行つてと伝えると、一同は二人に手を振りながら立ち去った。

二人も場所を移し、ゆりは調べの館へと佐々木先生を案内した。佐々木先生は調べの館を見回し、こういう場所もあるのかと、歴史を感じさせる調べの館を興味深げに見渡し、

「良い場所ねえ・・・ところで、さつきはゴメンなさい!嫌な事を聞いたみたいで・・・」

「いえ・・・先生!みゆき達の事、理解してくれてありがとうございます!」

「まだ全てを知ってる訳じゃ無いわ・・・出来れば止めたいけれど、彼女達の力が必要何でしょう?」

「はい!それだけは確実に言えます!!私達が今まで戦ってきたように、彼女達は、メルヘンランドという妖精達の国を守る為には、必要不可欠だと私は思っています!!」

ゆりはそうはつきり断言した・・・

あれだけの人数のプリキュアが居ても、尚みゆき達の力が必要不可欠だと聞き、佐々木先生は、みゆき達が強大な敵と戦っている事を改めて思い知らされ、表情が強張る。ゆりは、佐々木先生を安心させるかのように、



「当然、私達プリキュアも彼女達をフォローします！今は二人欠いていますが、彼女達も必ず戻って来て、私達に力を貸してくれる筈です!!」

ゆりが言つた二人とは、なぎさとほのかの事であるが、ゆりは自分にも言い聞かせるように、二人は必ず戻ってくるかと伝えた・・・

「響さん、奏さん、エレンさん、アコちゃん、お待たせしました!」

「つぼみさん、みんなも、いらっしやい!!みゆきちちゃん達やあゆみちゃんは初めてだよね?ようこそ!加音町へ!!」

響達の姿を見付けつぼみが声を掛けると、響達は嬉しそうに近付き、一同を歓迎するのだった。

「響さん、奏さん、エレンさん、京都ではありがとうございます!!」

「ううん、気にしないで!」

みゆきが京都で助けてもらった礼をすると、響は照れくさそうに気にしないでと伝え、れいかはエレンの前に来ると、

「ラブさんとせつなさんから伺いしました。エレンさんがお二方に、大阪に居る私達の援護に向かうように頼んで下さったそうですね!ありがとうございます!!」

「どう致しまして!本当は私達が駆けつけたかったんだけど、側に響のお父さんやみん

なが居たから・・・せつなとラブが間に合ってくれたようで良かった!」

エレンがニッコリ微笑むも、奏は少し表情を曇らせ、

「でもあなた達、担任の先生にプリキュアだって・・・バレちゃったんでしよう?」

「それを言ったら、私達全員何だけどね!」

「ラブさん、美希さん、祈里さん、せつなさん、いらっしやい!!」

奏の発した言葉に答えた人物を見て、一同が微笑んだ。ラブ達四人も笑みを浮かべながら、ひかり、つぼみ達、響達に会釈すると、あゆみが四人に近付きこの間の謝辞を述べた。

「ラブさん! 祈里さん! せつなさん! この間はありがとうございました!!」

「ううん、私達も楽しかったよ!」

ラブ、祈里、せつなもあゆみに笑顔を向けた。美希は複雑そうな表情を浮かべ、

「あゆみちゃん、この間はゴメンね! 前もって言うてくれれば、あたしもスケジュールの調整出来ただけど・・・もう、ラブとせつなったら・・・」

「ゴメン! 美希たん!!」

「あゆみとの話の流れでそうなっちゃったから・・・美希、悪気は無かったのよ!!」

ラブとせつなを、不満げな表情で見つめる美希に、思わずラブとせつなは美希に拝むような姿で詫びるのだった・・・

「みんな、良く来てくれたニャー！ハミイとピーちゃん、フェアリートーン達で、みんなを案内するニャー!!」

ハミイとピーちゃん、そしてフェアリートーン達は、加音町にやって来たメツプル、ミツプル、ポルン、ルルン、シフォン、タルト、シプレ、コフレ、ポップリ、ポップ、キャンデイを前に、加音町をみんなに案内すると張り切っていた。

「わいらがウロウロして、大丈夫何か?」

タルトは、妖精である自分達が、街中をウロウロ歩き回っていても大丈夫なのかと問うと、タルトの言葉を聞き少し考えたハミイは、

「大丈夫ニャー！ハミイだって、何時も加音町の中を歩き回ってるニャー!!」

「メポ・・・ハミイは猫の姿だから何とも思われてないだけメポ」

「そうですう・・・ぬいぐるみの振りをしないと不味いですう」

樂觀的なハミイの言葉を聞き、メツプルとシプレはぬいぐるみの振りをしてないと駄目だと言うと、ハミイは少し考え、大丈夫だと笑みを浮かべた。キャンデイは興味深げに辺りをキョロキョロしていると、脇道にキラッと輝く物が見え、不思議そうに側に近づいて行つた。

「キャンデイ、どうしたでござる?」

ポップの言葉を聞いた妖精達が、キャンデイの下に行つてみると、そこには一台のカメラが置かれていた・・・

「落とし物みたいですよっ」

「わいらが交番に届ける訳にも行かへんし」

「ひかり達に届けて、お巡りさんに渡して貰うミポ」

妖精達は頷き合い、一同の下へと戻つて行つた・・・

「加音町に来たのはクリスマス以来だね!」

「クリスマスの特典でも、大分活気を取り戻しては居たけど、まだあの時は、至る所にバロム達と戦つた爪痕が残つて居たものね・・・」

ラブと美希は、一年前のバロムとの戦い後と、クリスマスに加音町に来た時を思い出し、互いに感想を述べていると、せつなは何かを思い出した表情でアコを見て、

「加音町でバロムと戦つて居たつて話で思い出したけど、あの時アコは何処に居たの?」

「そういえば、あの時響さんと奏さんは、覆面のプリキュア、キュアミューズの事を言つてましたもんね・・・」

「メイジャーランドに戻つて居たの?」

せつなの言葉で、つぼみと祈里も思い出したようにアコに聞くと、アコは眼鏡の位置

を直しながら、

「あの時は、お爺ちゃん調べの館に居たの！ 禍々しい気配を感じたお爺ちゃんが、調べの館に結界を張ってくれたから、何とか見つからずに済んだんだけど、私達は、調べの館から出るに出来ない状況に陥ってしまったの・・・」

「どうりであの時、アコや音吉さんの姿を見ないと思つたよ！」

「キュアミューズが現われないのは、おかしいと思つたものねえ？」

響と奏も、真相を今知つたようで、ウンウン頷き納得していた。

「あの時は酷い目にあつたよねえ・・・倒した敵が甦るわ！ プリキュア同士で戦わされるわ！ あの時、ルミナスが居てくれなかつたら、あたしら全滅してたんじゃないの？」

「確かに・・・ルミナスのお陰で、私達は正気に戻れたようなものだしね」

えりかの言葉にラブも同意し、一同の視線がひかりへと向けられると、ひかりは少し頬を染めながら、

「いえ、私だけの力じゃ・・・皆さんの意思が氷の心を打ち破つたんです!!」

「氷の心・・・ですか!?!」

思わず氷の戦士ともいえるれいかが驚きの声を上げると、あの時の状況を知らないアコやみゆき達、あゆみに分かりやすいように美希が話し始め、

「簡単に言えば、敵の命令通りに動くように操られたのよ・・・もう二度とあんな思いは

「ゴメンだけど……」

「そないな事があつたんや……」

「うん!」

プリキュア同士で戦つたと聞き、あかねも驚愕し、いつきが複雑な表情をしながら頷いた。そんないつきに、戻つて来たポプリが抱きつき、いつきは微笑みを向けるも、キャンデイがカメラを持って居る事に気付き、

「あれ!? キャンデイ、カメラ何かどうしたの?」

「あそこに落ちてたクル!」

キャンデイがその路地で拾つたと言うと、みゆきの脳裏に嫌な予感が漂つたものの、えりかはカメラを見るや目を輝かし、

「カメラかあ……折角だから、みんなで一枚撮ろうよ!」

「えりか! 落とし物を勝手に……」

「良いじゃん! 後で交番に届ければ良いし、拾い主の権限つて事で……みんな! 集まるっしゅ!!」

「あつ、じゃあ私が撮りますから、キャンデイ達もみんなと一緒に並んで!」

つぼみがえりかを窘めようとするも、えりかに押し切られ、あゆみは自分が写すから、キャンデイ達もみんなと並ぶように伝えると、ひかり、ラブ達、つぼみ達、響達、みゆ

き達、そして妖精達が整列する。

「じゃあ、撮りますよ！はい、チーズ!!」

パシャつと、カメラからのフラッシュが一同に浴びせられ、あゆみが一同に視線を向けると、

「エッ!?皆さん、何処ですか?」

あゆみは呆然とした・・・

今まで目の前に居た一同が、突然消え失せたのだから・・・

あゆみの脳裏に、横浜の地で消えたブラックとホワイトの事が思い出され、見る見る青ざめたあゆみは、ゆりの名を大声で呼びながら、

「ゆ、ゆりさん、大変です！みんなが・・・ゆりさああん!!」

あゆみは、大慌てでカメラを置いたまま、ゆりを探しに走り出した・・・

「あゆみちゃん、どうしたんでしよう?」

「何やエライ驚いてたなあ・・・」

あゆみが大慌てでこの場から去って行ったのを、不思議そうに眺めていた一同、つばみは小首を傾げながら、何故大慌てでゆりを呼びに行ったのか、不思議そうにしている。あかねも、あゆみの走り去って行く後ろ姿を見つめ、小首を傾げた。

「取り敢えず、他のみんなが来るまで商品でも並べておこうよ!」

「そうね！みんなも、持って来てくれた物をそこに並べて下さい!!」

響の提案に奏も同意し、一同にブルーシートの上に並べて欲しいと言うと、一同は、言われた通り持って来た商品を並べだした。

不思議な事に、自分達の前を通りかかった人々は、皆怪訝な表情を浮かべ、中には悲鳴を上げて慌てて立ち去る人も居た。

「ねえ、何かあたし達を見る人達の様子・・・変じゃない?」

「そうですねえ・・・みんなギョつとしたような表情してましたよねえ?」

美希の言葉につぼみも同意し、小首を傾げて居ると、一人の少年が小箱を抱えながら駆け寄って来ると、

「あれ!? 姉ちゃん達何処行つたんだろう? たく、品物置きっぱなしにして何やってるんだか・・・」

現われたのは奏の弟の奏太、母美空から、みんなへのカップケーキの差し入れを持ってやって来たのだが・・・

「ちよつと奏太! 何言ってるのよ? 目の前に居るでしょう!!」

変な事を言う奏太に、ムツとした奏が声を掛けるも、奏太には聞こえていないようで、響、アコ、エレンも声を掛けるも、やはり奏太の耳には聞こえなかった・・・

「変ですねえ・・・どうして、私達の声が聞こえないんでしょうか?」



「声が聞こえへんなら・・・行動で知らしめればエエやん!」

つぼみが小首を傾げ、あかねは意地悪そうな表情を浮かべると、両指を動かすや奏太の身体をくすぐり始め、

「キャハハハ!アコ?それとも響姉ちゃん?もう止めて・・・エツ!」

笑いながら背後を振り向いた奏太は、ギョツとすると、顔面蒼白になり慌ててその場から飛び退くと、通行人が何事かと奏太に声を掛けると、

「お、お化けだああ!何かが俺の身体をくすぐったああ!!」

「ま、まさか・・・って、エエエエ!」

奏太を始めとする通行人達が、皆一斉にひかり、ラブ達、つぼみ達、響達、みゆき達の方を指差し、お化けええと悲鳴を上げながら逃げ始めた。

「お、お化け!?!イヤアアア!!」

「ど、何処?!」

お化けという声を聞き、エレンとなおが激しく動揺し震え出し、みゆきも引き攣った顔で隣に居るやよいにしがみついた。悪のりしたえりかとあかねは、

「エレン・・・なお・・・ゆっくり背後をみてみ!」

「二人の背後で・・・こんな顔が笑つとるでええ!!」

えりかとあかねが、怖い顔でビビって居るエレンとなおをからかうと、

「イヤアアアアア!!」

見る見る青ざめたエレンとなおは、悲鳴を上げながらその場から逃亡した……

「セイレーン!!」

「なお!待って!!」

慌てて二人に声を掛けるハミイとれいかだったが、二人はそんな声も聞こえないかのようには街中へと消えて行つた。響と奏も心配そうにエレンとなおの後ろ姿を見つめ、

「エレン!なおちゃん!大丈夫かなあ!?!」

「えりか!あかね!冗談が過ぎるわよ!!」

響が二人を心配し、少し怒つた表情をした美希が、えりかとあかねを窘めた。流石にえりかとあかねもやり過ぎたと反省し、

「いやあ、あそこまで驚くとは……」

「せやなあ……後で二人に謝まらないかんわ」

えりかとあかねは、走り去つた二人の方角を眺め、反省するのだった。

「なおちゃんとエレンさん、大丈夫かなあ?」

「ええ、なおは昔からお化けが苦手でしたから……」

「セイレーンもそうニヤ!」

やよい、れいか、ハミイも二人を心配そうに走り去つた方角を見つめていると、ひか

りは複雑な表情を浮かべ、

「でも・・・おかしいですよね!!何故みんな、私達を見て驚いたんでしょう?」

ひかりの疑問に、困惑した表情のみゆきがキャンデイを見つめると、

「キャンデイ・・・あのカメラ拾ったって言ってたよねえ?ちよつと見せてみて!」

キャンデイからカメラを受け取ったみゆきが調べてみると、レンズの下側に、マジョ

リーナの顔が付いて居た・・・

「やっぱりあの人達のカメラだよおお!!今度は私達、どうなつちやうのおおお!!」

見る見る変顔を浮かべたみゆきは、一同にカメラを見せ、この間マジョリーナのアイテムのせいで、咲と中身が入れ替わった事を伝えると、一同も呆然とし、みゆきはトホホ顔でカメラを見つめていた・・・

一方、目の色変えて逃げ回るエレンとなおは、道行く人々に触れるのもお構いなく悲鳴を上げながら走り回り、二人に触れられた人々もまた悲鳴を上げ、加音町はちよつとしたパニック状態になっていた・・・

「な、何か騒がしくなってきたし・・・ゆりさああん!!」

半ベそ掻きながらゆりを探し回るあゆみは、ようやく調べの館前に居たゆりと佐々木先生を見付けた。

「ハア、ハア・・・よ、ようやく見付けた・・・ゆりさん!佐々木先生!み、みゆきちゃん達が・・・」

「あゆみちゃん!?みゆき達に何かあったの?」

「ま、まさか、この間の人達が!」

慌てるあゆみの言葉を聞き、ゆりは険しい顔を浮かべ、佐々木先生は心配そうに不安げな表情を浮かべる。まだ、動揺しているあゆみに落ち着くように伝えた二人は、

「坂上さん、少し深呼吸しなさい!吸ってえ・・・吐いてえ・・・」

佐々木先生に深呼吸するように言われたあゆみは、言われた通りにすると、大分落ち着きを取り戻し、

「ゆりさん!佐々木先生!実は、キャンディが拾ってきたカメラで、みんなの事を写したら・・・みんな、消えちゃったんです!!」

「消えた!?!」

「はい!私がみんなの方を向いた時にはもう居なくなつて・・・どうしよう!?!」

不安そうな表情を浮かべるあゆみを励ました二人は、顔を見合わせ合うと、

「坂上さん、その場所まで案内して頂戴!!」

「そうですね・・・でも、敵が居るかも知れない!二人共、用心してくださいね?」

ゆりの言葉に頷くあゆみと佐々木先生、三人はみんなが準備していたフリーマーケツ

トの会場へと向かった・・・

「ヤッホ〜！咲ちゃん、舞ちゃん、満ちゃん、薫ちゃん」

加音町にやって来たのぞみ達六人とココ、ナッツ、シロップ、メルポは、前を歩いていた咲達を見付け、のぞみが声を掛けた。振り返った咲達も、のぞみ達を見るや表情を綻ばせ、咲とのぞみはハイタッチで再会の挨拶を交わした。

「のぞみ達も今着いたんだ？私達もそう何だあ・・・もう、他のみんなは着いたかなあ？」  
「そうね、フリーマーケットの会場は・・・広場の方ですって！みんな来てるかも知れないし、行ってみましょう!!」

咲の言葉にかれんも同意し、会場である広場に向かおうとした一同だったが、やけに加音町が騒がしく、一同は小首を傾げた。のぞみは近くに居た同じ年ぐらいの少女に話し掛けて見ると、今加音町にお化けが出て、大変な騒ぎになると聞き、りんは見ると、真つ昼間からお化けとはただ事じゃないわね？」

「そうね、調べてみましょう!!」

満の言葉にこまちも同意し、調べてみようと言うと、りんはブルブル首を振り、

「エエエ!?あ、あたしは出来れば遠慮したいですけど・・・」

「りんさん……お化け苦手ですもんね?」

「だつてええ!」

うららに言われたりんは、オドオドしながら辺りを見渡すと、かれんはりんを励ますように、

「りん、みんなも居るから大丈夫よ!」

「そうそう、何かあつたら私が退治してあげるわよ!!」

くるみはドヤ顔を浮かべながら、お化けが出たら退治してあげると言っていたのだが、慌てて広場から逃げるように走ってくる男が、

「で、出たああ!お化けだああ!!」

「ミ、ミルクウウ!!」

くるみはミルクの姿に瞬時に戻るや、慌ててかれんにしがみつき、ブルブル震え出す。りんは思わず、ジト目でミルクを見ると、

「もしもくし?」

「アハハハハ、さっきの勇ましきは何処へいったのやら?」

呆れ顔のりん、思わず笑いだす咲、舞も苦笑していると、向こうの通りからゆりとあゆみが近付いて来るのに気付き、

「見て!ゆりさんとあゆみちゃんが居るわ!!」

「本当ね！あらあ!!もう一人一緒に居るようだけど?」

舞が指さした方角を見て満も気付くも、もう一人何処かで見えた人物と一緒にだったの  
で、思わず薫と顔を見合わせ、小首を傾げた。のぞみはパンと手を叩くと、

「あの人、横浜スタジアムで私達が会った、みゆきちゃん達の担任の先生だよ!ラブちゃん  
んが言ってたけど、あの方は、私達がプリキュアだって知ってるって言ってたし・・・」  
「とにかく行ってみましょう!!」

かれんは一同を促し、ゆり達と合流した。

「咲達、のぞみ達も・・・ちようど良かった!みんなも一緒に来て!!つぼみ達、ひかり、  
ラブ達、響達、みゆき達が、突然あゆみちゃん目の前から消えちゃったそうなの!!」  
「エエエエ!!」

ゆりの言葉を聞き、咲達、のぞみ達が一斉に驚きの声を上げた。一体みんなに何が起  
こったのか?一同は顔色を変えると広場へと向かった・・・

2、プリキュアVS透明人間

バッドエンド王国・・・

「無い、無い、無い、無いだわさああ!!」

最早恒例となった、マジヨリーナの大騒ぎを聞き、ウンザリ顔のウルフルン、アカオー

ニ、サデイス、ベガ、デイクレが呆れながら見つめていた。

「また、何か無くしたのか?」

「あんだ・・・ボケてるんじゃないの?」

呆れ顔のデイクレ、サデイスにはボケたんじやないかと言われ、憤慨するマジヨリーナは、顔を真っ赤にしながらテーブルをバンバン叩き、

「失敬な! あたしや、ボケてないだわさあ!! それより、この上に置いてあつたミエナクナールが消えたんだわさああ!!」

「ミエナクナール!」

「無いオニ・・・その名前も無いオニ」

「また安易な名前だな・・・透明人間にでもなるアイテムとでも言いやがるのか?」

ベガが怪訝そうに呟き、アカオーニは首を何度も振りダメ出しをする。ウルフルンは、ダサイ名前前で、名前からすると透明人間にでもなるのかと、からかい半分にマジヨリーナに聞くと、マジヨリーナはウンウン頷き、

「その通りだわさあ!!」

「「「エエエ!」」」

安易なネーミングに呆れかえる一同、一体どんな物だったのかデイクレが問うと、マジヨリーナは自慢気に、



「カメラだわさあ！そのカメラのフラッシュを浴びた物は・・・透明人間になり、その姿も、声も、周りからは気付かれないんだわさあ！！ただ一つの難点は、見えなくなるだけでその場には居るから、感触だけは残ってるんだわさあ」

「何か使えるんだか、使えないんだか、微妙だな・・・」

「確かに・・・」

ウルフルンの言葉にベガも同意して頷いた。サデイスは顔色を変えると、マジヨリーナはサデイスの動揺を見逃さず、

「あんた、何か知ってるねえ？」

「いや、試しに撮ったら、何も写ってなかったから、壊れてると思って・・・捨てた!!」

「な、何て事するだわさああ!!」

マジヨリーナは、大慌てでミエナクナールを探しに出掛けて行った・・・

広場に着いたゆり達だったが、確かにあゆみの言う通り、一同の姿が見当たらず困惑していた。みんなは何処に消えたのか？

「やっぱり見当たりませんねえ？」

「無事で居てくれれば良いんだけど・・・」

そんなかれんとゆりの会話は、目の前に居るひかり、ラブ達、つぼみ達、響達、みゆ

き達にも聞こえていたのだが、大声を出してもゆり達には気付いて貰えず、途方に暮れていた。こんな時でも、身だしなみを整えようとした美希がコンパクトを開くと、

「エエエエ!？」

「み、美希たん．．．どうしたの!？」

変顔を浮かべ慌てふためく美希を見て、心配そうにラブが美希の顔を覗き込むと、

「ラ、ラブ!みんなも、鏡を見てみて!あたし達．．．鏡に映ってないのよお!!」

「エエエエエ!？」

美希に言われた一同が、慌てて鏡をみて見ると、確かに鏡に自分達の姿は映って居なかった．．．

「も、もしかして．．．加音町の人達が私達を見て驚いていたのは．．．私達の姿が見えないのに、服とか動いていたからですかああ!？」

「エエ!?!お化けの正体って．．．あたしらって事?」

つぼみとえりかが顔を見合わせ、お化けの正体が自分達だったと気付き動揺し、いつも困惑しながら、不安そうにしているポプリを優しく労った。

「やつぱ気付いて貰うんには．．．くすぐるのが一番やな!」

「あつ、私もやるうう」

あかねとやよいが、あゆみと佐々木先生の背後に回ると、あかねはあゆみをくすぐり、

やよいは佐々木先生の胸を触ると、

「アハハハハハ、や、止めてえええ！」

「イヤアア！痴漢!!」

あゆみは身をくねらせ悶え、佐々木先生は慌てて両胸を手でガードし、二人が背後を振り向くと誰も居らず、引き攣った表情を浮かべるあゆみと佐々木先生、ゆりは険しい表情を浮かべると、

「何て卑劣な!! 幸い、人影も無いし・・・みんな、変身よ!!」

「エエエエ!？」

ゆりの背後で頷く咲達とのぞみ達、ミルクもくるみに変化し、一同が変身アイテムを手につつと、それを見たひかり、ラブ達、つぼみ達、響達、みゆき達が思わず驚愕した。必至に弁明しようとするも、ゆり達に聞こえる事は無く・・・

「プリキュア！オープンマイハート!!」

「[[[デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!]]]」

「[[[プリキュア！メタモルフオーゼ!!]]]」

「[[[スカイローズ！トランススレイト!!]]]」

変身を終えたムーンライト、ブルーム達、ドリーム達が辺りの気配を伺うようにすると、何かが動く気配を感じたムーンライトは、

「そっ!!」

ムーンライトの手刀が空間を切り裂くと、やよいは尻餅を付きガクガク震えながら後退る。あかねに起こされ、慌てて一同の下に避難した二人に、えりかは目の色変えて怒り出し、

「ちよつとおお!あんだ達、何してくれてんのよおお!!」

「あ、あないに怒るとは思わんかったわ・・・スンマセン」

「ゴ、ゴメンなさい・・・」

あかねとやよいが一同に詫びると、美希は苦笑を浮かべながら、えりかの頭を軽く叩きながら諭し、

「えりか・・・あんだが言えないでしょうが!」

美希に、さつきエレンとなおをからかっていたあんだが言うのと突っ込まれ、えりかは変顔を浮かべる。つぼみはそんなえりかを見て苦笑を浮かべるも、

「ムーンライトを怒らせちゃいましたねえ?」

「どうしよう・・・このまま此処に居ると、私達・・・」

響もこのまま此処に居るのは不味いんじゃないかと思う間もなく、ブライトとウインデイが、容赦なく辺りを攻撃し始め、一同が慌てて飛び退く。

「ブライト、ウインデイ、落ちついてええ!!」

「無理よ！私達の声は聞こえてないわ!!」

ラブが二人に落ち着くように訴えるも、せつなは首を振り、聞こえてないから無理だと告げる。

「あ、あんな攻撃受けたら・・・私達死んじゃうわよ、お!!」

「確かにそうですね・・・何とか皆さんに、私達だって事を、知らせる事が出来れば良いんですけど・・・」

半分泣きべそをかけた奏の言葉に、ひかりも同意する。みゆきは何かを閃き、慌ててカバンからペンを取り出し、値札用の紙に何か文字を書き始めると、

「みゆきです！私達みんな、透明人間になっちゃいました」

と書くや、ムーンライト達に恐る恐る見せると、気付いたムーンライトは、攻撃しようとしていたブライトとウインディを慌てて止め、

「この紙を持つてるのは・・・みゆきなの!？」

思わず呆然とするムーンライト、みゆきに習い、他のメンバーも、自分の名前を書いた紙を手を持ちながら一同の前に出てくる。

「ひかり、ラブ、美希、祈里、せつな・・・ハハ、お化けじゃなくて良かったけど・・・あんた達、一体どうして透明人間になったの?」

ルージュはお化けでは無さそうでホッと安堵するも、仲間達が何故透明人間になって

いるのか苦笑しながら問うと、再びみゆきが紙に文字を書き始め、キャンデイが拾ったカメラが、実はマジヨリーナのアイテムで、それに写された自分達は、透明人間になっちゃったと書いた。

「マジヨリーナのアイテムといえば……この前、私とみゆきちやんの中身が入れ替わった事があつた」

「みゆき……あなたもよく騒動に巻き込まれるわねえ？」

みゆきの字を見たブルームは、一同にこの間、マジヨリーナのアイテムのせいで、みゆきと中身が入れ替わった時の事を一同に教え、ウィンデイは、みゆきの不遇ぶりに思わず呆れる。あゆみは、申し訳無さそうな表情で名前の書かれた紙を見つめると、

「あのカメラが……皆さん、ゴメンなさい！私が皆さんを写したから……」

シヨンボリするあゆみをフォローするように、つぼみが慌てて文字を書き始めると、悪いのはい出しつぺのえりかなので、あゆみちゃんは気にしないで下さいと書き、氣付いたえりかは、

「何よ！つぼみだつてちやつかり集まつたじゃない!!」

「私はちゃんとえりかを止めましたよおお!!」

言い合いを始めるつぼみとえりか、姿は見えないが、つぼみとえりかと書かれた紙が激しく揺れているのを見て、ムーンライト達は苦笑を浮かべた。アクアはキョロキョロ

辺りを見てみるが、カメラらしき物体は見つからず、

「で、そのカメラは何処にあるの!？」

「ああ、それは多分・・・さつきがむしやらに攻撃した時・・・吹き飛んでいった物体がそうだと思うわ!」

「気配を探るのに必死で、足下まで確認しなかったわね?」

ウインディとブライトの言葉を受け、飛んでいったであろう方角を見つめると、そこには緑色のフードを被った老女が居た・・・

「あ、あつただわさああ!!」

マジヨリーナは、嬉しそうに自らの発明品、ミエナクナールを取り戻し満足気にするも、正面に居並ぶムーンライトを始めとした11人のプリキュアを見て驚く、

「な、何でここにプリキュアが!?!でも、これはチャンスだわさ!」

マジヨリーナは、バッドエンド空間を発生させ、加音町の人々からバッドエナジーを集め出すと、エレンが持って来たサンバ衣装を赤鼻のアカンベエへと変えた。

「あゆみ、佐々木先生、少し離れていて下さい!みんな、行くわよ!!」

身構えるムーンライト達を見たマジヨリーナは、不適に笑いだし、

「ヒイヒヒヒヒ・・・もう、青鼻は使い切ったからねえ・・・今回は赤鼻で勝負だわさ!プリキュア・・・驚くなだわさああ!!」

マジヨリーナは、ミエナクナールを自分とアカンベエに向けてシャッターを押すと、マジヨリーナとアカンベエの姿が目の前から消え失せた。

「消えちゃった!？」

「何処に行つたんでしょう?」

ドリームとレモネードが辺りをキョロキョロしていると、突然笑いだし、

「アハハハハハ、やめ、やめてええ!」

「アハハハハ・・・だ、誰かにくすぐられてます!」

「ヒイヒヒヒ!こりやあ傑作だわさ!!」

一方のアカンベエにも突然攻撃され、ムーンライトもブルーム達も劣勢であった：：

「クツ、姿が見えないうえに・・素早い!」

辺りをキョロキョロ伺うも、気配を感じる事が出来ず苦戦する一同、その時、

「マジヨリーナ!私達を元に戻しなさい!!」

消えている筈の自分が話し掛けられ、思わずドキリとしたマジヨリーナが背後を振り向くと、険しい表情を浮かべたれいかを先頭に、ひかり、ラブ達、つぼみ達、響達、みゆき達がマジヨリーナを睨み付ける。

「な、何でお前達が・・さては、ミエナクナールを使ったねえ?お前達は邪魔だわさあ!!」



みゆき達目掛けパシヤリとシャッターを押すと、みゆき達の姿が元のように見えるようになり、ムーンライト達は、突然現われた一同に驚きつつも笑みを浮かべた。

「みんな、元に戻れたのね？」

「エッ!? 私達の姿が見えるんですかあ? ヤッター〜!!」

みゆきは喜び、思わず元に戻れて喜び合う一同だったが、れいかは冷静に周りを見回し、

「ですが、そのせいで見えていたマジヨリーナとアカンベエの姿が、私達にも見えなくなっていました・・・」

「不利な条件は変わらないわね・・・あなた達もプリキュアに変身して! こうなれば何処から攻撃されても対処出来るようにしたい・・・」

ムーンライトの指示に頷いた一同は、

「ルミナス! シャイニングストリーム!!」

「「チェインジ・プリキュア! ビートアップ!!」」

「「プリキュア! オープンマイハート!!」」

「「レッツプレイ! プリキュア! モジユレーション!!」」

「「「プリキュア! スマイルチャージ!!」」」

エレンとなおを除いた一同がプリキュアへと変身し、一同は円状に陣を引き、アカン

ベエの攻撃に備えた。

「ヒイヒヒヒ、それじゃあ、背中がガラ空きだよ!アカンベエ、プリキュア共の頭上にジャンプし、背後を取るだわさあ!!」

アカンベエは、マジヨリーナの命令通り大きくジャンプし、円の中心部に着地しプリキュア達の背後を取ると、サンバのように踊りながら、次々とプリキュア達を吹き飛ばした。姿が見えない敵に苦戦する一同、マジヨリーナは、無様に翻弄されるプリキュア達を見て大笑いを浮かべていると、

「あんだだっただのね・・・お化けの正体は!?!」

「私達を驚かせようだ何て・・・」

「絶対許さない!!」

「ハア!?!」

突然背後から声を掛けられ、ビックリとしながら振り返ったマジヨリーナ、そこには鋭い視線を向けたエレンとなおが立って居た。二人は変身アイテムを手に持つと、

「レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!」

「プリキュア!スマイルチャージ!!」

エレンとなおの身体がプリキュアへと変化していく・・・

「爪弾くは、魂の調べ!キュアビート!!」

「勇氣リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!」

「私達を怖がらせた報い・・・」

「纏めて返してあげるよ!!」

何時になく気迫が籠もるビートとマーチ、マジヨリーナは小首を傾げ、

「お化け!?!驚かす!?!あんた達何を言つて・・・ヒイイイ」

「問答無用!!」

何の事だか分からないマジヨリーナが反論しようとするも、二人は聞く耳を持たず、ビートはラブギターロッドを取り出し、華麗に舞いながら仲間達を攻撃するアカンベエ目掛け大きくジャンプするや、ラブギターロッドを奏で、無数の音符を出現させると、

「チヨコマカ動くな!ビート・・・ソニクソニク」

何時も以上な数のビートソニックが降り注ぎ、アカンベエは躲しきれずヒットし動きを封じた。

「な、何?!今の衝撃は?」

思わず辺りを見渡し呆然とするブルーム、アカンベエに何か起こっている事は一同にも分かった。

雄叫びを上げたマーチの周りに、三つの緑色の球体が浮かび上がると、

「あたし達・・・本当に怖かったんだからねええ!プリキュア!マーチ・・・シユートオオオ

!!

ビートとマーチ、二人は、先程えりかとあかねが言っていた、二人の背後に居たお化けをマジヨリーナの仕業だと勘違いし、怒った彼女達は何時以上も以上の力を引き出し、アカンベエ、マジヨリーナを圧倒し、アカンベエを浄化、更にマジヨリーナが手に持っていたミエナクナールにもヒットさせた。

キュアデコルをゲットしたマーチだったが、険しい表情は崩さず、ミエナクナールは煙を吐きながら爆発すると、ビート、マーチ、そして、マジヨリーナの姿を元に戻した。「プファ……プ、プリキュア! 覚えてるだわさあ!!」

目をパチクリしながら、口から黒煙を吐いたマジヨリーナは、慌てて撤退する。加音町はバッドエンド空間から解放された……

何が起こったのか理解出来なかった一同だったが、ビートとマーチがアカンベエを倒してくれたと気付き、二人に近付き称えるのだった……

元の姿に戻った一同、エレンとなおは、お化け騒動が終わりホッと安堵しながら、「全く、お化けの正体がアカンベエで良かったけど、もう懲り懲り」

「本当、あかね! えりかさん! さつきは教えてくれてありがとう!」

二人にお礼を言われたあかねとえりかは、思わずドキつとした表情を浮かべ、「さつき私をくすぐったり、佐々木先生の胸を触ったり、酷い人達でしたねえ……」

「本当よ！頭に来ちやうわ!!」

あゆみの言葉に佐々木先生もウンウン頷きながら同意すると、やよいと再びあかねが大きく動揺し、美希は意地悪そうな視線を三人に向けると、

「ああ、それ何だけど・・・エレンとなおの背後にお化けが居るって驚かしたのは、えりかとあかねの冗談で、あゆみちゃんと佐々木先生に悪戯したのも、あかねとやよいだったのよねえ」

「「エツ!?」」

真相を聞かされたエレン、なお、あゆみ、佐々木先生が驚きながら三人を見ると、美希にバラされた三人は、思わずゆっくり後退るも、険しい顔を浮かべたエレン、なお、佐々木先生に見つめられ、

「いやあ・・・悪気は無かったっしゅ」

「ウチも、ちよつと悪のりしちやつたなあと・・・ハハ」

「私も・・・先生の胸見たらつい出来心で」

あゆみは苦笑していたが、エレン、なお、佐々木先生はジト目で三人を見つめ、

「日野さん！黄瀬さん！あなた達・・・連休明けに今回の反省文、英語のレポートで書いて提出するように!!」

「「そんなああ!?!」」

半泣き状態のあかねとやよいが、必死に佐々木先生に縋り付き、許してええと謝るも、佐々木先生は認めず、あかねとやよいは頭を抱えた。

「え〜り〜か〜!あ〜か〜ね〜!・・・どういう事かしらああ!?!」

「二人共、詳しく聞かせて貰うからねえええ?」

ジワリ、ジワリと躍り寄るエレンとなお、えりかとあかねは思わず二人の迫力に逃げ出しても、呆気なく壁際に追い詰められ悲鳴を上げた・・・

「全く、何をやってるんだか・・・」

呆れたようにその様子を見つめたゆりが苦笑を浮かべると、一同も笑い声を上げた・・・

こうして、加音町を騒がせたお化け騒動も、プリキュアが追っ払ってくれたと人々に伝わり、加音町は無事に復興祭を大成功させた・・・

フリーマーケットの商品も無事完売し、一同は響達に導かれ公園に行くと、まだ時期は早いものの、七夕のように短冊がぶら下がっていて、思わず目を輝かせるポップとキャンディ、

「あれは何でござんる?」

「短冊だよ!お星様への願い事を書いた短冊を笹に吊し、どうか願いが叶いますようにってね!本当は7月の始めに行うんだけど、今回は特別に、加音町のみんなで願い事

を書いて吊したんだあ」

「それは拙者達の国、メルヘンランドのペガサスの日に似てるでござるなあ……」

響の説明を聞いたポップは、目を閉じてその時の光景を思い浮かべて居るようで、口元に笑みを浮かべていた。一同は興味深げにし、

「ペガサスの日？ポップ、それってどんな事をするの？」

みゆきがポップにペガサスの日の事を聞いてみると、ポップは瞬時にペガサスに変身すると、一同から響めきが起こった。

「さよう！一年に一度、沢山の星が流れる日にキャンドルを灯して、ペガサスにお願いする日(ごきる)!!」

「へえ、メルヘンランドにもそんな日があるんだねえ？」

「ウワア……ロマンチックウウ」

ポップの説明を聞き、ラブとのぞみも興味深げに聞いていると、

「折角みんなも来てるし、願い事を書いてみない？」

「うん、そうしよう！」

響と奏から、みんなも短冊を書かないかと誘われ、一同も参加する。妖精達も願い事を書いた。

一同が書いた願い……

そのほとんどは、なぎさとほのかが早く戻って来ますように・・・

ロイヤルクイーンが復活して、メルヘンランドが平和になりますように・・・

この二つの事が書かれていた・・・

そんな中、キャンデイの願いは・・・

みゆき達プリキュアのみんなや、ポップ達妖精達と、何時までも仲良く暮らせませますよ

うにと書かれていた・・・

一同は、加音町に浮かぶ星空を見上げ続けた・・・

第五十四話：加音町パニック!透明人間現わる!?

完



## 第五十五話：激突！ロボドリームVSハッピーロボ!!

1、やよい、燃ゆ！

ゴールデンウィークも終り、この日、学校から帰ったやよいは、素早く晩ご飯の準備を終えると、TVの前でやよいが大好きな、鉄人戦士ロボッターを見て一喜一憂していた。

鉄人戦士ロボッター・・・

少年タケルとロボッターが、仲間達と共に、地上の平和と、愛、友情を守る為、地球侵略を目論む、悪の皇帝ワルブッター率いる、機械帝国に立ち向かう物語である・・・  
「イツケエエ！ロボッター!!」

興奮気味にロボッターを応援するやよい・・・

太陽マンもそうだが、やよいは、地球の平和を守る作品が大好きだった。やよいが幼い時に亡くなった父勇一、幼い頃から平和のありがたさを勇一から聞いていたやよいは、自分の思いを、自作のミラクルピースというスーパードロイドに置き換えていた程である。

「ロボッター！負けるなああ!!」

ロボッターがパンチを放てば自分もパンチを、キックを放てば自分もキックを、まるで自分がロボッターの操縦者かのように行動するやよいだった。

その時玄関のドアが開き、やよいの母千春が仕事から帰ってくる、

「ただいま!やよい、ゴメンねえ、遅くなっちゃって!今支度を・・・って、終わってるし!?そうか、今日は木曜日だものね・・・ウフフ」

「ママ、お帰りなさい!そこだああ!!」

千春が帰ってきてても、無邪気にTVの中のロボッターに声援を送るやよい、月面上で大苦戦するロボッターに、やよいは拳を握りしめ声援を送り続ける。

タケルとロボッター、二人の気持ちがあわさった時、ロボッターは覚醒し、右腕をグルグル回転させたロボッターは、新必殺技、大車輪ロボッターパンチで敵を粉碎する!!

「ロボッター・・・俺とお前は、兄弟だぜ!」

「ああ、タケル!!」

二人は、月面から見える青く輝く地球を見て微笑んだ・・・

「凄なおおい!!」

新必殺技での勝利に、やよいの興奮は最高潮だった。千春はそんなやよいを見てクスリと笑い、そろそろご飯にしましょうとやよいを呼ぶ。その時、

「特報・・・TVの前のみんなあ!何時も応援してくれてありがとう!!そんな君達にビッ

グなお知らせだ!!」

その内容は、やよいが大好きなロボッターの超合金シリーズに、ロボッターと、悪の皇帝ワルブッターの超合金DXが同時発売されるといふ事だった。しかも、今日放送した大車輪ロボッターパンチの再現も可能だという。限定バージョンには、ロボッターの操縦者、タケルフィギュア付きで、価格は9980円!

一方のワルブッターは、マントが脱着可能で、価格は7980円!

やよいは既にこの情報を掴んでおり、背後の千春を呼ぶと、

「ママ!私、ロボッターDXが・・・どうしても、どうしても欲しいのおお!!買ってても良いでしょう?」

「ハイハイ、やよいは何時もママを手伝ってくれてるし・・・良いわよ!OKします!!」  
「ワアア!ママ、大好きい!!」

やよいは大喜びで千春に抱きついた・・・

翌日・・・

何時ものようにみゆき、あかね、やよい、なお、れいかの五人で学校から帰宅していると、あかねは徐にこの前の事を思い出し、

「ハア・・・この間はエライ目におうたわ!まさか、ウチとやよいだけ宿題出されるとは

思わなかった……」

「あかね……それはあたしとエレンさん、佐々木先生のセリフだよおお!あかねとやよいちちゃんは……自業自得だろう?」

加音町に遊びに行つた一同は、マジヨリーナのアイテムに振り回され、且つ悪戯した報いを受けたあかねとやよいは、れいかの協力もあり、何とか急遽佐々木先生に出された英語の反省文を手渡す事が出来た。佐々木先生からは、二度とあんな悪戯はしないようにと、あかねとやよいは嚴重注意をされていた。

「せやかて、佐々木先生の胸を触つたのはやよいやでえ!ウチはとぼちりやあ!!」

「あかねちゃん、ボヤかない、ボヤかない」

みゆきに窘められ、変顔を浮かべたあかねが言葉に詰まると、みゆき、なお、れいかが思わず笑いだす。

そんな中、おもちゃ屋の前で突然やよいの足が止まり、一同が何事かと立ち止まると、  
「みゆきちゃん、見てみて!ロボッターDXのプロモやつてるよお!!」

「エエ!?どれどれ?」

「キャンデイも見たいクルウウ」

キャンデイはカバンから這い出ると、みゆきの頭の上に飛び乗り、三人はその宣伝に釘付けになっていた。

「何や、みゆきの奴も食いついて見てるなあ?」

「うん、すこぶる食いついてるね」

「何でも、やよいさんから借りたロボッターのDVDを、キャンディと一緒に見てたそうですよ」

「へエ……」

れいから聞いたものの、興味が無さそうな表情を浮かべるあかねとなお、れいかは、やよいの好きなヒーロー物の時と同じ反応をする二人に、思わず苦笑を浮かべた。

「みゆきちちゃん!これは買いに行かない訳には行かないよ!!」

「そうだねえ……て、私はもうお小遣いほとんど残ってないから無理だけど……アハハ」

みゆきは咲達の町に行ったり、加音町に行ったりして、もうほとんどお小遣いが残って居ないのを思い出し、思わず苦笑を浮かべた。やよいは残念そうな表情を浮かべるも、

「でも、買いに行くのは付き合ってくれるよねえ?!みんなも、良いでしょう?」

「此処で買うんやろお?一人でエエやん!」

「此処じゃ駄目なおお!海沿いにある大型ショップ、ドンザラスで買うと……何とドンザラス限定、ロボッタークリアファイルが付いてくるんだよお!!」

やよいはキラキラ輝く目をしながら、あかね、なお、れいかに一緒に買いに行くの付き合つてとおねだりすると、あかね、なお、れいかは苦笑を浮かべる。

「みんなも、鉄人戦士ロボッターを見てくれれば、きつと面白さがわかるよ!!」

鼻息荒く、一同にロボッターの面白さをアピールするやよいに、あかね、なお、れいかは困惑気味に苦笑し、

「あたしの家も弟達が見てるから、名前は知ってるけど・・・あたしは興味無いなあ・・・どうせ同じロボット物なら、まだ車がロボットになる奴の方が良いかなあ!」

「ああ、絶望的に何たら言う奴やろお?げんきの奴が見取るわ!でも、ウチにはちつとも・・・ロボットの何処がエエの?」

「なお、あかねさん、何だかんだ言いながら知ってるんですね・・・私はそのどちらも全く知りませんけど・・・」

女子中学生達が、おもちゃ屋の前でロボット談義をする姿も、ある意味滑稽ではあった・・・

「ねえ、良いでしょう?ちゃんとロボッター大凶鑑も持つてくるから、みんなにも色々教えてあげよう!!」

鼻息荒くあかね、なお、れいかを説得するやよいに、三人は引き攣った笑みを浮かべると、根負けしたあかねは、

「分かった！分かった！それで、発売日は何時なん？」

「明日!!」

「『明日!?!』」

同意してくれそうで、ニッコリ微笑みながらやよいが明日だと答えると、四人の表情が一斉に曇り、やよいは小首を傾げた。みゆきは、嬉しそうなやよいに申し訳無さそうに、

「やよいちゃん・・・明日は無理だよ!」

「エエエ!?!何で!?!どうしてええ?」

天国から地獄に落下していくようにシヨックを受けたやよいは、みゆき、あかね、なお、れいかの顔を一人づつ見つめ、今にも泣きそうな表情を浮かべた。

「何でって・・・やよいも知ってるやろう?」

「明日はあたし達の街に、のぞみさん、りんさん、うららさん、くるみさんが来る日でしょう!」

「この前加音町で、のぞみさん達と決めたじやありませんか!」

「アツ!?!」

やよいの表情が見る見る凍り付いていった。あかね、なお、れいかの言葉で思い出したやよい、加音町でのぞみ達と会話していた時、次の週末に遊びに来るとのぞみ達が

言っていた。かれんどこまちは、あいにくその日は模試があつて来れないが、のぞみ達は遊びに来ると確かに言っていたのを思い出した・・・

「ひ、日にちを延ばして貰うとか・・・駄目かなあ?」

「やよい!」

「「やよいちゃん!」」

「やよいさん!」

あかね、みゆき、なお、れいかに窘められ、やよいはシヨンボリ落ち込むも、

(ま、まだ諦めないんだからああ!!)

やよいのロボッターへの執着は凄まじく、まだ何か作戦を考えようとしていた・・・

2、ロボニナル

バッドエンド王国・・・

「食らえ、ロボッター!ウルブッター・・・ペアアアンチ!!」

「ウワアア!強いオニ!流石ウルブッター様オニ!!」

ご機嫌でロボッターとウルブッターのおもちやで遊んで居るのは、ウルフルンとアカオーニ、そんな二名に興味が無さそうにデイクレ、ベガ、サデイスは、早々に自分の部屋へと戻って行った。マジヨリーナは呆れた表情で二人を見つめると、



「全く・・・何処が楽しいんだか」

「さあ止めだ、ロボッター！合体！ガシ〜ン！ウルブッター・・・アタ〜ック！」

おもちゃを合体させたウルフルンが、アカオーニの持つロボッター目掛けキックを放つと、ロボッターをゴロゴロ転がし、腕の部品を取り外すと、

「ウワアア！流石ウルブッター様！強いオニいい！負けたオニいい！！」

二人でテーブルを叩き大喜びをする。マジヨリーナは、大騒ぎする二人に醒めた視線を浴びせた。

この場にやよいが居れば、さぞかし三人で盛り上がって居た事だろう・・・

「全く、ロボット何て・・・ン!? 巨大ロボット?・・・これは使えるかも知れないだわさああ!!」

何かを閃いたマジヨリーナは、二人がウツトリしながら眺めていたウルブッターとロボッターのおもちゃを取り上げると、大急ぎで自分の部屋へと駆け出し、慌ててその後を追うウルフルンとアカオーニ、

「テメエ、マジヨリーナ！ウルブッターを返しやがれええ!!」

「そうオニ！返すオニイイ!!」

だが、追いつく事なく、マジヨリーナは二体のおもちゃを大釜に放り込み、巨大なしゃもじで大釜を掻き混ぜ始めた。

「アアアア!!」

大切なおもちゃが消え去り、涙を流しながらその場で膝から崩れ落ちたウルフルンとアカオーニ、二人の身体からバッドエナジーが照射され、ピーエー口復活の目盛りが上がった……

翌日……

のぞみ達との待ち合わせ場所、七色ヶ丘駅前に居るのはみゆき、あかね、なお、れい。かだったが、やよいの姿が見えず、四人は表情を曇らせていた……

「やよいちゃん、どうしたんだろう?」

「まさか……おもちゃ買いに行ったんやないやろうなあ?」

「いくら何でも、そのような事は……」

「大丈夫! やよいちゃんは、そんな最低な事しないよ!!」

なお、あかね、れいか、みゆき、皆やよいの事を信じては居たが、何の連絡も無い事に不安があつたのも事実であつた。もうすぐ、待ち合わせ時間の八時になろうとしていた……

「みゆきちやくん! あかねちやくん! なおちやくん! れいかちやくん!」

改札の中から大きな声で、自分達の名前を呼ぶのぞみの声が聞こえてきて、一同が振

り向くと、思わず四人は目が点になった。そこには、のぞみ、りん、うらら、くるみ、カバンから顔を出したココ、ナッツ、シロップ、そして、何故か一緒にニコニコしながら現われたやよいの姿があつたのだから……

「な、何でやよいが、のぞみさん達と一緒に居んのぉ?」

「さあ?」

「理解に苦しみますねえ……」

あかね、なお、れいかは、やよいの行動の意味が分からず、変顔を浮かべながら小首を傾げ、みゆきはやよいもちゃんと来ていた事に喜び、

「まあ、やよいちゃんも来てたし、一安心だね!のぞみさん!りんさん!うららさん!くるみさん!ココ、ナッツ、シロップも、いらつしやい!!」

一同は、やって来たのぞみ達を、笑顔を浮かべ歓迎するのだった……

「いやあ、あたしらがホームに着いたら、いきなりやよいが出迎えてたから驚いたよおお」

「本当よねえ……」

「はい!私達に早く見せたい場所があるとか……私、楽しみです!!」

りん、くるみ、うららの言葉を聞くと、あかね、なお、れいかの脳裏に、嫌な予感が漂い始めるのだった……

ルンルン気分のやよいを先頭に歩き出した一同、不安げな様子のあかね、なお、れいか、何処に連れて行って貰えるか楽しみなりん、うらら、くるみ、妖精同士楽しく会話するココ達とポップ達、一方、のぞみとみゆきは、

「みゆきちゃん!この間の童話の感想、お父さんに教えたら、凄く喜んでたよ!ぜひ家に連れて来てつて言われちゃったあ」

「本当ですか?私もぜひお話し聞きたいです!」

みゆきは、修学旅行先の大阪で買った、のぞみの父、夢原勉の童話の感想を、この間加音町で再会した時にのぞみに伝えると、のぞみは、みゆきの感想を聞いて大喜びで父に伝えた。勉は、のぞみの周囲で、自分の作品を読んでくれる子が居るとは思つて居らず、大いに喜んだ。のぞみの母恵美も、夫の作品を褒めてくれて嬉しそうに、今度家に連れてらつしやいとと言うと、勉も大いに賛成し、のぞみも必ず連れて来ると二人に返事を返した。

「例えば・・・例えばですけどお?私がおんな作品書いて欲しいなあとか頼んだら・・・書いてくれるんでしょうか?」

「エッ!?ウーン、それはお父さんに聞いてみないと分からないけど・・・今度家に来た時、頼むだけ頼んでみれば?」

「はい!!」

そんな会話をしながら、一同はどんどん海沿いにやって来て、

((やつぱり・・・))

あかね、なお、れいかは、先頭を歩くやよいの後ろ姿を、呆れた表情で見つめた。りんは、海を眺めると、

「へえ、七色ヶ丘にも海があるんだねえ?」

「夏場なら、海水浴とかも良いですよねえ」

七色ヶ丘に、海があるとは思っていなかったりんとうららは、意外な表情で海を眺めた。くるみは少し不満そうに、

「ねえ、やよい! 私達を是非連れて行きたい場所って、海の事?」

「いえいえ・・・皆さん、着きましたあ! 此処でええす!!」

くるみの言葉に、やよいは目の前の大きな建物を指さした。あかね、なお、れいかはガツクリ首を垂れると、あかねはやよいを見つめるや、

「アホかああ! ドンザラス何て、いろんな街にあるやろおお!!」

「エエ!? だつてええ・・・」

あかねに怒られ涙ぐむやよい、案内されたのぞみ、りん、うららは驚き、くるみは怪訝な表情を浮かべた。申し訳なきような表情をしたれいикаから、何故やよいがこの場所

に連れて来たのか、大体の事を聞いたのぞみ達は、苦笑を浮かべながらも、

「成る程ね・・・別に良いよ!何時間も並ぶ訳じゃ無いんでしよう?」

「そうですよ!買い物終わってから、みんなで出掛ければ良いじゃないですか!」

「全く、しようがないわねえ・・・」

「うん、そうだね!やよいちゃん、私達に遠慮しないで買っておいでよ!!」

「ほ、本当ですかああ!」

りん、うらら、くるみ、そして、のぞみから遠慮しないで買ってきて良いと言われ、やよいの表情は見る見る輝き、ペコペコのぞみ達に何度も頭を下げると、

「じゃあ、みんなで並びましょう!!」

やよいは意気揚々と列の最後尾に並ぶと、一同を手招きした・・・

「エツ!?何?あたし達も並ぶ訳?」

「アハハハ・・・まあまあ、りんちゃん良いじゃない!」

「重ね重ね、申し訳ありません・・・」

のぞみ達一同も列に加わり並ぶと、れいかは深々とやよいに代わって頭を下げるのだった・・・

最後尾に並んだ後も、後から並び出す人が多く、確かにロボッターは人気があるんだと理解した一同、やよいはカバンをゴソゴソ漁ると、

「みんなが暇にならないように・・・ジャジャーン！持って来ました、ロボッター大図鑑！！」

やよいがカバンからロボッター大図鑑を取り出すと、みゆきとキャンデイが目を輝かす。受け取ったみゆきがパラパラ中を見てあかねに渡すと、あかねはそのままスルーしてなおに手渡し、なおもそのままスルーしてれいかに手渡した。れいかは、意外に分厚い本に驚き、

「随分厚い本なのですねぇ・・・」

パラパラ中身を速読するれいか、ハツと気付き、のぞみ達に読みますかと差し出すと、のぞみ達は苦笑を浮かべながら、両手を振りながら遠慮し、再びれいかが速読を始めた。

「これを読めば、ロボッターの事が・・・全部わかるんだよおお!!凄いでしょ?」

「あつ、そう・・・」

全く興味無さそうに、曖昧な返事をするあかねとなお、りんは苦笑混じりに、

「ロボッター・・・そういえば、弟のゆうが見てたわねえ!あたしも、妹のあいも興味無いけど」

「ロボットつて見ないよねえ?」

「そうですね!やっぱり、女の子なら恋愛ものや魔女っ子物、後は美少女変身物ですよねえ?」

のぞみの言葉にうららも同意し、子供の頃見てたのは、魔女っ子物と言うと、

「ウンウン! 魔女物は私も見てたよ!!」

「確かに、おもちゃとか買って貰ったわ」

「ウチも見とったわ!」

「あたしも見てた!!」

魔女物なら自分達も見ていたとのぞみ、りん、あかね、なおも大きく頷き同意し、

「そういえば、こまちが加音町のハロウィンパーティーで、子供の頃見てた変身ヒロインに仮装してたわね」

くるみも、こまちが小さい頃に見ていた美少女物に仮装していたのを思いだし頷いた。やよいは膨れ面になると、

「もう、ロボッターだって面白いもん・・・」

「確かに、女の方でもロボット物を好きだという方は居るそうですし・・・」

「でもあれって、ロボットより操縦してる男の子に興味があるんでしょう?」

「わ、私はちゃんとロボッターも好きだもん!!」

れいかとなおの言葉を受けたやよいは、そんなミーハーな人達と違い、自分はちゃんとロボットも好きだと答えた。



「オラオラ！退け、退けええ！」

「今日発売のワルブツター様の玩具は何処オニ?！」

背後で横入りしてきそうな声を聞き、一同が眉根を曇らせ背後を見ると、ウルフルンとアカオーニが、並んでいる人々を威嚇しながらどんどん前に歩いてきた。

目が合った一同は、一瞬の沈黙の後互いを指差し、のぞみはウルフルンに変顔を浮かべながら、

「な、何であなた達が居るのよ?！」

「ウツセエ！お前からこそ・・・そうか、お前らもワルブツターのファンで、おもちゃを買いに来やがったなあ?！」

「なんでやねん！ちやうわああ!!！」

「そうだよ、私達はロボツターのファンだよ!！」

「「「もしもくし」」」」

何時の間にか、自分達までロボツターファンに加えているやよいに、みゆきとれいかを除く一同が突つ込みを入れた。

れいかは、周囲の人達からの痛い視線を感じ、頬を赤くしながら、

「み、皆さん、他のお客様に迷惑ですし、お静かに・・・」

慌てて止めようとしたれいかだったが、更に後ろからマジョリーナが現われると、

「お前達、何してるだわさあ! さっさとプリキュアを捜すだわさあ!!」

「プリキュアなら・・・此処に居るオニ!」

「エツ!」

アカオーニが指を指した人物を見て、マジヨリーナは一瞬キョトンとするも、直ぐに我に返り高笑いを浮かべ、

「ヒイヒヒヒ! 飛んで火にいる何とかやらとは・・・プリキュア! お前達の事だわさあ!!」

マジヨリーナは、バッドエンド空間を発生させると、並んで居た人々からバッドエナジーを回収する。周りを見た一同が険しい顔を浮かべ、やよいは表情を引き締めると、

「大変・・・街の平和が!」

「ヒイヒヒヒ! 今度こそ、お前達の・・・最後だわさあ!!」

「そうはさせない! 地球の人々の笑顔を守る為に、この程度の攻撃を受けても、私達は何度でも立ち上がる!!」

「いや、まだあたし達戦ってないし・・・」

「ウチら・・・何時攻撃食らったんやあ!」

自分の世界に浸ったやよいは、ロボッターの中のセリフを自分達に重ねて喋るも、りとあかねに突っ込まれる。やよいはそんな二人の突っ込みにもめげず、

「私達は・・・諦めない! みんな、行くよ!!」

凜々しい表情でスマイルパクトを構えるやよい、それとは逆に、困惑しながらキュアモを手を持つのでみ、りん、うらら、ミルキィパレットを手を持ったくるみ、そして、スマイルパクトを構えるみゆき、あかね、なお、れいか、

「プリキュア！メタモルフオーゼ！！」

「スカイローズ！トランススレイト！！」

「プリキュア！スマイルチャージ！！」

九人のプリキュアが三幹部の前に身構えると、マジヨリーナはフードの中からSFアニメに出てくるような銃を取り出した。咄嗟に顔色を変えたプリキュア達だったが、故かマジヨリーナは、銃をウルフルンとアカオーニに向けた。

「ワッ！な、何で俺達に向けるんだよおお!?」

「そうオニ！敵はあっちオニ!!」

二人は両手を振りマジヨリーナに撃つなどアピールすると、マジヨリーナは少し意地悪そうな表情を浮かべると、

「安心おし、これはロボニナルと言って、この銃を浴びた者は・・・まあ、見てれば分かるだわさあ」

「バ、バカ、撃つなああ!!」

「そう・・・ブエックシヨオオオオオン!!」

発射しようとしたマジヨリーナが、アカオーニが発した大きなクシヤミに驚き転倒してしまい、ロボニナルの照準は、偶然にもプリキュア達へと向けられたまま発射された……

パニック状態になった一同は、慌ててその場から回避したものの、ドリームとハッピーは、互いの頭と頭でぶつかり逃げ遅れ、

「しまったああ!?!」

「やあらあれたあああ!!」

ロボニナルの直撃を食らったドリームとハッピー、二人が心臓を抑えるも、別段何処にも痛みが無く、

「ア、アハハ!何とも無いや!」

「良かった、良かった!」

互いに手を取り喜んでいたドリームとハッピーであったが、見ていた仲間達は目を点にし、ルージュは大慌てで、

「ド、ドリーム!ハッピー!あんた達……巨大化してるわよ!」

「エエエエ!?!」

まるで巨大特撮ヒーローのように、徐々に巨大化していくドリームとハッピー、呆然とする仲間達と、ウルフルン、アカオーニ、そして、マジヨリーナ……

今、一同の前に、巨大な二体のロボットが聳え立っていた・・・

3、奪われたロボドリーム

バケツを引つ繰り返したような頭部・・・

ピンクの衣装はそのままだが、UFOのような胴体・・・

見る者を呆然とさせるその容姿・・・

「な、何!?何でドリームとハッピーが・・・ロボットになつてるのよおおお!!」

「何気に眉毛もありますねえ?」

ルージュは呆然としながら、非現実的な光景に首を振る。レモネードは二人の顔に眉毛が付いているのに気付き、啞然とする。そんな一同とは別に、喜ぶ人物が居た・・・

「ウワアア!二人共、格好良い!!」

「アホかああ!喜んどの場合かああ!!」

二人の姿を見て喜び、親指立ててGOODとジェスチャーするピースに、呆れたサニーが思わず突っ込みを入れる。ローズは二人を見比べながら、

「ドリーム!ハッピー!あなた達、そんな姿になつて・・・身体の方は何ともないの?」

「確かに・・・気になりますねえ?」

ローズの疑問に、レモネードも興味深げに頷くと、ピースは首を振りながら、

「違うよ!あそこに聳え立つのは・・・ハッピーロボに、ロボドリームだよ!!」

「そんなんどうでもいい!」

「すこぶるどうでもいい!」

ロボット化した二人に、ハッピーロボとロボドリームだと命名してはしゃぐピースに、サニーとマーチが無表情の突っ込みを入れる。

「エエエン!何だか分からないけど、身体が動かないよおお!」

「言葉は喋れるみたいだけどお・・・みんな、私達どうなっちゃうのおお?」

ハッピーロボとロボドリームの眉が、不安そうに下がる。ビューティは首を捻り、

「これは、予想外の展開ですねえ・・・」

「そこ、冷静に分析しない!」

驚きつつも冷静に状況を分析するビューティに、ルージュが突っ込みを入れる。妖精達も、この状況に呆然としていた・・・

「こんな事が・・・」

「ハッピー!ドリーム!これは大変な事になったでござるなあ・・・」

ココとポップも呆然とし、ナッツとシロップも思わぬ展開に驚愕する中、キャンディははしゃいでいた・・・

「お前達がジツとしてないから、プリキュアの方がロボットになっちゃうたじゃないか

い！さあ、今度は動くんじゃないよ！！」

再びマジヨリーナがウルフルンとアカオーニに照準を合わせると、二人は再び大慌てで、

「バ、バカ・・・そ、そうだ！ロボットになると動けねえってあいつら言ってたじゃねえか！！」

「そ、そうオニー！」

「そういえば・・・」

ウルフルンの言葉を受け、確かにその通りだとマジヨリーナも頷いた。

「どうやら・・・ロボニナルを浴びてロボットになると・・・誰かに操縦されなければ、動けないようだねえ」

ウルフルン、アカオーニ、マジヨリーナの視線がロボドリームとハッピーロボへと向けられた・・・

「ねえ、誰でも良いから操縦して座らせてえ！」

「ただ立ってるだけじゃ疲れちゃうよおお」

ハッピーロボとロボドリーム、二人は疲れてきたのか座りたいと言い出すと、

「あんた達、ロボットになっても疲れとかあるんだ？」

「操縦しろと言われても、どうやればいいのか……」

ルージュとマーチに問い掛けられたロボドリームとハッピーロボ、二人の胸元が開くと、中に操縦席らしきものが入った。思わず目が点になったルージュは、

「あんた達……本当にロボットみたいだねえ？」

「だから、ハッピーロボにロボドリームなお!!」

「シーン……」

ピースの言葉を、再び無表情でスルーするサニーとマーチ、ピースはそんな事にお構いなく、

「さあ、みんな!ハッピーロボとロボドリームに乗り込んで!!地球の平和は、私達で守るんだからああ!!」

鼻息荒くハッピーロボへと向かうピース、困惑しながらサニーとマーチ、ロボッター大凶鑑を小脇に抱えたビューティが後に続いた……

「な、何か大変な事になったわねえ？」

「本当に……この先どうなる事やら!?!」

「取り敢えず、私達も乗り込みましょう!」

ローズ、ルージュ、レモネードの三人も、困惑しながらロボドリームに向かおうとしたその時、三人を追い抜いたウルフルンとアカオーニは、



「オツと！ロボドリームには・・・俺達が代わりに乗り込んでやるよ！」

「そうオニ！そこでゆっくり見物してるオニ！」

「エツ!?ちよつとおお、勝手に乙女の身体の中に入らないでよおお!!」

困惑顔のロボドリームが、慌てて入り口を閉じようとしたものの、二人は間一髪操縦席に乗り込み、笑い声を上げた。

「エエエン！ココにだつて入られた事無いのいい!!」

「ドリーム・・・普通入れないココ」

「相当動揺してるみたいナツ・・・」

「このままじゃ不味いロブ」

ココ、ナツツ、シロップは、ウルフルンとアカオーニに奪われたロボドリームを見て思わず眩いた・・・

「これが、ロボドリームの操縦席かあ・・・面白え!!」

「さあ、ロボドリーム！ハッピーロボと戦うオニイ!!」

ウルフルンが操縦席に座り、アカオーニが補佐に回りながら、今、ロボドリームの瞳が輝いた。

「エエエエ!!」

思わず驚愕するロボドリームとハッピーロボ、今、二体の巨大ロボットが激突しよう

としていた・・・

4、動け!ハッピーロボ!!

ウルフルンとアカオーニに、ロボドリームを奪われたルージュ、レモネード、ローズは激しく動揺していた。このままでは、ロボドリームを操るウルフルンとアカオーニが、どんな事をしでかすか分からなかった・・・

「シロップ!悪いけど、かれんさんとこまちさんを・・・呼んで来てくれない?」

「ロボ!?!それは構わないロボ・・・けど」

苦渋に満ちた表情を浮かべたルージュは、シロップを呼ぶと、かれんとこまちを呼んできて欲しいと伝えた。ハツとしたようにルージュの顔を見たローズとレモネードは、

「良いの?」

「ルージュ、かれんさんとこまちさんは模試が・・・」

「分かっている!分かっているけど・・・かれんさんとこまちさんなら、きつと理解してくれる!きつと駆けつけてくれる!!ドリームを、あいつらの良いように何て・・・絶対使わせたくない!!」

ルージュに取ってもそれは苦渋の決断だった・・・

かれんとこまちの邪魔などしたくはない・・・

だが、自分達のみだけで、あの巨大なロボドリームを止めるのは難しいだろうと判断したルージユは、かれんとこまちの力に頼るより他に無かった・・・

シロツプは頷くと巨大化し、大空に飛翔する・・・

かれんとこまちを求め、猛スピードで七色ヶ丘から飛び去っていった。

「ウルッフッフッフ！さあ、ロボドリーム！ハッピーロボを可愛がってやんな!!」

ウルフルンが、右足下のペダルを踏みながら、ロボドリームの操縦桿を前方に倒すと、ロボドリームの意思とは関係無く、身体がハッピーロボ目掛け走り始めた。

「に、逃げて！ハッピー!!」

「エエ!?そう言われても・・・動けないんですぅう」

「アアアン！私は・・・勝手に動いちやうよおお!!」

動けないハッピーロボ、勝手に操作されるロボドリーム、困惑する両者を余所に、ハッピーロボ目掛け、ロボドリームの右パンチが炸裂し、吹き飛ぶハッピーロボ・・・

「キヤアアア!!」

中のコクピットに居た四人も思わず目を回し、自分の意思とは関係無く、ハッピーロボを攻撃してしまったロボドリームは、眉毛を下げながら困惑する。

「ハッピー・・・ゴメンねええ！ちよつとおお！勝手に私の身体を操らないでええ!!」

「ケッ!ウルセエ!!お前は、俺達の指示通り動けば良いんだよ!!」

「そうオニ!さあ、ロボドリーム・・・今度はキックオニイ!!」

アカオーニの言葉に反応し、ウルフルンが足下のペダルを踏みながら操作すると、ロボドリームは、倒れているハッピーロボ目掛け蹴りを放った・・・

「アアアン!止めてええ!!ハッピー、ゴメンねええ!!」

再び目をグルグル回すハッピーロボ、操縦席に居た四人は、

「このままじゃやられてまうでええ!」

「ピース、ハッピーロボを動かして!!」

「ピース!?!」

サニー、マーチ、ビューティに、ハッピーロボを動かすように言われたピースであつ

たが、仲間達を振り返ると涙目になり、

「私・・・操縦何て出来ないよおお!!」

「「エエエエ!?!」」

ピースは自ら進んで操縦席に座った事で、他の三人も当然ピースが操縦出来ると思つていた。だがピースは、ロボッターそっくりな操縦席に座りたかつただけで、操縦方法など知らなかつた・・・

模試の会場に到着したシロップは、人間姿になると、乱れた呼吸のまま、大声でかれんところまちなを叫び続けていた・・・

皆、試験間際でピリピリしていて、ある者は、大声を出すシロップを怒鳴りつける者も居た。シロップに気付いたかれんとこまちが、慌てて廊下に飛び出してくると、

「シロップじゃない！どうしたの!?!こんな場所まで?」

「のぞみさん達と一緒に、みゆきさん達の街に遊びに行つたんじゃなかったの?」

困惑気味にかれんとこまちがシロップを訪ねると、シロップは大慌てで、

「た、大変何だ！ドリームとハッピーがロボットになって、ドリームが敵に操縦されて・・・」

「ハア!?!」

慌てているシロップの説明を聞いても、二人は意味が分からず、顔を見合わせながら小首を傾げた。ドリームとハッピーがロボットになり、ドリームが敵に操縦されている・・・

非現実的な事ではあるが、二人の頭の中で素早く情報が整理されていくと、

「まだ詳しくは分からないけど・・・ドリーム達が危ないのね?」

「この場所までシロップさんが来たという事は、余程事態は深刻な状況なのかも知れないわね」

かれんどこまち、二人は目を合わせると頷き合い、素早く教室に戻ると自分達の荷物を取り、知人達に急用が出来たからと言い残し、再びシロップの下へと戻って来ると、「急ぎましよう!!」

「シロップさん、案内をお願い!!」

ルージユが言っていた通り、二人は何の躊躇も示さず、仲間の危機を知るや駆けつけようとする。改めてシロップは、のぞみ達五人の絆の強さを、目の前で見た気がするのだった。

かれんは、念の為ゆり達に、七色ヶ丘でドリーム達が敵と戦い、トラブルが発生した模様です。私達も今から向かいますが、駆けつけられそうな人は応援願います、と携帯を持って居る一同にメールを発信した。

シロップは人気の無い場所で巨大化し、かれんどこまちを背に乗せると、再び大空に飛翔した。

「二人共、今の内にプリキュアになっておいた方が良いロプ」

シロップのアドバイスを受け、かれんどこまちがキュアモを手にとると、

「プリキュア!メタモルフオーゼ!!」

アクアとミントに変身した二人、自分達が駆けつけるまで無事で居てくれと祈りながら、三人は七色ヶ丘へと猛スピードで飛んでいった・・・

ピースが操縦出来ないと告白し、一瞬の沈黙の後、サニーとマーチが変顔を浮かべながら、

「何でえ!? ピースはロボッターが好き何やろう?」

「あたし達・・・当然操縦出来るもんだとばかり・・・」

「アーン、そんな事言われたってええ・・・」

半ベそ掻くピースに、取り敢えず何か動かして見ればとアドバイスを送るも、ハッピーの跳ねた毛がアンテナ代わりにグルグル回転したり、起き上がろうとしてバランスを崩し、そのまま海の上に倒れ込む。まだ浅瀬であった為、全身水没まではいかないものの、ハッピーロボは困惑したまま、

「ウエーン、冷たいよおおお」

「やつぱり・・・無理だよおおお」

今にも泣きそうな表情になるピース、誰か変わつてと言われ、サニー、マーチ、ビューティは困惑した・・・

「ウルフルン! アカオーニ! その調子だわさあ!」

「ハッピーロボ! 頑張るクル〜」

無様な醜態をさらすハッピーロボに、観戦していたマジョリーナは、ウルフルンとア

カオニーに、キャンディはハッピーロボに声援を送る。敵同士の筈が何故か隣同士で座って観戦するマジヨリーナとキャンディ、ココとナッツ、ポップもキャンディの側に座りハッピーロボへと声援を送った。

「ケツ、手も足も出ねえようだなあ!」

「さあ、ロボドリーム!ハッピーロボをもっともつと痛めつけるオニー!!」

勝ち誇りゆつくり、ハッピーロボを威嚇しながら歩くロボドリーム、その時ハッピーロボが立ち上がった!

「何だとお!」

立ち止まり身構えるロボドリームだったが、ハッピーロボは手を水平に動かし続ける。

「サニー、凄いやおお!!」

「アカン・・・何かこれしか動かんわあ」

「「エエ!」」

額から汗が滴り落ちるサニー、何とか立ち上がり手を動かさせたものの、それ以上は動かず困惑の表情を浮かべる。

「マーチ!チェンジや!!」

「エエ・・・あたしがああ!」



席を立ったサニーに代り、席に座ったマーチは、恐る恐る操縦桿を握った。その背後でビューティは、ロボッター大百科を速読し続ける。

「マーチ！ファイト!!」

ピースはマーチに声援を送るものの、マーチにそんな余裕があるはずもなく、

「ゴ、ゴメン！話し掛けないで!!エエと……こうなりや自棄よ！直球勝負、行けええ!!」  
マーチが、がむしやらに操縦桿を動かすと、その場で足踏み始めたハッピーロボ、見ていたルージユ、レモネード、ローズは、今度は大丈夫かと期待して見守り続ける。

「チツ、そんなこけおどしが効くかよ!」

駆け出したロボドリームがジャンプすると、跳び蹴りを放ちハッピーロボを吹き飛ばす。

「ハッピー……ゴメン、ゴメンねえ」

困惑気味にどうすればいいのか分からず、ハッピーロボに詫び続けるロボドリーム、このままでは勝負にならなかつた……

「アアン、このままじゃハッピーロボがああ!」

嫌々首を振るピース、ビューティは額から汗を流すも、

「ハッピー!もう少し、もう少し持ち堪えて下さい!!」

「ビューティ、何か策があるの?」

「あるんなら、早くしてやあー!」

マーチが、サニーが、最後の砦ビューティに期待を託すも、ハッピーロボは目をグルグル回しグロッキー状態だった。

「不味いよ・・・私達で何とか足止めしてみよう!」

ルージュはドリームに呼び掛け、何とか動けないか問うも、身体の自由は全く効かず、せいぜい操縦席のドアを開かれるぐらいだと告げる。

「ドリーム、それだけで良いから、操縦席を開けて!」

「後は私達で何とかしてみる!」

「うん、ルージュ、レモネード、ローズ、お願い!」

ウィイインと操縦席のドアが開くと、ウルフルン、アカオーニが驚くも、

「ケツ、何を企んでるか知らねえが・・・残念だったなあ!ロボドリームの操縦システムは、こつちの方が優先何だよ!!」

ウルフルンの言葉通り再びドアが閉じられる。万策尽きたかに思われたその時、急降下してくるシロップが現われた・・・

「な、何?!あれがドリームと・・・」

「ハッピーなの?」

アクアとミントが、巨大な二体のロボットを見て目を点にする。アクアとミントが現われた事で、ロボドリームが、ルージュ、レモネード、ローズの表情が喜色ばんだ。地上に着地したシロップに集まってくる、ルージュ、レモネード、ローズ、

「アクア！ミント！二人共、大事な時なのにゴメン・・・でも、力を貸して!!」

「当たり前でしょう！それよりシロップに乗って！地上からではこちらが不利だわ!!」

大事な時に呼び出したルージュは二人に詫げるも、二人は笑みを浮かべながら三人にシロップに乗るように伝えると、シロップが再び上空へと飛翔した。その時、ハッピーロボの操縦席の入り口が開くと、険しい表情を浮かべたビューティが、

「皆さん、後五分・・・いえ、後三分時間を稼いで下さい！お願いします!!」

「三分で良いのね？」

「はい！お願い致します!!」

そう言い残すと、ハッピーロボの操縦席のドアが再び閉じられた。アクアは、何かビューティには策があると気付き、

「何かビューティには考えがあるようね・・・ドリーム！少々手荒な真似をするけど、少し我慢して!!私達みんな、あなたを必ず取り戻すから!!」

「エエェン、みんなあ、お願い！でも、出来ればお手柔らかにね？」

ロボドリームも同意し、シロップはロボドリームの周りを飛び回り、操縦席に居るウ

ルフルンとアカオーニの視界を遮り始める。二人はイライラしたように、

「ブンブン飛びやがって・・・」

ウルフルンは、腕で飛び回るシロップを払い除けようとするも、シロップは巧みに攻撃をかくぐり飛び続ける。シロップは、ロボドリームの足下付近を低空で飛び続けていると、

「イライラするオニ!!」

アカオーニが足下のペダルを踏み込むと、ロボドリームの右足が大きく上がった。アクアの目が輝くと、

「今よ、レモネード!ドリームの左足を、プリズムチェーンで・・・」

「そうか!プリキュア!プリズムチェーン!!」

アクアの考えが分かり、レモネードはプリズムチェーンで、ロボドリームの左足をチェーンで捕らえると、レモネード、ルージュ、アクア、ミント、ローズがシロップから飛び降り、思いっきりチェーンを、力を込めて引っ張ると、体勢を崩したロボドリームが尻餅を付いた。

「何やってるだわさあ!」

思わずマジョリーナが倒れたロボドリームに叱咤すると、それが聞こえた訳では無いだろうが、ウルフルンの目の色が変わり、

「畜生！こうなりや、必殺技を使うぜ…ロボドリーム！お前の技を見せてみやがれええ！！」

「エツ?! 必殺技?」

ロボドリームは、何の事だが分からず眉毛が下がり困惑するも、ウルフルンは、操縦席の右隅にある金色のボタンを思いつき叩くと、ロボドリームが起き上がりジャンプすると、宙返りした身体にピンクのオーラが纏われた。

「まさか…あれはシューティングスターの体勢じゃ?」

「不味い！ハッピー、避けてええ!!」

ローズが、ルージュが、動けないハッピーロボに避けるように伝えるも、ロボドリームは容赦なくハッピーロボの中心目掛け向かってきた。

「駄目！間に合わない!!」

「ドリーム！ハッピー!!」

このままでは最悪両者とも破壊されるのでは無いか、アクア、ミントが驚愕の表情を浮かべたその時、ハッピーロボの目が輝くと、シューティングスターが当たる寸前、その威力を利用するようにその場で右回りに回転し回避した。

「皆さん、ありがとうございます！ハッピーロボの操縦方法…何とか覚えました!!」

「覚えたって…どうやって?」

「ピースから借りたロボッター大図鑑、580ページ〜589ページを読みました」

「こ、この短期間に!？」

「ビューティ、凄なおおい!!」

ハッピーロボの操縦席に座ったビューティは、この短期間に操縦方法をマスターしたと豪語する。その頼もしき姿に、サニー、マーチ、そして、ピースの目が輝いた。

「ヨオオシ!ハッピーロボ、反撃開始!!」

ピースが前に見えるロボドリームを指さすと、それに合わせるようにビューティがハッピーロボを走らせた。

「しやらくせえ!動けたから何だつてんだあ?」

迎え撃つロボドリームが右パンチを繰り出すと、ハッピーロボはその腕を掴むや、

「ドリーム、申し訳ありませんが、少々我慢して下さい!」

「お手柔らかにいいい!!」

ビューティの声が外にも響き渡り、ロボドリームはトホホ顔でお手柔らかにと頼む。何とか逃れようがむしやらに操縦桿を動かすウルフルンだったが、

「行けええ!ハッピーロボ!!」

ピースの指示の下、ハッピーロボは、ロボドリーの身体を回転させながら投げ飛ばした。思わず目がグルグル回るロボドリームと、中に居るウルフルンとアカオーニ、ロ

ロボドリームは浅瀬に転倒し、

「これで、ハッピー大車輪投げ！」

「いや、操縦してるのはビューティヤん」

鼻息荒くドヤ顔を浮かべるピースに、思わずサニーが突っ込む。

「今よ、ロボドリーム！操縦席を開けなさい!!」

「ふあ、ふあい・・・」

目を回しながらも、ルージユの指示通り操縦席を開けると、目を回しながらウルフルンとアカオーニが地上に落下した。

フラフラ立ち上がったウルフルンとアカオーニに、ローズとルージユのパンチが炸裂し、二人を吹き飛ばす。

「よくも散々ロボドリームを扱き使ったわね？あんた達・・・覚悟しなさい!!」

身構えるロボドリームを除いたプリキュア5とローズ、ハッピーロボの協力を得て、無事ロボドリームを取り戻す事に成功した・・・

第五十五話：激突！ロボドリームVSハッピーロボ!!

完

# 第五十六話：脅威の合体ロボ!その名はバッドエンドV!!

1、バッドエンドV!!  
バッドエンド王国・・・

不意に現われたジョーカーは、三幹部の姿が見えない事に怪訝な表情を浮かべていた。サデイスの部屋を訪れたジョーカーは、

「サデイスさん、三幹部の皆さんの姿が見えませんが、どちらに行ったかご存じでしょうか?」

「ああ、あいつらなら・・・マジヨリーナが発明した物持って、プリキュアの下へ向かったよ!!」

「ほう・・・お三方揃ってですか?」

ジョーカーは、サデイスの言葉を聞き、自分の命令無しで三幹部が揃って出掛けた事に興味を持った。

(使えない人達ばかりだと思っていましたか・・・どれ、様子を見てきましようかねえ?)  
「どうです!サデイスさんも一緒に居るだけでは、身体が鈍ってし



まわれるんじゃないですか？」

(チツ！ジョーカーめ・・・)

薄ら笑いを浮かべたジョーカーに、サデイスは内心ムツとするも、バッドエンド王国に身を寄せる身としては、少しは役立つ所を見せねばならないかと思案し、ジョーカーの申し出を受諾した。

「それでは行きましようかねえ」

トランプの舞いと共に、ジョーカーとサデイスはその姿を消した・・・

形勢逆転・・・

ロボドリームを取り返し、ウルフルンとアカオーニに身構えるルージュ達四人とロズ、状況不利と見たマジョリーナは、大慌てで二人に合流したものの、ロボニナールをその場に置き忘れ、キャンデイが興味深げにロボニナールを手を取った。

「キャンデイ、また何か起こったら大変でござる！そのままにしておくでござる!!」  
「分かったクル〜！」

キャンデイも頷き、ロボニナールを隣に置いた。

「畜生、あと一步の所で・・・」

「惜しいオニ！悔しいオニ!!」

まだ目が回っているのか足下がおぼつかない二人、マジヨリーナが撤退しようとした持ちかけたその時、

「その必要はありませんよ!!」

トランプの舞いが降り注ぎ、一同の前に現われた人物、ジョーカーとサデイス・・・二人の出現に、プリキュア達は表情を引き締めた!

「三人揃ってお出かけしたと聞きましてね、もうプリキュアを倒した頃かと見に来てみれば・・・イヤハヤ、逃げ出す算段とは・・・」

ジョーカーはヤレヤレといった表情で首を振る。三幹部は凶星を指され困惑するも、ウルフルンとアカオーニは不満そうに、

「ウ、ウルセエ!後一歩だったんだ!!」

「そうオニ!ロボドリームで、ハッピーロボに止めをさせたオニ!!」

「ハア!?ハッピーロボ?ロボドリーム?あなた方、何を言ってるっしやるんです!」

怪訝な表情で首を傾げるジョーカーに、マジヨリーナはジョーカーの背後を指差し、「ジョーカー!サデイス!後ろを見てみるだわさあ」

「何です!?後ろ・・・な、何じゃ、アリアヤ!」

「ゲツ!?あれが、プリキュアだとおお?」

後ろを振り返り見上げたジョーカーとサデイスは、ハッピーロボとロボドリームを見

て困惑する。三幹部は、ジョーカーに今回の作戦を説明し、ハッピーとドリームを偶然ロボットにして、ロボドリームを奪い、ハッピーロボを苦しめた事を報告する。マジョリーナは、またジョーカーに嫌みを言われると、ウンザリな表情を浮かべたのだが、

「ロボットですか?・・・素晴らしい!素晴らしい作戦ですよ!!ですが、プリキュアロボなどで戦つても、面白みに欠けませんか?どうです・・・此処は私達が、合体ロボでプリキュアをバッドエンドにしてみませんか?ウフフフフ」

意外な事に、ジョーカーもこの作戦にノリノリで、自ら赤玉を手にとると辺りを見回し、ドンザラスのショーケースに飾られていた、昔の合体ロボットおもちゃに目を付けると、

「あれは使えそうですね・・・出でよ!アカンベエ!!」

飾られていた合体ロボ、赤、銀、メタリックブルーの三色のロボットは、アカンベエと化した。顔に付いた赤い鼻だけが一際目立っていた。アカンベエはその姿を五つに分離し、頭部は1号機のバッドジェット、両腕の部分が2号機のバッドクラッシュャー、胴体部分が3号機のバッドタンク、両脚部が4号機のバッドマリン、そして、両足が5号機のバッドクラフト、五台のマシーンが、ジョーカー達の目の前に現われる。

「ス、スゲエ!!」

「凄いオニ!格好良いオニ!!」

「五台あるって事は・・・あたしも乗るのかい!？」

大喜びのウルフルンとアカオーニ、自分も乗る事になりそうで困惑するマジヨリーナ、ジョーカーは口元に笑みを浮かべながら、

「ウルフルンさんは2号機、アカオーニさんは3号機、サデイスさんは4号機、マジヨリーナさんは5号機、そして、私は1号機に搭乗します!!」

ジョーカーの指示に従い、嬉しそうに指示されたマシーンに乗り込むウルフルンとアカオーニ、ハアと溜息を付きながら、渋々5号機に乗り込むマジヨリーナ、サデイスは不満気に、

「待ちな!何であたしがそんなメカに乗らなきゃならないんだい?あたしはゴメンだね!!」

腕組みしてソツポを向くサデイスに、ジョーカーはヤレヤレといった表情で両手を広げると、

「それは困りましたねえ?合体メカには、紅一点の美しい女性が欲しかったのですけど・・・」

ジョーカーのお世辞にピクリと反応したサデイスは、満更でも無さそうな表情になると、

「そ、そこまで言われちゃ断れないねえ・・・良いよ!乗ってあげるよ!!」

(ウフフフフ、バカと何とかは使いようとは良く言いましたねえ?)

颯爽と4号機に飛び乗るサデイス、ジョーカーは口元に笑みを浮かべながら1号機に飛び乗った。先程のジョーカーの言葉が聞こえたのか、5号機のマジョリーナが怒り出し、

「ちよつと、待つだわさああ!女はサデイスだけじゃ無いだわさああ!!」

「シーン……」

しかし、ウルフルンもアカオーニも、聞こえ無い振りをしてスルーした……

「私がレエツと言いましたら、皆さんもバッドエンドつと答えて下さい!さあ、皆さん、行きますよおお!!」

1号機のジョーカーが動き出すと、2号機、4号機、5号機がそれに続いて空に飛び上がり、轟音響かせ地を走る3号機、アカオーニは不満そうに、

「何で俺様のバッドタンクは……空を飛べないオニ!？」

「だってタンクだろう?」

「タンクは地上を走る装甲車じゃないか!」

「何だ、そういう事オニ!」

ウルフルンとマジョリーナに、タンクだから飛べなくて当たり前だろうと教えられ、納得するアカオーニ、バッドジェットが上空高く飛翔して宙返りをする、

「レエエツ!!」

「「「バアアアアッドエエエエンド!!」」」

五人の声が揃った時、1号機のバッドジェットから、バッドエナジーが照射され、2号機のバッドクラッシュャーに浴びせられると、まるで磁力に吸い付けられるように、2号機は1号機と合体し、更に3号機のバッドタンク、4号機のバッドマリンとバッドエナジーを浴びて合体し、最後に5号機のバッドクラフトが合体すると、ロボドリーム、ハッピーロボを遙かに凌駕する、推定、身長57メートル、体重550t、巨大なロボットが一同の前に姿を現わした・・・

その様子を、ポカンとした表情で見つめるプリキュア達と、ハッピーロボ、ロボドリーム、只一人、ピースだけは目を輝かせて居た。

「バッドエンドオオオV!」

ジョーカーが雄叫びを上げ、バッドエナジーを辺りに撒き散らしながら、バッドエンドVが身構えた・・・

「かつ・・・格好良い!!」

目をキラキラ輝かせ、バッドエンドVをウツトリした表情で見つめるピースに、サニー、マーチ、ビューティが苦笑を浮かべる。

「ピース……よう見てみい、顔はアカンベエのままや!」

「ウン……でも、格好良い!!」

「ハア」

ピースの態度に、駄目だコリヤと言いたげに溜息をついたサニーとマーチ、ハッピーロボは顔中に汗をかき、

「な、何か、本物のロボット来ちゃったよおお!?!私とドリームは……どうなっちゃうのおお?」

まさかあんな巨大なロボットと、自分達は戦う事になるのではと困惑するハッピーロボ、一方のロボドリームも、困惑しながらバッドエンドVを見つめていた……

「何あれえ!」

ロボドリームと同じ表情で、呆然と空に浮かび上がるバッドエンドVを見上げるルージユ、レモネード、ミント、アクア、ローズ、

「ハハ……何だ、ありや!」

「私……頭が痛くなってきたわ」

変顔浮かべながら困惑するルージユとアクア、レモネードは不安そうに、

「私達……あんな大きなロボットと戦うんでしようか?」

「でしようね……私達も、ドリームに乗り込んだ方が良いんじゃないの?」

ローズの言葉に頷いた一同がロボドリームへと向かう中、ミントは、ロボドリーム、ハッピーロボ、そしてバッドエンドVを改めて見比べると、  
「事実小説よりも奇なりとは・・・良く言ったものね?」

思わずミントはクスリと笑み、アクアを呆れさせた。

「このバッドエンドVを、ただのロボットとは思わない方が良いでしょう? 先ずは小手調べです・・・バッドファイター!!」

バッドエンドVの指が、小型のミサイルとなってハッピーロボへと発射された。思わずパニクるサニーとマーチだったが、ピースは自信満々に、

「フッフッフ、その程度の攻撃・・・ハッピーロボには効かないのだあ! ハッピーロボ、ハッピーバリアアア!!」

ピースの指示に素早く反応したビューティが、マントのようなもので全身を纏うと、バッドファイターの連射を、何事も無いかのように防ぎきった。

「す、凄い!!」

思わず驚愕するサニーとマーチ、だが、ビューティは険しい表情を浮かべると、

「こちらを飛ばなければ、勝負になりませんねえ・・・」

「大丈夫だよ! キャンディ隊長!!」



ハッピーロボの中に居る、ピースに声を掛けられたキャンデイが立ち上がると、ピースは、

「キャンデイ隊長！ハッピーロボに光の翼を!!」

「任せるクルウ!!」

キャンデイは、デコルデコールから、翼デコルを取り出すと、

「お兄ちゃん！キャンデイをハッピーロボまで連れてつてクルウ！」

「つ、連れて行けば良いのでござるか？」

ポツプは、鷲の姿に変化すると、キャンデイを背に乗せハッピーロボへと向かった。

操縦席のドアが開き、ピースがニツコリキャンデイに微笑むと、微笑み返したキャン

デイが翼デコルをピースに手渡し、元の場所へと引き返して行った……

「さあ、ハッピーロボ！今こそ光の翼を纏うのだああ!!」

ピースが翼デコルをセットすると、ハッピーロボの背に、ピンクの巨大な翼が装着された!!天使のように舞い上がったハッピーロボが、バッドエンドVと向かい合った……

一方、ロボドリームに乗り込んだ一同は……

「乗ったは良いけどさ……どうやって動かすのよおお!?!」

「私達、操縦方法何か知らないわよおお」

困惑するルージュとアクア、その時、正面のメインパネルが開き、ビューティの姿が映し出された。

「皆さん、簡潔にご説明致します・・・足を動かすには、右足のペダルを踏みながら左右のレバーを交互に前後に動かします。腕を動かすときは左足のペダルを踏みながらです。技を出すには、レバーの上側にある5つのボタンを押せば発動しますが、おそらく、武装はハッピーとドリームとは違っていると思われます。そして、金色に輝くボタン・・・それが、先程ウルフルン達が放ったドリームの必殺技です!!」

ビューティの指示を受け、誰が操縦するか相談すると、ルージュかアクアが最適だと結論が出て、取り敢えず最初にルージュが操縦席に座った。

「エエと、ペダルを踏みながら・・・だったわね!」

右ペダルを踏みながらレバーを上下に動かすと、ロボドリームが歩き始める。レバーを早く動かせば動かす程、走り出したりする事が分かってくる。アクアもルージュの動きを見てある程度のシステムは理解したようだった。

「みんなにも、光の翼を授けるね!」

ピースから渡されたサニーが、翼デコルをセットすると、ロボドリームの背にもピンクの光の翼が装着された!!

上昇するロボドリームが、ハッピーロボの隣に並ぶと、

「私達・・・凄おおおい!!」

思わず目を輝かして、空を飛んでいる事に喜ぶ二体のプリキュアロボ、だが、バッドエンドVを操るジョーカーの口元は、不適な笑みを浮かべていた・・・

「ウフフフ、このバッドエンドVを舐めて貰っては困りますねえ・・・バッドリターン!!」  
バッドエンドVの腰に付いて居る、半球体の物を手裏剣のように二体のプリキュアロボに放つも、ハッピーロボは再びハッピーバリアを、ロボドリームも両手を前に出すと、ピンクの巨大な蝶がバリアとなつて攻撃を防いだ。バッドリターンは自動的にバッドエンドVに戻り、ジョーカーはバッドリターンを組み合わせると、バッドエナジーであるでヨーヨーを操るような動きを始め、

「これはどうです?バッドエンド・ヨクヨクヨー!!」

素早いヨーヨー捌きで、バリアを張るプリキュアロボ目掛け怒濤の連打を放つと、ドリームバリアが砕かれ、ロボドリームが錐揉み状態で墜落するも、何とか地上への衝突は回避する。

「クツ、何なの?あの動くロボット兵器は!?!」

「このままじゃ不味いわねえ・・・」

ルージュの言葉にローズも同意し、五人とロボドリームは、バッドエンドVの実力の片鱗を見せつけられ驚愕した・・・

「スゲー!スゲエゼ!!バッドエンドV!!」

「最高オニイ!!」

ウルフルンとアカオーニは大はしやぎで喜ぶも、ジョーカーはチツチツと二人を窘め、

「まだまだ、こんな物じゃありませんよ!プリキュアロボに、実力の差を見せつけますかねえ・・・バッドエンド・タツマキイイ!!」

頭部のアンテナから発せられたバッドエナジーを腕に移すと、それをハッピーロボ目掛け放った。バッドエナジーは、まるで竜巻のように渦巻き、ハッピーロボは、ハッピーバリアで防ごうとしたものの、バッドエンドタツマキの直撃により、ハッピーバリアは無残に切り刻まれた。

「そ、そんなあ・・・無敵のハッピーバリアが破られる何てええ!」

ピースはガックリ膝から崩れ落ちた・・・

無敵のハッピーバリアが破られるなど、ピースには信じられなかった。更に状況は悪化し、

「クツ!?う、動きを完全に封じられました!操作不能です!!」

「「「エエエ!」」」

ビューティの告白を受け、サニー、ピース、マーチ、そしてハッピーロボが困惑した。

「さあ、ハッピーロボ！あなたの身体に、巨大な穴を空けて差し上げましょう・・・バッドエンド・スピイイン!!」

バッドエンドVが両腕を高々と上げて手を組み合わせると、手の先端はドリルのようになり、バッドエンドVは光速回転をしながらハッピーロボ目掛け突き進んだ!!

「イヤアア！あんな攻撃受けたら・・・真二つになっちゃうよおお!!」

困惑の表情を浮かべるハッピーロボ、だが操作不能の今、為す術は無かった・・・

「このままじゃハッピーが!?!」

「こうなれば、一か八かよ！ドリーム、頼んだわよおお!!」

ルージュが驚愕し、意を決したアクアが黄金に輝くボタンを押すと、ロボドリームは宙返りして、シューティングスターの体勢で、バッドエンドスピン目掛け、下方向から急上昇しながら突撃した・・・

## 2、集結！プリキュアロボ!!

横浜の街にあゆみの様子を見て来ていたせつなは、かれんから発せられたメールに気付き大慌てだった。ラブに電話すると、ラブ、美希、祈里の下にもかれんからのメールは届いていて、既に美希と祈里はラブの家に集まっていると知り、せつなも慌てて戻ろうとするも、

「せっつな、私は咲ちゃんとかとエレンに、美希たんはえりかちゃんに、ブツキーはひかりちゃんに連絡付けたら、みんなも仲間達に連絡して七色ヶ丘に向かってくれるって」

「そう・・・それは良かった!じゃあ私は、みんなを迎えに行つてからラブ達と合流するから、カオルちゃんのドーナツ屋の前にも居て!!」

「分かった!じゃあせっつな、後で!!」

電話を切つたせっつなは、ひかり、咲、ゆり、エレンにメールを入れ、これから迎えに行くから、今みんなが居る場所を教えて欲しいとメールを打つた。直ぐに一同から返事がやつて来て、ひかりはTAKO CAFEに、咲達はPAN PAKAパンの裏庭に、ゆり達は薫子の植物園に、エレン達は調べの館に集まっているとメールが来た。

「流星にみんな素早いわねえ・・・あゆみ、悪いけど今日はこれで帰るわね!」

「アツ!せっつなさん・・・私も一緒に連れてって下さい!みゆきちちゃん達の事が心配で・・・」

七色ヶ丘で何かが起こっていると聞き、あゆみの心は不安で一杯だった・・・

自分が行つた所で、何の力にもなれない事はあゆみにも分かつていた。だが、みゆき達の下に駆けつけたい!どんな些細な事でも良いから、力になりたいとあゆみは思った。

そんなあゆみの心情を察知したせっつなは、

「良いのね？何が起こっているかは．．．私達にも分からないわよ？」

「ハイ！構いません!!」

あゆみの決意に、頷き返したせつなは、アカルンを呼び出し、あゆみと共に消え失せた．．．

動きが取れないハッピーロボ目掛け、バッドエンドVのバッドエンドスピンの迫る。このままでは直撃を食らう、ハッピーロボとサニー、ピース、マーチ、ビューティの表情が凍り付いた時、下から物凄い速さでピンクの流星が急上昇を掛け、バッドエンドスピんと激突した．．．

「[[[[キヤアアアアア!!]]]]」

バッドエンドスピンの威力の前では、ロボドリームのシューティングスターも効果が無く、ロボドリームは弾き飛ばされた。思わず悲鳴を上げながら墜落するロボドリームと仲間達、操縦席から弾け飛んだルージュに代り、慌ててアクアが操縦席に座ると、体勢を何とか立て直した。

「ルージュ、大丈夫？」

「エエ、何とか．．．ハッピー達は!？」

心配したアクアがルージュに声を掛けると、ルージュは大丈夫だと告げた。一同は、

ハッピーロボが無事で居てくれと空を見上げると、ハッピーロボは無事健在で、一同はホッと安堵した。弾き飛ばされはしたものの、シューティングスターの勢いのお陰で、バッドエンドスピンはハッピーロボから軌道が逸れ、ハッピーロボは辛くも難を逃れた。ロボドリームのモニターにスマイル組が映し出され、ビューティが一同を代表するかのように、

「皆さん、ありがとうございます!どうやら操縦可能になったようです!!」

「し、死ぬかと思うたわ」

「こ、怖かったよおお!!」

サニーとマーチが抱き合いながら半泣きし、ピースは腰が抜けたかのように地面に座り込んでいた。アクアは一同の無事な姿を見て安堵し、

「みんな、無事で何よりだわ!」

「でも・・・想像以上の相手ね!」

真顔になったローズの言葉に、一同は表情を引き締めた。

「おやおや、外れましたかあ!?!まあ、楽しみは後で取っておきましょうかねえ」

まるで上から見下すように、ハッピーロボとロボドリームを見つめるバッドエンド

V  
.  
.  
.



このままでは何れやられてしまう・・・

ココとナッツは頷き合うと、ナッツはミラクルガイドライトのスイッチを入れた。先端のハートは激しく点滅し、虹色の輝きが上空を照らした・・・

「みんな、この場所に気付いてナッツ」

「早く、早く来てココ!!」

ライトを振りながら、他のプリキュア達の加勢を待ち望む妖精達であった・・・

再び上昇したロボドリームと、ハッピーロボだったが、動くロボット兵器と呼べるバッドエンドVの、巨大なミサイルであるバッドブラスト、頭部の角から発生したバッドエナジーを、指先に集めて発するバッドエンドスパーク、額のV字マークから発せられるVビーム、背中のキャタピラに、刃が現われ打ち出すバッドチェーンソー、数々の武器が容赦なく二体のプリキュアロボに浴びせられた・・・

「(、このままでは・・・)」

「不味いわね・・・」

操縦しているビューティ、アクアの表情が一層険しくなっていく・・・

ハッピーロボ、ロボドリーム、両者共数々の攻撃を受け、目がグルグル回っていた・・・

「どうしました!? もう、終わりですか?」

「ジョーカー!遊んでないでさっさと止めを刺しちまいな!!」

勝ち誇った表情でプリキュアロボを見下すジョーカー、サデイスは遊んで居ないでさっさと倒せと進言する。

「そうですね!もう少し相手になるかと思っただのですがねえ・・・」

最早、相手にするのも飽きた表情を浮かべたジョーカーだったが、その時、ココ達の前方が赤く輝き、待ち望んでいたプリキュアの仲間達とあゆみが駆けつけた・・・

何が起こっているか分からない今、一同は既にプリキュアに変身して駆けつけてくれた・・・

メツプル達はコミュニケーション姿でルミナスと共に、フラツピ達もコミュニケーション姿でブルーム達と一緒に、タルトとシフォン、シプレ達、ハミイとフェアリートーン、そしてピーちゃん妖精達も一緒だった。

「ココ、ナッツ、シロップ、キャンディにポップも、待たせたわね!」

「それで、ドリーム達やハッピー達は何処に居るの?」

パッションが、ブルームが、ココ達に声を掛けると、キャンディは空を見上げ指差し、「みんななら、お空で戦ってるクル!」

「空!?!」

空を指さすキャンディに、ムーンライトは怪訝な表情を浮かべ、キャンディが指さす空を一同が見上げた時、一同の表情は凍り付いた……

「ゲツ!?!何、あの変なの?」

「何か……ドリームとハッピーに似た変なのが、巨大な物と戦ってるわ!」

マリンは不可解な物体に驚き、目が良いパッションが、ドリームとハッピーに似た物が、巨大な何かと戦って居ると告げると、

「皆の衆!信じられんでござろうが……あれはハッピーとドリームでござる」

「このロボニナルで、二人はロボットになっちゃったクル」

「今、ルージュ達がドリームに、ビューティ達がハッピーに乗り込んで戦って居るナツ」

「ハア!?!」

ポップ、キャンディ、ナツツの説明を聞いても、一同は俄には信じられない話であった。キャンディはロボニナルを手にとつと、

「みんなもこれでロボットになって、ハッピーロボとロボドリームを助けてクル」

「エエエエ!?!」

突然キャンディにロボニナルを向けられてパニクる一同、ココとナツツ、ポップから、ハッピーやドリームのような姿になるだけだから、安心して欲しいと言われる。

「安心して……って言われてもねえ!?!」

「ちやんと元に戻れるんでしょうね?」

ベリーとブライトに言われたココ達は、顔を見合わせると、

「それは分からないロボ・・・」

「冗談じゃないわよおお!!」

「元に戻れるか分からないのに・・・ロボットに何かなりたくないわよ!!」

シロップに、元に戻れるかは分からないと告げられると、リズムは目の色変えて怒り、ベリーも拒否をする。空を見上げたパッションは、

「でも、このままじゃ不味いわよ?敵の攻撃に完全に押されてるわ!」

一同の耳にも、確かにロボドリムとハッピーロボの悲鳴が聞こえてくる。空を見つめるルミナスは、何かを決意した表情を浮かべると、

「キャンディ、私をその銃で、ロボットにして下さい!」

「クルウ!」

ルミナスは、自分が守りを受け持てば、ドリムとハッピーは、攻撃に集中出来るのではと考えた末の結論だった。ルミナスはあゆみに頼み、メツプル達四人を預けると、メツプル達は不安そうにルミナスを見つめた。そんな一同に笑みを浮かべたルミナスは、キャンディに頷きかけると、キャンディは目を輝かせながら、

「ありがとクルウ!!」

ルミナスにロボニナルを浴びせると、ルミナスの身体がどんどん巨大化し、ドリームとハッピーのような容姿に変わった・・・

他のプリキュア達が、目が点になる中、あゆみはルミナスロボを見つめると、

「ルミナス！私も・・・私も一緒に戦わせて下さい！！ロボットの操縦なんか出来ないけど・・・何かの役に立ちたい！！」

「ええ、あゆみさん、一緒に戦いましょう！！」

ルミナスロボの胸元が開くと、操縦席らしきものが現われた。シロップは巨大化し、ココとナッツは人間姿になると、あゆみを伴い、

「僕とナッツ、あゆみは、ルミナスに乗り込んでドリームとハッピーの援護に向かう」

「みんなも後から来てくれ！！」

シロップは舞い上がり、ココとナッツ、あゆみを操縦席に乗せると、自分も人間姿になるやルミナスロボに乗り込んだ。ハッピーロボとロボドリームへの連絡が付いたのか、ルミナスロボの背にも光の翼が現われ、ルミナスロボは大空に飛翔した・・・

最早迷って居る状況では無いと察した一同、ベリーとマリンは、ピーチとブロッサムを見つめると、

「仕方無いわねえ・・・ピーチ！」

「ブロッサム!ヨロシクウウ!!」

「分かった・・・つてえ、何でよおおお!!」

「エエエ!?何で私達何ですかああ?」

ベリーとマリんに、ロボになってと言われ、思わずピーチとブロッサムが抗議をするも、ベリーは空で戦って居る三体を指差しながら、

「だつてえ、ドリームもハッピーも・・・ピンクチームじゃない?」

「ルミナスは違うでしょう?」

不満そうに口を尖らせ、ルミナスは違うでしょうとピーチが言うも、ベリーとマリンは意味深な笑みを浮かべ合いながら、

「いやあ、ルミナスはブラックの代わりという事で・・・」

「そうそう!」

「ねえ〜!」

ベリーとマリンは顔を見合わせ「ねえ〜」と頷き合うと、ブルームとメロディの表情が凍り付き、

「ちよつと待つて!その法則で行くと・・・私とメロディもじゃないのよおお?」

「狡いよおお!!」

ピンクチームはロボットになってと言われ、ブルームとメロディも膨れっ面で抗議す

る。タルトはウンウン頷くと、

「せやなあ、どちらか言うたら・・・ピーチはんより、ベリーはんの方がロボット向きな気も、わいはしよるわ」

「ちよつとタルト！どういう意味よおおお?」

タルトに、自分の方がロボット向きだと言われたベリーは、ムツとしながらタルトに真意を問うと、タルトはベリーに背を向け、歩きながら言葉を続けて、

「ラビリンズで、ピーチはん達がキュアエンジェルになったやろう?ピーチはん、パインはん、パッションはんの背は、天使の羽やったけど、ベリーはんのは・・・ロボットのよくな羽根やったさかい」

タルトの言葉を聞いたベリーは、どんどん無言になり、その表情を見たピーチ、パイン、パッションは、変顔を浮かべながらタルトに後ろ、後ろとジェスチャーで伝えるも、タルトには伝わらず、ブルブル震えだしたベリーは、

「タルウウトオオオ!!」

名前を呼ばれ振り返ったタルトは、ベリーの表情を見て腰を抜かした・・・

ベリーに取って触れられたくない出来事だったようで、鬼気迫る表情でタルトに躡り寄って行った・・・

一向に誰がロボになるか決らない事に、キャンディは頬を膨らませると、イライラし

たように、

「誰でも良いから、ロボになるクルウウ!!」

「キャ、キャンデイ!待つでござる!!」

ポツプが止めるのも聞かず、キャンデイは無造作にロボニナールを発射した・・・  
慌てて躲す者・・・

避けきれず光線を浴びた者・・・

ロボニナールの直撃を受けたのは、ブルーム、ベリー、マリン、メロデイの四人・・・  
四人の身体は徐々に巨大化し、ハッピーロボとロボドリームのような容姿へと変化していった・・・

「何で結局・・・あたしなのよおおお!?!」

「何であたしまでええ?」

困惑するベリーロボとマリンロボ、ロボブルームとロボメロデイは観念したようで、  
「もう、こうなったらしょうがない・・・イーグレット、ブライト、ウインデイ、私に乗っ  
て!ドリームとハッピーの応援に行こう!!」

「ブルーム・・・大丈夫なの!?!」

「喋れはするけど・・・全く動けないや!アハハハ!!」

心配そうなイーグレットに、ブルームは自虐っぽく乾いた笑い声を上げた・・・



「ここで決めなきや女がすたる．．リズム、ビート、ミュージズ、行くよ!!」

「女というか．．ロボットだけどね？」

「リズム．．うるさいよお!!」

二体の胸元が開くと、乗り込んでいくイーグレット達とリズム、ロボメロディを改めて見つめたビートとミュージズは、

「まさか．．メロディに乗って戦う事になるとはねえ．．」

「奏太が聞いたら大喜びしそうね．．」

「うるさいなあ！早く乗ってよ!!」

ロボメロディに急かされたビートとミュージズも乗り込んだ。最後まで渋っていたベリーロボとマリンロボであったが、ムーンライトは二人を見上げながら、

「マリン！ベリー！あなた達もそうだったからには．．覚悟を決めなさい!!」

「ハアア．．」

ベリーロボとマリンロボの眉は下がり、トホホ顔を浮かべながら操縦席を開いた：

「皆さん、救援ありがとうございます！簡単に操縦方法をお伝え致します．．」

メインパネルに現われたビューティからの説明を聞き、ロボブルームの操縦をブライトが、ベリーロボの操縦をピーチが、マリンロボの操縦をブロッサムが、そして、ロボ

メロディの操縦をリズムが行う。

大体の操縦方法を覚えた一同が、光の翼を纏い、新たに加わったロボブルーム、ベリーロボ、マリロボ、ロボメロディが大空に舞い、ハッピーロボ、ロボドリーム、ルミナスロボと合流し、七体のプリキュアロボと、バッドエンドVが睨み合いになった・・・

3、決着!プリキュアパンチ!!

加勢に現われたプリキュアロボを見ても、ジョーカーは余裕の表情を浮かべていた・・・

「何人来ようが、このバッドエンドVの前では無意味ですよ!バッドエンド・ヨッヨッヨッ!!」

再びバッドエンドヨーヨーを操り、プリキュアロボ目掛け攻撃を開始するジョーカー、すかさず前に出たルミナスロボが、光のバリアで攻撃を完全に遮断する。

「また黄色のロボですか・・・全く忌々しいですねえ?」

バッドエンドVの数々の攻撃を防ぎ続けるルミナスロボに、ジョーカーは苛立ちを覚えて居た。

「皆さんは、攻撃に集中して下さい!!」

ルミナスロボの操縦席に座るのはあゆみ、ココとナツツのアドバイスを受けながら、

懸命にルミナスロボを操縦していた。

「あゆみちゃん、ルミナス、ありがとう！」

「みんなが加勢に来てくれれば、百人力だね！」

ハッピーロボとロボドリームの肩が上がり、気合いを込める。二体が左右に散ると、バッドエンドVに格闘戦を仕掛けた。マリンロボを操縦していたブロッサムも同意し、「分かりました！マリンロボ・・・今こそ必殺技を使う時です!!」

「つて言われてもさあ・・・あたしにもどんな技があるか分からないし」

ブロッサムが黄色のボタンを押すと、操縦室が突然赤くなり警告音が鳴り響いた。ブロッサム達は何事かと度肝を抜かれて居ると、

「自爆装置作動！自爆装置作動！」

「自爆装置?!」

「ブ、ブロッサム!?!何のボタンを押したの?」

自爆装置が作動し、顔をしかめたムーンライトとサンシャインは、ブロッサムに聞いた。ただすと、ブロッサムはドキつとした表情を浮かべながら、

「エエ!?!わ、私はビューティに説明された通り、ちゃんと黄色のボタンを押しましたよ！」

「ビューティは、金色のボタンって言ってなかったかしら?」

「確かにそう言っていました!」

「アツ!」

ムーンライトとサンシャインに指摘され、ブロッサムは自分がボタンを押し間違えていた事に気付き、変顔を浮かべた・・・

「で、でも・・・マリン!何で、自爆装置何か付いてるんですかああ!」

「あたしが知る訳ないっしょ?押したのはブロッサムでしょうがああ!!」

「そんな事言われなくても・・・」

マリンロボに怒られ、困惑するブロッサム、尚も激しいブザー音が鳴り響くと、マリンロボを中心に、ドンという爆発音が発生し、目をグルグル回したマリンロボは口から黒煙を吐くや、眉を思いつ切り吊り上げ、

「ブロッサム!何やってんのよおお!!」

「これは・・・ひよつとしてプリキュア大爆発だったんじゃない?」

「何でよりによって、これがあたしの技なのよおお!」

「ハア・・・」

ブロッサムとマリンロボの掛け合いを聞き、思わず溜息を漏らすムーンライトとサンシャインであった・・・

「ヒヤアツハハハハ！勝手に自爆するとは・・・随分頼りになるお仲間をお持ちですねえ？」

「ウルツフツフツフ！しよせんお前ら何か、バッドエンドVの敵じゃねえんだよお！」

「流石オニ！バッドエンドVは無敵オニ!!」

笑うジョーカー、見下すウルフルンとアカオーニ、そんな三人をモニター越しに、醒めた視線で見つめるマジヨリーナとサデイスは、

「何時までこんな事に付き合わされるんだわさあ？」

「全く・・・さっさと帰りたいね？」

「ハア」

思わず二人は溜息をついた・・・

トラブルに見舞われ、爆発したマリンロボを見て驚愕した一同だったが、マリンロボは、口から黒煙を吐いた程度で、一同はホツと安堵を浮かべた。ピースも驚いたものの、「ああ！マリンロボがあ・・・でも、まだ動けそうで良かった！ロボブルーム！ペリーロボ！マリンロボ！ロボメロディ！四体共、ハッピーロボとロボドリームに続くのだああ!!」

「「「ロボって呼ぶなあああ!!」」」

鼻息荒く一同をロボと呼び指示を出すピースに、四体のプリキュアロボがハモリながら抗議した。

「やけにピースは楽しそうね?」

「ピースは、元々ロボット作品が好きだって言ってたから・・・」

「どうりで、ウキウキしてると思っただわ」

「相変わらず・・・お子様ねえ」

メインモニターに映し出された、嬉々として指示を出すピースの姿に、ムーンライト、ピーチ、ウインディ、ミューズが思わず苦笑を浮かべた。

動くロボット兵器、バッドエンドVの攻撃を耐え凌いだプリキュアロボ達、反撃を試みるも、巨大なバッドエンドVに有効打になる攻撃を与える事は出来なかった・・・

「このままじゃ埒があかないわ!」

「バラバラに攻撃するより、一カ所を集中攻撃した方が良いのでは?」

手応えがない相手に、アクアが戸惑い、ビューティはみんなで一カ所を集中攻撃してみるのも一つの手ではないかと進言する。リズムもその提案に頷くと、

「やってみる価値はありそうねえ」

「そうね・・・ただ、相手がそう上手くこちらの狙い通りに行くかどうか・・・」

「うん！あの巨体だからねえ・・・」

ブライトの戸惑いにピーチも頷く、そんな一同にルミナスロボは、

「私に考えがあります！あゆみさん、あのロボット目掛け私の必殺技を放つて下さい！私の想像通りなら・・・あのロボットの動きを、少しの間止められる筈です!!」

「分かりました！やってみます!!」

ルミナスロボの指示通り、バッドエンドVの正面に移動したルミナスロボに、ジョーカーは怪訝な表情を浮かべるも、

「何を企んで居るか知りませんが・・・無駄だという事を教えて差し上げましょう！バッドエンド・タツマキイイ!!」

再びバッドエンドタツマキのモーションに入ると、アクアとビューティの顔色が一気に青ざめた。

「不味い！あの技は・・・」

「ルミナス！あゆみさん達も、気をつけて下さい！あの技を受けると・・・行動不能に陥ってしまいます!!」

頭部のアンテナから再びバッドエナジーが放出され始める。

「今です！」

「分かりましたあ!!」

ルミナスの指示の下、あゆみが金色のボタンを押すと、ルミナスロボはボタンを取りだし構え、ハーティエルアンクシヨンのポーズを取り、バッドエンドVへと放った。ハーティエルアンクシヨンをまともに受けたバッドエンドVは、虹色の輝きに包まれ行動不能に陥った。

「バ、バカな!?こちらが行動不能に陥るとは?」

操縦桿をガチャガチャ動かすも、バッドエンドVは身動き出来ず、ジョーカーを焦らせる。ルミナスロボは、その瞬間を見逃さず、

「皆さん、今です!!」

ルミナスロボの合図を受け、バッドエンドVへと向かった六体のプリキュアロボ、アクアは、バッドエンドVの頭部の角からバッドエナジーが放出されているのに気づき、

「みんな、私の想像通りなら、あのロボットの頭部に集中攻撃を掛けてー!」

アクアの指示を受け身構えるプリキュアロボ・・・

「みんなあ!プリキュアロボには・・・共通の必殺技があるのおお!!青いボタンを押してええ!!」

「共通の必殺技?」

「ウン!それは・・・プリキュアパンチ!!」

「「「「「ハア!?!」」」」」



「いいから、言われた通りにしてええ！せええのおお!!」

ピースの指示通り、ビューティ、アクア、ブライト、ピーチ、プロツサム、リズム、皆タイミングを合わせ青いボタンを押すと、六体のプリキュアロボの左手が、火花を散らしながらバッドエンドVへと飛んでいった!!

「私のおお」

「あたしのおお」

「腕がああああ!!」

自分の腕が勝手に轟音上げて飛んでいく様に、六体のプリキュアロボが仰天した：

次々とバッドエンドVの頭部に炸裂するプリキュアパンチに、バッドエンドVの頭部の角は折れ果て、バッドエナジーが無造作に放出されると、合体が解け始め、五台のマシーンがバランスを崩し始める。

「行けえ！ハッピーロボ!!止めのハッピーシャワー!!」

「左腕がまだ戻ってませんから・・・出来ません!」

自信満々に、止めのハッピーシャワーを指示したピースだったが、飛んでいった左腕が戻ってこないの、出来ないと冷静にビューティに突っ込まれる。ピースは変顔を浮かべながら、

「アアアンもうーじゃあ、もう片方の腕で……みんな、もう一発プリキュアパンチで止めよ!!」

ピースの合図で再び青いボタンを押した一同、

「私のおお」

「あたしのおお」

「右腕がああああ?!」

六体のプリキュアロボは、泣きそうな顔を浮かべながら、飛んで行った右腕を見つめた。両腕が無い状態のプリキュアロボであったが、その容姿ゆえか、何処かコミカルだった。

再び六体のプリキュアパンチを浴び、流石のバッドエンドVもその攻撃を耐えきれず、ジョーカー、ウルフルン、アカオーニ、サデイス、マジヨリーナは緊急脱出をして上空に浮かび上がった。

「まさか……バッドエンドVが倒されるとは!?!」

「畜生!!」

「ウオオオ!悔しいオニイ!!」

「やれやれ」

「やっと解放されただわさあ」

五人が撤退し、バッドエンド空間が解除されると同時に、バッドエンドVは消滅し、海に落ちそうな15個目のキュアデコルを、驚の姿になったポップの背に乗ったキャンデイがキャッチし、元のおもちやの姿を取り戻した・・・

「バンザアアイ！流石プリキュアロボオオオ!!」

「!!だから、ロボって言うなあああ!!」

逆転勝利に大喜びするピースに、四体のプリキュアロボは再びピースにロボと呼ぶなと文句を言い、

「ウエエエン！手が・・・元に戻ったああ!!」

「良かった、良かった!」

ハッピーロボとロボドリームは、無事に戻った手を見ながら喜んだ。

「みんなで勝利のポーズをしよう！白いボタンを押しして!!」

「!!!「白いボタン!?!」!!!」

「ピース、そのボタンは・・・」

「いいから、いいから・・・ポチッと!!」

プリキュアロボ大勝利を祝し、みんなで勝利のポーズをしようと提案したピース、誘われた一同は、訝しみながらも、ピースに言われたように白いボタンを押しした。白いボ

タンの意味を知っていたビューティだったが、ピースは嬉しそうに白いボタンを押し  
た。

ルミナスロボのツインテールの髪が、ゆっくり回転を始めた・・・

ロボブルームの跳ねた髪が、蟹の足のように動き始めた・・・

ロボドリームのドーナツ状に結わいた髪が、前後にパタパタ動き始めた・・・

ベリーロボの束ねた髪が、ヨーヨーのように伸び縮み始めた・・・

マリンロボの長い髪が、触手のようにウネウネ動き始めた・・・

ロボメロディの兎の耳のようなりボンが、左右交互に前後に揺れ始めた・・・

そして、ハッピーロボの跳ねた髪が、レーダーのようにクルクル回転し始めた・・・

「プリキュアロボー勝利のポーズ・・・決めええ!!」

「いい加減・・・ロボって呼ぶなあああ!!」

ピースは、ドヤ顔を浮かべながら、右手を突き出しポーズを決め、ロボブルーム、ベ  
リーロボ、マリンロボ、ロボメロディに、三度目の突っ込みを入れられた・・・

苦笑を浮かべていたルミナスロボだったが、何かを思い出したかのように困惑気味に  
一同に話し掛け、

「でも・・・私達、一体どうやって元に戻れるんでしょうか?」

「アッ!?!」

た  
ルミナスロボの現実に引き戻す一言を受け、プリキュアロボ達はフリーズするのだっ  
た  
・  
・  
・

第五十六話：脅威の合体ロボ！その名はバッドエンドV！！

完

## 第五十七話：ジョーカーの罠

## 1、ジョーカーの作戦

ピーちゃんの機転で、ロボニナルが壊れた事で元に戻れた一同、ロボになっていたルミナス、ブルーム、ドリーム、ベリー、マリン、メロディ、そして、ハッピーに奇妙な友情が芽生えた。

変身を解いた少女達・・・

やよいは、何とかロボッターDXを購入出来てご満悦だったが、りんは複雑な表情を浮かべると、

「ねえ、あたし達・・・結局七色ヶ丘に何しに来たんだろう?」

「本当よ!ロボットにされるわ・・・そう言えば、タルトおお!!」

「美希たん!タルトなら・・・シフォンと先に帰ったよ!」

「何ですってええ!?!」

「「「まあまあ・・・」」」

有耶無耶になっていた、タルトに文句を言う事を思い出した美希だったが、タルトは危険を察知し、早々に逃げ帰っていた。ラブ、祈里、せつなが、何とか美希を宥め、一

同は苦笑を浮かべた。

「皆さん、ありがとうございます！」

「ロボットになった時はどうなっちゃうのおおと思っただけど……皆さんのお陰で無事に済みました！」

「本当に、一時はどうなる事かと冷や冷やしたよ」

「本当、何とかロボッターDXを買えて良かったあ！」

「そっちのロボットかあ!?!……せや、折角七色ヶ丘に来たんやからあ、みんなウチの店に寄って行かへん？」

れいか、みゆき、なお、やよい、そしてあかねに感謝を述べられた一同、あかねは折角来てくれたから、自分のお好み焼き屋に来ないか誘うと、のぞみ、りん、うらら、咲、響は大喜びで同意するも、

「こんなに大勢で押しかけたら、迷惑じゃないかしら？」

「そうですね……」

ゆりとひかりは、これだけの大人数で押しかけては、迷惑ではとあかねに遠慮するも、まだ時間が早いから大丈夫だと伝えた。折角の誘いを断るのも悪いと思っただけは、あかねの店へと向かった……

流石に本場仕込みのお好み焼きの味は最高で、皆ニコヤカにお好み焼きを堪能し、か

れんどこまちは、のぞみがお代わりなどしないように見張りながら食べていた。妖精達も、見えない場所でお好み焼きを味わい、楽しい一時は過ぎていった・・・

「あかね、御馳走様！」両親にもよろしく言っておいてね!!」

「こちらこそおおきにいい！みんなも気をつけて帰ってやあ!!」

ゆりが代表して改めてあかねに礼を述べ、あかねもみんなに気をつけて帰るように促した。みゆきはあゆみを見つめると、

「あゆみちゃん、折角来たから、私の家にも泊まって行かない？」

「そうだよ！明日は日曜だし、ロボットーでも見て徹夜でも・・・」

「なんでやねん！」

「それじゃ泊まりに来る意味無いでしょう？」

やよいは、徹夜でロボットー鑑賞会でもしようと提案するも、あかねとなおに即座に却下される。

「アハハ・・・エーと、お母さんに聞いてみないと分からないけど・・・ちよつと電話して聞いてみるね」

あゆみは携帯から母に電話して、みゆきの家に泊まっても良いか問うと、あゆみの母は快諾してくれて、あゆみはこの日、星空家に泊まる事になった。



「じゃあ、私達は帰るわね！あゆみ、みゆき達と一緒になら、明日は私が顔を出さなくても大丈夫そうね！」

「はい！せつなさん、何時もありがとうございます！」

「ううん・・・じゃあ、みゆき、あかね、やよい、なお、れいかも、またね！」

「バイバイ!!」

一同が手を振りながら、七色ヶ丘から帰って行った・・・

みゆきの家に着いたあゆみは、みゆきの父博司、母育代に歓迎されていた。

「折角家に泊まりに来てくれたのに、何のお持てなしもしないのは気が引けるわあ・・・みゆき、本当にお夕飯要らないの？」

「うん！あかねちゃんのお家で、みんなでお好み焼き御馳走になったから要らない!!」

「そう・・・じゃあ、冷蔵庫にプリンが入ってるけど、それも要らない？」

「アアアン！それは食べるよおお!!」

「ウフフ、ちゃんと取って置いて上げるから、先にあゆみちゃんとお風呂にでも入ってらっしやい!!」

「ハアアイ！」

みゆきは自分の部屋にあゆみを連れて行くと、あゆみは部屋を見渡し、前にみゆきに

聞いていた通り、みゆきの部屋は絵本が一杯置いてあるのを見て驚く、

「本当にみゆきちゃんは・・・絵本が好きなのねえ？」

「うん！あゆみちゃん、私がまだ使っていない下着があるから、それでも着る？」

「良いの？じゃあ、お言葉に甘えて！」

「キャンディ、ポップも一緒に入る？」

みゆきに一緒にお風呂に入るか聞かれたポップは、頬を染めるや、

「エエエ!?せ、拙者は、武士（もののふ）！みゆき殿やあゆみ殿と共になど・・・入れないでござるよお」

「キャンディは、みゆきとあゆみと一緒に入るクルウ！」

キャンディは、みゆきの着替えの上にチョココンと座ると、ぬいぐるみの振りをしてみゆきとあゆみと共に浴室へと消えて行った。

ポップは、デコルデコールを取り出すと、感触深げに中に入っているキュアデコールを見つめた。みゆき達五人を始め、他のプリキュア達の協力も得て、数ヶ月の間で残り一つになるとは想像以上の早さだった。

「残るキュアデコルは・・・後一つ！これもみゆき殿を始めとする、プリキュア達のお陰!!ロイヤルクイーン様、あと少しでござるぞお!!」

目に浮かんだ涙を、ポップは拭い去った・・・

浴室からは、楽しい少女達の声が響き渡っていた・・・

バッドエンド王国・・・

ピーエロ復活の目盛りを刻むカウンターの前で、ジョーカーは険しい表情を浮かべていた・・・

戦力を繰り出して挑んだバッドエンドVが敗れた事は、ジョーカーに取っても誤算ではあつたのだが・・・

（私とした事が、少々お遊びが過ぎましたかねえ？プリキュア達は、既に15個のキュアデコルを手に入れ、残りはこの一つ・・・ですが、彼女達が浮かれている今こそ、こちらが仕掛けるには最高のタイミング！それには、他のプリキュア達が邪魔ですなえ・・・）  
ジョーカーは、手元に残る最後のキュアデコルを見つめ、何かを思案すると、三幹部、三人の魔人を呼びつけた・・・

「ジョーカー！何のようだ？」

「我らまで呼び出すとはどういう了見だ？」

ウルフルンとデイクレが、ジョーカーの真意を読めず尋ねると、振り向いたジョーカーの目は赤く輝き、

「皆様方にも協力して頂こうと思ひましてねえ・・・先ずはアカオーニさん、キュアデコ

ルを受け取りなさい」

「オニ!？」

アカオーニは、ジョーカーから最後のキュアデコルを受け取ると、ジョーカーの目は妖しく輝き、

「それが最後のキュアデコルです！それをあなたに託しましょう・・・キュアハッピー達を、それで倒してらっしゃい!!」

アカオーニは鼻息荒く必ず仕留めると豪語するも、ウルフルンとマジヨリーナは、自分達が行くと進言するも、ジョーカーは首を振り、

「あなた方二人と、デイクレさん、サデイスさん、ベガさんには・・・他のプリキュア達の足止めをして頂きたいのです!!」

「足止め!？」

「どういう事だい?」

ウルフルンとサデイスが眉根を顰める中、ジョーカーの目が再び妖しく輝き、

「これは命令です!!客分としてこの地に居られるあなた方三人とはいえ・・・従って貰いますよ!!」

アカオーニを除く一同は、内心不服ではあった・・・

だが、ジョーカーが発するプレッシャーは、それを上回り、一同はジョーカーの進言

を聞き入れる以外無かった・・・

「時間は明日の朝・・・向こうの世界の時間で午前9時！プリキュア達の住む街に、同時に攻撃を仕掛けます!!特にキュアハッピー達の下へは・・・絶対に近づけないようにして下さい!!」

鬼気迫るジョーカーの企みが、着々と進行して行こうとしていた・・・

2、さらわれたキャンディ!

翌朝・・・

みゆき達は、不思議図書館にあゆみを案内していた。沢山の本が置いてある不思議図書館を見て、あゆみは驚愕していた・・・

「一杯本があるのねえ・・・」

「凄いやろう?ウチらも最初見た時は驚いたわ!」

「此処にある本・・・みんな読んで見たいなあと思ってるんだあ!」

あかねが、みゆきが、ニコニコしながらあゆみに話掛ける。あゆみはポケットに手を入れると、アンデトルセンの形見ともいえる金色の球体を握りしめ、

(アンデトルセンにも、見せて上げたかったなあ・・・)

キャンディは、そんなあゆみの胸中を知ってか知らずか、

「ルセンは本を読むのが大好きだったクルウ！アンデは長い間読んでと・・・寝ちやつたクルウ」

「ウフフフ、何となくアンデらしいわね・・・」

あゆみはキャンデイの言葉を聞き、思わずクスリと笑みを浮かべた。みゆきは一同を見回し、ポップを見ると、

「ねえ、ポップ！あゆみちゃんにも、この場所に何時でも来られるように、行き方を教えて上げても良いかなあ？」

「勿論！構わないでござる!!何だったら、先生氏に教えても構わないでござるよ！二人共、立派にみゆき殿達の仲間でござるから」

「そうだね・・・ありがとう、ポップ！」

ポップに取って、あゆみは勿論、佐々木先生も立派にみゆき達プリキュアの仲間だと告げ、顔を見合わせた五人は嬉しそうに微笑んだ。

みゆき達が仲良くティータイムを過ごしていた頃、ジョーカーの作戦が始まろうとしていた・・・

咲達の町にウルフルンが・・・

のぞみ達の町にサデイスが・・・

ラブ達の町にマジョリーナが・・・

つぼみ達の町にデイクレが・・・

響達の町にベガが・・・

そして、七色ヶ丘にアカオーニが現われた・・・

ジョーカーは、ブラックとホワイトが居ない今、ルミナスにさしたる脅威を感じず、彼女の住む町に攻撃を仕掛ける事は無かった。例えルミナスが気付いても、彼女には直ぐに救援に向かえる手段は無いと読んでいた。

「さあ、素晴らしいシヨアの始まりですよお!!」

三幹部がバッドエンド空間を発生させれば、サデイス、ベガ、デイクレが、負の力を撒き散らし人々の気を失わせる。異変に気付いた一同が駆けつけ、目の前に居る敵に驚愕し、表情を引き締めた。

咲達が・・・

のぞみ達が・・・

ラブ達が・・・

つぼみ達が・・・

響達が・・・

一同がプリキュアに変身し迎え撃った・・・

不思議図書館で異変を感じたみゆき達も、あゆみを伴い駆けつけるや、郵便ポストを

アカンベエに変えたアカオーニと対峙した・・・

「今度こそお前達を倒すオニ!!」

「そうはさせない!みんな!!」

「「「エエ!!」」」

「「「プリキュア!スマイルチャージ!!」」」

「キラキラ輝く、未来の光!キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー!キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん!じゃんけん・・・ポン!キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負!キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心!キュアビューティ!!」

「「「5つの光が導く未来!輝け!スマイルプリキュア!!」」」

五人のプリキュアが、アカオーニとアカンベエに対しポーズを決めた!

「みんな、頑張つてええ」

キャンディ、ポップと共に、少し離れた場所でハッピー達を見つめるあゆみ、その三人の姿を上空から見つめていた者が居た。ジョーカーである・・・

(アカオーニさんなどに、期待はしていませんよ!精々プリキュア達を油断させる筈になつて下さい!しかしあの妖精・・・この前見た時のあの力、調べて見る必要があります)



うですねえ・・・)

キャンディを見つめるジョーカーの口元が、ニヤリと笑みを浮かべた。

「妖精さん！坂上さん！」

「アツ！佐々木先生!!」

ハアハア言いながら掛けてきた佐々木先生が、三人に手を振りながら近づき、ハッ  
ピー達が戦って居るアカオーニを見ると、

「な、何!?鬼?あの子達、あんな怪物とも戦って居るの?」

「あれはバッドエンド王国のアカオーニでござる!」

佐々木先生は、京都でアカオーニと入れ違いになつていたので、アカオーニの存在を  
初めて見ていた。棍棒を持ち、寅の腰巻きを着ているアカオーニを見て、佐々木先生は、  
子供の頃読んだ絵本に出てくるような姿を見て驚愕する。

「全く、昨日コテンパンにしたつたのに、こりないやつちやなあ!?」

「うるさいオニイ!昨日の怨みも晴らすオニイ!!」

アカンベエに更なる指示を出すアカオーニ、ジョーカーに期待されていると言う事  
は、ピーエー口にも期待されていると勘違いし、何時になく気合いが入っていた。

アカンベエは口から手紙を手裏剣のように吐き出し攻撃を加えるも、マーチが拳を操  
り手紙手裏剣の軌道を変え、サニーが炎で燃やし尽くした。ドヤ顔を浮かべた二人で

あったが、アカンベエは、更に大量の手紙手裏剣とはがき手裏剣を吐き出し、慌てて二人が回避し、ピースの雷が、手裏剣の群れを駆逐し、ビューティの冷気がアカンベエの足を凍り付かして動きを封じた。

「ハッピー！今です!!」

「プリキュア！ハッピー〜シャワー〜!!」

ビューティの合図を受け、ハッピーシャワーをアカンベエに放つと、動けないアカンベエは、為す術無く浄化された。

「グヌウウウウ・・・プリキュア！覚えてるオニイイ!!」

悔しそうに地団駄踏みながらアカオーニが撤退し、バッドエンド空間は解除された。

ハッピーは、落ちてきた最後のひまわりのキュアデコルをゲットすると、

「最後のキュアデコル・・・」

「」「ゲットオオ!!」「」

五人が満面の笑顔を浮かべながらキュアデコルを手にすると、キャンディも、ポップも、嬉しさが一杯で一同に駆け寄った。あゆみと佐々木先生も顔を見合わせ合いながら笑顔を向け、一同の下へと歩いて行った。

一同は変身を解くと、人気の無い場所へと移動し、みゆきは、最後のキュアデコルをポップに手渡した。ポップは涙目を浮かべながら、

「皆の衆、何度感謝しても足りんでござる・・・本当にありがとうでござる!!」  
「どう致しまして!! そうだ! 気分を盛り上げてえ・・・」

みゆきは、デコルデコールから星のデコルを取り出すと、スマイルパクトにはめ込み、辺りを星の流星が照らした。

「夜ならもつとキレイ何だけどねえ・・・」

「ウフフ、さあ、ポップさん!」

れいかに促され、ポップがデコルデコールに嵌め込んだ瞬間、突風が辺りに巻き起り、一同は思わず表情を崩し、突風が通り過ぎるのを待った。

目を開けた時、一同は驚愕する・・・

目の前にあつたデコルデコールが消え失せていたのだから・・・

「みんなあ・・・キャンディの姿が見えないよ!」

「「「「「エエエ!」」」」」

みゆきの言葉を受け、辺りを必死な形相で捜す一同に、上空から笑い声が響き渡った。  
「ウフフフフ! 皆さん、お疲れ様でしたあ!! 確かにキュアデコルは返して頂きましたよお!!」

「「「「「ジョーカー!」」」」」

ジョーカーが現われ、デコルデコールを奪った事に驚愕するみゆき達とポップ、佐々

木先生は、険しい表情を浮かべながらジョーカーを見つめ、

「それはこの子達なのでしょう！返しなさい!!」

「と、言われて返すバカは居ないでしょう？そうそう、この妖精も頂いちゃいましたから!!」

「「「「「キャンデイ!!」」」」」

一同の表情が真つ青になった・・・

一同は油断していた・・・

この状況でジョーカーが襲撃してくるとは、予想だにしていなかった・・・

「この妖精さんには、色々聞きたい事がありますのでねえ・・・」

「みゆきいい！みんなああ！お兄ちゃああん！助けてクルウウ!!」

泣き叫ぶキャンデイを、持っていた巨大な瓶に閉じ込めたジョーカーは、スマイルパクトを手にした一同を威嚇するように、

「動かない方が身の為ですよ？あなた方に取っても、この妖精に取ってもねえ・・・私がこの瓶を割ってしまえば・・・この妖精は、あなた方の目の前で粉々になるのですからねえ!!」

ジョーカーの言葉に、咄嗟に固まるみゆき達五人、皆口々にキャンデイとキュアデコルを返してと訴えるも、当然ジョーカーは聞く耳を持たず、

「返して欲しいですかあ？ だったら・・・バッドエンド王国まで取り返しにいらつしやい！ 尤も、あなた方が来られればですけどねえ？」

泣き叫ぶキャンデイ、トランプの舞いと共に二人の姿は上空から消え失せた・・・

呆然とする一同はその場で膝を付き、キャンデイの名を呼び続けた・・・

佐々木先生も、あゆみも、泣き叫ぶ彼女達に掛ける言葉を失っていた・・・

涙を拭ったみゆきは立ち上がると、

「行こう！ バッドエンド王国に!! キャンデイを、キュアデコルを取り返しに!!」

みゆきの言葉にハッとした表情を浮かべた一同、

「せやなあ・・・一丁乗り込んだろうやないかあ」

「うん！ 怖いけど・・・私、頑張る!!」

「みんなの力を合わせれば・・・きつと取り返せる!!」

「急ぎましょう！ ジョーカーにどんな目に合わされるか分かりません!!」

あかねが、やよいが、なおが、れいかが、バッドエンド王国に乗り込むと告げると、あ

ゆみは居ても経つても居られず、

「お願い！ 私も連れて行って!! アンデとルセンの分まで・・・キャンデイの側に居て上げ

たいの!!」

「あゆみちゃん・・・ウン!!」

「皆の衆：…忝ない！忝ない！拙者が知る限り、メルヘンランドを經由しない限り、バッドエンド王国には行けない筈でござるが・・・」

大切な教え子達が、バッドエンド王国に乗り込むと聞き、佐々木先生の胸は張り裂けそうだった・・・

「ま、待ちなさい！これは罠よ！！危険だわ！！せめて他のプリキュアの仲間知らせてから、一緒に乗り込むべきよ！！」

正論である・・・

何時ものれいかならば、佐々木先生と同じ考えが浮かんでいた事だろう。だが、目の前でキャンディを浚われ、どんな目に合わされるかわからない状況で、仲間達を待つ決断は、みゆき達には出来なかった・・・

「先生！大丈夫！！必ずキャンディと共に、みんなで帰ってくるから！！」

一同は頷き合うと、ポップは絵本を取りだし、

「皆の衆、ではメルヘンランドに向かうでござる！さあ、絵本の中へ！！」

「待ちなさい！！」

佐々木先生が止めるのも聞かず、みゆき、あかね、やよい、なお、れいか、そしてあゆみが絵本の中へと入ると、絵本はメルヘンランド目掛け飛び立って行った・・・

「みんなああ・・・」

涙を流しながら、慌てて携帯を取った佐々木先生は、ゆりに電話を掛ける。だが、デイクレと戦って居るムーンライトが電話に出る事は無く、空しく発信音が響き渡っていた。

(みんなあ．．．必ず他のプリキユア達に知らせるから！それまで無事で居て!!)

佐々木先生は携帯電話をギュツと握りしめ、みゆき達の無事を祈るのだった．．．

### 第五十七話：ジョーカーの罠

完

## 第五十八話：エコー！

### 1、戦意喪失

最後のキュアデコルを手に入れたのも束の間、ジョーカーによってデコルデコールと、キャンディを奪われたみゆき達は、キャンディとデコルデコールを取り戻すべく、ポップから聞いたバッドエンド王国に向かえる唯一の手段、メルヘンランドへと向かった……

バッドエンド王国……

捕らわれたキャンディは、二本の巨大な柱に挟まれた祭壇の上に縛られていた……  
「あなたに聞きたい事があります……ミラクルジュエルは何処ですか？」

ジョーカーは、キャンディの目の前まで顔を近づけ、ミラクルジュエルの在処を尋ねるも、キャンディは泣きそうな表情を浮かべながら、

「そんなの知らないクルウ！ キャンディを離すクルウ!!」

「本当に知らないんですかあ？ 本当にいい!？」

「知らないクルウウ！ みゆきいい！ みんなあ！ お兄ちゃああん！ 助けてクルウウウ!!」



(どうやら、本当に知らないようですねえ……)

涙目になりながら、みゆき達の名を叫び続けるキャンデイ、ジョーカーは再び顔を近づけると、

「確かに、あなたを助けにメルヘンランドに向かっているようですよ!」

ジョーカーの言葉に、キャンデイはみんなが助けに向かっていると聞き、表情が輝くも、ジョーカーは意味深な笑みを浮かべると、

「態々向こうの方から来て頂けたんですからねえ……折角ですし、ピエー口様復活への最後のバッドエナジーは……あなたが期待しているプリキュア達から頂く事に致しましょう!あなたには感謝していますよ!!何せ、あなたを助けに来て、キュアハッピー達五人は……」

「またもキャンデイにヌウつと顔を近づけたジョーカーは、

「全滅するんですからああ!!」

「クルウウ……」

自分の所為でみゆき達が大滅すると聞かされ、キャンデイの瞳から涙が零れる。

「み、みんななら……必ずキャンデイを助けに来てくれるクルウウ!!」

「いいえ、来ませんよ!何故なら、キュアハッピー達は……メルヘンランドで絶望し、あなたの存在など……どうでもよくなるんですから!!」

ジョーカーはそう言い残し、キャンディの前から姿を消した・・・

ハッピー達が、キャンディの事などどうでもよくなる・・・

「そんなの、そんなの嘘クルウウ!!」

キャンディは、大粒の涙を零しながら泣き叫んだ・・・

メルヘンランドに着いた一行は、絵本から抜け出し、辺りを見回した。空中に浮いた小島、家や王宮なども建ち、沢山の風船も浮かんでいて、その名の通りメルヘンを想像させはするものの、この国に住む住人もそうなのかと見回しても、人の姿が一人も見当たらなかった。絵本の世界と聞いていたが、此処には人の気配が感じられない、まるでゴーストタウンのような感覚を覚えた。

「ここが、ポップとキャンディの国、メルヘンランド・・・」

「さよう・・・此処が拙者達の国メルヘンランド！女王様が、ピーロとの戦い以後眠りに付いてしまわれ、みんなは嘆き悲しみ、メルヘンランドの民は・・・外出する事をほとんど止めてしまったのでござる!!」

俯いたポップがギユツと拳を握った・・・

ロイヤルクイーンさへ復活すれば、元通りのメルヘンランドを取り戻せるのにと・・・そんなポップの心情が伝わったかのように、みゆき達一同も悲しげな表情を浮かべた

その時、

「ウフフフ、その表情最高ですよおお!!」

「「「「ジョーカー!?!」」」」」

トランプの舞いが降り注ぎ、一同の前に姿を現わしたジョーカー、まさかメルヘンランドに現われるとは、誰も想像していなかった。ジョーカーの奇襲に戸惑いながらも、ポップにあゆみの事を託した一同は、スマイルパクトを手に持ち構えると、

「「「「プリキュア! スマイルチャージ!!」」」」」

五人の少女が、パクトのパフを塗っていき、プリキュアへと変身していく・・・

「キラキラ輝く、未来の光! キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー! キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん! じゃんけん・・・ポン! キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負! キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心! キュアビューティ!!」

「「「「5つの光が導く未来! 輝け! スマイルプリキュア!!」」」」」

五人のプリキュアが、ジョーカーに対してポーズを決めた!

「ジョーカー! キャンデイは何処? キャンデイを、デコルデコールを・・・返してええ!!」

「ならば、この私を倒してご覧なさい!!」

険しい表情を浮かべたハッピーが、ジョーカーに問いただすも、ジョーカーは手に持ったトランプを捌き始め、口元に笑みを浮かべながらハッピー達を挑発する。

「上等やないかああ！取って置きのおみまいしたるう・・・プリキュア！サニークファイヤー！！」

全身から溢れ出すような炎を集めたサニーは、それを凝縮し炎のボールにすると、ジョーカー目掛けサニーフファイヤーを放った。ジョーカーは、トランプを前に出すと、  
「その程度の攻撃・・・無駄ですよ！」

サニーフファイヤーは、トランプに吸い寄せられるように消えて行った・・・  
呆然とするサニーと入れ替わるように、

「だったら、今度はあたしの技を受けてみな！プリキュア！マーチ・・・シユククトオオ  
！！」

マーチシユートが轟音響かせジョーカー目掛け飛んで行くも、再びトランプカードの中へと吸い込まれ、ジョーカーは涼しげな表情で、

「分かりませんか？無駄ですよ！！」

「だったら・・・ハッピー、ピース、同時に仕掛けましょう！」

「分かった！」

「うん！！」

「プリキュア！ハッピー〜・シャワー〜!!」

「プリキュア！ピース・・・サンダー!!」

「プリキュア！ビューティ・・・ブリザード!!」

個人の技が効かないならば、力を合わせれば良い!!

ハッピーシャワーが、ピースサンダーが、ビューティブリザードが、ジョーカー目掛け飛んでいく!!だが・・・三人が力を合わせた技をも、トランプカードは吸収した・・・

「そんなぁ・・・」

「ウチらの技が効かん何て・・・どうすればエエンや!？」

ハッピーが、サニーが、一同が呆然とする・・・

「無駄です！あなた方如きの力が・・・私に効くとも思っていたのですかあ？さあ、自分達の攻撃でも・・・受けてみなさい!!」

五人の技を吸収したトランプカードから、ドス黒いエネルギー体が発射された。嘗て、技を放ったブライトの攻撃を、バッドエナジーを加えてブライト目掛け打ち返した時のように・・・

ドス黒いエネルギー体は、ハッピー達五人を直撃した・・・

「「「「「キアアアアア!!」」」」」

「ハッピー！サニー！ピース！マーチ！ビューティ！」

「みんなあああ!!」

吹き飛ばされた五人が、闇に覆われ、闇の中で弾け飛んだ。ポップが、あゆみが、それを見て絶叫する。ジョーカーはゆっくり闇の中に入って行くと、倒れ込むプリキュア達を見て、口をニタアと吊り上げた・・・

ジョーカーは、横たわるサニーの前に姿を現わし、起き上がろうとするサニーの目の前に顔を近づけると、

「あなたは勘違いしているようですねえ・・・」

「な、何がや!？」

「私はその気になれば、何時だってあなたなど葬りさせられるんですよ!このようにね!!」

サニーの目の前の闇の中に、父大悟、母正子、弟げんきの姿が映し出された。三人の瞳に輝きは無く、まるで全てに絶望しているような表情でサニーを見つめていた・・・

「父ちゃん!母ちゃん!げんき!どないしたんや!？」

「あかね・・・もう駄目だ!家のお好み焼きを食べたお客が・・・仰山死んだ!!」

(エツ!?)

「もう、アカン!ウチらはお仕舞いや!!あかね・・・一緒に死のう!!」

(な、何言うてんのお!?)

「姉ちゃんも・・・」

「「さあ、死のう!!」」

大悟の、正子の、げんきの手がサニーに伸びる・・・

「ウワアアアア!!ハア、ハア、ハア」

思わず仰け反り、荒い呼吸をするサニーの耳元にジョーカーが囁く、

「分かりました? 私がその気になれば・・・あなたなど、家族葬り去る事も容易いのですよ!! 私がほんのちよつと、火を付ければ、後はあなたが守ってきた町の人々が、あなた達家族を追いつめ・・・抹殺してくれるんですよお!!!」

ジョーカーの言う通りの出来事が、闇の中で浮かび上がる・・・

町内会長が、常連客達が、あかねの店に石を投げつけ、父が、母が、弟が、身を寄せ合い震える姿が現われる・・・

「や、止め・・・ヒイヒイヒイ」

包丁を手にした大悟が、正子を、げんきを、刺そうとする場面で、闇の中で真つ赤な血飛沫が飛び散り、サニーは恐怖で身を屈め震えだした・・・

「あなたの家族は・・・あなたがプリキュアだった為に殺されたんですよ!! あなたの所為でねええ!!」

(ウチの所為!?ウチがプリキュア何かになったから・・・)

もう、サニーの精神は限界を向かえていた・・・

幻覚なのか、現実なのか、今のサニーには分からない・・・

戦う気力を失ったサニーのスマイルパクトは石化し、あかねの姿に戻りその場で気を失った・・・

次のジョーカーの獲物はピース・・・

ピースの耳元に囁きだしたジョーカーは、

「あなた、子供の頃にお父様を亡くされてるんでしよう?お母様があなたを女手一つで育て上げてきた・・・」

「そ、それがどうしたの!?!」

ジョーカーは、口元に笑みを浮かべながら、指をパチリと鳴らすと、目の前の闇の中に母千春が浮かび上がった。

「あなたが死んだら、悲しむでしょうねえ・・・いや、それでも無いでしょうか?」

「な、何を!?!」

闇の中に浮かび上がった千春に、大勢の男達が笑顔で話し掛けていた。

「キレイな方ですねえ・・・言い寄る男性も多いんじゃないでしょうか?」



ジョーカーの言葉を表すように、男達が千春に言い寄るも、千春は娘が居ますからと躲して笑顔を浮かべ立ち去る。

「でも、本心ではどう思ってるんでしょうね？」

「ど、どういう事!!」

「つまり、あなたのお母様は・・・あなたが居るから幸せにはなれない!!きつとお母様もそう思っている事でしょう!キュアピース・・・あなたの存在自体が、お母様を苦しめて居るんですよ!!」

「ち、違う!ママはそんな事・・・」

だが、再び闇の中に浮かび上がった千春は、男達に悩ましげな視線を浮かべ、

「やよいさえ居なければ・・・あなた達の誰かと付き合えたんだけど?」

「!!ほ、本当!?!」

「ええ、やよいさえ居なければ・・・ね?」

(ママ・・・何を!?)

千春の発言を聞き、ピースの顔が曇る。千春は一体何を言い出すのかと、だが、千春の言葉を鵜呑みにした男達の言葉が、闇の中、木霊のようにピースの耳に聞こえてくる・・・

娘さへ居なければ、千春さんは自分の道を歩き、幸せになれるのだと・・・

「そう！やよいさえ居なければ・・・私は幸せになれたのに!!」

（嘘!?私の存在が・・・ママを苦しめてるの?・・・私が・・・）

ピースの瞳から涙が零れる・・・

千春は、まるでピースを見捨てたかのように、男達と共に、闇の彼方に消え去ろうと  
していた。ピースは必死に手を伸ばし、

「イヤアアアア！ママ!!置いていかないで！私を・・・置いていかないでええええ!!」

ピースの絶叫も聞こえ無いかのように、千春の姿は闇の中へと消え去った。ピースの  
瞳から止め処なく涙が零れてくる。ピースの目の前に再び姿を現わしたジョーカーは、  
手品のように真つ赤な一輪のバラを取り出すと、

「そう！あなたの存在が、あなたのお母様を枯らして行くんですよお！このようにねえ  
!!」

ピースにヌウと顔を近づけたジョーカーが、手に持っていた一輪のバラにバッドエナ  
ジーを加えると、バラは急激に枯れ果て消滅した・・・

「ヒイヒイイ」

ピースは、鼻水が垂れるのも気付かないかのように無様に怯え、そのまま失神した：  
（ママアア！私を捨てないでええ！もう・・・戦い何てイヤアアア!!）

薄れゆく意識の中、戦意の無くなったピースのスマイルパクトも石化し、やよいの姿

に戻った・・・

更なる獲物を求めたジョーカーの狙いはマーチ・・・

「キュアマーチ・・・あなた、随分ご家族が多いそうですねえ！」

「そ、それが何?!? あんたに関係無いでしょう?」

「大有りですよお!!」

ジョーカーがパチリと指を鳴らすと、マーチの目の前の闇の中に、大切な家族が浮かび上がった。一家の大黒柱、父源次、肝つ玉母さんとも子、大切な弟妹、けいた、はる、ひな、ゆうた、こうた、皆笑顔を浮かべていた・・・

「ですが、この中心的支えが無くなれば・・・どうなるでしょうねえ?」

「あ、あんた、何を言つて!?!」

「簡単な事です! 私がその気になれば・・・あなたを絶望させるのは造作も無いという事です! このようにねえ!!」

ジョーカーのトランプカードが、父源次と母とも子を貫くと、闇の中に浮かんでいた二人の姿が消え失せた・・・

「お父ちゃん! お母ちゃん! ジョーカーく〜!!」

険しい表情でジョーカーを睨み付けるマーチだったが、闇の中で弟妹達の泣き声が響

き渡る。マーチは必死に声を掛けるも、弟と妹には聞こえ無い。

「おい、お前の方で何人か面倒見ろよ！」

「そつちこそ！家は家族を養うだけで精一杯何だよ!!」

親戚同士が、厄介者を抱え込みたくないと言い争う声が聞こえてくる。

一人、また一人、弟が、妹が、嫌そうな顔をした違う親戚達に引き取られて消えて行く……

「イヤアア！聞いた、はる、ひな、ゆうた、こうたああ!!」

必死に手を伸ばすも、弟達も、妹達も、闇の中へと消えて行った……

ガツクリ項垂れ泣き崩れるマーチの耳元に、ヌウつと顔を近づけたジョーカーは、

「可哀想に……これもあなたが招いた……出来事何ですよおお!!」

「アツ……アアアア……」

弟が、妹が、恨めしそうな視線でマーチを見つめる。マーチはその視線に耐えきれず、怯えたように身を縮み込んで謝り続ける……

戦意を失ったマーチのスマイルパクトも石化し、なおの姿に戻っても、なおは怯え、震え続けた……

次にジョーカーが選んだのはハッピー・・・

何とか起き上がるとうとする、ハッピーの顔を覗き込んだジョーカーは、

「何故立ち上がるのです!? もう、勝負は付きましたよ?」

「ま、まだ、私達はキャンディを救い! ピエーロを倒してメルヘンランドを救うんだから・・・」

「救う!? あなたが? アハハハハ! これは傑作!! 私に適わないのに・・・ピエーロ様に何で、勝てる筈が無いじゃありませんか!!」

「そんな事・・・」

「それに・・・」

ジョーカーが指をパチリと鳴らすと、そこには父博司、母育代が映し出された。幸せそうな笑みは消え去り、二人は絶望に沈み、時折言い争う声さへ聞こえてきた。ハッピーは、普段喧嘩した事など見た事が無い二人の姿に動揺する。

「お父さん! お母さん! どうしたの!?!」

「それはそうでしょう! 大切な一人娘が・・・家出をして行方不明!! 互いのせいだと罵りたくもなるでしょう」

「どういう・・・事!?!」

自分が家出!? そんな事思った事など一度も無い、何故そんな事を父と母が思うのか、

ハッピーには理解出来なかった・・・

「オヤア!?これはおかしな事を仰いますねえ?あなた、ご両親にプリキュアだって教えてらっしゃるんですか?バッドエンド王国に行つて来ますなどと・・・言い残して来たらんですかあ?」

「それは・・・違うけど」

「でしょう!そのあなたが遊びに行つたまま戻らない!!立派な家出じやないですか?尤も、私がちよつと細工しちやたんですけどねえ・・・捜さないで下さいって置き手紙を置いてねえ」

「な、何て事を!」

「感謝して欲しいですねえ!あなたは二度と戻れない!!」

「違う!戻つてみせるよおお!!」

「いえいえ、戻れませんよ!ほら、ご覧なさい!!」

闇の中の育代が、荷物を纏め、家を飛び出して行つた・・・

普段、酒などほとんど飲まない博司が、酒に手を出し、部屋の中で暴れた・・・

「ご覧なさい!あなたがプリキュアなどになつたせいで、ご両親は不仲になられた。仮にあなたが帰つたとしても・・・元の生活には、二度と戻れない!!」

(私がプリキュアになつたから!?私のせいでお父さんが・・・お母さんが・・・)

呆然とするハッピーの顔に、自分の顔をヌウと近づけたジョーカーに、ハッピーは思わず悲鳴を上げ、後ろに仰け反った。

「そう！あなたのせいです!!」

「アツ・・・アアア」

ハッピーもまたジョーカーの術中に嵌り、戦意を喪失する・・・

自分がプリキュアになったから、大切な家族にまで危害が及んだと、自責の念に駆られた・・・

ハッピーのスマイルパクトも石化し、みゆきの姿へと戻った・・・

みゆきの瞳から光は消え去り、呆然と闇の虚空を眺め続けていた・・・

(このチームの頭脳・・・キュアビューティ！あなたにも思い知らせて上げますよ!!)

ジョーカーは口元に笑みを浮かべながら、ビューティへと近付いて行つた。ビューティは、ジョーカーを見て険しい表情を浮かべると、

「キャンディを返しなさい!!」

「しつこいですねえ・・・取り戻したかったら、私を倒して見なさいと言つたでしょう?」  
「倒して見せます！皆さん!!」

ビューティが闇の中で一同に声を掛けるも、誰一人返事を返す者は居なかった・・・

思わずビューティの心に不安が沸き起る。何故仲間達の声が聞こえないのか？みんなはどうしたのか？

「ウフフフフ！皆さんは・・・プリキュアになった事を後悔しているそうですよ？」

「な、何をバカげた事を・・・」

ビューティは、不愉快そうに鋭い視線をジョーカーに向けた。ジョーカーは意外そうな表情を浮かべると、

「おやあ!?!あなただだってそう思ってるんでしよう!?!現にあなたは、一度はプリキュアになる事を・・・拒否してるじゃありませんか？」

「あれは・・・」

「違うとでも!?!ああ、そうですねえ！あなたはプリキュアで居れば、キュアマーチを始めとした仲間達と共に居られる。あなた、プリキュアになる前は・・・孤独だったものねえ?？」

「なっ、何を!?!」

「あなたの考えに賛同する者など・・・皆無でしたものねえ？」

ジョーカーが指をパチリと鳴らすと、目の前でれいかの日々の行動が映し出される。生徒会に入ったのも、クラス委員長に立候補したのも、みんなが喜べるような学校にしたいからだった。



「あなた、自分が常に正しいと考えてませんか？でもねえ……他人から見れば、あなたの行動は……押しつけがましい行為何ですよ!!」

「そ、そんな!?!」

動揺するビューティを嘲笑うかのように、再びジョーカーが指を鳴らすと、クラスの人々が、先生達が、れいかの陰口を叩いていた……

（皆さん、誤解です！私はそんなつもりでは……）

激しく動揺するビューティに、ジョーカーは笑みを浮かべながら、

「現実を受け入れなさい！あなたがプリキユアになったのは……正義の為でも何でもない……ただの自己満足何ですよ!!」

（自己……満足!?!そう……なの？分からない、私には分からない!!）

「なお！みゆきさん！あかねさん！やよいさん！……どうして、どうして誰も答えてくれないの……」

ビューティの瞳から涙が零れる……

「お爺様！お母様！お父様！お兄様！」

一人になる恐怖……

ガツクリ膝から崩れ落ちたビューティの戦意は消え去り、スマイルパクトは石化し、れいかの姿へと戻った……

ジョーカーの精神攻撃は、現実と幻の区別を無くし、五人の少女達の心を、ズタズタに踏みにしつっていた・・・

## 2、覚醒

ジョーカーが再び闇から出てくると、闇は消え去り、瞳から輝きが消えたみゆき、あかね、やよい、なお、れいかの五人が呆然と座り込み、その前には石化したスマイルパクトが放置されていた。

「スマイルパクトが石に!?これは・・・皆の衆、一体どうしたでござるっ!」

「みゆきちゃん!あかねちゃん!やよいちゃん!なおちゃん!れいかちゃん!みんな、一体何があつたの?」

ポップが、あゆみが、まるでぬけ殻のように放心している五人に声を掛けるも、五人は答えない。

「ウフフフフ!無駄ですよ!!彼女達の精神は、闇に飲み込まれ・・・崩壊寸前!皆、絶望に沈み、戦う事に恐怖を感じているのですよ!!さあ、では頂きましようかねえ・・・ピエーロ様復活の最後のバッドエナジーを・・・プリキュアから!!」

メルヘンランドの上空を闇が覆い、みゆき達五人からバッドエナジーが放出されていく・・・

「私・・・何で戦ってるんだろう?」

「ウチが戦わなくても・・・プリキュアは仰山居る」

「もう、怖い思い何かしたくない」

「あたしは、一人・・・弟や妹も、もう・・・」

「私の力など、誰からも必要とされていない」

みゆきが、あかねが、やよいが、なおが、れいかが、皆瞳から光を消し、虚空を見つめながら呟いた・・・

「皆の衆! しつかりするでござるうう!!」

「みゆきちちゃん! みんなあ!!」

必死に五人に声を掛けるポップとあゆみ、だが、みゆき達五人には届かない・・・

「無駄ですよ! 最早此処に居るのは・・・生きる事に絶望した、五人の哀れな少女達! それとも、まだこの私と・・・戦おうと言うのですかあ?」

「」「ヒイヒイヒイ!」

ジョーカーは、口元に笑みを浮かべながらみゆき達を威嚇すると、五人は恐れおののき、身を寄せ合って震え続ける。

「皆の衆・・・」

「可哀想ですねえ!? 何の関係も無いメルヘンランド何かの為に・・・彼女達をこんな姿に

したのは・・・あなた達何ですよ!!」

経った数分前にジョーカーに向かっていた五人の勇姿は消え去り、まるで別人のように震え続けるみゆき達を見て、ポップは拳を振るわせた。ジョーカーの言う通り、彼女達をこんな危険な目に合わせたのは、メルヘンランドの住人である自分の責任であるとポップは自責の念に駆られていた。ポップは、みゆき達五人を労るように、目に涙を溜めながら頭を下げると、

「皆の衆・・・今まで忝ない！後は、拙者一人で何とかするでござる!!」

「ポップ、駄目！諦めちゃ駄目!!他のプリキュアのみんなが・・・きつと助けに来てくれる!!」

あゆみは、ポップが責任を感じ、自分達を逃がす時間を稼ぐ為に、ジョーカーと戦おうとしていると感じ、必ず他のプリキュアが助けに来てくれると止めようとする。

「ウフフフ！残念でしたあ！他のプリキュア達は来ませんよ!!今頃、ウルフルンさん、マジヨリーナさん、サデイスさん、デイクレさん、ベガさんと戦って居る最中ですからねえ？」

「そ、そんなあ!?!」

あゆみはジョーカーの言葉に呆然とするも、その目から希望は消えては居なかった・・・

「さて、バッドエナジーも全て集まり、後はピエロ様復活を待つばかり・・・もう彼女達にも用は無くなりました！さようなら！元プリキュアの皆さん!!」

ジョーカーは、五色のトランプカードを取り出すと、怯え続けるみゆき達目掛け投げつけた。

「させんでござるうう！みゆき殿達は・・・拙者の命に代えても、元の世界に帰すでござるうう!!」

ポップは巨大な盾に変化し、ジョーカーの攻撃を受け続けるも、限界を迎え、吹き飛ばされゴロゴロ地面を転がった。

「ポップ！」

思わず顔を覆ったあゆみだが、ポップの名を叫びながら近づき介抱するも、ポップは、「拙者は大丈夫でござる！あゆみ殿、みゆき殿達と一緒に・・・乗ってきた絵本に入り、元の世界に帰るでござる!!」

「そんな事、出来る訳無い！私達は、キャンディを救う為に此処まで来たんだよ!!」  
「でも・・・でも・・・もうみゆき殿達は・・・」

(((キャンディ!?!)))

あゆみとポップの会話の言葉は、みゆき達には届かない・・・

だが、キャンディという言葉聞いた時、心の中に何かを感じた・・・

「無様ですねえ！さあ、止め．．．ン!?あなた、何の真似です?」

ジョーカーが一同に止めを刺そうとしたその時、みゆき達を、ポツプを庇うように、あゆみが両手を広げながら、ジョーカーの前に立ち塞がった。

「みんなをこれ以上苦しめないでええ!今度は私が、みんなを．．．守って見せる!!」

「ハア!?!プリキュアでも無いあなたが．．．何の冗談ですか?そこを退いた方が身の為ですよ!!」

ジョーカーは、何の力も持たないあゆみに何が出来るかと鼻で笑い、忠告を与えるも、あゆみは微動だにせず、ジョーカーを睨み付けた。

「そうですか．．．ならば共に死になさい!!」

ジョーカーがトランプカードを手に持ち身構える．．．

ポツプは必死に身体を動かそうとするも、先程のダメージで起き上がるのがやっとの状態だった。あゆみは背後のみゆき達を振り返ると、優しく微笑み、

「みゆきちゃん達は、まだ出会って間もない私の為に、必死になつてくれた!私の事を守ってくれた!!友達の良い居ない私に、手を差し伸べてくれた!!私の大切な友達を、これ以上．．．苦しめないでええ!!」

あゆみの心の中で、何か弾けた．．．

それを待ち望んでいたように、白い光の柱があゆみの身体を包み込むと、みゆき達は、

目の前の光景を見て、自分達がプリキュアになった光に似ていると呆然と見つめた。

「アンデとルセンの形見ともいえる光の球体が輝くと、

(あゆみ・・・あゆみの思いが、奇跡を起こしたせせ)

(今なら、おいら達の声が聞こえる筈！)

(あゆみに力を!!)

アンデとルセンの声があゆみには聞こえた。

「アンデ!? ルセン!? ど、何処?」

幻聴だったのかあゆみにも分からない・・・

だが、二人の残した光の球体は覚醒し、スマイルパクトに似たシンクパクトと、白

いりボンデコルへと変化を遂げ、あゆみの目の前に現われた・・・

(あゆみ、シンクパクトにデコルをセットして・・・プリキュア! シンクチャージつ

て叫ぶデデ)

(きつとあゆみの力になってくれるせせ)

(あゆみ、キャンディを! みんなを! その力で助けて上げて)

「アンデ・・・ルセン・・・私、やってみる!! プリキュア! シンクチャージ!!」

あゆみがシンクパクトにりボンデコルをセットし、みゆき達のように白い光のパフ

を塗っていくと、塗られた箇所に白い衣装が身に着けられていく・・・

髪は茶色からクリーム色へと変化し、両脇をリボンで止めている三つ編みの髪が、足下まで伸び、胸とお腹辺りに大きなリボンを付けていた。

変身を終えたその姿は・・・正にプリキュアそのものだった!!

「思いよ、届け！キュアエコー!!」

今、新たなプリキュア！キュアエコーが誕生した瞬間だった・・・

3、いざ！バッドエンド王国へ!!

ジョーカーは、エコーを見て驚愕の表情を浮かべた・・・

メルヘンランドが誇るプリキュアとは、五つの光に導かれたハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの五人の事では無かったのかと・・・

「これは一体どういう事です!?何故あの娘がプリキュアに?」

戸惑うジョーカーに、鋭い視線を向けたエコーだったが、みゆき達に近づくと、

「みゆきちゃん、あの時悪い人になった私に、必死に呼び掛けてくれたよね?みゆきちゃん、私の思いが、私の悪い心を洗い流してくれたんだよ!あかねちゃん、やよいちゃん、なおちゃん、れいかちゃんもそう・・・みゆきちゃんの友達なら、自分達の友達も当然だと、私の事を必死に守ってくれた!だから、今度は私がみんなを元に戻して見せる!!みゆきちゃん達五人なら・・・きつと立ち直ってくれる!!」



エコーの思いが五人の少女に伝わる・・・

「「あゆみちゃん・・・」」

「あゆみ・・・」

「あゆみさん・・・」

五人の瞳から涙が零れていく・・・

五人の心は、まだ完全に闇に覆われてはいない。そう確信したエコーは目を閉じ、まるで何か祈るように両手を組むと、

「プリキュアのみんなあ！私に力を貸してええ!!」

エコーの思いが、戦い続けるプリキュア達に響き渡った・・・

「今の声・・・あゆみさん!!」

「ひかり、どうしたメポ？」

TAKO CAFEでテーブルを拭いていたひかりだったが、突然誰かに呼ばれた気がして思わずその手を止めた。ひかりは目を閉じ、感覚を研ぎ澄ませると、自分の心に話し掛けたのは、あゆみだと気付き困惑していた。

「確かに、あゆみさんの声だった！でも、私のイメージに浮かんだのは、見た事が無いプリキュアのような少女!!でも、見覚えがある・・・あの子は間違いなくあゆみさん!!」

突然呆然としたひかりに驚き、メツプルが話し掛けるも、ひかりは更に感覚を研ぎ澄ませると、

「分かりました！直ぐには応援には行けませんけど・・・必ずみんなで向かいます!!」  
「メツプル、ミツプル、ポルン、ルルン、あなた達も力を貸して!!」

ひかりは凜とした表情を浮かべると、アカネに早めに上がれるように頼み込むと、アカネは快諾してくれた。ひかりはメツプル達に、バッドエンド王国との決戦が近づいて居る事を伝えるのだった・・・

ウルフルンと戦って居たブルームは、心の中に声を聞いた気がしていた・・・

「今・・・あゆみちゃんの声が聞こえたような!?」

「ブルームも!?私にも聞こえたわ!!」

「どうやら、事態は急をようしているようね・・・」

「ええ、さっさと狼男を倒して、みゆき達の応援に行かなきゃね!!」

「俺様はウルフルンだ!!」

ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディ、四人は逃げ回りながら戦うウルフルンを、キツと睨み付けた・・・

「みんなも聞こえたよね？」

「エエ！あゆみの声が聞こえた!!」

「私達の力を求めてましたねえ？」

「みゆきさん達に、何かあったのかしら？」

「その可能性が高いわね・・・」

「そうと決れば・・・あなた！逃げ回ってないで、私達と勝負しなさい!!それとも、私達  
が怖いのかしら？」

エコーの声は、プリキュア5とローズの下にも届いていた・・・

ドリーム！ルージュ！レモネード！ミント！アクア！そして、ローズ！声を聞いた一  
同の気持ちは一つ、此処でモタモタしている時間は無い!!

ローズは、時間を稼ぐように逃げながら戦うサデイスを挑発すると、サデイスの顔付  
きが変わるも、

「オツと、その手には乗らないよ！こっちもジョーカーの奴に、役立つ所を見せなきゃな  
らないんでねえ・・・」

プリキュア5とローズ、サデイスの戦いは続く・・・

マジヨリーナと戦って居たピーチ達は、マジヨリーナが開発した新アイテム、チイサ

クナールを使ったマジヨリーナを見つげ出せず困惑していた・・・

「ベリー、パイン、パッション、見つかった?」

「こんな事なら、虫眼鏡でも持つてくれば良かったわ・・・」

「動物さんになら聞けるけど、昆虫さんとはキルンでも話せないし・・・」

しやがみながら探し続けるピーチ、ベリー、パインの三人、パッションも捜していたのだが、心の中にあゆみの声が聞こえた気がして、思わずハツとすると、

「待つて!今・・・あゆみの声が聞こえた気がする」

「エツ!?・・・ほ、本当だ!私にも聞こえるよ!!」

パッションの言葉で、ハツとした三人も心を落ち着かせると、あゆみの声が確かに聞こえていた・・・

四人は顔を見合わせ頷くと、ベリーは一芝居打ち、

「見つからないんじゃないや、しょうが無いわねえ・・・みゆきちゃん達の所にも行きましようか?」

「そうだね!」

「うん!!」

「じゃあ、アカルンを呼び出すわね!!」

ベリーの芝居に、ピーチ、パイン、パッションも加わり、マジヨリーナの事は放つて

置いて、みゆき達の下に向かおうと話していると、

「ま、待つただわさあああ!!」

小槌を持ったマジョリーナが大きくなり、慌ててピーチ達を引き留めようとすると、四人はクスリと笑い、

「「見付けた!!」」

「アツ!?しまったわさああ!!」

ピーチ、ベリー、パイン、パッションに囲まれ困惑するマジョリーナであった・・・

「今の声・・・あゆみちゃん!？」

「何か、尋常じゃ無い必死さが伝わって来ましたね・・・」

「エエ・・・みゆき達に何かあったのかも知れないわねえ?」

ブロッサム、サンシャイン、ムーンライト、皆が心に呼び掛けてくるあゆみの尋常じゃ無い様子に表情を曇らせる。マリンも動揺していたが、複雑な表情を浮かべると、

「応援に行くのは構わないけどさあ・・・でも、もうロボットにされるのは勘弁だよお!!」

以前助けに向かった先で、ロボットにされていたマリンは、変顔を浮かべながら困惑する。ブロッサムはマリンの頭を撫でながら、

「はいはい、今度は私になって上げましょう！」

「出たあ！ブロッサムの上から目線!!」

相変わらずのブロッサムとマリンの行動に、ハアと溜息を付くムーンライトとサンシャインだったが、四人は目配せすると、四方に散りデイクレを追い詰めていく。

「ムツ!?動きが変わったか・・・もしや、我らの魂胆に気付いたか?」

まだ、ジョーカーからの撤退命令は出ていない今、まだまだ四人を引き留めるべく、デイクレは四人から距離を取った・・・

ベガのダークネスボンバーを、ビートバリアで阻むビート、その背後に居たメロディ、リズム、ミュージズは、心の中に聞こえてくるあゆみの声に驚くも、

「あゆみちゃんか・・・私達を呼んでる!?!」

「何かあったのかしら?」

「その可能性が高いわね!」

メロディ、リズム、ミュージズが三人で話し合っていると、ビートバリアに罅が入り、「みんな、話は後!散って!!」

バリアが砕かれたのと同時に、四人が四方に散る。ビートは上空からビートソニックを放ち、ベガを牽制すると、

「私にも聞こえたわ！きつと他のプリキュアのみんなにも届いている筈!!」

「そうだね・・・みんなと集合するまでに、ケリを付けなきやね!!」

再び集結した四人が、ベガを鋭い視線で睨み付けた・・・

（思いが届いた！みんな、ありがとう!!）

エコーに導かれたかのように、鳥のような六つの物体が、羽ばたきながら一同の下に向かってくる、ポップも、ジョーカーも思わず驚きの声を上げた・・・

「な、何です!?!あれは?」

「あれは・・・本!?!まさか、プリキュアの絵本でござるかあ?何故此処に!?!」

伝説の戦士プリキュアの絵本・・・

光の園、泉の郷、パルミエ王国、スウィーツ王国、こころの大樹、メイジャーランド：

六冊のプリキュアの本は、みゆき達を囲むように舞い降りると、両手を広げたエコーに導かれるように、パラパラページが捲られていった。ポップはエコーを見て驚愕し、

「な、何と!?!あの本を導いたのは・・・あゆみ殿、いや、キュアエコーでござるかあ?」

「みゆきちゃん、あかねちゃん、やよいちゃん、なおちゃん、れいかちゃん、みんなの思いを受け取ってええ・・・世界に響け!みんなの想い!!プリキュア!ハートフル・エコー

〜!!」

エコーの胸のブローチから発射された光が、みゆき達の頭上で徐々に広がりを見せた。みゆき達の心に巣くった闇を浄化し、更に六冊のプリキユアの本から発せられた光が、みゆき、あかね、やよい、なお、れいかを照らし続ける。

「あれは・・・なぎささんとほのかさん？」

みゆき達の脳裏に浮かんで来るイメージ・・・

なぎさとほのかを始めとしたプリキユア達が、プリキユアになってからの挫折、苦悩、絶望をしている場面が浮かんでくる。

ブラックとホワイトに、持つて居たプリズムストーンを託し、闇に消えたキリヤを救えず号泣するほのか・・・

ホワイトを浚われ、戦意を失うも、必死にホワイトを救いに目指すブラック・・・

自分の存在意義に悩むひかり・・・

満と薫に救われ、二人の事を救えなかったと嘆き悲しむ咲と舞・・・

消滅するかも知れない恐怖に怯える満と薫・・・

仲違いが発展し、絶望の仮面を付けられ絶望するドリーム達・・・

せつながイスだったと知り、苦悩するラブ・・・

自分のしてきた数々の行ないに苦悩するせつなとエレン・・・



インフィニティとなったシフオンを浚われ、苦悩するラブ達・・・  
最愛のパートナー、コロンを失い、プリキュアの力を失ったゆり・・・  
世界が砂漠化し、今までの戦いが無駄に終わったと嘆いたつぼみ達・・・  
トーン記号を奪われ、キュアモジュールが石化した事を嘆く響達・・・  
そして、それを乗り越え立ち向かう一同の姿が、走馬燈のように一同の脳裏に浮かんでくる・・・

絶望に沈んだみゆき達一同に、まるで本の中の彼女達は、希望を失いそうになる事もある、戦う事に恐怖を覚える事もある。大切なのは、今あなた達はどうしたいのか？と、問い掛けるかのようにだった・・・

五人の意識が活性化されていく・・・

自分達は、何故プリキュアになる事を選んだのか？改めて思い出したかのように・・・  
「みんなも・・・こんな思いを乗り越えて居たの？」

「ウチらが、今したい事・・・」

「私達が此処に来た理由・・・」

「奪われたキュアデコルを取り戻し・・・」

「浚われたキャンディを救う為・・・」

みゆき、あかね、やよい、なお、れいかの瞳が、徐々に光を宿していった・・・

プリキュアの本は再び輝きを放つ・・・

例え離れていても、心は常にあなた達と共にあると語るかのよう・・・

「私達は・・・あんな絶望をみんなが味合わないように、戦ってきた！」

「せや！ウチ恥ずかしいわ・・・あないな幻覚に惑わされるや何て」

「うん！ママがあんな事思いう事、絶対無いもん!!」

「あたしの家族には、あたしが指一本触れさせない!!」

「私は、自分の為にプリキュアになったのではありません！私は、大切な仲間達と共に、平和への道を突き進む!!」

五人の気迫と共に、スマイルパクトは再び輝きを取り戻し、一同がスマイルパクトを手にとると、

「[[[[絶望に何か負けない！プリキュア！スマイルチャージ!!]]]]」

光が収まった時、そこにはエコーと共に並ぶハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの姿があった。

「あゆみちゃん！ううん、エコー!!あなたの声、確かに私達の心に届いたよ!!」

「エコー、感謝するでえ！」

「ううん、みんななら、必ず絶望何かはね除けるって、私信じてた!!」

ハッピーが、サニーが、一同がエコーに微笑むと、微笑み返すエコー、ジョーカーは、

信じられないと言った表情で呆然とし、

「バ、バカな!?!絶望から抜け出すだ何て・・・あなた方、もう一度この私と戦うと言うのですか?」

再びジョーカーの目が妖しく光も、一同はそんな事に動じず、エコーにポップの事を託すと、ジョーカー目掛け攻撃を開始した。

サニーが炎を交えたパンチを繰り出せば、マーチが風を纏った蹴りを放つ、ジョーカーは巧みに攻撃を躲すも、直ぐにピース、ビューティが連係攻撃を繰り出し、ハッピーシャワーがジョーカー目掛け炸裂する。

(クツ、先程とは動きが違う!?)

トランプカードで咄嗟にハッピーシャワーを吸収するも、間髪入れず、サニーファイヤーが、ピースサンダーが、マーチシユートが、ビューティブリザードが、ジョーカー目掛け飛んでいく。

「愚かですねえ?無駄だと・・・バ、バカなああ?」

トランプカードは、五人のプリキュアの攻撃を吸収仕切れず消滅し、その勢いのままジョーカー目掛け突き進む。咄嗟に空中に逃れたジョーカーの目が、赤く輝いた。

「やってくれましたねえ・・・良いでしょう!あなた方をバッドエンド王国に招待してさしあげましょう!!自分達の愚かさを思い知りなさい!!!」

「望むところやあ!!」

「私達は・・・必ずキャンディを救いだして見せます!!」

サニーが、ビューティが、ジョーカーに対し啖呵をきると、ジョーカーは益々イライラしたように、

「その言葉、覚えておきましょう!こちらも全戦力をぶつけて差し上げますよ!!」

トランプの舞いと共にジョーカーは消え失せた・・・

「み、皆の衆・・・よくぞ、よくぞ!!」

立ち直ったハッピー達五人を見て思わず涙ぐむポップ、ハッピーも涙ぐみながら、

「ポップ!心配掛けてゴメンね!」

「心配掛けた分・・・暴れたるでえ!!」

「もう大丈夫だよ!!」

「行こう!バッドエンド王国に!!」

「はい、キュアデコルと」

「[[[[キャンディを取り戻す為に!!]]]]」

メルヘンランドと、ハッピー達の世界では時間の流れが違うのか、決意を述べた一同が、空に浮かぶ満月を見つめた・・・

完

## 第五十九話：プリキュアVSバッドエンド王国!!（前編）

1、決戦の幕開け！

バッドエンド王国に戻ったジョーカーは、五枚のトランプカードにバッドエナジーを加えると、空間に向けて飛ばした。トランプカードは、まるで意思を持っているかのように消えて行った・・・

ウルフルン、マジヨリーナ、サデイス、ベガ、デイクレとそれぞれ戦って居たプリキュア達は、まるで時間稼ぎをしているように戦う一同を見て訝しんでいた・・・

デイクレと戦って居たプロツサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトだったが、「おかしいわねえ・・・こちらが攻撃を仕掛ければ引き、こちらが様子を見れば向こうが仕掛けてくる」

「エエ、何かを企んでいるようですねえ・・・」

ムーンライトの言葉にサンシャインも同意する。二人が訝しんでいたその時、デイクレの下にトランプカードが現われると、

「フン、ようやく撤退の合図が来たか・・・プリキュア共、まんまと我らの策に嵌ったよ

うだな！最早此処に用は無い!!」

「策!?待ちなさい!どういう事?」

「フン、直に分かる・・・直にな!!」

デイクレは、ムーンライトの問い掛けに意味深な言葉を残し、その場から姿を消した。ウルフルン、マジヨリーナ、サデイス、ベガも、時を同じくしてバッドエンド王国へと撤退して行った・・・

「さっきのあゆみの声も気になるわね・・・」

変身を解いた一同、ゆりは携帯に着信があつた事に気付き、着信履歴を調べると、それは佐々木先生からで、十数回掛かつて来ていた。顔色を変えたゆりが、佐々木先生に電話すると、佐々木先生は直ぐに電話に出た。

「先生、遅くなつて申し訳ありませんでした!今まで敵と戦つて居たもので・・・みゆき達に何かあつたんですか?」

「そうなの!キュアデコルとか言つたかしら!?それが全て集まつた時、仮面を被つたピエロのような人が現われて、キュアデコルと、キャンディと言う妖精さんを・・・バッドエンド王国と言う場所に、連れて行つてしまつたの!!青木さん、緑川さん、星空さん、日野さん、黄瀬さん、坂上さんの六人が、もう一人の妖精さんと一緒に・・・バッドエ

ンド王国に取り戻しに向かってしまつて……」

「何ですつて!?!みゆき達がバッドエンド王国に……六人とポップで乗り込んだんですか?」

顔色変え聞き返したゆり、その言葉を聞いたつぼみ、えりか、いつきは、直ぐに携帯を手取るや、つぼみはうららと咲に、えりかは美希とエレンに、いつきはひかりに慌てて電話を掛け、この状況を知らせた。幸いな事に直ぐ側に仲間達も一緒に居ると聞き、せつながみんなを連れて、ゆり達の下に向かうと言つてくれた。

「分かりました!幸いみんなと直ぐに連絡が付きましたから、今から先生の下に向かいます!!先生、今居る場所は!?!」

ようやく、みゆき達がバッドエンド王国へと向かつた事に気付いた一同……間に合うか?プリキュアオールスターズ……

バッドエンド王国……

撤退してきた一同を出迎えたジョーカーであったが、その表情は険しかった……

「皆さん、お疲れ様でした!最後のバッドエナジーをプリキュア達から奪い、後はピエーロ様の復活を待つばかり……」



「オオオ！遂にピエーロ様が!!」

「待つてたオニ！」

「いよいよピエーロ様が・・・感無量だわさ！」

ジョーカーの報告を受けて大喜びするウルフルン、アカオーニ、マジヨリーナ、さしたる興味も無さそうなサデイス、ベガ、デイクレ、ジョーカーは三人を見つめると、

「サデイスさん、デイクレさん、ベガさん、一先ずご休憩下さい！ですが、直ぐにプリキュア達がバッドエンド王国に乗り込んで来ますので・・・お三方のお力を再びお貸し下さい!!」

「何!?プリキュアが此処に来ると言うのか?」

プリキュアがバッドエンド王国に乗り込んでくると聞き、ウルフルン、アカオーニ、サデイス、ベガが驚愕し、デイクレは聞き返すようにジョーカーに問うと、

「はい！忌々しい事ですが・・・ならば、望み通り彼女達を受け入れ、彼女達の最期を、ピエーロ様復活の狼煙と致しましょう!!」

「あたしらはピエーロとやらはどうでもいいけど、プリキュアの奴らは・・・痛めつけてやらなきや気が済まないねえ!!」

「そうだな・・・」

サデイスの言葉にベガも頷く、ジョーカーは、そんな三人を見て含み笑いを浮かべな

がら、

「お三方、期待してますよお!!」

（フッフ、あなた方三人が我が手の内にあれば、彼の力も借りれますからねえ・・・）

ジョーカーは、場内へと消えて行った三人の後ろ姿を見ながらほくそ笑んだ。振り返ったジョーカーが三幹部を見つめると、ジョーカーは険しい表情を浮かべながら、

「さて、ウルフルンさん！アカオーニさん！マジヨリーナさん！この紫玉を差し上げましょう!!」

「紫玉!？」

「そんな物が有ったオニ?」

「一体、赤玉や青玉と何が違うだわさあ?」

紫玉を渡された三人は、興味深そうに弄り回していたのだが、ジョーカーは不敵な笑みを浮かべると、

「簡単に言えば・・・この紫玉を使えば、あなた方の力を5倍に引き出すアイテム!ただし、その代償として・・・あなた方の命を賭けて頂きますけどねえ!!」

「なっ、何だとお!？」

「命を・・・」

「ほ、本気かい!？」

紫玉を使えば、自分達の力は5倍になるも、その代償として命を賭けると聞き、三人は硬直した。手に持った紫玉を呆然としながら見つめた。

「はい！本気ですよ!!あなた方、今まで数々の失敗をしておいて・・・まだチャンスがあると思つてらしたんですか？まあ、使うか使わないかはあなた方しだい・・・ですが、あなた方は・・・またあの時のように戻りたいのですかあ？」

「「ウツ・・・」」

三人の脳裏に、絵本の中の数々の出来事が思い返されていく・・・

絵本の中で蔑まれ、恐れられ、孤独に過ごした日々を・・・

ある者は、顔を見ただけで逃げだし、またある者には、何もしていないのに石を投げつけられる。殺され掛けた事もある。

こんな生活は嫌だ・・・

そんな時に、ジョーカーと出会い、バッドエンド王国の為に働く事を誓った・・・

だが、三幹部は知らなかった・・・

その記憶こそ、ジョーカーに植え付けられた偽りの記憶だという事を・・・

「お、俺はやるぜ!!」

「お、俺様もやるオニ!!」

「あたしだって、あんな思いは真つ平だわさあ！」

「そうですよ！それで良いんですよ!! さあ、三幹部の皆さん！その力を使い、プリキュア達を迎え撃ちなさい!!」

三幹部は悲壮感漂う姿でその場を去った・・・

（ウフフフ、精々ピエーロ様復活迄の時間を稼いで下さい!!）

ジョーカーは、手に持っていたウルフルン、アカオーニ、マジヨリーナのシルエットが入ったカードを、その場で消滅させるのだった・・・

巨大な鷲の姿に変化したポップの背に乗りながら、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、そして、エコー・・・

一同は、不気味さ漂うバッドエンド王国に遂に乗り込んで来た!!

「此処が・・・バッドエンド王国!?!」

「何や、陰気な感じやなあ・・・」

ハッピーが辺りをキョロキョロ見渡しながら呟き、サニーは陰気な感じがするバッドエンド王国を見て顔を顰めた。

「この国の何処かに、キャンディは居るのですね・・・」

「絶対に助け出さなきゃ!!」

「うん!!」

ビューティが、マーチが、ピースが、キャンディを絶対に助け出さなければと改めて決意をしたその時、

「バアカ！お前らにそれは出来ねえよ!!」

不意に近くで声が響き渡り、顔色を変えた一同の前に、険しい表情を浮かべたウルフルン、アカオーニ、マジヨリーナが現われ、ハッピー達一同は身構えた。

「今日こそ決着を付けるオニ!!」

「本気で行くだわさあ!」

顔色変えて身構える三幹部に、向かっていく三人の姿があつた・・・

サニーはウルフルンの前に、ピースはアカオーニの前に、マーチはマジヨリーナの前に、ハッピー達も向かおうとしたその時、三人は振り返り笑顔を向けると、

「ハッピー!ビューティ!エコー!ポップ!あんたらは先に行きやあ!!」

「此処は私達に任せて!!」

「キャンディの事、頼んだよ!!」

サニー、ピース、マーチが、右手の親指を上に向けてウインクする。ハッピーとエコーは、まだ躊躇していたが、ビューティは三人と目配せして頷き合うと、

「ハッピー!エコー!此処は三人に任せて、私達はキャンディの下へ!!」

「でも・・・そうだね!サニー!ピース!マーチ!必ずキャンディを連れて来るから!で

も、それだけじゃないよ・・・必ずみんなと一緒に帰るんだからああ!!」

「三人共、無茶はしないでね!」

頷き合った六人のプリキュア達、腕組みしてその会話を聞いていたウルフルンは、

「遺言は終わったか? そう易々お前らの思う通りにはさせねえよ!!」

この場から去ろうとするハッピー達にも攻撃を仕掛けようとするも、

「そうはさせせん! ドロンでござる!!」

ポップは煙玉を地面に叩き付けると、辺りに煙幕が立ち上った。煙に視界を遮られ、ハッピー達を見失った三幹部、アカオーニが雄叫びを上げ棍棒を振り回し、ウルフルンが大きく息を吸い込み吐き出して、煙幕を吹き飛ばすと、ハッピー、ビューティ、エコーは、ポップが変化した巨大な鷲の背に乗り崖を急上昇していた。

「野郎!」

「そうはさせへんで!!」

攻撃をしようとしたウルフルンの前に、再びサニーが立ち塞がり身構えた。

「みんな、必ず無事で居てね!!」

眼下で今正に三幹部と戦おうとしているサニー、ピース、マーチの身を案じていたハッピーだったが、

「人の心配より、自分の身を案じた方が身の為ですよ!!」

突然目の前にトランプの舞いが現われ、ジョーカーが姿を現わすと、瞬時にトランプカードを投げつけた。だが、トランプカードは氷の盾に阻まれ、ポップから飛び降りたビューティが、ジョーカーに冷気を浴びせて牽制し、

「皆さん、ジョーカーは私が引き受けました! キャンディをお願いします!!」

「「ビューティ!!」」

心配そうにビューティを見つめるも、直ぐに領き、ポップは崖を越えると凄まじい強風が上空に吹き荒れていて、ポップは妖精姿に戻った。一同の視界の遥か先に、巨大な二本の柱が目に入り、

「きつと、キャンディはあの場所に・・・」

「うん! 行こう!!」

エコーの言葉に頷いたハッピー、三人は表情を引き締め、巨大な二本の柱を目指して駆け出した・・・

「悪知恵に長けたあなたの事・・・最後に現われると思っていました!!」

「ほう、私の行動を読んではいましたか・・・流石ですねえ?」

ビューティは、ジョーカーの行動を読んでいた。三幹部が現われたのに、ジョーカー

が出て来ないのは何か訳があるだろうと・・・

「ですが、この私相手に一人で立ち向かうだとは・・・私も舐められたものですねぇ！」  
ジョーカーの視線が赤く輝くと、バッドエンド王国上空に、サニーとウルフルン、ピースとアカオーニ、マーチとマジヨリーナ、駆け続けるハッピー、エコー、ポップ、そして、ビューティとジョーカーの姿が映し出される。

「あなた方全員にも、仲間の最期が見れるようにサービスしてあげましょう！さあ、三幹部の皆さん、行きますよ!!」

四人が白紙の本に黒い絵の具を塗りつぶすと、

「二」世界よ、最悪の結末バッドエンドに染まれ！白紙の未来を、黒く塗り潰すのだ!!  
「三」

ウルフルンの周りに青い空間が・・・

アカオーニの周りに赤い空間が・・・

マジヨリーナの周りに緑の空間が・・・

そして、ジョーカーの周りに紫の空間が現われた!!

「キュアサニー！おまえのサンサン太陽とやらを・・・この俺様が沈めてやるぜ!!」

「ほんならウチは、あんたの毛え刈り取って・・・セーターにしたる！」



ウルフルンとサニー、両者指を鳴らし身構えた・・・

「キュアピース！泣き虫のお前に、俺様を倒せるオニ？」

「私、泣き虫だけど・・・根性はあるもん！」

アカオーニとピース、棍棒を地面に叩き付けて威嚇するアカオーニを、涙目を浮かべながらも、気丈にピースが睨み返した・・・

「キュアマーチ！へそ曲がりのあたしに勝てるかだわさあ？」

「直球勝負だ!!」

「ヒイヒヒヒ・・・マジヨリーナタイムだわさあ!!」

マジヨリーナがバッドエナジーを体内に蓄えると、煙に包まれたマジヨリーナは若返り、サデイスをも凌ぐグラマラスなボディを持った美女の姿で若返り、思わずマーチは目を点にして呆然とした。

「わ、若返った!?!」

「驚いたかい？この姿のあたしは・・・一味違うよ!!」

不敵な笑みを浮かべたマジヨリーナがマーチを見つめた・・・

「友情ゴッコもこれでお仕舞いですよー!」

「お黙りなさい! 私達は誓い合いました・・・必ずキャンディを救い、キュアデコルを取り戻し、みんなで元の世界に帰るんです!!」

ジョーカーは舌をペロリと舐め、トランプカードを両手に持って身構えた。  
今、決戦の幕が切って落とされた・・・

## 2、裏の裏

泣き疲れたキャンディは、少しの間眠っていた・・・

どこからともなく、ハッピー達の声が聞こえてきたような気がしたキャンディは、目を冷ますと辺りをキョロキョロする。だが、やはり気のせいだったのか、自分は捕らわれたままで、キャンディは再びポロポロ涙を零した・・・

だが、ハッピー達の声は、確かにバッドエンド王国に響いていた・・・

顔色を変えたキャンディが顔を上げた時、バッドエンド王国の上空に映し出されたハッピー達の勇姿が飛び込んできた。見る見る嬉しそうな表情になったキャンディは、

「ハッピー! みんなああ! お兄ちゃああん!!」

やっぱりみんなは来てくれた!!

自分の事を救いにやって来てくれた!!

キャンデイの瞳は、涙混じりに輝いた!!

拳と拳が交差する・・・

蹴りと蹴りが交差する・・・

ウルフルンとサニーの戦いは、肉弾戦の攻防を繰り返り広げていた。ウルフルンの雄叫びが辺りに響いた時、サニーがその威力に吹き飛ばされるも、直ぐに受け身を取る。

「紫玉を使うまでもねえ・・・キュアサニー・・・このまま、お前を蹴散らしてやるぜええ!!」

「クツ、何やウルフルンの奴・・・何時もと気迫がちやうわ!でも、ウチも負けへんわああ!!」

雄叫び上げたサニーの身体が炎を纏った!!

「オニオニオニオニオニオニイイ!!」

棍棒を振り回しながら、ピースを追い詰めていくアカオーニ、ピースは飛び退きながら攻撃を躲し続ける。

「逃げてるだけじゃ、俺様には勝てないオニイイ!!」

「ま、負けないもん!!」

頬を膨らませたピースが、振り下ろされた棍棒を両手で受け止め、アカオーニを睨ん

だ・・・

蹴りと蹴りがぶつかり合うも、必死な形相で攻撃を放つマーチと違い、マジヨリーナには何処か余裕が感じられた。

「お楽しみは．．．これからだよ!!」

「エッ!?マ、マジヨリーナが．．．」

マジヨリーナの身体が数十人に分身し、思わずマーチはどれが本物か見分けが付かず混乱した．．．

ビューティの怒濤の攻撃を余裕で捌くジョーカー、ビューティは機転を利かせ、パンチを放つと見せかけ、掌底を打ちタイミングを狂わすものの、ジョーカーはそれすら見切り、二枚のトランプカードをビューティに浴びせた。

「ウフフ．．．おやあ!?!あの攻撃を防ぎましたかあ?残念!!」

「クツ、バカにしてえ!!」

咄嗟に結晶化した氷の盾で、ジョーカーの攻撃を防いだビューティを、ジョーカーは見下すような態度を取った．．．

走りながらも、上空に浮かぶ仲間達の戦う姿を見るハッピー、エコー、ポップ、三人の行く手に、デコルデコールが無造作に置かれていて、思わず三人は立ち止まり訝しんだ。

「何でこんな所にあるんだろう?」

「さあ!?!」

ハッピーの問い掛けに、エコーも思わず小首を傾げ、二人がデコルデコールに近付いて行くと、

「ハッピー・エコー・デコルデコールから離れるでござる!!デコルデコールから、バッドエナジーを感じるでござるぞおお!!」

「エツ!?!」

ポップの忠告を聞き、近付こうとしていた二人は立ち止まり、ポップの言葉を表すように、デコルデコールは、何処かびつくり箱を連想させる黄鼻のアカンベエへと姿を変えた。

近付きすぎた二人は、アカンベエの奇襲を受け吹き飛ばされる。

「キヤアア!!」

「ハッピー!・エコー!」

バッドエンド王国上空に、苦戦するプリキュア達の姿が映し出されていた・・・

七色ヶ丘・・・

佐々木先生の下に集結したゆり達一同は、佐々木先生から詳しい状況を聞き、皆険しい表情を浮かべていた・・・

「みんな、私達もみゆき達の後を追いましょう!!」

ココロポットを手に持ち、構えたゆりに領り返した一同が、変身アイテムを手に持つと、

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」

「[[[[デュアル・スピリチュアルパワー!!]]]]」

「[[[[プリキュア!メタモルフォーゼ!!]]]]」

「スカイローズ!トランススレイト!!」

「[[[[チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!]]]]」

「[[[[プリキュア!オープンマイハート!!]]]]」

「[[[[レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!]]]]」

少女達の身体が、忽ち光の中に包まれ、プリキュアへと変化していった・・・

「みんな、お願い!星空さん達を助けて上げて!!」

「はい、必ず!パッション!!」

佐々木先生に頭を下げられた一同は、力強く頷き、ムーンライトは必ずみんなを連れて戻って来る事を誓った。パッションはアカルンを呼び出すと、

「バッドエンド王国へ!!」

だが、アカルンの力は作動しなかった・・・

思わずプリキュア達から響めきが沸き起り、ブルームはパッションを見ると、

「パッション、これは一体!？」

ブルームの問い掛けに、パッションは首を振りながら、

「駄目だわ! 闇の力が強すぎて、アカルンでも近づけないみたい・・・」

「そ、そんなぁ・・・」

アカルンでもバッドエンド王国には近づけないとパッションが語ると、一同に再び響めきが沸き起り、プロツサムがハッピー達の身を案じ、思わず不安そうな表情を浮かべた。ドリームは何かを閃くと、

「シロップ! ハッピー達に手紙を書いて・・・それを届ける事は出来ないかなあ?」

「ロプ!?! それは試して見ないと、何とも言えないロプ・・・」

「それでも、このまま手を拱いているよりマシだわ! みんな、私達プリキュア5とローズ、ココとナツツで、シロップと共に試して見る・・・向こうにさへ辿り着ければ、みんなをバッドエンド王国に送れる方法が、きっと有るはずだわ!!」

何もしないでこのまま途方にくれているよりは試した方が良いと、アクアもドリームの提案に同意する。

「私も一緒に行きます！また、あゆみさんからのメッセージが届くかも知れない!!」

「うん！じゃあみんな、私達・・・試して見るね!!」

「分かったわ！私達も他に何か手段が無いか捜してみよう!!」

ルミナスもプリキュア5とローズと共に行くと言い、ドリームも同意した。パッションもその申し出に頷き、自分達も何か他に方法が無いか調べると伝えた。

シロップは巨大化し、ドリーム達を背に乗せると大空へと飛翔した・・・

三幹部、ジョーカー、アカンベエ、何時も以上の強さを見せる一同の前に、ハッピー達は大苦戦していた・・・

「ウフフフ！どうです!?だから言ったでしょう！自分達の愚かさを思い知りなさいって・・・我々が本気になれば、あなた方を倒す事など、造作も無い事何ですよ！あんな、小さく、弱く、泣き叫ぶだけの下らない妖精を助ける為に、ノコノコバッドエンド王国に乗り込んで来る何て・・・バカですなあ!!」

バッドエンド王国に、ジョーカーの嘲笑が響き渡ったその時・・・

「お黙りなさい!!私達の大切な友達を・・・愚弄するなど、絶対に許しません!!」



「ハア!? あんな弱つちい妖精が・・・友達ですかあ? アハハハハ! これは傑作・・・あなた、冗談のセンスもありますねえ!!」

ジョーカーのキャンデイに對しての嘲笑を聞き、ビューティは烈火の如く怒りを露わにした。そんな、ビューティを見て、ジョーカーは更なる嘲笑を浮かべるも、

「友達は・・・下らなく何か無いわあ!!」

「辛い時も、楽しい時も・・・いつもそばに居てくれる!」

「みんなで笑ったり、泣いたり、励まし合ったり!」

「一緒に居れば、どんな困難も乗り越えて行ける! そんな力が沸いてくるのおお!!」

「みんな一緒にやなきやダメなの! キャンデイも、友達や家族、みんな一緒にやなきや・・・それが私達の、ウルトラハッピー何だからああ!! か・が・や・けえくくく!!!」

「!!!」

「!!!」

スマイルと言った六人のプリキュア達・・・

ビューティの言葉に同意するように、サニー、ピース、マーチ、エコー、そして、ハッピー、踏ん張り顔だったり、泣き顔だったり、必死だったり、怒っていたり、でもそれが笑顔へと続いている。笑顔でいられる為に、彼女達は・・・戦い続ける!!

サニーが気合いを込め、大岩を持ち上げると、驚愕するウルフルン目掛け投げつけた。

攻撃を食らったものの、ウルフルンは目を赤くして雄叫びを上げると、バーサーカーのように挑みかかった。だがサニーは、指をパチンと鳴らすと、拳に炎を纏い、パンチでウルフルンを吹き飛ばした。

ピースは怖いのを我慢し、アカオーニに電撃を放った。忽ち感電するアカオーニであつたが、雄叫びを上げると一回り巨大化し、棍棒でピースを思いつ切り殴りつけようとするも、ピースは電気を全身に纏つて蓄えると、その姿を消した。ピースの姿を見失い、戸惑つたアカオーニに対し、ピースは電光石火、アカオーニの懐に飛びこんで肘打ちを食らわせた。

マーチは、分身したマジヨリーナの攻撃を、壁面を疾走して躲し、マーチシユートを放つてマジヨリーナの分身を一体潰す。

「ハッ！一体消したからって、どうだつて言うんだい？」

「だつたら、全て消し去るまで・・・ウワアアア!!」

雄叫び上げたマーチは、自分の周囲に無数の緑の球体を出現させると、マーチシユートの連続蹴りで次々マジヨリーナの分身を消し去り、本体にも命中させ、マジヨリーナは地上に落下した。

「エコー!!」

「うん、ハッピー!!」

「せえのおお!!」

ハッピーとエコーは、重心を低くして身構えると、呼吸を計ったようにアカンベエ目掛け突き進み、ダブルパンチでアカンベエを吹き飛ばした・・・

ビューティは、氷を剣のように尖らせ、アイスソードをピュツと一降りすると、ジョーカーを剣先で威嚇する・・・

「フフ、何時までも調子に乗らない方が身の為ですよ!直ぐにその顔を・・・泣きつ面に差し上げましょう・・・サデイスさん!ベガさん!ディクレさん!お待たせしました!!」

ジョーカーの合図を、待ち兼ねていたように、サニーの前にベガが、ピースの前にディクレが、マーチの前にサデイスが姿を現わした。

「このタイミングであるの三人を出すとは・・・ジョーカーめえ・・・」

再び奮い立てた気力を萎えさせるかのように、このタイミングでサデイス、ベガ、ディクレを召喚したジョーカーの策略に、ポップは齒軋りした。

「今日こそ、決着を付けてやるぞ！プリキュア!!」

「この地をあんた達の墓場にしてあげるよ!!」

「覚悟しろ、プリキュア!!」

サニー、ピース、マーチに身構えるベガ、サデイス、デイクレ、更に・・・

「「待ちな!!」」

再び起き上がった三幹部は目の色変えると、

「俺達は・・・負けられないんだ!!」

「絶対・・・勝つオニイ!!」

「必ずお前達を・・・倒す!!」

三幹部が紫玉を掲げると、目の下に黒い稲妻線が浮かび上がり、三人の表情をまるで悪鬼のような形相へと変えた・・・

「マーチ！サニー！ピース！」

不安そうに、上空に浮かぶ三人の画面にビューティが目を奪われた隙を逃さず、レイピアを構えたジョーカーがビューティに突っ込み、反応が遅れたビューティのアイスソードを弾き飛ばした。

「クッ！」

思わず片膝付き苦悶の表情を浮かべるビューティ、

「サニー！ピース！マーチ！ビューティ！キャアア！！」

ハッピーもまた、油断した所をアカンベエの体当たりを受けて吹き飛ばされた。

「みんな大分疲れてる！このままじゃ・・・」

エコーは、再び両手を組んで祈るようなポーズを浮かべると、

（プリキュアのみんなああ！私達に、力を貸してえええ！！）

再びエコーの思いが、プリキュア達の心に駆け抜けたその時・・・

三幹部、三人の魔人、ジョーカー、アカンベエの攻撃を受け、ハアハア荒い呼吸を繰り返していた一同の上空に、ヒラヒラ何かが舞い降りてきた・・・

「な、何や!？」

「これは・・・」

「手紙!？」

「何故、私達の下に手紙が!？」

「一体、これは・・・」

手紙の封に使われていたのは、五色の蝶のマーク！

ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの表情が輝き、上空を見上げた！  
自分達が戦う姿が浮かび上がるバッドエンド王国の空が光輝くと、流星のように幾つかの光が流れた・・・

「全く・・・あんた達、無茶しすぎ！時には仲間を信頼しなさい!!」

「ルージュ!!」

サニーの目の前に舞い降りたルージュが、サニーに手を貸し起き上がらせると、ウルフルンとベガの顔が険しさを増した・・・

「大丈夫ですか?」

「ハ、ハイ!!」

レモネードがピースを見てニッコリ微笑むと、目に涙を浮かべながらピースがコクリと頷いた・・・

「プリキュア!エメラルドソーサー!!」

ミントが発したエメラルドソーサーが、サデイスの攻撃をガードし、片膝付いて居たマーチを援護した。

「ありがとう！」

「どう致しまして!!」

起き上がったマーチは、ミントにニッコリ微笑み掛けると、ミントも笑み返した。

「ハッピー！遅れてゴメンねえ!!・・・あれ、その子は!?!」

「あゆみさんがプリキュアになった姿・・・ですよね?」

「ドリーム！ルミナス！来てくれたんですね!!この子は、ルミナスの言う通り、私達の新しい仲間・・・あゆみちゃんがプリキュアになった姿・・・」

「キュアエコーです!!」

エコーが二人に改めてお辞儀をして、駆けつけてくれた事への謝辞を述べると、ドリームは目を輝かせ、ルミナスはやはりと頷いた。

「凄なおおい！あゆみちゃんもプリキュアになれたんだねえ!!」

エコーの手を取ったドリームが、嬉しそうにブンブン手を振りながら微笑んだ。アカンベエは、雄叫びを上げながら一同に近付き、応援に来たドリーム、ルミナスが、目の前のアカンベエを睨み付けた・・・

「プリキュア！サファイアアロー!!」

サファイアアローの乱れ撃ちが、ビューティに止めを刺そうとしたジョーカー目掛け降り注ぐ、咄嗟に躲したジョーカー目掛け、ローズの肘打ちがヒットし、ジョーカーが吹き飛ぶも、直ぐに体勢を整えた。

「ビューティ、大丈夫？」

「まだ、戦えるわよね？」

「アクア、ローズ、ありがとうございませす！ハイ!!」

ビューティは二人に微笑み掛け、ハイと頷いた。ジョーカーは、目の前に現われたアクアとローズ、空の画面に浮かび上がったルージュ、レモネード、ミント、ドリーム、ルミナスを見て驚愕し、

「バ、バカな・・・どうやってバッドエンド王国に!？」

ジョーカーは、空を飛び交うシロップに気付くも首を傾げ、

（あの妖精の力!?!いや、それだけでは無さそうですなぁ・・・）

「遙々ご苦労ですなぁ・・・しかし、その程度の戦力でバッドエンド王国に乗り込んで来るとは・・・」

目を妖しく輝かせたジョーカーが、空に浮かぶルミナス、ドリーム、ルージュ、レオネード、ミントの映像、そして、目の前に居るアクアとローズを見ると、

「後悔しますよ!!」



トランプカードを投げつけるジョーカーの攻撃を、アクアとローズは手で払い除けると、

「あら!? 私達、一言も私達だけとは言っていないわよ?」

「私達がバッドエンド王国に来たという事は・・・」

アクアとローズの言葉を表すように、バッドエンド王国の上空が赤く輝くと、再び数十個の流星が流れた・・・

「サニー! お待たせえ!!」

「ブルーム、イーグレット、ブライト、ウィンディ」

サニー、ルージユの下に、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウィンディが・・・

「ピース! 大丈夫だった?」

「私達も一緒に戦うわ!!」

「メロデイ、リズム、ビート、ミュージズも」

ピース、レモネードの下に、メロデイ、リズム、ビート、ミュージズが・・・

「佐々木先生から聞いたわ! 何とか間に合って良かった・・・」

「ムーンライト、ブロッサム、マリン、サンシャイン・・・来てくれたんだ!」

マーチ、ミントの下に、ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトが・・・

「ビューティ!遅れてゴメン!!」

「さあ、反撃開始と行きましょう!!」

「大丈夫!」

「ビューティのその目を見れば分かるわ・・・キャンディを必ず救い出しましょう!!」

「ピーチ、ベリー、パイン、パッション・・・ありがとうございます!!」

ビューティ、アクア、ローズの下に、ピーチ、ベリー、パイン、パッションが・・・

エコーの導きは光を纏い、シロツプを、アカルンを、バッドエンド王国へと導いた!!

「みんなあ!!」

駆けつけてくれた仲間達・・・

頼りになる仲間達・・・

ハッピーとエコーは、空に浮かび上がるプリキュアの仲間達の映像を見て目を輝かせ

た・・・

「バ、バカな!? バッドエンド王国には…結界が張つてあるのですよ? 私の許可無く…」  
「形勢逆転ね…・覚悟しなさい!!」

思わずヨロヨロ蹠踉めくジョーカーを見たアクアは、形勢を逆転したと自信に満ち溢れた顔を浮かべた。後ろにヨロヨロ後退したジョーカーであったが、直ぐに踏み止まると、口元に笑みを浮かべ、

「なあくんちゃつて! ウフフフ! 戦いとは、常に二手三手先を読むものです…バルガンさん! お待たせ致しました!! 真打ち登場ですよお!!」

ジョーカーは、大げさなジェスチャーで空に両手を掲げると、バッドエンド王国の上空に、巨大な両目が浮かび上がり、両目が闇から姿を現わすと、二十メートルはあろう、巨大な大蛇に乗った、白い軍服のような服を着た男が、キャンデイが居る祭壇付近に降り立った。

「あの人は!」

ドリーム達にはその姿に見覚えがあつた…

褐色の肌が白い軍服を一段と引き立てるその男は、右目が見えないのか、黒いアイパッチをしていた。耳まで裂けた口の下から生えた二本の牙が見えたその容姿に、確かに見覚えがあつた!!

横浜の、港の見える丘公園で見た魔界の者、バルガンの姿に…

バルガンの出現は、再び形勢を逆転した・・・

### 3、大蛇（オロチ）

「オオ！オオ!!バルガン殿おお!!」

デイクレの表情が輝いた！

自分達は、完全に見捨てられた訳では無かったのだと・・・

デイクレ、ベガ、サデイス、三人の魔人の戦意が向上した・・・

魔界の者の参戦は、紫玉を使った三幹部達をも刺激し、三人が一層の雄叫びを上げ、負の力を周囲に撒き散らした。

「な、何!?あの巨大な蛇は?」

「あそこにはキャンデイが・・・」

「キャンデイイイ!!」

「あれはまさか・・・嘗て三人の魔人と共に、メルヘンランドを襲った怪物では!」

大蛇・・・

十二の魔神の内、四神に劣る八人の魔神にのみ持つ事を許された。龍族と並び、魔界の誇る蛇族の中の精鋭魔獣・・・

嘗てメルヘンランドを襲ったデイクレ、サデイス、ベガが、魔界から召喚した巨大な魔物が大蛇である。デイクレは、親交のあったバルガンから借り受け、大蛇を使いメルヘンランドを蹂躪した事があった・・・

ドリームが、エコーが、ハッピーが、そしてポップが、大蛇を見て驚愕する。バッドエンド王国の空を、うねりを上げて飛び続ける。だが、キャンデイの下に向かうには、目の前で身構えるアカンベエを先ず倒す必要があった・・・

「こんな所でモタモタしてられないね・・・私が突っ込むから、ルミナスとエコーは援護してー！」

ドリームはびっくり箱アカンベエ目掛け駆け出すと、アカンベエは口から火炎を吐いてドリームを牽制した。素早く反応し攻撃を回避するドリーム、ルミナスのバリアが攻撃を防ぎ、エコーがアカンベエを挑発し、自分に注意を引きつけた。

「今だ！プリキュア！シューティングスター!!」

ドリームは、シューティングスターでアカンベエに突っ込むと、アカンベエはその威力に押され、ひっくり返った。

「ハッピー！今よ!!」

「はい！プリキュア！ハッピー・・・シャワー〜!!」

ドリームの合図に頷いたハッピーが、ハッピーシャワーを放ち、起き上がれず藻掻い

ていたアカンベエを浄化し、デコルデコルを元の姿へと戻した。

「これで、デコルデコルを・・・キュアデコルを取返したでござる!!」

だが、喜んでばかりは居られなかった・・・

キャンディの直ぐ側には、バルガンが、巨大なる大蛇が居るのだから・・・

「禍々しい力を感じます・・・皆さん、気をつけて下さい!!」

表情を引き締めたルミナスが、ドリム、エコー、ハッピー、そして、画面を通じてプリキュアの仲間達や妖精達に注意を促した・・・

「あなた方・・・此処に何をしにいらしたんでしたっけ!？」

「な、何をバカな事を・・・言った筈です! キャンディを、キュアデコルを取り戻して見せると!!」

「私達が来た以上・・・好きにはさせないわ!!」

ビューティが、ローズが、身構えながらジョーカーに鋭い視線を浴びせ続ける。アクアはジョーカーの態度を訝しがり、

（おかしい・・・この男、何を企んでいるの?）

ジョーカーの真意が読めず、アクアの額から汗が滴り落ちた。

「ウフフフ、そうでしたねえ・・・ならば、此処で絶望を味わいなさい! バルガンさん!

その妖精はもう役立たずですので・・・大蛇の餌にして下さって結構ですよ!!」  
「な、何ですってええ!？」

バッドエンド王国に響き渡るジョーカーの声を聞き、プリキュア達に戦慄が走った・・・

キャンディを大蛇の餌にするなど、絶対にさせる訳にはいかなかった・・・

「フン、このような小物一匹食しただけで、大蛇が満足するものか!」

「ですよねえ? 幸い、此処には・・・プリキュアという大蛇の餌がゴロゴロ居ますから、満足出来ると思いますけどねえ?」

「そういう事か・・・良かろう! 来い、我が下僕共! 魔界樹マンドレイクよ!!」

バルガンが両手を上げると、それに答えるようにボトボト上空から何か降って来る。それらは地中の中にめり込み、直ぐに地上に出てくると、触手を持ったどす黒い植物のような姿になって、プリキュア達の前に現われた。

マンドレイク・・・

魔界に生えると言われ、根茎が複数分かれたその根には、毒が含まれていた。その根は古来、薬草としても使われ、麻薬効果、催眠効果をも引き起こした。かのクレオパトラも飲んでいたという伝説すらあった。地面から無理矢理引き剥がした時、マンドレイ

クが発した叫び声を聞いた者は、発狂するか、死を迎えると言い伝えられていた・・・

「何!?この薄気味悪いのは?」

「気をつけた方が良いわね・・・どんな攻撃をしてくるか分からない」

驚愕するブルームに、顔色変えたブライトが一同に忠告を与えた・・・

ウネウネ揺らぐマンドレイクは、プリキュアを敵と見なしたかのように、触手で攻撃を開始した・・・

「マンドレイク・・・聞いた事があるわ!確か・・・みんな、マンドレイクと戦う時は、絶対に無理矢理地上から引き抜かないで!!」

ミントは、何かの小説でこのマンドレイクの事を読んだのを思い出し、顔色変え慌てて空に浮かび上がる画面を通じ、一同に語り掛けた。

マンドレイクの不気味な姿を見て、少しビビリ顔のルージュ、困惑の表情を浮かべながら、

「何!?この薄気味悪いの・・・ちよつと、こつち来ないでよおお!プリキュア!ファイヤー ストライク!!」



「ウチも行くでえ！ウチの炎で燃やしたるわああ！！プリキュア！サニー・ファイヤー！！」

ファイヤーストライクが、サニーファイヤーが、マンドレイク目掛け炸裂すると、マンドレイクの群れが、炎に包まれ燃え尽きた・・・

「ルージュ、サニー、マンドレイクをお願い！私達は、此奴らを・・・」

ウルフルンに身構えるブルームとイーグレット、ベガを睨み付けるブライトとウィンディ、両者が突っ込み攻撃を仕掛けた・・・

「何か薄気味悪いよおお・・・でも！プリキュア！ピース・・・サンダー！！」

マンドレイクの群れにピースサンダーを浴びせると、マンドレイクの群れが黒焦げになつていく。マンドレイクに気を取られていたピースに、アカオーニが棍棒で殴りつけようとするのを、レモネードがプリズムチェーンで捕らえると、

「させませんよおお・・・ビート！ミューズ！」

「OK！プリキュア！ビート・・・ソニック！！」

「シ、の音符のシャイニングメロディ！プリキュア！スパークリング・・・シャワー！！」  
ビートソニックが、スパークリングシャワーがアカオーニ目掛け炸裂すれば、メロディとリズムが、ディクレと激しい肉弾戦を繰り広げた・・・

「ミ、ミントオオ!」

「大丈夫よ! 断末魔の悲鳴さへ聞かなければ、マンドレイクは恐れる事は無い筈よ!」

ミントにしがみつき、動揺するマーチを励ますミント、サンシャインはそれを見てクスリと笑うと、

「マーチ! あなたは、マジヨリーナとの戦いに集中して!! マンドレイクは私が・・・サンシャイン! フラッシュシュ!!」

サンシャインは、手から光の光弾を無数に放つと、マンドレイクの群れを光に包み込んで消滅させていった・・・

「あ、ありがとう! マジヨリーナ相手なら・・・」

「あたしが相手なら何だって言うんだ・・・プリキュアアアア!!」

マーチとマジヨリーナ、蹴りと蹴りがぶつかり合った・・・

「貴様には、あの時踏みつけられた借りがあつたねえ・・・」

「決着を付けましょう! ブラックとホワイトの分まで・・・私は戦い続ける!!」

ムーンライトとサデイスが正面から激突した・・・

「あのう・・・私達も居るんですがあ?」

「あたし達・・・完全に出遅れちゃったじゃない!」

辺りを見回し、相手が居なくて途方に暮れるプロツサムとマリンであった・・・

マンドレイクの群れを駆逐しながら突き進む、ハッピー、ドリーム、ルミナス、エコー、取り戻したデコルデコールを持ちながら走り付けるポップ、五人の目に、巨大な柱に挟まれた祭壇が見えてくる。

「「「キャンディ！」「」」

「ハッピー！みんなあーお兄ちゃああん!!」

泣き叫ぶキャンディ、祭壇に近付く四人を威嚇するように、巨大な大蛇が低空で飛行し、五人は思わず戦慄する。近くで見た大蛇の迫力は想像を絶していた・・・

「プリキュアと言ったな？やはり貴様らと戦わせるには、マンドレイクでは力不足であったか・・・では、お前達の相手は・・・この私自らしてやろう!!」

腕組みしたバルガンがドリーム、ハッピー、ルミナス、エコーに掛かって来いと一同を挑発すると、ドリームは険しい表情を浮かべながら、

「あの時、私達と戦う気は無いって言ったくせに・・・嘘つき!!」

「嘘!!フツ、ここはお前達の住む世界か？此処で戦う事に、何のお咎めも受けん!!」

「そんなの屁理屈よ!!」

「文句があるなら・・・腕ずくで退かしてみろ!!」

頬を大きく膨らませたドリームがバルガンに文句を言うも、バルガンは一笑に付した。アイコンタクトをしたハッピーとエコーが、バルガン目掛け攻撃を仕掛けようとするも、バルガンの負の力を浴びて吹き飛ばされた。

「ハッピー！エコー！このおお・・・プリキュア！シューティングスター!!」

シューティングスターでバルガン目掛け突撃したドリームであったが、バルガンは右手一本でシューティングスターを受け止めると、左手でドリームを思いつ切り殴り飛ばした。

「そんな、ドリームのシューティングスターを右手だけで受け止める何て・・・」

「あいつ・・・強いわね!!」

驚愕するアクアとローズ、苦戦するドリーム達を、空に浮かぶ映像で見たムーンライトは、

「アクア、ミント、ルージュ、レモネード、ローズ、あなた達はドリームの援護に向かつて!!」

「そうです！私達に任せて下さい!!」

「大船に乗った気で、あたし達に任せました！任せました!!」

ブロッサムとマリリンも同意し、ドリーム達の下に向かうように言うと、さつきまで戦

う相手が居なくて困惑していた二人を見て、醒めた視線を浮かべるシプレ、コフレ、ポプリであった。

シロツプが下降し、中に居たココとナッツと共に、アクア、ミント、ルージュ、レモネード、ローズがドリーム達の下へと飛び上がった・・・

「貴様らに、あの妖精は・・・救へはしない！さあ大蛇よ、生け贄を食らうが良い!!」

バルガンが大蛇に命じたその時、ハッピーが、エコーが、ドリーム、ルミナス、ポツプが戦慄する。再び立ち上がった一同が、バルガン目掛け攻撃を開始するも、バルガンを突破する事は出来なかった・・・

ポルン、ルルンは妖精姿になり、バッドエンド王国の空を見つめると、

「未来へ導く光の王子・・・ポルン！」

「未来を紡ぐ光の王女・・・ルルン！」

「プリキュアアア!!キャンディを助けてポポオオオ!!」

ポルンとルルン、二人の身体から、凄まじい輝きがバッドエンド王国上空に浮かび上がった。

「な、何だ?!これは?」

さすがのバルガンも、二人から発せられた光の力に驚愕する。だが、光は闇の中で消

え失せ、ポルンとルルンは、悲しげな表情で耳を塞ぎながら落ち込み、

「駄目ポポ……」

「届かないルル……」

「何事かと思えば……目障りだ！消えろ!!」

バルガンは、負の力をポルンとルルンに浴びせようとすると、二人は怯え、震え出す。ルミナスが間一髪割って入り、バルガンの攻撃を防ぎきった。

「みんなに手出しさせない!!」

両手を広げ険しい表情を浮かべるルミナス、ハッピー、エコー、ドリームも立ち上がり、

「そこを退いてええ!!プリキュア！ハッピー……シャワー!!」

「無駄だ!!」

再び右手一本で受け止めたバルガンであったが、ハッピーシャワーの威力で、少し後ろに押され出し、更にドリームが雄叫びを上げると、

「私達は、キャンディを……救うんだからあああ！プリキュア！シューティングスター!!」

再びバルガンに対しシューティングスターを放つドリーム、バルガンは左手で受け止めようとするも、その威力を止められず、右手を使い何とか受け止め、ドリームを再び

吹き飛ばした。

(こいつら・・・攻撃する度に力が増しているような!?)

バルガンは忌々しげな表情を浮かべると、目を金色に輝かし、

「調子に乗るなああ!!」

バルガンの肉体に変化が巻き起こる・・・

腕が、足が、植物のように変化し、足は大地に根を張り、腕は無数に枝分かれして、手がドリーム、ハッピー、エコー、ルミナス、ポップを捕らえ締め付ける。逃げ惑うポルンとルルンを助けるべく、コミュニケーション姿から妖精姿になったメツプル、ミツプルが、触手から二人を庇い捕らえられる。逃げ続けていたポルン、ルルンも捕らえられ、一同から悲鳴が漏れる。

「素晴らしい!素晴らしいですよ!バルガンさん!!」

「バカめ、バルガン殿を本気にさせるとは・・・プリキュア!貴様らはこれで終りだ!!」  
ジョーカーが、デイクレが、バルガンの実力を見てほくそ笑み、画面を見ていたプリキュア達から悲鳴が漏れた・・・

「さあ、バルガンさん!プリキュア共に絶望を見せつけて上げて下さい!!」

狂気の笑みを浮かべたジョーカーが、バルガンに進言すると、バルガンは大蛇を振り

返り、

「さあ、やれ！大蛇!!」

「キィシヤアア!!」

バルガンの命を受けた大蛇が、獲物を見付け急降下してくる。それを見たキャンディは大泣きしながら、

「クウウルウウウ」

「イヤアアア!!キャンディイイイイ!!」

ハッピーとエコーの叫び声が、画面を見ていたサニー、ピース、マーチ、ビューティの悲鳴が空しく響き渡ったその時……

祭壇の上の上空から光が舞い降りた……

光が祭壇のキャンディを照らした……

キャンディは、眩しそうに薄めを閉じるも、光の暖かさを感じていた……

「あれは……さつき、ポルンとルルンが放った光なの?」

ルミナスにも状況が飲み込めず、困惑の表情を浮かべる。ポルンとルルンは何かを感じたのか顔を上げると、

「ポポ!!」

「ルル!!」



苦悶の表情を浮かべながらも、光の輝きを見つめた一同、戦って居たプリキュア達と妖精達も、シロップに乗っていたプリキュア5とローズ、ココとナツツも、バッドエンド王国の者達も、呆然としながら空に浮かぶ画面を見つめ続けた・・・

戸惑っていた大蛇だが、光に怯む事無く、再びキャンディ目掛け急降下をかけた。だがその大蛇の巨体が、への字に曲がりながら吹き飛び、激しく地上に叩き付けられのたうち回った。

「な、何だ!?何が起きた?」

大蛇の巨体が吹き飛んだ事に、バルガンが驚愕の表情を浮かべた。大蛇を叱咤し、さっさとキャンディを餌食にしろと命じるも、大蛇は奇声を発しながら宙を見つめ続ける。

(な、何だ!?大蛇が・・・怯えているだろ?)

バルガンは、大蛇、そして、キャンディが見つめる視線の先を見上げた・・・

視線の先は、巨大な二本の柱の上を見つめていた・・・

そこには、二つの人影が立って居た・・・

「貴様ら・・・何者だ!?!」

険しい表情を浮かべたバルガンが、二つの人影に問うと、二つの影は柱からジャンプし、祭壇の前に降り立ち合流すると、背後を振り返りキャンディに微笑みを向けた。

「クウウルウウ!!」

キャンディは、涙混じりの笑顔を二人に浮かべ返した・・・

黒と白、二つの衣装を身に纏った二人は、バルガンと大蛇をキツと見つめると、

「光の使者・キュアブラック!」

「光の使者・キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!!」

「闇の力のしもべ達よ!」

ホワイトが、バルガンを険しい顔で睨みながら指差し、

「とつととお家に帰りなさい!!!」

ブラックが、大蛇を指差し睨み付けた!

キュアブラック・・・

キュアホワイト・・・

参戦!!

第五十九話：プリキュアVSバッドエンド王国!!（前編）

完

## 第六十話：プリキュアVSバッドエンド王国!!（後編）

1、ふたりはプリキュア

ブラックとホワイトが帰って来た!!

二人の無事な姿を見たプリキュア達は、驚愕の表情を浮かべながらも、皆涙ぐんでいた・・・

そんなプリキュア達とは逆に、サデイス、ベガ、ディクレの表情は醜く歪んでいた。ブラックとホワイトは、あの時光と共に消滅したと思っていた。だが、二人のプリキュアは生きていた!!

ジョーカーは、上空に浮かぶ映像を見ながら顔を顰め、

「サデイスさん、ベガさん、ディクレさん・・・これはどう言う事です!?!キュアブラックとキュアホワイト、二人はあなた方に敗れ消滅した・・・確か、そう仰って居られましたよねえ?私の聞き違いでしたかあ!?!」

上空に浮かぶ映像から、ジョーカーの皮肉混じりの嫌みが三人の魔人に浴びせられ、三人は忌々しそうにブラックとホワイトの映った画面を見ると、

「バ、バカな・・・あの二人は消滅したはずだ!?!」

「畜生・・・生きていたのかあああ?」

「おのれえ、プリキュアめええ!!」

デイクレが、サデイスが、ベガが、怒りで全身を振るわせた。今にもブラックとホワイトの下に向かいそうな三人に、プリキュア達が待ったを掛けた!!

「あなた達を・・・ブラックとホワイトの下には行かせない!!」

ムーンライトの言葉を表すように、ブルーム達が、メロディ達が、プロツサム達が、サデイス、ベガ、デイクレの前に立ち塞がった。ブラックとホワイトの出現は、プリキュア達の気持ちを再び奮い立たせていた・・・

「ブラックウウ!!」

「ホワイトオオ!!」

メツプルが、ミツプルが、涙を流しながら二人の名を呼び続ける。ブラックとホワイトは二人に微笑み返すも、一同がバルガンの触手に捕らわれているのに気付くや顔色を変え、

「ブラック、サンダー!」

「ホワイトサンダー!」

「プリキュアの、美しき魂が!」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「プリキュア！マーブルスクリュー！」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて一旦引いた手を前に突き出すと、

「マックス〜!!」

ギュツと握り合った手と手・・・

黒と白の稲妻が、バルガンの触手を一蹴して消し去り、触手に捕らわれていたドリム、ハッピー、エコー、ルミナスと妖精達を解放する。

「ブラツクウウ!!」

「ホワイトオオ!!」

解放されたメツプルとミツプルは、二人に駆け寄り、まだ大蛇が近くに居るのをものともせず、ブラツクとホワイトに飛びつくと、ブラツクとホワイトも笑みを浮かべながら二人を抱きしめた。コミュニケーション姿に変化したメツプルとミツプルが、ブラツクとホワイトの腰のケースに収まる。

「やっぱ、二人が居ないと・・・物足り無いよねえ？」

「そうね・・・」

ブラツクとホワイトは、顔を見合わせ合いクスリと笑い合った。

（す、凄い!? 私達が身動き出来なかったこの触手を・・・）

ハッピーは、改めて二人の強さを実感するも、ルミナスの見立ては違っていた。

（ブラックとホワイト・・・二人は、以前よりも数段力を増している気がする!?）

今二人が放ったマーブルスクリューマックスの威力は、以前とは桁違いの威力を放っていたとルミナスは思った・・・

「グウウ、おのれええ!!」

ブラックとホワイトに邪魔をされたバルガンは、二人を忌々しげに睨み付けるも、ドリームがその視線に割って入り、バルガンを睨み付ける。

「待ちなさい!あなたの相手は私達よ!!」

「みんな!!」

その時、ドリームの側に舞い降りたルージュ、レモネード、ミント、アクア、ローズ、合流した一同がバルガンに身構えた。

呻くバルガンを睨み付けるプリキュア5とローズ、ブラックとホワイトは、ルミナス、プリキュア5とローズ、ハッピー、そして空に映る仲間達を見ると、自然に笑みが浮かんだ。アクア達一同も背後を振り向くと、

「二人共・・・お帰りなさい!!」

「待ちくたびれたわよ!」

アクアとローズが、微笑みながらブラックとホワイトに言葉を掛けると、二人も微笑

み返し、ブラックは右手の親指を突き立て、

「みんな、お待たせえ!!」

「ハッピー!今の内にキャンディを解放して上げて!!」

ホワイトはハッピーを見ると、キャンディを解放してあげるように言葉を掛けた。バ  
ルガンが手出ししないように、プリキュア5とローズが鋭い視線で威嚇する。

「グウウウウ!!」

唸りながらブラックとホワイトの周りを這い回る大蛇は、口を大きく開けると、口の中  
から、紫掛かった唾液を飛ばした。ブラックとホワイトは瞬時に躲すも、大蛇の攻撃  
が当たった大地が、ジユウつと熔け始める。

「ブラック、気をつけて!この大蛇は・・・私達がメルヘンランドで戦った、あの時の蛇  
のようだわ!!」

(メルヘンランドで戦った!?今、ホワイトはそう申されたな?それがしが知る限り、お二  
方はメルヘンランドに来た事は無い筈でござるが・・・)

ホワイトの言葉を聞いたポップは、ブラックとホワイト、二人がメルヘンランドに来  
た事は無かった筈だが、と首を捻った。

このまま大蛇を放って置いて、不意打ち攻撃を食らっては不味いと考えたブラック  
は、

「本当は、ニョロニョロ系は苦手何だけど・・・ハッピー達の邪魔はさせない!!」

ブラックは単身巨大な大蛇目掛け駆け出すと、大蛇はブラックを威嚇するように、身体を伸ばしたり縮めたり、前後左右に揺らしたりするも、ブラックは怯まず、大蛇の顔目掛け接近するや、大蛇の顔面にパンチの連打を浴びせ続ける。

「ダダダダダダダダ!・・・ダアアアア!!」

大蛇は悲鳴にも似た声を上げ、上体を仰け反らした。更に力を込めたブラックは、全体重を乗せた強烈な右ストレートを放ち、大蛇はその威力の前に吹き飛び、岩場に激突して地響きを起こし、祭壇から遠ざけられた。

バルガンが呆然とする・・・

仮にも、魔界が誇る魔獣の中でも、最上級クラスの大蛇を一蹴するブラックの姿が信じられなかった・・・

「バ、バカな!?大蛇だぞ?あの巨体を、パンチ如きで吹き飛ばすなど・・・奴は化け物か!?!」

「そこ!人間きの悪い事言わないでよねえ?大体、どう見ても化け物はあるたの方でしよう!?!ハッピー、今の内に・・・」

頬を膨らましてバルガンを指差し文句を言うブラックは、ハッピーに、大蛇が離れた今の内にキャンデイの下に向かうように言うと、



「ハイ！キャンディイイ！！」

ハッピーは嬉しそうに頷き、エコー、ポップを伴いキャンディの側に行くと、キャンディは大泣きしながら、

「ハッピー！みんなああ！！」

解放されたキャンディは、ハッピーに抱きつきワンワン泣き崩れた。キャンディに微笑み掛けるハッピー、頭を優しく撫でるエコー、ポップは涙を拭いながら、キャンディの無事な姿に安堵した。ブラックは、ホワイトの側に戻るとエコーを見つめ、

「所で・・・その子は？」

「そう言えば・・・」

ブラックとホワイトが、エコーを見て小首を傾げると、ハッピーがエコーを指差し、  
「あゆみちゃんがプリキュアになった姿で、キュアエコーです！！」

「横浜では、助けてくれてありがとうございました！！」

エコーが深々お辞儀をすると、ブラックとホワイトは顔を見合わせながら笑みを浮かべ、

「そつかあ、あゆみちゃんもプリキュアにねえ・・・よろしく！キュアエコー！！」

満面の笑みを浮かべながら、エコーによるしくと声を掛けるブラック、ホワイトはエコーをジッと見つめると、

「光の園に居た時……どこかで聞いた事ある声だと思つて居たけど、今確信したわ！私達を導いてくれたのは……エコー、あなたね!!」

「エツ?!私は特に……」

エコーに思い当たる節は無かつた……

確かにみゆき達を救う為に、プリキュア達に力を貸して欲しいと心の中で思つたが、その思いは、ブラックとホワイトにも届いていたのだろうか？エコーは不思議そうに小首を傾げた。

「私達、光の園で誰かの声を聞いたの！力を貸してつて……それでクイーンが止めるのも聞かず、光の園から飛び出したままでは良かつたんだけど……」

「時の狭間に嵌つて迷つて居た時……現われた光が私達を此処まで導いてくれたの！あの光は……ポルン、ルルン、あなた達がしてくれたのね？ありがとう!!」

「エコーも、ありがとう!」

ブラックとホワイト、二人に感謝されたポルンとルルンは、顔を見合わせ嬉しそうにハシヤギ、エコーは恥ずかしげな表情を浮かべた。

その時、唸りながら大蛇が再び動き出し、その不気味に這う姿を見たブラックは、変顔を浮かべながら、今度はホワイト行つてよと頼み込み、ホワイトに苦笑される。

ブラックらしい姿を見て、本当に二人は戻つて来たと改めて実感したルミナスは、

「ブラック・・・ホワイト・・・良かった！無事で・・・良かった」

ルミナスの瞳から大粒の涙がこぼれ落ちていく・・・

堪えていた感情が止め処なく溢れてきた・・・

顔を見合わせたブラックとホワイトは頷き合おうと、マーブルスクリユーマックスを大蛇に浴びせるも、大蛇はダメージを負うものの、二人の攻撃を何とか耐えきった。

「マーブルスクリユーマックスでは、メルヘンランドの時見たいに、大蛇は倒せない見ただね？」

「この悪しき力が漂う場所では・・・スパークルブレスもきつと使えないわね？」

ブラックとホワイトが頷き合おうと、ルミナスを振り返り、

「ルミナス！力を貸して!!」

「ハ、ハイ!!」

二人に力を貸して欲しいと頼まれたルミナスは、嬉しそうにハイと頷き、二人の下に合流すると、バトンを手にしたルミナスから発せられた虹の光が、ブラックとホワイトを包み込む。

「漲る勇氣！」

手を回転させながらブラックが構え、

「溢れる希望！」

ブラックと同じように手を回転させホワイトが構えた。

「光輝く絆とともに！」

ハーティエルバトンを構えたルミナスが、そして足を広げ踏ん張るブラックとホワイトが気合いを込め、ブラックとホワイトの前方に巨大なハートが浮かび上がると、

「エキストリ〜ム!!」

「ルミナリオオオ!!」

ブラックとホワイトの叫び声がハモリ、気合いを込めたルミナスの叫びが響き渡る……

虹の輝きが、大蛇の巨体を一気に飲み込み、消し去った……

「ヤッター〜!!」

「フウ……何とか倒せたわね！」

ブラックとホワイトが顔を見合わせ、笑顔を浮かべた。

（お二人は気付いて居ないんだわ……今のルミナリオの力も、以前とは比べものに成らない！お二人の力は……格段に上がってる!!）

ルミナスは確信し、驚愕した表情で二人を見つめた……

「ブラック……ホワイト……」

二人の力強さを目の当たりにし、ブラックとホワイト、二人の無事な姿を、空に浮かぶ映像で見っていたムーンライトの瞳から、ポロポロ涙が零れる。大蛇を倒した二人に、画面から響き渡るプリキュア達の声が、自分達の名を次々に呼ぶ様子に、ブラックは小首を傾げ、

「やだなあ、みんな大げさだよ！でも、何時の間に横浜から移動したの？」

「「「エツ!」「」」

思わず側に居たルミナス、プリキュア5、ローズ、ハッピー、エコーの目が点になった。

「エツ!?! って、こっちがエツ!?! だよ！数時間離れてる間に・・・」

「ブラック、何暢気な事言ってるメポ！あれから三週間は経ってるメポ!!」

「「エツ!?!」」

今度は二人が思わず目を点にし、顔を見合わせたブラックとホワイトは、横浜の地で戦ってから三週間過ぎたと教えられ、二人は大慌てで、

「エエエエ!?! 何時の間にそんなに時間が経ったのおおお?」

「私達・・・まだあれから数時間ぐらいしか経ってないと思ってたの」

ブラックとホワイト、二人の感覚では、横浜の地から飛ばされてから、まだ数時間程度に感じられていた・・・

## 2、奮い立つ少女達

バルガンは惚けたように呆然としていた・・・

大蛇が倒されるなど、想像だにしていなかった・・・

「バ、バカな!?!大蛇を倒しただど?しかもたつた三人で・・・し、信じられん!?!」

「バルガン殿!素奴ら二人こそ、嘗てメルヘンランドで、我ら三人をロイヤルクイーンと共に封印したプリキュア!バルガン殿にお借りした大蛇も、素奴ら二人によつて深手を負わされ、魔界へと逃げ戻つた事がありました!!」

「バカ者!ディクレよ、何故先に言わんのだ!?!プリキュア、これ程までとは・・・」

画面を通じて話し掛けたディクレの話聞いたバルガンは苛立ち、プリキュアを甘く見ていた事を後悔し、激しい動揺を見せた・・・

十二の魔神の内、四神を除く八人に与えられし大蛇・・・

火、水、氷、雷、風、毒、土、闇・・・

八体の大蛇がそれぞれ属性を持ち、バルガンの大蛇は、毒の属性を持つて居た・・・

(大蛇を失うとは・・・このまま魔界に戻れば、カイン殿とアベル殿に会わず顔が無い!!)バルガンは雄叫びを上げると、プリキュア5とローズの隙を付き、触手でブラックと

ホワイトの手を捕らえた。だが、

「こんなもので・・・ハアアアア!!」

「ハアアア!!」

ブラックとホワイト、二人が力を込めると、触手は呆気なく引き千切られ、バルガンは呆然とする。ブラックは、そんなバルガンにアツカンベエーと舌を出した。

「アハハ、やっぱブラックはこうじゃなきやー!」

「ブルーム・・・褒め言葉じゃ無いわね?」

映像から聞こえるブラックの声を聞き、思わずブルームが笑みを浮かべながらポツリと呟き、イーグレットも苦笑混じりにブルームに突っ込みを入れる。

「おのれえ、舐めやがってええ!!」

画面で見るブラックの態度を見てベガが激昂する!瞬時に身構えたブルームとイーグレットは、

「あんたの相手は私達でしょう!」

「二人の下には行かせないわ!!」

ベガに突進した二人が、ベガと至近距離での格闘戦を開始した・・・

一方、ウルフルンと戦うサニーと、サニーの援護に回るブライト、ウインディだった

が、

「キュアサニー……。テメエだけでも倒さなきゃ、俺の気が済まねえんだよお!!」

咆哮を上げたウルフルンの気迫が一段と増し、サニーに対し、パンチとキックのラッシュを浴びせる。ウルフルンの蹴りを受けたサニーが吹き飛ぶと、直ぐに援護しようとするブライトとウインディ、だが片膝付いたサニーは、ブライトとウインディを制止すると、

「すみません……ウルフルンは、ウチを指名しとるんで、ウチに任せてくれますかあ?」  
「何を言ってるの!?これは……。ブライト?」

サニーが、ウルフルンとの一対一の戦いに拘っている事に、ウインディが顔を顰めながら窘めようとするのを、首を振りながらブライトが止めた。互いの信念をぶつけ合うとすると、二人の意気を感じたブライトは、ウルフルンとの戦いは、サニーに任せることが賢明だと感じる。ブライトは、真顔でサニーを見つめると、

「分かったわ……私達はブルームとイーグレットの援護に向かう!その代り、サニー……必ず勝ちなさい!!」

「おおきに!!」

ブライトは手でサニーに合図を送ると、サニーも口元に笑みを浮かべながら頷いた。ブライトは、まだ後ろ髪惹かれる思いをしていたウインディの背を軽く叩き、二人はそ



の場を共に離れ、ブルームとイーグレットの側へと向かった。

ゆつくり立ち上がったサニー目掛け、再びウルフルンが襲いかかるも、サニーも真つ向から受けて立ち、拳と拳がぶつかり合う。

「ウチも、負けへんわああ！ウチ、最初はプリキュアになっても、何処か遊び半分の所が合った気がする。でも、ハッピー、ピース、マーチ、ビューティ、沢山の先輩達と一緒に戦ってる内に理解したんや・・・バレーやお好み焼きと同じ、今ならハッキリと言える！プリキュアもそうや・・・ウチが大切なもんは、全部みんなと繋がった!!」

「それが何だ！全部ぶっ潰してやるよおお!!」

覚醒したサニーの全身から、凄まじい炎が巻き起こる。思わずその威力に戸惑ったウルフルンだったが、負けじと更なる雄叫びを上げ、サニーに突っ込んだ。

「みんながおつたら、どんな時でも100倍も1000倍も・・・力が沸いてくるんやああ！プリキュア！サニーファイヤ〜・・・バーニ〜ング!!」

凄まじい巨大な火の玉が、サニーの頭上に浮かび上がり、サニーが上空高くジャンプし、渾身の力でウルフルン目掛け放つと、ウルフルンは両手で押さえ、必死に堪え続ける。

「グウウウーち、畜生ううう!!」

だが、巨大な炎の玉に押され、ウルフルンの身体が地面に埋もれていった。サニーは、

ハアハア荒い呼吸をしながら、仰向けでその場に倒れ込んだ・・・

「ハハ・・・もう、ヘトヘトやあー!」

闇の空に浮かぶプリキュアの仲間達を見ると、自然と顔が綻んだ・・・

(ウルフルンの奴め、不甲斐ない・・・だが、あいつはもうほとんど動けない筈だ! 今がチャンスだな!!)

ベガは、倒れ込んでいるサニーに狙いを付けると、ブルームとイーグレットに突っ込むと見せかけたフェイントで二人を欺き、サニー目掛け突進した。

「しまった!？」

「待ちなさい!!」

顔色変えてその後を追うブルームとイーグレットだったが、ベガの右手を、追いついたブライトが掴むや、力を加えて右腕を捻り上げた。そのまま呻きながら跪いたベガを、見下すような視線を向けたブライトとウィンディは、

「何処に行こうというのかしら?」

「弱っているサニーを狙う何て・・・あなたの実力も高が知れるわね!」

「何だとおお!!」

二人に見下され激昂するベガだったが、二人は見下すのを止めず、追いついたブルームとイーグレットに、

「ブルーム、イーグレット、こんな見下げ果てた奴と、何時までもダラダラ戦って居るのも腹が立つわ!!」

「同感ね・・・ブルーム、イーグレット、一気に行くわよ!!」

「分かった!」

「エエ、ウインデイ!!」

「ハアアア!!」

戦い方としては、ベガの行ないは間違っている訳では無い・・・

生きるか死ぬかの戦いで、弱者を先に倒そうとするのは、強者に取っては当然の行為でもあろう・・・

だが、プリキュアとして、大勢の仲間達と絆を深めてきたブライトとウインデイに取っては、ベガの行為は卑劣極まらない行為と映って居た。

サニーとウルフルンは、互いの信念をぶつけ合い戦った・・・

その行為を、無に帰すような行動を取ろうとするベガを許せなかった・・・

四人の身体から、凄まじい精霊の光が沸き起ると、先ずブルームとイーグレットが同時にベガに突っ込み、格闘戦を仕掛けた。精霊の凄まじき力を発したブルームとイーグレットに押され、ベガは忌々しそうに猛り、がむしゃらに反撃を試みる。

「この野郎!プリキュアアア!ダークネス・・・ボンバー!!」

負の力を纏い、ブルームとイーグレット目掛けダークネスボンバーを放つベガだったが、二人は手を握り合い、バリアを張って攻撃を受け止めた。入れ替わるようにブライトとウインディが、上空から急降下して飛び蹴りを放ちベガを吹き飛ばした。

ベガを嘲笑うようにウインディの両肩に手を置いたブライトが、軽くジャンプし空中蹴りを浴びせ、体勢を崩したベガに、ウインディが風を右拳に纏い、そのままベガの鳩尾（みぞおち）目掛けパンチを繰り出した。

「グウウ……ちよ、調子に乗るなああ!!ダークネス!ボンバー!!」

負の力を纏ったベガが、再びダークネスボンバーを二人に放つも、二人はブルームとイーグレット同様、手を握り合いバリアを張り、ベガの攻撃を防いだ。ブライトとウインディは、口元に笑みを浮かべながら、

「一体、私達がその技をどれだけ見たと思ってるのかしら?」

「もう私達は……その技を見切ったわ!!」

ウインディは、両手をクルクル回転させるや、一気に両手をベガに向けて放つと、突風は気流に乗るように、ベガの身体を錐揉み上に上昇させた。

「か、身体の自由が……クソオオ!!」

ブライトは、光を両手に集めると、その場でシャドーボクシングするように、何度も拳を右左と突き出すと、光の光弾がマシンガンのようにベガに浴びせられ、ベガがそ

のまま地上に叩き付けられる。

「ふ、ふざけるんじやねえ!!俺は、魔界の……こうなれば、貴様らを道連れにいい!!」  
負の力を限界まで高め始めるベガ、漆黒のオーラがベガの身体を一回り大きくさせる  
と、

「この一帯事吹き飛ばしてやる!」

「そんな事、絶対させない!!イーグレット、ブライト、ウインディ……決めるよ!!」

「「エエ!!」」

ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディは、スパイラルリングをセットする  
と、

「精霊の光よ!命の輝きよ!」

イーグレットとウインディが叫べば、

「希望へ導け!二つの心!」

ブルームとブライトが叫ぶ、

「プリキュア!スパイラル・ハート……」

「プリキュア!スパイラル・スター……」

「「「スプラッシュ!!!」」」

四人のプリキュアから放たれた精霊の光が輝き、ベガの身体を飲み込んで行く……

「お、俺が・・・俺が・・・負け・・・グウウアアア!!」

精霊の光に飲み込まれたベガが消滅し、消え去った・・・

四人は険しい表情を浮かべながらベガの居た場所を見つめていたが、サニーの側に行くと、ブルームがサニーの右手を、ブライトが左手を取り、起き上がらせると、五人は微笑みを浮かべながら互いの健闘を称え合った。

そして、バッドエンド王国の上空から、サニー達の画面が消え去った・・・

「ブラックとホワイトが、あんた達何かにやられるもんですか！行くよ、リズム！ビート！ミュージー！」

「OK！メロディ!!」

「ウン！」

メロディの合図に頷くリズムとミュージー、ビートは、アカオーニと戦うピースの身を案じ、

「やっぱり気になる・・・メロディ、私はピースの援護に向かうわ!!」

「分かった！じゃあ、みんな、行くよ!!」

「黙れ！よくもベガを・・・貴様ら纏めて、塵にしてくれるわああ!!」

メロデイの合図と共に、四人が再び行動を開始し、激昂したディクレと衝突した：一方、アカオーニと対峙していたピースは、何時も以上の力を持つアカオーニの前に、大苦戦に陥っていた・・・

「キュアピース！お前と俺様とは・・・覚悟が違うオニ!!」

棍棒を激しく振り回し、周囲に風を巻き起こすと、ピースの身体が浮き上がり、そのまま思いっ切り地面に叩き付けられる。

「キヤアアア！」

悲鳴を上げながらその場に倒れ蠢くピースを、見下すような視線で見たアカオーニは、

「所詮、誰かの力を借りなきや、何も出来ないお前と俺様では・・・はなから勝負にならないオニ!!」

(こんな時、ミラクルピースならどうする？ミラクルピースなら・・・)

ピースの心の中に浮かんで来たのは、自分が小さい時から描いていたミラクルピースの事だった。ヒーローに憧れていたやよいが、自分で考え生み出したスーパーヒロインミラクルピース、自分の憧れを重ねて生み出したミラクルピースならば、こんな時どうするだろうか？ピースは自問し、そして、答えを見付けた!!

アカオーニは、ピースを無視し、メロデイ達の下へ向かおうとするのを、ピースがア

カオーニの両足を掴み阻止をする。

「い、行かせない！痛いし怖い……でもここで倒れてたら、私はみんなと一緒に居られなくなっちゃう……自分で自分が許せなくなっちゃう！それが一番怖い!!こんな時、ミラクルピースなら……絶対諦めない!!私、弱虫だけど……絶対負けない!!」

「なら、このまま叩き潰してやるオニ!!」

棍棒を振りかぶったアカオーニであったが、振りかぶった棍棒目掛け、ビートが全体重を乗せたキックを放ち、バランスを崩したアカオーニが尻餅を付く、

「ピース、大丈夫?」

「はい!大丈夫です!!」

（そう、頼れる仲間と一緒になら……ミラクルピースは、何時も以上の力で、悪い人に何か負けないんだからあ!!）

「私の中のミラクルピース……今こそ力となって天に轟け!!」

気合いを込めたピースの身体から、稲妻が天に昇った……

（これは……ピースの中で、何かが目覚めようとでも言うの?）

思わず隣に居るピースの顔をマジマジ見つめるビート、雄叫び上げながら突進してくるアカオーニを、ビートバリアで食い止めると、

「ピース!今よ!!」



「ハイ！プリキュア！」

天空からピース目掛け雷が降り注ぎ、ピースの身体が発光し始める。

「ピースサンダー〜！ハリケ〜ン!!」

雷の嵐がアカオーニ目掛け吹き荒ぶ、ビートは瞬時にアカオーニから距離を取ると、  
(凄い！これがピースの真の力!?)

ビートは、ピースの技を見て驚愕するも、口元に笑みを浮かべた。

「こ、こんなものでええ俺様がああ・・・」

ピースサンダーハリケーンは、アカオーニの巨体をもともせず、岩場の中を突き抜け、アカオーニの身体を吹き飛ばした・・・

「ハア、ハア・・・勝ったの!？」

思わずヨロヨロ蹠踉めいたピースを、ビートが抱き支え、

「大丈夫？良く頑張ったわね!!」

「エへへ・・・」

ビートに褒められたピースは、満面の笑みを浮かべながら微笑んだ。

一方、三人の魔人の中でもリーダー格のデイクレの前に、劣勢に陥るメロディ、リズム、ミュージズ、

「言った筈だ・・・貴様ら纏めて塵にしてやるとなああ!!」

デイクレが雄叫びを上げると、負のオーラがデイクレを包み込んだ・・・

獣のような唸り声と共に、デイクレの身体は、まるで獣人とも呼べるマントヒヒのような風貌に変化した。

「ハアア!これが我がの真の姿!!この姿で戦うのは、あの忌々しき二人のプリキュアと戦つて以来か・・・貴様らを血祭りに上げ、あの二人を今度こそあの世に送つてくれる!!」

デイクレは、獣人化した事で更に素速さを増した。メロディ、リズム、ミューズを素早い動きで翻弄する。

「クツ、動きが速い!?リズム、ミューズ、気をつけて!!」

「クククク、まだまだこれからが本番だぞ?」

デイクレは、体毛を抜き取りフウと息掛けると、体毛は小人のデイクレの容姿になり、容赦なくメロディ、リズム、ミューズをいたぶり続ける。

「キャアアア!」

「こ、このおお!!」

「こ、これじゃ追い払つてもきりがないわ!」

ミューズが悲鳴を上げ、メロディとリズムは手で小人を追い払うも、デイクレは次々

体毛を抜き取り、小人へと変えて三人を追い詰めていく。ハミイが、ピーちゃん、心配そうな視線を三人に浴びせ応援する。ビートは苦戦する三人に気付くと、

「メロデイ、リズム、ミュージック・ピース、あなたは此処で少し休んで！私はメロデイ達の援護に向かうわ!!」

ビートはそう言い残すと、三人の下へと駆け出し、走りながらラブリギターロッドを取り出し、上空高くジャンプすると、周囲に無数の音符を浮かび上がらせた。

「これ以上好きにはさせない！ビートソニック!!」

上空から雨霰のようにビートソニックが浴びせられ、命中した小人が消滅していった。ビートの援護を受け、距離を取った三人は、

「プリキュア！パッションナート・・・ハーモニクス!!」

「シ、の音符のシャイニングメロデイ、プリキュア！シャイニングサークル」

メロデイ、リズムのパッションナートハーモニーが小人の群れを打ち消し、ミュージックは、お返しとばかりに、四人のミュージックの幻影を生み出し、五芒星のようなサークルを描き、デイクレの動きを封じた。

「ムツ・・・小癩な真似を!!」

気合いを込め、シャイニングサークルを打ち破ろうとするデイクレに対し、メロデイ、リズム、ビートが並び立つと、メロデイはミラクルベルティエを、リズムはファンタス

ティクベルティエを取りだし、ビートはラブギターロッドを、ソウルロッドへと変化させる。

「翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア！ミュージッククロンド!!」

メロディとリズム、二人は呼吸を計ったかのように、互いにミュージッククロンドを放ち、

「翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア！ハートフルビート・ロック!!」

それに合わせるようにビートの技が放たれた。三人の技が、三重奏を奏でるかのように、三つのリングがダイクレを捕らえる。

「小賢しい！この程度の攻撃で、我を倒せると思うのか!?ハアアア!!」

雄叫び上げ、自分を捕らえている三人の技を振り解こうとするも、四人はハミイを振り返り、ヒーリングチェストの力を解放すると、

「出でよ、全ての音の源よ!!」

クレッシェンドトーンを召喚した四人、

「届けましょう！希望のシンフォニー!!」

両腕をクロスしたまま、クレッシェンドトーンの金色の光の炎と一体化した四人が、ダイクレ目指して突き進む、

「プリキュア！スイートセッション・アンサンブル・クレッシェンド!!」

黄金の光が、まだ身動きが出来ないデイクレを、光の炎が貫くと、苦悶の表情を浮かべたデイクレは空を睨み、

「グウウウウ．．．バ、バルガン殿！サデイス！ス、スマン」

「「「ファイナレ!!!」」」

デイクレは四人の前に敗れ去り、闇に帰った．．．

死闘を終えた四人は、ハミイとピーちゃん、そしてピースに微笑みを浮かべた．．．  
そして、バッドエンド王国の上空から、ピース達の画面が消え去った．．．

「畜生!!ベガ！デイクレ!．．．おのれええ！プリキュアアアア!!」

共に行動し、封印の眠りに付いた三人の絆は深かった．．．

二人を失ったサデイスの負の力は暴走し、サデイスの目は金色に輝くや、口は耳元まで裂け、その表情は夜叉を連想させた．．．

だが、ムーンライトはそんなサデイスに一步も引かず、

「これが、私達プリキュアの強さ．．．あなたにも教えて上げる!!プリキュア！シルバー  
フォルテウェーブ!!」

上空高くジャンプしながら、ムーンライトのシルバーフォルテウェーブが飛ぶ!!

サデイスの表情が醜く歪み、両手で必死にフォルテウエーブに耐えきると、雄叫びを上げながらムーンライトに殴りかかる。ムーンライトも受けて立ち、正面から肉弾戦を開始した。

「何か……二人の戦いに参加しづらいですねえ……」

「だねえ……何か、ムーンライトとダークプリキュアの戦いを思い出すよねえ」

「じゃあ、マーチの応援に……」

ブロッサムとマリン、ムーンライトに加勢するタイミングを掴めず、半ば解説要員になつていた二人は、マーチの応援に行こうとするも、死闘を繰り広げるマーチとマジョリーナの戦いを、サンシャインがサポートしていた……

「もうあたし達には後がないんだ……プリキュア！お前達をここで葬らなきゃねえ!!」  
足下にパッドエナジーを蓄えるや、先程マーチが放ったマーチシュートの連続蹴りのお返しとばかりに、マジョリーナがエネルギー弾の連続蹴りを放ちマーチを吹き飛ばす。

「キャアア！」

「ウフフフ……そら、オマケだよ!!」

更なる攻撃を加えるマジョリーナだったが、サンシャインが割って入り、サンシャインイージスで攻撃を防ぎきる。

「やらせない！マーチ、大丈夫？」

「ええ、ありがとう・・・」

助けに入ってくれたサンシャインに、笑みを浮かべながら感謝するマーチ、マジョリーナはそんなマーチを忌々しげに睨み付け、

「あたしはお前が気に入らなかつた！大勢の家族に囲まれ、幸せそうにしてるお前がねええ・・・お前をこの場で倒し、お前の家族も絶望に沈めてやるよおお!!」

マジョリーナは一層険しい表情を浮かべると、上空に浮かび上がり巨大なエネルギー光弾を作り出すと、マーチ、サンシャインの顔色が変わる。

「不味い！あれ程の巨大な光弾は・・・私だけでは防げないかも知れない」

上空に浮かび上がった、巨大な漆黒の球体を見たサンシャインの額から、汗が滴り落ちる。

「サンシャインとマーチがピンチです!!」

「今こそあたし達の・・・」

救援に向かおうとしたプロツサムとマリンドであったが、マーチは雄叫びを上げながら立ち上がった。マーチの脳裏に、メルヘンランドで受けたジョーカーの精神攻撃が思い返されてくる。あんな思いは絶対にさせない、家族は自分が守ると決めたあの時を・・・

「あたしの家族には手出しさせない！あたしの家族は、絶対にあたしが守る!!」

マーチの周囲で、凄まじい緑の風が巻き起こると、風に乗るようにマーチの身体が宙を飛ぶ!

「だったら、止めてみな!! くだばれ、プリキュア!!」

マジヨリーナから発せられた巨大な漆黒の光弾が、マーチ目掛け発射されるも、マーチは光弾に真っ直ぐ向かうと、

「あたしは・・・絶対に負けない!! プリキュア! マーチシュート!! インパクトオオオ!!」

風の勢いに任せて、光速回転したマーチの身体が緑色に輝き、回転を利用したマーチシュートインパクトが、マジヨリーナの放った巨大な黒い光弾を、緑の光弾に変え蹴り返した。

「バ、バカな!? あたしの攻撃を跳ね返す何てええ・・・このおお!!」

向かってくる巨大な光弾を両手で押さえるも、その威力を止められず、マジヨリーナの身体を飲み込み上昇し、マジヨリーナは、気を失い地上に落下した・・・

「相手の攻撃を利用し、そのまま跳ね返す・・・凄い攻撃でしたねえ?」

「まあ、流石はあたし達の後輩だね?」

今の戦いを振り返っていたブロッサムとマリリン、背後で声が聞こえたサンシャインは、二人を振り返ると

「ブロッサム、マリリン、そこに居たの?」



「ガ~~~~ン!!!」

サンシャインにそこに居たの？と言われ、ブロッサムとマリィ、二人は変顔を浮かべながら、激しいショックを受けるのだった・・・

(良い風・・・)

風に身を任せるように、力を使い果たしたマーチが落下するのを、ポプリが変化したマントに身を包んだサンシャインが受け止める。

「マーチ・・・お疲れ様！」

「いえ・・・」

微笑み掛けるサンシャインに、マーチも微笑み返していた・・・

一対一で死闘を続けるムーンライトとサデイス、サデイスは、ムーンライトの周囲に、無数のシャボン玉のようにフワフワ浮かぶ黒い光弾を発生させると、

「逃げ場は無いよ！ダークネス・シャボン!!」

サデイスが両手を合せると、無数のシャボンがムーンライト目掛け降り注いだ。ムーンライトは、両手を広げバリアを張りながら光速で回転し、ダークネスシャボンの威力を軽減させると、ムーンタクトを回し、

「この程度の攻撃で・・・私は負けたりしない！プリキュア！フローラルパワー・・・フオ

ルテツシモオオ!!」

f fのマークを宙に描くや、上空に舞い上がったムーンライト、ムーンライトのフォルテツシモが、サデイス目掛け急降下を始める。焦りの表情を浮かべたサデイスが、ムーンライトに連続光弾を浴びせるも、フォルテツシモは勢いを止める事無く、サデイスを突き抜けると、

「ハ〜トキャッチ!!」

着地したムーンライトが、タクトを広げてポーズを決めると、背後で爆発が起こり、サデイスは片膝付き荒い呼吸をする。

「ハア、ハア、ハア．．．デイクレ! ベガ! あたしに力を貸しておくれ．．．プリキュアの一人でも道連れにしない限り、あたしは終われないんだよおお!!」

両手を高々と掲げたサデイスに闇が流れてくる．．．

サデイスは闇を吸い込むと、目は益々吊り上がり、一層全身の筋肉が盛り上がりをもせた。

「感じる．．．デイクレを、ベガを、プリキュアアア!!」

禍々しい気が辺りに溢れかえる。シプレが、コフレが、ポプリが、禍々しい気が増して居ると一同に告げると、暴走したサデイスは辺り構わずエネルギー波を撒き散らして猛る。

「死ね！死ね！死ね！死ね！」

サンシャインイーゼスが、ムーンライトリフレクシオンがサデイスの攻撃を防ぐも、力を増したサデイスの攻撃を受け、二人が飛ばされる。

「これ以上好きにはさせません！プロツサムウウ・・・シヤワウウ！！」

「マリイイン・・・シュウウト！！」

プロツサムとマリンが技を放ち、サデイスの攻撃と相殺させる。

「プロツサム、マリン、サンシャイン・・・決めるわよ！！」

「ハイ！！」

ムーンライトの合図に領いた三人が、ムーンライトの側に集結すると、ハートキャッチミラージュを取りだし、

「鏡よ、鏡、プリキュアに力を！世界に輝く一面の花！ハートキャッチプリキュア！！  
スーパースルエツト！！！！」

此処を勝負所と見た四人はスーパースルエツトへと変身すると、

「花よ、咲き誇れ！プリキュア！ハートキャッチ・オーケストラアア！！！！」

四人の祈りに応えるように、巨大な女神のシルエツトが現われると、一同の指示の下、巨大な女神がサデイスの身体に愛の拳を打ち下ろした。

「ハアアアアア！！！！」

「ベガ・・・ディクレ・・・ゴメン！」

四人の叫びと共に、サデイスの身体は金色に包まれ、その身を消滅させた・・・

「ハハハ、流石ムーンライト達・・・凄いや!!」

マーチは、ムーンライト達四人の強さを改めて実感するのだった・・・

そして、パッドエンド王国の空に浮かぶ、マーチ達の映像が途切れた・・・

バルガンは、忌々しげにブラック、ホワイト、ルミナス、ドリーム、ルージユ、レモネード、ミント、アクア、ローズ、そして、ハッピーとエコーの顔を、一人ずつ見つめた。

「良くも我らが同胞を葬ってくれたな・・・現時点をもって、我ら魔界は、貴様らプリキュア、並びにお前達の息の掛かる全ての者を・・・敵と見なす！覚悟しろ、プリキュアアアア!!」

そう言い残すと、更にバルガンの容姿が変化していった・・・

背は急激に伸び、髪が無数に増え始め、身体全体至る所から枝葉が生え始める。その姿は巨大樹、いや、中央に残ったバルガンの顔だけを見た限り、人面樹と言える様相を呈していた・・・

「勝手な事ばかり言わないで！あなたが先に攻撃を仕掛けてきたくせに！」

険しい表情を浮かべた一同が、バルガンに鋭い視線を浴びせる。ドリームは一同を代表するようにバルガンの非を訴えるも、バルガンは一笑に付した。

「我ら魔界の者の真の力、お前達に見せてくれよう!!」

バルガンの生え茂った髪の毛に、まるで実を為すようにピンクの胡桃のような物体が無数現われた。急速に育ったそれは、地上に落下し割れると、辺りに黄色い胞子を撒き散らした。

「バッドエンド王国か……この土地は心地よい力を与えてくれる！さあ、我が能力の前に朽ち果てるが良い!!」

バルガンが放った胞子を吸い込んだ時、思わず一同は顔を顰めると、

「ゴホツ……な、何!？」

「か、身体が痺れ……」

ブラックとホワイト、ルミナスが、プリキュア5やローズ、ハッピーとエコーが、身体が痺れ地上に倒れ込み始める。

「ハッピー！みんなああ!!」

「これは……みんな、気をつけるココ」

「これを吸うと、身体の機能を麻痺させるみたいナツ」

キャンディが叫び、ココとナッツが胞子の特徴を一同に伝えるも、一同は咳き込み続け、反撃する機会を見付けられなかった・・・

「ククク、苦しいか？ 貴様らは楽には殺さない！ 我が胞子を浴びた者は、徐々に身体の機能を鈍らせ、やがて息絶える!! 何時見ても、苦しみながら死んでいく者を見るのは、爽快なものだ・・・さあ、ジワジワ苦しみながら死ぬが良い！ プリキュアアア!!」

バルガンの目が妖しく輝く中、ゴホゴホ咳き込み続ける一同の顔が、一層険しさを増していく・・・

「ハッピー・・・みんなああ・・・」

キャンディの目に涙が浮かんでくる・・・

自分を助けてくれたハッピー達が苦しんでいるのに、自分は何も出来ない事が悔しかった・・・

「ハッピー・・・みんな・・・みんなを、みんなを、虐めちや駄目クルウウウ!!」

キャンディの身体から、火の鳥のようなオーラが発せられた時、ポップが持つて居たデコルデコールに異変が起こった!!

まるでキャンディに感応したかのように、点滅しだしたデコルデコールは宙に浮かび上がり、激しい光に包まれると、まるで時計のような物体へと変化を果たした・・・

「これは一体!?!」

驚くココ達、ポップも目の前でキャンデイが起こした異変に呆然とするも、

「キャンデイ・・・そなたは!?それに、この姿・・・ま、まさか、伝説のロイヤルクロックでござるか?」

ポップはこの姿に見覚えがあった・・・

メルヘンランドの図書館で調べ物をしていた時に、確かに見た事があった・・・

それは、伝説のロイヤルクロック!!

だが、ポップにもどんな力があるのかまでは分からなかった・・・

ロイヤルクロックの光の輝きは、辺りに漂う胞子を浄化し、プリキユア達に力を与えた。

「身体の痺れが収まった!?!」

「本当だ・・・これなら!」

ドリームが、ブラックが、一同が再び立ち上がりバルガンを睨み付け、ハッピーとエコーがキャンデイを見て微笑み掛けた。

「キャンデイ、ありがとう!」

「あなたのお陰で・・・私達助かったわ!!」

「クウウルウ!!」

二人にお礼を言われたキャンデイは、自分も役に立てた事が嬉しかった。自分が起こ

した奇跡に気付かず・・・

「バ、バカナ!?何故胞子が・・・まあいい、胞子は幾らでも作り出せる!!」

バルガンは、胞子が消滅させられた事に驚愕するも、直ぐに再び胞子を作るべく、胡桃のような物体を作り始めると、

「そうはさせない!!プリキュア!ファイヤーストライク!!」

ルージュが雄叫びを上げ、ファイヤーストライクを放ち、胡桃のような物体を燃やし、胞子を飛ばさないようにする。

「小賢しい!!」

再び触手で一同を捕らえようとしたバルガン目掛け、ブラックとホワイトのマーブルスクリューが飛ぶ!ならばと、バルガンは口から無数の種をマシンガンのように連射するも、

「やらせないわ!プリキュア!エメラルドソーサー!!」

ミントのエメラルドソーサーがバルガンの攻撃を防ぎきる。入れ替わるように頭上からドリームとローズ、右側からアクアとレモネード、左側からハッピーとエコーが同時にキックを放ち、バルガンの表情を曇らせた。

「おのれ、プリキュア共・・・これも、貴様のせいだ!!」

バルガンの標的が、キャンデイに向けられる。恐怖に引き攣るキャンデイ目掛け、バ



ルガンの葉が手裏剣のようにキャンディ目掛け飛んでいく。

「キャンディ!!」

咄嗟にキャンディを庇ったハッピーの身体を擦り、ハッピーの腕と足から血が滲む、「大丈夫、キャンディ!?もうキャンディに、怖い思いはさせないからね!」

「ハッピー……」

キャンディは泣きそうな表情を浮かべると、ハッピーは笑顔でキャンディを励ました。ハッピーはキツとバルガンを睨み付けると、

「これ以上、私の大事な仲間達……酷い事しないでええ!!」

「ならば……力尽くで止めて見ろ!!」

バルガンは、身体を揺ると、まるで花粉のように黒い粉が舞い上がり、ドス黒いオーラを周囲に撒き散らした……

オーラは周囲を包み込むように広がり、結界の中に閉じ込められた一同は、再び動きが鈍る。

「クツ、な、何てプレッシャーなの?」

「思うように身体が……」

ホワイトが、アクアが険しい表情を浮かべる中、勝ち誇ったバルガンの笑い声が響く、「クククク!今度こそ貴様らの最期だ!!さあ、毒の花ウモーの香りを吸い、朽ち果てる

!!

結界の中で咲いた毒の花ウモー・・・

まるでカマキリの卵のような形をした不気味な花・・・

その花から発せられた香りが、辺りに立ち込め始める。ハッピーは、目を閉じカッと見開くと、

「私、みんなが大好き！みんな誰かを守りたいっていう優しい気持ちがあったから・・・プリキュアになった。だから、私達にとつて・・・プリキュアのみんなも、キャンディ達妖精の仲間達も、とつても大切な・・・だから、私はみんなを守る!!気合いだ!気合いだ!気合いだあああ!!プリキュア!ハッピーシャワー!シャイニイイグ!!!」

凄まじいピンクの輝きを浮かべたハッピーが、上空目掛けハッピーシャワーを放つと、凄まじい輝きは光の流星となつて、バルガンのフィールドを打ち消した・・・

「バ、バカな!?そんな、バカなあああ?」

バルガンは驚愕の表情を浮かべた・・・

絶対に葬れる自信があつた・・・

だが、ハッピーの仲間達への思いは、それを遥かに上回り、バルガンの攻撃を打ち消し、更に光の流星は、バルガンの力を一気に弱めた。思わず力を使い果たし蹠踉めいたハッピーを、エコーが、ブラックとホワイトが支え、ニッコリ笑みを浮かべながらハッ

ピーに微笑んだ。

ハツピーの攻撃が効いているとみたココとナッツは、

「今ココ！プリキュアに力を!!」

「ミルキイローズに力を!」

ココとナッツの頭上にパルミエ王国の王冠が現われ、プリキュア5とローズに力を与える。

「クリスタル・フルーレ!希望の光!!」

「ファイヤー・フルーレ!情熱の光!!」

「シャイニング・フルーレ!弾ける光!!」

「プロテクト・フルーレ!安らぎの光!!」

「トルネード・フルーレ!知性の光!!」

プリキュア5の手にキュアフルーレが装備される。そして、ミルキイミラーがローズの手に現われる。六人のプリキュア達が構えると、

「邪悪な力を包み込む、煌くバラを咲かせましょう!ミルキイローズ!メタル・ブリザー

ド!!」

「5つの光に!」

「「「勇気をのせて!」」」

「プリキュア！レインボー・ローズ・エクスポーション!!」

青い薔薇の吹雪が、五色の薔薇が合わさり虹色の薔薇が、バルガン目掛け飛んでいく……

「グウウウウ……舐めるなよおお!!」

バルガンは雄叫びを上げながら、プリキュア5とローズの必殺技を堪えようと試みるも、

「グウウ……ち、力が入らん……おのれ、おのれええ！こんな筈じゃああ」

巨大な虹の薔薇に飲み込まれ、バルガンの身体は消滅し、闇に帰った……

プリキュア5とローズは、ハッピーに親指立てて合図を送り、ハッピーも同じようなポーズを浮かべて微笑み返した。

そして、パッドエンド王国の上空から、ハッピー達の映像が消え去った……

「ブラックとホワイトも戻って来た！キャンディも、キュアデコルも取り返した！プリキュアの皆さんが、あなた方の戦士達にも勝ちました……もう、あなたの思い通りにはなりません!!」

再びビューティはアイスソードを取りだし、ジョーカーに剣先を向けた。ピーチ、ベリ、パイン、パッションも険しい表情でジョーカーを睨み付けると、ピーチは、

「あなたの負けよ!!」

「負け!? ウフフフ、この程度で勝ったつもりですか?」

(そう・・・ピエーロ様復活はもう目の前!!)

「あなた方に勝ち目がないと・・・教えて差し上げますよ!!」

ジョーカーは宙に浮かび上がり、レイピアを軽く振ると、ジョーカーの身体が数十人に分身しました。思わず驚愕するビューティ、ピーチ、ベリー、パイン、パツシヨン、  
「どうしました!? 何処を見ているのです?」

同時に喋る数十人のジョーカー、どれが本物なのか戸惑う一同を嘲笑うように、  
ジョーカーがビューティとピーチ達を翻弄した・・・

(これでは勝負にならない! 何とかしなければ・・・)

焦るビューティを、ジョーカーは挑発するように、

「あなた、あの妖精を助け出したつもり何でしょうけど、残念でしたあ! あなた方はもう・・・バッドエンド王国から出られませんよ!! ノコノコ浚われた間抜けな妖精の為に、全滅するとは滑稽ですよね・・・」

「何言ってるのよ! 私達が此処に来たと言うことは・・・」

「そう、戻る事も可能と言う事!!」

「うん! 私・・・みんなと帰れるって信じてる!!」

ピーチ、ベリー、パインが、バッドエンド王国に来られたのだから、出る事も当然出来る筈だと言葉を述べるも、ジョーカーは口元をニヤリとさせ、その態度を見たパッションとビューティは訝しんだ。

「いえいえ、無理ですよ．．．ほら!!」

ジョーカーが指をパチリとならすと、ジョーカー達のフィールドを除くあちらこちらからマグマが吹き出し始め、大地を赤く照らし始める。

四方から仲間達の悲鳴が聞こえてくる．．．

「ブラック！ホワイト！ルミナス！ブルーム！イーグレット！ブライト！ウインディ！」

「ドリーム！ルージュ！レモネード！ミント！アクア！ローズ！」

「ムーンライト！プロツサム！マリオン！サンシャイン！」

「メロディ！リズム！ビート！ミューズ！」

「ハッピー！マーチ！サニー！ピース！エコー！キャンディ！ポップ！妖精の皆さん．．．」

ピーチが、ベリーが、パインが、パッションが、そしてビューティが、仲間達の身を案じ、心配そうな表情を浮かべる。

「仲間の心配より．．．ご自分達の心配もした方が良いでしょう？」

大勢のジョーカーは、嘲笑うようにトランプカードを投げつけ、ビューティ達を翻弄する。

（このままでは・・・今私が優先させるべき事・・・それは!!）

ビューティは立ち上がると目を閉じ、精神を集中し始める・・・

「この期に及んで何の真似です!? 目障りですねえ・・・あなたから消して差し上げましょう!!」

無数のジョーカーがビューティに狙いを付けるも、ビューティを囲むようにピーチが、ベリーが、パインが、パッションが、ジョーカーの攻撃から身を持って庇い続ける。

「み、皆さん!？」

「何か考えがあるんでしょう?」

「あなたへの攻撃は、あたし達が防ぐ!!」

「うん! ビューティはそのまま続けて!!」

「必ずそれまで持ち堪えるわ!!」

ピーチが、ベリーが、パインが、パッションが、ビューティに微笑み頷いた。ビューティは、四人の気持ちを目に涙を浮かべながら受け取り、カッと目を見開くと、

「私の名前は・・・キュアビューティ!!」

「ハア!? 知ってますけど?」

ジョーカーは小首を傾げながら、今更何を言っているのかと不思議そうな表情を浮かべていると、ビューティはアイスソードを地面に突き刺し、

「私は、みなさんと一緒に居られる今を、大切にしたいんです！目指す未来へ向かって、大切な友達と歩み続ける。その為にも、プリキュアとして私は戦い続けます！それが私の道です!!プリキュア！ビューティブリザード・フリージング!!」

ビューティは、アイスソードを通じ、ビューティブリザードを放つと、冷気はバッドエンド王国の地表を凍らし、マグマの勢いを弱めた。

「バ、バカな!?バッドエンド王国を……凍らせたああ?」

驚愕するジョーカーに、ビューティはアイスソードを抜き、もう一本作り上げ二刀流で構えると、

「これで暫くは保つはずです……」

「ビューティ……凄い!!」

思わずピーチは、ビューティが此処まで成長している事に驚きを隠せなかった。パッションは、そんなビューティを見て笑みを浮かべると、

「やるわね……私も思い付いた事がある！ビューティ、あなたになら、私の考えが分かるわよね?」

そう言い残すと、パッションはパッションハープを取り出し、ピーチ、ベリー、パイ



ンに作戦を授けると、

「行くわよ、ジョーカー！吹き荒れよ！幸せの嵐！プリキュア！ハピネス・ハリケーン！！」

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！」

「プリキュア！ラブサンシャイン・・・」

「プリキュア！エスポワールシャワー・・・」

「プリキュア！ヒーリングプレア・・・」

「フレ〜ッッシュュ！！」

四人のプリキュアの攻撃が、ジョーカーが作り出した紫のフィールド上空目掛け放たれた。

「ウフフフ、何処を狙ってらっしやるんですかねえ？」

見当外れの方向を攻撃した四人に、嘲笑を浮かべたジョーカーであったが、

「いいえ！パッション達四人が、私に攻略の道を示して下さいました・・・アクア！技をお借りします！！」

ビューティは、アイスソードを二つ繋げるや、弓状に変化させ身構えた。ジョーカーは見落としていた。ピーチ達が放った攻撃が光を作り上げ、ジョーカーの本体の影をはっきり照らし出して居た事に・・・

「なっ、何と!? 私の影が?」

「プリキュア! ビューティプリザ〜ド! アロ〜!!」

ビューティの放った氷の矢が、ジョーカーの残像を打ち消しながら、真つ直ぐジョーカーの影がある本体目掛け飛んで行く・・・

その凄まじき威力が、ジョーカーが咄嗟に繰り出したトランプをも突き抜け、ジョーカーの仮面に突き刺さり、

（キュアビューティ・・・この短時間で此処まで力を付けるとは・・・）

ジョーカーは、ビューティの攻撃を受け墜落し、仮面が飛ばされ、氷の大地の奥深くに消えて行った・・・

そして、バッドエンド王国の上空は、元の暗闇へと戻った・・・

「ビューティ、お見事!!」

ピーチは思わずビューティに右手を差し出すと、ビューティは少し照れながら握り替えし、

「いえ、皆さんが私に道を示してくれたからです!」

その二つの手に重なるペリー、パイン、パッション、五人のプリキュアが笑みを浮かべた。

そして、散り散りだった仲間達が徐々に集結した・・・

第六十話：プリキュアVSバッドエンド王国!! (後編)

完

## 第六十一話：悪の皇帝!

1、ただいま!!

今、戦いを終えたプリキュア達が勢揃いした・・・

「ブラック！ホワイト！」

二人に駆け寄り抱きつくムーンライトに、ブラックとホワイトは笑みを浮かべながら、

「ただいま!!」

「遅くなつてゴメンなさいね！」

「本当よ・・・でも、無事で良かった！お帰りなさい、二人共!!」

涙混じりの笑みを浮かべるムーンライトに、ブラックとホワイトも、ムーンライトを始めとする仲間達との再会を嬉しそうにしていた・・・

キャンディは、プリキュアの仲間達一人一人に抱きつきながらお礼を言い回り、一同はキャンディの無事な姿を見ながら頭を撫でていった。

「あんた達・・・初めて会った時より、大分成長したわね？」

「本当、本当、あたし達もうかうかしてたら、直ぐに追い抜かれそうだよね！」

ルージュが、マリンが、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの成長振りに驚きつつも、頼もしさを感じていた。

「いえ、既に私達を超えて居るかも知れないわよ？サニー、ピース、マーチの攻撃も凄かったわ！特に驚いたのは、ハッピーとビューティね!!ビューティのブリザードアローは・・・私のサファイアアローの威力など、比べものにならないかも知れない・・・」

「そ、そんな事はありません!!」

「そうね・・・例えるなら、ビューティのブリザードアローは、一撃必殺！片やアクアのサファイアアローは、連射可能な集中砲火、どちらが優れているとは、一概には言えないわ!!」

ビューティの技を見たアクアは、自分の攻撃より上だと推察するも、ビューティは激しく動揺し、そのような事は無いと謙遜する。パッションが二人の技を見比べ、どちらも優秀な技で、甲乙は付けられないと述べると、アクアはクスリと笑いだし、

「ウフフ、パッション、煽っても何も出ないわよ?」

「どう致しまして・・・フフフ」

顔を見合わせたアクアとパッションは、共にクスリと笑い合った。

「あゆみちゃんもプリキュアになったし、エコーの力が無ければ、私達はバッドエンド王国には来れなかった筈・・・感謝してるわ!!」

「いえ．．．私はたいした事は．．．」

ブルームは目を細めながらエコーを称え、エコーは恐縮するも、ブラックとホワイトもルージユ、マリン、ブルームの言葉に同意し、

「ううん、ハッピー達五人も、エコーも、今の私達にとって、欠けてはならない大切な仲間．．．」

「そうね！」

「でもさあ、ブラックとホワイトは、今まで何処に居たの？」

「ポルンとルルンから、二人は遠い所で無事に居るとは聞いてましたけど．．．」

マリンとプロツサムに問われたブラックとホワイトは、顔を見合わせると苦笑を浮かべ、

「それ何だげどさあ．．．」

「実は私達．．．」

ブラックとホワイトが、マリンとプロツサムの問いに答えようとしたとその時、獣の咆哮が聞こえ始め、顔色変えたサニーが声の方を振り向くと、その表情は見る見る凍り付いていった．．．

「う、嘘やろう!?!」

驚愕の視線を向けるサニーの視線の先に、這い上がってきたボロボロのウルフルン

が、目を血走らせながらヨロヨロ一同の下へと歩み出す。あれだけの攻撃を受けながら、再び立ち上がって向かってくるウルフルンの姿が、サニーには信じられなかった：「ま、負けねえ……負けられねえ……」

「そう……オニー！」

ウルフルンの声に応えるように、棍棒を杖代わりにしたアカオーニが蹠踉めきながら姿を現わし、ピースはその姿を見て呆然としながら、

「そんなぁ……」

自分の渾身の力を込めた攻撃を受けたアカオーニは、まだ戦意を失わずこちらに向かってきた。二人が立ち上がった事で、マーチは咄嗟にマジヨリーナが倒れている方角を見ると、マジヨリーナもゆっくり立ち上がり、

「あたし達には……後が無いんだ！まだ、まだ終わっちゃいないよぉ」

合流した三幹部が、ヨロヨロプリキュア達目掛け歩み続ける。その姿は、敵とはいえプリキュア達に哀れみの心が浮かんでくる。

「もう、もう止めてよ！どうしてまだ戦おうとするの？」

悲しげな表情を浮かべたハッピーは、三幹部を止めようとするも、三幹部は、プリキュア達から浴びせられる、哀れみの視線を受け憤慨していた。

「何だ！その目は!？」

「そんな哀れみの言葉は．．．要らないオニ!!」

「あんた達には分からないだろうさ．．．」

「俺達が．．．」

「あたし達が．．．」

「二度も味わったあの悔しき、寂しき、痛みを!!」

そう発言した三幹部の瞳の奥に、悲しみを見た気がハッピーにはした．．．

最初にウルフルンに出会った時、ハッピーは直感的に分かって居たのかも知れない．．．

心の悲しみを．．．

「あたし達は、絵本の中じやいつも嫌われ者．．．」

「怖がられ、嫌われて．．．」

「誰からも相手にされない．．．」

「ある者には石を投げつけられ．．．」

「顔を見て逃げ去られる．．．」

「疎まれ、蔑まれ、誰からも相手にされない。その悔しきや寂しさを、お前達何かには：

分らないオニィー!

三幹部の心の叫びを、プリキュア達は呆然と聞き入っていた．．．



「そんな時だ、俺達の前にジョーカーが現れたのは…」

「ジョーカーは、痛いでしょう、苦しいでしょう、悔しいでしょう……いけないのはこの下らない世界です。こんな居心地の悪い世界は、全部壊しましょう！ピース口様が力をくれます。世界から未来を奪って、バッドエンドにしましょう。そうすれば、あなた達の住みやすい世界になりますよってねえ」

「憎いんだよ！ヘラヘラと楽しそうにしてる奴も、未来が明るいとか言ってる、脳天気なテメエらも全部なああ！」

「だからあたし達は、ピース口様と一緒にこの世界全てを壊すのさ！この下らない世界を全部ねえ！」

本音を述べた三幹部がヨロヨロしながら身構えるも、プリキュア達は誰一人戦おうと動き出す者は居なかった……

「何の真似だ!？」

「俺様達と……戦うオニ!!」

「さあ、掛かって来な！プリキュア!!」

「無理だよ……あなた達の本当の気持ちを知った以上、私達は、あなた達とは戦へ無い!!」

悲しげな視線を向けたハッピーが首を振り、戦へ無いと告げると、三幹部はバカにす

るなど憤慨する。

「別にウチら……あんたらの事、バカにしてる訳や無い」

「私もね……前に学校で同じような目にあつた事があるもん!あなた達の気持ちも、少しは分かるもん」

ハッピーの言葉に同意するように、サニーが、ピースが、悲しげな視線で三幹部を見つめた。

(プリキュアが……俺達と同じ目にあつた事があると……)

「嘘だ!!」

「ううん、嘘じゃないよ!私もそう……私もあなた達と同じように、心の底でこの世界を憎んでいた事があつたの……そんな私の心を、悪い人に利用された事が……」

エコーがポツリと呟いた……

その悲しげな表情からは、嘘偽りでは無い事は、三幹部にも伝わり、思わず三人は顔を見合わせた。

「何で、何でこんな事になつちやつたんだろう……」

「もつと早く気付いて上げられれば……」

マーチの、ビューティの目から、涙が零れた……

「だ、黙れ!テメエら何かに分かつてたまるかああ!」

「毎日幸せで、何の不自由もないお前達に……」

「人に嫌われた事が無いお前達に……」

「「分かってたまるかああ!!」」

だが、聞く耳持たない三幹部は、最後の力を振り絞り、プリキュア達目掛け駆け出した。

「私達は……あなた達が感じた嫌な思いを、少しでも和らげたい……それもプリキュアの使命!!」

ハッピーの言葉に賛同するように、プリキュア達が、妖精達が整列し、プロツサム達がハートキャッチミラーージュを天に掲げると、ハートキャッチミラーージュは、バッドエント王国の空に上昇して行った……

ウルフルンを、アカオーニを、マジヨリーナを、三人の心を少しでも解放して上げた！プリキュアと妖精達の意味が一つに重なった時、嘗て、デューンを浄化し、カオスを鎮め、ノイズの心を洗い流した、巨大なシルエツトが三幹部の目の前に現われた……無限の力と無限の希望！そして、無限の愛を持つ星の瞳のプリキュア！プリキュア!!無限シルエツト!!!」

「プリキュア……」

「無限……」

「シルエット……」

三幹部は虚を突かれたように、目の前に現われたみゆきに似た巨大なシルエットを呆然と眺めた。

「私は、絵本の中のみんなが大好き！本当は、狼さんも、鬼さんも、魔女さんも、とっても優しいんだよね!!絵本が沢山の夢や希望を与えてくれるのは、みんなが居てくれるおかげだもん……ありがとう!!」

無限シルエットは、その言葉を掛け三人に微笑んだ。感謝された三人は、驚き、戸惑う……

「良かったら……私達と友達になって欲しいなあ!!」

友達になって欲しい……

その言葉を否定しては居たが、何より心の奥底で心底言つて欲しかった言葉……

三人の目から、溢れるような涙が零れ落ちていく……

「みんなで一緒に遊ぼう!きつと、とっても楽しいよ!!」

両手を広げ、慈愛の表情を浮かべた無限シルエットの巨大な手が、三幹部を包み込んでいく。その両手の暖かな光に包まれた時、三人の憎しみの心は浄化されていった……

三人の心の闇を洗い流すかのように、三人から飛び出た黒いオーラを、光と共に完全に浄化した。心の闇を浄化された三人は、妖精のような姿へと変化すると、ポップと

キャンデイが仰天した。

「な、何と!?!そなた達は・・・ウルルン!オニニン!マジヨリン!」

「三人がウルフルン、アカオーニ、マジヨリーナだったクル?」

ウルルン、オニニン、マジヨリン・・・

嘗て、ピエーロ率いるバッドエンド王国が、メルヘンランドに攻め込んできた時、行方不明になっていた妖精達・・・

ジョーカーによつて、心の奥底にあつた闇を増幅され、バッドエンド王国の戦士へと変えられていた三人の妖精達、元に戻つたとはいえ、自分達がしてきた行為は、心の中に残つて居た・・・

「みんな・・・今まで悪い事ばかりしてゴメンウル」

「一杯悪い事をしてきたオニ・・・」

「決して許される事は無いマジヨ・・・」

ウルルン、オニニン、マジヨリンは、自分達がしてきた悪事を思い浮かべ涙を流した・・・

そんな三人に真つ先に声を掛けた者達が居た・・・

「確かに許される行為では無いのかも知れない・・・でも!」

「あなた達は、自分達のしてきた行為を受け入れた」

「そんなあなた達なら、きっとやり直す事が出来る!!」

「嘗ての私達と同じように、プリキュアの仲間達、妖精の仲間達が居てくれれば……」

「……あなた達なら、必ずやり直す事が出来る!!」

ブライト、ウインディ、パッション、ビートの四人である……

嘗て、ダークフォール、ラビリンズ、マイナーランドの戦士として、ブルーム達、ピーチ達、メロディ達と戦った四人は、

「私達四人も……嘗てプリキュアと戦った!」

「私達は……ダークフォールのアクダイカーン様の為に……」

「私は、ラビリンズの総統メビウスの為に……」

「私は、この世界を不幸で満たすように、不幸のメロディを歌う為、マイナーランドの歌姫に……」

「ピイイイ!!」

「そうね、ピーちゃんも私と同じ……」

「もしこの場に、ダークプリキュア5や、ダークプリキュアが居たのなら……私達と同じような行動を取った筈……」

嘗て、プリキュアとは敵だった四人とピーちゃん……

プリキュア達との出会いが、彼女達の心を少しずつ変えていった。ウルルン、オニニ

ン、マジヨリンの三人も、きつとやり直す事が出来ると告げ、次々と他の一同も同意し、暖かな言葉を掛けた。ポップとキャンディは、三人の前に歩み出ると、

「ウルルン！オニニン！マジヨリン！長く、辛い旅でござったなあ・・・お帰りでござる！！」

「お帰りクルウウ！！」

自分達がしてきた行為を不問にし、ポップもキャンディも、三人を暖かく迎え入れてくれた。三人も目に涙を浮かべながら、

「「ただいま！！」」

メルヘンランドの五人の妖精達が、涙を流しながら抱き合う姿を見た一同の目からも涙が零れる。だが・・・

ビューティが凍らせた、バッドエンド王国の地表から再びマグマが吹き上がった・・・

そのマグマと共に姿を現わした物体を見て、ポップの顔色が変わった・・・

「あれは・・・ピエーロ！！」

「我が名はピエーロ！全てを怠惰な世界に！！」

今、悪の皇帝が再び甦った・・・

2、ペガサス！

悪の皇帝ピエロが遂に甦った・・・

何処かジョーカーを思わせるその容姿、死闘を潜り抜けてきたプリキュア達の体力も、残り少ない中ででの最悪のタイミングでの復活、だが、彼女達の気力は萎える事は無かった・・・

「シロップ、妖精のみんなを乗せて離れてて!!」

「分かったロプ・・・」

真剣な表情を浮かべたドリームの言葉を受け入れ、シロップは巨大化し、妖精達に自分の背に乗るように伝えると、妖精達はプリキュア達を激励しながら、次々シロップの背に乗った。

「皆の衆・・・気をつけるでござるぞ!!」

「プリキュア・・・」

心配そうな表情を浮かべながら、シロップの背に乗るのを躊躇するウルルン、オニニン、マジヨリンに、ハッピーはしゃがみ込み三人の頭を撫でると、その背後でサニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコーが微笑んでいた。

「約束したもんね！三人と遊ぶって!!」

「シシシシ、今の内に何して遊ぶか考えときやー！」



「じゃんけんなら負けないよ！」

「確かにそうかもね・・・でもさ、折角遊ぶんだし、じゃんけんは・・・」

「そうですね・・・じゃあ、ピースが鬼で鬼ごっこでも！」

「エエ!?何で私？」

「ウフフ、楽しそう！」

「もう、エコーまで・・・プンスカプン!!」

ウルルン、オニニン、マジヨリンを心配させまいと、明るく振る舞うハッピー達の意気を汲み取ったマリンは、

「ここは年長者が鬼が良いよ・・・ムーンライト、ブラック、ホワイトの誰かが鬼と言う事で！」

「異議なし!!」

「「エツ!!」」

マリンの提案を、苦笑混じりの一同が異議なしと受け入れ、困惑気味の表情を浮かべたブラック、ホワイト、ムーンライトの三人、

「私達・・・これでも一応大学生何だけど？」

「ウフフ・・・ブラック、まあいいじゃない」

「ハア・・・まあ良いわ！」

苦笑混じりのホワイトの提案に渋々ながらも同意したブラックとムーンライト、ブラックは、キツとピエーロを見つめると、

「じゃあ、その前の最後の決勝負！一丁行きますか!!」

ブラックの合図と共に、プリキュア達は悪の皇帝ピエーロ目掛け駆け出した・・・

ピエーロは、そんなプリキュア達に気付いたのか気付かないのか、意に介さず、口を大きく開くと、口内でエネルギーを蓄え始めた。

「不味い！あれは、星をも砕くバッドエナジー砲でござる!!皆の衆、逃げるでござるうう!!」

気付いたポップが絶叫し、プリキュア達に逃げるように伝えるも、プリキュア達は崖ギリギリに陣取り、逃げるような素振りは見せなかった。星をも砕く力を持つなら、尚更自分達がここで食い止めなければと・・・

充填を完了したピエーロの口から、バッドエナジー砲が発射された・・・

その凄まじきエネルギー波に怯まず、手を握り合ったプリキュア達が巨大なバリアを張り対抗する。ぶつかり合った力は弾け合い、プリキュア達が吹き飛ぶものの、一撃目を防ぎきる。だが、ピエーロは攻撃を止めず、第二波のエネルギーを蓄え始めた。

「負けない！私達は、絶対に負けないんだからああ!!」

真っ先に立ち上がったドリームに釣られるように、立ち上がった一同が、第二波に備

える。

「しかし、このままじゃプリキュア達の体力は持たないココ」

「ナツ・・・プリキュア達に力を送れるアイテムでもあれば・・・」

ナツは、手に持ったミラクルガイドライトを見つめ、悔しそうな表情を浮かべた：  
「ハッピー、みんな・・・大丈夫クル！プリキュアは・・・プリキュアは負けないクルウウ  
!!」

キャンデイが、眼下のプリキュア達を見つめ信じたその時、ロイヤルクロックが再び  
光輝いた!!

「プリキュアの皆さん！今の私には、これぐらいしか力を貸す事が出来ませんが、あなた  
方にこの力を授けます!!伝説の、プリンセスキャンドルを!!!」

謎の声が聞こえ困惑するプリキュア達の中で、ブラックとホワイトだけは笑みを浮か  
べながら、

「今の声・・・ロイヤルクイーンだね?」

「ええ、間違いないわ!!」

互いを見て頷き合ったブラックとホワイトを見て、一同は響めいた。特にハッピー達  
五人は驚き、

「何やてえ!?!」

「じゃあ、ロイヤルクイーン様は復活したの？」

「ど、何処!？」

「姿は見えないようですが!？」

「うん・・・ロイヤルクイーン様!何処ですか?」

サニー、マーチ、ピース、ビューティ、ハッピーが辺りを見回しながら、ロイヤルクイーンに声を掛けるも、ロイヤルクイーンは応えない・・・

その間隙をぬって、ピーエーロはバッドエナジー砲の第二波を発射した。今度はルミナスが先頭に立ちバリアを張ると、一同はルミナスに力を貸すようにバリアを強固にし、第二波を防いだ。だが、プリキユア達の体力は限界に近かった。

その時、バッドエンド王国の上空をペガサスが舞った・・・

「あれは、ペガサス!何故此処に?」

ペガサスがバッドエンド王国に現われた事に驚愕するポップだったが、ペガサスの身体は光に変わり、光は五つに分かれハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの下に舞い降りた。

「これが・・・プリンセスキャンドル!？」

五人は、手の中に現われたプリンセスキャンドルを見て驚愕するも、今この危機を脱する事が出来るかも知れない、ロイヤルクイーンが授けてくれたこのアイテムに掛け

てみようかと頷き合った・・・

「二二」ペガサスよ、私達に力を!!」二二」

五人がキャンドルを合わせ、ペガサスに力を貸して欲しいと願うと、五人の姿が変化を遂げていく・・・

「プリンセスハッピー!」

「プリンセスサニー!」

「プリンセスピース!」

「プリンセスマーチ!」

「プリンセスビューティ!」

「二二」プリキュア!プリンセスフォーム!!」二二」

五人は、まるでドレスのような衣装を纏い、頭には天使の輪のような光のリングが装着される。髪型も変わり、特にビューティの変化には、他のプリキュア達は驚いていた。「ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、ピエーロの攻撃は私達で防いでみる!あなた達は、ピエーロをお願い!!」

「分かりました・・・みんな!!」

ブラックの言葉通り、バッドエナジー砲の第三波を防ぎきった一同、第四波の充填を始めたピエーロに対し、ハッピー達が勝負に出た!

「届け！希望の光！」

「羽ばたけ、未来へ！」

五人は五色のペガサスに跨るや、上空高く舞い上がった。五色のペガサスは、上空で宙返りすると、

「プリキュア！レインボー・バースト！！」

五色のペガサスが合わさり、巨大な光のペガサスの口から、五色のエネルギー波が放たれた！ピエーロは充填完了ながら、バッドエナジー砲を放ち、レインボーバーストを迎え撃った。レインボーバーストとバッドエナジー砲がぶつかり合う・・・

「ロイヤルクイーン様の、みんなの思いに応える為にも・・・」

「私達は負けない！！」

五人の思いが重なった時、レインボーバーストは、バッドエナジー砲を押し戻し、ピエーロを虹の輝きで包み込んだ。

「我が名は、ピエーロ！我が・・・名・・・」

ハッピー達五人は、キャンドルの炎を吹き消し、キャンドルをクルクル回してピエーロに背を向けポーズを決めると、

「輝け！ハッピースマイル！！」

背後で爆発が起こるや、ピエーロの身体が浄化され、身体の一部が吹き飛んでいっ

た・・・

「す、凄い!？」

「やったわね!五人共!!」

サンシャインはその凄さに驚愕し、ブライトが五人を称えた・・・

再び集結した仲間達がハッピー達を胴上げし、一同は歓喜に湧いた・・・

「帰ろう!みんな・・・」

笑顔が浮かぶ仲間達、ブラツクの言葉を受け、一同はパッションが呼び出したアカルの力で、メルヘンランドへと戻って行った・・・

ピエーロがプリキュアに敗れ去り、静まりかえるバッドエンド王国、あのマグマも嘘のように沈黙し、不気味な静寂が辺りを支配していた・・・

キュアビューティに射貫かれ、地面にジョーカーの墓標のように横たわる仮面・・・

その仮面の横から、ヌウト右手が地面から盛り上がるや、仮面を掴み取ると、ジョーカーがゆっくり這いだして来た。ジョーカーは辺りを見渡し、ピエーロが敗れ去った事を理解する。

(まさか、ピエーロ様が敗れるとは!まだ力が足りなかったようですねえ・・・それにしても、伝説の戦士プリキュア!これ程までの力を持つて居るとは・・・)

辺りを見渡していたジョーカーは、ピエーロの気配を感じると、嬉しそうに口元に笑みを浮かべ、気配のする場所へと向かった。ドクンドクンと鼓動するピエーロのコアを見たジョーカーは、

「フフフ！まだピエーロ様は無事なようですねえ……しかし、今動くのは時期尚早、こちらでも戦力の立て直しは必須！でもおお……プリキユア達もただでは済まないでしょうねえ……何せ、魔界の魔神の一人を倒したんですから!!ウフフフ、少しの間、じっくり見物させて貰いますよ!!アアハハハハハハ!!」

ジョーカーの笑い声が、バッドエンド王国に木霊した……

第六十一話：悪の皇帝！

完



## 第六十二話：ロイヤルクイーンとメルヘンランド！

メルヘンランドにやって来た一同・・・

変身を解いた少女達、みゆき達六人と、なぎさとほのか以外は、初めて見るメルヘンランドに興味津々であった。

「へえ、此処がメルヘンランド・・・」

「何か遊園地みたいだよねえ！」

りんとのおぞみが興味深そうに辺りを見渡していると、ウルルン、オニニン、マジヨリンの三人も懐かしそうに辺りを見渡し、キャンディは、三人が帰って来た事をみんなに教えてくると言い、ウルルン達三人を連れ王宮外へと駆け出して行った・・・

「さあ、皆の衆はこちらに！宮殿内にご案内致す!!」

「なぎさ、メツプル達は外で待つてるメポ！」

「コラー！ムーブ、フープ、勝手に飛び回ってちゃ駄目ラピー！」

ポツプに案内され、メルヘンランドの宮殿内へと導かれた一同、メツプル達妖精達は、外で待っていると伝え、興味深く辺りを見渡していた。

宮殿内へと入った一同は、歴史ある風格を見て感嘆の声を上げる中、

「依然と変わってないね？」

「そうね！もつとも、私達からしたら、つい数時間前の出来事のようにだけどね？」

なぎさとほのかがクスリと笑い合うと、ゆりは怪訝そうな視線を二人に向け、

「なぎさ、ほのか、あなた達・・・メルヘンランドに来た事があるの？」

「拙者も気になっていたのでござる！お二方は、メルヘンランドで大蛇と戦った事があるような言い方でござったが、拙者が知る限り、お二方がメルヘンランドに来た事は無いと存じるが？」

ゆりの言葉に同意したポップが、なぎさとほのかに問い掛けると、二人は苦笑を浮かべ、

「さつき言いそびれたんだけどさあ・・・信じられないだろうけど、私達、どうやら過去の世界に飛ばされたようなの！」

「過去!？」

なぎさの告白を受け、一同が驚愕の表情を浮かべた。俄には信じられない話だが、二人が嘘を言う筈も無く、一同は呆然としながらも、なぎさとほのかからの言葉の続きを待った。続いて話し出したほのかは、

「横浜で、私達が放った力と、あの三人の力が激突した時、どうやらその時発生した衝撃で、私達は時の狭間に飛ばされ、タイムトラベルしたようなの・・・私も半信半疑だつ

たけど、そうとしか考えられない……」

二人は、光と闇のぶつかり合いで発生した、時空震の余波に巻き込まれ、過去の光の園に飛ばされたと告げる。そこで、ジャアクキングのドックゾーンに襲われていた光の園を救い、ドックゾーンを追い返し光の園を守った！

更に、闇の気配が各地に漂っているとクイーンに聞かされた二人は、クイーンの導きの下、メルヘンランドで三人の魔人と戦って居たロイヤルクイーンの下へと馳せ参じ、大蛇を追い返し、三人の魔人をロイヤルクイーンと共に封じた事を一同に語るのだった……

「まあ、私達にしたら、つい数時間前の感覚だけどねえ？」

「ロイヤルクイーンにも心配して貰っていたから、無事に報告出来ると良いね？」

「そうだね……」

ハッピー達がキュアデコルを全て取返した事で、ロイヤルクイーンが復活している事を、心の底から思うなごきさとほのか、ゆりも心から驚いたようので、

「そんな事があつた何て……」

「どうりで、拙者の記憶には無い筈でござるー！」

ポップは何度も頷き、二人の言葉に納得していた。嘗て、メルヘンランドを救ったプリキュアとは、此処に居るなごきさとほのかであつたのだと理解する。

一同は天井の高い大広間に案内されると、そこには巨大なロイヤルクイーンの彫像が安置されていた。響は石像を見上げると感心したように、

「ウワァー！大きな石像だねえ……」

「この方がメルヘンランドの女王、ロイヤルクイーン様でござるー！」

「エッ!?これって石像じゃ無いの!?!」

キョトンとしたエレンが、彫像を指差しポップに確認すると、ポップは苦笑を浮かべながら、

「この方こそが、拙者達メルヘンランドの女王、ロイヤルクイーン様でござる!!」

「ま、待つて！何でロイヤルクイーン様は……復活してないの?」

「せや！ウチら、キュアデコルを16個全て集めたやないか?」

みゆきの言葉にあかねも同意し、ポップに問い詰めると、困惑の表情を浮かべたポップも説明に困り、

「いや、それが……拙者にもよく分からないのでござる……」

「どういう事!?!」

「ポップにも分からない何て……」

「それは困りましたねえ……」

ポップにも分からないと聞き、やよい、なお、れいかも困惑の表情を浮かべた。えり

かは、ロイヤルクイーンの石像を指で突つつきながら、

「じゃあさ・・・本人に聞いてみたら？」

「えりか、本人に聞いてみたらと言いましても・・・この有様じゃ、答えようが無いのでは？」

つぼみはえりかを呆れた視線で見つめると、うららも興味深げにロイヤルクイーンの石像を見つめ、

「でも、寝てるだけかも知れませんか？」

「アハハ、のぞみじゃあるまいし・・・」

「ちよつとりんちゃん！どうしてそこで私の名前が出るかなあ？」

「まあ、まあ」

苦笑を浮かべたりんに、のぞみじゃ無いんだからと名指しされたのぞみは、頬を膨らませ不満そうにするのを、咲とラブに宥められる。えりかの言葉にも一理あると感じたみゆき達は、

「すいませ〜ん!!」

「起きてらっしゃいますか？」

「もしも〜し」

「あ〜」

「ヤッホ〜!!」

「やよいさん・・・それは違うと思えますけど?」

なお、あゆみ、あかね、みゆき、やよいが声を掛けるも、一人意味が違うやよいに、れいかがあつた込みを入れる。せつなは首を捻り、

「返事が無いわね?」

「きつと寝起きが悪いんだよ!」

「そうだね! 眠そうな顔してるもの!」

「そうかしら!? 目を瞑ってるだけだと思うけど・・・」

みゆきとやよいは、寝起きが悪いのでは無いかと推測するも、怪訝な表情の満が、石像をみながらポツリと眩き、りんが手を振りながら、

「だから、のぞみじゃ無いんだから」

「もう・・・りんちゃんの意地悪〜!!」

再び頬を膨らませるのでみに、一同から苦笑が起こった。なぎさとほのかは、ジツと石像を見つめると、二人で近づき石像に手を触れながらロイヤルクイーンに語り掛け始めた。

「ご無沙汰してます!」

「私達の事を、覚えていらつしやいますか?」

二人に刺激されたかのように、石像が光輝くと、宮殿内にロイヤルクイーンの声が聞こえ始め、一同は驚愕した。

「やっぱり……寝起きが悪かった?」

「ウンウン!!」

顔を見合わせ頷き合うみゆきとやよいに、即座にりんが突っ込みをいれ、

「だから、違うわよ!」

「あなた達……頼むからこれ以上失礼な事言わないで!!」

額から汗を流しながら、くるみがみゆきとやよいを窘めた。ロイヤルクイーンはクスリと笑うと、

「皆さん、あなた方が集めて下さったキュアデコル……確かに頂きました!!しかし、ロイヤルクロックとペガサスと呼び覚ますだけで、私の力は使い果たしてしまいました……今はまだ目覚める事は出来ませんが、あなた方がロイヤルクロックの真の力を目覚めさせる事が出来れば、私はその時目覚める事でしょう!!!」

ロイヤルクイーンの話の聞き、一同が安堵の表情を浮かべる中、なぎさとほのかの表情は曇っていた。クイーンは更に話を続け、

「ですが、油断しないで下さい!ピーエーロは、バッドエンド王国は、滅びた訳ではありません!!必ず再び行動を起こす筈です……用心して下さい!!」

「ピエーロが、バッドエンド王国が滅んだ訳では無い……」

「そう聞いた一同から、響めきが沸き起る!だが……」

「安心して下さい!ロイヤルクイーン様の真の復活、ピエーロの復活を阻止する為にも、私達みんなが一丸になれば……きつと大丈夫!!」

笑顔を浮かべたみゆきの言葉が一同の胸を打ち、バッドエンド王国との戦いへと気持ちを高揚させた……

ロイヤルクイーンとの謁見を終え、一同が宮殿の外へと出て行く中、なぎさとほのかは、もうしばらくこの場に居させて欲しいとポップに頼み込むと、二人はロイヤルクイーンと共に戦った事のある間柄で、積もる話もあるうかと同意してくれて、二人を残した一同は宮殿を後にした……

「ロイヤルクイーン……見た通り、此処には私とほのかしか居ない」

「私達に、本当の事を教えて!」

「あなたは、本当は……」

なぎさとほのかの言葉を聞いたロイヤルクイーンは、暫し沈黙した後、二人には隠し通す事は不可能だと悟った。

「分かりました!古き友であるあなた達二人には……真実をお話致しましょう!!ですが、この事はキャンディやポップ、ハッピー達には秘密にして下さい!!」



ロイヤルクイーンが語った真相……

それを聞いたなぎささとのほかの表情は、見る見る強張り、悲しげな表情を浮かべていた……

外に出た一同は、戻つて来たキャンデイ達と合流し談笑していると、ちようどメルヘンランド宮殿の兵士の行進を目撃した。目を細めて見つめて居たのだが、兵士達は一同を見るや、慌てて宮殿内へと逃げ帰つて行った……

「何や、失礼なやつぢやなあ……」

あかねは、自分達を見て慌てて逃げて行つた兵士達を見て不満そうになると、苦笑を浮かべたポップが兵士達をフォローし、

「仕方ないでござるよ！彼らは、人の姿を見たのは初めてでござるから……」

「それはそれで、逃げ出すのは問題があると思うんだけど？」

「一応……メルヘンランドを守る兵隊なのよねえ？」

ラブと美希は、困惑した表情で逃げ去つて行つた兵士達の方を見て、呆れたように呟いた。ポップは手をポンと叩くと、

「そうでござる！せつかくメルヘンランドに来たのだから、皆の衆も散歩すると良いでござるよ！！ただ、その姿は不味いでござるなあ……」

「だったら、みんなも妖精の姿になるクルウ！」

「それは名案でござるなあ．．．どれ！」

ポップは、尻尾の毛を抜き、一同にフウと息を掛けると、尻尾の毛が舞い上がり、一同の姿を次々妖精の姿へと変えていった．．．

悲鳴を上げる者、喜ぶ者、困惑する者、少女達は、自分がプリキュアに変身した時の色をモチーフにした姿へと変わっていた。エレンを除いて．．．

「みんな、お待．．．エツ?!」

「これは一体!?!」

戻って来たなぎさとほのかは、目の前に大量の妖精達が居る事に動揺し、目を点にして驚いた。良く見れば、妖精達は一同にそっくりなのだから．．．

なぎさの脳裏に、嫌な予感が漂い始めて居た．．．

嘗て、初めて光の園に向かう時、妖精姿にされるのではないかと不安があった、あの時の事が思い浮かんでいた．．．

なぎさの予感の的中し、なぎさとほのかもポップの術を掛けられ、妖精のような姿へと変えられた。全身白いほのかに対し、なぎさは全身黒一色．．．

「ちよつとおお!何で私だけ身体が黒いのよおお!?!」

「なぎさ、大丈夫よ!ほら、エレンさんも黒猫姿になつてるわ!!」

エレンは元の姿である黒猫姿になっていて、ハミイと抱き合い嬉し涙を流していた。「いや、その姿は一時的なもので……まあ喜んでるし、束の間の幸せを味わって貰うでござるか……」

ポツプは野暮な真似は止めようと、喜ぶエレン、いや、セイレーンを見て微笑みを浮かべた。

「なぎささん、駄目だよ！身体が黒いナギイイ！つて言わなきゃ!!」

みゆきに注意され、変顔を浮かべたなぎさは、

「な、何でよおお!?こんなの……ありえなああい……ナギ」

半ばヤケクソなのか、なぎさも語尾にナギを付けて一同を笑わせた。

なぎさはナギ、ほのかはホノ、ひかりはピカ……

咲はナリ、舞はマイ、満はミチ、薫はカオ……

のぞみはノゾ、りんはリン、うららはウラア、こまちはコマ、かれんはですわ……

ラブはゲット、美希はミキ、祈里はプキ、せつなはイース……

つぼみはです、えりかは、ツシユ、いつきは僕、最後まで拒んでいたゆりも、結局ムー

ンで渋々同意した……

響はヒビ、奏はカナ、エレンはセイレーンの姿に戻り、アコはアコ……

みゆきはミユ、あかねは何故か、やねん、やよいはヤヨ、なおはナオ、れいかはレイ、

あゆみはアユ・・・

ウルルンは、みゆき、あかね、なぎさ達、咲達を・・・

オニニンは、やよい、あゆみ、のぞみ達、響達を・・・

マジヨリンは、なお、れいか、ラブ達、つぼみ達を連れて行動を始めた。

絵本の世界らしく、お菓子<sup>の</sup>国、赤ずきん、アリババと40人の盗賊、浦島太郎、桃太郎等々、一同は沢山見て回るのだった・・・

メルヘンランドの妖精達との交流も深め、最後に一同は、なぎさ、ほのか、ゆりを鬼にして、鬼ごっこを開始し、ウルルン、オニニン、マジヨリンの三人は、心の底から楽しんでハシヤギ、笑顔を浮かべて居た・・・

楽しい一時はあつと云う間に過ぎ去り、一同は宮殿前で大勢の妖精達に囲まれ笑顔を浮かべていた。

「本当に帰つちやうウル?」

「ウチらにも生活があるさかい・・・」

「うん・・・でも、必ずまた遊びに来るから!!」

ウルルンと握手を交わすあかねとあゆみ、オニニンもやよいと指切りしながら、

「約束オニ!!」

「今度はロボッターのおもちやも持つてくるね！」

マジヨリンはなおとれいかに抱きつきながら、

「絶対来てマジヨ！」

「約束は守るよ!!」

「ええ、またみんなで遊びましょう!!」

なおとれいかは満面の笑みを浮かべながら、またの再会を誓った。みゆきはそんな光景を目に焼き付けるように笑みを浮かべると、

「私が思い描いていた絵本の答えが、メルヘンランドにはあったー!」

「エッ!? ひよつとして! みゆきちゃんが家のお父さんに頼みたかった絵本の内容つて……」

「はい! 狼さんとも、鬼さんとも、魔女さんとも、仲良く楽しく遊べるお話し……そんなお話しを、私は読んで見たかった!!」

前に、のぞみの父にリクエストがあると語っていたみゆきの内容を知り、のぞみは目を細めた。のぞみはみゆきの肩を抱きしめ、

「私も読んで見たいなああ!!」

「はい! 是非!!」

のぞみとみゆきは、顔を見合わせると満面の笑顔を浮かべていた……

「では、皆の衆！お達者で!! キャンデイ、頑張るでござるぞ・・・また会おうでござる!!!」  
「うん！みんな、またね!!」

みゆきを始めた一同が、次々妖精達に声を掛け、せつなのアカルンの力で元の世界へと帰って行った・・・

東の間の平和を味わった一同は、まだこの時知らなかった・・・  
次なる戦いの舞台が、直ぐそこまで迫っている事に・・・

第七章：三人の魔人とバッドエンド王国！

完

## 第六十三話：外伝！時の旅人！！

## 1、時の流れの中で

横浜の地で、ハッピー達の窮地を救ったブラックとホワイト、二人は、三人の魔人、デイクレ、サデイス、ベガの攻撃を、バリアで押し返したものの、二人は、その反動で出来た時空震に巻き込まれた・・・

ブラックとホワイトは、手と手を握り合ったまま、不可解にねじ曲がった闇の空間を、まるで宇宙空間を漂うように彷徨っていた。二人の周りを、走馬燈のように、何かのビジョンが過ぎ去って行く。

一体ここは何処なのか？

不安な心が二人に沸き起るも、側に信頼するパートナーが居る事で、何とか理性を保っていた・・・

「ねえ、ホワイト・・・メツプル達やハッピー達、無事かなあ？」

「ルミナスも側に居るし、ムーンライト達も、きつと直ぐに駆け付けてくれるわ！」

「そうだね・・・じゃあ、今は私の事だけ考えようか？」

「そうね・・・一体此処は何所何だろう?」

メツプルとミツプル、ハツピー達の身を案じつつも、今は自分達の置かれている状況を考えてみようかと結論付け、ブラックとホワイトは、今一度周りに映るビジョンを見つめた・・・

ビジョンは、二人の前を流れるように通り過ぎていく・・・

そのビジョンには、ノイズやバロム、砂漠の使徒と戦って居た自分達の姿が映った気がして、思わず二人は驚き、

「ホワイト、今の!?!」

「エエ・・・見て、ブラック!ピーチ達や、ドリーム達、ブルーム達が戦ってる姿が・・・」

さらにビジョンは変わり、ピーチ達がラビリスと戦い、ドリーム達がエターナルとナイトメアと戦い、ブルーム達がダークフォールと戦う姿が映し出された。

「これは一体・・・」

「今度はムーンライトの姿が・・・」

更にビジョンは変わり、ムーンライトが砂漠の使徒と戦う姿が、そして、自分達がドックゾーンと戦う姿が映し出されていく。これは一体何を意味するのか、ブラックにもホワイトにも分からない。

「何なの、これ?」



困惑気な表情を浮かべるブラック、更に画面は流れて行き、ホワイトは注意深く観察し、ある事に気付き、慌ててブラックを呼ぶと、

「見て、ブラック！あれって・・・キュアフラワーじゃない？」

「エッ!？」

ホワイトに言われ、ブラックもホワイトが指さす先を、ジイと目を凝らして見つめると、確かにフラワーらしき人物が、巨大な巨人と戦って居る姿が過ぎ去っていた。二人は、フラワーが戦って居た巨人は、砂漠の王デューンだったのではと想像した。更に次々とプリキュアらしき人物達が過ぎ去って行ったのだが、ホワイトは妙な違和感を感じていた。

「ねえ、今のプリキュアらしき人は、まるで時代劇に出てくる、くノ一のような姿をしてなかった？」

「うん、さっきの人も、何か時代劇に出てくるような衣装着てたよねえ？」

二人は顔を見合わせ、再びビジョンを見続けた・・・

ホワイトは、嘗てゆりや薫子に聞いた事を思い出していた。約400年前、ココロの大樹に選ばれた最初のプリキュア、キュアアンジュを始めとしたプリキュア達が、砂漠の使徒と戦って居た事を・・・

困惑気味な表情を浮かべたホワイトは、ある出来事が頭を過ぎった。科学者を目指し

ているホワイトにとつては、あまり認めたくない出来事ではあったが、この状況を総合すると、ホワイトの脳裏には、ある一つの結論が出来ていた。

「ねえ、ブラック・・・笑わないで聞いてくれる?」

「エッ!?笑わない!笑わない!・・・何?」

ブラックはブルブル首を振りながら、笑わないから教えてとホワイトに伝えると、ホワイトは頭の中で整理を終え、ゆっくり語り出した。

「信じられないかも知れないけど・・・私達、どんどん過去の世界に飛ばされている気がするんだけど?」

「エッ!?過去?」

ホワイトの言葉を聞き、慌てて流れ過ぎていくビジョンを見つめると、何処かムーンライトを思わせる、天使の化身と呼べるような少女が、甲冑のような衣装に身を包み、巨大な黒龍と戦って居る姿が過ぎ去って行った。

「今の・・・前にゆりが言ってた?」

「エエ、最初に砂漠の使徒と戦ったと言われている・・・キュアアンジュ!」

「つて事は・・・今私達は、400年前を更に遡ってるつて事?」

「つて事になるわね・・・」

困惑気味に顔を見合わせるブラックとホワイト、どうすれば元の場所に帰れるのか、

二人にも分からなかった・・・

更に加速は進み、二人は、赤っぽい髪をし、上は黒いベスト、下は上側が白、下は赤っぽい二段のスカートを着ているプリキュアが、巨人と戦って居る姿を見た。

「地球が背景に映っているって事は・・・彼女が戦って居る場所は、月だとも言うの？」  
「エエエ!?月?あの娘、月で戦ってる訳?」

ホワイトが思わず眩き、ブラックは変顔浮かべながら、赤っぽい髪のプリキュアの戦いを凝視した。巨人の攻撃を受け、何度も立ち上がる少女の視線は、時折水色の髪をした青年を見つめる。青年は頷き、二人で何かのアイテムを発動させると、巨人は呻きながら消滅したようにブラックとホワイトには見えた。だが、少女が突然苦しみだした所で、ビジョンは二人の視界から遠ざかっていった・・・

「今の娘もプリキュアだよね?」

「ええ、そうだと思っ・・・」

更に加速され見た映像には、三人のプリキュアが映し出されていた。邪馬台国時代に着ていたと言われるような衣装を身に付け、鏡のような物を手に持った緑髪のプリキュアと、王冠を額に付けた水色のプリキュア、もう一人は、甲冑のような衣装を着て、赤髪で槍を身構えたプリキュアが、巨大な龍のような者と共に、悪魔のような容姿をした者と戦って居る姿が過ぎ去って行った。

「私達が見た映像って……みんな過去に居たプリキュアだって事?」

「私に聞かれても困るけど……見た限りではそのようね!」

ブラックの問いに、困惑気味のホワイトが答える。確かに、いきなりこんな場所に飛ばされて、状況を直ぐに理解するのは、流石のホワイトでも厳しいだろう……

何者かの意味が、まるでブラックとホワイト、二人にプリキュアの歴史を知らせるかのように……

「ホワイト……気付いてた?あの映像を見て居たら、長い黒髪の少女が必ず映って居た事」

「エッ!?私は気付かなかったけど……」

「気のせいなのかなあ……」

ブラックは小首を傾げ、再び周りが真つ暗になった時、二人の背後が物凄い光を放っていた。二人は驚いたものの、この状況を改善する為にも、思い切って光の中に入って見ようと結論付けた。

「じゃあ、行くよ!」

「うん!」

「せええのおお!!」

ブラックとホワイトは、覚悟を決めるや光の中へと飛び込んで行った!!

## 2、光の園とドックゾーン

光の中へと飛び込んだ二人、そこは闇に覆われ、不気味さを漂わせていた・・・  
だが、二人はその場所に見覚えがあつた！

何度か訪れた事がある、二人に取っては大切な場所・・・

光の園に酷似していたのだから・・・

「ホワイト！此処って・・・」

「ええ、間違いない！光の園だわ!!」

辺りを見回した二人は驚愕した！

何故なら、光の園を治めるクイーンの居城の直ぐ側で、クイーンと睨み合っている巨大なジャアクキングが居たのだから・・・

「な、何でジャアクキングが!?!」

「そう言えば・・・以前にも光の園は、ドックゾーンの襲撃を受けた事があるって言うたよね?」

「じゃあ、それが・・・今って事?」

見る見る表情が険しくなっていく二人、自分達が過去の世界に介入する事は、歴史を変えざる事になるかも知れないとホワイトが語るも、このまま見逃す事など、二人に出来

る筈は無かった。頷き合った二人は、クイーンとジャアクキングの居る方角へと駆けて行った。

まるでジャアクキングを守護するように、無数のザケンナーの群れが襲いかかるも、二人は怯む事無く、ザケンナーの群れを駆逐しながら前へと進んで行った。

「クイーン!喜べ、光は私に吸収され、一つになるのだ!!」

「ジャアクキング・・・何を愚かな事を言うのです!光と闇は・・・共存してこそ意味を為すのです!!」

「黙れ!」

「これ程言っても分からないのですか?」

平行線を辿った両者の主張・・・

クイーンとジャアクキングが、ガツプリ四つで組合い、その衝撃で光の園が崩壊し始める。拮抗する両者の力、だが、その拮抗を覆す二つの光が駆け寄ると、

「クイーン!私達も力を貸します!!」

「この光の園を・・・あなたの好きにはさせない!!」

突如現われた二つの人影に、クイーンも、ジャアクキングも驚愕していた。クイーンは、二つの力が自分と同じ、光の化身とでも呼べるような力を発揮している事に気付き、

「あなた達のその力・・・いえ、今は問いません！力を貸して下さい!!」  
「はい!!」

力強く頷いた二人は、ジャアクキングをキツと睨み付けると、

「光の使者・キュアブラック!」

「光の使者・キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!!」

「闇の力のしもべ達よ!」

「とつととお家に帰りなさい!!!」

ホワイトとブラックが名乗りを上げ、ジャアクキングを指さした!ジャアクキングは一層目を見開きながら、

「プリキュアだとお!?!何者だ、貴様ら?」

「だから、プリキュアだと言って言うてるでしよう?」

今プリキュアだとジャアクキングに名乗ったのに、相手には伝わっていないようで、ブラックが変顔浮かべながらムツとするも、ホワイトは周りの被害が更に拡大している事に気付き、このまま長引かせるのは不味いと判断し、

「ブラック!」

ホワイトに呼ばれたブラックも、ホワイトの合図に頷き、二人は一気に勝負に出た!

二人は、クイーンの居城の上に陣取ると、

「ブラック、サンダー!」

「ホワイトサンダー!」

「プリキュアの、美しき魂が!」

「邪悪な心を打ち砕く!」

「プリキュア! マーブルスクリュー!」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて、大きくジャンプしながら、一旦引いた手を前に突き出すと、

「マックス〜!!」

黒と白の稲妻が合わさり、ジャアクキング目掛け飛んでいく!

クイーンとガツプリ四つに組んでいるジャアクキングは、二人の攻撃をまともに浴びるも、

「そんな攻撃で……な、何い!？」

ジャアクキングは驚愕した……

二人が握り合った手に力を込めると、その威力はどんどん上がっていき、ジャアクキングの身体が地中にめり込んでいく。

「ヤアアアアア!!」



二人の雄叫びに反応したかのように、光の園のプリズムストーンが目映い輝きを放った。ジャアクキングは、プリズムストーンをチラリと見ると、

「そ、そうか！あの力が貴様達に力を……おのれ、クイーン！おのれ、プリキュア!!このままでは絶対すまさんぞおお!!」

ジャアクキングの足下は崩れ、ジャアクキングは、まるで天国から地獄に落下していくように、その巨体を暗黒の闇の中に消して行つた……

クイーンは、ポツカリ空いた巨大な穴を見つめながら、

(ジャアクキング、愚かな事を……ダーククイーンさへ目覚めれば、光と闇のバランスは保たれるのに……このままでは)

少し悲しげな表情を浮かべたクイーンであつたが、援護してくれたブラックとホワイトを見つめると、

「プリキュアと仰いましたね？あなた達のその力からは、私と同等！いえ、それ以上かも知れない光の力を感じます……あなた方の力を、光より生まれし者達に、分け与えてはくれませんか？」

「私達に協力出来る事があればしますけど……ねえ？」  
「ええ……でも、私達の力を分け与えるって一体!？」

顔を見合わせて、クイーンの申し出を受諾したブラックとホワイトだったが、力を分

け与えるにはどうすればいいのか、それは二人にも分からなかった。クイーンは、自身の画が描かれたカードを十数枚取りだし、ブラックとホワイトに授けると、

「そのカードに、あなた達の思いを乗せて下さい・・・光に生きる者達に、プリキュアの加護を・・・と!」

クイーンに言われるまま、ブラックとホワイトがカードに念を込めると、クイーンのカードは凄まじい輝きを放ちながら上空に浮かび上がると、一気に光の園から飛び去っていった。

「これで、光の者達に厄が訪れる時、あなた方の力を受け継いだ伝説の戦士、プリキュアが目覚める筈です!」

「エエエ!」

クイーンの発した言葉に、目を点にして驚いたブラックとホワイト、二人はヒソヒソ話を始めると、

「ど、どうしよう!私達・・・ひよつとして過去を変えちゃったんじゃない?」

「うん・・・そうかも知れない!でも、私達じゃどうする事も出来ないし・・・」

困惑するブラックとホワイト、その時、クイーンの表情が曇り、

「この気配は!?!・・・キュアブラック!キュアホワイト!あなた方に頼みたい事があるのですが、聞き入れては貰えないでしょうか?」

真剣な表情を浮かべたクイーンから、頼みたい事があると云われ、ブラックとホワイトは困惑した。これ以上過去を変える事になったら、どうなってしまうのか、二人にも分からない。だが、見つめ合った二人は頷き合い、クイーンの申し出を受け入れた。自分達が過去を変えた事で、どんな代償が起こるかは分からないが、彼女達は、この世界の為に、プリキユアとしてやるべき事をしようと誓った・・・

「では、お願いします！あなた達の力が込められたこのカードを・・・」

「はい、確かに届けてきます！」

「では、行ってきます!!」

「アツ！お待ちなさい・・・これを持って行くと良いでしょう!!」

クイーンはそう言うと、自らの髪の毛を抜き二人に渡した。

「私の髪を持って居れば、例え時の狭間に迷うとも、この光の園に導いてくれる筈です!!」

「ありがとうございます!!」

ブラックとホワイトは、クイーンに頭を下げると、クイーンの光の道標を頼りに、光の園を旅立って行った・・・

3、メルヘンランドを救え！

絵本の世界の住人達が暮らすメルヘンランド・・・

光の園のクイーンには及ばないものの、巨大な姿をした女王ロイヤルクイーンが治めて居た。頭部には黄金の冠を被り、左右には二枚の翼のような物が付属し、金色の長い髪は、足下まで伸びていた。全身を、白い衣装に身を包んだ姿は、高貴な印象を見る者に与えた。

その女王が治めるこの国は今、魔界からやって来た皆褐色の肌をした三人の魔人、一人は坊主頭で、ヒョロつとした2メートルはありそうな大男ベガ、もう一人は、紫色のボンテージ風の衣装を着て、黒いマントを羽織ったスタイルの良い赤い短髪の女サデイス、もう一人は、見た目小学生のような身長ながら、白髪塗れで顔は老人のような男デイクレによって、住民達は三人の意のままに動く魔物、クライナーに変えられた。

その姿を見たロイヤルクイーンは嘆き、この国の民を救うべく、三人の魔人に立ち向かった。当初はロイヤルクイーンの巨大さに驚愕していた三人だったが、クライナーを利用して、戦いを有意に進めようとしていた・・・

「この国の民に何をしたのです? 皆を元に戻しなさい!!」

ロイヤルクイーンの忠告を聞くや、笑い出す三人の魔人、

「二元に戻す!? アハハハハ! こりゃあ傑作・・・何であたし達が、あんたの言う事を聞かないやならないんだい?」

「フツ、笑止！この国は、我らが滅ぼしてくれ!!」

サデイスが、ベガが、ロイヤルクイーンを嘲笑い、腕組みしたデイクレは、  
「元に戻したければ・・・我らを倒す事だな！最も・・・」

デイクレの言葉の途中で、クライナーの群れが三人の魔人を守るように集結し、奇声を発しながらロイヤルクイーンを威嚇する。デイクレの口元がニヤリとし、

「我らが魔物に変えたクライナーが、先ず貴様の相手をしてくれるだろうがなあ!」

「な、何と卑劣な・・・みんな、正気を取り戻すのです!!」

「キュイイイン」

クライナーは、まるで悲しんでいるかのような奇声を発し、元はメルヘンランドの民を攻撃する事など出来る筈も無く、ロイヤルクイーンの表情が一層険しさを増した：

その時!!

メルヘンランドの上空から光が舞い降りると、その光の中から、黒と白の衣装を身に纏った二人の少女が舞い降りた。まるで天女の化身のような少女達、ブラックとホワイトの出現に、ロイヤルクイーンも、三人の魔人も、何事が起こったのかと呆然としていると、デイクレ、サデイス、ベガに気付いたブラックは、三人の魔人を指差し、

「アア!?何であんた達が此処に居るのよ?」

「何の事だ!?貴様らなど、我らは知らん!」

ブラックに問われ、困惑気味にデイクレが二人など見た事が無いと答えると、ホワイトは、肘でブラックを突つつきながら小声で話し掛け、

「ブラック、あの人達が私達の事を知らなくても当然よ!だって、此処は過去の世界何だし……」

「そ、そっかあ……何だかやりにくいねえ?」

ホワイトに忠告され、困惑するブラック、呆氣に取られていたロイヤルクイーンは我に返り、

「あなた方は一体!?!」

「私達は……」

「光の使者・キュアブラック!」

「光の使者・キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!!」

「闇の力のしもべ達よ!」

「とつととお家に帰りなさい!!!」

デイクレ、ベガ、サデイスを指差し啖呵を切ったブラックとホワイトに、三人の魔人が思わず呻いた。

「又ウウ、プリキュアだと?!」

「生意気な小娘達だねえ．．．」

「フン！我らの前に立ちはだかるなら．．．蹴散らす迄だ!!」

デイクレ、サデイス、ベガが、ブラックとホワイトを威嚇するように、鋭い視線を向けた。ブラックとホワイトは、そんな三人を無視するように、ロイヤルクイーンに説明を始めた．．．

自分達はプリキュアと言って、光の園のクイーンに頼まれ、悪しき闇に蝕まれそうなのこの国に、光の加護を届けて上げて欲しいと頼まれ、こうして駆けつけて来た事を語って聞かせた。

説明を終えたブラックとホワイトが、三人の魔人、そしてクライナーの群れに身構えると、ロイヤルクイーンは悲しげな表情を浮かべながら、

「待つて下さい！その者達は、元々はこのメルヘンランドの住民達、その三人の者達に、そのような姿に変えられてしまっただけなのです!!」

「つて事は．．．ホワイト!」

「うん、横浜の時と同じね．．．ブラック、みんなを助けて上げましょう!!」

「エツ!?あなた方は、皆を元に戻せる事が．．．」

ブラックとホワイトは、ロイヤルクイーンを見て力強く頷くと、ロイヤルクイーンの表情が輝いた。横浜の地で、ハッピー達がアンデとルセンを元に戻せたのなら、自分達

にも必ず出来る筈だと二人は考えて居た。ブラックとホワイト、二人は頷き合うと、

「ブラック、パルサー!!」

「ホワイト、パルサー!!」

「闇の呪縛に囚われし者たちよ!」

とホワイトが叫べば、

「今、その鎖を断ち切らん!!」

とブラックが応える、

「プリキュア! レインボー・セラピー!!」

ブラックとホワイトから、半球形の虹のオーラが放たれると、光に中和され心の闇を打ち消していく。闇に蝕まれて居たクライナーの群れから、闇の力が完全に抜けた：：次々と正気を取り戻していくメルヘンランドの住民達は、ロイヤルクイーンを見付けるや、我先に群がって行った。そんな一同を、ロイヤルクイーンは慈愛に満ちた目で見つめた。

「バ、バカな!」

「クライナーを・・・元に戻しただと?」

「サデイス、ベガ、油断するな! そ奴ら二人から放たれる光の力・・・悔れん!!」

メルヘンランドの住民達を、元に戻したブラックとホワイトを見た三人の魔人の顔付



きが変わった。ブラックとホワイトも、キツと三人に鋭い視線を浴びせながらも、

「さあ、今の内にロイヤルクイーンは、その子達を避難させて上げてー!」

「後は私達が引き受けました!!」

「キュアブラック! キュアホワイト! ありがとう!! わたくしも、この子達を避難させた後、必ず再び駆け付けます!!」

ロイヤルクイーンは二人に深々と頭を下げると、一同を王宮へと誘導し、避難していった。それを見届けたブラックとホワイトは、

「さてと……横浜での借り、返さなきゃね!」

重心を落とし身構えたブラックが、先ず先陣をきり三人の魔人に攻撃を仕掛けた。ブラックの瞬発力に出鼻を挫かれた三人の魔人は、ブラックの怒濤の連打を喰らって後退って行った。

「ダダダダダダ……ダアアア!!」

パンチが、キックが、サデイス、ベガ目掛け、雨霰のように浴びせられていく、加勢に向かったデイクレの前に、ホワイトが立ち塞がると、構わず突進してくるデイクレの攻撃を回転しながら捌き、デイクレを投げ飛ばした。

「クツ……こ奴ら、戦い慣れて居る!? サデイス、ベガ、距離を取れ! 体勢を整えろ!!」

デイクレは、想像以上の力を持って居るブラックとホワイトを警戒し、サデイスとベ

ガに距離を取れと命じ、自身は、両目を金色に輝かせると、

「こちらもそれ相当の力で対抗せねばなあ．．．ヌウウウウウン!!」

デイクレが雄叫びを上げると、負のオーラがデイクレを包み込んだ．．．

獣のような唸り声と共に、デイクレの身体は、まるで獣人とも呼べるマントヒヒのような風貌に変化した。この時のブラックとホワイトは、まるでデイクレの真の姿を知らなかった。デイクレの変化した姿に戸惑いを見せた二人の隙を付き、デイクレが俊敏な動きでブラックとホワイトを威嚇すると、

「さあ、今度はこちらの番だ!!」

デイクレは自分の体毛を抜き取り、フウと息を吹きかけると、毛は見る見る小人のデイクレと化し、ブラックとホワイトに襲い掛かった。

「ゲツ!?何これ?」

「キャツ!．．．ブ、ブラック、こちらも体勢を整えましょう!」

頷き合ったブラックとホワイトが距離を取るも、

「逃がさんぞ!ダークネス．．．ボンバー!!」

後方に下がったブラック目掛け、ベガは右肩に負の力を蓄え、シオルダータツクルのようにブラック目掛け体当たりした。何とか両腕でガードしたブラックだったが、後方に吹き飛ばされた。

「ブラック！」

「おっと、余所見をしてる暇は無いさ！ダークネス・・・シャボン!!」

ブラックに注意を向けたホワイトに、サデイスのダークネスシャボンが炸裂する。劣勢になったブラックとホワイトだったが、光の壁がベガとサデイスの前に立ち塞がり、ブラックとホワイトを守ると、

「キュアブラック！キュアホワイト！わたくしも加勢致します!!」

「ロイヤルクイーン!!」

巨大な高貴なる女王、ロイヤルクイーンが再び現われ、ブラックとホワイトに加勢した。援護された二人は体勢を整えると、

「ブラック、サンダー！」

「ホワイトサンダー！」

「プリキュアの、美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「プリキュア！マールブルスクリュー！」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて、一旦引いた手を前に突き出すと、

「マックス〜!!」

黒と白の稲妻が合わさり、デイクレの分身を打ち消しながら、三人の魔人目掛け飛ん

でいく、三人は力を合わせ、マーブルスクリューを受け止めるも、その威力に徐々に押し出され、

「グウウオオオオ! な、何て威力だ!？」

「ヤ、ヤバイよ!」

ベガとサデイスの顔から血の気が引いた・・・

デイクレの表情も一層険しさを増し、

「こ、このままでは・・・こうなれば、バ、バルガン殿にお借りした奴を・・・」

「デイ、デイクレ! あいつはあたし達の言う事何て・・・」

「奴の側に居れば、俺達の身もヤバイぞ?」

何かを召喚しようとするデイクレに対し、サデイスとベガの顔色が変わった。二人は、デイクレが召喚しようとする何かに、少し怯えているようにも見えた。

「だが、背に腹は代えられん・・・出でよ! 大蛇!!」

デイクレの叫びが聞こえたかのように、メルヘンランドの上空に罅が入ると、二十メートルはあろう、巨大な大蛇が上空からゆっくり下降してきた。大蛇は口から何かの液体を、敵味方関係無く浴びせると、マーブルスクリューを撃っていたブラックとホワイト、ロイヤルクイーン、デイクレ、ベガ、サデイスが慌てて飛び退き避けた。一同が避けた大地は、ジュウウウウと溶け始め、ブラックとホワイトが戦慄する。

「だ、大地が溶けた!？」

「ブラック、気を付けて!あの攻撃をともに受ければ、私達も……」

「メルヘンランドに何という事を……お止めなさい!!」

険しい表情を浮かべたロイヤルクイーンが、両手を広げ大蛇を止めようとするも、大蛇はジロリとロイヤルクイーンを見つめ、

「キシヤアアア!？」

邪魔をするなどばかり、口を大きく開き、ロイヤルクイーン目掛け毒液を飛ばすも、

「危ない!!」

ブラックとホワイトが割って入り、手と手を握り合ってバリアを張り、大蛇の攻撃を防いだ。縦横無尽に暴れ回る大蛇を見た三人の魔人、デイクレは人間体の姿に戻り、荒い呼吸を整えると、

「このままでは、我らにも被害が及ぶかも知れん……少し離れるぞ!ベガ、サデイス!!」

「ああ、分かった!」

デイクレの申し出を受け入れた二人、三人は森の中に後退し、成り行きを見守った。縦横無尽に空を飛び回りながら、暴れ回る大蛇、ブラックは変顔を浮かべながら大蛇を見つめ、

「勘弁してよおお……ニヨロニヨロ系は苦手なのがいい!」

「とはいえ、このままにしておけないわね……ブラック、私が突っ込むから援護して!」  
「わ、分かった!」

表情を引き締めたホワイトが、大蛇目掛け駆け出すと、ブラックは大蛇の注意を自分に引きつけるべく行動した。大蛇の標的になるかのようになり、態と目立つ行動を取るブラック目掛け、大蛇は上空から獲物を狙うように急降下してくると、大蛇の視界の死角から、ホワイトが現われるや、大蛇の頭部に強烈なかかと落とすを決め、堪らず大蛇が地面に叩き付けられた。

「グイグイシャアアア!」

だが、大蛇の目は妖しく輝き、上空から落下してくるホワイトに狙いを定め、大きな口を開けると、ホワイトの表情が青ざめた。

「ブ、ブラック!」

信頼するパートナーの名を叫ぶと、ブラックも心得たとばかりジャンプし、今正に大きく口を開け、ホワイト目掛け毒液を放とうとした大蛇の頭に着地すると、そのまま勢いよく地団駄踏んで、大蛇の頭部を踏みまくった。

「ダダダダダダダダダダ!もう一丁……ダアアア!!」

最後に思いつ切りジャンプし大蛇を踏みつけると、大蛇は堪らず口を閉じ、舌でも噛んだのか、大蛇の目から涙が零れた。更にホワイトもブラックの隣に來ると、再び二人

で大蛇の頭部を踏みまくった。

「キシヤアアアア！」

堪らず地面でのたうち回る大蛇から、悲鳴にも似た声が漏れた。尚も二人は大蛇の頭部の上で、まるでトランポリンをしているように飛び跳ね続けた。

「シヤア・・・シヤア」

大蛇は涙を流しながら、舌をチロチロ出し、まるでロイヤルクイーンに哀願するような目を向けた。敵ではあるが、ロイヤルクイーンに哀れみの心が湧いてくる。大蛇は何とかブラックとホワイトを振り解くと、ロイヤルクイーン目掛け這いずり、

「ロイヤルクイーン！」

「危ない!!」

ブラックとホワイトが叫ぶも、大蛇はロイヤルクイーンを襲うどころか、ロイヤルクイーンの後ろに隠れるように背後に回り、ブラックとホワイトをチラチラ見た。だが、その巨体が全て隠れる筈も無く、思わず目を点にするブラックとホワイトに、ロイヤルクイーンは少し苦笑を浮かべながら、

「ブラック！ホワイト！もうその辺で、大蛇を許して上げて頂けませんか？」

「エッ!?!」

予想外のロイヤルクイーンの言葉を受け、顔を見合わせ困惑する二人、まるで自分達

の方が、悪者のような扱いを受けている気までしてくる。

「ロイヤルクイーンがそう言うなら・・・」

「私達は構いませんけど・・・」

困惑しながらも大蛇を許す事に同意した二人、大蛇は涙を流しながら、ロイヤルクイーンの周りを這い回ると、感謝の気持ちを表したのか、ペコペコ頭を下げながら、上空に浮かび上がった。だが・・・

上空に浮かぶ亀裂の中に戻ると見せかけた大蛇は、踵を返すと、ブラックとホワイト目掛け、毒液を浴びせようとした。だが、大蛇は目を見開いて驚愕した。

不意打ちをした筈だった・・・

だが、ブラックとホワイトはその上を歩き、既にマーブルスクリューを何時でも発射出来る体勢を取っており、大蛇を見て口元に笑みさえ浮かべていた。

「どうもおかしいと思つてたのよねえ」

「私達を油断させようと考えていたんでしようけど・・・残念だったわね!」

ブラックとホワイトは頷き合うと、

「マックスく〜!!」

黒と白の稲妻が、大蛇目掛け放たれた。大蛇は慌てふためき逃げようとするも、マーブルスクリューの直撃を受け吹き飛ばされた。深手を負うも、大蛇はかろうじてマーブ



ルスクリューの攻撃を耐えきり、力を振り絞って魔界へと逃げ帰った。

大蛇は思った・・・

もう二度とあの二人には会いたくないと・・・

だが遙か未来で、再びブラック、そしてホワイトと、バッドエンド王国で再会する事になるとは、この時の大蛇には知る由もなかった・・・

三人の魔人、デイクレ、サデイス、ベガは驚愕していた・・・

三人の魔人すら畏怖する大蛇を、ロイヤルクイーンは手懐け、プリキュアと名乗るブラックとホワイトは、大蛇を魔界に追い返したのだから・・・

「し、信じられん!?魔界が誇る巨大なる魔獣大蛇を・・・」

「デイクレ、どうするんだい?」

「一先ず魔界に戻るか?」

「ムウウウ・・・」

サデイスとベガがデイクレに問うと、デイクレは低い呻き声を発しながら思索した。このまま撤退するのは容易いが、このまま魔界に戻れば、大蛇を自分に借てくれたバルガンに、面目が立たないと考えたデイクレは、

「このまま手ぶらで魔界に戻る訳にはいかん!せめて、プリキュアとロイヤルクイーン

に一矢報わねば・・・」

「ああ、あたしもそう思う・・・あの小娘共に、このまま良いようにされたままじゃ、腹の虫が収まらないねえ!」

「そうだな・・・」

デイクレの申し出を、サデイスもベガも受け入れた。三人の目が金色に輝くと、大蛇を追い返したブラックとホワイト、手懐けたロイヤルクイーンに対し、雄叫びを上げながら襲い掛かった。気付いたブラックとホワイトが迎え撃ち、激しい肉弾戦を始めた。

その戦いを見つめるロイヤルクイーンは、険しい表情を浮かべながら、

(このままでは、ブラックとホワイトの二人と、あの三人の者達との戦いで、メルヘンランドに更なる被害が生まれてしまうかも知れません・・・)

ロイヤルクイーンは何かを思索し、一冊の本を取り出した。その表紙には何も描かれてはなく、中身も真っ白なままだった。ロイヤルクイーンは、ブラックとホワイトの心に語り掛け、

(ブラック、ホワイト、あの三人をこちらに誘き寄せては頂けませんか? わたくしに考えがあります!!)

ロイヤルクイーンの話聞いた時、ブラックとホワイトは、ロイヤルクイーンが何をしようとしているのか瞬時に理解した。二人は、三人の魔人がメルヘンランドに封印さ

れて居た事は、妖精会議に出席していたメツプルとミツプル、ラブ達から聞いていたのだから……

「ホワイト、どうしよう!?このままここで封印しても、あの三人は私達が居た世界では……」

「うん……復活しちゃうもんね!」

ブラックとホワイトは、一旦距離を取りロイヤルクイーンの下にやって来ると、

「ロイヤルクイーン、信じられないかも知れないけど……私達二人は未来から来たの!」  
「私達の居た時代に、あの三人の封印が解け、再びメルヘンランドや私達の世界で、悪さをするの!」

「お願い!私達にあの三人と、此処で決着を付けさせて!!」

自分達の居た世界で、封印が解けたあの三人は、アンデとルセンをクライナーに変え、さらにはその尊い命を奪った。未来が変わるかも知れないが、二人は此処で決着を付けたいと考えて居た。だが、ゆっくりロイヤルクイーンは頭を振り、

「キュアブラック!キュアホワイト!あなた方二人がそう仰るなら、それは事実なのでしよう……ですが、現状を見て下さい!このままあなた方とあの三人が戦い続けられ、メルヘンランドは深刻な状況に陥ってしまいます!!どうか、わたくしの願いを聞き入れて下さい!!!」

ブラックとホワイトは、ロイヤルクイーンの忠告を受けハツとした。辺りを見回せば、確かに自分達と三人の魔人、更に先程の大蛇との戦闘で、夢の世界のようなメルヘンランドは、荒れ果てようとしていた……

ブラックとホワイトは、今の現状をよく見ていなかったのだと反省をした。未来の自分達の現状を知っているが為に、冷静さを失っていた。今自分達が優先させる事は、この世界に住む者達の平和こそ、最優先させなければならぬ重要な事ではと……

「そうだね……ロイヤルクイーン!」

「私達は、あなたの言葉に従います!」

ブラックとホワイトが同意してくれた事で、ロイヤルクイーンの表情が和らいだ。

「ブラック! ホワイト! ありがとう!!」

ブラックとホワイトは、ロイヤルクイーンに手を上げて合図を送り、ホワイトはブラックに何か囁くと、二人は再びデイクレ、サデイス、ベガへと向かって行った。

「何を企んで居るかは知らんが……調子にのるなよ!」

デイクレの合図と共に、サデイス、ベガが、ブラックとホワイトに肉弾戦を仕掛けた。当初は互角の戦いをしてきたものの、次第にブラックとホワイトが押され出し、ブラックとホワイトが後方に大きくジャンプし、体勢を整えようとしていると、チャンスとばかり三人の魔人が突撃した。

「掛かった!」

「ロイヤルクイーン!今よ!!」

ブラックとホワイト、二人は態と劣勢を装い、三人の魔人を油断させ、こちらに誘き寄せる事に成功した。ロイヤルクイーンは両手を大きく広げ、目の前に開いたまま置かれた本に、光のエネルギーを送り込むと、

「悪しき者達よ……光の本の中で反省なさい!」

ゆっくり両腕を閉じ始めたロイヤルクイーン、それに合わせたかのように、三人の魔人は、何かに吸い込まれるように身体を持って行かれた。

「な、何事だ!」

「か、身体が動かかん!」

「畜生!あたし達に一体何を!」

「「ウワアアアアア」」

まるで掃除器の中に吸い込まれるかのように、三人の魔人は光に包まれ、その身体を光の本の中に吸い込まれた。

「おのれロイヤルクイーン!おのれプリキュア!!」

「この恨み……絶対忘れないよ!!」

「必ず、必ず貴様らに復讐してやるううう!!」

本の中からは、デイクレ、サデイス、ベガの、憎しみの籠もった声が聞こえてくるも、ロイヤルクイーンが両手を合せると、光の本は、開かれていたページを閉じた。本が閉じられると、本は光の輝きを止め、本の表紙に文字が浮かび上がった。タイトルには、絵本の中の悪魔と書かれていた。ロイヤルクイーンは、三人を封印した本を手に持つと、「この本は、この地に祠を立てその中に封印し、この森を、何人も立ち入ってはならない、封印の森と定めましょう!一先ず、あなた方を宮殿にご案内致します!!どうぞこちらに・・・」

ブラックとホワイトは、ロイヤルクイーンの後を複雑な心境で付いて行った・・・

宮殿に招待されたブラックとホワイトは、ロイヤルクイーンに宮殿内を案内され、その大きさに目を奪われた。

「光の園の宮殿も凄かったけど、メルヘンランドも凄いよねえ?」

「うん・・・見て、ブラック!あそこには本が一杯あるわ!!」

話には聞いていたが、メルヘンランドはやはり絵本の世界である事を改めて実感したブラックとホワイトだった。女王の間に来た一同は、

「キュアブラック!キュアホワイト!改めてお礼を言わせて下さい・・・お二人共、メルヘンランドを救って頂き、ありがとうございます!!」

そう言うと、巨大な身体を窮屈そうにしながら、ロイヤルクイーンが二人に頭を下げた。ブラックとホワイトは、笑みを浮かべながら、自分達が役に立てた事を喜んだ。心を通じた三人は打ち解け、世間話を始める程親密になっていった・・・

「私達の本当の名前は・・・私が美墨なぎさ！」

「私は雪城ほのかです！」

「なぎささんに、ほのかさん・・・何故、元の姿にならないのですか？」

ロイヤルクイーンは、不思議そうに小首を傾げると、顔を見合わせたブラックとホワイトは苦笑を浮かべながら、

「私達、プリキュアになるにはパートナーの妖精達の力が必要何ですけど」

「訳あって、今は離れ離れ何です！だから、一旦元の姿に戻っちゃうと、プリキュアになる事は出来ないんです!!」

「成る程・・・それでプリキュアのままで居るのですね？」

「はい!!」

二人の説明を聞き、ロイヤルクイーンは何度も頷いて見せた。王宮からメルヘンランドを見渡すと、妖精達の声が聞こえ、平和を取り戻した事を実感したブラックとホワイトだった・・・

光の園のクイーンに頼まれた通り、カードをロイヤルクイーンに手渡したブラックと

ホワイトが、光の園にそろそろ戻ると告げると、ロイヤルクイーンは名残惜しそうに二人を見つめ、

「あなた方二人は、わたくしの大切な友人・・・あなた達が、無事に元の世界に戻れる事を、このメルヘンランドより祈っております!」

「ありがとうございます!」

「ブラック、ホワイト、お気を付けて!」

ロイヤルクイーンは、自ら宮殿の外まで二人を送り、手を振ると、ブラックとホワイトの身体が光に包まれ、

「私達も、未来でロイヤルクイーンと再会出来る日を、楽しみにしています!」

「じゃあ、お元気で!」

光は上空高く舞い上がり、ロイヤルクイーンは、その光が完全に消え去るまで手を振り続けて居た・・・

#### 4、二人を呼ぶ声

光の園に戻ったブラックとホワイト・・・

無事にメルヘンランドの平和を取り戻したとクイーンに報告したものの、二人の表情は冴えず、クイーンは玉座に座しながら二人の様子を気に掛け、



「キュアブラック、キュアホワイト、どうしました!?二人共表情が冴えませんか?」

ブラックとホワイトは、顔を見合わせた。横浜の地から過去の世界に飛ばされ、正確な時間は分からないが、あれから数時間は経っているだろうと思うと、ブラックもホワイトも、横浜に残る仲間達の事を思うと表情が険しくなる。

あれからハッピー達はどうなったのか?

みんなはどうしているだろうか?

ジャアクキングや三人の魔人と戦って居る時は、そんな余裕も無く戦いに集中出来たが、いざ平和を取り戻すと、早く元の世界に帰りたい思いが募ってくる。ホワイトはクイーンを見つめると、

「クイーン……先程も少し話したように、私達二人は、未来の世界から過去の光の園にやって来てしまったんです!クイーンのお力で、私達を元の世界に帰せる事は出来ませんか?」

ホワイトの話を真剣な表情で聞いていたクイーンだったが、少し考えると、

「キュアホワイト……残念ながら、私にはあなた達を元の時代に帰してあげられる力はありません!」

「そ、そんなあ……」

クイーンの言葉を聞き、思わずブラックが眩き、ホワイトも悲しげな表情を浮かべた。

その時だった・・・

二人の心に何者かの声が響いた・・・

(プリキュアのみんなあ!私に力を貸してええ!!)

確かに声はそう言っていた・・・

だが、ブラックもホワイトも、誰の声かまでは思い出せないが、何処かで聞いた事のある声に思えた。顔を見合わせた二人は、

「ホワイト、今の声聞こえた?」

「うん!みんなの身に何かあつたんじゃ?」

仲間が自分達の力を求めている・・・

帰らなきゃ!!

ブラックとホワイトの思いは一つ、決断した二人は、凛々しい表情でクイーンを見つめると、

「私達・・・元の世界に帰ります!」

「きつと何か方法がある筈です!」

二人はクイーンに頭を下げると、踵を返して駆け出した。クイーンは慌てて二人を呼び止め、

「待ちなさい!ブラック、ホワイト、光の園は通常の世界とは時間の流れが違います!!無

闇に外に飛び出せば……」

「分かってます！でも、仲間が呼んでるんです!!」

二人の表情を見たクイーンは、もう止めても無駄だと悟り、再び自分の髪を抜き、二人に手渡すと、

「私ももう止めません……もし、時空の狭間で迷うようなら、光の園に戻って来るんですよ?」

「はい!!」

ブラックとホワイトは駆け出した……

仲間達が待つ元の世界目掛け……

再び時の狭間に飛び込んだブラックとホワイトだったが、来た時とは違うビジョンが流れて居た……

悪魔のような容姿の魔の足下に、ピクリともせず、横たわる三人のプリキュアの姿が見えた。魔は雄叫びを上げ、三人のプリキュアを踏みつぶし、血飛沫が辺りに飛び散った。

「な、何?」

ブラックは思わず顔を背けた……

更に次のビジョンには、赤っぽい髪をしたプリキュアの表情がまるで何かに取り憑かれたかのように醜く歪み、パートナーである筈の水色髪の青年を、ロッドのような物で貫き、高笑いを浮かべていた。

「さっき見たのと違うわ!」

ホワイトが絶叫し、ブラックも同意する。更にビジョンは変わっていくが、どれもプリキュア達が敗北する姿が映し出されていく・・・

フラワーが、ムーンライトが、砂漠の使徒に敗北し殺された・・・

ブルームとイーグレットが、満と薫に殺される姿が映った・・・

ドリーム達が絶望の闇に沈み、ナイトメアの下僕となる姿があつた・・・

ウエスター、サウラー、そして、イースに捕らわれ、無残な姿にされているピーチ達の姿が映った・・・

ブロッサム達、メロディ達、ハッピー達もそれぞれ敗北し、無残な最期を遂げた姿が映った・・・

「アツ・・・アアア・・・な、何よこれ!? 訳分かんないよ?」

「何故プリキュアのみんなが・・・」

ブラックとホワイトが困惑していると、二人の側に二つの光が近付いた。目を凝らせば、光の中には人らしき姿があるような気が二人にはした。光の中にビジョンが現われ

ると、それには驚くべき光景が映った。

背中から金色に輝く、12枚の天使の羽を生やしたブラックとホワイトが、今二人が見たそれぞれの世界を、終焉に導く姿があつた……

二人は呆然とした……

「これは私達……なの？」

「そう……これは私達の記憶！」

「エッ！」

ブラックの問いに答えた声を聞いた瞬間、二人は驚き絶句した。二人に語り掛けた声は、確かにブラックの声そのものだったのだから……

「誰!? あんた誰よ?」

「私達にこんな場面を見せて……何が目的なの?」

だが、光はその質問に答えず沈黙する。ブラックがまだ何か言おうとしたその時、周囲に不気味な声が響き渡った。

「プリキュアアアアアア！」

地の底から這い上がってくるかのようなおぞましき声が、こちらに近付いて来る気がして、ブラックとホワイトの表情が凍り付く、度重なる連戦で、ブラックとホワイトの疲労もピークを向かえていた。

「な、何、今の声!?!」

「こつちに向かつてくるわ!」

近付いて来る何者かに、表情を険しくしたブラックとホワイトが身構えると、再び光が言葉を発した。

「あなた達は、あの敵と此処で戦ってはいけない!」

「あの敵は、伝説を継ぐ者、キュアソード達の敵よ!」

「伝説を継ぐ者?」

「キュアソードって一体!?!」

光からの声は、ブラックとホワイトにそっくりで、光からの声の意味を考えながら、ブラックとホワイトが呆然としてみると、光は二人の身体を包み込み、

「悪いけど、あんた達の身体・・・借りるよ!」

「あなた達を戦わせる訳には行かないの!!」

遠のいていく意識の中で、ブラックとホワイトは、そんな声を聞いた気がした。二人が意識を失うと、光は目映い輝きを放ち、ブラックとホワイトは、巨大な光の翼を背から生やし、その光の翼は片側6枚ずつ、12枚の天使の翼へと変化した。

「プリキュアアア!この恨み・・・キュアブラック!?!キュアホワイトだと?バ、バカな、お前達は向こうの世界に・・・な、何故此処に居るうう?」

姿を現わしたのは、巨大な黒い塊のような物体・・・

不気味に蠢き、収縮を続け、よく見れば、何体ものおぞましい生き物の集合体のようにも見えてくる。顔にはバッテンマークが付き、過去の世界に向かっているようだった。魔は、ブラックとホワイトを見た瞬間、まるで金縛りにあったかのように、その動きを止めた・・・

「何だ・・・お前達から溢れるその力は一体!? キュアブラックとキュアホワイトでは無いのか?」

「私達は・・・光と闇の使者、キュアブラック!」

「光と闇の使者、キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!」

「光と闇の調和を乱す者よ!」

「とつととお家に帰りなさい!!」

光と闇の使者と名乗った二人が、キツと魔を睨むと、魔は思わず息を飲んだ。圧倒的恐怖が魔の心を覆い尽くす。魔は、恐怖を払拭するように雄叫びを上げると、ブラックとホワイトに向かって来ようとする。だが、二人は顔色一つ変えず、ブラックは右手を、ホワイトは左手を前に振り上げた。

ただそれだけだった・・・

だが魔は、凄まじい突風でも浴びたかのように、やって来た方角に吹き飛ばされ、

「プリキュアアアア! 貴様、俺に何をおおお!」

魔は、何をされたのかも分からず、恨み事を二人に言い残し、クルクル縦方向に高速回転しながら、二人の視界から完全に消え去った。

「これであいつに、キュアソード達は追いつくね?」

「うん……ブラック、どうやら私達の気配に気付いて、彼女が来たようね!」

二人の目の前の時空が歪み、長い黒髪の少女が姿を現わした。ブラックもホワイトも、微動だにせず少女を見つめると、

「あなたは、この世界のブラックとホワイトをも取込もうと言うの?」

「私達を取込んだだけでは、物足りないとしても言うのかしら?」

ブラックとホワイトが問い掛けるも、少女は答えない。ただジツと悲しげな表情で二人を見続ける。

「あなたが、この世界を再び終焉に飲み込もうとする時は……」

「私達二人は、再びあなたと対峙する事になる!」

「それだけは覚えておいて!!」

ブラックとホワイトの言葉を聞くと、少女はただ悲しげな表情を浮かべ、何処かへと消え去った……



「さあ、彼女も帰ったし、この身体をこの世界の二人に返しませう！悪いけど、あなたの記憶を、少し封印させて貰うわね!!」

「これ以上、未来を変える訳には行かないからね!」

ホワイトの言葉にブラックも同意し、二つの光がブラックとホワイトの身体から抜け出すと、背中に生えた12枚の羽は消え去り、何時ものブラックとホワイトへと戻った。ハッと我に返ったブラックとホワイトは、

「アレエ!?今私達、何してたっけ?」

「エエと・・・光の園を飛び出したままでは覚えてるんだけど?」

二人で小首を傾げたブラックとホワイトだったが、連戦が続いた筈の二人の気力は、先程と違い満ち溢れていた。力が漲ってくるのが、手に手を取るようになって分かった。

「何だか・・・力が漲ってくる気がする!」

「うん・・・急にどうしたんだらうね?」

困惑していたブラックとホワイトの耳に、再び声が聞こえてきた。

「プリキュリアア!!キャンディを助けてポポオオオ!!」

二人に取っては聞き慣れた声が、涙混じりに絶叫していた。ハツとして顔を見合わせたブラックとホワイトは、

「今の声・・・ポルン!」

「キャンディを助けてって言ってたわね？」

瞬時に表情を険しくした二人、その側を二つの光が、まるでブラックとホワイトに仲間達の下への道標を示すように、二人に知らせているようだった。二人は頷き合うと、

「行こう！ホワイト!!」

「うん！待ってて、ポルン！今行くから!!」

二人は手を握り合うと、光の示す先へと進む・・・

この時の二人は知らなかった！

この光の道標は、もう一人の自分達が示してくれた事に・・・

ブラックとホワイトは進む・・・

仲間達の待つ決戦の地、バッドエンド王国目指して!!

第六十三話：外伝!時の旅人!!

完

## 第八章：絵本の世界の冒険！

## 第六十四話：なぎさのアルバイト

魔界・・・

プロローグ

それは人々の想像を超えた不気味な世界・・・

森が蠢き、大地は荒廃し、漆黒の海が、川が、湖がある世界・・・

昆虫、動物、植物、神獣、果ては異形な形態をした様々な生き物が蠢き、常に争いが

絶えず、不気味な声が響き渡る世界・・・

だがそんな生き物達が、近付く事を恐れる地があった・・・

天に轟く、不気味な黒き塔を守護するように、塔の周りを円形に囲む十二の魔宮・・・

白羊宮、金牛宮、双児宮、巨蟹宮、獅子宮、処女宮、天秤宮、天蠍宮、人馬宮、磨羯

宮、宝瓶宮、双鱼宮、これら十二の魔宮は、何処か古代ギリシャの建造物を想像する出

で立ちをし、不気味に赤く発光していた・・・

だが、その輝きから一つの光が消えた!!

塔の一階、広々した大広間に集まった四つの影・・・

頭部の左右から二本の大きな角を生やし、下半身は茶色い毛に覆われた屈強な体軀をした古の魔獣・・・磨羯宮を守護するアモン！

バルガンが着ていたような白い軍服を着て、背中まで伸びた金髪を靡かせた目付きの鋭い男・・・双児宮を守護するカイン！

背中まで伸びた銀髪以外、カインと瓜二つの男・・・アベル！

そして、水色の柔らかかそうな腰まで伸びる長い髪を靡かせ、白い裸身を包み込む黒いワンピースを着て、右手にハープを持ち、切れ長な目をしたスレンダーな美しき女性：天秤宮を守護するシーレイン！

大広間の前に現われし、魔界が誇る十二の魔神の内、四神と呼ばれし者達・・・

「十二の魔宮の内、宝瓶宮の光が消えた・・・バルガンが何者かによつて倒されたようだな？」

「確か・・・何処かの地に封印されて居た恥知らずな三人、その三人を預かっていた、ジョーカーとか言う者に力を貸していた筈だったな」

アモンの問いに、デイクレ達三人を思い出したアベルが不快そうに答えた。仮にも十二の魔宮の一つを預かる者が、他の世界に出向き、敗北するという事態に苛立っていた。カインはそんなアベルを見るや、口元に笑みを浮かべ、

「そう苛立つな、アベル！逆にこれは好機でもある・・・」

「好機!?カイン、どういう事かしら?我が王は、違う世界との干渉は嫌っている筈よ!」  
笑みすら浮かべながら、この事態を好機と捉えているカインに、シーレインは眉根を曇らせる。カインとアベルは顔を見つめ合うと、

「フフフ!そう慌てるな、シーレイン!直に分かる・・・王も此度のバルガンの失態にはお怒りだ!!」

「そうだな・・・ハハハハ!!」

(アモン、聞こえる!?!・・・カインとアベル、相変わらず得体の知れない行動を取るわね?でも、おかしいわ!!私も、アモンも、ここ数ヶ月・・・王の姿を拝見していない!!なのに、何故カインとアベルは王に会えるの!?)

シーレインは、カインとアベルに気付かれぬよう、テレパシーをアモンに送った・・・アモンはシーレインを見つめると、

(シーレインの言う通り、何かが変だ!我らが王は、カインとアベルを警戒していた筈・・・その王が、シーレインならば兎も角、カインとアベルのみに指示を出す事などあるだろうか?)

シーレイン、そしてアモンの心に、カインとアベルに対し不信感が芽生えていた・・・

1、たこ焼きデビュー

バッドエンド王国との死闘を一先ず終えた一同は、元の生活へと戻って居た・・・  
過去の世界から戻って来た、美墨なぎさと雪城ほのか・・・

二人は、過去の世界から戻って来てから、頻繁に妙な夢を見るようになっていた・・・  
暗闇の中で、長い黒髪の少女が、自分達に何か訴える夢を・・・

なぎさは寝ぼけ眼のまま、今見た夢をもう一度思い浮かべながら、何故自分がこのような夢を見るようになったのか考える。だが、思い当たる節は無く、なぎさは困惑した。  
（何処かで会った気はするんだけど、でも、不思議と顔は思い出せないのよねえ・・・ほのかに話してみようとも思うけど・・・ほのかも忙しいし、不安になるような事は言わない方がよいよねえ・・・）

思い出せないものはしょうがないと、なぎさはベッドから起き、その枕元にはコミューン姿のメツプルが眠り続けていた・・・

五月中旬の土曜日、TAKO CAFEのテーブルでは、元気の無いなぎさがたこ焼きを頬張りながら、ペローネ学園の先輩である藤田アカネと、後輩九条ひかりを相手に愚痴っていた・・・

「ああ、もう最悪かもおお！お小遣い抜きは・・・無いよねええ」

なぎさはそう言うのと、たこ焼きを楊枝で刺し、口の中へ放り込みモグモグ食べると、

ハアと溜息を付いた。過去の世界に飛ばされ、三週間家に連絡しなかったなぎさは、戻ってから両親にこっぴどく怒られ、母理恵から、今月のお小遣い抜きと言ひ渡されていた。

アカネとひかりは、顔を見合わせクスリと笑みを浮かべると、なぎさは恨めしそうに二人を見つめ、

「何よ、二人共おお・・・人事だと思つてえ！」

大きく頬を膨らませるなぎさに、ひかりが近づき謝りながら、

「すいません・・・ところでなぎささん、最近ほのかさんいらつしやいませんか？」

ほのかも、なぎさと共に過去の世界に飛ばされ、エコー、ポルンとルルンの声を聞き、二人はバッドエンド王国との戦いに苦戦する一同の下へと歸つて来た！

ほのかの祖母早苗は、まるで全てを悟っているかのように、ほのかの両親にも、ほのかと連絡付かなかった事を伝える事も無く、戻つて来たほのかを何時も通り暖かく迎へ、普段と変わらぬように接してくれていた。

「ほのか!? ほら、ほのかも私と一緒に三週間学校休んでたじゃない! 休んでた分を取り戻すつて頑張つててさあ、私も電話で話すぐらい何だよねえ・・・」

ちよつと寂しそうな表情を浮かべたなぎさが、再びたこ焼きを頬張り、アカネは少し心配そうに、

「なぎささあ、あんたは良いの?」

「私!? 私は保健体育専攻だし、ほのか程大変な訳じゃ無いんですよねえ」

「成る程ねえ……ところで、お小遣い無しにされたわりには、良く家の店に食べに来るわねえ?」

小遣い抜きにされたわりには、頻繁にやって来るなぎさに、アカネは小首を傾げながら問うと、なぎさは苦笑を浮かべながら、

「いやあ、付けが利くし……」

「ちよつと待ったああ! なぎささあ、家は何時もニコニコ現金払いだからねえ!!」

そう言うのと、アカネはニコニコ笑みを浮かべながら、なぎさに右手を差し出し、代金を支払うように催促すると、なぎさは変顔を浮かべながら、

「エエエエエ!? ウウウ、可愛い後輩が困ってるのいいい」

「それはそれ、これはこれ……毎度!!」

洩々たこ焼きの代金を支払ったなぎさに、アカネはニンマリとしながら毎度と言葉を掛けた。なぎさは、財布の中身を見つめながらトホホと呟いた……

流石にそんななぎさを見かねたアカネは、店のカウンターの前に置いてある無料の求人誌を手につつと、なぎさの目の前に置き、

「なぎささあ! あんたも大学生何だから、お金に困ってるなら……アルバイトでもしたら



「どうなのよ?」

「バイト!? そうですねえ……TAKO CAFEで雇って貰えればありがたいかなあ!!」  
「残念! 家にはひかりとアカネさんと云う、二大看板娘が居るから間に合ってるんだわ!! ねえ、ひかり?」

「エツ!? アハハ……」

アカネに話を振られ、ひかりは困惑気味に笑って話を誤魔化した。なぎさはアカネを微妙な表情で見つめると、

「ひかりはともかく、アカネさんは……もう看板娘っていう年じゃないような?」

「なぎさあ! 何か言った?」

「ううん、何にも!」

そう言うと、慌てて目の前の求人誌を取り、パラパラ読み始めるなぎさ、自分が出来そうなのはと捜し始めた。そんななぎさの耳に、聞き覚えがある声が聞こえてきた。

「ようやく着いたでえ! TAKO CAFEやああ!!」

聞き覚えのある関西弁に、背後を振り向いたなぎさは、星空みゆき、日野あかね、黄瀬やよい、緑川なお、青木れいか、坂上あゆみを見付け、思わず笑みを浮かべると、  
「誰かと思えば、みゆき達じゃない! どうしたの?」

「なぎささんも来てたんや！ウチ、前にひかりさんと約束してたさかい、休みを利用してみんなとやって来たつちゆう訳です」

「へえ、意外に律儀だねえ．．．みんな、よく来たね!!」

「皆さんいらつしやい！よく来て下さいましたね」

やって来た一同を、なぎさもひかりも歓迎し、テーブルへと手招いた。なぎさが座るテーブルと合わせ、一同が席に着くとアカネが顔を出し、

「いらつしやい！この子達、なぎさやひかりの知り合いなの？そう言えばひかりが、小学生の女の子の友達が、加音町に居るって言つてたつけ．．．意外にあんた達顔が広いよねえ？」

大学生のなぎさや高校生のひかりが、見た感じ中学生の少女達と親交がある事に、アカネは少し驚き、さすがにプリキュアの仲間だと伝える訳にもいかないなぎさは、

「うん、ちよつとね．．．そうそう、この関西弁を喋る子も、あかねって言うんだよ！」  
「そうなの!？」

「よろしゅう！シシシシ」

あかねとアカネ、共に顔を見合わせると思わず笑い出した。あかねは、なぎさとひかりに、せつかく約束していたから、たこ焼きを食べた事が無い、れいかのたこ焼きデビューは、TAKO CAFEでとみんなで決め、関西での修学旅行でもたこ焼きを食

べず、この日を楽しみにしていたと伝えると、なぎさ、ひかり、そしてアカネは大変喜び、

「あんた達、エライ！れいか、アカネさんが作るたこ焼きは、メツチャ美味しいんだからあ!!」

「それは楽しみです!」

れいかも心から楽しみにしているようでニコニコしていた。お金があれば、こんな粋な後輩達に御馳走して上げるのに・・・と心の中で思うなぎさであった。

「ウチは関西出身だから、たこ焼きにはチトうるさいよお!」

「オツ!言ってくれるじゃなあい・・・アカネさんスペシャル!楽しみに待っててねえ!!」

そう言うときと手際よくたこ焼きを作り出すアカネの姿に、みゆき達六人は目を輝かし、あかねはウンウン頷きながら、

「噂に聞いてただけあるやない!手際もエエし・・・ウチも食べるの楽しみやあ!!」

「本当!私も楽しみ!!」

「うん!」

「そうだね!」

みゆき、あゆみ、やよいもあかねの言葉に同意し、美味しそうな匂いに釣られたなおは、席を立ち上がり、アカネが作るたこ焼きを、口から涎を垂らしそんな表情で見つめ、

一同を苦笑させた。次々器に並べられたたこ焼きを、ひかりとなぎさが一同の目の前に置き、

「お待たせしました！」

「さあ、召し上がれ！美味しいよ!!」

表情を綻ばせたひかりとなぎさが一同に進めると、なおが真つ先に楊枝を手に取るも、

「なお、待ちや！此処は先ず、れいかに一番に食べて貰おうやないか!!」

「「「異議無し!!」」」

あかねの提案に、みゆき、やよい、なお、あゆみも賛同すると、れいかは少し驚いたような表情を浮かべ、

「エツ!!そんな、皆さん一緒に・・・」

「折角みんながああ言ってるんだし・・・先ずはれいか食べて見てよ!!そうそう、そんなに大きくないから、一口でパクつと一っちやって!!」

なぎさもあかねの提案に賛同し、れいかに食べてみるように勧めると、れいかも一同の意を汲み、楊枝を手に取るとたこ焼きに刺し、フウフウ息を吹きかけ上品に口に持つて行き、なぎさに言われた通り、口の中にパクリと放り込み、右手で口を隠しながらモグモグ味わった。見る見るれいかの表情が輝くと、ニッコリ微笑み右手でVサインし、

「私、生まれて初めて食べましたけれど……たこ焼きとは美味しい物ですね！皆さんも食べて見て下さい!!」

そう言うのと、また楊枝でたこ焼きを刺し、口の中に放り込みモグモグ食べるれいか、なぎさとひかりは嬉しそうに顔を見合わせると、

「でしょう!!」

「れいかさんのお口に合ったようで良かったです!」

「ほな、ウチらも頂くとしよかあ!」

「」「」「いただきまゝす!!」「」

あかねの言葉を合図に、みゆき達一同もたこ焼きを食べ始めると、皆目を輝かし、来て良かったと称え、

「外はカリッ!中はトロツ……ウチ、こんなに美味しいたこ焼き食べるの、久しぶりやわあ!!」

「本当、美味しいよねえ!!」

あかねは一個一個味わうように、なおは一気に頬張り口の周りをソース塗れにする。みゆきはアカネに気付かれないようにしながら、キャンデイにも分けてあげて、キャンデイも美味しいと表情を緩めた。そんな一同の喜ぶ姿を見て、アカネ、ひかり、そしてなぎさは顔を見合わせ喜んだ。

「いやあ、あんた達良い食べっぷりだねえ・・・気に入った！家のメニューで食べてみたいのあったらリクエストして！一品だけサービスするから!!」

「本当ですかあ？」

「ヤツタ〜!!」

みゆきとなおが大喜びで立ち上がると、カウンターに書いてあるメニューを熱心に見つめて選び始め、やよいはクレープを選び、苺とバナナ、生クリームがふんだんに入っている苺チョコバナナクレープを手取るや、

「チャララン・チャラン！勇者やよいは・・・クレープを手に入れた!!」

「やよいちゃん・・・勇者って!?!」

「あゆみ・・・気にせんでエエ！時々やよいは、妙なスイツチが入るさかい」

「そうなの!?!・・・何かやよいちゃんらしいね！ウフフフ」

やよいの言動に小首を傾げたあゆみに、苦笑を浮かべたあかねが気にしないでいいと伝え、あゆみが思わずクスリとする。そんな会話にお構いなく、やよいは手に入れたアイテム、苺チョコバナナクレープを美味しくそうに食べるのだった。そんな一同を羨ましそうな目で見つめたなぎさは、揉み手をしながらアカネの前に行くと、

「アカネさああん！可愛い後輩にも一つ・・・」

「しようがないなあ・・・」

苦笑しながらアカネがOKを出し、なぎさは大喜びで再びたこ焼きを注文した。れいかのたこ焼きデビューも無事に終え、一同は和気藹々と過ごしていった・・・

2、なぎさのアルバイト先は!?

なぎさの目の前に、求人誌が置いてあるのを見付けたみゆきは、小首を傾げながら求人誌を見せて貰うと、

「なぎささん、アルバイトするんですか?」

「うん! 今月、お小遣い無しでピンチだからさあ・・・良い所あればと思ってねえ」

「へえ、そう何ですかあ・・・」

パラパラページを捲っていたみゆきは、あるページを見てピクリと反応すると、変顔を浮かべながらなぎさを見つめ、

「此処、此処が良いですよお!!」

「エツ!? 何、良いところあった?」

目を輝かせたみゆきが、何度も指さす求人を見つめたなぎさは、

「どれどれ!?! 世界絵本博覧会スタッフ募集ねえ・・・」

「はい! はい!」

みゆきは鼻息荒くなぎさに迫り、此処が良いと思いますと言うみゆきの迫力に、思わ

ずなぎさは仰け反りながら苦笑を浮かべ、改めて良く内容を確認する。

世界中の絵本や童話を一堂に会したイベントを、共に盛り上げてくれるスタッフ急募、期間は六月一日からの二週間、募集内容は、絵本のキャラクターに扮した着ぐるみで、子供達に夢を与える仕事をしてみませんか？土日のみも可！時給1700円以上、交通費、日払いも可、要相談・・・主催：四葉グループなどと書かれてあった・・・

記事を見たなぎさは、微妙な表情を浮かべるや、

「無理、無理、確かに時給は良さそうだけどさあ・・・」

「エエ!? どうしてですかあ?」

少し不満気に口を尖らすみゆき、なぎさはそんなみゆきを見て困惑気味に、

「私さあ・・・人前で何かするのって、結構緊張するんだよねえ! ラクロスの時見たいに、何かに夢中になっていれば平気何だけど・・・ほのかはああ見えて度胸があるから、割とへっっちゃら何だけどねえ」

「「「「エエエ!?」」」」

なぎさが人前では緊張すると言うと、みゆき達一同は意外そうに驚きの声を上げた。なぎさにそんな面があるなど、とても思えなかった。

「何よ・・・みんなその顔は? 私だってこう見えて、意外にデブケート何だからねえ!!」  
「なぎささん・・・それを言うなら、デリケートでは?」



「エッ!？」

そんな一同に気付いき、なぎさが不満気にするも、言葉を間違え、れいかに諭される。大學生が中学生に教えられる姿を見て、アカネは駄目だコリヤと溜息を付くのだった。

「まあ、ほのかや、ゆりが一緒だったら・・・面接受けに行っても良いかなあ?」

「ほ、本当ですか!？」

「アハハ!まあ、二人共忙しいし、駄目だと思うよ・・・」

一人では流石に面接に行く気にもならないが、ほのかや月影ゆりが一緒なら、時給も良さそうだし、行っても良いかなあと思つたなぎさが口に出すと、みゆきの目は再び輝き、

「是非、是非、お二人にも声を掛けてみて下さい!!」

「何でみゆきがそないに必死何や?」

「確かに・・・」

必死になぎさに頼むみゆきの姿を見て、あかねとなおは首を傾げ、れいかはなぎさから求人誌を借りると、記事の内容をよく読んで見た。

「・・・スタッフ特典で、ご家族やご友人に割り引きシステムもあります・・・成る程、みゆきさんが必死な訳はこれですね?」

「エへへ!バレちゃった?世界絵本博覧会が開催されると知って楽しみにしてたんだけ

ど、色々物入りで・・・」

「そんなん自腹で行きやあ!!」

れいかに魂胆がバレ、みゆきが苦笑を浮かべると、あかねがさかさずツツコミを入れた。なぎさも苦笑しながら、

「本当、みゆきは絵本とか大好きだよねえ?!じゃあ、ほのかとゆりにメール入れてみるよ!」

今の時間は午後1時過ぎ、二人に電話を掛けても、きつと忙しいだろうとメールを送信したなぎさだったが、五分ぐらい経って、早くも返信が来た。意外そうな表情を浮かべたなぎさが携帯を取りだしメールを見ると、

「あつ、ゆりからだ!・・・なぎさ、アルバイトをするのはあなたの自由だけど、私やほのかを巻き込むのは、どうかと思うわよ?行くなら自分一人で行きなさい!!：ハア、ご尤も・・・」

確かにゆりの言う通りだと、トホホ顔のなぎさが携帯をしまうと、言い出しつぺのみゆきは申し訳なさそうに、

「なぎささん、ゴメンなさい!」

「ウウン、気にしないで!アルバイトしようとしたのは確か何だからさ!!」

そんな会話をしている間に、なぎさの携帯に電話が掛かって来た。なぎさが着信者を

見ると、それはほのかからであった。ほのかにも注意されるのかと、なぎさが恐る恐る電話に出てみると、

「もしもし、ほのか！さつきは変なメール打ってゴメン!!」

「ウウン！なぎさ、アルバイトするの？」

「ほら、私今月お小遣い無しにされたでしょう？色々ピンチでさあ・・・今TAKO CAFÉに居るんだけど、アカネさんにもバイトでもしたらって言われてさあ・・・そうそう、今みゆき達も来てるんだあ!!」

みゆき達も来ていると聞き、ほのかは意外そうにして驚き、なぎさは、あかねが前にひかりと約束していて、たこ焼きを食べた事が無いれいかのたこ焼きデビューは、TAKO CAFÉでとやって来た事を伝えると、ほのかも自分の事のように喜び、

「みゆきさん達、まだ時間大丈夫かしら？休んでいた分は取り戻せし、今から私も向かうわ！そうそう、アルバイトの件・・・私は別に良いよ！何だか楽しそうだし!!」

ほのかがなぎさと一緒にアルバイトする事を承諾してくれて、なぎさの表情が見る見る綻んでいく。心の中で、ほのかに手を合わせるなぎさであった。

「本当!!ありがとう、ほのか！みゆきも喜ぶよ!!」

「みゆきさんが!!何でなぎさのアルバイトの件で？」

「その件はこっちに着いてから話すから！じゃあ待つてるね!!」

「分かった！みゆきさん達にもよろしくね!!」

電話を切ったなぎさが、みゆきを見るとVサインをし、

「ほのか、一緒にアルバイトしてくれるってき！」

「本当ですか!？」

「で、ほのかも今からこっち来るって言うてるんだけど・・・みゆき達、まだ時間大丈夫?」

「はい、特に他に予定もありませんし・・・ねえ、みんな！」

みゆきも自分の事のように表情を喜ばせながら一同に聞くと、一同もほのかに会いたいと同意してくれて、みゆきとなぎさは満面の笑みを浮かべた。そんな二人を見たアカネとあかねは、

「全く、面接行くのを決めただけで、何をそんなに喜んでるんだかあ・・・」

「ホンマですねえ・・・みゆきもみゆきやでえ！」

思わず二人で顔を見合わせ、苦笑を浮かべるのだった・・・

ほのかは、ゆりにも声を掛けようと、メールでゆりに帰れるか聞いた所、ちようどゆりも帰る所だとメールが来た為、二人は駅に近い校門前で待ち合わせをしていた・・・  
「ほのか！待たせたわね!!」

「ウウン、私もさつき着いた所だよ！」

合流した二人は駅へと向かい歩を進めた。ゆりは携帯を見ると、

「そう言えば、なぎさから変なメールが来なかったかしら？」

「アルバイトの事でしよう？ 私はさつき電話でOKして、これからTAKO CAFEで、詳しい事をなぎさに聞こうかと思ってるの！ ゆりは？」

ほのかがアルバイトに乗り気なのを見て、思わずゆりは信じられないといった表情を浮かべると、

「ほのか、あなたなぎさに付き合ってアルバイトするの？」

「うん！ だってなぎさ困ってるし・・・なぎさがお小遣い無しにされたのも、あの戦いのせいだし、少しは役に立てればなあと思って・・・それに、面白そう!!」

少し楽しみに語るほのか、その言葉を聞いていたゆりの眼鏡がみるみる曇り、困惑気味の表情を浮かべたゆりは、

（それを言われると・・・私にも責任の一端はあるわね）

過去の世界に飛ばされたなぎさとほのかの為を思い、二人の家族に対し、啖やれいかに協力して貰い、二人は薫子の手伝いで地方に行っていると誤魔化してみたものの、その後のフォローを怠っていたのは、自分のミスであるとゆりは思っていた。

「ほのか、私も一緒に行くわ！」

「本当!?なぎさもきつと喜ぶよ!そうそう、みゆきさん達も来てるんですってえ」

「みゆき達が!?珍しいわねえ・・・」

ゆりが知る限り、みゆき達がTAKO CAFEに來た事は無かつた筈だがと小首を傾げた。ほのかはそんな戸惑うゆりをみてクスリと笑い、

「行つてみれば分かるわ!さあ、行きましよう!!」

ほのかに促され、二人はTAKO CAFEへと向かつた。

約1時間後・・・

ほのかとゆりがTAKO CAFEへとやつて來た!

なぎさ達は、ゆりも一緒に居る事に驚いていたが、ゆりも來てくれた事に嬉しそうに二人に駆け寄つて行つた。みゆき達と軽く会話をしたほのかとゆりは、飲み物を注文し、一同と一緒にのテーブルに座ると、なぎさはアルバイトの件を詳しく二人に話した。話を聞いたゆりも、面接に行く事を同意してくれて、なぎさは、ほのかとゆり、二人の手を取り感謝した。

「世界絵本博覧会ねえ・・・中々面白そう!」

「ですよね!私、スツゴク楽しみにしてるんです!!」

「みゆきは、本当に絵本や童話が好きなのねえ?」

目を輝かせるみゆきを見て、ほのかとゆりは苦笑を浮かべた。二人はなぎさから手渡された求人誌を見ると、

「土日だけでも良いのは助かるわね！」

「うん！平日は学校があるしね！！」

「二人共、感謝感激雨チヨコレート！！じゃあ、早速電話してみるよ！！」

「なぎさ、それを言うなら・・・感謝感激雨霰だよ！」

思わずクスリとしながらなぎさに教えるほのかに、

「エッ!?・・・アハハ！まあ、感謝してると言う事で!!」

なぎさは携帯を手に取ると、連絡先へと電話を掛けた。電話に出たまだ年若そうな男性に対し、アルバイトの面接を希望したい旨を伝え、自分を含めた三人で伺いたい事を伝えると、相手方は、人数は多い方が良いので、こちらとしても助かると言ってくれて、明日の10時ぐらいにでも面接に来て欲しいと言われた。その旨をほのかとゆりに伝えると、

「明日とは急ね・・・」

「履歴書も買いに行かないとね！」

「そうだよねえ・・・」

早速明日面接に来て欲しいと言われた三人は、少し困惑していると、アカネが三人の

側にやって来て、

「なぎさ、ほのか、ゆりちゃん、履歴書の事なら、あたしがバツチリ書き方教えて上げるから、何なら今から履歴書買って、此処で書きちゃえば？」

アカネからアドバイスするよと言われ、三人は表情を輝かせると、

「本当ですか？」

「そういう事なら、お願いしますアカネさん！」

「みゆき達、ちよつと待っててね!!」

そう言い残し、ゆり、ほのか、そして、なぎさの三人は、慌てて履歴書を買いに出掛けて行つた・・・

「何や、アルバイトするのも大変何やなあ・・・ウチは自分の家の手伝いしかないからわからんけど」

「私も、アカネさんのお手伝いぐらいなので、アルバイトの事は分かりませんが、大変そうなのは今分かりました」

あかねも、ひかりも、ちゃんとした所でアルバイトするのも大変な事何だと実感していた。みゆきが楽しそうに、テーブルに頬杖付いて足をブラブラさせていると、それに気付いたあゆみは、

「みゆきちゃん、楽しそうだね？」



「うん！上手くすれば、会場でなぎささん、ほのかさん、ゆりさんに会えるんだもん!!」  
「でしたら、いつその事皆さんも誘ってみましようか？のぞみさんのお父様も童話作家と仰ってましたし……」

れいかの言葉に、それは良いかもと同意する一同、みゆきも頷きながら、

「そうだね……でも実は、のぞみさんからは既に誘われてるんだあ！のぞみさんのお父さんが、二日目の土曜日にサイン会をするらしくて、のぞみさんもその日に行くそうで、一緒に行かないかって」

「へえ、のぞみさん達、二日目に来るんやあ……」

「じゃあ、なぎささん達が戻って来たら、あたし達は二日目の土曜日に行くと伝えておこうか？」

のぞみ達が二日目に来るなら、自分達もそうしようかとなおが一同に何うと、れいかも同意し、

「そうですね！では、咲さん達、ラブさん達、つぼみさん達、響さん達にも声を掛けてみましょうー！」

「じゃあ、せつなさんには私が知らせておくねー！」

自分がプリキュアになる前は、毎日のように様子を見に来てくれていたせつなには、あゆみが連絡を入れると話した。みゆきはひかりを見ると、

「ひかりさんも一緒に行きませんか？」

「エッ!? 私は土日もお店がありますので・・・」

「良いじゃん! ひかり、行って来なよ!! 何ならひかるも連れてってあげなよ!!」

「ハア・・・でも、お店の方が・・・」

「一日ぐらい大丈夫だって!」

アカネがニンマリしながら、気にしないでひかるを連れて行ってきなさいとひかりにOKを出し、ひかりも二日目に行く事を決めるのだった。

戻って来たなぎさ達に、二日目に行く事を伝えたみゆき達は、世界絵本博覧会会場で会いましょうと伝え、TAKO CAFÉを後にした・・・

アカネにアドバイスを受けながら履歴書を書き終えたなぎさ、ほのか、ゆりの三人、改めて求人内容を確認していると、

「絵本のキャラクターに扮した着ぐるみって、どんなのだろうね?」

「思い付くのは桃太郎とか、シンデレラとかかしら?」

「そうね・・・少し嫌な予感がしないでも無いのだけれど・・・」

ゆりの言葉を聞き、三人の脳裏に色々な絵本のキャラに扮した自分達の姿を想像するや、思わず顔を見合わせ三人でクスリと笑い合うなぎさ、ほのか、ゆりだった。

「話は変わるんだけどさあ・・・ほのか！ゆり！ひかり！みんなは最近変な夢とか見たりしない？暗闇の中で長い黒髪の少女が、自分達に何か訴える夢とか・・・みゆき達には、不安にならないように聞かなかったんだけど・・・」

なぎさは意を決し、最近頻繁に見る夢の話、ほのか、ゆり、ひかりにしてみると、ゆりとひかりは首を捻りながら、そんな夢は見ないとなぎさに告げるも、咄嗟にほのかの顔色が変わり、

「なぎさも見てたの？私と全く同じ夢みたい・・・少し気になるわねえ」

ほのかは真剣な表情で考え込むも、現時点では二人が同じ夢を見ているだけで、何かの前触れなのか？今の二人にも分からない。

「バッドエンド王国の事なのか？あの時現われた魔界の者と関係があるのか？それとも・・・全く別の脅威なのか？」

「今は考えてもしょうがないか・・・」

顔を見合わせ色々考えたほのかとなぎさだったが、現状で判断出来る事でもなく、この事は、他の一同にはまだ言わないでおこうと決めるも、用心だけはしておこうと四人で決めるなぎさ達だった・・・

翌日面接に行った三人は、無事に採用が決まった。学校帰りに会場に通い、他のアル

バイト達と共に稽古をする。元々運動神経の良いなぎさ、ほのか、ゆりの姿に、関係者達は目を細めていた。

この時の三人は、世界絵本博覧会会場で、仲間達とプリキュアになる事になろうとは、夢にも思っ居なかつた・・・

第六十四話：なぎさのアルバイト

完

## 第六十五話：のぞみとみゆき！

1、姉妹のような二人

みゆきが楽しみにしていた世界絵本博覧会が開幕した・・・

梅雨入りも不安視されていたものの、まだ梅雨入りの発表もなく、この日は時折晴れ間もあり、家族連れも多く、初日はまずまず順当な滑り出しを向かえていた・・・

みゆきはこの日、夢原のぞみの家に泊まりがけで遊びに来て居た。

以前、のぞみから一緒に世界絵本博覧会に行かないか誘われた一同は同意し、のぞみはみゆきに、前日に泊まりに来ないか誘っていた。誘われたみゆきはOKしたものの、ある問題に気付き困惑する。

それはキャンデイの事で、キャンデイも当然みゆきと一緒に行きたがったのだが、のぞみの家族に見つかるリスクを考え、渋るキャンデイをみゆき達が説得し、キャンデイは、やよいの家に一日泊まる事になった。みゆきは、あかね達と会場前で落ち合う事を決め、のぞみ達と一緒に向かう事を知らせていた・・・

夢原家の今日の晩ご飯はハンバーグ、そして、のぞみとみゆきで作った卵焼き・・・悪戦苦闘しながら、楽しみに料理する二人の姿を見ていたのでみの母恵美と、父勉は、

のぞみの妹のようなみゆきを見て目を細めた。

四人で食卓を囲み、食事を始めると、ちょうどテレビではこの日開幕した世界絵本博覧会の話題もやっていた。みゆきはそれを見るや目を輝かせ、興奮気味に話し、画面に釘付けになっていた。

「話しを聞いていると、みゆきちゃんは、本当に絵本が好きなのが分かるなあ・・・」

のぞみの父勉は、みゆきの絵本や童話の知識を聞いて、心から感心していた。みゆきは少し照れながら、

「私、小さい頃は恥ずかしがりやで、お友達も出来なかつたんです。そんな私を見かねたお婆ちゃんが・・・アツ！私が小さい時、少しの間お婆ちゃんの家に預けられてた事があつて、お婆ちゃんが絵本を買ってくれたんです。何度も何度も読み返し、私、自分が絵本の世界の住人になつてゐるような姿を想像したりして、絵本を読むのが大好きになつたんです!!」

「そうなの？そんな風に見えないけど・・・そう言えば、つぼみちゃんも小さい時は引つ込み思案で友達が出来ず、花に話し掛けるのが楽しかつたとか言つてたつつけえ・・・」  
みゆきの話しを聞いていたのぞみは、前につぼみもそんな事を話していたのを思い出していた。のぞみをチラリと見た恵美は、

「のぞみは、物心付いた時にはりんちゃんと一緒にだつたし、人見知りしない子だつたわ

ねえ……」

「知らない子にも話し掛けて、直ぐ仲良くなっていたなあ……」

「エツ!? そうだっけ? 覚えて無いよ……」

のぞみは考え込むような表情を浮かべるも、そんな小さい時の記憶が残っている事もなく、苦笑しながら頭を掻いた。勉はジツとみゆきの顔を見ると、

「そう言えばみゆきちゃん、僕にリクエストがあるつてのぞみから聞いたけど?」

「アツ、そ、そう何です! 私、狼さんや、鬼さん、魔女さん達とも楽しく過ごせるような絵本を読んで見たいなあと思って……」

「お父さん、そんなお話し書いて見ない?」

みゆきとのぞみに頼まれた勉は、腕組みしながら少し思案すると、

「どうだろう……みゆきちゃんの頭の中には、そんな場面が浮かんでいるんじゃないのかい?」

「エツ!? 確かにそうですけど……」

勉に聞かれたみゆきは、メルヘンランドでウルルン達と楽しく遊んだ場面を思い浮かべていた。あんな楽しい絵本を読みたいと、心の底から思った事を思い出していた。勉は、そんなみゆきの表情を見逃さず、

「だったらそのお話は、みゆきちゃんが、自分自身で書いた方が良く僕は思う!」

「わ、私がですか!？」

勉に自分で書いた方が良いと言われたみゆきが困惑していると、勉は優しいな笑みを浮かべながら、

「僕だって、童話を書く切掛けはそうだからね……こういう絵本や童話を読んでみたい!でも、中々そういう話には巡り会えない。だったら、自分で書いてしまえってね!!」

勉の話を聞いていたみゆきは、臍気ながらある絵本の事を思い浮かべて居た……

笑顔の大切さをみゆきに教えてくれた絵本の事を……

笑顔の素晴らしさを知る切っ掛けになった絵本の事を……

「そう言えば……小さい時に一度だけ、絵本の続きを書いてみようと思った事があったよ。うな……でも、何の本だったのか?」

首を捻りながら考え込むみゆきに、恵美はクスリと笑みを向けながら、

「みゆきちちゃん、ご飯冷めちゃうわよ!」

「アツ!つい思い出すのに夢中になっちゃってえ……」

ペロつと舌を出したみゆきに、のぞみ、恵美、勉が笑みを浮かべ、楽しい時間は過ぎて行った……

風呂から出たのぞみとみゆきは、のぞみのベッドに共に寝転んだ。互いにニコニコしながら顔を見合わせた二人は、



「みゆきちちゃん、明日出掛ける前にナッツハウスに案内するね！ココとナッツは、パルミエ王国に一先ず戻つちやつたけど、くるみとシロップは居るから！」

「はい！噂に聞いていたナッツハウスに行くのも、凄く楽しみです!!」

のぞみ達の集合場所、ナッツハウス・・・

近年は、なぎさ達、咲達、ラブ達、つぼみ達、響達も訪れるプリキュア達の集合場所、まだ行つた事のないみゆきは、どんな所だろうか考えたと楽しくてしようがなかった。

「早く明日になくれえ!!」

のぞみとみゆきは、お喋りをしながら何時しか深い眠りに付いた・・・

眠りに付くのぞみとみゆき、のぞみの部屋の外窓の前に、一冊の本が佇むと、

「みゆき！私とした約束、覚えて無いのね・・・」

「所詮、人間なんて薄情カゲエ！ニコもこれで良く分かったカゲエ!!」

(やつと見付けたのに・・・みゆきの、バカ!!)

何処か鳥の翼を想像させる髪形をしたニコと呼ばれた表紙の少女、笑顔は消え去り、悲しげな表情が浮かんだ。その脇には、頭部に二本の角を生やした丸い蝙蝠のような物体が載っていた。

本は赤い光を発しながら、羽ばたきながら何処かへ飛び去っていった・・・

翌朝・・・

恵美は仕事に行く前に、のぞみとみゆきを起こそうと、のぞみの部屋を訪れた。のぞみと同じような姿で寝ているみゆきを見た恵美は、まるでのぞみの妹のように見えてきて、

(後一人ぐらい・・・子供を作れば良かったかしら?)

そう思うと自分でも可笑しくなつて、恵美は思わずクスリと笑い、のぞみとみゆきを起こすのだった。恵美に起こされ、寝ぼけ眼の表情で居間に現われたのぞみとみゆきに、既に着替え終わった勉は苦笑しながら、

「のぞみ、みゆきちゃん、僕はこれから打ち合わせがあるから先に行くよ、じゃあ、また後で!」

「じゃあ、私もそろそろお店に行くから・・・みゆきちゃん、また何時でも遊びにいらつしやいね!」

「ハイ!お世話になりました・・・いつてらつしやい!!」

「うん!お母さん、いつてらつしやい!お父さん、後でね!!」

「行つて来ます!!」

のぞみとみゆきに見送られ、勉と恵美は二人に手を振りながら出かけて行つた・・・恵美の用意した朝食、ハムエッグとパンを食べながら、世界絵本博覧会の話題で盛り

上がるのぞみとみゆき、その時家のインターホンが鳴り、玄関を開けたのぞみは、迎えるに來た夏木りんを見て目を細めた。

「りんちゃん！おはよう！！」

「のぞみ、おはよう！てつきり寝坊してるだろうと思つて迎えに來たら、おばさん、ちゃんと起こしてくれたんだね！」

のぞみは、りんが一人で來た事を、不思議そうに思い小首を傾げると、

「あれえ!? ゆうちゃんとあいちゃんは一緒じゃ無いの?」

当初りんは、弟のゆうと、妹のあいも連れて來ると言つていた。のぞみは、二人が居ない事を不思議に思いりに訪ねると、りんは困惑気味に、

「ゆうとあいねえ……二人共、絵本みたいな子供じみた場所何か、行きたくないってさ……どうせなら、デイズニールランドに連れてけえつて言いだして、頭きたから置いてきた!」

勝ち気なあの二人なら、そんな事を言い出すのも想像出来、のぞみは苦笑を浮かべた。りんの声が聞こえ、みゆきがチョココンと顔を出すと、りんは笑みを浮かべながら右手を軽く挙げると、

「みゆき、おはよう！昨夜はちゃんと寝れた?」

「りんさん、おはようございます!!グッスリ眠れましたから大丈夫です!!」

気合いが入った表情を見せるみゆきに、りんは苦笑を浮かべた。

りんも加えた三人、のぞみとみゆきは食事を終えると、慌てて着替え、その間にりんは、春日野うらら、秋元こまち、水無月かれん、美々野くるみに連絡を入れると、かれんとこまちは既にナッツハウスに来ており、うららも今向かっている最中だと連絡を受けた。

「のぞみ! みゆき! かれんさんとこまちさん、もうナッツハウスに着いてるってさ・・・  
うららももうすぐ着くそうだから、あたしもそろそろ出掛けるわよ!!」

「アアアン! りんちゃん、置いてかないでええ!!」

「もうすぐ終りまああす!!」

のぞみの部屋の中から、慌ただしくドタバタ着替えているのぞみとみゆきの姿を想像し、りんは思わず吹き出した。

## 2、思案

一方あゆみは、みゆき達から行き方を教わった不思議図書館へとやって来ていた。なおの弟や妹も一緒に来る事で、集合場所を不思議図書館にする訳にも行かず、集合場所を七色ヶ丘商店街の噴水前と決め、不思議図書館にはやよいとキャンデイが向かえに来てくれる筈であったが、やよいとキャンデイの姿はまだ無かった・・・

「どうしたんだろう・・・やよいちゃんとキャンデイは!? もうそろそろ向かえに来てくれ

ないと・・・」

困惑気味にソワソワしていたあゆみは、やよいの下へ行ってみようと決意し、みゆき達に習った通り、

(やよいちゃんとキャンデイの居る場所に・・・)

あゆみは、そう心の中で念じながら本の扉を潜って行った・・・

「いけええ！ロボッター!!」

「パンチクルウウ!!」

あゆみを迎えに行くべき筈の二人は、出掛ける前に見始めたロボッターのDVDに夢中になっていた。ゴトゴト音がし、音の方を振り返った二人は、本棚から現われたあゆみを見て驚愕する。

「あ、あゆみちゃん!?ど、どうしたの?」

思わず一時停止のボタンを押し、突然現われたあゆみに話し掛けたやよいに、あゆみは慌てて靴を脱ぐも、テレビに映ってるロボッターを見て溜息を付き、

「もう!どうしたのって・・・やよいちゃんとキャンデイが、時間になっても迎えに来てくれないから、こうして様子を見に来たんだよ・・・」

少し呆れ気味にやよいに抗議すると、やよいとキャンデイは顔を見合わせ、慌てて時

計を見て顔面蒼白になり、

「あ、あゆみちゃん、ゴメンね!まだ時間大丈夫だと思つてて・・・」

あゆみを拝むように手を合わせ、涙目になりながら謝るやよいとキャンデイ、あゆみはクスリと笑い、

「やよいちゃんらしいね・・・やよいちゃんも支度して、そろそろ行かないと遅刻しちゃうよ!」

「う、うん・・・キャンデイ隊長!」

「任せるクルウ!」

やよいは慌てて部屋に戻り着替え始め、キャンデイはDVDとテレビのスイッチを消した。クスリとしながら待つていたあゆみだが、何かに気付くと、

「や、やよいちゃん・・・突然押しかけて大丈夫だった!?やよいちゃんのお母さん、まだ家の中に居るんじゃない?」

「大丈夫!ママはもう仕事に出掛けてるから・・・お待たせ!!」

やよいも着替え終り、二人とキャンデイは、大慌てで本棚から不思議図書館へと向つた・・・

その集合場所では・・・

「やよいの奴、遅いなあ？」

「あゆみさんを迎えに行つてゐる筈ですが……」

「中々来ないね……アツ！こうた、勝手に離れちや駄目！」

七色ヶ丘商店街の噴水前で、やよいとあゆみを待つのは、あかね、れいか、なお、そしてなおの弟けいた、ゆうた、こうたと、妹はる、ひなである。小学校高学年のけいたは、当初は行く事を渋つていたものの、妹はるはともかく、他の妹弟達をなおだけに面倒見させる訳にもいかず、こうして一緒に来ていた。

「こうた！なお姉にあんまり迷惑掛けると……連れて行かないからな！」

「ウフフフフ……けいたちゃんも、すっかりお兄さんしてるのね……」

「うん！けいたやはるは、あたしが居ない時はちゃんとゆうた、ひな、こうたを面倒見してくれてるから助かつてるよ！」

なおが初めてお姉さんになった時、生まれたばかりのけいたを見ていたれいかは、けいたの成長振りに目を細めるのだった。そんなれいかに褒められ、れいかに憧れているけいたは、少し照れながら、弟や妹達の面倒を見続ける。あかねは、そんなけいたを見て笑みを浮かべるも、

「それにしても、やよいの奴遅いなあ……何してるんやあ？」

少し焦れつたそうにしたあかねだったが、目の前の本屋から飛び出てきたやよい、あ

ゆみ、キャンディを見て、思わず呆気にとられた。

「みんな、ゴメンねえ！」

「遅くなってゴメンなさい!!」

やよいとあゆみが一同に頭を下げると、三人は苦笑混じりに、

「やよい・・・なおの弟や妹が居るんやから、不思議図書館使うのは止めた方がエエで！」  
「気付かれなかつたから良かったものの、あまり感心出来ませんね・・・面倒でも、あゆみさんを迎えに行つたら、やよいさんのお家から来た方が良かったのでは？」

あかねとれいかに窘められ、やよいとあゆみはシユンと少し落ち込むも、なおはそんな二人を励ましながら、

「まあまあ、れいかもあかねも良いじゃない・・・じゃあ、みんな揃つたし、そろそろ出掛けよう」

なおは弟と妹を集め、出掛けるから絶対に自分達から離れないように忠告する。そんな一同を、暖かな視線で見つめた一人の女性が近付いて来ると、

「青木さん、緑川さん、日野さん、黄瀬さん、坂上さん、おはよう！今日は星空さんが一緒に無いのねえ？代わりに、随分可愛らしい子達と一緒になのね・・・みんな、おはよう！」

近づいて来たのは佐々木先生で、なおの弟と妹達に気付き近付くと、その場にしゃが



んで、ひな、ゆうた、こうたの頭を優しく撫でると、三人は嬉しそうに頬を染め、ゆうたとこうたは甘えるように佐々木先生に抱きついた。

「アツ！ゆうた、こうた、駄目でしよう！」

慌ててなおとはるが、ゆうたとこうたを引き離し、佐々木先生に謝るも、佐々木先生は笑顔のまま、二人を優しい視線で見つめた。あかねは、先程聞かれた質問に答えるように、

「みゆきは、のぞみさんの家に泊まって、会場で落ち合う予定何ですわ」

「のぞみさん!?・・・アア、例のお仲間の・・・みんなで何処か行くの?」

「はい、私達は今日みんなで、世界絵本博覧会に行くんです！なぎささん、ほのかさん、ゆりさんも、現地でアルバイトしていますし・・・」

れいかの説明を聞いた佐々木先生は、なぎさ、ほのか、ゆりが会場でアルバイトしていると聞き、

「エツ!?月影さん達、会場でアルバイトしているの?・・・そう」

少し驚いたものの、佐々木先生は頭の中で思案し始めた。以前、バッドエンド王国に乗り込んだみゆき達の後を追って、ゆり達一同がバッドエンド王国に乗り込み、約束通り無事みゆき達を連れ戻してくれた事に、佐々木先生は心から感謝していた。

(みんな会場に来るのなら、私からもこの間のお礼をした方が良さそうね・・・)

本当は、ベイスターズのセパ交流戦、横浜対西武の試合を西武ドームに見に行くつもりだったのだが、心の中でベイスターズに詫びた佐々木先生は、

「みんなも来るなら・・・私も一緒に行くわ!この間のお礼も言いたいし・・・」

「ワアアイ!!」

佐々木先生も一緒に行くと言え、ゆうたとゆうたが喜び、再び佐々木先生に抱きついた。れいかは目を細めその姿を見つめながら、

「ゆうたちゃんとうちちゃん・・・佐々木先生に懐いてますねえ?」

「うん!前に先生が家に家庭訪問に来た時、弟や妹達と遊んでくれた事があったから、ゆうたもこうたも先生に懐いてるんだと思う」

「成る程なあ・・・」

なおの言葉にあかねも納得し、佐々木先生を加えた一同が、世界絵本博覧会が行われている会場へと出掛けて行った。

佐々木先生と一緒に来てくれた事が、後にひかり、咲、つぼみ、奏、なおの手助けになる事を、この時の一同はまだ知らない・・・

ナッツハウス・・・

のぞみ、りん、みゆきも合流し、一同は初めてナッツハウスを訪れたみゆきを歓迎し

ていた……

「みゆき、どうかしら!? ナッツハウスに初めて来た感想は?」

興味深げにナッツハウスの中を探索したみゆきに、かれんは笑み混じりにナッツハウスの感想を聞くと、改めて室内を見回したみゆきは嬉しそうに目を輝かせると、

「はい! 目の前に池もあつて静かだし、部屋の中もオシヤレで、良い所だなあと思いましたあ!!」

「それは良かったです! 今度はあかねちゃん達も連れて来て下さいね!」

みゆきの感想を聞き、のぞみ達一同がニコニコし、うらはは、次はあかね達も連れて来るように言うのと、みゆきは満面の笑顔を浮かべながら頷き、「はい!」と答えた。

キッチンに居たくるみが戻つて来ると、テーブルの上にバスケットを置き、

「折角みんなで出掛けるから、おにぎり作ったわ! 会場でみんなと一緒に食べましょう

!! 咲はパンを、ラブ達はドーナツ、奏はカップケーキを持つてくるとか言つてたわよ」

「本当!? 向こうで一杯美味しい物食べれるね!!」

のぞみとうららの目がキラキラ輝き、目の前のおにぎりを見つめっていると、かれんがテーブルの上に小箱を置き、

「私も、セレブ堂のシュークリームを持って来たわ!」

「私も、家の大福と羊羹を持ってきたの!」

「羊羹は毎日持ってそうですけどねえ?」

りに突っ込まれたこまちだったが、羊羹を常に持ち歩いているのは、週五日程度だと告げ、一同を笑わせた。和やかなガールズトークに付いていけない人間姿のシロップは、

「オイ!そろそろ出掛ける時間じゃないのか?言っておくけど、俺は会場まで送ったりしないから!!」

脳裏に嫌な予感が漂い、前もって釘を刺すシロップ、凶星を指されたのぞみの表情が強張り、

「エエエ!?せっかくみゆきちゃんも来てるのに……みゆきちゃんもシロップに乗ってみたいよねえ?」

「乗れるんでしたら……是非!」

「ほら、みゆきちゃんもお願いしてるんだしい……シロップウウ!」

のぞみとみゆき、うちらも加わり、シロップにお強請り視線を浴びせ、目をウルウルさせて訴えると、シロップは頭を掻きながら、

「たく、しょうがねえな……」

ブツブツ文句を言いながらも、ナツツハウスの外に出たシロップは、巨大な妖精姿に変化すると、

「早く乗るロプ!!」

のぞみ達一同を急かすと、一同が荷物を抱え、笑みを浮かべながらシロツプの背に乗り込んだ。一同を乗せたシロツプが大空に舞うと、みゆきは目を輝かせながら、空から眺める景色を楽しむのだった・・・

第六十五話：のぞみとみゆき！

完

## 第六十六話：世界絵本博覧会！

## 1、集結

世界絵本博覧会会場・・・

梅雨間近の貴重な晴れの下、四人の少女達が興味深げに会場内に入場して行つた・・・その四人は、桃園ラブ、蒼乃美希、山吹祈里、東せつな、そして、祈里が抱いているシフォン、ラブの隣をフェレットの振りをして歩くタルト、自分達が住む四つ葉町から、さほど遠く無い所に、世界絵本博覧会の会場はあつた。

四人は、会場の案内板の前で立ち止まり、次々入場して来ては、はしやぐ子供達を見て、四人は自然に笑みが浮かんできた。自分達も童心に返つたような気分になるも、ラピンスから来ているせつなに取つては、このような日常も新鮮に映つた事だろう・・・「此処が世界絵本博覧会の会場・・・中々賑わつてるのね？」

周りを見渡したせつなは、色々な絵本の物語に扮した格好をしているキャストと、それを見てはしやぐ子供達を見て目を細めた。この会場の何処かで、なぎさ、ほのか、ゆりも参加していると思うと、三人がどんな格好をしているのか楽しみだった。美希は、確かに賑わっているとは思つたものの、

「そうね・・・でも、時期が悪かったんじゃないのかしら!? ほら、世界最大のクローバータワーが、最近になって開業したばかりでしょう?」

「でも、世界絵本博覧会も、クローバータワーも、同じ会社が運営してるんでしょう?」「うん! 確か四葉財閥とか言ってたよ・・・健人くんの御子柴グループや、五星財閥などと同じ、日本五大財閥の一つとかって話よね?」

美希、ラブ、祈里の会話を聞いていたせつなは小首を傾げた。せつなは、かれんの家も財閥に含まれるのではと思っていたようで、

「かれんさんの所は違うの?」

「さすがに財閥じゃないでしょう・・・お金持ちなのは完璧に間違いないけど」

「でも、何か親近感覚えるよね! 四葉財閥かあ・・・」

美希、せつな、祈里、ラブが語った世界最大の電波塔、クローバータワーを私的に作り上げた四葉財閥とは、日本の五大財閥の中でも、特に色々な事業に乗り出す事でも知られ、最近オープンしたクローバータワー、そして、この世界絵本博覧会をも主催し、更に驚くのは、この世界絵本博覧会の企画をしたのは、まだ中学生の跡取り娘だというのが広まっていた。

ラブ達は、自分達が住む四つ葉町と同じ、四葉の名が付く四葉財閥、クローバーの名を付けているクローバータワーに、親近感を覚えて居た。

「此処からも、クローバータワーは見えるのね……」

巨大に聳え立つクローバータワーを見上げたせつながら、何処かラビリンスを管理したメビウスの居たメビウスタワーを思いだし、感触深げにポツリと呟いた。美希とラブも再びクローバータワーを見上げ、

「ええ、何せ世界最大の999メートルの塔だもの！」

「本当……良く作つたよねえ？」

「ピーチはん！ベリーはん！パインはん！パッションはん！……他のみんなを捜さなくてもエエんかあ？」

タルトに助言され、思わず目的を思い出し、変顔を浮かべた四人、ラブは頭を掻きながら、

「つて、そうだあ！それよりみんなを捜さなきゃ!!みんな、もう来てるかなあ？」

「取り敢えず、案内板の前に居るってみんなにメールしておくね」

祈里は他の一同に、入場口近くの案内板の前に居るとメールを送信した。

「まあ、なぎささん、ほのかさん、ゆりさんは間違いなく居るでしょうけど……三人がどんな格好をしているのか、興味があるわねえ」

「確か、絵本のキャラに扮してるのよねえ？」

美希とラブは、三人がどんな絵本のキャラクターに扮しているのだろうか気になり、



思わず顔が綻んだ。

そんな四人の耳に聞き慣れた声が聞こえてきた・・・

「皆さん、おはようございます！」

「ラブ！美希！祈里！せつな！おはよう！！」

「美希姉え！みんな、おはようっしゅ！！」

やって来たのは、ひかりと弟のひかる、日向咲、美翔舞、霧生満、霧生薫、コミューン姿のフラツピ、チョツピ、ムーブ、フープ、咲の妹みのり、会場前で咲達と合流した花咲つぼみ、来海えりか、明堂院いつき、三人の頭の上で縫いぐるみの振りをするシプレ、コフレ、ポプリ、そして、つぼみが押すベビーカーに乗った花咲ふたば、ふたばはひかるとみのりに可愛がられ、大はしやぎでベビーカーの中でキャツキャと騒いで一同を和ませる。ラブはひかる、みのり、ふたばを見て目を細めながら、

「みんな、おはよう！ひかるちゃんも、みのりちゃんも、おはよう！ふたばちゃん、大きくなったね・・・」

「はい！ふたばももうすぐ一歳ですし、目を離すと直ぐ這い這いして何処かに行こうとして、お母さんも大変そうでしたので、今日は私が連れて来ました！！」

「もうすぐ一歳って言う事は、離乳食の真つ最中よねえ？大変じゃないの!？」

美希に聞かれたつぼみは、少しドヤ顔になると、

「最近は、レトルトや瓶詰の離乳食も出てるんですよ！」

そう言うと、持ってきた瓶詰の離乳食を一同に見せるつぼみ、えりかとみのりが同じような表情で驚き、それを見たせつなは苦笑しながら、

「さすが現役のお姉さん、詳しいわね！」

「エッヘン！伊達にお姉さんはしていません!!」

再びドヤ顔で胸を張るつぼみを見て、一同が笑みを浮かべた。えりかは、そんなつぼみをからかうように、右手をつぼみの前に差し出すと、

「お姉ちゃん、10000円頂戴！」

「もう、えりかあ！私はえりかのお姉さんじゃありませんよお!!」

「エへへへ、冗談！じゃあ代わりに、美希姉え10000円・・・」

「ハア？えりかに上げるぐらいなら・・・喜んで賽銭箱に10000円入れるわ！」

「何でよおおお!!」

えりかの言葉が終わる前に、呆気なく美希が拒絶し、変顔になったえりかが美希に抗議する。その様子を見てみのりが大笑いすると、みのりはえりかの真似をするように、咲の顔をジッと見つめ、みのりの魂胆に気付いた咲が、みのりを一睨みする。

「ブー・・・みのり、まだ、何も言っていないのいいい！」

不満気に頬を膨らまして、咲に文句を言うみのりだったが、咲は溜息を付きながらみ

のり、そしてえりかを見つめ、

「みのりの考えはお見通し！もう、えりか！みのりが真似するから止めてよねえ!!」

「みのりちゃん！えりかの真似何かしても、みのりちゃんに良く無いから、決して真似しないようにね」

「薫お姉ちゃんがそう言うなら・・・分かった!」

しやがみ込んだ薫は、みのりの頭を撫でながら、えりかの真似をしないように忠告すると、その後ろで満もウンウン頷き、みのりが二人に分かったと頷き、思わず舞が苦笑を浮かべる。変顔を浮かべたえりかは、

「ちよつとお！何気にあたしの事否定してない？」

「ハア・・・えりか！否定されるような真似、あんたがするからでしょうが」

美希も、それはえりかが悪いと言い、えりかはペピーカーのふたばに抱きつき、

「エエエン！ふたばちゃん・・・みんなが虐めるっしゅ」

えりかが嘘泣きをすると、思わず真に受けたひかりはオロオロするも、冷めた表情のラブとせつなは、ひかりに対して、えりかの事を心配するだけ無駄よと伝え、ふたばがキヤツキヤツとはしゃいで、えりかの頭を何度も叩いた。いつきは苦笑を浮かべながら、

「えりか、どうやらふたばちゃんにも、嘘泣きだつてバレてるようだよ!」

「もう、いつきまでえ．．．」

拗ねたように口を尖らせるえりかを見て、一同が笑い合つた．．．

会場前で合流したのぞみ達とあかね達．．．

のぞみ達は佐々木先生が居る事に驚いたものの、互いにこの間の出来事の謝辞を述べ合つた。なおの弟と妹を紹介されたのぞみ達、りんは、やっぱり弟と妹も連れて来て上げれば良かったかも知れない、その後悔するのだった。

のぞみは周りを見渡しながら、

「いやあ、この辺つて中々隠れる場所無くて焦つたよね」

苦笑したのぞみは、人に見つからないように、降りられる場所を捜すのに苦労したと告げると、呆れ顔のあかねは、

「あないな大きな鳥見ただけでも、普通騒ぎになるやろねえ．．．」

「世界絵本博覧会も開催してるし、上手く誤魔化せましたね!」

あの鳥もイベント関係だろうと思われた節もあり、うららは上手く誤魔化せたとホツと安堵する。

「だから嫌だつて言つたロプ」

うららのバックの中に居たシロップは、独り言を呟き溜息を付いた。その時、のぞみとあゆみの携帯が鳴り、携帯に出た二人は、のぞみにはラブが、あゆみにはせつなが連絡してきて、入り口近くの案内板の前で、ひかり達、咲達、つぼみ達と居る事を知らせると、自分達も今会場前に着いた事を知らせた。

「ラブちゃん達、もう会場の中に居るって!」

「そう・・・じゃあ、私達も入りましょう!!」

のぞみの報告を聞き、佐々木先生が一同を促し会場内に入ろうと伝えると、なおは弟達と妹達を集め、

「みんな、勝手に動いちゃ駄目だよ!何処か行きたい時は、必ず私か、けいた、はる、他のお姉さん達に言ってから行く事・・・分かった?」

「なおは、あたしよりお姉さんらしいわ」

なおに釘を刺され、ひな、ゆうた、こうたが頷き、なおのお姉さん振りに、りんは自分より良く面倒見ていると感心していた。

会場内に入り、ラブ達と合流したのぞみ達とみゆき達は、互いに再会を喜び合った。

「つぼみちゃん!えりかちゃん!いつきちゃん!この赤ちゃんが、噂のつぼみちゃんの妹さんのふたばちゃん?」

「うららさん！はい、この子が私の妹のふたば何ですよ……ふたば、お姉ちゃんのお友達ですよ!!」

ふたばを抱き上げ、のぞみ達とみゆき達に見せると、ふたばはキャツキャとハシヤギ、一同は皆可愛いと喜び目を細めた。

「うらら、つぼみ達と仲良くやってるようで良かったわ……」

「ええ、同じ年だし……すっかり打ち解けてるわね」

「あの四人でチームと言われても驚かないわね」

うららがつぼみ達三人と親しげに会話する姿に、りん、かれん、こまちは顔を見合わせ微笑んだ。

ひかり、咲、つぼみ、なおは、互いの弟や妹達を紹介しあうと、こういう時、やはり女の子の方が積極的なのか、みのり、はる、ひなが中心になって、ひかる、けいた、ゆうた、こうたと親睦を深め、こうたは、自分より小さいふたばの頭を、良い子良い子と撫で可愛がった。和やかな光景に一同が目を細めていると、

「お姉ちゃん、向こうにお猿さんが居るよ!」

ゆうたが指さす先に、確かに猿のような格好をし、棒を持った人物、お坊さんが着るような法衣を身に纏った人物、何処か河童を連想させる衣装を身に纏った人物が、子供達に愛想良く手を振りながら、こちら側に近づいて来た。ジツとその姿を見ていたせつ

なは、

「あれ、なぎささん、ほのかさん、ゆりさんだわ!」

「エッ!? つて事は・・・なぎささんが孫悟空で、ほのかさんが三蔵法師、ゆりさんが沙悟浄って事?」

せつなの言葉を聞いた咲が、改めてジツと見つめると、他の一同も三人に視線を向けた。

そんな一同の会話が聞こえたかのように、孫悟空の格好をしたなぎさは、この姿を見られるのが恥ずかしいのか、踵を返して逃げようとするのを、三蔵法師に扮したほのかに尻尾を掴まれ、その場に倒れ込み、それを見て沙悟浄姿のゆりが頭を抱える。それを見たかれんはクスリと笑いながら、

「間違いなくなぎささん、ほのかさん、ゆりさんだわ・・・」

「なぎささん! ほのかさん! ゆりさん! スツゴクお似合いですよお!!」

みゆきが三人に大声で呼び掛け手を振ると、三人は顔を見合わせ合い、複雑そうに苦笑を浮かべた。

「皆さん、ようこそ! 世界絵本博覧会へ!!」

「皆さんを歓迎致します!!」

「ほのか、ゆり、この娘達にはお決まりのセリフ・・・言わなくても良いんじゃない?」

プリキュアの仲間達に、一般客と同じような口上しなくても良いんじゃない?と言うなぎさに、ほのかとゆりは、

「なぎさ、親しき仲にも礼儀ありと言うでしょう?」

「彼女達も大切なお客様よ!」

「ハアアイ・・・」

それもそうかと納得したなぎさ、三人は、ひかる、みのり、なおの弟や妹、ふたばをあやした。そんななぎさ、ほのか、ゆりに、佐々木先生は小さな声で話し掛け、

「みんなには言ったけど・・・三人共、この前は星空さん達を無事に連れ戻してくれてありがとう!」

「いえ、みゆき達には私達の方こそ助けられたくらいです」

「あの子達、随分成長したよねえ?」

「ええ」

ゆり、なぎさ、ほのかはそう言うと、楽しげにしているみゆき達六人を見つめた。あかねは、三人の周辺を見渡すと首を傾げ、

「猪八戒は居らんの?」

「私達三人友人同士って事で、スタッフの人が気を効かせてくれてさあ・・・私達三人でチームを組んだから、猪八戒役は居ないんだあ」



「そう何や・・・やよい、出番やでえ!!」

「あかねちゃん・・・それはどういう意味!？」

「何でもあらへん・・・シシシシシ」

やよいをからかい、笑うあかねに、やよいは何の事か分からず小首を傾げた。なぎさは一同を見渡し、響達の姿が見えない事に気付くと、

「アレエ!? 響、奏、エレン、アコちゃんの姿が見えないけど・・・みんなと一緒じゃ無いんだ?」

「さっき電話してみたんですけど・・・繋がらなかったんですけどすよねえ」

「エレンからのメールで、こっちに向っているのは間違いないんですけど・・・」

「全く、響達は何やってるんだか・・・」

ラブとせつなが、困惑気味に一同に話し、くるみは少しイライラした表情を浮かべていると、入場口から、何処かで聞いた事のある二人の言い争う声が聞こえてきた・・・  
「響! みんなもう着いてるじゃない! だからあれ程前もって準備しておきなさいよって言ったのに・・・」

「そう思ってるなら、奏が早めに起こして手伝ってくれば良いジャン! 私も色々忙しかつたの!!」

「どうだか・・・」

恒例の口喧嘩を始める響と奏、その前方を、ピーちゃんを抱いたアコ、奏の弟奏太が呆れ顔で歩き、ハミイを抱いたエレンが、苦笑しながら一同に気付き手を振った。

「やれやれ、響と奏も相変わらずだねえ・・・」

「でもあれを見ないと・・・あの二人らしくなかつたりしてえ」

そんな二人を見て、なぎさとラブが口元に笑みを浮かべた。アコと奏太、エレンとハミイも一同と合流し、口喧嘩しながらこちらに向つてくる響と奏を、一同が苦笑混じりに見ていると、

「ストオオオオツプ!!」

突然二人の間に二本の腕が割り込み、響と奏を引き離し、何事かと呆気にと取られた響と奏の間に、赤い髪の毛の頭頂部にピンクのリボン、ピンクの服を着た少女が割つて入ると、響と奏の顔を交互に見比べ、

「何が原因かは分からないけど、喧嘩は駄目だよ！それに、ここは世界絵本博覧会・・・子供達も大勢見てるんだよ！仲良くしなきゃ!!」

「ゴ、ゴメンなさい・・・」

少女の迫力の前に、響と奏は面目なさげに少女に謝ると、少女は微笑みながら二人の手を取り握手をさせ

「はい、仲直りの握手！何があつたか私に話してみて!!」

「エエツ!」

見た感じ、明らかに自分達より年下の少女に注意され、同じような表情で、再び顔を見合わせて困惑する響と奏、それを見たなぎさ、咲、りん、くるみ、ラブ、美希、えりか、あかねは、笑いを堪えるのに必死だった・・・

「ちよ、ちよつとマナー!」

「ウフフ! マナーちゃんらしいですわ」

少女の背後から大慌ての藍色の長い髪の少女と、茶髪で左右に二段重ねのお団子頭をした少女が、後ろに背の高いタキシードを着た身なりの良い、口ひげを蓄えた白髪の紳士を連れ近付いて来ると、

「六花(りつか)! ありす! あかね、この人達ね・・・」

「もう、マナーはいつも首を突っ込みすぎ! 幸せの王子をやるのも良いけど、大概にしなさい!」

マナーと呼ばれた少女は、こんな行動を良くやるのか、六花と呼ばれた少女が少し呆れ気味にマナーを注意した。六花は、響と奏に軽く会釈し、まだ響と奏に何か言いたげなマナーの背を押し、ありすとと呼ばれた少女の下へと、マナーを強引に連れ戻した。響と奏は、ポカンとした表情でそんな二人を見つめた。

「六花さん!」

「ありす!?それに、後ろのあの紳士何処かで……」

マナに名前を呼ばれた、六花とありすの名を聞いたれいかとかれんは、思わずハツとした表情を浮かべると、

「れいか、どうかしたの?」

「かれんさん、れいかちゃん、あの子達知ってるの?」

なおとのぞみが、首を捻りながられいかとかれんに問い掛けると、二人も確信は持て無かったが、

「いえ、直接には……中学生の全国模試で名を見たので、珍しい名前なので覚えて居たのですが、もしかしたらあの方が……」

「私は、あのありすって子の後ろの人と面識があるの……爺やと同じ執事仲間で、確か……」

かれんの視線が、ありすの背後に居る紳士に向けられると、紳士もかれんを見るやその場で一礼し、かれんに近寄って来ると、

「これは水無月様!お久しぶりでございます!!本日はお一人で?」

「いえ、友人達と世界絵本博覧会を見学……」

「さようでございますか……この催しは、私共四葉財閥で主催しており、ありすお嬢様がプロデューサーもされております。よろしければ、後程ご感想などお聞かせ頂ければ

幸いですか?」

「ええ、では、後程そちらに伺いますわ!」

「私共は、メイン会場に居りますので、係の者に伝えていただければ、お迎えに参ります! それでは、お待ちしております!!」

紳士は深々とかれんに一礼し、主であるありすの下に戻り、何かを告げると、ありすもその場でかれんに一礼し、かれんも礼を返した。なぎさは驚いた表情でかれんに話し掛け、

「あの子がここの主催者!? つまり・・・私達の雇い人?」

「そういう事になりますね!」

かれんがなぎさの言葉に頷くと、なぎさ、ほのか、ゆりは顔を見合わせ合い、

「まさか、中学生だった何て・・・驚いたわ!」

「確か、あの娘が四葉財閥の跡取り娘で、ついこの間中学生になったばかりの筈・・・中々の遣り手のようね」

「跡取り娘!? 確か四葉財閥には、私達ぐらいの跡取り息子が居た気がしたけど?」

ほのかの言葉に、確か自分達ぐらいの男性が居た筈だがとゆりは首を捻り、四葉財閥と知り合いかれんに真偽を問うと、

「ええ、確かにご息子が居られる筈です! 私も詳しい事は知らないのですが、現当主とそ

りが合わず、家を出たとか何とか・・・それで、彼女が跡取り候補に浮上して、英才教育を受けているそうですよ!!まだ、中学一年生だとか・・・」

「エッ!? っていう事は、私達より年下何ですか?」

ほのか、ゆり、かれんの会話を聞き、あゆみは自分より年下なのにすっかりしているような三人組を見て驚いた。

「ウーン、やつぱりあの二人が気になるなあ・・・」

マナはもう一度背後を振り返り、響と奏を見つめると、響と奏は、思わずギクツとした表情を浮かべ、ジイと二人を観察していたマナは、再び響と奏の下に舞い戻り、

「アア!? また喧嘩しようとしてたでしよう?」

「してない! してない!」

響と奏は、同じような仕草でブルブル首を振り、再びなぎさ達が笑いを堪えていると、茶髪のショートヘアで、山吹色のオーバーオールを着ている少女が、ニコニコしながら三人に近付き、徐に膝に付いているハート形のポケットから何かを取り出すと、

「こんな素敵な場所で、言い合い何か止めましょう・・・はい! おおもりご飯特製、ハニーキャンディ! 召し上がれ!!」

「「エッ!?!」」

響、奏、マナの三人は、突然飴を差し出した少女に呆然としながらも、反射的に飴を

受け取った。三人は、少女に言われるまま、飴の包み紙を外し、キャンディを口の中に放り込むと、

「「お、美味しいいいいい!!」」

思わず同じような表情で喜びを表現する三人、

「ああなつたマナを止める何て・・・あの子、やるわね?」

「そうですね・・・」

その様子を見て居た六花とありすは、マナを瞬時に手玉に取った少女に驚愕した。そんな二人の脇を、赤い髪をポニーテイルで纏め、学校で着ているような緑色のジャージ姿の少女が通り過ぎると、

「アツ、居た居た! ゆうゆう! 誠司達見付けたよ!!」

「めぐみちゃん! 分かった、じゃあ、私行くね!!」

三人は飴を舐めながら、去って行く二人の後ろ姿を呆然と見つめた。マナは思い出したのか、

「エエと、誰かは知らないけど、飴をありがとう! すっごく美味しかったよおお!!」

「「ご、御馳走様ああ!」」

大声を出して、ゆうゆうと呼ばれた少女に礼を言ったマナに釣られたように、響と奏も慌てて少女にお礼を言うと、少女は、ニコニコしながら手を振りながら去って行った。

そんなマナに、六花とありすが近付いて来ると、

「マナ、いい加減に私達も行くわよ!」

「マナちゃん、私、お客様をお待たせして居ますので、先に行つてしまいますわよ?」

「エエエ!? 六花、あります、置いていかないでよお! じゃあ、あたしも行くね・・・喧嘩はダメだからね?」

「は、はい!!」

反射的に響と奏がはいと返事をし、マナは満足そうにウンウン頷くと、側に居た一同に軽く会釈し、マナ達もその場を去つていった・・・

「奏・・・あの子達、何だったの?」

「私に聞かないでよ!」

去つて行つた少女達を見つめ、呆然としていた響と奏に、

「響! 奏! あんた達、何注意されてんのよお?」

響と奏に近付いたえりかは、二人をからかうように、肘で二人を突つつきニヤニヤしている、困惑気味の響と奏は、

「いやあ、喧嘩してたつもりじゃなかったんだけど・・・」

「あの子から見たら、私達、喧嘩してるように見えたのね・・・」

再び顔を見合わせ合うと、二人はトホホ顔を浮かべた。



全員揃った少女達・・・

その姿を、木の上から見つめる視線があるのに、気付いた者は居無かった・・・

## 2、動き始めた影

「めぐみ！ゆうこ！二人共、何所行つてたのよ？」

「全く・・・お前達のはぐれてたら、世話ねえだろう？」

「まあまあ、いおなも、誠司君も、無事に二人と再会出来たんだから良いじゃない！」

「いおなちゃん！誠司！まりあさんも、真央ちゃんもゴメン!!」

「ゴメンね！」

先程響達にキャンデイを上げたゆうこ、そしてめぐみが、一緒にやつて来た仲間達と合流したのは、イベント会場近辺だった。いおなと呼ばれた少女と、誠司と呼ばれた少年には注意されたが、まりあとと呼ばれた美少女は、優しい微笑を浮かべながらそんな二人を諭し、右手で白い麦わら帽子を被った誠司の妹、真央と呼ばれた少女の手を握っていた。めぐみとゆうこは、髪を触りながら苦笑気味に一同に謝った。

みんなが揃った事で、真央はまりあから手を放すと、大はしやぎでイベント会場を走り、一同が目を細めた。

「みんな、今日はサンキューーな！母ちゃんが仕事で留守がちだし、真央がどうしても世界

絵本博覧会を見たいって言ってたからさ……母ちゃんは、中学生になったばかりの俺だけじゃ、真央を連れて会場に行くのはダメだつて言うから困つてたけど……めぐみや大森、氷川にまりあさん迄来て貰えて助かりました！」

そう言うのと、誠司はめぐみ達一同を見渡し、頭を下げた。一同は笑みを浮かべながら、「家のお母さんは、身体が弱いからあまり外に出れないし……」

「私の家は、お父さんもお母さんも、お姉ちゃんも、お店があるから来れないし、お姉ちゃんが知り合いに頼んでみるつて言つてたのが、まりあさんだとは思わなかつたなあ……」

「ゆうこちゃんのお姉さん、あいさんに頼まれたら断れないわ！」

「お姉ちゃん、あいさんの後輩で、お世話になつてたもんね？」

そんな会話をしながら、はしやく真央を見つめていた一同だった。そんな中、真央は何か小さな生き物が動く姿を見付け、そつと後を付けてみると、物陰に隠れながら辺りを見渡す、水色髪をした白いワンピース姿の一人の少女を見付けて小首を傾げた。何であのお姉ちゃんは、こつちに来ないで、物陰に隠れながら見て居るのだろうかと疑問を持った。

真央が、そつと様子を伺っていると、

「どう、リボン!?!」

「どうと言われましても、わたくしが堂々と会場中を動き回る訳にもいかないですし……」

それよりヒメ！そろそろ待ち合わせ場所に戻りませんか、遅れてしまいますわよ？」

「ウウウ・・・やっぱりお母様に一緒に来て貰えば良かったよお」

「今更泣き言言つてもダメですわ！」

心細くなったのか、母親の事を思つて涙目になるヒメと呼ばれた少女に、頭部に大きなピンク色のリボンを付け、てんとう虫のような甲羅を背負つたりボンと呼ばれた妖精のような生き物が、呆れながらヒメを注意した。

「ワア!?お姉ちゃんが縫いぐるみに怒られてる?」

「ギクツ!!」

恐る恐る声のした方を二人で振り向くと、ジイと真央が見つめているのに気付き、変顔浮かべながら、顔中から冷や汗が垂れるヒメは、リボンを素早く抱き寄せると、無言のまま脱兎の如く逃げ出した。その逃げ足の早さに、真央は呆氣に取られていた・・・

合流したなぎさ達が、仲良く談笑する姿を見た木の上に居る黒い蝙蝠のような物体は、まるで影のように無数に蠢き、世界絵本博覧会会場へと散っていた・・・

(さあ、ニコの笑顔を奪つたみゆきに・・・思い知らせてやるカゲエ)

散っていた影は、展示してある様々な本に憑依すると、憑依された本から次々と絵本や童話の悪役達が飛び出てくる。

鬼、魔女、動物、妖怪・・・

皆その瞳は赤く輝き、両肩から黒い翼のような物を生やし、まるで何かに操られて居るように口々に言葉を発していた。

「ニコを悲しませたみゆきを・・・倒せ!!」

絵本から飛び出した悪役達は、世界絵本博覧会会場を暴れ回ろうとしていた・・・

「これは一体何事ですの!?!セバスチャン!!」

「ハッ!直ぐに確認に向います!!」

「それと、ブルースカイ王国のヒメルダ様の身边の方も・・・」

「ハッ!直ぐにヒメルダ様を保護次第、安全な場所へ誘導致します!!」

「頼みましたわ!!」

関係者以外立ち入り禁止の応接室に居た相田マナ、菱川六花、四葉ありす、ありすの執事セバスチャンにも、会場内に仕掛けられた防犯カメラで、この騒ぎは伝わっていた。ありすは、素早くセバスチャンに指示を出し、事態の確認に向わせた。

「あたし達も行ってみよう!」

「エエ!?!待ってよ、マナ!!」

「マナちゃん、まだ何が起こっているか・・・」

六花とありすが止める間も無く、マナは外へと飛び出し、思わず顔を見合わせた六花とありすも、直ぐにマナの後を追った。

一方、なぎさ達一同にも、会場の異変は感じていた。スタッフの一員でもあるなぎさ、ほのか、ゆりは、パニックの人々を誘導し避難させる。

「これもアトラクションなのかなあ？」

「どう考えても違うでしょう！」

これもアトラクションなのかと小首を傾げたみゆきを、りんが即座に否定する。

「みんな！．．．あれって、絵本の世界の悪役達みたいな格好してませんか？」

「確かに．．．私達は何度か敵の策略で、絵本や童話の世界に連れ込まれた事があるから分かるけど、何処かで見たような気はするわね」

指を指して一同に異変を知らせたいつきに、嘗て、エターナルのシビレッタによって、童話の世界へ何度か連れ込まれた事があるくるみ達一同が、そんな気がすると一同に注意を促す。満と薫は、そんな現状を分析するかのようになり、ジツと悪役達を見つめた。

会場のあちらこちらから、人々の逃げ惑う声が聞こえてきた為、一同は顔を見合わせると頷き合い、代表するようになおが佐々木先生を見つめ、

「佐々木先生、申し訳無いですけど．．．」

「ええ、分かったわ! 弟さんや妹さんは、私が責任を持つて預かるから!!」

佐々木先生も、一同は何が起こったか分散して調べに行く事を理解し、承諾する。弟、妹を連れて来ているメンバーは、それぞれ自分の弟や妹に声を掛け始め、

「聞いた、はる、佐々木先生の言う事聞いて、ひな、ゆうた、こうたを見て上げて!」

「みのり、あんたもこの中じやお姉さん何だから、年下の子達の面倒見て上げるんだよ  
!」

「ひかる、あなたも佐々木先生の言う事を聞いてね」

「ふたば、お姉ちゃんちよつとこの騒ぎを調べてきますから・・・他のお兄さんやお姉さんの言う事を聞いて、良い子で居るんですよ!」

なお、咲、ひかり、つぼみが、弟と妹に言葉を掛け、不安がる一同を和ませる。ふたばだけは何か分からず、キヤツキヤとはしやぎ、こうたに、良い子、良い子と頭を撫でられていた。奏も弟奏太に声を掛けると、

「奏太、ちゃんと先生の言う事聞きなさいよ!」

「分かったよ・・・でも、何でアコまで一緒に行くんだよ? だったら俺も・・・」

「いいから、言われた通りにしなさい!!」

「チエツ・・・ヒス姉ちゃん!」

「何ですつてええ!?!」

「まあまあ・・・」

不服そうな顔をする奏太に悪口を言われ、顔を真っ赤にした奏を宥めるように、響とエレンが、アコを伴い連れて行った。

「みんな、頼んだわよ！」

「私達も誘導を終えたら向うから・・・」

「それまで持ち堪えて!!」

なぎさ、ほのか、ゆりは、素早く行動を開始した後輩達を、頼もしげに見つめた：

世界絵本博覧会会場は、大きく分けて五つあり、世界中の絵本や童話を展示しているブース、世界の絵本や童話を映像化した作品を上映するブース、絵本や童話をイメージしたアトラクションブース、イベント会場、自分で絵本を作る体験ブースなどがあつた。

アトラクションブースに向かった咲、舞、満、薫の四人の前に立ち塞がるのは・・・三匹の子豚に出ていた少し緑色の狼と、赤ずきんちゃんの藍色の狼、

「ニコを悲しませたみゆきを・・・倒せ!!」

無表情のままそう叫びながら暴れる狼達に、咲達は困惑する。彼らが発しているみゆきとは、自分達の仲間、星空みゆきの事なのだろうか？だが、このまま暴れさせる訳に

はいかない。フラツピ達妖精がコミュニケーション姿に変化すると、

「「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」」

「花ひらけ、大地に!!」

「はばたけ、空に!!」

「未来を照らし!」

「勇気を運べ!」

「輝く金の花! キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼! キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「天空に満ちる月! キュアブライト!!」

「大地に薫る風! キュアウインデイ!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「聖なる泉を汚す者よ!」

「あこぎなマネは、おやめなさい!!」

変身を終えたブルーム、イーグレット、ブライト、ウインデイ、何処か精気を感じさせない狼に戸惑うものの、先ずブルームとイーグレットが二匹の狼に突っ込み肉弾戦を仕掛けようとするも、二匹の狼は素早い動きで距離を取り、遠吠えをして威嚇すると、更



に次々と狼が現われる。

「お、狼が出る絵本や童話って……こんなにあつたけ？」

ブルームは思わず変顔になり、狼の群れを指差しながら、イーグレット、ブライト、ウィンディに聞いてみると、少し考えたイーグレットは、

「私が知ってるだけでも……三匹のこぶた、赤ずきん、オオカミと七匹のこやぎ、オオカミ少年、ポリーとはらぺこオオカミ、他に羊飼いと狼のお話だけでも何作かあつたよ  
うな？」

「ゲゲエ……そ、そんなにあるの？」

イーグレットの話で、かなりの狼作品があると知ったブルームは、再び変顔になって仰け反る。冷静に狼の群れを見つめたブライトとウィンディは、

「元々狼は、群れをなして行動すると言うし、驚く事じゃないわ！」

「問題は、彼らが何者かに操られて居る可能性があるって事ね」

二人の言葉を聞いたブルームは、今一度狼の群れをジッと見つめ、ブライトとウィンディに再び問い掛け、

「じゃあ、迂闊に攻撃出来ないって事？」

「ええ、迂闊に攻撃して、仮に私達が彼らを倒してしまつたら……その物語の内容が変わり兼ねないって事ね」

「戦うにしても、手加減しながらって事になるわね……もつとも、ブラック達、ピーチ達、プロツサム達、メロデイ達、ハッピー達のように、敵を浄化する事が出来る技を持つなら別だけど……」

ブライトとウインデイの分析では、絵本や童話からこの世界に現われた者達は、何者かに操られて居るだけで、彼らを誤って倒せば、彼らの居た絵本や童話に、どんな影響が現われるかも分ならず、迂闊な攻撃は出来ないだろうと考えて居た。

「じゃあ、他のみんなにも伝えないと不味いわ！」

イーグレットは不安げに、他の仲間達にも急いで知らせなければと困惑の表情を浮かべるも、見つめ合ったブライトとウインデイは口元に笑みを浮かべ、

「その事については、さつきみんなと分かれる前に、ひかり、かれん、せつな、いつき、エレン、れいか、あゆみには伝えて置いたから大丈夫」

「おそらくみんなの所にも、このような童話の世界の敵が現われている筈！エコーを通じて、みんなには伝わる筈よ……私達の下には、ひかりと一緒になぎさとほのかが来てくれる筈だから、それまでは守りに専念しましょう」

「そういう事なら……」

ブルーム、イーグレットは正面の狼の群れを、ブライト、ウインデイは背後の狼の群れに対して身構えた。狼達は、邪魔する者は容赦しないとばかり、がむしゃらに攻撃す

るのを、四人はバリアを張って防ぎ続けた。

嘗て戦ったアカオーニのように、棍棒振り回し暴れる赤、青、黄の鬼達、のぞみ達は、逃げ遅れた人達を避難させ身構えると、

「もう、お父さんの晴れ舞台を・・・許せない！みんな、行くよ!!」

「「「「YES」」」」

父、勉が行う筈だったイベント会場を滅茶滅茶にされ、のぞみは大きく頬を膨らませると、一同を促し、

「「「「プリキュア！メタモルフォーゼ!!」」」」

「スカイローズ！トランスレイト!!」

「大いなる、希望の力！キュアドリーム!!」

「情熱の、赤い炎！キュアルージュ!!」

「弾けるレモンの香り！キュアレモネード!!」

「安らぎの、緑の大地！キュアミント!!」

「知性の青き泉！キュアアクア!!」

「「「「希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく5つの心！Yes！プリキュア5!!」」」」

「青いバラは秘密のしるし！ミルキイローズ!!」

変身を終えたドリーム達が名乗りを終えポーズを決めた・・・

「みんな、絵本から出てきた彼らを倒す事は、その物語に影響を与えかねない・・・」

「つぼみさん、えりかさん、いつきさん、力を貸して!!」

アクアが一同に忠告し、ミントが遅れてやって来たつぼみ、えりか、いつきにも協力を要請すると、

「分かりました・・・えりか!いつき!」

つぼみはえりかといつきに合図を送ると、二人が無言で頷き、シプレ、コフレ、ポップリがプリキュアの種を三人の手に送った。

「プリキュア!オーブンマイハート!!」

「大地に咲く一輪の花・キュアブロッサム!」

「海風に揺れる一輪の花・キュアマリン!」

「陽の光浴びる一輪の花・キュアサンシャイン!」

「ハートキャッチプリキュア!!」

ブロッサム、マリン、サンシャインも加わり、9人のプリキュアが、雄叫び上げた鬼達と睨み合いになった・・・

「めぐみお姉ちゃん!あれって・・・プリキュアじゃない?」

避難しながら誠司とめぐみに両手を握られていた真央は、ドリーム達やプロツサム達に気付き、一同に知らせると、

「エッ!?!・・・ほ、本当だ!」

「プリキュアつて・・・あの横浜のか?」

めぐみや誠司も、プリキュアの事はニュースで見た事があり知っていた。特にめぐみは、真央と一緒にプリキュアごっこで遊ぶくらい、彼女達に憧れていた。目をキラキラさせながらプリキュアを見つめるめぐみと真央、めぐみと誠司、真央が立ち止まったのを見たまりあは、

「三人共、今はこの場から離れる事を優先して!いおな!ゆうこちゃんも分かった?」

「はい!!」

まりあに促され、再び走り始めた一同、まりあはチラリと背後を振り向くと、

(確かに、前にニュースで映ってたプリキュアに似て居る・・・でも、何故彼女達が世界絵本博覧会に居るのかしら?)

まりあは不思議そうに首を傾げるも、その場を離れて行った。

外に飛び出してきたマナ、六花、ありすの目の前で、非現実的な出来事が繰り広げられていた・・・

魔法のランプから現われたかのような巨人が咆哮し、観客達を追い回す姿を呆然として見つめていた。

「あ、あります……念の為聞いておくけど、あれつてアトラクションじゃないのね?」  
「残念ながら、あのようなアトラクションは用意しておりませんわ」

共に顔を見上げ、呆然としながら巨人を見つめる六花とあります、二人が顔を戻した時、側に居た筈のマナの姿が、忽然と消え失せていた。

「エッ!? マナ! マナ、何処?」

「六花ちゃん、マナちゃんがあそこに!」

ありますが指さす先を見た六花の表情が、見る見る凍り付いていく……

あろう事か、マナは巨人の足下付近に駆け寄ると、巨人に対して何かを叫び続けて居ただけだから……

「巨人さん! みんな楽しんでいるのに、大きなあなたがそこで走ったら、他のみんなが楽しめないよ!! ねっ、楽しいのは分かるけど、自分だけ楽しむだけじゃなく、みんなと一緒に楽しもう!!」

「マナアア!! 何考えてるのよおおお!!」

「マナちゃんらしいですわ……ですが」

巨人に説教を始めたマナを見て、六花とありますの額から冷や汗が滴り落ちた……

そのマナの行動を見ていたのは、六花とありすだけでは無かった・・・  
 驚愕の表情を浮かべながら、マナを見つめるラブ、美希、祈里、せつな、そして、タルトとシフォンもその側に居た。

「あの子達は、さっきの・・・」

「ちよつと、あの子何考えてるのよ?」

「助けなきゃ・・・」

「ええ、ラブ、美希、ブツキー、変身よ!」

せつながリンクルンを手に取り、ラブ、美希、祈里を促すと、三人も頷き返しリンクルンを手に取り、

「[[[チエインジ・プリキュア! ビートアップ!!]]]」

「ピンクのハートは愛あるしるし! もぎたてフレッシュ、キュアピーチ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし! つみたてフレッシュ、キュアベリー!!」

「イエローハートは祈りのしるし! とれたてフレッシュ、キュアパイン!!」

「真つ赤なハートは幸せの証! 熟れたてフレッシュ、キュアパッション!!」

「[[[レッツ!プリキュア!!]]]」

変身を終えたピーチ達が、巨人目掛け駆け出した・・・

「ウゥン、言葉が通じないのかなあ・・・巨人さん、あたしの言う事分かるかなあ?」

身振り手振りです巨人にジェスチャーを交え、コミュニケーションを図るマナだったが、巨人は無表情さを変えず、

「ニコを悲しませた・・・みゆきを倒せ!!」

「エツ?!みゆきさんつて?」

戸惑ったマナは、足を上げた巨人の反応に遅れた。見る見るマナの頭上に巨人の足が振り下ろされてくる。六花が、ありすが悲鳴を上げ、マナが腕で顔をガードしたその時、四つの影がマナの視線に飛び込んでくると、巨人の足目掛け、ハイジャンプしながらベリ、パイン、パッションが蹴りを放ち、踏躑めいた巨人が尻餅を付いた。その隙にピーチがマナを抱き抱え、六花、ありすの下へとマナを連れて来た。マナは、レモン色のツインテールの髪を靡かせたピーチを、呆然としながら見つめた。

(ひよつとして、この人達は・・・プリキュア!?)

マナ、六花、ありすの三人も、嘗てニュースで話題になった事がある、プリキュアの事は知っていた。そのプリキュアが目の前に現われ、自分を救ってくれたのだろうか? ピーチはマナに微笑み掛けながらも、

「大丈夫? 無茶するなあ・・・」

「ひよつとして、あなた達は・・・プリキュア?」

「通りすがりのプリキュア・・・キュアピーチ! 危ないからあなた達は少し離れて、あ



の巨人は、私達が必ず元に戻して見せるから!!」

ピーチは、マナ、六花、ありすの三人に少し離れているように伝えようと、ベリー、パイン、パッションに合流し、巨人に身構えた。巨人は大きく息を吸い込み、プッププと小刻みに唾を吐き出すと、それは巨人そっくりな四つの人間ほどの大きさとなり、ピーチ、ベリー、パイン、パッションに攻撃を開始する。巧みに躲し続けるピーチ達、マナはその姿を、まるで観察するかのようにジッと見つめ続けた・・・

体験ブースにやって来た、響、奏、エレン、アコの前に、魔女達が立ち塞がっていた：「ニコを悲しませたみゆきを・・・倒せ!!」

魔女達は、虚ろな目をしながら会場に魔法を掛け、物の怪が出てきそうなおぞましき姿へと変えていく。

「今・・・みゆきって言ってたわ」

「これは偶然かしら!?それとも・・・」

自分達の知り合い、星空みゆきの事が真っ先に頭に浮かんだエレンと奏の顔付きが変わる。響も表情を引き締めると、

「奏、エレン、アコ、ともかく変身しよう!」

「エエ・・・ピーちゃん、ハミイと一緒に少し離れてて!!」

アコは、抱いていたピーちゃんを手放すと、ピーちゃんは羽ばたき、ハミイと共に少し離れた場所で四人を見つめる。

「みんなが楽しみにしている、世界絵本博覧会を滅茶滅茶にしようだなんて・・・」

「「絶対に許せない!!」」

「「レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション!!」」

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ!!」

「爪弾くは、たおやかな調べ！キュアリズム!!」

「爪弾くは、魂の調べ！キュアビート!!」

「爪弾くは、女神の調べ！キュアミューズ!!」

「「届け！四人の組曲!!スイートプリキュア!!!」」

メロディ、リズム、ビート、ミューズ、四人のプリキュアが、魔女達に対してポーズを決めた！魔女達は、そんな四人に怯むことなく無表情のまま、辺りに魔法を掛け続けた。

「止めなさい!!」

同時にふくよかな魔女に向かったメロディとリズムであったが、魔女の魔法を受け、メロディの左半身とリズムの右半身がくつつき、互いに離れようとしても、離れられない状態になっていた。

「エエエ!? 何で身体が離れないのおお?」

「ちよつとメロデイ、こつちに体重掛けないでええ!!」

バランスを崩し、その場に倒れ込み二人が藻掻いている姿を見て、ビートとミュージックが頭を抱えた。

「二人共、何やってるの?」

「全く・・・」

メロデイとリズムを呆れ顔で見たビートとミュージックは、顔を見合わせ合うと、左右に別れた。二人一緒に魔女達を浄化しに向かつて、逆に相手の魔法を受け、メロデイとリズムのようにされかねないと判断した二人は、左右に散り、先ずメロデイとリズムに魔法を掛けた魔女を浄化し、二人を元に戻そうと行動を開始した・・・

世界の絵本や童話を、映像化した作品を上映するブースへとやって来たみゆき、あかね、やよい、なお、れいか、あゆみの六人とキャンディだったが、他のブースと違い、この場所は平穏だった・・・

「今の所、何ともないみたいだね・・・」

みゆきは辺りをキョロキョロしながら、何事も無さそうでホツと安堵したものの、大きなテントの中から少女らしき悲鳴が聞こえ、咄嗟に顔色を変えて駆け出した。

慌てて中に入ると、それは上映されていた映像で、一同はホツと胸を撫で下ろすのだった。映像の中では、何かの本を持った黒い衣装を着た少女が、三人の悪者に追われている場面であつた。

「あれえ!?!この映像何かおかしいよ?」

みゆきは何かに気付き小首を傾げると、他のメンバーも改めて映像を良く見てみると、確かにみゆきが言うように何かが違つていた・・・

「ホンマや!あそこに居るのは・・・」

「金角、銀角、そして・・・牛魔王!この三人は、西遊記に出てくる筈・・・それがどうして?」

「あのような少女は・・・西遊記には出てきませんねえ」

あかね、なお、そして、れいかも画面に映る人物達を見て眉根を寄せた。大きな瓢箪を首からぶら下げてた金角と銀角、大きな扇のような物を手に持った牛魔王、その三人が、西遊記には登場しない筈の少女を、必死に追いかけて居たのだから・・・

やよいもジツと見ていたものの、

「気にし過ぎじゃないのかなあ?子供達に分かりやすいように、アレンジしてるのかも知れないよ?」

「確かに、その可能性もあるけど・・・」

あゆみも、やよいの言う事も一理有るとは思ったものの、何か引掛かっていた。そうする内にも、少女は岩場に追い込まれ、三人に囲まれた。キャンデイは身を乗り出し、少女がどうなるか画面を食い入るように見つめていると、少女は画面の中から、まるで一同に話し掛けるように、

「お願い……力を貸して!!」

少女の言葉が終わると、映像が一瞬暗くなり、今度は映像の中から目映い光が溢れ出し、その眩しさにみゆき達が目を背けた。再び画面を見つめた時、一同は度肝を抜かれた……

「イタアアイー!」

さつきまで映像の中に居た少女が画面から飛び出し、みゆきと激突し二人が床に倒れ込んだ。

「エッ!」

「が、画面から……飛び出してきた?」

あゆみとなおが、目の前で起こった出来事に思わず声を出した。映像の中に居た筈の少女が、突然映像の中から飛び出して来たのだから……

更に少女を追うように、金角、銀角、牛魔王もまた画面から飛び出して来て、更に驚きの声を上げる。

「『『『エエエエ!?』』』」

「最近の3Dというものは、凄いですねえ?」

「何でやねん!ちやうわ!!」

只一人、そんな場面を見ても、心から感心したようにれいかがポツリと呟くと、あかねがれいかに突っ込みを入れ、苦笑を浮かべながらも、慌ててれいかの右手を掴んだなおは、れいかを促しながら、

「れいか!3Dじゃないし、本物だから・・・」

みゆきは少女の手を掴み、慌ててテントの外に避難し、その後を他のメンバーが続いた。

「待て!逃がさんぞ!!」

鼻息荒く牛魔王が、金角、銀角に何か指示を出し、牛魔王がみゆき達の後を追って来る。みゆきは少女に微笑むと、

「大丈夫!あなたは私達が必ず守るから・・・みんな!!」

みゆきの合図を受け、あかね、やよい、なお、れいか、あゆみが頷き返すと、

「『『『プリキュア!スマイルチャージ!!』』』」

「プリキュア!スインクチャージ!!」

みゆき達六人の少女が、パフを身体に付けプリキュアへと変化していった・・・

「キラキラ輝く、未来の光！キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん！じゃんけん・・・ポン！キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心！キュアビューティ!!」

「一二三5つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア!!」

「思いよ、届け！キュアエコー!!」

六人のプリキュアが、少女を守るように牛魔王に名乗りを上げた!!

保護された少女は、一同が変身した姿を見て驚いていたが、その表情は何処か寂しげだった・・・

「何なのコレエエエ!?!」

色々な動物達に追われ、脱兎の如く逃げ続けるのは、ありすが待ち合わせていた相手、ブルースカイ王国の姫君ヒメルダと、世話役のリボン・・・

世界絵本博覧会に興味を持った彼女は、両親に頼み込み、四葉財閥に働きかけ招待されていた。当初は王妃も共に来るつもりだったが、人見知りか激しい娘の成長を願い、世話役のリボンのみを共にして、ヒメルダを日本へと送った。

「もうヤダアアア！」

泣きながら逃げ続けるヒメルダの前に、大きな鏡が姿を現わすと、鏡の中から水色髪の青年が手を差し伸べ、

「ヒメーリボン！急いでこっちに！！」

「神様！」

「ブルー様！！」

ヒメルダとリボンの目が輝き、二人はブルーと呼ばれた青年の手を掴み、鏡の中に消え去ると、鏡は忽然と姿を消し、ヒメルダを見失った動物達が途方に暮れた。

会場内に起こった異変を調べるありすの執事セバスチャン、目の前で起こる非現実的な出来事にも動じず、自らスタッフの先頭に立ち、観客達を安全な場所まで誘導していた……

（フム……あの三人は、適切な誘導をしている）

セバスチャンの視線の先には、なぎさ、ほのか、ゆりが、観客達を手際よく誘導して行く姿が映った。セバスチャンは満足げに何度も頷き、素早く携帯を手に取ると、何処かに電話を掛けた。

「私だ！二つ程頼み事をしたい……先ず、ブルースカイ王国姫君の安全の確保、それと、



西遊記の仮装をした三人組、このスタッフの事を調べて私に連絡して欲しい!!・・・ウム、今会場内で起こっている事は、こちらでも承知して居る。何か分かったら、それも合わせて知らせてくれ!!」

携帯を切ったセバスチャンだったが、直ぐに携帯の着信が鳴り携帯に出ると、監視力メラに、嘗て横浜の地を救ったプリキュアらしき少女達が現われ、会場内を暴れ回る者達と交戦中だと連絡を受けた。

「プリキュア!?あの、プリキュアだと言うのか?・・・分かった!私も直ぐそちらに向かう!!」

再び携帯を切ったセバスチャン、先程視線の先に居たなぎさ、ほのか、ゆりも無事に誘導を終えたようで、その姿は消え失せていた。

「そういえば、あの三人は水無月家のご令嬢と一緒にだったな・・・後で聞いてみるとしよう!」

踵を返したセバスチャンは、会場内に現われたプリキュア達の情報を得る為、メイン会場内へと戻って行った。

「なぎささん!ほのかさん!ゆりさん!」

三人の下に駆けつけたひかりは、先程満達と話した事を伝えるべく、なぎさ、ほのか、

ゆりの下に訪れると、手短かに状況を説明した。

「そう・・・やはり絵本の中から現われた何て」

ひかりの報告を聞き、少し考え込むほのか、なぎさとゆりも顔色を変えた。辺りを見渡すと、避難し終わったのか幸い人影も無く、四人は顔を見合わせると頷き合い、

「デュアルオーロラウエーブ!!」

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」

「プリキュア! オープンマイハート!!」

「光の使者・キュアブラック!」

「光の使者・キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!!」

「輝く生命、シャイニールミナス! 光の心と光の意志、全てをひとつにするために!」

「月光に冴える一輪の花・キュアムゥゥンライト!!」

他の一同も戦闘に突入していると察知したなぎさ、ほのか、ゆりは、ひかりを促しプリキュアへと変身した。

「ブラック、ホワイト、ドリーム達の下には、プロッサム達が向かったようだし、私はメロディ達の援護に向かうわ!!」

「分かった! 私達は、ブルーム達の下に向かうよ・・・行こう! ホワイト、ルミナス」

互いに軽く手を上げ、ブラック達はブルーム達の下に、ムーンライトはメロディ達の下へと向かった・・・

世界絵本博覧会の会場内で、プリキュアオールスターズと絵本の悪役達が対峙する中、この騒動を引き起こした黒い影は・・・

(まさか、あのような者達が現われるとは計算外だったカゲエ・・・でも、ニコは上手くみゆきと会えたカゲエ！)

会場内を飛び回り、一通り状況を把握した影は、ハッピー達と合流した少女を見て、口元にニヤリと笑みを浮かべた。眼下では、ハッピー達六人と、牛魔王、金角、銀角の戦いが、今正に始まろうとしていた・・・

第六十六話：世界絵本博覧会！

完

## 第六十七話：プリキュアVS絵本のキャラクター達！

1、大暴れ！絵本のキャラクター達

なぎさ、ほのか、ゆりがアルバイトしている、世界絵本博覧会にやってきた一同だったが、会場内は、絵本の中から現われた悪役達によってパニックになっていた。一同はプリキュアに変身し、事態の収束に動き出した・・・

とある鏡に囲まれた部屋・・・

鏡に映ったプリキュア達を見て、ヒメルダとリボンは目を見開き驚くと、

「神様・・・この人達って!?!」

「ブルー様、見たところ、彼女達からは不思議なパワーを感じますわ!」

「ヒメ、リボン・・・彼女達は、幾度もこの世界の危機を救って来た伝説の戦士プリキュア!一万年前、世界を救った三人のプリキュアの一人、君の先祖、キュアプリーステスと同じね!!」

「エエエ!?!」

ブルーの発言を聞き、ヒメルダとリボンは変顔を浮かべながら驚愕し、再び鏡に映る

彼女達の戦いを見つめた。

ハッピー達六人は、絵本の中から現われた少女を保護し、追ってきた西遊記の悪役、牛魔王、金角、銀角と今まさに戦おうとしていた・・・

「先制攻撃、行くでええ！・・・プリキュア！サニーファイヤー!!」

「俺様の邪魔をするってえなら・・・この芭蕉扇で吹き飛ばしてやるぜえ!!」

気合いを込めたサニーは、先制攻撃とばかりサニーファイヤーを放ったものの、牛魔王は、手に持っていた大きな扇を、力任せに一振りすると、周囲に突風が吹き荒れ、サニーファイヤーを押し戻した。サニーは何とか自身の放った攻撃を躲したものの、立って居るのがやつとの状態になる。

「コリヤ堪らんわあ・・・」

「サニー！大丈夫？」

強風に煽られるサニーを心配したハッピーが、サニーに声を掛けるも、サニーは表情を歪めながら、

「この程度なら大丈夫や！」

（そうか・・・あいつはサニーという名前なのか）

サニーと牛魔王の戦いを見て居た金角の口元が、ニヤリと吊り上がると、

「おい！サニー!!」

「何や!?今それどころじゃ・・・エエエエエ?」

強風で髪が激しく揺れ、苦悶の表情を浮かべるサニーに、背後から声が掛かり、振り向いたサニーが声の主に返事を返すと、突然サニーは物凄い吸引力で引つ張られ、為す術もなく、金角の持つて居た巨大な瓢箪に吸い込まれた。金角はニヤリとすると、持つて居た瓢箪に蓋をし、瓢箪を揺すつて笑みを浮かべた。

「サニー!?!」

「そんなあ・・・サニーが瓢箪に吸い込まれちゃった!?!」

ハッピーとピースが涙目になりながら、吸い込まれたサニーの身を案じる。牛魔王は、相手を金角に奪われ少し苛つくも、

「チツ！金角の野郎、俺様の獲物を・・・だが、流石は紅葫蘆（べにひさご）！大した威力だぜ!!」

思い返せば西遊記の中で、牛魔王の正妻である羅刹女が芭蕉扇を、金角と銀角兄弟が、呼びかけた相手が返事をする、中に吸い込んで溶かしてしまう、恐るべき瓢箪の紅葫蘆を持つて居た事を・・・

「金角と銀角が持つて居る瓢箪って・・・名前を呼ばれて返事をする、瓢箪の中に吸い込まれるんだった・・・」

瓢箪に吸い込まれた人物の身体は徐々に溶けて、瓢箪の中で酒のエキスに変わる事を思い出し、見る見る顔色が青ざめていくハッピー、

「迂闊に私達の名前を知られる訳にはいきませぬえ．．．」

険しい表情をしたビューティも、自分達の名前が知られないように用心するよう一同に伝えた。

「そう言えば．．．銀角って、山を動かせたよね？」

「はい．．．孫悟空が山に押しつぶされ、身動き出来なくされてましたね」

思い出したマーチが一同に話し掛けると、ビューティも頷き、一度は孫悟空も銀角に敗北した事を告げた。

「フフフン！俺様の強さが分かったようだなあ．．．さあ、ニコをこちらに渡せ!!」

ドヤ顔を見せる銀角、不安そうな表情を浮かべるニコを隠すように、ハッピーが銀角を険しい表情で見つめていると、フンと鼻息荒く言葉を捲し立てたピースは、

「この世界の孫悟空なら、山の一つや二つ．．．かめはめ波で消滅させられるもん！」  
「な、何だとおお!!」

「この世界にも孫悟空が居るのか?．．．しかも、それ程の者なのか?」

思わず顔を見合わせ、驚愕する金角と銀角に、今度は逆にピースがドヤ顔を浮かべると、

「ウン！私達の仲間だよ!!今、この会場にも来てるし、あなた達何か、チヨチヨイのチヨイ何だからあ……分かったら、今の内にサニーを返して!!」

当初、ピースは何を言い出すのかと呆れ顔のマーチ、ビューティ、エコーであつたが、どうやらこれはピースの作戦だと見抜き、成り行きを見守つた。

「バカめ！そんな話を聞いて……オメオメ黙つて居られるか！兄者、俺をこの世界の孫悟空と勝負させてくれ!!」

「良いだろう！我らの力、思い知らせてやれ!!」

「オオ!!」

血気盛んに荒ぶる銀角を見たピースは動揺し、仲間達を振り返りどうしようかと相談するも、銀角は何やら術を唱え、雲を呼び寄せると、ヒラリと雲の上に飛び乗り、会場内に居るであろう孫悟空を探しに向かった……

舂斗雲と言えば、孫悟空を真つ先に思い浮かべるが、基本的には雲に乗る術、仙術なので、元々天界の関係者である猪八戒、沙悟浄、牛魔王達も搭乗可能である……

「ど、どうしよう!?!銀角、孫悟空を捜しに行っちゃったよお?」

「こうなったら……私達の誰かが、孫悟空として戦う以外無いかも知れませんが……」  
「嘘だと分かったら……瓢箪に吸収されたサニーの身も、益々危ういかも知れない」

「そ、そんなあああ……」



ヒソヒソ話で会話するハッピー、ビューティ、マーチ、ピース、このまま孫悟空が見つからなければ、金角と銀角は腹いせに何をしでかすか分からない、思案していたエコーは何かを閃くと、

(孫悟空・・・そうだわ! なぎささんは孫悟空に扮していたし、事情を話せば、銀角を引き留めてくれるかも知れない・・・)

エコーは両手を組んで精神を集中させると、仲間達に思いを伝えた・・・

2、サニーを救え!

ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディの下に駆けつけたブラック、ホワイト、ルミナスの三人、現状をブライト、ウインディから聞いたブラック、ホワイト、ルミナス、ルミナスは、ブルーム達四人に加わり、狼達の攻撃をハーティエルアंकシヨンで止めるや、

「ブラック! ホワイト! 今の内に・・・」

「分かった・・・そうと決れば! ホワイト!!」

「ええ、無益な争いは避けたいものね・・・」

頷き合ったブラックとホワイトは、

「ブラック・パルサー!」

「ホワイトパールサーー!!」

「闇の呪縛に囚われし者たちよ!」

ホワイトが叫び・・・

「今、その鎖を断ち切らん!」

ブラックが応える・・・

「プリキュア! レインボー・セラピー!!」

ブラック、ホワイトから発せられた、半球形の虹のオーラが広がり、狼の群れを飲み込んで行った。

二人の放ったレインボーセラピーから逃れようとするかのように、狼達から影のような物体が抜けるや、両肩に付いて居た黒い翼は消え去り、狼達はキョトンとした表情を浮かべ、まるで吸い込まれるように元の絵本へと戻って行った・・・

「良かった! どうやら、狼の出る絵本の話を守れたようだね」

安堵の表情を浮かべるブルームに、ブラックとホワイトも微笑み返した。その時、  
「やいやいやい、孫悟空! 何処に居やがる? この銀角様が怖いのか!」

上空から雲に乗った銀角が、孫悟空を捜し回る声が響き渡り、ブラック達は呆然と上空を見上げた。

「な、何、あれ!」

「銀角つて名乗つてたわね．．．つて事は、西遊記に出てくる銀角大王つて事!」

ブルームが呆気にとられ、ホワイトが銀角と名乗つた事で、一同は西遊記に出てきた銀角大王だと悟つた。そんな一同の心に、エコーの声が響き渡つた．．．

(みんな、私達六人は、西遊記に出てくる牛魔王、金角、銀角に追われていた少女を保護したんですが、サニーが、金角の持つて居た瓢箪に吸い込まれてしまいました。更に、この世界の孫悟空は、彼らより強いと言つた所、怒つた銀角が、孫悟空と戦うと会場中を飛び回っているんです．．．銀角を引き留め、サニーを救出するまでの時間を稼いで貰えませんか?お願いします!この会場での孫悟空．．．なぎささん!!)

「エエエ!?わ、私?」

「確かに、ブラックは孫悟空役をやつてたけど．．．」

エコーに指名され困惑するブラックと、心配そうにブラックを見つめるホワイト、ホワイトとウィンディは顔を見合わせ合うと、

「確かに、サニーを救うには、敵の戦力を分散させた方が良いわね．．．」

「銀角!あなたのお探しの孫悟空なら．．．此処に居るわ!!」

ウィンディがブラックを指さすと、呼ばれた銀角も、指を指されたブラックも驚愕し、銀角は雲から飛び降り地上に降り立つや、ブラックの顔をジツと見つめ、

「成る程．．．確かに猿面をしている」

「ハア!?何かスツゴク腹立つんですけどおお!!」

「事実だからしようがないメポ」

「やかましい!!」

メップルにからかわれ、変顔浮かべたブラックがメップルを睨み付ける。銀角は、腕をバシバシ叩き、四股を踏みながら、

「さあ、山を打ち消すとかいう、かめはめ波とやらを・・・俺に放つて見ろ!」

「そんな技出来るかああああ!!」

銀角に猿呼ばわりされ、変顔を浮かべながらご立腹なブラック、更にピースの言葉を信じ、かめはめ波を放つて見ろと言われ困惑する。

「そんな訳の分からない事をあいつに教えたのは・・・ピースね!」

「あの子しか居ないわね」

共に顔を見合わせ頷き合うブライトとウィンディに、ホワイト、ルミナス、ブルーム、イーグレットは苦笑を浮かべ、ブルームは、

「ブライト、ウィンディ、私もそうだとは思うけど、そこまで断言しなくても・・・」

「そこは認めるのね・・・」

ピースをフォローしつつも、自分もそう思っているブルームを見て、イーグレットが苦笑混じりに呟く、

「エエイ、ゴチャゴチャ抜かしやがって……だったら、こちらからおみまいしてやる!!」  
銀角は両手の人差し指を合わせ、何か呪文を唱えると、側にあつたベンチ、ゴミ箱、自動販売機、遊戯道具が宙に浮かび上がり、建物が今にも浮かび上がりそうに激しく軋み始めた。

「さあ、我が術を受けて見ろ!孫悟空!!」

「黙って聞いてれば……頭きたああ!!」

ブラック目掛け次々襲ってくるベンチ、ゴミ箱等をものともせず、まるで見切つていくかのように躲し続け、雄叫び上げたブラックが、素早く銀角の懐に潜り込み、その素早い動きに、思わず銀角はギョツとした。口元に笑みを浮かべたブラックは、

「今度はこつちの番!ダダダダダ……ダアアア!!」

怒濤のパンチの連打を銀角に放ち、堪らず銀角が吹き飛んだ。倒れ込んだ銀角の上に、先程宙に浮かべた物体が、ものの見事に銀角の頭に次々ヒットしていった。銀角はその都度「イテエ」と声を発し、その場に再び倒れ込み、

「参った!流石はこの時代の孫悟空……」

銀角は、何処から取り出したのか、白旗振つてブラックに参つたと降参した。ブラックは、意外と呆気なく勝負が付いた事に驚きつつも、

「だから違うわよ!まあ良いや……さあ、私が勝つたんだから、サニーを元に戻して!!」

「それは、兄者の金角がした事だし・・・」

「だったら、私達をそこに案内しなさい!!」

ブラックとブルームに両手を掴まれた銀角が、トホホ顔で連行されながら一同を金角の下へと連れて行つた・・・

鬼達と戦つて居たドリーム達の下にも、サニーが瓢箪に吸収された事は伝わっていた。ミントは顔色を変え、仲間達に伝えるように、

「みんな、あの瓢箪の中に居ると、ジワジワ身体が溶け始める筈・・・長引けば長引く程、サニーの身が危険だわ!」

「エエ!? サニーの服が溶けちゃうんですかあ?」

「ありやりや、後で縫つて上げなきゃ駄目かなコリヤ?」

「レモネード、マリン・・・服だけならまだマシだけど、身体が溶けるつて今ミントが言つてたでしょう!」

少し呆れ顔で二人を見たアクアが注意し、仲間の危機に、ドリームの表情がキツと鋭さを増した。

「そこを退いて! プリキュア! シューティングスター!!」

色とりどりの鬼の群れに、シューティングスターで突っ込んだドリーム、次々吹き飛

ばされた鬼達が倒れ込む。

「プロツサム、マリ、サンシャイン、今よ!!」

「ハイ! マリン、サンシャイン、行きますよ!!」

「ヨツシャア!」

「分かった!」

ドリームの合図を受けた三人は、プロツサムタクト、マリンタクト、シャイニータンバリンを取りだし、

「花よ、輝け! プリキュア! ピンクフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、煌け! プリキュア! ブルーフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、舞い踊れ! プリキュア! ゴールドフォルテバースト!!」

三人の放った必殺技が、次々と鬼達に取り憑いた影を引き剥がしていった。黒い翼が抜け、我に返った鬼達は呆然としながら、

「アレエ!? 俺達は鬼ヶ島に居た筈でガンス?」

「一寸法師が中々現われず、イライラしてた事までは覚えてるんだが・・・」

何故自分達がこんな場所に居るのか、鬼達は不思議そうに小首を傾げ、皆元の絵本に吸い込まれるように消えて行つた・・・

「鬼達・・・やっぱり誰かに操られてたんでしょうか?」

「今の様子を見た限り、その可能性が高いわね!」

レモネードの問い掛けに、ミントが頷く、まだ表情を緩めないドリームは、一同を促し、

「さあ、私達もハッピー達の援護に向かおう!」

ドリーム達とブロッサム達も、サニー救出の手助けをする為、ハッピー達の下へと駆け出した……

「凄おおおおい!!」

イベント会場から、少し離れた場所に避難していたまりあ達一同だったが、ドリーム達とブロッサム達の活躍で、騒動が沈静化したのを見るや、めぐみと真央は急いで駆け寄り、すれ違い様にドリーム達とブロッサム達の勇姿を見て、二人は目を輝かせて居た。

「プリキュアって……本当に居たんだな?」

「エッ!?そ、そう見たいね……」

ポツリと誠司が呟くと、いおなはドキツとした表情を浮かべた。いおなの不自然な様子を見たゆうこは、

「どうしたの、いおなちゃん!?何か変だよ?」

「べ、べ、別にいい!?!」



そう言っつていおなは否定するも、誰の目から見ても、いおなの様子はおかしかつた。いおなは、継るような目をまわりあに向けると、まりあはそんないおなを見てクスリと微笑み、

「フッフ、隠してた訳じゃ無いけれど、私達の先祖に・・・プリキュアが居たつて聞いていたから、実際本当に居たのを知つて、いおなも驚いているのよ」

「エエエ!? いおなちゃんともりあさん・・・プリキュアの子孫何ですか?」

「凄おおおい」

ゆうことめぐみが目を見開いて驚き、誠司と真央も驚いているようだった。まりあは再びクスリと笑むと、

「さあ! 私にも真偽の程は私にも分からないわ! 千年前の話だそうだし・・・」

「「千年前!」」

「ええ、私達の先祖は、昔びかりヶ丘神社に使っていたの・・・千年前、この世に厄が巻き起こり、人々は嘆き悲しんだそうなの・・・人々の平和への願いを聞き入れたかのよう、びかりヶ丘神社に神様が降臨し、巫女にプリキュアの力を与えたそうよ! その巫女と神様が恋に落ち、巫女は子を宿したとか・・・でも巫女は、子を産んだ後行方知れずになり、巫女の妹がその子を娘として育てた。それが、私達の先祖・・・つて事だけど、こればかりは私も本気にしてなかつたんだけど、いおなはすっかり信じてて・・・」

「も、もう、お姉ちゃん！何もみんなの前で……」

益々動揺するいおなを見て、一同はクスリと笑い合った。

巨人の分身達の攻撃を、巧みに躲していたピーチ達四人であったが、サニーのピンチを知るや、攻撃に転じた。ピーチがパンチを中心にすれば、ベリーはキックを、パインは攻撃を受け止め、隙を見付けるや反撃に転じ、パッションはその素早い動きで翻弄していった。

（あれがプリキュアの力!? 四人とも……凄い!）

マナは目を輝かせながら、四人の戦い振りを見つめていた。四人はまるでタイミングを合わせるかのように、ピーチロッド、ベリーソード、パインフルート、パッションハーブを取り出すと、

「「悪いの、悪いの、飛んでいけ!」」

「プリキュア! ラブサンシャイン……」

「プリキュア! エスポワールシャワー……」

「プリキュア! ヒーリンググプレア……」

「「フレ〜ッッシュュ!!」」

「吹き荒れよ! 幸せの嵐! プリキュア! ハピネス・ハリケーン!!」

四人のプリキュアから放たれた必殺技が、巨人の分身達を浄化する。まるで浄化されるのを喜んでいるような分身達を見て、マナ、六花、ありすは驚愕した。

「ねえ、ねえ、六花、ありす、見た？」

「エエ・・・あれがプリキュアの力!？」

「暖かな光に包まれ、あの巨人の分身さんも、満足気でしたわ」

だが、本体である巨人はまだ残って居る・・・

四人のプリキュアは、あの巨人を相手にどう戦おうとするのだろうか？三人は更に興味深げにピーチ達に視線を向けた。

「ベリー、パイン、パッション、こんな所でモタモタしてられない・・・一気に行くよ!!」

「OK!」

「ウン！サニーが心配だもんね」

「何時でも良いわよ!!」

ピーチの合図に、ベリー、パイン、パッションが何時でもOKだと返事を返す。ピーチは頷くと、

「クローバーボックスよ、私達に力を貸して!!」

ピーチの合図に應えるかのように、タルトが持つて居たクローバーボックスの蓋が開き、ピーチ、ベリー、パイン、パッションのリンクルンが光輝いた。

「プリキュアフォーメーション！レディー・・・ゴー!!」

ピーチの合図で、巨人目掛け走り出した四人を見て、マナ、六花、ありますが、驚愕の表情を浮かべる。

「ハピネスリーフ！セット！パイン!!」

パッションから始まったハピネスリーフ、パッションはパインに投げると、

「プラスワン！プレアリーフ！ベリー!!」

受け取ったパインが、プレアリーフをセットしベリーに投げる。

「プラスワン！エスポワールリーフ！ピーチ!!」

受けたベリーが、エスポワールリーフをセットし、ピーチに思いを託し投げる。

「プラスワン！ラブリーリーフ!!」

受け取ったピーチは、ラブリーリーフをセットし、四つ葉のクローバーマークを完成させる。ピーチが四つ葉のクローバーマークを投げると、それは巨大化し、四人はそれぞれマークの上に乗って、クローバーの中心部に居る巨人の上で下降し、巨人を巨大な水晶の中に閉じ込めた。

「何アレエ!?!・・・凄いい!」

思わず見とれていたマナがポツリと呟いた。

「[[[[ラッキークローバー！グランドファイナーレ!!]]]]」

ラツキークローバーグランドファイナーレは、巨人を光の輝きの中で包み込んだ!!  
「シユワシユワシユワアア・・・」

巨人は幸せそうな笑みを浮かべ、巨人に取り憑いていた影が浄化された。黒い翼が抜け我に返った巨人は、不思議そうに辺りをキョロキョロ見回し、

「ハテ!?」主人様の姿が見当たたらぬようだが・・・」

巨人は不思議そうに小首を傾げながら、元の絵本へと消えて行った・・・

マナはキラキラ目を輝かせながら、四人のプリキュアの勇姿を見つめ、

「六花、ありす、約束通りプリキュアが、巨人さんを元に戻してくれたよ!」

「信じられないけど・・・目の前で見せられたら、信じるしか無いわね!」

目の前で起こった不可思議な出来事ながら、六花も自分の目で見たからには、真実だと認めるしかないと言わんばかりに苦笑混じりにマナに返事を返す。ありすは、不思議そうに小首を傾げると、

「でも、何故プリキュアがこの会場に現われたのでしょうか?」

「さあ!」

ありすの問い掛けに、思わず顔を見合わせたマナと六花は、小首を傾げた。ピーチ、ベリ、パイン、パッションの四人は、マナ、六花、ありすに軽く手を上げ、サニー救出の援護に、ハッピー達の下へと向かった・・・

「マハルカタンドアフリーランバ!」

魔法の魔法によって、メロディとリズムは身体が離れなくなり苦戦していた。ビート、ミュージズは、メロディとリズムに魔法を掛けた魔女を、先ず浄化しようと試みるも、他の魔女達の魔法の集中攻撃を受け、安易に近づく事が出来なかった・・・

「不味いわねえ・・・これじゃメロディとリズムを元に戻せないわ」

「うん! 何とか隙を作らないと・・・」

再び距離を取った二人、ビートは走りながらラブギターロッドを取りだし、ミュージズは大きくジャンプすると、

「シ、の音符のシャイニングメロディ! プリキュア! スパークリングシャワー!!」

ミュージズは魔女達目掛けスパークリングシャワーを放ったものの、宙にジャンプした事で、魔女達はミュージズに狙いを定めた。

「ミュージズ!!」

気付いたビートがミュージズの援護に向かおうとするも、魔法の魔法で現われたライオン、案山子、プリキ男が立ち塞がった。

「あれは、オズの魔法使いの・・・メロディ、何とか起き上がらないと二人が」

「そうだけど・・・上手くバランスが取れないよお」

ヨロヨロ立ち上がろうとするメロディとリズムだったが、嘲笑うように一人の魔女が二人の背中をチョンと押すと、二人は悲鳴を上げながら再び倒れ込んだ。

「もう、折角立ち上がったのにいい！」

頬を大きく膨らませ、魔女を恨めしげに見つめるメロディ、ハミイとピーちゃんもハアと溜息を付いた。

宙に飛んだ事で、魔女達の魔法攻撃を回避出来ず、ミューズも魔法の餌食になるかと思われたその時、マントを羽織ったムーンライトが急接近し、ミューズの右手を引っ張り、魔女達からの魔法攻撃を回避させるや、瞬時にムーンタクトを取り出し、

「花よ、輝けープリキュア！シルバーフォルテウエ〜〜イブ!!」

ムーンライトのシルバーフォルテウエイブが、魔女達目掛け飛ぶ、その中には、メロディとリズムに魔法を掛けた、ふくよかな魔女も含まれていた。

「ハアアアア!!」

ムーンライトはタクトをクルクル回し、フォルテウエイブの攻撃を受けた魔女達から、黒い翼が飛び出ていった。

「アレエ!?身体が離れられるよ！」

「ムーンライトが、私達に魔法を掛けた魔女を浄化してくれた事で、私達に掛けられていた魔法の効果が解けたのね！」

ムーンライトの出現に、ホッと安堵の表情を浮かべたビート、助けられたメロディ、リズム、ミュージズがムーンライトに笑みを浮かべ、

「「ありがとう!」」

「どう致しまして! さあ、残りの魔女達を元に戻し、サニー救出に向かうわよ!!」

「「「ハイ!!」」」

集結したメロディ、リズム、ビート、ミュージズ、そしてムーンライト、メロディはミラクルベルティエを、リズムはファンタステイクベルティエを取りだし、ビートは、ラビギターロッドをソウルロッドへと変化させる。

「「翔けめぐれ、トーンのリング! プリキュア! ミュージッククロンド!!」」

メロディとリズム、二人は呼吸を計ったかのように、互いにミュージッククロンドを放ち、オズの魔法使いに出てきた、北の魔女グリンダ、西の魔女ミス・ガルチに取り憑いた黒い影を浄化した。

「翔けめぐれ、トーンのリング! プリキュア! ハートフルビート・ロック!!」

「シ、の音符のシャイニングメロディ! プリキュア! スパークリングシャワー!!」

「花よ、輝け! プリキュア! シルバーフォルテウエ〜〜イブ!!」

そして、ビート、ミュージズ、ムーンライトの三人が、案山子、ブリキ男、ライオンに取り憑いた黒い影を浄化すると、浄化された一同は、一体何が起こったのかとも言い



たげに、辺りを見回しキョトンとし、それぞれ自分の作品へと戻って行った・・・  
「さあ、私達も行きましょう!!」

ムーンライトに促され、メロディ、リズム、ビート、ミューズの四人も、ハッピー達の下へと急ぎ駆け出した・・・

一方、瓢箪に吸収されたサニーは・・・

「何や、エライ酒臭い所やなあ・・・」

薄暗い中、足下には水が溜まり、酒の匂いが充満していた。サニーは鼻を摘みながら、さてどうしたものかと思案をする。

(瓢箪に吸い込まれ、蓋をされたつちゆう事は・・・何とか蓋を取らせなアカンちゆう事やな)

サニーは、何とか上に這い上がろうとするも、濡れた壁に触れた手はベトベトし、ぬかるんでいる足下は滑りやすく、直ぐに足を滑らせ、元の場所まで戻ってしまう状況に困惑する。

「みんなあ、何とか蓋を開けさせてやあ!」

サニーはハッピー達仲間を信じ、一瞬のチャンスに掛けようと、無駄な体力を使うのを止めた・・・

牛魔王に立ち向かうのはマーチ、ビューティの二人、サニーを救おうと金角と対峙するのは、ハッピー、ピース、エコーの三人であったが・・・

「どうだ!? 芭蕉扇の威力は凄まじいだろう? ガハハハハハ」

芭蕉扇に絶対の自信を持っている牛魔王が、ドヤ顔で高笑いを浮かべる。髪を激しく揺らしながら、苦悶の表情を浮かべるマーチとビューティ、

「私は・・・風の力を受けたプリキュア! この風を・・・力に変えてみせる!!」

マーチは目を閉じ、風の流れに逆らう事を止めた・・・

マーチの身体が、芭蕉扇の強風で錐揉みしながら上昇する。思わず顔色変え、マーチの手を掴もうとするビューティであったが、

「ビューティ、大丈夫! この風の流れ・・・分かった!!」

マーチは目をカッと見開くと、強風はマーチの周りを、グルグル渦を巻くように上昇していった。牛魔王は呆気に取られ、

「何だ!? あいつは何故芭蕉扇で吹き飛ばさないんだ? この野郎!!」

牛魔王は顔色変え、力任せに何度も芭蕉扇を振るも、風はマーチを吹き飛ばすことが出来無かった。逆に、風はマーチに力を与えるかのように、マーチの周りをグルグル渦巻く。

「ビューティ！力を貸して!!」

「分かりました!」

マーチの側に来たビューティ、二人はチラリと互いを見て笑みを浮かべ合った。共に並び立った両者は、

「プリキュア!マーチシユート・・・」

「プリキュア!ビューティブリザード・・・」

「ストリ〜〜ムウウ!!」

風を纏ったマーチの蹴りが、冷気をマーチシユートに乗せたビューティの技が、牛魔王目掛け二人の合体技が炸裂する。凄まじい暴風は冷気を纏い、まさにブリザードとなって、驚愕の表情を浮かべた牛魔王の身体を、徐々に凍らせて行った・・・

「なっ、何いい!?牛の兄貴が?」

牛魔王が凍り漬けにされ、金角から先程までの余裕が消えていた。ピースは再びドヤ顔を浮かべると、

「フフフウン!私達の強さが分かった?さあ、サニーを返してえ!!」

「まだ負けた訳じゃ無え!!エエツと、所で、お前の名前は何だっけ?」

金角は、探りを入れるようにピースの名前を聞き出そうとするも、ピースは、金角の

バレバレの行為に思わず吹き出し、

「フフフ．．．良いよ、教えて上げる！私の名前は．．．太陽マンレディー!!」

ピースは偽名を使い、金角をからかおうとしたものの、金角はニヤリとすると、

「そうか．．．オイ！太陽マンレディー!!」

「なあにいい？何ちやつてえ．．．エツ?!」

「ピース！駄目えええ!!」

返事をしたピースを、顔色変えたハッピーが止めようとしたものの、偽名の筈なのに、何故か返事をしたピースは、瓢箪の中へと吸い込まれていた．．．

「オッ！瓢箪の蓋が開いた!!ハッピー達がやってくれたようやな．．．ヨッシャア!!」

足下に力を蓄えたサニーが、光目掛けジャンプをするも、吸い込まれてきたピースと頭と頭で激突し、共に下まで落下して行つた．．．

「イタタタタ．．．な、何でピースまで!?!」

「エエエン！私にも良く分からないよおお?」

呆然と、新たに吸い込まれてきたピースを見て困惑するサニーと、偽名の筈なのに吸い込まれたピースは、訳が分からず涙目になる。

「孫悟空のお話でも、孫悟空は偽名を使って、孫悟空の弟、空悟孫と偽名を名乗ったんだ

けど、例え偽名であっても、その名前を呼ばれて返事をしちゃうと、あの瓢箪に吸い込まれちゃうの！」

「エエエ!? そうだったの? じゃあ、ピースが吸い込まれたのは……」

「うん、太陽マンレディーと呼ばれて、返事をしちゃったから……」

困惑しながら、孫悟空の話をエコーに聞かせたハッピー、マーチとビューティも合流し、どうすべきか思案するも、金角は瓢箪を揺すり、

「さあ、牛の兄貴を元通りにしろ! そして、ニコを俺達に差し出して降参しろ!! そうすれば、仲間を返してやっても良いぞ? さあ、早くしないと、中の二人が溶けちゃうぜ?」

形勢逆転!!

逆に金角に追い詰められたハッピー、マーチ、ビューティ、エコー、このまま二人を見殺しにする事など絶対出来ない!

だが、かといってニコと呼ばれた背後で保護している少女を、金角に渡せる筈も無かった……

(どうせ、私の事を忘れてたみゆきだもの……私を差し出すに決ってる!!)

背後に居たニコは、ハッピーの背を悲しげに見つめた。苦悩の表情を浮かべるハッピー達だったが、

「ニコちゃんは……絶対渡さない!!」

「!？」

ハッピーの宣言にも似た言葉に、思わずニコはハツとし、少し顔を動かしハッピーの顔を見た。それは、苦渋に満ちた悲しげな顔だった・・・

「ほう・・・なら、仲間を見殺しにするって言うんだな？」

「違う！サニーも、ピースも、必ず助けてみせるよ!!」

ハッピーの言葉を表すように、マーチ、ビューティ、エコーが、金角に身構えたその時、四人の視線の先に、ピンクの流星が急降下してくるのが見え、思わず顔が綻んだ。

「あなたの言う事何か・・・聞かないんだからああ!!」

ドリームは、シューティングスターで背後から金角に突っ込んだ。金角はその威力の前に吹き飛び、思わず瓢箪を手放してしまった。

「しまった!？」

慌てて瓢箪を追おうとする金角だったが、その先には腕組みしたピーチ、右手を腰に当てたベリー、引き攣りながらも金角を睨むパインが鋭い視線を向け、パッションは卑怯な手を使った金角を、蔑みの目で見つめる。

空中に吹き飛んだ瓢箪を、加勢に来たメロディが、ハイジャンプをしてキャッチした。更にルージュ達、ブロッサム達、リズム達、ムーンライトと続々加勢に現われ、ハッピー達の目が輝いた。

「みんなああ!!」

瓢箪をキャツチしたメロデイが、ハッピー達に親指立ててウインクし、金角を見つめるや、

「サニーを返して貰うよ!!」

「アア!?それは俺のぞ!返せええ!!」

金角にアカンベエをするメロデイを見て、金角が悔しそうに地団駄踏む。金角は、繩のような物を取り出すと、

「行け!幌金繩(こうきんじょう)!!」

まるで繩は生きているかのように宙を飛び、メロデイの身体を縛り付けた。たまらずメロデイは持つて居た瓢箪を落としてしまい、メロデイは亀甲縛りのように縛られ、地上で悶える。

「キヤアアア!な、何て縛り方するのよおおお!!」

顔を真っ赤にしたメロデイは、繩に食い込まれ悲鳴を上げ、

「イヤアアン:リズムムウ!ビートオ!ミュージズウ!みんなあ!お願い、何とかしてええ!!」

羞恥心に耐えながら、悩ましげな声を出すメロデイに哀願され、咄嗟にリズム、ピート、ミュージズ、ピーチ、ベリー、パイン、パッション、マリンが力任せに繩を引っ張り

取ろうとするも、縄は簡単に解けることは無かった。

「アアアン！お願あい、早く取つてええ!!」

「そう言われても・・・無理矢理取ろうとすると、縄が益々メロデイに食い込んじやうもの・・・」

どうしたものかと困惑の表情を浮かべるリズム、マリンはポンと手を叩くと、

「そうだ!・・・少しリラックスした方が良いんじゃないの?」

「ちよつと、マリリン！ドサクサに紛れてえ・・・アハハハ！止めてええ!!」

マリんにくすぐられ、益々身悶えるメロデイ、マリンの作戦が功を制したか、ただの偶然か、リズム達は何とか幌金縄をメロデイから取り除くと、金角は再び何か呪文を唱え、幌金縄を呼び戻し、瓢箪を取り返した。

「あれは・・・西遊記のお話しに出てきた幌金縄なの?」

「アアン・・・後もうちよつとでサニーを救えそうだったのにいい」

「惜しかったですねえ・・・」

「後一步だったんですが・・・」

ミントが現実に見た幌金縄に驚き、ドリームはあと一息だったのにと悔しがり、レモネードとブロッサムも同意した。ハッピーは申し訳無さそうにしながら、加勢に来てくれた仲間達に、



「あのう・・・サニーだけじゃなく、ピースも吸い込まれてしまったんですが・・・」  
「エツ!？」

状況が飲み込めず、何故ピースまで吸い込まれたのか理解出来ず、驚きの声を発する一同、次々と加勢に現われたプリキュア達も、この状況に途方に暮れた。

「とにかく、サニーとピースを助ける事が先決ね!」

サニーだけでは無く、ピースまでも瓢箪の中に捕らわれている現実を、どうにかする事が先決だと訴えるムーンライトに、アクア、ミントも同意し、

「ええ・・・金角、もう勝負は付いたわ!おとなしくサニーとピースを解放して!!」

「私達、何もあなた達を倒す事が目的じゃないもの・・・話し合えば分かり合える筈よ!」  
アクアとミントは金角に対し、金角達を倒す事が目的ではないから、サニーとピースを解放してくれるなら、喜んで話し合いに応じると訴えるも、

「そんな話信じられるか!現にお前らは、ニコを匿ってるじゃねえか!!」

「エツ!?!だってあなた達が、ニコちゃんを虐めてるから・・・」

困惑気味にハッピーは、それは牛魔王、金角、銀角がニコを虐めていたからだと言うも、金角は顔を真っ赤にして怒り出し、

「ふざけるなあ!俺達の絵本の世界を滅茶苦茶にしたのは・・・そのニコ何だぞ!!」

「エツ!?!」

ニコを指差した金角の叫びに、プリキュア達は呆然としながらニコを見つめた・・・

### 3、絵本の世界へ!!

ニコにとつて、不味い状況になって来た事に、黒い影はイライラしたように、

「全く、邪魔な奴らカゲエ・・・」

黒い影は、分身を何かの本に取り憑かせると、本から巨大な船が現われ、空に浮かび上がった・・・

「お前らの言葉何か信じられねえよ・・・牛の兄貴を元に戻さないなら、此奴らを酒のエキスに変えてやらあ!!」

「金角、止めてえええ!!」

瓢箪を思い切り揺すり始めた金角を見て、ハッピーを始めとしたプリキュア達が悲鳴を上げたその時、

「コラー!金角!!」

「何だ!?・・・ゲエエエ!!」

背後から名前を呼ばれ、思わず返事をした金角の身体が、凄まじい吸引力で吸い込まれて行った。金角の持つて居た瓢箪はその場に落ち、慌ててハッピー達は、金角が吸い

込まれた先に視線を向けると、そこには巨大な瓢箪を二人で持った、ブラックとブルームがニンマリしていた。二人は、吸い込まれた金角を見て蓋をし、

「兄者あああ!!」

自分が持つて居た瓢箪に吸い込まれた金角を見て、ブライトとウィンディに身体を押しさえられていた銀角が悲鳴を上げた。

「ブラック!ブルーム!みんなああ!!」

「みんな、お待たせええ!どうやら間に合ったようだね!!」

一同は、現われたブラック達7人と、捕らえられた銀角を見てホツと安堵の表情を浮かべた。銀角は心から観念したように、その場にヘナヘナへたり込むと、

「参った・・・お願いだあ!兄者と牛の兄貴を元に戻してくれええ!!」

「うん、良いよ!その代り、サニーもちゃんと助ける事!!」

「ハイ・・・」

あつさりブラック達は銀角の言葉を受け入れ、サニーも助ける事を条件に、両者の和解は成立した。

「ヨツシヤア!流石プリキュアのみんなやあ!!」

「あのう・・・私も居るんですけどおお!!」

瓢箪の中で、無事に出れそうだと知り、ガッツポーズを浮かべるサニー、自分の存在

が忘れられていそうなピースは、涙目になりながら不安そうにポツリと呟いた・・・

瓢箪から救出されたサニーとピース、共に服も溶けて無さそうので、安堵の表情を浮かべ、二人から放たれる酒の匂いに、一同は苦笑を浮かべるのだった・・・

今度は、金角が捕らわれた瓢箪の蓋を開け、金角を解放する。銀角が金角の無事な姿に安堵の表情を浮かべるも、金角はムツとした表情で銀角を睨み付け、

「銀角、何故こんな奴らと手打ちしやがった！俺は認めねえぞ!!」

「でも兄者・・・」

金角は、プリキュアと和解した事を認めないと吠え、銀角、プリキュア達を困惑させる中、

「銀角の言う通りだ！金角、俺達は負けた・・・此処は勝者の言う通りにするしかねえ!!」

「牛の兄貴!!」

ルージユのファイヤーストライク、サニーのサニーファイヤーで氷付けから解放された牛魔王、流石に兄貴分だけあり、自分達の負けをあつさり認め、プリキュアからの和解提案を受け入れた。

「さあ、煮るなり焼くなり好きにしろ!!」

その場に胡座をかいて座り込んだ牛魔王に習い、金角と銀角もその場で胡座をかい

た。その潔い行ないに苦笑を浮かべた一同、代表するようにブラック、ホワイト、ムーンライトが三人に近づき話し掛けた。

「別に私達、あんた達をどうしようとは思ってないわよ」

「それより、私達に詳しい事を教えて!!」

「本当にあの子が・・・絵本の世界を滅茶苦茶にしたの?」

ブラック、ホワイト、ムーンライトは、そう話し掛けると、少し離れた所で、ハッピー達に話し掛けられているニコを困惑気味に見つめた。牛魔王達もニコを見つめると、

「ああ、あいつも元々絵本の世界の住人だったようだが、あいつは黒い影を使い、絵本の世界をこちゃ混ぜにしやがった!」

「(こちゃ混ぜ?)」

牛魔王の告白に、思わずハモって驚くブラック、ホワイト、ムーンライトの三人、牛魔王、金角、銀角は頷きながら言葉が続け、

「本来、同じ絵本の世界であっても、俺達の話と、他の話の作品が交わる事は無い!」

「だがニコは、黒い影を操り、物語を滅茶滅茶にした為、物語の主人公達が現われず、俺達も途方に暮れていたって訳だ!!」

「それだけでは無く、絵本の世界の住人を、お前達の世界にまで来させ、暴れさせ始めやがった。幸い、俺達は影に操られる前に異変に気付き、何とか難を逃れたが、滅茶滅茶

になった絵本の世界を元に戻させようと、ニコを追いかけている内に、俺達もこちらの世界に来てしまい・・・」

「今に至るって寸法よ!!」

牛魔王達の話の聞いていた一同の顔色が険しさを増す、だとすれば、絵本の世界だけではなく、この世界絵本博覧会をも滅茶苦茶にしたのは、あそこに居るニコだと言うのだろうか?戸惑う一同の耳に、突然ニコの叫び声が響き渡った・・・

「キヤアアアア!!」

投げ縄に捕らえられ、ニコの身体が上空に浮かび上がる。上空を見上げた一同の視線に、巨大な海賊船が姿を現わした。海賊船から次々投げ縄が投げられ、プリキュア達は巧みに躲し続けたものの、

「離すクルウウ!!」

投げ縄は、キャンディ、ハミイ、フェアリートーン達、シフォン、シロップの妖精達をも捕らえ、上空に引き上げた。

「「「「キャンディ!!」」」」

「「「「ハミイ!フェアリートーン達まで!!」」」」

「「「「シフォン!!」」」」

「「「「シロップウウ」」」」

ハッピー達、メロディ達、ピーチ達、そして、ドリーム達が浚われた妖精達の名を叫ぶ、直ぐに奪還に向かおうとする一同に対し、海賊船は爆弾の雨霰を降らし、一同は避ける事に必死で、海賊船に近付く事が出来なかつた。

「アアハハハハ！大量、大量、野郎共！さあ、戻るぞ!!」

海賊船からは、プリキュア達を嘲笑うように笑い声が響き渡り、徐々に縮小して絵本の中へと消えようとしていた。その直ぐ後を、ピーちゃんが猛スピードで追跡し、海賊船と共に消え失せた。

「そんなぁ……キャンデイ、ニコちゃん、みんなぁ……」

「ピーちゃん……みんなをお願い!!」

ハッピーが、ビートが、不安混じりにポツリと呟き、呆然と消え去つた海賊船を見つめ、プリキュア達は、浚われた妖精達の身を案じた……

「エライコツチャでえ……」

パニクリ、あたふたするタルトを抱き上げたピーチは、

「行こう、みんな！浚われたみんなを助けに!!」

「でも、私達には絵本の世界に行く手段が……」

意を決したピーチは、一同に呼び掛け、浚われた妖精達を救いに向かおうと告げるも、困惑気味のミントは、絵本の世界に向かう手段が、自分達には無い事を悲しげな表情で

告げた。だがマリンは、パッションの背を押し、一同の前に連れ出すと、

「チツチツチ！あたしらにはパッションが居るじゃない!!」

ベリーは、閃いたマリンの頭を撫でながらパッションを見ると、

「そうだわ！パッションお願い!!」

「分かったわ・・・絵本の世界へ!!」

パッションは頷き、アカルンを呼び出すと、みんなを絵本の世界へ連れて行くように頼むも、アカルンの輝きが起こる事は無かった・・・

「駄目だわ・・・この前のバッドエンド王国のように、何かの結界が張られていて、アカルンでも近づけないみたい」

今の自分達では、キャンディ達が浚われた絵本の世界に行く手段が無い事に、沈黙するプリキュア達・・・

腕組みした牛魔王、瓢箪を担ぎ尚した金角、銀角は、

「それは俺達に任せて貰おうか!」

「最も、俺達にも何処に飛ばされるかまでは分からねえが、お前達を絵本の世界に連れて行く事ぐらい朝飯前だ!!」

牛魔王と金角の言葉を聞き、パツと表情が輝くプリキュア達は、三人を見つめ、銀角は念を押すように、



「どうする!?俺達と絵本の世界に行くか?」

「当たり前!牛魔王!金角!銀角!お願い、私達を連れて行って!!」

一同を代表するようにブラックが三人に頼み、牛魔王達三人は頷き返した。

「じゃあ、その本の前に並びな!金角、銀角、先頭はお前達が務める・・・行くぜえ!!」  
牛魔王は、芭蕉扇をプリキュア達目掛け一振りすると、一同は芭蕉扇に煽られ、次々と絵本の中へと消えて行った。最後に牛魔王も絵本に飛び込むと、絵本は輝きを失った。

「全く、また邪魔者が来るカゲエ・・・」

影もまた不愉快そうに絵本の中へと飛び込むと、ハッピー達がニコ達の映像を見て居たテントが消え去り、空き地が変わった・・・

「キヤアアアア!!」

プリキュア達は悲鳴を上げ、グルグル回転しながら、まるで異空間のような不思議な世界を何度も潜り抜けていった。その都度、数人の仲間達とはぐれ、一同は散り散りに散って行った・・・

第六十七話：プリキュアVS絵本のキャラクター達!

完

## 第六十八話：少女達の冒険！（前編）

### 1、孫悟空とかぐや姫

昔、昔、ある所に仲間にはぐれたお坊様が居りました・・・

お坊様には、猿、河童の妖怪が付き従い、共にはぐれた仲間を求め、旅に出たのでした・・・

「つて、何でまた孫悟空の格好してるのよお!?!しかも、絵本博覧会の時よりリアルだし・・・」

なぎさは、右手に如意金箍棒、通称如意棒を持ち、頭には緊箍児（きんこじ）と呼ばれる輪つかを付けていた。赤い上着とオレンジ色のズボンを穿き、ズボンからはニョキイツと尻尾が生え、足には長靴のような物を履いていた。

「さすがに、本当に尻尾が生えてないでしょうねえ?」

少し顔を赤らめながら、なぎさはお尻を撫でてみると、尻尾はズボンに付いているだけだと分かり、ホッと安堵する。

「なぎさの格好はマシよ！私何か、悪趣味な髑髏の首飾りをしてるし・・・」

そうボヤいたゆりの衣装はと言えば、普段掛けて居る眼鏡はそのままながら、九つの髑髏のネックレスを首にさげ、右手に半月刃の杖、降妖宝杖を持ち、草色の上着とズボンを穿いていた。沙悟浄と言えば、日本人なら河童を連想するだろうが、本来、沙悟浄は中国では剃髪した僧侶である。さすがにゆりの髪はロングヘアーのままであつたが、ゆりは複雑そうな表情を浮かべていた。

「西遊記のお話しに來ちやつたね」

そう言うほのかは、西遊記の三蔵法師として有名な玄奘三蔵に扮し、徳の高いお坊様が着ているような、黄土色をした袈裟（けさ）を身に纏っていた。

西遊記と違つているのは、玉龍と呼ばれる白馬と、猪八戒の姿が見当たらない事だろう……

三人は、トボトボあても無く荒野を彷徨い、途中アラビア風の衣装の人々や、和服を着た人とすれ違い、ここが何処か聞いて見るも、歩いて居た人々も、自分達も何でこんな荒野を歩いて居るのか分からないと途方に暮れていた。

「私達……プリキュアの姿でやつて来たのに、メップルとミップル、他のみんなとはぐれるし、ゆりはココロポットを無くすし、散々な目にあつてるよねえ？」

プリキュアのままこの世界に來た筈が、プリキュアの仲間達、メップル、ミップル達ともはぐれ、気付いた時には三人共、西遊記の衣装を着て、絵本の世界に辿り着いてい

た．．．

「みんなは何処に飛ばされたんだろうね？」

「他の絵本の話に飛ばされたなら、捜すのは厄介かも知れないわねえ．．．」

「さっきの人達の話も聞いても、絵本の世界は混乱しているのが分かるわね」

「そうだねえ．．．アレエ!？」

ほのかの言葉に、ゆりは牛魔王達の言葉を想いだし、他の絵本の話に飛ばされたのなら、捜すのは大変かも知れないと告げた。ほのかも頷き、やはり絵本の世界は混乱していて、捜すにしても確かに厄介な事になりそうだと語った。なぎさもそうかも知れないと、少し憂鬱な気持ちになった時、視線の先に、小さな町らしき物を見付けるや喜色ばみ、

「ほのか、ゆり、町があるよ！行ってみよう!!誰か居るかも知れない!!」

「待つて、なぎさ！迂闊に近付くのは．．．なぎさは今孫悟空だし、魃斗雲に乗つて、空から偵察した方が良いんじゃないかしら？」

「エツ!!出来るのかなあ．．．魃斗雲!!」

ほのかに指示されたなぎさは、半信半疑で魃斗雲を呼んでみると、魃斗雲は待つてましたとばかり、なぎさの足下に急降下して止まると、なぎさは恐る恐る足をチョンチョン乗せ、意を決し魃斗雲に飛び乗った。フカフカなベッドの上に居るような心地に、な

ぎさは楽しそうにピョンピョン跳び、

「ほのか、ゆりも乗ってみなよ！折角だからさ、三人で行こう!!」

なぎさに誘われたほのかとゆりは、顔を見合わせると、こんな機会は二度と無いだろうし、乗ってみようかとなぎさの誘いを受け、二人も舳斗雲に乗ってみた。なぎさが先頭、ほのかが真ん中、ゆりが最後尾の順番で、ほのかはなぎさの肩に、ゆりはほのかの肩に手を乗せると、

「じゃあ、行くよ．．．行けえ！舳斗雲!!」

なぎさの指示の下、舳斗雲が大空に舞う!

さすがに、三人乗った舳斗雲は窮屈ではあったが、三人は、舳斗雲から見ると空からの眺めを堪能するのだった．．．

「何でこんな事になっちゃったんだろう？みんなとはぐれちゃったし、ポルンやルルンも何処に居るのか．．．」

物悲しげに空を見上げるのはひかり、高貴な十二単に身を包んだひかりは、どうすれば良いのか分からず途方に暮れた。

「ひかり、そう落ち込むなメポ」

「そうミポー！きつとなぎさとほのかが迎えに来てくれるミポー」

ひかりと共にこの場所に飛ばされたのはメツプルとミツプル、二人はなぎさとほのかを迎えに来てくれるから元気を出せとひかりを励ました。

「ありがとう・・・メツプル！ミツプル！あなた達が側に居てくれるだけでも心強いわ!!」  
そうは二人に告げたものの、本当になぎさ達と合流出来るだろうか、ひかりの心に不安が過ぎる。

（なぎささん達と無事に合流出来れば良いんだけど・・・）

「かぐや姫・・・今日もお前に求婚を申し込んできたお方が居るぞ！驚くなかれ・・・なんと帝が、お前をお后にしたいと仰られてなあ！だが、もう一人お后候補が居るらしく・・・」

メツプル、ミツプルは慌ててコミュニケーション姿になり、ひかりは袖の中にコミュニケーション姿の二人を隠した。老翁はそんなひかりに気付かず、帝から求婚されている事をひかりに告げた。

「かぐや姫や、支度をしておくれ！これから帝様にお目通りし、ぜひお前をお后にして頂くようにお頼み申しに参るぞ!!」

「そんなあ・・・困ります!」

ひかりが飛ばされたのは、かぐや姫のお話・・・

ひかりを見た者は、その美しさに触れ、わが妻にと求婚してくる公家の男が後を絶たなかった。ひかりは、何度も私はかぐや姫などではありませんと訴えるも、老翁に取つて、ひかりはかぐや姫そのものであつた・・・

(確か、かぐや姫のお話は・・・)

ひかりは、ひかるに読んで聞かせた、かぐや姫のお話を必死に思い起こし、この状況を覆すヒントが無いか考えるのだった・・・

## 2、性悪狸と舞の不安

山道を全速力で駆け下りる咲、何かに追われているのか、物凄い形相で駆け下りる。その背後から、鎌を持った老翁が追いかけていた。

「待てえ!この性悪狸がああ!!」

「だからあ、私は狸じゃないってばあああ!!」

「化かそうたつてそうはいかねえぞ!婆さまの仇じゃああ!!」

「人違いだよおお!!」

咲が送られたのは、かちかち山のお話・・・

咲の格好はと言えば・・・

確かに狸の着ぐるみのような格好をしていて、逃げるのに必死な咲には、自分がどん

な絵本の世界に来ているのか分かる筈も無かった・・・

変顔浮かべながら全速力で逃げ続ける咲だったが、草むらの中から泣き声が聞こえ、そつと覗いてみると、

「ひかりい、何処ポポオオ！なきさあ！ほのかあ！メツプルウ！ミツプルウ！」

「みんな居ないルル？」

「嫌ポポ！嫌ポポ！」

駄々を捏ねながら泣きわめくポルン、不安で一緒に泣くルルンを見付けた咲は、

「ポルン！ルルン！どうしたの!?ひかりとはぐれちゃったの？」

「咲ポポ！」

「咲ルル？」

二人は見知った顔を見付けるや、嬉しそうに咲に抱きつき、咲も優しく微笑み返した。

「アア！この性悪狸、子供さ居やがったかあ!?!しかも二匹も？決めた！婆さまの仇で、今日は狸鍋じゃ!!」

「エエエ!?!だから私は狸じゃないし、まだ嫁入り前の、純情咲ちゃんだつてばああ!!」

再び追いついて来た老翁を見るや、ポルンとルルンを抱きながら、再び全速力で山道を駆け下りる咲、ポルンとルルンは、咲が鬼ごっこをしているように見えてハシヤギ、

「鬼ごっこポポ！楽しいポポ!!」



「違ああう！鬼ごっこじゃないの！！私達、あのお爺さんに捕まったら・・・食べられちゃうかもよ？」

「ポポ!!？」

「ルル!!？」

徐々に涙目になったポルンとルルンは、食べられるのは嫌だと再び泣きじやくり、喉を困惑させた。

さすがに年のせいか、老翁はハアハアその場にへたり込み、近くに居たうさぎを見付けると、

「う、うさぎさん！お願いじゃ、この先にいる性悪狸を・・・婆さまの仇を、わしの代わりにとつてくださらんか？」

「ミルウ!!？」

老翁が、うさぎと思つて声を掛けたのはミルクだった。飛ばされた拍子にミルキーパレットを何処かに飛ばされ、この近辺を探索していたミルクは、老翁の話を聞くと、

「それはお困りミル・・・分かったミル！ミルクがその性悪狸を懲らしめてやるミル!!」「オオ！それはありがたい!!うさぎさん、ではお願い致しますじゃ!!」

老翁はミルクに何度も頭を下げると、元来た道に戻つて行つた。それを見届けたミルクは、くるみの姿に変化すると、

「性悪狸・・・きつとここは、かちかち山のお話つて所ね！」

本来、このような物語に構っている余裕はくるみにも無いのだが、必死に縋り付く老翁の頼みは無碍（むげ）にする訳にも行かず、性悪狸を懲らしめようと、その正体が咲だとは知らず後を追った・・・

「困ったわあ、咲やチョッピ達ともはぐれちゃったし・・・」

一人トボトボ山道を歩いて居るのは舞、普段着こなさない和服に足袋という出で立ちに、少し困惑しながら歩いて居た舞は、草むらに足を踏み入れた途端、

「キヤアアア！」

足に痛みが走った舞は、その場に倒れ込んだ。足下を見ると、それは動物を捕る為の罠のようで、足からは血が滲み始めていた。

「どうしよう？こんな山奥じゃ・・・」

少し涙目になった舞だが、意を決し、精一杯の大声を張り上げた。

「すいませえん！誰かいらっしゃいませんか？」

そう叫んだものの、こんな山奥では、返事を返してくれる人も居ないのでと不安になつた舞であつたが、

「ハイですう!!」

「何処ですつ?」

何処かで聞いた事がある声が聞こえてきて、舞の表情はパツと明るくなると、

「その声は、シプレとコフレね? 私よ! 美翔舞よ!! シプレ、コフレ、手を貸して欲しいの!!」

舞の音が近くで聞こえ、顔を見合わせたシプレとコフレが辺りを捜すと、罨に掛かって身動き出来ずに居る舞を見付け、変顔を浮かべながら驚き、舞の側にやって来た。

「ど、どうしたですつ?」

「山道を歩いていたら、罨に足を挟まれてしまつて・・・シプレ、コフレ、この近くに居るのはあなた達だけなの? つぼみさんやえりかさんは一緒じゃないの?」

「つぼみ達とははぐれたですう!」

「僕達も捜していた所ですつ!」

シプレやコフレが居た事で、近くにつぼみやえりかも居るのではないかと思つた舞であつたが、その目論見は外れた。シプレとコフレは、罨から舞を助け出そうと懸命に罨を解除しようと試みるも、罨はびくともしなかつた。途方に暮れた三人の側で、

「おい、そこに誰か居るだけ?」

人の声が聞こえ、シプレとコフレは大慌てで何処かに隠れようとして、舞の胸元に潜り込み、

「エエエ!? ふ、二人共、何もそんな所に隠れなくてもおお?」

頬を染め、少しくすぐったそうにしながら恥ずかしそうにする舞、その胸元は、服から零れ落ちそうに巨大に実っていた……

「おやあ!? お前さん、そつたら所で……つて怪我してるじゃねえだか!」

翁は、舞の胸を見てその大きさに驚きながらも、目線を足に移し、罨を解除すると、素早く袖を破り、舞の足の傷に巻いてくれた。

「こつたら所じゃ、ろくな手当も出来ねえ……おらの家さ来い! 婆さまも居るで、もう少しまともな手当も出来るからのお……さあ、おらの肩に掴まるだあ!!」

「ご親切に……ありがとうございます!!」

舞は翁に深々とお辞儀をすると、舞の胸元からシプレとコフレの尻尾が飛び出そうになり、舞が慌てて胸元を隠した。翁は、大きすぎて胸が露わになりそうになったのかと誤解し、苦笑すると、

「いやあ、胸さ大きいと……色々大変何だなあ?」

「エツ?! いえ、これは……そのおお」

困惑しながら、舞は翁の肩を借り、翁の家へと向かった……

3、幸せの青い鳥!?

森の中を彷徨う満と薫……

二人は薄暗い森の中を、あてもなく歩き続けていた……

「薫、私達、咲達とはぐれたようね……」

「そうね、満……フープやムーブともはぐれてしまったようだわ……」

薄いブルーの服を着ているのは満、薄いピンクの服を着ているのは薫、どちらかと言えば、満は普段赤っぽい服を、薫が青い服を着ているのだが、この絵本の世界に飛ばされた二人は、逆の格好をしていた。

「どうする、薫……このままあてもなく歩き続ける？」

「浚われたみんなの事もあるし、このまま此処で時間を取られる訳には行かないけど……」

困惑した満と薫の下に、ピヨピヨ白い鳥が、上空を飛んでいる姿が二人に見えた。

「見て、薫！ひよつとして……ピーちゃん!」

「その可能性もあるわね……追いかけてみましょう!!」

満と薫は、ピーちゃんらしき鳥を追いかけて駆け出した。白い鳥を追いかけていく内には、二人の視線の先に、小さな家が見えてきた。白い鳥は家の屋根に止まると消え失せた。二人は思わず立ち止まると顔を見合わせ、

「こんな山奥に家がある何て……変ね？」

「ええ、あんな鳥を使つて、私達を誘き寄せる何て……見るからに妖しいわね」

二人は、家から立ち上る美味しそうな匂いに釣られる事も無く、そのまま踵を返し立ち去ろうとすると、

「誰だい、私の家を食べて……無い!?」

家のドアが開き、中から恰幅良い老婆が姿を現わし、自分の家を食べたのは誰だと告げようとするも、満と薫は既に視界から消え去ろうとしていた。

「アツ！ちよつとお、待つてえええ!!」

困惑した老婆は、ヒイヒイ言いながら二人を追いかけると、

「ま、待つておくれええ……あんた達、お菓子の家だよ！美味しそうだなあとか思わないのかい?」

「別に……興味無いわ!」

「じゃあ、私達急いでいるから!」

再び踵を返して立ち去ろうとする満と薫、老婆は二人にしがみつぎ、

「お願い、家を食べた良いから……家に寄つて行つておくれよおお！物語がいきなり終わっちゃうじゃないかああ!!」

「物語!?!」

哀願する老婆を不思議そうに見つめた満と薫、二人が飛ばされたのは、ヘンゼルとグ

レーテルのお菓子のお話・・・だが

お菓子の家から、満と薫が聞いた事がある声が聞こえてきた。

「ちよつとおお！早く私達を此処から出してええ!!」

「せつかく青い鳥を追つて来たら・・・」

声を聞いた満と薫は、顔を見合わせハツとし、

「薫、今の声・・・のぞみと響だわ!」

「ええ・・・二人共、あの家に居た何て」

のぞみと響の声を聞き、ハツとした満と薫、最初に捕らえた二人組が、満と薫の知り合いだと知つた老婆は、

「ヒイヒイヒイ!あの二人を捕らえていたのは正解だつたようだねえ・・・さあ、あの二人を助けたかつたから、あんた達もお菓子の家にさつさと来るんだよ!!」

さつきの気弱な老婆から一転、ずる賢そうな表情を浮かべた老婆は、のぞみと響を助けたかつたら、お菓子の家に来いと満と薫に命じた。のぞみと響をこのままにしておく訳にも行かず、満と薫は、老婆に言われるままお菓子の家へとやつて来た。

先程は近づかなかつたので分からなかつたが、お菓子の家は、正面以外ほとんど無く、のぞみと響の音が、はつきり聞こえた訳が分かつた気がする満と薫だつた。老婆はそんな満と薫を見るとフンと鼻で笑い、

「全く、こんなに食い荒らされるとは思っても見なかったよ・・・お前さん達の仲間の胃袋は底なしかい？あたしが捕まえないきや、全部食い尽くされてただろうさ」

「ちよつとお！失礼な事言わないでええ!!」

「お菓子の家が小さ過ぎただけでしょう!!」

老婆の声が聞こえたのか、大きな鳥籠の中に捕らわれた、のぞみと響が頬を膨らませて抗議をするも、少し呆れ顔の満と薫は、

「のぞみ、響、あなた達・・・もう少し考えて行動して欲しいわね?」

「お陰で、とんだ足止めを受けてしまったわ・・・」

「その声・・・満ちゃん!薫ちゃん!」

「二人共、助けに来てくれたの?」

満と薫が姿を現わし、のぞみと響の表情が輝いた。のぞみと響は、本来青い鳥の世界に飛ばされたのだが、混ざり合った世界は、ヘンゼルとグレーテル、青い鳥のお話をごちや混ぜにした世界だった・・・

#### 4、悪魔の住む家

薄暗い不気味な森を、身を寄せ合うように歩くのは、りん、エレン、なお・・・三人は、一人スタスタ先を歩くこまちの姿を、恨めしそうに見つめていた・・・



四人が気付くと、欧州の古い庶民の服を着て森の中に迷い込んでいた……  
あてもなく彷徨う森の中で、何かの文字が書かれた紙を二枚見付けると、

「何だろうこれ!?!」

「剥がれ掛かつて……アアア!?!」

りんとエレンがちよつと触れただけなのに、紙は呆気なく剥がれた。なおも興味深げに覗いて見るも、何が書かれてあるかまでは分からなかった。こまちに紙を手渡すと、

「これ……お札じゃないかしら!?!」

「「お、お札!?!」」

「ええ、何かを封印する為に貼り付けてあったとか?」

少し声のトーンを落として、三人にそう語ったこまちの迫力に、りん、エレン、なおはビビリ、

「ちよ、ちよつとこまちさん、脅かさないで!!」

「早くこんな森抜けようよおお!」

「何だか霧が出てきたよおお」

みんなと合流する為、歩き出した四人であったが、森は霧も出始め、どんどん薄暗さを増し、りん、エレン、なおの恐怖心は一層増していった……

こまち一人は、そんな事にお構い無さそうに、再び森の中へと歩を進めていく。周り

を見渡したりん、エレン、なおは、

「ちよつとおお！こまちさん!!どンドン薄気味悪い森の中に……入ってる気がするんですけどおお？」

「こまちいい……もう戻ろう！」

「こまちさああん！帰りましょうよ!!」

りん、エレン、なおは、涙目になりながらそうこまちに訴えるも、

「もう少し進んでみましょう……あらあ!?あそこに大きなお屋敷があるわ！行ってみましょう!!」

まるで突然現われたかのように、霧が晴れた先に、大きな洋館が姿を現わした。見るからにオバケ屋敷のような出で立ちに、りん、エレン、なおは、思わず生唾をゴクリと飲み込み、

「こ、こ、こまちさん……何かあたし、入っちゃ行けない気がするんですけどおお？」

「りんの言う通り！私の野生の勘が……そう告げてるわ！」

「あたしも……入っちゃ行けない病が……」

りん、エレン、なお、三人は同じ表情で首をブルブル横に振り、洋館に行くのを頑なに拒んだ。こまちは小首を傾げ、困った表情を浮かべると、

「じゃあ、私が見てくるから、三人は此処で待ってて！」

そう言い残し、こまちはまるで恐れを知らぬように、洋館の庭へと入っていた。大きな門の前で途方に暮れていたりん、エレン、なお、森の中からけたたましい動物の声が聞こえ、この場で待っている三人は、心細さが募ってくる。

「ね、ねえ．．．あたし達も行くのか？」

「そ、そうね、私達で残るより．．．こまちが居てくれた方が心強いわね！」

「そうと決れば．．．」

「「待ってええええ!!」」

三人は、視界から消えそうなこまちを、慌てて追いかけて洋館の庭へと入っていった。

こまちは洋館のドアをノックすると、見るからに不気味そうな銀の鼻をした男が姿を現わし、思わずりん、エレン、なおはギョツとした表情を浮かべた。

「誰だ？」

「私達、道に迷ってしまって．．．よろしければ、この森を抜け出す道を教えて頂ければと．．．」

「ほう、それはお困りだねえ．．．でも、この霧が晴れないと、この森を抜け出す事は難しいかも知れない．．．良かったら、霧が晴れるまで休んで行くと良い！」

銀の鼻をした男は、気さくにこまち、りん、エレン、なおを受け入れ、洋館の中を案内して回った。どの部屋も豪華で、思わず四人から感嘆の聲が飛び出す程だった。

とある部屋の前に来ると、銀の鼻をした男は声を潜めるように、

「今まで案内したどの部屋を使つても良いよ！でも……この部屋だけは決して開けてはいけないよ！良いねえ？」

カツと目を見開き、まるで四人を威嚇するように、銀の鼻をした男は告げた。その表情に、りん、エレン、なおは、身を寄せ合い震え上がった。こまちは笑みを浮かべ、

「ご親切にありがとうございます！では、少しの間お世話になります!!」

「ああ、そうすると良い！そうそう、君達にプレゼントをしよう……」

そう言うのと、銀の鼻をした男は、こまちの髪にジャスマインの花を、りんの髪にバラを、エレンの髪にカーネーションを、なおの髪にパンジーを付けた。困惑しながらも花のプレゼントを受け取った四人、銀の鼻の男は笑みを浮かべると、

「では、私は麓の道までの霧が晴れたか見てきて上げよう！」

そう言い残し、館を出ていた……

とある部屋に集結した四人、りん、エレン、なおは、見た目は怖そうだけど、親切な人で良かったとホッと安堵する中、こまちだけは神妙な顔持ちで何かを思案するのだった。

「こまちさん、あたし達折角だから館の中を見てくださいね！」

「こんな大きな館、見る機会なんてそうそう無いものね」

「まあ、かれんさんの別荘見た事あるあたしは、そんなに驚かないけど」

緊張の糸が解れ、リラックスした一同が部屋から出て行った・・・

(何となく、これと似たような話を何処かで読んだような気が・・・)

こまちは、子供の頃読んだ本の記憶を、懸命に呼び覚ましていた・・・

どれくらい経ったのか、こまちの表情が凍り付き、何かを思い出すと、

「思い出した！銀の鼻をした男・・・それは悪魔！私達、銀の鼻のお話に迷い込んだんだわ!!」

こまちが思い出したのは、銀の鼻の話・・・

洗濯屋を営む母と、その母を助け家業を手伝う三人の娘達だったが、暮らしはちっとも豊かにはならなかった・・・

一番上の娘は、いつその事、悪魔の家でも良いから、奉公に行こうかしらと、冗談とも本気とも取れる言葉を発した。母親は烈火の如く怒り、娘を窘めるも、それから数日後、娘の言葉を聞いていたかのように、銀の鼻をした紳士が訪ねてくる。

紳士は、娘さんを私の家に奉公に出しませんか？と母親に持ちかけ、母親は、銀の鼻をしている男を見て、悪魔かも知れないと疑念を抱くも、一番上の娘は一笑に付し、銀の鼻の男の家に奉公に出るのだった。

それが、悪魔の住処と気付かず・・・

立ち上がったこまちは、りん、エレン、なおにその事を告げようと部屋を飛び出そうとしたその時……

洋館の室内を見て回ったりん、エレン、なお、三人は、銀の鼻をした男が、決して中を見てはいけなと言っていた部屋の前に来ると、エレンは中の様子が気になるように、りんとなおに同意を求めるように、

「見るなつて言われると……ちよつと気にならない？」

「そりやあね……気にはなるわね」

「エレンさん、りんさん、勝手に見たら……」

「まあ、まあ、直ぐ閉めれば良いし！」

「そうそう」

そう言ったエレンとりんが、二人掛かりで重いドアを開くと、部屋の中は真つ赤な炎が吹き出し、中では焼けただけれた人が大勢苦しんで居た……

まるで地獄の業火の中に居るように……

中からは、熱い、苦しい、痛いと炎に苦しむ人々の声が聞こえ、三人はギョつとし、慌てて扉を閉めた。

「な、何!? 今の?」

「おぞましい炎が、部屋中に充満してたわ!」

「人が苦しむ声が聞こえたよ!」

引き攣つた顔で互いの顔を見つめたりん、エレン、なお、明らかにこの部屋の中はおかしいと感づいたその時、

「お前達、その部屋の前で何を!」

銀の鼻の男は、三人の髪に付けた花が焦げているのに気づくと、

「見たなあああ!!」

「「キヤアアアアアア!!」」

見る見る内に、銀の鼻をした男が恐ろしい形相となり、りん、エレン、なおの三人は、口から魂が抜け出るかのように絶叫した・・・

第六十八話：少女達の冒険！（前編）

完

## 第六十九話：少女達の冒険！（中編）

1、シンデレラと金の斧と銀の斧

昔、昔、ある国に、とても美しく、とても心優しい娘が居ったそうなの……

でも悲しい事に、娘の母親は早くに亡くなってしまったんやなあ……

そこで、娘のお父さんは再婚し、娘には継母と、二人の姉が出来たそうや……

でも、新しい母親と、二人の姉は、大層意地悪だったそうや……

そう言うタルトの視線の先には、困惑している四人の少女達の姿があった。かれん、

美希、奏、あゆみ、四人が飛ばされたのはシンデレラの世界……

見窄らしい服を着ているのはあゆみ、かれん、美希、奏は綺麗な服を着ては居たもの

の、何処か表情は冴えなかった。

「あたし達の格好からして……ここはシンデレラのお話つて事ですよねえ？」

「此処がそう何ですか？」

「エエ、私は前にも来た事があるから間違いないわ！」

困惑気味の美希、あゆみに聞かれたかれんは、嘗てシビレッタに送られたシンデレラ

の世界と似たような光景に、間違いなくシンデレラの世界だと告げた。



「つて事は、あゆみちゃんがシンデレラで……」

自分達の格好とあゆみの格好のギャップを見た奏は、複雑な表情を浮かべた。タルトは、少し意地悪そうな視線で四人を見つめると、

「せや！エコーはんがシンデレラで、アクアはんが意地悪な継母、ベリーはんとリズムはんが、意地悪な姉……三人共、ピッタリやでええ!!」

タルトはかれん、美希、奏を指さすと、後ろを向き、口を押さえ、クククと笑つていると、あゆみの側に居たかれん、美希、奏の空気が変わり、あゆみは思わずビビリ、

「タ、タルト……」

タルトにそれ以上言わない方がと苦言を言うも、タルトは気付かず、

「タルト……今のはどういう意味かしら!？」

「聞き捨てならない言葉が聞こえたんだけど？」

腕組みしたかれんと奏が、口元を轆き付かせながらタルトに話し掛け、タルトはしまったと恐る恐る背後を振り返ると、タルトは、凄い視線で睨む美希と目と目が合い腰を抜かし、

「タルトオオ！この間の七色ヶ丘での件といい、キツチリ話し合いましたようか？」

「ベリーはん、そう興奮せずに……アクアはんも、リズムはんも……エコーはん！助けてええな!!」

「エエエ!?!」

突然助けを求められ、あゆみは困惑しながらかれん、美希、奏を見るも、自分には止められないと首を振り、

「・・・無理!・・・」

「そんなあ、殺生やでええええ!!」

美希、かれん、奏に踊り寄られたタルトは、手を前に出し、

「まつ、待ったあああ!話し合おう!!プリキュアと妖精達は大切な関係・・・言わば家族同然や!!せやろう?」

「その大切な関係に、罅（ひび）を入れようとするのは・・・何処の誰かしらねえ?」

「タルトオオ!それがあなたの本心なのかしら?」

「タルトオオ、怒らないから言ってみなさい!!」

美希、かれん、奏の手が、怯えるタルトに伸びる・・・

嘗て、ラブとせつなが楽しみに取って置いたアイスを全て平らげ、ラブとせつなにとつちめられた時のように・・・

「ワイら、家族・・・アワワワ、オワアアアア」

目から涙を流しながら嫌々をするタルト、六本の手がタルトに迫るのを見たあゆみは、

「あ、あのう．．．私達、浚われたみんなや、はぐれたみんなと早く合流した方が良いんじゃない?．．．」

恐る恐る三人に告げたあゆみだったが、あゆみの言葉を聞いた三人の手は、ピタリと止まると、あゆみを振り返り、

「それもそうね!」

「はやく響達と合流して、浚われたハミイ達を助けなきゃ」

(エコーはん．．．ナイスフオローやでええ!!)

かれんと奏もあゆみの言葉に同意し、ホツと安堵したタルトであつたが、

「そうね．．．でも、それはそれ、これはこれ．．．」

美希の言葉を表すように、再びタルトに視線を向けた三人の目は据わつていた．．．

「か、堪忍やああ!!」

タルトの悲鳴がその場に木霊した．．．

森の中を彷徨うのは、うらら、つぼみ、えりか、いつきの四人、気がついた時、四人は木こりのような格好で湖の側に居た．．．

「シプレ、コフレ、ポプリともはぐれてしまったようですねえ?」

「うん、三人共無事だと良いんだけど……」

不安そうに呟くつぼみといつき、うららも不安そうに、

「のぞみさん達、他のみんなの姿も見えないし、何処かでキュアモを落としてしまったのか、見当たらないし、困りました……」

「まあ、しゃあないっしょ！それより……何であたし達こんな格好してるのよ！」

えりかは木こりの格好が気に入らないようで、不満そうに頬を膨らませる。

「私達、絵本の世界に来たという事は……何かのお話なのでしょうか？」

「その可能性はあるね！」

「はい！私も以前、何度か絵本の世界で戦った事がありますが、その時も絵本の世界の住人になってました」

木こりが出るお話に迷いこんだど知り、どんな話だろうか想像する。

「取り敢えず、木こりのようですし、試しに斧で木を切ってみましょうか？」

「そうだね、何か反応があるかも知れないね」

うららの提案にいつきも同意し、取り敢えず斧を持つてるし、みんなで木を切ってみようど話し合い、二人一組でペアを組み、斧で木を切り出した。うららといつき、つぼみといつきで組み、木を切っていると、

「思ったより、斧は随分重いんですね……アツ！」

つぼみの手から斧がすつぽ抜け、湖の中にポチャリと落ちてしまった。一同は湖面を覗き込み、

「ひよつとして……このお話は、金の斧と銀の斧じゃ?」

「言われてみれば……そんな気がしません!」

つぼみの言葉に、うららもそんな気がすると同意する。二人の言葉を表すように、ブクブク水の中から泡が出ると、湖の中から美しい女神が姿を現わし、

「あなたが落としたのは……この斧ですか?」

「いいえ、私が落としたのは、そんなに立派な斧ではありません」

金の斧を持った女神の問いに、つぼみはブルブル首を振って違うと答えた。次に女神は銀の斧を取りだし、

「では、この斧ですか?」

「いいえ、そんなに綺麗な斧でもありません」

つぼみは再び首をブルブル振り違うと答えると、女神は三つ目につぼみが使っていた使い古しの斧を取りだし、

「では、この斧ですか?」

「はい! わざわざ拾って頂き、ありがとうございます!」

つぼみの言葉を聞いた女神は、微笑みながら何度も頷くと、

「あなたは正直者ですねえ．．．さあ、この金の斧と銀の斧も持つて行きなさい！」

女神はそう言い残し、湖の中へと消えて行った．．．

「どうしましょう．．．本当に金の斧と銀の斧を頂いてしまう何て」

困惑するつぼみに、えりかは両手を後ろ首に回しながら、

「良いじゃん！くれるって言うんだから貰つておけば．．．まあ、どうせなら、もつと役立つものが欲しかったよねえ」

「えりか、欲張りは駄目だよ！」

「そうです！女神様に酷い目にされますよ」

いつきとうららにダメ出しされ、えりかは口を尖らせ、不満そうにしながら湖の側に行くこと、

「あたしだったら、ボロボロの服でも入れて、金の服と銀の服を貰いたいよねえ」

「もう、えりかだったら．．．」

つぼみはマイペースなえりかを見て苦笑を浮かべていると、切り株に躓（つまず）いたえりかが、そのまま体勢を崩し、頭からドボンと湖の中へ落っこちた。

「えりかああ！」

「えりかちやああん！」

湖に落ちたえりかを心配し、つぼみ、いつき、うららは、顔面蒼白になりながら湖の

側に近付いた・・・

## 2、浦島太郎と一寸法師

せつなは、薄汚れた男物の服を着て海岸を歩いてきた・・・

右手には釣り竿、腰に魚籠（びく）をぶら下げながら歩いて居るせつなの頭には、ぬいぐるみの振りをしたポプリの姿があつた。当初はいつきが居らず泣きわめいたもの、そこは見知つた顔同士、すぐにせつなに懐くポプリだつた。

「他のみんなの姿が見当たらないわね？」

「みんな・・・何処行つたでしゅか？」

「アカルンが居れば、直ぐにみんなに合流出来ると思うけど、絵本の世界に來た拍子に、リンクルンが何処かに飛ばされてしまったようだし・・・」

困惑するせつなは、アカルンが居れば、直ぐにみんなを見付けられるのにと、悔しげに俯いた。ポプリは何かに気付くと、

「せちゆなあ！あそこに何か居るでしゅー！」

「エッ!？」

ポプリに言われ、前方をジツと凝視したせつなは、三人の子供達が無かを棒で突つている事に気付き、

「子供達が居るわ！何かを虐めているみたい……」

少し険しい表情を浮かべたせつなが、子供達に近付いて見ると、そこには三人の子供達が、海岸の上で海亀を棒で突つつきはしゃいで居た。

「やめなさい！無闇に弱い者を虐めるものじゃないわ！！放して上げて！！」

そうは言つても、自分も嘗てラビリンスのイースとして、弱者をいたぶった事を思い出したかのように、悲しげな視線を向けた。

「何だよ！この亀はおいら達が先に見付けたんだぞおお！！」

「そうだそうだ！」

（可愛げの無い子供達ね……）

一瞬せつなの目付きが、ラビリンス時代のイースのように鋭さを増すと、子供達は後退り、

「じゃ、じゃあ、代わりに頭の上の変なの、おいら達に頂戴！」

「そうしたら、亀を逃がしてやるよ！！」

ポプリに気付いた子供達が、せつなに対し、代わりにポプリをくれと言い始め、ポプリはガタガタ震え出すと、せつなはポプリを安心させるように頭を撫で、

「駄目よ！この子は私の大事な友達だもの……そうね、代わりにこの魚を全部あげるわ！！これはどう？」



せつなは魚籠に入っていた魚を子供達に見せると、まだ活きの良い魚達が、魚籠の中でピチピチ騒いでいた。子供達は顔を見合わせ合うと、

「分かった！それで良いよ!!」

「じゃあね、お兄さん!」

(お姉さん何だけど・・・)

子供達は、魚籠事せつなから譲り受け、再びはしやぎながら去っていた。せつなはそれを見送ると亀の前でしやがみ込み、

「さあ、もう大丈夫よ！お行きなさい!!」

せつなは優しく亀に微笑み、もう大丈夫だから行きなさいと伝えると、亀はペコペコ頭を下げ、

「危ないところを助けて頂き、ありがとうございました！実はわたくし、こう見えて・・・亀何です!!」

「・・・見れば分かるわ!」

「でしゅ!」

亀のボケに、目を点にしたせつなとポプリが、亀を指差し、見れば分かるかと告げると、亀は手を振りながら、

「いえいえ、只の亀じゃない亀何です！そうだ、少しの間此処で待っていては貰えません

か？」

「エッ!? 出来れば私達急いで・・・」

「お手間はお掛け致しません! 30分程時間を頂ければ、直ぐに戻って参りますので・・・」

「30分で良いのね? それぐらいなら良いわ!」

亀は嬉しそうに、何度もせつなとポプリに頭を下げ、海へと消えて行った・・・

せつなは、ポプリを抱き抱え、二人で東の間の親睦を深めて行った・・・

それから約30分後、約束通り亀が海から戻ってくると、

「お待たせしました! それでは・・・エエと、そう言えばお名前をまだ・・・」

「東せつなよ!」

「ポプリでしゅ!」

「では、せつな様、ポプリ様、お二人を竜宮城までお連れ致します!」

「竜宮城?!」

せつなも浦島太郎の話は聞いた事があつたが、まさか自分が浦島太郎になるとは、思いもよらなかつた。困惑するせつなに、亀は早く背中の中のアザラシに乗って下さいと急かす。

ポプリは、

「せちゆなあ! ポプリは竜宮城に行つてみたいでしゅ!!」

「エツ!?でも、私達は他のみんなを捜して……」

「行きたいでしゅ!行きたいでしゅ!行きたいでしゅ!」

頬を大きく膨らませたポプリが、駄々を捏ね始め、せつなが困惑していると、

「せつなさん、ポプリさんの言う通りですよ!今は、異国から人魚姫が遊びにいらつしやつてますし、こんな機会は滅多にありませんよ?」

(浦島太郎に、人魚何か出てきたかしら?)

小首を傾げたせつなだったが、少しの間ならと、竜宮城に行く事を同意し、ポプリと共に亀の背に跨がり、竜宮城へと出発するのだった……

小さな川を、ドンブラコ、ドンブラコとお椀が流れていた……

そのお椀の動きに合わせるかのように、一匹の燕が飛んでいた……

「ねえ、そんなお椀に乗ってないで、こっちに移ったら?」

「せやかて、ウチは一寸法師みたいやさかい、お椀に乗って行かな、話が進まないんやないかと思うて……」

お椀を懸命に漕ぐのは、一寸法師となったあかね、燕の背に乗っているのは、親指姫となったアコ……

アコは、カエルに浚われるも、魚達の協力もあり何とか逃げ出す事に成功する。あてもなく彷徨っていたアコは、ねずみに助けられたものの、ねずみと親交のあったモグラに求婚され困惑していた。そこでアコは瀕死の燕と出会い、ピーちゃんを思い出したアコは、必死に燕を介抱し、そのかいあって、燕は自ら飛べる程回復し、アコを自由の身にしてきてくれた。

一方のあかね、自分が一寸法師になり困惑していたが、元に戻るには、打ち出の小槌が必要だったと思ひ出し、都へ向かつて川下りをしている途中、燕に乗ったアコと出会ったのだった……

「本当に私達、その打ち出の小槌があれば、元の大きさに戻れるの？」

「いやあ……一寸法師の話じゃそうっただけで、確証はあらへん」

「まあ確かに……絵本の世界に来た事無いわよね……」

そんな会話をしていた二人の耳に、何か口論しているような声を聞き、顔を見合わせた二人は、領き合い、あかねは燕に飛び乗ると、燕は声のする方に飛んでいった……

「ここ、この鬼め……姫様はこれから大事な用があるのだ!!指一本触れさせんぞ!!」

駕籠に乗った姫の護衛をしていた侍達は、二匹の鬼に向かって行くも、呆気なく刀を折られ、這々の体で逃げ去っていった。

「あ奴ら、あれだけの大口を叩いて何と情けない……誰か、誰か、姫を守って下さる者

は居らぬか？」

老翁は必死に周りに声を掛けるも、鬼を恐れた人々は、恐れおののき近付こうとはしなかつた……

「ガハハハハ！では、姫を貰つて行くとするか!!」

一匹の鬼が、駕籠の中に居る姫に触れた瞬間、

「曲者（くせもの）!!」

凜とした一喝が駕籠の中から響き渡り、鬼の身体が宙を飛んだ……

「な、何だあ!?何が起こつた？」

突然身体が宙に浮き、鬼が呆気にと取られていると、

「例えプリキュアになれなくても……この青木れいか!非道な行ないは許しません!!」  
駕籠から降りてきたのは、十二単を着た美しいお姫様の格好をしたれいかだった。れいかは、母静子から習つた青木流合気道の構えを取り、二匹の鬼に身構えた。

「生意気な……」

「覚悟しろ!!」

ジリジリとれいかに近寄つて行く鬼達だったが、れいかは身構えたまま一步も引かず、鬼を凝視する。

「待て待て待てえ!待ちやああ!!」

突然急降下してきた燕が、二匹の鬼を牽制し、針のような刀を持ったあかねが燕から飛び降り、緑色の肌をした鬼の鼻に一太刀いれた。

「イ、イテエ!? な、何だ、この虫みたいな奴?」

「虫や無い! ウチは・・・日野あかね! 今は・・・一寸法師やあ!!」

「エツ!? あかねさん?」

小さな物体が、あかねだと名乗り、れいかが驚愕の表情を浮かべる。

「私も居るわよ! 燕さん、お願い!!」

燕に頼んだアコは、青い鬼の顔付近をグルグル飛び回り、鬼はグルグル目を回し地面に倒れ込んだ。

「その声・・・アコさん!? 二人共、そのお姿は一体!?」

「話せば長うなるさかい・・・その前に」

「鬼達を・・・」

「そうですね! 退治しませんと!! ヤアアア!!」

あかね、アコの言葉を受け入れたれいかは、気合いを込めた言葉を発し、二匹の鬼に身構えると、鬼達は慌てふためきながらこの場から逃げ去っていった・・・

「まさか、姫があの様に強いとは思わなんだ・・・ン!?」

老翁は、鬼達が落としていた小槌を見ると、

「鬼の落とし物とは珍しい．．．帝への土産と居たそう！さあ、姫や、駕籠にお戻り!!」  
れいかは、翁にバレないようにあかねとアコを袖に隠し駕籠に乗り込むと、二人は此処まで送ってくれた燕に何度も手を振り、燕も別れを惜しむように何度もグルグル回ると、南の空に飛び去って行った．．．

「でも驚きました！お二方が小さくなられていたとは．．．」

「ウチかて、最初は驚いたわ！でもアカン、打ち出の小槌を取られてもうた．．あれが無いと、ウチら元に戻らへんかも知れん」

「お願い、れいか！何とか打ち出の小槌を手に入れて!!」

れいかに哀願するあかねとアコ、れいかは真顔になると頷き、

「分かりました！帝の手に渡る前に、何とか渡して貰えるように頼んでみます!!」

そんな三人の思いを知らず、れいかを乗せた駕籠は、帝の住む御所へと向かって行った．．．

3、やよい、猪八戒になる!?

一方、上空から舐斗雲に乗って町の様子をグルグル調べていたなぎさ、ほのか、ゆり、どうやら町に変わった様子は見られず、舐斗雲から飛び降り、町に入った三人、なぎさは真つ先に美味しそうな匂いに釣られ、

「ほのか、ゆり、早速腹ごしらえでもしようよ？」

「エエ!? もう、なぎさったら・・・」

「なぎさ、私達この町に遊びに来た訳じゃないのよ？」

二人にダメ出しされたなぎさは頬を膨らまし、お昼も食べないで絵本の世界に来たし、他のみんなを捜すにしても、体力つけなきやと二人を説得する。

「でも、私達お金何か持つてないよ？」

「エツ!? 絵本の世界だから・・・タダじゃないの?」

タダで食べる気満々だったなぎさを見たゆりは、ハアと溜息を付くと、

「違うと思うわ!」

「アハハ! ま、まあ、試しに入るだけ入ってみようよ!!」

ギイイと扉を開け店内に入った三人、キョロキョロ中の様子を見てみると、客足はほとんど無かったのだが、ある人物を見て驚愕する。

「ね、ねえ・・・あの髪形、やよいに似てない?」

「た、確かに似てると思っうけど・・・」

「やよい、あんな体型じゃ無かったと思っうわよ?」

変顔を浮かべたなぎさとほのか、眼鏡を曇らせ動揺するゆりの視線の先には、確かにやよいに似た髪型の人物の後ろ姿があった。だが、三人が知っているやよいの体型には



似て居らず、くびれないドラム缶のような体つきをして、美味しそうにガツガツ食べ物を手手で掴んで食べ続けていた。意を決したなぎさが、背後から声を掛けてみると、

「もしかして・・・や、やよい!?」

「ブヒイ!?」

振り返った人物を見たなぎさ、ほのか、ゆりは、一瞬沈黙し、

「「エエエエエ!」」

振り返った人物を見て、思わず驚愕の声を上げた。振り返った人物は・・・黄色い髪のおカツパ頭にカチューシャを付け、髪形を見れば確かにやよいであったが、その容姿は・・・豚だった!

「や、やよい!!!?何があつたの?まさか、やよいが猪八戒になつて何て思わなかつたよお!!」

「ちよ、ちよつとなぎさ?」

「確かに髪形はやよいだけど・・・明らかに違うでしょう?」

ほのかとゆりは、同じような仕草で首を左右に振り、いくら何でも別人でしょうとなぎさを諭すも、なぎさは、やよいに違い無いと信じ込み、

「ウウン、私には分かる・・・だつてえ、ここは絵本の世界何だよ!私達だつてこんな姿だつたんだもん・・・やよいが猪八戒にされても、全然驚きません!!」

「それは・・・そうだけど」

「どう見ても、違ふとしか・・・」

困惑するほのかとゆり、やよいらしき人物は、そんな事にお構いなく食事を続ける。奥から揉み手をしながら、口髭を蓄えた店の主人らしき小男が姿を現わすと、

「この豚・・・いえ、このお方は、あなた様方のお知り合いで？見るからにあなた方もお強そうだ・・・どうでしょう!?最近この辺りに現われた、動物使いを退治して頂けないでしょうか？」

「「動物使い!?!」」

店の主人に動物使いを退治して欲しいと頼まれた三人、店の主人は更に言葉を続け、「はい!最近になって、虎と変な生き物を従えた動物使いがこの先の山に現われ、恐れをなして最近旅人が減ってしまい、客足も減って困っていた所何です・・・もし退治して頂けるなら、こちらの方同様、手間賃代わりに食事の方を、無償で提供させて頂きますが?」

「タダ!?やるやる!ねえ、ほのか!ゆり!」

「「エエエ!?!」」

お腹いっぱい食べられると聞き、なぎさは安請け合いをして動物使いを退治すると告げ、ほのかとゆりを困惑させた・・・

その頃、本物のやよいは・・・

「イヤアアア！こつちに来ないでえええ！」

「ガウウウウウ」

持つて居た鉞（まさかり）を早々に放り投げ、やよいは熊から逃げ続けていた・・・  
やよいが居たのは金太郎の世界・・・

真つ赤な腹掛けには、金という大きな文字が書かれていた。本来の金太郎は、怪力の持ち主で、動物達と遊び回り、熊すら手懐けている程だったが、やよいは熊と相撲なんて取れないと、山道を逃げ続ける。

「エエエン！何で私が金太郎なおお!？」

「ガアアア！」

涙目になりながら、熊から逃げ続けていたやよいだったが、徐々に熊に崖まで追い込まれて居た・・・

「熊さん・・・私何か食べても美味しくないよ?」

「グアアア」

「ヒイイイイ！」

熊が上体を持ち上げると、2メートル近い巨体でやよいを威嚇する。やよいは涙目になりながら、その場にへたり込んだその時、

「待つてええ!!」

茂みの中から飛び出した人物、背中には日本一の幟（のぼり）が掲げられ、額には熊の絵が描かれた鉢巻きをし、煌びやかな衣装を身に着けた人物が、虎に跨がり現われた。

「熊さん、その人を食べないで！代わりにこのきびだんごを上げるから・・・ねっ?」

「その声・・・祈里さん!?きびだんごって、祈里さんが・・・桃太郎?」

「うん!どうやらそうみたい・・・」

苦笑を浮かべた祈里は、どうやら自分が桃太郎になったようだと言いに告げた。祈里は、腰に付けたきびだんごを熊に投げると、熊は美味しそうにゴクリと飲み込んだ。

「じゃあ熊さんもこれで、虎さん同様私のお友達ね!」

「ガウウウ!!」

熊はその場で座り込むと、おとなしくなっていた・・・

「す、凄い!熊を手懐ける何て・・・」

「流石は祈里ラピ」

「祈里は、動物とお友達になるのが得意チョピ」

「ううん、虎さんと仲良くなれたのは、フラッピちゃんとチョッピちゃんが手伝ってくれ

たからだよ」

祈里はニツコリ微笑み、フラツピとチョツピを見つめると、二人も微笑み返した。フラツピとチョツピも祈里と共に居た事に驚いたやよいは、

「フラツピとチョツピも一緒つて事は、咲さんと舞さんも一緒何ですか？」

「ううん、二人も咲さんと舞さんとはぐれちゃった見たいなの」

「フラツピ達も、咲達を捜してたラピ」

「その途中で祈里と出会ったチョピ」

やよいは納得し、改めて虎と熊を見つめると、

「でも、凄いですよねえ・・・桃太郎の本来のお供は、犬、猿、雉！それが、虎、熊何だもん、本家より強そう!!」

やよいは創作意欲が湧いたのか、目をキラキラ輝かせて居た。雉の替わりは何だろうかと、ワクワクして祈里に聞いてみると、祈里は苦笑しながらやよいの背後を指差し、

「さつきからやよいさんの後ろで・・・」

「エッ!?!」

振り返つたやよいの顔を、何かがペロリと大きな舌で舐めた。そこに居たのは巨大な龍、やよいは引き攣りながらその場で失神した・・・

## 4、繋がり始めた物語

ひかりは、帝への謁見の為、渋々老翁と共に帝の御殿にやって来た。駕籠の中に居た為、ひかりにはどれほどの規模の建物なのか分からなかったが、案内された紫宸殿の立派さを見ても、相当な規模の建物なのは理解した。室内に入ると、既に先客が居たように、老翁は軽く会釈し、案内された場所で、帝のお出ましを待っていた。

（何とかしないと・・・）

戸惑うひかりは、視線を感じ顔を上げると、先に付いて居た姫様を見たひかりは、思わずアツと声を出しそうになって、慌てて口を押さえた。

（あれは・・・れいかさん！れいかさんもこのお話の世界に飛ばされてたのね・・・）

れいかも見知った顔を見てホツと安堵したのか、着物の裾からひかりに手を振っていた。

（何とかれいかさんと話が出来れば良いんだけど・・・）

考え込んでいたひかりの袖を、何かが引つ張り、ひかりがそちらを見て見ると、そこには小さなあかねがニンマリしていて、思わずひかりは目が点になった。慌ててひかりはあかねを掌に乗せると、あかねは、れいかからの言伝をひかりに伝えるのだった・・・

れいかは、このまま帝がこの場に來たら、二人の内どちらかを花嫁に言う事になるから、双方の翁の事を思えば、帝が現われる前に、何とかこの場を逃げるしか無いと、し

かしそれには、あかねとアコを元に戻す事が出来る、打ち出の小槌を手に入れる事が最優先だと・・・

(確かに、この場に帝と呼ばれる人が現われたら・・・逃げるに逃げられなくなるかも知れない!あかねさんやアコちゃんもこのままには出来ないし・・・)

ひかりは、れいかを見て頷くと、何とかこの場を乗り切る為、メップルとミップルに何やら頼み込むのだった・・・

助けた亀の案内で、竜宮城に到達したせつなとポプリ、海底の中に本当にこんな御殿があるのかと驚愕していると、

「では、私はそろそろ戻りますので、竜宮城での一時、お楽しみにして下さい!」

亀はそう言い残し、竜宮城を後にした。話は亀から伝わっていたようで、せつなとポプリは、蛸といかの門番に、直ぐに中へと案内された。鯛やヒラメなどの魚の群れが、せつなとポプリを物珍しげに見つめていた。

「不思議よねえ・・・海の中なのに、地上に居るのと全く変わらないわ!」

「ウワア!綺麗でしゅねえ!!」

宮殿内を物珍しげに見て居たせつなとポプリの前に、何処かの王朝の貴婦人のよう

に、煌びやかな衣装を着た美しき女性が、大勢の腰元を連れ、せつなとポプリを出迎えるにやつて来た。

「話は亀から聞いております・・・私共の亀を助けて頂き、誠にありがとうございます！大したお持てなしは出来ませんが、ごゆるりとお過ごし下さいませ!! さあ、こちらに・・・」

せつなとポプリは、案内してくれる乙姫の後に追いて歩き出す。瑪瑙（めのう）の天井に、珊瑚の柱、廊下には瑠璃がしきつめてあった。せつなはその上を歩いて行くと、何処からか美味しそうな良い匂いが漂って来ていた。

「本日は、遙々異国の人魚姫も遊びに来ていらっしやいますが、お気になさらずおくつろぎ下さい!! さあ、こちらのお部屋です!!」

乙姫に促され、腰元達がギイイイと扉を開けると、宴会の真つ最中だったようで、鯛やヒラメが舞い踊り、鰹や河豚、海老達が料理を運んでいた。

「随分賑やかねえ・・・エツ!!」

せつなは、鯛やヒラメ達と楽しそうに踊る人魚を見て、目が点になった・・・

「ラブ! 何やつてるのよお!?」

「ムープとフープも居るでしゅ!」

呆れ顔のせつなが、上下白い貝殻ビキニ姿で、人魚姫の格好をしているのがラブだと



気付き声を掛け、ポプリも、ラブと一緒に楽しそうに踊っているムーブとフープを見て変顔になる。名前を呼ばれたラブ、ムーブ、フープも、せつなとポプリに気付き、近付いて来ると、

「せつなああ！ポプリも！二人も竜宮城に来てたんだねえ……私達も、気付いたらここに来ててさあ……」

「何よ、その格好？」

「イヤア！恥ずかしいんだけど、気付いたらこんな格好しててさあ……って、せつなだつて、何その格好？」

「私も……気付いたらこんな格好してただけよ！」

互いに自分の衣装を見て照れるも、直ぐに真顔になると、ラブとせつなは、それぞれが知り得る情報を話し出し、ポプリは、ムーブとフープとの再会を喜び合った。

「やっぱり本物の竜宮城だったんだあ……せつなと会えて良かった！此処からどう抜け出すか、ムーブやフープとも話してただけけど、思い浮かばなくて……」

「その割には……楽しそうに踊っていたみたいだけど？」

「まあ、何と言うか、成り行きで……アハハハハ！」

ラブは右手を頭に乗せ、誤魔化し笑いを浮かべるも、直ぐに表情を引き締め、  
「せつなとも会ったし……そろそろ他のみんなと合流しなきゃね」

「ええ、こんな事している間にも、シフォン達がどうしているか心配だし、美希やブツキー、他のプリキュアのみんなどもどうなったか、気になるわね？」

「一番の気掛かりは・・・此処が竜宮城だって事！戻ったは良いけど、数十年後でしたとかなってたら・・・」

少し心配そうにするラブに、せつなは少し思案すると、

「それは大丈夫なような気がする！現に、浦島太郎の話に、人魚姫が加わってる時点で、浦島太郎の物語は成立しない!!」

「と、決れば・・・すいませえん！」

ラブは、乙姫を呼ぶと、急用が出来たので、そろそろ失礼したい事を伝えると、乙姫はまだ良いじゃないですかと五人を引き留めた。ラブとせつなは、ムーブ、フープ、ポプリに一芝居頼み、

「嫌でしゅ、嫌でしゅ、嫌でしゅ！ポプリはお家帰るでしゅ!!」

「ムーブも帰りたいムプ！」

「フープも帰るププ！」

竜宮城中に響き渡るような大声で泣きわめくポプリ、帰りたいと大声で騒ぐムーブとフープに、さしもの乙姫も根負けし、

「分かりました・・・ですが、このまま手ぶらで帰らせる訳には・・・そうだわ！」

乙姫は手をパンパンと叩くと、腰元に命じ、ラブ、せつな、ムーブ、フープ、ポプリに玉手箱を手渡し、

「これはささやかなお土産です！では、お気を付けて!!」

「はい、ありがとうございます！」

「乙姫様も、竜宮城の皆様もお元気で!!」

「さようならああ!!」

「またみんなで来るムブ」

「それまでバイバイプブ」

「バイバイでしゅー!」

こうして、ラブとせつな、ムーブ、フープ、ポプリは、竜宮城を後にするのだった：

メルヘンランド・・・

バッドエンド王国との戦いを一先ず終え、行方不明だったウルルン、オニニン、マジョリンも戻って来たメルヘンランドは、住民達も徐々にではあるが、元の生活を取り戻し始めて居た。

「プリキュア達が、ピーエーロに大ダメージを与えた今の内に、一刻も早くロイヤルクイー

ン様を復活させる手段を見付けねば・・・」

メルヘンランドに戻ってからのポップは、メルヘンランドの女王、ロイヤルクイーンを復活させる手段を求め、王宮図書館で調べ物に勤しむ日々を送っていた・・・

「ポップ！大変ウル!!」

そんなポップの元に、顔色を変えたウルルン、オニニン、マジヨリンの三人が現われた。三人の手には何かの絵本が握られており、ポップは小首を傾げながら、

「三人共、顔色変えてどうしたでござる!?!」

「これを見るオニ！」

「絵本の内容が・・・替わってるマジヨ」

「何でござると!?!」

慌てて三人が持つて居る絵本、孫悟空、シンデレラ、浦島太郎の中身を確認するポップは、目が点になると、

「ここ、これは一体!?!この中に居るのは・・・プリキュアの皆の衆ではござらんか？一体どうなっているでござる??!」

困惑するポップ、ウルルン、オニニン、マジヨリンの四人、ポップは神妙な面持ちになると、

「これは何とかせぬと・・・世界中の絵本が滅茶滅茶になるかも知れないでござる！ウル

ルン、オニニン、マジヨリン、拙者に力を貸して欲しいでござる!!」

三人は頷くと、ポップは再び内容が替わった絵本を見て、何かを決意した・・・

みゆきは、牛魔王、金角、銀角と共に、浚われたキャンディやニコ達、はぐれた仲間達を求め、とある国にやって来ていた・・・

みゆきは、一目見てその国が自分の大好きな作品の舞台だと気付いた。

子供だけの国、それは、みゆきの大好きな絵本、ピーターパンの世界・・・

だがみゆきは、目の前のネバーランドを見て呆然としていた・・・

「何だ!?この町は誰も居ねえのか?」

「ここは、ピーターパンのお話の世界、ネバーランド!・・・の筈何だけど?」

牛魔王に聞かれたみゆきが答えると、突然、みゆき達の周りを小さな妖精が飛び回り、

「ピーター!やつと帰って来たのね!!」

妖精の名前は、ティンカー・ベル・・・

蝶のような透明な羽を背中から生やし、服装はピーターパンのように緑を主体にした

可愛い妖精・・・

「ピーター、此処はあなたの国なのに、あなたが突然いなくなつて、子供達がどんなに不

安がって居たか・・・」

「エエエ!? 私は星空みゆき! ピーターパンじゃ無いよお!!」

嘗て、修学旅行であかね、やよい、なお、れいかと共に好きな人の話をした時、みゆきが告げた名前が、ピーターパンだった。そんなピーターパンが自分の筈は無い・・・

そうは言ったものの、みゆきの格好は、服とズボンの色が緑色で、緑色の帽子を被り、帽子には、赤と白のツートンカラーの羽が付いて居て、確かにその出で立ちはピーターパンだった・・・

「ピーター、あなた突然居なくなつたかと思えば、妙な格好の者達を連れて来たわねえ・・・」

ティンカー・ベルは、牛魔王、金角、銀角を訝しげに見つめた。みゆきは苦笑を浮かべながらも、

「それより、ネバーランドに子供達の姿が見えないけど?」

「ええ、ピーターが居ない間に・・・またフック船長が襲つてきたの!! 私はピーターを探しに行ったから無事だったんだけど、子供達は・・・」

ティンカー・ベルは、悲しそうにポツリと呟いた。みゆきは、牛魔王、金角、銀角を真剣な眼差しで見つめると、

「みんな、少し寄り道しても良いかなあ?」

「海賊か・・・面白ええ!!」

「俺達も一緒に行つてやる!」

「今度こそ、この銀角様の實力をちゃんと見せてやる!」

牛魔王、金角、銀角は、みゆきが子供達を救出に向かおうとしている事に気付き、暴れられると知るや、みゆきに加勢すると息巻いた。スマイルパクトを無くし、プリキュアになれない今の自分に取つて、牛魔王達三人の存在は頼もしかった。さつきまで戦い合つた仲なのが信じられないくらいに・・・

「ねえ、ティンカー・ベル・・・今、フック船長は何処に居るの?」

「それが妙なの・・・今まで、フック船長の船が空を飛んだ事なんて無かつたのに、海賊船は空から襲撃してきたわ!おまけに・・・何処かの国からも浚つてきたらしく、プリキュア、助けてええとか声が聞こえたわ」

ティンカー・ベルの報告を聞いたみゆきは思わず驚き、

「エツ!」

「おい!それじゃ、あの時の海賊船が・・・」

牛魔王も、その海賊船こそ、さつき絵本博覧会に現われた海賊船だと感づき、みゆきの顔を見た。とある所で、キャンディ達救出の手掛かりを得たみゆき達、ティンカー・ベルは更に言葉を続け、

「最近……薄気味悪い城が姿を現わしたんだけど、フック船長の船は、そこに停泊している筈よ！ピーター、気をつけて!!」

「よし、そうと決れば……」

牛魔王は、術を唱えるや、舳斗雲のような黒雲を呼び、黒雲に飛び乗った。金角、銀角も術を唱え、雲を呼び寄せ、雲の上に飛び乗った。みゆきも、ティンカー・ベルの粉を身体に塗りつけると、大空に舞った。

「牛魔王、金角、銀角、行こう！みんなの所に!!」

「「オオ!!」」

浚われた仲間を救う為、滅茶苦茶になった絵本の世界を元に戻す為、四人がフック船長の下へと飛び去って行った……

不気味な城の前で、沢山の獲物を得たフック船長はご機嫌だった……

フック船長……

黄色のラインの付いた赤いコートに、薄いピンクの服、首元にスカーフ、袖にフリルのついた白いブラウス、紫っぽいズボンと羽根帽子、白の長い靴下、黒靴を着用する海賊達の船長……



嘗て、ピーターパンとの戦いの最中に海に落ち、ワニに右手を食べられてしまった。それ以降、右手にはフックを付けるも、ワニが最大の弱点となった。ワニを見ただけでおそれおののき、時計の音を聞くだけで取り乱してしまふ。残酷な性格で、手下達からも恐れられているが、身だしなみには敏感で綺麗好きという一面も持つて居た・・・

そんなフック船長の肩には、何者かに操られて居るかのように、黒い翼が生えていた・・・

(あいつは、完全に操りきれなかったカゲエエ・・・でも、このアイテムさへ奪つておけば、あいつらはニコの邪魔は出来ないカゲエ！この魔王の邪魔はさせないカゲエ!!)

マストの上から、額から二本の角のような物を生やし、丸い蝙蝠のような物体が、自らを魔王と称し、口元に笑みを浮かべながら、フック船長達が手に入れた戦利品の数々を見つめていた。その中には、のぞみ達のキュアモ、くるみのミルクイーパレット、ラブ達のリンクルン、つぼみ達のココロパフュームとゆりのココロポット、響達のキュアモジューレ、みゆき達のスマイルパクト、あゆみのスイंकパクトが転がっていた・・・

魔王の结界は、自らの邪魔をしそうな存在、プリキュア達を排除し、本来の持ち主達から変身アイテムを遠ざけた・・・

メップル達、フラツピ達が、なぎさ達や咲達と離れ離れになったのもその為だった・・・

戦利品の側には、ネバーランドから連れ渡された子供達が、そして、キャンディ、ハ

ミイ、シフォン、シロップ、フェアリートーン達が縛られていた。

（さあ、ニコの下に戻るカゲエ！）

魔王はバサバサ羽ばたくと、自らが作り上げた不気味な城へと消えて行った・・・

だが、魔王は気付かなかった・・・

物陰に隠れ、ジツと状況を見つめるピーちゃん存在を・・・

第六十九話：少女達の冒険！（中編）

完

## 第七十話：少女達の冒険！（後編）

1、なぎさ悟空大暴れ！

山に潜む動物使いを退治する事を条件に、タダでお腹一杯御馳走になったなぎさは、満足気にお腹を摩りながら店から出てくる一方、ほのかとゆりは微妙な表情を浮かべていた……

「なぎさ、あんな安請け合いしちやって良かったの？」

「後で困った事になっても知らないわよ？」

まだ自分達は、この絵本の世界について詳しい事は分かつて居ない。仲間達も捜さなければならぬ状況で、簡単に店の主の頼みを聞いたなぎさに対し、ほのかとゆりは、少し思慮に欠けるのではないかと、なぎさを注意する。注意されたなぎさは、少し不満そうに、

「エエ……だって、お店の人も困ってたじゃない!? これも人助けだって……ねっ、やよいー!」

「ブヒイ!」

なぎさ達と共に店から出てきた豚……猪八戒!

なぎさは、猪八戒をやよいだと信じ込み、共に動物使い退治に連れ出していた。ほのかとゆりは、背後に居る猪八戒をチラリと見つめると、

「なぎさ……この人、絶対やよいさんじゃ無いと思うー！」

「ええ、さつきから私達を、妙な視線で見つめてるし……」

ほのかとゆりは、背後から鼻息荒くクンクン匂いを嗅ぎ、自分達を舐めるような視線で見つめながら付いて来る、後ろの猪八戒に困惑していた。

「エエ!? だって、こんな髪形、そうは居ないでしょう?」

髪形だけを見れば、確かにやよいそっくりではあるが、大抵の人は、やよいと言われなくても、呆然とするであろう……

そうは言ったものの、なぎさも確かに二人の言うように、妙な視線を感じる気はするのだった……

「じゃあ、私は舐斗雲で上空から様子を見てくるけど……ほのかとゆりも一緒に行く?」

ほのかとゆりは、チラリと猪八戒を見ると、このまま猪八戒と残るよりは、なぎさと一緒に行った方が安心な気もすると二人で相談し合い、

「うん、私とゆりもなぎさと一緒に行くわ!!」

「あなたは此処で待っていて!」

猪八戒に此処で待っているように言い残し、舐斗雲を呼んだなぎさは、ほのかとゆり

を乗せ、動物使いが現われるという山へと偵察に向かった……

「兄貴達、俺をやよいか言う奴と勘違いしてたなあ？でも、兄貴や悟浄、お師匠様からは、何か女の匂いもしてたし……ひよつとして、偽物か!？」

猪八戒もまた、なぎさ達を孫悟空一行と勘違いしていたが、なぎさ達から発せられる女の匂いを敏感に感じ取るや、

「偽物を懲らしめる為なら……多少の行ないも兄貴達は許してくれるだろう！ムフッフ!!」

猪八戒は、スケベそうにニヤニヤすると、舂斗雲らしき雲を呼び寄せ、なぎさ達の後を追った……

動物使いが現われるという山に到着したなぎさ達、空から舂斗雲でクルクル辺りの様子伺っていると、

「ウウウオオ!!」

突然巨大な龍がうねりを上げて上昇してくるや、嬉しそうに舂斗雲の周りをグルグル回っていた。最初は、この龍も動物使いの仲間なのかと驚愕したなぎさ、ほのか、ゆりであったが、龍に悪意が無いと知るや困惑し、

「ひよつとして……この龍は三蔵法師を乗せていた白馬、玉龍何じゃ!？」

恐る恐るほのかか龍に手を差し出すと、龍はおとなしくほのかの側に顔を近づけ擦

り寄った。

「間違いなさそうね！」

「なぎさ、地上に降りて！」

ほのかに頼まれ、なぎさが舐斗雲を地上に降ろすと、そこには日本一の幟を背負った祈里が、なぎさに気付いき手を振っていた。

「なぎささん！ほのかさん！ゆりさん！良かった、三人に出会えて……」

「あれ!?祈里じゃない?……フラッピとチョッピも居る」

「祈里さんのその格好……ひよつとして、桃太郎なの？」

なぎさとほのかは、祈里の格好を見て驚き、祈里も改めて自分の姿を見つめると苦笑し、

「はい、みんなとはぐれた後……何故かこんな格好になってました」

「祈里も、私達と同じような目に遭って居たのね……」

苦笑混じりにゆりがポツリと呟いた。なぎさはある事に気付いき、変顔を浮かべながら祈里を見つめると、

「って事は……動物使いつて、祈里の事だったの？」

なぎさは、退治すると大見得切つて店を出たのに、どうしようと頭を抱え、トホホ顔のほのかに肩を叩かれる。

「祈里も私達と合流したし、この山に何時までも居る訳じゃ無いから、なぎさは約束を守った事になるんじゃないかしら？」

「そ、そうだよね？」

ゆりのフォローに、なぎさはホツと安堵の表情を浮かべ、何の事か分からない祈里は小首を傾げ、苦笑しながらほのかに祈里に状況を説明するのだった。

ようやく出会えた仲間との再会・・・

再会を喜び合い談笑する一同、その時、龍が首を上げると一鳴きし、

「この龍、何を!? :アツ、やよいも来た!へえ、やよいも筋斗雲に乗れたんだねえ :」  
上空を見上げたなぎさが、猪八戒が雲に乗った姿で現われたのを見ていると、猪八戒は見る見る下降して、なぎさ達の前に飛び降りた。

「アツ、祈里!私達、そここの麓の町でやよいと会ってさあ・・・可哀想に、やよいつたら猪八戒の姿にされて・・・」

そう説明するなぎさの背後で、無表情な顔をしたほのかとゆりが、右手を振り違うとジェスチャーで祈里に伝えた。祈里は不思議そうに首を傾げ、チラリとフラッピとチョッピを見ると、フラッピとチョッピも、なぎさは何を言ってるんだらうか?と小首を傾げた。

「あのう・・・なぎささん、その人がやよいさんって?」

「エッ!? ああ、豚の姿になつてから気付かないかなあ……ほら、この髪形やよいとそつくりでしよう?」

そう言いながら猪八戒に近付き、ポンポン肩を叩きなぎさに、猪八戒はなぎさを抱き寄せ、

「ほら、やよいも……つて、ちよつとやよい! 抱き付き過ぎ!!」

「なぎささん! やよいさんなら、あそこに……」

困惑気味に祈里が指さした大木の下で、やよいは、先程龍に顔を舐められたシヨックで気を失い、フラッピとチョッピに介抱されていた……

「エッ!? やよいが二人?」

変顔を浮かべたなぎさが、向こうで横になつているやよいと、隣に居るスケベそうな顔をした猪八戒の顔を交互に見比べ、ハアと溜息を付いたほのかとゆりは、

「だから、別人何だつてばあ!」

「それは、本物の猪八戒つて事よ!」

「エエエエエ!」

益々大慌てになつたなぎさが、猪八戒から飛び退くと、猪八戒は鼻息荒く、

「そつちの二人からも女の匂いがするなあ……お前達、この猪八戒様をよくも欺いてくれたなあ! 裸にひん剥いて、お仕置きしてやらなきやなあ!? ブヒイ!!」



猪八戒は、ドンドンと九本の歯のような熊手を思わせる馬鍬（まぐわ）風の農具、釘？（ていは）を地面に叩き付け、なぎさ達一行を威嚇するも、龍、虎、熊が一同を庇うように猪八戒を包囲し、龍は昔の中国風衣装を着た若者の姿に変化すると、

「八戒止せ！この方は、お師匠さまとはぐれ難儀していた俺に、食料を与えてくれた恩人……いくら八戒でも、恩人に仇なすなら……許さないぞ!!」

玉龍は、再び龍の姿になり吠えて猪八戒を威嚇すると、負けずと虎と熊も猪八戒を威嚇した。

「アアン!?この猪八戒様と一戦交えようつてえのか?ちようどいい、腹ごしらえに相手になつてやらあ!!」

猪八戒は、釘?を構え、玉龍、虎、熊を相手に戦おうとしていると、祈里は必死に間に入り、両者を説得に掛かったものの、

「アアン!?戦いを止めろだあ?良いぜ!止めてやつても……ただし、条件がある!この猪八戒様を欺いた罰に……お前ら全員、お師匠様達と合流するまで、俺様の夜伽になつて奉仕しろ!!」

「『夜伽!』」

猪八戒は、なぎさ、ほのか、ゆり、祈里、そして大木に横たわっているやよいを一人づつ指差し、夜伽になるなら戦いを止めてやると、スケベそうな表情でニヤニヤしてい

た。

「ほのか、ゆり、夜伽って？」

「猪八戒が寝る時、側で共に寝るって事だけど・・・」

「性的な意味でって事だね・・・」

「エッ!？」

夜伽の意味が分からないなぎさが、ほのかとゆりに問い掛けると、二人は顔を赤らめながら、夜伽の意味をなぎさに教えた。祈里も困惑気味に、

「そういう事は・・・良く無いと思うの!」

「ウルセエ!別にこっちは腕ずくで言う事聞かせても良いんだ・・・先ず、そこで寝てる女にでもするか?それとも、兄貴の偽物か?グフフフ」

やよいとなぎさを見て不気味に笑む猪八戒、玉龍は、共に天竺を目指す猪八戒が、このような暴走に走る事が我慢ならんとも言いたげに、今にも猪八戒に襲いかかりそうな勢いであったが、険しい表情をしたなぎさが割って入り、

「待って!ほのかやゆりが何度も違うって言ってたのに、私がやよいだと信じちゃったから、こんな騒動になっちゃったし・・・私が責任取るよ!!」

「ちよ、ちよとなぎさああ!!」

「なぎさのせいじゃないわ!!」

なぎさは、心の中で自分を責めていた・・・

自分のミスが、ほのか、ゆり、祈里ややよい、果ては絵本の世界の住人である玉龍、虎、熊にまで及ぼうとする事に・・・

ほのかとゆりは、顔色を変えて動揺し、なぎさを必死で庇い、祈里も困惑しながらなぎさのせいじゃない事を訴える。猪八戒は鼻息荒く興奮すると、

「覚悟は出来たようだなあ？安心しろ、可愛がつてやるからあ・・・ブヒヒヒヒ」

「可愛がる!?勘違いしないでえ！私は仮にも今は孫悟空・・・あんたが私に勝ったら、私をあんたの好きなようにすれば良いって事！でも、私が勝ったら・・・おとなしくして貰うからね!!」

なぎさは、猪八戒をキツと睨みながら指差し、決闘を申し込んだ・・・

猪八戒は一瞬躊躇したものの、心の中で本物の孫悟空となぎさを比べ、

(ブヒヒヒ・・・偽物が兄貴みたいに強い訳がねえ！たつぷり楽しませて貰うか・・・)  
猪八戒は涎をすすり上げ、釘?を構えると、

「ああ、良いぜ！猪八戒様の實力を見て恐れおののけ!!」

「交渉成立！ほのか、ゆり、祈里、手を出さないでね・・・ドリヤアアア!!」

如意棒をグルグル回し、猪八戒に向かっていったなぎさに、祈里の額から冷や汗が滴り落ちた。

「なぎささん・・・今プリキュアじゃないのに、大丈夫かなあ!？」

「なぎさは魘斗雲も呼べたし、今は孫悟空になっているなぎさを信じるしかないわね?」  
「大丈夫!なぎさは絶対負けられない・・・私達は、なぎさを信じて居れば良い!!」

プリキュアでは無い状態で猪八戒と戦うなぎさに、祈里は不安がり、ゆりとほのかはなぎさを信じ、なぎさと猪八戒の戦いを見守り続けた・・・

「ダアアアア!」

「ハ、ハのおお!!」

何度も何度も如意棒と釘?がぶつかり合い、辺りに凄まじい音を撒き散らす・・・

なぎさは、孫悟空が使える術の全てをさせる筈も無く、力任せに如意棒を打ち付け、猪八戒の攻撃に対しては、ひらりと身軽に身を躲し、再び攻撃に転じる。次第に猪八戒から焦りの表情が浮かんできた。

（な、何だ!?!・・・こいつ、戦い慣れてねえか?）

仮にも、孫悟空、沙悟浄達と共に、三蔵法師を守り、妖怪達と戦ってきた猪八戒だったが、その中でもなぎさは強い部類に入ると驚愕していた・・・

徐々になぎさに押され始めた猪八戒の額から、見る見る冷や汗が落ちてきた。

（ま、不味いぞおお・・・一旦引いて、出直しだ!あいつらの隙を突いて、一人づつ夜伽にしてやる!!）

猪八戒は距離を取り、雲を呼び寄せると慌てて飛び乗り、

「ま、負けた訳じゃねえからなあ．．．必ずお前ら全員、俺様の夜伽にさせてやるから、覚えてろおお!!」

そう言うと、慌てて空中に浮かんで逃げ出した．．．

「アア！逃げるなあああ!!このまま逃がしたら、また何してくるか分からないし．．． 舂斗雲!!」

なぎさは舂斗雲を呼び寄せ、猛スピードで逃げて行つた猪八戒の後を追つた．．．

此処まで逃げてくれば大丈夫だろう、そう安堵していた猪八戒であったが、舂斗雲は猛スピードで追いついた。同じ雲を呼び寄せる術であっても、その性能は、使う術者によつて違つてくるようで、猪八戒は大口開けて驚愕し、

「嘘だろおお!!こいつ、兄貴並に舂斗雲を?」

「猪八戒！降参しろおお!!降参しないなら．．．」

舂斗雲の上でグルグル如意棒を回したなぎさは、

「伸びろ！如意棒!!」

なぎさの命令通り、ギュンギュン如意棒は伸びだし、その勢いのまま猪八戒の雲を突き破り、

「ブヒヒヒヒヒ!!」

術を解かれた猪八戒は、両手足をバタバタさせながら地上へと落下していった。なぎさは舐斗雲を素早く操り、猪八戒の下側へ潜り込ませると、猪八戒は舐斗雲の上に落ち、事無き得た。

「ブヒイイイ！ま、参ったああ！！参りましたああ！！」

そう言うのと背後からなぎさに抱き付き、何度も謝り続ける猪八戒、だが両手はしつかりなぎさの胸を揉み、感触を楽しむと、鳥肌立ったなぎさはワナワナ震えだし、

「何処触つてるのよおおお！！」

「ブヒイイイイ……」

なぎさは、猪八戒の脂肪まみれのお腹に肘鉄を食らわせ、思いつ切り猪八戒を蹴り飛ばすと、猪八戒は悲鳴を上げながら遙か彼方に消え去った……

「全く、何なのよあいつは……アツ!?思わず思いつ切り蹴り飛ばしちゃった……大丈夫かなあ!？」

なぎさはやり過ぎたかなあと頭をポリポリ掻き、心配しているであろう、ほのか達の下へと戻ろうとしたものの、

「アレエ……私、どっちから来たっけえ？」

自分がやって来た方角が分からなくなり、困惑するなぎさであった……

帝の御殿では、ひかりの提案を受け入れたメツプルとミツプルが、妖精姿に変化し、室内を騒ぎ回っていた・・・

「広いメポ！ミツプル、競争メポ!!」

「待つてミポ！」

ドタバタ走るメツプルとミツプルを見た警護の人々、ひかり、れいかの親役である老翁達は困惑し、

「も、物の怪が御殿に!?!」

「皆の衆、大変でござる!物の怪が姫達を・・・」

老翁達は、物の怪は姫達を奪いに来たのではないかと、警護の者達に姫を守ってくれるように頼み込んだ。この騒動を利用するべく、れいかは老翁に話し掛けると、

「鬼の落とし物は、私が預かって置きます!」

「姫が!?!・・・そうじゃな、姫の手から帝に手渡した方が効果的じゃろうて」

老翁は頷き、れいかに打ち出の小槌を手渡すと、思わずアコとあかねはホッと安堵の表情を浮かべた。室内が慌ただしくなった事で、ひかりとれいかも逃げる振りをしながら合流し、再会を喜び合った。

「あかねさん、アコさん、もう少しこの姿で我慢していて下さいね!」

「後はメツプルさんとミツプルさんを助けて、直ぐにこの場から逃げないと・・・」

ひかりとれいかが頷き合ったその時、メツプルとミツプルは、抜刀した警護の者達に壁際に追い詰められ震えていた。

「この物の怪めえ・・・拙者が成敗してくれる!!」

一人の武士が刀を振り上げると、れいか、ひかりが悲鳴を上げ、慌てて駆け寄ろうとするも、他の警護の者に止められる。

「待つてええ!!」

「イヤア、メツプル！ミツプル！」

「も、もう駄目ミボ」

「ミツプル、しっかりするメボ・・・」

諦めモードのミツプルを励ますメツプルだったが、キラリと光を帯びた刀の刃を見ると、目に涙が溜まり、

「な、なぎさあああ!!」

思わず険に浮かんだなぎさの名前を叫ぶと、

「ちよつと待つたあああ!!」

メツプルの声が聞こえたかのように、舐斗雲に乗ったなぎさが御殿に乱入し、メツプルとミツプルを庇うように舐斗雲から飛び降り、警護の者達に身構えると、



「なぎさああ!!」

目をウルウルさせたメツプルとミツプルが、嬉しそうになぎさに抱き付き、コミュニケーションに変化した。なぎさは二人を胸元にしまうと、

「ちよつとお!よくもメツプルとミツプルを虐めてくれたわねえ!!」

如意棒をグルグル頭上で回転させ、警護の者達に身構えたなぎさ、なぎさがこの場所に来たのは、道に迷い、当てもなく上空を彷徨っていた時、この騒動に気付き、様子を見に来たからであった。

「おのれえ、今度は猿の物の怪が・・・皆の衆、帝の御殿を物の怪から守るでござる!」

「[[[[オオ!!]]]]」

抜刀した警護の者達が、次々になぎさに斬りかかるも、

「伊達に慌てんぼう將軍や、遠山の金さん銀さんを見てないわよ!」

時代劇が大好きななぎさは、TVで見えていて殺陣(たて)も理解しているようで、如意棒の扱いに慣れたなぎさは、巧みに如意棒で捌き、剣を叩き落としていく。そんななぎさを見たひかりとれいかの表情がパツと明るくなり、

「なぎささん!!」

「エツ!?ひかり!れいかも!?二人共、メツプルとミツプルと一緒にだったんだ?」

「エエ、あかねさんとアコさんも一緒です!」

ひかりから、あかねとアコも一緒と聞いたなぎさだったが、どう捜しても二人の姿が見付けられず小首を傾げ、

「あかねとアコちゃんも居るの!?姿が見えないようだけど?」

「なぎささん、お二人はご無事ですから・・・詳しい話は後で!今は此処から逃げ出しましょう!!」

「そうだね・・・そうと決れば! 舐斗雲!!」

れいかの提案に同意し、なぎさは舏斗雲を再び呼び寄せると、ひかりとれいかの側に移動した。

「二人共、舏斗雲に乗って!」

一瞬間を見合わせ戸惑ったひかりとれいかであったが、頷き合うと舏斗雲に飛び乗った。ひかりが真ん中、れいかが最後、あかねとアコはひかりが大事そうに抱え、れいかは打ち出の小槌を大事そうに懐に持って居た。

「じゃあ、行くよ!!」

なぎさの指示の下、舏斗雲は帝の御殿から飛び出すや、

「かぐや姫ええ!行かないでおくれええ!!」

「姫や、姫ええ!!」

二人の老翁の縋る姿を見たひかりとれいかは心を痛めるも、なぎさは二人を励ますよ

うに、

「大丈夫！絵本の世界が元通りになれば、本物の姫様達が戻って来るよ！」

「だと良いんですが……」

「きつと大丈夫ですよ……」

不安そうな表情を浮かべるひかりに、れいかもなぎさの言う通り、絵本の世界さへ元に戻れば、きつと大丈夫だと告げた。二人は筋斗雲の上から、老翁に手を振りながら去って行った……

「一時はどうなるかと思うけれど……これで一安心だな」

「早く元の姿に戻りたいわ！」

「エッ!?あかね、アコちゃん、何処に居るの?」

声は聞こえるも、姿が見えないあかねとアコに、なぎさは変顔を浮かべ戸惑っている。と、ひかりは苦笑しながら両手をなぎさの目の前に掲げると、その上でニンマリしているあかねと、眼鏡の位置を直すアコがなぎさの視線に飛び込んできて、思わずなぎさは驚きの声を発した。

「あかね!アコちゃん!その姿は一体!?!」

「ウチは一寸法師に!」

「私は親指姫に……」

「なつちやつてえ」

「エエエエ!？」

苦笑を浮かべながらなぎさに小さくなった事を伝えたあかねとアコ、なぎさが驚くと、ひかりとれいかは顔を見合わせ思わずクスリと笑い合った。

「取り敢えず、ほのか達と合流しよう！あの山は・・・アツ！玉龍が居る!!ほのか達が居る山だ・・・よし、じゃあ飛ばすよ!!」

とある山の上で、ほのか、ゆり、祈里に頼まれた玉龍は、まるで道標のように山をグルグル飛び回っていた。なぎさはホツと安堵の表情を浮かべると、舐斗雲のスピードを上げ、ほのか達の待つ山へと向かった・・・

## 2、狸の恩返し

老翁に婆さまの仇と誤解され追い回された咲、途中で再会したポルンとルルンを加えて逃げ続けていたが、どうやら老翁を撒いたようでホツと安堵し、手頃な石に腰掛け休息していた。

「いやあ、参ったよねえ・・・何で私を狸と間違えるんだらう?」

小首を傾げる咲だったが、ポルンとルルンは疲れたのか、コミュニケーション姿で眠っていた。二人共、疲れちゃったんだね・・・無理もないか、なぎささん達とはぐれて、心細かつ

たんだろうし・・・私も早く、舞達やフラツピ達と合流しなきゃ！」

立ち上がった咲が尻の埃を払っていると、お尻に妙な違和感を感じ戸惑った。

「何だろこれ!?・・・ゲゲエツ!し、尻尾!?私に尻尾が?」

自分のお尻に尻尾があつて驚く咲だったが、良く確認してみると、尻尾は衣装に付いているだけだと知りホッと安堵した。その時、草むらがザワザワ揺らぎ、咲はビクツと反応すると、草むらから束ねられた柴が現われ、

「もしもし、狸さん!この柴を運ぶのを手伝つて貰えませんか?重くて難儀していた所何ですが・・・」

(私、狸じゃ無いんだけどなあ・・・)

そうは言つても、困っている人をそのままにしておけない性格の咲は、柴を運ぶ事を快諾し、束ねた柴を背中に背負うと、

「このまま麓まで運べば良いのね?」

「はい!」

咲は、ヨイショと気合いを込めると立ち上がり、柴を背中に背負つたまま歩き始める。その柴の上に何かがピヨンと乗つかるよ、

(第一段階、成功ミルク!)

咲に柴を背負わせたのはミルクだった・・・

ミルクは、自分の代わりに仇を討つて欲しいと老翁に頼まれ、こうして老翁の替わりを果たす為、咲の後を追っていた。咲と気付かず・・・

ミルクは両手に老翁から貰った火打ち石を取り出すと、石と石とをぶつけ合い、「かちかち」と音が鳴り響く、

「あれえ、何の音だろう?」

不思議そうに小首を傾げる咲が、ミルクに訪ねると、

「ここは、かちかち山だから、かちかち鳥が鳴いているだけミルク!」

「そう何だ・・・ン!?今、ミルクって?」

「ま、不味いミルク!」

ミルクは、自分の行ないがバレないように必死に火打ち石を打ち合わせ、飛び火は柴に移り、柴が徐々に燃え始めた。

「何か・・・背中が熱くなったような?」

「ミルクミルク!この性悪狸、お爺さんの怨み、このミルクが晴らしたミルク!」

「エツ!?ミルク?私だよ、咲だよ!何、お爺さんの・・・キヤアアア!!」

ドヤ顔で高笑いを浮かべるミルクだったが、振り向いた人物を見て顔面蒼白になった。不思議そうな表情で、後ろを振り返ったのが咲だったのだから・・・

徐々に背中が熱くなり、思わず咲は悲鳴を上げ走り始め、ミルクも慌ててくるみの姿

に変化すると、

「な、何で咲が!?・・・咲、ゴメン!狸が咲だって、知らなかったのよおお!!」

「私は狸じゃなああい!それより、この火を何とかしてえええ!!」

背中を燃やししながら走る咲に、くるみも必死に走りながら辺りを見回すと、道の外れに池を見付け、

「咲、あそこ!池がある!!」

「分かったああ!!」

咲はそのままザブンと池に飛び込むと、何事かとポルンとルルンが妖精姿になって飛び起き、池から出た所をくるみが保護をした。咲はずぶ濡れになりながら上がってくる

と、

「くるみいい・・・酷いよおお!!」

「ゴ、ゴメンなさい!まさか、お爺さんが仇を討ってくれって言ってた性悪狸が・・・咲だったとは」

「人違いだよおおお!!」

くるみは動揺しながら咲の背中を見て見ると、狸のような衣装に守られ、咲自身は火傷する事は無く、くるみはホッと安堵した。その時、草むらがガサガサ音を立てると、

「誰か居るのか?何じゃ、狸か・・・ン!?娘さんも一緒とは珍しいのお?今日は良く娘さ

んに会う日じやなあ……」

そう言いながら現われたのは薪を背負った翁、数十分前、舞を助けた翁その人である。くるみは、翁の言葉に引つ掛かり、

「あのお、娘さんって……私のような姿をした？」

「ああ、胸さ大きな……確か、舞とか言ってたのお」

（舞って……巨乳ではないわよねえ？別人かしら!?）

くるみは舞のスタイルを思い出し、人違いだろうかと小首を傾げ、

（私って一体……）

会う人、会う人に狸と呼ばれ、咲はショックを受け跪くも、翁の舞と言う言葉に素早く反応し、

「お爺さん！舞を知ってるの!?ど、何処に居るの？」

「あれまあ！この狸、人間の言葉さ喋るだけかあ？その娘さんなら、おらの家に居るぞ！誤って脚が畏に引つかかり、怪我さしたもんだから、おらの家で休んどるよ!!」

「舞が……怪我!？」

翁の言葉を聞いた咲とくるみの表情が凍り付き、翁に縋り付くと、是非案内して欲しい事を訴えた。人の良い翁は、二人を見るや頷き、

「ちようどおらも帰る所だあ！一緒さ来い!!」



「ありがとうございます、お爺さん！」

(舞、今行くからね！無事で居てよ!!)

くるみは翁に礼を述べ、咲は舞の身を案じた。翁は二人を導くように、家路を急いだ……

翁の家で怪我の治療をして貰った舞は、痛みもほとんど消え、自分で歩ける程回復していた。

「本当にありがとうございますました！」

舞は、お世話になった翁の女房に礼を述べると、人が良さそうな女房はニコニコしながら、

「ホンに、大した怪我で無くて良かったなあ……でも、まだ無理するでねえだよ！もう少し、奥の部屋で休んでいると良いだ!!」

「ありがとうございます！では、お言葉に甘えて……」

舞は、女房に頭を下げ奥の部屋に入ると、舞の胸に隠れていたシプレとコフレがモゾモゾ這いだし、

「フウ、ようやく自由になれたですう」

「動けなくて窮屈だったですっ」

「もう、シプレ！コフレ！あなた達が私の胸に隠れるから、お爺さんとお婆さんに、変な

誤解されちゃったじゃない・・・」

顔を赤らめた舞は、胸から出てきたシプレとコフレに、苦笑混じりに苦情を言う。シプレとコフレは、そんな舞の苦情に、隠れる所が無かったからしようがないと二人で頷き合った。

「お爺さんとお婆さんのお陰で、大分足の方も良くなったけど、このまま此処に居たら、みんなと会えないし、かといって、お世話になったお爺さんとお婆さんに、何のお礼もしないのも・・・」

舞は、みんなと合流したいのは山々だが、怪我をした自分に良くしてくれた老夫婦に、何のお礼もしないわけには行かないと困惑した。顔を見合わせたシプレとコフレは、

「だったら、お手伝いをするですう！」

「舞は器用だから、きつとお爺さんもお婆さんも喜んでくれるですっ！」

「私はそれ程器用じゃ無いわ！でも、お手伝いかあ・・・」

シプレとコフレの言うように、お爺さんとお婆さんのお手伝いでもして恩を返そうと考える舞だった・・・

「婆さま！今帰ったぞ！！また、客人だ・・・何でも、さつき連れて来た胸さ大きな娘さんの知り合いだそうだ！！」

家の扉を開けた翁が、中に居る女房を呼ぶと、翁を出迎えた女房は、

「お爺さん、お帰りなさい！またお客さんとは・・・あれまあ！狸と娘さんがお客さんかへ？」

（ウウウ、また狸つて言われた・・・）

思わず変顔を浮かべる咲を見て、くるみは思わずクスリと笑い、頬を膨らませた咲に睨まれる。咲に睨まれ、コホンと咳払いしたくるみは気を取り直し、

「それで、舞と言う娘さんが、こちらにご厄介になつてゐるそうですけど？」

「ええ、その娘さんなら、奥の部屋で休んでおりますじゃ・・・汚い家ですが、どうぞお上がり下さい!!」

「ほんじゃあ、おらは取つてきた薪を割つてくるのでお・・・ゆつくりして行きなせえ!!」

そう言い残し、翁は薪を背負つたまま裏庭へと出て行つた。咲は、重たそうにしてゐる翁を見て、自分に手伝えないだろうか思案していると、くるみは女房と翁の言葉を素直に聞き入れ、

「それじゃあ、お言葉に甘えて・・・」

「くるみ、ちよつと待つて！私は見た通りまだ濡れた身体が乾いてないし・・・迷惑だから、外でお爺さんの手伝いでもしてるよ！舞の様子を見たら、知らせて!!」

「分かつたわ！それじゃあ、お邪魔します！」

くるみは深々と女房に頭を下げ、草鞋を脱ぎ部屋の奥へと入っていた・・・

咲も本心は直ぐにでも舞の側に向かいたかったが、どうも自分は、この絵本の世界では狸と思われる節があり、舞に迷惑が掛かる事を咲なりに考慮し、疑いもしないで自分を案内してくれた、翁の役に少しでもたとうと、咲は率先して翁の仕事を手伝った。

部屋の外から舞を呼ぶ声が聞こえるや、シプレとコフレは再び大慌てで舞の胸の中に潜り込み、

（二度この姿を見られてるし・・・恥ずかしいけど、この姿のままに居るしか無いわね）

こんな胸の大きな姿を、咲に見られたら何と言われるだろうかと溜息を付いた舞だったが、部屋に入ってきたくるみを見るや、忽ち目を輝かせ、

「く、くるみさん!?良かった！仲間と会えて!!」

「舞・・・あなたその胸!?!」

少し見ぬ間に立派に成長した舞の胸を見て、くるみは目を点にしながら舞の胸を指さすと、舞は激しく動揺し、

「ち、違うの！胸の中にシプレとコフレが居て・・・シプレ、コフレ、くるみさんだから出てきても大丈夫よ!!」

モゾモゾ舞の胸が動き出し、くるみは変顔を浮かべると、顔を出したシプレとコフレを見るや、嬉しそうにミルクの姿に戻り、三人で手を取り合った。

「外には、咲と一緒にポルンとルルンも居るミルク!」

「エツ!? 咲も来てるの? ミルク、ど、何処!？」

咲も来ている事を聞いた舞の表情がパツと明るくなり、今にも部屋から飛び出そうとするのを、ミルク、シプレ、コフレが慌てて止め、

「舞、その胸を見られたら不味いですう!」

シプレがそう言うと、二人はまた舞の胸の中にモゾモゾ潜り込んだ。ミルクは、巨乳の正体見たりといった表情で、意地悪そうな視線を舞に浴びせながらくるみの姿に変化し、舞は恥ずかしそうに、

(結局・・・咲にこの姿を見せる事になるのね・・・)

舞はトホホ顔を浮かべると、くるみと共に部屋から出て行った・・・

舞がお世話になった翁のお手伝いをする咲、翁は働き者の咲を感心しながら、

「いやあ、こつたら働き者の狸なんぞ、見た事ねえだなあ・・・」

「あのう・・・私、狸じゃ無いんですけどお・・・まあ、いつかあ!」

どうせ言つても無駄だろうと思つた咲は、薪割りを黙々と続けて居た。ソフト部で鍛えている甲斐もあつてか、咲は、翁に教わつた薪割りを直ぐに覚え、上手に薪を割つていった。

「咲いい!!」

「舞!!……って、その胸どうしたの!? 足を怪我してたって聞いたけど、胸だったの?」  
「もう、違うわよ! これは……後で説明するわ!!」

翁の家から走ってきた舞を見て、咲も嬉しそうな表情を浮かべるも、舞の胸を見て思わず口をアングリ開け、舞は恥ずかしそうに後で説明すると咲に伝えた。翁は、舞が走って来た事に驚き、

「お〜い、まだ走ったら駄目だろお? 無理するでねえ!」

「色々お世話になっちゃって……でも、もう大丈夫です! 私も何かお手伝いしたいんですか……」

「と言われても、華奢（きやしや）なお前さんには、薪割りは無理じゃてのお……婆さまに聞いてみるといいだ! くれぐれも無理するでねえだぞ!!」

「ハイ!」

舞は翁に礼をし、再び家の中に戻った。くるみも加わり、舞とくるみは女房の家事を手伝い、咲は翁の仕事を手伝った。

老夫婦の家の側を、一人の老翁が鎌を右手に持ち、キョロキョロしながら歩いて居た……

「うさぎさんに頼んでみたものの、気になって来てみただが、うさぎさんの姿も、狸の姿も見えんとは……ン!? あれは?」

老翁の視線に民家が現われ、こんな所に民家があるのかと、話を聞こうと立ち寄った老翁は、そこで翁の仕事を手伝う咲を見付け、目を吊り上げると、

「見付けただあ……この性悪狸めええ!!」

鎌を振り上げ、目を血走らせながら近寄つて来る老翁に、翁は険しい視線を向け、

「何じゃ、お前さんは! 勝手におらの家に……」

「す、すまねえ……あんた、氣いつけるだあ! その性悪狸は、おらの婆さまを叩き殺して逃げ出した極悪狸だ!!」

「ち、違うよおお! 私、そんな酷い事しないよおお!!」

後退りながらブルブル首を振り否定する咲だったが、老翁は聞く耳を持たなかった。騒ぎを聞き付け、舞、くるみ、女房が家の中から出てくるも、この騒動を見て顔色を変えた。出てきた三人にも、老翁は咲の事を性悪狸と罵り、ここで成敗しなければ、今後も被害にあう者が必ず現われるから、咲を引き渡せと翁に告げる。

舞とくるみは、咲を庇うように前にでて両手を広げると、

「止めてえ! 咲は……そんな酷い事絶対しない!!」

「そうよ! お爺さんは勘違いしているわ!!」

「舞！くるみ！」

二人の友情に目頭が熱くなる咲だったが、老翁をそんな二人にお構いなくジリジリ距離を縮めてくる。

「そこを退くだあ！退かねえならあ……」

「いやあ！絶対退かない！！咲は私に取って……大切なパートナーだもの！！」

「そうよ、大切な仲間に酷い事しないでえ！！」

老翁の脅しにも屈せず、舞とくるみは必死に咲を庇い続ける。ならばと、鎌を振り上げた老翁の腕を、静観していた翁が止めると、

「いい加減にするだああ！詳しい事情はおらにも分からねえ……だども、これだけは言える！この狸は仲間思いで、仲間の恩を、自分の事のように返そうとする健気さを持つてるだ！そんな狸が、お前様の仇だとは……おらは思わねええ！！」

「お、お爺さん……」

会って間もない自分の事を、必死に庇ってくれる翁を見て、咲の瞳からポロポロ涙が零れてくる。老翁はまだ承服出来かねないように、

「だ、だども……」

「大体、この狸さ、お前様の婆さまを殺す所を見たか？」

「そ、それは……だども狸なのは……」



「狸と言えば、この付近の山にどれだけの狸が居ると思つて居るだ？そんな性悪狸なら、おらも、家の婆さまも、今頃とつくに化かされてるだよ・・・さあ、こつちで一息つくだ。冷静に考えれば、色々矛盾も見えてくるだ・・・」

翁は、老翁を縁側へと案内し、茶を出すと、老翁も喉が渴いていたのかゴクゴク飲み干し、改めて咲を見つめた。老翁の手伝いを懸命にする咲、舞の事を気に掛ける咲を見て居る内に、自分の間違いに徐々に気付き、本来の穏やかな表情を浮かべた。くるみはそつと裏に回り、ミルクの姿に戻ると、

「お爺さん、捜したミル！お爺さんの仇の性悪狸は、あの山から追い出したミル!!もう安心ミル!!」

「ほ、本当ですかなあ、兎さん？」

ミルクはコクリと何度も頷くと、老翁はミルクの手を取り何度も礼を言い、咲の下に近付くと、

「散々追い回して済まなかつただあ！おらは何と言う酷い事を・・・許してくんろ!!」  
「分かつてくれれば良いんだあ！」

咲は満面の笑みを老翁に浮かべ返し、今までの事を水に流すのだった・・・

ミルクの話を受け、老翁は咲に何度も詫びながら帰つて行つた・・・

それを見届けた咲達、いつまでも此処に留まるわけにも行かず、

「舞の怪我也ほとんど良くなったし、そろそろ出発しようか？」

「ええ・・・お爺さん、お婆さん、本当にお世話になりました!!」

「お二人共、どうぞお達者で！」

咲、舞、くるみは、そう翁夫婦に礼を述べると、夫婦はニツコリ微笑みながら、

「はぐれた仲間に出会えると良いのおお・・・気をつけて行くだよ！」

「達者でのおお!!」

「ハイ！ありがとう・・・アツ?」

深々とお辞儀をした拍子に、舞の胸からシフレとコフレが転げ落ち、二人は反射的に縫いぐるみの振りをし、慌てて咲とくるみが拾い、老夫婦に苦笑を浮かべると、呆気に取られていた老夫婦は思わず笑いだし、

「アハハハ！いやあ、胸さ随分大きいだべなあと思つたら・・・」

「偽乳だっただべかあ？」

舞の顔は見る見る真つ赤になり、恥ずかしさで老夫婦の顔も見れない舞は俯きながら、

「ゴ、ゴメンなさああい！お世話になりましたああ!!」

顔を覆いながら走り出した舞、咲とくるみは大慌てで、

「アツ！舞いい・・・じゃあ、お爺さん、お婆さん、お世話になりました!!」

「お二人共、どうかお元気で！」

「待つてよ！舞いい!!」

老夫婦は笑顔を浮かべながら、三人の姿が見えなくなるまで手を振り続けていた……こうして、老夫婦と別れた咲、舞、くるみ、山道をトボトボ俯きながら歩く舞は、

「私……もうお嫁に行けない！」

「やだなあ！それを言ったら、私何か狸だよ！それこそ嫁に行けないよ!!でも、此処は絵本の世界……気楽に行こうよ!!」

落ち込む舞を、咲が励ましながらある事に気付くと、

「ねえ、舞？くるみと私はかちかち山のお話に来たけど……結局、舞は何のお話だったのかなあ？」

「多分……鶴の恩返しじゃないかしら？罨に嵌って足を怪我したし……」

少し考えた舞は、似たような場面があつた鶴の恩返しじゃないかと咲とくるみに語ると、くるみは舞を見てニヤリとすると、

「成る程！胸の正体を見られて、舞が逃げだした所何か、鶴の恩返しにそっくりかも!!」

「もう！くるみさんの意地悪!!」

「アハハハハ！」

舞をからかうくるみに、舞は頬を膨らませ、咲は笑みを浮かべた。ポルンとルルンか

ら、遊ぼうと誘われたくるみは、ミルクの姿に戻ると、ポルン、ルルン、シプレ、コフレ達と楽しそうにお喋りを始める。咲はさっきの事を思い出し、

「ところでミルク・・・でも、良かったの!? あんな事あのお爺さんに言ってる?」

「きつと大丈夫ミル! 絵本の世界が元にさえ戻れば、ちゃんと元通りの話になる筈ミル!!」

「その為にも・・・早くみんなと合流しましょう!」

「そうだね・・・」

一同は、浚われた仲間を救う為にも、早く仲間達と合流しようと山を下りて行った：

### 3、騙しあい

お菓子の方に拘束されたのぞみと響を救う為、満と薫は、老婆の言う通り、下働きを懸命に行っていた・・・

「さあさあ、仲間を助けたかったら、テキパキ働くんだよ!!」

手をパンパン叩き、尚も扱き使う老婆に反論もせず、言われた通り仕事をこなしている満と薫、のぞみと響は、大きな鳥籠の中で申し訳無さそうにしていた・・・

「満ちゃん、薫ちゃん、ゴメンねえ・・・私達が、チョットお菓子の家を摘み食いしちゃつ

たから・・・」

「お黙り！あれの何処がチョットだって言うんだい？この大食い共!!」

散々お菓子の家を食い荒らされた老婆は、のぞみの言葉に呆れ顔で罵ると、響は頬を膨らませ、

「育ち盛りの私達からしたら・・・あんなの摘み食い程度なの！ねえ、のぞみさん!!」

「そうそう！だから、早く降ろして!!」

「お黙りつてえのお！誰のせいでお菓子の家を作り直してると思ってるんだい？」

「さあ!？」

「あんだ達のせいだろう!!全く・・・」

そんな小競り合いも上の空、満と薫は、仕事をしながら周囲の様子を冷静に観察し、どの方法なら被害が少なく、のぞみと響を救えるだろうか思案していた・・・

手際よくお菓子を作る満を見るや、老婆は意外そうな表情で驚き、

「こりゃあ、驚いた・・・あんだ、無愛想だけどお菓子作りの才能あるねえ！その調子でジャンジャン作っておくれ!!チョコレートは、お菓子の家の屋根になるんだからねえ・・・」

そして、薫を見つめた老婆は、

「あんたは、その大鍋に水を入れて、火をたきな！」

薫は言われるまま大鍋に入れる水を汲み、戻る途中、満は小声で薫に話し掛け、

「薫、気付いてた？あのお婆さん・・・目が悪いようだよわ！」

「ええ、そこを上手く付けば、のぞみと響を救い出せる事も出来る筈ね！」

二人は頷き合うと、それぞれの仕事に戻って行った。鳥籠の中ののぞみと響は退屈そうに、

「ねえ、そろそろ出してよおお！私・・・お腹減っちゃった」

「のぞみさんも!?実は私も何です!!」

「育ち盛りだもんねええ！」

顔を見合わせ頷き合うのぞみと響を見て、思わず満と薫は溜息を付き、老婆は呆気に取られていた。直ぐに我に返った老母は、意味深な笑みを浮かべると、

「直に出してあげるさ・・・ヒヒヒヒヒヒ」

笑みを浮かべながら包丁を取りだし、研ぎ始めた・・・

「エッ!?何々、何か御馳走でもしてくれるの?」

「本当!?!」

老婆の魂胆に気付きもせず、のぞみと響は、何かの御馳走でも作るのかと期待する反面、満と薫は、老婆の行動を不審そうに見つめた。

（包丁を研いで、何をするつもりかしら!?!）

満の思考が目まぐるしく回転していく・・・

世界絵本博覧会に遊びに行くことで、満と薫は、絵本に付いて少し勉強をしていた。色々な絵本も読んでみた。その中から、今の自分達の境遇と似た話を思い浮かべると、

（お菓子の家・・・ヘンゼルとグレーテルのお話！だとすれば、この老婆は・・・魔女！捕らえたのぞみと響を、食べようと考えて居るつて事ね・・・）

魔女は包丁を研ぎながら薫を見ると、

「もう水は沸騰したかい？」

「いいえ！まだよ!!」

「何だつて!?!もう沸騰してもいい頃じゃないのかい？全く使えない子だねえ！」

それは薫の作戦だった・・・

なるべく時間を掛け、魔女を苛つかせ、魔女が隙を見せたその時こそ、満と共に、のぞみと響を救うチャンスだと・・・

薫の目論見通り、苛々した魔女は、

（全く、二人共召使いにでもしようかと思っただけど、使えそうなのは、あの満つて子ぐらいだねえ！もう一人は・・・あの二人と一緒に、パンにくるんで食べてしまおうとするか）  
魔女は、のぞみと響を狂気の視線で見つめるや、包丁を構え、

「エエイ、もう我慢出来ない！お前達を、今からパンに挟んで食べてやるよ!!」

「エエエエエ!?じよ、じよ、冗談でしよう?」

思わず身を寄せ合いビビるのぞみと響、眼下にいる満と薫に助けてえと半泣きで救いを求めるも、

「こうなつては、もう私達だけではどうしようも無いわ!」

「恨まないでね!」

満と薫は、咲と舞に教わった合掌をのぞみと響にすると、のぞみと響は顔面蒼白になり、

「エエエエ!?ちよつとおお!諦めるの、早すぎない?」

「満さああん!薫さああん!」

涙目で恨めしげに満と薫を見つめる響に、思わず満はクスリと笑いだしそうになるのを堪え、無表情さを守った。

「ヒイヒイヒイ!この子達は賢いようだねえ・・・さあ、覚悟おし!!満、二人を鳥籠からお出し!妙な真似をしたら・・・もう一人がどうなるか、賢いお前さんなら分かつて居るだろうねえ?」

「ええ、分かつて居るわ!」

「お前は、パンが焼けるかどうか、竈（かまど）の火加減を見ておいで!」



「分かったわ!」

魔女は、満に二人を鳥籠から出すよう命じ、薫には、竈でパンを焼けるかどうか火加減を見るように伝えた。満と薫は互いに目配せすると、行動を開始した!

竈に付いた薫は、わざと魔女を苛つかせるように、

「私、竈の火加減何て見た事無いから……よく分からないわ?」

「何だつてえ!?!……全く、中に入って確かめれば直ぐに分かるだろう?」

「竈の中つて……どうやって入るのかしら?」

薫の策略だとは気付かず、魔女は呆れたように竈の前に来ると、

「お前はバカかい? こうやって身を屈めて入れば……ギャアアアア!!」

竈に身を屈めた魔女に対し、薫はここぞとばかり、後ろから魔女を突き飛ばした!

魔女は絶叫しながら竈の中に転がり落ちると、鳥籠から解放されたのぞみと響は呆然としながら、

「ふ、二人共、助けてくれたのは嬉しいけど……やり過ぎ何じゃ!」

「あのお婆さん……死んじゃったの?」

自分達を食べてしまおうとした魔女ながら、のぞみと響は哀れむように竈を見つめていると、満と薫はクスリと笑い合い、

「大丈夫よ! 竈の火は、元々付いて無かったから……」

「あの魔女は、目が悪いから大げさに転んだだけ、直に自力で出てくるわ！」

「さあ、今の内にここから逃げ出しましょう!!」

満と薫に真実を聞き、のぞみと響はホッと安堵した。安堵すると、お腹が減っているのを思い出したのか、のぞみは、満が作りかけていたチョコレートを名残惜しそうに見つめ、

「ちよつとぐらいなら、貰っても・・・」

「駄目よ！のぞみ、響、行くわよ!!」

満はのぞみの背を、薫は響の背を押し、四人はお菓子の家を後にした・・・

悪魔の家だとは知らず立ち寄ってしまった、こまち、りん、エレン、なおの四人、こまちは、子供の頃読んだ、銀の鼻のお話に来てしまった事を悟り、屋敷内を見学に向かった、りん、エレン、なおに忠告しに向かおうとした時、室内から三人の悲鳴が聞こえ、表情が凍り付いた・・・

「今の声・・・間違いない！三人の悲鳴だわ!!」

慌てて部屋を飛び出したこまちの目の前に、銀の鼻の男が姿を現わすと、こまちの髪に付けた花を見るや目を細め、

「お前は私の言いつけを、ちゃんと守ってくれたようだねえ．．．」

「今、三人の悲鳴が聞こえたわ！りんさん、エレンさん、なおさんは何処!？」

「三人は無事だ！お前は言いつけを守る良い子だ．．．私はこれからまた用事があつて出掛けるが、今のように言いつけを守り、ここで待つておくれ．．．霧が晴れたかどうかも見えてきて上げよう!!」

悪魔は、こまちの髪に付いたジャスミンの花が、焦げていない事に上機嫌で再び出掛けて行つた．．．

「私のせいだわ．．．三人は、この館に来ることを頑なに拒んでいたのに、私が訪れたばかりに．．．」

こまちは、悲しげな表情で俯くも、今は落ち込んでいる場合では無いと気持ちを整理し、一旦部屋に戻ると、悪魔が髪に挿したジャスミンの花をコップの水に入れ、

「さつき、悪魔はこの花を見て居た．．．お話の通りなら、髪に付けた花を見て、秘密の部屋を覗いたかどうか判断していた筈だわ!」

こまちは念の為、首に巻いていた黄色いスカーフを頭に巻き、秘密の部屋へと向かつた．．．

不気味に静まりかえる室内を一人歩き、こまちは秘密の部屋の前に辿り着くと、意を決し、重い扉を力任せに開いた．．．

先程、りんとエレンの二人掛かりで開けた重い扉を、たった一人で開けたこまち、本人は気付いて居ないが、これが俗に言う火事場の馬鹿力と云うものかも知れなかった。「グイグイグイ」

不気味な音と共に扉が開かれると、中から人々の悲鳴と共に、見知った声が聞こえていた……

「あ、熱い……」

「私……もう、駄目かも」

「なお、エレン、しつかりして！今に、こまちさんが……」

地獄の業火のような炎に包まれ、なおが、エレンが、そしてりんが、皆苦悶の表情を浮かべながら熱さに耐えていた……

「りんさん！エレンさん！なおさん！」

三人を見付けるや、こまちは焼けるような熱さに耐え、三人を部屋から引つ張り出し、重い扉を閉じた……

「た、助かったあ！」

「焼け死ぬかと思つたわ！」

「エレン、怖かつたよおおお！」

りん、エレン、なおは、助けてくれたこまちに礼を言つたものの、こまちは表情を見

て、三人はギョツとした。こまちの目からは大粒の涙が零れ落ち、三人を抱きしめると、「りんさん・・・エレンさん・・・なおさん・・・みんな、みんな、ゴメンなさい！私が、嫌がるみんなを、こんな館に連れて来たばかりに・・・本当にゴメンなさい!!」

号泣するこまちを見て、貰い泣きした三人の瞳からも涙が零れ、

「こまちさんの所為じゃないってばああ!」

「うん!こまちい、泣かないでええ!!」

「グスツ・・・みんな、無事で良かった」

「早く此処から逃げ出そう!!」

りん、エレン、なお、誰一人こまちを責める筈も無く、一刻も早くこの館を逃げ出そうとこまちに提案すると、こまちは涙を拭いながら首を振り、

「それは・・・多分無理だわ!」

「「エエエエ!」」

こまちの意外な言葉を聞き、三人は身を寄せ合い思わず叫んだ。怯えていたなおだが、扉の中に他の人々も居た事を思い出し、

「ね、ねえ、私達の他にも、扉の中に人が居たけど・・・助けてあげよう!!」

「なおさん・・・残念だけどそれは無理だと思うわ!」

「ど、どうして!?!」

「取り敢えず部屋に戻りましょう！」

こまちは、不安そうに後を歩く三人を連れ一先ず部屋に戻ると、こまちは三人に先程の説明を始め、

「私が思うに、この話から抜け出す為には……この物語のような行動をしなければ無理だと思うの！それに、この世界に居る人々は、元々銀の鼻に出てくる人々で、私達では、彼らを救える事は出来ないと思うの……それに、お話自体変わり兼ねない!!」

「エエ!?じゃあ、どうすれば?」

不安そうな表情でこまちに聞くりん、こまちは、りん、エレン、なおの顔を交互に見つめると、

「このお話は、銀の鼻と言って……」

こまちが三人に語って聞かせた銀の鼻の話……

洗濯屋を営むおかみさんには、健気にも店を手伝う三人の娘が居た……

悪魔に目を付けられた娘達……

奉公に出た長女、次女は、悪魔の命に背き、秘密の部屋を覗いた事がバレ、炎の中に放り込まれるも、最後に奉公に来た三女儿チーアは、機転を利かせ、姉達を救い、悪魔の家から救いだし、富を得た話……

「私は、このお話に近い事をしなければ、脱出する事は不可能のような気がするの!」

「で、でも、どうやって?」

こまちの話を聞き、りん、エレン、なおは不安そうにどうするかこまちに聞くと、

「あの悪魔は、人が良いのは確かなようだわ!そこを付きましよう・・・」

こまちは、何やら策を、りん、エレン、なおに授けると、三人は表情を強張らせながら頷いた。

用事を済ませた悪魔が帰って来た・・・

出迎えたこまちの髪に付いているジャスミンの花が焦げていない事に、悪魔は満足げに頷き、

「どうだろう・・・君さへ良かったら、私の館で、奉公人として働いてみないか?」

「はい!喜んで!!ですが・・・私の仲間達にその事を伝えなければ心配してしまいます!この荷物を、人が通りそうな場所まで運んで、置いて来ては頂けないでしょうか?」

こまちは、足下に横たわる大きな袋に入った三つの荷物を、悪魔に外まで運んで欲しい事を伝えた。悪魔は小首を傾げ、

「随分大きな袋だねえ・・・何が入っているんだい?」

「私の仲間達がこれを見れば、私だつて直ぐに分かる品物です・・・でも、決して覗いたりしないで下さいね!私、此処でちゃんと見て居ますから!!」

「ハハハハ、覗いたりするもんか!では、行ってこよう!!」

悪魔は、袋の荷物を次々担ぎ、館を出て行った・・・

それを見届けたこまちは、素早く次の行動へと移るのだった・・・

（しかし、何て重さ何だ!?!）

担いではみたものの、その重さにさすがの悪魔も休み休み運んでいたが、中が気になり袋を開けようとしたその時、

「見てるわよ！見てるわよ！見てるわよ！」

何処からか声が聞こえ、思わず悪魔はギョッとし、慌てて再び荷物を担ぎ、こまちに言われた通り、人が通りそうな道に並べるように横たえた。こまちは、袋を開けられそうな時は、見て居る事を悪魔に伝えるように、三人に伝えてあった。

（うくむ、しかし、中身は何だったんだろうか!?!）

悪魔は小首を傾げながら、再び館へ戻って行った・・・

袋がモゾモゾ動き出すと、中から顔を出したりん、エレン、なお、中でもなおは涙目になっていて、

「なお・・・どうしたの?」

「泣いてるじゃない?そりゃあ、怖かったのは確かだけどさあ・・・」

「ち、違うの!袋の中に、モゾモゾ動く・・・虫が居たのおお!!でも、騒げないし・・・ウエエエエン!!」



日頃のお姉さん振りも何処吹く風、なおは、袋の中に虫が居た事でパニックになり泣きだした。動けば今までの行動が無になってしまうと、ジツと我慢し、悪魔が去った事で、恐怖が一気に襲いかかり、りんとエレンは縋り付き、「怖かったよおお」と泣きじゃくると、りんとエレンはなおの頭を撫で、

「なお、よく我慢したわね!」

「さあ、後は私達があの時のお札を見付け、こまちが上手く逃げ出すだけね!」

三人はこまちに言われた通り、空になった袋に大きな石を一杯詰めると、りんは、エレン、なおを促し、

「さあ、行きましょう!!」

りん、エレン、なおは、お札が貼られてあつた場所目掛け移動を開始した・・・

こまちは、シーツを使い、自分に似せた人形を作ると、布団の中に入れ、自分が入りに口にした袋の中にスッポリ入ると、悪魔が戻つて来るのを待った。部屋の外から、カツカツと悪魔の足音が聞こえ、部屋の前で止まると、ギイイとドアを開けた。

「おや!?!もう寝ているのかい?」

「ゴメンなさい、少し疲れたようで横にならせて頂いてました」

「ああ、構わないよ!頼まれた荷物は、ちゃんと外に置いてきたよ!!」

「ありがとうございます……ですが、何とした事でしょう！私は、大事な物が入った袋の方を、ご主人様に手渡すのを忘れてしまったのです!!」

「大事な物!?それはいけないねえ……分かった、私がもう一度置いてこよう!!この荷物かい?」

「はい……申し訳ありません!」

袋の中に入っているのがこまちとは気付かず、悪魔は袋を担ぐと部屋から出て行った……

さつき三人を担いだ時に比べれば、大分軽い事は確かであったが、悪魔は小首を傾げ、（ウーム……館を訪ねてきた時、このような大荷物は持つて居なかつた気がしたのだが?）

中身が気になった悪魔は、屋敷の門前で荷物を降ろし、中を確認しようとすると、「見てるわよ!見てるわよ!見てるわよ!」

こまちの声が辺りに響き渡り、悪魔は慌てて袋を担ぎ直し、（全く、あの子には適わないなあ……魔女だったのか?）

だが、優秀そうな奉公人が手に入りそうで、悪魔は満足げに荷物を担いで、先程置いた三つの袋が横たわる側に袋を置くと、館へと帰って行った……

悪魔の気配が去った事で、こまちはモゾモゾ袋から出てくると、辺りを見回し、

「どうやら三人も無事逃げ出せたようね．．．後は、悪魔が気付いて戻つて来る前に、三人が無事にお札を持って来てくれれば良いんだけど．．．」

こまちは、剥がれたお札を探しに向かった、りん、エレン、なおが早く戻つて来る事を祈つた．．．

館に戻つた悪魔、さすがに重たい荷物を担ぎすぎ、大分疲れては居たが、有能な奉公人を手に入れた事で、口元に笑みすら浮かべていた。あの秘密の部屋の前に来た悪魔は、中に居る筈の三人の様子を見る為、重い扉を開けた。「ギイイ」と不気味にドアが開き、中を覗いた悪魔、人々の悲鳴が響くものの、その中に、りん、エレン、なおの姿が見えず困惑する。

「なっ、あいつらの姿が．．．まさか!？」

悪魔は、慌ててこまちが居る筈の部屋に向かうと、部屋の中に入り、「寝ている所を済まない!ちよつと起きて私に顔を見せてくれるかい?」

悪魔は優しく話し掛けるも、返事が返ってくる事は無かつた．．．

悪魔は、さつき自分が担いでいた、四つの荷物の尋常じや無い重さを思い出すと、

(まさか．．．あの荷物は!?)

顔色を変えた悪魔が、バツと布団を剥ぎ取ると、そこにはこまちがシートで作つた、こまちちゃん人形と、騙してゴメンなさいと書かれてあつた置き手紙があつた。見る見る

悪魔の表情が悪鬼のように変わると、

「おのれええええ！騙したなああああ!!」

部屋の窓を思いっ切り開けると、悪魔は窓からヒラリと飛び降り、雄叫び上げながら走り出した・・・

館の庭から雄叫びが聞こえ、こまちは、悪魔に逃げ出した事が知られた事を悟った：

「こ、こんな早くバレちゃう何て・・・」

焦りの表情を浮かべたこまちが、辺りをキョロキョロ見渡すと、

「こまちさああん！」

りん、エレン、なおがこまちに気付き、手を振りながら走ってくるのを見たこまちは、

「急いでえええ！悪魔が逃げ出したのに気付き、追いかけて来たのおお!!」

「エエエエエ!!」

こまちが叫び、三人は顔色を変え懸命に走った・・・

だが、足下が悪く、どうしても思った以上のスピードが出なかった・・・

「足下が悪くて・・・ン!!? エッ!? エエエエ? ギャアアアア!!」

突然なおが絶叫し、二人を置き去りに猛ダッシュで駆け出した。目の色変えたなおの肩には、蜘蛛が止まり、なおは泣きながら、

「蜘蛛、蜘蛛、誰か取ってええええ!!」

大慌てで走り、こまちの目の前で、館の外壁にぶつかり倒れたなおは目を回した。その衝撃でヒラヒラ舞ったお札を手にしたこまちは、館の門の左側にお札を貼ると、

「りんさん、エレンさん、後一枚！急いでええ!!」

こまちが絶叫するも、悪魔は肉眼で見えるまで近づいて居た・・・

「逃がさんぞおお!!」

見る見る迫ってくる悪魔の恐怖・・・

りんが、エレンが、思わず恐怖で顔色が強張る。

「急いぞと言われてもお、これ以上スピードが・・・」

「りん！貸して!!」

困惑するりんから、お札を手渡されたエレンは、素早くジャンプし、木々の枝と枝の間を絶妙に飛び進み、館の前に飛び降りると、門の右側の壁にお札を貼った・・・

お札は目映い輝きを浮かべると、館を霧が覆い始め、困惑した悪魔は、

「行かないでおくれええ!!」

「ゴメンなさい！ゴメンなさい！・・・」

こまちは、館が霧で完全に見えなくなるまで、悪魔に謝り続けた・・・

悪魔は、寂しかったのでは無いか・・・そうこまちは思った。

自分達がこの話から脱出する為とはいえ、良くしてくれた悪魔を欺いた事に、こまち

の良心は痛んでいた……

霧が収まると、目の前にあった館は消え去り、山道が現われた。

「あの封印のお札が取れた事で、私達は銀の鼻のお話に迷い込んでしまったのね……」

「何か、森の中も薄日が射してきたし、良かったああ……」

「なお、大丈夫!?!」

「蜘蛛!?!蜘蛛は?……よ、良かったああ」

こまちが、りんが、無事に悪魔から逃げ出せた事に安堵し、エレンは、なおに手を差し伸べ助け起し、なおは蜘蛛が何処かに行った事でホッと安堵した。

「それじゃあ、この先の道に進みましょう!」

こまちの提案を受け入れ、歩を進めようとしたりん、エレン、なおだったが、三人の肩を、背後から何者かがトントンと叩いた……

「「ヒイヒイ!?!」」

まさか、さっきの悪魔がまた現われたのかと、三人の表情は見る見る青ざめ、恐怖に引き攣りながら、まるでロボットのようにつくり背後を振り向くと、

「やつぱり……こまち、りん、エレン、なおだったのね!」

「あなた達、こんな所に居たのね?」

三人の肩を叩いたのは満と薫、その背後で両手を振るのぞみと響の姿を見た三人は、

その場でヘナヘナと腰を抜き、満は不思議そうに小首を傾げながら、  
「どうしたの？」

「ちよつとおお！いきなり肩を叩かないでよおお!!」

「声ぐらい掛けてよおお！」

涙目になったりんとなおが、満と薫に抗議し、半泣き状態のエレンは、口をパクパクさせると、

「○×△□□だったんだからああ！」

「エレン・・・何を言ってるんだか分からないわ？」

薫もまた小首を傾げるも、こまちは苦笑を浮かべながら、

「私達・・・悪魔が出てくるお話に迷い込んじゃって・・・でも、無事にのぞみさん達と再会出来て良かったわ！」

のぞみは嬉しそうに再会出来た四人に話し掛け、

「りんちゃん！こまちさん！エレンちゃんも、なおちゃんも、無事で良かった！」

響も大切な仲間、エレンと再会し喜んだものの、エレンが泣いているのに気付き、からかうような視線で、

「アレエ!? エレンったら・・・泣いてたのお？」

「な、泣いて何か無いわよ!!」

恥ずかしさで顔を赤くしたエレンは、目をゴシゴシ擦り強がった。薫は、少し意地悪そうな視線を響に浴びせると、

「やっぱり同じチームねえ・・・響も鳥籠の中で、魔女に食べられそうになつて泣いていたもの」

「エエ!?ちよつと薫さん!」

薫にバラされ、動揺した響を見たエレンは、逆に冷めた目で響を見つめると、響はアハハハと誤魔化し笑いを浮かべた。

「あたし・・・もうこんな森に居るのは嫌!早く行こうよお!!」

こんな不気味で、虫も多い森からは一刻も早く抜け出したいと、なおは一同を急かした。こまちは苦笑しながらなおの言葉を受け入れ、

「のぞみさん達と再会出来た事で・・・この世界は繋がっている事を確信したわ!さあ、他のみんなに会いに行きましょう!!」

「よし!みんなと再会するぞお・・・決定!!」

のぞみはりんとこまちの手を掴み駆け出し、響もエレンとなおの手を掴み駆け出し、そんな一同を見た満と薫も、顔を見合わせクスリとすると、駆け出した・・・



## 4、驚愕！三人のえりか!?

金の斧と銀の斧の話に迷い込んだうらら、つぼみ、えりか、いつきだったが、えりかが誤って湖の中に落ちてしまい、三人は驚愕していた・・・

「僕が潜って助けてくるよ!」

いつきが上着を脱ごうとしたその時、湖からブクブク泡が立ち上がり、再び美しい女神が現われ、その腕の中にはえりかを抱いていた。それを見た三人はホッと安堵するも、

「あなた方が落としたのは・・・このえりかですか?」

「「エツ!」」

女神に聞かれた三人は、思わず目が点になった・・・

「ま、まさか!」

「で、でも、えりかは金色になつて無いし・・・」

「見た感じ、えりかちゃんにしか見えませんねえ・・・」

つぼみ、いつき、うららは、脳裏に、これも金の斧と銀の斧のように、金のえりかでも現われるのかとギョツとし、女神が抱いたえりかをジツと見つめるも、見た感じいつものえりかの容姿にしか見えなかった。「ハイ」と返事をしようとしたその時、女神に抱かれたえりかが目を開け、

「まあ、つぼみさん、いつきさん、うららさん、ご機嫌如何かしら？」

まるで何処かの令嬢のように、ニコリと三人に会釈するえりかを見て、三人は目を点にしながら同時に首を振り、

「「いいえ、違います！」」

「では、あなた方が落としたのは・・・このえりかですか？」

女神は一旦令嬢風えりかを湖に沈め、再び別のえりかを抱いていた・・・

「見た感じは・・・えりかですねえ？」

「いや、さっきのもえりかには違い無いと思うよ・・・中身は別人だったけど」

「でも・・・何処か何時もと違って無いですか？」

再びヒソヒソ話で話し合うつぼみ、いつき、うらら、女神に抱かれていたえりかが目を覚ますと、

「つぼみ殿、いつき殿、うらら殿・・・」

「「いいえ、違います!!」」

次に現われたえりかの言葉が終わらない内に、変顔浮かべた三人が同時に首を振り、違うと女神に答えた。女神は再びえりかを湖に沈めると、違うえりかを抱き上げた瞬間、

「「はい！そのえりか（ちゃん）です!!」」

女神が抱いていた三番目のえりかは、息を止めて居たのか、頬を大きく膨らました変顔をされていて、それを見た瞬間、三人は即答した・・・

女神は嬉しそうに何度も頷き、

「あなたは正直ですねぇ・・・さあ、この金のえりかかと銀のえりかも持つて行きなさい！」  
「いいえ！結構・・・エツ!?女神様！女神様ああ!?!」

女神は、つぼみの言葉を全く聞かず、最初に現われたえりかを金のえりかと呼び、二番目に現われたえりかを銀のえりかと呼び、そのまま本当のえりかと共に、湖の前に置くと、湖の中へと消えて行った・・・

つぼみ、いつき、うららは、湖の前に佇む三人のえりかを見て呆然としていた・・・  
「ど、どうしましょう!?!えりかが三人になっちゃいました?」

「ハハ・・・少し頭が痛くなってきたよ」

「どの辺が、金のえりかちやんと銀のえりかちやんで違うんでしょうか?」

うららの問い掛けに、三人は今一度ジツと三人のえりかに視線を向けた。つぼみは金のえりかを見つめると、

「お嬢様風のえりかが、金のえりかって呼ばれるのは、何となく分かりますねぇ・・・仕事草が何処か優雅ですし・・・」

「銀のえりかは・・・いぶし銀って事じゃないかなあ?」

「成る程！何か時代掛かってて・・・渋く見えますもんねえ」

「本来の意味とは、違っているような気がします・・・」

いつきの推測に、うららはポンと手を叩き納得するも、つぼみは苦笑を浮かべながら、本来の意味とは違う気もすると三人に告げた。

金のえりかとは銀のえりかの話題で、盛り上がる三人を見たえりかは、不満気に頬を膨らまし、

「ちよつとおお！何コソコソ三人で盛り上がってるのよおお！それより・・・何なのよ、

この二人のあたしは!？」

「まあ、随分お下品ですわねえ」

「本当に・・・」

金のえりかとは銀のえりかを指差し、変顔を浮かべるえりか、金と銀のえりかは、そんなえりかを見て眉根を曇らせた。つぼみ、いつき、うららは、言い争う三人を見て目を点にした。

「どうしましょう・・・このまま金のえりかとは銀のえりかを、置き去りにするわけにもいきませんし・・・」

「そうだね・・・」

困惑するつぼみといつき、うららは少し思案すると、

「金のえりかちゃんと銀のえりかちゃんは、絵本の世界から元の世界に戻れば消えると思います！ですから・・・他の皆さんにも是非見せて上げたいなあと思うんですが？」

うららの提案に、顔を見合わせたつぼみといつきは、他のみんなの反応も見て見たいかもと苦笑しいあい、金のえりかと銀のえりかも一緒に、共に仲間達を探しに向かう事を決めるのだった。だが、容姿が全く同じの三人のえりかにつぼみは、

「しゃべり方で判断しないと・・・これでは、どれがどのえりかか、分かりませんねえ？」

「そうだね・・・」

「そうだー！」

うららは何かを閃くと、三人のえりかに近づくや、少し三人と会話し、持って居た黒いペンで、金のえりかの額には金という文字を書き、銀のえりかの額には銀と書き、えりかの額には元祖と書くと、満足げに何度も頷き、

「これでバッチリです!!」

「アハハハハ」

うららの機転を見て、思わず笑いだしたつぼみといつき、えりかは目に炎を点すと、「あんた達、人事だと思つて楽しんでない？」

「そんな事無いですよ！じゃあ、みんなを探しに行きましよう!!金のえりか、銀のえりか、そして・・・元祖のえりか！」

「ムキイイイイ!!」

普段なら、えりかがからかう対象のつぼみに、逆にからかわれたえりかは、変顔を浮かべながら悔しそうな表情を浮かべた・・・

第七十話：少女達の冒険！（後編）

完

## 第七十一話：ポツポの作戦！

1、プリキュアパーティー!?

とある大きな城の中で、黒いドレスに身を包んだ王妃が鏡の前に佇んで居た・・・

「鏡よ、鏡！この世界で一番美しいのは・・・だあれ?」

王妃の問い掛けに反応し、鏡が光輝くと、

「はい！それは・・・プリキュアでござる!!」

「プリキュア!?! ござる?・・・プリキュアとは何者!? あたくしは聞いた事も無いわ?」

「最近、この世界に現われた美少女達でござる! 彼女らが居る限り・・・失礼ながら、王

妃様が一番美しいと呼ぶ日は来ないかと・・・」

「な、何ですつてえええ!?!」

王妃は目を鋭く吊り上げ、鏡の精に不満をぶつけた。鏡の精は、プリキュアをこの城に招待し、一気に追放させるのが一番では無いかと助言すると、

「成る程・・・では、プリキュアと呼ばれる者達に、この城への招待状を送る事に致しましょう!」

「では、その役目、拙者にお任せ下され!!」

そう言い残すと、鏡は輝きを失い、元の鏡へと戻った……

王妃の鏡の中に居たのはポップ、ウルルン、オニニン、マジヨリンの四人……

「どうやら上手く行きそうでござるな?」

「白雪姫の王妃は、自分が一番美しくないと気が済まないウル」

「それを利用し、プリキュア達を見付けようとは、流石ポップオニ!!」

「まだ安心は出来ないマジョ……さあ、この招待状に魔法を掛けて……プリキュア達に届けるマジョ!!」

絵本の世界にやって来た四人、白雪姫に出てくる王妃を利用し、プリキュア達を一気に見付け出そうと考えたポップ、ウルルン、オニニン、マジヨリン達、マジヨリンの魔法の力で、手紙が宙に浮かび上がると、絵本の世界に居るプリキュア達へと飛び去った……

「本当は、絵本の内容を変えかねないこんな方法は、使いたく無かったのでござるが……キャンディとも連絡が付かず、ポップは苦渋の判断で、白雪姫のお話を利用した……」

美希、かれん、奏への失言で、三人からキツイお仕置きを受けたタルトは、放心したかのように呆然と虚空を見つめていた。そんなタルトを無視するように、これからどう行動するか話し合う四人は、



「シンデレラなら・・・やっぱりお城の舞踏会に行かなければ、物語は進まないわね」  
「確かに・・・このまま此処に居ても意味は無いでしょうね」

かれんの言葉に美希も同意し、お城に向かおうとしたその時、四人の下に光輝く手紙がゆらゆらしながら落ちてきた。四人は不思議そうに手紙を見つめながら、

「シロップから・・・って事でも無さそうね？」

「プリキュアパーティーの招待状!？」

手紙が届いた事で、かれんはシロップからかとも思ったものの、捕らわれているシロップが、手紙を届ける筈も無いと自問し、中身を見た美希は、プリキュアパーティーという文字に困惑した。

「差出人は・・・ポップ!？」

「どういう事!？ポップはメルヘンランドに居る筈じゃ?？」

差出人の名を見たあゆみは、ポップと書かれていた事に思わず驚き、奏も、ポップはメルヘンランドに居る筈なのにと戸惑いを見せた。これは罠!？そう考えた四人であったが、

「もしかしたら・・・浚われたキャンディが、ポップに助けを求めたとか?？」

「それなら・・・あたし達をプリキュアパーティーに何て招待するかしら?？」

あゆみの言葉に、美希は小首を傾げ疑問視するも、少し思案したかれんは、

「何れにしろ、みんなと合流出来る可能性が高いのは事実……行ってみましょう!!」

罠の可能性はあるものの、みんなと合流出来る可能性が高いのもまた事実、かれんはそう判断した。かれんの提案に、美希、奏、あゆみも同意し、チラリといまだに放心しているタルトを見た美希は、

(ちよつとお仕置きをし過ぎたかしら?)

「タルト、もう怒らないから……一緒に行きましょう! みんなと再会出来るかも知れないわよ?」

ニッコリ微笑んだ美希だったが、タルトはその笑顔に恐れおののき、壁に背もたれながら嫌々をする。あゆみはそんなタルトを見て、

(美希さん、かれんさん、奏さん……タルトにどんなお仕置きしたんだろう?)

その現場を、三人の後ろ姿で確認出来なかったあゆみは、思わず苦笑した……

## 2、みゆきVSフック船長

ポップ達が届けたプリキュアへの手紙は、なぎさ達、咲達、のぞみ達、つぼみ達、ラブ達、響達、あかね達の下へと届いていた……

皆一様に、ポップからのプリキュアパーティーの招待状を受け取り訝しんだものの、

仲間達と再会出来る可能性を優先し、手紙に導かれるままパーティー会場へと向かって行った……

だが、結界の中心部、魔王城近くに居るみゆきの下へ、手紙が届く事は無かった……戻って来たみゆき宛の手紙を見て、ポップ達四人の表情は強張っていた……

「他の皆の衆の下には、手紙は届いたようでごさるが……みゆき殿の下に届かなかったとは……」

「みゆきの身に、何かあったんじゃ？」

心配そうな表情を浮かべたウルルン、オニニンとマジヨリンも同意し、

「ポップは、他のプリキュア達が来るのを、この城で待ってるマジヨ！あたしと、ウルルン、オニニンは……みゆきの所に行ってみるマジヨ!!」

「何と!?!それは危険でござる!この世界に何が起こっているか、拙者達には全く分からないのでござるぞ!!」

三人が、ウルフルン、アカオーニ、マジヨリーナの時のような力を持つて居るならいざ知らず、今のウルルン、オニニン、マジヨリンだけを向かわせる訳にはいかないとポップが告げる。ウルルンとオニニンはションボリと落ち込んだものの、マジヨリンは、  
「ポップ、それは大丈夫マジヨ！あたしに考えがあるマジヨ!!」

「そこまで言うなら……分かったでござる!他のプリキュア殿達と合流次第、それがし

も向かうでござる!! 三人共、気をつけるでござるぞ!!」

ポップは、三人の固い決意を感じ取り、三人がみゆきの下へ向かう事を認めた。マジョリンは、ウルルンとオニニンに、赤いキャンディを渡すと、

「ウルルン、オニニン、もしもの時は……このキャンディを舐めるマジョー!」

「舐めたらどうなるオニ?」

「また、変な味がするんじゃない?」

嘗て、納豆餃子飴を舐めた時の事を思い出したウルルンだったが、マジョリンは意味深な笑みを浮かべると、

「それは後のお楽しみマジョ!!」

こうして、三人は乗ってきた絵本の中に入ると、みゆきを探しに飛び立って行った:

フック船長に浚われた、キャンディ達やネバーランドの子供達を救うべく、魔王城近辺にやって来たのは、みゆき、牛魔王、金角、銀角の四人、海賊船のマストの上で辺りを警戒していたフック船長の手下から、何者かが近付いて居る事を聞かされたフック船長は、

「野郎共、宴は終りだ! さあ、客人を盛大に出迎えてやんな!!」

「オオオオ!!」

手下達は、勇ましく雄叫びを上げると、剣を手に取り、臨戦態勢に入った。一同がみゆき達に気を取られたのを見たピーちゃんは、物陰から徐々に、捕らわれたキャンディ達の方へと近付いて行つた……

「見えた!あの船にキャンディやニコちゃん達が……」

「どうやら、向こうさんに気付かれたようだけ……」

フック船長の船が目視出来る距離まで近付いたみゆき達、牛魔王は船の慌ただしい様子を見て、自分達が近付いて居る事が相手にバレた事を悟る。牛魔王は、金角、銀角に目で合図を送り、

「お前は、仲間を助けに行つてきな!雑魚共は、俺達が引き受けた!!行くぜ、金角!銀角!  
!」

「オオ!」

「うん!ありがとう……牛魔王、金角、銀角」

みゆきに手を上げた三人は、乗っている雲を急降下させみゆきと距離を取つた。牛魔王達は、みゆきの行動を援護するように、迎え撃つ海賊達と戦闘に突入した。絵本の世

界で戦う彼らは、向こうの世界で戦って居た時より、強さを増して居るように、みゆきには感じられた。みゆきは三人の意を汲み、

(三人共、お願い・・・キャンデイー！ニコちゃん！みんな、今助けに行くからね!!)

船目掛け上空から下降したみゆきは、その視線の先に、マストに登りこちらを見つめるフック船長が居る事に顔色を変えた。

「アアハハハハ！この俺様の宝を狙うとは小賢しい・・・返り討ちにしてやる!!」

フック船長はレイピアを抜き、みゆきに剣先を向けて威嚇する。変顔浮かべたみゆきは、

「ど、ど、どうしよう!?!プリキュアになれない今の私じゃ・・・」

プリキュアになれるのならまだしも、星空みゆきのままでフック船長と戦えるのか？みゆきは困惑する。だが、みゆきの姿をジッと見たフック船長は激しく動揺しだし、

「ゲツ!?!誰かと思ったら・・・ピーターパンだったのか?ピーターパン!今日こそ決着付けてやる!!」

何度も戦い、右手を失う切っ掛けになった憎むべき存在ピーターパン・・・

今度こそはリベンジしてやると、フック船長は動揺を抑え、みゆきに勝負を挑みだした。レイピアを構え、みゆき目掛け突き進んでくるフック船長、みゆきも腰に付いた細身の剣を抜き応戦するも、素人同然のみゆきに、フック船長の剣捌きを躲すのは難しく、

何度も危うい所で難を逃れた・・・

この絵本の世界に來た時、何故かピーターパンになっていたみゆきではあるが、絵本のピーターパンのように動ける筈も無かった・・・

「どうした、ピーターパン!? 寝不足か? それとも、この俺様が強くなりすぎすぎちまつたか? アアハハハハ!!」

みゆきの無様な姿に、フック船長は、今日こそ積年の恨みを晴らせると高笑いを浮かべた。その笑い声に吊られるように、上を見上げたキャンディ達、ピーターパンが助けに來てくれたと勘違いした子供達が、みゆきがフック船長と戦う姿を見て目を輝かせた。

「ピーターパン! 頑張れええ!!」

「みゆきいいい! 頑張るクルウウウ!!」

「でも、不味いニャ・・・」

「みゆきがピンチロプ! でも、こんな状態じゃ・・・」

「プリー・・・」

みゆきに声援を送る子供達やキャンディだったが、ハミイ、シロップ、シフォンは、フック船長に押されているみゆきの姿を、心配そうに見つめていた。縄に縛られた一同、シフォンは何度か超能力を使おうとするも、不思議な力で封じられていた。その

時・・・

「ピーイイ!」

妖精達の背後で小さく鳴き声が聞こえ、何事かと振り返った一同に、ピーちゃんは笑みを浮かべると、嘴を器用に使い、一同を捕らえているロープを懸命に切り始めた・・・

「ピーちゃん! ありがとニャ!!」

「ありがとクルウ!」

ハミイが、キャンデイが解放され、続いてシロップの縄を切り始めるピーちゃん、キャンデイは、目の前に転がるプリキュア達の変身アイテムからスマイルパクトを手に取り取る、

「みゆきいい! 此処にスマイルパクトがあるクルウ!!」

「キャンデイ! 良かった、他のみんなも無事で!!・・・あれ、ニコちゃんは?」

「ニコは、あのお城の中クル!」

「ニコちゃんが!?・・・分かった! そこに私のスマイルパクトがあるの?」

みゆきはマストをポンと蹴り、舞うようにキャンデイ達の下に舞い降りようとする、顔色変えたフック船長は、

「何を企んでやがるか知らねえが・・・そうはいかねえ!!」

フック船長は、マストからぶら下がるロープを伝い、みゆきより早くキャンデイの前



に飛び降りた。妖精達が、子供達が大騒ぎする中、フック船長は、キャンディからスマイルパクトを奪うと、

「こんなもの・・・こうしてやるうう!!」

「な、何を!? 止めてえええ!!」

フック船長は、大砲にスマイルパクトを詰めると、みゆきの絶叫をもとめせず、上空目掛け発射した。だが、瞬時に反応したピーちゃんが上空に舞い、スマイルパクトをキヤツチすると、みゆきに届けるべく降りてくる。

「アアーこのくそ鳥!! シツシ!!」

レイピアで威嚇し、みゆきに近づけさせないように試みるも、ピーちゃんは巧みにレイピアを躲し、みゆきの下にスマイルパクトを届けると、ハミイと共に仲間達の縄を再び解き始める。

「ピーちゃん、ありがとう! これさえあれば・・・プリキュア! スマイルチャージ!!」

みゆきの姿がプリキュアへと変化し、フック船長も、捕らわれて居た子供達も、思わず呆然と目の前で起こる光景を眺めた。

「キラキラ輝く、未来の光! キュアハッピー!!」

変身を終えたハッピーが、フック船長に身構えた!!

「何だ!? ピーターパンかと思ったら・・・偽物かあ?」

「ピーターパンじゃなああい……」

「何だよ、ガツカリさせて……」

「偽物だった何て……応援して損した」

フック船長が、子供達が、みゆきがハッピーに変身すると、ピーターパンでは無かった事で、ハッピーに非難の声が沸き上がる。ハッピーは口を尖らせると、

「私……最初からピーターパンだって名乗って無いよ!ハッピーっ……」

変顔しながら、不満そうにフック船長、子供達を見つめるハッピーだった……

ニコは、魔王城の中で、眼下で起こっているハッピーとフック船長の戦いを見つめていた。ハッピーは、自分がこの中に捕らわれていると思ってるのか、今助けに行くからと大声を出して居た……

(何よ!今まで私の事何か忘れてたくせに……でも)

もう一度窓から顔を出し、チラリとハッピーの勇姿を見たニコ、思い返せば、小さい時のみゆきと同じ、他人を気遣う優しさを失わないみゆきの姿を見て、ニコの心の中の蟠りが、少し溶け出していた。魔王はそんなニコの姿を覗き見て、

(ニコ……お前は、記憶を無くし、絵本の世界を彷徨っていた俺に優しく接してくれた

カゲ！そんなニコを悲しませたみゆきに・・・思い知らせてやるカゲエ!!)

ニコは、心の底からみゆきを憎んでいる訳では無い、自分の存在を忘れていたみゆきを、懲らしめてやりたい・・・

ただ、それだけだった・・・

だが魔王は、ニコの思いを歪んで受け止めていた・・・

魔王は地下に赴くと、地下室の中には、孫悟空や桃太郎達、本当の絵本の主人公達が倒れ込んでいた。魔王は主人公達に自分の影を潜りこませると、主人公達はゆっくり目を開け、目が吊り上がり、その肩からは黒い翼を生やしていた。

「俺様の留守に、偽物が良いようにしてくれたようだなあ」

「ネバーランドには・・・子供が居れば良いのさ！それ意外の奴らは・・・皆殺しさ!!」  
「日本一は、俺一人が良い！偽物め、覚悟しろ!!」

「私の王子様を奪おうだ何て・・・許せない!!」

三蔵、沙悟浄と共に孫悟空が、悪意に満ちた表情のピーターパンが、そして、桃太郎、シンデレラなどの物語の主人公達が、皆悪意の表情を浮かべ立ち上がった!!

「さあ、お前達！みゆきに、みゆきの味方をする奴らに・・・思い知らせて来るカゲエエ!!」

魔王の号令の下、絵本の主人公達は、部屋から飛び出して行った・・・

ハッピーは、その事実をまだ知るよしも無かった・・・

第七十一話：ポップの作戦!

完

## 第七十二話：魔王の影

## 1、集いし少女達

白雪姫や王妃が住む城・・・

白い外見からは優雅さが漂うものの、何処か陰気な雰囲気が高い、不気味さも感じられた。城の側には立派な街並みが広がっていたものの、外壁から外に出れば、小高い丘があり、その側には木々が生い茂っていた。その側には小さな小川も流れていた。数キロ先には大きな森が、後方には山々が聳える。交通に利便がありそうな城だった・・・

その周辺に、ポップが送った手紙に導かれ、続々集結する少女達が居た・・・  
最初に到着していたのはラブ、せつな、ムーブ、フープ、ポプリ、それから少し経つて、かれん、美希、奏、あゆみ、そして、あゆみに抱かれたタルトがやって来た。ラブとせつなは嬉しそうに駆け寄り、

「美希たん！かれんさん！奏ちゃん！あゆみちゃん！」

「タルト・・・何か元氣無いわね？」

あゆみに抱かれ、疲れ切った表情をしているタルトを見て、せつなは不思議そうに小首を傾げると、あゆみは、せつなを見て苦笑を浮かべた。

「ラブ！せつな！……ってラブ……随分大胆な格好してるわね？」

「その格好で此処まで来たの？」

上下白い貝殻ビキニ姿のラブを見て、目を点にしながらラブに問い掛ける美希とかれん、奏とあゆみは、ラブのスタイルの良さを羨ましがな視線を浴びせると、ラブは少し照れながら、

「いやあ、気付いたらこんな格好だったもんで……せつなに服を分けて貰おうとしたんだけど……」

「冗談じゃ無いわ！私だって、この服あげちゃったら……下着だけ何だから」

「美希たん、ブルンに頼んで、服を出してくれないかなあ？」

「ゴメン！あたし、リンクルンを無くしちゃったみたいで……」

「エツ!?美希たんも?」

「妙ね!?……私とラブも、絵本の世界に来てリンクルンを無くしてるの!」

「本当なの?私も、奏、あゆみも、変身アイテムを無くしてるの!何か裏がありそうねえ……」

ラブ達、かれん達も変身アイテムをお互いに無くしていると知り、かれんは、これは何者かが仕組んだ可能性が高い事を一同に知らせた。ひよつとすると、他の仲間達も変身アイテムを無くしているのでは無いかと、かれんは推測する。みな真顔で事の重大さ

に気付く困惑するも、ラブは自分の容姿の方が気になるようで、

「それも気になるけど・・・私は、この格好を真っ先に何とかしたいかなあ！美希たん、その衣装なら、上着一枚ぐらい・・・私にくれない？」

「別に構わないけど・・・今以上に変な格好になるわよ？」

美希は、モデルをしているだけあって、今のラブの格好に、自分達の上着を着せても、下半身はそのままの状態で、今の上下貝殻ビキニ姿より変な格好になる事をラブに助言する。ラブは大いに悩み、ウーソンと考え込んで居ると、

「かれんさん！ラブちゃん達も！ヤッホー!!」

「奏！あゆみちゃんも・・・良かった！再会出来て!!」

仲間の姿を見付けたのぞみと響は、かれん達に駆け寄り声を掛けると、かれん、奏も嬉しそうに一同との再会を喜んだ。

「のぞみ！こまち！りん！満に薫・・・」

「響！エレン！なお！無事で何よりだわ!!」

「いやあ・・・無事と言えば無事ですけれど」

「死ぬかと思つたわよね・・・」

見知った顔を見て安堵したなおとエレンが、苦笑混じりにポツリと呟き、奏は怪訝な表情を浮かべると、

「死ぬって……何かあったの?」

「まあ、色々怖い目にね!怖い目と言えば……タルトに何かあったの!?奏を見て怯えるけど?」

チラリとあゆみに抱かれているタルトを見たエレンは、時折奏を見ては、怯えたような視線を向けるタルトを見て小首を傾げた。奏は少しムツとしながら、

「失礼ねえ!私を見てだけじゃ無いわよ!!そもそも、タルトがいけないのよ!私達、シンデレラの世界に迷い込んでただんだけど、私やかれんさん、美希さんを見て、タルトったら、意地悪な役にピッタリだって笑ったのよ!酷いでしよう?」

「それで、かれんや美希と一緒に、タルトにお仕置きした……って事?」

「どうりで……タルト、元気が無いと思ったわ!」

奏の説明を聞き、エレンはぐったりしているタルトを見て、どんなお仕置きしたのかしらと苦笑し、せつなは納得がいったようで、タルトを見ながら何度も頷いた。

「あゆみ、ありがとう!」

「いえ……ほら、タルト!せつなさんが迎えに来てくれたよ!!」

せつなは、あゆみからタルトを抱き上げ、苦笑しながらタルトの頭を撫で優しく声を掛けると、タルトはオイオイ泣きながら反省した。タルトも、本心で美希、かれん、奏の事を意地悪だと思って居る訳では無く、三人の優しさも十分承知しては居たが、元来



お調子者のタルト、あの場のノリでついいうっかり美希、かれん、奏をからかったのが後の祭りだった・・・

「ベリーはん、アクアはん、リズムはん、わいのせいで、三人には嫌な思いさせて・・・スンマセンでした！この通りや！勘弁してやあ!!」

せつなの腕の中から飛び降りると、タルトはその場で土下座し、三人に改めて謝罪した。三人は、もう気にしてないからとタルトを許し微笑むと、タルトはようやくホッと安堵の表情を浮かべた。

響も苦笑を浮かべながら、

「それはタルトが悪いね・・・かれんさんや美希さんは意地悪じゃないし、奏も、口五月蠅いだけでもんねえ？」

「響・・・フォローになつてないんですけど?」

「エツ!?アハハハ!」

膨れっ面した奏に見つめられ、響は思わず笑って誤魔化した。

ムーブとフープは、満と薫を見付けるや、涙目になりながら二人に飛びつき、満と薫も、嬉しそうに互いのパートナーを抱きしめた。

「ムーブ!フープ!」

「会えて良かった・・・ラブ達と一緒にだったのね？」

「ラブ、せつな、ムーブとフープを守ってくれてありがとう！」

「どう致しまして！ムーブ、フープ、再会出来て良かったね!!」

満と薫に感謝されたラブとせつなも、嬉しそうにしているムーブとフープを見て、自分の事のように喜んだ。いつきに会えず、シヨンボリしているポプリに気付いたせつなは、

「ポプリ、大丈夫！直ぐにいつきに会えるわ!!」

「本当でしゆか？」

「エエ！それまで、私達と一緒に居ましょう!!」

「ハイでしゆ!!」

ポプリは嬉しそうに返事をし、立ち直ったタルトが、ポプリの面倒を見てくれて、せつなはホッと安堵するのだった。満と薫は、改めてマジマジラブの容姿を見ると、

「それはそうと・・・ラブ、その格好は何？」

「変な趣味にでも目覚めたの？」

「こんな格好が趣味って・・・どんな趣味よお!?私、人魚姫の話に迷い込んだようで、気付いたらこんな格好してただけなの!!」

満と薫に突っ込まれ、ラブは頬を膨らませていると、山道の方角から聞き覚えのある

大きな声が聞こえてきた。

「満！薫！みんなああ!!」

満面の笑みを浮かべながら手を振って近付いて来る咲、舞、くるみ、シプレ、コフレ、満と薫は咲の格好を見てキョトンとした表情を浮かべ、

「咲！舞！くるみ！．．．咲、あなたのその格好は!?!」

「舞やくるみの格好は兎も角．．．」

「満！薫！のぞみ達も、ラブ達も、良かった！みんなと会えて!!アハハハ！どうやら私、かちかち山のお話に迷い込んだらしく、この世界では狸と思われてるらしくて．．．」

「それでそんな格好してるのね．．．」

(でも．．．違和感を覚えないのは何故かしら!?!)

咲の説明を聞いた満と薫、二人は咲の狸のような着ぐるみ姿を見て、違和感を覚えなかった．．．

ポプリは、シプレとコフレを見付けると目を輝かせ近寄り、シプレとコフレも、ポプリと無事に再会出来た事を喜び合った。

徐々に増えていく仲間達．．．

一同は無事に再会出来た事を喜び合っていると、せつなの表情が突然強張り、

「な、何かしら!?!みんな、見て！上空から猛スピードで雲と．．．龍が飛んでくるわ!!」

「エエエエ!? 蜘蛛?」

「なお、大丈夫よ! 虫の蜘蛛じゃないから!!」

「ほ、本当!? 良かった!」

せつなが発した、雲と言う言葉に敏感に反応したなおは、隠れるようにエレンの背後に移動し、一同を苦笑させる。

「あれは・・・なぎささん、ほのかさん、ゆりさんだわ! 龍に乗ってるのは・・・ブツキーとひかり、やよいとれいかみたい!」

目が良いせつなが、真つ先になぎさ達に気付き、一同に教えた。一同は上空から近付いて来るなぎさ達に手を振ると、なぎさ達も気付き、

「みんなああ! 無事で何より!!」

「ラブちゃん、美希ちゃん、せつなちゃん、みんなと再会出来るって、私信じてた!」

「なお! 皆さんもご無事で何よりです!!」

なぎさ、祈里、れいかが仲間との再会を心の底から喜んだ。祈里は、送ってくれた玉龍の顔を撫でながら、

「送ってくれてありがとう! 玉龍さんが、三蔵法師さん達と再会出来るって、私信じてる!!」

「ありがとうございました! お気をつけて!!」

「うん！龍さん、ありがとう!!」

「道中気をつけて下さい!!」

祈里、ひかり、やよい、れいかが次々感謝の言葉を述べ、玉龍はそれに応えるように一鳴きすると、再び上空に舞い上がり、三蔵法師一行を探しに向かった・・・

「何あれ!?!龍って事は・・・龍の子太郎!?!」

「いいえ、あれは西遊記に出てくる白馬の本当の姿！玉龍よ!!」

「私達、玉龍には色々お世話になったわね!」

龍を間近で見た一同は驚き、のぞみは、小さい頃読んだ事がある、龍の子太郎に出てくる太郎の母龍なのか聞いてみると、ゆりとほのかは、西遊記に出てくる白馬の方だとのぞみに教えた。

「ひかりいい！なぎさああ！ほのかああ!」

「咲！舞！何処ほつつき歩いてたラピ?」

なぎさ達、咲達と再会出来たポルンとルルン、フラツピとチョツピは大いに喜び、特にポルンとルルンはひかりに抱き付きはしゃいでいた。咲は、嬉しそうになぎさに近付くと、

「良かった！私と同じ尻尾仲間が居て!!」

「私達さあ、この世界でも西遊記の格好にさせられて・・・咲も尻尾があるという事は?」

「私はかちかち山の狸みたいで……」

共に尻尾を見せ合い苦笑しあうなげさと咲だった……

「ブツキー……その格好、桃太郎なの？」

「うん、そうみたい！ラブちゃんのその格好……」

「アハハハ！私は人魚姫に……」

「あたしはシンデレラの意地悪な姉に……」

「私は浦島太郎に……」

「「なつちやつたようで」」

四人揃ったものの、互いの衣装を見て苦笑するラブ達、なおは、やよい、れいかと再会出来た事を喜び、

「れいか！やよいちゃん！二人共、無事で良かった!!れいかはどこかのお姫様で、やよいちゃんは……アハハ、金太郎だね！」

「もう、なおちゃん！笑わないでよ……あかねちゃんには、お腹抱えて笑われたし……」  
膨れっ面したやよいは、あかねに大笑いされた時を思い出し、なおは、やよいがあかねに会ったような言葉を発した事に驚いたようで、

「エッ!?あかねに会ったの?あゆみちゃんも居るし、後はみゆきちゃんとあかねだけだと思つて……ヒイイイ!!」

れいか達と再会し、喜んで居たなおだったが、首筋を何か MOZO MOZO 這い回り、顔面蒼白になると、

「む、虫いい!? だ、誰か取ってえええ!!」

「ちやうちやう、虫や無い! ウチや! あかねやでえ!!」

「エツ!? あかね?」

直ぐ側であかねの声が聞こえ、なおは恐る恐る首筋に手を当てると、ピヨンとなおの腕にあかねが飛び乗り、それを見たなおは目を点にして驚き、

「あ、あかね!? 何で小人に?」

「ウチ、一寸法師になったさかい、こんな小さくなったんやあ!」

「エツ!? あかねが一寸法師なの?」

「見たいやなあ・・・シシシシ」

小さい姿にも慣れたのか、あかねは今の自分の姿を少し楽しんでるように見受けられた。それとは逆に、アコは早く元の姿に戻りたいようで、

「ねえ、もう良いでしょう? 打ち出の小槌で元の姿に戻してよ!」

「エエ!? アコのその姿・・・」

驚愕する響、奏、エレン、アコは眼鏡を直しながら、自分は親指姫になった事を三人に伝えた。あかねもアコの言葉に頷き、

「せやなあ．．．れいか！頼むわ!!」

「そうですね．．．では、参ります!!」

打ち出の小槌を手持って身構えたれいか、「大きくなあれえ!!」と気合いを込めながら小槌を振ると、あかね、アコの姿が、徐々に大きくなり元の姿へと戻り、思わず見て居た一同からオオ!と歓声が沸き上がった。

「ねえねえ、打ち出の小槌って、服も出せないかなあ?」

ラブは、目を輝かせながられいかに聞いてみると、れいかは少し考え、

「確かに、打ち出の小槌は、宝物を出した事もありましたね!」

「ええ、服ぐらいなら簡単に出せるんじゃないかしら?」

こまちもれいかの推測に同意すると、ラブは益々目を輝かせ、

「本当!?お願い、何でもいいから服を出してみて!!」

「分かりました!やってみましょう．．．服よお、出ろお!!」

再び打ち出の小槌を手に取り、身構えたれいか、打ち出の小槌を振ると、胸元に道と大きく黒字で書かれた、白いTシャツが現われ、再び一同が響めいた。

「ヤツタ〜!服が出た!!」

「でも、その文字．．．何か意味があるのかしら?」

服が出た事で大喜びのラブ、美希は、道という文字が気になったようで小首を傾げる



と、なおとあかねが苦笑を浮かべながら、

「多分、打ち出の小槌を振った、れいかの影響が強く出たんじやないかと・・・」

「道やしな」

「ハイハイ！次は私にやらせて!!」

やよいは、れいかから打ち出の小槌を受け取ると、一同の脳裏に嫌な予感が漂い始めた・・・

「服よおおお！出ろおおお!!」

ポーズを取り、思いつ切りジャンプしながら打ち出の小槌を振ったやよい、案の定現われたのは、何かの特撮ヒーローのようなピンク色の衣装、

「また分かりやすいボケをかますわねえ・・・」

最早突っ込むのも面倒とばかり、呆れ顔のりんが、やよいが出した衣装を見て呟く、衣装を手に取り、ニコニコしながらラブに渡そうとするやよいに、ラブは困惑する。せつなは肘でラブを突つつき、

「折角やよいが出してくれたから・・・着てみれば?」

「マジっすか!?!流石にこれは・・・」

貝殻ビキニ姿も恥ずかしいが、この格好も十分恥ずかしいと思ったラブ、やよいはポーンと手を叩くと、再び打ち出の小槌を振り、小槌からラブの為に出したヒーロー衣装に

似た、赤、青、黄の衣装が現われた。

「これで、一人じゃないです!!」

ニコニコしながらどうぞと美希、祈里、せつなにも衣装を差し出すやよいに、

「そういう問題じゃないと思うわ・・・」

「あたし達にも・・・着ろって事!?!」

「桃太郎の格好も恥ずかしいけど・・・そっちはもつと嫌かも」

何やら自分達もラブのとばっちりを受けそうで、せつな、美希、祈里も困惑の表情を浮かべた。

「美希たん、ブツキー、せつなが着てくれるなら・・・着ても良いかなあ!?!」

「絶対・・・嫌!!」

「私も・・・パス!やよいさん、折角出してくれたのにゴメンねえ」

美希、祈里、せつなが一緒に着てくれるなら、その衣装でも我慢出来ると思ったラブであったが、三人は即座に却下した。やよいは残念そうにしていたが、ポンと手を叩き、  
「じゃあ、こつちなら・・・服よおお!出ろおお!!」

次にやよいが出した衣装は、悪の女幹部が着るような、胸を強調し、臍回りが大胆に出ている黒いボンテージ衣装だった。一同は、やよいの暴走を呆然と見つめていた・・・  
「ハハ・・・誰か突っ込んで上げて!」

「呆れてものが言えないよね」

突っ込む事も拒否したりんが、誰かに突っ込みを頼み、アコは呆れたように呟いた。ラブと美希は、せつなを見つめると、

「せつなが、イース時代に着てた・・・」

「そういえば、私達が加音町のハロウィンパーティーで・・・」

「違う！絶対違うわ!!」

「・・・」まで露出の多い服装じゃ無かったとせつなが首を振る。あかねは溜息を付くと、

「やよい！エエ加減にせんかい!!」

「エエ!?だつてえ、ラブさんが服を欲しがってたし・・・じゃあ、私達で着る?」

そう言うと、やよいは黄、あかねには赤、れいかには青、そして、なおには何故かピノクのヒーロースーツを手渡した。やよいはあゆみを見つめると、

「あゆみちゃんも一緒に・・・」

「アハハハ・・・わ、私は良いわ!」

引き攣った笑みを浮かべながら、あゆみはさり気なく拒否をした。

「ウチも、こんなん要らんわ!」

「あたしも・・・遠慮するよ!」

「私も・・・今回は辞退させて頂きますね」

「エエ!?じゃあ、私だけでも・・・」

(ハアア・・・みゆきちゃんが居たら、一緒に着てくれたのになあ・・・)

あかね、なお、れいかもやよいに服を返し、やよいは、みゆきが居てくれたら、一緒に着てくれた筈なのにと心の中で残念に思いつつ、自分のシンボルカラーである黄色い衣装を手に取った。その間に、ラブは美希に頼み込み、打ち出の小槌で何時も着ているような服を出して貰い、ホッと安堵するのだった・・・

一人嬉しそうに着替え始めるやよいを、冷めた視線で見つめる一同だったが、

「美希お姉様! またお会い出来て光栄ですわ!!」

「お、お姉様!」

名前を呼ばれた美希は、そんな呼び方で自分を呼ぶ人物が思い浮かばず、チラリと声のした方を見ると、そこには、まるでお姫様のように礼儀正しく美希にお辞儀をし、ニコリ微笑むえりかの姿があった。美希は目を点にしながら困惑し、

「えりか・・・よねえ!? 無事で何よりだけど・・・何、お姉様って?」

「美希姉上!」

「・・・!?」

背後から再び名前を呼ばれた美希が振り返った瞬間、美希の目は再び点になった・・・何故なら、振り向いた美希の視線の先には、もう一人えりかが居たのだから・・・

美希は、自分の目がおかしくなったのかと、ゴシゴシ目を擦ってみるも、やはりえりかは二人だった。更に背後から声が掛かり、

「美希姉え！その二人はあたしの偽物で・・・」

慌てたようにさらにもう一人のえりかが現われ、美希は、三人のえりかを見つめ呆然とする。金のえりかか銀のえりかは、偽物と呼ばれた事に憤慨し、

「まあ、偽物だ何て失礼ですわ!!」

「いかにも・・・このような下品な輩に言われたく無い!!」

「誰が下品よ！誰が!!」

言い争う三人のえりか・・・

「何・・・これは!？」

「えりかが・・・三人!？」

美希が、せつなが、そして、一同が呆気に取られる・・・

一同が呆然として三人のえりかを見つめていると、苦笑しながらつぼみ、いつき、うららが現われ、

「皆さん！合流出来て何よりです!!」

「いちゆきいい!!」

「ポプリ！アハハハ、無事で良かった!!」

「皆さん、もう着いていらしたんですねえ！」

三人のえりかを見ても平然としているつぼみ、いつき、うらら

一体これはどういう事なのか？・・・矢継ぎ早に三人に説明を求める声が飛んだ。三

人に近付いたシプレとコフレ、えりかのパートナーであるコフレは心底驚愕し、

「つ、つぼみ・・・えりかは一体、どうして三人になつてますっ？」

「まあ、何と申しませうか・・・」

「僕達は、金の斧と銀の斧の世界に迷い込んだみたいで・・・」

「女神様が住む湖に、えりかちゃんがかうっかり落つこちて・・・」

「二色々あつて、三人に増えちゃったんです」

そう言うと、言い争う三人のえりかを見て苦笑するつぼみ、いつき、うらら、美希は困惑し、

「ちよつと待って！ももかさんや、えりかのご両親に、何て説明すれば良いのよ？」

「ももかなら・・・最初こそ驚くかも知れないけど、えりかが驚かそうと思つて、そつくりな子でも連れて来たんだらうと、大笑いしそうでもあるわね」

「大丈夫！元の世界に戻れば、この世界のえりかさん達は消えると思うわ！」

「ええ、私達が絵本の世界で戦つた時もそうだったし」

驚きながら三人のえりかを見たゆりは、親友であるももかなら、最初こそ驚くものの、

こんな場面を見たら、笑いだすかもしれないと美希に語る。こまちとかれんは、そう心配しなくても、元の世界に戻れば消える筈だと美希に伝えた。満と薫は、三人のえりかをジッと見つめると、

「えりかが三人になる何て・・・世も末ね!」

「えりかが三人も居たら・・・世界が滅ぶかも知れないわね?」

そう言うのと、顔を見合わせ思わずクスリとする満と薫、元祖えりかは目に炎を点し、「ちよつとおお!ドサクサに紛れて何て事言うのよ!!」

「満、薫、それは言い過ぎよ!」

そう言つてえりかに助け船を出したのはせつな、えりかは腕組みしながらウンウン頷き、

「せつなさん!・・・でしょう?でしょう?もつと二人に言つてやつて!!」

「せめてえりかが十人は居ないと・・・世界は滅びないわ!!」

「だよねえ・・・つて、違うでしょうがああ!!」

「せつな・・・フオローになつてないわよ」

えりかがムッキイイと変顔浮かべながら怒り出し、困惑気味的美希が、せつなを見て呆れたように眩く、そんなえりかを、つぼみが苦笑しながら宥める。りんも苦笑しながら、

「満、薫、せつな、あんた達、突っ込み難いボケは止めて！あんた達が言うど……本気で言ってるのかと思うから」

「でも、驚いたよねえ……えりかちゃんが三人になってる何て」

「本当、本当、所で……三人のえりかの額に、金、銀、元祖って文字があるけど、これは何?！」

のぞみも三人のえりかを見て驚愕し、なぎさものぞみの言葉に同意する。なぎさは、三人のえりかの額に書かれている文字に付いて、うらら、つぼみ、いつきに聞いてみると、顔を見合わせ、笑みを浮かべた三人は、

「容姿だけでは判断しにくいので、分かりやすいように、金のえりかちゃんには金、銀のえりかちゃんには銀、本物のえりかちゃんには、元祖と書いてみました!!」

少しドヤ顔で、分かりやすいでしょう?と一同に聞くうららに、一同は再び三人のえりかを見て苦笑した。

そんな一同の下へ、鳥のように何か羽ばたきながら近づいて来た。鳥は、瞬時にポップの姿に変わり、

「皆の衆!どうやら無事来てくれたようでホッとしたでござる!!」

「ポップ!!」

目の前に現われたポップを見た一同は、招待状は何者かの罨では無く、確かにポップ



が出したものと理解した。だが、何故ポップはプリキュアパーティーなどと題し、自分達をこの場所に集めたのか分からなかった・・・

一同を代表するように、奏とほのかがポップに問い掛け、

「ねえ、ポップ・・・このプリキュアパーティーの招待状って、どういう事なの!？」

「私達、ポップはメルヘンランドに居るとばかり思ってたんだけど・・・」

「それは、こちらの方が皆の衆に聞きたい事でごさる! 皆の衆・・・何故絵本の世界に!!  
これを見てみるでござる!!」

ポップが取り出したのは、数冊の絵本・・・

ポップに渡され中身を見た一同は、絵本の中の物語に、自分達が関わっている事に驚きを隠せなかった・・・

大暴れして、かぐや姫と親指姫、一寸法師と姫を浚った孫悟空一行と桃太郎、金太郎の話・・・

偽乳の秘密がバレ、狸とうさぎと一緒に逃げ出した鶴の恩返し・・・

お菓子の家を食い荒らしたチルチルミチルと共に、逃げ出したヘンデルとグレーテル・・・

悪魔を欺き、財宝を盗み出した四人組・・・

ペットを虐待するシンデレラ一家・・・

竜宮城で浦島太郎を籠絡し、連れ去った露出狂の人魚姫……

わざと湖に斧や仲間を放り込み、女神を騙した木こり……

そして、牛魔王と金角、銀角を引き連れ、魔王城に乗り込んだピーターパン……

「ちよつと待つて！確かに御殿で暴れはしたけど……私、ひかり達を浚つて何か無いわよ!!」

「こんな話を子供達に読まれたら、私、もう外を歩けない……」

「失礼ねえ！食い逃げ何かしてないもん!!」

「確かに、悪魔は欺いたけれど……私達、財宝何か奪つて無いわ!!」

「な、何でよりによつて、あたし達がタルトにお仕置きした時が載つてるのよ?」

「私、露出狂じゃ無いよ!つて、絵本の中じゃ、私、ずっとこの姿なの?」

「私はちゃんと、金のえりかと銀のえりかは、女神様に遠慮しましたよ!」

なぎさ、舞、のぞみ、こまち、美希、ラブ、つぼみ達は、変顔しながら、この絵本の内容は間違つてると告げる。ポップは困惑気味に、

「皆の衆、ご理解頂けたでござるか?それがし、絵本の世界に何か異変が起こったのではと案じ、こうしてやってきたのでござる……プリキュアパーティーとは仮の姿で、本当は、皆の衆を一堂に集める為の口実でござる!一体、何があったのでござる?」

ポップに聞かれた一同、ゆりとほのかが一同を代表してポップに語り出し、

「私達の世界で行われていた、世界絵本博覧会にみんな来ていたのだけれど、そこに絵本の世界のキャラクター達が現われ、一騒動を起こしたの」

「何とか私達は、その騒動を治めたんだけど、その最中、シロップ、シフォン、ハミイ、フェアリートーン達、そしてキャンデイが、絵本の中から現われた海賊船によつて、絵本の世界の中へ浚われてしまったの！」

「何と!? キャンデイ達が? …成る程、それで皆の衆は絵本の世界へ救出に来たという事でござるか? …」

腕組みしたポツプは、プリキュア達がこの絵本の世界に來た事を理解した。何者かが裏で糸を引いている事も、臆気ながら理解した。 …

ポツプは一同の顔を見て居ると、えりかを見て思わず目を見開き、目をキラキラ輝かせると、

「な、何と!? えりか殿は…分身の術が使えるようになったのでござるか?」  
「な訳あるかい! 金の斧の話の影響で、三人になっただけのようや!」

ポツプのボケに、あかねが思わず突っ込みを入れた。れいかは、今一度ピーターパンの内容を読み返すと、ピーターパンの姿がみゆきになつている事に気付き、

「皆さん、このピーターパンは…どうやらみゆきさんのようですねえ?」

「そうだね…牛魔王と金角、銀角を引き連れ、魔王城に乗り込んだっていうのは気に

なるね……」

なおもれいかの言葉に頷き、魔王城に乗り込んだらしいみゆきの身を案じた。ポップは大いに頷き、

「それでござる！実は、みゆき殿にも招待状は送ったのでござるが……みゆき殿の招待状だけは届かなかったのでござる!!」

ポップの言葉を聞いた一同の表情が見る見る険しくなった。言い争っていた三人のえりかさえも……

「どういう事?!」

顔色を変えたポップに、えりかが詳しい事を聞こうとするも、ポップは首を振り、

「拙者にも、詳しい事は分からないのでござるが、何かの結界の近くに、みゆき殿は居るのでは無かるうか?」

「結界……ひよつとして、私達が変身アイテムを無くした事と関係が!」

険しい表情を浮かべたかれんが、結界を作り出した者こそ、自分達の変身アイテムを奪ったのでは無いかと驚愕する。ポップは、一同がプリキュアに変身出来ないと知るか、

「な、何と!?!皆の衆は現在、プリキュアに変身する事は……出来ないのでござるか?」「私となぎさ、ひかりさん、咲さん、舞さん、満さん、薫さんは、ミップル達やフラッピ

達と再会出来たから大丈夫!!」

此処に居る一同が現在変身アイテムを無くし、プリキュアになる事が出来ないと知ったポツプは驚くも、ほのかは、自分達と咲達は、メップル達、フラツピ達と合流出来た事で、プリキュアになれると伝えると、ポツプはホッと安堵した。

「今、ウルルン、オニニン、マジヨリンの三人が、みゆき殿を探しに向かっているのですが、魔王城とやらに向かっているとすると、みゆき殿やウルルン達の身が危険でござるな、それがし、みゆき殿達を探しに向かうでござる!!」

ポツプの言葉を聞き、顔を見合わせ領き合ったなぎさとほのか、みゆき達の身に危険が迫っているのなら、プリキュアになれる自分達だけでも、みゆきの下に向かうべきだろうと判断した二人、なぎさはポツプを呼び止め、

「待って、ポツプ!私とほのかも行く!!ひかりは、咲達と一緒にみんなと待機してて!!」

「なぎささん、それなら私達も一緒に行った方が良いんじゃない?」

「ウーん、敵の狙いが、私達プリキュアに向けられているとも限らないわ!変身出来ないみんなだけ残しておくのは、得策じゃないと思う、なぎさの言う通り、咲さん達はここに残って居て!!」

「そういう事なら、こっちは私達に任せて下さい!」

ほのかもなぎさの案に同意し、咲に待機するよう頼むと、咲も現状を理解した。複雑

な表情を浮かべていたあかね、やよい、なお、れいか、あゆみは、顔を見合わせると頷き合い、

「なぎささん！ほのかさん！ウチらも一緒に連れてって欲しいんやけど・・・」

「私達・・・みゆきちゃんが心配だもん！」

「変身出来ないあたし達じゃ、足手纏いになるかも知れないけど・・・」

「私達も、一緒に行かせて下さい!!」

「みゆきちゃんの下へ・・・」

「!!!お願いします!!」!!!

頭を下げてお願いするあかね、やよい、なお、れいか、あゆみの心意気を受け取ったなぎさとほのかは頷き、

「分かったわ!でも、私達だけじゃ、あなた達をサポート出来ないかも知れない・・・ひかりさん、やっぱり私達と一緒に行ってくれるかしら?」

「ひかりには、あかね達を守ってあげて欲しいんだけど・・・」

「はい!喜んで!!」

こうして、なぎさ、ほのか、ひかり、あかね、やよい、なお、れいか、あゆみの八人は、みゆきが向かったであろう魔王城目指し、巨大な鷲に変化したポップの背に乗り、飛び去って行った・・・

「なぎささん、ほのかさん、ひかりちゃん・・・みゆきちゃんをお願い！私達も、必ず向かうから!!」

きつと変身アイテムを取り戻し、必ずみゆきの下に向かう・・・  
のぞみは、飛び去ったポップを見送りながら誓いを立てた・・・

## 2、プリキュアVS絵本の主人公達

キュアハッピーへと変身し、再びフック船長と戦うハッピー・・・  
プリキュアに変身した事で、ハッピーはフック船長のレイピアをもともせず、優勢に戦いを進めていた・・・

「こ、この野郎・・・ピーターパン以外にもこんな奴が居やがるとは・・・」

「大人しくみんなの変身アイテムを返してえ！子供達を解放して!!」  
「うるせええ!!」

次第に追い詰められていくフック船長に焦りの色が浮かぶ、

(どうするかあ・・・一時撤退するにしても、俺様の船をこのままにも出来ねえしなあ・・・)  
どうするかと心の中で思案するフック船長、まさかピーターパンの偽物がこれ程強いとは想像していなかった。キャンディは、みゆきに読んで貰ったピーターパンの話所思

い出すと、そつとフック船長の背後に回り込み、

「チクタク！チクタク！」

「・・・ま、まさか!？」

「チクタク！チクタク！」

嘗て、ピーター・パンとの戦いの最中、海に落下したフック船長は、右手をワニに食べられていた。時計をしていた右手を食べられた事で、時計の音、チクタクと聞くだけで、ワニが来たと勘違いし、取り乱す程であった。みゆきからお話を聞かされていたキャンディは、巧みにそれを利用し、フック船長を動揺させた。更に追い打ちを掛けるように、又ウと牛魔王が顔を出したのを見たフック船長は、

「ギヤアアアア！ワ、ワニだああ!!！」

船長としての威厳も何処かへ吹き飛び、フック船長は慌てふためいて船から飛び降り、走って逃げ去って行った。牛魔王は小首を傾げながら、

「何だ、あいつは!?!いきなり逃げ出して?！」

「キャンディ！牛魔王！ありがとう!!！」

ハッピーは二人にウインクし、感謝の言葉を述べた。キャンディは嬉しそうにハッピーに抱き付き、牛魔王は不思議そうに小首を傾げた。

「牛の兄貴！こつちも粗方片付いたぜ!!！」



「これこそが俺様の本来の実力よ!!」

牛魔王に続き、金角、銀角も、フック船長の手下達を蹴散らし、ハッピーに合流した。捕らわれていた妖精達とも無事に再会し、ホッとしたハッピーであった。

「これでみんなの変身アイテムも取り戻せたね!」

大切な仲間達の変身アイテムも、無事取り戻せる事が出来て、ハッピーの表情が和らいだ。早くみんなに届けて上げたいと思いつつも、ハッピーは、自分をピーターパンの偽物だと思い込み、警戒している子供達を見つめると、

「シロップ、お願いがあるの! フック船長に浚われた子供達を、ネバーランドまで送り届けて上げて欲しいんだけど・・・」

「それはお安いご用ロプ」

シロップは、大きな鳥の姿に変化すると、子供達に乗り込むように伝えた。目の前でシロップが変化したのを見た子供達は、大いに驚き、そして喜び、シロップに集まった。ハッピーは、シロップが承諾してくれた事にホッと安堵しながら、不気味に聳え立つ魔王城を見つめると、

「後は、ニコちゃんを助けに行かなきゃ・・・」

そう思った時、魔王城の巨大なドアが、ギイイイと不気味な音を上げながら開かれると、大勢の人影が姿を現わした。シロップに乗り込もうとした子供達も、何事かと興味

深そうに海賊船から魔王城を見つめた。

「あれえ!!何だろう?」

ハッピーは小首を傾げながらジツと見てみると、ハッピーの目がキラキラ輝いた。中から現われたのは、ハッピーが大好きな絵本の主人公達だったのだから・・・

孫悟空、玄奘三蔵、沙悟浄、桃太郎一行、金太郎、浦島太郎、一寸法師、かぐや姫、シンドレラ、人魚姫、アラジンなど・・・そして、ハッピー憧れのピーターパン!!

「どうしよう!こんなに関近で絵本のみんなと会える何て・・・夢みたい!!」

憧れの絵本の主人公達を見て、ウキウキしているハッピーを諭すように、額から汗を垂らした牛魔王は、

「夢なら良かったんだろうがなあ・・・よくあいつらを見て見ろ!!」

「エツ!!」

牛魔王に忠告され、今一度ジツと一同を見つめたハッピーは、世界絵本博覧会を襲ったキヤラクター達同様、絵本の主人公達の両肩にも、黒い翼が生えている事を確認し呆然とした・・・

「そんなあ・・・」

「チツ・・・テメエらああ!仮にも絵本の主人公が、簡単に操られてるんじゃないぞ!!」  
だが、牛魔王の発破も、絵本の主人公達の耳には届かなかった・・・

不敵な笑みを浮かべながら近付いて来る絵本の主人公達、フック船長を逃亡させたのも束の間、再びハッピー達に危機が迫ろうとしていた。

「ワ〜イ！本物のピーターパンが助けに来てくれたぞ!!」

「お前達、待つロプ!」

ピーターパンが魔王に操られて居るとは知らない子供達は、喜び勇んでピーターパンに駆け寄ろうとするのを、ハッピーが必死に抱きしめ、

「待って！今のピーターパンは・・・みんなはシロップの背に乗ってネバーランドに戻って!!」

「アカンベエ〜!」

「偽物の言う事何か聞かないよくだ!!」

今のピーターパンの姿を、子供達に見せる事は避けたいとハッピーは思った・・・

子供達の憧れのヒーローが、魔王の意のままに操られる姿を見せたく無かった・・・

だが、子供達にそんな気持ちも伝わる事も無く、子供達は海賊船からピーターパンに声援を送り続けるのだった。

「さあ、お前達！ニコの笑顔を奪ったみゆきを・・・倒すカゲエエエ!!」

絵本の主人公達の上空に、黒い球体が飛んでいるのに気付いたハッピー、球体が、ハッピーこそ、ニコの笑顔を奪った存在だと告げた事にショックを受けた。

「エッ!? 私がニコちゃんの手を奪った!? 待って! どういう事? あなたは・・・誰!」

「俺は、魔王! ニコの手を奪ったお前に話す事は無いカゲエエ・・・さあ、みゆきを倒すカゲエエ!!」

「待って! 魔王!!」

「オオオオ!!」

ハッピーの問い掛けを打ち消すように、魔王の号令の下、絵本の主人公達がハッピーの居る海賊船目掛け押し寄せてくる。牛魔王、金角、銀角はハッピーを庇うように前に出ると、

「孫悟空共は俺達が引き受けた! 行くぞ、金角、銀角!!」

「オオ!!」

牛魔王、金角、銀角は、自分達が囷になるように、海賊船から飛び降りると、絵本の主人公達に向かって行った。ハッピーは後ろを振り返り、キャンデイ、ハミイ、シフォン、シロップ、ピーちゃん、フェアリートーン達に笑みを浮かべながら、

「シロップ・・・子供達をお願い! それからキャンデイ、他のプリキュアのみんなに、変身アイテムを届けて上げてくれないかなあ? ついでに、みんなに伝言もお願い・・・ちよつとピンチ! 助っ人お願いって!!」

ハッピーは妖精達にウインクをすると、牛魔王達に続くように海賊船から飛び降り

た。妖精達は、絵本の主人公達に向かって行ったハッピーの後ろ姿を呆然と見つめ、

「ま、不味いニャ・・・早く他のみんなにこれを届けるニャ!!」

「でも、どこに居るか分らないクル・・・」

「何を届けるって!?!」

「!?!?!?!?!」

変身アイテムを囲むように、話し合っていた妖精達の背後から声が掛かり、妖精達はドキつとしながら背後を振り返ると、そこには、なぎさに蹴り飛ばされた猪八戒が、意地悪そうな視線を浮かべ立って居た。

「あいつに蹴り飛ばされ彷徨っている内に、妙な場所に着いたと思つたら・・・どうやら、お前ら兄貴の偽物の仲間だな? ちようどいい! さっきの怨み、お前達で晴らしてやる!!」

猪八戒は、釘?(ていは)を地面に叩き付け、なぎさに痛い目に遭わされた鬱憤を、妖精達、そして、ピーターパンに声援を送り続ける子供達で晴らそうと威嚇する。海賊船内の異変に気付いたハッピーが、慌てて戻ろうとするも、

「あらあ!?! 何処に行こうというのかしら? その格好・・・あなたも私から王子様を奪おうという算段ね!!」

鋭利に尖ったガラスの靴を穿いたシンデレラが、ドレス姿を靡かせ、ハッピーにキッ

クの雨霰を繰り出した。

「止めてえ！私、そんな事思ってないよ!!」

シンデレラの攻撃を躲しながら、シンデレラを説得するハッピー、海賊船を気に掛けたラツと視線を外したその時、背後から更に金太郎が四股を踏み、張り手を繰り出してくる。ハッピーは両手をクロスして攻撃を受け止めるも、その威力に吹き飛ばされ、地面に倒れ込んだ。

「ドスコイ！そんな細腕じゃあ、俺の張り手を受け止められないぜ!!」

勝ち誇ったように再び四股を踏む金太郎、ハッピーは少し頭を振りながら立ち上がるも、

(このままじゃ、妖精のみんなが、子供達が……)

ハッピーに焦りの表情が浮かんだ……

第七十二話：魔王の影

完

## 第七十三話：キュアハッピー・・・絵本の世界に死す!?

1、復活！ウルフルン、アカオーニ、マジヨリーナ

魔王城近くを、鳥のように羽ばたきながら一冊の本が近づいて来た。絵本の中からヒヨイと顔を出したのは、ウルルン、オニニン、マジヨリンの三人、三人は辺りを見渡すと、

「見るウル！あそこで、ハッピーが戦ってるウル!!」

「大分押されてるオニ・・・」

「向こうの海賊船じゃ、キャンデイ達が襲われてるマジヨ・・・ウルルン！オニニン！今こそ赤いキャンデイを舐める時マジヨ！ウルルンとオニニンは、ハッピーを助けるマジヨ！私はキャンデイ達を助けるマジヨ!!」

そう言うと、マジヨリンは絵本から飛び出し、キャンデイ達の前に降り立った。顔を見合わせたウルルンとオニニンは、マジヨリンに言われる通り、赤いキャンデイを手に持ち、ハッピーの側へと降りていった。

突然現われたマジヨリンの姿に、キャンデイは驚いた様子で、

「マジヨリン!?!どうして絵本の世界に居るクル?」

「キャンディ、話は後マジョ!今は・・・」

そう言うと、マジョリンは赤いキャンディを口の中に放り込んだ・・・

「ウルルン!オニニン!どうして此処に!?!二人共、離れてて!私の巻き添えを受けちゃう!!」

心配そうにウルルンとオニニンを庇おうとするハッピー、ウルルンとオニニンは同時に首を振り、

「ハッピーを助けに来たのに・・・助けられる訳にはいかないウル!」

「早速マジョリンに貰った飴を舐めてみるオニ!」

二人が赤い飴を口の中に放り込んだ・・・

赤い飴を舐め始めた三人の身体から、見る見る白煙が立ち上り、三人の姿が見えなくなると、ハッピーも、キャンディも、心配そうに三人に声を掛けた。だが、白煙が収まった時、その中から現われた姿を見て驚愕した。

「エツ!ウ、ウルルン、オニニン、その姿は一体?・・・どうしてウルフルン、アカオーニの姿に!?!」

「いやあ、俺様にも良く分らねえが・・・」

「マジョリンに貰った飴を舐めたら・・・この姿になったオニ!何だか力が漲るオ



ニイイイ!!」

そう言いながら、自慢気にポーズを取るウルフルンとアカオーニ、そんな二人を無視するように、ハッピーに再び攻撃を加えるシンデレラの前にウルフルンが、金太郎の前にアカオーニが立ち塞がった。

「オツと・・・お前らの相手は俺様達だ!」

「ハッピー、此処は俺様達に任せるオニ! キャンディ達の下には、マジヨリンが向かったオニ!!」

「マジヨリンが!? もしかして・・・」

ハッピーの瞳が輝き、背後の海賊船を振り返った・・・

その海賊船の中では、猪八戒に襲われた妖精達を救う為、若マジヨリーナが猪八戒の前に現われた。猪八戒は、マジヨリーナの容姿を見るや、忽ち涎をジュルルと啜りながら、

「な、何だか分らねえが、こりゃあ、良い女だ・・・俺様の夜伽にしてやる!!」

「ハア!? 寝言は寝てから言うんだねえ・・・キャンディ、そこにあるのはプリキュア達なの?」

「そうクル! みんなの変身アイテムクル!!」

「つて事は、今みんなはプリキュアになれないつて事かい!?・・・不味いねえ、ポップが他のプリキュア達を連れて来ると言つてたけど、これじゃ期待は持てそうもないねえ・・・」

「お兄ちゃんも来てるクル?」

「ああ、あたし達と一緒に来てるよ!キャンディ、あんた達は、プリキュア達にその変身アイテムを届けておやり!!みんな、白雪姫の城を目指して集まつてる筈だよ!!」

そう言うのと、マジヨリーナは猪八戒に対し攻撃を開始した・・・

ハッピーの加勢に来たウルフルン、アカオーニ、マジヨリーナを見て、魔王は目を吊り上げた。何故次々に邪魔者が現われるのか、魔王は苛々したように、

「全く・・・どうしてこうも邪魔者が現われるカゲエ!?こうなつたら・・・」

魔王は、思いつ切り息を吸い込み、フウウウと息を空間に吹き付けると、空間が歪み始めた。魔王は、桃太郎一行、浦島太郎、アラジン、白いワンピースを着た人魚姫を見つめるや、

「お前達は・・・ここに来ていないみゆきの仲間達を倒してくるカゲエ!」

「ハッ、お任せを!!」

一同がそう返事を返すと、次々に歪んだ空間へと身を投じ、魔王が作り出した空間が

消え失せた・・・

「桃太郎達は一体何処に!？」

「みゆきの仲間達って言ってやがったなあ・・・とすると、白雪姫の城に集まってる、プリキュア達の事か!？」

「不味いオニ、変身出来ないあいつらじゃ・・・」

「そんなあ・・・」

一同がプリキュアになる為の変身アイテムは、まだこの場にある。今桃太郎達に襲われれば、プリキュアの仲間達に打つ手は無いと知り、ハッピーは不安そうに呟いた。

更に、魔王の発破を受けた主人公達の攻撃力があがり、孫悟空一行と戦っていた牛魔王、金角、銀角、シンデレラと戦って居たウルフルン、金太郎と戦って居たアカオーニが押され始める。ウルフルンは忌々しそうに、

「チツ・・・これでも喰らいやがれええ! プツ!!」

舐めていた飴玉を、シンデレラの顔面に吐き出すと、唾液混じりの飴玉がシンデレラの顔に掛かり、ワナワナ震えだしたシンデレラは、

「キヤアア! な、何て下品な・・・もう許さなあああ!! エツ!!」

顔色を変え、目を吊り上げたシンデレラがウルフルンを睨み付けるも、今まで目の前に居たウルフルンの姿が忽然と消えていた・・・

「このままじゃ不味いオニ・・・本気を出すオニィー!ゴツクン!!」

気合いを入れた拍子に、飴玉をゴクリと飲み込んだアカオーニ、忽ちその巨体は見る縮み始め、戦って居た金太郎が呆然とした。

再びウルルン、オニニンの姿へと戻ってしまった二人は、身体を触り確かめ困惑すると、

「マ、マジヨリーナ!一体どうなってるオニ?」

「また元の姿に戻っちゃったウル・・・」

海賊船で猪八戒と戦いながら、二人が元の姿に戻ってしまったのを見たマジヨリーナは、

「何やってるんだい!あの姿で居られるのは、飴を舐めている間だけ何だよ!!もう予備は無いつてえのに・・・」

「そんな事言われても・・・」

「知らなかったオニ・・・」

途方に暮れる二人の背後に、口元を吊り上げたシンデレラと金太郎が立つと、ウルルン、オニニンの首を掴み持ち上げる。放せと言いながらジタバタするウルルンとオニニンだったが、シンデレラと金太郎は意地悪そうな視線を二人に向けながら、

「ウフフフ！悪戯が過ぎたようねえ？」

「さあ、このまま地の果てまで吹き飛ばしてやる!!」

「止めてえええ!!」

二人に攻撃されそうだったウルルンとオニニンを、ハッピーがすんでの所で抱き止め、そのまま地面に倒れ込んだ。そんなハッピーを、不気味な笑みでジツと見つめたピーターパンは、レイピアを抜くと、

「お前だろう!?!僕の偽物は?・・・」

レイピアをハッピーの喉元に当てると、ニタリと何処かジョーカーを思わせる表情で微笑んだ。ハッピーは険しい表情を浮かべながら、止めるように説得を試みるも、ピーターパンは笑みを浮かべたままだった。そんな異変を海賊船から見て居た子供達は、

「ピーターパン!その偽物は・・・僕達をフック船長から助けてくれたんだよ!!」

「その子を虐めないで!!」

「みんな・・・」

子供達は、自分達をフック船長から助けてくれたハッピーは、悪者ではないとピーターパンに必死に叫び続ける。

子供達には分かって居た・・・

ピーターパンの偽物、そう認識していても、ハッピーは悪い人では無い事を・・・

ハッピーは、自分の事を必死に弁明してくれる子供達の姿に、目をウルウルさせていた。だが、ピーターパンはそんな子供達の言葉を鼻で笑い、

「フン・・・さようなら！偽物!!」

子供達の言葉を無視し、今まさにハッピーの喉を突き刺そうとしたその時、

「キュアキュア・・・プリップゥゥ!!」

海賊船の中からこの様子を見て居たシフォンは、耳を動かし、ハッピー、ウルルン、オニニンを、自分達の下へと瞬間移動させた。何とか無事にハッピー達を救えた事でホッと安堵する妖精達とマジヨリーナ、だが、シンデレラ、金太郎、ピーターパンが、忌々しそうに海賊船目掛け、一步一步、歩を進めていた。ハッピーと合流したマジヨリーナが、ハッピーに手を差しだし助け起こすと、

「ハッピー、大丈夫かい？このままじゃ不味いねえ・・・」

「うん・・・変身出来ないみんなの事も心配だし・・・」

妖精達を庇いながら戦う事にも限度があった。更に、変身出来ない一同の下にも、魔王に操られた桃太郎達が向かっている。早く届けなければ、ハッピーに焦りが浮かんだ。

だが、その不安を打ち消す見知った声が、上空から響き渡った!!

「みゆきいい！キャンデイ！無事何かああ？」

「今の声……あかねちゃん！」

ハッピーは目を輝かせながら上空を見上げると、巨大な鷲に変化したポップの姿が見る見る近づいて来た。キャンデイも兄ポップの姿を目にすると喜び、嬉しそうにポップの名前を呼び続けた。更にポップの背には数人の人影が見え、

「コラアア、猪八戒！あれだけ言ったのに、またこんな事してええ!!」

「ゲゲエ!? あいつは兄貴の偽物の……ま、不味い! あ、兄貴いい、助けてえええ!!」

猪八戒は、急降下してくる鷲の背になぎさがあるのを見付けるや、大慌てで海賊船から飛び降り、牛魔王、金角、銀角の三人をKOした孫悟空の下へと逃げ去った。孫悟空は猪八戒をチラリと見ると、

「何だ!? お前生きてたのか? ……俺様の偽物がどうしたって?」

「あ、あいつらが兄貴やお師匠様の名前を語って……」

そう言うと、海賊船を指さす猪八戒、兄弟子である本物の孫悟空ならば、きつと偽物を成敗してくれるはず、そのお零れを貰おうと猪八戒は悪巧みを考える。孫悟空は、そんな猪八戒の腹を殴りつけ、苦悶に歪む猪八戒にフンと蔑む視線を向けると、

「弱い奴に用はねえなあ……お前も、この俺様に殺されたくなければ一緒に来い! さて、本物の孫悟空様の實力を見せてやるか……舂斗雲!!」

孫悟空は舂斗雲を呼び寄せると、ヒラリと飛び乗り、沙悟浄、猪八戒にも付いて来い

と命じ、二人が舳斗雲に乗り込んだ。

「ハッピーく〜! 無事何かあ?」

「あかねちゃん、やよいちゃん、なおちゃん、れいかちゃん、あゆみちゃん、なぎささんにほのかさん、ひかりさん、それに・・・ポップまで!」

海賊船に降り立つたポップとなぎさ達、一同が現われた事で、ハッピーは目を潤ませながら駆け寄り、何とか無事ハッピーに合流出来た事で、なぎさ達はホッと安堵する。なぎさはハッピーを労るように抱きしめ、

「ハッピー、何処も怪我してない? シロップ、シフォン、ハミイ、キャンデイ、フェアリートーン達も平気? ピーちゃん、ウルルン、オニニン、マジョ・・・エツ? エエエ!」

「な、何で、マジヨリンがマジヨリーナに!」

なぎさ、なおは、マジヨリンの姿がマジヨリーナになっている事に驚くも、マジヨリーナは、口元に笑みを浮かべるのみで、代わるように苦笑混じりのハッピーが一同に説明を始め、

「さつき、ウルルンとオニニンも、ウルフルンとアカオーニの姿になって、私を助けてくれたんだよ!」

「でも結局・・・」

「ハッピーに助けられたオニ・・・」



「ううん、ウルルン、オニニン、さっきは危ないところを助けてくれてありがとう！」  
満面の笑みを浮かべながら二人に礼を述べたハッピーを見て、顔を見合わせたウルルンとオニニンは、自分達も少しは役立てたようだと言ったとホッと安堵するのだった。

「お兄ちゃあああん!!」

「キャンデイ！ゴフウウウウウ・・・」

大喜びで飛びついたキャンデイの体当たりをまともに受け、ポップが吹き飛びゴロゴロ床に転がった。それを見たあかね達は苦笑を浮かべ、

「何や、お約束になってきたなあ・・・」

「でも、キャンデイ達も無事でホッと致しました」

「ピーちゃんのお陰ニヤ！」

「ピーちゃん、ありがとう！エレンさん達も心配してたよ!!」

「ピイイ!!」

あかねが、れいかが、そしてあゆみが、妖精達の無事な姿に目を細めた。

「なぎさ、ほのか、何だか嫌な気配がさっきから漂ってるメポ！」

「二人共、用心してミポ！」

ほのかも、目を細めていたが、コミュニケーション姿のメップル、ミップルの忠告を聞くや表情を曇らせ、海賊船に近付いて来る、悪しきオーラを纏いし絵本の主人公達に気付くと、

「何とか間に合ったようね!でも・・・」

なぎさもほのかの険しい表情に気付き、孫悟空やピーターパン達が、海賊船に着いたなぎさ達に向かって来るのに気付くと、

「ほのか、ヤバイ!本物の孫悟空が来てる!!」

「ええ・・・確か本物の孫悟空は、不老不死の筈・・・なぎさ!」

「デュアルオーロラウェーブ!!」

なぎさとほのかの身体が光に包まれた・・・

## 2、反撃の狼煙

その光景を、絵本の主人公達も、ネバーランドの子供達も、そして、魔王も何事かと顔色を変えた。虹の輝きが収まった時、黒と白の衣装を着た二人組が、向かってくる孫悟空達をキツと見つめると、

「光の使者・キュアブラック!」

「光の使者・キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!!」

「闇の力のしもべ達よ!」

「とつととお家に帰りなさい!!」

「ケッ！この孫悟空様に喧嘩を吹っかけるとは・・・良い度胸だぜ!!」

ブラックとホワイト、二人に指を指された孫悟空は、口元をニヤリと吊り上げるや、如意棒をグルグル回し、二人に対して臨戦態勢に入った。

ホワイトは、背後を振り返りひかりを見つめると、

「ひかりさん、あかねさん達やハミイ達をお願いね!」

「待って!私も行きます!!」

「済まないねえ・・・そろそろあたしは、飴玉の効果が・・・切れたマジョ」

「ううん、ありがとう!マジョリン!!」

孫悟空に向かって行つたブラックとホワイトに続くように、ハッピーも再び海賊船から飛び降り、ピーターパン、シンデレラ、金太郎に向かった。効果が切れ、マジョリーナから再びマジョリンの姿に戻つたマジョリンは、申し訳無さそうに三人の後ろ姿を見送つた。

「ポルン、ルルン!・・・ルミナス、シャイニングストリーム!!」

ホワイトにあかね達五人を託されたひかりは、ポルンとルルンを呼び、二人もまたコミュニケーションに変化すると、ひかりはルミナスへと変身した。

「輝く生命、シャイニールミナス!光の心と光の意志、全てをひとつにするために!」

変身したルミナスは、辺りを警戒しながらあかね達五人、妖精達のガードに回ろうと

するも、あかねは少し離れた床にスマイルパクトらしい物体を見付け、

「ん!?アアア! キャンディ、それはひよつとして、ウチらのスマイルパクトじゃ?」

「アツ・・・忘れてたクル! そうクル! ここにみんなの変身アイテムがあるクル!!」

「みんなも早く変身するニヤ!」

キャンディとハミイは、床に並べられたキュアモ、ミルキイパレット、リンクルン、コロパフューム、ココロポット、キュアモジュール、そして、スマイルパクトとシンクパクトを指差し答えた。見る見るあかね、やよい、なお、れいか、あゆみの目は輝き、

「ヨツシヤアア!!」

「それはありがたいねえ!!」

「うん、ハッピー達の足手纏いにならないで済むもんね!!」

「この衣装では動きづらいですし・・・皆さん!」

「うん! 私達も、ハッピーの応援に行こう!!」

あかね、なお、やよい、れいか、あゆみは、自分のスマイルパクトとシンクパクトを手に持つと、

「[[プリキュア! スマイルチャージ!!]]」

「[[プリキュア! シンクチャージ!!]]」

五人の少女達が光に包まれ、プリキュアへと変化を遂げていく・・・

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん！じゃんけん・・・ポン！キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心！キュアビューティ!!」

「思いよ、届け！キュアエコー!!」

名乗りを終えた一同はルミナスを見つめると、

「ルミナス、私達はもう大丈夫ですので、キャンディ達をお願いします!」

「分りました!」

ビューティの言葉に頷き、ルミナスは妖精達、そして、シロップの側に居た子供達に、自分の側から離れないように伝えた。

「ハッピー!今行くでええ!!」

「サニー、みんなああ・・・でも、待って!魔王に操られた桃太郎達が、他のプリキュアのおみんなの所に向かったの・・・変身出来ないみんなが心配だよ!行ってあげて!!」

ハッピーの加勢に向かうべく、勢いよく海賊船から飛び降りたサニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコーであつたが、ハッピーは自分の加勢に来るより、変身出来ないみんなの助けに向かつて欲しいと告げた。他のみんなの下にも、操られた絵本の主人公達が向かっていると知り、サニー達も驚愕した。

「何だつて!？」

「確かに、他のみんなは変身出来ないもんね」

マーチも、ピースも、確かに変身出来ない他の仲間達の身を案じたものの、ビューティは、向こうにはプリキュアになれる咲達が残って居る事を思い出し、

「ですが、向こうには咲さん、舞さん、満さん、薫さんもいらつしやいますし・・・」

「咲さん達は、プリキュアになれるもんね!」

「ハッピー、大丈夫や!向こうにはプリキュアになれる、咲さん達が付いとる!!」

ビューティの言葉を受け、咲達四人が残って居るのなら、何とかしてくれる筈だとエコー、サニーも、ハッピーに安心するように伝える。ビューティは、海賊船を振り返ると、

「ですが、念には念を入れておいた方が良いでしょうね・・・ポップ!皆さんの変身アイテムを、届けて上げて頂けませんか?」

「合点承知でござる!!」

「ハミイも行くニャ!」

「プリー!」

ポップは、再び巨大な鷲の姿に変化すると、ハミイとシフォン、フェアリートーン達を背に乗せ、白雪姫の城周辺に居るゆり達の下へと、再び羽ばたいて行った。

ブラックとホワイト、ルミナス、そしてサニー達、次々に増えていく邪魔者に、魔王の苛々は益々膨れ上がった・・・

一方、白雪姫の城周辺で待機していたゆり達だったが、突然フラッピ達が騒ぎ始め、嫌な予感がするから、一同にも注意するように忠告をしていた・・・

空間が歪み始めると、中から桃太郎、犬、猿、雉、浦島太郎、人魚姫、アラジン達が突然現われ、驚愕する一同に笑みを浮かべた。ゆりは険しい表情を浮かべ、現われた桃太郎達を見つめながら、

「なぎさとほのかの予感が当たったようね・・・変身出来ない私達にも、刺客が送られて来たようだわ!」

「みんな、後ろに下がって!舞、満、薫、みんなを守るよ!」

「分ったわ!!」

変身出来ない一同を庇うように、咲、舞、満、薫は前に出ると、険しい表情を浮かべながら、

「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」

「花ひらけ、大地に!!」

「はばたけ、空に!!」

「未来を照らし!」

「勇気を運べ!」

「輝く金の花! キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼! キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「天空に満ちる月! キュアブライト!!」

「大地に薫る風! キュアウインディ!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「聖なる泉を汚す者よ!」

「あこぎなマネは、おやめなさい!!」

四人のプリキュアが、桃太郎達に名乗りを上げた!!

だが、桃太郎の視線に映るのは、日本一の幟を背負った祈里の姿が、浦島太郎はせつなを、人魚姫はラブを、険しい表情で睨み付けた。美希は、桃太郎、浦島太郎、人魚姫の険しい表情がラブ達に向けられていると知ると、

「な、何か・・・桃太郎達、ラブ達を目の敵にしてない?」

「多分・・・私達を自分達の偽物だと判断したようね!」

「桃太郎さん! 私達の話聞いて!! 私達、好きであなた達の姿になったんじゃないの!!」



「本当に本当なの！ちゃんと、衣装も変えたし……って、何か全く聞いていないような？」

美希の言葉に、せつなは自分達を偽物と判断し、目の敵にしたようだと言っていると、祈里とラブは困惑の表情を浮かべながら必死に弁明するも、桃太郎達は聞く耳を持たなかった。ブライトはそんな四人を諭し、

「無駄よ！よく肩を見て見なさい……世界絵本博覧会に現われた絵本の者達のように、肩に黒い翼が付いて居るわ!!」

「本当だわ……と言う事は、この人達もあの時同様操られて居るって事ね？」

「ええ……でもこれじゃ、あの時と一緒にだわ！」

ブライトの言う通りだと分った美希の表情が険しさを増す。ブライトの脳裏に、世界絵本博覧会での戦いが思い起こされた。下手に攻撃を加えて、もしも、桃太郎達を倒してしまつたら、物語は滅茶苦茶になってしまうだろうだと……

「ブルーム、イーグレット、あなた達は、絵本のキャラクター達がみんなに攻撃を加える事の無いように、防御に徹して！ウインディは、私と一緒になるべく時間を稼ぐように、風を上手く利用して足止めしてみよう……私は光を利用して足止めしてみよう!!」

ブライトの指示を受け、ブルームとイーグレットは、みんなを守るように手を握り合い半球系のバリアを張り、ブライトとウインディは左右に別れ、光と風を巧みに使い分

け、桃太郎達の足止めに徹した。

「ブルーム、イーグレット、ブライト、ウィンディ、ゴメンね！私達が変身出来ないばかりに・・・」

のぞみは、必死に桃太郎達から自分達を庇い続ける四人の姿に、思わずポツリと呟いた。自分達もプリキュアにさえなれば、四人の足を引つ張らずに済むのにと、みゆきの救援には、なぎさ達が向かってくれたものの、その事ものぞみには気掛かりだった。

こんな所でモタモタしてられない・・・

それは、のぞみだけではなく、この場に居る一同誰しもが思っ居た事だった・・・  
「何だ!?受け身に回ってるだけか?そんな事じゃ、俺達には適わないぜ!!」

アラジンは、魔法のランプを擦り始めると、煙と共に巨大な大男が姿を現わした。その姿を見たラブ、美希、祈里、せつなは、自分達が世界絵本博覧会で戦った巨大な魔神だと一同に伝えた。

「みんな、気をつけて!あの巨大な魔神は、自分の分身を作り出す事が出来るの!!」

「ランプの魔神!こいつらにお前の力を見せてやれ!!」

「畏まりました・・・パパラパ〜!!」

アラジンの命を受けたランプの魔神が呪文を唱えると、ブルームとイーグレットが張っていたバリアが、跡形もなく消え去った。

「そ、そんな!？」

「これは一体!？」

思わず動揺するブルームとイーグレット、その隙を逃さず、抜刀した桃太郎が突入し、祈里目掛け切り込むも、すんでの所で我に返ったイーグレットが割って入り、祈里を救助した。助けられた祈里はイーグレットに感謝しながらも、もう桃太郎と戦う以外無いのだろうか? 悲しげな表情を浮かべた。桃太郎が攻撃を開始したのを見た犬、猿、雉の三匹も、それぞれ桃太郎に続くように一同目掛け動き出すと、

「キイイイ!!」

猿は爪を研ぎ澄まし、一同を威嚇し始めた。響は、そんな猿を睨み付けるや、

「ウツホ!ウツホ!ウツホツホ!!」

自分の胸を両手で叩き、ゴリラの真似をして猿を威嚇すると、驚愕した猿はウキイイと叫びながら飛び退き、響を睨みながら上下左右に身体を動かし、逆に響を威嚇した。

「ひ、響……今の何!？」

目を点にしたりんが響を指さすと、エレンは、嘗て響が加音町の子供達の前で、ゴリラの物真似をしていたのを思い出したのかクスリと笑い、

「フフフ、響の十八番!ゴリラの真似よ!!」

「ちよつとエレン、ドサクサに紛れてみんなに変な事教えないで!大体……十八番じゃ

ないよお!!」

「でも・・・確かに似てたわよねえ?」

「奏までええ!ほら、奏もあの時みたいに手伝つて!!」

「エエエ!?何で私まで?」

再びゴリラの真似を始めた響に誘われるも、奏はブルブル首を振り嫌がった。ラブに険しい視線を浴びせる人魚姫に気付いたラブ、ラブは何かを思案すると、美希に問い掛けるように、

「エエと、人魚姫なら・・・一応魚だよな?」

「まあ、そうね・・・でも、今の人魚姫は、人間になつた時のようだし・・・」

そうラブに聞かれた美希は、人魚姫の容姿を改めて見つめると、確かに魚系ではあるが、今は人間の状態だと苦笑気味に答えた。ラブはウンウン頷くと、

「だったら私も・・・ニヤアアアゴ!!」

ラブは中腰の体勢になると、何かのスイツチが入ったかのように、招き猫のような構えを取り、猫の鳴き真似を始めた。人魚姫は忌々しそうな視線でラブを睨み付ける。美希とりんは呆れたように、

「ちよつと、ちよつと、ラブまで何やつてるのよ?」

「あんた達・・・こんな状況で物真似してる場合じゃないでしょう?」

「いやああ、少しはブルーム達の手助けになればと……」

同じように右手で頭をポリポリ搔いて、誤魔化し笑いをうかべるラブと響に、一同は苦笑する。そんなラブと響を見たいつきは、

「僕も負けてられないね!」

いつきは腰を落とすと、明堂院流の構えを取った。上空から急降下してきた雉の突進を華麗に捌き、雉は思わず地面に激突しそうになり蹠踉めくのを、笑みを浮かべながら抱き止め、空に放してやった。困惑した雉は、上空をクルクル飛び回った。今では病気も治った兄さつきに師範の座を譲ったものの、その実力は健在だった。そのいつきに並んだのは銀のえりか、

「流石はいつき殿……さあ、今度はこの来海えりかがお相手仕る!コオオオオ!!」

息を吸い込み、コオオと吐き出すと、何かの拳法の構えを取るや、変顔浮かべた銀のえりかを見た犬は、思わずその不気味さに後退る。元祖えりかは、そんな銀のえりかを見るや、

「ちよつとおおお、銀のあたし!変な顔しないでよ!!」

「まあ、違う意味でえりからしいですが……」

「ムキイイイイ!あたしはあんな変な顔しないってば!!」

口を尖らせた元祖えりかが、銀のえりかを注意すると、つぼみがえりかをからかい、思

わず一同からクスリと声が漏れた。時折笑みすら浮かべる一同に、桃太郎達の表情は険しさを増し、

「随分余裕じゃねえか?・・・だったたら、こっちも本気で行くぜ!!」

「後悔させてあげるわ!!」

桃太郎が、人魚姫が、浦島太郎が、アラジンが、更に目を吊り上げ、悪しきオーラを周囲に撒き散らし始めた。

「ブルーム、みんな、気をつけるラピー! さつきとは桁外れな邪悪な気配を感じるラピー!!」  
「確かに・・・みんな、用心してええ!!」

フラッピの忠告を聞き、ゆりの表情が一層険しさを増し、一同に用心するよう叫んだ。  
「今更気付いても遅い! ハアアア!!」

桃太郎が刀を横一線に振ると、凄まじい衝撃波が一同を吹き飛ばす。ウインディは、咄嗟にそよ風を一同に向け放ち、体勢を整えさせる。

「みんな、大丈夫?」

「ありがとう! でも、このままじゃ・・・」

のぞみの額から冷や汗が垂れたその時、上空から巨大な鷲が急降下してくると、  
「皆の衆!! 無事でござるかああ?」

「セイレーン! 響、奏、アコ、みんなああ!!」

「プリーイイイ!!」

「ハミイ! フェアリートーン達も・・・無事で良かった!!」

「シフォンやああ!!」

「良かった! シフォン!!」

エレン達が、ラブ達が、ポップの背に乗り手を振るハミイやシフォンを見て目を輝かせた。ハミイはのぞみ達を見ると、

「シロップも無事ニャ! ピーちゃんとハッピーのお陰でみんな助かったニャ!!」

「エツ!? 良かったあ・・・シロップも、ハッピーも無事なのね?」

シロップも、ハッピーも無事だと聞き、のぞみ達から思わず笑みが溢れた。ポップは元の妖精姿に戻ると、

「皆の衆、これを受け取るでござる! シフォン殿!!」

ポップはシフォンに頼むと、シフォンはプリーと頷き、超能力で一同の下へと変身アイテムを移動させた。一同の目は輝き、

「これは、私達の・・・」

「これであたし達も戦えるわね!」

「ハミイ、シフォン、ポップ、ありがとう!!」

ゆりが、美希が、アコが、ポップ達に礼を述べる。のぞみはキュアモを手にとると、一

同を振り返り、

「みんな、行くよ!!」

のぞみの言葉に一同が頷くと、キュアモを、リンクルンを、ココロパフュームを、ココロポットを、そして、キュアモジュールを手に取り構えた。

「[[[[プリキュア!メタモルフオーゼ!!]]]]」

「[[[[スカイローズ!トランスレイト!!]]]]」

「[[[[チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!]]]]」

「[[[[プリキュア!オープンマイハート!!]]]]」

「[[[[レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!]]]]」

のぞみ達、ラブ達、ゆり達、響達の身体が光に包まれプリキュアへと変身した。変身が終わったプロツサムとサンシャインは、変顔を浮かべながら、

「え、えりか!?!何で変身しないんですかあ?」

「もうみんな変身を終えたよ!」

呆れたように変身していないえりかに声を掛けた二人だが、三人のえりかは、ココロパフュームの取り合いをしていて、

「だってええ、金と銀のあたしがああ・・・」

「[[[[ここは私に任せて頂きますわ!!]]]]」



「いや、私が行こう！二人はここで見学していれば良い!!」

「何言ってるのよ！あたしのココロパフューム何だから、返してよお!!」

三人でココロパフュームを取り合うえりかに、パートナーのコフレはあたふたしながら、

「な、何やつてるですかあ！早くプリキュアになるですつ!!」

「こうなったら・・・コフレ、あんたが誰をマリンにするか選んでよ！だったら、文句ないよね？」

「それでよろしいですわ！コフレちゃんなら、必ず私を選んでくれますわ!!」

「私も異論は無い！誰がキュアマリンに相応しいか・・・コフレなら承知しているだろう!!」

「エエエ!?!」

三人のえりかから詰め寄せられ、コフレが困惑気味に三人の顔を見比べる。えりかが三人も居る事自体非常識だが、更にこの中からマリンになる人物を選べと言われ、コフレは絶るような目をブロッサム達に向けるも、

「まあ、三人のえりかもああ言ってますし・・・コフレ、選んであげて下さい!」

ブロッサムにも選ぶように頼まれたコフレは益々困惑し、金、銀、元祖、三人のえりかの顔をジッと見つめると、三人のえりかも身を乗り出し、ジッとコフレの顔を見つめ

返した。コフレは決心したように、

「僕のパートナーは・・・プリキュアの種、いくですっ!」

コフレから発せられたプリキュアの種が、元祖えりかの手に渡ると、

「ヨツシヤア!流石コフレ!!」

「コフレちゃん・・・信じて居たのに」

「コフレ・・・見損なつたぞ!!」

元祖えりかはニンマリし、金と銀のえりかは、恨めしそうにコフレを見つめた。コフレはそんな二人の視線にショックを受け、

「暫く・・・何処かに旅に出たいですっ・・・」

「コフレ、元氣ですぞう!」

落ち込むコフレの背を、シプレがポンポン叩きコフレを励ました。元祖えりかは、金と銀のえりかを見つめると、

「じゃあ、約束だからねえ・・・プリキュア!オーブンマイハート!!」

遅ればせながらも、えりかもキュアマリンに変身し、ブロッサム隣に並び立った。ブルーム達四人にドリーム達も加わつた事で、圧倒的プリキュアが有利になった。

「チツ・・・それで勝つたと思うなよ!!」

桃太郎は忌々しげに舌打ちした。この人数差では、少々手を焼くかも知れないが、こ

のままオメオメ逃げ帰るわけには行かない。桃太郎は、仲間達を見つめるや、

「このまま遅れを取っては・・・魔王様に申し訳が立たない！みんな、気合い入れていくぞ!!」

(魔王ですって!?)

ムーンライトは、魔王と言う言葉に引つ掛かっていた・・・

みゆきが魔王城に向かった事は、ポップの絵本で理解していたが、絵本の主人公達を操っているのが魔王だとすると、絵本に出てくる魔王では無く、魔界の関係者なのだと警戒心が沸き起った。

まさか、この騒動を引き起こしたのは魔界の者なのだろうか？

そうだとすれば、かなりの用心が必要ではないか？

迷うムーンライトだったが、他の仲間達は、魔神が作り出した分身体と戦闘を開始しており、ハツと我に返ったムーンライトも、一同に遅れながら後に続いた。

魔王は目を閉じ精神を集中させると、魔王の脳裏に絵本の主人公達とプリキュアの戦う姿が映ってくる。魔王はこの現状を理解すると、忌々しそうに目を吊り上げ、

「全く、次から次へと・・・もういいカゲエエ！この世界事、邪魔者達を排除するカゲエエ

!!」

苛々が頂点に達した魔王は、何かを念じると、魔王の身体から飛び出した影が、絵本の世界を暗く染めていった。住民達は、何事かと不安に駆られる者、恐怖に怯える者、そんな一同のネガティブな感情を吸い取っていくと、魔王の身体がドンドン巨大化していった・・・

「な、何や!?!あの小つこいのが・・・」

「どんどん大きくなってるよ!」

サニーが、ピースが、魔王を見て顔色を変えた。更に巨大になっていく魔王の姿が、怪鳥のような容姿に変わった・・・

魔王城の窓から、この様子を見つめていたニコも驚愕する。ニコは窓から身を乗り出すと、

「魔王!どうしちゃったの?」

「ニコ、安心しろ!ニコを悲しませたみゆきを・・・この魔王自ら消し去ってくれううう!!!」

「エッ!?!魔王、何を言って・・・」

魔王はそう叫び、奇声を発すると、思わずブラック達、味方で有るはずのピーターパン達さへ、耳を塞いだ。徐々に歪む空間から、ムーンライト達一同も強制的にブラック達の下へと引き寄せられた・・・

(魔王、みゆきを消し去るって・・・違う！私はそんな事望んでない！！魔王を止めなきゃ！！)

ニコは、魔王を止めようと窓から辺りを伺うと、地上から伸びた巨大な蔦が、窓の側に伸びているのに気付き、必死に手を伸ばすと、蔦に何とか飛び移り、魔王を止めるべく行動を開始するのだった・・・

### 3、ハッピーの危機

魔王の力によって、強制的に魔王城へと引き寄せられたムーンライト達は、何が起こったのか理解出来ずに居た。辺りをキョロキョロ見回すと、驚いたような表情をしているブラックとホワイトに近付き、

「ブラック、ホワイト、あなた達が居ると言う事は・・・」

「みんな、無事で良かった！うん、此処がハッピーが乗り込んだ・・・魔王城！！」

「あの大きな変なのが、魔王何だって！元々はボーリングの玉ぐらいの大きさだったんだだけだね」

ホワイト、ブラックが、現われたムーンライト達に説明をするも、状況が飲み込めないメンバーは目の前でどんどん巨大化していく魔王を呆然と見つめた。ブラックは、変身していない金と銀のえりかを見付けるや、

「二人共、シプレ達と一緒に、あそこにある海賊船に避難してて！あそこには、シロップ達妖精のみんなも居るから・・・」

「そうですわね：プリキュアになっていない私達では、役に立てそうも無いですし：」

「不本意ながら承知しました！マリリン、私達の方まで精進するように!!」

「分つてるって・・・金と銀のあたし、コフレ達を頼むね！」

金と銀のえりかはマリリンに頷くと、再びポップが変化した鷲の上に飛び乗り、シフォン、タルト、シプレ、コフレ、ポプリ、ハミイを伴い、海賊船へと避難して行った。

ブロッサムと合流したマリリンは、上を見上げると、

「ねえねえ、このままあいつを大きくさせたら・・・不味いんじゃないの？」

「そうですね・・・何だか、嫌な予感がしますねえ」

「せやなあ・・・よっしゃ〜！みんな、ここはウチらに任せて貰いますかあ？ハッピー、ピース、マーチ、ビューティ、ここはペガサスの力を借りて、一気にいてもうたろうやんかあ!!」

マリリンやブロッサムの言葉も尤もだと理解したサニーは、ハッピー達仲間を誘い、嘗てペガサスの力を借りたレインボーバーストで、一気に決着を付けようと話を持ちかけた。ハッピーは、魔王が言っていた、みゆきがニコを悲しませたという言葉にまだ引つ掛かっていたが、確かにこのまま魔王を放置しておくのは、後々更なる危険を招きそう

だと自分の気持ちを抑え、サニーの案に同意した。

プリンセスキュアンドルの柄に、プリンセスキュアデコルを嵌め込むと、

「二二ペガサスよ、私達に力を!!」二二

五人がキュアンドルを合わせ、ペガサスに力を貸して欲しいと願うと、五人の姿が、バツドエンド王国でピエーロと戦った時の姿へと変化を遂げていく・・・

「プリンセスハッピー!!」

「プリンセスサニー!!」

「プリンセスピース!!」

「プリンセスマーチ!!」

「プリンセスビューティ!!」

「二二プリンキュア!プリンセスフォーム!!」二二

魔王を見つめた五人は、キュアンドルのトリガーを引いてキュアンドルを着火させ、五色のペガサスのオーラに五人が騎乗し飛翔する・・・

「届け!希望の光!」

「二二羽ばたけ、未来へ!」二二

五色のペガサスは、上空で宙返りすると、

「二二プリンキュア!レインボー・バクスト!!」二二

五色のペガサスが合わさり、巨大な光のペガサスの口から、一度はピエーロすら退けた五色のエネルギー波が魔王目掛け放たれた!

「その程度の攻撃で・・・この魔王を倒せると思ったか?」

魔王は口を大きく開けると、ピエーロのバッドエナジー砲を彷彿させる、黒い負のエネルギー波を放った。空間で激突する光と闇の力、だが、魔王の攻撃はレインボーバーストを遥かに凌駕し、五人を飲み込んだ。

「「「「「キヤアアアアアアアア」」」」」

「ハッピー! サニー! ピース! マーチ! ビューティ!」

直撃を受けた五人は、脆くも地上に激突し、プリンセスモードが解けノーマル姿に戻って蠢いた。心配そうにエコーが駆け寄り、ハッピー達五人を介抱するも、攻撃を仕掛けたハッピー達も、見届けていた他のプリキュア達も、信じられないといった表情をしていた・・・

「そ、そんなあ・・・一度はピエーロさへ退けた、ハッピー達の攻撃を!」

「それだけ、あの魔王の力は凄いと云う事ね・・・」

メロディが呟き、拳をギュツと強く握りしめたムーンライトが、魔王を険しい表情で睨み付ける。

「流星は魔王様・・・さあ、お前達も魔王様の偉大さを思い知った所で・・・倒れるがい



い!!」

魔王の凄まじき力を目の辺りにし、桃太郎を始めとした絵本の主人公達が再び活気づいた。迎え撃つプリキュア達・・・

ブラックとホワイトは、再び孫悟空一行と戦い始め、ブルーム達はピーターパンと、ドリーム達はシンデレラと、人魚姫と浦島太郎と戦うのはピーチ達、桃太郎一行と戦うのはプロットサム達、アラジンとアラジンが呼び出したランプの魔神と戦うのはメロディ達、ハッピー達を狙う金太郎を、加勢に駆け付けたルミナスがバリアを張ってガードする。

だが、魔王の視線の先には、ハッピーの姿だけが映っていた。

ニコを悲しませる全ての元凶みゆき・・・

魔王は手を伸ばすと、まるでゴムのように魔王の手が伸び、ハッピーを掴むや自分の下へと引き寄せた。

「キャアアアア!」

「!!!ハッピー!!!」

魔王に隙を付かれたサニー達とルミナスの声が響き渡り、他のプリキュア達にも、ハッピーが魔王の手に落ちた事を悟る。だが、絵本の主人公達が一同の行く手を遮り、魔王の下へと近づけさせないようにしていた。

「魔王！もう、止めてえええ!!」

鳶を飛び降りたニコが、魔王にそう叫びながら近付くも、魔王の耳には届かない。

「お前にも思い知らせてやる・・・ニコの悲しみの全てを!!」

「魔王・・・何を!？」

魔王に問い掛けようとしたハッピーであったが、魔王の巨大な尾が、先端が鋭利に尖り、細長く七つに別れ、ハッピーの前に現われると、

ハッピーの両腕を・・・

ハッピーの両足を・・・

ハッピーの腹部を・・・

ハッピーの額を・・・

そして、ハッピーの心臓を・・・

ハッピーの肉体の七カ所を、撻るように貫いた!!

ハッピーは、自分の身に何が起こったのか分らない内に、次第に意識が遠のいていった・・・

「アツ・・・アアア・・・」

「嘘!？」

サニーが、マーチが、その無残なハッピーの姿を見て、目を見開き驚愕の表情を浮か

べた。魔王が七本の尾を次々引き抜き手を放すと、ハッピーは全ての力を失ったかのようになり手が垂れ、みゆきの姿に戻った。絵本の世界での衣装、ピーターパンの衣装を着たみゆきは、そのままグッタリ力なく地上へと落下して行った……

その姿を、時が止まったように、ブラック達が、ブルーム達が、ドリーム達が、ピーチ達が、プロツサム達が、メロデイ達が、そしてサニー達が、驚愕の表情を浮かべ目を見開くと、

「みゆきいいいい!!」

「みゆきさああああん!!」

「みゆきちやあああん!!」

涙ながらに絶叫する者、金切り声で叫ぶ者、怒鳴るような声で叫ぶ者、プリキュア達が、皆一斉にみゆきの名を絶叫するも、みゆきは答えない……

「「みゆきいいいい!!」」

「みゆき殿おとおお!!」

今にも海賊船から飛び出そうとするキャンディ、ウルルン、オニニン、マジヨリン、そしてポップだったが、

「みんな、堪えて!今のあなた達が行っても……」

「みんな、耐えて!きつとマリンを始め、プリキュアのみんなが……みゆきを救ってく

れる!!」

今の自分達がみゆきの側に駆け付けても、返ってプリキュア達の迷惑になると判断した金と銀のえりかは、涙ながらに妖精達を必死に押さえつけた・・・

「ウツ・・・ま、不味いぞ」

孫悟空一行の攻撃を受けて倒れていた牛魔王は、ヨロヨロ起き上がり、蹠踉めきながら必死に芭蕉扇を軽く振ると、芭蕉扇から発せられた緩やかな風が、みゆきの身体を優しく地上へと導いた。

だが、みゆきの身体はピクリとも動く事は無かった・・・

「みゆきいいいい!!」

顔面蒼白でこの光景を目撃したニコは、涙を拭おうともせず、みゆきの下へと駆け寄って行った・・・

第七十三話：キュアハッピー・・・絵本の世界に死す!?

完

## 第七十四話：みゆきとニコ

## 1、絵本の主人公達

みゆきは、暗い闇の中を一人彷徨っていた・・・

まだ意識が朦朧（もうろう）としている中、必死に辺りを見渡すも何も見えない！

（私、一体?!・・・エツ?!私、何で裸なの?）

自分の体を見たみゆきは、何も服を身に着けて居らず、発育途中の健康的な裸体姿である事に困惑した。何で自分は裸になつてるのか、頬を染め動揺していたみゆきは、遠くの方で微かな光を見付けた。その光に導かれるように進んで行くと、みゆきは見覚えある風景を見た。裸で居る事を忘れたかのように・・・

（この場所・・・間違いない!お婆ちゃんのお家だ!!でも、どうして!?!）

みゆきは、何故祖母タエの家に居るのか小首を傾げていたが、そんな部屋の中に、3、4歳の女の子が、嬉しそうに本を抱えて入ってきた。みゆきは、入ってきた女の子を見ると目を見開いて驚き、

「この子は・・・私!小さい頃の私だ!!・・・って事は、私、死んじゃったのかなあ?」

みゆきも、絵本や童話ばかり読んでいる訳でも無く、最近はおかねややよいに薦められ、漫画やアニメを、れいかに薦められ、普通の小説も読むようにはなっていた。だが、まだ圧倒的に好きな絵本を読む方が多いのだが……

（人は死ぬ間際、走馬燈（そうまとう）のように昔の事を思い出すとか、おかねちゃんに脅かされたっけ……）

自分は死んでしまったから、裸のまま居るのだろうか？

みゆきにフツと寂しさが沸き上がった……

大好きな両親や祖母、学校の友達や佐々木先生、そして、大切なプリキュアの仲間達、キャンディやポップの妖精達共、もう会う事は出来ないのかと思うと涙が零れて来た。そんなみゆきとは対照的に、絵本を読んでいる幼いみゆきは、楽しそうに声を出して絵本を読んでいた。

「ニコちゃんは言いました。喧嘩何か止めて、みんなで楽しく遊びましょう。仲良くするには……笑顔が一番！熊さんも、狼さんも、喧嘩を止めると笑顔で手を握りました！！」

（そう言えば、言い合いをしていた響さんと奏さんの事を、世界絵本博覧会で注意してた女の子達も居たなあ……ン!?今小さい私は、ニコちゃんって……アツ!?）

みゆきはハツとしたように、幼い自分の背後に回り込むと、そつと後ろから絵本を覗

き見た。その絵本に描かれていたニコという女の子は、間違いなくニコその人であった。みゆきの記憶がどんどん甦ってくる。

(そうだ・・・小さい頃引つ込み思案だった私は、中々お友達が作れず、いつも一人で遊んでた。そんな私に、笑顔の大切さを教えてくれたのは・・・ニコちゃんだったんだ!!) 母育代が身体を壊し入院していた一ヶ月の間、みゆきは祖母タエの家で暮らしていた。引つ込み思案だったみゆきは、タエの家から出ようとせず、何時も家の中で過ごしていた。見かねたタエは、みゆきに昔話を聞かせたり、絵本を買ってきて、読み聞かせて上げると、みゆきは目を輝かしてタエの話聞いていた。母育代からも絵本を読んで貰っていたが、そこは年の功、タエの語り口は幼いみゆきの心を刺激し、みゆきは絵本が大好きになり、絵本の内容の真似をして、外に出掛けるようにもなっていた・・・そんなみゆきの思いを表すように、幼いみゆきは絵本に書いて有る通り、鏡に向かつて笑顔を向けてみる。そんな幼いみゆきを見て、

(そう・・・そして、私は何度も笑顔の練習をしていて、偶々(たまたま)お婆ちゃんの家近所の子にその姿を見られた事が切っ掛けで、初めてお友達が出来た!それも、ニコちゃんのお陰!!)

どんだん幼き日の記憶が、みゆきの脳裏に甦って来る・・・

絵本のニコの言う通り、笑顔で話し掛けた時、みゆきの周りには沢山の友人達が出来

ていった。

「みんな笑顔でウルトラハッピー!!」

みゆきの口癖にもなったこの言葉は、ニコがもたらしてくれたものだった・・・

(思い出した! お婆ちゃんと一緒に、公民館で要らない絵本を貰ったのが・・・ニコちゃんが絵本! 私は、ニコちゃんの絵本を読むのが楽しみだった・・・でも、途中でページが破れてたんだ!! ニコちゃんを可哀想に思った私は、絵本の続きを書こうと・・・)

前にのぞみの家で、のぞみの家族と話して居た時、小さい時に絵本を書いてみようと思っただのは、ニコの本であつたと思ひ出したみゆき、その顔は悔恨(かいこん)を浮かべていた・・・

何故忘れていたんだろう?

みゆきの心の中に、ニコへの罪悪感(ざいあくかん)が生まれていた。

(出来るなら、ニコちゃんに会って謝りたい・・・私に笑顔の大切さを教えてくれたニコちゃんに、ちゃんとお礼を伝えたい! でも・・・)

今の自分は、もうみんなと会う事は出来ないのでは無いか? そんなみゆきの不安通、再びみゆきの身体は闇の中へと消えて行った・・・

「みゆきいい! お願い、目を開けて・・・みゆきいい!!」



みゆきの下に辿（たど）り着いたニコは、みゆきを抱き抱え、必死に声を掛けみゆきを揺さぶるも、みゆきは目を覚まさなかつた。

（ニコ・・・お前!?!）

魔王は、みゆきの名を叫びながら涙するニコの姿を、呆然と見続けていた・・・

みゆきの名を叫び続けるプリキュア達、だが、みゆきからの反応が返つてくる事は無かつた・・・

「嘘・・・や！嘘や嘘や嘘や・・・嘘やあああ!!」

ボロボロ大泣きしながら、サニーがみゆき目掛け這いずる。

「みゆきちちゃん、お願い・・・返事してええ」

涙と共に出る鼻水を啜りながら、ピースもまた必死にみゆき目掛け這いずる。

「嘘だよ・・・嫌だよ・・・みゆきちちゃん・・・みゆきちゃあああん!!」

蹠踵（よろ）めきながらも、何とか立ち上がったマーチの目からも大粒の涙が零れた。

「こんな・・・こんな事・・・信じられません!!みゆきさん!みゆきさああん!お願い、目を、目を開けてえええ!!」

ビューティもまた涙を流しながら、必死にみゆきの名を叫び続けるも、みゆきから返事が返つて来る事は無かつた・・・

「そんなあ・・・みゆきちちゃん、みゆきちゃああん!・・・アンデトルセンの時のように、

私の目の前でみゆきちゃんがあ、みゆきちゃんがあ……イヤアアアア!!」  
エコーはその場に膝から崩れ落ち、顔を覆って泣きじやくった……

「ククク、僕の偽物などになるから……惨（みじ）めな最期だったねえ？僕の手で止めを刺せなかったのは残念だったけどさ！」

「黙れ!!」

みゆきを見て嘲笑（あざわら）っていたピーターパンを、凄まじい形相でブライトとウインディが睨み付けた。二人は鬼気迫る表情で、ピーターパン目掛け一歩一歩歩を進めると、

「絵本の世界に混乱を招かないように、私達は遠慮していた……けれど、大切な仲間を嘲笑ったお前は……許さない!!」

「もう、遠慮はしない！例え、絵本の内容が変わる事になったとしても……」

「お前は、私達が倒す!!」

「おお、怖い怖い……」

戯けるピーターパンに対し、二人が今にも襲いかかろうとするのを、背後からブルームとイーグレットが、二人の肩を掴み止めた。ブライトとウインディは、険しい表情で振り返るや、二人に食って掛かりそうな表情を浮かべると、

「ブルーム！イーグレット！どうして止めるの？」

「あなた達は・・・みゆきを嘲笑ったこいつを、何とも思わないの？」

顔を見合わせたブルームとイーグレット、悲しげな表情を浮かべたその瞳には、うつすら涙すら滲（にじ）んでいた・・・

二人も、みゆきをあんな目に合わせた魔王に、嘲笑ったピーターパンに、怒りを覚えない筈は無かった。二人はブライトとウインディを諭すように、

「私達だって、許せる訳無い！でもね、こんな事みゆきちゃんは・・・きつと望んでないよ!!」

「彼女が大好きな、この絵本の世界を元に戻す事・・・それこそ今、私達がすべき事何じゃないかしら!？」

二人の言葉を受け、ブライトとウインディは返す言葉が浮かばなかった。みゆきなら確かにそう思うかも知れないと・・・だが、まだ二人は承服しかねる顔を浮かべていると、ピーターパンは口元に笑みを浮かべながら、

「おやおや、随分甘い事を言うんだねえ・・・絵本の世界を元に戻す？これこそが、僕達の望む絵本の世界なのさ!!」

「本当にそうかしら？あれを見てごらんなさい!!」

イーグレットが海賊船を指さすと、海賊船から身を乗り出すようにしてみゆきの名を

叫ぶ、キャンディ達妖精の面々に混ざり、ネバーランドの子供達も泣きながら何かを叫んでいた。その声がピーターパンにも聞こえてくる……

「ピーターパン！その子を助けて上げてえええ!!」

「ウツ!?!……………」

必死に叫ぶ子供達の声が、ピーターパンの心に次第に大きな声となつて響いていった……

生死を彷徨（さまよ）うみゆきの側に、直ぐにでも駆け付けたい……

ドリーム達の思いは一つ……

だが、それには目の前のシンデレラをどうにかする事が先決だった。鋭利に尖ったガラスの靴を上手く使い、フィギアスケートの選手のように華麗に舞うシンデレラは、ご満悦な表情を浮かべながら、

「どうかしら!?!この華麗な舞いは？私の王子様に手を出そうとした醜い者共には、到底真似など出来ないわよねえ？」

そんなシンデレラを、プリキュア5も、ローズも、哀れみの視線で見つめた。

「ええ、今のあなたの真似など出来ないし……したくも無い!」

「今のあなたは……私達が知っているシンデレラでは無いもの!」

「そうです！今のあなたは・・・」

「「心が汚れたシンデレラですもの!!」」

「な、何ですってええ!?!」

そう言いながら、アクアが、ミントが、レモネードが、シンデレラを指差すと、自分の心が汚れていると、名指しされたシンデレラは不愉快そうな顔を浮かべ、

「この私が、心が汚れたシンデレラですってえ!?!取り消しなさい!!」

「取り消す!?!・・・あなた、今の自分の顔を良く見てみたら?」

「今のおんたの顔は・・・あんたを虐めていた意地悪な継母（ままはは）や、意地悪な姉達と・・・何の変わりも無い!!」

「な、何を!?!」

ローズとルージュも、そんなシンデレラに険しい視線を向けながら、今のシンデレラは、自分の事を虐めていた継母達と、何の変わりも無いとシンデレラに伝える。動揺するシンデレラを諭すように、悲しげな表情のドリームは、

「シンデレラ・・・良く思いました！私達や、みゆきちちゃんが憧れていた・・・絵本の主人公、シンデレラの心を取り戻してええ!!」

「・・・・・・・・・・」

（今の私が・・・お姉様達やお母様と同じですって?）

ドリーム達の声を受け、シンデレラの心の中で、葛藤（かつとう）が生まれようとしていた……

釣り竿をビュンビュン振り、釣り糸を巧（たく）みに操り攻撃する浦島太郎、素早い動きでピーチ達を攪乱（かくらん）する人魚姫の攻撃に、苦戦していたピーチ達四人であつたが、みゆきの現状を目の当たりにし、その表情が一気に変わつていった。ピーチは、二人の攻撃をわざと受けると、二人の手を力一杯掴み、動きを封じた。動揺する二人に対し、パッション、ベリー、パインは、

「もう止めて！あなたは、虐められていた亀を助ける程の正義感の持ち主……そんなあなたなら、魔王の呪縛（じゆばく）何か、はね除けられる筈よ!!」

「あたし達は、あなた達と戦う為に、この絵本の世界に来たんじゃないの!!」

「人魚姫さん、浦島太郎さん、お願い！子供達が憧れた絵本の主人公に戻つてええ!!」

パッションが、ベリーが、パインが、浦島太郎と人魚姫の説得を試みる。尚も暴れようとする二人に、悲しい視線を向けたピーチは、

「あなた達は、遭難した王子様を、子供達に虐められていた亀を、身を持って助ける事が出来る優しい人……だから、王子様も、乙姫様も、あなた達の事を大切に思つた。物語的には、悲しい結末なのかも知れない……でもね、私達はあなた達のお話を読んで、

色んな事を学ぶ事が出来たの!!」

「・・・・・・・・」

「私が子供の頃の事だから、記憶の彼方に忘れていた事だったけど・・・あそこに居る絵本が大好きなみゆきちゃんやんが、私達にあなた達との思い出を呼び覚ましてくれた! お願いい!! みゆきちゃんの気持ち・・・無駄にするような事はしないで!!!」

ピーチの魂からの叫びを聞き、人魚姫と浦島太郎の二人は、ニコに介抱されるみゆきをジッと見つめた。お互い顔を見合わせた二人は、心の奥底にあった疑問が沸々（ふつふつ）沸き上がってくる。

何故自分達は、みゆきと言う少女達と戦うのだろうか? と・・・

桃太郎の剣捌（さば）きを巧みに躲すムーンライト、ニコに介抱され横たわるみゆきの事も気掛かりであったが、気を抜けば桃太郎の繰り出す刀を受け、致命傷に成りかねない現状に憂慮していた。

「ブロッサム、マリリン、サンシャイン、私が囿（おとり）になるから、みゆきの下に行つてあげて!」

「そうしたいのは山々何だけどさあ・・・この猿すばしっこくて!」

「そこを退いて!!」

険しい表情を浮かべたマリんとサンシャインが、足止めする猿、犬、雉を、少しイライラしたように手で追い払おうとすると、三匹は呼吸を計ったように飛び退いた。だが、三匹の表情は、何処か憂（うれ）いを帯びていた。それに気付いたサンシャインは小首を傾げ、

（三匹は、ひよつとしたら・・・）

サンシャインが思案していたその時、俯（うつむ）いたプロツサムは、思いつ切り顔を上げると、

「いい加減にして下さい！それでも、悪い鬼さんから困っている人々を守って来た人達 of する事ですか？私、堪忍袋の緒が・・・切れましたああ!!」

「いや、犬、猿、雉は人じゃないと思うけど?」

「マリナー！少し黙って下さい!!」

「はい・・・」

プロツサムの気迫が、犬、猿、雉、そして、マリンを萎縮（いしゆく）させる。桃太郎は、ムーンライトから距離を取り、犬、猿、雉を怒鳴りつけるも、プロツサムは桃太郎を指さすと、

「今のあなたは・・・子供達のヒーロー何かじゃありません！今のあなたを見たなら、きびだんごを作ってくれたお婆さんも、心配しながら送り出してくれたお爺さんも、きつと、



きつと悲しみます!!」

「な、何だと!？」

「犬も、猿も、雉も、きびだんごを分けてくれたあなたを慕い、共に鬼退治に出た仲間の筈です! そんな仲間、酷い事言わないで下さい!!」

そう言ったブロッサムが、ニコに介抱されるみゆきへと向けられると、桃太郎の視線も釣られるようにみゆきを見た。

(そう言えば、あいつもこいつらの仲間だったな・・・)

「ご託を並べてくれたわりに、自分達の仲間があんな目に遭って居るのに、随分薄情じゃないか?」

「みゆきは・・・こんな事で決して死んだりしない! 私達は、それを信じてる!!」

「犬、猿、雉も、きつと何時ものあなたに戻ってくれと信じて居るから、悪い事をしていると思つても、あなたの為になると信じて、私達と戦つて居ると思う!!」

「何!？」

ムーンライトが、サンシャインが、哀れみの視線を向けながら桃太郎を諭す。ブロッサムはマリンを促し、二人でタクトを取り出すと、

「あなたの心に巣くう闇を、私達が払つて見せます! マリン、行きますよ!!」

「やるっしゅ!」

「花よ、輝け！プリキュア！ピンクフォルテウエーイブ！！」

「花よ、煌け！プリキュア！ブルーフォルテウエーイブ！！」

二人から放たれたフォルテウエーブが、桃太郎目掛け飛ぶと、犬、猿、雉が桃太郎を庇うように前に飛び出した。桃太郎は目を見開き、

「お、お前達……」

桃太郎の目から涙が零れた……

自分は何をしていたのだろうか……

桃太郎は逆らう事を止め、犬、猿、雉を抱きしめながら、フォルテウエーブの光に身を預けた……

ランプの魔神が繰り出す魔法の数々に、メロディ達は苦戦していた……  
「どうだ、ランプの魔神の力は？」

高笑いを浮かべるアラジンと、メロディ達四人はキツと睨み付ける。こんな所でモタモタしてられない、みゆきの下に駆けつきたいと……

「アラジンだけなら、何とでもなるのに……」

「あのランプの魔神を何とかしなきゃ」

「ええ、でもあの魔法はやっかいね……」

四人は、次々繰り出される魔神からの魔法攻撃の数々に防戦一方だった。ミューズは少し考え込むと、小学校の図書室で読んだアラジンの話を思い浮かべた・・・

ミューズは、アラジンにはもう一人、指輪の魔神が登場した事を思い出した・・・

「メロディ、リズム、ビート、私に考えがあるの！ランプの魔神を、アラジンから遠ざけるように戦って!!」

「何か考えがあるのね？分った!」

ミューズの提案を受け入れたメロディ、リズム、ビートは、魔神をアラジンから遠ざけるような戦い方を始めた。アラジンは苛々したように、

「魔神、そんな奴らさっさとやっつける!!」

手を振り回すアラジンの隙を見付けたミューズは、アラジンに飛び掛かると、指輪を擦って見た。すると、指輪から黙々（もくもく）煙が現われると、ランプの魔神より一回り小さい、指輪からもう一体の魔神が姿を現わした。

「お呼びでございますか!?!ご主人様?」

「おお、そうだった!俺には指輪の魔神も・・・」

「呼び出したのは私よ!」

「畏まりましたご主人様・・・何かご用でも?」

「な、何い!?!」

指輪の魔神を呼び出したのが、ミューズだと知った魔神は、ミューズに畏まり、何なり願いたい事を言うように伝えると、アラジンは激しい動揺を見せた。

「あなたに、ランプの魔神をどうにかしてもらいたいの……出来る？」

「少々難題ですが、動きを封じるぐらいならば……では!!」

指輪の魔神は、そう言うのとランプの魔神の下へと飛び去った。ランプの魔神に追い回されたメロディ達三人は、障害物競走のように、ランプの魔神が繰り出す罠を駆け抜けて行く。

「ミュ、ミューズ、まだなののおお？」

「私……もう駄目ええ」

「リズム、しつかり……って、ギヤアアアア！オバケエエ!!」

リズムを励ましていたビートだったが、魍魎魍魎（ちみもうりよう）にまで追い回され、絶叫しながら逃げ回った。もう限界が近付いたのか、リズムがへろへろになったその時、指輪の魔神が背後から忍び寄り、ランプの魔神の動きを止めた。

「お前は!?!何をやる？」

「私のご主人様の命令だ!少しの間おとなしくして貰うぞ!!」

「た、助かったあああ」

ミューズの機転で、何とか危機を脱したメロディ、リズム、ビートの三人も、ミュー

ズに合流するようにアラジンの前にやってくると、

「ま、待て！俺に何かしたら魔神が黙ってないぞ!!おい、魔神!!」

「も、申し訳ありません！こ奴に動きを封じられていて、魔法を使う事が出来ません!!」  
「な、何だとおお!!」

頼りの魔神が動きを封じられ、アラジンに焦りが生じる。ミューズはアラジンを指さすと、

「観念する事ね！お話の通り、心を入れ替える良い機会よ!!」

「何を!？」

「音吉さんの本で読んだわ！あなたは、最初こそどうしようもない生活を送っていた。でも、心を入れ替えたあなたは、やがては国を治め、人民に慕われる程の人格者となった・・・今の絵本の世界をよく見てえ!!」

「これがあなたの望む世界なの?」

「違うよね?あなたなら・・・私達の言葉を分ってくれる!!」

ミューズの言葉に続くように、ビートが、リズムが、そしてメロデイが、アラジンに訴えるように言葉を続けていった。

「俺が望む世界!・・・」

アラジンは、改めて闇に包まれた絵本の世界を見渡した・・・

アラジンの心の中に、絵本の世界に住む住民達の、嘆きの声が聞こえてくるかのようだった……

「ダダダダダダダダダダ!!」

「ドラララララララララ!!」

孫悟空と激しい肉弾戦を繰り広げるブラック、こんな所で足止めをされている間にも、みゆきの身がどうなっているのか心配だった……

「いい加減にして!私のみゆきの側に行きたいの……あんた達に構ってる暇は無いの!!」  
「そんな事、俺様の知った事か!」

猪八戒、沙悟浄の攻撃を回転しながら捌き、二人を投げ飛ばしたホワイト、三蔵法師は不甲斐ない二人に楯を飛ばし、

「八戒!悟浄!お前達、悟空を見習いなさい!!そんな小娘に何を手間取っているんです!!!」

そんな指示を出す三蔵法師を見たホワイトの顔付きが変わった……

「あなたねえ……それでも尊い経本を取りに、天竺に向かおうとする徳の高いお坊様の言葉ですか?」

「お黙りなさい!この私に説教など……身の程を知りなさい!!」

「身の程を知るのよ……あなたの方よ!!」

普段、感情剥き出しで怒る事など、滅多に無いホワイトだったが、世界絵本博覧会で、この絵本の世界で、自分が演じた三蔵法師のこのような暴挙を許せなかった……

「あなたには、この世界の人々の嘆きが、私達の悲しみが分らないの? そんな事も理解出来ないあなたに……説法を行う資格など無いわ!!」

(おのれえ、小娘の分際でえ……だが、この世界の人々の嘆き!? 小娘達の悲しみ?)

ホワイトの説教を、忌々しそうにしていた三蔵法師ではあったが、心の中でホワイトの言葉が繰り返されると、改めてこの闇に覆われた空を見上げた……

「ドスコイ! ドスコイ! ドスコイ!」

サニー達を狙う金太郎の攻撃を、ルミナスは必死にバリアを張って耐え続けて居た。張り手の連打を浴びせるものの、ルミナスの強固(きょうこ)なバリアは、その攻撃を完全に防ぎ続ける。金太郎は忌々しそうに四股を踏み直すと、

「張り手が駄目なら……体当たりだ!!」

金太郎は両頬を叩き気合いを込めると、シオルダータックルのように、肩から激しくルミナス目掛けぶつかってきた。その衝撃でルミナスの身体が少しずつ後ろへと押されるものの、何とか耐え凌(しの)ぎ続ける。

「止めて！何故あなたは私達を目の敵にするの？」

「ハア!?それはお前達が、魔王様の敵だからに決つてるだろう!!」

「違う！それはあなたの意思何かじゃない!!だって、あなたは・・・動物達とも仲良く、困っている者が居たら放っておけない人格者ですもの・・・」

「だから、魔王様に・・・ウツ!？」

言い返そうとした金太郎は思わず言葉が詰まった。ニコに介抱されるみゆきを改めて見たルミナスの瞳からは、大粒の涙が零れて居たのだから・・・

金太郎は釣られるように、ニコとニコに介抱されるみゆきを見つめると、心の中に疑問が沸き上がってきた。

（ニコを悲しませたみゆきを倒せ！魔王様はそう言った！だが、俺が見る限り・・・ニコは、みゆきを失う事の方が悲しいのでは!?)

金太郎は攻撃を止め、呆然とニコとみゆきを見つめ続けた・・・

みゆきを介抱して泣きじやくるニコを、呆然として見て居た魔王は、ハツと我に返るや、絵本の主人公達に対し、

「お前達、何をしている！早くそいつらを・・・!？」

言いかけた魔王は、思わず言葉を飲み込んだ・・・



刀を納めた桃太郎は、犬、猿、雉を伴い、他の仲間達の下へと歩き出した。桃太郎の顔からは悪意が消え去っており、ブロッサムとマリンの放ったフォルテウエーブによって、魔王の呪縛から解き放たれた事の現れだった。桃太郎は、戸惑うピーターパンを、シンドレラを、人魚姫と浦島太郎を、アラジン、金太郎を、次々と誘うように訪れると、その都度主人公達から黒いオーラが抜け出していった・・・

プリキュア達は、その光景を見て安堵するも、皆みゆきの事が心配で、心から喜ぶ事は出来なかった・・・

(我が呪縛を解き放ったのか!?)

魔王は、絵本の主人公達から抜け出した影を元に戻すと、一同を攻撃するでもなく、再びニコを見つめた・・・

三蔵法師は、いまだに戦い続ける孫悟空を諫めるように、御経を唱えると、悟空の頭の輪っか、緊箍児(きんこじ)が縮み始め、悟空は頭を抑えながら地べたを転がり周り、「イテエエエエエ!お、お師匠様ああ、どうしてえ!?!」

「悟空!もうよい!もうよいのです!!……………娘さん、あなたの言う通りだ!人々を救う為に旅立った私達が……………逆にこの世界の人々を悲しませる事に手を貸していたとは……………恥ずかしい!!!」

そう言う三蔵法師から黒いオーラが抜け出すと、三蔵法師は深々とホワイトに頭を下げた。ホワイトの表情が見る見る明るくなると、

「ううん、私の方こそ、生意気な事を言つてゴメンなさい！」

そう言うのと、ホワイトも三蔵法師に対して深々と頭を下げた。三蔵法師は手を振つて遮り、

「いえいえ、あなたのお言葉……深くこの三蔵の胸に届きましたぞ！悟空、八戒、悟浄、お前達になら、本当に懲らしめるべき存在が誰なのか……分るはずです!!」

「本当に懲らしめる相手!？」

悟空は首を捻りながら考え込むと、ブラックを指差し、

「猿顔が被るこいつ?」

「違あああう!私猿顔じゃなああい!!」

そういうと、不満そうに拳骨で孫悟空の頭を小突くと、ホワイトの目が点になる。

「ブラック!もう……せつかく話が纏まり掛けてるのに……」

「だつてええ、私の事猿顔だつてええ……」

ホワイトに注意されたブラックは、頬を膨らまして不満そうな表情で孫悟空を指さすと、孫悟空はブラックを見てアカンベエと舌を出した。何時ものブラックなら、孫悟空と変顔合戦を始める所であつただろうが、やはりみゆきの安否を気に掛け、孫悟空の挑

発に乗る事は無かった。三蔵法師はそんな悟空を見て溜息を付くと、再び御経を唱え出した。悟空の頭の輪っか、緊箍児が再び縮み始め、悟空が頭を抑えてのたうち回る。

「お、お師匠様！勘弁してええ．．．もうしません！ホラ、この通り仲直りもします!!」  
孫悟空は、ブラックの肩に右手を廻し、三蔵法師に向かって、ブラックと和解した事をアピールする。牛魔王は少し意地悪げな視線を悟空に向けて、

「気をつけな！悟空は悪知恵が働くからなあ!!」

「うるさいぞ！牛魔王!!」

悟空の事が信じられないブラックは、ジト目で悟空を見つめると、

「どうも信じられない．．．ホワイト、レインボーセラピーで確実に．．．」

「別に良いけど．．．」

少し戸惑いながら、ホワイトはブラックの申し出を受けると、ブラックとホワイトが孫悟空、沙悟浄、猪八戒の前に立つや、

「ブラック・パルサー!」

「ホワイトパルサー!」

「闇の呪縛に囚われし者たちよ!」

ホワイトが叫び．．．

「今、その鎖を断ち切らん!」

ブラックが応える・・・

「プリキュア！レインボー・セラピー!!」

ブラック、ホワイトから発せられた、半球形の虹のオーラが広がり、悟空、八戒、悟浄を飲み込んで行った。元々、魔王に操られた訳ではない猪八戒だったが、煩惱（ぼんろう）を浄化されたかのように、目をキラキラさせるのだった・・・

桃太郎達絵本の主人公達一行が、泣きながらみゆきの名を叫び続けるニコ、そして、何の反応も示さないみゆきの下へとやってくる、プリキュア達や牛魔王達も続くようにみゆきの側に現われ、心配そうに見つめた。

少し遅れて、ブラックとホワイトはサニーを、ムーンライトとプロツサムはビューティを、ブルームとドリウムはピースを、メロディとリズムがマーチを、ピーチとパッションがエコーを支えながらやって来ると、ニコはハツとした表情で一同を見回した。

自分の為を思い、魔王はこの絵本の世界を滅茶苦茶にしてしまった。その責任は、自分にあるとニコはニコなりに考えて居た。

ニコは首を垂れて、小さな声でゴメンなさいと呟いた・・・

怒鳴られるかも知れない・・・

殴られるかも知れない・・・

でも、自分が起こしたこの騒動の責任は、きちんと果たしたいとニコは思った。

「反省しているなら……もう良いさ!」

「そうだな……現にお前らだって、魔王に操られて散々迷惑掛けたんだからな」

「ええ、私達だって、彼女達に酷い事をしてきたんだし」

「それより……みゆきちゃんは大丈夫なの?」

桃太郎が、牛魔王が、シンデレラが、ニコに優しく微笑み、ドリームはみゆきを見ながら心配そうに声を掛けた。ニコは想像外の四人の言葉を聞き呆然とするも、ドリームに聞かれた事を、無言で首を横に振り答えた。プリキュア達から響(どよ)めきが起こり、次々にみゆきに声を掛けるも、みゆきは何の反応も見せる事は無かった。桃太郎はプリキュア達を見つめると、

「プリキュアと言ったな……此処は俺達に任せて貰えるか?」

「何か方法があるの!?!……お願い!!」

桃太郎の申し出を受け、ピーチは桃太郎の申し出を承諾した。横たわるみゆきを囲むように、桃太郎、金太郎、シンデレラ、アラジン、人魚姫、浦島太郎、孫悟空、そして、みゆきが憧れているピーターパンが円を描くように並び立つと、人魚姫は、不老不死になると言われる自分の血を飲ませようと、みゆきの前でしゃがみ込んだ。だが、みゆきの身体には、魔王によって貰われた七力所の傷が何処にも無かった……

「見て！この子・・・何処にも傷が無いわ!？」

「あれだけ魔王に刺されたのに、血も全く出ず、傷跡が・・・何も無いとは!？」

人魚姫の言葉を受け、一同もじつくりみゆきの身体を観察するも、何処からも血が流れてはいなかった。浦島太郎は小首を傾げ、傷跡が無い事を不思議に思っていると、そんな疑問に答えるかのように、魔王が語り始めた。

「当たり前だ！俺は・・・影!!俺がみゆきに放った攻撃は・・・みゆきの精神を肉体と切り離しただけだ!!」

「どういう・・・事!？」

「じゃあ、じゃあ、みゆきは・・・生きてるの!？」

マーチが、ニコが、思わず魔王を見つめた。みゆきは生きているのではないか？一同の表情がパツと明るくなった。アクアは直ぐに行動に移り、みゆきの胸に右耳を当てると、アクアの耳に、みゆきの命の鼓動がドクンドクンと伝わってくる。

「よ、良かった・・・みんな、みゆきの心臓は動いてるわ!」

「本当!？」

アクアの報告を受け、プリキュア達から歓声が上がった。だが、アクアの表情が曇って居る事にムーンライトが気付くと、

「アクア、表情が冴えないけど!？」

「ええ、確かに心臓は動いています！ですが、魔王が言っている通りだとすれば・・・みゆきは二度と目を覚まさない可能性も・・・」

「何ですって!?!」

更なるアクアの言葉に、プリキュア達から響めきが沸き起る。不安そうにみゆきを見つめるニコを見た魔王は、

「ニコ・・・お前はみゆきが憎いのではないのか？約束を守らなかったみゆきに、復讐したかったのでは無いのか？」

「魔王・・・違う、違うの！私は・・・みゆきが大好き！でも、みゆきは私の事を忘れていた・・・だから、少し意地悪しよう・・・魔王、私がちゃんとあなたに伝えなかつたから・・・ゴメンなさい!!」

「グウウウウウ・・・だが、俺は、俺は、ニコを悲しませたみゆきを・・・許さない！ニコ、お前にはこの魔王が居る!!みゆきなど、この絵本の世界など・・・不要だああ!!!」  
再び魔王の邪悪な力が周囲に漂い始めると、プリキュア達が、絵本の主人公達が、険しい表情を浮かべる。

このままでは、本当に絵本の世界が崩壊してしまう・・・

海賊船からこの状況を見て居たキャンデイは、居ても経っても居られなくなり、

「キャンデイも・・・キャンデイも、みゆきの側に居たいクル・・・みゆきは、みゆきは、

キャンデイの大事な、大事な・・・友達クルウウウ!!」

みゆきを思い泣き叫ぶキャンデイの身体から、凄まじい衝撃が巻き起こり、キャンデイを押さえていた金と銀のえりかが吹き飛ばされる。

「キャ、キャンデイちゃん、落ち着いて!」

「キャンデイにこれ程の力があるとは!?!」

戸惑う金と銀のえりかに反し、ポップは、キャンデイから発せられた赤い光が、鳳凰(ほうおう)のようなシルエットを浮かべるのを見ると、

「キャンデイ・・・そなたのその力!」

呆然としていたポップだったが、キャンデイの頭上にロイヤルクロックが光輝きながら現われた。ポップは目を見開き驚くと、

「キャンデイ、そなたロイヤルクロックを持つて来てたのでござるか?」

「キャンデイ・・・知らないクル!みゆきのお家に置いてきた筈クル!」

戸惑う二人だったが、どこからともなく、ロイヤルクイーンの声がキャンデイとポップ、ウルルン、オニン、マジヨリンのメルヘンランドの妖精達に聞こえてきた・・・  
「キャンデイ・・・あなたはみゆきの力になりたいと思つたのですね!今のあなたには、まだロイヤルクロックの力を使いこなす事は出来ないでしょう・・・ですが、プリキュア達の、妖精達の、この世界の人々の力を借りる事が出来るのなら・・・」



「みゆきは・・・助かるクル？」

「それは私にも分りません・・・」

「だが、それしか方法が無いのなら・・・キャンデイ、ロイヤルクロックをみゆき殿の下に!!」

「分かったクル!!」

ポップは驚くに変化すると、キャンデイ、ウルルン、オニニン、マジヨリンを背に乗せ、みゆきの下へと飛び立った。

駆け付けたキャンデイとポップを見て、ビューティが今の状況をキャンデイ達に手短かに説明した。キャンデイは、みゆきの腕にロイヤルクロックを抱かせると、

「ロイヤルクイーン様は言ってたクル・・・プリキュアの、妖精のみんなの、絵本の世界みんなの力を借りる事が出来たなら・・・みゆきを助けられるかも知れないって、言ってたクル!!」

ロイヤルクロックの力を借りれば、みゆきを助ける事が出来るかも知れない・・・

キャンデイの言葉を受け、プリキュア達は一筋の光明（こうみよう）を見いだした気がした。その為にも、暴走し始めた魔王を止めなければならぬ。一同はキツと表情を引き締めると、

「キャンデイ、ポップ、ウルルン、オニニン、マジヨリン、ニコ・・・みゆきを頼むわ!」

「私達で、魔王を止めてみる！」

「エコー・・・あなたの力で、キャンディ達をサポートしてあげて下さい！」

「みゆきちゃんを・・・任せたよ！」

サニー、ピース、ビューティ、マーチが、キャンディやポップ達、エコー、そしてニコに声を掛けるのと同時に、プリキュア達は魔王に対して身構えた。エコーは頷くと、

「うん、私に手伝える事があるなら・・・みゆきちゃんの事は私達に任せて!!」

「みんな、みゆきちゃんの為にも、絵本の世界を・・・守るよ!!」

ドリームの合図と共に、プリキュア達が魔王に対して攻撃を開始した・・・

咆哮(ほうこう)する魔王に向かっていたプリキュア達、ブルーム達、ドリーム達、ピーチ達、ブロッサム達、メロディ達、サニー達が、魔王から距離を取り、技のコラボレーションを見せれば、一同の間隙をぬって、ブラック、ホワイト、ムーンライト、ローズが、魔王に対し激しい肉弾戦を試みる。そんな姿を見た桃太郎達は、彼女達の思いに応えるべく、みゆきを助ける方法をもう一度言葉に発した。

「この世界の人々の力を・・・か」

「なら、この世界の人々にも協力して貰わなきゃね！」

「だが、どうする!?! みんなに協力を頼むにしても・・・」

「私達が散り散りに説得に向かっていたら、みゆきを救う事は出来ないかも知れないわ！」

桃太郎、シンデレラ、金太郎、人魚姫が、さてどうするか思案するも、孫悟空とピーターパン、アラジンが空を飛んで一同に知らせる案を提案するも、それでもやはり時間が掛かってしまう事に気付कि、思案していると、

「その役目・・・私に任せて貰えませんか？」

「何か方法があるのかい？」

「あるなら、こちらの方こそ頼む！」

絵本の世界の住人達に協力を仰ぐ、その事を伝えるだけならば、自分にも出来るのではないかと思つたエコーが、一同に話し掛けると、ピーターパンと桃太郎が、エコーの提案を受け入れた。エコーは頷くと、両手を組んで祈るようなポーズを取り、目を瞑つた。精神を集中させるエコーの脳裏に、絵本の世界の人々の姿が浮かび上がってくる。

「分りました・・・皆さん、私の声が聞こえますか？今、この世界は崩壊の危機に瀕しています。みんなの力を貸して下さい!!」

エコーの声が絵本の世界中に響き渡ると、住人達は皆不思議そうに辺りを見回した・・・

「聞こえるか、子分共！この美猴王（びこうおう）事、孫悟空様も頼むんだ!! さっさと協力しやがれ!!」

悟空の声を聞き、水簾洞（すいれんどう）の猿達が騒ぎ始める・・・

「狼のみんなあ！この世界を、みゆきを救う為に、力を貸してウル!!」

ウルルンの声が、絵本の世界の狼達に響き渡った・・・

「青鬼様！鬼のみんなあ、みんなの力を貸して欲しいオニ!!」

オニニンの声を聞き、巨大な青鬼は空を見上げると、まるで了解したとばかり、棍棒を高々と掲げると、鬼達が一斉に棍棒を空に掲げた・・・

「魔法使いのみんなあ！マジヨリン達に力を貸して欲しいマジヨ!! みんなでこの世界を守るマジヨ!!!」

みんなでこの絵本の世界を守る・・・

オズの大魔法使いを筆頭に、恩讐（おんしゅう）を越え、グリンダとミス・ガルチの二人も杖を天空に掲げた。オズの魔法使い達に刺激されたように、世界中の魔女達が杖を上空に掲げた・・・

「みんな、聞こえるかい？僕だ、ピーターパンだよ！みんなの力を借りたいんだ・・・みゆきという少女を、絵本の世界を守る力を、みんなに貸して欲しいんだ!! みんな、手を空に挙げて!!」

ピーターパンの声が聞こえた時、ネバーランドに居たティンカー・ベルが、海賊船の中に居た子供達が、一齐に手を空に挙げた。

「何だい？ピーターパンだとお？」

逃げ出して居たフック船長だったが、魔王が取り憑かせていた影は既に抜けており、正気を取り戻していた。

「しかし、何で俺様はこんな所に居るんだあ？確か、ピーターパンと戦ってたような気がするんだが・・・」

空を見上げたフック船長、ピーターパンが言うように、確かにこの世界の異変は感じていた。

「チツ、仕方ねえ・・・おい、子分共！今回は特別だ、ピーターパンに協力してやれ!!」  
「[[[[[へい!!]]]]」

フック船長と手下達が両手を空に掲げた・・・

「もつとだ！この世界に住む人々よ、僕達に力を貸してくれ!!この絵本の世界を大好きな少女、みゆきを救う力を！この世界の為に戦ってくれている少女達に、力を貸してくれええ!!」

桃太郎の叫びが絵本の世界に響き渡った時、一寸法師が、白雪姫が、龍の子太郎が、か

ぐや姫が、色々な作品の主人公達が、絵本の世界を、みゆきを救うべく、心を一つにしたその時、みゆきの手握らされていたロイヤルクロックは光輝きだした。

「これは一体!？」

「これがみゆき殿を救える力なのでござろうか?」

エコーとポップが、光輝きだしたロイヤルクロックを見て驚愕すると、絵本の主人公達も次々と同意しだし、

「きつとそうだわ!ニコ、償う気持ちがあるのなら・・・あなたがみゆきの精神を連れ戻していらつしやい!!」

「俺達がこの箱に力を込める!」

「頼んだよ!」

シンデレラが、桃太郎が、ピーターパンが、一同がニコに微笑みを向けると、ロイヤルクロックに手を翳した。ニコは硬い表情で頷き、みゆきの左胸に顔を乗せると、みゆきとニコ、二人の心が重なったかのように、ニコの精神はみゆきの精神世界へと導かれた・・・

## 2、二人の思い

ニコは闇の中をゆっくり下降していく・・・

ニコの体も、みゆきのように何も身に付けていない幼い裸身を晒していた。だがニコは、そんな容姿を気にも止めず下降して行くと、次々とニコの前で、みゆきの幼き日の思い出が、走馬燈（そうまとう）のように流れていった・・・

ある場面を見た時、ニコは下降するのを止め、その場面を食い入るように見続けた。

「ニコちゃん、みゆきがお話の続きを書いて上げるねえ！ウーン・・・」

幼いみゆきはうつ伏せになり、両足をバタバタさせながら続きを考え、紙に書いては丸め、上手く考えつかないのか、少し飽きたようにゴロゴロ床を転がり回った。

（みゆき・・・ちゃんと約束守ろうとしてくれてたんだ・・・）

ニコは、みゆきは口だけで、絵本の続きなど考えもしなかつたんだろうと思つて居たのだが、みゆきは、ちゃんとニコのお話の続きを考えようとしてくれていた・・・

ニコにとつては、それだけで満足な事だった・・・

再び下降しだしたニコは、みゆきの名前を大声で叫び続ける。

「みゆきいい！みゆきいい！何処おお！みゆきいい！！」

そんなニコの声は、闇の中を落ちて行くみゆきにも聞こえていた。

（誰かが私を呼んでる・・・誰?!）

あかね達でも無い、なぎさ達でも無い、だんだん声がハッキリ聞こえてくると、みゆきの意識が活性化されていった。自分が会いたがった人物、ニコの声だったのだから

ら・・・

「その声・・・ニコちゃん！ニコちゃんでしょう!!」

みゆきからの返事が聞こえ、更に下降して行くと、ニコはみゆきの姿を見て、思わずホツと安堵の表情を浮かべた。共に裸での再会だったが、二人にとって、容姿などどうでも良かった・・・

みゆきと再会出来た事を喜びホツと安堵したニコは、

「みゆき！良かった・・・」

「ニコちゃん！でも、どうしてニコちゃんが此処に居るの？此処は・・・何処？」

「私にも良く分からないけど・・・魔王は、みゆきの肉体と精神を分離させたって言う事だから、多分みゆきの心の中!？」

「魔王が!?!・・・」

みゆきは、此処が自分の精神世界の中だと知り、何故自分が裸で居るのかうつすら理解した。ニコの言葉によって、自分がこのような目に遭って居るのは、魔王が引き起こした事だと悟る。だがみゆきの心の中で、魔王に対する怒りも、憎しみも湧いてくる事は無かった。逆に魔王に感謝の心さへ持つて居た。みゆきはニコの顔をマジマジ見つめると、

「ニコちゃん！私、今までニコちゃんの事を忘れていた・・・私に笑顔の大切さを教えて



くれたニコちゃんの事を・・・本当にゴメンなさい!!」

みゆきが深々と頭を下げると、ニコは首を振り、

「ううん、みゆきは悪くないよ! みゆきはちゃんと約束を守ろうとしてくれてたんだもん・・・」

「でも、結局続きは書けなかったし・・・」

「良いの! その気持ちだけで・・・それより、早くみんなの所に戻ろう! 魔王を止めなきや!!」

「魔王がどうかしたの?」

みゆきの問い掛けに、ニコは簡単に状況を説明すると、みゆきも頷き、

「うん、魔王の所に行かなきゃ! 私・・・魔王に話したい事があるの!!」

みゆきとニコは頷き合い、闇の中を上昇して行くも、先程とは違い、みゆきの幼い思いなどが現われる事は無かった。目指す方向を失った二人は、何処に向かえば良いのか途方に暮れた・・・

「みんな、ニコの様子が変だぞ?」

ニコがうなされるような状態になり、時折痙攣(けいれん)さへし始めた。桃太郎の声を聞き、一同は顔色を変え、ニコとみゆきに声を掛けるも、みゆきは無表情のまま、

ニコは更に苦しさを増しているようだった。

「まさか・・・ニコは、みゆきの精神に同化し始めたんじゃない?」

「不味いぞ! 早く引き戻さないと、二人揃ってこのまま二度と目を覚まさないんじゃないかねえか?」

牛魔王が焦りの表情を浮かべ一同を促すと、孫悟空も状況を知り、このままでは二人揃って二度と目を覚まさないかも知れないと告げた。エコーは顔面蒼白になり、

「そんな!?!・・・みゆきちやああん!」

みゆきに縋り付き必死に声を掛けるも、みゆきもニコも目覚めない。だが、ピーターパンだけは冷静だった・・・

「いや、二人は必ず助かるよ! みんな、此処がどこだか忘れて無いかい? 此処は絵本の世界! 絵本の主人公である僕達が揃ってるんだ、僕達が気持ちを一つに合わせれば・・・二人は必ず助けられるよ!!」

そう言うと、ピーターパンはロイヤルクロックに手を翳した。それに釣られるように、桃太郎が、金太郎が、シンデレラが、人魚姫が、浦島太郎が、アラジンが、孫悟空が、そして、牛魔王、金角、銀角、エコー、ポップ、ウルルン、オニニン、マジヨリンが、ピーターパンの手に次々と手を重ねていった。

「みんなの気持ちを合わせるクルウウウ!!」

最後にキャンデイが手を置き、キャンデイの合図と共に、一同の心が一つになった時、ロイヤルクロックは再び光輝いた!!

「ニコちゃん、見て!あの光・・・」

「うん、きつとそうだよ!みんなが私達に、道標を照らしてくれたのね!!」  
みゆきとニコの表情が輝くと、二人は光目掛け上昇して行った・・・

第七十四話：みゆきとニコ

完

## 第七十五話：笑顔とスマイル

## 1、心優しき魔王

暴走した魔王を、何とか食い止め続けるプリキュア達だったが、魔王を名乗るだけあり、プリキュア達の数々の集中攻撃を受け続けても、決定打を与える事は出来なかった……

「あいつ……強いね!」

「確かに……でも、此処で食い止めないと、絵本の世界は……」

みゆきの為にも、絵本の世界の為にも、此処で食い止めなければとブラックとホワイトの表情が険しさを増したその時、背後から絵本の主人公達の響めきが沸き起り、プリキュア達も、魔王も、何事かとそちらに視線を移した。

「みんなああ!みゆきちゃんが、みゆきちゃんが……」

涙声のエコーの声が脳裏に響き、プリキュア達は顔色を変え、サニーとピースはエコーを急かすように、

「エコー!みゆきがどないしたんか?」

「何かあったの?」

エコーは鼻水を吸るかのようにながら、

「うん．．．みゆきちゃん．．．」

「エへへへ！みんなあ、心配掛けてゴメンねええ!!」

エコーの言葉が終わる前に、一同が待ち侘びていたみゆきの声が聞こえ、プリキュア達から歓声が沸き上がった。ニコとエコーに支えられ、キャンディを頭に寄せたみゆきが、こちらに手を振りながら近づいてくる姿が、一同の肉眼からもはっきりと分かった。

「みゆきいいいい!!」

「みゆきちゃん!!」

「みゆきさん!!」

ブラック達が、ブルーム達が、ドリーム達が、ピーチ達が、プロツサム達が、メロディ達が、皆みゆきの無事な姿を見て、表情を和らげみゆきの名を呼んだ。サニー、ピース、マーチ、ビューティの目からは涙すら零れた．．．

「みゆきいい．．．心配さすなやあ!」

サニーは、ゴシゴシ涙を右腕で拭きながら、みゆきの無事な姿を見て安堵する。

「み、みゆきちゃん．．．ウエエエン！良かった、良かったよおおお!!」

みゆきの無事な姿を見て、ピースが更に泣きじやくりながら嬉し涙を見せた。

「みゆきちゃん．．．良かった、無事で良かったよ!」

「ええ、何事も無さそうで・・・ホツとしました!」

マーチとビューティは互いの涙を拭いながら、笑みを浮かべ合った。そんなプリキュア達の表情とは逆に、魔王は呻（うめ）き声を発しながら困惑していた。ニコの為を思い、このような行為をしてきた自分を、ニコは否定するのかと・・・

「みゆきの意識が戻ったのか!?!・・・ニコ、どうして俺の邪魔をする?」

「魔王!もう、もう止めようよ!!私・・・こんな事望んでない!!私の名前は、ニコ・・・みんなの笑顔を見るのが一番好き!!だから、もう、止めてええ!!」

「グウウウウ・・・ニコ、お前は俺を否定するのか?俺はお前の為を思って・・・グウオオ!!」

理性を無くした魔王の身体から、更なる闇が溢れ出し、更に絵本の世界を飲み込んで行った。

ニコは、自分の無力さを嘆いた・・・

そんなニコに、みゆきは笑みを浮かべると、

「ニコちゃん、そんな顔をしないで!魔王は、本当は優しいもん!私達プリキュアが：：きつと優しい魔王に戻して見せる!!私達のチームの名前は・・・スマイルプリキュア!笑顔の大切さは、私達も知ってるよ・・・行こう、エコー!!」

「うん!!」

「みゆき、気をつけるクルウ！」

キャンディはそう言い残し、みゆきの頭の上から飛び降りると、ポップ達の下に戻った。

「ありがとう、キャンディ！……プリキュア！スマイルチャージ!!」

みゆきはエコーを伴い、歩きながら変身を始めた……

一步、一步、歩く度に、みゆきの身体がハッピーへと変化していった……

「ハッピー!?大丈夫何か?」

サニーの問い掛けに、ハッピーが笑みを浮かべながら頷くと、サニーは右手で拳を握り、左手とパンと合わせ気合いを込めると、

「ヨッシャ、全員揃ったウチらの力……見せたるうやないか!!」

サニーの合図に合わせたかのように、プリキュア達が再び魔王に身構えると、ハッピーは慌てて前に出てみんなを止めると、

「みんな、待って!私、魔王に話したい事があるの!!」

「話!?!……そうだよねえ、あんな目に遭わされたんだもん」

「文句の一つも言いたくなるよねえ?」

ドリームとピーチが、同じようにウンウン頷くも、魔王に振り返ったハッピーは、

「魔王!……ありがとう!!」

「……??.??.」

ハッピーの予想外の言葉に、魔王は困惑し、プリキュア達からは響めきが沸き起った。何故あんな惨い目に遭（あ）わせた魔王に、ハッピーは感謝の言葉を述べるのか、理解出来なかった……

「なっ!?!何で?」

「ハッピー、あんた何言うてんの?」

「まさか、記憶が混乱しているとか?」

ブルームが目を点にし、サニーが、マーチが動揺する。ハッピーは、先程の影響で記憶が混乱しているのではないか? そう思ったが、ハッピーは更に言葉を続け、

「魔王は、私にニコちゃんとの思い出を思い出させてくれたんだね……私を殺そうと思えば、魔王なら簡単に出来た筈……でも、そうしなかった!」

「黙れ! 言ったはずだ……お前にもニコの苦しみを思い出せてやると、お前がニコとの思い出を思い出し、後悔しながら永遠に嘆（なげ）き悲しむようにしたただけだ!!」

「それは違うでしょう? 魔王! 魔王のお陰で、私もみゆきに対する誤解が解けた……みゆきは確かに私の事を忘れていたけど、約束は守ろうとしてくれた。私のお話を読んで、続きを書いてくれようとした。それを知る事が出来たのは……魔王、あなたのお陰よ!! そして私は、みゆき達に絵本の続きを、今見せて貰っている気がするの……」



「ニコちゃん．．．ウン！みんな、力を貸して！私は、この絵本の世界の人達とも、魔王とも、笑顔で接して居たい．．．だから!!」

「しゃあないなあ．．．まだ腑（ふ）に落ちん面はあるけど、みんなと笑顔で接したいのは、ウチも同じや！」

サニーは髪をポリポリ掻きながらハッピーの右肩に手を乗せると、シシシシとハッピーに笑みを浮かべた。ブラックは目を点にながら、ブロッサムを見つめると、

「つて事だけど．．．無限シルエツト、行つとく？」

「と言われましても．．．絵本博覧会に行くという事で、ハートキャッチミラージュは置いてきてしまいましたし．．．」

困惑するブロッサムだったが、上空の闇の中から、ハートキャッチミラージュがプリキュア達の上空に姿を現わした。再び一同から響めきが沸き起る。マリンとブロッサムは目を丸くし、

「エエエ!? どうして?」

困惑する二人を余所に、ムーンライトとサンシャインは、上空に浮かぶハートキャッチミラージュを見つめると、

「ハートキャッチミラージュも、ハッピーの考えに同意した．．．という事かしら?」

「だったら．．．みんな!!」

プリキュア達が、プロツサム達を中心に二列に並び、一同の心が一つに重なったその時、ハートキャッチミラーージュは、目映（まばゆ）い輝きを発した。光に包まれたプリキュア達を、魔王は眩しそうに見つめた。

（何だ!?何をやる気だ?）

魔王を遥かに凌駕（りようが）する、ゆつくりと大地に降り立ったみゆきに似た巨大な無限シルエットが、右手を空に掲げると、絵本の世界を覆っていた闇が一気に消え去り、美しい青空が広がった。その圧倒的力を見た魔王は驚愕し、

「バ、バカな!?お前は、何者だ?」

「無限の力と無限の希望!そして、無限の愛を持つ星の瞳のプリキュア!プリキュア!!

無限シルエット!!!」

「プリキュア・・・無限シルエットだど!?」

絵本の世界に出現した、無限シルエットを見た桃太郎達が響めく、ポツプ達も驚愕しながら見続け、

「あれは、この前ウルルン達を元に戻した・・・」

「つて事は、プリキュア達は、魔王を僕達みたいには?」

「きつとそうクルウ!」

自分達のように、魔王にも愛を分け与えようとするのだろうか?ウルルンがポツリと

眩くと、キャンディはきつとそうだと頷いた。

「魔王・・・あなたは、本当は心優しい人！私達が、あなたの愛を取り戻して見せる!!」  
「な、何だい？俺は、魔王だぞ？俺は・・・」

慈愛（じあい）に満ちた瞳で見つめられた時、魔王はその美しさに目を奪われた・・・  
無限シルエツトが両手を広げると、辺りは美しい花畑へと姿を変えた・・・

「凄いマジョ・・・今度はお花畑になったマジョ」

巨大な魔王を遥かに凌駕する、無限シルエツトの胸に抱かれた時、魔王はその心地良さに安らぎを得た。

（何て気持ち良いんだ？）

母の胸に安らぐ乳児のように、魔王は光に抱かれ眠りに付いた・・・

魔王の身体がどんだん元の姿に戻っていくのと一緒に、絵本の世界は、元の世界観を取り戻して行った・・・

2、さようなら、絵本の世界！

魔王はスヤスヤ眠り続けて居た・・・

プニョプニョした気持ちの良い感触に、魔王はスリスリ顔を擦りつけると、

「キャア・・・もう、魔王のエッチー！」

魔王が寝ぼけ眼（まなこ）で目を開くと、頬を膨らませたみゆきが魔王を睨み、その側には笑みを浮かべたなぎさ達や妖精達、絵本の主人公達、そして、ニコが居た。魔王は改めて周りを見回して見ると、なぎさ、ほのか、ゆりは、世界絵本博覧会で着ていた孫悟空、三蔵法師、沙悟浄の衣装に、他の一同も会場で着ていた服に戻っていた。そんな一同を見た魔王は、慌てて隠れるように木の陰に避難すると、

「ち、近付くな！俺は・・・魔王だぞ？」

「知ってるよ！あの大きなのが、その姿になるの見てたし」

「まさか、魔王の正体がそんなに可愛らしいとは思わなかったけど・・・」

「ネエエ!!」

魔王をからかうように、ラブとのぞみが相槌（あいづち）を打つと、魔王は動揺する。

魔王に近付いたニコは、魔王の頭を撫でながら、

「魔王、覚えてる？あなたに初めて会った時の事・・・」

「もちろん覚えてるカゲエ・・・」

魔王は、元々この世界の住人では無かった・・・

ある日、記憶を失い彷徨っていた魔王は、お腹を空かせて山の中で倒れた。何故自分がこの世界に居るのか、自分の名前が何なのかさえ分からなかった。

魔王・・・

自分は、誰かにそう呼ばれていた記憶だけは微かに残って居た。自分が誰なのか、薄れゆく意識の中で考えて居た魔王、そこに通りかかったのがニコ・・・

ニコは魔王を介抱し、最初は心を閉ざしていた魔王も、徐々にニコに心を開いていった・・・

何時も笑顔を決やさないニコであったが、みゆきという少女の事を話す時、何時も表情が曇っていた。不思議に思った魔王は、

「ニコは、みゆきを好きなのかカゲエ？」

「約束を忘れたみゆき何て・・・大嫌い!!」

その言葉を聞いた魔王は、みゆきという少女に嫌悪感（けんおかん）を抱いた・・・自分を介抱し、優しく接してくれたニコを悲しませた憎い奴、魔王はみゆきの事をそう解釈した・・・

「魔王は、私の事を思っていてくれたんだよね・・・ありがとう!でもね、私はこの世界が大好き!!私の事を大事に思ってくれた魔王の事も大好き!!私との約束の事を、ちゃんと守ろうとしてくれていたみゆきの事も・・・大好き!!」

魔王を抱き上げたニコが、みゆきを見て満面の笑みを浮かべると、一瞬呆気に取られたみゆきだったが、その目はウルウル滲み出し、大声挙げて泣き出した。周りに居た一同は動揺し、のぞみは慌ててハンカチを取りだし、みゆきに手渡す様は、姉と妹のよう

だった……

「ニコちゃんが……私の事大好きって……ウエエエン！」

「うんうん、みゆきちゃん、良かったねえ！」

のぞみはみゆきの頭を優しく撫でてしていると、少し呆れ顔のあかねは、

「な、何も泣く事無いやろお!？」

「みゆきいい!こんな時こそスマイルクルウ!!」

「そうね……みゆき、笑って!」

キャンディの言葉にせつなも同意し、みゆきに笑うように進言(しんげん)すると、みゆきも頷き、

「うん……スマイル!スマイル!!」

嬉し涙を流すみゆきに、一同から笑い声が溢れた……

ニコは、絵本の主人公達や、牛魔王達を見ると、深々と頭を下げ、

「みんなの世界を滅茶苦茶にして……ゴメンなさい!」

「もう良いさ!なあ?」

「」「うん!!」「」

牛魔王の言葉に、絵本の主人公達は笑顔で頷き、一同はニコの手を取り輪に加えた。絵本の主人公達に混じり、満面の笑みを浮かべたニコを見た魔王は、ある決心をするの

だった……

「みんなもゴメンなさい！」

なぎさ達一同にも頭を下げたニコに、響は首を振りながら、

「ううん、気にしないで！色々な目に遭ったけど、貴重な体験も出来たしね！」

「絵本の世界の住人に何て、そうそう慣れないものねえ？」

響の言葉に祈里も同意した。えりかは口を尖らせると、

「あたし何か……三人になつたし！」

えりかの言葉で思い出したのか、一同がえりかを見て苦笑を浮かべた。美希はえりかに話し掛けると、

「そう言えば、金と銀のえりかはどうしたの？」

「この世界が元に戻った時に……」

「えりか、少し寂しそうですねえ？」

つぼみの言葉に、少し寂しげな表情を浮かべたえりかだったが、

「まあね……もう懲り懲りだけどさ！」

金と銀のえりかは、この世界が修復された時に、光に包まれ消え去った。消え去る寸前、三人のえりかは顔を見合わせ微笑み合つた……

一同が、絵本の世界の住人になつた感想を述べ合う中、咲は少し不満そうに、

「でも、どうせなら・・・人間の役が良かったけど」

「だよねえ・・・私達、猿と狸だし・・・」

「ネエ!!」

咲の言葉に同意したなぎさがウンウン頷き、咲と相槌を打つと、ほのかは少し呆れ顔で、

「もう、なぎさたらあ・・・」

「何だとお！猿をバカにするなよ!!」

「ウキイイ!!」

「してない、してない!」

バカにされたと思った孫悟空と、桃太郎のお供の猿が騒ぎ出し、なぎさが慌てて否定し、一同がクスリと笑う。なおは何かを思い出したようにニコに話し掛けると、

「ところで・・・ニコちゃん、絵本の続きはもう良いの?」

「うん!もう大丈夫!!この続きは・・・自分で作っていくから!!」

そう言うのと、ニコは絵本を一同に見せた。

破れていたページが復元され、その先のページは白紙だった・・・

「そっかあ・・・そうだね!!」

ニコの決意を聞き、みゆきもニッコリ、ニコに微笑んだ・・・



「じゃあ、そろそろ私達元の世界に帰るね！」

「うん！みゆき、みんな、ありがとう!!」

「気をつけて帰れよ!!」

一同を代表するように、みゆきが声を掛けると、ニコと牛魔王が歩み寄り、一同に笑顔を向けながら気をつけて帰るように告げた。みゆきも満面の笑みで、

「うん、牛魔王、金角、銀角も、絵本の主人公のみんなも・・・そして、ニコちゃんも、魔王も元気でね!!」

「うん！元気でねええ!!」

「皆の衆、我々はもう少しこの世界の状況を見てから帰るでござる！」

ポップ、ウルルン、オニニン、マジヨリンは、ちゃんと絵本の世界が元に戻ったかを見極めてから帰る事をみゆき達に伝えた。

「俺が送ってやるカゲエエ！」

魔王はそう言うと、空間に歪（ゆが）みを作り上げた。

「みんな、大好き!!元気でねえええ!!」

一同はその歪みに次々手を振りながら飛び込み、最後にみゆきがみんなに満面の笑顔を浮かべながら帰って行った・・・

「ニコ、これでお別れカゲエ！」

「エツ!? そんな、魔王まで?」

「もうニコには、俺が側に居なくても・・・沢山の友達が出来たカゲエ!」

魔王はそう言いながら笑顔をニコに向けると、ニコも頷き、

「そっかあ・・・魔王、今までありがとう! 記憶が戻る事を、この絵本の世界で祈ってるからねえ!!」

「みんな、ニコを頼むカゲエ! ニコ、元気でなあああ!!」

絵本のキャラクター達にニコを託し、魔王も歪みの中へと飛び込んだ・・・

(ニコ、元気でな!・・・それはそうと、みゆき達のあはれは、邪魔カゲエ)

魔王はニヤニヤしながら空間に細工を施した事に、なぎさ達一同が気付く事は無かった・・・

「行っちゃった・・・アレエ、何だろう?」

みゆき達も、魔王も去った事で、少し寂しそうな表情を浮かべたニコだったが、上空から、ヒラヒラ沢山の何かが降ってきた・・・

「これ・・・さつきみゆき達が着てた・・・服!? 何でえ?」

空から降ってきた服を見て、ニコは空を見上げ小首を傾げた・・・

こうして、一同の絵本の世界の冒険は終りを告げた・・・

## 第七十五話：笑顔とスマイル

完

## 第七十六話：プリキュアショー!?

1、羞恥心（しゆううちしん）

世界絵本博覧会の会場では、佐々木先生が、預かった子供達を相手に四苦八苦（しくはつくく）していた。中々戻らない姉達に、みな不安げな表情を浮かべていた・・・

「みんな、もうすぐ戻って来るから・・・我慢してね!」

そう子供達に語って聞かせるも、佐々木先生も一抹の不安を覚えていた。なぎさ達も一緒に居るから大丈夫だとは思って居ても、心の何処かで不安が拭えなかった。

「ん!?あのマダムは大分お疲れのご様子・・・お嬢様!」

「どうしました、セバスチャン?」

「ハッ、あのマダムのお顔が優れないものですから・・・」

「まあ、あんなに沢山のお子さんをお一人で・・・セバスチャン、本館の方にご案内して差し上げて!私は、マナちゃんと六花（りっか）ちゃんと一緒に、もう少し会場を見て回りますわ!」

「畏まりました!」

セバスチャンはありすに一礼すると、佐々木先生達の下へと近づいた。礼儀正しく

深々とお辞儀をするセバスチャンに、佐々木先生も慌ててお辞儀を返すと、

「マダム、そのように大勢のお子さんを、お一人で面倒見て居られるのは大変でございましょう？ あちらの本館には、お子様用の遊戯スペースもございます！ よろしければこちらに！ では、ご案内致しますので、こちらに……」

セバスチャンがニツコリ微笑みながら、佐々木先生と子供達を促すと、佐々木先生は困惑顔で、

（エツ!? エエエ? ひよつとして、この子達全員……私の子と思われてる訳? 嘘おお!?）

「あ、あのお、この子達は知り合いの子を預かってるだけで……」

「先生、顔が真っ赤だああ」

「コラ、こうた! 先生をからかっちゃ駄目でしょう!!」

顔を真っ赤にしながら、慌ててセバスチャンに説明する佐々木先生を、こうたがからかい、直ぐにはるがこうたを窘（たしな）めた。

「先生!?!……これは失礼致しました! では、改めまして……先生様、本館までご案内致しますので、こちらに!!」

「あ、ありがとうございます! ですが、ここでこの子達の身内の者と待ち合わせをしていますので……」

「さようでございしましたか、出過ぎた真似を致しました。ささやかなお詫びを・・・」

そう言うと、セバスチャンは素早く携帯を取りだし、何処かに電話を掛けると、直ぐに沢山の風船を持った、三匹の子豚の仮装をした三人が、ひかる達に風船を配り始めた。風船を貰い、ひかる、みのり、ゆうた、ひな、こうたは大喜びし、はるは、貰った風船でふたばをあやすと、ふたばはキャツキャと嬉しそうにベビーカーの中ではしゃいだ。

「風船何か貰っても・・・あんまり嬉しくないよなあ?」

「だよなあ」

奏太に話を振られ、けいたも奏太に同意していたが、楽しそうにしている他の子供達を見てみると、自然に二人も優しそうな目を浮かべていた。

「では、私はこれでー」

「色々お心遣いしてくださり、ありがとうございます!!」

佐々木先生は、気に掛けてくれたセバスチャンに、深々とお辞儀をしながらお礼を述べるも、内心複雑な心境であった・・・

(私・・・まだ二十代なのに、他の人から見ると、これぐらいの子供達のお母さんに見られるのかしら?・・・みんなあ、早く戻ってきてえええ!!)

佐々木先生は心の中で悲鳴を上げた・・・

絵本の世界に向かった時、消え去った筈のテントが再び現われるや、その中からけたましい悲鳴が沸き起った。

「今の声!?!・・・六花、ありす、聞こえた?」

「うん、物凄い悲鳴だったよね?」

テントの近くに居たマナ、六花、ありすの三人、特にこの世界絵本博覧会の主催者であるありすの表情は、見る見る険しさを増し、

「マナちゃん、六花ちゃん、行ってみましよう!!」

ありすに促され、三人は悲鳴が聞こえた方向へ駆け出して行った・・・

そのテントの中では・・・

「タルト、シロップ、ピーちゃん、外に出てって!」

「こつち見たら絶対駄目だからねえ!!」

「ほら、コフレ! あんたもだよ!!」

「あんた達・・・外で誰も入れないように見張っておいて!」

ラブが、響が、えりかが、りんが、身体を椅子で隠すようにして、顔を真っ赤にしながら、妖精の四人にテントから出て行くように伝えると、シロップは大慌てで人間姿になるや、タルトとピーちゃん、渋るコフレを抱き上げ、慌ててテントから飛び出して行っ

た。

「メップル!」

「フラッピ!」

「目を開けたら、どうなるか分かってるよねえええ?」

「こ、怖いメポ」

「絶対見ないラピ・・・」

なぎさと咲に脅され、コミュニケーション姿のメップルとフラッピは、ブルブル震えていた。

なぎさ達一同が、椅子に隠れながら、それぞれ恥ずかしそうにしていたのには訳があった。何故なら、絵本の世界から元の世界に戻って来た少女達は、靴と装飾品以外、全員一糸纏わぬ全裸だったのだから・・・

「ねえ、ほのか! 私達・・・何でこんな姿になってるのお?」

「私に聞かれたって・・・知らないわよお!」

なぎさに聞かれたほのかも、困惑気味に訳が分からないと言葉を述べる。絵本の世界を出る時は、みんな服を着ていた。なのに、元の世界に戻って来たら、服が消えているのはどういう事なのか?

(もしかして・・・)

みゆきの脳裏に嫌な予感が漂うのだった・・・



困惑する一同の耳に、外で言い合いをしているシロップの声が聞こえてきた。思わずハツとした一同は、聞く耳を立てて、外の様子を伺った・・・

両手を広げ、必死にマナ、六花、ありすを通さないように試みるシロップを、三人はジイと訝（いぶか）るような視線で見つめていた・・・

「いや、だから、今は不味いんだって!」

「ピーイイ!」

シロップを援護するように、ピーちゃんが懸命に羽をバタ付かせていると、ありすは目を輝かせピーちゃんを抱き上げると、

「まあ、可愛い!」

「ありす・・・今はそれどころじゃ無いんじゃない?」

呆れ顔の六花に突っ込みを入れられ、要件を思い出したありすは、ピーちゃんを手放し手を振ると、直ぐにキツとシロップを見つめ、

「そ、そうでしたわ・・・何が不味いんですの? 私はこの世界博覧会の主催者です! 中を調べる権利がありますわ!!」

「主催者?!・・・いや、それはそう何だけど、色々取込んでいて・・・」

ありますがこの絵本博覧会的主催者だと知り、シロップは益々動揺する。そんなシロツ

プを見たマナと六花は、益々シロツプの事を胡散（うさん）臭そうに見つめ、

「何か怪しいよね？」

「あなた、中で何を企んでるの？」

「エエエ!?!別に企んで何か……おい、お前達、もう限界だ!後はお前達で何とかしろお!!」

マナと六花に、中で何か企んで居ると言われたシロツプは、大慌てで否定し、中に居る一同に対して、後は自分達で何とかしろと伝えると、中から響めきが沸き起こった。

「コラ、シロツプ!諦めるの早すぎ!!」

「もうちよつと粘りなさいよねえ!!」

シロツプは、ラブとりんにもつと粘れと怒られる。両者から責められ、板挟みのシロツプは、

「んな事言つたつてさあ……」

シロツプは、自分は怪しい者じゃ無いからと、必死に三人に引き攣った笑みを浮かべた。だが、マナ、六花、ありすの視線が変わる事は無かった……

「アカン……もう限界やあ!」

「でも、こんな姿見られたら……」

あかねが頭を抱え、舞もどうしたものかと不安そうな表情を浮かべる。エレンは一同を見渡すと、

「音吉さんの本で読んだわ！こんな姿を見られたら、私達全員……露出狂とか、変態とか思われるんじゃないかしら？」

「エレン……どんな本読んでのよ？」

「お爺ちゃん……」

エレンがウンウン頷きながら言うと、美希が呆れ顔で突っ込みを入れ、アコは益々恥ずかしそうに俯いた。みゆきは辺りをキョロキョロ見渡すと、

「魔王、居るんでしょう？姿を見せて!!」

「エツ!?魔王？」

「魔王は絵本の世界に居るんじゃないの？」

みゆきが魔王の名前を発し、魔王は絵本の世界に残って居ると思つて居た一同、うららといつきが、代表するようにみゆきに問い掛けた時、辺りに不気味な笑い声が響き渡った……

「カゲカゲカゲカゲ! やっぱり、お前達にはその姿の方がお似合いカゲエ!!」

「魔王!!!」

ニヤニヤしたスケベ顔で姿を現わした魔王に、みゆきを除いた一同が驚愕する。なき

さは胸を隠しながら魔王を指さすと、

「あんたの仕業かあああ！私達の服を返してよ!!」

「知らないカゲエ・・・絵本の世界に置いてきたカゲエ」

惚け顔の魔王が、絵本の世界に置いてきたと伝えると、一同が響めきながら、

「二二何ですつてええええ!!」二二

魔王は、そんな動揺する少女達の裸体（らたい）を觀賞するように、上空をグルグル  
旋回し続けた。

「魔王や無くて・・・エロ魔王やないかい!」

「魔王、私達の服を返してよ!」

あかねとやよいが嫌そうに服を返すように訴えるも、魔王はベエと舌を出し、

「嫌カゲエ」

魔王を捕まえようとするも、胸を隠しながらでは魔王のスピードに対応出来ず、一同  
が翻弄（ほんろう）されていく、

「何て下劣（げれつ）な・・・」

悔しそうにゆりが険しい表情を魔王に浴びせるも、魔王は我関せずといった表情で上  
空を飛び回り続ける。そんな魔王の油断を見逃さず、エレンは上空高くジャンプし、魔  
王を捕まえると、魔王は、そんなエレンを見て驚いたように、

「カゲエ!? お前、俺に裸を見られて恥ずかしくないのかあ?」

「多少はね、この姿にも慣れたし・・・でも私・・・元々猫の姿をしたメイジャーランドの妖精だし!」

「そつかあ! じゃあ、くるみも・・・」

「ミルク!?!」

「アアア! ちよつとおおお、何一人だけミルクの姿に戻ってるのよお?」

「五月蠅いミルク、ミルクは多感なお年頃ミルク」

「私達だってそうだよおお」

「ミルク、狡いいい」

一人妖精姿に戻ったミルクを、のぞみ、咲、ラブが頬を膨らませて抗議した。エレンはクスリと笑いながら、

「みんな、魔王を捕まえたけど、どうする?」

「どうする!?!・・・決ってるわ!!」

ゆりがココロポットを手を持つと、釣られるように一同が次々に変身アイテムを握りしめた。ミルクもくるみの姿に戻ると、ミルクイーパレットを手を持つ、皆その視線は険しい表情を浮かべていて、魔王の顔に焦りが浮かんだ。みゆきは胸を手で隠しながら魔王に近づくと、

「魔王、早くみんなに謝って!!」

「ゴ、ゴメンカゲエ……」

困惑気味の魔王が、一同に詫びようとするも、なぎさ、つぼみ、響は、魔王の謝罪を受け入れず、

「もう……遅い!!」

「私……堪忍袋の緒が……切れましたああ!!」

「魔王……やって良い事と、悪い事があるのおお!!」

「カゲエエエ!!」

一同の身体が光輝き、みゆきを除いた一同がプリキュアへと変化を遂げた……

「アアア!?良かったあ……プリキュアの際は衣装着たままだよ!」

「本当、安心したわ!」

顔を見合わせ合ったブラックとホワイトがホッと安堵する。少しはみんなも冷静さを取り戻したと感じたみゆきは、

「みんな、魔王も反省して……無い?」

プリキュアになって衣装を着ている事で、魔王はブウブウ文句を言い始め、庇(かば)おうとしたみゆきも、両頬を大きく膨らませると、無言でスマイルパクトを手に持ち、ハッピーに変身した。

「カゲエエ!?ま、待つカゲ!話し合うカゲ!!お前達、絵本の世界で俺の愛を取り戻すつて……」

「問答無用!!」

「カゲエエエエ!?」

テントの中が騒がしくなり、何事かと思つたマナ、六花、ありす、三人はシロツプの制止を振り切り、テントを開けたその時、我を忘れたプリキュア達の攻撃で、テントは吹き飛び、衝撃に巻き込まれたマナ、六花、ありすの髪が、アフロヘアーになって、何事が起こつたのかと目をパチクリしていた……

「ゲッ!?アハハ……だ、大丈夫?」

「だ、大丈夫ですか!」

「も、申し訳ありません……」

呆然とする三人に、慌ててブラック、ホワイト、ムーンライトが謝罪を始め、少し遅れて他の一同が駆け寄つた。

「俺……知らねえ!」

「僕も……知らないですつ……」

「アゝア、やってもうたあ……」

「ピィィ」

深々と頭を下げて、マナ、六花、ありすに詫びる3人のプリキュアの姿に、シロツプ、コフレ、タルト、ピーちゃんの目は点になった。困惑気味にプリキュア達を見つめるマナ、六花、ありすは、

「あのう・・・これはどういう事でしょうか?」

「何故あなた達がこのテントの中から!」

「ちゃんと説明して頂きたいですわ!」

三人に詰め寄られ、困惑気味に顔を見合わせた一同、メロディとリズムは、さり気なく後方に下がり、マナの視界から見えない位置に移動した。それに気付いたビートは小首を傾げ、

「メロディ、リズム、どうしたの?」

「いやあ、何となくあの子苦手で・・・」

「顔を合せづらくて・・・」

メロディとリズムは小声で、数時間前、マナに注意されたことを思い出し、どうも苦手でと苦笑を浮かべた。マリンもその時の事を思い出したようで、

「そう言えば、あんた達あの子に注意されてたもんねえ?」

「成る程、それで見えない位置に・・・」



思わずクスリと笑ったマリんとビートだったが、

「お前達、本当に反省してるのか？」

突然声が掛かり、メロディ、リズム、ビート、マリンの四人はビクツとしながら直立不動になると、

「「「はい、反省してます!!」」」

「なら良いカゲエエ！」

「「「カゲ!?・・・アアアアア!!」」」

四人に声を掛けたのは魔王、魔王はさっきの仕返しとばかり、四人をからかった。見る見る四人の顔は真っ赤になり、

「大体、こんな事になったのはあんたのせいでしょうか？」

「そうよ、さっさと私達の服を返しなさいよ!!」

「まだお仕置きが足りないようだねえ・・・」

「本当、可愛げの無い・・・」

メロディ、リズム、マリ、ビートが、魔王に文句を言っていると、慌ててブロッサムが四人を呼び止め、

「マリ、メロディ、リズム、ビート・・・シイです!!」

「「「エッ!?」」」

振り返った四人の視線の先には、ジイと見つめるマナ、六花、ありすの痛い視線が突き刺さった。

「とても反省しているようには見えませんか?」

眼鏡の位置を直した六花が、冷静な意見を述べると、マリリン、メロディ、リズム、ピートは、シユンと落ち込み、

「『ゴメンなさい……』」

「カゲカゲカゲカゲ、いい気味カゲエ!」

そんな姿を見て高笑いを浮かべる魔王を、ブラックは右手でムギユウと掴むと、

「あんた……いい加減にしなさいよおおお?」

「私達も……そう温和じゃないから!!」

「この場であなたを消滅させても……良いのよ?」

ブラック、ホワイト、ムーンライト、三人の険しい視線を見るや、流石の魔王も、三人から発せられる威圧感にガタガタ震えだし、ブラックはポイツと魔王をハッピーに投げると、ハッピーが慌てて魔王をキャッチする。先程とは打って変わって、ハッピーに抱かれた魔王は、ぬいぐるみのようにジツとしていた。

ブラック、ホワイト、ムーンライトを中心に、一同が改めてマナ、六花、ありすに謝ると、三人は思わず顔を見合わせクスリとし、

「いやあ・・・プリキュアって、こんなに親しみやすい人達だったんだねえ？」

「本当・・・もつと怖い人達かと思ってた！」

「そうですね・・・この件はもう結構ですわ！とところで、これは私からのご提案なのですが・・・皆様方に協力して貰いたい事があるのですが？」

ありすから予想外の提案を受け、顔を見合わせた一同、

「協力!？」

「これだけ迷惑掛けたし・・・」

「私達で出来る事なら協力しますけど・・・」

代表するようにブラック、ホワイト、ムーンライトは、協力する事に同意した。ありすは、手を叩き嬉しそうにすると、

「まあ、それは良かったですわ・・・セバスチャン！」

「ハッ!!」

何処から現われたのか、ありすがセバスチャンの名を呼ぶと、セバスチャンが現われ、ありすの指示を聞き、何度も頷いた。

「では、そのように手配致します！」

一体何を手伝わされるのか？

プリキュア達は皆不安げに、微笑むありすの顔を見つめた・・・

## 2、ありすの頼み

ブンビーが社長を務めるブンビーカーパニー、以前プリキュアのリーダーだとテレビで出演して以来、仕事も順調だった。パートを一人増やしたブンビーであったが・・・

「あのう・・・お化粧直してばかりじゃなく、仕事の方にも行つて欲しいんですけど?」

「ハアア!? あたしは、パートだよ? そういう出張は、社員がやるんじゃないのかい?」

（何!?! 何なのこの態度? 私は社長だよ! でもなあ・・・）

ブンビーカーパニーには、嘗てナイトメアにブンビーが居た頃の上司、カワリーノに似た社員が、この度雇ったパートは、ハデーニャに似た中年の女性だった。ブンビーは、面接に来たこの二人を断る事が出来ず、今に至つていたのだが・・・

「はいはい、分かりました! 外回り行つて来ます!!」

ドアを開けたブンビーの眼前が赤く輝くと、ドリーム、アクア、パッションが突然現われ、思わずブンビーは尻餅を付いて驚く、

「な、何!?! 君達、どうしたの、突然?」

「ブンビーさん、一緒に来て!」

「私達に協力して欲しいの!!」

大慌てのドリームとアクアに協力を依頼されたブンビー、仕事の依頼かと少しニンマ

リすると、

「協力!?仕事の依頼?じゃあ、事務所でゆっくり聞けど?」

事務所で話を聞こうとするブンビーの両手を、ドリームとアクアが掴むや、

「時間が無いの!いいから一緒に来てええ!!」

「じゃあ、戻るわよ!!」

パッションはアカルンに頼むと、周囲が赤く発光し始めた。ブンビーは驚愕しながら、

「エエエ!?いきなりそんな・・・アアアレエエ!!」

半ば強引に、ブンビーはドリーム達に連れ去られた・・・

ラビリンズ・・・

物静かに読書をするサウラーと、腕立て伏せをしているウエスターだったが、突然部屋が赤く発光し、何事かと驚いた二人だったが、突然パッションが腕立て伏せをしているウエスターの上に現われ、ウエスターを押しつぶした。

「ウエスター、サウラー、私達にちよつと協力して貰いたいんだけど?」

「協力!?プリキュアの姿になっていると言う事は・・・また君達の敵でも現われたのかい?」

「そういう訳じゃ無いんだけど・・・」

「なら悪いけど、僕は本を読んでる途中何で、遠慮しておくよ!」

チラリとパッションに視線を移したものの、サウラーはあっさりパッションの頼みを断った。パッションは、少し膨れっ面になると、

「アアン、もう・・・じゃあ、ウエスターだけで良いわ!」

「じゃあつて何だよ!?!それより・・・俺の上から退(ど)けよ!前にもあつたよな、こんな事!」

「じゃあ、戻るわよ!」

「イース!人の話を聞けええ!!」

ウエスターの言葉を見殺し、パッションはウエスターの上に乗ったまま、再びウエスターを伴いラビリンスを後にした。

「やれやれ、忙(せわ)しない事だねえ・・・」

そう言うと、サウラーは再び読書を始めた・・・

突然プリキュア達に呼ばれたブンビーとウエスター、バロムとの戦いの時に面識が合った二人は、直ぐに打ち解け、

「あなたもプリキュアに呼ばれたの?」

「そう何ですよ、全く人の話を聞かなくて困ってますよ!」

「でも・・・毎回会う度にプリキュアの人数増えてない?」

「そう言えば・・・あの青いプリキュアとはパルミエ王国で会ってるから分かるけど、あの六人と、黄色い小さなプリキュアは初めて見たなあ・・・」

ブンビーとウエスターの視線がビート、ミューズ、ハッピー達六人に向けられる。ブンビーはメロディ、リズムまでのプリキュアとは面識があり、ウエスターは、パルミエ王国でビートと共に、アカンベエと戦った事があるので、ビートまでは知っていたが、ミューズ以降のプリキュアを見るのは初めてだった。ビートは、視線が合ったウエスターとブンビーに軽く右手を挙げ、

「ウエスター! 久しぶり!! そっちの人も、何処かで会った気はするんだけど?」

「そっかあ! ビートは、バロムとの戦いの時に、ブンビーさんには会ってたよねえ?」

まだビートがプリキュアになる以前、当時マイナーランドの歌姫だったセイレーンが、プリキュア達と休戦して、共にバロムに立ち向かった事があったのを思い出したドリームは、ポンと手を叩き納得した。

「二応紹介しておくね! この子はキュアビート! こっちの子がキュアミューズ! で、こっちの六人は、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコーだよ!!」

ドリームに紹介され、ビートは再び右手を挙げ、ミューズとハッピー達六人が軽く会

釈し、ブンビーとウエスターも挨拶を返した。

「所でイース！頼みたい事って何だ？」

「どうせ私は、人の話を聞きませんよおお！フン!!」

ソツポを向いたパツションに変わり、主催者であるありますが、二人に会釈（えしやく）をして話し出した。その内容は、プリキュアショーに参加して欲しい事だった・・・

「プリキュアショー!?!」

思わず目を点にしながらハモったブンビーとウエスター、そんな事で呼ばれたのかと些（いささ）か困惑していると、

「はい、実は先程この会場内で、絵本のキャラクターが暴れたのですが、プリキュアの皆様方が鎮めてくださったのです。ですが、こんな騒ぎを起こした今、このままでは、明日以降の開催は行えないかもしれないと考えて居ました。そこで先程の騒動は、ショーの一部だったという事にしたいのです!!」

「成る程・・・それに私達にも参加して欲しいと、こういう訳ですな?」

「はい！如何でしょうか？もちろん、ご協力頂けるなら報酬はお出し致しますわ!!」

ありすの説明に納得したのか、ブンビーは何度か頷いていると、ルージュは小声でブンビーに話し掛け、

「ありすちゃん、四葉財閥の跡取り娘何だって！此処で知り合いになっておくのも、悪



く無いんじゃない?」

「四葉財閥のおおお!? やります! ぜひやらせて下さい!!」

ブンビーは、揉み手をしながらあつさり承諾したものの、ウエスターは興味無さそうに、

「俺はパスだなあ! ショーみたいな子供じみた真似・・・」

「何言ってるのよ! 散々四つ葉町で、そのショーみたいな事してたくせに!」

「ウツ!?!・・・」

ベエーと舌を出したパツシヨンに凶星を指され、ウエスターが言葉に詰まる。苦笑を浮かべたブラックは、マナ達に聞こえないように小声でウエスターに話し掛けると、

「ウエスターは、ドーナツの他にたこ焼きも好き何でしょう? ひか・・・ルミナスの家はたこ焼き屋をやってるんだけど・・・絶品だよ!!」

「協力して頂けるなら・・・御馳走しますけど?」

ルミナスも小声でウエスターに囁き、協力してくれるなら、たこ焼きを御馳走する事を約束する。見る見る表情を緩めたウエスターは、

「何いい、絶品たこさんを食べるのかああ!? やるううう!!」

「ハア・・・ウエスター! 協力してくれるのはありがたいけど、こつちが恥ずかしくなるわ」

そんなウエスターを見たパッションは、ハアと溜息を付いた・・・

ブラック、ホワイト、ムーンライトは、ハッピーに抱かれた魔王を囲むように立つと、  
「魔王、あんたにも協力して貰うからね？」

「協力してくれるなら・・・さっきの事は許して上げる！」

「断るなら・・・」

魔王の視線には、ブラック、ホワイト、ムーンライトの姿こそ、凶悪な魔王のように見えガクガク震えだし、コクコク何度も領いた・・・

何時まで経っても戻ってこないみゆき達に、困惑していた佐々木先生の耳に、場内アナウンスが聞こえてきた。

「皆様、先程のショーは如何だったでしょうか？これより、プリキュアショー、第二部を開催致します。どうぞお楽しみ下さい!!」

「プリキュアショー!?! 一体どういう事?」

困惑する佐々木先生の耳に、高笑いを浮かべる男達の声が聞こえてくる。

「ハアハハハ! 愚かな人間共よ!!」

「この会場は、我らが魔王様が支配した!」

「カゲエエエ!!」

ノリノリで悪役を演じるブンビーとウエスター、魔王であったが、子供達の反応はイマイチだった・・・

「アレエ!?何かイマイチだねえ?」

「魔王、ちよつと怖さが足りないんじゃないのか?」

「今は力が足りないから、仕方無いカゲエ・・・」

子供達からは、さっきのシヨールの方が怖かったとか、弱そうだとか、散々貶され、

「アレエ・・・良いの!?おじさん・・・本気出しちゃおうかなあ?」

そう言うのと、蜂に似た怪人状態に変化するブンビー、

「泣いても知らんぞ・・・ホホエミーナ、我に仕えよ!仕えよ!仕えよ!仕えよ!」

辺り構わず会場内の私設をホホエミーナに変えるウエスター、

「俺様もやるカゲエ・・・カゲカゲカゲカゲエエ!!」

会場内の大木に影を憑依させると、会場内を暴れ始める。ルージュとピーチは目を点にし、

「あのバカ達・・・やり過ぎよ!」

「これじゃさつきと同じじゃない?」

ドリームはウンウン頷くと、

「まあ多少の攻撃なら・・・あの人達なら大丈夫でしょう?」

「みんな、行くわよ!!」

ムーンライトの号令の下、物陰に隠れていたプリキュア達が次々に現われると、子供達から大歓声が沸き起った。

「ウワァー!プリキュアだああ!!」

ひかる達も、身を乗り出すようにショーに興奮しているのとは逆に、佐々木先生は目を点にししながら、

「プリキュアショーって・・・本物のあの子達が何してる訳!？」

困惑する佐々木先生を余所に、プリキュアショーは多いに盛り上がりを見せていった・・・

「見て見て、真央ちゃん!プリキュアだよ!またプリキュアに会えたね:プリキュア!何とかビーム!!」

両手の親指と人差し指で輪っかを作り、自分の目に当てためぐみは、プリキュアの技だとも言いたげにポーズを取って、側に居たウエスターに照射する真似をすると、ウエスターは少し呆気に取られながら、

「いや、プリキュアは、目からビームは出さと思うぞ?」

「じゃあ、プリキュアテレポト・・・とか言いながら、瞬間移動したりは?」

続いてゆうこに聞かれたウエスターは、チラリとパッションを見ると、

「ああ、それはあの赤いプリキュアが似たような事を・・・」

「するのおお!? 凄おおい!!」

興奮気味に身を乗り出すめぐみとゆうこ、真央はウエスターの白いマントを引っ張ると、

「ねえねえ、プリキュアのサインって貰えないかなあ?」

「ん!? さあ、俺に言われてもなあ・・・」

「エエ!? お兄さん、プリキュアの知り合い何でしょう? 頼んでみてよ!!」

「お願い! 強そうなお兄さん!!」

「お願い!」

「強そう!?!・・・そうだなあ、観客のリクエストに応えるのも仕事の内だからなあ・・・分かった! 後で俺からも頼んでみよう!! メイン会場にある建物の前で待っててくれ!!」

目をキラキラ輝かせて、ウエスターにお強請りするめぐみ、ゆうこ、真央、ゆうこのヨイシヨに、満更でも無さそうな表情を浮かべたウエスターは、後で聞いてみる事は約束してくれた。

いおなと誠司は、そんな二人を呆れながら見つめ、まりあはジイとプリキュア達の動きを見つめると、

（凄い！格闘経験者も何人か居るようね・・・ショーってアナウンスしてたけど、先程のプリキュア達を見た限り、本物だと思っただけ・・・）

まりあは困惑気味にショーを見つめ続けた。

パッションは、めぐみ達と会話するウエスターを見つめ、表情を曇めると、

「ウエスター！サボるなあああ!!」

「何だよ、観客にサービスしたただけだろう?」

パッションに怒られ、ブツブツ文句を言うウエスターであった。

「私は、あの黄色い衣装を着た、ツインテールのプリキュアが気になるわね・・・」

「ええ、でも彼女だけじゃないわ!あの青いプリキュアも、武道の心得が有りそうね!黒と白、そして銀色のプリキュアからは・・・凄みすら感じるわ!!」

「そうツスね!でも、プリキュアショーって・・・世界絵本博覧会と何の関係が!」

「さあ!」

サンシャインを見て居たいおなの言葉に同意するも、更にビューティやブラックとホワイト、ムーンライトを見たまりあの感想に、誠司も同意した。誠司は、何故世界絵本博覧会でプリキュアショーなどやるのだろうかと疑問に持つと、まりあといおなも小首を傾げた。

「プリキュア・・・格好良いなあ!!」

目をキラキラ輝かせ、プリキュアショーを見つめるめぐみとゆうこ、苦笑を浮かべながらショーを見つめるまりあといおな、数ヶ月後にまりあが、約十ヶ月後にめぐみ、ゆうこ、いおなが、自分達がプリキュアになる事になるとは、この時は知る由も無かった……

それはまた別なお話……

とある鏡に囲まれた部屋……

「ウワアアア!!」

勇ましいプリキュア達の様子を、目を輝かせながら見つめるヒメルダ、ブルーはジイと背後からヒメルダを見つめると、

（ヒメ、すまない……本来なら、キュアプリーステスの子孫である君も、プリキュアとしてこの世界の為に戦う宿命を持っているのに、千年前のあの時から、僕は力を失ってしまった……）

千年前の出来事を思い出したのか、ブルーは悲しげな表情を浮かべ目を逸らした。

「ねえねえ、神様！私、もつと近くでプリキュア見たい!!一緒に世界絵本博覧会に来てよおお!!」

「エッ!?!」

「ヒメエエエ！ブルー様に何て事を頼むんですのおお？」

目をキラキラ輝かせ、ブルーにおねだりするヒメルダ、リボンは目を見開き、ヒメルダを叱るも、ブルーは苦笑を浮かべながら、ヒメルダの頼みを引き受けた。

幸い、みんなショーに夢中で、突然鏡の中から現われた三人に気付いた者は居なかった。

「凄いやおお！」

目をキラキラ輝かせながら、プリキュアショーを見つめるヒメルダ、それを微笑ましく見て居たブルーだったが、その視線に映ったまりあを見た時、ブルーの表情が凍り付いた。

（あれは……いや、まさか!?!あれから1000年は過ぎている！彼女が生きている筈は……しかし、似て居る!?!）

まりあを見て動揺するブルーに気付かず、ヒメルダはプリキュア達に声援を送り続けて居た。

数ヶ月後、ヒメルダもまたプリキュアとして覚醒する事になるのだが、それもまた別なお話……

ブラックのパンチが、ホワイトの投げ技が、ブンビーに炸裂する。



近付きすぎた子供達を、ルミナスのバリアーが守る。

ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディが放つ合体技が、魔王が作り出した大木を吹き飛ばす。

ドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、アクア、ローズの技のコラボレーションが、ホホエミーナに炸裂するも、ホホエミーナの顔を見ると、攻撃するのを躊躇し、六人の視線がウエスターに向けられた。

「エエエ!? 俺えええ?」

「我慢しなさい! 行くわよおお!!」

「待て待て、イース、お前達までええ?」

思わずその人数にビビリ、ウエスターは、風船のようなホホエミーナの上に乗り、一同から逃げようと試みるも、ドリーム達に合流したピーチ、ベリー、パイン、パツションも加わると、

「!!!!!!!!プリキュア! コラボレーションパアアアンチ!!!」

ドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、アクアの五人が、ジャンプしながらパンチをウエスターのボディに繰り出し、ホホエミーナから落ちてきたウエスターを、ローズのアップercutで再び宙に浮かばせると、ピーチ、ベリー、パイン、止めにパツションのパンチがウエスターの右頬に炸裂した。10人のプリキュアのコラボパンチを受

けたウエスターは、

「お前らああ！手加減しろよなあああああああ」

そう言い残しながらウエスターが吹き飛ばされ、子供達から大歓声が沸き起こった。

「この声援・・・癖になりそうしゅ！」

「マリリン、私達も行きますよ！」

子供達の声援を受け、ドヤ顔のマリリンがポーズを取る。ブロッサムはマリリンを促し、先に大木と戦闘していたムーンライト、サンシャインと合流すると、四人はフォルテウエーブ、フォルテバーストで大木を浄化する。

さっきの怨みとばかり、メロディ、リズム、ビート、ミューズは、魔王に対しパシヨナートハーモニーを浴びせ、魔王は慌てて退散する。

「ほな、最後はウチらで閉めようや！」

サニーの合図の下、ハッピー、ピース、マーチ、ビューティが、残ったホホエミーナを浄化し、大反響の末、プリキュアショーは幕を下ろした・・・

「皆さん、お疲れ様でした！大盛況でしたわ!!」

「本当、迫力あったよねえ！」

「そりゃあ、本物のプリキュアだもん、当たり前でしょう！でも、世界絵本博覧会でプリ

キュアショー何かして、良かったのかしら？」

「全く問題無しですわ!!」

大盛況に終わったプリキュアショーに、ありす、マナ、六花が微笑みながら一同を出迎えた。絵本に関係無いプリキュアショーなどして、良かったのかありすに問い掛けた六花、ありすは両手を組みながらココリと頷き、問題無いと答え、それを聞いたプリキュア達が苦笑を浮かべる。それとは逆に、不機嫌そうにしているのはウエスター、ブンビー、魔王の三人、

「お前達、少しやり過ぎだろう!!」

「報酬の方、奮発して貰わないと」

「お前達の裸、もつと見せて貰わないと・・・割に合わないカゲエ」

「あんたは、黙れ!!」

ドサクサに紛れた魔王の暴言を、ブラックの拳骨が魔王の頭に炸裂し黙らせる。

「では、これは報酬ですわ!」

ブンビーには現金を、ウエスターには取り寄せたデザートの盛り合わせを手渡した。見る見る不機嫌だった二人の表情は和らぎ、

「こ、こんなに!? ぜび、何かありましたら、私共ブンビーカンパニーにご連絡を、最優先でお伺い致します!!」

ブンビーは、揉み手でニコニコ愛想笑いを浮かべながら、ありすに名刺を手渡した。それを見て居たドリームは思わずクスリと笑い、

「ウフフ、ブンビーさんだったら・・・現金何だからあ」

「現金大好きだからねえ・・・」

ブンビーのダジャレに、思わずムーンライトは顔を背けると、笑いを堪えるように背中が揺れた。

「さて、俺は帰るぞ! たこ焼きの件、忘れないでくれよな!!」

「分かってる、都合が付いたらせつ・・・パッションに迎えに行つて貰うから」

「お待ちしますね!」

ブラックとルミナスの言葉に、ウエスターは右手を挙げて了解したと頷く、

「ウエスター、ラビリンズに送るわ!!」

「今度はちゃんと送ってくれよな!・・・つて、思い出したああ!! なあ、さっきの観客にお前達のサイン頼まれたんだが、何とかしてやってくれないか?」

「サイン!?! もう、またそんな勝手な約束してえ・・・でも、ウエスターには協力して貰つたし、みんな、私からもお願いするわ!!」

「別に良いよ! ねえ、みんな?」

「うん!!」

パッションもウエスターの頼みを引き受け、皆に頼んでみると、ドリームを始めとした一同も、サインに快く応じる事を伝えた。

「良いなあ・・・」

「manaまで、何物欲しそうな顔してるのよ?」

「エエ!?プリキュアのサインだよ!あたしも欲しいよおお!!」

呆れ顔の六花を、manaは不服そうに見つめ、自分も欲しいと言っていると、ピーチはクスリと笑い、

「フフフ、別に構わないよ!あなた達にも迷惑掛けたし!!」

「本当!?!」

ピーチに許可され、manaの目は輝きを増した。素早くありますが色紙を手配し、プリキュア達は、急遽決ったサイン会を始めた。

「じゃあイース、さっきの子達に渡して置いてくれ!メイン会場の関係者入り口前に居る筈だから」

「分かった!後で彼女達に届けておくわ!!じゃあ、ラビリンスに戻るわよ!!」

「お前達、またな!」

そう言い残し、ウエスターはラビリンスに帰って行った・・・

「ブンビー様と仰いましたね?こうして出会ったのも何かのご縁、宜しければ、そちらの

会社がどのような業務をしているのか、お聞きしたいのですが?」

「エエエ!?それは喜んで!」

「セバスチャン!ブンビー様を応接室にご案内して上げて!!」

「ハッ!では、こちらに・・・」

ブンビーは、ありすにヘコヘコお辞儀をしながら、セバスチャンと共に出て行った。

「フフフ・・・ブンビーは、こういう所は相変わらず抜け目が無いわね?」

「良い性格してるわ・・・」

アクアとルージュは、思わず顔を見合わせ合うとクスリと笑い合った。

パッションが再び戻って来た事で、一同はありす、マナ、六花に改めて謝罪し、その場を後にした・・・

「プリキュアって・・・強くて、優しくて、面白い人達だったねえ?」

「イメージと全く違ったわ!」

「また何処かでお会いしたいですわねえ・・・ハッ!?私とした事が、ヒメルダ様をお待たせしたままでしたわ!!」

ありすは大慌てで部屋を飛び出し、プリキュアのサインを大事そうに抱えたマナと六花は、思わず顔を見合わせてクスリと微笑み合った。

そんな彼女達が約十ヶ月後、自分達もプリキュアになろうとは、この時は知る由も無かった・・・

それはまた別なお話・・・

パッションが代表してめぐみ達に色紙を渡した後、再びテントに戻ったプリキュア達の前に、ポップ、ウルルン、オニニン、マジヨリンが、一同が着ていた服を持って現われ、

「皆の衆、忘れ物でござる！服を忘れるとは、弛（たる）んでござるなあ？」

「一体どうして忘れたマジヨ？」

ポップに注意され、マジヨリンに聞かれた一同の視線が、一斉に魔王に向けられる。

魔王はソツポを向いて誤魔化すも、ポップもマジヨリンも状況を理解し、

「成る程・・・では、確かに届けたでござるぞ！キャンデイ、皆の衆さらばでござる!!」

「みゆき、みんな、またメルヘンランドに遊びにおいてウル」

「何時でも歓迎するオニ」

「待つてるマジヨ！」

ハッピーは嬉しそうに笑みを浮かべながら、

「うん！ポップ、ウルルン、オニニン、マジヨリン、色々ありがとう！またねええ!!」

無事に絵本の世界も元に戻った事で、ポップ達はメルヘンランドへと帰って行った。その姿を、プリキュア達は手を振りながら見送った……

服が戻って来た事で、元の姿に戻った一同、佐々木先生の下に戻ると、困惑顔の佐々木先生は、

「あなた達、ショーに出たり……一体何してたの？」

「まあ、色々ありまして……」

「好きで参加した訳じゃないんですけど……」

「佐々木先生にも、ご迷惑お掛けしました……」

なぎさ、ほのか、ゆりが、佐々木先生に頭を下げると、佐々木先生は苦笑を浮かべる。なお、つぼみ、咲、ひかり、奏も、弟や妹達を預かってくれた佐々木先生に謝辞を述べると、

「みんな、佐々木先生に迷惑掛けなかった？」

「ふたば、良い子にしましたか？」

「みのり、ちゃんとお姉さんらしくしてたの？」

「ひかる、遅くなってゴメンね！」

「奏太！大人しくしてたんでしょねえ？」



五人は、弟や妹達に声を掛けた。なぎさ、ほのか、ゆりは、

「じゃあ私達、バイトに戻るわ!」

「でも私達・・・ほとんど何もしてないけど?」

「確かに・・・なぎさ、ほのか、今からでも真面目にやりましょう!!」

「じゃあ、みんな!またね!!」

そう言い残し、なぎさ、ほのか、ゆりは、手を振りながらその場を後にした。のぞみも手を振りながら見送っていたが、何かを思い出したかのようにハツとすると、

「アアア!?お父さんの所に行くの、忘れてたああ・・・みんな、私これで!!」

「待ってえ!私も行きま〜す!!」

慌てて勉の居る会場に走り出すのぞみ、その後をみゆきが追いかけた。それを見たりん、うらら、かれん、こまち、くるみは苦笑を浮かべ、

「やれやれ、忙しないわねえ・・・じゃあ、あたし達もこれで!」

「結局私達・・・世界絵本博覧会に何しに来たんでしょう?」

「フフフ、何か疲れに来ただけね・・・」

「でも、楽しかったわね!」

「まあ、色々あったからね」

「じゃあ、みんなまたね!」

のぞみとみゆきの後を追うように、りん達もその場を後にした。残された咲達、ラブ達、つぼみ達、響達、あかね達も、それぞれ別行動をしようとした時、

「そう言えば・・・魔王は何処に行っただんでしょう?」

思い出したかのようなれいかの一言に、一同の動きが止まると、れいかを振り返り、  
「「「アアアア!!」」」

思わず一同から悲鳴混じりの声が発せられた。

「すっかり忘れてました!」

驚愕顔のつぼみが、どうしようと不安げに話し掛けると、あかね、咲、ラブ、響も困惑顔で、

「あのエロ魔王を、このまま野放しにしといてエエの?」

「不味いよねえ!?!でも捜しようが無いし・・・」

「でも、なぎささん達に散々脅されてたから、懲りたんじゃないかなあ?」

「なら良いんだけど・・・」

「一応、みんなにメールで知らせておくね!!」

ラブはリンクルンを手に持つと、一同にメールを送信した・・・

内容を読んだ一同は、魔王の事を思い出し、大丈夫だろうかと不安に思ったものの、何かあった時は、互いに連絡しあうと云う事で話は纏まった・・・

(魔王、何処に居るのかなあ!?)

みゆきは、この世界の何処かに居るであろう魔王の身を案じた・・・

美墨家・・・

なぎさが家に帰ってきたのは21時頃、帰り際にほのかとゆりと食事をし、今日の出来事を振り返り、重い足取りで家に入ると、中から母理恵の悲鳴混じりの声が聞こえていた。

「亮太、あんた男でしょう!早く取つてよ!!」

「エエエ!?!嫌だよ・・・気持ち悪いもん」

なぎさの父岳はまだ帰っていないようで、なぎさはハアと溜息を付きながら、キツチンにやつてくると、

「ただいまあ!何騒いでるの!?!ゴキブリでも出たの?」

「アツ!なぎさお帰り!丁度良かった・・・ねえ、お母さんのお尻にくつついた、変なの取つてくれない?気持ち悪くて・・・」

「変なの!?!」

母理恵に頼まれたなぎさが、ジッと母の尻付近に付着している黒い球体を凝視する。何処かで見たような、見ないような物体、なぎさがボールペンでツンツン突つについてみ

ると、モゾモゾ動き出す。なぎさの目が点になるや、素早く黒い物体を右手でギュッと掴み、理恵のお尻から無理矢理引き剥がすと、

「アハハハハ、と、取れたよ！何だろうね？外に捨てるから、アハハハ!!」

「あ、ありがとう!？」

挙動不審な態度を取るなぎさに、理恵も亮太も目を点にした。なぎさは二人に見られないように黒い物体を隠しながら自分の部屋に移動するや、黒い物体を壁にぶつけた。黒い物体はまるでボールのように弾け、

「イテテテテ・・・何するカゲエ!」

「それはこっちのセリフよ！何であんたが家に居るのよ?」

黒い球体の正体は魔王!

魔王はなぎさより先に美墨家に現われた。魔王はフワフワ浮かびながら、

「そんなの決つてるカゲエ・・・お前達にお世話してもらうからだカゲエ!」

なぎさは枕を手に持ち魔王にぶつけると、魔王がなぎさのベッドに落下する。

「何するカゲエ!」

「勝手に決めないで!さっさと出てって頂戴!!」

なぎさが窓を指差し、出て行くように魔王に伝えると、魔王の目はウルウルし始め、

「薄情カゲエ・・・行き場のない俺を追い出すなんて、酷いカゲエ!」

「ニコちゃんのに所に帰れば良いでしょう?」

「俺は元々絵本の世界の住人じゃ無いカゲ! お前達と居れば、記憶の手掛かりが得られると思つて付いてきたのに・・・」

「あんた・・・記憶喪失だったの!?!」

「そうカゲ! 自分が魔王と呼ばれてた事ぐらいしか・・・覚えて無いカゲ」

しんみりしながら語り始めた魔王に、少しなぎさも同情心が沸き起り、

「だからこつちの世界に来たんだあ・・・だからつて、勝手に家に来ないでくれる?」

「いやあ、順番にお前達の家にお世話になろうかと・・・」

「勝手に決めるなああ! 全く・・・今日はもう遅いから、私の家に泊めて上げるけど、明日になったら出て行つてよね!! 一応みんなに知らせておくから、今後あんたをどうするかはその時考えるわ・・・それで良い!?!」

「良いカゲ! じゃあ、一緒に寝るカゲ!!」

魔王が布団に潜り込むと、なぎさは魔王を摘み出し、

「勝手に寝るなあ! 私、お風呂に入るんだから・・・絶対この部屋から出ない事!! 出たら・・・直ぐに家から出てつて貰うからね!! メップル、見張つてて!!」

「何でメップルが・・・」

妖精姿に変化したメップルは、渋々承諾し、なぎさは浴室へと向かった。魔王も後を

追いて行くこうとしたものの、メツプルに止められる。

「何処に行くメポ?」

「汚れたから洗って貰おうかと・・・」

「そんな事したら・・・なぎさに殺されるメポ!」

散々(さんざん)なぎさに殴られた魔王は、その時を思い出し、ガクガク震えだした。メツプルはなぎさのベッドに飛び乗ると、

「でも本当は、なぎさは優しいから、魔王の事を思つて一晩泊めてくれたと思うメポ! 大人しくしたら、なぎさはきつと魔王の力になってくれるメポ!!」

そう言うと、なぎさと出会った時からの出来事を、魔王に語つて聞かせた・・・

なぎさが部屋に戻ると、メツプルはコミュニケーション姿で、魔王はそのまま羽を折り畳みながら、なぎさのベッドで眠っていた。なぎさは電気を消すと、

「やれやれ、こうして大人しく寝てれば可愛いんだけどねえ・・・」

そう言いながら、魔王を起こさないようにそつと掛け布団を捲り、ベッドに入ると、魔王と添い寝するように眠りに付いた・・・

沢山の出会いと別れ、なぎさ達の一日はこうして終わった・・・

だが、少女達は気付かなかつた・・・

再びバッドエンド王国が動き出そうとしている事に・・・

第八章：絵本の世界の冒険！

完

## 第九章：魔王と王女とバッドエンドプリキュア!

## 第七十七話：悪のプリキュア!?

## プロローグ

絵本の世界から、人間世界へとやって来た魔王は、美墨なぎさの家に半ば強引に泊まり込んだ。なぎさの家に泊まった魔王だったが、何や感やと理由を付けて居座り、結局三日間、魔王は美墨家の居候として過ごした。このままでは居座られると危惧を感じたなぎさは、雪城ほのかに泣きつき、魔王は二日間ほのかの家に泊まったのは良いのだが、どこで調べたのか、海外に居るほのかの母、文の下に迄現われ、温和なほのかを怒らせた。見かねた九条ひかりが昨日泊めたものの、なぎさとほのかは、大人しいひかりに魔王が悪さしたのではと危惧し、TAKO CAFEで魔王に尋問を始めて居た・・・

なぎさとほのかに、ジイと見つめられた魔王は、絶るような視線をひかりに送る。ひかりは苦笑を浮かべながら、

「なぎささん、ほのかさん、魔王も反省しているようですし、その辺で・・・」

「ひかりさんがそう言うのなら・・・」

「魔王！本当にひかりやアカネさんに、変な事してないでしょうね？」



ジイとなぎさに見つめられた魔王は、思わず視線を外し、なぎさは魔王の行動を見て一抹の不安を覚えた。なぎさはキツと魔王を見つめながら、

「いい、魔王！これからあんたをナッツハウスに連れて行くけど、ちゃんとみんなに、こつちの世界に來た理由を話すのよ？」

「ちゃんとお願ひすれば、みんなも泊めてくれるとは思うけど、私達にしたみたいなのは、絶対しないように!!」

「わ、分かったカゲー！」

プリキユア達の家には、順番に泊まりたいと願う魔王の意向を聞き入れた三人は、ナッツハウスに一同を呼び寄せ、魔王の願望をみんなに伝える機会を設けた。こうして、なぎさ、ほのか、ひかりは、魔王を伴いナッツハウスへと向かった。

バッドエンド王国のジョーカーが、再び動き出そうとする事も知らず・・・

### 1、ジョーカーの考え

不気味に静まりかえるバッドエンド王国・・・

プリキユアオールスターズと、ジョーカー率いるバッドエンド王国との激戦があつたのが、嘘のように静まりかえっていた・・・

室内をカツカツ歩き、ピーエー口のコアが祭られる祭壇を訪れたジョーカーは、何処か

苛立っていた・・・

「おかしいですねえ？バルガンさんを倒された魔界の者達が、プリキュア達に対して何の手出しもしないとは・・・計算が狂いましたか？」

ジョーカーは、顎に手を乗せ考え込んだ。ジョーカーの目論見では、直ぐに魔界の者達は行動を開始し、プリキュア達と全面戦争に入る筈、そう目論んでいた。だが魔界は、今だ動く気配を見せず、不気味な沈黙を続けて居た。

「魔界は、魔界の王の下、統制が執れていると思つて居たのですが・・・一枚岩では無いと云う事でしょうか？」

ジョーカーの計画では、魔界の者との戦いで疲弊したプリキュア達を、一気に倒す漁夫の利を狙っていたのだが、その目論見は外れた。

「このまま沈黙していても、何時まで経つても、ピエーロ様の真の復活は望めないですしねえ・・・」

さて、どうしたものかと思案するジョーカー、自ら出向いてバッドエナジーを回収する事は容易い、だが、人間界にはプリキュア達が居る!!

あの大勢のプリキュア相手では、いかにジョーカーといえど、たった一人で立ち向かう行為は、無謀以外無かった・・・

「バッドエンド王国での彼女達の戦い振り、敵ながら見事なものでしたからねえ・・・」

ジョーカーは、バッドエンド王国でのプリキュアオールスターズの戦い振りを、頭の中で思い浮かべる。ウルフルン、アカオーニ、マジヨリーナ、そして、魔界の者であるサデイス、ベガ、デイクレ、更には、魔界が誇る十二の魔神の一人である、バルガンすら戦力として差し向け、自らも前線で戦うも、徐々に集結したプリキュア達によって、自身を立てた計画は脆くも崩れ去った・・・

「完全復活していなかっただとはいえ、一度はピエーロ様さへ退けたあの力、我らバッドエンド王国の戦力に加えたいものですが・・・」

カツカツ室内を歩き回りながら思案していたジョーカーは、プリキュア達の何人かを拉致し、ウルルン達のようにバッドエナジーを浴びせ、配下に加える事は出来ないか思案するも、その可能性は極めて低いだらうと結論づけた。

「相手は伝説の戦士プリキュア！光の加護に守られた彼女達を、そう容易くは・・・ン!?伝説?そういえば一十年前、三人のプリキュア達が、三種の神器を駆使し、強大な闇の魔神を、たった三人で封じたとか・・・」

ジョーカーは何かを閃いたのか、徐にトランプカードを取りだし回転させると、カードは黒い本に姿を変えた。中を開き、速読し始めたジョーカー、その口元がニヤリとすると、本を閉じ、再び何処かへとしまおうと、今度は懐から、紙にくるまれた五本の色とりどりの髪の色を取り出した。

「思い出しましたよ！あの国の秘宝なら、ハッピー達のこれを利用して……」

メルヘンランドでの戦いで、一度はハッピー達五人を、戦意喪失まで打ちのめしたジョーカーは、勝利の証のように、彼女達の髪の色を奪っていた。

「まさか、これが役立つとは思っていなかったですがねえ……」

ジョーカーは、含み笑いを浮かべると、何処かへとその姿を消した……

トランプ王国……

中世のヨーロッパをイメージさせるその国では今、ある催しが開かれていた……

王国内にある巨大なスタジアムの中、大勢の国民達が、今から始まるセレモニーを、今か今かと待ち侘びていた。

メイנסタジオ中央に、ドツシリ座るこの国の王、髭を蓄え、その優しげな風貌は、人々達からも慕われていた。その隣に座るのは、この国の王女マリー・アンジュ、長いウエーブ掛かったピンク色の髪、その美しい顔立ちは、国民達から羨望の眼差しを受けていた。

慈愛の表情を浮かべ座っていたアン王女、その視線の先には、恭（うやうや）しく跪（ひざまず）く、一人の少女の姿があった。紫掛かったショートヘア、紫と白をベースにしたその出で立ちは、何処かプリキュア達に似ていた。純白の短いマントに身を包ん

だ姿は、一段と少女を凜々しく見せて居た。

アン王女が立ち上がり、少女の前にカツカツ歩き出すと、少女の目の前で立ち止まり、「これよりそなたを、トランプ王国の伝説の戦士……プリキュアに任命致します！以後あなたは……キュアソードと名乗り、パートナー妖精ダビィと共に、この国の繁栄に助力して下さい!!」

「ハッ！身に余る光栄……若輩故、至らない所もございましょうが、この身に代えて、この国の為に尽くす事を、お約束致します!!」

「ワアアアアアアア!!」

アン王女の宣誓に、新たにキュアソードとして任命された少女は、恭（うやうや）しく頭を下げ、プリキュアとして、この国の繁栄に助力する事を誓った。その姿を見に来ていた観客達から、盛大な歓声と拍手がソードに浴びせられた。だが、緊張しているのか、ソードの表情は硬かった。アン王女は、思わずクスリと笑みを浮かべ、優しくソードの右肩に手を乗せると、

「そう緊張しなくても良いのですよ？これはあくまで形式……私も本当は、こういう催しは苦手なのです。剣術のお稽古をしていた方が、どれだけ気が楽か……」

「オッホーン！これ、アン！……聞こえて居るぞ!？」

背後からアン王女の父である、この国の国王は、咳払いと共に、苦笑しながらアン王

女を窘めた。アン王女は肩を竦（すく）め、ペロツと舌を出すと、ソードにウインクし、元の自分の席へと戻って行つた。

（王女様は、私の緊張を解（ほぐ）して下さったのね・・・）

ソードは、アン王女の心遣い（こころづかい）を、心の底から感謝していた・・・  
幼い頃に事故で両親を亡くし、孤児となったソードを、国王も、アン王女も、王宮の一室に招き、他の孤児達と共に、一杯の愛情を与えてくれた。ソードは、二人からいっぱい愛情を受けて育ち、いつか自分は、この恩を二人に返したいと常々考えて居た。アン王女が、音楽が大好きだと知るや、彼女は歌の猛特訓をした。その甲斐あつてか、アン王女はソードの歌声を称えてくれて、よく王女の前で披露した。

アン王女が親交のあるメイジャーランドにも、共に出掛けた事もあつた。そこでソードは、当時の歌姫だったセイレーンの美声に感動した・・・

あのような人々を感動させられる歌を、自分も歌いたい・・・

そう考えて居た・・・

（私の歌何て、メイジャーランドの歌姫には遠く及ばないけど、私の歌が、王女様にとつて少しでも役立つなら、何度でも歌つて見せる!!）

ソードはそう思つて居た・・・

それが今、プリキュアに任命され、この国の守護騎士の一人として認められた。ソー

ドは身を引き締め、更なるトランプ王国への忠誠を、心の中で誓った。立ち上がった国王は、

「では此処に、トランプ王国の伝説の戦士、キュアソードの誕生を祝し・・・」

王の言葉が終わらぬ内に、会場内にパチパチ拍手が響いた。スタジアムに居た一同は、王の言葉が終わらぬ内に、拍手をすとは何と無礼な者だろうかと、皆辺りを伺うも、そのような人物は見当たらなかつた。ソードも険しい視線で辺りを探るも、何の異変も感じられなかつた。だが、アン王女とダビィはその邪悪な気配に気付き、宙を見上げると、

「ソード、上を見るビィー!」

「エッ!」

ソードは、パートナー妖精、コミュニケーション姿のダビィに促され、上空を見上げた。そこには、何処かピエロを思わせるような姿をした、一人の人物が宙に浮かんで居た。

「あなたは何者です!?! 此処がトランプ王国だと知つての狼藉か?」

父である国王を庇うように、アン王女は鋭い視線を宙に浮かべながら、謎の男に声を掛ける。アン王女の視線の先には、薄ら笑いを浮かべたジョーカーが居た。会場内の人々から響めきの声が沸き起る。ジョーカーは、そんな国民達を鼻で笑いながらも、視線を国王とアン王女に向けると、

「これは、これは、私はバッドエンド王国のジョーカーー!」

「バッドエンド王国!?!」

ジョーカーが言うバッドエンド王国など、国王も、アン王女も、一度も聞いた事が無かった。その国の者が、トランプ王国に一体何の用で現われたのか訝しんだ。そんな二人の反応を見て、ジョーカーはニイと口元に笑みを浮かべながら、

「いやあ、驚きましたよ!まさかトランプ王国にも、伝説の戦士プリキュアが誕生しているとは・・・でも、一万年前の事を合わせれば、何の不思議でも無いですけどねえ?」

「な、何故そなたがその事を!?!」

「その事を知るのは、王族関係者のみの筈・・・」

ジョーカーの言葉を受け、国王とアン王女の顔色が変わった。ソードは二人の反応に訝かしみながらも、二人を庇うように駆け出し、ジョーカーを睨み付けた。ジョーカーは、そんなソードを気にもしないように言葉を続け、

「不思議ですか?簡単な事ですよ!だって私・・・元々このトランプ王国の者でしたから!!」

「なっつ!?!」

ジョーカーの意外な告白を受け、国王も、アン王女も驚愕の表情を浮かべた。ジョーカーは、そんな二人の反応を楽しむように、



「それに私、王族の者とは少々因縁（いんねん）がありましたし……特に、アン王女！ あなたとはねえ!!」

アン王女を指さしたジョーカーの瞳が赤く光った。指を指されたアン王女は困惑した。何故この者は、自分に対し敵意を向けるのか、理由が思い浮かばなかった。

「わたくしと!? あなたは一体? ……まさか!？」

頭の中で記憶を整理していく中、アン王女は一人の人物に思い付き、ジョーカーに問おうとした時、ジョーカーは、それ以上のアン王女の詮索を嫌ったかのように、

「これ以上は止みましょう! 昔の事です……それより、ピエーロ様完全復活の序曲を、この国から始めましょうかねえ……世界よ! 最悪の結末、バッドエンドに染まれ! 白紙の未来を黒く塗りつぶすのだ!!」

ジョーカーは、トランプ王国でバッドエンド空間を発生させると、王国の民達が、王族関係者が、そして、国王までがバッドエナジーを発し、ピエーロ完全復活への目盛りが上がった……

「クツ……お父様、しつかり!」

「国王様! よくもおお!!」

父である国王を気遣うアン王女、ジョーカーを鋭い視線で睨み付けるソード、ジョーカーは、プリキュアであるソードが、バッドエンド空間で動ける事にさしたる動揺は感

じなかったが、アン王女がバッドエンド空間の中で動ける事には、少し驚きの表情を浮かべた。

（何故アン王女は、バッドエンド空間で!?!・・・まあ、良いでしょう!）

ジョーカーは、気持ちを切り替えると、二人を見て口元に笑みすら浮かべていた。そんなジョーカーの態度を見たソードは、宙に浮かぶジョーカー目掛け攻撃を開始する。ソードのパンチが、キックが、空を切る。ジョーカーは、ソードの攻撃を余裕で躲し続け、瞬時にソードの背後を取ると、そのまま衝撃波を加えて地上に弾き飛ばした。

「キヤアアア!」

「ソード!!」

まるで遊び半分で戦うようなジョーカーだったが、ソードはそんなジョーカーに翻弄され、地上に叩き付けられる。アン王女は、ソードを心配そうに見つめ、ジョーカーは、そんなソードを見てニタリとすると、

「おやあ!?!あなた、それでもプリキュア何ですかあ?私、手加減して差し上げたんですけどねえ・・・ノンノン!この程度の実力だった何て、正直ガツカリしましたよ・・・私 が相手をするまでもありませんねえ!出でよ!アカンベエ!!」

ジョーカーは、ソードを挑発するように、両手を開き、やれやれといった表情のジェスチャーを浮かべると、ソードは悔しそうに拳を振るわせた。そんなソードを見た

ジョーカーは、紫玉を掲げると、セレモニー用に飾られてあった剣を、アカンベエへと変えた。突然現われたアカンベエを見たソードは動揺し、

「あの怪物は一体!?!」

「ソード、気を付けなさい!あの者からは、嫌な気配を感じます!!」

ソードとアン王女の注意がアカンベエに向けられるや、ジョーカーはその姿を何処かへと消した・・・

「な、何なの!?!」

突然現われ、突然消え去ったジョーカーを見たソードが、呆気にとられていると、それを窘めるかのように、アン王女が話し掛け、

「ソード、此処には大勢のトランプ王国の民が居ます!民に被害が及ばないよう、食い止めて下さい!!」

「はい!王女様!!」

アン王女という言葉に頷いたソードは、単身剣の姿をしたアカンベエと対峙する。ソードはパンチを放とうとするも、アカンベエは、両手に持った剣を振り、衝撃派を放つと、ソードを吹き飛ばす。

「キャアアア!」

「ソード!・・・お父様、此処でしばしお待ちを!わたくしもソードの援護に向かいます

!!

キツと表情を引き締めたアン王女、まだプリキュアに成り立てのソードでは、実戦が不足していた。それを補うには、自分もソードと共に戦う以外無い、そうアン王女は判断した。アン王女は、国王を椅子に腰掛けさせると、不測の事態に備え、側近に用意をさせておいた槍を手に持つや、ソードの援護に向かった。

(こんな事なら・・・ミラクルドラゴングレイブを持つてくれば良かった・・・)

ミラクルドラゴングレイブ・・・

嘗て、闇と戦った三人のプリキュアの一人、キュアマジシャンが所持していた光の槍・・・

だが、三人のプリキュア達は、闇の呪いを受け数年の命だった・・・

光の槍の所持者キュアマジシャンは、封印した闇を監視する為に、仲間達に別れを告げ、光の槍を持って異世界に王国を建国した・・・その名をトランプ王国!

マジシャンは、共にこの国を作り上げた一人の男性と恋に落ち、残りの余生を一人の女性として過ごすべく、この国で生涯を終えた・・・

その槍は、マジシャンの子孫であるアン王女が、現在持つて居た!!

だが、記念すべき式典に、ミラクルドラゴングレイブを持参する訳にも行かなかった為、アン王女は万が一に備え、通常の槍は持参していた。槍を手に持ったアン王女は、素

早く髪を纏め上げると、苦戦するソードの側に駆け寄り、

「ソード、わたくしも援護します！」

「王女様!? ……申し訳ありません！私が不甲斐ないばかりに……」

「今は落ち込んでいる場合ではありませんよ！ハアアアア!!」

アン王女は、ソードを叱咤激励し、槍を身構えると、鋭い踏み込みでアカンベエに怒濤の突きを繰り広げる。アカンベエも剣で応戦し、アン王女と凄まじい攻防を繰り返す。ソードは、アン王女とアカンベエの激闘を見て驚愕し、

(凄い……流石は王女様！私も!!)

ソードは、パンと両頬を叩き、気合いを入れ直すと、アカンベエに再び立ち向かった。だが、アン王女も、ソードも、ジョーカーの真の狙いに気付く事は無かった……

## 2、奪われた秘宝

ジョーカーは、アン王女の部屋を訪れていた……

「この部屋に入るのも、数年振りでしょうか？アン王女を溺愛するあの国王の事、きつと秘宝はアン王女に託している筈!!」

ジョーカーは部屋の中を見渡すと、アン王女はあまりオシヤレに関心はないのか、女性の部屋にしては殺風景であった。

(やれやれ、アン王女も相変わらずですねえ……)

苦笑を口元に浮かべたジョーカーだったが、全身を映し出せそうな巨大な姿見鏡に目を付けた。ジョーカーの直感は、此処が怪しいと閃きを見せた。姿見鏡の横にある机の棚を調べ始めたジョーカーは、表面にAという文字が付いた白に赤のラインが入った小箱を見付けた。

「これは怪しそうですねえ……どれ？」

ジョーカーが開けようと小箱に触れた途端、小箱は光輝き、ジョーカーの手に電流が走った。思わず小箱を落としたジョーカーは、忌々しそうな表情で、

「どうやら、これに間違いないようですねえ！嘗て、キュアマジシャンが所持していた、聖なる力を持つアイテム……ですが、光の力など、バッドエナジーで消し去ってくれましよう！」

そう言うと、小箱にバッドエナジーを浴びせた。バッドエナジーを浴びた小箱から、光の輝きが消え去り、ジョーカーは小箱を開けた。蓋の裏側には、コンパクトのように鏡が入っていた。その下段には、赤、青、黄、ピンク、紫の五色の水晶が埋め込まれていた。

「確かに、この水晶からは凄まじい力を感じますねえ……」

ジョーカーはニタリと笑みを浮かべると、小箱の蓋を閉めた……

アカンベエと対峙し続けるソードとアン王女、アン王女の加勢で状況を覆したソードは、

「このキュアソードが、愛の剣でああなたの野望を……断ち切ってみせる！」

ソードは、右手を手刀のようにアカンベエに構えると、雄叫びを上げながら宙に飛んだ。アカンベエの注意が、ソードに気を取られた隙を見逃さず、アン王女は怒濤の突きでアカンベエの体勢を崩し、

「ソード、今です！」

「はい！閃け！ホーリーソード!!」

ソードの右手から、無数の剣形のエネルギー弾が、アカンベエ目掛け乱れ飛び、堪らずアカンベエはその威力に押され、

「リアブ！リアブ！リアブ！！」

目をハートマークにしながら、アカンベエは浄化され、着地したソードとアン王女は、互いを見つめ合い笑顔を向けた。そんな二人に対し、拍手が鳴り響いた。思わず拍手がした方角を見た二人は、何時戻って来たのか、ジョーカーの姿を見て表情を険しくする。ジョーカーは、そんな事にはお構い無いように二人に話し掛け、

「お見事！アカンベエを倒しましたか……まあ、こちらの用事も済みましたんで、時間

稼ぎにもなった事ですし、私ももうこの国にも用は無いですけどねえ・・・」  
「どういう事です!？」

不可解なジョーカーの態度を訝（いぶか）るアン王女は、思わずジョーカーを問い詰める、ジョーカーは含み笑いを浮かべながら、

「ウフフフ！ いえね、この国の秘宝を、無事に手に入れる事も出来ましたので、もう用は無いと言ったんですよ？」

そう言うと、ジョーカーは、アン王女の部屋から持ち去った小箱を取り出した。それを見たアン王女は、見る見る顔面蒼白になるや、

「な、何故それを!?!か、返しなさい!!」

「と言われて、返すバカが居ますか?では、使わせて頂きますよ・・・」

ジョーカーは、赤い小箱を開くと、中に埋め込まれていた五色の水晶を取り出した。

「や、止めてえええ!!」

アン王女の悲鳴が辺りに響き渡る中、ジョーカーは、水晶にバッドエナジーを加えるや、ピンクの水晶にハッピーの髪の毛を、赤い水晶にサニーの髪の毛を、黄色い水晶にピースの髪の毛を、紫の水晶にマーチの髪の毛を、青い水晶にビューティの髪の毛を埋め込んだ。更に、ピンク、赤、黄、緑、青の五色の大きなトランプカードを取り出すと、カードの中に水晶を埋め込んだ・・・



「アア!? な、何という事を．．．お願いだから、もう止めてえええ!」  
(王女様!?)

アン王女は、悲しげな表情でジョーカーに止めるように訴えるも、ジョーカーはただ不気味に笑むだけだった。ソードは、取り乱すアン王女を悲しげな目で見つめるも、直ぐに険しい表情でジョーカーを睨み付けた。

トランプカードに吸い込まれた水晶は、まるで心臓の鼓動のように、ドクンドクンと蠢き始める。その鼓動に合わせるように、巨大なトランプカードの中から、人のような姿が形作られていった。アン王女も、ソードも、目を見開き、目の前で起ころうとしている出来事を、呆然と見つめていた．．．

「ウフフフ、あなた方には特別に見せて差し上げましょう! さあ、目覚めなさい!! バッドエナジーより生まれしプリキュア．．．バッドエンドプリキュアよ!!」

「バッドエンドプリキュア!?!」

ジョーカーが放った一言に、アン王女も、ソードも驚愕した。確かに今ジョーカーは、プリキュアの名を出したのだから．．．

ジョーカーが両手を宙に広げると、トランプカードの中から、腕が、足が、現われ、更に中からゆっくり全身を現わした五人の少女達、頭部には、こうもりの羽のようなものを付け、その体は黒いタイツに覆われ、ピンク、赤、黄、緑、青のキャロットをした五

人の少女達が宙に浮かんで居た。ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの姿に何処か似ている、五人の少女達の姿が・・・

「な、何という事を・・・」

「何なの!?!あの子達が・・・バッドエンドプリキュア?」

その光景を見たアン王女はワナワナ震えだし、ソードは、突然現われた五人の少女達を見て呆然としていた。現われた五人の少女達、ピンク、赤、緑髪の少女達は背伸びをし、黄色い髪の少女は大あくびをし、青髪の少女は、何処か冷めた視線で周囲を見渡していた。

「ウーン・・・何か窮屈な所からやつと出れたあ!」

「ホンマやなあ・・・」

「つて言うか・・・あんた達、誰?」

「そう言えば・・・私、誰だっけ?」

「名前などどうでも良いわ!」

ピンク、赤、緑、黄、青の髪をした五人の少女達は、自分が何者なのか、何故此処に居るのか、全く理解出来ない様子を見たジョーカーの顔から、汗が滴り落ちた。ハツと我に返ったジョーカーは、五人の少女達に話し掛け、

「あなた方は・・・バッドエンドプリキュア!あなたは、そうですねえ・・・バッドエン

ドハッピー、あなたが、バッドエンドサニー、あなたが・・・」

ジョーカーは、五人の少女達に説明を始め、五人の少女達に名前を付けていった。ア  
ン王女も、ソードも、その様子を呆気に取られたように見つめていた。

「と言う訳で、あなた方には、ピーエー口様復活の為に、バッドエナジーを大量に集めて欲  
しいのです！」

ようやく説明を終え、ハアハア息をするジョーカーであったが、五人の少女達は、ま  
るで興味が無いような表情を浮かべると、

「フーン・・・でも、ヤダー！」

「ハア!？」

「面倒やあー！」

「エツ!？」

「そんな事しても・・・つまんなあい！」

「ゲツ!？」

「そんなチマチマした事・・・ゴメンだねえ！」

「もしもし!？」

「私達は・・・好きなようにやらせて貰うわ!!」

「あのお・・・」

ピンク、赤、黄、緑、青、バッドエンドプリキュアと命名された五人の少女達から、ジョーカーは次々と拒否をされ、動揺していた・・・

(な、何々ですか!?!何と我が儘な・・・)

「ですから、ピエー口様を復活させれば、全世界をバッドエンドに染める事が・・・」

呆気にとられていたジョーカーだったが、今一度バッドエンドプリキュアに説明するも、

「エエ!?!別に、興味無いし・・・」

「ウチも、自分が面白なら、それでエエ!」

「私も、自分で好きなようにしたいなあ・・・」

「あたしも、命令されるのはゴメンだねえ!」

「私達は、好きなようにさせて貰うわ!」

そう言うのと、五人はバラバラに散らばろうとし、ジョーカーは慌てて五人を呼び止めるのと、

「い、言いそびれてましたああ!実は、あなた方五人は・・・バッドエナジーを定期的に回収しなければ・・・消滅してしまうんですよおおお!!」

「「「エエエエ!?!」」」

バッドエナジーを回収しなければ、消滅してしまう・・・

ジョーカーの咄嗟（とつき）の思いつきであったが、その一言は、バッドエンドプリキュアの心に響いたようで、五人は顔面蒼白になると、

「そ、それ本当!?!」

「う、嘘やないやろうなあ?」

「エエエン! まだ何もしない内に・・・消える何てヤダアアア!!」

「泣くなつつうのお・・・」

「それが事実なら・・・確かにあなたの言うように、バッドエナジーを集めない訳にはいかないようね?」

ジョーカーの術中に嵌ったバッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの五人、

（やれやれ、何とか誤魔化せましたねえ・・・しかし、この我が儘振りには困りましたねえ）  
呆れ顔になるも、何とか誤魔化せた事で、ジョーカーはホツと安堵するや、

「では、あなた方をバッドエンド王国に案内致しましょう!!」

澁々ながら、ジョーカーの言葉を受け入れたバッドエンドプリキュアの五人は、宙に浮かび上がると、ジョーカーは空間に歪みを発生させた。ハツと我に返ったアン王女とソードは、

「お、お待ちなさい!」

「あなた達、水晶を王女様に返しなさい!!」

二人は、慌ててジョーカーとバッドエンドプリキュアを呼び止めた。五人は振り返ると怪訝な表情を浮かべ、

「何や、あいつら?」

「あたしは・・・命令されるのが大嫌い何だよ!!」

バッドエンドサニー、バッドエンドマーチの二人は、表情を険しくすると、バッドエンドサニーは炎を、バッドエンドマーチは緑色した球体を、アン王女とソードに向けて攻撃した。アン王女は、槍を巧みに操って攻撃を捌き、炎を無効化するも、ソードは緑の光弾を避けきれず、爆風に巻き込まれ吹き飛ばされた。

「キヤアアア!」

「キヤハハ!何あの子、超弱いんですけどお?」

バッドエンドピースは、ソードを見て嘲笑すると、おまけとばかり、ソードに対して雷を浴びせた。直撃を受けたソードは、そのまま意識を失った。

「ソードオオ!」

心配そうにソードに駆け寄り、介抱するアン王女、それを見下すように見た、ジョーカーとバッドエンドプリキュア達は、

「ウフフフ、無様ですねぇ?その程度でプリキュアを名乗るなど・・・アン王女、あな

たがプリキュアになった方が、良かったんじゃないやありませんか？アハハハハ！」

「クツ！」

ジョーカーの蔑む視線と嘲笑（ちようしよう）を受け、アン王女は悔しげな表情を浮かべた。ミラクルドラゴングレイブさへあれば、此処まで翻弄される事も無かったのに……

「じゃあねえ！」

「そのポンコツさんに伝えて置いて！」

「これに懲りたら、二度と私達の前に現われない事だと伝えなさい!!」

バッドエンドハッピー、ピース、ビューティの捨て台詞すら、アン王女の耳には届かなかった。ジョーカーの言うように、なれるものなら、自分もプリキュアとなつてソードと共に戦えたのにと、アン王女は、プリキュアになれない自分を恥じた……

だが、この時のアン王女は気付いて居なかった！

三種の神器の一つ、ミラクルドラゴングレイブを扱えるその事実こそ、アン王女は、プリキュアになる資格を既に持っていた事に……

（今回は私達の完敗です……ですが、必ず王家の秘宝は取り戻して見せます!!）

アン王女の瞳には、闘志が宿っていた。今回は完敗なのは認めても、必ず王家の秘宝は取返して見せると……

こうして、ジョーカーとバッドエンドプリキュア達は、バッドエンド王国へと帰って行った。バッドエンド空間から解放されたトランプ王国だったが、アン王女とキュアソードの心が晴れる事は無かった・・・

第七十七話：悪のプリキュア!?

完



## 第七十八話：魔王と少女達（前編）

## 1、魔王と花鳥風月

ジョーカーのトランプ王国襲撃・・・

そんな事がトランプ王国で起こっていたとは、なぎさ達一同が知る由は無かった：：この日、なぎさ、ほのか、ひかりの三人に呼ばれた一同は、集合場所の一つであるナツツハウスに集結した。少女達は、魔王を今後どうするか話し合っていた・・・

なぎさ、ほのか、ひかりの話を聞きながらも、テーブルの上でニタニタしている魔王を見て、表情を曇らせているのは・・・

咲、舞、満、薫

のぞみ、りん、うらら、こまち、かれん、くるみ

ラブ、美希、祈里、せつな

つぼみ、えりか、いつき、ゆり

響、奏、エレン、アコ

そして、みゆき、あかね、やよい、なお、れいか、あゆみ

なぎさも、魔王の気持ちをしは汲み取りつつも、自分達が魔王に受けた仕打ちも正直に話し、何とか魔王の願いを叶えてやろうとはしていたのだが・・・

「って訳で、最初に私の家に現われた魔王は、結局三日間も居座り、次にほのかの家に行っただけど・・・」

「どこで調べたのか、海外に居るお母さんの所に迄出没して・・・」

「俺は魔王だからなあ！お前達の身内の気配など・・・直ぐに分かるカゲエ!!」

自信満々で踏ん反り返る魔王を、頬を膨らませたなぎさとほのかが見つめる。ひかりは苦笑を浮かべながら、

「家に来た時は、最初こそ騒いでましたけど、ポルンやルルの遊び相手にもなってくれて、私も助かったんですよー!」

「ひかりは、なぎさとほのかと違い、俺と一緒に、お風呂に入ってくれたからなあ・・・それくらいお安いご用カゲエ!!」

その時を思い出したのか、魔王の表情がニヤニヤし、ひかりは恥ずかしそうに俯くと、「このエロ魔王！ひかりに何してんのよおお!!」

今初めて聞いたようで、魔王を見てムツとしたなぎさは、ゴツンと魔王の頭に拳骨を炸裂させ、ほのかも怪訝な表情で、ジイと魔王を無言で見つめる。魔王はそんな二人に思わずビビリ、ひかりの後ろに慌てて隠れた。あゆみは不思議そうに首を傾げ、

「魔王・・・やけになぎささんとほのかさんに怯えてますよねえ?」

「まあ、散々頭を殴ったから・・・かな!?折角私達がフオローしてあげてるのに・・・この分じや、記憶喪失って話も、どこまで信じて良いのやら・・・」

「言っておくけど、私は殴って無いわよ!でも、なぎさの言う通り、記憶喪失の話は・・・」  
「それは本当の事カゲエエ!」

「ジイイイ」

記憶喪失は本当だと訴える魔王に、なぎさとほのかは、同じような表情で疑惑の視線を浴びせた。魔王はパタパタ羽を飛ばたかせながら、宙に浮かび上がると、本当だと一同に訴え続けた。そんな魔王に、一同の冷めた視線が突き刺さった。なぎさはコホンと咳払いをすると、一同に話し掛け、

「で、みんなにナツツハウスに集まってもらったのは、魔王の事何だけど・・・」

「魔王曰く、私達一人一人の家に、一度泊まりたいんですって」

ほのかも苦笑を浮かべながら、なぎさの言葉を引き継ぎ、一同に魔王の願望を伝えた。当然一同からは響めきが沸き起り、

「エエエエ!?!」

「よろしくカゲエ!」

魔王は、愛想よく一同に媚びを見せるも、一同に思わず悪寒が走った。美希は、変顔

を浮かべながらブルブル首を振り、

「嫌よ！ニコちゃんのに帰れば良いじゃない!!」

美希の言葉も尤もだと思いながらも、苦笑を浮かべたなぎさとひかりは、

「それ何だけどさあ・・・魔王は元々、絵本の世界の住人じゃ無いんだってさ!」

「私達と一緒に居れば、記憶の手掛かりが得られるんじゃないかって思って、こちらの世界に来たそうです」

「記憶?!」

「そう言えば、さつきも言ってたけど・・・魔王って記憶喪失なの?」

「・・・とてもそうは見えないけど?」

二人の言葉を受け、美希、くるみ、満の疑惑の視線が魔王に浴びせられる。他の一同も、まだ何処か半信半疑の様子で、ジィと魔王を観察するように見つめた。だが、みゆきだけは魔王の言葉を信用しているようで、苦笑を浮かべながらも、

「でも、魔王は嘘を言っていないと思うなあ・・・」

「せやかて、こないな危険人物、家に連れて行けへんわ!」

あかねが魔王を指差し、変顔を浮かべながら否定すると、再びなぎさは苦笑を浮かべ、

「ああ、魔王を庇う訳じゃ無いけど、それは大丈夫!最初に脅しておけば・・・」

「脅すの!」

魔王を脅しておけばと聞き、思わずえりかは目を点にして聞き返し、満と薫も少し驚いた表情を浮かべながら、

「でも、なぎさやほのかのお母さんにも、魔王はチョツカイ出したんでしよう?」

「ひかりの所は平気だったの?」

薫に問われたひかりも苦笑を浮かべると、

「アカネさんにもチョツカイ出そうとしたので、それは止めてって頼んだら、私が一緒にお風呂に入れば、大人しくしてるとって魔王は約束してくれましたよ!」

ひかりの言葉を受け、一同の顔色は険しくなり、

「最低!」

思わずハモリながら、のぞみとラブが・・・

「変態!」

表情を険しくした響が・・・

「ほとんど脅迫じゃないのよ!」

頬を膨らませた咲が・・・

「いつき・・・魔王の性根を、叩き直して上げた方が良いんじゃない?」

「そうだね、魔王!・・・メツ!!」

えりかに頼まれたいつきは、ポプリを叱る時の要領で魔王を叱るも、言われた魔王も、

見て居た一同も目を点にし、りんは苦笑を浮かべながら、

「ハハハ・・・何だ、そりゃ!？」

「エツ!? ポプリに注意する時に・・・」

呆れたように突っ込みを入れるりに、いつきは驚いた表情を浮かべ、ポプリを叱つた時と同じようにした事を伝えると、ゆりも困惑気味に、

「それじゃあ、魔王の場合・・・まるで効果は無いと思うわよ?」

れいかも領きながら魔王を見つめると、

「魔王! それは人として道に反して・・・そういえば、魔王を人と捉えてもよろしいのでしょうか?」

魔王を人と呼ぶべきか、少し困惑しているれいかに、なおは苦笑しながら、

「れいか・・・今はどうでも良いんじゃないかなあ?」

どうも、自分に対して一同が冷たいと感じた魔王は、少し寂しげな表情を浮かべると、  
「お前達・・・もうちょっと俺を労（いたわ）って欲しいカゲ・・・」

「するかああああ!!」

一同からの大ブーイングを受け、魔王の顔から汗が滴り落ちた・・・

結局、魔王をこのまま放置する訳にもいかず、この日は咲達が魔王を連れ帰る事と

なった・・・

「魔王、最初に言つとくけど・・・あたし達や家族に、変な事しないでよねえ?」

変顔浮かべながら、咲は、舞が抱っこしている魔王に忠告を与えると、満と薫もウン頷きながら、

「まあ、何かしたらしたので・・・」

「私達が、あなたを消滅させて上げても良いんだけど?」

そう言うと、口元に笑みを浮かべながら魔王を見つめた。舞は苦笑を浮かべながら、満さん、薫さん、確かになぎささんは、最初に脅しておけばとは言つてたけど・・・ちよつと脅しすぎるのも、魔王が可哀想何じゃ?」

「ウウウ、舞!!」

「エツ!!キヤア!」

魔王はオイオイ泣きながら、舞の胸に顔を埋めると、舞は思わず悲鳴を上げ、頬を染めた。忠告している側からの魔王の行いに、咲、満、薫は、表情を険しくすると、咲は魔王を舞から無理矢理引き離し、

「舞・・・舞ももつと怒らないと駄目だよ!」

「甘やかせたら・・・凶に乗るわよ?」

「厳しく接するのも、魔王の為よ!」

「エエ!? そう言われても、今のは悪意があるとは思えないし・・・」

「舞は優しいカゲエエ・・・決めた! 今日舞の家に泊めて貰うカゲエエ!!」

「二「勝手に決めるなああ!!」」

「ご機嫌で今日泊まる家を、勝手に舞の家に決めた魔王に、咲、満、薫が駄目出しをする。この状況で舞の家に泊まったら、魔王は何をしてくるか分からないと三人は判断した。」

「今日は私達が泊めるわ!」

「変な真似をしたら・・・問答無用で消滅させるから!!」

「ウウウ・・・舞の家が良かったカゲエエ」

「こうして、魔王はこの日、満と薫の下で過ごした・・・」

翌日・・・

満と薫、フープとムーブ達と一緒に、疲れ気味の魔王がPANPAPAパンに現われた・・・

テラス席に腰を下ろした満と薫、少し遅れて咲が来て同じテーブルに座ると、

「満、薫、おはよう! 昨夜は二人共大丈夫だった?」

咲がヒソヒソ声で二人に話し掛けると、満と薫は顔を見合わせクスリと笑むと、



「ええ、大丈夫よ！」

「フープとムーブが、遊び相手が出来たと喜んで、一晩中遊んでたようだし」

そういうと、二人は魔王をチラリと見た。魔王はテーブルの上で、時折コクリ、コクリと居眠りするも、ムーブとフープに纏わり付かれて起こされ、迷惑そうにしていた。咲はそれを見るとニンマリし、

「じゃあ今日は、フラツピが一晩中魔王と遊んでー！」

そう咲に言われたフラツピは、妖精姿になってテーブルの上に現われると、

「冗談じゃ無いラピ！」

フラツピは、頬を膨らませて嫌だと拒絶した。腕組みしたフラツピは、

「大体、咲の裸何て・・・魔王も興味無いラピ」

「何おおおお！」

フラツピにからかわれ、咲は変顔を浮かべながら怒る中、魔王は咲をジイと見ると、

「・・・・・・まあ、大丈夫カゲ」

「その間は何よ!?!その間はああ?」

頬を大きく膨らました咲を見て、フラツピと魔王が逃げ出し、咲が二人を追いかけ廻した。満と薫は、そんな咲達を見ると、クスリと笑っていた・・・

その夜・・・

魔王は魘されていた・・・

巨大な何かに追われ、踏みつぶされた所で目が覚めると、目を開けた時、魔王の身体の上には、咲の左足が乗っかっていた・・・

「ど、どうりで重いと思つたら・・・ね、寝相が悪いカゲエ・・・」

「これでも大分マシになつたラピ！前はもつと酷かつたラピ」

思わず顔を見合わせると、フラツピと魔王は溜息を付いた。そんな二人に気付かず、咲は気持ち良さそうに眠り続けた。

（こ、こんな事なら・・・内緒で咲ママと寝れば良かったカゲ・・・）

魔王は深い溜息を付いて後悔していた・・・

翌日・・・

魔王を迎えに来た舞を見て、魔王はご機嫌だった！

この日は、自分に優しく接してくれた、舞の家に泊まれるのだから・・・

（舞なら、ひかりみたいに、きつと一緒に風呂に入れてくれるカゲエ！）

嬉しそうにはしゃぐ魔王を、咲、満、薫がジイと見つめると、ヒソヒソ話を始め、

「ねえ、このまま魔王を舞の家に泊めて大丈夫かなあ？」

「いささか不安ね？」

「ええ、きつと良からぬ事を考えていそうね？」

そんな三人を見た舞は、苦笑を浮かべながら、

「そうかしら!?!大丈夫じゃ・・・」

「舞、考えが甘いよ!」

「そうよ!ひかりが受けた仕打ちを、考えてごらんなさい!!」

「きつと舞のお母さんを出しに、一緒に入らないと、舞のお母さん入るとか言い出すわよ?」

「そ、そうかしら!?!」

そうは言うものの、確かにひかりは、魔王に脅迫紛いな選択を迫られ、魔王と一緒に風呂呂に入っていたのは事実だと考え、困惑した表情を浮かべた。満は、嬉しそうにはしゃぐ魔王を見つめながら、

「何か手を打った方が良いわね？」

そんな少女達のヒソヒソ話に、魔王が気付く事は無かった・・・

魔王を連れ帰った舞は、家の中を見渡すも、両親も、兄もまだ帰っては居ないようでホッと安堵した。自分の部屋に入ると、魔王をベッドの上に乗せ、

「魔王！約束して欲しいの……お母さんに変な事はしない事！後は、家族に見つからないようにして欲しいの……」

「それを守れば、舞と一緒に風呂に入ってくれるカゲエ？」

「エツ!? 出来れば遠慮したいけど……」

「じゃあ、嫌カゲエ！」

ふて腐れたようにソツポを向いた魔王に、舞が困惑していると、フワフワ浮かびながらフープとムープが現われ、魔王を見付けるや、二人は魔王に群がり、遊ぼうと魔王の周りを飛び回った。魔王は困惑気味に、

「な、何でお前達が、舞の家に居るカゲエ!?」

「満と薫に頼まれたムプ」

「魔王が一杯遊んでくれるからって言ってたププ」

「そんな事言っていないカゲエエ!?」

否定する魔王を無視し、二人は迷惑そうな表情を浮かべる魔王に纏わり付いた。舞は思わずクスリとすると、

（咲達、私の事を思って二人に頼んでくれたのね）

「魔王！ムープとフープが満足するまで遊んでくれるなら、後でみんなと一緒に風呂に入りましょう!!」

「本当カゲエエ!？」

「舞、そんな約束して良いチョピ?」

「フッフ、大丈夫よ、チョツピ」

魔王は目を輝かし、舞と一緒に風呂に入れると大喜びをしていた。チョツピは不安そうに舞に話し掛けるも、舞は何故か笑みを浮かべて大丈夫と答えるのだった・・・

ムーブとフープが満足するまで遊んであげれば、舞とお風呂に入れる・・・

魔王は、ムーブとフープを相手に鬼ごっこなどをして相手をして上げるも、二人は中々満足する事はせず、魔王はバテていった・・・

「お、お前達、もう一杯遊んだカゲ」

「ププ〜!次は何して遊ぶププ?」

「今度はかくれんぼムプ!」

「魔王が鬼ププ!」

「隠れるムプ!」

そう言うと、二人は舞の家の中を、フワフワ浮かびながら何処かに隠れに向かった。

「カゲエエ!？」

こうして、魔王はクタクタになるまで、ムーブとフープの遊び相手を勤めた・・・

疲れ切った魔王は、舞のベッドの上で羽を折り畳んで眠っていて、その側では、コ

ミューン姿のムーブとフープが眠りに付いていた。

「フフフフ、三人共疲れちゃったのね・・・魔王、お疲れ様!!」

舞はクスリと笑うと、魔王達を起こさないようにベッドに入ると、眠りに付いた：

## 2、魔王の思いやり

困惑気味にナッツハウスに集結したのぞみ、りん、うらら、こまち、かれん、くるみは一同にジューズを差し出ししながら、

「遂に私達の番が来ちゃったわねえ？」

「ハハ・・・出来れば連れて帰りたくは無いけど、なぎささん達も、咲達も預かってたし、あたし達も預からない訳にはいかないよね？」

乾いた失笑をしながら、テーブルの上に座る魔王を見てりんが答える。

「どういう順番にしますか？」

「そうねえ・・・此処は公平にジャンケンで勝った人から選びましょう!」

「[[[[異議無し!]]]]」

うららに聞かれた一同、こまちの提案に一同も同意し、

「[[[[ジャンケン・・・ポン!!]]]]」

六人の少女達が、ジャンケンで魔王を預かる順番を決めた!

初日はうらら、後は順にくるみ、こまち、りん、のぞみ、最後にかれんという順番に決った・・・

「まあ、家はお父さんとお爺ちゃんと私の三人暮らしですから、家族に付いての心配は無いと思いますけど・・・」

「その分、うららの身が危険な気もするわねえ?」

「そうだねえ・・・うらら、大丈夫?」

「エエエ!?りんさん、のぞみさん、脅かさないで下さいよお?」

りんとのぞみに脅され、不安がるうららではあったが、魔王を連れて家に帰った・・・

「此処が私の部屋よ!私、今日は夕飯を作るから支度しに行くけど、魔王は部屋でおとなしくしてて!!」

「夕飯の支度!?うららのママはしてくれないカゲエ?」

「私のお母さんは・・・私が小さい頃に亡くなったから・・・」

「・・・・・・・・ゴメンカゲエ!」

「ウウン・・・魔王にも、後でうらら特製カレーでも食べさせてあげるね!」

うららは、笑みを浮かべると、台所にカレーを作りに向かった。魔王はうららのベッドにゴロンと横になると、

（うらららに悪い事聞いたカゲエ・・・）

魔王も、この世界でプリキユア達と生活を共にする事で、色々な事を学んでいた・・・  
なぎさ達と出会った頃の魔王なら、このような自己嫌悪に陥る事も無かつたであろう・・・

魔王はうららの部屋を見渡すと、一つの写真立てが目にとまった。その写真の中には、綺麗な女性が、綺麗な衣装を纏い、何か歌っているような表情をしていた。

（ひよつとして、この写真がうららの・・・）

写真に写る美女を見た魔王だが、珍しく欲情する事も無かつた・・・

ただ、写真の中の女性をジイと見つめるのみだつた・・・

うららの手作りカレーを御馳走して貰った魔王、一応うららと一緒に風呂に入ってくれるか許可を求めた所、うららに苦笑を浮かべながら断られたものの、魔王はあっさり引き下がり、うららの部屋でおとなしくしていた。

その夜、眠りに付いたうららの寝顔を見つめた魔王は、うららの母まりあの写真に影を伸ばし、更に祖父平蔵、父ミッシェルにも影を伸ばし、二人からまりあの記憶を得ると、寝ているうららの頭にも影を潜り込ませた。

「夢の世界の・・・あいつの力を借りるカゲ！」



魔王は精神統一すると、深い眠りに付いた・・・

スヤスヤ眠っていたうららは、誰かに呼ばれたような気がして目を覚ました。

「魔王!?!でも、女性の声だったような!?!」

「うららー!?!うららら!?!」

確かに女性が自分の名前を呼びながら近付いて来る。困惑するうららだったが、背後を振り返った時、うららは思わず目を見開き呆然とした。

そこには、うららが物心付く前に亡くなり、写真や映像でしか見た事のない母親の姿があったのだから・・・

「うらら・・・大きくなったわねえ?」

「お母さん!?!これは・・・夢?」

ニツコリ微笑みながらうららを抱きしめたまりあ、うららの目からポロポロ涙が零れた。夢でも良い、心の奥底で母に抱きしめて貰える事を、何度願った事か・・・

そんなうららを見た魔王は、

「うらら、これは俺からのプレゼントカゲエ・・・」

魔王は幸せそうなうららを見て居ると、自分の事のように自然と笑みが浮かべながら夢の世界から去っていった。

「全く、魔王も酔狂な所があるわねえ．．．」

魔王が去った後、長い耳と額に月のマークをした桃色の身体をした妖精が姿を現わした。その背後から、水色の小柄な体をし、同じように額に月のマークをした水色の小さな身体をした妖精がチラチラ顔を覗かせていた。桃色の妖精がエプロンをしている姿は、水色の妖精の母親なのだろう．．．

二人は宙を見上げ、うららとまりあの再会を、目を細めながら見守った．．．

翌日．．．

うららの家からナッツハウスにやって来た魔王を、ミルクが渋い表情で出迎えた。魔王もミルクを見て不満そうに、

「何でお前は、人間の姿になってないカゲエ!?」

「魔王と一日一緒居るのに、なる訳無いミルク!」

魔王が何度おねだりしても、ミルクがくるみの姿になる事は無かった．．．

(ミルクの奴．．．俺の頼みを拒否するとは．．．)

魔王は目に炎を点した．．．

その夜魔王は、うららと違い、ミルクには怖い夢を見せ、ミルクは一晩中魘(うな)されていた．．．

翌日、魔王を迎えに来たこまちは、疲れ切っているミルクを見て小首を傾げ、

「ミルクさん・・・何かあったの!?!大分お疲れのようだけど?」

「ミ、ミルク!悪い夢を見て・・・こまち、早く魔王を連れて行ってミルク!」

「分かったわ!魔王さん、今日一日よろしくね!!」

「こちらこそヨロシクカゲエ!」

魔王はミルクに舌を出すと、ミルクも負けじと舌を出した。こまちはそんな二人を見ると、思わずクスリと微笑んだ。

こまちの家に泊まった魔王であったが、こまちの姉まどかを見てご機嫌だったものの、男勝りな性格のまどかは、ぬいぐるみみの振りをして抱いて貰おうとする魔王に全く興味を示さず、頼みのこまちも一緒にお風呂に入ってくれず、魔王は渋々、

「じゃあ、せめて・・・一緒に寝るかゲエ!」

「ゴメンなさい!私、小説の構想を考えながら寝たいの!」

「カゲエ!?!」

なぎさ、ほのか、ひかり、咲達四人でさえ、一緒に添い寝はしてくれたのに、ミルクは兎も角、こまちは添い寝もしてくれないのかと、魔王は見る見る不機嫌になり、こまちはお詫びの羊羹で誤魔化すのだった・・・

（仕方無いカゲエ．．．りんの家では．．．）

次のりんの家に期待を込めた魔王だった．．．

だが、魔王は知らなかった．．．

りんの家には、恐れを知らぬりんの弟と妹が居る事を．．．

翌日、りんの家に来た魔王であつたが、りんの母和代を見るや、

「美人カゲエ．．．」

「ちよつとお！あたしのお母さんを、変な目で見ないでくれる？」

やっぱり連れて来なきや良かったと後悔したりんであつたが、連れて来たものはしよ  
うがないと、自分の部屋に連れて行き、

「魔王、あたしの部屋から出ないでよ！部屋から出て弟や妹に見つかつても、

あたし知らないからね!!」

りに釘をさされた魔王だったが、りんが店の手伝いに出ている隙に、和代の姿も  
もつと見て見たいとそつと抜け出すと、

「アアア!?変なのが居るう?」

「本当だあ．．．」

「し、しまったカゲエ!?!」

迂闊にもりんの弟ゆう、妹あいにつかり、魔王は動揺した。二人は顔を見合わせ二ヤリとし、魔王を捕まえると、魔王の身体を思いつ切り引つ張り、遊び始めた。魔王は必死に逃れようと試みるも、ゆうとあいはいはしつかり魔王を捕まえて居て、

「スゲエ！こいつ、どこまでも伸びるぞ？」

「本当だあ・・・面白い!!」

「や、止めるカゲエ〜」

「アレエ!?こいつ喋ったぞ？」

「面白〜い!もつと伸ばそう!!」

まるでおもちゃのように散々弄り回され、魔王は困惑し、

「り、りん!助けてカゲエエ!!」

だが、りんは家の花屋の手伝いで忙しく、りんの家族に危害を加える訳にもいかず、魔王は何とか二人から逃れると、慌てて逃げ出し、店に出ていたりんと和代は、慌てふためきながら飛び出して来た魔王を見て目を点にし、

「魔王!ちよつとお、勝手にどこ行くのよ？」

「りん・・・何、あれ!？」

「エツ!?エエエとお・・・」

母和代にどう言い逃れしようかと困惑するりんであつた・・・

夢原家・・・

ベッドに寝つ転がり、お菓子を食べながら雑誌を読んでいたのぞみだったが、何やら外から声が聞こえ、不思議そうに窓を開けると、

「カゲエエエエ」

「ウワアアアア!?!」

のぞみは、何者かの体当たりを受けそのまま後ろに倒れ込んだ。イタタタと起き上がったのぞみは、飛び込んで来たのが魔王だと分かつて驚き、

「ま、魔王!?!何で家に!?!今日は、りんちゃんの家に泊まる日でしょう?」

魔王はそんなのぞみの言葉にブルブル頭を振り、

「りんの家は、もう懲り懲りカゲエ!これ以上居たら・・・あの二人にどんな目に遭わせるか分からないカゲエ!!のぞみ、今日は泊めて欲しいカゲエ!!!」

「あの二人!?!・・・ああ、ゆうちゃんとあいちゃんの事?成る程ねえ・・・」

ウルウルした瞳で哀願され、のぞみは困惑するも、ゆうとあいには追い回された魔王を思うと少し同情し、

「ウーン、そういう事情なら仕方ないか・・・分かった、良いよ!りんちゃんには、私から連絡しておくから、ちよつと部屋で待ってて!!」

のぞみはそう言い残し、部屋から出て行った。魔王はホツと安堵し、  
「た、助かったカゲエエ．．．」

魔王は落ち着きを取り戻すと、のぞみの部屋を見回した。机に飾られたプリキュアの仲間達や、深い絆で結ばれたのぞみ、りん、うらら、こまち、かれん、くるみ、そして、人間姿のココ、ナッツ、シロップ、シロップに抱かれたメルポの集合写真が飾つてあつた。

「こいつら．．．何者カゲ!？」

魔王は、シロップの事は世界絵本博覧会の会場で見知っていたが、ココとナッツには会つて居なかつた。

「何か妙に馴れ馴れしい奴カゲ!」

まるでのぞみ達は自分のものだとしても言いたげに、不機嫌そうにする魔王だったが、(そういえば、前にニコと一緒に此処に来て、みゆきの様子を見に来た時、のぞみには美人のママが居た気が．．．)

そつと窓から外に抜け出すと、のぞみの母恵美の様子を覗きに向かつた．．．

「魔王、りんちゃんに連絡しておいたよ!．．．魔王!」

戻つて来たのぞみだったが、部屋の中に魔王の姿が見つからず困惑するも、

「ひよつとして．．．お母さんの所!?お母さん、今からお風呂入るつて言つてたよね．．．

「ヤバイ!!」

のぞみは激しく動揺しながら部屋を飛び出すと、浴室に向かった。着替えを置いて、さあ服を脱ごうとしていた恵美を、のぞみは慌てて止めると、浴室の電気を付けて、辺りに魔王が居ないか目で捜して見るも、魔王の姿は無さそうに安堵した。

「のぞみ、なあに!?何かお風呂入った時に居たの?」

「う、ううん、何となく気になって・・・アハハハハ」

「変なのぞみ!」

恵美は小首を傾げ、再び服を脱ごうとすると、再びのぞみが浴室を開けてキョロキョロ辺りを伺うも、魔王の姿は無かった。恵美は目を点にしながら、

「何なの!?さつきから?」

「アハハハハ!お母さん、気にしないで!!」

のぞみは苦笑を浮かべながら浴室を立ち去り、恵美はそんなのぞみを見て小首を傾げた。

「魔王、何所に行ったんだらう?」

ウーンと考えながら自分の部屋のドアを開けたのぞみは、思わず中に居た人物を見て目を輝かせると、

「コ、ココ!何時こつちに来たの?」



「やあ、ついさつきシロップに送って貰ってね！それより……窓からのぞみの家を覗いていた変な奴を捕まえたんだが……ひよつとして、彼がミルクが言つてた魔王かい？」  
人間姿のココが、ヒョイと持ち上げると、離せと言いながらジタバタしている魔王が居て、のぞみは目を点にする。

「魔王！何所に行つてたのよお？勝手に出歩いちゃ駄目でしょうがあ!!」

「俺の勝手カゲエ！」

ソップを向く魔王に、のぞみはみるみる頬を膨らまし、

「何よーりんちゃんの所から逃げて来たから、可哀想だなあと思つて泊めてあげようと思つたのに……」

「エツ!?魔王は今日のぞみの家に泊まるのかい?……そうか、ミルクから聞いて、何か嫌な予感があったから、ナツツにパルミエ王国の事を頼み、一日早くシロップに迎えに来て貰い、こつちに来て正解だったようだ!」

「エツ!?ひよつとして……ココは私を心配して!？」

「アツ!?!いや、そのお……」

「もう、ココつたらあ……」

見つめ合い、自分達の世界に浸るのぞみとココを見た魔王は、不機嫌そうにココに体当たりすると、ココは堪らず妖精姿になって後ろに倒れ、

「コ、ココオ!?」

「ココ、大丈夫?・・・魔王!!!」

「ウツ・・・のぞみが依怙最負するから悪いカゲエ」

「もう、魔王がいけないんでしよう!」

「もう、いいカゲエエエ!」

「アツ!?魔王!待って、魔王!!」

のぞみの呼び止める声も聞かず、魔王は暗闇の中を去って行った・・・

「少し言い過ぎたかなあ・・・」

去っていた魔王の身を案じるのぞみであった・・・

去って行った魔王と言えば・・・かれんの家にやって来ていた。突然現われた魔王に驚いたかれんであったが、かれんは魔王を自分の部屋に入れ、魔王の愚痴を苦笑混じりに聞いていた・・・

「全く・・・みんな酷いカゲエエ!」

「フフフフ、でも、勝手に出てきては駄目よ!のぞみには、私から連絡を入れておくわ!!」

そう言うと、かれんは携帯を取り、のぞみにメールをし、魔王は家に来ているから安心して欲しい事を伝えた。魔王に取って幸いなのは、かれんの家には、かれんの他

には執事の坂本が住み込んでいるだけだった。

「魔王、私の家には、私と爺やしか居ないから、爺やに見つからないようにしてくれれば、好きなように過ごしてくれて良いわ!」

「ほ、本当カゲエ!?!じゃ、じゃあ、お風呂も?」

「別に入っても良いわよ……一人でならね?」

かれんはそう言うと、魔王にウインクし、魔王は不満気な表情を浮かべた。かれんは、勉強があるからと、自室に籠もり受験の為の勉強を始め、魔王は邪魔にならないようにかれんの家を探索しました。

(随分広い家カゲエ!?)

魔王は外に出て夜空の中、水無月家を見るも、空から見渡しても、かれんの家の広大さが分かった。

(こんな所に、かれんは召使いと二人で暮らして寂しく無いカゲエ?)

パタパタ宙に浮かびながら、そんな事を考えて居た魔王、家の中に戻り、大きな大広間に出ると、高価そうな家具類の上に、写真立てが飾られていた。写真には、かれんに似た女性が、バイオリンを弾いている姿が写っていた。

(これがかれんママカゲエ……かれんに似て綺麗カゲエ!でも、子供を放っておくのは、ダメカゲエ……)

魔王はジイと写真を凝視すると、何処かへと姿を消した・・・

黙々と受験勉強をしていたかれんの部屋のドアがノックされ、

「お嬢様、お食事の用意が出来ましたが・・・こちらでお召し上がりになられますか？」  
「いえ、ダイニングで頂くわ！ありがとう、爺や!!」

かれんは、受験勉強を中断し、広々としたダイニングにある大きなテーブルに並ぶ豪華な料理の数々の前に座るも、何処かに出掛けたきり戻ってこない魔王に気付き、些か表情を曇らせた。

（魔王・・・何所に行ったのかしら？）

困惑していたかれんだったが、ナイフとフォークを手に取り食事を始めた。今日の食事は、かれんの大好きな伊勢海老を使ったテルミドール、ベーコンとレンズ豆を使ったタルティーヌ、鴨フィレ肉のカシスソースヴァルサミコビネガー風味など、フランス料理の数々だった。このような料理を家庭で作れる、執事の坂本の腕前は並々ならぬ物があった。

かれんは、ゆっくり味わうように食事をしていく・・・

かれんは、のぞみ、りん、うららのように、食べるペースは早くはないが、量は食べるので、坂本も、かれんの為に料理の腕を振るうのは楽しみの一つでもあった・・・

「爺や、ありがとう！御馳走様!!」

ナプキンで口元を拭くかれん、あれだけの量を一人で完食し、坂本は嬉しそうな表情を浮かべた。かれんはちよつと恥ずかしそうにしながら坂本に話し掛け、

「爺や、少しで良いから、まだお料理の方残って居たら、小皿にでも小分けして貰えないかしら?」

「はい、まだ残っておりますので・・・お夜食にでも致しましょうか?」

「ええ・・・いえ、このまま貰って行くわ!」

(魔王が何時戻ってくるか分からないし・・・)

「畏まりました!少しお待ち下さいませ!!」

坂本が大きなキッチンに向かうと、かれんはリビングで腰掛け休息をしようとした。その時、水無月家に電話が鳴り響き、かれんが電話に出ると、それはかれんの母からだった。思わずパツと表情を明るくするかれんは、

「お母様!ご無沙汰しております!!」

かれんが最後に母に会ったのは、ノイズとの戦いを終え、バッドエンド王国が現われるまでの仮初めの平和の中の正月だった。

あれから数ヶ月・・・

世界的音楽家であるかれんの両親は忙しく、中々娘かれんに連絡をする事も出来な

かった。寂しく無いと言えば嘘になるが、かれんもその事は重々承知をしていて、両親と電話でコミュニケーション出来る事を楽しみにしていた。

「かれん、身体の調子はどうかしら？遅くにゴメンなさい！今日突然電話をしたのには、ちよつと訳があつて・・・さつきウトウト眠っていたら、夢の中に角の生えた丸っこい蝙蝠みたいな生き物が現われて・・・」

「エッ!?!」

母の報告を聞いたかれんの表情が、見る見る青ざめた。母は確かに角の生えた丸っこい蝙蝠みたいな生き物と言っていた。かれんの脳裏に真っ先に浮かぶ人物、それは魔王！

（ま、まさか!?!）

かれんの顔から冷や汗が流れた。一体魔王は、母に何をしでかしたのだろうか？そう思うと気が気では無かった。だが、母の口からは予想外の言葉が飛び出した。

「その生き物は、かれんは寂しがってるから、頻繁に連絡を入れなきや駄目だつて怒られて・・・確かに、最近かれんに連絡を入れる暇も無かつたから、私も気になつて電話を試してみたの」

「そ、そうですか・・・」

そう言葉を返しながら、かれんは動揺した。なぎさ達から聞いていた魔王の印象で

は、母の下に出向いた魔王は、母に何かイヤらしい事でもしたのでは無いかと気が気では無かった。だが母の話を聞く限り、魔王が母の下に訪れたのは、自分の事を思ってくれたからだとなり、かれんは自分の思い込みを反省した。

(魔王・・・私の事を思って・・・)

母との会話を終えたかれんは、魔王の帰りを待っていると、魔王は少し疲れた表情で帰ってきた。

「魔王・・・何所に行ったのかしら？」

「カ、カゲ・・・ちよ、ちよつと散歩カゲ」

「そう・・・まあ、随分汚れたわねえ？」

かれんは、埃まみれになった魔王の身体を拭いて上げると、

「いらつしやい！身体を洗ってあげるから!!」

「カゲ!!・・・まさか、一緒に？」

「さあ!!魔王がおとなしくしてたら考えるわ!フッフ」

思わずクスリと笑い、かれんは魔王を抱き上げると浴室へと向かっていた・・・

(今日は散々な日だと思つたら・・・最後に良い思いが出来たカゲエエ!何か、明日からのラブ達の町での暮らしも・・・楽しめそうカゲエエ!!)

魔王はご機嫌で鼻歌を歌い、かれんを苦笑させた・・・

その四つ葉町では……

「ククション!!」

ラブ、美希、祈里、せつなの四人は、それぞれ自分の部屋で同時にクシャミをして、背筋に悪寒が走った……

（何だろう……凄く嫌な予感がする!?)

ラブは思わずブルブル身体を震わせると、早めに休もうとベッドに潜り込むのだつた……

### 3、魔王の前尻尾

かれんからの連絡を受け、ラブ、美希、祈里、せつなが、アカルンの力を借りてナツツハウスへとやって来た。魔王を迎えに来た筈の四人だったが、その表情は何処か冴えなかった……

出迎えたのぞみ、りん、うらら、こまち、かれん、くるみ、そして、ココとシロップは苦笑気味に、テーブルの上にフワフワ浮いている魔王を見て居た。

「ねえ、あたし達の所に魔王が来るのって……早すぎない?」

「私も……まだ数日あると思ってたよ」



美希とラブが、テーブルの上でご機嫌な表情を浮かべる魔王を見て、困惑していると、のぞみとりんは申し訳なきように、

「ゴメンねえ．．．私の家とりんちゃんのお家から、魔王は出て行っちゃったから、私達の家には泊めてないの！」

「あたしも魔王をもう一度泊めようとしたんだけど、魔王が嫌がっちゃって．．．」

「当たり前カゲ！りんの家に行ったら．．．またあの二人にどんな目に遭わされるかわからないカゲエ」

「アハハハハ．．．だから、あたしの部屋から出るなつて言ったのに」

魔王に愚痴を言われたりんが、苦笑気味に答える。チラリとのぞみを見た魔王は、

「のぞみの家じゃ、ココつて奴と目の前でイチャイチャされるだけカゲ！」

「イヤだなあ！もう、魔王ったら．．．イチャイチャだ何てえ．．．ねえ、ココオオ？」

「エツ!? ああ．．．そうだね．．．」

「(甘酢っぱああい!!)」

魔王の言葉に、満更でも無さそうにするのぞみとココを見て、ラブ達は思わず心の中でウエスターのようにツツコミを入れた。

「魔王さん．．．随分ご機嫌ね？」

「フフフン！フフフン！昨日は、かれんと一緒にお風呂に入つて身体を洗つて貰ったカ

「ゲエ!!」

「「「「「「エエエエエ!?」「」「」「」」」」」」

祈りの問い掛けに、鼻歌交じりの魔王が答え、かれんを除いた一同が同時に驚愕の声を発した。かれんは苦笑を浮かべながら、

「フフフ、みんな、騒ぎ過ぎよ!魔王はちゃんとおとなしく良い子にしてたわよ・・・ねえ、魔王?」

「フフフン!フフフン!」

(魔王が大人しくしてた!?!・・・どうも信じられないんだけどなあ?)

魔王は、昨夜の鼻歌を再び歌い出し、その姿を見たラブ達四人は背筋が寒くなった：

「まあ、理由は大体分かったわ・・・魔王、いらっしやい!四つ葉町に行くわよ!!」

「よろしくカゲエ!」

せつなに呼ばれた魔王は、フワフワ浮かびながら、ラブ達の側に来ると、

「じゃあ、のぞみちゃん達、またねえ!」

「うん!悪いけど、魔王をお願いね!!」

のぞみ達は手を振りながらラブ達を見送り、ラブ達は、四つ葉町へと帰って行った：

一先ず公園にあるカオルちゃんのドーナツ屋にやって来た一同が、順番をどうするか話し合っていた・・・

魔王はカオルちゃんから、お近づきの印にと貰ったドーナツを食べて、益々上機嫌だった。そんな魔王を、四人は微妙な表情で見つめると、美希は溜息混じりに、

「ハア・・・ねえ、あたし、嫌な事はさっさと済ませたいから・・・あたしが最初に魔王を泊めるわ!」

「じゃあ、私が美希ちゃんの次に泊めるね!」

「分かった!じゃあ、私とせつなが最後に泊めるって事で・・・良い、せつな?」  
「分かったわ!ゆりさん達の所には、私が連れて行くわ!!」

こうして、魔王は美希と共に美希の家へと向かった・・・

美容室をやっている美希の母レミ、ちようどお客さんの接客中だったようで、美希は素早く魔王を抱くと、お客さんに会釈しながら奥に入った。チラリとレミを見た魔王は、案の定欲情し、美希は慌てて魔王を自分の部屋へと連れて行った。ご機嫌で美希の部屋の中ではしやぐ魔王を見て、美希は溜息を付くと、

(ハア・・・最初に泊めるとは言ったものの、ママに魔王の事何て言おうかしら?)

ラブ、美希、祈里の家族達は、自分達がプリキュアだと知っているので、魔王の事を

ちゃんと話しても信じて貰えるだろうが、やはり、魔王を家に連れて帰るのは気が引けていた。特に美希の家は、美希と母レミの二人暮らしなのだから・・・

（和希を呼んで、あたしとママがお風呂に入っている間だけでも見て貰うとか・・・でも、それじゃ和希に悪いか・・・）

妙に真剣な顔で思案している美希を見た魔王は、不思議そうに小首を傾げ、

「美希・・・悩み事なら相談に乗るカゲ？」

「ありがとう・・・って、あなたの事で悩んでるのよおお！」

「カゲエ!？」

何故自分の事で美希が悩んでいるのか理解出来ず、魔王は再び小首を傾げた。

「ハア、悩んでも仕方無いか・・・兎も角、魔王！あたしの部屋から勝手に出ないでよね?！」

「おとなしくしてたら、美希は・・・」

「嫌よ!！」

「ま、まだ話は終わってないカゲ!！」

「聞かなくても分かるわよ!どうせ、おとなしくしてたら、一緒に風呂に入ってくれるのかって言おうとしてたんでしょ?！」

「ウツ!？」

「ほら見なさい！だから嫌だつて言ったの!!」

美希に呆気なく拒絶され、魔王は不機嫌そうにしているも、更に美希は、魔王の考えはお見通しとばかりに畳み掛け、

「言つておくけど、あたしに拒否されたからつて、ママに変な真似してごらんなさい…直ぐに家から追い出すわよ!」

「ウウウウ…何で美希は俺を嫌うカゲ?」

「ハア!?魔王、あたし達の服を隠した事…忘れて無いわよねえ?あんな恥ずかしい真似されて、嫌わない訳無いでしょう!!」

「それは…シヨーに協力したから許してくれた筈カゲ!」

「分かつてるわよ!だから渋々あなたを泊めて上げてるでしょう…」

美希に凄まれ、少しシヨンボリした魔王を見て、美希も少し言い過ぎたかと反省し、

「魔王、お腹減つてない?何か食べたい物があるなら言つてごらんなさい」

「と言われても、こつちの世界の食べ物はまだよく分からないカゲエ…美希が作るのなら何でもいいカゲ」

「それもそうね…じゃあ、夕飯のおかず作つてくるから、魔王は部屋に居て!おとなしくしてなさいよ?」

美希はそう言い残し、夕飯を作り台所へと向かった。魔王はキョロキョロと部屋の

中を見渡してみると、美希はモデルをしているだけあって、ファッション雑誌が多く置いてあった。積み上げてあった雑誌を、魔王は影を伸ばして取ろうと試みるも、変な取り方をした為に、積まれていった雑誌が倒れ、魔王が顔色を変えた。

（ま、拙いカゲエ・・・また美希に嫌われるカゲ！）

動揺した魔王は、伸ばした影を手の代わりにして一冊一冊積み上げていると、

「何の音かしら!?!美希は台所に居たし・・・」

お客が帰り、下で休憩していたレミは物音を不審がり、美希の部屋をノックし、ドアを開けると、雑誌を持ったまま困惑している魔王と目と目が合った。だがレミは、魔王を見てもさして驚かず、

「あら、美希のお友達かしら!?!」

「ま、魔王カゲエ!?!よ、よろしくカゲエ!!」

見つかってしまったものはしょうがないと、魔王が破れかぶれでレミに挨拶すると、レミはニコニコしながら、部屋の中に入って魔王の側に座り込んだ。レミの黒いミニスカートの少し捲れ上がり、レミの熟れた太股が見えて、魔王は思わずゴクリと生唾を飲み込んだ。

「まあ、魔王ちゃんって言うの?初めまして、美希のママのレミでえす!魔王ちゃんは、タルトちゃんやシフォンちゃんのお友達かしら?」

レミに聞かれた魔王は、タルトとシフォンの事を思いだし、

「まだそんなには親しくないカゲ！最も、記憶が戻ってないから昔がどうだったかは分からないけど……」

「まあ!?魔王ちゃん、記憶喪失なの？可哀想に……タルトちゃんも、シフォンちゃんも、とつても良い子達だから、魔王ちゃんも直ぐに仲良くなれるわ!」

「……どうせなら、美希ママと仲良くなりたいたいカゲ!」

「あらまあ!魔王ちゃんたら、正直何だからあ……」

そう言うのと、魔王を抱き上げ抱きしめると、魔王はレミの心地良い感触に目を細めた。そんな会話で盛り上がって居る魔王とレミ、台所に居た美希は、二階が騒がしい事に気づき、慌てて自分の部屋に舞い戻ると、

「魔王!ドタバタ何を……って、ママ!?な、何してるの?」

美希は、部屋の中で楽しげに談笑している魔王とレミを見て目を点にし、レミは目頭を押さえながら、

「聞いて、美希ちゃん!魔王ちゃんったら、可哀想に記憶喪失何ですって!!」

「そ、それは知ってるけど……」

「まあ、美希!そんな可哀想な魔王ちゃんを一人にする何て……ママは、ママは、美希をそんな薄情な子に育てた覚えは無いわ!!」

「エッ!? 薄情って・・・あたしは別に・・・」

何やら魔王と仲良くなっているレミを見て、美希は困惑する。レミは何かを思い付いたのか手を叩き、

「そうだわ! 魔王ちゃんの歓迎会をしましょう・・・あゆみさん達や、尚子さん達にも声を掛けてみようかしら!!」

「まっ、待つてよ、ママ! 歓迎会って、もう料理の下ごしらえはしちやったし・・・」

「いいから! いいから! 魔王ちゃん、ちよつと待つててねえ!!」

そう言うと、レミは慌ただしく階段を下りて行った・・・

美希はハアと溜息を付くと、喜んで居る魔王を見つめた・・・

レミからの連絡を受けたあゆみ、尚子の二人も、レミの提案を受け入れ、あゆみは、夫圭太郎がまだ帰って居なかった為、ラブとせつな、タルトとシフォンを、尚子は、夫正と祈里を連れて来ると連絡が入り、蒼乃家は料理の準備に追われていた。最初にあゆみが現われ、次に尚子と正が現われたものの、玄関先から顔を出したラブ、祈里、せつなは、困惑顔で美希を手招きして呼ぶと、美希は三人に駆け寄り、

「ラブ、ブツキー、せつな・・・家のママが迷惑掛けて、ゴメン!!」

美希は拝むような仕草で三人に詫びると、顔を見合わせた三人は、

「美希たん・・・一体どうなってるの?」



「いきなり美希ちゃんの家に行くってお母さんに言われたから・・・私、驚いちゃった！」  
「本当、予想外の展開ね！」

大人達は、居間で主役の魔王を囲み、盛り上がって居るようで、タルトとシフォンもそのとぼつちりを受けたのか、魔王と仲良くするように頼まれ困惑していた。

「美希！」

「ラブ！せつちゃん！」

「祈里！」

突然母親達に呼ばれた四人は、足取り重く居間にやって来ると、

「お料理は私達で用意するから・・・」

「あなた達は、魔王ちゃんをお風呂に入れて上げて！」

「じゃあ、頼んだわね！」

あゆみ、レミ、尚子に、魔王をお風呂に入れて上げてと頼まれた四人は困惑しながら、

「「「エエエエエ!?」」」

「美希ママ！ラブママ！祈里ママ！こ、こんなに優しくされたのは・・・こつちの世界に  
来て・・・初めてカゲエエエ!!」

目をウルウルした魔王は感激し、三人の母親達に何度も感謝の言葉を述べた。それとは逆に、四人の目は死んだ魚のように見る見る輝きを失い、

「エエと・・・私、宿題まだやって無かったなあ」

「私も、明日の予習を・・・」

ラブと祈里は、家に帰って勉強しなきやと言うと、美希は慌てて、

「ふ、二人共狡うい！あ、あたしも・・・」

「そう言えば私も、ウエスターとサウラーに用が・・・ってラブ、美希、ブッキー・・・お母さん達が、物凄い表情で睨んでるわよ？」

せつなは、困惑気味にあゆみ、レミ、尚子が睨んでると知らせると、

「ラブ！せつちゃん！」

「美希！！」

「祈里！！」

あゆみ、レミ、尚子は、娘達の名前を怒気を込めて呼ぶと、呼ばれたラブ達四人は半泣き顔を浮かべながら、

「「「だつてええええ！！」」」

「だつてもへちまもありません！」

「魔王ちゃんが可哀想でしょう！」

「もし、言う事聞けないなら・・・」

「「「来月のお小遣い抜きよ！！」」」

「「エエエ!」」

「ラブ、美希、ブツキー……もう諦めたら?」

せつなは、母親達に怒られ諦めたのか、魔王を抱っこし、ラブ、美希、祈里にも、諦めて母親達の言う通りにしたらと伝えた。

「フフフン、フフフン、お・風・呂おお!!」

せつなに抱かれた魔王は、ご機嫌で鼻歌を歌い出し、ラブ、美希、祈里の三人は、それを見て惚けたように呆然としていた……

魔王を先に浴室に入れ、四人は浴衣と下着を脱ぎ、白いバスタオルを身体に巻き付ける。加音町のスーパ―銭湯で、プリキュアのみんなと一緒に入った事はあったが、ラブ達四人の身体は、更なる色気を増し、バスタオルを巻いた身体からも、胸の谷間がはつきり目立っていた。美希は溜息混じりに、

「ハア……家のお風呂、そんなに広くないのに、ママったら何考えてるのかしら?」  
「取り敢えず、言われた通りにしないと……」

ラブが先陣をきり浴室のドアを開けると、魔王は湯船にプカプカ浮かびながら、スケベ顔でラブ達四人を見つめた。

「ラブ、美希、祈里、せつな、待ち兼ねたカゲ!」

「どこのおっさんよおお!？」

「ちよつとお! あんまりジロジロ見ないでくれる?」

「そんなにジツと見られると・・・恥ずかしいんだけど」

「魔王! 全く・・・」

ラブ、美希、祈里、せつなの、バスタオル一枚纏っただけの姿を見た魔王はご機嫌だったが、四人は、罰ゲームをさせられているようで不満そうだった。取り敢えず、身体を洗ってあげるからと、せつなが浴槽から魔王を抱き上げると、せつなは不思議そうに小首を傾げ、

「ね、ねえ・・・魔王って、前にも尻尾生えてたっけ?」

せつなが見つめた視線の先には、確かに魔王の身体から、尻尾のような突起物がそそり立つように飛び出していた。

「エツ!? 有ったような、無かったような?」

「あたしが覚えて居る限り、生えてなかったような!？」

「尻尾にしては固いような気もするけど・・・」

せつなに聞かれたラブ、美希、祈里も小首を傾げ考え込むと、ご機嫌だった魔王はついでに言葉を滑らし、

「普段は生えてないカゲ! ひかりやかれんとお風呂に入った時も生えてきたけど、どう

やら、興奮すると前からニヨキニヨキ生えてくるようカゲ！」

「それって……もしかして!？」

見る見る変顔を浮かべた祈里が、ラブ、美希、せつなど目を合わせると、四人は思わず魔王の前尻尾を改めて見た。

「……」

まるで時が止まったかのように沈黙した四人、見る見る四人の頬は赤く染まり、美希はお風呂場の窓を開け、祈里は洗面器を手に取ってラブに手渡し、せつなはゆっくりラブに向けて魔王を放り投げると、

「カゲ!？」

困惑の表情を浮かべる魔王目掛け、ラブは洗面器を思いつ切り叩き付けると、

「出てけええええ!!」

「カゲエエエエエエエ!？」

何が起こったのか分からない内に、魔王はお風呂場から叩き出された。まるで示し合させたかのように、抜群のチームワークで魔王を追い出した四人、ムツとした表情を浮かべた美希が、ピシヤンと再び窓を閉め、鍵を掛けると、

「し、信じられない!？」

「ブツキー、あれって尻尾じゃなくて……」

洗面器を下に置いたラブも、困惑気味に祈里に話し掛け、祈里は少し頬を染めながら、

「うん！魔王さんの前尻尾じゃなくて・・・オチンチンだったみたい」

「最低！本当、最低だわ!!」

せつなは険しい表情を浮かべていると、直ぐに舞い戻った魔王が風呂場の窓を叩き、

「お、お前達、酷いカゲエエ!」

「うるさい！私達に何てもの見せるのよおお!!」

「外で反省してなさい!!」

「ゴメンねえ・・・」

「ブツキー、謝る必要何て無いわ!」

ラブが、美希が、祈里が、せつなが、魔王に反省を促していると、しばらくは入れろと喚いていた魔王の声が遠ざかった。少し経ってお風呂場に向けてドタドタ足音が響いたかと思うと、ガラツとお風呂場のドアを開けたあゆみ、レミ、尚子の三人は、

「ラブ！せつちゃん！魔王ちゃんを虐めてえ・・・」

「べ、別に虐めた訳じゃ・・・」

「祈里！どうしてこんな酷い事したの？」

「それは、そのお・・・」

「美希！ママは、ママは悲しいわ!!」

「ま、待つて、ママ！あたし達の言い分も・・・」

次々に母親達に怒られたラブ、せつな、祈里、美希、そんな四人を見て、レミに抱かれた魔王が舌を出し、

「ベエエエエー！」

「（）のおおおお!!」

顔を真っ赤にしたラブが、魔王に文句を言おうとすると、三人の母親達が一喝する。

「「お黙りなさい!!!」」

「黙らないよー！」

「ママ・・・娘と魔王と、どっちの身が大事なのよ？」

「お母さん、私達魔王さんを虐めてた訳じゃ無いの!」

「いくらお母さん達でも・・・こればかりは聞けないわ!」

ラブ、美希、祈里、せつなも、母親達に言い返し、言い合いを始める母と娘・・・

居間で茶碗やお皿を並べていた正、タルトとシフォンは、顔を見合わせると、  
「こりや、晩ご飯は遅くなりそうだなあ?」

「ハア・・・ワイ、お腹ペコペコなんやけど」

「プリー・・・」

「ハアア・・・」

「キユア」

お風呂場から聞こえて来る言い争う声に、三人は溜息を付いた・・・  
その夜、蒼乃家は夜遅くまで賑やかだった・・・

第七十八話：魔王と少女達（前編）

完



## 第七十九話：魔王と少女達（後編）

1、魔王の精神修行!?

あれから数日・・・

薫子が所長を務める植物園に集まった、つぼみ、えりか、いつき、ゆりだったが、四人は、目の下に隈を付くって、眠そうな表情を浮かべる、魔王を抱いたせつなを見て呆然としていた。見かねたゆりが心配そうにせつなに話し掛け、

「せつな、具合が悪そうだけど・・・大丈夫!？」

「ええ、これで魔王から解放されると思ったら・・・嬉しくて踊りたいぐらいよ」  
「・・・そ、そう、なら良いんだけど」

何処か口元に笑みを浮かべているようにも見えるせつなを見て、ゆりは困惑した。つぼみ、えりか、いつきも困惑気味に、

「せつなさん・・・少し変ですねえ?」

「変って言うか・・・寝不足で、ハイテンションになってるみたいだねえ?」  
「一体何があったんだろう?」

そんなせつなを見て、小首を傾げるつぼみ、えりか、いつきだった。

せつなが、目の下に隈が出来る程寝不足な理由・・・

魔王を危険人物と判断したせつなは、翌日も学校がある美希、祈里、ラブの身を案じ、美希の部屋、祈里の部屋、ラブの部屋と、魔王を見張る意味で共に泊まり、一晚中魔王を監視していた。更に昼間は昼間で、魔王がちやんとおとなしく部屋で過ごしているかどうか監視していて、せつなは寝不足になっていた。ラブ、美希、祈里も、せつなの身を案じ、そこまでしなくても良いと言っていたものの、あの日の出来事がせつなの頭から離れず、自分で監視しなければ気が済まなかった。

せつなは、魔王を上空に放すと、魔王はパタパタつぼみ達の下に羽ばたき、

「せつな、世話になったカゲエ！ラブ、美希、祈里や、ママさん達によろしく伝えてカゲエ！！」

「ええ、魔王も元気で！二度と会わない事を祈ってるわ！！」

そう言い残し、せつなは四つ葉町に帰って居た。魔王は、せつなの捨て台詞を聞いて不機嫌そうに、

「二度とって・・・失敬カゲエ」

「魔王・・・せつな達に何かしたの？」

先程のせつなの様子が気になり、ゆりが魔王に問い掛けると、

「カゲエ!?せつな達四人と一緒に風呂に入ったら・・・」

「「エエエ!」」

せつな達四人が、魔王と一緒に風呂に入ったと聞き、ゆり達四人は驚愕した。更に魔王は言葉を続け、

「俺の前尻尾を見て怒り出しただけカゲ」

「前尻尾!? まあ良いわ、後でラブ達に聞いてみるから・・・それより、魔王を泊める順番を決めましょう!」

「「はい!」」

ゆりの提案を受け入れ、四人は順番を決めに掛かった。その間暇な魔王は、植物園を散策していたが、置物のようにボオとしているコツペを見て困惑し、

(ボオとしているようで・・・何か凄い威圧感を感じるカゲ!?)

魔王は、何やら得体の知れななさそうなコツペを不気味に感じ、そそくさとつぼみ達の側へと戻った。その魔王の姿を、コツペは目だけを動かして見つめていた。

最初にゆりが、二番目にえりかが、三番目につぼみが、最後にいつきが泊める事になり、魔王はゆりに抱っこして貰おうと試みるも、ゆりにキツと見つめられ、

「魔王、甘えないで! カバンの中に自分で入ってなさい!!」

ゆりの迫力の前に、魔王は渋々言われた通り、身体を細長く変化させ、かばんの中に入った。ゆりの家も美希と同じく母と二人暮らしで、自分の家に連れて帰ったゆりは、

「あなたの事は、なぎさやほのかによく聞いてるわ！私の部屋でおとなしく過ごすなら、ある程度の事は見逃してあげるけど、妙な真似をしたら・・・分かってるわね？」  
「わ、分かったカゲ！」

ゆりの迫力の前に、魔王は何度もコクコク頷いた。

（どうもゆりは苦手カゲ・・・何か大事なものを、心の奥底に無理矢理仕舞い込んでいるような気がするカゲ）

魔王も、ゆりは本当は優しいのだろうかとは感じるものの、どこか違和感を覚えて居た。思い返せば、なぎさの家で三日間過ごしている時、プリキュアの仲間達の事をなぎさから少し聞いていた魔王は、ゆりは、父親が自分の目の前で爆死している事を思いだした。（ゆりも寂しい思いをしているカゲ・・・そうだ！またあいつに頼んでみるカゲ！）

魔王は、ゆりとゆりの母春菜に気付かれないように影を伸ばすと、二人から月影博士の情報を仕入れた。更に、ゆりの心の中では、ダークプリキュアの存在も大きくなっていく事を知った。

（こんなプリキュアも居たカゲエ!?）

魔王は、初めて見たダークプリキュアのビジョンに驚いたものの、嘗てと同じように、まるで自己催眠でも掛けたかのように眠りに付いた・・・

その夜、眠りに付いたゆりだったが、誰かに呼ばれた気がした目が覚めた！

目が覚めた時、ゆりの目の前には、父が、コロンが、そして、ダークプリキュアが居た！皆穏やかな表情を浮かべていて、ゆりの目からはポタポタ涙が落ちていた。それを見て居た魔王であったが、長い耳と額に月のマークをした、桃色の身体をした妖精が姿を現わした。

「魔王！酔狂も良いけど、いい加減にして貰えるかしら？いくらユメタの恩人のあなたでも、こう頻繁に夢の世界を勝手に好きにされたら・・・」

「マアム!?分かってるカゲ！ゆりも悲しい過去があったから・・・少しでも癒してやりたいカゲエ!!」

「ハア・・・今回で最後にしてよ?」

「嫌カゲエエ!」

魔王は、マアムと呼んだ夢の世界の妖精に舌を出し、何処かへと去っていた。マアムはハアと溜息を付くと、

「魔王！全く・・・根は優しいんだろうけど、困ったものねえ?」

そう言いながら、ゆりの夢を見て目を細めた・・・

翌日・・・

再び植物園にやって来た、つぼみ、えりか、いつきは、先に来ていたゆりを見て驚いていた。魔王を抱っこしながら談笑しているゆりに気付き、えりか、つぼみ、いつきの三人は思わず目を点にし、

「ゆ、ゆりさんが・・・魔王を抱っこしてる!？」

「しかも・・・仲良さそうにしてますねえ?」

「魔王・・・大人しくしてたのかなあ?」

「天変地異の前触れかも!？」

「三人共・・・聞こえてるわよ!」

「ドキッ!？」

ゆりに聞こえていたようで、三人は同じような表情でドキリと驚き、ゆりを苦笑させた。

ゆりから魔王を引き取ったえりかは、つぼみと共に帰りながら、

「昨日美希姉えから電話があつてさあ・・・魔王の前尻尾には気を付けなさいって言うたけど、何だろうね?」

「前尻尾!?!・・・こうして見る限り、魔王に尻尾は生えて無さそうですけどねえ?」

そんな話をしながら家の側まで来たつぼみとえりか、二人の両肩に突然手が回ったかと思うと、

「えりか、つぼみちゃん、随分楽しそうねえ?・・・あら!?えりか、あんたそんな縫いぐるみ持ってたっけ?」

そう言つて二人に話し掛けたのは、モデルの仕事帰りのえりかの姉ももか、ももかは、えりかが抱いてる魔王を見て小首を傾げた。つぼみとえりかはドキツとした表情を浮かべるも、

「こ、こ、これは・・・いつきに貸して貰つたの!」

「と、所々糸が解れたようで、えりかに直して欲しいと・・・ね、えりか!」

(つぼみ!ナイスフォロー!!)

「そうそう」

「フーン・・・それにしても、縫い目なんか無さそうだけど!」

そう言いながら、ももかが魔王に顔を近づけると、魔王はデレデレした顔になり、えりかはワアアと叫びながら、慌ててももかから魔王を遠ざけた。ももかは小首を傾げながら、

「な、何?!」

「エエと・・・虫が飛んでたから」

「フーン・・・まあいいわ!じゃあ、つぼみちゃんまたね!」

つぼみに軽く挨拶し、ももかはフェアリードロップの中に入って行つた。どうやら上

手く誤魔化せたと、ホツと安堵したつぼみとえりかだつたが、魔王は去つていたももかの事を思い出しながら、

「えりかに似ず、美人カゲエ・・・」

「ちよつとお！今何て言つた？」

目に炎を点したえりかが、魔王に抗議していると、えりかの携帯の着信音が鳴り、相手をを見て見ると、それは美希からで、

「美希姉え、聞いてよ！魔王つたらさあ・・・」

えりかは不満気に、魔王から受けた仕打ちを美希に告げた。溜息をついた美希は、魔王に代わつてとえりかに頼むと、えりかは魔王の側に携帯を差しだし、魔王にも美希の声が聞こえてきた。

「美希！この前は世話になつたカゲ!!」

「ええ・・・それは兎も角、魔王！ちゃんと大人しくしてなさいよ？ももかさんやえりかのお母さんに変な真似したら、あたしも許さないわよ！ちゃんとえりかの言う事聞いて大人しくしてる事・・・もし大人しくしなかつたら、ママ達に魔王の本性を教えちゃうわよ？魔王、ママ達にまで嫌われるわよお!?良いのお？」

「そ、それは困るカゲエ・・・美希ママ、ラブママ、祈里ママは、俺の友達カゲ！折角仲良くなつたのに、嫌われたら困るカゲ!!」



「なら、大人しくしてなさいよ？取り敢えず、さっきの事をえりかに謝りなさい！」  
「わ、分かったカゲ！えりか、さっきはゴメンカゲ！さっきの意味は・・・えりかは美女じゃなくて、美少女だって意味カゲ!!言葉が足りなかったカゲ・・・」  
「なぬう!?!そ、そう・・・分かれれば良いよ！」

魔王の煽てを真に受けたえりかは、見る見る機嫌を戻したが、聞いていたつぼみと美希は、

（魔王・・・えりかの扱い方を何所で覚えたんでしょうか？）

（魔王・・・どんどん悪知恵がついてる気がするけど、えりか達大丈夫かしら!?!）

つぼみと美希は一抹の不安を覚えるのだった・・・

「じゃあ、何かあったら何時でも電話掛けてきなさい！最悪、せつなに頼んでそつちに駆け付けるから!!」

「うん！分かったつしゅ!!」

美希からの電話を切ったえりかは、魔王を抱っこし、ご機嫌で家に帰って行った。つぼみは、えりかを不安そうに見送った・・・

えりかの部屋に入った魔王は、思わず呆然とした・・・

何故なら、魔王が今まで泊まったなぎさ達の部屋は小綺麗にしてあったが、えりかの部屋は、ファッションのデザインをしていたのか、部屋中にデザイン画が散らばり、失

敗作は紙を丸めて部屋に放置してあったのだから・・・

（俺は今日、こんな部屋で寝る事になるカゲ!?）

チラリと隣に居るコフレを見ると、コフレは溜息混じりに何時もの事だと魔王に語った。

「えりかは、お母さんに怒られるまで何時もこんな感じですよ」

「えりか、さすがに少し片付けた方が・・・」

「本当!?!じゃあ、魔王とコフレで片付けておいて!あたしは夕飯食べてくるからヨロシクウ!!」

「エエエエエ!?!」

驚くコフレと魔王を尻目に、えりかはそのまま逃げるように部屋から出て行った。顔を見合わせたコフレと魔王は溜息を付くと、

「これは酷いカゲエー!」

「そうですっ!魔王、つぼみに知らせに行くですよ!!」

えりかを懲らしめようと、コフレと魔王は窓から隣のつぼみの部屋へとフワフワ移動し、窓を叩くと、つぼみが窓を開き二人を招き入れた。

「どうしたんですか!?!コフレ、魔王?」

「つぼみ、シプレ、えりかだったら酷いんですよ!」

「俺達に部屋の片付けを頼んで、自分はさっさとご飯を食べに行つたカゲエ」

二人からえりかの仕打ちを聞いたつぼみとシプレは、思わず顔を見合わせると、  
「何か前にも聞いた事があるような!?!?・・・えりかにも困つたものですねえ・・・」  
「えりかのお母さんに話して見たらどうですう?」

えりかのお母さんに話すと言う、シプレのアイデアを聞いた魔王は目を輝かせ、  
「俺に任せるカゲ!」

「「それはちよつとお・・・」」

魔王をえりかの母さくらの下に一人でやつたら、どんな行動を取るか分からず、つぼみ、シプレ、コフレが、変顔を浮かべながら魔王に待つたを掛けた。

「大丈夫カゲ!えりかママの頭の中に、えりかの部屋のイメージを見せるだけカゲエ!!」  
魔王だけを、えりかの母さくらの下に向かわせる訳にも行かず、シプレとコフレも魔王と共に来海家へと向かつた。

こつそり覗き見ると、えりかは既にご飯を食べ終わったのか、ももかと共にテレビを見ながら大笑いをしていた。

「俺達に掃除を頼んでおいて・・・いい度胸カゲエ!」

魔王は影を分離させると何やら命令し、影はその場を去つていった。魔王は、洗い物しているさくらにそつと影を伸ばすと、さくらにえりかの部屋のビジョンを見せた。さ

くらは洗い物をしていた手を止めると、

「そう言えばえりか、部屋はちゃんと片付けてるの？」

「大丈夫、大丈夫、バッチリ！」

ニンマリ顔で答えたえりかを、ももかはからかうような視線で見つめ、

「本当かしら？」

「何よおお!? そんなに言うなら見てくれば良いじゃん！」

「そう・・・じゃあ、お言葉に甘えて！」

「エツ!? タ、タンマアア！」

そう言うのとえりかは、慌てて自分の部屋に戻り、さくらとももかは顔を見合わせてクスリと笑い合っていた。

部屋のドアを開けたえりかは、中を見た途端みるみる変顔を浮かべると、

「な、何じゃこりやあああ!？」

えりかが驚いたのも当然で、中では魔王の分身が暴れ回り、更には合流した魔王も加わり、えりかの部屋の中を更に酷く散らかして居た・・・

「ま、魔王!?! 何してんのよおお!! コフレ! コフレエエエ!!」

えりかに呼ばれたコフレは、渋々えりかの前に進み出ると、

「大体、えりかが悪い・・・」

「いいから、プリキュアの種貸して！」

「エエエエ!？」

ココロパフームを取り出したえりかが、半ば強引にコフレからプリキュアの種を受け取ると、

「プリキュア！オープンマイハート!!」

「た、大変ですう！つぼみに知らせるですう!!」

えりかがプリキュアに変身し、妙な状況になった事で、シプレは大急ぎでつぼみに知らせに向かい、マリンはマリントクトを取りだし、魔王を追い回した。

少し部屋の窓を開けたつぼみは、魔王をこっさり手招きし、それに気付いた魔王は、マリんにフェイントを使い、慌ててつぼみの部屋に飛び込むと、つぼみはそつと窓を閉めた。

「魔王！何所行ったああ!!」

「マリリン、冷静になるですつ！家の人が来ちやうですつ!!」

コフレに諭され、マリリンは渋々部屋の窓を閉めえりかの姿に戻った。騒ぎを聞き付けやつて来たさくらとももかに、えりかは怒られトホホ顔を浮かべた・・・

「魔王！えりかも悪いですけど、魔王もやり過ぎですよ・・・今日は家に泊めて上げます

から、明日えりかに一緒に謝りましょう!!」

「俺は悪く無いカゲ・・・」

そう思いながらも、魔王の身を案じて匿ってくれたつぼみの言葉を聞き入れ、魔王は翌日えりかに謝罪した。

ある意味、恩人のつぼみの家では大人しくしていた魔王は、最後にいつきの家にやって来た。魔王は、かれんの家程では無いが、いつきの広大なお屋敷に驚いていた。

「ここが僕の家だよ!魔王、門下生達も沢山居るから、みんなに見つからないですよ?」

「わ、分かったカゲ!」

「後、お爺様やお父様、お母様やお兄様にも・・・」

「大丈夫でしゅ!ポプリがいちゆきには手を出させないでしゅ!!」

「ありがとう、ポプリ!!」

いつきはポプリに頬擦りし、仲の良さを魔王に見せ付けた。魔王は、道場から聞こえて来る掛け声に驚き、

「いつき、あそこでは何してるカゲ?」

「あそこでみんな武道を習っているんだ!みんなが帰ったら、魔王にも精神の修行をして貰うからね?一緒に煩惱を吹き飛ばそう!」

「カゲエ!?じゃあ、それをやったらいつきは俺と・・・」

「アハハハ！魔王、それを煩惱って言うんだよ！」

「カゲエ!?!」

いつきの言葉が理解出来ず、小首を傾げる魔王であった・・・

門下生の稽古も終り、続々道場から帰って行くと、いつきは現在の師範代である兄さつきを呼び止め、

「お兄様、少しの間道場をお借りしたいのですが・・・」

「構わないよ！いつき、精が出るね」

さつきは爽やかな笑みをいつきに向けると、住居のある本邸へと去った。いつきは魔王を呼び、魔王がモゾモゾいつきのかばんの中から現われると、

「じゃあ、精神修行を始めるよ！」

いつきは座禅を組み、その隣で魔王も床に座って目を瞑る。沈黙の時間が流れる中、ポプリは退屈したのか、コクリコクリと居眠りをしていた。

「へえ、魔王！意外とやるね？」

「フフフン！精神統一は得意カゲ!!」

「凄いや！これなら煩惱を直ぐに吹き飛ばす事も出来そうだよ!!」

いつきは魔王の精神力に感心していた・・・

この分なら、魔王は煩惱を打ち消せるのではないかと思った。

修行は約1時間続き、精神を集中させて居た二人からも疲労が見え、顔からは汗が流れていた。

「魔王、お疲れ様！」

「いい汗かいたカゲエ・・・でも、何かベトベトして気味悪いカゲ」

「アハハ、それだけ真面目に修行してたって事だね・・・じゃあ、一緒に汗を流しに行こう！」

この時、魔王の目がキラリと輝いた事に、いつきは気付いて居なかった・・・

翌日・・・

植物園に集まった一同、元気にハシヤギ回る魔王に対し、いつきはどんよりした表情で落ち込んでいた。

「いつき、何かあったの？」

「随分疲れた表情してますねえ？」

心配したえりかとおぼみがいつきに声を掛けるも、いつきは二人をチラリと見ると、

「聞かないで・・・」

そう言うのと再び俯くいつきを見た三人は、



（（何があつたのかしら!?!））

「ゆりさん、ちゅぼみ、えりか、そつとしておいて上げてほしいでしゅ・・・ポプリが付いて居ながら、いちゆきを救えなかつたでしゅ・・・」

ハアと溜息を付き落ち落ち込むポプリ、ゆりはキツと魔王を睨むと、

「魔王! いつきに何かしたの?」

「カゲ!? いつきと一緒に精神修行をして、お風呂で身体の洗いつこをただけカゲエ!」

「「エエエ!」」

魔王は煩惱を振り払ったと過信していたいつきは、魔王の頼みを聞き入れてしまい、気付いた時にはまんまと魔王の策略に陥り、いつきは魔王に成長途中の裸体を露わにし、落ちて込んでいた・・・

「どんだんずる賢くなっていますねえ?」

「この間、えりかにやられたからなあ・・・勉強になったカゲ!」

魔王の言葉を聞いたゆり、つぼみ、いつきはハツとしてえりかを見ると、えりかは横を向いて視線を逸らし、

「エエエと・・・何の事だっけ?」

「「えりかああ!!」」

結果として魔王に悪知恵を授けたえりかは、ゆり、つぼみ、いつきの三人に説教され

るのだった・・・

## 2、魔王VSピーちゃん

メイジャーランド・・・

エレン、アコ、ハミイ、フェアリートーン達の故郷、その国に二人の客人が訪ねて来ていた。一人はトランプ王国王女、マリィ・アンジュ、もう一人はお供のキュアソード、二人は、メイジャーランドの王メフィストと、女王アフロデイトに謁見していた・・・

「お久しぶりです！アフロデイト様、メフィスト王」

「ウム！アン王女も元気そうで何より、お父上もお元気でいらつしやるか？」

「アン王女、あなたのような律儀なお方が、何の連絡も無く不意にメイジャーランドを訪れたのには・・・何か理由がお有りのようですね？」

「ハイ！本日伺ったのは・・・アフロデイト様、メフィスト王、お二方は、バッドエンド王国という国をご存じ無いでしょうか？」

「バッドエンド王国!?!」

アン王女に問われた二人は顔を見合わせ驚いた。何故なら、バッドエンド王国こそ、今娘アコ達プリキュアが戦って居る相手なのだから・・・

「ウム！我々も詳しい事は知らないのだが、バッドエンド王国の報告は受けて居る!!」

「皇帝ピエーロとやらを復活させ、世界をバッドエンドにする事が目的だとか・・・」

アン王女は、背後に控えているソードと顔を見合わせ表情を緩めた。二人がバッドエンド王国の事を知っているのなら、話は早いと・・・

「ご存じでしたか！実は最近、トランプ王国はバッドエンド王国のジョーカーと名乗る者から、トランプ王国に代々伝わる秘宝を奪われてしまったのです!!」

「秘宝!?!」

「はい、我がトランプ王国に伝わる秘宝：一万年前、私達の先祖であるキュアマジシャンが残した、三種の神器の一つと並び称される秘宝です！その秘宝を、ジョーカーと名乗る者に奪われてしまったのです！」

一同の会話を聞いていたソードも話に加わり、

「更にもその秘宝を使い、バッドエンドプリキュアと名乗る、五人の少女達を作り出しました。私は、不覚にも彼女達にも彼女達にも手も足も出さず・・・」

自分が不甲斐ないばかりにと、ソードは思わず言葉に詰まると、アン王女はソードを庇うように、

「ソード、そう自分を責める必要はありませんよ！今は秘宝を取返す事を考えましょう

!!」

「はい!」

アン王女の言葉に、ソードはコクリと小さく頷いた。聞いていたメフィストとアフロデイテは、

「アン王女、それならばアコ達の居る、向こうの世界の加音町にある、調べの館に行ってみると良いでしょう！バッドエンド王国の事ならば、私達の娘アコの方が詳しい筈です……」

「加音町にある調べの館ですか？分かりました！」

アフロデイテから、加音町にある調べの館に向かうと良いと助言されたアン王女は頷き、更にメフィストも話し掛け、

「加音町には、娘アコを始めとした四人のプリキュアが居る！更には、数十人の頼もしきプリキュア達も、向こうの世界には居る。協力を仰ぐと良い!!」

「数十人も!?!それは頼もしい限りですね……ソード、では加音町へ行ってみましょう!!」  
「はい！王女様!!」

こうしてアン王女とソードは、アフロデイテが作り上げた虹色の道を通り、加音町へと向かった……

その加音町に今、問題児が居る事も知らず……

加音町……

調べの館に集まった、響、奏、エレン、アコの四人、側にはピーちゃん、フェアリートーン達を始めとした妖精達に混じり魔王が居た。ハミイは何処かに出掛けているのか、調べの館には居なかった。エレンは、響と奏を見ると、

「私は別に大丈夫だったし、アコの家には音吉さんも居るから大丈夫だとは思うけど、響や奏の家に魔王が行って大丈夫なの？せつなが心配してたわよ？」

前日に、調べの館のエレンの部屋で過ごした魔王、元々メイジャーランドの妖精だったエレンは、魔王に対しても何時も通り振る舞った。

エレンに聞かれ、顔を見合わせた響と奏は、

「まあ、家のママは今パリに居るから大丈夫だとは思うけど、魔王は短時間で世界中に移動出来るようだし、些か不安だよねえ」

「家もそう・・・お母さんも居るし、私だつて同じ屋根の下で魔王と過ごすのには抵抗が・・・」

「ハア・・・でも、しょうがないよねえ」

エレンも、他のプリキュアのみんなもやっている事だからと、響と奏は観念しているようだった。そこに慌ただしくハミイが調べの館にやってくるのと、

「セイレーン！アコ！アフロディテ様が呼んでるニャ!!」

「エッ!?ママが？」

パツと表情を明るくしたアコは、ハミイの後に着いていくと、調べの館の裏に映像が現われていて、そこにはアフロデイトとメフィスト、その背後で微妙に三銃士のバストラ、バリトン、ファルセットが映って居た。

「アコ、今あなた達の下に、トランプ王国のアン王女とトランプ王国のプリキュア、キュアソードが向かっています。彼女達の話聞き、力になってあげて下さい！」

「ママ、アン王女って!?!」

「アコ、あなたが小さい時、遊んで貰った事もあるのですよ！あなたはお姉ちゃんって言いなから、よく彼女の後ろを付いて歩いていたのが、ついこの間のように感じられます……」

アフロデイトの言葉を聞き、アコの脳裏にアン王女の事がうっすらと思い出されてくる。優しい人だったような気がアコにはした。アン王女とソードが、加音町に向かっていると知った響と奏は思わず驚き、

「エエエ!?!」

「アフロデイト様、今加音町に来るのは不味いです!」

「どういう事です!?! セイレーン?」

小首を傾げたアフロデイトだったが、突然エレンを押しつけ、黒き物体がドアップになると、思わずアフロデイトは仰け反った。

「こ、これは!？」

「この人がアコママカゲエ? 美人カゲエエ!」

「まあ、美人だ何て・・・」

初対面ながら、自分を美人だと称えてくれた魔王に、アフロディテは少し照れたような表情を浮かべたものの、アコは必死に魔王を押し付け、

「マ、ママに変な真似させないんだからあ・・・ママ、分かったからまた後で!」

アコは慌ててメイジャーランドとのコンタクトを絶った。自分もアコと話したかったメフィストは涙目になると、

「ア、アコオオ! パパには、パパには話し掛けてくれないのかああ!？」

「「振られたあ! 振られたああ!! 振られたああ!!!」」

「喧しいわああ!!」

バスドラ、バリトン、ファルセットの三銃士にからかわれ、メフィストは三銃士を追い回した。アフロディテは呆れたように溜息を付くも、

(アコ、プリキュアの皆さん、どうかアン王女の力になって上げて下さいね)

妹同然のアン王女の力になって欲しいと願うアフロディテだった・・・

調べの館に戻った一同は、どうするか話し合っていた・・・

「どうする!? その、アン王女って人と、キュアソードだっけ?」

「うん、キュアソードって言ってたわね! また新しいプリキュアが生まれていたわ何て驚いたわねえ!」

「でも、加音町には今魔王が居るし、些か不安よねえ?」

響が、エレンが、奏が、メイジャーランドに行くとき騒ぐ魔王と、必死に止めるアコを見つめながら話す。

「魔王、ママの所に行ったら、許さないからねえ!」

「アコは、まだまだ発育途中だから、代わりにアコママに挨拶しに行くだけカゲ!」

「だから、駄目なおお!」

「なら代わりに・・・響、奏、お前達と一緒に俺とお風呂に入るカゲ!」

「どさくさに紛れて、何て事言うのよ!!」

同じような仕草で、魔王に文句を言う響と奏に、エレンは苦笑を浮かべる。ハミイは、相変わらず暢気そうにしていたが、ピーちゃんは徐に魔王に近付くと、

「ピイイ! ピ」

「な、何い!!? 女の尻を追い回すのも・・・大概にしろだとおお?」

「!! エッ!!? 魔王、ピーちゃんの言葉が分かるの?」

「ピッピッピ・・・ピイイイ!」



「何時も追いかけて回すから、みんなに嫌われてる……そんな事ないカゲエ！俺何か、ひかり、かれん、ラブ、美希、祈里、せつな、いつきと一緒に風呂に入ってるカゲエ!!」  
 「「「エエエ!?!」」」

魔王の告白を聞き、響達四人が驚きの声を上げた。ひかりと一緒に居たのは知っていたが、かれんやラブ達、いつきともお風呂に入っているととは思わなかった。ピーちゃんは、呆れたようにパイと溜息を付きながら、

「パイパイパイ……パイ！」

「な、何iiiiiiii!?お前は……なぎさ達、咲達、のぞみ達、ラブ達、つぼみ達、響達みんなと一緒に……お風呂に入ったとおお!?」

「ピピピピピ」

蔑むような目で魔王を見るピーちゃん、魔王は見る見る涙目になると、響達を睨み、

「お前達、狡いかゲエエ！」

「いやあ、あの時は色々あったし……ねえ？」

「「「うん」」」

響の言葉に相槌を打つ三人、

「悔しいカゲエエ」

魔王は悔しそうに地面を転げ回って居ると、ピーちゃんが再び言葉を発し、

「ピッ・・・ピイピイピイ！」

「な、何!?!お前、胸だか背中だか分からない身体見て、何が嬉しいんだとお?！」

魔王の通訳を聞いた響、奏、エレン、アコは、目を点にしながら、

「ちよ、ちよつとお!何気にピーちゃん酷い事言つてない?！」

「ほ、本当にピーちゃんそんな事言ってるの?！」

「祈里が居れば、ピーちゃんの言葉が分かるんだけど・・・」

「こんな事で祈里を呼ぶのも悪いし・・・」

響、奏、エレン、アコの四人は、本当にピーちゃんがそんな事言ってるのだろうかと疑問に思うも、確かにノイズ状態のピーちゃんは、そのような事を言っていたのを思い出し戸惑った。

ピーちゃんを睨み付けた魔王の背後から、黒きオーラが立ち上がると、負けずとピーちゃんの背後から白きオーラが立ち上がった。見る見るオーラは具現化し、魔王のオーラは、絵本の世界を壊滅寸前まで追い込んだ、あの時の巨大な魔王のようなシルエツトになり、ピーちゃんのオーラは、ノイズ究極体のようなシルエツトが浮かび上がった。調べの館の中で、異様に発する気と気のぶつかり合いに、響、奏、エレンは、思わず身を寄せ合い震えだし、

「ちよ、ちよつとお!ピーちゃん、魔王も落ち着いて!!！」

「何だか……嫌な予感がするんですけどお？」

「これって……非常にヤバくない!？」

ビビる三人に、アコは冷静に二人を止めようとするも、響、奏、エレンに必死に押さえ込まれ、

「だ、駄目だよ、アコ!」

「今の二人に近付いたら……」

響と奏の言葉を表すように、室内の中なのに、調べの館内に強風が吹き荒れ、会場内の物がガタガタ音を立て始める。このまま放置しておく、調べの館だけではなく、加音町まで被害が出るのではと危惧してくる。だが、プリキュアのみんなど力を合わせても、中々止められなかったノイズと魔王の力を思い出すと、四人だけで止められるのか不安が芽生えてくる。

「ど、どうしよう……私達だけで二人を止められるかしら!？」

不安そうにエレンがポツリと呟いた時、ピーちゃんと魔王が同時に動いた。

「ピーイイ!」

「カゲエエ!!」

「『ピーイイイ』」

互いに羽ばたき、威嚇し合うと同時に突進し、響、奏、エレンが、同時に悲鳴を上げ

た。だが、一同の不安を余所に、二人の対決は腹相撲のように、互いのお腹とお腹で体当たりし合うシンプルなものだった。思わず響、奏、エレンが転ける。

「ふ、二人共、ビックリさせないで!!」

イテテテと起き上がった響が、苦笑気味に二人に話し掛けたその時、調べの館の入り口が開き、二つの人影が調べの館に入って来た。

「あのう……こちらにアコ姫が居ると、アフロディテ様に伺ったのですが?」

そう言つて響達に声を掛けたのは、加音町にやつて来たアン王女とキュアソード、魔王が二人に見とれている間に、ピーちゃんの体当たりを受け、魔王が地面に転がり二人の対決は終焉を迎えた。

コロコロ転がった魔王を、アン王女は優しく抱き上げると、思わず魔王はその美しさに見惚れ頬を染めた。アン王女が手を放すと、魔王はアン王女の胸の位置まで羽ばたき、アン王女は魔王を見つめ微笑むと、

「大丈夫!? ウフフ、丸くて可愛らしい妖精さんね!」

「カゲエエ!」

アン王女の胸に顔を埋めようとしている魔王に気付き、響、奏、エレン、アコが同時に叫び、

「「「アン王女! 離れてえええ!!」」」

「エッ!？」

抜群の反射神経で、胸に飛び込もうとした魔王を咄嗟に避けると、魔王は背後に居たソードにぶつかり、ソードは思わず尻餅を付いた。それを見て居た響は、ソードに駆けより手を差し出すと、ソードを助け起こした。

「大丈夫!?!魔王が迷惑掛けてゴメンね!」

「い、いえ……」

「もう、魔王! チョコマカしない!!」

響が魔王をつまみ上げる姿を見て、ソードは呆気に取られた。アン王女も状況が読み込めず呆然としていたものの、アコがアン王女に近付き、

「アン王女ですね? 私は調辺アコ! 母からあなたの事は聞いています!!」

「まあ、あなたがあのアコ姫……随分大きくなりました」

アコがまだ幼き日に、一緒に遊んで上げた事を思いだし、アン王女が思いに耽つていると、エレンはアン王女に頭を下げ、

「それでアン王女、私達にご用とは!？」

「そうでした……わたくし達がこちらに来たのは他でもありません……バッドエンド王国について教えて欲しいのです!」

「「バッドエンド王国!」」

「はい！実は、わたくし共の国トランプ王国に、バッドエンド王国のジョーカーと名乗る者が現われ、わたくし達の国に伝わる王家の秘宝を奪われてしまったのです・・・」

そう言うと、アン王女は思わず悲しげに目を伏せた。響達四人は顔を見合わせると、アン王女とキュアソードに、バッドエンド王国について語り出した。アン王女とキュアソードは、四人から語られるバッドエンド王国の事を真剣に聞き入った・・・

「そして私達プリキュアは、バッドエンド王国に乗り込み、一度はピエーロを倒したのですが・・・」

「残念ながら、ピエーロは完全には滅びて居ないと、メルヘンランドのロイヤルクイーンは言っていました！」

「バッドエンド王国は、メルヘンランドのプリキュアである、七色ヶ丘に住んでいる私達の仲間を特に敵視しているの！」

「バッドエンド王国が再び動き出したのなら、彼女達の側に居る方が、再びジョーカーと出会える可能性は高いと思う・・・彼女達の名前は、星空みゆき、日野あかね、黄瀬やよい、緑川なお、青木れいか、私からもお二人の事を知らせておきます!!」

響が、奏が、アコが、そしてエレンが、親身になってアン王女とソードに助言を与えた。アン王女とソードは何度も頷いた。

（七色ヶ丘・・・そこに行けばバッドエンドプリキュアに会える！あの時の屈辱・・・）

ソードは表情をキツと引き締めると、踵を返して走り出した。アン王女は背後を慌てて振り返ると、

「ソード、お待ちなさい！ソード!!」

だが、ソードの耳にアン王女の言葉は届かなかった……  
ソードは疾風のように駆け続け、加音町を後にした……

「ハア……全く、あの子ったら……」

思わず溜息を付くアン王女、奏も心配そうに、

「ねえ、あの子一人で行かせて大丈夫かしら!?!」

「だよね、まだこっちの世界に来て間もないんでしょう?」

「あの子……七色ヶ丘の場所って知ってるのかしら?」

「どうする!?!みゆき達に知らせておいた方が良いんじゃない?」

奏の言葉に、響、エレン、アコも同意し、エレンは携帯を手にとると、れいかの家に電話を掛け、状況を手短かに説明した。エレンがれいかに電話したのは、あの五人の中では、れいかに知らせるのが最適だと考えたからだった。

「分かりました、他の皆さんにも知らせて、キュアソードさんを見掛けたらお知らせします!」

「お願い、私達もアン王女を連れてそっちに向かうわ！」

電話を切ったエレン、話を聞いていた魔王は、

「しょうがないカゲ・・・俺がソードを見つけて出して、みゆきの下に連れて行くカゲ！」

「エツ!? あんた、ソードの居場所分かるの?」

「フフフン! 俺はお前達の気配を感じられるからなあ・・・その美人のアンも、さつき  
のソードも覚えたカゲ!!」

「出来れば・・・アンと呼ぶのは止めて欲しいのだけれど」

「止めたら、アンは俺と一緒に・・・モグモグモグ」

苦笑気味にアン王女が魔王に訴えると、アン王女と一緒に風呂に入ってくれるか聞こうとした魔王を、響とエレンが慌てて魔王の口を塞いだ。

その頃、キュアソードは・・・

「ねえ、ダビィ! 七色ヶ丘って・・・何所にあるの?」

「そんなの、ダビィは知らないビィ! だったら、加音町に戻るビィ」

「無理よ・・・加音町がどっちだったか覚えて無いもの!」

とあるビルの屋上で途方に暮れたキュアソード、加音町から飛び出した迄は良かったが、自分が七色ヶ丘の場所を知らない事を思いだした。



(アン王女・・・迎えに来て下さい！)

途方に暮れたソードは、ビルの屋上で体育座りし、アン王女が迎えに来てくれるのを待ち続けた・・・

第七十九話：魔王と少女達（後編）

完

## 第八十話：真琴くキュアソードく

1、キュアソードVSキュアビューティ

日が落ち掛けたビルの上を、民家の上を、一人の人影が走り続ける・・・

その前には、丸い物体がフワフワ浮かんで居た・・・

その影の正体は、魔王とキュアソード！

道に迷ったソードを迎えに来た魔王に案内され、ソードは、みゆき達が住む七色ヶ丘目指して駆け続けるも、魔王から、ソード憧れのアン王女も、ソードの事を呆れていたと聞かされて居た・・・

「あのう・・・本当に王女様は？」

「呆れてたカゲ・・・俺もまだ、お前をプリキュアとは認めないカゲ！」

「エッ!？」

アン王女には呆れられ、魔王にはプリキュアとは認めないと言われ、思わずソードは立ち止まり、シユンと落ち込んだ。

(どうしよう!?!王女様に嫌われたら、私・・・)

幼い頃に両親を亡くしていたソードは、アン王女の事を姉のように、母のように慕っ

ていた。そんなアン王女に嫌われたらと思うと、ソードの心は激しく動揺していた。だが、落ち込んでいたソードだったが、気持ちを切り替えると、

「落ち込んで何か居られない！」

ソードは、パンと両手で頬を叩き気合いを入れると、再び走り始めた。だが魔王は、そんなソードを呆気に取られながら見つめると、

「ソード・・・そっちじゃ無いカゲ！」

「エツ!?は、早く言って！」

顔を赤くしながら戻って来たソードを見た魔王は、ニヤニヤしながら、

（中々素直カゲ・・・）

魔王の心の中に、ソードに対して悪巧みが生まれようとしていた・・・

バッドエンド王国・・・

バッドエンド王国にやって来た、バッドエンドプリキュアの五人は退屈していた・・・  
ジョーカーからは、まだ動く時では無いと言われ、バッドエンド王国で待機していた五人だったが・・・

「アアアン、暇だよおおお！」

大きなテーブルに座ったバッドエンドハッピーが、退屈そうに両足をブラブラさせる。

「せやなあ・・・身体が鈍ってまうわ！」

大きく伸びをしたバッドエンドサニーも同意し、ポキポキ指を鳴らす。

「そうだな・・・一暴れしたいもんだ！」

その場で素早い蹴りを繰り返し、空気を切るバッドエンドマーチも同意する。

「そうね・・・」

バッドエンドビューティも同意するも、その表情は険しかった。

「だったらさあ・・・みんなで出掛けない？」

バッドエンドピースは、みんなを手招きすると何かを囁いた。一同の視線が、テーブルに置かれていた黒玉に注がれ、バッドエンドハッピーは、辺りを伺うとそつと手を伸ばし、黒玉を手に取り、

「じゃあ、私達の元になってるっていう、プリキュアに会いに行こう！」

「「オオオ!!」」

バッドエンドハッピーの言葉に同意し、五人の少女がバッドエンド王国からその姿を消した・・・

七色ヶ丘・・・

れいから、アン王女とキュアソードの事を聞いたみゆき、あかね、やよい、なおの四人、もしかしたらソードが来ているかも知れないと考え、みゆき達一同は七色ヶ丘を探索していた・・・

「れいかちゃん、魔王がソードを迎えに行つたつて、エレンさんは言つてたんでしょ？」

「はい！あの後直ぐに再びエレンさんから連絡が入り、エレンさんはそう言つてましたね」

みゆきに聞かれたれいかが答えると、みゆきは一同の顔を見渡し、

「魔王は、私達の気配が分かるつて言つてたから、きつと無事に連れて来てくれるよ！」  
「せやなあ、こういう時だけは役に立つわ」

みゆきの言葉に同意したあかねが、苦笑混じりに魔王を褒める。話題に出たソードの事が気になったなおは、確認するように一同に語り掛け、

「キュアソードつて、最近プリキュアになつたばかり何でしょう？」

「ウン！遂に、遂に、私達も先輩つて呼ばれる日が来ちゃつたんだよ!!」

目をキラキラ輝かせたやよいが、熱く語るのをあかねが遮り、

「まああゆみも居るけど、あゆみは、ウチらとそう違わない時にプリキュアになつとるし、後輩つて気はせえへんなあ．．．年も同じやし」

「うん！あゆみちゃんは．．．私達スマイルプリキュアのメンバー見たいなもんだしね！」  
あかねは、あゆみがプリキュアになった時を思い出すも、そう自分達と変わらない時期にプリキュアになっていると告げ、みゆきも同意する。だが直ぐにれいかが真顔になると、

「ですが、ジョーカーが再び動き出したというのは気になりますねえ．．．」

ピエーロを倒した訳ではないと、メルヘンランドでロイヤルクイーンに聞いた時、薄々ジョーカーも無事で居るのではと考えていたれいかは、ジョーカーがどう動くのか気になっていた。悪知恵に長けたジョーカーならば、どんな手段を用いてくるか分からず、れいかに警戒心が湧いていた。そんなれいかとは対照的に、四人の話題はまだキュアソードに集中していた。

「どんな人だろうね？」

「意外としつかり者で、ウチらの方が後輩のように見えたりしてなあ？」

「ハハハ、それも有り得るかもね」

みゆきの問いに、あかねとなおが答えるも、やよいは含み笑いを浮かべながら、

「フッフッフ！例えそうでも．．．私達が先輩という事実は変わらないのだああ!!」  
「あつ、そう」

腰に手を当てて、自慢気にポーズを取るやよいに、あかねとなおが無表情のまま返事を返し、一同が苦笑を浮かべた。そんな中、突然キャンデイが騒ぎ出し、バッドエンド空間の気配を感じると一同に訴えた。直ぐに表情を引き締めた五人、

「さっそく現われたようですねえ．．．皆さん!」

れいかの合図に一同が頷くと、みゆき、あかね、やよい、なおが頷き返し、一同は紺色の空目掛け駈け出した。

バッドエンドビューティの手によって発生したバッドエンド空間．．．

ビルの屋上に座り、眼下で暴れる看板姿のアカンベエを見つめるバッドエンドプリキュアの五人だったが、バッドエンドビューティ以外、初めて見る人間界に興味津々のようで．．．

「ウワア!何あれ?」

「中々おもしろそうな街やなあ．．．」

「何だ．．．この良い匂いは?!食欲をそそのこの匂い．．．」

「ウワアア!何あの大きな絵!」

バッドエンドハッピー、サニー、マーチ、ピースが、それぞれ辺りを見回し衝撃を受けていると、バッドエンドビューティは背後を振り返り、

「あなた達、ここに何しに来たの？ちゃんとスマイルプリキュアとやらが出てくるのを・・・アツ!?」

忠告している側から、四人がバラバラに散ってしまい、バッドエンドビューティは呆然とするも、

「フン、お好きになさい・・・さあ、出てきなさい！スマイルプリキュアとやら!!」

バッドエンドビューティの合図と共に、黒鼻をした看板アカンベエが周囲を暴れ始めた。その側には、バッドエナジーを放出した人々が、絶望の言葉を呟きながら跪いている。駆け付けたみゆき達一同は、

「みんな、行くよ!」

みゆきの合図と共に、一同がスマイルパクトを構えると、

「[[[[プリキュア!スマイルチャージ!!]]]]」

「キラキラ輝く、未来の光!キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー!キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん!じゃんけん・・・ポン!キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負!キュアマーチ!!」



「しんしんと降り積もる、清き心！キュアビューティ!!」

「「「5つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア!!」」」

ハッピー達が名乗りを上げポーズを決めると、ビルの屋上から見て居たバッドエンドビューティの目は輝き、

「あれがスマイルプリキュア・・・私達バッドエンドプリキュアの元になっているプリキュアか・・・フッフ、お手並みを拝見させて貰うわ！」

スマイルプリキュアが現われた事で、バッドエンドビューティは、一同の力を見極めようとするかのように、ジイと五人を凝視した。注意を眼下に向けていたバッドエンドビューティは、背後の気配に気付かず、突然背中をポンポン叩かれ、思わずビルから落下しそうになり、慌てて体勢を立て直しながら背後を見た。そこには、何時戻って来たのか、バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチの四人が、何所で仕入れてきたのか、バニラソフトクリームをペロペロ舐めながら立っていた。

「あなた達、何時の間に!?!」

「ほらほら、ビューティも舐める?」

バッドエンドピースは、困惑しているバッドエンドビューティの顔にソフトクリームを差し出すも、バッドエンドビューティの顔面に付けてしまい、

「アッ、ゴメエン！顔に付いちちゃったああ・・・テヘ！」

ニツコリ微笑み小首を傾げたバッドエンドピースが、ペロつと舌を出して自分の頭を軽くコツンと叩くと、それを見たバッドエンドビューティの周囲に冷気が漂い、見る見る険しい表情を浮かべたバッドエンドビューティは、

「……殺す！」

「イヤアアン！怒つちやダメエエ!!」

「待ちなさい!!」

「イヤアア！だつてえ、ビューティの顔怖いんだもん!!」

わざとやったように感じたバッドエンドビューティは、バッドエンドピースを追い回した。慌ててバッドエンド王国に逃げ帰ったバッドエンドピースを追って、バッドエンドビューティもその姿を消した。その瞬間、バッドエンド空間が解除され、アカンベエと戦って居たスマイルプリキュアは驚愕する。

ビルの屋上でソフトクリームを食べていたバッドエンドハッピー、サニー、マーチは、「あーら、二人共帰っちゃったねえ……私達も食べ終わったし、帰ろうか?」

「せやな、いい暇つぶしにもなったしなあ」

「ああ、この世界は……美味しい物が沢山ありそうだ！」

この世界を気に入ったような、バッドエンドハッピー、サニー、マーチの三人も、先に帰った二人の後を追うように、バッドエンド王国に戻って行った。

「こ、これは一体どういう事でしょうか？」

アカンベエとの戦闘最中に、バッドエンド空間が解除された事など、ビューティの記憶では無かった筈であった。だが、現に戦闘途中でバッドエンド空間が解除され、ビューティは戸惑う。人々が正気を取り戻そうとしているのに気付き、五人は慌ててプリンセスキャンドルを取り出すと、

「『プリンセスよ、私達に力を!!』」

五人がキャンドルを合わせ、ペガサスに力を貸して欲しいと願うと、五人の姿が変化を遂げていく……

「プリンセスハッピー!!」

「プリンセスサニー!!」

「プリンセスピース!!」

「プリンセスマーチ!!」

「プリンセスビューティ!!」

「『プリンキュア!プリンセスフォーム!!』」

プリンセスフォームに変身した五人は、アカンベエをキツと睨み付けると、

「届け!希望の光!」

「羽ばたけ、未来へ！」

五人は五色のペガサスに跨るや、上空高く舞い上がった。五色のペガサスは、上空で宙返りすると、

「プリキュア！レインボー・バースト！」

五色のペガサスが合わさり、巨大な光のペガサスの口から、五色のエネルギー波が放たれた。ハッピー達五人は、キャンドルの炎を吹き消し、キャンドルをクルクル回してアカンベエに背を向けポーズを決めると、

「輝け！ハッピースマイル！」

背後で爆発が起こるや、アカンベエは為す術無く浄化され、黒玉は消滅した。五人は直ぐにプリンセスフォームを解除し、ホッと安堵した瞬間、

「やっと見付けた！あの時の屈辱・・・晴らして見せる!!」

「カゲエ!?ま、待つカゲ、あいつらは・・・」

「ソ、ソード、待つビィ！彼女達からは・・・」

「閃け！ホーリーソード!!」

魔王とダビィが止めるのも聞かず、キュアソードが六階建てビルから急降下しながらホーリーソードを放ち、不意を突かれたスマイルプリキュアは、両腕で頭をガードし、ソードの攻撃を何とか耐え凌いだ。

「な、何!?何が起こつたの?」

動揺するハッピーだったが、着地したソードは、キツとスマイルプリキュアを睨み付け、

「ようやく会えたわね……さあ、トランプ王国から盗み出した、アン王女の大事な宝物を返して!」

「トランプ王国!?じゃあ、あなたがキュアソード?」

トランプ王国の名を聞き、ハッピーは、目の前に現われたのがソードだと悟るも、ソードは険しい表情を崩さず、

「ええ、そう……私は、あなた達にあの時の屈辱を晴らす為に、こちらの世界にやって来た!さっさと返して、この盗人!!」

「ま、待ちや!ウチらには何の事だか!」

「うん、ソードは誤解してるよ!」

「ちゃんと話せば分かるって!」

ソードに盗人呼ばわりされ、サニーが、ピースが、マーチが大慌てで弁明するも、ソードはハッピー達を指差し、

「盗人の言葉何て聞かないわ!だったら腕づくで……」

「お黙りなさい!!」

沈黙していたビューティは、目をカツと見開くと、ソードを一喝して黙らせた。大切な仲間達を盗人呼ばわりされた事で、ビューティの感情は爆発した。更にビューティは言葉を続け、

「私の大切な仲間達を、盗人呼ばわりするとは・・・頭を冷やして反省なさい！プリキュア！ビューティブリザード・・・フリージング!!」

「ビュー、ビューティ!!」

「タ、タンマアア!」

マーチとサニーが慌てて止めようと試みるも間に合わず、顔色変えたソードは、

「クツ!?閃け!ホーリーソード!!」

ビューティが技を放つのに気付き、ソードもホーリーソードで迎え撃った。激突する両者の技だったが、ホーリーソードは、ビューティブリザードを受け次々に凍り付き、更にソードの身体を完全に凍り付かした。

「カゲエエ!?ま、間に合わなかったカゲ・・・」

「「魔王!?」」

困惑気味の魔王がようやく現われ、魔王を見たハッピー、サニー、ピース、マーチが思わず魔王の名を呼んだ。魔王は軽くハッピー達に挨拶するも、凍り付いたソードを見て溜息を付いた。ビューティは険しい表情を崩さず、ソードに近付くと、

「そこで頭をお冷やしなさい!!」

「いや、頭言うか・・・身体事凍つとるでえ?」

「ビューティ・・・少しやり過ぎじゃ?」

「ソード・・・大丈夫?」

「もしも〜し!?!」

サニー、マーチ、ハッピー、ピース、仲間達に諭され、冷静さを取り戻したビューティも、自分がやり過ぎた事に気付き、

「私とした事が・・・も、申し訳ありません!大丈夫ですか?」

ソードに深々とお辞儀して謝罪するも、

(ウウウウ・・・さ、寒い・・・は、早く此処から出して)

凍り付いたソードとダビィは、歯をガチガチ鳴らしながら、早く凍り漬け状態から解放される事を望んだ。

## 2、剣崎真琴

サニーのサニーファイヤーによって、凍り漬けから解放されたソードは、まだ寒いのがガチガチ歯を鳴らし、変身を解除したみゆき達も、心配そうにソードの側に居た。魔王とダビィはソードを見て溜息を付くと、

「全く、大体ソードが早合点するから悪いカゲエ！」

「だから待ってって言ったビィ」

「だってええ……この人達、バッドエンドプリキュアに似てたんだものお！でも、早合点して本当にゴメンなさい!!」

「私もやり過ぎてしまいました……申し訳ありませんでした！」

ソードは自分の非を認めて謝罪すると、やり過ぎたれいかも改めてソードに謝罪した。みゆきはバッドエンドプリキュアと言う言葉に引つ掛かり、

「バッドエンドプリキュアかあ……そんなに私達に似てたの？」

「ええ、でも思い返せば、彼女達とあなた達とは、衣装が違ってた……」

「彼女達からは、妙な気配を感じたビィ！邪悪な気配では無いけど……」

ソードとダビィは、トランプ王国で見たバッドエンドプリキュアの事をみゆき達に話した。ジョーカーによって生み出されたバッドエンドプリキュア、みゆき達五人は、何れ相まみえるであろう、彼女達の存在に興味を持つのだった……

魔王は、ソードを人気の無い路地裏に連れ出すと、

「全く、お前には呆れるカゲエ……アンに話して叱って貰うカゲ！」

「エエエ!?アン王女に?……あのう、出来れば王女様には……」



モジモジしながら、さっきの事は黙って居て欲しいと告げたソード、魔王はニヤリとすると、

「まあ、ソードはこの世界に来たのが初めてだし、みゆき達も許してたから、今回は見逃してやるカゲ！」

「本当!?!ありがとう!」

「でも、ちゃんとこの世界の仕来りはして貰うカゲ!」

「仕来り!?!具体的に私は何をすれば?」

「この世界には、禊（みそぎ）をするということわざがあるカゲ!身に罪や穢れ（けが）のある者、また神事に従事しようとする者が、川や海の水で身体を洗い清める事を言うカゲ!」

「ハア・・・それを私にしらうって言うの?」

「ソードは、さっきビュートイに凍り漬けにされたから、それは可哀想カゲ・・・特別にお湯で身を清めるカゲ!俺が見届けてやるカゲ!さあ、服を脱ぐカゲ!!」

「エッ!?!ここ、此処で?それは・・・」

「ソードは反省してるんじゃないのかあ?禊も出来ないなら、反省しているとは思えないカゲエ」

「反省してるわよ・・・分かったわよ、脱げば良いんでしょう?」

少し膨れっ面をしながら、ソードはプリキュアの衣装に手を掛けた時、魔王はフワフワ浮かび、思わず身を乗り出した。その時……

「いい加減にしろ！この変態魔王!!」

「カゲエエエエエエエエ!」

何時加音町から七色ヶ丘にやって来たのか、響のジャンピングボレーシュートが魔王に炸裂し、魔王はまるでサッカーボールのように一直線に飛び去り、

「エツ!!今の声、響さん!?!……ギヤツ」

響の声が聞こえたようで振り返ったみゆきは、物凄いスピードで飛ばされてきた魔王と顔面で衝突し、二人は目を回しながら地面に倒れた。

「み、みゆきちちゃん!?!ゴメエエン!そこに居るとは……大丈夫?」

「酷いよおお……ハツプツプ」

「イヤア……ゴメンゴメン」

響に介抱され、みゆきは頬を膨らませて抗議し、響は頭を掻きながらみゆきに再度謝った。ようやくお目々グルグル状態が収まった魔王は、

「お、俺に謝罪の言葉は無いのかああ!」

「何であんたに謝る必要が有るのよ!全く、心配して駆け付けて良かったよお!」

「響、お前どうやってこんなに早く……」

「エレンがせつなさんに頼んでくれたのよ」

「気になってせつなさんに頼んで正解だったわねえ……」

「魔王が悪さしてるんじゃないかと思ってね……まさか本当にしようとしてたは……」  
渋い表情を浮かべた奏とエレンも姿を現わし、魔王は更に驚き、

「奏、エレン、せつなに頼んだって事は……」

「ここに居るわよ！ 全く……魔王、本当に二度と会わないように、宇宙の果てにでも捨てて来るわよ？」

「エエエ!? せ、せつな、それだけは許してカゲエエエー！」

せつなに縋り付き、もう悪さしないから、それだけは勘弁してくれと魔王が頼み続けると、せつなはそっぽを向きながら、

「どうしようかなあ!?! ……じゃあ、今からみんなを迎えに行くから、魔王も手伝ってくれたら許して上げる！」

「分かったカゲ！ 手伝うカゲ!!」

「じゃあ、響、奏、エレン、アコ、さつき打ち合わせたように、みんなの所に行くわね！ みゆき達、アン王女、キュアソードも、また後でちゃんと挨拶するわね！」

「はい！ じゃあ学校で、佐々木先生には了承を頂いてますので」

「分かったわ！」

れいから七色ヶ丘中学校で待っていると伝えられ、せつなは頷くと、魔王を伴い七色ヶ丘を後にした。突然現われた響達を、呆然と見て居たソードの側に、アン王女がゆっくり近付くと、

「ソード、無事に七色ヶ丘に着いていて良かったです！ですが、軽はずみな行動は控えなさい！」

「王女様！も、申し訳ありませんでした・・・」

「まあ無事で何よりよね・・・」

アン王女の側にやって来たアコも、取り敢えずソードが無事に付いて居た事で安堵していた。眼鏡の位置を直したアコは、

「でもあなた、後先考えず行動する人よねえ・・・アン王女がどれだけ心配していたか」「ゴ、ゴメンなさい・・・」

アコにも注意され、ソードはシユンと落ち込んだ。そんなソードを見たダビィは、自分かソードの支えになろうと、この時心に誓いを立てた。

せつなを通じて、トランプ王国のアン王女と、新たなるプリキュア、キュアソードの報告を聞いたなぎさ達一同は、せつなに連れられ七色ヶ丘中学へとやって来た。街中ではアン王女とソードの衣装が目立つ為、生徒が帰った人気の無い中学校の方が良いだろ

うとれいかが判断し、佐々木先生に許可を貰っていた。なぎさ達一同が、先ず自分達の身分をアン王女とソードに語ると、続けてアン王女が話し始め、

「皆様方が全員プリキュアとは・・・心強い限りです！わたくしは、トランプ王国王女マリー・アンジュと申します！あなた方のお噂は、メイジャーランドのアフロディテ様やメフィスト王から聞き及んでおります・・・どうか、わたくし達の力になって下さい!!」

アン王女が深々と頭を下げると、慌ててソードもならい頭を下げた。続いてソードが話し始め、

「私は、トランプ王国のプリキュアで、キュアソードです！以後お見知り置きを・・・」

「キュアソード!?!」

ソードの言葉が終わる前に、聞いていたなぎさとほのかが、同時にソードの名を呼び小首を傾げた。ソードは、何か変な事を言っただろうかと不安そうな表情を浮かべると、なぎさは慌てて手を振り、

「アツ、言葉を遮っちゃってゴメン!」

「ゴメンなさい!」

「なぎさ、ほのか、どうかしたの?」

怪訝そうな表情で、ゆりが二人に問い掛けると、なぎさとほのかは顔を見つめ合い、同時にソードを見つめ、

「実は私達……キュアソードって名前を、何処かで聞いた事があるような気がするんだよねえ……」

「不思議と、何所で聞いたのかは思い出せないんだけど……」

「伝説を継ぐ者、キュアソードって」

なぎさとほのかの中で、嘗て時空の狭間に飛ばされた時の記憶が、キュアソードと聞いた瞬間微かに甦っていた。だが、アン王女もソードも小首を傾げ、

「何かの間違いでは!? ソードは、数週間前にプリキュアになったばかりですよ?」

「私も、あなた達とは何処かであった記憶は無いのですが?」

「そ、そう……ほのか、私達の勘違いなのかなあ?」

「お二人に否定されたら、勘違いだったのかも知れないね?」

そうは言っても、何処か心に引っ掛かるなぎさとほのかだった……

「それはそうと……アン王女、ソード、二人共こっちの世界で過ごすなら、その格好じゃ目立つっしょ!」

「あたしもそう思ってた! 特にソードは、プリキュアの姿で居ると色々目立つから、変身を解除したら?」

えりかと美希に忠告されたソードは困惑し、

「エッ!? でも、私はトランプ王国では、プリキュアの姿で暮らしてましたし……」

「ソード、こちらの世界には、郷に入っては郷に従えということわざがあるそうです。わたくし達も、こちらの世界で過ごすからには、皆さんの言われる通りに致しましょう！」

「はい、王女様！」

アン王女の忠告に従い、ソードはプリキュアの姿を解除した・・・

青紫色のショートヘアをし、服装はトランプ王国の民が着ていたのと同じようで、薄紫色の服を着ていた。えりかと美希は微妙な表情を浮かべ、

「ウーン・・・アン王女も、ソードも、その姿でも目立って言うかさあ・・・」

「確かに・・・微妙ね！」

「ヨツシャ〜！あたしに任せて!!」

えりかは、カメラを構えるようなポーズで、アン王女とソードの周りを不気味に一周すると、アン王女とソードは困惑気味に、

「あ、あのう・・・それは一体どのような意味が?」

「何か不気味何ですけど・・・」

「分かったあ!二人のスリーサイズは・・・ゴニヨゴニヨゴニヨ」

他のメンバーに聞こえ無いように、えりかはアン王女とソード、二人の耳元でスリーサイズを告げると、見る見る二人の顔は赤くなり、

「な、何故、わたくしのスリーサイズが?」

「エエエ!!」

えりかにズバリスリーサイズを当てられ、アン王女とソードは激しく動揺し、えりかの特技を知っていた一同はクスクス笑っていた。えりかは美希にも何か囁くと、

「OK！次はあたしの番ね・・・出てきて、ブルン！」

美希はブルンを呼び出すと、リンクルンを取りだしブルンを差し込んだ。

「アン王女、ソード、衣装の希望があつたら言ってみて？」

「衣装ですか？わたくしは特に拘りは無いのですが、出来ればなるべく肌を露出しないような、薄い青色の衣装を・・・」

「私は・・・エエと、よく分からないのでお任せします！色は紫系で!!」

「OK！あたしがバッチリ選んであげるわ!!」

取り敢えず、あかねがバレー部の部屋に三人を案内し、アン王女とソードは、中で下着姿になると、ブルンの力を借り、美希がコーディネートした衣装を、瞬時にアン王女とソードが身に付け、二人が驚愕した。

「こ、これは・・・」

「凄い！」

アン王女が身に付けたのは、ベージュ色のボーダースワンピースで、スカート部分には、レース地にボーダーの配色で、上品な透け具合は、高貴なアン王女を引き立た



せる。上着にはアン王女リクエストの薄いブルーのジャケットで、襟ぐりには、ピコレースをあしらっていた。一方のソードは、上は薄紫色のチュニツクで、下はネイビー色のショールパンで、ボーイッシュユキを醸し出していた。

「こんな素晴らしい衣装をわたくし達に?」

「良いの!!」

「ええ、気に入って貰えたようで良かったわ!」

二人に気に入って貰えたようで、美希はニツコリ微笑みながら満足気に頷いた。美希とあかねが伴い、アン王女とソードが姿を現わすと、一同が響めき、次々に似合ってるとか、可愛いと、か素敵とかいう声が二人に飛び、二人は頬を赤らめた。

衣装については解決したようで、やよいは気になっていた事を言ってみようと思いい立ち、

「ハイハイハイ! 私は、ソードって言う名前が気になります! アン王女は、マリー・アングジュさんって名前ですから、外国の人って事で誤魔化せると思うんですけど、ソードじゃまずいと思うの!!」

「確かにそうね……ソードさん、プリキュアになる前は何て名前だったのかしら?」

「まちなもやよいの提案に同意し、ソードに訪ねると、

「私の元々の名前はマコトです!」

聞かれたソードが答えると、のぞみは意外そうな表情を浮かべ、

「マコトちゃんかぁ・・・日本人っぽい名前だね?」

「ソードは音楽も好きだって言ってたから・・・漢字にするなら、真琴って所ね」

エレンも頷き、マコトを漢字にした名前をソードに教えた。

「じゃあ、名字を私達で付けてあげようよ!」

ラブの提案に、一同も同意し、色々思案をし始めた・・・

「ソードは、日本語で剣だし・・・」

「ハイハイハイ!私は、剣崎って名前が良いと思いまぁす!!」

いつきが考えている側で、やよいは再び手を上げ、剣崎と言う名字を提案すると、な

ぎさもウンウン頷き、

「剣崎かぁ・・・良い名前だよねえ!家のお父さんが学生の頃読んでたボクシング漫画に、

剣崎って言う名前があつたしさぁ」

「ブウウ!違いまぁす!!剣崎といえば、特撮の主人公の名前でええす!!!」

やよいは手でバツテンマークを作り、特撮の主人公から取ったと伝えると、見る見る

あかねとなおの表情が曇り始め、

「またかぁ・・・」

「やよいちゃん、もつと真面目に・・・」

あかねとなおに呆れられ、やよいは頬を大きく膨らませると、

「真面目に考えたもん！」

「私は、みんなが考えてくれたし、劍崎って名前が良いですけど？」

「まこちやああん!!」

真琴が劍崎という名字で良いと言ってくれて、やよいの目はキラキラ輝き、真琴に抱き付いた。りんは苦笑気味に、

「アハハハ、まあ、ソードが良いって言うから、それで良いかあ・・・じゃあソードは、プリキュア以外の姿では、劍崎真琴って事で・・・」

「うん！アン王女、まこちゃん、これからよろくね！」

「よろしく!!」

みゆきの言葉に釣られたように、一同が改めて二人に挨拶すると、

「ハイ！こちらこそよろしくお願ひ致します!!」

「少しの間こちらでご厄介になります！」

ソードとアン王女も頭を下げた。二人とも和み始めた事で、なぎさは一同を見渡すと、

「折角だし、二人の歓迎会でもする？」

「そうね・・・でもこれだけの大人数となると、ナッツハウスでも窮屈になりそうね？」

なぎさの言葉にほのかも同意し、何時ものようにナッツハウスでも考えたものの、人数も増えた事で、窮屈になりそうだと懸念していると、

「その心配は無用ですよ！」

さてどうするかと思案している一同の耳に、聞き覚えのある声が聞こえてきた。れいかの表情が見る見る曇った。何故なら、その声は何度も聞いた事のある、因縁のある声だったのだから……

「今の声……. ジョーカー！」

「エッ?」

ジョーカーと言う言葉を聞き、アン王女とソードが直ぐさま反応した。二人がこの世界に来る切っ掛けを作った人物と、こんなに早く再会出来るとは、二人も考えては居なかった。辺りをキョロキョロすると、日が暮れた空にジョーカーが浮かんで居た。よく見れば、その側に浮かぶ五つの影があった。

「久しぶりですねえ、プリキュアの皆さん……今日は皆さんに挨拶をしに来ましてねえ! さあ、あれがプリキュア達ですよ!!」

ジョーカーに促され、五人の少女達が少し前に出ると、

「ヤッホ、私はバッドエンドハッピー! 本当は、面倒だから来たくなかったんだけどお、こつちの世界は楽しそうだから、また来ちゃたあ!!」

「あの子もハッピー!?」

「確かに、何処かみゆきちゃんに似てるね?」

バッドエンドハッピーの自己紹介を聞き、自分と同じハッピーと名乗った事で、みゆきが目を見開き、あゆみも二人を見比べてみゆきに似て居る事を実感した。

「ウチはバッドエンドサニーや!ウチの炎で燃やしたるでえ!!」

指をパチリと鳴らすと、バッドエンドサニーの指から炎が沸き上がり、不適な笑みを浮かべた。それを見て居た咲とあかねは、

「バッドエンドサニー・・・何か攻撃的な感じだね?」

「せやねえ・・・何かウチに喧嘩売られてるようや!」

自分に喧嘩を売られているようで、あかねがジィとバッドエンドサニーを見つめると、バッドエンドサニーも、口元に笑みを浮かべながらあかねを見つめ返した。

「エエと、私はバッドエンドピースだよ!本当は、きつきも遊びに来ただけどお・・・ビューティに虐められて帰っちゃったの!!そうしたらね、今度はジョーカーに無理矢理連れて来られて、もうプンプンって感じ!!」

頭に大きなタンコブを作ったバッドエンドピースは、その時を思い出したのか、たんこぶを右手で撫でた。

「何や、あの黄色いの・・・やよいみたいやなあ?」

「本当……子供っぽい所もそっくり！」

「エッ!？」

あかねとアコにやよいに似てると言われ、やよいが少し動揺した。

「あたしはバッドエンドマーチ！チマチマした事は嫌いでねえ……これだけ居れば、歯応えがある奴に会えそうだねえ!!」

「へえ……中々挑戦的な事言ってくれるねえ」

「そうね……中々の自信家見たい」

何処か自分がプリキュアに変身した姿に似て居るバッドエンドマーチを見たなおは、闘志を漲らし、舞は、バッドエンドマーチがプライド高そうなのを見抜いた。

「私はバッドエンドビューティ！美しさこそが正義、強さこそが美しい証」

「何か、ナルシストみたいなの来たよ？」

「ええ、今の言葉……同意しかねます！」

目をパチクリしながらバッドエンドビューティを見たえりかが眩き、れいかはバッドエンドビューティの発言を否定した。

「彼女達がバッドエンドプリキュア……」

みゆきは、改めてバッドエンドプリキュアの五人を見て眩くと、

「ピンポン、ピンポン、ピンポン……正解でえす！」

「今ウチら、自分で名乗ったやろう！」

「全く……」

バッドエンドピースが、楽しそうに正解だとみゆきに告げ、みゆきは思わず呆気にとられた。バッドエンドサニーとマーチは、そんなピースに呆れ返った。

「エツ!?何、あの娘？」

「しかし、随分軽いノリやなあ……」

奏も驚きの声を出し、あかねも苦笑気味に答えると、バッドエンドビューティの顔が見る見る強張り、

「お黙りなさい！あなたが何かやる度に、私達まで恥をかくんだから」

バッドエンドビューティに頭を殴られ、バッドエンドピースの頭のタンコブが再び膨れ上がった。

「痛ああい……また殴ったああ！もう、信じられない!!」

バッドエンドピースが、隣に居るバッドエンドビューティに抗議するも、ビューティに睨まれ、思わずバッドエンドハッピーの後ろに隠れる。ジョーカーはやれやれといったジェスチャーを見せるも、視線を感じたジョーカーが、アン王女を見ると、アン王女は鋭い視線でジョーカーを見つめた。

「ジョーカーと仰いましたね……トランプ王国の秘宝、返して頂きますわ！」

「と言われましてもねえ・・・返す訳無いじゃありませんか!」

「だったら、腕づくで取返すまで・・・ダビィ!」

真琴の合図で、直ぐにダビィがラブリーコミュニケーション姿に変化すると、真琴はキュアラピースを取りだし、ラブリーコミュニケーションにセツトし、

「プリキュア!ラブリंक!!」

「L・O・V・E」

ラブリーコミュニケーションの画面に、真琴が指で「L・O・V・E」と描くと、ダビィがその都度その文字を読み上げ、真琴の身体が光に包まれ、プリキュアへと変化していった。

「勇気の刃! キュアソード!!」

変身を終えたソードは、両手でスペード型の形を作り上げると、

「このキュアソードが、愛の剣で、あなたの野望を断ち切ってみせる!!!」

バッドエンドプリキュアを右腕で指差し、ポーズを決めた。バッドエンドピースは思わずプツと吹き出し、

「誰かと思ったら、あの時の弱弱プリキュアちゃん・・・懲りずにまた私達と戦うのお?」

「例え一度敗れても、王家の秘宝を取り戻すまで、何度でも立ち向かってみせる!」

「フウウン・・・いいよ、私が相手してあげるう!」

そう言うのと、バッドエンドピースはゆっくり地上におり、ソードにおいておいでをす



ると、バカにされたと感じたソードが突進する。

「ソード、早まらないで！」

「ヤバイ！私達もプリキュアに・・・」

アン王女が忠告し、なぎさ達一同が慌てて変身アイテムを手に取ると、

「デュアルオーロラウエーブ!!」

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」

「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」

「プリキュア！メタモルフォーゼ!!」

「スカイローズ！トランスレイト!!」

「チェインジ・プリキュア！ビートアップ!!」

「プリキュア！オープンマイハート!!」

「レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション!!」

「プリキュア！スマイルチャージ!!」

「プリキュア！スイंकチャージ!!」

「光の使者・キュアブラック！」

「光の使者・キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア!!」

「輝く生命、シャイニールミナス！」

「輝く金の花！キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼！キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「天空に満ちる月！キュアブライト!!」

「大地に薫る風！キュアウインディ!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「大いなる、希望の力！キュアドリーム!!」

「情熱の、赤い炎！キュアルージュ!!」

「弾けるレモンの香り！キュアレモネード!!」

「安らぎの、緑の大地！キュアミント!!」

「知性の青き泉！キュアアクア!!」

「希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく5つの心！Yes！プリキュア5!!」

「青いバラは秘密のしるし！ミルキイローズ!!」

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュ、キュアピーチ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ、キュアベリー!!」

「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュ、キュアパイン!!」

「真つ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ、キュアパッション！！」  
「二」レッツ！プリキュア！！」

「大地に咲く一輪の花・キュアブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花・キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花・キュアサンシャイン！」

「月光に冴える一輪の花・キュアムーンライト！！」

「二」ハートキャッチプリキュア！！」

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！！」

「爪弾くは、たおやかな調べ！キュアリズム！！」

「爪弾くは、魂の調べ！キュアビート！！」

「爪弾くは、女神の調べ！キュアミューズ！！」

「二」届け！四人の組曲！！スイートプリキュア！！」

「キラキラ輝く、未来の光！キュアハッピー！！」

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー！！」

「ピカピカぴかりん！じゃんけん・・・ポン！キュアピース！！」

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ！！」

「しんしんと降り積もる、清き心！キュアビューティ！！」

「「「5つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア!!」」」

「思いよ、届け！キュアエコー!!」

（本当にこれだけの方がプリキュアに・・・何と心強い事でしょう!）

変身を終えた3人のプリキュアが姿を現わし、アン王女はその頼もしさに目を輝かせた。それとは逆に、見て居たバッドエンドプリキュアは激しく動揺し、

「エエエ!?な、何よ、あの数?」

「ちよ、ちよい待ち!ウチら、五人であんな大人数と戦わなきゃアカンのかあ?」

「上等・・・と言いたいけど、さすがにあたし達だけじゃキツイだろう?」

「ハッキリ言えば・・・今の私達だけで、彼女達に勝てる見込みは無いわ!」

バッドエンドハッピー、サニー、マーチ、ビューティの四人も、プリキュア達の人数に戦意を喪失仕掛ける。険しい表情を浮かべたジョーカーは、

（そう・・・まともに戦えば、如何に私も加わったとしても、勝ち目は無い・・・だが、裏を返せば!）

ジョーカーが何かを思案した時、ソードの背後に現われた沢山のプリキュア達を見て呆然としたバッドエンドピースは、突然シクシク泣き出し、思わず駆けていたソードは立ち止まり様子を伺うと、

「本当はね、あなた達と戦いたくないの!この水晶だって、今すぐ返して上げたい・・・」

でも、これを上げちゃったら．．．私達死んじゃうの！グスン．．．  
「エツ!?!．．．それ本当?」

水晶を手放すと死んでしまう．．．

バッドエンドピースの言葉がソードの胸を打ち、思わずソードはバッドエンドピースの言葉に耳を傾けると、バッドエンドピースは話を続け、

「うん! 酷いよねえ．．．でも、この前あなたには酷い事しちゃったし」

バッドエンドピースが、無理矢理水晶を取ろうと気付き、ソードは慌ててバッドエンドピースの手を取り止めさせると、

「バカ! 無茶しないで!! プリキュアのみんなが居るし、何かきつと良い考えが浮かぶ筈よ．．．だから、一緒に方法を考えましょう?」

「ウン! 優しいね．．．．．なあんちやつてええ!!」

「エツ!?!．．．キヤアアアアアアアアアア」

バッドエンドピースは、ソードを嘔泣きで欺き、ソードは、バッドエンドピースの雷攻撃を受けて身体を感電させた。堪らず悲鳴を上げたソードの身を案じたアン王女は、

「ソード!!」

「な、何てあざとい奴だ．．．」

「さすがにやよいに似とるだけある」

ソードを騙したバッドエンドピースを見て、マーチとサニーが感想を述べると、聞いていたピースは困惑しながら、

「エエエ!? サニー、何でそこで私の名前が出るの?」

「そんな事言ってる場合じゃ無い! みんな、ソードを助けるよ!!」

ドリームの合図と共に、プリキュア達は心配そうにソードに駆け寄ろうとした時、ジョーカーの口元がニタリと吊り上がり、

「これは使えますねえ・・・」

ジョーカーは、地上に居るソードとバッドエンドピースの前に降り立った。

「ご苦労様でした! バッドエンドピース、あなたにしては上出来です!!」

「エへへへへー!」

ジョーカーに褒められ、得意気にするバッドエンドピース、ジョーカーは、目の前で藻掻くソードを見つめながら、ランプカードを取り出すと、中から黒い水晶を取りだし、再びランプカードを何処かに仕舞い込んだ。

「さあ、あなたをバッドな世界にご招待してあげましょう!」

「エツ!! これは・・・キヤアアアアアアアアアア」

ジョーカーがソードに黒い水晶を翳すと、見る見るソードの身体が水晶の中に引き込まれた。

「ソードオオオオ!!」

アン王女が、プリキュア達が、水晶の中に吸い込まれたソードの身を案じ叫び、ジョーカーの笑い声が周囲に木霊した・・・

第八十話：真琴くキュアソードく

完

## 第八十一話：捕らわれたプリキュア（前編）

## 1、ジョーカーの提案

キュアソードは、バッドエンドピースの術中に嵌り、ジョーカーが手にしている黒い水晶玉の中に捕らわれた。ソードを救うべく、ジョーカー目掛け駆け出したプリキュア達を、ジョーカーは静止させると、

「お待ちなさい！私がこの黒水晶玉を壊したら……中に居るキュアソードも、この黒水晶玉同様粉々になりますよ!!」

ジョーカーの忠告は、今にも向かって来そうなプリキュア達の動きを止めた。嘘なのか、真実なのか、判断が付かない状況では、迂闊な行動は出来なかった。ジョーカーはニヤリとすると、

「そう、それが賢い選択ですよ!」

「クツ……卑怯者!」

思わずピーチがジョーカーを罵るも、ジョーカーはその言葉すら悦に浸るようで悶え、

「良いですよ!その苦悩の声……アツ、そうそう、この黒水晶ですけどね、この中に長



く居ると・・・絶望の虜になって、何もする気を失う素晴らしい場所ですよ!!」  
「何ですって!?!」

ジョーカーの言葉を聞くや、アン王女の顔色が変わった。妹同然のソードの身を案じると居たたまれなかった。そんなアン王女の心中を察したかのように、誰に命じられた訳でも無い筈なのに、プリキュア達はジョーカーを包囲するように散り、ジョーカーは、プリキュア達の素早い行動力に見張り、

(さすがに素早い・・・まともにやり合えばこちらが不利なのは明白!ならばここは・・・)  
「ノンノン、そう憤らないで下さい!閉じ込めたキュアソードを、あなた方に返して上げてもよろしいのですよ?」

「どういう事?」

怪訝な表情を浮かべたブラックがジョーカーに問うと、ジョーカーは右手の人差し指を振りながら、

「チツチツチツ・・・どうです、一つ私達とあなた方プリキュアとでゲームをしませんか?あなた方が勝てば、キュアソードを返すとお約束しましょう!ですが、あなた方が敗れば・・・キュアソード同様、この黒水晶玉の中に閉じ込められる。簡単なゲームでしょう?」

「ふざけないで!誰があんた達とゲーム何てするもんですか!!」

不機嫌そうにピーチが拒否をすると、ジョーカーは残念そうな表情を浮かべ、

「そうですかあ!? それだとキュアソードは、永遠に黒水晶の中で絶望に沈んだままですよ? まあ、あなたの方が泣きわめく姿を見るのも一興ですから、このように黒水晶玉を……」

「な、何を!? ダ、ダメエエエ!」

「止めてええ!!」

ジョーカーは、黒水晶玉を手から落とすと、メロデイが、アン王女が、思わず悲鳴を上げた。ニヤリとしたジョーカーは、足でポンと黒水晶玉を蹴り上げ、再び手に持つと、見てられないとばかり、ブラックが代表したかのようにジョーカーに話し掛け、

「分かった……あんたの言う通りにする! その代り、私達が勝つたら……」

「ええ、キュアソードを返すとお約束しましょう! ですが……」

「分かってる、私達が負けたら、ソードと同じ目に合うって事でしよう?」

「そういう事です! あっ、そうそう、対戦メンバーは私が決めますが、依存は無いでしょうねえ?」

「嫌だつて言っても、どうせそうするくせに」

少し膨れっ面をしたドリームが、ジョーカーに嫌みを言うも、ジョーカーは笑みを浮かべながら、

「ウフフフ、バレてました?・・・では、始めましょう!バッドエンドプリキュアVSプリキュア、クイズ大会!!」

ジョーカーは楽しみにハシヤギ、プリキュア達とアン王女は、そんなジョーカーを冷ややかに見つめた・・・

## 2、バッドエンドビューティVSピンクチーム

半ば無理矢理始まったプリキュアとバッドエンドプリキュアとの戦い・・・

妖精達も成り行きを見守り観戦していた。魔王は、側に居たタルトに話し掛け、「何だか大変な事になったカゲエ・・・でも、あいつらみゆき達にそっくりカゲ」

「せやなあ、バッドエンドプリキュア・・・何か嫌な予感がしよる」

(けど、色気ではみゆき達よりあいつらの方が上カゲ)

キャロットから覗く黒タイツ姿を見て、魔王は目を細めた。だが、ソードの身を案じ、不安げな表情を浮かべたアン王女を見ると、

「大丈夫カゲ!みゆき達がきつとソードを助けてくれるカゲ」

「ええ、ありがとう・・・ですが」

ジョーカーの真意が読めず、アン王女の不安が晴れる事は無かった・・・

ジョーカーは、トランプカードからマイクを取り出すと、まるで司会者のように両

チームの間に立ち、

「では、第二回戦の参加メンバーを発表致しましょう……キュアブラック、キュアブルーム、キュアドリーム、キュアピーチ」

「って事は、次は私の名前ですね！」

少し緊張しながら身構えたプロツサムだったが、

「キュアメロディ、キュアハッピー、そして、バッドエンドプリキュアからは……バッドエンドビューティさんに参加して頂きます!!」

「フッフフ、初戦に私を選ぶとは、ジョーカーも中々分かってるわね！」

バッドエンドビューティは、口元に笑みを浮かべながら、自信満々に前に出ると、

「ビューティ、ガンバ！」

「止めて！あなたに応援されると……テンションが下がるから」

「ブウウウ、折角応援して上げたのにいい！」

折角応援して上げたのに、バッドエンドビューティに拒否されて、ムツとするバッドエンドピースであった。一方、ピンクチームの中で、只一人呼ばれなかったプロツサムは困惑し、

「な、何で私だけ呼ばれなかったんでしょうか？」

「ウゥン……存在感が無かった？」

「ガ~~~~ン」

腕組みしながらポツリと言ったマリンの言葉に、ブロッサムは変顔浮かべながら落ち込み、サンシャインとレモネードに慰められた。

「何で私達を最初に選んだかは知らないけど・・・みんな、ソードを取返すよ！ファイトオオ!!」

「「「オオオオ!!」」」

円陣を組みながら手を合わせたブラック、ブルーム、ドリーム、ピーチ、メロディ、ハッピーが、ブラックの掛け声と共に返事を返し、威勢良く前に出た。

（ウフフフ、それぞれのチームの中心とも呼べるあなた達、あなた達を先ず黒水晶行きにすれば、他のメンバーの動揺を誘える。まあ、バッドエンドビューティに勝つ事は出来ないでしょうが、キュアブロッサムを外したのは、万が一の保険・・・後の六人など、知力勝負では恐れるに足りず）

ジョーカーは、前に出てきたピンクチームのメンバーを見てほくそ笑んだ。

「みんな、頑張つて下さい!」

「ファイトオオ!」

「いや、体育祭じゃないんだから!」

ルミナスとビートがピンクチームに声援を送り、ルージュは、何やら学校行事の乗り

に困惑した。

（このメンバーの中で、敢えてプロツサムを外した理由がありそうね・・・）

ムーンライトの脳裏に、一抹の不安が頭を過ぎった。

「それでは始めましょう！ 第一回戦！ お勉強対決!!」

「「「「エツ!?!」」」」

「フツ、造作も無い!」

お勉強対決と聞き、ブラック、ブルーム、ドリーム、ピーチ、メロディ、ハッピーの目が同時に点になり、バッドエンドビューティは、長い髪を掻き上げ余裕の表情を浮かべた。ジョーカーは、ポンと手を叩いてホワイトを見ると、

「そうそう、出場選手達に答えを教えたら、その場で失格ですから！ 教えた方も同罪で、黒水晶行きですからね?」

「つて事は、みんなが自力で何とかするしかないようね・・・」

ホワイトがポツリと呟くと、ブラック、ブルーム、ドリーム、ピーチ、メロディ、ハッピーの六人は激しく動揺し、

「ちよつとおお! 何でよりにもよって、お勉強対決で私達を呼ぶのよ!」

「「「「そうだそうだ!」」」」

メロディの言葉に、他の五人が同意する。続いてブラックが、

「そういうのは、ホワイトやムーンライト、アクアやビューティ達とやりなさいよねえ！」

「「「「そうだそうだ！」」」」

ブラツクの言葉に、他の五人が同意する。続いてブルームが、

「自慢にならないけど、私達は勉強苦手だからねえ！」

「「「「そうだそうだ！」」」」

ブルームの言葉に、他の五人が同意する。続いてドリームが、

「得意科目何か無いんだからねえ！」

「「「「そうだそうだ！・・・アレエ!?」」」」

体育が得意なブラツクとブルーム、体育と音楽は得意なメロディ、家庭科はわりと得意なピーチが今回は乗らず、ハッピーだけがドリームの言葉に同意した。

「何て情けない事を言うのかしら!?!」

「彼女達・・・戦う前から勝ちを投げてるようね?」

ブライトとウインディが溜息混じりに呟き、

「プロツサムを選ばなかった理由が分かった気がします!」

「プロツサムは、どちらかと言えば優等生だからね」

レモネードの言葉に、サンシャインも相槌を打ち、プロツサムの表情が少し明るくな

ると、

「じゃあ、私が選ばれなかったのは、影が薄いからじゃ無かったんですね？」

（気にしてたんだ？）

存在感が無くて呼ばれなかった訳じゃ無いと知り、ブロッサムはホッと安堵し、見て居たサンシャインとレモネードが苦笑する。

「ダンス対決なら、そこそこ自信あつただけど」

「私は、スポーツ対決が良かったなあ・・・」

「私も！」

「うんうん、スポーツ対決とかなら喜んで参加したよね！」

「ウーン・・・私は大食い対決かなあ？」

「私は、絵本当てクイズが良かったです！」

現実逃避するように、ピーチはダンス、メロディ、ブルーム、ブラックはスポーツ、ドリームは大食い、ハッピーは絵本と、自分の得意分野で勝負したかったと語り合っていると、

「コリアア！あんた達、情けない事言うなあああ!!」

「もつとやる気を見せなさいよね！」

半ば勝利を最初から諦めているようなピンクチームを見て、ルージュとローズが発破



を掛け、ホワイトはブラックをフォローするように、

「ブラック！ブラックは大学生何だから、冷静に考えれば大丈夫!!」

「そんな事言つたてさあ・・・」

「なぎさ達は、そんなに勉強が苦手カゲ？」

「せやな・・・賢そうには見えへんなあ」

「別名・・・おバカチームって言われてるロプ」

「「「「言われてな〜〜い!」」」」

魔王とタルト、シロップの会話が聞こえたのか、六人が三人に一斉に抗議した。

ジョーカーから試験用紙を渡され、用意された机と椅子に座つた一同、中身を確認すると、数学、英語、国語、社会、理科の問題が出されていて、見る見るピンクチームは変顔を浮かべ、情け無さそうな表情で、仲間達に縋るような視線を送つた。

「駄目だ、ありや駄目だわ!」

「それに比べて・・・バッドエンドビューティを見てみて!もうスラスラ解き始めているわ!!」

ルージユが首を振り、アクアはバッドエンドビューティを指差し、一同に教えた。既に勝敗が決したような対決は、こうして幕を開けた。

30分後・・・

同じようなポーズで机にへたり込み、ダウンしているピンクチーム、自信満々にドヤ顔を浮かべるバッドエンドビューティ、ジョーカーはテストを回収し、点数を付け始めると、

「ではキュアホワイト、あなたも代表して確認して下さい！」

「分かったわ！」

ジョーカーにテスト用紙を渡され、一同の答え合わせを見ると、見る見るホワイトの表情が曇り、首をガツクリ垂れ、トホホ顔を浮かべながらジョーカーに答案を返した。戻って来たホワイトに、ムーンライトが話し掛け、

「ホワイト、どうだった？」

「ハア・・・全然駄目、勝負になってないわ」

ホワイトは、仲間達を見て溜息を付いた。ジョーカーは再びマイクを握ると、

「では、結果発表です！バッドエンドビューティさん・・・100点！お見事!!」

「フツ、当然の結果よ！」

バッドエンドビューティは、当然の結果だとばかり、口元に笑みを浮かべた。ジョーカーは、些か呆れ気味に、

「続いて、キュアブラック30点、キュアブルーム28点、キュアドリーム5点、キュアピーチ26点、キュアメロディ9点、キュアハッピー1点・・・敵であるあなた方

にこんな事言うのも何ですけど・・・あなた方、もっと勉強した方が良いですよ？6人合せても、バッドエンドビューティさんの点に及ばないとは・・・」

「ジョーカーの言葉に同意するのも何だけど・・・その通りだと思うー！」

「「「「だから嫌だつて言ったのにいいい「「「「」

敵であるジョーカー、仲間のホワイトにも駄目出しされ、ピンクチームの六人は、皆頬を膨らませ、そう言い残しながら黒水晶玉に吸い込まれた・・・

「「ブラック！」「」

「「ブルーム！」「」

「「「「ドリーム！」「」

「「ピーチ！」「」

「「メロディイイ！！」「」

「「「ハッピー！」「」

吸い込まれた六人の名を心配そうに呼ぶ仲間達、それとは逆に、  
「やっぱりおバカチームだったカゲ」

魔王が呆れたようにポツリと呟くと、側に居た妖精達が無言で頷いた。

(先ず六人・・・)

ジョーカーは、黒水晶玉を大事に撫で、笑みを浮かべた・・・

## 3、バッドエンドハッピーVSプリキュア優等生チーム

薄暗い廃墟のような遊園地の中を、キュアソードは心細げに彷徨っていた。黒水晶玉の中に閉じ込められた事は、ソードにも薄々分かつていた。何とか出口を見付けようと歩き回ってみても、どこにも出口らしき物は見当たらず、ソードは不安から心細さが滲み出ていた。歩き疲れたソードは、壊れたコーヒークップのような遊具に座り、思わず溜息を付くも、

「ソード、元氣出すビー！アン王女や、プリキュアのみんなが、きつと助けに来てくれるビー」

「ダビィ・・・うん、そうだねー」

ダビィの励ましで元氣を取り戻したソードとダビィの耳に、叫び声が聞こえてきた。良く耳を敏（そばだ）ててみると、

「「「「「キヤアアアアア」」」」」

砂に覆われたメリーゴーランドの側に、上空からブラック達六人が落下して目を回して居た。思わずソードは駆け寄り、

「みんなあ！助けに来てくれたの？」

「イテテテ・・・ソード!?無事で良かった！いやあ、助けに来たと言うか」

「勝負に負けて、この中に吸い込まれたんだよねえ……」

お尻を撫でながら立ち上がったメロディとハッピーの会話を聞き、ソードは思わず目が点になり、

「エエエエ!!?」

助けに来てくれたと思ったソードだったが、どうやらブラック達六人もこの中に吸収されたと知り、困惑するソードだった。

「大丈夫!まだ向こうにはホワイト達が居る!」

(ホワイト、頼んだよ!)

信頼するパートナーに思いを託したブラックだった……

「では、第二回戦を始めましょう!参加メンバーは……キュアホワイト、キュアムーンライト、キュアビューティ、キュアアクア、ミルキイローズ、キュアリズム、キュアイーグレット、そして、バッドエンドハッピー!」

「エエエ!?私?……ウゥン、勉強苦手なんだよなあ」

(それは分かっていますよ!ですから……)

ジョーカーは口元に笑みを浮かべると、

「では第二回戦、嘘か本当かクイズ!このクイズは、これから私が出す問題が、嘘か本当

か答えて下さい！なお、プリキュアの皆さんは、話し合つて答えを選んで下さい！！この試合は、どちらかが不正解になった時点で終了となります！！そうそう、第二回戦からは、黒水晶玉の中に居る皆さんにも聞こえるようにサービス致しましょう・・・」

「どうせなら・・・さっきの試合に出たかったわね」

「ええ・・・でも、みんなを助ける為にも、気持ちを切り替えましょう！」

ムーンライトの言葉に同意しながらも、次戦に備えるホワイトだったが、ジョーカーは、一同がまだ動揺している事を見抜いて居た・・・

「では、第一問・・・キュアブラックの靴下は匂う」

「「「「「ハア?!」」」」」」

「良かったあ！お勉強じゃないなら・・・」

問題のバカバカしさに、思わずプリキュア達は呆れたように聞き返し、バッドエンドハッピーは、頭を使うような問題じゃないと知り安堵した。

一方、黒水晶の中では・・・

「ちよつとおおお！何て問題出すのよおおおお!」

黒水晶の中で、ブラックが地団駄踏みながら怒っていた・・・

「どうしました？答えないとその時点で失格になりますよ?」

「ウゥゥン・・・キュアブラックって、あの黒い人でしょう?何かブーツみたいの履いて

たし・・・匂うと思うからあ、本当！」

腕組みしながら考えたバッドエンドハッピーは、匂うと答え、一斉にホワイトを見たプリキュアチーム、ホワイトは俯きながら小さな声で、

「ちよつとだけよ！ちよつとだけ・・・匂うから、本当」

「ピンポン！両チームとも正解で～す!!」

ジョーカーが両チームとも正解だと告げるも、どこか喜べないプリキュアチーム、黒水晶の中のブラックは、体育座りをしていじけていた・・・

「続いて第二問・・・キュアブルームは、絵が下手すぎて敵にアドバイスされた事がある」  
「また変な問題が・・・」

「ここはイーグレットに任せるわ！」

リズムが困惑し、アクアがイーグレットに任せると、困惑しながらイーグレットが頷き、

「答えは・・・本当よ！で、でも、私は個性があつて良いと思うの！」

「私はあ・・・どうでも良いから本当でいいや」

バッドエンドハッピーは山勘で本当だと答えた。

一方、黒水晶内のブルームは・・・

「下手で悪かったわねええ！これでも舞には、个性的で良いわよつて褒められてるんだ

からあ!!」

「それって……遠回しに下手って……モグモグモグ」

ソードが小首を傾げながら何か言おうとするのを、ドリームとピーチが、慌ててソードの口を塞ぎ黙らせた。

「ピンポン! 両チーム共に今回も正解です! 続いて第三問……キュアドリームは、非処女である!」

思わずその場に居た全員の顔が真っ赤になり、黒水晶の中に居るドリームを、ブラック、ブルーム、ピーチ、メロディ、ハッピーが、興味津々な表情で見つめ、ソードは意味が分からず小首を傾げた。顔を真っ赤にしたドリームは、地団駄踏みながら、

「そんなの嘘よおおおお!!」

「「「「本当!」」」」」

ブラック達は、ドリームをからかうような視線で見つめた。

「な、何て問題出すのよ?」

ローズが目点をしながら呟き、ホワイト達の視線がアクアとローズに注がれるも、二人も困惑し、

「アクア、ローズ!」

「エエエ!? そ、そんな事聞かれても、私は知らないわ!!」



「でも、ドリームって・・・ココさんと仲良いですよね?」

ビューティに聞かれたアクアは困惑し、ローズは首を横に振りながら、

「ココ様は、そんなはしたない真似絶対しないわ!!」

意見が割れるプリキュアチームに対し、バッドエンドハッピーは手を上げると、

「ハイハイ! 非処女って何?」

「ああ、非処女って言うのはですねえ・・・」

「!!!」説明しなくて良いわよおお!!」!!!」

慌ててホワイト達は、バッドエンドハッピーに説明しそうなジョーカーを遮った。

「じゃあ、分からないけど・・・二問本当だったから、今回は嘘にするう」

意味が分からず、再び山勘で答えたバッドエンドハッピーに対し、ホワイト達は、円

になってヒソヒソ話を始め、答えを纏めると、

「答えは嘘よ! ドリームなら、清い交際をしている筈だわ!!」

「アクア!」

アクアが代表して答えると、黒水晶の中で聞いていたドリームはウンウン頷いた。

「ピンポン! 両チーム共に正解です! キュアドリームは、まだキスしかしていません!!」

「!!!」エエエ!? キスはしてたの?」!!!」

「い、何時の間に!」

アクア達六人が答えの補足に驚き、ローズも呆然とする。黒水晶の中で、耳まで真っ赤にしたドリームは、

「みんなの前で、何て事言うのよおおおお!!」

「じゃあ、キスは本当なんだ?」

少し意地悪そうにブラックがドリームに聞くと、ブルーム、ピーチ、メロディ、ハッピーがからかうように、

「「「ビュービュービュー」」」

「止めてえええ!」

一同にからかわれ、益々赤くなるドリームだった・・・

「では、第四問・・・キュアピーチは、変身前の姿で漫才大会に出た事がある」  
「漫才!?!」

「ピーチ達って、ダンス大会に出てたわよねえ?」

ムーンライトとホワイトは、ピーチ達ならダンス大会には出てても、漫才になど出ないでしょうと言うと、他のメンバーも次々に同意しだし、聞き耳立てて居たベリーの表情は焦りだし、

（ま、まずい・・・ここはあたしが!）

ベリーは、パインとパッションを相手に、ツツコミのジェスチャーを始め、何とか仲

間違に知らせようとする。ジョーカーがこちらを見ると、体操しているように誤魔化した。

(みんな、気付いてよね! あたし達、成り行きで漫才大会に出た事あるんだから!!)

「今、チラリと見えたんだけど・・・そう言えばベリーって、ルージュやサニー程じゃないけど、結構ツツコミしてない?」

「そう言えば、えりかと漫才のようなやり取りしてたわね?」

「って事は・・・」

「ピーチ達は、漫才大会に出た事があると思うから本当!」

「私もそう思うなあ・・・あの人達、お笑い系っぽいし」

話が纏まった一同、プリキュア達も、バッドエンドハッピーも本当だと答えると、ジョーカーはチラリとベリーを見つめ、

「キュアベリー、あなた変な事してませんでした?」

「してないわよ! 待ってる間退屈だから、こうして腕を動かしてだけよ・・・ヨッ!!」

「そうですかあ? なら良いんですけど・・・」

(やったあ! 上手く誤魔化した・・・あたし、完璧!!)

ベリーが軽く拳を握り喜びを露わにし、ジョーカーは少し残念そうな表情を浮かべながら、

「またもや両チーム正解です！では、第五問……キュアマリンは、敵に自分の学校の破壊を依頼した事がある!!」

このクイズには一同から響めきが沸き起り、マリンの顔から脂汗が流れ始める。

「いくら何でも、敵に学校の破壊を依頼する何て無いわよねえ?」

「どうなの、ムーンライト?」

「さあ、私も聞いた事無いわね?」

（そりゃあ、ムーンライトに話したら……あたし、只じやすまないっしょ）

ダラダラ脂汗を流すマリン、そんなマリンに気付かず、プリキュア達は答えを決めると、

「じゃあ、決まりね!」

「私達プリキュアが、敵に学校の破壊を依頼するなど……断じてありません!答えは嘘です!!」

一同を代表してビューティがハッキリ断言すると、プロツサムとサンシャインの冷ややかな視線がマリンに浴びせられ、マリンは腕を頭の後ろで組んで、口笛吹きながら誤魔化した。

「私はあると思うなあ……学校何かなければいいのにいつて思う事もあるだろうし」

バッドエンドハッピーは本当だと答え、五問目にしてようやく答えが別れた。ジョー

カーは待つてましたとばかり、マイクを持っていた手に力が入り、

「ようやく意見が分かれました！正解は・・・本当でしたああ!!」

「嘘です！私達プリキュアが・・・」

学校を破壊するのを依頼したなどと、そんな事を信じられないビューティが、ジョーカーに抗議しようとした時、申し訳無さそうな表情を浮かべたプロツサムとサンシャインは、

「あのう・・・スイマセン、本当何です」

「夏休みの宿題をやつてなかったマリンが、小学校を壊そうとしていたデザトリアンに・・・」

「いやあ、若気の至りつて奴で・・・いやあ、参った、参った」

軽いノリで誤魔化そうとしたマリンであったが、ホワイト達から立ち上る、殺気にも似た闘気を受け、思わず2、3歩後退った。

「マリン・・・どう言う事?」

「私は・・・信じて居ました!」

「いや、その、若気の・・・」

リズムとビューティに問い詰められ、マリンが思わず言葉に詰まり、更にイーグレットとローズも険しい表情でマリンを見つめながら、

「良く聞こえ無かったんだけど？」

「マリリン・・・あなた？」

「いや、だから、そのおお」

「済んでしまった事は仕方がないわ！」

「ええ、誰にでも過ちはあるもの」

「そうね・・・でも、マリリン」

「二後で話があるから!!」

マリリンをフォローしているようで、脅しているアクア、ホワイト、ムーンライト、三人の凄みを受けたマリリンは、思わずヘナヘナ腰を抜かし、7人はジョーカーの持つ黒水晶に吸い込まれて行った・・・

「ヤバイよおおお！メツチャ怒ってたよおおお」

頭を抱えて悶えるマリリンに、ベリーはポンポン頭を軽く叩き、

「何やってるのよ！そこはあたしみたいに、みんなにヒントを出さなきゃ!!」

ベリーがマリリンに注意した時、思わずポロリとヒントを与えた事を喋ったベリー、ジョーカーの目が妖しく輝くと、ベリー目掛け黒水晶玉を掲げ、

「私、答えを教えたら失格って言いましたよねえ？」

「エツ!?エエエとお、別に答えは教えてないわよ！ちよつとヒントを・・・」

「駄目です！キュアベリー・・・失格です!!」

「何でよおおおおお!?」

「ベリー!!」

ヒントを与えた事がバレ、ベリーも黒水晶玉の中に吸い込まれ、パインとパッションが、心配そうにベリーの名を呼んだ。

「何やってるのよおおお!」

勝負する前に吸い込まれたベリーを見て、ルージュは困惑気味に呟き、ミューズも困惑気味に、

「不味いわねえ!もうソードの他に13人もあの中に・・・」

「こうなったら・・・マリリン!汚名返上の為にも、マリリンが何とかするしかありません!!」

「エエエ!?あたし?・・・」

ブロッサムに指名され、マリリンは激しく動揺した・・・

第八十一話：捕らわれたプリキュア（前編）

完

## 第八十二話：捕らわれたプリキュア（後編）

1、バッドエンドマーチVSチームマリ

マリンの過去にしかした行為により、ホワイト達とヒントを与えたベリーも、黒水晶玉の中に捕らわれた・・・

「「「「「キヤアアアアア」」」」」

黒水晶内に捕らわれた一同の耳に、悲鳴が聞こえて上空を見上げると、ピンクチームの上にホワイト達が落下して、ピンクチームの六人を押しつぶした。次々に起き上がり、押しつぶされたピンクチームを心配そうに見つめたホワイトは、

「だ、大丈夫!?!」

「「「「「大丈夫じゃなああい!」」」」」

ブラック達は、一斉に変顔浮かべながら抗議をした。ようやく起き上がったブラックだったが、再び上空から悲鳴が聞こえ、見上げたブラックの上に、ベリーがお尻から落下してブラックを押しつぶした。ベリーはお尻を摩りながら、

「イタタタタ・・・」

「ベリー!?!どうしてあなたまで?」



第二回戦に参加していないベリーまで、黒水晶内に捕らわれた事で、アクアが訝りながらベリーに問うと、ベリーは頭を掻きながら、

「いやあ、ジョーカーに、みんなにヒントを出してたのがバレちゃって・・・失格にされちゃったのよねえ」

苦笑混じりに一同に語ったベリー、聞いていたピーチは笑いながら、

「アハハハ！もう、ベリーだったらしょうがないなあ！」

「ピーチ、あなたに言われたくないわよ！」

勉強対決で、良い所無く終わったピーチには言われたく無いようで、ベリーがピーチに文句を言っていると、ベリーのお尻の下の物体がモゾモゾ動き出し、

「どうでもいいから、早く退いて！」

「ブラック!?ゴメン、下に居るとは・・・」

苦笑しながら立ち上がったベリーが、手を差しのぼしてブラックを助け起こした。ブラックは変顔浮かべながらも、

「まさか、ホワイト達も吸い込まれちゃう何て・・・」

「だってえ、学校の破壊を敵に頼む何て・・・普通思い浮かばないわ」

膨れっ面したリズムの言葉を聞いたメロディは、腕組みしながら考え、

「まあ、学校破壊を敵に頼むのはやり過ぎだけど・・・気持ちには分からないでも無いよ」

「「「「「エッ?!」」」」」

メロディの発言に、ホワイト達優等生チームは、驚いた表情を浮かべた。だが、ブラック達はウンウン頷き、

「だよ、学校は好きだけど・・・宿題忘れた時って、学校行く足取り重かったしさ」  
「そうだよ!夏休みに宿題出すのは問題だよねえ?」

「「「「「そうそう」」」」」

ブラックの発言にドリームも乗り、ブルーム、ピーチ、メロディ、ハッピーも頷いた。  
ローズは呆れたようにブラック達を見つめ、

「あなた達ねえ・・・だからバッドエンドビューティに惨敗するのよ」

「「「「「あれは、私達を選んだジョーカーが悪いの!!」」」」」

ブラック達は、同じような表情で、自分達を選んだジョーカーが悪いと文句を言い、ホワイト達は呆れた。

（この人達、何で余裕何だろう?!私達、捕まっちゃってるのにな?）

ソードは、一同のやり取りを聞いていて、不思議そうに小首を傾げた。まだこの時のソードには、一同が残った仲間達を信頼し、心に余裕を持っている事に気付く事は無かった・・・

失態を犯したマリンに対し、ブロッサムは、マリンがこの窮地を救うよう提案した。少し考えたマリンは、覚悟を決めたのか鼻の穴を広げながら、

「やるっしゅー！」

「その意気ですー！」

ブロッサムが満足そうに頷くも、直ぐにマリンは縋るような目で、ブロッサム、サンシャイン、レモネードを見つめ、

「ブロッサム、サンシャイン、レモネード……あたし達、友達だよな？親友だよな？」  
「急にどうしたんですか？勿論、親友ですよー！」

ブロッサムが、笑顔を浮かべながら親友だとマリンに優しく語り掛け、サンシャインとレモネードも同意した。マリンは目をキラキラ輝かせると、ジョーカーの方を向き、  
「つて事で、あたしとブロッサム、サンシャイン、レモネードが次に行くっしゅー！」

「「エッ?!」」

半ば無理矢理チームのメンバーに加えられ、ブロッサムとサンシャイン、レモネードがキョトンとする。ジョーカーはマリン達を見つめ、

「第三回戦に出たいんですかあ？良いでしょう！では、第三回戦の参加メンバーを発表します……キュアマリン、キュアブロッサム、キュアサンシャイン、キュアレモネード、そして、バッドエンドマーチさん!!」

「ようやくあたしの出番か！」

バッドエンドマーチは、待たされたイライラを発散するように、その場で素早い蹴りを繰り返した。一方、困惑しているプロツサム、サンシャイン、レモネードの手を取ったマリンは、

「チームマリン！ムーンライト達に怒られる時は……一緒だよ!!」

「それが狙いだっただんですかあ？」

「マリン、そういうのは自分で何とかしないと……」

「マリン、狡いです！」

「いいから、いいから」

マリンの術中に嵌った、プロツサム、サンシャイン、レモネードも、渋々前に出ると、バッドエンドマーチは、四人を威嚇するように睨み始めた。

（さて、何の対決にしましょうかねえ？キュアマリンが居る以上、お笑い対決ではこちらが不利ですし……）

ジョーカーは、次はどんな戦いにしようかと考えるも、バッドエンドマーチとマリンを見比べるや、ある対決方法が思い浮かんだ。

「では、第三回戦……お色気対決！」

「「「「ハア!?!」」」」

予想外の対決を提案され、マリン達、バッドエンドマーチが、同時にジョーカーに聞き返した。聞いていた魔王の目はキラキラ輝き、勢い込んでジョーカーに話し掛け、

「俺を、俺を審判にするカゲエ！」

「ハア!? あなた・・・プリキュア達の仲間でしょう?」

「私情は挟まないカゲ！」

「と言われましてもねえ・・・ン!?!」

魔王が審判に立候補した事で、困惑したジョーカーだったが、バッドエンドマーチをイヤらしい視線で見つめ、バッドエンドマーチに、シッシと手で追い払われる魔王を見て考えを改め、

「まあ良いでしょう・・・では、審判はあなたにお任せしましょう！」

「任せるカゲ！」

「こいつで良いのか?」

魔王は嬉しそうに何度も頷き、バッドエンドマーチは嫌そうな表情を浮かべた。ブロッサム達は、魔王が審判だと聞き表情を和らげると、

「これはチャンスですね！」

「うん・・・お色気対決っていう所に一抹の不安もあるけど・・・」

「でも、魔王はあれで中々機転が利くよ」

ブロッサム、サンシャイン、レモネードがヒソヒソ話で会話をしていると、マリンは変顔浮かべながら、

「嫌な予感がするっしゅ」

「でも・・・お色気って、どういう事をすれば良いんでしょうか？」

ブロッサムは、こういう事には疎いようで、仲間達に聞いてみると、アイドルをしいたレモネードは少し考え、

「ウーン、グラビアアイドルとかは、セクシーなポーズを取ったりしてるね」

「そういうのは、私は苦手かなあ・・・」

レモネードの話を聞いたサンシャインは、そういう行為は苦手だと一同に告げた。幼き頃より、武道に勤しんでいたサンシャインに取っては、そういう行為は興味も無く、知識に欠けていた。一方のバッドエンドマーチも困惑していて、

「一体、どうしろって言うんだ？」

要領が飲み込めないバッドエンドマーチが、少しイライラし始めると、見て居たバッドエンドピースが話し掛け、

「マーチ！こういうのはねえ、チラリと中が見えそうならいスカートを捲ったり、ウインクしながら投げキッスとかすると良いらしいよ！夜中にテレビでやってたあ!!」

「そ、それをあたしにやれって言うのか!?!じよ、冗談じゃ無いよ?」

珍しく取り乱したバッドエンドマーチだったが、そういう仕草が魔王には新鮮に映り、

「今の表情は中々高ポイントだったカゲ！」

魔王は満足そうに何度も頷くと、変顔浮かべたブロッサムは慌てた様子で、

「エッ!?もう審査は始まってたんですかあ?」

「当然カゲ!さあ、お前達も始めるカゲ!!」

「魔王!・・・分かつてるよね?」

「ちゃんとあたし達が勝つように・・・」

「私情は挟まないカゲ!」

レモネードとマリンは、魔王に自分達が勝つようにしてくれるか確認するも、魔王はあつさり拒絶し、四人は変顔を浮かべた。マリンは変顔浮かべたままプンプン怒り出し、

「あの裏切り者おお!」

「ハア、魔王ですからからねえ・・・しようがありません!ここは実力で・・・」

ブロッサムは溜息を付くも、気持ちを入れ替え仲間達を集めるも、レモネードとサンシャインは、バッドエンドマーチをチラリと見つめ、

「でも、バッドエンドマーチって、私達より大人びてますよ?」

「正直・・・色気で私達が勝てるとは・・・」

「質より量です！私達は四人居ますし、ここは協力して・・・」

「じゃあ、こういう方法はどうかなあ!？」

ブロッサムが四人で協力して対抗しようと提案すると、レモネードは何か閃いたのか、ヒソヒソ一同に策を授けた。ブロッサムはマリんと、サンシャインはレモネードと、互いのスカートをチラリと捲り魔王にアピールすると、魔王の目は輝き、

「オオオ！それは中々高ポイントカゲ!!」

興奮した魔王が身を乗り出しても、見て居た他のプリキュア達はドン引きし、ルージューはハアと溜息を付くと、

「私達って・・・何やってんだらう?」

「何だかバカバカしくなって来たわね!」

「でも、捕まったみんなを助け出す為には、我慢も必要よ!」

少しイライラしだしたウインディを、ミントは窘めた。マリンもバカバカしくなって来たようで、変顔浮かべた瞬間、

「えりかのその表情は駄目カゲエ・・・減点!」

「ムツキイイイ!何でよおお!？」

マリンは、顔を真っ赤にしながら怒り、魔王に文句を言うと、魔王は首を振り、



「審判に口答えは駄目カゲエ．．．えりか、失格カゲ！」

「何い!? やつてられつかああああ!!」

「マ、マリリン! 落ち着いてええ!!」

悔しげな表情を浮かべながら、マリインタクトを取り出したマリリンを、ブロッサム、サンシャイン、レモネードが必死に止めて居ると、バッドエンドマーチは目を輝かせ、

「実力行使かい!? 上等! あたしもそっちの方が．．．」

「駄目だよ、マーチ! ちゃんと．．．アツ!」

ようやく本当の勝負が出来ると思ったバッドエンドマーチが、マリリンに向かって行くとうとするのを、バッドエンドピースが止めようとしたものの、転びそうになって慌ててバッドエンドマーチのスカートに手を掛け、そのまま倒れ込んだ拍子にスカートが下に吊り落ちた。バッドエンドマーチの黒いボディスーツに覆われた、スラリと伸びた美しい足が、少し盛り上がった神秘的な下腹部が、魔王の目に飛び込み、魔王の両目はハートマークになった。

「キヤアアア!? な、何してんのよおおお?」

「ゴメエエン! マーチ、許してえ!．．．テへ」

顔を真っ赤にしたバッドエンドマーチは、慌ててスカートを穿き直し、バッドエンドピースに文句を言うと、バッドエンドピースは謝ったものの、ペロつと舌を出し、その

姿はとても反省しているようには見えなかった。

「あんたねえ・・・」

バッドエンドマーチは、ゴツンとバッドエンドピースの頭に拳骨を落とすと、痛そうにバッドエンドピースが頭を摩り、たんこぶが再び大きくなったのを知り涙目になった。

想像以上の出来事を目の前で見た魔王は、興奮しながら大喜びすると、

「勝者！バッドエンドマーチカゲエエエ!!」

「「エエエエ!」」

「魔王の裏切り者おおお！」

「あ、あんな姿見られて勝利って・・・」

魔王がバッドエンドマーチの勝利を宣言し、プロツサム、サンシャイン、レモネードは、同時に目を点にしながら驚き、マリンはプンプン怒りながら魔王に文句を言い続けた。勝利宣言されたバッドエンドマーチだったが、微妙な表情を浮かべ、その横では更に頭のたんこぶを大きくしたバッドエンドピースが大喜びしていた。思わず吹き出し、笑い出したジョーカーは、

「プツ、アハハハ！あなた、本当に私情は挟まないようですねえ・・・では、キュアマリン、キュアプロツサム、キュアサンシャイン、キュアレモネード・・・あなた方の負け

です!!」

「二「魔王の・・・バカアアア!!」二」

ジョーカーは、四人に黒水晶玉を掲げると、ブロッサム、マリ、サンシャイン、レモネードの四人が、黒水晶玉の中に吸い込まれて行った。

「つぼみ、いつき、うらら、そしてえりか、許すカゲ・・・審判は公平さが大切何だカゲ」  
涙を堪えるような表情を浮かべた魔王だったが、観戦していたプリキア達も怒り出し、

「アホかあああ!」

「何やってんのよおお!」

「魔王、あなたどつちの味方よ?」

「やっぱり・・・宇宙の果てに捨ててくれば良かった・・・」

サニーが、ルージュが、ビートが、パッションが、険しい表情で魔王に文句を言うも、魔王は我関せずといった表情で妖精達の下に戻って行った。隣に来た魔王を、アン王女は無然とした表情で見つめると、さり気なく一歩横にずれ魔王から離れ、ピーちゃんは魔王に近付くや、

「ギアアアス!」

「何、お前はバカかだとお・・・審判は公平なだけカゲ!」

嘗てのように口喧嘩を始めるピーちゃんも魔王、シプレ、コフレ、ポプリも、不満そうに魔王に文句を言い続けた・・・

## 2、バッドエンドサニーVSプリキュアお淑やかチーム

チームマリンも敗れたのを実況で知った捕らわれた一同、その一同の下に、チームマリンが降ってきた。起き上がったマリンは、ムーンライトの姿を見るや、直ちにチームマリンに招集を掛け、恐る恐るムーンライト達に話し掛けると、

「あたしも、汚名を返上しよう頑張ったんだけどさあ・・・」

「そうね・・・魔王があんな行動に出るとは思わないわよね！」

聞いていたムーンライトも、この敗戦はしようがないとマリンをフォローした。ここだとばかり、ブロッサムが一同に話し掛け、

「皆さん、マリンも反省して、進んで第三回戦に参加しましたし、さっきの事は許して上げて下さいませんか？」

「私達からお願いします！」

マリンを庇うように、ブロッサム、サンシャイン、レモネードの三人もムーンライト達に頭を下げると、マリンは目をウルウルさせながら、三人に抱き付き、

「心の友よおおお！流石あたしの親友達だよおお!!」

心から大喜びするマリンの姿を見て、ムーンライト達は、苦笑を浮かべながらマリンを許した。

一同を見渡したブラックは、

「マリン達も負けちゃったし、ちよつとヤバイかな!？」

「大丈夫! まだパインやパッション達も残ってるし、何とかしてくれるよ!」

ピーチは仲間達を信じ、上を見上げた・・・

続々とプリキュア達を捕らえたジヨーカーは、ご満悦な表情を浮かべ、

「さあ盛り上がりつつ参りました! では、第四回戦のメンバーを発表しましょう・・・シャイニールミナス、キュアミント、キュアパイン、キュアミューズ、キュアエコー、バッドエンドプリキュアからは、バッドエンドサニーさん!」

「何や、ようやくウチの番か・・・今度はまともな勝負にしてなあ?」

ニヤニヤしながら前に出てきたバッドエンドサニー、対するプリキュアチームは、ミントが中心になり、

「捕らわれたみんなを、何とか助け出しましょう!」

「その為にも、負けられないわね!」

「はい! みんなを取り戻しましょう!!」

「それには先ず彼女に勝たないとね！」

「あんまり自信は無いけど・・・」

ミント、ミューズ、ルミナス、パイン、エコーが、対戦相手のバッドエンドサニーを見つめるや、バッドエンドサニーは腰に手を当てて、余裕の表情を浮かべていた。

「では、第四回戦・・・スポーツ対決！」

「「エエエ!? スポーツ?」」

「望む所よ！」

「オッ!? そっちのおチビちゃんはやる気やない！」

「チビじゃないわよ！」

目と目で火花を散らすミューズとバッドエンドサニー、一方のルミナス、ミント、パイン、エコーは、スポーツはそれ程得意では無さそうで・・・

「私、あまりスポーツとかは得意じゃ無いんです」

「私も・・・」

「私もダンスはやってたけど、スポーツってそんなに得意じゃないの」

「TVゲームのスポーツならまだ良かったんですけど・・・」

（ウフフフ、だからスポーツ対決にしたんじゃありませんか!）

ジョーカーは、戸惑う四人を見てほくそ笑んだ・・・

「ルールは簡単！これからバッドエンドサニーさんが、あなた達一人ずつに一本ずつ放つスパイクの内、一球でもバッドエンドサニーさんのコートに返せれば、あなた方の勝ち！返せなければあなた方の負け・・・簡単なルールでしょう？尚、バレーボール同様のルールで行いますので、ダブル・コンタクトやキャッチボールなどは反則としますのであしからず」

ジョーカーの説明を聞き、再び目が点になるルミナス、ミント、パイン、エコーの四人、

「バレーボールのルールって、私良く分からないんですけど？」

「取り敢えず、やるしか無さそうね！」

「大丈夫かなあ!？」

「レシーブ、トス、スパイクって事ぐらいは分かるけど・・・」

不安げな表情を見せる四人を見たサニーは、ルールだけでも教えてあげようと参加メンバーに話し掛け、

「エエか、ダブル・コンタクトちゆうのは・・・」

「アツ！キュアサニー、味方にルールを教えたら失格に致しますよ？」

「なんでやねん！ルールぐらいエエやろう？」

「駄目です！さあ、始めましょうかねえ・・・」

ジョーカーは、バレー部が使っているコートを利用し、勝負を開始した・・・

先ずは練習とばかり、バシバシ強烈なスパイクを決めるバッドエンドサニーを見て、キュアサニーの表情が変わった。

（なんちゆうスパイクやあ!?!バッドエンドサニーは・・・バレーボールをやった事あるんかあ?）」

そんなサニーに気付いたバッドエンドサニーは、サニーを見てニヤリとした。こんなスパイクを、ルミナス、ミント、パイン、ミューズ、エコーは、止める事が出来るのだろうか、サニーの顔から冷や汗が流れた。それはルミナス達も一緒に、ヒソヒソ打ち合わせをして順番を決めた。一番手はパイン、二番手はエコー、三番手はミューズ、四番手にミント、最後にルミナスで戦う事を決めた。一番手のパインが緊張の表情でコートに入ると、

「パイン、落ち着いて!」

パッションが仲間であるパインを励ますと、パインはコクリと頷き、腰を落として身構えた。バッドエンドサニーは、バレーボールを手に持ち、バシバシ叩くと、

「ほな、始めよかあ・・・行くでえええ!」

ボールを高々と宙に投げると、バッドエンドサニーは先程とは違い、上空高くジャンプし、急角度からスパイクを放った。



「エッ!？」

強烈なスパイクがパインの後ろ側に炸裂し、パインは、何が起こったのか分からない間に、スパイクを決められていた。

「二丁上がりやあ!」

「ぜ、全然見えなかつた……」

パインの血の気が引き、冷や汗が流れる。見て居たエコー、ミューズ、ミント、ルミナスも同じように驚愕の表情を浮かべた。バッドエンドサニーは、キュアサニーを見るとドヤ顔を浮かべ、お前でも取れないだろうと挑発するかのようには笑みを浮かべた。サニーは険しい表情を浮かべ、

(バッドエンドサニー……ウチへの当てつけのつもりかいな!?)

サニーは拳を振るわせた……

スゴスゴ戻って来たパインに、四人はドンマイと声を掛け、続いてエコーがコートの中へと入っていった。サニー、ピース、マーチは、エコーを激励し、

「エコー、頼むでえ!」

「ガンバ!」

「きつちり見ていこう!」

「うん! 頑張る!!」

エコーは三人に頷き返し、パイン同様腰を落とし身構えた。バッドエンドサニーは、先程同様ボールをバシバシ叩くと、口元に笑みを浮かべ、

「ほな、行くでえええ!!」

再び上空高くボールを宙に投げると、バッドエンドサニーは上空高くジャンプした。エコーは、頭の中で先程のイメージを浮かべ、

（きつとまた同じような場所にスパイクを打つ筈・・・）

エコーは、バッドエンドサニーの腕が後方に振られた瞬間、素早く後方に下がり身構えた。だが、バッドエンドサニーは瞬時にそれを見抜き、今度はネット手前の位置に凄まじいスパイクを炸裂させた。

「アアア!?!」

読みが外れたエコーは呆然とし、バッドエンドサニーはニヤリとすると、

「読みは中々エエ感じやったけど、動くのが早すぎやあ!あれじゃ、ウチなら直ぐに反応できるでえ!!」

再びサニーを見つめながらドヤ顔を浮かべたバッドエンドサニー、エコーもまた、しょんぼりしながら、コートを出て仲間達の下に戻って来ると、仲間達がドンマイと声を掛け、ミュージズは右手でエコーとタッチし、

「ドンマイ!読みは悪くなかったわ」

続いてミュージズがコートに入ったものの、バッドエンドサニーは、ミュージズを見て小首を傾げ、

（何や!? あのおチビ・・・さつきより背が伸びてへんかあ?）

さつき見た時より身長が伸びているようで、バッドエンドサニーは不思議そうにした。それはジョーカーも気付いたようで、ジイとミュージズを見つめると、

「ちよつと待つて下さい! キュアミュージズ・・・あなた、足に何か細工してませんか?」  
「してないわよ! これは、私が覆面のプリキュア時代のコスチュームの一部よ!!」

「ハア!?・・・まあ、良いでしょう!」

小首を傾げながらも、ジョーカーはミュージズの行為を認め、バッドエンドサニーは、戸惑いながらも再びバレーボールをバシバシ叩き、

「何の真似やか知らんけど・・・止めれるもんなら止めてみいや!!」

上空に高々とボールを宙に投げ、バッドエンドサニーが大きくジャンプすると、ミュージズも時間差でジャンプした。その行動に目を奪われたバッドエンドサニーは、タイミングを狂わされ、先程より勢いのないスパイクを放ってしまい、

「しもたあ!!」

ボール目掛け手を伸ばすミュージズ、だが惜しくも後数センチ届かず、ボールはコートに落下した。

「アアア!? 惜しい!!」

見て居たミント、ルミナス、パイン、エコーが、後数センチで届いたのにと残念そうな表情を浮かべた。バッドエンドサニーは、ホツと安堵すると、

「惜しかったなあ、おチビちゃん」

「チビじゃないわよ!!」

頬を大きく膨らませながらコートを出たミューズを、ミント達が惜しかったと出迎えた。履いていた足底ブーツを脱いだミューズを見たビートは、

（ミューズ・・・バッドエンドサニーに、おチビって言われたのが悔しくて履いてたのね）  
ミューズが、負けん気が強い事を思い出し、苦笑を浮かべ、直ぐに次のミントに声援を送った。サニーを見て再び口元に笑みを浮かべるバッドエンドサニーを前に、サニーはイライラし始めていた。

（ウチへの当てつけかあ!!）

自分も今すぐコートの中に入りたいと思うものの、メンバーでは無いサニーには、仲間を信じるしか無かった。続いてミントがコートの中に入ると、ミントは頭の中で分析を始め、

（正直、正攻法で私が彼女のスパイクを受け止められるとは・・・そうだ!）

ミントは何かを閃くと、腰を落として身構えた。バッドエンドサニーは、ボールを二、

三度地面でバウンドさせると手に持ち、

「ほな、四人目・・・行くでええ！」

ボールを宙に投げ、上空高くジャンプしたバッドエンドサニー、ミントは構えを止めると、

「プリキュア！エメラルドソーサー!!」

ミントは、右手でエメラルドソーサーを作り上げると、スパイクを放ったバッドエンドサニーの手から放たれたボール目掛け、エメラルドソーサーを投げつけた。エメラルドソーサーに跳ね返されたボールは弾き飛んだものの、コートの外へと落下し、二人のサニーは同時に目を点にした。

「アア、後少しだったのに・・・」

「惜しかったですなぁ！」

残念そうな表情を浮かべるミントに、ルミナスが惜しかったと言葉を返すも、サニーは困惑気味に、

「イヤイヤイヤ、それは反則やから」

「エツ?!駄目なの？」

「キュアミント・・・失格です！」

ルールを理解していなかったミントは、ジョーカーの宣言で失格とされ、トボトボ俯

きながらコートから出て、他のメンバーに慰められた。バッドエンドサニーは、サニーを見て右手の中指で掛かってこいと挑発すると、サニーのイライラは頂点に達しようとしていた。

（調子に乗っ取るやんけえ・・・）

サニーは握り拳を握った・・・

最後にルミナスがコートに入り、身構えると、バッドエンドサニーはボールを指でクルクル回して余裕の表情を浮かべ、

「これで仕舞いや！行くでえええ!!」

ボールを高々と上げ、今までで一番高く飛び上がったバッドエンドサニー、ルミナスが緊張の面持ちで上を見上げる。その時、

「調子に乗るんやないでええー!」

「エッ!?サニー?」

ダッシュでコートに乱入したサニーを見てルミナスが驚愕し、サニーは、バッドエンドサニーが放ったスパイクを見切り、ものの見事にレシーブすると、

「お返しやああ!!」

今度はサニーが上空高くジャンプし、バッドエンドサニー目掛けスパイクを放った。バッドエンドサニーは反射的に横っ飛びで反応するも、ボールは見事にコートの中に落

ちた。

「どないやあ！調子に乗ってからにいい！」

「クツ!?やるやないのお！」

バチバチ目と目で火花を散らす二人のサニーだったが、ジョーカーは呆れたように、「キュアサニー……第四回戦のメンバーでないあなたの乱入は認められません！よって、勝者バッドエンドサニー！シャイニールミナス、キュアミント、キュアパイン、キュアミューズ、キュアエコー、並びにキュアサニーは失格です!!」

「しもたあ!?ウチとした事がつい……」

「いえ、一矢報いただけでも良しとしましょう……皆さん、後は頼みました！」

「ルージュ、後をお願いね！」

ジョーカーは黒水晶玉を掲げ、サニーはカツとなった自分の過ちに気付き、ルミナスとミントが仲間達に後を託し、六人は黒水晶の中へと吸い込まれた……

「サニー！全く、カツとなつてえ……」

本来ならば残つて居る筈のサニーまで吸い込まれ、ルージュが困惑する。冷静に状況を見て居たパッションは、

（不味いわね……例えこの後勝利したとしても、ジョーカーの事だから、みんなを素直に帰すとは思えない！）

パッションは、深刻な表情で何かを思索し始めた・・・

### 3、意外な提案

黒水晶の中に捕らわれているプリキュア達、ルミナス、ミント、パイン、ミューズ、エコー、サニーも捕らわれ、一同に重い空気が流れ始めて居た。体育座りをしているソードの目は虚ろになり始め、

「ソード！しっかりして!!」

ブラックがソードの肩を揺すりながら、必死にソードの名を呼び続けると、ソードは、ハツとしたように正気を取り戻すも、見て居たホワイトは、

「不味いわねえ・・・長い間この中に閉じ込められていたソードに、影響が出始めてきているわ!」

「パイン達も負けちゃったし、残ってるのは・・・」

困惑気味な表情を浮かべたピーチが残って居るメンバーを問うと、

「ブライト、ウインディ」

「ルージュ」

「パッション」

「ビート」



「ピースにマーチ」

「後7人・・・」

ブルーム、ドリーム、メロディ、ハッピーが、残って居る仲間達の名を呼び、険しい表情をしたムーンライトがポツリと呟いた。

(みんな、頼んだよ！)

ブラック達は、残った仲間達を信じ、成り行きを見守り続けた・・・

観戦していたピースが急にモジモジしだし、見て居たマーチが話し掛け、

「ピース、どうかした？」

「う、うん・・・何か緊張しちゃって、ちよつとおトイレ行って来ても良いかなあ？」

「何時名前が呼ばれるか分からないから、早く戻って来なさい！」

「ハイ！」

ルージユにOKを貰い、ピースは早歩きで校舎の方に消えて行った。

「ブライト、ウインディ、ちよつと良いかしら？」

「パッション・・・何か!？」

「私達に用事？」

パッションは、ブライトとウインディを呼ぶと、ヒソヒソ話し始めた。聞いていたブ

ライトとウインディは、最初こそ戸惑った表情を見せたものの、何度かお互いの顔を見て頷き、パッションを見て大きく頷いた。三人は、ルージュ、ビート、マーチの側に行くと、

「私達は、これからある行動をするけど、驚かないで欲しいの!」

「「ある行動!?!」」

「ええ、パッションが閃いてね!それには、ジョーカーに気付かれないようにしなきゃならない!」

「私達の事を調べているジョーカーだから、私だけじゃ真意に気付かれてしまうかも知れない!」

「だから、私達二人もパッションに協力するけど・・・」

「「もし私達の作戦が失敗した時は・・・後をお願い!!!」」

「パッション、ライト、ウインディ・・・分かった!あんた達を信じる!!」

ルージュが同意し、困惑していたビートとマーチもコクリと頷いた。三人も頷き返し、ジョーカー目掛け歩み出すと、パッションはジョーカーに話し掛け、

「ジョーカー!あなたに話があるわ!!」

「話?!何です、次はあなた達が出たいと言う事ですか?」

「いえ、違うわ!」

「私達三人は……」

「この戦いを棄権するわ!!」

パッション、ブライト、ウィンデイが、勝負を棄権すると宣言し、見て居たアン王女と妖精達、捕らわれているプリキュア達が驚愕する。

「棄権って……あの娘達、何考えてるのよ?」

険しい表情をしたローズが呟き、困惑の表情を浮かべたピーチだったが、

「パッション達が、何の考えも無く棄権する何て思えない!」

「ええ、何かきつと考えがあるのよ!!」

ピーチの考えにイグレットも同意した。他のプリキュア達からはざわめきが起き、彼女達の真意を探った。ジョーカーも訝りながら三人を見つめ、

「棄権と言う事は……敗北を認めると?」

ジョーカーの言葉にパッションは頷き、

「そう……その代り!」

三人は、バッドエンドピースを指差すと、

「バッドエンドピースの頭を、私達に叩かせて!!」

「エエエエエ!?何でえええ?」

三人に指を指され、バッドエンドピースが驚愕の表情を浮かべながら、一、二、三步後退つ

た。ジョーカーは、三人の真意を探るも思い浮かばず、

（何を考えているのかは知りませんが、一番厄介だと思つて居たキュアパッション、キュアブライト、キュアウインディを、労せず黒水晶行きに出来るのなら、乗らない手は無いですねえ・・・）

「ジョ、ジョーカー!?!そんな話聞かないよねえ?」

「良いでしょう!バッドエンドピースの頭を殴らせるぐらい造作もありません!!それであなた方を捕らえられるのなら・・・安いものです!!」

「嘘おお!?イヤアアア!」

ジョーカーが許可を出し、バッドエンドピースは涙目になりながら嫌々をするも、両脇をバッドエンドマーチとバッドエンドサニーに掴まれ、三人の前に連れて来られた。パッション、ブライト、ウインディは、右拳にハアと息を吹きかけると、順番にバッドエンドピースの頭に拳骨を落としていった。

「ウエエエエン!バカアアア!いじめっ子!!あなた達何か嫌いだああ!!ハッピーく  
!!!」

「よしよし、良い子!良い子!」

頭のたんこぶが一層大きくなつたバッドエンドピースは、泣きながらバッドエンドハッピーに泣きつき、頭を撫でられながら慰められた。

「これでスツとしたわ！」

「さつきからあの子の言動には、イライラしていたの！」

（（分かる！））

ウインディの発言に、無言で頷いたバッドエンドサニー、マーチ、ビューティ、ブライトはジョーカーを見つめ、

「もう良いわ！」

「では、キュアパッション、キュアブライト、キュアウインディの三人は、棄権とみなします！」

ジョーカーは黒水晶玉を掲げると、パッション、ブライト、ウインディが吸い込まれて行った……

（何をしようとしているのか分からないけど、信じてるわ！）

ビートは、仲の良いパッションを信じ、吸い込まれて行った黒水晶玉を凝視した。

黒水晶玉に吸い込まれたパッション、ブライト、ウインディを、微妙な表情を浮かべた仲間達が出迎えた。ピーチとベリーはパッションに話し掛け、

「パッション、何か考えがあるんでしょ？」

「パッション、あなたが何の考えも無く棄権するとは思えないもの」

「ええ、上手く行くかは分からないけど……みんな、集まって！アカルンの力を使い、

「ここから脱出出来るか試して見るわ!!」

「そうか!? パッションにはアカルンが・・・」

パッションの考えを知り、一同の表情が明るくなると、パッションの近くに一同が近づき、パッションはアカルンを呼び出した。

「外の世界へ!・・・みんな、ゴメン! 何かの結界が張られてるみたい」

パッションの考えに、一度は希望を見いだしたプリキュア達だったが、その希望は打ち砕かれた・・・

（ルージュ、ビート、マーチ、ピース・・・ゴメン! 後をお願い!!）

ギユツとリンクルンを強く握りしめたパッションは、残った仲間達に希望を託すのだった・・・

#### 4、バッドエンドピースVSプリキュア恐がりトリオ

ジョーカーが一番用心していたパッション、ブライト、ウインディを労せず捕らえた事で、ジョーカーはご満悦だった。

（後三人ですかあ・・・実力行使でも構わないですが、折角ですからこのまま余興を続けましょうかねえ・・・）

ジョーカーは、口元に笑みを浮かべながら、残ったルージュ、ビート、マーチを見つ

めると、

「では、第五回戦！キュアルージュ、キュアビート、キュアマーチ、そしてバッドエンドピース、前へ!!」

ジョーカーに名前を呼ばれた一同が前へと歩み出した。バッドエンドピースは、さっき頭を叩かれた恨みとばかり、三人をジと目で見つめ、

「私、怒ってるんだからねえ！」

「いや、あたしら関係無いし・・・」

「そうそう」

「プンスカプン！」

（（本当にピースに似てるわねえ？）（））

バッドエンドピースの言動や行動を見て、三人は改めてキュアピースに似て居ると思  
い、思わず苦笑した。

「では第五回戦・・・肝試し対決!!」

「ワ〜イ!!」

「「ちよつと待てええええ!!」」

大喜びするバッドエンドピースとは逆に、引き攣った表情を浮かべた三人が、ジョーカーに異議を唱えた。ジョーカーは怪訝な表情を浮かべ、

「何か問題でも?」

「大有りよ!」

「あなた、あたし達がオバケとか苦手なの知ってて、わざと言っててるでしょう?」

「こんなのフェアじゃ無いよ!!」

ビート、ルージュ、マーチが、不公平だと文句を言うも、ジョーカーは右手を右耳に当てて、聞こえ無いような素振りを見せ、

「勝負は私に一任されてますしねえ?では、始めましょう!肝試し対決!!」

(終わった……)

第五戦が肝試しだと知り、捕らわれていたプリキュア達は、ソード以外既に勝敗が決した事を悟った……

「ゴメエン、遅くなっちゃったあ……アレエ!」

まるでお通夜のように静まりかえっており、ピースは小首を傾げると、同じような表情で失神しているルージュ、ビート、マーチが居て驚愕した。ピースはアン王女の側に行くと話し掛け、

「な、何があつたの?」

「ええ、第五戦の勝負は肝試しで……三人は、バッドエンドピースが放つたオバケのよ



うなアカンベエを見て失神してしまい……」  
「エエエ!?!」

白いカーテンをアカンベエに変え、幽霊のように突然背後から驚かされた三人は、そのまま失神した。

「勝者! バッドエンドピース!!」

「ワアアアイ!!」

バンザイしながら飛び跳ねて、大喜びするバッドエンドピース、ジョーカーは失神している三人を黒水晶送りにするとニヤリとし、

(これでプリキュア達は全員捕らえましたねえ……私達の勝ちです!!)

勝ち誇るジョーカーだったが、ジョーカーは忘れていた……

トイレに行っていて、席を外していたプリキュアが居た事を……

キュアピースの存在を!!

5、ジョーカーVSキュアピース

「……ルージュ、ビート、マーチ……」

「「ウ、ウゥン……」」

気を失っていた三人は、ドリームに呼ばれて意識を取り戻し、ハツとして飛び起きる

も、仲間達の姿を見て、自分達が敗れた事を悟った。

「ゴ、ゴメン・・・何の役にも立たず」

「後を託されたのに・・・」

「自分が情けないよ・・・」

「仕方無いよ、苦手なもので勝負を挑んでくるジョーカーが、私達より上手だったんだからさあ」

落ち込むルージュ、ビート、マーチを励ますように、ブラックが声を掛けた。一同に重い空気が流れる・・・

そんな空気に耐えられないように、メロデイが一同に話し掛け、

「後、残って居るのは・・・」

「まだ、ピースが残ってる！ピースなら、きっと頑張ってくれるよ!!」

ハッピーは、最後の希望ピースに思いを託したものの、ムーンライトは、ブロッサムとエコーに小声で話し掛け、

「ブロッサム、エコー、薫子さんにこの状況を知らせたいのだけれど・・・」

「それが、お婆ちゃんは、昨日から学会に出席していて・・・」

ムーンライトに問われたブロッサムは、申し訳無さそうに今薫子が留守にしている事を伝えると、ムーンライトは驚愕し、

「エッ!?それじゃあ、植物園には居ないと言う事?・・・それでも、このまま何もしないで居るよりマシだわ!エコー、薫子さんに、この状況を知らせてくれるかしら?」

「分かりました!上手く行くか分かりませんが・・・やってみます!!」

エコーは両手を組むと、精神を集中し、今の状況を薫子へと知らせた・・・

突然心に話し掛けられ、学会に出席して居た薫子はハツとして驚き、薫子の顔色が変わったのを見た、両隣に居た五十代の男性達は、

「どうしました、花咲さん?」

「何か?」

「い、いえ・・・続けて下さい!」

薫子は、男性達に何でも無いと伝え、会議を続けましょうと言ったものの、内心気が気では無かった。

(コツペが居れば、直ぐにでも向かうのだけれど・・・みんな、ゴメンなさい!私は今すぐに向かうのは無理だわ!みんななら、みんなならきつと、困難を乗り越えてくれると、私は信じて居るわよ!!)

薫子は、後輩達を信じた・・・

勝った!

ジョーカーは、プリキュア達を捕らえ舞い上がっていた・・・

「ウフフフフ、私達の勝利・・・ン!? キュアピース? ど、どうしてあなたがそこに?」

プリキュアは全て捕らえたと思つて居たジョーカーは、アン王女の隣に居るピースを見て驚愕して話し掛けると、ピースは困惑気味に、

「どうしてつて、さつきトイレに行つて今戻つて来たから・・・」

「ゲツ!?・・・仕方ありませんねえ、あなたにはこの私自ら戦つて差し上げましょう!」

「ま、負けないもん!」

バッドエンドプリキュア達を、全て勝負で使つてしまい、ジョーカーは、最後の余興を自らの手で決着を付けるべく、自らピースの対戦相手として出場すると告げた。ピースも、みんなを救う為にも負けられないと覚悟を決めた。

「ハイハイハイ! ジョーカーが出るなら、最後は私に問題出させてえ!!」

突然手を上げたバッドエンドピースは、ジョーカーに自分が司会者をやりたいと訴え、少し思案したジョーカーは、その訴えを認めた。バッドエンドピースは嬉しそうに前に出ると、

「フフフフ、最後は難しい問題を出すよおお! 先に正解した方が勝ちだけど、ジョーカーは分かると思うから、今回は特別に、キュアピースに回答権を与えて上げるね!!」

「エツ!? 私から答えて良いの? ありがとう!」

自分から答えて良いと言われ、思わずピースはバッドエンドピースに謝辞を述べ、ジョーカーは、そんなバッドエンドピースに一抹の不安を覚えていた。

(バッドエンドピース・・・大丈夫でしようねえ?)

「では、問題・・・1+2+3+4+5は、幾つでしようか?」

「エッ!?!」

バッドエンドピースに意外な問題を出され、ジョーカーと他のバッドエンドプリキユア達も、アン王女や妖精達も、捕らわれていたプリキユア達も、思わずエツと驚きの声を発した。見る見るジョーカーの顔付きは変わり、

「な、何を考えてるんですかあ、あなたはあああ!?!こんな問題認めません!!」

「いえ、この問題の司会者は・・・バッドエンドピースです!あなたに問題を代える選択権は無いわ!!」

ジョーカーの言葉をアン王女が遮り、ジョーカーは思わず反論出来ず唸った。

「全く、あの子は何を考えてるの?」

「何も考えてへんと思うでえ?」

イライラしたバッドエンドビューティが、困惑したバッドエンドサニーが、この問題を出したバッドエンドピースの行動に呆れ返った。

「ようやく私達も勝てるね！」

「ええ、でもこれからが本番よ！」

ブラックとホワイトは、ホッと安堵した・・・

今回は、先に回答権があるピースの勝利を誰もが信じた。

「ジョーカー、策士策に溺れるとはこの事です！さあ、キュアピース、答えを!!」

少しドヤ顔を浮かべたアン王女だったが、ピースの表情を見ると、見る見る困惑した。何故なら、ピースは顔から大量の汗を流し、指で数を数えて居たのだから・・・

「3、2、1・・・ブツブウウウ！時間切れでええす!!では、ジョーカーさん答えをどうぞ!!!」

「エッ!?じゅ、15・・・」

困惑気味に答えを言ったジョーカー、バッドエンドピースは楽しそうに、

「ピンポンピンポンピンポン・・・正解でええす!!」

「アアアン!だつてえ、指が足りないんだもん・・・」

「エエエエエ!!」

ピースは、悔しそうに指が足りないと答え、バッドエンドピース以外の一同を驚愕させた・・・

「・・・な、何はともあれ、私の勝ちですね!キュアピース、あなたの負けです!!」

「アアアン、みんな、ゴメンねえええ！」

そう言い残し、ピースもまた黒水晶玉の中へと吸い込まれて行った・・・

「そ、そんなああ・・・」

アン王女は膝から崩れ落ち、地面に両手を付いた。あれだけ居たプリキュア達が全員敗北し、ソード同様捕らわれるとは思って居なかつた。

黒水晶内に吸い込まれたピースは、微妙な表情を浮かべる仲間達を見ると涙目になり、

「ゴメンね、負けちゃった・・・」

「何やってるのよおおお！」

「あれぐらい暗算で分かるでしょう?」

「ウウウウウウ」

ローズとミューズに責められ、ピースが言葉を詰まらせるも、

「そうピースを責めるもんじゃないわ!」

「急にあんな問題を出されて、緊張してたのよね?」

「ええ、気にする必要は無いわ!」

アクア、ホワイト、ムーンライトにフオローされ、我が意を得たりといった表情を浮かべたピースは、コクコク何度も頷くも、

「でもピース……」

「「後で話があるから!!」」

さっきのマリンの時同様、フォローしているようでピースを脅した三人、ピースはそのまま魂が抜けたかのようにヨロヨロし、ハッピーとエコーに支えられた。マリンは三人を宥めるように、

「まあまあ、あたし達も負けたんだしさあ」

「そうね、学校破壊を依頼した何て思わなかった私達が悪いものね」

「藪蛇だったああああ」

ムーンライトに、先程の話しを蒸し返され、マリンが頭を抱えて悶えた……

「アハハハハ！私達の完全勝利です!!」

「クツ、ま、まだです！まだわたくしが居ます!!」

キツとジョーカーを睨み付け、立ち上がったアン王女は、次は自分の番だと訴えるも、ジョーカーは右手を右耳に当てると、

「はい!?!アン王女、あなたに出場資格はありませんよ?」

「な、何故です!?!わたくしも……」

「だってえ……あなた、プリキュアじゃ無いじゃありませんか?私、最初に言いました



よねえ？私達とあなた方プリキュアの勝負だつて……」

「そ、そんなの屁理屈です！わたくしが怖いのですか？」

アン王女の言葉を聞き、バッドエンドマーチとサニーが顔色変え、

「何を!？」

「上等やんけえ！」

「およしなさい！私達を挑発して、対決させようとしている彼女の策よ!!」

そんな二人をバッドエンドビューティが制し、ジョーカーもバッドエンドビューティに同意して、

「そう言う事です！では、プリキュア達も捕らえましたし、バッドエンド王国に戻るとしましうかねえ？」

「ま、待つて！お願い、わたくしと勝負を……」

王女としてのプライドも捨て、必死にジョーカーに哀願するアン王女を見て、

「アン……」

魔王は悲しげな表情でアン王女を見つめた。ジョーカーはそんなアン王女を鼻で笑い、

「あなたがプリキュアになれるなら、今すぐにも戦つて差し上げますよ……アハハハハハ！」

「クッ・・・」

アン王女は拳を握り震えた・・・

プリキュアになれない自分を恥じた！

万策尽きたかと思われたその時！！

「そう、プリキュアならあなた達と戦えるのね？」

「だったら、あたし達も混ぜて貰うよ！」

突然辺りから声が聞こえ、顔色変えたジョーカーは辺りを見渡し、

「誰です!?姿を見せなさい!!」

ジョーカーの言葉を聞いたかのように、七色ヶ丘中学校の空間に亀裂が発し、その中から、五つの影がゆっくり姿を現わした。その姿を見て、アン王女とキャンディ、魔王以外の妖精達の表情が輝き、五つの影は妖精達を見て微笑んだ。

「今聞こえた声って!？」

「うん、あたしにも聞こえた!」

ドリームとルージュは、嬉しそうな表情で見つめ合い、闇に覆われた空を見上げた：黒き衣装に身を包んだ五人を見て、バッドエンドプリキュア達が目を見開き、ジョーカーも驚愕の表情を浮かべながら、

「あなた方は、一体何者です!？」

「「私達は・・・闇に生まれ、光の暖かさに触れ生まれ変わった戦士！ダークプリキュア5!!」」

プリキュア達の危機に、ダークプリキュア5が帰ってきた!!

第八十二話：捕らわれたプリキュア（後編）

完

## 第八十三話：バッドエンドプリキュアVSダークプリキュア5

## 1、闇のプリキュア

プリキュア達の危機に駆け付けたダークプリキュア5の五人、黒水晶玉の中に捕らわれていたプリキュア達からは、歓声が沸き起っていた・・・

「あの子達ったら、前回もそうだけど、良いタイミングで現われてくれるよねえ？」

「うん！勝利を確信していたジョーカーも、戸惑っていると思う」

「実はあの娘達・・・裏でスタンバってたりして？」

「ウフフ、まさかあー！」

嘗て加音町で、大量のゴーレムと、ハウリングの配下トランクイットに苦戦するブラックとホワイトの下へ、ダークプリキュア5が駆け付けてくれた時を思い出した二人、ブラックの言葉にホワイトは苦笑した。頼もしき仲間達の帰還に、一同の口元には自然と笑みすら浮かんでいた。

「ダークプリキュア5って、前にみんなが言ってた？」

ダークプリキュア5の名を聞き、ハッピーは、嘗て一同からダークプリキュア5の事

を聞いていた事を思いだしていた。だがソードは、名前すら聞いた事が無く困惑するものの、ビートがソードの背をポンポン叩き、

「ソード、彼女達なら、この劣勢を覆すチャンスを与える筈よ！」

「信用してるんですね？」

ダークプリキュア5の事を信頼しているビートを見て、ソードがポツリと呟くと、アークアはそんなソードを見て笑みを浮かべながら、

「そう・・・宇宙に旅立っていた私達の大切な仲間！彼女達なら、この状況を覆す事が出来る・・・私はそう信じてるわ!!」

アークアの言葉に同意するように、レモネードも微笑み、

「帰って来てくれたんですね！」

「ええ、彼女達を信じましょう！」

宙を見上げたミントに釣られたように、一同が宙を見上げた・・・

ダークプリキュア5と名乗った、五人の黒き衣装を身に纏った少女達を見て、ジョーカーは慌ててトランプカードを取りだし、一冊の漆黒の本を取り出すと速読を始めた。

「ダークプリキュア5・・・確かに記述がありますねえ！ですが、あなた方はバッドエンドプリキュアと同じように、闇の力を得て生まれたプリキュアの筈・・・それがど

うして彼女達に協力を!？」

ジョーカーは本を閉じ、トランプカードの中に本を仕舞い込むと、ダークプリキュア5に問い掛けた。闇に生まれた者が、光の者と共に戦う事が不思議だった。そんな戸惑うジョーカーを見たダークプリキュア5は、

「確かに私達は、プリキュア5を倒す為に生まれた、闇のプリキュア・・・」

「一度はプリキュア5と戦い、消滅した・・・」

「でもその戦いで、あたし達は光の温かさを知った!」

「我らのマスターによって、再びこの世界に生を受けた私達は、彼女達と再会し、この世界は守るべきものだと思ったわ!」

「だから私達は・・・プリキュアのみなどと共に歩む!」

ダークアークア、ダークレモネード、ダークルージュ、ダークミント、そして、ダークドリームが、嘗ての記憶を呼び覚ますように目を閉じ、ジョーカーに語って聞かせた。ジョーカーは、やれやれといったジェスチャーを見せると、

「つまり、あなた方は私達の敵って事ですよねえ? でしたら、最早ゲームなど不要・・・バッドエンドプリキュアの皆さん!」

ジョーカーの言葉を聞いたバッドエンドプリキュアの五人が、ゆっくり歩を進め、ダークプリキュア5達の目の前に移動してくると、見つめ合う両チーム達・・・

二組のチームは、改めて互いに自分達に似ている事を実感した・・・  
ダークドリームは、バッドエンドプリキュアの五人を順に見つめると、

「あなた達は、何故その人と行動するの?」

「エツ!? だってえ、バッドエナジーを定期的に回収しないと、私達消滅しちゃうし・・・」  
ジョーカーと一緒に行動する意味を問われ、バッドエンドハッピーは、少し動揺気味に答えた。自分達だって、本当は自由に行動したい、でもバッドエナジーを定期的に回収しなければ、自分達が消滅するかも知れない恐怖・・・

そんな彼女の気持ちに気付いたのか、ダークミントは、少し愁いを帯びた瞳で話し掛け、

「本当にそうかしら!?!」

「どういう事?!」

再びバッドエンドハッピーが、怪訝な表情でダークミントの言葉に反応した。ダークルーージュも同意し、

「あの男に、あんた達が利用されてる可能性もあるんじゃない?」

ジョーカーに利用されている・・・

それはバッドエンドプリキュアの五人も、全く考えて居なかつた訳では無かつた・・・

「フツ、そうね・・・でも本当だったら、私達は消滅する!」

その言葉を聞いた時、バッドエンドビューティの口元に笑みが浮かんだ。ダークプリキュア5の言いたい事は理解出来た。だが、目的を見いだせないよりは、取り敢えずの目標である、バッドエンジャーを回収していれば、消滅する事は無い。そうバッドエンドプリキュア達は思つて居た。消滅という言葉聞き、バッドエンドピースは心底嫌そうな表情で首を振り、

「そんなのヤダもん!」

「あんた達こそ、何であたし達にそんな事言うのさ?」

「せや!ウチらとあんたらは敵同士やで?」

敵である自分達の身の上を、ダークプリキュア5達は心配しているような素振りを見せ、バッドエンドマーチも、バッドエンドサニーも戸惑っていた。ダークドリームは、ジィとバッドエンドプリキュアの五人を見つめ、

「そうねえ・・・あなた達が、昔の私達に似ているから・・・って事じゃ理由にならないかしら?」

「どういう事!」

自分達バッドエンドプリキュアと、昔のダークプリキュア5が似て居る。そう聞いたバッドエンドハッピーは、困惑気味にダークドリームにその真意を問うと、

「さっき言った通りよ!私達は元々、ドリーム達プリキュア5を倒す為に作られた存



在・・・言わば彼女達のクローン！そう思ってた・・・」

「だから私達は、私達を生み出した存在の命に従い、プリキュア5と戦った・・・あなた達を見て居ると、まるであの頃の私達を見ているよう・・・」

ダークアクアもダークドリームの言葉に同意し、バッドエンドプリキュアの五人を改めて見つめた。ピクリと反応したバッドエンドビューティは、

「だから、私達バッドエンドプリキュアに忠告している・・・そう言う事かしら？」

闇のプリキュア同士、何処か惹かれ合うのか、互いに興味を持った10人の少女達、そんな少女達を見たジョーカーは、少しイライラし始め、

「バッドエンドプリキュアの皆さん！そんな世迷い事に、耳を貸す必要は有りませんよ！！」

バッドエンドビューティは、口元に笑みを浮かべながら、

「安心なさい！暇つぶしに、彼女達の話を聞いていただけよ！」

やはり言葉だけで、彼女達を納得させる事は無理だと分かり、少し憂いの表情を浮かべたダークドリームは、

「そう・・・今はそれでも構わない！でも、心の何処かには留めておいて・・・」

命令される事が嫌いなバッドエンドマーチは、眉根を顰め、

「余計なお世話だよ！」

「ほな、ボチボチ始めよか?」

バッドエンドサニークの言葉を合図にしたかのように、重心を落とし身構えたバッドエンドプリキュアの五人、それを見て瞬時に後方にジャンプし、距離を取ったダークプリキュア5も身構えた。

今、闇V S 闇のプリキュアの戦いが始まるうとしていた・・・

2、ジョーカーVS魔王&ピーちゃん

遂に火花を切ったバッドエンドプリキュアとダークプリキュア5の戦い・・・

ダークドリームはバッドエンドハッピーと戦い、ダークルージュはバッドエンドサニークと、ダークレモネードはバッドエンドピースと、ダークミントはバッドエンドマーチと、そして、ダークアクアはバッドエンドビューティと対峙していた・・・

互いに手の内を探るように、肉弾戦を続ける10人の闇のプリキュア達、その戦いに、アン王女と妖精達が気を取られて居た。

(ウフフフ、精々バッドエンドプリキュアと戦って居なさい!今の内に私は・・・)

ジョーカーは、黒水晶玉を見てニヤリとすると、巨大なトランプカードを出現させ、バッドエンド王国に戻ろうと試みた。だが、ジョーカーの行く手を黒い影が遮り、ジョーカーの視線の先を、高速に何かが飛び回り牽制した。ジョーカーは軽く舌打ちす

ると、

「誰かと思えば・・・妖精風情が、出しやばらない方が身の為ですよ？」

「余計なお世話カゲエ！さっさとみゆき達を返すカゲ!!」

「ギャアアス！」

ジョーカーの行く手を阻むべく、空中で羽ばたきながら居並ぶ魔王とピーちゃんの二人、アン王女もようやく気付いて宙を見つめると、

「わたくしも加勢に向かいたいのですが、空中では・・・」

戸惑うアン王女に気付いたシロツプは、巨大化するとアン王女と妖精達を促し、

「みんな、シロツプに乗るロプ！」

「まあ、あなたはこんな姿にも？ありがとう！お願い致します!!」

キツと表情を引き締め、アン王女と妖精達はシロツプの背に飛び乗ると、シロツプは夜空に飛び上がった。

魔王、ピーちゃんと対峙したジョーカーに、焦りが生まれていた。二人から発せられる威圧感が、ジョーカーに息苦しさを与えてくる。

（な、何というプレツシャヤー!?先程までとはまるで別人・・・まるで、ピエーロ様に匹敵するかのよう強大なプレツシャヤー・・・あの者達は、ただの妖精では無さそうですねえ

?)

ジョーカーには見えていた・・・

魔王とピーちゃんの後から立ち上る巨大なオーラを・・・

一方、戦い続けるバッドエンドプリキュアとダークプリキュア5だったが、徐々にバッドプリキュア5が押され出していた・・・

「アハハハ、どうしたの!?!これはどうかなあ?バッドエンド・・・シャワー!!」

バッドエンドハッピーは、指をハート形の形にするや、まるでハッピーシャワーのような光弾を発射した。躲すダークドリームだったが、バッドエンドハッピーは、連続してバッドエンドシャワーを放ち、

「クツ!?!このおー!」

ダークドリームは、咄嗟に手からエネルギー弾を放ち相殺したものの、爆風を受け吹き飛んだ。バッドエンドハッピーは、再び指をハート形にして、その中に吹き飛ばされているダークドリームの姿を映すと、

「バイバイ!バッドエンド・・・シャワー!!」

再び放たれたバッドエンドシャワー、ダークドリームに直撃したかに思われたが、忽然とダークドリームの姿が消え失せて居て、バッドエンドハッピーは困惑する。辺りを

キョロキョロしながら、

「エツ!? 何所行つたの?」

「ここよ! プリキュア! ダークネス・スター!!」

「キヤアアア!」

ダークドリームは、間一髪ドリームのシューティングスターに似た必殺技、黒き流星と化すダークネススターを放つて攻撃を回避し、その勢いのままバッドエンドハッピーに体当たりした。吹き飛ばされたバッドエンドハッピーだったが、体勢を整え宙に止まると、

「へえ・・・中々やるね?」

「あなたもね!」

互いに口元に笑みを浮かべ、再び二人が激突した・・・

「ほらほら、何所見取るんやあ?」

「クツ、速い!?!」

バッドエンドサニーは、足のブーツから炎を噴射し、そのスピードでダークルージュを翻弄した。ダークルージュは、その瞬発力の前に防戦一方だった。

「ほな行くでえええ! バッドエンド・・・ファイヤー!!」

炎を全身に纏ったかのように、バッドエンドサニーは、弾丸のようにダークルージュ目掛け突進した。

「クッ!？」

ダークルージュは、咄嗟に手を楕円形に描き、炎を目の前に出現させるも、バッドエンドファイヤーの直撃を受け吹き飛ばされた。

「キヤアアアア!」

「どないや!・・・何やと!？」

ドヤ顔を浮かべたバッドエンドサニーだったが、ダークルージュは、吹き飛ばされながらもダークネスシユートの体勢を取り、

「お返しだよ!プリキュア!ダークネス・シユート!!」

ルージュのファイヤーストライクに似た、まるで黒き炎のボールが、バッドエンドサニー目掛け放たれた。バッドエンドサニーは両手で何とか弾き返し、再び両者が睨み合った。

「私、みんなから頭を叩かれて・・・怒ってるんだからあ!」

「それが私と何の関係があるの?」

「あなたも私と同じ目に合わせて・・・あ・げ・る!!」

「遠慮しとくわ!」

呆れ顔を浮かべたダークレモネードだったが、バッドエンドピースの周囲に雷が巻き起こり、顔色変えて瞬時にダークレモネードは距離を取った。近距離では、バッドエンドピースの雷攻撃の的にされると判断した。

「エへへ! 距離を取れば大丈夫だと思つたあ? 残念!」

バッドエンドピースは、ダークレモネードに軽くウインクすると、それを合図にしたかのように、雷がダークレモネードを直撃した。

「キヤアアアア」

「バイバイ! . . . エツ!? エエエ?」

悲鳴を上げながら地上に落下していくダークレモネード、バッドエンドピースは右手を振りながらバイバイするも、ダークレモネードが放ったダークネスウィップが身体に巻き付き、共に地上へと落下していた . . .

「ダークネスプラズマ!」

ダークミントから放たれた黒き閃光が、バッドエンドマーチ目掛けて放たれた。だが、バッドエンドマーチは、その閃光を見切っているかのように、躲し続けながらダークミント目掛け距離を詰めてきた。その口元には、笑みすら浮かんでいた . . .

(な、何てスピード!?)

動揺したダークミントが、もう一度ダークネスプラズマを放つも、黒き閃光を、黒き疾風に当てる事は出来なかった。

「どうした!?!それで精一杯かい? そんなスピードじゃ、あたしに掠り傷一つ付けられやしないよ!!」

距離を一気に詰めたバッドエンドマーチが、右足でダークミントの腹部に蹴りを入れ、堪らずダークミントは吹き飛んだ。

「キヤアアア!」

「フフフフ、弱者にも遠慮はしないよ! バッドエンド・・シュート!!」

漆黒色をした球体エネルギーが、徐々にアドバルン程に大きくなるや、バッドエンドマーチは、ダークミント目掛け球体を蹴り上げた。うねりを上げながらダークミント目掛け突き進んだバッドエンドシュートが、ダークミントを飲み込み、バッドエンドマーチの口元に笑みが浮かんだ。だが、巨大な球体から徐々に緑色の光が漏れ始め、

「ハアアアアアア!」

「な、何い!?!」

ダークミントの雄叫びと共に、バッドエンドシュートは内側から一気に崩壊した。戸惑うバッドエンドマーチの視界の中に、中から荒い呼吸をしたダークミントが姿を現わ



した。

「へえ、あの攻撃に耐えたのか・・・上等！」

「戦いは、攻撃だけが全てじゃない！」

再び身構えた両雄が、再度激突した!!

ダークアクアは、その都度距離を変えながら、バッドエンドビューティと戦い続けていた。アクアのサファイアアローに似た黒き水の矢、ダークアローを放ち牽制しながら、バッドエンドビューティの実力を探ろうと試みていた。だが、矢はバッドエンドビューティに届く前に、全て凍り付き失速し、バッドエンドビューティは、悠然と距離を詰めてきた。

「醜い・・・あなたの攻撃には、美しさが足りないわ!私が見せて上げるわ・・・

バッドエンド・・・ブリザード!!」

バッドエンドビューティの周辺に、黒い結晶が空中に複数浮かび上がり、ダークアクア目掛け放たれた。無数の黒き氷がダークアクアに襲い掛かる。

「クッ!？」

ダークアクアは、黒き水を剣に変え、黒き吹雪の攻撃を防ぎきった。バッドエンドビューティは、口元に笑みを浮かべながら、

「あれを耐えたとは・・・良いでしょう！」

バッドエンドビューティも氷を剣へと変化させ手に持つと、水の剣と氷の剣が激突した。

(ここまでのプレッシャー・・・ですがあ！)

ジョーカーは、魔王とピーちゃんから放たれるオーラに押されていたものの、自らの心の中に浮かんだ恐れを断ち切るように、二人にトランプカードを投げつけた。二人は咄嗟に躲すも、二人から発せられた強大なオーラは消え去り、ジョーカーの口元がニヤリとした。

「思った通りですねえ・・・そのプレッシャーは、何時でも出せると言う訳では無さそうですねえ！」

魔王とピーちゃん、二人がかなりの実力者だという事はジョーカーも理解した。だが、何時でも出せる訳では無いと知るや、反撃に転じた。そんな二人を援護すべく、シロップの背に乗ったアン王女が近付き、

「お二人共、わたくしも援護します！」

「ピギアアア！」

だが、そんなアン王女の言葉にピーちゃんは首を振ると、魔王がピーちゃんの言葉を

アン王女に通訳し、

「ピー助は、何か考えがあるみたいカゲ．．．アンは少し下の方で離れてるカゲ！」

「エツ!? 考えが?．．．分かりました!」

少し戸惑ったアン王女だったが、二人の言うように、シロップに下側で状況を見守りましようと伝えた。シロップが下降していくと、ピーちゃんはチラリと魔王を見つめ、

「パイパイ、ピツギヤア!」

「何!? 俺に囮になれってピー助は言うのか?」

「ギヤア、ギヤアアス!」

「分かったカゲ!」

頷き合った魔王とピーちゃん、魔王はジョーカー目掛け高速移動をすると、ジョーカーは目障りとばかり、トランプカードを投げつけた。その様子をジイと見て居たピーちゃんは、再びジョーカーがトランプカードを手に持ち、投げようとした瞬間、ピーちゃんは怪しく目を輝かせた。

「なっ、何!? 私の身体が?」

「ギヤアアス!」

「任せるカゲエ!」

まるで金縛りにでもあったかのように、ジョーカーは身体を動かす事が出来なかつ

た。ピーちゃんによって動きを止められたジョーカー、ピーちゃんの合図と共に、魔王は、ジョーカー目掛け影を伸ばすや、右手に抱えていた黒水晶玉を叩き落とした。

「しまった!」

慌てるジョーカーを嘲笑うかのように、黒水晶玉は、下で戦って居るバッドエンドプリキュアとダークプリキュア5の方へと落下して行つた。

黒水晶玉の中に捕らわれて居るプリキュア達は、突然天地が目まぐるしく回転しだし、パニックって居た……

「な、何が起こってるの?」

「みんなあ、何かに捕まってる!」

困惑顔のメロディが思わずポツリと眩き、表情を険しくしたムーンライトは、一同に指示を出した、一同は、ムーンライトに言われた通り、近場にある物体にしがみついていた……

### 3、黒水晶玉を奪え

「お前達、その黒水晶玉の中に、みゆき達プリキュアが捕らわれてるカゲエ!それを奪うカゲエ!!」

「あの中にドリーム達が？．．．分かったわ！みんなああ!!」

「「「分かった!」」」

魔王の言葉にダークドリームは頷き、仲間達にも同意を求めた。戦つて居たバッドエンドプリキュアから距離を取ったダークプリキュア5が、黒水晶玉の確保に向かった。見て居たアン王女はシロップに話し掛け、

「わたくし達も参りましょう!」

アン王女に促され、シロップも黒水晶玉目掛け飛びだした。

ジョーカーは珍しく動揺していた．．．

折角捕らえたプリキュア達を、このままむぎむぎ取返させる事だけは避けたかった。

「バッドエンドプリキュアの皆さん、黒水晶玉を渡すのだけは阻止して下さい!最悪、破壊しても構いませんよ!!」

「エエエ!?面倒だなあ．．．みんな、どうする?」

ジョーカーに頼まれたバッドエンドプリキュアの五人、バッドエンドハッピーは、面倒くさそうに他の仲間達にどうするか問い掛けると、

「しやあないなあ．．．」

バッドエンドサニーは嫌々ながら同意し、

「エへへへ、破壊しても良いんだよねえ?」

バッドエンドピースは、破壊出来るのを楽しそうに喜び、呆れ顔のバッドエンドマーチとビューティは、

「待て待て、最悪って言うってただらう?」

「取り返せなかつた場合、破壊しても構わないって事よ、お馬鹿さん!」

「馬鹿じゃないもん!」

バッドエンドビューティに馬鹿呼ばわりされ、バッドエンドピースは頬を大きく膨らませた。

「しょうがない・・・オーライオーライ!」

バッドエンドハッピーは、黒水晶玉目掛け宙に飛んだ。その視界に、黒水晶玉が落下してくるのが見えたバッドエンドハッピーは、両腕をグルグル回し、自分が取るとアピールするも、魔王がそうはさせないと影を伸ばして黒水晶玉を叩き、落下スピードが速くなった。簡単に捕れると思って居たバッドエンドハッピーは、目測を誤り、

「オーライ・・・キヤツ!」

バッドエンドハッピーの顔面に当たって黒水晶玉は跳ね返り、方向を変えて更に落下を始めた。バッドエンドハッピーはグルグル目を回し、地上に落下して行つた。

「何やってるんやあ!」

ブーツの足底から炎を噴射し、超加速で黒水晶玉を奪いに向かったバッドエンドサニーだったが、黒き閃光がその行く手に降り注ぎ、バッドエンドサニーは避けきれず直撃を喰らった。

「そう簡単には行かせないわ!」

バッドエンドサニーの前に立ち塞がったダークミントは、ダークネスプラズマを巧みに利用し、結界を張るようにバッドエンドサニーの動きを制限した。

「チツ・・・だったらあたしが!」

バッドエンドマーチが、そのスピードで黒水晶玉を奪いに向かうも、黒き流星が追いつき、バッドエンドマーチの行く手を遮り、

「あなたの相手は私よ!」

「貴様、何時の間に!?!」

「瞬発力なら・・・あなたに負けないわ!」

バッドエンドマーチの行く手に、ダークドリームが立ち塞がった。

「だらしない・・・私が奪いに行くわ!」

掛かってくるなら何所からでも来なさいとでもいうように、自信に満ちた表情を浮か

べたバッドエンドビューティ、その前に立ち塞がったダークレモネードは、

「本当は、あの頃の技は使いたくは無いんだけど・・・ダークネス・フラッシュ！」

ダークレモネードは、その場で足に力を込めた。ダークレモネードの足が光輝き、三日月のような形をした光弾が、バッドエンドビューティ目掛けて飛ぶ。こんな攻撃避けるまでもないと言いたげに、

「何をするかと思えば、この程度の攻撃・・・エッ?！」

バッドエンドビューティは、ダークネスフラッシュを冷気を宿した光弾で相殺したものの、相殺した時に起こった閃光で一瞬目が眩んだ。その隙を付き、ダークルージュがダークネスシユートを放ち、虚を突かれたバッドエンドビューティに命中した。

「アララ・・・みんな失敗しちゃったみたいだねえ?」

みんなが失敗した事を、少し小馬鹿にしたような表情を浮かべたバッドエンドピース、口元をニヤリとさせると、落下してくる黒水晶玉に狙いを付け、今にも雷を落とそうと試みる。だが、黒き水の矢が上空から降り注ぎ、バッドエンドピースは慌てて躲し続けるも、

「水晶玉を破壊させないわ!プリキュア!ダークアロー!!」

再びダークアローがダークアローを放つも、黒き矢はバッドエンドピースの頭上で衝



突し、水となってバッドエンドピースに降り注いだ。

「何所狙ってるのおお!! エへへ、狙いはこうやって付けるんだよ・・・バッドエンド・サンダー!!」

バッドエンドピースは、黒水晶玉目掛けてバッドエンドサンダーを放った。だが、雷は黒水晶玉を破壊する事無く、バッドエンドピースの体内で激しく発光する。

「キヤアアア!?! な、何でええ?」

「水は、一般的に電気を通す物質と位置付けられて居る! でも本当は、不純物をまったく含まない純水は、絶縁体となり電気は流れない。けれど、純水に塩が混ざること、イオンが電離し、プラスとマイナスに分かれ電流が流れるように・・・」

「アアアン! そんな難しい事分かんないよおお! もっと分かるように言つてえええ!!」

ダークアクアの語り出した説明が、バッドエンドピースにはチンパンカンパンで、何で雷が自分に降り注ぐのか、再度ダークアクアに聞いてみると、

「簡単に言えば、私が放ったダークアローは、純水ではない! つまり、今のあなたの身体は、電気を良く通す導体状態にあるって事・・・」

そう説明している間にも、バッドエンドピースは自分が放った雷で感電し、悲鳴を上げた。

その間にも見る見る黒水晶玉が地上へと迫る・・・

急降下したシロップは、何とか黒水晶玉に追いつき、必死に手を伸ばしたアン王女は、何とか黒水晶玉を手に入れる事に成功した。

#### 4、チームワーク

ダークプリキュア5の協力もあつて、黒水晶玉を手に入れたアン王女、妖精達から歓声が沸き起り、ダークプリキュア5もホッと安堵した。だが、まだ戦いが終わった訳では無かった・・・

「クツ!? 黒水晶玉を・・・」

「カゲカゲカゲ、いい気味カゲエエー!」

「ギヤアアス!」

「おのれえ、妖精風情がああ!!」

ジョーカーは齒軋りし、魔王とピーちゃんを睨み付けるも、二人もジョーカーを睨み返した。

「みんな、今まで彼女達バッドエンドプリキュアと戦って居て、気付いた事がある! 個々

の力は、彼女達は私達よりも上かも知れない・・・でも、彼女達には欠けているものがある!!」

ダークアクアは、仲間達を見て何かの策を授けた・・・

ダークドリームはコクリと頷き、

「分かったわ!みんな、アクアの考えで行きましょう!!」

ダークドリームの合図と共に、再び散り散りになった五人、何度も邪魔されたバッドエンドプリキュアの五人が、その後を追う。ダークドリームを追うのはバッドエンドマーチ、ダークルージュを追うのはバッドエンドビューティ、ダークレモネードを追うのはバッドエンドハッピー、ダークミントを追うのはバッドエンドサニー、そして、ダークアクアを追うのはバッドエンドピース、何度も小競り合いをしながら距離を取ると、ダークプリキュア5は、一斉に仲間達の方に距離を詰め疾走する。

「何の真似?!逃がさないんだからあ!」

バッドエンドハッピーが、サニーが、ピースが、マーチがその後を追う。バッドエンドビューティは少し顔を顰め、

(これは何かの罠?!それとも?)

「ビューティ、逃げられちゃうよおお!」

「エッ!?わ、分かったわ!」

少し思案していたバッドエンドビューティは、バッドエンドハッピーの言葉で我に返り、仲間達同様ダークプリキュア5の後を追った。どんどん距離を詰めてくるバッドエンドプリキュア、ダークプリキュア5の五人は、互いの顔を識別出来る距離まで接近すると、アイコンタクトをして宙に飛んだ。

「ダークネス・プラズマ!」

「キヤア!」

すかさず上空からダークミントが、黒き稲妻ダークネスプラズマを放ち、バッドエンドプリキュアの動きを制限し、

「ダークネス・ウィツプ!」

ダークレモネードが、戸惑って居たバッドエンドプリキュアの五人を、ダークネスウィツプで捕らえた。

一方、捕らわれたプリキュア達の下にも変化が訪れていた・・・

黒水晶玉の中は、空一面真っ暗だったのが、ある一点から光が差し込んで居た。ブックは、困惑気味に光を見つめ、

「あれは一体!?!」

「もしかしたら・・・みんな、あの光の下まで行ってみましょう!」

「パッション、どういう事？」

「行けば分かるわ！」

パッションは、ピーチの問いに答えず、一同に光の下まで移動しようとした。パッションに何か策があると感じた一同は、パッションに言われるまま、光の下に辿り着くと、パッションは目を輝かし、

「やはり此処からなら……みんな、集まって！此処から脱出するわよ!!」

「エッ!?出来るの?」

「本当ですか?」

ブルームとプロツサムに聞かれたパッションは、自信に満ちた表情で頷き、

「ええ、この光を通れば……じゃあ、行くわよ!元の世界へ!!」

パッションの言葉と共に、一同の身体は赤く輝き、その姿を消した……

手に持っていた黒水晶玉から亀裂が起こり、思わずアン王女は驚愕し、

「そんな、黒水晶玉に亀裂が!?!」

「ロプ!?!じゃあ、間に合わなかったロプ?」

「それは、わたくしにも……」

何が起こっているのか、自分にも分からないと告げようとしたアン王女だったが、黒

水晶玉が粉々に砕け散った代わりに、目の前に一斉にプリキュア達が現われ目を輝かせた。

「み、皆さん……よくぞご無事で！」

「王女様！」

「ソード……この娘は心配させて」

「ゴメンなさい！」

ソードは、アン王女を見ると嬉し涙を浮かべながら抱き付き、アン王女もソードを抱きしめ返した。戻って来たプリキュア達は、皆嬉しそうに妖精達やアン王女を見つめ、ブラックが、ハッピーが話し掛け、

「みんな、心配させてゴメンね！」

「キャンディ、ただいまああ！」

「ハッピー、みんなああ!!」

キャンディは、嬉しそうにハッピーに抱き付いた。光の戦士の子孫であるアン王女が触れた事で、邪悪な水晶玉の一部に、光の加護が現われ脱出出来たとは、この時の一同には分からなかった。

「お、お前達……重いロプ」

シロップに、突然現われた32人のプリキュアの重さが加わり、どんどん下降して

行った。妖精達の歓声が沸き起り、ダークプリキュア5の五人にも、プリキュア達が無事に脱出出来た事が分かり、五人は顔を見合わせホッと安堵した。

「ダークドリーム！みんなあ！ありがとう!!」

ドリームは、両手をブンブン振りながら、自分達の無事な姿をダークプリキュア5に知らせた。

「おのれえええ！後一步と言うところでえええ!!」

プリキュア達が、黒水晶玉から脱出したのを見たジョーカーは、激昂しながら不気味に赤く目を輝かせた。そんなジョーカーを一斉に睨み返すプリキュア達、

「クツ、此処は任せましたよ!」

形勢不利とみたジョーカーは、後時をバッドエンドプリキュアに託し、早々とバッドエンド王国へと帰った。捕らわれたバッドエンドプリキュアの五人は、プリキュア達が脱出し、ジョーカーは帰ったのを見て戸惑いながら、

「なっ!?!プリキュア達出てきちゃった?ジョーカーは帰っちゃったし・・・」

「チツ、こんなん、直ぐ解いたるわ!」

「イタアアイ!力入れないでええ!!」

「我慢しろよ、このくらい!」

「むざむざ敵の計略に嵌り、見す見すプリキュア達を取返されるとは・・・」

バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの五人が、懸命にダークネスウィップを解こうと藻掻き、ダークドリームは憂いの表情を浮かべながら、

「このままこの場を去り、あの男と行動を共にしないと誓ってくれば、あなた達を見逃してあげても良いけど……」

「余計なお世話だよ!」

ダークドリームの提案を、バッドエンドマーチは拒絶した。プライド高い彼女は、この屈辱を受け慥然として居た。ダークドリームは、残念そうな表情を浮かべながら、

「そう……残念だけど、みんな!!」

ダークドリームの合図に頷いた四人、ダークプリキュア5は、目を閉じ、精神を集中させた。

「!!」我らがマスター!ダーククイーン……私達に力をお貸し下さい!!」

そんなダークプリキュア5の心に、気高き声が聞こえてくる。

(親愛なるダークプリキュア5!例え離れていようと、あなた方の声は私に聞こえています!!さあ、あなた方に力を授けましょう……)

ダークプリキュア5の頭上が輝くと、五人の手に黒いフルーレが装着される。五人は軽くフルーレを振ると、

「5つの闇に!」



「希望を乗せて！」

「プリキュア！ダーク・ローズ・エクスペロージョン！！」

五人のフルーレの先端に、黒い薔薇が姿を現わし、思わずバッドエンドプリキュアの五人が目を見張った。ダークプリキュア5は、呼吸を合わせるように、

「ハッ！！」

五人がフルーレを前に突き出すと、フルーレから放たれた黒い薔薇が合わさり、巨大な黒薔薇となつて、バッドエンドプリキュアに向かつて飛んで行く。何とか拘束されていたダークネスウィップを解いた五人だったが、目の前に現われた巨大な黒薔薇に、飲み込まれようとして居た。

「クッ!?、こんなもの！」

バッドエンドビューティは、一歩前に出ると、前方に冷気を集中させ両手を突き出し、氷のバリアを作り上げた。

「ビューティ、凄いい！」

「やるやないかあ！」

バッドエンドハッピーが、サニーが、バッドエンドビューティを称えるも、バッドエンドビューティの顔からは、何時もの冷静さが消え、冷汗すら流れて居た。その様子を見たバッドエンドマーチとピースは、心配そうに声を掛け、

「ビュ、ビュートイ!？」

「だ、大丈夫?」

「クツ・・・いいから、さっさと逃げなさい!」

(あの娘・・・)

ダークローズエクスページョンを放ちながら、バッドエンドビュートイの行為を見たダークドリームは、少し口元に笑みを浮かべて居た。

(クツ、氷に罅が!?な、何て威力なの?)

バッドエンドビュートイが作り上げた氷のバリアは、衝撃で所々罅が入り、今にもバッドエンドビュートイを飲み込もうとするかのように勢いを増す。

(この私が・・・負ける!?)

ミシミシ亀裂が一層走り、バッドエンドビュートイが呆然としたその時、バッドエンドビュートイの両手を四つの手が掴み、バッドエンドビュートイはハッと我に返った。

「あ、あなた達!？」

「私達も力を貸すよ!」

「せや、あないな攻撃、ウチらが力を合わせれば、どうって事あらへん!」

「エへへ、私達五人でバッドエンドプリキュアだしね!」

「そういう事!」

バッドエンドハッピーが、サニーが、ピースが、マーチが、バッドエンドビューティにウインクし、ハアと溜息を付きながらも、何処か嬉しそうな表情をしたバッドエンドビューティは、

「礼は言わないわよ!!」

「!!」「ハアアアアア!!」「!!」

バッドエンドプリキュア五人の気持ちが一つになった時、バッドエンドビューティが作り上げた氷のバリアは、より一層強固な氷のバリアと化し、ダークローズエクスプローションは、彼女達を飲み込む事無く消滅した・・・

「そんな、ダークプリキュア5のあの技を防いだの?」

「でも見て!何かあの娘達嬉しそうだよ?」

「本当だ!でも、どうして?」

アクアが、ダークプリキュア5の技を防いだバッドエンドプリキュアに驚愕し、ブラックとピーチは、技を防がれたのに、何処か嬉しそうな表情をしているダークプリキュア5に戸惑った。

プリキュア達は知らなかった・・・

ダークプリキュア5は、嘗ての自分達同様、仲間の大切さを知ったバッドエンドプリキュアを見て、心の底から喜んで居る事に・・・

## 5、アン王女の決意

ダークプリキュア5が放った、ダークローズエクスペロージョンを何とか堪えたバッドエンドプリキュアの五人だったが、技を防いだ事で体力が尽きようとしていた。荒い呼吸を続ける五人を、ダークプリキュア5はジッと見つめるのみだった。

(今なら私だけでも！)

キツと表情を険しくしたキュアソードは、バッドエンドプリキュア目掛け駆け出し、

「ソード、お止めなさい！」

「止めないで下さい！今なら私でも・・・閃け！ホーリーソード!!」

アン王女が止めるのも聞かず、ソードは駆け出しながら大きくジャンプし、右手から無数の剣形のエネルギー弾を、バッドエンドプリキュアの五人目掛け放った。体力を失っていた五人は、険しい表情でただ見つめるのみだったが、

「ダークネス・プラズマ！」

ホーリーソードを、黒き閃光が全て消滅させた。思わず目を見張ったソードは、ならば接近戦を仕掛けようとする、チラリとソードを見たダークドリームは、

「プリキュア！ダークネススター!!」

「キャット!?ど、どうして?」

黒き流星がソードの行く手に立ち塞がり、ソードは戸惑った。まるでバッドエンドプリキュアの五人を庇うように、キュアソードに立ち塞がったダークプリキュア5は、

「あなた、何なの？」

「あの子達に攻撃しようと言うなら・・・」

「代わりにあたし達が相手になるよ！」

「弱ってるあの子達を狙う何て・・・最低！」

「あなた、本当にプリキュアかしら？」

「ま、待つて！あの子達は、バッドエンドプリキュアと言って・・・」

ソードを険しい表情で見つめるダークドリーム、ダークミント、ダークルージュ、ダークレモネード、ダークアクアの五人、庇われたバッドエンドプリキュアの五人も、呆然としながら成り行きを見て居た。五人から凄まれ、思わず身を仰げ反らせたソードだが、必死に弁明しようとするも、ダークプリキュア5は険しい表情を止めなかった。慌ててプリキュア5の五人が両者の間に入り、

「まつ、待つて、みんなあ！ソードも落ち着いて!!」

「彼女はキュアソードって言って、あたし達の仲間なの！」

「味方通しで攻撃しあう何て止めようよ！」

「冷静になりましょう！」

「あなた達、ひよつとしてバッドエンドプリキュアに、昔の自分達を重ねたんじゃない？」

ドリームが、ルージュが、レモネードが、ミントが、両者を宥めに掛かり、アクアは、ダークプリキュア5達は、バッドエンドプリキュアが昔の自分達に似ている事で、何とか彼女達を助けられないか思案しているのではないかと見抜いた。それを聞いたバッドエンドハッピーは、少し顔を赤らめながら、

「べ、別に私達、助けて何て一言も言っていないからね？」

「分かってるわ！でも、あなた達にも友情の素晴らしさが、少しは理解出来た筈よ!!違う？」

バッドエンドプリキュアの五人を見ながら、ダークドリームが諭すように話し掛けると、バッドエンドプリキュア達は、先程の戦いが頭を過ぎった。特に頭の回転の速いバッドエンドビューティは理解し、

「それは認めざるを得ないわね・・・でも、次に会った時、私達は、この日の借りを必ず返す！それだけは覚えておきなさい！」

「そう!?!私は、あなた達五人とは、何時か並んで共に戦う時が来る!そう信じてるわ!!」

「.....」

何時か自分達バッドエンドプリキュアが、ダークプリキュア5達と並んで共に戦う日

が来る・・・

ダークドリームの言葉が、バッドエンドプリキュアの心に響いた。思わず無言になった五人だったが、バッドエンドビューティは我に返り、

「そのような戯れ言で、私達を動揺させようとするのは無駄よ！ダークプリキュア5、そして、スマイルプリキュア！他のプリキュア達、また会いましょう!!」

「次は今回には行かない！」

「ねえ、ねえ、私達も合体技考えようよ？」

「良いねえ！やろう、やろう！」

「やれやれ・・・てな事や！次は負けへんでええ！」

バッドエンドマーチは、目付きを鋭くして一同を見渡すも、バッドエンドピースは五人の合体技を考えようと誘い、バッドエンドハッピーは同意した。バッドエンドサニーはやれやれといった表情を浮かべるも、キツとプリキュア達を見つめ、次は負けないと告げた。

バッドエンド王国に戻って行った五人を、ダークプリキュア5は、名残惜しそうに見送った・・・

ダークプリキュア5とキュアソード、両者の間にプリキュア5の五人が入った事で、

ダークプリキュア5も冷静にソードの言いたかった事に耳を傾けた。ダークプリキュア5の五人も、ソードの気持ちを少しは理解する事が出来た。だが、キュアソードを見つめるアン王女の視線は険しかった・・・

帰って来たダークプリキュア5達と、楽しそうに談笑していたプリキュア達や妖精達だったが、ソードに近付いたアン王女は、

「ソード・・・」

「はい・・・アツ?!」

アン王女は、右手でソードの左頬を平手で叩き、叩かれたソードは、目に涙を浮かべ、談笑していたプリキュア達も、思わずシーンと黙り込み、呆然とアン王女とソードのやり取りを見つめていた・・・

「ア、アン王女・・・どうして?!」

「わたくしは言った筈です！軽はずみな行動は控えなさいと・・・ですが、あなたはそれを聞き入れなかった!!あなたの軽率な行いが、他のプリキュアの方々をも、危険な目に遭わせたのですよ!!この方々が加勢に来てくれたから良かったもの・・・分かっているのですか?」

「も、申し訳ありません・・・でした」

零れる涙を拭おうともせず、ソードは、俯きながらアン王女の言葉に聞き入っていた。



アン王女の言うように、ダークプリキュア5が来てくれなければ、自分達はどうなっていたらと思うと、背筋がゾツとした。見かねたドリームとピーチが、ソードに助け船を出し、

「アン王女！ソードも反省してるし、その辺で……」

「そうだよ！折角ダークプリキュア5も帰って来たしさあ!!」

「いいんです！アン王女の仰る事は当然ですから……」

落ち込みながらも、アン王女の言葉を肯定するソード、ドリームとピーチが、微妙な表情で顔を見合わせたその時、ソードのパートナーである、ラブリーコミュニケーション状態のダビィが騒ぎ出し、

「アン王女、国王様から連絡が入ってるビィ！」

「エツ!?お父様から?」

アン王女はその場で身を屈め、ダビィを手に持ち、トランプ王国に居る国王と通信を始めた。

「お父様、何かあったのですか?」

「ウム……アン、直ちにトランプ王国に戻ってくるのだ!実は……プリキュアの妖精が、三人も同時に誕生したのだ!!」

「エツ!?プリキュアの妖精が?」

「ウム、これは何かの前触れなのか、はたまた偶然なのか……」

「わ、分かりました！直ちにトランプ王国に戻ります!!」

通信を切ったアン王女に近付いた一同、ソードも不安げな表情を浮かべ、

「お、王女様?」

だがアン王女は、ソードを無視し、クルリとソードに背を向けると、他の一同に話し掛け、

「皆様、折角お近づきになれたばかりですが、わたくしは、急用でトランプ王国に戻らねばなりません!」

「プリキュアの妖精が生まれたって言ってたよね?」

ブラックに聞かれたアン王女は、コクリと頷くと、

「はい……それが何を意味するのかは、わたくしにも分かりませんが、ダビィのように、妖精達に、プリキュアの妖精としての使命を伝えねば……」

「ロプ!それならいつその事、その生まれた妖精を、妖精学校に入れたら良いロプ!!」

アン王女が、プリキュアの使命を、生まれたばかりの妖精達に伝える使命があると話すと、シロップが話に加わり、妖精学校の事を一同に教えた。妖精学校の事は一同も初耳だったようで、

「妖精学校!」

「そのようなものがあるのですか？」

プリキュア達が、アン王女が、思わずシロップに聞き返した。シロップはコクリと頷くと、

「そうロプ！ココやナッツ、四大国王、他の妖精の国のみんなが中心となって、妖精達の学校を作ったロプ!!」

「そんな事が・・・それでココ達は、あんまりこっちの世界に来れないんだね？」

以前、のぞみの家に魔王が泊まりに来る日が近いと知ったココは、のぞみを心配してこっちの世界に来た事があったが、魔王がラブ達の下に行くと、ココは、シロップに乗って直ぐにパルミエ王国に帰った事を、ドリームは思い出した。ベリーはタルトをチラリと見ると、

「タルト、あなたも知ってたの？」

「いやあ、ワイの耳には・・・何せワイは、王子言うても、スウィーツ王国の105番目の王子やさかいなあ」

「それって・・・あんまり自慢にならないよね？」

タルトが、スウィーツ王国の105番目の王子だと知り、微妙な表情を浮かべたブルームが、タルトに話し掛ける。シロップはアン王女を再び見つめ、

「良かったら、シロップがココとナッツに話すから、トランプ王国に迎えに行くロプ！」

「それは助かります・・・分かりました！トランプ王国に戻り次第、父に話しておきます！！」

アン王女は、シロップの案に同意し、新しく生まれた三人の妖精達を、妖精学校に預ける事を決めた。

「では、わたくしはトランプ王国に戻ります！こんな事を皆様にお頼みするのは心苦しいのですが・・・ソードの事、よろしくお願い致します！！」

「エッ!?ま、待つて下さい！私も一緒に・・・」

「なりません！キュアソード、わたくしが許可するまで・・・トランプ王国に戻つて来る事は禁じます!!」

「エッ!?・・・そ、そんなああ・・・嫌、嫌ですうううう」

他のプリキュア達に、ソードの事を頼んだアン王女、ソードと一緒に帰りたいと伝えても、アン王女は冷たくソードを突き放した。アン王女は、トランプ王国までシロップに送つて貰えるか頼むと、シロップは送る事を快諾したものの、

「本当にソードを置いていくロップ？」

「はい！良いですね、ソード!!」

「待つて・・・私も、私も・・・」

だが、アン王女はソードを無視し、シロップの背に乗り込むと、ソードから顔を背け

た。それを見たソードの感情は爆発し、まるで赤子のように泣き喚いた・・・  
「ウワアアアアアン・・・」

泣きじやくるソードを心配し、ブロッサムとハッピーが側に近寄り慰めるも、ソードは泣きじやくり続ける。

「いくら何でも酷いよー!」

「そうだよ!私、アン王女に抗議してくる!!」

「私も行く!!」

「お止めなさい!!」

泣きじやくるソードの事を見かねて、ドリームとピーチが、アン王女に抗議しに行こうとするのを、ムーンライトが右手を広げながら止めた。二人はどうして止めるの?と言った表情でムーンライトを見つめると、

「ムーンライトの言う通りよ!良くアン王女の事を見て見なさい!!」

ダークアクアが、シロップに乗ったアン王女を指差し、釣られるように一同が視線を向けると、アン王女の肩も揺れていた。それは、アン王女も涙を流している事を、一同に理解させた。

「ゆり達の言う通りカゲ!アンだって、ソードを一人残すのは辛いカゲ・・・でも、自分が側に居ると、ソードは、心の何処かでアンを頼ってしまう!アンは、自分が側に居る

事が、ソードの成長を妨げているのではと思ったようだカゲエ・・・ソード、自分でも薄々分かつてるカゲ？」

会話に加わった魔王が、アン王女の真意を一同に語ると、ソードはハツとした。確かに、孤児となった自分を育ててくれたアン王女の事を、ソードは母とも姉とも思い慕って居た。プリキュアになっても、心の中でアン王女に甘えていた事が、思い返されてくる。ソードはゴシゴシ涙を腕で拭うと、大きく息を吸い込み、

「アン王女おお！私、強くなりますから！プリキュアのみんなど一緒に過ごし、心も体も・・・強くなりますからああ!!今度アン王女と会う時は、胸を張って会えるように、成長しますからああ!!」

ソードの告白を聞き、堪らず振り向いたアン王女の瞳からも、大粒の涙が落ち、

「ソード・・・わたくしもしも楽しみにしていますよ！皆さん・・・ソードを、ソードをよろしく願います!!」

プリキュア達にソードの事を託し、アン王女は、シロップに乗ってトランプ王国へと帰って行った・・・

その姿を、一同は手を振り続けた・・・

完

## 第八十四話：真琴の学校デビュー

1、真琴と魔王の居候先は!?

ダークプリキュア5、魔王とピーちゃん活躍で、無事に助け出されたプリキュア達、アン王女は、トランプ王国で新たに生まれた三人の妖精の事を聞き、トランプ王国へと帰って行った。強がってみたものの、ソードは元気が無かった・・・

「ソード、元氣出すカゲエー！さっきの勢いはどうしたカゲエー！」

「うん・・・そうだよね！」

一同を振り返り、満面の笑みを浮かべたソードを見て、一同はホツと安堵した。マリンは、膨れっ面しながら魔王を見つめると、

「そんな事より：：やい、エロ魔王！さっきはよくもあたし達に恥をかかせてくれたねえ？」

「カゲ!? あれは、審判の俺に口答えしたえりかが悪いカゲエー！」

「ムッキイイ！素直に謝れば許して上げようと思つたのに・・・海より広いあたしの心も、ここらが我慢の限界だよ!!」

マリインタクトを取りだしたマリンは、さっきの恨みとばかり魔王を追い回し、魔王は



巧みにプリキュア達の間を掻き分け逃げ続けるも、パッションに呆気なく捕まり、

「魔王もマリンも、その辺にしておきなさい!」

「は〜い!」

「分かったカゲ」

パッションに窘められ、マリンは渋々魔王を追い回すのを止め、魔王も素直にマリン、ブロッサム、サンシャイン、レモネードに謝罪した。ブラックは、ダークプリキュア5を見つめると、

「あんた達、本当に良いタイムイングで来てくれたわ・・・裏でスタンばってた?」

「エッ!?何の事?実は、以前にも帰って来ようと思った時があったの!プリキュアのみんなあ!私に力を貸してええ!!て声が、私達の心の中で聞こえた事があって・・・」

「その時は、私達が居た場所から、地球まで大分距離があったから、駆け付けたくても出来なかつただけど・・・」

「それであんた達が、また新たな敵と戦っているんじゃないかとは思っては居たんだけど・・・」

「さつき、またあの時の声が聞こえて、つぼみのお婆さんの薰子さんに助けを求める声が聞こえたから、これはあなた達の身に何か起こったんじゃないかと思って・・・」

「マスターに頼んで、闇の気配を探ってもらったところ、この場所だつて分かつて駆け付け付

けたのよ」

「間に合って良かったわ！」

ブラックに聞かれた、ダークドリーム、ダークアクア、ダークルージュ、ダークミン  
ト、ダークレモネードが語った内容を聞き、一同の視線がエコーに集まった。ブラック  
は、エコーをマジマジと見つめ、

「エコーの声が、ダークプリキュア5達の下まで届いて居たとは……」

「過去の世界に飛ばされた、私達の下にも届いていたぐらいだし……不思議では無いわ  
！」

ホワイトは、嘗て過去の世界に飛ばされていた自分達にも聞こえた程だから、ダーク  
プリキュア5の下に届いていても不思議では無いと告げた。ハッピーは、改めてジィと  
エコーを見つめると、

「今改めて思ったけど……エコーの力って、凄いなだねえ？」

「エッ!? 私に聞かれても……でも、みんなの役に立っているなら嬉しいです！」

エコーは、謙遜しながら少し照れたように顔を赤らめた。プリキュア達の中でも異色  
な存在であるエコーだが、仲間達は、エコーの力の重要性を改めて認識した。

ブラックは一同の顔を見渡し、

「折角ダークプリキュア5も帰って来てくれたけど、アン王女は帰っちゃったし、この後

どうする？」

「ちよつと遅くなっちゃったしね……また後日集まって、みんなでソードの歓迎会でも開いてあげましょうか？」

もう日も完全に暮れて、七色中学校も闇に覆われていた。ホワイトは、後日改めてソードの歓迎会でもしてはどうかと提案すると、ムーンライトもコクリと頷き、

「それが良いわね！大学生の私達は兎も角、まだ高校生や中学生のみんなを遅くまで連れ出すのは、気が引けるわね」

ソードの歓迎会は、また後日開くという事に一同も依存はなかったのだが、ローズはダークプリキュア5を見ながら、

「あなた達、まだこっちに居られるの？」

ローズに聞かれたダークプリキュア5の五人、五人の視線が、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコー、そしてソードに向けられ、

「折角新しいプリキュア達にも会えたり、少しはのんびりしたい所だけれど……」  
「あたし達があなた達に会いに来た理由が……実はもう一つあるの！」

「それをあなた達に伝えるのも、私達の使命！」

「これから話す事を、心の何処かに留めておいて欲しいの！」

「みんな！カオスに気を付けて!!」

「カオスって・・・あのカオス？」

ダークアクア、ダークルージュ、ダークレモネード、ダークミント、そしてダークドリームが、一同に忠告を与えた。カオスと聞いたドリームは、思わずダークドリームに問い返した。

カオス・・・

闇の救世主を名乗るバロムによって、強制的に目覚めさせられた闇の根源・・・

プリキユア達の思いを一つにした、無限シルエットレクイエムによって、カオスは再び眠りに付いた筈だとは思っていた。だが、ブラックとホワイトだけは、ダークドリームへの忠告を聞いて、ハツとした表情を浮かべた。

（そうか・・・そうだったんだ!! 私とホワイトが、最近頻繁に見る長い黒髪の少女の夢・・・あれは、カオスだったんだ!! でも、何故私達だけに!?)

ブラックは、過去の世界から戻って来てから、頻繁に見る長い黒髪の少女の夢の事を思いだしていた。思い返せば、加音町でバロムと戦い、闇の中でカオスを鎮め、闇の門から地上に出た時、ブラックとホワイトは、闇の中に少女を見て居た。後で他の仲間達に聞いてみても、ブラックとホワイト以外、その少女は誰も見て居なかった。あの時はカオスだとは気付かなかったが、今思い返せば、間違いなくカオスであったとブラックは確信した。

「ねえ、カオスに気を付けてって……どういう事？」

怪訝な表情でダークプリキュア5に問い掛けたブラック、ダークプリキュア5は小首を傾げながら、

「さあ、私達にも正確な事までは分からないわ！ただ、カオスの動きが妙だって、マスターは言ってた……」

「あなた達プリキュアの様子を、カオスは見ているようだってマスターは言ってたわ！」  
ダークドリームとダークミントの言葉を聞き、ブラックはチラリとホワイトを見ると、ホワイトもコクリと頷き、

「今直ぐにカオスが動く事は無さそうだけど、用心しておいた方が良いのは確かね……忠告ありがとう！」

「気にしないで！これも私達の役目だから……とここで、キュアハッピーって言ったわね？話があるんだけど……少し良いかしら？」

「エツ！私に？もちろん構わないですけど……」

ダークドリームに呼び出されたハッピーは、一同から離れ校舎裏に場所を移した。静まりかえる夜の校舎裏は不気味で、ハッピーが少しビクビクしているのを見て、ダークドリームは小首を傾げた。

「どうかした？」

「い、いえ．．．ちよつと夜の学校は不気味だなあと思つて．．．」

思わずそんなハッピーを見たダークドリームはクスリと笑い、

「フフフ、ハッピーは、どことなくドリームに似てるわねえ?」

「エツ!? そ、そうかなあ?」

「エエ．．．だからこそ、あなたに聞いてみたいと思つたの! あなた、バッドエンドプリキュア達をどう思う?」

急に真顔になつたダークドリームを見て、ハッピーも真顔になつた。バッドエンドプリキュアの事を聞かれても、さつき初めて会つたばかりで、ハッピーにも彼女達の事は良く分からないというのが本音だつた。

「どう思うと聞かれても、さつき会つたばかりだし．．．私達スマイルプリキュアに、どことなく似て居るなあとは思いましたけど．．．」

「そう．．．でもこれだけは言える! 彼女達に、光の温かさを教えられるのは．．．スマイルプリキュア! あなた達よ!!」

「エツ!?!」

「彼女達がこのまま闇の道を進むか、光の温かさに触れ、私達のように光と共に歩む道を進むかは、あなた達次第つて事．．．でも、それには一度は確実に彼女達と戦う日が来る! 友情の大切さを知つた彼女達は．．．強いわよ!!」

ダークドリームの言葉を聞き、ハッピーは激しい動揺をした・・・

戻って来たハッピーとダークドリームは、一同の様子を見にやって来た佐々木先生に気付いた。

「佐々木先生、どうして此処に!?!」

「どうしてじゃありません!急に学校を使いたいって連絡が合つて、気になつて来てみたら・・・プリキュアの姿になつていてという事は、またあの人達が現われたの?」

「ハッピー、この人は?」

「私達の学校の先生で、佐々木なみえ先生です!先生は、私達がプリキュアだつて知つて協力してくれてるんです」

「初めて見る方よねえ?私は星空さん、青木さん、緑川さん、日野さん、黄瀬さんの担任をしている佐々木なみえです!」

「私は、ダークドリームです!」

互いに自己紹介をしながら、大体の状況を理解した佐々木先生だった。ハッピー達と一緒に現われた佐々木先生を見て、プリキュア達は挨拶し、魔王は目を輝かせ、側に居たプロッサムに話し掛けると、

「おいつぼみ、あの美人は誰カゲエ?」

「エッ!? 魔王は世界絵本博覧会の時に、佐々木先生に会ってませんでしたっけ? あの方は、ハッピー達の学校の先生で、佐々木なみえ先生って言うんですよ!」

「知らないカゲ! あの時は、みゆきを懲らしめるのに必死で、気付かなかったカゲ…」

「私達がプリキュアと知っている数少ない協力者の一人よ!」

「魔王、言っておくけど、佐々木先生に変な事したら駄目だよ?」  
近くに居たイーグレットとレモネードも会話に加わり、レモネードは前もって魔王を窘めた。

「それじゃあ、私達は今回の報告も兼ねて、マスターの下に戻るわ!」

顔を見合わせたダークプリキュア5、ダークドリームが一同に語り掛け、ダーククイーーンの下に戻ると告げると、一同は残念そうな表情を見せるも、

「そっかあ…五人共、危ないところを助けに来てくれてありがとう!」

「ええ! みんなが来てくれなかったらと思うと…鳥肌が立ってくるわ!」

「本当、感謝してるわ!」

「また直ぐに会えるって、私…信じてる!」

「ウン! ダークドリーム、みんな、また何時でも帰って来てよね!」

名残惜しそうにしながらも、ブラックが、サンシャインが、ブライトが、パインが、そしてドリームが声を掛けた。ダークプリキュア5はコクリと頷き、



「エエ、また近い内に必ず．．．それじゃあ、また会いましょう！」

ダークプリキュア5は、一同に軽く手を振りながら時空の狭間に消えて行った．．．その姿を、一同は惜しみながら手を振り続けていた．．．

一同が変身を解除した事で、佐々木先生は改めて一同を見渡しながら、みゆき、あかね、やよい、なお、れいかを見つめると、

「みんな、今日はもう遅いから帰りなさい！親御さんも心配しているわよ？現に、星空さんのお母様から電話を頂いたし．．．」

「エツ!?お母さんが?」

「ええ、心配してたわよ?」

みゆきの母育代が、みゆきが中々帰って来ない事で心配し、佐々木先生の家に電話を掛けてきたと知り、みゆきは変顔浮かべながら動揺した。なぎさも佐々木先生の言葉に同意し、

「そうですねえ．．．じゃあ、今日はお開きにしようか?」

「そうね．．．真琴、あなたはこれからどうする?私と一緒に加音町で暮らす?」

真琴の事を気に掛けたエレンが問うと、真琴は微妙な表情を浮かべ、

「そうしたいのは山々何ですけど．．．何時ジョーカーやバッドエンドプリキュア達が現

われるか分からないし、私はこの町で過ごすのかと……」

真琴が七色ヶ丘で暮らそうかと考えて居ると聞き、みゆき達の目が輝いた。特にやよいはキラキラ目を輝かせ、

「本当!?まこちゃんも私達の街で暮らせるなんて……歓迎しちゃう!」

「それは構わんけど……真琴、どっか泊まるあてはあんの?」

「一週間交代ぐらいなら、あたし達の家泊めて上げられるけど……」

行く宛があるのか真琴に聞いたあかねとのおも心配そうに、一週間交替ぐらいなら、自分達の家泊めて上げられると提案するも、真琴はゆつくり首を振り、

「皆さんの迷惑になるような真似はしたく無いので、何処か公園とかでダビィと一緒に  
凄そうかと……」

真琴の考えを聞いた一同から響めきが沸き起り、みゆき達は特に目を点にしながらか  
き、

「「「「エエエ!?」」」」

「いや、それは不味いつて!」

「真琴さん、こちらの世界には、こちらの世界のルールがありますし、そのような真似をしたら、警察の方に家出少女と勘違いされますよ?」

なおとれいかに考え直すように言われ、真琴は困惑気味に、

「でも……」

「だったら、不思議図書館はどうかなあ？」

「良いねえ！あそこなら本も一杯あるし、楽しく過ごせそう!!」

やよいの提案にみゆきも同意した。ほのかは確認するように真琴に声を掛け、

「真琴さん、自炊とかするの？」

「自炊……って何？」

「自炊って言うのは、自分で食事を作ったり、お洗濯やお掃除する事を言うんだよ！」

やよいの説明を聞き、見る見る困惑気味な表情を浮かべた真琴は、ゆっくり首を振ると、

「無理です！自炊とかした事無いし、王宮に住んでた頃は、専門の方が居たし……」

真琴の困惑した表情を見て、一同は、真琴を一人で暮らさせるのは無理だと悟った。

ダビィは微妙な表情で真琴を見つめ、

(ダビィが人間の姿になれば、ソードの力になれるのに……)

妖精姿で真琴の為に料理など作って上げられず、ダビィはガツカリした表情で俯いた。

「詳しい事情は分からないけど、あなた行く宛が無いの？」

「佐々木先生、この子は剣崎真琴ちゃん、キュアソードって言って……」

見かねた佐々木先生も会話に加わると、みゆきが手短かに真琴の事を佐々木先生に教えた。トランプ王国から、ジョーカーに奪われた秘宝を取り戻す為に、こつちの世界にやって来た事などを語った。ジイと真琴の顔を見ながら話を聞いていた佐々木先生は、「大体の事情は分かったわ・・・良かったら、私の家にいらつしやい！私は一人住まいだし、一人ぐらい増えたって大丈夫だから!!」

「でも、それじゃあご迷惑に・・・」

「子供が遠慮する必要無いわ!」

一同からもそれが良いと薦められ、真琴とダビイは、佐々木先生の下で居候する事になった・・・

「ゴホカゲ、ゴホカゲ」

わざとらしい咳払いをした魔王を、怪訝な表情を浮かべた一同が見つめると、魔王は俺の事を忘れて無いか?と言いたげに、

「それで、今日俺は何所に泊まれば良いカゲ?」

「アッ!?!」

「すっかり忘れてた!」

順番通りなら、本来魔王を泊めるべき響と奏、アコの三人は、困惑気味に顔を見合わ

せながら思い出し、

「エエエと・・・せっかく七色ヶ丘に来てるし、魔王も加音町に戻るよりは、七色ヶ丘に居る方が良いよねえ？」

「そうそう！響、たまには良い事言うわねえ!!」

「面倒だもんね!」

「たまにはは余計だよ!」

奏とアコも響の案に同意すると、見る見るあかね、やよい、なお、れいかの表情が曇り、

「そんなん狡いわあ!」

あかねが思わず不満そうにポツリと呟くと、やよい、なお、れいかがコクリと頷いた。苦笑を浮かべたみゆきは、

「まあまあ、ここは魔王の意見も聞いてみようよ!魔王はどうしたいの?」

「俺か!?俺は・・・この先生と一緒に暮らすカゲエエ!!」

「エツ!!私の家?」

満面の笑みを浮かべながら、魔王が希望を述べると、佐々木先生は困惑した。他の一同も魔王を困惑気味に見つめ、なぎさはハアと溜息を付くと、

「魔王ってさあ・・・意外と熟女マニアだよねえ?」

「熟女って・・・なきさ、佐々木先生はまだ二十代何だから失礼よ！」

「そうでした！」

ほのかに注意され、なきさは舌をペロツと出しながらそうだったと苦笑を浮かべた。

「私、魔王と一緒に住むの・・・嫌です！」

さつき魔王に騙された真琴は、泣きそうな表情で魔王を指差し嫌々をした。魔王は、真琴の周りをプカプカ浮かびながら、

「ソード！加音町からここまで、俺が連れて来てやった恩を忘れたカゲかあ？」

「それは・・・それとこれとは別なもの！」

頬を大きく膨らませた真琴に拒絶され、さらに佐々木先生も申し訳無さそうに魔王を見つめ、

「私も・・・家はペット禁止だから、見つかったら色々・・・悪く思わないでね？」

「ガアアアアン!!」

魔王はフラフラ地上に落下しへたり込んだ。そんな魔王を見て、一同にも少し同情心が沸き上がった時、誰かを呼ぶ声が校門から聞こえ始め、そちらの方角を一斉に見た一同、段々声は校舎の方に近づいて来て、

「みゆきい、居るのお？」

「エツ!?!お母さんだ！」

「カゲ!？」

声の主がみゆきの母育代だと分かり、みゆきが少し動揺していると、落ち込んでいた魔王は素早く反応して顔を上げた。みゆきが慌てて母の下に駆け寄り、みゆきの母ならば、挨拶しなければ不味いだろうと考え、なぎさ達一同もその後を追った。

「みゆき、遅くなるなら連絡入れなきや駄目よ!」

「ゴメンなさい!」

育代は、みゆきの頭を撫でながらも、さり気なく注意をし、みゆきも素直に謝った。育代は、みゆきの背後に居る黒い物体に気付くと、不思議そうに小首を傾げ、

「ところで・・・みゆきの後ろに居るのは!？」

「エッ!？」

慌てて背後を振り返ったみゆきの表情が、見る見る変顔に変わった。何故なら、背後には育代を見つめ、目をハートマークにしている魔王が居たのだから・・・

「魔王カゲ!みゆきの友達カゲエ!!」

「ま、魔王!？」

魔王が当たり前のように育代に話し掛け、みゆきは大パニックになり、シドロモドロの言い訳を育代に始めた。遅れてやって来た一同も、魔王の行動を見て目を点にし、あかねは呆れ返りながら、

「魔王の奴、アホちやうかあ!? みゆきのおかんにバレルやないかあ?」

「そうですねえ! あの容姿では・・・九官鳥やオウムだとは誤魔化せませんし・・・」

あかねの言葉に、れいかも困惑気味に同意した。みゆきに加勢して、何とかこの場を誤魔化そうと考えた一同であったが、

「そう、みゆきのお友達なの!? 魔王ちゃんって言ったわね? みゆきが何時もお世話になつてます!」

「カゲエ・・・こつちこそ、みゆきには色々お世話になつてるカゲエ! 行く所が無くて困つてた俺を、みゆきは、家で暮らせれば良いって言ってくれたカゲエ!!」

魔王は目をウルウルしながら育代に語り、娘のみゆきが、そんな優しい心を持つていると知り、育代は嬉しそうに表情を和らげ、

「まあ、そうだったの?」

「エエエエ!? 私、そんな事一言も言っていないよおお・・・ハッピープウウ」

魔王の捏造を、育代は信じて居るのか、意外とすんなり魔王を受け入れ、みゆきは変顔浮かべながら困惑した。

「う、受け入れたなあ?」

「うん! 受け入れたね?」

苦笑を浮かべたあかねとなお、くるみも困惑気味に、



「流石はみゆきのお母さんだわ！」

「それより、私達も挨拶しなくちゃ！」

ほのかに諭され、一同も育代に挨拶し、なぎさ、ほのか、ゆりが、自分達が遊びに来たから、みゆき達は七色ヶ丘を案内してくれて遅くなつてしまい、申し訳ありませんでしたと謝罪した。

「エエと、じゃあ私達もそろそろ帰るわ！」

「みゆきちゃん、魔王をよろしくねえ！」

困惑しながらも、なぎさと響に後を託されたみゆきは、かなり動揺しながら、

「エエ!? 本当に私の家には？」

「みゆき、仲良くするカゲ！ みゆきママとも仲良くしたいカゲ!!」

「まあ、魔王ちゃんつたら・・・でも、本当に言葉が上手ねえ？ 良いわよ！」

「みんなああ・・・」

育代は、魔王が居候する事にOKを出し、半泣き顔のみゆきが、一同に縋るような視線を向けるも、なぎさも困惑気味に、

「ま、まあ、みゆきのお母さんも許可してるからさあ」

「みゆき、何か魔王がしでかしたら連絡入れて！ 今度こそ宇宙の果てに捨ててくるから

!!」

「それはそれで、魔王が可哀想だよお・・・ハアア」

せつなはジイと魔王を見つめながら、みゆきを励ますように声を掛けるも、みゆきの心は不安で一杯だった。キャンディは見る見る涙目になると、

「ずるいクルウ！キャンディも・・・」

「ワアアア！キャンディは、縫いぐるみって事になってるんだからダメだよお!!私、これからどうなつちやうのおお!」

自分もちゃんと妖精として、みゆきの家で過ごしたいキャンディも、魔王のように育代に存在を認められたいと思うも、既にキャンディはみゆきが持つて居るぬいぐるみだと育代には言っており、みゆきは慌ててキャンディを抱き上げ宥めた。

これからどうなってしまうのか？

不安がるみゆきを余所に、こうして、真琴は佐々木先生の家に、魔王はみゆきの家に居候する事になった・・・

## 2、最初が肝心

佐々木先生のご厚意を受け、真琴とダビィは、佐々木先生の部屋で居候生活をしていった。

佐々木先生の賃貸マンションは、築三年の三階建てで、築三年という事もあり、中々

おしやれなマンションで、真琴は初めて一緒に来た時、こんな素敵な所に、自分が一緒に住んで良いのだろうかかと悩んだ程だった。マンションはオートロックで、全室モニタ付きインターホンは、女性の一人住まいにとっては安心でき、佐々木先生がこのマンションを選んだのもこの事が大きかったし、住んで居る住人も、若い女性やカップルが多かった。佐々木先生の部屋は3階の角部屋、間取りは2DKで、洋室6・7畳、洋室5・3畳の二部屋があるものの、真琴が来るまでは、5・3畳の洋室は、専らベイスターズグッズで埋め尽くされていたが、あの日真琴と一緒に帰って来た時に、ベイスターズグッズは、自分の部屋のクローゼット送りにして、5・3畳の洋室は、真琴に提供してくれた。

あれから一週間・・・

真琴は朝から緊張していた・・・

今日は、みゆき達が通う七色ヶ丘中学校に、真琴も転入生として登校する日だったのだから・・・

佐々木先生から、子供は学校に通わないと駄目だと言われた真琴は、佐々木先生の親戚として、七色ヶ丘中学校の生徒として通う手配をしてくれた。トランプ王国に居た頃は、学校ではないが、城で読み書きや計算などを、他の孤児達と一緒に、アン王女に習っ

て居た真琴だった。

(き、緊張するなあ・・・学校ってどういう所だろうか?)

「劍崎さん、そろそろ出掛けるわよ!」

「は、はい!」

佐々木先生に呼ばれた真琴は、ガチガチに緊張していた。他のプリキュアの仲間達から、学校生活の噂は色々聞いては居たものの、やはり自分の目で確かめないと、真琴の不安は拭えなかつた・・・

七色ヶ丘中学校二年二組・・・

遅刻ギリギリに登校してくるみゆきを除いた、あかね、やよい、なお、れいかの四人も、後輩として通う事になる真琴の事を心配していた。

「今日からやったなあ、真琴がウチらの学校に転入してくるの?」

「うん! 沢山お友達が出来るの良いけどねえ?」

「根は良い子だから、きつと友達も出来るよ!」

「ですが、真琴さんは些か世間離れした面もありますし・・・」

「れいかが言うんか?」

「エツ!?何か問題でも?」

「いやあ、問題つて訳やないけど・・・なあ?」

「れいかもちよつと天然な所があるからね?」

思わず顔を見合わせてクスリとしたあかねとなお、れいかは何の事か分ならず小首を傾げ、やよいはそんなれいかを見てクスクス笑った。

真琴は、職員室で佐々木先生から、自分の担任になる1—1組の担任、坂田すみれ先生を紹介されていた。坂田先生は音楽の担当で、眼鏡を掛けて居て、茶髪のシヨートヘアをしていた。佐々木先生より少し若い20代の女性教師で、担任を持つのはこの年が初めてだったが、生徒からの人望もあつた。

「じゃあ、後は坂田先生の言う事を聞いてね!」

「はい!ありがとうございます!!」

「では坂田先生、真琴をよろしくお願いしますね!」

「分かりました!それじゃあ、劍崎さん・・・一緒にクラスメートのみんなの所に行きましよう!!」

「は、はい!」

緊張する真琴が、ぎこちなく坂田先生の後に付いて歩いて居た時、下駄箱から聞き覚えがある声が聞こえてきた。

「遅刻うううう!」

「星空さん!あなたは、毎度毎度……それに、廊下を走ってはいけません!!」

遅刻しそうで、大慌てで廊下を走っていたみゆきを見付け、佐々木先生はみゆきを呼び止め説教をしていた。緊張していた真琴だったが、遅刻しそうでアタフタしているみゆきを見ると、思わず笑みが浮かび、真琴の緊張が解れた。みゆきもそんな真琴に気がき、

「まこちゃん!そういうえば今日からだったね?」

「はい!これからよろしくお願いします……星空先輩!」

「エエエ、みゆきで良いよおお!」

真琴に星空先輩と呼ばれたみゆきは、イマイチしつくり来ないのか、みゆきで良いと照れくさそうに真琴に伝えた。教室に向かう真琴の後ろ姿を見たみゆきは、

「先生、まこちゃん大丈夫かなあ?」

「エツ!そ、そうねえ、昨日から大分緊張していたようだしね……でも、あなた達のお仲間の黒川さんが、真琴を気に掛けて、昨日電話でアドバイスしてくれたそうよ!」

「へえ、エレンさんがあ……そう言えばエレンさんも、響さんと奏さんの学校に転入してきたって言ってたっけ?」

この場に響と奏が居れば、エレンが真琴にアドバイスをしたと聞き、些か不安を覚え

ただろうが、みゆきがそんな事を思う事は無かった。

一年一組・・・

真琴が通う事になるクラスメート達は、どんな子が転入してくるのか気になりザワ付いていた。担任の坂田先生がクラスに入り、一同に新しい仲間が加わると告げ、真琴を教室に導いた。真琴の心臓の鼓動がドキドキ速く脈打ち、緊張気味の真琴が教室に入るも、チラリとクラスメートを見て、緊張から下を向いた。

(真琴、すっかりするのよーエレンさんも言ってたじゃない・・・最初が肝心だった!!)  
覚悟を決め、顔を上げた真琴は、クラスメート達の視線を一斉に浴びて、再び心臓がドキドキした。

「それじゃあ剣崎さん、黒板に名前を書いて、みんなに自己紹介して!」

「は、はい!」

黒板を向いた真琴は、白いチョークを手に取ると、昨夜のエレンの言葉が浮かんでくる。頷いた真琴は、背伸びをしながら文字を書き始めたが、それを見ていた坂田先生も、クラスメート達も、真琴の行為を呆然としながら見て居た。何故なら、真琴は最初の一文である剣という字を、黒板一杯に書いてしまい、隅っこに小さく崎真琴と書かれていた。思わずクスリとクラスメート達から笑いが起こり、真琴は小首を傾げた。

「な、何やってるのかしら、あの子!？」

「緊張しちゃったのかなあ?」

まるで覗き見するように、一年一組を覗くみゆきと佐々木先生、二人の肩を誰かがトントンと叩くと、二人はギクリとしながら背後を振り返った。そこには60近い恰幅良いい白髪の男性が立っていて、

「佐々木先生、ご親戚の子が心配なのは分かりますが・・・もうホームルームの時間は過ぎてますよ?」

「エッ!?」、校長先生?し、失礼しましたあああ!」

佐々木先生は、大慌てでみゆきの右腕を掴み、自分のクラスへと戻って行った・・・7月に入ってから、転入生が来る事などまず無い為、真琴は、クラスメートの女子達から質問攻めにされるも、以前にみゆき達からアドバイスを貰っていて、トランプ王国の事や、プリキュアの事は、秘密にするように言われていた。クラスメート達は、何処か世間擦れをしている真琴の事を受け入れた。

放課後、不思議図書館に集まったみゆき達とあゆみは、真琴から今日の出来事の報告を受けていた・・・



「ハア、学校つて色々大変何ですネ？」

「急にどうしたん？」

「何かあつたの？」

溜息を付いた真琴を見かねて、あかねとなおが聞いてみると、国語や英語、歴史などはチンプンカンプンで分からず、家庭科の授業では、キャベツのみじん切りをしたら、まな板まで一緒にみじん切りをして、家庭科の先生やクラスメートの女子を脅かせた。れいかは、落ち込む真琴を慰めるように、

「真琴さんは、トランプ王国からこちらの学校に通ってまだ間もないですし、直ぐに理解出来なくても、気にする必要はありませんよ？」

「うん、そうだよ！私何か全部分からないし!!」

「みゆきちちゃん・・・それはそれで不味いと思うけど？」

れいかの言葉に頷くみゆきを見て、あゆみは苦笑混じりにツツコミを入れた。れいかは真琴の教科書を開くと、

「真琴さん、私でよければお教え致しますよ？期末テストも近いですしね！」

「本当ですか!?!よろしくお願ひします！」

「「「よろしくお願ひします！」」」

「みゆきちちゃん達まで!?!」

れいから期末テストが近いと聞いた瞬間、みゆき、あかね、やよい、なおの顔色が変わり、真琴同様れいかに頭を下げ、あゆみは再び苦笑した。

真琴は元々頭が良い方で、れいかの教えを受け着実に実になった反面、みゆき達はさしたる上達は見られなかった・・・

三日後・・・

れいかに教わった内容を予習していた真琴の側に、ツイントールをした緑髪の少女若林さなえと、赤髪のシヨートヘアの真鍋ゆきが近付いた。二人は、見る見る勉強が上達している真琴に興味を持ったのか、

「剣崎さんって、本当は頭良いのねえ？」

「本当！転入してきた時とは大違いだよねえ？」

「ううん、先輩の青木さんが教えてくれたの！」

謙遜した真琴が、れいかに教わっていると教えると、さなえとゆきは大変驚き、

「エエエ!? 剣崎さん、生徒会副会長の青木先輩と知り合いなの？」

「す、凄い・・・」

「うん！他に星空先輩、日野先輩、黄瀬先輩、緑川先輩にも仲良くして貰ってるの!!」

「エエエ!? サッカー部の緑川先輩や、バレー部の日野先輩まで？」

「星空先輩っていうと……あの?」

「七色ヶ丘中学校、始まって以来の遅刻常習犯で有名な?」

さなえとゆきは、みゆきの事は不名誉な内容で記憶しているようで、真琴は苦笑した。真琴にも、プリキュアの仲間達以外に、親しい友人が出来たようで、みゆき達もホッと安堵した。

真琴はシロップに頼み、トランプ王国に居るアン王女に手紙を書いた。トランプ王国にやって来たシロップから、真琴からの手紙を貰ったアン王女は、内容を見ると見る見る目に涙を浮かべ、

「ソードは、向こうの世界で頑張ってるんですね……友達も出来たようで何よりです! 私も何れ、ソードがお世話になってる佐々木先生に、直接ご挨拶に行かねばなりませんねえ」

「ところで、プリキュアの妖精達はどうしたロプ?」

「はい、アフロディテ様に気を利かせて頂き、既に妖精学校に入学して頑張ってる居ます! こちらの方も、私は近い内に様子を見に行こうと思ってる居ます」

アン王女の報告を聞き、シロップは頷いた。ソードも、プリキュアの妖精達も、学校で勉強を頑張ってる。今一度真琴からの手紙を読んだアン王女は、嬉しそうな表情を浮かべ、

（ソード、次に会う時を楽しみにしていますよ！）

アン王女は、ソードからの手紙を大事そうに懐に仕舞い込んだ。

だが不本意ながら、この後直ぐソードに再会する事になるとは、この時のアン王女は知る由も無かった・・・

第九章：魔王と王女とバッドエンドプリキュア！

完

第十章：六人目のスマイルプリキュア！

第八十五話：妖精学校からの招待状！

プロローグ

魔界・・・

不気味な沈黙をしていた魔界の戦士達・・・

だが・・・

バルガンが着ていたような白い軍服を着て、髪の色以外瓜二つの容姿を持つ金髪のカインと銀髪のアベルは、天に轟く不気味な黒き塔の内部に居た。二人の背後の闇が蠢くように黒いフードで全身を包み込み、顔も見えない闇の中の人物は、カインとアベルに話し掛け、

「カイン、アベル、遂に見付けたぞ！」

「本当か、ソドム!?!」

「それで、我らの真の肉体は何処に!?!」

普段冷静なカインですら、興奮したように身を乗り出した。そんな二人の様子を見た

ソドムと呼ばれた魔神は、闇の中からクククと薄ら笑いを浮かべながら、

「何所だと思う!? 笑えるぜ．．．何せ、俺達が今この場に居るこの黒き塔、この塔こそ、忌々しき魔王ルーシエスが、我らの肉体を封じた場所だ!!」

「何．．．だとお!?」

ソドムの報告は、カインとアベルも全く予期せぬ事だったらしく、二人は目を見開き驚愕した。ソドムは更に言葉を続け、

「だが残念ながら、魔王ルーシエスによつて、この塔には二重の結界が張られている!」  
「そんな物、力尽くで壊せば良い!」

そう言ったのはアベル、カインは何かを思案するように目を閉じた。アベルの言葉をソドムは直ぐに否定し、

「いや、それは不可能だ! 何故ならルーシエスは、この塔に闇と光の二重結界を張っているのだからなあ」

「成る程、ルーシエス亡き今、闇の者である我らなら、闇の封印は解けても、光の封印を解く事は出来んからなあ．．．どうする!? カイン?」

アベルに問われたカインは、考えが纏まったのか、目をゆつくり開くと、  
「．．．．．そう言えば、バルガンを倒した者達が人間界に居たな?」

「ん!? 例のプリキュアとか言う奴らの事か?」

バッドエンド王国において、バルガンを倒した者達、プリキュアの事はカインもアベルも報告を受けて知っていた。アベルの言葉にカインは頷くと、

「ああ、奴らは光の戦士だと聞く、上手く奴らを利用出来れば、あるいは……」  
光の戦士の力を利用する……

カインの考えを聞いたソドムは、闇の中で再びクククと笑い、

「成る程……では、俺は再び闇に消え、プリキュア達の動向を監視しよう！」

「頼む！ソドム、何かプリキュア達に動きがあれば知らせてくれ！」

「ああ、カイン……だが、俺の好きにさせて貰うぞ？奴らが本当に、我らに匹敵する程の実力を持つて居るか……試して見たくてなあ」

フードに隠れたソドムの両目が不気味に真紅に輝いた……

1、エンエンとグレル

TAKO CAFE……

疲れ切った表情を浮かべたなぎさが、テーブルに座りながらたこ焼きを頬張っていた。そんななぎさの姿を、ひかりが笑み混じりに見つめていた。店主のアカネがなぎさに話し掛け、

「なぎさ、やけに疲れた顔してるじゃない？」

「うん……今日の授業は中々ハードで疲れちゃった!おまけにパツとしない天気で蒸し暑いし……」

「そりゃあ、今は7月でまだ梅雨明け前だしねえ……」

「でも、去年は今頃梅雨明けしてたよ!」

「今年は遅くなりそうだとTVで言っていました!」

ひかりも会話に加わり、今年は梅雨明けが遅くなると、TVで言っていた事をなぎさに話した。なぎさは下敷きを取りだし、団扇代わりに扇ぎながら、

「アアア……何かこう、パツと晴れた場所にでも行きたいよねえ……」

曇天の空を見上げながら、なぎさが思わず呟いた。アカネがクスクス笑いながら、店のワゴン車の中に戻った事で、コミュニケーション姿のメップルが妖精姿に変化すると、

「なぎさは、直ぐ嫌な事があると現実逃避したくなるメポ!」

「何よお!」

「疲れてるのはメップルの方メポ!なぎさがほのかと違う学校に行くようになって、ミップルと会える機会が大分減ったメポ!!」

「しようがないでしょう!」

「大体、なぎさがほのかと同じ学校に行けば、ミップルと会えない寂しさを味合わないで良かったメポ……なぎさ、今からでも遅くないメポ!もつと勉強して、ほのかとゆり



と同じ学校に通うメポ!!」

「自分で言うのも何だけど・・・T大に何て私が行けるかああ!!」

互いに変顔浮かべながら、睨み合うなげきとメツプルと見て、ひかりは思わずクスリと笑みを浮かべた。

妖精学校・・・

ココとナツツ、四大王達为中心となつて建国した妖精学校、ココやナツツは、自ら入学した生徒達にも勉強を教えていた・・・

サンクルミエール学園で教師をしていたココ、本を読むのが大好きで博識のナツツは、勉強を教える事には慣れて居た。他には、この妖精学校の責任者としても言うべき、亀に似た妖精や、メツプルとミツプル、フラツピとチョツピも都合を付けて時折プリキュアの事を妖精達に語った。現在は、タルト、シプレとコフレ、ポップが妖精学校の講師として招かれ、妖精達にそれぞれの国のプリキュアの事などを語つて聞かせた。

妖精学校の生徒達は、色々な国から勉強に来ていて、この場になげき達一同が居れば、懐かしさで再会を喜び合う妖精達の姿もチラホラあつた。

皆熱心にノートに書き込む中、一人の妖精が不満げな表情を浮かべて居た・・・  
名はグレル・・・

額に菱形の模様があり、背中にはマントを羽織、腰には竹光を身に付けた、どここなく小熊のような姿をイメーჯさせる妖精グレルは、机の上にピョンと飛び乗ると、

「ケツ！プリキュア何か、ただの女の子じゃねえか!!」

「グレル、静かにするシャルル！」

「嫉妬は見苦しいぜ！」

「うるさいぞ！シャルル、ぐらさん」

シャルルと呼ばれた、何処かダビィに雰囲気似て居る、全身をピンク色にし、兎のような耳をして頭部にリボンを付けた妖精と、ぐらさんと呼ばれた、その名の通り頭にサングラスを乗せている、ブルースカイ王国の妖精、リボンに似て居る妖精がグレルを窘めるも、グレルは聞く耳を持たなかった。グレルの後方に座っていた、犬のような容姿をしたピンク色の妖精がオドオドしながら三人を宥め、

「喧嘩はダメパフ」

「パフの言う通りロマ！グレル、静かにするロマ!!」

パフの右隣に居た、紫色の身体をした小鳥のような妖精アロマ、アロマは身体が小さい事もあり、テーブルの上に乗って授業を聞いていた。

二人は兄妹で、ホープキングダムという国の妖精達、アロマは執事、パフはメイドになる事を夢見ていたが、ホープキングダムのカナタ王子から、もつと広い世界を知るよ

うにといいお達しを受け、妖精学校に入学していた。

「お前の方がうるさいだろう、アロマ！」

アロマの声は高音で響くのか、グレルは耳を塞ぎながらアロマに言い返した。そんな一同の様子を、不安そうにキョロキョロ見つめ、涙目を浮かべた妖精が居た。

名はエンエン……

額にはクローバーの模様があり、頭まですっぽり被ったフードを着ていた。気が弱いのか、クラスメート達から輦蹙（ひんしゆく）を買う、グレルの事を気にしているようだった。グレルとエンエンは、元々同じ国の出身だったが、行動派のグレルに対し、エンエンは気弱な性格で、グレルに付き従い行動を共にしていた所は、嘗てメルヘンランドに居た時の、アンデとルセンの関係を彷彿させた。

「グレル……もう止めなよ？」

「何だよ、エンエン！お前だつてそう思うだろう？」

「エツ!?ば、僕……」

グレルに同意を求められたエンエンは、直ぐに俯きモジモジしていると、エンエンの隣に居た、丸い耳に花冠のようなものを頭に付けた全身黄色の妖精ランスが、ハアと溜息を付きながら首を振り、どこか舌足らずのようにゆっくり話し出し、

「エンエンは、優柔不断でランス」

「ランス、そういう事をハッキリ本人に言うのは、どうかと思うケル」

そう言ってランスを窘めたのは、全身青色で、耳が垂れ下がっており、頭部にはダビィやシャルルのようにリボンを付けたラケルだった。アン王女に、トランプ王国の国王から連絡があったプリキュアの妖精とは、シャルル、ラケル、ランスの三姉弟の事だった。「チエツ！俺の方が、プリキュアより強いに決まってるあー！」

エンエンが同意してくれず、グレルは不満そうに腰に差した竹光を取りだし振り回すと、周りの妖精達が止めるように促し、亀のような教師も、グレルに止めるように注意する。ココとナツツも止めるように注意するも、グレルは言う事を聞かなかった。それを見ていたタルトは、少し意地悪な表情を浮かべると、

「グレル、そない言うんやったら、ホンマもんのプリキュアはん達に……おおて見るかあ？」

「プリキュアに!?!いい、良いぜー！」

タルトの意外な言葉に一瞬たじろいだグレル、グレルもプリキュア達の凄さは分かかって居たが、みんなの手前強がった。

「夕、タルト殿!?!」

「エエから、ワイに任しときい！」

ポツプは慌ててタルトを止めようとするも、タルトは手を振りながら自分に任せてお

けとジエスチャーし、

「よっしや！ほないっその事、プリキュアはん達を……この妖精学校に招待せえへんか？」

「プリキュアを妖精学校に!?!」

「ウワアアアア！会いたい!!」

タルトの言葉を聞き、妖精達が一齐に大騒ぎしながら喜び、慌ててココとナッツ、ポツと亀の妖精先生が生徒達を宥めた。ココとナッツは、呆れたようにタルトを見つめるも、

「こうなったら仕方無いココ」

「みんなに協力して貰うナツ」

顔を見合わせながら頷いたココとナッツは、妖精学校の責任者である亀の妖精の許可を貰い、プリキュア達やアン王女に招待状を送った。

## 2、妖精学校へ

トランプ王国……

アン王女の下にやって来たシロップは、妖精学校からの招待状を手渡すと、アン王女は嬉しそうに封を切り、手紙を読んだ。

「シャルル、ラケル、ランスの三人は、真面目にやっているかしら?」

手紙を読み終えたアン王女は、手紙を封にしまうと、シロップをチラリと見つめながら小声で話し掛け、

「実は、わたくしが向こうの世界に行っていたのを、お父様は良く思っておられず、わたくしもシャルル達の様子を見に行きたかったのですが、お父様から許可が下りず、難儀をしていた所です・・・よろしければ、わたくしをこのまま、妖精学校に連れて行っては頂けないでしょうか?」

「ロプ!?それは構わないロプ!でも、国王にバレたら・・・」

「その時はその時です!わたくしももう子供ではありませんし、お願い致します!!」

「分かったロプ!」

父である国王の目を逃れるように、コソコソ城の外に出たアン王女とシロップ、シロップが巨大化し、アン王女がシロップの背に乗ると、城の中が騒がしくなり、シロップに気付いた警備兵達が騒ぎ出し、

「な、何だ、あのデカイ鳥は!?!」

「み、見ろ!あの鳥の背に・・・王女様が居られるぞ!!」

「ま、まさか・・・誘拐!?!す、直ぐに国王様にお知らせしろ!!」

「ロプウウウ!?!」

何やら、自分が王女誘拐の主犯にされているようで、シロップが困惑すると、アン王女も慌てて警備兵達を呼び止め、

「心配はご無用です！この方は、わたくしの大切な友人の一人、この方と共に少し国を留守に致しますが、お父様には心配しないように伝えて下さい!!」

「お、お待ちを!?!王女様、王女様ああ!!」

警備兵が止めるのも聞かず、アン王女は一同に手を振りながらトランプ王国を後にした・・・

アン王女を妖精学校に送ったシロップは、なぎさ達一同の下にも手紙を配達した：：喜ぶ者、困惑する者、様々居たが、一同も妖精学校の事はシロップから聞いていて、興味は持っていた事もあり、皆妖精学校に行く事を快諾した。一同の都合も付き、集合場所のナツツハウスに勢揃いした一同、あゆみだけは学校の行事があり、遅れて行くともゆきに連絡があり、みゆきはなぎさ達一同にその事を伝えた。

「そつかあ、じゃああゆみちゃんには悪いけど、私達だけで先に行こうか?」

なぎさが一同に何うと、のぞみもコクリと頷き、

「そうだね、あゆみちゃんの下には、後でシロップに迎えに行つて貰おうよ!」

「でも案内状には、手紙に貼られたシールを擦ると、妖精学校まで案内する乗り物が現わ

れるって書いてあるわ!」

今一度中身を確認したほのか、手紙には、妖精学校までの道案内をしてくれる乗り物の事が書いてあると一同に伝えた。こまちも思い出したかのように頷き、みゆきを見つめると、

「そう言えばそうね・・・みゆきさん、あゆみさんにも案内状は届いてるんでしょ?」

こまちに聞かれたみゆきはコクリと頷き、

「はい! あゆみちゃんにも届いてるそうです!!」

「じゃあ、私達が先に行っても大丈夫ね!」

「分かったわ! あゆみには私からメールを入れておくわ!!」

せつなが素早く携帯を操り、あゆみにメールを入れると、直ぐにあゆみから返事が返り、分かりましたとメールが来た。

「みんな、どうする!?! 私が妖精学校まで送っても良いけど・・・」

せつなが一同に伺うと、なおは、一同が用意してきた数々の品物をチラリと見た。ひかりはたこ焼きを、咲達はパンを、かれんはシュークリーム、こまちは毎度お馴染みの羊羹、ラブ達はドーナツ、つぼみ達は大福、奏はカップケーキ、あかねは紙に包んだお土産のお好み焼き、なおはそんな美味しそうな数々を見て居るだけで、口内に唾液が広がり、



「あたしはせつかくだから・・・みんなが持つて来てくれた美味しい食べ物、一杯食べながら行きたいなあ！」

「良いねえ！何かピクニックみたいだし!!」

「賛成！」

なおの提案に、のぞみと響も肩を組みながら同意した。佐々木先生の家に居候している真琴にとつては、初めて見る食べ物一杯有り、興味深そうにジイと見つめ、

「これがたこ焼きで、こっちはお好み焼き・・・」

「真琴、良かったら一つ食べて見る？」

「よろしければどうぞ！」

ひかりが真琴にたこ焼きを差し出すと、なぎさは食べ方の見本を見せるように、爪楊枝でたこ焼きを刺し、口の中に放り込んだ。

「良いんですか？じゃあ、遠慮なく・・・」

なぎさがやったように、楊枝を手に持つと、息を整え一気にたこ焼きを突き刺した。だが、勢いよく刺しすぎ、パックがグシャッと潰れ、真琴の顔面にソースが飛び散った。呆然とする真琴に、ほのかは慌ててハンカチを差しだし、なぎさは苦笑混じりに、

「いや、そんなに思いつ切り刺さなくても大丈夫だから・・・」

「ウウウ、な、何かベトベトする」

真琴は微妙な表情を浮かべながら、顔に付いたソースを拭き出した。それを見てえりかはアハハハと笑い出し、真琴はえりかを恨めしそうに見つめながら、頬を大きく膨らませた。

「じゃあ、乗り物呼び出すよ? エエと、シールを擦れば良いのよね?」

なぎさがほのかに確認すると、ほのかはコクリと頷き、なぎさは手紙に貼られていたシールを人差し指で擦った。するとモクモク煙が立ち上り、見る見る何かの形に変化し、やがてメツプルの姿をした気球が現われ、なぎさ達一同も、本人のメツプルも思わず驚愕した。だが、メツプル形の気球に全員乗るには狭すぎて、念の為咲達、のぞみ達、ラブ達、響達、みゆき達もシールを擦ると、モクモク煙が現われ、フラッピ、ココ、シフォン、シプレ、ハミイ、キャンデイの気球が現われた。

「キャンデイの気球も有るクルウ!」

自分の気球を見て、キャンデイが大喜びしていると、あかねは苦笑を浮かべながら、「此処に魔王が居たら、悔しがったりしてなあ?」

「有り得る、案外目立ちたがり屋だし」

そう言うと、あかねとなおは顔を見合せて笑い合った。魔王の話題が出た事で、一同もようやく魔王がこの場に居ない事に気付き、なぎさはみゆきに話し掛け、「どうもおとなしいと思ってたら、魔王は一緒に来なかったんだ?」

「うん．．．家のお母さんと一緒に居るから行かないって」

みゆきが変顔浮かべながら一同に魔王の事を話し、みゆきに同情したくるみが声を掛けると、

「みゆき、それはそれで．．．不安よね？」

「うん！うん！無理矢理にでも連れて来るんだったああ!!」

今思い返し、魔王を無理矢理にでも連れて来れば良かったと後悔したみゆきが、頭を抱えて悶えていると、それを見ていたせつなは無言でコクリと頷き、突然せつなの姿がこの場から消えさった。辺りをキョロキョロ見渡したラブは、

「あれえ!?せつな、何所行つたんだらう？」

「何か忘れ物かしら？」

かれんも小首を傾げていると、再び先程せつなが居た場所が赤く輝き、大騒ぎしながら喚く魔王を、右手で抱えながらせつなが再び姿を現わした。

「魔王!？」

魔王の姿を見た一同が思わず言葉を発し、魔王も一同の姿を見て驚くと、

「せつなああ!いきなり何するカゲエエ?」

「魔王をみゆきのお母さんと二人きりにさせたら．．．何しでかすか分かったもんじゃないから、私達と一緒に居させようと思って」

「せつなさああんー！」

せつなの好意を知り、みゆきは目をウルウルさせながら、せつなの両手を掴んで感謝した。そんな二人を見ていた魔王は、

「みゆき、せつな、ひよつとして・・・お前達、俺と一緒に居なくて寂しかったカゲかあ？」

少しご機嫌になった魔王が、みゆきとせつなに問うと、みゆきは無言でブンブン首を横に振り、せつなは、イース時代のような冷ややかな視線で魔王を見つめ、

「魔王・・・二度とこっちの世界に帰って来れない、宇宙の果てにでも行く？」

「え、遠慮しとくカゲ」

これ以上せつなを怒らすと、本当に宇宙の果てに捨てられそうなので、魔王はせつなを怒らせるのは止めようと決めた。

メツプルの気球には、なぎさ、ほのか、ゆり、れいかが乗り、フラツピの気球には、ひかり、咲、舞、こまちが乗り、ココの気球にはのぞみ、りん、響、奏、なおが乗り、シフォンの気球には、ラブ、祈里、かれん、いつき、アコが乗り、シプレの気球には、つぼみ、えりか、うらら、美希が乗り、ハミイの気球には、エレン、満、薫、せつな、くるみが乗り、そして、キャンデイの気球には、みゆき、あかね、やよい、真琴が乗り込んだ。妖精達はそれぞれのパートナーと一緒に気球に乗り込み、魔王はみゆきの気球に

乗った。

「じゃあ、みんな・・・行くよ！」

なぎさの合図と共に、気球はフワリと宙に浮き、なぎさ達一同を乗せた気球は大空へと舞い上がった・・・

それを見届けた闇は不気味に蠢き、

「妖精学校か・・・ククク、これは利用出来そうだな！」

闇の中から、なぎさ達一同を監視していたソドムは、何かを企てる為行動を移した！  
だが、この時の一同には、ソドムの暗躍を知る事は無かった・・・

第八十五話：妖精学校からの招待状！

完

## 第八十六話：困惑のアン王女

1、妖精達とプリキュア

なぎさ達より先に到着していたアン王女は、教室の一番後ろに立ち、授業を眺めて居た。ちょうどココとナッツが、生徒達にプリキュアに関しての問題を出しているように、

「みんな、最近プリキュアになったのは、誰だか知ってるココ?」

ココはそう問うと、生徒達の顔を眺めていった。その中で、一際机から身を乗り出し、手を上げている生徒を指名すると、生徒は大喜びで宙に浮かび、

「ハイハイハイ! キュアソードシャル!!」

自信満々でココに答えを言ったのはシャルル、ココは満足そうに何度も頷き、

「正解ココ! ソードは、シャルルと同じトランプ王国のプリキュアココ! 実は、ココもまだキュアソードには会った事無いココ!!」

「シャルルも早く会いたいシャル!」

「ナッツ達も、キュアソードを始めとしたプリキュア達に、久々に会うのを楽しみにしてるナッツ」

そんな授業を、妖精達は真面目に受けていたが、アン王女の視線が一人の妖精を見て小首を傾げた。

（あの子、何だかやる気がなさそうですわねえ!?）

アン王女の視線の先に居たのはグレル、グレルは授業そっちのけで、プリキュア達にどうやって勝つか考えて居た。

（プリキュアって、一杯人数居たよなあ・・・）

「・・・レル、グレル！」

「エッ!？」

誰かに名前を呼ばれて、ハツとしたように顔を上げたグレルを、亀のような先生がハアと溜息を付きながら、

「グレル!今は授業中ですよ!!」

「ウツ・・・」

「全く、何しに学校に通ってるのか分からないぜ！」

「本当ロマ」

「ウ、ウルセエー！」

ぐらさんとアロマにも呆れられ、グレルはうるさいとばかりに二人を睨み付けた。そんな中、ニヤニヤしたタルトが教室に入ってくると、

「みんなあ、お待ちかねのプリキュアはん達が到着したようやでえ！」

「エエエエエ!?」

(エツ!?)

タルトにプリキュア達が到着したと教えられ、グレルを除いた妖精達が、窓に群がり外を覗いた。プリキュア達がやって来るとは知らなかったアン王女は、困惑の表情を浮かべながら窓の外を見て、

(ま、まさかソードも一緒じゃ!?ど、どうしましょう?あのような別れ方をして、こんなに直ぐにソードに会ってしまったのは・・・)

ソードの成長を見守るつもりでトランプ王国に戻ったというのに、この場で再会しては、この間の行為が全て無駄になってしまふのではと、アン王女は狼狽えた・・・

気球がゆっくり校庭に着地し、なぎさ達が一人ずつ降り立った。見渡してみれば、自然に恵まれ木々が生い茂り、鳥のような鳴き声も聞こえてくる。そんな中に妖精学校は建っていた。自然を壊さない為の配慮からか、妖精学校はこぢんまりしていて、人間界で言う分校のような規模だった。一同がそれぞれ辺りを見回し感想を述べ合っていると、何処かライオンに似た妖精が笑顔を浮かべながら近づき、

「皆の衆、お忙しい所よくぞおいで下さった!」



「ポップ！」

「お、お兄ちゃああああん!!」

「キャンディ！そなたも・・・ゴボオ!!」

嬉しさのあまり、キャンディは勢いよくポップに体当たりし、堪らずポップは後方に吹き飛ばされ、頭部を強打した。

「シシシ、何やか・・・お約束やなあ」

苦笑しながらあかねが二人を見て眩くと、兄が居る舞は、自分達兄妹の事を思いだしたのか、目を細めながら、

「仲が良くて良い事だわ！」

「そうね・・・でもこのまま続いたら、その内死んでしまいそうだけど？」

「薫、どうしてそう言う事言うの？」

「冗談よ」

薫の毒舌を満が窘め、一同から苦笑が起こる。ポップはイタタタと起き上がるも、  
「し、失礼致した！皆の衆、早速中に案内するでござる！生徒達も、首を長くしながら、皆の衆を待つていたのでござるよ!!」

「そう何だあ・・・アツ、ポップ！あゆみちゃんは、後で遅れて来るから!!」

「あゆみ殿が!?分かったでござる！他の方々には拙者から伝えるでござる!!」

みゆきから、あゆみは後で来ると聞いたポップは頷いた。真琴は不思議そうにポップを見つめ、

「あのポップって言う妖精・・・随分変わったしやべり方しますね？」

「ポップは、あたし達の世界の時代劇が好きなのよだし、自然と口癖になったのかもね」  
「そうなの？」

なおの言葉を聞き、真琴は小首を傾げながらも納得した。一同がゾロゾロ校舎内に入ると、窓から見て居たアン王女は狼狽へ、教室の後ろでウロウロしながら、ブツブツ独り言を言い始めた。側に居た妖精達がヒソヒソ話を始め、パフとエンエンは、そんなアン王女を見ると少し怯えた表情で、

「あの人、何だか怖いパフ」

「ぼ、僕もちよつと・・・」

「大丈夫シャル！あの方はトランプ王国の王女様シャル」

シャルルは、自分達の国トランプ王国の王女だから、大丈夫だとパフとエンエンを安心させ、アロマは、ウロウロしているアン王女をもう一度見ながら、

「ロマ!?トランプ王国の？」

「そうでランス・・・きつとオシッコでもしたいんでランス」

「ランス・・・違うと思うケル」

ランスの言葉を、困惑気味にラケルが否定した。ぐらさんは、ジイとアン王女を見る  
と、

「何か考え事をしているようだぜえ？」

一同の視線が再びアン王女に注がれた・・・

「ア、アン王女、どうかしたココ？」

「何かおかしな事でも？」

異変に気付いたココとナッツが、困惑気味にアン王女に話し掛けると、アン王女は  
ハッと我に返り、

「い、いえ、何でもありませんわ！どうぞ、授業をお続けになってくださいまし・・・オ  
ホホホ」

作り笑いを浮かべながら誤魔化すと、妖精達は再びヒソヒソ話を始めた。その時、教  
室のドアをコンコンとノックし、ポップが中に入ると、

「皆の衆、プリキュア達が到着したのでござるよ！」

「ワアアアアア!!」

一斉に教室内に歓声が沸き起ったものの、微妙な表情を浮かべた人物が二人居た。一  
人はグレル、もう一人はアン王女、戸惑う二人を余所に、案内されたなぎさ達三人、咲  
達四人、のぞみ達六人、ラブ達四人とシフォン、ゆり達四人とシプレ、コフレ、ポプリ、

響達四人とハミイとピーちゃん、フェアリートーン達、みゆき達五人とキャンディ、魔王の順番で入り、皆が黒板の前に並び、最後に真琴が入って来た瞬間、アン王女は咄嗟にその場で身を伏せた。

それに気付いたなぎさは、変顔浮かべながらほのかに話し掛け、

「ね、ねえほのか、今後ろで隠れたのって・・・アン王女だよねえ？」

「そ、そうね、アン王女も来ていたようね」

「何で隠れたんだろう？」

「さあ!？」

なぎさとほのか、二人の視線がジイと自分を凝視しているのに気付いたアン王女は、少し顔を出し、二人に何か合図するように、右手の人差し指を鼻の前に持つて行き、シイとジエスチャーすると、思わずなぎさとほのかの目が点になる。

「み、見なかった事にしてあげましょう」

「そ、そうだね」

「多分・・・私達とあんな別れ方をしたから、顔を合せづらいのかも知れないわ」

「じゃあ、みんなにも知らせておかないや！」

「そうね・・・でも、真琴さんにだけは内緒にしてた方が良いと思うよ！」

ほのかとなぎさは、困惑気味にアン王女の意を汲み、見なかった事にしようと思った。

(やっぱり、プリキュア何て只の女の子じゃねえか！)

教室の中に入ってきたなぎさ達を見たグレルは、自分の想像していたように只の女の子で、これなら俺でも勝てると口元に笑みを浮かべた。

「ウワアアア！こんなに妖精さん達が一杯・・・」

「本当！」

そんな事とは知らず、目をキラキラ輝かせた祈里とみゆきが、生徒達を穏やかな視線で見つめた。ココとナッツ、タルトは一同の前にやって来ると、

「みんなあ！良く来てくれたココオ!!」

「妖精のみんなも喜んでるナツウ！」

「ココも、ナッツも、元気そうだね！」

「あかし達は、タルトとは頻繁に会ってるけどね」

うららと美希も笑み混じりに再会を喜んだ。ココとナッツは更に一同に話し掛け、

「みんな、生徒達に一言声を掛けて上げて欲しいココー！」

「生徒達も喜ぶナツ！」

ココとナッツにリクエストされ、なぎさ達一同は輪になって話すと、ほのかが代表するようにな生徒達に語り始め、

「皆さん、こんにちは！今日は私達プリキュアを招待してくれてありがとうございます

！もう一人、キュアエコーが居るんですけど、少し遅れて来るので待ってて下さいね！では、先ず私達から・・・」

ほのかは、なぎさとひかりに目配せすると、二人も頷き返し、

「デュアルオーロラウエーブ!!」

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」

「光の使者・キュアブラック!」

「光の使者・キュアホワイト!」

「ふたりはプリキュア!!」

「輝く生命、シャイニールミナス!」

「ウワアアアア!」

なぎさ、ほのか、ひかりがプリキュアに変身した事で、生徒達のボルテージは上がり大歓声が起こった。ブラック、ホワイト、ルミナスの姿を見た、全身薄いピンク色をしたカエルのような妖精が、両目をウルウルさせ、感極まったのか三人目掛けて駈け出し、「プリキュア!会いたかったでございまちゅ!!」

「エツ!?! マーキーズ?」

「あなたも妖精学校に?」

「ハイでございまちゅ!」

マーキーズ・・・

あらゆる生命に希望を与えると言われる、希望の園の妖精で、ジャアクキング復活を目論む魔女から、希望の園の秘宝、ダイヤモンドラインを守って貰う為、なぎさ達に助けを求めに来た妖精の一人で、妖精騎士団の中では最も幼く、なぎさ達からも可愛がられて居た。

ルミナスも、そんなマーキーズとの久々の再会に目を細め、

「久しぶりですねえ・・・皆さんお元気ですか？」

「みんなもプリキュア達に会いたがっているでございまちゅー！」

「ポルン、ルルン、希望の園のマーキーズが居るわよ」

「ポポ!？」

「ルル!？」

ルミナスに教えられたポルンとルルンが、妖精姿に変化すると、マーキーズとの再会を喜び合った。

続いて、咲、舞、満、薫が一步前に出ると、

「みんなあ、絶好調なりイかあ？私は日向咲、こつちの三人は美翔舞、霧生満と薫そして、私達のもう一つの姿は・・・舞、満、薫、行くよ！」

「分かったわー！」

「[[[[デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!]]]]」

「輝く金の花! キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼! キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「天空に満ちる月! キュアブライト!!」

「大地に薫る風! キュアウインディ!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「ウワアアア!」

咲達四人もプリキュアに変身し、生徒達から歓声が上がった。続いてのぞみ達が前に出ると、

「皆さん、こんにちはあー! 私達はプリキュア5でえす!! 今日招待してくれてありがとう・・・じゃあ、みんな行くよー!」

「[[[[YES!]]]]」

「[[[[プリキュア! メタモルフォーゼ!!]]]]」

「スカイローズ! トランススレイト!!」

「大いなる、希望の力! キュアドリーム!!」

「情熱の、赤い炎! キュアルージュ!!」



「弾けるレモンの香り！キュアレモネード!!」

「安らぎの、緑の大地！キュアミント!!」

「知性の青き泉！キュアアクア!!」

「[[[[希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく5つの心！Yes！プリキュア5!!]]]]」

「青いバラは秘密のしるし！ミルキイローズ!!」

「ウワアア、こんどは6人も増えたああ!」

一気に入六人増えた事で、生徒達の興奮は更に高まり、ドリーム達は顔を見合わせ笑みを浮かべていると、

「ご無沙汰しておりますわ!」

突然話し掛けられたドリーム達、ドリームは、話し掛けた少女の顔をマジマジと見ると、

「エツ!?!・・・チョコラ!あなたも妖精学校に?」

「いえ、私は生徒のみなさんに、おやつを届けに来たのですが、授業を見学していけばとお声を掛けて頂いて、お言葉に甘えていました」

「チョコラ姫、以前はお菓子を一杯分けて下さり、ありがとうございました!」

「みんなで美味しく頂きました!」

「本当にあの時は感謝してます!」

アクア、ミント、そしていつきは、深々とチョコラ姫に頭を下げ、以前受けた厚意を感謝した。そんな三人に、チョコラはニッコリ笑顔を浮かべ、

「いいえ！あれぐらいお安いご用ですわ！」

チョコラ・・・

お菓子之国とも呼ばれるデザート王国の姫で、桃色の髪と青色の瞳、頭部にはティアラとウサギのような耳飾りをつけており、桃色のドレスを着ていた。嘗て、ムシバーンによつて危機に陥ったデザート王国を、プリキュア5とローズに救われ、それ以来のぞみ達に憧れていた。砂漠の王デューンを浄化し、地球を元に戻したプリキュア達、かれんとこまち、そしていつきは、チョコラの母であるデザート女王に手紙を書き、お菓子を分けて貰った事があつた・・・

「美希たん、ブツキー、せつな、私達も行くよ！」

「エエ、妖精のみんなに、あたし達の完璧な姿、見せてあげましょう！」

「そうだね」

「じゃあ、行くわよ！」

ラブ、美希、祈里、せつなが一歩前に出ると、

「「「チェインジ・プリキュア！ビートアップ!!」」」

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュユ、キュアピーチ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ、キュアベリー!!」

「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュ、キュアパイン!!」

「真つ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ、キュアパッション!!」

「!!「レッツ！プリキュア!!」!!」

「ウワアアア！」

妖精達の歓声を受け、ピーチは手を振りながら、

「どうも！今日は私達を招待してくれてありがとう!!私達は・・・」

「!!「フレッシュプリキュアです!!」

続いて前に出たのは、つぼみ、いつき、ゆり、えりかは妖精達に投げキッスをしていて、

「ほら、えりか！私達の番ですよ!!」

「もう、えりかつたらあ・・・」

「オオオ！そんじや、一丁行きますかあ!!」

つぼみといつきに、両脇を抱えられながらえりかが前に出て、ゆりはハアと溜息を付くも、直ぐに生徒達を穏やかな表情で見つめ、

「今日は、私達プリキュアをお招き頂きありがとうございます！みんなと楽しく過ごしたいと思つてます！つぼみ、えりか、いつき・・・行くわよ！」

「はー。」

「やるっしゅー！」

「プリキュア！オープンマイハート！！」

「大地に咲く一輪の花・キュアプロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花・キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花・キュアサンシャイン！」

「月光に冴える一輪の花・キュアムーンライト！！」

「ハートキャッチプリキュア！！」

「ウワアアア！」

妖精達から割れんばかりの歓声が起こり、続いて前に出た響達は、

「私達もみんなに負けてられないね・・・奏、エレン、アコ、行くよ！」

「うん！」

「レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション！！」

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ！！」

「爪弾くは、たおやかな調べ！キュアリズム！！」

「爪弾くは、魂の調べ！キュアビート！！」

「爪弾くは、女神の調べ！キュアミューズ！！」

「二」届け！四人の組曲！！スイートプリキュア！！」二

「みんなあ、こんにちはああ！」

「今日は、私達プリキュアを招待してくれてありがとう！」

「緊張して寝不足だけど、何だか眠気も吹っ飛んだわ！」

「みんなとの一時、楽しく過ごしたいと思ってるわ！」

「二」みんな、よろしくねええ！」二

「ワアアアア！！！」

メロディ、リズム、ビート、ミュージック、四人が生徒達にウインクスし、生徒達から大歓声が沸き起った。メロディ達の挨拶が終わり、緊張したみゆきは仲間達を見ると、

「ど、どどど、どうしよう！？私達の番だよ？」

「みゆき、緊張しすぎや！」

「そうそう、リラックスリラックス」

「何時も通り行こう！」

「ええ、では参りましょう！」

あかね、やよい、なお、れいかがみゆきを励まし、五人が一步前にも出るも、みゆきはバランスを崩すと、顔面から地面に激突し、

「みゆき？」

「みゆきちちゃん!？」

「みゆきさん、大丈夫ですか？」

あかねが、やよいとなおが、れいかがみゆきを心配そうに見つめるも、みゆきは頭を掻きながら顔を上げ、

「アアアン、転んじやつたあ・・・ハツプツプ」

みゆきの変顔を見た妖精達から笑い声が起こり、他のプリキュア達が苦笑を浮かべる。立ち上がったみゆきは、

「エへへへ、失敗しちゃったあ・・・みんなあ!今日は招待してくれてありがとう!!後であゆみちゃんも来るから、楽しみに待っててね!では、みんなあ!!」

「[[[[プリキュア!スマイルチャージ!!]]]]」

「キラキラ輝く、未来の光!キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー!キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん!じゃんけん・・・ポン!キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負!キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心!キュアビューティ!!」

「[[[[5つの光が導く未来!輝け!スマイルプリキュア!!]]]]」

「ウワアアア!」

みゆき達もプリキュアに変身し、妖精達から歓声が上がリ、妖精達の視線が最後の一人真琴に注がれる。教室の後ろからヒヨイと顔を覗かせたアン王女を、ブラックとホイトは苦笑を浮かべながら見て居た。真琴は一歩前に出ると、

「私は、トランプ王国のプリキュアでキュアソードです！今日は招待してくれてありがとうございます！じゃあ、私も変身します・・・ダビィ!!」

真琴の合図で、直ぐにダビィがラブリーコミュニケーション姿に変化すると、真琴はキュアラビーズを取りだし、ラブリーコミュニケーションにセットした。

「プリキュア！ラブリンク!!」

「L・O・V・E」

ラブリーコミュニケーションの画面に、真琴が指で「L・O・V・E」と描くと、ダビィがその都度その文字を読み上げ、真琴の身体が光に包まれ、プリキュアへと変化していった。

「勇気の刃！キュアソード!!」

「ウワアアア」

真琴もソードに変身し、妖精学校にエコーを除いた3人のプリキュアが勢揃いした・・・

## 2、暴走

マーキーズやチヨコラに刺激されたように、生徒達も一同の側に近寄った。なぎさ達も変身を解き、妖精達との交流が始まった。ある者はプリキュアの事を質問し、またある者は一緒に遊びたいと頼んだり、なぎさ達は、出来る限りの範囲で妖精達の要望に応えて居た……

（プリキュア……やっぱり直に見ると迫力あるよなあ……）

プリキュアなどに勝てると言っていたグルルだったが、本物のプリキュアを見ると、他の生徒達同様、歓声を上げていた事に本人は気付いて居らず、それを見たタルトはニヤニヤしていた。

（でも、やっぱり変身してなきやただの女の子だよなあ……）

グルルは腰に差した竹光をギュツと握り、教室にいるなぎさ達を一人一人見ていった……

トランプ王国の妖精シャルル、ラケル、ランスは、真琴の側に近寄り、ダビイも妖精姿に変化して互いに交流を始めた。アン王女は、真琴にバレ無いように這いながら近づき、聞き耳を立てていると、

「あれ、アン王女よねえ？」

「な、何をやってるのかしら？」



アン王女の不可解な行動を見て、美希とかれんが困惑していると、なぎさとほのかは、真琴以外の一同を呼び寄せ、

「何だかよく分からないけど、アン王女は、真琴と顔を合わせるのを避けてるみたい」

「多分、向こうであんな別れ方をしたから、顔を合せづらいんだと思うの」

「そういう事なら協力するけど、あんな行動してたら余計目立つと思うのだけど・・・」  
なぎさとほのかに、大体の事情を聞いた一同、ゆりの視線が、真琴の様子を伺うアン王女に注がれる。一同も釣られたように顔を向け、

「成る程、それであんな行動を・・・」

「ゆりさんの言う通り、余計に目立つ気もするんだけど・・・」

エレンは腕組みしながらココココ頷き、奏は苦笑気味に余計目立ちそうだと呟いた。

アコはアン王女に近付くと、

「アン王女！」

アコに話し掛けられ、思わずビクリとしたアン王女は、ゆっくり背後に居るアコを振り向くと、顔を引き付かせながら、

「ギクツ・・・ひ、人違いでは!？」

「ハア・・・丸わかり何ですけど?」

「いやあ・・・バレバレ何ですけど?」

「アコと響が少し呆れながらアン王女に話し掛けると、アン王女の顔から冷汗が流れた。アン王女はようやく観念したように、真琴にバレないように一同の下に来ると、

「皆様、ソードがお世話になっております!とところで、何時からわたくしが居ると?」

「最初から分かっていたんですけど・・・」

「変装ぐらいせな、丸わかりやでえ?」

「なぎさとあかねが苦笑を浮かべながら会話に加わり、アン王女はあかねの言葉を聞き、キラキラ目を輝かせると、

「変装!?!・・・その手がありましたわ!」

「アン王女はポンと手を叩くと、周囲を見回した。アン王女の視線が、つぼみの顔をジッと見つめると、つぼみは思わず一步後退り、

「あ、あのう・・・私に何か?」

「その眼鏡を・・・わたくしにお貸し頂けませんか?」

「エツ!?べ、別に構いませんけど、度が入ってますよ?」

「構いませんわ!」

「アン王女は、つぼみが掛けていた大きな丸いレンズの眼鏡を掛けた。だが、度がきついのかちよつとクラクラし、見かねた美希は、

「それじゃ目に悪いわ!あたし、伊達眼鏡を持って来てるから、あたしのを貸して上げ

る・・・それと、一応ヘアバンドとヘアゴムも貸すわ!!」

美希は、自分が持って居た伊達眼鏡、ヘアバンドとヘアゴムをアン王女に貸した。アン王女は嬉しそうに受け取ると、

「ありがとうございます！これなら・・・」

アン王女は、美希から借りたヘアバンドと、伊達眼鏡を身に付けた。伊達眼鏡は、昔の教育ママがしていたような形をしていて、お世辞にもアン王女に似合っているとは言えず、変装としては良かったのだが、髪形はヘアゴムで髪を束ねただけのポニーテイルで、

(もうちょつと髪形変えないと・・・いくら何でもバレるわ)

アン王女の変装を、美希は呆れながら心の中でツツコミを入れた。そんな事にはお構い無いように、再びアン王女は真琴達の側に近付き、様子を伺っていると、

「あなた達が、アン王女が言ってた新しい妖精達ね？」

「そうシャル！私はシャルルシャル」

「僕はラケルケル！」

「ランスでランス！」

「ダビィだビィ！」

「私は剣崎真琴事キュアソードよ！こうしてトランプ王国の住民と会えるのも久しぶり

「だわ……アン王女はお元気かしら？」

互いに自己紹介を終え、真琴に聞かれたシャルル、ラケル、ランスの三人、  
「アン王女なら……シャルル!？」

突然シャルルの背後から腕が伸び、シャルルを拉致すると、数秒後、口に×マークのマスクを付けたシャルルが戻され、

「シャルル、どうしたの?」

「ンンンンン!」

「それじゃあ、何を言ってるのか分からないケル! アン王女は……ケル!？」

今度はラケルの背後から腕が伸び、ラケルを拉致すると、数秒後、ラケルもシャルル同様、口に×マークが付いたマスクを付けられ唸っていた。

「二人共、どうしたでランス? アン……」

言葉が完全に終わる前に、ランスの背後から腕が伸び、ランスをも拉致した。数秒後、ランスも×マークを付けたマスクを付けられ唸っていた。

「さつきからどうしたの?」

シャルル、ラケル、ランスの背後を、真琴が覗き込もうとして、アン王女は思わずドキリとするも、さり気なくラブ、美希、りんが、自分達の身体で、真琴からアン王女が見えないようにフォローした。遅れてえりかもやって来ると、真琴の注意を逸らすよう

に、

「そう言えばさあ、あたし達って、アン王女の事あんまり知らないよねえ？真琴、アン王女って好きな物とかあんの？」

「エツ!?王女様はお花とか好きです。特に薔薇とか・・・」

「へえ、薔薇が好きなんだあ・・・今度キュアローズガーデンに案内してあげたいわね」  
「後は甘い物が大好きです！来る時に頂いた甘い物の数々は、きつとアン王女も食べていたら喜んだと思います!!」

(わたくしが食べたなら喜ぶ!?)

「まだ残ってるから、後でアン王女も食べて！」

小首を傾げるアン王女に、小声でニコニコしたラブが囁いた。更にえりかが真琴に質問し、

「じゃあ、逆に苦手な物や嫌いな物は？」

「蛸は苦手でした・・・後は、人参を見ると私に良く分けて下さいました！」

「へえ、蛸をねえ・・・少し親近感湧いたわ！」

「本当！人参は私も嫌いだし!!」

(ソード・・・そういう事は他人に言わなくて良いのです！)

アン王女が蛸や人参を嫌いだと知り、思わず親近感が湧いたラブと美希、アン王女は

困惑気味に心の中で呟いた。

「それに、私と同じようにオバケも苦手でした……」

「オバケも!? 何だか親近感湧いてきたわ!」

苦笑を浮かべながら、りんが背後のアン王女をチラリと見ると、アン王女は顔を赤くした。真琴は更に言葉が続け、

「以前、王宮の方から怖い話を聞かされた事があつて……私もアン王女も怖くて夜トイレに行けず、二人で王女様の部屋の……」

(ソオオオドオオオ!!)

自分の赤つ恥なエピソードを、一同に喋りそうな真琴に、アン王女は側に合った椅子を掴んで頭上に振り上げた。背後から感じる殺気に、ラブ、美希、りん、えりかの額から冷汗が流れる。りんは、慌てて真琴の言葉を遮り、

「ま、真琴、それ以上は言わなくて良いわ?」

「エツ!? そうですか、昔の事だから別に話しても良いんですけど?」

真琴は小首を傾げると、美希、ラブ、えりかも変顔浮かべながらりに同意し、

「真琴ちゃんが良くても……ねえ?」

「うん! 真琴ちゃんが、二度とトランプ王国に帰れなくなるとヤバイから……聞かなかつた事しておくよ!」

「真琴・・・聞いたあたしが悪かったしゆ！」

「私が二度とトランプ王国に帰れない？そ、そんな事無いです！王女様は、厳しい面もありますが、優しい方です!!」

(ソード・・・)

振り上げた椅子を下ろしたアン王女だったが、真琴はさっきの会話の続きを何気に語り出し、

「怖い話を聞いてトイレに行けなかった時も、このままベッドで・・・」

(ソオオオドオオオ!!)

再び顔色変えて、椅子を振り上げたアン王女に気付いたココとナッツは、慌てて人間姿に変化し、アン王女に駆け寄ると、二人でアン王女の身体を押さえながら小声で話し掛け、

「ア、アン王女、落ち着いて！」

「他の生徒達も怖がつてるぞ！」

「で、ですが、あの娘ったら・・・」

ココとナッツの言う通り、生徒達は怖がつてアン王女の側から一斉に離れた。りん、ラブ、美希、えりかも加わってアン王女を宥めていると、アン王女は、自分の事をジッと見つめる真琴に気付き、顔から冷汗が流れる。頭上に掲げていた椅子を下ろすと、

「い、異常なしですわ!」

「ジイイイ」

真琴は、そんなアン王女の事をジイと見つめると、アン王女は動揺しながら、

「エ、エエエと、わたくしの顔に何か!」

(((バレた!完璧にバレた!!)))

りん、ラブ、美希、えりかが、困惑しながら真琴とアン王女の顔を見比べていると、

「もう少し静かにしてくださいませか?」

「は、はい・・・ゴメンなさい!」

(((エエエ!?気付いて無い?気付いて無いのおお?)))

アン王女の変装を見ても、全く気付いて居ない真琴を見て、りん、ラブ、美希、えりかの目が点になった。真琴に怒られたアン王女は、バレずにホツとした気持ちと、家臣に怒られる屈辱で、複雑な胸中のまま後ろの空いている席に腰掛けた。

そんなアン王女を見て居た。パフは、

「やっぱり・・・あの怖い。パフ」

パフがブルブル震え出すと、つぼみがパフを抱き上げ、優しく頭を撫でながら、

「大丈夫ですよ!おそらく、えりかが余計な事を聞いて、素直な真琴さんがそれに答えて



しまったのでしょ……」

「うん、ココやナッツがアン王女の側に付いてるし、大丈夫だよ！」

つぼみの言葉にのぞみも同意し、パフを安心させようとした。パフは二人の顔を交互に見比べ、

「本当パフ？」

「パフ、パフにはお兄ちゃんが付いてるロマ！」

「パフウウ！」

アロマは自分の胸を叩くと、パフは嬉しそうに尻尾を振った。そんなパフとアロマを見たのぞみとつぼみは、顔を見合わせながら微笑を浮かべた。会話に加わったみゆきは、アロマとパフに話し掛け、

「ねえねえ、二人の住む所にも、プリキュアって居るのかなあ？」

顔を見合わせたアロマとパフ、アロマはコホンと軽く咳払いをすると、

「聞いて驚くロマ！僕達の国ホープキングダムには、遙か昔、伝説の戦士プリンセスプリキュアが居たロマ！！プリンセスプリキュアは三人居て、プリキュアに力を与えるという12個のドレスアップキーを使い、人々の夢を奪い、絶望させる大いなる闇を封じ、世界を平和に導いたロマ！！」

アロマの話を、興味深く聞いていたつぼみ、のぞみ、みゆき、三人は顔を見合わせな

がら、

「プリンセスプリキュア：私達のように、この世界の為に戦ったプリキュア達が、ホーピングダムにも居たんですねえ」

「へえ、アロマとパフの国にも、プリキュアの伝説があるんだねえ？」

「プリンセスかあ、きつと優雅に戦うんだらうなあ・・・」

「そ、そこまではアロマも知らないロマ」

「だよねえ・・・」

そう言うのと三人で苦笑を浮かべた。教室をプカプカ浮かんでいた魔王は、アン王女にビビリ、窓に張り付く一人の妖精に気付くと、妖精に近付いた。

「お前、マアムの息子のユメタ！・・・お前も妖精学校に居たカゲ？」

「アツ!?魔王さん！うん、僕、友達が欲しくて・・・」

「それでマアムに頼んだカゲか？」

「うん、最初は反対されたんだけど、少しの間なら良いって言ってくれたの」

魔王はユメタの言葉を聞くと、納得したようにコクリと頷いた。

ユメタ・・・

夢の世界の住人で、魔王の知り合いのマアムの息子である。水色の小柄な体をしていて、マアムと同じように、額に月のマークをした水色の小さな身体をしていた。魔王は

絵本の世界に行く以前、偶然彷徨い辿り着いた夢の世界で、悪夢獣と呼ばれる、人間の悪夢から生まれた怪物に襲われていたユメタを助けた事があった。

親睦を深める一同だったが、グレルはピョンと机の上に飛び乗ると、

「プリキュア！俺と勝負しろ!!」

「グレル！折角来て頂いたプリキュアの皆さんに失礼ですよ!!」

大声で叫ぶグレルを見て、なぎさ達はキョトンとした表情を浮かべた。亀の教師は慌ててグレルを注意したものの、グレルは言う事を聞かなかった。ぐらさんは呆れたように、

「全く、グレル、嫉妬は見苦しいぜ！」

「う、うるせえなあ・・・プリキュア何か、プリキュア何か、変身してなきや、只の女の子じゃねえかああ!!」

他の妖精達からも冷ややかな視線で見られ、グレルは堪らず教室を飛び出した。

「ま、待ってよ、グレル！」

それに気付いたエンエンは、直ぐにグレルの後を追った。呆然としていたなぎさ達は、

「何なの、あの子？」

「あのままほつといて良いんでしょうか？」

側に居たタルトにひかりが声を掛けると、タルトは右手を振りながら、

「ああ、構へんわ！少しグレルの頭を冷やした方がエエわ」

そんなグレルの後を、闇が追っていた事に気付いた者は居なかつた・・・

第八十六話：困惑のアン王女

完

## 第八十七話：あゆみちゃんって・・・誰!?

## 1、闇の囁き

学校行事を終えたあゆみが、教室で慌てて帰り支度をしていると、三人のクラスメイト達があゆみに近づき、

「ねえねえ、あゆみちゃん！最近美味しいクレープ屋さんが出来ただけど、この後行ってみない？」

そうあゆみに話し掛けたのは、ちよつとぼちやりした眼鏡を掛けたボブヘアの少女、その側にはショートカットの少女とツインテールの少女が居た。この少女達は、プリキュアの事が大好きで、みゆき達と友達になった事で、勇気を出したあゆみが、三人に声を掛けた事が切っ掛けで、あゆみはこの三人と仲良くなった。

「ゴમેエエン！この後私、用があつて・・・本当にゴメンね!!」

あゆみが拝むようなポーズで三人に謝ると、三人は苦笑を浮かべながら、

「ううん、用事があるならしょうがないし、また今度行きましょうー!」

「うん！じゃあ私、急いでるからこれで・・・バイバイ!!」

「バイバイ!!」

あゆみは三人に挨拶し、足早に学校を後にした・・・

あゆみは、帰り道にある公園のベンチに座ると、今一度妖精学校からの手紙を読んだ。  
(このシールを擦ると、乗り物が現われるんだあ!?!でも、何所で乗り物を出せば良いんだろう?)

どこで試そうかと思案していたあゆみだったが、辺りを見回すと幸い人影は見えず、一人だけ遅れている事で、少し慌てていたあゆみは意を決し、

(ここをやっちゃおう!)

あゆみは、もう一度周りに人が居ない事を確認し、人差し指でシールを擦ると、モクモク煙が立ち上り、慌てるあゆみを余所に、煙はどんどん何かの形を作っていった。完成した気球を見たあゆみは、思わず息を飲んだ。何故ならそこには、あゆみが会いたいと思っても、もう二度と会う事は出来ない、あの妖精の姿があったのだから・・・

「ここ、これは・・・アンデ!?!」

狐に似たようなアンデの気球を見たあゆみの瞳から、涙がポロポロ零れた。だが、嬉し涙を流している間にも、何時人が来るかも分からず、あゆみは慌てて気球に乗り込んだ。あゆみが気球に乗り込むと、子供連れの二十代らしき奥さんがやって来て、あゆみは思わずドキリとするも、何故か奥さんは気球に気付かず、そのまま通り過ぎて行った。(そうか・・・の気球は、普通の人には見えないんだわ!!)

あゆみがホツと安堵したのと同時に、気球は大空目掛け舞い上がった！

和気藹々と、なぎさ達と親睦を深める妖精学校の生徒達とは裏腹に、妖精学校を飛び出したグレルは、あてもなく駆け続けた。大きな森を抜けると、グレルの眼前に大きな池が現われ、立ち止まったグレルは、池の畔に腰掛けた。

「チエツ！みんなプリキュアプリキュアって、変身しなきゃ只の女の子じゃねえか！俺の方が強いに決まってるあ!!」

グレルは、落ちていた小石を拾い池に投げ入れた。グレルも、プリキュアを心から嫌っている訳では無かった。憧れていたからこそ、エンエンと共に妖精学校に入学したのだから……

やんちゃに見えても、グレルにも自分より弱い者を守りたいという、正義感を持つて居た。だが、いざ入学してみると、生徒達は皆プリキュアプリキュアと騒ぎ、プリキュアの事を知っている生徒が、学校ではヒーロー扱いされる事も、グレルには気に入らなかつた。そんなグレルの心の中で、プリキュアより自分の方が強かつたら、自分は妖精学校でヒーローになれるのではないか？グレルがそう思い込むのに、そう時間は掛からなかつた。

そんなグレルの心の隙間を狙ったかのように、突然グレルは話し掛けられ、

「そう思うか? だったら、試して見れば良い!」

「エッ!」

周りには誰も居ないと思つて居たグレレルは驚き、思わず周りを見渡すと、

「グレレル〜!」

「エンエン!?! どうか、お前が俺に話し掛けたんだな?」

グレレルに手を振りながら近付いて来るエンエンを見て、さっきの声はエンエンだったのかと思ひ、グレレルはホツと安堵した。だがエンエンは、グレレルの隣に座り、グレレルの言葉を聞くと小首を傾げ、

「エッ!?! 何の事? 僕、今此処に来ただけど?」

「・・・お、脅かすなよなあ、お前以外に誰も居ないだろう?」

「で、でも、僕本当に今来たばかりで・・・」

「じゃあ、誰が俺に話し掛けたんだよ?」

エンエンに否定され、少しムツとしたグレレルがエンエンに問い詰めるも、二人の背後から不気味な笑い声が聞こえ始め、

「クククク・・・それは、俺だ!」

「「エッ!?!」」

グレレルとエンエンは、思わず声が聞こえた背後を同時に振り返つた。振り返つた先に



は、生い茂った森がある筈だった……

だが、二人が振り向いた背後には、見た者をゾツとさせるような闇が蠢いていた。エンエンは恐怖で涙目になり、グレルも怖かったが、友人であるエンエンの前で弱い姿を見せられず、慌てて立ち上がると、腰の竹光を抜いて闇に身構えた。

「お、お前は誰だ!？」

闇の中の人物は、そんなグレルとエンエンを見て、再び闇の中で不気味に笑い、

「クククク、俺か!?俺の名などどうでも良いだろうか?それより、お前プリキュアに勝ちたいんだらう?お前の事を劣等生だと見下している、クラスの奴らを見返したいんだらう?俺が力を貸してやる!!プリキュアに勝てる力を……お前に!!」

そう言うと、一瞬間の中にシルエツトが浮かび上がり、黒いフードに身を包んだ人物が浮かび上がった。その姿は、魔界でカインからプリキュア達の監視を頼まれていたソドムだった。だが、グレルもエンエンも、そんな事に気付く筈もなく、自分がプリキュアに勝てるかと断言する闇の中のソドムに驚き、

「エツ!俺がプリキュアに?む、無理だぜ!あんなに大勢居るのに……」

「お前も言っていたらどうか?だから……奴らの変身アイテムを奪うんだ!」

「プリキュアの変身アイテムを奪う!?それだって無理だぜ?」

「いいや、出来る!俺は、ほんの十数秒の間だが、時を止める事が出来る!!」

「と、時を止める!？」

「そうだ！頻繁に使える訳では無いがな・・・お前はその間に、変身アイテムを奴らから奪うのだ!!」

「グ、グレル!？」

ソドムの囁きを聞き、グレルは何かに取り憑かれたかのように、ソドムの話に聞き入っていた。エンエンはグレルを止めたかったが、その勇気が出ず、成り行きを見守っていた。グレルは闇の囁きを真に受けると、

「俺、何だか出来そうな気がしてきた!」

「その意気だ！さあ、妖精学校に戻り、プリキュア達の変身アイテムを奪ってくるのだ!!」

「オオ!」

「エツ!?ま、待つてよ、グレル!グレルウウウ!!」

グレルは勢いよく来た道を駆け戻り、涙目を浮かべながら、エンエンはグレルの後を追った。

(クククク、光の化身とも呼べるプリキュアの変身アイテムを奪えば、光の封印を解けるやも知れんからなあ・・・それに、奴らのあの人数は脅威だ！徒党を組まれれば、我らの悲願の妨げになるやも知れん！カインには悪いが、連れ帰るのは一人か二人で良いだ

ろう！残りの奴らには・・・消えて貰おう！！

ソドムは再び闇に溶け込み、グレルとエンエンの後を追い消え去った・・・

## 2、奪われた変身アイテム

妖精学校・・・

一同は、教室から出て行ったグレルとエンエンを気に掛けて居たものの、ポップが代表して二人を捜しに出掛けた。ほのかや祈里、つぼみやみゆきも、一同を代表してポップと共に捜しに向かおうとしたものの、他の生徒達から引き留められ、二人の搜索をポップに託した。

「グレルとエンエン・・・大丈夫かなあ？」

「なあに、グレルはちよつと頭を冷やした方がエエ・・・ポップも捜しに行ってるよって、直に帰って来るやろう！」

二人を心配したみゆきが、窓から外を見つめながらポツリと呟くと、タルトは、ポップが捜しに向かったから大丈夫だとみゆきに告げた。

アン王女も落ち着きを取り戻し、ホツと安堵したココとナッツが妖精姿に戻ると、近くに居たダビィは心底驚愕し、

「エエエ!?ふ、二人は人間の姿になれるビィ？」

「ココ！ココとナッツ、シロップとミルク、それにポップはなれるココ」  
 「それがどうかしたナツ？」

ココとナッツがダビィに訪ねると、ダビィは二人の目の前で土下座し、思わずココとナッツは驚愕した。慌ててダビィに止めるように言うも、ダビィは土下座を止めず、  
 「是非ダビィを、お二人の弟子にして欲しいビィ！ダビィは・・・人間の姿になつて、真琴の役に立ちたいビィ!!」

ダビィの真剣さに心を動かされたココとナッツは、

「そこまでの思いがあつたココ・・・分かつたココ！」

「ナッツとココで、ダビィに教えるナツ！」

「ココ先生！ナッツ先生！ありがとうダビィ!!」

ダビィは嬉しそうにココとナッツに感謝し、ココとナッツによる、ダビィへの変身講座が急遽決つた。ダビィは他の妖精達と会話する真琴をチラリと見ると、

「出来れば、真琴にはまだ知られたく無いビィ！」

「分かつたココ！」

「じゃあ、場所を変えるナツ！」

ココ、ナッツが先に教室を出て、講師達が休憩する部屋へとダビィを案内した。中は本当に一休みするような場所で、こぢんまりしていた。ココとナッツは再び人間姿にな

ると、

「僕達が変身する時のコツを教えるよ！先ず、自分がどういう人物になりたいか、頭の中でイメージするんだ!!」

「ただイメージするだけじゃ駄目だぞ！ダビィは女性だから、少女なのか、成人女性なのか、そのイメージだけでも大分変わってくるぞ」

「さあ、試しになりたい人物像をイメージしてみてー」

ココとナツツにアドバイスされ、ダビィは目を閉じて精神を統一させた・・・

（ダビィは・・・パートナーである真琴の役に立ちたいビィ！真琴の支えになってあげたいビィ！）

ダビィの心技体が合わさった時、ダビィの身体に変化が起こった！

「オオオ!!」

思わず身を乗り出したココとナツツだったが、目の前にダビィが変身した人物を見て思わず顔を赤らめた。何故なら、目の前にはダビィが変身した20代後半ぐらいの女性が、一糸纏わぬ姿で立って居ただけだから・・・

「出来たビィー！」

全裸の女性の容姿をしたダビィを見たココとナツツは、目のやり場に困りながら、

「ダビィ、まあ出来たと言えばそうだけど・・・その姿はまずいよ!」

「エッ!？」

「ダ、ダビィ、その姿は色々支障が・・・」

動揺するココとナッツ、その時部屋のドアを誰かがノックし、ドキリとしたココとナッツを余所に、扉が開かれると、

「ココ、ナッツ、居るんでしよう?」

「二人が出て行ったから、気になってのぞみさんと・・・」

ドアを開けて入ってきたのは、のぞみとこまち、二人は急に出て行ったココとナッツを心配して、二人の後を追って来たのだが、中に居た予想外の女性の姿を目の辺りにして、思わず呆然と立ち尽くした。目を点にしたのぞみは、室内に居る全裸の女性を指差しながら、

「ココ・・・どういう事?」

「アツ、いや、これには深い事情が・・・」

「深い事情!? ナッツさん・・・ちゃんと説明してくれるんでしようねえ?」

「こまち、落ち着け! これには・・・」

こまちにも問い詰められ、ナッツも激しく動揺するも、変身出来た事で有頂天のダビィは、

「ココ先生とナッツ先生にアドバイスしてもらって、この姿に・・・」

ココとナッツが、ダビイが変身した女性を、こんな姿にしたと勘違いしたのでぞみとこまちは、

「ココオオオ！」

「ナッツさん！」

怒気を含んだのぞみとこまちに大声で呼ばれ、取り乱したココとナッツは妖精姿に戻り、

「違うココ！違うココ！」

「誤解ナツ！誤解ナツ！」

のぞみとこまちは、軽蔑の眼差しで二人を見ると、無言でドアをピシヤンと勢いよく閉めると、踵を返し足早に立ち去った。ココとナッツは大慌てで二人の後を追ひ、人間姿になる事に一応成功したダビイは、一人満足そうだった。それとは逆に、何とかのぞみとこまちの誤解を解いたココとナッツだったが、教室に戻ってきた二人の疲労した表情を見て、他の一同は首を傾げていた・・・

「フアアアアアア」

メップルは大あくびをすると、なぎさに近づき、

「なぎさ、メップルは少し疲れたから、ちよつと休みたいメポ」

「エッ!?もう疲れたの?て言うか、あんた何にもしてなかつたよねえ?」

「うるさいメポー！」

ふて腐れたメツプルは、コミュニケーション姿に変化し、直ぐに高軀を始めた。

「ほのか、ミツプルも少し休みたいミポ」

「分かったわ！」

なぎさとメツプルと違い、ほのかとミツプルは言い合いをする事も無く、ミツプルもコミュニケーション姿に変化すると眠りに付いた。顔を見合わせたなぎさとほのかは思わずクスリと微笑んだ。

飛び出したグレルとエンエンを捜しに向かったポップだったが、外に出て長い階段を降りようとしていると、下からグレルとエンエンが駆け上ってくるのを見てホッと安堵した。ポップは階段の上で二人を出迎えると、

「グレル、エンエン、心配したでござるぞ！無事に戻って良かったでござる・・・さあ、教室に戻るでござる!!」

「いやあ、俺もちよつと頭にきちちゃってき・・・反省してるぜ！」

グレルは、苦笑を浮かべながらポップに素直に謝ったが、エンエンは不安そうにグレルの顔を見つめ、

「グレル・・・」



グレルは、不安そうな表情を浮かべるエンエンに、シツとジエスチャーすると小声で語り掛け、

「エンエン、俺達友達だよな？エンエンは、俺の味方だよなあ？」

「エツ!?う、うん・・・でも・・・」

グレルを止めたいと思っても、エンエンにはその勇気が出ず、思わず口ごもってしまった、結局はグレルのペースに嵌ってしまう。自分の勇気の無さに、エンエンは涙目になるも、グレルにはそんなエンエンの気持ちをはかる事も無く、

「そっだよな！俺達は友達だ!!さあ、一緒に戻ろうぜ!!!」

グレルは、愉快そうにエンエンの背中をポンポン叩き、二人はポップと共に学校の中へと戻って行った。

(クククク)

背後の闇は、そんな二人の姿を見届けその姿を消した・・・

グレルとエンエンも戻って来た事で、ココとナツツ、なぎさ達一同もホツと安堵したもの、タルトはお気楽そうに、

「どや!?わいの言う通り戻って来たやろう?」

聞いていたくるみは少し呆れたように、

「タルト：：仮にもあなたは、ココ様やナッツ様と同じ教える立場何だから、もうちよつと心配しなさいよね？」

「アハハハ、まあタルトだし！」

ラブは思わずタルトを見ながら苦笑し、一同も釣られたように笑う中、変身授業を終え教室に戻って居たダビィは、表情を険しくしながら真琴に話し掛け、

「真琴・・・何か嫌な気配がするビィ！」

「エッ!?!嫌な気配って？」

「それは・・・良く分からないビィ」

「良く分からないって・・・それじゃ対処の仕様が無いわ！」

だが、そんなダビィの不安を表すように、パフ、ぐらさん、シャルルも顔を顰め、

「何だか・・・嫌な感じがするパフ？」

「同感だぜ・・・」

「パフとぐらさんも感じたシャル？」

「嫌な感じ!?!でも、アロマは何にも感じないロマ」

アロマは、不安がる妹パフを心配しながらも、自分には嫌な気配は感じないと告げた。そんな中、グレルが近付いて来ると、

「やあやあ、諸君！さつきは悪かったなあ!!」

「グレルル・・・何だかご機嫌シヤル？」

「何か良い事でもあったパフ？」

「さあてねえ・・・なあ、エンエン！」

「エツ!?ウン・・・」

ご機嫌なグレルルとは正反対に、エンエンの表情は曇り、シヤルル達一同は小首を傾げた。グレルルは一先ず自分の机に戻って、プリキュア達の事が書かれた、プリキュア教科書を開いた。その本を改めて見ると、プリキュアが変身する為に必要なアイテムに付いて調べ、グレルルは教室内を彷徨（うろつ）きながら、なぎさ達の変身アイテムを教科書で確認した・・・

なぎさとほのかのハートフルコミュニケーション・・・

ひかりのタツチコミュニケーション・・・

咲、舞、満、薫のクリスタルコミュニケーション・・・

のぞみ、りん、うらら、こまち、かれんのキュアモ・・・

くるみのミルキイパレット・・・

ラブ、美希、祈里、せつなのリンクルン・・・

つぼみ、えりか、いつきのココロパフューム・・・

ゆりのココロポット・・・

響、奏、エレン、アコのキュアモジュール・・・

みゆき、あかね、やよい、なお、れいかのスマイルパクト・・・

そして、教科書にはまだ書かれていない、真琴が変身する為に必要なダビィを凝視した。

(うくん、何人か妖精姿になってるのは不味いよなあ・・・)

グレルが腕を組んで考え込むと、ポルン、ルルン、フラツピ、チョツピ、フープ、ムープ、そしてダビィがコミュニケーション姿に変化し、慌ててそれぞれのパートナーがコミュニケーションを掴んだ。咲は不思議そうにフラツピに話し掛け、

「フラツピ、どうしたの?」

「何だか、酷く疲れて・・・少し寝るラピ!」

「疲れたんだ・・・良いよ! ゆっくり休んで!!」

咲は、クリスタルコミュニケーションと化したフラツピを、ポケットに仕舞い込み、ひかり、舞、満、薫、真琴も、それぞれポケットに変身アイテムを仕舞い込んだ。それがソドムの仕掛けた罠だとも知らず・・・

(何だか知らないがチャンスだぜ!)

グレルが目を輝かせると、グレルの心の中にソドムが語り掛け、

(さあ、今こそ行動の時だ! もう一人と協力し、プリキュアの変身アイテムを奪え!!)

グレルはコクリと頷くと、エンエンに小声で話し掛け、

「エンエン、お前も協力してくれるよなあ？話を聞いたお前も同罪だぜ！」

「エエエ!?そ、そんなあ……う、うん」

グレルに同罪だと言われ、エンエンは涙目になると、渋々協力する事を約束した。  
(クククク、それで良い！さあ、時を止めるぞ!!)

ソドムの叫びと共に、教室内が静まり返った……

一同は、時が止まった世界で沈黙し、全く身動きしなかった……

その中をグレルとエンエンが走り回り、ひかり、咲達、のぞみ達、ラブ達、つぼみ達、響達、みゆき達から変身アイテムを奪い、教科書を入れる為のカバンに詰め込み、なぎさとほのかの下に向かおうとしたものの、

「何をモタモタしている！もう時間が……チツ、仕方無い！そいつらは構わん、奪った変身アイテムを俺に寄せせ!!」

ソドムは、鱗に覆われた不気味な両手を差し出すと、グレルとエンエンは、言われるままソドムにカバンを手渡した。それと同時に時が再び動き出し、なぎさ達も、妖精達も、何事も無かったかのようにしていた……

だが只一人、ピーちゃんはそんな二人の行動を目で追っていた……

グレルとエンエンはピーちゃんに見られているようでドキリとし、グレルはエンエン

に目で合図を送り、

「エエ!? エンエン、忘れ物しただつて? それは大変だ! 捜しに戻ろう!!」

「あつ、うん・・・」

グレルとエンエンは、教室内に居る事に居たたまれず、教室から再び飛び出して行った。

(パイギヤア!?)

あの二人は何をしようとしているのか、この時のピーちゃんには目的が分からず困惑の表情を浮かべた。一同は、再び出て行ったグレルとエンエン、二人の去った方を見て呆然としていた・・・

プリキュア達の変身アイテムを奪い、闇の中のソドムは、勝ち誇ったかのように不気味に笑み、

(クククク、遂に手に入れたぞ! 光の力!! 後は何人か浚い・・・ン!?)

逃げ出したグレルとエンエンが校舎から飛び出すと、目の前の校庭に新たな気球が降りてきた。このままじゃ盗んだのがバレるかも知れないと、激しく動揺するグレルとエンエンに反し、闇の中のソドムは、気球から降りたあゆみを見ると、

(そう言えば、後からもう一人来ると言つて居たな・・・クククク、これは利用出来そうだ!)

どうしようかと動揺するグレルとエンエンだったが、闇の中からソドムが二人に声を掛け、

「お前達、あの娘をプリキュア達の居る教室に案内しろ！」

「エツ!? そ、そりゃあ、不味いぜ! 俺達、プリキュアの変身アイテムを奪ってるのに……」

「そ、そうだよ! バレたら、みんなに僕達怒られちゃうよ……」

「クククク、大丈夫だ! さあ、この箱をお前達に授けよう!!」

闇の中から、鱗に覆われた不気味な腕が現われ、グレルに小箱を手渡した。小箱の中身は確認出来ず、グレルとエンエンは顔を見合わせながら驚き、

「これは!？」

「お前達の内、一人は先に教室に向かい、教室に着いたらこの箱を開ければ良い! 後は俺がやる!!」

「そうすると……どうなるの?」

エンエンが不思議そうにソドムを訪ねると、ソドムは不気味な声で、

「見れば分かる……見ればなあ……クククク」

闇の中で不気味にソドムが笑い、グレルとエンエンの背筋がゾツとした。だが、もう引き返すことは出来ない二人は、ソドムに言われるままあゆみに近付いた。あゆみは、近づいてくるグレルとエンエンを見て微笑み、グレルとエンエンもあゆみに笑み返し

た。

「プ、プリキュアさんだよ・・・ですよね？」

「ええ、私は坂上あゆみ！キュアエコーよ!!あなた達は、妖精学校の生徒さん？」

「そうだ・・・いえ、そうです！俺、いや、私はグレル！」

「ぼ、僕はエンエン・・・」

「そう、グレルとエンエン・・・出迎えに来てくれてありがとう！みんなはもう来てるんでしよう？」

「きよ、教室でみんなと一緒に居ます！」

「そう・・・じゃあ、私を教室まで連れて行って貰えるかなあ？」

「は、はい！エンエン、俺は先に行つてみんなに知らせってくるから、エコーさんと一緒に来てくれ!!」

「エツ!?ウ、ウン」

「じゃ、じゃあ、エコーさん！また後で!!」

グレルはそう言い残すと、慌てて校舎内へと戻つて行つた。あゆみはクスリと笑いなからエンエンに話し掛け、

「そんなに慌てなくても良いのにね？」

「エツ!?ウ、ウン・・・あ、あのお!？」



「ん!?何?」

あゆみは、笑みを浮かべながらエンエンを見つめると、エンエンはあゆみを凝視する事が出来ず俯き、

「な、何でも無い……」

「そう……じゃあ、行こうか?」

あゆみはニツコリエンエンに微笑むと、二人はゆっくり校舎内へと入って居った……

3、みんな……大嫌い!!

グレルは慌てながら教室目指して駆け続けた……

(本当に何とかなるのかなあ?)

貰った小箱を見ながら小首を傾げるも、グレルは教室に着くと、少しだけドアを開き、教室内に箱を置いて開けてみた。すると、めだかぐらいの魚のような数十匹の物体が、まるで水の中を泳ぐかのように、教室内を泳ぎ始め、やがて消え去った……

(な、何だ!?今の?)

(ククク、直に分かる!)

動揺するグレルだったが、闇の中のソドムは不気味に笑んでいた。エンエンと一緒にやって来たあゆみを見て、グレルは顔から大量の汗をかきながら、

「こ、この中が教室になってます!」

「そう、二人共、案内してくれてありがとう!」

あゆみは中腰になって、エンエンとグレルの頭を撫でると、教室のドアを開けて中に入った。エンエンとグレルの言っていたように、既になぎさ達一同は教室に居て、生徒達と楽しそうにしていた。あゆみは目を細めると、

「みんな、遅くなってゴメンねえ!」

笑顔を浮かべながら、今到着した事をなぎさ達や妖精学校の関係者に伝えようとしたあゆみだったが、あゆみを見る一同の視線は困惑していた。あゆみは小首を傾げると、近くに居たみゆきに話し掛け、

「みゆきちゃん、遅くなってゴメンね!」

「エッ!」

あゆみに話し掛けられたみゆきは大いに驚き、あゆみをジィィと見ながら小首を傾げ、髪を掻きながらあゆみに愛想笑いを浮かべたみゆきは、

「あのう・・・何処かでお会いしましたっけ?」

「エッ!」

「何や、何や、みゆき、この子と知り合いなん?」

「妖精学校に来てるって事は、この人もプリキュアなのかなあ?」

「かも知れないね!」

あかね、やよい、なおも、みゆき同様、あゆみの事を知らない素振りを見せた。あゆみは混乱し、縋るような視線をれいかに向けると、

「もう、意地悪何だからあ．．．れいかちゃん、みゆきちゃん達に言つてあげて!!」

「エツ!!あのう、私の事もご存じなのでしようか?申し訳ございません．．．どこかでお会いたした事があつたのでしようか?」

話を振られたれいかも困惑し、丁寧にあゆみに謝罪すると、何所であつたのかあゆみに逆に聞いてきた。あゆみは益々混乱し、

(何!? 一体どういう事? . . .)

「もう、いい加減にして! 笑えないよ．．．なぎささん! ほのかさん! ゆりさん! ひかりさんも、咲さん達! のぞみさん達! せつなさん達! つぼみさん達も、響さん達も、真琴ちゃんも、みゆきちゃん達に何とか言つて下さい!!」

半分ベソをかきながら、なぎさ達に縋つたあゆみだったが、名前を呼ばれた一同も困惑し、顔を見合わせながら小声で話し始めるも、皆小首を傾げた。あゆみは思わず拳を握りしめ、

「みんな、どうしてそんな意地悪するの? 確かに遅れて来たけど．．．ちゃんと最初に遅れるって言ったの!!!」

痲癩を起こしたように、あゆみが一同に抗議すると、ゆりはあゆみを宥めるような仕草で、

「落ち着いて頂戴！ゴメンなさい!!私達、本当にあなたの事を・・・」

「私は、あゆみです！坂上あゆみ！キュアエコーです!!」

何故こんなに必死になって、自分の事をみんなに説明しなければならぬのか、あゆみの目に涙が浮かんだ。

「あゆみちゃん!?!」

「ウーン！あゆみって言うと、家のお母さんぐらいしか思い付かないなあ・・・」

「キュアエコー・・・聞いた事無いよねえ？」

「誰か知ってる？」

咲、ラブ、のぞみ、響も小首を傾げ、他の一同に問い掛けるも、皆小首を傾げた。コトナツツ、ポップも困惑し、タルトはボンと手を叩くと、

「そや、プリキュア教科書で確認すれば済むこっちゃ！エエと、エコー、エコー……：……やっぱり載ってないでえ？」

タルトは、手に持っていたプリキュア教科書をパラパラ捲るも、キュアエコーのページは無かった……

「そんななあ……」

自分の事が載っていないと言われ、あゆみは慌ててタルトからプリキュア教科書を借りるも、確かに自分の事は載っていないかった・・・

窓際の前の方に居た魔王とピーちゃんも、ようやく異変に気付き、

「何の騒ぎカゲ!?」ン、あれはあゆみ!あゆみは今着いたカゲか?」

「ギャアア!?!」

「でも、何だか様子がおかしいカゲ?」

魔王とピーちゃんは、あゆみの存在をちゃんと覚えて居たのだが、騒動の顛末を知らない二人は、顔を見合わせながら成り行きを見守った。

「全く、うるさくてオチオチ寝てられないメポ」

寝ぼけ眼のメツプルが妖精姿になった時、あゆみはこの場に居る事が居たたまれなくなり、

「みんな、酷い・・・酷いよ・・・」

あゆみの目から大粒の涙がポロポロ零れる・・・

何故自分は、みんなからこんな扱いをされるのか分からなかった・・・

「私、私、何も悪い事してないのに・・・みんな、みんな・・・大嫌い!!!」

「アツ!?!」

あゆみはそう言い残し、顔を覆って泣きながら教室を飛び出して行った。みゆきは、

声を掛けて止めようとしたものの、あゆみは振り返りもせず駆け去った・・・

廊下から成り行きを見て居たグレルとエンエンも困惑した表情を浮かべ、

「グレル・・・あの子可哀想だよ！」

「あ、ああ・・・」

「グレル！」

「わ、分かったよ！」

普段弱気なエンエンに発破を掛けられ、悪い事をしてしまったと感じていたグレルも同意し、二人はあゆみの後を追った。その背後で、闇の中のソドムは不気味に笑い、  
(クククククク、これで奴らの絆など崩壊したも同然！後はあの娘を・・・)

ソドムはあゆみに狙いを付け、その後を追った・・・

なぎさ達は、泣き去ったあゆみの居た場所を、呆然としながら見つめていた・・・

第八十七話：あゆみちゃんって・・・誰!?

完

## 第八十八話：あゆみの涙とエコーの決意

### 1、困惑する少女達

妖精学校に遅れてやって来たあゆみだったが、何故かなぎさ達やココ達は、あゆみの事を覚えて居なかった。みんなに意地悪されていると思い込んだあゆみは、居たたまれなくなつて、泣きながら妖精学校を後にした。あゆみが去つた後でも、その場で呆然としてゐるなぎさ達を見て、妖精学校の生徒達は動揺していた・・・

「今の人は・・・プリキュアじゃ無いパフ？」

「みんな、知らない見たいシャル！」

「それより・・・何かこの教室の中、変な感じがするぜ？」

パフやシャルル達もヒソヒソ声で会話していると、ぐらさんは、教室内を見渡しながらポツリと呟いた。ユメタは、プリキュア教科書を改めて開いていると、とある空白のページを見て小首を傾げた。

(アレエ!?このページには、確かプリキュアが載つてたような?)

ユメタは、ジイイと空白のページを凝視した・・・

遅れてやって来たあゆみの事を覚えて居ないなぎさ達に、魔王とピーちゃん、メツプ

ルは困惑していた。あゆみと喧嘩でもしたのだろうか？確かめようとなぎさ達の側に近付いた魔王とピーちゃん、騒ぎに気付いたミップルも、妖精姿になってメツプルの隣に現われた。

「みゆき、あゆみと喧嘩でもしたカゲ？」

「なぎさ、あゆみを追いかけてないメボ？」

「エツ!?魔王、あゆみちゃんって人知ってるの？」

「メツプル! あんた、あの子の事知ってるの？」

目を見開いて驚いた表情を見せるみゆきとなぎさに、思わず顔を見合わせた魔王とメツプルだったが、見る見る二人の表情は険しくなり、

「何寝ぼけた事言ってるカゲ？」

「なぎさ、どうかしてるメボ？」

「そんな事言われてもさ、私達本当にあの子の事・・・でも、不思議何だよねえ? 全く知らないかって言われると、何処かで会った気はするんだよねえ・・・」

なぎさは困惑気味にメツプルと魔王に語った・・・

知らない子に突然声を掛けられたものの、自分達の事を知って居る少女に、なぎさ達は困惑し、泣きながら去っていた少女を見て呆然とする・・・

見ず知らずの少女だったら、あの子は何を言っているんだろう? そう思う筈だっ



た・・・

だが、なぎさ達はそうは思えなかった。あの子は自分達の事を知っているのに、自分達はあの子の事を知らない、でも、全く知らないかといえは、そうでは無く、何か頭の中がモヤモヤしていた。

「アア・メツプルやミツプル、ピーちゃんや魔王は知ってるのに、何で私達はあの子の事覚えて無いの？」

髪を掻きむしりながら、何とか思い出そうとするなぎさだったが、あゆみの事を思い出す事は無かった。ミツプルは、不安げな様子でほのかを見つめると、

「ほのか、あゆみが可哀想ミポ！」

「そう言われても・・・確かにこのままじゃ不味いとは思うけど・・・」

呼び戻しに向かったとしても、あゆみの事を思い出せない自分達が迎えに行けば、逆にあゆみに不快な思いをさせるのでは無いかと思うと、直ぐに行動に出られなかった。そんななぎさ達一同の煮え切らない態度に、魔王は目を吊り上げると、

「もう良いカゲ！お前達、見損なつたカゲ!!ピー助、あゆみを迎えに行くカゲ!!」

「ギヤアアス!!」

「なぎさのワカランチン！もう良いメポ!!魔王、メツプルとミツプルもあゆみを迎えに行くメポ!!」

「一緒に連れて行って欲しいミポ！」

「分かったカゲ！」

魔王とピーちゃん、メツプルとミツプルは、あゆみを迎えに行こうと行動しようとした時、突然ユメタが叫び、

「ま、魔王さん！この教科書おかしいよ?！」

「ユメタ、どういう事カゲ?」

「あのね……このページ、ジイイと見てると、微かに動いてるの!」

「エエエ!」

ユメタの声を聞き、生徒達は一齐にプリキュア教科書を開いた。ユメタが指摘をしたページは真つ白だったが、確かにジイイと凝視すると、何か違和感を覚えた。気付いたシフォンも、プリキュア教科書を見つめると、

「キュアキュア……プリプー!」

シフォンが耳を動かすと、教科書のページを覆っていた何かが一齐に動き出し、宙に逃げ去った。そして、空白だったページに、キュアエコーの事が現われた。教科書を見て居たユメタは驚き、慌てて一同に話し掛けると、

「みんな、見て!さっきの人が言ってた、キュアエコーが載ってるよ!!」

なぎさ達も、ココ達も、そしてアン王女も、プリキュア教科書を見て見ると、確かに

あゆみが言っていたように、キュアエコーの事が載ってあった。見る見る一同の顔は青ざめ、困惑の表情を浮かべたなぎさは、

「じゃあ、あゆみちゃんって子が言ってた事は、全部本当だったんだあ?」

「でもおかしいよ! 何で私達やココ達は、あゆみちゃんの事覚えて無いの?」

のぞみの言葉にほのかも同意し、

「ええ、ミップルとメツプル、ピーちゃんや魔王は覚えて居るのに、私達は覚えて居ない……何がおかしいわ!」

「本当……ねえ、フラツピは……アレエ!」

「咲、どうしたの?」

「フラツピが……居ない!」

咲は、フラツピにも聞いてみようとして、ポケットをゴソゴソ漁るも、コミュニケーション姿で寝ている筈のフラツピが居なかった。咲の言葉を受け、舞もポシエットを調べて見ると、チヨツピの姿も無かった。ハツとしたひかりは、直ぐにポルンとルルンの身を案じ、

「まさか……ポルンやルルンの姿もありません!」

「ええ、私達もそう……」

「一体何処に!」

ひかり、満と薫も表情を青ざめ、ポルンやルルン、ムーブとフープが居なくなってい

る事を知らせた。ざわつく室内、ゆりはハツとすると、

「みんな、変身アイテムは持ってる？」

「エツ!? 此処に……アレエ!? な、無い?」

「私達のリンクルンも無くなってるよ!」

「ココロパフュームもありません!」

「私達のキュアモジュールも無いよ!」

「嘘おお!? 私達のスマイルパクトも……無い無い……無いいいい!」

「ダビイの姿が見当たりません!」

ゆりに忠告され、のぞみ達、ラブ達、つぼみ達、響達、みゆき達、そして真琴が大慌てで身体をまさぐって捜すも、変身アイテムは消え失せて居た。

「ひよつとして、さっきの子が……」

そう言いかけて響は言葉を止めた……

(そう言えば、前に私、今思ったような勘違いをした事があつたような?)

響は、あゆみが自分達の変身アイテムを持って行ったのでは無いか? そう一瞬思ったが、何処かでそんな勘違いをした自分の事を思いだした。そんな勘違いに気付いたのか、ピーちゃん一同に知らせるように騒ぎ出し、

「ピーちゃん、何か知ってるの?」

アコがピーちゃんに話し掛けると、ピーちゃんは一同に知らせようとジエスチャー混じりに言葉を発し、

「ギヤア、ギヤア、ギヤアアアス！」

「何!?!さっきのグレルとエンエンって妖精達が……みゆき達の変身アイテムを奪った力ゲかあ?」

「エエエ!?!」

ピーちゃんの言葉を通訳した魔王によって、状況を理解した一同、妖精学校の生徒達は、クラスメートであるグレルとエンエンの悪事を知り、ヒソヒソ話を始めた。アロマは目を吊り上げて怒り出し、

「全く、何て事をするロマー！」

「全くだぜ!グレルは兎も角、エンエンまでやるとは……驚きだぜ!」

「きつと、グレルに無理矢理手伝わされたシャル！」

アロマの言葉に、ぐらさんも、シャルルも同意するも、アン王女は、美希から借りた伊達眼鏡の位置を直すと、シャルルを窘めるように小声で話し掛け、

「シャルル、クラスの間を、そんな風に言うものではありませんよ?」

「シャル!?!でも……」

「何か事情があるのかも知れませんが!二人から真相を聞き出した方が良いでしょう!」

「それは俺達がするカゲ！ピー助、メツプル、ミツプル、あゆみを連れ戻すついでに、あの二人から変身アイテムを取り戻すカゲ！」

魔王はアン王女の言葉に頷き、ピーちゃん、メツプルとミツプルを誘い、魔王が大きく息を吸い込むと、少し魔王の身体が大きくなり、メツプルとミツプルを背中に乗せた。「行ってくるカゲエ！」

「ピイイイ！」

魔王とピーちゃん、そしてメツプルとミツプルは、教室の窓から飛び出した。ほのかはなぎさを見つめると、

「私達も行きましょう！ミツプルとメツプルまで奪われてしまったら、私達、本当にお手上げだもの!!」

「そうだね・・・」

「私も行きます！あゆみちゃんに、さっきの事謝りたい！まだ、あゆみちゃんの事を思い出せないけど・・・それでも、謝りたい!!」

訴えるようなみゆきの熱意を感じ、なぎさとほのかが頷いた時、妖精学校は、大きな地震が起きたかのように激しく揺れ、一同は地面に倒れ込みながら激しく動揺した・・・

## 2、クラーケン

泣きながら外に飛び出したあゆみは、無我夢中で走り続けた・・・

階段を下り、森の中を走り続けたあゆみは、大きな池の畔に辿り着き、その場で地面に崩れ落ちるかのように膝を付き、嗚咽した・・・

「みんな、酷いよ・・・ウツウツウ」

顔をクシャクシャにしながら泣き続けるあゆみ、追いついたエンエンとグレルだったが、そんなあゆみの姿を見ると、自分達がこのような事態を引き起こした責任を痛感した。エンエンの目に涙が溜まる。エンエンの心に罪悪感が沸き上がり、被っていたフードを両手で持ち、グツと下に引っ張ったエンエンは、

「ウ、ウ、ウワアアアアン！ゴメンなさい！ゴメンなさい！ゴメンなさい！！」

「エッ!?!」

突然背後から泣き声が聞こえ、あゆみが目を擦りながら背後を振り返った。エンエンは、あゆみの顔をまともに見られないのか、頭に被っていたフードで自分の顔を隠すように、泣きながらあゆみに謝り続けた。あゆみは呆然とすると、

「ど、どうしてあなたが泣くの?」

「僕達の・・・僕達のせいなの・・・」

「エッ!?!どういう事?」

「そ、それは・・・」

あゆみは表情を曇らせ、エンエンをジイと見つめると、エンエンは涙目のままグレルを見つめた。ドキリとしたグレルだったが、エンエンを睨み、

「何だよ、その目は！ハッキリ言えば良いだろう!! 言えよ、俺の所為だつて!!」

「ウツ・・・ウワアアアアン!」

「泣き虫!泣くなよ・・・泣く・・・」

感極まり、グレルの目にも涙が溜まった。あゆみはジイと見ながら頭の中で推理し、考えを纏めると、二人を険しい表情で見つめ、

「ま、まさか、みんながおかしくなったのは・・・」

「ゴメンなさい!ゴメンなさい!!」

「お喋りな奴らめ!」

あゆみはもっとハッキリした事を知りたくて、エンエンとグレルを問い詰めようとしたその時、あゆみの背後から不気味な声が掛かり、思わずあゆみは恐る恐る背後を振り向いた。そこには不気味な闇が広がり、声はその闇の中から聞こえていた。それを見たエンエンとグレルの表情が青ざめた。闇から伸びた手が、エンエンとグレルの口を塞ぐと、二人の口にガムテープのような物が貼られ、二人が苦しそうに唸った。

「クククク、少し黙るが良い!」

「エンエン!グレル!あなたは・・・誰!? どうして二人にこんな酷い事を?」



あゆみは気丈に闇の中の人物、ソドムに声を掛けた。ソドムは声のトーンを抑えながら、

「俺か!?俺はソドム・・・お前の味方だ!」

「味方!?どういう事?」

「俺は全て見ていた!その二人は、プリキュア達に頼まれ、お前を引き留める為の時間を稼ぐ囚役・・・あいつらは酷い奴らだ!!お前があの場合に居ないのを良い事に、元々プリキュア教科書に載っていたお前のページを破り、あたかもお前の存在など知らないように仕組んだ!!」

ソドムの言葉を聞いていたあゆみの顔は、見る見る表情を強張らせ、エンエンとグレルは必死に首を横に振り、違うとあゆみに伝えようと試みるも、あゆみはソドムに気を取られ、そんな二人に気付かなかった。

「みんなが!?嘘よ!そんな事無い!!みんなは私の大切な仲間達・・・みんなが、プリキュアのみんなが、そんな酷い事する訳無い!!」

「そのお前が大切に思っている仲間達が、お前に何をした?」

「それは・・・」

ソドムに看破され、あゆみは思わず言葉に詰まった・・・

ソドムの言葉を否定したくても、現にプリキュアの仲間達は、自分の存在を否定した

のだから・・・

「そうだ！あんな意地悪な奴らは放っておけばいい!!お前の力を必要としている者達の為に使うべきだ!!」

「私の力を必要としている者・・・そんな人が居るの?」

「ああ、居る!俺と共に来い!!力を貸してくれ・・・坂上あゆみ!!いや、キュアエコー!!!」  
「ウウウウウウウ!!」

エンエンとグレルは激しく首を振り、ソドムの言っている事はデタラメだから、話を聞いちゃ駄目だと伝えようと試みるも、あゆみは以前のグレル同様、ソドムの術中に嵌りかけていた・・・

プリキュアの仲間達は、自分の存在を否定した・・・

その心の隙間を付いたソドムの甘言に、あゆみは引き込まれようとしていた。そんなあゆみを、正気に戻す声が上空から聞こえてきた。

「あゆみいい!迎えに来たカゲエエ!!」

「ピギアア!!」

「あゆみ、メップル達と一緒に帰るメポ!」

「あゆみの事は、ミップル達がちゃんと覚えてるミポ!だから泣かないでミポ!!」

「魔王、ピーちゃん、メップルにミップルも・・・私の事、覚えて居るの?」

魔王達は、自分の事をちゃんと知っていてくれる。ただそれだけの事なのに、あゆみの両目からポロポロ涙が零れる。悲しい涙では泣く、嬉し涙が・・・

そんなあゆみを見た魔王達は、あゆみを安心させるように笑みを浮かべながら、  
「何当たり前の事言ってるカゲ？」

「ピギヤアア！」

「ピー助も、ちゃんと覚えてるって言ってるカゲ！」

「ちゃんとあゆみの事も、プリキュア教科書に載ってたメポ！だから、安心して良いメポ！！」

「エツ!?でも、さっきは・・・」

「あゆみのページの上に、妙な生き物が張り付いて、エコーのページを隠してたミポ！」  
「だからなぎさ達も、あゆみの言ってた事が正しいと気付いたメポ」

「みゆき達からあゆみの記憶が消えたのも、きっと何か理由があるカゲ・・・ン!?アアア、お前達は？」

エンエンとグルレルに気付き、魔王が二人を見て目を吊り上げた時、妖精学校の方から大きな物音が聞こえた。

(チツ！余計な奴らが・・・まあ良い、クラーケンが動き出したようだ！ククク)

ソドムは軽く舌打ちするも、クラーケンが動き出したと知り、不気味に口元に笑みを

浮かべた。

妖精学校は、巨大な魔物に襲われていた・・・

ソドムが魔界より召喚した、30メートル以上はありそうな巨大なイカに似た白い悪魔、巨大なる魔獣クラーケンは、妖精学校の上に覆い被さり、妖精学校に巻き付いた。ミシミシ不気味な音を立てる校舎に、生徒達が怯えるのを、なぎさ達やココ達、アン王女も、そんな生徒達に声を掛け励ました。触手は不気味にウネウネ動き、妖精学校校内へと進軍しようと試みる。一同は慌てて教室の窓を閉め、なぎさは変顔浮かべながら、「何て都合の悪い時に現われるのよお！」

「不味いわね・・・現状では、私達誰もプリキュアに変身出来ない！」

ゆりは険しい表情でポツリと呟いた。変身アイテムはエンエンとグレレルに奪われ、メップルとミップルはあゆみを迎えるに行っていて、なぎさとほのかもプリキュアにはなれなかった・・・

不気味な咆哮が妖精学校の方から聞こえ、一同が背後を見つめると、森の頭上に蠢く白い物体が見えた。

「な、何?! あれは一体?！」

巨大な何かが妖精学校の側に居る・・・

あゆみや魔王達に緊張が走った!

「何だかヤバイ気配を感じるカゲ・・・あゆみ、みゆき達はそこに居るエンエンとグレルに変身アイテムを奪われて、プリキュアになる事が出来ないカゲ!」

「エツ!?エンエンとグレルが?それでさつき、私に謝って・・・」

「なぎさとほのかも、メツプルとミツプルが此処に居るから、プリキュアにはなれないメボ」

「あゆみ、みんなを助けて欲しいミボ」

「みんなが!?!・・・」

一瞬顔色を変え、スインクパクトを手を持ったあゆみだったが、思わずみんなからのさつきの仕打ちを受けた事が脳裏に浮かび、変身するのを躊躇(ためら)った。

魔王は小首を傾げると、闇の中のソドムがククククと笑い声を上げ、

「そうだ、あゆみ!あんな薄情な奴らは放っておけば良い!!さあ、俺と一緒にいこう!!」

ソドムがあゆみに不気味な手を伸ばすと、魔王とピーちゃんソドムとあゆみの間に割って入り、

「お前は誰カゲ!?お前からは、邪悪な匂いがプンプン漂ってるカゲ!」

「ギャアアス!」

（何だ!?この黒い奴、何処かで会った事があるような・・・）

魔王を見たソドムは、違和感を覚えて居た。魔王から発せられる気配を感じると、苛ついてくるのが自分でも分かった。

エンエンとグレルは、一同に真相を話そうと懸命に口に付いたテープを取ろうとしていた。メツプルとミツプルは、そんな二人の側に近寄り、口に付いたガムテープのようなものを取るのを手伝うと、二人の口に貼られていたテープが何とか取れ、二人の口元は赤くなっていた。

「お前達、みんなから奪った変身アイテムを返すメポ!」

「ポルン、ルルン、起きてミポ!」

だが、ミツプルが呼び掛けても、ポルン達からの返答は無かった。エンエンは首を振り、

「違うの!僕達、その闇の中に居る人に言われて・・・」

「プリキュア達の変身アイテムは、あいつに渡しちゃったんだ!」

「「「エエエ!?!」」」

「それに、キュアエコーの事を他のプリキュア達が忘れちゃったのも、そいつに指示された箱を教室で開けてから何だ!」

「「本当にゴメンなさい!!」」

エンエンとグレルは、心から反省しているように、あゆみや魔王達に泣きながら謝った。ソドムは、全て露見したことで本性を現わし、エンエンとグレルから渡された変身アイテムが入ったカバンを一同に見せ、

「クククク、全くお喋りな奴らだ・・・まあいい、奴らの変身アイテムは・・・この通り俺の手の中にある！後は貴様を連れ帰れば、それで全て片が付く！もつとも、他のプリキュアの奴らは邪魔なだけ、クラーケンによつて始末されるがなあ!!!」

「何ですって!?!」

「クククク、もう一つ教えてやろう！貴様の仲間達が、何故貴様の記憶を失ったか分かるか？奴らの脳には、記憶を喰らう空魚が居るからだ！空魚は生物の記憶を好んでいてなあ・・・それを利用し、あの教室に居た者共の記憶から、貴様の記憶を空魚に喰らわせた！更に、貴様の事が書かれていたページに、空魚を潜り込ませてそのページを見えなくしてやった！貴様の顔を見た他のプリキュア達の表情は傑作だったぞ・・・クククク!!」

「そんなあ・・・じゃあ、じゃあ、みんながおかしくなったのは・・・全てあなたの所為だったの？許せない・・・許せない！」

あゆみはキツと闇の中のソドムを睨み付けた！

「プリキュア！スインクチャージ!!」

あゆみがスィンクパクトにリボンデコルをセットし、白い光のパフを塗っていくと、塗られた箇所に白い衣装が身に着けられていく……

髪は茶色からクリーム色へと変化し、両脇をリボンで止めている三つ編みの髪が、足下まで伸び、胸とお腹辺りに大きなリボンを付けていた。

「思いよ、届け！ キュアエコー!!」

変身を終えたエコーの勇姿を、エンエンとグレルは目を輝かせながら見つめていた……

3、悪い事をしたと思っているのなら

変身を終え身構えたエコーが、険しい表情で闇の中に居るソドムを見つめる。

「みんなから奪った、変身アイテムを返して!」

「返す!? バカめ! これは我らの悲願を達成させる為に使えるやも知れん物……誰が返すか!!」

「だったら……ハアアア!」

エコーは闇に向かい攻撃を開始した!

エコーのパンチが、キックが、闇に浴びせられるも、ソドムは不気味に笑い、「クククク、今の俺は闇と同化している……その俺に、物理攻撃など効くと思っ



のか?」

「クツ!」

一先ず距離を取ったエコーが、どうソドムと戦うか思索していると、魔王とピーちゃんのエコーの側に近付き、

「俺達も手を貸すカゲ!」

「ギヤアアス!」

「フン! 目障りな奴らだ・・・一撃で終わらせてやる! 何が起こったか分からぬ内に  
なあ・・・」

ソドムの目が不気味に輝いた時、妖精学校周辺は沈黙した・・・

時を止めたソドムによって、エコーも、魔王も、メツプルとミツプルも、エンエンと  
グレルも動きを止めた。ソドムは不気味な笑い声を響かせ、

「クククク、さあ黒いの、貴様から消えろ!!」

ソドムが魔王に止めをさそうと、闇から両手を出した瞬間、ピーちゃんの目が逆に妖  
しく輝いた。

「ギヤアアアス!!」

油断していたソドムは、体当たりしたピーちゃんの攻撃でバランスを崩し、

「な、何だ?! 貴様、動けるのか?・・・し、しまった!」

バランスを崩した事で、ソドムの腕から変身アイテムが入ったエンエンとグレルのカバンが地上に転がった。それを合図にしたように、再び沈黙していた時が動き出し、「ギヤアアアアアス！」

ピーちゃんの発した言葉を受け、魔王はハツとした表情を浮かべると、

「何!? 変身アイテムが?」

「あれは、僕達のカバン・・・グレル!」

「オオ!!」

気付いたエンエンとグレルが、自分達のカバンを取り戻そうと必死に駆け出し、気付いたソドムが、カバンを奪い返そうと隣に覆われた不気味な両腕をグングン伸ばす、

「二人の邪魔はさせない!」

エコーはソドムの両腕を両脇で押さえ込み、ソドムの動きを封じた。その隙を付き、エンエンとグレルはカバンを取り戻した。ソドムは忌々しげに、

「クツ! 邪魔をするな!」

「エンエン、グレル、本当に悪い事をしたと思って居るのなら・・・それを持って、みんなに返しに行つて!!」

「ぼ、僕達が!? でも、みんな・・・」

「こんな事した俺達を、許してくれる筈無いぜ」

「本当に心から悪い事をしたと思って居るのなら、みんななら必ずあなた達を許し、受け入れてくれる……」

エコーの檄を受け、顔を見合わせたエンエンとグレルは大きく頷き、クラーケンに襲われている妖精学校目掛けて駆け出した。

「ミップル、メップル達も行くメポ！」

「はいミポ！」

メップルとミップルも、エンエンとグレルの後を追うように駆け出した。それを見届けたエコーが、闇の中に居るソドムをキツと睨むも、魔王はエコーに話し掛け、

「あゆみ、お前がコイツを許せない気持ちには分かるカゲ……でも、今はみゆき達を助けてやって欲しいカゲ！こいつは、俺とピー助で相手をするカゲ!!」

「ギヤアアアス！」

魔王の言葉に、ピーちゃんも同意したかのように返事を返した。ソドムの事は許せない、でも、今は大切な仲間達を救うのが先決だとエコーは判断すると、魔王とピーちゃんにコクリと頷き、

「魔王、ピーちゃん……分かった！此処をお願い!!」

「待て！貴様は……」

「お前の相手は俺達カゲ！」

「ギャアアアス！」

「チツ、妖精風情が・・・良い気になるなよ！」

魔王とピーちゃん、そしてソドムから凄まじい気がぶつかり合った。

（待ってて、みんな！今行くから!!）

この場を魔王とピーちゃんに託し、エコーは踵を返すと、妖精学校目指して駆け出した・・・

第八十八話：あゆみの涙とエコーの決意

完

## 第八十九話：キュアエコー・・・最後の戦い!?

1、猛襲! クラーケン

ソドムが召喚した魔界の魔獣クラーケンに、妖精学校は襲撃されていた。だが、変身アイテムを奪われてしまったなぎさ達一同は、プリキュアになれず為す術は無かった・・・

「ねえ、どうしてさっきみたいプリキュアにならないのお?」

「プリキュア、助けてよ!」

なぎさ達の先程の勇姿を覚えて居た一部の生徒達は、縋るようになぎさ達に訴えた。生徒達に懇願されたなぎさ達は困惑し、しゃがみ込んだ祈里は、懇願した妖精を抱きしめると、申し訳無さそうな表情を浮かべながら、

「ゴメンなさい・・・私達、今はプリキュアになる事が出来ないの!」

「エエエエ!」

「どうしてえ!」

祈里の言葉を聞き、困惑する生徒達、祈里はただ悲しそうに詫びるだけだったが、見かねたシャルルはパンパン手を叩くと、

「みんな、静かにするシャル!」

「野暮な事を言うのは止めた方がよいぜ!プリキュア達は、グレルとエンエンに変身アイテムを奪われてるんだぜ?」

「そう 로마!プリキュア達を責めるのは筋違い 로마!」

「悪いのは、グレルとエンエンだケル」

少し膨れっ面をしながら、ラケルがグレルとエンエンを悪く言うのと、アン王女は表情を曇らせ、

「ラケル!クラスの仲間になんかそういう事を言うものではありません!!」

アン王女は、少し語気を強めてラケルを窘めた。ランスは、なぎさ達一同の前をゆっくり歩き、最後に真琴の前で立ち止まると、ヤレヤレといったジエスチャーを交えながら、

「みんな、あつさり奪われる何て・・・間抜けでランス」

ランスに駄目出しされた一同は、返す言葉が見つからず、困惑気味に美希は側に居たつぼみに話し掛け、

「あの子、可愛い顔して結構毒舌よね?」

「でも、あの子の言う通りですし・・・言い返せませんよね?」

トホホ顔を浮かべたつぼみが、ランスを見ながら美希に返事を返した。真琴はランス

を恨めしそうに見つめ、頬を大きく膨らませると、

「今ランスは、私の顔見て間抜けって言ってたでしょう？もう・・・」

「静粛に！静粛に!!」

亀のような容姿をした妖精学校の教師は、騒ぐ生徒達を抑えるも、外からはクラークンが発する奇声が聞こえ、妖精達が不安がる。なぎさは右拳を軽く握り左手と合わせてパシッと叩くと、

「もう、メップルとミップルさへ居れば・・・」

ほのかはゆっくり首を左右に振りながら、苛立つなぎさを宥めるように、

「仕方無いわ！ミップルとメップルは、私達の代わりにあゆみさんを迎えに行ってるんだし・・・」

「アアア！もう、何でこんな事になってるのよお!!」

あゆみの事を覚えて居らず、外には巨大な魔物クラークンが咆哮する現状に、為す術が無いなぎさは頭を抱えた。

そのメップルとミップルは、フウフウ息を切らせながら森の中を駆け続けた。虹の園と呼ばれる、なぎさ達の住む世界に居る時よりはマシだが、長時間妖精姿で居る事で、メップルとミップルの体力は奪われていった。ハアハア息をするメップルとミップル

に追いついたエコーが、背後から二人に声を掛け、

「メツプル!ミツプル!私もみんなの所に行くわ!!」

「エコー!?助かったメポ」

「一緒に連れて行ってミポ」

二人はコミューン姿に変化すると、エコーは、メツプルとミツプルが変化したコミューンを、大事そうに手に握り再び駈け出した。

「急げ、エンエン!」

「うん!」

変身アイテムが入ったカバンを抱え、懸命に妖精学校目指して走るグレルとエンエン、自分達がしかした行為により、妖精学校のクラスメートやプリキュア達は窮地に陥った。反省した二人は、一同に変身アイテムを返すべく駈け続け、階段をヒイヒイ言いながらも何とか登り切った。階段を上りきった二人は、妖精学校に覆い被さるようにする巨大なるクラーケンを見て思わず怯んだ。

「な、何なの!?!」

「ちくしょう!これじゃ妖精学校の中に入れないぞ!?!」

エンエンとグレルは、クラーケンを見て激しく動揺した。何故なら、妖精学校に入る



には、巨大なるクラーケンが不気味に動かす触手をかいくぐり、校舎内に入るしか無かったのだから・・・

クラーケンは苛立っていた・・・

窓の隙間から触手を伸ばそうとしたものの、気付いた中に居た一同に窓やドアを閉められた事で、威嚇するように妖精学校を締め付けた。痺れを切らしたクラーケンは、八本の内、一本の触手を不気味に動かすと、大きく振りかぶり、妖精学校の窓を勢いよく叩き割った。ガラスの割れる音が教室に響き渡り、窓の近くに居たパフ目掛け、触手が襲い掛かってきた。パフは恐怖で身体が竦み、思わず涙目になった。

「パフウウウ!!」

兄であるアロマがパフを見て絶叫したその時、咄嗟にパフに飛び付き、その勢いのまま床をゴロゴロ転がったポニーテイルの人物が、間一髪の所でパフを救った。それはアン王女で、アン王女は震えるパフの頭を優しく撫で、

「大丈夫!?!何所も怪我は・・・無いようですね!」

「ありがとうパフ!」

パフは、怖いと思って居たアン王女の優しさに触れ、自然にアン王女に笑顔を向けながらお礼を言った。そんなパフを見てアン王女も微笑み返し、

「どう致しまして！皆さん、生徒達を安全な場所まで避難させて下さい!!」

アン王女は、なぎさ達に声を掛け、生徒達の身を案じ避難させるよう進言する。ゆりはコクリと頷き、

「みんな、窓から離れて！」

「なるべくドアの方に避難して！」

ほのかが手招きしながら生徒達を呼び、なぎさ達が生徒達を誘導する。のぞみはココとナッツに確認するように、

「ココ、ナッツ、何処か他に安全な場所は無いの？」

「こんな事が起こるとは想定して無かったココ・・・」

「安全な所何て・・・」

動揺するココとナッツ、妖精学校の至る所で、パリンとガラスが割れる音が聞こえ、一同は他にも触手が妖精学校内に侵入した事を悟った。教室内で蠢く触手、更に廊下からウネウネ不気味な音が聞こえ、生徒達は悲鳴を上げ、なぎさ達からは冷汗が流れた。ココとナッツは一步前に出ると、両手を前に付きだし、バリアを張って触手から一同を守り続ける。

「ポプリも手伝うでしゅー！」

ポプリも加勢し、バリアはより強固となつて触手を防ぐものの、それは只の時間稼ぎ

でしかない事は、誰の目からも明かだった・・・

「止めろ！この化け物!!」

グレルはカバンをエンエンに渡すと、腰の竹光を抜いた。

「妖精学校から離れろおおお！」

グレルは、危険を顧みずクラーケン目掛け駆け出した。グレルも怖かったが、目の前で妖精学校の仲間達を、危険な目に合わせようとするクラーケンが許せなかった。

雄叫びを上げながら、クラーケン目掛け駆け出すグレルを、クラーケンは邪魔だとはかり、妖精学校に巻き付けていた触手の一本で、グレルに向けて攻撃を開始した。クラーケンの注意がグレルに集中した事で、教室内の触手は大人しくなり、恐る恐る窓から外を覗いたシャルル、パフ、ぐらさんは、触手に追われるグレルとエンエンを見て驚愕し、

「あれは・・・グレルシャル！」

「エンエンも居るパフ」

「む、無茶だぜ！」

三人からの報告を聞きざわめく教室内、険しい表情を浮かべたアン王女は、

「きつと、あなた方の危機を知り、あの子達は助けに戻って来たのでしょうか・・・」

アン王女の眩きを聞き、ほのかは険しい表情を浮かべながら、

「でも、無茶よ!」

「クツ、プリキュアになれば・・・」

悔しそうになぎさが拳を握り、険しい表情を浮かべたゆりは、

「何とかあの怪物の注意を、あの子達から逸らしましょう!」

そう言うのと、ゆりは教室内を見渡したが、武器になりそうな物は見つからず、ゆりの顔から冷汗が流れた。その間にも、グレルとエンエンは次第に触手に追い詰められ、

「グレルとエンエンが?」

「不味いロマ!」

「捕まっちゃったでランス」

ユメタが、アロマとランスが、今クラークの触手に捕らわれた、グレルとエンエンを見て真っ青になった。なぎさは大きく息を吸い込むと、

「その子達を離せえええ!!」

だが、なぎさの絶叫空しく、クラークがグレルとエンエンを今正に絞め殺そうとしたその時、

「エンエン!グレル!今助けるから・・・ハアアア!!」

階段を勢い良く駆け上ったエコーが、大きくジャンプし、グレルとエンエンを捕らえ

た触手に、全体重を乗せた蹴りを浴びせると、締め付けた触手が緩み、グレルとエンエンが解放され、エコーは、二人を両脇に抱えて校庭に舞い降りた。

「プリキュアだああ!」

「プリキュアが来てくれたああ!!」

「あれが・・・キュアエコー!?!」

生徒達の目は輝き、なぎさ達は今だに思い出せず、困惑気味にエコーの勇姿を見つめた・・・

## 2、ミラクルライト

駆け付けたキュアエコーによって、クラーケンの注意はエコーに向けられた。クラーケンは、学校内に潜り込ませた触手を戻し、エコーに対して臨戦態勢を取った。グレルとエンエンを地上に降ろしたエコーも、クラーケンを凝視した。間近で見れば、クラーケンの巨大さが、エコーにもより一層分かった。助けられたエンエンとグレルは、

「エコー、ありがとう!」

「でも、あいつが居るから、俺達妖精精学校に入れないうぜ・・・」

「大丈夫!私が注意を惹きつけるから、あなた達はその隙にみんなの所に行つて!」

エコーは、コミュニケーション姿になっているメップルとミップルを、グレルとエンエンに託

すと、クラーケンの注意を自分に向けようと校庭を走り出し、グレルとエンエンから距離を取った。

「いくら何でも、一人じゃ無理よ!」

「でも、プリキュアになれない私達じゃ、あの子の力になれない・・・」

憂いを帯びた舞が叫び、満は、プリキュアになれない今の自分達じゃ、何の援護も出ないと嘆いた。

(エンエンとグレルが、みんなの所に辿り着ける迄、私が何とかしなきゃ・・・)

エコーとクラーケンの戦いが幕を開けた・・・

だがエコーは、クラーケンから放たれる触手攻撃を、ただ躲すだけの防戦一方だった・・・

クラーケンの触手は八本だったが、クラーケンは、エコーを弄ぶかのように、三本の触手で攻撃を繰り返した。一本を躲してももう一本の触手が、それを躲しても更にもう一本が襲い掛かる。背後を取られたエコーは、背中を触手で叩かれ吹き飛ばされる。

「キヤアアア!」

吹き飛ばされながらも、何とか地上に着地したエコーだったが、このままでは戦いの結果は明らかだった・・・

「エコー！頑張るクルウウウ！！」

そう言つて真つ先に窓から身を乗り出し、エコーに声援を送り出したのはキャンディだった。キャンディもまだエコーの事を思い出せては居なかつたが、キャンディは、エコーに声援を送らずには居られなかつた。それに釣られたかのように、

「プリキュアアア！頑張るシャルウウ！！」

「エコー！頑張つて！！」

「頑張れええ！」

シャルルを筆頭に、妖精学校の生徒達がエコーに声援を送り始めた。劣勢だったエコーは、思わず妖精学校を振り返り、

「エツ!?みんな・・・」

自分に声援を送る妖精達の声、更に聞き慣れた声も聞こえだし、

「エコー！頑張つてええ！！」

「今は加勢に迎えないけど・・・必ず、必ず私達も行くから、それまで持ち堪えて！」

みゆきの声が、なぎさの音が、更に仲間達の声が、エコーに力を与え出す。その時、ナッツが持つて居たミラクルガイドライトが光輝くと、先端から目映い虹色の光を照射し、妖精達の手に、小型のミラクルガイドライトのような物が握られた。ココは驚愕し、

「ナッツ、あれは一体!？」

「奇跡が起こったナツ・・・みんなのエコーへの思いを吸収し、ミラクルガイドライトが進化したナツ！正にミラクル・・・ミラクルライトナツ!!」

「何だか良く分からないニャ・・・でも、取り敢えずエコーをみんなで応援するニャア！」  
「エコー、頑張れえええ!!」

ハミイの合図と共に、ココとナツツが、タルトとシフォンが、シプレ、コフレ、ポプリが、妖精学校の生徒達が、ミラクルライトの光と共に、エコーに声援を送り、なぎさ達一同も懸命にエコーに声援を送り続けた!!

「みんな・・・みんな、ありがとう！」

エコーは、みんなから更なる力を与えられたかのように光輝き、クラーケンをキツと見つめると、

「みんなが、みんなが私に力を分けてくれた！その力を、この一撃に賭ける!!世界に響け！みんなの思い!!プリキュア！ハートフル・エコー!!」

エコーの叫びと共に、光輝く胸のブローチから発射された光が、巨大なるクラーケンに向けて発射された。

（な、何だ!?!あの光は?）

魔王とピーちゃんと相対して居たソドムだったが、エコーが放った光に気付き動揺し



ていた。

(あの光、気になる……こんな奴らと戦い、時間を無駄に過ごすのも得策では無いな！  
目障りだが此処は……)

「おい、だんまり決め込んでどうしたカゲ!?俺達に恐れをなしたカゲか?」

「フン、好きに吠えれば良い!俺は貴様らと遊んで居る時間は無い!!」

ソドムはそう言い残すと、地上に吸い込まれるかのように消え去った。呆気に取られていた魔王とピーちゃんは、

「逃げたカゲか?」

「ピーピー」

「エツ!?そう言えば、物凄い力を感じるカゲ……ピー助、もうちよつとこの辺を調べたら、俺達もあゆみの下に行くカゲ!!」

「ピーイイイ!」

そう言うと、魔王とピーちゃんはフワフワ宙に浮かんだ。

エコーから放たれたハートフル・エコーが、クラーケン事妖精学校を包み込む……

目映い光のシャワーが、クラーケンを、妖精学校の中に居る一同を照らし続ける。

「まだよ!私の中に残って居る力よ、私に力を貸してええ!!ハアアアア!!!」

ありつただけの力を込めたエコーだったが、スイंकパクトにセットしたりボンデコルは、その力に耐えきれず亀裂が走った。それにも構わず、エコーはありつただけの力を更に込めた・・・

クラーケンは苦しみを増し、妖精学校に居た一同の目に、教室内を覆うように空を泳ぐ大量のめだかのような生物が、次々に浄化されていく姿が飛び込んで来た。それに合わせたかのように、なぎさ達の瞳からポロポロ大粒の涙が零れた。

限界を迎えたりボンデコルは真つ二つに裂け、エコーは、変身が解けてあゆみの姿に戻り、全ての力を使った反動か、そのまま地面に両膝を付いてハアハア荒い呼吸を繰り返した。そんなあゆみの背後から、不気味な声が響き渡り、

「クククク、残念だったなあ!?!見ろ!クラーケンは健在だ!!」

再び闇と同化し、現われたソドムは、クラーケンが無事な姿を見てあゆみに嘲笑を浴びせた。だがあゆみは、思わず笑みを浮かべながら、

「フフフ・・・私一人で浄化出来ないのは、最初から分かって居たわ!私の本当の目的は・・・エンエン!グレル!」

「オオオオオ!!」

「何・・・だとお?」

あゆみの合図と共に、ハートフル・エコーを受け、思考が停止していたクラーケンの

隙を付き、エンエンとグレルが妖精学校に飛び込んだ。それを見たソドムは動揺し、エンエンとグレルが飛び込んだ教室の中では、

「何で私達、あゆみの事を忘れてたんだろう・・・ありえない、ありえない!!」

「あゆみちゃん、ゴメン、本当にゴメン・・・あたし達、どうかしてた」

「私、あゆみちゃんの事知らない何て・・・何であんな酷い事言っちゃったの?」

「私だつてそうだよ・・・お母さん以外にも、あゆみつて名前の大事な友達の名前を忘れる何て・・・」

「私、私、自分自身に、堪忍袋の緒が・・・切れましたああ!」

「あゆみちゃんゴメン!私は何であんな良い子を疑つたりしたのよ!」

「謝らなきゃ、あゆみちゃんに・・・」

なぎさが、咲が、のぞみが、ラブが、つぼみが、響が、みゆきが、皆あゆみに対しての罪悪感で胸が張り裂けんばかりに痛んでいた。他の一同も、胸が張り裂けそうな気持ちになり、ただあゆみにたいしての謝罪の言葉を繰り返した。

それは、ココやナツツを始めとした妖精達も同じだった・・・

キュアエコーが最後に放った、ハートフル・エコーの一撃は、なぎさ達一同の脳に寄生していた空魚を浄化し、なぎさ達の記憶を完全に取り戻した!

3、反撃！プリキュアオールスターズ!!

妖精学校に飛び込んだエンエンとグレルは、ジイと二人を見つめる視線の数々に狼狽えながら、

「あ、あのおお・・・」

「そのおお・・・」

「悪い事をしてゴメンなさい!!」

エンエンとグレルはそう言うのと、なぎさ達や教師達、クラスメートに涙ながらに謝罪し、一同の前に変身アイテムを差し出した。メップルとミップルも妖精姿になり、エンエンとグレルは心から反省し、危険を顧みず一同の危機を知って駆けつけた事を告げて、二人をフォロウした。エンエンとグレルは、なぎさ達に簡潔に今までの事情を説明し、続けるような視線を向けると、

「お願い、エコーを・・・助けて!」

「お願いします!」

なぎさはコクリと頷くと、

「分かってる!みんなああ!!」

なぎさの合図と共に、一同が変身アイテムを手に持ち、なぎさとほのかは、メップルとミップルにアイコンタクトを送ると、

「メツプル！」

「ミツプル！」

「メポ！」

「ミポ！」

「アン王女、後をお願いします！」

「ええ、ご武運を祈ってますわ！」

なぎさとほのかの合図に、メツプルとミツプルがコミュニケーション姿に変化し、なぎさとほのかの手に握られた。ゆりは小声でアン王女に後時を託し、アン王女は承諾した。一同は表情を引き締めると、

「デュアルオーロラウェーブ!!」

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」

「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」

「プリキュア!メタモルフォーゼ!!」

「スカイローズ!トランススレイト!!」

「チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!」

「プリキュア!オープンマイハート!!」

「レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!」

「[[[[プリキュア！スマイルチャージ!!]]]]」

「プリキュア！ラブリンク!!」

今、あゆみを救う為、妖精学校を救う為、プリキュアオールスターズが校舎を一齐に飛び出した！

ソドムは怒りに震えていた・・・

エンエンとグレルが妖精学校に入ったという事は、直ぐに一同がプリキュアになって、クラーケンと対峙する事は明らかだった。

「クツ、計画は狂ったが、プリキュアである貴様を・・・」

「残念だったわね！プリキュアになる為に必要な、リボンデコルが真つ二つになってしまった今・・・私は、もうプリキュアにはなれない!!」

まるで自分への自虐も混め、あゆみはソドムに、もうプリキュアになれない事を告げると、ソドムは驚き、

「何だ?!? 貴様、もうプリキュアになれないのか? そうか・・・なら、もう貴様は不要だ! 死ぬ!!」

あゆみの顔面に、ソドムの鱗に覆われた不気味な右手が迫った刹那、

「[[[[プリキュア！レインボー・バースト!!]]]]」

ハッピー達はあゆみの危機を見るや、直ぐにプリンセスフォームに変化し、五色のペガサスが合わさり、巨大な光のペガサスの口から、レインボーバーストがソドム目掛けた放たれた！

「何だ?!?クウウウ」

不意を突かれたものの、咄嗟に左手も出したソドムは、両手でレインボーバーストの勢いを受け止めた。だが、ソドムは闇との同化が解け、実体を露わにした。藍色の髪の色以外、カインとアベルにそっくりな顔、その身体は不気味な鱗に覆われ、顔と身体のアンバランスさが更なる不気味さを漂わせた。

あゆみを庇うように、あゆみの目の前に着地したハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの五人は、ソドムを睨み付けた。あゆみは思わず五人に声を掛けようとしたものの、まだ五人は自分の事を覚えて居ないのでは無いかと思うと、声を掛ける事を思わず躊躇した。そんなあゆみに気付いたかのように、ハッピー達があゆみを振り返ると、ハッピーは泣きながら変身を解いてみゆきの姿に戻り、そのまま倒れ込むようにあゆみに抱き付いた。

「あゆみちゃん、あゆみちゃん、ゴメン、ゴメンねえええ!!」

「エツ!?じゃあ、じゃあ、私の事・・・」

「うん!うん!エンエンとグレルに聞いたよ!!あゆみちゃんが、ハートフル・エコーを

放ってくれたお陰で、私達記憶を取り戻す事が出来たの！本当に、本当にゴメンねえええ!!ウワアアアアアン!!」

あゆみに抱き付き号泣するみゆき、更にサニー、ピース、マーチ、ビューティも変身を解き、あゆみに抱き付くと、

「あゆみ・・・ウチを殴ってエエ！大切な友達を、一時でも忘れるや何て・・・ウチは最低や!!」

鼻を殴りながら、あかねは自分を殴ってくれとあゆみに伝え、

「私の事も殴って良いよ・・・私の、バカバカ!」

やよいもあかね同様自分も殴って良いと言いながら、自分の頭をポカポカ叩き、なおは自分の両頬をピシヤンと叩くと、

「自分が情けないよ・・・あゆみちゃん、本当に、本当にゴメンね!」

「なおの言う通りです・・・私は、自分が恥ずかしい・・・あゆみさん、何とお詫びすれば良いのか・・・本当に申し訳ありません」

れいかも泣きながらあゆみに謝罪し、五人を見たあゆみの瞳からも大粒の涙が滴り落ちた。

「ううん、私もあの時、酷い事を言ってゴメンね!みんながあんな意地悪する筈無いのに・・・みんな、みんな、あの人・・・」



そう言ってソドムを指さしたあゆみに釣られるように、みゆき達五人がソドムを険しい表情で見つめた・・・

一方、再び動き出したクラークンの前に、ブルーム達四人、ドリーム達六人、ピーチ達四人、プロツサム達四人、メロディ達四人、そして、キュアソードが勢揃いしていた。「あゆみさん、ゴメンなさい！私の記憶が欠けていたとは思わず、あゆみさんの事を知らないだ何て・・・」

ソードはちらりとあゆみを見ながら謝罪し、メロディはクラークンを険しい表情で睨み付け、

「よくも妖精学校を・・・よくもエコーを・・・あなた、絶対許さないからね！」

クラークンを指差し、メロディは拳を握った。今だ、妖精学校に覆い被さり続けるクラークンを見て、ムーンライトは一同に話し掛け、

「まずは、妖精学校から引き離すことが先決ね！」

「それは私に任せて！」

ムーンライトの言葉を受け、自分に任せて欲しいとパッションが進言した。パッションは、ゆっくりクラークン目掛け歩き出し、クラークンは威嚇するように触手でパッションを攻撃した。

「パツシヨン!」

「危ない!」

ピーチが、パインが、パツシヨンに注意を促すも、パツシヨンは歩みを止めず、触手が身体に当たりそうになると、一瞬でその姿を消し、再び姿を現わしては歩みを始める。クラークンはそんなパツシヨンに苛立ち、妖精学校を覆っていた触手を戻し、全てパツシヨン目掛け攻撃しようとした時、パツシヨンの目が輝いた。

「お前達の所為で、私達は大切な仲間の心を傷付けてしまった・・・私は、お前達を絶対に許さない! みんな、攻撃準備を・・・行くわよ!! ハア!!!」

パツシヨンは、アカルンを呼び出すと、瞬時にクラークンの巨体を消し去り、妖精学校から少し離れた森の中へと瞬間移動させた。それを合図に、プリキュア達が森目掛け駆け出すも、皆、あゆみの側で立ち止まると、謝罪の言葉を口に出し、再びクラークン目掛け駆けだした。計画が狂ったソドムは、一同がプリキュアになった事で、この場を去ろうと試みるも、自分に対して発せられる、強烈なプレッシャーを受け戸惑って居た・・・

(な、何だ!?! この俺に対してここまでプレッシャーを与えるとは・・・)

ソドムは、プレッシャーの出所を探ると、その視線が黒と白の衣装を纏った二人組を見て止まった。

(奴らか!・・・)

ソドムに対してプレッシャーを放ちながら、あゆみとみゆき達の前に立ったブラックとホワイト、ホワイトはみゆき達を振り向くと、

「みゆきさん、あかねさん、やよいさん、なおさん、れいかさん、あなた達もみんなに手を貸して上げて!」

「で、でも、この人を・・・」

ホワイトに頼まれたものの、自分達から、あゆみの記憶を奪ったソドムを許せないみゆきは困惑したものの、ブラックは力強く拳を握り、

「それは、私とホワイトに任せて!」

ホワイトは、後から来たルミナスを見るや、

「ルミナス、あなたはあゆみさんと妖精学校のみんなを守って上げて!」

「はい!あゆみさん・・・本当に申し訳ありませんでした!また改めて後で謝らせて頂きますけど、今はこちらに!!」

「気にしないで下さい!みゆきちちゃん達、ブラック、ホワイト、後をお願い!!」

「うん!ブラック、ホワイト、その人は任せました!みんな!!」

「プリキュア!スマイルチャージ!!」

再びスマイルプリキュアに変身したハッピー達は、クラーケン撃破の為、一同の下へ

と駆け去った。ルミナスは、あゆみを伴い妖精学校の目の前に移動した。ソドムをキツと睨み付けたブラックとホワイトは、

「あゆみの無念、私達の悲しみ、妖精学校のみんなを怖がらせた事、全て私達が晴らして見せる!」

「覚悟しなさい!」

「クククク、たった二人で俺に挑もうとは・・・死にたいようだなあ?」

ブラック、ホワイトと、ソドムの戦いが始まった!!

パッションによつて森の中へと送られたクラークン、森の中では自由に触手が動かせず、木々を破壊しようとするも、

「そうはさせない!ビートソニック!!」

上空にジャンプしたビートは、瞬時にラブリターロッドを取りだし、ビートソニックを放った。それに合わせるように、アクアとソードもジャンプし、

「プリキュア!サファイア・アロー!!」

「閃け!ホーリーソド!!」

三人の同時攻撃を受け、クラークンの触手が一本千切れて浄化された。怒ったクラークンは、無差別に触手で森を破壊しようとするも、プリキュア達は四方に散り、ブルー

ム、イーグレット、ブライト、ウインディは、足下に力を蓄えると一気にジャンプし、それに反応した二本の触手が四人を追った。

「妖精学校を滅茶苦茶にしようだ何て・・・あたし達プリキュアが許さない！ブライトとウインディはそっちをお願い！こっちはあたし達が・・・行くよ！イーグレット!!」

「ええ、ブルーム！」

「こっちは任せて！良いわね、ウインディ？」

「何時でも良いわよ、ブライト！」

ブルームの言葉に、イーグレット、ブライト、ウインディも同意した。頂点に達した四人は、そのまま落下を始め、地上から追ってきた触手を目にするや、

「精霊の光よ！命の輝きよ！」

イーグレットとウインディが叫べば、

「希望へ導け！二つの心！」

ブルームとブライトが叫ぶ、

「プリキュア！スパイラル・ハート・・・」

「プリキュア！スパイラル・スター・・・」

「スプラッシュシュ!!!」

四人のプリキュアから放たれた精霊の光が輝き、二本の触手に直撃する。触手は、ブ

ルーム達の攻撃を耐えきる事が出来ず消滅した。

「後、五本！私達も行くよ!!」

「「YES!!」」

ドリームの合図にルージュ、レモネード、ミントが頷いた。一本の触手をビート、ソードと共に浄化したアクアも加わり、プリキュア5が触手に怒濤の連携技を繰り出した。パンチが、キックが、触手を何度も吹き飛ばす。ルージュは雄叫びを上げると、

「ウオオオ・・・行けええ！プリキュア！ファイヤーストライク!!」

炎のボールが触手向かって飛び、援護するようにアクアが再びサファイアアローの体勢に入ると、

「プリキュア！サファイア・アロー!!」

水の矢がクラーケン目掛け放たれる。弱ってきたものの、ルージュとアクア目掛け反撃を試みる触手に、

「やらせないわ！プリキュア！エメラルドソーサー!!」

ミントがエメラルドソーサーを放ち、触手の攻撃を完全に防いだ。ここだと見たレモネードは、

「プリキュア！プリズムチェーン!!・・・ドリーム、今です!!」

プリズムチェーンで触手を捕らえると、レモネードはドリームに合図を送った。ド

リームは力強く頷くや、

「プリキュア！ シューティングスター!!」

ピンクの流星と化したドリームが、その勢いのまま触手に体当たりを喰らわせ、触手を消滅させた。地上に降下したドリームの一瞬の油断を付き、新手の触手が背後からドリームを狙うも、それに気付いたローズは、

「やらせない！ 邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう！ ミルキイローズ・ブリザード!!」

ドリームを狙った触手を、ローズのミルキイローズブリザードが消滅させた。

「グオオオオオオオ!!」

五本の触手を失ったクラークンは、物凄い咆哮を上げると、思わずマリンは耳を塞ぎながら、

「何この声!?! 鼓膜が破れるでしょうがああ!」

触手を次々失った事で、先程のエコーのハートフルエコーを浴びた事で、クラークンの動きは大分鈍っていた。ムーンライトはムーンタクトを取り出すと、

「もう一息のようね……三人共、行くわよ！ プリキュア！ フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

ムーンライトは、タクトでffのマークを描くと、銀色の光と共に上昇した。ムーン

ライトの合図に頷いたブロッサムは、

「はい！マリン、サンシャイン、行きますよ!!」

「ちやつちやと倒して、あゆみの所に行かなきゃね！」

「うん！」

頷いたマリンとサンシャイン、ブロッサムとマリンはタクトを、サンシャインはシャイニータンバリンを取り出すと、

「集まれ、二つの花の力よ！プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

ブロッサムとマリンがピンクと青の光に包まれ上昇すると、それを合図にしたようにサンシャインが、シャイニータンバリンを構え、

「花よ！舞い踊れ!!プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

サンシャインが、ゴールドフォルテバーストの力で太陽のような光のゲートを空中に作り出すと、先ずムーンライトが、続いてブロッサムとマリンのフォルテツシモが、それ目掛けて突入し、三人の身体が金色に輝く。

「プリキュア！シャイニング」

「フォルテツシモ!!」

ムーンライトも加わった、合体技シャイニングフォルテツシモが、クラークンの触手を突き抜け、触手を消滅させた！



「後二本！先ずは動きを止めなきや・・・シの音符のシャイニングメロディ！プリキュア・シャイニングサークル!!」

ミューズは、まるで分身の術を使ったかのように、四人の幻影を出すと、五芒星のようなサークルを描き、触手の動きを封じた。

「メロディ、リズム、今よ!」

「OK!行くよ、リズム!」

「OK!メロディ!」

ミューズの合図にコクリと頷いたメロディとリズム、メロディは、ミラクルベルティエをクロスロッド状態に、リズムは、ファンタステイックベルティエをクロスロッド状態へと変化させた。

「駆け巡れ、トーンのリング!」

メロディとリズムは、クロスロッドを鈴のように振ると、

「プリキュア!ミュージッククロンド・スーパーカーテット!」

二人の掛け声と共に、薄いブルー、薄いオレンジ、ピンク、薄いピンク、レモン色の五本のリングが現われ、ハート形の光と共に螺旋のように飛び、触手を捕らえると、メロディとリズムは顔を見合わせ、

「せえのお・・・ファイナーレ!!」

二人の合図と共にリングは爆発し、触手を浄化した!

「後一本!行くよ、ベリー、パイン、パッション」

「ええ、一気に行きましょう!」

ピーチの合図にベリーも頷き、ベリーソードを取りだした。ピーチとパイン、パッションもベリーの提案に同意し、ピーチはピーチクロッドを、パインはパインフルートを、パッションはパッションハーブを取りだし、

「二悪いの、悪いの、飛んでいけ!」

「プリキュア!ラブサンシャイン・・・」

「プリキュア!エスポワールシャワー・・・」

「プリキュア!ヒーリンググプレアー・・・」

「二フレ〜ッシュ!!」

「吹き荒れよ!幸せの嵐!プリキュア!ハピネス・ハリケーン!!」

ピーチ、ベリー、パイン、パッション、四人の合体技を受け、最後の触手は消滅した:

だが・・・

「後は本体を・・・そんな!?!」

「まだ有ったの!?!」

「しまった!?!」

後は本体を浄化すれば全てが終わると判断していたムーンライトが、ピーチが、ソードが驚愕する。クラーケンは一同の一瞬の油断を見逃さなかつた。二本の隠し腕を伸ばしたクラーケンは、油断していたプリキュア達を捕らえた。締め付けられたプリキュア達だったが、

「みんなが!?プリキュア!ハッピー・・・シャワー!!」

「プリキュア!サニー・・・ファイヤー!!」

隠し触手に捕らわれた一同を救うべく、ハッピーとサニーが咄嗟に技を繰り出した。直撃を受け触手の勢いが弱まると、プリキュア達は捕らわれた触手から脱出した。

「ハッピー、サニー、ありがとう!コノオオオ!!」

ブルームは、ハッピーとサニーに礼を述べると、変顔浮かべながら自分達を巻き付けていた触手を掴んだ。それを見た他の一度も同じように触手を掴み、一本の触手をブルーム達、ドリーム達、ソードが捕まえ、もう一本の触手を、ピーチ達、ブロッサム達、メロディ達が捕まえた。

「ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、今の内に!」

「はい!」

ドリームの合図に頷いたハッピー達五人は、

「一二三!ペガサスよ、私達に力を!!」

五人がキャンドルを合わせ、ペガサスに力を貸して欲しいと願うと、五人の姿が変化を遂げていく……

「プリンセスハッピー！」

「プリンセスサニー！」

「プリンセスピース！」

「プリンセスマーチ！」

「プリンセスビューティ！」

「……プリンキュア！プリンセスフォーム!!」

五人は、まるでドレスのような衣装を纏い、頭には天使の輪のような光のリングが装着される。

「届け！希望の光！」

「……羽ばたけ、未来へ！」

五人は五色のペガサスに跨るや、上空高く舞い上がった。五色のペガサスは、上空で宙返りすると、

「……プリキュア！レインボー・バースト!!」

五色のペガサスが合わさり、巨大な光のペガサスの口から、五色のエネルギー波がクラーケン目掛け放たれた！

「グウウオオオオオオ！」

物凄い咆哮をしながら、クラークンはレインボーバーストを受け浄化された。プリンセスフォームを解除したハッピー達を、仲間達が出迎えた！

4、怒るブラック！猛るホワイト！！

プリキュア達が、クラークンと対峙していた時を同じくして、ブラックとホワイトは、今回の騒動の元凶であるソドムと対峙していた・・・

「ダダダダダ！」

ブラックの怒濤の連打を捌くソドムだったが、徐々に押され出し、

(こいつ・・・)

ソドムはブラックの強さを認め、両目を金色に輝かせると、

「俺に本気を出させた事は褒めてやろう・・・だが！」

ソドムから発せられる負の力が強さを増し、妖精学校から見て居た一同が心配そうに戦いの行方を見守っていた。

「あいつの力が急激に上がったココロ」

「物凄い邪悪な力を感じるナツ」

「ええ、この感じは嫌な予感がします・・・」

アン王女も険しい表情を浮かべ、ココとナッツの言葉に同意した。

妖精学校前に居たルミナスにもその気配は伝わり、

「あゆみさん、私から決して離れないようにしてください!」

「は、はい!」

あゆみは頷き、ルミナスの側に近寄ると、ルミナスは何時でも妖精学校を守れるように身構えた。

ソドムは不気味な右腕を横に払うと、ブラック目掛け凄まじい風が襲った。だが、ブラックは足に力を込め踏ん張り、

「こんなものでええ!」

一歩一歩前に進み、ソドム目掛けるブラック、ブラックを援護するように、横から攻撃を繰り出すホワイトの右腕を掴んだソドムが、上空に放り投げるも、ホワイトはクルクル回転しながら威力を弱め、ブラックの隣に着地した。

「忌々しい奴らめ・・・ヌウウン!」

ソドムは邪悪な気を両腕に集めると、負のエネルギーはどんどん大きくなり、気球ほどの大きさになると、

「死ね!プリキュアアアア!!」

ソドムから発せられた強大な負のエネルギーが、ブラックとホワイトに迫る。

「ブラック！ホワイト！」

心配そうにブラックとホワイトの名を叫んだルミナスとあゆみだったが、ブラックとホワイトは、その攻撃を、手を繋ぎながらバリアを張って堪え、尚もソドム目掛け前に出る。

（チツ、忌々しい奴らめ・・・ん!?あの光は、さっきの・・・まさか、クラーケンがやられたのか？）

先程のハッピー達のレインボーバーストを見て居たソドムは、クラーケンが敗れた事を悟った。

（チツ、此処に居ても俺の不利だな・・・仕方が無い!）

「貴様らに、この攻撃が堪えられるか？ハアアアアアアアア！」

ソドムは、さっき放った一撃以上に強大な負のエネルギーを溜め始め、阻止しようとした。動いたブラックとホワイトに対し、身体に付いた鱗を飛ばして牽制した。

「クククク、その鱗には猛毒が仕込んである・・・触れば、お陀仏だぞ？」

「うるさい！あんただけは、あんただけは・・・」

ソドムの忠告を無視し、ブラックが前に進むうとするのをホワイトが肩を掴んで止め、

「いくら私達でも、あれに触れれば一溜まりも無いわ! ブラック、マーブルスクリューで・・・」

「そっか・・・分かった!」

ホワイトの忠告を受け入れたブラック、二人からマーブルスクリューがソドム目掛け発射された。だが・・・

(チツ、邪魔はさせん!)

ソドムの両目が怪しく輝くと、世界が沈黙する・・・

再び時を止めたソドムの前に、ブラックとホワイトも動きを止めた。

「ピー!?!」

再び時が止まった事を悟ったピーちゃんは、隣で沈黙している魔王を尻目に、心配そうに空を見上げた。

「厄介な奴らだ・・・おそらく、これを放つても貴様らの攻撃と相殺するだろう・・・ならば!」

ソドムは溜め込んだ負のエネルギーを、ブラックとホワイトには放たず、妖精学校へと放った。

「クククク、これで貴様らは技を放つ余裕など無く、妖精学校を助けに向かう筈・・・そ



の隙に俺は魔界へと帰らせて貰おう・・・出直した!!」

ソドムの言葉が終わると同時に、再び時が動き出した・・・

目の前に居た筈のソドムが消え失せ、妖精学校に負のエネルギーを放ったと知ったブラックとホワイトから冷汗が流れた。

「ルミナス!!」

二人は絶叫し、ハッと我に返ったルミナスが、目の前に迫る強大な漆黒色した負のエネルギーを、バリアを張って受け止めた。

「何・・・だと!?あの攻撃を?」

ソドムは呆然とした・・・

あの強大なエネルギーを、受け止められる者が居るとは思ってた。その一瞬の油断を見逃さず、

「ブラック、サンダー!」

「ホワイトサンダー!」

「プリキュアの、美しき魂が!」

「邪悪な心を打ち砕く!」

「プリキュア!マーブルスクリュー!」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて一旦引いた手を前に突き出すと、

「マックスくっ!!」

ギュッと握り合った手と手・・・

再びソドム目掛けマーブルスクリューが飛ぶ、時を止めた事で疲弊していたソドムは、マーブルスクリューを両手で受け止めるも、その威力に徐々に後ろに押され始める。「クツ、何て威力だ・・・だが、この程度なら!」

一歩一歩前に出てマーブルスクリューを押返すソドム、負けずとブラックとホワイトの握り合う手に力が加わる。

「私達は、あんたのせいで、あゆみの心を傷付けてしまった・・・」

「あなたのせいで、私達は深い哀しみを味わってしまった・・・」

「あんただけは!」

「あんただけは!」

「絶対に!許さなあああああいい!!」

ブラックとホワイトの心からの感情が爆発した時、二人の身体が黄金に輝いた。

「も、物凄い力を感じるメポ!」

「こんな事、初めてミポ!」

困惑するメップルとミップル、だがブラックとホワイトの輝きは増し、二人の背中から大きな光の翼のオーラが現われた。あゆみは思わず目を見張り、

「ブラック？ホワイト？ルミナス、あれは一体!?」

「わ、私にも分かりません・・・ですが、二人から強大な光の力を感じます!」

ルミナスにも二人の変化の理由が分からず首を振った。尚もブラックとホワイトは光輝き続け、大きな光の翼が片側三枚ずつ、計六枚の翼に変わると、ブラックとホワイトの手が更なる発光を遂げ、

「シヤイニイイイング!!」

二人の掛け声と共に、マーブルスクリューは強大な光のエネルギーとなり、一気にソドムを飲み込んだ。

「俺が、この俺が!?プリキュア・・・恐るべし!伝えねば、カインとアベルに・・・例え偽りの身体を失おうとも・・・ウウオオオオオ!!」

ソドムは最後の力を振り絞り、再び時を止めた・・・

だが、ソドムが時を止めても、マーブルスクリューシヤイニングはその威力を止めず、ソドムは必死に右手を動かし、自らの首を刎ねた!首は吹き飛び、辛くもマーブルスクリューシヤイニングから逃れ、ソドムの生首は姿を消した・・・  
再び時が動き出し、ソドムの肉体は跡形もなく消滅した・・・

5、来て良かった!

クラークンとソドムを撃退し、妖精学校に再び平和が戻った!

妖精学校の校庭で、平和を取り戻した事を共に喜べる筈だった・・・

だが、一同の笑顔が戻る事は無かった・・・

何故なら、リボンデコルが真つ二つになった今、あゆみは二度とキュアエコーにはなれないのだから・・・

「こんなのつて無いよおお」

「折角、折角、あゆみちゃんのを記憶を、エコーの記憶を取り戻したのに・・・」

「あんまりだよおお」

ラブとのぞみは抱き合いながら泣き続け、それを見ていた一同の目にも涙が零れた。エンエンとグレルの目にも涙が溜まり、

「ゴメンなさい!僕達のせいなの!僕達の・・・」

「お前のせいじゃねえよ!全ては俺の、俺の・・・」

「あなた達のせいじゃないよ!エンエン、グレル、だから、泣かないで!」

あゆみは、エンエンとグレルの頭を優しく撫で、沈痛な表情を浮かべるなぎさ達やアン王女、妖精達を見て、そんな一同に元気を取り戻して貰おうと、笑みを浮かべながら、「泣かないで下さい!私のプリキュアとしての物語は終わってしまったけど・・・」

「何言うとるんやあ!ワイは・・・ワイは・・・これからもエコーはんって呼び続けまっ

せ!!」

そんなあゆみの言葉を、泣きながらタルトが遮り、みゆきも泣きながらタルトを肯定し、

「そうだよ! 例えあゆみちゃんがプリキュアになれなくても・・・あゆみちゃんは、あゆみちゃんは、私達スマイルプリキュアの・・・六人目の仲間何だからねえ!!」

「みゆきちゃん・・・」

みゆきの言葉に、堪えていたあゆみの目にも涙が溜まり、あかね、やよい、なお、れいかも加わり、

「せや!」

「うん!」

「あゆみちゃんは・・・」

「ええ、私達スマイルプリキュアの仲間です!」

「キャンデイもクルウウ!」

六人の少女達に、キャンデイも加わり、あゆみはスマイルプリキュアの仲間だと抱き付くと、堪えていたあゆみの目から涙がポロポロ零れた。

「シャルルも、エコーの勇姿は忘れないシャル!」

「ブラックやホワイト、ルミナスの他にも、沢山のプリキュアが居た事をみんなに話すで

「ぎいまちゅー！」

「俺もリボンに教えるぜ！」

「そうロマ！必ずカナタ様に知らせるロマ!!」

「キュアエコーっていう勇敢な戦士が居た事を・・・必ず！」

シャルルやマーキーズ、ぐらさんやアロマも、涙混じりにキュアエコーというプリキュアの勇姿を伝えると告げた。あゆみは顔をクシャクシャにしながら涙を流し、

「みんなああ・・・嫌な事も有ったけど、私、私、妖精学校に来て良かった！」

「あゆみいいい！」

両手で顔を覆って嬉し泣きするあゆみに、なぎさ達が次々に抱き付いた。だが、グレルとエンエンの表情はまだ冴えなかった。自分達がしてしまった代償はあまりにも大きく、二人の心を傷付けた。

（本当に悪いと思つて居るのなら・・・）

（グレル、エンエン、あなた達があゆみに力を貸して上げて！）

「エツ!？」

突然誰かに話し掛けられ、グレルとエンエンは辺りをキョロキョロするも、二人に話し掛けたような者は居なかった。

「エンエン、お前にも聞こえたのか？」

「う、うん・・・」

（おいらはアンデ！）

（私はルセン！）

「エッ!?アンデとルセン?」

「ど、何処に居るの?」

動揺する二人に気付いたあゆみは、グレルとエンエンに近付くと、

「グレル、エンエン、どうしたの?」

「いやあ、俺達にアンデとルセンって奴らが話し掛けてきたんだけど・・・」

「何所にも姿が見えないの!」

「エッ!?アンデとルセンが?」

あゆみは激しく動揺した・・・

アンデとルセンは、三人の魔人の一人、ベガに殺され消滅した筈だったのだから・・・

「本当に、アンデとルセンって言ったの?」

「うん!」

そんなあゆみの心にも、アンデとルセンの声が聞こえてきた・・・

（あゆみ、みんなの力を受け取ったハートフルエコーの力は、おいら達の力を遙かに超えてしまったんだ!）

(だから、リボンデコルはその衝撃に耐えられなかったの)

(でも、リボンデコルの輝きは・・・まだ完全に失っては居ない!)

(エンエン、グレル、お前ら二人がおいら達の代りをするんだ!)

(しっかりとこの妖精学校で勉強し、心身共に鍛える事が出来たなら、あなた達との絆と共に、あゆみは必ずエコーになれる!)

「私がもう一度エコーに!?!」

あゆみの声に、周りに居た一同も驚き、あゆみに近づいてくると、みゆきは驚きながらあゆみに声を掛け、

「あゆみちゃん、もう一度エコーについて・・・もしかして?」

「うん! アンデとルセンが、エンエンとグレルの力を借りれば、また必ずエコーになれるって・・・」

「本当!?!」

「今直ぐって訳じゃ無さそうだけど・・・でも、必ずって!」

嬉しそうな表情を浮かべるあゆみの姿を見て、ようやく一同にも笑みが浮かんだ。グレルはエンエンを見ると、

「エンエン・・・俺、やるよ! もっと妖精学校で勉強して・・・エコーのパートナーになれるように努力する!!」



「僕もやるよ！グレル、一緒に頑張ろう!!」

グレルとエンエンの目に、もう涙は浮かばない・・・

二人には、あゆみのパートナーになり、もう一度あゆみをキュアエコーにする夢が出来たのだから！

教師である亀の妖精は満足そうに何度も頷き、

「グレル、エンエン、よくぞ言いました！エコーさんの為にも、頑張るんですぞ!!」

「はい!!」

二人は力強く返事を返した！

こうして妖精学校はようやく笑顔を取り戻し、なぎさ達は、改めて妖精達と親睦を深めて行った・・・

魔界・・・

古代ギリシャの建物を連想させる十二の建物の一つ、双児宮に居たカインとアベルは、闇の気配を感じ近づくと、

「ソドム、戻ったか・・・ソドム!？」

カインが声を掛けるも、闇の中からソドムの声が聞こえて来ず、カインとアベルは思わず顔を見合わせた。

「ソドム、どうした!?何かあった・・・何!？」

闇に声を掛けたアベルは、闇の中からゴロゴロ転がってきた物体を見て絶句した。何故なら、転がってきたのはソドムの生首だったのだから・・・

カインも目を見開いて驚き、

「し、信じられん、ソドム程の者が・・・」

「まさか、プリキュアって奴らの?」

カインとアベルが会話をしていると、突然ソドムの生首がカツと目を見開き、

「そうだ!カイン、アベル、プリキュアに徒党を組ませるな!奴らは危険だ!!」

「どういう事だ、ソドム!？」

カインが詳しい事をソドムに聞こうとするものの、ソドムは目を閉じて無反応だった。

「ソドム!・・・ムウ眠りに付いたか・・・だが、ソドム程の者にこれ程のダメージを与えるとはなあ?」

アベルはソドムの生首を手につつと、カインに差し出した、カインはソドムの生首を受け取ると、

「プリキュア・・・もつと良く調べた方が良さそうだな!」

カインとアベルは、双児宮の奥へと消え去った・・・

第八十九話：キュアエコー・・・最後の戦い!?

完

## 第九十話：バッドエンドプリキュアとプリキュア達（前編）

1、なぎさが見た夢

妖精学校から戻ってきた一同・・・

あゆみはエンエンとグレルの力を借りれば、再びエコーになれる日が来ると聞き、一同はホッと胸を撫で下ろした。あゆみを労りながらも、一同は乗ってきた気球に乗り、それぞれ自分達の住む街へと帰り、アン王女と妖精達は、その姿が見えなくなるまで手を振り続けた・・・

その夜なぎさは、妙な夢を見て居た・・・

闇の中に漂う雲のような上で、なぎさは辺りをキヨロキヨロ見渡した。

（これは・・・夢!?でも、何時も見えるカオスの夢とも違うような?）

困惑するなぎさの耳に、聞き慣れた声が聞こえてきた・・・

「遂に目覚め始めてしまったみたいだね・・・」

「エッ!?その声・・・私?」

夢とは言え、話し掛けている相手が自分だと気付いたなぎさは、目を点にしながら困惑した。声は次第に近づき、なぎさの前に現われた人物は・・・キュアブラックその者だった。なぎさは、混乱しながらもブラックに話し掛け、

「どういう事よ?」

「二度私達は、あなた達の身体を借りた事があつた! その影響かも知れない・・・美墨なぎさ! マーブルスクリーチャーニンングを使うのは止めて!!」

「マーブルスクリーチャーニンング!? そう言えば、あの時・・・」

ブラックが話した、マーブルスクリーチャーニンングという言葉に、思わずなぎさは反応した。あゆみを、自分達を弄んだソドムに対する怒りが爆発した時、ブラックとホワイトは、身体から溢れる力をそのまま解放し、無意識の内にマーブルスクリーチャーニンングを放った事が思い返されてくる。ブラックはコクリと頷き、

「あなたも時空の狭間で見たでしょう? あの技は・・・世界を終わらせる力を秘めている!」

「世界を終わらせる!? ちよ、ちよっと、いくら何でも大げさじゃ・・・」

そう言いながらも、忘れていた時空の狭間での記憶が甦ってくる。大切な仲間達が敗北する世界を、背中に12枚の光の翼を生やしたブラックとホワイトが、世界を終焉に導く姿が・・・

「じゃ、じゃあ、あの時あなた達が放ったのは？」

「そう・・・マーブルスクリユーシャイニング！最も、あなた達が妖精学校で放った時は、シャイニーブレスも装着していない未完成だったけどね！」

「シャイニー・・・ブレス!？」

「本来の力で放っていたら・・・妖精学校はおろか、この世界は終焉していただろうねえ」  
「ちよ、ちよつと！脅かさないでよ!!」

「忠告はしたよ！マーブルスクリユーシャイニング・・・もしもあの技を再び放つ時は、カオスと決着を付ける時!!それまでは、今のあなた達ならマーブルスクリユーマックスや、マックススパーク、ルミナスとのルミナリオでも十分戦える!!」

「アツ!?!ちよつと?！」

まだ詳しい話を聞きたかったなぎさだったが、急速に目が覚め、慌ててベッドから飛び起き、思わず時計を見た。時間はまだ3時前、なぎさは再びベッドに寝転ぶと、  
（夢だったのかなあ!?!でも、やけに現実的だったような?）」

そう考え込んで居る内に、なぎさは再びウトウト眠りに付いた・・・

2、バッドエンドハッピーVSスイートプリキュア♪

七色ヶ丘で、プリキュアオールスターズとのクイズ大会以降、バッドエンド王国で大

人しくしていたバッドエンドプリキュアの五人であったが、ジョーカーにバッドエンドを集めてくるように言われ、この日バッドエンドプリキュア達は、久しぶりにバッドエンド王国から出掛けようとしていた・・・

「ねえねえ、みんなは何所行くの?」

バッドエンドハッピーに聞かれた他の四人、真っ先にバッドエンドピースがハイハイと手を上げ、

「私は・・・私の頭を叩いたキュアブライトとキュアウインデイが居る、海原市夕風つて所に行くの!本当は、キュアパッションも纏めてやつつきたいんだけど、あっちまで行くの面倒だし、そっちはマーチ行ってきてよ!!」

「コラア!何で勝手に決めんだよ?あたしは、命令されるのが大嫌い何だよ!!」

「でもでも・・・美味しいドーナツ屋さん、四つ葉町にはあるらしいよ?」

「本当!?コホン、ま、まあ、仲間の頼みを無碍に断るのも何だよなあ・・・じゃあ、あたしが四つ葉町に行ってやるよ!」

バッドエンドピースの術中に嵌り、あっさり四つ葉町行きを承諾したバッドエンドマーチ、バッドエンドピースは、そんなマーチを見て両手を口元に当てクスクス笑った。バッドエンドサニーは、そんなバッドエンドピースを見ると呆れたように、

「相変わらずあざとい奴やなあ・・・まあええ、ウチはプリキュア5達が住む所に行こう

と思うとる！あいつら痛めつけたら、またダークプリキュア5がやって来るかも知れんしな!!」

バッドエンドサニーは、右手で拳を握り左手に軽く拳を当てると、不敵な笑みを浮かべた。少し小首を傾げたバッドエンドビューティは、

「私は・・・そうねえ、スマイルプリキュアと言いたいところだけど、彼女達と戦う時は、五人で一緒について決めたものね！他には・・・キュアムーンライトと直に戦って見たいわね！」

「じゃあ、キュアムーンライトが住む希望ヶ花に行くんだ？」

バッドエンドハッピーに聞かれたバッドエンドビューティは、少し考えると、

「そうね・・・そうしようかしら？」

「ハッピーはどうするの？」

バッドエンドハッピーは、バッドエンドピースに聞かれ、腕組みしながら考え込むと、  
「ウゥゥン・・・そうだなあ、キュアリズムのお家は、美味しいカップケーキ屋さん何だつて！それを食べに行こうかなあ？」

「行くなら、お土産よろしく!!」

「ウン！みんなもお土産よろしく!!」

「OK!!」



「ハア……あなた達、私達の目的を分かつて居るの？」

バッドエナジーを集めに向かうのか、美味しい物を食べに行くのか分からない仲間達を見て、バッドエンドビューティは溜息混じりに呟いた。

加音町……

学校を終えた南野奏は、店の手伝いをする為、何時ものように制服姿のままエプロンをする、

「奏、お土産用のカップケーキ、外のテラス席に居る黒い服を着た女の子のお客さんに渡してきてー！」

「はー！」

奏の母、美空から頼まれた奏は、手際よくメモに書かれた商品を取り箱詰めすると、外に居る筈の黒い服を着たお客をキョロキョロ捜した。奏の視線に、黒い衣装を着た少女らしき後ろ姿を見付けたが、どうも何処かで見えた事があるような気がして、思わず奏は戸惑った。そんな奏に気付いたのか、後ろを振り向いた少女を見て、奏は思わず目を点にし、持って居た箱を落とすようになり、慌てて体勢を整えた。奏の顔を見て口元に笑みを浮かべたバッドエンドハッピーは、

「ヤッホー！こっち、こっち!!」

「な、何であなたが家のお店に居るのよ？」

「今日の私は・・・お客さん！お客さんにそう言う言葉遣いして良いのかなあ？」

「ウツ!?それは・・・」

バッドエンドハッピーに凶星を指され、思わず奏は言い返せず言葉に詰まった。バッドエンドハッピーは、動揺する奏を見てエヘと笑うも、生クリームが一杯入って、色取り取りのハート形のシユガーと、ハート形のりんごが入ったカップケーキをパクリと口に頬張ると、幸せそうな表情を浮かべ、

「あなたの店のカップケーキ、美味しいね？」

「エツ!?それはどうも！」

敵とはいえ、自分の店を出している商品を美味しいと言われれば、奏も満更でもない表情を浮かべた。だが、バッドエンドハッピーの目的が分からず、奏は困惑する。奏は、お土産用に箱に詰めたカップケーキをテーブルに置くと、

「はい！お待たせしました!!」

「ワアイ！みんなもきつと喜ぶよ!!さてと、目的は果たしたし、後はオマケの用事でも片付けようかなあ？手が汚れるから嫌何だよねえ・・・」

そう言うと、バッドエンドハッピーは両手に薄いゴムの手袋を嵌め、百科事典のような一冊の本を取り出した。

「その本は!？」

気付いた奏の表情が険しくなる。本がバッドエナジーを集めるアイテムなのは、奏もバッドエンド王国との戦いで知っていた。奏は慌ててバッドエンドハッピーに駆け寄り、

「止めなさい!」

「ベエエエだ!」

止めようとした奏をヒラリと躲し、バッドエンドハッピーは本を捲ると、

「世界よ!最悪の結末、バッドエンドに染まれ!白紙の未来を、黒く塗りつぶしちやえ!!」

バッドエンドハッピーが、白紙のページに黒い絵の具を叩き付けると、奏の家である Lucky Spoon 周辺の空がピンク色に染まり、幼児が描いた落書きのような物体が浮かび上がった。それと同時に、店内に居た奏の両親や店に居た人々が跪き、口々に絶望に染まったかのような言葉を発し、人々から発せられたバッドエナジーが、本に吸収されて行った。

そして、ピエーロ完全復活への目盛りが上がった・・・

「よくも私達家族の大切な店を・・・絶対に許さない!」

「別に許して何て言っただけ無いですよ!ベエエエ!!」

「可愛くない!」

奏に対して、ベエと舌を出したバッドエンドハッピーを見て、奏は頬を膨らませた。絶対に許さないと割った割には、プリキュアになる気配の無い奏を見て、バッドエンドハッピーは不思議そうに小首を傾げ、

「どうしたの!?!プリキュアにならないの?」

「ウツ!?!な、なるわよ!響が来てからだけど・・・」

「エツ!?!あなた一人じゃプリキュアになれないの?何だ、つまらない!」

バッドエンドハッピーは、本当につまらないのか、椅子に座って足をブラブラさせた。まるで馬鹿にしているような態度を見せるバッドエンドハッピーに、奏が益々苛々し始めた時、L u c k y S p o o nに駆け寄って来る足音が聞こえて来た。

「奏!?!どうかしたの?」

「アコ!?!ちようど良かったわ!!」

現われたのは調辺アコ、奏は状況を手短かにアコに説明すると、アコはキツとバッドエンドハッピーを見つめ、

「響やエレンが来るまで、私が相手よ!レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!」

この場に響が居ない為、変身出来ない奏を援護するように、アコはミュージズへと変身

した。

「爪弾くは、女神の調べ！キュアミューズ!!」

「エヘヘへ、ようやく一人現われたね！じゃあこちらも：出て来い！アカンベエエ  
!!」

バッドエンドハッピーが、黒玉を高々上に掲げると、Lucky Spoonの店名の由来となっている、カップケーキを食べる為のピンク色のラッキースプーンを、アカンベエへと変えた。

「何て事を・・・」

見る見る表情を険しくする奏だったが、バッドエンドハッピーは我関せずと言った表情で、再び美味しそうにカップケーキを食べ始めた。

「うくん！やっぱり美味しい!!アカンベエ、適当にその子の相手しといて!!」

「何が適当によ！タアアア!!」

馬鹿にしているような態度をとるバッドエンドハッピーを見て、ミューズもムツとすると、アカンベエに対し格闘戦を仕掛けた。ミューズの小さな身体が俊敏に動き、アカンベエに対しパンチを繰り返すも、攻撃は当たらず、逆にミューズは、アカンベエに避けられて柱にぶつかったり、椅子に躓いたりして転んだりした。

「もう！何で攻撃が当たらないのよ?」

ミュージズは頬を膨らまし、攻撃が当たらない事に苛立ちを覚えた。そんなミュージズを見た奏は、ある事を思いだしていた。嘗て、まだマイナーランドの歌姫だったセイレーンにも、ラッキースプーンをネガトーンに変えられた事があったのだが、その時の戦いでメロディとリズムは、今のミュージズ同様アンラッキー状態になり、ネガトーンに苦戦した時の事を・・・

「ミュージズ、あのアカンベエは、幸せを呼ぶと言われるラッキースプーンを、闇の力でアカンベエに変えた姿、今は不幸を呼ぶのかも知れない・・・注意して!!」

「不幸!? 何だか良く分からないけど、無闇矢鱈な攻撃はしない方が良いつて事?」

「ええ、響やエレンもきつと気付いて来てくれるわ! それまでアカンベエの動きを・・・」

「ならーシ、の音符のシャイニングメロディ! プリキュア! シャイニングサークル!!」

ミュージズは、まるで分身の術を使ったかのように、四人の幻影を出すと、五芒星のようなサークルを描き、アカンベエの動きを封じた。動揺するアカンベエだったが、

「そんな攻撃つままないよ・・・バッドエンドシャワー!」

「キヤア!」

座りながらカップケーキを食べていたバッドエンドハッピーは、動きを止められたアカンベエを見ると眉を顰め、バッドエンドシャワーで動きを止めていたミュージズを攻撃した。それと同時にアカンベエが力を込めると、ミュージズのシャイニングサークルは消

滅した。バッドエンドハッピーは、それを見ると再び美味しそうにカップケーキを食べ始めた。

「何なのあの子は!? やる気が有るのか無いのか?」

困惑する奏だったが、アカンベエがミューズ目掛けスプーンのような光弾を放ち、ミューズは攻撃を回避し続けるも、再び椅子に躓き転倒する。

「ここじゃ戦いにくいわ! もっと広い場所に移動しましょう!!」

「そうね! ここつちよ!!」

奏の助言に頷いたミューズは、アカンベエを店外に誘導した。奏も慌ててミューズとアカンベエの後を追い、バッドエンドハッピーは、面倒くさそうな表情を浮かべるも、お土産用のカップケーキを右手で抱え、一同の後を追った。

突如加音町にバッドエンド空間が発生し、それに気付いた響とエレン、そしてハミイは、途中で合流すると、バッドエンド空間目掛け駆け出していった。

「急ごう、エレン! あの方角には、奏のお店がある!!」

「ええ! 奏、待ってて! 今向かうから!!」

駆け続ける響とエレンだったが、広場の方で爆発音が聞こえ、慌てて立ち止まると、

「あつちだ!」

「見て、響！ミューズが・・・」

「良かった！ミューズが来てくれたんだ!!」

顔を見合わせた響とエレンは、互いに頷き合うと、広場へ向かって駆け出した。

アカンベエから、スプーンのような光弾が連続でミューズ目掛けて飛んでいくも、ミューズは俊敏な動きで躲し続けていると、響とエレン、ハミイが広場に到着し、気付いた奏はホッと安堵する。奏は大きく息を吸い込むと、

「響、エレン、こっちよ!」

「奏！ミューズ、待ってて今直ぐ援護に向かうから!!」

合流した響と奏、そしてエレン、三人はキュアモジューレを手にとると、

「レツツプレイ！プリキュア！モジューション!!」

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ!!」

「爪弾くは、たおやかな調べ！キュアリズム!!」

「爪弾くは、魂の調べ！キュアビート!!」

変身した三人に気付き、ミューズも側に着地すると、まるで四人は呼吸を計ったかのよう

「レッ届け！四人の組曲!!スイートプリキュア!!」



集結したスイートプリキュアを見て、バッドエンドハッピーはニンマリすると、  
「ようやく揃ったね！アカンベエ、やっちゃって!!」

バッドエンドハッピーの合図を受け、アカンベエの目の色が変わり、メロディ達に対し、先程以上の光弾を連射する。メロディ達は四方に散り光弾を躲すも、メロディは落ちていたバナナの皮に足を滑らせ転倒し、リズムは噴水に落下して水浸しになり、ピートは転がってきたボールを見て本能的に追いかけて壁にぶつかり、ミュージズはヒラヒラ落ちてきたビニール袋を頭にすっぽり被り、前が見えなくなつて転倒する。

「何でこんな所にバナナの皮が落ちてるのよおお！」

「イヤアアン、もう水浸し・・・もう最悪！」

「わ、私とした事が・・・」

「何なのよ、この袋はあ!?!」

「アハハハ！何その姿!?!」

「ハニヤニヤ、アンラツキーニヤ・・・」

バッドエンドハッピーに指を指されながら大笑いされ、ハミイは見てられないと顔を顰め、メロディ、リズム、ピート、ミュージズの四人は、顔を少し赤らめながらも、バッドエンドハッピーを見ると、頬を大きく膨らませた。リズムはバッドエンドハッピーを指さすと、

「アンラッキーだろうが、大凶だろうが、私達が力を合わせれば……乗り越えられるわ！」

リズムの言葉に頷いたメロデイが、ビートが、ミューズが立ち上がると、四人は雄叫び上げながらアカンベエ目掛け駆け出すも、アカンベエの側に落ちていたバナナの皮に四人は足を滑らせるも、右手で身体を支えながら、

「こんなもののおおー！」

メロデイの叫びを合図にしたかのように、四人はそのままスライディングをするような格好でアカンベエの足下に滑り込み、足をすくわれたアカンベエが堪らず転倒する。

「今ニャー！」

ハミイは持つて居たヒーリンググチェストを天に掲げると、

「出でよ、全ての音の源よ!!」

メロデイ、リズム、ビート、ミューズ、四人はクレッシェンドトーンを召喚し、

「届けましょう、希望のシンフォニー!!」

両腕をクロスしたまま、クレッシェンドトーンの金色の光の炎と一体化した四人は、

「プリキュア！スイートセッション・アンサンブル・クレッシェンド!!」

金色の炎と化した四人の攻撃を受け、アカンベエが光に包まれると、

「ファイナーレ!!!」

四人の合図と共にアカンベエは浄化され、元のラッキースプーンに戻った。バッドエンドハッピーは口元に笑みを浮かべながら、

「ヘエ、やつぱり強いね・：まっ、いいや！お土産も買ったし!!じゃあね、ご馳走様!!!」  
アカンベエを浄化されても、バッドエンドハッピーはご機嫌な様子で帰って行った。  
四人は、そんなバッドエンドハッピーが去った場所を、呆然と見つめていた・：

### 3、バッドエンドサニーVS夢原のぞみ

バッドエンドハッピーが加音町に現われたのと同じく、のぞみ達が暮らす街にはバッドエンドサニーが現われていた。

「エエと、プリキュア5が居るのは、確かナッツハウス言うところなあ?」  
バッドエンドサニーは宙に浮かびながら、ナッツハウスを探し当て前に降りてくると、

「こんにちはあ!プリキュア5、居る?」

しかし、中からは何の応答も無く、拍子抜けしたバッドエンドサニーは階段に腰を下ろし、ボオオと池を眺めて居ると、ついウトウト眠り込んだ・：

バッドエンドサニーが待っているとは知る筈も無く、学校を終えたのぞみはルンルン気分でナッツハウスにやって来ると、

「あれえ!? 誰だろう?」

今はアクセサリーの販売をしていないナッツハウスに来る者など、自分達やプリキュアの仲間達ぐらいなのになあと、のぞみが小首を傾げながら近付くと、待つていたのがバッドエンドサニーだと知り、のぞみの表情が険しくなる。

「あなたは、バッドエンド王国!」

「ん!? ファアアアアア! 何や、ウチ寝てしもうたんかあ? ヨッ! 待ちくたびれたでえ!!」  
「何であなたが此処に!」

「いやあ、ジョーカーの奴に、バッドエナジーをいい加減に集めて来い言うてなあ、それやったら、プリキュア5を痛めつけて、ダークプリキュア5を誘き寄せたろう思うたんやけど……」

「何ですって!? そんな事させない!」

「まあまあ、そう急かさんでもエエよ! 今日居らんの?」

「エツ!? 誰の事?」

「あんたがチューした相手や!」

バッドエンドサニーは、いきり立つのぞみをからかうかのように、今日はキスをした相手は一緒じゃ無いのかのぞみに訪ねると、のぞみの顔は真っ赤に染まり、しどろもどろになった。

「な、な、な、何!?と、と、突然、何言い出すのよおお?」

「エエから、で、居らんの?」

「い、居ないわよ! ココは忙しいんだから!!」

「へエ、ココつて言うんや? シシシシシ」

バッドエンドサニーの誘導尋問に、見事に引つ掛かったのぞみは、相手がココだと自らバラした事に気付き、益々顔を赤らめると、

「・・・アアアア!? 私の、バカバカバカバカ!」

恥ずかしさでバッドエンドサニーの顔を見れず、のぞみは俯きながら自分の頭をポカポカ叩いた。バッドエンドサニーはのぞみに近付くと、

「ほんでほんで、どんな状況でキスしたん?」

「ど、ど、どうだつて良いでしょう?」

「エエやん、減るもんや無いんやし! ハハアン、他人に言えないような状況で・・・」  
「ち、違うもん! ムシバーンに操られたココを元に戻そうと・・・ハッ!」

再びバッドエンドサニーの誘導尋問に引つ掛かったのぞみは、恥ずかしさで思わず俯いた。バッドエンドサニーは、そんなのぞみを見て益々ニヤニヤしながらからかい、

「へえ・・・お姫様のキスで元に戻したんや?」

「し、知らない、知らない! 聞こえ無いもん!!」

のぞみは、首を激しく左右に振りながら両耳を塞いだ。そんな二人の下に四つの人影が近付き、

「のぞみ、どうしたの？」

「のぞみ!?!・・あんたは、バッドエンドプリキュア!」

「のぞみさんに何をしたんですか?」

「のぞみさん、みんな来たからもう大丈夫よ!」

かれんが、りんが、うららが、こまちが、バッドエンドサニーを見て表情を険しくし、のぞみの身を案じるも、駆け付けてくれた仲間達を見たのぞみは、目をウルウルさせると、りに縋り付き、

「りんちゃああん!」

「の、のぞみ、どうしたの!?!あいつに何かされたの?」

泣きついたのぞみの髪を撫でながら、りんはバッドエンドサニーを睨み付けるも、バッドエンドサニーは肩を竦めながら、

「失礼な事言わんといて!ウチはただ、夢原のぞみが誰と、どんな状況でキスしたのか聞いただけや!」

「!?!ハア!?!」

予想外の言葉を聞き、りん、かれん、うらら、こまちは、思わず目を点にしながら、の

ぞみの顔を見つめると、

「イヤアアアン！もう、帰ってええ!!」

この場に居るのが耐えられないかのように、のぞみは慌ててナツツハウスの中へと逃げ去った。バッドエンドサニーは大笑いを始め、

「シシシシシ！ああ、面白かったわ!!何やスツキリ……ン!?なあ、なあ、その紙袋の中、何が入つとるの?」

こまちが抱えていた二つの紙袋が気になったのか、バッドエンドサニーが紙袋を指さすと、こまちは袋から大福を取りだし、

「これは、大福っていう和菓子よ！良かったら食べてみる?」

「エエの!?!おおきに!……オツ!中々美味しいやん!それ、何所で買ってきたん?」

「これは、家のお店の大福よ!気に入ったなら、少し分けてあげるわ!!」

「ホンマ!?!おおきに!」

こまちは、一つの紙袋をバッドエンドサニーに渡すと、バッドエンドサニーは嬉しそうに紙袋を受け取り、

「今日はこれで帰るわ!ほな、またな!!」

こまちから貰った大福が入った紙袋を抱え、バッドエンドサニーはご機嫌で帰って行った。呆然と見て居た、かれん、りん、うららは、

「あの子・・・何しに来たのかしら？」

「さあ!？」

「でも、のぞみさんのキスの話って気になりますよねえ？」

「こまちもうちの言葉に大きく頷き、

「ええ、私達ものぞみさんにじっくり話を聞きましょう！」

「こまち・・・やけに嬉しそうね？」

かれんは呆れたようにこまちを見るも、四人もナッツハウスへと入って行った・・・

第九十話：バッドエンドプリキュアとプリキュア達（前編）

完



# 第九十一話：バッドエンドプリキュアとプリキュア達（後編）

1、バッドエンドマーチVSカオルちゃん!?

クローバータウンストリート・・・

ラブ、祈里、せつなは、あゆみを招待し、カオルちゃんのドーナツ屋で、この前のお詫びを兼ねて、ドーナツを御馳走していた・・・

「あゆみちゃん、本当にあの時はゴメン!」

「美希ちゃんも気にしてたけど、今日はモデルの仕事が入っていて来られないから、改めてお詫びするって言ってたわ」

「さあ、遠慮しないで食べて!」

「そんな、気にしなくて良いのに・・・でも、折角何で頂きます!」

あゆみは、パクリとドーナツを頬張ると、美味しきで口元が自然と微笑んだ。あゆみは辺りを見渡すと、美希の他に、タルトとシフォンの姿も見当たらない事に気付き、

「タルトやシフォンも居ないんですか?」

「うん、一度戻って来たけど、二人共また妖精学校に行ってるよ!」

「そうそう、グレルとエンエンの二人も、勉強を頑張ってるって、タルトが言ってたわ」  
「特にグレルさんは、依然と見違えたそうよ」

「そうですか、エンエンとグレルが・・・」

ラブ、せつな、祈里から、エンエンとグレルの近況を聞いたあゆみは、思わず目を細めた。和やかに談笑する一同だったが、あゆみは、ずっと気になっていた事を、ラブ達に聞いてみようと思うと、

「あのう・・・みんなは妖精学校で私の事を覚えて居なかったのに、どうして魔王やピーちゃん、メップルとミップルは覚えて居てくれたんでしょうか？みゆきちゃん達に聞いてみたんですけど、みゆきちゃん達もよく分からないって言ってたから・・・」

「私達も気になって魔王に聞いて見たんだけど、魔王自身も分からないって言ってたよ」  
「ほのかさんとゆりさんは、これは仮説だけど、魔王とピーちゃんは、嘗て強大な闇の力を以前持つて居たから、あの魚さん達は近づけなかつたんじゃないか？て事だけど・・・」  
あゆみの疑問に、ラブと祈里がほのかとゆりに聞いた事を教えると、あゆみは少し納得したものの、更に小首を傾げ、

「そう何ですか・・・でも、メップルとミップルは違いますよねえ？」

あゆみの更なる疑問に、今度は苦笑混じりにせつなが話し始め、

「メップルとミップルは・・・あゆみが来るまで、コミュニケーション姿で寝てたからじゃないかっ

て、なきさきさんが言ってたわ」

「メツプルが妖精姿になつて直ぐに、魔王とピーちゃんメツプルとミツプルの側に居たよね」

少し疑問が解け、あゆみが笑みを浮かべたその時、一同の周囲を一瞬強風が吹き荒れ、一同の髪を激しく揺らした。

「何、今の!? 凄い風だったねえ?」

「本当! あゆみさん、大丈夫?」

ラブは髪のを直しながら一同に語り掛け、祈里も同意しながらあゆみの身を案じた。あゆみはコクリと頷きながら、

「はい! 私は... エッ!」

大丈夫ですと答えようとして、あゆみは思わず言葉に詰まった。あゆみの隣に居たせつなの表情も、見る見る険しくなり、二人の異変に気付いたラブと祈里も、ハツとして後ろを振り返ると、そこには腕組みしながら立つて居るバッドエンドマーチの姿があった。

「バッドエンドプリキュア!」

「よお! 挨拶に来てやったよ!!」

口元をニヤリとさせたバッドエンドマーチが、右手をパチリと鳴らすと、再び周囲に

強風が巻き起こった。一同は立ち上がると、あゆみを庇うようにラブ、祈里、せつなが、一歩前に出てリンクルンを手に持った。

「慌てるな！今日のあたしの相手は・・・キュアパッション、お前だ!!」

「私!?望む所よ!」

「せつな!」

「せつなちゃん!」

「せつなさん!」

バッドエンドマーチが、パッションとの戦いを望んでいると知り、ラブと祈里、そしてあゆみは、心配そうにせつなに声を掛けた。せつなは不安そうな表情を浮かべる三人を見つめると、

「ラブ!ブッキー!大丈夫、ここは私に任せて!二人はあゆみをお願い!!」

リンクルンを手に持ったせつなが、更に一歩前に出てバッドエンドマーチと睨み合った。

「チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!真っ赤なハートは幸せの証!熟れたてフレッシュ、キュアパッション!!」

せつなはパッションに変身し、再び睨み合うパッションとバッドエンドマーチだったが、

「フッフ、あたしが此処に来たのは、バッドエンドピースに頼まれてな！あんたの頭を叩いて来てだつてさ!!」

「バッドエンドピース!?!?．．．ああ、あの子?」

パッションは、困惑気味にバッドエンドピースの事を思いだした。七色ヶ丘中学校で、バッドエンドプリキュアとの対抗戦の中で、ブライトとウィンディと一緒に、バッドエンドピースの頭を叩いた事を．．．

パッションは、苦笑混じりにバッドエンドマーチに話し掛け、

「へえ、仲間思いなのね?」

「まさか!?!あたしの本当の目的は．．．美味しいドーナツを食べる事さ!!」

「!?!エツ!?!」

四人は思わず、一斉に後方にあるカオルちゃんのドーナツ屋を見た。バッドエンドマーチはニヤリとすると、

「あるんだろう?キュアパッション、お前をボコリ、美味しいドーナツを頂く!」

「そう簡単に出来るかしら?」

パッションも口元に笑みを浮かべると、今正に両者が激突しようとしたその時、

「待て待て待て待て!全く、おじさんのドーナツは元氣過ぎで困っちゃうよ．．．グハツ」  
パッションとバッドエンドマーチの間に、先程の強風で転がったドーナツを追いかけ

て来たカオルちゃんが割って入り、思わずパッションは、慌てて攻撃しようとするのを止めた。

「カオルちゃん！危ないからこっちに!!」

ラブがカオルに声を掛け手招きするも、カオルは、拾ったドーナツの穴からバッドエンドマーチを覗くと、

「お嬢ちゃん、見掛けない顔だねえ!?!良かったら、ドーナツ食べて見る?」

「い、良いのおお!?!」

カオルの思わぬ行動に、呆然としたバッドエンドマーチだったが、ドーナツを食べて見ると薦められ、バッドエンドマーチの目がキラキラ輝いた。バッドエンドマーチは、まるで疾風のようにパッションやラブ達の横を駆け抜けた。

（速い!?!）

バッドエンドマーチが、カオルの店の前に移動すると、その速さに思わずパッションも唸り、ラブ、祈里、あゆみも、呆然としながら背後を振り返った。パッションに近付いたカオルは、

「戦うだけが全てじゃないでしょう?ただ買う事も時には必要・・・グハッ!」

「エッ!?!」

カオルの言葉の意味が分からず、パッションは呆然とするも、カオルはそのままバツ

ドエンドマーチが待つ店へと戻った。出てくる涎を噉りながら、バッドエンドマーチは色々なドーナツの種類を見て目を輝かせ、

「オツ!? これも美味そう、あれも・・・アアア、迷っちゃうなあ?」

そう言うのと、クルリと振り返ったバッドエンドマーチは、ラブ達に話し掛け、

「なあ、どれが美味しい?」

「エツ!? そりゃあ、どれも絶品だよ!」

「最初は、シンブルなノーマルタイプを食べて見たら?」

困惑しながらも、ラブと祈里が答えると、バッドエンドマーチは腕組みしながらココク頷き、

「ノーマルタイプかあ・・・そうだよなあ、最初はそれが良いかなあ?」

腕組みしながらどのドーナツを選ぶか迷って居るバッドエンドマーチ、一人取り残されたパッションは、

（私がプリキュアに変身した意味って・・・一体!?）

まるで戦いに来た事を忘れて、熱心にドーナツを見つめるバッドエンドマーチに、パッションは困惑した。呆然としているパッションを尻目に、バッドエンドマーチはどれにするか決めたようで、

「決めた! じゃあ、あんたが手に持つてるドーナツを・・・」

カオルは了解したとばかり親指でバッドエンドマーチに合図を送り、グハッ！と笑みを浮かべた。

「はい、お嬢ちゃん！」

「ウワアア！ありがとう!!」

（こうしてると、バッドエンドマーチって、なおちゃんソックリだわ）

初めて直に持ったドーナツを見て、目をキラキラ輝かせて居るバッドエンドマーチの表情は、なおに似て居た。あゆみはなおを思い出し、思わずクスリと笑った。何時ものクールさも影を潜め、ドーナツを見て喜ぶ様子は、年頃の中学生達と何ら変わらなかった。幸せそうに、満面の笑みを浮かべたバッドエンドマーチは、

「じゃあ、いただきま〜す〜！」

バッドエンドマーチは、口を大きく開け、パクリとドーナツを食べた。何度も噛む内に口内にドーナツの甘みが広がり、

「う、美味しい！これが・・・ドーナツ!!」

もう一口、二口と食べると、そのまま一気にドーナツを平らげた。目をウルウルさせたバッドエンドマーチは、

「あんた、厳つい顔してるけど・・・良い腕してるよね？すつごく美味しかったよ！」

「いやあ、おじさんダンディだし・・・グハッ！」



再びドーナツを手に持ちながら、何時ものカオル節を発した。途方に暮れていたパツシヨンは、

「あなた、私と戦いに来たんじゃないの？」

「エッ?! いやあ、それは次いで、本当の目当てはドーナツ食べる事だしさ! ねえねえ、みんなにお土産買って帰りたいから、お薦めのドーナツ10個ぐらい売ってよ!!」

「こんな美人に頼まれちゃ、おじさん張り切っちゃおうかな!」

カオルが袋を取りだし、ドーナツを選んでいる間、バッドエンドマーチはパツシヨンの方をクルリと向き、

「待たせたな! 時間が無いんで、手っ取り早く済ませてやるよ!!」

「それはこちらの台詞! 散々待たせてくれた分、利子を付けて返して・・・」

再び二人が戦いそうな雰囲気を出し、カオルのサングラスがキラリと輝くと、

「はいはい、お土産出来たよ! お嬢ちゃん、戦い何かより、おじさんがドーナツをドーナツで作ってるか・・・興味無い?」

「あるある!」

まるでパツシヨンに興味を無くしたかのように、カオルの発した言葉に興味を持ったバッドエンドマーチは、カオルの前に移動した。

「カオルちゃん!? もう・・・」

戦おうとしていたパッションは、またしてもカオルに邪魔されて、少し膨れっ面を浮かべた。そんなパッションとカオルを見比べて、ラブ、祈里、あゆみは苦笑を浮かべた。カオルが披露するドーナツ製造方法を見て、感心したように呻くバッドエンドマーチは、

「その球体をあの機械に入れると・・・オオオオ!? 本当にドーナツになった!!」

ベルトコンベヤーから、次々転がるように出てくる大量のドーナツを見て、バッドエンドマーチは心の底から感心したように目をキラキラ輝かせた。そんなバッドエンドマーチを見たカオルは、徐にデジカメを取り出すと、

「じゃあ記念に、お嬢ちゃんを一枚撮って上げよう!」

「エエ!? あんまり写真って・・・」

カメラを向けられ、少し動揺するバッドエンドマーチだったが、

「良いから、良いから、もうちよつと下がって! そうそう、そこで左手で拳を握って・・・じゃあ、撮るよ・・・ドーナツ!!」

パシヤリとシャツターを押し、ワゴン車に一先ず戻ったカオルは、数分して戻って来ると、

「ハイ、おまたせえ! ドーナツに写真のお土産を付けといたから・・・グハツ!!」

「ありがとう・・・って、これは!? アハハハ! あんた、面白いね?」

カオルから、お土産用のドーナツと写真を受け取ったバッドエンドマーチは、思わず写真を見て笑い出した。気になったラブ、祈里、あゆみが、バッドエンドマーチに近づき、背後から覗いてみると、写真にはバッドエンドマーチとパッションが写っていたのだが、遠近法を上手く利用して、まるでバッドエンドマーチが、パッションの頭を叩いているようなポーズで写っていた。思わず目を点にした三人は、そのまま背後を振り向きパッションを見つめた。

「何、ラブ？」

気になったパッションが、バッドエンドマーチに近付き写真を見ると、思わずパッションは目を点にし、

「な、何よ、この写真は!？」

思わず動揺するパッションを見て、バッドエンドマーチは再び笑い出し、

「アハハハハ、何だかバカバカしくなってきた！お土産も買ったし、今日は帰るよ!!おじさん、ありがとね!!」

「また何時でもおいで・・・グハツ」

カオルに手で合図を送り、バッドエンドマーチは帰って行った。パッションは慌ててバッドエンドマーチを呼び止め、

「アツ、待ちなさい！まだ勝負が・・・行っちゃったわ」

自分は何の為に変身したのか、呆然とするパッションだったが、このままプリキュアで居る意味も無くなり、せつなの姿へと戻った。

「もう！カオルちゃんつたら・・・」

少し不機嫌そうにするせつなの耳に、聞き慣れた声が聞こえて来た。せつなが声の方を振り向くと、

「よう、兄弟！ドーナツを・・・ン!? イース達も居たのか?」

「ウエスター!?!」

現われたのはせつなの盟友ウエスターで、ドーナツが大好きなウエスターは、暇を見付けては、四つ葉町にあるカオルの店に買いに来ていた。

「どうした、イース!?!何かイライラしているようだが・・・ああ、あの日か?」

ウエスターの言葉を聞いた瞬間、せつなの目付きが変わり、ウエスターの顔面目掛けせつなの右ストレートが炸裂し、せつなの右拳がウエスターの顔面にめり込んだ。ウエスターは痛そうに顔を摩りながら、

「グウウウ・・・イ、イース、いきなり何だ?!!」

「誰があの日よ!?!大体、何しに来たのよ?」

ウエスターを見て居たせつなの表情が、どんどんイース時代の頃のように険しさを増していき、思わずウエスターはラブ達の方に逃げ、

「お、おい、イースの奴はどうしたんだ？」

「今のせつなに、変な事言わない方が良いよ！」

「かなり不機嫌みたいだから・・・」

「最悪なタイミングで来ちゃいましたね？」

苦笑気味にラブ、祈里、あゆみがウエスターに助言を与えると、

「エエエ!?俺、関係無いだろう？」

「ウエスター~~~~!!」

「ま、待て、イース！話せば・・・ギヤアアア!!」

「待ちなさい!!」

逃げるウエスターを追い回すせつな、ラブ、祈里、あゆみは、同じような表情で追いかけてつことを続ける二人を見つめ、

「せつな・・・完全に八つ当たりだね？」

「そうみたい・・・」

「ですね？」

「あらあら、ドーナツてるんだらうね?・・・グハッ！」

カオルに鬱憤を晴らす事は出来ず、せつなは、半ば八つ当たりでやって来たウエスターを追い回し続け、ラブ達は苦笑を浮かべながらその姿を見つめて居た・・・

2、バッドエンドビューティVSキュアサンシャイン

希望ヶ花・・・

バッドエンドビューティは、キュアムーンライトと戦うべく希望ヶ花へとやって来た。宙に浮かびながら、眼下に見える私立明堂学園を見て口元に笑みを浮かべると、百科事典のような分厚い本を取り出し中身を開くと、

「では、キュアムーンライトを誘き出すとしましょう・・・世界よ！最悪の結末、バッドエンドに生まれ！白紙の未来を、黒く塗りつぶしなさい!!」

バッドエンドビューティは、黒い絵の具を本に叩き付けると、明堂学園周辺の空が紺色に染まり、辺りに冷気が漂った。バッドエンドビューティの下へ、明堂学園関係者達から発せられたバッドエナジーが集まり、ピーエー口完全復活の目盛りが上がった。

「さあ、出て来なさい！キュアムーンライト!!」

バッドエンドビューティは知らなかった・・・

すでにゆりが、明堂学園高等部を卒業していた事を・・・

ネガティブな言葉を発する明堂学園関係者達の側を、制服のスカートを靡かせながら、三つの人影が駆け抜けて行く。その姿は、えりか、つぼみ、いつきの三人と、シブ

レ、コフレ、ポプリの妖精達だった。

「つぼみ、いつき、これって!？」

「はい、あの時と同じですね・・・と言う事は!」

「うん、バッドエンド王国の誰かが、僕達の学校に現われたと考えられるね!」

校庭に出た三人は、宙に浮かびながら、こちらに鋭い視線を送るバッドエンドビューティを見付けた。バッドエンドビューティは、ゆつくり三人の前に降りてくると、

「あなた達か・・・キュアムーンライトは何所?」

「ハア!? ゆりさんが此処に居る筈無いですよ?」

「ゆりさんは、三月で学園を卒業しています」

「ゆりさんに何の用!? それより、みんなを元に戻して!」

えりか、つぼみ、いつきに、ゆりは春に学園を卒業して居て、この学園に居ない事を聞き、バッドエンドビューティは拍子抜けした表情を浮かべ、

「そう・・・キュアムーンライトと戦おうと、わざわざ出向いて来たけれど、飛んだ無駄足だったようね?」

「だったら、ゆりさんの代わりに、あたしらが相手になってあげるよ! つぼみ、いつき、行くよ!」

えりかの言葉に頷いた二人、三人がココロパフォームを手にとると、シプレ、コフレ、

ポプリからプリキュアの種が発せられた。

「プリキュア！オーブンマイハート!!」

「大地に咲く一輪の花・キュアプロツサム！」

「海風に揺れる一輪の花・キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花・キュアサンシャイン！」

「ハートキャッチプリキュア!!」

プリキュアに変身した三人であったが、バッドエンドビューティは興味無さそうな表情で、

「キュアサンシャインは兎も角、美しさの足りないお笑いコンビと戦うつもりは無いわ  
！」

「だ、誰がお笑いコンビよ?!」

「マ、マリンは兎も角、何故私まで?!」

「何一人だけ否定してるのよお！」

「マリンのせいで、私までお笑い扱いじゃないですかああ！」

バッドエンドビューティにお笑いコンビ呼ばわりされ、マリンとプロツサムが言い合っていると、シプレとコフレは頭を抱えた。バッドエンドビューティは、ハアと溜息を付きながら首を振ると、



「醜い……あなた達には、アカンベエの相手がお似合いだわ！出てきなさい！アカンベエ！！」

バッドエンドビューティが、黒玉を持った右手を高々と上げると、校庭に落ちてあつたサツカーボールをアカンベエへと変えた。瞬時に言い争いを止めたプロツサムとマリンは、上空高くジャンプすると、

「ヤアアアア！」

「タアアアア！」

アカンベエ目掛け、雄叫びを上げながら空中からダブルキックを放った。アカンベエは、両手足を引つ込ませると、大きなボール状態になり、キックしてきたプロツサムとマリンを乗せたまま、高速で転がり始めた。

「ワワワワアアア！？」

「キアアア！な、何なんですかあ!？」

二人は変顔浮かべながら、まるで玉乗りをしているように、アカンベエの上で懸命にバランスを取りながら走り出す。サンシャインは二人を心配そうに見つめ、

「プロツサム！マリン！」

「フフフ、お笑いコンビにはお似合いの舞台のようね！では、キュアムーンライトの代わりに……キュアサンシャイン、あなたを倒すとしましょう」

「そう簡単にやらせないわ！あなたのその心の闇、私の光で照らしてみせる!!」

キツと鋭い視線をぶつけ合うサンシャインとバッドエンドビューティ、互いの呼吸を探り合うと、ほぼ同時に二人が突進し、バッドエンドビューティの左右からのパンチを、サンシャインはすんでの所で見切り躲し続ける。

（私の攻撃を見切ったの!?!）

（中々鋭い突きね！油断したらかなりのダメージを受けそう・・・だったら!!）

サンシャインは、バッドエンドビューティの力を探るように、サンシャインフラッシュを放った。光の飛沫がバッドエンドビューティ目掛け飛んで行くも、バッドエンドビューティは悠然と構え、

「その程度の攻撃・・・避けるまでも無い!」

バッドエンドビューティの周囲に、冷気が漂ったかと思うと、光の飛沫を氷の結晶に変え、結晶は地上へとハラハラ落ちていった。

「では、こちらの番・・・バッドエンド！ブリザード!!」

バッドエンドビューティの周囲に、黒い氷の紋章のような模様が浮かび上がると、一層辺りに冷気が漂い始め、サンシャインの顔から冷汗が滴り落ちる。バッドエンドビューティの合図と共に、バッドエンドブリザードがサンシャイン目掛け襲い掛かった。

「クツ!? サンフラワー・・・ イーリス!」

サンシャインは、ひまわりの花のような形をした、強力な巨大シールド、サンフラワーイーリスを前方に展開させ、バッドエンドブリザードの攻撃を耐え凌ぐ。

「ヤアアアアア!!」

サンシャインの気合いと共に、バッドエンドブリザードを、バッドエンドビューティまで押し戻した。

「私のバッドエンドブリザードを!? 美しい・・・今の戦い方は美しいわ! でも、大分体力を消耗したようね?」

「ハアハアハア・・・まだよ!」

更にサンシャインは、サンフラワーイーリスに力を込めた掌底を浴びせると、

「これは!? キアアアア!」

サンシャインは、サンフラワーイーリスインパクトを、バッドエンドビューティ目掛け放った。その威力に、バッドエンドビューティは後方に吹き飛ばされたものの、空中で体勢を立て直し、再び地上に着地した。バッドエンドビューティはサンシャインを見つめると、

(キュアサンシャイン、これ程とは思わなかった・・・)

サンシャインへの評価を改めたバッドエンドビューティ、再び睨み合うサンシャイン

とバッドエンドビューティだったが、その間を、悲鳴を上げながら、アカンベエに乗ったブロッサムとマリンが通り過ぎて行く。チラリとバッドエンドビューティを見たマリンとブロッサムだったが、バッドエンドビューティは両手を開いて首を左右に振り、二人に呆れた表情を浮かべていた。マリンは変顔浮かべながら悔しがり、

「海より広いあたしの心も、ここらが我慢の限界よ！ブロッサム、あいつに良い所見せるよー！」

「はい！見返して上げましょう!!」

コクリと頷き合った二人は、タイミングを合わせて宙に飛ぶと、

「ブロッサムウウ・シャワー!!」

「マリイイン・シユ〜ト!!」

二人の攻撃が合わさり、アカンベエに命中して動きを鈍らせた。地上に着地した二人は、ブロッサムタクトとマリンタクトを取り出すと、

「集まれ、二つの花の力よ!・・・ハアア!!」

二人はタクトを回転させ、更にタクトを振ってフォルテツシモ記号のような形をしたエネルギを生み出すと、

「プリキュア!フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

ブロッサムとマリンが、ピンクと青の光に包まれ上昇すると、一気にアカンベエ目掛

け急降下を始めた。フォルテツシモがアカンベエをハート形に貫き、再び姿を現わした  
プロツサムとマリンは、

「ハートキヤツチ！ハアアアアア!!」

タクトをクルクル回転させ、二人はアカンベエを浄化した。二人もサンシャインに合流し、三人がバッドエンドビューティを見つめると、バッドエンドビューティは一瞬険しい表情を浮かべるも、直ぐに口元に笑みを浮かべ、

「流石はプリキュアと言った所かしら?」

「見た!?あたし達の実力!」

マリンがドヤ顔を浮かべるも、プロツサムが肘でマリンを突つつき、

「そういう事をするから、お笑いコンビ何て言われるんですよ!」

「フフ・・・さあ、アカンベエはプロツサムとマリんに浄化されたわ!」

そんな二人のやり取りを見て居たサンシャインは、朗らかな表情を浮かべたものの、直ぐにバッドエンドビューティに話し掛けるも、

「そのようね・・・出直すとしましょう!キュアサンシャイン・・・その名を覚えて置くわ!また会いましょう!!」

「ちよつと待ったあああ!あたし達の名前も覚えて帰つてよ!!」

「そうね・・・キュアプロツサム!キュアマリン!あなた達、お笑いコンビの名も覚えて

おきましよう!!」

そう言い残し、バッドエンドビューティは撤退し、バッドエンド空間は解除された。

「な、名前を覚えてくれたのは良いんですが：：何でお笑いコンビのまま何ですかあああ？」

「アハハハ、まあまあ名前は覚えられたんだし：：」

「良く無い!!」

今もつてバッドエンドビューティには、お笑いコンビ扱いされるプロツサムとマリンであった：：

3、バッドエンドピースVSキュアブライト&キュアウインディ

夕凧町：：

バッドエンドピースは、七色ヶ丘で頭を叩かれた恨みとばかり、満と薫に復讐するべく、咲達が住む夕凧町を訪れ、バッドエナジーを集めようとしていた：：

「エへへへ、この間の恨み晴らしちゃうもんねえ!」

とは言うものの、好奇心旺盛なバッドエンドピースは、ルンルン気分で辺りを散策し、奇抜な格好を見た人々は、ヒソヒソ話をするものの、皆見て見ぬ振りをしていた。そんなバッドエンドピースは、海岸で一人大声を出しながら何かをやっている少年に出会っ

た。年の頃は16、17才ぐらい、学校帰りなのか制服を着ていて、少し気になったバッドエンドピースが近づくと、

「オツ!?!お客さんかあ?こりやあ張り切らなきや・・・嬉しすぎて靴が地面にくつついた!」

「・・・・・・・・・・」

「緊張しすぎて・・・腸が超痛い!」

「・・・・・・・・・・」

「お嬢さん、どっかこの辺に・・・内科は無いか?」

「・・・・・・・・・・」

ダジャレを言いまくっていたのは、咲の幼なじみである星野健太、高校になってもお笑いを目指す心は変わらず、時間を見付けては、ギャグに磨きを掛けていた。健太のギャグを聞いていたバッドエンドピースは、見る見る寒気がし始め、この辺にバッドエンドビューティが居るのだろうか、思わず辺りをキョロキョロ見渡して捜した。

「何かイライラしてきたなあ・・・世界よ、最悪な結末に変わっちゃって!白紙の未来を黒く塗りつぶしちゃう!!」

バッドエンドピースは、健太のダジャレを聞いている事に飽き、バッドエンド空間を発生させると、空が不気味に黄色く変化し、その周りを落書きで描いたようなイラスト

が覆っていた。

「俺のネタ何か聞くより、寝た方がマシだ・・・」

健太はそのまま地面に崩れ落ち、バッドエナジーがバッドエンドピースに集まり、ピーエー口完全復活の目盛りが上がった。

「咲、あれって!?!」

「うん・・・バッドエンド王国かも?」

顔を見合わせた咲と舞は、急ぎバッドエンド空間が発生した海岸へと駆け出した。海岸に駆け付けた二人は、バッドエンドピースの仕様だと悟り、表情を強張らせた。

「あれは・・・健太!?!ちよつと、健太に何したのよう?」

「元に戻しなさい!」

咲と舞に注意されたバッドエンドピースは、見る見る不機嫌そうな顔を浮かべ、

「何であなた達なのよおお! 私は、キュアブライトとキュアウインディに用があるの!!」

「ブライトとウインディに!?!何を企んでるか知らないけど・・・舞!」

「分かったわ!」

咲の合図に舞も頷き返し、二人がコミュニケーションを手に持つと、健太の周囲に雷が落ちた。

咲と舞は見る見る青ざめ、



「健太！ちよつと、止めて!!」

「止めて欲しかったら・・・ブライトとウィンディを此処に連れて来てよ！そうしたら、その子を返して上げる。連れて来なかつたら・・・ビカビカつてしちゃうからね!!」

「卑怯よ!」

思わず舞がバッドエンドピースに抗議するも、バッドエンドピースは舞を見ながら舌を出し、

「ベエエエ!卑怯も秘境もありません・・・つてあの人の変なダジャレ聞いてたら移っちゃった・・・いいから、早く連れて来てよ!!」

再び健太の周囲に雷が落ち、悔しそうな表情を浮かべる咲に、舞は小声で話し掛け、  
「咲、このままじゃ本当に、あの子何するか分からないわ!ここはあの子の言う通りに、満さんと薫さんを連れて来るしか無いわ」

「アアア、もう、腹立つなああ・・・満も薫も、家のお店手伝つてくれてるのにいい」  
「早くしてよね!私、待つのが嫌いだから・・・そうだ!ねえねえ、そのまん丸顔!!」  
「ま、まん丸顔!?!それってあたしの事?」

「そうそう、あなたは此処に残って、私が暇つぶしになる事やつてよ!」

「な、何ですつてええ!?!」

「あつそう、嫌なら良いんだ・・・それえ!」

目を瞑ったバッドエンドピースは、健太の周辺に無差別に雷を落とし始め、咲は必死にバッドエンドピースに声を掛け、

「わ、分かったから止めて！舞、お願い!!」

「分かったわ！直ぐに満さんと薫さんに知らせるから!!」

舞はこの場を駆け出し、咲の店でアルバイトをする満と、咲の妹みのりの面倒を見ている薫の居るPANPAPAパンへと駆け出した。

咲は無理矢理寝ていたフラッピを起こすと、小声でフラッピに話し掛け、

「フラッピ、協力してよ！舞が満と薫を連れて戻って来るまで、何とか時間稼がないと、健太が・・・」

「そういう事なら協力するラピ・・・でも、何をすれば良いラピ?」

「そう言われると困るけど・・・ねえ、あたしは何をすれば良いのよ?」

咲も何をすれば良いか分からず、バッドエンドピースに聞くと、バッドエンドピースはちよつと小首を傾げて考え、

「うくん・・・どうしようかなあ?私、漫画が読みたい!!面白い漫画描いてよ!!!」

「エツ!!」

バッドエンドピースに、漫画を描くようにリクエストされた咲は、変顔浮かべながら困惑した。何故なら、咲は舞いとは違い、絵を描くのが苦手だったのだから・・・

「咲、描くだけ描いてみるラピ」

「エエエ!? あたし、苦手何だよねえ．．．」

困惑しながらも、咲は落ちていた細い枝を拾うと、砂浜に何かを描きだした。

「ワ〜イ、始まった!」

バッドエンドピースは本当に嬉しいのか、咲に近付いて描いている画を見て見ても、何の漫画なのか理解出来ず困惑した。

「エエと．．．その化け物が主役なの?」

「これはあなたのつもり何だけど．．．」

「．．．．．じゃあ、この溶けて消えそうな妖怪は?」

「それは妖怪じゃなくて舞!」

「．．．．．」

「知っていたけど．．．酷いらピ」

「私があの子だったら、こんな絵見せられたら絶対に怒る．．．」

「舞はそんな事で絶対に怒らないわよ!」

画を見ていたフラッピとバッドエンドピースは、呆れたように呟いた。咲の描いた画を、改めてジックリ見たバッドエンドピースは、あまりの酷さにお腹を抱えて笑い出し、「ウケルウウ! この画が人だ何て．．．キャハハハ」

「ウウウ、何!?この屈辱感・・・」

「まあ事実だし、しょうがないラピ」

「うるさい!」

フラツピにもバカにされ、咲が不機嫌そうに頬を膨らませた時、上空から二つの人影が舞い降りてきた。

「咲、話は舞から聞いたわ!」

「後は私達に任せて!」

「ブライト!ウインデイ!」

咲は目を輝かせた・・・

もつと時間が掛かるだろうと思っていた咲だったが、満と薫は、舞から話を聞くや、直ぐにブライトとウインデイに変身し、ブライトが舞を抱きながら足下に力を溜め、一気に海岸まで飛翔して駆け付けた。ブライトが舞を下ろすと、舞は嬉しそうに咲に話し掛け、

「満さんと薫さんに話したら、急を要するみたいだからって、直ぐにプリキュアになってくれて、一緒に連れて来て貰ったの!」

「ホツとしたチョコピ」

「舞も、チョコピもありがとう!」

「どう致しまして！」

互いにに笑みを浮かべあつた咲と舞、そんな二人を見てチョツピも目を細めた。バツドエンドピースは、ブライトとウインディを見るや不気味に笑み、

「フツフツフ、ようやく現われたわね！何もしない可憐な私の頭を、あなた達は無理矢理叩いた！その恨み・・・今こそ晴らして上げるわ!!」

逆恨みしたバツドエンドピースは、二人を見て目に炎を点すと、思わず顔を見合わせたブライトとウインディは、呆れたように溜息を付き、

「何もしてないって・・・あなた、ソードを騙して攻撃してたじゃない！」  
「バカだとは思ってたけど、記憶力も無いのかしら？」

「バカじゃないもん！もう、信じらんない・・・その二人、プリキュアに変身して、ブライトとウインディを懲らしめてやって!!」

突然バツドエンドピースに話を振られ、動揺した咲と舞は、即座に険しい表情で首を左右に振ると、

「ふざけないで！あんた、何言ってるの？」

「私達が、あなたの言う事を聞く筈無いじゃない！」

即座に否定する咲と舞に、バツドエンドピースはゲスい表情を浮かべると、

「へエ、私に逆らうんだ？あの子、ビリビリ痺れちゃっても良いのかなあ？」

「健太を使つて脅迫する何て．．．卑怯よ！」

「恥を知りなさい!!」

「エエ!? そんなの知らなあい．．．さあ、やるの? やらないの?」

バッドエンドピースに脅迫され、咲と舞の表情が苦悶に歪む、ブライトとウインディは、顔を見合わせてアイコンタクトすると、

「咲、舞、言う通りにしましょう!」

「さあ、二人共プリキュアに変身して!」

ブライトとウインディは、そう言うどゆつくり場所を移動し、バッドエンドピースの視線を惹きつけた。咲は二人の考えが読めず困惑しながら、

「ブライト!? ウインディ!」

「咲!．．．．．」

二人の作戦に気付いた舞は、小声で咲に話し掛けると、咲も満面の笑みを浮かべ、  
「分かった! プリキュアになるよ!!」

「そうそう、それで良いの! あの二人を懲らしめてやって!!」

バッドエンドピースはコクコク満足気に頷き、咲と舞はアイコンタクトすると、

「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」

「輝く金の花! キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼！キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

咲と舞が、ブルームとイーグレットに変身し、バッドエンドピースは、ブライトとウィンディを見てゲスイ笑みを浮かべた。その背後で、ブルームとイーグレットは、バッドエンドピースに気付かれないように、抜き足差し足で健太の居る方に移動した。

「さあ、やつちやえ！ブルーム、イーグレット、ブライトとウィンディの頭を、ポカポカ叩いて来てええ!!」

バッドエンドピースは、ブライトとウィンディを指差し、ブルームとイーグレットに攻撃開始を告げた。だが二人は無反応で、不思議そうにバッドエンドピースが振り返ると、ブルームとイーグレットは健太を無事に保護し、少し離れた場所へと移動していた。

「アアア!? 狡い!!」

「全く・・・此処まで上手く行くとは私も思わなかったわ!」

「バカに付ける薬が無いっていうのは、本当のようね!」

「ムウウウ、バカにしてえええ! 良いもん、私一人で・・・勝てるかなあ?」

「私達に聞いてどうするのよ?」

「何だかこの子と戦うのがバカらしくなってくるわね・・・」

いざ戦おうと思ったものの、少し自信が揺らいだバッドエンドピースは、思わず敵で

あるブライトとウインディに問い掛け、二人を益々呆れさせた。

（ウウウウウ．．．そうだ！一先ず帰って、ハッピーに助っ人を頼もう!!サニーやマーチは来てくれないだろうし、ビューティには怒られそうだもんね．．．決めた!!）

バッドエンドピースが急に薄ら笑いを始め、ブライトとウインディは真意が読めず少し警戒すると、バッドエンドピースは、突然手をポンと叩き、

「ほ、本当は、あなた達何か私一人でも楽勝だけど．．．急用を思い出したあああ!」  
そう言い残すと、慌てて撤退し、バッドエンド空間が解除された。

「エツ!?」

思わず呆然とするブライトとウインディ、健太の側に居たイーグレットも驚いたように、

「あの子．．．帰ったの?」

「に、逃げた!?待ちなさい!健太にした事謝らせてやろうと思ったのにいい!!もしも健太に怪我でもさせてたら、あの子絶対許さないんだから!!」

「ブルーム、それは多分大丈夫よ!」

「エツ!?でも、あの子健太に攻撃をしよう．．．」

「本気で攻撃を当てようとしてたら、何時でもあの子なら狙えた。ブルームとイーグレットなら、きっと健太を見捨てられないと分かって居てやってたと思う」



「強がっては居るけど、あの子、根は悪い子じゃ無いと思うわ・・・」  
「バカだけど!!」

そう言うのと、顔を見合わせたブライトとウィンディは、クスリと笑い合った・・・

#### 4、ダークドラゴン

魔界・・・

嵐が吹き荒れ、雷が鳴り響く不気味な空に、二つの影が対峙していた・・・

一人は銀髪の魔神アベル! もう一つの影は、巨大なる黒き竜、ダークドラゴン!!

竜と言えば固い鱗を持つ事は、東西共通の容姿だが、東洋では、巨大な爬虫類のような容姿をし、短い手足を持ち、空を自在に飛び回る姿を連想する。西洋では、巨大な爬虫類系なのは一緒だが、ドラゴンは二足歩行をし、背中に生えた翼で空を飛びイメージが強い。アベルが対峙するダークドラゴンは、西洋ドラゴンの容姿をしており、その威風堂々とする振る舞いは、王者の風格を醸し出していた・・・

「消えろ! 我は誰の下にも従わん!!」

「フッフ、ソドムがあのような容姿になつては、貴様の力を借りるしかないのではあ・・・  
無理矢理でも従わせるぞ! 闇の竜よ!!」

竜の咆哮が、アベルの雷が相殺され、辺りの地形が吹き飛び、弱き魔が逃げ惑った。

「闇の竜よ、老いたな！嘗て、我らと魔界の覇権を争った力は消え失せたか・・・ならば、貴様の力を借りるまでもない・・・消えろ!!」

「黙れ、アベル！老いたりといえど、真の姿になっていない貴様などに遅れは取らん!!」  
ダークドラゴンは大きく息を吸い込むと、黒き鱗から粒子が舞い散った。アベルは険しい表情でダークドラゴンを見つめると、

（ダークブレスか・・・老いぼれめ、まだそんな力が!?だが、妙だな?）

ダークドラゴンは、溜め込んだ力を一気に吐き出すと、黒い閃光がアベル向かって放たれた。アベルも迎え撃つように両手を組むと、

「ダ〜クネス・・・フレイム!!」

アベルの両手から、ダークドラゴン目掛け放たれた黒き炎が放たれた。空間で燻（くすぶ）る両者の技と技、爆発と共に空間に歪みが発生した。その時・・・

「キヤアアアアア」

「何だ!?女の声?」

「逃げ遅れた者か!?!」

突如女の悲鳴が二人に聞こえ、アベルとダークドラゴンは困惑した。ダークドラゴンは、落下してきた女を、咄嗟に巨大な手を出して受け止めると、

「ありがとう・・・アレツ!?此処は何所!?バッドエンド王国じゃないの?」

「バッドエンド王国!? 違う! 此処は魔物達が暮らす世界・・・魔界だ!」  
「魔界!?・・・アレツ!? あなたもしかして?」

落下してきたのは、巻き込まれたバッドエンドピースだった。バッドエンド王国に戻ろうと次元の狭間に入った時、タイミング悪く二人の戦いで発生した時空震の影響に巻き込まれ、魔界へと吸い込まれた。バッドエンドピースは、周りをキョロキョロするも、助けてくれたダークドラゴンを見ると目を輝かせ、

「ウワアア! あなた、竜でしょう? 私、初めて見たああ! 私はバッドエンドピースだよ!!」

「貴様・・・我を見て恐ろしくはないのか?」

「可愛い!」

「か、可愛いだとおお!?」

思わずダークドラゴンは困惑した・・・

自分の容姿を見て、恐れおののく者は幾らでも見てきたが、可愛いなどと言われた事は一度も無かった。そんな二人のやり取りを見て居たアベルは笑い出し、

「アハハハ! 闇の竜も形無しだなあ? それより・・・女、何所から迷い込んだ? 貴様のその姿・・・まさか!? お前プリキュアか?」

「誰よ、あなたは!? 確かに私はプリキュアだけど・・・」

バッドエンドピースは、アベルの事を胡散臭そうな目で見つめるも、プリキュアである事は認めた。アベルの目がキラリと輝くと、

「フ、フハハハハ！まさか、自らオメオメ魔界に現われるとは手間が省けた！俺と来い！！」

「ベエエエ！あなた、竜ちゃんの敵でしょう？それに偉そうだから・・・嫌だよお！！」  
「りゅ、竜ちゃん!!」

バッドエンドピースは、アベルに舌を出し、竜ちゃんと呼ばれたダークドラゴンは思わず困惑顔を浮かべた。共に行く事を拒んだバッドエンドピースに、アベルは口元に笑みを浮かべ、

「そうか、ならば無理矢理にでも連れて行くのみー」

「ベエエだ！バッドエンド・・・サンダー!!」

バッドエンドピースは、ダークドラゴンの手から飛び出すと、挨拶代わりのバッドエンドサンダーをアベルに放った。アベルは、右手人差し指を突き出しながら高々と腕を上げると、バッドエンドサンダーを右手の人差し指に吸収していった。

「そ、そんな!?!私のバッドエンドサンダーが?」

「ククク、俺も貴様と同じ用に、雷の技を使うんでな、俺には雷に対しての耐性があるんだよ！今度はこちらの番!!」



（気付いて居ったか・・・）

アベルに凶星を指され、思わずダークドラゴンが沈黙する。アベルがゆっくり下降し、ヨロヨロ立ち上がったバッドエンドピースを見つめると、

「さあ、俺と来い！これ以上痛い目にあいたくないだろう？」

「ベエエエだ！私は自由に居たいの！！あんたの言う通りに何か・・・キヤアアアア」

バッドエンドピースが拒否すると、口元に笑みを浮かべたアベルは、容赦無くバッドエンドピースを蹴り飛ばした。反撃のバッドエンドサンダーを放つも、アベルには効果が無かった・・・

「動けないように、その両手足・・・燃やし尽くしてやる！」

（みんなに会えずに、私、此処で死んじゃうのかなあ？）

バッドエンドピースの脳裏に、四人のバッドエンドプリキュア、ハッピー、サニー、マーチ、ビューティの姿が目に見え浮かんだ。アベルが両手を組み、ダークネスフレイムの体勢に入ったその時・・・

（自由か・・・あの娘、我と似ている！）

死が間に迫っているダークドラゴンに取って、バッドエンドピースとの出会いは、不思議な感情を産み出した。元々竜族は仲間意識が強く、魔界の中でも、一匹の竜に手を出せば、竜族全員を敵に思うと思えと伝えられる程に絆が深かった。だが、ダークド

ラゴンだけは孤独を好み、強者を求め魔界を彷徨った。

（竜王バハムート、今なら、嘗て貴様が言った事が理解出来る！どうせ消えゆく命なら・・・未来ある者へ！）

「グウウオオオオオオ!!」

「何だ!?!」

「竜・・・ちゃん!?!」

ダークドラゴンの物凄い咆哮に、アベルとバッドエンドピースも思わず視線を向けると、ダークブレスがアベル目掛け放たれた!

「バカな!?!奴は死ぬ気か?チィィィ!!」

その場に居たはずのアベルの姿は消え失せ、数キロ離れた場所に瞬時に姿を現わした。ダークドラゴンは、更にアベル目掛け翼を飛ばたかせ急降下すると、その風圧でアベルの髪が激しく靡き、思わずアベルが顔を腕で守ると、その一瞬の隙を見逃さず、ダークドラゴンはバッドエンドピースの下に飛び、彼女を抱き抱えると、

「竜ちゃん・・・助けてくれたんだ?エへへへ、ありがとう!」

「迷い人よ、お前を元の世界に送ろう!」

「私は、バッドエンドピース!あなたは?」

「我はダークドラゴン!本当の名は・・・忘れた!!」

「ダークドラゴンは、再び大きな翼を広げると、魔界の空高く飛び去った……  
「チツ、逃げたか……まあ良い、プリキュアが魔界に來た事實は、何ら変わらんのだからなあ……フハハハハ！」

アベルの笑い声が、飛び去っていくダークドラゴンを見ながら響き渡った……

バッドエンド王国……

お土産をちゃんと持って來たバッドエンドハッピー、サニー、マーチは、お土産を持って帰って來なかつたバッドエンドビューティを、不満気に問い詰めていた。

「何や、ビューティだけお土産無しかいな？」

「エエ!? 私達、ちゃんとビューティの分も買って來たのにいいー！」

「ただ食いは感心しないねえ……」

「し、仕方ないでしょう……て言うか、私達、バッドエナジーを集めに行つたんじゃなくって?」

「それはそれ、これはこれ……ねえ?」

「「そうそうー!」」

バッドエンドハッピーに問われ、サニーとマーチはウンウン頷き同意した。益々困惑したバッドエンドビューティは、



「仕方が無いわねえ、今から何か買いに……何!? この声は一体?」

何かを買いに行くかと告げようとしたバッドエンドビューティだったが、外から物凄い咆哮が聞こえ、四人の表情が一瞬で険しくなった。

「外からだよ! 行ってみよう!!」

バッドエンドハッピーの言葉に頷き、四人は慌てて外へと駆け出した。ピエーロのコアが祭られている祭壇に居るジョーカーにも、咆哮は聞こえたものの、

「やれやれ、また彼女達が何かしているようですねえ!? まあ、順調にバッドエナジーを集めてくれていきますから、大目にみて差し上げますか……ピエーロ様、もう暫くお待ち下さい!!」

ジョーカーは、ニヤリとしながらその身をトランプと共に消した……

慌てて外に飛び出してきた四人は、思わず立ち止まると、目の前に立ちはだかる巨大な黒き竜を見て驚愕した。敵なのか、味方なのか、判断付かない四人は、険しい表情を浮かべるも、

「案ずるな、我はお前達と戦うつもりは無い! お前達の仲間を、送り届けに来ただけだ!!」

そう言うと、ダークドラゴンは、両手で優しくバッドエンドプリキュア達の前へ、バッドエンドピースを下ろした。

「[[[[ピース!!]]]]」

目の色変えた四人が、ボロボロの姿で横たわるバッドエンドピースに声を掛けるも、ピースは眠って居るようだったが、時折驚かされていた。

「誰!? ピースをこんな目に遭わせたのは?」

「ピースは、ブライトとウインディの所に行く言うとなつたな?」

「なら・・・あいつらか!」

「キュアブルーム! キュアイーグレット! キュアブライト! キュアウインディ! ピースに手を出した事・・・私達が後悔させて上げるわ!!」

バッドエンドハツピーが、サニーが、マーチが、ビューティが、表情を険しくした四人の背後からバッドエナジーが湧き上がり、今まさにバッドエンドピースの敵討ちに行こうとするのを、静観していたダークドラゴンが四人を制止し、

「勘違いするな! その娘をそのような惨い姿にしたのは・・・魔界の魔神アベルだ!!」

「魔界の魔神アベル!」

「何でや!? 何でピースが、こないな目に遭わされるんや?」

「あたし達、魔界に何て行った事無いし」

「些か合点がいかないわね?」

ダークドラゴンから、バッドエンドピースをこのような惨い姿にしたのは、魔界の魔

神アベルだと聞き、バッドエンドハッピー、サニー、マーチ、ビューティの四人は困惑した。魔界の者との接点など、自分達には無い筈だった。

「この者は、我とアベルの戦いの影響で、魔界に迷い込んだのかも知れん・・・」

ダークドラゴンが、穏やかな表情でバッドエンドピースを見つめていると、

「ウツ、ウウウウン・・・フアアアアア！良く寝たああ・・・アレ!?私・・・」

寝ぼけ眼で起き上がったバッドエンドピースは、仲間達を見付けるや、目に涙を浮かべて抱き付き、

「ウエエン！もう、もうみんなに会えないかと思ったああ!!」

「よしよし、もう大丈夫だから!」

バッドエンドハッピーが優しくピースの髪を撫で、バッドエンドサニー、マーチ、ビューティも、ホッと安堵した表情を浮かべ、

「ピース、そこに居る竜に感謝しいや」

「ピースの事を、魔界から連れて来てくれたみたいだからさ」

「私達からも礼を言わせて貰うわ!」

「うん! 竜ちゃん・・・」

「...」  
「...」  
「...」

そう言うのと、バッドエンドプリキュアの五人は、ダークドラゴンに対して素直に頭を

下げた。魔界に居た時には、感じた事の無い思いが、バッドエンドプリキュアと触れ合う事で、ダークドラゴンに沸き上がり、ダークドラゴンも目を細めた。何かに気付いたバッドエンドビューティは、仲間を促すと、

「み、見て！ダークドラゴンの身体が!？」

「「エツ!?!」」

良く見てみれば、ダークドラゴンの身体が、ゆっくり、ゆっくり消え始めて居た。バッドエンドピースは、ダークドラゴンにしがみつくと、

「りゅ、竜ちゃん、どうしたの?」

「私の寿命が・・・尽きる時が来たようだ!!」

「「エエエ!?!」」

「そんなああ!?!」

ダークドラゴンの告白は、バッドエンドプリキュアの五人に激しい衝撃を与えた。出会ったのはほんの僅かだが、何処か互いに親しみを覚えて居た。

「バッドエンドピースと言ったな? お前と触れ合った短時間で、我は大いなる事を学んだ気がする・・・感謝するぞ!」

「感謝して・・・私がする事だよおお!」

ダークドラゴンにしがみつき泣きじやくるピースを、ダークドラゴンは、愁いを帯び

た表情で見つめると、

「泣くな！我が肉体は潰えても、我が魂はお前達と共にある！バッドエンドピース、そして、心優しきその仲間達よ、私の魂は、お前達と共にある事を忘れるな!!」

そう言い残し、ダークドラゴンの身体は光の粒子へと変わり、バッドエンド王国上空に消え失せた。バッドエンドプリキュアの五人は、名残惜しそうに、消え去った光の粒子の痕跡を目で追い続けた・・・

第九十一話：バッドエンドプリキュアとプリキュア達（後編）

完

## 第九十二話：美墨なぎさとバッドエンドプリキュア！

1、ブラック先輩！

バッドエンドプリキュア達が、ダークドラゴンとの出会いと別れを体験してから三日後、なぎさは暇を持って余し、アカネとひかりの店、TAKO CAFEへと向かって行った……

「折角夏休みになったって言うのに、ほのかやゆりは夏休みも大学に行ってるとは……こんな事なら、何かサークルにでも入っておけば良かったかなあ？うちの大学、女子ラクロス部もあって、誘われては居るんだけど……」

ぼやいては居るものの、なぎさがサークルに入らないのは、バッドエンド王国の事を気にしている事もあった。バッドエンドプリキュアを産み出し、再び動き出したバッドエンド王国、みゆき達を始めとした後輩プリキュア達だけを戦わせる事に躊躇いを感じていたなぎさ、ほのか、ゆりは、大学生になってもプリキュアとして戦い続ける事を決めた。

「出来れば、戦わずに済むのが一番何だけどねえ……」

そう思いながら、TAKO CAFEのある公園にやって来たなぎさは、TAKO

CAFÉの前で困惑しているひかりを見て、小首を傾げ話し掛けると、

「ひかり、どうかしたの!? 顔色が悪いわよ?」

「なぎささん、いらつしやい! 実は……」

なぎさを見て顔を綻ばせたひかりだったが、直ぐに視線をテーブル席に向け、なぎさも釣られるようにテーブル席を見た。テーブル席を見たなぎさは、思わず目を点にし、

「あ、あんた達は……バッドエンドプリキュア!? な、何であんた達がTAKO CAFÉに居るのよ?」

テーブル席に座っていたのはバッドエンドプリキュアの五人、五人はテーブル席に座り、たこ焼きを食べながら雑談に興じて居るようだったが、なぎさの声が聞こえ、ようやく五人もなぎさに気付き、

「アツ! 足の臭い……」

「人聞きの悪い事言うなあああ! それより、何であんた達が此処に居るのよ?」

バッドエンドハッピーに指を指されて足の臭いと言われ、なぎさは顔を真っ赤にしながら慌ててバッドエンドハッピーの言葉を遮り、何故五人がTAKO CAFÉに居るのか、再び問い詰めた。

「何でって、ウチらたこ焼き食べに来たんやけど?」

「別にあたし達の勝手だろう?」

「私達、ちゃんとお金も払ったよ・・・ねえ？」

「払ったのは私でしょう！買ったたこ焼きを私達が此処で食べても、何の問題も無い筈よー！」

「いや、まあ、それはそう何だけどきあ・・・」

パッドエンドサニー、マーチ、ピース、ビューティに言いくるめられ、反論出来ないなぎさが戸惑って居ると、ワゴン車から出てきたアカネが近付き、

「何、何、この子達、なぎさの知り合いなの？」

「いやあ、知り合いと言うか、何と言うか・・・」

「何かこの子達って、変わった格好してるなあと思ったけど、今若い子の間で流行ってるの？」

「いやあ、流行っているのは、この子達の間だけと言うか何と言うか・・・」

なぎさがしどろもどろに曖昧な返事をして、思わずアカネは不思議そうに小首を傾げるも、

「それにしてもこの子達って、前に来たあかねちゃん達に似てるよねえ？食べっぷりも良いし！ねえねえあんた達、なぎさやひかりの知り合いのようだし、サービスするよ！どれか好きなの、一つだけおまけして上げるけど？」

「「本当!？」」



「ホンマ!？」

アカネの言葉を聞いたバッドエンドハッピー、ピース、マーチ、サニーは目を輝かせ、バッドエンドビューティは、さして感触無き気にオレンジジュースのグラスを手に取り、中の氷をカラカラ鳴らした。

「アカネさん、この子達には・・・な、何よ?」

なぎさはアカネに、この子達にはサービスしなくても良いよと言おうとするも、なぎさの右腕にバッドエンドハッピーが、左腕にバッドエンドピースがしがみつき、二人で目をウルウルさせながら、なぎさに目で合図を送り、更にバッドエンドサニーとマーチも加わり、アカネに聞こえ無いように小声でなぎさに話し掛け、

「いやあ・・・流石はブラック先輩の知り合いや!」

「ブ、ブラック先輩!？」

「そうそう、ブラック先輩だけは、他のプリキュア達とは違うと思ってたよ!」

「な、何調子良い事言ってるの?」

バッドエンドサニーとマーチにブラック先輩と呼ばれ、思わずなぎさの背筋がゾツとする。

「大体、何で私が、あんた達に先輩って呼ばれなきゃいけないのよ?」

「エエ!?だってえ、私達と同じように黒い衣装だし・・・」

「私達やダークプリキュア5達、闇のプリキュアの元祖だもん！」

「ねえ！」

バッドエンドハッピーとピースに、黒い衣装を着ていて、闇のプリキュアの元祖と言われ、思わず動揺したなぎさは、慌てて否定しようとして、

「違う！私は、光の使者……」

そう言いかけて、思わずなぎさは言葉に詰まった。記憶の彼方に、光と闇の使者と名乗った事があるような気がした。それは、時の狭間で出会った別の世界のブラックの記憶なのだが、なぎさの記憶とシンクロし、なぎさは微妙な表情を浮かべると、

「そう言われると……」

「でしよう？でしよう？」

「ワッ！ブラック先輩バンザイ!!」

「ブラック先輩!？」

「あつ、いや、私、一部ではブラックってあだ名で呼ばれてて……アハハハ」

なぎさの反応を見て、バッドエンドハッピーとピースが大声出して嬉しがるも、なぎさの事をブラック先輩と呼んでいるのがアカネに聞こえ、アカネは不思議そうに小首を傾げ、なぎさは慌てて誤魔化した。なぎさは、バッドエンドハッピーをジイと見つめると、

「アツ！でも、バッドエンドハッピーには、さつき足が臭い何て言われたしなあ：：バツドエンドハッピーには、サービスしなくても良いかなあ？」

「ウワアアン！ゴメンなきああい！！もう、二度と言わないよおお！！」

「アハハ、冗談冗談！」

バッドエンドハッピーは、半泣きしながらなきさに泣きつくのと、その仕草がみゆきに似て居て、思わずなきさは、冗談だとバッドエンドハッピーに笑みを浮かべた。

（な、なきささん．．．どうしてバッドエンドプリキュアと仲良くして居るんだろう？）  
ひかりの心の中に、思わず不安が芽生えた．．．

## 2、バッドエンドブラック!?

こうして話をしてみれば、みゆき達のようなバッドエンドプリキュアの五人を、なきさは徐々に受け入れていった．．．

「まあ、悪さしないって言うなら、私もあんた達に何か奢って上げるけど？」

「！！しない！しない！ブラック先輩の前で、そんな事しません！！！！」

ヨイシヨを続ける四人を、バッドエンドビューティは呆れたように見つめるも、そんなやり取りを見て居たバッドエンドビューティは、思わずクスリと笑った。

「何だか良く分からないけど、仲良いねえ．．．何にするか決ったら知らせてねえ！」

「ハッイ!!」

「分かりました!」

そうバッドエンドプリキュア達に言い残し、アカネは再びワゴン車に戻った。バッドエンドプリキュア達に誘われ、同じテーブルに座ったなぎさを見て、見る見るひかりの表情は曇り、

(ど、どうしよう!?!このままじゃ、なぎささんが、なぎささんが・・・バッドエンドプリキュアになっちゃう!!)

ひかりは慌てて少し離れ、携帯を手に取ると、何処かに電話を掛けた・・・

T大・・・

ほのかは、ゆりと待ち合わせて、T大近くの喫茶店で一休みをしていると、徐に携帯が鳴り、着信者を見るとそれはひかりからで、直ぐに電話に出ると、電話口のひかりは酷く慌てて居た。

「ほのかさん、大変です!なぎささんが、なぎささんが・・・」

「ひかりさん!?!どうしたの?なぎさに何かあったの?」

ほのかの電話のやり取りを聞いていたゆりも、なぎさに何かあったと聞き、思わず飲んでいたコーヒークップを置き、ほのかをジイと見つめた。

「なぎささんが、なぎささんが．．．バッドエンドプリキュアになっちゃう!」  
「ハア!?!」

思わずほのかは目を点にした。なぎさがバッドエンドプリキュアになっちゃうという、ひかりの言葉の意味が分からなかった。ほのかは小首を傾げながら、

「ひかりさん、落ち着いて!なぎさがバッドエンドプリキュアになっちゃうって、一体どう言う意味かしら!?!」

「ほのかさん!直ぐ、直ぐ来て下さい!!」

「エツ!?!何だか良く分からないけど．．．分かったわ!」

このまま電話でのやり取りを続けて居ても、混乱しているひかりから、詳しい事情を聞くのは無理だと判断したほのか、困惑顔で携帯を切るとゆりがほのかに話し掛け、

「ほのか、どう言う事?」

「さあ!?!私にも良く分からないんだけど、ひかりさんも混乱してるみたい．．．ねえ、ゆり!悪いんだけど、一緒にTAKO CAFEに行ってくれないかしら?もしなぎさに何か遭ったら、私達はプリキュアになれないし．．．」

「そうね!数日前に、つぼみ達の下にもバッドエンドビューティがやって来たって言うし、少し気になるわね．．．大体の事は終わったし、良いわよ!私も行くわ!!」

「ありがとう、ゆり!」

二人は会計を済ませると、急ぎ足で駅へと向かった・・・

ひよんな事でバッドエンドプリキュア達に懐かれたなぎさは、バッドエンドプリキュア達に誘われ、同じテーブルに座り雑談に参加していた・・・

「ダークドラゴン!?!本当に竜って居たんだけ?」

「ウン!私も魔界に行つて初めて知つただけ・・・竜ちゃん、可愛かつたよ!」

バッドエンドピースが、親しげに竜ちゃんと呼んでいるのを聞き、思わずなぎさは目を点にしながらか、

「竜ちゃん!?!竜つてそんな可愛らしいの?」

「いやあ、ようピースが見取るアニメや漫画に出とるような、ゴツツイ奴やつたなあ?」

「うん、大きかつたよねえ!でも、ピースを送り届けてくれたし、優しかつたよね?」

少し苦笑しながら、バッドエンドサニーが竜の姿はゴツツイと言うと、バッドエンドハッピーも同意しながら、優しい竜だつた事をなぎさに教えた。バッドエンドピースは、悲しげな表情を浮かべ、

「でも、消滅しちゃつたけど・・・」

バッドエンドピースが呟くと、バッドエンドプリキュアの五人は思わず俯いた。なぎさは、そんなしおらしい姿を見せるバッドエンドプリキュア達に驚き、

「消滅!? 死んじやったって事?」

「ええ・・・でも、消滅する寸前、魂は私達バッドエンドプリキュアと共にあると、ダードラゴンは言っていたわ!」

「でも、どう言う意味だかあたし達には良く分からなくて・・・」

バッドエンドビューティとマーチが、困惑しながらなぎさに呟くと、バッドエンドハッピーはなぎさを見つめ、

「ブラック先輩は何だか分かる?」

「いやあ、私に聞かれてもさあ・・・ウチのハッピー達スマイルプリキュアを例えるなら、ペガサスに力を借りると、プリンセスキャンドルが現われてハッピー達に力を貸してくれるようだし、あんた達の竜も、あんた達が気持ちを一つにして祈れば、何か力を貸してくれるとか?」

「成る程・・・それも一つの案だし、試して見る価値はありそうね!」

「流石ブラック先輩!」

バッドエンドビューティは、なぎさの言葉を聞くとハツとし、その可能性は大いに有り得ると何度も頷いた。それを見たバッドエンドハッピーは目を輝かせ、なぎさを尊敬の眼差しで見つめた。

「いやあ、本当かどうか分からないけどね!」

なぎさは、髪をポリポリ掻きながら照れ隠しをするも、バッドエンドプリキュア達は、なぎさの言った事を後で試して見ると笑みを浮かべた。なぎさは話を誤魔化すかのよう、

「ところで、さつき魔界って言ってたよね？魔界が有るって言うのは、以前戦った魔界の戦士が居たから知ってたけど・・・どんな所よ？」

「ウーン、私はアベルって言うのにやられちゃって、助けてくれた竜ちゃんの背中で眠っちゃったから良く分かんない！」

「魔界に居るアベルとか言う奴・・・何れウチらがしばいたる！」

「うん！ピースに酷い事したもんねえ!!」

「このままじゃ・・・絶対に済まさない!!」

「私達バッドエンドプリキュアが・・・必ず報いを与えるわ!!」

「みんなああ!!」

バッドエンドピースの口から、アベルの名が出た途端、四人のバッドエンドプリキュアの表情は見る見る険しくなり、バッドエンドサニー、ハッピー、マーチ、ビューティが、ピースに酷い事をしたアベルに、自分達バッドエンドプリキュアが借りを返すと誓うと、バッドエンドピースは、目をウルウルさせて四人を見つめた。そんなバッドエンドプリキュア達を見たなぎさの脳裏に、思わずダークプリキュア5の事が過ぎった。



(やっぱり、この子達もダークプリキュア5達と一緒だなあ！出来る事なら・・・)

更になぎさの脳裏に、有る人物が浮かび上がった・・・

ドツクゾーンに生まれ、闇の戦士としてこの世界にやって来たものの、なぎさやほのかを始めとしたこの世界の人々に触れ、光の世界の素晴らしさを知った少年の事を・・・

なぎさは意を決すると、バッドエンドプリキュア達に話し掛け、

「ねえ、あんた達・・・こつちの世界で暮らしてみない？」

「「「「エツ!」」」」

「バッドエンド王国何かより、絶対こつちで暮らす方が楽しいって!」

「なぎささん!」

なぎさの予想外の発言に、困惑気味のひかりがなぎさの名を呼ぶも、なぎさはそのまま話を続け、

「あんた達が住む所は、私達が捜すからさ・・・どう？」

なぎさの発言を聞き、思わず顔を見合わせたバッドエンドプリキュア達は、困惑気味になぎさを見つめ、

「こつちの世界は、楽しいとは思うけど・・・」

「ウチらは、バッドエナジーを集めな、消滅するつちゆう話やし・・・」

「だったらさあ・・・ブラック先輩がバッドエンド王国にお出でよ!」

「そうそう、ブラック先輩ならあたし達も歓迎するよ！」

（な、なぎささん!）

バッドエンドハッピーとサニーにはやんわり拒否をされ、逆にバッドエンドピースとマーチからは、バッドエンド王国に来て欲しいとなぎさが誘われ、思わずひかりはドキツとして、なぎさの反応を見た。なぎさは一体どう返答するのか、ひかりは不安そうになぎさを見つめるも、なぎさはかなり動揺したようで、

「な、何で私が逆に誘われるのよ?」

「では、この話は聞かなかった事にするわ!」

バッドエンドビューティから、この話は聞かなかった事にすると言われてると、なぎさは心底残念そうな表情を浮かべ、

「いやあ……出来れば、心の何処かには残して置いて欲しいんだけどなあ?」

「「「「……」」」」

なぎさは、ほのかと共に救えなかったキリヤの事を思いだし、バッドエンドプリキュア達を、ダークプリキュア5達のように、闇の世界から自分達の世界へと手を差し伸べたかった。だが、行き成りすぎたかと反省したなぎさは、誤魔化し笑いを浮かべ、

「ア、アハハハ、行き成りすぎたかなあ?じゃあ、そろそろアカネさんの所に行っておまけの品でも貰って来ようか?」

「ワアアイ！」

「しもた！話に夢中ですっかり忘れとった！」

「私は何にしようかなあ？」

「ブラツク先輩も奢ってくれるんだよね!?!だったら、あたしはポリューム有るやつにしようかなあ？」

「私は何でも良いわ・・・そうね、飲み物でも頂こうかしら？」

なぎさの言葉にバッドエンドプリキュア達は素直に従い、席を立った六人は、アカネの待つワゴン車へと歩いて行った。

### 3、約束

早足でTAKO CAFEにやって来たほのかとゆり、二人を見たひかりは、今にも泣き出しそうな表情で慌てて近づき、

「ほのかさん！ゆりさんも来てくれたんですか！」

「ひかりさん、なぎさは!?!」

「ひかり、表情が優れないけど？」

「なぎささんは・・・」

ひかりの視線がテーブル席に注がれると、釣られるようにほのかとゆりもそちらに視

線を向けた。視線の先には、バッドエンドプリキュアの五人と楽しげに談笑するなぎさの姿があり、思わずほのかとゆりは呆然とした。

「た、確かにあんな姿を見れば、ひかりさんが慌てるのも無理ないかも？」

「全く・・・なぎさは何を考えてるのかしら？」

「ハア」

なぎさが、バッドエンドプリキュア達と楽しげに談笑する姿を見て、思わず顔を見合させたほのかとゆりは、溜息を付いた。少し表情を険しくしたほのかは、

「なぎさー！」

「エッ!? ほのか! ゆり! 二人も来てたんだ?」

「来てたんだじゃ無いわよ! ちよつと!!」

ほのかは、なぎさを手招きして呼ぶも、ほのかとゆりも来た事にバッドエンドプリキュア達も気付き、バッドエンドプリキュア達からは、なぎさに見せて居た人懐っこさは影を潜め、ほのかとゆりを見る姿には警戒心が沸き上がっていた。バッドエンドビューティがジイとゆりを凝視すると、口元に笑みを浮かべたゆりも見つめ返し、

「私の居ない時に、つぼみ達にチョツカイを掛けてくれたそうね?」

「元々は、あなたと戦う為に希望ヶ花に出向いたのだけれど、代わりにキュアサンシャインにお相手願ったわ!」

「そう……だったら、今此処で相手をしましうか?」

ゆりとバッドエンドビューティの間に緊張感が走る。表情を変えたなぎさが、バッドエンドビューティを見つめると、他の四人は思わずハツとし、さつきのなぎさの言葉を思い出した。バッドエンドサニーとマーチは、慌てて爪楊枝を手に取り、たこ焼きを刺すと、

「ほらほら、ビューティ、アアアンや!」

「あ、あなた達、何のまね!」

「いいから!いいから!」

そう言うのと、弁当箱におかずを無理矢理詰め込むかのように、バッドエンドビューティの口の中に、交互にたこ焼きを詰め込んでいった。

「ひやめ……てえ!」

次々口の中に運ばれてくるたこ焼きに、何時ものクールさも消え失せ、バッドエンドビューティは、変顔浮かべながら苦しげな表情を浮かべた。

「ちよ、ちよつとあんた達、詰め込み過ぎだつてば!大丈夫!?ほら、これでも飲んで!!」  
なぎさは慌ててオレンジジュースをバッドエンドビューティに差し出すと、バッドエンドビューティは、それを受け取り、流し込むようにたこ焼きを何とか口内から飲み込み、少しゴホゴホ咽せた。

「サニー！マーチ！何のまねよ？」

少し怒ったバッドエンドビューティの周囲に冷気が沸き起るも、他のバッドエンドプリキュアの四人は、バッドエンドビューティに抱き付き、

「ビューティ、落ち着いて！」

「さつき、ブラック先輩と約束したやんか？」

「ブラック先輩の前ではおとなしくしてらっ！」

「ビューティ、堪えて！」

バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチに諭され、バッドエンドビューティもハツとした表情を浮かべるも、

「あれは、あなた達がしただけで・・・ハア、分かったわー！」

冷静さを取り戻し、バッドエンドビューティが溜息を付きながら気持ちを落ち着かせると、ホツとしたなぎさはほのかとゆりに近づき、

「ゆりも、あの子達を刺激しないで！あの子達は、おとなしくTAKO CAFEに食べに来ただけ何だから」

「私も事を荒立たせる気は無いけれど、でもブラック先輩って!?なぎさ、どういう事？」

「私達に分かるように説明して！」

「いやあ、話せば少し長くなるんだけどさあ・・・」

なぎさは、ひよんな事でバッドエンドプリキュア達に懐かれた事を、ほのかとゆり、そして、ひかりに話した。バッドエンドプリキュア達は、根は悪い子達じゃない事も三人に話した・・・

「大体の事情は分かったけど・・・なぎさ、ひかりさんが心配してたよ！」

「なぎさがバッドエンドプリキュアになっちゃうってね」

「嫌だなあ、そんな事無いって！でも、心配してくれてありがとう、ひかり!!」

「い、いいえ！」

なぎさは苦笑混じりに否定した時、ひかりは心の底からホッと安堵した。静観していたバッドエンドプリキュア達が席から立ち上がると、

「ブラック先輩！私達帰るねえ!!」

「何やお邪魔虫も来たようやし」

「エヘヘ！たこ焼き美味しかったよ！」

「ほんとうは、まだまだ食べられるけど・・・」

「マーチ、あなたは食べ過ぎよ！」

「アツ！ちよ、ちよつと待って!!」

なぎさは慌ててアカネに何やら話し掛け、二袋をアカネから受け取ると、バッドエンドプリキュア達の下に歩み寄り、

「はい！さつき約束したでしょう！今日は私も奢って上げるって……これは、お土産!!」  
「「ウワアアア！」」

「良いの？」

バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチはお土産を大いに喜び、バッドエンドビューティは、仲間達の前で、敵である自分達にお土産などを渡して良いのか尋ねると、なぎさは苦笑を浮かべながら、

「あんだ達は、ちゃんと約束守ってくれたからね！」

「そう言う事なら、遠慮なく受け取るわ！」

なぎさが、バッドエンドビューティにたこ焼きの入ったお土産を手渡すと、人懐っこい笑みを浮かべたバッドエンドハッピーが抱き付き、

「ブラック先輩！ありがとう!!またねええ!!」

「うん！さつき言った事、考えておいてよ!!」

「ブラック先輩も、バッドエンド王国に来たくなったら何時でもお出でよ！」

互いに手を振りながら別れたなぎさとバッドエンドプリキュア達を見て、ほのかとゆりは心底呆れたように、

「なぎさ……あんまりこういうのって、良く無いと思うよ！」

「真琴やアン王女が知ったら、あの二人はどう思うか……」



ジョーカーによってトランプ王国から盗まれた秘宝を取返す為、こっちの世界にやって来て居る真琴が知ったら、バッドエンドプリキユアと仲良くしているなぎさを見てどう思うか、ほのかとゆりにそう言われると、なぎさも困惑する表情を浮かべた。確かに真琴やアン王女からすれば、バッドエンドプリキユアはジョーカーの仲間であるのだから、だが、ジョーカーに半ば無理矢理産み出されたバッドエンドプリキユア達は、被害者だと考えたなぎさは、

「でも、トランプ王国の秘宝を盗み出したのは、ジョーカーじゃない！私は、あの子達も被害者だと思う・・・直ぐには無理かも知れないけど、真琴やアン王女も分かってくれるって私は思ってるんだよねえ・・・」

なぎさはそう言うと、さつきまでバッドエンドプリキユア達が座っていたテーブル席を見つめた・・・

バッドエンド王国・・・

戻って来たバッドエンドプリキユア達は、たこ焼きを中に置くと、再び外へと出てきた。

「じゃあ、ブラック先輩が言っていた方法試して見よう！」

「待ってハッピー！気持ちいを合わせるなら、声を出した方が良くないかしら？」

「せやなあ・・・その方が上手く行きそうや！」

「ウン！テレビとかでも前にそんなのやってたよ！」

「ピースはテレビの見過ぎだろう？まあ、良いけど・・・じゃあ、始めよう！」

バッドエンドハッピー、ビューティ、サニー、ピース、マーチは、右手を合わせると、  
「！！ドラゴンよ！私達に力を！！！！」

バッドエンドプリキュア五人の思いが一つになった時、五人の身体から黒いオーラが沸き上がり、見る見る何かの姿へと変化していった。

「あれは・・・竜ちゃん！」

バッドエンドピースが嬉しそうに指さすと、黒いオーラはダークドラゴンへと変化を遂げ、その姿を、バッドエンドプリキュア達は嬉しそうに見つめていた・・・

第九十二話：美墨なぎさとバッドエンドプリキュア！

完

# 第九十三話：レインボーバーストVSバッドエンドバー スト

1、ユメタの夢と焦るランス

妖精学校・・・

妖精学校での一件以来、グレルとエンエンは、講師達の授業を一番前の席に座り、一言も聞き逃すまいとするかのように、勉強に勤しんでいた。

「エンエンとグレル、あの時に比べてエライ変わりよったなあ」

「二人共あゆみ殿を、一日も早く再びエコーに変身させたいと願っているのでござろう」タルトやポップの講師達も、その努力には目を見張り、時には熱心に質問してくる現状を喜んで居た。それに反し、魔王の知り合いでもあるユメタは何処か元気が無かった・・・

「ユメタ、どうかしましたか!?最近元気が無いようですが?」

休み時間、何処か元気のないユメタを見かねて、亀の容姿をした妖精学校の教師は、ユメタに話し掛けた。ユメタは、最初こそモジモジしていたものの、

「あのお・・・ぼ、僕、先生達に話があるの!」

意を決したユメタの表情を見て、亀の教師はユメタの並々ならぬ決意を見て取ると、ココやナッツ、タルトやポップを呼び、共にユメタの話に聞き入った。最初こそ驚いたものの、教師達は皆満面の笑みを浮かべ、

「分かったココ！ユメタのその決意、しかと受け取ったココ!!」

「じゃあ、みんなにその旨を伝えた方が良いナツ！」

「う、うん・・・」

緊張した面持ちで、ユメタは頷いた・・・

その日の授業後、亀の教師は一同に話し掛け、

「今日は、皆さんに残念なお知らせがあります・・・ユメタ、前へ！」

「は、はいー！」

亀の教師に名前を呼ばれたユメタは、ゆっくり前に出ると、亀の教師の横に並んだ。

生徒達は何の話だろうかとザワザワし、ココとナッツに注意される。

「大変な話ではありますが、ユメタは本日を持って・・・妖精学校を辞めるそうです！」

「「「エエエエ!」」」

「本当かよ、ユメタ？」

「一体どうして?」

驚愕する生徒達、グレルとエンエンも心底驚いたようで、ユメタに真偽を問うと、ユ

メタは恥ずかしそうにモジモジしながら、

「うん．．．あのね、僕には夢があるの！お母さんと同じように、悪夢に襲われる人を助けたいの！！僕は勇気がないから、そんな怖い事出来ないって思ってた．．．けど、あの時のエンエンとグレルを見て思ったの！諦めなければ、夢は叶うんじゃないかって：」  
ユメタの脳裏に思い出されるのは、ソドムが送り込んだクラーケンに蹂躪される妖精学校を、グレルとエンエンが必死になつて救おうとする勇姿だった。グレルとエンエンは思わず顔を見合わせキョトンとすると、

「ユメタ、あれは元々、俺の所為で起こった事何だつて言つただらう？」

「結局僕達は、エコーのお陰で妖精学校の中に入れたんだし．．．」

「でも、二人は僕達を助けようと必死だったよ！僕が同じ立場だったら．．．怖くてそんな真似出来なかつたと思う」

ユメタはそう言うのと、グレルとエンエンに微笑んだ。更にユメタは妖精学校の生徒達を見渡すと、目に涙が滲んだ。

「僕は、夢の世界の妖精！夢の世界に帰れば、みんな僕の事を忘れちゃうかも知れない．．．それでも、僕はこの妖精学校に入って、みんなと友達になれて嬉しかったんだ！！」

「ユメタ．．．何言つてんだよ！お前の事を忘れるわけ無いだらう！！」

「グレルの言うとおりだよ！ユメタ、離れていたって、僕達は友達だよ!!」

グレルとエンエンに釣られたかのように、他の生徒達も次々にユメタに温かい言葉を掛け、感極まったユメタの瞳からは大粒の涙が零れ落ちた。

「みんな、ありがとう！みんなの事・・・僕、僕、絶対忘れないよ!!」

「ユメタ!!」

次々に立ち上がり、ユメタに駆け寄った生徒達を、亀の教師も、ココとナツツ達も目を細めて見て居た。教室の端でその光景を見ていたアン王女は、そんな生徒達の温かな交流を見て思わず貰い泣きをし、涙を拭いた・・・

翌日、ユメタの去った妖精学校だったが、誰一人ユメタの事を忘れた者など居なかった。

今日も熱心に勉強に励むエンエンとグレルを見たシャルルは、休み時間にランスに話し掛けると、

「ランス！ユメタは妖精学校を辞め、グレルとエンエンはメキメキ勉強に励んで居る今、この妖精学校で一番の落ちこぼれは・・・ランスシャル!!」

「ガアアアン・・・でランス！」

シャルルに指を指されて注意されたランスは心底驚愕し、そのままヘナヘナ床に倒れ込み、

「そ、そんなの嫌でランス！」

「だったらもつと勉強を．．．シャルル!？」

シャルルはウンウン頷きながらランスを見ると、目の前に居た筈のランスの姿は忽然と消えていた。驚くシャルルにラケルが話し掛け、

「シャルル、ランスならエンエンとグレルの所に．．．」

「シャル!？」

呆れ顔のラケルがランスを指差し、シャルルがランスを見た瞬間、シャルルの目が点になった。ランスは、休み時間も先程の予習をしているエンエンとグレルに話し掛け、

「エンエン、グレル、勉強ばかりしてたら疲れるでランス．．．一緒に休むでランス！」

「俺達は良いよ!なあ？」

「うん、僕達、さっきの所を．．．何？」

「ただ勉強するだけじゃ駄目でランスウウ！」

頬を大きく膨らませたランスが、エンエンとグレルにダメ出しし、持つて来た果物を美味しそうに嚙り出すと、

「ほらほら、休憩しないと一人で食べちゃうでランス」

「いや、俺達は別に要らないし．．．」

顔を見合わせながら困惑するグレルとエンエン、シャルルは顔を真っ赤にして怒り出

すと、慌ててランスに近付き、

「何やつてるシャルウウ！勉強する所か、二人の邪魔をしてえ、何考えてるシャルウウ！！」

シャルルはお腹で体当たりしてランスを転ばすと、ランスは涙目になりながら、

「一番の落ちこぼれになるのは、嫌でランス！」

会話に加わったラケルも、呆れたようにランスに話し掛け、

「それで二人の邪魔をしたケル？」

「だからもつと勉強しろって言ってるシャル！」

「勉強は疲れるランス」

「ハアアア」

ランスの姉と兄にあたるシャルルとラケルは、ランスの不甲斐なさに溜息を付いた。

その時、突然ランスは頭を掴まれ、まるでクレイニングゲームの景品のように宙に浮かび驚愕していると、背後から聞き覚えのある声が聞こえ出し、

「ランスウウ、ちよつと向こうでお話しましょうか？」

「ア、アン王女!？」

「お友達の勉強の邪魔をしては、駄目ですわ！」

アン王女は、口元に笑みを浮かべてはいるものの、その目は明らかに笑って居らず、ラ



ンスは恐怖に引き攣りながら、アン王女に連れられ教室の外に連れ出された。

「ゴ、ゴメンでランスウウ……」

ランスの悲鳴と共に、シーンと廊下は静まりかえり、生徒達は思わずゴクリと唾を飲み込んだ。暫くすると、教室のドアがゆっくり開き、ヨロヨロしながらランスが戻つて来て自分の席に座ると、プリキユア教科書を取り出した。再びアン王女が教室内に戻つてくると、何事も無かつたかのように後ろに回り、再び生徒達を見守つた。

「ランスに何があつたケル!？」

「触れない方が良いシャル」

困惑気味なラケルの言葉に、これまた困惑したシャルルが返事を返した。パフは改めてアン王女を見ると、アン王女はパフを見てニツコリ微笑むも、

「やっぱりあの人……怖い。パフ」

パフは慌てて視線を逸らした……

授業後、亀の教師は、帰り支度をしているエンエンとグレルを呼び止めると、

「グレル、エンエン、二人共見違えたように勉強に励んでくれて、先生も嬉しい限りです  
！」

亀の教師に褒められ、思わず顔を見合わせたグレルとエンエンの二人、グレルは少し

照れくさそうにしながら、

「へへ！俺達、一日でも早くあゆみをエコーに上げてたくて……なあ、エンエン？」  
「うん！僕達が頑張れば、それだけあゆみが再びエコーになれる日が早まるんじゃないかと思つたら……ねえ、グレル？」

グレルとエンエン、二人の思いは一つで、あゆみを一日でも早くエコーに戻して上げる事、その目標に向かって精を出す二人に、亀の教師は満足そうに何度も頷き、

「良い心掛けです！実は、他の講師の方々とも相談したのですが……グレル、エンエン、二人共、人間界に行つてみる気はありませんか？」

「エッ!？」

亀の教師に、人間界に行つてみないかと誘われたグレルとエンエンが驚き、更にグレルは確認するように問い掛け、

「人間界つて言つたら……プリキユア達が暮らす？」

「そうです！きつと教科書を読むだけでは出来ない経験が、あなた方に待つている筈です!!」

亀の教師は、微笑みながらグレルとエンエンに人間界行きを薦めると、思わず二人は顔を見合わせ、

「スゲエエ！でも、俺達で良いの？」

「僕達の他にも優秀なみんなが．．．」

自分達よりも優秀な生徒達は一杯居るのに、自分達で良いのかと困惑する二人、亀の教師はゆっくり首を振り、

「いえいえ、君達も立派に優秀な生徒ですよ！今の君達の姿を、エコーさんにも見て貰いなさい！！」

「エツ!?あゆみに？」

「会いに行っても良いの？」

「もちろんです！」

あゆみに会いに行っても良いと言われ、思わずグレルとエンエンの表情はパツと明るくなり、亀の教師は笑みを浮かべながらコクリと頷いた。

「どうです、行きますか？」

「はい！！」

「分かりました！では、シロップさんに頼み、人間界まで送って貰いましょう．．．それと、アン王女にあなた方の事を頼んでおきます！アン王女を私の代りだと思って、ちゃんと言う事を聞くんですよ？」

「はい！！」

こうしてグレルとエンエンは、アン王女に引率され、人間界へ勉強に向かった．．．

2、ブライト、ウインディVSバッドエンドプリキュア

グレルとエンエンを引率して、七色ヶ丘へとやって来たアン王女だったが、直ぐに伊達眼鏡を掛け、髪をポニーテールに纏め上げると、エンエンとグレルは不思議そうにそんなアン王女を見つめ、

「アン王女、どうしてそんな格好になるの？」

「さっきのまままで良いんじゃない？」

エンエンとグレルに聞かれたアン王女は、少し困惑気味な表情を浮かべ、

「実は・・・事情があつてわたくしは、ソードと顔を合せるのを避けているのです！ですから、このように変装を・・・そうそう、お二人もソードが居る所では、わたくしの事を、決してアン王女と呼ばないようにして下さいね？」

「変装するなら・・・化粧を落とせば良いんじゃない？」

「グレル・・・何か仰有いました？」

グレルの何気ない一言にピクリと反応したアン王女は、グレルをジイと見つめると、思わずその迫力にグレルは一步後退りながら、

「い、いいえ！な、何も言つてません!!」

「フフフフ」

そんなグレルを見て、エンエンは思わず笑うと、アン王女は、今度はエンエンをジイト見つめ、

「エンエン、何か可笑しい事でもありましたか?」

「い、いいえ!可笑しい事何てありません!!」

今度はエンエンが、少し涙目になり、一歩後退りながら返事を返した。二人は顔を見合わせると、小声で話し始め、

「エンエン・・・アン王女って、プリキュア達より迫力ねえか?」

「そ、そうだね、怒らせないようにしないと・・・」

アン王女は、小声でヒソヒソ話をするグレルとエンエンを訝しみ、

「二人共、何か仰有いました?」

「いえ、言ってません!」

「そうですか、では先ずみゆきさん達に会いに行きましょう!」

「はい!!」

アン王女は、グレルとエンエンを抱き上げると、人間界では縫いぐるみの振りをして見るようにと言いつけた。二人は言われる通りに縫いぐるみの振りをしながらも、初めて見る人間界の姿に目を輝かせて居た・・・

ちようど七色ヶ丘の商店街を歩いていると、向こうから学期末テストの為早く学校を

終え、下校していたみゆき、あかね、やよい、なお、れいかを見付けて目を細めた。

「グレル、スマイルプリキュアだあ！」

「みゆき達にも世話になったからなあ．．．ちゃんと挨拶しておこうぜ！」

そんな二人のやり取りを聞いていたアン王女は、笑みを浮かべながら手を上げると、  
「みゆきさん、あかねさん、やよいさん、なおさん、れいかさん！」

突然名前を呼ばれたみゆき達がハツとし、アン王女の姿が目に入り思わず驚愕する  
と、

「エツ!? アン王女? それに．．．グレル! エンエン! 二人もこつちに来てたの?」

「ヨッ、久しぶりい! 妖精学校では迷惑掛けて悪かったな!!」

「あの時はゴメンなさい!」

「ウウン、気にしないで! 今日はどうしたの?」

突然現われた三人に、みゆきが訪ねると、三人は大まかな状況をみゆき達に知らせ  
た．．．

「へえ、こつちの世界に勉強しに来たんかあ」

「二人共、あれから勉強を頑張つて居たのですね!」

「グレル、エンエン、見直したよ!」

「本当!」

「じゃあ、帰ったらあゆみちゃんにも知らせておくね!」

あかね、れいか、なお、やよい、そしてみゆき、一同はグレルとエンエンの頑張りを聞き、思わず目を細めた。アン王女は周りを見渡し、真琴の姿が見当たらない事を気に掛け、

「ソードはご一緒では無いのですか?」

「うん!まこちゃんは、分からない所を先生に聞きたいから、それが終わってから帰るって言ってたよ」

「そうですね．．．先生と言えば、ソードがお世話になってる佐々木先生という方に、ご挨拶に伺いたいのですが、出来ればソードが居ない時に．．．」

「そういう事でしたら、早い方が良いでしょうね．．．では今から学校に戻って、私の方から先生の都合の良い時間を聞き、アン王女にお知らせ致します!」

「そうして頂けると助かります．．．お手間を取らせません!」

アン王女は、深々とれいかに頭を下げた。互いに積もる話もあり、学校に戻ったれいかを除いた一同は、場所を不思議図書館に移動した．．．

バッドエンド王国．．．

バッドエンドプリキュアの五人は、ジョーカーより新たなる銀玉のアカンベエを授

かっていた・・・

「この銀の玉からアカンベエを産み出せば、今までの黒玉で作った時より、数倍強力なアカンベエを産み出す事が出来ます」

「へえ・・・でも、私達には必要無いんじゃない?」

「せやなあ!ウチらには強力な味方が居るし・・・」

バッドエンドハッピーとサニーの会話を聞いたジョーカーは、不思議そうに小首を傾げ、

「強力な味方!?それは誰の事です?」

「エへへへ!それは・・・ナ・イ・シヨ!!」

ジョーカーに問われたバッドエンドプリキユア達は、顔を見合わせ合うと少し笑みを浮かべ、バッドエンドピースは、右手の人差し指を鼻に当て、内緒だとジョーカーに伝えた。ジョーカーは再び不思議そうに小首を傾げ、

「ハア!?!」

「まあ、直に分かるさ!」

普段動じないジョーカーを驚かせた事で、バッドエンドマーチも少し上機嫌でジョーカーに直に分かることからかった。バッドエンドビューティも笑みを浮かべていたが、少し真顔になると、



「ですが、折角ですから頂いて置きましょう！」

バッドエンドビューティに促され、バッドエンドプリキュアの五人は、それぞれ一つずつ銀玉をジョーカーより受け取った。

「では、バッドエンドプリキュアの皆さん、期待していますよー！」

そう言い残し、ジョーカーはトランプの舞いと共に、その姿を何処かに消し去った。バッドエンドプリキュア達は輪になると、

「で、どうする!?直ぐにスマイルプリキュアの下に向かう?」

そう一同に問い掛けたのはバッドエンドハッピー、少しワクワクしながらバッドエンドピースが他の四人に話し掛け、

「ねえねえ、スマイルプリキュアの所にはどうせ行くんだから、その前に、この力を試そうよー!」

「試す!?それは構わないけど・・・」

「何所で試すんだ?」

バッドエンドハッピーとマーチが逆にバッドエンドピースに聞くと、

「エへへへ!私、ブライトとウインディの頭を、どうしても叩かなきゃお腹の虫が治まらないの!パッションは、マーチが叩いてくれたから、気持ちもスツとしたからもう良いんだけどね」

「エッ!? ああ、アレね・・・」

少し惚け顔をしながら、バッドエンドピースの視線を避けたマーチ、バッドエンドハッピー、サニー、ビューティは、

（（あの捏造写真を、ピースは本当だと思ってるんだ？））

バッドエンドマーチがカオルに貰った写真を見ながら、ニンマリするバッドエンドピースを見て、三人は些か驚いた表情を見せた。

「じゃあ、ブライトとウインディの所に出発!」

張り切るバッドエンドピースとは対照的に、他の四人は何処か渋々後に続いた・・・

夕風町・・・

満と薫は、部活の為に学校に残った咲と舞と別れ、アルバイト先である咲の家、PANKAパンへと向かっていた。本格的な夏ももう始まるうとしていて、坂道から海をみると、サーフィンをしている人々の姿が見えてくる。

「・・・薫!」

「ええ、分かってる!」

突然二人は歩みを止めると、前方に歪む空間から現われた五人組を見て身構えた。

「バッドエンドプリキュア!」

「エヘヘヘ！この間の借りを返しに来たもんねえ!!」

「一人で勝てなかったから、仲間を引き連れてやって来たって事かしら?」

「数を増やせば良いってものでも無いわよ!」

満と薫は、ムープとフープがコミュニケーション姿になったクリスタルコミュニケーションを手に持つと、

「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」

二人の身体を光が覆い、満と薫をプリキュアへと変えていく、満の髪は更にポリウムを増し、両肩辺りで左右に跳ね、薫の髪は、ポニーテイルのように束ねられた。

「未来を照らし!」

「勇気を運べ!」

二人の姿が完全にプリキュアへと変化すると、

「天空に満ちる月!キュアブライト!!」

「大地に薫る風!キュアウインデイ!!」

「ふたりはプリキュア!!!」

「聖なる泉を汚す者よ!」

「アコギな真似は、お止めなさい!」

変身を終えたブライトとウインデイがバッドエンドプリキュアを指さすと、バッドエ

ンドプリキュア達はポカンとした表情を浮かべ、

「ねえねえ、聖なる泉って何？」

「ウチら、聖なる泉何て知らんでえ？」

「汚してもないし、まだアコギな真似何か何もしてないよ？」

「変な言い掛かりは止めろよな！」

「私達を貶めようとする魂胆かしら？」

怪訝な表情でブライトとウィンディを見つめる、バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティに、思わず顔を見合わせたブライトとウィンディは、ぱつが悪そうに、

「こ、言葉の綾よ！」

「深い意味は無いわ！」

「そ、それより、私達に用があるんでしよう？」

慌てて話を逸らすように、ブライトがバッドエンドプリキュア達に話し掛けると、バッドエンドピースはポンと手を叩き、

「そうそう、私はどうしてもあなた達の頭を叩きたくて……だ・か・ら、私達と必殺技の勝負しない？」

「必殺技勝負!?!」

「そうそう、私達が勝つたら．．．私があなた達の頭を叩くのおお!!」

そう言うと、バッドエンドピースはニンマリしながら叩くジェスチャーをした。ブライトとウインディはキョトンとするも、

「私達が勝つたら?」

「あなた達はどうするの?」

「このままおとなしく退散．．．アツ!? 美味しいチョココロネって言うのがあるんだよねえ? それを沢山買って上げるうう．．．どう?」

ブライトとウインディに聞かれたバッドエンドピースが答えると、再びブライトとウインディは、呆れたようにバッドエンドピースを見つめるも、

「まあ良いわ! でも、場所を変えましょう!!」

「此処じゃ人が巻き添えになるかも知れない．．．良いわね?」

「OK! 良いよ!!」

ブライトとウインディは、足下に精霊の力を溜めると、一気にジャンプして森の方へ移動し、バッドエンドプリキュア達もその後を追った。

「此処なら滅多に人も来ないし．．．」

「そうね、じゃあ始めましょうか!」

ブライトとウインディが身構えると、バッドエンドプリキュアの五人は不敵な笑みを

浮かべ、

「じゃあ、みんな行くよ！」

バッドエンドハッピー、ビューティ、サニー、ピース、マーチは、右手を合わせると、  
「二二ドラゴンよ！私達に力を!!」

バッドエンドプリキュア五人の思いが一つになった時、五人の身体から黒いオーラが沸き上がり、見る見る何かの姿へと変化していった。

「な、何、あれは!?!」

「竜?!これは・・・」

ブライトとウインディは、バッドエンドプリキュア達の頭上に現われた黒い竜の姿を見て驚愕した・・・

夕風高校・・・

部活の途中だった咲と舞だったが、フラッピとチョッピから森の方で妙な気配を感じると聞き、二人は途中で部活を上がらせてもらい、咲と舞は下駄箱で合流し、急ぎ森へ向かって駆け出した。咲は駆けながらフラッピに話し掛け、

「フラッピ、どういう事なの？」

「フラッピにも良く分からないラピ」

「でも、邪悪な気配では無いチョピ」

「その側に、ムーブとフープの気配も感じるラピ」

「舞、咲、急いでチョピ」

「何だか分からないけど、満さんや薫さんが心配だわ！咲、急ぎましょう!!」

「そうだね・・・」

咲と舞は、森目掛け坂道を駆け上っていった・・・

「あ、あなた達、その姿は!?!」

「まるで、ハッピー達の・・・」

ブライトとウィンディは、目の前のバッドエンドプリキュア達を見て驚愕していた。普段冷静な二人を持ってしても、動揺は隠せなかったが、二人はそれを払拭するように、

「精霊の光よ！命の輝きよ！」

「希望へ導け！二つの心！」

「プリキュア！スパイラル・スター・・・」

「スプラ〜ッッシュ!!」

バッドエンドプリキュア達目掛け、ブライトとウィンディのスパイラルスタースプラッシュが飛ぶ、だが・・・

巨大な黒き竜から放たれた黒き閃光が激突した。次第にスパイラルスターズプラッシュが押され始め、黒き閃光がスパイラルスターズプラッシュを打ち消しながら、ブライトとウインディ目掛け突き進んだ。

「キヤアアア!!」

直撃を受け吹き飛ばされたブライトとウインディが、その勢いのまま地面をゴロゴロ転がった。二人は、ヨロヨロしながらも立ち上がり身構えるも、二人を見つめるバッドエンドプリキュア達は口元に笑みを浮かべ、バッドエンドピースは、ゆつくりブライトとウインディ目掛け歩き出すと、

「エへへへ！私達の勝ちいい!!さっきの約束、覚えてるよねえ?」

そう言うと、何所から取り出したのか、ピコピコハンマーを取り出した。呆気に取られたブライトとウインディの頭目掛け、ピコピコハンマーを振り下ろすと、二人の頭上でピコピコ音が鳴った。

「アア、スツキリしたああ!」

バッドエンドピースが、満足気に仲間達の下に戻った時、

「ブライト!ウインディ!」

「二人共、大丈夫!?!」

駆け付けた咲と舞が、ブライトとウインディを庇うように二人の前でバッドエンドプ



リキュアに身構えると、

「よくもブライトとウインディを・・・」

「今度は私達が相手よ!」

険しい表情を浮かべた咲と舞が、クリスタルコミュニケーションを手に持つも、ブライトとウインディが咲と舞を静止し、

「咲、舞、変身する必要は無いわ!」

「この勝負は、バッドエンドプリキュアが勝った・・・それだけの事」

「でも・・・」

咲と舞を止めるブライトとウインディに、咲が困惑していると、バッドエンドピースがニンマリしながら、

「そういう事、私達は他に用があるからもう行くね!」

「お次はスマイルプリキュアの奴らをのしたる!」

バッドエンドサニーが手をパシッと叩くと、咲、ブライト、ウインディの表情が険しくなり、

「「みゆき達を!」」

舞も顔色変えると、バッドエンドプリキュア達を呼び止め、

「ま、待ちなさい! やつぱりこのままあなた達を行かせる訳には・・・」

「ベエエエ！待たないよおお」

「あたしは命令されるのが大嫌い何だ！」

「まだ戦いたいなら、あなた達もスマイルプリキュアの下に来る事ね！」

バッドエンドハッピー、マーチ、ビューティに拒否をされ、舞の表情が一層険しさを増した。バッドエンドプリキュア達の背後の空間が歪み、五人は歪みの中に入り消え去った。咲と舞は、ブライトとウインディに話し掛け、

「ブライト、ウインディ、一体何があつたの？」

「私達に詳しく話してみて！」

「それは後で話すわ！それより、直ぐにみゆき達に知らせて!!」

「みゆき達に!?!何を？」

「バッドエンドプリキュアが現われても、絶対に戦っちゃ駄目だつて伝えて！」

「エツ!?!」

「今のみゆき達じゃ、スマイルプリキュアじゃ・・・」

「バッドエンドプリキュアには勝てない!!」

咲と舞は、ブライトとウインディから、スマイルプリキュアはバッドエンドプリキュアには勝てないと聞かされ、思わず顔を見合わせて呆然とした・・・

## 3、宿命の対決！

みゆきから、エンエンとグレルがこっちに來ていると聞き、あゆみは一同が待つ不思議図書館へとやって來た・・・

「エンエン！グレル！」

「あゆみいい！」

「ヨッ！あの時は迷惑掛けちまつたなあ」

「ウウン、二人共、良く來てくれたね！」

互いに笑みを浮かべながら、会話を続けるあゆみ、エンエン、グレル、そんな三人の様子を、みゆき達も自分の事のように朗らかな視線を向けていると、突然キャンデイが騒ぎ出し、

「みゆき、みんな、嫌な気配がするクルウ」

「エッ!?まさか・・・」

「バッドエンド王国かいな!?全く、懲りん奴らやなあ・・・」

「でも、れいかちゃんはまだ学校から戻って來てないし・・・」

「れいかなら、きつと気付いて駆け付けてくれる！あたし達は先に行こう!!」

キャンデイから嫌な気配がすると聞かされたみゆき、あかね、やよい、なおの四人、れいかはまだ学校から戻っては居ないものの、れいかなら必ず駆け付けてくるというなお

の言葉を信じ、四人は、バッドエンド王国が現われた場所へと、あゆみ、エンエンとグレル、アン王女を伴い、不思議図書館から向かった・・・

七色中学校・・・

職員室で、佐々木先生とヒソヒソ話をしてたれいかは、アン王女が会いたがっている事を伝えると、佐々木先生は、夜20時ぐらいには何時も家に居るから、その時間なら何時でも良い事をれいかに伝えた。

「では、そのようにアン王女にお伝え致します！」

「ええ、青木さん、わざわざ知らせに来てくれてありがとう！アン王女にもよろしく伝えて下さい!!」

「はい、分かりました！」

れいかが振り返った時、思わずれいかはギクリとして仰け反り、それに気付いた佐々木先生も思わず目を見開いた。何故なら、れいかが振り向いた先には真琴が立っている、

「れいかさん・・・今、アン王女って言ってませんでした？」

「エッ!? エエとですね・・・」

「ま、真琴が、アン王女に会えなくて寂しがって無いかしら、そう二人で話してたのよ・・・

ねえ、青木さん？」

「そ、そうですね！真琴さん、大丈夫ですか？」

佐々木先生が出てくれた助け船に乗り、れいかが話を誤魔化しながら真琴に聞くと、真琴は不思議そうに小首を傾げながら、

「寂しく無いって言えば嘘になりますが、皆さんも、佐々木先生も、ダビィも居てくれますし……」

「そ、そうですね！それは何よりです……そうそう、今こっちに、エンエンとグレルが来て居るんですよ！」

「エンエンとグレルが？」

更に話題を変えようと、れいかはエンエンとグレルがこっちに來ている事を伝えると、真琴もパツと表情を和らげた。れいかは、上手く誤魔化した事でホツと安堵し、

「私も、これからなお達に合流するんですけど、真琴さんも行きませんか？」

「はい、特に用事ありませんし……じゃあ、佐々木先生、お先に失礼します！」

二人は佐々木先生に挨拶し、七色ヶ丘中学校の校舎を出た。人氣が無いのを確認したダビィは、

「真琴、また嫌な氣配がするビィ！」

「エッ!?まさか・・・バッドエンド王国?」

「行きましよう!!」

ダビィからの報告を聞くや、二人は表情を引き締め、空を赤色に染める方角目掛け駆け出した・・・

バッドエンドサニーが作り出した、バッドエンド空間の中で、スマイルプリキュアの到着を待ち続ける五人、お腹を減らしたバッドエンドマーチは、

「待たされるなら・・・キュアブルームの家で売ってる、チョココロネでも買ってくれば良かったよおお」

「あなたは良くお腹が減るわねえ・・・ある意味感心するわ」

「しょうがないだろう・・・」

バッドエンドビューティに呆れられ、バッドエンドマーチが少し不満そうにした時、近所の本屋の本棚からみゆき達が現われ、更にれいかと真琴も駆け付けた。真琴を見たアン王女は、思わずギクリとし、あゆみの背後に隠れてあゆみを苦笑させた。

「バッドエンドプリキュア!また現われたわね!!ダビィ、行くわよ!!」

真琴は、バッドエンドプリキュアを見ると目の色を変え、真琴の合図で、直ぐにダビィがラブリークミューン姿に変化し、真琴はキュアラビーズを取りだし、ラブリーク

ミュージーンにセットすると、

「プリキュア！ラブリック!!」

「L・O・V・E」

ラブリックミュージーンの画面に、真琴が指で「L・O・V・E」と描くと、ダビィがその都度その文字を読み上げ、真琴の身体が光に包まれ、プリキュアへと変化していった。

「勇気の刃！ キュアソード!!」

変身を終えたソードは、両手でスぺード型の形を作り上げると、

「このキュアソードが、愛の剣で、あなたの野望を断ち切つてみせる!!!」

バッドエンドプリキュアの五人を、ソードは右腕で指差しポーズを決めた。バッドエンドピースは、うんざり顔でソードを見ると、

「エエ、またあなたなのおお!? 私達が用があるのは、スマイルプリキュアなのに・・・」

「邪魔やなあ・・・せや! ジョーカーに貰うた、アカンベエを使うらう! アカンベエ! 出てこんかああ!!」

バッドエンドサニーは、右手に持った銀玉を高々と掲げると、近くにあつた自転車を銀鼻をしたアカンベエの姿に変えた。

「アカンベエ、ウチらがスマイルプリキュアと戦こうて居る間、ソードの相手をしときや」

バッドエンドサニーの命を受けたアカンベエは、ソードに対してのみ攻撃を開始した。それを見たバッドエンドハツピーは、みゆき達五人を見ると、

「じゃあ、邪魔者が消えた所で、私達もそろそろ戦おうか？」

「どうしても戦わなきゃ駄目なの？」

以前ダークドリームに言われた言葉が、みゆきの頭の中に思い出された。彼女達に光の温かさを教えられるのは、自分達だけだと言う言葉を・・・

「駄目ええ！」

「さつさと変身しな！あたしは気が立ってるんだ!!」

「私達に怖じ気づいたのかしら？」

バッドエンドピースが両手でバツテンマークを作り、更にマーチが、ビューティが挑発した。何処か見下した態度を取るのに、腹が立ったあかねとなお、二人が真っ先にスマイルパクトを手に持つと、

「上等やんけ！ホンマもんの実力、偽物に見せたるわ!!」

あかねの偽物と言う何気ない一言に、バッドエンドプリキュア達は瞬時に不快そうな表情を浮かべた。なおもあかねに同意し、

「売られた喧嘩・・・買ってあげるよ！」

身構えるあかねとなおだけを戦わせる訳にも行かず、れいかはみゆきとやよいを見つ



め、

「仕方がありませんね．．．みゆきさん、やよいさん、私達も参りましょう！」

「分かった！」

「．．．．．．そうだね！」

れいかの言葉にやよいとみゆきも同意し、五人が横一列に並ぶと、

「[[[[プリキュア！スマイルチャージ!!]]]]」

「キラキラ輝く、未来の光！キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん！じゃんけん．．．ポン！キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心！キュアビューティ!!」

「[[[[5つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア!!]]]]」

変身を終えたスマイルプリキュアと、バッドエンドプリキュアが睨み合いの状態になり、見て居たエンエンとグルルが、驚いたようにあゆみに話し掛け、

「ねえねえ、あの子達って．．．スマイルプリキュアにどことなく似てない？」

「ああ、俺もそう思ってたぜ！」

エンエンとグルルに聞かれ、顔を見合わせたあゆみとアン王女、

「彼女達は、バッドエンドプリキュアと言って、みゆきちゃん達の細胞の一部を得て生まれた存在だから……」

「エエエ!？」

思わず顔を見合わせた驚くエンエンとグレル、グレルは更にあゆみに確認するかのよう

「じゃあ、あいつらもプリキュアなのか？」

「ええ、闇のプリキュア……バッドエンドプリキュアよ!」

「わたくし達の暮らす、トランプ王国の秘宝から生まれた者……」

そう言うアン王女は、バッドエンドプリキュアの事を一人ずつ凝視していった：

夕凧町……

咲は慌ててみゆき達の家に連絡を入れるも、誰一人まだ家には戻って居なかった。咲は困惑気味に、舞、変身を解いた満と薫に視線を向け、

「どうしよう!?!みゆき達、まだ誰も家に帰って来て無いって!」

携帯を切った咲からの報告を聞き、舞、薫、満も険しい表情を浮かべ、

「不味いわねえ……」

「もしかしたら、もうバッドエンドプリキュアと……」

「咲、せつなに連絡して！彼女なら、先にみゆき達の下に向かえるわ」

「そうだね・・・念の為、他のみんなにも知らせておくよ！でも、何があったの？」

「実は・・・」

咲は満と薫の話の話を聞かや、慌てて携帯を手に取ると、慌ただしくプリキュアの仲間達一同に連絡を入れた・・・

みゆき達もスマイルプリキュアに変身し、睨み合う両チーム、バッドエンドハッピーが徐に話し出し、

「ねえねえ、ただ戦うより、私達とお互いの必殺技で勝負しない？」

「必殺技勝負!？」

思わずバッドエンドハッピーの言葉を、ハッピーがオウム返しのように呟くと、バッドエンドハッピーはコクリと頷き、

「そうそう、あなた達はレインボーバーストだっけ？私達は私達の必殺技を、お互いにぶつけ合うの!どう?」

「ほう・・・面白いやん!ウチはエエで!!」

「私も・・・良いよ!」

「あたしも構わない!ビューティは・・・」

サニー、ピース、マーチは同意し、マーチはビューティにどうするか意見を聞こうとするも、ビューティは真剣な眼差しで考え事をしていて、

（これは何かの策!? レインボーバーストは、一度はピーエーロすら破った技：それを知って挑んでくるとは、余程の自信があるのね?）

「ビューティ!?!」

「エツ!?!わ、私も構わないわ!でも、みんな用心した方が良いわ!!」

「だよね・・・分かった、この勝負、私達スマイルプリキュアは受けて立つわ」

ビューティとハッピーも同意し、此処にスマイルプリキュアとバッドエンドプリキュアの必殺技勝負が開始された。バッドエンドハッピーは嬉しそうに、

「そうこなくっちゃ!じゃあ、お先にどうぞ!!」

バッドエンドハッピーに促されたハッピー達だったが、直ぐに気持ちを切り替え、プリンセスキャンダルを召喚すると、

「三三三ペガサスよ、私達に力を!!」

五人がキャンダルを合わせ、ペガサスに力を貸して欲しいと願うと、五人の姿が変化を遂げていく・・・

「プリンセスハッピー!」

「プリンセスサニー!」

「プリンセスピース！」

「プリンセスマーチ！」

「プリンセスビューティ！」

「！！！！プリンキュア！プリンセスフォーム！！！！！！」

五人は、まるでドレスのような衣装を纏い、頭には天使の輪のような光のリングが装着された。それを見たバッドエンドプリキュア達は、口元に笑みを浮かべると右手を合わせ、

「！！！！ドラゴンよ！私達に力を！！！！！！」

バッドエンドプリキュア五人の思いが一つになった時、五人の身体から黒いオーラが沸き上がり、見る見る何かの姿へと変化していった。

「何、あれは!？」

「竜、竜やと!？」

ハッピーが、サニーが驚愕し、見て居たピース、マーチ、ビューティも目を見開き驚いた。黒いオーラは竜へと代り、竜から放たれた黒い光が、バッドエンドプリキュア五人の手に注がれた。五人の手には、先端に竜の顔を象ったロッドが握られ、見る見るバッドエンドプリキュアの姿を変えていった・・・

「ダークプリンセスハッピー！」

「ダークプリンセスサニー！」

「ダークプリンセスピース！」

「ダークプリンセスマーチ！」

「ダークプリンセスビューティ！」

「「バッドエンドプリキュア！ダークプリンセスフォーム！！」」

まさに黒いスマイルプリキュア・・・

バッドエンドプリキュア達は、まるで黒いドレスのような衣装を纏い、頭には天使の輪のような闇のリングが装着された。ダークプリンセスフォームに変化した五人は、服の色こそ違けど、その容姿はスマイルプリキュアにソックリだった・・・

「な、何!?この姿は?」

「私達のプリンセスフォームにソックリだよ?」

「何所まで猿真似すんねん！」

「さ、さすがに驚いたよ！」

「驚いている暇はありません！皆さん!!」

ビューティに促され、ハッと我に返った四人、五人は頷きあうと、

「届け！希望の光!!」

「「羽ばたけ、未来へ！」」

五人は五色のペガサスに跨るや、上空高く舞い上がった。五色のペガサスは、上空で宙返りすると、

「プリキュア！レインボー・バースト!!!」

バッドエンドプリキュア目掛けレインボーバーストが放たれた。時を同じくして：

「轟け！絶望の闇!!」

「堕ちよ！闇の世界へ!!」

「プリキュア！バッドエンド・バースト!!!」

巨大な闇の竜の背中に乗ったバッドエンドプリキュア達は、巨大な闇の竜の口から黒いブレスを放った。激突した両者の技と技、アカンベエと戦闘しながらもソードが、あゆみが、キャンディが、アン王女が、皆成り行きを見守っていたが、レインボーバーストとバッドエンドバーストではその力は歴然だった。呆気なくレインボーバーストは破られ、

「キャアアアア」

スマイルプリキュアの五人が、悲鳴を上げながら吹き飛ばされ、プリンセスフォームを解除された五人は、ノーマル状態に戻っていた。

「ハッピー！サニー！ピース！マーチ！ビューティ！みんな、みんな大丈夫!」

心配したあゆみは、咄嗟にハッピー達の下に駆け出し、声を掛けるも、五人からは呻

き声が聞こえるだけだった。エンエンとグレルも目を見開いて驚愕し、

「嘘でしょう!?!」

「そんな・・・スマイルプリキュアが、負けちゃった!?!」

「ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ・・・嘘クル、みんなが負けるなんて嘘クルウウウ!!」

キャンディは、涙ながらに絶叫し、ハッピー達の下へと駆け寄った。

レインボーバーストは、バッドエンドバーストの前に完全敗北を喫した・・・

第六十三話：レインボーバーストVSバッドエンドバースト

完



## 第九十四話：ロイヤルレインボーバースト

## 1、諦めない心

スマイルプリキュアは、レインボーバーストをバッドエンドプリキュアに破られ、バッドエンドプリキュアの前に敗北した。バッドエンドプリキュア達は、楽しみにしていたスマイルプリキュアとの戦いだったが、呆気なく決着した事に、落胆の表情すら浮かべていた……

「エエエ!? もうちよつと強いと思つてたのになあ……」

「ウチらの事、偽物言うとなつたなあ? ほな、その偽物に負けたあんたらは何やろうなあ?」

「キャハハ! 私達が強すぎたんだからしょうがないよ!!」

「チツ、こんな奴らに、バッドエンドバーストを使う事も無かつただろう……」

「そうね……アカンベエで十分だったようね」

バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの蔑む声が、スマイルプリキュア達の耳にも聞こえて来る。だが、反論したくても彼女達は出来なかった。バッドエンドプリキュア達の言葉は、事実だったのだから……

俯きながらも、悔しげな表情を浮かべるサニーとマーチ、一度はピエロさへ退けた事で、慢心していた二人の自信は打ち砕かれた。ハッピーの脳裏に、ダークドリームの言葉が思い返されてくる。友情の大切さを知った、バッドエンドプリキュアは強いと言葉を・・・

(ダークドリームの言う通りだった・・・)

自信を失いそうなスマイルプリキュア達、駆け寄ったあゆみとキャンディの言葉も、彼女達の心には届かなかった。一方銀玉となつて更なる強化をされた自転車アカンベエ相手に、キュアソードもまた苦戦していた・・・

「そんなあ!? ホーリーソードを跳ね返すなんて・・・」

ソードの必殺技ホーリーソードも、強化されたアカンベエの前では通用しなかった。車輪をグルグル回したアカンベエの衝撃波を受け、ソードはスマイルプリキュア達の側に吹き飛ばされた。

「ソード!」

思わずアン王女は、顔色を変えソードの名を叫ぶと、ソードは朦朧とする意識の中、(エッ!? 今、アン王女の声が聞こえたような・・・)

アン王女の声が聞こえた気がして、ソードは思わず辺りをキョロキョロするも、その油断をアカンベエは見逃さず、ソードはアカンベエの衝撃波を再び受け吹き飛ばされ

る。険しい表情を浮かべながら、アン王女はあゆみに話し掛け、

「あゆみさん、キャンディを連れてこちらに！」

「でも……」

「失礼ながら、今のあゆみさんでは、返って彼女達の負担を増やしてしまうだけですわ  
！」

「……わ、分かりました！キャンディ!!」

あゆみは軽く唇を噛むも、アン王女が言ってる通り、エコーになれない自分では、返ってハッピー達の迷惑になると思い、キャンディを連れてアン王女の下に戻った。

（あゆみ……）

そんな悔しげな表情を浮かべるあゆみを見て、グレルとエンエンは思わず手に力を込めた。

アカンベエは、ヨロヨロしながら立ち上がったソードと、スマイルプリキュアに対し、両手でペダルを回し始めると、身体に付いたタイヤが高速で回転しだし、そこから先程以上の衝撃波を出して、六人のプリキュアを攻撃した。パワーアップしたアカンベエに対し、一同は劣勢に陥り悲鳴を上げた。バッドエンドプリキュア達は、そんなプリキュア達を見て残念そうな表情を浮かべると、

「アアア、私達だけじゃなくて、アカンベエ相手にもあんなに苦戦しちゃう何て……」

「正直、ガツカリやなあ」

「私達を偽物何て言うから、罰が当たったんだよ！」

「しかし、不甲斐ない奴らだなあ・・・」

「今のスマイルプリキュアは、私達に敗れた事にショックを受けた抜け殻同然・・・そんな彼女達なら、アカンベエでも十分でしょう！」

バッドエンドビューティは、状況を冷静に分析し、自分達に敗れた事で、スマイルプリキュアは精神的に弱っている事を見抜いた。あゆみに抱かれていたキャンディは、ハッピー達の危機を目の前で見ると、目に涙を為ながら、

「ハッピー！みんなあ、頑張るクルウウ!! キャンディも、キャンディも一緒に戦うクルウウ!!」

そう叫んだかと思うと、キャンディはその場で藻掻き、あゆみの手からスルリと逃れると、ハッピー達の下へと再び駆け出した。

「「「キャンディ!?!」」」

泣きながらこちらに駆け寄って来るキャンディに気付き、ハッピー達は思わずハツと我に返り、

「キャンディ、来ちゃ駄目！」

「ウチらは大丈夫や！」

「うん、だからそこで見て居て！」

「あたしたちは……こんな事で挫けない！」

「諦めるものですか……皆さん！」

「みんなあ……分かったクル！」

ビューティの合図の下、再びプリンセスキャンドルを手に持った五人が、プリンセスフォームに変化し、キャンディは、スマイルプリキュアの言葉を信じ、その場に立ち止まり力強く頷いた。バッドエンドプリキュア達は、そんな彼女達を見ると口元に笑みを浮かべ、

「へえ、またレインボーバーストを使うんだあ？」

「お手並み拝見といこうやないか！」

バッドエンドハッピーが、バッドエンドサニーが、成り行きを見守った。

「届け！希望の光!!」

「羽ばたけ、未来へ！」

五人は五色のペガサスに跨るや、上空高く舞い上がった。五色のペガサスは、上空で宙返りすると、

「プリキュア！レインボーバースト!!!」

自転車アカンベエ目掛け、レインボーバーストが放たれた。それにタイミングを合わ

せたかのように、ソードがジャンプしながらホーリーソードを放った。二つの技が合わさり、その勢いのままアカンベエ目掛け飛んだ。アカンベエは、大汗かきながら必死にペダルを漕ぎ、タイヤをフル稼働させると、衝撃波を放ちプリキュア達の技を相殺させた。バッドエンドピースは、口に手を当てて笑いを堪える表情で、

「プププ、残念でしたあー！」

「結局口だけかよ？」

バッドエンドマーチも不愉快そうに吐き捨てるも、ただ一人バッドエンドビューティは、ハツとしたようにスマイルプリキュアを指差し、

「いえ、彼女達の目を良く見て見なさい！彼女達は……まだ諦めてない!!」

バッドエンドビューティの言葉を表すように、何度もレインボーバーストを試みるスマイルプリキュア達、その行為に刺激されたかのように、

「キャンディも、キャンディも、みんなと……みんなと一緒に戦うクルウウウー！」

キャンディの絶叫と共に、キャンディの背後から、オーラのように鳥のような炎のシエルエツトが沸き上がった。

雲の園……

ハツとして首を上げた鳳凰は、何かに呼ばれたような気配を感じ、塔から飛び立ち、下

界へと向かった。

「長老、鳳凰はどうしたんでしようか？」

ムササビのような妖精に聞かれた、長老と呼ばれた白い髭を蓄えた老人は、小首を傾げながら、

「さあのおう……嘗て闇に世界が飲まれた時のように、鳳凰は何かの気配を感じたのやも知れんのおう……」

二人は、下界に舞い降りた鳳凰の姿が消え去るまで目で追った……

スマイルプリキュアの力になりたいと願ったキャンディ、更にあゆみにも異変が起こり、

（みんな、みんな頑張ってる！私も……みんなの力になりたい！もう一度、もう一度だけでも良い……私もキュアエコーになって、みんなと一緒に……戦いたい!!!）

そう心に願ったあゆみ、その願いを叶えるかのように、あゆみとグレル、エンエンの身体を白い光の柱が包み込んだ。スマイルプリキュアも、ソードも、アン王女も、その光景に驚き、

「あゆみちゃん!?これは、メルヘンランドであゆみちゃんが、初めてエコーになった時と同じ光？」

「せや！なら、あゆみは・・・」

「そうだよ！きつとあゆみちゃんは・・・」

「うん！再びエコーに・・・」

「エエ、再びキュアエコーに・・・」

「「「変身出来る!!」」」

ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティの瞳に、輝きが宿ったのに反し、バッドエンドプリキュア達は、皆怪訝な表情で光に包まれたあゆみを見た。キャンデイも嬉しそうに光の柱を見て居ると、キャンデイの心に誰かが話し掛けてきた。

（キャンデイ、キャンデイもあゆみに力を貸して欲しいデデ）

「クルウ!?」

（あゆみを再びプリキュアにしたいと思っている、グレルとエンエンが揃った今、キャンデイが三人に力を貸してくれれば・・・）

（あゆみは、必ず再びエコーになれる!!）

「その声・・・アンデルセン！二人の声が聞こえるクルウ!!分かったクルウ!!」

キャンデイはコクリと頷くと、ロイヤルクロックを取り出した。あゆみと共に、白い柱の中に居たグレルとエンエンは大慌てで、

「ウワアア!?何だこれは?」



「ぼ、僕達、一体どうなっちゃったの?」

「これは、あの時の!? だったら・・・アンデルセン! 居るんでしよう? お願い、私はもう一度プリキュアに・・・キュアエコーになりたいの!! お願い、力を貸して!!!」

「エエエ!!」

驚愕するグレルとエンエンを余所に、あゆみは必死にアンデとルセンに話し掛け、もう一度エコーになれるように力を貸して欲しいと願った。キラキラ輝く光の中から、あゆみの持つて居たスイंकパクトと、真つ二つに折れたリボンデコルが姿を現わし、あゆみとグレル、エンエンの耳に声が聞こえてきた。

「あゆみ、あゆみとキャンディの強い願いが合わさった今なら、あゆみをもう一度エコーに出来る筈!」

「あゆみはスイंकパクトを、グレルとエンエンはリボンデコルを手につつせせ」

「そして、三人で願うんだ!」

「もう一度、あゆみをキュアエコーにつて!!」

「そうすれば、あゆみはエコーになれるのか?」

「僕、やるよ!」

グレルとエンエンは頷き合い、二人であゆみを見つめると、あゆみもコクリと頷いた。

三人は気持ちを合せたかのように、

「私をー！」

「あゆみをー！」

「もう一度、キュアエコーに!!」

「みんなの力を合わせるクルウ！」

キャンディは、ロイヤルクロックの上に付いているボタンをカチリと押した。針が数字の1を指さすと同時に、あゆみ達を覆っていた光の柱が消え去り、グレルとエンエンが、そして、目を瞑って居たあゆみの目がゆっくり開いた。

「あゆみ、今スマイルパクトは・・・スマイルパクトへと進化したデェー！」

「その力で、スマイルプリキュアを助けて上げてセセー！」

「六人目のスマイルプリキュア！キュアエコーとして!!」

（私が、六人目のスマイルプリキュア・・・）

「あゆみちゃん！」

ハッピー、ピース、マーチが、

「あゆみ！」

サニーが、

「あゆみさん！」

そして、ビューティ、ソード、アン王女が、皆口元に笑みを浮かべながら、あゆみの

姿を見た。

あゆみの手には・・・スイंकパクトが進化し、ハッピー達と同じスマイルパクトが握られ、真つ二つになっていた白いリボンデコルは、完全に元の姿を取り戻していた。

「ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、私も一緒に戦う・・・スマイルプリキュアとして！」

あゆみは、スマイルパクトを開き、リボンデコルをスマイルパクトにセットすると、「プリキュア！スマイルチャ〜〜ジ！」

あゆみはそう叫ぶと、スマイルパクトのパフを、身体の光輝く場所に付けていくと、あゆみの身体を、光の衣装が覆っていく。髪は茶色からクリーム色へと変化し、両脇をリボンで止めている三つ編みの髪が、足下まで伸び、胸とお腹辺りに大きなリボンを付けた、嘗てと同じ、キュアエコーの姿へと・・・

「思いよ、届け！キュアエコー!!」

キュアエコーは、六人目のスマイルプリキュアとして、再びその姿を露わにした!!

2、プリンセスエコー

キュアエコー、復活!

エコーは、力を貸してくれたグレル、エンエン、そしてキャンディに微笑み掛け、ア

カンベエに苦戦するスマイルプリキュアとソードに合流した。

「ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、私も一緒に戦う！六人目のスマイルプリキュア・・・キュアエコーとして!!」

「ウン！またエコーと一緒に戦える何て!!」

「ホンマや！しかも、ホンマに六人目のスマイルプリキュアになるとは驚きや!!」

「うん！新たなポーズも考えなきゃね!!」

「アハハ、そうだね・・・でもその前に」

「はい、アカンベエを浄化しましょう!」

エコーが加わり、ハッピー達は、気力が漲ってくるかのように感じられた。更に、そんな彼女達の耳に、鳥のような声が聞こえると、見る見るその物体は下降し、キャンデイの前へと降り立った。それは雲の園からやって来た鳳凰で、鳳凰は周りをキョロキョロすると、キャンデイは不思議そうに小首を傾げ、

「ちみは誰クル?」

「ひなたを呼んだのは君かい!?!・・・君からは、ポルンやルルンと同じような気配を感じる!あつちの子達からは、ひかりやほのかと同じような力も感じる!あつちの子達は・・・どこことなくぎさに似て居るような気も・・・」

鳳凰は、キャンデイを見てポルンとルルンを、スマイルプリキュアを見てひかりとほ

のかを、バッドエンドプリキユアを見てなぎさを思い出していた。キャンデイは目を見開いて驚き、

「ポルンとルルンを知ってるクル!?二人共、キャンデイの友達クル!」

「ひかりさんやほのかさん、なぎささんの事も知ってるの?」

鳳凰はひなたと名乗り、ポルンとルルン、ひかり、ほのか、そしてなぎさの名を出した事で、キャンデイも、ハッピーも少し驚いた表情を見せた。ひなたも驚いたような表情を浮かべ、

「ポルンとルルンの!?二人はひなたの友達!ひかりやほのかもひなたの友達!なぎさも・・・一応友達!」

ひなたはスマイルプリキユアを見ながらそう呟いた。呆気に取られていたバッドエンドプリキユア達だったが、

「何かあの鳥・・・ブラック先輩には棘のある言い方してたね?」

「ブラック先輩、何かしたんやろうか?」

「足の臭いを嗅がせたとか?」

「焼き鳥にしようとしたとか?」

鳳凰の言葉を聞いたバッドエンドピース、サニー、ハッピー、マーチが、あれこれ推測していると、バッドエンドビューティは溜息を付きながら、

「ハアア・・・あなた達、ブラックに聞かれたら怒られるわよ?」

「「「エヘヘヘ」」」

バッドエンドビューティは、呆れたように仲間達を諭すと、四人は同じような仕草で舌をペロツと出して頭を搔いた。

（ブラック先輩!?!）

ソードとアン王女は、バッドエンドプリキュア達が、ブラックの事をブラック先輩と呼んだ事に眉根を顰めた。

「ポルンやひかりの友達なら・・・君達もひなたの友達!君からはひなたに近い力を感じる・・・ひなたの力を君に貸して上げる!!」

ひなたの身体が光に包まれると、エコーは温かな力に包まれた・・・  
（この力・・・心が安らいでくる!）

エコーは目を閉じ、心地良い気持ちに身を預けていると、エコーの目の前にゆっくりと何かが舞い降りてきた。不思議そうにエコーが手に取ってみると、

「これは・・・プリンセスキャンドル!」

「「「エッ!?!」」」

エコーの手にもプリンセスキャンドルが握られた事で、ハッピー達五人も思わず驚きの声を上げた。エコーは、手に取ったプリンセスキャンドルをマジマジと見つめると小

首を傾げ、

「でも、みんなのと違い、私のはフェニックスのような顔が付いてる・・・」

「そう、それがひなたが君に与えた力！ひなたが分けた力を、そのアイテムに変えたんだ！！」

「私にも、プリンセスキャンドルが・・・ウン！！」

エコーは頷き、プリンセスキャンドルを空に向けて掲げると、

「鳳凰よ、私に力を貸して！！」

エコーの身体を光が包み込み、ハッピー達と同じようにエコーの姿が変化していった。ハッピー達と同じ光のドレスのような衣装を纏い、お腹に付いていた大きなリボンには、胸のリボンと合わさったかのように、より一層大きなリボンが胸に装着された。頭には天使の輪のような光のリングが装着され、中央には王冠のようなアイテムが、その両脇には光の羽根のようなものが付いていた。エコーのツインテールの髪は更に伸び、内巻きにカールされていた先端の髪が、膝までカールされていた。

「プリンセスエコー！！」

プリンセスキャンドルを手を持ったエコーが身構えた。

「今クルー！みんなの力を合わせるクルウウ！！」

キャンディは、もう一度ロイヤルクロックの上に付いているボタンをカチリと押し

た。針は動き、数字の2に合わさると、ロイヤルクロックからフェニックスが舞い上がり、エコーの身体を包み込み上昇させる。エコーはプリンセスキャンドルをスマイルプリキュアに向けて構えると、エコーの背後に、巨大なフェニックスのシルエットが浮かんだ。

「集え！五つの希望の光!!」

「[[[[羽ばたけ、光輝く未来へ!]]]]」

ハッピー達五人は、五色のペガサスに跨るや、エコーに導かれるように上空高く舞い上がった。五色のペガサスは、上空でフェニックスと合わさると、フェニックスは命を宿したかのように咆哮を上げた。

「[[[[プリキュア!ロイヤルレインボー・バースト!!!!]]]]」

エコーも加わり、レインボーバーストはロイヤルレインボーバーストへと進化し、フェニックスの口から、強烈な虹のエネルギー波がアカンベエ目掛け放たれた。アカンベエは必死にペダルを漕ぐも、ロイヤルレインボーバーストは、一瞬でアカンベエを包み込んだ。ハッピー達六人は、キャンドルの炎を吹き消し、キャンドルをクルクル回してアカンベエに背を向けポーズを決めると、

「[[[[輝け!ハッピースマイル!!]]]]」

背後で爆発が起こり、アカンベエは浄化された・・・



「ロイヤルレインボーバースト!？」

「へ、へエ、中々やるやん!」

「ウツ・・・で、でも、私達のバッドエンドバーストの方が凄いもん!」

「そうでなくちゃな・・・燃えてきた!」

「甘く見ない方が良いわ!あの力、以前とは比べものにならないわ!!」

バッドエンドプリキュアの目の色が変わり、再びスマイルプリキュアの六人と視線を交差させた。

### 3、止めなさい!

ソードは、キラキラ目を輝かせながら、六人となったスマイルプリキュアを見つめると、

「ロイヤルレインボーバースト・・・凄い!これなら、バッドエンドプリキュアにだって負けない!!」

再び希望を見いだしたように、ソードはスマイルプリキュアを見つめた。バッドエンドプリキュア達は、再びスマイルプリキュアに近付くと、

「アカンベエをやっつけたんだ・・・ねえ、もう一回私達と勝負しよう!」

「ウチらのバッドエンドバーストと、あんたらのロイヤルレインボーバースト」

「どっちが上か勝負しよう！」

「今度は歯応えありそうだな・・・勝負だ!!」

「・・・油断はしない!こちらも本気で行く!!」

バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティから、再び勝負を挑まれたスマイルプリキュアの六人、六人は顔を見合わせ合うと、互いに頷き合い、

「分かった!その代り、他のみんなに手出ししないで!!」

「もちろんしないよ!」

一同を代表したハッピーが勝負を受け、バッドエンドハッピーも、他の妖精やソード達に手を出さない事を約束する。再び一定の距離を取って見つめ合う両チーム、その時アン王女の側で赤く発光し、せつなが姿を現わすと、その側には咲達四人、のぞみ達六人、ラブ達三人、つぼみ達三人、響達四人に、ひかりとほのか、ゆりの姿があった。

「じゃあ、私はなぎささんを連れて来るわね!」

「うん!お願いね、せつなさん!」

ほのかの言葉にせつなは軽く頷き、再び何処かへと消え去った。えりかは首を傾げながらほのかに話し掛け、

「なぎささんと連絡取れないの?」

「さっきなぎさからメールが来て、今家庭教師が終わったから、迎えに来て欲しいって連

絡があつたの！それでせつなさんに頼んで……」

そうほのかが話して居ると、くるみの背後が赤く発光し、なぎさを連れさせたせつなが戻つて来た。くるみはそれに気付かず、思わず変顔を浮かべると、

「なぎさに家庭教師のアルバイトを頼む何て……随分酔狂な人も居るわね？」

「く、くるみ、言い過ぎよ！」

ほのかの話を聞いていたくるみが、呆れたような表情でポツリと眩き、かれんは、頬を膨らましているなぎさに気付き、慌ててくるみを窘めた。くるみの耳にそつと顔を近づけたなぎさは、

「チャラチャラ！チャラチャラチャラチャラ……」

そう何かの時代劇のテーマソングを口走り、くるみの首筋を指で押すと、驚いたくるみがパニックになり、ミルクの姿になってかれんにしがみつき、一同を笑わせる。

「ミルク！何好き勝手言ってるのよ!!」

「な、なぎさ!?!脅かさないでミルク……」

「私が居ないと思つて、好き勝手言つてくれちゃつてさ」

なぎさが頬を膨らませながら、ミルクに文句を言っている姿を見たほのかは、思わずクスリと笑い、

「家庭教師って言つても……体育の家庭教師で、走り方を教わりたいんですつて」

「そうそう、走り方教えてお金貰える何て、良いアルバイト見付けたわ!」

なぎさが腕組みしながらウンウン頷いてると、

「成る程、そう言えば最近、子供が駆けっこで速く走れるように、家庭教師を依頼する人が居るとか、前にテレビでやってたのを観たよ!」

響もウンウン頷きながら、納得した表情を浮かべた。雑談に興じて居た一同であったが、ハッピー達とバッドエンドプリキュア達が、睨み合う状況に気付いた。なぎさは顔色を変え、

「な、何!? 何でハッピー達とバッドエンドプリキュアが?」

満と薫は、動揺するなぎさや他の一同に教えるように、

「バッドエンドプリキュアは、新たに五人で繰り出す必殺技を編み出したの!」

「さっき私と満も、バッドエンドプリキュアと必殺技勝負をしたんだけど、私達は、彼女達のバッドエンドバーストに敗れた!」

「エエエエエ!」

満と薫が、バッドエンドプリキュアに敗れたという報告を聞き、一同は思わず声をだして驚愕した。二人がプリキュアになったブライトとウインデイの實力は、一同も良く知っていたのだから・・・

なぎさは改めてバッドエンドプリキュアの五人を見つめ、

「バッドエンドバースト!?あの子達、何時の間に・・・」

一同に説明を終えた満は、顔から汗を滴り落としながら、

「不味い!今の子達じゃ、バッドエンドプリキュアには・・・エツ!?エコー?みんな、見て!あゆみがエコーの姿になってるわ!!」

「本当だ!あゆみちゃん、何時エコーになれるようになったんだろう?」

指を指した満に釣られるように、一同がエコーに気付いてざわめき、ラブは不思議そうに首を傾げた。ひかりはハツとして何かに気付くと、

「なぎささん、ほのかさん、あそこにひなたも居ます!」

「エツ!」

ひかりの指さす場所を見ると、確かにひなたがキャンディの側に居て、ハッピー達とバッドエンドプリキュア達を見つめていた。なぎさは困惑し、

「一体、何がどうなってるの?」

アン王女は、一同がやってきた事に気付き、グレルとエンエンを伴い一同に近付くと、  
「それは、わたくしからお話致しますわ!」

「アン王女!?何時こっちに?」

「ええ、グレルとエンエンの付き添いで今日こちらに、何故あゆみさんがキュアエコーになれたかと言うと・・・」

アン王女は、手短かに状況を一同に知らせた。ハッピー達がバッドエンドプリキュア達に必殺技勝負を挑まれた事、一度はレインボーバーストを破られ敗北したものの、ハッピー達を信じるキャンディやあゆみ、諦めないハッピー達の思いが奇跡を呼び、グレルとエンエン、そしてキャンディの力を借りてエコーに復活出来た事、ひなたが力を貸しに来てくれた事を語った・・・

そんな中、遂に両者が動き、バッドエンドプリキュア達は右手を合わせると、

「一二三ドラゴンよ！私達に力を！！一二三」

バッドエンドプリキュア五人の思いが一つになった時、五人の身体から黒いオーラが沸き上がり、オーラは黒き竜へと姿を変えた。五人の手には、先端に竜の顔を象ったロッドが握られ、見る見るバッドエンドプリキュアの姿を変えていった・・・

「ダークプリンセスハッピー！」

「ダークプリンセスサニー！」

「ダークプリンセスピース！」

「ダークプリンセスマーチ！」

「ダークプリンセスビューティ！」

「一二三バッドエンドプリキュア！ダークプリンセスフォーム！！一二三」

「ダークプリンセスフォーム！！」

(あれが、前にバッドエンドプリキュア達が言ってたダークドラゴン!?)

なぎさ達は、スマイルプリキュアにそっくりになったバッドエンドプリキュアを見て、更なる驚きを見せた。

キャンディは、再びロイヤルクロックの上に付いているボタンを押すと、針は数字の3を指し、

「集え！五つの希望の光!!」

「!!!羽ばたけ、光輝く未来へ!」!!!

ハッピー達五人は、五色のペガサスに跨るや、エコーに導かれるように上空高く舞い上がった。五色のペガサスは、上空でフェニックスと合わさると、フェニックスは命を宿したかのように咆哮を上げた。

「!!!プリキュア!ロイヤルレインボー・バクスト!!!!!!!」!!!

ハッピー達は再びロイヤルレインボーバーストの態勢に入り、負けずとバッドエンドプリキュア達も、

「轟け!絶望の闇!!」

「!!!堕ちよ!闇の世界へ!!!」!!!

「!!!プリキュア!バッドエンド・バクスト!!!!!!!」!!!

巨大な闇の竜の背中に乗ったバッドエンドプリキュア達は、巨大な闇の竜の口から黒

いブレスを放った。再び激突した両者の技と技、その威力は拮抗し、互いの中間地点で燻（くすぶ）り合った。見て居た一同からぎわめきが沸き起り、

「あれが、エコーが加わったロイヤルレインボーバースト……」

「そして、あつちがバッドエンドバースト……」

「両方共凄いい威力ね？」

ゆりが、のぞみが、エレンが、両者の攻防を見て思わず眩き、ジイと見て居たほのかは、

「不味いわね……あのまま続けさせたら、空間で蓄積されたエネルギーが膨れ暴発し、ハッピー達も、バッドエンドプリキユアも、互いの衝撃で吹き飛んでどうなるか分からないわ！」

ほのかの言葉を聞いた瞬間、なぎさはほのかの手を掴むと、

「ほのか、力を貸して！あの子達を……止める!!」

「待って、なぎさ！無茶……なぎさ?!」

なぎさが、この戦いを見て居られないと言いたげに、今にも泣き出しそうな表情を浮かべているのに気付いたほのかは、なぎさにコクリと頷き、

「分かったわ！止めましょう、彼女達を……」

「ありがとう、ほのか！」



なぎさとほのかは、互いを見つめ頷きあうと、ハートフルコミュニケーションに手をかざし、互いの手を取り合って同時に叫び、

「デュアル・オーロラ・ウェーブ!!」

二人の身体をオーロラが包み込み、なぎさとほのかを、プリキュアへと変えていく…

「光の使者・キュアブラック!!」

「光の使者・キュアホワイト!!」

「ふたりはプリキュア!!!」

ブラックとホワイトは、ロイヤルレインボーバーストとバッドエンドバーストが燻り合う中間地点目掛け駆け出すと、ひかりが、ゆりが顔色を変え、

「ブラック！ホワイト！」

「無茶よ！二人共、戻って!!」

ひかりも、ゆりも、慌てて変身アイテムを手に持つも、ブラックとホワイトは、手を握り合いながら燻り合うエネルギー波に飛び込むと、

「あ、あんた達…」

「戦いを…」

「止めなさああい!!」

ブラックとホワイトは、手を繋ぎ合いながら球体状のバリアを張り、そのバリアは威

力をどんどん増しながら虹色に輝きだした。

「エツ!? ブラック、ホワイト?」

「どうしてブラック先輩が?」

「私は・・・私は・・・あんた達が戦い合う姿何て・・・見たくなあああい!!」

ブラックの絶叫と共に、ハッピー達も、バッドエンドプリキュア達も、思わず互いに技を出すのを止め、空間に燻り合っていたエネルギーも徐々に縮小し、やがて消滅した。「ね、ねえ、今バッドエンドプリキュア達・・・ブラックの事をブラック先輩って言ってなかった?」

「うん、あたしにも聞こえた! どう言う事?」

咲に聞かれた一同、美希も咲の言葉に同意し、聞こえたと伝えると、一同も聞こえたことわづいた。そんな騒ぎも何所吹く風、ブラックとホワイトは、先ずハッピー達六人に話し掛け、

「みんな、怪我は無い?」

「大丈夫?」

ブラックとホワイトに労られ、微妙な表情を浮かべたハッピー達は、

「怪我という怪我はしてないけど・・・」

「今あいつら、ブラックの事をブラック先輩言うとしたようやけど・・・」

「どう言う事？」

「アハハハ、それについては後でみんなに話すよ！」

ハッピー、サニー、マーチに聞かれたブラックは、苦笑を浮かべながら後で訳を話すと伝え、ホワイトは優しそうな目でエコーを見つめると、

「またエコーの姿になれたのね？良かった！」

「はい！アンデヤルセン、グレルとエンエン、それにキャンデイやあの鳳凰が力を貸してくれて……」

「そっかぁ……ひなた、久しぶり！」

「元気そうで何よりだわ！」

「ウン、プリキュア達も、ひかりも、元気そうで良かった！やっぱりこの子達は君達の友達だったんだね」

「うん！大切な友達……ひなた、エコーに力を貸してくれてありがとう!!」

ホワイトは、ニッコリ微笑みながらひなたに感謝した。ひなたの話題が出た事で、バッドエンドサニー、ピース、ハッピー、マーチも会話に加わり、

「せや！ブラック先輩、この鳥に何かしたん？」

「どうもブラック先輩の事を話す時は、この鳥微妙な表情してたよ！」

「足の匂いを嗅がせたとか？」

「焼き鳥にしようとしたとか？」

「「「したんでしょ？」」」

「するかああああ!!ちよつと名前を付けてあげたら、イマイチだったようで・・・」

「なぎさはひなたの名前を、ポチとかタマとか、コタツとかストーブとか、どうでも良いような名前にしようとした!」

その時を思いだしたのか、ひなたはジト目でブラックを見つめ、思わずブラックがたじろぐ、

「「居るなあ、直ぐにそんな名前付けたがるの」」

思わず二人のサニーが、同時にブラックにツツコミを入れ、ブラックが言葉に詰まる。

そんなやり取りを見て居たゆり達一同、

「無事で何よりだわ!」

「何だか、さつきまで戦って居たとは思えない、和やかな雰囲気になって居るわよね?」  
「でも、戦わないで済むなら、それが一番ですよ!」

奏は、そんなブラック達を見て呆気に取られ、つぼみはそんな一同を見て目を細めた。

ひなたは一声鳴くと、再び大空に舞い、ひかりの上でグルグル何度も旋回すると、雲の園へと飛び去って行った。

(どうして!?!どうしてバッドエンドプリキュア何かと親しげに話してるの?)

ソードは表情を険しくし、ブラックに抗議しようとしているのに気付いたビューティは、ソードを引き留め、

「ソード、理由は後でブラックが話してくれる筈です。今は、事を荒立てるのは得策ではありません!」

「でも……」

直ぐにでもブラックに問い詰めたいソードではあったが、ビューティの言葉を受け入れ、その場で拳を握って堪えた。バッドエンドプリキユア達は満足したのか、

「色々楽しかったし、今日は帰ろうか?」

「せやな、何やかんやで楽しめたな」

「エへへ、ブライトとウィンディの頭も叩けたし、一度はスマイルプリキユアに勝ったし、満足って感じ?」

「あたしのお腹は……不満足だよ!何か食べたい!!」

「ハア……あなたは本当にお腹を良く空かせるわねえ?」

バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティは、何時もの乗りをしながらバッドエンド王国に帰ろうとし、それに気付いたサニーはバッドエンドプリキユアを引き留め、

「待ちや!さっきの言葉は取り消すわ!!あんたらは、ホンマに強かった……偽物や何て

言ったウチが慢心しとった」

サニーが素直にさっきの偽物発言を詫びた事で、バッドエンドハッピーも笑み混じりに、

「それはお互い様、私達もさっきの言葉を取り消すよ！あなた達は・・・強い!!でも、私達はもつと強くなつちやうからねえ」

「せや！精々そつちも気ばつときや」

「スマイルプリキュア・・・益々興味が湧いてきたねえ！」

「次の対決を楽しみにしているわ！」

「じゃあ、ブラック先輩！スマイルプリキュア！後他の・・・またねえ!!」

バッドエンドハッピー、サニー、マーチ、ビューティ、そしてピースは、そう言い残しバッドエンド王国へと戻って行つた。他の仲間達も一同に近付き、プリキュアになっていた一同も変身を解いた。近付いた一同は、再びエコーになったあゆみに温かな言葉を掛けて居ると、真琴はなぎさに詰め寄り、

「どういう事ですか?!何でバッドエンドプリキュアに、ブラック先輩何て言われてるんですか?みゆきさん達だつてそうです・・・さつきまで戦いあつたのに、どうして?」「真琴、落ち着いて!いやあ、私にも良く分からないんだけど、何だかあの子達に懐かれちゃつてさあ・・・会話してみればあの子達、根は良い子達だし・・・」

「良い子!? 何所がですか? あの子達は、バッドエンド王国何ですよ! 私達のトランプ王国から、大事な秘宝を盗み出した極悪人です!!」

それまで困惑気味に聞いていたなぎさだったが、真琴がバッドエンドプリキュア達を、極悪人だと言った瞬間表情を険しくし、

「それは言い過ぎでしょう! 大体、トランプ王国の秘宝を盗んだのはジョーカーでしょう? あの子達は関係無い!!」

「関係有ります! 奪われた秘宝から産み出されたのが、彼女達バッドエンドプリキュア!! バッドエンドプリキュアだって盗人と同じです!!」

「だから、それはジョーカーがした事でしょう? 言わば彼女達だって、無理矢理産み出された被害者じゃない!」

り、  
「どんどんエキサイトしていくなぎさと真琴に、慌ててほのかとれいかが両者の間に入り、

「ちよ、ちよつとなぎさ、落ち着いて!」

「真琴さんも冷静になつて下さい!」

れいかに冷静になるように言われた真琴だったが、興奮は治まらず、

「被害者は私達トランプ王国です! 悪から生まれた者が、良い子な訳が無い!!」

その瞬間、沈黙していた満と薫の表情が険しくなり、

「今の言葉は聞き捨てならないわね！」

「なら私達は、プリキュアで居る資格は無いって、あなたは言いたいのかしら？」

「私達は、元々ダークフォールで生まれた存在……」

「そ、それは……私は、お二人をそんな風に何て思つてません！」

満と薫に凄まれ、思わず真琴は狼狽えながらも、そんな事は思つていないと必死に弁明した。二人の事や、せつな、エレンの事、ダークプリキュア5の事は、真琴もこちらの世界に来て話は聞いていた。闇の世界で生き、プリキュアのみんなとの出会いが彼女達を変えた事を……

「真琴ちゃん、彼女達を許せない気持ちも分かるけど、人は過ちに気付いた時、やり直せる事が出来る！」

「うん、バッドエンドプリキュアだつてそう！彼女達が間違つた道を進もうとするなら……」

「私達が、正しい道に導いて上げる……それもプリキュアの使命だと私は思います！」  
「私にもあなたの気持ちは理解出来る……私にも、のぞみ達やみゆき達のように、もう一人の私と呼べるダークプリキュアが居た。私は、彼女とは相容れない宿敵……そう思つていた時もあった。でも、それが間違いだったと言う事が、ようやく後になつて分かつた」



「前にダークドリームが言つてたわよね？彼女達バッドエンドプリキュアとは、何時か並んで戦う日が来るって……確かにあの子達は悪い事もするけど、私にも、彼女達が絶対悪だとは思えないなあ……」

押し黙つた真琴を労りながらも、のぞみが、ラブが、つぼみが、ゆりが、響が、真琴を諭すように語つた。ジツと黙つて聞いていたアン王女は、徐に束ねた髪を解き、伊達眼鏡を外すと、

「ソード……やはりあなたをこちらの世界に残していて良かった」

「エツ!?アン王女?ど、どうしてこちらに?」

「あなたには黙つて居ましたが、妖精学校でもあなたの事は見ていました。まだソードと再会するのは早いと考へて居た私は、他の皆様に頼み、あなたには内緒にして置いて欲しいと頼みました。私が側に居れば、あなたの成長の妨げになると考へていました。ですが、それはわたくしのエゴだと考へを改めました……」

「アン王女……」

「良いんですか?」

なぎさとのほのかに聞かれたアン王女は、コクリと頷いた。再びソードを見つめて話しかけ、

「ソード、わたくしも、最初にバッドエンドプリキュア達が、キュアブラックをブラック

先輩と呼んだ時、わたくしは思わず眉根を曇らせました。理由はあなたと同じです……。ですが、わたくしは考えを改めました！妖精学校でグレルとエンエンが、何者かの甘言を受け、皆さんやソードの変身アイテムを奪い、あゆみさんの心を傷付けた。ですが、皆さんは、非を認めて謝ったグレルとエンエンを許し、更には自分達の仲間として受け入れた。ソード、以前あなたもなき皆さん達と同じように、バッドエンドプリキュアのことを救いたいと思った事があつたでしょう？」

「エッ!?.....アツ！」

アン王女の言葉を聞き、少し考えた真琴だったが、確かにそんな事があつた事を思いだしていた。初めて此処に居る一同と出会った時、真琴は、対峙したバッドエンドピースの、水晶を手放すと死んでしまうという嘘を信じ、欺かれた事があつた。だが、欺かれたと知る前、真琴は確かに、みんなの協力を仰ぎ、バッドエンドプリキュア達を助けて上げたいと思った事があつた。

「思い出しましたか?そうです、欺かれたとはいえ、あなたはバッドエンドピースの言葉を信じ、何とかして上げたいと思った事があつた.....ソード、少し彼女達に時間を与えても良いのではないですか?結果はどうなるか、それはわたくしにも分かりません.....ですが、此処に居る皆様なら、彼女達の心の中で蠢く闇を、晴らしてくれるのではないかとわたくしは思います!!」

アン王女の大人の対応を聞き、なぎさは心の中で感謝しながら、真琴に話し掛け、「真琴、私もつい感情的になって怒鳴っちゃったけど、もう少し時間をくれないかなあ？彼女達は、私の前では悪さはしないって誓ってくれた！その言葉は信じられるって、私は考えてる……」

「バッドエナジーを集めに来る事も有ると思う……その時は、私達は当然プリキュアとして彼女達と戦う事もあるだろうけど、何時かは彼女達も分かってくれる……そうなられば良いなあって、私も思うなあ」

なぎさの言葉に続き、みゆきも本心を真琴に語って聞かせた。

「ええ、私達と咲と舞だって、直ぐに打ち解ける事が出来た訳じゃ無い」

「私もそう……先ずは彼女達に、自分達の一している事は、駄目な事だと思つて貰えるようにしなきゃね」

「先は長いかも知れない……でも、私達とバッドエンドプリキュアも、さつきのなぎさとの関係みたいにな、笑い合う事が出来たら良いって私も思うわ！」

満、せつな、エレンの三人も、穏やかな表情で真琴に話し掛け、真琴は戸惑いながらも、さつきのように険しい表情は影を潜めた。

「正直、まだ腑に落ちない点があります……」

「うん、それは仕方無い事だと思うわ！あたし達だつてそうだったし……」

「まああたし達も、バッドエンドプリキユア達の事を、まだ釈然とはしてないし、真琴もそう思い詰めないでさ、今まで通り気楽に行こう！あたし達だって、トランプ王国の秘宝を、ジョーカーから奪還する為に、協力は惜しまないしさ」

美希とえりかは、真琴をフォローしながらも、今まで通り協力する事を改めて真琴に話し、真琴は力強く、ハイと答えた。のぞみは表情を和らげると、

「よおおおし、あゆみちゃんも再びエコーになったし、アン王女も戻ってきたし、グレルとエンエンもこつちに來たし、美味しい物でもみんなで食べようよ！・・・決定!!」

「そうそう、この前歓迎会出来なかつたしね！」

「なぎささんの奢りで、ペアと！」

のぞみの提案に、ラブと響も同意し、何時の間にか自分が奢る状況になっている事で、なぎさは見る見る変顔を浮かべ、

「コラアア！ドサクサに紛れて何言ってるのよおお!!」

「フフフフ」

一同のコミカルなやり取りを見て、真琴は思わずクスリと笑い、アン王女はそんな真琴の背に優しく右手を置き、一同の後に続いた・・・

バッドエンド王国・・・

バッドエンド王国に戻ったバッドエンドプリキュア達、バッドエンドハッピーは、今日の出来事を思い返ししながら、

「スマイルプリキュア、中々興味深かったなあ・・・ねえねえ、前にブラック先輩に言われた事覚えてる？向こうの世界は楽しいって！」

「ああ、前にそないな事言うとしたなあ」

「でも、確かに面白いよねえ？」

「そうそう、美味しい物も沢山あるし！」

「そうね、色々な知識を学べるのも悪く無いわね！」

「でしよう？だからさあ・・・」

バッドエンドハッピーは仲間達を側に集めると、小声でヒソヒソ話を始めた。見る見る一同の目は輝き、

「面白そうやん！ウチ賛成!!」

「私も、私も！」

「あたしも良いよ！」

「そうね・・・私も良いわよ！」

「そうと決れば・・・ジョーカーくゝ居るううう？」

大声でジョーカーの名を呼ぶバッドエンドハッピー、暫くするとランプの舞いが現

われ、見る見るジョーカーが姿を現わすと、

「何です、大声出して……何か私に用ですか？」

「実は……」

バッドエンドハッピーは、みんなで決めた事をジョーカーに伝えると、ジョーカーは胡散臭そうな顔で、バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチを見つめ、バッドエンドビューティと視線が合うと、

「まあ、あなた方だけなら許可などしませんが、バッドエンドビューティさんが一緒なら……まあ、良いでしょう！お好きになさい!!その代り、ちゃんとバッドエナジーを集めるんですよ？」

ジョーカーの言葉を聞き、ちよつと膨れっ面をしたバッドエンドハッピーだったが、  
「何か棘がある言い方だけど……分かった！」

バッドエンドプリキュア達は、顔を見合わせて嬉しそうな表情を浮かべた。

翌日、七色ヶ丘中学校……

昨日の歓迎会で大いに騒いだみゆきは、案の定遅刻ギリギリになり、廊下を走つていると、

「星空さん、廊下は走らない！」

「ゴ、ゴメンなさい・・・あれ!? 佐々木先生、机何か運んでどうしたんですか?」

「いえ、今日隣の1組に転入生が来たのよ!」

「エエエ!? だって明日で一学期終りですよ?」

「そうなのよ! でも生徒さん達が、どうしても夏休み前から来たって話らしくて・・・それで足りない分の机と椅子を、私達教師が運んでるって訳」

「机余つて無かつたんですか?」

「それが・・・五人も転入生が入って来て、学校も大変で・・・そんな事より、早く教室に行きなさい!!」

「は、はい!」

佐々木先生に促され、教室に向かったみゆき、遅刻ギリギリに来たみゆきを、何時ものようにあかねがからかうも、みゆきはやよい、なお、れいかも呼ぶと、

「隣の1組に、今日五人も転入生が来るんだって」

「何で!? 明日で学校終りやでえ?」

「五人一辺に1組に来るの?」

「それも不思議だねえ・・・普通クラスを分けるよねえ?」

「はい! 些か気になりますねえ・・・」

みゆきからの報告を聞き、あかね、やよい、なお、れいかも、五人の転入生達に興味

を持ち、

「後でみんなで見よう！」

みゆきの提案に一同は同意し、休み時間、コッソリ一組を覗いたみゆき達は、思わず目を見開き、

「「「「アアアアアア!?」」」」

五人で大声を出しなら同じような仕草で驚愕し、他の生徒達を驚かせる。五人の転入生は、みゆき達に気付くと、椅子から立ち上がり近づいて来た。その姿は、みゆき、あかね、やよい、なお、れいかに似て居て、知らない人から見れば双子と思われる程だった。

「ヤッホー！今日からこの学校に通う事にしたからヨロシクねえ!!」

「シシシシ、精々楽しませてや！」

「分からない事があつたら教えてねえ・・・なあんちやつてえ！」

「これで何時でもあんた達と戦えるな！」

「それは口実で、美味しい物でも食べ歩くんじやなくって？」

「「「「バ、バッドエンドプリキュア!?!」」」」

みゆき達五人は、転入してきたバッドエンドプリキュア達を見て、思わず腰を抜かしてその場に座り込んだ・・・



## 第十章：六人目のスマイルプリキユア

完

## 第十一章：プリキュアと魔界の戦士達

### 第九十五話：魔界からの訪問者！

プロローグ

美墨なぎさは、眠そうな目をしながら、自分の部屋で机に座って考え事をしていた。メツプルは、そんななぎさを珍しいとからかうものの、なぎさは心此処にあらずといった状態で、思わずメツプルは小首を傾げた。

「なぎさー！なぎさあぁあ!!」

「だぁあぁー！な、何?！」

驚いたなぎさがバランスを崩し、慌ててキョロキョロすると、メツプルは溜息を付き、「なぎさ、珍しく勉強してるかと思えば・・・」

「うるさいわねえ！私だつて考え事する時はあるの!!」

そう言うのと、なぎさはメツプルに舌を出し、再び考え事を始めた。

(またカオスの夢を見たのは良いけど、何か悲しそうだったなあ・・・)

なぎさが頻繁に見る夢は、闇の中に浮かぶ長い黒髪をした少女カオス・・・

時が経つにつれ、どんどん夢が鮮明になっていく気がしたなぎさは、カオスは自分に

何か訴えたいのでは無いかと思ひ、それは何だろうかとボンヤリ考えて居た。そんななごきさに、メツプルはお腹が減つたと騒ぎ、なごきはやれやれといった表情で、メツプルとミツプルの料理番である、オムプのカードを取りだした。メツプルが美味しそうにハンバーグを食べる姿を見て、なごきもグウウとお腹を減らし、

「まつ、いつか！後でほのかにも聞いてみようつと」

目の前の空腹に勝てず、なごきは外へと出掛けて行つた・・・

## 1、魔神達の集い

魔界・・・

日の光届かぬ、不気味な曇天の空に覆われし空、森が蠢き、大地は荒廃し、漆黒の海が、川が、湖があり、異形なる多種多様な生物が住む不気味な世界、その中心部に、十二の魔宮に守られ、中央に佇む、天に轟く不気味な黒い塔が有つた。その内部に、十二の宮を預かりし者達が集つていた！

バッドエンド王国でのプリキュアとの戦いで、倒されたバルガンが着ていたような白い軍服を着て、髪の色以外瓜二つの容姿を持つ、双児宮を守るのは、最強の二神金髪のカインと銀髪のアベル・・・

頭部の左右から二本の大きな角を生やし、下半身は茶色い毛に覆われた屈強な体軀を

した古の魔獣・・・磨羯宮を守護するのは、魔界の勇者アモン！

水色の柔らかな腰まで伸びる長い髪を靡かせ、白い裸身を包み込む黒いワンピースを着て、右手にハーブを持ち、切れ長な目をしたスレンダーな美しき女性・・・天秤宮を守護するのは、美神シーレイン！

四神と呼ばれる四人の者達、さらに四人の前に控える者達が居た・・・

全身をモコモコした白い毛皮で覆われ、顔が何所にあるかも分からない魔神、白羊宮を守護するのは、顔無しのおロン！

魔界でその名を知らぬ者は居らずと言われ、頭部から牛のような二本の猛々しい角を生やし、巨大な斧を所持して、金牛宮を守護するのは、荒ぶる牛神ミノタウロス！

アモン、ミノタウロスと並び、全身を禍々しい鎧で包み、その鋭い眼光で睨まれた者は、恐れ震え上がると言われる、獅子宮を守護するのは、荒ぶる獅子バルバス！

シーレインにも勝とも劣らないと言われる美貌を持ち、その黒き下着のような肢体を見れば、忽ち虜になり、妖艶な瞳で見つめられれば、男も女も魅了して精気を奪う、処女宮を守護するのは、サキュバスのリリス！

嘗て、魔界の勇者と呼ばれ、その肉体を失い、骨となつても魔王に忠義を尽くす、仁なるアンデット、天羯宮を守護するのは、スケルトンのベレル！

その速さは、魔界で並ぶ者は無いと噂された半獣神、上半身は筋肉隆々とした人の容

姿をし、下半身には毛並み鮮やかな馬の身体を持つ、その神速から放たれる矢を、躲せる者は居らずと言われる、人馬宮を守護するのは、ケンタウロスのアロン

バルガン亡き後、カインとアベルによつて新たに選ばれし魔神、紫色の短髪で、右目にのみ赤い水晶を埋め込み、その赤く輝く瞳が輝く時、狡猾な策略が閃く、宝瓶宮を守護するのは、狡猾なる魔神シャックス

シーレイン、リリスと並ぶ女性の魔神、黄緑色した長い髪をし、上半身は白い貝殻ビキニを着け、下半身は魚のような鰭を持つ人魚、水の中だけではなく、空中をも自在に泳ぐ姿を見た者は、その美しさに目を奪われるという、普段は魔界の魔神とは思われない程温厚ながら、一度怒れば、その美しき髪は真紅に染まり、怒らせた相手は血の海に沈むと言われる、双魚宮を守護するのは、マーメイドのニクス

巨蟹宮だけは無人なのか、この場所に姿を見せる魔神は居なかった・・・

それら魔界の魔神達が、カインとアベルに、魔王の勅命として呼びだされ、黒き塔の内部に勢揃いしていた。シーレインは、カインとアベルに疑心に満ちた眼差しで見つめていた。何故魔王ルーシエスは、警戒していたカインとアベルにのみ、自らの指示を出すとうとするのか、何故姿を現わそうとはしないのか、様々な疑惑がシーレインの心の中に浮かんで居た。シーレインは、カインとアベルの出方を探るかのように、

「カイン、アベル、私達全員を呼ぶとは・・・本当に魔王様の許可は取っているのですよ

うねえ？」

「無論だ！きて、一同に集まってもらったのには訳がある……実はアベルが、魔界にプリキュアが侵略してきたのを目撃してなあ……」

「プリキュアと言えば、バルガンを倒したという……アベル、それは本当なの!？」

カインの言葉を聞き一同がざわめいた。これには真偽を問おうとしていたシーレイも驚き、思わずアベルに問い掛けた。魔界には結界が張っており、おいそれと乗り込んでくる事など不可能な筈だった。アベルは、少し口元に笑みを浮かべながら、

「ああ、本当だ！無論返り討ちにしてやったがなあ……だが、まんまと逃げられた!」  
アベル程の者が逃げられたと聞き、首を傾げたりリスは、

「何人で乗り込んで来たのです?」

「たった一人だ……我らも舐められたものだ!その事実を知った魔王様は、大変お怒りだ!!先のバルガンの件もあるしな」

アベルが一人だと答えた事で、更に一同がざわついた。アベルの実力を持ってすれば、たった一人の侵入者を、殺す事も捕らえる事も出来ないとは思えなかった。カインは、思わず沈黙する一同に、檄を飛ばすかのように、

「魔王様の命はこうだ……魔界に仇なすプリキュアを……倒せとな!そして、見せしめに何人か魔界に拉致して、我が生贄に捧げよとのお達しだ!!」

魔王ルーシエスの命が下った事で、魔神達の目の色は変わり、

「オオオオ！魔王様が・・・」

「ならばその役目拙者が！」

「いや、俺に行かせろ！最近暴れたり無くてウズウズしていた!!」

アロンが、ベレルが、バルバスが、プリキュア討伐への名乗りを上げる中、突然室内にハープの調べが鳴り響き、一同が金縛り状態に陥った。不意を突かれたカインは、キツとシーレインを見つめ、

「何の真似だ!?シーレイン!!」

シーレインは、目を閉じながら、何かを思案するようにハープを弾いた。ゆっくり目を開いたシーレインは、一同を見渡し、

「その役目・・・このシーレインが参りましょう!ただし、私なりのやり方でやらせて貰うわ!!」

「どういう意味だ?」

シーレインの真意が読めず、眉を顰めたカインがシーレインに問うと、シーレインは、ハープの弦を一本ずつ弾き、

「プリキュアが、本当に我らと戦うつもりで乗り込んで来たのか、それとも、たまたま迷い込んだのか・・・やって来たのが一人だと言う事が、私には些か合点が行かない・・・」

この眼で確かめさせて貰うわ!」

カインとアベルは、思わず口元に笑みを浮かべた。自分達を警戒しているシーレインが、自ら志願して、プリキュアの住む人間界に行くという事は、何らかの成果を出さない限り、シーレインを、魔王の命を装って処罰するのは容易いのみだから・・・

「良いだろう! お前の好きにするが良い!!」

口元に笑みを浮かべたカインが、シーレインの申し出を受け入れた。ニクスはシーレインの顔をジッと見つめると、

「シーレイン様、よろしければ私も一緒に参りましょうか?」

「ありがとう、ニクス! でも、これは私が自分で決めた事だから・・・アモン、留守を頼みます!!」

「分かった! お前程の者が遅れを取る事はあるまいが、気を付けるがいい!!」

「ええ・・・」

アモンの労いの言葉に、シーレインが軽く頷くと、アモンの心の中にテレバシーを送った。シーレインに取って、心を許せる魔神は、アモンとニクスの二人のみだった。忠義に熱いベレルの事も信頼をしていたものの、ベレルは、カインとアベルに何ら疑惑を感じて居らず、自分達の本意を伝える事は出来なかった。

(アモン、私の留守を良い事に、カインとアベルは何らかの行動を起こす筈! 注意してい



て！)

(ああ、分かって居る・・・だが、お前が自ら囿になる事もあるまい?)  
(それでもしなければ、あの用心深いカインを欺けないでしょう・・・)

シーレインは、自分が魔界を留守にすれば、カインとアベルはきつと野心を表に出すと考え、人間界へと向かう決意をした。例えそれが、自らを窮地に陥らす事になったとしても、魔王ルーシエスの安否、カインとアベルの本当の目的を暴く為には、こうするよりないと考えて居た。

アイコンタクトした二人は頷き合い、シーレインは、プリキュアが住む人間界へと向かった・・・

## 2、悔しいです！

バッドエンドプリキュア達が、七色ヶ丘中学校に転入してきた知らせは、二時間目が終わった休み時間に、真琴の耳にも入っていた。

バッドエンドプリキュア達は、それぞれ星崎みさき、日川あおい、黄野やおい、緑山なみ、青田れいなど名乗り、二年一組の生徒となった。みゆき達が、バッドエンドプリキュア達の事をどうするか、教室で相談している三時間目が終わった休み時間、真琴は表情を険しくしながら、バッドエンドプリキュア達が転入した、二年一組の様子を伺っ

た。その時、突然真琴は肩をトントン叩かれ、反射的に真琴が右側から背後を振り向くと、真琴の右頬を、バッドエンドピースの人差し指が突き刺し、真琴の可愛らしいホッペがへこんだ。

「何やつてるのかなあ？」

「あ、あなた!?! どういうつもり? 何で私達の中学校に……」

「別に、私達の勝手でしょう?」

「何を企んでるか知らないけど……」

真琴が表情を強張らせながら、バッドエンドピース事やおいに抗議していると、

「やおいちゃん、どうかしたの?」

突然やおいの背後から声が掛かった。その声は同じ一組のクラスメートで、一人は眼鏡を掛けたお下げ髪の少女、もう一人はショートカットの少女、最後の一人は、ヘアバンドをしておでこを出した少女だった。同じクラスメートだと気付いたやおいは、思わずドキツとした表情を浮かべると、瞬時に表情を変え背後を振り返った。やおいの目はウルウル揺らぎ、今にも泣き出しそうな表情を浮かべていて、同じクラスの三人組の少女達は、皆驚いたような表情を浮かべ、眼鏡の子とヘアバンドの子が、やおいに優しく話し掛け、

「や、やおいちゃん、どうしたの?」

「何かあの子に言われたの？」

「エエエ!？」

真琴は、自分を見つめる一組の先輩達の鋭い視線を受け、思わず仰け反り、首をブルブル横に振つて違うと合図するも、やおいは鼻を嚙りながら、

「うん．．．私はまだ学校に慣れてないから、ちよつとモタモタしてたら．．．邪魔だつて．．．」

やおいはそう言うと、もう一度鼻を嚙つた。見る見る三人の少女たちの表情は強張り、

「酷い!」

「ちよつと、あなた確か．．．一年の剣崎さんつて言つたわよね？」

「そうそう、佐々木先生の親戚だつて聞いたわ!先輩に対して、そういう態度は無いんじゃない？」

目の色変えた眼鏡の子、ショートカットの子、ヘアバンドの子、三人に抗議された真琴は、思わず困惑し仰け反りながら、違うと必死に弁明しようとする。三人の背後に居たやおいは、思わずニヤリとすると、三人組の前に行き、

「庇つてくれてありがとう!でも良いの、私がモタモタして、彼女の迷惑になったのは事実だし．．．」

そう言うことやおいは、真琴を振り返り、ゲスイ表情を浮かべながら真琴に小声で話し掛け、

「へえ、学校つて所は、先輩の方が偉いんだねえ．．．ねえねえ、ソード！私、お腹減ってきたなあ．．．購買でパンでも買って来て！そうしたら、この場を治めて上げる！！」

「だ、誰が．．．」

そう強がるうとした真琴だったが、背後に居る三人組の鋭い視線に気付き困惑すると、

「ウツ．．．ウワアアアン！」

この場に居るのが居たたまれなくなっただのか、真琴は、右腕で両目を隠しながら駈け出した。やおいは思わずクスクス笑うものの、背後の三人に気付き慌てて嘘泣きを始めると、三人はやおいを慰めた。教室に戻ってきたやおいを見たみさき、あおい、なみ、れいなは、やれやれと言った表情でやおいを見つめ、

「あああ、ソード泣き出しちゃったね？」

「相変わらず性格悪いやつちやなあ．．．」

「まあ、ピースらしいっちゃ、ピースらしいけどさ」

「でも、下手にボコを出されたら、私達にも影響が出るわ！」

そんな会話をしながら、やおいを見つめていると、気付いたやおいは舌をペロつと出

しながら四人に近付き、

「エへへ、面白かった!」

「ピース、からかうのも良いけど、程々にしておきなさい!」

「ハアアイ!」

れいなに窘められ、再びやおいは舌をペロつと出した・・・

放課後・・・

ふしぎ図書館にある星デコルで作ったハウスに集まった、みゆき、あかね、やよい、なお、れいか、キャンデイ、更に、みゆき達から連絡を受けたあゆみとグレル、エンエン、佐々木先生の家で、真琴同様居候の身になっていたアン王女にも連絡が行き、一同は、テーブルに覆い被さるように泣きじやくり、ダビイに慰められている真琴に困惑していた。

「ウワアアアアン・・・わ、私、悔しいです!」

真琴はそう言うと、テーブルをバンバン右手で叩き泣き喚いた。泣きじやくる真琴の姿に、困惑気味にみゆき達を見たアン王女とあゆみは、

「ソードに何かあったのですか?」

「さつきから悔しい悔しいって言ってるけど・・・真琴ちゃん、どうしたの?」

聞かれたみゆき達も困惑気味に、

「私達も、その場に居た訳じゃ無いから、詳しい事は良く分からないんだけど・・・」

「何でも、バッドエンドピースに倣められたとか・・・」

「真琴ちゃん、詳しい事を話してみて？」

「それは、ダビィから話すビィ！」

みゆきとれいか、そうアン王女とあゆみに話し、やよいは、自分達に何があつたか話して欲しいと、優しく真琴に話し掛けた。真琴は顔を上げるも、嫌々をしながらバンバンテーブルを叩き、代わりにダビィが、一同にバッドエンドピースとのやり取りを、ジェスチャーを交えて語って聞かせた・・・

話し終わると、ダビィも興奮しながら、ソードを虐めたバッドエンドピースの事は許せないと怒り、キャンデイとグレル、エンエンに宥められた。再び真琴はテーブルを右手でバンバン叩きながら悔しがり、見る見る一同は困惑した。あかねは髪をポリポリ掻きながら、

「で、結局パンをかうて来たんか？」

少し呆れ気味にあかねが真琴に問うと、真琴は思わずピクリと反応し、ゆっくり顔を上げると、少し不服そうな表情を浮かべた。真琴は少し頬を膨らませながら、

「だってえええええ」

不満そうな表情を浮かべる真琴に、なおは苦笑混じりに話し掛け、

「真琴ちゃん、いくら先輩だからって、理不尽な事は聞かなくて良いんだよ?」

自分の事を庇ってくれると思いきや、あまり一同の反応は芳しく無く、これもバッドエンドピースのせいだと思つくと、真琴はバッドエンドピースの顔を思い浮かべると、段々イライラしてきて、

「ウウウウ、私、他の四人は兎も角、バッドエンドピースだけは嫌!もう、ピースつて名前聞くだけで……ムカムカしてきます!」

(エツ!?)

そう言うと、真琴は再び頬を大きく膨らませ、自分もプリキュアになった名前が、ピースなやよいは困惑した。もしかしたら、真琴は自分の事を嫌っているのではと思つと、思わずやよいは身を乗り出し、恐る恐る真琴に話し掛け、

「ま、まこちゃん……ひよつとして、私の事も嫌つてる?」

「やよいさんの事を、私が嫌う訳無いじゃありませんか!嫌いなのは……ピースです!!」  
(私もピース何だけど……)

そう真琴に断言され、今度はやよいが落ち込み、力なく椅子に腰掛け、みゆきとれいかにフオローされた。アン王女は、そんな真琴を見ると何かを思案し、自ら納得したかのようにコクリと頷くと、

「分かりました！わたくしに考えがあります!!しばらくお待ちを・・・」

アン王女はそう言うと、扉を開けて徐に不思議図書館から何処かへとワープして行った。

アン王女が何所に行ったのか気になっては居たものの、残ったメンバーが、真琴とやよいを慰めながら雑談していると、ハウスの入り口が開いた。思わず一同が視線を向けると、入ってきたアン王女を見て一同は呆然とし、れいかは、飲んでいたお茶を思わず吹き出し、ゲホゲホ咽せた。

「ア、アン王女、その姿は?！」

変顔浮かべながらアン王女を指さしたみゆき、一同が驚くのも無理はなく、アン王女は、みゆき達の学校、七色ヶ丘中学校の制服を着ていたのだから・・・

更にその背後から、微妙な表情を浮かべた美希が現われ、一同に軽く会釈した。美希がアン王女と共に現われた事で、更に一同は混乱し、あゆみは美希に話し掛け、

「美希さん、どうしたんですか?！」

「あたしが聞きたいくらいよ!行きなりアン王女がやって来て、みゆきちちゃん達の制服を着せて欲しいと頼まれた時は・・・あたしも驚いたわ!!」

美希はそう言うと、困惑気味にアン王女を見つめ、その時を思い出していた。学校を終え、この日は仕事がオフだった美希は、自分の部屋で美希の趣味でもある香水を自分



の好みにアレンジしていると、突然本棚からアン王女が現われ、思わず美希は悲鳴を上げて驚いた。更に、みゆき達が通う七色ヶ丘中学校の制服を着せて欲しいと頼まれ、美希は思わず自分の耳を疑った程だった。

「一体何があつたの？」

「実は……」

美希にも理由を聞かれ、みゆきは困惑気味に今までの経緯を説明した……

美希も状況を理解したものの、みゆき達の学校の制服を着て、アン王女は何をしようとしているのか想像すると、思わず美希は変顔になり、アン王女を見つめた。

(まさか……まさかね!?)

美希の脳裏に、アン王女は真琴を心配して、年を誤魔化してみゆき達の中学校に通おうとしていたのではないか? そう考えた美希は、改めてアン王女の制服を着たその姿を見ると、思わず変顔を浮かべた。美希と同じような事を、みゆき達一同は頭の中に過ぎた。そんな一同の視線に気付かず、アン王女は呆然としていた真琴を励ますように、

「ソード、いつまでもクヨクヨするのはお止めなさい！」

「ですが……」

「安心しなさい！ 明日から、わたくしも佐々木先生に頼んで、あなたと同じクラスに通え

るように手配して貰います!!」

「ほ、本当ですか?」

「「「「エエエエエエ!?!それはちよつとおおお?」「」「」「」

アン王女の言葉を聞き、真琴は瞳を輝かせながら喜色笑み、みゆき達六人と美希は、目を点にしながらか驚愕し、慌ててアン王女に待ったを掛けた。アン王女は首を傾げ、

「何か問題でも?」

「大有りよ!」

「いやいや、真琴は中一やで・・・」

「それじゃあアン王女は、私達より年下になつちやうし・・・」

美希が真つ先に異論を唱え、あかねとみゆきが、遠回しにアン王女に考え直すように伝えようとすると、アン王女はそんな彼女達の思惑を理解せず、

「そうですか・・・では、みゆきさん達と同じクラスにすれば良いのですか?」

「「「「それもちよつとおおお!」「」「」「」

再び真琴以外の一同が待ったを掛け、アン王女は怪訝そうに、

「それもダメなのですか?」

「エエイ、仕方無い・・・アン王女、これでも見て!」

美希は、持つて居たコンパクトを取り出して、アン王女の姿を映した。アン王女は、鏡

に映る自分の制服姿をジイと見つめると、見る見る顔を赤くし、恥ずかしそうに腕で制服を隠した。アン王女自身が見ても、その姿は、良い歳をして制服のコスプレをしている、痛い人のように映り、自らの行為を反省した。

「わ、わたくしが間違つてました!」

「分かつてくれて良かったわ!」

「流石美希さん!」

アン王女が自らの行為を反省し、真琴以外の一同はホツと安堵し、美希に感謝の言葉を発するのだった・・・

「ハアアア」

ただ一人、真琴は心から残念そうに溜息を付くと、徐に鞆の中から一枚の写真を撮り出した。写真を見ると、真琴の表情が見る見る和らぎ、

「こんな時、マヤちゃんが居てくれたらなあ・・・」

「マヤちゃん!」

聞き慣れない名前を聞き、みゆきが思わず聞き返すと、アン王女の表情も寂しげに変わった。真琴は写真を一同に見せると、その中には10代後半に見えるアン王女が、幼い真琴ともう一人の少女の肩に手を置き、三人で微笑んでいる姿が写っていた。真琴がマヤと呼んだ少女は、肩まで伸びた黒いセミロングの髪をしていて、真琴と仲が良いの

を現わすかのように、真琴の右手と、マヤの左手はしっかりと握られていた。

「ウワアア、まこちゃん、可愛いー!」

「で、この子がマヤちゃん?」

「はい!トランプ王国で、私が一番仲が良かった女の子です!!」

真琴は当時を思い出したかのように、目を瞑ると穏やかな表情を浮かべながら、昔語りを一同に始めた・・・

真琴は、孤児になってトランプ王国のお城に引き取られた。国王は、子供は国の宝だという方針をしていて、城に引き取った子供達を、城内に作った孤児院で手厚く保護し、孤児達は健やかに育っていった。真琴もその一人で、当初は男の子達と共に、ボール遊びなどをしたりしていた。真琴が引き取られて半年ぐらい経って、孤児院にやって来たのがマヤだった。真琴とマヤは直ぐに仲良くなり、またアン王女も何かに付けて孤児院を訪れ、孤児達の遊び相手になったり、習い事などを教えてあげていた。真琴とマヤも、大きくなったらアン王女のようになりたいなどと、二人で語ったりしていた。

「へえ、まこちゃんの親友何だねえ・・・マヤちゃんって子も、まこちゃんがキュアソードになった事を、喜んでくれたんじゃないの?」

みゆきに聞かれた真琴は、アン王女と顔を見合わせると微妙な表情になり、みゆきは何か不味い事でも聞いたのだろうかと言っていると、真琴は慌てて首を振り、

「マヤちゃんは今・・・5年前に突然居なくなっちゃったんです!」

「エツ?!居なくなつた?」

「それって、家出つて事?」

みゆきとなおが、思わず驚いて真琴に問うと、真琴は困惑した表情を浮かべた。真琴にもマヤが突然失踪した理由など思い浮かばなかつたのだから、真琴は首を振り、

「私にも分かりません・・・あのお祭りの日、マヤちゃんは、大勢の子供達が、ご両親と一緒に楽しそうにしているのを見ていたら、突然パパやママに会いたいって言つて駆け出しちゃつて・・・」

真琴の言葉を引き取つて、アン王女がその頃の様子を思い出しながら、ゆっくり一同に語り出し、

「ソードから聞いたわたくしは、直ぐに王国の兵達にも知らせ、マヤを捜索に向かつたのですが、忽然とその姿を消してしまつたんです・・・」

「まるで神隠しね?」

美希は、良く話しに聞く神隠しの事を例えると、トランプ王国にも似たような言葉があるらしく、アン王女はコクリと頷き、

「ええ、誰かに浚われた事も危惧したお父様は、国境の警備を強化し、わたくしは、最も信頼する兵を国境の警備に添え、もしマヤの手掛かりがあれば、直ぐに城に知らせるよ

うにしては居るのですが、あれから5年、何の手掛かりも未だに……」

そう言うと、アン王女は言葉に詰まり、一同もそれ以上追求する事を止めた。真琴は、もう一度写真の中に写るマヤを見ると、心の中で、きつと何処かで無事に居るよねと話し掛けた……

### 3、シーレイン現る！

シーレインは、バルガンが最初に訪れた、横浜の港が見える丘公園に降り立つた……辺りを見渡せば、夏休みも直ぐ目の前で迫っている事も有り、多くの若いカップルや、子供連れで賑わっていた。

（此処が人間界……この澄み渡るような青空、何所までも続いているような海、穏やかな気持ちになれる所ね）

シーレインは、空いていたベンチに腰掛けると、人間界と魔界の違いを実感し、軽くシヨックを受けていた。こんな世界に住むプリキュアが、態々血生臭い争いが跋扈（ばつこ）する魔界になど、攻めて来る事など有り得るのだろうか？やはり自分の想像通り、カインとアベルが何かの計画の為に、プリキュアの事を利用してしようとしているのは無いだろうか？シーレインがそんな事を考えて居ると、チャライ格好をした二人組の男に声を掛けられた。

「ねえねえねえ、彼女、一人?」

「こんな所に一人で居ても寂しいっしょ?俺らと何処かに遊びに行かない?」

シーレインは、声を掛けてきた二人組をジイと見つめると、二人はシーレインの美しさにドキリとし、何とかナンパを成功させようと必死だった。一人は茶髪のロン毛、もう一人は金髪頭の短髪、シーレインはクスリと笑うと、

「そうね・・・私の質問に答えてくれたら、あなた達と一緒に رفتても良くってよ!」

「ほ、本当!」

「何でも言つて!」

こんな美人をゲット出来るチャンスだとばかり、二人が身を乗り出すと、シーレインは再びクスリと笑った。魔界で自分に対して、こんなに馴れ馴れしい言葉を掛けてくる者など居なかった。シーレインの機嫌を損ねれば、それは直ちに死に繋がると恐れているのだから、だが、シーレインは争いを好きでは無かった。魔王ルーシエスが魔界を支配してから、無法地帯だった魔界に秩序が生まれた。魔界に秩序をもたらしたルーシエスの事を、シーレインは心から尊敬し、ルーシエスの下に仕えたい一身で、シーレインはハープを利用した多種多様な力で、魔界にその名を轟かせた。そんな過去を少し思い出したシーレインだったが、ハッと我に返り、本題であるプリキュアについて、男達に聞いてみようと思いついた。

「私があなた達に聞きたい事は……プリキュアは、何所に居るのかしら？」

「プリキュア!？」

二人組のチャラ男達は、こんなモデルのような美人の口から、プリキュアの話が出てとは思わず、シーレインに聞き返した。シーレインはコクリと頷き、

「ええ、プリキュア！あなた達は知っているのかしら？」

チャラ男達は顔を見合わせると、コクリとアイコンタクトし、上手く丸め込めば、シーレインを物に出来ると感じた茶髪のロン毛が、

「はいはい、あのプリキュアねえ……数ヶ月前、この横浜に現われた怪物を倒した、コスプレした少女の集団の事だよねえ？」

「プリキュアが、この地に？」

バルガンがこの横浜の地に降り立った事は、カインからの報告でシーレインも聞いていたが、まさかプリキュア達も此処に居たとは思わず、シーレインは少し興奮気味に身を乗り出した。

「確か、色々都市伝説にもなってたなあ……ちよつと待ってね！」

金髪男はそう言うのと、携帯を取りだしてネットに繋ぎ、プリキュアの文字を入力して検索すると、色々な情報が現われた。

「プリキュアを見たって情報は……ここの横浜の他に、四つ葉町、希望ヶ花、加音町、



七色ヶ丘って所で見たって噂になってるね？」

「本当?! 私にも見せてくれるかしら?」

「どうぞで、どうぞで!」

金髪が携帯をシーレインに手渡すと、金髪はさり気なくシーレインの右肩に右腕を回し、シーレインの様子を伺うと、シーレインは携帯に夢中なようで、特に嫌がる素振りも見せなかった。金髪は、茶髪にニヤリとすると、携帯の操作の仕方をシーレインに教えた。

「四つ葉町が危機に陥ると、どこからともなく四人組のプリキュアが現われ、悪者を倒すと何処かに去った。世界が砂漠化した時、希望ヶ花に現われた巨大な化け物の群れを、大勢のプリキュアが倒してくれた。音楽の街加音町で、悲しみに暮れる人々を救うプリキュア達が居た。七色ヶ丘中学校の校庭で見たような気がする・・・成る程、これは良い情報をくれたわ!!」

「役に立った? じゃあ、俺らと一緒に遊びに行ってくれるよね?」

「ええ、良いわよ! その前に、教えてくれたお礼をしなきゃね?」

「お礼?」

顔を見合わせたチャラ男達に、シーレインは、何所から取り出したハーブを奏で始めた。シーレインの目が妖しく赤く輝くと、見る見るチャラ男達の目は、眠そうにトク

ンとし、催眠術に掛かったかのような状態に陥った。シーレインは、先程見た携帯画面を思い返し、

「四つ葉町、希望ヶ花、加音町、七色ヶ丘かあ・・・そうね、音楽の街っていうのが気になるわね！ねえ、私を加音町まで連れて行ってくれるかしら？」

「はい！仰せのままに・・・」

チャラ男達は、シーレインに命じられるまま、港の見える丘公園前に路上駐車してあつた、赤い日産のフェアレディZにシーレインを乗せると、加音町目掛け爆音立てながら走り出した・・・

その事を、響、奏、エレン、アコが、知る由も無かつた・・・

第九十五話：魔界からの訪問者！

完

## 第九十六話：歌姫V S 音姫！

## 1、狼狽えるアコ

シーレインが、加音町に迫っているとは知らず、響、奏、エレンは、ハミイやフェアリートーン達と共に、奏の店 Lucky Spoon で夏休みの計画を立てていた。

「中学生生活最後の夏休みかあ・・・早いよねえ？」

「そうねえ、この三年間、色々有ったわよねえ？」

懐かしそうに入学した時から、今までの事を振り返った響と奏の二人、お互いの勘違いから生じ、中学一年の頃は微妙な距離感だった二人、進級して中学二年になった時、二人はキュアメロディとキュアリズムになってマイナーランドと戦い、その途中で他のプリキュアのみなどと出会った。エレンやアコもプリキュアとして仲間に加わり、ノイズと和解した事で、ピーちゃんも新たに仲間に加わった。中学三年になった時には、みゆき達プリキュアの後輩も出来た。そんな二人の思い出話に何の興味も無いかのように、ハミイとフェアリートーン達は、ガツガツカップケーキを食べて居て、そんな姿を見て居たエレンは、思わずクスリと微笑んだ。エレンも響と奏の会話に加わり、

「本当なら、マイナーランドとの戦いを終えた私は、メイジャーランドに帰って居た筈な

のに、また加音町に戻って来るとは思わなかったわ」

ノイズと和解し、伝説の楽譜がメイジャーランドに戻り、平和を取り戻した後、一度エレンは、ハミイやソリー、ラリーと共に、メイジャーランドへと帰った。遊びに行こうと思っていたものの、バッドエンド王国という新たな敵が現われた事で、再び加音町で暮らす事になるとは、エレンも思わなかった。響と奏もエレンの言葉に頷き、

「うん、バッドエンド王国が現われたもんねえ・・・」

「でも、私達にはハッピー達スマイルプリキュアの六人や、ソードと言う頼もしい後輩達も出来たわね！」

「そうだねえ・・・折角だし、一日ぐらいは夏休みの間に、プリキュアのみんなと何処かに行ってみたいよねえ？」

響の何気ない提案に、奏とエレンも目を輝かせ、

「良いわね！今度みんなに提案してみましよう!!」

「プリキュアのみんなとなら、せつなも居るし、日帰りでも何処かに行けるわね！」

そんな会話をしている間に、ハミイは目の前にあったカップケーキを平らげ、膨らんだお腹を満足そうに撫でながら幸せそうに横になり、響、奏、エレンは、そんなハミイを見て思わずクスリと笑い合った。

音楽の街に不釣り合いな、爆音が加音町に響き渡る中、赤いフェアレディZは加音町の中心部で止まり、中から水色の髪をした、モデルのようなスタイルの良い女性がゆつくりと降り立った。それは十二の魔神の一人シーレインで、シーレインは送ってくれた二人組のチャラ男達に声を掛け、

「送ってくれてありがとう！」

シーレインは、チャラ男達にウインクすると、その場を見渡し、

「此処が音楽の街加音町・・・此処にプリキュアが居るかも知れないのね？」

シーレインは、先程の横浜とも一味違う加音町の光景に目を奪われ、少しこの町を散策したくなり歩き始めた。シーレインが去ると、チャラ男達は我に返り、

「あれ!?俺達、何でこんな所に居るんだあ?」

「さ、さあ!?それより・・・此処は一体どこ何だああ?」

「さつきの美女は・・・何所に消えたんだああ?」

互いに顔を見合わせながら、チャラ男達は訳が分からず叫び、再び爆音響かせながら去っていた・・・

奏太と一緒に下校していたアコは、奏太から夏休みには何処か行くのか聞かれたものの、特に考えては居らず、

（そう言えば、パパが一日でも良いから、帰って来いって言ってたっけ？）

アコを溺愛しているメフィストは、学校が夏休みの間は一ヶ月以上休みになると聞き、キラキラ目を輝かせると、エレンを通じてアコに連絡を取り、メイジャーランドに帰ってくるように、半ば泣き落としのように訴えた。アコも本心では、メフィストやアフロディテの顔を見に、メイジャーランドに帰りたいのは山々だったが、バッドエンド王国の事も気になり、特に決めてないと奏太に答えた。

「ふくん、家も店があるから、行けても一泊二日とかだろうなあ・・・」

奏太の家は、Lucky Spoonというカップケーキのお店をやっているので、連休などはそうそう取る事も無かった。だが奏も奏太も、そんな両親に愚痴を言う事もなく、店の手伝いすらしていた。そんな会話をしていた二人は、広場の方から流れてくる心地良い音色に気付いた。

「良い曲ねえ・・・」

「何だろう?! 何か分かんねえけど、俺にも良い曲だつて言うのだけは分かる!」

「奏太、行ってみましょう!」

この時のアコは気付かなかつた。この音色は、人々を呼び寄せる為に、シーレインが弾いているハープの音色だという事に・・・

シーレインの音色に惹かれ、加音町の人々が次々に集まって来ていた。その中には、

アコと奏太の姿もあつた。まるで、自分の意思に関係無く、何かに引き寄せられるかの如く、ハープを弾くシーレインに近付いて来る。シーレインは、近付いて来る足音の数を聞くと、

(これだけ集まれば頃合いね！)

シーレインの奏でるハープの音色が突然変わった。まるで、深い闇の中に堕ちていくような感覚がし、アコは思わずハツと我に返るも、時既に遅く、アコもまた深い闇の中に堕ちたように、催眠状態に陥つた。シーレインは、ハープを奏でながら、

「あなた達に聞きたい事があります・・・プリキュアは、この町に居るのかしら?」

シーレインのこの質問に、スイートプリキュアを見た事がある面々が「はい」と答えた。その中にはアコも含まれていた。シーレインは満足そうに頷き、

「じゃあ、この中に、プリキュアが誰だか知っている人は居るかしら?」

この質問には皆無言だったが、一人だけ手を挙げそうな少女が居た。それはアコだったのだが、アコは無意識の内に、シーレインの呪縛に耐えようとするかのように、手を挙げようとする事に躊躇していた。シーレインはアコに気付き、

「お嬢さん、あなたはプリキュアを知っているようねえ・・・何所に居るのかしら?」

「アツ・・・ウツ・・・い、言えません!」

「言えない!? 妙ねえ・・・」

シーレインの質問に耐えるアコだったが、その姿こそ、自分でプリキュアの関係者と暴露しているに等しかった。シーレインはクスリと笑うと、ハーブを一本ずつ弾き、人々の催眠状態を継続させると、アコの目の前に歩き、右手の人差し指と中指で、指をパチリと鳴らした。思わずアコは正気に返りハツとすると、

「わ、私・・・一体!?!」

「お目覚めかしら!?!あなたひよつとして・・・プリキュアじゃない?」

「な、何の事!?!」

激しく動揺するアコの姿に、シーレインは再びクスリと笑った。

## 2、シーレインVSスイートプリキュア♪

アコは、シーレインの追求に白を切ろうとするも、その態度が自らをプリキュアだと認めているに等しかった。白を通そうとしたアコだったが、得体の知れない技を繰り出すシーレインに対しては、もうプリキュアになるしかないと考えた。そんなアコの気持ちを察したかのように、紫色をした妖精ドドリーが、アコの周囲を飛び回り、シーレインは突然現われた小さな妖精ドドリーに驚いたものの、直ぐに口元に笑みを浮かべた。覚悟を決めたアコは、キュアモジュールを取り出すと、

「レッツプレイ！プリキュア！モジュールシヨン!!」



アコの掛け声と共に、ドドリーはキュアモジューレの中にその半身を沈め、アコの身体を、黄色い衣装とバルーンスカートを履いた、まだあどけなさが残るプリキュア、キュアミューズへと変わった。

「爪弾くは、女神の調べ！キュアミューズ!!」

変身を終えたミューズが、シーレイン相手に身構えた。シーレインは、予想以上に早くプリキュアに出会えた事で、口元には自然に笑みが浮かんだ。それを見たミューズは、自分が小さいからバカにされたように感じ、少し不機嫌そうな表情を浮かべると、

「何笑ってるのよ?」

「フフフ、気に触ったのならゴメンなさい!」

ミューズは、シーレインが何処か自分の事を見下しているように感じ、先制攻撃を仕掛けようと、青色の妖精シリィをモジューレにセツトし、

「シ、の音符のシャイニングメロディ!プリキュア!スパークリングシャワー!!」

シーレイン目掛け、ミューズが放った大量の音符の泡が、シーレインを包み込もうと飛んでいったものの、シーレインはフツと笑むと、

「フフフ、中々面白い技を使うわね?さあ、自分でも味わって見なさい!」

向かってくるスパークリングシャワーをもともせず、シーレインはハープを巧みに奏でると、

「シベリウスシフ!!」

ハープの曲調が変わったのと同時に、ミューズが放ったスパークリングシャワーが、ミューズ目掛け攻撃を開始した。ミューズは目を見開いて驚き、

「そんな!? キャアアアアア!」

自分の攻撃を、悲鳴を上げながらもすんでの所で躲し続けるミューズだったが、シーレインの得体の知れない強さに驚きを隠せなかった。

(私一人じゃ・・・勝てない!)

ミューズは、シーレインの強さに気付き、焦りだしていた。周りの人々を巻き込む訳にはいかないと、

「場所を変えましょう!」

「別に私は構わないわよ? 何なら、お仲間の所に行ったら?」

「バカにしてええ!!」

プウと両頬を膨らませたミューズは、広場から離れた。シーレインが言う通りにするのは癪だったが、ミューズ一人で何とか出来る相手で無い事は、戦って居るミューズ本人が一番理解していた。

(もうみんな学校から帰っている筈・・・とすれば、奏のお店か、調べの館に行けば・・・)  
地上を走るミューズは、奏と奏太の家でもある Lucky Spoon 目掛け走り続

けた。その後を、身軽そうに屋根の上を飛ぶようにするシーレインが追跡する。二人は、一定の距離を保ち続けた・・・

異変は響達にも分かったようで、三人は店の前に出て辺りの様子を伺っていると、ミューズがこちらに向かって駈けてくる姿が見えて目を見張った。

「ミューズ!? またバッドエンド王国が来たの?」

「とにかく、私達もプリキュアになりましょう!」

「幸い、この辺りに人は居ないようね!」

顔を見合わせ頷き合った響、奏、エレンは、キュアモジューレを取り出すと、響のモジューレに、ピンク色をした妖精ドリーが、奏のモジューレに、白色をした妖精レリーが、そして、エレンのモジューレに、水色をした妖精ラリーが装着された。

「レッツプレイ! プリキュア! モジューレ! ション!!」

三人の全身を光が纏い、プリキュアへと変えて行った・・・

「爪弾くは、荒ぶる調べ! キュアメロディ!!」

「爪弾くは、たおやかな調べ! キュアリズム!!」

「爪弾くは、魂の調べ! キュアビート!!」

三人が変身を終わると、合流したミューズは、ホッと安堵した表情を浮かべ、そんな四人の前にシーレインが舞い降りてきた。四人はキッとシーレインを見つめると、

「三！届け！四人の組曲!! スイートプリキュア!!!」

四人がシーレインに対しポーズを決めた。シーレインの目は輝き、

「その三人があなたのお仲間って訳ね? 初めまして! 私の名前はシーレイン!!」

「シーレイン!?!」

「バッドエンド王国の新たな刺客って事?」

メロディとリズムは、困惑気味にシーレインに問い掛けた。バッドエンドプリキュア達の他にも、ジョーカーが新たに差し向けたのだろうか? と警戒した。シーレインは小首を傾げ、

「バッドエンド王国!?! . . . ああ、バルガンの言ってた? 違うわ! 私は、魔界の戦士とでも言えば分かりやすいかしら?」

「魔界の戦士!?!」

「その魔界の戦士が、私達に何の用?」

警戒を続けながら、ビートが、リズムがシーレインに逆に何の用か問うも、ミューズは首を振り、

「話は後よ! 彼女のせいで、加音町の人達の様子がおかしくなってるの!!」

ミューズから、先程の事態を聞いたメロディ、リズム、ビートの表情は見る見る険しくなり、メロディはキツとシーレインを見つめ、

「本当?! 加音町の人達に何かする何て・・・」

「!! 絶対、許さない!!!」

四人は四方に散り、シーレインを包围する陣形をするも、シーレインはハアと溜息を付き、

「私は、あなた達と話をしに來ただけ何だけど・・・仕方がないわね!」

シーレインの目付きが変わり、瞳が金色に輝いた・・・

### 3、死のメロディ

遂に戦いの火蓋を切ったスイートプリキュアとシーレインの戦い、メロディとリズムは、阿吽の呼吸でタイミングを合わせ、シーレインに突撃し、メロディはパンチを、リズムは連続して回し蹴りを繰り出すも、シーレインは見切ったように二人の攻撃を躲し続ける。ビートは、上空高くジャンプしかかと落としを狙い、ミューズは、シーレインの側で身を伏せ、足払いを放った。だがシーレインは、その時間差攻撃をも見切り、シーレインは四人から距離を取った。シーレインはどこからかハープを取り出すと、ミューズの顔色が変わり、

「みんな、気を付けて! あいつは、あのハープの技を使って不思議な事をしてくるわ! さつき私が、スパークリングシャワーを放ったら・・・何故か私の放ったスパークリン

グシャワーが、私を攻撃してきたの!!」

「「エエエ?」」

ミュージズからの情報を聞き、三人は驚きの表情を見せた。メロデイは試して見ようと思おうと、リズムに目配せをした。リズムは頷き、メロデイはミラクルベルティエを、リズムはファンタステイックベルティエを取りだし、メロデイは、ミラクルベルティエをクロスロッド状態に、リズムは、ファンタステイックベルティエをクロスロッド状態へと変化させた。

「駆け巡れ、トーンのリング!」

メロデイとリズムは、クロスロッドを鈴のように振ると、

「プリキュア!ミュージッククロンド・スーパーカーテット!」

二人の掛け声と共に、薄いブルー、薄いオレンジ、ピンク、薄いピンク、レモン色の五本のリングが現われ、ハート形の光と共に螺旋のようにシーレイン目掛け飛んで行った。

(仕方が無いわね・・・)

シーレインは少し憂いを帯びた表情を浮かべながら、ハープを巧みに奏でると、

「シベリウスシフ!!」

ハープの曲調が変わったのと同時に、メロデイとリズムが放ったミュージックロン

ド・スーパークルテットが、メロデイとリズム目掛け飛んで行った。二人は目を見開き驚愕しながらも、自らが放った技を受け吹き飛ばされた。

「キヤアアア！」

「メロデイ！リズム！」

ビートは上空にジャンプし、飛ばされてくるメロデイとリズムを、身体を盾にして何とか受け止めた。

「ありがとう、ビート！」

「ミューズの言った通りね！」

「だったら！」

メロデイ、リズム、ミューズの考えは同じのようで、三人は、肉弾戦を仕掛ける為に、シーレイン目掛け突撃した。その時、シーレインの目が妖しく輝き、

「近付けば何とかなると思ったのかしら？・・・ジ・レクイエム！」

シーレインのハープから、物悲しい曲調の調べが奏でられた。それを物ともせず、シーレイン目掛けるメロデイ、リズム、ミューズだったが、ビートは見る見る顔を青ざめ、

「な、何かおかしい・・・メロデイ、リズム、ミューズ、逃げてえええええ！」

「「エツ!?!」」

ビートの絶叫も空しく、ビートの声に気付いた時は、メロディ、リズム、ミューズは、シーレインの結界に捕らわれ、三人の耳に死のメロディが流れてきた。見る見る三人の表情は真つ青になり、力なくその場に倒れ込み、ピクリとも動かなくなつた。それを見届けると、シーレインはハーブを奏でる事を止めるも、倒れた三人が動く事は全く無かつた。呆然としながら三人に近付いたビートは、メロディ、リズム、ミューズの順番で三人の身体を揺すつたり、声を掛けたりするものの、三人は何の反応も示さなかつた。ビートの目から涙がポロポロ零れ落ちると、

「メロディ！リズム！ミューズ！イヤアアアアア!!」

ビートは、涙を流しながら絶叫した・・・

4、ビートの命！ハミイの命！

泣きじゃくるビートの声に気付き、満足そうにテーブルの上で眠つて居たハミイは、慌てて飛び起ると、心配そうにビートに近付き声を掛けた。

「セイレーン、どうしたニヤ!?!」

(セイレーン!?!あのプリキュアは、セイレーンと言うの?)

ハミイがビートの事をセイレーンと呼んだ事に、思わずシーレインはハツとしてビートを見つめた。自分と似たような名前を持つビートに、何処か親近感さへ湧いてきた。



ビートは、どうしたら良いのか分からないといった表情で、ハミイに哀願するような表情を浮かべると、

「ハミイ……どうしよう!? メロデイが、リズムが、ミュージックが……息をしてないの!」  
「ニヤ、ニヤンですとおおお!?!」

ビートの話を聞き、ハミイも円らかな瞳を思いつき開いて驚愕すると、倒れ込むメロデイ、リズム、ミュージックに声を掛けたが、三人からは何の返事も返らなかった。シーレインは、倒れ込む三人を物悲しそうに見つめながら、

「私も、出来ればこんな事はしたくなかったけど……ジ・レクイエムは攻防一体の技、この調べを聞いた相手を、穏やかな気持ちで死に至らしめる私の奥義! 彼女達は、安らぎの中で、やがて……息絶える!!」

「そんなああ!? メロデイ! リズム! ミュージック! 返事してよ……」

必死に三人に声を掛け続けるビートとハミイだったが、三人は依然何の反応も示そうとはしなかった。シーレインは、そんなビートの姿を、見て居るのが辛くなったかのよう目を閉じると、

「無駄よ! 彼女達は……!?!」

シーレインは思わず話して居た言葉を飲み込み、半ば呆然としながら再び目を開きビートの事を見た。ビートは大きく息を吸い込むと、

「ララララ、ラララアラ．．．」

ビートは、横たわる三人に聞かせるようにその場で歌い始めた。時折涙を噉りながらも、ビートは歌い出した．．．

深い闇の中を落ちていくメロディ、リズム、ミュージック、三人は心地良いハーブの音に聞き入っていたが、そんな三人の耳に、ビートの歌声が聞こえて来た。まるでビートの歌声に止められたかのように、三人はその場に留まると、

「私、どうしてこんな所に居るんだろう?」

「メロディ、私達どうして．．．そうだ! ビートは?」

「そうだよ、私達戦って．．．」

メロディも、リズムも、ミュージックも、三人は同じように闇の中を見渡すも、ビートの姿も、シーレインの姿も何処にも無かった。ただあるのは無限に続くかのような闇、だがその闇の上の方から、確かにビートの歌声が聞こえていた。メロディ、リズム、ミュージックは、顔を見合わせ合うと頷き合い、

「「帰らなきや! みんなの居る加音町に!!」」

声に導かれるように闇の中を上昇して行った!!

ビートが懸命に歌い続ける中、シーレインは首を横に振り、

「無駄な事を．．．エツ!」

思わずシーレインは目を見張った。何故なら、死のメロディを聴いて、死の淵へと落ちていった筈の、メロディ、リズム、ミューズの身体が、ピクリと微かに動いたのだから……

「バカな!? 私のジ・レクイエムを聴いて……クッ!」

シーレインは再びハープを取り出すと、ジ・レクイエムを奏で始めた。今度はビートや側に居るハミイをも死へと誘おうとするかのように、だが、ビートは歌を止めなかった。更にはハミイも加わり歌い始めた。

「ララララ、ララ、ララララア」

シーレインも負けずとハープを奏で続けるも、次第に二人の歌声に聴き惚れていった……

(あの二人……何と心のこもった歌を歌うの!? まるで、命の……ハツ?)

シーレインはそう考えた時ハツとした。二人は自らの命を燃やして、仲間の三人を助けようとしているのではないかと思うと、

「止めなさい! それでは、あなた達まで命を落とすわよ!!」

シーレインは、敵である筈のビートとハミイの身を思わず案じ声を掛けるも、

「構わない! それで、メロディが、リズムが、ミューズが……三人が生きてくれるなら

!!」

「な、何を!?」

(私の・・・負けね!あなた達の歌声に聞き惚れた時点で分かっては居たけど、認めたくなかった!!)

自らの命を燃やししながら、再び歌い続けるビートとハミイを見たシーレインは、自らの負けを心の中で認めた。シーレインは、再びハープを奏で始めるも、それは死のメロディ、ジ・レクイエムとは明らかに違う曲調だった・・・

### 5、シーレインからの忠告

「「ウ、ウウウン・・・」」

何処か艶やかな声を発しながら、メロディ、リズム、ミュージックはゆっくり目開いた。まだ身体が馴染んでいないかののように、全身が怠かったが、三人がゆっくり起き上がると、その側で、プリキュアの姿を解いたエレンとハミイが、笑みを浮かべながら横たわって居た。慌てて三人はエレンとハミイを抱き上げ声を掛け、

「エレン、ハミイ、どうしたの?」

「二人共、返事して!」

「そのまま寝かせて上げて!」

「「エツ!?あなたは!!」」

シーレインを見つめるメロデイ、リズム、ミューズの視線は厳しかったが、シーレインは首を振り、

「私は、あなた達と敵対する意思はもう無いわ！私は、彼女達に……負けたのだから」

「エツ?! エレンとハミイに?」

「どう言う事よ?」

シーレインの敗北宣言を聞き、メロデイ、リズム、ミューズは、訳が分からずシーレインに問うと、シーレインは今までの経緯を三人に簡潔に話した。シーレインのジ・レクイエムを聴いた三人は、一度は死の淵に堕ちた事、それをエレンとハミイが、自らの命を燃やして歌い続けて三人を救った事、力を使い果たしたエレンとハミイの事を……

「じゃ、じゃあ、エレンとハミイは……死なせる訳無いでしょう!」

シーレインがそう断言すると、メロデイ、リズム、ミューズはホツと安堵し、寝ている二人の耳元に感謝の言葉を伝えた。シーレインは、改めてメロデイ、リズム、ミューズの前に立つと、

「さつきも言っただけど、元々私はあなた達と敵対するつもりは無かったの! 成り行きで戦った事は謝るわ……ゴメンなさい!!」

そう言うのと、シーレインは素直に頭を下げた。

「ううん、分かってくれたなら・・・私達もつい感情的になって、あなたの話を最後まで聞けなかったのも悪い・・・」

「そう言つて貰えると助かるわ!改めて自己紹介するわね、私は魔界に住むシーレイン!」

シーレインにもう敵対意思が残つて無いと分かり、メロデイ、リズム、ミューズも変身を解くと、

「私は、北条響事キュアメロデイ!よろしく!!」

「私は、南野奏事キュアリズムよ!」

「私は、調辺アコ事キュアミューズ・・・私も早とちりしてゴメンなさい!」

「いえ・・・それで本題だけど、私がこちらの世界に来たのは、あなた達に聞きたい事があるからなの!!」

「聞きたい事!」

「ええ!この前、私達が住む魔界に、一人のプリキュアが乗り込んで来たの!!」

「エエ!?」

「私は、その本当の目的が知りたいだけ・・・本当に魔界に攻めてきたのか、それとも迷い込んだだけなのかをね!」

腕を組んで首を捻つた響は、

「ウウン、少なくとも私達じゃ無い事は確かだけど・・・他のみんなもそんな事しないと思うなあ」

響の言葉に奏も相槌を打つと、

「ええ、私達が魔界に行く理由が無いものねえ？」

響と奏の会話を聞く限り、二人が嘘を言っているとは感じられず、シーレインはコクリと頷きながらも、

「そう・・・出来れば他のプリキユアにも、聞いて欲しいのだけれど・・・」

「そういう事情なら・・・エレンが起きたら、みんなに連絡取ってみるよー」

「そうしてくれると助かるわ！あなた達を見た限り、魔界と戦う意思を持っているとは思えないし・・・」

それから30分後、目を覚ましたエレンによって、一同にメールが送信された。続々と返信されてくるも、皆そんな事はしていないと答える中、なぎさだけは、心当たりがあるから、今からせつなに頼んで加音町に来ると返信があった。シーレインは嬉しそうに頷き、

「それは助かるわ！直に何か知っている人に話を聞けるなら、それはこちらの手間も省けるわ!!」

「じゃあ、調べの館に場所を移しましょう！人前じゃ色々と言にくい事もあるだろう

し

エレンはそう言うと、なぎさ宛てに調べの館で待っていると返信を返した。それから約十分後、調べの館のエレンの部屋が騒がしくなり、

「何!? 私の部屋から声が・・・」

恐がりなエレンはビビりながら、響と奏、アコとシーレインにも来て貰い、恐る恐る自分の部屋をソツと空けてみると、中には美希、みゆき、あかね、やよい、なお、れいか、あゆみ、真琴、アン王女、キャンデイやエンエンとグルルが居て、思わずエレンはそのままドアにズツコケテ中へと入った。

「人の部屋で何やってんのよおおお！」

みゆきは頭を掻きながら、

「エへへへ、ゴメンなさい! あの後、なぎささんが、魔界の人と話すチャンスだから、みんなも一緒に行かないって誘われちゃって」

「それで、あたし達も加音町に来ようと思った訳!」

みゆきの言葉に苦笑を浮かべた美希も同意し、なおが美希の言葉を引き取り、「エレンさんの部屋は、調べの館にあるって聞いてたのを思い出したら・・・」

「「「「「不思議図書館からこの部屋にみんなで来ちゃった!」」」」」」

「やつかましいわ! 私の部屋を滅茶滅茶にしてええ・・・後で片付けてよね!!」



目を吊り上げて怒るエレンの表情を見て、思わずシーレインはクスリと笑った。それに気付いたみゆき達は、見掛けない顔のシーレインを見て首を傾げ、

「ひよつとして、その人が？」

「ええ、私は魔界から来たシーレイン！以後お見知り置きを!!」

シーレインが頭を下げて挨拶を始め、慌てて美希やみゆき達も挨拶を返した。更にその数十分後には、せつなに連れられた一同が調べの館に集まり、総勢33人の少女達が勢揃いした。さすがにプリキュアがこれだけ居るとは思わなかったシーレインは驚き、

「あなた方全員が・・・プリキュア？」

「わたくしは違いますけどね！」

アン王女は、少し愁いを帯びた表情で、自分は違うとシーレインに告げた。シーレインは一人一人顔をジイと見つめると、

「それでも・・・想像してたより遥かに多いわ」

「実は、他にも居るんだよねえ！」

えりかの言葉に咲も同意し、

「まあ、地球に居ないから、中々こつちから連絡つかないんだけど」

「そ、そうなの!？」

一体何人居るのだろうか？シーレインは呆然としてみると、なぎさは咳払いを始め、

「で、さっきのメールの内容の事何だけど、あなたが知りたがってた、魔界に行ったプリキュアの名前は・・・バッドエンドピース！けど、彼女は何かの拍子に魔界に迷い込んだって言うってた」

「やはりそうでしたか・・・」

「その時に、アベルって奴と、ダークドラゴンって言うのが戦ってて、バッドエンドピースは、アベルに攻撃されてやられそうになった時、ダークドラゴンに助けられて魔界から逃げ帰ったんだって」

「まっ、待つて下さい！アベルがダークドラゴンと戦って居たのですか？」

「うん！バッドエンドピースはそう言うってた」

なぎさの話聞き、見る見る表情を険しくしたシーレイン、本来ドラゴン族に手を上げる事は、魔界の中でもタブーとされていた。何故なら、竜族は仲間意識が強く、竜族に手を出せば、魔界全土が戦場となる魔界大戦が勃発すると言い伝えられているのだから・・・

「それが本当なら、アベルを問い詰める絶好の機会！」

「ねえ、アベルっていう奴に付いて知りたいんだけど、教えてくれないかな？その戦いが元で、ダークドラゴンは命を落としたそうだし・・・」

「エツ!?ダークドラゴンが？そうですね・・・あなた方は知っている限りの事を話してく

「ださいましたし、私も魔界の事をお話ししましょう・・・」

シーレインは、そう言うのと魔界の状況について話し始めた・・・

魔界は、魔王ルーシエスが治めてからは、ただ争いに明け暮れる世界では無くなった事、天に聳える黒き塔、そこに住む魔王ルーシエスを守るように、十二の宮が存在する事、各宮には、魔王を守護する魔神達が居る事、自分はその中で天秤宮を守っている事、その魔王が表舞台に出て来なくなった事を良い事に、双児宮を守護するカインとアベルが暗躍している事などを語って聞かせた。ほのかは少し真顔になり、

「十二の魔宮・・・それぞれの宮を守護する魔神」

「ええ、あなた方もバルガンと闘った事があるのでしょうか？バルガンは、宝瓶宮を守護していたの」

「ああ、あの人面樹の人ね！」

バルガンと闘ったのぞみが、少し嫌そうな表情で思わず呟いた。シーレインはコクリと頷き、

「ええ、バルガンの事は私からも謝るわ！魔王ルーシエス様は争いを嫌うお方で、人間界には手出ししないように言われていたのだけど・・・」

何かを思案するように言葉に詰まったシーレインの間に割り込むように、再びなぎさがシーレインに問い掛け、

「私達、妖精学校でソドムって奴に、酷い目に遭わされたんだけど、そいつは十二宮の魔神じゃないんだ?」

「ソドム!?!いえ、私は初めて聞く名前ですが・・・」

シーレインは初めて聞くソドムと言う名が気になり、一同にどんな人物だったか容姿を問い、一同から聞かされたソドムの容姿を思い描いて目を見開いた。

「それでは、まるでカインとアベルそっくりな・・・やはり何かを企んで居るのは確かなようね」

つぼみは不安な心を打ち消すかのように、シーレインに話し掛け、

「でも、こうしてシーレインさんと親睦を深める事が出来たし、魔界と争わないで済めば良いですね?」

「それは・・・残念だけど無理ね!」

「エッ!?!」

「私は、あなた達ともう敵対する意思は無いけれど、魔界に戻った私は、おそらくカインとアベルによって、何らかの処断をされる。もちろん、あなた方に魔界と敵対する意思は全く無い事は、みんなに伝えるけど、カインとアベルが、人間界に対し、何らかの手出しをしてくるのは、避けられないと思う・・・注意して!!」

シーレインからの忠告を聞き、一同は思わず沈黙した・・・

## 第九十六話：歌姫VS音姫！

完

## 第九十七話：シーレインの誤算

1、アモンVSアベル

魔界・・・

不気味な薄暗い空に雷が轟き、十二の魔宮を時折稲光が照らしだしていた・・・

シーレインがスイートプリキュアと戦っていた同じ頃、シーレインの不在を利用したカインとアベルが、密かに動き出していた。十二の魔宮の一つ、巨蟹宮に向かったカインとアベル、まるで二人を歓迎するかのように、巨蟹宮に続く道を稲光が照らし、その稲光に導かれるかのように、カインとアベルが歩を進める。その姿を、息を潜ませながら鋭い双方の目が見つめていた。稲光がその人物を照らした時、姿を現わしたのはアモン！

「やはりシーレインの読み通り、カインとアベルが動き出したようだな・・・無人の巨蟹宮で、何を企んで居るかは知らんが、このアモンが居る限り、貴様らの好きにはさせんぞ！」

アモンはシーレインに頼まれた通り、カインとアベルに対する警戒を怠らなかつた。それが幸いしてか、アモンは、直ぐに行動を起こしたカインとアベルに気付き、その後

を追った。だが、カインはその一歩上を行っている事を、アモンが気付く事は無かった……

不気味に静まりかえる巨蟹宮の巨大な扉を、右側をカインが、左側をアベルが押し、ドアを全快に開くと、二人は薄暗い闇の奥へと歩を進めて行つた。巨蟹宮の入り口に佇んだアモンは、無人の筈の巨蟹宮に、カインとアベル以外の気配を感じていた。

(何だ!?何者かが……居る!)

アモンは、カインとアベルの企み、並びに巨蟹宮に潜む謎の人物を探る為、巨蟹宮の中へと歩を進めていった。巨蟹宮の奥深くからは、アモンをして緊張させる程の、重苦しい空気が流れてきた。魔界の魔獣と恐れられるアモンは、その緊張を感じたのもちよつと、逆にその正体を暴こうと、戦士としての心が高ぶっていた。どれくらい歩いたのか、アモンにも分からなかつたが、薄暗い奥の部屋から、話し声が聞こえてきて、アモンはその場で足を止めた。

(この奥か!直ぐに踏み込むか、少し様子を見るか……)

少し考えたアモンは、様子を見ようと決断し、奥の状況を、気配を消して探つた。その奥からは、アベルが誰かと会話している声が、アモンにも聞こえていた。

「傷は癒えたか、ソドム?」

「問題無い!最も、この生首だけでは動く事も出来んがなあ」

(ソドム!? 何処かで聞いた名の気もするが・・・)

ソドムという名に聞き覚えがあったアモンが首を捻ると、アベルは、そんなアモンの行為をお見通しとばかり、

「アモン、そんな所でコソコソしてないで、こつちに來たらどうだ? 魔界の魔獣と恐れられた名が泣くぞぞ!」

(氣付かれていたか!?)

アモンは、氣付かれたのならコソコソする必要も無いと思い、ゆつくりアベル、そして、黒い不気味な台に飾られていた生首、ソドムの前に姿を現わした。そんなアモンの姿を見るも、アベルは何故か口元に笑みを浮かべ、

「おいおい、氣付かれないとでも思つて居たのか? 貴様のようなガタイの良い奴が、どんなに氣配を隠そうとも、俺が氣付かない筈無いだろう?」

「フン、氣付かれていたなら隠れる必要も無い! アベル、そのソドムという者は何者だ!?!」

アモンは、ソドムをキツと睨み付けながら指差し、アベルに問い掛けた。アベルはソドムをチラリと見ると、アベルとソドムは不気味に笑い、

「クククククク、アアハハハハ!!」

「貴様ら、何が可笑しい?」



アベルとソドムに侮辱されたと感じたアモンは、戦士の誇りを傷付けられたように感じ、闘気を二人に浴びせた。だが、二人はそんなアモンを見ても笑いを止めず、アモンは大腿でアベルに近付くと、アモンは右手で、アベルの白い軍服の胸ぐらを掴み持ち上げると、

「その薄汚い笑いを止めろ！ 貴様もその生首のようになりたくなければなあ!!」

「クククク、止める!? これが笑わずに居られるか!」

「どういう意味だ!?!」

更にアモンは、アベルを締め上げようとするも、ある事に気付きアベルをそのまま投げ飛ばすと、アベルはクルリと宙で回転し着地した。アモンは周りを見渡し、カインの姿が消えている事に気付き、

「アベル、カインは何所だ!? 貴様らは何を企んで居る?」

「クククク・・・良いだろう、貴様にも教えてやる!! 我らの真の目的は・・・魔王ルーシエスによって封じられた、我らの本当の肉体を取り戻す事だ!!」

「本当の肉体だと!?!」

そう言ったアモンは、思わずハツとした!

アモンの脳裏に、忘れようとした悪夢が甦つて来る・・・

嘗て、ルーシエス以前にこの魔界を支配していた魔王の事を、巨大なる漆黒の身体と、

巨大な蝙蝠のような羽を持ち、前、両横に顔を持つ、三顔の悪鬼、悪魔王ゼガンの事を：

悪魔王ゼガンの姿を思い出した時、アモン程の勇者でも思わず全身に震えが走った。驚愕の表情を浮かべたアモンは、

「ま、まさか・・・貴様らは!？」

「そうだ！我らは三人であり、一人でもある！我らの本当の名は・・・ゼガン！俺とアベル、そしてカインは、ルーシエスの策略に陥り、三つの身体に分けられ、肉体を封じられた・・・」

「ルーシエスは、俺達を監視する事も含め、手元に俺達を置こうとした。それに気付いたカインは、ソドムの存在を隠し、魔王ルーシエスに従う振りをしながら、ソドムに真の肉体の探索を命じた・・・」

ソドムとアベルの話の聞く内に、アモンにも当時の記憶が徐々に甦って来ていた。この魔界全土を巻き込んだ、魔界大戦の事を・・・

ゼガンは、その圧倒的力で魔界を制圧し、その力を誇示するかのように、従わぬ者は次々八つ裂きにしていった。静観していた竜族の長、光の竜バハムート、普段はバハムートと唾み合いながらも、ゼガンの非道な行いに激昂したダークドラゴンも加わり、ゼガン率いる魔族と竜族との間で300年の長きに渡る戦いが繰り広げられた。その戦いに巻き込まれ、多くの魔界の者達が命を落とした。魔界の魔獣と恐れられたアモン

だったが、この戦いには加わらず、もっぱら弱い魔界の精霊達を助け、静観をしていたが、一度だけゼガンと戦った事があった。魔界の魔獣と恐れられたアモンだったが、ゼガンが放つ圧倒的威圧感に飲まれ、為す術もなく殺されようとしたその時、天空より背中に10枚の天使の翼を持ったルーシエスが舞い降り、ゼガンと対決した。

「あの時、ルーシエス様が現われなければ、俺はゼガンに八つ裂きにされていただろう……」

「そうだ！だが、俺達はお前の事を評価していたのだぞ、アモン!!」

「我らに恐れつつも、精霊共を守る為に、我らに立ち向かった貴様の事は認めていた」

アベルとソドム、二人は意思を合わせたかのように、

「我らに手を貸せ、アモン！もうこの魔界に、ルーシエスは存在しないのだ!!」

「な、何だと!?ルーシエス様が……どう言う事だ?」

アモンは顔色を変えた……

この魔界を治める魔王ルーシエスが、相手がゼガンならばいざ知らず、力を封じられている今のカインとアベルに倒せるとは思えなかった。そんなアモンの疑問に気付いたのか、アベルとソドムは低い声で笑い始めた。アモンは激昂し、

「何がおかしい!?良いだろう、貴様をこの手で倒し、我が手でルーシエス様を救って見せる!!ウオオオオオ!!」

「ほう、この俺とやるのか・・・アモン!?」

アモンが咆哮すると、巨蟹宮の中が地震でも起きたかのように激しく揺れ、アモンの身体に闘気が漲ってくる。それを見たアベルは、直ぐに臨戦態勢に入り、アベルの身体が発光しだした。両者が動き出し、アモンの鋭い爪から繰り出す素早い連続突きが、アベル目掛け炸裂する。アベルは躲し続けるも、何発か頬を擦り、両目を金色に輝かせたアベルが、アモンに雷を放つも、アモンは大きく息を吸い込むと、口から火炎を吐き、雷と相殺させた。

「流星は魔界の魔獣と言われるだけはある・・・この姿では、俺の方が不利か?」

「フン、ソドムとやらに手を借りても良いのだぞ?」

アモンに名を呼ばれたソドムは、両者の戦いを見てクククと笑い、

「貴様ら、俺の巨蟹宮を壊す気か?ここで戦わせるのは・・・光の戦士プリキュアだけで十分何だかなあ?」

(プリキュアだど!?)

プリキュアの名を聞き、一瞬虚を突かれたアモンに、アベルの雷を帯びた右ストレートの顔面に炸裂し、アモンは右片膝を付くも、二発目のパンチは左手で受け、逆にアモンはアベルに右ストレートを放つも、今度はアベルが左手で受け止めた。ガツプり四つの体勢で力比べを始めたアモンとアベル、パワーではアモンが上かと思われた

時、アモンは、アベルの背後から突然現われたカインを見て驚愕した瞬間、身体が言う事を聞かず、そのまま地面に倒れ込んだ。カインはゆっくりアモンの前にやって来ると、

「殺しはせん！アモン、俺達の為に働いて貰うぞ!!」

（グウウウ・・・シーレイン、スマン・・・俺は・・・俺は・・・）

アモンの意識は、深い闇の中に沈んで行くかのように、ゆっくり遠のいて行った・・・

## 2、束の間の親睦

調べの館に勢揃いしたなぎさ達と、魔界の戦士シーレインとの間に、奇妙な友情が芽生え始めて居た・・・

奏は、響、あかね、なお、真琴を連れ、一度家に戻ると、家からカップケーキを一杯持つて来て、一同を喜ばせた。奏はシーレインに、生地がチョコベースで、上に苺と生クリームたっぷりのカップケーキを差し出すと、シーレインは最初こそ戸惑ったものの、一口口の中に頬張ると、見る見る表情が和らいだ。魔界で生まれたシーレインにとって、初めて食する未知の食感、口の中に広がる生クリームと、チョコ味のスポンジケーキが口の中でマッチし、思わず目を見開くと、

「お、美味しい!?!」

「本当!?喜んでくれて良かった!まだまだ色々な種類があるから、良かったら食べてね!!」

奏は、シーレインが喜んでくれて、嬉しそうにそう言ったものの、持って来た箱の中身を見て見れば、既に残りは後一個になっていて、思わず奏は目を点にした。みんなに一人三個は余裕で配れる計算で持って来たのに、足りないような状況に、奏は思わず響をジロリと睨むと、響は慌てて口の中の物をゴクンと飲み込んだ。見る見る奏の顔は真つ赤になり、

「響いいい!!」

「良いジャン!持ってくるの手伝ったんだし・・・奏のケチ!!」

「ケチじゃない!毎回のように摘み食いしてええ!!」

怒った奏を見た響は、脱兎の如く逃げ出し、その響の後を奏が追いかけて、響と奏、二人が調べの館の中で追いかけてこを始める。そんな中、慌てて飲み込んだ者が更に三人居て、なぎさ、のぞみ、なおは、同じような表情で誤魔化し、一同を笑わせる。思わずシーレインもクスリと笑い、

「随分楽しそうねえ・・・何時もこんな感じなの?」

「フフフ、大体こんなものよね!魔界ではどうなの?」

今度は逆にエレンがシーレインに問い掛けると、シーレインは憂いの表情で、

「向こうで笑顔を見せた事何て・・・ほとんど無いわ!とところで、あなたセイレーンと言うのね?その猫ちゃんと呼んでいたけど・・・」

「ええ、メイジャーランドの名前ではね!でも、こつちの世界では黒川エレンよ!!」

「少し親近感が湧いたかも?」

「フフフ、私も!さつき、あなたが本気だったら、私達四人掛かりでも勝てなかった相手と、今はこうして笑顔で話を出来る何てね!出来れば他の魔界の人達とも、こんな風に過ごせば良いんだけど・・・」

「さつきも言ったけど、それは無理!ルーシエス様がお姿を現わして下さいれば別だけど・・・」

ルーシエスの姿を思い描いたのか、シーレインの表情が優しげになり、目をキラキラ輝かせたえりかが会話に加わり、

「ホホオ、恋する乙女の目をしてますなあ?」

「エツ!べ、別に・・・そういう訳じゃ・・・」

えりかに凶星を指されたかのように、シーレインの頬が赤く染まり、周りに居た一同からヒューヒューと声を掛けられ、益々シーレインは頬を染めた。こんな穏やかな気持ちになれたのは何時の事だろうか、シーレインは、プリキュア達との親睦を心から喜んだ・・・

楽しい一時も終りを迎えようとしていた……

シーレインは、響と奏の案内で、一同と共に人気の少ない天文台の近くにやって来ていた。シーレインは、一同を振り返り笑顔を向けると、

「あなた達と出会えて良かった！念を押すようだけど、用心だけはして！私のように、精神攻撃を得意としている者も居れば、バルガンのように毒を、戦った相手に呪いを掛けるような者も居る。私も出来るだけ、あなた方と魔界の者が戦わないで済むように、みんなに話して見るけど、おそらくは……」

「魔界がそんな状況なのに、このまま帰ってあなたは大丈夫なの？」

ほのかに聞かれたシーレインは、少し影のある笑みを浮かべると、

「おそらく、只では済まないでしょうね……でも、カインとアベルを追求できるチャンスでもある！大丈夫、私には信頼できる仲間が居るから!!」

「そっかあ……また会えるよね？」

なぎさに聞かれたシーレインは、コクリと頷いた。何処か陰のあるその表情を見て一抹の不安を覚えたものの、シーレインは、そんな一同を心配させないように、

「ええ、必ず！プリキュアの皆さん、ありがとう！」

シーレインは一同に頭を下げると、一同も釣られるように頭を下げた。



(もう、会えないかもしれないけど、あなた達プリキュアとの交流は忘れない!)

シーレインは、魔界に繋ぐ時空を出現させると、魔界へと帰って行つた。その姿を、一同は手を振って見送つた。

### 3、処断

魔界に戻つたシーレインは、魔神達に招集を掛けた・・・

黒き塔内部に続々と魔神達が集まってくる中、天羯宮を守護するベレルは、アモンに對して妙な違和感を感じていた。ベレルは、魔界の魔獣とも、勇者とも言われるアモンを、戦士として尊敬していた。魔界は強さこそ正義、弱者は当然明日をも知れぬ我が身に怯え、ひっそりと暮らし続ける。だがアモンは、そのような弱者を自ら進んで庇い、慕われていた。だが、今日の前に居るアモンは、鬨気を満々と発し、威圧感を周囲に張り巡らし、弱き精霊達もここに来るまで怯えていたのを、ベレルは見えて居た。

(アモン殿はどうしたのだ!?!これでは、ミノタウロスやバルバスと変わらぬではないか?)

ミノタウロスやバルバスは、常日頃から乱暴狼藉を繰り返し、弱者である精霊達から恐れられていた。アモンは、そんな二人を見付けけるや、精霊達を庇い続けて居たが、ベレルが見た今のアモンは、そんな二人と大差が無いように思えてならなかった。ベレル

は、アモンの真意を探ろうとするかのようには話し掛け、

「アモン殿、シーレイン殿が、是非拙者達に報告したい事とは何でござろうな？」

「・・グウウウウ・・・・・・・・・・・・」

「アモン・・・殿?!」

(おかしい・・・明らかに変だ!?)

アモンは、話し掛けたベレルの言葉を聞こえ無いかのように無視し、ドスドス足音を立てながら大股歩きで奥へと消え去った。ベレルの身は朽ちて、骨となっている為、ベレルの表情は分からない、だが、動揺している事は明らかだった・・・

再び集結した12の魔神達、シーレインは一同の顔を見渡すと、

「私は、人間界でプリキュア達に会い、アベルから報告があった、魔界に乗り込んで来た真意を聞きました。彼女達の中の一人は、此処に居るアベルと・・・ダークドラゴンの争いの影響で、この魔界に迷い込んだそうです!!」

アベルがダークドラゴンと戦ったという報告を聞き、カインとアモン、シーレイン以外が思わずざわついた。ベレルは確認するように、

「アベル殿、それは事実でござろうか!?!ドラゴン族に手出しする事は、この魔界で最大のタブーですぞ?」

(さあ、どう言い逃れするのかしら、アベル?)

シーレインは、お手並み拝見といった表情でアベルを見つめた。だがアベルは意に介さず、

「それがどうした？ダークドラゴンは、竜族との交流を絶った存在だ。問題あるまい？それに、奴が暴れていたのな、この俺自ら奴の横暴を止めたまでだ!!」

カインも、それがどうしたという表情を浮かべながら、

「その事については、既にルーシエス様に許可を得ている！問題あるまい？」

「ルーシエス様が!?!ならば問題無いわよねえ？」

ルーシエスの許可も得ているというカインの言葉を聞き、リリスは長い髪を掻き分けながら、他の一同に確認するように声を掛け、一同がコクリと頷いた。シーレインはアモンをチラリと見ると、

（アモン、私が留守中、カインとアベルに動きは無かった？）

シーレインは、アモンの心の中にテレパシーで話し掛けるも、アモンはシーレインの問い掛けに、何も答えようとはしなかった。シーレインは小首を傾げながらも、今一度アモンの心に話し掛けるも、アモンはまるで聞こえていないとばかり、無言を貫いた。

（アモン、一体どうしたの!?!アモン？）

シーレインの表情に、焦りが生まれた事を見抜いたカインは、逆にシーレインに尋問を始め、

「それよりシーレイン、貴様はプリキュアに会っていないながら、何の手土産も持たずに戻ったのか？」

「プリキュア達に、魔界に対する敵意は無かったわ！それが分かれば……」

「魔王様はこう言っていた筈だぞ！魔界に仇なすプリキュアを……倒せとな！そして、見せしめに何人か魔界に拉致して、我が生贄に捧げよと!!」

「だから、それは誤解だったと……」

「黙れ！貴様は、四神の身でありながら、魔王様の命に背いた……」

シーレインが弁明しようとすると、アベルがそれを遮った、カインは、シーレインを威圧するように、

「シーレイン、魔王様の命に背けばどうなるか、分かって居るよなあ？如何に四神と云えど、その罪は重い……よってシーレインの処断を、これより決める!!」

（クツ!?下手に動けば、返ってこちらが不利か?）

何とかカインとアベルの企みを、白日の下に暴こうとしたシーレインであったが、カインとアベルは、巧みにそれらを魔王ルーシエスの名の下に一蹴し、逆にシーレインの処遇を決めようと動き出した。シーレインは、ここで反論するのは返って自らを窮地に陥れると判断し、一同の出方を伺った。真っ先にカインとアベルに反論しようとしたのは、双魚宮のニクスだった。ニクスは激しく動揺しながら、

「お、お待ちを！シーレイン様に悪意があるとは……」

「ニクス、シーレインと懇意な貴様の弁解など聞かんぞ！」

「ですが……」

「これより、シーレインの処断について決を採る！知つても居る通り、反対が賛成を上回らない限り……シーレインは処刑する!!」

カインの宣言を聞き、一同はシンと静まりかえった。

「では、問う……当然俺は処刑こそ相応しいと思つている！アベル、お前は？」

「無論だ！シーレインは、ルーシエス様の命を独断で破つたのだからな!!アモン、貴様は？」

「……グウウ……殺す！」

「エツ!?!」

アモンは唸りながら、ただ一言殺すとハッキリ叫んだ。シーレインとニクスは、信じられないといった表情でアモンを見つめた。同じ四神であり、魔王ルーシエスに忠誠を誓う同志と信じて居たシーレインにとって、アモンのその一言は、とても信じられなかった。

「ア、アモン……」

シーレインはそのまま膝から崩れ落ちた……

信じて居た者に裏切られた絶望が、シーレインの心を覆い尽くして行く。そんなシーレインを見て、カインとアベルは口元に笑みを浮かべた。ベレルはそんなアモンの表情に疑惑を持ち、

（やはりアモン殿は・・・おかしい!?何か裏がある!）

ベレルはそう確信した・・・

アベルは口元に笑みを浮かべながら、

「そうか!アモン、お前も処刑に賛成か・・・ミノタウロス、お前は?」

「フン!そんな事、俺は興味が無い!!」

「俺もだ!プリキュアとやらと戦わせろ!!」

ミノタウロスとバルバスは、シーレインの処断については、何の興味も無いようで、頻りにプリキュアと戦わせろと騒いだ。カインはやれやれといった表情を浮かべると、ニクスを見つめ、

「ミノタウロスとバルバスは棄権か・・・ニクス、貴様は?」

「も、勿論反対でございます!シーレイン様を処刑だ何て・・・」

「分かった、もう良い!アロン、貴様は?」

カインに聞かれたアロンは、目を閉じ腕組みしながら思索していたが、腕組みを解くと目を見開き、

「……シーレイン殿の言う事も一理ござろうが、魔王様の命に背く事は……」  
「アロン！」

「案ずるな、ニクス！カイン殿、私は反対に回ります!!」

アロンも反対に回り、軽く舌打ちしたアベルは、ニヤニヤしているシャックスを見つめ、

「シャックス、貴様は？」

「フフフフ……そうですな、シーレイン様のような美女を殺すのは惜しいですな……どうせなら、魔界の者の慰め者にするのは如何ですか？一生を掛けて魔界の者達の子を産み続ける……そうそう、オークの子など如何ですか？二週間に一度、醜いオークの子を産むなど、裏切り者にはお似合いかと？」

シャックスが口に出したオークとは、魔界に住む者に取っては蔑むべき者と言われていた。豚とゴリラが合わさったような醜い容姿をしていて、オークの知能は低く、雄しか居なかった。だが、その分オークの生殖本能は凄まじく、集団で行動しては、あらゆる種族の女を凌つては犯し、犯された女は一週間でオークの子を孕み、二週間目には子を産む、生涯をオークの子を産む慰め者となった。魔族、動物、人間等、あらゆる種族の女や雌と交わっても、オークは、自分達種族の子を孕ませる事が出来る脅威、魔界に住む女モンスター達に取っては、最も忌み嫌う存在……それがオークだった!!

魔王ルーシエスは、オーク達をある一点の森に集め、そこで暮らすように命じ、結界を張った。その場所はオークの森と呼ばれ、女魔族に取って、決して近付いてはならぬ禁断の地と語られていた。そのオークに、あろう事かシャックスはシーレインを与えてはどうかと提案したのだから、ニクスの怒りは頂点に達しようとしていた。髪が真紅に染まり始め、シャックスを物凄い表情で睨みだし、リリスも今の言葉は聞き捨てならないと言うように、リリスの髪が、まるで生き物のように動き出した。

「貴様ああ、シーレイン様を侮辱するなら……」

「シャックス……今の言葉は、私も聞き捨てならないわねえ！」

「オオオ、怖い、怖い、こんな野蛮な者達と仲良くしている女は、殺した方が良いでしょうねえ……賛成です!!」

「シャックスウウウウ!!」

今にもシャックスに飛び掛かりそうな勢いのニクスを、細身の愛刀を引き抜いたベレルが抑え、

「ニクス、場をわきまえろ! シャックス、貴様も言葉を慎め!!」

「ウウウウ……ベレル様、しかし」

「フフフ、申し訳ありません!」

ベレルに止められたニクスは、まだ不満そうにしながら、何処か人を小馬鹿にした態



度を取るシャツクスを、恨めしそうに睨み続けた。場が落ち着いた事で、カインはリリスを見ると、

「リリス、お前はどうかだ？」

「此処はシーレイン様に貸しを作っておきましょう！反対ですわ!!」

「リリス・・・相変わらず素直じゃ無いわね？」

十二の魔神の中で、三人の女魔神と言う事もあり、シーレインとニクスの関係とは違いなながらも、リリスも心の中では、シーレインとニクスの事は認めて居た。ニクスもまた、憎まれ口を叩きながらも、リリスならきつと反対に回ってくれと信じていた。心を読まれたように感じたリリスは、少し跋が悪そうに、

「お黙りなさい！反対に入れて上げた事、良く覚えておきなさい!!」

女達の戯言など聞いておれんとばかり、カインはベレルを見つめると、

「ベレル、お前はどうかだ？」

「拙者は当然反対しましょう！シーレイン殿のような貢献者を、処刑などはもつての他に存じまする!!」

「ベレル様ああ!!」

カインとアベルにも忠誠を誓っているベレルが、ニクスにもどう動くか分からなかったが、ベレルは処刑しようと試みる事自体不満そうで、ニクスは嬉しそうにベレルを見

た。

「成る程・・・賛成は、俺とアベル、アモンにシャックス、反対は、ニクス、アロン、リス、ベレル、棄権はミノタウロスにバルバスかあ・・・」

現状は賛成4、反対4、棄権2の全くの互角で、最後の一人、オロンの決が重要となった。オロンは、そんな一同の視線を知ってか知らずか、自分の白い体毛を使って、床に何か描いていた。カインは呆れながら、

「オロン、遊んでないで貴様も・・・」

「待つて下さい！これは・・・反対!?見て下さい！オロンは、反対つて毛で書いてます!!」  
ニクスの指摘を受け、棄権したミノタウロスとバルバスが確認すると、確かに毛は反対と読めた。ニクスは嬉しそうにオロンに抱き付き、オロンはオロロオンと嬉しそうに一鳴きした。カインは舌打ちしながらも、

「結果が出たな・・・シーレインは、この塔の牢で謹慎処分とする！良いな、シーレイン?」

だが、アモン以降の一同のやり取りを、シーレインは知らない・・・  
彼女の心は、深い哀しみに沈んだままだった・・・

(アモン、どうして!?!私は、何の為に人間界に・・・プリキュア達よ、私はあなた達のために、何もしてあげられなかった・・・)

ミノタウロスに担がれたシーレインは、荒々しく黒き塔の最下層に幽閉された事を、プリキュア達は知る筈も無かった・・・

4、あゝ夏休み！

翌日・・・

七色ヶ丘中学校は、終業式を迎えていた・・・

一同は、明日からの夏休みをどう過ごすかななどを語り合い、和気藹々としていたが、バッドエンドプリキュア達に取っては、夏休みとは何の事だか理解出来なかった・・・

今日も真琴をからかってやろうと、やおいは真琴の教室一年一組に來ると、キヨロキヨロ部屋の中を見回したが、真琴の姿は見当たらなかった。やおいは、近くに居たツインテールをした緑髪の少女若林さなえと、赤髪のショートヘアーの真鍋ゆきに、ブリツ子風に声を掛けると、

「ねえ、今日はソード・・・じゃなくて、真琴ちゃんは居ないのお？」

「真琴ちゃんですか？あれえ、今まで・・・」

今まで居たのになあと、さなえとゆきが真琴の机の方を見ると、真琴は机の下に隠れ、右手の人差し指を鼻に当て、シイとジエスチャーをしていて、思わず二人は目を点にした。

「あ、あのう、何処か行っちゃったみたいですよ！」

「エエエ!? 居ないのおお? 残念だなあ! 昨日の写真が出来たのに……」

(昨日の写真!?)

真琴は、やおいが言った昨日の写真という言葉が気に掛かり、少し顔を持ち上げると、  
「まっ、いつかあ! そうだ、あなた達も、ソード……じゃなかった、真琴ちゃんの面白い写真見て見ない?」

「面白い写真ですか?」

「うん!」

さなえとゆきが小首を傾げるも、やおいは意に介さず、上着のポケットから一枚の写真を撮りだし、

「昨日、真琴ちゃんが泣きながら……」

「ワアアアアアアア!!」

真琴は、やおいの企みにまんまと陥り、さなえとゆきに変な写真を見せようとしているやおいを、慌てて教室の外に連れ出し、階段の方まで連れて行った。やおいはゲスイ表情を浮かべると、

「なあんだ! ソード、やつぱり居たじゃない!!」

「わ、私に、何の用よ!?!」

「アレエ!?先輩にそんな態度取って良いの?」

「ウウウウ・・・な、何の用ですか?」

「何の用ですか、やおい先輩・・・でしよ?」

やおいはニヤニヤしながら、真琴に自分が言ったように呼んでみてと告げると、真琴は屈辱感で一杯になりながらも、

「ウウウウ・・・な、何の用ですか?や・お・い・・・先輩!」

「別にいい、暇つぶしいい!ソードからかうと面白いんだもん!!」

「そんな事で教室に來ないでええ!」

「エへへへ、これからソードは、私のパシリにしてあげるう!」

「だ、誰がああ!!」

「あれえ!?!この写真バラ巻いても良いんだあ?」

やおいはそう言うのと、昨日泣きながら焼きそばパンを渡す真琴の写真を見せた。見る見る真琴は頬を染めて、

「い、何時の間に・・・返してええ!」

「嫌だよおおお!ベエエエ!!」

半泣き状態の真琴が、やおいから写真を奪おうとし、やおいは逃げ惑ってそんな真琴をからかっていると、突然やおいの頭に拳骨が落ち、やおいは思わず舌を嚙んで涙目に

なった。恨めしそうに背後を向くと、そこには周囲に冷気を撒き散らしたれいな姿があり、

「学校で目立つ行動をするなって、私言つて置いたわよねえ？」

「ビュ、ビュ〜ティ!?アハハハ、ちよつと退屈凌ぎに・・・」

「教室に戻るわよ!もうすぐ終業式も始まるんだから!!」

「分かった!分かったから引きずらないでええ!!」

れいなに襟を掴まれたやおいが、ズルズル引き摺られながら真琴の下を去り、真琴は思わず鼻を噁りながら、

「た、助かったああ!バッドエンドピース・・・絶対許さないんだからああああ!!」

そう言いながらも、写真を取りあげそなたになった真琴は、心の底から、明日から夏休みで良かったとホツと安堵した。

終業式も終り、みさき、あおい、やおい、なみ、れいな五人は、屋上のみゆき、あかね、やよい、なお、れいかを呼びつけた。やつて来たみゆき達五人は、皆何の用だろうかと警戒し、あかねは少し表情を険しくして、

「何や、ウチらを屋上に呼んで?」

「こんな所でまた戦う何て言わないよな?」

なおも怪訝な表情でみさき達を見ると、あおいはニヤリとしながら、

「お望みちゆうなら、ここで戦つてもエエで！」

「お止めなさい！あなた達を呼んだのは他でもないわ・・・夏休みつて何をすれば良いの？」

れいなはあおいを窘めると、みゆき達五人を見つめながら、夏休みについての質問を始めた。予想外の出来事に呆然としたものの、戦いに来た訳では無いと知つたみゆきは、少し楽しげに、

「エツ!?エエと、その名の通り、夏の間学校がお休みになる事で、その間は大いに遊んで、大いに遊ぶ有意義な事だよ！」

「オオオ!?それは良いねえ！」

「でしよう?」

似た者通し気が合うかのように、みゆきとみさきが笑い合うと、れいかは少し溜息を付き、

「みゆきさん・・・勉強の事が抜けてますが?」

れいかが少し呆れたように、みゆきに勉強の事が抜けていると伝えると、みゆきは苦笑しながら、

「エへへへ!宿題があるのが難点何だけどねえ」

「でも、一ヶ月以上あるから・・・」

「じゃあ、遊び優先で大丈夫じゃん!」

「そうそう!」

やよいとやおおい、同じようにブリツ子風水草で相槌をうち、益々れいかの表情が曇った。れいなを除いた四人は、嬉しそうにハシャギ、れいなはれいかを見つめると、

「宿題もやらなきや不味いんでしよう?」

「はい!後で苦労する事になると思いますよ!」

「まあ、あの子達に何言っても無駄よね?」

「・・・そのようですね?」

こうして語り合う姿は、とても敵味方同士には見えなかった・・・

バッドエンド王国・・・

ジョーカーは、学校に通い始めてから、バッドエナジー集めが疎かになっている、バッドエンドプリキユア達に活を入れようとやって来たものの、彼女達の姿は見当たらなかった。

「全く、何所で遊び呆けてるんですかねえ・・・ン!?」

ジョーカーは、五人が食事をする時に集まる大きなテーブルの上に、紙が置いてある



事に気付き、手にとって読み始めた。そこにはこう書かれていて・・・

・・・ジョーカーへ！

人間の世界には、夏休みが有るんだってえ！

羨ましいよねえ・・・

て事で、私達も9月迄バカンスに行つてきまあす!!

捜しに来ちゃダメだよ！

「な、何じゃコリヤアアアアアア!?!」

ジョーカーは、読み終わった紙をビリビリに破いて撒き散らすと、尚も口惜しいのか、何度も足で紙を踏みつけた。

第九十七話：シーレインの誤算

完

## 第九十八話：お婆ちゃんとの思い出!

### 1、動き出す魔界の戦士達

魔界・・・

嘗てバルガンが守護していた宝瓶宮、そこはカインとアベルに任命された新たなる魔神、シャックスが治めていた。椅子に腰掛けたシャックスの目の前には、シャックスの配下である異種多様な生物達が跪いていた。シャックスは、爬虫類のような目で配下の者達を見渡すと、

「私は、前任のバルガンのように、自ら前線に出向こうとは思いません!何故なら、私にはあなた方のような、優秀な臣下がいるのですからねえ!」

「オオオオオ!!」

シャックスに言われたお世辞を、言葉通りに受け取った配下の戦士達が雄叫びを上げた。シャックスは手をパチパチ叩き、

「これより、あなた方には人間界に出向いて貰い、プリキュア達に戦いを仕掛けて頂きたい!当然、カイン殿やアベル殿の許可は取ってあります・・・見事プリキュアを倒した者、並びに捕らえた者には、私からカイン殿とアベル殿に進言し、シーレインの代わり

に、天秤宮の魔神に推薦させて頂きます!!」

プリキュアを倒すか、捕らえれば、シャックスは自分達の誰かを、シーレインの後釜に推挙してくれると言う言葉は、多くの戦士達の士気を上げた。トンボと蚊が合わさったような魔物が、揉み手をしながらシャックスに話し掛け、

「そ、それは誠にございますか?」

「はい!この場で嘘を言ってもしょうがありませんし・・・そうそう、皆さんにこれをお渡し致しますよう!!」

シャックスはそう言うと、一同に蛇の紋章が付いたヘアバンドを授けた。不思議そうに貰ったヘアバンドを弄くる魔物達に、

「邪魔かも知れませんが、人間界ではそのヘアバンドを付けて頂きます。それをしてい  
る間は、人間達にはあなた方が魔物とは分からない仕組みになっています。それと・・・  
人間を狩るのは構いませんが、程々にして下さいよ?魔王ルーシエス様最前の魔神達に  
知れたら・・・あなた方は八つ裂きにされるでしょうから?」

そう言うと、シャックスはニヤリと笑みを浮かべ、配下の者達は思わずゴクリと唾を  
飲み込んだ。一同が去った後、シャックスは片眼鏡を右目に取り付けると、脇に付いて  
居る赤いスイッチを押した。ピイイと機械音が鳴り響き、配下の者達の話し声が聞こえ  
て来る。

「クククク、あいつらに渡したアイテムこそ、この私がプリキュア攻略のヒントを得る為の重要アイテム、奴らの弱点を探り、それを利用すれば、プリキュアなど恐れるに足りない事でしょう! 精々私の捨て石として、プリキュア攻略のヒントを探ってきて下さいよ!!」

片眼鏡には、今受診した相手が見て居る容姿が浮かんで居た。その姿は、河童に似て居た……

巨大な顔をしたカエルとアザラシが合わさったような魔物ヴォジャノは、両脇に生えた三本の長い髭を、指でチョンチョン突つつきながら、甲羅を背負った魔物に話し掛け、「何だ河童、お前は、シャックス様に貰ったアイテムを付けないのか?」

「ああ、オイラは河童だ! 元々オイラは、向こうの世界と魔界を行き来する物の怪、そんな物付けなくても、元々オイラはルーシエス様には許可を頂いてる!! それに俺は……あいつは好きじゃ無い!!」

「お、おい、滅多な事は言わない方が良いぜ?」

ヴォジャノは、周囲に誰か居ないか確認するも、特に誰も居らずホツと安堵した。河童の言葉を聞き、大きな顔を捻り思案すると、

「そうか……なら、俺はお前と共に行くかな? 俺は人間界に行くのは初めてだし……」  
「別に構わんが、俺の故郷で悪さはするなよ?」

「ガハハハハ、そりやあ分からん！」

「あそこの人間達に悪さしたら・・・オイラもお前の敵になるのを忘れるなよ？」

「ガハハハハ、覚えておこう！」

河童は軽く舌打ちすると、ヴオジャノを連れて人間界へと戻って行った・・・

## 2、田舎へGO！

夏休みに入り、みゆきは、あかね、やよい、なお、れいか、あゆみ、キャンディ、グレル、エンエン、そして魔王を連れ、父方の祖母タエが一人で暮らす、田舎へと遊びに出掛けた。無論、真琴やアン王女も誘ったのだが、真琴は打倒バッドエンドピースの修行があると断り、アン王女は、のぞみ達に招待されてキュアローズガーデンに行くとの事だった。

みゆきの父博司が、一戸建てを購入した時、田舎にいるタエと一緒に住まないか誘ってみたものの、タエは感謝しつつも田舎暮らしの方が良いと言い、博司の申し出を断っていた。みゆきはお婆ちゃんであるタエの事が大好きだった。母である育代が身体を壊して入院していた時、田舎に住むタエの家に預けられたみゆきに、タエは色々な話を聞かせてくれたり、絵本を買って来てくれたりしてくれて、みゆきが絵本大好きになったのも、タエのお陰と言っても過言では無かった。そんなタエが、一人で田舎に暮

らす事をみゆきは心配し、母育代にも話して、田舎に遊びに行つた時、もう一度一緒に住まないか誘つてみると話すと、育代も承諾した事で、みゆきは、育代にベツタリな魔王も無理矢理連れ出し、こうして田舎へとやつて来たのだが・・・

空は快晴、入道雲が青空を覆い、山々に囲まれた喉かな風景、蟬の声のみゆき達一行を歓迎する・・・

彼女達の服装はと言えば、みゆきは、麦わら帽子を被り、肩にフリルの付いた薄いピンクのノースリーブのシャツと薄いブルーの短パン姿で、大きめの手提げカバンの中には、キャンディと魔王が入っていた。あかねは、黒と赤の二色の柄のキャップを逆にして被り、オレンジ色のTシャツの上に、少し薄めの橙色のタンクトップを着ていて、クリーム色の短パン姿、やよいは、黄色い縁が付いた麦わら帽子を被り、胸の位置に紐が付いた、白と薄い黄の半袖のワンピースを着ていて、なおは、白とオレンジのサンバイザーとオレンジ色のリボンをし、黄緑した半袖シャツと紺色のタイトスカート、れいかは、白い大きな帽子を被って、胸にフリルが付いた薄いブルーと白のワンピース姿、あゆみは、薄いブルー色をした首まで隠れるぐらいの大きめな帽子に、肩から胸元までフリルが付いた白い半袖のワンピース姿をしていて、大きめなカバンの中にはグレルとエンエンが入っていた。

時刻は既にお昼を過ぎ、一番暑い頃と言う事もあり、一同の足取りは重かった。顔に

は大量の汗が流れ落ち、やよいは舌を出してバテ気味に、普段元気なあかねですら、少しバテた表情をしていた。

「ハアハアハア、何で不思議図書館から行かんかったん？」

「みゆきちゃん……まだ着かない？」

あかねとやよいに聞かれたみゆきは、少し困惑気味に、

「だつてえ、折角みんなと旅行するし……もうちよつとだから！」

「でも、みゆきちゃんのお婆ちゃんの家近くまで、電車とバス、タクシーも走つてないとは思わなかったね？」

「うん！バスは通つてるつて思つてたよ！」

あゆみとなおも、苦笑気味に話し、みゆきは少し頭を掻きながら、

「エヘヘヘ、言うの忘れてたあ！」

「そこ、重要やから！」

「ゴメエエン！」

「「「アハハハハ」」」

あかねに突つ込まれ、みゆきが照れ笑いをすると、一同がみゆきの仕草を見て笑みを浮かべた。魔王はバックの中から顔を出すも、その表情は不機嫌そうで、

「何で俺まで一緒に行くカゲ！」

「たまには良いでしょう?」

「お前達とお風呂入れ・・・」

「「嫌!」」

魔王の言葉が終わる前に、あかね、なお、やよいが首を振り、魔王はふて腐れたのか、再びカバンの中へと顔を引っ込めた。あゆみは思わずクスリと笑い、

「フッフ、魔王、相変わらずだね?」

「うん!家でもこんな感じで参っちゃうよ!!」

みゆきは口を尖らせながら、魔王の事を愚痴り始めた。みゆきの母の事をすっかり魔王は気に入り、育代の事は育代ママンと言つて懐くも、博司の事は嫌いらしく、博司が声を掛けても知らん振りをして、博司を苦笑させた。母の事も父の事も大好きなみゆきは、そんな魔王を快く思つて居らず、良く魔王を注意するも、魔王は我関せずといった具合で何時ものように飄々としていた。母育代が入浴する時は、特に魔王から目を離す事は出来ず、結局みゆきが魔王とキャンディと一緒に風呂に入る事も度々あった。

「エエエ!みゆきちちゃん、魔王と一緒に風呂に入るの?」

「最初は嫌だったけど、今は慣れちゃったかな?別段魔王も悪さしないし・・・」

「俺達もあゆみと入ってるよな、エンエン!」

「うん!」



「二人は良い子にしてくれてるから、私も安心して一緒に入れるし」

話しがお風呂談義になると、あかねの表情は益々困惑気味になり、

「何か余計暑くなつてきよつた．．．みゆき、何処か休む所無いんか？」

れいかは、あかねの言葉を聞くと、太陽を見上げながら、

「梅雨開け後は、毎日暑いですものね．．．」

「もう少し歩くと、私のお気に入り場所があるんだあ！」

「みゆきさんのお気に入り場所ですか？」

みゆきがお気に入り場所があると一同に告げると、れいかはちよつと興味を持ったのか、みゆきに確認するように聞き返すと、みゆきはコクリと頷いた。そのお気に入り場所に、自分達より先に五人の少女達が居たとは、みゆき達は知らなかった．．．

### 3、みさきとタエ

みゆき達が向かう一キロ程先の道路脇に、木々が生い茂り、大きな岩と岩の間を川が流れて居た。綺麗な川で、川の底まで透けて見える程で、見た者は自然と顔が綻ぶ自然の美しさを醸し出していた。その川の側にある大きな岩に、七色ヶ丘中学の制服を着た五人の少女達が腰掛け、同じように足を川に入れて休息していた。その少女達はバッドエンドプリキュア、バッドエンド王国を出て、こつちの世界で夏休みの間過ごそうと決

めた五人は、こっちの世界で動きやすい、学校の制服姿で過ごしていた。

「なあ、田舎に來れば涼しい言うとしたのは……何所の誰やつけ?」

「それは私! だつてテレビでそう言つてたんだもん!!」

あかね同様、少しバテ気味なあおいに聞かれたみさきは、頭を掻きながら自分だと手を上げた。やおいは舌を出してハアハア荒い呼吸をすると、川に入れた足をバシババシヤ動かしながら水飛沫を上げ、チラリとれいなを見ると、

「もう、暑い嫌ああああ! ビューティ、冷たい風で冷やしてよ?」

「私を冷房代わりに使おうとは……良い度胸ね? 何なら、夏が終わるまで此処で凍らせてあげようかしら?」

「え、遠慮しとく!」

れいなに脅され、やおいは益々顔から大量の汗をかいた。そうは言つても、この川の側は確かに気持ちが良い風も通り、なみは背伸びをしながら、ゴロンと岩の上で横になりながら辺りを見渡していると、何かの物体に気付いた。なみは起き上がると、その物体をジイと凝視し、他の四人は何事かとそんななみの行動を見守っていると、

「何だ!? 何かざるの中に、野菜が入ってるぞ?」

「「「エツ!」」」

なみが指さした場所を見て見ると、確かにざるの中に色取り取りの野菜が入ってい

た。何でこんな川に野菜など入れているのだろうか、五人は不思議そうに見て居ると、  
「フフフ、むやみに川に足を入れてると・・・河童に川の中に引き摺り込まれるわよ？」  
「「「エッ!?!」」」

突然背後から声が掛かり、五人は思わず驚いて身体をビクリとさせた。暑さで思考が鈍っていたのは確かだが、バッドエンドプリキュアの五人は、今声を掛けてきた人物の気配を、五人揃って感じ取れなかった事に驚きを隠せなかった。五人に声を掛けたのは、七十前後の老婆で、何処か気品を漂わせていた。みさきは、この老婆を初めて見た筈なのに、何処か懐かしさを感じていた。

（何だろう!?!初めて会った筈なのに・・・何だか懐かしい気がする?）

老婆も老婆で、みさきを見ると、自然に顔が綻んできた。

（あの子・・・みゆきに似てるわねえ?）

老婆の名前はタエ、みゆきの実の祖母で、みゆき達が訪ねようとしている人であった。タエは普段から、自然がもたらした冷蔵庫とも呼べる川で、野菜や果物を冷やしていて、みゆき達がそろそろ来る頃合いを見計らって、野菜を取りに来た所だった。タエは、籠に入れて居た野菜から、キュウリを一本取り出すと川に流し、キュウリは流れに身を任せながら、やがて完全に川の中に沈んで行った。みさきは不思議そうに、

「何であの野菜捨てちゃったの?」

「フフフ、あれは河童へのお供え物よ!」

「「「「河童!」」」」

みさき達は、初めて聞く河童と言う言葉に興味を持った。タエはフフフと笑い、「そう、河童! 川に住む妖怪で、時々人を川に引き摺り込んで悪きをするの、だからどうか悪きをしないで下さい! 代わりにお供え物を差し上げますってね」

「「「「へえ・・・」」」」

バッドエンドプリキユア達に取っては、何の事だか分からなかったが、タエの話し方は上手く、五人は思わず感心しながら聞き入った。タエは、冷やしていたスイカを、ヨイシヨと川から持ち上げると、スイカを岩に置いてみさきを見て微笑みながら、

「その制服、七色ヶ丘中学校の制服に似て居るのねえ?」

「エツ!? お婆ちゃん、七色ヶ丘中学校を知ってるの? 確かに私達、その生徒だけど?」

七色ヶ丘中学校の事までタエは知っている事で、益々みさきはタエに興味を持った。タエも、みさき達はみゆきが話していた友人じゃないかと思つたものの、みゆきの姿が見えない事だけは、タエの頭に引っ掛かっていた。そんなタエの背後から声が掛かり、「お婆ちゃん!」

声を掛けたのはみゆき、タエは数ヶ月振りに聞く孫娘の声に目を細め、背後をゆつくり振り返ると、

「お帰り、みゆき！」

「「「「こんにちは!!」」」」

みゆきの背後から、あかね、やよい、なお、れいか、あゆみが頭を下げて挨拶したものの、タエの側に居たみさき達を見ると驚愕し、あかねはあおいを指さすと、

「な、何であんたらが此処に居るん!?!」

「それはこっちのセリフや! 夏休みは、涼しい所でゆつくり過ごそう思うてやって来たら、何であんたらの顔みなアカンねん?」

互いに視線で火花を散らしたあかねとあおい、タエはヨイショと二つ目のスイカを手にとって、

「フッフ、みゆきのお友達なのね? あなた達も一緒にいらつしやい! スイカも良く冷えたわよ!!」

タエは微笑みながらみさき達五人も家に招待した。五人は顔を見合わせて困惑するも、その表情は何処か嬉しうでもあった。タエがスイカを両手に持った事で、

「アツ、お手伝いします!」

こういう時、やはり普段から家の手伝いをしているれいかとなおが、真つ先にタエの側に駆け寄った。だがなおは、川の側に祠が建っているのに気付くと、顔から脂汗が流れ出し、タエに確認するように祠を指差し、ゴクリと唾を飲み込みながら、

「あ、あれは・・・何ですか?」

「あれは、河童の祠よ!」

「「「河童!」」」」

先程のバッドエンドプリキュア達と、同じような表情で驚愕する一同、みゆきは夕エに確認するように、

「お婆ちゃん、河童さんにキュウリ上げたの?」

「ええ、さつき上げたから大丈夫!今日は河童も悪さはしないわ!!」

みゆきと夕エの会話を聞いたななおの表情は、変顔浮かべながら見る見る青ざめ、なおは恐る恐る二人に話し掛けると、

「か、かかかか、河童!?河童って・・・本当に居るの?」

「うん!なおちゃん、大丈夫だよ!お婆ちゃんが河童さんにお供え物上げたし・・・」

「本当!?本当に本当だね?」

なおは涙目浮かべながら、尚も念を押してみゆきに確認した。なみは、そんななおを見ると溜息を付き、

「ハア・・・あれがあたしの元になってるプリキュアかと思うと・・・情けなくなってくる」

「だつてええええええ!」

なみに呆れられ、まだ涙目のなおが頬を膨らませ、れいかはフフと笑うと、

「なおは昔から、妖怪とかの話も苦手でした」

「しよ、しようがないでしょ〜う!」

そんななおの態度を見て、一同が笑い声を上げた。ようやく落ち着きを取り戻したなおとあゆみが、スイカを一つずつ手に持ち、れいかはざるを手に持った。みゆきは、タエの右腕に左腕を絡め、嬉しそうにタエを引っ張りながら道路へと戻った。あかねは変顔浮かべながら、

「此処で休憩するんや無かったん?」

「あかねちゃん、諦めた方が良いよ!」

「置いて行かれちゃうよ!」

「やよい、あゆみ、待たんかああ!」

置いて行かれそうなあかねは、変顔浮かべながらみゆき達の後を追った。みさきは仲間達を振り返ると、

「折角だから、私達も行こうか?」

「せやなあ、スイカつちゆうもんに興味もあるし・・・」

「私も良いよ!」

「何か食べさせてくれそうだしな!」

「マーチ・・・あなたもたまには、食事の事を頭から離したらどうなの？」

自然とれないなは、そんななみを見てクスクス笑った。一同が去った後、川から大きな顔がヌウウと顔を出した。それは河童と共にこの世界にやって来たヴオジャノで、ヴオジャノは、エラを膨らませたり戻したりしながら、去って行く一同を目で追い、

（クククク、スゲエ御馳走がウヨウヨ居るじゃねえか？ 幸い河童の野郎は、さっきのお供え物とやらを食べてご機嫌で寝てやがるし・・・俺も久々の人間の獲物を食いてえ！）

ヴオジャノは、長い舌でペロペロ口まわりを舐めると、ゆっくり川から上がり、みゆき達の後を追った。

#### 4、ヴオジャノVSスマイルプリキュア

田舎道を大人数の少女達が歩き、擦れ違う近所の人達に、みゆきは嬉しそうに挨拶し、挨拶された老人達も、タエの孫みゆきだと分かると、皆懐かしそうに声を掛けてくれた。一同は、周囲を畑に覆われ、家の脇を小さな小川が流れて居るタエの家にやって来た。タエの家は、段々畑の上にあるので、家の庭から辺りの自然がよく見えて、一同は、思わず絵に描いたような自然の風景を見て、感嘆の声を発した。バッドエンドプリキュア達でさえも思わずその美しさに目を奪われた。妖精達も顔を出し、魔王を見たなみは慌てて飛び退き、



「ゲツ!?いつぞやの変態妖精!あんたも来てたのか?」

「カゲカゲカゲ!お前達も居るとは奇遇カゲ・・・ちよつと楽しくなってきたカゲ!!」

魔王のスケベ笑いを聞き、バッドエンドプリキュア達は背筋に悪寒が走った。みさきはみゆきに小声で話し掛け、

「あの子連れて来て大丈夫!?何か視線が・・・」

「アハハハハ!エエエと、多分平気かな?」

みゆきはみさきに愛想笑いを浮かべ、みさきはもう一度魔王を見て顔を顰めた。キャンデイ、グレル、エンエンも目をキラキラ輝かせ、

「キャンデイも楽しみクル!」

「何か妖精学校を思い出すよな、エンエン?」

「うん!みんなどうしてるかなあ?」

妖精達が楽しそうに外の景色を楽しんでいると、あかねは軽く咳払いをし、

「エエか、キャンデイ、グレル、エンエン、魔王、みゆきのお婆ちゃんの前では、ぬいぐるみの振りをするんやで?」

「俺もカゲか?俺は良いカゲ!」

「まあ、魔王の事はお婆ちゃんにも話してあるから大丈夫だけど・・・キャンデイ、グレル、エンエン、ゴメンね!お婆ちゃんの家に住る間は、おとなしくしててね?」

グレルとエンエンは直ぐに快諾し、キャンデイは少し渋ったものの、ぬいぐるみの振りをする事に同意した。そこにスイカを切ったタエが入ってきて、

「みんな、今日は疲れたでしょう? スイカでも食べて!」

「「「「ありがとうございませす!」」」」

あかね達五人がタエに深々とお辞儀をし、みさき達も思わずタエに頭を下げた。どうやって食べるのか不思議そうにしているみさき達に、

「何や、スイカの食べ方も知らんのか? こうやって食べるんや!」

あかねはそう言うと、一気にスイカを口の中に頬張ると、あおいに近くに来いとジェスチャーすると、あおいは小首を傾げながらあかねの側に寄ると、あかねは勢い良くあおいの顔目掛けスイカの種をプププと飛ばした。あおいは慌てて手でガードすると、表情を険しくし、

「何するんや? 喧嘩なら受けて立つてえ!」

「シシシシ、これがスイカの正しい食べ方や! 口の中に堪ったスイカの種を、勢い良く飛ばす!!」

「そ、そんな風に食べるのか? 知らなかった・・・」

少しカルチャーショックを受けたあおい達、れいなは、あかねを指差しながら、れいかに話し掛け、

「そうなの？」

「信じないで下さい！」

れいかは困惑気味に首を振り、違うと答えたものの、既に他の仲間達はスイカを口一杯に頬張り、種の飛ばし合いを始めて居た。れいかは慌てて、

「み、皆さん、そんな下品な食べ方は……アッ?！」

あかねとあおいの二人から、スイカの種攻撃を受けたれいかの顔に、ほくろのようにスイカの種が付き、俯いたれいかは身体を震わせると、無言でスイカを口に入れ、種飛ばしに参加した。スイカの種飛ばしの戦場と化した庭先から逃れた妖精達は、縁の下で美味しそうにスイカを頬張っていた。タエはそんな子供達を、笑いながら見守っていたが、晩ご飯の仕込みをしに奥へと消えていった。

種飛ばしを終えたみさき達は、奥の台所で顔を洗いに向い、みゆき達は後片付けをしていると、キャンディやエンエン、グレルが騒ぎ出し、

「みゆき、みんな、何か嫌な気配がするクルウ！」

「何だかこつちに近付いて来るよ！」

「俺も感じるぜ！」

妖精達の視線が、タエの家の横を流れて居る小川に向けられると、みゆき達も釣られるように視線を向けた。小川から大きな顔がヌウウと現われ、思わずなおは悲鳴を上げ

れいかの後ろに隠れた。大きな顔の正体はヴォジャノ、ヴォジャノは小川からその全身を現わし、そのおぞましい姿に一同は思わず怯んだ。表情を険しくしたみゆきは、ヴォジャノを睨むように、

「あなたは!?まさか、魔界の・・・」

「クククク、その通り!さてと、ようやく追いついたぞ!さあ、何奴から頂こうとするかな?」

ヴォジャノは、舌なめずりをしながら、みゆき達六人の品定めをするかのように、一人ずつ凝視していった。

「何奴も柔らかくて美味そうだ!俺は美味しい物は最後に味わう主義だなあ・・・骨ばかりで不味そうな、さっきの婆さんから食らうとするか!!」

(まさか・・・お婆ちゃん!?)

みゆきの脳裏に真つ先にタエの姿が目に見え浮かんだ。タエを食べようとする目の前の物の怪の事を、みゆきは許せなかつた。

「そんな事させない!みんなああ!!」

みゆきの合図に、あかね、やよい、なお、れいか、あゆみが頷くと、六人はスマイルパクトを構え、

「「「「プリキュア!スマイルチャージ!!」」」」

「キラキラ輝く、未来の光！キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん！じゃんけん・・・ポン！キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心！キュアビューティ!!」

「思いよ、届け！キュアエコー!!」

「一二三6つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア!!」

六人のスマイルプリキュアが、ヴォジャノに対してポーズを決めた。ヴォジャノは驚愕した。捜していたプリキュアに、こうもいとも簡単に出会えるとは思っていなかった。ヴォジャノは鼻息荒く、

「俺は、何て付いてるんだ！此処でプリキュアを倒せば・・・」

ヴォジャノの野心に火が付いた・・・

だが、ヴォジャノはプリキュアの力を甘く見過ぎていた。怖がりながらも、夕エを食おうとするヴォジャノへの怒りが、マーチを俊敏に動かせ、ヴォジャノの液体攻撃をものともせず躲し続け、ヴォジャノの腹に蹴りを放ち、入れ替わりに上空からサニーがヴォジャノの顔目掛けスパイクを決めてヴォジャノを下の川へと落下させた。

(「ハ、ハ、ハ」いつらあ・・・戦い慣れてやがる!?)

川へ落ちたヴォジャノを追いかけ、スマイルプリキュアも川へと追いかけた。

「何や、これが魔界のもんの力かあ?」

「これならアカンベエの方が手強いかも!」

サニーとピースの一瞬の油断が、ヴォジャノに反撃の機会を与えてしまい、ヴォジャノはカアアアと痰を口内に溜めると、ペツとスマイルプリキュア目掛け放った。六人は瞬時に攻撃を躲したものの、地面に吐かれた痰から異臭が発生し、スマイルプリキュアは、身体が痺れたようにその場で蹲り、苦悶の表情を浮かべた。

その戦いを、庭先に戻ってきたバッドエンドプリキュアの五人が気付き、ジイと戦いの様子を見つめていたが、

「あらら、あいつら苦戦してるようなあ?」

「まあ、私達には関係無いけど!」

「スイカも食ったし、そろそろ帰るか!」

「そうね、これ以上彼女達と馴れ合う必要も無いわね!」

あおい、やおい、なみ、れいなは、そろそろ飽きてきたから帰ろうと話す中、みさきは尚も戦いの様子をジイと見つめていた。

「カアカカカ!俺をバカにするからそんな目に合うんだ!!さっきの婆さんや若いのは、お前達の仲間だろう?・・・食うのはお前らだけにして、あいつらは俺の溶解液で、跡

形も無く消し去つてやる!!」

勝ち誇つたヴォジャノは、胃液を口内に逆流させ蓄え始めた。一同は顔面蒼白になり、ハッピーは必死に立ち上がろうと試みるも、ヴォジャノは大きく口を開いた。

「な、何を!?!止めてええええ!!」

ハッピーの絶叫空しく、ヴォジャノの溶解液が、タエの家に向かつて発射された。あおい、やおい、なみ、れいなは、我関せずとタエの家から距離を取り、あおいはみさきに声を掛け、

「何してるんや!?!はよ、こっつちに……ハッピー?」

みさきの脳裏に、タエの優しい顔が浮かんだ瞬間、みさきは無意識の内にバッドエンドハッピーの姿に変化すると、向かってくる溶解液目掛けジャンプし、

「バッドエンド……シャワー!!」

バッドエンドハッピーは、指をハート形の形にするや、まるでハッピーシャワーのような光弾を、溶解液目掛け発射した。溶解液は、バッドエンドシャワーの前に、跡形も無く消滅し、ヴォジャノは驚愕する。バッドエンドハッピーは、一同に檄を飛ばし、

「何暢気に倒れてるのよ! さっさとそんな奴倒しちゃいなさいよ!!」

「バッドエンドハッピー……ウン!」

まるでバッドエンドハッピーに力を貰ったかのように、六人は立ち上がった。形勢不

利と見たヴオジャノは、魔界へと逃げ帰ろうとしたものの、足に何かが絡みつき、ヴオジャノの動きを封じた。

「な、何だ!? 足が? アアア! お前は、河・・・」

何者かに足の動きを封じられたヴオジャノに対し、

「二三」ペガサスよ、私達に力を!!「二三」

「鳳凰よ、私に力を貸して!!」

六人がキャンドルを合わせ、ペガサスと鳳凰に力を貸して欲しいと願うと、六人の姿が変化を遂げていく・・・

「プリンセスハッピー!」

「プリンセスサニー!」

「プリンセスピース!」

「プリンセスマーチ!」

「プリンセスビューティ!」

「プリンセスエコー!」

「二三」プリキュア! プリンセスフォーム!!「二三」

六人は、まるでドレスのような衣装を纏い、頭には天使の輪のような光のリングが装着された。



「今クル！みんなの力を合わせるクルウウ!!」

キャンディは、ロイヤルクロックの上に付いているボタンをカチリと押した。針は動き、数字の4に合わされると、ロイヤルクロックからフェニックスが舞い上がり、エコーの身体を包み込み上昇させる。エコーはプリンセスキャンドルをスマイルプリキュアに向けて構えると、エコーの背後に、巨大なフェニックスのシルエットが浮かんだ。

「集え！五つの希望の光!!」

「[[[[羽ばたけ、光輝く未来へ!]]]]」

ハッピー達五人は、五色のペガサスに跨るや、エコーに導かれるように上空高く舞い上がった。五色のペガサスは、上空でフェニックスと合わされると、フェニックスは命を宿したかのように咆哮を上げた。

「[[[[プリキュア!ロイヤルレインボー・バクゥスト!!!]]]]」

フェニックスの口から、強烈な虹のエネルギー波がヴオジャノ目掛け放たれた。ハッピー達六人は、キャンドルの炎を吹き消し、キャンドルをクルクル回してヴオジャノに背を向けポーズを決めると、

「[[[[[[輝け!ハッピースマイル!!]]]]]]」

「ち、畜生!!」

背後で爆発が起こり、ヴオジャノは浄化され、その時川にポチャンと水飛沫が立つ

た・・・

戻つて来たみゆき達、みゆきはみさきに笑みを浮かべ、

「ありがとう!あなたが助けてくれなかったら、私、お婆ちゃんを助けられなかった!」

「べ、別に・・・あなたのお婆ちゃんには、借りがあつたから返したただだよ!」

「もう行つちやうの!?!今日は泊まっていけば良いのに?」

「べ、別に私達の勝手でしょう!みんな、行こう!!」

「「う、うん」」

みさきのさっきの行動を見ていたあおい達は、困惑気味にみさきの後に続いた。その

時、奥からタエが出てきて、

「あら!?!もう帰るの?今日は泊まっていけば良いのに・・・」

「ううん、私達はもう帰る!」

「そう・・・また何時でも遊びにいらつしやい!」

「・・・ウン!!」

タエに何時でも遊びに来て良いと言われ、思わず振り返つたみさきは、満面の笑みを浮かべていた。その姿はみゆきにそっくりで、タエも自然と笑みを浮かべていた・・・みゆきはこの時、心の底からバッドエンドプリキュア達とは、友達になれる気がして

いた・  
・  
・

第九十八話：お婆ちゃんとの思い出！

完

## 第九十九話：名乗れぬ者達

## 1、真琴の修行（その一）

みゆき達が、みゆきの祖母タエの家に遊びに行っていた頃、劍崎真琴は、打倒バッドエンドピースの目標を掲げ、夏休みの間、身を鍛えようと決意していた。最初に門を叩いたのは、明堂院いつきの道場であった。閉ざされた門を、真琴はドンドン叩き、大きく息を吸い込むと、

「頼もう！」

大声でそう叫んだ真琴に、ダビイは不安げな様子で話し掛け、

「ソード……本当にそんな挨拶で良いビイ？」

「だって、この前読んだ時代小説に書いてあったもの！道場を訪ねる時の挨拶何だって」

「ダビイは……違うと思うビイ」

門の中の様子が慌ただしくなつて、真琴とダビイは思わず困惑した……

いつきは、真琴から明堂院流の稽古を習いたいと連絡を受け、この日つぼみとえりかも家に招き、真琴が来るのを待つて居たが、門下生達が慌ただしく室内を駆け回る姿を見て訝しみ、何があつたのか訪ねてみると、門前に道場破りがやって来ていると聞き顔

色を変えた。

(折角真琴ちゃん、家の道場に修行しに来るのに、寄りにもよって道場破り何て……)  
いつきは困惑し、つぼみとえりかに部屋で待っていてと伝えると、道場の様子を見に向かった。道場主であるいつきの祖父厳太郎は、あいにく留守をされていて、いつきの兄で、師範代であるさつきは、皆に落ち着くよう指示を出した。

「みんな、落ち着いて！先ずは相手の出方を伺うのが先決でしょう……道場にお通しして下さい!!」

さつきは、道場破りを道場に案内するよう指示を出している所にいつきが現われ、

「お兄様、門前に道場破りが来ているとか?」

「ああ、そのようだね!」

「僕が見て参ります!」

「そうだね……殺気立っている者も居るようだし、いつき、道場まで案内を頼めるかい?」

「分かりました!」

いつきはさつきにお辞儀すると、道場を出て門へと向かった。困惑気味に門を開けようとしている執事に、自分が応対する旨を伝えると、いつきは門を開けた。重い扉が開き、いつきが門前を見て見ると、そこにはキラキラ目を輝かせて居る、胴着姿の真琴が

立って居て、いつきは思わず呆気に取られた。

「道場破りって・・・真琴の事だったの？」

「道場破り!? 私は、本で読んだように声を掛けたんですけど・・・」

「アハハハ、何か色々間違っているような・・・」

「だから違うって言ったビィ!」

ダビィにダメ出しされた真琴は、思わずプウウと頬を膨らませた。いつきはさつきに、やって来たのは稽古に來た真琴だった事を伝え、取り敢えず真琴を、自分の部屋へと連れて行つた。いつきから、大体の事情を聞いたつぼみとえりか、えりかはお腹を抱えて笑い、そんなえりかを見て、再び真琴の頬が膨れた。

「じゃあ、早速道場に行こう!」

「何だか・・・嫌な予感がしますねえ?」

「でも、いつきのお爺ちゃんは留守にしてるんでしよう? 以前かれんさん達が來た時みたいには、ならないんじゃない?」

嘗て、互いの親睦を深めようと、それぞれの町に遊びに行つた時、満と薫、かれんとこまちとくるみ、ラブは、いつきの祖父厳太郎に、体験見学をさせられた事があつた。その話をいつきから聞いていたつぼみだったが、えりかは、厳太郎が留守にしているから大丈夫だろうと樂觀していた。

道場にやって来た四人は、先ず師範代のさつきに挨拶した。さつきはニコニコしながら挨拶を返し、

「あなたが真琴さんですね？話はいつきから聞いています！明堂院流の稽古を付けて欲しいと言う事ですが・・・何故そのような気になったのか、差し支えなければお聞かせ下さい!!」

さつきは、真琴の本心を探ろうとするかのように、ジイと視線を真琴に向けた。真琴は真つ直ぐな目でさつきをジイと見つめながら、

「はいー私は、バッドエンドピースに・・・」

「「ワアアアアア!!」」

真琴がバッドエンドピースの事を話そうとしているのに気付き、慌てて、いつき、つぼみ、えりかが真琴の口を塞いだ。ウウウ唸る真琴に、三人は小声でプリキュアに関する話題を話すのはダメだと忠告すると、真琴はコクコク頷いた。

「いつき、どうしました?」

「い、いえ、真琴が今真琴の学校で流行ってる話題を話そうとしたので、お兄様には分からないからつて話を・・・ねえ、つぼみ、えりか?」

「「そうそう!」」

つぼみとえりかは苦笑気味にコクコク頷き、さつきは少し首を傾げるも、

「まあ、良いでしょう！では、真琴さんの事はいつきに任せましょう・・・」

「はい！お兄様!!」

いつきはさつきに一礼し、真琴に話し掛けると、

「我が明堂院流は、古武道と古伝空手を合わせ、独自に発展させたんだ！明堂院流の基本は・・・ただ強さを求めるだけでなく、己の心を磨き、そして技を磨く事にあるんだ!!」

「ハア・・・奥が深そうですね？」

「アハハ、まあ、難しい事はこの辺にして・・・じゃあ、型に付いて簡単に説明するね！つぼみ、えりか、君達もついでにやってみない？」

「エエエ!」

困惑するつぼみとえりかも誘い、いつきは三人に型の説明を始めた・・・

型とは、色々な敵との戦いを想定して、決められた技（受け、突き、蹴りなど）を、決められた通りの順番で繰り返し出す事を言い、先ずいつきが三人に見本を見せた。次に三人も参加させ、自分と同じような動きを覚えて貰い、それが自然に行えるようになるまで繰り返し続けた。つぼみとえりかは早々に根を上げたものの、真琴は懸命に覚えようとし、いつきも、離れて見て居たさつきも目を細めた。

「真琴、筋が良いよ！その心構えを忘れないで!!」

真琴は力強く頷くも、小声でいつきに話し掛け、



「はい!!・・・あのう、これをプリキュアの姿になって試して見たんですけど・・・何処か試せそうな場所を知りませんか？」

「プリキュアで!?それは構わないけど・・・」

「じゃあ真琴さんにも、取って置き場所を教えますね!」

聞いていたつぼみが話に加わり、嘗てデューンとの戦い後、プリキュアのみんなを案内した、希望ヶ花にある丘に、四人と妖精達でやって来た。此処からは街の眺めが一望出来、素晴らしい景色が、真琴とダビィの目に飛び込んで来た。

「此処なら滅多に人は来ませんし、プリキュアになっても大丈夫ですよ!」

「ありがとうございます!ダビィ!!」

真琴はつぼみに礼を述べると、真琴はダビィに合図を送り、直ぐにダビィがラブリーコミュニティ姿に変化した。真琴はキュアラビーズを取りだして、ラブリーコミュニティにセツトすると、

「プリキュア!ラブリック!!」

「L・O・V・E」

ラブリーコミュニティの画面に、真琴が指で「L・O・V・E」と描くと、ダビィがその都度その文字を読み上げ、真琴の身体が光に包まれ、プリキュアへと変化していった。

「勇気の刃! キュアソード!!」

真琴がキュアソードに変身した姿を、ジイイと伺う者が居た。土の中から不気味に目だけが飛び出して、ユラユラ花のように揺らぎながら、ソードを見つめて居た。

「ケケケケ、プリキュア発見！あいつを倒すか捕らえれば・・・俺はシーレインの変わりに、天秤宮の戦士になれるぞおお!!」

地中から目だけを出し、魔物は静かにソード目掛け近付いて行った・・・

「何だか嫌な気配がするビィー!」

ダビィが不安そうにソードに訴えるも、精神を統一しようとしているソードは、シィとダビィを窘めた。ソードは脳内で、ゲスい表情で見下すバッドエンドピースの姿を思い浮かべると、段々イライラし始めた。そんなソードを見た魔物は、距離を一気に縮め、地中から飛び出した!!突然現われた両目がウネウネ蠢く身体がミミズのような魔物に、つぼみ、いつき、えりかが驚愕した。だがその瞬間、カツと目を見開いたソードは、

「バッドエンドピース！修行の成果受けてみなさい!!閃け！ホーリーソ〜ド!!」

「プリキュアアアア!この・・・エツ?!」

ソードの右手から、無数の剣形のエネルギー弾が、地中から飛び出した魔物目掛け炸裂した。自らの名を名乗り、ソードを倒そうとしていた魔物は、大慌てで逃げようとするも、時既に遅く、ホーリーソードの直撃を受け浄化された。

「よし！今の感じね!!」

「「エッ!」」

ソードは、魔物を浄化した事に気付いて居ないようで、つぼみ、えりか、いつきは顔を近づけてヒソヒソ話を始めると、

「ソード、今の敵に気付いて無いようですねえ?」

「まあ、ソードもあたし達も何ともなかったし、良いんじゃない?」

「修行の成果が出た・・・のかなあ?」

三人は、再びイメーজトレニングを始めるソードを、困惑しながら見つめて居た：

2、キュアローズガーデンを守れ!

この日アン王女は、のぞみ、りん、うらら、くるみに招待され、ナッツハウスにやってくる、のぞみ達の他に、ココやナッツ、シロップやメルポも居て、アン王女を出迎えてくれた。キュアローズガーデンへの扉を開いたのぞみ、一同は巨大化したシロップの背に乗り込むと、キュアローズガーデンを訪れていた。別名を命の庭とも呼ばれ、全ての世界の生命を司るバラを守護しており、そのバラに害を与えると、すべての生命が止まると言われる大切な場所・・・

先代管理者フローラより、新たにこのキュアローズガーデンの管理者に任命されたのぞみは、この素敵な場所を、多くの人に見て貰おうと開放していた。この日訪れたアン

王女は、この広大な場所にある、沢山の薔薇の数々を見て目を細めていた。

「トランプ王国にも、沢山の薔薇はありますが、これ程壮観な薔薇の楽園を、わたくしは生まれて初めて見ましたわ！」

「エへへ、アン王女に喜んで貰えて良かった！ねえ？りんちゃん、うらら、くるみ！」

「そうだね、トランプ王国にも薔薇があるって聞いたから、興味あるのかと思って誘って見て良かったね、のぞみ！」

「本当は、かれんさんやこまちさんも、一緒に来たがってたんですけど・・・」

「模試と重なっちゃったのよね！二人共アン王女によるしくって言ってたわ!!」

うららとくるみも、目を細めながら気さくにアン王女に話し掛けた。アン王女は、大きく息を吸い込み、薔薇の楽園から漂う美味しい空気を味わった。見回せば、妖精達も見学を訪れていて、ココがそんな一同のガイドを引き受けて居た。トランプ王国の宮殿に植えた薔薇の数々も綺麗だとは思っていたが、キュアローズガーデンの景色は、より一層アン王女の胸に安らぎを与えた。りんは、薔薇に興味があるアン王女に説明するよ  
うに、

「最近は、品種改良も進んで、薔薇にも色々な色が増えたんだよねえ！」

「そうなの!?!じゃあ、私の青い薔薇も珍しく無くなった訳ね！」

「まあ、くるみの場合は、フローラさんから授かった青い薔薇だから、同じとは言えない

けどね」

「色々な種類の薔薇ですか？」

興味が湧いたのか、アン王女が身を乗り出してりんを訪ねると、りんは微笑みながらコクリと頷き、

「赤の他に、ピンク、オレンジ、黄、青、白、そして黒……」

「アハハハ、私達プリキュアみたいだねえ、りんちゃん！」

のぞみが、自分達プリキュアみたいだと率直な感想を述べると、確かにその通りだと同が笑った。和やかな雰囲気の一同の下に、不穏な影が迫っている事に、この時まで一同は知らなかった……

ナッツハウス周辺に異変が起きていた……

人間ほどの大きさの巨大な二組の昆虫が現われた時、周囲の草木が枯れ果てて行っ  
た……

ナメクジのような魔物が、地面に粘液を撒き散らしながら現われ、その背にはトンボのような者が乗っていた。周囲を見渡すと、キュアローズガーデンへの入り口が開かれて居る事に気づいた。

「感じるぞ！光りの力を!!」

ナメクジのような魔物の目が輝くと、背中に居たトンボのような物体と融合し、トンボの羽を生やした魔物は、キュアローズガーデン目掛け扉を潜り抜けて行つた。のぞみが植えた、フローラの生まれ変わりのような花は、のぞみ達に危機を知らせるかのように、ユラユラ揺れていた・・・

アン王女は、微笑みながら顔を近づけ薔薇の匂いを嗅ぎ、そんなアン王女を見て居たりんは、

「今直ぐつて訳には行かないけど・・・アン王女は、種から花を育てるのと、苗から育てるのと、どっちが好きなの？」

「エツ!? エエエと・・・お恥ずかしい話ですが、私は育てるのは・・・主に観賞するのが好きでして・・・」

アン王女は、少し恥ずかしそうにりんに答えると、りんは苦笑しながら、

「そっかあ、じゃあ、苗の方が良いね! アン王女、今日直ぐつて訳には行かないけど、薔薇の苗を取り寄せようか? アン王女は薔薇を好きみたいだし、色々な色の薔薇を、トラップ王国に植えてくれるなら、あたしも見に行きたいしさ」

「よ、よろしいのですか? それはぜひお願いしたいですわ!」

アン王女はりんの手を握り、感謝の気持ちを伝えた。

その時、妖精達を案内していたココと、のぞみ達の側に居たナッツの顔色が変わり、  
「みんな、気を付けるココ！」

「キュアローズガーデンに．．．何か嫌な気配の者が近付いてるナツ！」

「「「エツ?!」」」

ココとナッツの言葉を聞き、瞬時に表情を険しくしたのぞみ達、

「私達、様子を見てくる！アン王女は、ココと一緒に妖精達をお願い!!」

「分かりました！ご武運を!!」

「ナッツは一緒に行くナツ！」

シロップは再び巨大化すると、のぞみ、りん、うらら、くるみ、そしてナッツを背に乗せ、キュアローズガーデンに向かってくる何者かの正体を確かめる為飛び立った。

キュアローズガーデンに続く長い階段を急降下していくシロップは、中間地点で翼の生えたナメクジのような物体と擦れ違った。シロップは、急上昇を掛けてナメクジ魔物を追い抜いた。一同に取って幸いだったのは、ナメクジの魔物のスピードは速いとは言えず、シロップのスピードならば、迎え撃つ時間を稼げた。

「あれね！りんちゃん、うらら、くるみ、行くよ!!」

「「「YES!」」」

のぞみの合図に頷き、のぞみ、りん、うららはキュアモを手を持ち構え、くるみはミ

ルキイパレットを手を持った。

「プリキュア！メタモルフォーゼ！！」

「スカイローズ！トランススレイト！！」

のぞみ、りん、うらら、くるみの姿を、プリキュアへと変えていく……

「大いなる、希望の力！キュアドリーム！！」

「情熱の、赤い炎！キュアルージュ！！」

「弾けるレモンの香り！キュアレモネード！！」

「青いバラは秘密のしるし！ミルキイローズ！！」

変身を終えたドリーム、ルージュ、レモネード、ローズ、まずはルージュが先制攻撃を仕掛け、

「キュアローズガーデンに、あんたのような者を入れさせない！プリキュア！ファイヤーストライク！！」

ルージュは炎のボール、ファイヤーストライクで攻撃すると、ナメクジ魔物はバランスを崩しながらも、粘液を巧みに利用して攻撃を防いだ。だが、直ぐにドリームがシロップから飛び降り、

「キュアローズガーデンには、アン王女や、妖精のみんなが居るんだからああ！プリキュア！シューティングスター！！」



ドリームが、ナメクジの魔物目掛け全身をピンクのオーラで包んだシューティングスターで突っ込むと、ナメクジの魔物に体当たりをして墜落させた。粘液に付着し、共に地上に落下していくドリームを見たレモネードは、

「ドリーム!?プリキュア!プリズムチェーン」

落下していくドリームを救うべく、レモネードがプリズムチェーンで、ドリームの身体を辛くも捕らえ、安堵の表情を浮かべながら、ドリームを上空に引っ張り上げた。

「ローズ、今です!」

レモネードの合図に頷き、ローズはミルキイパレットをフル稼働させた。

「分かった!邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう!ミルキイローズ・ブリザード!!」

青い薔薇吹雪が、ナメクジのような魔物を直撃した。

「プリキュア!?!な、何故こんなに早く?俺は、俺は、魔界の・・・」

ミルキイローズ・ブリザードの青い薔薇に包まれ、ナメクジのような魔物は、為す術もなく消滅した。安堵したナッツだったが、ドリームを見ると見る見る顔を赤くし、

「ド、ドリーム・・・ふ、服が!」

「エッ!?服って?・・・アアアア!」

ドリームは慌てて胸元を隠し、気付いたローズは、慌ててナッツの目を隠した。何故

なら、ドリームが魔物の粘液に触れた箇所が溶け、ドリームの胸の谷間が見えていたのだから……

「アアアン！ ナッツ、見ちゃダメエエエ!!」

「ドリーム、泣かないの！」

「こまちさんに言いつけますよ！」

「ナッツ様?!」

「人聞きの悪い事、言うなナツウウウウ！」

ドリーム、ルージュ、レモネード、ローズの四人から、まるで覗いているような扱いに、ナッツの不満げな声が木霊した……

3、あかねVSあおい

夏休みも三日目を迎えていた……

この日あかねは、父大悟が夏の間出している海の家で、助っ人のアルバイトをしていた。大悟は腰を痛め、母正子は店の仕込で忙しく、海の家にはあかねと弟元気が手伝う筈だったが、元気は早々に逃げ、あかね一人で切り盛りしていた。だが、さすがに一人では捌ききれず、あかねは、みゆき、やよい、なお、れいか、あゆみに助っ人を頼み、六人は海の家でアルバイトをしていた。あかねとなおはお好み焼き担当、かき氷担当はれ

いかとやよい、食器洗いはみゆきとあゆみが担当し、あゆみはエンエンとグレルに、キャンデイの遊び相手を頼んで居た。

「へえ、こつちではかき氷も出してゐるんだねえ？」

「まあな！去年はお好み焼きだけで勝負したんやけど、やつぱ夏はかき氷を置かなアカン!!ほんで、今年に奮発してかき氷の機械も買うて挑んだんやけど、大正解やつたちゆう訳や!!」

夏場にお好み焼きだけ出しても、それだけでは客は寄りつかないと、去年悟つた大悟の影響もあつてか、かき氷を担当しているれいかとやよいの前には列が出来て居た。

「かき氷の後は、お好み焼きでもどうや！美味しいでええ!!」

商売根性逞しいあかねだったが、そんなあかねの店に、水着姿の五人の少女達が来店した。みさきは、黒とピンクのボーダープリントで、レイヤードスタイルのビキニ、下にはスカートも付けていてどこか可愛らしきがあつた、あおいは、黒に赤のラインが入つた三角ビキニで、華奢なストラップが付き、ヒップラインをみせない黒と赤のショートパンツ姿、やおいは、チューブタイプのドレスがセットになつたビキニで、ワンピースはアウターとしても使え、なみは、大胆に背中を魅せた黒のフォルターネック水着を、れいなは、黒と青の柄の三角ビキニで、下は両脇を紐で縛るタイプで、中学生が着るような水着では無く、その姿を見たいかは思わず頬を染めた程だつた。

みさきは気さくに一同に話し掛け、

「ヤッホー！良く会うよねえ？」

「アツ!?みさきちゃん、いらっしやい！」

みゆきとみさきは、この前みゆきのお婆ちゃんの家での出来事以来、少し打ち解けた間柄になったようだが、他のメンバー達は、まだぎこちなかった。なみとれいなは、店内をキョロキョロ見回し、

「なあ、あの変態妖精は居ない？」

「居るなら素直に仰有い！直ぐに出て行くから!!」

少しオドオドしているなみとれいなを見て、思わずみゆきは小首を傾げ、

「変態妖精!?ひよつとして・・・魔王の事？」

「それ以外居ないだろう！」

慄然とした表情でなみが答えると、あゆみとみゆきは苦笑しながら、

「アハハハ、確かに・・・」

「ウン！今日私達はあかねちゃんに急に手伝ってくれつつ頼まれたから、魔王は家に居るよ!!それがどうかした？」

みゆきから、魔王はこの場に居ないと聞いたなみとれいなは、心の底から良かったとホッと安堵し、

「い、居ない!? 居ないんだな?」

「それを聞いて安心したわ!」

二人は安心したように倚子に腰掛け、やおいはこつそりれいな肩紐を緩めようとして、やよいに止められる。

そんな中、あかねとあおいは、険悪そうな雰囲気醸し出していた……

「何や、何しにきたん?」

「ご挨拶だねえ! わざわざ寄ってやったんだ! あんたの所のお好み焼き……美味しいんやろうなあ?」

「当たり前や!」

バチバチ火花を散らすあかねとあおいは、他のメンバーは、この暑い中よくやるなといったような表情で、呆れたように二人を見つめた。

「せや! なあ、ウチと勝負せえへん?」

「勝負!? 何の勝負や?」

「折角海に来とるし……ビーチバレー何てどうや?」

「面白いやんけえ! みゆき、やよい、なお、れいか、あゆみ、ちよつとお店の方頼むわ! ウチはちよつと用事が出来たもんで……」

あかねはエプロンを脱ぐと、オレンジ色の半袖シャツに、クリーム色の短パン姿にな

り、あかねとあおい、両者は睨み合いながら海の家から出て行った。

「あ、あかねちゃん!？」

「放っておきなさい! その内戻つて来るでしょう……それより、私はかき氷を貰おうかしら……ブルーハワイね!!」

「アツ、ビューティ狹い! 私は……苺にしよう!!」

「じゃああたしは、メロンで良いや!」

「私は……大人の味、レモン!!」

四人はれいかに注文すると、テーブルに座りながら、砂浜に出たあかねとあおいを暇つぶしそうに見つめた。

勝負しようと砂浜に出たものの、海水浴客が一杯で、ビーチバレーが出来そうなスペースは見当たらなかった。痺れを切らしたあおいは、バッドエンドサニーの姿に変化し、闇の絵本とでも呼ぶべき本を開くと、

「全く邪魔や! 世界よ! 最悪の結末、バッドエンドに生まれ! 白紙の未来を、黒く塗りつぶしたれえ!!」

「アツ!?! 何してんのや!」

バッドエンドサニーは、白紙のページに、黒い闇の絵の具を叩き付け塗りつぶすと、バッドエンド空間を発生させた。バッドエンド空間に取込まれた人々から、バッドエナ

ジーが溢れ出し、闇の書の中に吸い込まれて行った。あかねは顔色変えると、スマイルパクトを取りだし、

「あなたの好きにはさせへんでえ！プリキュア！スマイルチャージ!!」

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

あかねもまたキュアサニーに変身し、両雄が睨み合った!!

みさき、れいな、なみ、やおいは、かき氷を食べながらそんな二人のサニーを見つめ、

「あーら、夏の間はお休みするって決めたのよね？」

「放っておきなさい！」

「本当、単純な奴だなあ・・・」

「プププ、サニーもマーチには言われたく無いと思ってるよ！」

「何いい!?!」

やおいにからかわれ、なみがやおいを追い回していると、店内に居たみゆき達も、サニーの援護に行こうとするも、みさきは頬を膨らませ、

「エエエ!?!お客さんを置き去りにする気?」

「だつてええ、サニーを援護しなきや・・・」

みさきに不服をいわれ、みゆきは困惑気味に答えると、再び椅子に座ったやおいがかき氷を食べながら、

「大丈夫だよ、私達夏の間は仕事しない事に決めたし！」

「でも、現にバッドエンドサニーは……」

「れいかバッドエンドサニーを指さすと、なみとれいなもみさきとやおいに同意し、

「人が邪魔だから、バッドエンド空間を発生させただけだろう？放つて置きなよ！」

「あなた達が参加するなら……私達も参加しない訳には行かないわよ？あなた達が此処に居るなら、私達も手出ししないわ！」

見たところ、バッドエンドサニーは、アカンベエを召喚する気配も無さそうで、みゆき達はサニーを信じ、成り行きを海の家から見守った。

バッドエンドサニーは、サニーも変身した事で口元に笑みを浮かべると、

「お互いプリキュアになったんやし、どうや!?ただのビーチバレー何か止めへんか?」「どう言う意味や?」

バッドエンドサニーは、砂浜に直線を書くと、

「あんたが、サニーファイヤーをこの線の上に放る、それをウチとアンタでスパイクし、どちらのライン上にサニーファイヤーが落ちるかで勝負を決める……ちゅうのはどうや?」

「一発勝負ちゅう訳やな……エエで!」

二人のサニーに緊張感が走る中、背鰭（せびれ）を海面に出しながら、海から近付い



て来る物体に、二人はまだ気付いては居なかった……  
(ククク、何だか知らねえが、力が漲ってくるぜええ……ン!? あそこに居るのは、プリキュア!? ククク、こいつは付いてるぜええ!!)

二人のサニーに狙いを付けた物体が、海面から獲物に狙いを付けて一気に近づいて来た!!

「ほな、行くでええ……プリキュア! サニーファイヤー!!」

サニーは、炎の力をバレーボール状に凝縮して、ライン上の空中に出現させた。それと同時に、二人のサニーがジャンプした瞬間、海面からも巨大な鯨のような魔物が、大きな口を開きながらジャンプし、

「プリキュア! 貴様らを噛み砕き、この魔界の殺し屋、ザン……」

「邪魔やああああ!!」

「エツ!!」

横からゴチャゴチャ言う魔界の者に切れ、二人のサニーが同時に、サニーファイヤーを鯨の魔物に向けて放った。二人のサニーが、偶然力を合わせて放ったツインサニーファイヤーの威力は凄まじく、魔界の殺し屋を名乗った鯨に似た魔物を、瞬殺で浄化した……

「ねえ、何か今鯨みたいなの、サニー達の側に居なかった?」

「何か居たような、居ないような？」

みゆきの言葉に、あゆみも小首を傾げながら居たような気もすると呟いた。なおは二人のサニーを指差し、

「アツ!? 戻つて来た・・・」

全速力で海の家に戻つて来た二人のサニーは、

「今度はかき氷の早食いで勝負やああ!」

「望むところやああ!!」

「あのお・・・その前に、バッドエンド空間を解除して頂けませんか?」

「勝負が先いい!」

「やれやれ・・・この二人、仲が良いのか悪いのか?」

なおは首を竦め、かき氷の早食いをして、頭を抑えて同じような仕草で悶絶する二人のサニーを見て呆れたように呟くと、一同から笑い声が漏れた・・・

鏡に覆われた部屋・・・

その中で、憂いの表情を浮かべた青髪の青年が、ジイと正面の鏡を凝視していた。

「また一つ、悪しき気が消えた・・・やはりこの世界に、悪しき者達が侵入しているようだ! でも、今の僕では・・・知らせねば、彼女達に!」

青髪の青年が見つめる鏡の中には、TAKO CAFEで楽しげに会話をする、なぎさとほのかの姿が映っていた・・・

第九十九話：名乗れぬ者達

完

## 第百話：神様からの警告

1、激昂！花鳥風月!!

海原市夕風・・・

咲の妹みのりは、夏休みに入り、今年の研究は大空の樹がある、トネリコの森に付いて調べようと思ひ立った。

「でも、一人であそこに行くの、怖いなあ・・・」

みのりも咲に似て明るく、友達も多かったが、やはり背伸びをしたい年頃の少女、咲の友人舞や満、そして特にみのりは、仲の良い薫の事が大好きで、彼女達と話すのが大好きだった。だが、高校生になった彼女達は何かと忙しく、みのりも小学校5年生になった事で、自分でもお姉さんのように振る舞いたかった。みのりは、店の前で昼寝をしているコロネを抱っこすると、

「コロネ、一緒にトネリコの森に行こう！」

「ニヤア!？」

コロネは、そんなみのりに首を傾げながらも、無理矢理連れ出された・・・

大空の樹があるトネリコの森には、姉の咲は良く出掛けていたが、みのりは滅多に来

る事は無かった。だが、そこは咲の妹、みのりも大空の樹の事は知っていて、こつそり薫に連れて行って貰った事もあった。コロネを抱いたみのりは、途中で道に迷ったのか、奥深い林の中に入ってしまった、

「アレエ!?間違えちゃったかなあ?」

みのりが引き返そうとした時、急に抱いていたコロネの様子がおかしくなり、毛を逆立ててみのりから飛び降りると、ニヤアと低い声で林の奥に居る何かを威嚇した。首を傾げたみのりだったが、嗅覚を刺激する甘い匂いが漂って来た。

「何だろう!?甘い匂いがする?」

みのりはクンクン匂いを嗅ぎながら、甘い匂いがしてくる林の中を伺ってみると、そこには食虫植物のウツボカズラのような、黒い不気味な物体が地面から生えていた。みのりは不思議そうに近付くと、急激な目眩に襲われ、思わず倒れた。心配そうにコロネが近寄り、食虫植物を威嚇するように唸り声を上げ、心配そうにみのりの顔をペロペロ舐めた。みのりはボーとしながら立ち上がり、目の焦点も定まらないまま、元来た道を戻って行き、コロネも慌てて後を追った・・・

(ククク、この世界に来た事で、大分力を使っちゃったが、あの娘の養分を吸い取って糧とし、この世界に居るプリキュアとやらを倒してやる!!)

みのりが見付けた、ウツボカズラに似た植物の正体は、魔界の魔マキシマだった・・・

マキシマは自ら行動を起こさず、近付いた獲物を暗示に掛け、その養分を吸い取って力に変える魔だった。みのりが悪魔の植物に魅入られた事を、咲はまだ知る由も無かった……

その日、家に帰ったみのりだが、咲や父大介、母沙織が話し掛けても上の空で、食事にもほとんど手を付けなかった。当初は夏バテかとさしたる心配もしなかった咲だったが、夏休み二日目、三日目と、出掛けて帰ってくると、みのりの様子は必ずおかしくなり、遂に三日目の夜には寝込んでしまった。

「あなた、明日みのりを病院に連れて行くわ！」

「そうだねえ……」

みのりを心配そうに見つめる大介と沙織に、咲も胸を痛めていた。

（みのり、あんなに張り切ってたのに、どうしたんだろう？）

咲とみのりは、同じ部屋を半分に仕切って使っていて、ベッドの頭部から勉強机のある壁に衝立が置かれているだけで、行き来が出来る分、みのりの苦しそうな声が聞こえてきて、咲は居たたまれなかった。その時、部屋のドアをガリガリする音が聞こえ、咲がドアを開けると、コロネがニヤアニヤア鳴き、咲は、そんなコロネに右手の人差し指を鼻に当て、シツとジェスチャーすると、

「コロネ、静かにしてなきやダメだよ！」

咲はコロネを抱き上げると、コロネの寢床でもある両親の部屋へと連れて行った。

翌日、元気の無い咲を見かねて、咲の家にやって来た舞、満、薫が、裏庭のテーブルに座りながら、心配そうに咲に話し掛け、

「咲……どうかしのたの？」

「何か一昨日辺りから変よ？」

「夏バテ!」

「うん、あたしは何とも無いんだけど、みのりが……」

「「エツ!」」

「さ、咲、みのりちゃんに何かあったの!」

驚いた三人、薫は思わず目の色変えて咲に聞くと、咲はコクリと頷き、

「うん、この間からみのりの様子がおかしいんだよねえ! 出掛けて帰ってくると、心此処にあらずつて感じで、遂には昨日寝込んで……」

「そう……それは心配ね!」

舞も沈痛な表情を浮かべた時、普段は店の看板前で寝ているコロネが、テーブルにピョンと乗つかると、咲達の顔を見ながら、何か訴えるようにニヤアニヤア鳴き続けた。

「コロネ、私達に何か伝えたい事があるんじゃないの？」

満に聞かれた咲は困惑気味に、

「でもコロネが、フィーリア王女を身体の中に住まわせていた時なら兎も角、普通の猫になつたコロネの言葉何て……」

そう思つた咲だつたが、四人はパツと表情を明るくすると、

「そうだ！あたし達には、祈里が居た!!」

「エエ、祈里に訳を話して、こつちに来て貰いましょう!」

咲の言葉に薫も同意し、咲は祈里に携帯を掛けた。幸い祈里は家に居て、詳しい事情を聞くと、

「コロネさんの話を聞きたいのね？分かつた！急いでるようだから、私からせつなちゃんに頼んでみるね!!」

「本当?!それは助かるよ!」

咲はホツと安堵すると、それから三十分経たずに、咲の家の裏庭が赤く発光し、祈里とせつなの他に、ラブと美希もやって来た。

「ラブと美希も来てくれたんだ?」

「うん!何か大変みたいだから、手伝える事があればと思つて」

「咲、大変ねえ……」

「うん……でもみんなが来てくれて、少しホツとしたかなあ」

咲はそう言うのと、口元に笑みを浮かべた。祈里を見たコロネは、薫子の植物園で、祈



里と会話をした事を思いだしたのか、自ら祈里の前に移動し、ニャアニャア鳴き出した。祈里はコクリと頷くと、直ぐにキルンを呼び出し、コロネの話に耳を傾けた。

「うん・・・エッ!? トネリコの森に?・・・うん、うん・・・た、大変!!」

「い、祈里!?!ど、どうしたの?」

「ブツキー、コロネ何て言ってるの?」

早くコロネが話して居る内容が聞きたい咲とラブが、身を乗り出して祈里に聞くと、祈里は一同の顔を見渡し、

「コロネさんの話じゃ・・・トネリコの森の奥深くに、邪悪な植物が生息してるんですって! その植物に近付いた途端、みのりちゃんの様子がおかしくなっちゃって言ってるわ!」

「「トネリコの森に!?!」」

咲達を知る限り、トネリコの森にそのような危険な生物が存在している事は無い筈だった。だが、コロネが嘘を言う筈も無く、咲が困惑していると、コロネはテーブルから飛び降り、一同を見てニャアと声を発すると、すかさず祈里が通訳し、

「案内するから追いて来てだつて!」

「分かった、行こう! 舞、満、薫」

「「分かったわ!!」」

コロネが駆け出し、咲達が後を追おうとすると、ラブ達も立ち上がり、

「なら、私達も行くよ！」

「ううん、折角来てくれたんだし、ラブ達はゆっくりして行って！」

「私も行くわ！コロネちゃんの言葉が分かる私も居た方が良いでしょう？」

「なら私も行くわ！何かあった時、ラブ達に連絡取れるようにしておいた方が良いでしょう!!」

「そうだね・・・じゃあ、祈里！せつな！悪いけどお願い!!」

咲は、祈里とせつなに感謝の言葉を伝え、ラブと美希を残した一同が、コロネの後を追ってトネリコの森へと向かった。

「私達も行かなくて良いのかなあ？」

「そうね・・・でも、向こうにはブツキーやせつなも居るし、何かあったら呼びに来るでしょう」

ラブと美希は、一同の無事を祈りながら咲の家に残った・・・

トネリコの森目指して駆け続ける一同、あまり運動が得意では無い舞や祈里だったが、一同に付いて懸命に走り続けた。だんだん奥深くに入っていくと、フラツピとチヨツピの表情が険しくなり、

「咲、気を付けるラブ！」

「何か邪悪な気配を感じるチョピ！」

更にはコロネも低い声を上げながら毛を逆立たせて、一同にも緊張感が走った。コロネがニヤアと発すると、すかさず祈里が通訳し、

「みんな、あの林の中だつて!!」

「分かつた！」

勢い良く林の中に入って居た一同は、人など丸ごと飲み込みそうな程大きくなったマキシマが居た。茎が蠢くと先端に目玉が付いて居て、一同を見ると、

「ほう、あの子供だけでなく、栄養がありそうな奴らがゴロゴロ現われたぞー」

マキシマは、一同からもみりのように養分を吸い取ろうと、周囲に漂う嫌な匂いを発した。直ぐに表情を曇らせた咲は、

「舞、満、薫、行くよー！」

「「分かつたわ！」」

「せつなちゃん、私達も！」

「ええ！」

「「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」」

「「チェインジ・プリキュア! ビートアップ!!」」

咲、舞、満、薫、祈里、せつなの身体が輝き、プリキュアへと変化していった・・・

「輝く金の花！キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼！キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「天空に満ちる月！キュアブライト!!」

「大地に薫る風！キュアウインディ!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシユ、キュアパイン!!」

「真つ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシユ、キュアパッション!!」

「レッツ！プリキュア!!」

六人のプリキュアがマキシマに対して名乗りを上げた。マキシマは驚愕するも、

「プリキュア!? お前達がプリキュアだったのか? 丁度良い! 貴様らの養分を吸い取れば・・・この俺の力も上がるって訳だ!! もう、あんなガキの養分も要らねえなあ!!!」

「まさか・・・みのりの事!? あんた、良くもあたしの可愛い妹を・・・許さない!! ダアアアア!!!」

雄叫び上げたブルームが、マキシマに怒濤の連続パンチを浴びせ、マキシマはサンドバッグのように打たれ続けた。必死に触手でブルームを遠ざけると、

「テメエ、良くもやりやがったなあ! 今、可愛い妹って言つてたよな? ククク! あのガキ

には、俺の分身が取り憑いて養分を奪い、俺に養分を与え続けてるんだよ!!俺の指示一つで・・・テメエの可愛い妹を干からびさせて、殺す事も容易いんだよ!!」

マキシマの言葉に一同は驚愕し、更に攻撃をしようとしていたブルームの表情は強張った。迂闊にマキシマに攻撃すれば、みのりの身が危なかった。

「な、何て奴!?!」

「卑怯よ!」

ブライトが、イーグレットが、拳を振るわせながらマキシマを罵るも、マキシマは不気味に笑い、

「ククク、おとなしく俺様に養分を吸わせな!逆らえば・・・分かってるよなあ?」

マキシマに脅され、手も足も出せないプリキユア達、パッションは、小声でブルームに声を掛け、

「ブルーム、私とパインで向こうに戻って、ラブと美希に知らせる!私達が、あなたの妹に取り憑いてる奴を倒すまで、何とか持ち堪えて!」

「パッション・・・お願い!みのりを・・・」

「うん、大丈夫だよ!絶対救えるって、私信してる!!」

「パイン・・・二人共、お願い!」

「「エエー!」」

パインとパッションは力強く頷き、瞬間移動でこの場を後にした。マキシマは、二人消えた事に不快感を見せるも、

「逃げたのか!? まあいい．．．おい、抵抗すればどうなるか．．．分かってるよなあ?」  
「わ、分かったわよ!」

ブルーム達四人は、苦悶の表情を浮かべながら、その場で棒立ちとなった．．．

戻って来たパインとパッションからの報告を聞き、ラブと美希の表情が見る見る険しくなると、

「何て卑怯な奴! 許せない!!」

「ええ、ラブ、あたし達も変身よ!」

「チェインジ・プリキュア! ビートアップ!!」

「ピンクのハートは愛あるしるし! もぎたてフレッシュ、キュアピーチ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし! つみたてフレッシュ、キュアベリー!!」

四人のプリキュアは、沙織が背中にみのりを背負い、病院に連れて行くこうとする姿を見付けると、ピーチは慌てて沙織を呼び止め、

「待って下さい!」

「エツ!? あ、あなた達は?」

突然話し掛けられた沙織は、ピーチ達四人を見て困惑した。

「通りすがりのプリキュア・・・フレッシュプリキュアです!」

「プリキュア!?!あの横浜の?」

沙織も、プリキュアの事は以前ニュースで見て知っていた。そのプリキュアが、何故自分達の家に居るのか疑問だった。ベリーはコクリと頷き、

「はい!実は、娘さんに悪い怪物が取り憑いてるんです!!」

「私達は、その怪物を退治に来ました!」

「私達を信じて、娘さんをこのテーブルに座らせて頂けませんか?」

パイン、パッションも自分達を信じて欲しいと沙織に訴え掛け、四人の真剣な眼差しを見た沙織は、それでみのりが治るならと思い、半信半疑ながら、みのりをテーブル席に座らせた。パインは、パインフルートを取り出すと、

「悪いの、悪いの、とんでいけ!プリキュア!ヒーリングプリアー・・・フレッシュ!!」

パインの浄化技ヒーリングプリアーがみのりに放たれた。沙織はどうなる事かとハラハラしたもの、みのりの首筋から何かが逃げるように離れると、みのりの表情は見る見る安らいで行った。みのりは目を擦りながら目を覚まし、

「アレエ!?!みのり、どうして此処に?」

「みのりいいい!良かった!!」

何時ものみのりに戻り、沙織は涙ぐみながらみのりに抱き付いた。それを見たピーチ達は目を細めるも、みのりから離れた物体は、徐々に大きくなり、白い身体をしたマキシマのような姿になった。ピーチ、ベリー、パインは、表情を険しくしながら白マキシマを睨み、

「あいつね!」

「パッション、こつちはあたし達に任せて!あなたはブルーム達に・・・」

「ブルーム達を援護して上げて!」

「分かったわ!」

この場をピーチ、ベリー、パインに託すと、パッションは、みのりが無事元気を取り戻した事をブルーム達に伝えるに、瞬間移動で消え去った。ピーチ達は、この場から離れているように沙織とみのりを逃がすと、みのりは店の看板の陰に隠れながら、ピーチ達三人を見つめた。ピーチはピーチロッド、ベリーはベリーソード、パインは再びパインフルートを取り出すと、

「人に取り憑いて、養分を奪おう何て・・・許せない!ベリー、パイン、行くよ!!」

「「悪いの、悪いの、飛んでいけ!」」

「プリキュア!ラブサンシャイン・・・」

「プリキュア!エスポワールシャワー・・・」



「プリキュア！ヒーリングプレアー・・・」

「「フレ〜ッッシュュ!!!」」

ピーチからピンクのハート型の光弾が、ベリーから青いスピード型の光弾が、パインから黄色いダイヤ型の光弾が同時に発射され、三人の合体技が白マキシマに放たれた。その威力の前に、白マキシマは為す術無く浄化され、ピーチ達三人はその場を離れた。

みのりを人質に取られたも同然のブルーム達は、マキシマに手を出せず、一方的にいたぶられ、いま養分を奪われようとしていた。

「クッ!?みのりを酷い目に合わせた、こんな奴にいい・・・」

ブルームが悔しそうに拳を握ったその時、周囲が赤く発光し、パッションが姿を現わした。四人の視線が一齐にパッションに向けられると、パッションは口元に笑みを浮かべ、

「みんな、安心して！咲の妹は、無事元気を取り戻したわ!!」

パッションの言葉を聞き、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインデイの表情は一齐に晴れ渡り、

「本当!?!」

「良かったわね、ブルーム!」

「さあ、後は・・・こいつに御礼をしなきゃね！」

「ええ・・・みのりちゃんにした報い・・・百倍にして返してやらなきゃね!!」

ウィンディの目が険しくなったその時、マキシマの薫が突風によって次々に切り裂かれ、マキシマが悲鳴を上げてのたうち回った。更にブライトがその場で連続光弾を放ち、マキシマの身体に穴が空いて行く・・・

(こ、こいつら、強ええ!?!に、逃げなきゃ遣られる!!)

マキシマは、溶解液を地上に吐きまくり、砂埃を周囲に撒き散らし、その間に地中に逃げようと試みるも、パッションがその行動を読み、

「逃がさないわよ！」

パッションはアカルンを使い、マキシマを宙に浮かせると、

「ブルーム、イーグレット、今よ！」

パッションの合図に頷いた、ブルームとイーグレットは、

「よくもみのりを・・・」

「みのりちゃんが苦しんだ分・・・私達が纏めて返して上げるわ！」

互いに見つめ合い、頷き合った二人、ブルームはベルトに、イーグレットは左手に付いているハート形の中心部分にリングを装着し、

「精霊の光よ！命の輝きよ!!」

イーグレットが叫べば、

「希望へ導け！二つの心!!」

ブルームが叫ぶ、

「プリキュア！スパイラルハート・・・」

力を込めたブルームとイーグレットが一旦腕を引くと、

「スプラ〜ッッシュ!!!」

一気に力を解放し、両腕を突き出した二人から、凄まじいエネルギー波が、上空から落下してくるマキシマ目掛け放たれた。直撃を受けたマキシマは、

「こ、この力!!この力さへ取込めれば・・・俺は、俺はああああ」

スパイラルハートスプラッシュを受け、マキシマは消滅した。ブルームはパッションに礼を言うと変身を解き、コロネを抱き上げ、ラブ達が待つPANPAPAパンへと瞬間移動で戻って行った・・・

咲は、妹みのりの事で、舞、満、薫、そして心配してやって来てくれたラブ、美希、祈里、せつなの友情に改めて感謝し、一同にお店のパンをどんどん差し入れし、裏庭のテーブルに運んでくると、元気を取り戻したみのりも、一同に顔を見せた。

「薫お姉ちゃん、みのり、プリキュアを見たんだよお！」

「へえ、良かったわね、みのりちゃん！」

「ウン！」

みのりは、ピーチ達が白マキシマを、浄化した時の真似をしているつもりなのか、ストローを右手でクルクル回しながら、左手でメロンパンを揺らした。ラブは首を傾げながら、

「みのりちゃん、そのメロンパンはどういう意味!？」

「うん、あのピンクのプリキュアのオッパイが、こう揺れて・・・」

「エエエエエ!？」

ラブは思わず顔を赤くしながら、自分の胸を触り、美希と祈里に小声で話し掛け、

「私って、技放つ時あんな風になるの?」

「さ、さあ!？」

「どう何だろう!？」

聞かれた美希と祈里は困惑気味に首を傾げ、思わずせつなはクスリと笑った。

「ラブ・・・また胸が育ったの?」

ラブの胸を、羨ましそうに睨が見つめ、一同から笑い声が響いたその時、一同の携帯が鳴りメールが届いた。見て見るとそれはなぎさからで、中身はこう書かれていた。

・・・みんな、急で悪いけど、T A K O C A F Eに今から来られないかなあ? みん

なに会いたがつてる人が居て・・・信じられないだろうけど、何とその人は、地球の神様!! 詳しくはみんな集まったら話すよ! そうそう、ゆりはもうこっちに来てるから!!・・・

メールを読んだ咲達、ラブ達は目を点にし、

「か、神様?! 神様って本当に居るの?」

「まあ、女神様も居るから、居てもおかしくは無いよね?」

ラブに氣かれた咲は、フィーリア王女の事を思いだし、居てもおかしくは無いと語った。

「取り敢えず、行くしか無いわね!」

せつなは、また自分がみんなを、瞬間移動で連れて行く事になりそうだと苦笑を浮かべた・・・

2、あなたが神様!?

咲達がマキシマと戦って居た頃、TAKO CAFEで談笑していたなぎさとほか、ひかりはアカネに頼まれて買い出しに行っていて留守にしており、ゆりも後から合流する事になっていた。

「大学生ともなると、夏休みが長くて良いよねえ?」

「もう、なぎささつたらあ．．．」

たこ焼きを頬張りながら、談笑している二人の視線に、青髪の青年が微笑んでいる姿が映った。今まで居なかつたのに、何所から現われたんだろうと不思議に思いながらも、なぎささもほのかも、さして気にしていなかつたのだが、青年は、なぎささとほのかに近付いて来ると、

「やあ、僕は地球の神ブルー！君達の事は．．．」

突然近づいて来た青年が、自分の事を神様だと名乗り始め、なぎささとほのかは、目を中心にしながら呆然とし、微笑むブルーを見て困惑した。二人は、同じような仕草で、椅子を引き摺りながらその場を後退ると、思わず小声で話し合い、

「な、何あの人!?!自分の事神様だとか言い始めたよ?」

「そ、そうね．．．」

「大体さあ、神様があんなチャライ格好する?」

「胸元が大きく開いた、白いシャツの事?」

「神様って言ったらさあ、長い顎髭を蓄えて、白い仙人のような服を着て、雲に乗ってるよねえ?」

「見た事無いから知らないわよ!でも、自分で神様って名乗ってるのは．．．確かに怪しいよね?」

「でしよう？それとも・・・ちよつと頭のおかしい、関わつちやいけない人かも!」

なぎさに言われたほのかが、胡散臭そうに改めてブルーを見ると、ブルーはニコリと  
して、ほのかも思わず愛想笑いを浮かべ、

「な、なぎさの言う通りかも!」

「でしよう!でしよう!」

ほのかも同意してくれた事で、なぎさは改めてブルーを胡散臭そうに見つめた。再び  
コソコソ話をしていると、買い出しに行っていたひかりが戻つて来て、ブルーはひかりと  
を見て微笑むと、

「やあ!僕は地球の神ブルー!!」

「神様!?!初めまして!私は九条ひかりです!!」

「君達には、幾度もこの世界を救つて貰い、いくら感謝しても仕切れないくらいだよ!」  
「そんな事ありません!」

ひかりは、なぎさとほのかと違い、ブルーの言葉を信じて居るようで、楽しげに会話  
していた。気付いたなぎさとほのかは、慌ててひかりを呼ぶと、

「ひ、ひかり!無闇に話掛けたら駄目だよ?」

「付きまとわれてしまうかも知れないわ!」

二人にダメ出しされ、ひかりは首を傾げると、

「でも、神様ですよ?」

「信じちゃ……駄目!!」

なぎさとほのかは、同じような仕草をしながら、ひかりにブルーの言葉を信じないように忠告した。ひかりは再び首を傾げ、

「でも……あの人からは、光の園のクイーンのような、温かい光を感じます!悪い人では絶対ありません!!」

「エッ!?!」

ひかりにそう断言され、顔を見合わせたなぎさとほのか、再びブルーを見つめると、ブルーは優しげな表情でニッコリ微笑み、二人も愛想笑いを返した。再びヒソヒソ話を始めたなぎさとほのか、ほのかはなぎさに話し掛け、

「ねえ、なぎさ!」

「何、ほのか?」

「私……あの何処かで見えた気がするんだけど?」

「エッ!?!……そう言われると、私も……」

「アッ!?!」

なぎさとほのかが同時にブルーを指差し、アッと驚きの声を上げた。二人がブルーを見た場所、それは時空の狭間に迷い込んだ時、過去の世界に流されたとある世界で、プ



リキュアらしき少女と、今日の前に居るブルーが、巨大な敵と戦っている姿を見ていたのを思い出した。

「じゃあ、じゃあ、あの人は……」

「『本物の神様?!』」

変顔を浮かべたなぎさとほのかは、自分達が神様に失礼極まりない態度を取っていたと反省し、同じような仕草でブルーに近付き、先ずなぎさが、ブルーの肩をさつとはたきながら、

「アッ! 神様、服に埃が……」

「エッ!? ありがとう、でも大丈夫だよ!」

続いてほのかは、ブルーをテーブル席に座らせると、

「ひかりさん! 神様に何かお飲み物を!! 神様は、何時も何をお飲みになります?」

「エッ!? 僕は、紅茶を……」

「ひかり! 神様、紅茶だって!!」

なぎさもほのかの言葉に合わせるかのように、ひかりに紅茶の手配を頼んだ。ひかりはそんな二人を見て思わずクスリとし、

「はい! ただいまお持ちします!!」

ブルーは、先程までと急に態度が変わったなぎさとほのかを見て首を傾げ、

「エエエと、二人共、急にどうしたんだい？」

「ホホホホ、何でもありません!!」

同じような仕草で、誤魔化し笑いを浮かべるなぎさとほのかは、遅れてやって来たゆりは、  
は、

(なぎさとほのか・・・何やってるのかしら?)

なぎさとほのかは、ブルーに媚びているような姿を見て、ゆりは眼鏡を曇らせ呆然として居た・・・

なぎさとほのかは、遅れてやって来たゆりにも、青髪の青年が、地球の神ブルーだと紹介するも、ゆりのブルーを見つめる視線は険しかった。

「あなたが本当の神様だとして・・・何故あなたは、この世界が何度も危機に陥った時、救ってはくれなかったのですか？」

「君達には濟まないと思ってる！僕は・・・千年前に力を失い、今では、ただこの世界の行く末を見守る事ぐらいしか出来なくなりました・・・」

憂いを帯びた表情で俯いたブルーを見て、なぎさとほのかは、とある少女の事を思いだした。

「ひよつとして・・・神様が一緒に戦ってたプリキュアと関係が？」

「エツ!? 君達は、キュアミラーージュの事を知っているのかい?」

「いえ、直接には……ただ、私達は以前、時空の狭間に迷い込み、過去のプリキュア達を見た事があつたものですから……」

「そんな事が……やはり君達は、闇の神ブラック、光の神ホワイトと、何か関係があるのでは……」

「エツ!? 闇の神ブラック?」

「光の神ホワイト?」

なぎさとほのかは、ブルーの意外な言葉を聞いて思わず顔を見合わせた。ブルーはそこで、ひかりが持つて来てくれた紅茶を一口飲み、なぎさ、ほのか、ひかり、ゆりの顔を見つめていくと、

「僕が君達に会いに来た理由がまだだったね……可能ならば、全てのプリキュア達にも伝えておきたいのだが……」

「分かりました! じゃあ、みんなにメールしてみます!!」

なぎさは慌てて一同に、神様が伝えたい事があるから、こつちに来られないかというメールをすると、信じる者、冗談だと思ふ者が居たが、せつなから一同を連れて来るといふメールが入り、なぎさはホッと安堵した。

「みんな、こつちに来てくれるそうです!」

「そう！それは良かった!!」

ブルーはそこで笑みを浮かべたものの、直ぐに真顔になり、

「君達は、魔界の者と接点があるのかい?」

ブルーに聞かれた四人、ゆりが代表するように、

「ええ、シーレインという人とは仲良くなりました!」

「魔界に何かあつたんですか?」

ひかりが不安そうにブルーに問うと、ブルーはコクリと頷き、

「うん！この地上に・・・魔界の者達が入り込んでいる!!それも、君達を倒そうと企んでいるようだ!!」

ブルーの言葉を聞き、なぎさ、ほのか、ひかり、ゆりの顔色が変わった。シーレインの忠告通り、カインとアベルが動き出した事を、四人はこの時初めて知った。

「既にプリキュア達の何人かは、魔界の者と戦い、退けては居るようだけど、君達は知らないようなので、僕はその事を忠告に来たんだ!」

ブルーは良かれと思って、一同に忠告にやって来たのだが、プリキュア達を全員集めた事が、逆にプリキュア達全員を、生死の分かれ道に立たせる事になるとは、この時のブルーには知る由も無かった・・・

完

## 第一百話：呪われたプリキュア!

1、使い魔のキャミー

魔界・・・

天蠍宮を守護する骸骨戦士ベレルの下に、宝瓶宮のシャックスが訪ねて来た。ベレルは、この新参者であるシャックスに対し、良い感情は持つて居なかった。

「何か用か、シャックス?」

「はい!ベレル様に、お願いしたい事がありましたね」

「何だと!」

シャックスの真意が読めず、ベレルはシャックスの出方を探った。シャックスはニヤニヤしながら、

「実は、ベレル様の配下である、ミイラのアレオのお力をお借りしたく、こうして参上致しました!」

「何!?アレオを?・・・そうか、そう言う事か・・・シャックス、貴様既にアレオと接触しておったな?」

「フッフフ、流星はベレル様ですねぇ・・・」

「フン、既にファレオを誑（たぶら）かし、プリキュアの下へと差し向けたという所か：」  
「フフフ、誑かしたとはご挨拶ですねぇ？ファレオは、私の考えに賛同してくれましてね、小娘如き、俺一人で十分だと仰有り、人間界へと出掛けて行かれましたよ！」

「確かに、ファレオの呪いに掛ければ、プリキュアといえど全滅も有り得る・・・好きにするが良い！だが、プリキュアを甘く見るなよ？」

「フフフ、ご忠告感謝致しますよ！」

シャックスは、口元に笑みを浮かべながら、その場を後にした。残ったベレルは少し考え込み、

（ファレオをも己の名声に利用するか・・・相変わらず小賢しい奴よ！カイン殿とアベル殿は、何故あのような格下を、拙者達と同等に加えたのか、理解に苦しむ・・・）

ベレルは、天蠍宮の中をウロウロしていたものの、急に立ち止まると、両手をポンと叩き、辺りを見回した。

「キャミー！キャミーは居るかあ！？キャミー!!」

「ハイハイハイ！ベレル様！使い魔のキャミーは此処ですニヤー!!」

身軽に天蠍宮の中を駆けて来たのは、焦げ茶色で猫の容姿をした使い魔のキャミーだった。使い魔とは、いわば召使いのような者で、ベレルの身の回りの世話を担当していた。キャミーは、尻尾を振りながら、

「何かお仕事ですかニャー?」

「ウム! キヤミー、悪いが人間界に赴き、ファレオの動向を観察してくれ!」

「ファレオ様ですかニャー? あの人、陰気で少し苦手ですニャー!」

「何も直に接触しろと言う事では無い! ファレオが、人間界でプリキュアと戦う様を…見届けてくれ!!」

「プリキュアですかニャー?」

「そうだ! お前は向こうの世界に居る猫とそっくりだから、怪しまれる事も無い筈だ! : それと、この水晶を持って行け!!」

ベレルは、キヤミーの首に、首輪のような小型の水晶を付けた。

「これは、拙者との通信機をも兼ねて居る! 何か指示を仰ぎたい時は、その水晶に念を込めて話し掛けて見ろ! 拙者に繋がる!!」

「ベレル様…何時の間にこんなアイテム作つたんですかニャー?」

「フフフ、拙者がそんな器用な真似出来ると思うか?」

「思いませんニャー!」

キヤミーが首を竦めながら両手を広げると、ベレルは思わず笑い出し、

「ハハハハ、ハッキリ言いよるわい! これは昔、魔法界の知り合いに貰ったものでなあ…」



「魔法界ですかニヤァ!? ベレル様、魔法界にも知り合いが居るんですかニヤァ?」

「貴様も知って居るように、元々魔法界と魔界は一つの世界だったからなあ! 二つの世界に別れた今でも、互いの世界を行き来する事は可能だ!! 双魚宮のニクスも、元々は魔法界の人魚の里の出だ!!」

「ニクス様があ!?! 知らなかったニヤァ!」

「と、キヤミーは、ベレルの言葉にココココ頷きながら納得し、ベレルは軽く咳払いをする

「ゴホー! 話はこのぐらいにして・・・ではキヤミー、頼むぞ!」

「分かりましたニヤァ!」

ベレルの使い魔キヤミーは、人間界へと出向いたファレオ観察の命を受け、人間界へと向かった・・・

地球の神ブルーは、なぎさからプリキュアのみんなが、全員TAKO CAFEに集まってくれると聞くと、ある人物の事を思いだした。一万年前、この世界を救った三人のプリキュアの一人、キュアマジシャンの子孫の事を・・・

「君達の仲間の中に、トランプ王国のプリキュアも居るそうだねえ?」

「エッ!? ソードの事ですか?」

ブルーに聞かれたなぎさ、ほのか、ひかり、ゆりは、思わず顔を見合わせ、なぎさがブルーにソードの名前を告げた。ブルーはやはりと言ったような表情を浮かべると、

「ソード・・・それが現在のトランプ王国の王女が、プリキュアになった名前かい？一度会って話をしてみたいのだけど・・・」

ブルーの問いに、ほのかは首を横に振ると、

「いえ、違います！ソードは、トランプ王国の民である、真琴さんがプリキュアになった名前で、アン王女はプリキュアでは・・・」

「エッ!? 違うのかい？ それは妙だねえ・・・トランプ王国の王女なら、その資格は既に持つて居ると言っても良い筈だけど・・・」

不思議そうに首を傾げるブルーを見て、ゆりは怪訝な表情を浮かべながら、

「どういう事でしょう?」

「トランプ王国とは・・・一万年前、大いなる闇から世界を救った、三人のプリキュアの一人、キュアマジシャンが作った国何だ！トランプ王国の王女は、世界が闇の危機に陥る時、キュアマジシャンが残した、王家の切り札のプリキュアとして、世界の危機を救ったんだ!! だから、今の君達とも共に戦っているものだとばかり・・・」

「神様！お言葉を返すようですけど、アン王女は私達の仲間です!」

「なぎさの言う通りです!」

「例えプリキュアになれなくても、アン王女は私達と一緒に戦ってくれてます!!」

なぎさの言葉にほのかとゆりも同意し、少し険しい表情でブルーを見ると、ブルーは、自らの発言が一同を不快に思わせたと感じ、

「そうだね・・・僕の言い方が悪かったようだね！出来れば、そのアン王女とも話をしてみたいのだけど？」

ブルーが素直に自分の非を認めた事で、なぎさ達の機嫌も直り、なぎさは携帯を見つめると、

「アン王女も真琴と一緒に来るって、さっきメールが来てましたから、大丈夫だと思いますよー!」

「それはありがたい・・・そうだ！そんな君達なら、彼女の事も受け入れてくれるかも知れない・・・君達に、一人会わせたい子が居るんだけど、此処に連れて来ても構わないかい？」

思わず顔を見合わせたなぎさ、ほのか、ゆり、ひかりは、今一度ブルーを見つめながら、

「会わせたい子!？」

「私達は構いませんけど・・・」

「そうね、私達に拒む理由もありませんし・・・」

「ひよつとして・・・神様のお子様ですか？」

「いや、そういう訳じゃ・・・じゃあ、今から連れて来るから！」

ブルーはそう言うのと、鏡を出現させ、何処かへと姿を消した・・・

なぎさ、ほのか、ゆり、ひかりは、鏡が消えた場所を呆然としながら見つめて居た。

2、キャミーとハミイ

ブルースカイ王国・・・

何処か神秘さを醸し出す城の外観とは裏腹に、城の内部では、少女の駄々を捏ねる声が響き渡っていた。

「嫌だ！嫌だ！嫌だ！嫌だああああ!!」

「ヒメー！我が儘言うものではありませんわ!!」

この国の王女ヒメルダは、プリキュア達に会ってみないかとブルーに誘われ、目を輝かせるも、いざ出掛けようとした時、これから会うプリキュア達の人数を聞いたヒメルダは、会う事が怖くなり、王国の柱にしがみつき、出掛ける事を渋っていた。お世話係の妖精リボンは、そんなヒメルダに呆れ、ヒメルダの母である女王も困惑し、

「ヒメルダ、折角の神様のご厚意を無にしてどうしますか？あなたも、またプリキュアに会いたいと、常日頃から言っ居たではありませんか？」

「だつてお母様ああ．．．プリキュアつて、一杯居るんだよお！私．．．みんなに会うの怖いよおお！！」

泣き言を言うヒメルダに、ブルーは困り顔を浮かべながらヒメルダを諭し、

「ヒメ！怖い事は無いよ！君も絵本博覧会で、彼女達を遠くからとはいえ、見て居ただろう？」

「でもでも、こんな目をして睨んでたプリキュアも居たよ！」

ヒメルダは、ムーンライトのキリツとした目を思い出しながら、思わず真似をする  
と、ブルーは苦笑を浮かべた。トランプ王国の王女、アン王女もやって来ると聞き、ブルーは、一万年前のプリキュアの子孫である、ヒメルダとアン王女を会わせてあげよう  
と思い、良かれと思つて、なぎさ達一同と顔合わせさせようとしたものの、乗り気でないヒメルダを、無理に会わせるのも可哀想に思い、

「彼女達には伝えてしまったが、ヒメがそれ程頑なに拒むのなら、仕方が無いね．．．」  
「エツ!？」

ブルーは、嫌がるヒメルダを、無理矢理連れて行く事は出来ないとはばかり、連れて行くのを諦め掛けたのを知るや、ヒメルダは大いに動揺した。行きたい気持ちは当然あるも、あんな大人数の前で、ちゃんと挨拶出来るかどうかを考えると、ヒメルダの心は不安だった。このチャンスを逃せば、もう二度と会えないような気もしてくると、しがみ

ついていた柱から手を放し、モジモジしながら両手の人差し指を合わせ、

「アツ！エエエと・・・神様、遠くから見てるだけじゃ・・・ダメ？」

「構わないよ！ヒメの事は、僕から彼女達に話しておくよ!!」

「本当!?!それなら行くううう!!」

「ハア・・・全く、ヒメには呆れてしまいますわ!」

リボンが溜息を付くと、ヒメルダは忽ち頬を大きく膨らませた・・・

ブルーがヒメルダを連れに行っている頃、せつなに連れられ、続々とTAKO CA

FE

に一同が集結していた・・・

アカネは、急にお客さんが増えた事で苦笑を浮かべると、

「アハハハ、こんなにお客さん来るとは思わなかったわ!材料完全に足りないわねえ・・・」

「すいません、急にみんなが集まろうって話になりました：私、今から買い出しに：」  
「いいって!ひかりは店番お願いね、じゃあ買い出しに行ってくるから、後の事はよろしくう!!」

アカネは気を利かせてくれたようで、ひかりに店番を頼み、買い出しに出掛けた。

TAKO CAFEには、さっきまで魔界のマキシマと戦って居た咲達とラブ達のぞみ達、つぼみ達、響達、みゆき達、真琴とアン王女、そして、メツプル達、フラツピ達、シロップ、シフォンにタルト、シプレ達、ハミイ達、そしてみゆきに抱かれた、キャンデイと魔王もやって来ていた。なぎさはアン王女を手招きすると、

「アン王女、何だか知らないけど、地球の神様がアン王女に会いたがってたよ!」

「地球の神がわたくしに!? どういう事でしょう?」

「さあ!? アン王女の先祖のキュアマジシャンの事も、懐かしそうに語ってたから、それも関係しているのかも?」

「そうですか・・・」

アン王女は、何故地球の神が、自分に会いたがっているのか不思議に思いながらも、自分の先祖である、キュアマジシャンの事を聞けるのではないかと思うと、アン王女もブルーに会う事が楽しみになって居た。

そんな少女達の様子を、アカネの自動車の脇から、ジイと見つめる茶色い猫が居た：（あれがプリキュアかニャー・・・見た感じ、普通の女の子見たいだニャー?）

見つめて居たのは、魔界の使い魔キャミーで、キャミーはなぎさ達一同を見て居ても、伝説の戦士と言われるプリキュアだとは、とても思えなかった。だが奏を見た時、キャミーはその眼光に驚いた。まるでキャミーの正体を見抜いたとでも言いたげに、ジイと

キャミーを見つめるその視線に、キャミーは困惑した。

(ま、まさか!? キャミーの正体に気付いたのかニャー? でも、人間界の猫と変わらない筈ニャンだけどニャー?)

自分の正体がバレたのかどうか、半信半疑のキャミーだったが、ジイと見つめて居た奏は、徐にキャミーに近付いて来て、キャミーは益々困惑した。

(や、やっぱりバレてるニャー!? な、何で!? どうして? どこから見ても猫の筈ニャー? 人間界の猫と、何が違うのニャー?)

キャミーは慌てて周りをキョロキョロすると、一匹の白い猫を見付けた。それはハミイで、ハミイもキャミーに気付いたのか、嬉しそうに近付いて来る。それに気付いた奏が、ハミイを抱き上げ、一緒にキャミーの方に近付いて来る。

(どう見ても、あの猫と・・・!?)

奏に抱かれながら近付いて来るハミイを見て、キャミーは思わず口をアングリ開けて呆然とした。

(あ、頭デカア!? 人間界の猫は・・・あんなに頭が大きかったのかニャー? 拙いニャー:)

逃げるべきか、もう少し様子を見るべきか、迷って居たキャミーは、奏が伸ばした手に反応が遅れ、そのまま抱き抱えられた。奏は悦の表情を浮かべ、目をキラキラ輝かせながらキャミーに頬擦りし、



「イヤアアン、可愛い！ねえねえ．．．あなたの肉球触らせてええ!!」

(ニヤ、ニヤンだああ!?)

キャミーを抱き抱えた奏は、悦に浸った表情を浮かべながら、キャミーの肉球を気持ち良さそうに触り続けた。

(は、離すニヤー!)

ジタバタ暴れるキャミーだったが、奏はそんなキャミーに気付かず、幸せそうにキャミーの肉球を触り続ける。

「奏．．．その子、物凄く嫌がつてるわよ?」

「出たあ!奏の肉球フェチ!!」

そんな奏を、呆れ気味にエレンと響が窘めるも、奏はデレデレし続け、顔を見合わせたエレンと響は、嫌がるキャミーを奏から引き離し、奏をみんなの側へと強制連行した。奏は名残惜しそうな目でキャミーを見つめると、キャミーの背筋はゾツとした。

(ニヤンニヤンだあいつは!?!あいつ．．．嫌いニヤー!!)

不機嫌そうな表情をするキャミーに、その場に残ったハミイが話し掛け、

「ゴメンニヤ!奏は、猫と肉球が大好きで、目に付くとああなつちやうニヤ!悪気は無いから許してあげて欲しいニヤ!挨拶が遅れたニヤ!ハミイって言うニヤ!!これはお詫びの印ニヤ!!」

ハミイはそう言うのと、奏が差し入れに持つて来たカップケーキを、ニコニコしながら  
 キヤミーに差し出した。シンプルなクリームのカップケーキで、キヤミーは受け取りな  
 がらも納得し、

(そういう事か、キヤミーの正体に気付いた訳じゃ・・・アレ!?)

「お、おい! お前、人間の言葉喋ってないかニヤー?」

「ハミイは、メイジャーランドの妖精ニヤ! そういう・・・アレ!? そういえばまだ名前聞  
 いて無かったニヤ?」

「キヤミー!」

「キヤミーって言うニヤ? ハミイと名前が似てるニヤ!」

「そういえば・・・」

初対面ながら、気さくでマイペースなハミイを見て、キヤミーもハミイには心を許し  
 たかのように、仲良く話し続けた。ハミイは、もう一人紹介したいと言い、

「セイレーン! ちょっとここっちに来て欲しいニヤ!」

「何、ハミイ!?!」

ハミイに呼ばれたエレンが、再びキヤミーとハミイに近付いて来ると、その背後で、自  
 分も行くと言いたげに、こちらに来ようとしている奏を、響とアコが抑え、奏は名残惜  
 しそうにキヤミーに手を振り、キヤミーはソツポを向いて奏をへこませた。エレンは苦

笑を浮かべながら、

「まあ、無理矢理あんな真似をされれば、奏が嫌われてもしようがないわねえ．．．ところでハミイ、私に何か用？」

「セイレーン！この子はキャミーって言うニヤ!!キャミー、こっちはセイレーン!ハミイの幼なじみで親友ニヤ!!」

「幼なじみ!?親友!?!．．．あんた、人間と幼なじみなの?」

驚いたキャミーが、思わず人間語を話すと、エレンは目を点にし、

「ね、猫が喋った!?!」

「し、しまったニヤー!?!」

思わず動揺するキャミーだったが、ハミイは平然とエレンに説明を始め、

「よく知らないけど、キャミーもハミイとセイレーンのように、何処かの国の妖精みたい何だニヤー!」

「ああ、それで．．．私は黒川エレンよ!今は人間の姿をしてるけど、元々はあなたのように、猫の姿をしてたの．．．よろしくね!!」

(う、受け入れた．．．って言うか、この人間が猫の姿を!?)

キャミーは、エレンの全身を上から下へと見つめ、今度は下から上へと向けた。

「セイレーンは．．．化け猫なのかニヤー?」

「やっかましいわ! 誰が化け猫よ!!」

「だって、人間の姿に化けてるじゃないかニャー?」

「訳あって、今は猫の姿に戻れなくて、この姿で過ごしてるの!」

「ニャる程・・・呪われたのかニャー?」

「いや、呪われたって訳じゃ無いけど・・・ところで、あなたはどこの国の妖精なの?」

エレンに聞かれたキャミーは、周りをキョロキョロ見渡し、近くには三人しか居ない事を改めて確認すると、

「二人には本当の事を話すけど、他のプリキュア達には秘密にしてくれるかニャー?」

「秘密!」

思わず顔を見合わせたエレンとハミイだったが、同時にコクリと頷くと、

「キャミーは、魔界の使い魔何だニャー!」

「魔界の!?! そのキャミーが、どうしてこっちの世界に!?!」

「実は・・・」

エレンの問いに答えようとしたキャミーだったが、その時、なぎさ達が響めいた。

3、えりかとヒメルダ

突如現われた姿見程の鏡、その中からブルーが現われ、背後から人影が現われたかと

思うと、脱兎の如く走り出し、あつという間に少し離れた草むらにその姿が消えた。慌ててその後をリボンが追うと、草むらから突然腕が現われ、リボンを無理矢理草むらの中に入れた。見て居た一同は呆然とし、ブルーは苦笑を浮かべながら、一同の顔を見渡していたが、視線にアン王女が映った時に、ハツとした表情を浮かべると、

「君は・・・キュアマジシャン!? そうか、君がトランプ王国の王女だね?」

「ハイ! わたくしは、トランプ王国王女、マリー・アンジュと申します!」

アン王女は、深々とブルーに頭を下げると、ブルーはコクリと頷き、再びアン王女を見つめると、思わずアン王女の頬が染まった。

「それにしても似て居る・・・キュアマジシャンに!」

「そんなにわたくしは、キュアマジシャンに似て居るのでしょうか?」

「ああ、今君を見て感じた! 君は、キュアマジシャンの再来とも言えるよ!!」

「エツ! ですが、わたくしはプリキュアでは・・・」

「いや! 君は光りの戦士を導くエースとして、何時か輝くと僕は思う!!」

「わたくしが・・・」

アン王女は、ブルーの言葉を聞き呆然としていた・・・

自分もプリキュアになれるのなら、当然プリキュアとなつて、みんなと共に戦いたい気持ちは持つて居たが、本当にそのような日は来るのだろうか、アン王女は困惑した。

ブルーは改めて一同を見渡すと、

「話が途中になったね!みんな、急に集まってもらってありがとう!僕は地球の神ブルー!!」

ブルーが一同に自己紹介を始めると、先に会っていたなぎさ、ほのか、ひかり、ゆり以外のメンバーがどよめき、咲は変顔を浮かべながらブルーを指差し、

「エエエエ!?あなたが、か、神様?」

のぞみも首を傾げながら、ブルーをジイと見つめると、

「神様って・・・お爺ちゃんの姿をしてるんじゃないの?」

「絵本の神様も、大体お爺ちゃんが多かったような・・・」

のぞみの言葉にウンウン頷いたみゆきは、絵本の中の神様を思い描き、ポツリと言った。りんは苦笑混じりに、

「いや、のぞみ、みゆき、あたし達は、誰も神様何て見た事無いんだから、若い姿でも不思議じゃ無いでしょう?」

ラブと美希は、りんの言葉に同意しながらも、ブルーの服装を見ると変顔を浮かべながら、

「それはそうだけど、あの格好は・・・」

「神様って・・・何処かに居そうなチャライ格好をしてるのねえ?」

「でも、でも……イケメンさんですううう!!」

つぼみは、目をハートマークにしてときめくと、えりかは、またかと言いたげな表情で両手を広げ、溜息付きながら首を振った。

「何かイメージとだいぶ違うよねえ?」

「そうですねえ……と言っても、わたくしも神様には会った事はありませんけど」

響に話し掛けられたアン王女も、ブルーの姿は想像出来なかったようで驚いていた。みゆきに抱っこされていた魔王は、ブルーを胡散臭そうに見つめると、

「お前、本当に神様カゲかあ!?!何か証拠はあるカゲ?」

「ちよつと魔王!神様に失礼でしょう?」

なぎさは慌てて魔王を諭すも、さっきまでなぎさとほのかも、ひかりに諭されるまで、ブルーを神だとは信じて居なかった事を思い出したのか、微妙な表情を浮かべた。ブルーは微笑みながら、

「ウーン……どうすれば信じてもらえるかなあ?」

「地球の神様らしい事をするとか?」

「神様らしい事って……何かしら?」

「そう言われると……」

少し考えた祈里が提案するも、舞に逆に聞かれ、祈里は苦笑を浮かべた。ブルーは少

し憂いの表情を浮かべると、

「僕は1000年前の戦い以降、力のほとんどを失ってしまつてね!今ではこの星を見守るぐらいしか出来ないんだけど、世界を救い続けてくれていた君達の事は、ずっと見守つて居たよ!!本当に感謝してもしきれない・・・ありがとう!!」

ブルーが深々と一同に頭を下げると、一同も慌てて頭を下げた。なぎさもブルーに助け船を出し、

「私とほのかは、過去の世界に飛ばされた時、神様がプリキュアと一緒に戦つて居る姿を見てるから、間違いないよ!」

「へえ・・・じゃあ本物の神様何だあ!?!あたし達を見守つていたつて言うけどさ、どうやって?」

えりかに聞かれたブルーは、再び姿見鏡を出現させ、目を閉じて精神を集中させると、鏡の中に何処かの部屋が移つた。部屋の中は、丸められた紙や、本が部屋中に散らばり、それを見たえりかは、顔中から汗が滴り落ちた。つぼみといつきは目を点にしながら、

(あれは、えりかの部屋ですねぇ)

(あれは、えりかの部屋だねえ)

「神様、随分散らかつてる部屋だけど、その部屋に何か意味があるんですか?」

美希は不思議そうに首を傾げ、ブルーに問うと、



「僕は、鏡を通じて・・・」

「ワアアアア！説明は良いから、その鏡に映ったの消してえええ!!」

「えりか！あなたの部屋なのお？もっと片付けなさいよねえ!!」

「プライバシーの心外だよおお!!」

美希に頭をグリグリされながら注意されたえりかは、恨めしそうにブルーを見た。魔王も目を吊り上げると、

「そうカゲ！お前、コツソリみんなの風呂覗いてるカゲなあ？こいつは邪神カゲエエエ!!」

「それはあんたでしよう!」

涙目になりながら悔しがる魔王に、なぎさの拳骨が炸裂して黙らせた。ブルーは、そんな一同の声にも笑顔を崩さず、チラリと草むらに隠れたヒメルダを見ると、

「あの草むらの中に居る彼女は、ブルースカイ王国の姫で、ヒメルダ・ウインドウ・キュアクイーン・オブ・ザ・ブルースカイって言うんだ!」

ブルーは、草むらの中に居るヒメルダの名前を一同に教えると、一同は困惑した。えりかは目をパチクリしながら困惑し、

「ヒメルダ・・・何たらかしたらブルースカイ!?!」

「随分長い名前ですnee?」

うららも名前を覚えきれなかったのか、困惑気味にブルーに問うと、ブルーはコクリと頷き、

「ブルースカイ王国の王族は、代々ブルースカイを名前に付けるからね」

「にしても……長いわ!ウチ、覚え切れん!」

「私も!」

困惑気味のあかねは、ヒメルダの名前は覚えられないと根を上げると、ややいもコクリと頷きながら、あかねの言葉に同意した。かれんは、草むらの方を見つめながら、ブルーに話し掛け、

「神様、ヒメルダ・ウインドウ・キュアクイーン・オブ・ザ・ブルースカイ王女は、何故こちらに来ないで、草むらの中に居るのですか?」

「かれん、あの子の名前覚えたの?」

「流石かれんさん!」

かれんは、ブルーが言ったヒメルダの本名を間違えず正確に呼び、なぎさやのぞみを驚愕させた。ブルーは困惑しながら、

「済まない!実はヒメは……極度の人見知りで、大勢の人の前に出ると、怖がってしまつてねえ……」

ブルーの言葉を聞き、一同の視線が、草むらの中で隠れているであろう、ヒメルダへ

と注がれた。くるみは草むらを指差し、

「姫様なのに!？」

響も首を傾げながら、アコやアン王女に話し掛け、

「アコ、アン王女、姫様つて、大勢の前で挨拶とかするんでしよう?」

「私は、小さい時にメイジャーランドを出たから……でも、やっぱり国民のみんなの前に、パパやママと一緒に顔を出した事はあるよ」

「そうですねえ……わたくしもトランプ王国の民はもちろん、アコ姫のメイジャーランドを始めとした、他国の王族関係の方々との懇談もしましたわ!ですが、ヒメルダ王女の気持ちも分からないではありません!わたくしとて、大勢の人々の前に出れば、緊張する事はありませんし……」

「そうですねえ!私だつて、転入してみんなの前で挨拶した時は緊張しましたし、逃げ出したい気持ちにもなりました」

「分かる!分かる!」

嘗て、明堂学園中等部に転入した日を思い出したつぼみの言葉に、同じく転入初日の事を思い出したみゆきとあゆみが、コクコク何度も頷いた。ブルーは口元に笑みを浮かべ、

「そう言つて貰えると、僕も助かるよ」

「あの時、えりかが……アレエ!? えりか?」

転入初日のえりかの行動を思い出したつぼみが、えりかに注意しようとした矢先、隣に居た筈のえりかの姿が忽然と消えて居た。

「つぼみ、えりかなら……」

「エツ!?!」

困惑の表情を浮かべたいつきが、草むらを指差し、釣られるようにつぼみが草むらに目を向けると、えりかはヒメルダの隠れている草むらに徐に近付き、

「見い付けたあ!」

「エツ!? エエエエエエ?」

ヒメルダは、草むらから一同の様子をチラチラ見て居たが、突然現われたえりかに驚き、変顔浮かべながら素早く後退りして、顔から大量の汗をかいてパニックっていた。草むらに隠れていたせいで、白と水色のレースの服が汚れて居て、えりかは思わず顔を顰め、

「ほら、こっちに出てきなよ! 折角の綺麗な服が汚れちゃうじゃん!!」

えりかは、ヒメルダにこっちに来るように促し、ヒメルダは、重い足取りで草むらから姿を現わした。

「注意しようとした矢先に……」

「全く、えりかは・・・」

「つぼみちゃん、いつきちゃん、ちよつと待って！少し様子を見て見ましょう!!」

つぼみといつきは、呆れながらえりかを連れ戻しに行こうとしたが、美希は二人を止めると、様子を見ようと提案した。

（こういう時、えりかの人見知りしない行動が、思わぬ効果を呼ぶ事もあるのよねえ・・・）  
美希は苦笑を浮かべながら、えりかとヒメルダのやり取りを見守った・・・

「あたしは、来海えりか！神様から聞いたよ、何でこっちに來ないの？」

「アアア・・・ウウウウ・・・」

えりかに話し掛けられたヒメルダだが、目をパチクリし、両手の人差し指を付けたり離したりしながら、挙動不審な態度を取り、見かねたりボンは目を吊り上げると、

「ヒメ！折角プリキュアの皆さんが集まって居られるのですよ!!」

「で、でもおお・・・」

「オオオオ！ひよつとして、ブルースカイ王国の妖精さん？」

「はい！ヒメのお世話役をしているリボンと申します」

「あたしは来海えりか！よろしくう!!」

互いの手を取り握手をするえりかとリボン、ヒメルダは、そんなリボンを羨ましそう

に見つめ、

「リボン狡いよおお！私だつてき．．．」

「オオオ!!そんなじゃヒメとも握手!!」

リボンがえりかと握手したのを見たヒメルダは、羨ましそうに見つめて居ると、えりかはそれに気付いき、気さくにヒメルダの手を取り握手をした。見る見るヒメルダの顔は綻び、

「エツ!!ウワアアアア!プ、プリキュアと握手しちやつたああ!!」

「これであたしとヒメはもう友達だね」

「友達!?私がプリキュアと?．．．友達ですかああああ?すごすごおおおい!!」

ヒメルダは、えりかからもう友達だと告げられると、見る見る目を輝かせて幸せそうな表情を浮かべた。リボンも心から嬉しそうに、

「まあ!ヒメ、良かったですわねえ!!」

「ウン!あのおお．．．えりかお姉ちゃんと呼んでも良い?」

「お、お姉ちゃん!!」

「駄目!?!」

「お姉ちゃんかあ!何て素敵な響きしゆ．．．妹よおお!!」

「お姉たまああ!!」

互いに抱き合い感動するえりかとヒメルダを見て、一同は呆然とした・・・  
薫は、そんな二人を見て何度も瞬きすると、

「えりかとあの子・・・珍獣同士の気が合うのかしら!？」

「薫! どうしてそういう事言うの?」

薫がポツリと本音を洩らし、満にダメ出しされた。美希も苦笑を浮かべていると、えりかは美希を手招きし、呼ばれた美希は首を傾げながら近付いた。

「ヒメルダ姫、あたしは蒼乃美希! よろしくね」

「美希姉え、挨拶が固いよおお! ヒメは、あたし達の妹分何だからさあ」

「ハア!？」

「えりかお姉たまのお姉様なら、美希お姉たまも私のお姉たまです!」

「いや・・・あの、言ってる意味が良く分からないだけど!？」

「美希姉えは、あたしのお姉ちゃんみたいなものじゃない! ヒメは、もうあたしの妹同然って事は、必然的に美希姉えは、ヒメのお姉さんにもなるっしゅ!」

「ハア!?! どうしてそうなるのよおお?」

髪を振り乱して困惑する美希と、美希を姉と呼び慕うヒメルダ、変顔浮かべた美希は、  
「そ、そう言う事なら・・・ブルーチームの長女かれんさんや、エレンにれいかちゃんも・・・」

「言っておくけど！私はどちらかと言えば紫枠だからねえ？」

美希の声が聞こえたのか、エレンは間髪入れずに、自分は青では無く紫だと告げると、目を点にした美希は、

「エレンの薄情者おお！良いわよ、かれんさんとれいかちゃんに・・・」

後ろを振り返った美希だったが、さっきまで居た筈のかれんとれいかの姿が忽然と消え、動揺した美希は辺りをキョロキョロし、

「ちよつとお！かれんさん、れいかちゃん、何所行つたのよおお？」

「かれん！」

「れいか！」

「美希さんが呼んでるわよ？」

こまちなおは、足下で身を伏せて、美希の視線から逃れるかれんとれいかに、苦笑混じりに小声で話し掛けるも、かれんは引き攣った表情でシィとジエスチャーし、困惑の表情を浮かべたれいかは、小声でかれんに話し掛け、

「かれんさん、このまま隠れていてよろしいのでしょうか？」

「シツ！こういう事は、美希に任せておきましょう!!」

ブルーは、そんな一同のやり取りを目にすると、やはりヒメルダをプリキュア達に会わせて良かったと、心の底から安堵した。



## 4、プリキュアVSフェアレオ

えりかの機転で、ヒメルダも輪に加わった・・・

ブルーは、一同を見つめると、

「じゃあ、本題に入ろう・・・今日みんなに集まってもらったのは、魔界の者について話があったから何だ！」

ブルーが魔界の名を口に出すと、直ぐに咲達、のぞみ達、ラブ達、つぼみ達、響達、みゆき達、真琴の表情が険しくなった。

「君達の何人かは、実際に魔界の者と戦って居るだろうけど、この世界には何体もの魔が入り込んでいるんだ！」

「あたし達、ついさっき魔界のマキシマって言うのと戦って来たばかりだよ・・・妹のみのりを、酷い目に遭わせた最低な奴だった！」

（マキシマ!?!何処かで聞いた名前だニヤァ?フェアレオ様の他にも、何人も人間界に来てるのかニヤァ?）

キャミーは首を傾げていると、TAKO CAFÉ周辺の空気の流れが変わった・・・

快晴だった空は曇天へと変わり、遠くの方から雷が聞こえて来る。夏休みなのに、背筋がゾツとしてくるような感覚が、一同には感じられた。咄嗟にブルーが、妖精達が、そ

してキャミーの表情が変わった。アン王女はブルーに進言し、

「神様、ヒメルダ王女を、安全な場所に避難させた方がよろしいのでは？」

「エツ!?何？」

「そうだね・・・ヒメ!今日はもう帰った方が良い!此処に、魔界の者が現われたようだ!!それも、かなりのプレッシャーを、周囲に撒き散らす程の相手のようだ!!」

一同に緊張感が走る中、重苦しい空気が、段々こちらに近付いて来る。キャミーは顔から汗を滴りながら、

「おい、ハミイ!エレン!注意しな、ファレオ様がこの場所に来たようだ!!」

「ファレオ様!」

「ああ、分かりやすく言えば、全身を包帯で覆ったミイラ・・・」

「ミ、ミイラ!」

エレンは、キャミーの言葉を聞くと、変顔浮かべ動揺した。エレンは、物の怪関係は苦手だったのだから・・・

「来るニヤー!」

キャミーの叫びと共に、目以外の全身を、灰色掛かった包帯でグルグル巻きにしたミイラ男が、両手を前に突き出しながら現われた、目は不気味に赤く輝き、思わずなぎさ、のぞみ、うらら、かれん、つぼみ、えりか、あかね、あゆみは、その不気味さに一歩後

退り、りんはこまちの後ろ、くるみはかれんの後ろ、エレンはハミイとキャミーを抱きしめ、みゆきはやよいの、なおはれいかの後ろ、真琴とアン王女は、ヒメルダと一緒にブルーの背後に身を隠した。

「シユウウウウ・・・お前達がプリキュアだなあ？魔界に禍をもたらす光りの者よ！このファレオが、お前達に呪いを与えよう!!」

ファレオは、聞いた者を思わずゾツとさせるように、地の底から聞こえて来るかのようなしわがれ声を発し、一同は思わず声を失った。ファレオの手から、薄汚れた灰色の包帯が宙に舞うと、包帯は見る見るファレオに似たミイラ男となって続々姿を現わした。その数20体、それらが不気味に両腕を突き出しながら、ゆっくり一同に近づいて来る。ゆりはココロポットを手に取り身構えると、

「みんな、行くわよ!」

険しい表情を浮かべたゆり達とは逆に、なぎさは困惑気味に、

「出来れば・・・あんな不気味なのと戦いたく無いんだけどお」

「!!」「ウンウン!!」「!!」

「いいから、さっさと変身しなさいよねえ!」

なぎさの言葉に、りん、エレン、みゆき、なお、真琴は、コクコク頷きながら同意するも、アコに注意され、渋々変身アイテムを手に持った。やよいは、側で怯えているヒ

メルダに気付き、

「神様、ヒメルダさんを今の内に!」

「分かった!ヒメ、戻るよ!!」

「う、うん・・・みんな、頑張つてねえ!」

「任せるしゅ!」

えりかは胸を叩きヒメルダに親指出してドヤ顔浮かべると、ヒメルダは嬉しそうに両手を振つて一同の武運を祈つた。

「デュアルオーロラウエーブ!!」

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」

「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」

「プリキュア!メタモルフオーゼ!!」

「スカイローズ!トランススレイト!!」

「チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!」

「プリキュア!オープンマイハート!!」

「レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!」

「プリキュア!スマイルチャージ!!」

「プリキュア！ラブリック!!」

なぎさ達一同はプリキュアへと変身し、迫り来るミイラの群れに対して身構えた。

「ハアアアア！」

雄叫びを上げながら先陣を切ったのはキュアムーンライト、ムーンライトは、ミイラの動きが鈍いのを瞬時に見抜き、一体一体にパンチやキックを放って離れさせた。直ぐに他のメンバーも各個撃破に当る。

ブラック、ホワイトがマーブルスクリューを放てば、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディが、スパイラルハートとスパイラルスターを放ち、ルージュとサニーはコンビで炎の技を、アクアとビューティもコンビで、サファイアアローとビューティブリザードの合わせ技を、ビートとソード、ピースがトリオを組み、ビートソニックとスパイラルソードに雷を合わせた合体技を、レモネードがプリズムチェーンで、ミューズがシャイニングサークルで動きを封じれば、ベリィ、パイン、リズム、エコーが合体技を放って浄化した。妖精達に向かったミイラには、ルミナスとミント、サンシャインがバリアを張ってミイラからの攻撃を防ぎ、ムーンライト、マリン、ローズが、フォルテウェーブとミルクイローズブリザードを放って浄化する。

「私達も負けてられないね！」

ピーチの合図と共に、ブロッサム、メロディ、ハッピーが加わり、四人が並んで目の

前のミイラの群れに向き合おうと、

「私達も力を合わせましょう!」

ブロッサムと言葉と共に、ピーチはピーチロッド、ブロッサムはブロッサムタクト、メロディはミラクルベルステイエを取りだし、ハッピーは、みんながアイテムを使用している事で、自分もプリンセスキャンドルを使おうか考えたものの、

「プリキュア!ラブサンシャイン……」

「ブロッサムウウ……」

「プリキュア!ミュージック……」

「エエエ!?待ってえええ!ハッピー……」

「フレツシユ!」

「シャワー!」

「ロンド!」

「シャワー!」

「集え!私達の……」

四人の必殺技が合わさり、強大な光りとなって飛んでいく筈が、四人の技は合わさる事なく四方に散り、

「……つ、集わない……」

四人は変顔を浮かべながらその場で固まり、見かねたパッションは、シューティングスターを放っていたドリームに気付き、瞬間移動でドリームの身体を、ピーチ、ブロッサム、メロディ、ハッピーが放った技を、シューティングスターに纏わせた。

「エエエ!?何だか知らないけど凄おおい!」

「「「つ、集ったああああ!!!」」」

「ハア・・・世話が焼けるわねえ」

驚くドリームだったが、眼下にいる四人にピースすると、シューティングスタースペースシャルで次々にミイラを浄化し、四人は再びドヤ顔を浮かべ、パッションは思わず苦笑混じりの溜息を付いた。

プリキュア達は、次々とミイラを浄化し、残るはファレオ一人となった。

「みんな凄いニヤ!」

ハミイは、大喜びで優勢なプリキュア達を見るも、隣に居たキャミーの表情は優れず、(この戦いは直ぐに終わる!けど、ファレオ様が恐ろしいのは、戦いが終わった後の方・・・)

「流星は伝説の戦士・・・だが、全ては終わった!」

ファレオはそう不気味な言葉を発し、その姿を消した・・・

「逃げた!?あたし達の勝利っしゅ!」

ドヤ顔を浮かべたマリンドったが、キャミーは目を光らせると、プリキュア達全員の額に、梵字のような文字が浮かび上がっていた。

(やつぱり……)

「ハミイ、また会いましょう!じゃあ!!」

「エエエ!?!もう行つちやうニヤ?」

キャミーはハミイにそう言い残し、何処かへと姿を消し、ハミイは名残惜しそうに、キャミーが消え去った場所を見続けた……

変身を解いた一同を出迎えた妖精達だったが、魔王は不思議そうに首を傾げ、

「お前達、額に付いてるその文字みたいなのは何かゲ?」

「エツ!?!」

コンパクトを取り出した美希が、慌てて顔を見るも、額に文字など無く、美希はホツと安堵し、魔王は見ると、

「付いて無いじゃない!魔王、変な事言わないでよね!!」

「エツ!?!……ピー助、お前にも見えないカゲかあ?」

「プイイイ!?!」

「ピー助にも見えないカゲかあ……俺の目がおかしいカゲ!?!」

魔王は目をゴシゴシ擦るも、魔王には、やはりなぎさ達全員の額に、梵字のようなも



のが浮かんで見えていた。

再び姿を現わしたブルーは一同を称え、神との出会いはこうして幕を閉じた……  
だが……

暗闇の中で、目を閉じていたファレオは、カッと目を見開くと、

「さあ、時間だ！プリキュアよ、我が呪いの前に朽ち果てるが良い！！ククククク」

不気味な笑い声が辺りに響き渡り、そのファレオを、キャミーはジイと見つめ続けた……

家に帰ったなぎさだったが、風呂から出てピンク色のパジャマに着替え、自分の部屋に戻ろうとした時、急激に意識が遠のいていった……

(アレ!?私……)

突然大きな音を立ててなぎさが倒れ込み、驚いて駆け寄ったなぎさの母理恵、父岳、弟亮太が駆け付け、

「なぎさ、どうしたの!?なぎさっ！」

理恵が声を掛けるも、なぎさはピクリとも動かない、しゃがみこんだ岳が、なぎさの名を呼びながら身体を揺するも、なぎさはグツタリしてピクリともしなかった。横から

理恵が心配そうに覗き込み、なぎさの額に手を乗せた途端、その熱さに思わず手を放し、「お、お父さん! なぎさ、凄い熱よ!! まるで、炎の中に手を入れてるように・・・」

「何だって!?! なぎさ、おいなぎさ、しっかりしろ! なぎさああ!! 亮太! 救急車!!」

「わ、分かった!」

亮太は、慌てて救急車を呼ぶ為に電話を掛け、理恵と岳は、心配そうになぎさの名を呼び続けた。その様子を、なぎさの部屋のドアを少し開けたメツプルが、泣きながら見つめて居て、

(なぎさああ! 一体どうしちゃったメポ・・・)

なぎさが倒れた同時刻、他のプリキュア達も一斉に倒れた事を、この時は誰も気付く事は無かった・・・

そう、地球の神ブルーでさえも・・・

第百一話：呪われたプリキュア!

完

## 第百二話：プリキュアの為に・・・

## 1、悲しみの妖精達

なぎさ達一同は、家族や発見してくれた通行人によつて、それぞれが住む町で、救急車で病院に運ばれて居た。だが、夜ではちゃんとした検査も出来ず、一同はそのまま入院となったが、意識を取り戻す事は無かつた・・・

加音町で、響、奏、エレン、アコの痛ましい姿を見て、嘆くハミイを見たキャミーは、大きな木の上に移動すると、首に掛けられた水晶に念を込めた・・・

(ベレル様、聞こえますかニャー?)

少しして水晶が輝き、水晶の中からキャミーの主であるベレルの声が聞こえてきた。

「キャミーか!?!どうした、変わった事でもあつたか?」

「ハイ!プリキュアは全員・・・ファレオ様の呪いを受け、生死を彷徨つてますニャー!」

「そうか・・・分かつた!キャミー、もう良いぞ!魔界に戻つて来い!!」

「それニャンですけど・・・もう少しこちらに居させて欲しいんですニャー!」

「何!?!それは構わないが、何かあつたのか?」

ベレルには、キャミーの真意が読めなかつた・・・

キャミーは使い魔として優秀で、ベレルはキャミーを気に入り、キャミーもそんなベレルに応えようと一生懸命使え、ベレルの側を離れる事も洩る程だった。そんなキャミーが自らの意思で、もう少し人間界に居たいという願いを、ベレルが聞いて困惑していると、キャミーは心の中で迷いながらも、ハミイの悲しげな顔が浮かんだ途端、ベレルに問い掛けた。

「ベレル様！あのう・・・つかぬ事を伺いますニヤ！ファレオ様の呪いって、解けるんですかニヤー？」

「何?!・・・フフ、キャミーよ、そちらの世界で友達でも出来たか？」

ベレルはキャミーの言葉を聞き、キャミーの真意に気付くと思わず笑みを浮かべた。キャミーは動揺し、

「い、いえ、そのような事は・・・」

「フフフ！まあ良い、教えてやろう！ファレオの呪いは強力でなあ、例えファレオを倒せたとしても、呪いが解ける事は無い!!」

「ニヤ、ニヤンとおお!？」

「逆に、それは呪いを解く事を、自ら放棄したに等しい・・・何故なら、ファレオの呪いを解くには・・・ファレオが自らの意思で、呪いを解いた時に限る！あ奴も我が配下の戦士、自ら認めた者なら、例え呪いを掛けた相手でも解除するであろうが、今度はどう

であろうなあ!？」

「・・・・・・・・」

キヤミーには、返す言葉が浮かばなかった・・・

「キヤミー、気が済むまで人間界に居るが良い!もし他の者に問い詰められても、わしが許可したと伝えろ!!」

「ベレル様・・・ありがとうございますニヤー!」

キヤミーは心の底からベレルに感謝したものの、ベレルから聞いたこの事を、ハミイに教えるべきかどうか、心の中で迷って居た・・・

翌日・・・

なぎさの母理恵、ほのかの祖母さなえ、ひかりの保護者アカネ、咲の母沙織、舞の母可南子、のぞみの母恵美、りんの母和代、うららの父ミッシェルと祖父平蔵、こまちの母、かれんの執事坂本、ラブの母あゆみ、美希の母レミ、祈里の母尚子、つぼみの母みずき、えりかの母さくら、いつきの母つばき、ゆりの母春菜、響の父団、奏の母美空、アコの祖父音吉、みゆきの母育代、あかねの母政子、やよいの母千春、なおの母とも子、れいかの母静子、あゆみの母、そしてアン王女が、皆心配そうにそれぞれが入院している病院で、無事を祈り続けて居た・・・

だが、検査をしたそれぞれの病院からの検査結果では、特に異常は見当たらず、何故このような高熱が出るか原因不明で、もしもの時も覚悟をして置いて欲しい事を、家族達は告げられて居た・・・

魔王はその様子を、それぞれの病院に分身を飛ばして状況を確認すると、妖精達に集合を掛けた。悲しみの中、ナッツハウスに妖精達が背揃いして居た・・・

そのナッツハウスでは、意識を失った事で、くるみの姿を保てなくなっていたミルクが、高熱で寝込んで居た。病院に連れて行つて上げたくても、妖精姿では、他の一同と同様の病院にも、動物病院にも連れて行く事が出来ず、途方に暮れたシロップは、ココとナッツにこの現状を知らせた。二人は大いに驚き、シロップを呼び寄せると、共にナッツハウスにやつて来て、意識が戻らず苦しむミルクの姿を見て悲しみの表情を浮かべた。キャンディからの報告を聞き、ポップも慌てて駆け付けて、皆沈痛な表情を浮かべて居た。ポップは降りてきたココとナッツに話し掛け、

「ミルク殿の様態はどうでござるか？」

「ダメココ・・・頭を冷やしても、直ぐにタオルが乾いてしまつて・・・」

「ミルクの酷い熱を見る限り・・・これはただ事では無いナツ！」

「一体、みんなに何があつたココ!？」

ココとナッツの問い掛けに、原因が分からない妖精達にも、どうすれば一同を救えるのか、それが分からなかった・・・

「分からないラピ！突然暈が倒れて・・・」

沈黙する室内の中、ココとナッツが一同に訪ねると、憂いの表情を浮かべたフラツピにも状況が分からず、首を横に振るだけだった。

「まさか、なぎさだけじゃなく、ほのかやひかり、みんなまで同じような症状になってた何て・・・思わなかったメボ」

そう言うと、メツプルは目から零れ落ちてくる涙を拭った。魔王は一同を見渡すと、「みんな同じ症状だとすると、考えられるのは一つカゲ！あの時、俺は確かにみゆき達の額に、何かの文字みたいな物が浮かび上がって見えたカゲ！他の奴らには見えてなかったから、あまり気にはしなかったカゲが、あれが関係しているのは、間違い無いカゲ!!」タルトは思わずゴクリと唾を飲み込み、身を乗り出して魔王に確認するように、「じゃあ、あのミイラが、プリキュアはん達を、あない惨い目に遭わせたつちゆう事かあ？」

「間違い無いカゲ！」

魔王はそう断言した・・・

原因が少し分かった気がした妖精達、メツプルも涙を拭って魔王を見つめ、

「じゃあ、あのミイラを倒せば、なぎさ達は元に戻るメポ?」

魔王の言葉を聞きざわめく妖精達、魔王の考えが正しければ、あのミイラを倒せば、みんなも元気を取り戻すのではないかと、少し希望を見いだした。

その時・・・

「そんな事をしたら・・・プリキュア達は本当にあの世行きニャー!」

希望を見いだした妖精達を、打ち砕くような声が、ナッツハウスの外から聞こえて来た。ココが慌ててペランダの窓を開けると、そこには茶色い猫がジイと中を見ていた。ハミイは嬉しそうに目を輝かせると、

「キャミー! また会ったニャ!!」

キャミーは無言で頷くと、ナッツハウスの中へと入って来た。ざわめく妖精達に、ハミイは自分の友達だと紹介するも、魔王は険しい表情でキャミーを見つめ、

「お前、さつき妙な事言ってたカゲなあ? 何であのミイラを倒したら、プリキュア達があの世行きだって言ったカゲ?」

「何か知ってるのか? 知ってるなら教えるよ!」

グレルも身を乗り出して、キャミーに乱暴な口調で問い詰めると、ハミイはハラハラしながら両者の間に入り、一同を宥めようとするも、

「知ってて当然ニャー! キャミーは、魔界の使い魔ニャンだからニャー!!」



「エエエエ!？」

キャミーは、自ら魔界の者だと告げた事で、妖精達は驚き、一層険しい表情を浮かべた。ハミイは更にオロオロし、必至にキャミーを庇い、

「キャミーは、昨日も忠告してくれたニャー!あのミイラに気を付けろって言うてくれたニャー!!」

「ハミイ、良いよ!ファレオ様の仲間なのは事実だし・・・」

キャミーはそう言うと、ジイと一同を凝視した。自分がファレオの仲間だと伝えた事で、一同からどのような扱いを受けるかは分からなかったが、全てを明かした上で、昨日ベレルから聞いた事を伝えようとキャミーは考えて居た。ココは徐にキャミーに近付くと、その場でキャミーに頭を下げ、妖精達とキャミーを驚愕させた。

「頼むココ!何か知ってる事があつたら、ココ達に教えて欲しいココ!!のぞみ達みんなを・・・助けて上げてココ!!」

ココがキャミーに頭を下げた事で、シーンと静まりかえる室内、キャミーは少しの沈黙の後語りだし、

「プリキュア達は・・・ファレオ様の呪いに掛かつてるニャー!」

「呪い!?!ひよつとして、あいつらの額に浮かんだ文字みたいな物カゲか?」

「お前・・・あれが見えるニャー!?!あれは、魔界の者にはしか見えなくて聞いてたけど

ニヤー？その通りニヤー！あれが、フアレオ様が掛けた呪いの証、あれが消えれば、プリキュア達に掛かった呪いは解けるのニヤー!!」

キャミーは、魔王を見ながら首を傾げた。あれが見えたと言う事は、魔王は魔界と何か関係があるのではないかと思つたものの、この機会に知つている事を妖精達に知らせた。一同は、キャミーから微かな希望を与える言葉を聞き、表情がパツと明るくなるも、キャミーは尚も言葉を続け、

「でも、フアレオ様を倒しても、呪いは決して消えないニヤー！呪いを解くには・・・フアレオ様が自分の意思で、呪いを解く以外方法は無いのニヤー!!」

キャミーの発した言葉は、妖精達を呆然とさせた。フアレオが自らの意思で、呪いを解く事などあるのかと思うと、微かな希望をも打ち砕かれたかのようにも思えて来た。だが、此処で悲しみに暮れていても、何の進展も見えなかつた。ハミイはキャミーに話し掛け、

「キャミー、ミイラが何所に居るか知つてるかニヤ？」

「プリキュア達に呪いを掛けた時は、昨日出合つた辺りに居たニヤー！でも、あれから忽然と姿を消したニヤー・・・キャミーも手を貸すから、まずはフアレオ様を捜し出す事が先決ニヤー!!」

妖精達は、キャミーに頭を下げた・・・

キャミーは、魔界の使い魔でありながら、自分達に協力してくれると約束してくれたのだから・・・

ナッツは一同に話し掛け、

「みんなで手分けして、そのミイラを捜すナッツ！」

「でも、わいらが外を出歩く訳にも行かんやろう？」

妖精である自分達が、気ままに外を出歩くのは不味いとタルトが言うと、魔王は少し目を吊り上げ、

「それならあいつに手伝わせるカゲ！・・・おい、神！聞こえてるなら返事するカゲ！！みゆき達がああなったのは、お前にも責任があるカゲエ！！」

「ま、魔王、仮にも神様に何て事言うでさう？」

コフレは慌てて魔王を窘めるも、魔王は険しい表情を崩さず、

「あいつも神なら、責任を取らせるのは当然カゲ！！さつきと出てくるカゲエエ！！」

目を吊り上げた魔王は、地球の神ブルーを呼ぶと、ナッツハウスに突然姿見鏡が現われ、その中から憂いの表情を浮かべたブルーが現われた。当初は、一同がそんな状況に陥っているとは知らなかったブルーも、現状を知り、憂いの表情を浮かべて居た。

「済まない、僕があの場合にみんなを集めて貰った事が、逆に仇となってしまうたようだ・・・」

「そんな事はどうでも良いカゲ！お前、あのミイラが何所に居るか分からないカゲか？」  
ブルーは姿見鏡を使い、悪しき気配を探るも、ブルーにはファレオの気配を感知する事は出来なかった。だが、ブルーは別な悪しき存在の気配を感じハツとすると、

「みんな、この場所に、あの時のミイラとは別な、悪しき存在の気配を感じる！」

「エエエエエ!?!」

妖精達とブルーは、慌ててナッツハウスの外に飛び出し辺りを伺うと、ブルーは上空をキツと見つめた。そこには、一人の人物が浮かんで居て、その口元はニヤリとしていた。

「ウフフフ、みなさんご機嫌いかがですか？」

妖精達は、突然出現したジョーカーに驚愕した！

## 2、危機

最悪のタイミングで現われたジョーカーに、妖精達は顔色を失った。キャミーはハミイに話し掛け、

「あいつは何だニヤァ?」

「あれは、バッドエンド王国のジョーカーって言って、とっても悪い奴なのニヤァ！」

「フウウウン・・・」

キャミーはジョーカーをジイと見つめるも、確かに何を考えて居るのか読めない、不気味さを感じていた。

(何処かシャックス様に似てるニヤァ・・・)

ポップは険しい表情を浮かべた。何故ジョーカーが、このタイミングでナッツハウスに居るのか分からず、

「お、お主は、ジョーカー!? な、何故この場所に?」

「ウフフフ、バッドエンドプリキュアの皆さんが、遊び歩いて仕事をしてくれませんかからねえ・・・ホトホト困ってしまいましたねえ! そこで、私自ら世界を不幸にしようと、こつちの世界に来た時、あなた方の嘆き悲しむバッドな気配を感じましたねえ・・・お陰でホラ! あなた方が発したバッドエナジーが、こうして集まりましたよ! ウフフフフ」

ジョーカーは、一同を小馬鹿にしたように、黒の書を見せ付けながら笑った!

一方、仕事をしないとジョーカーに言われたバッドエンドプリキュア達は・・・

「あのおう、皆様方はひよつとしたらプリキュアでは?」

「エツ!? そうだけど、あなた、誰?!」

「私は、この国の王女で、デザート王国のチョコラと申します! プリキュアの皆さんにはお世話になってます!! よろしければ、私がこの国をご案内致します!!」

「[[[[ハア!?]]]]」

「美味しいデザートも一杯ありますから!」

「[[[[本当!?]]]]」

「あなた達ねえ・・・」

食べ物に釣られるバッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチを見たバッドエンドビューティは、呆れたように溜息を付いた・・・

バッドエンドプリキュア達は、プリキュア達の身に何が起こったのかも知らず、デザート王国を観光して居た・・・

口惜しげな表情を浮かべる妖精達を、ジョーカーは更に挑発するように、

「そうですか、プリキュア達は、原因不明の病気で生死を彷徨って居るのですかあ!?!?!:アアアハハハハ!これは傑作!!」

ジョーカーは、腹を押さえて笑い出し、妖精達とブルーが一層険しい表情を浮かべた。ジョーカーは目を怪しく輝かせると、

「ウフフフ、これは好機ですねえ・・・邪魔なプリキュアを、一掃する絶好のチャンスじゃないですか!」

「そんな事はさせないココ!」

「お前の好きにはさせないカゲエエ！」

「ピイイ!!」

ココはジョーカーを睨み付けながら叫び、魔王とピーちゃんがジョーカーに向かって行くも、ジョーカーは紫玉を取りだし、側にあつた大木をアカンベエに変えた。

「オツと、そう慌てないで下さい！私は、あなた方と戦つて居る暇はありませんよ！何せ私・・・これからプリキュア達を、全員殺して差し上げなきゃいけないんですから!! まあ、呪いとやらで直に全滅するようですが、それでは今まで彼女達に苦杯を味合わされた、私の気が済みませんしねえ・・・あなた方は、アカンベエと戦つてらっしゃい!!」

ジョーカーはそう言い残し、トランプの舞いと共にその姿を消した。

「みんな、みゆき達の下に向かうカゲエ！こいつは、俺とピー助で何とかするカゲ!!」

魔王は叫び、ピーちゃんと共に大木アカンベエへと向かつて行つた。ココは拳を握りながら、ある五人の少女達の事を思いだし、

「こんな時、ダークプリキュア5が居てくれたら・・・」

「ダークプリキュア5が、今何所に居るか分からないナツ・・・」

「そーや！フラワーはんはどうや?」

ナツは、ダークプリキュア5との連絡手段が無い事に落ち込むも、タルトは閃き、フラワー事薫子の事を話すも、シプレ、コフレ、ポプリは、悲しげに首を振り、

「ダメですっ！キュアフラワーは、今入院していて・・・」

「でも、コツペ様なら・・・僕達、コツペ様に知らせるですう！」

シプレ、コフレ、ポプリが、コツペに知らせに飛び立とうとするのを、ブルーは慌てて止め、

「僕が送ろう！この鏡を使って!!」

ブルーの手助けを受け、シプレ、コフレ、ポプリの三人は、慌てて鏡の中に突入し、コツペに知らせに向かった。タルトもポンと手を叩き、

「せや！シフォン、わいらも兄弟達に知らせに行くでえ!!」

「プリー！」

シフォンは頷くと、タルトと共に何処かに瞬間移動して消え去った。ナッツは、ココとシロップに話し掛け、

「ココ、シロップと一緒に、のぞみ達の所に行くナツ！ミルクはナッツが守るナツ!!」

「分かったロプ！」

「ナッツ、ミルクを頼むココ！」

シロップは頷くと巨大化し、ココを背に乗せて飛び立った。ブルーは、再び姿見鏡を出現させると、

「みんな、鏡でプリキュア達の所に送る！順番に鏡の中に飛び込んで!!」



ブルーはそう叫び、始めにキャンデイとポップ、ダビィが飛び込み、次にグレルとエンエンが、その次にハミィとフェアリートーン、そしてキャミーが、その次にフラツピ、チヨツピ、フープ、ムーブが、最後にメツプル、ミツプル、ポルン、ルルンが鏡の中へと飛び込んだ。

「此処を頼むよ！僕は、あのジョーカーという者の気配を追う!!」

ブルーは、この場に残ったナツツ、魔王とピーちゃんに後を託し、ジョーカーの後を追った……

加音町……

加音町に戻って来たハミィは、アコの見舞いに来ていた音吉と、病院の敷地内で会い、涙を流して居た。

「音吉さん、みんなの様子はどうニヤ!?」

「ウゝム……最悪じゃ！アコの体力では……明日の朝まで持つかどうか」  
「ニヤ、ニヤンですとおお!?!」

「他の三人も、明日の夜まで体力が持たないとの事じゃ……」

ハミィは呆然とし、エレン、響、奏、アコの顔が目には浮かんでくると、ポロポロ涙が零れて来た。

「音吉さん、どうしたら良いニヤ!? 此処に、直にバッドエンド王国が来るニヤ!」

「何じやと!? ムウウ・・・ハミイの言う取りだとすると、わし一人で持ち堪えられるかどうか・・・」

髭を触りながら思案する音吉だったが、ハミイが言った通り、悪しき気配を周囲に撒き散らしながらジョーカーが現われ、救急車をアカンベエに変えると、直ぐに何処かへと去って行つた。音吉は病院を救う為、アカンベエに対し、音盤のようなバリアを出現させ、アカンベエからの攻撃に耐えていた。ハミイは涙を拭いながら、メイジャーランドのアフロデイトに通信を送つた。何の用かと思つたアフロデイトだったが、泣いているハミイを見ると驚き、優しくハミイに話し掛け、

「ハミイ! 泣いているのですか!? 一体どうしたのです?」

「どうした、アフロデイト?」

「あなた、ハミイが・・・」

「アフロデイト様! メフィスト様! 実は・・・」

ハミイは泣きながら、今の窮地をアフロデイトとメフィストに伝えると、二人は当初こそ呆然としたものの、直ぐにメフィストは、バスドラ、バリトン、ファルセットの三銃士を呼んだ。三銃士はメフィストの前にやって来ると片膝を付きながら畏まり、バスドラが代表してメフィストに話し掛け、

「お呼びですか、メフィスト様？」

「バスドラ、バリトン、ファルセット、三人共わしに続けええ！アコに仇なす痴れ者を……成敗してくれる!!」

「「ハッ！」」

「あなた、私も参ります！ハミイ、私達が向かうまで、何とか持ち堪えて下さい!!」

ハミイは涙を拭いながらコクリと頷き、音吉に知らせに向かった。その様子を、使い魔のキャミーは、沈痛な表情を浮かべながら、少し離れて眺めて居た。

### 3、助っ人達

ジョーカーは、プリキュア達が入院している病院に向け、アカンベエ達を差し向けた。だが、意識を失って入院している一同には、為す術は無かった……

「ウフフフ！プリキュアが生死を彷徨っている今、最早プリキュアを倒すなど、赤子の手を捻るようなもの……精々苦しみ悶える様を眺めさせてもらいますよ!!」

ジョーカーは、ナッツハウス、加音町の病院に続き、四つ葉町、希望ヶ花、横浜みなとみらい、海原市夕風、なぎさ、ほのか、ひかりが入院する三カ所の病院にアカンベエを出現させ、そして、七色ヶ丘へと現われた。ダビイから報告を受けたアン王女は、髪を纏めてポニーテイルにすると、病院前でポップと共にジョーカーと対峙した。

「デイトー！いえ、ジョーカー！あなたの思い通りにはさせません!!」

「拙者達が、みゆき殿達を守るでござる!」

ジョーカーは、両手を広げてやれやれといったジェスチャーをすると、

「おやおや、あなた方に何が出来るのです?出でよ!アカンベエ!!」

ジョーカーは、松葉杖をアカンベエに変え、お手並み拝見とばかり、口元をニヤリとさせながら空中から眺めて居た。

(守らなければ、ソードを!プリキュアの皆さんを!!)

アン王女は、キツとアカンベエを睨み付けた・・・

その心に、燃えるような闘志が宿った!

トランプ王国・・・

王の間に居た国王の下に、一人の兵士が慌ててやって来ると、

「国王様、た、大変です!ミラクルドラゴングレイブが・・・」

「ミラクルドラゴングレイブがどうした!?!」

兵士の尋常では無い様子に、国王は慌てて椅子から立ち上がると、兵士と共にミラクルドラゴングレイブが祭られている祭壇へと向かった。祭壇に付いた国王は、光輝くミラクルドラゴングレイブを見て驚愕し、

「ミラクルドラゴングレイブが光輝いて……これは、何の前触れなのだ!!」

国王は、その名の通り光りの槍と呼ばれるミラクルドラゴングレイブが輝く姿を見て呆然としていた……

バッドエンド王国……

嘗て、トランプ王国からジョーカーが盗み出した王家の秘宝、キュアマジシャンが所持していた、表面にAという文字が付いた、白に赤のラインが入った小箱が置かれていた。バッドエナジーによって、光の力を封印された筈の小箱が、今再び光輝きだしていた!

タルトとシフォンは、ウエスターとサウラーに助っ人を頼むべく、ラビリンスを訪れたものの、あいにく二人は留守だった。タルトは口をアングリ開けながらシヨックを受け、

「兄弟! 何所行つたんやああ!! プリキュアはん達が大ピンチや言うのにいい……」

ラビリンスの中を走り回るも、二人から返事が返ってくる事は無かった……

「兄弟、何所行つてもうたんやああ……しやあない! シフォン、ワイらだけでプリキュアはん達を守るでええ!!」

「プリー！」

タルトは、両頬を叩き気合いを入れると、シフォンと共に、ラブ達が入院する病院へと向かった！

希望ヶ花にある総合病院では、ジョーカーが出現させた車椅子アカンベエが、病院を破壊すべく、両手で車輪を回しながら、突進してくるのを、ポプリがバリアを張って懸命に堪えていた。

「ポプリ！頑張るですっ！」

「フアイトですう！」

シプレとコフレもポプリの身体を支えながら、懸命に耐えていたものの、徐々に押し始められるも、三人は顔を真っ赤にしながらも耐え続けた。だが、バリアに罅が入り、最早これまでかと思われた時、

「ゴホツ・・・ポプリ、よく耐えてくれたわね！コッペ!!」

「「キュアフラワー!!!」」

背後から声を掛けたのは、この病院に入院していた薫子、まだ体調は万全では無いものの、病院の正面玄関まで出てくると、薫子を支えていた人間姿のコッペが、花びらの舞と共にアカンベエの前に移動し、回し蹴りでアカンベエを蹴り飛ばした。

「「コツペ様ああ!!!」」

三人は、頼もしいコツペに大声援を送り続けた。

ナッツハウス・・・

アカンベエと戦う魔王とピーちゃん、それを見守るナッツの側に、一人の妖精が姿を現わした。ナッツは驚き、側で頭を下げる妖精に話し掛けると、

「ユメタ!? どうして此処に?」

「ナッツ先生、お久しぶりです! 実は・・・夢の世界に変な人が現われて、プリキュアさん達に追い出して貰えないかと思って・・・」

「変な人!? 一体どんな奴ナツ?」

ナッツに聞かれたユメタは、思い出すのも恐ろしげに身震いし、

「うん! 実は、全身を包帯で覆った・・・」

ユメタの言葉を聞いた途端、ナッツの目は輝いた。ナッツは慌てて魔王とピーちゃんの名を叫ぶと、二人はアカンベエから距離を取り、ナッツとユメタの側へとやって来た。

「お前はユメタ!? どうしてここに居るカゲ?」

「魔王、それよりミイラの居る場所が分かったナツ!」

「そ、それは本当カゲかあ?」

「ナツ！ユメタが知らせに来てくれたナツ!!ミイラは・・・夢の世界に居るナツ!!」

ミイラが夢の世界に居ると聞き、魔王は自分達にも、神であるブルーにも気配が分からない理由がようやく分かった。

「夢の世界!だから気配を感じられなかったカゲなあ・・・ピー助、時間があまり無いカゲ!此処をお前に任せて良いカゲか?俺はユメタを連れ夢の世界に向かうカゲ!!」

「ピイイイイ!」

「任せたカゲエエ!」

魔王は、ユメタと共に夢の世界へと向かおうとしたものの、

(夢の世界・・・だったら、もしかしたらプリキュアを!?)

「ユメタ、お前は先に戻ってマアムに伝えて欲しい事があるカゲ!」

「エツ!?お母さんに?」

「俺はこれから、ある人物達を迎えに行くカゲ!だから・・・」

魔王はユメタに何かを授け、ユメタはコクリと頷いて夢の世界へと帰って行った。魔王はそれを見届けると、数十体の分身を作り出し、

「お前達、頼んだカゲ!夢の世界に連れて来るカゲエエ!!」

魔王の命を受けた分身達は、影と同化しその姿を消した。魔王は空を見上げながら、  
「おい、神!俺に考えがあるカゲ!!力を貸すカゲ!!」



魔王は再びブルーを呼ぶと、何かの考えを伝え、ブルーが出現させた鏡の中へと姿を消した。

加音町でアカンベエと対峙する音吉だったが、アコを心配し、一睡もしていない身体では、アカンベエの攻撃を防ぎきる事は出来ず吹き飛ばされた。だが、その身体をバスドラが受け止め、アカンベエの右タイヤをバリトンが、左タイヤをファルセットが、そして上空からアカンベエの赤く点灯する頭目掛け、メフィストが切りつけ吹き飛ばした。

「大丈夫ですか、お父様？」

「オオ！アフロデイト、来てくれたのか？」

「当たり前です！アコは、私達の大事な娘ですよ・・・あなた、私はアコの下に向かいます!!」

「ウム！この痴れ者を成敗した後私も向かう!!」

メフィストは、剣先をアカンベエに向け険しい視線を向けるも、背後からハミイの声  
が聞こえ、

「アフロデイト様！メフィスト様！」

「ハミイか、もう安心だぞ！」

「ハイニャー!」

メフィストがハミイを見てコクリと頷くと、ハミイも嬉しそうに頷き返した。ハミイが笑顔を取り戻したのを見て、思わずキャミーもホツと安堵した。

のぞみ達が入院する病院にも、注射器アカンベエが現われ、シロップと、シロップの背に乗ったココが、アカンベエを攪乱していたが、彼らでは、アカンベエを攪乱するぐらいしか出来なかった。それでも時間を稼げば、魔王とピーちゃんを駆け付けてくれると信じ、アカンベエの動きを封じていると、

「アレエ!? お前達、何してんのお?」

突然眼下から見知った声が聞こえ、ココを乗せたシロップが急降下すると、そこには作業着姿のブンビーが居た。ブンビーはアカンベエを見て驚愕し、

「な、何だあ、ありや!」

「あれは、アカンベエって言うココ!ブンビー、力を貸して欲しいココ!!」

「のぞみ達プリキュアが、この前の戦いで、みんなこの病院に入院しちゃってるロプ…」

「プリキュアが!?!で、私に強力しろと?」

「頼むココ!ココ達だけじゃ、この病院を救えないココ!」

「お願いロプ!力を貸して欲しいロプ!!」

ココとシロップに頼まれたブンビーだったが、その表情は冴えなかった。心の中で計算を始めたブンビーは、

(ウーン、あんな怪物と戦っても、私には一銭の得にはならないしねえ．．．とはいえ、プリキユア達には、四葉財閥を紹介して貰った恩もあるしなあ．．．)

腕組みしたブンビー目掛け、注射器アカンベエが突進してきて、慌ててブンビーが躲すと、ブンビーが居た所に針で穴が空いていた。ブンビーは表情を険しくすると、瞬時に蜂に似た怪人状態に変化し、

「やれやれ、私に手を出した事．．．後悔しても遅いよおお!!」

ブンビーは宙に浮くと、腕を砲身状態に変化させ、アカンベエ目掛け細い針を連射して威嚇した。その威力にアカンベエは地上に墜落し、ココとシロップは歓声を上げた。

ラビリンスでウエスターとサウラーに会えなかったタルトとシフォン、二人は、迫り来る薬箱アカンベエが放つ、薬攻撃に逃げ惑って居た。角に追いやられた二人に、アカンベエがお腹から、薬爆弾で止めの一撃を放とうとした時、木の上からアカンベエ目掛け、何者かが跳び蹴りを放つと、アカンベエはバランスを崩して転倒した。一体何が起こったのかと、困惑の表情を浮かべるタルトとシフォンの前に、サンガラスをした人物が振り返り、

「兄弟！怪我は無いか？」

「カオルはん！」

タルトとシフォンを救ったのはカオル、タルトは目をウルウルさせるも、起き上がったアカンベエが、再び腹から薬爆弾を放とうとし、

「カオルはん！危ない!!」

「大丈夫さ、兄弟！何故なら・・・」

「そう、何故なら、俺達ドーナツブラザーズの絆を、打ち砕ける者など居ないからなあ！」  
「だから、僕を勝手にその変な仲間に加えないでくれるかなあ？」

「ホホエミーナ!!」

二体のホホエミーナの体当たりを受け、アカンベエが再び転倒した。その眼前に降り立ったのは、ウエスターとサウラー、タルトは目を輝かせ、

「兄弟！何所行つてたんやあ？」

「いやあ、兄弟の店に、サウラーとドーナツを買いに来ていたんだが・・・」

「そこで、イース達が原因不明の病気で入院していると聞いてね」

「兄弟と三人でお見舞いに来たら、ちょうどこの場面に出くわしたつて訳だ！」

ウエスターとサウラーは、カオルにタルトとシフォンを任せ、アカンベエと向かい合った。

魔王は、七色ヶ丘の総合病院で、みゆきの側に付きそう育代の側に近付き、育代の頭に影を伸ばすと、育代は急な睡魔に襲われて眠りに付いた。魔王の分身達も同じ行為を行い、魔王は、理恵、文、アカネ、沙織、可南子、恵美、和代、こまちの母、かれんの母、あゆみ、レミ、尚子、みずき、さくら、つばき、春菜、まりあ、美空、アフロディテ、育代、政子、千春、とも子、静子、あゆみの母に一齐に話し掛け、

「お前達の娘は、夢の世界に居るミイラに呪われてるカゲ！お前達の手で、娘達を救い出すカゲエエ!!さあ、その鏡の中に手を差し出すカゲ!!!」

魔王の事を知っているあゆみ、レミ、尚子、アフロディテ、育代以外の母親達は、何の事だか理解出来なかったが、娘を救い出すという言葉に、無意識の内に鏡へと手を伸ばすと、母親達の身体は光に包まれた・・・

夢の世界で静観していたファレオの目前が突然光輝き、ファレオは思わず目が眩んだ。眩しそうに腕で光を避けながら、

「な、何だ!?!この光は一体?」

動揺するファレオの前に、数十人の人影が姿を現わした。ファレオはその容姿を見て呆然とし、

「バ、バカな!? お前達は我が呪いを受け・・・」

そう言いかけたファレオは思わず沈黙した。衣装だけ見れば、確かに昨日見たプリキュアの物だった。だが顔を見て見れば、明らかに違っていた。

「プリキュアでは無いのか!? 何者だ、貴様ら?」

「カゲカゲカゲ! ママキュアオールスターズ・・・見参カゲエエ!!」

「ママキュアオールスターズだと!」

魔王の背後では、ブラックの衣装を着た理恵、ホワイトの衣装を着た文、ルミナスの衣装を着たアカネを筆頭に、それぞれの娘達が着ているプリキュアの衣装に身を包んだ母親達が勢揃いした!!

ジョーカーが見守る中、松葉杖アカンベエに苦戦するアン王女とポップ、

(せめて、せめて、光の槍、ミラクルドラゴングレイブがあれば・・・キュアマジシャン! わたくしに、わたくしに力を貸してえええ!!)

アン王女の心の叫びと共に、空の彼方から何かが高速で飛んでくると、アン王女の前で地面に突き刺さった。それは目映いばかりの輝きを放ち、アン王女がそれを引き抜くと、見て居たジョーカーの顔から冷汗が流れ出し、

「あ、あれは!?! ミラクルドラゴングレイブ?・・・ン!?!」

更にジョーカーは、アン王女目掛け飛んでくる物体を見た！

「バ、バカな!? あれはトランプ王国から奪った……」

ジョーカーは再び困惑した……

何故なら、ジョーカーが奪ったトランプ王国の秘宝、Aと書かれた小箱が、ミラクルドラゴングレイブ同様、光輝いてアン王女の手に移ったのだから……

「これは一体!? 何が起こって居るのです?」

アン王女は、突然飛んできた二つのアイテムに困惑していると、アン王女の心に何者かが語り出した。アン王女は、心の中に響く声と会話するかのように目を閉じた……  
（我が血を受け継ぐ者よ! あなたの悲しみは、私の悲しみ……あなたに私の力を授けます!!）

（力を!? ひよつとして、あなた様は……）

（わたくしはキュアマジシャン!）

声の主はキュアマジシャンを名乗り、アン王女は驚愕した。

デザート王国……

美味しそうにデザートを頬張っていたバッドエンドプリキュア達だったが、胸のクリスタルから温かい光が沸き起り、五色の光を発しながら何処かに飛び去った。

「な、何、今の!？」

動揺するバッドエンドハッピーは、光が飛び去った方角を呆然と見つめた・・・

飛んできた五色の光が、アン王女を包み込んだ時、

(今こそ目覚めの時です!この危機を打ち破る、エースとして目覚めなさい!!そして、こう叫ぶのです・・・)

アン王女はカッと目を開くと、心の声の言う通りにAと書かれた小箱を手を持った。

「プリキュア!ドレスアアアップ!!」

アン王女の身体を炎が覆い、その姿を、ポップも、ジョーカーも呆然と見つめて居た。髪は腰に届くほどの赤髪のロングヘアで、左側に羽飾りを付けた黄金のカチューシャを付け、黄金の楕円形の耳飾りを付けていた。赤と白を基調としたコスチュームで、スカートの内側は、薄い赤色で、腰には薄い赤のリボンが付いて居た。そして、その顔には口紅とアイシャドーも塗られ、他のプリキュア達より大人びた印象を与えたが、その姿は、正にプリキュアだった!!

「愛の切り札・・・キュアエース!!」

今、最強の助っ人が現われた・・・

第一百二話：プリキュアの為に・・・



完

## 第三百話：アンジュくキュアエースく

1、困惑！ママキュアオールスターズ

プリキュア達に呪いを掛けたファレオの前に、魔王に率いられたママキュアオールスターズが勢揃いして居た。ファレオと対峙した魔王は、

「カゲカゲカゲ、夢の世界に居たのが間違いだったカゲなあ！此処なら．．．みんなのママさん達を、プリキュアにする事も可能カゲ！」

「そう言う事か．．．だが、あいつらは何しに来たのだ？」

「カゲ!？」

ファレオが背後を指さし、釣られた魔王が背後を振り向くと、ママキュアオールスターズ達は、それぞれ見知った顔と雑談を始めて居た．．．

「まあ、雪城さんのお母様もそんな格好を!？」

「エエ、気付いたらこんな恥ずかしい格好を．．．」

「こんなミニスカート何て、主人に見られたら何て言われるか．．．」

「お二人はまだマシですよ！私何かこんな姿ですよ！こんなロリ衣装何て．．．何の罰ゲームよ!!」

理恵と文、アカネが、着ている衣装の恥ずかしさを語り合つて居れば、沙織と可南子は、

「確か、咲の病室に居た筈何ですけど……」

「ええ、私も舞の病室に……」

「これは、夢……ですよねえ？」

「こんな衣装着てますしねえ？」

沙織と可南子は、これは夢だと語り合い、恵美と和代は、互いの衣装を指差しながら、

「和ちゃん、その衣装!？」

「そういう恵美ちゃんも……変ねえ!?!私達、どうしちゃったのかしら?！」

「それに……此処は何所かしらあ!?!」

恵美と和代は、不思議そうに首を傾げた。普段着るドレスと違い、アクアの衣装を着

たかれんの母も動揺し、

「これは一体!?!あそこに居るのは、前に夢で見た蝙蝠みたいな……という事は、これも夢なのかしら?！」

自分の衣装を、複雑な表情を浮かべながら見つめ呆然としていた。こまちの母は、髪形こそこまちやまどかに似て緑髪をしていたが、体型は少しぽっちゃりしていて、

「あらあ!?!私、どうしてこんな姿をしているのかしら?！」

首を傾げながらも、あまり動揺しているようにも見えず、ちよつとホンワカしている雰囲気は、こまちに似て居た。つぼみの母みずきとえりかの母さくら、いつきの母つきも、噂には聞いていたプリキュアの衣装を、何故自分達が着ているのか理解出来ず困惑して居た。

「私、どうしてこんな格好を……」

「本当に……こんな衣装、私達には似合わないわよねえ？」

「お二人はまだ良いですわ！私の衣装は、臍まで出て居て……こんな所を父や子供達に見られたらと思つたら……」

つばきは頬を染めながら、恥ずかしそうに腕でお臍を隠した。ゆりの母春菜も困惑して居たが、

（ゆりちゃんの病室に居た筈なのに、私、一体!?……あら!?あの人?）

春菜は、金髪の長身の女性が、自分の事をジッと凝視している事に気付き、首を傾げるも、金髪の女性が近付いて来ると、

「ひよつとして……お姉様!?春菜お姉様では?」

「エツ!?……ひよつとして、アフロ……さん?」

「はい!お姉様、ご無沙汰しております!!」

「まあ!」

アフロデイトに気付いた春菜も、嬉しそうな表情で互いの手を取って再会を喜び合った。二人の出会いはいは、二十数年前に遡る・・・

アフロデイトは、好奇心多い十代前半に、人間世界にお忍びでやって来た事があった。だが、当時から背の高かったアフロデイトは、同年代のグレた少女達に目を付けられて絡まれた事があった。父である音吉から、帝王学を学んでいたアフロデイトは、無闇に人を傷付ける事をよしとせず、正論で少女達を窘めようとしたものの、返って少女達の反感を買い、難儀していた時、当時高校生だった春菜に助けられた事があった。アフロデイトは一人っ子だった為、春菜に憧れを持ちお姉様と呼んだ。春菜もアフロデイトを妹同然に可愛がり、音吉が迎えに来る間、姉妹のような交流をしていた事を、二人の娘ゆりとアコが知る由も無かった。

「その姿・・・お姉様のお子様もプリキュアだったとは・・・」  
「エッ!?!」

アフロデイトは、感触深げに春菜の着たムーンライトの衣装を見て、ポツリと眩き、思わず春菜が聞き返した。奏の母美空は、パリに居る筈の響の母まりあを見て驚き、

「まあ、まりあさん、何時日本に戻られたんですか?」

「主人から、響の事を聞いて戻ろうとは思ってたんですけど、私、まだパリに居た筈なのに・・・それより、どうしてこんな大胆な衣装を着ているのかしら?」

「そうですねえ？ 私も何でこんな白いバニー衣装を着ているのかしら？」

美空は、頭に着いたウサ耳のようなアイテムを見て、バニーガール姿になっていると思つたらしく、まりあと不思議そうに会話をしていた。

みゆき達の母親達も、互いに何故この場所に居るのか、何故こんな衣装を着ているのか理解出来ず戸惑つて居た。育代は、正子、千春、とも子、静子に話し掛け、

「まあ、皆さんもそんな姿に？」

「そうなんよ！アカン、こんなピッタリした衣装着たら、お腹出てるの丸わかりやわ！」

正子は、恥ずかしげにお腹をポンと叩くと、とも子は苦笑を浮かべ、

「日野さんはまだ良いじゃない！私何か、お腹の中に子供が居るんで、何時もより余計目立って……」

とも子はそう言いながら、愛しそうにお腹を摩ると、とも子の妊娠を知った静子、育代、正子、千春が目を細め、

「エツ!?とも子さん、オメデタ!?!」

「まあ！おめでとうございます!!」

「ホンマに、今でもお盛んで羨ましいわあ……」

「イヤン！日野さんつたらあ……」

正子は、とも子を見ながら羨ましそうにすると、千春は両手を頬に当てながら照れた。

正子は、千春、育代、静子を見つめながら、

「何言うてんの！ 星空さんも、黄瀬さんも、青木さんも、まだまだもう一人ぐらい行けんのとちやいますの？」

「「エエエエ!? 無理、無理!!」」

正子に突つ込まれ、顔を赤くした育代、千春、静子が首を振る。そう言う正子はどうかとも子が聞くと、正子は右手を振りながら、

「アカン！ ウチの旦那……この前久々にエッチしたら、ギツクリ腰になつてもうて……」  
「まあ、お盛んですわねえ？」

「そう言う青木さんの所はどうなん？」

「エツ!? 家は……もう長男が大学生ですし……ここ数年は……」

静子が頬を染めながら答えると、正子の視線が育代と千春に注がれ、二人は思わずギクリとし、

「星空さんや黄瀬さんは、まだまだ現役やるの？」

「エツ!? ……エエエと……」

「わ、私は、主人が亡くなつてからは……」

育代と千春が、顔を赤らめながら返事に困つて居ると、背後から声が掛かり、

「あのう……此処は何所なのでしょう？ 娘の病室に居たら突然……」

そう言つて育代達に声を掛けたのはあゆみの母、あゆみの母の問いかけは、脱線して  
いた育代達五人を正気に返らせた。

魔王の事を知っているラブの母あゆみ、美希の母レミ、祈里の母尚子は、魔王がこの  
場に居る事に気付くと、徐に魔王に近付いた。困惑顔のレミが魔王に話し掛け、

「魔王ちゃん、これは一体どういう事なの？」

それを合図にしたように、あゆみや尚子も魔王に質問を浴びせ、

「あの人は一体？」

「魔王ちゃん、何か知ってるの？」

三人は、魔王が険しい表情で見つめた、包帯姿のファレオを見ると、その不気味さに  
思わず顔を顰めた。魔王は三人に顔を近づけると、

「ラブママ、美希ママ、祈里ママ・・・実は、あいつこそ、ラブ達みんなに呪いを掛けた  
張本人カゲエー！」

「「な、何ですつてえ!?!」」

「みんなが不可解な病気になつたのは・・・あいつの所為カゲエー!!」

魔王が険しい表情でファレオを睨み付けると、魔王の声が聞こえたのか、ママキュア  
達は一斉にファレオに視線を向けた。ファレオはそんな一同の視線を受けても、不気味  
な笑みを浮かべていた・・・



## 2、一撃の槍

アン王女が尊敬する先祖、キュアマジシャンの力を借り、遂にアン王女は、キュアエースとしてプリキュアの力に目覚めた！

ブルーは、なぎさ達がそれぞれ入院している病院に、ジョーカーが差し向けたアカンベエの状況を、鏡に覆われた部屋で憂いの表情で見居たが、キュアエースの力を感じると、ハツとした表情を浮かべた。

「これは!?キュアマジシャンに似た力を感じる・・・」

ブルーは自ら確かめようと、鏡に身を投じ、エースの側へと現われた。エースは驚愕し、

「神様!?どうしてこちらに?」

「いや、キュアマジシャンに似た力を感じたものだから・・・そうか、君もプリキュアになれたんだね?」

「ハイ!キュアマジシャンが、わたくしに力をお貸し下さった事で・・・私はキュアエースとして目覚めました!!」

「そうか、キュアマジシャンが・・・不幸中の幸いといった所か!エース、現状を君に教えておくよ!!」

ブルーは、エースに現状を手短に説明した・・・

ジョーカーによって、なぎさ達一同が入院しているそれぞれの病院に、アカンベエが現われて居る事、のぞみ達、ラブ達、つぼみ達、響達の下には助っ人が現われて、アカンベエと戦って居てくれる事を教え、更にプリキュア達に呪いを掛けたファレオが、夢の世界に居る事、魔王はそのファレオを追って、なぎさ達の母親達を連れ、夢の世界に向かった事を伝えた。エースは険しい表情を浮かべながら、ジョーカーをキツと見つめると、

「そうですか・・・ジョーカー！何と卑劣な真似を!!」

「卑劣!?アハハハハ！こんな好機を逃すバカが何所に居ますか？いくらあなたがプリキュアの力に目覚めようと、既に手遅れ何ですよ!!アアハハハハ!!!」

ジョーカーは、差し向けたアカンベエによって、プリキュアの何人かの最期を確信し、高笑いを浮かべた。エースは目を瞑り、思案を纏めカツと目を見開き、ジョーカーに聞こえ無いくらいの声でブルーに話し掛けると、

「神様、わたくしに力を貸して頂けるでしょうか?」

「それは構わないが、エース!君は何をしようと・・・」

「わたくしがアカンベエを倒したと同時に、わたくしを入院して居るみなさんの病院の下に、順番に送って頂きたいのです!」

エースの提案に、ブルーは一瞬躊躇った・・・

エースの提案、それは複数のアカンベエを、たった一人で浄化すると言っていると同じだった。無謀にも思える提案だったが、ブルーはエースの目を見ると、その覚悟を見て取り、コクリと頷いた。エースも頷き返すと、松葉杖アカンベエをキツと見つめ、  
(キュアマジシャン・・・わたくしに)加護を！)

エースは、ミラクルドラゴングレイブをクルクル回転させ、穂先を松葉杖アカンベエに向けるや、アカンベエ目掛け突撃し、大きく宙にジャンプすると、

「ミラクルドラゴングレイブの力・・・受けてみなさい！ハアアアア!!」

エースの気合いと共に、ミラクルドラゴングレイブは目映い金色の輝きを見せると、黄金の龍のオーラが現われ、アカンベエを飲み込んだ。アカンベエは、その光の力の前に為す術無く浄化され、ジョーカーは呆然とした。

「バ、バカな!?!、一撃でアカンベエを?クツ、紫玉アカンベエでは相手にならないとは・・・だが、覚えておきなさい!今更他のプリキュア達の下に向かおうとしても、手遅れですよ!!」

ジョーカーは、エースの力を目の前で見せ付けられ、口惜しさを晴らすかのように、捨て台詞をエースに残して撤退した。エースは着地すると同時にブルーに話し掛け、

「神様!」

「分かった！エース、その鏡の中に飛び込むんだ!!」

「ハイ!」

エースは、ブルーに言われるまま、目の前に出現した姿見鏡の中に飛び込み、ブルーもその後を追った。

ジョーカーは勝利を確信して居たが、なぎさ達、咲達には、それぞれパートナー妖精が居た事を、ジョーカーは侮って居た。メップル達やフラッピ達は、目の前に迫るアカンベエに恐怖しながらも、自ら囿になるかのように、アカンベエの注意を惹きつけて居た・・・

「勇者メップルが相手になってやるメポー!」

メップルは、なぎさが入院している病院に迫る、車輪が付いた車アカンベエにビビリながらも、勇敢に立ち向かって居た。アカンベエは、メップルを轢き殺そうとするかのように、タイヤをフル稼働させてメップルに迫った。その時メップルの側が突然光輝き、姿見鏡が現われると、その中から赤い髪を靡かせたエースが現われた。エースは、赤い髪を靡かせながらメップルに微笑むと、

「ハアアアア!!」

エースは雄叫び上げながら、ミラクルドラゴングレイブをアカンベエ目掛け一振りす

ると、槍は目映い輝きを放ち、アカンベエ目掛け三日月形の光のエネルギー波が放たれた。アカンベエは、慌てて急ブレーキを掛けるも間に合わず、光に包まれ浄化された。エースの圧倒的力を目の前にしたメツプルは思わず呆然とし、

「す、凄いメポ……」

「あれは、キュアエース！アン王女がプリキュアになった姿……」

「アン王女が!？」

メツプルは、隣に立ったブルーからエースの正体を聞き、その頼もしさに目をウルウルさせた。直ぐに我に返ったメツプルは、

「アン王女、いやエース！きつとほのかやひかり、他のみんなの所にも怪物が居るメポ！みんなを助けて欲しいメポ!!」

「ええ、勿論ですわ！神様!!」

「メツプルも行くメポ!」

エースは再びブルーに合図を送り、肩にしがみついたメツプル共々姿見鏡に入った。

「さ、さっさと来ないでミポ!」

ミツプルは、涙目になりながら、ほのかが入院している病院に迫るペットボトルアカンベエに恐怖していた。アカンベエの中身は、炭酸飲料とでもいうように、身体を激し

く揺さぶると、頭頂部から発射した液体が、酸のように周囲を溶かし、一層ミツプルを恐怖させた。恐怖でガクガク震えるミツプルだったが、その側が突然光輝き姿見鏡が現われ、驚くミツプルの目に、鏡の中から赤い髪を靡かせたエースが姿を現わした。その肩に居たメツプルがミツプルに気付くと、エースから飛び降りミツプルに駆け寄った。

「ミツプル！もう安心メポ！キュアエースが来てくれたメポ！！」

「メツプル！でも、キュアエースって一体誰ミポ？」

首を傾げるミツプル、最後に鏡の中から現われたブルーは、メツプルとミツプルを両腕で抱き上げ、

「キュアエースとは・・・アン王女がプリキュアになった姿！」

「アン王女が!？」

ミツプルは、頼もしそうにエースの背を見た！

「ハアアアアア！」

エースは雄叫び上げながら、ミラクルドラゴングレイブを右左と振り、アカンベエから放たれた溶解液を弾きながら、

「ヤアアアア!!」

エースの咆哮と共に、ミラクルドラゴングレイブから光の衝撃波が飛び出し、動揺するアカンベエを浄化した。

「ハアハアハア……神様、次です！」

「エース……少し休んだ方が良くないんじや？」

「わたくしは大丈夫ですわ！」

ブルーは、三人目のアカンベエを浄化し、少し疲労が見えてきたエースを心配するものの、エースは気丈に次の場所に向かうとブルーに進言した。ブルーは頷き、姿見鏡を出現させると、エースは気丈に鏡に飛び込み、ブルーはメツプルとミツプルを連れ、ひかりが入院している病院へと一同を運んだ。

エースはその勢いそのまま、ひかり、咲達が入院して居た病院を順番に周り、ミラクルドラゴングレイブでアカンベエを一蹴し続けた。メツプルとミツプルから事情を聞いたポルンとルルン、フラツピ、チョツピ、ムーブ、フープ達も、そんなエースの力に驚きながらも、頼もしさを感じて居た。

ナツツハウスの前で、大木アカンベエと戦い続けるピーちやんと、それを心配そうに見つめるナツツだったが、ナツツハウスの周辺に突然姿見鏡が現われ、ナツツを驚かせた。

「あれは、神様の!?ま、まさかみんなの身に何かあったんじや?」

ナッツは、入院している一同の身を案じ、顔から大量の汗をかいて動揺するも、姿見鏡から現われたエースを見て驚愕し、

「エッ!?プリキュア?でも、あんなプリキュア見た事無いナツ・・・」

「ナッツ!」

「みんな!無事だったナッツ!!」

「ナッツの方こそ無事で何よりメポ!」

「エースのお陰で、咲達もみんな無事ラピ!」

「エース!」

動揺するナッツの下に、メツプル達、フラツピ達が駆け寄り、ナッツにアン王女が変身したエースの事を教えた。見る見るナッツの目は輝き、エースへと視線が注がれた。

「ピイイイ!」

ピーちゃんは、自分が囿になるから、その間にアカンベエを浄化してくれとでもエースに語ったのか、自ら飛び回ってアカンベエの注意を惹きつけ、大木アカンベエはそんなピーちゃんを疎ましく思ったのか、伸ばした枝を使って捉えようとする。エースはミラクルドラゴングレイブをクルクル回転させてアカンベエに穂先を向けると、

「ハアアアア!!」

エースの気合いと共に、ミラクルドラゴングレイブは目映い金色の輝きを見せると、



黄金の龍のオーラが現われ、アカンベエを飲み込んだ。それを見たナッツを始めとした妖精達からは大歓声が沸き起り、エースはニツコリ微笑むも、その疲労は隠せなかった。「ハアハアハア……つ、次ですわ!」

槍を使って再び立ち上がったエースが、ブルーに進言するも、ブルーはエースの右肩に手を置いてニツコリ微笑むと、

「エース……それには及ばない!他のプリキュア達の下に居るアカンベエは、どうやら全て倒されたようだ!!」

「ほ、本当ですか!?!それは……良かったですわ!」

ブルーの言葉を聞き、心の底から安堵したのか、エースはその場にしゃがみ込み、妖精達はそんなエースの為に水を持って来たりして気遣った。エースがアカンベエを倒した時を同じくして、ブンビー、ウエスターとサウラー、コツペ、メフィスト達もアカンベエを退け、ジョーカーの企ては一同の活躍で水疱に喫した。

(キュアエース……この借りは必ず返して見せますよおお!!)

バッドエンド王国で現状を知ったジョーカーの目は、怪し気に赤く輝いた!

「エース、本当に凄いメポ!」

「とても初めてプリキュアになって戦ったとは思えないラピー!」

メップルとフラツピに称えられ、顔を赤くしたエースは、

「まあ、そのように煽っても何も出ませんわよ？これも、キュアマジシャンのご加護のお陰・・・わたくしは、その力を借りただけに過ぎません！ですが、本番はこれから・・・皆様方に呪いを掛けた相手との戦いが残って居ますわ!!」

エースはそう言うのと立ち上がり、夢の世界に居るであろう、ファレオとの戦いに備えた。

### 3、リフレツシュ

娘達に呪いを掛けた相手が、目の前に居るファレオだと知ったママキュアオールスターズ達、これは夢の中の出来事だと、大半のママキュア達は思っ居るものの、一同は、全身を包帯で覆った不気味な容姿をしたファレオを、キツと睨み付けた。真つ先に口を開いた理恵は、

「あなたがなきき達を・・・ちよつと、何か言いなさいよ!」

「そうよ!みんなを元に戻して!!」

理恵の後にあゆみもファレオに抗議し、次々にファレオを問い詰めるも、

「言いたい事はそれだけか?ならば・・・実力でそうさせて見ろ!!」

ファレオの包帯が怪しく揺らぎ、嘗てと同じ用に、己の分身を十体作り出し、ママキュ

アオールスターズへと差し向けた。ゾンビのように両腕を前に突き出し、ゆっくり向かってくる不気味なミイラの集団に、さっきまでの強気も影を潜め、ママキュア達は悲鳴を上げながら逃げ惑った。

「みんな、しっかりするカゲ！今のお前達は……」

「魔王……それは無理よ！」

「マアム!? どういう事カゲ？」

魔王の考えでは、夢の世界ならば、プリキュアとなったママキュア達なら、ファレオとも対等に戦える筈だと考えて居たが、その考えを、夢の世界のマアムが首を振って否定した。

「いくら夢の世界だとは言え、今の彼女達は、ただプリキュアの衣装を着た集団でしか無いわ！彼女達のほとんどは、プリキュアに付いてほとんど何も知らないんじゃないの？」

マアムの忠告を聞き、頭の回転が速い方の魔王は、見る見る顔から汗を流し狼狽えだした。あゆみ、レミ、尚子、アフロディテ以外の母親達は、自分達が娘の変身したプリキュアの姿になっているなどは、夢にも思わないだろう事も理解した。

「し、しまったカゲ!?!」

魔王は自分の考えが甘かった事を痛感し、ママキュア達を救いに向かおうとした時、

姿見鏡が出現し魔王を驚かせた。

「これは、神の!?! . . . . . ?!」

更に魔王は、鏡の中から現われた、見た事の無いプリキュアを見て更に驚いた。赤い髪と白と赤の衣装に身を包んだエースは、魔王の側に寄ると、

「魔王! 現状をわたくしに教えて頂けますか?」

「その声 . . . . . もしかしてアンか!?!」

「はい! わたくしは、キュアマジシャンの力を借り、プリキュアになる事が出来ました! 神様から、プリキュアの皆様方に呪いを掛けた者が、この夢の世界に居ると聞いたものですから . . . . .」

「そういう事カゲ . . . . .」

魔王は納得し、エースに今置かれている現状を知らせた。プリキュア達の母親達の力を借りて居る事、プリキュア達の呪いを解くには、ファレオに自らの意思で解かせる事が必須で、倒す事はプリキュア達の死に繋がる事、ファレオが作り出したミイラに手を焼いて居る事などを伝えた。

「それは厄介ですわねえ . . . . .」

ファレオを浄化すれば救えるのであれば、話は早いのだが、ファレオに自らの意思で呪いを解かせるとなると、エースとしても迂闊な攻撃は仕掛けられなかった。

「だったら、ファレオ様に認めさせれば良いニヤ!」

突然二人の会話に割り込んで来た者が居た。それは使い魔のキャミーで、キャミーは、ファレオの視界に入らないように近付き話し掛けた。

「お前は!?!認めさせるってどういう事カゲ?」

「ファレオ様は、ああ見えても誇り高いベレル様の配下・・・自ら認めた相手なら、呪いを解く事も有り得ると思うニヤ!」

「わたくしが、あのファレオと決闘し、勝利すれば皆様に掛けた呪いを解く事も有り得ると?」

「ファレオ様は・・・見た通りの陰気くさい性格だから、確証は持てニヤいけど・・・」  
「それでも、このまま手を拱いているよりはマシですわね・・・」

エースは自らを納得させるようにコクリと頷くと、ママキュア達を襲うミイラの群れを、ミラクルドラゴングレイブで一蹴し、ファレオの眼前に降り立った。

「ほう、貴様中々やるな?」

「あなたに決闘を申し込みますわ! わたくしが勝ったら、プリキュアの皆様方に掛けた呪いを解く事!!」

「ほう・・・で、俺が勝ったら貴様はどうする?」

「あなたの好きにすれば良いですわ!」

「無茶だエース！ミラクルドラゴングレイブを使えば、成る程君にも勝機はあるが、光の槍であるミラクルドラゴングレイブを、この戦いでは使えない!!何故なら、その強大過ぎる力は、その者事浄化しかねない!!ミラクルドラゴングレイブを使えなければ・・・」

ファレオとエースのやり取りを聞いていたブルーは、表情を険しくしながらエースは論じた。エースはブルーに微笑み、

「神様、ご忠告ありがとうございます！ですが、このまま闇雲に時が過ぎて行くだけでは、何も救えませんか!!可能性が少しでもあるのなら・・・わたくしは、それに掛けてみたい!!」

「エース・・・」

ブルーはエースの表情を見て、もう何を言っても無駄だろう事を悟った。エースの言う通り、このまま時間が過ぎる事は、プリキュア達の命の危険に繋がるのだから・・・

「では、貴様の提案受けよう・・・精々楽しませてくれよ！ヌウウン!!」

ファレオから放たれた負のエネルギーが、夢の世界に広がって行く。エースは、ブルーにミラクルドラゴングレイブを託すと、ファレオに向かって行つた。マームは顔色変えると魔王を小突き、

「魔王！何してくれるの!!これじゃ夢の世界が滅茶滅茶じゃない!!」

「ま、待つカゲ！結界を張るから・・・おい、神！ボヤボヤしてないでお前も手伝うカゲエ

!!!  
「」

マアムに注意され、魔王はブルーの協力の下、夢の世界に結界を張り、エースとファレオの半径100メートルに結界を張り、これ以上負のエネルギーが広がらないように押さえ込んだ。

「一体、何が起こってるのかしら?」

「さあ?」

理恵は側に居た恵美に話し掛けると、恵美は困惑気味に小首を傾げた。ママキュア達は、皆困惑顔でエースとファレオに視線を集中させた。

見つめ合ったエースとファレオ、両者が睨み合い、やがて距離を取ると、戦闘が開始された。ファレオの手から放たれた、無数の包帯がエースを捉えようと蜘蛛の糸のように襲い掛かるも、エースは巧みに躲し続けながら、変身アイテムラブアイズパレットを開くも、クリスタルがバッドエンドプリキュア達の下にある今、中は鏡が付いて居る以外空洞だった。

(何か使えそうな物があればと思ったのですが・・・)

エースは、ミラクルドラゴングレイトの扱いには慣れて居たが、キュアエースとして戦うには、まだ明らかに情報が不足して居た。

「ククク、どうした!?逃げてばかりだなあ?」

勝利を確信したフェアレオが、更に包帯をシャワーのように浴びせると、エースは避けきれず左足を包帯で絡め取られた。

「しまった!？」

「ククク、捉えたぞ!」

獲物を引き寄せるかのように、フェアレオが包帯を手元に引き寄せて行く。エースは逃れようと試みるも、包帯がエースの足から外れる事は無かった。

(クツ! わたくしが負ければ、プリキュアの皆様が・・・絶対に、負けない!!)

エースの強い意志が光となり、エースの胸から真紅に輝く光のラビーズが浮かび上がって来た。エースは驚きながらもそれを手に取ると、再びラブアイズパレットを開いた。物は試しと真紅のラビーズを嵌め込んでみると、ラブアイズパレットは光輝き、鏡の中から口紅のようなルージュのダイヤルが姿を現わした。エースは、藁を掴む思いでそれを手に取り、左手でルージュのダイヤルを2つ回してリップを出した。

「いろいろだ! ラブキツスルージュ!!」

リップは、赤、水色、黄、紫、そしてピンクの五色の色に輝き、リップの先端が水色のまま固定されると、

「ときめきなさい! エースショット・・・ハアアア!!」

エースから放たれた、青い薔薇の花びらを纏った強力な水色のエネルギーが、フェアレ



才目掛け発射された。

「な、何だと!？」

直撃を受けたファレオの身体は、弾力性を持つ泡の中に閉じ込められ、エースの左足に巻き付いた包帯が、呆気なくエースから外れ、エースは立ち上がった。

「わたくしの勝ちです!」

「勝ち!?!バカめ!この程度・・・ヌウウウウン!!」

ファレオの包帯が、まるで生き物のように揺らぎ、ファレオの身体を包み込むと、包帯は徐々に膨らみ、エースが放った泡を内側から破壊した。

「クツ!?!」

出来れば、今の攻撃で勝ちを認めさせたかったエースだったが、脆くもその考えは崩れ去った。ファレオは不気味に笑い、

「クククク、もう飽きた!貴様と戦うより、プリキユア達の最期を見物した方が面白い!!」

「何を!?!ま、待つて!まだ勝負は・・・」

「クククク、勝負など知るか!ン!?!」

エースとの勝負に飽きたファレオは、呪いによって苦しみながら死んでいくプリキユア達の姿を見ようと、夢の世界から撤退しようと試みるも、その前にキャミーが立ち塞

がった。

「待つニヤ！ファレオ様、今の言葉は聞き捨てならないニヤ!!ベレル様なら、こんな事きつと認めないニヤ!!」

「使い魔の分際で、俺に説教か？フン、俺は、自らの呪いによつて苦しむ姿を見る事が生き甲斐・・・何だ!?!」

ファレオは違和感を覚えて居た・・・

何か引つ張られるような感覚が、ファレオの身体に伝わつて来た。エースの仕業かと思つめるも、エースは戦いを続けさせようとしていて、そんな仕草は見られなかった。ならば魔王かと思つて見るも、魔王もママムの側に居て、特に手出しはして居なかった。ファレオが違和感の感じる包帯の先を見て行くと、そこにはママキュア達が群がって居た。ママキュア達は、皆手に何かを持って居て、エースショットで出来た泡の破片を利用し、ファレオの包帯を洗つて居た。

「全く、さつきから気になつてたのよねえ・・・」

「本当！こんな薄汚れた包帯じゃ、良くなるものもならないわよ!!」

えりかの母さくらが、りんの母和代が、包帯を手に取りゴシゴシ汚れを洗うと、ファレオは、

「お前らああ！俺が長年掛けて身に染みさせた汚れを・・・」

『ゴシゴシ!』

「止めろおおお!」

ファレオの汚れた包帯を洗うママキュア達を見て、ファレオは、日頃見せた事の無い激しい動揺をし、慌てて止めさせようとする。ブルーは何か気付き、

「エース、ファレオの動きを止め、あの包帯を浄化してみるんだ! 本体じゃないならあるいは・・・」

「神様!? 分かりましたわ! いろいろ! ラブキッスルージュ!!」

エースは再びラブキッスルージュを取りだし、リップは、赤、水色、黄、紫、そしてピンクの五色の色に輝き、リップの先端が紫のまま固定されると、

「ときめきなさい! エースショット・・・ハアアア!!」

エースは、四角形の星屑を纏った、紫色のエネルギー波を発射すると、ファレオの動きを封じた。

「皆様、今です! もっと包帯を引っ張って下さい!!」

「皆さん、行きますわ!・・・そおおれ!!」

エースの合図と共に、ラブの母あゆみの音頭の下、一同が包帯を引っ張ると、ファレオは身体がクルクル回りながら、包帯をどんどん剥ぎ取られ、数分後には全て無理矢理剥ぎ取られ、赤黒い干からびたミイラが姿を現わした。

「み、見たなあ!? 我が全てを・・・お前らああ! 呪ってやる!! 絶対呪ってやるからなあああ!!」

触れただけで折れそうな両手足、見て居るだけで衰れみを感じるファレオの正体に、魔王も、ブルーも、キャミーも、さしものエースも呆然として居たが、我に返ったブルーは、

「今だ、エース! 包帯を浄化するんだああ!!」

「ハイ!」

リップの先端が赤のまま固定されると、エースは三度ラブキツスルージュを構え、

「ときめきなさい! エースショット・・・ハアアア!!」

「嘘、嘘、呪わないからあああ! 止めてえええ!!」

さつきまでの強気な態度は消え失せ、哀願するようなファレオの言葉に胸を痛めながらも、エースは、赤い薔薇の花びらを纏った、強力な赤いエネルギー波を発射し、ファレオの包帯を包み込んだ。

「アデュー!」

エースは包帯に向けウインクすると、エースショットに包まれて居た包帯から、ドス黒いオーラが沸き起り、見る見る消滅した。包帯は、クリーニング屋も驚く、驚きの白さで新品同然になり、ファレオは力なくその場にヘナヘナ崩れ落ちた・・・

力なく倒れ込んだファレオに、ママキュア達が近付き包帯を巻き始めた。理恵はファレオの右手を取ると、

「あんなくすんだ包帯をして居るから、妬んだ性格になるのよ！はい、右手を出して!!」  
力なく右手を出したファレオの手に、包帯をグルグル巻いていく、他のママキュア達も同様に巻き続けて居ると、

「俺は、お前達の娘に呪いを掛けた相手なのに・・・」

「それはそれ、これはこれ・・・それに、もう呪いは解いてくれるんでしょう?」

あゆみがファレオにウインクすると、ファレオは思わず天使のようなその顔に見惚れ、顔を背けて頬を染めた。

(何だこの気持ちには!?何だかこの数千年・・・)

ファレオは、積年の負の力に覆われた包帯から解放された事で、まるで自分が生まれ変わったかのような、妙な爽快感を感じて居た。もうプリキュアに対する蟠りも完全に消え去って居た。全ての包帯が巻かれ終わった時、ファレオは両腕を伸ばし、清々しい気持ちに自然と言葉を発し、

「リフレッシュ!!」

エースとファレオは思わず顔を見合わせると、

「まあ!」

キヤミーも、そんなファレオの変化に驚き、

「ファレオ様!？」

「負けた! 負けた! 俺の負けだ!! キュアエース、お前にと言うより……あそこに居る母親達にな!!」

ファレオはそう言うと、再び雑談に興じる母親達を見て目を細め、

「さあ、娘達の所に帰るが良い! もう目を覚ました頃だろう……」

「エツ!?! じゃあ、呪いは?」

「さつき言っただろう、俺の負けだってな! ついでに、プリキュア達には呪いに対する耐性を付けてやった。今後の戦闘で、例え呪いの攻撃を受けようと、呪いが発動する事は無い!! キュアエース、お前にも付けてやろうか?」

「け、結構ですわ!」

ファレオの申し出を、エースは苦笑気味に断った。だが、この選択が後に、トランプ王国崩壊の切っ掛けを作るとは、この時のエースには知る由も無かった……

魔界……

ベレルは、巨蠍宮で胡座を掻き、精神を鍛えていると、背後から声を掛けられた。ベレルが振り向くと、そこには畏まるように片膝付いて居たファレオの姿があった。

「ファレオ、戻ったか！」

「ベレル様、この度は勝手な振る舞いを居たし、申し訳ございません！」

ファレオの言動に思わずベレルは驚き、マジマジとファレオの全身を見た。以前のファレオからは、負のドス黒いオーラが包み込み、息苦しさすら覚えて居たが、今目の前に居るファレオからは、そんなオーラが消え去り、戦士としての誇りすら現われて居た。

「ウウウム・・・ファレオ、何があつた!?以前の貴殿とは別人なようだぞ?」

「フフフフ、プリキュア達、その母親達の愛に触れたから・・・とでも申しておきましょう!まるで生まれ変わったかのように爽快な気分です!!」

「ウウウム・・・貴殿からそのような言葉を聞く日が来るとはなあ?」

「これも、プリキュア達のお陰と申しましょう・・・ハハハハ!では、今回の騒動の責任を取り、しばし謹慎致します!!」

「待て!その必要は無いぞ!!拙者もシャックスの申し出を受けたのだから・・・後でもっと向こうの世界の事を知らせてくれ!!」

「ハイ!ありがたき申せ!そうそう、使い魔のキャミーでございますが、もう少し人間界に居たいと言っていました、如何致しますか?」

「何!?キャミーが?・・・まあ、良からう!ワシから伝えておこう!!」

「ハッ！では、ゴメン!!」

ファレオがまるでスキップするかのようによく去って行くと、ベレルは思わず呻き、ファレオの陰湿な性格を変えたプリキュアに、更なる興味を持つのだった・・・

ナッツハウス・・・

呪いが解けた事で、なぎさ達一同は元氣を取り戻し、妖精達やブルー、アン王女に対してささやかなお礼を兼ねたパーティーを開いていた・・・

「いやあ、そんな事になってたとは、ちつとも知らなかったよ!」

苦笑を浮かべたなぎさが、頭を掻きながら暢気そうに言うのと、メップルはやれやれと言った表情で溜息を付いた。ほのかはクスリと笑いながら、

「フフ、本当!それに、アン王女もプリキュアになって居た何て・・・」

「だよねえ、あたしも見たかったなあ・・・」

えりかも腕組みしながらウンウン頷いていると、魔王は軽く咳払いし、

「ゴホ!写真ならあるカゲ!!」

「エツ!?本当?見せて、見せてええ!」

のぞみが目を輝かせながら魔王に頼むと、アン王女は慌てて立ち上がり、

「ま、魔王!何も皆さんに・・・アツ!」



顔を真っ赤にしながら動揺するアン王女、魔王から写真を見せて貰った一同だったが、正面で恥ずかしそうにピースをするエースの周りに、自分達の衣装を着た母親達の姿を見て呆然として居た・・・

(お母さん・・・良い歳して何て格好を!?)

なぎさが・・・

(お母さん・・・恥ずかしいよ!)

ほのかが・・・

(アカネさん・・・ルミナスの姿になってまで、迷惑掛けてゴメンなさい!)

ひかりが・・・

(アハハハハ・・・自分で言うのも何だけど、お母さん、似合って無いよ!)

咲が・・・

(お母さん・・・)

舞が・・・

(ウワァ!お母さん、ドリームの格好似合わないなあ・・・制服ならいけるかなあ?)

のぞみが・・・

(アチャア・・・何て格好してるのよ・・・)

りんが・・・

（お母さん……何だか楽しそう！）

こまちが……

（お、お母様……このような姿にさせて申し訳ありません！）

かれんが……

（お母さん……これはこれで有りかも!?）

ラブが……

（ママアア！何嬉しそうにピースしてるのよおおお!!）

美希が……

（お母さん……恥ずかしそう！）

祈里が……

（お母さん、恥ずかしそうにしていますねえ……）

つぼみが……

（オオオ!?何じやコリヤア?）

えりかが……

（お、お母様……何でサンシャインの姿に!?）

いつきが……

（お母さん……アフロディテ様とやけに親しそうにしてるわねえ?）

ゆりが……

(ママ……結構イけてるかも！)

響が……

(これはこれで有り……ハッ!? 私ったら何言ってるの?)

奏が……

(ママ……凄く嬉しそう! でも、隣に居る人誰だろう?)

アコが……

(ワアアア! お母さん似合ってるうう!! エへへ!!)

みゆきが……

(母ちゃん、勘弁してやあ……)

あかねが……

(ウワアア! ママ素敵!!)

やよいが……

(お、お母ちゃん……お、お腹があああ!)

なおが……

(流石はお母様! お似合いですわ!!)

れいかが……

（お母さん、何て格好してるの？ 恥ずかしいよおお・・・）

あゆみが・・・

皆それぞれの母親の衣装を見て、心の中で驚きの声を上げて居た。なぎさは咳払いしながら、

「アン王女もエースになれたし・・・」

「私も心強いです！」

真琴も嬉しそうにアン王女を見つめるも、アン王女は少し憂いの表情を浮かべ、  
「それなのですが・・・実は、わたくしがプリキュアになれたのはあの時限り、何度か試して見ましたが、エースになる事は出来ませんでしたわ！」

アン王女はそう告げ、あの時はキュアマジシャンの加護があつたから、エースになれた事を実感し、一同に語った。

「ですが、きつとわたくしも再びエースとなり、皆さんと共に戦える日が来ると信じて居ますわ！」

アン王女は、ジョーカーから取り戻した、変身アイテムラブアイズパレットをギュッと掴み、改めて一同に共に戦う事を誓った！

魔界・・・

宝瓶宮に居たシャックスは、ファレオが失敗した事を知るも、さしたる動揺も見せず、何かを思案して居た。

(今まで手下達によつて得たプリキュアについての情報、そして、此度のファレオさんの情報を総合すれば・・・精神的に弱らせる事が一番のような気がしますねえ！)

シャックスは長い舌で唇をペロリと舐めると、

「次は私自ら出掛けてみますか！フフフフ!!」

シャックスの不気味な笑い声が宝瓶宮に響き渡った・・・

第百三話：アンジューキュアエース

完

## 第四百話：シャックスの罨

## 1、迷子

バッドエンドマーチ事緑山なみは、この日も美味しい物を食べ歩いて居た。他の仲間達も、この日は各自自由に行動して居て、バッドエンドハッピー事星崎みさきは、みさきが懐いたみゆきの祖母たえの家に遊びに行き、バッドエンドサニー事日川あおいは、何か面白い事はないかと関西方面に出掛け、バッドエンドピース事黄野やおいは、何やら怪しげな本を仕入れて、コミケという言葉に惹かれて情報招集に出掛け、バッドエンドビューティ事青田れいなは、夏休みの宿題を済ませると言い、図書館に出掛けて居た。

「ウ〜ン！たまには一人で気ままに食べ歩くって言うのも、悪くはないよなあ・・・」

そう言いながら、なみは美味しそうにバナラソフトクリームをペロペロ舐めた。空を見上げれば、太陽がこれでもかとはかり、強い日射しを地上へと照らし、ソフトクリームが溶け始めた。公園のベンチが空いて居たので、なみは木陰のベンチに腰を下ろし、暑い夏を満喫して居ると、なみは緑色のTシャツを引っ張られた感覚を覚え、思わず視線を向けた。そこには、黄色のシャツと青いオーバーオールを着た、見た感じ3、4才の小さな男の子が、なみとなみの食べて居るソフトクリームを、物欲しそうにジッと眺

めて居た。男の子と視線が合ってしまったなみは、一瞬の沈黙後、軽く咳払いをして向きを変えるも、男の子もなみの移動した方向に移動し、再びなみの食べて居るソフトクリームをジイと見つめた。変顔浮かべながら、なみは何度も向きを変えるも、男の子は楽しそうに、その都度なみの正面に移動した。根負けしたなみは、軽く溜息を吐くと、「ハア……な、何かあたしに用!？」

「あのね……お姉ちゃん達とお兄ちゃん達と買い物に来たのお! そうしたらね、可愛い猫ちゃんが居たから追いかけたの! そうしたら、お姉ちゃんとお兄ちゃんが居なくなつたの……」

そう言うのと、男の子は急に不安になったのか、泣きそうな顔をしてなみは困惑した。(これって……迷子って奴だよなあ! 参つたなあ……折角一人で満喫してたのにさあ! 誰か居ないか!?)

キヨロキヨロ辺りを見回すも、この暑い中では公園で遊ぶ人の姿も無く、なみは益々困惑する。

(このままシカトして、どっか場所変えるか!)

そう思ったなみは、徐にベンチから立ち上がり、場所を移動しようとする、男の子はなみの服を握りしめ、一緒に付いて来ようとする。なみの脚力ならば、男の子を振り解いて走り去る事など造作も無かったが、なみはこの男の子を見て居ると、何処か心が

和むような気がして居た。男の子が、ウルウルした瞳でなみを見つめると、なみは深い溜息を付き、

「ハアアア．．．分かった！あたしも一緒に捜してやるよ!!」

「本当!!」

「ああ！ただし、泣くのは勘弁だぜ？泣いたら．．．あたしはあんたを追いつちやうからな？」

「うん！僕泣かない!!」

「そうそう！それで良いんだ．．．アイス食べるか？」

「うん！」

こうして男の子と接して居るなみは、男の子と年の離れたお姉さんのようにも見えて来るようだった．．．

なおは、必死の形相で町内を走り回って居た．．．

妊娠中の母親とも子を労り、弟達と妹達と一緒に買い物に出かけたなおだったが、ちよつと目を離れた隙に、末弟のこうたの姿が忽然と消えて居たのだから．．．

「こうたああ！」

何度弟の名を呼んでも返事は無く、なおは泣きそうな表情で尚も探し回った。居なく



なつた事に気付いてから、そう時間は経つて居ないので、直ぐに見つかると思つて居た  
なおだったが、予測不能な行動を取る幼児の事を侮つて居た。商店街を走つて居ると、  
顔見知りの八百屋のおばさんがなおに声を掛け、

「アレエ!?!なおちゃんじゃない? おかしいわねえ・・・さつきなおちゃんが、一番下の男  
の子と一緒に、歩いて居る姿を見た気がしたんだけどねえ?」

そう言うと、おばさんは小首を傾げた。なおはおばさんの前に慌てて移動すると、  
「お、おばさん、それ本当!?!ど、どっちに行つたの?」

おばさんは、なおだとばかり思つて居た少女と、手を繋ぎながら商店街をこのまま  
真つ直ぐ歩いて行つたとなおに告げた。なおはおばさんに礼を言うと、再び走り出し、  
こうたの後を追つた。少し走ると、八百屋のおばさんが言つていたように、こうたは、緑  
のTシャツを着た少女と、手を繋いで歩いて居る後ろ姿が目に入った。なおはホツと安  
堵し、

「こうた!」

「エツ!?!あつ、なおお姉ちゃん!」

なおに呼び掛けられたこうたは、驚いて振り向くも、なおの顔を見て嬉しそうな表情  
を浮かべ、隣に居るなみの手を引つ張つた。なみも振り返ると、視線が合ったなおとな  
みは、互いを指差し驚きの表情を浮かべると、

「アツ!?!」

「なおお姉ちゃん!このお姉ちゃんに、アイスクリーム買ってもらったんだよ!」

「エツ!?!な、何か弟がすっかりお世話になったみたいで・・・ありがとう!」

「べ、別に・・・それより、こんな小さい子から目を離すなよな!」

「う、うん・・・ゴメン・・・」

お互い微妙な表情を浮かべるも、なおは、なみがこうたの面倒を見てくれたと知り、心から感謝し、なみも、こうたから解放されホッと安堵した筈なのに、何処か寂しさも湧いてくるような自分に戸惑った。

「あ、あたしはもう行くよ!」

なみは、なおに気取られないように、こうたに手を振ると去って行った・・・

「なおお姉ちゃん、今度あのお姉ちゃんと遊んで貰う約束したんだよ!」

「へ、へえ・・・こうた、良かったね!」

「うん!」

「でも・・・あたし達に黙って、勝手に一人で行っちゃ駄目でしょう?」

「ゴメンなさい・・・」

「さあ、けいた達が待ってるから戻ろう!」

なおは右手でこうたの左手を掴み、けいた達を待たせて居る場所に戻って行った。

(バッドエンドマーチ・・・借りが出来ちゃったなあ)

なおはそう思いながら、今一度背後を振り返った・・・

## 2、暗躍

魔界・・・

宝瓶宮を治めるシャックスは、配下に命じ、オークの森の四方に、怪しげな機械を配置させた。鱗に覆われた魚人は、一緒に来たゴキブリのような昆虫形の魔に話し掛け、

「なあ、シャックス様は何でこんな事するんだ？」

「そんな事俺が知るか！だが、オークを利用しようとしているのは確かだろうな!!」

「相変わらず、得体の知れないお方だなあ・・・」

二人の魔は、ブツブツ話し合いながらも、仕事を終え去って行った。そのシャックスは、双児宮を訪れ、カインとアベルに対してある提案をして居た・・・

「何だ?!残りの大蛇を全て貴様に貸せだど？」

アベルは少し語気を荒げ、聞き返すようにシャックスに念を押すと、シャックスは、見て居る者を不愉快にさせるような、ニヤケ顔を浮かべながら、

「ハイ！残念ながら私には大蛇が居りません・・・無能な前任者が、プリキュア達に大蛇を倒されてしまいましたのでねえ・・・そこで、プリキュアを捕らえる代わりに、ベレ

ル、ニクス、バルバス、ミノタウロス、アロン、オロン、リリスが持つ大蛇を、私めに貸して頂きたいのです!!」

「ほう・・・貴様がプリキュアを捕らえると言うのか?」

「ハイ! そう時間は掛からないと思いますよ? すでに準備は始まっておりますので・・・」

「どうする、カイン?」

アベルに尋ねられ、腕組みしたまま沈黙して居たカインは、

「構わん! 俺から皆には通達する・・・シャックス、貴様の好きにやればいい!!」

「ありがとうございます! では・・・」

シャックスは、ニヤケ顔で頭を下げると、双児宮からゆつくり出て行つた。アベルは舌打ちすると、

「チツ! カイン、良いのか? あんな下つ端を十二の魔神に任命した事も解せぬが、残りの大蛇まで奴に貸すのは・・・」

「フフフ、そう憤慨するなアベル! 奴を十二の魔神に任命したのは、奴は、裏でコソコソ我らに隠れ、何かをやつて居たのでな・・・少しソドムに調べされたら、中々使い道がありそうだったので、利用したまで・・・」

「利用!?!」

「ああ、奴の野心は並々ならぬものがある・・・奴の真の狙いは、この魔界の頂点に立つ

事だ！奴は、その用心深い性格から、自分の障害になるものを、徹底的に調べ上げ、利用出来る者は手駒に加え、障害になる者は排除する！！」

「どういう事だ!?!」

「奴は恐らく・・・プリキュアを精神的に屈服させ、自分の手足に動かす駒として利用し、俺達に反逆しようと考えて居る!!」

「何だ?!?そう上手く行く訳無かろう?」

「普通に考えればなあ・・・だが、奴ならあるいは、プリキュアの弱点か何かを、既に調べ上げて居るのかも知れん・・・奴がプリキュアを駒として扱えるなら、逆にこちらにも好都合!!我らの封印を解かせる絶好の機会でもある!!!」

「成る程・・・逆に奴を利用しようという考えか?」

「そういう事だ！だが、ルーシエスの光の結界が、どうやれば解けるのか、そこがまだ調べねばならん・・・それまで奴を泳がす!!」

カインの話に、アベルはコクリと頷いた・・・

宝瓶宮に戻ったシャックスは、自分の思い通りに事が運んで行くのを見て、笑みが止まらなかつた。

（フフフフ、良いぞ！後は大蛇やオークを利用し、プリキュア達を誘き寄せれば良いだ

け・・・行動開始と行きましようかねえ!!)

シャックスは、時空に歪みを発生させ、人間界へと赴いた・・・

3、追い詰められたなお

7月も終りを迎えようとして居たある日、それは起こった・・・

シャックスは、プリキュアの中で緑川なおに狙いを付けて居た。

(クククク、プリキュアの中でも、人一倍家族の絆が強いキュアマーチ・・・逆にキュアマーチを利用し、他のプリキュア達を・・・)

シャックスは、夜中の内になおの家に配下を侵入させ、なおの家族を浚って居た。翌朝、妊娠中の母とも子を労って、誰よりも早く起きて、朝食の支度を始めたなおは、家族を起しに行くも、家族の姿は忽然と消えて居た。

(お父ちゃん、お母ちゃん、けいた、はる、ひな、ゆうた、こうた・・・みんな、みんな何所行っちゃったのよ!?)

動揺したなおは、幼なじみで親友でもある青木れいかに連絡しようとして、電話口まで来た時、なおはその場から動けなくなつて居た。何故なら、電話の前には体長1.5メートルはありそうな、蜷局(とぐろ)を巻いた蛇が居たのだから、

「ヒイイイ!な、何で家の中に蛇が!？」

今にも泣き出しそうな顔で怯えるなおは、れいかにも連絡出来ず、蛇に睨まれた蛙のように佇んで居た。そんななおに、突然蛇が話し掛け、

「クククク、そう怯えなくても良いですよ！キュアマーチ!!」

「なっ、何で!?!」

「あなたの事は、良く調べさせて貰いましたよ！あなたは家族が多い事もあり、プリキュア達の中でも、特に家族愛が強いようですねえ・・・」

「まさか・・・あなたがお父ちゃん達を?」

シャックスは、なおの家に侵入させた蛇を使い、言霊を使ってなおとコンタクトを取って来た。蛇に怯えるなおだったが、シャックスがなおの家族の事を話し出すと、恐怖心よりも怒りの感情が先に出て、なおは思わず目の前の蛇を睨み付けた。

「あんた！あたしの家族に何をしたの?みんなを返してええ!!」

「私の言う通りにして頂ければ、危害を加えず返す事を約束しましょう!」

「ふざけるな！誰が家族を浚って脅迫するような奴の・・・」

「なら、あなたの家族が減っていくだけです・・・そうだ！逆に増やすのも面白そうですねえ!?!あなたの母親、妊娠してるんですって?魔界に住むオークは、特に恰幅の良い女体を好んでましてねえ・・・あなたのお母さん何か人気者になりそうで、何百というオークの子を産み落としそうですよ!!」

「あ、あんた！何を!?」

「あなたに協力して頂ければ、危害は加えませんが、拒むのなら……先ずあなたの母親を、オークの森への生贄とさせて頂きます!!」

シャックスの言葉を聞き、なおは青ざめた……

なおの脳裏に、嘗てシーレインから聞いた魔界の情報がい思い返されてくる。だが、十二の魔神の事や、魔王ルーシエスの事を聞いては居たが、オークに付いての情報は聞いては居なかった。

「ああ、あなたはオークに付いては知らないようですねえ……では、聞かせて差し上げましょう!」

そんな狼狽えるなおの容姿に気付いたのか、シャックスは、オークの特性をなおに語って聞かせた。オークとは、あらゆる種族と繁殖行為を行える稀有(けう)な存在で、豚とゴリラが合わさったような醜い容姿をし、知能は低く、雄しか居なかった。だが、その分オークの生殖本能は凄まじく、集団で行動しては、あらゆる種族の女を浚っては犯し、犯された女は一週間でオークの子を孕み、二週間目には子を産む、オークに浚われた者は、生涯オークの子を産む慰め者となった事や、魔族、動物、人間等、あらゆる種族の女や雌と交わっても、オークは、自分達種族の子を孕ませる事が出来る事を教えた。

「そんな……そんな……」



なおはシヨックでガタガタ震えた・・・

母とも子を、そんなオークへの生贄などには絶対にさせたく無かった。瞳からポロポロ涙が零れだしたなおは、

「止めて！止めてよおお!!」

「ええ、ちゃんと私の言う通りにして頂ければ・・・ご家族皆さんお返し致しましょう！断れば・・・あなたの母親の他に、二人の妹さんもオークへの生贄とし、父親と弟達は・・・そうですねえ、大蛇の餌にでもさせましょうかねえ？」

「お、大蛇!？」

なおの脳裏に、バッドエンド王国でキャンデイを飲み込もうとした、巨大な大蛇の姿が思い出され、その大蛇が父や弟達を飲み込むビジョンが頭を過ぎった。

「イヤアアアア!お願い!お願いだから・・・みんなを返して!!」

なおはシヨックで顔を覆い、泣きながらシャックスに家族を帰すように哀願するも、  
「フフフフ、ですから、言う通りにして頂ければ、返して差し上げますよ!私が指定する場所に、他のプリキュア達を全員集めて頂ければねえ!!」

「そ、そんな・・・あたしに、プリキュアみんなを裏切れって言うの!?!そんなの・・・そんなの出来ない!!」

「出来ないなら・・・ご家族がどうなるんでしょうねえ?では、30分だけ時間を差しし上

げましょう！それと、この事を他のプリキュア達に話せば・・・分かってますよねえ？  
では!!」

「アツ!?待って!・・・あたし、あたし、どうしたら良いの?ウワアアア」

なおはそのまま崩れ落ち、泣き喚いた・・・

だが、なおに考える時間は無かった!

30分後には、なおの返答を聞きに、再びあの蛇がやって来るのだから・・・

なおは、受話器を手に取ると、縋るようにれいかの家に電話を掛けた・・・

「れいかああ・・・」

「なお・・・泣いてるの!?何かあったの?」

電話口のれいかは、なおが泣いている事に気付いた。幼なじみの異変を素早く察知したれいかは、なおを安心させるかのように、優しい口調で語り、なおはつい家族の事を話しそうになるも、蛇に監視させて居るような気がして、中々話し出せなかった。

「れいか・・・ゴメン!何でもない!!」

「アツ!?なお!なお?」

なおは電話を切ると、その場で崩れ落ち、再び顔を覆って泣いた・・・

(なお・・・)

れいかは表情を険しくすると、なおの様子を見るべく、身支度をして出掛ける準備を

して居ると、しばらくして再び電話が鳴った……

なおは、夢遊病者のように歩いて居た……

そんななおを、店で買ったメロン味のかき氷を、美味しそうに食べ歩きして居たなみが見つけ、

(何だ、あいつ!? 変な歩き方して?)

「おい! 今日のはあの時の小っこいのが一緒じゃ無いのか?」

だが、なおはなみの声が聞こえないかのように、フラフラそのまま通り過ぎて行った。  
(何だ!? どうも様子が変だな? ……まっ、あたしには関係無いね!)

なみはそう心の中で呟いたものの、チラリと背後を振り向いた……

#### 4、罨

なぎさ達一同が、なおに呼び出されたのは、七色ヶ丘中学校校庭だった。真つ先に駆け付けたのは、みゆき、あかね、やよい、真琴とアン王女、なおの姿は見当たらず、五人が小首を傾げている間に、あゆみ、そしてせつなの瞬間移動でやって来たなぎさ達、咲達、のぞみ達、ラブ達、響達、そして妖精達の姿があった。だがピーちゃん、日課の散歩に、魔王も育代と家で留守番して居る為、この場には居なかった。その中には、プ

リキュアに興味を持って居たキャミーも、ハミイと一緒にこの場に来て居たが、何故か  
れいかの姿は見当たらなかった・・・

れいかを除いた一同が揃うと、辺りに霧が発生し、霧が晴れた時、一同の目の前には、  
沈痛な面持ちをしたキュアマーチが、一同の顔を見た途端ポロポロ涙を流し、

「みんな・・・ゴメン！本当にゴメン!!」

「マーチ!? どうしたの？何があつたの？」

「それは・・・」

みゆきに問われたマーチは、思わず言葉に詰まると、突然辺りで声が聞こえてきて、  
「おっと！それ以上は言わない約束でしたよねえ・・・キュアマーチ？」

「クツ!？」

マーチの後ろから、ゆっくり姿を現わしたのは、紫色の短髪で、右目にのみ赤い水晶  
を埋め込んだ、宝瓶宮の魔神シャックス！

「何かおかしいですね？」

「ええ、あの男からは、嫌な感じがする！」

「みんな、気を付けるメポ！あいつからは、邪悪な匂いがプンプンするメポ!!」

ひかりに聞かれた薫も同意し、メップルは、シャックスから邪悪な匂いが漂っている  
と忠告を与えた。怪訝な表情を浮かべたみゆきは、

「あなたは誰!? 何でマーチと一緒に?」

みゆきに問われたシャックスは、人を不愉快にさせるような笑い声を発し、

「クツ、ククククク! 私の名前はシャックス!! 魔界の魔神と言えば分かりやすいですかねえ?」

「魔界の!? そのあなたが、何でマーチと一緒に?」

「いえね、キュアマーチは・・・私の考えに賛同して下さり、我が配下に加わってくれたのですよ! そうですよねえ、キュアマーチ?」

「クツ・・・」

マーチは返事をせず、悔しそうに俯き拳を振るわせた。その姿を見たなぎさ達は、マーチがシャックスに脅迫されて居る事が直ぐに分かった。見る見る表情を険しくした一同、なぎさとほのかはシャックスを睨み付け、

「あんた! マーチに何をしたの?」

「大方、マーチの家族を人質にして脅して居る・・・そんな所かしら?」

「ククククク、頭の回転が速いようで助かりますよ! なら話は早い・・・あなた方プリキュア全員、私に降伏し配下になりなさい!! さもなければ、キュアマーチの家族がどうなるか・・・お分かりですよねえ?」

「何て卑怯な奴!」

「私達が、そんな脅迫に屈するとも思ってるの！」

ラブとのぞみも険しい表情でシャックスを睨み付ける。シャックスは両手を広げ、

「おやおや、仲間の家族などどうでも良いという事ですか？」

「ふざけるなや！仲間の家族を、そない風に思う訳無いやろ!!」

「私達をこの場に集めた事・・・後悔させて上げるわ！」

「ええ、こんな卑怯な手を使う奴・・・懲らしめてやりましょう！」

そう言いながら、険しい表情を浮かべたあかねが、ゆりが、りんが、シャックスを睨み付けると、シャックスはニヤリと口元に笑みを浮かべ、

「そう言うと思つて居ましてね、色々細工をしておきました！」

シャックスがそう言うと、七色ヶ丘中学校の校庭に、蜃気楼のように不気味な森が浮かび上がってきた。マーチの顔色は一気に青ざめ、シャックスを睨み付けると、

「約束が違う！何でオークの森を!？」

「ハア!?!私に異論を唱えるなど・・・あなた、自分の立場分かってるんですか？」

「卑怯者！」

「今の言葉はちよつと傷つきましたねえ・・・キュアマーチ？」

「ウツ・・・」

シャックスの右目が真紅に輝き、これ以上抗議すれば何をするか分からないと直感し

たマーチは、そのまま悔しげに押し黙った。なぎさ達一同は、突如現われた森を見て響めき、マーチが言ったオークの森と言う言葉を聞いた瞬間、キャミーは突然ガタガタ震え始め、それに気付いたハミイとエレンは、

「キャミー、どうしたニヤ？」

「震えて居るじゃない！どうしたの？」

「ハミイ、セイレーン、それにプリキュア達も・・・まずいよ！あの森は、オークの森って言って・・・」

キャミーは怯えながら、プリキュア達にオークに付いて語って聞かせた。その信じがたい話を聞き、一同が静まりかえる。いつきは眉を顰めながら、

「その話が本当なら、そんな奴らが僕達の住む世界に現われたら・・・」

「ええ、私達が住む世界は・・・」

「オークの巣にされるわ！」

「何という卑怯な真似を・・・」

こまち、祈里、そしてアン王女も、険しい表情を浮かべながら、この世界に現われようとしている森を見ながら呟いた。

「絶対阻止しなきゃ・・・みんな！」

響がキュアモジューレを手に取り一同に促すと、一同も変身アイテムを手に取った。

「デュアルオーロラウエーブ!!」

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」

「デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!」

「プリキュア!メタモルフオーゼ!!」

「スカイローズ!トランスレイト!!」

「チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!」

「プリキュア!オープンマイハート!!」

「レッツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!」

「プリキュア!スマイルチャージ!!」

「プリキュア!ラブリンク!!」

だが・・・

一同の身体がプリキュアになる事は無かった・・・

「プ、プリキュアになれない!」

「これは一体!」

せつなが、舞が、思わず両腕を見つめ、プリキュアに変身出来ない事に驚愕した。シャックスは再び笑い出し、



「ククククク、だから言ったでしょう？色々細工をしたってねえ．．．此処は魔空間と言いましてね！魔界と人間界の狭間と言えば分かりやすいでしょうか？さっきの霧は、魔空間へと繋ぎ、光の力を封じる結界の中にあなた方を閉じ込めたと言う訳です！キュアマーチのように、すでにプリキュアに変身して居れば別ですが、今のあなた方は、鳥籠に捕らわれた鳥そのもの．．．飛ぶ事も出来ず、ただ喚いているしか無いという事ですよ!!」

「何ですって!?!」

「プリキュアになれない私達じゃ．．．」

シャックスの説明を聞き、アコと真琴が悔しげな表情を浮かべ、それを見たシャックスはニヤニヤすると、

「そう言う事です！更に．．．」

シャックスの声を合図にしたかのように、七色ヶ丘中学校の空に亀裂が走ると、赤、青、黄、緑、紫、茶、そして黒色の身体を持った、七匹の巨大な大蛇が出現して、魔空間の中に捕らわれた七色ヶ丘中学校の空を飛び回った。

ソードとアン王女を除いた一同の顔は、見る見る青ざめた．．．

一同の脳裏に、バッドエンド王国に現われた巨大な大蛇の光景が思い出されてくる。キャンデイも思い出したのか、震えながらみゆきにしがみついた。みゆきはキャンデイ

を安心させるように抱きしめながら、

「あ、あれは、バッドエンド王国に現われた……」

「ええ、大蛇!」

「しかも、七体も居る何て!？」

みゆきの声にはのりも険しい表情で同意し、奏は七体も居る事に焦りを浮かべた。シャックスは、右手の人差し指を天に掲げ、

「あなた方の返答次第で、この七体の大蛇が、あなた方が此処で捕らわれている間に、街の人間共を喰らい尽くす事も可能何ですよ!」

「卑怯者!」

ラブが悔しそうにシャックスを罵るも、シャックスは悦な表情で悶え、

「良いですよ!その屈辱に塗れた表情……ゾクゾクしてきます!!何、私に忠誠さえ誓って頂ければ、後は、あなた方は考える事など不要……私が開発したある装置で、私の命令通りに動く兵隊として活躍させてあげますよ!!」

「そ、そんな!?!みんな……本当にゴメン」

マーチは、力なくその場にヘナヘナへたり込んだ。マーチは家族を人質にされ、シャックスからプリキュアをこの場を集める事だけを指示された。悩み抜いたマーチは、みんなならきつと何とかしてくれる事を信じ、半ば縋る心で一同をこの場に呼んだ

事が、結果的に一同を、自分と同じような苦悩をさせる事になり、マーチの心は折れ掛かって居た。マーチの瞳から、止め処なく涙が溢れ、ただ一同に詫び続けた。みゆきは悲しそうな表情を浮かべ、

「マーチ、泣かないで！」

「マーチ、あなたが気にする必要は無いわ！」

「そうだよ！もし私が同じ立場でも、同じ事をしたと思う・・・」

泣き続けるマーチを慰めるように、みゆきが続いて、ゆりとあゆみもマーチを庇った。

なぎさはキツとシャツクスを睨み付け、指を指すと、

「悪いのはあんたよ！マーチは約束を守った・・・マーチの家族を返して!!」

「返す!?!まだあなた方の返事を聞いてませんしねえ・・・これ以上時間を稼がれても、私も迷惑ですから、直ぐに決断するようにして差し上げましょう・・・大蛇、人間界に出向き、人間を・・・喰らってきなさい!!」

「な、何やと!?!」

「止めてええええ！」

シャツクスは、上空を飛び回る大蛇に指示を出すと、あかねが驚き、やよいが悲鳴を上げた。

その時、真夏の暑さが嘘のような冷気が辺りに漂うと、大蛇は見えないバリアに阻ま

れたかのように、七色ヶ丘中学校の敷地から出られなかった。

「こ、これは一体!?!」

動揺するシャックスが周囲を見回すと、一人の人影が近付いて来た。冷気はより一層周囲に漂った。

「よくもなおを．．．．なおを悲しませた報い、このキュアビューティが晴らして見せる!!」

「ビューティ!?!」

マーチが驚きの声を上げる中、シャックスを凍てつく視線で見つめながら、キュアビューティが姿を現わした!

### 5、荒ぶるビューティ

れいかは、再びなおからの電話で、七色ヶ丘中学校に来て欲しい事を告げられた時、なおが、何者かに脅されて居るであろう事を見抜いて居た。幼なじみの直感が働き、れいかはなおを脅して居る人物の正体を、自ら確かめようと行動して居た。れいかは、最悪な事態も想定し、プリキュアに変身して居た事が幸いした。

「ビューティ!」

「姿が見えん思うたら．．．」

「で、でも・・・様子がおかしいよ?」

「ほ、本当!まるで・・・最初に見た時のバッドエンドビューティのようだわ」

みゆき、あかね、やよい、あゆみは、現われたビューティが、何時もと違う雰囲気を感じ出している事に困惑した。ゆりは、今のビューティを見て、嘗て自分が陥った状況、憎しみの心に捕らわれて居る事を悟った。

「ビューティ、駄目よ!憎しみの心で戦っては!!」

ゆりは、ビューティを窘めるように叫ぶも、なおを悲しませ、なおの家族を人質にして、他のプリキュアの仲間達にまで危害を加えようとして居る、シャックスへの憎しみの心で埋まったビューティの耳に、ゆりの言葉は届かなかった。一步一步シャックスに近づく事に、ビューティの表情は険しさを増した。

「クククク、一人だけプリキュアに変身して居るとは予想外でしたが、私に手を出せば、キュアマーチの家族が・・・」

「ヤアアアアア!」

シャックスの言葉が終わる前に、突進したビューティが、驚愕の表情を浮かべるシャックスの顔面に飛び蹴りを放ち、脆くもシャックスが吹き飛んだ。更に攻撃しようとするビューティから、シャックスは距離を取ると、

「き、貴様あ!私の顔を・・・私の顔を蹴りやがったなあああ!!もう許さん!!!キュアマー

チの家族を・・・オークや大蛇の生贄にしてやるううう!!!」

シャックスは右目を怪しく輝かせると、オークの森の側に、気を失って倒れて居る、とも子、はる、ひなの姿が現われた。その瞬間、オークの森の奥から、無数の獣のような咆哮が聞こえだした。

「お母ちゃん!はる!ひな!」

慌てて立ち上がったマーチが助けに向かうも、三人の前には、見えない壁でもあるかのように、マーチは三人に触れる事が出来なかった。更に、上空を旋回する大蛇の側に、柱で縛られ気を失っている大悟、けいた、ゆうた、こうたの姿があった。

「お父ちゃん!けいた!ゆうた!こうたああ!!」

マーチは、気が狂わんばかりに絶叫するも、四人が意識を取り戻す事は無かった。より一層辺りに冷気が立ち上り、

「どれだけなおを苦しめれば・・・許さない!絶対に許さない!!」

ビューティの殺気に、思わずシャックスは後退り、泣き叫ぶマーチを呼ぶと、

「キュアマーチ!キュアビューティを殺せええ!!そうすれば、お前の家族を返してやるぞ!!さあ、早くしろ!!オークは、お前の母と妹に気付いたぞ?森の中に浚われればどうなるか・・・分かってるよなあ?キュアマーチ!!目の前で家族が、生贄にされるのが見たいかああああ!!」

オークの森から近付いて来る獣の声が、上空を旋回する七匹の大蛇の雄叫びが、マーチを精神的に追い込んで行った。

「ハツハツハツハツ」

マーチはその場にしゃがみ込むと、まるで呼吸の仕方を忘れたかのように過呼吸になり、荒い呼吸を繰り返した。

「マーチ……」

「もう、もう見て居られないわ」

みゆきの目に涙が浮かび、舞は思わず顔を背けた。咲も思わず視線を逸らし、シャツクスを睨み付けると、

「な、何て奴なの!?!」

「助けに行きたいですけど、この結界から出られなきゃ、私達プリキュアにはなれませんし……」

うららも悔しそうにキュアモを握りしめた。満はせつなに話し掛け、

「せつな、アカルンで助けに行けない?」

「さつきから何度か試してるけど……駄目だわ!」

満に聞かれたせつなは、悲しげな表情で首を振って無理だと答えた。一同に落胆の溜息が起こった……

（こんな事なら、ミラクルドラゴングレイブを、トランプ王国に戻すんじゃないや無かった：）  
アン王女も悔しげな表情を浮かべながら、ミラクルドラゴングレイブを、シロップに頼んでトランプ王国に戻した事を後悔して居た。えりかは、髪を掻きむしりながら変顔を浮かべ、

「ああ、もう！こんな時こそ神様の出番でしょうがああ!!」

「えりか！神様だつて忙しいでしょうし・・・」

「八つ当たりは良く無いよ！」

「でもさあ・・・」

「あいつがさつき、此処は人間界と魔界の狭間だつて言つてたでしょう？いくら神様でも、近づけないのかも知れない・・・」

そんなえりかを、沈痛な表情をしたつぼみといつき、そして美希が窘めた。悲しげな表情でエレンとキャミーを見たハミイは、

「セイレーン！キャミー！何とかならないニヤ？」

「何とかしたいのは山々だけど・・・」

（ベレル様！聞こえますかニヤ!?ベレル様をお願いしますニヤ!）

「キャミー!?!」

キャミーが、首輪にぶら下がった小型の水晶を握りしめて、ブツブツ呟き始め、エレ



ンとハミイは少し驚きの表情を浮かべながら見守った。過呼吸するマーチを見たビューティは、ジロリとシャツクスを睨み付け、

「これ以上なおを・・・苦しめるならああああ！プリキュア！ビューティブリザー・・・」  
「ヒイヒイ！お、大蛇いい！！キュアマーチの家族を喰らえええええ！！」

ビューティに追い詰められ、無様にシャツクスが怯えるも、大蛇にマーチの家族を喰らうよう指示を出すと、ハツと立ち上がったマーチは、慌ててビューティに飛びつき、ビューティブリザーを止めさせると、

「れいかー！止めてえええええ！！」

それでも、何時もの冷静さを失って居たビューティは、シャツクスに攻撃を加えようとした時、かれんの叱責が飛んだ！！

「ビューティ！冷静になりなさい！！迂闊に攻撃しては、マーチの家族が危険な目に遭うだけよ！！ビューティ、憎しみの心を捨てなさい！！今、マーチを救えるのは・・・あなたしか居ないのよ！！」

マーチを救えるのはあなたしか居ない・・・

かれんの発したその言葉が、木霊のようにビューティの心に響いた時、ビューティはハツと我に返ったようにマーチに気付き、

「なにおっ？」

「お願い……このままじゃ、あたしの家族が……お願い、れいか!!」  
「なお……ゴメンなさい! 私とした事が……」

我に返ったビューティは、マーチを抱きしめ謝罪し、マーチはビューティに謝りながらボロボロ泣いた。それを見たシャックスは、口元をニヤリとさせ、

「そうです! それで良いんですよ!! さあキュアマーチ、そのまま私に攻撃したキュアビューティを……倒しなさい!!!」

シャックスの非情なる命令が、再びマーチへと告げられた!

第百四話：シャックスの罠

完

## 第百五話：三つの誤算

1、キュアマーチVSキュアビューティ

十二の魔神の一人、シャックスに家族を人質に取られたマーチは、手も足も出せず、シャックスの要求を飲み、なぎさ達一同を七色ヶ丘中学校の校庭へと集めた。シャックスの罠で、プリキュアに変身出来ない一同は窮地に陥るが、駆け付けたビューティによつて、状況は改善されると思われたが、シャックスの非情なる命が、再びマーチに発せられた……

「どうしました!? 私は、この私を怒らせたキュアビューティを・倒せと命じたんですよ？」

「クツ!?!」

シャックスに命じられても、マーチは拳を握りしめ、悔しげな表情を浮かべて居た。物心ついた頃からの幼なじみであるビューティと戦う事など、マーチには出来なかつた……

かれんの一言で冷静さを取り戻したビューティは、周囲を見回し、仲間達が捕らわれて居る結界、そして、なおの家族が捕らわれて居る姿を見ると、

（きつと何かカラクリがある筈！それを見破れば、皆さんを結界から救う事も、なおのおば様達を救う事も出来る筈、でも迂闊な行動を取れば、なおのおば様達を・・・）

ビューティは、頭の中で素早く考えを纏め上げると、意を決してマーチに話し掛け、  
「なお・・・あの男の言う通りにして下さい！」

「そんな、れいかと・・・」

「じゃないと、なおの家族が・・・私に考えがあります！だから・・・」

「れいか・・・分かった！」

互いにアイコンタクトし飛び退いた二人、ジリジリ距離を詰めると、互いに突進し、マーチの素早い蹴りがビューティに炸裂し、ビューティはすんでの所でそれを見切り、マーチの蹴りを躲し続ける。

「ヒヤアツハハハハ！そう、それで良いんですよ！キュアマーチ!!」

シャックスは、自らの命令通り戦い始めた、マーチとビューティを見て狂気の笑い声を上げ、なぎき達一同は、戦い始めたマーチとビューティを見て動揺し、みゆきは悲しげな表情を浮かべた。みゆきは息を大きく吸い込むと、

「マーチ！ビューティ！止めてええ!!仲間同士で戦う何て・・・」

「待つて、みゆき！ビューティの目を見てみて!!ビューティは、先程と違い冷静さを取り戻して居るわ・・・おそらく、何か考えがあるようね？」

かれんは、ビューティの目が正気を取り戻して居る事に気付き、みゆきを止めた。キヤミーはコクリと頷き、

「時間を稼いでくれるニヤら、好都合ニヤ！その間にベレル様が・・・」

「キヤミー、あなたも何か策があるの？」

エレンの表情がパツと明るくなり、キヤミーに問うと、キヤミーは再びコクリと頷き、「キヤミーのご主人様のベレル様に、この状況を報告してみたニヤ！ベレル様は、禁じられたオークの森を利用した、シャックス様の行為にお怒りになられ、ファレオ様を連れて、オークの森周辺を調べて見るって言ってくれたニヤ!!もしシャックス様が何かしてゐるなら、きつとベレル様達が気付いてくれるニヤー!!」

「本当!?!ならば、あの男に気付かれないように祈るだけね・・・」

「でもオークは・・・あそこに横たわる三人に気付いたから、時間が無いのは確かニヤ!」  
ほのかは、マーチとビューティの戦いを見守るシャックスを、険しい表情で見つめ、キヤミーは、オークの森からけたたましい雄叫びと、近付いて来る足音が聞こえて来る事に恐怖した。

(ベレル様あ・・・急いで下さいニヤー!)

キヤミーは、この窮地を脱する事が出来るかも知れない、ベレルからの朗報を待ち焦がれて居た・・・

戦い続けるマーチとビューティは、校庭を走り回り、校舎裏に移動して再び戻って来  
る。シャックスは眉根を顰め、

（何かおかしいですねえ!?)

「キュアマーチ！何をもちもたしてるんですか？オークは直ぐそこまで近付いて居るん  
ですよ？さつさとキュアビューティを倒してしまいなさい!!」

少しイライラしながら、シャックスがマーチに指示を出すと、ビューティの目は輝き、  
（かなりイライラして居るようね！私の狙い通りなら・・・）

「なおー！」

ビューティは、小声でマーチに声を掛けると、戦い合う素振りを見せながら、マーチ  
に何かの策を授けた。ビューティは、瞬時にマーチにアイコンタクトすると、マーチは  
大きく後方に飛び、ビューティから距離を取った。マーチの周囲で風がざわめき、  
ビューティの周囲に冷気が立ち上る。

「プリキュア！マーチシユ〜ト!!」

「プリキュア！ビューティブリザ〜ド!!」

マーチとビューティ、二人は互いの必殺技を放ち、なぎさ達一同を驚かせた。だが、二  
人が同時に攻撃を躲すと、マーチシユ〜トは青色の大蛇に、ビューティブリザードは緑  
の大蛇に命中し、二匹の大蛇が怒りの雄叫びを上げた。

## 2、シャックスの誤算

互いの必殺技を躲し、大蛇に命中させたマーチとビューティ、攻撃を受けた二匹の大蛇は烈火の如く怒り、マーチとビューティを追い回すと、その風圧を受け、マーチの家を覆っていた結界に罅が入り、シャックスは驚愕した。

「な、何て事を!? 大蛇! 止めなさい!! 私言う事が・・・ヒイイ!!」

シャックスの命令など我関せずとばかり、低空飛行で動き回る二匹の大蛇に、シャックスは、慌てて頭を抑えて倒れ込み、悲鳴を上げた。

（そ、そうか! キュアマーチとビューティは、最初からこれを狙って・・・おのれえええ!!）

シャックスの右目が赤く輝くと、

「キュアマーチ! よくも私を欺きましたねえ・・・母親と妹達が、オークの生贄にされる様を、そこで指を咥えて見て居るがいい!!」

シャックスの言葉を表すかのように、オークの雄叫びと地響きが、より一層とも子は、ひなが倒れて居る近くで聞こえて来た。キャミーは顔から大量の汗を流して困惑し、

「ま、不味いニャー!」

「クツ!? マーチー! ビューティー! 急いでお母さん達を助けて上げてええ!!」

キャミーの声を聞き、エレンがマーチとビューティに声を掛けるも、二人は青と緑の大蛇の攻撃を躲す防戦一方で、近づけなかった。キャミーは大きく息を吸い込むと、大声を張り上げて大蛇達に話し掛け、

「大蛇、止めるニヤ!! 大蛇は、シャックス様に利用されてるだけニヤ!!」

『シャアアアア!!』

シャックスに利用されているというキャミーの叫びに、大蛇達が戸惑った様子を見せると、シャックスは大慌てで、

「お黙りなさい! 貴様は、ベレルの使い魔!? 何故ここに? . . . 大蛇、そのような使い魔の戯れ言など、聞く必要はありませんよ!! 今、お前達の主は . . . この私何ですから!!!」

「お願いだからそこを退いて! このままじゃ、お母ちゃん達が . . .」

「大蛇! お願い!!」

マーチが、ビューティが、敵である大蛇に必死に声を掛けるも、そんな二人を嘲笑うかのように、一匹のオークが、シャックスの肉眼で確認出来る距離にやって来た。豚とゴリラが合わさったような醜い容姿が、獲物を見付け、胸を両手で叩いて喜びを現わし、とも子、はる、ひなへと迫って来た。

「ビヤアツハハハハ! そこで母親と妹が生贄になるのを、見物して居るが良い!! 大蛇!



お前達の主であるこの私が命じます・・・その二人を足止めしなさい!!」

シャツクスは、大蛇達に改めて指示を出し、緑と青の大蛇は、シャツクスに言われるまま、マーチとビューティを足止めするべく行動する。

「クツ!? なお、行つてええ! 大蛇は私が抑える!!」

「れいか・・・お願い!」

ビューティは、自らが二匹の大蛇の囷となり、マーチを三人の救助に向かわせようとするも、マーチの前に新たな赤い大蛇が立ち塞がり、マーチの行く手を阻んだ。

「そこを退いてえええ!」

マーチはそんな大蛇にも怯まず、母と妹達目がけ駆け続けるも、赤い大蛇は口から火炎を吐き、マーチの行く手を炎で塞いだ。

「そんなああ!?! お母ちゃん! はる! ひなああ!!」

「ヒヤアツハハハハハ! 良いですよ、大蛇いい!!」

『止めてえええ!!』

マーチが絶叫し、シャツクスの嘲笑が当たりに響いた。その場に居た一同が悲鳴を上げたその時、森は突如消え始め、とも子に手を伸ばしたオークの身体事消え去った。

「なっ、何だ?! 一体どうなっている? どうして、オークの森が?」

何故オークの森が消え去ったのか、シャツクスには理解出来なかった。キャミーが嬉

しそくに叫び、

「ベレル様ニヤァー！ベレル様が間に合ってくれたニヤァー!!」

「ベレルだど!?!: : : そうか、貴様がベレルに: : : おのれええ、魔界の裏切り者がああああ!!」

シャックスが激高し、キャミーが思わず後退った。そんなキャミーを庇うように、エレンを始めとした一同が、シャックスを睨み付けた。その時、キャミーが首に掛けていた水晶が輝くと、

「裏切り者は貴様だ、シャックス！キャミー、何とか間に合ったようだな？」

「ベレル様あ！ギリギリのタイミングでしたニヤァ!!」

「ウム、間に合ったのなら良かった: : : シャックス！魔王ルーシエス様が禁じているオークの森を、よりにもよって私利私欲の為に利用するとは: : : このベレル、断じて許さん！本来ならば、拙者自ら出向いて貴様を成敗するところだが: : : プリキュア達よ、この者の処遇、貴公達に任せる!!」

ベレルは、シャックスの処遇をプリキュアに託すと、キャミーが掛けていた水晶の輝きが消え去った。動揺して居たシャックスの隙を付き、マーチはひび割れていた境界を破壊し、横たわるとも子、はる、ひなに駆け寄った。

「お母ちゃん！はる！ひな！良かった: : : 三人共無事で良かったああ!!」

マーチは、無事な姿を見て涙を零しながら安堵した。なぎさ達一同も、ビューティもホツと安堵したものの、それを見たシヤツクスの顔は醜く歪み、

「おのれえええ！こうなれば、キュアマーチ！貴様の家族の一人でも殺さなければ、私の気が晴れん……大蛇いいい！キュアマーチの家族を……喰らええええ!!」

シヤツクスの狂気を帯びた絶叫が、大蛇に向けて発せられた。赤、黄、茶、紫、黒の大蛇の視線が、柱に括り付けられた大悟、けいた、ゆうた、こうたに向けられた。獲物を肉眼に捕らえた大蛇は、ゆつくりと大悟達に近付いて行くが、四人は気を失ったままだった。

「お父ちゃん！けいた！ゆうた！こうたあぁー！」

何とか母と妹達は救えたものの、今度は父と弟達の窮地を見せ付けられ、顔を真っ青にしたマーチは、家族の名を絶叫した。ビューティは、瞬時にアイスソードを作り上げると地面に刺し、なぎさ達一同をチラリと見るや、

「皆さん！緊急事態ですので、皆さんまで巻き込んでしまうかも知れませんが、お許し下さー!!」

「ビューティ！私達の事は気にせず、マーチの家族を救って上げて!!」

一同を代表したかのように、かれんがビューティに伝えると、ビューティは力強くコクリと頷き、

「ハイ！これ以上おじ様達に手出しはさせない!!プリキュア！ビューティブリザード・フリージング!!」

ビューティは、嘗てバッドエンド王国を凍らせた時のように、アイスソードを通じ、ビューティブリザードを放つと、冷気は魔空間に捕らわれた七色ヶ丘中学校を覆い、氷のバリアが、大悟達に襲い掛かるうとしていた大蛇を防ぎ、シャックスは地団駄踏んで悔しがった。

シャックスに取つて、二つの誤算が起こつて居た・・・

一つ目は、この場にベレルの使い魔キャミーが居た事!

二つ目は、れいかがビューティに変身してこの場に現われた事!

「おのれえ！またしても、私の計画がああ・・・キュアビューティめええ！赤き大蛇よ！小癩な氷のバリアなど、溶かしてしまいなさい!!」

シャックスが櫛を飛ばすと、赤き大蛇は言われる迄も無いと言いたげに、大悟、けいた、ゆうた、こうた目掛け、大きく息を吸い込んだ口から、黒炎を吐いた。黒炎は、先程マーチの行く手を遮った火炎とは、比べものにならない業火で、ビューティが放つた氷のバリアを溶かして行つた。ビューティの顔から汗が流れ始め、  
(クッ!?!このままでは持たない!)

ビューティは、赤い大蛇の放つた黒炎の威力に動揺した。マーチも大悟達の下に向か

いたかったが、シャックスは、隙あらば直ぐにでもとも子達を再び手中に収めようと狙って居て、マーチは動くに動けなかった・・・

「アア、もう！私達がプリキュアになれば・・・」

「この結界さえ消えれば・・・」

なぎさとほのかは、プリキュアになれない事で焦るも、見えない壁に阻まれたなぎさ達に、為す術は無かった・・・

赤い大蛇が放った黒炎が、氷のバリアを砕き、こうたが張り付けられて居た、柱の下側を一瞬で消滅させ、こうたの身体が宙に舞った。それを見た紫の大蛇が、口を大きく開いて、こうたを飲み込もうと動き出した。

「こうたあああ！」

「こうたちやん！」

「大蛇！駄目ニヤアアアア!!」

「先ず一人・・・ヒヤアツハハハハハ！」

マーチとビューティが、悲鳴混じりにこうたの名を叫び、キャミーは大蛇に止めるよう絶叫し、そして、そんな一同を嘲笑うかのように、シャックスの嘲笑が響いた。

その時・・・

七色ヶ丘中学校に強風が吹き荒れ、辺りに霧が立ちこめた！

霧が晴れた時、辺りの風景は一変して居た。空には太陽が爛々と輝き、一同を容赦無く日の光が照らし、蟬の聲が辺りに響き渡った。

「バ、バカな!?!ここは、元の人間界・・・どうして?」

動揺するシャックスに取って、三つ目の誤算が起こって居た・・・  
それは・・・

マーチとビューティは、眩しそうにしながらも、こうたの姿を求め、空を見上げた。その二人の視線が、こうたを愛しそうに両腕で抱いた、一人の少女の姿を見た。なぎさもその少女に気付き、みんなに教えるように指を指しながら、

「みんな、あそこ!アハハ、まさか、あの娘が助けに現われる何て・・・」

シャックスもその少女に気付き、険しい表情で睨み付けると、少女も険しい視線でシャックスを睨み返した。

「ま、まだ居たのか!?!プリキュアアアアア!」

「フン!手を出す気は無かったが、あたしはこの子と・・・遊ぶ約束をして居るからな!!」  
『バッドエンドマーチ!』

マーチが、ビューティが、なぎさ達が、顔を綻ばせながら、出現したバッドエンドマーチを見つめた。

シャックスにとつての三つ目の誤算・・・

それは、静観して居たバッドエンドマーチが参戦した事だった！

3、大蛇とプリキュアオールスターズ（その1）

バッドエンドマーチは、上空で飛び回る五匹の大蛇、更にビューティの近くに居る二匹の大蛇をチラリと見ると、

（さて、学校の四方にあった妙な機械を破壊して正解だったようだが、こいつらをこのままにしておいたら、この街は全滅だな・・・ン!?）

バッドエンドマーチは、眼下で変身アイテムを手に握りしめたなぎさ達に気付き、

（成る程、既に戦う準備をしようとしてるようだねえ・・・今回は貸しを作っておいてやるか!）

バッドエンドマーチは、黒き書を頭上に掲げると、

「世界よ！最悪な結末、バッドエンドに染まりな！白紙の未来を、黒き塗りつぶせ!!」

バッドエンドマーチは、七色ヶ丘中学校周辺にバッドエンド空間を作り出した。近くに居た人々が、絶望したかのような表情で座り込み、

「私の計画何て・・・どうせ成功する筈が無い・・・」

シャツクスも、その場で体育座りをして絶望に染まり、バッドエナジーを吸い取られて居たものの、直ぐに我に返り、

「ハッ!?わ、私は何を?」

シャックスはハッと我に返り、辺りをキョロキョロした。なぎさは、困惑顔でバッドエンドマーチを見つめ、

「ちよつとお!何でバッドエンド空間を・・・」

「ブラック先輩!さつさとプリキュアにならないと、この蛇達が暴れ回つたらヤバイんじゃないの?東せつな、さつさとキュアパッションに変身して、周囲で絶望してる奴らを避難させてやりな!このままあの巨大な蛇とは、中学校の敷地内だけで戦へ無いだろう?」

「そう言う事!バッドエンド空間を作り上げて、この周辺に人々が寄つて来られないようにしたり、絶望に染まった人々を避難させ、大蛇との戦いに巻き込まないようにしたのね・・・何か言いなりになるのは癪だけど」

「成る程・・・分かつてる!助けに来てくれてありがとう!!みんな!!」

口元に笑みを浮かべたせつなが、感心したようにコクコク頷いたなぎさが、バッドエンドマーチの真意に気付いた。結界が消えた事で、プリキュアになれると確信した一同、なぎさは一同に声を掛けると、一同が頷き返した。

「デュアルオーロラウェーブ!!」

「ルミナス、シャイニングストリーム!!」



「[[デュアル・スピリチュアル・パワーツ!!]]」

「[[プリキュア!メタモルフォーゼ!!]]」

「[[スカイローズ!トランススレイト!!]]」

「[[チェインジ・プリキュア!ビートアップ!!]]」

「[[プリキュア!オープンマイハート!!]]」

「[[レッツツプレイ!プリキュア!モジュレーション!!]]」

「[[プリキュア!スマイルチャージ!!]]」

「[[プリキュア!ラブリンク!!]]」

一同の身体は光りに包まれ、プリキュアへと変身した。パッションは、直ぐにアカルンを使い、大悟達をマーチの側へとテレポートさせ、バッドエンド空間内で絶望する人々を避難させた。シャックスは、悉(ことごと)く計画が失敗した事に激しく動揺し、(何と言う事ですか!?!私の計画が・・・このままオメオメ魔界に戻れば・・・)

シャックスは、このまま何の手土産も持たずに、魔界に逃げ帰っても処刑されるだけだと悟って居た。

「大蛇いい!プリキュアの相手はしなくていい!!この近辺の人間共を・・・喰らい続けろ!!!」

シャックスの狂気の叫びが木霊した時、

「残念でした！バッドエンドマーチが、あんたの魂胆に気付いて、パッションの力でみんな避難済みよ！みんな、行くよ!!」

ブラックの合図と共に、一同がチーム事に散り、七匹の大蛇へと向かって行こうとすると、キャミーが一同を慌てて呼び止め、

「待つて欲しいニヤ！出来るなら、大蛇は追い返す程度にして上げて欲しいんだニヤ……」

「と言われても、大蛇相手に手加減出来るかどうか……」

ブルームは、空を飛び回る大蛇を見て困惑気味に呟くも、キャミーはもう一度一同に頼み込むように、

「本来、この七匹の大蛇は、緑の大蛇はベレル様、青の大蛇はニクス様、紫の大蛇はリリス様、赤の大蛇はアロン様、黄の大蛇はバルバス様、黒の大蛇はミノタウロス様、茶の大蛇はオロン様の配下なのニヤ！此処に七匹居るって事は、半ば無理矢理呼ばれたんだと思うのニヤ！だから……」

「迂闊に倒せば、他の魔神達の怒りを買うかも知れないって事？」

「ミューズが確認するようにキャミーに聞くと、キャミーはその可能性も有り得るところだと頷いた。」

「分かった！マーチの恩人の一人であるあなたの頼みじゃ……断れないよ！」

「ありがとうニャー！」

ドリームがニツコリ微笑み、しゃがみ込んでキャミーの頭を撫でながら話し掛けると、キャミーは嬉しそうに尻尾を振った。一同がチーム事に大蛇目掛け走り出し、ホワイトはルミナスに、ブラックはソードに声を掛け、

「ルミナス！あなたはマーチの家族を守って上げて!!」

「分かりました！」

「ソードは、私達と一緒に来て！」

「ハイ！」

ルミナスとソードは、ホワイトとブラックの言葉を聞き入れた。ルミナスがマーチの側へとやって来ると、

「マーチ、ご家族は私が責任を持ってお守り致します！」

「ルミナス・・・ありがとう！」

「おい、この小つこいのも頼むぜ！」

バッドエンドマーチは、七匹の大蛇を威嚇しながら、上空からゆつくり下降して来ると、こうしたの事もルミナスに託した。マーチは、降りて来たバッドエンドマーチを見ると、飛びついて抱き付き、バッドエンドマーチを驚愕させる。

「ありがとう！あんたが来てくれなかったら、こうだが・・・」

「べ、別にあんたの為じゃ無いよ！」

「うん・・・でも、ありがとう！」

マーチは、涙混じりの笑みをバッドエンドマーチに浮かべると、バッドエンドマーチは少し照れた表情を浮かべるも、

「ほ、ほら、さっさと行きな！あんたの仲間が、緑の蛇と戦ってるぜ？」

「うん！」

マーチは、バッドエンドマーチに頷くと、ビューティと合流したハッピー達の側へと駆け出した。

(ウウウウウ!? やつらまでプリキュアになっては・・・こ、此処は大蛇に任せて・・・)

シャックスは、先程絶望した影響からか、それとも夏の暑さの影響か、顔から大量の汗を流し、大蛇と好戦し始めたプリキュア達の視界から、ゆっくり離れようと試みるも、一人の険しい視線が、その行為を逃さなかった。疾風がシャックスの行く手に立ち塞がり、

「よう！何所に行くんだ？あたしの相手が居なくてなあ・・・少し遊んでくれよ？」

「クツ!? 貴様が来なければ、キュアマーチの弟だけでも・・・」

「残念だったなあ！お前はあの子を嘲笑った・・・だから、あたしが此処に居るんだよ!!」

「ヒイヒイ」

シャツクスの行く手を塞いだバッドエンドマーチの迫力に、思わずシャツクスは尻餅を付き、無様に怯えた。

プリキュア達は、七色中学校敷地内や周辺で、七匹の大蛇と交戦状態に突入した。

七匹の大蛇には属性があり、黒の大蛇が闇を、赤の大蛇が火を、青の大蛇が水を、紫の大蛇が氷を、黄の大蛇が雷を、緑の大蛇が風を、茶の大蛇が土を、それぞれ現わして居た。

ブラック、ホワイト、そしてソードは、黒い大蛇と・・・

ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディは、赤い大蛇と・・・

プリキュア5とミルキイローズは、紫の大蛇と・・・

ピーチ、ベリー、パイン、パッションは、黄の大蛇と・・・

プロツサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトは、青の大蛇と・・・

メロディ、リズム、ビート、ミューズは、茶の大蛇と・・・

そして、スマイルプリキュアの六人は、緑の大蛇と戦い始めた！

三人で黒い大蛇と戦うブラック、ホワイト、ソード、黒大蛇の口から、煙幕のように黒煙が吐かれ、周囲の状況が見えにくくなる。ホワイトは、ブラックとソードに声を掛け、

「ブラック！ソード！気を付けて、何所から攻撃してくるか分からないわ!!」

「だったら、三人で背中合わせになって・・・」

「それも手ですね!」

ブラックの提案にソードも同意し、背中合わせになった三人の側で、大蛇が地上で這い回る不気味な音が聞こえて来る。ホワイトは耳を敬て、大蛇の気配を探ったが、大蛇は既に、蝮局（とぐろ）を巻くときのように、円を描くようにジワジワと三人を包囲して、締め付けようとして居るようにホワイトには感じられた。

（長引かせれば、私達が不利かも知れない・・・）

「ブラック、バッドエンド王国で戦った大蛇と同程度だとすれば・・・」

「そっかあ!じゃあ、一気に行く!?!」

「エエ!ソード、少しの間時間を稼いで!!」

「分かりました!閃け!ホーリーソード!!」

ソードはその場でジャンプし、自分達を包囲して居る周辺に、右手から無数の剣形のエネルギー弾を大蛇に放った。

ブラックとホワイトは、ソードが黒い大蛇を牽制してくれて居る間に手を繋ぎ、アイコンタクトした二人は、

「ブラック、サンダー!」

「ホワイトサンダー！」

「プリキュアの、美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「プリキュア！マーブルスクリュー・・・」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて前に突き出すと、

「マックス！！」

二人の掛け声と共に、必殺技マーブルスクリューマックスが、目の前に居るであろう、黒い大蛇目掛け放たれた。ソードのホーリーソード、そして、ブラックとホワイトのマーブルスクリューの前に、黒煙は消し去られ、黒き大蛇が奇声を上げる姿が見えた。

「シヤアアアア！」

黒の大蛇の脳裏に、バルガンの大蛇だった銀の大蛇の言葉が浮かんで来た・・・

嘗て、黒と白のプリキュアと呼ばれる者と戦って、酷い目に遭ったと言う言葉を・・・

「シヤア！シヤアアア！」

大蛇は、お前達が銀の大蛇を倒したのかとブラックとホワイトに聞くも、当然二人が大蛇の言葉を分かる筈も無く、大蛇は困惑した。それを見たブラックとホワイトの繋いだ手に、更に力が込められる。

「ヤアアアアア！！」

二人の掛け声と共に、黒と白の稲妻を受け、黒き大蛇は吹き飛び藻掻くと、黒き大蛇は慌てふためきながら空中に逃れた。このまま止めをさされると思った大蛇だったが、「キャミーと約束したからねえ……このまま魔界に帰るなら、私達もう手を出さないよ！」

「仕方が無かったとはいえ、バッドエンド王国で、あなたの仲間を倒してしまった事は謝るわ！」

ブラックとホワイトが、これ以上攻撃する意思が無いと知った大蛇は、ジイイとブラック、ホワイト、そしてソードの顔を見ると、黒の大蛇は、銀の大蛇から聞いて居た話と違い、ブラックとホワイトからは悪意が無いと知った。大蛇はコクリと頷くと、

「シヤア！」

「良かったあー！どうやら分かってくれた見たい!!」

三人は顔を見合わせてホッと安堵し、黒の大蛇は空間に歪みを作り、魔界へと帰って行った……

大蛇が吐いた紅蓮の炎が、ブルームとイーグレットに襲い掛かる。二人は手を繋ぎ合いい、バリアを張って耐え続けるも、二人の周囲を炎の海が襲い掛かる。

「クツ!!」



「このままじゃ不味いわ!」

夏の暑さの影響も加わり、暑さで二人の意識が遠のき始めて来る。

「ブルーム! イーグレット!」

ブライトは、足下に力を蓄え、一気に上空高くジャンプすると、赤い大蛇の顔付近で閃光弾を放ち、大蛇の目を眩ませる。

「ハアアアア!」

その間隙をぬい、ウインデイが風を巧みに使って、炎の勢いを止めた。ブルームとイーグレットに合流したブライトとウインデイは、

「二人共、大丈夫?」

「バラバラに戦っても、効果はあまり期待出来ないわね」

「だったら、あの時のブラックとホワイト、ルミナスのように・・・」

「そうね! 私達も力を合わせましょう!」

ブルームの提案にイーグレットも同意し、頷き合った四人、ブルームはハート型の、ブライトは星型のリングを、それぞれベルトに装着し、イーグレットはハート型の、ウインデイは星型のリングを、それぞれブレスレットに装着した。

四人が見つめ合い、大きく頷きあうと、ブルームとイーグレット、ブライトとウインデイがそれぞれ手を繋ぎ、

「精霊の光よ！命の輝きよ！」

イーグレットとウインデイが同時に叫び、

「希望へ導け！二つの心！」

それに応えるように、ブルームとブライトが同時に叫ぶ！

「プリキュア！スパイラル・ハート……」

「プリキュア！スパイラル・スター……」

精霊の力を凝縮させた四人のプリキュアが、息を合わせて同時に叫び、

「……スプラ……ッシュ……」

四人が手を前に突き出した時、凄まじい輝きが赤い大蛇目掛け飛んでいった。赤い大蛇は、大きく息を吸い込み、ビューティが作り出した氷のバリアをも溶けさせた黒炎を吐いて迎え撃った。激突する両者の技、

「……ハアアアアアアア……」

更なる四人の雄叫びが、必殺技の威力を高め、黒炎を押し戻し、赤い大蛇の身体に直撃させた！

「キシヤアアアアア……」

吹き飛んだ大蛇の前に佇んだ四人、ブライトとウインデイが先ず大蛇に話し掛け、

「まだ私達と戦うのかしら？」

「このまま帰るなら、見逃してあげても良いわよ?」

「シャア!?!」

ブルームは、驚く赤の大蛇に、少し悪そうな顔を浮かべると、隣に居るイーグレットを指差し、

「ねえ、大蛇!このお姉さんを怒らせると・・・怖いよおお?おとなしく帰った方が良いんじゃないかなあ?」

「エッ!?ブルーム、何を言ってる・・・」

「シャア!?!」

赤の大蛇は、顔から大量の汗をかきながらイーグレットを見た。とても怖そうには見えなかったが、こういうタイプを怒らせたなら怖い事は、シーレインやニクスを見て知って居た。赤い大蛇は、尻尾でバランスを取りながら、イーグレットの前で直立不動になると、

「シャア!?! シャアアアア!!」

赤い大蛇は、イーグレットにペコペコ頭を下げると、上空に浮かんで魔界へと逃げ帰った。困惑したイーグレットは、ブルームを恨めしそうに見つめ、

「ブルーム!変な事言わないで!!大蛇に誤解されちゃったじゃない!!」

「まあまあ、大蛇も帰ってくれたし、結果オーライって事で!」

「もう！誤魔化してええ!!」

「フフフフフ」

ブライトとウインディは、そんな二人を見て思わず笑い合った・・・

「プリキュア！シューティング・スタ〜!!」

咆哮する紫の大蛇に対し、真つ先に攻撃を仕掛けたのはドリーム、腕をX字に組み、自らが光と一体化して、大蛇の顔面目掛け突撃した。

「プリキュア！サファイア・アロー!!」

「プリキュア！ファイヤーストライク!!」

ドリームを援護するように、アクアがサファイアアローを連射し、ルージュが炎のボールファイヤーストライクを紫の大蛇目掛け放った。ピンクの流星が紫の大蛇の頭部に体当たりするも、ドリームの身体が弾き飛ばされる。紫の大蛇は、口を大きく開けドリームに狙いを定めるも、

「やらせないわ！プリキュア！エメラルドソーサー!!」

ミントがドリームを守るように、エメラルドソーサーを投げつけ、紫の大蛇が発した、大量の氷の粒を浴びせて敵を凍り漬けにする、アイスブレスを辛うじて防いだ。

「キシヤアアア!!」

得意技を防がれた大蛇は動揺し、再び大きく息を吸い込むと、

「そうはさせません！プリキュア！プリズムチェ〜ン!!」

ジャンプしたレモネードは、大蛇の口目掛けプリズムチェーンを投げつけ、大蛇は鎖を解こうと藻掻き始めた。更にローズもジャンプし、大蛇の口目掛け急降下すると、

「これはオマケよ！ハアアアア!!」

ローズは、大蛇の口目掛け全体重を乗せたパンチを食らわせると、大蛇の脳に衝撃が走り、地面に倒れ込んだ。今をチャンスと見たプリキュア5とローズは、ココとナッツに合図を送った。二人は頷き、

「プリキュアに力を！」

「ミルキイローズに力を！」

ココとナッツの頭上に、パルミエ王国の王冠が現われ、プリキュア5とローズに力を与える。

プリキュア達に更なる力が与えられると、プリキュア5が叫ぶ！

「クリスタルフルーレ！希望の光!!」

「ファイヤーフルーレ！情熱の光!!」

「シャイニングフルーレ！弾ける光!!」

「プロテクトフルーレ！安らぎの光!!」

「トルネードフルーレ！知性の光！！」

プリキュア5の手に、キュアフルーレが装備される。そして、ミルキイミラーがローズの手に現われる。六人のプリキュア達がアイテムを構えると、

「邪悪な力を包み込む、煌くバラを咲かせましょう！ミルキイローズ！メタル・ブリザード！！」

「5つの光にー！」

「！！勇気をのせてー！！」

「！！プリキュア！レインボー・ローズ・エクスペロージョン！！！！」

青い薔薇の吹雪が、五色の薔薇が合わさり虹色の薔薇が、紫の大蛇目掛け飛んで行く。大蛇はようやく光の鎖を外し、再びアイスブレスを放ったものの、プリキュア5とローズの必殺技を抑える事は出来ず、大蛇は焦り始める。ハツとしたドリームは、慌てて一同に話し掛け、

「いつけな〜い！キャミーと約束してたあ！！」

死を覚悟した紫の大蛇だったが、突然青い薔薇と虹の薔薇が消え去り、紫の大蛇がキョトンとして居ると、ミントが大蛇に話し掛け、

「あなたは、あの人に無理矢理悪い事をさせられたんでしょう？このまま魔界にお帰りなさいー！」

「シャアアア!？」

「このまま帰るなら、あたし達はもう手を出さない!」

「約束するわ!」

「バイバイ!!」

ルージュとアクアがこのまま帰るならもう攻撃しないと伝え、ドリームとレモネードが大蛇に手を振り始め、再びキョトンとした大蛇は、戦う意欲を無くしたのか、魔界へと去って行った。

七色ヶ丘中学校の頭上で、青の大蛇と空中戦を繰り広げるのは、ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトのハートキャッチプリキュアの四人だった。四人はマントを羽織り、自在に飛び回る大蛇目掛け攻撃を仕掛けるも、有効打は与えられなかった。

「アア、もう・・・デザートデビルじゃ無いんだからさあ!」

マリンが頑丈な大蛇を見て、嘗て戦った巨大なデザートデビルの事を思い出して愚痴り、ブロッサムとサンシャインに苦笑される。その油断を突き、青の大蛇の口から、滝のような勢いのウォーターブレスを受け、変顔浮かべたマリンに直撃し、目をグルグル回しながら墜落して行った。ブロッサムとサンシャインは、慌ててマリンを救助に向かうも、その二人の背中目掛け、更に大蛇はウォーターブレスを放った。

「そうはさせない！ムーンライト！リフレクション!!」

ムーンライトは、三人の前にバリアを張って大蛇の攻撃を防ぎつつ、もう一枚のバリアに反射させて大蛇に攻撃を跳ね返した。

「キシヤアアアア!?!」

自らの攻撃で水浸しになった大蛇は、何が起こったのか分からないように混乱して居た。その隙に、無事にマリンを救助したブロッサムとサンシャインが、マリンの手を片方ずつ掴み、ムーンライトの側へと戻って来た。お目々グルグル状態から立ち直ったマリンは、

「よくもあたしを水浸しに……海より広いあたしの心も、ここらが我慢の限界だよ!」

マリンは、ブンブン怒りながらマリンタクトを取り出した。マリんに釣られたかのように、ブロッサム、サンシャイン、ムーンライトもタクトを取りだし、

「では、反撃開始と行きましょう!花よ、輝け!プリキュア!ピンクフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、煌け!プリキュア!ブルーフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、舞い踊れ!プリキュア!ゴールドフォルテバスト!!」

「花よ、輝け!プリキュア!シルバーフォルテウエ〜イブ!!」

四人の必殺技が、青の大蛇目掛け飛ぶ、大蛇は大きく息を吸い込み、ウォーターブレ



スで四人の必殺技を打ち消した。

「シャシャシャシャシャ！」

まるで笑って居るような声を発した大蛇だったが、四人の姿は空中から忽然と消えて居た。

「キシヤアアア?!」

大蛇は不思議そうに周囲を見回していると、四人は既に地上に降り、ハートキャッチミラーージュを取り出すと、

「ミラーージュよ、鏡、プリキュアに力を！世界に輝く一面の花・ハートキャッチプリキュア！  
スーパースルエツト!!」

全員が白色の衣装に、羽衣を身に着けたような姿に変わり、四人が一斉にハートキャッチミラーージュを上空に放った。

「花よ、咲き誇れ！プリキュア！ハートキャッチオーケストラ!!」

四人の呼びかけに応えるように、目を閉じた巨大な女神のシルエツトが姿を現わし、四人の叫びと共に行動する巨大な女神のシルエツトから、青い大蛇目掛け愛の拳が振り下ろされた。

「シャアアアアアア?!」

自分を遥かに凌駕する巨大な女神のシルエツトに、大蛇は恐怖の表情を浮かべ、巨大

な女神から愛の拳が振り下ろされ直撃した・・・かに見えたが、愛の拳は、何故か大蛇の直ぐ上でピタリと止まった。大蛇は思わず生唾をゴクリと飲み込み、

「シヤア!?!」

困惑しながら舌をチロチロ出すも、その顔は明らかに恐怖して居た。マリンはドヤ顔を浮かべ、

「どうよ! あたし達がちよちよいと本気出せば、ざつとこんなもんだつて!!」

「このまま魔界に帰つて貰えませんか?」

「出来れば、無駄な争いはしたくないの!」

「さあ、お行きなさい!」

ブロッサム、サンシャイン、ムーンライトにも、魔界に帰るよう促され、しばらく考え込んだ大蛇は、コクリと頷くと、上空に浮かび上がり魔界へと帰つて行つた。

第百五話：三つの誤算

完

## 第百六話：マーチ！怒りのインパクト！！

1、大蛇とプリキュアオールスターズ（その2）

茶の大蛇がその巨体を擦りつけると、震動が地面を伝わり、メロディ、リズム、ビート、ミュージックが思わずバランスを崩した。茶の大蛇は、七色ヶ丘中学校の校庭の砂を大量に吸い込むと、四人目掛けサンドプレスを吐き、砂嵐がスイートプリキュアを襲った。「な、何これ!?目を開けてられない!」

「イヤアン！口に砂が・・・ペッペッ、もう最悪う!!」

メロディとリズムが顔を顰め、ビートとミュージックも腕で目をガードするも、大蛇の尻尾攻撃を受け、四人が吹き飛ばされる。

「「「キヤアアア!」」」

吹き飛ばされて校庭にゴロゴゴ転がるも、四人は直ぐに受け身を取って体勢を立て直した。それを見た茶の大蛇は、再びサンドプレスを吐くも、瞬時にビートが反応し、

「弾き鳴らせ、愛の魂ーラブギターロッドー!」

ビートが、アイテムであるラブギターロッドを取り出すと、ロッドを弾いて正面にバリアを張って、サンドプレスを防ぎ続ける。直ぐにミュージックも加勢し、青色の妖精シ

リーをモジューレにセツトすると、

「シ、の音符のシャイニングメロディ!プリキュア!スパークリングシャワー!!」

ミューズが放った大量の音符の泡が、茶の大蛇目掛け飛んで行く。メロディとリズムは、互いの手を叩き合い、二人で踊るように舞うと両手を繋ぎ、

「プリキュア!パッションナート・ハーモニー!!」

二人の叫びと共に、手から金色の光が大蛇目掛け発せられた。

「シャアアア・・・シャア!」

大蛇は突然七色ヶ丘中学校の校庭に穴を掘り始め、地面へと消え去った。メロディ達は動揺し、何所から大蛇が現われて来るか神経を尖らせた。そこにキャミーが駆け寄つて来ると、

「セイレーン!茶の大蛇は、甘いものが大好きニャ!それで誘き寄せるニャ!!」

「甘い物!」

そう聞いた途端、メロディはリズムを、リズムはメロディをジイと見つめ、

「メロディ、マーチに呼ばれる前、家の店でカップケーキ食べてたわよねえ?」

「そういうリズムだって、カップケーキ運んで来た時に、生クリームが指に付いてたよねえ?」

「失礼ねえ!出掛ける前に手ぐらい洗ってるわよ!!」

「あたしだって・・・何!? ビート、ミュージズ、キャミー?」  
「どうかしたの?」

メロデイとリズムは、思わず言い争いをして居ると、見て居たビート、ミュージズ、キャミーは目を点にし、指で二人の背後を指差し、

「「後ろ・・・」」

「「エツ!」」

釣られるように背後を振り返ったメロデイとリズムは、二人の背後で舌をチロチロ出した茶の大蛇に顔を舐められた。見る見る二人は顔を青ざめると、悲鳴を上げながら逃げ出した。

「「キヤアアアア!!」」

「「シヤアアアアア!」」

そんな二人を大蛇は追い回し、遅れてやって来たハミイを見たビートは、

「ハミイ、まだカップケーキ持ってたわよねえ?」

「「ニヤプ!」後でセイレーンとキャミーと一緒に食べようと持ってきたニヤ!」

「悪いけど、私にくれない?」

ビートはハミイに頼み、生クリームとチョコのカップケーキを受け取ると、

「大蛇いい! ほら、甘い物があるわよ?」

ビートは、カップケーキで大蛇を誘き寄せようと試み、大蛇はピタリと動きを止めると、メロディとリズム、カップケーキを交互に見つめて首を傾げ、少しの沈黙の後、再びメロディとリズムを追い回した。

「何でこつち来るのよおおお!?」

「カップケーキじゃ小さすぎて、物足りない見たいニヤ!」

「私達は、ケーキじゃなくい!!」

再び全速力で逃げるメロディとリズムだったが、次第に大蛇に対して腹が立ち、呼吸を合わせたかのように立ち止まると手を繋ぎ、

「プリキュア!ハーモニーショット!!」

メロディとリズムは、蝶のような閃光弾を放ち、茶の大蛇に直撃させる。大蛇は、効かないとばかり微動だにしなかったが、メロディとリズムは上空高くジャンプし、

「スイートハーモニーキック!!」

上空から急降下して跳び蹴りを放ち、地上に着地した二人、メロディは、ビートとミューズに声を掛け、

「ビート、ミューズ、決めるよ!」

「待つてよ!決めるって、大蛇は・・・」

「キャミーのお願い聞くんではしょう?」

ビートとミューズは、メロデイとリズムが、このまま大蛇を浄化しようと考えて居るのではと感じ、困惑気味にメロデイとリズムに問うと、

「四人でパシヨナートハーモニー！」

「ああ、それなら大丈夫かも!？」

メロデイとリズムからの提案を受け、四人でパシヨナートハーモニーを放つと、危険を感じて再び穴に潜ろうとした大蛇だったが、先程以上の勢いを避ける事は出来ず、吹き飛ばされた。ヨロヨロ頭を動かす大蛇に、メロデイ、リズム、ビートが近付き、カットケーキを口の中に放り込むと、大蛇の目はハートマークを浮かべて、舌をチロチロ出して喜びを表した。

「ねえ、大蛇!あなた、あいつに無理矢理連れ出されたんでしよう?」

「このまま魔界に帰ってくれないかなあ?」

「今度キャミーに、カットケーキのお土産渡すから、キャミーが魔界に帰ったら、また食べよう!」

ビート、メロデイ、リズムに、このまま魔界に帰って欲しい事を言われた大蛇は、頭の中で何やら考え、

「シャアアア!」

茶の大蛇はコクリと頷き、舌をチロチロ出して再びメロデイとリズムの顔を舐める

と、上空に浮かび上がった。ビートは、放心しているメロデイとリズムに話し掛け、

「メ、メロデイ、リズム、大丈夫?」

「な、何とか!ね、ねえリズム・・・ひよつとして大蛇は、今度は私達を食べられると勘違いしてないよねえ?」

「メロデイ・・・、怖い事言わないで!」

互いに変顔を浮かべ、メロデイの嫌な予感を聞いたリズムが顔を顰めた。それを見たミュージズとキャミーは、苦笑を浮かべながら、

「どうやら交渉成立したようね!」

「ホツとしたニヤ!」

「大蛇!また遊びに来るニヤア!!」

「来なくていいわよおおお!!」

大蛇に手を振りながらの、ハミイの何気ない一言を、メロデイとリズムは、引き攣りながら瞬時に却下した。

合流したピーチ達とハッピー達は、緑の大蛇が嵐を呼び、黄の大蛇が雷を落とすコンピネーションに、目の前で居並ぶ二匹の大蛇に近づく事が出来ず、防戦一方だった。

「これじゃ近づけない!何とかしなきゃ・・・」



ピーチが悔しそうに呟くと、パッションはジイとピースとマーチを見つめ、それに氣付いた二人が不思議そうにパッションに話し掛け、

「あのう……私達に何か?」

「あやし達の顔をジイと見てますけど?」

「エエ……向こうが嵐と雷を使うなら、こちらもつて思つてね」

「エツ!!」

パッションの閃きに、思わずピースとマーチは驚き、ひよつとしたら、自分達を囚にしようと考えて居るのではと思うと、ピースは涙目になりながら激しく首を振り、

「無理いいい! あんな攻撃受けたら……死んじやいますう!!」

「フッフ、冗談よ! 近づくだけなら、もつと簡単な方法があるわ!!」

『エツ!!』

パッションは、口元に笑みを浮かべながらアカルンを呼び出すと、一同の姿が忽然と消えた。黄と緑の大蛇は、突然消えたフレッシュ勢とスマイル勢に驚き、辺りをキョロキョロ捜すも、視界に映るのは、他のプリキュア達だけだった。

「シャボオ!!」

「キシヤア?」

互いに首を捻るも、どうも頭の上が騒がしく、二体の大蛇が上目使いになると、

「パッション!ここは?」

「大蛇の頭の上よ!」

ピーチに聞かれたパッションが、大蛇の頭の上だと答えた。黄の大蛇の頭の上に居るのは、ピーチ、ベリー、パイン、パッションの四人、緑の大蛇の頭の上に居るのは、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコーの六人で、パッションから大蛇の頭の上に居ると聞き、パッションを除いた一同は目を点にした。一同は、恐る恐る足下を見ながら、思わず驚きの声を発した。

『エエエエ!?』

「此処なら、大蛇も迂闊に攻撃出来ないでしょう?」

困惑する一同を余所に、パッションは笑み混じりにそう語るも、恐る恐る互いに隣を見ると、黄と緑の大蛇は困惑しながらも、ギロリと大きな目で一同を睨み付けてくる。顔色変えた一同がパッションに話し掛け、

『私達・・・』

「あたし達・・・」

『大変危険な状況何ですけどおおお?』

直ぐ足下から感じる大蛇のプレッシャーが、パッション以外のプリキュア達には感じられた。パインは、慌ててキルンを呼び出すと、

「大蛇さん、話を聞いて！私達、あなた達と戦いに来たんじゃないの!!」  
「シャボ!?」

「このまま魔界に帰ってくれないかなあ?お願い!ほら、ピーチも、ベリーも、パツションもお願いして!!」

「エツ!?う、うん・・・お、お願い!」

「あたし達も、出来れば戦わないで済ませたいし・・・」

「そうね・・・お願い!」

両手を組み、パインが大蛇に哀願し、ピーチ、ベリー、パツションにも言うのと、三人は困惑しながらも、パインに言われるまま、黄の大蛇にこのまま魔界に帰るようにお願いをした。

「シャアアア・・・シャボ!?」

「うん!私は、あなた達ともお話出来るよ!!」

パインが大蛇と会話出来る事を伝えると、黄の大蛇は見る見る嬉しそうな表情を浮かべ、コクコク頷いた。

「本当!?ありがとう!」

「シャアアアアア!シャ、シャ、シャアアア!!」

「エツ!?私とお話したいの?別に良いけど・・・」

「話って、何?」

ピーチ、ベリー、パッションは、困惑しながら黄の大蛇を見つめた。ハッピー達は、パイン達が黄の大蛇と打ち解けたのを見て、

「じゃあ私達も、緑の大蛇と・・・」

「シヤアアアアアアアア!」

ハッピーが、緑の大蛇に魔界に帰るように説得しようとした時、黄の大蛇と違い、緑の大蛇は苛立つて居るのか、身体を激しく動かし、スマイルプリキュアを頭から振り落とそうとする。ハツとしたパインが慌てて通訳し、

「そっちの大蛇さんは・・・さっき攻撃された事をまだ怒ってるみたい!」

「[[[[[[エエエ!]]]]]]」

「という事は、ビューティブリザードで攻撃した事を、怒っているという事でしょうか?」

「けどあれは、あたしの家族を食べようとした大蛇だって悪いし・・・」

困惑するビューティとマーチ、パインはスマイル勢に話し掛け、

「私が黄の大蛇さんを説得して、緑の大蛇さんも一緒に魔界に連れて帰るようお願いしてみるから、もうちょっと頑張つて!」

「パイン!お願い!!」

「たのんまつせ！」

「でも・・・その間私達どうするの？」

「パインが説得してくれるまで、逃げ回るしかないよ！」

「逃げるのは癪だけど、大蛇はあいつに利用されてるだけなら、戦うのは気が引けるし・・・」

「そうですね・・・では、時間を稼ぎましょう！」

パインの提案に乗り、ハッピー、サニー、ピース、エコー、マーチ、ビューティは、大蛇から逃げ回り、時間を稼ごうと決めた。

五分後・・・

「シャアアア！シャ、シャ、シャ、シャボ！！」

「そう何だ・・・バルバスさんって人は、蛇使いが荒いんだあ・・・大蛇さんも大変ねえ？あのね、大蛇さん！あなたにお願いが・・・」

「シャアアア！シャシャシャ、シャボ！！」

「そ、そう・・・扱き使われるのは嫌だもんねえ？」

十分後・・・

「シャシャシャ・・・シャアアアボ！！」

「こんな可愛い子と会話出来る何て嬉しい・・・ありがとう！それでね、私の話も聞いて

貰えると……」

「シャシャシャシャアアアアア!」

「久々に会話が弾む!?そ、そう……」

十五分後……

「パイン!まだですかああ!?!」

「もうちよつと頑張つて!」

学校の外周道路を、全速力で緑の大蛇から逃げ回り続けるスマイル勢、学校内に戻つて来たハッピーが、大声でパインに聞くも、大蛇の長話は続き、困惑しながらもう少し待つて欲しいとパインが告げた。痺れを切らしたピーチ、ベリー、パッションは、

「パイン……大蛇の事はパインに任せて、私達はハッピー達の応援に行くよ!」

「パイン、後をお願いね?」

「じゃあね!」

「アアアン!待つてえええ!!私達、仲間でしょう?友達でしょう?お願い!最後まで付き合つてえええ!!」

「シャア!?!」

「うん!ちゃんと聞いてるよ!!三人共、行かないでえええ!!」

「二!分かつた!分かつたから……スカート引つ張らないで!!スカート脱げちゃうううう」

!!!  
」

パインは、中々話が終わらない黄の大蛇に困惑しながらも、一人にされるのは嫌なように、ピーチ、ベリー、パッションのスカートを、ギュツと握りしめながら泣きついた。

二十分後・・・

「何や!?!交渉が長引いてるようやな?」

「このままじゃ罅が空かないね?」

「私達で、何とかやってみましようか?」

サニーが、エコーが、そしてビューティが、自分達でどうにかやってみようかと仲間達と話して居ると、見かねたキャミーがやって来て、

「大蛇!プリキュア達は敵じゃ無いニヤ!!ベレル様は、プリキュア達にシヤックス様の処遇をさせたニヤ!!このままプリキュア達と戦うと、ベレル様に反逆してると一緒になっちゃうニヤ!!!」

「シヤア!?!シヤ、シヤ、シヤア・・・」

「大蛇は、それは困るって言ってるニヤ!」

「キャミー、あなたも大蛇の言葉が分かるの?」

キャミーが大蛇と普通に会話している姿を見たハッピーは、驚きながらキャミーに問うと、キャミーはコクリと頷き、

「これでも使い魔だからニヤ!」

「だったら、もつと早く来てよ!」

「いやあ、何だかみんな楽しそうだったから・・・」

『楽しんでない!』

キャミーには、ハッピー達が太蛇と追いかけてこしているように見えて居た。そうハッピー達に語ると、六人は声を揃えたかのように、即座に否定した。緑の大蛇は、スマイル勢の顔をジイと見つめると、

「シャア!シャシャシャシャ・・・シャア!!」

「俺もベレル様の大蛇!もしお前達が勝てば、このままおとなしく魔界に帰ってやるって言ってるニヤ!!」

「結局・・・戦うしか無いって事!?!」

緑の大蛇の提案に、ハッピーが困惑気味にキャミーに聞くと、キャミーはコクリと頷き、

「太蛇に実力を示せば、それで良いと思うニヤ!」

「どうしよう!?!ロイヤルレインボーバーストじゃ、太蛇の身も危ないし・・・」

エコーに相談された一同、ハッピーは何やら閃き、仲間達を手招きすると、

「こういうのはどうかなあ?あのね、一人づつ・・・ゴニョゴニョゴニョ」



「フムフム……エエンやない？」

「そうだね！」

「私もハツピーの案で良いよ！」

「じゃあ、ハツピーの提案で行こう！」

「キャミー、大蛇に通訳して貰えますか？」

サニー、エコー、ピース、マーチ、ビューティも同意し、キャミーが一同の提案を大蛇に伝えると、大蛇も承諾した。

六人は、大蛇の前にランニングするかのよう移動し、縦一列に並ぶと、戦闘を終えた他のプリキュア達は呆然とし、

「あの娘達……何しようとしてるのかしら？」

「ピーチ達もそう……何か大蛇とずっと喋ってるようだし……」

「加勢しようと思ったけど……少し様子を見て見ましよう！」

アクア、ムーンライト、ホワイトは、困惑しながらスマイル勢とフレッシュ勢の行動を見守った。

先頭に居たサニーが、五歩前になると右手を高々上げ、

「一番！キュアサニー……サニーファイヤー、行くでえ!!」

「シャボ！」

「二番!キュアピース・・・ピースサンダー、行きま〜す!!」

「シャボ!」

「三番!キュアエコー・・・ハートフルエコー・・・行きます!!」

「シャアアア・・・シャボ!」

「四番!キュアハッピー・・・気合いだ!気合いだ!気合いだ!気合いだ!ハッピー  
シャワー・・・行くよおお!!」

「シャボオオオオ!」

「五番!キュアビューティ・・・ビューティブリザード、参ります!!」

「シャ・・・シャボオオ!」

「六番!キュアマーチ・・・直球勝負!プリキュア!マーチシュート!!行けえええ!!!」

「シャアアアボオオ!」

サニー、ピース、エコー、ハッピー、ビューティ、マーチの順で、六人は緑の大蛇に  
対して、それぞれの必殺技を放った。六人の攻撃を、まるで確かめるかのようにその身  
で受けた大蛇は、

「シャアアアア!」

「お前達、中々やるなつて言ってるニヤ!」

「エへへへ!あなたこそ、私達の攻撃を受けても平然としてる何て・・・驚いちゃった!」

ハッピーが、エヘへと微笑みながら、緑の大蛇に話し掛けると、

「シャボ！シャアアアアア、シャシャシャア!!」

「約束通り、魔界に帰るって言うてるニヤ！」

緑の大蛇はそう言うのと、上空に浮かび上がり、スマイル勢はホッと安堵したものの、緑の大蛇は、少し疲れた表情で、黄の大蛇と会話し続けるフレツシユ勢に気付き、

「シャアアア!?! シャシャシャア・・・シャア!!」

「エツ!? そのままそいつの話を聞いて居ると・・・三日は話し続けるううう?」

「「エツ!?!」」

「シャア! シャシャシャ・・・」

「う、うん・・・そうして貰えると助かる!」

「パイン、緑の大蛇は何て言ったの?」

困惑顔のピーチが、大蛇の通訳をパインに頼むと、パインも困惑顔のまま、ピーチ、ベリ、パツシヨンに話し掛け、

「あのね・・・黄の大蛇さんは、話し好き何だつて! 久しぶりに他の大蛇以外と話が弾んだようだから、そのまま続けさせたら、三日は喋り続けるぞつて・・・」

「み、三日も!?!」

「冗談じゃ無いわ!」

ベリーとパツシヨンが、心底嫌そうな表情を浮かべ、ピーチは思わず目を点にした。パインも苦笑し、

「うん!だから、緑の大蛇さんが、魔界と一緒に連れて帰ってくれるって!!」

「何だか、時間の無駄だった気がするんだけど?・・・」

「ゴメ〜ン!」

ピーチ、ベリー、パツシヨンは、この数十分、ジツと我慢して大蛇の世間話を聞いていたのは、一体何だったんだろうかと、目を点にしながら思わずポツリと呟き、パインは、そんな三人に申し訳無さそうに、思わず頭をペコリと下げて謝った。緑の大蛇に話を遮られ、渋々黄の大蛇も上空に浮かぶと、二匹の大蛇は、名残惜しそうに上空を旋回し、フレツシユ勢とスマイル勢に見送られ、魔界へと帰って行った。

2、ツインシュートインパクト

シャツクスは呆然として居た・・・

七匹の大蛇全てが、プリキュアと和解し、魔界へと帰って行った事が信じられなかった。

「バ、バカな!?!七匹の大蛇全てが・・・」

「みんな甘ちゃんだねえ・・・あいつらなら、大蛇ぐらい倒せただろうに!さてと、こつ

「ちも決着着けるかい？」

バッドエンドマーチは、大蛇に止めを刺さず、魔界へと逃がしたプリキュア達を見て、呆れたように呟いた。バッドエンドマーチは、長い右足でバレリーナのように半円を描くと、

「ハアアアアア！」

雄叫びを上げると、足下にエネルギーを蓄え始め、シャックスを動揺させる。

（クッ!? 何とかこの場から逃げ切れれば、家族さへ人質に取れば、プリキュアなどいくらでもどうとでも出来る!!）

何か逃げる手段は無いかと、シャックスがキョロキョロすると、バッドエンドマーチの表情が険しくなり、

「戦闘中・・・何余所見してるのさ?」

「ヒイヒイ！」

バッドエンドマーチが素早い連続蹴りを放ち、シャックスが無様に怯え、吹き飛ばされた。シャックスは、バッドエンドマーチに対して殺意を抱くと、

（調子に乗ってええ！許さないですよお!!）

シャックスは、怒りで身体中を振るわせるも、バッドエンドマーチは止めとばかり、足下にエネルギーを蓄え始めると、それはどんどん巨大化していった。

「これで仕舞いだ!バッドエンドオオ・・・シュ〜ト!!」

「ヒイイイイイ!」

バッドエンドマーチは、マーチシユートのようなバッドエンドシユートを、シャツクス目掛け蹴り放った。轟音上げてシャツクス目掛けるバッドエンドシユートは、シャツクスの身体を包み込んだ。

「ギヤアアアアア!」

「チツ!他愛もない野郎だぜ!!」

無様に断末魔の悲鳴を上げたシャツクスを見て、バッドエンドマーチは、見下しながら吐き捨てた。徐々にシャツクスの身体が干からびていき、戦いは終りを迎えたに見えた。

(な、何かおかしい!?)

緑の大蛇との戦いを終え、家族を危険な目に遭わせたシャツクスが許せず、駆け付けたマーチは、バッドエンドマーチが倒したように思えるシャツクスの姿に、何処か違和感を覚えて居た。マーチが駆けつけて来たのを見たバッドエンドマーチは、

「さてと、今回のは貸しにしといて・・・」

「バッドエンドマーチ!危ない!!」

「エツ!?!」

突然マーチがバッドエンドマーチに飛びつき、両者が校庭に倒れ込むと、今までバッドエンドマーチが立っていた場所に、先端が尖った鋭利な刃物のような物があつた。刃物が縮んで行くと、その先には、バッドエンドシユートで消滅した筈のシャツクスが居た。刃物はシャツクスの舌だったようで、舌打ちしたシャツクスは、

「チツ！外しましたか・・・だが、キュアマーチ、並びにプリキュア達よ、安心しない事ですweeney！私は、何度でもあなた方の家族を狙って差し上げますよ！！私は執念深いですからねえ・・・」

「お、お前は!?無事だったのか?」

バッドエンドマーチは、バッドエンドシユートを受けて無傷でいるシャツクスに驚愕するも、シャツクスは高笑いを浮かべ、

「ヒヤアツハハハ！あなたの攻撃が当る直前、私は、あなた方の言葉で言う、脱皮をしましてねえ・・・あなたが消滅させたのは、私の抜け殻に過ぎないんですよ!!」

「クツ!?野郎・・・」

シャツクスに出し抜かれたと知ったバッドエンドマーチは、険しい表情で睨み付けるも、シャツクスは戯けるように、

「さて、私は一先ず姿を消しますが、必ずこの恨みは・・・ン!?」

そんなシャツクスの視線が、キュアマーチへと向けられた。マーチは雄叫び上げ、そ

の周囲で風がざわめき、徐々にボールぐらいの大きさからボーリングの玉、更に大きな球体のエネルギーを作り出した。

「あんなだけは、絶対許さない!あたしの家族に手を出した償い・・・させてやる!!」  
「ヒヤアツハハハハ!そんな大きなエネルギー波など、当たらなければどうという事も無い・・・そちらのプリキュア同様、あなたの技は直線にしか飛ばない!見切る事など造作も無い!!キュアマーチ、無駄な事をしますねえ?」

「黙れ!それでも・・・あたしはあんなを倒す!!プリキュア!マーチ・・・」

マーチは右足を振り上げマーチシユートの体勢に入ると、まるで鏡に映したかのよう  
に、マーチの隣で左足を振り上げたバッドエンドマーチの姿があつた。

「癪だが、力を貸してやる!」

「バッドエンドマーチ!ウン!!」

「ツインマーチ・・・シユート!!」

二人のマーチが、同時に蹴り上げた緑のエネルギー波が、うねりを上げてシャックス  
目掛け飛んで行くも、シャックスはやれやれといった表情を浮かべ、

「バカですねえ!?!あなた方の単調な攻撃など・・・な、何?」

シャックスは動揺した・・・

直線に飛んでくるマーチシユートなど、躲せると高を括っていたが、バッドエンド



マーチも加わったツインマーチシユートは、エネルギー球体を小刻みに揺らし、ツインマーチシユートの軌道を読めなくして居た。

「バ、バカな!?これでは軌道が読めない?な、ならば、脱皮を・・・」

シャックスは、再び脱皮して逃れようと試みるも、ツインマーチシユートは益々その勢いを増し、タイミングを狂わされ、驚愕の表情を浮かべるシャックスに直撃した。

「ギャアアアア!バ、バカな!?そんな・・・バカなああああ?」

「マーチ!シャックス様は、また逃げようとしてるニヤ!!」

絶叫しながらも、何とか脱皮しようと試みるシャックスに気付いたキャミーが、マーチに知らせた。このまま放って置いたら、確実にシャックスに逃げられる事を理解したマーチは、シャックスに駆け寄ろうとすると、

「キュアマーチ!あたしの右足に乗りな!!」

「バッドエンドマーチ!?・・・分かった!!」

バッドエンドマーチが右足を振り上げると、マーチはバッドエンドマーチの右足に両足を乗せた。

「決着、着けて来い!バッドエンド・・・シユートオオオ!!」

バッドエンドシユートの勢いを利用し、物凄いスピードで回転しながら、シャックス目掛け飛んで行くマーチ、それに気付いたシャックスは恐れ戦き、

「ヒイイイ!?く、来るなあ・・・来るなああああ!!」

「ウオオオオオ!あたしの家族を危険な目に遭わせた事・・・後悔しなああ!!」

「ヒイイイイイ!」

マーチの右足に、強力な風のエネルギーが凝縮されていく、マーチは、恐れ戦くシャツクスの懐に入ると、

「プリキュア!ツインシュート・・・インパクトオオオオオ!!」

「ギイイイヤアアアアアア!」

マーチは、右足に堪った風のエネルギーを一気に解放し、強烈な右足の一撃でシャツクスを上空へ蹴り飛ばした。シャツクスは、白目を剥いて気を失い、先程のツインマーチシュートの威力も加わり、光りに交わり浄化されて行った・・・

「ハア、ハア、ハア・・・あたしの家族を利用した事・・・後悔しな!!」

「フン、片付いたようだな!」

「バッドエンドマーチ、ありがとう!あんたが協力してくれたから・・・」

「チツ!たまたま利害が一致しただけだ!!」

困惑気味にソツポを向くバッドエンドマーチ、それを見たビューティは、口元に笑みを浮かべると、

「フフフ、少し妬いてしまいますねえ?」

「れ、れいかああ！からかわないで!!」  
『アハハハハ』

ビューティの冗談にマーチが動揺し、一同が笑い声を上げた。その時、突然上空からパチパチと疎（まば）らな拍手が鳴り、ハツとした一同が拍手の出所を見ると、そこには、二人の人物が宙に浮かんで居た。エコー、そして、ブラックとホワイトは、見る見る表情を険しくすると、

「あ、あの顔は・・・ソドム!？」

「何であんたが此処に!？」

「待って！二人共顔がソックリだわ!!もしかして、前にシーレインが言ってた・・・」

ホワイトの言葉を受けたブラックは、二人組の正体が、シーレインが警戒していたカインとアベルだと気付いた。

「じゃあ、あいつらが、カインとアベル?」

「何だとお!?!おい!?!どっちがアベルだ?家のバッドエンドピースにチョツカイ出したのは、どっちかって聞いているんだよ!?!」

バッドエンドマーチは、ブラックが発したアベルという言葉に敏感に反応した。仲間であるバッドエンドピースを、酷い目に遭わせたアベルが目の前に現われた事で、バッドエンドマーチは怒り、どちらがアベルか名乗れと叫んだ。アベルは思わずニヤリと

し、

「フフフフ、随分威勢が良いなあ？俺がアベルだ！」

「上等！あたしがピースの借り・・・返してやるよおお!!」

「フン、直情的な奴だ・・・少し相手をしてやろう！」

アベルはそう言い、右手の人差し指を天に掲げると、忽ち辺りを黒雲が覆い、雷がアベルの右手に降り注いだ。アベルの身体が発光すると、

「所詮三下、貴様など我が雷の前に・・・」

アベルが右手を振り下ろすと、雷がバッドエンドマーチ目掛け降り注ぐも、バッドエンドマーチは巧みに雷を躲し、アベルとの距離を詰めて行つた。アベルとバッドエンドマーチの戦いを見て居たビューティは、ある疑問が浮かび上がり、

(おかしい・・・ある一点にだけ雷を放つて居ない!?これは・・・罫?)

「貰つたああ!!」

バッドエンドマーチは、アベルの攻撃パターンを見切つたと判断し、一気に距離を縮めようとしたものの、

「バッドエンドマーチ!逃げてええええ!!」

「エッ!」

ビューティの絶叫を聞き、バッドエンドマーチは驚いてビューティを振り返るも、今

正に自分が向かおうとした場所に、特大の雷が落ち、その威力に巻き込まれ、バッドエンドマーチが吹き飛び、

「キヤアア!?!」

『バッドエンドマーチ!』

「手を掴んで!」

悲鳴を上げたバッドエンドマーチを、心配そうにプリキュア達が声を掛け、マーチがバッドエンドマーチに手を差し伸べて掴み、体勢を整えさせた。

「クツ!?あ、危なかった!キュアビューティの声を聞いてなきゃ・・・あたしはただじゃ済まなかった・・・」

「あれが魔界で、バッドエンドピースに深手を負わせたアベル・・・」

ブラックは、キツとアベルを睨み付けるも、バッドエンドマーチとプリキュアオールスターズを戦慄させた。アベルは、攻撃を避けられた事を意外そうに、

「フン、あの屑と同じように、消し去ってやろうと思ったんだがなあ・・・流星はプリキュアという所か?」

「あの屑ですって!?!」

見る見るホワイトの顔が険しくなり、それを見たカインは愉快そうに、

「そう、貴様達が今倒したシャックスの事だ!利用出来るかと、十二の魔神に加えてや

り、大蛇を七体も貸してやったが、とんだ見込み違いだった!」

「我らの手で葬ろうとやって来たが、手間が省けた!ゴミ掃除をしてくれて礼を言うぞ・・・プリキュア!」

この瞬間、バッドエンドマーチも含めた、この場に居たプリキュア達は、カインとアベルに嫌悪感を抱いた。見る見る一同の表情が一層険しさを増していった。ブラツクは、険しい表情のままカインとアベルに話し掛け、

「あいつは、あんた達の仲間でしょう?」

「仲間!?笑わせるな!」

「我らに仲間など居らん・・・手駒になるかならないか・・・それだけだ!」

「今日は挨拶代わりにしておいてやろう・・・次に我らに会う迄、せいぜい力を付けておけよ!!」

「ハハハハハハハ」

カインとアベルは、プリキュア達に対し嘲笑を残し、魔界へと戻って行った・・・

(カイン、それにアベルか・・・)

ブラツクは、拳をギュツと握り、何れ戦うであろう二人に対し、心の中で闘志を燃やして居た・・・

## 3、伝説の妖精

ようやく戦いは終わった・・・

バッドエンドマーチは、ブラックに会釈したものの、無言のまま去って行こうとする。「待って！あんたには、何とお礼を言つて良いか・・・」

「さつきも言つたら！必要無い!!じゃあな!!」

そう言い残し、バッドエンドマーチは、歩きながらなみの姿に変化して行つた。それを見つめるマーチは、右隣に居るハッピーに話し掛け、

「ハッピー・・・ダークドリームは、何時かバッドエンドプリキュア達と、共に並んで戦える日が来るって言つてたんでしょ？」

「うん！私もそう思うよ!!」

「あたしも、今ならそう思える！彼女達とは・・・友達になれる気がするなあ!!」

マーチは、去つて行くなみの後ろ姿を見て、心の底からそう思った・・・

変身を解いた一同、なおは一同の前に出ると、深々と頭を下げ謝罪を始め、

「みんな、今日は本当にゴメンなさい！」

「なおが謝る必要無いわよ！」

「そうです！ご家族を人質に取られたら、私達だつて同じ事をしていたと思いますよ？」

「そうそう、だからさあ、気にする必要無いつて!」

『そうそう』

美希が、つぼみが、えりかが、なおに気にしないように言うと、他の一同もそうだと同意し、

「みんなあ．．．ありがとう!」

なおは、一同の優しさに目をウルウルさせた。えりかは変顔を浮かべ、

「それにしても、神様だったら、あたし達がこつち戻つて来ても現われなかつたねえ?」

「神様だって、ずっと僕達の事を見てる訳じゃ無いだろうからね」

「そうですよ、えりか!」

いつきとつぼみは、地球の神ブルーをフォローするも、腕組みしたえりかは、

「でもさあ．．．キャミーやバッドエンドマーチが居なきや、あたし達ヤバかつたジャン?」

「そ、それはそうだけど．．．」

「えりか!あまり神頼みは感心しないわねえ．．．あたし達は、今までもみんなと協力して困難に打ち勝つて来たんだから!」

「それは．．．そう何だけどさあ!」

美希にも窘められたえりか、今までの戦いを振り返れば、確かに美希の言う事も理解



出来た。今まで自分達プリキユア達は、砂漠の王デューン率いる砂漠の使徒、闇の救世主を名乗るバロムを、ノイズ率いるマイナーランドを、暴走した魔王を、そして現在、ピエーロ復活を目論むバッドエンド王国や、魔界の者との戦いを、みんなで力を合わせて乗り越えて来ているのだから・・・

「美希姉えの言う通りだね！」

「エエ、あたし達は、あたし達が出来る事をしましょう！」

美希がえりかに言い聞かせていた言葉を、ラブは思わず心の中で繰り返した・・・

（私達が出来る事かぁ・・・）

せつなは、なおに話し掛けると、

「なお、家まで送るわ！ご家族が目を覚ましたらまずいでしよう？」

「そ、そうだった！」

「なお、私もお手伝いします！」

「うん！お願い、れいか!!」

れいかが手伝うという申し出を、なおは嬉しそうに聞き入れた。みゆきも手伝いに行

こうと思うと、

「じゃあ、私達も・・・何!?!あゆみちゃん？」

「みゆきちゃん、ここはなおちゃんといれいかちゃんの二人にさせて上げましょう！」

「せやなあ・・・幼なじみ同士、久々に積もる話もあるかも知れへんし」

「そっかあ・・・そうだね!」

あゆみとあかねの考えにみゆきも同意し、なおは、家族を家で休ませる為、れいか、せつなと共に、自宅へと帰って行った。直ぐにせつなが一人で戻って来ると、ラブは、美希、祈里、せつなに話し掛け、

「美希たん、ブツキー、せつな、以前薫子さんに言われた事、覚えてる?」

「「薫子さんに!?!」」

「ウン!ほら、私達が最初にナッツハウスで、ダークプリキュア5に出合った時・・・」

ラブは、ダークプリキュア5との出合った時の事を思い出して居た・・・

長きに渡る光と闇の影響で、この地上に蓄積された負のエネルギーが限界を迎えた事、千年前、一度浄化を試みた地球の神だったが、それは、当時のプリキュアを犠牲にする事で成し遂げた苦肉の策だった事、神はその行為をおおいに嘆き、その力を失った事・・・

そして戦いは続き、数百年前からの砂漠の使徒とプリキュアとの戦い、そして、近年のドックゾーン、ダークフォール、ナイトメア、エターナル、ラビリンズ、マイナーランドとの戦い、カオスによって一度は闇に消えたこの世界は、負のエネルギーの蓄積に耐えられなくなった事、このまま放置しておけば、負のエネルギーが暴発し、地球は死

の星と化してしまう事を・・・

「そうだったわね！そして、あの時せつなは・・・」

「ええ、ダークドリームの話を承諾した私は、再びイースとなった！」

「満さんや薫さん、なぎささん、ほのかさん、ゆりさん、薫子さんも同意し、私達と戦ったのよね！」

美希、せつな、祈里も、ラブの話を聞いて当時の事を思い出して居た。

「うん！それは全て、この世界に蓄積された負のエネルギーを、パンドラボックスに封印する為だったよねえ！またバロムが現われた時は驚いたつけえ・・・その戦いの後、私達、薫子さんにアドバイスしたい事もあるから、尋ねてらっしゃいって言われたの!!」

「そういえば・・・でもラブ、あなたにしては良く覚えてたわねえ？」

美希は、ちよつとからかうようにラブに話し掛けると、ラブは右手で後頭部を押さええ、テレ笑いを浮かべると、

「アハハハハ！今まで忘れてたんだけど、さつき美希さんが、えりかに言つてた話聞いたら何か思い出してさ!!カインとアベル・・・何時かあの二人と戦う時が来るなら、役に立つんじゃないかって思つて！」

美希、祈里、せつなも、先程見たアベルの力を見るに、薫子に助言を求めるのは間違いで無いとコクリとラブに頷いた。それを見たラブは真顔で頷き返すと、

「つぼみちゃん、そういう事で、薫子さんに話しておいて欲しいんだけど?」

ラブに聞かれたつぼみは、見る見る困惑の表情を浮かべ、

「すみません・・・実はお婆ちゃん、私が入院している同じ頃、身体を壊して入院していません!今は退院していますが、あまり無理は・・・」

「そう何だ・・・じゃあ無理はさせられないねえ?」

ラブが残念そうな顔を浮かべると、ゆりがラブに話し掛け、

「ラブ、あの時の事なら私も覚えて居るわ!薫子さんは、あなた達に空手を教えようと考えて居たらしいわ!それだったら、薫子さんの代わりに・・・私が教えて上げるわ!!」

「エッ!?ゆりさんが?」

「ええ!これでも薫子さんには、免許皆伝のお墨付きを得ているのよ?」

『納得ううう!!』

ゆりが薫子から、空手の免許皆伝のお墨付きを得て居ると聞き、一同は納得してココク頷いた。

「そうだ!それだったら、みんなも一緒に参加しない?」

「賛成!ちょうど私も、プリキュアのみんなでどっか行きたいよねえ?つて思ってたんだあ!!」

ラブが一同に聞いてみると、響が真つ先に同意した。ラブは嬉しそうにココリと頷

き、他の仲間達に改めて聞くと、

「私も良いよ！カインとアベル・・・何かあいつら嫌な感じがするんだよねえ？」

「私も良いですよ！お婆ちゃんに、話だけはしておきますね!!」

「私もOKです！なおちゃんといかちゃんには、後で私達から話しておきます！」

「あたしは部活があるけど・・・2日ぐらいなら何とか!」

なぎさ、つぼみ、みゆき、咲も同意した。のぞみは腕組みして考え込むと、

「ウーン、これだけの人数だと目立つちゃうよねえ・・・そうだ！かれんさん、前に行つたかれんさんの別荘がある島、あそこでプリキュア合宿しません？」

「エッ!?別に構わないわよ！日にちさえ前もって教えてくれれば、爺やに頼んで準備して貰うけど?」

のぞみに聞かれたかれんは、別段困惑した様子も見せず、別荘を提供する事に同意した。他のメンバーは、島にある別荘と言う事で驚き、

『島!』

「そう！かれんさんの別荘の一つは・・・まるごと島なの!」

『・・・・・・・・・・』

島がまるごと水無月家の別荘と聞き、一同は絶句した・・・

「じゃあ、決まりだね！これから日にち決めて、みんなでプリキュア合宿しよう!!」

『OK!!』

提案者のラブが、一同に確認すると、全員がOKと答えた。ほのかは思い出したかのように、

「そうそう、前もって準備もしなきゃねえ!なるべくかれんさんに迷惑掛けないように、事前に食材や飲料水の買い出しもしなきゃ!!」

「私も買いだし手伝います!」

「じゃあ、私も手伝うよ!」

ひかりとなぎさも買い出しの手伝いをすると言げ、

「島なら海も当然あるし、水着も用意しなきゃ!」

少しウキウキした美希が水着の話題を振り、奏も思い出したかのように、

「宿題も持って来なきゃ!」

『ブウウウ!それは要らない!!』

のぞみ、ラブ、えりか、響、みゆきが同じような仕草で首を振った。

「あなた達・・・当初の目的忘れて無い?」

ゆりは、はしやぐ一同を見て呆れたように呟いた・・・

この世界に存在しながら、神によって守られ、その存在を隠された島・・・

一万年前、この世界を闇に飲み込んだ、大いなる闇と戦った三人のプリキュアの一人、キュアエンプレスが眠る島・・・

ブルーは、プリキュア達がシャックスの罠に嵌って居たのを知らず、同じ頃この島を訪れて居た・・・

人の存在をまるで感じない、無人島とも思えるこの島を、ブルーは懐かしそうに歩き、とある洞窟へとやって来た。

「誰だー！」

人の気配を感じたのか、奥からゆつくり姿を現わした人物、亀の甲羅のようなものを、背中に背負った老人のような人物、この者こそが、嘗て一万年前、三人のプリキュアと共に戦った伝説の妖精だった。ブルーは懐かしそうに目を細め、

「メラン、久しぶりだねえ！」

「ブルーか！100年振りじゃなあ・・・キュアローズ、キュアフローラ、キュアマーマイド、キュアトウインクルを連れて来て以来じゃったか？」

「そうだねえ・・・僕達に取って、100年ぐらい前は、ついこの間のように思えるけどね？」

「フフフ、違わない！ところでブルー、このような島に何しに来た？」

「メラン、君ならもう、気付いて居るだろう？ここ数年、闇の力が急速に強まって居る！」

魔界からこの地に禍をもたらす者も多く現われ、今は静観しているカオスも、何やら不穏な雰囲気醸し出して居る……このタイミングで、大いなる闇が再び暗躍すれば、プリキュア達といえ……」

「それで、100年前のように、プリキュアに試練を与え、あらゆる真実を映し出す水晶の鏡、マジカルラブリーパードの力を、再び解放しようという訳か？」

メランに聞かれたブルーはコクリと頷き、

「それだけじゃないんだ！実は、君の目で確かめて欲しいプリキュアが居るんだ！」

「やれやれ、年寄りに無茶させる神だのお……で、今度は何人じゃ？」

「今現在、プリキュアは30名以上居るんだが……」

「な、何!?この時代のプリキュアは、そんなに居るのか？」

「うん！それ程の危機が起こって居るんだ!!」

悲しそうに視線を落としたブルー、メランは、先のカオスの暴走で、この世界が闇に覆われた事は知って居たが、プリキュアの数人が、それ程居るとは想像だにできなかった。

「やれやれ、30人以上も一度に相手にするには……」

「違うよ！僕は、その中の二人、キュアブラックとキュアホワイトを、君の目で確かめて欲しいと思つてねえ!!」

「どういう事だい!?!」



「彼女達は……この世界を終わらせる力を秘めて居る気が、僕にはするんだ！」  
「な、何じゃと!？」

「彼女達は、まだ自分達の中に眠る力に気付いて居ない!だから、君との戦いで何かを学んでくれればと思つて居てねえ……」

「……………」

メランは目を瞑り、返答に困つて居た……

神の言葉とはいえ、二人のプリキュアが、世界を終わらせる力を持つて居るとは、とても思えなかつた。だが、意を決して目を開けると、

「良いだろう!会うだけ会つてみよう……ただし、加減はせんぞ?」

「ありがとう!近い内に、キュアブラックとキュアホワイトの二人を、君の下に必ず連れて来るよ!!」

ブルーはメランに礼を述べると、姿見鏡を出現させ帰つて行つた。メランは、祭壇に祭られて居る水晶の鏡、マジカルラブリーパッドを見つめると、水晶の鏡に、微笑むエンプレスの姿を見た気がするのだった……

第百六話：マーチ!怒りのインパクト!!

完

## 第一百七話：ブラック、ホワイトVS伝説の妖精メラン

## 1、恐怖のドライブ

カインとアベルの実力の片鱗を見たなぎさ達は、ラブの提案で、かれんの別荘がある島で、みんなでプリキュア合宿をしようと話し合った。一同の都合を合わせると、8月6日、7日、8日が、全員揃う事が出来るようで、この3日間でプリキュア合宿を行う事を決めた。

なぎさ、ほのか、ひかり、ゆりは、ほのかのたつての希望で、前日の8月5日、ほのかの家に集合して、別荘で過ごす三日間の為の準備で、主に飲料水を買に行こうと決めた・・・

ほのかの祖母さなえは、所用で出掛けて居て留守で、庭先に居るほのかの愛犬忠太郎は、夏の暑さにバテ気味なのか、木陰で涼んで居るようで、舌をハアハア出して居て、その側でポルンとルルンも一緒にバテて居た。なぎさ達は、ほのかから出して貰った麦茶を飲みながら、支度があるから待つて居ると、席を外したほのかが来るのを待つて居た。「前から思ってたけど・・・ほのかって、よく冷房無くても我慢出来るよねえ?」「ほのかの家は風通しが良いから、こうして縁側に居るだけでも気持ち良いわよ?」

「風鈴の音色も良いですよねえ……」

蝉の鳴き声も聞こえ、改めて夏を実感して居たなぎさ、ゆり、ひかり、玄関が開き、ほかの三人に声を掛けると、

「お待たせ！さあ、行きましよう!!」

ほのかに呼ばれた三人が、雪城家の玄関から外に出ると、家の前に一台の白い軽自動車が進んで居た。なぎさは迷惑そうに、

「全く誰だろうねえ？人の家の真ん前に車止める何てさあ！」

「アツ！それ私の車!!」

「へえ、そうなんだあ……エツ!」

「「エエエ!」」

止まって居る白い車が、ほのかの車だと聞き、なぎさ、ゆり、ひかりが思わず驚きの声を発した。なぎさは車を指差しながら、

「ほのか、何時の間に免許取ったの？」

「うん、先月合宿免許で！」

「そういえば、先月前半は、あんまりほのかと会ってなかったっけ？でも、メールはしてたよねえ？」

「フフフフ、ちよつとみんなを驚かせようと思つて！」

「そりゃあ、驚いたわよ！ねえ、ひかり、ゆり？」

「ええ、詳しくは知らないけれど、合宿で免許取るには、数週間は掛かるんじゃないの？」  
ゆりに聞かれたほのかは、少し楽しそうに話し出し、

「うん！普通車のATだったら、最短で14泊15日の教習で卒業出来るよ!!」

「ほのかさんは、どれぐらい掛かったんですか？」

ひかりは、ほのかがどれくらいで卒業できたのか気になり、ほのかに聞いてみると、  
「私は、最短で卒業出来たよ！」

最短で卒業出来たと言うほのかに、三人は感心したように頷き、なぎさがほのかに話し掛け、

「へえ・・・ほのか、車の免許取るのも優秀何だね？」

「エエ!?それ程でも無いよ？結構私と同じ最短で卒業してたし・・・」

少し恥ずかしそうにほのかが答えた。なぎさは、どうしてほのかが急に免許を取ろうと思ったのか気になり、

「でもほのか、何で急に免許何か取ろうと思ったの？」

「うん・・・家のお婆ちやま、もうお年だから、買い物するのも大変そうで・・・それで、免許を取ろうと思ったの！重たい物の買い物も、一緒に行けるでしょう？」

「そっかあ・・・」

ほのかの言葉を聞き、三人は納得したのかコクリと頷いた。改めて良くほのかを買った白い軽自動車を見てみると、車種はスズキのアルトラパンで、色はパールホワイト、丸みがある形は女性に人気で、エンブレムや、ドアノブ付近に、うさぎのマークのような物が見られ、女性に人気なのも納得出来るような車だった。ほのかも、丸みがあるデザインが気に入って購入して居た。なぎさは、興味深げにうさぎのエンブレムを触りながら、

「車は何時買ったの？」

「納車されたのは昨日の夕方！だから、今日が試運転なの!!」

「「エッ?!」」

ほのかは嬉しそうにニコニコするものの、なぎさは、ゆり、ひかりの心に、一抹の不安が浮かんで居た・・・

三人は、不安ながらもほのかの軽自動車に乗り込んだ。なぎさは助手席、ゆりは運転手側の後部座席、ひかりは助手席側の後部座席に座った。中は、男性が乗るには少し狭いと感じるかも知れないが、女性が乗る分には特に問題無く、背が高いゆりも窮屈そうにはしていないかった。

「じゃあ、出掛けましょう!」

ほのかは車のキーを回し、エンジンが掛けられた。まさに実習で教わった通りの手順

で、ほのかはゆっくり車を走らせた。初心者にしては、ほのかの運転は上手い方で、急発進や急停止でもするんじゃないかと不安がって居た三人も、徐々にほのかの運転を信頼し、次第に会話も弾んで居た。

「ほのか、運転中々上手いじゃない!」

「そう!?! これでも少し緊張してるんだよ!」

「安心して乗って居られるわよ!」

「はい! ポルンやルルンは、気持ち良さそうに眠ってますよ!」

なぎさ、ゆり、ひかりから運転を褒められ、ほのかは少し恥ずかしそうにしながら大型スパーに着いた。車庫入れもまごまごする事もなく、スムーズにこなし、

「やっぱり軽だけあって、車庫入れも楽だわ!」

ほのかは、口元に笑みを浮かべながら眩き、無事に車庫入れを終えた。店内に入った一同は、飲料水コーナーで、2リットル飲料水を箱で買ったたり、オレンジジュースやグレープジュースなども買ったたりした。なぎさは、プリキュア合宿の日程を思い出し、

「ねえ、ひかり! そう言えばさあ、合宿で過ごす8月7日は、咲の誕生日だったよね?」

「はい! 前に咲さんから聞いた事あります!!」

なぎさに聞かれたひかりがコクリと頷くと、それを聞いたほのかとゆりも会話に加わり、

「折角買い物に来てるし、何かサプライズでプレゼントしてあげようかあ?」

「良いわね!じゃあ、何を上げるか決めましょう!!」

一同は、誕生日を迎える咲の為に、サプライズでプレゼントを上げようと、相談しながら店内を歩いた・・・

「取り敢えず、これだけあれば足りるかなあ?」

「良いんじゃない?足りなかつたら、せつなに頼んで買い足しすれば良いんだし!!」

ほのかに聞かれたなぎさは、足りなければせつなに頼んで買い出しに行けばいい話し、それを聞いたゆりは微妙な表情で、

「それだと、合宿に来た気がしないような・・・」

「そうですね・・・せつなさんも大変でしょうし?」

ひかりもゆりの言葉に同意し、なぎさは苦笑しながら、

「アハハハ、まあ、足りなければつて事で!でも、咲の誕生日には、ケーキでも上げたいよね?」

「そういう事情なら、せつなも喜んで買い物に付き合ってくれそうね?」

ゆりも苦笑気味に、なぎさの言葉を肯定した。会計を終え、荷物を後部座席に乗せた一同が再び車に乗り込み、発進しようとした時、それは起こった・・・

ほのかは、先に駐車場から出て行く赤いセダン車を待つて居たが、20代ぐらいの短い髪のお金をした運転手は、飲んで居たペットボトルをそのまま窓から投げ捨て、地面に跳ね返ったペットボトルが、ほのかの車に当たった。その瞬間、ほのかの目付きが変わったのを見たなぎさは、思わず背筋にゾツと鳥肌が立った。先程とは打って変わって急発進したほのか、思わずなぎさは、ゆり、ひかりが前のめりになり、ゆりとひかりに至っては、何が起こったのか理解出来て居ないようだった。なぎさは恐る恐るほのかに話し掛け、

「ほ、ほのかか？」

「全く！ゴミを投げ捨ててる何て・・・許せない!!」

「「エツ!!」」

驚く三人を余所に、急発進したほのかの車は、急加速をしてタイヤを鳴らした。シートベルトをして居ても、身体を持って行かれ、慌ててなぎさは、ゆり、ひかりは、手摺りに掴まった。

「ほ、ほ、ほのかぁ！落ち付いてええ!!」

「全く・・・何てマナーが成ってない人なのかしら!」

なぎさの声もほのかには届かないかのように、目が据わったほのかは、車を荒く運転し続ける。右に左に、三人の身体が揺さぶられ、コミュニケーション状態のメップル、ミップル、



ポルン、ルルンの目はグルグル回って居た。

「ほのか！落ち着いてええ!!」

ゆりがほのかに落ち着くよう声を掛けるも、なぎさは微妙な表情をしながら首を横に振り、

「ゆり……無理！こうなったほのかは……止められない!!」

「エエエ!?!」

ほのかと親しいなぎさの口からそう断言され、思わずゆりの眼鏡が曇った。ひかりは、急に豹変したほのかに戸惑い、

「ほ、ほのかさん……急にどうしたんでしよう?」

「さっきの赤い車が、窓からペットボトルを投げ捨てて、それがほのかの車に当って……」

「ほのかがキレたって事?」

「そう……」

なぎさの言葉に静まりかえる室内、エンジン音だけがけたたましい唸りを上げた。本当に先程と同一人物が、この車を運転しているのかと思える程、ほのかの運転は荒く、先程の赤い車を追い抜くと、赤い車の前に横付けして止まり、シートベルトを素早く外したほのか、勢い良く運転席から飛び降りた。道を塞がれた男も、窓から顔を出し、

「オイ！いきなり前を塞ぎやがって……邪魔だ！さっさと退けろ!!」

「退かない！あなたねえ、平気で窓からペットボトルを投げ捨てる何て・・・恥を知りな  
きゃー!!」

「ハア!? お前に関係無いだろう!」

「関係あります! あなた見たいな自分勝手な人・・・周りに迷惑なの!!」

(ほのか・・・ほのかも結構迷惑掛けてるよ)

なぎさは、困惑気味に口論するほのかに心の中で呟いた。ゆりは、隣で背もたれに持  
たれながらダウンして居るひかりを気遣いながらも、なぎさに声を掛けると、

「なぎさ、私達も行きましょう!」

「そうだね!」

ほのかの迫力に、男が気圧され、更にはなぎさとゆりも車から降りて来て、ほのかの  
背後に立ち、あなたのせいで私達まで迷惑受けて居るのよ、そう言いたげな眼力を浴び  
せた。騒ぎを聞き付け、野次馬も集まりだし、運転手は困惑しながら、

「嫌、その・・・俺が悪かったよ! 次から気を付けます!!」

「分かってくれれば良いの! 行きましょう!!」

相手が非を認めれば、あっさりとそれを許す、ほのかの懐の深さが少し垣間見られた。  
車に戻ったほのかは、背もたれにもたれ掛かり、グツタリしているひかりに気付き、

「ひかりさん、顔色が優れないけど大丈夫?」

「は、はい・・・何とか・・・」

ひかりは、引き攣りながらもほのかにそう返事を返し、微妙な表情を浮かべたなぎさとゆりは、

「ほのか・・・一人であまり車運転しない方が良いかも?」

「私もなぎさの意見に賛成だわ!」

「エエエ!? どうして?」

「何となく」

「変なの?」

ほのかは首を傾げながら、再び安全運転で車を発進させた・・・

ほのかもほんわかモードに戻り、ドライブがてら、ゆりが住む希望ヶ花のゆりの家まで送り、次にひかりを送ったほのか、なぎさと二人になり、あれやこれや会話をしながら、裏通りを車で走らせて居ると、突然目の前に鏡のような障害物が見えたかと思うと、人が飛び出して来て、ほのかは慌てて急ブレーキを踏んだ。なぎさとほのかの身体が勢い良く前後に揺さぶられ、二人は顔面蒼白になりながら、シートベルトを外して車から飛び出すと、

「だ、大丈夫ですか!?!」

「怪我は・・・で、神様!？」

「やあ!この前は・・・」

「脅かさないでええ!!」

「??」

人を轢いてしまったのではと、慌てて飛び出したなぎさとほのかは、それが地球の神ブルーだと知り、ホツとするも、ブルーの非常識な行いに、少しムツとした二人だった。なぎさとほのかは、車を脇に止めブルーと話し始めた。ついこの前、シャツクスによつて危機に陥った事も正直に話すと、ブルーも心底驚いたようで、

「そんな事が・・・済まなかったねえ!その頃僕は、メランに会つて居てね!」

「メラン!？」

ブルーが発したメランという言葉に、なぎさとほのかは首を捻った。ブルーはコクリと頷き、

「そう・・・一万年前、三人のプリキュアと共に、この世を闇に包み込んだ大いなる闇と戦つた伝説の妖精・・・」

「エツ!?今、一万年前つて言つてませんでした?」

「その妖精は・・・まだ生きてらつしやるんですか?」

一万年前のプリキュアと一緒に戦つた妖精が、まだ生きて居る・・・

俄には信じられない話だが、地球の神であるブルーが嘘を言う筈も無く、なぎさとはのかは心底驚いた。

「ああ、生きている！メランも僕と同じように、この世界を見守り続けてくれて居るんだ・・・そんなメランに、君達を会わせたいんだが、どうだろう？」

「エツ!? そうですわね・・・一万年前の話とかも聞いてみたいし・・・ほのかは？」

「うん！興味あるよね!!」

なぎさとほのかも、一万年前の妖精が健在だと聞き、それならば話を聞いてみたいと思うのは、当然の事かも知れなかった。ブルーはニツコリしながら頷くと、

「良かった！じゃあ、今からメランに会いに行こう!!」

「エツ!? 今から？」

「ああ、メランには、君達二人の事は既に話してあるんだ！」

「でも・・・私達、車で来てるし・・・」

「そんなに時間は取らせないよ！ちゃんとこの場所に僕が送るから!!」

「そういう事でしたら・・・」

そんなに時間は掛からないというブルーの言葉に、ほのかも今からメランに会いに行く事を承諾した。ブルーは、姿見鏡を出現させると、三人の姿が鏡に吸い込まれて行った・・・

2、一万年前の出来事・・・

なぎさとほのかが、ブルーに連れられて来た島・・・

オーシャンブルーの海が周りに広がり、島を囲うように存在する海岸は、どこからでも泳げそうな砂浜が囲い、島の内側は森に覆われ、鳥や動物の鳴き声が響いて居た。その中央に聳える岩山は、どこか神秘さを醸し出して居た。メツプルとミツプルも妖精姿に変化すると、島の景色を堪能し、

「キレイな所メポー！」

「景色も良いミポー！」

「でも、ミツプルの方が、もっと、もっとキレイメポー！」

「メツプルたらあ・・・恥ずかしいミポー！」

この島に来て、普段と変わらぬやり取りをするメツプルとミツプルを見て、思わずなぎさとほのかが苦笑する。改めて周りを見たなぎさは、

「この島に、一万年前の妖精が・・・」

「そう、噂をすれば・・・」

「エッ!?!」

なぎさが辺りを見回し、メランの事を呟くと、ブルーは表情を明るくし、メランがやつ

て来た事を二人に伝えた。メランは宙を滑るかのよう移動しながら現われ、なぎきとほのかは呆然と見て居ると、メランが二人に話し掛けた。

「お前達が、ブルーが言っていたプリキュアか？」

「このお爺さんが・・・伝説の妖精?!」

「お黙り! あたしや、これでも女だよ!!」

「し、失礼しましたああ!」

当初メランをお爺さんだと思つて居たなぎきだったが、メランから女だと聞き、思わず頭をポリポリ掻きながら謝罪した。メランは、ジツとなぎきとほのかを見つめると、  
(確かにブルーが言うように、何かしらの力は感じるが・・・)

「ブルーから話は聞いて居るね? 私の名はメラン!」

「初めまして! 美墨なぎき、キュアブラックです!!」

「私は雪城ほのか、キュアホワイトです!!」

「メツプルメポ!」

「ミツプルミポ!」

その場でなぎきとほのか、メツプルとミツプルが自己紹介して、コクリとメランに頭を下げると、メランも頷き返した。

「早速だが・・・お前達に水晶の鏡、マジカルラブリーパッドを託す事が出来るかどうかどう

か・・・試させて貰うよ！」

「エッ!? 水晶の鏡?」

「マジカルラブリーパッド!」

なぎさとほのかは、メランが何の事を言っているのか分からず首を捻った。メランは呆氣に取られ、

「何だい!?! お前達、ブルーから何も聞いてないのかい?」

「いやあ、ついさつき、私達に会わせたい人が居るからって言われてえ・・・」

「私達は、一万年前の妖精とお話出来るなら、そう思っでこうしてやって来たんですけど・・・」

困惑したなぎさとほのかにそう言われ、メランは呆れたようにブルーを見つめながら、

「何だいブルー!?! そんな事もこの娘達に伝えて無かったのかい?」

「僕の口から聞くより、直に君から話を聞いた方が良いと思っでね!」

「やれやれ、困った神だねえ・・・良いだろう!」

メランは呆れたようにして居たが、宙に浮くのを止め、地上に降り立つと、なぎさとほのかに一万年前の話を始めた・・・



一万年、世界を闇が覆い尽くした・・・

地上から光が消え、世界は極寒に包まれ、人々は絶望の声を上げた。地球の神ブルーは、必死に闇に包み込んだ者の正体を探り、それが大いなる闇と呼ばれる存在だと気付いた。ブルーは、大いなる闇の企みを阻止しようとするも、地上を守るだけで精一杯だった。そこに、異世界から、三人のプリキュアと呼ばれる者達が、この地上の危機に現われた！

「魔法界から追い出した、大いなる闇の配下を追って駆け付けた、竜王バハムートに託された角を、ミラクルドラゴングレイブと呼ばれる光の槍に変えて携えたキュアマジシャン、この世界の知識を全て受け継いだとされる、黄金の冠、エターナルゴールデンクウンを被り、大いなる闇の企みを防ぐ為に、この世界に現われたキュアプリーステス、そして、光の女王から水晶の鏡、マジカルブリーパッドを授かった、我がパートナーであるキュアエンプレス、それら三人がこの地で出合い、力を合わせこの地上で大いなる闇の軍勢と戦った・・・」

「今、光の女王って言ってたミポ？」

「光の園の事メポ？」

「ほう、お前達光の園の妖精かい？」

メッブルとミッブルが、光の園の妖精だと知り、メランは興味深げに目を輝かせた。

（成る程、ブルーが言うように、この二人には何かがあるようだねえ・・・エンプレス、お前が言ったあの時の事が、こうして目を瞑ると思いい出してくるようだ・・・）

メランはそう言うのと、目を瞑って当時の事を懐かしんだ・・・

黄金の冠を被ったキュアプリーステスが、的確な指示でマジシャンとエンプレスをフォロ―し、マジシャンが光の槍で、エンプレスが水晶の鏡を反射させて、闇を次々浄化して行く姿が浮かんで来る。

「三種の神器に頼らずとも、三人のプリキュアは強かった・・・マジシャンは炎を、プリーステスは氷を、そして、エンプレスは光の属性を持つて居て、次々に闇の軍勢を浄化させて行つたし、私も勿論戦つた！だが、多勢に無勢の闇の軍勢の前に、私らは次第に追い込まれて行つた！傷つき片膝付くマジシャンとプリーステス、そんな中でも、エンプレスだけは最後まで諦めず、何度も大いなる闇に向かって行つた!!その行為に励まされ、マジシャンとプリーステスも再び立ち上がり、三人は協力して、プリキュア！エクスクラメーションを放つた!!」

「プリキュア！エクスクラメーション!?」

「そうだ！キュアマジシャンが持つ、闇を切り払う光の槍に力を結集した、私が知る限り、プリキュア最大の技とも呼べるじやろう・・・」

「確かに凄かった！僕が地上へのダメージを軽減させた状態でも、凄まじい威力を放つて居たからねえ……」

「その戦いで、大いなる闇は肉体を失った……だが、精神体と成つても、奴の邪悪な心は一層闇を広げ、三人のプリキュアに呪いを掛けた！」

「呪い!?!」

話を聞いて居たなぎさとほのかの表情が曇つた。彼女達二人も、ファレオの呪いによつて、生死を彷徨つた事があるのだから……

「そうだ！大いなる闇を封印し、この地上に再び太陽の光を取り戻したが、三人は大いなる闇によつて呪われてしまった!!」

メランは再び目を閉じ、その後の彼女達の事を思い涙した。それを見たなぎさとほのかは、メランの心情を思うと、声を掛ける事が出来ず、変わつてブルーが話を引き継ぎ、「戦いが終わった後、日に日に衰えていく身体に気付いた三人、彼女達も一人の女性……大いなる闇を封印し、プリキュアとして戦う事も無くなつたマジシャンとプリーステスは、何時の日か復活するであろう、大いなる闇を警戒し、新しい国を作つたんだ！それがトランプ王国と、ブルースカイ王国、彼女達は、建国に尽力してくれた者と恋に落ち、子を得た……だが彼女達は、自らの子をその手で抱く事も適わず命を落とした……それを知った僕は、この事実を、この島で余生を過ごして居たエンプレスとメランに知ら

せた!!エンプレスも大分衰弱して居たが、この島にも盟友マジシャンとプリーステスの墓を作り、二人を弔った・・・やがて、彼女も死を迎える直前、僕とメランにある事を頼んだ!!!」

「ああ、エンプレスは、マジシャンとプリーステスと違い、誰かを愛し、その子を成す事も無かった!だがその代り、もし、後の世に禍再び起こる時は、必ず自分達と同じように、プリキュアが現われる事を知って居た!この水晶の鏡であるマジカルラブリーパッドを、後世の世に託せる者が現われた時は、力を貸して上げて欲しいとなあ!エンプレスは、後世のプリキュア達を、自分の娘同様に思ったのかも知れない・・・だが私は、ただ渡すだけでは、後世のプリキュアの為にならぬので無いかと考えた!」

ブルーとメランの話に聞き入って居たなぎさとほのか、二人の目にも涙が溜まって居た。ほのかはメランに話し掛け、

「今までに、あなたの試練に打ち勝ち、この鏡を託したプリキュアは居たんですか?」

「居た!千年前、ブルーと共に戦って居たキュアマミラージュ、百年前、ブルーが連れて来たキュアローズ、キュアフローラ、キュアマーマイド、キュアトウインクルの四人・・・彼女達が、再び暗躍した大いなる闇との戦いで、この水晶の鏡を使い奴を封印した!!他にも何人か来た事があるが、残念ながら、私の試練に打ち勝った者は居なかつた!!!」

「そんな事が有った何て・・・驚いたね、ほのか?」

「うん！正直驚いたよね？」

「大いなる闇かあ……」

なぎさとほのかは、一万年前の話を聞き、更にその戦いは、千年前、百年前にも起こって居たと聞き、互いに驚いていると、ブルーは意味深な表情を浮かべ、

「ああ、大いなる闇……それは、ある意味ではプリキュアの宿敵とも呼べる存在なのかも知れない！何故なら、大いなる闇が暗躍する時、プリキュアはこの地に集ったのだから!!」

「特にブルー、お前さんには宿敵じやろうなあ？千年前、キュアミラーージュを……」

「メラン、その話は止そう!」

「フフフフ、まだ心の傷は癒えんのか？」

「済まない……」

そう言うとう目を伏せたブルーに、なぎさとほのかも気にはなつたが、ブルーの心の傷を広げる訳にも行かず、狼狽えて居ると、メランが二人をジロリと見つめ、

「さて、昔話は終りじゃ！さあ、お前達の力……この私に見せてみる!!ハアアアア!!」

メランが気合いを込めると、徐々にメランの姿が変化して行った……

年老いた小さな老婆の姿から、徐々に巨大化していった。口の上側には、黄金に輝く角が生えて居て、強者の雰囲気漂わせて居た。背中には、妖精姿のなごりのように、亀

のような甲羅が残って居たが、その姿は・・・怪獣とも竜とも思えた！

「う、嘘でしょう!？」

「ここ、これが、メランの真の姿なの?」

なぎさとほのかは、目を点にしなから、咆哮を上げたメランを呆然と見つめた。

3、仲間が居るから・・・

変身したメランの口からは、時折炎が吐かれた。メランはその場で足踏みすると、地響きで島が揺れた。

「さあ、お前達の実力を、この地上に迫る禍を消し去る力を・・・この私に示せ!!」

「ほのか・・・やろう!」

「そうね・・・」

互いに頷き合ったなぎさとほのかは、メツプルとミツプルにアイコンタクトを送ると、二人はコクリと小さく頷いて、ハートフルコミュニケーションへと変化した。なぎさとほのかは、ハートフルコミュニケーションに手をかざし、互いの手を取り合って同時に叫んだ。

「デュアル・オーロラ・ウエーブ!!」

二人の身体をオーロラが包み込み、なぎさとほのかを、プリキュアへと変えて行く・・・

「光の使者・キュアブラック!!」

「光の使者・キュアホワイト!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「それが、お前達がプリキュアになった姿か? さあ! お前達の実力を示せえ!!」

メランはそう言うのと、大きく息を吸い込み、火炎を吐いた。ブラックとホワイトは、今までの数々の戦いで、口から火炎などを吐く者を見て居た事もあり、メランが火炎を吐いても、さしたる驚きは無かった。だがその威力は、この間の赤い大蛇をも上回るかも知れないと咄嗟に理解し、迂闊に攻め込む事をしなかった。尚もメランは攻撃の手を休めず、尻尾や爪でブラックとホワイトを責め立てた。

「どうしたあ!?! お前達の実力はそんなものなのか?」

「ホワイト、向こうが火炎なら、こっちもマーブルスクリューで行く?」

「そうね・・・試して見ましょう!」

(目付きが変わった!?)

メランは、ブラックとホワイトの目付きが変わった事を見抜き、様子を見るように攻撃を止めた。

「ブラック、サンダー!」

「ホワイトサンダー!」

「プリキュアの、美しき魂が!」

「邪悪な心を打ち砕くー！」

「プリキュアア！マーブルスクリユー・・・」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて前に突き出すと、

「マックスス〜!!」

二人の掛け声と共に、マーブルスクリユーマックスが、メラン目掛け飛んで行くも、メランの瞳が輝くと、メランの身体全体を、背中の甲羅のような透明のバリアが覆った。メランが放ったバリアは、完璧にマーブルスクリユーを防ぎきり、ブラックとホワイトを驚愕させた。

「マーブルスクリユーを・・・」

「防いだ!?」

「何を狼狽えて居るうう!」

二人の隙を見逃さず、メランが尻尾を勢い良く振り、ブラックとホワイトに鞭のように振るうと、

「キヤアアア!!」

ブラックとホワイトの身体が、激しく森の中へと吹き飛び、木々に激突して行った。

メランは咆哮し、

「ウウウオオオオ!どうした!?もう終りか?期待外れな・・・ん!」



メランが、ブラックとホワイトを挑発したその時、二人はヨロヨロ起き上がり、互いの状況を確認しあうと、

「参ったねえ・・・流石に伝説の妖精！強い!!」

「ええ、でも私達も・・・」

「あなたの思いに応えてみせる!!」

(何?)

メランは、二人の闘志に、一瞬パートナーであるエンプレスの姿がダブって見えた。ブラックとホワイトは、手を繋ぎ、目を瞑った・・・

「私達の目の前に、希望を!」

「私達の手の中に、希望の力を!」

ホワイト、ブラックの言葉を聞き入れたように、金色の光が、ブラックとホワイトの下に集まってくる。ブラックの右手に、ホワイトの左手に、スパークルプレスが装着された。漲ってくる力を現わすように、腕を回しながら構えたブラックとホワイトの姿に、メランは、ブラックとホワイトの二人から、先程を遥かに凌駕するを感じ、

「何だ!?!あの二人から、先程以上の力を感じる?まさか、これがブルーの言って居た?」

「メラン・・・あなたの一万年前から続く思いを、私達が受け継ぐ!」

「だから、私達の思い・・・受け止めて!」

「ハアアアアアア!!」

ブラックとホワイト、二人の気合いが島全体に響くかのように、島が震えた。波がざわめき、生き物達がざわめいた。戦いを見守るブルーの表情も険しさを増した。

(二人は……この一撃に全てを掛けるようだ!メラン、君はどうする?)

ブルーの視線がメランに向けられると、メランも大きく息を吸い込み、二人の攻撃を待った。雄叫び終えたブラックとホワイトが駆け出すと、大きくジャンプし、メラン目掛け急降下の蹴りを放つようだった。

「甘いわああ!!」

メランはそう吐き捨て、火炎をブラックとホワイトに放った。

「ヤアアアアア!!」

二人は一層の雄叫びを上げ、蹴りから発せられる風圧で、メランの火炎をもともせず急降下し続ける。メランは慌てて目を光らせ、再びバリアを張るも、ブラックとホワイトの急降下し続ける勢いを見た時、バリアは持たない事を見抜いた。勝敗が決した事を見抜いたブルーは、

「ブラック!ホワイト!そこまでああ!!それ以上続けてはメランがああ……」

慌ててブルーが二人に待ったを掛けるも、ブラックとホワイトの雄叫びは続き、メランが放ったバリアは砕け散った。その勢いのまま二人の蹴りはメランを擦り、その威力

の前にメランは吹き飛び、妖精姿に戻って目を回した。凄まじい地響きと共に、ブラックとホワイトが放った蹴りで、周囲に巨大なクレーターが出来て居た。

(す、凄い・・・これがキュアブラックとキュアホワイトの真の力!?!いや、彼女達はまだ全力には見えなかった!)

驚愕するブルーを余所に、クレーターから這いだして来たブラックとホワイトは、目をグルグル回して気を失っているメランに近付き介抱すると、

「アハハハハ・・・張り切り過ぎちゃった!」

「ゴメンなさい!メラン、大丈夫?」

メランはゆっくり目を開けると、ブラックとホワイトの顔を見た瞬間、烈火の如く怒り出し、

「このバカたれ共がああ!もつと年寄りを労らんかああ!!碌な目に遭わんぞ、お前らああ!!」

「ゴメンなさい・・・」

「やれやれ!メラン、元氣それで良かったよ!」

「全く、困った奴らじゃ・・・じゃが、試験は合格じゃ!付いて来い!!」

メランは、ブラックとホワイトに自分に付いて来いと伝えると、二人は変身を解き、ブルーと共にメランの後を追った。メランは、岩山にある鍾乳洞の中に入ると、その中

心部は大きな空洞になって居て、その奥に、何かの鏡が祭られて居た。メランは鏡を指差し、

「あれが水晶の鏡、マジカルラブリーパッドじゃ！さあ、持って行くが良い!!」

水晶の鏡、マジカルラブリーパッド・・・

縁を紫色で覆われた神秘的な鏡が、なぎさとほのかに、その存在を知らせるかのようにキラリと輝いた。メランは、なぎさとほのかに促すも、なぎさとほのかは、顔を見合わせ合うとココリと頷き合った。なぎさはメランを見つめると、

「メラン・・・水晶の鏡は、私達は受け取れない!」

「な、何じゃと!?!お前達、一体何を言ってる?」

「あの鏡は、メランとエンプレスを結び付ける大切な物・・・私達は受け取れない!!」

ほのかもなぎさ同様、水晶の鏡は受け取れないとメランに話した。ブルーも呆気に取られて聞いて居たが、二人の真意に気付いたのか、口元に少し笑みを浮かべた。メランは表情を険しくし、

「バカ者! あれは、お前達に取って、今後の戦いを有利に・・・」

「分かっている! 昔の私達なら・・・喜んで受け取って居たと思う!!」

「ええ、レインボーブレスや、スパークルブレスを手に入れた時のように、私達は受け入れて居たかも知れない・・・」

「だったら・・・」

「さつきあなたから聞いた、一万年前の出来事を聞いた時、私達、思ってたんだあ・・・エンプレス達は、三種の神器があつたから、大いなる闇と戦えた訳じゃ無い！」

「メラン、あなたを含めた信頼出来る仲間が居たから、何度でも大いなる闇に立ち向かえたんだと思うの！」

「・・・・・・・・・・」

「今の私達には、ルミナス以外にも、ムーンライト達を始めとした、沢山のプリキュアの仲間が居る！そりゃあ、何度もヤバイ目には遭つてるけど、私達は、大勢の仲間と共に乗り越えて来た!!」

「今の私達に必要なのは、更なる仲間達との繋がる心・・・当然、まだ未熟な面もあるけど、それを補う為、私達、今度みんなと合宿をするの!!」

「それに・・・水晶の鏡は、私達以外の人が使うべき物じゃないか・・・そういう気がするの!!」

「ジツと聞いていたメランは、そこでハツとした。なぎさとほのか達以外の者が使うべきと聞き、メランは思わず二人に問い、

「どういう事だい!?!」

「うーん、私達にも良くは分からないんだけど、大いなる闇が、私達に仕掛けてくるとは

限らないんじゃないかなあ？」

「もしかしたら、私達の後の世代が必要なのかも知れないって思ってる！」

なぎさとほのかの言葉を聞いたブルーはハツとした。千年前の出来事を思い出して居た。

（そうだ！大いなる闇は、邪悪なる生命体・・・自ら前に出て戦うというより、裏で暗躍してほくそ笑む者・・・あの時、僕とミラージュの仲を切り裂いた時のように・・・）

「ウウウウム・・・」

メランは思わず唸った・・・

確かに、今水晶の鏡を使って禍を払えば、大いなる闇は沈黙し、後世にその牙を向ける事は有り得ると思えた。仮にブラック達が水晶の鏡を使ったとして、その後で水晶の鏡がその真の威力を発揮するまでには、十年は光の力を蓄える必要があった。メランはチラリと水晶の鏡を見つめると、エンプレスがクスリと微笑んだ気がした。メランは溜息を付くと、

「やれやれ、とんだ無駄な試練じゃったなあ・・・」

「ウウン、私達勉強になったよ！」

「あなたとの戦いを通じて、学んだ事があるような気がします！」

「フーン！褒めても何も出んぞ？」

「アハハハ！ そうだ！ 折角だから、エンプレス達のお墓参りしたいんだけど・・・駄目かなあ？」

「何!? エンプレス達の墓参りじゃと?・・・フツ、お前達ならば、エンプレスも喜ぶかも知れん・・・その道を通つ直ぐ進め！ 外に出れば、そこにエンプレスが眠る墓がある！」

「ありがとう!!」

なぎさとほのかは、メランに礼を言い、エンプレスが眠る墓へと駆け出した。ブルーはメランに近づくと、

「メラン、どうだった!? キュアブラックとキュアホワイトの二人は?」

「正直・・・良く分からん！ だがあの二人からは、一万年前から続く、エンプレス達の意思が宿って居る・・・そんな気がする!!」

「そうだね・・・」

メランとブルーは、大きな石を積んで作られた、エンプレス、マジシャン、プリーステスの三つの墓に、祈りを捧げるなぎさとほのかの後ろ姿を、ただ黙ってジイと見つめて居た・・・

この時、なぎさとほのかの脳裏に、エンプレス、マジシャン、プリーステスが、プリキュア！ エクスクラメーションを、大いなる闇に放つ姿が目に見え居た。エンプレ

ストとプリーステスが、前方で背中合わせにしゃがみながら構え、後方でマジシャンが、光の槍を前方に向けながら両手を付きだして居た。エンプレスとプリーステスも黄金の槍を掴み、三人の雄叫びと共に、光の槍から目映い光が輝き、一気に光が大いなる闇を飲み込んで行く姿が・・・

（これが・・・プリキュア！エクスクラメーション!?）

まるでなぎさとほのかに、技を伝授しようという三人の意思が働いたかのように・・・

メランとの交流も終え、ブルーは姿見鏡を出現させると、

「さあ、元の場所まで送ろう！」

「メラン、色々ありがとう！今度は私達の所に遊びに来てよ!!みんな喜ぶから!!」

「そうも行かん・・・私にはこの島を守る勤めがあるからなあ！」

「そうですか・・・今度は、みんなを連れて遊びに来ても良いですか？」

「やれやれ、騒がしいのは苦手じゃが・・・たまには・・・な？」

「はい!!」

メランがウインクし、なぎさとほのかが嬉しそうにはいと返事を返した。なぎさとほのかは、メランに手を振りながら帰って行った。

（フツ！キュアブラックにキュアホワイトか・・・不思議な奴らじゃ!）



メランは口元に笑みを浮かべ、鍾乳洞の中へと消えて行った・・・

ブルーによつて元の場所に送つて貰つたなぎさとほのか、既に空は真つ暗になつて居て、あれから数時間は経つた事が二人にも分かつた。さて車に乗り込もうとした時、二人の顔が凍り付いた・・・

「嘘!?私の車が・・・無い?」

「エッ!?エッ?どうして!?此処だつたよね?」

「う、うん・・・」

泣きそうな表情を浮かべるほのかを、なぎさが励ましていると、車が止まつて居た道路に、何かが書かれて居た。

「ほのか、何か地面に書いてある!」

「エッ!?本当だ?」

なぎさとほのかが、地面をジイと見てみると、そこにはほのかの車のナンバーと、警察署の電話番号が書かれて居た・・・

「ほのか・・・これってひよつとして、レッカー移動されたんじゃない?」

「う、うん・・・私の車ああああ!」

ほのかは、泣きそうな表情で天を仰ぎ、二人は暗闇の中で途方に暮れた・・・

第一百七話：ブラック、  
ホワイトVS伝説の妖精メラン  
完

## 第百八話：水着泥棒は誰!?

1、プリキュア合宿開始

8月6日の午前十時・・・

集合場所をナッツハウスにした一同、のぞみ達、咲達、ラブ達、つぼみ達、響達、みゆき達、真琴とアン王女、そして、フラッピ達、シフォン、シプレ、コフレ、ポプリ、ハミイとピーちゃん、フェアリートーン達、ハミイに誘われたキャミー、キャンデイ、グレルとエンエン、そしてダビィは、既に集まって居た。

半袖のワンピースを着ているのは、舞、こまち、えりか、れいかの四人!

スキニーパンツを着ているのは、薫、りん、つぼみ、響、みゆき、やよいの六人!  
短パンを着ているのは、咲、満、ラブ、あかね、アコ、真琴の六人!

タイトスカートを履いているのは、かれん、美希、せつな、ゆり、なお、アン王女の六人!

ミニスカートを履いているのは、のぞみ、うらら、くるみ、祈里、いつき、奏、エレン、あゆみの八人!

集合した一同は、ワイワイと合宿についての話題で盛り上がって居ると、シロップが

上空から急降下して来て、ナッツハウス前に降り立った。シロップの背からココが顔を  
出し、

「みんなあ！お待たせココオオ!!」

「ココ！それに・・・」

のそみはココを見て微笑み、ココの後ろから続々と降りて来る妖精達を見た。それを  
見た一同は、ニコニコしながら微笑み、

『ようこそ！私達の世界に!!』

一同が笑顔で出迎える中を、ココとナッツ、タルト共に降りて来たのは、シャルル、ラ  
ケル、ランス、ぐらさん、アロマとパフの六人、六人はココ達に引率されて遊びに来た。  
グレルとエンエンは、久しぶりに会った妖精学校のクラスメート達を見て目を細めた。

「みんな、久しぶりだなあ・・・元気だったか？」

「本当に久しぶりだねえ・・・でも、今日はどうしたの？」

グレルとエンエンは、クラスメート達との再会に目を細めた。話し掛けられた妖精学  
校の生徒達も、元気そうなグレルとエンエンを見て目を細めた。シャルルは、ちよつと  
見ない間に遅くなったような二人に、驚きながらも話し掛け、

「元気シャルよ！夏休みをどう過ごそうかと考えてたら、ココ先生達に誘われたシャル  
!!」

「折角だから、パフ達も遊びに来たパフ！」

「まっ、そういうこった！よろしくな!!」

「そう言えば、お前達、キュアエコーのパートナーになれたって聞いたロマ！」

パフ、ぐらさん、アロマも話に加わり、グレルとエンエンに話し掛けた。グレルは、エンエンと顔を見合わせてニンマリすると、

「オオ！色々あつて、俺とエンエンは、あゆみのパートナーになったんだ！」

「フフフ、グレルとエンエンは、私に取って大切なパートナーよ！」

ニッコリ微笑み合うあゆみとグレルにエンエン、それを見たラケルは羨ましそうに、  
「夢が叶う何て・・・凄いケル！」

「大丈夫ですよ！きつとあなたにも、素敵なパートナーが見つかります!!」

ニッコリ微笑んだれいかに、頭を撫でられたラケルは、デレデレした表情を浮かべ、  
「もう・・・見付けたケル！」

「エツ!!? そうなのですか？」

「ウン！ラケルのパートナーは・・・君ケル!!」

「エツ!!? 私ですか？」

デレデレしたラケルに指名されたれいかは、キョトンとした表情を浮かべると、さすがにシャルルがラケルに対し、お腹で体当たりをした。

「何寝ぼけた事言ってるシャル! れいかは、もうプリキュアになってるシャル!!」

「申し訳ありませんが、別の方を捜して下さい・・・」

「トホホケル・・・」

シャルルには怒られ、困惑したれいかにも拒否をされ、ラケルは耳が萎(しお)れた。  
「そんな事より、暑いでランス・・・」

ランスはそんな話に興味が無いのか、日陰に避難しながらバテて居た・・・

一同は、この場にまだ来て居ない、なぎさ、ほのか、ひかりの到着を待つて居た・・・

「なぎささん達、遅いですねえ?」

のぞみに聞かれたゆりは、携帯をチェックしながら、

「もうとっくに出たから、そろそろ来る頃よ! 噂をすれば・・・」

ゆりの視線に、昨日乗せて貰ったほのかの白い軽自動車飛び込んで来た。あの時と違い安全運転のようで、ゆりは思わずクスリと笑うも、車から降りてきた三人の表情は優れず、一同は首を傾げた。

なぎさは、ピンクと黒のツートンカラーのブラウスと、花柄のフレアスカート姿で、ほのかは、フリルの着いた白のワンピース姿で、ひかりは、紐の付いたラメの刺繍が入ったタンクトップで、下はベージュのタックパンツ姿で一同の前に姿を見せると、

「みんな、遅れてゴメンね！」

「すいませんでした！」

なぎさとひかりが一同に謝り、ほのかはかれんを見付けると、慌ててかれんに近づき、徐にかれんの両手を握り、

「かれんさん！此処は車止めてても・・・大丈夫？」

「エツ!?ええ、ナッツハウスがあるこの公園自体、家の私有地ですし、大丈夫ですよ！」

「本当!?本当ね？」

「エツ!?エエ・・・」

ほのかに念を押され、困惑するかれん、それを見たゆりは、肘でなぎさを突つつき、小声でなぎさに話し掛けると、

「なぎさ、ほのかは一体どうしたの？」

「アハハハ！ほら、昨日四人で買い出しに行つたじゃない？ゆりを送つたあの後、ひかりを送つて、私を送つてくれる途中で、神様と会つてさあ・・・」

「神様と!?!」

「そう、それで車を止めて、神様が、私達に会わせましたがつてた人に会いに行つたんだけど・・・まあ、この話は合宿所に着いたら、改めてみんなにするけど、それで用を済ませて戻つたら・・・ほのかの車、レッカー移動されてて・・・」

「エッ!?成る程・・・それでほのかが、珍しく取り乱して居るのね?」  
なぎさとゆりは、ほのかが、困惑したかれんに縋るような様子を、苦笑を浮かべながら見て居た・・・

ほのかが車で現われた事で、他の一同も興味深げにほのかの車に群がった。のぞみとラブは、窓から車の中を覗き込むと、

「へえ、ほのかさん、車買ったんですねえ?」

「良いなあ・・・私も乗ってみたい!」

のぞみとラブのように、みゆきも窓ガラスにへばり付き、顔を変形させながらジイと車の中を覗き込むと、

「私も乗ってみたいなあ・・・」

「じゃあ、戻って来たら乗ってみる?」

ほのかは、かれんに車を止めて居ても大丈夫だと言われた事で安心したのか、ニコニコしながら、のぞみ、ラブ、みゆきをドライブに誘うと、三人は見る見る嬉しそうな表情を浮かべ、

「「良いんですかああ?」」

「エエ、良いわよ!」

「本当!?!私も乗りたい!!」



響も羨ましそうに車を見つめながら言うと、ほのかはニコニコしながら、

「四人乗りだから、交代になるけど、それでも良いなら・・・」

『ワ〜イ!』

ほのかから許可が出て、車に乗りたいメンバー、のぞみ、ラブ、みゆき、りん、うらら、つぼみ、えりか、響、あかねが喜びの声を上げた。なぎさは微妙な表情を浮かべると、

「止めなくて良いかなあ?」

「のぞみ達も喜んでるし、それに、ここはかれんの家の私有地だそうだし、あの時のようにはならないでしょう?」

「まあ、ここつちに来る時も一応大丈夫だったし・・・いつかあ!」

ゆりから、水無月家の私有地である公園内なら、マナーが悪い運転手などに動くわす事など無いから大丈夫だろうと言われると、なぎさも苦笑しながら同意した。それよりゆりは、ひかりがナツツハウスの入り口前の階段に、グツタリしながら腰を下ろして居る事に気づき、首を傾げた。

「それよりなぎさ・・・ひかりの表情が優れないけど?」

「ああ、昨日の今日で、ひかりは、ほのかの運転ちよつと怖がつてさあ!ひかり、最初は電車で行くって言ってたんだけど、ほのかに一緒に行こうって誘われて・・・ひかり

は優しいでしょう？断れなくて一緒に車で来たんだけど、車の中であんな感じになっちゃった！」

なぎさとゆりは、舞や祈里に心配されて居るひかりを見ながら呟いた。なぎさとほのかは、持つて来た荷物を車から降ろし、ほのかはナッツハウスの脇に車を止めた。せつなは、まるで引率の先生のように一同を呼び寄せると、

「じゃあ、みんな集まって！かれんさんの別荘に向かうわよ！」

「ワクワク！ワクワク!!」

みゆきとやよいが、同じような表情で両脇を広げたり閉じたりして興奮し、それを見て居たアコは呆れ、こまちとあゆみは苦笑を浮かべた。えりかも大はしやぎで、

「よっしやあ！出発ううう!!」

「ハア・・・えりか、遠足じゃ無いんだから！」

「エエエ!?!そういう美希姉えだつて、荷物一杯持つて来てるじゃん！」

えりかは変顔浮かべながら、不満気に美希の荷物を指差し抗議した。成る程美希のバッグは他の一同より大きく、指摘された美希は動揺するも、

「コ、コホン！こ、これは・・・色々よ！」

美希は、軽く咳払いをして誤魔化した。れいかは、なおのバックをチラリと見ると、海外旅行に行くかのような、キャリーバックが一つ、後はページュのシオルダーバックを

肩から下げて居た。

「なお・・・随分荷物を持って来たんですねえ？」

「エッ!? だってえ、島に行くんだよ？」

「そうだけど、一体何を持って来たの？」

エレンも会話に加わり、興味深げになおのキャリーバックを指さした。なおはキャリーバックを開けると、思わずれいかとエレンの目が点になった。

「虫除けスプレーでしょう！ それに、殺虫剤も・・・どんな虫が居るか分からないから、ゴキブリ用、蠅、蚊用、蟻用、蜘蛛用、ダニ用を三本ずつ、後は、ゴキブリホイホイや蚊取り線香も欠かせないよね！」

キャリーバックの中身が、全部虫撃退の商品だと知り、れいかは呆然としながらキャリーバックを指差し、

「ぜ、全部虫関係なのですか!?!」

「だってえええ！ 別荘周辺には森とかあるんでしょう？ 想像しただけで・・・ヒイイイ!!」  
なおは、両手で頭を抑えながら変顔を浮かべた。なおにとつて、虫の事を考えただけで、鳥肌が立つてくるようだった。アコは、呆れたようになおを見つめ、

「島中の虫を殺す気!?!」

「可能ならば・・・」

「なおおおおお!!」

「だつてえええ……」

なおの過激な発言を耳にし、眉間に皺を寄せたかれんがなおに一喝し、なおはトホホ顔を浮かべた。それを見たラブは笑い出し、

「アハハハ、なおちゃんらしい!それに美希たん!美希たん、新しい水着買いに行つてもんねえ?」

「そういうラブも、あたしやブツキー、せつなど一緒に買いに行つてるでしょう?」

「アハハハ!そうでした!!」

ラブ達が水着を買いに行つたと聞き、薫の脳裏に、絵本の世界でのラブの姿が思い出されて居た。薫はラブのバックを指差し、

「まさかラブ……あの時のような貝殻ビキニを!」

「あんな水着……二度と着るかああ!」

ラブも絵本の世界での事を思い出したのか、顔を赤らめながら即座に否定した。貝殻ビキニという言葉に驚いた真琴とアン王女の二人は、

「貝殻ビキニ!」

「それはどういう物ですか?」

「真琴、アン王女、興味があるなら……あたしが後で、ブルンで試着させてあげるけど

「？」

美希が楽しそうに二人にその声を掛けると、祈里とくるみが慌てて美希に話し掛け、

「み、美希ちゃん!？」

「知らないわよ？」

「女同士だし、大丈夫よ！」

美希は大丈夫と済ました表情を浮かべるも、ラブも微妙な表情で、

「着た事あるから言うけど・・・タルトやココとナッツ、シロップにピーちゃん達だつて居るよ？」

「まあ、あの五人なら大丈夫でしょう？魔王が居たら別だけど・・・」

美希は、魔王に受けた数々の辱めを思い出したのか、嫌そうな表情を浮かべながら呟いた。

「そう言えば、魔王の姿が見えないわね？」

魔王の話題が出た事で、せつなは辺りを見回し、魔王がこの場に居ない事に気付居た。ラブは苦笑しながら、

「みゆきちゃんに頼んで、魔王には内緒にして貰ったからね!でも、後で魔王にバレたら・・・ちよつと怖いかも!？」

ラブの心の中に、少し不安が沸き上がった・・・

その頃、魔王は・・・

みゆきの家で、退屈そうにテレビを見て居たが、あまり興味がありません。やっとなかったのか、テレビを消すと、ソファーにゴロゴロ転がった。

「つまらないカゲエ・・・育代ママは、博司と出かけて居ないし、みゆきとキャンディも、あかね達とどっか行つたし・・・美希ママの所にでも遊びに行くカゲかあ！」

電気を消した魔王は、そのまま美希の家へと遊びに出かけた。レミと魔王は、妙なところでフィーリングが合い、二人は話が弾むようで、魔王は母親達の中でも、特にレミと親しかった。だが、美希の家はシャツターが降りていて張り紙がしてあり、16日間で休業すると貼ってあった。魔王はシヨックでヘナヘナ店の前で倒れ込むと、パート先のスーパーに向かつて居た、ラブの母あゆみが通り掛かった。あゆみは、黄昏れた魔王に気付くと声を掛け、

「あら!?魔王ちゃんじゃない!」

「ん!?・・・ラブママ!」

魔王は、ラブの母であるあゆみを見ると、目を細めながらパタパタ宙に浮かび、側に寄って行つた。あゆみは魔王の頭を撫でながら、

「魔王ちゃん、この前はありがとう!とここで魔王ちゃん、レミさんの家に用事でもあつ

たの?」

「退屈だったんで、美希ママの家に遊びに来たカゲ!」

「そう・・・レミさんは、お知り合いとハワイに行つて留守にしてるし、美希ちゃんはラブ達と・・・そう言えば魔王ちゃん!魔王ちゃんは、ラブ達と一緒に行かなかったの?」  
「何の事カゲ!?!」

「あら!?!ラブだったら、魔王ちゃんに話してなかったの?プリキュアのお友達と合宿するつて、朝から出掛けて行つたわよ?」

あゆみの話を聞いた魔王は、見る見る困惑すると、

「そんなの聞いて無いカゲ・・・」

「そう・・・困つたラブねえ?」

あゆみは首を傾げながら、魔王を除け者にしたラブに溜息を付いた。

（おのれラブ!おのれみゆき!俺を除け者にしようとしても、そうはいかないカゲエエエ!）

魔王の目に炎が灯つた事を、ラブ達を知る由は無かつた・・・

せつなのアカルンの力で、かれんの別荘がある島に着いた一同は、プライベートビーチに立つと、思わず感嘆の声を上げた。

『ウワアアアアア！素敵いいいい!!』

正面には、別荘に続く長い階段があり、別荘だけでも、東京ドーム数個分は余裕でありそうな広さがあつた。別荘の周りには、深い森が広がって居て、左右の脇には高い崖があり、この島の目印になりそうな配置をして居た。再びビーチ側を見てみると、クルーザーで来た時に止める桟橋があつた。今立っているプライベートビーチには、百人以上は余裕で過ごせそうな広さがあり、更には正面に広がるオーシャンブルーの海が広がっていて、一同が感嘆するのも納得出来た。

「じゃあ、先ずは荷物を別荘に置きに行きましょう!」

「重たい物は桟橋にでも置いておいて、後で私が別荘まで持つて来るから!」

かれんが一同に声を掛け、せつなは、重い荷物は後で自分が持つて来るから、ここに置いておいて良い事を伝えた。かれんは一同を引き連れ、別荘へと案内し始めた。

一同が階段を上り、別荘に近付く度に歓声が沸き上がり、周りをキョロキョロ見回した。咲は大きなプールを見て仰け反り、

「す、凄い!?!プールまである?」

「ほ、本当……此処、何処かのリゾートホテルみたいね!」

流石のゆりも、驚愕しながら眼鏡を曇らせた。かれんは別荘だと言っていたが、初めて来た一同に取っては、何処かの高級リゾートホテルにしか見えなかつた。プールサイ



ドには、野外で食事も出来るように作られて居て、のぞみが得意そうに、  
「前に来た時、取り立ての魚介を使って、パーベキューをしたんだよ！ねえ、かれんさん？」

「エエ、もし釣りとかに興味有るなら、釣り竿もあるわよ？この近辺は、水無月家の所有だから、魚介類も取り放題だし……」

『す、凄い……』

一同は、かれんからの話を聞いて、思わずゴクリと生唾を飲み込んだ。エレンは満面の笑みを浮かべながら、

「取れたての魚を食べられる何て……最高ねえ！」

「でしょう!?!あたし達も最初に来た時は、大喜びで魚介取りに夢中だったわ！なおも、魚なら平気でしょう?」

「ウン！魚なら平気かな!!」

りに聞かれたなおも、嬉しそうに頷いた。れいかは首を傾げながら、  
「でも、なお……釣り針には、沙蚕（ごかい）のような餌が必要ですよ?」

「ヒイイイ！れいかあ！練り餌だって良いでしょう?嫌な事思ひ出させないで!!」

『アハハハハ』

怯えながられいかに抗議するなおを見て、思わず一同が笑い声を上げた。別荘の中に

入るも、本当にどこかのリゾートホテルじゃないのかと思う程だった。かれんは一同に話し掛け、

「みんな、ゲストルームは二十室あるから、二人ずつで良いなら、好きな部屋を使って！」

「に、二十室!？」

「ホンマにホテルみたいやなあ？」

ゲストルームが二十室あると聞き、舞が思わず驚きながら眩き、あかねも改めて室内を見渡した。好きな部屋を使って良いと言われ、えりかは目を輝かせて喜び、

「ウツヒヨオオオ！何所でも良いの？何所にしようかなあ・・・」

「まあ、部屋選びは後でも良いんじゃないかな？」

苦笑したいつきがえりかを諭した。のぞみは、一同の反応を見てニコニコして居たが、

「そうだ！かれんさん、この島をみんなに案内しようよ！」

「そうね・・・」

のぞみの提案に、かれんが賛成しようとした時、ゆりの眼鏡がキラリと光った。ゆりは一同を見渡しながら、

「良いわね！特訓を兼ねて・・・」

『エッ!?!もう?』

困惑する一同を余所に、ゆりは眼鏡の位置を直しながら、

「当然でしょう!!? 此処に何しに来たと思つて居るのかしら?」

「そうね・・・じゃあ、着替えたらみんなを案内するわ!」

かれんもゆりの提案に同意し、一同は、トレーニングウェアに着替えると、かれんの別荘周辺を、ランニングしながら一周しに行った・・・

その間妖精達は、プールサイドで気持ち良さそうに眠つて居たが、ランスだけは室内に残り、

「この暑いのに、外に居る何て間抜けでランス・・・ハア、極楽でランス!」

コップに入ったグレープジュースを、美味しそうにストローで飲みながら、冷房の効いた涼しい部屋で、気持ち良さそうに昼寝を始めた・・・

2、咲には内緒!

『ファイトオ!ファイトオ!』

「ヒイヒイヒイ!?!虫いいいいい!」

左右に広がる深い森の中を、三十三名の少女達が、掛け声合わせてランニングして居ると、時折なおの悲鳴が沸き起つた。その後では、泣きながらなおが大量の殺虫剤を撒き、

「なお！止めて頂戴!!」

この島の主であるかれんが、なおを背後から羽交い締めにして止める。そんな光景が何度か続くと、ようやく一同は森を抜け、再び海岸へとやって来た。ゆりは一同を止める、

「足腰の鍛錬にもなるし、修行は主に此処でやりましょう!」

『はい!』

一同がゆりに返事を返した。なぎさは、ゆりに話し掛けると、

「ねえ、ゆり・・・初日だしさあ、最初は軽く汗を流す程度にしない!？」

「どうして?」

「ほら、持ち主のかれんや、来た事があるのぞみ達は兎も角、私達は初めてだしさあ・・・」  
「晩ご飯をどうするかとかも、決めなきゃならないもんね?」

「そうそう!流石ほのか!!」

なぎさをすかさずフオローするほのかの言葉に、なぎさは我が意を得たりと何度もココク顔した。ゆりも、そういう理由ならばと納得したのか、

「そうね・・・そういう事なら、1時まで基礎鍛錬をして、その後は自由時間で良いわよ!」

『ヤッタァー!!』

自由時間が長く取れそうだと分かり、一同が喜んだ。なぎさは小声でほのかとゆりに話し掛け、

「ねえねえ、咲には内緒で、明日の咲の誕生パーティーやるのを、みんなにも伝えて置かない？多分、舞や満と薫は、咲の事お祝いしようと思ってるだろうし・・・」

「そうね・・・なら、私が咲を連れ出すから、その間にみんなと打ち合わせしておいて！」

「OK」

ゆりの提案を聞き入れたなぎさとほのか、ゆりは咲を呼ぶと、

「咲、もう一週走れるわよね？」

「エエエ!?あたしだけ？」

「咲は、部活があつて明日の夜には帰るでしょう？他のみんなは、なぎさとほのかの指示に従つて！じゃあ行くわよ、咲!!」

「そういう事なら・・・でも、扱かれてるみたいでトホホなりく・・・」

咲が変顔浮かべながら、悄げる姿を見た舞は、少し表情を曇らせ、

「だったら、私も・・・」

「アツ!?舞さんは、私達と一緒に・・・」

「どうしてですか？」

ほのかに呼び止められた舞は、少し不服そうにほのかをジイと見て居ると、なぎさが

舞の背中を押しながら、

「まあまあ!じゃあゆり、よろしく!!」

「エエ、そっちもね!」

「よし、気合い入れ直すぞおお!」

「咲、その意気よ!」

咲は気合いを入れ直し、ゆりの後に続いて再び階段を上ってランニングを始めた。舞は恨めしように、なぎさとほのかを見つめると、なぎさとほのかは、苦笑しながら一同を手招きし、

「ねえ、舞!満!薫!あんた達、明日の咲の誕生日に、何かしてあげようと考えてるんでしょう?」

「エツ!?なぎささん、知ってたんですか?」

なぎさが咲の誕生日を知って居た事で、舞が目を見開いて驚いた表情を見せた。なぎさはひかりを指さすと、

「ウン!前にひかりに聞いた事あるから・・・そこで、折角みんな揃ってるし、咲に内緒で、みんなで咲をお祝いして上げようって考えててさ・・・みんな、どう?」

『異議無し!』

なぎさの提案を、満場一致で一同が受け入れた。それを見た舞の目はウルウル緩み、

「みんなああ……ありがとう！咲もきつと喜ぶと思うわ!!」

「何で舞が泣くのよ?」

くるみは怪訝そうな表情で、涙を流す舞を見て首を傾げると、舞は涙を拭いながら、  
「だつてえ……嬉しくて……」

「アハハハ！舞つたら感動しすぎだよ!!で、当然ケーキも用意してあげたいよねえ?」

「エエ……満さん！満さんは、咲さんのお店で手伝っているのよねえ?」

「エエ、手作りケーキでお祝いしてあげようつて事なら、喜んで作らせて貰うわ!」

「じゃあ、私も手伝うわ!」

咲の店でアルバイトをしている満、実家がカップケーキ屋で、デザート作りが得意な  
奏も、満を手伝うと立候補した。更に元気良く手を上げた響が、

「ハイハイ!じゃあ私も!」

「響は駄目よ!」

奏は首を左右に振りながら、響の立候補を却下した。響は不満そうに口を尖らせる  
と、

「何で!?!」

「折角のケーキが……響の摘み食いで無くなっちゃうわ!」

「人聞きの悪い事言わないでえええ!!」

『アハハハハ』

何時も通りの痴話喧嘩を始める響と奏に、一同は思わず笑い出した・・・

30分後・・・

再びゆりと咲が戻って来た事で、一同は別荘へと戻って行った・・・

かれんとこまちの二人は、受験生である為、かれんが普段利用している部屋を利用する事が決まった。他の一同が部屋割りをどうしようか決め始めると、のぞみが一同に話し掛け、

「ねえねえ、折角だし、ペアで泊るのを、くじ引きで決めてみない?」

「面白そうやん・・・ウチ賛成!」

『良いわよ!』

「あたしは、明日で帰っちゃうから、あたしと同じ部屋は三人にしない?」

『OK!』

のぞみの提案に真っ先にあかねが賛同し、他の一同も聞き入れた。咲の提案にも一同が賛成し、各部屋の二人組をくじ引きで決めた。なぎさと真琴、ほのかと舞、ひかりとくるみ、咲とのぞみ、そしてなおの三人、満と奏、薫とアコ、りんと響、うららといつき、ラブとあゆみ、美希とえりか、柝里とエレン、せつなどあかね、つぼみとみゆき、ゆ



りとやよい、れいかとアン王女が同部屋と決った。

「じゃあ、残った部屋を、ココ達で使って！」

「分かった！みんな、集まってえ!!」

「部屋に移動するぞ！」

かれんに言われた、人間姿のココとナッツが領き、妖精達を呼び寄せるも、二人の側に、見慣れない大人の女性が一人混じって居た。濃い青紫色のショートヘアで、眼鏡を掛けて居る女性の姿に、なぎさは首を捻りながらかれんに話し掛け、

「ねえ、かれん……あの人、お手伝いさん？」

「いえ、私も今初めて見た方で……」

かれんも初めて見る女性に、困惑しながらなぎさに告げると、徐に真琴が会話に加わり、

「あれは……ダビイです！」

「何だ、ダビイかあ……エツ!？」

「ダビイって、人間姿になれたかしら？」

なぎさとかれんは、ダビイが人間姿になれる事は、今初めて聞いたような気がして首を捻ると、真琴はダビイを見ながら話し始め、

「みんなで妖精学校に行った時、ココとナッツから教わったそうです！」

一同にもダビイが人間姿になれる事が分かり、皆感心したようにダビイを、見つめ、  
『へエー!』

「ああ、あの時……」

真琴の説明を聞いた瞬間、のぞみとこまちの軽蔑の視線が、ココとナッツに飛んだ。  
二人は見る見る顔から汗を流し、

「お、おいおい!あの時ちゃんと説明しただろう?」

「また蒸し返すつもりか?」

「別にいい……」

のぞみとこまちは、同じような仕草でソツポを向き、慌てるココとナッツを見た一同  
が笑みを浮かべた。そんな騒動も気付かないように、ダビイはキョロキョロ辺りを見回  
すと、ランスの姿が見当たらない事に気付いた。

「そう言えば……ランスの姿が見えないわねえ?」

「エッ!……大丈夫だとは思うけど、人間界に慣れて居ない、ランスだけ残すのは不味  
いね!」

「ああ、少し部屋の中を捜してみるか?」

全員揃わないと、部屋に移動出来ないというココとナッツの声を聞き、アン王女は見  
る見る表情を曇らせ、

（あの子の性格からして・・・）

「わたくしに思い当たる節がありますので、かれんさん、わたくしと一緒に来て頂けませんか？」

「エエ、構いませんけど・・・」

アン王女は、今別荘で冷房が掛けられている部屋を聞くと、そこに向かった。大広間へとやって来た二人は、そこで気持ち良さそうに寝ているランスを見付けた。かれんはクスリと笑い、

「フフフ、気持ち良さそうに寝て居ますねえ！ココ達には後で・・・アン王女!」

かれんは、気持ち良さそうに寝ているランスを、このまま起こすのも悪いと思ったものの、アン王女は無言でランスに近付くと、片手でランスの頭を持ち上げ、かれんは思わず呆然とした。気持ち良さそうに寝ていたランスだったが、突如驚かれ目を開けると、そこには、口元に笑みを浮かべながらも、目には殺気すら放つて居るアン王女と目が合った。

「ランスウウ・・・ちゃんと皆さんと行動しなくては、駄目ですわああ!」

「ゴ、ゴメンでランスウウウウ!」

その瞬間、ランスの口から魂が抜けたかのように、ランスはグツタリし、振り向いたアン王女は、困惑するかれんに、満面の笑みを浮かべ、

「さあ、皆さんの下に戻りましょう!」

「アン王女・・・確認するようですけど、その子、生きてますよね?」

「まあ!?かれんさんだったら・・・当然ですわ!フフフ!!」

アン王女は、片手でランスの頭を掴みながら、かれんと共に大広間を出て行った。かれんはこの時、アン王女を怒らせるのだけは、絶対止めようと心の中で誓った・・・

### 3、プリキュア!エクスクラメーション!!

部屋に戻った一同は、折角やって来たんだから、水着に着替えて海に行こうという美希の提案を受け入れ、水着に着替えた・・・

先にビーチに来て居た妖精達は、ココやナッツ、ダビイを手伝い、ビーチパラソルや、ビーチベッドの準備を始めた。そこに、水着に着替え終えたなぎさ達一同が現われ、思わずココとナッツは視線に困り、困惑して居た。

上下紐で結ぶビキニを着ているのは、満、薫、のぞみ、ラブ、美希、祈里、せつな、真琴の八人・・・

フレア付きビキニを着ているのは、なぎさ、ひかり、咲、舞、りん、うらら、くるみ、つぼみ、えりか、いつき、響、奏、アコ、みゆき、あかね、やよい、なお、あゆみの十人・・・

ワンピースタイプを着ているのは、ほのか、こまち、かれん、ゆり、エレン、れいか、アン王女の七人……

ある者は堂々と、ある者は恥ずかしそうに、ビーチへとやって来た！のぞみはココの前にやって来ると、

「ココオ！どう!?!似合ってる?」

「エツ!?!……ウン、可愛いよ!」

「エエエ!?!それだけ?」

のぞみは、頑張ってビキニにチャレンジした自分の姿の感想を、もつとココから聞きたかったものの、ココは恥ずかしがり、ジイと凝視する事は出来無かった。一同の水着姿を見た、ラケルの心臓の鼓動は速まり、

「な、何だか、胸がドキドキして凄いケル……」

「シャル!?!ラケル、気分が悪いなら、ちよつと休んでいと良いシャルよ!」

「そうさせてもらうケル!」

ラケルは、美希にブルンで出して貰った、妖精用のサングラスを掛けると、妖精用のビーチベッドに横になった。だが、サングラスの視線に映るのは、水着姿の一同で、それを見たラケルは、ニヤニヤするだけだった。

『何だか……妙な視線を感じるような?』

一同は、魔王でも居るのかと困惑気味にキョロキョロするも、特に見当らず、準備運動をして海へと入って行った・・・

「みんな、急に深くなるから、奥に行くなら気を付けてね!」

かれんからの忠告を聞き、泳ぎが得意な者は奥まで泳ぎ、苦手の者は波打ち際で水の掛け合いをしてハシャいだ。

なぎさは、ほのかとゆりを誘い、ビーチパラソルの下で、ビーチベッドに寝転びながら、昨日のブルーとメランとの出来事をゆりに語って聞かせた・・・

「そんな事があつたのね・・・」

「ウン!それで、私とほのかは、エンプレスのお墓参りをしたんだけど、私達その時、エンプレス、マジシャン、プリーステスが、プリキュアエクスクラメーションを放つ姿が浮かんで来たんだよね!」

「まるで三人の意思が、私となぎさに技を伝授するかのようには、ハッキリと見えたの!」  
少し興奮気味に話すなぎさとほのか、ゆりは二人の顔をマジマジと見つめながら、

「プリキュアエクスクラメーション!?それを私達で試して見ようという事?」

「ウン!折角合宿に来てるし・・・ゆりはムーンタクト持つてるから、光の槍の代わりに使えないかなあつて思つてさあ!!」

「そうねえ・・・折角のプリキュア合宿だし、それも良いわね!」

なぎさの提案に、ゆりは少し考える表情を浮かべた。結果的に役立つかも知れないのなら、試して見る価値はあるだろうと思つたゆりは、なぎさの言葉に同意した。なぎさとほのかは、顔を見合わせて笑みを浮かべ、

「本当!?じゃあ早速試して見よう!」

「私達が見たのは・・・」

なぎさとほのかは立ち上がると、背中合わせにビーチにしゃがみ、昨日見たエンプレスとプリーステスの構えを真似た。

「今私とほのかが構えてる姿が、エンプレスとプリーステスの構えで、ゆりが真似るマジシャンは、後ろで中腰になって私達の間立ち、光の槍を構えるんだけど、取り敢えず今はイメージ特訓で・・・」

最初はゴコチ無かつたものの、次第に形になって来た事で、夜にでもプリキュア姿になって、一度試して見ようと話は纏まった。

その時、ラブ、美希、祈里、せつなの悲鳴が響き渡り、一同は何事かと四人を見つめると、肩まで肌を出したラブが、顔を赤らめながら叫びだし、

「みんなあゝ!気を付けてええ!!海の中に何か居る!!」

『エッ?!』

ラブの忠告を聞き、一同が驚く中、咄嗟に響が海の中に潜ると、確かに何か黒い物体

が居た。黒い物体が響の側を通り過ぎた瞬間、響は溺れたかのように、バシャバシャ海で藻掻き、心配そうに奏が響に話し掛け、

「響! どうしたの?」

「み、みんなあ、ラブさんの言う通り、海の中に黒い何かが居る! そいつが…擦れ違った瞬間、私の水着を取っちゃって…」

「エツ!?! じゃあ響は今…」

「ウン、何も着てない…」

恥ずかしそうに響がポツリと呟くと、奏は大慌てで、

「た、大変!?! 今バスタオルを…キヤアアアアア」

「奏!?! ワアアア?」

「りんちゃん!?! どうしたの…エエエエエ!?!」

ラブ達四人に続き、響と奏、更にはりんのにのぞみと、被害者は徐々に広がり、海の中は少女達の悲鳴でパニック状態になって居た。サングラスを外して、ジイとれいかを見て居たラケルは、ワンピースなのに、まるで水着だけ掃除器で強引に吸引されたように、水着を剥ぎ取られたれいかの姿を見て、興奮のあまり鼻血を吹き出し、ピクピク痙攣した。

「ラケルウウウ!?! どうしちゃったシャル!?!」



「う、生まれて来て・・・良かったケル！」

「ハア!? 何言ってるシャル?」

シャルルは、ラケルが顔を赤らめながら、幸せそうに悦に浸った表情を浮かべる姿を見て、呆れたように見つめた。被害は更に深刻な状況になり、ビーチに居たなぎさ、ほのか、ゆり以外のみんなが、着ていた水着を剥ぎ取られて居た。人間姿のココ、ナッツ、シロップが心配して近づこうとするも、のぞみは慌てて両手を振って来ないでアピールをした。

「ダメエエエ! こつちに来ないでえええ!!」

「いや、しかし・・・それじゃ!」

このまま一同を放っておく訳にも行かず、ココ、ナッツ、シロップが困惑していると、「私が、みんなの分のバスタオルを持って来るわ!」

人間姿に変化したダビィが、慌てて人数分のバスタオルを取りに行った。なぎさ、ほのか、ゆりにも、一体海で何が起こって居るのか理解出来なかった・・・

「何!?! 海の中で何が起こってるの?」

「分からない・・・でも、何かが海の中に居るらしいわ!」

「なぎさ、ほのか、私達も行きましょう!」

慌ててみんなが居る海に駆け出そうとした時、そんななぎさ、ほのか、ゆり、三人の

背後から声が掛かり、

「カゲカゲカゲ！お前達、よくも俺を除け者にしてくれたなあ!!」

「「魔王!?!どうしてここに?」」

「カゲカゲカゲ！俺は、お前達の気配が分かるカゲ!!」

踏ん反り返って高笑いを浮かべる魔王だったが、そんな魔王を、なぎさ、ほのか、ゆり、そして海の中に居る一同の視線が、射るように見つめた。

「カゲカゲカゲ！そんな目で睨んだって駄目カゲ！俺を除け者にしたお前達が・・・」

「あんたの仕業かああああ!」

「最低だわ!」

「魔王、みんなに水着を返しなさい!」

なぎさ、ほのか、ゆりに凄まれた魔王だったが、何の事かさっぱり分からないように首を傾げ、

「水着!?!お前達、何の事言ってるカゲ?」

「惚けるなあ!いくら除け者にされたからって、腹いせにみんなの水着を奪う何て・・・許せない!!」

「水着!?!ちよ、ちよつと待つカゲ！俺は今来たばかりで・・・」

そう言いながらも、頭の回転が速い魔王は、今海の中に居る一同は、裸で居るのでは

ないかと想像し、パタパタ宙に浮かぶと海へと近付いて行った。魔王の視線が一同をゆっくり見つめ、ラブへと向けられた。ラブは思わずドキっとした表情を浮かべ、

「な、何よ、その顔はあ!?!」

「ラブ、呼んだカゲ!?!」

「よ、呼んでない!呼んでないからああ!!」

「良く聞こえ無いカゲエエ!」

魔王はフワフワ浮かびながら、スケベ顔でラブに近付いて行くと、ラブは慌ててシツシツとジエスチャーしながら、

「こ、こつちに来ないでええ!」

「何て言ったカゲエエ!?!」

「来ないで……イヤ」

近づいてくる魔王から逃げようとしたものの、ラブは顔を覆って泣き出した。せつなはラブに近付いて慰めながら、険しい表情で魔王を睨み付けた。それを見たなぎさは、全速力で駆け出して魔王を右手で叩き付けると、魔王は目をグルグル回しながら、ビーチにゴロゴロ転がった。

「なぎさああ!何するカゲエエ!!」

「あんた!最低だよ!!そりゃあ、あんたがエッチなのは知ってたけど、みんなの水着を無

理矢理剥ぎ取る何て・・・もう絶交だよ!!!」

怒ったなぎさは、少し目に涙を溜めながら、魔王からソツポを向いた。絵本の世界から続く魔王との日々、何だかんだ言っても、魔王もまた大切な仲間の一人になって居たが、その魔王に裏切られた気がして、なぎさは悲しそうな表情を浮かべた。海の中から、次々に罵声を浴びせられた魔王は、

「俺は、何もしてないカゲエエ! 何で信じてくれないカゲ?」

「信じられるかあ! 大体、黒い物体でこんな事するようなの、魔王しか居ないじゃない!!」

『最低!』

「魔王! 内緒にしたのは悪かったけど・・・こんな事する何て、酷いよ!!」

次々と魔王へと浴びせられる罵声、みゆきを含めた一同に嫌われた魔王の目に、ジワリと涙が浮かんだ時、美希は慌てて一同を止めた。

「みんなあ、待って! あたしも、魔王じゃ無いと思う!!」

「ウウウウ・・・美希いい!」

「ヒイイイ! こっち来なくて良いから!!」

顔をクシャクシャにしながら、嬉しそうに美希に近付こうとした魔王を、美希は変顔浮かべながら拒絶した。

「美希、何も魔王何か庇わなくても……」

美希が魔王を庇う姿を見て、困惑しながらなぎさが美希に声を掛けるも、美希は首を振り、

「ウウン！そうじゃないの……あたしの考えが確かなら、あたし達の水着を剥ぎ取ったのは……絶対魔王じゃ無い!!あたし、この感触に覚えがあるの!!絶対に忘れられない、幼い頃この腕に感じた感触が……この感触……間違い無い!!タコよ!!!」

「タコ!?みんなの水着を奪ったのが、タコだつて事?」

なぎさが聞き返したその時、突然海から三本の足が洗われ、吸引力の優れた掃除器のように、なぎさ、ほのか、ゆりの水着を吸い取った。

「「キャアアアア!?!」」

三人は、手で身体を隠しながら、慌てて海に飛び込んだ。その瞬間、海から20メートル前後ありそうな、巨大な黒いタコのような怪物が現われ、一同は驚愕した。更に驚かされたのは、タコの足には、一同が奪われた水着が吸盤に吸い付き、戦利品のように風に靡いていた。

「タッコでえす！海は広くて迷ったが、ようやく見付けたぞ、プリキュア!!」

八本の足をウネウネ動かしながら、魔界の魔獣タッコが姿を現わした。キャミーは一同に知らせるように、

「みんな、気を付けるニヤ! タツコの足の吸盤は……あらゆる衣服を吸い取るニヤ!!」  
 「衣服を……吸い取る!?!」

「じゃ、じゃあ、あいつの仕業だったの!?!」

咲が、なぎさが、キャミーの忠告を聞き、改めてタツコを見た。勝ち誇ったように足を振り回すタツコの姿を見て、魔王は目を吊り上げると、

「だから、俺じゃないって言ったカゲ!」

キャミーの忠告を聞き、一同は呆然とした。キャミーの話が本当ならば、自分達は美希の言う通り、魔王に濡れ衣を着せていたのだから……

『ゴメンなさい……』

魔王を疑った事を反省し、一同は素直に魔王に謝った。魔王はタツコを睨むと、

「大体、こんな事になったのも全部お前のせいカゲエエ!……アツ!?!でも、裸にしたのは出来したカゲ!!」

『オイ!』

何気に裸にした事は褒める魔王に、一同からツツコミが起こった。魔界の魔獣タツコが現われた事で、妖精達も騒ぎ、メツプル達、フラツピ達、シプレ達は、互いのパートナーの下に向かおうとすると、シロップが巨大化し、

「みんな、シロップの背に乗るロプ、ココ! ナツツ! あいつらの変身アイテムを……」

「分かった!」

人間姿のココとナッツは、預かっていた変身アイテムをシロップに積み込み、シロップの背に乗ると、ココとナッツは妖精姿に戻った。それはなぎさ達一同への配慮で、妖精姿ならば、恥ずかしさも少しは薄れるのではないかという思いからだ。シロップは、水着を剥ぎ取られ、どうする事も出来ないなぎさ達一同の下へと飛び立った。ピーちゃんは魔王を促し、タツコの注意を惹きつけるべく、タツコの周りを飛び回った。その隙を付き、真琴以外の一同が、次々に変身アイテムを手にすると、瞬時にプリキュアへと変身した。

「プリキュア! お前達を倒し、俺がシャックス様に推薦されて新たな魔神に・・・」

「シャックス!」

「あいつなら・・・この前マーチに倒されたで?」

シャックスの名を聞き、瞬時にマーチが不快感を表し、サニーが、マーチによつて既にシャックスは浄化された事を伝えた。これにはタツコも驚き、

「エッ!」

驚くタツコに鋭い視線を向けたムーンライトは、

「みんな! わざわざ向こうから、今夜のおかずが現われてくれたわ!!」

「エッ!? エエエ?」

「あれを．．．食べるの!？」

「え、遠慮するわ．．．」

更に驚いたタッコが、思わず自分の足を自分に向けて、ムーンライトの口元がニヤリと上がった。マリンとベリーは変顔浮かべながら首を振り、タッコはホツと安堵した。ブラックは、ブルーム、ドリーム、ピーチ、ブロッサム、メロデイ、そしてハッピーにアイコンタクトすると、七人はシロップの背に乗り、上空高く飛翔すると、タッコ目掛け一気に飛び降りた。

「よくもあんな恥ずかしい目に遭わせてくれたわねえ．．．みんな、行くよ！プリキュア!!」

「[[[[[[コラボレーシヨソパンチ!!]]]]]]」

ピンクチームの七人が、ブルーム、ドリーム、ピーチ、ブロッサム、メロデイ、ハッピー、そしてブラックの順番で、タッコの頭目掛け、急降下しながらのパンチを浴びせた。軟体動物であるタッコだったが、思わずその威力に口から泡ならぬ墨を吐いて悶えた。

「よくも私達に恥をかかせてくれたわね！」

アクアの周囲で波が高まると、アクアはブルーチームの仲間を見た。アクアが手を上げると、波はアクア、ベリー、マリン、ビート、ビューティの身体を持ち上げた。突然



の出来事に動揺する四人に、

「みんな、流れに身を任せて！行くわよ・・・プリキュア！」

「「「コラボレーションキック!!」」」

まるでウオーターズライダーをやっているかのように、五人の身体がタツコ目掛け滑り降りて行つた。アクア、ベリー、ビート、ビューティの流れるような蹴りを受け、タツコがバランスを崩し、最後にマリンの攻撃が決るかと思われたが、マリンはその勢いのまま海にダイブし、目をグルグル回して海に浮いて居た。

「マリン・・・大丈夫？」

「いきなりやらないでええ！死ぬかと思つたよ!!」

心配してマリンに近付いたアクアが、マリンを介抱すると、マリンはブンブン怒り、アクアは苦笑しながら謝つた。油断していた二人の背後から、タツコが口から種のような黒い何かを吐き出すも、ルミナス、ミント、サンシャインが攻撃を防ぎ、レモネードとミューズが、プリズムチェーンとシャイニングサークルでタツコの動きを封じた。そんなマリンに代わるかのように、上空からイーグレット、ブライト、ウインディが、後方からルージュ、パッション、パイン、サニー、マーチが、タツコに攻撃を喰らわせた。

「よーし！私も頑張っちゃおうぞお!!プリキュア！ピース・・・」

「ピース、止めて！」

「海でピースサンダー使ったら．．．」

慌ててリズムとエコーがピースを止めた。雷は拡散し、近くに居た一同を巻き込む恐れがあつた為である。ブラックは、ホワイトとムーンライトに話し掛け、

「ホワイト、ムーンライト、あの技．．．試して見ない?」

「此処で!?!?．．．そうね」

「良いわよ!」

「二「みんな、離れて!!」」

突然三人で構え始めたブラック、ホワイト、ムーンライトを見て、一同は慌ててタツコから離れたものの、裸のままの真琴とアン王女は、海から上がるに上がれず困惑している。ベリーが二人に近付き、

「取り敢えずこの姿で我慢してて!」

ベリーはブルンを呼び出すと、二人に何やら水着を着せて上げた。

「ありがとう!」

「これなら海から上がれ．．．．エツ!?!」

「キヤアアア!」

ビーチに出た真琴とアン王女だったが、二人が着ていたのは白い貝殻ビキニ姿で、二人は恥ずかしそうにその場でしゃがみ込み、ラケルの鼻からは再び鼻血が吹き出した。

戻つて来たダビイによつて、真琴とアン王女はバスタオルを渡して貰つた。バスタオルを身体に巻いたアン王女と真琴は、海から戻つて来たベリーを、恨めしそうに見つめると、

「ベリー！何て格好をさせるんですの？」

「もう……酷いです！」

「イヤア！二人共、貝殻ビキニに興味持つてたようだから、つい……ね」

「こんな水着、もう懲り懲りですわ！」

珍しく取り乱すアン王女を見て、ラケルとランスが笑つて居ると、ギロリとアン王女に睨まれ、二人は慌てて視線を逸らした。慌てて近付いたアクアは、

「ベリー……アン王女をからかうのは、止めた方が良いわ！」

「どうして……エツ!？」

ベリーの視線に、右手にラケル、左手でランスを掴んだバスタオル姿のアン王女が、無言のまま別荘に戻つて行く姿を見た。ベリーの背筋はゾツとし、思わず自分がアン王女に頭を捕まれ、引き摺られている姿が思い浮かんだ。

「後で……アン王女に謝つてきます！」

「エエ……その方が良いわ！」

アクアはコクコク頷き、真琴はそんな二人を見て首を傾げた。

プリキュアエクスクラメーションの体勢に入った、ブラック、ホワイト、ムーンライトの三人、ムーンタクトに、黒い稲妻と白い稲妻が落ち、目映い発光を始めた。

「このままじゃ・・・終わらんちゃうウノ!!」

タツコは、ブラック、ホワイト、ムーンライトの三人目掛け、三本の足を必死に伸ばした。それと同時に、ムーンタクトが一層輝き、三人の身体が光に包まれた。

「プリキュア! エクスクラメーション!!」

三人の叫びと共に、ムーンタクトから目映い光が一気に解放され、タツコの巨大な身体を一瞬で包み込み、遙か先の海で目映い巨大な閃光を放ち、やがて治まった・・・  
「フウウ! 成功した・・・のかなあ?」

三人が力を使い切ったかのように息を吐くと、他のプリキュア達は目を点にして驚いた。技の威力もそうだが、一同が驚いた理由・・・

それは・・・

「ココオオ! 見ちゃ駄目えええ!!」

ドリームが慌ててココの目を塞いだ・・・

「ナッツさんも!」

ミントがナッツの前に立ち、前を塞いだ・・・

「シロップもだよ!!」

レモネードが、シロップの身体を後ろに向けた・・・

「タルト！こつちにいらつしやい!!」

パッションが、タルトを無理矢理瞬間移動で移動させた・・・

「コフレ！あんたもさつきとこつちに来なさいってば!!」

変顔浮かべたマリリンが、コフレを脇に抱えてピーチ後方に下がった・・・

「ピーちゃん、こつちおいで!」

メロディが両手を広げ、ピーちゃんを呼び寄せた・・・

「アレエ!?魔王の姿が・・・」

ハッピーは、辺りをキョロキョロ捜すも、魔王の姿が見当らなかつた・・・

「ブラック、ホワイト、ムーンライト・・・」

「あのう・・・三人の衣装が、さつきのタコさんに・・・」

困惑した表情で、ピーチとブロッサムが三人に話し掛け、三人の衣装が、タッコによつ

て剥ぎ取られた事を伝えた。一瞬の沈黙の後、互いの姿を見た三人は、

「「エツ!!・・・キヤアアアアア!」」

タッコの最期の足掻きで、三人のプリキュア衣装は全て剥ぎ取られ、三人は、全裸のまま慌ててその場にしゃがみ込んだ。

「ありえない!ありえない!ありえない!」

ブラックが絶叫し、ダビイからバスタオルを貰ったルミナスが、慌てて三人にバスタオルを渡すと、三人は慌ててバスタオルを身体に巻いた。

「オオオイ！お前達、無事カゲかあ？」

「魔王!?!こつちに来ないでええ!!」

何所に潜んでいたのか、魔王は、バスタオル姿のブラック、ホワイト、ムーンライトに海から近付いて来た。取り乱した三人は、こつちに来ないように魔王に告げるも、

「エエエ!?!良く聞こえ無いカゲエ?」

魔王が更にスケベ顔で近付き、それを見た三人の目は一気に吊り上がり、無言で再びプリキュアエクスクラメーションの体勢になった。しゃがみ込んだブラックとホワイトのバスタオルが捲れ、健康的な太股が露わになり、見えそうな魅惑のデルタゾーンを見て、魔王は興奮して一層近付いたものの、

「プリキュア!エクスクラメーション!!」

「カゲエエエ!?!」

目映い閃光が魔王の脇を貫き、魔王の顔から大量の汗が滴り落ちた。魔王は、恐る恐る背後を振り向くと、先程同様、巨大な閃光が海の彼方で輝いた。

「お、お前達、俺を殺す気……カゲ!?!」

「プリキュア!エクスクラメーション!!プリキュア……」

「ギャアアア！魔王殺しいい！！」

魔王目掛け、プリキュアエクスクラメーションの連射が飛び、魔王は海の上で必死に躲し続けた。その余波を受け、遠くの海が荒れ、次第に島に高い波が押し寄せ、ビーチに大量の魚が打ち上げられ、ピチピチ跳ねて居た。

「わ、私の島が……」

「ちよ、ちよつと、止めないとヤバくない？」

アクアは思わずよろめき、慌ててミントとベリーがアクアを両脇から抱え、顔色変えたドリームは、ルージュ、ピーチ、パッション、メロディ、ビートと共に、ブラック達三人に抱き付き、攻撃を止めさせた。

魔王はゾツとし、この三人を怒らせるのだけは、絶対止めようとこの時心の中で誓った……

こうして、波乱に富んだプリキュア合宿一日目は終了した……

第百八話：水着泥棒は誰!?

完

## 第九百九話：少女達は・・・

第九百九話：少女達は・・・

### 1、就寝前の一時

プリキユアエクスクラメーションの余波で、大量にビーチに打ち上がった魚を料理に使って、晩ご飯を食べた一同は、大浴場で疲れを癒した後、自分達の部屋へと戻って行った・・・

かれんとこまちの部屋では・・・

ベッドでグツタリしているかれんを見て、机で勉強しながらも、こまちがかれんを気に掛けて居た。一同を別荘に招待したものの、たった一日目でこんなに疲れるとは、かれんも思っては居なかった。

「ハア・・・初日からこれじゃ、先が思いやられるわ」

「そうね・・・でも、何だかんだ言って、かれんも楽しそうだったわよ?」

「そうかしら!?!」

「エエ」



「ウフフフ」

顔を見合わせたかれんどこまちは、思わずクスリと笑い合った・・・

ひかりとくるみの部屋では・・・

「全く、今日は散々な目に遭ったわよねえ？」

「そうですね・・・確かに色々有りました」

「この姿で居るのも疲れるし・・・」

くるみはそう言うと、ミルクの姿に戻ってベッドの上に飛び乗った。本来の姿である妖精姿で居る方が、ミルクは気が休まるのか、そのままベッドに横になると、ポルンとルルンも妖精姿になって現われ、

「遊ぶポポ！遊ぶポポ！！」

「遊ぶルル！遊ぶルル！！」

左右からポルンとルルンが、ミルクを揺らして遊ぼうと誘いを掛けた。ミルクは迷惑そうに、

「今日は疲れたから、もう寝るミルク」

「駄目ポポ！駄目ポポ！！」

「ミルク、遊ぶルル！」

「頼むから寝かせてミルクウウウ！」

布団に潜つて寝たふりするミルクを見て、ひかりはクスリと笑み、ポルンとルルンを抱き上げると、

「ポルン、ルルン、ミルクは疲れて居るから、寝かせてあげましょう」

二人の頭を撫でながら、ひかりがポルンとルルンを優しく諭すと、二人はコクリと頷き、ひかりは二人に紙とペンを渡し、お絵かきをさせて気を紛らわさせた・・・

ほのかと舞の部屋では・・・

「考えたら、こうして舞さんとじっくり話すのは、初めてじゃないかしら？」

「そうですね、何時も咲やなぎささんも一緒ですしね？」

「たまには新鮮で良いわよね？」

「フフフ、そうかも知れせんね」

ほのかと舞はそう言うと、互いのパートナーであるなぎさと咲との出会いから、ドックゾーン、ダークフオールとの戦いの日々を語り合った・・・

咲、のぞみ、なおの部屋の前では・・・

部屋を開けようとした咲に、なおが慌てて待ったを掛けると、まるで中に誰かが居る

のでは無いか？そんな表情でドアノブを右手で持ち、緊張するなお、咲とのぞみは、そんななおに困惑し、

「なお・・・どうしたの？」

「中に誰か居るの？」

「シイ！今息を整えてるから・・・よし!!」

息を整えたなおは、ドアノブを回し、部屋の中に突入すると、持つて居た殺虫剤を部屋中に噴射し、咲とのぞみを唾然とさせた。

「ちよつ、ちよつとなお、何やつてるのよ？」

「そんなに殺虫剤撒いたら・・・」

更になおは、持つて来たキャリーバックから、ゴキブリホイホイや蚊取り線香を四隅に設置し、ようやく額に拭った汗を拭き取り、ホツとした表情を浮かべた。

「これでやつと落ち着ける！」

ようやく笑顔を見せるなおに、咲とのぞみは、目を点にしながら同じような表情で会話を始め、

「のぞみ、なおの虫嫌い、少しどうにかしないと・・・」

「うん、私もそう思う・・・」

二人は、なおの虫嫌いの凄さを知り、呆気に取られて居た・・・

満と奏の部屋では……

ベッドに腰掛けた満と奏は、明日の咲の誕生日に作るケーキの打ち合わせをして居た……

「咲さんって、どんなケーキが好き何ですか？」

「咲は特に好き嫌い無いわね……変にアレンジするよりは、シンプルなデコレーションケーキとかの方が喜びそうな気がするけど……」

「成る程、シンプルなデコレーションケーキですか……」

奏は頷きながら、手帳にメモを始めた。

「でも、みんなと一緒に食べるなら、フルーツは多めでも良さそうね……奏なら、どんなデコレーションケーキにしたい？」

「シンプルなのなら、やっぱり苺のデコレーションケーキですよねえ……フルーツをふんだんに使うのなら、スポンジケーキを丸じゃなく、四角くするのも手ですよねえ？」

「確かに、大勢で食べるなら切り分けやすいし、良いわね」

ケーキ談義に花を咲かせた二人は、遅くまで盛り上がりつつ居た……

薫とアコの部屋では……

ベッドに腰掛けた薫は、徐にアコをジイと見つめ、見つめられたアコは困惑し、  
「私に何か用？」

アコが薫に話し掛けると、薫はアコを真顔で見つめたまま話し掛け、

「アコ・・・あなた、アン王女の事をお姉ちゃんつて、呼んでたんですつて？」

「エッ!?わ、私が小さい頃の話で、覚えてないわよ・・・」

突然薫が妙な話題をアコに話し掛け、虚を突かれたアコは、益々困惑した。薫は真顔で、更にジイとアコを見つめると、

「ねえ、アコ・・・」

「何？」

「私の事を・・・薫お姉ちゃんつて呼んでみて！」

「ハア!?な、何言つて・・・」

薫はそう言うのと、ジイとアコを見つめながら出方を伺った。アコはどうしたものかと動揺するも、薫が目と呼んで欲しいとアピールしているようで、根負けしたアコは、少し恥ずかしそうにしながら、

「か、薫お姉ちゃん・・・」

「アコオオオオ！」

薫は目を輝かせると、アコの頭を引き寄せ、アコの頭を撫で続けた。頭を撫でられ続

けるアコは困惑し、

(どうしよう?! 満を呼んだ方が良いかなあ?)

そう思いながらも、一人っ子のアコは、優しくしてくれる薫に、少しずつ心を開いていった……

りと響の部屋では……

後は寝るだけながらも、響はベッドの横で腕立て伏せをしていた。りんは感心しながら響に話し掛け、

「響、寝る前なのに頑張るわねえ?」

「毎日の日課何ですよ! 何か身体を鍛えてないと、どうも落ち着かなくて……」

「へえ……ところで響は、明日の自由特訓に何するか決めてるの?」

「ウーン……特には決めてないですよ。奏やエレン、アコと一緒にハーモニーパワーでも磨こうかなあ……りんさんは?」

「あたしは、そうだなあ……なおと似たような技あるし、あたしのファイヤーストライクと、マーチのマーチシユートで、何かコラボ技出来ないかなあって考えてて……」

「へえ……中々面白そうですよねえ?」

「いやあ、折角みんな集まってるし、色々試せないかなあって思ってたよ」

りんは照れながらも、響とコラボ技で盛り上がった。響は徐に真顔になると、

「こんな機会滅多にないし、りんさん、ちよつと聞いてみたい事があるんですけど・・・」

「エツ!? あたしに?」

「りんさんの将来の夢とか・・・聞いてみたくなって・・・」

響もどう話題を振ろうかと考えて居たのか、言葉を選びながら、りんに問い掛けた。

りんは、響の真意が読めず困惑するも、嘗て自分達が将来の夢に悩んだように、響も悩んでいるのでは無いかと思うと、迂闊な答えは出来ない判断した。少し頭の中で整理したりんは、

「あたしは・・・かれんさんもだけど、響と同じぐらいの時、当初は将来の夢って思い浮かばなかったんだよねえ・・・のぞみは教師、うららは女優、こまちさんは小説家っていう目標を持つて居たから、あたしとかれんさんは焦つてねえ・・・」

「そうだったんですか・・・」

「でも、あたし達にも夢が出来た! かれんさんはお医者さん、あたしは、デザイナーになりたいっていう夢がね・・・それで、響は?」

「私は、パパやママみたいな音楽家の道を・・・将来ママとコラボ出来るような、ピアノストになるのが夢です!」

「うん! 素晴らしい夢だね!!」

りんは、響の夢に感心し、何度も頷いた。響はちよつと照れたのか、俯きながら再びりんに問い掛け、

「そのお……りんさんは、私と奏みたいに、のぞみさんと小さい頃から幼なじみでしたよねえ？」

「うん、そうだよ」

「もし、もしですよ？自分の夢と友達、どっちを取るっていつたら、どっちを取ります？」「エツ!?!?どういう意味？」

「実は……この前ママから電話があつて、中等部を卒業したら、ママの知り合いの海外にある音楽学校に通つて見ないかって誘われて……それで、高校出るまでは、奏達と一緒に過ごすかどうか迷つてて……」

（そういう事かあ……）

りんは、響の話に合点が行き何度も頷いた。確かに、ピアノストを目指すなら、早い段階で一流の学校に通うのも、正しい判断だろうとりんにも理解出来た。でもりんには、響の心の中では、奏と違う高校に行く事になるかも知れない事に、響は寂しさを感じて居る事が伝わった。

「響……これはあたしならつて事で聞いて」

「はいー」



「あたしがプリキュアじゃなかったとしても・・・あたしは、のぞみ達と過ごす事を選んだと思う！これは、あたしの勝手な思い込みかも知れないけれど、あたしは、この貴重な学生時代を、のぞみ達と一緒に過ごしたい・・・夢に遠回りになったとしても、あたしは、今この素晴らしい仲間達と過ごすこの日々を、大切にしたいと思ってる」

「・・・・・・・・」

「響、これはあたしの勝手な話だから、聞き流してくれても良いけれど、あたしは、響が今直ぐ決めなくても良いんじゃないのかって思うの」

「りんさん・・・」

響は、りんが親身になって本音を語ってくれた事が嬉しかった。心の中に陰ったモヤモヤが、晴れた気がする響だった・・・

うららといつきの部屋では・・・

うららは、今度やるドラマに恋愛シーンでもあるのか、台本を覚えながらも、感情込めてセリフを語った。いつきは、そんなうららに感心しながら見守って居た。

「あなたと身分が違っていても、私は・・・いつきちゃん、今の所どう思った？」

「うん、お姫様の役だね？中々感情が籠もってたし、良かったと思うよ」

「そう・・・少しホツとしました」

そう言うのと、うららはいつきをも見て微笑んだ。うららは何かを思い出したのか、手を叩くと、

「そうだ！ねえ、明日つぼみちゃんといりかちゃんを誘って、四人で特訓しませんか？」

「エツ!?別に構わないよ」

「本当!?実は、四人で試して見たい技があつて・・・」

「へえ、どういう技？」

「フフフフ、それは明日のお楽しみです」

「そ、そう・・・」

何やら一人楽しそうに、口元に笑みを浮かべるうららを見て、いつきは苦笑を浮かべた・・・

ラブとあゆみの部屋では・・・

ラブは、ベッドに横になって大の字になりながらあゆみに話し掛け、

「いやあ、さつきは参ったよねえ？魔王は来るわ、水着はタコの怪物に取られるわけで、散々だったよ」

「本当ですよねえ、結局みんなの水着は海に流されちゃったし・・・散々でした」

あゆみは、寝る時は髪を下ろしているようで、背中まで掛かる長い髪を、櫛で解かし

ながら、ラブに答えた。ラブは、枕を足で挟み、上げ下げしながら、

「アアア、折角水着買ったばかりなのになあ・・・」

「ですよねえ・・・そうだ！もしかしたら、ビーチに流されて来たりしませんかねえ？」

「成る程、有り得るよねえ・・・明日、捜しに行ってみようか？」

「はい！」

「でも魔王には内緒に・・・アハハハ」

思わずハモった二人は、同じ事を考えて居たと知り、思わず笑い合った・・・

美希とえりかの部屋では・・・

美希は、机に座って、趣味であるアロマの調合をし、えりかはベッドにゴロゴロ転がりながら、秋の文化祭でのファッションショーの企画を練っていた。

「美希姉え！美希姉えなら、学園祭でファッションショーやるなら、どんな感じにする？」

「エッ!? えりか、今年も学祭でファッションショーやるんだ？」

「そりゃあ、そうしょ！何せファッション部だよ」

「それはそうだけど・・・こんなアイデアもあるわよ？」

「エッ!? どんな？」

美希は椅子から立ち上がってベッドに移動し、えりかの側に座ると、

「えりか達は、自分で作った服を観客にアピールしたい訳でしょう?」

「うん!」

「だから、ちよつとそこを捻って・・・えりか達がデザインした服を、お客さんに試着してもらおうのよ」

「エエエエ!?そんなの無理っしょ?」

「あら、それでも無いわよ?最近パソコンに取込んだ服のデザインを使って、コーディネート出来るそうだし・・・ほら、ゲームとかでもあるでしょう?」

「オオオ!そう言えばあるね」

美希が言うように、近年のロールプレイングゲームは、キャラに装備させる衣装を、全身姿で変えていくシステムが搭載されたゲームも増えていた。

「まあファッションショーなら、確かに話題性はあるけど、どうしてもモデルが主役で、服はその次って印象を受ける人も居るから、服をメインに考えるなら、こういう手もあるって事よ・・・えりか、参考にしてみて」

「流石美希姉え!」

えりかは美希に飛びつき、頬を美希の身体にすり寄せ、美希を苦笑させた・・・

祈里とエレンの部屋では・・・

祈里は、動物学の本を読んで居ると、フと疑問に思った事があり、試して見たい衝動に駆られて居た。

(エレンさん、人間の姿になつてもう長いけど、猫の反射神経をまだ持つてるのかなあ?)

祈里は好奇心に負け、音吉から借りた本を熱心に読んでいたエレンに、バックから取り出した丸い球体状の物を、エレンの側で転がしてみた。コロコロ転がる丸い物体が、エレンの視界に入った瞬間、エレンは左手で球体を手に取り、不思議そうに凝視すると、  
「祈里、何か転がって来たわよ?」

「ゴ、ゴメンなさい!」

エレンから球体を受け取った祈里の両目はキラキラ輝き、更なる欲求が祈里に湧いてきた。祈里は、持つて居た綿棒を取り出すと先端にティッシュを巻き付け、エレンの側でパタパタ揺らすと、エレンは綿棒を目で追い、素早く祈里から奪い取り、祈里は思わず両手で拍手をし、ハッと我に返ったエレンは、

「祈里! さつきから何してるのよ?」

「エレンさんが、まだ妖精時代の習性が残ってるのかなあと思つてつい・・・」

「やつかましいわああ!」

エレンは、目を吊り上げながら祈りに抗議し、祈りは苦笑を浮かべながらエレンに謝った・・・

せつなとかかねの部屋では・・・

クールビューティな雰囲気醸し出すせつなに、あかねは何と話し掛けようかと思案して居た。テレビの話題や漫画の話題を振っても、せつなはあまり興味が無いのか、見て無いわねの一言で会話が終り、あかねが沈黙する。

(アカン、何か他にせつなさんが興味ありそうな話題は・・・せや)

「せつなさん、魔王が急に現われた時は・・・」

「魔王の話は止めて!」

「ハ、ハイ・・・」

せつなは、昼間魔王がラブを泣かせた出来事をまだ根に持ち、魔王の話題が出る事さへ嫌がっていた。あかねは益々困惑し、

(アカン、話題が続かへん・・・ン!? そういうえばせつなさんは、ラブさん達と漫才大会に出た言ううとつたな・・・これや!)

あかねは指をパチリと鳴らし、

「せつなさん、昔ラブさん達と一緒に、漫才大会に出た事ある言ううとりましたなあ?」

「エッ!?! . . . そうですね、そんな事もあったわね」

「誰とコンビ組んだんですのお?」

「私は . . . 美希と一緒によ」

「美希さんと . . . 美希さんは、ボケもツツコミも行けそうやから、面白かったちやいますの?」

「さあ?あの時は、何が何だか良く分からない内に終わってたわ」

「どんなネタやったんですの?」

「あかね . . . 眠たいの?」

「ハッ!?!」

「今寝たって . . .」

「 . . . . .」

あかねはこの時、せつなが天然だと言う事に、初めて気付いた瞬間だった . . .

つぼみとみゆきの部屋では . . .

つぼみにとって、お姉さん代わりのなぎさ達、一つ下でありながら、自分より大人びている響達の前では振る舞えないが、みゆきの前では姉ポジションを演じられ、つぼみは喜びのあまり顔がニヤけて居た。みゆきは不思議そうに首を傾げ、

「つぼみさん、何か良い事あったんですかあ？」

「良い事ですか？どちらかと言えば、今日は散々な目に遭った気がしますが……」

「はい！プライベートビーチだったから良かったものの、もし普通の海水浴場だったらと思うと……ゾツとします」

つぼみの脳裏に、一瞬自分達が大勢の海水浴客の前で、裸になった姿を思い浮かべ、変顔を浮かべた。みゆきもそんな姿を想像したのか、ブルブル頭を横に振り、

「そんな目に遭ったら……外を歩けなくなっちゃううう」

「ハイ！でも魔王のせいでは、世界絵本博覧会では本当にそんな目に遭いかねませんでしたねえ……そう言えばみゆきさんは、魔王とも一緒にお風呂に入っているんですか？」

「うん！魔王は、家のお母さんと入りたがってるんだけど、それは阻止しようとしてたら、お父さんが魔王を風呂に入れて上げて、風呂から出てきた魔王が私に泣きついて、それからは、キャンディと魔王と一緒に入ってます」

「何だか目に浮かぶようですねえ……」

つぼみとみゆきは、顔を見合わせると思わずクスリと笑い合った……

ゆりとやよいの部屋では……



無言の静寂が、やよいにプレッシャーを与えていた・・・

やよいは、何か話題を振ろうと考え、幼い頃ならゆりもアニメや特撮を見て居ただろうと思うと、

「ゆりさん、ゆりさんは小さい時、どんなアニメを見てたんですか？」

「アニメ!? 私は別に興味無かったわねえ・・・」

「そ、そうですか・・・」

「でも、セーラー服を着た美少女戦士物だけは見てたわ!」

(キタアアア!)

ゆりの言葉を聞いた瞬間、やよいの目はキラキラ輝き、

「あのアニメ面白かったですよねえ! 月に代わって・・・ゆりさんは、どのキャラが好きだったんですか?」

「そうねえ、上げてあげれば、水星を守護に持つ・・・」

「ああ、あの天才少女! 私も好きなんですよねえ・・・知ってました? 今度原作基準にしたりメイクが企画中だって噂ですよ?」

「そう・・・別に興味無いわね」

「そ、そうですか・・・」

折角盛り上がりそうな話題を見付けたやよいだったが、呆気なく撃沈した。ゆりはや

よいを凝視すると、

「そんな事より、やよい、宿題は持って来てるの？私が見て上げるわ」

「エツ!?アハハハ、わ、忘れちゃったなあ・・・」

「そう・・・じゃあ私が問題を出して上げるわ」

「エツ!?!」

ゆりが紙に数学問題を書き始め、やよいの顔から大量の汗が滴り落ちてきた。

(だ、誰でも良いから・・・部屋を代わってええええ!)

心の中で悲鳴を上げるやよいだった・・・

れいかとアン王女の部屋では・・・

れいかは、持って来た百人一首に関しての本を読んでいると、興味を持ったのか、アン王女がれいかに話し掛け、

「れいかさん、何の本を読んでらっしゃるんですか？」

「はい、これは百人一首と言い、日本の古き伝統の一つで・・・」

れいかは、アン王女に百人一首の解説を始めた・・・

百人一首とは、百人の歌人の歌を、それぞれ一首ずつ撰んで集めた歌集で、百人一首の中でも有名なのは、小倉百人一首と呼ばれて居た。藤原定家が、飛鳥時代の天智天皇

から、鎌倉時代の藤原家隆・雅経にいたるまで、代表的な歌人百人の歌を選んだ物事だった。江戸時代に入ると、木版画技術が普及し、絵入りの歌がるたの形態で広く庶民に広まったとされ、当時娯楽の少なかつた人々が、皆で楽しめる遊戯としても普及した。アン王女は、日本の古き伝統という言葉に惹かれたのか、興味ありそうな表情で更にならぬかに話し掛け、

「どのような遊びですか？」

「そうですね、色々あるのですが……」

れいかは、百人一首の遊び方をアン王女に話し始めた。かるた競技は、一対一の個人戦の事で、100枚の札を裏向けて混ぜ、25枚ずつ取り、残りの50枚は使えないとか、各自の持ち札を、上中下の3段に分けて、自分の方を向けて自由に並べたり、札の位置を15分間記憶するなどしてようやく競技が開始される事、読み手が、百人一首の歌（上の句）を読み、読まれた歌の札に先に触れた方が、その札を獲得する。二人同時の場合は、自陣にある側が獲得する事を教えた。更にれいかは、100枚の札を全て並べてその周囲に座り、読まれた歌の札を取って、勝ち負けを決めるちらし取りや、読み手を除く参加者を、源氏と平氏の陣営に分け、両陣営に50枚ずつ並べた札を3段に分けた源平合戦などを教えた。

「中々奥が深いのですねえ……実際にやってみたいものです」

アン王女は、百人一首に益々興味を持ったのか、れいかの話に熱心に聞きいつて居た・・・

なぎさと真琴の部屋では・・・

なぎさはへこんでいた・・・

水着を取られただけで無く、プリキュアの衣装までタコの魔物タツコに剥ぎ取られた事で、落ち込んで居た。

「ハア・・・幸い、またプリキュアに変身しても裸って事は無かったけど・・・最悪だわ」  
「魔界の魔物って、魔王みたいな怪物ばかり何でしょうか？」

真琴に聞かれたなぎさは、自分達プリキュアが戦った、魔界の者達を思い出し、ゾツと鳥肌が立った。

「もう変態相手は勘弁して欲しいよねえ・・・ありえないって感じ」

「同感です・・・」

「ハア・・・真琴、さっさと寝よう！」

「はい！」

なぎさと真琴は、電気を消しベッドで横になると、少しして二人の寝息が聞こえて居た・・・

翌朝・・・

普段から早く起きているのか、ゆり、れいかが、朝食の準備をしていると、突然姿鏡が姿を現わし、中から地球の神ブルーが現われた・・・

2、なぎさとメツプル

プリキュア合宿二日目・・・

それは早朝から波乱に満ちて居た・・・

なぎさ、ほのか、ゆりの三人は、突然やつて来たブルーに呼び出され、かれんにゲストルームの一室を借りて、話し合いが行われて居た。他の一同は、急に現われたブルーに驚き、部屋の前に何人か集まり、成り行きを見守って居た・・・

「どう!?!まだ三人は、神様に注意されてるの?」

「ウン!でも、いきなり神様が現われた時は、正直驚いたよねえ?」

エレンに聞かれたのぞみはコクリと頷き、まだ中に居る三人が、突然やつて来たブルーに注意されて居る姿を見つめて居た・・・

「ブラック、ホワイト、ムーンライト、三人共分かって居るのかい?あの技は、無闇矢鱈に使うべきじゃ無いんだ!それを、何度も・・・地球の形状を変えかねないんだよ?」

「まさかあ!?!いくら何でもそれは言い過ぎじゃ・・・」

「なぎさー!」

「はっ・・・」

ほのかとゆりに窘められ、なぎさは押し黙った。なぎさ、ほのか、ゆりの三人は、昨日何度もプリキュアエクスクラメーションを放った事で、ブルーから嚴重注意をされて居た。ブルーは溜息を付き、

「理由は兎も角、後輩達を導くべき筈の君達が、逆に後輩達に諭される何て、今の君達は・・・プリキュア失格だよ」

「・・・」

ブルーの言葉に、返す言葉も無く沈黙するほのかとゆりに反し、なぎさはブルーに対して、イライラした感情が沸き上がって居た。世界の危機にブルーは何もしないのに、どうしてプリキュア失格などと、自分達三人が言われなければならないのか?そう思うと、プリキュアになって、今まで抑えてきた感情が爆発したように、なぎさはブルーに噛みついた・・・

「プリキュア失格!?!別に私達、神様に言われて今までプリキュアやって来た訳じゃないわよ!戦わないで済むなら・・・今直ぐにでも辞めたいぐらい!!世界の危機に、神様は何もして来なかつたくせに・・・偉そうにしないで!!」

「な、なぎさ!」

「ブラック……」

険しい表情でブルーに抗議するなぎさの姿に、ほのかとゆりは驚き、ブルーは憂いの表情を浮かべた。なぎさは更にブルーに文句を言い始め、

「私達が、どんな気持ちでプリキュアやって来たのか、考えた事ある? ほのかも、ゆりも、咲達だって、のぞみ達だって、ラブ達だって、つぼみ達だって、響達だって、みゆき達だって、真琴やアン王女だってそう……神様だか何だか知らないけど、私達の気持ちも知らないで、好き勝手言わないで!!」

なぎさはそう言うのと、勢い良くテーブルを叩き、ほのかとゆりが止めるのも聞かず、呆然とするのぞみ達を余所に、別荘を飛び出して行った……

ブルーは、出て行ったなぎさを見て、沈痛な表情を浮かべた。千年前、キュアミラージュの心を傷付けてしまった出来事を、ブルーは思い出して居た……

(僕は……千年前と同じように、ブラックの心まで傷付けてしまったのか?)  
ブルーは右手で髪を掻き上げ、苦悩の表情を浮かべた……

「なぎさ……」

心配したほのかが立ち上がるも、妖精姿に変化したミップルが現われ、

「ほのか、なぎさにはメップルが付いているミポ。なぎさはきつと帰って来るミポ」

「ミツプル・・・そうね」

ほのかとゆりは、なぎさが帰って来る事を信じた・・・

なぎさの心は揺れて居た・・・

なぎさは、ブルーに対して思わず感情を爆発させたものの、森の中を走り続けて居ると、早朝の心地良い海風が、なぎさの苛ついた心を癒してくれるかのようだった。考えれば、ブルーの言葉もなぎさには理解出来た。あの時、ドリーム達が止めてくれなければ、この島は、大津波に飲み込まれていたかも知れないのだから・・・

（アアア！私、何であんな事言っちゃったのよ・・・）

更になぎさは、世界の危機に、ブルーは何もしなかったと、あの時は言ってしまったが、少し頭を冷やして考えれば、ブルーは、一万年前にはエンプレス達と、千年前にはキュアミラーージュと共に戦い、力を無くした後も、この地球の為に、メランにプリキュアを引き会わせたりして来たのを、つい一昨日聞いたばかりだったと思い返し、自己嫌悪に陥った。

（これじゃ、昔プリキュアに成り立ての頃、ほのかと喧嘩した時と同じじゃない・・・）  
「ハア・・・」

なぎさが溜息を付くと、森が開け、見晴らしの良い広場に出た。なぎさは腰を下ろす



と、顔を隠すように体育座りを始めた。その時、コミュニケーション姿だったメツプルが妖精姿になると、黙ってなぎさの横に座った。メツプルは、敢えて自らは語らず、ただ黙ってなぎさの隣に座って居た。なぎさは、隣に居るメツプルに悩みを打ち明けるかのように、

「また・・・やっちゃった・・・」

「聞こえてたメポ」

「ハア・・・つい感情的になって、あんな事言っちゃったけど・・・」

「後悔してるメポ？」

「そりゃあね・・・神様に、プリキュア失格何て言われて、ついカツとなっちゃったけど、確かにこんな私は、プリキュア失格だよなぁ?・・・ハア」

再び顔を覆うように項垂れたなぎさに、メツプルはポツリと呟き、

「そんななぎさに・・・メツプルは救われて来たメポ」

「エツ!？」

ポツリと呟いたメツプルの言葉に驚き、思わずなぎさは顔を上げてメツプルを見た。メツプルはなぎさの目をジイと見つめながら、

「なぎさとほのかが居たから、プリキュアになつてくれたから、メツプルは、ミツプルに再会出来たし、今こうして此処に居るメポ」

「メップル・・・」

「メップルは、なぎさに感謝してるメポ。光の園が無事だったのも、虹の園が無事だったのも、なぎさ達が戦って来てくれたからメポ・・・一度くらいプリキュア失格何て言われたから何だメポ」

「・・・そうだね」

「なぎさやほのか、ゆりなら、神様に言われたプリキュア失格何て言葉、直ぐに訂正させられるメポ」

「そ、そうかなあ!？」

「なぎさ、後悔してるなら・・・」

「そうだね・・・私、神様に謝って来る」

メップルからの励ましは、傷ついたなぎさの心を癒していった・・・

なぎさとメップルとの付き合いは、ほのかと親しくなるより早かった。普段喧嘩ばかりしている両者だが、互いの心が弱った時、叱咤激励してくれるパートナーだった。メップルは、少し元気を取り戻したなぎさに、

「それに、そんな顔してたら、折角の咲の誕生パーティーが、台無しになっちゃうメポ」  
「だね!」

そんななぎさとメップルのやり取りは、なぎさを気に掛けて追って来たブルーにも聞

こえて居た。ブルーは、千年前の出来事を少し思い出して居た。ミラージュにも、ブルーの他にパートナーである妖精が居たのだが、ミラージュのパートナー妖精は、ミラージュに心酔していて、ブルーの言葉に耳を貸す事は無かった。

(君達二人は、互いに叱咤激励出来る、素晴らしい関係何だね……)

ブルーは、何かを決意したように表情を引き締めると、

「ブラック……ちよつと良いかい？」

「エッ!?か、神様？」

メップルに励まされ、少し元気を取り戻したなぎさに、背後からブルーが声を掛けた。なぎさとメップルは、突然背後に居たブルーを見て驚きの表情を浮かべた。

3、なぎさとブルー

「か、神様……あのう、さつきはゴメンなさい！私、ついカツとなつちやつて、神様に酷い事を……」

「それは僕も同じだよ……ホワイトとムーンライトにも、此処に来る前に非礼を詫びて来たよ」

「エッ!？」

「ブラック、君の言う通りだ！君達がどんな気持ちで、この世界の為に戦つて来たの

か……そんな事も理解出来ない何て、僕の方こそ神失格だ!!」

「そ、そんな事無いです!」

「君に言われて……僕は千年前の事を思い出した。キュアミラーージュの心を傷付けてしまった、あの時の事を……」

ブルーはそう言うのと、なぎさとメツプルに自らの過去を語り始めた……

一万年前、三人のプリキュアによって、大いなる闇は封じられた……

だが千年前になって、大いなる闇は更なる禍と共にこの世界に甦った。ぴかりヶ丘の神社で巫女をして居たミラーージュは、闇に覆われた空を嘆き、神に祈りを捧げた。その願いが叶い、空から地球の神ブルーが降臨した。ブルーは、ミラーージュの清き心に触れ、彼女をプリキュアにする為、ブルースカイ王国の妖精、ファンファンを呼び寄せた。シルクハットを被り、灰色のつなぎを着て、背中の羽は黒いファンファンは、少し大人びた態度を取って居たが、徐々にミラーージュの優しい人柄に触れ、彼女に心酔していった。キュアミラーージュは、ブルーのサポートを受けながらも、たった一人で大いなる闇の配下達と戦い続けた……

「ミラーージュは強かった……だが、大いなる闇の軍勢は、数で圧倒的に勝って居た。そこで僕は、ミラーージュをメランに引き合わせた……結果は知っているね?」

「ハイ！」

「メランから水晶の鏡を託されたミラージュは、ミラクルマジカルパッドの力を使い、この世界を闇から解放した！ だけど、大いなる闇は月へと逃れ、月ごとこの地球を破壊しようとしてたんだ!!」

そう言うと、ブルーは当時を思い出すかのように目を瞑った・・・

決戦の場が月だと知ると、ミラージュの心に不安が沸き上がって居た。もう二度と地球に帰れなくなるのでは無いかと思うと、ミラージュは心の不安を拭うべく、ブルーに本心を打ち明けた。

それは、ミラージュがブルーの事を愛して居た事実・・・

ブルーも本心では、ミラージュの事を愛して居た・・・

愛しいミラージュをこの腕で抱きしめ、ミラージュの不安を拭い去って上げたかった・・・

だがブルーは、地球の神として振る舞う事を選んだ。その結果、二人の間に微妙な隙間風が吹いた。

時は待つてはくれなかった・・・

大いなる闇との決戦の地、月に向かったミラージュ、ブルー、ファンファンは、大いなる闇が繰り出した巨大なる魔と戦った。その戦いは、過去の世界に飛ばされたなぎさ

も知って居たが、なぎさはあえてブルーの話に聞き入った。

「大いなる闇が同化した巨大なる魔の前に、僕達は苦戦した。メランから借りたマジカ  
ルラブリーパッドも、地球を浄化した事で、その力は無効化したに等しかった」

ブルーはそう語り、目を瞑って少し間を置くと、

「僕は、シャイニングメイクドレッサーをミラージュに託した！」

「シャイニングメイクドレッサー!?!」

なぎさが聞き慣れない言葉に思わず眩くと、ブルーはコクリと頷き、

「そう、エンプレス達が持つて居た三種の神器のように、僕が力を貸したプリキュアに、  
光の加護を与えるアイテムとでも思ってくれば良いよ」

ブルーは、シャイニングメイクドレッサーの力を解放し、ミラージュは大いなる闇を  
倒した。だが、それも束の間の出来事だった……

精神体となった大いなる闇は、あろう事かキュアミラージュに取り憑いた。普段のミ  
ラージュならば、取り憑いた大いなる闇の甘言など一笑に付したであろう。だが、ブ  
ルーの愛を得られなかったと思って居た、ミラージュの心の隙を、大いなる闇は巧みに  
付いて来た。ミラージュは、心の中に沸き上がってくる黒い欲望に気付いた。

「ミラージュは、大いなる闇に取り憑かれ、負の感情に支配されていった。ミラージュ  
は、僕にこう言ったんだ……私事、大いなる闇を封じてくれと！」

ブルーは再びその時を思い出したかのように、悲しそうな顔をしていて、見て居たなぎさの心も悲しみに包まれた。

「キュアミラージュの美しかった真紅に染まる赤い髪が、黄緑色に変色し、身に纏って居たプリキュアの衣装さえも、黒く変貌していった。ファンファンは絶叫し、ミラージュを助けるように僕に叫んだ。でも、シャイニングメイクドレッサーの真の力を解放出来るのは……プリキュアだけだったんだ！」

「……………」

「僕は、この手でミラージュを……シャイニングメイクドレッサーに封印してしまったんだ！僕がミラージュを……」

「神様……………」

ブルーは、地球を救う為に、非情な決断をするしか無かった。ファンファンはブルーを罵り、ミラージュと共に、シャイニングメイクドレッサーに封印される事を選んだ。だが、大いなる闇は、封印される間際に精神を分離させ逃れて居た事を、ブルーは後になつて知つた。

「僕は、あの時のミラージュの声が忘れられない……必死に手を伸ばしながら、僕の名を呼び続けたミラージュの声が……その時から僕は、名ばかりの神となつた」

「そんな事無い！」

「ブラック!？」

「さつきはあんな事言っちゃったけど、神様は力を失いながらも、この世界の事を憂い、私達の事を見守って居てくれて居た」

思わず見つめ合うなぎさとブルーを見たメツプルは、軽く咳払いをすると、

「なぎさ、藤P先輩から、神様に乗り換えたメポ?」

「な、な、何言ってるのよお?」

「オヤア!?!赤くなったメポ?」

「あんたねえええ・・・コラー!メツプル!!」

ブルーの前で追いかけてつこを始めたなぎさとメツプルを見て、ブルーは沈んでいた心が少し晴れた気がして居た。なぎさがブルーと共に帰って来た事で、他の一同はホッと安堵し、ブルーを交えて楽しい朝食の時間を過ごして居た・・・

第百九話：少女達は・・・

完



## 第百十話：それぞれの特訓

## 1、空手道

プリキユア合宿二日目・・・

早朝に起きたなぎさとブルーの騒動も丸く収まり、朝食を終えた一同は、軽くランニングで汗をかいた後、ビーチでゆりから空手の型を教わって居た。妖精達は、森に遊びに出かけたハミイとキャミー、姿が見えない魔王とピーちゃん以外、ブルーと共にその様子をビーチで眺めて居た・・・

「折角ビーチに居るのに、何で水着じゃないケル?」

「修行してるのに、何で水着になる必要があるシャル!」

「水着で修行しちゃ・・・何で悪いケルウウウ!」

「ラケル! 何考えてるシャルウウ!!」

ラケルは、一同のトレーニンングウェア姿や胴着姿を見て、不満そうに口を尖らせ涙ながらに叫び、シャルルにお腹で体当たりされて怒られる。パフは、ポルンとルルン、フープとムーブやキャンデイ達と一緒に、砂に絵を描いてはしやぎ、アロマはそんな幼い妖精達を、目を細めながら眺めていた。ぐらさんは、サングラスを掛けながら、妖精用の

ベッドの横になり寛いでいると、ブルーがぐらさんに近づき、

「ぐらさん、久しぶりだねえ？」

「ああ、お前も元気そうで何よりだぜ。リボンは元気か？」

「うん、元気でヒメの側に使えているよ」

「へえ、ぐらさんは、神様と知り合いなのか？」

「ああ、俺はブルースカイ王国の妖精だからな」

人間姿のシロップに聞かれたぐらさんは、自分もブルースカイ王国の妖精だと教えた。ランスは、恐る恐るアン王女を見ると、アン王女は特訓に夢中なようで、ランスはホッと安堵し、ぐらさん同様ベッドに寝転び、ストローでジュースを飲み始めた。

「そういえば、魔王とピーちゃんの姿が見えないね？」

「朝には二人共居たんだが・・・」

人間姿のココとナッツは、魔王とピーちゃんがこの場に居ない事に、一抹の不安を覚えた。

ゆりに空手を教えたつぼみの祖母薫子は、山籠もりなどで、空手を独自に創意工夫して極め、全国大会で優勝した事もある達人だった。その薫子から空手を直伝されたゆりは、一同に空手の大まかな流れを教え、各自が型を行って居た。型とは、一人で演武す

る空手の練習で、技は決まった順序で演武するのが基本であった。この辺りは、いつきの明堂院流に似て居た。現に薫子は、ゆりをいつきの祖父徹太郎の、明堂院流を極めさせようと考えて居た事でも分かった。

「いつき、あなたも前に出て手伝つて頂戴、私が見た限り、薫子さんの空手と、あなたの道場の明堂院流は通じ合うものがあるわ」

「分かりました」

いつきはゆりに呼ばれると、ゆりの隣に立った。胴着に着替えたいつきは、流石の着こなしをしていた。ゆりは、素人がほとんどのなきさ達一同の為に、単純な突き、蹴り、受けを、一同の身体が自然に動けるまで鍛錬させた。真琴は型をしながら、以前いつきの道場で習った事を思い出し、

（これは、いつきさんの道場で教わった動きに似て居る・・・）

「ヤッ！ハア！トウ!!」

いつきも以前の事を思い出したのか、真琴の動きを見て口元に笑みを浮かべ、ゆりも驚いた表情で真琴を見た。

「真琴、筋が良いわねえ・・・その意気よ！」

「ハイ！」

「空手の道も奥が深いのですねえ・・・ハッ！」

ゆりに褒められた事で、俄然やる気を出す真琴、母静子から習った合気道を嗜（たしな）むれいかもまた、気合いを込めて熱心に稽古に精を出した。トランプ王国で武道の修練をして来たアン王女、以前明堂院流を体験見学していた満と薫の筋も良かった。なぎささとのほか、スポーツが得意な咲、りん、かれん、くるみ、美希、せつな、響、エレン、アコ、あかね、なお、芝居やダンスをやっていた影響もあつてか、うらら、ラブと祈里も、型を何度も行う内に、自然と身体が覚えたのか、次第に様になって居た。苦戦して居たのは、ひかり、舞、こまち、つぼみ、えりか、奏、みゆき、やよい、あゆみ、それでも何度も続ける内に、形になって行つた。ゆりは頷くと、

「みんな、大分形になってきたわね・・・では、次に組手に移りましょう」

『組手!?!』

「ええ、組手って言うのは・・・」

ゆりはそう言うのと、簡単に組手について一同に説明を始めた。組手とは、それぞれのレベルに合わせた、攻撃技や受け技（防御）、返し技の鍛錬を目的に行い、主に二人で行う空手の練習形式の一つで、決まった手順で技を掛け合う約束組手や、自由に技を掛け合う自由組手、勝敗を目的にした組手試合などがあつた。ゆりは、いつきと軽い打ち合わせをすると、

「口で説明するより、実際に見た方が分かりやすいと思うから、私といつきで見本を見せ

るわね」

ゆりはそう言うと、いつきに目で合図を送り、ゆりといつきが向かい合った。互いに礼をし、真つ先に技を仕掛けたのはいつきで、突きの連打を放ち、ゆりがそれを手で受け流すや、いつきは前蹴りでゆりの腹部を狙った。ゆりはその攻撃を、右肘で前蹴りを受け止め、逆に左手の突きでいつきの顔を狙うも、今度はいつきが右手で攻撃を払った。一同は、息を飲みながらその様子を見ていたが、

「す、凄い……」

「本当に戦つてみたいねえ？」

「こんなの私達でやるの？」

なぎさが、かれんが、祈里が、少し動揺しながら言葉を発し、尚もゆりといつきの組手は続けられたが、ゆりの口元に笑みが浮かんだ瞬間、いつきは攻撃を止め、二人の組手は終了した。再び互いに礼をしたゆりといつきが、見て居た一同に向き合うと、

「こんな感じで、みんなもやってみて」

『無理いいい！』

ゆりの言葉に、目を点にした一同が首を横に振るも、いつきはクスリと笑い、  
「アハハ、何も僕達みたいにしなくても良いんだよ」

「ええ、二人一組になって、交互に突きと受けをすれば良いわ」

ゆりもいつきの言葉に同意し、一同は二人一組でコンビを組んだ。なぎさとほのか、ひかりとあゆみ、咲と舞、満と薫、のぞみとりん、かれんとこまち、うららとくるみ、ラブと祈里、美希とせつな、つぼみとえりか、響と奏、エレンとアコ、みゆきとあかね、なおとれいか、

「やよいさん．．．一緒に組手してくれませんか？」

「エツ!? う、うん、別に良いけど．．．」

(仮想バッドエンドピースにピツタリだわ)

真琴たつての希望で、やよいは真琴と、武道経験者のアン王女には、いつきが再び相手を務めた。一同は、真剣な様子で組手を続けた．．．

数十分後．．．

「みんな、お疲れ様！少し休憩にしましょう」

『フウ．．．』

一息付いてその場に座り込む一同、特にやよいはゼエゼエ荒い呼吸をし、

「ま、まこちゃん、酷いよおおお！」

やよいは、涙目になりながら真琴に抗議し、真琴は、やよいにバッドエンドピースの姿をダブらせ、つい力が入り、何発かやよいの身体にヒットしていた。真琴は、行き過

ぎた行為を反省し、ペコペコやよいに頭を下げた。

妖精達は、特訓で疲れた一同に水を手渡し、一同は美味しそうにゴクゴク飲み干した。ゆりは一同に話し掛け、

「基本的な流れはこんな感じね……後は、それぞれで修行を行う自由時間にしましょう。もつと空手について聞きたいなら、遠慮なく私に言つて頂戴……そうそう、咲には仕上げの特訓を用意して上げるから、15時にもう一度ここに来て頂戴」

「エエエ!? またあたしだけえ?」

「フフフ、特別特訓何て、良かったじゃない、咲!」

「トホホなりイ……」

少し悄気返る咲を見て、一同が思わずクスリと笑った。ゆりの言葉を受け、一同は特訓を各自の自由に行う自由時間となった……

## 2、虫嫌いの謎

咲は、近付いて来たフラツピに声を掛けられた。何の用かと問う咲に、フラツピは、大きく深呼吸してから言葉を発し、

「咲、ここは自然に囲まれた素晴らしい所ラピ……ここで精霊の気を感じてみると良いラピ」

「精霊の気かあ・・・そうだね！舞、満、薫、あたし達は森の方に行ってみない？」

「「良いわよ！」」

「ねえ、響達も一緒に行かない？ハーモニーパワーを磨くとかかって言ってたけど、精神修行みたいなの何でしょう？」

咲に聞かれた響は、右手で頭を掻き苦笑を浮かべながら、

「いやあ、実はこれといったイメージが湧かなくて、みんなと同じような行動すれば良いのかなあとか・・・」

奏は、響に何らビジョンが浮かんで居ない事を知り、呆れたように響に話し掛け、  
「もう、響ったら、そんな事で私達を誘ったの？」

「良いじゃん！」

「はいはい、何するかは森に行ってから考えましょう」

苦笑を浮かべたエレンが、響と奏の背中を押しながら、森に向かって歩き出そうとすると、咲は何かを思い出したかのように、

「そうだ！舞、満、薫、それに響達も、先に行つて、あたしは用を済ませてから行くから」

咲に誘われた一同が、頷きながら返事を返し、咲もコクリと頷き返した。

「アコ、さあ行きましょう！」



「エッ!? うん・・・」

響達も一緒に行くこと知り、薫はアコの腕を掴んで森の方へと歩いて行つた。満は不思議そうに首を傾げるも、薫とアコの後に付いて歩き出し、舞と響達もその後を追つた。咲は、舞達と響達が先に森に向かつたのを見届けると、のぞみを呼び止めた。のぞみはくるみと共に、みゆき、やよい、あゆみ、アン王女を誘い、一緒に修行しようと話し掛けていたが、咲に呼ばれた事で、のぞみが近付いて行つた。くるみは、みゆき、やよい、あゆみ、アン王女を伴い、先に別荘へと戻つて行つた。咲はのぞみの耳に顔を近づけ、

「のぞみ、さっきの話だけど・・・」

「エッ!? なおちゃんの?」

「うん!」

「そうだね・・・かれんさん、ちよつと良いですか?」

咲とのぞみはアイコンタクトで領き合い、のぞみはかれんを呼んで何やら耳打ちすると、かれんはコクリと頷いた。

りに誘われたなおは、あかねとれいかも誘い、四人で特訓をしようとしていると、かれん、咲、のぞみが四人に近付き、代表してかれんがなおに話し掛け、

「なお、ちよつと心眼を鍛えてみない?」

「エッ!? 心眼?」

「そうそう！ちよつと目隠しして椅子に座つて」

「怖く無い、怖く無ああいから」

なおは、咲とのぞみに両腕を掴まれながら階段を上り、森の入り口に用意された椅子に座らせられ、アイマスクで目隠しをされた。れいかは困惑した表情で、

「何やら誘拐犯のようですねえ・・・」

「エエエ!?そんな事無いよ」

れいかに誘拐犯のようと言われ、咲とのぞみが困惑する。目隠しされた事で、なおは不安そうに辺りをキョロキョロし、

「何!?何しようとしているの?」

なおは、何が始まるのかと想像すると、少し緊張し、顔から大量の汗が流れてきた。咲がなおの右側に、のぞみが左側に立ち、目隠しされたなおの耳元で、右側から咲が、蜂が出てくる歌を歌い出すと、なおは大いに動揺し、

「蜂?!イヤアアア」

更に今度のはのぞみが左側から、なおの耳元でトンボが出てくる歌を歌い出した。なおは震える声で、

「ト、トンボまで?!」

そんな三人の姿を見た、りん、あかね、れいかは、不思議そうに首を傾げた。りんは、

のぞみに話し掛け、

「のぞみ、なおに何してるの?」

「エツと、実は・・・」

のぞみは、りん、あかね、れいかを側に呼び、何やら耳打ちすると、三人は微妙な表情を浮かべた。あかねとれいかは首を傾げながら、

「そんなで、なおの虫嫌いが治るとは思えんけどお?」

「ですが、確かになおの虫嫌いは、少し酷くなっている気がしますねえ?」

「大体、なおって何で虫嫌いになったの?」

「さあ?」

りんは、なおの虫嫌いのルーツをあかねとれいかに聞くと、二人も分からないように首を傾げた。そんな一同の話が聞こえて居たなおは、大きく膨れっ面をした。なおは、咲とのぞみにアイマスクを取って欲しいと告げると、咲がアイマスクを外した。するとなおは、恨めしそうにれいかを見つめ、

「ちよつとれいか!元を正せば、れいかにも責任あるんだからねえ!!」

「エツ!?!私ですか?」

「そう!幼稚園の頃・・・」

なおはそう言うと、れいかに思いださせようとするかのように、昔話を始めた・・・

幼稚園の頃、なおは今のようには虫嫌いではなかった。逆に、虫を捕まえて遊ぶ程の幼女だった。幼いれいかと共に、捕まえたゲジゲジを使って競争をして遊んだりもした。

「あかし、もつともつと早い虫さん見付けるんだあ！」

「なおちゃん、れいかも協力するね！」

「本当、れいかちゃん？」

「ウン！見付けたら、なおちゃんのお家に持って行って上げる！」

「ワアアイ！」

そんな他愛もない事でも、幼い頃は楽しかった・・・

だが、ある日の事・・・

その日れいかは、両手でバケツを持ってなおの家にやって来ると、庭先でなおを呼んだ。

「なおちゃん、一杯虫さん持って来たよ」

「本当!?!見せてえ！」

そう言うと、なおはれいかの持って居るバケツを覗き込もうとした時、

「ウン!・・・アツ!?!」

なおに見せようとしたれいかは、バランスを崩して転び、運悪くバケツがひっくり返り、なおの全身にゲジゲジ、ダンゴ虫などの虫が掛かった。当然なおは泣きじやくり、バ

ケツを引つ繰り返したれいかも泣きだした。身体を蠢く沢山の虫の感触に、幼いなおはパニックになった・・・

「それ以来あたしは、虫が苦手になって・・・」

かれん、咲、のぞみ、りん、あかねは、聞いているだけで身体が痒くなってくるよう  
で、変顔を浮かべた。れいかは首を傾げながら、

「そのような事が・・・今まで忘れて居ました」

「もう、れいかだったら、人事だと思つてさあ・・・」

膨れっ面を浮かべるなおに、れいかは素直に申し訳無さそうに頭を下げた。そんな一  
同の前にやつて来たブルーは、なおの虫嫌いの話を聞き、

「誰にでも、苦手な物はあるよ・・・でも、もつと良く虫達を観察してごらん」

「エエエ!? 虫を?」

困惑した表情をするなおに、ブルーは微笑みながら右腕を前に出すと、右腕の周りを、  
色取り取りの蝶が舞い踊つた。そんな蝶達を良く見てみれば、確かに恐怖心など湧いて  
くる事は無かつた。

「マーチ、足下を見てご覧」

「足下!? アツ?」

ブルーに促されたなおは、言われるまま足下を見た。そこには蟻が列を作りながら、

巣穴から出て行く者、戻る者が忙しなく動き回っていた。更に心地良い風と共に、耳を敬てれば、蟬の鳴き声が聞こえて来る。

「虫も、君達と同じように……この世界で生き、命を全うしているんだよ」  
「……………」

ブルーは、優しい口調でなおに語り掛けるように、虫についてなおに伝えた。なおは言葉に詰まり、無言のまま自然と共存する虫達を見て居ると、視界に入っただけで不快感が芽生えた気持ちに、変化が起こっているかのように、自分でも感じられた。

『流石は神様！』

咲、のぞみ、りん、かれんは、なおの虫嫌いを、言葉だけで少し緩和させたブルーを、尊敬の眼差しで見つめた。だがそれも束の間、なおは何かの視線を感じ、右肩を恐る恐る見てみると、一匹のカマキリがなおの右肩に止まって居た。

「ヒイヒイ！虫いいい!!誰か取ってええええ!!」

慌てて立ち上がったなおは、悲鳴を上げながら何処かに立ち去った。れいかは右手で右頬を触り、少し首を傾げると、

「なおはどうやら、視線に入るだけなら耐えられるようになったようですが、触れられるのは、まだ駄目なようですねえ？」

れいかの言葉を聞いた、咲、のぞみ、りん、かれん、あかね、ブルーは、走り去って

行くなおの後ろ姿を、呆然と見つめて居た・・・

### 3、ローリングフォルテツシモ

ビーチの角に集合した、つぼみ、えりか、いつき、うららの四人、四人はプリキュアの姿に変身すると、レモネードが思い付いたという技を試そうと、準備運動をしていた。「ヨツとーで、あたしらはフォルテツシモをすれば良いの?」

マリリンが準備運動をしながら、レモネードに話し掛けると、レモネードは手首の運動をしながらコクリと頷き、

「はい!サンシャインとの合体技の、シャイニングフォルテツシモを試してみてください」

「シャイニングフォルテツシモですか?それは構いませんけど、どんな技を試そうとしてるんですか?」

「ちよつと想像付かないわね?」

ブロッサムとサンシャインにも、レモネードが試そうとしている技のイメージが思い描けず、思わず首を傾げた。レモネードは、口元に笑みを浮かべながら、

「フツフツフ、それはまだ内緒です」

（(何か不安・・・)）

ブロッサム、マリリン、サンシャインは、そんなレモネードを見て一抹の不安を感じた。

気を取り直した三人は頷き合うと、

「集まれ、二つの花の力よ！プリキュア！フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

ブロッサムとマリンが、ピンクと青の光に包まれ上昇し、それを合図にしたようにサンシャインが、シャイニータンバリンを構えると、

「花よ！舞い踊れ!!プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

サンシャインがゴールドフォルテバーストの力で、太陽のような光のゲートを空中に作り出すと、それ目掛けて突入する、フォルテツシモ状態のブロッサムとマリンの身体が、徐々に金色に輝いた。

「プリキュア！シャイニング」

「フォルテツシモ!!」

三人の合体技、シャイニングフォルテツシモが披露されると、レモネードは目をキラキラ輝かせ、

「今だ！プリキュア！プリズムチェ〜ン!!」

「・・・エツ!?!」

レモネードが、光の鎖であるプリズムチェーンを上空に向けて飛ばすと、プリズムチェーンは、ブロッサムとマリンの両足に絡みつき、二人の目が点になる。レモネードの鎖を持つ手が、更に力を込めると、



「二人共、行きますよおお．．．プリキュア！ローリング」

「フォルテツシモオオ!?」

レモネードが、まるでハンマー投げをするかのように、グルグルその場で回転すると、上空に居る黄金のフォルテツシモ状態のブロッサムとマリリンが、勢い良く円を描き回り続けた。

「凄い！これが、レモネードが言ってた．．．アレ!?」

サンシャインは、驚愕しながら上空のローリングフォルテツシモを見て居たが、次第に回転の勢いが弱まり、レモネードが目をグルグル回しながら、その場に尻餅を付き、上空からも、目をグルグル回したブロッサムとマリリンが落下した。サンシャインは目を点にする。

「うくん．．．もう少し改良が必要じゃ無いかなあ?」

「「そ、そうみたい．．．」」

サンシャインの言葉に、三人も目をグルグル回しながら同意し、ローリングフォルテツシモは保留となった．．．

#### 4、見切り

ラブは、美希、祈里、せつな、そして真琴と共に、今一度ゆりに空手の指導を受けて

いた。なぎさとほのか、ひかりとこまちは、先程習った組手のおさらいをしながら、ラブ達の様子を見て居た。ラブが特に重点に置いて居たのは、見切りだった。ゆりは、五人に対して見切りの説明を始め、

「良い事、見切りと言うのは、ただ攻撃を避ければ良いというものでは無いわ。相手の動きや構えなどから、その技や出方などを判断し、紙一重で相手の攻撃を躲せる間合いを取る事よ」

『ハイ!!』

「じゃあ、先ずラブから・・・私が今からラブの顔に正拳突きを放つけど、へたに動かないで!返って攻撃が当たってしまうから」

「ハイ!お願いします!!」

ラブはゆりと向き合うと、一礼して空手の構えを取った。ゆりは腰を落とし、正拳突きを放つと、空気を切り裂くかのように音がなり、ラブは思わず目を瞑った。

「ラブ、目を瞑ったら駄目よ。それでは見切りは身に付かないわ」

「ハイ!すいません!!」

見て居た美希も緊張した面持ちで、祈里とせつな、真琴に話し掛け、

「でも、目を瞑るなって言われても、ゆりさんのあの空気を切り裂くかのような、正拳突きを目の前で見れば、目も瞑るわよねえ?」

「う、うん……」

祈里も不安そうに美希の言葉に同意するも、せつなは微妙な表情を浮かべ、

「でも、ゆりさんの言う通り、それじゃ見切り何て覚えるのは、夢のまた夢じゃない？」

「そうですね、相手の攻撃を恐れない勇氣……是非とも覚えたいものです」

せつなの言葉に真琴も同意した。それはラブにも分かって居たが、本能的な恐怖心が沸き上がり、思わず何度も目を瞑ってしまった。その様子を見ていたなぎさは、ゆつくりラブに近付くと、

「ラブ、ゆりの拳ばかりに気を取られてるから、思わず怖がっちゃうんじゃないかなあ？ ゆり、ちょっと私に試して見て」

なぎさは、ゆりに自分にも正拳突きをしてみたと告げると、ゆりはコクリと頷き、なぎさの前に移動して正拳突きを繰り出した。なぎさは、まるで見切ったかのように、ゆりの正拳突きを躲しながら、右手で受け止めた。ゆりは思わず口元に笑みを浮かべ、

「なぎさ、やるわね？」

『凄い!?!』

なぎさの行動を見て驚く一同に、なぎさは照れながら説明を始め、

「いやあ、今私が出したのは……実は、ラクロスの応用をしたんだよねえ」

『ラクロスの応用?』

ラクロスに付いて、それ程知識が無いラブ達が聞き返すと、なぎさはコクリと頷き、「そう、今ので例えるなら、ゆりの腕がクロス（棒の先に網が付いたスティクの事）で、拳がボールってわけ」

「成る程、それで・・・そうか！」

なぎさの言葉を聞いたせつなは、何かを閃いたのか、ラブ、美希、祈里を呼び、「そうよ！私達は、正拳突きって言葉が頭に残り、どこかで恐怖心を持っていただけ、これをダンスに応用すればどうかしら？」

「「ダンスに!?!」」

「ええ、用は振り付けだと思えば良いのよ」

せつなの提案・・・

それは、ゆりの正拳突きを、ダンスの振り付けの一部だと例える事だった。ゆりが繰り出す正拳突きのモーションを、頭の中でリズムを取って覚える事と提案した。

「うん、やってみよう！せつな、そこで正拳突きしてみて」

「ええ」

せつなは頷き、先程ゆりに習った正拳突きをその場で何度も行なった。その様子を見つめて居たラブ、美希、祈里は、リズムを取っているかのように、頭を何度も上下に動かした。

「何となくイメージ出来た気がする．．．ゆりさん、もう一度良いですか？」  
「ええ、何度でも付き合おうわよ」

ゆりは口元に笑みを浮かべ、コクリと頷いた。再び互いに向き合い礼をすると、ゆりが腰を下ろし、正拳突きを放つ、その一連の行動を、頭の中でリズムを取っていたラブは、身体を入れ替え、見事に正拳突きを躲した。

「出来た！」

「ラブ、そのイメージを忘れないで」

ゆりは満足気に頷き、ラブを称えた。ゆりは、美希、祈里、せつな、真琴にも順番に正拳突きを放つも、皆驚くほどの上達を見せて、次第に四人も見切りをマスターしていった。ゆりは満足そうに何度も頷きながら、

「どうやら、見切りについては、もうあなた達に教える必要は無さそうね。後は、それぞれで練習してみて」

『ハイ！』

ゆりに合格を貰い、ラブ、美希、祈里、せつな、真琴の表情からは、自信が滲み出ていた．．．

## 5、攻防一体

なぎさがラブ達にヒントを与えていた時、ほのかはその側で、ひかりとこまちから頼まれ、敵に掴まれた時の対処法を教えて居た・・・

「素人の私が教えるのはおこがましいけど、私が今まで戦って来て思ったのは、敵の力を利用する事も、とつても大事な事だと思うの」

「敵の力を利用!?!」

「ええ、私達はプリキュアになると、通常の数倍、数十倍の力を得る事が出来るけど、それでも戦って居る相手の方が、力が上回る場合が多々あるわ。そういう時にこそ、相手の力を利用する事が、生きてくると思うの」

ほのかの言葉に納得しているのか、ひかりとこまちは何度も頷いた。

「詳しい事はいつきさんや、お母様が合気道を為さっている、れいかさんに聞いた方が良いわね」

「そうですね・・・でも、ホワイトになったほのかさんって、投げ技をしたり、関節を決めたりしてますよね?」

こまちに聞かれたほのかは首を傾げながら、

「うくん・・・昔、なぎさに薦められて、一緒にプロレスのテレビを見た事があつたら・・・」

「プロレスですか?」

今度はひかりがほのかに聞き返し、ほのかはコクリと頷き、

「ウン！なぎさはプロレスが好きだから、技を掛ける時、スローモーションで見せて解説してくれたんだけど・・・何となく覚えちゃった」

「ハア」

ほのかはその時を思い出したのか、楽しそうに二人に語り、ひかりとこまちが困惑する。ひかりは、ブラックとホワイトの戦い方を思い出したかのように、

「そう言えばお二人とも、プロレスに出てくるような技を掛けてましたね」

「でしょう？以外と、そういうのもプリキュアで役立つと思うよ」

「成る程・・・」

ひかりとこまちはコクリと頷いた。とはいえ、普段プロレスなど見る事もないひかりとこまちは、ラブ達へのアドバイスを終えて、戻って来たなぎさに相談すると、なぎさは腕組みしながら何度も頷き、

「成る程ねえ・・・じゃあコブラツイストでも覚えてみる？」

「コブラツイスト!?!」

「そうそう、私の得意技で・・・アツ!?でも亮太が居れば実験台に出来るけど、他のみんなを実験台にするのは気が引けるかなあ・・・」

なぎさが目で辺りを伺うと、ちょうど森から戻って来たブルーの姿が目に入った。な

ぎさは変顔浮かべながら、

（神様にコブラツイスト何かしたら、ほのかやゆりに怒られるだろうし、何か天罰受けそうだし……）

考え込むなぎさに、困惑したひかりとこまちが話し掛け、

「あ、あのう、出来れば、相手の力を利用した投げ技とか、関節技を……」

「エツ!?相手の力を利用した投げ技かぁ……説明するより見た方が早いよね」

そう言うのと、なぎさの視線の先に、人間姿のシロップが映った。なぎさはシロップを手招きして呼ぶと、シロップは気怠そうに、ゆっくりなぎさの下に歩いて近付いて来た。なぎさは更に手招きして、

「シロップ、ちよつと急いでこっちに来てくれない?」

「ハア……おいなぎさ、何か用……ワアアア!?」

シロップは渋々ながら、言われるままなぎさの下へ走って近付くと、突然なぎさがしゃがみ込み、急に立ち止まらないシロップの身体を、背中ですくい上げ、シロップはそのまま背中から砂浜に落ちて妖精姿に戻って目を回した。

「今のがシオルダースルーだよ!走ってきた相手の勢いを利用して、背中そのまま後ろに投げ飛ばす技」

「ハア……」



「大丈夫ですか？」

こまちが困惑し、ひかりは目を回すシロップを心配して声を掛けた。シロップはまだ目を回しながら、

「なぎさ・・・酷いロプ」

「ゴメンゴメン、これもひかりとこまちの為だから、少し練習台になってよ？」

「じよ、冗談じゃ無いロプウウウ！」

シロップは、大慌てでその場を離れて逃げ出した。その様子を見ていたひかりとこまちは、このままなぎさから教えを受けると、他の人に被害が行きそうに感じ、

「なぎささん、ほのかさん、私達試したい事があるので、二人で練習してきます」

「アドバイスありがとうございました！」

ひかりとこまちが、なぎさとほのかに頭を下げると、ほのかはニツコリ微笑みながら、  
「もし手伝える事があつたら、遠慮なく言つてね」

「じゃあ、頑張つて」

なぎさは、右手を握りながら合図を送り、二人を励ました。ひかりとこまちはコクリと頷くと、

「ハイ！」

二人はもう一度なぎさとほのかにお辞儀をし、階段を上った。階段を上り終わると、

騒動を終えたかれんが、キュアアクアに変身してプールサイドで精神を統一していた。こまちがアクアに話し掛け、

「アクア、あなたはここで特訓してたのね？」

「ええ、ちよつと思いついた事があつて試してみたくて……こまちとひかりは？」

「私達は、ゆりさんに組手をもう一度予習させて貰つてたの」

「なぎささんとほのかさんにも、投げ技や関節技のアドバイス頂いたんですけど、何だかしつくりこなくつて……」

「そう考えた時、私のエメラルドソーサーや、ルミナスの防御技を、もつと極めてみようと思ひ立つたの」

こまちとひかりの話聞いたアクアは、少し考える表情を浮かべると、

「そう……ねえ、折角だから三人で練習してみない？試したい技があるって言ったでしよう？まだ成功するか分からないし、あなた達がフォローしてくれるなら、私も実際にやってみれるし」

「構わないわよ」

「分かりました！じゃあ、ポルンとルルンを呼んできます」

アクアの誘いを受けたひかりとこまち、ひかりはポルンとルルンを呼びに行き、二人はルミナスとミントに変身し、アクアとは反対側のプールサイドに立った。アクアはミ

ントに話し掛け、

「ミント、エメラルドソーサーを上空に放って見て」

「分かったわ」

ミントはアクアに言われた通り、エメラルドソーサーを上空に向けて発した。それを見たアクアは、右腕を高々掲げると、アクアの背後で噴水のように水が噴き出し、アクアの身体をその勢いのまま持ち上げると、

「プリキュア！アクアキック!!」

アクアが右腕を下げると、水はウォータースライダーのように流れ出し、アクアはその流れに身を任せて、勢い良く滑り降り、エメラルドソーサーを水流に乗ったキックで破壊した。

「こんな感じね」

アクアは、大体思い描いた通りに技が決まり、ホッと安堵した。そんなアクアを見て居たミントは、

「ねえアクア、私もちよつと思いついた技があるんだけど、コントロール不能になったら、破壊してくれないかしら？」

「エツ!?コントロール不能って・・・危険な技なの?」

「エエと、エメラルドソーサーを連射して、自在に動かせるように出来ないかと思って」

「そういう事・・・分かったわ」

「ルミナスにもフォローを頼めるかしら？」

「分かりました」

ミントに頼まれたルミナスも同意し、ミントはホツとした表情を浮かべると、直ぐに真顔になり、

「プリキュア！エメラルドソーサー!!」

ミントは、緑の光を円盤に変え、上空目掛け四発のエメラルドソーサーを発射した。ミントは、四つのソーサーに意識を集中し、右手で右側のソーサーを、左手で左側のソーサーに指示を出すかのように誘導した。右斜め上下、左斜め上下に移動したエメラルドソーサーを見て居たアクアに、

「アクア、何所でも良いから、エメラルドソーサーにサファイアアローを撃つてみて」  
「分かったわ・・・プリキュア！サファイアアロー!!」

アクアが、右下のエメラルドソーサーにサファイアアローを放つと、水の矢が勢い良く向かって行った。ミントは、右手をゆっくり右回りに回しながら、

「今だわ！プリキュア！エメラルドソーサー・・・リフレクション!!」

ミントの指示で、エメラルドソーサーの角度が変わり、サファイアアローを四力所のエメラルドソーサーに反射させ、サファイアアローをアクアの脇に跳ね返した。

「す、凄いいじゃない、ミント!」

「本当に・・・四力所に反射させる事で、動きが分かりにくいですもんね」

「以前、ムーンライトのムーンライトリフレクションを見て、私にも出来ないかかってずつと考えてたんだけど、上手く行って良かったわ」

ミントは、アクアとルミナスに褒められた事で、ニツコリ微笑み、ホツとした表情を浮かべた。ルミナスは、恥ずかしそうにアクアとミントを見つめ、

「実は、私も考えて居た技があるんですけど、試して見ても良いですか?」

「そうなの? 遠慮しないで良いわよ」

「私達が手伝えるなら手伝うわ」

「ありがとうございます。じゃあ、お言葉に甘えて試して見ますね」

ルミナスは、アクアとミントにその場でお辞儀すると、ハーティエルバトンを取り出した。ルミナスは、ハーティエルバトンをクルクル回すと、

「ルミナス! ハーティエルシャワー!!」

ルミナスが上空高くハーティエルバトンを飛ばすと、クルクル回転しながら島中を一周し、光のシャワーが島全体に降り注いだ。理由を知らない他の一同は、何が起こったのか分からず困惑していた。アクアとミントも呆然とし、何が起こったのか理解出来なかった。

「ルミナス、今の光は一体!？」

「何が起こったの?」

ルミナスは、アクアとミントに話し掛けられ、苦笑しながら説明を始めた。

「今のは、ハーティエルアंकションの応用で、邪な考えを持つ者が、この光のシャワーに触れると、動く事が出来なくなる・・・という技何ですけど、此処には邪な考えを持つ方何て居ませんでしたね」

ルミナスは、恥ずかしそうに照れ笑いを見せると、アクアとミントも思わず微笑んだ。

その同じ頃・・・

「か、身体が急に動かなくなっただでランスウウウ!？」

「ぼ、僕もケル!？」

ビーチに居たラケルとランスが、突然動けなくなっただけとは、ルミナスに知る由も無かった・・・

6、名前は大事だよ

のぞみは騒動後、くるみにアン王女、みゆき、やよい、あゆみ達が待つ別荘に向かい、玄関先で待つて居た一同に、別荘の室内でミーティングをしようとして提案するも、くるみは呆れたような表情を浮かべ、

「ミーティング? そんな事してる暇があったら、さつきゆりに教わった事の応用でもしてた方がマシよ」

「そうですねえ・・・私もお付き合い致しますわ」

「本当!?!じゃあアン王女、私と組手でもしない?」

「良いですわね」

二人は別荘の前に移動し、先程ゆりに教わった組手の予習を始めた。のぞみは頬を膨らまし、

「もう、折角ミーティングしようと思つたのに・・・」

「のぞみさん、ミーティングって、どんな事をします?」

「ウゥン・・・そうだなあ」

みゆきに聞かれたのぞみは、腕組みしながら考え込み、あゆみは思わず目を点にしなから、

「ま、まだ、何も考えて無かつたの?」

「のぞみさん、のぞみさん、私に良い考えがありません」

あゆみが呆気に取られて居ると、やよいが手を上げて、必死にのぞみにアピールした。のぞみとみゆきは身を乗り出し、

「なにになに?」

「エエと、私達で、コラボ技の名前でも決めませんか？」

「コラボ技!？」

「エへへへ、チームの垣根を越えた、私達だけの必殺技!」

「オオオオ!? 良いねええ」

やよいの提案に、身を乗り出すのぞみとみゆき、だが、あゆみは微妙な表情を浮かべ、  
「あのう……技の名前は、後で決めれば良いんじゃないかなあ? それより、どんな技にするか……」

「あゆみちゃん!」

「は、はい!？」

突然真顔のやよいに名前を呼ばれ、あゆみが緊張した面持ちで返事を返すと、

「あのね、技の名前って言うのは、とつても、とつても大事何だよ! ヒーロー物の王道何だよ!!」

「ハア……」

熱く語り出したやよいに、あゆみは呆気に取られながら生返事を返すも、のぞみとみゆきも、やよいの言葉に何度も頷き、

「だねえ、名前は確かに大事だよねえ」

「気合いの込め方が違ってきますもんね」



のぞみとみゆきも、やよいの話に益々興味を持ったようで、やよいの目が輝いた。「でしよう?でしよう?」

(そうなのかなあ?)

そんなテンションが上がる一同とは逆に、あゆみのテンションは下がっていった。やよいは上機嫌で話し続け、

「実は私、新しい必殺技も考えちゃったんですよ」

「本当!?凄おおい!」

「スペシャルピースサンダーって言って、通常は片腕でピースするんですけど、何と、手でダブルピースして放つんです!」

「見てみたい!」

(それって・・・結局ピースサンダーと変わらないよね?)

目を点にしたあゆみは、心の中でやよいにツツコミを入れた。のぞみとみゆきも、二人の合体技を語り出し、

「私とハッピーだったら、どんな技かなあ?」

「シューティングシャワーとかハッピードリームとか?」

「みゆきちゃん・・・最後のはただプリキュアの名前付けただけだし」

あゆみが苦笑しながらみゆきにツツコミを入れると、みゆきは右手で髪をポリポリ搔

きながら、

「エへへへ、中々難しいよねえ」

「ねえねえ、あゆみちゃんだったらどんな技名付ける？」

「聞かせて、聞かせて」

「私ですか!?! そうだなあ・・・」

あゆみは、のぞみとやよいに話を振られると、三人に感化されたのか、あゆみも満更でも無さそうな表情で、技名を考え出した。そこに組手を終えて中に入って来た、くるみとアン王女は、

「アン王女・・・あの子達、何してるのかしら？」

「さあ？ 理解に苦しみますわねえ」

盛り上がる四人を余所に、くるみとアン王女は、そんな四人を見て困惑していた：

## 7、キャノンショット

りん、あかね、れいかは、先程の騒動で疲れ切った表情を浮かべるなおと共に、それぞれプリキュアに変身して、合体技の練習をしていた・・・

「では、今一度・・・プリキュア！ ビューティブリザードフリージング!!」

ビューティは、ルージュ、サニー、マーチの前方に、氷で巨大な障害物を作り出した。

「サニー、マーチ、もう一回試すよ」

「ハイ！」

ルージユの合図に、返事を返したサニーとマーチは、

「プリキュア！ファイヤーストライク！！」

「プリキュア！サニ〜ファイヤー！！」

「プリキュア！マーチシユート！！」

ルージユ、サニー、マーチがそれぞれ必殺技を放つも、何処か連携に欠けていた。サ

ニーは地上に着地すると、

「アカン、また失敗や！」

「どうもしつくり来ないですねえ」

「そう何だよねえ・・・」

マーチの言葉にルージユも同意し、三人は合体技を編み出す事に苦戦して居た。

ビューティは、苦戦する三人を見て、素早く頭の中で三人の必殺技をイメージした。

（地上から技を放つマーチとルージユ、上空から技を放つサニーとは、時間的誤差が生

まれているのでは？）

ビューティは、頭の中で三人の連携をイメージすると、

「マーチ、サニー、ルージユ、こういうのはどうでしょうか？」

「「エツ!?!」」

ビューティに提案された三人が、ビューティの話を聞いていると、三人は何度も頷き、徐々に目が輝きだした。

「うん、中々良いアイデアだと思う」

「せやね、試して見る価値はありそうや」

「じゃあ、ビューティの案で・・・」

「「せえの!!」」

三人は、掛け声を合せると、先ずサニーがサニーファイヤーのモーションに移り、少し間を置いてルージユがファイヤーストライクの体勢に入った。

「プリキュア! サニー・・・」

「プリキュア! ファイヤー・・・」

「ファイヤー!!」

「ストライク!!」

サニーとルージユが同時に叫び、上空からサニーがサニーファイヤーを、地上からルージユがファイヤーストライクを、両者の前方の中間地点目掛け放った。両者の技が合わさり、巨大な炎のボールと化した。それを見たマーチは、

「今度はあたしの番・・・プリキュア! マーチシユート!!」

マーチのマーチシュートが炎のボール目掛け放たれると、炎のボールが加速し、ビューティの作り上げた、氷の壁目掛け飛んで行った。その威力は凄まじく、巨大な氷の壁を破壊したその威力は、大砲のようだった。ビューティにとつても、想像以上の威力だったようで、

「これ程までとは……名付けるなら、そうキャノン！キャノンシュートつて所でしようか？」

「「キャノンシュート……」」

ルージュ、サニー、マーチの三人は、顔を見合わせるとニツコリ微笑み合った……

## 8、繋がる心と精霊の声

咲達と響達は、早朝なぎさがやって来た森が開けた場所で、円になって瞑想して居た。心地良い風が一同を優しく包み込んだ。だが、咲達にも、響達にも、具体的なビジョンが浮かばず、ただ時だけが過ぎていく気がして焦りだしていた……

「フラッピ、精霊の声って、あたし達にも本当に聞こえるの？」

「今の咲達になら、きつと聞こえるラピ」

「根を上げず頑張るチヨピ」

「そうは言ってもさあ……」

少しイライラしてきた咲は、フラツピに確認するも、フラツピとチョツピも、今の咲達四人なら、精霊の声は聞こえると断言した。咲は疲れたのか、その場に大の字になって休憩に入ると、響も同じように大の字になり、

「私達もそう、ハーモニーパワーを磨くって言っても、具体的に何をすれば良いのか：」  
そんな響を見て居た奏の脳裏に、ある出来事が過ぎっていた。まだエレンがマイナーランドの歌姫だった頃、セイレーンの作戦で離れ離れにされて、お互いを感じる事が出来ず、変身出来なかつた事、ヒーリングチェストを求め、魔響の森に行った時も、同じようにお互いを感じる事が出来ず、変身出来なかつた事を思い出していた。

「ねえ響、ひよつとしたら、私達は今四人が側に居る事で、心の何処かで安心感があると思うの、あの時の事覚えてる？」

奏はそう言うのと、響、エレン、アコに、さつき脳裏に浮かんだ出来事を語って聞かせた。見る見る三人の目は輝き、

「奏、それだよ！私達が今やってた事の逆をすれば良いんだよ」

「試して見る価値はあるわね」

「そうと決れば・・・薫？」

「アコを浚えば良いのね？手伝うわ」

「何でそうなるのよおおお」

アコをお姫様抱っこした薫が、森の奥へと駆け出し、アコの叫び声がどんどん遠ざかって行った。呆然としていた響、奏、エレン、咲と舞だったが、満は興味無さそうに再び目を瞑って精神を集中させた。ハツと我に返った響は、縋るような視線で満に話し掛け、

「満さ〜ん」

「薫は、あなた達に協力しようとしているようね…これを利用して、ハーモニーパワーを磨いて見たら？」

「アコを感じろって事ね？響、奏、やってみよう」

「分かった」

満の言葉を聞いたエレンは、響と奏に進言し、二人も同意した。三人は目を閉じ、アコの事を心の底から思った。

「ハミイ、あそこに居るの、ハミイの仲間の…」

「ニャプ!?! 本当ニャ、アコと薫ニャ」

森の中で遊んで居たキヤミーとハミイは、不思議そうに薫とアコの姿を、木々の隙間から眺めて居た。

一方、薫に連れ出されたアコも、目を閉じて響、奏、エレンを思い浮かべた時、四人のハーモニーパワーが合わさったかのように、森の奥から光が輝きだした。響、奏、エ

レンは、目を見開くと、

「「あっちだわ」」

三人は、まるでタイミングを計ったかのように駆け出した。それを見た咲は、

「凄いね、何だかんだ言っても、あの四人のハーモニーパワーって、もう出来上がってるんじゃない？」

「私達も負けてられないわね」

咲と舞は、互いにアイコントクトして頷くと、満同様再び瞑想を始めた。森の中を懸命に走り、アコの下へと辿り着いた響、奏、エレン、三人を見て笑みを浮かべたアコは、

「直ぐ見付けてくれると思ってた」

「エへへへ、まあね」

響が照れ隠しの笑みを浮かべると、エレンが右肘で響を突つつき、奏はそれを見て笑った。薫も口元に笑みを浮かべ、

「こうもあつさり見付けるとわねえ……さて、私も精霊の声を聞く修行に戻ろうかしら」

「薫、ありがとう」

アコに言われ、薫は口元に笑みを浮かべるも、右手を挙げて響達に挨拶し、咲達の下へと戻って行った。

「最近、私達が離れ離れになる事も無かったから、あの時の気持ちを忘れてた」



「ええ、時には昔の出来事を思い出す．．．良い勉強になったわ」

「音吉さんの本だけでなく、こういう事でも成長出来るのねえ」

響、奏、エレンが、しみじみとそう語ると、アコもコクリと頷き、

「ウン！今度は、プリキュアの姿でも特訓しない？」

「「良いよ！」」

アコの言葉に三人も同意し、四人はプリキュアへと変身し、それを見届けたハミイとキャミーは、笑みを浮かべながら、再び森の中へと遊びに出かけた．．．

薫も戻って来た事で、咲は、舞、満、薫に進言し、

「響達見て思ったって訳じゃ無いけど、あたし達も、大の字で寝転んで手を繋いでみない？」

「手を!?!別に構わないけど．．．」

「さつき大の字になった時、何かの力を感じた気がしたんだあ」

咲はそう言うのと、真っ先に大の字になって地面に横たわり、舞、満、薫がそれに続いた。咲、舞、満、薫、大の字に地面に横たわった四人の頭上には、太陽が爛々と輝き、日の光を一杯に浴びながら、四人は円を描きながら手を握り合った。目を瞑り、自然と一体化したかのような四人を見て、フラッピとチョッピは目を細めた。心地良い風に混じ

り、何かの声が聞こえたような気が四人にはした。

(ひよつとして・・・今のが!?)

咲達四人は、自然に口元に笑みが浮かびながら、精霊の声に耳を傾けて居た・・・

後にこの時の特訓が、魔界に乗り込んでの戦いで、効果を發揮する事になるうとは、咲達も、響達も知る由も無かった・・・

### 9、絶好調なりイ

それぞれが特訓に精を出して居た頃、別荘で楽しそうに合体技を決めて居た、のぞみ、みゆき、やよい、あゆみだったが、チラリと時計を見たあゆみは大いに驚き、

「みんな、大変ーもう15時過ぎてるわ!!」

「「エエエ!?!」」

あゆみの声で我に返った三人、のぞみは直ぐさま自室に戻り、ロケット花火を持ってくると、プールサイドに飛び出した。くるみとアン王女は、プールサイドで再び組手をし、かれん、こまち、ひかり、そしてなぎさから逃亡したシロップは、特訓を終えてその様子を眺めて居た。一同は、慌てて外に出て来たのぞみ達に驚き、かれんは、首を傾げながらのぞみに話し掛けた。

「のぞみ、慌ててどうしたの?」

「どうか致しまして？」

「かれんさん、アン王女、大変！もう15時回っちゃってるよ」

慌てるのぞみの言葉に、首を傾げたくるみだったのが、

「15時!?!・・・アツ!?!」

「そう言えば、咲さんの・・・」

くるみもひかりも、思い出したかのようにハツとし、のぞみはコクリと頷いて、

「ウン！みんなに知らせようかと」

「そういう事なら・・・シロツプの背に乗るロプ」

シロツプは巨大化すると、のぞみを背に乗せて大空に舞った。島の上空にロケット花火が数発打ち上げられ、何事かと空を見上げた一同に、のぞみは大声で話し掛け、

「みんなああ！もう15時過ぎたよ!!」

シロツプに乗って上空からのぞみの声が島中に発せられると、咲を除いた一同は大いに慌ただしくなり、

「舞、満、薫、急にどうしたの？何かのぞみが15時過ぎたって言ってたけど・・・」

「エツ!?!べ、別に・・・ねえ、満さん、薫さん？」

「ほら、私達今日の料理当番だから・・・舞、薫、行くわよ」

「ええ、行きましょう」

咲に聞かれた三人、動揺する舞をフォローするかのようになり、何時もの冷静さで上手く誤魔化した満と薫だったが、

「じゃあ、あたしも手伝うよ!」

「咲、それよりゆりさんとの特訓があるんでしよう?」

「アツ!?!忘れてたあああ!」

咲はそう言うのと、コミュニケーション姿になったフラツピを手に持ち、慌てながらビーチに向かって駆け出して行った・・・

咲とゆりを除いた一同は、別荘に戻って咲の誕生会の準備を始めた。せつな、なぎさ、薫、かれん、うらら、いつき、響、エレン、なお、真琴は買い出しに、ほのか、ひかり、満、こまち、くるみ、ラブ、美希、えりか、奏、れいか、やよいは、料理やケーキ作りを、舞、のぞみ、りん、祈里、つぼみ、アコ、みゆき、あかね、あゆみ、アン王女、それに妖精達は飾り付けを、一同から聞いたブルーも飾り付けを手伝い、皆が咲の為に準備を始めた。そこに、大量の物を持って魔王とピーちゃんが帰って来た。なぎさは二人に話し掛け、

「魔王、ピーちゃん、今まで何所に・・・アツ!?!」

一同は、魔王とピーちゃんが持って来た、水に濡れた大量の布きれを見て思わず目を

点にした。何故ならそれは、昨日魔界のタツコによって奪われた、一同の水着だったのだから……

「咲の誕生会で必要だと思って、ピー助と一緒に海を探し回って、ようやく全部回収したカゲ」

「ギャクス！」

「ピー助も疲れたって言ってるカゲ」

全身びしょ濡れになった魔王とピーちゃんを見て、一同は必死に探し回ってくれた事を実感し、少し感動したものの、なぎさは微妙な表情を浮かべ、

「二人共、捜して来てくれたんだね、ありがとう！でも、咲の誕生会で水着は着ないんだけど……」

「そ、そんな!？」

「プイ!？」

どつと疲れが出たのか、魔王とピーちゃんがその場に倒れ込み、みゆきとアコが慌てて二人を抱き上げた。ラケルは感動の涙を流し、

「折角二人が苦勞して水着を捜して来てくれたのに、水着を着ない何てあんまりケル!」「いや、私達にそう言われても……ねえ?」

涙目になりながら抗議するラケルに、なぎさは困惑しながら一同に聞くと、一同も微

妙な表情で頷いた。尚もラケルは食い下がり、

「プールサイドでやるなら、水着でやってもおかしくないケル!」

「お前は・・・俺達の苦勞を分かってくれるカゲかあ?」

「ハイ! 僕は感動したケル!!」

「お前・・・名前は何て言うカゲ?」

「ラケルです! 僕は、魔王さんを尊敬してるケル」

「お前、見所あるカゲ」

「アン王女・・・あの子、止めなくて良いの?」

「ハア・・・後でキツチリ言っておきますわ」

妙な事で意気投合しだした魔王とラケルに、一同は困惑し、えりかに聞かれたアン王女は、溜息混じりに後でラケルを窘めると語った。ほのかは、困惑顔で魔王とラケルに話し掛け、

「それはそうだけど、一応咲さんの誕生会だから・・・水着も濡れてるし」

「乾かせば良いカゲ」

「手伝うケル」

「あんな気持ちが悪い、タコの魔物に触れられた水着、そのまま着たく無いわよ」

美希はタッコの事を思い出したのか、嫌そうな顔で本音を洩らし、魔王とラケルが悄

気返った。なぎさは、そんな二人を見て少し哀れみ、魔王とピーちゃんの頭を撫でながら、

「でも魔王、ピーちゃん、水着を探し出してきてくれてありがとう！洗濯して乾いたら、明日帰る前にでも、もう一度みんなと、ビーチで泳ぐ時に着させて貰うよ」

「魔王もピーちゃんも、咲の誕生会の準備、一緒に手伝ってくれるかしら？」

「もちろんカゲ」

「ピイイイ」

舞に聞かれた二人は、目を細めながらコクリと頷いた。こうして、咲の誕生会の準備は順調に進んで行った・・・

咲が、ゆりからの課題を懸命にこなしている間にも、日は暮れて辺りが暗くなつて来た。ゆりは、階段の上をチラチラ見て居ると、ようやくなぎさが顔を出し、懐中電灯を大きく振ってゆりに合図を送った。

「咲、お疲れ様。頑張ったわねえ・・・どうやら食事の準備が出来たようだし、みんなの所に戻りましょう」

「ハイ！ありがとうございました。いやあ、お腹ペコペコで・・・アハハハハ」

ゆりと談笑しながら階段を上り終えた咲は、プールサイドに用意された、豪華な食事

やケーキを見て呆気に取られて居ると、ゆりも笑みを浮かべながら一同の輪に加わり、なごさからクラツカーを受け取った。それを合図にしたかのように、

『咲……』

『咲さん……』

『お誕生日、おめでとう!!』

「みんなあ……」

一同からクラツカーの祝福を受け、呆然としていた咲の目から、感動の涙が零れ落ちていった。舞が櫛を飛ばし、

「咲、泣いちや駄目よ、何時もの決めゼリフ！」

舞に櫛を飛ばされた咲は、右腕で涙を拭くと、

「みんなあ、ありがとう！今のあたしは……絶好調なりイイイイ!!」

咲の挨拶と共に、一同から歓声が沸き起り、拍手が咲に浴びせられた。咲は、涙混じりの笑顔を一同に向けて、喜びを表した。

第百十話：それぞれの特訓

完



## 第百十一話：ブルーの大失態

1、パーティー

咲の誕生会が開始された・・・

ブルーサイドに設けられたパーティー会場で、一同は咲の誕生日を祝い、和気藹々と過ごしていた・・・

こまちは咲に近付くと、申し訳無さそうな表情を浮かべ、

「咲さん、ゴメンなさいね。私の考えた、フルーツ羊羹ケーキも食べて貰いたかったんだけど、何故かみんなに止められて・・・」

「エツ!?アハハハハハ」

（みんな、ありがとう！名前聞いただけで、何か危険な感じが・・・）

咲は、こまちの言葉を笑いながら聞き流した。一同が賑やかに語り合っている姿を、ブルーは目を細めながら見つめて居た。不意にミラージュの姿が居た気がして、ハツとしたブルーだったが、それは幻だと分かり、悲しげに視線を落とした。

（ミラージュ、この場に君が居てくれたら・・・）

そんなブルーの表情に気付いたなぎさは、さり気なくブルーに近づくと、

「神様、どうかしました？」

「エッ?! いや、何でもないんだ……」

(ひよつとして、ミラージュさんの事でも……)

なぎさは、少しでもブルーの気を紛らわせようと思うと、

「エエエと、神様は、こういうパーティーみたいなものには、参加されるんですか？」

「ブルースカイ王国の女王に、何度か呼ばれた事はあるけど、僕もメラン同様、あまり賑やかなのは……」

そう言うと、ブルーは押し黙った。せつかくの咲の誕生パーティーを、盛り下げような発言は控えようという配慮だった。なぎさはそんなブルーを見て、ミラージュを自ら封印した事で、自らを戒めて居るのではないかと考えたが、その事に触れては、益々ブルーの心を閉ざしてしまうのでは無いかと考え、別の話題を切り出した。

「メランで思い出したんですけど、神様、メランはずっとあの島で、一人で過ごしてたって言っていましたよね？」

「そうだよ。メランは、エンプレスが眠るあの島を、ずっと一人で守って来たんだ」「寂しく無いんですかねえ？」

「どうだろう?! ……メランは、一万年前から続けて来た事だからねえ」

なぎさは少し目を瞑ると、ほのかと共にメランに会った時を思い出していた。

（メランはあの時、私達の所に遊びに来る事は拒んでたけど、少しの時間なら来てくれな  
いかなあ？）

そう思ったなぎさは、ブルーに相談してみた。ブルーは首を傾げ、

「それは難しいかも知れないねえ：メランは、エンプレスが眠るあの島を、聖地と思っ  
て居るようだし、あの場を離れる事は・・・」

「ウーン・・・じゃあ、水晶の鏡も一緒につて言うのはどうでしょう？」

「フフフ、ブラックは、どうしてもメランと呼んでみたいようだねえ・・・なら僕と一緒に、  
行ってみるだけ行ってみるか？」

「ハイ！その前に、みんなにも事情を説明しなきゃ・・・少し待ってて下さい」

なぎさはブルーに少し待って貰い、ほのかとゆりを呼ぶと、

「ねえ、ちよつと思いついたんだけど、此処にメランと呼んじや駄目かな？」

「メランを！？それは構わないけど、来てくれるかどうか分からないわよ？」

ほのかは、少し考えるように首を傾げ、ゆりは、なぎさとほのかの顔を交互に見つめ  
ながら、

「メランつて、なぎさとほのかが試練を受けたつていう？」

「ウンー！」

「でも、急にどうしたの？」

ゆりに聞かれたなぎさは、少し愁いを帯びた表情でブルーの姿を見つめ、

「ウン・・・何だか神様、ちよつと寂しそうに見えたからさ」

「エッ!」

なぎさに言われて、ほのかとゆりもブルーを見てみると、確かにブルーは少し元気が無いように思われた。

「見知った顔が居れば、神様も少しは気が休まるかなあと思つて・・・」

「そうね、みんなに聞いてみて、良いつて言つてくれれば、私は構わないけど」

「私も依存は無いわ。直に一万年前の伝説の妖精に会えるなら、私も会つてみたいし」

ほのかとゆりもなぎさにOKを出した事で、見る見るなぎさの表情は和らぎ、

「本当!?じゃあ、みんなに聞いてみる」

なぎさは、少し嬉しそうにかれんに近づき、何やらかれんに話し掛けると、頷いたかれんは別荘内に入り、少し経つてワイヤレスマイクを持って来た。かれんは、マイクをなぎさに手渡し、なぎさはマイクのスイッチを入れると、軽くマイクのテストをし、何事かと思つた一同の視線がなぎさに集まつた。

「みんなあ、盛り上がつてる?」

『イエエイ!!』

なぎさが一同にマイクを向けると、一同が笑い混じりに返事を返した。なぎさも自然

に笑みを浮かべ、

「実は、ここにゲストを一人呼びたいんだけど、良いかな？」

「ゲストって誰ですか？」

手を上げたのぞみがなぎさに聞くと、なぎさは待つてましたとばかり、

「私とほのかは、実はプリキュア合宿前に、神様に連れられて、一万年前のプリキュア、キュアエンプレス、キュアマジシャン、キュアプリーステスと共に戦った、伝説の妖精メランの下を訪れ、試練を受けたの」

『エエエエ!?!』

突然のなぎさの告白に、一同は響めいた。なぎさは言葉を続け、

「そのメランを、この場所に呼びたいと思うんだけど、みんな、どうかな？」

なぎさが一同に問い掛けると、一同は近くに居た仲間達と会話しながらも、特に反対意見が出る事も無かった。

「へえ、伝説の妖精かあ・・・会ってみたいね？」

「本当だね・・・どんな妖精だろう？」

のぞみとラブが、顔を見合わせながらメランに会ってみたいと話し、アン王女も目を輝かせながら、

「わたくしに依存ありませんわ。キュアマジシヤンの話を、直接聞いてみたいです

し……」

「あたしも良いよ！賑やかなのは大好きだし」

この誕生会の主役、咲も許可してくれた事で、なぎさはホツと安堵した。えりかは、小さな身体を目一杯伸ばして手を上げると、

「ハイハイ！ねえ、ヒメも呼んじや駄目？ヒメもプリーステスの子孫何でしょう？」

「ヒメって、ブルースカイ王国のヒメルダ姫の事!?別に良いんじゃないかなあ……神様、どうでしょう？」

えりかが、ヒメルダも連れて来たいとなぎさに聞くと、なぎさはブルーに確認してみた。ブルーはニツコリ微笑み、

「ヒメは、君達の事を慕っているからねえ、喜ぶと思うよ」

ブルーからも許可が出て、えりかは目を輝かせると、美希の下に近付き、

「オオオ!?それじゃあ、美希姉え、一緒にヒメを迎えに行くっしゅー！」

「ハア!?何であたしも一緒に？」

「妹分を迎えに行くのに、理由は要らないっしょ」

「いや、あたし、ヒメルダ姫の姉になった覚えは……」

困惑した美希の視線が、一同を見渡し始めると、

(何か嫌な予感が!?)

かれんとれいかは、何か嫌な予感が漂い、思わずテーブルの下に慌ててしゃがみ込んだ。その予感的中し、今度は逃がさないとばかり、かれんとれいかを目で捜した美希だったが、

「ハッ!? またかれんさんとれいかちゃんの姿が消えた?」

困惑顔の美希が、さり気なくかれんとれいかの姿を尚も捜すも、二人の姿は嘗て同様忽然と消えて居た。えりかはずれを切らし、美希の右腕を引っ張ると、

「美希姉え、いいから早く行こうよ!」

えりかに右腕を掴まれ、腕を引っ張られた美希は、深い溜息を付くと、

「ハアアア・・・分かったわよ。せつな、ブルースカイ王国まで頼める?」

困惑しながらも、美希はえりかと共にヒメルダを迎えに行く事を同意し、せつなに頼むと、苦笑を浮かべたせつなは、グレープジュースをテーブルに置き、

「まあ良いわ! 折角のお目出度い席で、断るのも気が引けるし・・・」

「ありがとう、せつな」

美希に礼を言われたせつなは、苦笑を浮かべると、えりかがせつなに近付き、

「じゃあ、せつなさんもあたし達姉妹に・・・」

「遠慮しとくわ!」

せつなは、えりかの話が終わる前にあっさり拒否し、変顔浮かべた美希は、

「あたしも遠慮したいわよ・・・ハア」

美希は思わず溜息を付くも、えりかはマイペースで、早くブルースカイ王国に行こうと二人を急かした。その時、

「ちよつと待った！俺も一緒に行つてやるぜ」

そう言つて、自分も一緒に行く事を立候補したのは、ぐらさんだった。ぐらさんは、ブルースカイ王国出身だった事を、美希、せつな、えりかに伝え、

「まつ、俺が居た方が、すんなり話が伝わりやすいと思うぜ」

「それもそうね・・・じゃあ、お願いするわ」

美希は、ぐらさんの申し出を受諾し、話が纏まった事でブルーが美希達に話し掛け、

「何か聞かれたら、僕の名前を出してくれても構わないよ」

「分かりました！じゃあ、ちよつとブルースカイ王国まで行つて来るわね」

美希が一同に報告し、四人の周囲が赤く発光すると、四人の姿は消え去った・・・

それを見届けたなぎさは、ブルーを促すと、

「神様、私達もそろそろ・・・」

「そうだね。じゃあ、メランを尋ねてみよう」

「ほのか、ゆり、後をよろしく」

「分かったわ」



なぎさは、ほのかとゆりに後を任せて、ブルーと共にメランを迎えに行った。

## 2、プレゼント

ブルースカイ王国・・・

突然やって来た美希、えりか、せつな、そして、ぐらさんから、咲の誕生会に誘われたヒメルダは、大喜びでえりかに抱き付いた。ヒメルダは、薄いブルーのワンピースを着ていて、目をキラキラ輝かせながら、

「本当!? 私も行つて良いのお? プリキュアのパーティーに行ける何て・・・すごすごおおい!」

「やれやれ、おヒメちゃんも相変わらずだぜえ」

「そういうぐらさんも、相変わらずで何よりですわ」

「リボンもな」

久しぶりの再会に、ぐらさんとリボンも、嬉しそうに目を細めて語り合った。ヒメルダは、ポンと手を叩くと、

「そうだ! 折角のパーティーなら、目一杯おしゃれしなきゃ!」

「アツ!? 普段着で十分よ、パーティーって言つても、そんな豪華なものじゃないし」

美希は、慌ててヒメルダにその姿でも良いからと話すも、えりかの目が輝き、

「オオオ!? それならあたしが選んで上げるっしゅ」

「えりかお姉様がぁ!? 喜んでえええ!」

「えりか!」

えりかとヒメルダは、互いにファッションの話題で盛り上がりながら、奥へと消えて行つた。その姿を見た美希とせつなは、思わず頭を抱えて居ると、ブルースカイ女王が近付いて二人に声を掛け、

「まさか、あなた方がプリキュアだとは……以前、ヒメルダが大変お世話になつたそうで、ありがとうございます」

「い、いえ、あたし達は別に……ヒメルダ姫は、えりかに懐いているようですから」

女王自ら頭を下げた事で、美希とせつなは困惑し、ぐらさんとリボンは、そんな二人を見て、思わずクスリと笑い合つた。

一方、メランを迎えに行つたなぎさとブルーだったが、予想通りメランは渋い表情を見せて居た。

「何じゃ、何しに来たかと思えば……そんな下らない用で来たのか?」

「ウン。みんなにメランの事を紹介したくてさぁ……メランも他のプリキュアの事、少しは見てみたいとは思わない?」

「まあ、気にならないと言えば嘘になるが、この島を離れるわけには……」

「じゃあ、水晶の鏡を持って一緒に……」

「何じゃと!?!お前は、水晶の鏡を何だと……」

メランは不機嫌そうにそう言いながら、水晶の鏡を見つめると、水晶の鏡に、目を輝かせたエンプレスの姿が映った気がした。

(忘れておった……エンプレスは、人一倍好奇心が強かった事を)

メランは、やれやれといった表情を浮かべながら溜息を付くと、なぎさとブルーを見つめ、

「よかろう!エンプレスも、今のプリキュア達の姿を見たいと思つて居るようじゃ」

「本当!?!」

なぎさは嬉しそうにメランの両手を握りしめ、ブルーは、そんな二人の様子を、目を細めながら黙つて見つめて居た……

美希、せつな、えりか、ぐらさんが、白いドレスを着たヒメルダトリボンを、なぎさとブルーがメランを連れて来た事で、咲の誕生会は更に盛り上がりを見せた。メランは、隣に居るブルーに話し掛け、

「此処に居る者達、皆プリキュアなのか?」

「まだ目覚めて居ない者も居るけどね」

「ウウウム」

メランは、ゆっくりと一同を見渡し始めた。なぎさとはのか以外の一同も、一万年前の伝説の妖精、メランを直に見られた事で、メランに注目が集まった。不意にメランの視線がアン王女を見た時、メランはハッと息を飲み、

「お前は、キュアマジシャン!?ブルー、これは一体?」

「メラン、彼女はトランプ王国のアン王女、マジシャンの子孫だよ」

「マジシャンの!?成る程、それでか・・・しかし似て居る」

メランは、アン王女をジイと見て、マジシャンと姿をダブらせた。アン王女はその場でメランに一礼し、

「わたくしは、トランプ王国王女、マリィ・アンジュと申します。よろしければ、キュアマジシャンのお話をお聞かせ下さいませんか?」

アン王女がマジシャンの話題を振ると、ヒメルダがアン王女の背後から、恥ずかしそうにメランに声を掛け、

「私も・・・プリーステスの話聞きたいなあ・・・ダメ?」

メランの視線がヒメルダに向けられると、ヒメルダは慌てて隣に居るえりかの背後に隠れた。それを見たブルーは、苦笑を浮かべながら、

「彼女は、ブルースカイ王国の姫で、ヒメルダ・ウインドウ・キュアクイーン・オブ・ザ・ブルースカイって言うんだ」

「何?!!ではあの者は、プリーステスの子孫か?」

再びメランの視線がヒメルダに向けられると、ヒメルダは恐る恐るメランに話し掛け、

「あのお・・・ひよつとして、プリーステスも私にソックリとか?」

アン王女の姿が、マジシャンにそっくりと聞き、ヒメルダは内心ドキドキしながら、メランからの答えを待った。

「いや、全く似て居らん!」

「ガアアアアン!」

メランが首を激しく横に振り、ヒメルダは体勢を崩してこけた。起き上がると少し涙目になり、えりかに頭を撫でられて慰められる。なぎさは苦笑を浮かべながら、再びマイクを握り、

「みんなあ!メランとヒメルダ姫も参加してくれたし、改めて咲の誕生パーティーの続きを始めるよおお!!」

『イエエイ!!』

なぎさの合図と共に、一同が右腕を高々と上げると、楽しそうにヒメルダやりボンも

右腕を上げた。メランは呆気に取られて居たものの、ダビイとシャルルに、小さな妖精用のコップで飲み物を手渡された。メランは、大いなる闇との戦いを終え、エンプレス、マジシャン、プリーステス、ブルーと共に、闇から解放した青空を見上げながら、食事をした日を思い出して居た。

「あの時以来か……このような賑やかな催しは」

「メランにとつてはそうだね……」

メランとブルーは、その時の事を懐かしむかのように、日の暮れた空を見上げた。そこにほのかが近づき、

「メラン、どうぞ。このスプーンを使って、好きな物を遠慮せずに食べて下さい」

ほのかはメランの為に、スプーンに小さく切った海鮮料理を載せると、メランに手渡した。メランはそれを口に含むと、思わず目を見開き、

「う、美味しい!」

「本当?!良かった」

ほのかは嬉しそうに微笑んだ。ブルーは、盛り上がる一同を見続けていると、自然と口元が綻んできた。この世界を救い続けてくれるなぎさ達に、せめてもの感謝の気持ちを表したかった。

「僕は少しこの場を離れるけど、直ぐに戻るよ」

「分かりました」

ほのかに少しこの場を離れる事を伝えたブルーは、姿見鏡を出現させると何処かに消え去った。

メランは、ほのかから渡されたスプーンで食事をしながらも、一同の様子を伺って居た。見た感じ、本当にプリキュアなのかと疑いたくなる者も何人か居て、メランは渋い表情を浮かべていると、なぎさがメランに近づき、

「メラン、どうしたの?」

「本当に、この者達がプリキュアなのか?」

「そうだよ・・・そうだ!」

なぎさは何かを思い付くと、再びマイクを手に取り、

「みんな、メランにまだプリキュアの姿見せてないよねえ? 折角だし、この後はプリキュアに変身してみない?」

なぎさの提案に、一同は隣同士でワイワイ話し合うも、全員がOKを出した。

「アン王女は、キュアエースって言うプリキュア何だけど、訳あって今は変身出来なくて、ヒメルダ姫はプリキュアじゃないんだけど、神様によれば、何時か必ず目覚めるって話だよ」

「フム・・・その者達以外は、皆プリキュアになれるのか?」

「ウン！・・・みんなああ!!」

なぎさの合図と共に、一同が変身アイテムを手に持ち、目映い輝きの中、一同がプリキュアへと姿を変えた。

「光の使者・キュアブラック！」

「光の使者・キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア!!」

「輝く生命、シャイニールミナス！」

「輝く金の花！キュアブルーム!!」

「きらめく銀の翼！キュアイーグレット!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「天空に満ちる月！キュアブライト!!」

「大地に薫る風！キュアウインディ!!」

「ふたりはプリキュア!!」

「大いなる、希望の力！キュアドリーム!!」

「情熱の、赤い炎！キュアルージュ!!」

「弾けるレモンの香り！キュアレモネード!!」

「安らぎの、緑の大地！キュアミント!!」



「知性の青き泉！キュアアクア!!」

「二」希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく5つの心！Yes！プリキュア5!!」

「青いバラは秘密のしるし！ミルキイローズ!!」

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュユ、キュアピーチ!!」

「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュユ、キュアベリー!!」

「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュユ、キュアパイン!!」

「真つ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュユ、キュアパッション!!」

「二」レッツ・プリキュア!!」

「大地に咲く一輪の花・キュアプロツサム!」

「海風に揺れる一輪の花・キュアマリン!」

「陽の光浴びる一輪の花・キュアサンシャイン!」

「月光に冴える一輪の花・キュアムーンライト!!」

「二」ハートキャッチ、プリキュア!!」

「爪弾くは、荒ぶる調べ！キュアメロディ!!」

「爪弾くは、たおやかな調べ！キュアリズム!!」

「爪弾くは、魂の調べ！キュアビート!!」

「爪弾くは、女神の調べ！キュアミューズ!!」

「三」届け！四人の組曲!!スイートプリキュア!!」

「キラキラ輝く、未来の光！キュアハッピー!!」

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

「ピカピカぴかりん！じゃんけん・・・ポン！キュアピース!!」

「勇気リンリン、直球勝負！キュアマーチ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心！キュアビューティ!!」

「思いよ、届け！キュアエコー!!」

「三」6つの光が導く未来！輝け！スマイルプリキュア!!」

「勇気の刃！キュアソード!!」

変身を終えた一同が、華麗にポーズを決めた。それを見て居た妖精陣とヒメルダは目を輝かせ、

『凄おおい』

「ピー助、今考えると、俺達、よくこんな人数と戦ったカゲなあ・・・」

「ピギアア」

「そうカゲなあ・・・もうこいつらと戦うのは遠慮するカゲ」

妖精達から大歓声が沸き、嘗て戦った事がある魔王とピーちゃんは、プリキュアの敵だった当時を思い出しながら、改めてプリキュアの凄さを目の辺りにした気がしてい

た。

「すばい！おおい！」

ヒメルダは、目を大きく開いて輝かせながら、一同のプリキュアになつた姿を見て居た。以前ヒメルダが初めて会つた時は、魔界のファレオが現われた事で、ヒメルダは、一同がプリキュアになる前に避難していた。今回、初めて目の前でプリキュア達の変身を直に見て、ヒメルダの興奮は凄かつた。

「ウウウウウム。これ程の人数が、本当にプリキュアだつたとは……」

メランは思わず唸つた……

ブラックとホワイトを筆頭に、総勢32人のプリキュアの勇姿に、思わず鳥肌が立つた。メランは、テーブルに飾られた水晶の鏡を見ると、後輩達の姿を喜んで居るかのよ  
うに、水晶の鏡も光輝いた気がした。ドリームは、一歩前に出てメランに話し掛けると、  
「メランは、ブラックとホワイトに試練を与えたつて聞いたけど、どんな事をしたの？」  
「ん!? ああ、此処にある水晶の鏡を、託すに値する實力があるかどうか、この私自ら二人  
の相手をした」

「エエエ!? そんな姿なのにな?」

ミューズは、小さいお年寄のようなメランの姿で、ブラックとホワイトと戦つたのか  
と思つたのか、思わず不思議そうに首を傾げた。メランはそんなミューズの疑問に気付

いたのか、ミューズの容姿を見て口元に笑みを浮かべ、

「お前に言われるのは些か心外じゃが……これは仮の姿じゃ」

『仮の姿?!』

「そう、私の本当の姿は……此処で待っているといい」

メランはそう言うと、宙に浮かびながらビーチの方へと移動して行つた。アクアは少し困惑した表情を浮かべ、

「メラン、どうしたのかしら?」

「直ぐに分かるよ」

そんな一同の不安気な表情を見て、ブラックは、笑み混じりの穏やかな表情を浮かべた。ビーチに付いたメランは、目を閉じて精神を集中させると、

「ウオオオオオオオ!」

雄叫びと共に、メランの容姿がどんどん巨大化し、巨大な龍に似た姿になって、一同は思わず驚愕した。マリンは変顔浮かべながらメランを指差し、

「な、何じゃありや〜?」

ヒメルダは思わず腰を抜かして、少し怯えた表情を浮かべると、

「りゅ、龍になっちゃった!?!」

サンシャインも、ソードも呆然としながら、

「ま、まさか、あんな姿になる何て・・・」

「あれが、メランの本当の姿なの？」

ムーンライトは、慌ててブラックとホワイトに話し掛けると、

「ブラック、ホワイト、あなた達、あの姿のメランと戦ったって事？」

「ウン」

『エエエ！』

再び驚愕する一同だったが、ピーチはギュツと拳を握ると、息を大きく吸い込み、

「メラン！あなたにお願いがあるの！！」

「何だ!?!」

「私達、この島に来てプリキュア合宿をしてるんだけど、特訓の成果を、あなたとの手合  
わせで試して見たいんだけど・・・」

「「「イヤイヤイヤ」」」

ピーチの提案に、ビビリ顔のプロツサム、マリン、ハツピー、ピースが、同時に右手  
を振って同じようなジェスチャーをした。ムーンライトは口元に笑みを浮かべると、

「それは名案ね」

「「「何でえええ!?!」」」

咲の誕生会から、何故か特訓の披露を行う雰囲気になり、プロツサム、マリン、ハツ

ピー、ピースが、同じような表情で変顔を浮かべた。メランは、ジロリとプリキュア達を一人づつ睨み付け、

「特訓の成果か・・・フッフ、良い心掛けた。気に入ったぞ！だが、試してやりたいのは山々だが、手加減を知らぬ、どこぞの二人組との戦いで受けたダメージが、まだ完全には癒えておらんのでなあ・・・」

メランはそう言うと、視線をブラックとホワイトに向けた。二人はドキリとし、同じような表情を浮かべると、

「ゴメンなさい！」

ブラックとホワイトは、トホホ顔を浮かべながらメランに謝り、メランは愉快そうに笑い声を上げた。ピーチは残念そうな表情で、

「そうですか・・・」

「ピーチ、ガツカリしないで。明日の最終日に、特訓の成果を、私とブラック、ホワイトで見上げるわ」

「ハイ！お願いします!!」

ピーチは、ムーンライトに頭を下げ、メランも再び老翁の姿に戻り、一同の下へと戻って来た。一同もプリキュアの姿を解除し、再びパーティーを続けて居ると、そこに再び姿見鏡と共に、ブルーが現われた。ブルーは、大きな樽をテーブルの脇に置くと、

「みんな、これは僕から、君達への感謝の気持ちを込めた贈り物だよ、好きだけ飲んで構わない」

ブルーが樽の蓋を開けると、樽の中から甘い良い匂いが漂って来た。一同は、匂いに釣られるように樽の側にやって来ると、飲み物を飲んで居たグラスへと注ぎ始めた。飲み物は、グレープジュースに似て居るようで、紫がかっていた。先ずこのパーティーの主役である咲が、ゴクゴク一気に飲み干すと、

「な、何これ!?メチャメチャ美味しいよ!」

『本当!?!』

咲の言葉を合図にしたかのように、一同もゴクゴク飲み出すと、確かに甘くて美味しいジュースのようで、ゴクゴク飲み出した。えりかは幸せそうな表情で、

「プハア!美味いっしゅ!!」

「本当!何杯でも飲めちゃうよ」

ヒメルダも上機嫌で、樽の中の飲み物を何杯も飲んだ。他の一同も、上機嫌で樽の中の飲み物を美味しそうに味わい、楽しそうに会話が弾んでいた。

(みんなが喜んでくれて良かった)

ブルーは、そんな一同の様子を見てニコニコして居たが、メランが妖精用のコップで一口飲むと、

「ン!?この味、何処かで……」

「気付いたかい?これは一万年前、僕とメラン、エンプレス達と一緒に飲んだ、あの時と同じ飲み物さ」

「ほう、あの時の……」

メランは、当時の事を思い出したのか、懐かしそうにしていたが、不意に何かを思い出したのか、ハツとした表情を浮かべながらブルーを見ると、

「ブルー、お前ひよつとして、あの時の事を忘れたのか?」

「エツ!?どういう事だい?」

ブルーは、メランが発した意味深な言葉に動揺していると、メランは渋い表情を浮かべながら、

「お前さんが持って来た飲み物、あれは果実酒じゃったろう?」

「そうだけど……」

「そんな物を小娘共に与えたら……」

メランの言葉が終わる前に、突然アコが倒れた。真つ先に潰れたのはアコ、まだ小学生のアコには、酔いが早く回ったのか、

「にやんだか……とつても……眠たくてえ……」

アコはそう言うのと、顔を赤くしながらスヤスヤ眠りに付いた。それを合図にしたかの



ように、一同の様子がどンドンおかしくなっちゃった……

「何アコ、眠いの？ 薫お姉さんが添い寝してあげるわ！」

真っ先に壊れたのは薫、薫はアコの側で横になると、自分の右腕を枕代わりにして、アコを寝かせた。ひかりも蹠踉めいて椅子に腰掛けると、

「私も……何だか眠く……て……」

「ひかりさんも？ 私も……」

「お二人も!? 実は、私も何です……けど……」

「私も……もう……ダメエエエ」

「私も……ダメミルウ」

ひかり、舞、れいか、真琴、くるみは途中でミルクの姿に戻った。そのまま四人は、頭を合わせながら眠りに付いた。ひかりの膝の上で、ミルクも気持ち良さそうに眠りに付いた。一同の寝顔は、まるで天使のようだった……

ほのかは、こまち、あゆみに対して、何かの講義を行っているのか、饒舌に話し出し、ちなみに、ダイエットに効果があるのは、バナナは有名だけど、グレープフルーツやりんご何かも良いのよ」

「そう言えば、私も何かの本で読んだ気がするわ。キウイはお肌に良いんですって」

「ウン！ キウイは、ビタミンCやクエン酸が豊富だから」

「へえ、お二人とも流石に詳しいですねえ……じゃあ、もっと神様から貰った、美味しい果物ジュース飲んじやいましょう！」

「そうね！」

あゆみの言葉に同意し、ほのか、こまち、あゆみは、再び樽からコップに注いで、美味しそうにゴクゴク飲み干した。三人の顔は益々赤くなり、目がトロロンとしていった。

「アアア、服何か……邪魔あああ！」

「エ、エレン、ちよつとおおお!!？」

酔ったエレンは、妖精時代の感覚が甦ったのか、着ていた服を脱ごうとしだし、美希が慌ててエレンを羽交い締めにして止めた。

「良いぞー！もつと脱ぐカゲエエ」

「魔王、あつち行つてなさいよーラブ！ブツキー！せつな！あなた達も……」

魔王も酔っ払ったのか、ご機嫌でエレンを囓り立て、目を吊り上げた美希に怒られた。美希は、ラブ、祈里、せつなにも手伝つて貰おうと、ラブの様子を伺うと、

「ウン、ウン、そうだよねえ……分かる！分かるよお！のぞみちゃん!!」

「分かってくれる、ラブちゃん？」

「私も、良く分かります」

「ウンウン！私も、何だか良く分からないけど悲しい」

「ありがとう！ラブちゃん、つぼみちゃん、響ちゃん」

「「ウエエエーン」」

(な、何なの!?)

泣き上戸だったのはラブ、のぞみ、つぼみ、響、のぞみのココとの恋愛話を聞き、四人は互いに抱き合いながらオイオイ泣いた。呆然とした美希は、祈里の様子を伺うと、

「アハハハ！何だか・・・凄く気持ちイイのお」

祈里の言葉に、なぎさ、うらら、いつきもウンウン頷いて同意し、

「だよねえ？」

「こんなに愉快なのは、久しぶりな気がします」

「そうだよねえ、僕もこんな気分は何時以来だろう？」

そう言うのと、四人は美味しそうに、コップに注がれた果実酒を一気に飲み干した。

「何かさあ、踊りたいって感じだよねえ？」

えりかがヒメルダに聞くと、ヒメルダは顔を真っ赤にしながらハシヤギ、

「刻が見えるって感じだよおお」

「アハハハハ、何だそりゃ？」

「ヒメちゃん、意味不明」

「あんだ、それじゃ酔ってるみたいだよ？」

ヒメルダは、酔いがかかなり回ってきたのか、言動がおかしくなるも、咲、なお、りんが、肩を組みながらヒメルダにツツコミを入れた。みゆきはご機嫌で鼻歌を歌い出し、「フフフン、これぞハッピーって感じだよねえ?」

「ウンウン!私、踊るのって好きじゃ無いけど、今は踊りたいぐらい!」

やよいはそう言うと、みゆきの手を掴んで、二人でスキップしながらハシャいだ。

奏もご機嫌で、果実酒と知らずに飲み続け、

「ハア・・・本当に美味しいジューズよねえ・・・お代わりいい!」

「ハイハイ!お待ちやでえ!!」

あかねが奏のコップに再び注ぎ、今度はあかねと奏が肩を抱き合いながら、楽しげに歌い出した。祈里は、一同のそんな姿を見て笑い出し、

「アハハハハ!ねえねえ、みんなで踊っちゃおうかあ?」

『イエエエ』

(ブ、ブッキーまで!?)

祈里はハイテンションになり、楽しくて仕方がないといった表情で、なぎさ、えりか、ヒメルダ、咲、りん、うらら、いつき、奏、みゆき、あかね、やよい、なおと共に、楽しそうに踊り出し、美希は再び呆然とした。

「せ、せつなは大丈夫よね?」

せつなを目で捜した美希は、開いた口が塞がらないとばかり、口を開けたまま呆然とした。せつなは、満、かれん、ゆりと共に、目が据わって居て、その表情は美希にラビリンズ時代のイースを連想させた。四人は絡み酒のようで、四人に絡まれた妖精達はオドオドしていた。

「誰が年増なのかしら？」

そうラケルに切り出したのはかれん、ラケルは首をブルブル横に振り、

「言つてないケル！ れいかと比べたら、お年……」

「ハア!？」

かれんの鋭い眼光を受け、ラケルが死んだ振りをする。ゆりは、人間姿のココとナツツに絡み、

「二人共、のぞみとこまちの事をどう思つて居るのかしら？」

「いや、その……な、何か君達の雰囲気、変じゃないかい？」

「ココも気付いたか？ 神様からの差し入れを飲んでから……」

ゆりはテーブルを思いつきり叩くと、驚いたココとナツツが妖精姿に戻ってビクビクする。

「いい事、場を和ませるのに最適なのは……落語よ！ 落語を覚えなさい!!」

「落語!? ゆり、何言つて……」

「二人は落語の特訓よ！」

「何でココオオオ!?」

何故かゆりに凄まれたココとナッツは、大いに動揺した。美希は困惑し、慌ててせつなに話し掛けると、

「ちよつとせつな！」

「せつな!? 私はイース! ラビリンスの・・・ン!? せつなでも良かったっけ?」

「せつな、何言ってるの?」

せつな自体混乱しているようで、美希は益々困惑するも、せつなは、満と共にゆっくり美希に近付き、

「それより・・・私を呼びつける何て、良い度胸ね?」

「フッフ、私達、妖精相手より、あなたを虐める方が好きかも・・・」

「ハア!? せつな、満、何かおかしいわよ?」

エレンが静まり、そのまま寝息を立てた事で、美希は思わずせつなと満から後退りするも、両手を前に付きだした二人は、

「「可愛がつてあげる!」」

「ちよつとおおおお!?」

動揺する美希に、二人は果実酒が入ったコップを差しだし、

「じゃあ、飲んだら許してあげる！」

「一気よ、一気」

「全く・・・飲めば良いんでしよう」

そう言うと、美希は一気に飲み干すと、美希の酔いが一気に回り、せつなと満の両肩に腕を回して絡み始めた。

一同の突然の豹変振りに、ブルーは困惑しながらメランに話し掛け、

「メ、メラン・・・みんなは一体どうしたんだろう？」

「ブルー・・・一万年前と同じじゃ、お前が持って来た果実酒は、甘くて飲みやすく・・・嘗てエンプレス達も、コ奴らと同じように酔った事があつたらう？」

「・・・そう言えば」

「コ奴らは、果実酒が飲みやすいが故に、加減が分からず飲み過ぎてしまったようじゃ」「そ、そんな!？」

動揺するブルーに、アン王女が近付き、

「まあ、あれは果実酒だったんですのお？」

「ウン・・・まさか、こんな事になる何て思っても見なかったんだ」

アン王女の言葉に、困惑顔のブルーがコクリと頷いた。咲の誕生会で盛り上がる一同に、今までのお札を兼ねたプレゼントを与えたい、そう思って差し入れたブルーだった。

メランは、アン王女は平然としているように見えた事で、

「お前は大丈夫なのか？伊達に二十歳を優に超えている訳では無いな」

「まああ・・・わたくし、永遠の十七歳ですわああ！」

（どうやら、アン王女も酔っているようだ・・・）

（コ奴・・・流石はキュアマジシャンの子孫だわい、全く同じ事を言っている）

ブルーとメランは、実際にはアン王女もかなり酔っている事に気付いた。メランは呆れながら、完全に酔いが回って、気持ち良さそうにしている一同の寝姿を見て、

「全く、無邪気に寝おって・・・だが、このままにしておけんだろう・・・おい、お前達手を貸せ！コ奴らを室内に移動させる」

メランは、さほど酔っていないココとナッツ、シロップとピーちゃんに協力を仰ぎ、一同を室内へと移動させた。

ブルーは、こんな状態を引き起こしてしまった事を、深く後悔した・・・

翌日・・・

プリキュア合宿三日目は、全員二日酔いの為、完全休養日となった・・・

これにより、プリキュア合宿は急遽一日延長と決った・・・

第百十一話：ブルーの大失態



完

## 第一百十二話：プリキュア合宿終了

1、二日酔いだよ、全員休養

プリキュア合宿三日目・・・

何時もなら早起きする筈のメンバーもまだ眠って居るのか、別荘内は静まり返っていた。部屋割り通りに、なぎさと真琴、ほのかと舞、ひかりとくるみ、咲、のぞみ、なおの三人、満と奏、薫とアコ、りんと響、うららといつき、ラブとあゆみ、美希とえりか、祈里とエレン、せつなどあかね、つぼみとみゆき、ゆりとやよい、れいかとアン王女が、美希とえりかからの部屋にはヒメルダも寝ていて、皆熟睡し、誰一人起きる気配を見せなかった・・・

本来は、この日がプリキュア合宿最終日になる筈だったのだが・・・

フラツピは、眠い目を擦りながら、コミュニケーション姿から妖精姿へと変化した。少しよるめいたフラツピは、自分は咲、のぞみ、なおの部屋で寝て居る事に気付き、大あくびをした。時計を見ればまだ朝6時、フラツピは、もうちよつと寝ていようとした時、ある事に気付いた。

「アレ!? 咲は、昨日家に帰るって言ってたような……」

フラツピが腕組みしながら考え込むと、徐々に記憶が整理され、フラツピは大慌てで咲に声を掛けた。

「咲、咲、起きるラピ! 咲いい!!」

「ウ……ン……何よ、フラツピ……」

眠そうに起き上がった咲は、昨夜の誕生会で着ていた服装のまま寝ていたらしかった。起きてみると、頭がガンガン痛く、吐き気すらしてきた。咲は再びベッドに倒れ込むと、

「もうちよつと寝かせてえ……何か気持ち悪いし」

「咲! 合宿はどうするラピ?」

「合宿?! だから今してるじゃない?」

「こつちの合宿じゃないラピ! ソフトボールの合宿の事ラピ!!」

「ソフトボールの? ……アアアアア!」

咲は慌ててベッドから飛び起きるも、頭はクラクラし、吐き気がしていた。咲は、取り敢えず顔を洗おうと洗面所に向かい、口を濯ぎ、顔を洗うも、まだ体調は最悪だった。

「どうしよう!?!」

咲は困惑しながらも、二日酔いに耐えながら、荷物の整理を始めた。のぞみとなおは

熟睡していて、当分起きる気配を見せなかった。咲はメモを書き、ソフトボールの合宿があるから、悪いけど先に帰る事をメモに残した。

「フラツピ、一緒に来て！」

頷いたフラツピがコミュニケーション姿になり、咲はコミュニケーションとカバンを手に持ち、せつなに家までアカルンで送って貰おうと、せつなとあかねの部屋へと向かった。せつなとあかねの部屋も、他の部屋同様静まりかえり、二人もまだ寝ているだろう事も想像出来たが、咲は、二人に悪いと思いつながらにもドアを叩いた。

「せつな！せつな起きて！！せつなああ！！せつなちやああん！！」

咲が何度もドアを叩くと、ようやく気付いたのか、ボサボサ髪のせつなは、機嫌が悪そうな表情でベッドから上半身を起こし、ドアの方を見たものの、咲同様二日酔いの為、頭が朦朧としていた。せつなは二度三度瞬きするも、少しボーとした後、

「……寝る」

せつなはそう言い残し、そのままベッドに倒れ込んで再び熟睡を始めた。一向にせつなが起きてくる様子も無く、途方にくれた咲に背後から声が掛かった。

「ブルーム、おはよう！昨日は済まなかったね」

「エッ!?神様、おはようございます」

咲に声を掛けたのはブルーだった・・・

最早神頼みとばかり、咲はブルーに頼み事を始めた。

「神様、あたし本当は、ソフトボールの合宿があつて、昨日帰る筈だったんですけど、何だか覚えて無いんだけど、パーティーの後、そのまま寝ちやつたみたいで困つてるんです」

「そうか、君には本当に済まない事をしたね・・・ブルーム、この丸薬を飲んでみると良いよ、少しは気分が楽になる」

ブルーはそう言うのと、咲に自ら調合した丸薬を与えた。咲は言われるまま口に含むと、少し苦みがあり、思わず咲は変顔を浮かべた。だが少しすると、ブルーの言うように、頭痛や吐き気が治まった気がして来た。

「ワアア、何だか少し楽になつて来た気がする」

「そう、それは良かった・・・じゃあ、僕が君の家まで送ろう」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ、それぐらいの償いはさせて貰うよ」

「償い!? まっいつかあ! 神様、お願いします」

頷いたブルーが、姿見鏡を出現させた時、調子が悪そうな舞が起きて来た。舞は、目を擦りながらも、咲を見るとホッと安堵した表情を浮かべ、

「咲、良かった! ちゃんと起きられたのね?」

「エエエと、フラツピが起こしてくれなかったら、完全に終わってたけどね・・・舞、あたし先に帰るけど、他のみんなによるしく言っけて置いてくれるかなあ？」

「分かったわ！気を付けてね、咲」

「ウン！舞もね・・・じゃあ!!」

「イーグレット、すまなかつたね！非礼は後ほど詫びさせてもらうよ」  
「エツ!!」

咲は舞に軽く右手を挙げると、ブルーと共に帰って行った・・・

「非礼って、何の事だろう？」

舞は不思議そうに首を傾げるも、咲がちゃんと起きていた事にホッと安堵した。舞は、咲の事が気掛かりで、体調が悪いのを我慢して、咲を起しに向かう途中で咲と出会えた。

「良かった、咲が起きてて・・・まだ気持ち悪いから、もうちよつと寝てよう」

舞は、少しよろめきながら、再びほのかと相部屋の、自分の部屋へと戻って行った：

それから四時間後・・・

午前10時頃になって、ようやく何人かがリビングに起きて来た。

起きて来たのは、ほのか、ゆり、ひかり、舞、かれん、こまち、れいか、あゆみ、真

琴、アン王女の10人だったが、一同は調子悪そうに、リビングに腰掛けグッタリし、ほのかはゆりに話し掛けると、

「ねえ、ゆり・・・今日の特訓止めにしない？」

「私もそうしようと思つて考えてたわ。起きてるのがやつとで、特訓どころじゃないもの」

アン王女は、二人の会話を聞いて、ホッと安堵した表情を浮かべると、

「そうして貰えると助かりますわ。恥ずかしながら、わたくしもまだ二日酔いで・・・」  
『二日酔い!?!』

アン王女が発した二日酔いという言葉に、一同は思わず驚きの声を上げると、アン王女は首を傾げたものの、直ぐにみんなが知らなかった事を悟り、

「あら!?!皆さんはご存じ無かつたんですの? 昨日神様から頂いたお飲み物は、果実酒だったそうですわ」

『果実酒!?!』

再びアン王女から真実を聞き、一同は呆然とした。ほのかは深い溜息を付き、

「ハアアア・・・どうりで、おかしいと思つたわ」

ゆりもほのかの言葉に同意し、コクリと頷くと、

「ええ、途中からの記憶が無かつたし、ココとナツツは、私の顔を見ると大慌てで逃げ出

したし、変だとは思ったわ」

「それで神様は、咲に悪い事をしたと思って送ってくれたのね」

舞も、この頭痛や吐き気が二日酔いからくると分かり、困惑気味にそう話した。こうして一同は、全員二日酔いになり、完全休養日として特訓は中止し、各自で自由に過ごす完全休養日となった・・・

お昼になるとようやく全員集まったものの、皆本調子にはほど遠く、グツタリしていた。そこに姿見鏡が姿を現わすと、ブルーが戻って来た。舞は、咲の事を真っ先にブルーに問い、

「神様、咲は間に合ったんでしょっか？」

「ウン、ギリギリだったけど、何とか間に合ったよ。ブルームは、みんなによろしくって言うていたよ」

「そうですか・・・良かった」

咲が無事に合宿に間に合ったと聞き、舞はホッと安堵した。ブルーは一同を見渡すと、立ったまま一同に頭を下げ、

「みんな、すまなかつたね。僕の甘い考えが、君達を・・・」

「神様、気にしないで下さい。調子に乗って飲み過ぎた私達も悪い・・・」



なぎさはブルーをフォローするも、明らかに体調が悪いのはブルーにも分かった。

「みんな、ブルームにも渡したけど、これを飲んで見て欲しい、少しは症状が良くなるから」

一同は、戻つて来たブルーから、お詫びと共に貰った、酔い覚ましに効く丸薬を貰つて飲み、ようやく二日酔いが治まった。

「それじゃあ、僕はこれで……ヒメ、夜に迎えに来るから、それまでみんなと楽しんでおいで」

「ウン！ありがとうございます、神様」

ヒメルダはブルーに手を振ると、ブルーは一同に微笑みながら、姿見鏡の中へと去つて行つた。

それを見届けたゆりは、一同に話し掛けると、

「症状は治まったけれど、今日はこのまま休養日として、帰る日を一日延ばそうかと考えて居るんだけど、みんなの都合はどう？」

ゆりに聞かれた一同、真つ先にのぞみが言葉を発し、

「私は別に良いけど……かれんさん、もう一日別荘を借りちやつても、大丈夫何ですか？」

「ええ、気にしないで！爺やに連絡を入れれば済む事だから」

かれんは、穏やかな表情で気にしないで良いと一同に語った。なぎさは一同を見渡し、

「私達も、家にさえ連絡入れておけば大丈夫じゃないかな？用事ある人居る？」

なぎさはそう言うと、一同に問い掛けた。一同は、顔を見合わせながら、

『別に無いです』

そう告げたものの、やよいだけはモジモジし、

「あのう・・・私、一回家に帰っても良いですか？今日休養日になるなら、済ませておきたい事があるんで・・・」

「別に良いわよ、でも、勉強だったら、私達で見て上げるけど？」

「いや、あのお・・・実は私、この前漫画を応募してみたんです。そうしたら、編集さんから指摘されたページを、描き直して持って来て欲しいと言われてて、その締め切りがそろそろ近いんで、ネームだけでも済ませておきたいなあって思って・・・」

やよいの突然の告白に一同はざわめくも、直ぐに拍手が沸き起こった。漫画に興味なさそうな、ゆりやかれんも笑顔を見せて、やよいを称えてくれて、やよいは恥ずかしそうにモジモジしていた。みゆき達にも内緒にしていたようで、

「やよいちゃん、凄い！」

「何時の間にそんなの描いてたんや？」

「あたし達、全然気付かなかったよ」

「本当ですねぇ・・・」

「驚いちゃった」

『手伝える事があつたら、言つてね!』

みゆき、あかね、なお、れいか、あゆみも、笑顔を浮かべながら、何時でも手伝うとやよいに伝えた。やよいは目をウルウルさせながら、

「みんなを驚かせようと思つて・・・でも、ありがとうーじゃあ、今から構想するから、みんなの意見も聞かせて?」

『喜んで!』

やよいは嬉しそうに、なぎさ達一同と漫画のネームを考えた・・・

## 2、肝試し

やよいのネームも大方出来上がると、急にこまちが真顔になり、

「ねえ、みんな・・・咲さんは帰ってしまったけど、折角の休養日だし、みんなで何かしてみない?」

「それは構わないけど・・・具体的には何をするの?」

かれんは、こまちの提案に、一抹の不安を覚えて問い掛けると、

「私は、肝試しが良いと思うの！ちようどお誂（あつら）え向きに、森も近くにあるし……」

こまちが、声のトーンを落として告げた時、外で雷が鳴り始めた。思わずシーンと静まりかえった室内だったが、見る見る怖がりトリオの、りん、エレン、なおの顔色が悪くなり、更にはなぎさ、のぞみ、うらら、かれん、くるみ、ラブ、美希、つぼみ、えりか、あゆみ、真琴、アン王女の顔色も怪しくなった。そんな中、急にみゆきが騒ぎだし、「反対、反対、反対、絶対反対！」

「あら、どうして!?!」

みゆきが頬を膨らませながら、こまちに異を唱え、こまちがみゆきに問うと、みゆきは今にも泣きそうな表情で、

「だって怖いもん！オバケさん出そうだもん!!」

「そこが面白いと思うんだけど？」

こまちは不思議そうに首を傾げるも、恐がり軍団が同時に叫び、

『面白くない!!』

「みゆきさん、妖怪は平気なのに、オバケは苦手なのですか？」

れいかに聞かれたみゆきは、目をウルウルさせながら、

「だってえ、妖怪さんは良い人だもん、お婆ちゃんが言ってたもん」

「妖怪とオバケって……同じようなもんちゃうの？」

あかねは、首を傾げながらみゆきに尋ねると、みゆきは激しく首を左右に振り、

「違うもん！全然違うもん！妖怪さんは優しいけど、オバケさんは意地悪するもん!!」

みゆきは、涙目になりながら、妖怪とオバケの違いを熱く語ったものの、他の一同には、妖怪とオバケの違いが理解出来なかった。こまちは窓の外を見ると、残念そうに溜息を付き、

「そう・・・じゃあ、森の中の肝試しは諦めて、室内でしましょう!」

『何でそうなるの?』

恐がり軍団が異を唱えるも、祈里、響、奏、やよいは、嬉しそうにこまちに話し掛け、  
「こまちさん、私手伝います」

「面白そうだから、私と奏も手伝います」

「そうね、加音町のお祭りを思い出すわねえ」

「ちよつとワクワクしてくるかも?」

こまちの提案に同意した祈里、響、奏、やよいが手伝う事に同意し、恐がり軍団の抗議を無視し、段取りを決め始めた。かれんは首を左右に振り、

「ああなつたこまちは・・・止められないわ!」

かれんの言葉を聞き、恐がりトリオは見る見る青ざめていった。なぎさは、引き攣つた表情でこまちに語り掛け、

「ねえねえ、ここは間を取って、怖い話ぐらいにしとかない？」

「怖い話は前にもしてるし、ここは肝試しにした方が良さそうですね」

「あつ、そうですか……」

こまちに却下され、なぎさはスゴスゴ怖がり軍団に戻った。りんは不思議そうになぎさに話し掛け、

「なぎささん、怖い話で散々あたしら怖がらせたのに、肝試しは嫌い何ですか？」

「なぎさは……オバケとか苦手だから」

苦笑したほのかが、真実を怖がり軍団に話すと、怖がり軍団は驚きの声を発し、

『エエエ!』

「いやあ、驚かせるのは好き何だけど、驚かされるのは苦手だよねえ……アハハハ」  
『質悪い!』

なぎさが誤魔化し笑いを浮かべると、怖がり軍団からなぎさに対して総ツツコミが入った。

だが、この時の少女達は知らなかった……

本当の恐怖が近付いて居た事に……

3、ほくら、ホラーだよ

ブルーは、メランの下に訪れ、昨夜の事を詫びて居た・・・

酔つ払つて熟睡した一同を、メランは巨大化して背に乗せ、それぞれの部屋の窓から、ブルー、ココ、ナツツ、シロップ、ピーちゃん、室内のベッドに移動させて寝かせて居た。

「メラン、君には本当に世話になったねえ」

「フン、それより、小娘共はもう大丈夫なのか？」

「ウン、お陰様で、何とか酔いは治まったようだよ」

「まっ、何だかんだで私も楽しかったさ・・・エンプレスも、大勢の後継者達を見られた事で、嬉しがって居た事だろう」

「そう言つて貰えると、僕も助かるよ」

ブルーが口元に笑みを瞬間、なぎさ達が居る島に、一瞬強大な気配を感じた気がして、ブルーはハツとした。

「どうした、ブルー？」

「いや、プリキュア達が合宿している島に、今強大な力を感じた気がしたんだけど・・・」

「今はせんのか？」

「ウン！何事も無ければ良いんだけど・・・」

「お前の気のせいかも知れんし大丈夫じゃろう？仮に何者かが現われたとしても、酔つ

てさえなければ、あ奴らが早々遅れを取る事は無い」

「そうだね・・・」

ブルーはメランの言葉に同意し、再び会話を続けた・・・

午後5時を過ぎ、別荘がある島に雷と共に激しい雨も降り始めた。ほのかとゆりは、こまちに協力する為、ひかり、舞、満、薫、せつな、いつき、アコ、あかね、ヒメルダ、妖精達と共に、和気藹々と肝試しの準備をする、こまち達の手伝いをしていた。その一方、順番待ちをしていた怖がり軍団は、皆引き攣った表情で落ち着きが無かった。外から聞こえる激しい雨と雷の音、そのせいで外は薄暗く、怖さも倍増していた。

「な、何か待ってるだけって嫌よねえ？」

「確か、開始は18時って言ってたよね？」

沈黙に耐えられないとばかり、かれんが引き攣りながら一同に話し掛けると、なぎさぎが開始時刻を確認するように一同に話した。りんは不服そうに、

「何であたし達まで、肝試し何てしなきゃならないの？」

「ハア・・・こんな事になるなら、あたしも咲さんみたいに帰れば良かった・・・」

りんの言葉に同意するかのようになり、なおは帰れば良かったと後悔していた。エレンに至っては、極度の緊張でみゆきやあゆみを連れて、トイレに何度も行っていた。年長者



のなぎさは、一同を励ますように、

「まあまあ、みんな居るから大丈夫だよ」

「でも……此処に居るメンバー、みんなオバケ苦手だよ」

『……………』

えりかの何気ない一言で、再び室内が沈黙した時、それは始まった……

激しい雷と共に、突然別荘の電気が一齐に消え、一同や部屋で寛いでいた妖精達が悲鳴を上げた。

「な、何!? これもこまち達の仕業?」

かれんは、電気が消えた事で焦りだし、ラブは、今の雷が原因かも知れないと思うと、  
「それとも、今の雷で停電したとか?」

「その可能性もあるよね……取り敢えず懐中電灯はあるし、ブレイカーを見に行ってみる?」

なぎさが一同に聞くと、りんはかれんを見つめ、

「じゃあ、かれんさん……お願いします」

「エツ!? わ、私一人で? な、何人か一緒に来てくれても良いでしょう?」

「じゃあ、私行きます!」

真つ先へのぞみが一緒に行くと立候補してくれて、かれんはホツと安堵した。更にアン王女も右手を挙げ、

「わ、分かりました。私とソードもお供致しますわ」

「わ、私もですか？」

真琴は自分を指さすと、アン王女はコクリと頷き、真琴は渋々ながらかれん、のぞみ、アン王女と共に、地下にあるブリーダーを調べに向かった。途中、トイレでパニクるエレン、みゆき、あゆみと合流し、七人は地下へと向かおうとした。二階に向かう階段と、地下に降りる階段が見えて来た時、再び外で激しい雷が鳴り、一同に緊張が走った。更に稲光が、階段の窓から室内を照らした瞬間、一同は恐怖でその場から動けなくなった。「い、今……階段の前に誰か居ませんでした？」

真琴は怯えながら、確認するように一同に問い掛けると、一同もコクリと頷き、あゆみは生唾を飲み込むと、

「な、何か居たよね？」

「もう、こまちいいい！悪い冗談は止めてええ!!」

かれんが叫んだ瞬間、再び稲光が室内を照らした。七人の顔は、照らされた場所に立つ何かを見て、青ざめながら目を見開き、

『キヤアアアアアア』

七人の悲鳴が別荘中に響き渡った・・・

悲鳴が沸き起った時、くるみは恐怖でミルクの姿に戻り、美希にしがみついた。美希はミルクの頭を撫でながら、

「な、何!?!今の悲鳴?」

「かれんさん達に何かあった?」

りんは恐怖で顔が引き攣り、心臓の鼓動が早くなっていた。つぼみも不安そうに、

「早速、こまちさん達に驚かされたんでしょうか?」

「こまちさんならやりかねませんね」

うららもつぼみの話に頷くも、なおは震えながら時計を見て、

「で、でも、開始時間にはまだ早いよ?」

「それも有り得るけど・・・行ってみよう!」

なぎさの提案に同意し、なぎさ、りん、うらら、ラブ、美希とミルク、つぼみ、えりか、なおは、かれん達の様子を見に、リビングを出て行った。

一同は、恐る恐る悲鳴の聞こえた階段方面に向かつて行くと、

『イヤアアアアアア!!』

悲鳴を上げながら、全速力で駆け戻って来る七人を見て、思わずなぎさ達も合流して

逃げ出した。

「か、かれん、何があつたの？」

なぎさは、恐る恐るかれんに何があつたか聞くと、取り乱したかれんは、変顔浮かべながら、

「で、出た・・・オバケが出たのおお！」

「じよ、冗談よね？」

「こまちさん達じゃ無いんですか？」

美希とラブが、顔を引き攣りながら改めて聞くと、

「そうかも知れないですけど、怖くて見てられないですわああ」

アン王女も普段の冷静さはどこへ、一同に混じつて半泣きしながら駈け続けた。意を決したなぎさが立ち止まり、背後を振り向くと、追つて来ているであろう、何かの正体を見極めようと待った。

「待てええ！」

遠くの方で声が聞こえたかと思うと、再び稲光と共に室内が一瞬明るくなり、なぎさは、骸骨が追い駈けて来る姿を目にした瞬間、脱兎の如く逃げ出した。

「ありえない！ありえない！ありえない！が、骸骨が追い駈けて来るよおお！！」  
『が、骸骨?!イヤアアアア!!』

なぎさから骸骨が追いかけて居ると聞かされた一同は、益々パニックになり、  
「もう、誰よおおお!? 響でしよう?」

半泣きのエレンが響を疑うも、とうの響は、奏、アコと共に、今エレン達が通り過ぎた部屋の室内で、傘オバケを制作中だった。

「奏、アコ、今エレンの声がしなかつた?」

「した! した! もう怖がつてる何てねえ」

「本当、臆病何だからあ・・・」

三人は、廊下に居るであろう、エレンの様子を見ようとドアを開けた瞬間、骸骨と至近距離で顔を合せた。

「「・・・エツ!」」

「お前達も・・・」

「「キヤアアアアアア!」」

響達は、骸骨が発した、地の底から響き渡るような声を聞き、思わず鳥肌が立つと、悲鳴を上げて逃げ出した。

響、奏、アコも加わり、一同は追って来る骸骨から別荘の中を全速力で逃げ回って居た。途中で電気が点き、こまち達がブレーカーを入れ直してくれたようだったが、その

分一同には、不気味な骸骨がハッキリ分かった。腰に下げた剣をカチャカチャ鳴らしながら、執拗に追いかけてくる骸骨、エレンは恨めしそうに響を睨み、

「な、何で響達も逃げてるのよお!? あなたが私達を脅かしてたんでしよう?」

「ち、違う、違う、私達じゃないよ!」

「私達、肝試しに使うオバケ傘作ってただけよ」

「あんな骸骨知らないわよおお」

響、奏、アコが否定し、それを聞いたなおは、半泣きしながらみゆきに話し掛け、

「み、みゆきちゃん、妖怪は大丈夫何でしょう? 骸骨説得して帰って貰ってえええ!」

「エエエエ!? 骸骨さんは妖怪じゃないよおおおお!」

みゆきは頬を膨らませて否定するも、引き攣った表情のなぎさも加わり、みゆきに話し掛けると、

「いや、骸骨つて色々な妖怪居るよ。ガシヤドクロとか、骨女とかさあ」

「そんなの知らないもん! 妖怪さんは、河童さんや天狗さんは、良い人だってお婆ちゃんに聞いているけど、他のはオバケさんだもん!!」

みゆきは、頭の中がパニックになっっているのか、激しく取り乱し、あゆみは逃げながらも、そんなみゆきにツツコミを入れ、

「みゆきちゃん・・・オバケも妖怪も似たようなもんじゃ?」

「違うよお！全然違うよおおお!!」

「待てえええ!!」

再び背後から聞こえた不気味な声に、一同の逃げ足は益々速くなった。みゆきは半泣きしながら、

「アアアアン！ゴメンなさ〜い!!骸骨さんも良い人です・・・だから、追つて来ないでええええ!!」

執拗に一同を追い回す骸骨に追われ、徐々に一同もへばつて来ていた。かれんは意を決すると、

「こつなつたら、こまち達の所に行きましょう!そうよ、骸骨何か居る筈無いわ・・・これはこまちの仕業よ!」

かれんは、自らを奮い立たせるかのように言い聞かせ、こまち達が準備している大浴場へと向かった。

大浴場で準備をしていた、ほのか、ゆり、こまち、舞、満、薫、祈里、せつな、あかね、やよい、ヒメルダと妖精達だったが、悲鳴を上げる人数が、どんどん増えていく事に気付いたほのかとゆりは、

「ねえ、何だかなぎさ達の様子が変だわ!」

「ええ、まだ肝試しの開始時間じゃないのに、尋常じゃ無い悲鳴を上げてるし・・・」

「ウフフ、かれんやりんさん達ったら、恐がり何だからあ」

こまちは楽しそうに、せつせとオバケの小道具を準備するも、いつきとひかりも、困惑した表情で、

「でも、まだ始まって居ないのに、ちよつとおかしく無いですか?」

「はい、何かがあつたんじやないかと思ひます」

「そうですね。廊下を走るのはよくありませんし・・・」

「れいかさん・・・心配するところ?」

れいかも二人の意見に同意するも、どこかの外れな言葉を喋つたれいかに、舞が苦笑気味に呟いた。そうこうしている間に、悲鳴がどんどん近付いて来ると、大浴場の扉が勢い良く開かれ、かれん達が慌てて入つて来た。かれんは、こまちを見付けると慌てて近づき、こまちの両肩をギュつと掴んで激しく揺さぶつた。

「こまちいいい!あの骸骨はあなたの仕業なのよねえ?そうよねえ?そうだと云つてええええ!!」

「かれん、落ち着いて!骸骨!?そんなの用意してたかしら?」

『さあ?』

こまちに聞かれた脅かし役は、皆一斉に首を傾げた。騒ぎに気付いた妖精達も近付き、キャミーは不思議そうに首を傾げながら、



「ニヤンの騒ぎニヤ?」

「何でも、かれん達が骸骨に追い回されたそうナツ」

少し怯えた表情のナツツが、妖精達に語ると、

『骸骨うう?!』

妖精達は、骸骨の話を聞くと、魔王とピーちゃん、キャミー以外は、少し怯えながら怖がり、シャルル、パフ、リボンは、思わずガタガタ震え出す中、キャミーは思案するように考え込み、

(骸骨?!ひよつとして・・・)

キャミーが考え込んで居ると、魔王は怯えるなぎさ達を見て笑い出し、

「カゲカゲカゲ、全く、プリキュアなのに骸骨何かにビビってる何て、お笑いカゲ」

『悪かったわねえ』

怖がり軍団が一齐に頬を膨らませると、魔王は入り口の方へ移動し、

「俺が見て来てやるカゲ」

「流石に魔王を名乗るだけあって、こういう時は頼もしいわねえ」

魔王が様子を見てくると大浴場から出て行くと、かれんは少し魔王を見直した。何やら廊下の方で声がすると、魔王が再び現われ、

「お前達に客カゲ!」

『客!?』

「入ってくるカゲ」

魔王に促されて入って来たのは、なぎさ達を散々追い回した、腰に剣を差した骸骨だった。骸骨が入ってきた瞬間、

『ギャアアアア』

怖がり軍団は絶叫し、今にも失神しそうな表情を見せるも、こまちは笑みを浮かべながら骸骨に近付き、

「連れの者が失礼致しました。何かご用でしょうか?」

「ほう、貴公は拙者を見ても悲鳴を上げぬとは、中々肝が据わつておるなあ?」

不気味な声でこまちと会話をする骸骨だったが、どうやら敵意は無さそうで、怖がり軍団は、怯えながらも骸骨を凝視した。いつきは、何事も無いように骸骨と会話するこまちに困惑し、

「れ、冷静に骸骨と話してる?」

「流石はこまちさん」

「時々こまちの事がわからなくなるわ・・・」

のぞみはこまちを称え、かれんは引き攣った表情でこまちを見た。すると、奥の方から嬉しそうなキャミーの声が聞こえ、

「やつぱり、ベレル様ニヤ！」

「ン!?オオ、キャミーではないか!プリキュア達と一緒にだったのか?」

「はいですニヤ!プリキュア達には、良くして貰いましたニヤ」

「そうか・・・お前の気配を辿って此処に来て正解だったようだな。プリキュア達よ、我が使い魔キャミーが世話になったようだな」

ベレルが一同に礼を述べると、少し緊張した表情のほかがベレルに頭を下げ、

「いえ、私達の方こそ・・・ベレルさんの事は、キャミーから聞いてます。オークの森を元に戻して頂いたそうで、助かりました」

「いや、あれはこちらの方が詫びを入れねばなるまい・・・シャツクスの奴めが勝手に行った事とはいえ、貴公らにも迷惑を掛けたな」

「あ、あのう・・・ありがとうございました!あなたのお陰で、お母ちゃん達が危ういところで救われました」

なおは、ゆりの影に隠れ、恐がりながらもベレルに頭を下げた。ベレルは愉快そうに笑い出し、

「ハハハハハ!何、礼には及ばん・・・しかし、貴公ら、中々怖がりな揃っておるなあ?拙者が現われただけで逃げ出すとは・・・」

『だってええええ』

「まあ良い、今日は噂に聞くプリキュアに会いに来てみたが、全員揃っているとは好都合だったわい」

「たまたまみんなで、合宿で特訓してたから・・・」

なぎさから特訓の事を聞いたベレルは、

「ほう、特訓かぁ・・・これは丁度良い！何人か、拙者と手合わせしてみんか？」

ベレルから予想外の声が掛かり、一同がざわつく中、ラブは手を上げると、

「じゃあ、私達と手合わせして貰えますか？」

「エエエ!？」

「良いわね!」

「そうね」

美希は、ラブの提案に変顔浮かべ驚くも、祈里とせつなはラブの提案に同意した。ベレルは何度も頷き、

「ほう・・・良いぞ!では、外の雷雲を何とかせねばな!!」

ベレルは、そう言うのと外へと移動し、剣を上に掲げると、雄叫びと共に振り下ろした。それと同時に、雷雲は剣に斬られたかのように真っ二つに裂け、ちょうど島の周辺だけを雷雲が避けるように移動した。

「す、凄い!？」

なぎさは、目を見開いて驚き、ラブは、美希、祈里、せつなに話し掛けると、

「美希たん、ブツキー、せつな、ゆりさんから教わった修行の成果、試して見よう！」

「ちよつと気が引けるけど、良いわよ！」

「私も良いよ！」

「ええ、何時でもOKよ！」

美希、祈里、せつなも同意し、ラブ達四人はプリキュアへと変身し、ビーチに移動すると、ベレルとの組手を始めた・・・

「ダアアアアア」

ビーチは、雄叫びと共にパンチを繰り出すも、ベレルはそれを躲し、反撃を試みようとした。すると空中からベリーが飛び蹴りを行い、ベレルは右足を軸にして上体を反らすと、ベリーに反撃のパンチを浴びせた。だが、その瞬間にパインが両腕をクロスしながら割って入り、ベレルのパンチを防ぎ、パッションが激しい連続攻撃で二人を援護した。

(ほう、コ奴ら中々のチームワークを持って居る・・・)

ベレルは一旦距離を取ると、ビーチ、ベリー、パイン、パッションが横一列に並び、ベレルと向き合った。

「今度は、ベレルさんの方から攻撃して貰っても良いですか？」

「何!?!・・・フツ、良からう!」

「(は、速い!?)」

ベレルの瞬発力は凄く、一気にピーチ達との距離を詰め、四人を激しい連続攻撃で吹き飛ばした。四人は体勢を崩しながらも持ち直し、

「特訓の事を思い出さなきゃ・・・」

「ピーチ、ベリー、パッション」

「!?!?!」

パインは、無言で三人にアイコンタクトを送ると、ピーチ、ベリー、パッションも無言で頷いた。再びベレルが一気に距離を詰め、一人前に出たパインに連続攻撃を浴びせるも、ピーチ達は一齐にパインを援護せず、交互に入れ替わりながらベレルと戦い、戦いから距離を取った者は、ベレルの動きをジイと見つめた。

「何だ!?!」

ベレルは困惑するも、尚も攻撃を続けて居ると、四人の目が一齐に輝き、

「!?!見切ったあ!」

「何!?!」

ベレルの猛攻を、四人は完全に見切り、すんでの所で攻撃を躲し続けた。ベレルが動揺した瞬間を見逃さず、ピーチは左腕でベレルの右ストレートを持ち上げ、カウンター

気味の右ストレートを放った。

「グウウウ!？」

ベレルは、足をスリップさせて衝撃を弱めると、そのまま大きく後方にジャンプして着地した。

「ハハハハ、拙者の攻撃を順番に受ける事で、残りの者が拙者の攻撃を見極めておったか・・・まんまとしてやられたわい」

「二二」ありがとうございます!」「二二」

四人はベレルに頭を下げ、特訓の甲斐があつた事を直に感じた。

それを見て居た満は、いつきの側に近寄ると、

「いつき、今日は休養日だけど、ちよつと私とあなたで出来そうな技を考えたんだけど、後で付き合つてくれるかしら?」

「良いですよ!どんな技だろう?」

いつきは、満からの提案を聞き、技を想像するとウキウキしていた・・・

模擬戦を終え、ピーチ達四人が変身を解くと、ベレルは一同に、プリキュアに興味があつて会いに来た事を告げた。更に先程ピーチ達と模擬戦をした事に触れ、

「良いか、くれぐれも今手合わせした事は内密になあ。バレると、色々面倒だから

のお・・・」

「「「ハイー！」」」

「さて、プリキュア達の顔も見た事だし、拙者は帰るとしよう・・・キャミー、お前はどうかする？」

「今まで自由にさせて頂きましたし、キャミーもベレル様と一緒に魔界に帰りますニヤ」「エエエ!? キャミー、帰っちゃうニヤ？」

「寂しくなるわね・・・」

キャミーが魔界に帰ると伝えると、ハミイとエレンが少し寂しそうな表情で別れを惜しんだ。

「ハミイやセイレーンには仲良くして貰ったニヤ・・・ありがとうニヤー!」

キャミーとハミイが、固い握手でまたの再会を約束していると、ベレルは笑い出し、「ハハハハ、プリキュアもそうだが、貴公らと共に過ごす妖精達も、興味を引く者達が多いな」

ベレルはそう言うと、なぎさ達や妖精達を一人ずつ見つめ、魔王と目が合うと、(特にあの者、拙者は何処かであった気がするのだが・・・)

ベレルは首を捻るも、直ぐに気を取り直し、

「そうそう、これは拙者からの忠告だと思って頂こう!」



『!?』

「その四人との戦いや、シーレイン殿の話を書く限り、拙者は、貴公達が魔界に仇をなす存在とは、到底思えぬゆえ敵意は持たぬが、カイン殿とアベル殿は、何故か貴公らに拘っているように思われる。もし、処女宮を守護するリリスを差し向けたなら・・・貴公らは全滅するであろう!!」

『エッ?!』

ベレルの発言を聞き、一同は心の底から驚愕した。特訓の甲斐もあつて、自分達は、少しは強くなった自負を持つて居た。ベレルは、そんな一同に気付いたのか、

「勘違いするなよ、貴公らは強い!それは認めよう・・・だがリリスには、貴公らが勝てぬ訳がある・・・これから戻つて、ニクスとリリスには言い含めるが、仮にリリスが現われても、戦つてはならんぞ?」

「どういう事?」

ゆりが険しい表情でベレルに問い掛けるも、ベレルは、もう助言はしたと言いたげに、  
「言つた通りだ・・・ン!?!」

そんなベレルの視線が、何気なしにアコを見た時、思わずベレルは愉快そうに笑いだした。

「ハハハハハ、本当に貴公らは面白いなあ・・・全滅するかも知れないに訂正しておこう」

「あまり変わってないんですけど？」

なぎさが困惑気味に呟いた。ベレルは、改めて一同に向き合うと、

「では、さらばだ!!」

「アツ!?ベレル様、待つて下さいニヤ!みんな、今まで世話になったニヤ・・・また、何か会おうニヤ!!」

『キャミーも、元気でね!』

一同は、複雑な心境で、去って行くベレルとキャミーの後ろ姿を見送った・・・

その夜、プリキュア合宿最後の夜を迎えた一同の晩ご飯は、みんなで作ったカレーだった。ヒメルダとリボンも、帰る前にみんななどの団欒を楽しみ、

「私、こんなに楽しかったのって・・・久しぶりだよおお!」

「そうですねえ」

ヒメルダとリボンは、楽しそうに顔を見合わせてハシヤギながらカレーを食べた。えりかは何度も頷き、

「ウンウン、ヒメを招待して大正解っしゅ」

「えりかお姉様、ありがとう!」

ヒメルダがえりかに抱き付き、えりかは本当の妹が出来たと言いたげに、ヒメルダの

髪を優しく撫でた。食事も終え、後片付けを終えたヒメルダとりボンは、改めて一同に礼を述べた後、迎えに来たブルーによってブルースカイ王国に帰って行った。

#### 4、打ち上げ

プリキュア合宿四日目・・・

最終日のこの日は、朝からビーチに集合して、ゆりから教わった空手のおさらいをしていた。皆ベレルが残した、意味深な発言に刺激されたのか、稽古に身が入っていた。ゆりは満足そうに頷き、

「みんな、お疲れ様！それぞれ帰り支度もあるでしょうし、これから、私となぎさ、ほのかで、みんなが試して見たい事に付き合うけど、誰か居るかしら？」

ゆりに聞かれると、真っ先に満が声を掛け、

「私といつきで行うわ！薫、プリキュアに変身するから協力して」

「良いわよ」

薫は頷くと、二人はブライトとウインデイに変身し、それを見たいつきもポプリに話し掛け、

「ポプリ、僕達も行くよー！」

「ハイでしゅー！」

ポプリからプリキュアの種を貰い、いつきもサンシャインへと姿を変えた。つぼみ、えりか、うららはヒソヒソ話を始めると、

「私達も、この前のローリングフォルテツシモを試すんですか？」

「でも、この前失敗したじゃん？」

「特に何の改良もしてないですしねえ・・・」

「「じゃあ、今回は試さないって事で」」

三人は、ローリングフォルテツシモを披露する事を止めた。ブライト、ウインディ、サンシャインがプリキュアになった事で、なぎさ、ほのか、ゆりもプリキュアに変身し、ブライトとサンシャインが一歩前に出た。

「私達が試したい技は・・・これよ！」

ブライトの合図と共に、サンシャインがシャイニータンバリンを取り出すと、ゴールドフォルテバーストの力で、太陽のような光のゲートを空中に作り出した。ブライトはそれを見届けると、上空に目映い輝きを放つ巨大な光のエネルギー体を作り上げると、

「月と」

ブライトが叫び、

「太陽を」

それに応えるようにサンシャインが叫び、

「今、一つに！プリキュア！サンライズムーン!!」

二人の作り上げた技が重なった時、上空から目映い輝きが起こり、ブラック、ホワイト、ムーンライトを始めた一同は、目映い光に目が眩んだ。技を披露し終えたブライトとサンシャインが、一同に説明を始め、

「私達が考えたのは、簡単に言えば目眩ましね」

「ブライトが昨日閃いたんだけど、私もこの技は、色々な局面で使える気がするの」

「成る程・・・これは予想を遙かに超える技ね？」

「ウン、確かに色々な局面で役立ちそうね」

「凄いじゃない、二人共」

ムーンライト、ホワイト、ブラックからも絶賛され、二人は互いに顔を見合わせ微笑んだ。更にアクアがアクアキックを、ミントがエメラルドソーサリーフレクションを、ルミナスがハーティエルシャワーを、ルージュ、サニー、マーチが、キャノンショットをそれぞれ披露した。のぞみは、悔しそうに頭に両手をおいて藻掻き、

「しまったあああ!?! 私達名前決めるのに夢中で、実際の特訓忘れてたあああ」

「シヨボン」

みゆきとやよいも項垂れ、あゆみは三人を見て呆れたように、

「だから言ったのに・・・」

「でも、あゆみちゃんもノリノリだった」

「エエエと・・・そうでした」

三人にツツコミを入れられ、あゆみは思わず舌をペロりと出した。一同からの報告を聞いたムーンライトは、改めて満足そうに何度も頷き、

「みんな、お疲れ様！これでプリキュア合宿は終了よ!!後は各自で技を磨いて頂戴」

『ハイ!』

「じゃあ、これで合宿も終りだけど、みんな集まって!」

ブラックは一同を呼ぶと、ヒソヒソ話を始めた・・・

魔王は、つまらなそうにラケルを連れ、森を散策していた。苦心して一同の水着を拾って来たのに、あれから一同が水着を着る事は無かった。苦心して一同の水着を

「折角苦労して水着を拾って来てやったのに、あれから一度も着てないカゲ」

「みんな薄情ケル」

「これで合宿も終りカゲなあ・・・お前はまた妖精学校に戻るカゲ?」

「ハイ!また学校に戻って、プリキュアのパートナーになれるように勉強ケル」

「お前なら・・・必ずなれるカゲ」

「魔王さん・・・」

魔王とラケル、スケベコンビに今奇妙な友情が生まれた瞬間だった・・・  
その時、別荘の方からなぎさ達のはしゃぐ声が聞こえて来て、魔王とラケルはハツとした。

「あ、あいつら、また俺を除け者にして帰る気カゲか？」

「置いてかれたら困るケルウウ」

魔王とラケルは、大慌てで別荘へと戻って行った・・・

別荘に戻った魔王とラケルは、水着を着てプールではしゃぐなぎさ達一同と、妖精達が戯れて居る姿を見て、思わず呆然とその場に立ち尽くした。上下紐で結ぶビキニを着ているのは、満、薫、のぞみ、ラブ、美希、祈里、せつな、真琴の八人、フレア付きビキニを着ているのは、なぎさ、ひかり、咲、舞、りん、うらら、くるみ、つぼみ、えりか、いつき、響、奏、アコ、みゆき、あかね、やよい、なお、あゆみの十八人、ワンピースを着ているのは、ほのか、こまち、かれん、ゆり、エレン、れいか、アン王女の七人、一同は、魔王とピーちゃん、ビシヨ濡れになりながら、懸命に海の中から集めて来た水着を着ていた。

「あいつら・・・着てくれたカゲかあ」

魔王は嬉しそうに羽をパタパタ動かし、ラケルは目をハートマークにしてハシャいだ。それに気付いたなぎさが、二人を手招きし、

「ほら、魔王もラケルもこっちおいでよ！」

「今日も暑いし、冷たくて気持ち良いわよ！」

笑みを浮かべた舞が・・・

「折角プールがあるのに、一度も入らないのは勿体ないしね」

ニンマリしたのぞみが・・・

「まあ、折角魔王とピーちゃんやんが、水着を拾って来てくれたんだし」

少し照れながらも胸を揺らしたラブが・・・

「プリキュア合宿の締めは、プールで大いに遊ぼうってなぎささんが提案して」

えりかの浮き輪を引つ張りながららつぼみが・・・

「それで、こうしてみんなで遊んでるって訳」

楽しそうにはしゃぐ響が・・・

「魔王も一緒に遊ぼう！こっちにおいで!!」

笑顔を浮かべながら、両手を広げて魔王を呼ぶみゆきが・・・

『魔王、遊ぼう!』

そして、プールの中ではしゃぐ一同が、皆魔王に笑顔に向けていた。魔王は目をウルウルさせると、

「オオオ！遊ぶカゲエエエ!!」



魔王は嬉しそうに、ビーチボールのように跳ねながら、一同の頭に次々当たってはしゃいだ。

楽しい水着姿の少女達と妖精達の声が、島中に響き渡っていた。  
こうして、プリキュア合宿はその幕を下ろした・・・

第百十二話：プリキュア合宿終了

完

## 第百十三話：Wピース

## 1、真琴、痛恨のミス

プリキュア合宿を終えた一同は、再び元の生活に戻り、夏休みを過ごして居た．．．  
やよいは、プリキュア合宿でみんなに協力して貰い、頑張って描いたネームを元に、編集者に言われたページの描き直し作業をしていた。やよいは、編集者から画については褒められたものの、ストーリーに関しては、王道過ぎて少し面白みに欠けるから、もうちよっと遊び心を加えた方が良いと言われていた。

「みんなからアドバイス貰って、ネーム描いてみたけど、これで本当に大丈夫なのかなあ？」

初めて投稿した作品であるミラクル・ピースは、やよいが憧れていたヒーロー物を、女の子を主役にした作品で、こんなヒロインになりたいという、やよいの願望を表したキャラでもあった。以前、バッドエンド王国でアカオーニと戦った時も、ミラクルピースの事を思い描いた程だった。

「みんなと考えたんだし、きつと大丈夫」

やよいはそう意気込み、ベレー帽を被って気持ちを高ぶらせて居ると、家のチャイム

が鳴った。やよいが玄関を開けると、そこにはみゆき、あかね、なお、れいか、真琴の姿があった。みゆきは、あゆみの話題に触れ、

「あゆみちゃん、用事があつて来られないみたいだけど、その分私達が手伝うよ」

五人は、やよいの陣中見舞いを兼ね、何か手伝える事があれば、手伝うと申し出た。やよいは目をウルウルさせて感動し、

「みんな、ありがとう・・・さあ、入つて」

『お邪魔します!』

一同はやよいの家に上がり、部屋へと通された。やよいから漫画についての簡単な説明をされ、やよいはリビングからテーブルを持つてくると、みゆき達の作業場として提供した。みゆきは消しゴム掛け、れいかはトーン貼り、なおは効果で、スピード線などを描いた。あかねと真琴は、分担してベタ塗りを担当する事になった。

(ベタ!? 指示された所を黒く塗れば良いのね?)

真琴は、漫画について良く分かつては居なかつた。そしてやよい達一同も、真琴がこの世界の事を、まだ良く分つていない事も忘れて居た・・・

やよいが下書きとペン入れをしたページを、みゆき達が受け取つて仕上げていく中で、真琴にも漫画用紙が回つてきた。

「真琴、こつちのベタ頼むわ」

あかねから二枚の漫画原稿を渡された真琴は、ジイと漫画用紙と睨めっこすると、(この枠を黒く塗りつぶすのね？折角画が描いてあるのに……)

真琴は首を傾げながらも、四角く括られた画の中を、黒く塗りつぶしていった……  
「出来ました！」

真琴が黒ベタ作業を終えた事を報告すると、一同は感心し、

「へえ、まこちゃん早いねえ？」

「本当、あたしはまだスピード線書き終えてないのに」

「私も、まだトーンを貼ってる最中ですよ」

みゆき、なお、れいかも、真琴の要領の良さに驚き、あかねもウンウン頷くと、

「ホンマやなあ、ウチもまだ……エツ!?」

あかねの目に、チラリと真琴が担当した、漫画原稿が視界に入り、あかねは思わず我が目を疑った。折角やよいが描いた画を、あろう事か枠だけ残して、黒く塗りつぶしてあったのだから……

あかねは口をパクパクして放心し、あかねの異変に気付いた一同も、真琴が手に持つ漫画用紙を見て、思わず呆然とした。あかねは呆気にとられながら、

「ま、真琴、何しとんねん？」

「エツ!?言われた通り黒く塗りつぶして……」

「いや、それはそうねんけど・・・」

一同の異変に気付いたやよいは、真琴を庇うように、

「まこちゃん、大丈夫だよ！はみ出したところは、修正ペンで消せるから」

真琴をフォローしたやよいだったが、あかねとなおは跋が悪そうな表情で、

「いや、はみ出したちゆうか・・・」

「描き直した方が早いと言うか・・・」

描き直した方が早いという言葉に反応し、思わずやよいが後ろを振り向き、

「エッ!? どういう事?」

その瞬間、やよいの目に、真琴の手に握られた漫画原稿が、黒く塗りつぶされている事に気付いて呆然とした。描き直した枚数は数枚で、真琴が塗りつぶした枚数は、二枚ではあったが、ミラクル・ピースで漫画原稿を初めて描いたやよいにとつて、何度も下書きを描き直して、苦勞しながら描き上げた作品が、ほんの数分で水泡に帰してしまった。やよいの目にジワリと涙が浮かんでくる。真琴は、そんなやよいを見て狼狽へ、

「あ、あの・・・」

「酷いよーまこちゃん!!」

やよいは、堪えていた感情が爆発したように、思わず真琴を怒鳴ると、真琴の身体はビクリとし、慌ててやよいに頭を下げて、

「ゴ、ゴメンなさい・・・」

「やよい、真琴を責めんでやって・・・ちゃんと説明せ何だウチが悪いんや」

「や、やよいちゃん、あたし達手伝うから、もう一回・・・」

あかねが真琴を庇い、なおも自分達が手伝うから、もう一度描いてみようと思ふようになったものの、やよいの心は深く傷ついていた。

「もう、もう、放つて置いて!」

「アツ!?や、やよいさん?」

「待つて!やよいちゃああん!!」

やよいは、れいかやみゆきが止めるのも聞かず、漫画用紙を一同から引つたくるよう手に取ると、泣きながら玄関を飛び出して行つた。呆然とその様子を見ていた真琴の目にも、ジワリジワリと涙が浮かび、

「ウツ・・・ウワアアアアン」

真琴は、自らの非でやよいを怒らせてしまい、その責任を感じて泣きじやくり、みゆき達は、そんな真琴を気遣いながらも、飛び出して行つたやよいの身を案じた。

## 2、やよいとバッドエンドピース

佐々木先生の家で、真琴同様居候生活をしているアン王女だったが、部屋のドアを

佐々木先生がノックし、

「アン王女、真琴から電話ですよ！何か泣いてるのが気になるけど・・・」

「エッ!? ソードが?」

アン王女は、佐々木先生から携帯を借りると、真琴と会話を始めた。

「ソード、どうしました?何かあったのですか?」

「アン王女おおお・・・わ、私、どうしたら良いんでしょう?」

真琴はそう言うと、事の顛末をアン王女に話した。アン王女は何度も頷き、

「分かりました!家臣の失態は、わたくしの責任も同然・・・今からわたくしもそちらに向かいます」

アン王女は携帯を切り、佐々木先生に返すと、佐々木先生も気になったのか、

「アン王女、真琴に何かあったの?」

「トラブルが発生してしまっただけです・・・所で佐々木先生」

「何でしょう?」

「漫画って・・・どう描くのですか?」

「エッ!?!」

佐々木先生は、アン王女が発した意外な言葉を聞いて、思わず呆然とした。

夏休みを満喫していたやおいは、この日も個人活動をして、公園のベンチで気持ち良く眠って居ると、近くで大きなバッドエナジーを感じて目を覚ました。

「アレエ!?バッドエナジーを感じるう…どうしようかなあ?夏休みは、お仕事休もうつてみんなで決めただけど…」

やおいは、腕組みしながら考え込むも、楽をしてバッドエナジーを回収出来るなら、貰って置こうと、バッドエンドピースの姿へと変化し、黒の書を取り出した。取り出した瞬間に、黒の書にバッドエナジーが吸収されていき、ピエーロ完全復活の目盛りが上がった。バッドエンドピースが出所をチラリと見ると、それはベンチに座って落ち込んでいるやよいだった。

「あれは!?そうだ!暇つぶしにからかっちゃおうと!」

バッドエンドピースは、小悪魔的な表情を浮かべると、そつとやよいに近付いて行った。ベンチに座って居たやよいは、黒く塗りつぶされたページを見ると溜息を付き、「ハア…折角の原稿が台無し!でも、まこちゃんにちゃんと説明しなかった私にも、非はあるよねえ…ハア」

やよいにも、真琴がわざとやった事では無いと、改めて冷静になつてみれば理解出来た。真琴がこつちの世界にやって来てから、まだ一ヶ月ちよつとだったのだから…「まこちゃんの事、思わず怒鳴っちゃったけど…」



「フウウン、ソードと喧嘩したんだあ？」

「ウウン、喧嘩って言うか……エツ!?」

やよいは、背後から話し掛けられた事に驚き、思わず振り返ると、ニヤニヤしたバツドエンドピースが、ベンチの背もたれに両腕を寄せ、興味ありげな表情で、やよいが手に持つ漫画原稿を見つめた。バツドエンドピースの右手が伸び、驚いているやよいから漫画原稿を奪い取ると、

「ねえねえ、これ何!? 見せてえー!」

「アツ!? ダメエエ、返してええー!」

「嫌だよおおー! ベエエエ」

バツドエンドピースは、やよいに舌を出して大きな木の上に移動し、やよいはその木の下で、返してと叫びながら途方に暮れた。バツドエンドピースは、やよいが描いたミラクル・ピースを、ジイと読んでいくと、

「ねえ、この二枚だけ、四角の中真っ黒だけど?」

「そ、それは、まこちゃんの間違えて塗りつぶしちやったから……」

「ソードが!? フウウン、それであ……」

バツドエンドピースは、木の上から飛び降りると、やよいの前に着地し、やよいに漫画原稿を返した。やよいは慌てて漫画原稿を胸に押しつけて隠すも、バツドエンドピー

スは腕組みすると、

「ウウウン、画は良いから読みやすいんだけど、何かあなたの漫画って物足りなくて、面白みに欠けるんだよねえ？」

「エツ!？」

バッドエンドピースの感想を聞いたやよいは、思わずドキリとした。編集者に言われた事と、ほとんど同じだったのだから・・・

やよいは身を乗り出して、バッドエンドピースに話し掛け、

「ど、どの辺が物足りないの?」

「エエエ!?聞きたい?続き教えてくれるなら、私も教えてあげても良いんだけどなあ?」  
「あのね・・・編集の人にも同じ事言われたの!私の漫画は、遊び心が足りないって・・・それで悩んで・・・」

やよいがモジモジしながら、本音をバッドエンドピースに話すと、バッドエンドピースはウンウン頷き、

「その編集さんって人、見る目あるね!私もそうだと思う、あなたの漫画には・・・お色気が足りないわ!!」

「お色気ええ!?!」

やよいは、頭をトンカチで殴られたような衝撃を覚えた。ミラクル・ピースは、ヒー



宅へと戻って行った・・・

### 3、コンビ結成!

飛び出して行ったやよいの身を案じ、みゆき、あかね、なお、れいか、真琴は、途中で合流したアン王女と共に、外へ出て真琴を捜し続けた。

「見当らない・・・やよいちゃん、何所まで行ったんだろう?」

みゆきが不安そうに、飛び出して行ったやよいの身を案じると、あかねは一同の顔を見渡し、

「一緒に捜しても埒がアカン。手分けして捜そうや」

「そうだね、じゃあ二人ペアで捜そう」

なおもあかねの案に同意し、二人でペアを組んで捜そうと提案した。れいかも頷き、「分かりました!合流場所は?」

「わたくしとソードは、あまり土地勘がありませんし、やよいさんの家の前ではどうでしょう?」

「」「」「」

「スイマセン・・・皆さんに迷惑掛けちゃって」

アン王女の提案で、待ち合わせ場所をやよいの家の前にした一同、真琴は申し訳無さ

そんな表情で一同に詫げるも、皆真琴に対して労りの言葉を掛けてくれた。みゆきは、念を押すように一同に話し掛け、

「じゃあ、一時間後にやよいちゃんの家の前で！」

「キャンデイも行くクルウ」

みゆきは頷き、キャンデイを連れて真琴とペアを組み、あかねとアン王女、なおとれ  
い  
か  
の  
ペ  
ア  
で  
別  
れ、  
再  
び  
や  
よ  
い  
を  
捜  
し  
に  
向  
か  
つ  
た。

やよいはそんな事とは知らず、バッドエンドピースを家に招待していた。バッドエン  
ド  
ピ  
ー  
ス  
は、  
再  
び  
や  
お  
い  
の  
姿  
に  
変  
わ  
り、  
や  
よ  
い  
は  
玄  
関  
を  
開  
け  
る  
も、  
中  
は  
静  
ま  
り  
返  
つ  
て  
居  
た。  
や  
よ  
い  
は  
少  
し  
寂  
し  
そ  
う  
に、

（みんな、帰っちゃったんだ・・・）

「さあ、上がって！」

やよいは気を取り直し、やおいを中に招待した。やおいは室内を見渡し、  
「フウウン、ここがあなたの家なの？」

「ウン！私の部屋は此処だよ」

やよいは、やおいを自分の部屋へと招き入れた。やおいが周りを見渡すと、ヒーロー  
物  
の  
グ  
ズ  
や、  
以  
前  
買  
つ  
た  
ロ  
ボ  
ッ  
タ  
ー  
の  
超  
合  
金  
が  
飾  
ら  
れ、  
や  
よ  
い  
が  
ア  
ニ  
メ  
や  
特  
撮  
好  
き  
な

のが、やおいにも分かった。やよいは、オレンジジュースとチョコを含めたお菓子を  
持って戻って来ると、やおいに差しだし、

「はい、食べて」

「ありがとう・・・あなたって、アニメとか好き何だねえ？まあ、私もだけど」

「私の事は、やよいで良いよ！やおいちゃんも、アニメ好きなの？」

「私は、深夜アニメの方かなあ・・・」

「深夜アニメかあ・・・」

「そつ、エッチなの多いよ？」

「そ、そう何だあ・・・」

「そういう作品見るのも、勉強になると思うよ？」

やおいの提案に、やよいもコクリと頷いた。やよいは、ヒーロー物やロボット物が好きだが、深夜アニメはほとんど見た事は無かった。やよいは、目を輝かせると、一枚の漫画原稿をやおいに渡し、

「ちなみに、やおいちゃんなら、この場面どうする？」

「ん!?私？私なら・・・此処でこのヒロインが吹き飛ばされるでしょう？このシーンに太股のアップ描いて、股間付近が見えるか見えないかぐらいの描写入れるかなあ・・・」

やおいはそう言うのと、慣れた手付きで鉛筆を握り、簡単なラフを描いた。やよいは、慣

れた手付きのやおいに驚きながらも、ラフを見せて貰うと、確かに話の流れに上手く乗っており、違和感を感じなかった。

「確かに、これなら違和感湧かないねえ・・・」

「でしよう!? こういうシーン増やして、お色気有りのヒロイン物にすべきだよ」

やおいの提案に感化され、やよいは鼻息荒く頷き、

「ウン! 何だか少しイメージ湧いてきた。やおいちゃん、ラフ描くから遠慮なく意見してみて」

「まっ、お菓子も御馳走になったし、そのくらいは良いかなあ・・・」

やよいとやおい、二人は楽しそうにミラクル・ピースの内容を話し合った。話し合っている内に、やおいも徐々に、ミラクル・ピースにたいして親近感が湧いていた。二人でネームを描くと、予想以上に早く終わり、やおいは満足気に頷き、

「じゃあ、やよいは下書きして。ペン入れは私が上げてあげる」

「本当!? でもやおいちゃん、漫画を描くの、慣れてるよねえ?」

「まあねえ! ウチのビューティ、陰険な所あるでしょう? でも、直に言うとは直ぐ怒るから、漫画で憂さ晴らししている内に、何か上達したみたい」

「そうなんだあ・・・」

やおいと話して居る間に、やよいの心の中に、ある構想が浮かび上がった。自分一人

で漫画を描くのは、今のままでは厳しい気がするもの、やおいがパートナーとして加わってくれば、自分の中の引き出しが、更に増える気がしてワクワクしてきた。やおいはやおいに話し掛け、

「ねえ、やおいちゃん・・・一緒にコンビ組んで、漫画描いてみない?」

「エエエ!? 私達、敵同士だよ?」

「でも、それはプリキュアになった時だし・・・私は、やおいちゃんと一緒に漫画描けたら、もつと成長出来る気がするんだよねえ?」

「ウーン・・・私、どっちかって言うと、エロい画描く方が好き何だけだなあ?」

「程々なら、ミラクル・ピースでも描いて良いよ?」

「本当!? どうしようかなあ・・・」

「二人で漫画描く時は・・・毎回おやつとジュース付き」

「乗ったあああ!」

おやつに釣られたのか、やおいは右手を高々と上げてやよいとコンビを組む事を承諾した。やよいは心から嬉しそうにバンザイし、

「ワアアアイ! じゃあ、コンビ名を決めようか?」

「私達ピースだし、面倒だから、Wピースで良いんじゃない?」

「何か漫才コンビみたいだけど、私もそれで良いよ!」



やよいとやおい、どちらが言い出したわけでも無かったが、やよいが右手で、やおいが左手でピースしながら腕を突き出すと、二人のピースが合わさり、

「美少女漫画家コンビ！Wピース!!・・・エヘヘヘヘ」

やよいとやおい、二人は思わずハモって顔を見合わせると、可笑しそうに笑い出した・・・

みゆき達は、必死にやよいを捜したものの、やよいの姿は全く見当らず、一同は重い足取りでやよいの家の前まで戻って来た。

「念の為・・・チャイム押してみようか？」

「そうやな、もしかしたら帰ってるかも知れんし」

みゆきの提案にあかねも同意し、みゆきの頭に乗ったキャンデイがチャイムを鳴らすと、中からドタドタ足音が聞こえて来た。みゆきはホッと安堵し、

「良かった！やよいちゃん帰って居るみたい」

玄関のドアが開き、やよいが顔を出すも、さつきと打って変わってやよいは上機嫌で、

「みんな、さつきはゴメンね！まこちゃんも、怒鳴っちゃってゴメン」

「い、いえ、悪いのは私ですし・・・」

「アン王女も来てくれたんだあ・・・さあ、上がって」

『お邪魔します！』

みゆき達は、やよいに室内に通され、やよいの部屋に入ると、皆一瞬虚を突かれた。中にはやよいが居て、しかも漫画原稿にペン入れをしていたのだから・・・

「な、何であなたが居るのよ？」

真琴は露骨に嫌そうな表情を浮かべると、やよいはゲスい表情を浮かべ、真琴が失敗した漫画原稿を左手でヒラヒラ揺らし、

「アレエ!? 誰かさんの失敗をフオローしてあげてる私に、そんな口聞いちゃうんだあ？」  
「ウツ・・・」

やよいに凶星を言われ、思わず真琴が悔しそうな表情で言葉に詰まった。やよいはニコニコしながら、

「あのね、やおいちゃんは、漫画描くのスツゴク上手なの！それで手伝って貰ってたんだけど・・・ジャアアン！私達、何とコンビ組んじやいました!!」

『エツ!?』

「美少女漫画家コンビ・・・Wピース！」

やよいとやおいが、先程と同じポーズを、一同に見せ付けて決めた。一同は呆然としているも、やよいとやおいは盛り上がり、

「また決ったねえ！」

「ウンウン」

やよいの言葉に、やおいも顔を見合わせながら満足気に頷いた。みゆきとキャンディも目を輝かせ、

「何か凄いね、やおいちゃん！」

「凄いクルウ」

「エへへへ、やおいちゃんは私に・・・時代はエロだと教えてくれたんだよ」

「ハア!？」

やよいの言葉を聞いたあかねとなおは、同時に変顔浮かべながら呆然とし、れいかは首を傾げながらアン王女に話し掛け、

「何時の時代でしょうか？」

「わたくしにも分かりませんわ」

アン王女も首を傾げて不思議そうに表情を浮かべた。やおいは真琴を見つめると、  
「所で、暑くて喉渴いてきちゃった・・・ソード、コーラ買って来て！」

「ハア!?!何で私が・・・」

真琴が思わず不愉快そうな表情をすると、やおいはゲスい表情を再び浮かべ、真琴が失敗した漫画用紙を左手でヒラヒラしながら、

「アレエ!?!誰かさんのフォローしてる私に、そんな口聞いちやうの?感謝して欲しいぐ

らいなのになあ・・・あの時、やよい、泣いてたなあ」

「ウツ・・・あ、ありがとう」

真琴の心は屈辱感で一杯だったが、現にやよいは真琴のフォローをしてきている事は事実で、真琴は悔しさに耐えてやよいに礼を述べた。やよいは再びゲスい表情を浮かべると、

「そうそう、それで良いの・・・ソード、コーラ買うのダツシュユね？」

「ウウウウ・・・」

「やおいちゃん、まこちゃん虐めちゃ可哀想だよ！」

(や、やよいさん・・・)

真琴は、酷い事をした自分を、やよいが庇ってくれたと思い、目をウルウルさせたものの、

「まこちゃん・・・私はサイダーで良いから」

「ウツ・・・ウワアアアン」

真琴は、やよいにまで飲み物を頼まれ、泣きながら部屋を飛び出して行つた。みゆき達一同は、予想も出来ない出来事の連続に呆然とし、アン王女はハツとすると、

「た、確かにバッドエンドピースは、ソードのフォローをしてくれたようですねえ・・・」

「まさか・・・二人でコンピを組むとは、思っても見ませんでしたね」

「ウン・・・あたしも予想外で驚いてるよ」

れいかとなおも、二人のコンビ結成には驚くも、みゆきは、敵であるバッドエンドピースと、仲良さそうなやよいを見て目を細めた。

「そうだね・・・でも、仲良く出来るなら良い事だよ」

みゆきも、バッドエンドハッピー事みさきとは、話して居て楽しいと考えて居た。二人を見てみると、みさきと友達になれるような思い、それが現実味を増していくように感じた。

やおいは何かを閃くと、

「そうだ！ねえ、やよい、ソードを私達のアシスタントにしようよ」

「まこちゃんを!」

「ウンウン、きつと面白いよお?」

「そうだねえ・・・ワクワクしてきた!」

やおいの提案に、やよいも同意し、二人は勝手に、真琴をWピースのアシスタントに任命した。あかねは変顔を浮かべながら、

「何やか、組ましてはアカン二人を、コンビにした気もするなあ?」

あかねの何気ない言葉に、一同がやよいとやおいを見つめると、なお、れいか、アン王女もそんな気がしてきて、

「「確かに・・・」」

思わず三人は、やよいとやおいのWピースを見て呆然と呟き、二人はそんな一同の不安を余所に、キャツキャとはしゃいで盛り上がって居た。

一方、勝手にアシスタントにされた事も知らず、コンビ二目指して駈け続ける真琴は・・・

(ピース何て、ピース何てえええ・・・)

「大嫌いよおおお！」

腕で涙を拭いながら、思わず叫んだ・・・

劍崎真琴・・・

Wピースのアシスタント(パシリ) 決定!!

#### 4、コミケ

やよいは漫画雑誌の編集者に、やおいとのコンビで改めて頑張る旨を伝えてから数日・・・

会社勤めの人々も休みが多いお盆休み、毎年この時期になると、お台場にある東京ビックサイトでは、盛大なイベントが行われていた。最終日のこの日は曇天、雨が降るかも知れないような微妙な天気だった。なぎさ、ほのか、ゆりは、やよいとやおいのW

ピースコンビに頼まれ、朝早くから一緒に夏コミと言われる同人誌即売会へと出かけた。みゆき、あゆみも参加し、無理矢理二人のアシスタントにされた真琴も、慥然とした表情で参加していた。新橋駅からゆりかもめに乗った一同、電車の中は異様な熱気に包まれて居た。

「やけに込んでるのねえ？」

「ウン、ゆりかもめって乗った事無かったけど、何時もこんなに込んでるのかなあ？」

ゆりとはのかは、大勢のリユックを背中に背負った、一種異様な集団を見て思わず眩き、なぎさも周りを見渡すと、

「テレビ局もあるし、イベントやってるからじゃないの？」

みゆきはなぎさの言葉に頷き、

「やよいちゃんの話によると、このイベントがある時は、何時もこんな感じらしいです」  
「同人誌即売会って凄いですねえ・・・」

あゆみも、周りを見て驚きながら会話する一同、なぎさはみゆきに小声で話し掛け、  
「ねえみゆき、魔王も一緒なの？」

「ウウン、魔王は、家でお母さんとお留守番してます」

「珍しいわねえ？」

「こういう所に来たがりそうだけど・・・」

魔王が一緒じゃ無いと聞き、ほのかとゆりは不思議そうにみゆきに聞くと、みゆきは苦笑気味に、

「アハハハ、エエエと何でも、コレクションの整理をするって、魔王は言っていました」  
（（どんなコレクション何だろう？））

みゆきから、魔王がコレクションの整理をすると聞いたなぎさ、ほのか、ゆり、あゆみは、一抹の不安を覚えた。

そんな会話をする一同だったが、真琴は会話にも加わらず、恨めしそうな視線で、楽しそうに会話するやよいとやおいを見て頬を膨らました。

「何で私まで・・・大体、何で私が、あの二人のアシスタントになってるの？」

真琴は、独り言のようにブツブツ文句を呟き、あゆみは心配そうにみゆきに話し掛け、  
「みゆきちちゃん、真琴ちゃんどうしたの？」

「本当！何かさつきからずっと、やよいとやおいを恨めしそうに見つめているし」

なぎさも気になったのか、みゆきにそれとなく聞いてみると、みゆきは苦笑しながら、この前の出来事を、あゆみ、なぎさ、ほのか、ゆりに伝えた。四人は改めて真琴の顔をジッと見つめ、

「成る程、それで真琴は、ご機嫌斜めなのね？」

「断れば良かったのに？」



ゆりとほのかに話し掛けられた真琴は、少し口を尖らし、

「だつてええ．．．私が断ろうとすると、バッドエンドピースは、私が失敗した漫画原稿見せ付けて脅すんですよ」

「そういうずる賢い所あるよね、あの子．．．」

真琴の話を聞いたなぎさは、ウンウン頷いた。そうこうしている内に、電車は目的駅である国際展示場正門駅に付いた。ドアが開いた途端、乗っていた人々は我先に駆け出したり、早歩きを始め、思わずなぎさ達が呆気に取られて居ると、

「ほら、ブラック先輩、私達も急ぐよー」

「エッ!? ちよ、ちよつと腕を引つ張らないでえ」

やおおいに腕を引つ張られたなぎさは、エスカレーターなのに、最早階段のように次々と下りて行く人々に混じり、改札正面まで降りてきた。天井を見上げれば、何かのアニメの画が描かれた大きなポスターのようなものが貼られ、周りを見れば、何かのコスプレをした人物の姿や、美少女のちよつとエツチな絵柄が描かれた、大きな紙袋を持つ人も居て、思わずゆりの眼鏡が曇り、ほのかが変顔を浮かべた。改札を出た正面には、東京ビックサイトへの案内板があり、まだ7時前なのに、続々と人々の波が、東京ビックサイト目掛け進んで行った。なぎさは人の多さに驚き、

「まだ7時前なのに、凄い人だねえ．．．アレエ!? ほのか、ゆり?」

なぎさが背後を振り向くと、二人の姿が忽然と消えて居た。なぎさは、辺りをキョロキョロして二人の姿を捜していると、再び国際展示場正門駅の中に戻ったゆりとほのか、無言のままなぎさに手を上げて合図し、新橋方面乗り場へと消えて行つた。

「薄情者おおお！」

なぎさは、思わず変顔浮かべながら絶叫するも、やおいに背中をポンポン叩かれ、「ブラツク先輩には、私達が付いているから、元氣出して」

「何であんたに励まされなきやいけないのよ・・・大体、コミケって何なの？」

「同人誌即売会で、毎年夏と冬に開かれて・・・」

「そういうマニアックな話はどうでも良い！何で私まで呼ばれたの？」

「だってえ・・・18才以上じゃないと買えないし」

やおいから、18才以上じゃないと買えないと言われたなぎさは、思わず変顔を浮かべ、

「ハア!? あんた達・・・一体何の本買いに来たの？」

「エツチな本」

「帰るううううう！」

「ダメエエエエエ！」

変顔浮かべながら踵を返したなぎさの両腕を、やよいとやおいが掴んで嫌々をした。

なぎさは変顔浮かべたまま、

「私じやなくても、アン王女だつて居るじやない」

なぎさがアン王女の話題を出すも、やよいは少しオドオドしながら、

「だつてええ．．．アン王女に年聞いたら、怖い顔で睨まれて怖かつたんだもん」

「じゃあ、佐々木先生は？」

「こんな本買いに来たのバレたら．．．学校にママを呼び出されちやうよおお」

やよいは、嫌々をして否定した。それもそうだと納得したなぎさは、

「それもそうか．．．で、私やほのか、ゆりを誘つた訳？」

「ウン」

なぎさは、あかね、なお、れいかの姿が見当らない理由が分かつた気がした。なぎさも、二人の目的が分かつて居たなら、当然断つて居た。

「あかね、なお、れいかの姿が見えないと思つたら、そういう事か．．．」

「アハハハ、私もそうだと知つて居たら、絶対来ませんでした」

あゆみも今知つたのか、引き攣つた顔でなぎさに同意した。あゆみのバックから顔を出したグレルとエンエンは、

「なあなあ、エツチな本つて何だ？」

「面白いの？」

「キャンディも読みたいクルー！」

キャンディも興味ありそうに目を輝かせ、なぎさ、みゆき、あゆみが、必死に三人を宥めた。

東京ビツクサイト目掛け歩いて居た一同だったが、あまりに凄い人で、会場内は入場規制をされ、なぎさ達も長い列に並んだ。最初はおとなしく並んで居たやおいだったが、一向に移動しない列に痺れを切らし、

「アアアン、もう！みんな邪魔ああ！」

そう言うと、やおいはバッドエンドピースの姿に変身し、周囲に居たりユツクを背負った男達が響めき、カメラや携帯で撮影しだした。なぎさ達は、慌ててバッドエンドピースを止めようとしたものの、バッドエンドピースは、黒の書を取り出すと、

「世界よ、最悪な結末に変わっちゃって！白紙の未来を、黒く塗りつぶしちゃおう！！」

バッドエンドピースが、バッドエンド空間を発生させると、空が不気味に黄色く変化し、その周りを落書きで描いたようなイラストが覆っていた。掲げた黒き書に、バッドエナジーが吸収され、並んで居た人々が力なく座り込んだ。やよいは、大慌てでバッドエンドピースに話し掛け、

「ダメだよおおお！」

「だって、邪魔何だもん」

バッドエンドピースは、座り込む人々を見て嫌そうに呟くと、なぎさは地団駄踏んで怒り出し、

「コラー！私の前では悪さしないって約束したでしょう？約束破るなら帰るからねえ！！」

「だつてええ……」

なぎさにも怒られたバッドエンドピースは、不満そうに口を尖らせた。何気なく下を向いたバッドエンドピースは、慌ててスカートを抑えていると、真琴が突然ドヤ顔を浮かべてバッドエンドピースを指差し、

「フッフッフ、とうとう本性を見せたわねえ、バッドエンドピース！ダビィ、行くわよ！！」

「何時でも良いビィ」

真琴は、キュアラビーズを取りだし、ラブリーコミュニケーションにセットすると、

「プリキュア！ラブリック！！」

「L・O・V・E」

ラブリーコミュニケーションの画面に、真琴が指で「L・O・V・E」と描き、ダビィがそれに反応して、その都度その文字を読み上げると、真琴の身体が光に包まれ、プリキュアへと変化していった。

「勇氣の刃！ キュアソード!!」

変身を終えたソードは、両手でスペード型の形を作り上げ、

「このキュアソードが、愛の剣で、あなたの野望を断ち切ってみせる!!」

ソードはそう言うと、バッドエンドピースに対し、右手の人差し指で指差しポーズを決めた。なぎさは変顔を浮かべながら、

「あんたまで変身してどうすんのよおお?」

「どうしよう!?! 私達も変身した方が良いかなあ?」

「ウーん、今の所アカンベエも出してないし、もうちよつと様子見ようか?」

みゆきとあゆみは、困惑気味にもう少し様子を見る事を決めた。ソードに指を指されたバッドエンドピースだが、バッドエンドピースは、そんなソードを無視し、バッドエナジーを吸われた筈なのに、座り込みながらも、バッドエンドピースの下半身を狙い、写真を撮ろうとする者達から逃げ回った。

「バッドエナジーを吸われて居るのに、何でえええ!?!」

「待ちなさい! 今こそ合宿の成果を・・・」

ソードは、動揺しながら逃げ回るバッドエンドピースを追いかけたが、みゆきはソードを指差し、

「ねえソード、あなたも下半身を・・・」

「エツ!? ……キヤアアアア! ど、どこを撮ってるのよお!!」

ソードもバッドエンドピース同様、スカートを抑えながら逃げ回り始め、なぎさは溜息付きながら頭を抱えると、

「あんた達、こつち来なさい! 此処から離れるわよ!!」

「イヤアアアン」

なぎさが二人を手招きすると、バッドエンドピースとソードは、スカートを抑えて並びながら逃げ戻って来るも、辺りではシャッター音が鳴り響いた。

なぎさは、変身を解いたやおいと真琴、みゆき、やよい、あゆみを連れて、逃げるように国際展示場正門駅に戻って来た。やよいとやおいは悲しそうな表情で、

「エエエ!? 本当に帰っちゃうの?」

「仕方無いでしょう! あんな騒ぎ起こしちゃったんだからあ…」

「ブウウウウ」

頬を膨らませたやよいとやおいだったが、やおいは何かを思い出したのか手を叩き、「そっだ! だつたらあ、秋葉原って所行きたい。何でも、そこでもこういう同人誌を売ってるんだって」

やおいの提案に、なぎさも秋葉原ならここからさほど遠く無いし、こんなに人も居ないだろうと考えると、

「秋葉原かあ．．．ここからそんなに遠く無いし、別に良いよ」

「ワアアイ」

（もう．．．帰りたい）

喜ぶやよいとやおおい、苦笑を浮かべるみゆきとあゆみと対照的に、真琴はトホホ顔を浮かべながら、一同の後を付いて行つた．．．

秋葉原に着いた一同は、電気街口を出て、中央通りにある同人誌を取り扱う店へと向かつた。なぎさ達に取つて幸いしたのは、コミケを早々に断念した為、この秋葉原には店の開店時間ぐらいに着いた事で、店内は割りと空いていた。やよいとやおいは、嬉しそうに店内を物色し、なぎさ、みゆき、あゆみ、真琴は、エツチな表紙を見ると、見る見る顔を真つ赤にして俯いた。他のお客さん達は、なぎさ達をニヤニヤしながら興味あり気に見つめ、その視線に耐えられなくなつたみゆき、あゆみ、真琴の三人、みゆきはやよいに話し掛け、

「や、やよいちゃん、わ、私達、外で待つてるから」

「ウン！分かつた」

（私もさつさと出たい．．．）

変顔浮かべたなぎさは、思わず心の中で呟いた。そんななぎさの気持ちも知らず、や



よいとやおいは、気さくに店の従業員に話し掛けると、店の従業員もそんなに忙しくないので、笑顔で色々教えてくれて、

「午後二時過ぎぐらいになると、コミケ帰りのお客さんで、閉店まで賑わうんだけど、午前は、お客さんは少ない方ですねぇ・・・」

なぎさは、恥ずかしそうにしながら、やよいとやおいを呼び、小声で話し掛けると、「で、どれ買うのよ？早く出たいんだから、早く決めて」

「エエエ!?折角空いてるし、色々見たい」

「ウンウン！表紙だけじゃ、ミラクル・ピースの参考になるか分からないしね？」

やおいの言葉にやよいも同意し、二人は目を輝かせて同人誌を物色するも、なぎさは、拝むように二人に話し掛け、

「お願いだから、適当に選んで早く出よう。奢って上げるからさあ」

「本当!？」

(ありえない!こんなエッチな本を買う倅めになる何て・・・)

なぎさはトホホ顔を浮かべるも、やよいとやおいの漫画に役立つなら、そう自分に言い聞かせ、恥ずかしさに耐え、エッチな同人誌を数冊購入した・・・

外で待っていたみゆき、あゆみ、真琴は、顔を真っ赤にしながら項垂れるなぎさに声を掛け、

「なぎささん・・・大丈夫ですか?」

「顔が真っ赤ですよ?」

「何かフラついている気もします」

みゆき、あゆみ、真琴に心配されたなぎさだったが、やおいは、更に奥のビルを指差し、

「ブラック先輩、次はあそこに行こうよ!あそこにあるのは何と・・・女性向けの、男の人同士が恋愛しちゃう同人誌専門何だつてえ!!」

「エエエ!?そういうのもあるの?」

やよいに聞かれたやおいは、意味深な笑みを浮かべ、

「これも勉強だよ、やよい!」

「そうだね、やおいちゃん」

「「エツ!」「」」

更にマニアックな店に一同を連れて行こうとする二人に、流石のなぎさも涙目になり、

「もう、もう二度と嫌だああ!帰るううう!!」

そう言うのと、なぎさはレジで買う時を思い出したのか、顔を隠して駅方面に歩き出し、みゆき、あゆみ、真琴も続いた。

「エエエ!? もう帰っちゃうのおお?」

「でも、良い勉強になったよ、やおいちちゃん」

「そうだね、帰って早速研究しようよ」

そんななぎさの気持ちなど知らず、やよいとやおいは、早速帰って追加エピを入れようと張り切っていると、やおいは、なぎさ達に聞こえないぐらい、小声でやよいに話し掛け、

「ねえ、やよい。折角だから、この同人誌参考にして、プリキユア達のエッチなイラストも描いてみようかあ?」

「エエエ!? みんなにバレたら・・・」

「見せなきや大丈夫だよ!」

「・・・それもそうだね?」

やよいは、やおいの提案に乗り、二人は和気藹々と構想を話し出し、その背中を、なぎさ達は不安そうに見つめた。

「ハア・・・私、恥ずかしくて、もう二度と秋葉原に来られないかも・・・」

「今回だけは同情するメポ」

なぎさは、ガツクリ項垂れ、コミュニケーション姿のメップルが顔だけ出し、そんななぎさを労った。

5、Wピース、漫画家デビュー！

お盆休みも終わろうとしていた8月某日・・・

その知らせは、突然もたらされた・・・

やよいは以前、やおいと共に編集者を訪ね、課題を出されていたミラクル・ピースを描き上げ、感想を聞こうと持ち込んだ。更に、同人誌で勉強した成果を試そうと、プリキュア達にセクシーなポーズを取らせたイラストを描いて、編集者に見せてみた。

「ウン！中々良いよね・・・こっちのイラストも、僕が預かっても良いのかな？」

「ハイ！」

「分かった！前より全然良いよ！ちよつとエツチなヒロイン物・・・これなら読者の反応も良いと思う。僕から編集長に頼んで、読み切りで一度載せて貰えるか頼んでみよう」

「ほ、本当ですか？」

「まあ、あまり期待はしないでね・・・」

編集者はそう言っていたが、それは現実となった！

編集者から電話を貰ったやよいは、緊張しながら話を聞くと、

「実は・・・ミラクル・ピースの月刊ジャンジャンでの掲載が決った！」

「エエエエ!?ほ、本当ですかあ？」

「ああ、実は〇〇先生が、この月の原稿間に合わなくてねえ……穴埋めになる作品を捜していたら、君達Wピースのミラクル・ピースが選ばれたんだ。おめでどう！」

「あ、ありがとうございます！やおいちゃんにも知らせなきゃ!!」

「発売は26日だから、楽しみにして！それと、出来ればお母さんと相談して、携帯を持つて貰えないかな？学校の時間に掛けるような事はしないけど、何時でも連絡取れる手段を持つておきたいから」

「分かりました。ママに聞いてみます」

電話を切ったやよいは有頂天だった……

読み切りとはいえ、こんなに早く夢が叶うとは想像もしていなかった。やよいは、自分の世界に浸り、やおいと共に、本屋でサイン会をしている自分達の姿を、思わず妄想して顔がニヤけた。その時、窓をコンコンノックし、やよいが慌てて窓を開けると、バッドエンドピースが窓から入って来た。

「ヤッホー！暇だから遊びに来たよ」

「誰かに見られたらまずいよお！やおいちゃんの姿で遊びに来て」

「ハイハイ、分かった、分かった」

バッドエンドピースは、そう言うことやおいの姿になり、やよいは嬉しそうにやおいの両手を握ると、

「それより、やおいちちゃん！何と、ミラクル・ピースが、月刊ジャンジャンで読み切りの掲載が決ったよ!!」

「エツ!?本当?」

「ウン!今、編集さんから連絡来たのおお!!」

「ヤツタねえ!」

「イエイ!」

やよいとやおい、二人はハイタッチをして喜びを分かち合った。やよいは、ハッと何かに気付くと、

「で、でもあの話を、バッドエンドプリキュアの他の四人に見られて平気なの?」

「平気、平気、やよいと漫画のコンビを組んだ事は教えたけど、ウチの四人、漫画とか興味無いし」

「そう、なら安心だね!」

やよいとおいは、話の流れで、自然とミラクル・ピースの続編の構想に入っていた・・・

そして、月刊ジャンジャンの発売日である26日がやって来た・・・

なぎさ達一同は、やよいからの報告で、今度漫画が月刊ジャンジャンに載るから、み

んなの感想を聞かせて欲しいと言われていた。キャンデイは、早く読みたいと、みゆきより先にやよいの家に遊びに行き、やよいと行動を共にして居た。普段漫画など読まないメンバーが多い一同も、仲間の晴れ舞台とあれば話は別で、一同は、月刊ジャンジャンを購入した。ミラクル・ピースは、自分達がプリキュア合宿で聞いていた内容とはかなり変わっていて、ちよつとエツちなヒロイン物に生まれ変わっていたものの、話自体は面白く感じられた。

「へえ、何かこの敵役の五人の少女、バッドエンドプリキュアみたいだなあ・・・」

なぎさは、そう思うと、思わずクスリとして読み終えた。やよいも携帯を買って、メルアドレスも聞いているし、感想でも書こうと思いつながら、何気に次のページを開いて目が点になった。

「な、何よこれえええ!?!」

そこにはこう書かれていた・・・

今回のミラクル・ピース読み切りに、君達が選んだエツちなヒロインが登場するかも!?!お気に入りのキャラの番号を三人まで選んで、官製はがきに住所、氏名、年齢、電話番号、ミラクル・ピースへの感想を書いて、月間ジャンジャン編集部まで送って欲しい旨が書かれていた・・・

1に描かれていたのはキュアブラック・・・両足のブーツを脱いで、足の裏を見せな

がら、大きくM字に開いた足から、スカートが捲れて露わになった太股と、ピッタリ張り付いたスパッツが、健康的なお色気を醸し出していた。

「ありえない！ありえない！ありえない！何て画描いてるのよおおお!!」

なぎさは、顔を真っ赤にしながら、慌てて本を閉じた・・・

2に描かれていたのはキュアホワイト・・・自らスカートを捲り、媚びるような視線で太股露わにパンツを見せて居た。

「やよいさんに、どういう了見でこんな下品な画を描いたのか・・・問い詰めなきや」

ほのかは思わず目付きが鋭くなり、漫画本を机に乱雑に置いた・・・

3に描かれていたのはキュアムーンライト・・・長いロングスカートが捲れ上がり、太股まで見えた、スラリと伸びた長い足を露わにし、誘うような視線で横たわって居た。

「やよい・・・一体どういうつもり!？」

険しい表情をしたゆりが、見るのも汚らわしいと本を閉じた・・・

4に描かれていたのはシャイニールミナス・・・天使のような微笑みを浮かべながら、ホワイト同様、自らスカートを捲り上げ、パンツを見せて居た。

「こ、これは・・・私!?な、何故やよいさんはこんな画を?」

ひかりは、休憩時間にTAKO CAFEのテーブルに座って読んで居たが、目を点にしながら困惑していた・・・



5にはブルーム、6にはイグレット、7にはブライト、8にはウインデイが描かれていた・・・ブルームは、笑顔を向けながらお尻を突き出し、イグレットは、誘うような視線で横たわりながら、右足を高々と上げて太股露わにした生足を披露し、ブライトは、流し目をしながら、右足の膝を立て、スパッツに隠れた股間の膨らみの中を、想像させるような挑発ポーズを取り、ウインデイは口元に笑みを浮かべながら、胡座をかいたまま風で靡いたように、捲り上がったスカートの中から生足を披露してパンツを見せて居た。

「な、何よこれえ!？」

「私達をこんな風に描くなんて、許せないわ!」

「やよいに、お灸を添えて上げなきや」

「エエ、自分がした事を、キツチリ反省させてあげなきやね」

咲、舞、満、薫は、PANPAPAのテラス席に座りながら、皆険しい表情を浮かべながら、咲が買って来た漫画を読んだ・・・

9にはドリム、10にはルージュ、11にはレモネード、12にはミント、13にはアクア、14にはローズが描かれていた・・・ドリムは、キスをせがむように潤んだ目を浮かべ、ルージュは、爽やかな笑顔で右足を蹴り上げて、股間付近のスパッツ丸見えの状態、レモネードは、はじける笑顔で右目を閉じて、ウインクしながら投げキッ

ス、ミントは、優しげな微笑を浮かべてうつ伏せに寝転びながら、お尻のスパッツが丸見えになるポーズを、アクアは、女豹のように惱殺的な視線でお尻を高々と突き上げ、ローズは、ドヤ顔を浮かべながら、スカートの中のスパッツを見せ付けるような姿をそれぞれ披露して居た。

「や、止めてえええ！」

「み、見てるだけで、恥ずかしくなってくる・・・」

「私のは、まだマシだけど、やっぱり嫌です」

「やよいさん、どうしてこんな画を描いたのかしらあ？」

「やよいいいい！こんな画を描いてどういうつもりよ？」

「エエ、みんなと連絡とって、やよいに直に問いたしましょうー」

ナッツハウスに集合した一同は、ココ、ナッツ、シロップを慌てて下に下ろし、のぞみは恥ずかしげに顔を隠し、りんも不機嫌そうにソツポを向き、うららとこまちも困惑気味に首を傾げ、かれんとくるみは、不機嫌そうな表情で叫んだ・・・

15にはピーチ、16にはベリー、17にはパイン、18にはパッションが描かれていた・・・ピーチは、おねだりするような表情で、乳輪が見えそうなくらい衣装を下げ、胸の谷間を見せ付け、ベリーは、左目閉じてウインクしながら、スカートを捲り上げて太股を露わにし、パインは、微笑みながらピーチ同様胸の谷間を露わにし、パッショ

ンは、挑発するような視線を浮かべながら、黒のタイツを脱いで右手で持ち、太股露わにした生足を披露した。

「な、何?!? 何でこんなポーズを?」

「やよいいいい! これじゃあたしは露出狂じゃないのよ!!」

「見ているだけで恥ずかしくなってくるよね……」

「ラブ、美希、ブツキー、みんなに連絡入れて……やよいが待つてる不思議図書館所に乗り込むわよ!」

せつなの言葉に三人も頷き返し、ラブは急いでなぎさ達一同に、メールを書いて送信した……

19にはブロッサム、20にはマリリン、21にはサンシャインが描かれていた……ブロッサムは、キスのおねだりをするように目を瞑り、マリリンは、Vサインしながら肩紐を外して衣装を脱ぎかけ、サンシャインは、ウインクしながらお尻を突き出した。

「こ、こんな画を描く何て……私、堪忍袋の緒が……切れましたああ!」

「な、何でやよいは、こんな画描いたんだろう?」

つぼみといつきは、困惑しながらも険しい表情を浮かべるも、えりかは変顔浮かべながら、

「全く、どうせなら、背や胸を一回り大きくしろって感じだよねえ?」

「えりか・・・ツツコミ入れる所そこ？」

つぼみといつきは、マイピースなえりかを見て呆気にとられた・・・

22にはキュアメロデイが描かれて居た・・・メロデイは、小悪魔風の視線で、股間付近が見えるか見えないかのギリギリで、女豹のポーズをしていた。

「な、な、な、何よ、これ!?私が何時こんなポーズしたつて言うのよおおお!!」

響は、自宅で何気なく買つて読んだ月刊ジャンジャンを見て、恥ずかしそうにベッドに叩き付けた・・・

23には、キュアリズムが描かれていた・・・リズムは、右目を閉じてウインクし、セクシーポーズをしながら、自らスカートを捲り上げて太股を露わにしていた。

「や、や、やよいいいいい!な、何て画を描くのよおおお!!」

奏は、弟奏太に買つてきて貰つた、月刊ジャンジャンを自室で読んで思わず叫んだ：：  
24にはビート、25にはミューズが描かれて居た・・・ビートは、艶やかな視線をしながら、お尻を振つて挑発しているかのような女豹のポーズで、ミューズは、可愛らしい愛想のある笑顔で。座りながら両手と両足を上げて、ハシャいで居るかのようなポーズをしていた。

「何これ!?何か意味があるのかしら?」

「やよいの考えてる事何て分かんないけど、スツゴク恥ずかしい・・・」

調べの館で、音吉に頼んで買ってきて貰った、月刊ジャンジャンを読んだエレンとアコは、やよいの真意が分からず困惑していた・・・

26には、キュアハッピーが描かれていた・・・ハッピーは、両手を振って笑顔を向けるも、そのスカートは下まで吊り落ち、ピンクのスパッツが丸見えになっていた。

「やよいちゃん、酷いよおお、こんな画描く何てえ・・・ハッピープウ」

本を読んだみゆきは、不満そうに頬を膨らまし、みゆきが置いた月刊ジャンジャンをやつて来た魔王が見ると、目を輝かせて、みゆきに内緒で翼に隠した・・・

27には、キュアサニーが描かれていた・・・サニーは、満面の笑みを浮かべながら胡座を掻き、スカートを自ら捲っていた。

「何やコレ!?ウチ変態みたいやんかあ・・・アホかあ!」

自室で本を読んでいたあかねは、呆れたように本を投げた・・・

28には、キュアマーチが描かれていた・・・マーチは、体育座りをしながらも、股間付近を見えるように座り、スパッツ越しの盛り上がった股間付近が丸見えになっていた。

「何よ、これはああ!?やよいちゃんつたらあ・・・ピース姿は描かないのに狡いよお」  
やよいのフェアじゃないやり方に、なおは不満そうに口を尖らせた・・・

29には、キュアビューティが描かれていた・・・ビューティは、艶やかな横座りで

太股を露わにし、右の掌を口で吹くようなポーズをしていた。

「これは!?何の意味があるのでしようか?」

自室で読んで居たれいかは、やよいの真意が読めず首を傾げた・・・

30には、キュアエコーが描かれていた・・・エコーは、小悪魔のような表情で、軽く舌を出し、お尻付近のスカートを捲つて、スパッツ丸見えの姿でポーズをしていた。

「は、は、恥ずかしい・・・やよいちゃんったら、どうしてこんな画を!?秋葉原で買った同人誌つて、この為に必要だったの?」

自宅に居たあゆみは、不満そうに口を尖らし、意味が分からず月刊ジャンジャンを読んで居るエンエンとグレルから、慌てて本を取り上げて隠した・・・

31にはソード、32にはエースが描かれていた・・・ソードは、服すら描いて貰えず、裸体に反省中の紙で胸と股間を隠し、エースは、右斜めに構え、自らスカートを捲り上げて投げキッスをするかのようなポーズを取らせていた。

「ひ、酷い!酷すぎます!!」

「何の目的があつてこのような画を描いたのか・・・問い詰めなければなりませんねえ」  
佐々木先生の家で、真琴とアン王女は、本を読んで憤慨していた。もつとも、ソードの画を描いたのは、やよいでは無くやおいであったのだが・・・

Wピースの漫画は、ひよんな事からみさき達も目にして居た。立ち読みしていた小学生の男の子が、自分達の顔を見ると、

「アハハハ、お姉ちゃん達、この漫画の悪役に似てるよ」

「「悪役!」」

気になった四人は、男の子から漫画を読ませて貰うと、その内容を見てワナワナ震えだした。そこに、何も知らずに現われたやおいは、

「アレエ!?みんなもこの辺に居たんじゃあ?私も・・・何?」

無言のあいとなみに両腕を掴まれたやおいは、みさきが手に持っているのが月間ジャンジャンだと知り、どんどん顔色が悪くなっていった・・・バッドエンド王国に連行されたやおいは、四人の沈黙に嫌な予感が漂い、顔から大量の汗を流した。みさきは、男の子から買った月刊ジャンジャンを指差し、

「酷いよお!バカなピンクって・・・思いつきり私じゃない!!」

「せや!下品な赤・・・これ、ウチの事やろう?」

「無駄飯ぐらいの緑・・・へえ、あたしの事そんな風に思ってたんだあ?」

「冷血で陰険な青・・・フフフ、本当にその通りの事してあげましょうか?」

みさき、あおい、なみ、れいな姿が、見る見るバッドエンドプリキュアに変化し、やおいは大慌てで

「ち、ち、違うよ！お話を盛り上げるために、ちよつと、ほんのちよつとデタラメを……」

「……言いたい事は……それだけ？自分の事は、美少女ガール何て描いて？」

「アアアン、ゴメンなさ〜い！許してえええ!!」

「……嫌!」

「バッドエンド・シヤワー!」

「バッドエンド・ファイヤー!」

「バッドエンド・シユート!」

「暫く氷の中で反省してなさい……バッドエンド・ブリザード!」

「ビイイイイイイ!許してええええ!!」

四人の攻撃を受けたやおいは、悲鳴を上げながら凍り漬けにされ、何度も謝り続けた……

一方、不思議図書館の秘密基地では、やよいはキャンディと一緒に、みんなが感想を知らせに来るの待つて居た。何度も左右に歩いては座り、また歩いては座り、何所か落ち着かない表情を見せて居た。キャンディは、テーブルの上にチョココンと座りながら、ミラクル・ピースを読んで居たが、

「やよい、良く分らないけど、キャンディは面白かったクル」



「フッフ、ありがとう、キャンデイ！感想第1号だね」

やよいは嬉しそうにキャンデイの頭を撫でて居ると、キャンデイは更にページを捲つて首を傾げた。

「やよい、お話終わったのに、まだ何か描いてあるクル」

「エツ?!ミラクル・ピースはあれで終りだよ?」

やよいが本を覗き込むと、それはやよいとやおいが、エロ同人誌を買った試しに、プリキュア達でエツチなイラストを描いた画だった。やよいは何故月刊ジャンジャンに載っているのか理解出来ず、慌てて携帯を手に取ると、編集者からメールが入っていた。やよいが読んでみると、そこにはこう書かれていた・・・

・・・やよいちゃん、実は、○○先生が急病で、15ページ分足りなかったから、君の描いてくれたイラストを、勝手ながらこちらで利用させて貰った事言うの、すっかり忘れてたよ・・・

(エツ・・・エエエエ!?)

やよいは、思わずその場に座り込み放心すると、このまま此処に居たら、命の保証は無い気がしてきた。

「キャ、キャンデイ、私急用思い出したから、みんなに・・・」

その時、不思議図書館の外が騒がしくなり、やよいは恐怖で引き攣りながら、思わず

テーブルの下に頭を抱えて隠れた。それと同時に、部屋のドアが勢い良く開き、

「やよいの……」

「やよいちゃんの……」

「やよいさんの……」

『バカはどこもおおお!?』

なぎさ達一同が怖い顔で乱入し、キャンデイは怯えながら後退りし、

「キャンデイ……知らないクルウウウ」

そう言いながら、テーブルの下を見たキャンデイは、一同から逃げるように二階に避難した。一同の視線がテーブルの下へと向けられる。急に静かになった事で、やよいが恐る恐る顔を上げると、怖い表情でやよいを睨む一同の視線と目が合った。

「ヒイヒイヒイ！ゴメンなさい！ゴメンなさい！ゴメンなさい！！」

やよいは慌てて後ろに飛び逃げ、恐怖でガタガタ震えながら、何度も謝り続け、不思議図書館に、やよいの悲鳴と謝り続ける声が、遅くまで響いた……

第百十三話：Wピース

完

## 第百十四話：夏休みの終り・・・

第百十四話：夏休みの終わりに・・・

## 1、魔王ゲーム

「やよいが、プリキュア達のちよつとエツチなイラストを、なぎさ達に内緒で描いていた事がバレ、やよいがお仕置きを受けていた同じ頃、魔王は、みゆきから内緒で手に入れた月刊ジャンジャンを読み、一人ニヤニヤしていた。

「やよいにこんな画が描けるとは、知らなかったカゲ・・・今度頼んで描いて貰うカゲ」  
魔王はニヤニヤしながら、更に他の漫画を読んで居ると、とある漫画の内容に目を奪われた。

「ハ、これは!?!・・・王様ゲーム?」

魔王は目をキラキラ輝かせるも、魔王には、王様ゲームの意味が良く分からなかった。  
魔王は、リビングにいる育代の下に移動し、育代に話し掛けると、

「みゆきママ、王様ゲームって、何かゲ?」

「エツ!?魔王ちゃん、王様ゲームに興味あるの?」

育代は、不思議そうに首を傾げるも、魔王の反応を見てクスリと笑い、

「私も、そんなに詳しい訳じゃ無いけど・・・」

育代は、苦笑気味に魔王に王様ゲームの内容を教えた・・・

割り箸などの棒状の物の端に、参加者の数と同じ数の棒に番号を振り、その中の一つには王様、もしくは王様と分かるような印がつけられ、当然ながらくじ引きをする際は、文字が見えないようにする。大凡の流れとしては、

1、参加者が順番に、もしくは一斉にくじを引く。

2、全参加者が声を合わせ、王様だくれだ？などの掛け声に合わせて、王様くじを引いたものが名乗り出る。

3、王様はその権限で、○番が○○をするとか、○番と○番が○○をするとかの命令を出す事が出来る。

4、指名された者は、一同の○番だくれだ？の掛け声に合わせて名乗り出て、王様に命令された内容を実行する。

5、くじを回収し、再び王様を決める。

魔王は、育代の説明に納得したのか、コクコク何度も頷き、

「つまり、みゆきママは魔王にチューするとかはダメで、○番は魔王にチューするって言えば良いカゲ？」

「まあ、そういう事ね・・・今度試しにみんなですてみる？」

「本当カゲ!？」

大喜びする魔王を、育代は目を細めながら見つめた。みゆきの部屋に戻った魔王だったが、気持ちが高ぶり色々想像して居ると、直ぐに試して見たい衝動に駆られた。

「確かみゆきは、やよいの漫画の感想を伝えに、不思議図書館に行くって言ってたカゲ・・・俺も行くカゲエエ」

魔王は、月刊ジャンジャンを手に持ち、みゆき達の居る不思議図書館へと向かった：

その不思議図書館では、一同に取り囲まれたやよいが、正座をしながらシヨンボリしていた。やよいも反省しているようで、なぎさ達の怒りも徐々に収まった所に、魔王が月刊ジャンジャンを持って現われた。

「オオ!?!お前達も一緒だったカゲかあ・・・これは好都合カゲ」

『魔王!?!』

なぎさ達は、魔王が一体何しに来たのかと、怪訝な表情を浮かべるも、魔王は機嫌が良さそうにニコニコしていた。みゆきは不思議そうに首を傾げながら

「魔王、何か嬉しそうだねえ?」

「カゲエ! 記憶の手掛かりを見付けたカゲ!!」

『記憶の手掛かり!?!』

「そうカゲ！この本を読んで、何か思い出せそうなゲームが載ってたカゲ」

「アツ!?月刊ジャンジャン」

やよいは、魔王が手に持つてる月刊ジャンジャンを見て、思わず顔が引き攣った。この本に載ったプリキュア達の、少しエツちなイラストの為に、今まで一同に散々叱られていたのだから・・・

(ど、どうしよう!?またみんなの機嫌が悪くなっちゃうかも?)

やよいは、一同の顔色を窺いながらビクビクするも、一同は、魔王が発した記憶の手掛かりという言葉の方に関心が移ったようで、やよいは思わずホツと安堵した。やよいは魔王に話し掛け、

「記憶の手掛かりって、月刊ジャンジャンにあったの?」

「随分身近にあったのねえ?」

美希も心底驚いたようで首を傾げた。魔王はとあるページを開くと、興味があるのか近寄ってきた一同に見せた。ほのかとなぎさは、同じような変顔を浮かべ、

「エツ!?これが記憶の手掛かり?」

「ハア!?これ、ただの王様ゲームじゃないの?」

「そうカゲ!俺は、魔王ゲームとしてやってた記憶があるカゲ」

(本当は、真っ赤な嘘カゲ)

魔王は内心舌を出し、魔王に王様ゲームの話題を振られた一同は、思わず呆気に取られた。なぎさは微妙な表情を浮かべると、

「魔王ゲーム!?! あんた、本当にそんな事してたの?」

「した記憶があるカゲ! だ・か・らあ……お前達と魔王ゲームをすれば、何か思い出せそうな気がするカゲ」

魔王の不気味な笑みを見て、困惑顔の美希は、冷めた視線で魔王に話し掛け、

「フウウウン……あたし達と王様ゲームじゃなくて、魔王ゲームをしたいつて言うの?」  
「そうカゲ! 協力してくれるカゲ?」

『断るわ!』

一同は、まるでタイミングを合わせたかのように、一斉に魔王の頼みを断った。見る見る魔王の顔は不機嫌そうになり、

「何でカゲエ!?!」

首を傾げる魔王を、美希とのぞみがジト目で見つめ、

「何でつて、自分で今まであたし達にしてきた事、考えてみなさいよ!」

「どうせ、イヤらしい事考えてるんでしょ?」

魔王は、のぞみに凶星を指されて思わずギクリとし、一同の冷ややかな視線が、魔王に浴びせられた。魔王は、このままではまずいと考えたのか、

「そんな事、ちよつとしか考えてないカゲエ」

「あのさ・・・そこは嘘でも良いから、否定するところっしょ」

呆れ顔のえりかにツツコミを入れられた魔王だが、

「俺は正直者だから仕方ないカゲ：やってくれなきや、嫌カゲ、嫌カゲ、嫌カゲエエエエ  
！」

「子供かあ！あんたは、全く・・・」

なきさは、床を転がりながら駄々を捏ねる魔王に、呆れたように話し掛けるも、ちよつと魔王に哀れみの気持ちもあつた。なきさは魔王を諭すように話し掛け、

「裸になれとか、そういう命令は絶対しない？」

「そういうのも有った方が、盛り上がると思うカゲ？」

「盛り上がるかあ！そういう行為で喜ぶの、あんただけだから!!」

「裸じゃなきや良いカゲ？」

「一抹の不安はあるけど・・・裸を無しにするなら、参加してあげてもいいけど・・・」

「な、なきさ、本当カゲ？」

『エエエエ!?やるの?』

なきさが、魔王ゲームに参加しても良いと告げると、一同は思わず目を見開き、驚いた表情を見せた。なきさは苦笑しながら、



「まあ、魔王の記憶の手掛かりになるっていうなら・・・」

「絶対嘘だと思うわ」

せつなは真顔で即座に否定し、他の一同も頷いた。なぎさもそう思っては居たのか、せつなの言葉にコクリと頷き、

「まあ、私もそうだとは思うんだけど、何だかんだ言っても、魔王も私達には色々協力してくれてるしねえ」

「なぎさあああ、以前メツプルが言ってたように、お前、本当は優しいカゲなあ・・・」  
「お世辞を言っても、何も出ないから」

魔王は少し感動したのか、目をウルウルさせながら、以前なぎさの部屋でメツプルから聞いた事を思い出していた。なぎさが参加すると表明した事で、一同も不本意ながら魔王ゲームに参加を決めた。魔王は、育代から分けて貰った割り箸を用意すると、手回しの良い魔王に一同は驚き、変顔浮かべた咲が魔王に話し掛け、

「ねえ、魔王・・・何か最初から、あたし達が参加するの見越してない?」

「お前達なら、きつと協力してくれるって信じてたカゲ」

「何か良いように利用されてる気もしますねえ?」

「つぼみ、それは気のせいカゲ」

「そうでしょうか?」

つぼみは困惑気味に首を傾げている内に、魔王はくじの準備を終えた。

## 2、暴君

人数が多い為、魔王以外3グループに別れて魔王ゲームに参加する事となった。第1グループは、なぎさ、薫、りん、かれん、ラブ、いつき、奏、アコ、やよい、れいか、アン王女で、第2グループには、ほのか、舞、満、のぞみ、うらら、美希、祈里、えりか、響、あかね、なおで、第3グループには、ゆり、ひかり、咲、こまち、くるみ、せつな、つぼみ、エレン、みゆき、あゆみ、真琴に別れた。

「じゃあ、最初はなぎさ達のグループカゲ」

ニコニコした魔王に呼ばれ、第1グループのメンバーが魔王に近付いた、一同がくじを掴むと、

『魔王はだくれだ?』

一同が一斉にくじを引き上げると、魔王の顔が描かれた箸を引き当てたのは、魔王だった。

「カゲカゲカゲカゲ!俺が魔王カゲエ!!」

魔王はスケベ顔でニヤニヤし、なぎさ達の顔から血の気が引いた。一体どんな事をさせようとするのか想像すると、一同はゴクリと生唾を飲み込んだ。魔王はラブを見て内心ニヤ付くと、

(カゲカゲカゲ、実は、ラブがくじを引き上げる時、数字が見えたカゲ！ラブは6番カゲ……)

魔王は軽く咳払いすると、第1グループのメンバーを見渡し、

「じゃあ、命令するカゲ……9番は、6番の胸を揉むカゲ！」

『……いきなりい!?!』

魔王のエツチな命令がいきなり下り、一同は不満そうに魔王を睨み、なぎさは呆れたように魔王に話し掛け、

「あんたは、全く……」

「裸じゃないから良いカゲ。さあ、9番は6番の胸を揉むカゲ！」

ラブは、顔を真っ赤にしながら手を上げてくじを見せ、

「6番の人、ゴメン！私が9番何だよねえ」

(アレエエ!?)

魔王は、ラブが9番だと申告した事で、思わず首を傾げるも、直ぐにある事に気付いた。

(し、しまったカゲ！俺は、9と6を逆に見てたカゲ……じゃあ、6番は一体!?)

困惑した魔王がラブ以外のメンバーの顔を伺うと、不機嫌な表情をしたアコが無言でくじを一同に見せた。奏は思わず目を点にし、

「アコが6番!?!」

「チッ!」

アコが6番だと知り、薫が思わず自分のくじを見て舌打ちし、思わずなきさ達が苦笑した。ラブはアコに謝りながら、

「何かゴメン・・・」

「ウウウウウ」

胸の大きなラブが、まだ少女の体型のアコの胸を揉む異様な光景に、一同は沈黙した。アコは、恥ずかしさと悔しさが混ざったような、複雑な表情で魔王からの命令をクリアした。

「じゃあ、次は第2グループカゲ!」

魔王に呼ばれた、第2グループのメンバーがくじを握った。ほのかは困惑した顔で魔王に話し掛け、

「今見たいのは無しよ?」

「さあ、それは分からないカゲ!」

惚け顔の魔王を見て、なおは困惑気味に、

「とにかく、魔王にさえ当らなければ・・・」

『魔王はだくれだ?』

一同が一斉にくじを引き上げると、魔王の顔が描かれた箸を引き当てたのは、再び魔王だった。

「カゲカゲカゲカゲ！また俺カゲ!!」

高笑いする魔王に、舞は怪訝な表情を浮かべながら話し掛け、

「魔王、くじに細工してない？」

「そんな事してないカゲ。日頃の行いが良いからカゲ」

「何かムカツクなあ．．．」

魔王の話し方に少しイラ付いたえりかが思わず頬を膨らませた。魔王は第2グループのメンバーを見回すと、

「じゃあ命令するカゲ．．．3番と10番は、ウインクしながら魔王ちゃん大好きって言うカゲ！」

『．．．．．』

第2グループのメンバーは、思わず沈黙しながら自分が引いたくじを確認した。見る見るガツクリ項垂れたのはのみと響で、二人は気怠そうな表情で顔を見合わせた。

「さつきよりマシと言えばマシだけど．．．」

「恥ずかしいよねえ．．．」

「さあ、3番と10番は、早くウインクしながら魔王ちゃん大好きって言うカゲ」

「分かったわよ・・・魔王ちゃん、大好き・・・って、恥ずかしいいいいい」

顔を真っ赤にしながら、のぞみと響は恥ずかしげにウインクしながら、魔王の命令を実行した。魔王はご機嫌でフワフワ宙に浮かび、のぞみと響は、力が抜けたようにガツクリ膝から崩れ落ちた。

「次は第3グループプカゲエ！」

魔王に呼ばれた第3グループのメンバーが、渋々魔王に近寄りくじを握った。ゆりは一同を見回し、

「みんな、魔王が魔王のくじを引かないように頑張りましょう」

『エエ！』

ゆりの言葉に、他の第3グループのメンバーが力強く頷き返した。

『魔王はだくれだ？』

くじを引き、一斉に一同がくじを見ると、みゆきの表情が輝き、

「ヤッター！私が魔王だ!!」

「」「良くやったわ、みゆき!!」「」

ゆり、咲、くるみ、せつな、エレンが、みゆきの肩を叩いて激励し、

「みゆきちゃん、ナイス！」

あゆみが思わずみゆきに抱き付いた。

「『流石みゆきさん!』」

ひかり、こまち、つぼみ、真琴が、笑みを浮かべながらみゆきを称えた。魔王は軽く舌打ちし、

「チツ・・・まあ、今回はみゆきに譲ってやるカゲ」

みゆきが魔王を引き当てた事で、一同はホツと安堵し、みゆきも簡単な命令にしようと考えたと、

「じゃあ、1番と5番の人が握手するっていうのはどうかなあ?」

「安心しました!私が1番です」

「本当よねえ・・・私が5番よ!」

ひかりが、右手で胸を押さえてホツと安堵した表情を浮かべ、くるみも魔王をドヤ顔で見ながら番号を明かした。二人は軽い気持ちで右手を差し出して握手するも、それを見て居た魔王は、やれやれといった表情で頭を左右に振り、

「それじゃつまらないカゲエ・・・先代魔王特権発動!1番と5番は、現在の魔王の尻を叩くカゲエ!!」

「エエエ!?何、先代魔王特権ってえ?」

魔王の突然のルール変更に、みゆきが驚いて聞き返すと、魔王は反り返りながら、

「二回以上続けて魔王を引いたら、一度先代特権を行使出来るカゲ」

「何それ!? そんなの聞いて無いよおお・・・ハッピープウ」

魔王の滅茶苦茶な提案に、みゆきは頬を膨らませて抗議し、他の一同も魔王にブーイングを浴びせた。

「フフフン、悔しかったらお前達も、二回続けて魔王を引けば良いカゲエー! さあ、1番と5番は、現在の魔王の尻を叩くカゲエエ!!」

「何て悪知恵が働くのかしら!？」

「魔王を甘く見てましたねえ」

「みゆき・・・ゴメン!」

「みゆきさん、すいません」

くるみとひかりは、困惑しながらも、魔王ゲームの立案者である魔王の命令を実行し、みゆきのお尻を軽く叩き、みゆきは恨めしそうに魔王を見つめた。

「さあ盛り上がって来た所で、再び第1グループカゲ!」

上機嫌の魔王に反し、なぎさ達一同のテンションは盛り下がって行った・・・

魔王は、立て続けに魔王くじを引き当て、第1グループでは、2番のかれんと、7番のれいかが魔王の頬にキスをし、第2グループでは、4番の祈里と、11番のなおが、プリキュアに変身して、月刊ジャンジャンに載ってる自分達のイラスト通りのポーズを取らされた。第3グループでは、8番のこまちと、9番の真琴が、魔王に頬擦りさせられ



た。ほのかは魔王を指差し、

「いくら何でもおかしいわ！絶対くじに細工してるでしょう？」

「そう思うなら、他の奴がくじを持ってても良いカゲ」

「そうさせて貰うわ！くじは私が・・・」

魔王の不正を疑い、今度はゆりがくじを持って一同にくじ引きさせるも、再び魔王を引き当てたのは魔王だった・・・

「どうして魔王ばかり!？」

「何か細工してあるとしか思えないわ！」

「でも、証拠が無いんやでえ・・・」

満が首を傾げ、せつなは不正をしていると訴えるも、あかねは、証拠が無いのではどうしようも無いと肩を竦めた。魔王は高笑いを始め、

「カゲカゲカゲ！キングオブ魔王の前に、敵は無いカゲエ!!」

暴君魔王の天下が続いたものの、ようやくその天下が終わろうとしていた・・・

3、今まで世話になったカゲ

それは、第3グループの4巡目で起こった。

『魔王はだ〜れだ?』

第3グループのメンバーがくじを引き当てた時、せつなは思わず拳を握り、更に魔王が引いたくじを凝視し、魔王が引いたくじが1番だという事も見抜いた。

「私が魔王のようね！」

「良かったあ・・・さつき先代魔王特権も使ったし、これで魔王に邪魔されずに命令を実行出来ますね？」

「エエ、この下らないゲームを、これで終りにして見せるわ！」

『オオオオ!!』

せつなの自信に漲る表情を見て、思わず一同が響めいた。せつなは軽く咳払いすると、

「じゃあ、命令するわよ？1番は・・・このゲームを終わらせて、この世界から追放よ！」

「カゲエエエエエエエエ!!」

『エエエエ!!』

せつなの、魔王としての非情の命令が、1番を引いた魔王に下された。そのエグイ命令には、他のメンバーもドン引きし、ラブは慌ててせつなに話し掛け、

「せ、せつな、いくら何でも、その命令はやり過ぎじゃ？」

「いえ、これぐらいやらなきゃ、1番の人には分からないわ！」

(とはいえ、私も本気で言ってる訳じゃ無いけど・・・きつと魔王は泣きついてくるわ！)

せつなは、本心から魔王を追放しようと考えた訳では無く、魔王を少し懲らしめよう  
とこんな命令を出し、魔王が泣きついてきたら、許して上げるつもりだった。魔王は暫  
らく沈黙し、なぎさ達一同の顔を一人一人ジイと見て行くと、

「お前達と会って数ヶ月・・・色々楽しかったカゲ！」

「エッ!?魔王、何言って・・・」

魔王のしんみりした表情に、みゆきはハツとし、なぎさも魔王の異変に気付いて、

「ちよ、ちよつと、魔王!?せつな、やり過ぎよおお！」

「ま、待って、魔王！冗談、冗談だから・・・魔王？」

せつなも慌てて魔王を引き留めるも、魔王は一同に満面の笑みを浮かべると、

「みんな、今まで世話になったカゲエ！」

そう言い残し、魔王は不思議図書館から飛び出して行った。一同は顔面蒼白になり、  
魔王の後を慌てて追うも、魔王の姿は忽然と消えて居た。みゆきは、膝から崩れ落ちて  
泣きじやくり、

「ウワアアアアン・・・せつなさん、酷いよおお」

「ゴ、ゴメン、まさか本気にする何て・・・私、魔王を捜して連れ戻してくる！」

せつなは、慌ててアカルンを呼び出し、魔王の行きそうな場所を探すも、魔王の姿は  
忽然と消えたままだった・・・

「どうしよう!!まさか本気にする何て……魔王、何所行っちゃったのよ?」

せつなの目からポトポト涙が零れ、他の一同に会わせる顔の無いせつなは、涙を拭つて、ウエスターとサウラーに協力を仰ごうと、ラビリンズへと戻った。

「ウエスター、サウラー、あなた達に頼みがあるんだけど……」

せつなは、沈痛な表情で二人に話し掛けたが、ウエスターとサウラーは、せつなの顔を見ると慌てて近付き、サウラーは怪訝な表情で逆にせつなに話し掛け、

「イース、これはどういう事だい!!?」

「エツ!?何の事?」

状況が読めないせつなが、首を傾げながら二人に聞くと、困惑顔のウエスターは、少し大声で話し出し、

「それはこっちのセリフだ!いきなり魔王の奴が現われて……」

「エツ!?魔王、ラビリンズに来てるの?」

「来てるのじゃない!いきなり現われたかと思えば、イースに言われて、此処で暮らす事になったからと、お前の部屋に……」

「エエエエ!?!私の部屋に?」

ウエスターとサウラーの話聞いたせつなは、ラビリンズで暮らしていた時の、自分の部屋へと向かうと、せつなの部屋は、水着の女の子のポスターがあちこちに貼られて

居て、思わずせつなの目が点になった。

「フフン、フフン……」

「ま、魔王!？」

「ン!?せつな?お前に追放されたから、今日からここに住む事に……」

魔王の言葉が終わる前に、せつなは魔王に駆け寄って抱きしめると、目から涙をポロポロ零し、

「魔王……ゴメン!私が悪かったわ、みんなも心配してるし、帰って来て!!」

「でも、俺はせつなに追放されたカゲエ……」

「あれは冗談だったの、魔王の心を傷付けたなら謝るから……お願い、帰って来て!」

「でも、部屋の模様替えもしたし……せつな、今日一緒に寝てくれるカゲ?」

「分かった!」

「またみんなで、魔王ゲームしてくれるカゲ?」

「たまになら、多分……」

「なら、帰るカゲエエ!」

(ハア……何だか良いように利用された気もするけど……)

せつなはそう思いながらも、魔王をギュッと抱きしめ頬擦りして再び謝った。その様子を見たウエスターとサウラーは、何も言わず二人の姿を、目を細めて見つめる様は、兄

のようだった。せつなと魔王は、二人に言葉を掛けると、みんなが待つ不思議図書館へと戻って行った・・・

「魔王!?!良かったああ・・・もう、心配させないで!」

魔王が戻って来た事で、なぎさもホッと安堵したのか、思わず目から涙を零した。魔王は、一同を心配させて居た事に気付かされ、照れくさそうに顔を赤らめながら、

「心配掛けて・・・ゴメンカゲ」

『魔王、お帰り!』

『お帰りなさい!』

涙を拭う者、笑みを浮かべる者、一同の心には、魔王の存在は大切な仲間として無くてはならないものになって居た。魔王も嬉しそうに羽を動かして宙に浮くと、

「オオオ! ただいまカゲエエ!!」

一同が広げる手の中に、魔王は嬉しそうに飛び込んで行った。そんな中、真琴はある事を思い出し、

「そう言えば・・・みんなで魔王ゲームをしたけど、魔王の記憶って、少しは戻ったの?」

「エツ!?! エエエエと・・・」

「ハア・・・やっぱり嘘だったのね? でも、もう怒る気力も湧かないわ」

『フフフフ、そうね』

せつなの言葉に、一同も思わず笑みを浮かべた・・・

4、8月31日

8月31日・・・

一部の学校では、既に新学期も始まっている学校もあるものの、その日は宿題をやつて居ない者達に取つて、地獄の日の始まりだった・・・

来海えりかは慌てていた・・・

中学時代からマイペースなところは変わらないえりかは、つぼみといつきに何度も注意されて居たが、えりかは秋の学祭のプランに追われ、夏休みの宿題を後回しにしたツケが、一気にえりかへとのし掛かっていた。

「つぼみいいい！ヘルプ！ヘルプミィ〜!!」

えりかは自室の窓を開けて、隣に住むつぼみに助つ人を頼もうと試みるも、つぼみの部屋の窓が開かれる事は無かった。えりかは頭を抱えながら悶え、

「つぼみ〜、何所行っちゃったのよお？親友の大ピンチだよおおお!!」

「大体、えりかは毎年同じ事を繰り返し過ぎですよ」

えりかのパートナーであるコフレは、毎年同じ事を繰り返すえりかを見て、やれやれ

といった表情で首を左右に振った。えりかは不満そうに頬を膨らませ、  
「何よおおお・・・あたしだって、秋の学祭の構想したりして、忙しかったんだから仕方ないじゃん」

そう言いながらも、えりかは携帯を手に持つと、つぼみに電話を掛けた。だが、中々つぼみが電話に出ず、痺れを切らしたえりかは、いつきにも電話を掛けるも、いつきも電話に出る事は無かった。えりかは頭を両手で抱えて悶え、

「アアア！つぼみもいつきも電話に出ないじゃん!!親友のピンチに何やってるんだかああ」

「つぼみもいつきも、毎年の事だから、どこかに避難してるですう」

コフレは、悶えるえりかを冷めた視線で見つめた。諦めないえりかは、つぼみといつきにメールを送ると、数分後によくやくつぼみからメールが来て、えりかは慌てて見てみると、つぼみはいつきと共に、図書館に居る事が分かり、えりかはコフレを拉致するかのように小脇に抱え、慌てて自宅を飛び出して行った。

図書館に着いたえりかは、全速力で駆け続けたせいか息が荒く、ハアハア荒い呼吸をしながら館内を見渡すと、手招きするつぼみ、苦笑するいつきに気付き目を輝かせた。

「つぼみいいー！いつきいいー！」

「シッ！」



えりかは、地獄に仏を見たように、嬉しそうに二人を見付けて思わず大声を出し、つぼみといつきに慌てて窘められた。

「つぼみ、いつき、ヘルプ！ヘルプミイ!!」

「ハア・・・こんな事だろうと思つて、いつきと一緒に図書館で待機していて、どうやら正解でしたねえ？」

「うん！毎年えりかには泣きつかれてたから、今年もそうだろうと思つてたら案の定・・・」

「えりか、私達が手伝いますから、解らない所があつたら言つて下さい」

えりかの行動を読み、既に手伝う準備をしていたつぼみといつきを見て、目をウルウルさせたえりかは、二人に抱き付き、

「持つべき者は親友だよおお・・・で、国語はつぼみに、数学と英語はいつきに任せて・・・」

「えりか、教えるから自分でやらなきや」

「トホホホ・・・」

嘆きながらも、二人が側に居てくれるだけで、宿題が終わるような気がするえりかだった・・・

桃園ラブは、自分の部屋で項垂れて居た・・・

ラブは、勉強はあまり得意な方では無く、苦手な数学の宿題を後回しにしたツケがたり、集中力が欠けていた。その側では、美味しそうにアイスを食べるシフォンとタルトが居て、ラブはチラリと二人を羨ましそうに見つめた。時計を見れば、もうすぐ10時半だった。ラブは溜息を付くと、

「せつな、早くアルバイトから帰って来ないかなあ・・・」

せつなは、バッドエンド王国との戦いが始まり、再び四つ葉町で暮らすようになった。ラブの母あゆみ、父圭太郎は、せつなをラブ同様自分の娘同然に思っ居て、せつなは、ラブと同じ高校に通って居たものの、少しでもお父さんとお母さんの役に立ちたいと、あゆみのパート先であるスーパーにアルバイトに行っ居た。

「ピーチはん・・・宿題やらな、アカンちやいますの?」

「分かつてるよお・・・分かつてるけど、今はちよつと休憩」

「そんなんしてたら、後でパッションはんはんに怒られるでえ・・・アツ!!」

突然タルトが大声を出し、ラブとシフォンは思わず驚いて体をビクリとさせ、

「タルト、脅かさないでよ」

「いやあ、ワイとした事が、スツカリ忘れてもうたわ・・・ピーチはんはんに、パッションはんからの言っ居て頼まれてたんやあ」

「エツ!?!せつなが私に?」

「せや、ピーチはんの事だから、勉強に行き詰まるかも知れないから言うて、これを渡されたんや」

タルトは、せつなから預かったノートを手渡した。そこには、今正にラブが行き詰まっていた数学の公式を、分かりやすく解説して書いてあった。せつなのノートを参考に解き始めると、今まで悩んでいたのが嘘のように、スムーズに問題が解けていった。

「終わったあああ！せつなあ、ありがとう!!」

ラブは、せつなのノートを拝みながら、せつなに礼を述べた・・・

北条響は怒られて居た・・・

奏の店である Lucky Spoon のテーブル席に座って口を尖らせている響の前には、奏とエレンが仁王立ちし、アコは少し離れたテーブル席に座り、奏の弟奏太と共に、カップケーキを食べながら、呆れながら成り行きを見て居た。ハミイは、響の席の下で、ガツガツカップケーキを食べ、ピーちゃんに興味無さそうに空へと散歩に出かけた。奏太はチョコのカップケーキを頬張りながら、

「まっ、響姉ちゃんが、家の姉ちゃんに宿題忘れて怒られるのは、小学生の頃からだから、見慣れてるって言えば、見慣れてるよなあ」

「フウウン・・・ようは成長してないのね」

アコは呆れた視線を響に送り、生クリームを頬張った。

「響いい！この間のプリキュア合宿で聞いた時、ほとんど終わってるって言ってたわよねえ？」

奏は、少し痲痺気味に響に問うと、響は惚け顔で首を傾げ、

「アレエ!?! そうだっけ?」

「何惚けてるのよ!」

そんな響の態度に、奏は顔を顰めて怒り、エレンは響を哀れむように、

「ねえ響、宿題忘れて先生に怒られるのは、響自身なのよ?」

「それはそうだけど・・・分からないんだからしょうがないじゃん」

奏は、そんな響の態度に更に機嫌を損ね、

「だったら、私達に聞けば良いでしょう?」

「だから、こうして聞きに来たんじゃない!」

「だから、何で夏休みの最後の日に聞きに来るのよ?」

「色々忙しかったの!」

二人のやり取りを聞いていたエレンは、このままでは埒が空かないと思ったのか、奏を宥め、話を進めようと響に話し掛け、

「それで響は、何の科目が分からないの?」

「ウウウン……とくに数学と英語、ぜひ奏とエレンの力を借りたくて……」

「そ、そう素直に聞いてくれれば、私も……で、何所が分からないの？」

響の哀願する視線に、奏はさっきまで怒っていたのも何処へ、椅子に座って響に宿題を教えだし、エレンは思わずクスリと笑いながら、奏同様椅子に座って響に宿題を教えた……

みゆき、あかね、やよい、なおの四人は、絶望の表情を浮かべながら、れいかの家目指していた。みゆきの頭の上にはキャンデイが乗って居るも、キャンデイはそんな一同とは逆に、遊びに行けると思っているのかハシヤギ、あかねは、そんなキャンデイを羨ましげに見つめながら溜息を付き、

「ハア……キャンデイはエエなあ！ウチらはアカン……さつき佐々木先生に会った時、つい宿題終わってる言うたけど」

「私は数学が……」

「あたしは社会が……」

「ウチは英語が……」

「私何か全部だよおお」

「それはやらなさすぎー！」

やよいは数学、なおは社会、あかねは英語、みゆきは全部の宿題をやつて居なかつたものの、れいかも誘つて遊びに行こうと歩いて居ると、途中で買ひ物に来ていた佐々木先生とアン王女に出くわし、四人が遊んで居るのを見た佐々木先生は、宿題も終わつて居るんでしょう？と四人にプレッシャーを掛けた。

「こんな時、頼りになるのは・・・」

「れいか！」

「れいかちゃん！」

四人の意見は纏まり、れいかの家へと歩いて行くと、途中でれいかと出会い、四人は我先にれいかに取り縋つた。

「み、皆さん、一体どうしたのですか？」

「れいかああ・・・」

「れいかちゃん・・・」

「「宿題手伝つてえええええ！」」

「エッ!？」

れいかに縋り付き、宿題を手伝つて欲しいと泣きつくみゆき達四人に、困惑の表情を浮かべたれいかだったが、

「「「ついでに、こつちの宿題も手伝つてえええええ！」」」

「「「エッ!」」」

突然背後から声が掛かり、後ろを振り向いたみゆき達は、自分達と同じようにトホホ顔を浮かべた、みさき、あおい、やおい、なみが居て、その後ろで、我関さずといった表情でジューズを飲むれいなが居た。

「みさきちゃん達も?」

「ウン!」

「そつちのビューティに頼めばエエやろう?」

困惑顔のあかねに、れいなに頼めばいいと言われたみさき達は、背後に居るれいなを見ると、れいなはソッポを向き、やおいはトホホ顔を浮かべながら、

「こつちのビューティは、頼んでも無視されちゃうし・・・そうだ! Wビューティ以外みんな集合!」

『何?!』

突如やおいに招集された一同は、怪訝な顔で集まってきた。キャンディは、みゆきの頭から飛び降り、れいなの側に寄ると、れいながキャンディを抱き上げた。キャンディは不思議そうに首を傾げ、

「れいか、みんな遊びに行かないクル?」

「この様子では無理なようですねえ・・・また後日みんなで行きましょう」

れいかは、宿題をやつて居ないみゆき達は、遊び所では無いだろうと考え、キャンデーの頭を撫でながら論じた。やおいは、れいかとれいな以外の一同を呼び寄せると、

「ねえねえ、こうなつたら、私達とあなた達で勝負しない？無理矢理二人のビューティも参加させて、負けた方のビューティが、私達の宿題やるつていうのはどう？」

「ほう、面白いなあ……負けてもウチらにメリツトあるし」

『ウン！』

やおいの提案に、あかねも満更でも無い表情を見せ、みゆき達一同も頷いた。それとは逆に、そんな一同の悪巧みが聞こえたれいかとれいなは、呆れたような表情を浮かべながら、

「ちよつと待つて！」

「何故私達が、みなさんの宿題をしなければならぬのでしょうか？」

「ハア……醜い！自分の宿題ぐらい、自分で片付けなさい!!」

れいかとれいなからダメ出しをされた一同ではあつたが、皆同じような表情を浮かべると、

『それが出来れば苦労しない！』

「開き直りましたね？」

「情けない……」





(れいか・・・)

(れいかちゃん・・・)

((ビューティ・・・))

((((助けてええええ!!))))

みゆき達八人は、れいかとれいなに目で助けてとアピールして訴えるも、れいかには違う意味に取られ、れいなにはソツポを向かれた。佐々木先生と堀毛先生は、補習に集中しない一同に気付き、

「あなた達！ちゃんと前を向きなさい!!」

「宿題終わらずまで、帰れませんか？」

『そんなあああ!!』

真琴は、今までのお返しとばかり、やおいとやよいを見て指差しながら、お腹を抱えてクスクス笑って居た。そんな真琴を、みゆき達が口を尖らせて、抗議するような視線を向けて居た・・・

第百十四話：夏休みの終り・・・

完

## 第百十五話：お仕事再開

## 1、嫌み

夏休みも終り、バッドエンド王国で再び過ごすバッドエンドプリキユア達を、ジョーカーは室内に集合させた。ジョーカーは、薄暗い部屋の中を行ったり来たりしながら、バッドエンドプリキユア達に嫌みをタツプリと聞かせ、

「バッドエンドプリキユアの皆さん、遊び歩いて、さぞかし有意義な時間を過ごされたんでしようねえ？ですが・・・遊びの時間は終りですよ！今日からは、あなた方がさぼったバッドエナジーの回収を、ちゃんとやって貰いますよ！」

「エエエ!?私、夏休みの時も少しは回収したよお？」

ジョーカーに注意されると、バッドエンドピースは不満そうに頬を膨らませた。ジョーカーは、何かを思い出したように両手を一度叩き、

「はいはい、確かにそうでしたねえ？珍しく、バッドエンドピースだけは集めてらっしゃいましたねえ」

「[[[ピースの裏切り者おお！]]]]」

バッドエンドハッピー、サニー、マーチ、ビューティは、夏休みの間は仕事しないと

決めたのに、一人抜け駆けしたピースをジト目で見つめ、バッドエンドピースは、そんな四人を見て小悪魔的な笑みを浮かべた。

「エヘヘヘ、たまたま良いタイミングに居たからねえ」

バッドエンドピースは、真琴に漫画原稿を駄目にされて落ち込んでいたやよい、コミケに居た人々からバッドエナジーを回収していた。ジョーカーは口元をニヤリとさせると、

「ですがあなた・・・キュアピースと仲良くなつて、コンビを組んだとか？」

（ギクツ!?）

バッドエンドピースは、ジョーカーにやよいと漫画コンビを組んだ事がバレているのを知り、思わず動揺を見せるも、直ぐに愛想笑いを浮かべると、

「アハハハ、ほ、ほら、仲良くなったと見せかけておけば、後で裏切られた絶望も大きいでしょう？」

「ほう・・・では、キュアピースとコンビを組んだのは、彼女を絶望させる為の演技だど？」

「そ、そうなののおお！」

（（（嘘だあ!）））

動揺しながら何とか誤魔化そうとするバッドエンドピースを、他のバッドエンドプリ

キュア達は、再びジト目で見つめた。ジョーカーはニヤニヤしながら、「まっ、よろしいでしょう……。では皆さん、お願い致しましたよ?」

ジョーカーに念を押されたバッドエンドプリキュア達は、ジョーカーがこの場を去った後、どうするか相談を始めた。バッドエンドマーチは現状を思い返すと、スマイルプリキュアを始めとした、プリキュア達と馴れ合う事もあつた事を思い出し、

「そーいや最近、あいつらと馴れ合い過ぎたからなあ……。ここらでガツンと挨拶に行くか?」

バッドエンドマーチに問われると、一同も確かに馴れ合い過ぎた事を自覚していた。バッドエンドサニーはコクリと頷き、

「せやなあ……。で、どないする?」

バッドエンドサニーに聞かれた、バッドエンドピースとビューティは、

「スマイルプリキュアとソードには、何時でも会えるから、他のプリキュアにしておこうよ」

「では、誰の所に行くか決めましょう?」

「二ブラック先輩の所以外なら、何所でも良い二二」

バッドエンドビューティに問われた四人は、ブラックの所じゃ無ければ何所でも良いと話し、バッドエンドビューティを困惑させた。バッドエンドビューティは首を傾げな

がら、

「どうして、ブラックの所は嫌なの？」

「だってえ．．．ブラック先輩の前で悪きすると、もう奢ってくれないもん」

「何や感や、ブラック先輩には親近感湧いとるしなあ？」

「ウンウン！私、エッチな同人誌買って貰ったよ」

「同じ黒の衣装だしさ」

「「「ねえ？」」」

バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチは、思わず顔を見合わせ合いながら頷いた。バッドエンドビューティは溜息を付き、

「ハア．．．仕方無いわねえ、ブラック、ホワイト、ルミナスの所には、私が行くわ」

「「「どうぞ！どうぞ！」」」

「あなた達ねえ．．．」

バッドエンドビューティは、呆れたようにそんな四人の仲間達を見つめた．．．

2、のぞみとバッドエンドハッピー

ナッツハウス．．．

学校から帰ったくるみは、家の中を掃除して居ると、のぞみとりんが遊びに来た為、掃

除を中断して三人で談笑して居た。飲み物を持って再びリビングに戻って来たくるみは、徐に窓の外を覗くと、チラチラ見える人影がみゆきに見えた。くるみは、のぞみとりに話し掛けると、

「のぞみ、りん、外にみゆきが来ているみたいよ?」

「エッ!?みゆきちゃんか? 鍵は開いているから、入ってくれば良いのにねえ?」

「まあチャイムも無いし、入りにくいのかも知れないわね・・・のぞみ、迎えに行つてあげれば?」

「分かった!」

のぞみは立ち上がると、軽いステップで階段を駆け下り、入り口のドアを開けた。

「みゆきちゃん、いらつ・・・アレエ!?あなたは・・・」

「ヤッホー!」

ドアを開けたのぞみは、ドアの前に居たのが、両手を振るバッドエンドハッピーだった事で思わず驚き、

「バッドエンドプリキュア!?・・・アレエ、あなた一人なのお?他のみんなは?」

「エへへへ、今日はプリキュア達に挨拶に来たから、他のみんなは、違うプリキュア達の所に行つてるよ」

他のバッドエンドプリキュア達は、他のプリキュアの所に挨拶に行つたと聞いたので

みは、思わず不思議そうに首を傾げた。

「挨拶!?!まあ、何の用事か分からないけど、知らない間柄じゃないし、立ち話も何だから中に入れば?」

「本当!?!じゃあ、お邪魔・・・じゃなくて!私達、最近あなた達と馴れ合い過ぎたなあつて反省して、今まで通り、バッドエナジーを集めるお仕事再開するから」

「エエエ!?!しなくて良いよお」

「ジョーカーにも怒られちゃつたしい・・・つて事で、また次に会う時は敵同士だからねえ・・・じゃあ、バイバイ!」

「アツ!?!ちよとお?・・・何か調子狂っちゃうなあ」

のぞみは、両手を振りながら去っていたバッドエンドハッピーを、苦笑混じりに見つめた。何所か憎めない、妹のような気がするのぞみだった・・・

### 3、キュアピーチとバッドエンドビューティ

#### 四つ葉町・・・

カオルちゃんのだーナツ屋に現われたのはバッドエンドビューティ、彼女はこの後、ひかりが居るであろうTAKO CAFEにも行かねばならず、ラブ達が現われるのを、今か今かと待つて居た・・・



(キュアピーチ達は、よくこの店に来てるってマーチに聞いて来てみれば、どうやら今日  
は来てないようねえ?)

バッドエンドビューティは、ベンチに座りながら、公園に設置されている時計をチラ  
チラ見た。このままラブ達を待つべきか、先にT A K O C A F Eに行くべきかどうか  
を考えた。

(さて、このまま時間を無駄に使うのは、賢い選択では無いわねえ……)

そんな悩めるバッドエンドビューティを見たカオルちゃんは、ドーナツを持って近づ  
くと、

「お嬢ちゃん、悩み事かなあ?ドーナツを食べれば、そんな悩み何てドーナツでも良い気  
分になるから……はい、お一つどうぞ!」

「エッ!?あ、ありがとう……」

(な、何なのかしら!?)

バッドエンドビューティは、突然話し掛けて来て、ニンマリとしながらドーナツを差  
し出すカオルちゃんに思わず動揺するも、カオルちゃんに貰ったドーナツを一口食べる  
と、見る見るバッドエンドビューティの目が思わず見開き、

「お、美味しい!?そう言えば、前にマーチがお土産に買って帰って来た事があつたわね」  
バッドエンドビューティは、以前バッドエンドマーチのお土産を食べた時の事を思い

出した。バッドエンドビューティは、もう一口美味しそうに口の中に頬張った。ちょうどその時、学校帰りのラブとせつなが、バッドエンドビューティに気付いた。

「バッドエンドビューティ、何しに来たんだろう?」

「他の四人はともかく、彼女がドーナツを食べに来るとは考えられないわね?」

「バッドエンド空間も発生させてないから、悪さをしに来たんじやないよだけど…」

ラブとせつなは困惑しながらも、ベンチに座るバッドエンドビューティに近付いた。ラブは、困惑気味に話し掛けると、

「バッドエンドビューティ、どうしてカオルちゃんの店に?」

「フフフ、ようやく現われたわね!今日は、あなた達に挨拶しに来ただけよ」

「挨拶!?!」

「そう…遊びの時間は終りよ!また私達は、これからバッドエナジーを集めるわ…次に会う時は敵同士よ!!」

バッドエンドビューティが、次に会った時は敵同士だと告げた瞬間、ラブとせつなの周囲に冷気が漂った。ラブは表情を険しくすると、

「そんな事…させない!せつな、行くよ!!」

「エッ!?!待ってラブ!まだ彼女は何も…」

ラブがプリキュアに変身しようとしているのに気付き、まだバッドエンドビューティ

が何もしていないのに、変身しなくても良いのではないかと思つたせつなは、ラブを止めようとしたものの、ラブはリンクルンを手を持ち身構え、

「チェインジ・プリキュア！ビートアップ!!」

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュユ、キュアピーチ!!」

「後の二人にも伝えて、私は他にも行かなくてはならないから・・・」

ラブはピーチに変身したのも束の間、バッドエンドビューティは、時計を見ると慌ててその姿を消した。せつかく変身したものの、あつさりバッドエンドビューティが去つた事で、ピーチは変顔浮かべながら呆然とした。せつなは溜息を付き、

「ピーチ、前に私も、バッドエンドマーチと同じような事があつたから、せつかく忠告してあげたのに・・・」

「ウウウウ・・・カオルちゃん！ドーナツ一杯持つて来てええ！」

「ピーチ・・・やけ食いする気なら、せめて変身を解いたら？」

せつなは、ドーナツをやけ食いしようとするピーチを諫め、ちようどその場に通りがかつた知念大輔は、

「おっい・・・プリキュアの姿になって、何騒いでるんだ？」

「大輔には関係なああい！」

ピーチはそう言うと、カオルちゃんが持つて来たドーナツを、両手に持つて口の中に

交互に頬張り、思わずせつなと大輔は顔を見合わせた。二人は再びピーチを見つめると、

「プリキュアの姿で、みつともない真似は止めとけよ！」

「私もそう思う・・・」

大輔とせつなにダメ出しされ、ピーチはトホホ顔を浮かべながらラブの姿に戻った・・・

#### 4、満とバッドエンドサニー

海原市夕風町・・・

満は、アルバイトをしている咲の家でもあるPANPAPAパンで、休憩時間を利用して、庭先に出てテーブル席に座り、オリジナルメニューを考えて居た。その時、満は誰かの気配を感じて視線を向けると、そこにはニヤニヤしたバッドエンドサニーが立って居たが、満はさして気にも止めなかった。バッドエンドサニーは、自分を見ても驚かない満を見て、思わず首を傾げながら、

「何や!?!ウチが現われても驚かんのかあ?」

「別に・・・あなた達、何度かこの街に来ているし、さして驚く事も無いわね」

「へえ・・・あんたどこことなく、ウチのビューティに似とるわ」

「そんな事より、今日は何の用かしら!? 今ここには、私しか居ないわよ?」

「アツ、エエねん。今日は挨拶に来ただけやから」

「挨拶!?!」

バッドエンドサニーが挨拶に来ただけだと聞き、満は思わず首を傾げた。何の挨拶に来たのか満は考えると、どうやら夏休みが終わった事と関係がありそうな気がしてきた。

「確かあなた達・・・夏の間は仕事しないような事言っていたそうね? なら、夏休みも終り、二学期も始まったから、さしずめまた、バッドエナジーを集めると宣言にでも来たのかしら?」

「な、何で分かるんや? 怖いやつちやなあ・・・その通りや」

バッドエンドサニーは、満に自分の考えが読まれた事で、満を油断出来ない相手だと認識した。

「まっ、説明する手間は省けるよってエエか・・・って事で、仲間のブルーム、イーグレット、ウインデイにも伝えておいてやあ」

「なぎさが知ったら嘆くわよ?」

「ギクツ!? アツ・・・エエと、ブラック先輩には、ウチらのビューティが伝えに言った筈やから・・・」

「そう・・・あなた達とは色々あったけど、出来ればもう戦いたくは無かったけどね」

「次に会う時は・・・再び敵同士やでえ」

「仕方が無いわね・・・薰や咲、舞には一応伝えて置くわ」

「ほな、頼んだでえ！」

満に手を上げ帰ろうとしたバッドエンドサニーだったが、何かを思い出したのか、慌てて満を振り返り、

「なあなあ、この店のチョココロネって美味しいんやろう？」

「エエ、美味しいわよ」

「前から気にはなってたんや・・・まだ残つとるの？」

「欲しいの？バッドエンドマーチには、この間の借りがあるし・・・」

「ハア!? マーチと何かあったん？」

バッドエンドサニーは、バッドエンドマーチがなおの家族の窮地を救った事を、バッドエンドマーチから聞いては居ないようで、満は余計な事は言わない方が賢明だと判断した。

「何でも無いわ！今日は特別に、私からあなた達にお土産としてプレゼントするわ」

「ホンマかあ!?! いやあ、あんたも只者や無いとは前々から思ってたんやあ」

（この乗り・・・本当にあかねとそっくりねえ）

満はクスリと笑みを浮かべ、店内に戻ってチヨココロネを五個、バッドエンドサニーへのお土産で渡し、バッドエンドサニーは嬉しそうに帰って行った。

「出来れば、本当に彼女達とは、もう戦いたくは無いわね……」

満はそう思いながら、休憩を終えて店内へと戻って行った……

5、つぼみ、えりか、いつきとバッドエンドマーチ

希望ヶ花……

バッドエンドマーチは、渋い表情を浮かべていた……

（そう言えば、ビューティからこの街の美味しい食べ物の情報聞くのを忘れてた）

さてどうしたものかと歩いて居ると、何処かで見た二人組の妖精が、フワフワ飛んでいる事に気付いた。

「あいつらの後を付ければ、きつとプリキュアの所に……」

シプレとコフレは、バッドエンドマーチに尾行されている事に気付かず、薫子が所長を務める植物園にやって来た。二人が中に入ると、バッドエンドマーチも二人の後を追うように、コソコソ中に入ると、木々の間に隠れながら中の様子を伺った。

「コツペ様ああ！」

シプレとコフレは、薫子のパートナー妖精の、巨大なコツペに抱き付き、そのモフモ

フ具合に悦の表情を浮かべて癒されていた。バッドエンドマーチは、コツペを見たのは初めてで、二人に抱き付かれても、置物のように微動だにしないコツペを見て、思わず呆然とした。

（何だ!?あれも妖精なのか?置物じゃないのか?）

首を傾げたバッドエンドマーチだったが、楽しみに会話をする声が聞こえて、そちらを見てみると、薫子が入れてくれた紅茶を飲みながら、ティータイムをしているつぼみ、えりか、いつきの姿を目にした。バッドエンドマーチは木々から立ち上がり、

「捜したぞ!」

「バッドエンドマーチ!?」

突然現われたバッドエンドマーチに、つぼみ達三人も驚いた。バッドエンドマーチは口元に笑みを浮かべ、

「お前らに挨拶に・・・」

バッドエンドマーチは、バッドエナジーを集める事を再開したと、つぼみ達に告げようとしたものの、つぼみ達三人の表情は明るかった。つぼみはニコニコしながら話し掛け、

「いらつしやい、良くここが分かりましたねえ?」

「エツ!?ああ、あの妖精達の後を・・・」



「才、成る程成る程」

「そんなところに立ってないで、こっちに座つたら？今お茶でも入れてくるよ」

「.....」

つぼみ、えりか、いつきの自分に対するおかしな態度に、バッドエンドマーチは困惑した。

「な、なあ、あたし達は敵同士だぞ？何でそんなに親しげに.....」

敵である自分に親しげに話し掛けてくるつぼみ、えりか、いつきに、バッドエンドマーチは戸惑うも、つぼみ達は笑み混じりに、

「もう私達、お仲間みたいなものじゃないですか！」

「何!？」

「そうそう、なおの家族を助けに現われた時のあんたの姿.....最高!」

「あれは.....」

「本当にあの時はどうなるかと、僕達ヒヤヒヤしてたんだよ」

「いや、あの時も言ったが、あたしはマーチの弟と遊ぶ約束をしたから、助けただけだからな」

「「またまたご謙遜を」」

つぼみ達三人は、同じような表情と仕草でバッドエンドマーチを称え、バッドエンド

マーチは困惑した。

(調子狂う奴らだなあ・・・)

「バッドエンドマーチは・・・以外と幼児に好かれるタイプなのかなあ？」

「そうですね、保母さんとか似合ってそうですよ」

「ほ、保母さんだとお!？」

つぼみに保母さん姿が似合っていると云われ、思わず変顔浮かべたバッドエンドマーチは、そんな自分の姿を一瞬思い浮かべて、激しく頭を横に振った。えりかは腕を組んで何かを思い出し、

「幼児に好かれると言えばさあ、ゆりさんと一緒だあ、ゆりさんもお・・・ラブレター貰っちゃったりしてたしいい」

「保母さんのお仕事手伝った時も、子供達に懐かれてましたねえ？」

「そんな事もあったねえ」

「ゆりさんったら、意外と年下キラー何じゃないの？」

(年下キラー!?!何だ、それは? ムーンライトは、年下の男の子を・・・)

バッドエンドマーチの脳裏には、ムーンライトが笑みを浮かべながら、小さな男の子に踊り寄る姿が浮かんだ。

「羨ましいいいいい」

つぼみ達三人は、顔を近づけてキヤツキヤとハシヤギ、益々バッドエンドマーチは困惑した。

(な、何を勝手に盛り上がってるんだ・・・こいつらは!?)

バッドエンドマーチは、このまま此処に居たら拙いと考え、軽く咳払いすると、

「ゴホツ・・・アア、盛り上がってる所悪いが、今日あたしが此処に来たのは・・・あたし達バッドエンドプリキュアは、またバッドエナジーを集める事にしたから、次に会う時はまた敵同士だと伝えに来ただけだ!じゃあ、ムーンライトにも知らせて置いてくれ」

「「エエエ!?」」

「じゃ、じゃあなあ!」

(あいつらの側に居ると、こっちまでおかしくなりそうだからなあ・・・さっさと帰ろう)  
バッドエンドマーチは、驚くつぼみ達から逃げるように植物園を後にした・・・

## 6、響、奏とバッドエンドピース

バッドエンドピースは、奏の店で生クリームがタップリ入ったカップケーキを購入し、響達が居るであろう調べの館へとやって来た。ドアを開けて中の様子を伺おうとするも、中からは激しく言い合う声が聞こえてきて、バッドエンドピースは、恐る恐る扉

をゆっくり開けてみた。

「何それ!? そんな話し、今初めて聞いたんですけどお?」

「だから、今初めてみんなに話をしてているの」

「そんな大事な話・・・今まで黙ってる何て酷いよ!」

「私だって散々悩んだわよ・・・でも、決めた事なの!」

言い合いをするのは響と奏、エレンとアコ、そしてハミイは、戸惑いの表情を浮かべながら、響と奏の側に居た。バッドエンドピースは、気づかれないように姿勢を低くして中に入ると、

(何々!? 喧嘩してるのかなあ?・・・エへへへ、挨拶する前に、漫画のネタになるかも知れないから見物しようつとお)

バッドエンドピースは、目をキラキラ輝かせながらメモを取り出して聞き耳を立てた。響と奏は、そんな事とは知らず言い合いを続けた。二人の言い合いが始まった切っ掛けは、奏が、響、エレン、アコに言った一言から始まった・・・

「響、エレン、アコ、実は私、中学を卒業したら・・・パティシエ専門の高校に進学しようと思ってるの」

「「エッ!? パティシエ専門の高校?」」

「エエ・・・加音町から通うには遠いから、学校の寮にでも入って・・・」

響は慌てて奏の話を遮り、心の中に浮かんだ不安を口にした。

「ちよつ、ちよつと待ってよ！それじゃあ、プリキュアはどうするの？現にバッドエンド王国や、魔界と戦ってる真つ最中じゃない」

「分かつてる！それは分かつてるわ・・・仮に私達が高校になつても戦いが続いたとしても、以前みゆきに教わつた、不思議図書館を経由すれば、直ぐに駆け付けられると思うの」

「何それ!?そんな話し、今初めて聞いたんですけどお？」

こうして始まつた響と奏の口論・・・

響は、高校生になつてもみんなと過ごしたい思いから、母であるまりあの誘いを断り、このままアリア学園の高等部に通おうと考えて居たのに、奏はそんな自分の心を嘲笑うかのように思え、響は苛立つた。

「私は、みんなと同じ高校に通いたいから、ママの申し出を断ろうと思つてたのにいい」「エツ!?響、どういう意味?」

「私はママに、知り合いが居る海外にある音楽学校に、通つて見ないかつて誘われて：：でも、私は断ろうと思つてた！奏やエレン、アコと、せめて高校を卒業するまでは、一緒に居たかつたから・・・」

「響・・・」

「なのに、酷いよお！」

「待って、響！」

響は目から涙を零しながら、奏を恨めしそうに見つめ、奏も響の真意を知り押し黙った。そんな響を止めたエレンは、

「響・・・奏を責めるのは、筋違いじゃないかしら？」

「何で!?! 私は・・・」

「響、聞いて！響は、私や奏やアコと、せめて高校出るまでは一緒に居たいって言ってくれるのは、本当に嬉しい・・・でもね、私やハミイだって、何時まで加音町に居られるのか分からないの」

「・・・・・・・・・・」

「私達は、新たに動き出したバッドエンド王国と戦う為に、またこっちの世界にやって来た。当然戦いが終われば、私もハミイも、またメイジャーランドに戻らなければならぬ」

「それは・・・」

「奏もさつき、散々悩んだって言ってたでしょう？それは、奏の本心だと私は思う」

エレンに諭された響も、少し冷静になって考えれば、それは奏の気持ちを無視して、自分の願望を奏に押しつけようとしているエゴだと悟った。エレンは、響が気付いてくれ

たと知り目を細めると、

「響、辛い事かも知れないけど、奏が決断したのなら、喜んで送りだしてあげよう？」

「響、もつと早く話すべきだったね・・・ゴメンね」

「ううん、私もついカツとなつて言い過ぎちゃった・・・ゴメン」

「まつ、今直ぐ別れる訳でも無いんだし」

「「「そうね」」」

眼鏡の位置を直したアコの言葉に三人も同意した時、突然四人に声が掛かり、

「何だあ、もう仲直りしちゃったんだあ？」

「「「バッドエンドピース!」」」

「ねえねえ、今のが痴話喧嘩って言うんでしよう?」

「「ち、痴話喧嘩!」」

バッドエンドピースに痴話喧嘩と言われ、思わず顔を見合わせた響と奏は、慌てて頭を左右に振った。バッドエンドピースは、小悪魔的な表情で二人を見ると、

「そつ、良いネタを見れたよ、次回のミラクルピースのネタで使えるかもねえ?」

「「ミ、ミラクルピース!?!止めてええ!」」

響と奏は、ミラクルピースと聞いて、この間雑誌に載った、自分達の少しエッチなイラストを思い出して変顔を浮かべた。エレンとアコは、少し首を傾げると、

「あなた、此処に何しに来たの？」

「響と奏をからかいに来たの？」

「エエエ!? 何よそれえ？」

「ブツブブウ! 残念でしたあ!! 私は、お仕事再開した事を、あなた達に知らせに来たの」  
「「「お仕事!」」」

「そつ、バッドエナジー集め! また次からは敵同士だからね・・・バイバイ!!」

バッドエンドピースは、そう言い残しながらルンルン気分で行った。さつきまでの重い空気が嘘のように、四人は顔を見合わせながら呆然としていた・・・

7、なぎさ、ひかりとバッドエンドビューティ

TAKO CAFE・・・

学校から帰ったひかりは、何時ものように車の中で制服から着替えると、エプロン姿で接客をしていた。高校生になったひかりは益々美人になり、ひかり目当ての男性客も増え、TAKO CAFEは賑わいを見せていた。30分位経つと一段落し、

「ひかり、お疲れえ! 休憩入っちゃってえ」

「分かりましたあ」

ひかりは、お世話になってるアカネに言われた通り、ベンチに座って休憩を入れて



いると、そこになぎさが現われた。

「ひかりい、今休憩？」

「なぎささん、いらつしやい」

なぎさはひかりが座るテーブル席に腰を下ろし、アカネにたこ焼きを頼むと、

「いやあ、休みが多かったから、授業久々に聞いたら眠くなっちゃった・・・」

「アハハハハ、なぎさあ、それは何時もの事じゃない？ハイ、たこ焼きお待たせえ！」

「アカネさん、一言多いよお・・・」

アカネにからかわれ、なぎさは熱々のたこ焼きに楊枝を差し、息をフウフウ掛けて冷ますと、口の中に入れてモグモグ味わった。そんな二人の周辺に、冷気が漂いだした。

「アレエ!?急に冷えてきたような？」

「そうですね、まだ9月も序盤何ですけど・・・」

なぎさとひかりは思わず空を見上げるも、日が落ち掛けた太陽からは、まだ熱い日射しが届いて居て、風も南風のように、何故寒く感じたのか不思議だった。

「フフフ、ブラック、ルミナス、揃ってるわね・・・ン!?ホワイトの姿が見当らないようね？」

「バッドエンドビューティ!?」

ゆっくり現われたバッドエンドビューティを見たなぎさは、慌てて立ち上がるとバツ

ドエンドビューティの手を取って木陰に移動させた。バッドエンドビューティは、少し渋い表情を浮かべ、

「ブラック、何の真似!？」

「それはこっちのセリフだよ．．．そんな格好じゃ目立つでしょうがあ？」

「これが私達バッドエンドプリキュアの姿何だから仕方無いわ？あなただって、黒い衣装を着て居るでしょう？」

バッドエンドビューティに反論され、思わずなぎさが言葉に詰まると、後を追ってきたひかりが説明し、

「なぎささんは、その衣装じゃ目立つから、なるべく人目を避けようとしただけだと思います」

「そうそう．．．で、あんたもたこ焼き買いに来たの？」

「そういう事なら此処に持って来ますけど？」

なぎさとひかりは、バッドエンドビューティがたこ焼きを買いに来たのかと思つたのか、気を効かせたつもりで話し掛けるも、バッドエンドビューティは狼狽へ、

「わ、私を他の四人と一緒にしないで！私がここに来たのは．．．私達バッドエンドプリキュアは、またバッドエナジー集めを再開するわ！私達の邪魔をするなら、次に会う時容赦はしない．．．それをあなた達に伝えに來ただけよ」

「エッ!?」

「ホワイトにも伝えて、それじゃ」

バッドエンドビューティが立ち上がると、なぎさは慌てて引き留め、

「アッ!?じゃあ他の四人にも伝えてくれる?」

「何を?」

「私は・・・あんた達を信じてるって」

「どういう意味!?!」

「あんた達五人が・・・バッドエンド王国から離れてくれるのを、私は待ってるから!」

なぎさの発言を、こっちの世界に来たばかりのバッドエンドビューティならば、一笑に付して居た。でも、こちらで生活する間に、バッドエンドビューティも様々な事を学んでいた。思わず口元に笑みを浮かべると、

「・・・・・・フフ、一応伝えておくわ」

「ウン!」

「全く、あなた達はお節介ね?」

「かもね?」

バッドエンドビューティは、踵を返すとこの場から去って行った。その後ろ姿を、なぎさは消えるまで見つめて居た。ひかりは、そんななぎさを見ながら不安気に話し掛

け、

「彼女達・・・本当にバッドエンド王国から離れてくれるんでしょうか？」

「きつと一緒に戦ってくれる日が来るよ！」

「そうですね・・・そう信じたいですね」

なぎさとひかりは、その時を信じながら、TAKO CAFEへと戻って行った。

魔界・・・

双児宮に居るカインは、黒い水晶を使って何者かと交信をしていた・・・

「ほう、断ると言うのだな？」

「当たり前じゃ！大事な生徒達を、お前達の手駒になどさせる筈無からう!!」

「ならば・・・魔法界も敵と見なすぞ？」

「何と卑劣な・・・そんな脅しになど屈指はせぬ！」

カインの話していた相手は、慥然としながら通信を絶った。カインは口元に笑みを浮かべ、そのやり取りを見て居たアベルは、

「魔法学校の校長とは、頭の固い奴のようだな？」

「プリキュアを誘き出す餌に、奴らを利用出来るかも知れぬと思っただがなあ？」

「俺が出向いて壊滅させてやろうか？」

「いや、奴はベレルと親しい．．．それは得策では無いな」  
「ならどうする!?!」

「フッフ、魔法界の奴らは、人間界．．．いや、奴らはナシマホウカイと呼んで居たか？  
そのナシマホウカイに密かに憧れを抱いている者も少なくないという。どちらにしろ、  
餌を上手く誘導すれば、餌の方で勝手に誘き寄せてくれるかも知れんぞ？」

カインの黒い水晶に、魔法界と人間界を結ぶカタツムリに似た列車を、興味深げに見  
つめる、あどけなさの残る一人の少女の姿を映し出して居た．．．

第百十五話：お仕事再開

完

## 第一百十六話：スマイルプリキュアとバッドエンドプリキュア（前編）

1、あゆみとバッドエンドビューティ・・・あゆみを捜せ  
バッドエンド王国・・・

バッドエンドプリキュア達は、なぎさ達にお仕事再開する旨を伝え、バッドエンド王国に戻って来た。バッドエンドサニーは、満から貰ったチョココロネを四人に渡し、五人はチョココロネを食べながら、各自状況を報告していたが、バッドエンドビューティから、なぎさは、自分達がバッドエンド王国を離れてくれる事を、信じて居るからと伝えられ、一同に微妙な空気が流れた・・・

「ブラック先輩はそう言うけど・・・」

「せやな、ウチら、バッドエナジーを集めな、消滅するっちゅう話しやし」  
「ウン・・・」

「確かに向こうの世界は、美味しい物が沢山あるのは魅力的だけどさあ・・・」

バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチも、なぎさには好意を持っているように、複雑な胸中を語った。バッドエンドビューティは少し考え込むと、

「でも、確かにピースはバッドエナジーを集めたとはいえ、夏休みの間、私達はほとんどバッドエナジーを集めていないのに、私達の身体には何ら異変が起ころなかつた事も事実・・・私達が初めてジョーカーに会った時、ジョーカーは、私達がバッドエナジーを定期的に回収しなければ、消滅すると言っていたのによ？」

「つて事は・・・ジョーカーが、あたし達を欺まして居たつて事か？」

「そう考えれば、辻褄は合うわね」

バッドエンドマーチに聞かれた、バッドエンドビューティは軽く頷いた。頭の回転速い彼女は、以前ダークプリキュア5に言われた、ジョーカーに利用されているという言葉は、事実かも知れない事を悟った。バッドエンドハッピーは頬を膨らまし、

「エエエ!? 酷くい!」

「そうだとしたら・・・どうする?」

「ジョーカーにウチらの実力・・・見せ付けたらどうか?」

バッドエンドマーチとサニーが、少し険しい表情でバッドエンドビューティに問うた。彼女達も、ジョーカーが自分達を欺ましていたのなら、許せない気持ちがあつた。だが、バッドエンドビューティは首を振った。彼女もジョーカーに不信感は抱いていたものの、ジョーカーが自分達バッドエンドプリキュアを産み出した事は、否定できない事実だつた。

「それは得策じゃ無いわねえ……私達を産み出したのは、ジョーカーだという事は事実だわ。ジョーカーは、何か企んで居るのかも知れないし、迂闊な行動は慎むべきだと思う……今の所は、ジョーカーに言われた通り、バッドエナジーを集めましょう」

「二三分かった！」

バッドエンドビューティの言葉に、他の四人は同意してコクリと頷いた。ジョーカーに不信心は沸いたものの、彼女達は気持ちの切り替えが早かった。バッドエンドハッピーは、何かを思い出したのか両手を一度叩き、

「そうであ！ねえねえ、スマイルプリキュアとソードには、明日学校で会うから良いけど、エコーの事はどうするの？」

バッドエンドハッピーに聞かれた一同、バッドエンドサニーはポンと手を叩き、

「せや！あいつもスマイルプリキュアやったなあ？」

「ウン！でもエコーは、ハッピー達とは別の町に住んで居るみたいだよ？」

バッドエンドハッピーはコクリと頷き、バッドエンドビューティも同意し、頭の中でエコーのデータを整理すると、

「ええ、確かエコーは、横浜つて所に住んで居るようだよ」

「横浜かあ……確か美味しい中華料理の店が、一杯有るとかって本で見たぞ」

「エへへ、折角だしみんなで見に行ってみようよ？」



横浜の話題が出た事で、バッドエンドマーチは思わず本で読んだ中華街の事をイメージし、バッドエンドピースも興味有りそうな表情で、一同に横浜行きを頼んだ。バッドエンドハッピーも、興味有りそうに身を乗り出しながら同意すると、

「じゃあエコーには、みんなでお仕事再開した事を伝えに行こうかあ?」

「『OK!』」

バッドエンドハッピーの言葉に、他の四人も同意し、バッドエンドプリキュアの五人は、あゆみが住む横浜の地へと向かった・・・

その頃あゆみは、学校から帰ってから、自分の部屋で情報雑誌を読んで居た。グレルとエンエンも、興味深そうにあゆみの側に近寄ると、あゆみが熱心に見て居るページを覗き見た。

「あゆみ、何の本読んでるんだあ?」

「ん!?これ?情報雑誌で、今私が見てるのは、最近出来た美味しいクレープ屋さんの特集だよ」

あゆみは二人にそう説明したものの、グレルとエンエンにとつては何の事か分からず、二人は顔を見合わせながら首を傾げた。エンエンはあゆみに問い掛け、

「クレープって?」

「そうかあ・・・エンエンもグレルも、クレープってまだ食べた事無かったっけ?ひかり

さんのお店にも有ったんだけど・・・そうだ、今から行つてみようか？」

「行きたい！」

グレルとエンエンが、同時に行きたいと手を上げた事で、あゆみは思わず笑みを浮かべ、

「じゃあ、そうしようか・・・支度するからちよつと待つてて！」

あゆみは、横浜の地にバッドエンドプリキュア達が来て居るとも知らず、エンエンとグレルをバッグに入れ、雑誌に載っていたクレープ屋へと向かった・・・

バッドエンドプリキュアの五人は、プリキュア姿では目立つ為、七色ヶ丘中学の制服に着替え、みさき、あおい、やおい、なみ、れいなの姿となった。なみたつての希望で、中華街の入り口ともいえる善隣門に来た五人、れいなは一同に話し掛け、

「じゃあ、手分けして五人でエコーを捜しましょう。一時間後に此処で落ち合いますよ  
う」

「「分かった！」」

れいなという言葉に四人も同意し、五人は、それぞれ別れてあゆみの捜索に向かった・・・

一時間後・・・

再び中華街の善隣門前に集合した五人、先ずれいなが状況を一同に話し始め、

「私は、港の見える丘公園と、元町って所を捜してみたけれど、残念ながらエコーは見付  
けられなかったわ・・・マーチは？」

「見付けた！」

「エッ!?!何所に居たの?」

れいなは、なみがあゆみを見付けたと思つて身を乗り出すも、なみは袋から肉まんを  
取り出すと、

「雑誌に載つてた肉まん、ようやく見付けたあ!みんなの分も買つておいたから」

「ありがとう!」

「おおきに!」

「.....」

なみから肉まんを分けて貰い、みさき、あおい、やおいは嬉しそうに肉まんを頬張つ  
た。肉汁が口内に溢れ出し、四人は幸せそうな表情を浮かべるも、れいなは、呆然とし  
ながら肉まんを手にしたままだった。次に一同に報告したのはあおい、

「ウチは、おもしろ水族館ちゆう所に行ったんやけど、中々ブサイクな魚が居つて笑つた  
わ」

あおいが行つたのは、横浜中華街の中にある水族館で、色々変わった作りをしてあつ

た。下駄箱の中に水槽が入って居たり、色々な実験コーナーがあつたりして、あおいはそこそこ楽しめた様子で、一同に語って聞かせた。

「「へえ!?中々面白そうだねえ?」」

「.....」

肉まんを食べながら、あおいの話を興味深く聞くみさき、やおい、なみだったが、れないは、ようやく肉まんを食べ始めるも、微妙な表情を浮かべ無言だった。次に報告したのはみさき、

「私は.....公園で猫と遊んでたあーニャアニャア鳴いて可愛かつたよお」

みさきが歩き疲れて休憩したのは、横浜中華街内にある山下町公園、関帝廟通り入り口には、二匹の狛犬が居たり、中華街のシンボルツリーと言われるけやきの大木があつたり、肉まんなどを買った観光客が、座って休める屋根付きベンチがあつた。みさきはそこで猫を見掛け、思わず猫をあやしていたら時間がどんどん過ぎ、集合時間が近付いて居た。みさきは、その時を思い出したのか、幸せそうに頬擦りするようなジェスチャーをすると、あおい、やおい、なみは、肉まんを食べながらコクコク頷きながら、

「「へえ〜」」

「.....」

だが、れないは瞬きもせず固まった。最後に報告したのはやおいで、

「私は、横浜大世界つて所に行つたのお！トリックアートが面白かつたよ」

やおいが行つたのは、横浜大世界という場所で、一階はお土産物屋や点心屋台、二階にはコンフォートフロア、三階には飲茶喫茶などがあり、四階〜八階は、やおいが行つたトリックアートミュージアムがあつた。四階には、身体を使つて錯覚を楽しむ体験コーナーが有り、五階には、大学博士や現代作家などが作成した、アート作品を集めたコーナーが有り、六階には、大型スクリーンによる3D映像や、動画作品コーナーが有り、七階と八階には、写真撮影OKで、見学者も参加出来るトリックアートコーナーがあつた。

「ほな、これから行つてみるう？」

「良いねえ！」

「本当!?!じゃあ、案内するね!?!?!ン!?!ビューティ、どうしたの?」

れいななの周囲で冷気が漂いだし、あおい、みさき、なみ、そしてやおいの表情が見える焦りでした。れいなは、キツと険しい視線で四人を見つめると、

「あなた達いい!?!?!一体ここに何をしに来たのかしらあああ?」

「ビュ、ビューティ、落ち着いてええ!」

「捜す、真面目に捜すよつてえ!?!?!」

「エ、エコー、何所かなあ?」

「アレエ!? 見当らないねえ?」

みさき、あおい、やおい、なみが、あゆみを捜す振りをするも、その態とらしい行為は、益々れいなを苛立たせ、れいながバッドエンドビューティに変わった。

「あなた達をあてにした、私がバカだったわ! このままエコーを誘き寄せる・・・世界よ! 最悪の結末、バッドエンドに染まれ! 白紙の未来を、黒く塗りつぶしなさい!!」

バッドエンドビューティは、まるで鬱憤を晴らすかのように、黒い絵の具を黒き書を開いて、白紙のページに勢い良く叩き付けると、横浜中華街の空が紺色に染まり、辺りに冷気が漂った。バッドエンドビューティの下へ、中華街に居た人々から発せられたバッドエンドプリキュアの姿に変化すると、

「ビューティ、ご機嫌斜めやなあ?」

「どうしたんだらうねえ?」

「逆らわない方が良いよ」

「ここはおとなしくするか」

バッドエンドサニー、ハッピー、ピース、マーチの四人は、自分達の行動が、バッドエンドビューティを怒らせた自覚が無いようで、バッドエンドビューティの視界に入らないように、四人はビルの死角に隠れた。

「さあ、出て来なさい！キユアエコー!!」

本来、お仕事再開をあゆみに知らせに來ただけの筈が、仲間達の行動で怒ったバッドエンドビューティもまた、当初の目的を忘れて居た。

バッドエンド空間が発生した異変は、直ぐにグレルとエンエンにも感じられた。二人はハツとすると、

「あゆみ、向こうの方で嫌な感覚がするぞ」

「また何か現われたみたい」

「エツ!!・・・本当だ！あれは、中華街の方だわ・・・」

あゆみは、一瞬みゆき達に知らせるべきか迷ったものの、そのまま中華街目指して駆け出した。懸命に駆け続けたあゆみは、空に浮かぶバッドエンドビューティに気付いて顔色を変えると、

「あなたは、バッドエンドビューティ!?!」

あゆみがようやく現われた事で、バッドエンドビューティは口元に笑みを浮かべた。

「ようやく現われたわね、キユアエコー！私達は、バッドエナジーを回収する事を再開するわ。今日はほんの挨拶、次に会う時は・・・」

「待って!?!次に会う時って・・・もうあなた、バッドエナジーを奪って居るんじゃないの?」

「エッ!?・・・そう言えば?」

バッドエンドビューティは、あゆみに言われて何時もの冷静さを取り戻すも、跋が悪そうな表情を浮かべながら、ゆっくりあゆみの目の前に降り立った。

「エ、エコー、と、とにかくちゃんと知らせたわよ?」

バッドエンドビューティはそう告げると、慌ててバッドエンド王国に戻って行った。他の四人は、慌ててビルの死角から飛び出してくると、

「二」ビューティ、待ってえ!」

バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチは、軽くあゆみに手を上げて帰って行き、バッドエンド空間は解除された。人々は、どうしたんだろうかと首を傾げながらも、中華街は何時もの日常を取り戻した。あゆみは呆然としながら、消え去ったバッドエンドプリキュアが居た場所を見つめ、

「結局あの子達、バッドエナジーを奪う事だけが目的だったのかしら?」

あゆみは首を傾げながらも、家に帰ってみゆきに電話で状況を報告した。

2、みゆきとみさき・・・みゆきの思いとみさきの思い

みさき達は、屋上にみゆき達と真琴を呼び出した。みゆき達にも、それがどんな内容なのかは、あゆみから連絡を受けて、分かっては居たのだが、真琴以外の一同は、みさ



き達バッドエンドプリキュアと戦う事に消極的だった。みさき達は、少し硬い表情で話し始め、

「もう他のプリキュアから聞いているかも知れないけど……私達、バッドエナジー集めを再開するからねえ」

「止めるちゆうなら、腕づくできいや！」

「負けないよ！」

「じゃあ……早速始めるか？」

「そうね……」

あおい達の姿がバッドエンドプリキュアに変わり、みさきもバッドエンドハッピーの姿に変わろうとした時、みゆきがみさきの右手を掴んだ。みゆきは俯いたままみさきに小声で話し掛け、

「一緒に来て」

「エッ!？」

バッドエンドサニーが黒き書を取りだすも、みゆきはそのまみさきを連れて駆け出した。あかね達は、突然のみゆきの行動に驚いて思わず声を掛け、

「みゆき!？」

「みゆきちゃん!？」

「みゆきさん!？」

「ハッピー、どこ行くんやあ?」

バッドエンドサニーもみさきに声を掛けるも、みさきは戸惑いながら、

「私に聞かないでええ・・・」

みさきの言葉が終わる前に、足音が遠のいて行き、あかね達も、バッドエンドプリキュア達も、皆呆然と入り口を見つめた。

「ちよ、ちよつと、何の真似?」

みさきは、困惑しながらみゆきに話し掛けるも、みゆきは振り向きもせず、ただ黙って駆け続ける。校舎から出ても、尚もみさきの手を引つ張るみゆきの行動に、

「いい加減にしてよー!」

みさきは、少し口を尖らせてその場で抵抗して立ち止まると、ようやくみゆきも止まった。みゆきがゆっくり振り返ると、その目には涙が滲み、思わずみさきは呆然とした。我に返ったみさきは、

「な、何で泣いてるの?」

「嫌・・・だから」

「エツ!？」

「みさきちゃん達と、また戦う何て・・・絶対嫌あ!」

「な、何言ってるのよ!? 私達、元々敵同士でしょう?」

「でも・・・仲良くなれたもん」

「仲良くって・・・そうかなあ!?!」

「そうだよ! お婆ちゃんも喜んでた・・・みさきちゃん、夏休みの間に何度か、私のお婆ちゃんの家に遊びに行ってくれたんでしよう?」

みゆきは、祖母タエの事をみさきに話すと、みさきの表情が優しげに変わった。みさきにも分からなかったが、タエと一緒に居ると、みさきは心が和み、夏休みの間に何度かタエの家に遊びに行っていた。

「お婆ちゃんも、喜んでたんだよ。可愛いお友達が出来たって」

「本当!?!」

「うん!」

みさきは、タエに可愛い友達が出来たと言ってもらったと知り、心の底から嬉しく思ってた居た。みゆきは、そんなみさきの両手を握ると、

「ねえ、みさきちゃん」

「何!?!」

「ダークドリームに言われた事・・・覚えてる?」

みゆきに聞かれたみさきは、ダークプリキュア5と戦いながらも、奇妙な感覚に囚わ

れた事を思い出していた。何所か他人とは思えないダークプリキュア5、ダークドリムは、何時か自分達とパッドエンドプリキュアが、共に並んで戦う日が来ると言つて居た事を……

「覚えてるよ……私達とダークプリキュア5が、何時か共に並んで戦う日が来るって言つた事でしょう？」

「ウン！でもそれは……私達プリキュアとみさきちやん達が、何時か共に並んで戦う日が来るって事だよ」

「……ブラック先輩にも言われたし、サニーもブライトに、もう私達とは戦いたく無いって言われたって言つてた」

「本当!?みんなもそう思ってるんだよ……私達は同じプリキュアだもん」

「でも、私達は闇のプリキュアだもん！あなた達とは違うよ」

「同じだよ……光だろうと、闇だろうと、同じプリキュアだもん……私、友達になれるって信じてるから！」

みさきは、みゆきの目を見てそれが本心だと分かった。でも、この時のみさきには、自分が本当はどうしたいのか、それが分からなかった。一つ言える事は、確かに自分の心の中で、キュアハッピーとキュアブラックとだけは、戦いたく無い気持ちが芽生えて居た。そんな気持ちを押し殺したみさきは、

「は、話はそれだけ!? 私、みんなの所に戻るから!」

みさきは、みゆきから逃げるように駆け出した。このままみゆきと話し続けたら、自分の気持ちに嘘を付けなくなるから……

### 3、あかねとあおい・・・海外から来た留学生

9月に入り、みゆき達のクラスに、イギリスからの留学生が、二週間滞在する事になった。その海外留学生は、あかねの家でホームステイをする事を聞き、みゆき達は驚いた。みゆきは恥ずかしそうにするあかねに話し掛け、

「エエエ!? あかねちゃん、ブライアンくんと一緒に住んでるの?」

「ま、まあな……ウチの母ちゃん、ウチの英語嫌い克服させよう思ったさかい、父ちゃんと相談して、留学生の受け入れ先に立候補してたようや」

あかねは、照れながらもみゆき達に説明をし、チラリとブライアンを見た。眼鏡を掛けた優しいような少年で、日本に興味を持って留学生として日本にやって来て居た。やはり目をキラキラ輝かせると、

「その年で同棲だ何て……あかねちゃん、何かあつたら教えてね?」

「ど、同棲ちゃうわ! 小っ恥ずかしい事言わんといて」

あかねは、やよいに同棲と言われて、見る見る顔を赤くして動揺した。なおは、少し

首を傾げながらあかねに問い、

「でも、ブライアンくんって、日本語出来るの？」

「「「確かに……」」」

最初の挨拶では、確かに日本語は多少出来るようではあったが、何か知ってる日本語を並べて居るようにもみゆき達には感じられた。あかねは苦笑しながら、

「ブライアン、日本が好きなようで、日常会話ぐらいなら何とか出来るようやで？」

「成る程……あかねさん、折角ですからブライアンさんに、日本語を教えて差し上げたら如何ですか？」

れいかに言われたあかねは、思わず苦笑した。何故なら、父にも同じ事を言われて居たのだから……

「父ちゃんにも言われたわ……代わりに英語教えて貰えって」

「素晴らしい事ですね」

れいかは、微笑みながら何度も頷いた。その様子を、教室の前側ドアにへばり付いたみさき達が覗き込み、聞き耳を立てていた。みさきは他の四人に話し掛け、

「外人だつてさ？」

「あたしらも外人みたいなものだよなあ？」

なみは、パッドエンド王国である自分達も、ある意味では外人と言えるのではないか

と思い、仲間達に問い掛けると、やおいは首を傾げながら、

「どう何だろうねえ？」

「ある意味ではそうね」

れいなは考えながらも、なみの言葉に同意してポツリと呟いた。教室内を覗き見て居たあおいは突然騒ぎだし、

「お、おい、あの外人、こつち来よつたでえ？」

みさき達に気付いたブライアンは、あかねとみさき達を交互に見比べて目を輝かせると、突然大声を出し、

「ワンダフォー！あかねえは、ブンシン出来るんですかあ？」

「ハア!?ブライアン、あんた何言うて・・・」

あかねはそう言いながらも、ブライアンが自分とあおいを見て、分身していると勘違いしているようだと思いついた。あかねは慌てて席を立ち上がると、あおいの側に早足で近寄り、

「ウチとあんたの姿が似取るさかい、ブライアンの奴、ウチが分身しとると勘違いしとるやないかあ」

「何やそれは!?ウチは関係あらへん」

「オオオ!?一人、ポケットツコミですなえ？」

「ちやうわああ!!」

あかねとおおい、二人が同じような仕草で同時に否定し、ブライアンに取っては、正に分身して居るように見えて居た・・・

その夜から、あかねはブライアンに日本語を教え始めた。逆にブライアンは、あかねに英語を教えた。普段の男勝りな性格が影を潜めた事で、あかねの弟、元気はあかねをからかい、

「姉ちゃん、まるで借りてきた猫やなあ?」

「やかましい!元気、勉強の邪魔や」

「へいへい、邪魔者は退散しますう」

元気は、ニヤニヤしながらあかねの部屋を後にした。元気にかかわれた事で、あかねは、昼間やよいに言われた言葉が頭を過ぎった。

(な、何でウチが、ブライアン何て意識せなならんねん?)

そう言いながらも、あかねは自分の頬が赤くなつた事には、気付いては居なかつた。あかねは、ブライアンに英語を教わり、苦手だった筈の英語を、徐々に好きになつていった・・・

だが、時は残酷に過ぎて行つた・・・



ブライアンの帰国が近づくと、あかねの乙女心は複雑な胸中になっていた。みゆきは、何気なく仲間達にブライアンの話題を語り掛け、

「ブライアンくん、明日で帰っちゃうね？」

「せ、せやね……」

ブライアンと言う名が出ただけで、あかねは思わずドキリとし、やよいは少し首を傾げ、

「あかねちゃん、何か変だけど大丈夫？」

「な、何言う тоннねん、ウチは何時も通りやで」

「本当に!？」

「な、なおまで……」

なおにまで疑われ、あかねは大いに困惑した。れいかは、単刀直入にあかねにブライアンの事を切りだし、

「あかねさん、明日はブライアンさんのお見送りに行くんでしょう？」

「な、何で、ウチが……」

「「「ジイイイ」」」

「い、行くわあ!」

四人の疑惑の視線を受け、あかねは顔を真っ赤にしながら見送りに行くのを認めた。

そんなあかねの様子を、廊下から眺める視線があった。それはあおいで、あおいは、何所か乙女つぼきを出し始めるあかねを、苦々しく感じていた。

（何や!?最近のあいつは、何所か腑抜けとるやんけ?）

あおいは、何所かあかねをライバル視していた。自分と外見が似て居るのはもちろん、言葉遣いもそっくりで、あおいにとっては、そんなあかねが目障りながらも気になった。そんなあかねの腑抜けた姿を見たあおいは、

（腑抜けたキュアサニーに、ウチが活をいれてやろうやないかあ!）

あおいの目がキラリと怪しく輝いた事を、あかねが知る由も無かった。

翌日・・・

ブライアンは、お世話になった日野家の人々に別れの挨拶をしていた。大悟と正子も、優しく明るいブライアンを気に入っており、別れを惜しんだ。

「ブライアン、また何時でも遊びに来いや」

「ホンマや、またお好み焼き食べさせたさかいなあ」

「でも姉ちゃん、ちよつと出てくるって出かけたわりに、中々帰って来ないなあ?」

げんきは、中々戻って来ないあかねに痺れを切らし、辺りを見に行つたものの、あかねの姿は見当らなかつた。大悟は軽く舌打ちし、

「チツ、全くしようがねえ奴だなあ……」

「いえ、あかねも色々忙しいですよ……それじゃあ、パパさん、ママさん、ゲンキ、お世話になりましたあ！あかねにも、よろしく伝えて下さい」

ブライアンは、そろそろ出発する事を伝えると、正子は申し訳無さそうな表情を浮かべながら、

「そ、そう!?ブライアン、ゴメンなあ……あかねが帰って来たら、直ぐ後を追わせるよつて」

「ハハハ、では皆さん……グツバアイ！」

ブライアンは笑顔を浮かべながら、気さくに右手を挙げて、大悟、正子、げんきの三人に手を振りながら、イギリスに戻る為、空港へと向かった。

あかねは、ブライアンの見送りに行くつもりだったのだが、いざブライアンの帰国がもう目の前に迫ってくると、思わず逃げるように家を飛び出して居た。どんな顔でブライアンを見送れば良いのか、あかねには分からず、宛てもなく歩いて居た時、あかねの前にあおいが現われた。あおいは、あかねを学校に連れ出すと、あかねは怪訝な表情で、

「何の用や!?ウチは今、メツチャ忙しいねん」

「忙しい!?ハン、腑抜けのくせに用言うわ」

「ふ、腑抜けやお？」

「自分の顔、鏡で見てみいや！今にも泣きベソかきそうな顔してるでえ？」

「な、何やお・・・」

あかねは、あおいの言葉を否定しようとしたものの、その先の言葉が出て来なかった。あおいの言う通り、確かに今の自分は、腑抜け同然かも知れなかった。あおいは、自分に言い返して来ないあかねにイライラし、バッドエンドサニーの姿に変化すると、

「何で言い返せへんのやあ？今のアンタ見とると・・・メツチャ苛つくわあ！さつさとプリキュアに変身しいや！ウチがアンタのその根性・・・叩き直したるう!!」

あかねは、バッドエンドサニーの言葉は本心だと知り、自分もサニーに変身して、この場をやり過ぎさなければ、バッドエンドサニーは、本気で自分を倒しに掛かる気がした。あかねは渋々ながらスマイルパクトを取り出すと、

「じゃあない・・・プリキュア！スマイルチャージ!!」

「太陽サンサン、熱血パワー！キュアサニー!!」

七色ヶ丘中学校校庭で、二人のサニーが向かい合った。先に仕掛けたのはバッドエンドサニー、素早い動きでサニーを翻弄し、近付くやいなや、パンチが、キックが、サニーに容赦無く浴びせられ、サニーが吹き飛ばされる。バッドエンドサニーは軽く舌打ちし、

「チツ、やつぱ腑抜けとるやんかあ! どないしたああ!!」

再び容赦無いバッドエンドサニーのパンチとキックの連打が、サニーに浴びせられた。

「何を悩んだのか知らんけど、どうやら無駄になりそうやなあ?」

バッドエンドサニーの、何気ない一言を聞いたサニーは思わずハツとした。

(無駄になる!?・・・ちゃうわ! 無駄な事に何かならへん。ウチはブライアンのお陰で、英語が楽しく思えてきたし、ブライアンと過ごした時間は、決して無駄やない! 離ればなれになっても、一緒に過ごした時間は消えへんのやああ!!)

サニーの迷いが吹っ切れた時、サニーの目に闘志が宿り、バッドエンドサニーのパンチを受け止めた。

「フン、ようやく何時ものアンタらしゅうなったやないか」

「ある意味、アンタのお陰や・・・」

「フン、お世辞言つても何もあらへん・・・勝負は預けるでえ!」

バッドエンドサニーは、口元に笑みを浮かべながらその場を後にした。迷いを吹っ切ったサニーはあかねの姿に戻り、ブライアンの見送りに向かう為、急いで家路に着いたが、あかねは、大悟、正子、げんきの叱責を受けた。

「あかね、何モタモタしてたんやあ」

「ブライアン、さつき帰ってしもうたでえ」

「姉ちゃん、はよう後を追わんと」

「分かつとる！」

あかねは、全速力で駆けて空港行きのバス乗り場に向かった。バス亭には、既にみゆき達が来て居た。

「あかねちゃん、遅いよお！」

「バス20分前ぐらいに行っちゃったよ！」

「クツ、アカンかったかあ・・・」

みゆきとやよいから、バスが出てしまった事を聞き、あかねの表情が曇った。なおは、れいかを振り返り、

「れいか、ブライアンくんが乗る飛行機の時刻は、何時つて言つてたっけ？」

「確か、12時35分発の便だと言つていました」

れいかは、先程ブライアンを見送つた時の記憶を思い出し、一同に教えると、なおが慌ててバスの時刻表を調べた。

「つて事は、今は10時30分だから・・・駄目だ！次のバスは一時間後だから、待つて居たら間に合わない」

「だったら、タクシーを！」

みゆきは、タクシーの前に両手を振って飛び出し、タクシーが慌ててブレーキを掛けて止まった。運転手の怒声混じりの声のみゆきに飛ぶも、みゆきは必死にタクシーの運転手に話し掛け、

「すみません！空港まで大至急でお願いします！」

「空港!?!週末のこの時間じゃ、途中で渋滞に嵌るかも知れないけど……」

「それでも構いませんから……あかねちゃん、乗ってええ！」

「みゆき……」

「あかね、あたし達のお財布事持っていて」

「何かの足しにはなる筈です」

「あかねちゃん、ちゃんとブライアンくんにお別れ言うんだよ」

「なお、れいか、やよい……おおきにい！」

仲間達の友情に目頭を熱くしたあかねは、タクシーに飛び乗り空港へと向かった。そのタクシーを、みゆき達は見えなくなるまで見送った。あかねが無事ブライアンと、お別れの挨拶が出来ますようにと祈りながら……

(成る程、それでサニーは腑抜けになつてたんか?)

そんなみゆき達の行動を、バッドエンドサニーが物陰から見て居たが、真相を知ると何処かに消え去った。

空港を目指していてタクシーだったが、20分程進むと、運転手が危惧したように渋滞に嵌ってしまった。

「他に裏道無いんかなあ？」

「下手に裏道進むと、返って時間掛かるよ？」

あかねはタクシーの中からキョロキョロ裏路地を見て見るも、確かにそちらも渋滞でほとんど動かないようだった。痺れを切らしたあかねは、

「空港に行くには、どう行けばエエの？」

「ん!? 後はこの道を真っ直ぐ進めば標識も出てくるけど」

「ほな、此処でエエわ! おおきに、お代はいくら？」

「エツ!? まだ10キロ近くはあるよ？」

「ウチ・・・走るわ」

あかねは、仲間達から借りたお金でタクシー代を払い、タクシーから降りると、空港目指して駆け出した。9月の下旬に入ったばかりだったが、まだ夏の名残が続き熱かったが、あかねは懸命に走った。顔から汗がダラダラ流れてくるのを、時折手で拭いながら、あかねは空港目指して駆けた。どれくらい走ったのか、運転手が言っていたように空港までの標識が見えた時、あかねは思わず油断して足が纏れて転んだ。

（クツ!? こんな所で倒れ取る場合じゃ無いちゅうのに・・・）



立ち上がったあかねは再び走り出すも、先程のような軽やかな走りは出来なかった。  
(此処まで来たつちゆうのいにい．．．)

思わずあかねの目から涙が零れ落ちた時、背後から突然声が掛かった。それはバッドエンドサニーで、再びあかねを険しい表情で見つめた彼女は、

「チツ、また腑抜ける気かよ！ 目障りだ!!」

「なっ、何やと!？」

あかねは、バッドエンドサニーの奇襲を受け、為す術も無く上空高く持ち上げられた。このまま地上に落とされれば、プリキュアに変身する前に地上に落下するかも知れない脅威が、あかねの心に沸々沸いてくる。

(こ、こんな所でやられる訳にはイカンのやあ)

カツと目を見開いたあかねだったが、ある事に気付き思わず呆然とした。何故なら、あかねの視線の先には、自分が向かおうとしていた空港が、どんどん近付いて居るのだから．．．

「バッドエンドサニー．．．アンタ、ウチを空港まで!？」

「さて、何の事や？ ウチは、アンタを怯えさせようと空に連れ出しただけや．．．けど、あんま効き目無さそうやなあ」

バッドエンドサニーは、そう言うとはどんどん下降し、空港にあかねを下ろすと、その

まま何も言わず飛び去った。周りがざわめく中、あかねは腰が抜けたかのように、呆然と座り込んだまま放心していると、あかねの目の前に手が現われた。ハツとしたあかねが手の主を見ると、大丈夫というTシャツを着たブライアンが、優しい笑みを浮かべながら、手を差しだしていた。

「あかね・・・大丈夫や?」

「ブライアン・・・アホ、それはウチのセリフや」

そう言いながら、あかねは嬉しそうにブライアンが差し出した手を握って立ち上がった。あかねはこの日、優しい仲間達、好敵手、そして、自分に英語の楽しさを教えてくれた、ブライアンと出会えた事を、心の底から感謝した・・・

4、やよいとやおい・・・主役は、わ・た・し!

ブライアンが帰国してから数日後・・・

やよいの母である千春は、家で頭を抱えて居た・・・

千春は、キッズファッションの関連会社で企画を担当していたが、明日の母娘ファッションショーに参加予定だった子供達が、ノロウイルスに感染してしまい、明日のファッションショーには出られない旨の連絡を受けていた・・・

(どうしよう!?!今更延期に何か出来ないし・・・)

千春は、藁にも縋る思いで、携帯を掛けた・・・

「もしもし、来海先生ですか？何時もお世話になっております。黄瀬ですけど・・・」

千春が携帯を掛けた相手は、えりかの母である来海さくら、元ファッションモデルで、美希の母レミとも交流があった。今はファッションショップ、フェアリードロップを経営して居るオーナー兼デザイナーで、千春の会社とも取引をしていた。千春は、現状をさくらに説明すると、

「そう、それは困ったわねえ・・・で、母娘ファッションショーっていうのは、あくまでも小学生のお子さんまでの対象なのかしら？」

「いえ、今回は合同企画でして、下は幼稚園から、上は大学生でも大丈夫ですけど・・・」

「あら!? だったら、あなたの娘さんと一緒に出たら？」

「エツ!? やよいと? で、でも、私は現場のスタッフですから・・・」

「そう、ちよつと待ってね・・・ももかあ! えりかあ! ちよつと来てえ!!」

さくらは、娘でカリスマファッションモデルである来海ももか、えりかの姉妹を呼ぶと、状況を二人に説明した。ももかはさくらに拝むような仕草をし、

「ゴメエン! 私、明日は仕事が入ってて・・・」

「そう・・・えりかは?」

「あたし!? あたしは別に良いけど・・・」

「じゃあ、決まりね！千春さん、私と娘のえりかが、参加させて貰うわ。それと、私の方から知り合いに声を掛けて聞いてみるわ」

「本当ですか!?!そうして頂けると助かります・・・ハイ！ハイ！私の方でも何人かに当つてみますので・・・来海先生、本当にありがとうございます」

そんな千春の会話を、部屋の中からやよいとやおいが盗み聞きしていた。ミラクルピースの、次作の構想を打ち合わせしていた二人は、思わず顔を見合わせ、

「ママ、何か困つてたなあ・・・」

「やよい、ファッションショーって何だっけ？」

「ファッションショーっていうのはね・・・」

やよいは、やおいに簡単にファッションショーについて説明すると、見る見るやおいの目が輝いた。やよいは恥ずかしり屋なのに対し、やおいは目立ちたがり屋だった。部屋から出たやおいは、目をウルウルさせながら千春に話し掛け、

「相手のママのピンチに、私黙って何か居られない・・・私で良ければ、ファッションモデルやつても良いです」

「エツ!?!やおいちやんが?」

「ウン！それとも・・・お母さんが居ないとダメでしょうか?」

そう言うと、やおいは落ち込んだ表情を浮かべた。やおいの演技に欺まされた千春

は、慌てて首を振り、

「ありがとう、やおいちちゃん．．．じゃあ、お言葉に甘えてお願いしちやおうかしら？」

「ハイ！やよいもやるよねえ？」

「エエエ!?私もおお？」

「ママのピンチ何だしさあ？」

「ウ、ウン．．．そうだ！ママ、人数は多い方が良いの？」

「ウゝン．．．多すぎても困るけど、来海先生母娘は参加して頂けるから、母娘なら、あと最低7組は欲しいわねえ．．．後は、お子さんのファクションショーで誤魔化しが聞  
くし．．．」

「年齢はバラバラの方が良いの？」

「そうね、今回は色々な世代をターゲットにしてるし．．．出来れば下は幼稚園から、上は大学生ぐらいまで、幅広い方が盛り上がるかも知れないわね」

「じゃあ、みゆきちゃん達に頼んでみようか？」

「エッ!?そうね．．．それはママから、育代さん達に話してみるわ」

「分かった！じゃあ私は、知り合いに連絡してみる」

やよいは、プリキュアの仲間達に、ママのピンチを助けて欲しいと連絡を入れた．．．

その結果、さくらから連絡を受けたレミは、美希を半ば無理矢理説得して母娘で参加、

レミは更に、あゆみ、尚子にも連絡を入れ、ラブ、せつな、祈里も母娘で参加、えりかはつぼみといつきも誘い二人が参加、千春に頼まれた育代と静子は、娘のみゆきとれいかと共に参加するも、店がある正子と、妊娠中のとも子は遠慮し、あかね、なお、あゆみ、真琴とアン王女は個人で参加、他にはほのか、薫、のぞみ、かれん、エレン、アコが参加する事になった。

「ウー、まだ母娘が二組足りないなあ・・・」

「そうだ！私に考えがあるよ」

「やおいちゃんに？」

「ウン！アクアとアン王女を欺ましてさ・・・」

やおいは、やよいに何やら耳打ちすると、見る見るやよいの表情が曇った。そんな事をしたら、かれんとアン王女が怒り出しそうな気がして、やよいは思わず背筋がゾツとするも、母である千春のファッションショーが成功するなら、後で二人に怒られても良いと思うやよいだった・・・

そして、ファッションショー当日・・・

会場には大勢のお客さんが入って、千春はホッと胸を撫で下ろした。既に控え室には、今日のショーに参加するメンバーも控えて居た。

「急な頼み事だったけど、最低限の人数確保出来て良かったわあ。みんなに感謝しないと……」

そんな千春に、背後から声を掛けた者が居た。千春が振り返ると、思わず笑みを浮かべて手を差しだし、

「館さん、ご無理を言つて申し訳ありませんでした」

「いえ、こちらこそ、こういうショーを沢山経験させる事は、きららの役に立ちますわ」千春が挨拶をしたのは、芸能プロダクションの社長である館響子、元々はファッションモデルをして居たそうで、その容姿は美しかった。黒色のショートヘアをしており、眼鏡を掛けた姿は、どこか知的に見えた。半袖をした緑色の服と、黒色のスカート姿で、薄い紫色のタイツを履いて居る姿は、今回のファッションショーに参加しても、注目を浴びるだろうと思われる。千春は、そんな彼女に頭を下げ、

「そう言つて貰えると助かります」

「いえ、もう一つのご要望には残念ながら、ステラは海外のショーの準備で忙しくて……」  
「急なお願ひでしたから……きららちゃんが出て頂けるだけでも、大変感謝しております」

千春はそう言うと、笑みを浮かべた。

控え室では、素人同然の一同が緊張しまくっている中、レミとさくららは、こういう舞

台に慣れて居て、久々の再会に会話を弾ませて居たが、

「でも不思議よねえ!?!あの方と何処かであったような気がするんだけど・・・」

さくらはそう言うのと、談笑する育代と静子、あゆみと尚子を見て首を傾げた。レミはあつけらかんと、

「アラ!?!だって、夢の中で・・・」

「ちよ、ちよつとママアア!?!」

レミはついうっかり、ファレオに呪われて生死を彷徨う娘達を救う為に、魔王と呼ばれて、夢の世界に行った事をさくらに話しそうになり、変顔浮かべた美希が慌てて止めた。そんな賑やかな控え室で、一人の少女が一同から離れた所で黙々と何かの勉強をして居た。少女の名前は、天ノ川きらら、今売り出し中の小学生モデルで、茶髪のツインテールをしていて、髪留めには、星の飾りが付いたゴムを付け、黄色い服装を好むのか、黄色のワンピース姿をして居た。母はカリスマトップモデルであるステラ、父は大物俳優である高天原健で、両親とも不在の時が多く、事務所の社長で、ステラの親友でもある響子が、きららを公私共に面倒見て居た。きららの事は、美希やももかも知っていて、二人もきららには一目置いていた。美希は、母レミを見張っているようにえりかに頼むと、きららの下に近付き声を掛けた。

「きららちゃん、あたしは蒼乃美希、今日はよろしくね」



「ハイハイ、よろしくう」

きららは、美希に視線を合わせる事無く、そのまま黙々と書き物をしていた。何気にチラリと美希が見てみると、数学の勉強をしているようだったが、小学生の問題としては、難しいように美希には感じられた。

(最近の小学生って、こんな問題までやるのかしら?)

美希が思わず驚いていると、視線に気付いたのか、きららが徐に嫌そうな表情で顔を上げ、

「いくら先輩でも、人の物を覗き見るのはどうかと思うけど?」

「ゴ、ゴメンなさい、悪気は無かったの」

美希は、きららを可愛げない子だなあと思いつつも、非があるのは自分の方だと素直に謝り、仲間達の下へと戻った。ラブとのぞみが美希に近付き、

「美希たん、あの子と何かあったの?」

「さつき私が話し掛けた時も、何か素っ気なかったなあ・・・」

「何か勉強してたようだし、邪魔しないで置いてあげましょう」

美希がそう二人に告げたのも束の間、やおいはゲスイ表情できららに近づき、小声で話し掛けると、

「精々私の引き立て役として頑張ってねえ?」

「ハイハイ、あたしの引き立て役として頑張ってる」

「ハア!? あんたが、私の・・・」

きらららに言い返され、やおいが言い返そうとした時、そろそろ衣装に着替えて欲しい旨を、スタッフから一同に告げられた。真っ先に立ち上がったのはきらららで、その目はキラキラ輝いて居た。美希は思わず目を見張り、

（あの子の雰囲気が変わった!?）

そんな美希の耳に、レミときららの会話が聞こえてきた。二人もきららの変化に気付いたようで、レミはさくららに話し掛け、

「見て、さくらさん、あの子の雰囲気・・・変わったわ」

「本当、あの子確か、ステラのお子さんでしょう?」

「ステラちゃんのか? 成る程、それならあの年で独特のオーラを持って居ても驚かないわ」  
（ステラ!? あの子、トップモデルのステラの娘なの?）

これが、トップモデルとして生涯のライバルとなる、美希ときららの最初の出会いだった・・・

説明をしにきたスタッフから、大まかな説明が着替えを終えた一同に説明がされた。先ず、子供達から順にファッションショーを始め、最後に母娘ファッションショーをや

ると説明があつた。トップバッターは天ノ川きさら、後は、慣れて居ないだろうかという配慮で、順につぼみといつき、ほのかとのぞみ、あかねとなお、あゆみと薫、せつなとエレン、やよいとやおい、その後から母娘フアッションショーを始め、さくらとえりか、桃園あゆみとラブ、尚子と祈里、育代とみゆき、静子とれいか、アン王女と真琴、かれんとアコ、トリにレミと美希で、最後に全員で舞台を一回りする手順を説明された。

「ちよつと待つて下さい！」

顔色を変えながら、同時にスタッフに待つたを掛けたのは、アン王女とかれん、二人はこめかみを痙攣させながら、

「何故、私達が母親役なのでしょうか？」

「姉なら納得出来ますけど……」

「ハア、そう言われましても……」

アン王女とかれんはスタッフに詰め寄るも、慌てて千春が手を拝みながら駆け付け、「ゴメンなさいねえ……母娘役の人数が足りなくて、二人なら喜んで協力してくれるつてやおいちゃんに聞いたから、てつきり話を通つてるものだと……」

「やおい!!」

かれんとアン王女の視線が、ニンマリしてピースするやおいと、申し訳無さそうにペコペコ謝るやよいの姿を目にした。

（嵌められた・・・）

二人は、恨めしそうな視線をやおいに浴びせるも、このままショーを台無しにする訳にも行かず、渋々ながらアン王女は真琴の母親役を、かれんはアコの母親役を引き受けた。薫は小声でかれんに話し掛け、

「かれん・・・何なら私がアコの母親役代わってあげるわよ？」

「代わって欲しいのは山々だけど・・・今回はやよいのお母さんの為だし、我慢するわ」  
こうして始まろうとしたファッションショーだが、やおいは、さも当たり前のように身構えるトップバッターのきららに、不快感を覚えていた。

「あの子の服に切り込み入れて、舞台上で赤っ恥かかせてやろうかしら？」

「や、やおいちちゃん、それはダメだよ！」

「だって、あの態度・・・アアア、もうムカツクウウ！」

「や、やおいちちゃん!？」

やおいは、やよいが止めるのも聞かず、舞台裏から駈け去ると、瞬時にバッドエンドピースの姿に変化した。

「こうなったら、バッドエンドピースで主役になっちゃうもんねえ」

バッドエンドピースが突然舞台に現われると、ファッションショーが始まったのかと一瞬響めいた。きららは突然現われたバッドエンドピースに表情を険しくし、慌てて舞

台に飛び出すと、

「ちよつとお！何よ、アンタは？」

「私!? 私はバッドエンドピース、このショーの主役は、わ・た・し・なのおお！」

「ハア!? さつさと神聖な舞台から降りなさいよねえ！」

何やら言い合いを始めた二人に会場がざわめき、異変は他の一同にも知れ渡った。レ

ミとさくららは首を傾げ、

「何かしらあの娘!? 飛び入りかしらねえ？」

「さあ!? 千春さんは何も言つて無かつたけど？」

美希達もバッドエンドピースに気付いたものの、身内が居てはこの場で変身出来ず困惑した。それに気付いたラブの母あゆみは、レミと尚子を促し、さくら、育代、静子に声を掛け、

「皆さん、ちよつとスタツフさんに事情を聞いて参りましょう！ラブ、せつちゃん、あなた達は此処に残つてて」

あゆみは、ラブとせつなにウインクすると、母親達を舞台裏から連れ出した。それを見たほのかは、一同に語り掛け、

「私と薫さん、アン王女は、その隙にあの子を助けるから、みんなはバッドエンドピースをお願い」

『ハイー！』

なぎさと満がこの場に居ない為、プリキュアになれないほのかと薫は、アン王女と共にサポートに回った。ラブは、念の為持って来たクローバーボックスを、ほのかに預けると、

「分かった、預かるわ」

「お願いしますー！」

ラブは一同を振り返り、リンクルンを手に持って声を掛けると、

「みんな、行くよー！」

『分かった！』

ラブの合図に頷き返し、一同も変身アイテムを手に持った。

「プリキュア！メタモルフオーゼ！！」

「チエインジ・プリキュア！ビートアップ！！」

「プリキュア！オープンマイハート！！」

「レッツプレイ！プリキュア！モジュレーション！！」

「プリキュア！ラブリンク！！」

「大いなる、希望の力！キュアドリーム！！」

「知性の青き泉！キュアアクア！！」

「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュ、キュアピーチ!!」  
「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ、キュアベリー!!」  
「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュ、キュアパイーン!!」  
「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ、キュアパッション!!」  
「二」フレッシュプリキュア!!」

「大地に咲く一輪の花・キュアプロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花・キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花・キュアサンシャイン！」

「二」ハートキャッチプリキュア!!」

「爪弾くは、魂の調べ！キュアビート!!」

「爪弾くは、女神の調べ！キュアミューズ!!」

「勇気の刃！キュアソード!!」

仲間達が続々プリキュアになる中、みゆき達は困惑していた・・・

「どうしよう!?!私達、出来ればバッドエンドプリキュアとは・・・」

「そうは言うても、このままには出来んやろう?」

「せつかくのやよいちゃんのお母さんの企画が、台無しになっちゃうし」

「そうですね・・・致し方ありません！」

「そ、そんなぁ・・・」

せつかくのフアツションショーを、メチャメチャにしそうな勢いのバッドエンドピースに、みゆき達は苦渋の表情を浮かべながらも、スマイルパクトを手に持った。あゆみは、そんなやよいの気持ちを察したのか、

「大丈夫、ここには他のプリキュアのみんなも居てくれる。私達は、少し様子を見ましよう?」

「「「そうだね」」」

「あゆみちゃん」

あゆみの提案に一同も同意し、やよいは嬉しそうに目を輝かせた。だがその間にも、きららに散々罵声を浴びせられたバッドエンドピースは、

「もう、あの子生意気で頭来ちゃう!世界よ、最悪な結末に変わっちゃって!白紙の未来を黒く塗りつぶしちゃうおう!!」

バッドエンドピースは、黒き書を取りだし、黒い絵の具を黒き書を開いて、白紙のペー  
ジに勢い良く叩き付けると、空が不気味に黄色く変化し、その周りを落書きで描いたよ  
うなイラストが覆っていた。会場中の人々がネガティブな言葉を発し、きららもまた膝  
から崩れ落ちた。

「あたしが、ママみたいなトップモデルになれる訳・・・」



「エへへ、そうそう、主役は私に任せておけば良いの！」

きららがネガティブな言葉を発し始め、バッドエンドピースが嘲笑し始めた時、きららの瞳に再び光が宿った。立ち上がったきららは、

「あたしは、天ノ川きらら！何時か世界の檜舞台で、ママと共に共演する時まで、挫けて何かいられますか？言うの!!」

「な、生意気いい!!?アカンベエ、出て来てええ！」

バッドエンドピースは、以前ジョーカーから貰った銀鼻のアカンベエを召喚すると、フアッションシヨアの看板が、帽子を被ったアカンベエの姿に変えられた。バッドエンドピースは、きららを指差し、

「アカンベエ、あの子をエンエン泣かせてあげてえ！」

「アカンベエ！」

バッドエンドピースの命を受け、アカンベエがきららに近づいてくると、流石のきららも狼狽へた。

「な、何あれ!?!」

「泣いたら許してあげるう」

「ベエ！誰が泣きますかって言うの」

「プリンスカプン！アカンベエ、傷付けない程度にやっちゃってえ」

きららは、バッドエンドピースに舌を出し、バッドエンドピースの命を受けたアカンベエは、きららに狙いを定めると、パンチを繰り出した。きららは何とか躲すも、風圧で身体が吹き飛ばされ宙に浮いた。そのきららを、何者かが空中でキャッチした。

「大丈夫!?!後はあたし達に任せて!」

「エッ!?!」

きららを助けたのはキュアベリー、ドリームとアクア、ピーチ達、ブロッサム達、そして、ビートとミューズがアカンベエを取り囲み、アカンベエが狼狽えた。ベリーはその隙に、ほのかと薫、アン王女にきららを託すと、キツとバッドエンドピースを睨み付けた。

「何でこんな事するの!」

「だってえ……あの娘生意気何だもん」

「だからって、せっかくのショーを台無しにしようだ何て、あたし達が許さないわよ!」  
「ベエエだ!もう今度会ったら敵同士だって、ちゃんと伝えたもん、遠慮しないからあ……アカンベエ!!」

バッドエンドピースの命を受け、アカンベエがプリキュア達に攻撃を開始した。帽子を手にとると、ブーメランのようにプリキュア達目掛け飛んで来るも、プリキュア達は躲し続ける。勢いが弱まった所で、ドリームとピーチが帽子を蹴り返し、体勢を崩した

アカンベエに、ブロッサム達三人とビートが加わり、アカンベエを蹴りで転倒させた。アクアは一同に檄を飛ばし、

「此処で戦い続けたら、会場の人々に被害が出てしまうわ」

「私に任せて！シ、の音符のシャイニングメロディ！プリキュア！シャイニングサークル！！」

ミューズは、四人のミューズの幻影を生み出し、五芒星のようなサークルを描き、困惑するアカンベエの動きを封じた。ピーチは、仲間達に声を掛け、

「みんな、後は任せて！ベリー、パイン、パッション、行くよ！！」

「OK！！」

「クローバーボックスよ、私達に力を貸して！！」

ピーチの言葉を受け取ったかのように、ピーチが念の為持つて来てほのかに預けたクローバーボックスが開き、クローバーボックスから放出された光が、リンクルンに力をもたらしした。

「プリキュアフォーメーション！」

ピーチの合図を受け、四人が一斉にしゃがみ込み構えると、初めて見たバッドエンドピースときからは、思わず目を見開いて驚いた。

「レディイー・・・ゴー！！」

再びピーチの合図で今度は走り出した四人、

「ハピネスリーフ！セフト！パイン！！」

パッションから始まったハピネスリーフ、パッションはパインに投げると、

「プラスワン！プレアリーフ！ベリー！！」

受け取ったパインが、プレアリーフをセットしベリーに投げる。

「プラスワン！エスポワールリーフ！ピーチ！！」

受けたベリーが、エスポワールリーフをセットし、ピーチに思いを託し投げる。

「プラスワン！ラブリーリーフ！！」

受け取ったピーチは、ラブリーリーフをセットし、四つ葉のクローバーマークを完成させる。ピーチが四つ葉のクローバーマークを投げると、それは巨大化し、四人はそれぞれのマークの上に乗って、クローバーの中心部に居るアカンベエの上で下降し、アカンベエを巨大な水晶の中に閉じ込めた。

「[[[[ラッキークローバー！グランドファイナーレ！！[[[[

ラッキークローバー・グランドファイナーレの力は、凄まじい輝きを放ち、アカンベエを光の輝きの中で包み込んで浄化した。悔しがるバッドエンドピースに、ソードが攻撃を仕掛け、

「バッドエンドピース、遂に本性を見せたわね！私が相手よ」

「何よお、ソードは私のパシリのくせに……」

「パシリって呼ばないで！」

ソードは、思わず頬を膨らませながらも、バッドエンドピースに攻撃を始めた。ソードの攻撃を躲し続けたバッドエンドピースは、悲しげに自分を見つめるやよいの姿を見ると、思わず胸がチクリと痛んだ。

「きよ、今日の所は見逃してあげる」

バッドエンドピースはそう言うのと姿を消し、バッドエンド空間が解除された。それに合わせるかのように、プリキュア達は一斉に舞台から消え、人々は正気を取り戻した。きさらは、側に居たほのか、薫、アン王女に話し掛け、

「今の……何なの？」

「エツ!? エエエと……プリキュアかしら？」

「プリキュア!? あの横浜の? でも、あの黒いのもプリキュアっぽかったよねえ?」

困惑気味にほのかが答えるも、バッドエンドピースの姿もプリキュアに似て居た事で、きさらは首を傾げた。薫は、困惑するほのかに助け船を出したかのように、

「さあ、邪魔者は消えたし、舞台裏に戻りましょう」

「そうですわ! あなたはトップバッターなのですから」

「ウ、ウン……」

きららは、薫とアン王女に促され、舞台裏へと戻った。ハプニングはあったものの、15分遅れで、フアツションショーを開幕するアウンズが場内に流れた。美希はきららに声を掛け、

「きららちゃん、頑張つて」

「当然っしょ！」

可愛くない態度を取るきららに、美希は思わず苦笑を浮かべると、美希の背後から声が掛かり、

「姉御、あの生意気な子、やつちやいましょうか？」

物騒な言葉を放ったのが、えりかだと思つた美希は、険しい表情を浮かべると、

「姉御!? えりかあ、何て事を・・・」

「み、美希姉え、あたしじゃないよお」

えりかは、自分が疑われている事に気づき、変顔浮かべながら右手を振ると、美希もえりかじゃ無いと気付き、慌てて背後を振り返つた。そこには、何所で見付けたのか、昭和時代のチンピラが掛けて居たような、サングラスをしたやおいとやよいの姿があり、思わず美希は呆然とした。

「な、何で、あなたが此処に!?!」

「エエエ!?! だつてえ、私出場者だよ?」

やおいは、先程の騒動を引き起こしたのも何のその、何食わぬ顔で舞台裏に戻つて来て居た。他の一同は呆れ返り、かれんは窘めるようにやおいに話し掛け、

「こんな騒動引き起こしておいて、よくも又ケヌケと言うわねえ？」

「あれは・・・バッドエンドピースの仕業だもん」

のぞみも開いた口が塞がらないとばかり、やおいの性格に呆れ返り、

「だから、それはあなたでしようが？」

「エへへ、今はやおいだもん・・・ねえ、やよい」

「ウン！戻つて来てくれて良かった」

『良い性格してるわ・・・』

一同は思わず、微笑みながらピースするやおいを見て呆れ返つた。

遂に開幕したフアッションショー・・・

トップバッターのきららは、堂々とした姿で会場を盛り上げ、その姿に引つ張られたように、つぼみといつき、ほのかとのぞみ、あかねとなお、あゆみと薫、せつなどエレン、やよいとおおいが場を盛り上げた。母娘フアッションショーも、十数年振りにモデルとして復帰した、さくらとえりかで場を盛り上げ、桃園あゆみとラブ、尚子と祈里、育代とみゆき、静子とれいか、仲が良い母娘の雰囲気でも盛り上げ、アン王女と真琴、かれんとアコは、母親役の二人が引き攣つた笑みを浮かべながらも、何とか乗り切り、ト

リでレミと美希が、美人姉妹のようなスタイルの良さで観客達を魅了した。

（へえ、中々やるねえ）

舞台袖で見て居たきらは、美希がモデルとして中々の素質を持つている事を見抜いた。最後に全員で舞台を一周し、ファッションショーは大成功を収めた！

千春は、今日の功労者である一同に深々とお辞儀をして礼を述べ、

「皆さん、本日はお疲れ様でした！ささやかですが、打ち上げのパーティーでも開きたいと思っておりますので、お時間の都合が付く方は、このままお待ち頂き、レストランの方にお出で下さい」

一同が歓声を上げる中、きらは興味無さそうに立ち上がり、事務所の社長である響子に話し掛けると、

「ほんじゃ社長、あたし帰るんで！」

「分かったわ」

「それで社長、仕事の方向だけど・・・」

「分かってるわ！ノーブル学園の受験が終わるまでは、ちゃんとセーブするから安心して」

「了解！そんじゃ、お先い!!」

きらは軽く一同に挨拶し、響子が一同に頭を下げて、共に控え室を出て行った。や



おいはやよいに話し掛け、

「エエエ!?何あの娘、感じ悪ううい・・・やよい、次作にあの娘出して、酷い目に遭わせてやろうよ」

「アハハハ・・・無理」

やよいは、何と言葉を返して良いか分からず、笑って誤魔化しながらも、ハッキリ否定し、やよいは頬を膨らませた。美希は、思わず溜息を付き、

「ハア、あんたが言うか・・・全く」

室内からは、笑い声が響き渡った・・・

社長である響子の車に乗り込んだきさららは、青空を見つめながら、その先のビジョンを浮かべていた。

（ママと同じノーブル学園に入り、あたしは、ママが学んだ何かを吸収して、トップモデルとしてママに追いつき、追い越すんだからあ！）

響子は、そんなきさららを見て一抹の不安を感じて居た。ステラときさららでは、決定的に違うものがあつた。ステラはその明るいい性格で、仲間達と共に自分の魅力を高めて行つたが、きさららは、自分の殻の中だけで、魅力を高めようとしていた。

（きさらら、私やステラが忠告しても、あなたは聞く耳を持たないでしょう。ノーブル学園

で、良い仲間と出会いなさい！そうすれば、あなたは必ず世界に羽ばたくわ!!）  
響子の想像通り、後にきららはノーブル学園に入り、一人の少女と出会った事で、プリキュアとして目覚め、そして、一流モデルの夢に近づく事になるのだが、それはまた別のお話・・・

第百十六話：スマイルプリキュアとバッドエンドプリキュア（前編）

完

# 第一百十七話：スマイルプリキュアとバッドエンドプリキュア（後編）

## 1、なおとなみ・・・激走！リレー対決

9月も終りに近付き、秋の気配が深まってきた。七色中学校でも他の学校同様、体育祭の日程が近付いて来た。佐々木先生は、ホームルームを使ってリレーの立候補者を募って居た・・・

「じゃあ、男子はこのメンバーで行きましょう。次に、女子メンバーで立候補する人は居ないかしら？ 推薦でも構いませんよ」

佐々木先生はそう言いながら教室内を見回した。一同が視線を避ける中、只一人背筋を伸ばして、大きく手を上げて居たのが、なおであった。佐々木先生は思わず笑みを浮かべた。このクラスの女子、いや男子と比べても一番速いであろう、なおが立候補してくれるのは、佐々木先生にしてもありがたい事だった。

「緑川さん、あなたが立候補してくれるのは大歓迎よ」

「ハイ！ それと、推薦したい人達が居るんですけど？」

なおの問いに、佐々木先生は一瞬驚いた表情を見せたものの、直ぐにコクリと頷き、

「どうぞ、誰かしら?」

「ハイ!青木さん、星空さん、日野さん、黄瀬さんです!!」

なおはそうハッキリ断言した。名前を呼ばれたれいか、みゆき、あかね、やよいは、思わず驚愕しながらなおを見つめ、他の生徒達もざわついた。なおは、みゆき達を見つめると、嬉しそうに微笑んだ。だが佐々木先生は、なおの推薦メンバーを聞いて呆気に取られた。

（日野さんは分かるし、青木さん、星空さんも、足は速い方だと思うけど、黄瀬さんは……）

佐々木先生の疑問は尤もだった。やよいは、クラスの中でも一、二位を争う程、足は遅かったのだから……

「な、なおちゃん……」

やよいも、何故なおが自分を推薦したのか、その真意が読めず、困惑の表情でなおを恨めしそうに見つめた。なおは、白い歯を出すほどの笑みを浮かべ、やよいを安心させようとしているかのように、

「大丈夫!」

なおがそう断言し、佐々木先生も生徒の自主性を尊重して、クラスの女子リレー代表は、なお、みゆき、あかね、やよい、れいかで決定した。

その知らせは、隣の一組にも伝わった……

なみは、右手の拳と左手を合わせ、音を鳴らすと、

「へえ、あいつらが出るのかあ……上等！あたしらもリレーって奴に参加しようぜえ？」

なみはやる気満々で、みさき、あおい、やおい、れいなに声を掛けたが、仲間達の反応は鈍かった……

「エエエ!?面倒だよお？」

「そうや！疲れるだけやろう？」

「私……疲れるの嫌あ」

「そんなもので彼女達に勝つても、何の自慢にもならないんじゃないんじやなくて？」

みさき、あおい、やおい、れいなに拒否され、なみは髪を掻きむしると、

「ダアア、分かってねえなあ！この姿でもあたし達の方が上だって、ハッキリするだろう？」

「[[[[ウーン]]]]」

なみの言葉に、思わず四人は唖った。確かに学生姿は、バッドエンドプリキュアの時より、力はセーブされて居た為、なみの言う事も少しは理解出来るものの、この勝負に意味があるとは到底思えず、四人は首を傾げた。なみは、そんな四人を意に介さず、

「じゃあ、先生に言ってくるから！」

「[[[[エエエ!?]]]]」

なみは半ば無理矢理、みさき達四人をメンバーに加えて、一組のリレー選手に立候補し、堀毛先生に受理された。とはいえ、なみ達五人は、リレーについて、ただ五人で走る競技としか知らなかった。

その日の放課後・・・

なおは、さっそくリレーの練習をしようと、仲間達に声を掛け、みゆき、あかね、やよい、れいかは、体操着に着替えて、なおが来るまで準備運動をして居た。なおは、嬉しそうにバトンを振りながら、みゆき達に駆け寄ると、

「陸上部からバトン借りて来たよ」

あかねは、なおが来た事で、屈伸運動をしながら、素朴な疑問を口にした。

「なあなお、何でウチらを推薦したんや？」

あかねに聞かれたなおは、何でそんな事を聞くのだろうかと思っただのか、少し首を傾げながら、

「ん!?何でって・・・この五人で走ってたから」

「「エッ!?それだけ?」」

「ウン、それだけ」

「「「・・・・・・・・」」」

四人は、なおの真意が読めず思わず沈黙した。だが、なおと幼なじみであるれいかは、

ハッと何かに気付くと、

「なお・・・ひよつとして、この五人で、記憶に残る思い出を作りたいと思ったのですか？」

「「エツ!」」

「ウン! あたし達は、プリキュアになった事で絆が深まったけど、学校の行事でも、この五人で思い出になる事をやってみたいと思っただなあ・・・あゆみちゃんが同じ学校で、同じクラスだったら、また違う事考えたかも知れないけどねえ」

なおは、そう言うのと苦笑した。本当は、あゆみも参加した何かをしたいとも考えたが、それはこの前、やよいの母である、千春の会社主催のファッションショーに、他のプリキュア達の何人かと共に参加して居た事もあり、今回は体育祭をみんなと一緒に走って、思い出を作りたいと考えた。

「じゃあ、練習始めるよ!」

「「ウン!」」

なおの気合いの入った掛け声に、なおの真意を知った、みゆき、あかね、れいか、そして、走るのが苦手なやよいも同意した。勝ち負けよりも、みんなで協力して繋ぐバトルに意味があると、だが、それはなお達五人にとってであり、他のクラスメイト達に取っては、勝ち負けが大事だった。練習するなお達を、教室の窓から覗いて居た、同じクラ

スの男子、井上せいじと岡部かつとしは、微妙な表情を浮かべて居た。せいじは、かつとしに話し掛けると、

「なあ、何で緑川は、黄瀬何か推薦したんだ？」

「さあ!? 仲が良いからってだけだろう？」

「何だそりや!? 黄瀬何か出してたら、勝てるもんも勝てねえって」

「だよなあ!?!」

せいじの言葉に、同じ事を思っていたかつとしが頷きながら同意した。せいじは更に言葉を続け、

「隣の一組は、何か緑川達にそっくりな、あいつら五人が出るそうだし、三組は陸上部らしいぜ?」

「四組、五組、六組も、足の速いの揃えたって聞いたし、ウチのクラスはビリじゃねえ?」  
「アアアア」

やよいが代表で出る事に納得がいかない二人は、廊下に聞こえる程の声で嘆いた。そこにたまたま通りかかったなみとやおいは、少し教室の中を伺った。やおいは、漫画コンビを組んでいるやよいの悪口を言われた事で、自分でも分からないが、ムツとした表情を浮かべた。

「何よ、まだ始まっても居ないのに、あいつら、やよいだけ責めて・・・雷でも落として



やろうかなあ？」

「止めな！あたしらが口だしする事じゃ無いだろう？あいつらの話聞く限り、キュアピースは、どうやら足が遅いようだな」

「だからってさ……」

「まっ、あたしらは、あたしらの走りをすれば良いさ……ハッピー達の下に行こうぜ」  
なみは、まだ不機嫌そうにしているやおいの背を押し、みさき達と合流する為戻って行った。

練習を開始したなおは、先ずバトンをスムーズに次の走者に渡せるように、バトン渡しの訓練を始めた。初日という事もあり、四人はバトンを何度も落とすも、段々落とさずに出来るようになって来た。

「ウン、大分良くなってきたよ」

「けどなお……走る練習せえへんで、バトンの練習だけでエエんか？」

「ウン、バトンをスムーズに次の走者に渡せるようになれば、少しはタイムを短縮出来るし、先ずはバトンを渡す事を重点にしよう」

「二三分かった」

体育祭を一週間後に迎え、初日はバトン練習で終りを告げた……

だが、なおの真意を知ったみゆき、あかね、やよい、れいかは、それぞれ家に帰ってからも独自の訓練をしていた・・・

みゆきは・・・

夕飯を終えて自分の部屋に戻ったみゆきは、キャンディと魔王に声を掛けると、

「キャンディ、魔王、バトン渡しに協力してよ」

「何だかよく分からないけど、分かったクル」

「面倒カゲなあ・・・まあ良いカゲ」

「じゃあ行くよ・・・ハイ！」

みゆきは、キャンディからバトンを受け取り、魔王にバトンを渡し、今度は逆に魔王からバトンを貰い、キャンディにバトンを渡す訓練を、何度も続けた。

あかねは・・・

「父ちゃん、母ちゃん、悪いけどお、体育祭終わるまでは、店の手伝い堪忍してや」

「何やあかね、やけに気合い入つとるなあ？」

「あんたあ、ほら、ブライアンに・・・」

「ああ、成る程、体育祭でエエとこ見せて、それをブライアンに報告しようって事やな？」

「ちやうわあ！」

あかねは両親にからかわれ、逃げるように走り込みに出かけた。

れいかは・・・

れいかもあかね同様、走り込みに出ようとしたものの、大学から帰って来たれいかの兄淳之介が声を掛け、

「れいか、僕も行こう」

「エッ!?でも、お兄様は先程お帰りになられたばかりですし・・・」

「ハハハ、れいかには、毎朝ランニングに付き合つて貰つてるし、今回は僕が協力しよう。それに可愛い妹を、夜道に一人でランニングになど出せないからね」

「お兄様・・・ありがとうございます」

れいかは、淳之介に頭を下げ、素直に行為を受け取り、ランニングをしながら、淳之介にリレーについてのアドバイスを受けていた。

やよいは・・・

不思議図書館に来たやよいは、ソワソワしながら誰かが来るのを待つて居た。その時、本棚が光り出すと、本棚から光に包まれながらなぎさが現われた。なぎさは軽く右

手を挙げ、

「やよい、お待たせ！この前は、やよいのお母さんのファッションショーに参加出来なくてゴメンねえ、ちよつと講師に、夏休みに出したレポートの事で色々聞かれてさあ」「いえ、気にしないで下さい。それよりなぎささん、急に頼んだのに、ありがとうございます」

「ウウン、私に出来る事なら協力するよ」

やよいは、なぎさにメールを出し、今度リレーにみんなと出る事になった事を伝え、少しでもみんなの役に立ちたいと、なぎさに協力を頼んだ。メールを見たなぎさは、やよいの気持ちに動かされ、コーチ役を引き受けた。なぎさはやよいに話し掛け、

「今日はどんな特訓したの？」

「エエと、なおちゃんに言われて、バトンの渡し方と貰い方の練習です」

「へえ、流石になお、良く分かってるね……リレーって、バトンをスムーズに渡せると、タイムロスをかなり減らせるだよねえ」

「そ、そう何ですか？」

「ウーン！やよいは、何番目に走るの？」

「まだ決まって無いですけど、アンカーはなおちゃん決めて決まりだし、最初はあかねちゃんじゃないかなあ？」

「そっかあ・・・じゃあやよい、取り敢えず何時ものように走ってみて」「ハイ!」

やよいは、何時ものように走ってみると、なぎさはジイとやよいの走り方を見つめた。一生懸命走っているのは伝わるものの、手足の動きが合っておらず、顎も上げ気味で、身体が左右に揺れて居て、やよいはかなり遅かった。

「大体分かった・・・じゃあ、今度は私が走るから、やよいは私の走り方見てて」

なぎさは、そう言うのと駈け出した。なおは、風のように舞うような華麗な走りだったが、なぎさの走りはどこか力強く、そして速かった。

「なぎささん・・・速い」

「まあ、私はリレーで何度もアンカーやってるしね。で、やよい、今私の走り見てて、何か気付いた事ある?」

「ウウウン・・・力強さを感じました」

「腕の振りとか、足の上げ方とか、身体は揺れたり、顎を上げたりしてた?」

「腕の振りや足の上げ方!?!・・・アッ!」

なぎさは、やよいが自分のヒントに気付いた様子を見て、口元に笑みを浮かべた。やよいの走りは、腕と足の動きが合ってなく、身体も揺れてバランスが良いとはいえなかったが、なぎさの走りは綺麗なフォームで走って居た。

「やよい、確かに足の速い遅いは有るけど、やよいはもつと正しいフォームを覚えれば、タイムを大分短縮出来ると思うよ?」

「ほ、本当ですか?」

「まずは身体がぶれないように、走る事を心がけて見よう」

「ハイ!」

なぎさのアドバイスを受け、やよいは目を輝かせながらコクリと頷いた。

なおは・・・

なおは、夕ご飯の片付けを終えると、一回りしてくと、ランニングに出かけた。ランニングしながら、勝手に他の四人をリレーメンバーに推薦したのに、みんなが自分の気持ちを理解してくれた事が嬉しかった。

「みんなとの思いでのバトンを最後まで繋ぐ為にも・・・あたしも頑張ろう」  
なおが走って居ると、その隣に並ぶ者が居た。

「よう、今度のリレー対決っていうの、楽しみにしてるぜ」

「なみ!?! あんた達もリレーに出るの?」

「知らなかったか? ああ、同じマーチ同士、この姿でも勝負したくてな」

「あたし達は、勝負には拘らないよ。思い出に残るように全力を出すだけ・・・」

「勝負の日を楽しみしてるぜ！」

なみはそう言い残し、夜の街並みに消えて行つた。なおは立ち止まり、

「勝負か・・・あんた達とも、楽しく過ごしたんだけどなあ・・・」

なおは少し愁いを帯びた表情を浮かべるも、また走り出した・・・

なおのコーチや、それぞれの特訓の甲斐もあり、四人は日に日に、なおが感心する程の上達を見せて居た。

そして、体育祭の日がやって来た・・・

女子リレーのメンバーが、それぞれスタート地点に並んだ。紫の一組と赤の二組の順番は、第一走者はあおいとあかね、第二走者はみさきとみゆき、第三走者はれいなとれいか、第四走者はやおいとやよい、アンカーはなみとなお、他のクラスのメンバーも足が速そうなメンバーばかりで、二組の井上せいじは、やよいの組み合わせメンバーを見て嘆き、

「アアア、見て見ろよ、かつとし！黄瀬の所」

「ああ、三組は陸上部の福田かよ」

岡部かつとしも、あきらめ顔で両手を広げると、カチューシャをした岡田まゆと首の両脇をお下げにした金本ひろこも会話に加わり、

「四組には木島さんが居るわ」

「彼女も足速かったよねえ？」

「だろう!?!こりやダメだ」

せいじはそう言うのと、あきらめ顔で天を仰いだ。そんなクラスメイト達の嘆きも知らず、先ず、第一走者がスタート位置に並んだ。あおいは、あかねを見てニヤリとすると、「勝つのはウチやで」

「負けへん」

二人が目で火花を散らしている間に、スタートの合図であるピストルが鳴った。

「アッ!?!」

二人は言い合いをしていて、最初こそ出遅れたものの、張り合うあかねとあおいは、五組と六組を抜き、更に三組と四組に追いつき、そして追い抜いて、あかねとあおいで首位争いをしていた。一組と二組が首位争い、以下陸上部を揃えた三組、四組、六組、五組と続いた。

（流石日野さん・・・良いわよ、そのまま行けええ!）

貴賓席で見守る佐々木先生は、教師である立場上、冷静を振る舞いながらも、勝負事に目がなかった。佐々木先生は思わず拳を握りしめて、心の中で熱くなつて居た。首位争いを続ける二人は、視界に第二走者のみゆきとみさきの姿が飛び込んで来た。あかね



とあおいは、思わずバトンを握る手に力が入り、

「みゆきいいー！」

「ハッピーー！」

「頼んだでええ!!」

「任せて！」

あかねとあおいは、ほぼ同時にバトンを手渡したものの、バトンの特訓をしていたみゆきの方がスムーズに受け取り、みさきは少し出遅れた。みゆきが一位で走り、その後をみさきが追う展開に、クラスメイト達も思わず立ち上がって声援を送り出した。

「ひよつとして・・・イケるんじゃないかね？」

「ウン！頑張れえ、星空さああん!!」

豊島ひでかずが、クラスメイトに話し掛けると、背が小さく、頭の両脇に髪留めを付けた尾ノ後きよみと三つ編みをした柏本まゆかが、みゆきに声援を送った。貴賓席で見て居た佐々木先生は、みゆきが一位で走る姿を見て思わず右拳を振り上げ、

(流星星空さん、遅刻で鍛えた足は、伊達じゃないわね)

遅刻常習犯であるみゆきが聞いたら、頬を膨らませてイジケそうではあるが、佐々木先生的にはみゆきを褒めていた。みゆきの視界に、第三者走者のれいかが目に入ってきた。れいかは、みゆきのタイミングに合わせるようにゆっくり走り出し、

「みゆきさんー！」

「れいかちゃん、お願いー！」

みゆきのバトンをスムーズに受け、れいかが首位で走り出した。その直ぐ後で、みさきもれいなバトンを渡し、れいながれいかの後を追う。

（クツ、勝負何てどうでも良いと思つてたけど・・・）

れいなとの闘争心に火が付き、れいかを追い上げるも、れいかも踏ん張り走り続ける。佐々木先生は思わず立ち上がつて椅子の上に乗る、

（大丈夫よ！青木さん、そのままそのまま！）

興奮する佐々木先生の姿を、隣で座つて観戦していた堀毛先生は、呆氣に取られながら見つめた。れいかとれいなとの視界に、第四走者のやよいとやおいの姿が目に入つて来た。

「やよいさんー！」

「ピースー！」

れいかとれいなとの二人が、やよいとやおい目掛けてバトンを伸ばした。その姿を観客席から見て居た真琴は、右腕を伸ばしてやおいに向かつて、念を飛ばすように何かブツブツ呟きだし、

「バトンを落とせ、落とせ、落とせ、落とせ、落とせ・・・」

「ま、真琴ちゃん!？」

「何か怖いよ?」

真琴の友人であるツインテールをした緑髪の少女若林さなえと、赤髪のシヨートヘアの真鍋ゆきの二人は、まるで呪いを掛けているような、真琴の姿に困惑した。

やよいは、スムーズにいかからバトンを受け取ったが、やる気が無いやよいは、真琴の呪いの所為か、思わずバトンを落とした。その瞬間、真琴は小さくガツポーズを取り、さなえとゆきを呆れさせた。その間に三組と四組に抜かれ、更には六組と五組にも抜かれて、一組は最下位になった。れいなは、思わずやよいを睨み、

「ピースウウー!」

「お、怒らないでよお・・・」

やよいは、慌ててバトンを拾って駆け出したものの、トップを走るやよいは、後ろから追い上げてきた三組と四組に抜かれた。更には六組にも追い上げられ、最下位を走って居るやよいではあったが、自分の事よりも、思わずやよいの事を案じた。

(やよい・・・)

やよいは以前、やよいのクラスのせいじとかつとしが、やよいの陰口を言っていたのを聞いていたのだから・・・

佐々木先生は、やよいが六組にも抜かれた瞬間、力が抜けたように椅子に座り込み、

（誰よお!?黄瀬さんを推薦したのは・・・）

佐々木先生は、思わずガツクリ頭を垂れた。クラスメイト達の落胆の声が聞こえ、せいじは頭を抱えながら、

「だああ!黄瀬何か出すから・・・」

せいじは、髪を掻きむしるかののように悔しがった。

少し本気になったやおいは、やよいを猛追する五組を追い抜き、やよいに並ぶと、

「やよい、しつかり!」

「やおいちゃん・・・ウン!」

やおいの励ましを受け、やよいは、なぎさに受けたアドバイスを思い出ししていた。

（手と足がバラバラにならないように、顎を上げないように、身体がブレないように）

その時、やよいの走りが変わった!

それに気付いた豊島ひでかずは、やよいを指差して一同に聞こえるように話し出し、

「見ろ!黄瀬の奴、まだ諦めてねえ」

「ウン!それにやよいちゃん・・・何だか今までで一番速い気がする」

「そう言われれば・・・何か走る姿も綺麗かも!」

ひでかずの言葉に同意したのは、少しポツチャリして眼鏡を掛けた藤川あみ、やよいと一、二位を争う程、クラスの中で足の遅い彼女の言葉は、一同の心に響いた。まゆか

は、あみの言葉を聞いて良くやよいを見てみれば、抜かれたとはいえ、懸命に走るやよいの姿が遅いとは思えなかった。シヨートヘアーでカチューシャをした若林かおりは、あみとまゆかの言葉を受けてポツリと眩き、

「黄瀬さん、この日の為に特訓してただね・・・」

「・・・」

クラスメイト達の声を聞き、やよいの事を認めていなかったせいじとかつしは、思わず沈黙し、改めてやよいの走りを見た。確かに一同が言うように、やよいの走る姿は、以前見た時より綺麗だった。やおいと共に、前を走る六組を追い上げるやよいを見たせいじは、椅子の上に乗れ大きく息を吸い込むと、

「黄瀬えええ！頑張れえええ!!」

せいじの言葉を合図にしたかのように、二年二組の生徒達から、やよいに大して声援が飛んだ。

「「みんなああ・・・」」

みゆき、あかね、れいか、そしてアンカーとしてやよいを待っていたなおは、クラスメイト達が送るやよいの声援を聞いて感動し、なおの心の中に闘志が宿った。一同の声援を受け、やよいは六組を懸命に抜き返し、先ず三組がトップでアンカーにバトンを渡し、次いで四組がアンカーにバトンが渡った。なおとなみは、やよいとやおいをチラリ

と振り返り、

「やよいちゃん！」

「ピース！」

「なおちゃん、お願い！」

「マーチ！」

数秒遅れて、やよいとやおいが、ほぼ同時になおとなみにバトンを渡すと、二人は風のように優雅に競り合いながら駆け出した。なみとなお、二人の走りはほぼ互角、一気に四組を抜き去り、トップを走つて居た三組をも抜き去つた。佐々木先生は再び椅子に乗ると、拳を振り上げながらなおに大声援を送り、

「行けえええ！緑川さああん！！」

「さ、佐々木先生!？」

隣に居た堀毛先生は、呆然としながら佐々木先生を見た。

「流石にやるな？」

「あんたもね」

なみとなお、両者互角のまま最終コーナーを回ると、

「なおちゃんああん！」

「なおおお!!」

みゆき、やよい、れいか、あかねの気持ちも伝わったかのように、なおがなみを振り切りトップに立った。

「何い!?!クツ」

なおにトップを許したなみだったが、懸命になおの後を追った。ゴールが遂に見えてきた時、なおに一瞬の油断が生じた。

「エツ!?!」

「なんだと!?!」

足が縛れバランスを崩したなおは、激しく転倒し、右膝からは血が滲んだ。咄嗟になみはジャンプして躲し、一着でゴールをした。直ぐに背後を振り向いたなみは、右膝から血を流しながらも懸命に立ち上がり、右足を引き摺りながらゴールを目指すなおの姿に呆然とした。なおは、三組と四組、更には六組と五組にも抜かれて最下位になったものの、足を引きずりながらも諦めずゴールした。そんななおを、泣きながらみゆき、やよい、れいか、あかねが出迎えて抱き付くと、

「なおおちやああん!」

「なおおおお!!」

「みんな、みんな、ゴメン……ゴメン……ワアアア」

なおも思わず号泣した……

そんななおを出迎えたのは、みゆき達だけでは無かった。クラスメイト達が思わず駆け寄ると、なおは涙ぐみながら謝罪を始め、

「み、みんなあ……ゴメン」

「緑川、良くやったぞおお！」

「ほら、僕の肩に掴まって」

佐藤かずやがなおを称え、体格の良い宗方しんやがなおに肩を貸した。やよいに近づいたせいじとかつとしは、

「黄瀬、良く走ったな」

「お前、この日の為に特訓したんだろう？」

「エツ!?う、うん……」

やよいは戸惑いながらも、自分は役に立てなかつたと思つて居たのに、称えてくれるクラスメイト達にまた涙目になった。みゆき、あかね、れいかもクラスメイト達に称えられた。涙を拭いながらやつて来た佐々木先生は、

「緑川さん、青木さん、日野さん、星空さん、黄瀬さん……先生は、先生は、感動しました！」

「先生、泣いてちや化粧が落ちるよ？」

野川けんじにからかわれた佐々木先生は、涙を拭いながら、



「コラ！教師をからかうんじゃないやありません!!」

そんな仲間達や恩師を見たなおは、目から涙を零しながら、

(あたし、あたし、勝てなかつたけど、やっぱりみんなとリレーに出て良かった)

最下位ながらも、仲間達と一生懸命走った事を、クラスメイト達に認められ、なおはリレーに出て良かったと心から思うのだった。

そんな二年二組の生徒達の姿を見た真琴は、貰い泣きして泣きじやくり、さなえとゆきに慰められた。なみ達五人も、二組の様子を見ていたものの、あおいは呆れたように両手を開き、

「勝ったのはウチらなのになあ・・・ン!?マーチ、どないしたん?」

あおいは、なみの表情が優れない事に気付き、怪訝な表情で話し掛けると、なみは、険しい表情で首を左右に振り、

「あんなの、勝ったとは言えない!現にあたしは、緑川なおに抜かれたんだからな」

なおに勝ったとは思えないなみだったが、みさき、れいな、やおいは、そんななみを宥め、

「まあまあマーチ、ここは素直に喜ぼうよ?」

「そうね・・・クラスのみんなも喜んでくれてるわよ?」

「って事で、今日はマーチの奢りで、デザートで祝勝会しよう」

「『賛成！』」

「お前らなあああ!？」

なみは、仲間達に呆れ返りながらも、心の中でなおとの勝負を思い返していた。

（緑川なお・・・あの時、仲間の声援を受けたあいつの走りは、確かにあたしを上回った。あれが思いの力って奴なのか？）

なみは、なおが仲間達と共に、涙ながらに全力を出しきった姿を、呆然と見つめて居た・・・

こうして、体育祭は終りを告げたが、なお、みゆき、あかね、やよい、れいかにとつて、決して忘れる事はない思い出となった・・・

2、れいかとれいな・・・生徒会長は誰!？」

七色ヶ丘中学校は、体育祭、そして文化祭も終りを告げ、現生徒会の役目は終了した・・・

次の生徒会を決める選挙が、近々行われる事になっていた。前生徒会長である入江は、校内を歩いて居たれいかを見付けて声を掛けた。

「青木くん」

「入江生徒会長」

「おいおい、僕はもう引退しただろう?」

「そ、そうでした・・・」

「ところで青木くん、君は次期生徒会長に立候補してくれるんだろう?」

「そ、それは・・・まだ決めかねて居て」

「そうか・・・僕は、次の生徒会長に相応しいのは、青木くん、君だと思っているよ」

れいかは、入江に聞かれて思わず返事に困った。生徒会の仕事は好きだったが、弓道部にも所属し、かつプリキュアとして戦う日常で、生徒会長のような激務をこなせる自信が、れいかには無かった。入江も深くはれいかに言わず、その場を後にした。

(生徒会長か・・・)

れいかの脳裏に、ある人物達が過ぎった。プリキュアとして戦って居た頃、学校で生徒会長をしていた、水無月かれんと明堂院いつきの二人の事が・・・

(かれんさんやいつきさんに相談してみよう)

れいかがそう思つて考えながら歩いて居ると、みゆき達四人が、掲示板の前に居るのが目に入った。れいかが近づくと、どうやらみゆき達は、生徒会の立候補者募集の張り紙を見て居たようだった。れいかに気付いたみゆきは、

「れいかちゃん、れいかちゃんは立候補するんでしょう?」

「エッ!? いえ、まだ立候補するかどうかは決め手ないです。弓道部もありますし、プリ

キュアとしての使命もありますから・・・」

れいかは、困惑気味にみゆき達に小声でそう話すと、みゆき達四人は残念そうな表情を浮かべた。れいかならば、この学校を良い方向に導いてくれると考えて居た。そこちようどみさき達もやって来た。みさきはみゆきに話し掛け、

「何見てるの？」

「今度の生徒会選挙の、立候補者募集のポスターだよ」

「……生徒会!?!」

みさき達五人が思わず首を傾げると、れいかが五人に説明を始め、

「生徒会とは、生徒により組織される自治組織の事で、学校生活の充実を図る為の活動です。文化祭や体育祭等のイベントの実行に関する活動など、主に行うと思つて頂いて構いません。知り合いの通つていた学校では、部活動の予算なども生徒会で決めますが、我が校では、そこまでの権限はありません」

みさき、あおい、やおい、なみは、れいかが話して居る事がチンプンカンプンのように、呆然として聞いて居たが、れいなは、何か心に引つ掛かる事があつたようで、れいかに生徒会長について質問し、

「……に書いてある、生徒会のトップの生徒会長は？」

「生徒会長は、生徒会の最高責任者で、生徒会長を中心として、日常的な生徒会の業務が

行われます。多くの学校においては、複数の生徒会役員を選挙で選出しますし、我が校もそうで、それがこの募集ですね。選挙をする事によつて、多様な意見を生徒会運営に反映する事が出来ます。それと、我が校では生徒会長に一つ権限が与えられていまして、副会長、会計、書記の中から一人だけ、自分で推薦した人物を選ぶ事が出来ますよ」

れいかの説明を聞いたれいなは、少し口元に笑みを浮かべた。れいかは、そんなれいな態度に違和感を持った。れいなは再びれいかに質問し、

「ようは、生徒の中で一番権限を持つ者って事ね？」

「そうですね、ですから、先ず生徒会長を決める選挙が最初に行われ、後日残りの生徒会を決める選挙が行われます。それと、立候補が認められるには、推薦人が最低二人必要ですよ」

れいな質問に、れいかはコクリと頷き、更に補足の説明を伝えると、見る見るれいなは、自信満々な表情を浮かべた。

「フフフフ、それなら、私は生徒会長に立候補するわ！」

『エッ!』

れいな生徒会長選挙立候補宣言を聞き、思わず一同が驚きの声を上げた。

「私が生徒のトップに立ち、私が生徒達を美しく導いて上げましょう。他の生徒は、何もせず、只私に従えば良い・・・ハッピー、サニー、マーチ、ピース、あなた達、推薦人

になつてくれるわよねえ？」

「良いよー！」

「エエでー！」

みさき、なみ、あおいは、即座に同意したものの、やおいは何か考えて居るようで、腕組みをして居た。れいかは慌ててれいなに話し掛けると、

「ま、待つて下さい！それでは、生徒達に自主性が……」

「私の感性に合わない生徒は……必要無いもの」

れいかは、れいな言葉の聞き疑問を覚えた。生徒会長とは、生徒の見本となるべき人物であるという事では、れいなが生徒を導くと言つた内容に関しては、れいかも同じ考えだったが、れいかは、ただ生徒会が中心に動くのでは無く、生徒達の自主性も尊重しようと考えて居た。以前かれんから聞いた、徳川吉宗が行つたとされる目安箱のように、生徒達の意見も広く募集し、それを踏まえた上で学校生活をより良くして行くのが、生徒会長の勤めだと考えて居た。れいなは、そんなれいかの思いに気付いたのか、

「ならキュアビューティ……あなたも生徒会長選挙に立候補なさい」

「……分かりました！立候補致します!!」

れいかは、れいなとの挑戦を受けて立ち、生徒会長選挙に立候補する事を決めた。みゆきは目を輝かせると、

「本当!? だったら、私達れいかちゃんを応援するよ」

「「ウン!」」

みゆきの言葉に、なお、あかね、やよいも同意すると、れいかは表情を和らげてみゆき達にお辞儀をし、

「急な事になってしまいましたけど・・・お願い致します」

「「任せて!」」

胸を叩いた四人だったが、突然やおいが叫び、

「ちよつと待ったあ! 私も、生徒会長選挙に立候補するうう!!」

やおいの突然の立候補宣言に、その場は思わず静まり返った。やおいは一同を見渡し、

「な、何で静かになるの?」

「ピース・・・あなた、生徒会長になって何がしたいの?」

れいなに聞かれたやおいは、よくぞ聞いてくれましたとばかり、軽く咳払いすると、  
「ゴホン! エエエと、私が生徒会長になったらねえ・・・宿題は無くすでしょう、それに、休憩時間を増やすなあ、十時と三時にはおやつタイムも作るでしょう、お昼寝の時間も居るよね、それに・・・」

「聞いた私がバカだったわ」

「話になりませんね・・・」

やおいの滅茶苦茶な動機に、れいなとれいかは呆れ返り、みゆき達とみさき達が苦笑する。やおいは頬を膨らまし、

「何よ、立候補するのは自由でしょう？ハッピー、推薦人になつてくれるよねえ？」

「エツ!? 私は、ビューティの推薦人になるからダメだよ」

「ガアアアン!?!」

みさきに聞いたやおいだったが、みさきはれいなとの推薦人になるからと断つた。やおいの視線が、あおいとなみに向けられ、

「じゃあ、サニーとマーチはなつてくれるよね？」

「うちも、ビューティの推薦人になる言うたから無理や」

「あたしもダメだな」

「ガガガアアアン!?!」

あおいとなみは、首を振りながらやおいの申し出を断つた。やおいの視線がれいなに向けられると、

「じゃあ、ビューティは？」

「ハア!?!・・・バカなの？私も生徒会長に立候補するって言っているでしょう?」

「ウウウ、バカじゃないもん!」



れいなが、呆れ返りながらやおいの申し出を拒否し、やおいが涙目になる。やおいは涙目になりながられいいかを見つめ、

「推薦人って、同じクラスじゃなきやダメなの？」

「エツ!?いえ、我が校の生徒なら、どなたでも構いませんよ」

「本当!?!」

れいいから、この学校の生徒なら誰でも良いと言われたやおいは、目をキラキラ輝かせながら、やよいを見つめた。やよいは思わず、瞬きしながら自分を指差し、

「わ、私!?!」

「そう、やよい!やよいは、私の推薦人になってくれるよねえ?」

「エツ!?で、でも、私もれいかちゃんの推薦人に……」

「アアアア、Wピース解散の危機になっちゃった」

「エエエ!?!そんなああ?」

「なつてくれるよねえ?」

「ウウウウ……」

やよいは思わず言葉に詰まった。先の体育祭でも、やおいは自分を励ましてくれた恩もあるものの、れいいかは大切な仲間で、どうすれば良いのかやよいは分からず動揺していると、れいかがやよいに助け船を出し、

「やよいさん、私に気兼ねせず、やおいさんの推薦人になって上げて下さい」

「で、でも私、れいかちゃんを応援するって・・・」

「やよいちゃん、れいかちゃんの応援は私達がするから大丈夫だよ」

「みゆきちゃん・・・じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて」

「ワアアアイ！これで立候補出来るう！！」

やおいが両手を上げて喜びを表すも、れいかは首を傾げながら、

「でも、推薦人はもう一人必要ですよ？」

「宛てはあるのかよ？」

なみに聞かれたやおいは、思わず口元をニヤリとし、

「フフフフ、私達Wピースには、可愛いパシリちゃんが居るから大丈夫」

やおいがゲスい笑みを浮かべた瞬間、一同は、やおいのターゲットが誰だか直ぐに理解した。

「やよい、もう一人の私の推薦人の所に行くよ」

「う、うん・・・でも、勝手に決めて良いのかなあ？」

「大丈夫！」

「じゃあ、れいかちゃん、みんな、ゴメンね」

やよいはペコリと一同にお辞儀をし、やおいに腕を引っ張られながら去って行った。

れいなは、呆れながら溜息を付き、

「ハアアア……キュアビューティ、どうやら生徒会選挙は、私とあなたの一騎打ちになりそうね？」

「そうですね、私も全力を尽くします」

れいかと、れいな、二人の信念を掛けた選挙活動が始まろうとしていた。

一年一組……

窓側の一番前に座る真琴は、休み時間に仲の良いさなえとゆきと談笑していたものの、不意に悪寒に襲われ、思わず辺りを見渡した。さなえとゆきは不思議そうに首を傾げ、

「真琴ちゃん、どうしたの？」

「急にソワソワしただして？」

「う、うん……何だか急に悪寒が走って……」

「風邪かなあ!?!」

「念の為保健室行く?」

そんな会話をしていると、教室内がざわめき出し、真琴達が無気なく前ドアを見ると、そこにはニコニコしたやおいと、後ろでペコペコ後輩達に頭を下げるやよいの姿があ

り、真琴は慌ててしやがみ込んだ。やおいは教室内をキョロキョロ見渡しながら、

「まああこおちちゃん！」

やおいに呼ばれた真琴は、益々悪寒が走り、この場から逃げ出したい衝動に駆られたものの、下手に動くとおおひに見つかると考え、さなえとゆきに頼み込み、二人の背後で耳を塞ぎながらジイとして居た。だが、やおいの行動が気になるのか、真琴は耳を塞ぐのを止め、やおいの言動に聞き耳を立てた。

「アレエ!?返事が無いねえ・・・まあこおちちゃん、出て来ないなら、このまま推薦人に名前書いて提出しちゃうよ?」

（推薦人!?パッドエンドピース、今度は何を企んで居るの?）

真琴が恐る恐る顔を出すと、真琴を見付けたやおいがゲスイ顔を浮かべ、用紙をヒラヒラさせた。真琴は、嘗て自分が失敗した漫画原稿を、クラスメイトのみんなに話すと思ひ、慌てて飛び出すと、やおいは真琴を指差し、

「ソード、見く付けた!」

「ソードって呼ばないで!それより何の用よ?」

「何の用?」

やおいは、耳に手を当てて真琴に何かアピールすると、真琴はハツとした表情になると不機嫌そうに、

「何の用ですか？や・お・い・先輩」

「そうそう、それで良いの。先輩には敬語を使わなきゃダメだよあのね、私今度生徒会長に立候補する事になったから、やよいとソ・・・じゃなくて、真琴に推薦人になつて貰うから、その報告に来ただけだよ」

「生徒会長!?!あなたが？」

「ウン！」

「何で私が、勝手に推薦人にされてるのよ？」

「だってえ・・・真琴は、私達のパシ・・・」

「ワアアアアア！」

真琴は慌ててやおいの口を塞ぎ、教室からやおいとやよいを連れ出した。階段に連れ出した真琴は、やおいとやよいから事の顛末を聞き、自分が知らない間に、やおいの推薦人にされた事を知った。真琴は大きく頬を膨らまし、

「何で勝手に決めるのよ？れいかさんが出るなら、私は、れいかさんの応援するわ」

「またまた、真琴は、私達Wピースのパシリ何だから、言う通りにしなきゃ」

「パシリじゃなああい！」

そう叫ぶ真琴だったが、悪知恵に長けたやおいは、真琴の数々の失敗を上げ、協力しないと生徒会長選挙でつい話しちゃうかもと脅し、真琴を無理矢理陣営に引き込んだ。

「こうして始まった生徒会長選挙、三人の候補者が、七色ヶ丘中学校生徒達に自己アピールを始めた。やおいは、真の公約は本番当日まで秘密にして、ありきたりな内容でアピールするも、その親しみやすい人柄で好印象を与え、れいなは、その毅然とした態度に好印象を与えた。れいかは、生徒達の声を取り入れながら、一丸となつて学校を盛り上げようと訴えた。

日に日に盛り上がつていった生徒会長選挙は、本番当日を迎えた！

体育館に集まつた、七色ヶ丘中学校の全校生徒の視線が、生徒会長選挙に立候補した三人の候補者を見つめる中、司会に立つたのは、前生徒会長の入江だった。入江から、順に立候補者の名が読み上げられ、先ずやおいが挨拶に立った。軽く咳払いしたやおいは、

「生徒会長に立候補した、二年一組の黄野やおいです！私が生徒会長になったらあ……何と、十時と三時におやつ時間を作りまあす」

『ワアアア！』

やおいの予期せぬ公約を聞き、一年生から歓声が沸き、二年と三年からは失笑が漏れた。やおいは両手を振つて一年に愛想を振りまき、

「どうもどうも！更に、宿題も無くしまあす！」

『ワアアア！』

「更に更に、漫画やゲームも持ち込み放題にしまあす！」  
『ワアア!』

再び一年生から大歓声が沸き、真琴は思わず、やおいが当選したらどうしようかと不安を覚えた。そんなやおいの公約を聞き、堀毛先生の眉間に皺が寄り、隣に居た佐々木先生と何やらヒソヒソ話を始めた。調子に乗ったやおいは、

「それに、お昼寝の時間も・・・エッ!？」

やおいの演説の途中であつたが、堀毛先生と佐々木先生が壇上に上がり、やおいの両脇を二人で掴むと、佐々木先生は、困った表情でやおいに話し掛け、

「黄野さん、我が校の生徒会長に、そんな権限はありません!」

「黄野さん、そんな悪ふざけをするなら・・・あなたの立候補は却下します!」

「エエエエエエ!? 何でええええ?」

佐々木先生と堀毛先生に両脇を抱えられ、引き摺られるようにやおいは強制退場し、立候補取り消しとなった。場内に失笑が響く中、やおいの推薦人だったやよいと真琴も呼び出され、やおい、やよい、真琴は、体育館から職員室に連れ出され、佐々木先生と堀毛先生からお説教をされた。体育館では、何事かとざわめく生徒達を沈めようと、入江は苦笑しながら、

「エエエ、予期せぬハプニングがありました、このまま生徒会長選挙を続けたいと思ひ

ます・・・では、次に青田れいなさん！」

「ハイ！」

入江から紹介されたれいなは、毅然とした態度で椅子から立ち上がり、マイクに近付いて行った。生徒達からは、何所か威厳があるれいなを好意をもつて見つめる視線が結構居た。れいなは、マイク前で一礼し、

「生徒会長に立候補した、二年一組青田れいなです！私が立候補した理由はただ一つ・・・」

れいなが演説を始めたその時だった・・・

やおいは嘘泣きをして堀毛先生と佐々木先生を騙し、職員室からやよいと真琴を置いて逃げ出し、バッドエンドピースの姿に変化して体育館に戻って来ると、

「何で私だけ除け者なのよおおお！頭来ちゃった・・・世界よ、最悪な結末に変わっちゃって！白紙の未来を黒く塗りつぶしちゃおう!!」

バッドエンドピースは、黒き書を取りだし、黒い絵の具を黒き書を開いて、白紙のペー지에勢い良く叩き付けると、体育館の天井が不気味に黄色く変化し、その周りを落書きで描いたようなイラストが覆い、七色ヶ丘中学校の面々が、ネガティブな言葉を喋り出し、バッドエナジーが黒き書に吸い取られ、ピー口完全復活の目盛りが上がった。れいなは、険しい表情でバッドエンドピースを見つめながら声を掛け、



「ピース、これは何の真似?」

れいかもれいな同様、険しい表情でバッドエンドピースを睨み、

「生徒会長選挙を妨害しようとする何て・・・」

「許さない!」

「許せません!」

互いにライバルでありながら、まるで示し合わせたかのように、れいなとれいかが同時に叫び、れいなのはバッドエンドビューティの姿に、れいかはスマイルパクトを取りだした。

「プリキュア!スマイルチャージ!!」

「しんしんと降り積もる、清き心!キュアビューティ!!」

バッドエンド空間を出現させて、生徒や教師達をネガティブにして、生徒会長選挙を滅茶苦茶にしたバッドエンドピースに対し、Wビューティが並び立った。二人の迫力の前に、バッドエンドピースは少しビビりながらも、

「な、何よお!?!私を除け者にしようとしたのが悪いんだからあ」

だがWビューティは、そんなバッドエンドピースの言い分に耳を貸さず、険しい表情でバッドエンドピースを指差し、

「悪いのは・・・」

「あなたの方です！」

「頭を冷やして反省しなさい！」

「バッドエンド……」

「ビューティ……」

「ブリザードオオオ!!」

「ヒイヒイヒイ!?!」

まるで呼吸を合わせたかのように、Wビューティが放ったツインブリザードが、逃げようとしたバッドエンドピースに直撃し、バッドエンドピースの全身が凍り漬けになった。みさき、なみ、あおいは、バッドエンドピースに近づくと、バッドエンドピースは、凍り漬けにされて寒いのか、涙目になりながら三人に助けを求めた。

「エエエエン！ハッピー、マーチ、サニー……寒いよおお、助けてええ」

バッドエンドピースから助けを求められた三人であつたが、何所か人事のようにバッドエンドピースを眺め、

「アララ!?!二人のビューティを怒らせちゃったねえ？」

「まつ、少しそのままおとなしくしてな」

「自業自得ちゆう奴やなあ……生徒会長選挙が終わつたら、ウチが氷を溶かしたるから、それまでおとなしゅうしてや」

「そ、そんなああ!？」

バッドエンドピースは、三人が直ぐに助けしてくれると思つたものの、三人はそのままの姿で居るように伝え、バッドエンドピースは今にも泣き出しそうな表情を浮かべた。三人は更に、凍り漬けになつたバッドエンドピースの周りに立つと、

「「邪魔だから、どつかに退かそう」」

「エエエエン! 酷い!!!」

みさき、あおい、なみの三人は、凍り漬けになつて泣き喚くバッドエンドピースを、何処かへと運び去つた。みゆきはそんなみさき達を見て苦笑しながら、

「アララ・・・でも、今の二人のビューティ、凄かつたよねえ?」

「せやなあ、何やかんやで、根っ子ではあの二人似とるなあ」

並び立つWビューティを見たあかねが、思わず呟いた。なおは、れいかの心意を読み、「真面目と言うか、何と言うか、れいかは、生徒会つていう仕事に情熱を注いでるからねえ・・・バッドエンドピースに選挙を妨害された事が、許せなかつたんだろうね」

「そうだね・・・みさきちゃん達がバッドエンドピースを何処かに連れて行つたし、直ぐにみんなも元に戻るね」

みゆきの言葉を表すかのように、Wビューティが変身を解いたと同時に、バッドエンド空間が解除され、生徒達や教師が我に返つた。入江は辺りをキョロキョロし、

「アレ!? 僕は一体何を?」

「続きを始めても良いのかしら?」

れいなに聞かれた入江は、一瞬キョトンとするも、直ぐに我に返り、

「エツ!? そ、そうだったね、始めて下さい」

「では改めまして、生徒会長に立候補した、二年一組青田れいなです! 私が立候補した理由はただ一つ、それは生徒会長として、この学校を他校が羨む美しい学校へとする事です。美しい学校とは、色々な意味があります・・・学校を美しくする事、生徒達の美への思いを深めさせる事、その為にも、新たに風紀委員を創設したいと考えます。私が理想とする生徒会長とは、己が信念を貫く事、時には皆さんに、厳しい言動を言う事もあるかも知れません。しかし、トップに立つとは、例え恨まれる事になっても、生徒達を美しく導いていく事と私は考えます。私は、生徒達の先頭に立ち、皆さんを引っ張って行く事をここにお約束致します! 是非皆さんも、この私を信じ、私に全てを任せて付いて来て下さい。後悔は決してさせません!!」

れいなが演説の最後に発した、後悔はさせないという言葉は、生徒達の心に響いたように、生徒達から盛大なる拍手が浴びせられた。れいかは、れいなが持つカリスマを目の当たりにし、少し自信が揺らぎそうになっていた。

（生徒達のこの歓声・・みなさんが求めているのは、れいなさんのような人なのでしょ

うか?)

盛大な拍手で送られたれいなは、勝利を確信したかのように自分の席に戻り、れいかをチラリと見た。その表情は、れいかのお手並みを、拝見しようと言っているかのようだった。動揺するれいかに、入江から声が掛かり、

「では次に、青木れいかさん」

「ハイ!」

れいかは、緊張した面持ちで椅子から立ち上がった。生徒達が、自分の演説に聞く耳を持つてくれるだろうか、れいかはマイクに近付きながらも、不安が大きくなっていった。その時だった、

「れいかちやくん!」

みゆきがれいかの名を呼んだ。ただそれだけだったのに、れいかは、今までの不安が嘘のように消えた事を悟った。

(みゆきさん、ありがとう! 私は、何を不安に感じていたのでしょうか、私の思いが生徒の皆さんに伝わらないなら、伝わるまで訴え続ける!!)

れいかの表情が変わった!

れいかは、マイクの前で一礼すると、

「この度、生徒会長選挙に立候補した、二年二組青木れいかです。私が生徒会長として目

指す事は、我が校を清く明るく美しい学校に皆さんと共にする事です。それには、皆さんのお知恵も借りなければなりません。私は、皆さんの声が直接生徒会に届くように、目安箱を設置したいと考えて居ます。私の考え方は、面白みに欠けて退屈かも知れませんが、ですが私は、皆さんと共に、この学校で過ごす時間を大切に育んでいきたい。私に皆さんの力を貸して下さい！」

れいかはそう演説すると、最後にお辞儀をした。れいなと違い、盛大な拍手が起きる事は無かった。だが、数人が拍手をし始めると、段々拍手の音が大きくなり、先程のれいなに勝とも劣らない拍手が、れいかにも送られた。れいかは、椅子に座ると少し目頭が熱くなるのを感じていた。

「それでは、これより投票を始めます。入場した時に投票用紙は貰ってますね？それでは先ず、黄野やおいさんの名前前の所に、線を引いて除外して下さい。そして、青田れいなさん、青木れいかさんの名前の下にある四角い枠の中に、どちらが生徒会長になって欲しいか、なって欲しい人の下に○をして、前にある投票箱に順番に投票して下さい」

入江の説明を聞き、一年から順番に投票が始まった。教師達がそれぞれ投票箱の後ろに二人ずつ並び、投票が終わると即座に開票を始めた。その間もれいかとれいなは、舞台の上で椅子に座りながら、集計結果が出るのを待っていた。

数十分後、選挙結果が出て、司会者である入江の下に当選者の名前が告げられた。入

江はマイクを握る力を強めると、

「結果が判明しました！近年稀に見る接戦でしたが、来期の生徒会長は……青木れいかさんに決定しました!!」

『ワアアアアアア!』

『おめでとう!』

生徒達から、盛大な拍手と歓声が沸き上がった。呆然とするれいかに対し、敗北したれいなは、無言のまま舞台を降りようとした。れいかはそれに気付くと、

「れいなさん、待って！待って下さい!!」

「何か用!?勝ったのはあなた何だから、私がここに残る理由は無いわ」

「いえ……れいなさん、以前私は、あなたに説明した事がありましたよね?」

「どういう事!？」

「れいなさん……私は次期生徒会長として、あなたに副生徒会長をお願いしたいと思いません」

「!?」

「入江前生徒会長が仰有っていましたよねえ?近年稀にみる接戦だったと、裏を返せば、それは生徒の皆さんが、れいなさんを必要としている事を意味します。私は、生徒の意見を尊重し、れいなさん、あなたと一緒に、生徒会を美しく盛り上げていきたいと考え

ます」

れいかはそう言うのと、右手を前に差し出した。れいなは、フツと口元に笑みを浮かべると、れいかが差し出した右手を右手で握り返し、

「良いでしょう！今回はあなたの勝ちだもの……敗者は素直に勝者の言う事を受け入れましょう。でも、後悔する事になるかも知れないわよ？」

「フフフ、そうですね」

『ワアアアアアア！』

れいかとれいなが壇上で握手をした事で、この日一番の大歓声が二人に浴びせられた。みゆき達も、みさき達もその中に混じり拍手をしていたが、みさきは首を傾げると、あおいとなみに話し掛け、

「そう言えば、何か忘れて無かったっけ？」

「ん!?ウチ覚えとらん？」

「あたしも……まあ忘れるぐらいだし、たいした事じゃ無いさ」

「それもそうだね」

こうして、生徒会長選挙は幕を下ろし、凍り漬けにされたまま、一人忘れられたパッドエンドピースは、堀毛先生と佐々木先生に怒られて、落ち込んで戻って来たやよいと、ふて腐れて戻って来た真琴に見つかり、真琴は怒っていた事も忘れたかのように、パッ



ドエンドピースを指差して大笑いをして居た・・・

魔界・・・

双児宮に呼び出された双魚宮のニクスと、処女宮のリリスは、カインからの命令を聞き呆然としていた・・・

「シーレイン様を処刑!?ど、どうして?それは以前に・・・」

「お前達も今のシーレインの姿を見ているのだろうか?最早あの腑抜けには、生かす価値は無いと魔王ルーシエス様はお考えだ」

「・・・・・・」

カインの言葉を、ニクスもリリスも返す言葉は無かった。何故なら、アモンに裏切られたシーレインは、あのまま心を閉ざしてしまつて居た。ニクスは、そのままカインに平伏し、

「カ、カイン様、お慈悲を!どうか、どうか」

「私からも、お願い致します。シーレイン様の処刑だけは・・・」

リリスもニクスの横でカインに平伏すと、カインの口元がニヤリとした事に、二人は気付く事は無かった。

「ウム!お前達の活躍によつては、この処刑、私から掛け合い無かつた事にする事も可能

だぞ？」

「「本当でございますか？」」

「嘘は言わん・・・お前達が、この私の命令通りにしてくれるならなあ？」

カインの拒否する事を許さぬかのような気に、ニクスとリリスは、思わずゾツと鳥肌が立った。

第百十七話：スマイルプリキュアとバッドエンドプリキュア（後編）

完

## 第一百十八話：落ちてきた魔法つかい

1、キュアアップ・ラパパ！

魔法界・・・

嘗て、魔界と繋がって居たこの世界は、多くの魔法つかい達が、様々な種族達と共存しながら暮らして居た。魔法界は、広い海に無数の島があり、魔法界の中心には、魔法樹と呼ばれる巨大な木がそびえ立って居た。この巨大な木の上には、子供達に魔法の指導をする魔法学校と呼ばれる学校があった。生徒達は、魔法学校に入学すると、親元を離れ寮生活を送り、皆それぞれの夢へ向かって魔法を学んで居た。

その中の一人、紫色のロングヘアで、マゼンタの瞳をし、胸に何所か高価そうなペンダントをした一人の少女が、魔法界の住人達が多く集う、魔法商店街と呼ばれ、魔法関係の商品を取り扱う商店街にやって来た。少女は魔法学校の生徒で、マゼンタ色のとんがり帽子、リボン、ケープ、ジャンパースカート、ローファーを着ており、それに白のブラウスと黒のハイソックスを穿いて居た。少女が魔法のほうきを扱うお店に入ると、

「グスタフさん、ほうきを下さいな」

「いらつしやい！ウチは、学生用からレース用まで取り揃えてるよ……って、何だリコちゃんかあ？今日はお姉ちゃんと一緒にやないのかい？」

ほうき屋を営んでいるのは、リコと呼ばれた少女に、グスタフさんと呼ばれた大柄で金髪の男だった。何所か職人気質があったが、優しくて気が利くおじさんで、リコは、リコの姉リズの付き添いで何度か訪れて居た。

「ウン、今日は私一人よ、そろそろほうきを欲しいなあと思って……」

「エツ?!リコちゃんは、まだ魔法学校の初等科だろう？初等科は、学科で魔法の知識だけを勉強するから、まだリコちゃんにほうきは早いだろう？」

グスタフが苦笑混じりにリコを宥めると、リコは少し不服そうな表情で、

「私だって、来年はもう中等部だし、早めにほうきを持つて居ても構わないでしょう？」

「まあそりやそうだが……ウン……リコちゃんには、初心者用のほうきかなあ？」

「エエエ!?せめて学生用が良いなあ」

「まだ早い！慣れてからでも遅くはないさ」

グスタフはそう言うのと、リコに笑いながら、初心者用のほうきを気前よくプレゼントしてくれた。リコは嬉しそうにほうきを受け取り、

「グスタフさん、ありがとう」

「どう致しまして、でも、くれぐれも魔法を覚えないうちに、ほうきに乗るんじゃないよ？」  
「ハ〜イ！」

リコは、まるでスキップするかのようにはうき屋を出た。リコは、そのまま魔法商店街を散策していると、

「アラア!? リコちゃんじゃなあい！ 今日はお一人？」

「フランソワさん！ ウン、今日は私一人よ」

リコがフランソワさんと呼んだのは、魔法商店街で洋品店を営み、薄い青紫色の髪で、顔には化粧を付けた、オネエ言葉を使う何所かオカマ風の男性だった。だが腕は確かで、魔法商店街で一番腕が良い服屋と言われる程だった。リコは、姉リズ、更には母リアにも連れられて、何度も店に通う内に、フランソワに気に入られて居た。

「また新しいお洋服が欲しくなったら、何時でもいらっしやい！ この前ナシマハウ界で、新しい生地を仕入れたわよお」

「エツ!? フランソワさん、ナシマハウ界に行つて来たの？ 良いなあ・・・」

「ウフフフ、気になる？ リコちゃんも機会があつたら、一度はナシマハウ界に行つてみると良いわよお」

フランソワは、リコにウインクし、リコが思わず苦笑する。リコも、フランソワに言われる迄もなく、ナシマハウ界に興味を持つて居た。リズと魔法商店街に行った時、ナ

シマホウ界の旅行ガイドブックに目が行き、リズに買つて貰つて以来、本を読んでほんんな場所なのか想像して居た。リコは、時々寄宿舎を抜け出して、魔法界とナシマホウ界を結ぶ、カタツムリニアと呼ばれる、カタツムリのような機関車も見に行つていた。寄宿舎で生活する学生達が、ナシマホウ界に行く為には、魔法学校の校長先生の許可が必要だった。

(良いなあ・・・何時か私も)

フランソワと別れたリコは、そろそろ魔法学校に戻ろうと、魔法絨毯タクシーで魔法学校へと戻つて行つた。魔法学校に戻つたリコは、高等部の寄宿舎に來ると、姉であるリズを捜した。キヨロキヨロ辺りを見渡すと、リコを見知つた女生徒が、リズを呼んで來てくれた。

「リコ、どうしたの?」

そうリコに声を掛けたリズは、青色のロングヘアとリコと同じマゼンタの瞳をした美少女で、魔法学校高等部の中でも優秀で、リズは、魔法学校の教師になる事を目指して居た。リコは、リズを見て少しモジモジすると、

「お姉ちゃん!あのね・・・ちよつとお願ひがあるのお」

「お願ひ!?!何かしら?」

「私に・・・魔法を教えて欲しいの」

リコに魔法を教えて欲しいと頼まれたリズは、思わず驚いた。まだ初等科のリコが、いきなり実技をこなせるとは思えず、

「エツ!? リコにはまだ早いわ・・・中等部になったら、嫌でも教わる事になるんだし、それまで我慢しなさい!」

「嫌よ! 今日、折角魔法のほうきをグスタフさんに貰って来たのに・・・」

「エツ!? リコったら、一人で魔法商店街に行ったの?」

「エへへへ」

リコが可愛らしい笑みを浮かべながら、ペロツと舌を出すと、リズは思わず溜息を付き、

「ハア・・・困った子ねえ」

「お願い、お姉ちゃん・・・お姉ちゃんも、先生になる練習になると思うの」

「リコったら・・・」

リズは、リコが一度言いだしたら聞かない、強情な所があるのを思い出し、リコを寄宿舎の裏へと連れて行つた。

「本当は、初等科の子に魔法を教えるのは、学校から禁止されているんだけど・・・少しだけよ?」

「ウン! ありがとう、お姉ちゃん」

リズは、早速愛用の魔法の杖を取り出した。リズの魔法の杖は、赤い宝石が付いていて、何所か優雅さを醸し出していた。リズは、リコが手に持つ魔法のほうきを見つめると、

「キュアアップ・ラパパ！ほうきよ、踊りなさい」

キュアアップ・ラパパという言葉が、魔法を唱える呪文のようで、リズがほうきに魔法を掛けると、魔法のほうきは、命を宿したかのように踊り出した。リコは思わず目を輝かせると、

「凄おおい!？」

「リコもやってみる?」

「ウン!」

リコは再び目をキラキラ輝かせると、先端に星の宝石を付けた自分の魔法の杖を取り出した。魔法界の住人は、生まれた時に杖の木から魔法の杖を授けられて居たもの、ちやんとした魔法の知識を得てから使用するように、魔法学校に入学して魔法を習つてからのみ、魔法の仕様を許可されて居た。リコは、ほうきをジイと見つめると、先程リズが唱えたように、自分も呪文を唱え、

「キュアアップ・ラパパ！ほうきよ、踊りなさい」

しかし、何も起きなかつた・・・



「キュアアップ・ラパパ、キュアアップ・ラパパ、キュアアップ・ラパパ……」

リコが何度も呪文を唱えるも、しかし、何も起きなかった……

「何でよおおお!？」

リコは思わず変顔浮かべながら、恨めしそうにほうきを睨み、リズが思わず苦笑する。

「リコ、やつぱりまだ無理よ!魔法は、ただ呪文を唱えれば必ず成功する訳じゃないのよ

? 集中心も大事なの」

「集中心!？」

「そう、集中心……頭の中で、成功した時のイメージを浮かべたりね」

「なあんだ、それなら簡単よ」

リコは、ドヤ顔を浮かべながらそう言うのと、頭にほうきが踊るイメージを抱いた。

「キュアアップ・ラパパ!ほうきよ、踊りなさい!!」

一瞬の間の後、ほうきが微かに動き出し、成功したと思ったりリコが思わず気を緩めると、ほうきは暴走し、リコの身体事宙に浮かび上がり、暴れ馬のように空で動き回った。

「キヤアアアアア!」

リコの悲鳴を聞いたリズは、顔色を変えると素早く魔法の杖を構え、

「リコオオ!キュアアップ・ラパパ!ほうきよ、静かに降りてきなさい!!」

リズが再び呪文を唱えると、悲鳴を上げるリコを乗せたほうきは、静かにリズの前に

降りて来た。

リズはホッと安堵するも、内心では魔法を暴走させたリコに驚いて居た。普通は、宙に物を浮かばすだけでも、かなりの気力を必要とする筈で、初めて唱えた魔法で、物を宙に浮かせるのは、そうそう出来る事では無かった。

(やはりリコには、秘められた魔法の力が眠って居そうね)

リズは、やはりリコには、魔法学校で正式に魔法を教わってから、魔法を使った方が良いと実感した。リズはリコに声を掛けると、

「リコ、大丈夫だった？」

「ウ、ウン・・・計算通りだし」

「エッ!？」

リコの負け惜しみを聞き、リズは思わず苦笑した・・・

2、そしてリコは・・・ナシマホウ界へ

翌日・・・

魔法界の上空を、二人の美女が飛んで居た。一人は、スタイルの良い身体を、露出が高い黒い下着姿のような衣服で纏い、背中に生えた小さな黒い翼で飛び、もう一人は、人魚の姿で空を泳いでいるかのように、尾鰭を使って優雅に飛んでいた。二人の名は、サ

キュバスのリリスとマーメイドのニクス、シーレインの処刑を回避して貰う為、二人はカインの命令通り、ニクスの故郷である魔法界へとやって来た。

「ニクス、魔法界に来るのも久しぶりでしよう？懐かしいんじゃない？」

リリスは、魔法界出身であるニクスに話し掛けると、ニクスは確かに懐かしそうな表情を浮かべるも、

「まあ、懐かしくないと言えば嘘になるわね。でも、私が居た頃から、魔法界では二百年は経っているし・・・」

「エッ!?ニクスって・・・そんなに年寄りだったの？」

「うるさいわねえ・・・たった二百年よ！」

「やっぱり年寄りじゃない」

「うるさい！大体、あなた私の年知ってるでしょう？リリスは、千年は生きてるんだつたわよねえ？」

「失礼ねえ！私だってまだ二百年よ!!」

ニクスとリリス、どこか唾み合いながらも、二人は本音では互いを認めて居た。そんな他愛もない会話を二人でしながらも、二人は魔法学校の生徒を誘惑し、人間界に連れて行く任務を実行する為、魔法学校へと向かって飛び続けた。暫く飛び続けた二人は、魔法学校のある島に近付くと、ニクスはリリスに警告し、

「リリス、島に着いたら、人魚の私はともかく、リリスの格好では、直ぐに魔界の者とバ  
レてしまうかも知れないわ」

「お構いなく、ちゃんと露出は控えるわよ」

「それもそうだけど、背中の翼も隠しなさいよ?」

「ハイハイ・・・島が見えてきたようよ」

リリスは、小姑のようなニクスに呆れた時、ちやうど魔法学校がある島が見えてきた。  
リリスが島を指差すと、ニクスもコクリと頷きながら、

「じゃあ島に着いたら、少し情報を仕入れてから、めぼしい子に声を掛けましょう」

「でも、カイン様が言うように、魔法学校の生徒を人間界に連れて行けば、本当にプリ  
キュアは見つかるのかしら?」

「さあ!でも、魔法界に伝わる伝説では、一万年前に闇から魔法界を救った、伝説の魔法  
つかいと呼ばれるプリキュアが居たそうよ?」

ニクスは、魔法界に居た頃の記憶を思い出していた。人魚の里で暮らしていた頃のニ  
クスは、好奇心旺盛で読書好きだった。その頃読んだ古文書で、一万年前、魔法界を救っ  
た伝説の魔法つかいの事を知った。リリスは首を傾げながら、

「二万年前って・・・随分胡散臭い話じゃない?」

「その頃から魔界に居たアモン様やベレル様なら、何か知って居るのかも知れないけど、

私達が生まれる遙か昔の話だしね……でも古文書には、伝説の魔法つかいであるプリキュアの名前が、キュアマジシャンって事まで書かれて居たから、事実かも知れないわよ?」

「フーン……」

リリースもそれ以上深く追求せず、二人は島の端に降り立ち、ニクスは尾鰭を足に変化させた。

その頃リコは、授業を終えた後、ほうきを持ちながら、人気の無い場所で、魔法の訓練をしていた……

「キュアアップ・ラパパ!……ダメだわ、昨日は反応あつたのになあ?お姉ちゃんは、あれから魔法教えてくれないし……もう!」

リコはそう言うのと、頬を思いつき膨らませていじけた。少し休憩したりリコは、気分を変える為、魔法界と人間界を結ぶ、カタツムリニアを見に行こうと歩いて居ると、

「あなた、魔法学校の生徒さんよねえ?」

「私達は、魔法学校の生徒さんを捜していたのよ」

「エッ!?!」

突然背後から声を掛けられたリコは、思わず驚いて背後を振り向くと、そこには二人

の美しい美女が立って居た。リコは、内心綺麗な人達だなあと思いながら、

「そうですけど、あなた方は？」

「私達は、魔法学校の校長先生に頼まれて、目星を付けた生徒さんに、ナシマホウ界で見聞を広げて貰うように頼まれた者で、私はニクス」

「私はリリスって言うわ、あなたは？」

「私は・・・リコって言います」

「そう、リコちゃんって言うの？賢そうなお名前ねえ？」

ニクスにお世辞を言われると、リコは見る見るドヤ顔を浮かべ、

「エッ!?そ、それ程でも・・・有るし」

(「エエエ!?この子、お世辞を真に受けたわ?」)

ニクスとリリスは、リコの性格に驚きながらも、煽てれば欺ましやういと思いつき、目でアイコンタクトすると、ターゲットをリコに決めた。ニクスとリリスは微笑みながら、

「どうかしら!?あなたにその気があるなら、ナシマホウ界に一緒に行ってみない？」

「あなたは、優秀な魔法つかいになれる素質を持っていそうだし、ナシマホウ界に行けば、きっとあなたの為になる筈よ?」

「本当!?あつ、でも・・・ナシマホウ界に行くには、校長先生の許可が必要で・・・」

リコは、ニクスやリリスに言われる迄もなく、ナシマホウ界に行きたい気持ちは当然持つて居たものの、校長の許可なしに出かけたら、怒られるんじゃないかと思い、モジモジした。リリスは、そんなリコの心意に気付き、

「リコちゃん、安心して。ちゃんと校長先生の許可は得ているから、これからナシマホウ界に行きましょう」

「エッ!?今からですかあ?どうしよう、お姉ちゃんに言わなくても大丈夫かなあ?」

「戻ったら、お姉様に知らせれば大丈夫よ!さあ、行きましょう」

「じゃあ、カタツムリニアに乗れるんですね?ヤッター!」

「カタツムリニア!」

ニクスとリリスは同時に首を傾げた。魔界で暮らしている二人に取って聞き慣れない言葉で、ニクスが居た頃の魔法界には、まだカタツムリニアは存在して居なかった。二人が首を傾げた事で、リコも不思議そうに首を傾げ、

「違うの?」

リコが不審そうにジイと二人を見つめた事で、リリスはニクスを肘で突つつき、小声で話し掛けると、

「ニクス、ひよっとして、さつき本屋で見た本に書いてあった、人間界と魔法界を繋ぐ乗り物の事じゃない?」

「確か、人間界の津成木駅って所に繋がっているんだったわね？」

ニクスとリリスがこそこそ話し出した為、リコは益々不審そうに交互に二人を見つめると、

「何か怪しい!？」

「エツ!?!怪しくない!怪しくない!」

リコに不審がられた事で、ニクスとリリスは同時に右手を振り、愛想笑いを浮かべた。ニクスは手を叩くと、

「リコちゃん、そんな物に乗らなくても、ナシマホウ界には行けるのよ?」

「エツ!?!」

ニクスにそう言われたリコは、以前授業で聞いた内容を思い出していた。高度な技量を持つ魔法つかいならば、カタツムリニアに乗らなくても、時空を乗り越え、ナシマホウ界に行ける事が出来ると、授業で教わった事を思い出した。

「じゃあお二人は、高度な魔法つかい何ですnee? 凄おおい!」

リコは一人で興奮し、尊敬の眼差しでニクスとリリスを見つめると、思わずニクスとリリスは顔を見合わせた。

(この子・・・何か勘違いしているわね?)

二人はそう思いながらも、リコを連れて人気の無い場所に移動すると、空間に歪みを



生じさせ、ニクスは少し声のトーンを落としながら、

「じやありコちゃん、目を瞑って、両手で私達の手をしっかりと握っていてね」

「途中で手を放しちゃうと・・・永遠に帰れなくなっちゃうかも知れないわよお？」

「ヒイヒイ」

リリスに脅されたリコは、思わず両手をギュツと握りしめ、ニクスは呆れたように、リコをからかったリリスを見つめ、三人は何処かへと去って居た・・・

### 3、魔法つかいに憧れる少女

どれくらい経ったのか、リコの耳に賑やかな音が聞こえてくる。一体何の音だろうか  
とリコが不安そうにしていると、ニクスは思わず笑み、

「フフフ、もう目を開けても良いわよ」

「リコちゃん、ゆっくり目を開けてみて」

ニクスとリリスから許可を貰ったリコは、言われるままゆっくり目を開いた・・・

「ウワアアアア！此処がナシマホウ界!?!」

リコの眼前に広がる光景は、リコが想像して居た以上の衝撃をリコに与えた。ナシマホウ界の雑誌を買って読んで、薄々は分かっては居たが、目の前を勢い良く走る自動車や、歩きながらスマホや携帯ゲームをする人、忙しなく歩く人など、ナシマホウ界では、

時間の余裕が無いように感じられた。それは、初めて人間界を訪れたニクスとリリスも同様だったが、リリスは人々から溢れ出る性への欲望を感じ、思わず舌なめずりをした。(ウフフフ、人間界は美味しい御馳走が一杯ありそうねえ?)

「リリス・・・涎が出ているわよ?」

「エッ!?!」

ニクスに注意され、リリスは慌てて涎を啜った。キョロキョロ辺りを見渡したりリコは、少しナシマホウ界を散策したくなって居た。

「あのう・・・少しこの辺りを歩いてても良いですか?」

「エエ、良いわよ。でも、あまり遠くに行かないようにしてね?」

「迷子になっちゃわよお?」

「ハ〜イ!」

リコは、ニクスとリリスに返事を返し、ほうきを持ったまま楽しそうに歩き始めた。擦れ違う人々は、ほうきを持ったリコを、稀々な表情で見つめるも、直ぐに興味を無くしたようにそのまま歩き続けた。リリスは、そんなリコの後ろ姿を目で追うのを止めると、

「ニクス、人間界に来たものの、これからどうする?」

「そうね、あまりあの子をこっちに連れ出したら、魔法学校でも騒ぎになりそうだ

し……」

ニクスが魔法学校と言ったその時だった。突然二人の背後から声が掛かり、

「今、魔法つて言いましたあ？」

「エツ!？」

ニクスとリリスは驚き、思わず背後を振り向くと、リコとそう年が変わらないくらいの少女が、熊のぬいぐるみを持って立って居た。少女は目をキラキラ輝かせて、ニクスとリリスを見つめると、

「お二人は……爆裂魔法を使えるんですかあ？」

「いえ、使えません」

少女に聞かれたニクスとリリスは、目を点にしながら同時に首を振った。少女は尚も食い下がり、

「でも……魔法つかいさんですよねえ？」

「いいえ、違います」

ニクスとリリスは、再び目を点にしながら首を振り、魔法つかいでは無いと告げるも、少女はジイイと二人を見つめると、リリスは、少女の純粋な視線に耐えられず、思わず顔を背けた。

(そ、そんな純粋な目で、私を見ないでえええ)

不純なりリスにとつて、純粋な子供達は苦手だった。少女はニッコリ微笑むと、

「アアア!?目を逸らしたあ!やっぱり、魔法つかいさんだあ!!」

「だ、だから違うわ」

「お嬢ちゃん、こんな所に居ないで、お友達と遊んで来たらどうかしら!」

話を逸らすように、ニクスは少女に、友達と遊んで来たらと伝えると、少女は再びニッコリ微笑み、

「お友達!?居るよ!」

「そう、じゃあそのお友達のお家に・・・」

「モフルン!」

少女はそう言うと、ニクスとリリスに、モフルンと呼んだ熊のぬいぐるみを紹介するかのように、頭上に持ち上げた。ニクスとリリスは、思わず変顔を浮かべ、

「エツ!?そのぬいぐるみが?」

魔界に住む二人ではあったが、ぬいぐるみの事は知って居た。そのぬいぐるみを、この子は友達だと言った事で、思わず二人は確認するかのように少女に聞くと、少女は嬉しそうに頷き、

「ウン!モフルンは、私の大事な、大事なお友達!!」

少女がそう告げた瞬間、ニクスとリリスは変顔浮かべながら、早足で逃げるように少

女から離れるも、少女は楽しそうに二人に付いて来た。

「モフルン、魔法つかいさんに会える何て．．．ワクワクもんだあ！」

少女が嬉しそうに後を付いてくるのを見たリリスは、肘でニクスを突つつき、

「ちよつとニクス、あの子付いて来るわよ？」

「何か変な子と関わり合っちゃったわねえ？ぬいぐるみが友達だ何て．．．このまま知らん顔して行きましょう」

「そうね、その内諦めるでしょう」

ニクスとリリスは、後ろを気にしながらも、少女から逃れるように早足で歩き続けた。だが少女は、ニコニコしながら相変わらず二人に付いて来た。再び変顔浮かべた二人は、思わず少女から逃げるように駆けだした。ニクスは困惑しながら、

「な、何なのよ、あの子はああ!？」

「こうなったら、いつそあの子を．．．」

リリスはその場に立ち止まり、後ろを振り返って少女を怪しげな赤い瞳で見つめた。リリスが一瞬殺気立つと、ニクスは慌ててリリスを叱咤し、

「バカ！勝手に人間界の人間に手を出したら、私達の身が危うくなるわよ？相手がプリキュアならば、例え殺した所で、取り繕う事は出来るでしょうけど」

「じゃあ、どうするのよお？」

「そういう時は・・・逃るのよおー！」

「結局それえ!？」

リリスも渋々ニクスの提案を受け入れ、二人は慌てて再び逃げ出した。少女は嬉しそうにそんな二人を追いかけ、

「魔法つかいさん、待て待てえ・・・アハハ、楽しいねえ、モフルン?」

少女は楽しそうに熊のぬいぐるみに話し掛け、ニクスとリリスを追いかけ回した。ニクスとリリスは、魔界で走る事などした事が無かった。普段走らない二人は息切れし、木々が生い茂った公園で立ち止まると、ゼエゼエ荒い呼吸を整えた。そんな二人に少女が嬉しそうな表情で追いつき、

「追いついたあー！」

「また来たあ!？」

「ねえねえ、魔法つかいさん、追い駈けっこもつとしようよ?」

「だから、魔法つかいじゃないわよ!」

少女は、ニクスとリリスの腕を引つ張り、もつと追いかけてつこをしようとして提案するも、バテていた二人は、困惑気味に少女に魔法つかいじゃないと再び告げた。だが、少女はそんな二人の話を信じず、魔法つかいだと信じ切った。ニクスとリリスは、少女の執念深さに根を上げ、

「もう・・・勘弁してえ！」

「エエエ!? つまらないよね、モフルン?」

少女は少し頬を膨らまし、熊のぬいぐるみに話し掛けると、ニクスとリリスは心の中で同じ事を思い、

( つまらないなら・・・どっか行ってえ )

だが、二人のそんな思いも少女には伝わらず、少女はニクスとリリスに尚も纏わり付き、

「ねえねえ、今度は何して遊ぶの?」

少女に聞かれたニクスは、次第にイライラしだした。十二の魔神の一人である自分に對し、魔界で知らぬ者がこのような馴れ馴れしい態度を取れば、命を失つても文句は言えなかった。ニクスの黄緑色した長い髪の色が、見る見る赤くなり、リリスはハツとした。普段は温厚なニクスだが、一度怒ればその美しき髪は真紅に染まり、怒らせた相手は血の海に沈むと言われるのだから・・・

「ワアアア、髪の色が急に赤くなつたあ! これってやつぱり魔法!? ワクワクもんだあああ!」

少女が興奮するのは逆に、ニクスは、キツと少女を睨み付けると、

「お嬢ちゃん、お姉さん達は今忙しいの! 遊ぶなら、他のお友達と遊びなさい! さもない

と・・・」

「ちよつとニクス！」

ニクスが少し語気を強めると、少女はうつすら涙目になった。リリースに窘められたニクスは、泣きそうな表情を浮かべた少女に気付き、思わず狼狽へながら、髪の色が元の黄緑色に戻った。困惑したニクスは、少女をあやすように、

「ちよつと、お姉さんが悪かったわ。だから泣かないで、ねっ？お嬢ちゃんのお名前は？」

「みらい・・・朝日奈みらい」

少女は鼻を吸りながら、朝日奈みらいと名乗った。ニクスは引き攣った笑みを浮かべ、みらいの頭を撫でながら、

「そう、みらいちゃんって言うの？」

「ウン、お姉ちゃん達は？」

「私はニクス」

「私はリリースよ」

「ニクスお姉ちゃんとリリースお姉ちゃん？」

みらいに呼ばれた二人は、引き攣った笑みをしながらコクリと頷いた。ニクスはみらいに話し掛けると、



「みらいちゃんは、そんなに魔法つかいが好きなの?」

「ウン!お婆ちゃんに教えてもらったの!お婆ちゃんが中学生ぐらいの頃、魔法つかいと出会ったんだって、私それを聞いて、魔法つかいさんに私も会いたいなあと思って、それに、この前観たテレビでね、爆裂魔法っていう、格好良い魔法観たんだよ」

ニクスに聞かれたみらいは、嬉しそうに魔法つかいについて語りだし、みらいが心から魔法つかいの事が好きだと二人も理解した。ニクスは、みらいが発した爆裂魔法という言葉を、魔法界に居た時、そんな魔法の事は聞いた事も、文献で読んだ事も無かった。ニクスは首を傾げ、

「爆裂魔法!?そんな魔法、魔法界に居た時も聞いた事も無いわねえ?」

「エッ!?やつぱりお姉さん達魔法つかい?」

みらいが嬉しそうに目を輝かせると、リリスは困惑した表情で、

「ニクスのバカ!」

「し、しまった!」

ニクスはみらいに釣られ、魔法界に居た頃の間で話してしまい、みらいの目がキラキラ輝きだした。見る見るリリスとニクスは困惑し、ヒソヒソ話を始めると、

「ニクス、どうするのよ!?!あの子、このままじゃ帰らないわよ?」

「リコの事も気掛かりだし、あの子に適当な事教えて、練習させている間にも逃げま

しよう」

二人は示し合わせると、みらいに近付くように伝え、みらいは嬉しそうに二人に近付いた。

「みらいちゃん、お姉ちゃん達が魔法つかいだって事は・・・内緒にしてくれる？」  
「ウン！するよ」

「じゃあ特別に・・・みらいちゃんに魔法つかいの口上の仕方を教えて上げるわ」  
「本当!?!ワクワクもんだあああ!」

ニクスは、興奮しながらはしゃぐみらいに対し、デタラメな魔法つかいの口上を教え始めた・・・

4、そしてリコは・・・途方に暮れる

ニクスとリリスが、みらいによって追い回され、何処かに行ってしまった、戻って来たリコは狼狽えて居た。

「アレエ!?!ニクスさんとリリスさんが居ない? 確か此処だったわよねえ? どうして二人共・・・居ないのよおお?」

動揺したリコが、少し涙目になると、薄笑いをした小太りの眼鏡を掛けた若い男が、嬉しそうにリコに近付いて来た。リコは困惑した表情で若い男を見て居ると、男は中腰に

なり、馴れ馴れしくリコの頭を撫で始め、リコが嫌そうな表情になった。男は再び薄ら笑いを浮かべながら、

「お嬢ちゃん、迷子かなあ？お兄ちゃんの家に来ない？」

「ヒイイ!?ま、迷子じゃ無いしいい！」

「アツ、お嬢ちゃああん！」

リコは慌てて若い男から逃げ出すと、若い男が呼び止めるのも無視して走り続けた。走りながらリコはある事に閃いた。

「そ、そうだわ！空から捜せば良いのよ」

リコは、人気の無い裏道に入り込むと、辺りをキョロキョロ見渡した。幸い人影も無く、リコは魔法の杖を取りだし、ほうきに跨がり精神を集中させると、

「キュアアップ・ラパパ！ほうきよ、飛びなさい！」

しかし、何もおきなかった・・・

「フ、フフン、最初から上手くいかないのは、計算通りだし・・・」

リコは負け惜しみを言いながらも、何度か呪文を試した。昨日リズに言われた事が頭を過ぎり、リコの脳内に、ほうきに跨がり飛んでいるイメージが沸き上がった瞬間、

「キュアアップ・ラパパ！ほうきよ、飛びなさい!!」

その瞬間、リコの胸のペンダントが輝き、ほうきが勢い良く空に飛び上がった。リコ

は嬉しそうに、

「せ、成功した!? フン、流石私!」

リコがドヤ顔を浮かべた瞬間、ほうきはドリルのようにグルグル回転し始め、

「と、止めてえええ!」

リコは、思わず悲鳴を上げた。

「我が名はみらい! 爆裂魔法をこよなく愛する魔法つかい!! これで良いですかあ?」

みらいが振り向くと、熊のぬいぐるみと共に座っていた筈の、ニクスとリリスの姿が忽然と消えて居た。みらいは辺りをキョロキョロ見渡し、

「アレエ!? 居なくなっちゃった?」

その時だった!

みらいの上空を、何かの悲鳴が聞こえた気がして、みらいは思わず空を見上げると、  
「誰か、止めてええええ!」

そう叫びながら、何かがみらいの上空を通過して行った。みらいは見る見る目を輝かせ、熊のぬいぐるみが居るベンチに座ると、

「モフルン、見てえ! また魔法つかいさんだよ!!」

みらいは、熊のぬいぐるみにも見せるように、何処かへと飛び去った何かを、目を輝

かせながら見送った。

リコとみらい、この二人が後にプリキュアとなって、生涯の親友になる事になるとは、この時の二人には知る由も無かった・・・

それはまた別のお話・・・

## 5、落ちてないし

逃げるように戻って来たニクスとリリスは、まだリコが戻って来て居ない事に焦りを覚えて居た。周囲を探し回るも、リコの姿は忽然と消えて居た。通行人に尋ねて見ても、誰もリコの姿を見た者は居なかった。

「私達が離れてる間に・・・リコは一体何処に？」

「ニクス、まずいわねえ!?!このままじゃ、魔法学校で騒ぎになるわよ?！」

「まあ、私達の事に気付く事は無いとは思うけど、人間界に搜索には来そうね」

「私達も、このままリコを捜しましょう。このままじゃ、魔界に帰ってもカイン様に会わせる顔が無いわ」

「そうね・・・仕方無い、しばらく人間界で様子を見ましょう。何かプリキュアの情報も手に入るかも知れないし」

「でもニクス、この街は離れましょう!リコも居そうに無いし、あの魔法つかい好きな女

の子に会うのは……もう勘弁よ！」

「リリス、珍しく意見が合うわねえ？同感よ！」

ニクスとリリスは、人間界に残る事を決めたものの、みらいとの再会を恐れ、津成木町から逃げるように離れて行った。

七色ヶ丘……

生徒会選挙も無事に終わり、日常を取り戻したものの、バッドエンドプリキュア達は、ピエーロを完全に復活させる為、この日もバッドエナジーを集めて居た。止めに来たみゆき達は、スマイルプリキュアに変身し、途中で合流したエコーと共に、困惑しながらバッドエンドプリキュアと公園で対峙しようとしていた……

「みさきちゃん、止めようよ！」

「ダメだよ！それに、今の私はバッドエンドハッピーだもん」

「ですが、私達はもう、あなた方と戦いたくありません」

ビューティもハッピーの意見に同意し、バッドエンドプリキュア達に戦いたく無いと告げると、バッドエンドプリキュアの五人も、複雑な表情を浮かべた。バッドエンドピースは、スマイルプリキュアの六人に話し掛け、

「なら、前みたいに私達の必殺技で勝負しようか？」

「一発勝負って事か・・・上等!」

バッドエンドドマーチも同意したものの、スマイルプリキュアの六人は困惑した。

その時・・・

「誰か、止めてえええ!」

『エツ!』

突然上空から声が聞こえ、一同が一斉に空を見上げると、ドリルのようにグルグル回転した何かが、高い木に激突した。

「キヤアアアアア!」

ガサガサ音を立て、何かが枝を折りながら落ちて来るようだった。十一人の光と闇のプリキュア達は、木の真下に移動すると、そこには、物干し竿に干された洗濯物のようにな、木の枝に服が引つ掛かり、白い下着を丸見えにしながら、藻掻いて居る少女の姿があった。落ちてきたのはリコで、リコは失敗した姿を大勢に見られて、恥ずかしそうにしていた。エコーは、そんなリコに声を掛け、

「ねえ、大丈夫!?!何でそんな所に落ちてきたの?」

「お、落ちてないし」

リコは、困惑気味に落ちてないと否定するも、サニーはリコの格好を見て呆れながら、「落ちてない言うても・・・どう見ても落ち取るやん?」

「け、計算通りだし」

「計算通り!? 本当だとしたら、凄いですねえ?」

ビューティが思わず首を傾げ、バッドエンドビューティは、リコをチラツと見つめると、

「どう考えても負け惜しみでしょう?」

「負け惜しみじゃないし」

リコは困惑しながらも、負け惜しみじゃないと一同に強がった。バッドエンドサニーは、そんな強がるリコに呆れたかのように、一同に話し掛け、

「さよかあ・・・ほな、さっきの続きしようや!」

リコをこのまま置いて、必殺技勝負の続きをしようと提案し、リコの側を離れようとする、さすがにリコも狼狽へ、

「アツ!? ちよ、ちよつとおお!」

「何や!? 計算通り何やろう?」

「ウウウウ」

今度はサニーが、ちよつとリコをからかうように話し掛けると、リコが言葉に詰まった。ハッピーはサニーを宥め、

「サニー、虐めちゃ可哀想だよ」



「ウウウウウ、分かった！分かりました！はいはい、落ちました。これで良いでしょう？」

リコは開き直り、半ばヤケクソ気味に落ちた事を認めた。サニーとバッドエンドプリキュア達は、そんなリコの態度を見て、

『可愛くないなあ』

「……まあまあ……」

サニーを除いたスマイルプリキュアが、苦笑しながら六人を抑えた。ハッピーは、一歩前に出ると、何かが足に辺り、地面を見てみると箒が落ちていた。ハッピーはリコに話し掛けると、

「ねえ、これはあなたの箒かなあ？」

「アツ!?そ、そうよ……ついでに、先が星の形をした杖を見付けてくれると、もっと嬉しいかも……」

『杖!?!』

ハッピーが辺りを見渡すと、確かに先端が星の形をした杖が落ちていた。ハッピーは、リコの持ち物である箒と杖、そして、よくリコの姿を見て見れば、絵本で見た魔法つかいが被っていたような帽子を見て、思わず目を見開き、リコを指さすと、

「あなた、ひよつとして……魔法つかいさん!?!」

『エッ!?!』

ハッピーが発した魔法つかいと言う言葉を聞き、一同の視線が一斉にリコに向けられた。再びパンツ丸見え状態の姿を見られたリコは、顔を真っ赤にしながら、

「エエエエと・・・お話の前に、ここから下ろして貰えると助かるんですけどお」

ハッピーはポンと手を叩き、リコの現状に改めて気付くと、側に居たエコーに話し掛け、

「アツ、ゴメンゴメン、エコー、手伝って」

「分かった」

ハッピーとエコーに救出され、リコは無事に地上に降りた。リコは軽く咳払いし、照れくさそうにしながらも、

「あ、ありがとう」

「どうぞ致しまして」

ハッピーとエコーが、リコに微笑んだ。リコは再び軽く咳払いすると、

「コホン! まあ、隠してもしょうがないし、あなた達には正直に言うけど・・・私は魔法学校の生徒で、リコ」

『魔法学校!?!』

一同は、リコの容姿を上から下、下から上へと見た。確かにそう言われれば、魔法つ

かいつぼく見えなくも無かった。ハッピーとピースは目をキラキラ輝かせると、リコに近付いていきなり手を握った。

「魔法つかいって本当に居たんだねえ．．．私は、キュアハッピーだよ」

「キュア．．．ハッピー!?!」

「うん、私達プリキュアって言うんだあ」

ハッピーがプリキュアの名前を出した瞬間、リコは変顔になって驚き、

「エエエエ!? あなた達が．．．プリキュアアアアア?」

「エツ!? そうだけど．．．リコちゃん、プリキュアを知ってるの?」

「名前だけはね。昔々、魔法界を救った伝説の魔法つかいプリキュアが居たの。確か：

キュアマジシャンって言ったかしら?」

『エエエ!?!』

リコの言葉に、今度はスマイルプリキュアの六人が変顔になって驚いた。キュアマジシャンの事は、ブルーやメランに聞いていたのだから．．．

「キュアマジシャンって、魔法の国の人だったんやなあ」

「言われてみれば、マジシャンって名前だもんね?」

サニーとピースが、苦笑しながらマジシャンの話題を話して居ると、リコはプリキュア達が、マジシャンの事を知っているかのような口ぶりに驚いた。

「エツ!? あなた達、キュアマジシャンの事を知っているの?」

「二万年前の方ですし、直接会った事はありませんけど、キュアマジシャンの子孫の方とは、私達は知り合いですよ」

「エエエエ!? 子孫? じゃあ、キュアマジシャンって実在したの?」

「ウン、実際に居たんだよ。キュアマジシャンと一緒に戦った妖精さんとも、私達知り合いで、直接話も聞いたしね」

『へへ〜』

マーチはコクリと頷き、バッドエンドプリキュア達は今初めて聞いた為、納得したかのように頷いた。ピースは、携帯を手に持つと、

「魔法つかいさんが本当に居た何て・・・みんなにも知らせなきゃ」

ピースは、ウキウキしながら携帯でメールを打ち始めた。内容は、私達の街に魔法つかいがやって来て仲良くなったから、みんなも来てみない? というメールだった。

『魔法つかい!?!』

ピースからメールを受けたなぎさ達一同は、最初こそ困惑したものの、妖精や精霊、魔界まであれば、魔法の国があってもおかしくないと思うと、こつちの世界にやって来た魔法つかいに興味を持った。リコも、ハッピー達から他のプリキュアに会わせてあげると聞けば、当然興味が沸いたものの、リコは助けられた事で、ナシマホウ界に来てから

何も食べて無い事を思い出した。リコが現われた事で、戦う事を止めたスマイルプリキュアとバッドエンドプリキュアは、みゆき達とみさき達の姿へと戻った。リコは、お腹が空いたのか、お腹を鳴らして恥ずかしそうにしながら、

「あのう・・・何か美味しい食べ物ってあるかしら？」

「ほな、お好み焼きでも食べるう？」

「お好み焼き・・・ちよつと興味あるかも？」

「じゃあ、サービスしたるわ。なお、手伝つてくれるかあ？」

「分かった。じゃあれいか、後をお願い」

「分かりました。皆さんがいらしたらそう伝えます」

れいかが頷き、あかねとなおは、あかねの店へと向かい、残った一同が談笑していると、公園の側が赤く発光し、せつながなぎさ達一同を連れて突然現われ、驚いたリコは変顔を浮かべた。なぎさは、キョロキョロ辺りを見渡すと、みゆきに声を掛け、

「ねえ、魔法つかいが現われたって本当!?!思わずせつなに頼んじやつた。この場に居るのかなあ？」

「何か空から落ちてきたんでしよう？」

のぞみが空を指さしたその時、リコは変顔浮かべながら、

「お、落ちてないしいい！」

リコが顔を赤くしながら、懸命に否定する様子を見て、なぎさ達はリコが魔法つかいだと分かり、思わず苦笑した。

魔界・・・

双児宮でリコと接触したなぎさ達を、水晶に映し出して見て居たカインは、こうも自分の思い描く筋書き通りに事が進んで行くさまに、思わず口元に笑みを浮かべた。  
(クククク、餌に魚が掛かったようだな！さて、後はニクスとリリースがどう出るか・・・  
クククク)

カインは水晶を消すと、双児宮から何処かへと消え去った。

第百十八話：落ちてきた魔法つかい

完

# 第一百十九話：妖怪オールスターズ対プリキユアオールスターズ!?

## 1、リコとプリキユア

リコは、ニクスとリリスに欺まされて、人間界に連れて来られたとも知らず、ひよんな事から知り合ったみゆき達とみさき達、そして、みゆき達に呼ばれたなぎさ達と出会った。やおいは、嫌な表情を浮かべる真琴をからかい、なみは、お土産を持って来た咲からパンを分けて貰い、あおいはココの話題を振つてのぞみをからかった。れいなは、れいかに促され、かれんといっきの下に近付き、生徒会の心得を聞いた。ラブは、みさき達がみゆき達と一緒に要るのに驚き、みさきに声を掛けると、

「あなた達も来てたんだけ？」

「うん、私達がみゆき達と戦おうとしてたら、その自称魔法つかいが空から落ちてきて・・・」

「だからあ、落ちてないし」

ラブに聞かれたみさきが、リコをからかうように空を指さすと、顔を赤くしたりリコが慌てて否定し、その場に居た一同が、リコのコミカルの動きに思わずクスリと微笑んだ。

みゆきは、改めてリコを見つめると、

「でも、魔法つかいさんが本当に居た何て……ウルトラハッピー!」

「そうね、メルヘンランドのマジヨリンや、絵本の世界の魔法つかい達の事は、私達知ってたけど、魔法界って所がある何て……ロマンチックよねえ」

こまちも興味を持ったようで、目を輝かせながらみゆきの言葉に同意した。一同は、魔法つかいであるリコに興味を持ち、一方のリコも、プリキュアに興味を持っていた。リコは、驚いた表情を浮かべながら、なぎさ達一同の顔を見渡し、

「あなた達みんな……本当にプリキュアなの?」

リコが驚くのも無理は無かった。魔法界では、伝説の魔法つかいと呼ばれたプリキュアが、ナシマホウ界には、アン女王やバッドエンドプリキュア達も入れて、38人ものプリキュアが、今リコの目の前に居るのだから……

「プリキュアって……伝説じゃないの?こんなに多いのに伝説?」

「他にも居るよ。ダークプリキュア5の五人でしょう、つぼみちゃんのお婆ちゃんの、キュアフラワーも居るし」

「ヨボヨボのお婆ちゃんも、プリキュアをやってるの?」

リコは、のぞみから聞いたつぼみの祖母である薫子が、腰が曲がり、ヨボヨボ杖を突きながら、なお現役でプリキュアをやっている姿を想像した。つぼみは、そんなリコの



想像に気付いたのか、少し頬を膨らませながら、

「家のお婆ちゃんは、ヨボヨボじゃありませんよ。この間は、身体を壊して入院した事もありましたが、至って元気です。でも、若い時にやってたつてだけで、今は私達をサポートしてくれてます」

「いやあ、まあ伝説何て、蓋を開けてみればこんなもんだからさあ」

「そうそう」

「気持ちに分かるっしゅ。あたしも最初にみんなの事知った時は、リコと同じように驚いたしさあ」

なぎさが頭を掻きながら苦笑混じりに呟き、響もなぎさの言葉に同意してウンウン頷いた。えりかも変顔浮かべながら、コクコク頷いた。みゆきはリコにアン王女を紹介すると、

「リコちゃん、この人がキュアマジシャンの子孫で、トランプ王国のアン王女様だよ」  
「トランプ王国!?!」

リコは、聞き慣れないトランプ王国という言葉に首を傾げた。キュアマジシャンや、キュアフラワーの話題から、行き成り他の話題に飛んだ気がした。咲は、そんなリコの気持ちを察したかのように、

「トランプ王国は、キュアマジシャンが大いなる闇を封じたのを、監視する為に建国した

「国らしいよ」

「大いなる闇!?!ひよつとして、一万年前に魔法界を闇が覆ったって、何かと、関係があるのかしら?」

リコが誰に聞くともなく話を振ると、ほのかが小さく頷き、

「エエ、そうらしいわね。私達も直に見た訳じゃ無いから、詳しくは分からないけど……ほのかが少し口籠もったのを引き継ぎ、アン王女がリコに話し掛け、

「リコさん、私はマリィ・アンジュと申しますわ。わたくしの先祖であるキュアマジシャンは、この世界で出会ったキュアエンプレス、キュアプリーステスと共に、光の槍であるミラクルドラゴングレイブを用い、世界を闇に閉ざした大いなる闇と戦い封じたそうです。それを監視する為に作られたのが、トランプ王国……わたくし達の国ですわ。ですが、キュアマジシャンが魔法界の出身というのは、わたくしも初耳でした。よろしければ、魔法界の事を教えて頂けませんか?」

『聞きたい!』

アン王女がリコにそう告げると、他の一同も同意した。リコは、アン王女の話に思考がついて行けず、困惑したものの、魔法界の事をプリキュア達が知っていたが、知ると、少しドヤ顔を浮かべ、軽く咳払いをした。

「コホン! 私が生まれ育った魔法界は、魔法界に住む人々が、日常生活で魔法を普通に使

う世界なの」

リコはそう語ると目を閉じ、魔法界の風景を思い出した・・・

魔法界は、料理や掃除などの日常生活でも、人々が当たり前のように魔法を使い、更  
にリコや姉リズが通う魔法学校、フランソワやグスタフが店を構える魔法商店街、ペガ  
サスを始めとした、沢山の動物達が暮らす魔法の森、人魚が住むと言われる人魚の里、魔  
界から時折現われるひゃっこい島のアイスドラゴンと、あつちい島のファイアドラゴ  
ン、魔法界の何処かにあると言われる妖精の里の事など、自分で見たり聞いたり、読ん  
だりして知った魔法界の事を、リコはなぎさ達に教えた。なぎさも興味ありげに、

「へえ・・・一度行ってみたい所だねえ」

「キャンデイも、ペガサスに会いたいクルウ」

「ぬ、ぬいぐるみが喋った!？」

みゆきの側に居たキャンデイは、リコがペガサスの話をする、メルヘンランドを思  
い出したのか、少し愁いを交えた表情で話した。リコは、突然話し出したキャンデイに  
驚いた。プリキュア達に気を取られて、キャンデイの存在に気付かなかつた。キャン  
デイは不満そうに頬を膨らませ、

「キャンデイは、ぬいぐるみや無いクルウ」

「シシシ、キャンデイは、メルヘンランドの妖精や」

リコの反応を見て思わず笑い声を上げたあかねが、キャンデイがメルヘンランドから来た妖精だと教えると、リコは、先程もメルヘンランドという言葉聞いたのを思い出した。

「メルヘンランド!? そう言えば、さっきも言ってたわよねえ?」

「メルヘンランドは、世界中の絵本のお話が集まった世界だよ」

『へえ〜』

みゆきがメルヘンランドについて少し教えると、みさき達もリコ同様、詳しく聞いたのは初めてだったようで、興味深げな表情を浮かべた。リコは、世界中の絵本が揃っていると聞き、魔法界の絵本もあるのではないかと思うと、

「世界中の!?! ひよつとして、魔法界の絵本もあるのかしら?」

「さあ!?! それは分からないけど、魔法界にも絵本があるの?」

やよいは首を傾げるも、魔法界にも絵本があるようなりコの口ぶりに、思わず問い掛けてみると、リコは頷き、

「ウン! 家の母が、毎年誕生日に絵本を見ながらお話してくれたから、何となく覚えちゃった」

「へえ・・・ねえ、折角だから話してみて?」

エレンに聞かれたリコは、コクリと頷くと、

「良いわよ」

リコが、魔法界の絵本の内容を話そうとしたその時、のぞみの携帯に着信が入った：

## 2、ブンビーからのSOS

のぞみが携帯を見ると、相手は登録していない番号で、のぞみは思わず首を傾げながら顔を顰めた。のぞみが携帯に出てみると、見知った声が聞こえてきて、

「もしもおし、ブンビーだが・・・」

「エッ!?ブンビーさん?ちよ、ちよっと待って」

のぞみは一旦保留すると、一同にブンビーから携帯に掛かって来た事を伝えた。のぞみは困惑した表情で、

「私、ブンビーさんに携帯番号教えてたっけえ?」

「のぞみ、前にブンビーの所にアルバイト行つた事あつたじゃない。その時じゃないの?」

考え込むのぞみを見たりんは、以前のぞみが、一日で首になつたとはいえ、ブンビーの所にアルバイトに行っていたのを思いだし、のぞみに教えると、のぞみは手を叩いて思い出した。

「そうか、その時・・・もしもしブンビーさん、お待たせえ!ところで私に何か用?」

のぞみがブンビーに話し掛けると、ブンビーは待つてましたとばかり、のぞみに話だし、

「いやあ、実は困った事が起きてねえ……君達プリキュアの力を、ぜひ借りたいんだよ」「エツ!プリキュアの力を?……ひよつとして、魔界の怪物か何か?」

のぞみの脳裏に、魔界の者達の事が真つ先に過ぎつた。まだこちらの世界に潜伏している可能性も否定出来なかつた。のぞみの話を聞いたブンビーは戸惑つたものの、

「エツ!魔界の怪物?……そう、それ!それだよ!仲間達に連絡して、プリキュアの姿で、京都にある映画村の撮影所に、大至急来て頂戴……頼んだよ!!」

「エツ!ちよつと、ブンビーさん?もしもし!切れちゃつた……」

ブンビーはそう言うと、一方的に携帯を切つた。のぞみはよく状況を飲み込めず、困惑した表情で仲間達を見ると、りんは、浮かない表情ののぞみに気付き、

「のぞみ、どうしたの?」

「ウン……何だか良く分からないけど、京都にある映画村の撮影所で、魔界の怪物が来て暴れてるようなの」

『エツ!』

のぞみから、ブンビーの電話の内容を聞いた一回は、思わず驚きの声を上げた。リコは二、三度瞬きすると、アン王女に話し掛け、

「魔界って、怖い姿をした怪物が居るあの魔界の事？」

「エエ、その魔界の事ですわ。最近、こちらの世界にも時折現われるようになったので  
す」

アン王女は頷き、魔界の者達が頻繁にこの世界に現われだした事を伝えると、リコは困惑した表情を浮かべた。のぞみは更に一同に話し掛け、

「それで、大至急私達プリキュアに来て欲しいって」

「それが本当なら、確かに急いだ方が良いわね？」

ブンビーの話と言う事で、かれんは少し胡散臭さを感じたものの、本当ならば急を要する事を理解し、真顔になった。アコもかれんの言葉に同意して頷き、

「みんな揃ってるしね」

「せつな、お願い出来る？」

ゆりはせつなに話し掛けると、せつなはコクリと頷き、

「分かったわ！」

一同がせつなの近くに集まると、目を閉じながら腕組みして聞いていたなみが目を開いた。その目には、どこか闘志が宿っているように見受けられた。

「ちよつと待った！相手が魔界のもんなら話は別だ。アベルって奴かも知れないんだろ  
う？あたし達も一緒に行ってやる!!」

なみがなぎさ達一同と一緒にいくと進言すると、直ぐにみさき、あおい、やおい、れいなが、なみの側に近付いた。バッドエンドプリキュア達に取っては、プリキュア達と戦う事以上に、アベルと戦い、決着を付ける事を優先していた。

「良いの?」

なおは、嬉しそうな表情でなみに聞くと、なみは、右手の拳を左手に当てて気合いを入れ、

「ああ、アベルの奴には、あたしも、ピースも借りがあるからなあ・・・倍にして返さなきゃ気が済まない!」

「だよねえ! つて事で、私達も行くよねえ?」

「「もちろん」」

やおいに聞かれたみさき、あおい、れいなが頷きながら同意した。それを聞いたなぎさは、心の底から嬉しかった。一時的かも知れなかったが、バッドエンドプリキュアの五人が、自分達と共に戦う事を、自ら進言してくれたのだから、なぎさはみさき達五人を抱き寄せ、

「じゃあ、みんなで行こう!」

「「「ウン」」」」

「フフフ、なぎさ嬉しそう」



ほのかは、心の底から嬉しそうなぎさを見て、自らも自然と顔が綻んだ。ゆりもほのかに同意しながらも、視界に入った真琴の表情を見逃さず、

「そうね、でもそれとは逆に、真琴は凄く嫌そうな顔してるけど」

「エッ!? まあ、真琴さんは・・・バッドエンドピースと色々あったみたいだしね」

ほのかも真琴を見ると、ゲスイ表情を浮かべたやおいに、肩を組まれた真琴は、嫌そうな表情を浮かべた。ほのかは、そんな真琴を見て思わず苦笑した。真琴は、頬を膨らませてムツとした表情を浮かべながら、

「馴れ馴れしくしないで!」

「アララ!? ソードったら嬉しいくせに」

やおいは、再びゲスイ表情を浮かべながら、両手の人差し指で真琴の頬を突つついた。

「べ、別に嬉しく無いわよお」

やおいにからかわれた真琴は、再び頬を膨らませた。ゆりは一同を見渡し、

「映画村に着いたら、直ぐに戦闘になるかも知れないから、ここでプリキュアになっておきましょう」

ゆりの提案を受け入れ、光に包まれた一同が、プリキュアの姿へと変身した。リコは目をキラキラ輝かせ、

(本当にみんなプリキュアだったんだあ・・・アレエ!? アン王女は変身しないのかしら?)

リコは、アン王女がプリキュアにならない事に首を傾げると、アン王女は苦笑を浮かべながら、リコの心の声に気付いたかのように、

「事情があつて、わたくしは現在プリキュアになる事は出来ません」

「そ、そうだったんですか・・・」

リコは、アン王女に不味い事を聞いたかしらと思いつつも、一同がこの場を離れそうだと感じて、戸惑いながら一同に話し掛けた。

「ね、ねえ、みんなあ！私も一緒に行つたらまずいかしら？ここに一人だけ取り残されても・・・」

見知らぬナシマホウ界でニクスとリリスからはぐれ、一人取り残されたリコは、プリキュア達と出会つた事で、孤独感は消え失せて居たが、ここでまた独りぼつちにされたらと考えると、リコは心細さが湧いてきた。そんなリコを見たドリームは、気さくにリコに話し掛け、

「それもそうだねえ・・・じゃあ、リコちゃんもお出でよ」

「良いの？ヤッター！」

ドリームが許可してくれた事で、リコは嬉しそうに顔を綻ばせた。ホワイトはルミナスを見ると、

「ルミナスは、向こうに着いたら、アン王女とリコちゃんの側に付いて居てあげて」

「分かりました。アン王女、リコちゃん、向こうに付いたら、私の側から離れないで下さい」

「ハイ」

ルミナスの言葉に、アン王女とリコが領きながら返事を返し、一同はパッションの近くに集まると、パッションはアカルンを呼び出した。

「じゃあ、行くわよ・・・京都の映画村へ！」

パッションの言葉と共に、周囲が赤く発光し、一同の姿が忽然と消え去った。

3、プリキュアオールスターズ・・・映画デビュー!?

京都にある映画村・・・

嘗てなきさとほのかが、中学時代の修学旅行で訪れ、みゆき達が修学旅行で京都に来た時は、時間が無くて断念した時代劇などの撮影所、そこでプリキュアの到着を、今か今かと待ち焦がれるブンビーが居た。ブンビーの隣には、赤い帽子を被ってサングラスをし、口髭と顎髭が繋がった癖毛の人物が、威厳ありそうな風格で、メガホンを右手に持って椅子に腰掛けて居た。

「いやあ、ブンビーちゃんに頼んで正解だったよ。妖怪オールスターズ対プリキュアオールスターズ・・・いける！いけるよ、これはあ！」

「いえいえ、深澤監督のお役に立てて光栄ですよ」

ブンビーは、揉み手をしながら深澤監督にヨイショした。深澤監督とは、時代劇系でもつか売り出し中の監督で、代表作にふたりはくノ一シリーズや、じゃじゃ馬姫まかり通る、そして、今話題に出た妖怪オールスターズDXなどのヒット作を世に送り出して居た。

ブンビーは、以前深澤に仕事を頼まれた時、親近感を覚えた。親近感を覚えた一つの理由は、ブンビーと深澤は、声がそっくりだったし、どこか話も合った。二人は意気投合してメル友になり、深澤はブンビーカンパニーに、エキストラの調達などを依頼したりしていた。天才肌のこの監督は、よく撮影中に閃き、その場で台本や設定を変えたりするライブ感の持ち主で、現場泣かせの監督としても有名だった。妖怪オールスターズDX3の撮影中、ブンビーの顔を見ていると、急にプリキュアと対決させたくなり、ブンビーがプリキュアのリーダーを名乗って居たのを思い出して、今回ブンビーに依頼していた。

「ですが監督、妖怪オールスターズは江戸時代の話ですよ？プリキュアを出したら、色々と障害が・・・」

30前半の助監督が、監督にそう話し掛けると、監督のサングラスがキラリと輝き、助監督をジロリと睨み、

「君い！それが何か問題あるのかねえ？」

「い、いえ……」

監督の迫力に、思わず助監督が黙り込むと、ブンビーは助監督を安心させるかのように、

「大丈夫ですよ。プリキュアは、400年前には既に居たつて聞いてますし、江戸時代ぐらいへつちやら、へつちやら」

「だよねえ？流石ブンビーちゃんは話が分かるなあ」

監督は、我が意を得たりと何度も頷いた。監督はチラリと腕時計を見ると、

「ところでブンビーちゃん、プリキュア達はいつ頃到着するの？」

「さつき連絡したばかりですからねえ……アツ、でもご安心下さい。彼女達の一人は、瞬間移動出来る術を持っていますので、他のプリキュアを引き連れ、直ぐにでも……」

そうブンビーが話して居たまさにその時、若手スタッフの男が慌てて監督に走り寄り、

「監督う、プリキュアさん達いらつしやいましたああ！」

「来たああ!?みんなあ、準備良い?プリキュアさん達をこちらにお通ししてえ！」

監督の号令の下、スタッフが慌ただしく動き始め、妖怪の着ぐるみを被った役者達が、休憩を終えて現場へと戻つて来た。そこへ、スタッフに連れられたブラック達プリキュ

アオールスターズの面々は、呆然としながらブンビーと深澤監督の前へとやって来た。

「ようこそ、プリキュアの皆さん。今日はよろしくお願い致しますよ」

『エツ!』

「ブンビーさん、どういう事!?!魔界の怪物って何所に居るの?」

監督に挨拶された一同は、呆然としながら一齐にブンビーの顔を見た。ドリームは、ジト目でブンビーを見つめると、ブンビーは首を傾げしながら、

「魔界の怪物!?!あちらでちゃんとプリキュア達の来るのを待ってたよお」

ブンビーは、そう言って妖怪の着ぐるみを指さした。プリキュア達は呆然としながら、妖怪の着ぐるみを見て、見る見る困惑した表情を浮かべ、

『だ、欺まされたあああ!』

「人聞きの悪い事言わないでくれるう?ちゃんと妖怪居たでしょう?」

「もう!」

ブンビーの開き直りとも取れる言葉に、ドリームは頬を膨らました。アクアはハアと溜息を付き、

「やっぱり、ブンビーの言う事を信用するんじや無かったわ・・・みんな、どうする!?!帰りましょうか?」

「でも、せっかく撮影所に来ましたし・・・見学ぐらいはしませんか?」

プロツサムは、思わず名残惜しそうに呟いた。お婆ちゃん子のプロツサムは、薫子の影響もあり、時代劇が大好きだった。プロツサムがそう呟いた時、監督がメガホンで一同に話し始め、

「それじゃあ、妖怪オールスターズ対プリキュアオールスターズの撮影・・・」

何故か自分達が題名に付いている事で、プリキュア達は訳が分からず混乱した。

『エエエ!?妖怪オールスターズ対プリキュアオールスターズ?』

監督は、プリキュア達が皆キョトンとした表情をしている事に気付き、

「アレエ!?プリンビーちゃんに聞いて無い?君達プリキュアに、私の映画に出て貰いたい  
のよ」

『エエエ!?私達が・・・映画にいい?』

監督からの出演要請に、プリキュア達は驚愕した・・・

驚愕しながらも、満更じやない表情を浮かべたのは、ブラック、ブルーム、ドリーム、ルージユ、レモネード、ローズ、ピーチ、ベリー、プロツサム、マリン、メロディ、ビート、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、バッドエンドハッピー、バッドエンドサニー、バッドエンドピースの19人、苦笑していたのは、ホワイト、ルミナス、イーグレット、ミント、パイン、サンシャイン、ビューティ、エコーの8人、困惑していたのは、ブライト、ウインディ、アクア、パッション、ムーンライト、リズム、ミューズ、ソード、バッ

ドエンドマーチ、バッドエンドビューティ、そしてアン王女とリコの12人だった。ブラックは一同に集合を掛け、

「ねえねえみんな、折角何だし映画に出てみようよ？これも人助けだしさあ」

『そうそう』

すかさずブラックに合いの手を入れたのは、ピーチ、ベリー、ブロッサム、マリン、Wハッピー、Wピースの八人で、ブラックは、我が意を得たりと更に言葉を続け、

「映画の撮影を間近で見られるだけでも、滅多にないよお？ましてや映画に出られる何て、こんな機会そうそう無いよ？」

「それは・・・そうだけど」

「プリキュアの力を、こんな事に使うのは・・・」

ホワイトとムーンライトにも、ブラックの言う事も理解出来たが、プリキュアの力を私利私欲に使っても良いのだろうか？という葛藤があった。ブンビーは、そんな二人の葛藤を見抜いたかのように、

「良いんじゃないのお？現に君達は以前、絵本博覧会でプリキュアショーに出てるじゃない。あの時は私が協力したんだから、今回は私の顔を立ててだねえ・・・」

「それを言われると・・・」

ホワイトとムーンライトは、困惑した表情で思わず言葉に詰まった。ブンビーが言っ



た通り、嘗てプリキュア達は、成り行きで迷惑を掛けてしまった、四葉財閥の四葉ありすの頼みを聞き入れ、世界絵本博覧会でプリキュアショーに出演した事があつた。その時に、ブンビーにも協力して貰つた事もあつたのだから・・・

「ハア・・・分かつたわ」

「以前、あなたにも協力して貰つたのは事実だし」

「ココ達から聞いたけど、私達プリキュア5は、呪いを受けた時、あなたに助けて貰つたそうだし・・・」

「出てくれるの!?!これで私も肩の荷が下りたよ」

ホワイト、ムーンライト、アクアも折れ、ブンビーの頼みを渋々受け入れた。映画に出る事を承諾した三人に、ブンビーはニンマリ微笑んだ。だが、バッドエンドマーチとバッドエンドビューティは興味無きように、

「あたしは、そういうのは止めとくよ」

「そうね、私達には関係無いもの」

バッドエンドマーチとバッドエンドビューティの二人は、魔界の者も居ないようで、興味無きようにこの場から帰ろうとして居た。それに気付いたキュアサニーとキュアビューティが二人に近付き、

「なあなあ、京都の美味しいもん、食わんで帰ってエエの?」

「何いいい!？」

「京都は古都と言われるくらいですし、見応えある場所も多いですよ?」

「・・・成る程、悪く無いわね」

京都の食べ物に釣られたバッドエンドマーチ、古都である京都観光に興味を示したバッドエンドビューティも同意し、バッドエンドプリキュア達を加えたプリキュアオールスターズ全員が、映画に協力する事をブンビーと監督に告げた。監督のサン格拉斯がキラリと輝き、

「いやあ、ありがとう!お陰で良い作品が取れそうだよ・・・」

監督はそう言うのと、プリキュア達一人一人の容姿をジイと見つめていった。プリキュア達を直に見て、作品イメージを探っているかのように・・・

リコはモジモジしながら、

「良いなあ・・・私もちよつと出てみたいかも」

「フフフ、中々楽しそうですものね」

リコとアン王女がそう会話をしていると、二人をチラリと見た監督は、何かを閃いたのか、突然リコとアン王女に近寄り、

「君達、プリキュアの関係者の人かね?」

「エツ!?!エエ、まあ」

「それがどうかしまして?」

一体何を言われるのかと、リコとアン王女が緊張した面持ちをみると、監督はニコリと微笑み、

「君達も映画に出てみない?」

「エッ!?!」

「君はお姫様、君は奥方様、二人が妖怪に狙われた所から物語は始まる・・・いける! いけるよ、これはあああ!!」

「ハア・・・」

監督のライブ感は更に高まり、リコはお姫様役で、アン王女はその母君である奥方役で出演する事になった。それを見たキャンディは、

「お兄ちゃんにも見せて上げたいクルウ」

「そつかあ、この前はポップに見学させて上げられなかったもんねえ」

キャンディが少し悲しげな表情を浮かべた事で、ハッピーも、京都での修学旅行の自由時間で、映画村を見られなかった事を思い出した。パッションは、チラリと悲しそうなキャンディを見ると、

「キャンディ、今からポップと一緒に迎えに行く?」

「パッション、お兄ちゃんを呼んでも良いクルウ?」

「エエ、まだ撮影には時間が掛かりそうだし、良いわよ」

「ありがとクルウ」

キャンディは嬉しそうにパッションの右肩に乗ると、パッションはポップを迎えに、メルヘンランドへと向かった。

#### 4、ブラックの悪知恵

パッションとキャンディは、ポップを連れて五分程で戻って来た。一同は、パッションの早い戻りに驚いた。パインはパッションに話かけ、

「パッション、早かったね?」

「それが・・・映画村で私達が映画の撮影をしようと云ったら、ポップはその場で、仕事をウルルン、オニニン、マジヨリンに任せて・・・」

「ここが映画村でござるかあ・・・オオオ!?あれは正にサムライではござらんかあ?」

ポップは、パッションの腕に抱かれながら、サムライ姿の役者を見て興奮し、他の一同を苦笑させた。ポップは目をキラキラ輝かさせると、

（プリキュア殿達は、皆映画に出られるのでござるなあ・・・羨ましいでござる。ここは拙者も是非!）

ポップは、サムライに憧れていた・・・

ポップが時代かぶれの言葉を使うのも、憧れであるサムライのようになりたいたいからでもあった。ポップは、パッションに下ろして貰うと、サムライの姿を目に焼き付けるかのように、ジイと見つめて居た。

「キタアアア！イメージが沸いてきたよおおお・・・プリキュアの皆さん、こちらにいい！」

監督は、待機している妖怪役と、サムライ役の側でプリキュア達を呼ぶと、一同がゾロゾロと監督に近付いた。監督は、ブラックとバッドエンドプリキュア達六人を、妖怪サイドに立たせると、

「君達黒いプリキュアが、妖怪オールスターズのリーダーって設定で・・・」

「「エエエ!?!私達が悪役うう?」「」

ブラック、バッドエンドハツピー、バッドエンドピースは、ちよつと不満そうな表情を浮かべるも、ルージュの突っ込みが飛び、

「あんた達は、元々バッドエンド王国でしよう?」

「私は違うんだけどなあ・・・」

ブラックはそう言うのと、背後を振り返り、妖怪オールスターズの面々を見た。有名所の天狗や河童、唐傘オバケに一つ目小僧やぬりかべに鬼達が、面や着ぐるみを着てスタンバっていた。

(アレエ!? あんな妖怪って居たっけ? オリジナルの妖怪なのかなあ? … そうだー!)

ブラックは、首を傾げながらも何かを閃き、監督の下へと歩み始めた。ブラックが見た妖怪は、額から大きな角を生やし、二メートル以上はある筋骨逞しいゴリラのような体格をした、顔は虎のような妖怪で、全身を白い毛に覆われて居た。妖怪は、プリキュア達を見ると、

(まさか、こんな所でプリキュアに出会うとわなあ… ここなら俺の姿でも驚かれねえから、隠れ住んでいたが… これはプリキュアを倒す好機かも知れねえなあ?)

この白い妖怪こそ、本物の魔界の魔物で、名を人虎(じんこ)と言い、嘗てシャツクスの招集に応じて、人間界に向いた一人だった。

ブラックは、そんな魔が紛れているとも知らず、監督に近づくと小声で話し掛け、

「監督さあん、ほら、向こうとこつちじやプリキュアの人数違い過ぎません? 私達がもつと仲間を呼んだり、プリキュアを引き抜いた方が面白いと思うんですけどお?」

「ホホオ… ウン、良いねえ! それで行ってみよう!!」

監督は、ブラックの提案を聞いていて、イメージがどんどん沸いてきたのか、ブラックの提案を受け入れた。監督から許可を貰った事で、ブラックは含み笑いを浮かべて戻って来ると、ホワイトは、そんなブラックの表情を見逃さず、

(ブラックのあの顔… 何か企んでるわねえ?)

ホワイトに見破られているとも知らず、ブラックはエコーを手招きすると、

「エコーちゃああん！チョット、チョット」

「エッ、私ですか!?!何でしょう?」

エコーが首を傾げながらブラックに近づくと、ブラックはエコーの耳元で何か小声で語り出した。見る見るエコーは変顔浮かべ、

「エエエ!?そんな事したら、私怒られちゃいますよおお」

「大丈夫、大丈夫、私が責任持つからさあ」

「怒られても、私知りませんよ?・・・」

エコーは浮かない表情ながら、ブラックの提案を受け入れ、その場で両手を組んで目を閉じた。エコーは心の中で思いを相手に伝えると、ハアと深い溜息を付いた。ブラックはニンマリと笑み、

「これで良し!」

「それじゃあ、プリキュアの皆さんと関係者さん、こちらが台本になります」

スタッフからプリキュア達とリコ、アン王女に台本が渡された。若い男性スタッフは、小声でプリキュア達に話し掛け、

「あの監督、その場の勢いで色々変えたりしますから、セリフを全部覚えなくても大丈夫ですから」

『ハア・・・』

そうスタツフに助言されたものの、一同は分厚い台本を見て困惑の表情を浮かべた。メロディは、リズムをチラリと見ると、

「リズム、何かあつたら助けてよ?」

「そう言われても・・・この台本、ほとんどアドリブでつて書いてあるんですけど・・・」  
台本を見たリズムは目を点にし、ブライトは速読で台本を読み終えるも、

「この台本つて・・・渡された意味あるのかしら?」

「まあ、話の流れを理解するつて面では、一応あるんじゃないかしらあ?」

ブライトに話を振られたミントが、苦笑混じりにそう答えた。基本的な流れは、妖怪達と、人間側の味方をするプリキュアが、激しい激突をするも、最後には和解するといった内容だった。ルミナスは困惑しながら、

「私、アドリブとかそういうの苦手何ですけど・・・」

「余計なプレツシャーが掛かるわよねえ?」

ビートも緊張しながらルミナスに同意し、台本を熱心に見ながらそう呟いた。サンシャインは、レモネードをチラリと見ると、

「その点レモネードは、台本つて慣れてるわよねえ?」

「でも、私もほとんど丸々アドリブつて作品・・・バラエティならともかく、映画では初



めてです」

主役こそまだ演じた事はないものの、女優として映画やドラマ、舞台などを経験しているレモネードではあったが、こういう監督との仕事は初めてで、困惑の表情を浮かべた。マリンは両手を組んで後頭部に回し、

「アドリブで良いなら気が楽じゃん！適当にやれば良いんでしよう？」

「それじゃあ、NGになるんじゃないかしら？」

「何度もダメ出しされるだけでしょうねえ」

お気楽な発言をしたマリんに、イーグレットとウインディが少し呆れながら論ずも、バッドエンドサニーもマリんに同意し、

「まあエエやん、駄目やったら勝手にやり直させるんやろう？」

「そうね・・・でも、他の役者さんの迷惑になる事だけは避けたいわねえ」

ベリーは、妖怪役やサムライ役の役者さんに気を使った。だいぶ構想が纏まつてきた監督の背後から、声を掛ける者が居た。監督がギロリと背後を振り向くと、

「監督殿、拙者も映画に出しては頂けぬでござろうか？」

「君は!？」

「拙者は、風の吹くまま、気の向くまま渡り歩く・・・風来坊ポップ！」

監督にアピールしたのは、人間姿に変化したポップが、サムライのような服を着て、着

物の脇に脇差しをさして立って居た。その頭部には、動物のような耳が、お尻からはフサフサした尻尾が生えていた。一同は思わず驚き、

『エツ!?!』

「ポツプって、人間姿になれたの?」

マーチがブンビーに抱かれたキャンディに聞くと、キャンディも良く分からないのか首を傾げた。監督はポツプの容姿を見ると、サン格拉斯をキラリと輝かせて頷き、

「オオオ!?!良い、良いよお、君いい!是非君も出演してくれたまえ!!」

「ほ、本場でござるかあ?忝ないでござる!」

ポツプは目を輝かせながら、サムライ側に居るアン王女とリコの側に並んだ。

スタッフの動きが慌ただしくなり、冒頭に出番があるアン王女とリコに指示が飛んだ。監督は四方に目を配り、

「準備良い?それじゃあ、妖怪オールスターズ対プリキュアオールスターズ・・・ヨウイ・・・アクション!」

監督の指示の下、妖怪オールスターズ対プリキュアオールスターズの撮影がついに開始された・・・

息せき切って走る二つの人影、その直ぐ後を、異形な姿をした妖怪の群れが追いか

た。慌てて逃げるのは、綺麗な着物を着飾った、どこかの姫君であるリコ姫と、その母親である藩主の妻アン奥方、家来の者は次々と妖怪達に倒され、地べたに倒れ込んだ。

「誰かあ！誰かああ!!」

「お母様、リコ怖い!」

震えながらアン奥方にしがみつきリコ姫を、アン奥方は庇いながら後退り、追いついて来た河童や天狗が、ジワリ、ジワリと二人を包囲した。

その時・・・

「待ちなさいああい!」

ピンクの衣装を着た一人の少女が、屋根の上から飛び降り、リコ姫とアン奥方を庇った。

「河童さんや天狗さんは、こんな悪い事何てしない!」

「何だ!?!お前は?」

「キラキラ輝く、未来の光!キュアハッピー!!」

ハッピーが名乗り身構えると、背後で庇われていたアン王女とリコが小声でハッピーに囁き、

「ハッピー、登場するの早すぎですよ?」

「ブラック達が出てからでしょう?」

「アレエ!? そうだっけえ? エヘヘヘ」

アン王女とリコに注意されたハッピーは、頭をポリポリ掻きながら笑って誤魔化した。頭を掻くハッピーを見たスタッフは、困惑しながら監督に話し掛け、

「監督、ストツプしましょうか?」

「いや、良いんじゃない・・・続けてえ」

監督の一声で、撮影はそのまま続行された。妖怪達の背後から、黒い衣装を着た五人組が現われた。

「アララア、誰かと思えば・・・私達バッドエンドプリキュアの邪魔をしに来たのかなあ?」

「エエ度胸やなあい」

「クスクスクス、お姫様と年増の二人を、素直に差し出せば良いのにい」

バッドエンドプリキュアと名乗った、バッドエンドハッピー、サニー、ピースが、キュアハッピーを挑発するも、

「年増ですってええええ!」

「お、お母様、抑えてええ」

アン王女は、バッドエンドピースに年増とアドリブで呼ばれた事で立腹するも、娘役のリコが必死に宥めた。

「あたし達五人とやろうってえのかい？」

「一人で向かって来た事・・・後悔させてあげるわ」

「エツ!? エエエと・・・本気じゃないよね？」

バッドエンドマーチとビューティの迫力の前に、思わずハッピーは演技だよなと確認した。その時、ハッピーの側に次々とプリキュア達が現われ、

『一人じゃ無いわ!プリキュアオールスターズ参上!!』

「みんなああ!」

ハッピーの前に勢揃いしたプリキュア達、ハッピーも加わり、総勢29人のプリキュア達が、バッドエンドプリキュアの五人と睨み合いになった。バッドエンドハッピーは、プリキュア達をキョロキョロ見渡し、

「何て数なの!?!」

「数なら負けないよおお・・・妖怪のみんなああ、集合!」

『オオオオ!』

バッドエンドピースに呼ばれた妖怪オールスターズが、続々と姿を現わした。その中には、隙を付いてプリキュアを倒そうと考えて居る、人虎も含まれていた。ルージュ、ビート、マーチは、お芝居とは分かって居たものの、妖怪達の容姿を見て少しビビリ、「映画の中とは言え・・・こうして大勢の妖怪を見るのは、良い気がしないわねえ?」

「ウン．．．出来れば戦いたく無いわね」

「あたし何か、見られるだけで怖くなってるよお．．．」

三人は、徐々に後ろに下がって行った。更に妖怪達の群れの中から、黒い衣装を着た一人がゆっくり姿を表すと、バッドエンドハッピー、サニー、ピース、マーチが声を掛け、

「『ブラック先輩!』」

「フッフ、私達に逆らおうと言うのは、その娘達かい?」

キュアブラックは、悪役っぽい演技をし、思わず見て居たホワイトが、笑いを堪えきれず、後ろを向いてクスクス笑った。ドリームはブラック達を指差し、

「お姫様と奥方様は．．．私達が守って見せる」

「エエエ!? 守る? フッフ、私達妖怪オールスターズが、これだけだと思ってるの?」

「エツ!? どういう事?」

ブラックのアドリブに、ブルームが驚いたその時、両チームの間の空間に亀裂が走った。突然現われた空間の亀裂に、スタッフ達がざわめき、

「か、監督うう! 中断しましょう!!」

「良いんじゃない!? ．．．続けて!」

監督は椅子に座りながら、一人満足気に何度も頷いた。突然現われた空間の亀裂に、

ブラックとエコーを除いたプリキュア達も驚愕の表情を浮かべた。ムーンライトが思わず声を出し、

「エッ!?!これは何?」

「実は、さつきブラックに頼まれて・・・嫌だなあ、みんなに怒られちゃうよおお」

『エッ!?!』

トホホ顔を浮かべたエコーが、言いにくそうにポツリと呟き、一同は再び空間の亀裂を見た。空間の亀裂から、徐々に人影が現われた。空間の亀裂が治まると、一同の目の前に、黒い衣装を着た五人の少女達が姿を現わした。監督は、想像しない展開に興奮して、椅子から思わず立ち上がった。

「オオオオ!良いよおお、仲間を呼んだわけだねええ?」

姿を現わしたのは、ダークプリキュア5の五人、ダークドリームは周囲を見渡し、

「みんな、数ヶ月ぶりにね!」

『ダークプリキュア5!?!』

「あれが、今あんな達が戦ってる敵って事かい?」

「確かに大勢居るね・・・」

「私達も手を貸すわ」

「一緒に戦いましょう」

ダークルージュ、ダークレモネード、ダークミント、ダークアクアの視線が、妖怪の面々に向けられた。人虎は、更に増えたプリキュアに驚き、

（また増えた!?プリキュアってこんなに居るのかあ?だが、何か仲間割れしてるようだし、そこを付けば・・・）

人虎は、この仲間割れが芝居だとは気づいては居なかった。

ダークプリキュア5の五人は、妖怪達に大して身構えると、慌ててブラックは両手を大きく振って五人を止め、

「違う、違う、妖怪は私達の味方で、敵は後ろ」

「「「エツ!?!・・・エエエエ?」」」

ブラックに、敵は後ろと言われたダークプリキュア5の五人、後ろを振り返ってみても、そこにはプリキュアの仲間達しか居なかった。

「「「これは一体、どういう事なの!?!」」」

「実わさあ・・・」

ブラックは、困惑するダークプリキュア5に、大凡の経緯を説明すると、見る見る五人は、呆気にとられた表情でブラックを見つめた。ダークアクアは、エコーを恨めしそうに見ると、

「エコー、そんな事で私達を呼んだの?」



「ゴメンなきあい。ブラックがどうしてもって言うから・・・」

エコーは、半泣きしそうな表情でそう告げると、五人の視線が一斉にブラックに注がれた。

「「「ブラックウウ!」」」

「アハハハハ! まあまあ、良いじゃない! ほら、バッドエンドプリキュアの五人も私達の仲間何だし、一緒に映画に出ようよ」

「「「ハア・・・」」」

ブラックは笑って誤魔化し、ダークプリキュア5は思わず溜息を付いた。バッドエンドハッピーは、両手を振ってダークドリームに話し掛け、

「ヤッホー! 久しぶりい・・・本当に前にあなたが言ってたように、並んで戦う事になっちゃったねえ?」

「こういう意味で言っただんじやないわ・・・」

バッドエンドハッピーにそう言われたものの、ダークドリームは跋が悪そうにポツリと呟いた。ブラックの悪知恵は更に続き、

「フッフッフ、彼女達だけじゃ無いよ。あなた達の中にも、既に私達の仲間を潜り込ませて居たんだあ」

『エッ!?!』

ブラックのアドリブに、再びプリキュア達は驚くと、ブラックはニンマリしながら、「さあ、こっちに戻っておいで、地味な色をした緑コンビ、ミントとマーチ!」

「地味いい!?!」

ブラックのアドリブによって、スパイとしてプリキュアに紛れていた事にされたミントとマーチが困惑した。二人は、困惑しながら監督の方をチラリと見ると、監督はコクリと頷き、二人はトボトボ妖怪サイドに歩いて行った。

「何だか良く分からないけど、こっちの仲間になったわ。よろしくね」

「トホホ・・・よりもよって妖怪側何て」

苦笑しながらも、何所か楽しそうにダークミントと会話するミント、妖怪の群れが背後に居る事で、ビクビクするマーチ、ホワイトは目を点にすると、

(ブラックったら、何か企んでると思ったらあ・・・こういう事だったのねえ?)

ブラックのアドリブを見たバッドエンドピースは、心底楽しそうに、

「キャハハ、何か面白い! 私もやろうっと・・・ピース、ソード、こっちにおいでええ」

「エツ!?!」

「私達Wピースだし、ソードは私のパシリだし・・・」

「ワアアアアアア!」

バッドエンドピースにパシリと言われたソードは、慌てて飛び出しバッドエンドピー

スの口を塞ぐも、まんまと策略に嵌って、妖怪サイドに寝返った格好になった。ピースは一同にペコペコ頭を下げ、遅れて妖怪サイドに移った。最早台本など完全無視な展開になり、助監督は困惑しながら監督に話し掛け、

「監督うう、このままじゃ収集付かなくなっちゃいますよおお?」

「心を揺さぶる精神攻撃って訳ね・・・良い! 実に良いよおお!!」

「監督うううう」

立ち上がって興奮する監督とは逆に、助監督の不安は一層強まった。ブラックは更にプリキユア達を揺さぶり、

「ほらほら、こっちサイドに来れば目立てるよおお?」

ブラックの精神的揺さぶりは、プリキユア達の何人かの心を揺さぶった。ベリーは小声で隣に居たピーチに話し掛け、

「確かに、あっちの方が好きなように出来そうよねえ?」

「ウン、楽しそうだよねえ?」

ピーチもチラリと妖怪サイドを見て呟いた。マリンは誘惑に心引かれ、

「あたし・・・あっちに行こうかなあ?」

「エエエ!? マリン、駄目ですよおお」

ブロッサムは、誘惑に負けそうなマリンの右腕を掴んで引き留めた。ブラックは、精

神的揺さぶりが効果あると分かり、更にルミナスに話し掛け、

「ルミナスウウ、どう?」

「わ、私ですか!」

ブラックがルミナスまで勧誘し出すと、ホワイトは口を尖らせてブラックを恨めしそうに睨み、

「ブラックウウウ!」

「ワアア、ホワイトが怒ったあああ!」

「怖い、怖い」

「もう!」

ブラックは、バッドエンドハッピー、バッドエンドピースを従えて、怯えた表情を見せ、ホワイトを悔しがらせる。ムーンライトは、ホワイトの右肩を掴むと、

「このままじゃ、ブラックのペースに巻き込まれて、話が滅茶苦茶になってしまうわ。私達で軌道修正しましょう」

「そう、そうね」

ムーンライトの助言を受け入れ、再び台本のような展開に戻そうと、ホワイトとムーンライトが動き出した。

二人の活躍もあり、脱線した物語も徐々に軌道修正し始めた。今正にキュアブラック

率いる妖怪オールスターズと、ホワイトとムーンライト率いるプリキュアオールスターズが激突しようとしたその時、

「待つでござるうううー！」

『エツ!?!』

両者の間に一人のサムライが、ゆっくり歩きながら姿を現わした。

5、真の黒幕!!

突然現われたサムライの姿に、奥方役のアン王女はサムライに話し掛けた。

「あなた様は一体!?!」

「拙者は、風の吹くまま、気の向くまま渡り歩く……風来坊ポップー！」

おいしい場面で現われたポップに、ピーチは小声でベリーに話し掛け、

「第三勢力つて手もあつたねえ？」

「失敗したわねえ？」

「ピーチ、ベリー……」

パイんとパツションは、そんな二人を見て思わずトホホ顔を浮かべた。両者の間に立ったポップは、

「皆の衆、これは妖怪と人間を争わせようとする、何者かの策略でござるぞおー！」

(ギクウウウ!?)

両者が争っている隙を付いて、プリキュアを一人ずつ倒そうと考えて居た人虎は、思わずドキリとした。よくポップの容姿を見てみれば、頭には獣のような耳、尻からは尻尾が生えていた。見る見る人虎の顔色が変わり、

(あの野郎も魔界の者だなあ？俺の手柄を奪おうって魂胆だなあ・・・そうはさせるかああ！)

最早これまでとばかり、人虎は妖怪達を押しつけてポップの前に現われると、

「プリキュアを倒し、シャックス様への手土産にしようと思っていたが、テメエに俺の獲物の邪魔させねえええ！」

『エツ!? シャックス?』

プリキュア達は、これも妖怪役の人のアドリブだろうかと困惑して成り行きを見守って居たが、シャックスの名が出た事で、表情が険しくなった。ポップは人虎を指差し、「お主の数々の策略、断じて許さないでござるよー！」

「ウルセエー！」

人虎は、両手の鋭い爪をキラリと輝かせると、ポップ目掛け攻撃を開始した。ポップは慌てて躲しながらも、これを芝居と思いつき込み続け、

「中々やるでござるなあ・・・拙者の秘伝、受けてみるでござるう！メルヘン流奥義！妖

精斬りいい・・・でござるう!!」

ポップは勢い良く宙に飛び、空中で三回転してその勢いのまま人虎の爪目掛け刀を振り下ろした。だが、人虎の鋭い爪の前に、刀は真つ二つに折れた。ポップは膝から崩れ落ち、

「拙者の愛刀、メルヘン佐衛門正宗が真つ二つにいいい!?!」

「何やそれええ!?!」

思わずWサニーが同時にツツコミを入れた。勝ち誇った人虎は、ポップにゆっくり近づき、止めを刺そうとするも、ハツと我に返ったブラックは、

「そうか、アンタが私達を欺して、プリキュアと争わせようとしてたんだねえ?」

「エッ!?!」

機転を利かせたブラックのアドリブで、全ては人虎が企んだ事とした。人虎は思わず呆気にとられた表情を見せるも、ホワイトにもブラックの考えが分かり、ブラックに話を合わせる時、

「今こそ、私達プリキュアと」

「妖怪の力を合わせる時」

「みんなあ・・・行くよおほ!」

ブラックとホワイトの合図を受け、妖怪オールスターズとプリキュアオールスターズ

の面々が右手を挙げ、

『オオオオオオ!』

一同の声が合わさり、人虎に一斉に視線が向けられた。人虎は思わず怯み、

「エエエエ!? こ、こうなつたらあ、全員返り討ちにしてやるううう」

人虎も雄叫びを返し、今最後の決戦がはじまろうとしていた。監督は興奮し、思わず椅子の上に乗ると、

「良いよおお! 最後の大決戦つて感じ出てるよおおお!! カメラアア、もつとアップで撮つてえええ!!」

監督の指示の下、カメラマンが一同をアップで映し出す。そんな中でも、マリンは常にカメラ視線を忘れなかった。

「ダークドリーム!」

「ドリーム!」

左右の屋根に上がった二人のドリームは、

「プリキュア! シューティングスター!!」

「プリキュア! ダークネス・スター!!」

ピンクの流星が右側から、黒き流星が左側から同時に飛び立ち、人虎の鋭い爪を真つ二つにへし折つた。人虎は呻き、近くにあつた民家を破壊し出すと、破片が妖怪役やサ



ムライ役の役者に当りそうになり、ブラックとホワイトは同時に叫び、

「ルミナスウウ！」

「ハイ！」

返事を返したルミナスが、サムライ達と妖怪達の前に出て、バリアを張って破片から守った。更にミント、サンシャインもルミナスに加勢し、三人は役者達を守った。

「ウウウオオオオオ！」

人虎が雄叫びを上げ、息を大きく吸いこむと、人虎の身体が更に巨大化した。監督は興奮して椅子の上でハシヤギ、

「オオオオ!? 凄い迫力だあああ！」

「何だあ、アリヤ〜!? ひよつとして・・・本物混じってたああ?」

ブンビーは、ようやく人虎が本物の魔物だと理解して困惑した。だが、プリキュアが居れば大丈夫だろうと判断し、監督の横で見続けた。

アクア、ダークアクア、ビート、ソードがジャンプし、上空からサファイアアロー、クアロー、ビートソニック、ホーリーソードで人虎を牽制し、レモネードとダークレモネードが、人虎の両腕をプリズムチェーンとダークネスウィップで絡め取り、動きを制限した。

「バッドエンドビューティ、私達は足を封じましょう」

「あなたに命じられるのは気に入らないわねえ……まあ良いでしょう」

二人のビューティは、ツインブリザードで人虎の両足を完全に凍らせた。ブラックとホワイトが人虎の目の前に立つと、

「これで終りよ！」

「ブラック、サンダー！」

「ホワイトサンダー！」

「プリキュアの、美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「プリキュア！マーブルスクリユー……」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて前に突き出すと、

「マックスス〜!!」

二人の掛け声と共に、マーブルスクリユーマックスが人虎目掛け飛んでいった。動きを封じられていた人虎は、為す術無くマーブルスクリユーの直撃を受け、闇に帰った：

「フウ、手強い敵でござったなあ……」

「あなたは、剣を折られて落ち込んでただけでしょうが？」

額の汗を拭いながら、そう呟いたポップに、思わず二人のルージュが同時にツツコミを入れた。ポップは立ち上がると、リコ姫とアン奥方に声を掛け、

「拙者はこれで……」

「あ、あのう……お名前は？」

「拙者、風来坊のポップ。名乗るほどのものではござらんよ……」

「名乗ってるでしようがあああ」

「名乗ってるやん」

二人のルージユと二人のサニーが同時にツツコミを入れる中、風来坊ポップは去って行った……

「カアアアアトオオオオオ！」

監督は、鼻息荒く興奮しながら一同に駆け寄り、一人づつ握手を交わし、

「いやあ、ありがとう！君達のお陰で素晴らしい作品が出来たよおお!! 試写会にはぜひ来てくれたまえ」

『ハイ!』

無事に撮影が終わるも、ポップは監督に話があるからと一人映画村に残り、一同は、ダークプリキュア5、バッドエンドプリキュアを連れて京都観光を楽しんだ。

そして、試写会当日……

映画に出たプリキュア達とリコ、アン王女が勢揃いし、試写会を今か今かと待ち焦が

れていた。ブラックは、前の席で監督の隣に人間姿のポップが座っているのに気付き、「ハッピー、何でポップは監督の隣に居るの?」

「さあ!?!何でも、編集を手伝ったって言ってました」

『へえ……』

監督の挨拶の後、いよいよ上映が開始された。盛大な拍手が、観客達、プリキュア達から浴びせられた。リコとアン王女が逃げる中、河童と天狗に追いかけて始まる冒頭、

「この後私が……」

ハッピーは、少し恥ずかしそうにしていたものの、

「待つでござるううう!」

そう言つて画面に現われたのはポップであった。ハッピーは首を傾げ、

「アレエ!?!ここ私だったよねえ?」

『ウン……』

一同も、何故いきなりポップが現われたのか分からなかったが、映画が進む度に、一同の表情はどんどん困惑した表情になっていた。何故なら、映画はポップが主役のように編集されて居たのだから……

「中々やるでござるなあ……拙者の秘伝、受けてみるでござるう!メルヘン流奥義!妖

精斬りいい・・・でござるう!!」

ポップは勢い良く宙に飛び、空中で三回転してその勢いのまま人虎目掛け刀を振り下ろした。

「ウウウオオオオオ！」

人虎の雄叫びの後、ポップのアップに切り替わり、

「フウ、手強い敵でござったなあ・・・」

ルージユは思わず目を点にし、

「な、何!?何なの、この捏造編集は？」

まるで、ポップ一人で人虎を倒したように編集されており、見る見るプリキユア達は変顔をしたり、呆れた表情を浮かべた。更に映画はラストシーンに入り、風来坊ポップは立ち上がると、リコ姫とアン奥方に声を掛け、

「拙者はこれで・・・」

「あ、あのう・・・お名前は？」

「拙者、風来坊のポップ。名乗るほどのものではござらんよ・・・」

去つて行くポップと共に、エンドロールが流れ始めた・・・

(な、何だあ!?!この映画?プリキユアほとんど出て無かったぞお?)

ブンビーは、思わず額から汗が流れ始めた。背後をチラリと振り向くと、薄暗い室内

の中、映画出演に前向きだったブラック、ブルーム、ドリーム、ルージュ、レモネード、ローズ、ピーチ、ベリー、プロツサム、マリリン、メロディ、ビート、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、バッドエンドハッピー、バッドエンドサニー、バッドエンドピースの19人のプリキュア達の周辺には、赤いオーラが揺らめいていた。

(怒ってる・・・メツチャ怒ってるよおお!!)

ブンビーは、隣に居る深澤監督、その隣で満足そうな表情を浮かべるポップに、プリキュア達が怒っている事を知らせようとするも、キャンディはポップに声を掛け、

「お兄ちゃん、格好良いクルウ!」

「いやああ、それ程でも・・・有るでござるよ!」

『出るんじや無かった・・・』

ポップを決めるポップを見て、ホワイト、ルミナス、イーグレット、ミント、パイン、サンシャイン、ビューティ、エコー、ダークプリキュア5の13人が項垂れた。

「エエエと・・・私達、何しに行つたんでしようか?」

『最悪・・・』

苦笑したルミナスに、ブライト、ウインディ、アクア、パッション、ムーンライト、リズム、ミューズ、ソード、バッドエンドマーチ、バッドエンドビューティの10人も困惑しながら同意した。

(良かった、私達には出番があった)

アン王女とリコは、内心ホツと安堵していたが、あまりに酷い編集に、数人のプリキュアが切れた……

真っ先に椅子から立ち上がったバッドエンドマーチは、プリキュア達一同を見渡ししながら、

「オイ！あいつら殴る気力残ってるかあ？」

「あたしはやるよ……こういう冗談は好きじゃ無い！」

「プリンスカポン！私も、私も」

バッドエンドマーチに、真っ先に賛同したのはダークルージュ、バッドエンドピースも同意した。映画出演に前向きだった人物達や、時間の無駄にされて怒った人物達が、盛り上がる深澤監督とポップを睨んでいた。ブンビーは、その迫力にガタガタ震えだし、

(わ、私は関係無いからねえ……)

ブンビーは、暗い室内に紛れて逃げ出そうと試みるも、深澤監督に話を振られ、逃げるに逃げられない状況に陥った。

この直ぐ後、ブンビー、深澤監督、ポップの悲鳴が室内に響き渡った……

妖怪オールスターズ対プリキュアオールスターズは、後に四葉ありすが著作権を買い取るまで、お蔵入りになったという・・・

第百十九話：妖怪オールスターズ対プリキュアオールスターズ!?

完



## 第二百一十話：ニクスとリリス（前編）

## 1、リコからの手紙

## 魔法界・・・

魔法学校では、リコが神隠しにあつたのでは無いかと大騒ぎになったが、手紙の運び屋であるシロップが、リコからの手紙を携えて現われた。シロップが、リコの手紙を扱った経緯は、知り合いとほぐれた事で、魔法界に帰れなくなったリコだったが、なぎさ達から、せつなやシロップなら、何時でも魔法界に連れて帰ってくれると聞き、もうちよつと人間界で過ごしてみたい欲が出て来た。

「何時でも魔法界に帰れるなら、もうちよつとこつちで暮らしてみたいかも!」

そう思ったリコは、のぞみからシロップを紹介され、リコは二通の手紙をシロップに託した・・・

魔法界に着いたシロップは、人間姿に変化すると、魔法学校の生徒達に話し掛け、「リコの姉のリズって奴は居るかあ?」

人間姿のシロップが、リコの姉であるリズを捜していると、クラスメイトに聞いたリ

ズは、怪訝な表情で外に居るシロップの前に現われた。

「私がリズですが、あなたは一体!?!ひよつとして、あなたがリコを……」

リズは、自分より年下っぽいシロップの容姿に警戒しながらも、シロップがリコの安否に関わっているのではないかと疑った。シロップは困惑し、慌てて手紙を取り出すと、

「エッ!?!か、勘違いするなよなあ。俺はリコから、あんた宛ての手紙を届けてくれって頼まれただけだ」

「エッ!?!リコから?」

リコから手紙を預かったシロップは、驚いて居るリズに手紙を手渡した。リズは自分への宛名を書いたリコの筆跡を見ると、確かにリコの筆跡だった。

「じゃあ、確かに渡したからな。俺はまだ手紙を届けに行かなきゃならないんでな」

「アッ!?!リ、リコは元気で居るの?」

「ああ、今リコは、加音町って町で、黒川エレンって奴の世話になってるぜ」

シロップが言うように、リコは映画の撮影後、調べの館に住むエレンの世話になっていた。シロップはそうリズに告げると、巨大な鳥のような妖精姿に変化した。魔法学校の関係者達は、突然現われた巨大なシロップに驚くも、シロップは一鳴きすると、魔法界の空に羽ばたいた。騒動を聞き付けた魔法学校の校長は、リズに近付き声を掛けた。

「リズくん、彼は何者かね?」

「校長先生! 私にもよくは分からないのですが、彼は手紙の運び屋だつて言つてました。彼は、リコが私宛に書いた手紙を、届けに来てくれただけのようです」

リズに校長先生と言われた男性だったが、銀色の長髪をした姿は、リズとそう年が変わらない青年にも見えた。青を基調とした服と、緑色のマフラーを着用している姿からも、青色が好みなのかも知れなかった。生徒思いの校長だが、一説には、魔法学校で40年以上教員をしている、アイザックという老教師が、校長の教え子という噂もあり、校長が本当は幾つなのか? という事は、魔法学校七不思議の一つにもなつていた。

「ほう、手紙の運び屋かね……どこかで聞いた事はあるな。では、リコくんは無事だったのだな?」

「はい! 校長先生、リコがご迷惑をお掛けして、本当に申し訳ありませんでした」

リズは、申し訳無きそうに校長に深々と頭を下げた。校長は笑みを浮かべ、「うむ! 無事ならばそれでよい。他の生徒達の手前もあるし、わしがナシマハウ界行きを許可した事にしておこう」

「ありがとうございます」

リズは今一度校長に頭を下げると、自室に戻つたが、リズの部屋にルームメイトは居なかつた。以前は、リズと一、二位を争う程の優秀な魔法つかい、ソルシエールという

少女が同部屋だったが、数ヶ月前、彼女は師匠の魔法つかいの下にお見舞いに行き、そのまま魔法学校に帰って来る事は無かった。それ以降、リズは彼女が帰ってくる日を信じ、教頭先生に頼んで、彼女の所有物をそのまましてもらっていた。

「リコったら、心配させて・・・」

リズは手紙の封を切ると、リコの手紙を読み始めた・・・

お姉ちゃんへ・・・

私は今、ナシマホウ界に来てます。ニクスさんとリリスさんって人に誘われて、ナシマホウ界に来たんだけど、何と途中で二人とはぐれちゃったの！エへへ、でもね、私プリキュアと知り合いになったんだよ。それに・・・何と伝説の魔法つかいプリキュアの、キュアマジシャンの子孫って人とも知り会ったのよ！凄いでしょ？後、ナシマホウ界で映画っていうのにも出たのよ。今は、プリキュアの一人、エレンさんって人のお世話になってるの。この町は、音楽が有名だよ。それに、エレンさんから色々な本を読ませて貰って、こちらの世界の勉強もしてるのよ。もっと色々書きたいけど、魔法学校に戻ったら、ちゃんとお姉ちゃんにお話しするね。心配掛けてゴメンなさい・・・リコ

リコの手紙にはこう書かれていた・・・

手紙を読んだリズは、思わず呆然とした。プリキュアの名は、リズも歴史書を読んで

知っては居たが、伝説の魔法つかいと呼ばれたプリキュア、キュアマジシャンの子孫と、リコは直接会つたらしかった。

(リコの手紙が本当だとしたら、伝説は本当だったの?)

リズは思わず呆然とした……

シロップは人間界に戻ると、リコから預かったもう一通の手紙の主を捜して居た。最初にリコがやって来た津成木町を捜したものの、お目当ての人物達とは出会えなかつた。

「チツ、全くニクスとリリスって奴らは、一体どこに居るんだよ?」

シロップが、リコから預かったもう一通の手紙の届け先は、ニクスとリリスだった。シロップは、嘗てベレルが注意するべき人物として出したリリスの名を、すっかり忘れて居た。

「たく、居場所も分からねえのに、どうやって手紙を届けりや良いんだ!?!……さてよ?」  
シロップは、キュアエコーの力を借りれば、二人の心に話し掛ける事が出来るのではないかと考え、横浜にあるあゆみの家へと向かった。

だがその横浜には、幸か不幸か、シロップが捜して居たニクスとリリスが居た……  
「ねえニクス、確かここに、シーレイン様は最初にやって来たって以前聞いたわよねえ

「？」

「ええ、バルガンが最初に来たのもこの町だったそうだし」

二人は、嘗てバルガンが現われた、横浜にある港の見える丘公園に来て居た。高い木の上から横浜を見て居ると、上空を猛スピードで飛んでいる何かにリリスが気付いた。

「あれは!?!ウフフフ、ちよつと覗いてみようかしら?」

「どうしたの、リリス!?!」

「ちよつとねえ、何か気になる物体を見つけたものだから……」

リリスはそう言うのと、目を閉じて精神を集中させた。リリスの意識が、幽体離脱したかのように、上空を猛スピードで飛ぶ物体を捉えると、リリスの口元に笑みが浮かんだ。リリスが見付けたのは、横浜に住むあゆみの家を目指し、飛んで来たシロツプだった。

「フフフ、あの鳥、ただの鳥じゃ無さそうねえ……こちらに誘き寄せましょう!サキユバスイイ!!」

リリスは目を見開き、瞳が怪しく赤く輝くと、シロツプの頭上に巨大な目が現われた。その瞬間、シロツプの身体は、まるで何かに引き寄せられるかのように、港の見える丘公園に移動して行った。

「か、身体がフラフラするロプ……もう、もう駄目ロプウウ」

シロツプはそう言うのと、通常の状態に戻ってしまい、上空から地上目掛け落下すると、何

か柔らかいものに抱き止められた。シロップが顔を上げると、口元に笑みを浮かべたりリスが、妖艶な表情でシロップに顔を近づけ、思わずシロップはドキツとした。リリスは、そんなシロップを見てクスクス笑いながら、

「ウフフフ、私の胸に飛び込んで来る何て、エツちな鳥さんねえ?」

「ち、違うロプウウ! 突然力が抜けて・・・しまったロプ!」

シロップは、つい人間の言葉を喋ってしまい、思わず両手で口を塞いだ。ニクスもそんなシロップを見て、思わずクスリと微笑み、

「あなた、どうやら只の鳥じゃ無さそうねえ? 妖精か何かかしら?」

「ロプ!?! シロップを見ても驚かないロプ?」

「ええ、見慣れて居るもの」

ニクスとリリスは、クスクス笑いながらも、シロップを安心させるかのようにそう話すと、シロップは少し安堵した。リリスは、そんなに急いで何所に行くのかシロップに問うと、

「シロップは、手紙の運び屋をしてるロプ。でも、リコから預かった手紙の相手が見つからなくて困ってたロプ」

「エエエ!? リコ?」

シロップがリコの名を出すと、ニクスとリリスの表情が変わった。シロップは、そん

な二人を見て首を傾げながら、

「お前達、リコを知ってるロップ？ひよつとして、お前達がニクスとリリスロップ？」

シロップの口から、思いがけないリコの名を聞き、思わずニクスとリリスは驚いた。更にシロップは、自分達の名前まで呼んだのだから・・・

「ええ、そうよ、私がニクス」

「私がリリスよ」

「本当ロップ!?こんな偶然もある何て・・・これがリコから預かった手紙ロップ」

シロップは、ニクスにリコからの手紙を渡した。ニクスが手紙を開くと、リリスもニクスに顔を近づけて、二人は一緒に手紙の内容を読み始めた。すると、見る見る二人の口元に笑みが浮かび上がった。ニクスは、カインが言っていた通り、魔法界の人間が、プリキュアと出会った事を聞き、思わず笑い声を発し、

「フッフ、そう、リコはプリキュアと会ったのね？」

「ねえ、シロップ、あなたはプリキュアの事も知ってるの？」

「知ってるロップ」

リリスに聞かれたシロップは、彼女達が魔界の者とは露知らず、正直に答えてしまった。ニクスとリリスは、顔を見合わせ合うと頷き合い、

「ねえシロップ、私達を、彼女達プリキュアに会わせてくれないかしら？リコを保護して



くれたお礼も言いたいし」

「そうね、出来れば私とニクスを、リコの所まで連れて行って貰えると助かるんだけど・・・」

「お安いご用ロプ」

シロップはそう言うのと巨大化し、二人に背に乗るように告げた。ニクスとリリスはアイコンタクトすると、シロップの背に乗り、シロップは、リコが居る加音町目指して飛び去って行った。

## 2、闇のプリキュア達の宴

ナッツハウス・・・

池の畔で、少し離れた場所から、ナッツハウスの中の様子を気にしながら、のぞみ達六人とみゆき達六人が集まって居た。何故みゆき達がナッツハウスにやって来たかと言えば、ダークプリキュア5から頼まれたのぞみからのメールで、みさき達五人を、ナッツハウスに連れて来て欲しいと頼まれたからだった。

「大丈夫かなあ？」

みゆきは、両チームがナッツハウスの中で、喧嘩しているイメージが思わず頭に浮かび、心配そうな表情でナッツハウスを見つめた・・・

そのナッツハウスでは、招待されて中に入ったみさき達が、出迎えたダークプリキュア5の面々を見て、微妙な表情を浮かべていた。ダークドリームは、みさき、あおい、やおい、なみ、れいなの五人を見つめ、口元に笑みを浮かべながら、

「へえ、その姿になつてると、あなた達は本当にみゆき達に似てるのね？」

「本当、あなた達の方がちよつと大人っぽくも見えるかしら？」

ダークミントも同意するも、みさきは五人の心意が読めず、ちよつと警戒するかのよう、

「元々私達、みゆき達の細胞から生まれたつて聞いたし……それより、一応招待されたから来たけど……私達に何か用なの？」

「ええ……まあ、話は上で」

ナッツハウスの二階に続く階段を、ダークドリームを先頭にダークプリキュア5が上がって行き、そのあとをみさき達が続いて上がっていた。二階にあがったみさき達は、テーブルに並べられた飲み物や食べ物を見て、思わず呆然とした。ダークドリームは、五人を促し、

「どうぞ、好きな所に座って」

「ウワアア……美味しそうだねえ」

「ぎ、ぎ、御馳走!？」

「何や気味悪いなあ」

「これは一体!？」

やおい、なみ、ああい、そしてれいなは、テーブルに並べられた御馳走を見て驚きの声を上げた。ダークアクアはクスリと笑み、

「フフフ、大した意味は無いわ。以前映画の撮影であなた達と一緒にあって、最初は私達も戸惑ったけど、何だか楽しかったし」

「それで、お互いをもっと知った方が良いんじゃないかなあと想着て」

「それでみゆき達に頼んで、あんた達に来て貰ったってわけ」

ダークレモネード、ダークルージュは、そう言いながら料理を小皿に分けてみさき達に手渡した。

「フフフ、毒は入っていないから大丈夫よ」

ダークドリームはそう言うと、自ら箸を手に取り、唐揚げをパクリと嚙ってウインクした。それを合図にしたかのように、みさき達も箸を手に取ると、

「」「」「いただきます!」「」

みさき達は、ダークプリキユア5が用意してくれた御馳走を食べ、次第に警戒心が薄れていった・・・

「ダークドリームは、ジイイとみさき達を見ていると、

「ウフフ、何だかあなた達のその姿を見ると、常にプリキュアの姿で居る私も、日常では違う姿で過ごしてみたくなるわねえ・・・」

「フウウン・・・なっっちゃええば?」

みさきがさり気なくダークプリキュア5に告げると、五人は思わず驚き、

「「「「エツ!?!」」」」

「そうそう、意外と面白いでえ」

「私達みたいになるなら、名前も考えなきやねえ?」

「ダークドリームなら・・・差し詰め夢野のぞむとかあ?」

「ありきたりだけど、分かりやすいのは確かねえ」

「あおい、やおい、なみ、れいなにも薦められ、ダークドリームも満更でもさなそうなる表情を浮かべると、

「フウウン・・・試しになってみようか?前にベリーに貰った服があつたよねえ?」

「「「「良いわよ」」」」

ダークドリームに聞かれた四人は、苦笑しながらもダークドリームの申し出に賛同した。五人は、以前ベリーからプレゼントされた、五人のイメージカラーをしたワンピース

スを捜して手に持つと、顔を見合わせた五人は、

「じゃあ、行くよ．．．せええのおお！」

「「「ワアアアアア！」」」

ダークドリームの合図と共に、五人の姿がのぞみ達に似た容姿へと変化し、思わずみさき達から歓声が上がった。

くるみは、ジイイとナッツハウスを見つめて居た．．．

みゆきが想像したように、くるみも最初にダークプリキュア5に頼まれた時、バッドエンドプリキュアと会わせても大丈夫かという不安が頭を過ぎった。でも思い返してみれば、映画の撮影の時も、京都観光の時も、そして映画の試写会でも、両チームはいがみ合うこともなく、むしろ、ポップと監督にお仕置きをした時は、息が合っているぐらいにも思えた。

「映画の撮影の時も、試写会の時も、両方共いがみ合う事も無かったし、大丈夫でしょう？」

「そう言いながら、一番ソワソワしたのはくるみだったけどねえ？」

「しよがないでしょう？いきなりダークドリームに、バッドエンドプリキュア達を、ナッツハウスに呼んでも良いかって聞かれたんだから．．．」

りんにし少しからかわれ、くるみは少し頬を膨らませた。こまちは何所からか羊羹を取り出すと、

「甘い物でも差し入れてこようかしらあ？」

「こまちさん・・・前から思ってたけど、羊羹を何時も持ち歩いてらっしやるんですか？」

れいかに聞かれたこまちは、コクリと頷いて羊羹を見た。

「実家が和菓子屋だし、毎日じゃないけど持ち歩いているわよ。羊羹はあずきで出来るし、あずきはヘルシーなのよ」

「バナナの代りみたいな感じでしょうか？」

れいかが首を傾げながらそう話した時、ナッツハウスから笑い声が聞こえて来た。思わずのぞみ達も、みゆき達も、自分達の事のように嬉しさが込み上げてきた。

その時、のぞみ達とあゆみの携帯にメールが届いた。気になったのぞみ達とあゆみが内容を見てみると、差出人はエレンからで、リコの捜していた人物が見つかったから、リコが魔法界に帰るみたいだと知らせが届いた。

### 3、サキユバスのリリス

メイジャーランド・・・

アコは不機嫌そうに、メフィストからソツポを向けていた。メフィストはアコの気を惹こうと、三銃士であるバズドラ、バリトン、ファルセットに即興の余興をさせるも、アコのご機嫌が治る事は無かった。一緒に来ていたハミイとピーちゃんは、そんな二人を交互に見つめ困惑していた。

「アコオオ、パパが悪かったから、機嫌を直しておくれえ。そうだ、美味しいお菓子が……」

「要らない!」

アコは首を横に振り、話し掛けたメフィストの顔も見ようとしなかった。アコの母アフロデイトは、そんな二人を見て溜息を付き、

「ハア……あなた、アコに嘘を付いてメイジャーランドに来させたのですから、あなたが悪いんですよ?」

「だから、その事は何度もアコに謝って居るだろう?なあ、アコ……パパは、アコの顔の中々見られなくて寂しいのだ。機嫌を直しておくれ」

「知らない!」

「ハアアアア……アコつたら」

アコは、頬を膨らませながらメフィストを無視し、アフロデイトは深い溜息を付いた。メフィストは、アコの機嫌が直らずオロオロし、バズドラ、バリトン、ファルセットは、

そんなメフェイスを見て、笑いを堪えるのに必死だった。アフロディテは、優しくアコに話し掛け、

「アコ、今回はパパを許して上げて。何もパパは、嘘を言った訳ではありませんよ。そろそろアコにも、メイジャーランドの次期女王として、自覚を持たせても良い頃だと、二人で話して居たのです」

「エッ!?私が?」

「当然でしょう?あなたは私達の一人娘なのですから」

「私、弟か妹が欲しいなあ・・・」

「エッ!」

アコが突然眩き、思わずアフロディテとメフェイスがドキリとし、見る見る二人の顔が赤くなった。メフェイスが正気を取り戻し、メイジャーランドに戻って来た事で、アフロディテとメフェイスは、夫婦の愛を取り戻したかのように、激しく愛し合った日もあった。アフロディテはその時を思い出したのか、少し恥ずかしそうに、

「そ、そう・・・アコ、でも赤ちゃんは、欲しいからと言って、直ぐ産まれてくる訳ではないのよ?」

「ウン、分かっている!欲しいなあと思って思っただけ・・・じゃあ、私そろそろ加音町に戻るから、行こう、ハミイ、ピーちゃん」



動揺するアフロディテとメフィストを余所に、アコはハミイとピーちゃんと共に、メ  
イジャーランドを後にした。

加音町・・・

調の館の前に、アコを除いたなぎさ達が集まって居た。リコをナシマホウ界に連れて  
来た人物が見つかったという事は、リコが魔法界に戻る事を意味していた。みさき達五  
人や、休暇がてらナッツハウスでくろみと共に過ごす、ダークプリキュア5の五人も、み  
ゆき達やのぞみ達と共にやって来て居た。

「じゃあ、俺は行くぜ」

「ええ、送ってくれてありがとう」

ニクスとリリスは、どこか妖艶な微笑を漂わせながら、シロップに礼を述べた。シ  
ロップは思い出したかのようにリコを振り返ると、

「そうだ！リコ、姉ちゃんが心配してたぞ？帰ったらちゃんと謝っておけよな」

「お姉ちゃんが!?!うん、ありがとう」

シロップは、まだ配達が残っているからと、巨大化して大空に飛び去って行った。そ  
れを見送ると、みさきはリコに話し掛け、

「何だかんだで、あなたと一番最初に出会ったのは、私達とみゆき達だし、見送りぐらい

はしてあげる」

「ありがとう」

みさきは、ナッツハウスでダークプリキュア5と食事会を開いていたが、のぞみ達やみゆき達から、リコの捜していた人物が見つかり、魔法界に帰るようだから、一緒に見送りに行かないかと誘われ、仲間達と共に加音町に来た。リコは、プリキュアみんなが自分の為に集まってくれた事で、感動して目がウルウルしていた。響は、申し訳無さそうな表情で、

「アコは、用事があつてメイジャーランドに戻ってるから、間に合わないかも知れないけど・・・」

「ううん、良いの！みんながわざわざ集まってくれただけでも、凄く嬉しいし」

「リコ、捜してた人に会えて良かったわね」

「ウン！エレンさんにも色々お世話になっちゃつて」

リコはそう言うのと、行くあてが無くて困惑したリコを、調べの館に招いてくれたエレンに改めて感謝して頭を下げた。そんな一同を、ニクスとリリスは薄ら笑いを浮かべながら見つめて居た。

（何かあの二人の態度、引つ掛かるわねえ・・・）

ダークアクアは、ニクスとリリスの態度に、何所か違和感を覚えて居た。ニクスとリ

リスは、リコが粗方挨拶を済ませると、リコを挟むように両隣に立った。ニクスはリコに話し掛け、

「リコ、プリキュアのみんなどのお別れは済んだかしら？」

「ハイ！ちよつと名残惜しいけど・・・」

「そうね、もう永遠に会えないかも知れないものねえ？」

「リリスさん、別に永遠に会えなくなる訳じゃないと思うんだけどなあ」

リコがちよつと恨めしそうにリリスを見たその時、リリスの名を聞いたほのか、ゆり、かれんの顔色が瞬時に変わった。ほのかはリコに確かめるように、

「リコさん、今その人の事・・・リリスさんって言った？」

「エッ!?ほのかさん、リリスさんの事知ってるんですか？」

「・・・」

ほのかはリコに聞かれたものの、ほのかの耳には届かなかった。ほのかの視線は、リスと、隣に居るニクスに釘付けだった。リリスは戯けるように、

「あらあ!?!プリキュアに名前を知られる何て、私達も有名になったものねえ・・・もつとも、シーレイン様やベレル様に聞いて居たんでしょう？」

「じゃあ、あなた達はやはり!?!」

かれんは表情を険しくしながら問うと、思わず二人の口元に笑みが浮かび、

「そう、私は十二の魔神が一人、処女宮を預かるリリス」

「私は、双魚宮を預かる者ニクス」

リリスとニクスが十二の魔神である事を認め、一同に緊張が走った。みさき達やダークプリキュア5達には何の事か分からず、

「何々!?!みんなどうしたの?」

「あなた達のその顔・・・彼女達は敵だつて事なの?」

「魔界の人達が、全て敵つて訳じゃ無いけど・・・」

みさきとダークドリームに聞かれ、あゆみは困惑の表情を浮かべた。二人が魔界の者だと分かると、瞬時にみさき達はバッドエンドプリキュアに変化し、なぎさ達一同は二人を警戒した。ゆりは険しい表情で二人に話し掛け、

「二応、聞いておくわ・・・あなた達、リコを利用して此処に何しに来たのかしら?」

「もちろん、私達は・・・プリキュアを倒す為に此処に居るわ!」

ニクスとリリスはそう言うのと、魔界で過ごすスタイルへと瞬時に変化した。ニクスは、上半身は白い貝殻ビキニを着け、下半身は魚のような鰭を持つ人魚姿になって宙に浮き、リリスは、頭から蝙蝠の羽のような触覚と、お尻からは愛くるしい先端がハート型をした尻尾をゆらゆら揺らし、黒い下着のようなボンテージ衣装に身を包んだ。

「エツ!?!ニクスさん、リリスさん・・・その姿は一体!?!それに、それってどういう・・・」

リコは、正体を現わした事で、急に殺気を露わにしたニクスとリリスに動揺し、思わず言葉を飲み込んだ。

「さあ、あなた達も変身しなさい！」

ニクスとリリスに、プリキュアに変身するように促されるも、やる気満々のバッドエンドプリキュア達を抑えたなぎさは、出来れば二人との戦闘は避けたかった。なぎさは二人に話し掛け、

「ねえ、二人共ベレルに事情は聞いたんでしよう？ 私達は、あなた達魔界と敵対する気は無いし、以前バッドエンドピースが魔界に行ったのは、偶然迷い込んだだけなの」

「エエエ!?何？私が魔界に行ったのが原因なの？」

「ううん、それをカインって人と、アベルって人が利用してるだけだと思うよ」

バッドエンドピースは、この二人がこっちに来たのは、自分が原因かも知れないと知り、少し動揺するも、やよいはバッドエンドピースをフォローした。その事はニクスとリリスにも伝わっては居た。ニクスは、目を閉じるとシーレインが言っていた事や、ベレルがニクスとリリスを呼び、プリキュア達は、魔界と敵対する意思など全く持っていない事を知らされた。それはリコを見ても、此処に案内してくれたシロップを見ても、皆プリキュアに好意を持っている事でも分かった。

「ええ、それはシーレイン様からも、ベレル様からも聞いてるわ。リコに優しく接して

くれたあなた達を見ても、それはその通りなのでしょう・・・」

「そうね・・・それは私も認めるわ」

自分達が敵対する意思を持つては居ない事は、ニクスとリリスにも伝わっているように、咲はホッと安堵した表情を浮かべながら、

「だったら」

「でもね、事情が変わったの」

「私達は、あなた達を倒し、何人かを魔界に連れ帰る為に、こちらの世界にやって来た」  
「どうしても、私達と戦うって事？」

ラブは困惑しながら二人に問うと、ニクスとリリスはコクリと頷いた。本心では、二人もプリキュアと戦う事には消極的だったが、シーレインの処刑を免れる為には、カインの言う通りに動く以外二人にはなかった。

「その覚悟がなければ、わざわざ人間界などに来はしないわ」

「そう言う事よ」

ニクスとリリスは、なぎさ達に変身を促した。最早戦いは避けられないと知り、一同は渋々ながらも、プリキュアへと姿を変えた。

ニクスとリリスは、一同がプリキュアになった事でリコを見つめ、

「リコ、あなたを利用した事は謝るわ・・・あなたは此処から離れていなさい」

「これは、私達とプリキュアの問題だから」

「でも・・・プリキュアのみんなは、私に優しくしてくれたし、ニクスさんとリリスさんも・・・」

「今も言った通り、私達はあなたを利用しただけ」

「プリキュア同士は引かれ合うっていうカイン様の命令で、嘗て魔法界にもプリキュアが居た事で、魔法界の人間を利用しようとしただけよ。そして、私達が選んだのが・・・リコ、あなたよ！」

二人の言葉を聞き、リコの表情が曇った。最初に出会った時、どこか胡散臭い面も有りはしたものの、リコは一緒に行動する内に、二人を信頼していた。

「そんなぁ・・・」

「問答無用って訳ね・・・リコ、彼女達が言うようにここを離れなさい」

「調べの館の中に避難してて」

リコはビートとリズムに、ここから離れて調べの館に避難しているように言われたものの、どこかこの場を離れる事にうしろめたさがあった。

「で、でも・・・」

「言う通りにして！」

「は、はい・・・」

「わたくしが一緒に行きますわ」

険しい表情をしたドリームにも言われ、リコは慌てて返事を返し、アン王女に手を掴まれたリコは、調べの館の中へと避難した。それでもみんなが気になり、リコはそつと入り口の扉を少し開いて、アン王女と共に様子を伺った。

ニクスは、リコがこの場を離れた事で、内心巻き込まないで済むと安堵した。プリキュア達を見つめると、

「じゃあ、始めましょうか」

「上等！」

バッドエンドマーチが右手の拳を握って気合を入れた。リリスは一步前に出ると、  
「ニクス、私がやるわ」

「そうね、さすがにこれ程の人数を相手にするには、あなたに任せた方が良いかもね……でも、あなたあのあの下品な技を見るのは、好きじゃ無いけど」

「下品!? まあ、いい歳して可愛い子ぶっちゃってえ?」

「うるさい!」

「ウフフフ、まあ良いわ。あなた達の相手は……このサキュバスのリリスがしてあげる」  
ニクスとのやり取りを見て、思わず虚を突かれたプリキュア達だったが、舌なめずり



したりリスを見て、ホワイトの背筋は思わずゾツとした。嘗てベレルに忠告された言葉が、思わず頭に浮かんで来た。貴公らは、全滅するであろうという言葉が・・・

「みんなああ、油断しないでええ！」

ホワイトが一同に警戒するように伝えるも、リスは妖艶な表情で笑い出し、

「ウフフフ、実は・・・さつき内緒で、あなた達の周囲を、私のテントリーで覆って居たのよねえ。さあ、あなた達の悶え声を、私に聞かせて頂戴・・・エロチックアイ！」

『エッ?!』

リスは、ウインクしながらプリキュア達に投げキッスを放ち、思わずプリキュア達が呆然とした。プリキュア達の頭上に、巨大な目が現われると、地面に魔方陣の紋章が浮かび上がり、地面からピンク色の輝きがプリキュア達を覆った。

「な、何?!これは?・・・アアアア」

突然輝いたピンク色の光にブラックが驚くも、急に力が抜けてきたかのように思わず片膝を付いた。それは他のプリキュア達も同じで、皆表情を赤くしながら、急激に沸き上がってくる劣情に戸惑った。ホワイトは、息を乱しながらリスを見つめ、

「ハアハアハア・・・わ、私達に・・・な、何をしたの?」

「ウフフフ、私のエロチックアイはね、光に捉えた相手の性的欲求を、高ぶらせる事が出来るよ。あなた達のように、男を知らなくても、淫らに快樂の虜にする事が出来るの」

『そんな!』

リリスは、プリキュア達の反応を見て、全員まだ男を知らない身体だと見抜いた。

プリキュア達は、まだ全員処女だった・・・

学校の授業で性教育を受けては居たが、異性の生殖器を間近で見た事なども無かった。例外的に、魔王やオークの生殖器を見た事がある者は居たものの、それを見て劣情を催した事など無かった。ましてや、自ら性的興奮を発散する為に、自慰をした事も無かった。そんな彼女達だったが、リリスのエロチックアイの呪縛からは逃れられず、初めて沸き上がってくる快楽に、恐怖すら覚えていた・・・

「ウフフ、どうかしら!? 気持ち良くなってきたでしょう?」

「う、うるさい! この・・・変態女」

バッドエンドマーチは、沸き上がる快楽に耐え、リリスを罵ると、リリスは口元に笑みを浮かべながら、ゆっくりバッドエンドマーチに近付き、

「あらあら、随分酷い口を聞くのねえ? 悪い子には、おしおきしなくちゃねえ?」

リリスはそう言うのと、バッドエンドマーチの背中を、右手の人差し指で撫でた。ただそれだけだったが、バッドエンドマーチは激しく悶え、

「アアアア、ハアハアハア・・・ハアン」

バッドエンドマーチは、益々力が抜けたかのように地面に倒れ込み、足を摺り合わせ

ながら恥辱に耐え続けた。調べの館から状況を見ていたアン王女とリコ、アン王女はリスの性格を見て、ある人物を思い出していた。

「ま、まずいですわ。あの魔王のような性格・・・」

「魔王!？」

「ええ、わたくし達の仲間・・・のような存在ですが、エッチな性格をしています」

アン王女は、リコにそう説明しながらも、悶え続けるプリキュア達の身を案じた。

星空家・・・

みゆきの母育代と共に、テレビを見ていた魔王は、誰かに呼ばれたような直感が過ぎった。

(今、誰かに呼ばれたような気がしたカゲ・・・)

魔王が急に黙り込み、育代は不思議そうに首を傾げ、

「魔王ちゃん、どうしたの?」

「何かみゆき達に呼ばれた気がしたカゲ・・・ちよつと様子を見てくるカゲエ」

「魔王ちゃん、今日は魔王ちゃんが好きなハンバーグだから、みゆきと一緒に、晩ご飯の時間までには戻ってねえ」

「分かったカゲエエ」

魔王は、プリキユア達の気配を捜しながら、星空家を飛び立って行った・・・

#### 4、快樂の虜

リリスは舌なめずりしながら、悶え続けるプリキユア達を眺めた。プリキユア達が、快樂に悶える声が、リリスの糧となっていた。

「ウフフ、さあ、もつと快樂に身を任せなさい。私が手伝って上げる」

「な、何を!? 止め・・・てええ・・・ハアハア」

「や、止めなさ・・・アアア・ンンン・・・ハウ」

「ち、力が入らない・・・アアアアア」

ブラックが、ムーンライトが、ホワイトが、リリスによって首筋に息を吹きかけられ悶えた。リリスは、ピーチの胸を見ると、尻尾を器用に動かし、ピーチの胸元を刺激した。

「クツ・・・な、何を!?!」

「あなた、中々大きい胸なのねえ!?! 感度はどうかしら?」

リリスの尻尾の先端が、ピーチの胸を刺激するかのようにはげ動を与えた瞬間、

「イヤアアアア! アアア、アツアアアア」

「「ピーチ!」」

ビクビク身体を震わせたピーチが、激しく身悶え始めた。その目からは、うつすら涙が滲んだ。ベリー、パイン、パッションは、苦悶の表情を浮かべながらも、ピーチの身を案じ、思わず叫んだ。

「止め……止めろおお！」

パッションは氣力を振り絞り、何とか上体を起こすも、リリスは口元に笑みを浮かべ、「フッフ、まだ快樂に抗う力が残ってたのねえ!? あなたはどんな声を聞かせてくれるのかしら?」

「な、何を!? 止め……アアアアア……イ、イヤアアア」

リリスの尻尾が、パッションのスカートの中に潜り込み、パッションの黒タイツに覆われた太股周辺を、激しく刺激した。パッションは、力なく倒れ込み、ハアハア荒い呼吸を続けた。リリスは更に、右手ではベリーのお腹を、左手でパインのお尻を撫でると、

「ンンンン……ハアハアハア」

横向きに倒れ込み、パインはお尻を突き出すような格好で倒れ込んだ。

「クウウ、な、何て奴!?!」

「ハアハアハア……さ、最低よ」

メロディとリズムが、リリスに抗議するような視線を向けると、リリスは二人の腕を取り、

「ウフフフ、羨ましいのかしらあ？そうだわ。あなた達は、お互いの身体をまさぐつちやいなさい」

「な、何を!？」

リリスは、右手でメロデイの右腕を、左手でリズムの腕を掴み、互いの胸に手を乗せ、前後に激しく揺さぶった。

「アツ、アアアア！イヤアアア」

更なる快樂がメロデイとリズムの二人を襲い、二人の目から涙が零れた。そんなリリスに、一陣の風が吹いた。それは辛うじて上体を起こしたウィンデイからの攻撃だったが、力が抜けているウィンデイの技の威力は、リリスに取っては涼風に等しかった。

「へえ、反撃する気力が残っていた何てねえ」

「こ、これ以上、私達の仲間を・・・侮辱させ・・・ない」

「ええ、私達は・・・ハアハア、あなたに何て・・・屈しない」

ダークアアアも、ウィンデイに同意するかのように反撃を試みるも、リリスの尻尾が生きているかのように揺らぎ、二人の胸を刺激し、二人は激しく悶えだし、

「アアアア!?!クウウウ・・・ンンン・ハアハアハア」

更にリリスは、プリキュア達一人一人を翻弄して歩いた。

ルミナスが、ブルームが、イーグレットが、ブライトが喘ぎ、Wドリームが、Wルー

ジユが、Wレモネードが、Wミントが、アクアが悶えた。ローズは、限界に近付いているのか、顔を真っ赤にし、

「こ、こんな最低な奴に……手も、足も、出ない……何て……アアアアア」

ビクビク身体を痙攣させながら倒れ込んだ。悔しい気持ちは薄らぎ、ローズの心を快樂が支配していった。

(な、何で!?何で抗えないの?)

ダークドリームは、為す術無くリリスに翻弄される姿に戸惑った。更にリリスは、ブロッサム、マリンの背中を、サンシャインのお臍を愛撫して、三人を悶えさせ、ビートの首筋に息を吹きかけ、ハッピー、サニー、マーチ、ビューティ、エコー、ソードの六人と、バッドエンドハッピー、サニー、ビューティの身体をも弄んだ。

『アアアア……イヤ・イヤ……ハアハアハア』

嘗てなきさにエツチな同人誌を買って貰い、読んだ事があるWピースではあったが、あの時以上の興奮が、二人の欲求を刺激して行つた。

「変に、変になつちやうよおおお」

「わ、私も……アアアア」

プリキユア達は、リリスに反撃しようとする意思はもちろんあつたが、快樂は、そんな彼女達の思いを嘲笑うかのように、ジワジワ彼女達の身体を、心を、蝕んでいった。プ

リキュア達の心は、羞恥心と屈辱で一杯だった。

リリスは、そんなプリキュア達の抵抗する気力を、一気に粉砕しようとするかのよう  
に、

「もう一つ教えて上げるわ。あなた達、子宮が疼いてきてない？今のあなた達は、私の力  
によつて、強制的に排卵日にもっとも近い状態になつて居るのよ。言つてる意味が分か  
るかしら？今のあなた達は、もっとも妊娠しやすい状態に身体がなつて居るの。仮に  
今、男と性交渉を持てば・・・あなた達は間違いない、その男の子供を宿す！」

『なっ!?!』

リリスの言葉に、プリキュア達は皆恐怖した・・・

「ねえニクス、プリキュア全員妊婦になる何て、面白くない？」

「知らないわよ」

ニクスは、リリスに話を振られるも、こういう行為を好きではないのか、思わずソッ  
ポを向いた。リリスは、そんなニクスに舌を出し、

「乗りが悪いわねえ・・・アアア、誰か男でも来ないかしらあ!?!私のチャームで魅了して、  
あなた達の欲求を満たすお手伝いをさせてあげるのに・・・まあ、あなた達が敗北を認  
め、私の言う事を聞くつて言うのなら、サキュバスの契約の下、あなた達の命は保証す  
るわよ?。」



「ハアハアハア、誰が、あなた何かにいい」

四つん這いの状態で激しい呼吸をしながらも、ドリームがハッキリ、リリスの申し出を拒絶すると、リリスはそんなドリームを見て首を傾げ、

「うくん、さつきから思ってたけど、あなた処女にしては、どうも男慣れしてるような？」

「し、失礼ねえ……ハアハア、わ、私は……」

「まあ良いか……男が居ないなら、このまま快樂に果てちゃって」

上空の目が一層見開かれると、魔方陣から放たれたピンク色の光が一層輝きを増した。

『アツ、アツア、アアアア……イヤ、イヤアア、イヤアアアア』

プリキュア達の身体が、先程以上にビクビク痙攣し、太股を擦り合わせながら激しい悶え声を上げた。

「もう、もう止めてええええ！」

そう叫びながら、リコが思わず調べの館を飛び出した。アン王女も慌ててリコの後に続いた。リコはプリキュア達を庇うように両手を広げるも、リコもエロチックアイのテントリーに入ってしまった、初めて体験する快樂の恐怖がリコに襲い掛かった。

「クウウウ、な、何!?アアアア！」

「リコさん……ハウ、こ、これは!?身体が疼いて……アアアア！」

リコを引き留めに来たアン王女だったが、リコ同様エロチックアイのテントリー内に入ってしまったアン王女にも、快樂の波が押し寄せてきた。だが、リコやプリキュア達と違い、アン王女は婚約者との間で、既に一度結ばれて居た。アン王女は涙目になりながら、そのまま腰が抜けたかのように座り込み、快樂に耐えようとしたものの、それに氣付いたリリスは目を輝かせた。舌なめずりしながらアン王女を見つめると、

「フッフ、お客さんが来たようねえ？あなたは、既に男の味を知っているようね・・・さあ、あの時の快感を思い出さなさい！」

「アアアア、ンンンン、ハアハアハアアア！ジョ、ジョナサン・・・アアアアア！！」

アン王女の脳裏に婚約者の顔が浮かび、涙が零れ落ちた。

「お、王女様ああ！や、止めてええ！！」

ソードがアン王女を見て叫ぶも、ソードもまた快樂に抗う術を持たず、快樂の波がソードの心を飲み込んで行こうとしていた。

「リリス、一旦エロチックアイを解除しなさい！そのままじゃ、リコも巻き添えに・・・リリス！」

「フッフッフ、良いわよ・・・そのまま全員快樂の虜になって果てなさい！」

ニクスは、悶え続けるリコを見て良心が痛み、リリスにエロチックアイを解除するよう進言するも、リリスの瞳は金色に輝いたまま暴走し、ニクスの声が届くことは無

かった。

(リリス・・・プリキュア達の快樂を糧にし過ぎて、力が暴走しているの?)

「さあ、私にあなた達の絶頂の声を聞かせなさい!」

(もう・・・もう・・・)

プリキュア達の頭の中が真っ白になっていく・・・

快樂の波に飲まれ、皆絶頂に達しようとしていた・・・

ダークプリキュア5や、バッドエンドプリキュアを加えた一同であったが、嘗てベルが言っていたように、今正に、全滅の危機に直面していた。

その時・・・

プリキュア達を覆っていたピンクの光が突然消え去り、変わりに黄金の輝きがプリキュア達を包み込んだ。黄金の輝きに包まれると、心の奥底から沸き上がってきた快樂が、徐々に薄らいで行くのが分かった。

『ハアハアハアハア・・・』

「これは一体!」

これにはリリスもニクスも驚きの声を発した。リリスは表情を険しくし、

「私のエロチックアイを封じた!? 誰? 姿を見せなさい!」

リリスは辺りを見渡すと、何かの気配を感じて上空を見上げた。上空に浮かんで居た

巨大な目を消滅させ、姿見鏡の中から、青髪をした成年が舞い降りた。成年は、プリキュア達を見つめると、荒い呼吸をし続けるブラックと目が合った。ブラックは、一層顔を赤らめ、

「か、神様!?!...イヤ、見ないでええ」

ブラックは、顔を赤くしながら隠した。

プリキュア達を救ったのは地球の神ブルー、ブルーは、憂いの瞳をしながら、見ないでと哀願したブラックに、嘗て大いなる闇に身体を乗っ取られた、キュアミラージュの姿をダブらせた瞬間、両手の拳を握りしめた。リリスは、突然現われたブルーに驚いたものの、

「あら、男の方から現われてくれる何てねえ...ねえあなた、あなたが望むプリキュアと交わってみない?」

「黙れ!これ以上彼女達を、なぎさ達を辱めるのは止めろ!これ以上彼女達を辱める事は、この僕が...絶対許さない!!」

プリキュア達を救う為、地球の神ブルー降臨!

第二百十話：ニクスとリリス（前編）

完

## 第百二十一話：ニクスとリリス（後編）

1、キュアミューズVSサキュバスのリリス

サキュバスのリリスの放ったエロチックアイにより、プリキュア達は快樂の虜に沈もうとしていた。助けに現われたブルーによつて救われたものの、プリキュア達は荒い呼吸を続け、立ち上がるのも困難な状況だった。ブルーは、プリキュア達を救う為、リリスと睨み合つて居たのだが・・・

「私を許さない!?!ウフフフ、随分威勢が良いのねえ?でもあなたは、私のチャームからは逃れられない」

リリスはそう言うと、両目を金色に輝かせ、ブルー目掛け投げキッスをした。だがブルーは、リリスをキッと見つめながら、

「僕にそんな攻撃は効かない。さあ、彼女達を元に戻せ!」

リリスは、技を放った相手を魅了する技であるチャームを放った。チャームを受けた者は、リリスに魅了され、リリスの命じる事を実行に移す傀儡（かいらい）と成る技であった。だが、地球の神であるブルーには、リリスの放ったチャームは、まるで効果が無かった。リリスは目を見開いて驚き、

「まさか!? 私のチャームが効かないとは・・・驚いたわ」

（リリスの誘惑に耐えた!?あの男、何者なの?）

ニクスは、リリスのチャームを受けても、何事も無いように立つブルーに興味を覚え  
た。ニクスはリリスの隣に移動すると、

「リリス、どうやら少しは正気を取り戻したようね?」

「ニクス!? そう・・・また力の暴走をしたようね」

リリスは、自分が暴走した事に気付き、思わず自分の両手を見つめた。リリスは、魔  
界に居た時でも、性のエキスを吸いすぎ、暴走した事があった。

（まるで私の中に、もう一人の私が居るかのよう・・・）

「リリス!? 話を聞いている?・・・ねえリリス、その男の相手は私がするわ」

自らの力の暴走を知らされ、呆然としていたリリスだったが、何度もニクスに話し掛  
けられ、ようやく我に返った。

「ニクスが!・・・まあ良いわ、私はプリキユア達を、絶頂に導いて上げないといけな  
い」

「その前に、リコを移動させなさいよ?」

「ハイハイ」

「ま、待て!」

ブルーは、リリスが再びプリキュア達に、エロチックアイを放とうとしているのに気付き、リリスを止めようとするも、ブルーの前にはニクスが立ち塞がった。尾鰭を器用に動かし、髪を靡かせながら宙を漂うニクスは、ブルーを指差すと、

「あなたの相手は、このマーメイドのニクスがしてあげるわ」

「クツ・・・」

ブルーに焦りが生まれた・・・

力を失っているブルーにとって、魔界の魔神を相手に戦う力は無かった。ブルーがニクスと対峙している間に、リリスはブルーが張った黄金の結界を打ち破った。まだ倒れながら、荒い呼吸を続けるプリキュア達にとって、再びエロチックアイを受ければ、直ぐに絶頂に達し、精気の全てをリリスに奪われかねなかった。

「さありこ、あなたはそこを退きなさい」

リリスに命じられたリコだったが、荒い呼吸をしながらも、激しく首を振りながら拒絶し、

「ハアハアハア・・・い、嫌よ！リリスさん・・・もう、もうお願いだから止めてえ！プリキュアに、恨みがある訳じゃ無いんでしょ？」

「そうね、彼女達に恨みは無いわよ・・・でもね、そうはいかないの。彼女達を倒し、何人か魔界に連れ帰らなければ・・・私達の大事な人の命に関わるの！」

「そ、そんなあ!？」

（ハアハア・・・わ、私達の大事な人の命!?!）

ビートは、荒い呼吸をしながらも、リリスが言った大事な人の命と言う言葉が気になった。リリスはリコに手を差しだし、

「さありこ、私の手を掴んで立ちなさい。立たないと、無理矢理移動させるわよ?」  
「嫌よ!」

リコは、リリスの言葉に首を振って拒絶した。リコにとって、プリキュア達は大切な友人となっていた。その時、鳥の鳴き声が聞こえたかと思うと、ピーちゃんが羽ばたきながら現われた。ピーちゃんは木の上に止まり、心配そうにプリキュア達を見つめた。ピーちゃんに気付いたシブレ、コフレ、ポプリ、キャンディ、グレルとエンエンは、ピーちゃんが止まった木の下に慌てて集まり、

「ピーちゃん、大変ですっ!」

「ブロッサム達が、大変何ですう!」

慌てるコフレとシブレを見たピーちゃんは、木の上から降りてシブレ、コフレ、ポプリ、キャンディの話に耳を傾けた。ちょうどそこへ、ピーちゃんの後を追って、ハミイとアコが駆けて来た。

「ピーちゃん、どうしたニヤ!？」



「何か調べの館で……エツ!」

やって来たアコは、思わず立ち止まり、目の前の光景に呆然とした。目の前では、サキュバスのリリースに翻弄され、荒い呼吸をしながら横たわって居たり、座り込んでいるプリキュアの仲間達が居た。ハミイは妖精達に合流し、アコはプリキュア達に話し掛けた。

「バッドエンドプリキュアまで!?!みんな、一体どうしたの?」

『ハアハアハア』

アコは、バッドエンドプリキュアまで居る事に驚いたものの、荒い呼吸を続ける一同の様子を見て表情を険しくした。

「一体、みんなに何が起こったの!?!」

「アラア!?!もう一人お客さんかしら?」

やって来たアコに気付き、振り返ったリリースの口に微笑が浮かんだ。呼吸を整えたメロディは、潤んだ瞳でアコを見ながら、

「ハアハア……ア、アコ、逃げてええ!」

「エツ!?!」

メロディに逃げるように言われたアコは動揺した。メロディの言葉を素直に受け取れば、微笑を浮かべるリリースと、ブルーの動きを牽制しているニクスの二人を相手に、

バッドエンドプリキュア達も加わったプリキュア達は、戦闘不能状態にされたと受け取れた。リリスは、動揺するアコに近付くと、舌なめずりをしながら、

「フフ、あなたもプリキュアなのかしら!？」

「やはりあなたがみんなを!?! そうよ、私は・・・ドドリー!」

アコがドドリーを呼ぶと、ドドリーがアコのキュアマジューレに装着された。アコはキュアマジューレを構えると、

「レッツプレイ!プリキュア!マジューレーション!!」

「爪弾くは、女神の調べ!キュアマミューズ!!」

アコがキュアマミューズに変身し、リリスと向かい合った。ブルーは、ミューズが現われた事でホツとしたものの、リリスのエロチックアイを受ければ、ミューズとて只では済まないかも知れないと思った。

「ミューズ、その者の妙な技に気を付けるんだ!他のプリキュア達は、その者が放った妙な技で、精気を吸い取られた」

「神様・・・精気!?!何の事だか良く分からないけど、気を付けるわ」

「ウフフフ、ダメよ・・・もうあなたは、私の手の内に居るんだから」

「エッ!?!」

「さあ、あなたはどんな声で悶えてくれるのかしら?受けてみなさい、エロチックアイ

！」

リリスは、ウインクしながらミューズ目掛け投げキッスを放ち、思わずミューズが呆然とした。ミューズの頭上に、巨大な目が現われると、地面に魔方陣の紋章が浮かび上がり、地面からピンク色の輝きがミューズを覆った。ミューズは動揺しながら、ピンク色に染まった周囲を見渡し、

「何!?これは?」

『ミューズウウ!』

自分達と同じように、ミューズ目掛け放たれたエロチツクアイを見て、プリキュア達がミューズの身を案じて叫んだ。リリスは、勝利を確信したのか笑い声を上げ、

「ウフフフ、さあ、あなたの声を……エツ!」

リリスは、目の前のミューズを見て二度三度瞬きし、思わず右手で目を擦った。何故なら、目の前では呆然としたミューズが、首を傾げながら平然と佇んで居たのだから：「これが……どうかしたの?」

『アレエ!?!』

プリキュア達は、平然としているミューズを見て、思わず全員首を傾げた。リリスは信じられないといった表情を浮かべるも、直ぐに我に返り、

「わ、私とした事が、つい力を加減してしまったようね……さあ、最大威力のエロチツ

クアイを受けてみなさい！」

真顔になったリリスは、再びミューズにウインクし、投げキッスをして渾身のエロチックアイを放った。ミューズの身体を包んだピンクの輝きが、一層激しく輝いたものの、ミューズは二度三度瞬きし、再び不思議そうに首を傾げた。

「だから・・・これが何なの!?!」

「エツ!?!」

「ミューズ、凄いくるウウウ!」

リリスは思わずポカンと口を開き、妖精達は、エロチックアイを受けても平然としているミューズを見てはしやぎ、キャンデイは嬉しそうに声援を送った。リリスは我に返るも、激しく取り乱した。

「ど、どういう事よおお!?何であなたには、私のエロチックアイが効かないのおお?」「そんなの、私が知る訳無いでしょう?」

リリスには、何故ミューズにだけ、エロチックアイが効かないのか理解出来なかった。ミューズは、平然とエロチックアイのテントリー内から出ると、リリスに身構えた。

（何故あの子には効かないの!?!・・・ハッ!?!）

リリスは、ある事に気付いた。

エロチックアイには、最大の弱点があつた事を・・・

「あ、あなたまさか……まだ初潮が来てないの？」

「初潮!？」

リリスがミューズに聞いた初潮とは、女の子が初めて経験する月経（生理）の事だった。エロチックアイは、対峙した女性の子宮を刺激し、性的欲求を増幅する技ではあるが、初潮を迎えていない少女に対しては、その効果は無かった。それは、リリスの中に潜在的に眠る、清純に対する憧れが、エロチックアイの効力を無効にしているのかも知れなかった。

「そ、その反応……まだ来てないのね？」

リリスは、まだ荒い呼吸を続けるプリキュア達を見ると、動揺しながら一同を指差し、「ちよつとあなた達いい、まだ初潮も来てないお子様を、プリキュアとして戦わせて良いわけえ？」

「お子様じゃ無いわよ！」

「お子様よ！エロチックアイが効かないのが何よりの証拠……何て事なの？まさかプリキュアの中に、初潮も来てないお子様が居た何て……」

「さつきからお子様って……」

ミューズは、リリスに子供扱いされた事で頬を膨らませた。ミューズにとって、子供扱いされる事は一番嫌な事だった。

「何だかよく分からないけど、ミューズは子供だから、そいつの攻撃が効かないんだね？」

「良いぞ、お子様バンザイ！」

少し身体の火照りも治まったメロデイとマリンは、ついミューズの事を子供扱いしてしまい、ミューズの目が光った。ミューズは、無言のままメロデイとマリんに近づくと、二人をゴロゴロ転がして、先程自分が受けたエロチックアイのテントリー内に入れた。

「アアアン、ヤ、ヤメてええ！オシッコ・・・漏れちゃうううう!!」

「もう子供扱いしない？」

「アアアン、しませええん！」

メロデイとマリンは激しく悶えながら、ミューズを子供扱いしない事を誓い、ミューズは二人を再びゴロゴロ転がし、仲間達の下に戻した。

「オシッコ洩らすかと思っただあああ」

半泣き顔のマリンとメロデイが、グツタリしながら呟くと、リズムとブロッサムは呆れ顔で、

「二人共、何やってるの？」

「マリン、メロデイ、ミューズを怒らせてどうするんですかあ？」

放心したようにグツタリするマリンとメロデイを、他の一同が呆れ顔で見つめた。リ

リスは、ミューズが初潮を迎えていないプリキュアだと知り、激しいショックを受けていた。今まで自分に向かってくる者の中で、初潮を迎えていない人間の容姿をした人物は、初めてだった。

(まさか、初潮も来てない女の子が、プリキュアの中に居る何て……)

「何だかよく分からないけど、今がチャンスね」

ミューズは、動揺するリスの隙を付いた。

「今度はこっちの番よ、シ、の音符のシャイニングメロディ！プリキュア！シャイニングサークル!!」

ミューズは、まるで分身の術を使ったかのように、四人の幻影を出すと、五芒星のよなサークルを描き、リスの動きを封じた。先程ミューズに対して、最大級のエロチックアイを放った事で、リスの力は半減していた。シャイニングサークルを振り解こうと試みるも、逆に疲労を早める結果になった。

「クッ!?しまった?」

「リス!?!」

ミューズによって動きを封じられたリスに気付き、ニクスはブルーに背を向けて、リスの援護に向かおうとするも、その前によくやく少し力を取り戻した、十人の闇のプリキュア達が立ち塞がった。ニクスは眉根を顰め、

「あなた達、何の真似かしら!？」

「ハアハア、行かせないわよ」

「さつき受けた屈辱、あんたで晴らして上げるよ!」

ダークドリームと、バッドエンドマーチの声を合図にしたかのように、十人の闇のプリキュア達が、ニクスに対して身構えた。ブルーは、そんな闇のプリキュア達を心配そうに見つめながら声を掛け、

「君達、戦えるのかい!？」

「ここは私達が、あなたは他のみんなを」

「すまない」

ダークミントの言葉に頷いたブルーは、闇のプリキュア達に後を任せ、ブラック達の下へと駆け寄った。

（このまま少し体力を回復させれば、エロチックアイを使わなくても、あのお嬢ちゃんだけなら・・・）

相手がミューズ一人なら、少し体力を回復させれば、苦手な肉弾戦でも圧倒する事は出来ると判断したリリスだったが、背後から異様なプレッシャーを感じて、思わず振り返った。リリスの視線には、ブルーの加護を受け、蹠踏めきながらも立ち上がった、ブラック、ホワイト、ムーンライト、ブルーム、ドリーム、ピーチを見て、思わず鳥肌が



立った。何故なら、6人の背後からは、ゆらゆら揺らぐ炎のようなオーラが、メラメラ燃えていたのだから……

「ちよつ、ちよつとお……暴力反対!」

リリスは、幻惑系の攻撃を得意としていたが、格闘に関しては苦手な方だった。ましてや、ミューズに放った最大級のエロチックアイや、ミューズに拘束された事で、体力を消耗していた。六人のプリキュアから発せられる威圧感に、リリスは暴力反対と訴えた。

「「「「「……」」」」」

だが、無言のまま一歩一歩近付いて来る、六人のプリキュアの迫力に、さしものリリスの顔は引き攣っていった。

「エツ、エエエと、これには深い訳があつて……」

「「「「「……」」」」」

リリスが再び話し掛けるも、まるで耳に届かないとばかり、六人のプリキュアは無言のまま更に近付いて来た。ミューズは肩を竦めると、リリスに聞かせるかのように、

「アアア、みんな怒ってるよ……私、知くらない」

ミューズは、リリスに舌を出してその場を離れ、リリスの顔からは大量の汗が流れ出した。

（やっぱり・・・怒ってるううう!?!）

数秒後、リリスの悲鳴が響き渡った・・・

2、闇のプリキュアVSマーメイドのニクス

ブラック、ホワイト、ムーンライト、ブルーム、ドリーム、ピーチによつて、お仕置きされたリリスは、目をグルグル回しながら気を失った。

「リリス！よくもおおお・・・」

「ハアハア、それはこちらのセリフよおお！ダークネススター!!」

ニクスに対して身構える、ダークプリキュア5とバッドエンドプリキュア達だったが、エロチックアイを受けた疲労がまだ見て取れた。ダークドリームは、自らの気を高めようとするかのように叫び、ダークネススターでニクスに攻撃を仕掛けるも、ニクスは難なくダークネススターを回避した。

「人魚のくせに、空を自在に飛ぶ何て・・・」

「フフフ、人魚が宙を泳ぐ事が不思議かしら？私に取つて、空中も海の中と一緒・・・こういう事も出来るのよ？バキューム・サイクロン！」

ニクスは、手のひらを合せて右の腰に当て気を高めると、一気に前方に突きだした。ニクスが繰り出した見えない攻撃に、9人の闇のプリキュアは全く反応出来なかったも

の、只一人バッドエンドマーチは、瞬時にバッドエンドシュートを前方に蹴り上げた。バッドエンドシュートは、掃除器に吸い込まれたかのように、激しく回転をしながら消滅した。

「やっぱりそうか・・・お前ら、気をつけな！こいつはあたし同様、風を自在に操る事が出来るようだ」

「へえ、私の攻撃に対応出来るとは・・・流星はプリキュアと言ったところかしら!？」  
(他の奴らじゃ、今はまだこいつの技に対応出来ないようだな・・・)

バッドエンドマーチはそう判断した。自分がサポートに回らなければ、ニクスの攻撃に対応する事は無理だと判断した。ブラックは、苦戦している闇のプリキュア達に気付くと、

「みんな、私達も加勢するよ」

「大丈夫、ここは私達に任せて」

「ブラック先輩達は、そのサキュバスを見張ってて」

「もしまたさっきの技を受けたら、ミューズ以外本当に全滅しかねないわ」

ブラックが加勢しようとするのをダークアクアが制止し、リリスを見張っているようにバッドエンドハッピーとバッドエンドビューティに頼まれた。ブラック達は頷くと、『分かったわ』

それを見たバッドエンドマーチは、闇のプリキユア達に声を掛け、

「あたしがサポートに回る！あんた達は、あの人魚を」

『OK！』

バッドエンドマーチに同意した一同は、ニクスの動きを制限させようとするかのよう  
に、一斉に四方に散った。ニクスは目で一同の行動を追い、頭の中でどう動くか素早く  
イメージを浮かべた。

「フッフ、私の動きを制限しようと考えているのでしようけど・・・エアーウエーブ！」  
ニクスは両腕を水平にすると、ゆっくり上下に動かし始めた。ニクス目掛け、四方か  
ら近付こうとした闇のプリキユア達だったが、まるで波に飲まれたかのように、宙を回  
転しながら押し戻された。

（い、息が・・・）

エアーウエーブに飲まれた一同は、呼吸する事が出来ず、皆苦しそうな表情を浮かべ  
た。それに気付いたホワイトは顔色を変え、

「バッドエンドマーチ！他のみんなは、呼吸出来ないようだわ!!」

「何だ?!」

バッドエンドマーチは、ホワイトの助言を受け、慌てて力を加減したバッドエンド  
シユートを放ち、闇のプリキユア達に当て、エアーウエーブから脱出させた。ゴホゴホ

咳き込みながらも、体勢を立て直した闇のプリキュア達に、バッドエンドマーチが合流した。

「無事か、お前ら!?!」

「何とかね・・・ゴホッ・・・バッドエンドビューティ、耳を貸して」

「何の用!?!」

ダークアクアは、バッドエンドビューティに何か囁くと、二人はニクスをキツと見つめた。ダークアクアが宙に飛び上がると、

「お返しよーダークアロー!!」

ニクスに対して、アクアのサファイアアローに似た黒き水の矢、ダークアローを放つも、ニクスは口元に笑みを浮かべると、

「この私に、水属性の攻撃が効くと思って居るのかしら?」

ニクスは、水の技など避けるまでも無いと、口元に笑みを浮かべたままその場に留まった。

「エエ、思ってた居ないわ・・・でも」

「こういう攻撃も出来るのよ・・・バッドエンドブリザード!」

ダークアクアの言葉を引き継ぎ、バッドエンドビューティがダークアロー目掛けバッドエンドブリザードを放つと、ダークアローは黒き氷の矢となって、ニクスに向かって

勢いを更に付けながら飛んで行った。

「しまった!？」

油断したニクスは、咄嗟に二人の連携技を躲し続けるも、一本の黒き氷の矢が、ニクスの尾鰭を擦った。

「クッ!？」

ニクスの顔が思わず苦悶に歪むと、ニクスの黄緑色した長い髪の色が、徐々に赤く変化していった。

「やってくれたわねえ・・・」

（あいつの周辺の空気が変わった!?!）

ニクスから、殺気を帯びた気を感じたバッドエンドマーチは、思わずゾツと鳥肌が立った。その異変は、他の一同にも感じられたが、バッドエンドピースは、そんなニクスを生意気と見て取り舌を出すと、

「ベエ!そんなハツタリ効かないよおだ・・・バッドエンド・・・サンダー!!」

バッドエンドピースは、バッドエンドサンダーを放ったものの、ニクスは高速の動きで攻撃を躲しまくり、その視線にバッドエンドピースを捉えた。

「さあ、踊りなさい!ブラッディ・ダンス!!」

ニクスは、バッドエンドピースに狙いを付け、高速の動きから尾鰭を使った乱舞を、

バッドエンドピースに浴びせ続けた。

「キヤアアアアアア！」

ニクスのブラッディダンスを受け、バッドエンドピースの身体が、縦横無尽に吹き飛ばされる姿は、正に踊らされているかのようだった。次第にバッドエンドピースの唇が切れ、血が滴り落ちた。尚もニクスは、バッドエンドピースにブラッディダンスを浴びせ続け、

「さあ、そのまま自らの血で、血の海に沈みなさい」

「アウウウウ……」

「[[[[ピース！]]]]」

「このままじゃ……. . . . . ダークネス・ウィップ！」

バッドエンドハッピー、サニー、マーチ、ビューティが、バッドエンドピースの身を案じ、ダークレモネードは、咄嗟にダークネスウィップを放って、バッドエンドピースの身体に絡めて、バッドエンドピースを引き寄せた。九人の闇のプリキュアは、バッドエンドピースを庇うように、円になってニクスからの攻撃に備えた。

「あ、ありがとう……. . . . . もう、完全に怒ったからねえ！」

バッドエンドピースは、一同に礼を述べながらも、ニクスに視線を向けると大きく頬を膨らませた。ニクスが再び、バキユームサイクロンの構えを取ったその時、

「ダアアアアアアアアア！」

「チッ！」

雄叫びと共に急降下してきたキュアブラックの蹴りを、ニクスは舌打ちしながら回避した。

「「「「ブラック!?」」」」

「「「ブラック先輩、どうして!?」」」

他のプリキュア達と共に、リリスを見張っているように頼んだキュアブラックが加勢し、闇のプリキュアが驚いた表情を見せるも、ブラックは自分の服を指差し、

「まあまあ、私もブラックだからさ・・・ダアアアア！」

ブラックは、闇のプリキュア達にウインクすると、雄叫び上げながらニクスに向かって行くも、ニクスはブラックの攻撃を回避し、今度はブラックをブラッディダンスの餌食にしようと一旦距離を取った。

「ブラック先輩!・・・バッドエンドシャワー!」

「ダークネスプラズマ!」

それに気付いたバッドエンドハッピーとダークミントが、そうはさせまいとニクスに攻撃し、ニクスは二人の攻撃を回避した。ブラックは、闇のプリキュア達に合流すると、一同に話し掛け、



「私があいつに攻撃を仕掛けるからさ、みんなはその隙に……」

「でも、あいつ素早くて……」

「本当、頭来ちやう！」

バッドエンドハッピーが思わず呟くと、バッドエンドピースも同意して頬を膨らませた。ダークルージュはニクスを見つめながら、

「だったら、あいつが避けきれない技を放てば良いんじゃない？」

「そうね、私達のダーク・ローズ・エクスプロージョンと、あなた達が言ってたバッドエンドバーストなら……」

「確かに……」

ダークアクアの言葉に、バッドエンドビューティも同意した。ダークドリームは一同を見渡すと、

「そうと決れば……みんな、行くよ！」

『OK!』

ダークドリームの言葉に一同が同意し、先ずブラックが行動に出た。

「ダダダダダダダ！」

ブラックは雄叫び上げながら、ニクスに怒濤の連続パンチを浴びせるも、ニクスはブラックの攻撃を躲し続けた。だがニクスは、次第に焦りだしていた。

（何!?パンチの勢いが、どんどん加速してるの?）

ブラックのパンチのスピードが徐々に上がり、ニクスは躲しきれなくなってきた、両手でガードし始めた。それを見た十人の闇のプリキュア達は、それぞれ動き出した。ダークプリキュア5は目を閉じ、精神を集中させ、

「「「我らがマスター!ダーククイーン・・・私達に力をお貸し下さい!」」」

そんなダークプリキュア5の心に、気高き声が聞こえてくる。

（親愛なるダークプリキュア5!例え離れていようと、あなた方の声は私に聞こえています!!さあ、あなた方に力を授けましょう・・・）

ダークプリキュア5の頭上が輝くと、五人の手に黒いフルーレが装着される。五人は軽くフルーレを振ると、

「5つの闇に!」

「「「希望を乗せて!」」」

「「「プリキュア!ダーク・ローズ・エクスペロージョン!!」」」

五人のフルーレの先端に、黒い薔薇が姿を現わした。一方のバッドエンドプリキュアも右手を合わせ、

「「「ドラゴンよ!私達に力を!!」」」

バッドエンドプリキュア五人の思いが一つになった時、五人の身体から黒いオーラが

沸き上がった。黒いオーラは竜へと代り、竜から放たれた黒い光が、バッドエンドプリキュア五人の手に注がれた。五人の手には、先端に竜の顔を象ったロッドが握られ、見る見るバッドエンドプリキュアの姿を変えていった。

「ダークプリンセスハッピー！」

「ダークプリンセスサニー！」

「ダークプリンセスピース！」

「ダークプリンセスマーチ！」

「ダークプリンセスビューティ！」

「……バッドエンドプリキュア！ダークプリンセスフォーム!!」……

バッドエンドプリキュアが、ダークプリンセスフォームに変化すると、思わずダークプリキュア5は、口元に笑みを浮かべた。

「轟け！絶望の闇!!」

「……堕ちよ！闇の世界へ!!」……

「……プリキュア！バッドエンド・バ……スト!!!」……

巨大な闇の竜の背中に乗ったバッドエンドプリキュア達は、巨大な闇の竜の口から黒いブレスを放った。ダークプリキュア5は、バッドエンドプリキュアと呼吸を合わせるように、

「ハッ!!」

五人がフルーレを前に突き出すと、フルーレから放たれた黒い薔薇が合わさり、巨大な黒薔薇となって、ニクスに向かって飛んでいった。これには、身体の火照りも治まったプリキュア達も、思わず目を見開いて驚いて居た。

「す、凄い、ダークプリキュア5と、バッドエンドプリキュアが同時に・・・」

「え、ええ、ダークローズエクスペーションと、バッドエンドバーストを同時に放つ何て・・・」

ローズに話し掛けられたアクアは、思わず呆然とした。サニーは少し変顔を浮かべながら、

「あんなん、躲せへんやろう?」

「あれをまともに受けたらと思うと・・・ゾツとするわね」

ルージュは思わず背筋がゾツとなり、今は味方で良かったと改めて感じていた。ハッピーは、目を輝かせながら、

「私達のロイヤルレインボーバーストと、バッドエンドプリキュア達みんなのバッドエンドバーストを、何時か一緒に放って見たいなあ・・・」

ハッピーの脳裏に、そんな姿が目に浮かんだ・・・

後に悲しみの中で、それは現実となるのだが、この時のキュアハッピーには知る由も

無かった・・・

闇のプリキュア達から放たれた合体技は、ニクスを大いに動揺させた・・・

「な、何!?何が起きたの?」

「彼女達を甘く見ない方がよいよ!これが彼女達の本当の力!!」

「彼女達の、本当の力!?!・・・クツ!?バキウム・サイクロン!」

ブラックは、そうニクスに言い残し、ニクスから距離を取った。ニクスは咄嗟にバキウムサイクロンを放って、両チームの技を吸い込み、無効化しようと試みた。闇のプリキュア達が放った技が、ニクスのバキウムサイクロンに吸収されていくものの、ニクスの顔からは血の気が引いていった。

(きゅ、吸収仕切れない!?!こ、これ程の威力なの?)

ニクスのバキウムサイクロンを打ち破り、ダークローズエクスプロージョンと、バッドエンドバーストが、動揺するニクス目掛け突き進んだ。

(クツ!?!このままじゃ・・・)

ニクスは、咄嗟に周囲にエアウエーブを放ち、空気を歪めて直撃こそ免れたものの、その威力の前に大きく吹き飛ばされた。

「キヤアアアアアアア!」

(ニクス!?)

「二、ニクスさああん！」

ニクスが悲鳴を上げながら、激しく地上に叩き付けられ、ニクスの赤く染まった髪が、元の黄緑色した色に戻った。ようやく気付いたリリスと、動揺したリコは、思わずニクスの身を案じて叫んだ。

「イエーイ！」

「やったね！」

「エエ」

バッドエンドピースが右手を挙げ勝利を喜び、バッドエンドハッピーは、ダークドリームの前に両手を突き出すと、ダークドリームも両手を前に突き出し、両者はハイタッチをして互いに笑みを浮かべあつた。そんな三人を、他の七人の闇のプリキュアとキュアブラックは、笑み混じりに見つめた。

「ま・・・まだ・・・よ」

『エツ!』

プリキュア達は思わず驚きながら、か細い声が聞こえた出所を見た。そこには、今激しく地上に激突したニクスが、額から血を流し、蹠踉めきながら再び上体を起こして居た。

「ま、まだ・・・勝負は・・・付いてない」

そんなニクスの側に、蹠蹠めきながらソードが近付いて行った。アン王女は顔を顰め、

「ソード、どうしたのです?」

「まだあの変な攻撃のダメージ残ってるのかなあ?」

「迂闊に近付いたら危ないわよ」

ピースが不思議そうに首を傾げ、イーグレットがソードに忠告したその時、ブルーは一同に知らせるようにソードを指差し、

「違う! あれは、リリスだ!!」

『エエエ!』

「エエ、私達は・・・負けられない」

プリキユア達がブルーの言葉に驚く中、ニクスの言葉に同意するかのようになり、ソードの姿が瞬時にリリスに代り、リリスもニクスの側に蹠蹠めきながら歩いて来た。

「エツ!? 何時の間?」

「今までここで気を失ってたのに?」

気絶していた筈のリリスが起き上がった事で、ハッピーとブライトが思わず背後を振り返ると、リリスに何かされたのか、目をグルグル回しながらソードが気を失っていた。

「ソード!」

「大丈夫ですか？」

アン王女とルミナスが、心配そうにソードに声を掛けると、ソードはハッと我に返り、「す、すいません、油断しました。リリスが気付いたから、彼女を見た途端、急に目眩がして……」

一同の視線が、再びニクスとリリスに向けられた。合流した二人は、キツとプリキュア達を見つめると、

「『シーレイン様の為にも……私達は……負けられない！』」

（エツ!? シーレインの為? やっぱり、あの二人……）

ビートは、最早戦える身体では無いのに、気力だけで立ち上がって並び立ったニクスとリリスを見て、シーレインに何かあったと直感した。

「フン、あんなボロボロの二人、後は私達だけで楽勝だもん……ハッピー、サニー、マーチ、ビューティ、もう一回バッドエンドバーストで倒しちやおう」

「待つて! もう勝負は付いたでしょう?」

バッドエンドピースの提案を受け入れ、バッドエンドプリキュア達は、再びバッドエンドバーストを放とうとしているのに気付き、リコは慌ててバッドエンドプリキュア達を止めようとするも、バッドエンドプリキュアは、再びダークプリンセスフォームに変化していた。



「止めてええええ！」

リコが慌てて掛けだしたその時、リコの視線の先で、まるでニクスとリリスを守ろうとするかのように、一人のプリキュアがバッドエンドプリキュアの前に立ち塞がった。

『ビート!?!』

プリキュア達が驚く中、彼女達の視線に映ったのは、キュアビートだった・・・

「弾き鳴らせ、愛の魂！ラブギターロッド！」

ビートはラブギターロッドを取りだすも、バッドエンドプリキュア達は、バッドエンドバーストの体勢を止めず、

「轟け！絶望の闇!!」

「!!!」

「!!!」

「!!!」

巨大な闇の竜の背中に乗ったバッドエンドプリキュア達は、巨大な闇の竜の口から黒いブレスを、キュアビートとその背後に居るニクスとリリスに向けて放った。プリキュア達は、ビートの身を案じ絶叫した・・・

第百二十一話：ニクスとリリス（後編）

完

## 第二百二十二話：マザーラパーバ

## 1、和解

まるでニクスとリリスを庇うように、バッドエンドプリキュアが放った、バッドエンドバーストの前に立ち塞がったキュアビート、ビートは咄嗟にラブギターロッドを取りだし、ロッドを弾いて正面にバリアを張り、バッドエンドバーストを防ごうとしていた。ニクスとリリスは、そんなビートを見て呆然として居た。

「リリス、あなたあのプリキュアを、チャームで魅了したの?」

「しないわよ、そんな力も残って無いし……彼女、どうして私達を庇うのかしら?」

ニクスとリリスには、ビートが自分達を庇う理由が思い浮かばなかった。ビートは、襲い掛かったバッドエンドバーストの威力を直に感じて、その威力に脅威を覚えた。

(これがバッドエンドバースト……私の想像以上の威力だわ!?)

ビートの張ったバリアに、呆気なく亀裂が走り、ビートの額から冷汗が流れた。バッドエンドバーストが、今正にビートをも飲み込もうとしたその時、

「あんた達、もういいでしょう? 止めてえええ!!」

ブラックが絶叫し、その声に反応したバッドエンドプリキュア達は、咄嗟にバッドエ

ンドバーストの方向を変え、バッドエンドバーストは徐々に縮小して消え去った。  
「ハアハアハアハア」

荒い呼吸を続けるビートを、バッドエンドプリキュア達は険しい表情で見つめた。  
バッドエンドビューティは、ビートを詰問するかのように、

「キュアビート、どういうつもり？理由があるなら話しなさい」

「話によっちゃ、あいつら事あんたも敵と見なすよ」

バッドエンドビューティの言葉に同意し、バッドエンドマーチもビートを詰問するも、バッドエンドピースは舌を出し、

「元々敵だけどねえ」

「あんたは黙つとれ！」

「まあまあ」

二人を茶化するバッドエンドピースを、バッドエンドサニーが一喝し、バッドエンドハッピーが、そんなバッドエンドサニーを宥めた。ビートは荒い呼吸をしながら、

「ハアハア、もう・・・彼女達に戦う力は残って無いわ。それに、私は彼女達に聞きたい事があるの」

「」「聞きたい事!」「」「」

「どういう事？」

ビートはそう言いながら息を整えると、呆気に取られるバッドエンドプリキユア達とダークドリームを余所に、ゆっくり背後を振り返り、ニクスとリリスに近付いて行った。一同がビートの行動を見守る中、ビートはニクスとリリスの側に寄ると、二人に話し掛けた。

「ねえ、今あなた達、シーレインの為に負けれないって言ってたわよね？シーレインの身に、何かあったの？」

「あなたには関係無い事よ」

ニクスは、ビートの問い掛けを冷たくあしらったものの、ビートはそんなニクスを見ながら首を振り、

「ううん、関係あるわ。だって私達は・・・シーレインの友達だから」

「エッ!？」

ビートが発した、シーレインと友達だと言う言葉に、ニクスもリリスも驚きを隠せなかった。確かにシーレインは、プリキユアに敵意は無いとは語っていたが、友達になった事までは、ニクスとリリスは聞いては居なかった。カインに操られたアモンの事もあり、シーレインはあの後、直ぐ心を閉ざしてしまっただけだ。思わず顔を見合わせたニクスとリリスに、ビートは更に話し掛け、

「あなた達も、シーレインが一人でこつちの世界に来た事があるのは、知って居るわよ

ねえ？ 私達は、その時シーレインと友達になったの」

ニクスもリリスも、思わずビートの目を見つめた。澄んだ瞳をしていて、ビートが嘘を言っていない事は、二人にも直ぐに理解出来た。

「あなたのその目……嘘では無さそうね」

「でも、ダメよ……カイン様が見ているかも知れないのに、あなたには話せない」

ブルーは、ニクスとリリスの二人から、プリキュア達に対する敵意が、完全に抜けた事を悟り、自分達の居る周辺を、黄金の結界に包み込んだ。一同は、周辺を覆った黄金の結界を見渡していると、ブルーもニクスとリリスに話し掛け、

「これでそのカインという者は、今の君達を見る事も出来ないし、声を聞く事も出来ない」

「あなたは一体!?!」

ニクスとリリスは、ブルーの話を聞くも半信半疑だった。カインの実力を知って居る二人に取って、目の前のブルーが、カインを抑える力を持つとは思えなかった。ブルーは、そんな二人に微笑みながら、

「僕は……地球の神ブルー」

「地球の神!?!」

ブルーが自らを地球の神と名乗った事で、リリスは、ブルーにチャームが効かなかつ

た理由がハッキリ分かった。リリスは納得したかのように小さく頷き、

「そう、それなら私のチャームが、あなたに効かなかった理由も分かるわ」

「まさか・・・地球の神自ら現われる何て!？」

ニクスも、目の前に居るブルーが神だと知り、動揺を隠せなかった。ブルーは、ニクスとリリスを澄んだ目で見つめると、思わず二人は魔界の王ルーシエスの顔をダブらせた。ブルーとルーシエスは似ている訳ではなかったが、顔を見てみると、安心感を与えてくれる存在という面では、共通しているように二人には思えた。

「僕も君達の話に興味がある・・・みんなに話してくれないかな？」

「・・・・・・」

ブルーにも、話を聞かせて欲しいと言われたニクスとリリスは、地球の神ならば、魔界に居るカインの力を、押さえ込む事も出来るかも知れないと思い、互いに顔を見合わせる、小さく頷きあった。

「ニクス、プリキュア達がシーレイン様の友ならば、私達が拒む理由は無いわね？」

「そうね。分かりました、お話しします・・・」

リリスは話を始める前に、プリキュア達を見つめると、

「その前に、エロチックアイであなた方を辱めた非礼を・・・詫びさせて貰うわ」

「私もそうね・・・特にあなたには酷い事をしてしまったわね」

リリスはプリキュア達に、ニクスはバッドエンドピースに深々と頭を下げ、

「ゴメンなさい！」

『もう良いわ・・・』

「でも、もう二度とあの技は私達にしないでよ？」

プリキュア達は、苦笑しながらもニクスとリリスを許し、ピーチは念を押すように、エロチックアイを、二度と自分達にしないようにリリスに話し掛けると、リリスはさっきの事を思い出したのか、少し笑いながら、

「ウフフ、みんな中々良い声で悶えて居ただけだねえ？」

「う、うるさいなあ」

ブラックは、自分の恥ずかしい姿が目には浮かぶと、思わず変顔浮かべながらリリスを恨めしそうに睨んだ。リリスは思わず笑い、

「ウフフフ、残念だけどそうするわ」

「アハハハ、お願いよ？」

ピーチもそんなリリスを見て思わず苦笑した。バッドエンドピースは、少しゲスイ表情でニクスを見ると、

「お仕置きの特シャルバッドエンドサンダーで許して・・・イタッ！」

「ピース、また話をややこしくする気かあ？」

「ハア・・・全くあなたは・・・」

「だつてえええ・・・」

バッドエンドマーチに頭を叩かれ、バッドエンドビューティに溜息を付かれ、バッドエンドピースが涙目になる。そんな様子を見たリコは、プリキュア達とニクス、リリスが和解したようで、ホッと安堵するのだった。

「今・・・エロチック何たらとか言つてたカゲ？」

ふいに上空から見知った声が聞こえてきて、一同は思わず黄金の結界の上空を見上げると、パタパタ羽を飛ばたかせながら、魔王がゆつくり降りて来た。プリキュア達やアン王女、妖精達は、見る見る微妙な表情を浮かべた。ブラックは変顔浮かべながら、現われた魔王を指差し、

「ゲツ、魔王!?!どうしてここに?」

「お前達が俺を呼ぶ声が聞こえて・・・」

『呼んでない!』

『呼んでません!』

困惑した表情のプリキュア達が、一斉に呼んでないと否定するも、魔王は一同を見渡しなが

「なあなあ、今会話に出てたエロチック何とかって・・・何の事カゲ？」



『さあ?』

魔王にエロチックアイの事を知られたく無い一同が惚けるも、事情を知らないリリスは、

「あなたも妖精なの!?! エロチックアイは私の技で、受けた者の性的欲求を刺激し……」  
『ワアアアア!』

一同は、慌ててリリスの言葉を大声出して打ち消すも、魔王は、目をキラキラ輝かせながら、リリスに詰め寄り、思わずリリスが豊満な胸を強調するかのように仰け反った。

「な、何!?!」

「今……何て言ったカゲエエエ?」

魔王は、詰め寄ったリリスのスタイルを見て、見る見るスケベ顔を浮かべた。ベリーは、そんな魔王を見て嫌そうな表情を浮かべ、手で魔王を追っ払うようなジェスチャーをしながら、

「何でも無いわよ……シツシ」

「そうよ、魔王には関係無いわ」

パッションもベリーに同意するも、魔王は二人を無視し、更にリリスに話し掛け、  
「いや、今その乳娘が気になる事を言ってたカゲ」

『乳娘って何!?!』

「ち、乳娘!? そんな風に言われたの、初めてだわ……」

プリキュア達とリリスは、魔王が乳娘とリリスの事を呼んだのを聞いて、思わず呆気に取られた。思わずニクスはそんなリリスを見て苦笑を浮かべるも、魔王の視線が、今度は自分の身体を営めるように感じられ、思わず背筋がゾツとした。リコは隣に居るアン王女に話し掛け、

「ねえ、あの黒い妖精が、さっきアン王女が言つてた魔王なの?」

「はい……出来れば会わせたくはなかったのですが、あの子が魔王ですわ」

アン王女は、言いにくそうにしながら、魔王の事をリコに教えた。リコは改めて魔王の容姿を見ていると、魔王もリコに気付き、見つめ返した。魔王はリコを見ながらどんだんニヤニヤし、

（まだ若すぎるカゲなあ……でも母親は、アコのママみたいな美人かも知れないし、中々将来有望そうカゲ）

「何かイメージと全然違ったわ……もつと怖そうな姿をしているのかと思つた」

魔王は、リコを見て少し若すぎるとガツカリしたものの、リコの母を思わずイメージすると、将来有望だと思ひ込み、一方のリコは、魔王と呼ばれているからには、もつと怪物のような姿を想像していた。

「リコ、魔王の容姿に欺まされちゃダメよ。中身はスケベなおじさんみたいなものだか

ら」

「ス、スケベなおじさん!？」

ローズに忠告されたリコは、思わず目を点にしながら魔王を見つめ、ニヤニヤ笑みを浮かべる魔王を見てゾツとした。サニーはウンウン頷きながら、

「ホンマ、エロ魔王やからなあ・・・」

「まあ怒った時は、確かに魔王の雰囲気は持つて居るんですけどね」

「魔王が絵本の世界で暴走した時は、私達みんなまで戦つても苦戦したよね」

「あの時は大変でしたね。ハッピー、死んじゃったんじゃないかと思つたし・・・」

レモネードが、絵本の世界の事を思い出し、暴走した魔王の事を話すと、ピースとエコーも同意して、苦戦した事を思い出していた。十人の闇のプリキュア達は、皆驚いた表情で魔王を見つめながら、

『エツ!?!あなた達総掛かりで苦戦したの!?!』

「エロい目に遭わされたからやらないの?」

プリキュア達の実力を知つて居る闇のプリキュア達は、俄には信じられず、バッドエンドサニーは、エツちな被害を受けたからではと語るも、ブロッサムは首を振り、

「今では信じられないかも知れませんが、その頃の魔王は、エツチじゃ無かつたんです

よ」

『嘘!?!』

「ちよつと信じられないんですけど・・・」

ブロッサムの話は、闇のプリキュア達だけでなく、ソードとアン王女も信じられないといった表情を浮かべ、ソードは、魔王を胡散臭そうな目で見つめながら、思わず本音を呟いた。サンシャインは苦笑しながらハッピーを見つめ、

「絵本の世界で、魔王がお世話になった女の子を、みゆきが悲しませたと勘違いしてね」「ううん、結果的には、ニコちゃんを悲しませたのは事実だったし・・・でも、魔王に分かって貰えて良かった」

ハッピーはそう言いながら、魔王に微笑んだ。魔王も笑みを返しながらプリキュア達を見つめ、

「お前達の愛を受けて、俺は生まれ変わったカゲ!」

「こんな変態に生まれ変わるとは、誰も思ってた無いわよ」

ブラックは、悦な表情を浮かべる魔王を見て、変顔浮かべながら指差し、一同から苦笑が漏れた。魔王はハツと我に返ると、リリスに話し掛け、

「なあなあ、俺にもそのエロチッククアイっていう技を、是非見せて欲しいカゲ」

「見せてあげても良いけど・・・」

『ダメよ!』

慌ててリリースを止めるプリキュア達を見た魔王は、きつとその名の通りエツチな技だろうと想像すると、ニヤニヤしながらプリキュア達を見つめた。魔王の視線がピーチとメロディを捕らえると、

「じゃあ、こいつらで試すカゲ」

魔王がピーチとメロディを指さすと、二人は見る見る表情を強張らせながら、魔王目掛け勢いよく駆けだし、

「帰れえええ!!」

「カゲエエエエエ!!」

怒ったピーチとメロディが、息を合わせたように上空高く魔王を蹴り飛ばし、魔王は悲鳴を上げながら、星となつて消え去つた。ピーチとメロディは、頬を膨らませながら、

「全く、私達を何だと思つてるのよ」

「本当・・・もうあの技は懲り懲りだつて言うのに」

「全く、懲りないねえ・・・」

「ピイイ・・・」

ルージュが呆れたように眩き、ピーちゃんは、そんな魔王を見て呆れたように溜息を付いた。リコ、ニクスとリリースは、目を点にしながら上空を見上げると、

「行っちゃった!?!」

「何だったのかしら？」

『気にしないで！』

一同は、魔王の事は忘れて良いからと、三人に話した。ニクスとリリスは、気を取り直して、プリキュア達とブルー、リコやアン王女に、リコを利用して人間界に来た理由を語り出した・・・

「人間界から戻ったシーレイン様は、あなた達プリキュアには、魔界と戦う意思は無いと、ハッキリ私達に伝えたわ」

「でも、カイン様とアベル様は、ルーシエス様の名を出し聞き入れなかったの」

「お二人は、シーレイン様がルーシエス様の命に背いたとして、処刑するかどうか私達に決を採ったわ：：でも、私やリリス、ベレル様達反対票が上回り、シーレイン様は、ルーシエス様が住む、黒き塔の最下層に幽閉されたの」

「シーレインが・・・」

ニクスとリリスの言葉は、そこで一旦言葉が途切れ、ビートも沈痛な表情を浮かべた・・・

ニクスとリリスの脳裏に、アモンに裏切られ心を閉ざしたシーレインの痛ましい姿が、思わず目に浮かんだからだった。少しの間を置き、再び二人は話し始め、

「それから暫くして、私とリリスは、カイン様に呼び出されたわ。そこでカイン様の口か

ら、ルーシエス様の命令で、シーレイン様の処刑が決った事を告げられたの」  
『エツ!?!』

思わずプリキュア達は驚いた。今二人は反対票が上回って、シーレインは幽閉されたと言っていたのだから……

「私達も驚いたわ……処刑は多数決で否決されたのに、カイン様から、急にルーシエス様の命令で、処刑が決ったと告げられたのだから」

「そこで私とリリスは、シーレイン様の処刑だけは、何とか免除して欲しいとカイン様に訴えたの」

「カイン様は、シーレイン様を処刑しない代りに……あなた達プリキュアを倒し、何人かを魔界に連れ帰る事を、私達に条件として出されたわ」

「でも私とリリスは、プリキュアが何所に居るか何て分からなかった……そこでカイン様は、嘗て魔法界にもプリキュアが居た事を突き止め、魔法界の人間を利用すれば、プリキュアと出会えるかも知れないと私達に告げたの」

「そこで私達は魔法界に向かい、リコ……あなたと出会い、利用させて貰った。今では申し訳無いと思っているわ」

「ゴメンね……リコ」

「ううん、謝ってくれたら、もういいの」

リコはそう二人に告げると、ニッコリ二人に微笑んだ。一時はどうなるかと思つたものの、ニクスとリリスは、プリキュア達と和解した事で、リコの心は晴れやかだった。「ありがとう・・・リコ。でも結果的には、カイン様の言う通り、リコはプリキュア達と出会つた・・・それが何を意味するのは、私にもリリスにも分からないけど・・・」

「そうね」

そう言うのと、ニクスとリリスは、リコの顔を見ながら、リコとプリキュアが出会つた事は偶然だったのか、何かの意味があつたのか思案すると、突然ブルーが話し出した。

「それはおそらく・・・マザーラパーバの導きかも知れないね」

『マザーラパーバ!?!』

その場に居た一同は、初めて聞く名前に全員首を傾げた。ブルーは一同の顔を見渡し、

「ここに居るみんなは、知らなくても当然かも知れないね・・・君達二人の話の腰を折るようだけど、折角の機会だし、ここに居るみんなにマザーラパーバの事を話そう。ここにプリキュア、魔法界と魔界の関係者、そして妖精達が居るのも、何か大いなる意味があるように、僕には思えてならない」

「妖精さんは、一人帰っちゃいましたけど・・・」

「あれは忘れて良いから」



リコが空を指差しながら、魔王が強制的にこの場から帰った事をブルーに告げると、ブラックは背後からリコの右肩に手を置き、首を左右に振りながら、魔王の事は忘れて良いからと告げた。ブルーは更に一同に語り掛け、

「これから話す事は、プリキュアみんなの中でも、特にムーンライト達や、ブルーム達には、関係ある話何だ」

『エッ!?!』

「どういう事でしよう?」

ブルーム達とプロツサム達が驚きの声を発し、ムーンライトにも全く想像出来ず、思わずブルーに問うも、ブルーは口元に笑みを浮かべながら、マザーラパーパについての昔話を始めた……

## 2、ブルーの昔話

ブルーは黄金の結界の中で、光と闇のプリキュア達、妖精達、リコとアン王女、そしてニクスとリリスをゆっくり見渡し、

「君達の中で、何人かには、一万年前の話をした事があると思うけど、今から話す事は、更に昔の話何だ……」

ブルーが話し始めた昔話……

地球という星が誕生し、やがて生命が産まれた・・・

生命は進化を遂げ、やがて知能を得た・・・

だが、知能を得た事で、生命は争いを始めた・・・

まるで、闇の記憶を引き継いだかのように・・・

「まだ僕は若く未熟だった。僕は、争い続ける者達に嫌気がさしてしまった。そこで僕は、そんな荒れた心に憩いを与えようと、一粒の愛の種をこの星に植えた。そして僕は、直接この星に干渉する事を止め、この星に生きる者達を陰ながら見守る事にしたんだ。やがて僕が植えた愛の種は芽を出し、まるでこの星の生命を見守ろうとするかのよう

に、成層圏をも越える大樹となったんだ」

「せ、成層圏を越える大樹!?!」

「木ってそんなに大きくなるものなのかしら?」

ブルームとベリーが思わず驚きながら言葉を発し、ブルーは小さく頷くと話を続け、「そんな大樹に、沢山の花が咲き、地上に沢山の花の種を運んだ。やがてそれらが芽を出し、花を咲かせ、地上に花が覆いしげる光景は、花の海のようなだった。この星に住む者は心を惹かれ、大樹の側で暮らし始めた。まるで花の海のようなその場所にね」

「花の海ですか? 一度見て見たいですう」

ブロッサムは、瞼にそんな場面を浮かべ、目をキラキラ輝かせた。ブルーは目を閉じ、

花の海に覆われた地球を思い浮かべた。

「僕は、大樹にも生命が宿った事を知った。それが後に、あまねく生命の母と呼ばれる事になるマザーラパーパ。」

『マザーラパーパ……』

一同は、思わずオウム返しのように、先程聞いたマザーラパーパの名を呟いていた。光と闇のプリキュア達も、リコやアン王女も、妖精達も、そして、ニクスとリリスさへも思わず呟いていた。

「そう……地球の民にとつては、彼女の方こそ神と呼ぶのに相応しいかも知れない」  
ブルーはそう言うと、静かに目を閉じて、当時の光景を睨に思い描いていた。マザーラパーパの容姿は、白緑色をした長い髪をしていて、赤いバラと緑色の葉っぱを飾った、神々しい白のワンピースを着て居た。両肩にはピンクのバラのような花が、頭部の両側には、白い花の髪飾りを付けていた。その巨大な姿は、正に大樹に咲く花の化身のようだった。

「マザーラパーパ……地球の神も認める女神のような存在」

「どんな人だったんだろうねえ？」

ウィンディがポツリと呟き、パインもブルーが認めるマザーラパーパの存在が気になつていた。

「彼女は、この星に住む者達に取って、正に母のような存在だった。地球の民達は、彼女の事をこうも呼んで居た・・・母なる樹とね」

『母なる樹・・・』

マザーラパーバの魂が宿る巨大な大樹、その周辺を花の海が覆い尽くし、そこには、人も、動物も、昆虫も、妖精も、精霊も、幻獣も、魔族さへも、マザーラパーバに導かれるように、平和に暮らしていた。そんな地球に住む民達を、マザーラパーバは慈愛を込めて見守って居た・・・

「だが・・・そんな平和を脅かす存在が、この星に迫っていたんだ」

ブルーはそう言うのと、どんどん表情を強張らせた。ドリームも瞬時に表情を険しくしながら、

「平和を脅かす存在!？」

「大いなる闇の事ですか?」

ルミナスの脳裏には、嘗てブルーに聞いた、大いなる闇の事が直ぐに頭に過ぎった。ルミナスが確認するようにブルーに問うと、ブルーはゆっくり首を振った。

「いや、大いなる闇が現われる遙か昔の事、その者の名は・・・デウスマスト!」

『デウスマスト!?!』

一同は、驚いたようにブルーの言葉をオウム返ししていた。ブルーは小さく頷き、

「そう．．．ある星はデウスマスに飲み込まれ、ある星は軌道を変えられた。この地球と兄弟星であった惑星レッドもその一つ．．．」

「惑星レッド!?!」

「地球と兄弟星ってどういう事!?!」

ホワイトは、初めて聞く星の名に首を傾げ、ブライトは興味深げにブルーに聞いた。ブルーは、一瞬悲しげな表情を浮かべ、

「地球は．．．惑星レッドと共に生まれた二重惑星だったんだ」

『エエエエ!?!』

「地球は昔、二重惑星だった!?!．．．凄いわあ」

地球が、惑星レッドと共に生まれた二重惑星だったと聞き、一同は驚きを隠せなかった。学校の授業では決して教わらない、地球誕生に関係した話を、今ブルーはさらっと一同に伝えたのを聞いた中、ミントは小説のヒントを得たのか、どこか嬉しそうにも見えた。

「惑星レッドは．．．僕の兄レッドが神として見守って居た。デウスマスの影響で、惑星レッドの軌道が狂わされ、暴走した惑星レッドは、地球から離れて行った。僕は、兄に協力する為惑星レッドに行き、兄と共に軌道を安定させている時、地球はデウスマスに飲み込まれようとしていたんだ」

ブルーは、当時の事を思い出したのか、悔しそうに拳を握り締めた。一同は、そんなブルーをただ黙って見つめ、ブルーが再び話し始めるのを待った。ブルーは、気を落ち着かせるかと再び話し始め、

「そんなデウスマストを止めるべく、マザーラパーバは、地球に住むあらゆる命を守る為、デウスマストに立ち向かった。だが、デウスマストの力は強く、兄と共に、惑星レツドの軌道を安定させた僕は、兄に別れを告げて急ぎ地球に戻ると、マザーラパーバは無残な姿になって居たんだ。巨大な大樹には、無数の傷が付き、今にも何カ所か折れそうな程だった。それでもマザーラパーバは、デウスマストに向かって行った……」

ブルーの脳裏に、圧倒的力でマザーラパーバ事地球を飲み込もうとする、デウスマストの不気味な姿が思い出されていた。巨大なブラックホールの中から、人型のような上半身だけを出すも、顔らしき物から血管のような管が、両腕まで伸びた容姿は、生命を感じさせなかった。その頭部の左右には、まるで目のような四つの球体が浮かんで居た。

「デウスマストはおぞましき姿をしていた……デウスマストが意思を持って居たのかも、僕には未だに分からない。ただ、全てを無に返す為にだけ存在している。そう、全てを無にするまで動き続ける終わりのなき混沌……そんな感じにすら僕には見えなかった。マザーラパーバが、最後の力を振り絞ろうとしているのを感じた僕は、彼女が愛した民達

を守るだけで精一杯だった。デウス・マストの影響で、地球に吹き荒れる暴風に耐えていたマザー・ラパーパの大樹が、根元から倒れようとした時、僕はこの目で見た！まるで両脇から彼女を支えるように、光と闇の巨大な人のようなシルエットが姿を現わしたんだ」

ブルーはそう言うと、ブラックとホワイトをチラリと見た。当時の光景と今二人を見た光景が、ブルーには重なって見えた。

(そう・・・ブラック、ホワイト、今の君達の姿に似て居たような気がする)

「僕は、それが闇の神ブラックと、光の神ホワイトだったのでないかと、今でも思っているんだ」

「エッ!? 闇の神ブラック?」

「光の神ホワイト!」

ブラックとホワイトは思わず呟いた。二人の脳裏に、時の狭間での出来事がうつすら甦って来る。

(まさか、あの時見たのは!?)

動揺するブラックとホワイトを余所に、ブルーは話を続け、

「そう、僕も直接には会った事は無いけど、あれは光と闇の神だったと思う。光と闇の神の力を借りたマザー・ラパーパは、ブラック達のルミナリオに似た虹色の光を、デウス・マ

ストに浴びせて吹き飛ばし、太陽に封印したんだ。太陽にある黒点・・・あれこそが封印されたデウス・マスト！」

「た、太陽の黒点が!？」

「う、嘘!？」

「驚きました・・・」

学校の授業で習った事が、ブルーによって事実とは違う事を教えられ、アクアとリズム、そしてビューティが困惑の表情を浮かべた。ハッピーは、困惑顔でドリームに話し掛け、

「太陽の黒点って何でしたっけ？」

「う~~~~ん・・・」

腕組みしたドリームが首を傾げながら唸ると、ミュージズは呆れたように、

「太陽の中にある黒い点の事でしよう」

「オオオオ！」

思わずミュージズに拍手するドリームとハッピーだったが、ホワイトも会話に加わり、「付け加えるのなら、太陽黒点とは、太陽の表面に存在する黒い斑点として観測される部分の事よ。太陽の表面の温度は、およそ 5400℃ 何だけど、黒点はそれより 1000℃ から 1500℃ くらい低いので、それが黒く見える理由と言われて



居るわ。ちなみに・・・」

ホワイトのうんちく講座が始まり、見る見るドリームとハッピーの目が点になっていった。更には二人の背後で、ブラック、ピーチ、メロディ、サニー、ピース、マーチ、バッドエンドハッピー、バッドエンドサニー、バッドエンドピース、バッドエンドマーチも加わり、ムーンライトは、口から魂が抜け出そうな表情をした、12人を見て溜息を付き、

「ハア・・・あなた達、もうちょつと勉強なさい」

「・・・・・・・・トホホ」

ムーンライトに忠告され、ドリームとハッピーはトホホ顔を浮かべ、ブラック達も困惑の表情を浮かべた。アン王女はブルーを見つめると、

「では、光と闇の神の力を借りて、デウスマストを封印したマザーラパーパが勝ったのですね？」

「そうだよね、神様は今封印したって言ってたし・・・」

アン王女に同意したメロディだったが、ブルーは悲しげな表情で首を振り、

「いや・・・マザーラパーパは、確かにデウスマストを封印する事は出来た・・・でもマザーラパーパは力尽き、母なる樹は、無残にも根元から抉り取られたかのように吹き飛び、その衝撃で、幾つにも大樹はへし折られた。地球の民達は、悲しみの声を上げなが

ら、その衝撃で吹き飛ばされた。最悪な事に、その衝撃波で時空に亀裂が生じ、大樹の残骸の一部と共に、人や動物、昆虫の一部、妖精、精霊、幻獣、魔族達は、時空の穴へと飲み込まれてしまった。その時の絶望の声を、僕は今でもハッキリと覚えて居る」

ブルーの話を聞いていた一同は、思わず黙り込んだ。今ブルーから聞いた話は、一同に取ってはショックな事でもあった。

「時空の穴に飲み込まれた一同がどうなったか、僕には分からない。でも僕は、地球に残った民を、マザーラパーバの意思を継ぎ、僕がこの星に住む者達を守ろうと誓ったのはこの時だった・・・だが、マザーラパーバは完全に消えた訳じゃなかったんだ」

ブルーはそう言うと、ブルーム達を見つめた。

「ブルーム、イーグレット、ブライト、ウィンデイ、君達は世界樹と大空の樹を知って居るね？」

「う、うん・・・」

「世界樹と大空の樹がどうかしたんですか？」

ブルーに話を振られ、ブルームとイーグレットは困惑気味にブルーに問い、ブライトとウィンデイは、ブルーからの返答を待った。ブルーは小さく頷き、

「その二つの樹は、マザーラパーバの意思が宿りし大樹」

「「「エエエ!?!」」」

「泉の郷にある世界樹が、マザーラパーパの意思を宿してるラピ!」

「もしかして・・・泉の郷に住むチョッピ達の先人達は、緑の郷から来たチョピ?」

ブルーム達だけじゃなく、話を聞いていたフラッピとチョッピも驚きの声を上げていた。ブルームは小さく頷き、

「そう・・・そして、ムーンライト、プロツサム、マリン、サンシャイン、君達をプリキュアにしてくれたこのころの大樹も・・・マザーラパーパの意思が宿りし大樹何だ」

「「エッ!」」

「何ですとおお!」

ムーンライト、プロツサム、サンシャインが驚き、マリンは変顔浮かべながら思わず仰け反った。ムーンライトは、何かを思い出したかのようにブルーに話し掛け、

「神様、ひよつとしてこのころの大樹が、砂漠の使徒からの脅威に対抗する為に、私達を始めとしたプリキュアを誕生させたのは、デウスマストの記憶があったからなのでは?」

「おそらくそうだと思う・・・ブルーム達精霊の力を借りたプリキュアも、デウスマストのような脅威から守る為、産み出されたと僕は思う」

ブルームは腕組みしながら考え、イーグレットを見つめると、

「そう言えばあだし達は、フラッピやチョッピ達の故郷、泉の郷の聖なる泉を汚す者達と戦う為に、プリキュアになったんだもんね」

「そうね」

「私とブライトの場合は、ちょっと意味合いが違うけど」

「でもあの時、ブルームとイーグレットを救う為に、ムーブとフープの力を借りて、私達はプリキュアになったから、意味合いは同じじゃないかしら？」

「私達も、地球を砂漠化しようと企む、砂漠の使徒と戦う為にプリキュアになった」

「「ハイ」」

ブルーム達も、ムーンライト達も、ブルーの話に納得出来るようだった。更にブルーは、リコ、ニクスとリリスを見つめ、

「君達の住む世界にも、マザーラパーバの加護はあるんだよ？」

「「エッ!？」」

「僕もこれから話す事は、キュアマジシャンやメランに聞くまで知らなかった事だけど、魔法界には、杖の樹と呼ばれる大樹があるそうだね？」

「ハイ! 私が通う妖精学校は、杖の樹の上にあります」

ブルーに聞かれたリコは、頷きながら杖の樹が魔法界にある事を認めた。ブルーは頷き、ニクスとリリスに視線を向けると、

「そして、君達が住む魔界にも、傷ついた者達を癒す泉があるそうだね？」

「良くご存じね? 確かに魔界には、傷ついた者を癒す泉はあるわよ」

地球の神が、魔界について詳しい事に少し驚きながらも、リリースはブルーの問い掛けを認めた。更にブルーは話を続け、

「その泉の中心に、大樹があるそうだね?」

「エエ、戦いに明け暮れる魔界の者達にとって、その場所は……まさか!?癒しの大樹が、あなたが言うマザーラパーパの?」

ニクスは、魔界にある癒しの大樹が、さつき話に聞いたマザーラパーパの加護からきているのか、身を乗り出すようにブルーに確認すると、ブルーは小さく頷いた。

「キュアマジシャンが、嘗て竜王バハムートから聞いた話と言っていたから、おそらく間違いないだろうね……そして、魔法界と魔界は、元々一つだったと聞く。いや、魔法界の何処かにあると言われる妖精の里も入れれば、嘗て時空の穴に飲み込まれた者達を心配したマザーラパーパは、大樹の破片を通して、君達を見守る存在として側に居たという事だろうね……」

ブルーの話の聞いた一同は、マザーラパーパの慈愛の心を感じるのだった……

### 3、ビートの決意

ブルーから聞いたマザーラパーパの伝説を聞き、一同が感触深げな表情を浮かべていると、ルミナスは、表情を曇らせながらブルーに質問を始めた。

「神様、一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「何だい!？」

「デウスマストは、マザーラパーバによって太陽に封印されたと聞きましたが、デウスマストは・・・まだ生きていますという事でしょうか？」

ルミナスの問いに、一同は思わずハツとした。封印されたデウスマストが、まだ健在ならば、封印が解けて大いなる闇のように、再び星々を破壊するのではないかという疑念が沸き上がってきた。ブルーは沈痛な表情を浮かべながら、

「これは僕の推測だけど、デウスマストは・・・生きている！太陽の中で、封印を解こうと今でも藻掻き続けて居る・・・そんな気がする」

ブルーの推測を聞いたアクアは、表情を険しくし、

「それが本当だとしたら・・・もしも封印が解けたら大変な事になるわね？」

「大いなる闇という者も気になるけど、そんな封印されて居た者が再び現われたらと考えると、恐ろしいわね？」

「あたし達、しばらくこっちに居た方が良いんじゃない？」

「ですね・・・何か遭ってからじゃ遅いし」

「用心に越した事は無いわね」

ダークアクア、ダークルージュ、ダークレモネード、ダークミントも、デウスマスト

を警戒し、もう少し地球に残る事を提案すると、ダークドリームは大きく頷き、

「その方が良いわね・・・」

「みんなが居てくれたら心強いよ」

「エエ、私達も肝に銘じておきましょう」

ドリームとホワイトもダークプリキユア達に同意し、小さく頷きながら、一同にデウスマストを警戒するように促した。ブルーもホワイトに小さく頷き返すも、直ぐにニクスとリリスに話し掛け、

「君達の話の腰を折ってすまなかったね」

「いえ、私とリリスも、貴重な話を聞かせて頂きました」

「そうですね、魔界の誕生にマザーラパーパが影響している何て・・・」

「もつとも、元々時空の狭間には、悪しき心を持った意思が漂っていたとも聞くけどね」

ブルーはそう言うのと、ニクスとリリスに先程の話の続きを、一同に聞かせてくれるように頼み沈黙した・・・

「話の続きと言っても、後はさつきあなた達と出会った通り・・・」

「私とリリスも、もうあなた達と戦う気は無いし・・・魔界に戻ってベレル様に相談してみます」

リリスとニクスは、和解したプリキユア達を魔界に連れ帰る訳にも行かず、魔界に

戻って、今後の対策をベレルに相談しようと考えた。だが、カインがシーレインの処刑を待ってくれるとは思えず、困惑の表情をしている事に、ビートは気付いて居た。

「待って！ニクス、リリス・・・私を捕らえた事にして、私と一緒に魔界に連れて行って」「エツ!?!」

『ビート、何を!?!』

ビートの突然の提案を受け、その場に居た一同の視線がビートへと注がれた。

「私を連れ帰れば、あなた達はカインって奴の命令を実行した事になるし、シーレインの処刑は行えない」

「そ、それはそうかも知れないけど・・・」

「あなたを魔界に連れて行けば、あなたがどんな目に遭うか・・・私とリリスにも分からないのよ?！」

ビートの突然の提案に、ニクスもリリスも困惑した。本心から言っているのか探るように話を振るも、ビートは真剣な表情で二人を見つめ、

「そうだとしても・・・シーレインをこのままに何て出来ない!！」

ビートはそう断言した・・・

一瞬の沈黙の後、慌ててメロデイ達が会話に加わり、

「待ってビート、それなら私達も・・・」



「そうよ、私達は四人でスイートプリキュアなのよ?」

「ビートが行くなら、私達も行くわ」

「みんなで行きましょう」

メロディが、リズムが、ミュージックが、更にはパッションがみんなで行こうと提案するも、ビートは首を振り、

「ダメよ・・・魔界に行っている間に、こつちに何かあつたらどうするの?それに、みんなで行けば、カインって奴に警戒されるのは間違い無いわ。私一人だけなら、向こうも油断する筈だし、何かの行動を起こす気もする」

『だからって、あなた一人だけ・・・』

ビート一人だけ行かせる訳には行かない・・・

プリキュア達の思いは一つであったが、ビートの意思は硬かった。ニクスとリリースは、その場で片膝付いて座り、ビートに頭を下げると、

「最初から・・・あなた方プリキュアを信頼し、協力を仰ぐべきでした」

「ベレル様には聞いていたのに・・・改めて非礼をお詫びします」

「マーメイドのニクス!」

「サキュバスのリリース!」

「この命に代えて、あなたの命を守る事を、此処に誓います!!」

ビートの言葉は、ニクスとリリスの心を打った。自ら魔界に向かえば、どんな危険がビートに待ち受けているか分からなかったが、ビートはシーレインを助ける為に、自ら志願した。ニクスとリリスは、そんなビートを尊敬に値する人物と思い、自分達の命に代えても、ビートを守ろうとこの時決意した。更にはハミイがビートに飛びつき、ピーちゃんがビートの右肩に止まった。

「ハミイ!?!ピーちゃん!?!」

「セイレインが行くなら、ハミイも一緒ニャ!ピーちゃんも、一緒に行くって言ってくれてるニャ。だからみんな、安心して欲しいニャ」

「ピーイイ!」

ピーちゃんは、パインを見ながら何か一声掛けると、パインはキルンを使って通訳し、「何かあれば、連絡入れるって言ってるわ」

「ピーちゃんが一緒なら・・・だけど、やっぱり行かせられないよ」

メロディがそう言った時、ピーちゃんの目が妖しく輝いた。その時、まるで時間が止まったかのように、プリキュア達、妖精達、リコとアン王女の動きが止まった。だが、ブルーには効かなかったようで、

「ビート、決意は固いのかい?僕もあまり良い考えとは思えない・・・でも、確かに君の言う通り、カインという者が、プリキュアを手中にした事で、何か行動に出る事は間違

「無いと思う」

「はい．．．みんなには悪いと思ったけど、シーレインの身が心配だし．．．」

「本当に良いのですね？」

「エエ．．．行きましょう、魔界に！」

「待つて、ビート．．．これを持っていくと良い」

ブルーはそう言うのと、何かのペンダントのような水晶をビートに手渡した。ビートは、ブルーに言われるまま身に付けると、

「魔界から繋がるかどうかは、僕も試した事は無いから未知数だが、それを通じて、僕と連絡が取れるアイテムを手渡しておくよ」

「ありがとう、神様．．．ハミイ、ピーちゃん、ソリー、ラリー、行くわよ！」

「では、魔界への扉を開きます．．．」

ビートの合図に頷き、ニクスとリリスは魔界へと繋がる穴を出現させた。最初にリリスが、次にニクスが、ビートはもう一度プリキュア達を見渡すと、ブルーに笑顔を向け、

「行つてきます！」

「ビート、必ず無事で帰つて来るんだよ？」

「ハイ！」

ビートは、ブルーに手を振りながら穴に入ると、穴は徐々に消え失せた。それと同時に、時が動き出したかのように、プリキュア達が動き出すも、目の前に居た筈のビート、ハミイ、ピーちゃん、ニクスとリリスの姿が消えていた。メロデイは大慌てで辺りを見渡し、

「ビート、何所!?!ビートオオオ!!」

メロデイの叫びにビートからの声は返らなかった。ピーチは慌ててパッションを見つめ、

「パッション、魔界に行けない?」

「無理よ、悪しき力が強すぎて、アカルンでも・・・」

『そんなぁ・・・』

パッションに、悪しき力が覆う魔界には、アカルンでも近付く事は出来ないと言われ、一同は為す術無く途方に暮れた。

(ビート、必ず私達も行くから・・・無事で居てよ)

メロデイの思いは、他の一同も一緒だった。一同は沈痛な表情を浮かべながら、ビートの無事をただ祈るしか出来なかった・・・

完

## 第二百二十三話：魔界の予言者

## 1、魔界の予言者モグロス

キュアビートは、ニクスとリリスと共に、シーレインの処刑を回避させる為、魔界へと向かった。曇天の中、不気味に佇む双児宮の前に、三人とハミイ、ピーちゃん、ソリーとラリーはやって来た。いざ魔界にやって来ると、さっきの勢いをも半減し、ビートはハミイを抱き、ビクビクしながら辺りを見渡した。ビートは・・・やはり怖がりだった。(い、いざ来てみると、何だか怖く・・・エッ!?)

ビートは、双児宮の端に人影を見て、思わずニクスとリリスの後ろに隠れながら、人影を見た場所を指差した。

「ふ、二人共、あそこー!あそこに誰か居る!!」

「エッ!?!」

ニクスとリリスは、ビートが指さす辺りを、警戒した表情を浮かべながら見つめると、周囲に不気味な笑い声が響きだした。

「ホッホッホッホ、そんなに怯えなくても大丈夫ですよ?」

「エッ!?!」

不気味な笑い声を響かせる者は、怯えなくてもいいとビートに話し掛けるも、ビートは声を聞くだけで、思わず鳥肌が立っていた。ニクスとリリスは、声の主に心当たりがあるようで、

「その声は・・・モグロス卿!？」

「モグロス卿、何故あなたが双児宮の前に?」

ニクスとリリスに、モグロス卿と呼ばれた人物がゆっくり姿を現わした。小太りで何所か愛嬌がある顔は、福の神を連想させるような面持ちで、全身を黒い帽子と黒いスーツで覆っていた。モグロスは、何所か底知れぬ不気味さを漂わせて居た・・・

「ホッホッホッホ、この魔界に、革命をもたらず切掛けのプリキユアを、是非この目で見たいと思ひましてねえ・・・」

ビートはモグロスに、自分が魔界に革命を切掛けを作ると言われ、激しく動揺した。そんな事を思った事は無く、只友達になったシーレインの危機を救いたい・・・それだけだった。

「わ、私が魔界に革命!?!そんな大それた事考えて無いわ。私は、ただ友達を助けたいだけ」

「ホッホッホッホ、これは失礼致しました。改めまして、私、モグロスと申します・・・お近づきの印に、あなたの未来を占って差し上げますけど?」

「私の未来を占う!?!あなた、何か企んでいるの?」

「とんでもございませぬ。私は、あなた方が住む世界の言葉で言うボランティアをしていまして、見返り無しで未来を教えて差し上げているだけですよ・・・ホッホッホッホ」  
再び白い歯を見せて、大きく口を開けながら笑い声を発したモグロスに、ビートは嫌悪感を抱いていた。何かバカにされているようにも受け取れた。ニクスとリリスも表情を険しくし、

「モグロス卿、この方をからかうのならば、私とリリスの二人が承知しませんよ?」

「今はあなたに、未来を占ってもらっている時間は無いの」

ニクスとリリスにも拒否されたモグロスだったが、再び笑い声を発し、

「ホッホッホッホ、そうですねかあ?ではお詫びに、あなた方に一つご忠告して差し上げましょう。いいですか、これから双児宮のカインさんに出会っても、決してカインさんの目を見てはいけませんよ?」

「「エツ!?!」」

「もし、カインさんの目を見たら・・・あなた方は大変な事になるでしょう!」

モグロスの忠告を聞き、ビート、ニクスとリリスの表情が瞬時に青ざめた。大変な事とは何なのかと思うと、三人は思わず無視しようとしていたモグロスに話し掛けた。

「た、大変な事って何!?!」



「モグロス卿、何か未来予知を!?!」

「よろしいですか、カインさんの目を見ない事ですよ?・・・ホッホッホッホ」

だが、モグロスと呼ばれた小柄な魔物は、三人の質問に答える事無く、笑い声を響かせながら去っていた。ビートも、ニクスとリリスも、そんなモグロスの背を、ただ呆然と見つめた。

「ね、ねえ、あの人は一体!?!」

ビートは、不気味な風貌をしたモグロスの先程の忠告が気になり、ニクスとリリスに問うと、先ず困惑顔のニクスが話し始めた。

「モグロス卿は・・・未来を見通す力を持ったお方」

「未来を見通す!?!」

「そう・・・別名、魔界の予言者とも呼ばれているわ」

「魔界の・・・予言者?」

ビートは思わずゴクリとつばを飲み込むと、今度はリリスが頷き、モグロスが去っていた場所を見つめながら、

「ええ、普段何所に住んで居るのか誰も知らないの・・・何か予知を見た時だけ、今のようにフラリと突然現われる謎の方よ。何を考えて居るのか分からなくて、私はどうも苦手なのよねえ」

「ベレル様やアモン様同様、古の魔の一人……私とリリスも、あの方の事はほとんど分からないの」

十二の魔神の中の二人、ニクスとリリスをもつてしても、モグロスについてはほとんど情報を持つては居なかった。ビートは、心配そうに見つめるハミイの頭を撫でながら、

「行きましょう！忠告は気になるけど……」

「「そうね……」」

ビートにそう返事を返しながらも、ニクスとリリスは、二人だけでテレパシーで会話し、この先ビートの身に危険が迫れば、自分達の命に代えても、守り通そうと改めて誓い合った。

双児宮……

その名が示す通り、同じ顔をした不気味な生物のオブジェが、左右の扉に付いていた。ニクスとリリスが左右の扉を押すと、扉は不気味な音を立てながら奥への道を開いた。リリスは、自分の長い髪を一本抜くと、息を吹きかけた。すると、毛は細いロープのようになり、リリスはビートの両手首を、自分の髪で今作った細いロープで軽く縛り、

「少しの間我慢してね？」

リリースは、ビートを労わる様に声をかけると、ビートはそんなリリースに微笑み返し、「ええ、大丈夫よ。それより、この奥にカインとアベルは居るの?」

ビートに聞かれたニクスとリリースは小さく頷いた。双児宮の中に入れば、カインとアベルのテントトリーの中に入ったようなものだった。ニクスは緊張した面持ちで、

「そう・・・この先こそカイン様とアベル様が治める双児宮・・・少し私語は慎みましよう」

ニクスに忠告され、三人と妖精達は、無言のまま双児宮の扉の奥へと進んで行った。三人の姿が消えたと同時に、双児宮の入り口にモグロスが現われ、帽子を深く被り直すと、

（さてさて、ご忠告をして差し上げましたが、あの三人は、カインさんの目を見る事になるでしょうねえ・・・ですが、あのプリキュアの肩に止まっていた鳥、あの鳥がどうかか・・・何せ、あの鳥の動きだけは、この私の予知でも見られませんでしたからねえ・・・）  
「ホッホッホッホ」

モグロスは何所か楽しげに、笑い声を発しながらニヤリとすると、双児宮の中へと入って行った。

## 2、野心

三人が奥に入ると、暗闇の中に火が点り、奥への道を照らした。ビートは思わず生唾を飲み込んだ。沸き上がってくる恐怖心を打ち消そうとするかのように、ニクスとリリスに話し掛けようとするも、二人は険しい表情で、カインとアベルの手の内に居る状況では、無駄な私語は止めた方がいいと改めて忠告された。足音だけが辺りに響く中、奥の部屋の中から明りが漏れてきた。ニクスとリリスの顔が緊張し、ビート、ニクスとリリス、ハミイとピーちゃん、そしてソリーとラリーは、不気味な音を立てるドアを開き、明りが漏れる部屋の中に入って行つた。殺風景な部屋の中に、軍服のような衣装を着た一人の金髪の男が、背を向けて佇んで居た。男は、一堂に気づいたのか背後を振り返り、「戻つたか、ニクス、リリス……ほう、ちゃんとプリキユアを連れ帰つたようだな。だが、想像したより少ないな？」

「は、はい……ですがカイン様、私とリリスは、ちゃんとと言われた通りにプリキユアを連れ帰りました」

「シーレイン様の処刑は、無かつた事にして頂けますね？」

ニクスとリリスは、緊張の面持ちでカインにそう告げるも、カインは口元に笑みを浮かべながら、

「ん!? そうだったなあ、その話の前に……貴様がプリキユアか？」

カインの射るような視線がビートへと向けられた。ビートはそんなカインに飲まれ

ないように、少し大きな声で答え、

「そうよ、私は・・・キュアビート!」

ビートはそう言いながら、緊張した面持ちを隠せなかった。だが、元々恐がりなビートが、この場に居た事は幸いしたかも知れなかった。カインからしてみれば、ビートは捕らわれて緊張しているように見えていた。カインは含み笑いをしながら、

「クククク、そう緊張するな・・・俺の言う通りにしてくれれば、貴様の命まで取ろうとは思わん」

「ふざけないで! 誰があなたの言う通り何て・・・」

「クククク、貴様に選択権などは無い・・・貴様は、この俺の命令通りに動く人形となるのだからなあ」

「ウツ!?!」

カインが怪しい瞳でビートを見つめると、ビートの脳裏にモグロスの忠告が過ぎり、ビートは慌てて視線を外した。ニクスとリリースは、慌ててビートの身体をカインの視界から遮るように前に出た。もちろん、自分達もカインから視線を逸らしていた。

「カ、カイン様、先程の話しの答えをまだ伺っていません」

「シーレイン様の処刑・・・無かった事にして頂けるのですよね?」

ニクスとリリースは、再度シーレインの件をカインに確認するも、カインは興味なさげ

に、

「残念だったなあ、今頃・・・」

カインの言葉が終わる前に、ビート、ニクス、リリスの顔が瞬時に険しくなった。ニクスとリリスは、モグロスの忠告を忘れたかのように、鋭い視線でカインを睨み付けた。カインは、そんな二人を見て口で笑い、

「何だ、その顔は!?!」

「私達を欺ましたのね!」

ニクスとリリスは、カインを非難した。十二の魔神を束ねる四神に担わない行為をするカインに対し、二人は嫌悪感を示した。

「クククク、バカめ、プリキュアが手中に入った今、危険なシーレインを生かしておく訳あるまい?今頃は、バルバスが配下の者を・・・」

「カイン!」

カインに欺まされていたとハッキリした事で、ニクスとリリスの髪が揺らいだ。更には二人の背後から、

「カイン!あなたは許さない・・・ビートソニック!!」

ビートは、両手を縛っていた紐を引き千切り、ラブギターロッドを取り出すと、カインにビートソニックを放った。虚を突かれたカインは舌打ちし、

「チツ・・・ニクス、リリス、貴様ら俺を欺いたな！」

カインはその場を動かさず、右手に力を込めてバリアを張り、ビートソニックを完全に防いだ。カインは、軍服のような服の埃を払うような仕草で、余裕の表情を見せるも、ビートは着地するとカインを指差し、

「カイン、あなたの好きなようにはさせない！」

「エエ、私達を欺いた報い・・・思い知らせて上げるわ！」

「シーレイン様は、私達三人で必ず救って見せるわ！」

ビートに続き、更にはニクスとリリスもカインに反旗を翻して動き、三人がカインを包围するも、カインは余裕の表情を変えなかった。

「フン、貴様らもあいつらのようにしてやる」

「何の事?!」

「クククク・・・姿を現わせ、我が人形共！」

カインが指をパチリと鳴らすと、黒き塔に続く双児宮の奥から、数体の人影が現われた。その姿を見た瞬間、ニクスとリリスは目を見開いて驚いた。

「そ、そんな・・・アモン様?!」

「オロンにアロンまで?!」

「カイン、一体、みんなに何をしたの?!」

ニクスとリリスは呆然とした・・・

何故なら、十二の魔神達の中、アモン、オロン、アロンの三人が、カインに何かされたのか、殺気を周囲に発しながら立って居たが、ニクスとリリスには、三人からはまるで感情を感じられなかった。カインはニヤリと笑い、

「クククク、さつき言った通りだ。こいつらは俺の魔幻を受け、俺の命令通り動く操り人形と成り果てた」

「何て事を!？」

「・・・・・・・・」

憤るニクスに反し、リリスは、自らもカインと似たような技を使う事もあり、思わず沈黙した。カインは、そんなリリスを見て笑みを浮かべながら、

「ククク、この技は元々・・・リリス、貴様が俺に教えてくれたようなものだぞ?」

「わ、私が!?! どういう事?」

「ククク、お前の身体の中には、古の魔神の血が眠っているのさ・・・今尚魔界の地下深くに眠ると言われる・・・七つの大罪と呼ばれし七人の古の魔神、その中の一人、色欲の魔神の血がな!」

「私の・・・中に!?!」

カインの言葉は、思わずリリスの心に響いた。古にこの魔界を支配していたと言われ



る七つの大罪と呼ばれた魔神達、その中の一人色欲の魔神の血が、カインは自分の中に眠っていると告げた事で、リリスはカインの術中に嵌りかけていた。

「そうだ・・・リリス、目を覚ませ！この魔界を、嘗てのように争いの絶えぬ世界に変えようでは無いか。貴様の身体の中に眠る血も、疼いて居るだろう？リリス、貴様が快楽を吸収した時に感じる喜びを思い出せ!!」

「私の中に眠る・・・色欲の魔神の血？」

「そうだ！」

「リリス、ダメよ！カインの甘言に耳を貸さないで!!」

ニクスはそう叫びながらも、カインが言っている事は、事実であろう事を悟った。現にリリスは、快楽を吸収すると、我を忘れる傾向が多々あった。

「俺の命令一つで、こいつらはお前達を葬る事が出来るが・・・リリス、お前の中に眠る古の魔神の血を絶やすのは惜しい。リリス、貴様の技でニクスとプリキュアの快楽を吸い尽くせ、後はじつくり、俺がこいつらも操り人形に代えてやる」

カインの術中に嵌ったかのように、リリスの怪しげな視線が、ビートとニクスを見つめた。ニクスは、動揺しながら何度もリリスの名を叫んだ。エロチックアイやチャームをまともに受ければ、ニクスといえど抗う事は出来ない事を知っていた。

「リリス、お願い正気を保って！プリキュアを・・・キュアビートを命に代えても守ると

「いう誓いを忘れたの？リリスウウウ！」

ニクスは再度リリスの名を叫んだ。普段いがみ合うような関係の二人だったが、心の中では繋がっている事を、リリスは改めて実感した。

（ニクス、ありがとう・・・）

リリスは、心の中ではニクスに感謝したものの、ちよつと捻くれた面もあるリリスは、思わず笑い声を上げた。

「ウフフフフ、ちゃんと聞こえているわよ。おバカさん・・・私が、あの時の誓いを忘れて居ると思っているの？古の魔神の血？そんなの関係無いわ！私はサキユバスのリリス・・・カイン、あなたの野望を阻む者!!」

「リリス！」

リリスは、ニクスの励ましもあり、自我を失う事無く、ハッキリカインの野望を阻む者と告げた事で、ニクスとビートの表情が思わず明るくなった。カインは舌打ちし、  
「チツ・・・ならば、貴様のチャームと俺の魔幻、どちらが優るか試して見るか？」

「望むところ・・・行くわよ！」

リリスとカイン、両者の瞳が金色に輝き、リリスはカイン目掛け投げキッスをした。一方のカインも、右手の親指と人差し指をリリスに向け、二人の技であるチャームと魔幻が激突した。だが、次第にリリスの顔から大量の汗が流れ出し、右膝を付いて荒い呼

吸を始めた。

「ハアハアハア……こ、これ程とは？」

「リリース！」

直ぐにニクスとビートがリリースに近付き、三人は改めてカインの実力を知った。

「チツ、流石は古の魔神の子孫、俺の魔幻をまともに受け正気を保てるとは……だが、次は耐えられまい？これでお前ら三人は終りだ！マリオネット・コンパルション!!」

カインが三人に対し、ピアノを弾くように指を動かすと、三人は自分の意思と関係無く頭が動き、カインの顔をマジマジと見せられた。

（（か、身体が勝手に……））

三人は、身体が自由が効かず、ただカインの事を見つめる事しか出来なかった。カインは、再び親指と中指を三人の顔に狙いを定めると、

「さあ、直ぐ自分の考えなど不要にしてやる……魔幻！」

「「アアアア!?!」」

「セイレーン!しつかりするニヤアアア!!」

ハミイが絶叫するも、カインの魔幻が、ビート、ニクス、リリースに決まり、次第に三人の意識は遠ざかり、目からはアモン達同様光を失おうとしていた。だが、その時……

「ピイイイイ！」

ピーちゃんは、雄叫びと共に目を光らせると、まるで双児宮の中で、時が止まったかのように静まり返った。ピーちゃんは、嘴でビート、ニクス、リリスの頭を何度も突っつけた。

「いい、痛い！・・・エツ!?」

ピーちゃんの嘴で突っつかれた三人は、一瞬記憶が混乱するも、思わずハツと我に返った。

「ギヤアアアス！」

ピーちゃんは三人に対し、今の内にこの場から逃げろと叫んだものの、この場にピーちゃんの言葉を理解出来る者は居なかった。ビートは、ピーちゃんの頭を撫でながら、

「ピーちゃん、ありがとう」

「ほう、ソドムと同じ時を操る者が、プリキュアの仲間の中に居るとはなあ?」

「ピイイイ!?!」

ピーちゃんは驚愕した・・・

自分が時を止めたこの空間の中で、ピーちゃんが触れたビート、ハミイ、そしてニクスとリリス以外動ける筈は無かった。現にアモン、オロン、アロンの三人は、止まった時の中で、身動き一つせずしていたのだから・・・

ピーちゃんは、この姿ではカインに勝てない事を悟り、懸命に三人とハミイに、ここ

から逃げるように伝えようとするも、三人は再びカインと戦おうと身構えていた。ピーちゃんが止めた時も再び動き出し、アモン、オロン、アロンの雄叫びが双児宮に響いた。ニクスは、そんな三人を見つめると、

「カイン、三人を元に戻しなさい！」

「ククク、ならば腕づくでそうさせてみる！」

「言われる迄も無い！」

ニクスの髪が真紅に染まり、カインに対しブラツデイダンスを放とうとした瞬間、地獄の業火のような火炎が、ニクス目掛け飛び、ニクスは辛うじて火炎を躲した。

「ハアハアハア・・・あ、危なかった」

ニクスは、火炎で攻撃してきた人物を見て思わず顔が青ざめた。

「そ、そんな!?ア、アモン様？」

動揺して動きが止まったニクスに、アロンが放った矢が射られ、ビートが慌ててピートソニックを放って相殺し、オロンが身体を丸めて体当たりするのを、リリスがニクスの両手を持ち上げて宙に浮かべ何とか躲した。

「ニクス、一旦引くわよ!このままじゃ私達に勝ち目は無いわ!!」

「クツ・・・分かったわ」

ニクスは悔しそうな表情を浮かべたものの、現状ではリリスが言う通り勝ち目はな

かった。カインは、そんな三人を見ながら口元に笑みを浮かべ、

「ククク、良いのか？このまま無様に逃げれば、シーレインといえど不拔けた状態では、バルバスの配下の者に、一方的になぶり殺しにされるだけだぞ？」

「クツ!？」

三人に取って、カインの発言は痛い所を付かれた。このまま退却すれば、確かに心を閉ざしているシーレインの身が、危うい事は三人にも分かった。更に状況は悪化し、室内の入り口から声が聞こえてきた。

「もつとも・・・お前らはここから逃げる事も出来んがなあ？」

そう言いながら、ゆっくり姿を笑わしたのはアベルだった。三人に取って、アベルの出現は誤算だった。

「ア、アベル!?何時の間に・・・」

ニクスとリリスは、此処にはアベルは居ないと思ひ込んでいた事を後悔したものの、最早双児宮から逃げ出す術もなくなり、カインとアベル、更にはアモン、オロン、アロンとさえも戦わなければ、どうする事も出来ない状況に追い込まれた。

「どうやら・・・戦うしか無さそうね」

ビートはそう言うのと、ラブギターロッドを手に持って身構えた。ニクスとリリスは、アイコンタクトして頷き合うと、

「……ビート、あなたは双児宮の奥にある扉に向かつて」

「此処は私とリリスで抑えるわ」

「シーレイン様をお願い！」

ニクスとリリスは、この時死を覚悟した……

それは、ビートにも直ぐに伝わった。だがビートは、二人を置いて自分一人で行ける筈は無かった。ビートは激しく首を横に振り、

「だ、駄目よ！あなた達だけ残して、私だけ行ける筈無いでしょう？此処を出る時は……必ず三人一緒よ!!」

ビートは、少し涙ぐみながらも、三人で双児宮を出ようと進言した。ニクスとリリスは、そんなビートの進言に首を振り、

「でもこのままじゃ……三人共カインの操り人形になってしまおうわ」

「そんな屈辱を味わうなら……私もニクスも、この場で死ぬ覚悟は出来て居るわ」

「せめてあなただけでも……」

悲痛の表情を浮かべながら、ビートだけでもこの場から逃がそうとするニクスとリリスであつたが、

「お喋りするとは……」

「余裕だなあ？」

「クツ!?」

奥からはカインが、入り口からはアベルが、同時にビート達三人に攻撃をしようとき出したその時、

「ホッホッホッホ！」

「何だ?!」

双児宮の室内にモグロスの笑い声が響いた瞬間、カインとアベルは思わず攻撃を止めた。何故なら、二人はあろう事か同士討ちをしそうになっていた。

「バ、バカな!?俺とアベルに対し、このような戯言をするなど・・・」

「姿を見せろ！」

そんな動揺するカインとアベルを嘲笑うかのように、室内の中央に、ビート、ニクス、リリスを庇うように、モグロスが姿を現わした。

「あなたは!」

「モグロス卿!」

モグロスは、驚くビート達に白い歯を見せながら笑い声を上げ、ハミイの隣に居るピーちゃんを見つめると、

「ホッホッホッホ、その鳥には、ちよつと面白いものを見せて頂きましたし、今回は特別に、あなた方に力を貸して差し上げましょう」



「「エッ!」」

「良いですかあ、あなた方は何も気にせず、このまま真つ直ぐ奥の扉に走つて下さい」  
「で、ですがモグロス卿、奥の扉にはアモン様、オロン、アロンが・・・」

奥の扉を塞ぐように居並ぶアモン、オロン、アロンを見たニクスが、戸惑いながらモグロスに現状を伝えるも、モグロスは余裕の表情で笑い声を発し、

「ホッホッホッホ、心配には及びません。さあ、お行きなさい」

ビート達に力を貸すモグロスに、カインとアベルの表情は険しさを増した。普段誰にも与さず気ままに行動するモグロスを、カインとアベルは侮っていた。

「モグロス、何の真似だ!」

「モグロス、何故貴様が此処に?」

「お気になさらないで下さい。ちよつと暇つぶしに立ち寄つただけですから・・・ホッホッホッホ」

モグロスは、まるでカインとアベルをからかうように、二人を見ながら笑い声を上げた。アベルは舌打ちすると、

「チツ・・・ふざけるなあ!」

アベルの激高と共に、雷がモグロス目掛け落ちるも、モグロスは雷の動きを見切っているかのように、状態を捻って攻撃を回避した。

「おやおや、急に雷が落ちてきましたねえ？」

モグロスは右手を額に当て、キョロキョロ周囲を伺うようなコミカルな動きをする  
と、アベルの表情が更に歪み、

「貴様ああ！」

激高したアベルは、モグロスに対し無差別に雷を落とすも、モグロスは完全に雷を見  
切り、ちよつと身体を反らすだけで全て躲した。

「「す、凄いい!!」」

三人は、アベルの攻撃を完全に見切つて避けまくるモグロスに、思わず呆然とすると、  
それに気づいたモグロスは、

「ホッホッホッホ、さあさあ、今の内にお行きなさい」

モグロスは、三人に手でジェスチャーを交えながら、奥の扉に急ぐように指示を出し  
た。三人は、モグロスの実力を直に見た事で、この場はモグロスを信じて言う通りに行  
動しようと思った。

「あ、ありがとう」

「モグロス卿、恩にきまず」

ビート、ニクス、リリスは、軽くモグロスに頭を下げ、奥の扉目掛けて走り出した。モ  
グロスは、ニヤニヤしながら三人の背中に手を振っていると、カインは、険しい表情で

アモン達三人を指さした。

「待て、むぎむぎ逃がすか！アモン、オロン、アロン、三人を捕らえろ!!」

「ホッホッホッホ、無駄ですよ。既に風は吹きましたから」

「何?!」

モグロスの言葉を表すかのように、双児宮に一筋の風が吹き抜けた。それと同時に、奥の扉の前に居た筈の、アモン、オロン、アロンの三人が、カインとアベルの居る正面側に吹き飛ばされた。

「何だ?!?モグロス、貴様の仕業か？」

「ホッホッホッホーさあ、どうでしょうねえ？」

モグロスの術中に嵌った事に、カインとアベルが苛立つと、更に奥の扉からモグロスに話し掛ける声が聞こえてきた。

「モグロス、貴公の言う通りであったなあ・・・カイン、アベル、そなたらの悪行、確かにこのベレルしかと見届けた。ルーシエス様に成り代わり、貴公らを成敗する！」

「あなたは!!」

「ベレル様！」

現われたのはスケルトンのベレルだった。ベレルは、細身の愛刀を引き抜くと、剣先をカインとアベルに向けながら、ゆっくりビート達三人を庇う様に前に出た。ビート、

ニクス、リリスは、新たに現われた頼りになる援軍、スケルトンのベレルの出現に表情を明るくした。ベレルは背後を振り返り、

「お主達は、シーレイン殿を頼む」

「「ハイ！」」

ビート達三人はベレルに頷くと、奥の扉を抜け黒き塔へと向かった。

「チツ・・・ベレル、貴様もルーシエス様に逆らうか？」

「黙れ！ルーシエス様に仇なすは貴公達だ!!」

ベレルは、カインとアベルの本心を知り激昂していた。魔王ルーシエスに忠誠を誓うベレルは、ルーシエスの代弁者同然のカインを信頼し、忠誠を誓っていたが、最近の二人に疑念を抱いて居たところ、モグロスの忠告を受け共に双児宮を訪れ、それが全てカインとアベルが企てた事と知った。モグロスは、ベレルを宥める様なジエスチャーをしながら、

「まあまあ、ベレルさん落ち着いて下さい。此処で戦つても・・・」

「止めるな、モグロス！誇り高きアモン殿をこのような姿に・・・許さんぞ、カイン!!」  
「貴様も直ぐ同じ目に合わせてやる・・・魔幻！」

ベレルの注意が、操られたアモンに向いたその隙を逃さず、カインは魔幻の効果範囲まで一気に距離を詰め、ベレルに魔幻を放った。まともに魔幻を受けたベレルの動きが

止まるも、モグロスは愉快そうに笑い声を上げた。

「ホッホッホッホ」

「モグロス、何が可笑しい？ 貴様も直ぐ魔幻の餌食に……」

「ホッホッホッホ、一つご忠告して差し上げましょう。ベレルさんに、そのような小細工は効きませんよ？ 最も、私にも効きませんがねえ」

「何?!」

「フッフ、そう言う事だ……このベレル、肉体を失った時に二つの目も失った。拙者が見る目は……心眼！ 拙者の心眼には、貴様の小細工など、効かぬわ!!」

「何だと?!」

ベレルは平然としながら、カインに一太刀浴びせようとすることも、アロンの援護射撃で距離を取った。ベレルは一旦剣を鞘に戻すと、モグロスがベレルに近づき小声で話しかけ、

「ベレルさん、あなたもニクスさん達と合流した方が得策だと思えますよ？ 三人の魔神、並びにプリキュアの一人がシーレインさんの傍に居れば、そうやすやすカインさん達も仕掛けられないと思いますけど？」

「ウム、一理ある……分かった、貴殿の忠告受け入れよう」

「はい、では、私もそろそろ退散しますか」

「では、援護しよう。ヌウウン．．．ベレルスラッシュュー！」

ベレルは居合の構えから気を高めると、一閃して刀を引き抜いた。その衝撃で剣圧がカイン達目掛け飛び、思わずカインとアベルが、両手を前に突き出してバリアを張ってかろうじて防いだ。それを合図にしたかのように、ベレル、モグロスは、双児宮からその気配を消した。カインは舌打ちし、

「チツ、ベレルめ．．．まだ実力を隠していたのか？」

「モグロスの気配も消えたな．．．どうするカイン？」

「プリキュアには奴らが一緒ならば、迂闊に手は出せぬなあ．．．」

「力押しで攻めれば良いだろう？」

「いや、それは得策では無いな。ならば他のプリキュアを利用するまで．．．ブラッドは居るか？」

「はい、カイン様！」

カインに名前を呼ばれたブラッドは、双児宮の天井に両足を付け、逆さになった全身黒い大蝙蝠を思わせた。ブラッドは、天井から降りるとカインの前で片膝付いた。

「以前、シャックスが探っていた情報は頭に入っているな？ 確かプリキュアは、人間界の日本とかいう国に住んで居たな．．．これより貴様が人選した数十人を引き連れ人間界に赴け、人間共を利用してプリキュアを誘き出す。俺の指示がありしだい、直ぐに行動

に移れ！」

「お任せを！」

ブラッドは、カインにお辞儀をし、双児宮を後にした……

### 3、宣戦布告

カインは頭を切り替え、ビート以外の他のプリキュアを何人が利用しようと考えた。シャックスが宝瓶宮に残していた資料を我が物にしたカインは、プリキュアの情報を得ていた。アベルは、以前ソドムから聞いた忠告を思い出し、

「だがカイン、ソドムは俺達に、プリキュアに徒党を組ませるなど忠告して居たぞ？ やつらをこの魔界に誘き寄せるのは……」

「フッフ、分かっている。この魔界に誘き出すのは、四、五人のプリキュアで十分だろう。他のプリキュア共は……始末する！」

「だが、そう上手くいくか？」

アベルの脳裏に、シャックスを倒した時に見たプリキュア達の姿が浮かんだ。あの時はまだ、未熟さがあるように見ていたが、今さつき見たビートの動きを見る限り、最初に見た時より力を付けている事を見抜いていた。カインは口元をニヤリとさせると、

「だから言っただろう、人間共を利用すると……アベル、双児宮を任せろ。俺は巨蟹

宮に行く」

「巨蟹宮だど!？」

「ああ、巨蟹宮の奥には、ソドムが利用していた深淵の闇の間がある」

「集中力を高める部屋の事か？」

「ああ、これから人間共、並びに我らに忠誠を誓う事を拒否した魔法界の奴らに、俺達の意味を伝えねばならんからな」

カインはそう言い残し、双児宮を後にした・・・

ビート、ニクス、リリスの三人は、無事に双児宮を抜け、黒き塔の入り口目指し駆け続けていた・・・

「ビート、こつちよ!」

ニクスとリリスが先頭を走り、その後をビートが走っていたが、黒き塔に近づくにつれ、ビートは妙な威圧感を感じていた。

(な、何なの!?!この感覚・・・正直怖い。此処に居たら駄目なような気がする)

「ビート!?!」

「エッ!?!ウウン、何でもない」

ビートの本能が、黒き塔に眠る得体の知れない何かを敏感に察知した。だがそれが何



なのか、ビートにもその確証は持てなかった。黒き塔の入り口に、十数体の異形な容姿の魔物の姿があった。魔物達は、三人に気づくと道を塞ぎ行く手を阻んだ。ニクスは顔を顰めると、

「そこを退きなさい！」

「ニクス、面倒だわ、こいつらに門番でもさせましょう・・・チャーム！」

リリスのチャームを受け、魔物達は目をハートにして三人を見つめると、リリスは魔物達にウインクし、

「あなた達、そこで門番をしてねえ。ベレル様やモグロス卿が来るかも知れないから、その二人以外通しちゃダメよ？」

『ギイイイイイ！』

魔物達は、分かりましたと返事を返し、三人に対して道を開いた。リリスは魔物達に投げキッスをし、

「ウフフ、良い返事ねえ？後でニクスとビートが、あなた達を気持ち良くしてくれるって言ってる居たわよお？」

『ギイイイイイ！！』

興奮したように大喜びする魔物達を見て、ビートもニクスも困惑した顔付きで、

「言ってるわいよ！」

「良いじゃない?」

「良くない!」

三人は、そんなやり取りをしながら黒き塔の内部へと入った。ニクスとリリスは、明かり一つない暗闇の中で、周囲に殺気が漂って居る事に居づいた。

「ビート、気を付けて!この中にも十数人居るわ!!」

「この程度で私達の足止めをしようだ何て・・・」

ビートの目が次第に暗闇に慣れてくると、既にニクスとリリスは何者かに気づいて戦いを始めて居た。ビートは、襲い掛かって来た獣のような魔物の攻撃を避け、ラブリギターロッドを手を持って、ビートソニックで一蹴した。

ビート、ニクス、リリスの三人を相手にしては、バルバスの配下達は脆くも敗れ去り、三人は地下へと続く階段を下りて行った。静まり返る室内の様子に、どうやら間に合ったようだと言った。

「私とリリスも、地下牢に来るのは初めてだけど、陰気な所：早くこんな場所からシーレイン様をお出ししなければ」

「本当に薄気味悪いわねえ・・・」

「シーレイン!居るんでしょう?私よ、キュアビートよ!ニクスとリリスと一緒に迎えに来たわよお!!」

ビートの声が反響するも、シーレインからの答えは返つては来なかった。更に階段を降り、薄明かりが点いた牢の前に辿り着いた三人は、思わず沈黙した。

「シ、シーレイン様!?!」

「シーレイン!?!」

牢の中に居たシーレインの頬は瘦せこけ、目には隈が目立ち、嘗ての美貌を失つていた。ただブツブツ小さな声で、何かを呟き続ける姿は異質だった。ニクスは思わず膝から崩れ落ち、

「シーレイン様、何とお勞しいお姿に……」

「シーレイン様は、完全に心を閉ざしてしまつたようね……」

リリースも沈痛な表情で俯いた。ビートは檻にしがみ付き、何度もシーレインに声を掛けるも、シーレインが三人に気づく事は無かった。

「一体どうして!?!」

ビートがニクスとリリースに問うと、ニクスは沈痛な表情で項垂れながら、

「おそらくあの時……同胞である筈のアモン様が、シーレイン様の処刑に賛成した事が……」

「でもそれはカインが、アモンをあの手で操つたからでしょう?」

「ええ、でもシーレイン様は、それに気づいて居なかつた……」

再びビートに問われたニクスだったが、そう言うのと押し黙った。リリスもニクスに話しかけ、

「シーレイン様が、アモン様と親しかったのは私も知っているけど、ここまでシヨックを受けるものなの？」

「リリスは知らなかったかも知れないけど、シーレイン様とアモン様は、元々カインとアベルに不信感を持っていたようなの・・・私もその事を告げられた時は、半信半疑だったけど、結局お二人の疑念は当たっていたのね。そのアモン様に裏切られたと思ったシーレイン様は・・・」

「そうだったの・・・」

再び沈黙する二人だったが、ビートはそんな二人を叱咤するかのように、

「話は後にしましょう。シーレインを、一刻も早くこんな牢から出してあげましょう」

「そ、そうね」

ビートの声でハツと我に返ったニクスとリリスも同意し、リリスが髪の毛を抜いて、針のように変化させ牢の鍵を開けると、三人はシーレインを牢から救い出した。とりあえず牢の檻に背もたれさせると、ビートは何かを決意したかのように、ハミイを見つめた。

「ハミイ、力を貸して！私達で・・・シーレインの心を連れ戻す」

「ニャプ!? そんな事出来るかニャ?」

ビートにそう言われたハミイは、思わず目を丸くしてビートに確認すると、ビートは沈痛な表情で、

「分からない・・・分からないけど、あの時メロディ達を救えたように・・・」

「分かったニャ! セイレーンの言う通りにしてみるニャ」

ハミイは、ビートに絶大な信頼を置いていた。ビートがそう言うなら、きっとシーレインは救えると思えていた。嘗てシーレインのジ・レクイエムから、メロディ達三人を救えたように・・・

「ありがとう、ハミイ・・・ニクス、リリス、今から私達で、シーレインの心に私達の歌をシンクロさせてみるわ」

「そ、そんな事が出来るの?」

ニクスとリリスは、思わず希望を見出したかのようにビートを見つめた。ビートは表情を険しくしながらも、

「分からない・・・けど、やるしかない!」

ビートとハミイは見つめ合い頷くと、ニクスとリリスも思わず聴き惚れる歌を歌いだした・・・

魔法界・・・

魔法学校の校長は、校長室で大好きな冷凍みかんを、美味しそうに丸かじりしながら食べていた。通常冷凍みかんは、魔法を使って解凍してから食べるのが一般的だったが、校長は凍ったまま丸かじりにするのが好きだった。

「ウム、美味しー！」

「フッフ、毎日食べてよく飽きませんわね？」

そう校長に話しかけたのは、校長愛用の水晶玉のキャシー、まるで水晶玉の中で命を宿しているかのような彼女は、水晶玉の中に魔法つかいの風貌をした女性のシルエツトが映って居て、校長の理解者でもあり、相談相手でもあった。その占いは的中率が高く、校長も信頼していた。ほのぼのとした何時もの日常だったが、その平和は今破られようとしていた・・・

（聞け、魔法界の者共よ！我が名はカイン・・・魔界の者と言えば、貴様らにも分かりやすかろう。再三なる我ら魔界からの申し出を拒絶した愚かなる者共よ、これは最終通告だ！今から三十分だけ時間を与えよう・・・我らの軍門に下れ！さもなければ、今から三十分後・・・魔法界に対して総攻撃を掛ける!!）

カインから、突然魔法界の人々にテレパシーが届き、魔法界に対し無条件降伏を告げる宣戦布告が告げられた。魔法界は、カインからの突然の宣戦布告によって、半ばパ

ニツク状態になろうとしていた。魔法学校の校長は、表情を険しくして居ると、50代後半と思われる橙色の髪をして、紫を基調にしたドレスと帽子を被った熟女が、慌てて校長室に飛び込んできた。

「こ、校長先生！こ、これは一体何事でしょう？」

「教頭、騒がずともよい！それより、生徒達の動揺を鎮めるのが先じゃ・・・他の教師達と一緒に、生徒達の心のケアをしてくれ。それと、魔法学校からは決して出ぬように伝えるのじゃ」

「わ、分かりました」

教頭は、校長の指示を受けると、直ぐに威厳ある表情を取り戻し、校長室を出て行った。校長は、両肘を机の上に乗せ、両手で頬を抑えて思案顔を浮かべると、

「遂に仕掛けて来おったか・・・キャシー、さてどうしたものであろうなあ？」

「そうですわねえ・・・占ってみましょう！ハアアア・・・エツ!?これは？」

「どうした、キャシー？」

「魔法学校の制服を着た少女が、光の戦士を連れて舞い戻る・・・とありますわ？」

「何じゃ、それは!?!」

「さあ?」

水晶のキャシーが告げた曖昧な占いの結果に、校長も占った水晶のキャシーも、思わ

ず沈黙した……

加音町……

プリキュア達とアン王女とリコ、そしてブルーは、ビートの身を案じて今尚調べの前に居た。バッドエンドマーチは、右手で拳を握って左手で叩くと、

「あいつ、一人で抜け駆けして……あたしも魔界に乗り込みたかったぜ」

「ここにただ居るのって、なんか退屈だよねえ？アアア、美味しいデザートとかあればなあ？」

バッドエンドピースがそう言うと、思わずリズムをチラチラ見た。まるでカップケーキの催促をされているようで、リズムは思わず不機嫌そうに、

「何よ!?私にカップケーキでも差し入れしろって言うの?」

「別にいいい」

バッドエンドピースが、両手を後ろで組んでリズムから顔を背け、他の一同が苦笑する。そんなやり取りをしている時、突然リコが困惑した表情を浮かべた。両隣に居たハッピーとアン王女は心配そうに、

「リコちゃん、どうしたの?」

「具合でも悪いんですの?」



「な、何か私の心の中に、突然声が聞こえてきて・・・」

一同には全く声が聞こえず、ただリコを見つめていると、リコの顔はどんどん青ざめた。

「ど、どうしよう!? カインって魔界の人が、魔法界が降参しないと、三十分後に魔法界に攻めて来るって言っているの」

『エッ!?』

リコの表情を見る限り、嘘を言っただけで居るようにも見えず、プリキュア達も困惑しながら耳を澄ませるも、一同には全く聞こえる事は無かった。ブラックは、隣に居るホワイトに話しかけ、

「それが本当なら、このままにしておけないよね?」

「ええ、私達で魔法界に行くしか・・・」

そうホワイトが返事を返した時、今度はプリキュア達の心に声が聞こえてきた。

(聞こえるか、日本に住む人間共!俺は魔界の戦士カイン!小賢しくも我ら魔界に、プリキュアという者達が歯向かった。貴様らは、その報いを受けねばならん。だが、俺も貴様ら全てを殺そうとは思わん・・・貴様らには一時間だけ時間をやろう。貴様ら自身でプリキュアを探し出し・・・殺せええ!!)

『なっ、何!?』

突然のカインの一方的な申し出に、一同の表情が険しさを増した。

(それが出来れば、貴様らの命だけは……)

カインが一方的にそう告げた時、何者かの声が割って入った。

(ふざけるんじゃないやねえ!どこの誰だか知らないが、プリキュアを殺せだ?バカも休み休み言え!この世界が、何度プリキュアに救われて来たと思つてやがる。お前の命令何か、誰が聞くかつて言うんだああ!!)

何者かの声を聞いた時、ピーチの表情が変わつた。何故なら、その声には聞き覚えがあつた。異性の喧嘩友達である、その知り合いの声に似て居たのだから……

「この声……大輔!」

「[[[エエ!]]]」

ピーチの声に、瞬時にベリー、パイン、パッションが反応した。彼女達も大輔の事は知つて居たのだから、大輔の名前は知念大輔と言ひ、ラブ達四人がダンスを教つた恩人、ダンスユニットであるトリニティのリーダーであるミユキの実の弟で、ラブとは同じ中学、高校に通つて居た。

「もう、大輔つたら格好付けて……」

(ほう……では、今の貴様の返事が人間共の返答と受け取ろう……今から日本に住む者共を、無差別に攻撃する、プリキュア共よ、止められるものなら止めてみる!フッフ、

ハハハハハ!!)

ピーチが少し嬉しそうな表情もつかの間、カインの一方的な宣戦布告が、日本に住む人々に告げられた。ブルーは顔色を険しくすると、慌てて姿見鏡を出現させた。

「みんな、ここでは情報が不足している。僕の住む場所に一緒に来てくれ!」

ブルーはそうプリキュア達に告げた。調べの館で待機するより、常に世界の情勢を、鏡を通して見る事が出来る自分の部屋の方が、現状では最適だろうという考えからだつた。だがバッドエンドプリキュア達は、自分達の思う様に行動しようと考えて居た。

「あたし達は、勝手にやらせて貰うよ!カインか、上等!!」

「まあ、七色ヶ丘には私達が通う中学があるし、こっちは私達が引き受けるよ」

「あなた達は、他の場所を守るのね」

「精々気張りや!」

「じゃあねえ!」

バッドエンドマーチが、ハッピーが、ビューティーが、サニーが、ピースが、そう言い残し、七色ヶ丘を守ると伝えると、加音町を去ろうとしていた。

「ウン、私達の町をお願い!」

ハッピーは、そんな五人の後姿を目で追いながら、バッドエンドプリキュアの五人を信頼し、自分達が住む七色ヶ丘を託した。

（どうしよう?! 魔法界大丈夫かなあ?）

リコは、不安そうな表情でソワソワしているのを、ブラックは見逃さなかった。ブラックは、何かをホワイトに囁くと、ホワイトも同意したかのように何度も頷いた。その時、上空から見知った声が聞こえてきた。

「みんなあ、今のは一体何だったロプ?」

人間界で暮らすシロップにも、カインの宣戦布告は聞こえていた。シロップは、物騒なカインの発言を聞き、慌てて加音町に舞い戻った。

「シロップ! 大変なのよ、カインがこっちの世界を攻撃するって」

「それで今からあたし達、神様と共にその対応策を考えようかと思つてさ」

「それは一大事ロプ」

ローズとルージュから話を聞いたシロップも、状況を聞き戸惑っていると、ブラックは一同に話し掛け、

「みんな、こんな大変な時に言うのも何だけど、私とホワイトは、リコちゃんを連れて魔法界に行つて来る。シロップ、戻つて来て早々悪いんだけど、魔法界まで頼めるかなあ?」

「それは良いロプ。でも、こっちはどうするロプ?」

「魔法界も、私達の世界同様大変な状況みたいだし、こっちにはみんなが居てくれる」

ブラックとホワイトが一緒に魔法界に向かつてくれると聞き、リコは思わず嬉しそうな表情を浮かべた。本心では、魔法界を助けて欲しいと思つて居たものの、人間界も魔界の宣戦布告を受けた状況では言い出しづらかったが、ブラックとホワイトは、そんなリコの気持ちを代弁してくれたようで、リコは嬉しかった。リコは、ブラックとホワイトに再度確認するように、

「い、良いんですか？」

「ウン！」

ブラックとホワイトが力強く頷いた事で、リコの表情は明るくなった。更にアン王女も三人に近づき、

「でしたら、わたくしも魔法界に向かいますわ。わたくしの先祖キュアマジシャンの故郷を、カインの好きなようにはさせたくありませんわ。ソード、こちらの世界を頼みましたわよ？」

「ハイ！」

アン王女の申し出に、ソードは力強く頷いた。ルミナスとムーンライトは、ブラックとホワイトに声を掛け

「ブラック、ホワイト、気を付けて」

「こつちの事は私達に任せて！魔法界を頼んだわよ？」

「ウン！みんなも気を付けて、向こうが落ち着いたら、私とホワイトも直ぐ戻って来るから、それまでこつちをお願い」

「シロップ、お願い」

「ロプウウウ！」

こうして、ブラックとホワイトは、リコとアン王女を伴い、シロップの背に乗り魔法界へと向かった。ブルーは、去っていくシロップを目で見送ると、残った一同に改めて声を掛け、

「じゃあみんな、鏡の中に」

『ハイ！』

ムーンライト達と妖精達は、ブルーに促され鏡の中へと消えて行つた・・・

カインの宣戦布告の影響は、プリキュアとして次世代を担う事になる、少女達の身にも降り掛かろうとしていた・・・

第二百二十三話：魔界の予言者

完

## 第二百二十四話：次世代を担う少女達（前編）

## 1、大貝町の少女達

人間界へとやって来た大蝙蝠の魔物ブラッドは、とある森の中で木にぶら下がり、カインからの指示を待つて居た。その下では、動物、昆虫、植物の姿をかるうじてした数十体の魔物達が、気配を消しながら待機して居た。暫くすると、ブラッドにカインからのテレパシーが届いた。

（ブラッド、聞こえるか？人間共を襲い、プリキュアを誘き出せ）

カインからの指令を受けたブラッドだったが、ブラッドはカインからの指示を受け、嘗てシャックスが任されていた宝瓶宮を調べ、プリキュアについての情報を得て居た。ブラッドはカインに進言し、

（カイン様、襲う場所は私にお任せ頂けませんか？人間の中には、特に光の力が強い者が居るようです。後々奴らがプリキュアになつて、我らの邪魔にならない内に・・・）

（ほう・・・良いだろう！人間界の方はお前に任せる。だが良いか、その後が重要だ。プリキュア達が人間共を救う為、自分の住む町を離れた隙を狙い、その町を攻撃しろ。慌てて戻つて来たプリキュア共を、お前は命に代えてでもその場に止まらせろ）

（分かりました！で、どの町を狙うので？）

ブラッドはそう告げたものの、カインの考えが読めなかった。これだけの人数が居れば、人間を利用すれば、自分達だけでもプリキュアは倒せると考えて居たが、カインはまるで、はなから自分達だけでは、プリキュアを倒せないと思つて居るように思えた。だが、カインに反論する訳にもいかず、ブラッドは不満を押し殺し、プリキュアが住んで居るどの町を攻撃するのか、カインからの返答を待った。

（先程、小賢しくも俺に意見してきた人間が居てなあ・・・そいつの気配を探った所、どうもフレッシュプリキュアとかいう奴らが住む町の者だと分かった。ターゲットは：：奴らが住む四つ葉町だ！）

（四つ葉町・・・分かりました！私は選抜した者を引き連れ、四つ葉町に向かいます）  
（ウム、ではそちらの世界は任せたぞ）

カインは、ブラッドへのテレパシーを終えると、大きく息を吐いた。魔法界、人間界、そしてブラッドへとテレパシーを送り続けた事で、流石のカインも些か疲労した。  
（さて、魔法界には誰を向かわせるか・・・）

カインは目を閉じると、魔法界総攻撃の人員を選び始めた。

ブラッドは、木から飛び降りると、数十人にもものぼる魔物達を集めた。



「カイン様からお許しが出了。これより何小隊かに分かれ、光が強く反応している町を責める。各小隊十人前後も居れば十分だろう。第一小隊は、大貝町とか言う町に迎え！この部隊は・・・カメラ、お前が率いろ」

ブラッドが大貝町に向かわせる部隊の隊長に命じたのは、筋骨隆々としたナマケモノに似た魔物だった。カメラはゆっくり前に出ると、ブラッドに畏まり、

「わっかっりっまっしたっ」

(ウゝム・・・カメラは強いのだが、どうも動きと喋り方が鈍くていかん)

ブラッドは少しイライラしたものの、気持ちを切り替えて第二小隊の人選を始めた。

「ウ、ウム、任せた・・・次に第二小隊、この部隊は、ぴかりが丘とか言う町を攻略しろ！だがこの町には、千年前にプリキュアが居たと、シャックス様の資料に残されて居た。用心して掛かった方が良いな。この部隊は・・・ネズリオ、お前が率いろ・・・ネズリオ!？」

ブラッドは、部隊長に命じたネズリオと呼んだ魔物の姿が見えず困惑した。辺りをキョロキョロしてみるも、ネズリオの姿は見当たらなかった。

「さつきから目の前に居るっチュウ」

「何!？」

ブラッドは、細い目を更に細めて、声のした辺りを凝視すると、木々に交わり瞬きし

ている物体を見つけた。

「ネズリオ、そこに居たのか？お前の保護色機能は、凄いなあ！？これならばプリキュア共も・・・とところで、実体を表してくれるか？独り言を言ってるようで、俺が間抜けに見えるんだが？」

ブラッドは、困惑しながらネズリオに言葉を掛けると、ネズリオは言われるままに姿を露にした。頭部は鼠、体はカメレオンのようで、ちよつとグロテクスにも見えた。

「次に、第三小隊には夢見ヶ浜を・・・」

ブラッドは、更なる人選を次々に決めて行った・・・

大貝町・・・

相田マナは、親友の菱川六花と共に、もう一人の親友である四葉ありすの家に招かれ、お茶会をしていた所、カインの宣戦布告を受けて居た・・・

「あただしだけじゃなく、六花にもありすにも聞こえたって言う事は、あたしの空耳じゃなかったんだねえ・・・」

「うん、何かプリキュアを目の敵にしているみたいだったわね？」

「気掛かりなのは、無差別に日本を攻撃すると言ってる事ですわ」

マナの言葉に、六花もありすも、少し険しい表情をしながら話した。三人共、世界絵

本博覧会では、直にプリキュア達に接した事で、憧れも抱いていた。そのプリキュアを、カインは目の敵にしているようだった。ありすの執事であるセバスチャンは、

「お嬢様、念の為室内にお入り下さい。お茶会の続きは、室内で致した方が宜しいかと」  
「そうですね・・・マナちゃん、六花ちゃん、室内で・・・」

ありすがそう告げた時だった・・・

ありすは思わず話を中断し、庭先に満ちる邪気を感じて居た。ありすの執事セバスチャンも、異変を察知したようで、三人を庇う様に周囲の気配を探った。マナと六花は何事かと目を見張り、

「ありす、どうしたの!？」

「脅かさないでよね?」

「残念ですが、私達以外の何者かが、この庭先に潜入したようですわ」

「エッ!？」

マナと六花にも、ありすとセバスチャンの険しい表情を見て、今この場所に何者かが侵入して居る事に気づいた・・・

鏡の部屋・・・

ブルーは、日本の各地で邪気が蠢き始めた事を察知し、プリキュア達の周囲に、七枚

の姿見鏡を配置した。

「みんな、どうやら魔界の者が行動に移ったようだ。近くにある鏡に入って、魔物に襲われている町を救って欲しい」

ブルーが一同に頭を下げるも、ピーチは鏡を指さすと、

「神様、この鏡は、何処に繋がって居るんですか？」

「七枚の鏡は、今魔界の者が現れた町へと繋がって居るんだ」

ブルーの説明に、一同は小さく頷いた。ブルームは一同を見渡し、

「とにかく、行くしかないね！」

ムーンライトも一同を見渡すと、一同に指示を出し、

「みんな……行くわよ！」

『ハイ！』

一同がムーンライトに返事を返し、それぞれ行動に移そうとすると、ブルーは慌ててベリーとマリリンに話し掛け、

「ベリー、マリリン、君達二人に頼みたい事があるんだが……二人は残ってくれるかい？」

「あたし達に!？」

ムーンライトの合図と共に、一同は一番近い鏡の中へと飛び込んで行ったが、ベリーとマリリンの二人は、ブルーに呼び止められ、困惑の表情を浮かべた。

ブラッドの命を受けた魔物達が、異空間を使って、同時に光を心の中に宿す少女達に攻撃を開始した……

マナ、六花、ありすの前には、ナマケモノのような容姿をした、筋肉質な魔物カメラが、ゆっくり姿を現し、マナと六花は思わず目を見開いた。

「あれは……ナマケモノさん？」

「まあ、見た目はナマケモノみたいだけど……何かムキムキでキモイんですけど？」

六花はその見た目を見て、若干引き気味だったものの、ありすは目を輝かせると、  
「まあ！楽しそうなナマケモノさんですわあ」

「エエエ!？」

ありすがナマケモノの魔物を見て目を輝かし、マナと六花は思わず困惑しながら顔を見合わせた。セバスチャンは軽く咳払いし、

「いけません、お嬢様……さあ、皆様お屋敷の中に避難を」

そう述べたセバスチャンだったが、まるでマナ達一行を取り囲むように、魔物の群れが次々と姿を現した。カメラを筆頭に、巨大な大トカゲ、五匹の巨大な蟻、コオロギ、そして向日葵（ひまわり）、それらをモチーフにした九匹の魔物達が、ジリジリ四人を包囲して行った。セバスチャンは、直ぐに無線を手に取り、

「お嬢様に手出しはさせん．．．四葉レンジャー部隊！お嬢様達をお守りしろ!!」

セバスチャンの号令の下、突如屋敷の上空に二台のヘリコプターが飛来し、三十名前後の武装した集団が、ロープを伝って降りて来た。マナと六花は、それを見て思わず目を点にした。マナは降りて来た人達を指さし、

「あ、ありす、あの人達は何!?!」

「あの方達は、四葉レンジャー部隊ですわ」

「レンジャー部隊!?!」

ありすの口から飛び出したレンジャー部隊という言葉に、マナと六花が思わず同時に聞き返した。四葉財閥が、色々な事業に手を出して居る事は、二人もありすから聞いていたが、まさか私営でレンジャー部隊まで持つて居るとは、マナと六花も思っても見なかった。マナと六花は、降りて来たレンジャー部隊を呆然と見ていると、セバスチャンは右手を胸に当て、マナと六花に説明を始めた。

「ハッ、お嬢様の護衛を主に、お嬢様の災いを排除すべく．．．」

セバスチャンの言葉を、慌てて六花が遮り、

「イヤイヤイヤ、クーデターでも始める気?」

「御心配には及びませんわ。あれはエアガンですから」

「そういう問題!?!」

ありすからエアガンだと聞かされても、マナと六花は、フル装備したレンジャー部隊に驚愕した。カメラは、突如現れた武装したレンジャー部隊を見るも、さしたる動揺を見せる事は無かった。銃を構えるレンジャー部隊が、ジリジリ魔物の群れに近寄るも、巨大な向日葵の様な魔物から、無数の蔓が伸び、レンジャー部隊の身体を捕らえた。『ウワアアア!?!』

悲鳴を上げたレンジャー部隊は、まるで魂を抜かれたかのようにグツタリし、魔の向日葵は、興味を失ったかのように放り投げた。どうやら、眠り粉でも吸ったかのように、レンジャー部隊は、皆夢の中へと堕ちて行った。セバスチャンは、信じられないといった表情を浮かべた。

「バ、バカナ!?!四葉財閥が誇るスーパーレンジャー部隊が、3分も持たず全滅だ!?!」  
セバスチャンが驚愕するのも仕方が無かった。彼らは射撃の大会で、過去に好成績を残した程の精鋭だったのだから・・・

マナは、レンジャー部隊が頼り投げられた瞬間、カメラの傍まで歩き出した。六花とありすは驚愕し、

「ダメよ! マナ、戻って!!」

「マナちゃん、危険ですわ!」

だが、マナは歩き続けた・・・

その目には、どこか闘志が宿っているようにも思えた。キヤメラは、マナを見るとブラッドの言葉を思い出して居た。

（なぐるくほくど）

ブラッドが言つて居たのは、マナのような人間が、後に魔界の脅威になるのではないかと実感した。マナは、キヤメラの前で立ち止まると、

「ナマケモノさん、どうして此処に来たのかは知らないけど、乱暴な事は止めよう？」  
「やくめくなくい」

キヤメラがそう言うやいなや、キヤメラの右腕が伸び、マナの身体を捕らえた。

「キヤア！」

「マナアア！」

「マナちゃん！」

マナの悲鳴を聞き、六花とありますが思わず叫ぶも、油断した二人の隙を付き、向日葵の魔物が、再び蔓を伸ばして六花とありすを捕らえた。

「キヤアア！」

「おのれえ、この化け物共！お嬢様達を放せ！！」

セバスチャンは、ありすと六花を捕らえた植物に対し、執事拳法を駆使し立ち向かうとするも、相手が人間ならば兎も角、魔物相手では相手にならず、蔓に跳ね飛ばされ



て壁に激突して呻いた。

「グウウウ、お、お嬢様、暫しの・・・ウツ」

セバスチャンは、何とか立ち上がろうとするも、思わず目が眩み膝を付いた。

（又ウウ、こ、この程度で！）

「又ウオオオオ！」

セバスチャンは、気合を込めて何とか立ち上がるも、マナを捕まえたカメラの右手が、六花とありすを捕らえた植物の魔の蔓が、三人の身体を益々締め付けていった・・・

その時、突然現れた姿見鏡の中から、ピンクの衣装を着た二人のプリキュアが飛び出して来た。一人はキュアピーチ、もう一人はキュアドリーム、ピーチは、マナを捕らえていたカメラ目掛け走り、助走を付けて大きくジャンプすると、

「タアアアア！」

ピーチは、全体重を右拳に込め、雄叫びながら急降下パンチをカメラに浴びせた。ピーチの奇襲を受けたカメラは、思わず捕らえていたマナを放り投げて尻もちを付いた。その勢いで宙に飛ばされたマナを、ピーチがジャンプして受け止めた。

「大丈夫!？」

「ハイ！あなたには、また助けられちゃった」

「そっさいえっばそっだねえ」

マナに言われたピーチも、世界絵本博覧会の事を思い出し、思わずマナと顔を見合わせて苦笑した。マナはハッと我に返り、心配そうな表情でピーチに話し掛け、

「六花やありますが・・・」

「大丈夫、もう私の仲間が助けに向かったから」

ピーチの言葉を表すかのように、険しい表情を浮かべたドリームは、六花とありすを捕らえた向日葵の魔物に対し、

「プリキュア！シューティングスター!!」

ドリームは、上空に舞い上がり、腕をエックス字にして突進した。向日葵の魔は、現れたドリーム目掛け無数の蔓を伸ばすも、シューティングスターは、その勢いのまま蔓を押し返し、向日葵の魔を突き抜け、蝶の残像が浮かび上がると同時に、植物の魔を打ち破った。ドリームのお陰で解放された六花とありすだったが、今度は大トカゲの魔物が、六花目掛け這い寄って来た。

「こ、今度はトカゲのお化け!？」

顔色変えた六花だったが、大トカゲの周囲が凍り付き、まるで金縛りにあったかのようになり動きが止まった。六花は、氷の結晶を操る青い衣装を見て目を輝かせた。ゆつくり六花を庇うように前に出たのは、キュアビューティだった。

「プリキュア！ビューティ・ブリザード!!」

ビューティは、動きが止まった大トカゲの魔物に対し、右手に冷気を球状に凝縮し、左手で空中に雪の結晶を作った後、雪の結晶と氷の球を合わせ、大トカゲの魔物目掛け冷気の技、ビューティブリザードを放って一蹴した。後ろを振り返ったビューティは、六花を労わる様に声を掛け、

「大丈夫ですか？」

「は、はい」

「まだ危険ですので、少し離れて居てください……サンシャイン、四人をお願いします」  
「ウン、四人は私に任せて！その前に……花よ、舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

最後に現れたのはキュアサンシャイン、サンシャインは、動きが鈍ったセバスチャンと、セバスチャンを庇ったありすを狙った、五体の蟻の集団の魔物に対し、ゴールドフォルテバーストを放った。シャイニータンバリンが輝き、ひまわり型のエネルギー光弾が、蟻の魔物目掛け多数飛んで行った。光弾に直撃した魔物は動きを抑えられ宙に浮かび、逃げた蟻の魔物も居たが、サンシャインは軌道を変えて追尾させ、五体の蟻の魔物全てを、宙に浮かび上げさせた。

「ハアアアアア！」

サンシャインがシャイニータンバリンをクルクル回し、五体の蟻の魔物を一気に浄化

させた。ありすは目を輝かせると、

「一度に五体の蟻さんを・・・凄いですわあ」

「ヒュウヒュウ！サンシャイン、ラブリーでしゅー！」

サンシャインのパートナー妖精ポプリが、サンシャインの活躍を見て大声援を送り、ありすは目を輝かせて、ポプリの目の前でしやがみ込み、

「まあ、あなたはあのプリキュアさんの？」

「エッヘン！サンシャインのパートナー、ポプリでしゅー!!」

ポプリは思わず自慢げに腰に手を当てて仰け反り、それを見たサンシャインは、思わず苦笑を浮かべた。そこに、マナを抱いたピーチが、サンシャインの傍にマナを下ろし、

「サンシャイン、この子もお願ひ」

「ハイ！みんな、私から離れないで」

「わ、分かりました」

「ご指示に従います」

マナ、六花、ありす、そしてセバスチャンは、サンシャインの指示に従い、サンシャインの傍で戦いの行方を見守った。

「今度は私の番！悪いの、悪いの、飛んでいけ！プリキュア！ラブサンシャイン・フレッシュシュー!!」

ピーチは、向かってきたコオロギのような魔物に対し、ロツドの先端からハート形の光弾を照射し、コオロギの魔物の動きを封じると、

「ハアアアアア！」

ロツドをクルクル回して、コオロギの魔物を浄化した。ピーチに合流したドリームとビューティが、第一部隊のリーダーであるキメラと睨み合った。

「おゝまゝえゝたゝちゝが．．．」

キメラのゆつたりした喋り方を、当初は聞いていた三人だったが、次第にドリームとピーチが痺れを切らした。

「遅い！もうちよつと早く喋って」

「むゝりゝ」

キメラにあつさり拒否されて、ドリームとピーチは頬を膨らませた。ビューティは、キメラに警戒感を持ち、

「お二人共、油断為さらないで下さい。まだどんな行動をするか．．．」

ビューティがドリームとピーチに、キメラの事を油断しないように忠告しようとしたのも束の間、ドリームとピーチは、呼吸を計ったかのように宙に飛び上がり、

「プリキュア！シューティングスター！！」

「ヤアアアアア！」

ドリームがシューティングスターで、ピーチは先程カメラに尻もちを付かせた、全体重を乗せた急降下パンチを浴びせた。だが、カメラは右手でシューティングスターを、左手でピーチの急降下パンチを完全に受け止めた。

「ドリーム！ピーチ！」

ビューティとサンシャインが、カメラに捕まった二人を見て思わず叫び、マナはこの戦いの様子をジイと見守り続けた。

カメラはその場でゆっくり回り始め、ハンマー投げのようにドリームとピーチを空中目掛け投げ捨てた。ぶつかりそうになったドリームとピーチだったが、互いの右手をクロスさせて衝撃を弱め、そのまま地上に降り立った。ドリームは、直ぐに頭を切り替え、

「どうやら、力はあるそうだね・・・ピーチ、ビューティ、援護して、私に考えがあるの！サンシャイン、ゴールドフォルテバーストを頭上に！」

「分かったわ！花よ、舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

サンシャインは、ドリームの指示を受け、ゴールドフォルテバーストの力で、太陽のような光のゲートを空中に作り出した。

「今だ！プリキュア！シューティングスター!!」

ドリームは、サンシャインが作り出したゴールドフォルテバースト目掛け、シュー

テイニングスターで突入した。時間を稼ぐかのように、ピーチとビューティが、キャメラと小競り合いを続けた。ドリームの全身が黄金に輝くと、キャメラ目掛け急降下を始めた。

「プリキュア！シャイニング・スター〜!!」

嘗て、闇の救世主を名乗るバロムの力で、復活したサーキュラスに苦戦するムーンライトとダークプリキュアを援護した、ドリームとサンシャインの合体技であるシャイニングスターが、今再びキャメラ相手に炸裂した。キャメラは両手で堪えようとしたものの、シャイニングスターの勢いを止める事は出来ず、呆気なく両手を弾かれ、キャメラの身体をシャイニングスターが光の残像と共に貫いた。マナと六花は目を輝かせ、

「凄い!」

二人とは逆に、ありすは少し残念そうな表情で首を傾げ、

「あのナマケモノさん・・・飼ってみたかったですか・・・」

『エエエエ!』

アリスの発言を聞き、マナと六花、ドリーム、ピーチ、サンシャイン、ビューティが、思わず同時に驚きの声を発した。セバスチャンは再び咳払いをすると、

「いけません、お嬢様・・・プリキュアの皆さん、お嬢様達をお助け下さり、誠にありがとうございます。よろしければ、こちらで細やかな御持て成しを致したいのですが?」

「お誘いありがとうございます。ですが、直ぐに戻って他に襲われている町が無いか、確認をしなければなりませんので・・・」

ビューティが一同を代表して、セバスチャンの申し出を辞退すると、四人はマナ達に手を振りながら、姿見鏡にゆくり歩き出した。マナは残念そうに、

「アアア、差し入れに持って来た家のお店の桃まん、一杯持って来たから、プリキュアのみんなにも食べて貰いたかったなあ・・・」

マナがそう呟いた瞬間、歩いて居たドリームの足が止まると、そのまま後ろ歩きでマナ達の方に戻って来た。

「「エッ!?!」」

突然ドリームが後ろ歩きで戻って行った為、ピーチ、サンシャイン、ビューティは、思わず後ろを振り返って呆然とすると、ドリームは頭を掻きながら、

「エエエと・・・お土産に貰って帰っても良いかなあ?」

「「ドリーム!」」

ピーチ、サンシャイン、ビューティは、思わずドリームを困惑気味に窺めるも、マナは大喜びで桃まんを差しだし、

「全然大丈夫です!ハイ!!」

「ウワア・・・美味しそう!ありがとう!!」



「フフフフ」

マナは嬉しそうに、ドリームに差し出し、ドリームも嬉しそうに差し入れの桃まんをマナから貰った。それを見たピーチ、サンシャイン、ビューティは、思わず笑みを浮かべた。

こうしてマナ達は、四人のプリキュアの活躍で救われた・・・

## 2、びかりが丘の少女達

びかりが丘神社・・・

千年前、キュアミラージュがまだプリキュアになる前、巫女としてこの神社に任せ、この地でブルーと出会った。今この場所では、ミラージュの妹の血筋を組む、二人の姉妹が空手の組手を行っていた。姉妹の名前は氷川まりあとその妹氷川いおな、その可愛らしい容姿とは裏腹に、彼女達は実家が営む空手道場の後継者として、日々切磋琢磨していた。

「エイッ！ハッ！・・・どうしたの、いおな!?型に気合が籠って無いわよ?」

「だってお姉ちゃん、さっきの不気味な声・・・」

「そうね、確かに気にはなるけど・・・」

いおなに聞かれたまりあも、思わず顔色を変えた。突如二人の心にも聞こえて来た力

インの声、自分一人ならば幻聴だと思えたかも知れないが、いおなにも聞こえて居たとなれば、まりあも真実だったと認める以外無かった。

「今日は早めに切り上げて、道場に戻りましょう」

「ウン、お姉ちゃん」

二人は再び型の稽古を始めた時、思わず二人の顔色が変わった。何かの気配が、この神社周辺から感じられた。

「お姉ちゃん！」

「ええ、誰か居るわね・・・しかも、明らかに私達に敵意を向けてるわ」

まりあは、道場の師範代である祖父から、師範代代行を命じられる程の実力者だった。そんなまりあでも、思わず怯む様な邪気が、明らかに自分達姉妹に向けられている事に、まりあに緊張感が走った。

「いおな、油断しないで」

「う、うん」

二人は周囲を警戒しながら、ゆっくり階段目掛け歩を進めると、木々が物音立てて大きく揺らぎ、邪気はゆっくり姿を現した。上空に舞った蛾のような巨大な魔物が、鋭利な鎌のような両手を持った、カマキリのような魔物が、不気味にウネウネ身体を動かし、無数の手を持ったムカデのような魔物が、まりあといおなの前に現れた。いおなは思わ

ず目を見張り、

「か、怪物だわ!？」

「いおな、逃げるのよ!」

まりあは、瞬時に逃げる判断を下した。まりあといおなに対し、己の性的欲求を満たそうとするような輩ならば、懲らしめてやろうと考えて居たまりあだったが、相手が怪物では、先ず妹いおなの身を案じ、逃げる事を優先した。いおなの手を取り、駆け上つて来た階段目掛け走り出したものの、カマキリの魔物が背中の中の羽を振動させると、一気にジャンプし、二人の行く手を遮り、蛾の魔物がまりあといおなの上空を旋回した。

「オオオと、逃がしやしないぜ?」

「キュキュキュキュ、人間を食えるとは久方ぶりだあ」

「しや、喋った!？」

巨大な昆虫のような生き物が、あろう事か人語を発し、思わずまりあといおなは驚愕した。いおなは思わず怯み、まりあの胴着を力強く握った。

「お、おねえちゃん」

「大丈夫よ!あなたは、私が守る!!」

まりあはそう言うと、怪物の群れに対し、空手の構えを取った。

「「キシヤキシヤキシヤ」」

魔物達は、自分達と戦おうとするまりあを見て嘲笑を発し、先ず蛾の魔物が二人を上空から攻撃しようとしたその時だった。

「花よ、輝け！プリキュア！シルバーフォルテウェイブ!!」

「エツ!？」

まりあといおなは、突然聞こえた声に反応し、思わず声が聞こえた方向を見ると、神社の屋根の上に、銀色の衣装を靡かせながら、ムーンタクトの先端から、花の形をした光弾を、蛾の魔物目掛け放ったキュアムーンライトの姿を見た。

「ハアアアアア!」

ムーンライトは、シルバーフォルテウェイブで捕らえた蛾の魔物を、タクトをクルクル回して浄化するやいなや、神社の屋根からジャンプして、まりあといおなを庇う様に、カマキリの魔物とムカデの魔物に向き合った。まりあといおなは目を輝かせながら、

「あなたは、世界絵本博覧会で見た・・・銀のプリキュア」

「エツ、あの時のプリキュアが、また助けてくれたの?」

いおなは、キラキラ目を輝かせながら、ムーンライトの後姿を眩しそうに見た。ムーンライトは、チラッと背後を振り向くと、

「今の内に離れて居て、あなた達二人は・・・私が守る!」

ムーンライトは、そう言うと、タクトを二体の魔物に向けて身構えた。カマキリとム

カデの魔物は、プリキュアという名前を聞くと、ムーンライトに対し敵意を向けた。「こいつがプリキュアか．．．よし、俺が行く！」

カマキリの魔物は、鎌のような両手の腕をカチカチ鳴らしながら、ムーンライト目掛け攻撃して来た。ムーンライトは、その攻撃を躲し、避けきれない攻撃には、ムーンタクトを巧みに利用して攻撃を防ぎながら、魔物の隙を付くと一気に反撃を試みた。ムーンライトのパンチが、キックが、容赦なくカマキリの魔物に浴びせられ、最後に回し蹴りで吹き飛ばされ、ムカデの魔物に激突して二体がもがいた。それを見たムーンライトは、一気に勝負を決めるべく行動に出た。

「プリキュア！ フローラルパワー・フォルテツシモ!!」

ムーンライトが、赤紫の光を帯びながら上昇し、一気に二体の魔物目掛け急降下した。態勢を整えようとした二体の魔物であったが、フォルテツシモの光が二体を貫き、爆風を受けた。

「ハアアアアア！」

ムーンライトがタクトをクルクル回転させると、二体の魔物は心地良い表情で宙に浮かび上がり、浄化されていった。まりあととおなは、三体の魔物を無傷で倒したムーンライトの強さに驚いていた。ムーンライトは、ゆっくりまりあととおなに近づくと、

「怪我はないかしら？」

「ハイ！あなたのお陰で、私も妹も無事です」

「あ、あのう・・・ありがとうございませした！」

いおなは、姉まりあと同じように、ムーンライトを尊敬の眼差しで見た。三対一という不利な状況下でも、逃げる事無く自分達姉妹を助ける為、魔物に立ち向かうその姿に憧れを抱いた。

（私も、この人のような強い信念を持ちたい）

いおなが後に、プリキュアとなつて戦う姿勢は、この時のムーンライトを意識しての事だった・・・

「どう致しまして・・・でも、この街には他にも魔界の魔物が蠢いている。家まで送るわ」  
ムーンライトは、ようやく二人に笑みを浮かべ、まりあといおなは、ムーンライトに救われ、共にぴかりが丘神社を後にした・・・

愛乃めぐみは、親友の大森ゆうこの実家で、お弁当屋を営むおおもりご飯にやつて来て居た。

めぐみの母かおりは病弱で、病院に行く時と体調が良い時以外は、ほとんど家で過ごし、めぐみが母の代わりに買い出し担当を行つて居て、この日はおおもりご飯で、から揚げとコロツケなどの総菜を買いに来ていた。既にコロツケは売り切れていたが、ゆう

この母ようこや、父たけおから、揚げたてのコロッケがもう直ぐ揚がるから、少し待ってればと言われ、おおもりご飯の店前で、コロッケが出来上がる間、外にあるテーブル席に腰掛け、ゆうこと雑談に興じていた・・・

「ねえ、ゆうゆう、さっきの声って本当かなあ？」

「うん、どう何だろうね？でも、プリキュアって言ってたし、本当かも知れないよね」  
「このぴかりが丘に、こんな怪物来たらどうしよう？・・・ガオオオ！」

めぐみはそう言うと、両手の人差し指を口の中に入れ、左右に引っ張って変顔で怪物の鳴き真似をした。ゆうこは思わず苦笑し、

「アハハ、もう止めてよ、めぐみちゃん」

この時までには、まさかめぐみとゆうこも、本当にこの場所に怪物が居るとは知る由も無かった。

(な、何?! 同化してる俺に気づいたチューの!?)

ネズリオは、めぐみとゆうこが自分の存在に気づいて居ると勘違いし、二人が只者ではないと判断した。

(第二部隊、全員集合! この危険人物達を排除するチューの)

ネズリオのテレパシーを受けた第二部隊が、おおもりご飯目掛け続々と集結しようとしていた。

「ウワアア！怪物だあ！！本当に怪物がぴかりが丘に攻めて来たぞおお！！」

「キヤアアアア」

逃げ惑う人々の悲鳴が、ぴかりが丘に響き渡る中、動く大木の魔物が、ピヨンピヨン跳ねた巨大カエルの魔物が、長い首をしたキリンのような魔物が、異形な容姿をした半魚人のような怪物が、おおもりご飯を包囲するかのよう集まって来た。

「ほ、本当に出たああ!?!」

めぐみとゆうこは困惑した・・・

本当にこのぴかりが丘に、怪物がやって来るとは思っても見なかった。ゆうこの父も母も、そして姉も、そんな騒動に気付かないのか、おおもりご飯から出て来る気配が無かった。

「お父さん、お母さん、お姉ちゃん」

ゆうこは、両親と姉に知らせに向かおうとするも、その行く手を遮るかのよう、飛び跳ねたカエルが立ち塞がった。

「ゆうゆう！」

めぐみがゆうこを心配し、ゆうこの側に近づくと、怪物達はまるで二人を狙うかのよう、めぐみとゆうこを包囲した。

「な、何?!まるで私達を狙ってるみたい?」



「う、うん・・・どうしよう?」

めぐみとゆうこは、前に進む事も、後ろに進む事も出来ず、どうする事も出来ずに困惑した。

「よし、その危険人物達をパクつと食っちゃまえ!」

「エエエ!?!」

ネズリオの命を受けた魔物達が、大きく口を開けたその時、ダークドリームが駆け付け、宙に飛び上がると、

「プリキュア!ダークネス・スター!!」

ダークドリームは、ドリームのシューティングスターに似た必殺技、黒き流星と化するダークネススターを放って、大木の魔物を打ち破り、めぐみとゆうこの側に着地した。

「どうにか間に合ったようね」

ダークドリームに話し掛けられ、めぐみとゆうこは目を輝かせた。

「あ、あなたは・・・もしかしてプリキュア?」

「助けに来てくれたんですか?」

「エエ、私はダークドリーム・・・そして」

ダークドリームの話の続きを現すかのように、三人のプリキュアが新たに駆け付け  
た。

「ダークネス・ウィップ！」

「閃け！ホーリーソ〜ド!!」

「プリキュア！マーチ・・・シュートオオオ!!」

一人はダークレモネード、もう一人はキュアソード、そしてキュアマーチ、ダークネスウィップでキラリンのような魔物の動きを封じ、ソードがその隙にキラリンの魔物にホーリーソードを放って浄化し、マーチは半魚人のような魔物をマーチシュートで浄化した。

「ウワアア！またプリキュアだああ!!」

めぐみとゆうこは、ぴかりが丘を助けに来てくれた四人のプリキュアに大声援を送った。残ったカエルの魔物に、四人の意識が集中した時、ネズリオの舌が伸び、ダークドリーム、ダークレモネード、ソードとマーチのうなじを舐めた。

「「「キャア!?!」」」

四人は、その気色の悪い舌触りに、全身が金縛りにあつたかのように麻痺をした。ネズリオは、カエルの魔物に指示を出し、

「今の内に、そいつらの目の前で、その二人を食ってやれっチューの」

ネズリオの指示を受け、カエルの魔物が舌なめずりしながら、めぐみとゆうこに近づくと、思わず二人は後退った。

「エエエ!? こ、来ないでえ!」

何とか身体を動かして救出に向かいたい四人だったが、身体がいう事を聞かなかった。ダークドリーム、ダークレモネード、ソードとマーチは顔色を変え、

「や、止めなさい!」

「ふ、二人共、逃げてえ!」

「か、身体が動きません!」

「さつき舐められたからなの?」

身体が動けない四人は、目の前で窮地に陥るめぐみとゆうこを、救う事が出来なかった。カエルの魔物が、めぐみとゆうこに舌を伸ばしたその時、

「ハアアア!」

上空からムーンライトが急降下キックを放ち、カエルの魔物はその衝撃で倒れ込んだ。

「「ムーンライト!」」

「た、助かったああ」

めぐみとゆうこは、思わず抱き合いながらホッと安堵した表情を浮かべると、いおなとまりあが慌てて二人に駆け寄り、

「めぐみ、ゆうこ、無事?」

「二人共、怪我は無い？」

「いおなちゃん！まりあさん！」

「ハイ、プリキュアのお陰で」

互いに無事な姿を確認し、四人はホッと安堵した。まりあは三人に話し掛け、

「さあ、プリキュアの邪魔にならないように、私達は少し離れて居ましょう」

「「はい！」」

まりあにそう進言され、三人は少し離れた場所からプリキュアの戦いを見守った。

ムーンライトは、四人を振り返り、

「四人共、油断したわね？」

ムーンライトに注意された四人は、申し訳なさそうな表情を浮かべるも、ダークド

リームは周囲を見渡し、

「ゴメン・・・でも気を付けて！姿は見えないけど、もう一体この近くに居るわ」

「姿が見えない!?それは厄介ね・・・」

ムーンライトの脳裏に、嘗て加音町でマジヨリーナのアイテム、ミエナクナールによつて透明化したアカンベエ相手に、苦戦した経緯を思い出して居た。ダークドリームは、ダークレモネードにアイコンタクトすると、

「カエルの魔物は、私達が引き受けるわ」

「あなた達は、見えない魔物を探して」

「「分かったわ」」

ムーンライト、マーチ、ソードの三人は、ダークドリームとダークレモネードの進言を受け入れ、近くに居るであろうネズリオを探すべく周囲を警戒した。ダークドリームとダークレモネードは、巨体ながら身軽に跳ね回り、舌で攻撃してくる巨大なカエルの魔物に苦戦しながらも、次第にカエルの動きを見切つて行つた。

「レモネード、カエルの舌を封じて！その隙に私が仕掛ける」

「了解！じゃあ、先ずは・・・ラアアアア！」

ダークレモネードは、歌を利用しカエルの動きを制限すると、

「今だ！ダークネス・ウィップ！」

ダークレモネードは、カエルの舌を華麗な鞭捌きで捕らえた。それを見たダークドリームは、

「プリキュア！ダークネス・スター!!」

黒き流星と化したダークドリームが、カエルの魔物を闇に返した。離れて見ていためぐみ、ゆうこ、いおなは目を輝かせ、

「格好良い！」

「あの黒い衣装の二人のプリキュアは、世界絵本博覧会じゃ見なかったよね？」

「ウン、あつちの紫のプリキュアも居なかったと思うわ。でもプリキュアって、黒い衣装も似合うわね」

思わずはしやく三人に、まりあは思わず苦笑を浮かべるも、

（まだ終わってないわ！姿が見えない魔物何て、どうやって・・・）

まりあの不安は的中し、ムーンライト達は、ネズリオを見つけ出す事が出来なかった。ムーンライトに焦りが浮かんだ。

「クツ、迂闊に攻撃を仕掛ける訳には・・・」

（チュチュチュ、そうやすやす見つかるかチューの）

ネズリオは、見付けられる筈が無いと嘲笑を浮かべるも、そんなネズリオの油断を、ゆうこが見逃さなかった。ゆうこは、生まれ育ったこの場所を熟知していた事を、ネズリオは知らなかった。ゆうこは、傍に居たマーチを手招きすると、マーチは首を傾げながらゆうこに近づいた。

「どうしたの？」

「エエエと、あのテーブルの椅子を良く見て貰えますか？」

「エツ!?何処？」

「あそこです・・・あそこの椅子って、私が小さい時、めぐみちゃんや相良くんと一緒に  
お絵かきしちやって、今でもその時の絵が微かに残っているんですけど、あの椅子には

その絵が描かれて無いんです」

ゆうこはそう言うのと、お店の人気のオマケ、ハニーキャンデイの包みを取り、指摘した椅子目掛け頬り投げた。すると、何かが一瞬でハニーキャンデイを奪い去った。その行為を、プリキュア達も見逃さなかった。ムーンライトの口元がニヤリと笑み、

「どうやら、向こうから居場所を知らせてくれたようね」

「私に任せて下さい！閃け！ホーリーソ〜ド!!」

ソードは、右手から無数の剣形のエネルギー弾を、ネズリオ目掛け飛ばした。ネズリオは、堪らず実態を表すと、既にマーチがマーチシューートの体勢に入って居た。

「姿が見えればこっちのもん・・・行くよ！プリキュア！マーチ・・・シュートオオオ!!」

「バ、バカなあああ!?!」

緑の光弾がネズリオに命中し、思わずネズリオが悲鳴を上げながら浄化された。マーチはゆうこに微笑みかけ、

「あの魔物を倒せたのは、あなたのお陰だよ・・・ありがとう」

「エへへ、お役に立てて良かった」

「ゆうゆう・・・」

「ゆうこ・・・」

「羨ましいー!」

ゆうこがマーチに感謝された事で、めぐみといおなは、そんなゆうこを羨ましそうな視線を浴びせた。それを見ていたムーンライト達はクスリと微笑んだ。ムーンライト、ダークドリーム、ダークレモネード、ソード、マーチは、順番にまりあ達に声を掛け、「もうこの街に魔物は居ないようね」

「それじゃあ、私達は帰るわね」

「バイバイ！」

「失礼するわ」

「間に合って良かった・・・じゃあー！」

五人が手を上げながらびかりが丘を去ろうとすると、ゆうこは慌てて呼び止め、

「待ってください！助けて頂いたお礼に、おおもりご飯特製のお弁当を食べて行って下さい」

ゆうこに呼び止められ、歩みを止めたムーンライト達、困惑気味に振り返ったムーンライト達に反し、マーチは目をキラキラ輝かせると、

「特製のお弁当!?!ち、ちなみに、どんなお弁当なの?」

「「「マーチ!?!」」」

マーチは、戦闘を終えた事でちょうどお腹が空いて居たのか、ゆうこの話に興味津々で聞き返した。ムーンライト達は、呆れたようにマーチを窺めるも、マーチはまだ名残



惜しそうに、

「き、聞くだけだから良いでしょう?」

「マーチ、遊びに来たんじゃないわよ!折角の申し出だけど、気持ちだけ頂くわ」

ムーンライトに、少し強い口調で窘められ、ムーンライトがゆうこにお弁当を辞退すると、マーチはガツクリと肩を落とした。

「・・・ハア・・・」

ゆうこは、溜息つくマーチを少し憐み、ポケットからハニーキャンディを取り出した。

「じゃあせめて、ハニーキャンディだけでも持つて行って下さい」

ゆうこがマーチにハニーキャンディを手渡そうとすると、マーチは恨めしそうな視線をムーンライトに向けた。ムーンライトは思わず苦笑し、

「そうね、キャンディなら頂くわ。せっかくのご厚意ですものね」

ムーンライトに許可をされ、マーチは嬉しそうにハニーキャンディをゆうこから受け取り、早速包みを開けて口の中に放り込んだ。見る見るマーチの表情が緩んだ。マーチは、今まで色々なキャンディを舐めてきたが、ハニーキャンディの美味しさは格別だったように、

「お、美味しいいいいい!」

「良かった」

マーチは目じりを垂れ下げ、幸せそうな表情を浮かべ、ゆうこも思わず嬉しそうに目を細めた。ムーンライトは、気持ちを切り替えると四人を見つめ、

「さあ、戻るわよ」

「「ハイ」」

去って行く五人のプリキュアに、まりあは手を振りながら、

「プリキュア、ありがとう！」

めぐみ、ゆうこ、いおなも、まりあに続くかのようにプリキュア達に手を振り、

「「バイバイ！」」

五人のプリキュアの姿が消え去るまで、四人の少女達は手を振り続けた・・・

### 3、キラキラル

苺坂町にやって来たのは、ルミナス、ブライト、ウィンディ、ローズ、そしてメロディとリズムの六人だった。だが、六人の予想に反し、苺坂町は何事も無いように平和だった・・・

メロディは辺りを見渡すも、魔物が出た様な騒ぎにはなっていない。メロディは首を傾げ、

「アレエ!? 神様の話じゃ、あの鏡は魔界の魔物が居る所に繋がってるって、神様は言っ

たよねえ？」

「エエ、見落として居るかも知れないから、二人ずつ分かれてこの町を調べてみましょう」

メロデイの問いに、ローズが頷き、二人ずつ分かれてこの町を搜索しようとした時、コミュニケーション姿のポルンが、誰に話すともなく、独り言を言い始めた。

「一杯、妖精が居るポポ・・・悪い、悪い狼が狙ってるポポ・・・怖いポポ」

「ポルン、どうしたの？何か感じ・・・これは!？」

ポルンに問おうとしたルミナスだったが、ルミナスにも、背後の山の上から、嫌な気が漂って居る事を感じた。ルミナスは、慌てて探索に向かおうとしていた一同を止め、

「待って下さい！あの山の上の方に、何か嫌な気配が沢山します」

「「「エッ!」」」

ルミナスの忠告を受け、一同が思わず背後の山を見上げた。その山は、どこか母のよな形に似て居た。ブライトは山を見上げながら、

「ルミナス、あの山に何かが居るのね？」

「ハイ！ポルンは言っていました。あの山には沢山の妖精が居て、悪い狼が狙ってるって」

リズムは少し首を傾げながら、

「悪い狼!?それが魔界の者って事かしら?」

「だとすれば・・・あの山に行ってみましょう」

「[[[[エエ]]]]」

ウインディの言葉に同意し、一同は悪しき気配漂う山へと向かって走り出した。

いちご山・・・

百年前、大いなる闇に呼応したかのように、この街に災いをもたらしたノワールという者を、たった一人で食い止めたプリキュアが、山の麓に住んで居たと言われる山、そこには大勢の妖精達が、密かに暮らして居た・・・

『キラキラキラルン、キラキラルン、美味しく、美味しく、美味しくなあれ!』

呪文のように唱えながら、妖精達は大好きなデザートを作って居た。歪な出来であったが、妖精達は互いに作ったデザートを試食しあい、意見を述べ合った。その中の一人、ペコリンという妖精は、頑張り屋ではあったが、上手く調理する事が出来ず、何時も失敗を繰り返して居た。ペコリンの容姿は、少しぽっちゃりしたピンク色の身体に、頭頂部にチョココンとある髪と、ふわふわした耳、そのふわふわした耳は、その時の気分によって色が変わるようだった。

「また失敗ペコオ・・・」

「ペコリン、気にする事無いキラ  
「そうピカ」

そんなペコリンを、キラリンとピカリオの姉弟が励ました。キラリンは、ピンク色の耳と髪をしていて、耳元にはヒイラギと赤色の実があしらわれて居て、赤いスカーフを首に巻いて居た。弟のピカリオは、キラリンと双子の妖精という事もあり、ほぼ同じ姿をしていた。違っているのは、耳が左向きで、体も水色を基調として、薄紫のスカーフをして居た。ペコリンは、そんなキラリンとピカリオに励まされ、元気を取り戻してまたスイーツ作りを始めた。妖精達の長老は、そんな一同を温かい目で見つめた。長老の容姿は、長老という名前らしく、妖精が年老いたような姿をしていて、身体はペコリンや他の妖精達よりも二回り以上は大きかった。モコモコした白い毛が、頭部のほとんどを覆って居て、普段は見えづらいが、つぶらな瞳を見せながら妖精達を見守った。

だが、そんな妖精達の身に、危険が迫って居た事に気づく者は居なかった・・・

ブラッドから第七部隊を率いるように任命されたのは、凶悪な瞳をした狼男だった。狼男の名前はガイ！だが、ガイはプライド高い野心家で、ブラッドの命令など更々聞く気が無く、ブラッドに命じられた人が住む苺坂町を襲うのを後回しにし、部隊の者を引き連れ、いちご山で獲物を求めて彷徨っていた。

「チツ、プリキュアを誘き寄せろだあ？ 蝙蝠野郎め、この俺様がそんなくだらねえ真似出来るかってんだ！」

ガイの部隊は好戦的な者が多く、主に動物系が主体だった。二つの頭と鋭い爪を持つた怪鳥の魔物ガルーン、額に巨大な角を生やした兎の魔物アルミラージュ、頭部は蛇で足は蛸の魔物蛇蛸、女好きな馬男スタルヒーン、翼の生えた猫のような魔物フライングキャット、そんな魔物達が、ガイに従い行動していた。フライングキャットは、上空からこの山を偵察して戻って来ると、

「ガイ、この先に沢山の妖精が居るぜ」

フライングキャットからの報告を聞き、ガイの大きな口が耳まで避けた。

「ほう、妖精か・・・人間狩りの前に、妖精でも食らって英気を養うか？」

蛇蛸は、長い舌と八本の足を不気味に動かしながら、

「ケケケケ、流石はガイだけ、話が分かる」

妖精達を食べると聞き、一同が舌なめずりする中、スタルヒーンだけは浮かない表情をしていた。

「ヒヒヒイーン！俺は妖精何かより、早く人間の女を俺の自慢の物で・・・」

「お前は黙ってる、種馬！しかし、お前はオークのようだな？」

スタルヒーンが腰を振るジェスチャーをすると、直ぐに不快そうにガイに遮られた。

スタルヒーンは少し不満そうに、

「失敬な、あんな豚ゴリラ野郎共と一緒にするな」

「やつてる事は同じだろう?」

「オークの森から出られない奴らより、お前の方がよっぽど危険じゃニヤアか?」

アルミラージとフライイングキャットは、そんなスタルヒーンをからかうかい、ガルンも双頭の頭を動かしながら、

「お前、前にシーレイン様やニクス様、リリス様にもチョツカイ出して、ボコボコにされたって本当か?」

ガルーンに聞かれたスタルヒーンは、凶星だったのか頭を激しく左右に振り、

「ブルブルブル、嫌な事思い出させるなあ! 全くうるさい奴らだ……そう言えば、プリキュアって奴らは、全員女だそうじゃねか? 変身する時、真つ裸になるんだってなあ? 早く会いたいぜえ!」

スタルヒーンの勘違いを真に受けた蛇蛸は、ガイに思わず問いかけ、

「おい、ガイ……そうなのか?」

「知らん……アホの相手は疲れる。さっさと妖精共の所に行くぞ」

ガイは、一人場違いなノリを見せるスタルヒーンを無視し、妖精達の下へと向かった。妖精達の傍まで来ると、美味しそうな匂いが漂い、思わず魔物達は匂いを嗅いだ。

「何の匂いだ!? 甘ったるいが、食欲を誘う良い匂いだぜ」

ガイは、口から流れてくる涎を啜り、草むらを掻き分け様子を伺った。そこには妖精達が楽しそうに歌いながら、デザートを作り続けて居た。

『キラキラキラルン、キラキラルン、美味しく、美味しく、美味しくなあれ!』

先程と同じように、呪文のように唱えながら、妖精達はお菓子作りに集中していた。魔物達の目は、獲物を見つけた怪しい輝きを放った。長老は、そんな怪しい気配を敏感に察知し、

「何の気配ジャバ!」

長老が怪しい気配がする方向に注意を向けると、行き成り草むらの中からガイ達が姿を現し、妖精達はパニックになった。

『ワアアア!』

逃げ惑う妖精達を、ガイ達は包囲し、妖精達は身を擦り合わせて震えて居た。長老は、魔物達を見つめると、

「お前達は何ジャバ!」

「ククク、俺達か!? 俺達は・・・お前らを食う為にここに来た魔界の者さ」

『ヒイヒイヒイ!』

「ま、魔界とな!」



長老は困惑した・・・

人知れず、この山でおとなしくしている自分達を狙って、魔界の者がやって来るとは思っても見なかった事だった。長老は、何とか妖精達の命を助けたいと、ガイに交渉を持ちかけた。

「スイーツはお主達にやるから、皆の命だけは助けてくれないジャバか？」

「ダメだなあ・・・」

ガイは長老の頼みを即座に却下し、魔物達がジリジリ妖精達を包围しながら近づいて来た。今まさにガイ達が妖精達に襲い掛かろうとしたその時、ルミナスは駆けながらハーティエルバトンを取り出した。ルミナスは、ハーティエルバトンをクルクル回すと、

「ルミナス！ハーティエルシャワー!!」

ルミナスが上空高くハーティエルバトンを飛ばすと、クルクル回転しながら山の頂上で一周し、光のシャワーが山全体に降り注いだ。

「な、何だ!?!急に身体が動かなくなってる・・・」

ガイ達は、急に身体が動かなくなった事で困惑し、妖精達は何が起こったのかと皆驚いた様子をしていた。長老は、突然現れた六人のプリキュアの姿に驚き、

「これは一体!?!そなた達は一体?！」

「私達は、プリキュアです。皆、今の内に私の側に避難して！」

「プリキュアジャバ!？」

長老は思わず隠れた目を見せながら驚いた表情を見せた。長老は、プリキュアという言葉を知って居た。百年前、このいちご山周辺を闇が覆った時、闇を打ち払ったのが、伝説のパティシエと呼ばれたプリキュアだったのだから……

「分かったジャバ！皆の者、あのプリキュア達の側に避難するジャバ!!」

『ハイ!』

妖精達は、ガイ達がハーティエルシャワーで行動不能になっている間に、ルミナス達の側に避難した。ルミナスは、他の五人に話し掛け、

「ブライト、ウインディ、ローズ、メロディ、リズム、妖精達は私が、後をお願いします」  
「[[[[OK]]]]」

ルミナスは妖精達を後ろに庇い、ブライト達はガイ達に対して身構えた。ようやく動けるようになったガイ達は、獲物を取られた事で敵意を向ける中、馬の魔物スタルヒーンだけは鼻息荒く興奮し、

「ヒヒヒ〜ン！お、お前達がプリキュアかあ……いつも俺好みで目移りしちまうぜ」

再び腰を振る動作をしたスタルヒーンに、プリキュア達は不快な表情を浮かべた。ガイはスタルヒーンを無視し、

「ケツ、俺様達の邪魔をするとは．．．覚悟しやがれ！」

プリキュア達を指さすガイに対し、ローズも魔物達を指さし、

「それはこつちのセリフよ、妖精達を襲うだ何て．．．」

「「絶対には許さない！」」

ローズ、ブライト、ウインディ、メロディ、リズムが、魔物達に身構えた。先制攻撃を仕掛けたのはミルキイローズで、ローズはミルキイパレットをフル稼働させ、

「邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう！ミルキイローズ・ブリザード!!」  
青い薔薇吹雪が魔物の群れ目掛け吹き荒れた。魔物達は咄嗟に躲したものの、陸上では素早く動く事の出来ない蛇蛸が、ミルキイローズブリザードの直撃を受けて倒された。

「野郎、やりやがったなあ！ウウウオオオオ!!」

ガイは激高して咆哮し、それを合図に、五人が睨み合いになった．．．

ローズとガイが、ウインディとガロンが、ブライトとアルミラージュが、リズムとフライングキャットが、そしてメロディとスタルヒーンが睨み合った。最も、リズムはフライングキャットを見て、猫フェチの血が騒いだのか、フライングキャットの肉球を触りたくなり、スタルヒーンはメロディを見て興奮し、腰を何度も振り続けてメロディを困惑させた。一同が四方に散り戦闘が開始された。

「ヒヒヒ〜ン！俺様の物で、お前を痺れさせてやるぜえ!!」

再び腰を振りまくるスタルヒーンに、ドン引きしたメロディは、過去の戦いを振り返った・・・

（そう言えば私って、前にドロドロンとかいう変態とも戦った事あったよねえ？何でこのの系統は、私が受け持つの？）

メロディは困惑し、思わず視線に映ったリズムの側に近寄った。

「ねえリズム、相手を代わって」

「エエエ!?嫌よ」

「良いじゃん、リズムだって、猫と戦うよりマシでしょう？」

「これから良い所何だから邪魔しないで」

口喧嘩の様子を呈したメロディとリズムに、妖精達は不安そうに口を開き、

「何か喧嘩してるキラ」

「あの二人、仲が悪いピカ？」

「喧嘩はダメペコオオ！」

キラリン、ピカリオ、ペコリンが、困惑しながら話すと、ルミナスは苦笑を浮かべながら、

「大丈夫です。あの二人の場合、喧嘩する程仲が良いと言うか・・・」

ルミナスの言葉を表すかのように、興奮して襲い掛かって来たスタルヒーンを、メロデイとリズムは息を合わせたかのように、絶妙なタイミングで蹴り飛ばし、上空から襲ってきたフライングキャットを、邪魔だとはかり払い除けた。互いに並び合ったメロデイとリズムは、互いに息を合わせて手を繋ぎ、

「プリキュア！ハーモニーショット!!」

蝶のような形をした閃光弾が、スタルヒーンとフライングキャット目掛け飛び、二人に当たって怯ませた。メロデイとリズムは、舞いながら両手の指をパチンと鳴らすと、  
「奏でましょう、奇跡のメロデイ！ミラクルベルティエ!!」

「刻みましょう、大いなるリズム！ファンタステイックベルティエ!!」

二人が同時に叫ぶと、二人の手にミラクルベルティエとファンタステイックベルティエが現れた。メロデイとリズムは、ベルティエを分離させると、片方ずつお互いに交換し、再びベルティエにセットした。メロデイとリズムは、息を合わせたかのように、

「二つのトーンを、一つの力に!!」

「奏でましょう、奇跡のメロデイ！ミラクルベルティエ・クロスロッド!!」

メロデイが叫べば、

「刻みましょう、大いなるリズム！ファンタステイックベルティエ・クロスロッド!!」

メロデイの言葉に応える様にリズムが叫んだ。再び二人は息を合わせたかのように、

「翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア！ミュージッククロンド・スーパーカーテツト！！」

メロディとリズムは手を繋ぐと、空色、薄橙色、桃色、桜色、レモン色の5本のエネルギーリングが現れ、ハートの光と共に螺旋を描きながら、ベルティエの先から強力なエネルギーを、同時にスタルヒーンとフライングキャット目掛け放った。命中した五色のエネルギーリングに捕らわれた二人は、身動きが出来なかった。

「ち、畜生、動けないニヤァー！」

「ヒヒヒヒーン！も、最早これまでかぁ・・・せめて、せめてお前達に頼みがある」

「エツ!?何?」

スタルヒーンは覚悟を決めたのか、目から大粒の涙を流しながら、メロディとリズムに訴え、少し同情したメロディとリズムが聞く耳を向けると、スタルヒーンは股間を大きくくし、

「せめて、せめて俺の子種を、お前達の体内に残して・・・」

「せえくの！ファイナーレ!!」

「最後まで聞けよおおお！」

スタルヒーンのしようもない最期の願いを無視し、メロディとリズムの掛け声を合図に、命中したエネルギーリングが爆発して、スタルヒーンとフライングキャットを浄化

した。

ウインディは、大空を自在に飛び回るガルーンに苦戦していた・・・

(空中戦じゃ、自在に動けないこちらが不利ね)

ウインディは、風の力を利用して空中戦を繰り広げるも、空を飛び回るガルーン相手では分が悪かった。ウインディは、眼下をチラリと見ると、

「ブライト！」

ウインディはブライトの名を叫ぶと、アルミラージと戦って居たブライトは、まるでウインディの考えが分かったかのように一旦距離を取ると、

「光よー！」

ブライトは上空に両腕を上げて気合を込めると、ブライトの頭上に巨大な光球が浮かび上がった。ブライトは上空目掛け放つと、ガルーンはその眩い光に目を眩まされて思わず怯んだ。その隙を、ウインディは逃さなかった。

「風よ、吹き荒れよー！」

ウインディが両腕を交互に振ると突風が放たれ、ガルーンは翼を上手く扱えず、地上に落下しだした。ウインディはその後を追い蹴り上げると、ガルーンは更に勢いを付けてアルミラージの側に墜落した。

「おいガルーン、しつかりしろ！」

「グウウウ、翼を傷めちまった．．．」

ヨロヨロ立ち上がったガルーン、上空からウインディも降りて来てブライトの隣に並ぶと、二人はアイコンタクトした。

「精霊の光よ！命の輝きよ！」

「希望へ導け！二つの心！」

「プリキュア！スパイラル・スター．．．」

「スプラッシュシュ！！」

ブライトとウインディのスパイラルスタースプラッシュが、ガルーンとアルミラージ目掛け飛んでいた。二体は、その威力の前に為すすべなく倒された。

ローズが戦うのは、第七部隊のリーダーである狼男のガイ、ローズとガイは、激しい攻防を繰り広げながら、肉弾戦を続けた。パワーはローズが優るものの、スピードではガイがローズを上回って居た。

（こいつ、思ったより素早いわねえ．．．）

ローズのパンチが、キックが空しく空を切っていく。ガイは調子に乗り、  
「どうした!?!当たらなければ意味は無いぞ？俺の配下を倒した報い．．．先ずお前が思い



知れえ!!」

ガイは両手に意識を集中すると、ガイの両手の爪が鋭く伸びた。ローズは腕をクロスして顔を庇いながら、ガイの攻撃を受け防戦一方だった。

「「「ローズ!」」」

ルミナス、ブライト、ウインディ、メロディ、リズムが、ローズの身を案じて叫ぶも、ローズにはまだ余裕があるのか、

「心配には及ばないわ・・・直ぐにケリを付けるから」

「アアアン!?防戦一方のくせして何言ってやがる?」

ガイはローズの強がりだと思い、更に攻撃を険しくするも、ローズはただ防戦一方で居た訳では無かった。ローズは、ガイの攻撃の間合いを、攻撃を受けながらも計り、徐々にそのタイミングをつかんで居た。

(3、2、1・・・今だ!)

ローズは、右肘を思いつきり真横に放つと、確かな手応えがあった。

「ウウウオオオオ!?バ、バカな?」

「この私が、オメオメやられてるだけだと思っただけだ?さあ、今度はこっちの番よ!」

ローズの肘撃ちを受けたガイの動きは、完全に止まった。ローズは、今までの借りを返すかのように、パンチやキックをガイに放った。吹き飛ばされたガイに、ローズは再

びミルキイパレットをフル稼働させた。

「邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう！ミルキイローズ・ブリザード!!」  
青い薔薇吹雪が、ヨロヨロ立ち上がったガイ目掛け吹き荒れた。

「畜生おぉお！」

ガイは悔しそうに吠えながら、ミルキイローズブリザードの直撃を受けて倒された。

『ヤッター!!』

ルミナスに守られていた妖精達は、皆大喜びで飛び回り、プリキュア達は目を細めた。  
キラリンとピカリオは、思わず眩しそうに六人のプリキュアを見上げ、

「あれがプリキュアキラ!?!」

「凄いピカ」

「ウム、プリキュアとは伝説のパティシエの事だと思つて居たジャバが、他にも居たん  
ジャバなあ……」

長老は愛用の黄色い傘を広げ、プリキュア達と伝説のパティシエを思わず比べた。六  
人は、妖精達に近づき、ルミナスは妖精達一同を見渡すと、

「皆さん、怪我はありませんか?」

『ハ〜イ!』

「所で、ここで何してたの?」

メロディに問われた妖精達、長老が代表してプリキュアに話し出した。

「わしらは、此処でスイーツを作って居ったジャバ」

「「「「エツ!?!スイーツ?」」」」

「そうジャバ! さあ皆の者、プリキュア達のお陰でまたスイーツを作れるジャバ」

妖精達は、嬉しそうに舞い踊り、プリキュア達にお礼を言いながら、またスイーツ作りを始めた・・・

『キラキラキラルン、キラキラルン、美味しく、美味しく、美味しくなあれ!』

プリキュア達は、目を細めながら妖精達のスイーツ作りを見て居ると、妖精達が作ったスイーツから、沢山のキラキラ輝く宝石のようなものが溢れ出して居るのを見た。

「エツ!?! デザートから色とりどりの宝石みたいな何かが溢れ出して居るのを見た?」

「何なのこれ!?!」

リズムとメロディは、困惑しながらスイーツを指さすと、長老がプリキュア達に対して再び説明を始めた・・・

キラキラルとは、想いが込められたスイーツに宿るエネルギーの事で、人々を始めとした生き物や、世界を元気にする力があり、嘗てこの町を守ったプリキュアの力の源でもあることを語った。ローズは感心しながら、

「へえ、キラキラルかあ・・・そんな風に思いながら作った事何て無いわね?」

「ブライトも感心したように、スイーツを作り続ける妖精達を、目を細めながら見守った。」

「そうね、美味しく出来る様にとは確かに思ったけど、キラキラルかあ・・・」

ルミナスは、目を細めながら仲間達に話し掛け、

「せっかくだし、私達も混ぜて貰いませんか？」

「賛成！少しなら大丈夫でしょう」

ルミナスの提案に、ローズが真っ先に賛成した。メロデイも右手を上げると、

「私も手伝うよ！」

メロデイも手伝うと進言するも、リズムはゆっくり首を左右に振り、

「メロデイはダメよ」

「何だよ？」

「どうせ、摘まみ食いするだけでしょう？」

「ギクツ!?バレたかあ」

「やれやれ、メロデイもたまには、食べる専門じゃなくて、スイーツを作りなさいよね？」

「「「フフフフ」」」

メロデイとリズムのやり取りを見て、ルミナス達は思わず笑みを浮かべた。

プリキュア達は、妖精達に交じりスイーツ作りを勤しんだ。元々スイーツを作って居

るルミナス、ブライト、ローズ、リズムは、慣れた手付きでスイーツを作り、妖精達を驚かせた。キラリンは、一同に話し掛けると、

「上手キラ・・・プリキュア、キラリン達を弟子にしてほしいキラ！」

『エツ!!』

「俺からも頼む」

ピカリオもキラリンの隣で頭を下げ、思わず一同は困惑した。プロのパティシエでもない自分達が弟子を取るなど烏滸（おこ）がましい事だと考えた。リズムは申し訳なきような表情を浮かべると、

「ゴメンなさい、私達プロのパティシエでも何でも無いし、弟子入りするのなら、やはり本物のパティシエの下に行かないと・・・」

「スイーツってどこに行けば一番うまくなれるピカ？」

ピカリオに聞かれたリズムは、少し首を傾げて考えると、

「そうねえ・・・一流を目指すなら、やはりフランスのパリよね」

「パリ!?!」

キラリンとピカリオは、思わずまだ見ぬパリの地に思いを寄せた。キラリンは、ピカリオに小声で話し掛け、

「ピカリオ、キラリンはパリで修業してみたいキラ」

「ウン、俺もそう考えてたピカ」

「長老、キラリン達も、伝説のパティシエであり、プリキュアである古のプリキュアみたいになりたいキラ」

二人のパリへの思いは益々強まり、長老に許可を頼んだ。長老は、最初こそ渋い表情を見せたが、二人の成長になるならと考え、二人の申し出を受諾した。

「その代わり、勉強頑張るジャバよ?」

「ハイ!」

キラリンとピカリオは、希望に満ちた表情を浮かべながら、まだ見ぬパリの地を想像して居た。二人の決断に、ペコリンも嬉しそうに祝福し、

「キラリン、ピカリオ凄いペコオ・・・ところで、どうやってパリに行くペコ?」

「アツ!?」

キラリンとピカリオは肝心な事を忘れていた・・・

いちご山から出た事が無い二人からしたら、パリに二人だけで行くのは夢のまた夢だった。ガツクリ頂垂れたキラリンとピカリオを見たローズは、ふと妖精姿に戻ると、妖精達は皆驚いた表情を浮かべた。キラリンは思わず目を見開き、

「エエエ!?!妖精だったキラ?」

「そうミル!ミルクは、パルミエ王国からこつちの世界にやって来た妖精ミル」

ミルクは、今までの出来事を語って聞かせた・・・

ナイトメアによってパルミエ王国が一度は滅ばされた事、のぞみ達プリキュア5によつて、ナイトメアの暗躍を阻止した事、新たに現れたエターナルとの戦いの中、キュアローズガーデンの管理者、フローラから託された青いバラの力で、ミルキローズになつた事、そして、この世界で闇と戦う大勢のプリキュア達と出会い、今でも闇の勢力と戦い続けて居る事を語って聞かせた。

「キラリン達も、ミルクみたいに人間の姿になれるキラ？」

「夢を諦めちゃダメミル！思い続ければ、きっと夢は叶うミル！ミルクの仲間に、シロップって言う運び屋が居るミル。シロップならキラリンとピカリオを、パリまで送り届けてくれるミル」

「ほ、本当!？」

ミルクは微笑みながら頷き、シロップに頼んで二人を迎えに来る事を約束した。そんなやり取りを、一同は目を細めながら見守つた。

妖精も、人間の姿になる事は出来る！

ミルクの言葉は、キラリンとピカリオの胸を打つた。

キラリンは、一流のパティシエになる事はもちろん、ミルキローズのようなプリキュアになりたいと思つたのは、この時からだった・・・

第二百二十四話：次世代を担う少女達（前編）  
完



## 第二百二十五話：次世代を担う少女達（後編）

1、きらら再び

ホープキングダム・・・

花、海、星で構成された資源も豊富な美しい国・・・

国民の多くは、国王の善政のお陰もあり、豊かな生活を送っては居たが、五年前のあの事件を切掛けに、この国の民から笑顔が消えた。この国には、妖精、人間や獣人のような姿をした者も多く住んで居て、魔法界のように多民族国家とも呼べた。王族関係者の耳は尖った形になって居て、その姿は魔界に住むエルフを連想させた。湖の畔にたつ美しい城ホープキングダム城、百年前、世界の危機に立ち上がったプリンセスプリキアが使用し、ホープキングダムが秘宝として、12個のドレスアップキーと呼ばれるアイテムを、城で厳重に管理して居たが、五年前、キュアフローラが変身する時に使用して居たドレスアップキーだけは、この場から消え去り、11個のドレスアップキーが祭られて居た。この城に住むカナタ王子は、ドレスアップキーが祭られている祭壇へとやって来た。

「ここに来るのも、トワが居なくなつて、僕が探しに来たあの日以来か・・・」

カナタ王子の本名は、プリンス・ホープ・グランド・カナタと言い、容姿は、薄い紫色の髪をし、母親譲りの褐色の肌をして居た。白い王族衣装を身に纏い、頭部にはティアラを着けて居た。

（トワ・・・君は今何処に居る？）

カナタ王子がトワと呼んだ名は、彼の妹でプリンセス・ホープ・デライト・トワと言う。だが妹トワは、五年前忽然とその消息を絶った。王国から笑顔が消えたのもそれからだった・・・

カナタ王子が物思いに更けていると、祭られていた11個のドレスアップキーが、何かに共鳴するかのようになり、眩い光を点滅させていた。カナタ王子は思わず目を見張り、「こ、これは!? 五年前のあの時と同じ輝き?」

カナタ王子の脳裏に、五年前の出来事が思い起こされていた。五年前にも、今居るこの場所で同じ現象が起こり、嘗てキュアフローラが、変身する時に利用したドレスアップキーに導かれたカナタ王子は、人間界に赴き、一人の少女と出会って居た。

「まさか、あの時のようにドレスアップキーが!？」

カナタ王子の考えは的中し、嘗てキュアマーマイド、キュアトウインクルが変身する為に使用していたドレスアップキーが、眩い輝きを放ってその姿を消した。

「これは一体!？」

カナタ王子は、呆然としながら虚空を見つめた・・・

天ノ川きらは、社長である館響子が運転する車の後部座席に座って居た。助手席にはきららの母で、響子の親友でもあるステラが、トップモデルで忙しい中、娘きららの為に時間を取り、母校私立ノーブル学園の見学をした。ステラは、金髪のロングヘアをしていて、海外でスーパーモデルとして活躍して居た。突然のステラの来訪であったが、在学時代は生徒達からの信頼厚く、寮母である白銀の口添えもあり、娘きららの見学を許可されたが、ステラの突然の来訪は、伝統あるノーブル学園の生徒達をも驚かせ、大騒ぎになった。だが、教師達や、この秋に新たに生徒会長になった海藤みなみという生徒が、そんな生徒達を窘め、きらら、ステラ、響子は、ノーブル学園を見学して回った。そのノーブル学園の帰り道、車中で三人はカインの宣戦布告を聞いて居た。

「さっきの何だったのかしら？」

「さあ!?!取り敢えずせっかく夢ヶ浜に来たし、何処かで食事でもしましょう」

響子に話を振られたステラだが、俄かには信じられない事で、ステラはさして気にせず、懐かしい夢が浜で食事でもしようと思ち掛けた。そんな二人とは対照的に、きらはさっきのカインの声が気になって居た。

（さっきのあいつ、プリキュアに恨みを持つてるぽかったよねえ?）

きららは、やよいの母千春がプロデュースした、母子ファッションショーに参加した時、バッドエンドピースと揉め事になり、アカンベエに襲われた所を、プリキュア達に救われた事があつた。きららの表情が優れない事に気づいたステラは、

「きらら、どうしたの？ ノーブル学園のイメージでも違つたのかしら？」

「エツ!? ウウン、そうじゃないんだけどさ……」

響子も浮かない顔できららに話し掛け、

「それじゃあ、やつぱりきららもさつきの声を気にして？」

「ウン……そんな感じかなあ」

きららはそうポツリと呟くと、窓の外を見た。きららの目に、まるで流れ星のように、何かが空から落ちて来たように見えた。きららは、その光の輝きを見ると、自分でも分からないが、何か惹きつけられる魅力を感じた。きららは慌てて響子に話し掛け、

「社長、ストップ！ 車を止めて!!」

「エツ!?!」

突然車を停めるように言われ、響子は思わず車のウインカーを左に出し、直ぐにハザードランプを転倒させた。車が停まると、きららは何かに引き寄せられるかのように車から降り、流れ星のような何かが落ちた場所目掛け走り出した。

「確か、こつちの方に……」

「きららら!」

ステラと響子は、きららの異変に驚き、思わずきららの名前を呼ぶも、きららは二人の声が聞こえないかのように走り続けた。すれ違う人々は、そんなきららを見て不思議そうにするも、直ぐに何事も無かったように歩き出した。きららは、黄色い光を発光させる何かに近づくも、擦れ違う人々は、まるで興味無さそうに素通りして行つた。きららは、落ちていたアイテムを拾うと、発光していたアイテムは何事も無かったかのように光が収まった。

(エッ!? あたしが触ったら、光が止まった?)

きららが首を傾げたその時だった……

「キヤアアア! 怪物よおお!!」

「逃げろおおお!!」

突如人々の悲鳴が沸き起こり、ハッと我に返ったきららの四方を、牛の顔と蜘蛛の身体を持った牛蜘蛛、宙を彷徨巨大な人喰い生首である餓首、巨大なヤモリの化け物ピエラ、全身びしょ濡れで、長い黒髪で顔を覆った不気味な魔ピグの四体の魔物が、まるで光を追って来たかのように怪物が取り囲んで居た。物怖じしない性格のきららではあつたが、目の前に現れた怪物を前にしては、動揺は隠せなかつた。真つ先に口を開いたのは餓首、

「忌々しい光を追ってみれば．．．小娘、貴様の仕業か？」

（う、嘘?!怪物が喋った?）

きらららに取って信じられない光景だった．．．

バッドエンドピースが出現させたアカンベエを見た事はあったが、今日の前にいる怪物は、小さい頃に見た妖怪や怪物のような出で立ちをし、きららの目の前で人の言葉を喋ったのだから．．．

「さっきの忌々しい光は．．．お前の仕業かと聞いているんだよおお！」

そう言つて両腕を前に突き出しながら、きららの首を絞めつけようとしたのはピグだった。ピグの両手がきららの首に近づいた瞬間、再びきららが手に持つドレスアップキーが光り輝き、ピグを吹き飛ばした。

その瞬間、きららは見た！

「エツ?!人?あ、あなたは!」

きららの目には、一瞬だが光り輝いた瞬間、輪状に結った黄色のロングヘアーに、前髪には赤色のメッシュが入り、黄緑色の衣装を着た少女を見た。その姿は、以前見たプリキュア達にどこことなく似て居た。だが、きららがその少女を見たのはほんの一瞬で、光は再び輝きを消した。きららにも今の出来事が錯覚だったのか分からなかった。

（幻だったの!?!）

きららが呆然としていると、そんな彼女を現実に戻すかのように、魔物達が咆哮を上げた。

「おのれ、小娘えええ！」

「食つてやる！食つてやるぞおお!!」

餓首とピグがきららに狙いを付け、牛蜘蛛は、きららを心配して近づいたステラと響子に狙いを付け、牛蜘蛛の口から糸が吐き出され、ステラと響子の身体を捕らえた。

「キヤアアア！」

「ママアア！社長！」

きららが二人の身を案じて叫ぶも、餓首は不気味に笑い、

「クククク、貴様の知り合いか？直ぐに会わせてやろう・・・地獄でな！」

餓首が大きな口を耳元まで裂けながら開け、きららを丸齧りしようとしたその時、光に導かれたかのように、二人のプリキュアが駆け付けた。真っ先に行動に出たのはキュアレモネード、

「させませんよ！プリキュア！プリズムチェ〜ン!!」

レモネードの両拳の蝶の飾りが光輝くと、二つの光のチェーンが飛んで行き、餓首を完全に捕らえた。

「ダークアア、今です」

「OK！プリキュア・・・」

レモネードの合図に頷いたダークアクアは、必殺技であるダークアローの体勢に入った。それを見た牛蜘蛛は、慌ててダークアクアに話し掛け、

「ま、待て！そのまま餓首を攻撃すれば、捕らえたこいつらを窒息死させるぞ!!」

「ウツウウウウ」

「ママ！社長！」

牛蜘蛛は、捕らえたステラと響子の糸を締め付け、二人から苦悶の声が漏れ、きららが激しく動揺した。レモネードとダークアクアは、二人を人質に取られては攻撃出来ず、悔しそうな表情を浮かべた。

「ひ、卑怯よ！」

「何とでも言え・・・さあ、餓首を捕らえた鎖を外せ！」

牛蜘蛛に更に迫られたレモネードは、言う通りにしなければ、二人を絞殺されない現状に、レモネードは苦渋の決断で、餓首を捕らえたプリズムチェーンを緩めようとしたその時、

「レモネード、その必要は無いわ！」

「パッション！」

そう言つて現れたのはキュアパッション、パッションは、瞬間移動で牛蜘蛛の懐に入



り込み、蹴りを浴びせると、ステラと響子を捕らえていた糸事、二人を瞬間移動させて魔物達から引き離れた。レモネードはホツと安堵し、

「パッション、向こうの様子はどうですか？」

「アクアやピース、ダークミントが調べて居るわ。こつちを済ませて、アクア達に合流しましょう」

「そう、それを聞いて安心したわ」

パッションの報告を聞くと同時に、宙に飛んだダークアクアは、餓首に狙いを定めると、

「プリキュア！ダークアロー!!」

「お、おのれええええええ!!」

ダークアクアから放たれた黒き水の矢の連射が、餓首目掛け炸裂した。餓首は恨みの咆哮を上げながら闇に帰った。きららは、慌ててステラと響子に近づき、二人の身体を揺すりながら声を掛け、

「ママ！社長！しっかりして!!」

「大丈夫、気を失っているだけだわ・・・あなたもここから動かないで」

「エツ!?ウ、ウン」

パッションは、きららにこの場から動かないように忠告すると、パッションハープを

取り出し、再び瞬間移動で牛蜘蛛の側に現れるやいなや、

「吹き荒れよ！幸せの嵐！プリキュア！ハピネス・ハリケーン!!」

パッションは、パッションハープを高く掲げて高速回転すると、赤いハート型エネルギー波が、まるで羽毛のように激しく舞いながら、旋風と共に牛蜘蛛を包み込んで浄化した。残ったヤモリの怪物ピメラと、全身びしょ濡れのピグは恨みの咆哮を上げると、

「おのれえ、よくも餓首と牛蜘蛛をおお！」

「恨めしい……お前達の五体を、この手で引き裂いてくれる！」

ピメラは壁を伝いながら、ピグは両出を前に突き出しながらレモネード、ダークアークア、パッションに向かって行つた。

「ウウウ……ちよつ、ちよつと気色悪いです」

「大丈夫、私とパッションが付いてるわ」

「ハイ！よろし……プリキュア！プリズムチェーション!!」

レモネードは、ピグの不気味な動きを見て、少し怯えた表情を浮かべたものの、ダークアークアに励まされ、再びプリズムチェーンをピグ目掛け放つた。

「ウウウオオオオオ！」

アンデット系のピグに取って、光の鎖であるプリズムチェーンは効果靦面で、ピグはその光の輝きに身を包まれ消滅した。だが、最後に残ったピメラは厄介だった。壁を伝

い素早く移動する為、迂闊な攻撃は出来なかった。きららは、徐にピメラを睨み付け、  
「よくもママと社長を・・・プリキュアを怖がって、逃げ回ってるくせに」

「何だど!?小娘え、小癩なああ・・・貴様から殺してやる!」

ピメラはきららの挑発に乗り、動きを止めて長い舌をきらら目掛け伸ばした。その舌  
目掛け、レモネードがプリズムチェーンを飛ばして絡め取り、ピメラを地上に引き落と  
した。

「パッション、ダークアクア、今です!」

「OK!」

パッションは右側から、ダークアクアは左側から攻撃態勢に入り、

「吹き荒れよ!幸せの嵐!プリキュア!ハピネス・ハリケーン!!」

「プリキュア!ダークアロー!!」

パッションとダークアクアのコンビネーション攻撃を受け、ピメラはもがきながらき  
ららを睨み、

「お、おのれ、小娘に気を取られなければああ」

ピメラは、きららに恨み言を述べながら、パッションとダークアクアの技を受け浄化  
され、きららはホッと安堵した。レモネードはきららに話し掛け、

「大丈夫ですか?」

「ウン、おかげ様でね・・・そう言えばこの前助けられた時も、あっちの赤い服着たプリキュアも居たよね？」

きららは、近付いて来るパッションを見てそう語ると、パッションも覚えていて小さく頷き、

「エエ、あなたとはあの時以来ね」

「あたしをあの時助けてくれた、あの変なヘアースタイルしたプリキュアは、今日は一緒にじゃないんだ？」

「「変なヘアースタイル!」」

きららに聞かれた三人は、同じような表情で首を傾げた。きららは、手でジェスチャーを交えながら説明を始め、

「そう、何か薄紫っぽい色で、マスカットのようなヘアースタイルした・・・」  
(ベリーの事ね・・・)

パッションはきららの説明を聞き、それが誰の事か分かると思わず目を点にし、この場にベリーが居なくて良かったと、心から思うのだった。きららはレモネードを見ると、

「そう言えば、あなたの髪形もちよつと変わってるよね？」

「ガアアアアン！」

レモネードは、思わず変顔を浮かべながらよろめき、パッションとダークアクアはそれを見て苦笑した・・・

## 2、青の後継者

### 私立ノーブル学園・・・

元児童絵本作家家の望月ゆめが、約五十年前に創立した伝統ある名門学校・・・

この学校は、将来の夢を抱く生徒達が通う全寮制の共学校だった。島を繋ぐ橋の向こうにある市街地は夢ヶ浜で、学園から路線バスで容易に移動出来、生徒達も外出許可を出せば自由に夢ヶ浜に遊びに行けた。この学園の場所は、海沿いの陸地に近い島にあり、敷地内には男女別の学生寮、学生食堂、教室棟といった設備から、バレエの練習場やパーティーホールなどの環境が整っていた。これらも、学園を卒業後の生徒達の為に少しでもなれば、理事長である望月ゆめが考案していた。この学園の制服は、男女ともセーラー襟になっていて、基本色は、薄紫色と白で、女子はセーラー服にピンク色のリボン、白いジャンパースカートと紺色のハイソックスという出で立ちで、男子は水色のワイシャツに赤いネクタイ、セーラー襟のジャケット、グレーのスラックスという恰好をしていた。

講堂に集まった全校生徒と教職員の前で、壇上に上がって一人の少女が、何かを喋っ

て居た。

少女の名前は、海藤みなみ・・・

髪の一部を三つ編みにして、左肩に垂らしたエメラルド色のロングヘアをして居て、彼女の実家は、日本五大財閥の一つ、海藤グループの娘で、四葉財閥の四葉ありすとも顔馴染みだった。

「皆さん、決して外には出ない様にして下さい。俄かには信じられない話ですが、もしもという事もあります。あとは先生方の指示に従い、寮で待機して下さい」

この前の生徒会長選挙で当選し、新しく生徒会長になったみなみは、学園の生徒達の前で演説し、決して外には出ない様に訴えた。まだ中学一年生ながら、威厳を持ったその態度は、上級生達からも一目置かれていた。同じ生徒会長である相田マナとは、また別のタイプの生徒会長であった。みなみは、カインの宣戦布告を聞いてパニックになった生徒達を、冷静に宥め、落ち着きを取り戻させた。生徒達が落ち着きを取り戻した事で、教師達は生徒達に寮で待機して居る様に指示を出した。

「海藤さん、お疲れザマス」

「座間先生」

みなみに話し掛けたのは、ノーブル学園の教師で座間すみれ、昔の教育ママが掛けて居た様な、フォックス眼鏡を掛けていた。口喧しい所はあるものの、それは生徒を思っ

ての事だと、みなみは気づいて居て、みなみは座間先生を信頼していた。座間先生は右手で眼鏡の位置を直すと、

「海藤さん、あなたも寮に戻ると良いザマス」

「ハイ……では、ごきげんよう」

みなみは座間先生に頭を下げ、講堂を後にした……

寮に戻るみなみだったが、責任感の強い彼女は、念の為外に残った生徒が居ないか、学校周辺を見回って帰ろうと思いついた。

(どうやら、外に残って居る生徒は居ないようね)

みなみはホッと安堵し、自分も寮に戻ろうとした時、空から流星のように何か青く発光する光が、浜辺の方に落ちて行ったのが見えた。

(今の光は何かしら!?)

みなみは首を傾げるも、何か流星のような物から輝く光に導かれるように、浜辺へ近づいてみると、そこにはドレスアップキーが落ちていた。

「落とし物かしら!?!でも、この輝きは?」

みなみは身を屈めてドレスアップキーを拾うと、光は収まった。みなみは思わず驚き、ドレスアップキーを確認していると、背後の方で木々が騒めいた。みなみは反射的に木々を見つめると、思わずみなみは息を呑んだ。

「アッ!？」

みなみはそう声を出すのがやつとで、恐怖でその場に固まってしまった。それもその筈で、今みなみの目の前には、人間女性の頭部をした人面鳥とでも呼ぶ鳥ラーが、枝に止まりながら、不気味な笑みを浮かべて居たのだから・・・

（そ、そんなあ!?!あの声は本当だったとでも言うの?）

みなみは、カインの宣戦布告を思い出し恐怖した。逃げ出したかったが、足がいう事を聞かなかつた。みなみの両足は恐怖でガタガタ震え、逃げ出す事が出来なかつた。

「ケケケケケ、震えて居るのかい!?!」

（嘘!?!しゃ、喋って居るの?）

みなみは、悪夢なら覚めて欲しいと思つた。だが、これが現実だという事は、みなみ自身気付いていた。枝に止まって居た人面鳥は、翼を広げ羽ばたくと、みなみの上空を旋回し始めて奇声を上げた。その奇声に応えるかのように、二つの影が飛んで来た。みなみが恐る恐る飛んで来た物体を見ると、翼が生えたカエルのようなフライングフロツグと、翼の生えた巨大な丸い一つ目の魔物アクマイトが居た。

「お前達だけかい!?!まあいい・・・この娘から光の力を微かに感じるが、見なよ、震えていやがるよ・・・ヒヒヒヒヒヒ」

不気味な笑い声を上げるラーに、みなみはますます恐怖した。みなみは、幼い頃の出



来事で、オバケや妖怪の類の話の話を聞くだけでも、泣き出すぐらいだった。

（お、お兄様、お父様、お母様・・・助けて）

みなみは、思わず心の中で家族に助けを求めるも、それは無駄な事なのは、みなみ自身に分かって居た。アクマイトは、そんなみなみを嘲笑う様に近づき、

「こいつ、本当に光の力を持つてるのかあ？」

アクマイトは、みなみを脅かそうとするかのように、大きな一つ目をみなみの顔に近づけたその時、みなみを持って居たドレスアップキーが眩い光を放ち、アクマイトはその光をもろに一つ目に浴びて目が眩み、思わず地上に落下した。

「ギャアアア！め、目があああ!!」

「アクマイト!」

地面を這いまわるアクマイトを見て、ラーとフライングフロッグの表情が醜く歪んだ。みなみは、思わず呆然としながら眩い光を見ると、きららが見た少女の幻影とは違う姿を見た。青と水色のツートンカラーのポニーテールをし、薄いエメラルドグリーン of 衣装を身に纏い、腕には半透明の衣を付けた少女の姿を・・・

「あなたは!」

みなみが問いかけると、少女は一瞬振り返り、笑みを浮かべたように見えたが、みなみは、少女の姿を見ると、今まで恐怖に震えて居た事が嘘のように、恐怖心が消え去つ

て居た。だがそれも束の間、その少女はまるで幻だったかのように消え去った。

「エッ!？」

みなみは思わず何度も瞬きし、今の出来事は何だったのか分からず呆然とした。だが、そんなみなみを現実に取り戻す魔物達の声が、みなみの耳に聞こえて来た。

「小娘、よくもやってくれたなあ」

「怖がった振りをして、オレ様達を油断させるとは……」

ラーとフライングフロッグは、もう油断はしないと叫ぶ表情を浮かべると、ラーは羽を飛ばたかせて強風を起こし、みなみは堪らず飛ばされ地面を転がった。

「キヤアアアア」

「人間風情が、いい気になるなよおおお!」

目の眩みが収まったアクマイトは、さっきの仕返しとばかり上空に飛び、みなみ目掛け口から何かを吐き出して攻撃した。だが、その攻撃は雷によって無効化された。

「プリキュア! サファイア・アロー!!」

みなみの耳に、突然声が聞こえたかと思うと、三本の矢と化した水の矢が、アクマイトの両翼と巨大な目を貫き闇に帰した。

「エッ!？」

「な、何だ!？」

みなみが、ラーとフライングフロッグが驚愕する中、森を抜けてゆつくり浜辺に姿を現したのは、キュアアクアとダークミントだった。アクアとダークミントもまた、青い光に導かれたかのように、この場所に赴いて居た。アクアは、みなみの顔を見ると少し驚いた表情を見せるも、直ぐに優しい面持ちでみなみに話し掛け、

「海藤さん、大丈夫？」

「ハイ・・・エツ!? どうして私の名前を？」

「以前、ちよつとね・・・さあ、今の内にこつちに」

アクアは、以前とあるパーティ会場でみなみと出会って居た。まだ当時小学生でありながら、礼儀正しいみなみの姿に、アクアは好印象を得て居た。

「ハ、ハイ」

みなみは、アクアの言葉に頷き、慌ててアクアとダークミントの背後に逃れた。アクアとダークミントは、ラーとフライングフロッグをキツと睨み付け、

「あなた達の好きにはさせないわ！」

「覚悟なさい！」

「な、何だ、貴様らは!？」

「オレ様達の邪魔をするのか？」

「当たり前でしょう? その為に私達は、夢ヶ浜に来たのだから」

アクアは毅然とした態度でそう断言し、思わずみなみはその凛々しさに好感を持った。だが、自分を庇いながら戦えば、アクアやダークミントが不利なのは明らかだった。みなみは戸惑いながら、アクアとダークミントに申し訳なさそうに話し掛け、

「申し訳ありません。私があなた方の足手纏いになってしまつて……」

「それは違うわ！ 私達プリキュアはね、今までも誰かを守る為に闘い続けて来たの。あなたを守つて戦える事は……むしろ私の力となる！」

「アクアの言う通りよ、あなたの事は私達を守るわ」

アクアはそう断言し、ダークミントもみなみを守ると断言した。アクアは再びサファイアアローの体勢に入るも、ラーとフライングフロッグは、空中高く舞い、サファイアアローの有効射程外へと逃れた。

（地上からでは、あの二体にサファイアアローを命中させるのは、至難の業ね。かといって、宙に飛べば、あの魔物達の格好的になつてしまふ……）

アクアは頭の中で、二体の魔物の攻略を素早く考えると、先ず隣に居るダークミントに話し掛けた。

「ダークミント、私はカエルを狙うから、あなたはあの人面鳥をお願い」

「エエ、でも相手が空中を自在に飛び回るのは少し厄介ね」

「エエ……」

アクアは、背後に居るみなみにも話し掛けた。

「海藤さん、少しこの場を離れるけど、急に走り出したりはしないで！あの魔物達を刺激する事になってしまうわ」

「ハ、ハイ」

「直ぐに私の仲間が来てくれる筈だから、ゆっくり私達から距離を取る様にして」

アクアの忠告を受け、みなみは言われた通り、ゆっくり後退ると、アクアの周囲に水の激流が沸き起こり、まるでアクアの身体を持ち上げるかのように、上空高く吹き上がった。

「な、何だ!?!」

ラーとフライングフログは突然吹き出した水流を見て驚愕するも、アクアはまるでウォータースライダーを滑るが如く、水を自在に操りその身を滑らせた。

「プリキュア！アクアキック!!」

水の勢いを利用したアクアのキックがフライングフログに命中し、フライングフログは錐揉みしながら墜落した。一方のダークミントも、ラーに対し、

「ダークネスプラズマ！」

ダークミントから放たれた黒き閃光が、ラー目掛け炸裂するも、墜落したフライングフログは、地面に落下したと同時に飛び上がり、ダークネスプラズマをその身に浴び

るも、さしたるダメージは受けなかった。

「私の攻撃を弾いた!？」

ダークミントの動揺の隙を付き、ラーは狙いをみなみに変えようとしていた。それに気づいたアクアは、

「させないわ!プリキュア!サファイア・アロー!!」

アクアは再びサファイアアローを放つも、ラーは攻撃を回避しながら、アクアとみなみの間を飛び続けた。

「クツ!?これでは、もし外したら海藤さんに・・・」

アクアが動揺したその時、勢いよく駆けて来る足音が聞こえてくると、  
「すいませ〜くん!向こうの方は異常無しでしたあ」

「ピース」

「ハイ!？」

そう言っただけで現れたのはキュアピース、ピースを見たアクアとダークミントは、安堵した表情を浮かべると、アクアは直ぐにピースに指示を出し、

「ピース、彼女を守って上げて!」

「アクア!?!ダークミント?二人共、もう戦闘に入っただけですかあ?」

ピースは、向かって来るラーの姿の不気味さに思わず涙目になるも、

「こつちに来ないでええ！プリキュア！ピース・・・サンダー!!」  
「ゲコオオオオ！」

ピースがピースサンダーを放った瞬間、起き上がったフライングフロッグは、ラーを庇う様に大ジャンプで前に出ると、ピースサンダーの直撃を受けた。だがピースサンダーは、何かに弾かれたかのようにフライングフロッグに効果が無かった。

「嘘おお!?ピースサンダーが効かないの?」

動揺するピースに、背後から見ていたみなみが話し掛けた。

「もしかすると、あのカエルのお化けの表面のゼリー状の物が、雷を弾いているのかも知れませんか」

(海藤さん・・・怖がって居るだけでなく、ちゃんと戦況も見ていたのね)

アクアは、みなみの注意深さに感心し、おそらくはみなみの推察通りだろうと心の中で同意した。アクアはピースに話し掛け、

「ピース、あのカエルは私が何とかするわ。あなたはダークミントと共に人面鳥をお願い」

「分かりました!」

ピースはアクアの言葉に頷き、空中を飛び回るラーに視線を向けた。ダークミントも合流すると、二人は上空を旋回するラーに視線を向けた。みなみもラーの動きを見てい

ると、ラーの動きにパターンがある事に気付いた。みなみはピースとダークミントに話し掛け、

「少し気づいた事があります。お二人共、私が指さした方向に、先程の技を放って見て頂けますか？」

「何か考えがあるのかしら？分かったわ」

「エツ!? ウン、私も分かった」

ダークミントとピースが同意してくれた事で、みなみはラーの動きをジッと目で追った。ラーが自分達の上空で宙返りをしたその時、みなみは頭上を指さした。

「今です！ 真上に先程の技を」

「ウン！プリキュア！ピース・・・サンダー!!」

「ダークネスプラズマ!」

ピースとダークミントは、みなみの指示通り、頭上にピースサンダーとダーククネスプラズマを放つと、慌ててフライングフロッグが再び大ジャンプを試みようとするも、アキラはその動きを前もって予期し、サファイアアローの体勢に入って居た。

「やはりあの人面鳥は、雷に弱いようね。必死にあなたが庇って居たから、おかしいと思ってるわ・・・でも、やらせない！プリキュア！サファイア・アロー!!」

アキラのサファイアアローが、無防備なフライングフロッグを打ち抜き、ピースと



「ダークミントが放ったピースサンダーとダークネスプラズマが、ラーに命中した。」  
「ギヤアアアア！」

二体の魔物は、断末魔の悲鳴を上げながら浄化され、みなみはホッと安堵した。ピースは、隣に居るみなみの両手を掴んでキャツキヤとハシヤギ、みなみは思わず呆然とするも、自分がプリキュアの役に立てた事で、自然に笑みが浮かんで居た。ダークミントもみなみを称え、口元に笑みを浮かべた。アクアも近付いて来るとみなみを称え、

「海藤さん、凄い洞察力だったわ」

「エエ、冷静な判断だったわ」

「ウンウン、私、感心しちゃった」

アクアの言葉に、ダークミントとピースは何度も頷きながら同意した。思わずみなみは照れた表情で、

「い、いえ・・・それより、助けて頂いてありがとうございます」

みなみはそう言うのと、アクアとピースに頭を下げた。その礼儀正しい佇まいに、アクアとダークミントは感心し、ピースは慌ててお辞儀を返した。

みなみは数か月後、キュアマーマイドとしてプリキュアになり、かれんから青の後継者として、新生ブルーチームを託される事になるのだが、それはまた別の話・・・

## 3、花のプリンセス

小江戸と称される古き街並みを残すこの町は、観光地としても有名だった。古風有る赴きの店、伝統ある和菓子屋はるのも、雑誌に取り上げられる程の人気店だった。和菓子屋はるのの看板娘で、小学六年生の春野はるか、幼い頃からプリンセスになる事に憧れて居た。はるかの容姿は、髪は茶髪で、頭のとっぺんがお団子頭をして居て、前髪には花弁のピン止めをして居た。彼女はピンクの服が好きなようで、花柄のピンクのパーカーとデニムっぽいミニスカート姿で、和室の居間に座って参考書を広げ、額には自分で書いた絶対合格の鉢巻きを締め、私立ノーブル学園に入学しようと猛勉強をして居た。

「はるか、ももかを知らない!?!」

そうはるかに声を掛けたのは、はるかの母親もえ、薄紫の作業着を着て頭には三角巾で髪の毛を隠し、眼鏡を掛けて居て、はるかの姉でも通りそうな容姿をして居た。もえが声を掛けるも、はるかは気づかないかのように勉強を続け、もえは思わず溜息を付き、もう一度大声ではるかに声を掛けた。

「はるか! ももかを知らない!?!」

「ワアアア!?!」

はるかはようやく気付いたのか、変顔浮かべながら持つて居たペンを指から滑らせて

落とし、背後を振り向いて恨めしそうにもえを見つめ、

「お、お母さん・・・ペンが滑って落ちたあああ！」

「ゴメエン・・・それより、ももかを見なかった？」

「ももか!? ウウン、見て無いよ。ももかがどうかしたの？」

二人の会話に出てくるももかとは、はるか妹で、現在幼稚園の年長で、来年小学校入学を控えていた。お姉ちゃん子で、普段はるかの側を離れず、はるかももかを良く面倒見て居たが、ノーブル学園受験を決めてからは、ももかと遊んであげる時間も減って居た。

「ほら、さっきの不気味な声もあるし・・・」

もえは、先程聞いたカインの宣戦布告を思い出し、表情を曇らせた。はるかはそんなもえの言葉に首を傾げ、

「不気味な声!? 何の事?」

「エツ!? はるかには聞こえなかったの? プリキュアがどうか言ってたでしょう?」

もえの口からプリキュアの話が出た事で、はるかの目が輝いた。どこかプリンセスのような衣装を着て戦う彼女達に、内心はるかは憧れを抱いて居た。

「エエエ!? プリキュア? ウウン、私は聞こえなかったけど・・・勉強に集中してて、気づかなかったかなあ? アハハハ」

はるか、思わず苦笑を浮かべ頭を掻いた。だがもえの表情は変わらず、

「こうも言つてたわ、無差別に日本を攻撃するとか言つて、プリキュアに、止められるものなら止めて見ろとか……」

「エッ!？」

はるかは、もえの言葉を聞いて直ぐに真顔になった。今もえが言つて居た通りだとすると、確かにももかの姿が見当たらないのは気掛かりだった。はるかは徐に立ち上がると、

「私、探してくる」

「アッ!?!はるか、待ちなさい!」

もえは、居間を飛び出して行つたはるかを見て、内心しまったと動揺していた。責任感が強いはるかは、自分が遊んで上げない事で、ももかはつまらなくて何処かに行つたと思つたのであろう事が想像出来た。

「ももか!ももかあ!」

はるかが家の外でももかの名前を呼ぶも、ももかから返事は返らなかつた。はるかは周辺を走り回り、周囲を見渡した時、何時もとは違う異変を感じて居た。

（アレエ!?!何か静かだと思つたら、今日は観光客の人が居ない?）

普段は観光客でごつた返して居たが、今は人影もなく静まり返つて居た。はるかが戸

惑って居ると、はるかのデニムのミニスカートの右ポケットが、突然ピンク色の輝きを放った。はるかは驚きながらも、右ポケットの中に手を突っ込み、中身を取り出すと、はるかの手には、ピンクの輝きを放つドレスアップキーが握られて居た。

「エエエ!? 五年前にあの人に貰ったお守りが光ってる?」

はるかが言うあの人は、ホープキングダムのカナタ王子の事だった。はるかは、一面に咲き誇る花畑でカナタ王子と出会い、はるかの話聞いたカナタ王子は、夢に向かつて頑張ろうとするはるかを見て好意を得た。カナタ王子は、そんなはるかにドレスアップキーを授け、はるかはそれをお守りとして普段から大事にし、肌身離さず持ち歩いて居た。そのドレスアップキーを手を持ったはるかは、思わず我が目を疑った。光が照らす先には、グツタリした人々が横たわって居た。

「嘘!? 今まで人が居なかったのに、どうして?」

はるかは、突然現れた人々に動揺していると、花粉のようなものはるか目掛け飛んできた。はるかが持つドレスアップキーは更に光り輝き、思わずはるかは目が眩んだ。目が慣れてくると、はるかは一人の少女の姿を薄っすらと見た。

「エエエ!? また人が突然現れた?」

はるかが見た人物は、ピンク色のロングヘアをし、頭頂部に花をモチーフにしたかのような黄金のティアラを付けて居て、衣装は全体的にピンクを基本色としており、胸

元と両太腿辺りに花の飾りが付いて居た。ドレスは足元全体を隠し、はるかが憧れて居るプリンセスそのもののような容姿をしていて、思わずはるかは、その美しさに目を奪われた。だがそれも束の間、少女の姿は幻だったかのように消え去った。

「エツ!? エツ? 消えちやつた?」

はるかは、辺りをキョロキョロ見るも、やはり少女の姿は見られなかった。はるかは頬を思いつきり抓ると、その痛さに思わず涙目になり、夢じやないと思つた。だが、その余韻を打ち破る不気味な声が、はるかの耳に聞こえて来た。

「バ、バカな!? この空間を無理やり押し開けるとは、小娘、貴様の仕業か?」

そう話しながら地を這つて現れたのは、巨大な一凛の黒い花の怪物だった。黒い花の怪物の中央には、不気味な顔が付いて居た。この者の名はロシアといった。

「お花の怪物!? 嘘おお?」

はるかは、小さい頃から大好きな、花のプリンセスという絵本に刺激され、花が大好きで花の種類にも詳しくあったが、このような巨大な花は見た事が無かつた。はるかは思わず恐怖して後退るも、ひよつとしたらこの怪物が、横たわる人々のように、ももかをどこかに攫つたのではないかと思うと、はるかに勇気が湧いて来た。

「ももかは何処!? ももかを返して!」

「何の事だ!? まあいい・・・見られたからには、貴様のエキスも吸収してやる!」

ロシアの蔦が伸び、はるか目掛け飛んで来たその時、ピンク髪のポニーテールに、ピンクの衣装を着た少女が駆け付けると、

「やらせません！ブロッサムウウ！シャワー！！」

駆け付けたのはキュアブロッサム、ブロッサムが放ったブロッサムシャワーによって、はるかの周囲に花卉が舞った。

「綺麗・・・」

はるかには、まるではるかを守るかのように降り注ぐ、花卉の舞に目を奪われた。ブロッサムははるかを庇う様に前に出ると、

「大丈夫ですか!?か弱い女の子を虐める何て、私、堪忍袋の緒が・・・切れましたあああ！」

「誰だ!?!」

ロシアの中央の顔が醜く歪み、ブロッサムを睨み付けるも、はるかを守るブロッサムの側に、更に三つの影が合流した。

「あんた達がお探しのプリキュアさ」

「ルージュ、ブロッサム、そいつをお願い。あたしとイーグレットは、この子を守る」

「二人共、油断しないで」

ブロッサムに合流したのは、ルージュ、ブルーム、イーグレットだった。ブルームは

はるかを庇いながら

「あなたはあたし達の傍を離れないで」

そう言いながら振り返ってはるかを見たブルームは、思わずマジマジとはるかを見た。一方のはるかも、ブルームを見ると、目を点にしながらマジマジブルームを見た。

「何だろう!?!何か他人の気がしない?」

ブルームとはるかは、思わず同時に同じ事を呟くと、すかさずコミュニケーション姿のフラッピが顔を出して後を引き取り、

「同じ狸顔をした女の子と、運命の出会いラピ」

「フラッピ!誰が狸顔だつてええ?」

ブルームは、腰に付けてるコミュニケーション姿のフラッピの顔をジロリと睨むも、フラッピはすまし顔で更にブルームをからかい、

「もちろん、ブルームとその子ラピ」

「エエエエ!?!た、狸に狸つて言われたあああ」

はるかは、フラッピを狸のマスコットと勘違いし、思わず変顔浮かべながら言い返した。今度はフラッピが、顔だけ実物大の大きさにしてはるかに反論し、

「フラッピは狸じゃないラピ!フラッピは花の妖精ラピ」

フラッピから花の妖精と聞かされたはるかは、思わず目をキラキラ輝かせた。はるか



がイメージしていた妖精とは、大分かけ離れては居たが……

「狸さんじゃなくて、お花の妖精さんなの？わ、私、お花大好き何です」

「それは良い心掛けラピ」

「フラツピったら、調子良いんだからあ」

はるかに花が大好きだと言われたフラツピは、上機嫌で何度も頷き、ブルームは呆れた様な視線でフラツピを見つめた。イーグレットは、困惑気味に三人に話し掛け、

「三人共……一応、ルージュとプロツサムが戦つて居るんだけど」

イーグレットはそう言いながら、ラシアと戦つて居るルージュとプロツサムを指さすと、二人にも三人のやり取りが聞こえたようで、ルージュは少し怒りながら、

「ちよつとお！あたし達が戦つて居る時に、何ホンワカ気分に浸つてるのよお!!」

「今の内に、その方を安全な場所まで避難させて上げて下さい」

プロツサムも、ラシアの薦を躲しながら、ブルームとイーグレットに進言した。ブルームは、頭を掻きながら二人に謝り、

「ゴメンゴメン……じゃあ、あたし達が安全な所まであなたを送るよ」

「お家はこの近くなの？」

ブルームとイーグレットに聞かれたはるかは、ハッと我に返つたように表情を険しくすると、

「あのう、幼稚園くらいの子の女の子を見かけませんか？私の妹何です。私、居なくなつた妹を探して居て・・・」

「エツ!? そうだったの？ あたし達がここに来るまでには見掛けなかつたけど、もしかしたら、一緒に来た他の仲間達が保護してくれてるかも知れない」

ブルームは、自分にも妹が居る事で、はるかの不安心持ちが痛い程理解出来た。イーグレットにしても、ブルームの妹みのりの事を、妹同然に思つて居る事から、はるかの心を理解し、優しい声で語り掛け、

「私達と一緒に探しましょう」

「ハイ！」

はるかは、ブルームとイーグレットも一緒に探してくれると言つてくれた事で、心強さを感じて力強く返事を返した。ブルームは頷き、ルージュとプロツサムを見ると、

「ルージュ、プロツサム、あたしとイーグレットは、この子の妹を探してくる」

「こつちは任せたわ」

「任せて！」

「お任せください！」

ルージュとプロツサムは力強く頷き、ブルームとイーグレットは右手を上げて二人に合図すると、はるかを連れてこの場を去つて行つた。

「居なくなった妹か・・・プロツサム、あたし達もさっさとこいつ片付けて、あの子の妹探しを手伝いますか」

「ハイ！そうと決まれば・・・」

ルージュとプロツサムの二人にも妹が居た事で、はるかの不安を感じ取った。二人はロシアをキツと見つめると、プロツサムは、プロツサムタクトを取り出した。

「今度はこっちの番です。花よ、輝け！プリキュア！ピンクフォルテウエイブ！！」

プロツサムのピンクフォルテウエイブが、ロシア目掛け飛んだ。ロシアは薦で払い除けようとするも直撃を受けた。

「な、何だ!?身体が宙に浮かんで?」

ピンクフォルテウエイブに包まれたロシアの身体が宙に浮かび、プロツサムはルージュに合図を送ると、

「ルージュ、今です！」

「OK！プリキュア！ファイヤーストライク!!」

ルージュは、動きが止まったロシアに対し、炎のボールとも呼べるファイヤーストライクを放って命中させ、ルージュとプロツサムは、ロシアを浄化させた。

その頃、はるかの妹もかは、花一面の花畑の中で、はるかがお気に入りしている

花のプリンセスという絵本を手に取り、悲しげな表情でしやがみ込んで居た。

（お姉ちゃん、本当にお家から居なくなっちゃうのかなあ？）

ももかは、大好きな姉はるかが、ノーブル学園に合格すると、学園の寮に入る為家に出る事を、両親とはるかの話を聞いてしまい、ショックを受けて家を飛び出してしまった。不安な心がももかの心を覆っていった。

「お、お姉ちゃん……グス」

ももかの不安が頂点に達し、ももかが思わず涙ぐむと、何処からか優しい声が聞こえて来た。

「どうしたの!?!もしかして、迷子になっちゃったのかな?」

そう言いながらももかの隣に、眼鏡を掛けた紺色の髪の三つ編みの少女が腰掛けた。少女は、ももかが手に持って居る花のプリンセスの絵本を見ると、目を大きく広げて驚き、

「その絵本は、花のプリンセス」

「エッ!?!お姉ちゃん、この絵本知ってるの?」

「ウン、お姉ちゃんも大好きで……ほら」

少女はそう言うとりュックを漁り、ももかが手に持って居る物と同じ、花のプリンセスの絵本を取り出してももかに見せた。ももかは目を見張って驚き、

「ワアアア!? お姉ちゃんの絵本も、はるかお姉ちゃんの絵本と一緒にだあ」

「エツ!? じゃあ、その絵本はあなたのじゃないの?」

「ウン、私のお姉ちゃんが大切にしている絵本だよ。何時もお姉ちゃんが、ももかにお話してくれるの」

「あなたはももかちゃんって言うの? 私は、七瀬ゆいよ。そう・・・優しいお姉さん何だね」

少女の名前は、七瀬ゆい・・・

彼女もまた、ノーブル学園を進学先に希望して居て、両親にたまには受験勉強の息抜きにと日帰り旅行に誘われ、この町にやって来て居た。だが、両親と逸れて探す内、この素敵な花畑に目を奪われ、ももかと出会って居た。

「お家は此処から近いの? 私が一緒にお家まで送って上げようか?」

ゆいがももかに優しく話し掛けたその時だった。ゆいとももかの耳に、不気味な皺枯れ声が聞こえて来た。

「ヒイヒヒヒ、お前達はお家には帰れないよ」

「「エツ!?!」」

「「」」であたし達に・・・食われちゃうんだからねえ」

そうやって姿を現したのは、頭部から二本の角を生やした般若のような顔をした鬼女

だった。その背後からは、鳥の頭と蛇の身体をしたバニツプが、花を踏み倒しながら地上を這い、蛾のような容姿をした人型の魔物、モスマンの三体が、ゆいとももかを餌だとはかりゆつくり近づいて来た。ゆいは、恐怖で震えながらも、自分より年下で、しがみ付いて震えるももかを庇いながら後退った。ももかは、ゆいにしがみ付いた拍子に、はるかが大事にしてた花のプリンセスの絵本を落としてしまい、慌てて拾いに戻ろうと駆け出した。

「ももかちゃん、ダメえエエー！」

ゆいが叫びながら、ももかに手を出して引き留めようと試みるも、ももかの身体はゆいの手を逃れ、落ちていた花の絵本を拾った。だが、這って来たバニツプの嘴で上空高く飛ばされ、ももかが悲鳴を上げた。

「キヤアアアア」

「ももかちゃん！ー！」

ももかの悲鳴が、ゆいの絶叫が花畑に響いたその時、ももかの身体を、ピンクの衣装で身に包んだ少女が、空中高く飛び上がって受け止め、ゆいを庇う様に、白い衣装を着た少女が駆け寄った。ピンクの衣装を着た少女は、そのまま白い衣装の少女の側に着地すると、ももかを背後に居るゆいに託し、

「本当は、鬼さん見るのは怖いけど、絵本が大好きな子供を虐める何て・・・許せないよ

！」

「私も、許せない！」

ゆいとももかを助けに現れたのは、キュアハッピーとキュアエコーだった。バニツプは、そんな二人を目障りと感じたかのように、嘴を大きく開けて、吹き矢のような物を放つも、仁王立ちしたしたハッピーとエコーの前に、まるで見えないバリアが張られているかのように、攻撃を跳ね返した。

「な、何だ!? 攻撃が跳ね返された?」

ハッピーは、少し緊張した面持ちながら、

「効かないよ! 私達の前には、バリアがあるんだからあ……ミント、彼女達をお願いします」

「任せて! プリキュア! エメラルドソーサー!!」

更に加勢に現れたミントのエメラルドソーサーが、四か所の上空に張られ、ミントは、何時でもハッピーとエコーを援護出来る様に身構えた。ハッピーとエコーは、後ろを振り返り、一緒に来たキャンディとグレル、エンエンに声を掛けた。

「キャンディ、あなたもミントの側に居て」

「エンエン、グレル、あなた達も」

「分かったクル」

「分かった」

妖精達もミントに託し、ハッピーとエコーは、三匹の魔物に対し身構えた。

ももかを探すはるか、ブルーム、イーグレットの下にも、新たに魔物が襲い掛かっていた。

「人間を傷めつければ、ブラッドの奴から褒美をたんまり貰えるからなあ……さあ、覚悟しな」

新たに現れた魔物は、蟬人間、超音波の攻撃を繰り返し、思わずはるか、ブルーム、イーグレットは耳を塞いだ。そんな中でも、はるかが手に持つドレスアップキーは、まるではるかにももかが居る場所を知らせようとするかのように、ピンク色の輝きを放っていた。

「何だろう!?!ももかの身に何か起きてるんじゃないや? すいません! 私、ももかが心配で……」  
「分かった。この近くに、あたしの仲間のミント、ハッピー、エコーが要る筈だから、何かあったらブルームとイーグレットに言われたと言えば、彼女達が力になってくれる筈」

「私達も直ぐに後を追うわ」

ブルームとイーグレットは、はるかの思いを受け止め、この場を自分達が受け持ち、は



るかを先に行かせようとした。はるかは力強く頷き、

「ハイー！」

はるかは、ピンクの輝きに導かれるように、この場を走り去って行った。蝉人間は逃すまいと背中を震わせて宙に飛ぶも、足元に精霊の力を込めたブルームとイーグレットが大ジャンプで飛び上がり、蝉人間と空中戦を繰り広げた。

「ダアアアアア！」

「エイツ！」

ブルームのパンチが、イーグレットの蹴りが、蝉人間にヒットし、蝉人間は二人から距離を取り、今一度超音波攻撃を仕掛けて来た。二人は落下しながらもブルームはベルトに、イーグレットはブレスレットにスパイラルリングを装着すると手を握り合い、

「精霊の光よ！命の輝きよ！」

「希望へ導け！二つの心！」

イーグレットとブルームが、順番に口上を述べると、二人の身体に精霊の力が凝縮されていった。

「プリキュア！スパイラル・ハート・・スプラッシュシュ！！」

ブルームとイーグレットから放たれた金と銀の混ざり合った螺旋状のエネルギーが、ハートの型で蝉人間を包み込んだ。

「な、何だ!?この力はあ?も、もしや、貴様らがプリキュアだったのかあああ!」

蟬人間は、闇に帰る直前になって、ようやく二人がプリキュアだったと気づいた。着地して大きく息を吐いた二人に、ルージュとブロッサムが合流した。ルージュは周囲にはるかの姿が見えない事に気付く、

「ブルーム、イーグレット、さっきの子は?」

「ウン、この場に魔界の者が現れたから、あたし達、あの子を先に行かせたんだあ」

ブルームの言葉にブロッサムが頷くと、

「分かりました。じゃあ、私達も急ぎませんと」

「そうね・・・行きましょう!」

イーグレットの言葉に三人も頷き、四人ははるかの後を追った。

ゆいとももかの前に、ハッピー、エコー、そしてミントの三人のプリキュアが現れた事で、ゆいは目を輝かせていた。

（ま、前にテレビで見たプリキュア・・・本当に居たんだあ）

ゆいがプリキュアに目を奪われていると、土手の方からももかを呼ぶ声が聞こえて来た。ももかは表情を和らげ、

「はるかお姉ちゃん!」

「ももかあ!?!良かった、無事だったの」

「ウン! ゆいお姉ちゃんと、プリキュアのお姉ちゃんが助けてくれたの」

「エツ!?! ももかもプリキュアに助けられたの?」

はるかかの視線が、鬼女、バニップ、モスマンと今対峙しそうなハッピーとエコー、そしてももかとゆいを守りながらも、戦況を見つめるミントを見た。はるかは大きく息を吸い込むと、

「プリキュアさくくん! 妹を助けてくれてありがとう!! ブルームって人と、イーグレットって人もこの近くに居ます!!」

「どう致しましてえ!」

ハッピーとエコーがはるかに手を振り、はるかも嬉しそうに手を振り返した。はるかは、ゆいにも気づいて話し掛け、

「あなたがももかが言ってた、ゆいちゃん?」

「ウン。そう言うあなたが、ももかちゃんが話してたはるかさんね」

「ももかがお世話になっちゃってありがとう」

「ウウン、私も色々お話出来て楽しかったよ。はるかさんも、花のプリンセスが好き何ですってね?」

「エツ!?! ももかだったらそんな事まで・・・アレエ!?! はるかさんもって事は?」

「ウン！私も花のプリンセスの絵本が大好きで……ほら、何処かに行く時は何時も持ち歩いて居るの」

ゆいが花のプリンセスの絵本を取り出して見せた事で、はるかには益々表情を和らげた。ハッピーは、はるかやゆい、ももかの三人が、表情を和らげた事でホッと安堵し、「ねえ、エコー、ミントも一緒だし、ブルーム達も来てくれるみたいで、私、実はホッとしちゃった」

「そうだね、でもハッピー、油断しないで」

エコーは、ハッピーの反応に少し笑みを浮かべたものの、鬼女から発せられる負の力を感じて顔色を変えた。

「お前達がプリキュアかあ!?!邪魔をしおつてえええ!!」

怒りの咆哮を上げた鬼女の肉体に変化が起きた。上半身の筋肉が膨れ上がり、筋骨隆々とした女子レスラーのような体格になり、足元の花を踏みつけながらハッピーとエコーに向かって来た。ミントは、嫌な予感が漂い、即座に四つのエメラルドソーサーをハッピーとエコーの前に移動させ、より強固なバリアを作り上げた。だが……鬼女の怒涛のパンチを受けて脆くもひびが入って碎かれ、ハッピーとエコーは左右に分かれて鬼女と距離を取った。ハッピーにはバニップが、エコーにはモスマンが追い打ちをかけ、鬼女はミントの背後に居るはるか達を襲うとした。

「させないわ！プリキュア！エメラルドソーサー!!」

ミントが再びエメラルドソーサーを繰り出して、鬼女の攻撃から懸命に堪えた。だが、鬼女の力は強く、このままでは再びエメラルドソーサーを破られるのは時間の問題だった。

「このままじゃ・・・ハッピー、エコー、手を貸して!」

「ミント!? 待ってて、今加勢に行くから・・・プリキュア! ハッピーくく・・・シャワくく!!」

ハッピーが、両手で組んだ腕を前に突き出すと、ハッピーの手からピンク色の光の輝きが放たれ、バニツプの身体を包み込んで浄化した。

「私達も直ぐ行きます。世界に響け! みんなの想い!! プリキュア! ハートフル・エコー!!」

エコーの叫びと共に、光輝く胸のブローチから発射された光が、モスマンの身体を包み込んで浄化した。ハッピーとエコーは、バニツプとモスマンを浄化してミントの加勢に向かうも、パワーアップした鬼女のパワーの前に劣勢を強いられた。そこに、ブルーム、イーグレット、ルージュ、ブロッサムが現れた。

「ミント、ハッピー、エコー、大丈夫!」

「あたし達も加勢するよ」

「はるかさん、妹さん達と一緒にこっちに！」

ブルームとルージュが、イーグレットと共にハッピーとエコーに合流すれば、プロッサムははるか、ももか、ゆいを手招きして呼び寄せ、ミントと共にはるか達を守る態勢を取った。

「おのれええ、またしてもおお」

「「ヒイイイ!?!」」

激昂して口が耳まで裂けた鬼女を見て、思わずルージュとハッピーが一步後退るも、ブルームとイーグレットが飛び出して肉弾戦を仕掛け、鬼女と激しい攻防を繰り広げた。それを見て勇気を振り絞ったルージュとハッピーは、

「怖くない、怖くない、怖くない……プリキュア！ファイヤーストライク!!」

「気合いだ、気合いだ、気合いだああ！プリキュア！ハッピー……シャワー……!!」

勇気を振り絞ったルージュのファイヤーストライクと、ハッピーのハッピーシャワーが、放たれ、呼吸を計ったかのようにブルームとイーグレットは、鬼女から距離を取り、ルージュとハッピーの合体攻撃が、鬼女を飲み込み浄化した。

「「ヤッターアア！」」

はるかどゆいは、思わず手を取り合ってプリキュア達の勝利を喜び合い、プリキュア達も魔界の者達を浄化した事でホッと安堵し、笑顔を浮かべた。初めて会ったはるかど

ゆいではあったが、何処かお互いに惹かれ合つて居た。

はるかどゆい、二人が生涯の親友になるとは、この時の二人に知る由は無かつた……

#### 4、パインとみらい

朝日奈みらいはご機嫌斜めだつた……

先程の不気味なカインの宣戦布告を聞いて、母今日子はみらいに対し、家から一步も出ないように釘を刺して居た。みらいは自室で、熊のぬいぐるみのモフルンを抱っこしながら、不満そうに愚痴つて居た。

「また魔法つかいさんに会えるかも知れないのに、つまらないよねえ、モフルン？」

みらいはモフルンを抱っこしたまま、そのままベッドに寝転がるも、直ぐに起き上がり、抜き足、差し足、忍び足で一階に降り、母今日子の様子を見た。今日子は夕飯の準備をしているようで、みらいはしめしめとばかり、また抜き足、差し足、忍び足で、日子に気付かれず家から外に出た。

「ヤッター、大成功！」

みらいは辺りを見渡すも、普段と同じ景色がそこにはあつた。

「お母さんったら、心配性……モフルン、また魔法つかいさんに会えないかなあ？」

みらいはモフルンを抱っこしたまま、近所の公園へと向かつた。ベンチに腰掛けたみ

らしいが空を見上げると、日は暮れ始めて薄暗くなってきていた。そんなみらいの耳に、尋常じやない動物の唸り声が聞こえて来た。

「何だろう!？」

みらいは、意を決して声の方に走っていくと、全身の毛を逆立てた子猫が居た。更にみらいの視線に映ったのは、五メートルはありそうな毛むくじやらかな生物が、右手に棍棒を持って不気味な笑みを浮かべて居た。巨人の名はオーガ、みらいは思わずオーガを見上げ、

「大きいなあ・・・アツ!?猫ちゃん、ダメだよ!」

子猫は、恐怖に耐えきれないかのように、オーガに向かって行くも、オーガは大きく息を吸い込み、子猫目掛け息を吹きかけた。子猫は堪らず吹き飛ばされ、みらいは身体を張って子猫を受け止めた。

「大丈夫!?猫ちゃん、逃げよう!」

みらいは、右手にモフルンを、左手に子猫を抱いて逃げ出すも、オーガはその場で右足を持ち上げて地上に振り下ろすと、まるで地震が起きたかのように地上が揺れ、みらいは思わず転んでしまい、モフルンが宙に飛んだ。

「モフルン!猫ちゃんは先に逃げて!!」

みらいは、子猫を先に逃がすと、宙に飛んだモフルンを必死に追った。子猫は、心配



そうに後ろを振り返るも、そのまま何処かに消え去った。宙に飛んだモフルンを、オーガは巨大な腕を伸ばして掴み、口の中に放り込もうとしていた。みらいは、オーガの前で両腕を広げて立ち塞がり、オーガの視線がみらいを捕らえた。

「モフルンを返して！」

頬を膨らませてオーガに抗議するみらいだったが、オーガはみらいを摘まみ上げ、大きな口を開けて、モフルン事みらいを飲み込もうとした。みらいは両足を動かして抵抗した。だが、無情にもみらいとモフルンを捕らえて居た手を離すと、みらいとモフルンは、オーガの口目掛け落下していた。オーガがみらいとモフルンを食べようとしたその時、一人の人影がみらいとモフルンをキャッチし、そのまま地上に降り立った。それはキュアパインだった。更に入れ替わる様に、ミューズとサニー、そしてダークルージューがオーガの前に現れた。

「パイン、私達でこの大きい巨人を惹きつけるから」

「あんたは今の内にその子を安全な所に避難させな」

「ウチらに任せといてえ」

「ウン、直ぐ私も合流するから」

パインは、みらいを少し離れた場所で下ろすと、

「大丈夫!? 怪我は無いかしら?」

「パインは、優しくみらいに話し掛けて、モフルンをみらいに手渡すと、背後をチラリと見た。そこには先程みらいが逃がした子猫が居た。パインは子猫の頭を撫でながら、「ありがとう、あなたが教えてくれたから間に合ったわ」

「ミヤアア」

パイんに頭を撫でられながら声を掛けられた子猫は、気持ち良さそうな表情を浮かべた。みらいは呆然としていたものの、直ぐに慌ててパインにお礼を始め、

「お姉ちゃん、ありがとう。モフルン、良かったね?」

「どう致しまして、この猫ちゃんと一緒にここに居てね」

パインがみらいに離れているように伝えると、オーガと戦って居るミューズ、サニー、ダークルージュの下に駆け去った。みらいは、傍に居る子猫の頭を撫でながら、

「あのお姉ちゃん、この子に教わったって言ってたけど・・・ひよつとして、子猫の言葉が分かる魔法つかいさん!」

みらいは、パインが子猫と会話する魔法を使えると思い、目をキラキラ輝かせた。

巨大なオーガと戦うミューズ、サニー、ダークルージュ、そして合流したパインの四人、ミューズは、オーガの動きを止めるべく行動に移った。

「あんなに大きいのに暴れられたら大変、先ずは動きを制限しなきゃ・・・、シ、の音符のシャイニングメロディ!プリキュア!シャイニングサークル!!」

ミューズは、四人の幻影を出すと、五芒星のようなサークルを描き、巨大なオーガの動きを封じた。

「三人共、今の内に！こんなに大きくちや、長くは動きを止められない」

「OK！」

「OKやー！」

ミューズの言葉に頷いたパイン、ダークルージュ、サニーの三人、パインはパインフルートを取り出し、サニーは、サニーファイヤー、ダークルージュはダークネスシユートの体勢に入った。

「ウチの炎、受けてみいやー！プリキュア！サニーファイヤー！！」

「デカ物、これでも喰らいな！プリキュア！ダークネス・シユート！！」

サニーの炎のスパイクサニーファイヤーが、ルージュのファイヤーストライクに似た、まるで黒き炎のボールが、オーガ目掛け飛び、パインはパインフルートを優しく奏で、

「プリキュア！ヒーリングプレアー・・・フレ〜ッシユ！！」

パインから黄色いダイヤ型の光弾が同時に発射された。

「グウウオオオオオオ！」

オーガはもがいて、シャイニングサークルを振り解いたものの、サニーファイヤー、

ダークネスシユートトの直撃と、そのすぐ後にヒーリングプレアーを受けた事で、為すすべなく浄化された。

「「フウウ」」

パイン、ミューズ、サニー、ダークルージュが、安心したように大きく息を吐くと、みらいが嬉しそうに三人に近付き、子猫もみらいを追いかけて来た。パインは近づいて来た子猫をしゃがみ込んであやしていると、みらいは目をキラキラ輝かせながら、パインに話し掛け、

「あのお・・・魔法つかいさんですよねぇ？」

「エッ!? エエと、私達魔法使いって言うか、プリキュアだけだ」

「でも、この猫ちゃんとお話出来るんですよねぇ？」

「ウ、ウン、キルンの力を使えば・・・」

パインは少し動揺しながらも、みらいの質問に正直に答えた。キルンも楽しそうに姿を現し、子猫はキルンを追ってグルグルその場で回り続けた。ミューズ、サニー、ダークルージュも、穏やかな目で子猫を見ていると、親猫が迎えに来たのか、子猫は一同にミヤアと声を発して、この場を去って行った。パインは、子猫の言葉を通訳するように一同に話し掛け、

「あの子、助けてくれてありがとうって言ってたよ」

「そう、間に合って良かったよね」

「終わりよければ何とかやらやな」

「じゃあ、そろそろ戻りましょう」

ミューズ、サニー、ダークルージュはパインを頷き返し、ブルーの所に戻ろうと提案した。パインも頷き、

「そうだね・・・じゃあ、私達これで」

「私、朝日奈みらいって言います！」

「エツ!? そ、そう・・・私は、キュアパイン、こちらがミューズ、あちらがサニー、そちらがダークルージュよ。じゃあみらいちゃん、私達これで・・・」

パインは、ミューズ、サニー、ダークルージュと共にこの場を去ろうとすると、みらいが慌ててパインを引き留め、

「あのう、パインお姉ちゃんは、動物とお話出来るんですよねえ？」

「ウ、ウン、そうだけど・・・」

「じゃあ、モフルンともお話しできるんだあ・・・モフルンが何て言ってるか、私に教えてくれますか？」

「モフルンちゃん!? ウン、良いけど・・・そのモフルンちゃんって何処に？」

「モフルン！」

みらいは嬉しそうにモフルンを頭上に掲げると、パインとサニー、ダークルージュの目は点になり、ミューズの表情が曇った。困惑顔のパインは、みらいに確認するように、「エエエと、縫いぐるみだよね？」

「縫いぐるみじゃないよ。モフルンだよ！」

パインはどうしたものかと益々困惑していると、ミューズとダークルージュは、みらいを呆れたような視線で見つめ、サニーは変顔を浮かべながら、

「エエエと・・・あの子不思議ちゃんかいな？何か取り込んでるようやし、ウチらは先に帰るかあ？」

「そうね・・・じゃあ、話が長くなりそうだから、あたし達は先に戻るよ」

「みんなには、私達から話しておくから」

サニー、ミューズ、ダークルージュが、パインを置いて先に帰ろうとすると、困惑したパインは、必死に三人のスカートを掴んで引き留めた。

「アカンアカン、スカートがああ!？」

「スカート脱げちゃううう!？」

「待つてええええ!置いて行かないでえええ!!私達、同じプリキュアの仲間でしょう?友達でしょう?お願いいいいい!!」

パインは、置いて行かれまいとして、必死にサニー、ミューズ、ダークルージュを引

き留め、三人はスカートを抑え、パインを引き吊りながら、四人の姿が姿見鏡へと消えて行つた。みらいは呆然と見て居たが、

「アツ!?!魔法つかいのパインお姉ちゃんに逃げられちゃつた」

みらいは残念そうにしながら、モフルンに話し掛け、

「ねえモフルン、パインお姉ちゃんって……私の髪形に似てたよねえ? エへへへ」

みらいは、パインの事を思い出し、嬉しそうに口元が緩むと、みらいの頭を、左右から拳が押さえつけた。

「エツ!?!」

「みくらくいいいい!」

「そ、その声……お、お母さん!?!」

みらいの母今日子は、みらいが家から抜け出した事に気付き、みらいを探しに来て居た。みらいは恐る恐る振り返ると、心配顔した今日子の両拳が、容赦なくみらいの頭を締め付けた。

「痛い、痛いいい!ゴ、ゴメンなさああい!」

「もう抜け出したりしない?」

「しません!アアアン、パインお姉ちゃん、助けてえええ!!」

みらいは、今日子に謝り続けながら、家へと連れ戻された……

第百二十五話：次世代を担う少女達（後編）  
完



## 第二百二十六話：魔法界を救え

1、サイアーク

ブルースカイ王国・・・

一万年前、大いなる闇から世界を救った三人のプリキュアの一人、キュアプリーステスの子孫達が代々治めて来た国、この国には千年前、復活した大いなる闇との戦いで、その身事大いなる闇と共に封じられたキュアミラーージュが、アクシアと呼ばれる箱の中に封じられ、代々の女王が管理して居た。王国の姿見鏡に、ブルーに似たシルエットが浮かび上がると、

(何やら地上が騒がしいようだな・・・この時代のプリキュアの力を試すには、良い機会かも知れん)

シルエットは消え去り、再び王国内は静まり返った・・・

その頃、ブルースカイ王国の姫君ヒメルダは、城を抜け出して王国の子供達に、プリキュアの事を語って聞かせて居た・・・

「で、私は何と・・・二人のプリキュアと姉妹同然の間柄になったんだよ。凄いでしょ

う？」

ヒメルダは、得意気に子供達に自慢して踏ん返りながらプリキュアについて熱く語って居た。普段人見知りするヒメルダだが、自分より年下の子供達相手ならば、ヒメルダは極度の人見知りになる事はなく、子供達も姫なのに気さくに自分達に接してくれるヒメルダに懐いて居た。だが、ヒメルダのお世話役であるリボンは、時々城を抜け出して子供達と戯れるヒメルダに頭を抱えた。

「ヒメエ！お城を抜け出したかと思えば、子供達に何自慢してるんですのお？」

「だってえ・・・折角えりかお姉ちゃんや美希お姉ちゃん、プリキュアのみんなと仲良くなっただよ」

「だからって・・・」

リボンは、困惑顔でヒメルダを更に窘めようとするも、ヒメルダからプリキュアの話聞いた子供達は興味津々だった。

「私、姫様のお話もつと聞きたい！」

「僕もおお！」

子供達がプリキュアに興味を持ってくれたようで、ヒメルダは目をキラキラ輝かせる  
と、

「オオオオ!? 良いよ、もつと、もつと、プリキュアの事、みんなに教えちゃう！フッフツ

フ、実は私がちよつと頼むと、プリキュア達は直ぐ駆け付けてくれるんだよ．．．凄いでしょ？」

『凄おおい！』

「ハアアアア」

ヒメルダは、思わず調子に乗り、益々得意気にするヒメルダを見て、リボンは深い溜息を付いた。そんな中、一人の緑髪した少年が、仲間の輪に入れず、遠巻きに一同の様子を見守つて居た。少年の名はマルクと言ひ、人見知りか激しかった。自分も人見知りが激しいヒメルダだったが、自分より年下の子とは直ぐ打ち解け、自分と似たようなマルクの事も気に掛けていたが、この日はプリキュアの話に盛り上がり、マルクの事を思いやる事が出来なかつた。

（ぼ、僕もヒメルダお姉ちゃんのお話聞きたいなあ．．．）

そう思ったマルクだったが、足が動かずただ眺めているだけしか出来なかつた。その様子を、森の中から輝く姿見鏡が見つめて居た。

（あの子供は使えそうだな．．．）

姿見鏡が輝くと、マルクの身体を光が覆つた！

「ヒ、ヒメルダお姉ちゃあああん！」

それが、マルクが辛うじて発せた言葉だつた。ヒメルダは思わず声をした方向を振り

向くと、そこには封印された姿見鏡の中で、両手を胸の前で交差させたマルクが、眠って居るかのように佇んでいた。

「マルク!? どうしたの?」

ヒメルダは、顔色変えてマルクに近付くと、ロボットのような腕と足をして、赤い尖ったサングラス、赤いマフラーとベルト、そして全身が赤く染まって居る怪物が姿を現した。

「フッフッフ、先ずは目障りなこの王国を攻撃し、プリキュア達を誘き出すか：サイアーク、やれ」

「サイアーク!」

地響き立てて近付いて来る怪物の出現に、子供達はパニックになり、ヒメルダとリボンも思わず恐怖の表情で後退った。

「な、何なの、アレ!?!」

「わたくしにも分かりませんわ」

『キヤアアアア』

ヒメルダと子供達は、お城とは反対の方向に逃げ出すと、サイアークは、逃げるヒメルダ達に反応し、追いかけ始めた。姿見鏡に浮かんだシルエットは軽く舌打ちし、

「チツ、まだ完全に力が戻ってないか・・・まあいい、サイアーク、子供は殺すな! 怖が

らせるだけで良い」

姿見鏡のシルエットは、そう言い残しその姿を消した・・・

「な、何か私達を追って来るんですけどおおお!?」

『キヤアアア』

ヒメルダは、リボンと共に変顔浮かべながら、子供達と一緒に逃げ続けるも、サイアークはそんな一同を執拗に追い駆けまわした。一人の少女が、泣きながらヒメルダに訴え、

「姫様ああ！姫様は、プリキュアと友達何でしょう?」

その少女の言葉を聞くと、子供達が同意したように、次々にヒメルダにプリキュアに助けて貰って欲しいと訴えた。

「そ、それは・・・」

ヒメルダは、思わず涙目になりながら言葉に詰まった。つい調子に乗ってしまい、自分が呼べば、プリキュアは直ぐ駆け付けると言ってしまったが、実際にはブルーを通さなければ、プリキュアと連絡を取る事も出来なかった。サイアークは、そんな一同を次第に追い詰め、一人の少年の足が纏れて転倒した。少年は泣きじやくり、顔色変えたヒメルダが少年を助け起こすも、少年の膝からは血が滲んでいた。

「痛いよおおお！」

「大丈夫!? 走れる?」

「痛くて走れないよおおお」

ヒメルダは、泣きじやくる少年を背負う事も考えたが、すぐ間近に迫って来るサイアーク相手に、背負って逃げ切れるのは不可能に思えた。

『プリキュアアア、助けてええ!』

子供達の口から、プリキュアに助けを求める声が木霊のように辺りに響くも、プリキュアが現れる事は無かった。

「姫様あああ! どうしてプリキュアは来てくれないの?」

「姫様は、プリキュアの友達何でしょう?」

「.....」

ヒメルダは子供達の目に、現れないプリキュアに、そしてプリキュアの事を話したヒメルダに、失望の表情が浮かんで居る事に気付き、思わず沈黙した。その間にも、サイアークは直ぐ傍まで近づき、ヒメルダは意を決し、サイアークの前に駆け出すと、両腕を広げて足止めしようとして試みた。

(私のせいだ..... 私が調子に乗ってあんな事話しちゃったから)

「これ以上、あの子達に近付かないで!」

だが、無情にもサイアークは右腕を振りかぶり、ヒメルダ目掛け右拳が振り下ろされた。その瞬間、ヒメルダは目を瞑った。だがその時、

「サイアーク、子供は殺すなと命じた筈だぞ！」

突然辺りに声が響き渡り、サイアークの動きが止まった。ヒメルダは、恐る恐る目を開けると、自分のすぐ目の前にサイアークの拳があり、ヒメルダは思わず尻もち付いた。

「い、今の声って・・・何?！」

ヒメルダは、周囲をキョロキョロ見渡すも、人影は見当たらなかつた。サイアークは困惑の表情を浮かべるも、ヒメルダを摘まみ上げると、邪魔だとばかり大きな木目掛け頬投げた。

「キヤアアア」

「ヒメエエエエ！」

ヒメルダの悲鳴が、リボンの絶叫が響いたその時、突然現れた姿見鏡の中から、二つの人影が飛び出して来た。

「あたし達の妹分に何するのよお！マリイイン・・・シュート！」

サイアーク目掛け、マリンは右手を回転させ、手から水の塊を無数に放つ、マリンスュートを放ち、ベリーは、放り投げられたヒメルダを空中でキャッチした。ベリーは、優しくヒメルダに声を掛け、

「ヒメ、大丈夫!？」

「ウツ・・・ウツ・・・ベリーお姉ちゃん、マリンお姉ちゃん・・・怖かったよおお」  
「よしよし、あたし達が来たからは、もうお任せだよ」

「ウン・・・来てくれてありがとう」

ベリーに合流したマリンは、泣きじやくるヒメルダの頭を撫でて上げると、ヒメルダは涙を拭い、ベリーとマリンに感謝の言葉を述べた。ベリーは、ヒメルダを子供達の側に下ろすと、リボンは慌てて近付き、

「ヒメエエ、大丈夫ですのお!?ベリー様、マリン様、ヒメをお助け下さり、感謝の言葉もありませんわ」

リボンは、ベリーとマリンに何度も頭を下げ、感謝をし続けると、マリンは口元をニヤリとさせ、

「間に合って良かったっしゅ」

それを見たベリーは、マリンの頭を軽くポンポン叩き、

「マリン、調子に乗らない・・・ヒメは、リボンや子供達と一緒に少し離れてて」

「ウン!」

『ウワアア!プリキュアだああ!!本当にプリキュアが来たああ!!』

子供達は、目をキラキラ輝かせながら、助けに来てくれたベリーとマリンを見つめた。



そんな子供達とは逆に、サイアークを見たベリーの表情は曇っていた。

（おかしいわねえ!?!カインは、日本を総攻撃するって言っていたと思うけど、ブルースカイ王国にまで攻撃の手を広げたとでも言うの?）

ベリーは訝り、サイアークをよく観察するも、自分達が今まで戦った魔界の者達とは、何処か違っていた。姿見鏡の中のシルエットは、プリキュアが現れたのを知ると、

（ほう、こどもも早くプリキュアが現れるとはなあ・・・ブルーの差し金か?それとも偶然か?まあいい、この時代のプリキュアの実力を試すには好都合・・・）

「サイアーク、プリキュアを狙え!」

「サイアーク!」

「誰!?!」

「姿が見えないよ?」

何者かの命令を受け、サイアークのサングラスがキラリと光った。ベリーとマリンは、周囲を見渡すも、サイアークに指示を出した者を見付ける事は出来ず、サイアークは、ベリーとマリンド目掛け行動を開始した。ベリーはマリんに話し掛け、

「マリリン、気づいてる?あのサイアークって、魔界の者にしては何処か変じゃない?」

「ウン、それに神様があたし達をブルースカイ王国に寄こしたのは、調子に乗ってるヒメを、諫めて欲しいって事だったよねえ?なのに、魔界の者が居るのはおかしいっしょ?」

「ええ、それにどちらかと言うと、あたし達が今まで戦って来た、ナキワメーケやソレワターセ……」

「デザトリアンやネガトーン、アカンベエっばいよね？」

「そうね、まさかとは思うけど……新たな敵って事も考えられるわね」

「エエエ!? マジっすかあ?」

「かも知れないって事よ……来るわよ!」

ベリーはマリンを促し、襲い掛かって来たサイアークのパンチを、ベリーは右側に、マリンは左側に飛んで躲した。マリンは躲しながら、再びマリンシユートをサイアークに放ち、バランスを崩した所をベリーが見逃さず、右足目掛け全体重を乗せた飛び蹴りを放ってサイアークを転倒させた。姿見鏡のシルエットは、ベリーとマリンの戦いを見ると少し動揺して居た。

(こいつら、戦い慣れてる!?)

『ウワアアア!』

プリキュアが攻勢なのを受け、ヒメルダを始めとした子供達から歓声が沸き上がった。だが、サイアークはさしたるダメージを受けなかったのか、平然と立ち上がった。長期戦になれば、この場に二人しか居ないベリーとマリンが不利になりそうな展開に、ベリーはベリーソードを取り出すと、

「マリン、二人でバラバラに戦っていても意味が無いわ。あたしとタイミングを合わせ  
て」

「合点承知の助！」

マリンもまたマリンタクトを取り出し、二人はアイコンタクトすると、先ずベリーが  
サイアークに仕掛けた。

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！プリキュア！エスポワールシャワー：フレ〜ッシユ  
!!!」

ベリーソードの先端から、青いスピード型光弾がサイアーク目掛け放たれた。そのす  
ぐ後に、今度はマリンが仕掛けた。

「花よ、煌け！プリキュア！ブルーフォルテウエ〜イブ!!」

マリンタクトから放たれた、水色の花の形をしたエネルギー弾が、エスポワールシャ  
ワーと合わさり、サイアークに命中した。サイアークの巨体が宙に浮かび、サイアーク  
は何とか逃れようとするも、ベリーとマリンは、ベリーソードとマリンタクトをクルク  
ル回した。

「ハアアアアアア！」

ベリーとマリン、二人の絶妙なコンビネーションで、二人の合わさった技の威力が上  
がり、サイアークは幸せそうな表情を浮かべ、

「ゴ、ゴクラック」

サイアークが浄化されると、姿見鏡に捕らわれていたマルクが解放され、その場に倒れ込んだ。ヒメルダは、慌ててマルクに近付き抱き起すと、

「ヒメルダお姉ちゃん!? アレエ? 何か変な夢を見てたようなの?」

「ウン、ウン、マルク、無事で良かったよおお」

『プリキュアアアアア!』

マルクも無事解放され、子供達に囲まれたベリーとマリンは、ホツと安堵した表情を浮かべたものの、ベリーは、今浄化したサイアークの事が頭を過ぎった。

(サイアークか・・・戻ったら、みんなにも話した方が良さそうね)

ベリーは新たな敵ならば、他の仲間達にも知らせるべきだと考えて居た。そんなベリーの両腕を、子供達が親しみを込めて引つ張り、ベリーは目を細めた。その様子を見ていた姿見鏡の中のシルエットは、

(この時代のプリキュア・・・侮れんな! 今はもう少し静観した方が良さそうだ)

姿見鏡は、忽然と森の中から何処かに消え去り、ブルースカイ王国に子供達の嬉しそうな声が響き渡った。

「ワアア! ヒメ様の言う通りだああ」

「本当にヒメ様は、プリキュアと友達だったんだねえ?」

子供達は、皆目を輝かせながらヒメルダを見た。先程反省して居たのもどこ吹く風とばかり、ヒメルダは再び調子に乗り始めた。

「フフン、当然！私のお姉ちゃん達は凄いでしょ？」

『ウン！』

ヒメルダは思わず踏ん反り返り、自分事のようにベリーとマリンをお姉ちゃんと呼び、子供達に自慢を始めた。ベリーは呆れ顔を浮かべ、マリンはそんなヒメルダを苦笑交じりに見つめ、

「アリヤリヤ、ヒメったら踏ん反り返っちゃったよ」

「ヒメ、あたし達が来たから良かったけど、これに懲りて、あまり自慢するのを止めなさい」

「そうそう、神様にも言われたけど、ヒメとあたし達で姉妹同然の約束したけど・・・止めちやおうかなあ？」

ベリーとマリンに駄目だしされ、姉妹の約束を無かった事にしようと言われ、見る見るヒメルダは泣きそうな表情を浮かべながら二人に縋りつき、

「そ、そんなああああ！もう自慢しないから・・・許してええええ!!」

そんなヒメルダを見て、ベリーとマリンは思わず顔を見合わせて笑い合った。

2、怪物よ、あつちに行きなさい

ブラックとホワイトは、リコの故郷魔法界を救う為、シロップの背に乗り、アン王女とリコを連れ、一路魔法界へと向かった。その魔法界には、カインの命を受け、獅子宮を守護する十二の魔神の一人バルバスが、全身を禍々しい鎧で包み、配下の魔物達を引き連れ、魔法学校を包围していた。

(バルバスと言えば、ベレルと同等の地位を持つ者とか・・・カインめ、本気で魔法界を潰しにきおったか)

魔法学校の校長は、教頭に指示を出し、外には出ないように告げるも、生徒達は何が起こったのかと、皆気が気ではなかった。リコの姉リズも、心配そうに外の様子を覗き見ていた。

(あれは、噂に聞く魔界の・・・校長先生、大丈夫かしら!?)

リズの視線が、外でバルバスと配下の者達と向き合う校長に釘付けされた。校長は、バルバス達を険しい表情を浮かべながら見つめ、

「お主らは、此処に何しに來おったのじゃ!？」

「フン、貴様が魔法学校の校長か?カイン、魔法学校の校長が出て來たぞ」

バルバスは、右手に嵌めた時計のような形をした水晶に話し掛けると、水晶が輝き、その中からカインの声が聞こえて來た。

「聞こえるか？では先程の返答を聞こう」

「何度も同じ事を言わせるな！」

「そうか・・・交渉は決裂だ！バルバス、好きなように暴れるが良い」

カインはそう言い残すと、水晶の輝きは消え失せた。バルバスは指を鳴らしながら、何処か楽しそうな表情を浮かべた。

「了解だ！では、我ら魔界の言葉に従わぬ愚か者達を・・・皆殺しだ！」

バルバスはそう言うのと、右手を振り、その衝撃波でリズが覗き見ていた校舎が直撃を受けた。その衝撃で、リズを含めた何人の生徒達が外に吹き飛ばされた。リズは瞬間に木々に魔法を唱え、吹き飛ばされた自分達の下に、木の葉が柔らかいクッションのようになり、生徒達をゆっくり地上に下ろした。校長は、リズの咄嗟の機転を見てホッとするも、心配そうにリズに声を掛け、

「何て事をするんじや！リズ君、無事か？」

「ハ、ハイ、何とか」

「早く他の者達と一緒に逃げるんじや！」

校長は瞬時にリズに指示を出すも、バルバスは配下の獣の魔物達に命じると、狼や豹に似た四足歩行をする魔物の群れが、あろう事かりズ達目掛け駆け出した。リズは魔法の杖を振ると、

「キュアアップ・ラパパ！ほうきよ、私達を守りなさい!!」

リズはほうきを意のように操り、近付いて来る魔物をほうきで掃くようにして、自分達に近づけない様に試みた。ほうきは魔物群れを掃き、その隙にリズは生徒達を校舎内に避難させた。だが、最初こそ上手く行っていたものの、素早い獣の群れが相手では、次第に対応しきれなくなってきた。校長は慌ててリズの前に駆け寄り、杖でバリアを張った。

「大丈夫か、リズ君？」

「ハイ！私は平気です」

「スマンのう・・・君まで巻き込んでしまった」

校長は、教え子であるリズを危険に巻き込んだ事を詫びるも、バルバスは更に他の魔物達に指示を出した。

「お前達は、他の場所に行け！皆殺しにしても構わん・・・魔法界を壊滅させろ!!」

「な、何じやと!？」

「そんな!？」

校長とリズが驚愕する中、バルバスの命を受けた魔獣達は、

『ウオオオオオオ!』

魔獣の群れが雄叫びを上げ、魔法学校から近い魔法商店街目掛け進軍を開始した。



シロップは、全速力で魔法界目掛け飛び続けた！

リコはシロップの背の中で、両手を組んで魔法界の無事を祈り続けて居た。

(お願い、私達が付くまで無事で居て)

シロップは、人間界と魔法界を繋ぐ異空間を抜けると、魔法界へとやって来た。シロップは一同に知らせるように、

「着いたロプ！リコ、何処に向かうロプ？」

「魔法学校に向かって！あの時、カインって人は、校長先生に無理難題を押し付けようとしてたし」

「分かったロプ」

シロップは、リコの言葉に頷き、もうスピードで魔法学校目掛け飛び続けた。ブラックとホワイト、そして、祖先であるキュアマジシャンの故郷、魔法界を訪れたアン王女の三人は、眼下を見下ろし、魔法界の様子を眺め見た。空から見下ろしてみれば、人間同様広大な海が広がり、ポツポツと小さな島が見えた。

「へえ、こうして空から見てみると、私達が住む世界と同じに見えるよね？」

「そうね・・・綺麗な海が広がってるわね」

「エエ、このような綺麗な世界が広がる魔法界を襲うだ何て、カイン・・・許せませんわ」

「ウン」

アン王女の言葉に、ブラックとホワイトも同意したかのように小さく頷いた。疾風のように飛び続けるシロップは、やがて陸地に到達するも、陸地から獣の咆哮のような声が聞こえて来た。

「シロップ、あの声になるから、もっと低く飛んでみて」

ブラックに頼まれたシロップは急降下した。見る見る地上が近付いて来ると、リコは眼下を指さし、

「ここは魔法商店街よ。猫の像が持つランプの中に炎が見えるでしょう？あれは情熱の炎と言われ……」

リコがそう説明しようとした矢先、魔法商店街から人々の悲鳴が聞こえて来た。シロップが更に下降すると、シロップは地上に着地した。一同はシロップから降りると、リコは周囲を見渡した。魔法商店街の人々は、今リコが指さした情熱の炎が祭られている猫の像に慌てて避難しているようだった。リコは顔馴染みのフランソワとグスタフを見付けると、

「フランソワさん、グスタフさん、一体どうしたの？」

「まあ、リコちゃん!?あなたもこっちにいらっしやい!急に獣のような魔物の群れが、魔法商店街に現れて暴れて居るのよ」

「どうもあいづら、魔法学校の方から来てるようだぜ」

「エエエエ!？」

フランソワとグスタフの話を聞き、リコは見る見る顔を青くした。リコの脳裏に、姉リズの姿が思い浮かぶと、リコは慌てて一同に話し掛け、

「わ、私、魔法学校に行ってみる! キュアップ・ラパパ・・・ほうきよ、飛びなさああい!!」

リコは素早く魔法を唱えると、一度目は失敗する事が多いリコの魔法だったが、魔法学校や姉の身を案じて集中していた事が幸いし、リコはほうきに跨り宙に舞い上がった。

「リコちゃん、戻りなさい! 危険よおお!!」

フランソワはリコの身を案じ、戻る様に伝えるも、リコはほうきに跨りその姿を見る見る消した。ブラックは表情を曇らせ、

「魔法学校も気になるけど、こつちに現れたって言う魔物も気になるよね?」

「ええ、行ってみましょう・・・シロップ、アン王女を連れて先に魔法学校に向かつて」  
「私達も、こつちを片付け次第直ぐ魔法学校の場所を聞いて向かうから」

ブラックとホワイトはそう言うのと、人々が逃げて来るのとは逆に、魔法商店街へと駆け出して行った。フランソワとグスタフは、ブラックとホワイトを見て呆然とし、

「あの子達、魔法商店街に行ったけど大丈夫かしら？」

「あの子達、リコちゃんと一緒に来てたよな・・・リコちゃんの知り合いか？」

フランソワとグスタフの会話を耳にしたアン王女は、二人に自分達の事を話し始めた。

「ハイ！わたくし達は、あなた方の言葉でいうナシマホウ界から来ました。あの二人は、伝説の戦士と呼ばれるプリキュアの、キュアブラックとキュアホワイトですわ」

アン王女から、二人がプリキュアだと教えられたフランソワとグスタフは、大いに動揺した。フランソワは、ブラックとホワイトの駆け去った場所を思わず見つめ、

「エエエ!?プリキュア?もしかして、伝説の魔法つかいプリキュアの事おお!」

フランソワも、伝説の魔法つかいプリキュアの事は子供の頃に読んだ本で知って居た。闇に覆われた魔法界を、たった一人で救った伝説の魔法つかいキュアマジシャンの事を・・・

「それはおそらく、わたくしの先祖であるキュアマジシャンの事だと思いますが、あの二人も、同じプリキュアと思って頂いて構いませんわ。あの二人なら大丈夫、きっと魔法商店街に現れた魔物を、退治してくれる筈です。あの二人に、後で魔法学校の場所を教えてください上げて貰えますか?わたくしは、リコさんが心配ですので、このまま魔法学校に向かいます」

アン王女は、二人にお辞儀すると、シロップの背に再び乗り込み、シロップは魔法学校目掛け飛び去った。顔を見合わせたフランソワとグスタフは、互いに頷き合うと、引き返すように魔法商店街に歩き出した。アン王女に頼まれた事もあるが、二人は、ブラックとホワイトが伝説の魔法つかいと呼ばれたプリキュアの再来ならば、直にこの目で二人の姿を目に焼き付けようと思つたからだつた。

そのブラックとホワイトは、魔法商店街で暴れまわる数十匹の豹や狼に似た魔物の群れと遭遇した。魔物の群れは、光の戦士である二人の気配を感じ、威嚇するように唸り声を上げ、ブラックとホワイトを包围して来た。二人の目付きは険しくなり、まるで息を合わせたかのように、二人は魔物の群れ目掛け駆け出した。魔物達も一斉にブラックとホワイト目掛け飛び掛かるも、

「ダダダダダダダ」

ブラックは、飛び掛かつて来る魔物達を、パンチの連打で吹き飛ばし、ホワイトは、一匹の魔物の両足を掴むと、

「ヤアアアアア！」

ホワイトはその場で勢いよく回転し、捕らえた魔物を振り回して同士討ちさせ、捕らえた魔物を投げ飛ばした。勢いが弱まった魔物達に対し、

「ホワイト、魔法学校に向かったリコちゃんが気になるから、一気にいこう」

「分かったわ」

ブラツクの提案にホワイトも同意し、二人は魔物の群れをキツと睨み付けると、手を握りあい叫ぶ！

「ブラツク、サンダー！」

黒い稲妻がブラツク目掛け降り注ぎ、

「ホワイトサンダー！」

白い稲妻がホワイト目掛け降り注いだ。二人の身体が虹色に輝くと、先ずホワイトが言葉を発し、

「プリキュアの、美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

ホワイトの言葉にブラツクが答えた。

「プリキュア！マーブルスクリュー・・・」

ブラツクが右手に、ホワイトが左手に力を込めて前に突き出すと、

「マックスくっ！！」

二人の掛け声と共に、必殺技プリキュア・マーブルスクリューマックスが、魔物達目掛け放たれた。凄まじいエネルギーが、魔物達を一気に飲み込み、魔物達が闇に返った。

「す、凄いわああ」

「あ、ああ、あれが伝説の魔法つかい……プリキュア?」

やって来たフランソワとグスタフは、ブラックとホワイトの戦い方を見て驚き、呆気にとられたものの、直ぐに我に返り二人に話し掛けた。

「ねえ、あなた達、あなた達のお仲間頼まれたわ」

「魔法学校に行きたいんだらう?」

「「エッ!」」

フランソワとグスタフに話し掛けられたブラックとホワイトは、こうして二人から魔法学校に案内して貰える事となった。

その魔法学校は、バルバスの猛威に晒されて居た……

バルバスの発する衝撃波により、校舎が傷付いていた。

校長は、バリアを張り続けるも、疲労は隠す事も出来ず、片膝付いて荒い呼吸を繰り返して居た。

「ハアハアハア……な、何て奴じゃ」

「グウウウウ……しぶとい奴め、ならこれはどうだ!？」

「エッ!? キヤアアアアア!」

「リ、リズくううん!」

バルバスは、口元の口角を上げると、リズに対し不意打ちの衝撃波を発した。リズは直撃こそ免れたものの、地面を転がり倒れ込んだ。リズを心配した校長の集中が途切れた瞬間を狙い、バルバスは再びその場で衝撃波を発し、校長もまた吹き飛ばされた。

「ち、力が……」

校長は、何とか立ち上がるようにするも、足がいう事を聞かなかった。バルバスは勝ち誇り、

「グオオオオオ！ 魔界に歯向かう愚か者め、少しは身の程を知ったか？ まだまだ後悔するのは早いぞ……まずは、貴様の目の前であの娘を……殺す!!」

「や、止めろおおお！」

バルバスの目が殺気を宿し、倒れ込むリズに向けられた。校長は、辛うじて顔を上げるも、リズを救いに向かう事が出来なかった。バルバスは、鋭い爪を光らせ、リズ目掛け駆け出そうとしたその時、

「お姉ちゃああああん！ ど、退いてえええ!!」

「何い!? グウウウウウウ」

突如上空から急降下したリコが、今リズを殺そうとしたバルバスの後頭部にほうき事ぶつかり、その衝撃でバルバスが被って居た兜は吹き飛び、バルバスは、兜が取れた事で茶色いたてがみを靡かせながら、後頭部を抑えてその場に蹲（うづくま）った。リコ



は地面を転がりながらも、何とかリズの側に駆け寄り、何度もリズの身体を揺すった。「お姉ちゃん！お姉ちゃん!!」

リコが必死にリズを揺すった甲斐もあり、リズはゆっくり目を開いた。そのリズの視線には、ナシマホウ界に行ったりリコの姿が映った。

「ウツ・・・エツ!?!リ、リコ?」

「ウン、お姉ちゃん、大丈夫?」

「この子は・・・心配させてえええ」

「ゴメンなさい・・・」

リコは素直にリズに謝り、リズは愛しそうに右手でリコを引き寄せ抱きしめた。後頭部を抑えて居たバルバスは、咆哮を上げながら立ち上がると、

「グウウオオオオオオ!こ、この野郎、不意打ちするとは良い度胸だあ!!」

「け、計算通りだし」

リコは、獅子の怪物ともいえるバルバスを見て怯えながらも、計算通りだと強がった。バルバスは苛立ち、

「計算通りだあ!?!ふざけやがって、貴様もその女と一緒に始末してやる・・・ウオオオオオ!!」

バルバスは怒りの咆哮を上げると、バルバスのたてがみは怒りを表すように揺らめ

き、バルバスは、リコとリズ目掛け衝撃波を放った。その時、

「ロプウウウウウ」

「リコさん、お姉様とこちらに！」

シロツプの背から、アン王女が必死に手をリコとリズに差し出した。

「アン王女！お姉ちゃん、アン王女に捕まって!!」

「エエ」

リコとリズは、アン王女が差し出す手を掴み、アン王女は二人の身体を持ち上げた。上昇するシロツプを見たバルバスは、忌々しそうに舌打ちし、

「チツ、それで逃げたつもりか？」

バルバスは勢いよく駆けだすと、大きく上空目掛け飛び上がった。上空まで逃げれば大丈夫だと油断していたシロツプは、大ジャンプで目の前に飛び上がって来たバルバスの出現に驚いた。バルバスは、両腕をクロスさせると、

「逃がすかよ！シャドウナイツ・・・クロウ!!」

「ロプウウウウウ!!」

バルバスは、交差させた両腕の前に突き出すと、両手の鋭い爪を伸ばし、シロツプの翼を傷めつけた。堪らずシロツプが錐揉み上に急降下して行った。

「「「キヤアアアアアア！」」」

アン王女、リコ、リズは、落下しながら悲鳴を上げ、校長は魔法の杖を振ると、辛うじて噴水の水を利用してスポンジのような状態に変え、四人のダメージを軽減した。アン王女は、足を少し擦り？きながらも、妖精姿に戻って気を失うシロップを、膝の上に置いて介抱した。リコは、リズを庇う様にバルバスを睨んだ。

「逃げられやしねえよ！さあ、覚悟しな!!」

バルバスは、狙った獲物は逃がさないとばかり、リコとリズ目掛け歩を進めた。リコはリズを庇う様に、魔法の杖を懸命に振りまくった。

「キュアアップ・ラパパ！怪物よ、あっちに行きなさい!!」

だが、リコの呪文は何の効果も示さず、バルバスの口角が再び上がった。

「グルルルル・・・何だ、そりや!?!痛くも痒くもねえぞ?」

「キュアアップ・ラパパ！怪物よ、あっちに行きなさい!!」

リコは、バルバスに嘲笑されながらも、必死に魔法の杖を振り続けたが、リコの魔法は一切効果を示さず、バルバスはリコとリズ目掛け、更にゆつくり歩を進めた。校長は這いながら、

「よさぬかああ！リズ君、リコ君、逃げるんじやああ!!」

「リコさん！クツ、エースになれれば・・・」

校長は叫ぶも、リコとリズはバルバスの氣に当てられたかのように、足が竦み逃げ出

す事は出来なかった。アン王女は、エースへの変身アイテムであるラブアイズパレットを、悔しそうに手で握りしめた。リコはそれでも諦めず、何度も魔法の杖を振り続けた。「キュアアップ・ラパパ！怪物よ、あっちに行きなさい！！キュアアップ・ラパパ！怪物よ、あっちに行きなさい！！キュアアップ・ラパパ！怪物よ、あっちに……」

「行きなさいああい！！」

まるでリコの呪文に合わせるように、グスタフが運転する魔法の絨毯で、グスタフとフランソワに送って貰ったブラックとホワイトが、リコの危機を見るや、魔法の絨毯から飛び降り、不意打ちの急降下蹴りでバルバスを蹴り飛ばした。

「グウウオオオオ！な、何だ？」

吹き飛ばされたバルバスは直ぐに起き上がり、険しい表情でブラックとホワイトを睨み、二人も睨み返した。

「ブラック！ホワイト！」

リコとアン王女は、その頼もしい二人の姿に、見る見る表情が明るくなった。フランソワは、魔法の絨毯からリコに手を振り、

「リコちゃん、大丈夫！プリキュアを連れて来たわよ」

「フランソワさん、グスタフさん、ありがとう！」

リコは、上空の魔法の絨毯に居るフランソワとグスタフに両手を振ってお礼を言っ

た。校長は不思議そうに、

「リコ君、彼女達は……一体何者何じや!?」

「校長先生、彼女達はキュアブラックとキュアホワイト……プリキュアよ」

リコは、表情を明るくしながら校長に説明した。すると、校長と話を聞いたリズの表情が変わった。

「な、何じやとおお?!」

「プリキュアですって?」

校長とリズの脳裏に、魔法界に伝わる伝説が頭を過ぎった。嘗て闇に覆われた魔法界を救った、伝説の魔法つかいプリキュアの事を……

「あの者達が……伝説の魔法つかいじやとおお!」

校長は、眩しそうにブラックとホワイトを見た。ブラックとホワイトは、唸るバルバスを指さし、

「魔法界を滅茶滅茶にしようだ何て……許せない!」

「私達が相手よ」

ブラックとホワイトは、重心を落としてバルバスに身構えた。バルバスにも、リコが発した二人がプリキュアだという声を聞き口角を上げた。

「貴様らがプリキュアかあ!?!シーレインやニクスとリリースを退けた実力、この俺が確か

めてやる！」

バルバスは、着こんでいた禍々しい鎧を脱ぎ始めた。鎧はかなりの重さだったようで、その場に投げると地響きが起こり、鎧は地面に減り込んだ。バルバスは、首を左右に振ると、

「さて、久々に本気を出してみるか」

バルバスはそう言うと、先程とは打って変わり、素早い動きで駆け出した。バルバスの動きは素早く、残像が残った。

(速い!?)

反応が遅れたブラックとホワイトに、バルバスの衝撃波が繰り出された。二人は風圧で飛ばされるも、辛うじて態勢を整えながら着地した。更にバルバスは、その勢いのまま両手でブラックとホワイトの顔を驚掴みにして、二人を引き吊り回した。

「キヤアアアア！」

「ブラック！ホワイト！」

二人の身を案じ、アン王女とリコが同時に叫び、ブラックとホワイトは何とか両足をバルバスの腕に絡め、バルバスの手から逃れた。バルバスは両腕を交差させると、

「まだまだ行くぞ！シャドウナイト・・・クロウ!!」

バルバスが両腕を前に突き出すと、バルバスの両手の爪が伸び、ブラックとホワイト

を襲った。二人は素早く、バク転しながら攻撃を躲し、バルバスと距離を取ると、アイコンタクトで領き合った。黒と白の稲妻が二人に落ち、虹色の輝きと共にマーブルスクリューマックスを放つも、バルバスは再び両腕をクロスして、マーブルスクリューマックスを防ぎきった。

「そんなもんかあ、プリキュアアア？ウオオオオオオ!!」

ブラックとホワイトを挑発するように、バルバスが吠えた。

「そ、そんなあ!?ブラックとホワイトの技が?」

「堪えたというのですか?」

リコとアン王女は、マーブルスクリューを堪えたバルバスに驚愕した。だが、ブラックとホワイトは冷静だった。嘗て、メランとの勝負で、マーブルスクリューを破られ動揺した二人は、メランによって大ダメージを受けた事があった。その時の教訓もあり、ブラックとホワイトは冷静に状況を見つめ、ブラックはホワイトに話し掛けた。

「ホワイト、あいつ、流石に魔界の魔神だね?」

「エエ、ルミナスが居ないととなると・・・でも、魔法界にもプリキュアが居たなら、あるいはスパークルブレスが使えるかも?」

ブラックとホワイトは領き合うと、二人は手を繋ぎ、目を瞑った・・・

「私達の目の前に、希望を!」

「私達の手の中に、希望の力をー」

ホワイト、ブラックの言葉を聞き入れたように、金色の光が、ブラックとホワイトの下に集まってくる。ブラックの右手に、ホワイトの左手に、スパークルプレスが装着された。漲ってくる力を現わすように、腕を回しながら構えた、ブラックとホワイトの姿を見たバルバスの表情が変わった。

（な、何だ!?!さつきまでとは別人のような力を、あの二人から感じるだど?）

動揺するバルバスに、先ずブラックが攻撃を仕掛けた。ブラックは、バルバス目掛け勢いよく駆けだすと、バルバスはその速さに思わず目を見張った。

「バ、バカな!?!俺が目で追えんだど?」

一気に飛び出したブラックの速さに反応出来ず、バルバスはブラックの連続パンチの猛攻を受けた。本気を出したバルバスのスピードに対応したのは、まだルーシエスが光臨する前に戦った事があるベレルやケンタウロスのアロン以来だった。

「こ、こいつ、ベレルやアロン並みのスピードを!?!」

「ダダダダダダダダ」

「グウウウウウ!?!」

ブラックの容赦のないパンチの連打が、バルバスに浴びせられる。バルバスの身体がどンドン後方に追いやられて行った。



(こ、この俺が押されてるだお!?)

「コノオオオオ!」

バルバスは強引に右パンチを放つも、ブラックは素早く上半身を下げ、足払いを行い、入れ違いにホワイトが体勢を崩したバルバスの右腕を掴み、

「ヤアアアアアア!」

ホワイトは、激しくバルバスを投げ飛ばした。バルバスは地面に激突しながらも受け身を取って体勢を整える。だが、ブラックとホワイトは追い打ちをかけるように宙に飛び、

「ヤアアアアアア!!」

ブラックとホワイトの呼吸の合った飛び蹴りを受け、バルバスが大きく後方に吹き飛んだ。意識が飛ぶ程の威力を持ったブラックとホワイトの蹴りに、ハッと我に返ったバルバスは、二人が只者ではないと認めるしかなかった。

「ガハアアア! つ、強ええ．．．だがなあああ!!」

バルバスはその場で唾を吐き、気を高めようとしたその時だった。

「バルバス、もういい引け」

突然バルバスが右腕に巻いていた時計のような水晶が輝き、カインの声が聞こえて来た。バルバスは舌打ちし、

「チツ、撤退だあ!?カイン、冗談言うんじゃないやねえ!これからが本番だあ!!」

「バルバスよ、これは、ルーシエス様の命令だ!その者達との決着は、何れ魔界で付けさせてやる」

「魔界でだ?!?どういう意味だ?」

「何れ分かる・・・今は引け!」

「クツ・・・プリキュアアア!貴様らの面覚えたぞおお!!必ず魔界に来やがれ、次に戦う時は・・・必ず貴様らを引き裂いてやる!!」

バルバスはそう言い残し、脱ぎ捨てた鎧と兜を拾って、魔法界を後にした。その瞬間、魔法学校から大歓声が沸き上がった。ブラックとホワイトは大きく息を吐き、リコは大喜びして二人に抱き付いた。

「ブラックウウ!ホワイトオオ!ありがとう!!」

「どう致しまして」

抱き付いたリコに、ブラックとホワイトは目を細めた。リズムも二人に近付くと、妹であるリコを保護してくれた事と、魔法学校を救ってくれた事を感謝した。

（あの二人が、伝説の魔法つかいプリキュアの再来!?キャシーの占いは、彼女達の事じゃったか）

校長は、眩しそうに伝説の再来であるブラックとホワイトを見つめた

## 3、魔法つかいアンジュ

戦闘が終わり、教頭は慌てて校舎から飛び出し、校長の側に駆け寄ると、校長は手で教頭を制した。

「わしは大丈夫じゃ。それより、リズ君を手当てしてやってくれ」

「ハ、ハイ……リズさん、こちらに」

「ハイ！」

教頭に言われ、リズはリコの頭を軽く撫でると、教頭の側に歩いて行った。教頭は、ジロリとリコを見つめると、思わずリコはドキリとし、緊張した面持ちになった。校長から許可を得た事になったものの、リコが勝手にナシマホウ界に行った事実は変わらないのだから……

「リコさん、あなたもいらつしやい……あなたには後でお話があります！」

「ウツ!?ハ、ハイ……」

リコは、ニクスとリリスに誘われるまま、勝手に魔法学校を抜け出した事を怒られると思うと、どうしようといった表情でオドオドした。ブラックは、そんなリコを見て苦笑しながら、

「リコちゃん、後で私とホワイトも経緯を話して上げるからさ」

「本当!？」

「ウン」

ブラックが頷き、リコはホッと胸を撫で下ろした。リコは、三人に手を振り、  
「じゃあ、また後でね」

リコが慌てて教頭とリズの後を追って校舎内に入ると、校長は、ブラックとホワイトの側に近寄り、

「リコ君から聞かせて貰った。そなたらが伝説の魔法つかいプリキュアの後継者だったとは・・・魔法学校を救って貰い、感謝する」

校長は、その場で頭を下げると、ブラックは両手を振って困惑した。キュアマジシャンと同じプリキュアではあるものの、自分達は魔法つかいでは無いのだから・・・

「い、いえ・・・私達、別に魔法つかいって訳じゃ無いんですけど」

「何と!? 違うと申すか?」

驚く校長にホワイトは小さく頷き、

「ハイ、プリキュアには違いありませんけど、私達、魔法は使えませんし・・・」

「それに、キュアマジシャンの後継者なら・・・」

ブラックは、そう言うとアン王女を校長に引き合わせた。アン王女はその場で頭を下げ、

「お初にお目にかかりますわ。わたくしは、トランプ王国王女、マリー・アンジュと申します。魔法界の方には、キュアマジシャンの子孫と言った方が分かりやすいでしょうか？」

「な、何じやと!?そなたは、あの伝説の魔法つかいプリキュア、キュアマジシャンの子孫じゃと?」

「ハイ!よろしければ、キュアマジシャンの事を教えて頂ければと・・・」

アン王女に頼まれた校長は、これも伝説の魔法つかいプリキュアの導きのように感じられて居た。

「折角じゃ、三人に魔法界について話すと致そう」

校長は自ら先頭を歩き、ブラック、ホワイト、アン王女を、校長室へと招き入れた。そこで校長は、魔法界の事を三人に伝えた。三人もリコから話を聞いて居たので、改めて驚くような事実は無かったが、それでも魔法界の実力者である校長の話は興味深かった。校長は、一万年前の魔法界の伝承を語り終えると、

「・・・と言いついて居る。わしも一万年前の事を見た訳では無いからのう・・・じやが、現実にはわしの目の前に、キュアマジシャンの子孫のアン君が居るといふ事は、伝承も事実じゃったといふ事か」

「わたくし達が、地球の神様から聞いた話とも一致しますし、伝承は事実であつたとわた

くしも思います」

「なるほど、大いなる闇……その者が一万年前に魔法界をも巻き込んで、暗躍しておつたという訳か……益々興味が湧いてきおつたわい」

校長は、目を輝かせると、一万年前の事をもっと良く知りたいと思う様になつていた。ブラックとホワイト、アン王女の視線が自分に向けられているのに気づき、校長は慌てて咳払いすると、

「では折角じゃし、魔法樹である杖の木を案内するかのう」

「「お願いします」」

校長に誘われたブラックとホワイト、そしてアン王女は、校長室を出て外に出ると、大きな枝の上を歩きながら上に行き、沢山の木々が生い茂る森の中を歩いた。

「魔法樹から枝木された杖の木は、魔法界の至る所に生えておる。この地に生まれた赤ちゃんが生まれると同時に、杖が実り赤子に魔法の杖が授けられるんじや」

「へえええ」

「神秘的ですわねえ？」

「これも、マザーラパーパの導きなのかなあ？」

「かも知れないわね」

アン王女、そしてブラックとホワイトの会話を聞いて居た校長は、聞きなれないマ

ザーラパーパという言葉に敏感に反応した。

「マザーラパーパ!？」

「「い、いえ、何でもありません」」

「??？」

校長の説明を聞き、魔法樹に宿るマザーラパーパの神秘的な力を改めて実感しながら、三人は歩を進めた。そんな四人の目の前に、一際大きな木が映り、一軒の建物が見えて来た。校長は建物の上を見上げ、

「この木は、杖の木の中でも最も古いんじやが、最後に杖を实らせたのは、数百年前じやとも言われておる。もう枯れ果てたのかも知れぬのう・・・」

校長はそう言うと、眩しそうに杖の木を見上げた。釣られるようにブラックとホワイトト、そしてアン王女も見上げた。アン王女は、まるで杖の木に導かれたかのように、ゆっくり歩を進めると、まるで杖の木は、アン王女に反応したかのように、ゆっくり光り輝き始めた。これには校長も、ブラックとホワイトも驚き、

「何と!?!杖の木が?！」

「何か光り出したよ?！」

「アン王女に反応したとでも言うの?！」

（わたくしに!?!）

アン王女は、思わず右手を杖の木に近づけると、まるで杖の木は、アン王女が来る事を待ち侘びて居たかのように、杖の木は実り始めた。校長は思わず唸り、

「ウウウム、どうやら杖の木は、アン君を選んだようじゃのう」

「アン王女を!?!」

(ウウウム・・・これには何か意味があるのじやろうか?)

校長は、杖の木から新たに生まれた魔法の杖が、アン王女の右手に握られた姿を見て、思わず唸った。アン王女は、右手に持った魔法の杖をマジマジと見つめた。先端にはハートマークの中にはアルファベットのAと読めるようなマークが付いて居た。

「リコさんのとは、また形が違っているのですねえ?」

「ウム、魔法の杖は、一人一人形が違うからかう・・・では、校長室に戻ろう」

「ハイ!」

校長室への戻り道、校長は頭の中で有る事を考えて居た。キュアマジシャンの子孫であるアン王女や、伝説の魔法つかいの後継者のブラックとホワイトが、魔法界を訪れた事、アン王女が杖の木から魔法の杖を授かった事、それら一つ一つに何か意味があるのではないかと思つて居た。

(ならば、今のわしに出来る事は・・・)

校長は、密かに心の中である事を決めて居た・・・



校長室に戻る途中、教頭に注意されているリコを見掛けたブラックは、慌てて中に入ると、リコはホツとしたような表情を浮かべた。ブラックは困惑気味に教頭に話し掛け、

「あのう、リコちゃんをあまり怒らないで上げて下さい」

「ブラックー！」

リコの表情が明るくなるも、教頭にジロリと見つめられると、見る見る顔を俯いた。教頭はブラックに視線を向けると首を振り、

「いえ、そうは参りません！リコさんは、我々を散々心配させて・・・」

秩序を重んじる教頭は、リコを憎んで憎まれ口を叩いて居る訳では無い事は、一同にも理解出来た。校長は教頭を宥めるように、

「教頭、その事はわしも許可して居ったと前に伝えておいたじやろう？もうその辺で良いじやろう」

「それはそうですが、他の生徒達に示しが・・・」

「まあ良いではないか、リコ君がプリキユア達を連れて戻って来てくれたから、今こうしてわしらは無事にして居られるんじやしのお」

「それはそうですけど・・・」

「リコ君、君も一緒に来ると良い」

「ハイー！」

教頭の小言から解放されると知り、リコはホツと胸を撫で下ろした。リコは、アン王女の右手に杖が握られているのに気づいた。

「アン王女、その右手の杖は!？」

「ええ、今校長先生に案内された杖の木で、偶然わたくし用の魔法の杖が生まれたとかで」

「エエエ!? アン王女の?」

「ウム! アン君、それなのじゃが、君さへ良ければどうじやろう・・・魔法学校で魔法を習って見る気はないかのう?」

「エツ!? わ、わたくしが魔法を?」

「ウム。杖の木がアン君を選んだ事に、何か意味がある気がわしにはするんじや。もちろん、アン君が望むならばじゃが・・・どうかのう?」

校長に誘われたアン王女は、内心激しく動揺していた。先祖であるキュアマジシャンと同じように、魔法を扱えるのならば、扱ってみたいというのは、アン王女の嘘偽りない気持ちだった。

（エースに自在になれない今、魔法で皆様方をサポート出来るのなら、それはわたくしに取ってもプラスになる筈）

アン王女は心の中で、魔法を本格的に覚える事を決断した。

「それは、わたくしの方からお願いを致したいぐらいですわ」

「そうか、君ならば基礎を覚えれば、直ぐにでも魔法を覚える事が出来るじやろう」

「よろしくお願い致しますわ」

アン王女は、その場で校長に深々と頭を下げた。ブラックとホワイトも、リコも、急な成り行きに大いに驚いたものの、三人共アン王女の決断を尊重し、祝福しようと思つて居た。

「何か凄いねえ」

「エエ、アン王女に魔法の才能が有った何てね」

「私も負けてられないなあ」

リコは、魔法の杖をギュツと力強く握つた。アン王女は、ブラックとホワイトに右手を差し出すと、

「ブラック、ホワイト、ソードや他の皆様に、よろしくお伝えください」

「エエ、みんなには私達から伝えます」

「魔法の修行、頑張ってくださいね」

「ハイ！」

互いに笑みを浮かべた三人、ブラックとホワイトは、外で休息して居たシロップの背

に乗り込むと、

「それじゃあ、アン王女、リコちゃん、またね！」

「リコちゃん、また機会があったら遊びに来てね」

「ハイ！エレンさんや、他のプリキュアのみんなにもよろしく伝えて下さい」

魔法学校を飛び去って行くシロップの背を、アン王女とリコは見えなくなるまで手を振り続けた。校長も、その姿を校長室の窓から無言で見送り、ブラックとホワイトは、シロップの背に乗って人間界を目指した。だがその人間界では、ラブ達が住む四つ葉町に、危機が迫ろうとして居た……

第二百二十六話：魔法界を救え

完

## 第二百二十七話：四つ葉町の危機

## 1、復活のシーレイン

魔界・・・

シーレインの事を気に掛け、キュアビートは、ハミイ、ピーちゃん、ソリー、ラリーと共に、ニクスとリリスに連れられ魔界へとやって来た。モグロスやベレルの手助けもあり、無事にシーレインと再会する事が出来たビートであったが、アモンに裏切られたと感じたシーレインの心は深く傷つき、心を閉ざしてしまった。そんなシーレインを救うべく、ビートはハミイの協力を仰ぎ、歌の力でシーレインの心に接触を試みて居た：「まだ何も変化が見られないわね」

「エエ・・・」

リリスに聞かれたニクスも、今はただ黙ってビートの力に賭ける以外は無かった。薄暗い室内に、何者かの気配を感じたニクスとリリスは、瞬時に表情を険しくすると、ゆっくり階段近くへと距離を詰めた。地下牢へと降りて来る何者かの気配を探る二人は、一段一段ゆっくり降りて来る足音に、二人の緊張がピークに達しようとしたその時、「ハハハ、ニクス、リリス、それで気配を消したつもりか？安心せい」

「その声!?! ベレル様!」

ニクスとリリスは、聞き覚えのある声に思わず顔を見合わせ、ニクスは確認するように声を掛けた。ゆっくり地下牢に降りて来たベレルを見て、ニクスとリリスはホツと安堵した。ベレルは二人に近付きながら頷き、

「ウム、モグロスに貴公達と合流する方が得策だと諭されてなあ……で、シーレイン殿の様子はどうか?」

「そ、それが……」

思わず妙な顔で俯いたニクスとリリスを見て、ベレルにもシーレインの容態は思わしくない事は分かった。ベレルは薄暗い周囲を見渡すと、ニクスとリリスと共に、先にシーレインの下に向かった。ビートの姿が見当たらず、思わず首を傾げた。

「先程のプリキュアの姿が見えぬようだが?」

ベレルは二人にビートの事を問うと、二人は背後の薄暗い闇を見つめた。ベレルも二人に釣られるように闇を凝視すると、ニクスとリリスがベレルに説明を始めた。

「ビートは、シーレイン様の心に直接シンクロし……」

「シーレイン様の心を連れ戻すと言って、向こうで……」

「何!?!」

ニクスとリリスに促され、ベレルはシーレインが捕らわれて居た檻へと近づいた。ニ

クスとリリースが言う様に、そこには精気を感じさせず憔悴しきったシーレインが、檻にもたれ掛る様にグツタリし、その傍でビートとハミイも眠って居るかの様にシーレインにもたれ掛かつて居た。ピーちゃんは、そんな三人を心配そうに見つめて居た。ベルは思わず唸り、

「ウウウウム、あのシーレイン殿がこれ程憔悴しておつたとは……」

「はい……お勞しい事です」

ニクスは改めて沈痛な表情を浮かべながら俯いた……

シーレインの心は、深い闇に堕ちて居た……

精神体の彼女は、その美しき身体に一切の衣装も身に着けず、ただその心には虚無感があった。考える事も放棄した彼女だったが、そんな彼女の心に歌が聞こえて来た。

(……歌?!)

シーレインは、歌声に導かれるように思考が再び動き出した。それは何時以来なのか彼女にも分からないが、シーレインの思考は確かに働いていた。

(……この歌声は、何処かで聞いた事があるわ……)

シーレインの心に直接響いて来るような歌声に、シーレインはこの歌を歌う人物の記憶がハッキリと浮かんで来た。

(この歌声は……セイレーン!?)

ビートの顔が浮かんだ瞬間、シーレーンの心によりハッキリとビートの歌声が聞こえた。だが、疑問も浮かんで来た。何故人間界に居る筈のビートの歌声が聞こえて来たのか、

(これは、私の幻聴なの!?)

「シーレーン、聞こえる!?!私よ、キュアビートよ!」

(いえ、違うわ!やはりセイレーン)

なぜ人間界に居る筈のビートの声が、自分に聞こえて来たのかシーレーンは疑問を持った。だが、直ぐに人間界で親交があったプリキュア達の中でも、特に名前の似て居るビートに親近感が湧いていたシーレーンは、ビートに一目会いたいと思った自分が、無意識に作り出した幻聴ではないかと思うと、自らの行為を自嘲するかのように笑みが浮かべた。

(ルーシエス様選ばれた十二の魔神、その中でも四神に選ばれた私に、こんな女々しい所があつた何てね……)

シーレーンは自分の愚かさに嫌になろうとしたその時、

(ラララ、ラララララア)

(エツ!?!ち、違うわ!確かにセイレーンの歌声が……ウウン、セイレーンだけじゃない、



あの時の猫ちゃんの歌声もするわ)

シーレインは思わず目を開くと、暗闇の中をビートが、衣服を身に付けぬ健康的な裸体のビートが、ハミイを肩に乗せてゆつくりとシーレインの下に降りて来た。

「シーレイン……やつとあなたの心に届いたわ。ニクスやリリス、それにベレルも心配して居るよ、私達と一緒にみんなの下に戻ろう」

ビートはそうシーレインに話し掛けると、ハミイと共に微笑みながら、ゆつくりシーレインに右手を差し出した。シーレインは呆然とビートの顔を見つめながら、

「ニクスだけじゃなくベレルやリリスも？」

「ウン！それに、アモンって人がおかしくなったのは、カインの怪しげな技に掛かったからなの」

「エッ?!アモンがおかしくなったのはカインのせい？」

シーレインは、ハツとした表情でビートを見つめた。あの時のシーレインは、アモンがシーレインを処刑する事に賛成した事で、普段の冷静な判断が出来なかったが、思い返してみれば、あの時のアモンはシーレインの心の呼び掛けにも応じて居なかった事を見て、どこかおかしいと思ひ返された。ビートは更に言葉を続け、

「ウン、私とニクスとリリスも、カインの怪しげな術に掛かりそうだったんだけど、一度はピーちゃんに、二度目はモグロスって言う人とベレルに救われたの」

「モグロス卿があなた達に!？」

シーレインは、ベレルは兎も角、モグロスまでがビートに力を貸してくれるとは思っても見なかった。魔王ルーシエスにも、竜王バハムートにも与さず、我が道を歩むモグロスが動いた事は、事態は急速に動き始めた事を知った。シーレインは、ビートの右手を握り返し、ビートとハミイを見て微笑むと、

「セイレイン、それに猫ちゃん、ありがとう・・・あなた達のお陰で、私は再びカインとアベルに立ち向かう勇気を貰ったわ。行きましょう!」

「ウン!戻ろう」

ビートはシーレインに力強く頷き返し、ビートとハミイ、そしてシーレインの精神体は、ゆっくり闇の中を上って行った。

そんな三人の肉体の周りを、ニクスとリリス、そしてベレルとピーちゃんは、心配そうに三人を見守って居た。ピーちゃんは何かに気付くと、三人に知らせるように一鳴きした。先ずビートとハミイの身体がピクピク動き、そのすぐ後にシーレインの目がゆっくり開かれた。

「シーレイン様!」

「シーレイン殿!」

三人は、目を覚ましたシーレインを見て嬉しそうに顔を近づけた。シーレインはニツ

コリ三人に微笑むと、

「ニクス、リリス、そしてベレル……心配をさせましたね。私はもう大丈夫」

「シーレイン様！」

ニクスとリリスは嬉しそうにシーレインの身体を抱き起した。ベレルはそんな三人を見て何度も頷いた。

「ウ、ウ……」

ビートとハミイもようやく目を覚ますと、ピーちゃんは嬉しそうに一声鳴き、気付いたハミイは、ピーちゃんの両羽を掴んで一緒に踊り合った。ベレルはビートに声を掛け、

「おお、気付いたか」

「キヤアアアアアア！」

ビートは、目を開けた瞬間に飛び込んで来たベレルを見て悲鳴を上げ、そのまままた気を失った。ベレルは呆れたように唸り、

「ウ……このプリキュアは、相変わらず怖がりなようだわい」

ベレルの脳裏に、プリキュア合宿での出来事が思い出されて居た。自分の姿を見て逃げ回るプリキュア達の中に、ビートが居たのを思い出して居た。シーレイン、そしてニクスとリリスは、そんなベレルを見てクスリと微笑んだ。

## 2、サイアークの謎

ブルーが暮らす鏡に覆われた部屋の中に、人間界に現れた魔界の者達を撃退したプリキュア達が次々と戻って来た。ブラックとホワイトを除いた一同が戻り終えると、ブルーは一同に深々と頭を下げた。

「皆、ご苦勞様。君達の活躍で、各地に現れた魔物達は撃退されたよ」

ブルーの報告を聞き、プリキュア達は顔を見合わせてホッと安堵した表情を浮かべた。大貝町、ぴかりが丘、いちご山、夢ヶ浜、川越町、津成木町、それぞれに現れた魔物達を撃退出来た事を喜び合った。戦いが終われば、彼女達も年頃の少女達で、直ぐにガールズトークへとなっていった。ドリームは、相田マナに貰ったももまんが入った袋を取り出すと、

「ねえ、世界絵本博覧会で会ったマナちゃんって覚えてる?」

「ああ、響と奏に説教してた子だよねえ?」

マリンはメロディとリズムをからかうように、ニヤニヤして二人を見ながら話すと、メロディとリズムは困惑顔を浮かべた。ドリームはマリんに頷くと、

「そうそう、そのマナちゃんから、私達ももまんって言うの貰ったんだけど食べる人居る?」

「ハイハイ！食べるううう！！」

そう言つて真つ先に右手を上げたのはメロデイとマーチだった。リズムとビューティは苦笑し、他のメンバーはクスリと笑つた。マーチは左手を開くと、そこにはゆうこに貰つたハニーキャンデイがあつた。

「あたし達はぴかりが丘に行つただけど、そこであつた女の子にハニーキャンデイつていうのを貰つただけど・・・一個だけだつたよ」

マーチはそう言つと、恨めしそうにムーンライトを見つめ、ムーンライトは思わず溜息を付き、ビューティは思わず自分の事のようにムーンライトに頭を下げ、ムーンライトは思わず苦笑した。メロデイは何かを思い出したようにハシヤギ、

「アア！そのキャンデイ、世界絵本博覧会で私とリズムが女の子に貰つたやつだ。あのキャンデイ美味しかったよねえ？」

「確かに美味しかったわね」

リズムもそれは認めてメロデイに同意して頷いた。メロデイが羨まし気な視線を、マーチの掌に乗つたハニーキャンデイにしていると、リズムは呆れたように、

「メロデイは、いちご山で出会つた妖精達と、私達が作つたケーキ食べたでしょう？」

「エエエ!?あれだけじゃ足りないよ」

メロデイがお腹を押さえながら腹ペコをアピールすると、

「「メロディの食いしん坊!」」

「アハハハハ」

ブルーム、ルージュ、ピーチ、マリンの四人が、そんなメロディをからかい、メロディは右手で髪の毛をかきながら照れ笑いを浮かべた。そんな和やかな雰囲気とは違い、ベリーは一人真顔だった。パインはそんなベリーに気付き、

「ベリー、浮かない顔してどうかしたの?」

「エエ。ちよつと気になる事があつて・・・神様、あたしとマリンは、神様に言われた通りブルースカイ王国に行つたんですけど、そこであたし達は、サイアークと叫ぶ魔物とは明らかに違う者と戦つたんですけど、何か心当たりはありますか?」

「そうそう、危うくヒメが大怪我するところだったよ」

ベリーがブルーに問うと、マリンも頷きながらヒメルダも大怪我をするところだったと伝えると、和やかな雰囲気も一変し、プリキュア達が険しい表情を浮かべた。一同の視線がブルーへと注がれる中、ブルーの顔色は、まるでサイアークの事を知って居ると表すかのように変わっていった。

「サイアークだつて!?!まさか、千年前の・・・」

「神様!?!」

「どうかなされたんですか?」

ブルーの顔色が変わった事で、表情を強張らせたルミナスとムーンライトは、訝みながら問うと、ブルーはプリキュア達を一人づつ見渡し、ベリーで視線を止めると、

「ベリー、マリリン、君達がサイアークと呼んだ者と、僕とミラージュは戦った事がある」  
「神様と千年前のプリキュアが!?!」

ベリーとマリリンは、自分達が戦ったサイアークと千年前にもブルーと当時のプリキュア、キュアミラージュが戦った事があると聞き、驚きの声を上げた。サイアークがブルースカイ王国に現れた事で、ベリーはブルーに何か知って居るか尋ねただけだったが、千年前にも表れて戦った事があるとは思っても見なかった。ブルーの話聞き、一同の脳裏にある者の名が浮かんだ。

『まさか・・・大いなる闇!?!』

プリキュア達がそう思うのも当然かもしれない。ブルーは千年前、キュアミラージュと共に大いなる闇と戦って居たのだから・・・

「そうかも知れないし、違うのかもしれない・・・」

『エッ!?!』

ブルーからの答えは曖昧なもので、プリキュア達は思わず困惑の声を発した。ブルーは一同を見て申し訳なさそうにしながら、

「すまない・・・確かに僕とミラージュは、千年前に大いなる闇と戦って居た。でも、そ

れに呼応するかのようになり、サイアークと声を発する怪物が現れたんだ。ただ、大いなる闇の軍勢とサイアークとでは何かが違うって聞いた……」

ブルーは千年前の記憶を思い出そうとするも、何が違っていたのかまでは分からなかった。ただサイアークは、人々を鏡の中に閉じ込め生み出されたようだった。

(サイアークの出現は、何かの前触れなのだろうか?)

ブルーの心の中に、新たなる不安が沸き起こった……

メロディは、そんなブルーを元氣付けるかのように、

「まあ、ここにあれこれ考えてもしようがないよ」

「そうそう、もしもの時は私達プリキュアが居るしね」

「そうね……でも一応、新たなる敵かも知れないって事は、みんなも頭の中に入れて置いて」

メロディの言葉にドリームも同意し、ベリーも少し不安な気持ちが晴れた気がしたが、一同にも警戒するように伝え、一同も領いた。ムーンライトは一同を見渡し、

「後は、シロップに乗って魔法界に向かったブラックとホワイト、アン王女が戻って来れば……」

そうムーンライトが話していた時、再びブルーの顔色が変わり、ムーンライトは思わず話を止めた。ブルーは険しい表情でプリキュア達を見つめると、



「みんな、また魔界の者達が現れたようだ。しかも。一つの町にかなりの数が集まって居る」

『エエエ!?!』

プリキュア達は、一つの町にかなりの数の魔物が集まって居ると聞き、思わず驚きの声を発した。ブルーは、ピーチ、ベリー、パイン、パッションを順番に見つめると、

「魔界の者達が現れたのは、ピーチ、ベリー、パイン、パッション・・・君達が住む四つ葉町、クローバータウンストリートだ」

「二二エツ!? クローバータウンストリート?」二二

ブルーの話を聞き、ピーチ、ベリー、パイン、パッションの顔が凍り付いた。自分達が住む四つ葉町クローバータウンストリートに、あろう事か魔物の軍勢が現れたのだから、ムーンライトは、素早くパッションに指示を出し、

「パッション、私達を四つ葉町に送って頂戴。みんな、良いわね?」

『ハイ!』

ムーンライトの言葉に、他のプリキュア達は迷う事無く同意した。ピーチは、仲間達の思いやりに目に涙を浮かべ、

「みんな・・・ありがとう!」

ピーチは涙を拭って一同に感謝を述べ、ベリー、パイン、パッションがピーチの後ろ

で頭を下げた。一同も無言で頷き返した。ブルーはプリキュア達に声を掛けると、  
「みんな、魔物はかなりの数だ、気を付けて！ブラックとホワイトが戻って来たら、直ぐに僕から二人に知らせて置くよ」

「お願いします」

ブルーの言葉にルミナスが返事を返し、一同が頷いた。一同はパッションの側に移動し、パッションはアカルンを呼び出した。ムーンライトが代表してブルーに声を掛け、  
「神様、では行つて来ます」

「ウン、みんな疲れているのにすまない」

ブルーは、今の非力な自分の力では、大勢の魔界の者を止めるのは不可能で、プリキュアに頼る事しか出来ない自分を恥じながら、プリキュア達に頭を下げた。

「みんな居ますし、お茶の子さいさいです」

「そう言う事、そんじゃあ神様、ちよつくら行つて来るから」

プロツサムとマリンは、右手の親指を上げて同じような表情でドヤ顔を浮かべ、ポプリを抱いたサンシャインが苦笑した。パッションは、アカルンの力を使い、プリキュア達と、シフォン、タルト、シプレ、コフレ、ポプリ、フェアリートーン達、キャンディ、グルルとエンエンの身体が赤く発光し、この場から消え去った。ブルーは愁いの表情を崩さず、

(何か嫌な予感がする．．．みんな、どうか無事で居てくれ)

ブルーは、プリキユア達の無事を祈るしかなかった．．．

### 3、四つ葉町を守れ

四つ葉町、クローバータウンストリート．．．

ピーチ、ベリー、パイン、パッションが住むクローバータウンストリートは今、ブラッド率いる、動物、植物、昆虫、アンデット、闇に堕ちた精霊達が襲っていた。ほとんどの人々は魔物を恐れ、家の中でこの恐怖が去るのを祈るしかなかった。警察も、魔物相手では歯が立たず、魔物の群れが我が物顔でクローバータウンストリートを恐怖の渦に沈めていった。その光景を、知念大輔は軒先の影から隠れ見て、拳を震わせながら見ている。

「畜生、あいつら好き勝手しやがって」

「大輔、見つかるわよ、ちゃんと隠れてなさい。仕方が無いわ、ラブちゃん達は、他の町に現れた魔物達を退治に向かって留守のようだし．．．」

そう言つて大輔を窘めたのは、大輔の姉ミユキだった。ミユキは、ラブ、美希、祈里、せつなにダンスを教え、ダンスの楽しさを彼女達に教えた恩人でもあった。現在、彼女がナナ、レイカと組んでいた三人組のダンスユニットトリニティは、メンバーだったレ

イカが家庭の事情で脱退した影響もあり、ミユキは充電期間として仕事を休業していた。

「けどよ、姉ちゃん・・・アツ!？」

大輔が姉に反論しようとしたその時、大輔とミユキの視界に、一匹の魔物が泣き喚く小さな子供に気付くと、まるで獲物を見付けて喜ぶかのように這いずり出した。その頭部は猫、身体は植物という不気味さに、幼子は益々恐怖で泣き続けた。幼子の母親は、慌てて子供を抱きかかえたものの、不気味な魔物のおぞましき姿が、自分達に迫りくる恐怖で足が震えてその場に固まってしまった。大輔とミユキは思わず顔色を変え、

「不味いぞ、何とかしなきゃ・・・」

大輔はそう言いながら素早く周囲を見渡した。そんな大輔の視界に掃除で使うモップが立ってかけてあるのに気づいた。大輔は素早くモップを立てかけてある場所に移動するとモップを手に掴むや、怪物目掛け駆け出した。

「大輔、止しなさい! ラブちゃん達が戻ってくるまで・・・」

「待つてられるかよおおお!」

ミユキが大輔の身を案じて叫ぶ中、大輔は怪物目掛け一心不乱に近づき、猫と植物が合わさった魔物目掛け思いっきりモップを叩きつけた。

「この化け物! 俺が相手になってやる・・・来い!」

大輔も魔物が怖くない筈は無かった。だが、母子を何としても守りたいという大輔の正義感がそんな恐れを吹き飛ばしていた。大輔はモツプをがむしやらに振り回して魔物の注意を引き付けると、魔物は邪魔をするなどばかり、その意識を大輔に集中させた。大輔はジリジリ魔物を引き寄せるように後ずさりし、魔物は大輔目掛けにじり寄り、母子から距離が離れた。大輔は目でミユキに目で合図を送ると、ミユキはハツとして大輔の真意に気付き、直ぐ母子に駆け寄った。

「大丈夫ですか!?今の内に早く」

「は、はい」

我に返った母親は、子供を愛しそうに抱きながら慌てて駆け去った。ミユキは大輔に知らせるように、

「大輔、あなたも早く逃げなさい!」

「分かっている!こいつはオマケだ!!」

大輔は、力を込めてモツプを魔物に叩き付けると、モツプは真つ二つに折れた。大輔は、残ったモツプの端を魔物に投げつけて逃げようと試みるも、魔物は葛を伸ばして大輔の足を絡め取った。

「ウワアア!し、しまった!?!」

大輔は何とか逃れようと試みるも、足に絡まった葛を取る事は出来なかった。

「ち、畜生、この化け物、放しやがれ！」

大輔は更に暴れて逃れようとするも、魔物は大輔を捕らえた蔦を引き寄せ、勝ち誇ったかのように蔦を頭上に持ち上げて、大輔の身体を逆さ吊りにした。

「大輔ええええ！」

ミユキは大輔の身を案じて叫んだその時、クローバーストリートの一画が赤く発光した。

「着いたー！」

ピーチは、素早く周囲を見渡すと、ピーチの視界に逆さ吊りにされる大輔の姿が飛び込んで来た。ピーチは顔を顰め、

「あれは、大輔ー！」

大輔の危機を知ったピーチは、大輔目掛け走り出した。だが、プリキュアが現れた事を知った大蝙蝠の魔物のブラッドは、上空から急降下してピーチの前に立ち塞がった。リーダーであるブラッドの後を追って来たように魔物達が集結し、ピーチの行く手を塞いだ。

「ケケケケ、来たなあプリキュア」

「退いて！そこを退いて」

ピーチは、険しい表情でジエスチャー交じりにブラッドに退くように告げるも、それ

は返って頭の回転が速いブラッドに、捕らえた大輔がピーチの知り合いだと気づかせるだけだった。ブラッドは不気味な笑みを浮かべると、

「ケケケケ、どうやらキャットトリーフが捕らえたあいつは、プリキュア！お前の知り合いのようだなあ？先ずあいつから血祭りにあげてやる」

「そ、そんな事させない」

「ケケケケ、なら止めてみる！キャットトリーフ、捕らえたそいつを血祭りにしろ!!」

ブラッドは、動揺するピーチを嘲笑う様に非情なる命令をキャットトリーフに告げた。

更に邪魔をさせないとばかり、魔物の群れがピーチを包囲しようと動き出したその時、

『ハアアアアア!』

雄叫びを上げながら、ピーチに群がろうとする魔物の群れを、プリキュア達が迎え撃った。

「ピーチの知り合いに手を出す何て・・・あたし達がゆるさない！イーグレット、ブライト、ウインディ、行くよ!!」

「[[[エエ]]]」

ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディが・・・

「みんな、ピーチの援護をするよ!」

「[[[[[YES!]]]]」

ドリーム達プリキュア5とローズが・・・

「私達も行くこう」

「「YES!」」

ダークプリキュア5が・・・

「ピーチ、ベリー、パイン、パッション、あなた達は彼を助け出す事に集中なさい。魔物は私達が・・・ブロッサム、マリン、サンシャイン、行くわよ!」

「「ハイ!」」

ムーンライト、ブロッサム、マリン、サンシャインが・・・

「リズム、ミューズ、ビートは居ないけど、私達もピーチの援護をするよ!」

「OK、メロディ!」

メロディ、リズム、ミューズが・・・

「私達プリキュアが来た以上、これ以上勝手な真似はさせないわ」

凛々しい表情をしたソードが・・・

「ピーチ、ベリー、パイン、パッション、あなた達の邪魔はさせません。サニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコー、キャンディ、一気に行くよ!」

「「「うん!」」」

「分かったクル」



スマイルプリキュアの六人は、プリンセスキャンドルを召還すると、プリンセスフォームへと変化した。

「みんなの力を合わせるクルウウ！」

キャンディがロイヤルクロックの上に付いているボタンをカチリと押した。針は動き、数字の8に合わさると、ロイヤルクロックからフェニックスが舞い上がり、エコーの身体を包み込み上昇させた。エコーはプリンセスキャンドルをスマイルプリキュアに向けて構えると、エコーの背後に、巨大なフェニックスのシルエットが浮かんだ。

「集え！五つの希望の光!!」

「[[[[羽ばたけ、光輝く未来へ！]]]]」

「[[[[プリキュア！ロイヤルレインボー・バクスタ!!!]]]]」

フェニックスの口から、強烈な虹のエネルギー波が、ピーチ達の行く手を塞ぐ魔物の群れ目掛け放たれた。フェニックスの咆哮と共に、魔物の群れが虹の光に飲み込まれて行った。ブラッドは慌てて空中に逃れ、魔物達の陣形が崩れた。

「ピーチ、ベリー、パイン、パッション、今です！」

「ハッピー、みんな、ありがとう！行くよ、ベリー、パイン、パッション」

「[[[[OK！]]]]」

ハッピーの合図と共に、フレッシュプリキュアの四人が駆け出した。ピーチは、途中

でミュキと視線が合うと、ミュキは声を張り上げ、

「ラブちゃん、大輔をお願いします！」

「ハイ！必ず大輔を助けます。ルミナス！ミュキさんを守って上げて」

ピーチはミュキに力強く頷き、ミュキの事をルミナスに託した。ルミナスは頷いてミュキの側にやって来ると、

「分かりました。心配でしょうが、ここはピーチ達に任せて下さい」

「ハ、ハイ」

ミュキは、クローバーストリートの危機に駆け付けてくれたプリキュア達の数に驚いていた。

（ラブちゃん達・・・今はあの時以上に頼もしい仲間達が出来たのね）

ミュキの脳裏に、ラビリンズと戦って居た頃のピーチ達の姿が、走馬灯のように頭の中で流れた。ルミナスは四方を見張り、

「私の側から離れないで下さい」

「ハ、ハイ」

ルミナスに話し掛けられた事で、ミュキはハッと我に返った。

（このままじゃ不味いわね）

パッションは、大輔を捕らえたキャットトリーフが、大輔を振り回している姿を見て、何

時建物にぶつかると、地面に叩き付けられるか分からぬ現状に、険しい表情を浮かべた。  
「大輔、今助けに行くから、もうちよつと我慢してえ！」

ピーチが全速力で駆けながら大輔に声を掛けると、パッションはピーチの名を呼んだ。

「ピーチ！」

「パッション!？」

ピーチは、パッションの顔を見ると直ぐにパッションの考えが伝わり頷いた。パッションはアカルンを呼び出すと同時に、ピーチの身体が赤く発光して消えたかと思うと、瞬時に大輔の側の空中に現れ、大輔を捕らえた鳶の上に飛び降りた。

「コノオオオ！大輔を放せえええ!!」

ピーチは、大輔を捕らえた鳶に何度もパンチとチョップを繰り返して、最後に渾身の力を込めた拳を振り下ろした。キャットリーフはその痛みに堪らず大輔を放り投げた。

「大輔ええええ！」

ピーチはその場で大ジャンプすると、大輔を受け止めた。大輔は辛そうな表情をしながらも、ピーチを見て憎まれ口を叩き、

「たく……遅えんだよ」

「ウン……ゴメン」

「ありがとな・・・ラブ」

「ウン！」

大輔は、照れくさそうにしながらピーチに礼を述べると、ピーチは満面の笑みで頷き、大輔はピーチの美しさに思わず見とれて、慌てて視線を外した。ベリー、パイン、パッションの三人は、キャットトリーフが大輔を抱いた無防備なピーチを攻撃しない様に、連携攻撃でキャットトリーフの注意を自分達に向けさせた。ピーチは、ルミナスとミュキの側に降り立つと、

「ルミナス、大輔の事もお願い。隙を見て二人を安全な所に避難させてあげて」  
「分かりました。さあ、こちらに」

ルミナスが大輔とミュキを避難させようと誘導しようとする、大輔はピーチの名を呼び、

「ラブ！」

大輔は右手の親指を上げると、ピーチも無言で同じポーズを取り、大輔はミュキと共にその場を離れた。ピーチはそれを見届けると、キャットトリーフと戦うベリー、パイン、パッションに合流した。ベリーはピーチをからかう様に、

「王子様との感動の再会は終わったかしら？」

「お、王子様!?!ちっがう!そんな何じゃなく!!」

ピーチは、ベリーにからかわれて頬を大きく膨らませると、パインとパッションが両側からピーチの頬を人差し指で押し、

「せつかくの美人が台無しだよ?」

「大輔くんに笑われるわよ?」

「もう!そんな何じや無いってばあ……いいから行くよ!」

ピーチはそう言うと、素早くピーチロッドを取り出した。ベリーはベリーソード、パインはパインフルート、パッションはパッションハープを直ぐに取り出す辺り、四人の意思疎通の凄さが表れていた。キャットトリーの正面に立った四人は、

「悪いの、悪いの、飛んでいけ!」

「プリキュア!ラブサンシャイン……」

「プリキュア!エスポワールシャワー……」

「プリキュア!ヒーリングプレア……」

「フレ〜ッッシュ!!!」

「吹き荒れよ!幸せの嵐!プリキュア!ハピネス・ハリケーン!!」

「ハアアアアア!!」

ピーチ、ベリー、パイン、パッション四人は、ロッド、ソード、フルート、ハープをクルクル回転させ、技の威力を上げると、四人の合体技を受けたキャットトリーは、為

すすべなく浄化された。他のプリキュア達も、ブルームとイーグレットがスパイラルハートを、ブライトウインデイがスパイラルスターを、プリキュア5がそれぞれの技を合わせ、ローズがミルキイローズブリザードを、ブロッサムとマリリン、サンシャインとムーンライトのフォルテツシモが、メロディ、リズム、ミューズのパツシヨナートハーモニーが、ソードのホーリーソードが、それぞれ魔物達を浄化して行った。

「バ、バカな!?あれほどの数を半数以上も倒されただとお?」

ブラッドは、信じられない目の前の光景に呆然とした。プリキュアの実力は聞いては居たが、まさかこれ程とは思ってもみなかった。動揺するブラッドだったが、その時、ブラッドがカインから授けられたアイテムが光り輝いた。

#### 4、・エーテルダークネス

魔界・・・

シーレインも復活し、カインとアベルへの反撃の狼煙は上がった。キュアビートは、シーレイン、ニクスとリリス、そしてベレルと共に、黒き塔を出て再び双児宮に居るだろうカインとアベルの下へと向かおうとして居た。そのビートの両肩には、ハミイとピーちゃんに乗って居た。シーレインは、双児宮に向かう前に確認するかのようになり、「あなた達の話の話を聞く限り、アモン、オロン、アロンの三人は、完全にカインの術中に嵌っ

たと考えて良いわね」

「はい……残念ながら」

「でも、アロンやオロンだけなら私とリリスで食い止められるけど、アモン様までとなると正直厳しいわね」

ニクスのお話を引き継ぎ、リリスはアモンとも戦う事になるかも知れない事に一抹の不安を感じて居た。ニクスも頷き、

「そうね……」

「それに、ミノタウロスやバルバスがどう動くかも気になるわね」

リリスの言葉に、腕組みしていたベレルも頷いた。

「ウム、戦う事が生き甲斐のバルバスの事だ、嬉々として拙者達に戦いを仕掛けてくるであらう……。だが、分からぬのはミノタウロスだ。奴も強者と戦う事は昔から好きではあったが、正直この数十年、拙者はミノタウロスに違和感を覚えて居った」

ベレルのお話を聞いて居たシーレインは表情を曇らせた。自分が知る限り、ミノタウロスに特に違和感を感じた事は無かった。

「ベレル、ミノタウロスに違和感があるとはどういう事でしょう?」

「ハイ、奴もアロンと同じ半獣人ではありませんが、以前の奴は、奴なりの誇りを持って居りました。昔の話ですが、拙者はミノタウロスと手合わせした事がござった。拙者との

試合中、ミノタウロスの奴は、突然戦いを放棄した事がござつてなあ……無言でその場を去るミノタウロスの後姿を、拙者は呆然と眺めて居ると、奴が居た場所の近くの草むらの中に、一人の小さき精霊が気を失つてござつた。拙者達との戦いに巻き込まれたのでござろう」

ベレルはそう言うと、一旦話すのを止めた。その時の事を思い出そうとするかのように、少ししてベレルは再び話し始め、

「拙者が精霊を保護しようとしたその時、ミノタウロスは戻つて来るや、ミノタウロスが大事にして居る金棒を置き、拙者に背を向けて気を失つて居る精霊を、無言のまま大きな手に乗せ、何かの雫を精霊に飲ませたのでござつた。すると精霊は直ぐに意識を取り戻し、ミノタウロスに礼を述べ何処かに立ち去りました。それを見つめるミノタウロスの優しい視線を、拙者の心眼は確かに捕らえて居りました。ミノタウロスは、この勝負は何れまたと拙者に告げると立ち去つて行きましたが、拙者にはあの時のミノタウロスの姿が、アモン殿と重なつて見えたのを覚えて居ります」

ベレルは腕組みを取ると首を傾げだし、

「ですが、そのミノタウロスが、数十年前からまるでバルバスのように変わり、拙者は困惑しておつたのでござる」

「それは初耳でした。ミノタウロスにそんな一面が……では、ミノタウロスもカインに



「？」

シーレインは、数十年前からのミノタウロスの変貌も、カインのせいではないかと疑惑を持ちベレルに問うも、ベレルも首を傾げ、

「それは拙者にも何とも、時が経てば性格が変わる事も多々ある故……」

「そうですね……では、それも踏まえて今から双児宮に……」

シーレインがそう話している途中、一同の背後にそびえる黒き塔が、まるでおぞましき咆哮を上げたかのように、突然振動を始めた。

「……これは何!?!」

ビート、ニクスとリリスは、慌てて背後を振り返った。振動を続ける黒き塔の異変に、状況が分からない三人は呆然として居たが、シーレインとベレルは険しい表情を浮かべた。シーレインは黒き塔を鋭い視線で凝視し、

「……これはエーテルダークネス」

「シーレイン殿、ルーシエス様は居城には居られぬのでは無いのですか?」  
「その筈です。おそらく、カインとアベルが勝手に起動させたのでしょうか」

ベレルに問われたシーレインは、カインとアベルの独断で使用しようとしていると告げた。魔界の事を知らないビートがエーテルダークネスの事を知らないのは当然ながら、十二の魔神であるニクスとリリスも、エーテルダークネスについては知らなかった。

「エーテルダークネス!? 私は初めて聞いた名だわ、リリス、知ってる?」

「ウウン、私もそう、今初めて聞いた名よ」

ニクスとリリスは思わず顔を見合わせ、互いに知って居るか問うも、お互い知らない  
と分かり、ニクスはシーレインに問いかけた。

「シーレイン様、ベレル様、エーテルダークネスとは何ですか?」

ニクスに聞かれたものの、シーレインとベレルは険しい表情を崩さなかった。シーレ  
インはゆっくり口を開き二人に話し始めた。

「ニクス、リリス、あなた達二人がエーテルダークネスを知らないのも無理はありません  
ね」

「ウム、本来は十二の魔神の中でも、四神と呼ばれる方々のみに、ルーシエス様は知らせて  
居ったからなあ・・・拙者が何故知って居るかと言えば、ルーシエス様に直に話を聞  
いて居ったからだ」

「あなた達二人も、ベレルは本来私やアモンと同等の地位を与えられる立場だったとい  
う事は聞いた事があるわよね?」

「ハイ」

シーレインに問われると、ニクスとリリスはコクリと頷いた。ベレルは元々魔界の勇  
者と呼ばれ、その武勇は二人もよく知って居た。シーレインは頷き返し、

「本来ルーシエス様は、ベレルを加えた五神を頂点に、十二の魔宮を管理なされようと考えられていたの」

「ハハハハ、肉体を失った拙者にはその資格は無く、身に余る栄誉であつた為固辞したただけでござるよ」

「それは謙遜というものです。ルーシエス様はあなたを信頼しておられましたし、あのカインとアベルですら認めて居たのですから、ですからルーシエス様はあなたにも知らせて居たのでしょうか・・・」

シーレインはそこで言葉をとぎると、再びエーテルダークネスについて語り出した。エーテルダークネスとは、魔界に仇なす古の脅威を黒き塔の地中深く封印し、一定の間溜まった負のエネルギーを、黒き塔の最先端部に溜めて上空に放出し、魔王ルーシエスの力で相殺して居た。カインはそれを利用してしようとしているのだらうと語った。ベレルは頷き、

「シーレイン殿の仰られる通りでござろう・・・が、塔の先端に集めたあのエネルギーを、カインめ、一体何に使おうとしておるのか？」

カインの真意が読めず一同が沈黙すると、リリスはクスリと笑い、

「ウフフ、そう言う事なら、カインを探ってみますわ」

リリスはそう言うと、サキユバスアイでカインの居場所を先ず探った。当然双児宮に

居るものだとばかり思って居たが、カインは巨蟹宮に居た。これにはリリスも驚き、

「エッ!?カインは巨蟹宮に居るわ」

「「エッ!」」

双児宮に向かおうとして居た一同は驚くも、リリスは次に耳を動かし、

「場所さへ分かればこつちのものよ．．．サキュバスイヤー」

リリスは、巨大な耳を巨蟹宮の上空に召還すると、巨蟹宮の内部に聞き耳を立てた。

ニクスは呆気にとられ、

「ねえリリス、あなた、目だけじゃなくて耳も使えたの?」

「エエ、ニクスの事も時々覗たり、盗み聞きして居たわよ」

「エエエ!?全く、あなたは．．．」

ニクスはリリスに呆れかえって居ると、突然リリスの表情が険しくなった。リリス

は、ニクスの鼻に右手の人差し指を乗せると、

「シッ!カインが何か喋ってる」

リリスの忠告を受け一同は静まり返り、リリスの言葉を待った．．．

クローバータウンストリート．．．

ブラッドは、カインの言葉を聞いて思わず呆然として我が耳を疑った。自分自身に聞

き間違いだと暗示を掛けると、

「カ、カイン様、もう一度、もう一度仰って頂けますか？」

「フツ、良いぞ……ブラッドよ、良くぞプリキュア共を四つ葉町に集め足止めしてくれた。礼を言おう……だが、貴様の役目は終わった！プリキュア共々、その町ごとエーテルダークネスを受けて消え去るがいい!!」

カインの非情なる言葉がブラッドに告げられ、ブラッドは呆然とした。カインはあろう事かブラッド率いる魔物達を、プリキュアを誘き寄せ餌として利用して、エーテルダークネスで四つ葉町事消し去ろうとしているのだから、ブラッドはこれまでのカインの為に働いて来た日々が走馬灯のように過ぎると、カインへの怒りが爆発した。

「カイン！貴様俺を、この俺を騙して居たのかああ？今まで散々お前の為に働いて来た俺を、お前は、お前はああ!!」

「クククク、安心しろ……貴様はプリキュアと共に死ねるのだ。無駄死にはないぞ？おっと、逃げようと思ってももう無駄だぞ。その町は既に結解に封じ込めた。入る事は出来ても、逃げ出す事は出来んよ……ククク、ハアハハハハハハ！」

「カイン！カイン！貴様ああああ!!」

突然カインを罵り絶叫を始めるブラッドの姿に、プリキュア達も、魔物達も困惑して居た。魔物達は、このままプリキュアと戦えば良いのか、撤退すべきなのかブラッドか

らの指示を待つて居たのだから、ルージュは困惑気味に、

「何あいつ、突然叫び出して？」

「あたし達の実力目の当たりにしてビビっちゃったんだよ」

「いえ、何か様子が変だわ。油断しない方が良い」

マリンはドヤ顔で胸を張るも、ブライトはブラッドを警戒するように直ぐにマリンを窘めた。ブラッドはゆっくりプリキュア達を見ると、思わずプリキュア達はその表情を見てゾツとした。ブラッドは狂ったように笑い始め、

「ケエケケケケ！プリキュアアア！貴様らはもう終わりだああ!!」

「ハア!?何言ってるのよ?それはあんた達の事でしよう?」

メロディは、不愉快そうにブラッドに抗議するも、ブラッドは狂気の笑いを再び発しながら、

「ケエケケケケ！そうさ、俺達はもう終わりさ……だが、貴様らも、この町事終わりだああ!!上を見ろおお!!」

『エツ!?!』

プリキュア達は、ブラッドの言葉を受け、反射的に上空を見上げた。四つ葉町の空に、何かの自然現象でも起こったかのように、歪みが生じて居た。ブラッドは狂気の笑い声を響かせながら絶叫し、

「ケエケケケケケ！エーテルダークネス！闇の光がこの空に輝く時、この町に破滅の光が降り注ぎ、全てを消滅させるのさあ・・・ケエケケケケケ!!」

『何ですってえ!?!』

ブラッドの絶叫に、プリキュア達は見上げながら大いに動揺して居た・・・

第二百二十七話：四つ葉町の危機

完

## 第二百二十八話：魔王・・・死す!?

### 1、迫る脅威

魔界・・・

キュアビートは、リリスからカインがブラッドに語っていた内容を聞き愕然とした。

「そんなあ、パツシヨン達が住む四つ葉町が?」

「エエ、でもそれだけじゃないわ。カインは配下の者達を捨て石として囮にし、その町に誘き出されたプリキュア達と共に、エーテルダークネスを発射して一気に消し去る気よ」

「そ、そんなああ・・・な、何とかみんなに知らせないと」

ビートは大いに動揺して居た。このままでは、プリキュアの仲間達が、エーテルダークネスを受けて消滅してしまう恐怖が、ビートの心を不安にさせた。何とかプリキュアの仲間達に知らせたいビートだったが、パニックっている影響もあり、ビートに妙案は浮かばなかった。直ぐに四つ葉町に駆け付けて知らせたい思いもあったが、自分は今魔界に居てなす術は無かった。

「どうしたらいいの!?!」



困惑するビートを、ハミイは悲しそうに見つめて居たが、ビートの首に掛かっているペンダントを見るとハツと何かに気付いた。

「セイレーン、神様に貰ったそのペンダントは、使えないのかニヤ？」

「エツ!?そ、そうか!神様は魔界から繋がるか分からないって言っていたけど・・・」

ビートは、ハミイの言葉でブルーに貰った連絡アイテムの事を思い出し、縋る様にペンダントを右手で握りしめて、地球の神ブルーを呼び始めた。

「お願い、神様に繋がってえ・・・神様、聞こえますか?神様、私です。キュアビートです!神様、お願い出て下さい!!」

ビートは祈るような気持ちで、必死にブルーを呼び続けたものの、ブルーに繋がる事は無かった。悲しげな表情のビートを見ていたニクスは、シーレーンにある進言を始めた。

「シーレーン様、私達の力で人間界と魔界を繋ぎ、ビートを仲間達の所に送り届けてあげませんか?」

ニクスの提案ではあったが、シーレーンはゆっくり首を左右に振り、

「ニクス、私も出来るならそうして上げたいのですが、他の場所ならば兎も角、この十二の魔宮は、ルーシエス様を守る為に作られたの、十二の魔宮の内側には、何人をも近づかせない様に結界が張られているのは知って居るわね?ルーシエス様の居城である

この塔より下は、結界によって他空間に繋げる事は出来ないわ」

「そうですか・・・」

一同の視線が、尚も必死にブルーを呼び続けるビートへと注がれた。ベレルは腕組みしながら聞いて居たが、腕組みを解くと、

「シーレイン殿、ここには十二の魔神の内、四人が居ります。シーレイン殿、ニクスとリリス、それに拙者の四人がそのプリキュアの周囲を取り囲めば、人間界と交信する程度ならば出来るのではないかと思われませんが如何でしょう？」

「なるほど・・・それは試してみる価値はありそうですね。ニクス、リリス、あなた方二人も協力してくれますか？」

「もちろんです」

ベレルの提案に、シーレインも、ニクスとリリスも同意した。四人はビートを囲むように立つと、気合を込め始めた。

「「ハアアアアア！」」

「ヌウウウウン！」

四人の気が合わさり、ビートの上空の空間に歪みが生じた。シーレインはビートを見つめ、

「何とか成功したようね。セイレーン、あなたが立つその範囲だけならば、人間界と交信

が出来る筈よ」

「本当!? シーレイン、ニクス、リリス、ベレル、ありがとう! 神様、聞こえますか? 私です。キュアビートです!」

ビートの必死の呼び掛けは、シーレイン達の協力もあり、ブルーの下へと届いた。プリキュア達の身を心配して居たブルーは、聞こえて来たビートの声を聞いてハッと我に返り、

「ビート! 良かった、無事だったんだね?」

「良かったあ・・・神様に繋がった。神様、大変なの! 四つ葉町に向かったプリキュアみんなの身が危険なの!!」

「何だって!? ビート、もっと詳しく話を聞かせてくれるかい?」

ブルーは、ビートからの連絡を受け、見る見る険しい表情を浮かべて行った・・・

星空家・・・

加音町で、ピーチとメロディに蹴り飛ばされ、ご機嫌斜めで星空家に帰って来た魔王は、そろそろ夕飯の支度を始めようかとしていた、みゆきの母育代に頭を撫でられ、すっかり機嫌を直して居たのだが、魔王は、妙な胸騒ぎを感じて居た。

(何かみゆき達の事が気になるカゲ・・・加音町に居たと思ったら、色々な町に現れたり、

ラブ達の町に現れたり・・・)

「魔王ちゃん、どうしたの?」

育代は、虚空を見つめて物思いにふける魔王を見て声を掛けた。魔王はハッと我に返ると、何時ものように育代を見て笑みを浮かべた。そのまま魔王はフワフワ宙を飛びながら育代の前に移動すると、育代に甘えるように身体を擦りつけた。育代はニコニコしながら魔王の頭を撫でていると、魔王は育代の顔まで浮かび上がり、

「みゆきママ、ちよつと出掛けて来るカゲ」

「あら、魔王ちゃんまたお出かけ?魔王ちゃんのハンバーグ先に焼こうかと思ってたんだけど・・・」

「帰ったら食べるカゲエエ」

魔王はそう言い残し、星空家を後にした。魔王は、何か心に引つ掛かるプリキュア達の事を思うと、自然と身体が動いた。

「やつぱり、みゆきママだけじゃなく、みゆきも一緒にハンバーグ食べた方が楽しいカゲ。でも、みゆきパパは要らないカゲ」

魔王はそう思いながら、プリキュア達の様子を見に四つ葉町へと飛び去った。だが、魔王が育代の作ったハンバーグを食べる事は無かった事を、この時の魔王が知る由もなかった。

## 2、破滅の光

クローバータウンストリート・・・

ブラッドは、カインに騙された事を知り自棄になっていた。カインが仕組んだ結界により、四つ葉町に入る事は出来ても、もう逃げ出す事も出来ないと思つたブラッドは、せめてプリキュアの一人でも自らの手で倒さなければ、死んでも死にきれないと思つて居た。

「プリキュアアアアア！」

ブラッドは、生き残つた配下の魔物達と共に、プリキュアに対して総力戦を仕掛けて来た。ピーチは困惑しながら、

「今はあなた達の相手をしている暇は無いの」

「あなた達だつてこのままじゃ・・・」

ベリーもカインに裏切られたブラッドに、憐みの視線を向けた。それはブラッドに、嘗てラビリンズでメビウスに見捨てられ、プリキュアと一緒に消滅させられそうになつた、ウエスターとサウラーの事が頭を過ぎつたからだつた。だが自棄になつたブラッドには、ピーチやベリーの声も届かなかつた。

「黙れえええ！もう全てお終い何だ・・・せめて、せめて貴様らの一人でも倒さなきや、

俺の気がすまねえんだよおお！」

ブラッドは問答無用とばかり、ピーチ達フレツシュプリキュアを上空から攻撃し始めた。他の魔物達も、プリキュア達に対して攻撃し、プリキュア達も迎え撃った。

ブルーム達は、黒い頭巾を被って、矢を射て攻撃してくる闇の精霊ボツクルと・・・  
ドリーム達プリキュア5は、ヤギの頭部とゴリラの肉体を持ったようなボルクスと・・・

ローズとソードは、カナブンのような昆虫の魔物と・・・

ダークプリキュア5は、カラスのような魔物と・・・

ムーンライト達は、半分身体が腐ったようなおぞましいグールの群れと・・・

メロディ達は、イカの様な身体と犬の頭部をした魔物と・・・

そしてハツピー達は、カブトムシとクワガタが合わさったような昆虫の魔物とそれぞれ戦って居た。ルミナスは、大輔とミユキを安全な場所まで避難させて居た。

「ケエケケケ、空を飛べねえ貴様らなど、俺の敵じゃねえよ」

ブラッドは、上空を自在に飛び回り、空からピーチ達を攻撃し、ピーチ達は苦戦して居た。ピーチは上空を見上げながら、

「何とかあいつの動きを止めないと・・・」

そんなピーチの声が、タルトに背負われていたシフォンに届いた。シフォンは空を見

上げてブラッドを見ると、

「キュアキュア、プリプー」

シフォンは耳を動かすと超能力が起こり、空を飛んでいたブラッドの身体が急速に重くなつて行つた。

「な、何だ!?!身体が急に重くなつて・・・」

ブラッドは、重さに耐えきれず地上へと落下した。クローバーボックスを手を持ったタルトは、

「ピーチはん、ベリーはん、パインはん、パッションはん、今やでええええ!」

タルトの声に、四人は反応して頷くと、ピーチは仲間達に目で合図を送り、

「行くよ、ベリー、パイン、パッション!クローバーボックスよ、私達に力を貸して!!」  
タルトが持つて居たクローバーボックスから放出された光が、リンクルンに力をもたらしした。

「プリキュアフォーメーション!」

ピーチの合図を受け、四人が一斉にしゃがみ込み構えると、シフォンに動きを封じられていたブラッドは困惑した。一体何を始めようとするのか、ブラッドには分からなかった。

「レディー・・・ゴー!!」

再びピーチの合図で、四人はブラッド目掛け走り出した。

「ハピネスリーフ！セツト！パイン!!」

パッションから始まったハピネスリーフ、パッションはパインに投げると、

「プラスワン！プレアリーフ！ベリー!!」

受け取ったパインが、プレアリーフをセツトしベリーに投げる。

「プラスワン！エスポワールリーフ！ピーチ!!」

受けたベリーが、エスポワールリーフをセツトし、ピーチに思いを託し投げる。

「プラスワン！ラブリーリーフ!!」

受け取ったピーチは、ラブリーリーフをセツトし、四つ葉のクローバーマークを完成させる。ピーチが四つ葉のクローバーマークを投げると、それは巨大化し、四人はそれぞれのマークの上に乗って、クローバーの中心部に居るブラッドの上で下降し、ブラッドを巨大な水晶の中に閉じ込めた。ブラッドはもがいて逃げようと試みるも、動きを封じられていたブラッドは、逃げ出す事が出来なかった。

「ち、畜生、だが、貴様らも終わりだあああ!」

「[[[[ラッキークローバー！グランドファイナー!!]]]]」

ラッキークローバー・グランドファイナーの力は、凄まじい輝きを放ち、ブラッドを光の輝きの中で包み込んで浄化した。他のプリキュア達も魔物達を浄化したものの、彼



女達の心が晴れる事は無かった。一同の視線が空へと向けられる。四つ葉町の上空に発生したゆがみは、やがて巨大な穴の様な窪みになった。負の力が起こすプレッシャーが、プリキュアと妖精達を動揺させていった。エーテルダークネスという未知の脅威を前に、何をすべきか分からなかった。その時、プリキュア達の側に姿見鏡が現れ、中からブルーが現れた。だが、姿見鏡はブルーが通り抜けると、何かに耐えられないように消滅した。ブルーは困惑しながら、

「この力もエーテルダークネスの……」

『神様！』

エーテルダークネスの脅威の前に動揺して居たプリキュア達に取って、地球の神であるブルーがやって来た事は心強かった。ブルーは一同の無事な姿を見てホッと安堵するも、その表情は固かった。

「みんな、無事で良かった。さっき魔界に行ったビートから連絡があった」

「「エツ!?!ビートから?」」

ブルーから、魔界に居るビートから連絡が入ったと聞き、メロディ、リズム、ミューズは思わず身を乗り出した。ビートがどうやら無事で居るようで、三人は思わず自分達の置かれている状況を忘れたかのようにホッと安堵した。ブルーは話を続けると、

「ビートが魔界の協力者達から聞いた話によれば、エーテルダークネスという負の力を

蓄えたエネルギー波が、この町に降り注ぐ」

「ハイ、私達もさつき、この町を襲って居た魔物から聞かされました」

ピーチの言葉に、ブルーはゆっくり頷いた。プリキュア達がエーテルダークネスの事を知って居るのなら話は早かった。

「そうか、それなら話が早いよ、元々この町を襲わせたのは、邪魔な君達を町事一気に消滅させようと考えた罠のようだ。その為に配下の者達を利用したそうだ」

全てはプリキュア達を四つ葉町に集結させる為の罠、プリキュア達が改めてカインに対して敵意を向けたその時、ブルーが持つて居たアイテムが輝きだした。

「みんな、聞こえる?」

『ビートー!』

ビートの声が、ブルーが手に持つアイテムから聞こえて来た。ビートと別れてからまだ数時間ではあったが、プリキュア達は皆魔界に行つたビートの無事を知って安堵した。だが、ビートは険しい声で叫び、

「みんなあ、注意して!エーテルダークネスが起動するわああ!!」

ビートは絶叫しながらプリキュア達に知らせ、一同は上空を見上げた。上空から、何か唸り声のような音が四つ葉町に迫って来て居た。ブルームは、イーグレット、ブライト、ウインディに話し掛け、

「先ずあたし達が最初に防いでみよう」

ブルームはそう提案するも、直ぐにブルーは顔を横に振り、

「いや、それは得策では無いよ。みんなの力を結集させて守りに備えた方が良い」

ブルーは、ビートから話を聞く内に、ビートに知らせたシーレン達が、かなりエーテルダークネスを警戒している様子なのを知り、個々の力で防ごうとするより、力を結集させるべきだと提案した。ちょうどそこに、ミユキと大輔を避難させたルミナスも戻って来た事で、ブルーはルミナスにもエーテルダークネスの事を伝えた。ムーンライトはルミナスの右肩に手を置き、

「ここはやはりルミナス、あなたの力に頼るしかないわね」

「分かりました・・・ポルン、ルルン、あなた達も力を貸して」

「ポポ、ポルンも頑張るポポ」

「ルルンも頑張るルル」

ポルンとルルンもルミナスに力を貸す事を誓い、ルミナスは二人に微笑みながら頷いた。ルミナスは上空を見上げると、険しい表情を浮かべた。上空から発せられる威圧感が強まっているのを、プリキュア達も、妖精達も、そしてブルーも感じていた。ルミナスが両手を空に向けて上げると、

「クイーン！私に力をお貸しください・・・ハアアアア!!」

ルミナスが気合を込めると、四つ葉町上空に、巨大な虹色のバリアを作り上げた。それを見たブルーも両腕を高く掲げると、

「ルミナス、僕も力を貸そう」

「神様・・・ハイ!」

ルミナスはブルーに小さく頷くと、ルミナスが放ったバリアにブルーの力が加わり、ルミナスの身体が光り始め、バリアはより強固になって四つ葉町の空に浮かび上がった。それと時を同じくし、四つ葉上空に破滅の光エーテルダークネスが降り注いだ。その凄まじい衝撃がルミナスを襲った。

「キャアアアアア!」

『ルミナス!』

エーテルダークネスの凄まじい威力により、ルミナスの身体が吹き飛ばされそうになるのを、ムーンライトが後ろからルミナスを支えた。それでも二人の身体事吹き飛ばす程の威力で、ピーチが慌ててムーンライトを支え、他のプリキュア達が次々に前のプリキュアを支えると、バリアはプリキュア達の力を受けて更に強固になり、エーテルダークネスの衝撃を、プリキュア達は一分間耐えきった。破滅の光が徐々に収まり、やがて消えていった・・・

「ハアハアハアハア・・・」

全ての力を使い果たし、ルミナスがよろめくのをムーンライトが支えた。

「ルミナス、お疲れ様」

「ハアハアハア・・・ハイ」

ルミナスは疲れ果てて倒れ込むのを、ムーンライトは優しく自分の膝に頭を乗せて寝かせてルミナスに感謝の言葉を伝え、他のプリキュア達も次々とルミナスを称え、プリキュア達もエーテルダークネスの脅威が去った事を喜び合った。ブルーも力を使い果たし、壁に背中を付けて息を整えるも、

（おかしい!?まだ禍々しい負の力が消え去って居ない?）

ブルーが訝しんだその時・・・

（甘いな、プリキュア!）

『エツ!』

嘗ての様に、突然一方的にプリキュア達の脳にカインの声が響き渡った。動揺するプリキュア達に対し、再びビートの声が聞こえて来た。

「みんなああ!エーテルダークネスの第二波が発射されたわああ!!」

『そんな!』

ビートの叫びが再びブルーが持つアイテムから響き渡った。だが、エーテルダークネスの第一波を防いで、体力の無くなったルミナスとブルーには、再びバリアを張る力は

もう無かった。ムーンライトは、その場でルミナスを横にならせて休むように伝えると立ち上がり、

「みんな、私達の力を一つにして迎え撃つわよ」

『ハイ!』

一同が返事を返したその時、無情にもエーテルダークネスの絶望の光が、四つ葉町上空に輝いた。

### 3、プリキュアと魔王

ピーチは、四つ葉町上空に輝く絶望の光を呆然と見つめた・・・

「そ、そんなぁ・・・私達の町が・・・みんな、ゴメンー!」

ピーチの瞳から大粒の涙が零れた。もうどうする事も出来ない現状に、ピーチの心は深い悲しみと悔しさで一杯だった。迫り来る絶望の光に、シフォンが険しい表情を浮かべたその時、四つ葉町の空を闇が覆った。ピーチは空を見上げて動揺し、

「エッ!?これは何?」

動揺するピーチに知らせようとするかのように、シフォンは空の一面を指さしてハシャイだ。

「カアアアゲエエエ」

『魔王?!』

プリキュア達が、空に浮かぶ闇を凝視すると、そこには嘗て絵本の世界で戦った時より巨大な魔王が、四つ葉町の空に浮かび上がり、エーテルダークネス目掛け、口から強烈なエネルギー波を放って迎え撃った。魔王の咆哮と、エーテルダークネスがぶつかり合い、四つ葉町上空に激しい閃光がほとばしった。ハッピーは大きく息を吸い込むと、

「魔王！頑張ってえええ!!」

ハッピーが魔王に対して声援を送り、それに続くように妖精達が、プリキュア達が魔王に声援を送った。ムーンライトはムーンタクトを手に取ると、

「みんな、私達も魔王を援護するわよ」

『ハイ!』

ムーンライトの指示の下、一同は魔王を援護すべく攻撃を開始した。ブルーム達は、スパイラルハートとスパイラルスターを放ち、ピーチ達はトリプルレッツシュとハピネスハリケーンを、ムーンライト達はフォルテウェーブとフォルテバーストを、メロディ達がパッションナートハーモニーを、ソードはホーリーソードを、ハッピー達は再びロイヤルレインボーバーストを放った。ドリームは悔しそうに、

「ココが居てくれたら、私達もレインボーローズエクスプロージョンを放てるんだけど……」

「仕方が無いわ、あなた達の方も私達がカバーするわ」

ダークドリームは、ドリームを励ますように肩をポンポン叩き、仲間達と共にダークローズエキスプロージョンを放った。アクアはルージュとローズに話し掛け、

「私達だけでも援護しましょう!プリキュア!サファイアアロー!!」

「OK!プリキュア!ファイヤーストライク!!」

「邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう!ミルキイローズ・ブリザード!!」  
アクア、ルージュ、ローズの技も加わり、プリキュア達の技が合わさった。

『ハアアアア!』

さらに力を込めるプリキュア達の技が合わさり、魔王のエネルギー波がエーテルダークネスを押し返して、完全に消し去った。

「ヨツシヤアア!」

「魔王、ありがとう!」

マリンが両腕を上げてガッツポーズを取り、ハッピーは両手を振って魔王に感謝した。だが、四つ葉町上空に漂う邪悪な気配は消える事は無かった。三度ビートの絶叫が響き渡り、

「みんなああ、堪えて!第三波が発射されたわ!!」

『そ、そんなあ・・・』



ビートからの希望を打ち砕く絶望の声が、プリキュア達の心に響き渡った。ビートは一同を励ますように、

「今シーレイン達が、エーテルダークネスを発生させる装置を破壊に向かって居るわ。これを持ち切れば、カインはもうエーテルダークネスを撃てない。お願い、みんなあ！何とか堪えてえええ!!」

ビートは、祈るような気持ちでプリキュア達を励ました。だが、二度のエーテルダークネスを防いだプリキュア達に、もうエーテルダークネスを食い止める力は残っては居なかった・・・

魔法界からシロップの背に乗って戻って来たブラックとホワイトだったが、二人のパートナー妖精であるメツプルとミツプルが突然騒ぎ始めた。

「ブラック、あっちの方から、もの凄く邪悪な力を感じるメポ」

「その直ぐ側に、ポルンとルルンも感じるミポ」

メツプルとミツプルの話を聞き、ブラックとホワイトは思わず顔を見合わせると険しい表情を浮かべた。

「ポルンとルルンが側に居るって事は、ルミナスも側に居るって事だよねえ、ホワイト？」

「エエ、他のプリキュアのみんなも一緒かも知れないわ・・・行きましょう!」

「シロップ、お願い!」

ブラックとホワイトに頼まれたシロップは、分かったとばかり一鳴きすると、猛スピードで邪悪な気配漂う四つ葉町目掛け飛び去った。

四つ葉町を守る魔王は、上空に浮かんだまま虚空を見つめて居ると、プリキュア達との日常の日々が走馬灯のように流れた。

(あいつらは、俺の友達カゲ、この町には、俺に優しくしてくれたラブママ、美希ママ、祈里ママも居るカゲエ・・・俺がみんなを、みんなを・・・)

「守るカゲエエエ!」

魔王は大きく息を吸い込むと、魔王の身体が更に一回り大きくなった。ハッピーは不安そうに、

「魔王、何をする気なの?」

「みゆき達は、俺の友達カゲ・・・俺がお前達を・・・守るカゲ!!」

『魔王・・・』

魔王の思いは、プリキュア達の心を打った。ムーンライトは、力を使い果たした自分の無力さを悔やむように唇を噛んだ。エーテルダークネスの第一波、第二波を食い止め

た事で、体力の限界を超えていた。

(情けない・・・魔王に縋るしか無いだ何て・・・)

ムーンライトが拳を握ったその時、四つ葉町上空に、三度破滅の光が降り注いだ。魔王は大きく息を吸い込み、口を大きく開いて再び強大なエネルギー波でエーテルダークネスを迎え撃った。激突する魔王のエネルギー波とエーテルダークネスによって、四つ葉町上空にまばゆい光が何度も行き来した。だが、次第に魔王がエーテルダークネスに押され始めた。魔王もまたエーテルダークネスの第二波を防いだ影響で、体力をかなり失って居た。ハッピーは大きく息を吸い込むと、

「魔王！頑張ってえええ!!」

「魔王、気張りや!」

「魔王・・・お願い!」

右拳を上げたサニーが、両手を組んで祈るような仕草のピーチが、そしてプリキュア達が魔王に希望を託した。

だが・・・

(もう、もう限界カゲ・・・あいつらは、あいつらは・・・)

「俺が守るカゲエエエ!」

魔王は咆哮し、自らの身体を使ってエーテルダークネスを受け止めた。魔王の身体

を、容赦なくエーテルダークネスの破滅の光が蝕んでいった。

『魔王!』

(か、身体が・・・バラバラになりそうカゲ・・・)

魔王が苦しうに呻き続け、プリキユア達は心配そうに魔王を見守った。

「カアアア・・・ゲエエエエ!」

魔王の断末魔の様な叫びが響き渡るも、ついに四つ葉町上空に蔓延っていた邪悪なる力は完全に消え去り、四つ葉町の空に日が傾き始めた青空が再び現れた。魔王は眩しうに空を見上げると、

(守れた・・・カゲ)

魔王は薄れゆく意識の中、再び走馬灯のように絵本の世界でニコと過ごした日々、プリキユア達との日常が流れ、魔王は自然と笑みが浮かんだ。

(ニコ、元気でやってるカゲ! また・・・ニコにも会いたい・・・カゲ)

魔王は、その力の全てを使い果たしたかのように落下を始めた。まるで魔王の身体がバラバラになっていくように、四つ葉町の空から、1c m程の黒い球体がポツポツ雨の様に降って来た。

『魔王~~~~!!』

プリキユア達が魔王の身を案じて絶叫するも、魔王はその命を燃やし尽くしたかのよ

うに、ただ四つ葉町に降り注いだ・・・

#### 4、いざ、魔界へ！

プリキュア達と魔王の活躍で、四つ葉町に迫った危機は回避された。だが、プリキュア達も、妖精達も、誰一人それを喜ぶ事は出来なかった。

「魔王・・・嘘でしょう?！」

ピーチは呆然としながら、目の前に降って来た中で一際大きいゴルフボールぐらいの黒いゼリー状の球体を両手で受け止めると、愛しそうに豊満な胸に抱きしめた。ピーチの瞳から大粒の涙がポロポロ零れ落ち、ピーチは膝から崩れ落ち、涙を拭おうともせず泣き続けた。泣きじゃくる者、放心したように呆然と立ちすくむ者、プリキュア達は目の前の光景が信じられなかった。ハッピーは、号泣しながらそのまま膝から崩れ落ち、「魔王！返事してよお!!魔王く!!・・・ウツ、ウワアアアン」

ハッピーは両手で顔を覆って泣きじゃくり、自らも涙を浮かべたビューティとブロッサムが優しく慰め、ハッピーはビューティにしがみ付いて泣きじゃくった。ブルーも沈痛な表情でプリキュア達を見守って居ると、ビートから通信が入った。

「神様、みんなは無事なの? シーレイン達が、エーテルダークネスの発生装置を破壊したって連絡が入ったわ」

「そう・・・君に協力してくれた魔界の者達に、僕からも感謝して居たと伝えて欲しい」  
「ハイ!それで、みんなは?」

ビートは、プリキュア達の安否が知りたくてウズウズしていた。みんなならきつと無事で居てくれるとは思っても、不安でしようがなかった。ブルーはそんなビートに気づいたのか、

「無事だよ・・・魔王が自らを犠牲にして、エーテルダークネスの脅威から、プリキュア達と四つ葉町を守ってくれたんだ」

「エツ!?魔王が自らを犠牲にしたって・・・エエエ!?!」

ビートは、ブルーの報告を聞き、放心したように呆然と立ち尽くした。ハミイとピーちゃんは、そんなビートを気に掛け、

「セイレーン、一体どうしたニヤ?」

「プイイイ!?!」

「ハミイ、ピーちゃん、魔王が、魔王が、みんなを助ける為にその身を犠牲にして、エーテルダークネスからみんなを守ったって・・・」

「ニヤンですとおおお!?!」

「プイイイ?」

沈痛な表情をしたビートからの報告を聞き、ハミイとピーちゃんも目を丸くして驚い

た。慌てるハミイに対し、ピーちゃんはゆっくり頭を左右に振った。ビートとハミイに、ピーちゃんの言葉は分からない。それでも二人には、ピーちゃんが言わんとしている事が伝わっていた。あの魔王が、こんな事で死ぬ筈が無い、ピーちゃんはそう言っていると感じ取れた。ビートはピーちゃんを見て頷き、

「そうだよね、あの魔王が死ぬ訳無いよね？」

「そうニャ！次に会う時は、何時も通り元気な魔王と再会出来るニャ」

「ペイペイ！」

ピーちゃんは、ビートとハミイに自分の考えが伝わった事で、満足そうに何度も頷いた。

四つ葉町の空を、猛スピードでやって来たシロップは、四つ葉町へと降り立った。シロップの背から降りて来たブラックとホワイトの姿を見ると、ルミナスは今まで堪えた感情が爆発したかのように、ブラックとホワイト目掛け駆け出した。

「ブラックウウ！ホワイトオオ！魔王が、魔王が、私達を庇って・・・」

ルミナスは、そこまで話すとブラックとホワイトに抱き付き泣き続けた。ブラックとホワイトは困惑し、

「何!?!魔王がどうかしたの?」

「みんな、一体私達が居ない間に何があったの?」

状況が飲み込めないブラックとホワイトは、事の詳細を聞こうと話し掛けたものの、ほとんどのプリキユア達が、ルミナス同様泣きじやくって居て、ブラックとホワイトは益々困惑した。二人の視線がムーンライトに向けられると、ムーンライトは、パートナーだったコロンの最期を思い出したかのように、悲しみを堪える様な表情を浮かべていた。ムーンライトは、ブラックとホワイトの視線に気づくと二人に近付いた。

「ブラック、ホワイト、実は・・・」

ムーンライトは、沈痛な表情のままブラックとホワイト、そして呆然としているシロップに四つ葉町で起こった出来事を話した。話を聞いて居たシロップは驚愕し、

「ま、魔王がそんな事になってた何て・・・ココとナッツに知らせて来るロプ」

シロップはそう言うのと、魔王の身に起こった出来事を知らせる為に、パルミエ王国目指し猛スピードで飛び去って行つた。見る見るブラックとホワイトの目にも涙が浮かんだ。

「そ、そんなあ、魔王が・・・」

ブラックは言葉に詰まり、思わず足元を見た。そこには何も喋らない黒い魔王の残骸があるだけだった。ブラックの目からポロポロ涙が零れ落ち、魔王との思い出が思い返されていった。最初はみゆきに対する誤解から対立して戦つたが、誤解が解けて和解



し、魔王が人間界で暮らすようになり、時には魔王によってエッチな被害を被ったものの、魔王もまた大切な仲間の一人になって居た。その魔王が、足元の地面に無数に転がる黒い肉片になったなど信じたくは無かった。ブラックは、右手の衣装で零れ落ちる大粒の涙を拭いながら、

「魔王！返事してよおお!!お風呂でも何でも、魔王がして欲しい事してあげるから・・・  
お願いだから返事してよおお!!」

ブラックは、四つ葉町の空を見上げながらそう叫ぶも、魔王からの返事が返って来る事は無かった。沈痛な表情のホワイトは、そんなブラックを見て、

「ブラック・・・」

ホワイトはブラックの名を呼ぶも、悲しみに暮れるブラックを見てられず、言葉に詰まった。

その時・・・

(クククク、まさかエーテルダークネスを三発も喰らって生き延びるとはなあ・・・正直驚いたぞ)

『カイン！』

プリキユア達とブルーの脳に、カインからのテレパシーが響き渡った。一同は瞬時に険しい表情を浮かべた。ピーチは、ゴルフボール程の魔王の破片を胸の谷間に入れる

と、ゆっくり立ち上がった。

「カイン！あなただけは・・・許さない!!」

「あたし達を、あたし達の町を、そして、あたし達の大切な仲間を苦しめたあなたを：：あたし達は決して許しはしない!!」

ピーチに続き、ベリーもカインに対し険しい表情で啖呵をきつた。カインは愉快そうに笑いだし、

（クククク、随分威勢がいいなあ？だが、それも後数時間だ！後五時間もあれば、再びエーテルダークネスを発射できる。貴様らが住む町を、今度こそ消滅させてやる）

カインの話は、プリキユア達を戦慄させた・・・

ブラックとホワイトを除いた一同は、エーテルダークネスの脅威を直に見ていたのだから・・・

だが・・・

「黙れえええ！あんただけは、あんただけは、この手で直に殴らなきや気が済まない。あんたが魔界に隠れてるっていうなら・・・魔界に乗り込んででも、魔王の分まであんたを殴る!!」

一同が沈黙する中で、ブラックの魔界に乗り込んででもカインを殴るという、宣戦布告に等しい力強い言葉を受け、他のプリキユア達も次々とカインと戦う事を誓った。カ

インは再び笑い、

(クククク、勇ましい事だ・・・良いだろう！貴様らにチャンスをやろう)

カインがそう告げると、クローバータウンストリートの一画に歪みが発生した。カインは言葉を続け、

(貴様らを魔界に招待してやる。ただし・・・五人だ！それ以上の数が無理にその中に入れば消滅する。では、魔界で貴様らが来るのを待つて居るぞ・・・フハハハハハ)

カインはそう一方的に告げると、カインからのテレパシーが止んだ。一同の視線が、カインが発生させた魔界へと続くゆがみへと向けられた。魔界に行けるのは五人、カインはそう言つて居たが、この場に居るプリキュア一人一人、自分が魔界に乗り込むカインと戦おうとする気迫に満ちていた。ブルーは愁いの表情を浮かべ、

「みんな、冷静になるんだ！これは罠だ!!」

ブルーは、これはプリキュアを魔界に誘き出そうとするカインの罠だと見抜き、プリキュア達に自制するよう促した。だが、ブラックはゆっくり頭を左右に振り、

「神様の言う通りかも知れない・・・けど、あいつだけは、あいつだけは・・・」

ブラックの意思是固かった・・・

プリキュアの仲間達を、ピーチ達が住む四つ葉町を、そして大切な仲間の魔王を、こんな目に遭わせたカインの事が決して許せなかった。魔界に行けるのは五人、人選をど

うするのか一同が相談を始めると、パッションは何かを考えるように、カインが発生させた魔界へと繋がる歪みを凝視した。その時、ピーチが突然悲鳴を上げた。

「キヤアア!」

「ピーチ、どうしたの?」

ブラックが不思議そうにピーチに聞くと、ピーチは頬を赤らめながら、胸の谷間をチラリと見つめ、

「そ、それが・・・勘違いかも知れないけど、ここに入れてた魔王の一部が動いたような気がして・・・」

『エッ!?!』

一同が驚愕する中、ピーチの話を肯定するかのように、四つ葉町に散らばる魔王の一部が、一斉にピクピク動き出した。ピーチの胸がモゾモゾ動き出し、

「イヤアアン」

ピーチは思わず恥ずかしそうに胸を抑えると、胸の谷間からモゾモゾ黒い物体がもがきながら顔を出した。

「フウウウ・・・死ぬかと思ったカゲエ・・・でも、何か良い感触だったカゲ」

ピーチの胸の谷間から顔を出したのは、ゴルフボール程の大きさだったが、確かに魔王の姿だった。プリキュア達は見る見る目を見開き、

『魔王！』

「カゲ？」

『ワアアアアアア!!』

ピーチの胸の谷間から浮かび上がった魔王を見て、プリキュア達から大歓声が沸き起こり、ブルーや妖精達も、皆嬉しそうに何度も頷いた。魔王はそんな一同を見て不思議そうな表情を浮かべるも、自らの大きさに気付くと、

「全員、俺に集まるカゲエエえ！」

『カゲカゲカゲカゲカゲ・・・』

魔王の号令が下ると、1cm程のミニ魔王の集団が宙に浮かび上がり、次々とゴルフボールサイズの魔王と融合を始めた。やがて、魔王の身体が以前の様にボーリングの玉程の大きさになると、

「復活カゲエ！」

「何てデタラメな身体をしているのかしら？」

魔王は元の大きさに戻ってハシャギまわり、ブライトは困惑の表情をしながら思わず呟いた。ブロッサムは、右手の指で涙を拭いながら、

「でも、でも、魔王が無事で本当に良かったです！」

ブロッサムの言葉にブライトも頷き、二人は穏やかな表情で魔王を見守った。ハッ

ピーは魔王に駆け寄って魔王に抱き付くと、

「魔王！無事で、無事で良かったよ！！」

ハッピーは、心から嬉しそうに魔王を抱きしめて頬擦りし、魔王の無事を喜んだ。魔王は、心配してくれた一同に元気な姿をアピールするかのようになり、一人一人の前にフワフワ浮かびながら顔を見せ、プリキュア達も嬉しそうにして居た。魔王は、突然何かを思い出したように一同を見渡し、

「そういえば、お風呂でも何でも、俺がして欲しい事してくれるって聞いた気がするカゲエ」

(ギクウウウウ!?)

魔王の言葉を聞き、一同の視線が言い出しつぺのブラックに向けられ、ブラックの顔が引き攣った。あの時は、魔王が無事であって欲しい事から、ついその場の勢いでそう口走ってしまったが、冷静になって考えれば、自分は不味い事を口走っていたと気づき、顔から汗が滴り落ちて来た。ブラックはしどろもどろになりながら、

「エツ!? エエエとお・・・アハハハ、な、何かの聞き間違いじゃないかなあ? アハハハハ」

「なぎさ・・・何か変力ゲ?」

「エツ!? 変じゃない、変じゃないよ。いやあ、魔王が無事で本当に良かった・・・アハハハ、良かった、良かった」

「どうも怪しいカゲ？」

魔王はジト目でブラックを見つめると、ブラックは口笛拭きながら魔王から視線を逸らした。そんな魔王を、突然ピーチが抱き上げた。魔王は何事かとピーチの顔を見ようとすると、ピーチは魔王を豊満な胸に押し当てた。ピーチの豊満な胸の感触と心臓の鼓動が、魔王に伝わってくると、魔王は思わずニヤニヤスケベ顔を浮かべた。そんな魔王の身体に、ポトポト雫が当たった。魔王は雨でも降って来たのかと体勢を変えて上を向くと、そこには大粒の涙を流したピーチの顔があった。魔王はそんなピーチを見て呆然としていると、

「魔王・・・私達を、私達の町を・・・守ってくれてありがとう」

「カゲエエエ」

魔王は、涙交じりに自分に礼を言うピーチを見て、純粋な心で美しいと思い、心の底から自分が役に立てて良かったと思った。ブラックはそんな二人の交流を、目を細めて見守って居たが、突然何かを思い出したように、

「アッ!?色々あつて言いそびれてたけど、アン王女は魔法界に残って魔法の修行をするって言ってたよ。リコちゃんもみんなによろしくだつてさ」

『魔法!?!』

ブラックの話の聞き、一同は頭を傾げた。魔法つかいであるリコは兎も角、何故魔法

つかいでも無いアン王女が魔法の修行をしようとしているのか分からなかった。ホワイトは、一同のそんな空気を察し、

「魔法界に行ったアン王女は、杖の木から魔法の杖を授けられたの、魔法界出身のキュアマジシャンの血を受け継いだアン王女だから、杖の木に認められたんだと思う。おそらくアン王女は、自由にエースになれない現状を考え、魔法で私達をサポート出来ればと考えたんじゃないかしら?」

「ソード、そういう事だから寂しいかも知れないけど・・・」

「アン王女が・・・分かりました」

ブラックは、ソードの左肩に手を置き優しく励ますと、ソードは小さく頷いた。パルミエ王国から戻って来たシロップは、ココとナッツを連れて戻って来た。シロップから降りた二人の目には、元気に飛び回る魔王が映った。ココとナッツは、啞然としながらシロップを見ると、

「シロップ・・・魔王は元気そうココ?」

「どういう事ナツ!?!」

「アレエ!?!いや、確かにあの時は魔王が・・・!?!」

ココ、ナッツ、シロップは、何時もと変わらない魔王を見て目を点にするのだった。

「みんな、集まって!」



パッションは、カインが作り出した魔界へと続く歪みの前で一同を呼んだ。一同は何事かとパッションに視線を集中させると、

「さあ、今度はこちらの番よ・・・魔界に行きましよう！」

「エツ!?まだ魔界に行く五人を決めてないよ?」

パッションの提案に、パインが驚きながら声を掛けた。パッションは口元に笑みを浮かべ、

「その必要は無いわ。カインがわざわざ魔界へと繋げてくれたなら・・・それを利用させてもらう。アカルンを使えば、人数制限何て関係無いわ」

「そっかあ!」

パッションの閃きに、ピーチも納得顔で頷いた。プリキュア達も、妖精達も、ブルーもパッションの側に集まった。魔王は少し目を吊り上げ、

「当然俺も行くカゲ!」

妖精達の中で、魔王が真っ先に魔界に行く事を宣言した。エーテルダークネスを放ったのが、魔界に居るカインだと知った魔王は、プリキュア達や四つ葉町を、窮地に追い込んだ張本人のカインに怒っていた。ココとナッツ、シロップ、シフォンとタルト、シブレ、コフレ、ポプリ、フェアリートーン達、キャンディ、エンエンとグレルも、プリキュアと共に魔界に行くと言った。ホワイトは、先程のブルーの言葉を思い出し、

「でも、神様が言う様に、何かの罫かも知れない、何人かは此処に残った方が良いわ」

ホワイトの言葉も最もだった。自分達が全員魔界に出掛けた隙を付き、カインが四つ葉町を再び襲う事も考えられるのだから、一同は話し合いの結果、ソードとダークプリキュア5の六人と、もしもに備えシロップがクローバータウンストリートに残る事となった。ブルーは、ビートにも渡したペンダント形の通信アイテムをブラックに手渡すと、

「ビートにも渡して置いたけど、何かあつたらこれで連絡して欲しい」

「分かりました。何かあつたら連絡を入れます」

ブラックは、ブルーから渡されたアイテムを首に掛けた。ソードは心配そうに、

「みんな・・・気を付けて下さい」

ソードの心は不安だったが、ピーチは力強く頷き、

「ウン！ソード、ダークプリキュア5、私達が留守中、四つ葉町をお願い」

「ハイ！」

ピーチはそう言いながら右手を差し出すと、最初にソードと握手した。

「エエ、あなた達の留守中は、私達がこの町を守るわ」

「あなた達こそ気を付けて」

「魔界がどんな所か分からないしね」

「みんな、油断しないでね」

「何かあったら知らせて・・・ドリーム、みんな、必ずまた会いましょう」

ピーチは、ダークミント、ダークルージュ、ダークレモネード、ダークアクア、そしてダークドリームと順番に握手をしてクロバータウンストリートを託した。パッションは、先にカインが作り出した魔界へと続く歪みの中に入ると、

「じゃあ、行くわよ!・・・魔界へ!!」

パッションがそう言うと、一同の身体が赤く発光し、魔界目掛けこの場所から消え去った。

「みんな、必ず帰って来てね」

ソードは、一同が立っていた場所を、名残惜しそうに見つめて居た・・・

第十一章：プリキュアと魔界の戦士達

完

## 第十二章：魔王と魔王

## 第二百二十九話：魔界の予言者再び

1、プリキュアとモグロス

プリキュア達は、カインの野望を阻む為、ソード、ダークプリキュア5、ブルーに四つ葉町の事を任せ、魔界へとやって来た。ブラックは周囲を見渡し、

「ここが・・・魔界」

空を見上げれば日の光が見られない曇天、だが、周囲を見渡せば、五階建てのビル位の大きさはある木々が密集する中から、獣のような咆哮が聞こえてきた。ビートのように、魔界の者であるニクスとリリスが一緒だったならば兎も角、全員初めて訪れた魔界では、何処に向かえば分からず一同は困惑した。ピーチに抱っこされた魔王は、キョロキョロ周囲を見渡すと、

「何だか、見覚えある気がするカゲ・・・」

「エッ!?魔王、あんた魔界に来た事あるの?」

魔王が魔界を、見覚えある気がする場所と聞き、ブラックは思わず魔王に魔界に来た事があるか聞いた。魔王は考えてはみたものの、魔界に関する確かな記憶は無かった。

魔王は困惑の表情を浮かべながら、

「どうもその所がよく覚えて無いカゲエ」

「結局、あんたも初めて来たのと変わらない訳ね。それじゃあ、こう広いと迂闊に動けないよねえ？」

「エエ、下手に動いて魔物を刺激するのも、あまり得策とは言えないかもね」

ブラツクに聞かれたホワイトも同意した。この見知らぬ土地をあてもなく歩き続け、魔物を刺激するのも得策とは思えなかった。ピーチは不安そうな表情を浮かべ、

「でも、あの時カインが言っていた事が気になって……後五時間後に、またエーテルダークネスが発射されたらと思うと……」

「そうね……でもピーチの話じゃ、シーレイン達がエーテルダークネスの発生装置を破壊してくれたって連絡があっただけでしょう？……私は、ピーチが言ってる事が事実だと思う」

ピーチの不安な気持ちも理解出来るホワイトは、ちよつとピーチを励ます意味も込め、ピーチが言っていた、エーテルダークネスの発生装置を破壊したという言葉信じると語ると、ピーチも小さく頷いた。マリンは両手を首に回して組み、

「じゃあ、やっぱあたし達を魔界に來させようとしたカインの罠って事かなあ？」

「そうだとしても、カインも私達がこれ程の人数で來るとは、思っっては居ない筈よ」

「エエ、カインは態々魔界に来られるのは五人までだと言って居たわね」

カインの裏をかけたパッションの言葉に、ブライトも同意した。メロディは、ビートの名が出た事で、この魔界に居るビートの事を気に掛けて居た。

（ビート、今何処に居るんだろう!?!）

「オーホッホッホッホ」

「だ、誰!?!」

ビートの事を考えて居たメロディの直ぐ後ろで、突然笑い声が響き渡り、メロディは変顔浮かべながら動揺し、慌てて背後を振り返った。そこには、小太りで何所か愛嬌がある顔の、福の神を連想させるような面持ちで、全身を黒い帽子と黒いスーツで覆った、何所か底知れぬ不気味さを漂わせた男が立って居た。男はプリキユア達に深々とお辞儀をすると、プリキユア達に自己紹介を始めた。

「初めまして、プリキユアのみなさん。わたしは、魔界で予言者の様な事をして居るモグロスと申します。以後お見知りおきを・・・オーホッホッホッホ」

『魔界の予言者!?!』

一同は、モグロスが魔界の予言者を名乗った事で警戒感を持った・・・

なぜ自分達がこの場に居る事が分かったのか?

モグロスが、自分達の前に現れた理由は何なのか?

モグロスはひよつとして、カインの仲間ではないのか？

そんな一同の心の内を見抜いたかのように、モグロスは両腕を顔まで上げると、手を左右に振り、

「とんでもございません。わたくし、あなた方のお仲間のビートさんともお会いしましたけど、わたくしが皆さんをこうしてお尋ねしたのは、あなた方に興味を持って居るからで、やましい気持ちなど、これっぽっちもございません」

モグロスはそう言うのとニヤリと笑んだ。その表情は、どこか一同を小馬鹿にしているようだった。

「私達に興味って・・・何か引つ掛かるなあ？」

ドリームは困惑顔で、モグロスを警戒するような視線を向けると、モグロスは笑い出し、

「オウホツホツホツホ、何せ貴女方プリキュアの皆さんは、この魔界において前代未聞の事をなさるお方達ですから」

『私達が前代未聞の事をする!?!』

「おっと、今の話は聞かなかつた事にして下さい・・・オウホツホツホツホ！」

プリキュア達は、何処か自分達を小馬鹿にしているようなモグロスを、用心するようになんぞ警戒した。だが、メロディ達にしてみれば、モグロスがビートに会ったと聞けば、

ビートの事を聞かずには居られなかった。

「ねえ、ビートに会ったの!?! ビートはまだ塔に居るの?」

「知って居るなら、ビートの事を詳しく教えて、私達、魔界の事何て良く分からないし……」

ビートを心配して居るメロデイとリズムが、矢継ぎ早にモグロスにビートの消息を訪ねると、モグロスはそんな二人を見て何度も頷いた。

「そうでしょう、そうでしょう、お仲間の事を気に掛けるのは当然の事ですものねえ……  
教えて差し上げててもよろしいですよ」

「「本当!?!」」

モグロスがビートの近況を教えるても良いと言った事で、ミュージズも思わず身を乗り出し、メロデイ、リズム、ミュージズが同時にモグロスに真意を訪ねた。モグロスは大きく頷き、

「ハイ!ただし……あなたが抱いて居る魔王さんを、わたくしに引き渡して欲しいのです」

モグロスはそう言うと、ピーチが抱っこしている魔王を指さした。思わず一同の視線が魔王に向けられ、魔王も困惑の表情を浮かべた。

『魔王を!?!』



「カゲエ？」

モグロスからの提案で、魔王を引き渡して欲しいと聞き、プリキュア達の顔付きが瞬時に険しくなり、先程以上の警戒心でモグロスを見た。モグロスは、再び両腕を顔の前まで上げ、両手を左右に振りながら、ジェスチャー交じりにプリキュア達に話し掛けた。「いいえ、勘違いなさらないで下さい。わたくし、何もやましい考えなど持つて居りませんから」

モグロスがそう否定しても、プリキュア達のモグロスに対しての疑惑は拭えなかった。ブラックはモグロスを指さし、

「あんた、一体何を企んでるの？」

「そうだよ、勘違いってあなたは言うけど、敵か味方が分からないあなたに、魔王を渡す筈ないじゃない」

ピーチもブラックに同意し、魔王を庇う様に豊満な胸に魔王を押し付け、魔王はデレデレした表情を浮かべた。モグロスは小首を傾げ、

「そうですかあ!?!それは困りましたなあ・・・魔王さんの記憶に関する事何ですけどねえ？」

モグロスの言葉を聞き、ピーチの胸の感触を堪能して居た魔王だが、ハツとした表情を浮かべると、もがく様にピーチの手から離れてフワフワ浮かび上がり、モグロスの正

面に移動した。

「お前……ひよつとして俺の事を知ってるカゲ？」

モグロスが、自分の記憶の手掛かりを知って居る様な口ぶりに、魔王は思わずモグロスに尋ねずに居られなかった。モグロスは小さく頷き、

「正確に申し上げれば、あなたと会うのは今が初めてですが、あなたの正体を知る人物から、あなたをお連れするように頼まれたと思つて頂いて結構です」

モグロスはそう言うのと、大きな口を開いて不気味な笑みを浮かべた。プリキュア達は、そんなモグロスの表情を見て、まだモグロスを警戒して居た。魔王を利用して、何かを企んで居るのではないかという気もしないでは無かった。マリンは何かを閃き、右手を上げてモグロスの前に移動すると、

「ハイハイ！あんだ、予言者何でしょう？本当かどうか、試しにあたしの数分後の未来を占つてみてよ。それによつては、あんだの言う事信じて上げても良いよ」

マリンは、モグロスにからかい半分でそう話し掛けた。どうせ、自分達プリキュアに近づく為の嘘に決まってると思つて居た。だが、モグロスはマリンをジイと見つめると、何かを閃いた様な顔付きになり、

「よろしいですよ。では、あなたを予言致しましょう！あなたは30秒後……インチャックに足元から身体を丸飲みされます」

「ハア!？」

モグロスは、右手でマリンを指差して予言を伝えると、プリキュア達はシンと静まり返った。マリンは右手を右耳に当てて、モグロスを小馬鹿にした表情を浮かべ、今度は左手を額に乗せ、周囲をキョロキョロ見渡すも、周囲に魔物の姿など見られなかった。マリンは思わず両手でお腹を押さえて笑い出し、

「アハハハハ！何よ、何にも居ないじゃん！あんた本当に予言……」

マリンがそう言い掛けた瞬間、マリンの真下の地面が盛り上がり、地面から巨大なイソギンチャクのような魔物が現れ、マリンを足元から丸飲みした。モグロスの予言通りの展開になり、プリキュア達は顔色を変え、

『マリン!？』

「マリン！大丈夫ですかあ?」

「待ってて、今助けるから」

プリキュア達は顔色を変え、プロツサムとベリーが慌ててマリンを救おうと、マリンを飲み込んだイソギンチャクに似た魔物、インチャックに駆け寄った。モグロスは、そんなベリーとプロツサムを見て、何かを思い出したかのようにポンと手を叩き、

「そうそう、言い忘れてましたが……あなた方二人も、インチャックに丸飲みされます」

「エッ!？」

モグロスに予言され、呆然と振り返ったベリーとブロッサムの足元の地面も盛り上がり、二匹のインチャックが現れ、ベリーとブロッサムをマリン同様足元から丸飲みした。『ベリー！ブロッサム！』

プリキュア達は、慌ててマリン、ベリー、ブロッサムを丸飲みした三匹のインチャックを浄化し、三人を助け出した。三人の身体は、インチャックに丸飲みにされた影響が生臭かった。三人は目が虚ろになりながらしやがみ込み、同じような仕草で頭を抱え始めると、

「二」魔界怖い、魔界怖い、魔界怖い、魔界怖い……」

ベリー、ブロッサム、マリンの三人は、呪文のように魔界怖いと呟き続けた。プリキュア達は、呆然と三人を見ていたが、変顔浮かべたブラックは、モグロスを指さし、

「ちよつとあんた！そう言う事はもつと早く言つてよねえ!!お陰でベリーやブロッサムまで飲み込まれたじゃないよ」

「またまた言いそびれてましたが、この場所はインチャックの巣ですので……」  
『エツ!?!』

モグロスの言葉に、プリキュア達は思わず驚きの表情を見せると、モグロスの言葉が終わる前に、今度は、レモネード、メロディ、ピース、マーチの足元が盛り上がり、四匹のインチャックが地面から現れ、四人を足元から丸飲みした。

「ゲツ!? またかあああ?」

変顔したブラックを筆頭に、一同は四人を丸飲みしたインチャックを慌てて浄化し、四人を助け出した。

「「「「魔界怖い、魔界怖い、魔界怖い、魔界怖い、魔界怖い、魔界怖い、魔界怖い、魔界怖い、魔界怖い、魔界怖い」」」」

助けられた四人は、マリンの側で同じような表情と行動を取り、七人は魔界怖いと呪文のように呟き出した。困惑するプリキュア達と妖精達だったが、足元の地面が盛り上がり、インチャックの大群が地面から顔を出した。まるでモグラ叩きのゲームの様に、顔を出しては引っ込み、直ぐに違う場所に現れるインチャックの群れに、

『キヤアアアア!』

プリキュア達は、地面から現れるインチャックの群れを前に、悲鳴を上げながら逃げ回り、慌ててインチャックに丸飲みされた七人に近付き、ムーンライトがブロッサムを背負い、マリンをサンシャインとアクアが、ベリーをピーチとパインが、レモネードをドリームとルージュが、メロディをリズムとブルームが、ピースをハッピーとエコーが、マーチをビューティとサニーが、肩と足を掴み、一同は悲鳴を上げながらインチャックから逃げ回った。

「「こつちに来ないでええええ!」

「ウフフフ、ちよつと楽しいかも!」

「楽しくないわよおおお！」

『キヤアアア！』

半泣きしたエコーが、少し楽しそうなミントが、そんなミントを呆れながらローズが、そして悲鳴を上げたプリキュア達と妖精達が、必死に逃げ回り続けた。ただ一人、インチャックが全く近寄らないモグロスは、プリキュア達が逃げ惑う姿を他人事の様に見物し、その場で飲み物をゴクゴク美味しそうに飲みながら寛いでいた。飲み物を飲み終えたモグロスは、

「おやおや、みなさん大変そうですねえ？」

「やかましい〜！大体、何であんたは魔物に全く襲われないのよおおお？」

ブラックはインチャックから逃げ回りながら、他人事の様に見て、目を吊り上げ、指さしながら文句を言う、モグロスは何かの小瓶をスーツから取り出した。

「わたくし先程足元の周囲の地面に、インチャックが嫌うこの薬品を地面に撒いて置きましたので、わたくしの側にはインチャックは寄って来ないですよ・・・オ〜ホッホッホッホ」

『早く言つてええ！』

一同は、愉快そうに笑うモグロスを見て、思わず同時に同じような仕草でモグロスに

抗議した・・・

## 2、魔界シンδροーム

何とかモグロスの側に逃げ延びた一同は、疲れ切った表情で荒い呼吸をしていた。ブラックは息を整えながら、恨めしそうにモグロスを指差し、

「ハア、ハア、ハア・・・あんた、さつきから私達をからかって楽しんでない?」

ブラックにジト目で睨まれたモグロスは、両腕を前に突き出して両手を左右に振り、「とんでもございません。わたくしは、みなさんのお役に立てればと、こうしてやって来ただけでございます」

「とてもそうは見えないんですけどお?」

『ウン』

「それは困りましたねえ・・・」

ブラックが再びジト目でモグロスを見ると、他のプリキュア達と妖精達も同時に頷いた。一同は、ますますモグロスの事を胡散臭そうに感じて居た。モグロスは一同の顔を見渡すと、まだ頭を抱えて魔界怖いと呟き続けるベリー達を見た。

「それはそうと、その方々は、どうやらインチャックに飲み込まれた影響で、魔界シンδροームに掛かったようですね」

『魔界シンドローム!?』

プリキュア達は、モグロスが発した魔界シンドロームという、聞いた事が無い言葉に思わずオウム返しで呟いた。モグロスは頷き、

「ハイ、まああなた方にも分かるように簡単に申し上げれば、魔界恐怖症に掛かったとでも言えば、みなさんにも分かりやすいでしょうか？見たところ症状も軽そうですね、魔界から出れば時期に治りますけど、魔界に居る間は、このままでしょうなあ」

『エッ!?!?!?!?!』

モグロスの話を聞き、一同は思わず驚きの声を発し、直ぐに沈黙した。これからカイン達との戦いが控えている中で、七人のプリキュアが戦線を離脱するのは、一同に取ってかなりの痛手だった。更には、彼女達を庇いながらでは、この大人数でさえ不利に成りかねなかった。ブラックは困惑顔で仲間達を見つめ、

「どうする?..」

「ベリー達を、このまま此処に置いていく訳にも行かないし...」

「かといって、この場でカインの所に向かうメンバーと、彼女達の側に残るメンバーを分散させるのも...」

ピーチとホワイトも、困惑顔でどうしたものかと悩んだ。魔界の事を詳しく知らない現状で、人数を二手に分けるのは得策とも思えなかった。そんなプリキュア達が思案す



る様を、ニヤケ顔で見ているモグロスは突然笑い出し、

「オ、ホツホツホツホ！あなた方とお近づきになったのも何かの縁ですし、わたくしがお知恵をお貸し致しましょう。この魔界には、癒しの泉と呼ばれる、癒しの大樹から恵みの水を与えられし聖地があるのです」

『癒しの泉と癒しの大樹!?!』

プリキユア達は思わずハツとした。その言葉には聞き覚えがあつた。和解したニクスとリリスが言っていた事を、一同はハッキリと覚えていた。ブラックはホワイトに話し掛け、

「癒しの泉と癒しの大樹って、ニクスとリリスが話してたよねえ?」

「エエ、彼女達はそう言ってたわね」

「確か、傷付いた魔物を癒すとか言ってるわ」

ホワイトとアクアも頷き、モグロスが話したのは、ニクスとリリスが言ってる場所と間違いないであろうと一同に語った。モグロスは何度も頷き、

「ほほう、ご存知でしたか・・・癒しの泉は、傷付いた心の傷をも治すと言われておりますよ」

「本当!?!じゃあ、そこに連れて行けばベリー達は治るって事?」

ブルームに聞かれたモグロスは、再びコクリと頷いた。

「ハイ！癒しの泉に頭から浸かれば、彼女達の症状は治癒される事でしょう」

「その癒しの泉は何処にあるのかしら？」

「場所を知って居るなら私達に教えて」

ミントとイーグレットに聞かれたモグロスは、プリキュア達の顔を見渡し、

「癒しの大樹をご存知なあなた方ならお分かりでしょうが、あそこに、他の樹木より一際大きな大樹があるのがお分かりになりますか？あれこそが癒しの大樹でございます」

モグロスが指さした方向に、プリキュア達の視線が、一際大きな大樹へと向けられた。モグロスが言う様に、他の樹木からは何処か不気味さが感じられたが、青々と生い茂る癒しの大樹からは、見ているだけで力を与えられるかのような気さへして来た。

「確かに、あの大樹を見ていると、魔界に來ている事を忘れる様な、とても穏やかな気持ちになりますね」

ビューティは穏やかな表情で、癒しの大樹を見た感想を述べた。ブルーの話によれば、この魔界にもマザーラパーパあり、癒しの大樹がそうだと聞いたのを思い出して居た。確かにあの場所に行つて、癒しの泉にベリー達を頭から浸からせれば、ベリー達七人は魔界シンドロームから解放され、元に戻るかも知れなかった。胡散臭いモグロスの話ではあるが、遠回りになつてもモグロスの言う通り、癒しの泉を経由する事が最善策ではないかと思えた。ドリームは、ベリー達七人を見ると、

「なら、行くしかないね」

「エエ、みんな、癒しの泉に行きましょう」

『ウン』

ムーンライトの言葉に一同も同意し、プリキュア達は癒しの泉へと立ち寄る事を決めた。一同が出発準備をしていると、モグロスがプリキュア達を呼び止めた。

「お待ちください！魔王さんの件をお忘れなく・・・魔王さん、折角記憶の手掛かりが得られる機会を、あなたは棒になさるおつもりですか？」

「ウツ!？」

モグロスの話を聞き、魔王は思わず言葉に詰まった。自分の記憶を知りたがっている魔王に取って、モグロスの話は興味を惹かれていた。魔王を見守って居るプリキュア達だったが、魔王の記憶に関する事ならば、自分達が口を挟むよりも、魔王自身が自分で決めるべきだと思え、魔王の言葉を待った。魔王は唸りながら考え、悩みに悩んだ末、モグロスを信じて、一緒に自分の事を知って居る人物に、会いに行くべきであろうと結論を出した。魔王は、目付きを鋭くしてモグロスを睨み、

「嘘だったら・・・分かっているカゲなあ？」

「怖い、怖い・・・大丈夫ですよ、わたくし、魔界の中でも正直者で通って居ますし、魔王さんを騙そうだ何て、これっぽっちも思っ居ませんから・・・オッホッホッホ」

（その笑い声が、あんたの信用を落としてるんだけど・・・）

ブラックは、モグロスの不快な笑い声を聞き、思わず心の中で突っ込みを入れた。魔王は、プリキュア達に話し掛けると、

「ちよつと、この胡散臭い奴と行って来るカゲ」

「これは手厳しいですなあ・・・オッホッホッホッホ」

モグロスは再び笑いだし、ブラックは嫌そうに変顔浮かべるも、魔王を心配して声を掛けた。

「分かった・・・けど魔王、魔界で私達と離れ離れになって、また私達と合流出来るの？」

ブラックに聞かれた魔王は、思わず笑みを浮かべると、

「カゲカゲカゲ、お前達の気配は分かるカゲ」

「そう・・・じゃあ私達は、ベリー達を癒しの泉に連れて行ってから、カインの所に向かうよ。きっとビートとも合流出来るだろうし」

「分かったカゲ」

ブラックの言葉に魔王が頷いた。リズムはビートの件を思い出し、モグロスに訴えるように話し掛けると、

「メロディ達の事で危うく忘れる所だったわ・・・ねえ、魔王はあなたと一緒に行くんだから、ビートが今何処に居るか教えて？」

「ハイハイ、そうでしたねえ．．．ビートさんは、ベレルさんとも合流し、魔王城と呼ばれる塔の前に居る筈ですよ」

リズムの問いかけに、モグロスは素直にビートが今居るであろう場所を教えた。一同は、モグロスが発した魔王城と言う言葉に敏感に反応した。

『魔王城．．．』

「そう固くならなくても大丈夫ですよ、何せ魔王城には今、主が居りませんから．．．オッホッホッホッホッホ」

モグロスは、何処まで真相を知って居るのか、愉快そうに笑い続けた。ビートの居場所も判明し、プリキユア達はそろそろ癒しの泉を目指して出発しようと話した。ハッピーは、魔王に近付くと、暫しの別れを惜しむようにハグし、

「魔王、気を付けてね?」

「オウ! みゆきも、お前達もなあ、美希達の事頼んだカゲエ」

「分かってる。じゃあ、私達先に行くね」

魔王は目を細めながら、プリキユア達と暫しの別れの挨拶をし、ブラックも魔王の言葉に頷き、プリキユア達は癒しの泉目指して歩き出そうとした。

### 3、モグロスの予言

モグロスは、歩き出そうとしたプリキュア達を慌てて呼び止めた。

「お待ちください!」

「何!? まだ何か私達に用があるの?」

モグロスにまた声を掛けられ、ブラックは、またかといった表情でモグロスに問うた。ブラックはどうもモグロスが苦手だった。丁寧な喋り方ではあるが、何処か人を小馬鹿にしているように受け取れた。だが珍しくモグロスは、ブラックとホワイトの顔を真顔で凝視した。

「キュアブラックさん、キュアホワイトさん」

「エッ!? 私達に何か用?」

モグロスに呼び止められたブラックとホワイトは、思わず変顔浮かべハモリながら問い返した。モグロスは、ジイイと二人の顔を見つめながら、徐に自分の顔を近づけると、ブラックとホワイトは、反射的に嫌そうに仰け反った。二人は戸惑いながら、

「な、何!?」

「キュアブラックさん、キュアホワイトさん、あなた方二人は、近い内にある選択をしなければなりません」

「エッ!?!」

モグロスが突然、自分達二人に予言染みた事を話し始め、ブラックとホワイトは困惑

した。

「あなた方二人は……この世界を滅ぼすか、それとも存続させるのか、その選択をあなた方二人は……選ばなければならぬのです！」

モグロスは二人を順番に指さして、意味深な発言をした。そんなモグロスの発言を聞いたブラックとホワイトは、返す言葉も無く思わず沈黙した。他のプリキュア達も、モグロスの言葉を呆気に取られて聞いて居たが、ブルームとサニーは思わず笑いだし、

「アハハハ、あんた何言ってるのよ？」

「ホンマやあ、何大げさな事ゆつとんねん？」

「ウンウン、本当だよねえ」

ドリームも苦笑しながら何度も頷き、モグロスの大仰な話に苦笑した。他のプリキュア達も思わず失笑していたものの、当のブラックとホワイトの二人だけは真顔だった。

(私達が……この世界を滅ぼす!?)

ブラックとホワイトの脳裏に、時の狭間での記憶が再び思い返されて居た。ブラックとホワイトは、時の狭間での記憶を断片的にしか覚えては居なかつたが、時折頭の中に忘れていた記憶が蘇ったかのように、二人はハッキリ時の狭間での記憶を思い出す事があつた。モグロスが言つて居たように、時の狭間でブラックとホワイトは、プリキュア達が敗北した世界を見た時、あろう事かその世界を終焉に導く、自分達二人の姿を見て

いたのだから・・・

（あれは、闇の神ブラックと光の神ホワイトじゃなかったの!? あれは・・・私とホワイトだつて言うの?）

（私とブラックに、そんな力があるとは思えないわ! でも・・・）

モグロスの話を聞き、困惑するブラックとホワイト、二人にもあの出来事が何だったのか、未だに良く分からなかった。モグロスは、困惑するブラックとホワイトの顔を見て、帽子を深く被り直すと笑い出した。

「オッホッホッホッホ! まあまあ、ブラックさん、ホワイトさん、そう固くならず、お気楽になさつて下さい。あなた方がしたい通りにすれば良いだけですから・・・オッホッホッホッホ」

そんなモグロスの笑い声も、今のブラックとホワイトの耳には届かなかつた。二人は時の狭間で記憶を、何度も頭の中で思い描いていた。ルージュはモグロスを睨み、「あんたが、ブラックとホワイトに変な事言うからでしょう?」

「オッホッホッホッホ、それは失礼いたしました。さあ魔王さん、そろそろ出掛けましょうかねえ?」

ルージュがモグロスに突っ込みを入れ、モグロスは愉快そうに笑い、魔王にそろそろ出掛けようと話し掛けた。魔王は頷くと、一同に話し掛けた。



「じゃあ、行つて来るカゲ」

「魔王、気を付けて！」

「ちゃんと戻つて来てよ」

ピーチとハッピーは、心配顔で魔王に声を掛けるも、魔王は元気そうに大きな声で明るく振舞い、

「オオ！お前達もなあ!!」

魔王は宙返りを何度かしながら、モグロスと共に去つて行つた。二人を見送つたプリキュア達も、そろそろ癒しの泉に出発しようと話し合うも、ブラックとホワイトの心は、此処にあらざといつた感じだった。ルミナスは心配顔で、

「ブラック、ホワイト、大丈夫ですか？」

「ブラック、ホワイト、私達もそろそろ出発しましょう」

ルミナスとムーンライトに話し掛けられた二人は、ハツと我に返り、二人は先程のモグロスの話を、全く気にして居ないように明るく一同に話し掛けた。

「じゃ、じゃあ、癒しの泉に向かつてえ．．．レッツゴー！」

「み、みんな、行きましょう！」

ブラックとホワイトは、動揺して居る事を胡麻化すように、ブラックは率先してプロッサムを背負い、ホワイトはマリンを背負つた。ミューズはそんな二人を見て小首を

傾げ、

「ねえ、何かあの二人変じやない?」

「シッ!あのモグロスに変な事言われて、二人も戸惑って居るのよ。私達に遠慮して、誤魔化して居るようだし、気付かない振りをしてあげましょう」

アクアはミューズの背を軽く押し、このまま気付かない振りをしてあげようとブラツクとホワイトを労わった。ピーチとパッションはベリーを、ローズとミントがレモネードを、ブライトとウインデイがメロデイを、ブルームとイーグレットがピースを、ルミナスとムーンライトがマーチを、それぞれ両肩と両足を掴んで抱え、一行はモグロスに教わった癒しの泉へと歩き出した。

一方の魔王……

むさ苦しいモグロスとの二人旅の道中で、些かご機嫌斜めではあったが、自分の記憶を得られる為ならば、そう思つて珍しく我慢をしていた。モグロスは、そんな魔王を見て口元に笑みを浮かべると、

「そうそう、プリキュアのみなさんといえば、目的地の癒しの泉に入ったら、きつと開放的になるでしょうなあ」

「それはどういう意味カゲ?」

モグロスが発した言葉の意味が分からず、魔王は不思議そうに問い返した。モグロス

は口をニヤリとさせると、

「実は、癒しの泉と呼ばれては居ますが、要は人間界で言う所の温泉のようなもの何ですよ・・・癒しの大樹から流れ落ちる水と、地下深くに煮えたぎる灼熱の地層が、絶妙な融合を遂げた場所、それが癒しの泉なのです。」

「だから、どういう意味・・・」

魔王が更にモグロスに聞こうとするのをモグロスは遮り、小声で魔王に話し掛ける  
と、

「此処だけの話、つまり温泉に入るのに、プリキュアさん達があの衣装のまま入って居たら・・・衣装が邪魔になるとお思いになりませんか？皆さんもきつと開放的になって、ピチピチのお肌丸出しで入って居るんじゃないかと思ひましてねえ・・・オウホツホツホツホ」

モグロスは、自分に付いて来た魔王をからかう様に魔王に告げると、魔王はソワソワして背後を何度も振り返った。魔王の心の中で、自分の記憶とプリキュア達の裸体姿が葛藤し、呆気なく自分の記憶は片隅に追いやられ、プリキュア達が癒しの泉に浸かりながら、ウインクして魔王を手招きする姿が、頭の中一杯に描かれ、魔王はデレデレした表情になった。

「やっぱり・・・みゆき達と行くカゲエエエ」

魔王は、元来た道を戻ろうとするも、モグロスは魔王の身体を右手で掴んで引き留めた。魔王は不服そうに、

「やつぱりこんなむき苦しい奴と、二人で行く何て嫌カゲエエエ」

「オッホッホッホッホ！おやおや、魔王さん、ホームシックに掛かってしまいましたかあ？仕方ありませんねえ．．．今回は魔王さんの為に、特別にキレイどころを用意致しますよう」

「ほ、本当カゲ!？」

「ええ。魔界にもキレイな魔族はいらっしゃるんですよ」

魔王は、魔界のキレイどころと聞けば、高音町であったニクスとリリスの姿を思い出して居た。確かにニクスとリリスは、人間界の基準で言ってもかなりの美人だった。

「ニクスやリリスみたいな感じカゲ?」

「ほほう、ニクスさんとリリスさんをご存知でしたかあ?確かにあの二人にシーレインさんを加えた三人は、魔界の中でもトップレベルの美しさですからなあ．．．他には、凍える雪山の雪女さんとか、鬼族の娘達も中々キレイ所が揃って居ますなあ。でも．．．これからご紹介するのは、そんな皆様方に優るとも劣らない美女でございます」

モグロスの話を聞いた魔王は、思わずニヤケ顔になった。モグロスが紹介するキレイどころの美女は、そんな美女達に優るとも劣らないと言うのだから、魔王の期待は高ま

るばかりだった。魔王は周囲をキョロキョロしていると、モグロスは笑い声を上げ、  
「オッホッホッホッホ！魔王さん、恥ずかしがり屋さんですので、私が魔王さんの背中を  
叩くまで、決して振り返ってはいけませんよお？」

「分かったカゲ！俺は優しいから、言われた通りにするカゲ」

魔王は、モグロスからの合図を今か今かと待ち侘びた。

（ニクスやリリスより美人カゲかなあ!?みゆきママン達みたいな熟女系も良いカゲ  
なあ・・・みゆき達みたいな美少女系も捨て難いカゲ）

魔王は、心の中で絶世の美女を勝手に想像し、デレデレした表情を浮かべた。そんな  
魔王の背中を叩くモグロスの合図があった。魔王は期待に胸を膨らませて、満面の笑み  
で背後を振り返ると、

「魔王ちゃん、お待たせえ！オッホッホッホッホ!!」

振り返った魔王が見たおぞましき姿・・・

モグロスは、何処から取り出したのか、黒髪で三つ編みのオサゲのカツラを被り、頬  
と口に分厚い紅色の化粧をして魔王にウインクした。魔王は、その気色の悪さを目にし  
て放心し、そのまま気を失って地上に墜落し、目をグルグル回して居た。

「おやおや、折角魔王さんのリクエストにお応えして差し上げたんですがねえ・・・オッ  
ホッホッホッホ！」

モグロスは、地面で気を失って、目をグルグル回す魔王を右手で掴み、笑い声を響かせながら、何処かへと去って行った。

第百二十九話：魔界の予言者再び

完

## 第三百三十話：竜王バハムート

## 1、パインと子竜

魔界にやって来た一同は、魔界の予言者を名乗るモグロスと出会い、その最中、ベリ、ブロッサム、マリ、レモネード、メロディ、ピース、マーチの七人は、魔界の魔物で、イソギンチャクに似たインチャックに丸飲みされた影響で、魔界シンドロームに掛かった。モグロスから癒しの泉に七人を浸からせれば、魔界シンドロームが治ると言われたプリキユア達は、七人を元に戻す為、癒しの泉目指して歩いて居た・・・

「ハア・・・何か中々距離が縮まらないよねえ？」

ブラックは、背中にブロッサムを背負いながら、中々癒しの泉に近付かないのを愚痴った。視界に移るのは、何処かおぞましい魔界の植物達だらけで、先程現れたインチャックのように、突然攻撃してくるかも知れない緊張感で、何時もより疲労して居た。「見える景色は何か不気味な植物ばかり・・・嫌になつてくるよねえ？」

「フッフ、ブラック、めげない、めげない、最初に出発した場所より、大分近づいて来たよ」

愚痴るブラックを励ますように、マリを背中に背負ったホワイトがブラックを励ま

した。ホワイトが言つて居るように、出発した時に見えた癒しの大樹の姿が、徐々に近の木々に遮られ、見えにくくなって来ているのは、癒しの泉に近付いて居る事を意味して居た。そんな中パインは、何処からか鳴き声が聞こえた気がして、思わずその場に立ち止まった。

「みんな、ちよつと待つて！」

「パイン、どうかしたの？」

「何か気になる事でもあるの？」

イーグレットとミュージズに聞かれたパインは、小さく頷くと周囲を見渡した。パインは声が聞こえて来た草むらを掻き分けると、額から角を生やし、緑色した肌を持つ小さな三匹の小鬼が、何かを囲んで虐めている姿が目に入った。パインは思わず顔を顰め、「虐めちゃダメでしょう?・・・メッ!」

パインが小鬼を叱ると、パインに気付いた小鬼達は、慌てて何処かに逃げ去った。パインは、小鬼達に石を乗せられてもがいている黒いトカゲのような生き物から石を取り除いて上げた。トカゲはもがきながら体勢を立て直すも、パインを警戒しているようだった。パインはキルンを呼び出すと、トカゲのような生き物に話し掛けた。

「大丈夫!? 私はキュアパイン! あなたを虐めていた虐めっ子達は逃げちゃったから、もう大丈夫だよ」



パインはそう言うと、トカゲのような生き物にニッコリ微笑んだ。右手の人差し指を近づけると、トカゲのような生き物は最初こそ警戒して居たものの、甘えるようにパインの人差し指に身体を摺り寄せた。

「助けてくれてありがとう、僕はダークドラゴン！この前生まれただけりなんだあ」

「エエエ!?ダークドラゴンちゃん?」

「ウン、そうだよ！それがどうかした?それと・・・僕ドラゴンだから、人の言葉が分かるし、人間語も話せるよ」

「そ、そうなの!?!」

パインは思わず驚いた・・・

何故ならダークドラゴンは、魔界に迷い込んだバッドエンドピースをアベルから庇い、その命を失ったと聞かされていたのだから・・・

「ね、ねえ、ひよつとしてあなたのお父さんって、同じ名前のドラゴンさん?」

「ウゥン・・・僕は良く分からないや、バハムートなら何か知ってるかも知れないけど・・・そうだ!ねえ、バハムートを見なかった?」

ダークドラゴンの赤ちゃんは、竜王バハムートの名前までも出したのだから、パインは再び驚いた。だが、ダークドラゴンはバハムートと逸れたようで、パインは動揺させまいと平静さを装った。

「私達は見なかったよ。そう・・・逸れちゃったのね？」

「ウン、バハムートを探して森の中を彷徨ってたら、三匹の小鬼が僕に悪戯してきたんだあ」

「そうだったの・・・じゃあ、私達と一緒に行かない？私達、癒しの泉に行く所何だけど、もしかしたら途中でバハムートさんに会えるかも知れないよ？」

「エツ!? パインは癒しの泉に行くの？僕とバハムートも癒しの泉に行く所だったんだあ・・・バハムートが、場所を覚えて置くと良いって連れて来てくれたんだけどさあ、エへへ、鳥に夢中になっちゃって、真似して羽ばたいたら、僕まだ飛べない事すっかり忘れちゃって落っこちちゃった。僕もパインと一緒に行くよ！もしかしたら癒しの泉に、バハムートが居るかもしれないし・・・」

パインに誘われたダークドラゴンは、パインと一緒に行く事に同意をし、パインの右手の人差し指を駆け上がり、腕、肩を通ってパインの胸元を這うと、パインの胸の谷間に身体を入れて、もがく様に態勢を変えて顔を出した。パインは顔を赤らめて恥ずかしそうにしながら、

「そこに居ても良いけど・・・あんまり動いちゃ駄目だよ？くすぐったいから」

「フーン・・・分かったよ」

ダークドラゴンは頷き、パインは仲間達の下へと戻った。パインからダークドラゴン

の事を聞き、ブラックは、パインの胸の谷間から顔を出した、ダークドラゴンに顔を近づけた。

「この子・・・バッドエンドピースを庇って亡くなった、ダークドラゴンの赤ちゃんのかなあ？」

「さあ!?この子にもよく分からないみたいだよ」

パインは首を傾げ、ブラックもそれ以上聞く事を止めた。ブラックはダークドラゴンに笑顔で話し掛け、

「そっかあ・・・何はともあれよろしくね」

「ウン、よろしくね」

「エッ!?!りゅ、竜が人間の言葉を喋った?」

「そりやあドラゴンだもん、喋るよ」

ダークドラゴンが当たり前のように人語を話し、ブラックは変顔浮かべながらホワイトに話し掛けた。

「ホワイト・・・竜って喋るの?」

「私に聞かれても・・・困るけど」

ホワイトも困惑顔を浮かべ、パインは苦笑した。こうして一行は、魔界で出会ったダークドラゴンの赤ちゃんを連れ、再び癒しの泉目掛け歩き出した。途中で何度か魔物

達に遭遇したものの、何故か魔物達は逃げるように去って行った。ホワイトは眉をしかめ、

「何か妙ね？」

「ウチらにビビってるん tochやうの？」

「なら良いけど・・・油断はしない方が良いわよ」

サニーが右腕で力こぶを作りながらニンマリ笑うも、ブライトはそんなサニーを窘めた。

双児宮・・・

アベルの下に、続々と配下の魔物達から連絡が入って居た・・・

「何だど!?プリキュアが大人数で魔界に乗り込んで来ただど?」

「ハ、ハイ・・・奴らは癒しの泉の方向に向かってるとか・・・如何致しましょう?」

「知れた事、オメオメ魔界に乗り込んで来た事を、この俺自ら後悔させるまでよ」

アベルは、自ら出向いてプリキュアを迎え撃つべく、出撃しようとしていると、カインからのテレパシーがアベルに届いた。

(待て、アベル)

(カインか・・・まさか、プリキュアを魔界に誘き寄せたのはお前か?)

(フツ、その通りだ！エーテルダークネスで消滅させてやろうと思ったのだが、奴ら意外としぶとくてなあ・・・魔界に五人程招待してやった。奴らをこの十二の魔宮に誘き寄せ・・・)

(五人!?待て、カイン！一体何を言っている？プリキュア共は、数十人の群れでこの魔界に乗り込んで来たよ、我らの配下の者達から、次々と連絡が入って居るのだぞ)  
(何!?)

このアベルの報告には、さしものカインも驚きの声を発した。数人のプリキュアを魔界に誘き寄せ、この十二の魔宮に連れて来て、ルーシエスが施した封印を解く事に利用しようとして居たカインであったが、その目論見を、プリキュア達に逆に逆手に取られた事を知った。

(成程・・・奴らの中にも中々の知恵者が居るようだなあ)

(感心している場合じゃないぞ、カイン！数十人ものプリキュア達を、この魔宮に近づけさせるのは不味い)

(そうだな・・・で、プリキュア共は今何処に居るのだ?)

(今入った情報によれば、奴らは癒しの泉に向かっているようだ)

(ほう、それは意外だったなあ。直ぐにこの魔宮に乗り込んで来ると思ったが・・・そうか、癒しの泉か・・・クククク)

カインは、プリキュア達が癒しの泉に向かつて居ると知り、含み笑いを浮かべた。カインは、頭の中で癒しの泉周辺の情報を整理すると、

（アベル、配下の者達に奴らをオークの森に誘導するように指示を出せ！見事オークの森にプリキュア共を誘い出した者には、褒賞を与えると伝えれば、妖精共も協力するだろう）

（オークの森だど!? そう易々あいつらが上手く引つ掛かるか?）

アベルには、カインを出し抜いた程の知恵者が居るプリキュア達が、カインが言つて居るように、オークの森にむぎむぎ迷い込むとは思えなかつた。カインは含み笑いをしながら、

（クククク、奴らは魔界の地理に詳しくない。きつと奴らの方から痺れを切らして、魔界の者に接触を試みる筈だ。それを利用すれば、奴らは自らオークの森に赴く事になる。いかに奴らでも、オークの大群を前に何れは力尽き、奴らの慰め者になる。そこに数人のプリキュア共に助け舟を出してやれば、心が折れた奴らを屈服させるのも容易い）  
（ほう・・・まあ良いだろう、直ぐにそう手配する）

カインの提案にアベルも同意し、アベルは、配下の魔物達にプリキュア達をオークの森に誘導するように手配した。

## 2、癒しの泉

そんなカインとアベルの暗躍が、自分達の身に迫って居る事を知らない一行は、更に癒しの泉目指して歩を進めると、ようやく開けた場所に出た。大きな池のような場所からは、こんこんと湯気が沸き起こり、その池のような中心に、巨大な大樹が聳え立っていた。一行は大樹を凝視すると、大樹からは止め処なく水が流れて居て、此処が目的地である癒しの泉であると理解した。ドリームは癒しの泉に近付くと、右手を癒しの泉の中に入れてみた。まるで温泉の中に手を入れた様な心地良さで、ドリームは目を見開いて驚き、

「ウワアア!?!みんな、この泉、温泉みたいだよ?湯加減もちょうど良いし!」

『温泉!?!』

ドリームからの報告を聞き、一同は思わず驚きの声を発した。癒しの泉が温泉だったとは、モグロスは一言も言っただけで居なかった。ルージュとリズムが泉に手を入れてみると、

「確かにドリームの言う通りだね・・・泉に入れた手が、何かスベスベするわ!」

「エエ・・・温泉のようだし、確かにあのモグロスっていう人の言う通り、メロディ達を元に戻す効果がありそうな感じね!」

「じゃあ、此処が癒しの泉で間違いなさそうだね!」

ドリーム、ルージュ、リズムの報告を聞いたブラックは、目的地の癒しの泉に着いた事で、ホッと安堵した表情を浮かべた。周囲を見渡して見るも、自分達以外に人影も見えないようだった。ブラックは安堵して、

「フウ・・・取り敢えずプロツサム達を下ろそう」

さすがに七人を運びながら歩いて来て疲れたのか、ブラック達はベリー達七人を下ろした。ホワイトとムーンライトは、癒しの泉の深さを確認するように、そのまま癒しの泉の中へと入って行つた。一步一步用心しながら周囲の深さを探る二人だったが、全員が入つても大丈夫な範囲は、膝ぐらいまでの深さで、正に露天風呂に入つて居る感じだった。ホワイトは一同に微笑みながら、

「どうやら深さも問題ないみたいよ」

「後数人泉の中に入つて来て、私達がベリー達を受け止めるから」

ムーンライトに呼ばれ、ブラック、ブルーム、ルージュ、アクア、ピーチが癒しの泉の中に入り、その他のメンバーがベリー達を抱えて癒しの泉まで運び、ゆつくりとブラック達と共に泉の中へと入って行つた。ベリー達の背中を支えて座らせると、ゆつくり七人の頭の上から癒しの泉を掛けた。すると、魔界怖いと呪文のように呟いていた七人が、次第にほのぼのとした表情になり、呟くのを止めて行つた。ルミナスは効果を実感し、



「何だか、癒しの泉に入った効果が、早速出ているみたいですね？」

「ウン、何だか段々幸せそうな表情になってるよね」

ルミナスの言葉にミューズも同意した。ローズはやれやれと言った表情で、

「此処まで七人を運んで来たんだもの、効果が無かったらくたびれ損だったわ」

「そうね・・・見て、ベリー達の表情が・・・」

パッションが七人を指さすと、一同も七人を見つめた。七人の表情が、見る見る気持ちよさそうな顔付きになっていった。マリンは生きかえったかのように顔を何度もバシバシ洗い、

「プハア！最高!!」

「本当ですわねえ、何だか温泉に入っているみたいですよ」

マリンとプロツサムが、幸せそうな表情でくつろぎ、ベリーも両腕を上げて伸びをし、「ウーッン！身体に残っていた生臭さもほとんど消えて、気分爽快って感じよわねえ？」

「本当、本当、いやあ温泉何て久しぶりい」

「フ、生きかえりますよわねえ」

ベリーの言葉に、メロディとレモネードも同意して癒しの泉を満喫した。ピースはマーチとお湯の掛けっこをしてハシヤギ、

「それえ！エへへ、温泉最高！」

「やったねえ．．．それええ！」

「「「「「気持ち良いいいいい！」」」」」」

七人が癒しの泉を満喫している姿を見た一同、ブライトとウインディは少し呆気にとられ、

「あなた達．．．呑気なものね？さつきまでと大違い」

「本当、さつきまでとは別人のようね」

「ほな、ウチも癒し泉を満喫しよかあ．．．それええ！」

サニーはそう言うのと、仲間達に癒しの泉を掛けてはしゃいだ。ブラックやブルーム、ドリームやピーチ、ハッピー達も仲間に加わり、一同で癒しの泉の掛けっこが始まり、一同の衣装が水浸しになっていった。パインの胸の谷間から、そんなプリキュア達を見ていたダークドラゴンは、泉の岸边に真つ赤な花が咲いているのを見つけた。

「ねえパイン、その花から暖かい風が出て無いかなあ？」

「エッ!．．．本当だ、近付くと暖かいかも」

パインは赤い花に近付くと、ダークドラゴンが言う様に、赤い花から暖かい風が発せられて居た。

「みんな、濡れた服は、あの花の前で乾かすと良いよ。バハムートに聞いたんだけど、あの花は温花って言って、よく分からないけど、地面の熱を体内に取り込んで、暖かい風

を吐き出すんだってさあ」

「そうなの?でも、本当の温泉に入つて居る訳じや無いし、服を脱いで入るのはちよつと・・・此処は魔界だから、用心しないと・・・」

パインがそう言い掛けて、一同に同意するように視線を向けると、ベリーは何時の間にか衣装を脱いでいて、岸に脱いだ衣装を置いてリラックスして居た。そんなベリーを見て、パインの目が思わず点になった。パインは困惑気味に、

「ベリー・・・」

「大丈夫、大丈夫、それにあの怪物の中に居た時、粘液で身体中ベタベタになって生臭く気持ち悪かったし、衣装の下もキレイにしなきゃねえ」

「そ、そう・・・」

ベリーはそう言うのとパインにウインクし、パインはただ苦笑するのみだった。マリノもベリーの言葉に同意し、泉の中で衣装を脱ぐと、

「そうそう!コフレ、あんたあたしの衣装乾かしといてよ」

「エエエエ!?な、何でボクがそんな事をしないとならないですかあ?全く、マリノはパートナーを何だと思つてるですつ?」

マリノはコフレを呼ぶと、コフレ目掛け脱いだ衣装を投げた。コフレは反射的にマリノの衣装を手に取り、ハツとしたように文句を言うも、マリノが言う通り渋々ながら、温

花の前にマリンの衣装を並べた。それを見ていたシプレは、ブロッサムの前に進んで移動すると、

「ブロッサム、ブロッサムの衣装も乾かすですう」

「シプレ、良いんですかあ？……ありがとうございます、お願いします」

「ハイですう」

シプレはニコニコしながらブロッサムが脱いだ衣装を手に取り岸に移動し、ついでに置いてあったベリーの衣装も手に取って温花の前に並べた。

「シプレ、あたしの衣装まで乾かしてもらってありがとうございます」

「どう致しましてですう」

渋々マリンの衣装を並べるコフレと、進んでブロッサムとベリーの衣装を並べるシプレを見ていたポプリとキャンデイも、二人の真似をしようとサンシャインとハッピー達の服を乾かそうとした。

「マーチ達の衣装はキャンデイが乾かすクルウ」

「エエエ、それじゃキャンデイに悪いよ」

「ウウウ……キャンデイもお手伝いしたいクルウウウ！」

マーチは遠慮するも、褒められたいキャンデイは頬を膨らませて手伝いと騒ぎ、マー

チはピースと共に、申し訳なきようにキャンデイに衣装を手渡した。

「ゴメンねえ・・・じゃあお願い、キャンデイ」

「ありがとう、キャンデイ」

「クウウルウ」

キャンデイは役に立てた嬉しさと満面の笑みを浮かべ、温花の前に移動した。ポプリもサンシャインに衣装を乾かしたいと進言するも、サンシャインは戸惑いながら岸まで上がり、ポプリの頭を撫でると、

「ポプリ・・・気持ちだけ受け取っておくよ」

「イヤでしゅーイヤでしゅー！ポプリは、サンシャインの役に立ちたいでしゅー！！」

「ポプリ・・・分かった！」

サンシャインは、ポプリのいじらしさに目をウルウルさせると、その場で衣装を脱ぎ始めた。ドリーム、ミント、ピーチは、慌てて岸に上がると、ドリームはココの目を、ミントはナツツの目を、ピーチはタルトの目を両手で隠し、ミューズはコフレの目を塞いだ。シフォンは、そんな一同を見て楽しそうに見えたのかハシヤギ出し、

「キュアキュア〜プリプ〜！！」

『エツ!?エエエエ?キヤアアアアアアアアアア!』

シフォンの両耳がピクピク動くと、衣装を着ていたプリキュア達は宙に浮かび上がる

と、一同の衣装はまるで意識を持つて居るかのようになり、一同の身体を離れ、温花の前に並べられた。衣装を剥ぎ取られると、一同はそのまま恥ずかしそうに癒しの泉の中に飛び込み、顔を赤らめた。ココとナッツは、慌てて人間姿に変化すると、ココはメツプルとフラツピとコフレを、ナッツはタルトとエンエン、グレルを両脇に抱え、逃げるように慌ててその場を離れた。ピーチは恥ずかしそうにシフォンを見つめ、

「もう、シフォン！こんな悪戯しちや、メツでしよう？」

「キュア〜！」

ピーチに注意されるも、シフォンは嬉しそうにハシヤギ、パツシオンは溜息を付くと、「ハア・・・此処に魔王が居なかったのだけは、不幸中の幸いなね」

『確かに』

パツシオンの言葉に、その場に居たプリキュア達が全員同意して頷いた。ブラックは、泉で顔を洗うと、気持ち良さそうにホワイトに話し掛け、

「でも、何だかんだで、本当に良い湯加減だよねえ？」

「そうね・・・本当にみんな温泉に来たような感じだね」

「ハイ！みんなと温泉に来た気分になれる何て思ってもみませんでした」

ホワイトの言葉にルミナスも同意した。ブロッサムとマリンは、ピーチ、ベリー、パイン、パツシオンを凝視し、四人も二人の視線に気づいた。ピーチは困惑気味に二人に

声を掛け、

「ブロッサム、マリリン、どうしたの!？」

「羨ましい・・・」

ブロッサムとマリリンは、同じような表情でジイとピーチ達四人の胸を見てポツリと呟いた。ピーチ達は困惑の表情を浮かべ、

「「ハア!？」」

「その浮いてるお胸が、羨ましいですううう」

「あたし達も、そんなの体験してみたあい！」

（（また胸の話!））

ブロッサムとマリリンは、自分の胸を触ってトホホ顔を浮かべ、ピーチ達は胸の話題が出た事で、さりげなく浮いていた胸を泉の中に沈め、ダークドラゴンはパインの頭の上に移動して、癒しの泉を満喫した。ドリームも気持ち良さそうに両手を組んで伸びをすると、

「ウゥーン!こうしていると、加音町のスーパー銭湯にみんなが入った時や、この間のプリキュア合宿でもみんなと入ったけど、露天風呂は初めてだから新鮮で気持ち良いよねえ？」

ドリームの言葉にムーンライトも小さく頷き、

「確かに、戦い続きで疲れた身体を癒されたみたいね。でも……私達が魔界に来た理由を、みんな忘れて無いわよねえ？ベリー達も元に戻ったし、そうゆつくりも出来ないわよ？」

『ウン』

ムーンライトの言葉に一同が頷いたその時、突然大きな波でも起きたように、一同の身体が大きく揺らいだ。泉の反対側の方で、巨大な何かは泉の中からゆつくり姿を現そうとして居た。衣装を脱いでいたプリキュア達は、皆困惑顔で様子を窺って居ると、泉の中から巨大な白い竜が姿を現した。

### 3、プリキュアとバハムート

反対側は深いのか、予想だにしない突如現れた巨大な白い竜を前に、衣服を着て居ないプリキュア達は思わず悲鳴を上げた。

『キュアアアアアア！』

プリキュア達の悲鳴を聞いた人間姿のココとナッツは、表情を険しくして思わず顔を見合わせた。

「今の声は!?!」

「みんなに何かあったんじゃ？行ってみよう！」



ココとナッツは、プリキュア達の身に何か起こったと思うと、顔色変えて戻って来た。「みんな、どうしたんだ？」

「悲鳴を上げて、何かあったのか？」

人間姿のココとナッツに続き、タルト、メップル、フラツピ、コフレ、グレルとエンエンが駆け付けた。それを見た瞬間、プリキュア達は再び叫び、

『キヤアアア！エッチイイイ!!』

プリキュア達は、やって来たココ達の姿を見て恥ずかしそうに身体を隠し、ココ達は顔を赤くして狼狽えて居ると、巨大な白い竜はギロリとそんな一行を睨み付けた。

「うるさいぞおお！貴様らああ!!」

巨大な白い竜の一喝を受け、思わずプリキュア達は静まり返り、ココとナッツは驚いた拍子に妖精姿に戻り、右往左往しながらパニックだった。白い竜は、更にそんなココ達を見て一喝し、

「うるさいと言つて居るだろう！小童共おお!!」

白い竜の迫力ある一喝を受け、ココ達妖精は、思わず金縛りにあつたように硬直して、シンと静まり返った。白い竜は不快そうに、

「此処は、聖なる恵みの地・・・騒ぎ立てるとは何事だあ！この愚か者共おお!!」

『ゴ、ゴメンなさい・・・』

白い竜に怒られ、確かに白い竜に何をされた訳でもないのに、自分達が騒いで居た事に非があると思つた一行は、素直に白い竜に頭を下げて謝つた。ダークドラゴンは、白い竜を見ると目を輝かせ、

「ワアアア！やっぱりバハムートだあ！」

『エツ?!バハムート?』

プリキュア達は、パインの頭の上で喜ぶダークドラゴンが発した、バハムートと言う名と、ゆっくり近づいて来るバハムートの姿に、プリキュア達は驚愕した。ブルーの話やシーレインから魔界に付いて話を聞いた時、竜王バハムートの名は何度か聞いて居た。こうして目の前で目の当たりにすると、その迫力はかなりのものだった。古からの戦いを現すかのように、その身体は傷だらけで、口の上の角は途中で折れていた。近づいて来たバハムートは、ダークドラゴンを見ると目を細め、

「オオオ、何処に行つたかと思つたら、此処に居つたのか?」

「ウン!バハムートと逸れた後、三匹の小鬼に虐められて居たのを、パイン達に助けられたんだあ」

「何?!」

バハムートは、ダークドラゴンの話を聞いて居ると、パイン達に助けられたと聞き、プリキュア達をジロリと見つめ、一人一人見ていった。衣装を着て居ないプリキュア達

は、そんなバハムートの視線を受け、恥ずかしそうに泉の中に身体を隠しながらバハムートを見つめ返した。バハムートは、プリキュア達を見ていく内に、次第に穏やかな表情を浮かべた。

「成程・・・精霊にしては光の力が強いとは思って居た。お前達を見てみると、この角を与えたキュアマジシャンの事を思い出す。それに、何処と無くキュアマジシャンと同じ力を感じる」

「ハイ！私達は、キュアマジシャンと同じプリキュアと言う者です」

バハムートの話を聞いて居たホワイトは、正直に自分達がプリキュアである事を伝えた。

「ほう、あのキュアマジシャンと同じか・・・」

バハムートは、目の前に居る少女達がプリキュアだと知り、懐かしそうに目を細めた。一万年前、大いなる闇によって世界が闇に沈んだ事を愁い、魔法界から魔界に居る竜王バハムートに協力を求めに来たキュアマジシャンを、バハムートはメランのようにその力を試し、マジシャンの諦めない不屈の思いを認め、自らの角を折り、マジシャンに与えたのが、光の槍とも言われるミラクルドラゴングレイブだった。マジシャンは、バハムートに感謝を述べ、魔法界に戻り、大いなる闇の配下を蹴散らして魔法界に光を取り戻した。

「確か、大いなる闇と言う者と決着を付けると、人間界に赴く前にあったのが最後だったか……」

「ハイ……キュアマジシャンは、仲間達と共に、見事に大いなる闇を封じたのですが、大いなる闇の呪いを受け、数年後に亡くなったそうです」

「そうか……」

ホワイトの話を聞いたバハムートは、マジシャンを偲ぶように目を閉じた。その行為は、亡き戦友を偲んで黙祷しているようにプリキュア達には見え、バハムートの優しい人柄が伝わって来た。バハムートは再び目を開くと、

「だが、そのキュアマジシャンと同じプリキュアが、一体魔界に何をしに来たのだ？」

「実は……」

一同を代表し、ムーンライトがバハムートに魔界に来た理由の説明を始めた……

自分達の住む世界を、何度も危険な目に合わせ、四つ葉町に再び破滅の光エーテルダークネスで攻撃しようと企むカインの陰謀を阻む為にやって来た事を伝えた。バハムートは思わず唸り、

「ウゥゥム……カイン、ゼガンの亡霊がなあ……あやつのだ、何か企んで居るのは間違いないだろう」

「ハイ！ですが、先に魔界に来てる私達の仲間に、協力してくれている魔界の人も居るん

です。シーレイン、ニクス、リリス、ベレル」

「それに、モグロス……って人は、何か私達をからかっているようだったけど」

メロデイの話に続き、ブラックは変顔浮かべながらモグロスの事を伝えた。バハムトはモグロスの名を聞いて驚き、

「シーレインやベレルならば、然もあらんとは思ったが、あのモグロスまでもがなあ……あやつが興味を持つのは……人の心！お前達の心に、何か興味を覚えたのかも知れないなあ」

「だから、私達に協力してくれたと？」

モグロスの顔を思い描くと、ブラックはどうも変顔を浮かべてしまった。人を小馬鹿にしたような仕草や喋り方、だが、自分達に癒しの泉の情報を与えてくれたのは確かだった。ブラックの言葉にバハムトは首を捻り、

「あいつの事だ、協力と言っても……まあいい、お前達が魔界に來た理由は分かった。ダークドラゴンの件、我からも礼を言わせてもらおう」

「い、いえ」

パインは、緊張の面持ちで謙遜した。ブラックはバハムトに話し掛け、

「アッ!? 一つ聞いても良いですか？」

「何だ!？」

「その子、アベルと戦って亡くなった、ダークドラゴンの赤ちゃん何ですか？」

「何!?アベルとの戦いで奴は・・・そうか、それは知らなかった」

「ダークドラゴンは・・・」

ブラックは、簡潔ながら自分がバッドエンドプリキュア達から聞いた話を、バハムートに伝えた。アベルとの戦いの最中、魔界に迷い込んだバッドエンドピースを庇ってその命を落とし、肉体を失った後も、その魂は彼女達と共にあると知らせた。

「そうか、あのワイバーンがなあ・・・」

バハムートは、先代ダークドラゴンといがみ合って居たと言われるも、当のバハムートと先代ダークドラゴンであるワイバーンは、互いに実力を認め合って居た。ワイバーンが群れを離れたのは、竜王の称号は、バハムートこそ相応しいと考えて居たからだ。事実魔界を支配しようと目論む先代魔王ゼガンが、巨人族を従えて竜族に攻撃を仕掛けて来た時には、ワイバーンはバハムートに協力して、ゼガン達と戦って居た。

（魂になっても、認めた者の為に戦うとは・・・貴様らしいなあ）

バハムートは目を瞑り、魔界大戦で先代ダークドラゴンのワイバーンと共に、ゼガン達と戦った事を思い出し、哀悼の意を心の中で捧げた。目を開けたバハムートは、ブラックを見つめながら、

「先程の質問の答えならば、我ら竜族は、光、闇、炎、氷、風、岩、水の属性のどれかを

持つてこの世に生まれて来る。魔法界に住むアイスドラゴンのような例外も居るが、我らは基本一属性に付き、一体のドラゴンがその能力を持つて生れ出る。その竜が亡くなった時に、新たな竜がこの世に生を受ける。このダークドラゴンは、先代のダークドラゴンであるワイバーンが亡くなった為に、この世に生まれ出た」

「そうだったんですか・・・」

バハムートから、竜族の事を聞いたブラックは、少し愁いを帯びた表情で俯いた。だが、長い時間泉の中で身体を浸からせていた影響で次第にのぼせて来た。バハムートとダークドラゴンは不思議そうにプリキュア達を見て首を傾げ、

「どうした!? 顔が真っ赤だぞ?」

「ちよ、ちよつと泉に浸かり過ぎてのぼせて来て・・・」

「ならば泉から出れば良いだろう?」

「エエエ!? 無理です! だって私達裸何です!!」

パインは恥ずかしそうにしながら、バハムートとダークドラゴンに今の自分達の現状を伝えると、ダークドラゴンは再び首を傾げ、

「エエエ!? 僕達も裸だよ? 別に服何か着なくても平気だよ」

『平気じゃないの!』

プリキュア達は、困惑気味にダークドラゴンに説明を始めたものの、ダークドラゴン

は理解したのかしないのか、何度も首を傾げ、バハムートはそんな一同のやり取りを見て笑い出した。

「ハハハハ、ダークドラゴンよ、人間には我らに理解出来ぬ事もあるのだ。我らはそろそろ退散しよう」

バハムートの言葉にダークドラゴンは頷き、パインを見つめると、

「じゃあ、僕は行くよ。パイン、プリキュアのみんな、此処まで連れて来てくれてありがとう」

「ウン！ダークドラゴンちゃんも元気でね？」

パインとの別れを済ましたダークドラゴンは、バハムートの口を駆け上がり、折れた角に小さな手でしがみ付くと、

「バイバイ、プリキュアー！」

「ダークドラゴンを世話してくれた借り・・・必ず返す！さらばだ、プリキュア達よ!!」  
バハムートは、そうプリキュア達に告げると、背中に生えた大きな翼を羽ばたかせて大空へと舞った。プリキュア達は、飛び立ったバハムートの姿を、目に焼き付けるかのように手を振り続けた。

「ねえバハムート、パイン達大丈夫かなあ!？」

「ん!?確かカインの野望を阻止すると言って居たな・・・案ずるな、あの小娘共なら大丈夫



夫だ！それに、いざとなれば……」

バハムートは、プリキュア達を心配するダークドラゴンを安心させるように微笑んだ。

ダークドラゴンとバハムートと別れたプリキュア達は、再びココ達を遠ざけ、乾いた衣装を身に纏い、カインが居る十二の魔宮目指して歩き出した。

第三百三十話：竜王バハムート

完

## 第三百一十一話：前代未聞

## 1、オークの森

癒しの泉に浸かった事で、魔界シンドロームに掛かって居た、ベリー、マリィン、プロツサム、レモネード、メロデイ、ピース、マーチも元氣になり、一行は再びカインが居るであろう十二の魔宮を探そうと考えて居た。その十二の魔宮の一つ、天蠍宮を守護するベルルの使い魔キヤミーは、嘗てシャックスに協力し、プリキュアに呪いを掛けて苦しめたファレオから、ある報告を聞いて居た・・・

「エッ!? セイレーンやハミィが、魔界に来てるんですかニヤ?」

「ウム、ニクス様とリリス様と一緒に来たそうさ。更に、先程此処に来る前に出会った小鬼共の話によれば、どうやら容姿からいって、他のプリキュア達も魔界に来ているようだぞ?」

「ニヤンと?」

ファレオの話の聞いてキヤミーは、プリキュア達が魔界に来ていると知って驚いた。またみんなと会いたいとは思って居たが、まさかプリキュア達の方から、魔界に来るとは想像もしていなかった。ファレオは更に話を続け、

「小鬼の話によれば、プリキュア達は癒しの泉の方向に歩いて行ったそうだ」

「癒しの泉ですかニャ!? ニャンでみんなは、癒しの泉の事を知ってるんだらう?」

「さあなあ!? だがキャミー、お前も知って居る通り、癒しの泉の近くにはオークの森がある。プリキュア達が、誤ってオークの森に迷い込まなければ良いのだが・・・」

ファレオの話を聞き終え、キャミーはオークの姿を思い出し、思わず全身の毛が逆立ち、見る見る表情が凍り付いた。もしもプリキュア達が、誤ってオークの森に迷い込んで居たらと考えると、気が気ではなかった。

「ファレオ様、ちよつと出掛けて来ますニャ」

「フツ、プリキュア達が気になるのか? 分かった、行つて来るがいい」

「ハイニャ!」

キャミーは、ファレオに許可を貰うと、天蠍宮を後にし、何処かへと走り去った。

プリキュア達は、カインが居るであろう十二の魔宮を目指し歩き始めたものの、目印になるような物が見当たらず、森の中で困惑して居た。トホホ顔を浮かべたブラックは、

「ハア・・・ベリー達を元に戻す事や、バハムートに気を取られて居て忘れてたけど、こんな事ならモグロスやバハムートに、十二の魔宮の事聞いておけば良かったね?」

「そうね・・・でも、魔界にもモグロスやバハムートのように、私達に好意的にしてくれる人も居るし、何とかなるかも知れないよ?」

ホワイトはそう言うと、子供をあやす様にブラックの頭を撫でた。そんな一同の前を、一匹の魔物が横切ろうとして居た。小柄で、老人の様に白い顎鬚を蓄えた魔物は、何処か優しそうな出で立ちをしていて、ドリームは思い切つて声を掛けてみた。

「すいませ〜ん! 私達道に迷つちゃつて、教えて貰えませんかあ?」

ドリームが話し掛けると、魔物は立ち止まつてドリームを見つめた。魔物は蓄えた白い顎鬚を撫でながら、

「ほう・・・それはお困りのようじゃのう? 見たところ、わしと同じ妖精かのう? 見掛けぬ顔じゃが・・・」

「エエエ!? エエエと・・・」

「アツ、エエエと、私達、傷付いた仲間を治す為に、初めて癒しの泉に連れて来たんです」  
老妖精に問われたドリームが戸惑い、ピーチは慌ててドリームをフォローした。老妖精は納得したのか、何度も頷き微笑した。

「ほうほう、成程のう・・・で、何処に行きたいのかのう?」

「ハイ! 私達、十二の魔宮つて所に行きたいんですけど、知つて居たら教えて欲しいんですけどお?」

老妖精が教えてくれそうな雰囲気、ドリームはちよつと上目遣いでおねだり風に尋ねると、老妖精は微笑を崩さず、

「ほう、十二の魔宮に用があるのかい？さしずめ、ニクス様やリリス様に御用という所かのう？」

「そ、そんな所です・・・」

ドリームは、ちよつと動揺しながらも、老妖精に話を合わせた。老妖精は頷くと、  
「十二の魔宮なら知って居るよ・・・あの空を見てみるんじやー！」

『エッ!?!』

老妖精が北の方角を指さすと、プリキユア達は釣られるように反射的に北の空を見上げた。曇天で見えにくい、目が慣れてくると、天まで届きそうな何か黒い大きなものが見えた。老妖精は北の空を指さしながら、

「あそこに見えるのは、我らの魔王様が住むと言われる塔じやよ、その周囲に塔を守る様に建つて居るのが、十二の魔宮と呼ばれておる場所じやよ」

老妖精によつて、十二の魔宮の場所を教わり、プリキユア達はホツと安堵した表情を浮かべた。向かうべき場所にカインが居ると思うと、プリキユア達の瞳に闘志が宿った。老妖精は更に言葉を続け、

「あの森を抜けて行くと近道じやよ」

老妖精は、少し離れた川の向こうにある大きな森を指さした。何処か不気味な雰囲気を持つてはいたが、十二の魔宮の近道になるのならば、プリキュア達は教わった森を通つて行く事を決めた。ドリームは、老妖精に両手を振つて笑顔を見せ、

「色々教えてくれてありがとう！じゃあ、私達行くね・・・行こう、みんな！」

『エエ』

ドリームの掛け声に応え、プリキュア達は老妖精にお辞儀しながら、次々に川をジャンプして越えて行き、大きな森へと駆けて行つた。その姿を見届けた老妖精の顔に罅が入ると、先程の温和な表情は崩れ落ち、目が吊り上がった狡賢い表情に変化した。

「ケケケケケ、精々死ぬまでオークの森で、オークの子を産み続けるが良いさ・・・さて、アベル様に報告に行くか」

本性を現した妖精は、まんまとプリキュア達を罠に嵌め、報酬を得る為に、双児宮に居るアベルに会いに向かった。

老妖精に騙されたとも知らず、プリキュア達は魔の森、オークの森へと足を踏み込んだ。マーチは、この森に入ると思わず立ち止まり周囲を見渡した。

「何かこの森・・・見た事あるような？」

「マーチ、どうしました？」

「エツ!? ウウン、何でもない」

ビューティに声を掛けられ、ハッと我に返ったマーチは、ビューティと共に再び駆け出した。森の中から不気味な雄叫びと、何かを叩く音が周囲から響き渡り、その音が次第に近づいて来ているように感じられた。

「この声……まさか!? みんな、待つて!!」

『エツ!?!』

マーチは、周囲から響く不気味な雄叫びに聞き覚えがあった。嘗て、母のとも子、妹のはる、ひなを、欲望のままに攫おうとして居たある者達の事を……

「此処……間違いない! オークの森だ!!」

『エツ!?!』

マーチの叫びを聞き、プリキュア達の表情が凍り付いた……

嘗て、宝瓶宮の魔神シャックスの罠に嵌った事を思い出して居た。あの豚とゴリラが合わさったような、欲望丸出しの下品な魔物の巢に、自分達が足を踏み入れてしまったと聞かされ、表情を険しくした。次第に獣の咆哮は、自分達プリキュアを包围するように狭められて行った。ムーンライトは、一同に指示を出し、

「みんな、バラバラにならないように注意して!」

『分かった』

ムーソライトの指示の下、一同は四方からのオークの襲撃に備え、少し開けた場所です丸になる様に陣形を組み、妖精達を自分達の背後に庇う様に身構えた。

一方、プリキュア達をまんまと罠に嵌めた老妖精は、アベルからの褒賞を期待し、ほくそ笑みながら独り言を呟き、双児宮を指して居た。

「ケケケケ、相手は小娘共、ちよろいもんだぜ。さあて、アベル様はどんな・・・」  
「今の話、もつと詳しく聞かせるニヤ！」

「だ、誰だ!？」

老妖精の独り言に、何者かが割って入った。老妖精はハッと我に返り、辺りを伺いながら問うと、使い魔のキャリーが、森の中から老妖精の目の前にゆっくり現れた。

「フン、誰かと思えば使い魔か・・・使い魔如きがこの俺様に何か用か？」

「今、お前が言つてた事を、もつと詳しく話すニヤ！」

「ケツ、使い魔如きに話す事はねえ・・・消えな！」

老妖精はキャミーを威嚇するも、キャミーは一步も引かず、

「そうはいかないニヤ!話さないつて言うニヤら、無理やりにでも話させるニヤ!!」

「ケツ、使い魔如きにやられる・・・エツ!?エエエエ?」

老妖精はキャミーを見下して居た。使い魔如きに負けるとは考えて居なかったが、



キヤミーの背後で光る巨大な十四の瞳を見ると、思わず腰を抜かしてガタガタ震えだした。

「さて、喋る気にニヤつたかニヤ？」

キヤミーが老妖精を脅すと、老妖精は怯えながらコクコク何度も頷いた。

老妖精に騙され、オークの森に迷い込んだプリキュアという獲物を求め、オーク達は徐々に包囲を狭めて来た。円になって身構えるプリキュア達の前に、嘗てマーチの家族を捕らえようとした、豚とゴリラが合わさったような怪物オークが、地上から、木の上から、続々と姿を現した。プリキュア達の姿を見たオークの群れは興奮し、自らの胸を何度も叩いて雄叫びを上げ、見る見る股間を膨らませて行つた。プリキュア達は、その汚らしい行為に眉根を顰（ひそ）めた。

『ウオオオオオオ！オツホオオオオ!!』

興奮したオーク達が、鼻息荒くジワリジワリとプリキュア達にじり寄つて来る。そのオークからの不快なプレッシャーが、プリキュア達に浴びせられた。ムーンライトは、オークの反応が変わつた事に気付くと、

「みんな・・・来るわよー！」

ムーンライトの警告と共に、オークの群れが一斉にプリキュア達に襲い掛かった。ア

クア、ビューティは、オークに警告するかのようには、

「これ以上近付けば・・・プリキュア！サファイアアロー!!」

「頭を冷やして冷静におなりなさい！プリキュア！ビューティ・ブリザード!!」

水の矢の連射が、ブリザードが、オーク目掛け飛べば、ルージューはサニーに合図を送り、

「あたし達も負けてられないよ！プリキュア！ファイヤーストライク!!」

「ほな、ウチも・・・プリキュア！サニーファイヤー!!」

炎コンビの技が、オークの群れ目掛け飛んで行った。連射を終えたアクアは、

「それ以上近付けば・・・エツ!?!」

アクアは、思わず我が目を疑った。オークは怯むどころか、獲物を求めて我先にと奥からゾロゾロ現れてくるのだから・・・

プリキュア達は、不快な表情を浮かべながらも、そんなオーク達を更に迎え撃った。

「プリキュア！スパイラルスター・・・スプラ〜ツシュ!!!」

ブライト、ウインディが・・・

「プリキュア！ラブサンシャイン・・・」

「プリキュア！エスポワールシャワー・・・」

「プリキュア！ヒーリングプレア・・・」

「フレ〜ッッシュュ!!!」

「吹き荒れよ! 幸せの嵐! プリキュア! ハピネス・ハリケーン!!」

ピーチ、ベリー、パイン、パッションが・・・

「花よ、輝け! プリキュア! ピンクフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、煌け! プリキュア! ブルーフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、舞い踊れ! プリキュア! ゴールドフォルテバースト!!」

「花よ、輝け! プリキュア! シルバーフォルテウエ〜イブ!!」

ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムーンライトが・・・

「プリキュア! ハッピー〜・シャワー〜!!」

「プリキュア! ピース・・・サンダー!!」

「プリキュア! マーチシユートオオ!!」

「世界に響け! みんなの想い!! プリキュア! ハートフル・エコ〜!!」

ハッピー、ピース、マーチ、エコーが・・・

それでもオークは怯まなかった・・・

更に続々と奥から現れて、ブラックとブルームは、思わず嫌そうな表情を浮かべた。

「全く、何て数なのよ?」

「本当、次から次へと湧いて来て嫌になってくる・・・」

そう言いながらも、ブラックとブルームは、隣に居るホワイトとイーグレットに目で合図を送り、ホワイトとイーグレットは小さく頷いた。

「プリキュア！ マーブルスクリュー……マックス……!!」

「プリキュア！ スパイラルハート……スプラ……ツシュ!!!」

二組のプリキュアの掛け声と共に、必殺技プリキュア・マーブルスクリューマックスが、スパイラルハートスプラッシュが、オーク達目掛け放たれた。凄まじいエネルギーが、オーク達を一気に飲み込み闇に返した。だが、それでもオーク達は怯まない、本能の赴くまま、欲望の赴くまま、自分達の性欲を満たす存在であるプリキュア達を求め、後から後から現れ続けた。ローズは目を吊り上げ、

「いい加減、しつこいのよおおお！ 邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう！

ミルキイローズ・ブリザード!!」

「本当だよ……リズム、ミューズ、私達も……」

「OK！ メロディ！」

「プリキュア！ パッシュョナートハーモニー!!」

ローズとメロディ、リズム、ミューズの攻撃を受け、オークの陣形が少し変わった事に、プリキュア達は気付かなかった。オークは、まだあどけなさが残るミューズに狙いを付けた。五匹のオークが、大樹の上に移動したのを気付かせまいと、正面のオーク達

が自らの胸を叩いてプリキュア達の注意を引き付けさせた。五匹は木々を飛び、プリキュア達の頭上付近を見下ろせる位置に移動すると、一気に上から奇声を上げて飛び降りた。

「[[[[[[ウホオオオオオオ!!!]]]]」

『エツ!?!』

上空を振り返ったプリキュア達だったが、それは時既に遅かった。それを合図に、オーク達もプリキュア達目掛け襲い掛かった。ムーンライトは険しい表情で、

「誰でも良いわ! 妖精のみんなを保護して上げてええ!!」

「[[[[[[ハイ!]]]]」

ムーンライトの叫びに、直ぐにルミナス、ミント、パイン、サンシャイン、エコーが応じた。ルミナスはシプレ、コフレ、ポプリを、ミントはココとナッツを、パインはタルトとシフォンを、エコーはキャンディ、グレルとエンエンを抱きかかえた。サンシャインは、一同を守る様に、

「ルミナス、ミント、パイン、エコー、私の側に寄って! サンフラワー・プロテクション!!」

サンシャインは、サンフラワー・イージスの変則技であるサンフラワープロテクションで、ドーム型のバリアを自身の周囲に作り上げ、オーク達の猛攻を耐えしのいだ。

オークの上空からの奇襲を受け、陣形が乱れたプリキュア達であったが、それでも何とか戦い抜いた。しかし、数で圧倒的に優るオークを前に、次第に仲間達との距離が広まって行つた。メロディ、リズムと距離が離れたミューズの間を付き、一匹のオークがミューズに背後から襲い掛かった。

「エツ!? キャアアアアアア!」

『ミューズ!?!』

ミューズの悲鳴が周囲に響き渡り、プリキュア達が険しい表情でミューズの姿を目で追つた。そこには、一匹のオークがミューズを右脇に抱えて、獲物を捕らえた事を仲間に知らせるかのように、奇声を上げながら、森の奥にミューズを連れ去ろうとしている姿があつた。

『ミューズウウウウ!!』

プリキュア達が絶叫したその時・・・

『シヤアアアアア!!』

オークを威嚇するかのように、数体の獣の叫び声が、オークの森上空に響き渡つた。

## 2、大蛇の恩返し

オークの森の上空を、緑、赤、黄、青、紫、茶、黒の色をした巨大な七匹の大蛇達が、

旋回しながら飛び回り、プリキュア達と戦って居たオークは、大蛇のその巨大な姿に怯え、逃げ出し始めた。その中には、ミューズを攫ったオークも居たが、茶の大蛇はそれを見付けるや、急降下して木々を薙ぎ払ってオークを追い回し、ミューズを攫ったオークは、悲鳴を上げてミューズをその場に落として逃げ去った。メロディとリズム、ウィンディは、心配そうにミューズに駆け寄り、ミューズも三人に抱き付いた。ブラックは、呆然としながら上空を飛び回る大蛇を見つめ、

「大蛇!? どうしてここに?」

「みんなあー! 無事かニヤ〜!」

『キャミー!』

プリキュア達の耳に、見知った声が聞こえて来て、思わず一同はホツと安堵したような表情に変わった。緑の大蛇の頭に乗ったキャミーが、心配そうに一同に声を掛け、プリキュア達も無事な姿を知らせるように、キャミーに手を振った。震えるミューズを落ち着かせるように、メロディはミューズの頭を撫でながら、

「キャミー、どうしてオークの森に?」

「私達が魔界に来た事を知って居たの?」

メロディとリズムは、絶妙なタイミングで助けに来てくれたキャミーに感謝しつつも、まるで自分達プリキュアが、オークの森に居る事を、最初から知って居るかのよう

なキャミーの事を不思議に思い問いかけた。キャミーは、プリキュア達が無事なようであん心したのか、笑み交じりに二人の問いに答え始めた。

「フアレオ様に聞いたニヤ。プリキュアのみんなが魔界に来ていて、癒しの泉の近くに居たようだって、教えてくれたニヤ。でも、癒しの泉の近くにはオークの森があるから、みんながうつかり迷い込んだかも知れニヤいと思つて、大蛇達に頼んでみたニヤ。そうしたら大蛇達も、プリキュアのみんなどまた会いたいつて言つてくれて、キャミーに協力してくれたニヤ。ちようどみんなを探して居たら、みんなの事を騙した妖精と出くわして、その妖精を脅したら、みんなを騙してオークの森に誘導したつて聞いたニヤ」

キャミーの話を聞いて居たドリムは、見る見る困惑の表情を浮かべ、

「エエエ!?あの妖精さん・・・私達を騙していたの?」

「そうニヤ、でも、みんなを騙した妖精は、大蛇が懲らしめてくれたニヤ」

キャミーの話を聞いたプリキュア達は、自分達が老妖精に騙されてオークの森に誘き寄せられた事、大蛇達が助けに来てくれた事を知つた。

「そうだったんだ・・・ありがとう、大蛇!」

「みんなが来てくれなかつたらと思つと・・・本当にありがとう!」

メロディが大蛇達に両手を振り、ミューズは心からの感謝を表す様に、大蛇達に頭を下げた。他のプリキュア達も、大蛇に手を振りながら、



『ありがとう!』

『シヤアアボオオオ!』

大蛇達も、プリキュア達の役に立てた事を喜んで居るのか、目を細めて歌う様に喜びの声を発した。キャミーは更に話を続け、

「みんな、早く大蛇の頭の上に乗るニヤ! オークはまだ諦めてないニヤア!!」

『エツ!』

キャミーの忠告を聞き、プリキュア達は周囲に居るオークの状況を目で追った。大蛇に怯え森の奥に引き込んだかに思えたオークは、まだ諦めて居ないのか、プリキュア達の姿を木々の隙間から覗き見て居た。一同の隙があれば、先程の様に奇襲をして、プリキュア達を攫おうとしている魂胆が分かった。

「魔王様が張った結界は、オークの森上空には張られては無いニヤ。だから空からなら、オークの森から逃げ出す事も可能だニヤ」

『本当!』

キャミーから、オークの森からの脱出出来る唯一の方法を聞き、プリキュア達は安堵の表情を浮かべた。プリキュア達は遠巻きに様子を窺って居るオークを警戒しながら、続々と大蛇の頭の上に乗った。黒の大蛇の頭の上には、ブラック、ホワイト、ルミナスが、紫の大蛇の頭の上には、プリキュア5とローズ、ココとナッツが、黄の大蛇の頭の

上には、ピーチ、ベリー、パイン、パッション、シフォンとタルトが、青の大蛇の頭の上には、ムーンライト、プロツサム、マリン、サンシャイン、シフレ、コフレ、ポプリが、茶の大蛇の頭の上には、メロデイ、リズム、ミューズ、フェアリートーン達が、緑の大蛇の頭の上には、スマイルプリキュアの六人と、キャンデイ、グレル、エンエンが乗った。ブルームは、頭を差し出す赤の大蛇の頭の上に乗ろうとすると、

「シャアアアア！」

「エツ!?!」

突然赤の大蛇がブルームを威嚇し、ブルームは困惑した。直ぐにキャミーが赤の大蛇の言葉を通訳し、

「大蛇は、最初は姐さんからだつて言ってるニヤ」

「「「姐さん!?!」」」

ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインデイは、誰の事か分からず、同時に不思議そうに首を傾げた。再び赤の大蛇が声を発し、

「シャアアア！」

「姐さん、さあどうぞでつて言ってるニヤ」

キャミーは笑いを堪える様な表情で、イーグレットを見て声を掛けると、イーグレットは呆然としながら自分の指を差し、赤の大蛇は満足そうに頷いた。イーグレットは

ハツとすると、赤の大蛇と戦った時の事を思い出した。ブルームが最後に赤の大蛇を脅し、イーグレットは怒らせると怖いと言って居た事を・・・

「もう！あの時ブルームが変な事言うから、大蛇に誤解されたままじゃない!!」

「アハハハ・・・まあまあ、さつ、姐さんからどうぞ」

「ブルーム！」

ブルームにからかわれたイーグレットは、頬を大きく膨らませながらも、最初に赤の大蛇の頭の上に飛び乗った。プリキュア達と妖精達が、大蛇の頭に乗った事で、大蛇は目でオーク達を威嚇しながら、ゆっくり上昇を始めた。

『オオオオオオオ！』

オーク達は、オークの森の空高く上昇していく大蛇の姿を見ながら、悔しそうに咆哮し続けた。

双児宮・・・

アベルの下に、再び配下の者から連絡が入って居た。アベルは険しい表情を浮かべ、「何だ?!プリキュア共が七匹の大蛇を従えて、オークの森を抜け出したのだと?」

アベルには、何故大蛇達がプリキュアに協力するのか理解出来なかった。ベレル、ニクス、リリスの大蛇だけならば、三人の命を受けたとも考えられるが、生き残っている

七匹の大蛇全てが、プリキュア達に力を貸すなど想像して居なかった。配下の者は更にアベルに情報を伝え、

「しかも、どうやら大蛇を使って、空からこの魔宮に攻め込んで来るような勢いです。如何致しましょう?」

「大蛇めええ!知れた事、裏切り者の大蛇事、プリキュア達を消してしまえ!!ガルダ共を使つても構わん。空の魔物達を総動員し、数人のプリキュアを残す以外:プリキュア共を殺せえ!!」

「ハ、ハイ!」

アベルは、苦々しい表情で配下の者に指示を出した。アベルは不快そうに腕組みし、「カインめ、また裏を掛かれやがって:まあい、ガルダ共が相手では、いくら大蛇とはいえ、無傷で近付くのは不可能だ。そこを空と地上の魔物達で襲えば、奴らも今度こそ:」

アベルが言ったガルダとは、人間界という驚に似て居たが、その大きさは比べ物にならず、ジャンボジェット機並みの巨体を誇つて居て、その獐猛な性格は、大蛇に並び称される大空の支配者とも、一部の魔物には呼ばれて恐れられていた。アベルは、双児宮上空から聞こえてくる魔物達の咆哮にニヤリと笑み、

「さあ、プリキュア共よ:この十二の魔宮に来られるなら来てみるがいい!」

十二の魔宮の空を、怪鳥ガルーダの群れを始めとした空の魔物達が、プリキュアと裏切り者の大蛇を迎え撃つべく、続々と集結して居た。

そんな状況になっているとは、まだこの時プリキュア達は気づいては居なかった。オークの森上空に浮かび上がった七体の大蛇達、キャミーは改めてプリキュア達に話し掛けた。

「ところで、みんなはニャンで魔界に来たのニャ？セイレーンやハミイも来てるようだけど、別行動してるのかニャ？」

キャミーには、プリキュア達が魔界に来た理由がよく分からなかった。プリキュア達は、魔界と敵対する気は無いと言って居たのだから、メロディは少し愁いの表情を浮かべながら、

「ビートの事もあるけど、実は私達……」

メロディはキャミーに、カインが人間界に対し宣戦布告を行った事、配下の魔物達を人間界に差し向けた事、ピーチ達が住む四つ葉町を、エーテルダークネスという破壊兵器で消滅させようとした事、再びエーテルダークネスを起動させるのを阻止する為に、魔界に乗り込んで来た事を告げた。キャミーも薄々理解したようで小さく頷くと、

「ニヤるほど……それでその事をモグロス様に聞いたベレル様は、不機嫌そうに出掛

けて行つたんだニヤ」

「うん、ベレルもビートに協力して、シーレイン達と一緒にカインに立ち向かつてくれて居るの！」

メロデイが再びキャミーに大声で伝えた。キャミーは、改めて一同に問う様に、

「みんなは、これから何処に向かう気ニヤ?!」

「もちろん・・・カインが居る双児宮よ！」

ピーチが力強く返答し、プリキュア達が皆頷いた。一行は、カインとの決着を付けるべく、魔界に乗り込んできたのだから、キャミーは頷きながらも少し表情を曇らせ、

「でも、カイン様が双児宮の先に居たら、少し厄介な事になるニヤ」

「エツ!? キャミー、どういう事?」

キャミーの話聞き、ブラックは思わずキャミーに問い掛けた。キャミーは、その辺の事情をプリキュア達に知らせた。十二の魔宮は、元々魔王ルーシエスの居城を守護する名目で建てられた事、十二の魔宮は、結界の役割も果たして居て、如何なる者も十二の魔宮の結界を破らない限り、魔王城へは近づけない事、結界を破るには十二の魔宮を守護する魔神達を打ち破るか、あるいは認めさせる事を伝えた。キャミーは更に話はじめ、

「部外者であるみんなが、そのまますんなり魔王城に近づける事はニヤイと思うニヤ」

キャミーの説明を聞き、メロデイはビートの事を思い出して居た。ビートは、シーレイン達の協力の下、エーテルダークネスを発生させた塔の側から、人間界に居る自分達に連絡をしてきたのだから・・・

「じゃあ、ビートがルーシエスって人が住んでる場所の側に居たのは、ニクスとリリスと一緒にだったからって事？」

「そういう事ニヤ」

キャミーはメロデイに頷き、プリキュア達は、カインとアベルだけでなく、他の魔神達共戦わなければならない事を理解した。キャミーは再び一同に問い、

「みんな、それでも行くニヤ？」

『もちろん！』

キャミーの問い掛けに、プリキュア達は迷う事無く即答した。キャミーは頷き、大蛇達に話し掛けると、

「大蛇い！みんなを何としても十二の魔宮まで送り届けるニヤアア!!」  
『シヤアアアボオオオ！』

七匹の大蛇達は、分かったとばかり咆哮し、十二の魔宮目指して移動を開始した。だが、一行が目指す十二の魔宮の空を、魔物の群れが覆いつくして居た。

大蛇が近付いて来るのを見た魔界の魔物達が、遂に行動を開始した。魔物の群れの咆

哮が、十二の魔宮から響き渡り、徐々に一向に近付いて来た。

「みんな、大蛇から振り落とされないように注意してええ！」

ムーンライトが一同に大声で注意を促し、プリキユア達は、大蛇の頭の上という不安定な足場で、少しでも身体をしつかりさせる為、表情を険しくしながら体勢を低くして、大蛇の頭の上で身構えた。

「来るニャアアア！」

キャミーの叫びと共に、先ず真つ先に大蛇に向かつて来たのは、頭部は驚、身体は人型のタイプで、背中から翼を生やしたホークマンだった。ホークマン達は、それぞれ槍を手に持ち、そのスピードを活かして大蛇の周辺を飛び回り、槍で大蛇を突き刺して傷を付けて行った。更には、昆虫型の魔物である巨大な蜂や蛾、カマキリのような魔物が、双頭の頭を持った鳥系の魔物などが、容赦なく大蛇に攻撃を仕掛けて来た。大蛇達も、それぞれが得意とする属性の攻撃で迎え撃ち、炎が、水が、氷が、風が、雷が、岩が、闇が、魔物達に向けて発せられた。魔物を駆逐して十二の魔宮目指す大蛇達だったが、大蛇達の身体からは、戦いで受けた傷が痛ましかった。プリキユア達は心配そうな表情を浮かべ、

「私達も加勢したいけど・・・キャツ?!」

ハッピーは、自分も加勢したいとは思ったものの、大蛇の頭の上という不安定な足場



で、バランスを取りながら戦う事は困難だった。そんな一同の視線の先には、数十メートルはありそうな怪鳥の群れが、視界に映った。キャミーは顔色を変えて叫び、

「あ、あれはガルードニャアア！」

『ガルード!?!』

キャミーは思わず戦慄し、プリキュア達はキャミーの言葉をオウム返しに呟いた。嘗てキャミーは、地上から空を飛行するガルードを見た事はあつたものの、実際に目の当たりにした迫力は想像以上だった。大蛇達が万全の状態ならば、ガルード達と戦つても互角以上の勝負が出来たであろうが、魔物の群れの攻撃を受け手傷を負い、更には頭の上にプリキュア達を乗せて居る大蛇達が、今の状態でガルードと戦えば、結果は戦わずとも明らかだった。それでも大蛇達は、プリキュア達の為に前へ進もうとしたその時……

「邪魔をするなああ！小童共があああ!!」

プリキュア達は、曇天の空に響き渡る見知った声を聞いてハツとした。徐々に姿を見せた巨大な白き竜の姿に、魔物達だけでなく大蛇とキャミーさへ戦慄した。

### 3、竜の恩返し

大空に響き渡る一喝を受け、魔物達と大蛇達は、恐れおののいた。キャミーはガタガ

夕震えだし、

「りゅ、竜王バハムートニヤアアア!? な、何で此処に?」

竜王バハムートは、まるで大空の覇者である事を示すかのように、威風堂々と背中から生えた二枚の巨大な翼を羽ばたかせて居た。更には、竜王バハムートに付き従うかのように、深紅の身体をしたファイヤードラゴン、青い身体をしたアイスドラゴン、黄色い身体をしたサンダードラゴン、紫の身体をしたポイズンドラゴン、緑の身体をしたストームドラゴン、茶の身体をしたストーンドラゴンの六体が、編隊を組んで飛行する姿は壮観だった。

「パイーン! みんなああ、助けに来たよおおお!!」

「その声、ダークドラゴンちゃん!」

バハムートの折れた角に捕まったダークドラゴンが、パイーンとプリキュア達に声を掛けた。パイーンはダークドラゴンの声を聞いて表情を和らげ、プリキュア達も、バハムートが竜族を引き連れて加勢に来てくれた事で、安堵の表情を浮かべた。キャミーは、顎が外れるかという程、口をあぐり開けて呆然としていたが、ハツと我に返りプリキュア達に話し掛けた。

「ニヤ、ニヤンでみんなは、魔界に来たばかりなのに、りゅ、竜王と知り合いなのニヤ!?!」  
「うん、ひよんな事で、生まれて間もないダークドラゴンちゃんを助けてあげたの!」

「それで、私達ダークドラゴンと一緒に癒しの泉に行った時に、バハムートと出会って、ダークドラゴンを引き渡して上げた時に、少し話をして親しくなったの」

「パインとピーチの説明を聞くと、キャミーは納得したのか何度も頷いた。

「ニヤる程・・・竜族は同族意識が強いニヤ。みんながダークドラゴンを助けて上げたから、竜王は仲間を引き連れてみんなに恩返しに来たんだニヤア・・・でも、大蛇と竜族はあまり仲が良くないのに、よく加勢に来てくれたニヤア？」

「キャミーが首を傾げると、バハムートにもキャミーの声が聞こえたのか、

「フン、そのような些細な事、我らには関係ないわ！受けた恩は必ず返す・・・それが我ら竜族だ!!」

バハムートがそう言うのと、キャミーは怯えるようにコクコク何度も頷いた。バハムートは大蛇を追い抜くと、大蛇達の前に移動し、前方に居るガルダの群れをギリリと睨んだ。バハムートが大きく息を吸い込むと、バハムートの身体が光り輝き出した。次の瞬間、バハムートが大きく息を吐き出すと、バハムートの口から凄まじい光のエネルギー波が吐き出され、前方に居たガルダの群れや魔物達を一瞬で消滅させた。更にその威力は十二の魔宮に張られている結界にぶつかり、激しい衝撃が十二の魔宮に起こった。

双児宮に居るアベルは、双児宮に起こった地響きに驚き、慌てて外に飛び出した。

「何が起きた!？」

「ア、アベル様ああ!りゅ、竜王が、竜王バハムートがあああ!!」

「バハムートだど!？」

配下の報告を聞き、アベルは思わず空を見上げた。

「ウオオオオオオ!プリキュア達の行く手を阻む者は……我ら竜族が相手をしてやる!死にたい奴は……掛かって来るがいい!!」

「「「「ウオオオオオオ!!」」」」

バハムートの宣言と共に、六匹の竜が咆哮し、竜達は大蛇を守る様に隊列を組み、大蛇を攻撃してくる魔物達に攻撃を開始した。炎が、氷が、雷が、強風が、毒が、岩の群れが、容赦なく魔物達に浴びせられ、その威力は大蛇をも上回っていた。

「す、凄い……何かメランの試練を受けた時を思い出しちゃった」

ブラックは、ドラゴン達の凄さを見て、思わず伝説の妖精メランの事を思い出して居た。メランの本当の姿も竜に似て居て、今日の前で戦う竜族達に引けを取らない強さだった事を思い返した。バハムートは再び吠え、

「ウオオオオオオ!さあ、死にたくなければ道を開けろ!阻む者は……容赦はせんぞおおお!!」

バハムートの脅しを前に、魔物の群れは完全に委縮した。ガルーダの群れさえ一蹴し

た、バハムートの実力を目の当たりにしては、魔物達の戦意は完全に萎え、十二の魔宮への進路を塞ぐ者は完全に居なくなつた。

十二の魔宮にも、この緊急事態は次々と報告され大騒ぎになつていた・・・

白羊宮・・・オロンは、白羊宮の前で空を見上げながら悲し気に鳴いて居た。

金牛宮・・・巨大な鉄斧を持ったミノタウロスは、空を見上げて吠えた。

獅子宮・・・バルバスは、配下の報告を受けると、口角を上げて外へと飛び出した。頭上を見上げると、

「来たか、プリキュアアアア！魔法界での借り・・・必ず倍にして返してやるぞおお!!」

処女宮・・・妖精達は、処女宮の主であるリリスの名を叫びながら探し回つて居た。

天秤宮・・・主のシーレインが投獄されて以来、天秤宮は静まり返つていた。

天蝸宮・・・ファレオは、空を見ると口元に笑みを浮かべ、

「キャミーの奴、大蛇を使つたのか・・・プリキュア達と無事合流出来たのは良かったが、まさか、竜族まで手を貸すとはなあ」

ファレオは、改めてプリキュア達の人を惹きつける力を感じながら、天蝸宮を後にした。

人馬宮・・・アロンは、無表情のまま上空に矢を射る構えをして、プリキュア達が現れるのを待ち構えているかのようだった。

磨羯宮……アモンの獣の様な叫び声が響き渡り、精霊達はその姿を悲しそうに見つめて居た。

宝瓶宮……バルガン、シャックスという主を無くしてから、不気味に静まり返る無人の宮となっていた。

双魚宮……魚人達は、ニクスにこの事を伝えようとやって来たが、ニクスの姿が見当たらず困惑して居た。

そして、双児宮……

アベルは、我が目を疑った……

「バ、バカな!?何故竜王バハムートがプリキュアに力を？」

竜王バハムート率いる竜族のプリキュアへの加勢は、アベルをも驚愕させた。そんなアベルに、カインからのテレパシーが届いた。

（案ずるな、アベル……バハムートは直接我らと対峙する事はせん）

（カイン！貴様の目論見、悉（ことごと）く裏を掛かれて居るぞ？）

（そうだな……まさか、俺の裏をかき、俺が繋げた魔界への入り口を、逆に奴らに利用され、オークの森に陥れたプリキュア達を大蛇が救い、更にはバハムートまで力を貸すとは、俺の想定外だった……だが、こうなれば奴らを十二の魔宮に辿り着かせ、各宮でプリキュア達に光の力を使わせるしかあるまい）

(シーレイン、ベレル、ニクス、リリスは、俺達に反逆したのだぞ？ 奴らが守護する天秤宮、処女宮、天蝸宮、双魚宮は・・・)

(俺が何の為にソドムの巨蟹宮に居ると思つて居る？ プリキュア達には・・・幻覚と踊つて貰うさ。クククク)

カインは含み笑いを浮かべながら、次の一手へと動き始めた・・・

魔王の居城の入り口で待機して居たビート、ハミイ、ピーちゃん、三人にも十二の魔宮に起こつた異変は伝わっていた。

「い、今の衝撃は一体!?!」

戸惑うビートの頭上に、巨大な口が現れ、リリスの声が聞こえて来た。

「ビート、お仲間と一緒に最上階まで上がって来て」

「リリス、何かあつたの!?!」

「エエ・・・あなたにも関係ある事よ。急いで!」

ビートは、リリスの声が少し焦っているように感じられ、思わず戸惑いながらも、ハミイとピーちゃんを伴い、黒き塔である魔王の居城の中に再び足を踏み入れた。最初に来た時は、捕らわれたシーレインの下へと向かう為、階段を下りたビートだったが、今度は最上階目掛け駆け出した。薄暗い室内を駆け続けるビート、所々不気味なオブジェ

が飾ってあり、ビートは少し表情を強張らせながらも、階段を駆け上り続けた。

「此処が最上階?!」

「セイレーン、何か気味が悪いドアがあるニヤ」

ハミイが少し怯えながら、沢山の罫縷が飾られた巨大なドアを指さすと、ビートも思わずゴクリと生唾を飲み込んだ。不気味なドアが開いて居て、ビートは恐る恐るドアから顔を出して室内を伺うも、黒を基調とした薄暗い室内は殺風景だった。あまり物も置いて無く、大きな椅子が一脚置いてあるだけで、室内はかなり広く感じられた。ビートは意を決して室内に入り、

「ここが、魔王ルーシエスって人が暮らす部屋なの!？」

ビートが戸惑って居ると、バルコニーに続く透明なドアの向こうに、空を見上げるシーレイン、ニクス、リリス、ベレルの姿を見付けた。ビートは、ハミイとピーちゃんと共にバルコニーに出ると、シーレインはビートに振り返り、

「来たわね・・・セイレーン、どうやら、あなたの仲間達が来たようよ」

「エッ!？」

シーレインの口から、仲間達がやって来たと聞き、ビートは思わず驚き声を出した。四つ葉町に居るものとはばかり思ってた居たプリキュアのみんなが、この魔界に来ていると言われたのだから、シーレインはリリスに話し掛けると、



「リリース、セイレーン達にも見せて上げて」

「ハイ・・・サキュバスアイ!」

シーレインに言われたリリースは、ゆっくり目を閉じると、サキュバスアイを上空目掛け放った。ビート達が見上げる曇天の空に、リリースがサキュバスアイで見ている光景が映し出された。ビートは、白い竜が咆哮する姿に目を見開いて驚き、

「りゅ、竜!？」

「それだけじゃないわ。もっと良く見てごらんなさい」

シーレインに言われたビートは、更によく観察してみると、竜王バハムートが率いるドラゴン達が、七匹の大蛇を守るような隊列を組んで居た。その大蛇の頭がズームアップされていった。

黒い大蛇の頭上には・・・中腰で片膝付いたブラックが、凛々しい表情で前方を見つめ、その両脇で、険しい表情をしたホワイトとルミナスが立って居た。

赤い大蛇の頭上には・・・四人で威風堂々立つ、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインデイの姿があつた。

紫の大蛇の頭上には、右腰に右手を置いて立つドリームを筆頭に、ルージュ、レモネード、ナツツを抱いたミント、アクア、ココを抱いたローズの姿があつた。

黄の大蛇の頭上には、腕組みして凛々しい表情で仁王立ちするピーチを筆頭に、左腰

に左手を置き優雅に立つベリー、シフォンを抱いたパイン、タルトを抱いたパツシヨンの姿があった。

青の大蛇の頭上には、険しい表情で仁王立ちするムーンライトを筆頭に、そのムーンライトの両足にしがみ付き、ビビリ顔を浮かべるブロッサムと、その右肩に捕まるシブレ、そんなブロッサムを見てニンマリ微笑むコフレを抱いたマリン、ポプリを抱きながら苦笑するサンシャインの姿があった。

茶の大蛇の頭上には、キャミーを抱いたメロデイ、その両脇で凛々しく前方を見つめるリズムとミュージズの姿が映った。

緑の大蛇の頭上には、緊張した面持ちをしながらキャンデイを抱いたハッピー、グレルとエンエンを抱いたエコー、大蛇と竜のコラボを見てはしやくピース、困惑の表情で足元を見つめるビューティ、そのビューティの右足にしがみ付くサニーと、左足にしがみ付くマーチの姿があった。

総勢三十人にもなるプリキュアの仲間達の姿を見たビートの表情が、見る見る明るくなっていった。ハミイやピーちゃんも側には居てはくれているものの、ビートの心の中は寂しさがあつたが、そんな感情も、プリキュアのみんなの姿を見ると、何処かに吹き飛んだように感じられた。

「みんなあああああー！」

ビートは、堪えて居た感情が爆発したように、嬉しそうに両腕を上げ、空に映し出される映像に両手を振り、ハミイとピーちゃんの小躍りしながら喜びを現した。シーレイン、ニクス、リリスは、竜王バハムートがプリキュアに協力している事に改めて驚き、「ま、まさか、竜王バハムートが、竜族を従えてプリキュア達に力を貸す為だけに、十二の魔宮の領空にまで乗り込んで来る何て・・・」

「ハ、ハイ・・・それに大蛇達も、私達の命もなくプリキュア達に力を貸して居るのにも驚きました」

「そ、そうよねえ・・・プリキュア達、何時の間に大蛇達や竜族と親しくなったのかしら!?!」

シーレイン、ニクス、リリスが、呆然としながら空に浮かぶ映像を見ていると、ベルは愉快そうに笑いだし、

「ハハハハハ、全く、プリキュア達には驚かされてばかりだわい。大蛇と竜族を従えて、空から十二の魔宮に乗り込んで来るなど・・・前代未聞だわい」

ベルルの言葉に、シーレイン達も頷く中、そのプリキュア達の視界には、今十二の魔宮を捉えようとして居た・・・

第三百三十一話：前代未聞

完

## 第三百三十二話：十二の魔宮（前編）

1、宝瓶宮・・・ブラックとホワイトを消せ

プリキュア達は、キャミーと七匹の大蛇達、そして、竜王バハムート率いる竜族の協力を得て、十二の魔宮上空へと辿り着く事が出来た。竜王バハムートは、竜族の者達に目配せし、

「プリキュア達は皆無事魔宮に到達し、我らの役目は果たした。一同、大儀だったー」

竜王バハムートの労いを受け、深紅の身体をしたファイヤードラゴン、青い身体をしたアイスドラゴン、黄色い身体をしたサンダードラゴン、紫の身体をしたポイズンドラゴン、緑の身体をしたストームドラゴン、茶の身体をしたストーンドラゴンの六体は咆哮を上げた。バハムートは、プリキュア達に声を掛けると、

「プリキュア達よ、借りは返した・・・だが用心しろ、ゼガンの亡霊のカインの事、何を企んで居るか分からんぞ？」

バハムートの忠告を聞いたプリキュア達は、皆その忠告を受け入れたように小さく頷いた。ドリームは、一同を代表するかのようにはバハムートに頭を下げると、

「ウン・・・私達に協力してくれてありがとう」

「パイン、みんな、元気でねえ！」

バハムートの折れた角にしがみ付いて居るダークドラゴンは、名残惜しそうにパインに視線を送り、プリキュア達に声を掛けた。パインは右手を振りながら、

「ダークドラゴンちゃんも、バハムートさんもお元気で！」

「では、さらばだ！」

バハムートは踵を返し、それに従う様に六体のドラゴンも後に続き、竜族達は十二の魔宮を離れて行つた。その後ろ姿を、プリキュア達は皆感謝の心で見送つた……

竜族も去り、巨大な黒き塔を守護するように、眼下に散らばる古代ギリシヤの建造物をお知らせる、十二の魔宮を見たホワイトは、ある事に気付いて眉根を顰めた。

「ねえキャミー、上空から見ると、魔宮の数は十一に見えるんだけど……」

「そんなバカニヤア!？」

ホワイトに聞かれたキャミーは、苦笑気味に眼下を見渡すも、ホワイトの言う様に、魔宮の数は何度数えても十一しかなかった。キャミーは何度も目を擦るも、十二ある筈の魔宮は十一だけだった。キャミーは顎が外れるかと思う程口を開け放心した。

「ニヤ、ニヤンで十一しかないのニヤ？」

「私達に聞かれても困るけど……」

キャミーは困惑顔でメロディに問いかけるも、問われたメロディに分かる筈も無く、

メロディもまた困惑した。リズムは真顔で、

「どうやら、バハムートの忠告通り、カインが何か企んで居るのかも？」

ムーンライトは、少し険しい表情を浮かべながら、眼下に見える十二の魔宮の位置を確認した。リズムの言うように、カインは何か魔宮に仕掛けを施したのではないか？そんな考えが浮かぶと、ムーンライトは一同に声を掛けた。

「みんな！リズムの言う通り、カインが何か十二の魔宮に仕掛けをした可能性もあるわ。カインが双児宮に居るかどうかわからない現状では、全ての宮に行く必要があるかも知れないわ。此処で別れましょう」

ムーンライトの案に一同が頷き、必ず再会する事を誓い合い、大蛇達は別の宮の前へと移動を始め、それぞれ違う魔宮の前へと下降を始めた。

黒の大蛇は、ブラック、ホワイト、ルミナスを乗せ、宝瓶宮の前に降りた。

赤の大蛇は、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディを乗せ、磨羯宮の前に降りた。

紫の大蛇は、プリキュア5とローズ、ココとナッツを乗せ、人馬宮の前に降りた。

黄の大蛇は、ピーチ、ベリー、パイン、パッション、シフォンとタルトを乗せ、処女宮の前に降りた。

青の大蛇は、ムーンライト、ブロッサム、マリリン、サンシャイン、シフレ、コフレ、ポ

プリを乗せ、天秤宮の前に降りた。

茶の大蛇は、メロデイ、リズム、ミユーズ、キャミー、フェアリートーン達を乗せ、天蠍宮の前に降りた。

緑の大蛇は、スマイルプリキュアの六人と、キャンデイ、グレル、エンエンを乗せ、双魚宮の前に降りた。

一同は、ここまで送ってくれた大蛇達に礼を言い、大蛇達は、ここで待っているから気を付けてとでも言いたげに、魔宮へと駆けて行ったプリキュア達の後姿を見送った。

巨蟹宮・・・

瞑想していたカインは、プリキュア達が十二の魔宮の前に到着した事を察知し、目を見開くと口元に笑みを浮かべた。

「来たか、プリキュア！ さあ、先ずどいつから利用するとするか・・・」

カインは、どのプリキュア達から、魔王ルーシエスが施した光の封印を、どう解除させる事に利用するか思案して居ると、背後の祭壇に祭られていたカインに似た藍色の髪をした生首、ソドムがカツと目を見開いた。

「カイン、俺をこの姿にした黒と白のプリキュア・・・奴らは危険だ！ 此処から排除した方がいい」

ソドムは、妖精学校で戦ったブラックとホワイトに、脅威を感じていた。自分達の野望に立ち塞がる、最大の障壁になりかねないと思っていた。カインは、ソドムを見つめ小さく頷くと、

「そうだったな・・・奴ら二人と行動を共にする黄色いプリキュアからは、他のプリキュア達以上の光の力を感じる。あの者が居れば、確かに黒と白のプリキュアは不要だな」

カインは再び目を閉じると、宝瓶宮全体に負のエネルギーが満ち溢れた・・・

そうとは知らないブラック、ホワイト、ルミナスは、嘗てバルガンとシャックスが治めていた宝瓶宮へと辿り着いた。だが三人にとっては、此処がどの宮なのか分かる筈も無かった。ブラックが右側の、ホワイトが左側の扉を開き、宝瓶宮の扉が久方ぶりに開かれたが、中からは思わず身震いするような冷気を感じた。ブラックは、隣に居るホワイトに話し掛け、

「何だかこの中、肌寒いやねえ?」

「エエ・・・行ってみましょう」

警戒しながらゆっくり中へと進むブラックとホワイトだったが、ルミナスは妙な感覚を感じていた。

（何だろう!?!人の気配は感じないのに、何か嫌な感じがする・・・）

ルミナスは警戒しながらも、先に入ったブラックとホワイトを追って、中へと入って



行つた。薄暗い不気味な通路を進んでいく三人、少し歩くと、メップル、ミップルが騒ぎ始めた。

「ブラック、何だか嫌な感じがするメポ」

「用心してミポ」

「二人共、脅かさないでよねえ？」

「でも・・・確かに何か嫌な雰囲気ね」

ブラックとホワイトは、メップルとミップルの忠告を聞き、より用心深く室内を歩いていると、大きな扉が見えて来て、二人は思わず足取りを緩めた。ルミナスも追いつき、三人は目配せすると、大きな扉をブラックとホワイトが両側から開いた。不気味に軋む音と共に、室内に目を凝らすも中は薄暗かった。だが、三人は思わず生唾をゴクリと飲み込んだ。室内には、二つの人影が見えたのだから・・・

「誰!？」

「あなた達がこの宮の門番なの？」

ブラックとホワイトは、険しい表情を浮かべながら、室内に居る何者かに声を掛けるも、二つの人影は無言のまま、ゆっくり、ゆっくり三人に近付いて来た。二つの人影が識別出来る距離に近付いて来た時、思わずブラック、ホワイト、ルミナスの表情が凍り付いた。そこには、自分達プリキュアオールスターズと戦い、闇に帰った筈のバルガン

とシャックスが、不気味に笑みを浮かべながら近づいて来たのだから……

「あ、あんた達は!? 何であんた達が此処に?」

ブラックは、二人をキツと睨みながら問うも、バルガンとシャックスは何も答えず、ただ不気味に笑み続けるだけだった。身構えるブラックとホワイト、だがルミナスは、間近で目の前の二人を見ると、

（やつぱり何かおかしい!? 目の前に居るのに……生命の鼓動をまるで感じない?）

ルミナスは、目の前に居るバルガンとシャックスに違和感を覚えていた。ルミナスは直ぐにブラックとホワイトに話し掛け、

「ブラック、ホワイト、あの二人の様子が何か変です。先ずあの二人の動きを止めて、様子を見てみましょう」

「分かった」

ルミナスの提案に、ブラックとホワイトは頷いて同意すると、ルミナスは上を見上げ、  
「光の意思よ、私に勇気を! 希望と力を!」

ルミナスの叫びと共に、ハーティエルバトンがルミナスの手に現れた。ルミナスはバトンをクルクル回転させると、弓状に変化させた。弓状に変化させたハーティエルバトンを、宙に放つと同時に腰を低く落とすと、バトンはルミナスの前方にゆっくり戻り、1回転しながら光を纏った。

「ルミナス！ハーティエル・アंकシオン!!」

ルミナスは、前方のバルガンとシャックスに対し、ハーティエルアंकシオンを放つと、光は一瞬の内に二人を貫き、バトンがその背後でゆっくり回転し、バルガンとシャックスは、虹色の光によって動きを封じられた。巨蟹宮のカインはカッと目を見開くと、「何だ、これは!?!・・・クククク、凄い光の力だ。宝瓶宮に施されていた光の封印が解けた」

カインは、宝瓶宮奥のドアの横に輝いていた光の結界が解けた事を感じ、思わず口元に笑みを浮かべた。

「あのプリキュアさえ居れば・・・さあ、邪魔な二人には時空の狭間に消えて貰おう・・・デッドエンド・ホール!」

カインが両目を金色に輝かせ、両手を上空に上げて指を動かした。それと時を同じくして、宝瓶宮のバルガンとシャックスの二人は、黒きオーラが全身から漂い、その不気味な笑みを止める事は無かった。それに気づいたルミナスは、困惑の表情でバルガンとシャックスを凝視し、

(な、何?!あの二人から感じる嫌な感じは?)

「何笑ってるのよお!」

「ブラック!」

痺れを切らしたブラックは、バルガンに向かって行くと、瞬時にホワイトはブラックを援護するように、シャックスに向かって行った。

「ブラックウー！ホワイトオ！ダメエエエ!!」

「ヤアアアアアアア！」

ルミナスが絶叫するも、ブラックとホワイトは、バルガンとシャックスに攻撃を仕掛けた。ブラックとホワイトが二人に触れたその時、ハーティエルアंकシヨンの効果が切れたと同時に、バルガンとシャックスの身体が、まるで異空間と繋がり、小型のブラックホールになったかのように、ブラックとホワイトをその体内に取り込もうとした。

「な、何なの!？」

「身体が吸い込まれ……」

苦悶の表情を見せるブラックとホワイトの耳に、異空間から赤ちゃんの泣き声が聞こえた気がした。二人はハツとし、

「赤ちゃんの泣き声!?! ……キアアアアア!!」

「ブラック!?! ホワイト!?!」

ルミナスは、突然金色の光に包まれたブラックとホワイトを見て、思わず驚愕の表情で叫ぶも、ブラックとホワイトには、ルミナスの叫びに応える余裕は無かった。ブラッ

クは右手を、ホワイトは左手を、必死に互いの手に伸ばすも、二人の身体はバルガンとシャックスの体内に吸収され、バルガンとシャックスの身体は縮小して消え去った。果然としていたルミナスはハツと我に返り、

「ブラックウウ！ホワイトオオ!!」

それはまさにアツという間の出来事だった。ルミナスは為すすべなく、膝から崩れ落ちた。その時、ルミナスの脳裏に何者からかのテレパシーが届いた。

「ククク、仲間が心配か？」

「その声は・・・カイン!? ブラックとホワイトを返して!」

「仲間と会いたければ、その奥の扉を進め! 貴様を特別に招待してやろう・・・このカインが居る巨蟹宮になぁ」

「ふざけないで!」

「ククク、こうして居る間にも、時の狭間に飛ばされた奴らは、二度と戻っては来られなくなるぞ? それでも俺は構わんがなぁ・・・ハアハハハハ」

カインの一方的な要求に、ルミナスは表情を一層険しくした。

ルミナスは気付かなかつたが、先程放つたハーティエルアंकシヨンの効果で、ルーシエスが施した宝瓶宮の光の封印が解けた事を・・・

ポルンとルルンは、泣きそうな表情で怖いとルミナスに訴え、ルミナスは二人を安心

させるように優しくあやした。

（どうしよう?! 他のみんなと合流してから・・・でも、もしカインの言う通りだとしたら、ブラックとホワイトが・・・）

ルミナスは、困惑の表情で奥の扉を凝視した・・・

2、天秤宮、天蠍宮、処女宮、双魚宮・・・幻覚を打ち破れ!

巨蟹宮・・・

邪魔者であるブラックとホワイトを、時空の狭間に飛ばしたカインは、判断に迷うルミナスを一先ず放置して再び瞑想すると、カインの脳裏に天秤宮、天蠍宮、処女宮、双魚宮の光景が浮かんで来た。

（ククク、もはや一々小細工するのも面倒だ。纏めて利用させてもらおうぞ）

天秤宮には、ムーンライト、プロツサム、マリン、サンシャイン、シプレ、コフレ、ポプリが、処女宮には、ピーチ、ベリー、パイン、パッション、シフォンとタルトが、双魚宮には、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコー、キャンデイ、グレルとエンエンが、そして天蠍宮には、メロディ、リズム、ミューズが、キャミーとグレルにやって来た。カインが両手を頭上に掲げると、天秤宮、天蠍宮、処女宮、双魚宮に、負のエネルギーが満ち溢れた・・・

魔王城・・・

シーレイン、ベレル、ニクス、リリスと共に、魔王城の最上階に居たキュアビートは、プリキュアの仲間達が、十二の魔宮に到達した事を知ってソワソワしていた。シーレインはクスリと笑み、

「ビート、お仲間の事が気になるようね？」

「そ、そういう訳じゃ・・・」

ビートは、シーレインに凶星を差されて動揺し、それを見たリリスとニクスは顔を見合わせてクスリと笑み、

「別に隠さなくてもいいじゃない」

「エエ、私達はまだ此処で調べたい事もあるし、ビートはお仲間の所に行つてあげて」

「で、でも・・・」

尚も困惑の表情をビートは浮かべた。自分も何か手助けする事があるのではないかと思うと、自分に協力してくれたシーレイン、ニクス、リリス、ベレルの役に立ちたいと考えて居た。

「フツ、拙者達の事を案ずるでは無い。お主は我らが認めた者、我が天蠍宮、シーレイン殿の天秤宮、ニクスの双魚宮、リリスの処女宮の四つの宮ならば、そなたは自由に出入

り出来る」

「仲間達の力になっておあげなさい」

ベレルとシーレインからの再度の言葉を受け、ビートは力強く頷き、ハミイとピーちゃんに目配せすると、

「ハミイ、ピーちゃん、行こう！みんなの所へ!!」

ビートは、仲間達と合流する為、ハミイとピーちゃんを伴い、登つて来た魔王城を駆け下りて行つた。

天秤宮に着いたムーンライト、プロツサム、マリン、サンシャイン、妖精達は中に入り奥へと進んだ。奥の扉を開いたムーンライトは、プロツサム、マリン、サンシャインに止まるように合図するかのようになり、左手を横に広げた。

「ムーンライト、どうかしたんですか？」

少し緊張した面持ちのプロツサムが声を掛けると、ムーンライトは険しい表情のまま奥を凝視しつづけ、

「奥に・・・誰か居るわ」

「「エッ!?!」」

ムーンライトの忠告に、プロツサム、マリン、サンシャインは驚きの声を発し、思わ



ず室内を凝視した。ムーンライトは、警戒しながらゆっくり歩き出すも、中に居る人物を見た時、思わず安堵した表情を見せた。何故なら、中にはムーンライトが見知った顔、天秤宮を守護するシーレインの顔があった。

「シーレイン、良かった。無事だったようね」

ムーンライトの言葉を受け、ブロッサム、マリン、サンシャインも、ムーンライトの横から顔を出し、奥を見つめるとそこには確かにシーレインの姿があった・、

「エッ!?シーレインさんだったんですか?良かったあ」

「何だ、緊張して損した」

「と言う事は、此処は天秤宮って事かなあ?」

ブロッサム、マリン、サンシャインも安堵の表情を浮かべたが、突然シーレインの表情が一変し、憎悪の表情で四人に対して襲い掛かって来た。四人は四方に散って攻撃を躲すも、激しく動揺して居た。

「シーレイン、止めなさい!」

「シーレインさん、止めて下さい。私達、加音町でお友達になったじゃないですか?」

ムーンライトとブロッサムが、動揺しながらもシーレインに声を掛けるも、シーレインは憎悪の表情を崩さず、四人を攻撃し続けた。

そしてそれは、他の宮でも起こっていた・・・

「リリス!? どうして?」

「あたし達が分からないの?」

「止めて、リリスさん」

「クツ・・・明らかに私達に敵意を向けて居るわ」

処女宮のピーチ、ベリー、パイン、パッションの前にはリリスが・・・

「エツ!? エツ? な、何で!? ニクス、止めてえ!」

「何や!? 何でニクスがウチらに攻撃して来るんや?」

「私達の事、忘れちゃったのかなあ?」

「そんな!? ニクス! あたし達だよ!!」

「私達よ、プリキュアよ! ニクスウウ!!」

「ひよつとしたら・・・ニクスは操られて居るのかも知れせんね」

「「「エエエ!?」」」

双魚宮のハツピー、サニー、ピース、マーチ、エコー、ビューティの前にはニクスが・・・

「ベレル、どうして!?!」

「キャアア! 止めて、ベレル!!」

「私達が分からないの?」

そして、天蠍宮のメロディ、リズム、ミュージックの前にはベレルが……  
魔王城に居る筈のシーレイン、リリス、ニクス、ベレルの四人は、それぞれプリキュア達に攻撃を仕掛けて来た。プリキュア達は、自分達に協力してくれた四人が、自分達に攻撃を仕掛けて来た事に戸惑い困惑した。

仲間達の下に向かって走り出したビートは、黒き塔から外に出ると徐に立ち止まった。ビートは、精神を集中させるかのように両目を瞑り、プリキュア合宿で培ったハモニーパワーを探った。

「セイレーン、どうしたニヤ？」

ハミイは、急に立ち止まったビートを不思議そうに見ながら話し掛けると、ビートはハミイの問いに応えようとするかのように両目を開いた。

「間違いない、メロディ達はあっちの宮に居るわ。ハミイ、ピーちゃん、私に追いつて来て」  
「合点ニヤ」

「ピー……」

ハミイとピーちゃんはビートに頷き返し、三人はメロディ達が居るであろう天蠍宮目掛け再び駆け出した。

「ベレル様ああー！一体どうしちゃったニヤ？」

メロディ達と行動をするベレルの使い魔キヤミーは、メロディ、リズム、ミュージズを攻撃するベレルの行為に困惑した。細身の剣を抜いたベレルの容赦ない攻撃が、メロディ、リズム、ミュージズに向けられ、戸惑いながら四人は攻撃を避け続けた。

「ベレル、もう止めて！」

「私達、あなたと戦いに来た訳じゃ無いわ！」

メロディとリズムがベレルに声を掛けて説得するも、ベレルは聞く耳持たぬと言いたげに、攻撃の手を休める事は無かった。強張った表情を浮かべたミュージズは、

「こうなったら、戦うしかないわ！」

ミュージズの進言を聞いても、メロディはベレルと戦う事を避けようとするかのよう  
に、再度ベレルに説得を試みた。

「クツ・・・ベレル、どうしちゃったの？私達プリキュアの事が分からないの？」

メロディの問い掛けに対し、何の感情も見せないベレルを見たリズムは、ある疑念をメロディとミュージズに告げた。

「メロディ、ミュージズ、ベレルはもしかしたら・・・操られているのかも!？」

「エッ!？」

「そんニヤ!？」

リズムの言葉に、メロディとミュージズ、使い魔のキャミーは、困惑しながらベレルを凝視した。その一瞬の油断をベレルは逃さず、メロディの懐に入り込んだ。反応が遅れたメロディ目掛け、ベレルの一刀が下段から繰り出されようとしたその時、

「ハアアアアア」

突如ベレルの背後の奥の扉から雄叫びが響くや、光の音符を右手で掴んだビートが、素早い動きで流れるように近づき、ベレルを蹴り飛ばした。

「大丈夫、メロディ?」

「「ビート!」」

音符から降りたビートは、メロディを見て声を掛けると、メロディ、リズム、ミュージズの目が輝いた。

「ビート!もう、心配させないで」

「無事で良かったわ」

「怪我也無いようね?」

「エエ、おかげ様でね。心配させてゴメン」

ビートは、自分の事を心配してくれていた三人に、少し申し訳なさそうな表情で三人に頷き、直ぐにベレルを険しい表情で見つめた。

「何処の誰かは知らないけど、ベレルに化けてメロディ達を襲う何て・・・絶対許さない

「！」

ビートはそう言うと、ラブギターロッドを取り出した。メロデイ、リズム、ミュージックは、ビートが言った目の前に居るベレルが、偽物だという言葉に驚いた。メロデイとリズムは、ビートに確認するように、

「エッ!?あのベレルは偽物なの?」

「本当、ビート?」

「エエ、さつき本物のベレルと別れたばかりの私が言うんだから、間違いないわ。ベレルは、シーレイン、ニクス、リリスと一緒に、まだ魔王城に居るわ」

状況を理解したミュージックは小さく頷き、

「どうりで・・・私達を攻撃してくるからおかしいとは思ってた」

「エエ、それに、もし本物のベレルだったら、今の私の不意打ち何て、難なく躲していたわ」

ビートの話を聞いたキャミーはホツとしたように、

「よ、良かったニヤア」

そんなキャミーに、遅れて奥の扉からやって来たハミイとピーちゃんが近づいた。メロデイ達も二人に気付き、

「ハミイ、ピーちゃん、二人共無事で良かった」

「ビートと一緒に、私達が知らない間に魔界に行っちゃうんだもの」  
「もう、心配したんだからね？」

メロディ、リズム、ミュージックがハミイとピーちゃんに声を掛けると、

「ゴメンニヤ」

「ペイ」

ハミイはその場でペコリとメロディ達三人に頭を下げ、ピーちゃんはミュージックの肩に止まると、ミュージックは目を細めてピーちゃんの頭を撫でた。ハミイはキャミーに話し掛け、

「キャミー、また会えたニヤ」

「ハミイ、また会えるとは思って無かったニヤ」

「再会の挨拶は後、メロディ、リズム、ミュージック、カインが何を企んで居るか分からない。他のみんなに早く合流する為にも、一気に行くわよ」

「OK！」

ビートの合図に頷いた三人は、ハミイが手に持つ宝石箱に似たような形のヒーリングチェストに視線を向けると、

「出でよ、全ての音の源よ!!」

四人の声に導かれるかのように、ヒーリングチェストの中から、フェアリートーン達

に似た巨大なクレッツシエンドトーンが姿を現した。

「二届けましょう、希望のシンフォニー！」

両腕をクロスしたまま、クレッツシエンドトーンの金色の光の炎と一体化した四人は、ベレルに化けた何者か目掛け突撃した。

「二プリキュア！スイートセツション・アンサンブル・クレッツシエンド！！」

「二ファイナーレ！！」

「ギャアアアアア！」

四人の合体技を受けたベレルに化けた何者かの身体が朽ち、腐った死体のような魔物が浄化され消えて行った。メロディは、浄化された魔物が消えた場所を凝視しながら、

「あいつがベレルに化けてたんだね」

「そうね・・・見て！奥の扉の脇の光が消えて行くわ」

奥の扉の異変に気付いたリズムは、他の一同に異変を知らせるかのようになり、奥の扉を指差した。巨蟹宮のカインは目を見開くと、

「フツ、もう一人のプリキュアが合流したか・・・貴様達にはまだ利用価値がありそうだな、さあ奥の扉を抜けるが良いさ。その先には・・・ククククク」

カインは、含み笑いを浮かべると、再び目を閉じて天秤宮、双鱼宮、処女宮に精神を集中させた。



処女宮のピーチ達もまた、襲い掛かって来るリリスに困惑していた。必死にリリスに呼びかけるピーチとパインだったが、リリスは何も答えず笑み交じりに攻撃してくるだけだった。そんなリリスを見たベリーとパッションは、リリスに違和感を覚えた。ベリーは困惑気味に三人に話し掛け、

「ねえ……あれって本当にリリスなのかしら?」

「エッ!? どう見てもリリスにしか見えないけど?」

「ウン……私にも」

ピーチとパインが改めてリリスを見るも、以前加音町で見たリリスと何の変りもないように思えた。だが、パッションはベリーに同意し、

「ベリーも気付いた? 以前戦ったリリスは、エロチックアイのような精神的な攻撃を繰り出し、肉弾戦などほとんどしなかったわ。でも、今日の前に居るリリスは……ひよつとしたら、以前ノーザに見せられた幻覚の様に、このリリスはカインが私達を欺こうとして、幻覚を見せて居るんじゃないかしら?」

「幻覚!?!」

パッションの言葉に、ピーチ、ベリー、パインの三人が思わずオウム返しに聞き、パッションは小さく頷いた。ピーチは、右拳を力強く握りしめると、

「ベリーやパッションの言う通りだとすると・・・」

ピーチは、リリスと戦った時の事を思い出して居た。確かにリリスは、幻惑系の攻撃を得意として事を思い出すと、

「ベリー、パイン、パッション、本物のリリスなら、私達が技を仕掛けるのを幻惑で阻止しようとする筈・・・試してみよう」

「「OK」」

ピーチはピーチロッドを、ベリーはベリーソードを、パインはパインフルートを、パッションはパッションハープを取り出すと四方に散った。四人が散った事で動揺したりリスは、キョロキョロ四方を見渡し戸惑って居た。ピーチは三人に合図を送り、

「ベリー、パイン、パッション・・・行くよ！」

「「悪いの、悪いの、飛んでいけ！」」

「プリキュア！ラブサンシャイン・・・」

「プリキュア！エスポワールシャワー・・・」

「プリキュア！ヒーリンググプレアー・・・」

「「フレ〜ッッシュュ!!」」

「吹き荒れよ！幸せの嵐！プリキュア！ハピネス・ハリケーン!!」

ピーチ、ベリー、パイン、パッション、四人の四方からの同時攻撃を、リリスはただ

オロオロするだけで直撃を受けた。ピーチ達は、そんなリリスの反応を見てみると、リリスの風貌は崩れ、角の生えた魔物の姿を露にして浄化された。ピーチは、今のリリスが偽物だった事で、少しホッと安堵した表情で、

「ベリーとパッションの言う通りだったね」

「エエ、リリスにしてはおかしいと思つたわ」

「ウン、良かった」

ベリーとパインも安堵した表情を浮かべていたが、パッションは奥の扉の横の灯りが消えた事に気付き、

「見て！奥の扉から灯りが消えたわ」

奥の扉を指差した。パッションに釣られ、ピーチ、ベリー、パインも奥の扉を凝視した。ピーチはパッションに話し掛け、

「本当だ・・・と言う事は、あの奥の扉を抜けられるつて事かな？」

「エエ、行つてみましょう」

四人は頷き合い、用心しながら奥の扉へと歩み始め、シフォンとタルトもその後を追った。

巨蟹宮のカインは目を開くと、

「どうやら、もう一組も・・・こいつらも更に利用させて貰おう」

カインは口元をニヤリとさせると、再び目を閉じて瞑想を始めた。

双魚宮でニクスに襲われ、戸惑って居たスマイルプリキュア達六人、痺れを切らしたサニーとマーチは、

「このままじゃアカン・・・」

「ウン、ニクスと戦うしかないよ」

二人の進言に、ハッピーとピースは困惑した。せつかく和解したニクスと戦う事は忍びなかった。

「待って！せつかく仲良くなれたのに・・・」

「ウン・・・私も出来るなら戦いたくないかも」

「・・・そうですね。操られて居るのかどうか、まだ確かめていませんからね」

ビューティも、ハッピーとピースに賛同した。エコーは目を閉じ、両手を組んでニクスの心に話し掛けてみるも、ニクスがエコーの心の声に答える事は無かった。

「駄目、反応が無い・・・ちよつと荒療治だけど、私のハートフルエコーなら、もしかしたら・・・」

エコーは、妖精学校でなぎさ達一同に寄生し、エコーの記憶を蝕んだ空魚を、ハートフルエコーで浄化した事を思い出し、もしかしたらニクスを救えるのではないかと思

付いた。ビューティもその事を思い出したのか、

「それは試してみる価値はありそうですね」

「ウン！エコー、お願い」

ハッピーも、このままニクスと戦うよりは、エコーの提案を受け入れ、サニー、ピース、マーチも同意した。エコーは頷き返すと、尚攻撃して来ようとするニクスを見つめ、「世界に響け！みんなの想い！！プリキュア！ハートフル・エコー！！」

エコーの叫びと共に、光輝く胸のブローチから発射された光が、ニクス目掛け放たれた。その眩い輝きは、巨蟹宮に居たカインにも異変を与えていた。カインは、ハートフルエコーの光の力に思わず驚愕した。

「な、何だ!?この光の力は？」

髪の色以外カインそっくりの生首のソドムは、エコーのハートフルエコーに気付くや、カッと目を見開いた。

「この力は!?カイン、こいつだ！俺が妖精学校で魔界に連れ込もうとした…確か、キュアエコーと言ったか？あの時は、もうプリキュアにはなれないと抜かして居たが、どうやらハッターリだったようだな」

「そうか、こいつがお前の言ってたキュアエコーか？この俺にまで影響を与えるとは…チツ、他の宮にまで影響を与えたか」

カインは、自分にまで影響を与えたエコーの力に、改めて驚かされた事で精神が乱れた。それは、カインが天秤宮、双魚宮に及ぼしていた幻覚が今、途絶えた事を意味していた。

天秤宮では・・・

「エエエエ!?ど、どうなっているんですか?」

「シーレインが消えて、いきなりガリガリのお婆ちゃんが現れた!」

「じゃあ私達は、さつきからこの魔物と戦って居たの?」

「どうやらそのようね。シーレインに見せかけて、私達を動揺させようという、カインの魂胆だったという所ね」

ブロッサム、マリリン、サンシャイン、ムーンライトは、カインの術中に嵌っていた事を理解した。幻覚が解除された事で、四人の鋭い視線を受けた老婆の姿をした魔物は狼狽えた。ブロッサム、マリリン、サンシャインは一步前に出ると、ブロッサムは後ろを振り返って、ムーンライトに話し掛けた。

「ムーンライト、ここは私達にお任せください。マリリン、サンシャイン、行きますよ」

「ほんじゃまあ、チョチョイのチョイと・・・」

「マリリン、油断しちゃ駄目だよ」

ブロッサム、マリリン、サンシャインのそんなやり取りを見たムーンライトは、右の口

角を少し上げて小さく頷いた。ムーンライトの許可が下りた事で、ブロッサムとマリンはタクトを、サンシャインはタンバリンを取り出すと、

「花よ、輝け！プリキュア！ピンクフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、煌け！プリキュア！ブルーフォルテウエ〜イブ!!」

「花よ、舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

ブロッサムとマリンのフォルテウエ〜と、サンシャインのフォルテバーストが老婆の魔物を捉えると、

「ハアアアアア!!」

三人はタクトとタンバリンを回転させると、老婆の魔物が幸せそうな表情で宙に浮かび上がり浄化された。ムーンライトは、奥の扉の横で輝いていた灯りが消えた事に気がつき、

「三人共、奥の扉の横の灯りが消えたわ。どうやら、この奥に行けそうね」

ムーンライトの話に、ブロッサム、マリ、サンシャインも奥の扉を凝視した。

双魚宮でも、エコーのハートフルエコーを受けたニクスの姿は消え、半魚人の姿を露にした魔物は浄化された。ビューティは、奥の扉の横の灯りが消えた事に気付き、

「灯りが消えた!? どうやら、エコーの技を受けた事が関係しているようですね」

「じゃあ、奥の扉を進めるのかなあ?」

「だと思えますよ」

ハッピーに聞かれたビューティは、小さく頷いた。サニーとマーチは、両拳を握って気合を込め、ピースは少し緊張した表情を浮かべた。エコーはハッピーに進言し、

「行こう、ハッピー」

「ウン！みんな!!」

ハッピーの合図に頷いた五人と妖精達は、奥の扉を開いて奥へと入った。メロディ達も、ムーンライト達も、ピーチ達も、同じように奥の扉を進んで行った。

だが・・・

「エッ!?ど、どうなってるの?」

メロディが・・・

「これは!?またカインの幻覚とでもいうの?」

ムーンライトが・・・

「な、何で魔宮を抜けた先に!？」

ピーチが・・・

「魔宮は抜けた筈なのに・・・何で目の前にまた魔宮が現れるのお!？」

ハッピーが・・・

メロディ達は金牛宮に、ピーチ達は白羊宮に、ムーンライト達は獅子宮に、そしてハッ



ピー達は双児宮に、四チームの目の前には、再び魔宮の入り口が現れていた。

「ククク、さあ、お前達にはもう一度魔宮で戦って貰うぞ。人馬宮、磨羯宮に向かったプリキュアと共に、精々利用させてもらうぞ。最も、アモンと戦うプリキュア共は、アモンの力の前では、何の役にも立たんかも知れんが、代わりは幾らでも居るのだからなあ……ククク、アアハハハハ」

自らの野望を叶える為、プリキュアを利用しようとするカインの嘲笑が、巨蟹宮内に鳴り響いた。

### 3、人馬宮……戦士の誇りを取り戻せ

プリキュア5とローズ、そしてココとナツツは、人馬宮の中を走り巨大な扉の前に辿り着いた。ルージュが左の扉に、ローズが右の扉に立つと、二人はタイミングを合わせて扉を開いた。不気味な音が響く中、一同が室内に踏み入るも、中は静まり返っていた。一同は周囲を見渡しながら室内を歩き始めたその時、レモネードが踏んだ床が沈み、何かの機械音が響いた。

「す、すいません……何か踏んじやいましたあ」

『エッ!?!』

レモネードからの報告を聞き、一同がレモネードを見たその時、人馬宮の天井から数

十本の矢が、時間差で降り注いで来た。

『エエエエ!?』

思わず変顔浮かべた一同、ドリームはココを抱き上げ、ミントはナッツを抱き上げ、一同は四方に散って矢を躲し続けたものの、次第に動きを制限されて行つた。ドリームは顔色を変え、

「このままじゃ・・・躲しきれない」

「クツ・・・プリキュア！ サファイアアロー!!」

アクアは仲間達を救うべく、天井から落ちてくる矢に向けて、必死にサファイアアローの連射を放つた。だが、全て破壊する事は出来ず、ドリーム達の周囲を矢が囲み、ドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、ローズは、身体の動きを制限された。ローズは少しイライラしたように、

「こんなものおー！」

ローズは、矢を破壊しようと肘撃ちで矢に触れたその時、ローズの身体に電流が走つた。

「キヤアアアアア！」

『ローズ!』

「だ、大丈夫・・・でも、この矢には何か細工がしてあって、触れると電流が流れる仕組

みのようね」

プリキュア5、そしてココとナッツがローズの身を案じて叫ぶも、ローズは苦悶の表情を浮かべながらも、冷静に一同に知らせた。アクアは一同を見回し、

「待ってて、何とかこの矢を破壊するから」

ただ一人身動きできるアクアは、仲間達を救おうと試案を始めた。その姿を、奥の暗闇から凝視する二つの瞳があつた。

「……グウウウ」

凝視して居たのは、この宮を守護するケンタウロスのアロン、アクアが弓使いと知るか、己が持つ弓と矢を持ち、ゆっくり一同の前に姿を現した。アクアは、アロンを見ると険しい表情を浮かべ、

「あなたがこの宮の門番ね？よくもみんなをこんな目に！」

だが、アクアの問い掛けにも、アロンの表情は強張つて居た。アロンの心に、カインの言葉が浮かんでくる。お前はもう操り人形だと言う言葉が……

(ち・が・う・私は……)

アロンは心の中で葛藤しながら、手に持った弓をアクアに見せるかのようにゆつくり上げた。アクアは困惑し、

「どういう事!?何か私に知らせたいの?」

アクアには、アロンがアクアに何を訴えたいのか分からなかった。それでもアロンの真意を探ろうと、アクアはアロンの表情から読み取ろうとした。アロンは弓を軽く叩き、振り絞るように声を発した。

「た・戦え・・・私と・・・弓・・・」

「エッ!?!・・・もしかして私とあなたで、弓で勝負をしろという事?」

アクアの問いに、アロンは大きく頷いた。

（私一人で、十二の魔神と呼ばれる者と・・・）

アクアは、バルガン、ベレル、ニクスとリリスの実力を思い出し、四人の力を目の当たりにした事があるアクアは、思わず動揺した。アクア一人で、十二の魔神の一人と戦う厳しさを考えたその時、

『アクアアア!』

心配そうにアクアに声を掛けるドリーム達仲間達を見た時、アクアはハッと我に戻った。まるで仲間達の声に勇気づけられたかのように・・・

（いえ、今みんなを救えるのは私だけだもの・・・絶対に負けれないわ!）

アクアは不安な心を払拭し、キツとアロンを睨み付けた。

「勝負は受けるわ!その代わり、私の大切な仲間達に、危害を加えないと約束して」

アクアの申し出を、アロンは聞き入れたとばかり大きく頷いた。アクアは、アロンに

確認するかのようには話し掛けた。

「勝負方法は!？」

アロンは、背中に背負った鞆(ゆぎ)と呼ばれ、矢を入れて携行した武器のような物から、矢を一本取り出した。アクアは、アロンからの勝負方法が、弓対決を求められていると悟った。

「私は、今弓と矢を持って居ないわ。私の技、サファイアアローを使っても良いのかしら?」

アクアの問いに、アロンは大きく頷いた。アロンは、周囲の矢を破壊するも、ドリーム達五人の周囲の矢は残し、五人は未だ身動き出来ず、心配そうにアクアを見守った。アクアはサファイアアローの体勢に入り、両者の対決が始まった・・・

先制攻撃を仕掛けたのはアクアで、三本のサファイアアローを放つも、アロンは難なくサファイアアローを矢で射抜いて消滅させた。ルージュは今の状況を見て、

「あいつ・・・強いよ。的確にアクアの攻撃に合わせていた」

「はい・・・アクア、大丈夫でしょうか!？」

レモネードも不安そうに仲間達に話し掛けた。ミントは、そんなレモネードの不安を和らげるかのように、

「大丈夫よ、私達はアクアを信じましょう」

「そうだね・・・」

「エエ、アクアならきつと大丈夫」

ミントの言葉に、ドリームとローズも同意し、レモネードも小さく頷いた。

（流石にやるわね・・・）

アクアは、迂闊な攻撃を仕掛けては、アロンに隙を突かれると警戒したが、アロンはそんなアクアを嘲笑うかのように駆け出した。アクアの周囲を、円を描くように駆けまわるアロンの姿が、次第に目で追えなくなっていた。

（は、速い!）

どこからアロンが矢を射るのか読めず、アクアの顔から冷や汗が垂れてくる。

「何て速さ!?!動きが見えない」

ルージユも、アロンの速さに思わず驚きの声を上げた。アクアは、牽制の意味も込めてサファイアアローを一矢放つも、アロンの残像を通り過ぎて行っただけだった。

（ど、どうすれば!?!）

動揺するアクアに対し、アロンは的確に矢を放ち、アクアは抜群の運動神経で何とか躲すも、矢はアクアの身体をかすり、徐々にアクアを追い詰めて行っただ。

「キヤア!」

『アクアアアア!』

アクアは、矢を躲した拍子に体勢を崩し、仲間達がアクアを心配して声を掛けた。アクアは心の中で自分自身を鼓舞し、

(負けられない……)

仲間達への思いが、アクアの集中力を高めた。アクアは、アロンからの蹄の音に、ある一定のリズムがある事に気付いた。アクアは目を瞑り、そのリズムのタイミングを取り、サファイアアローの体勢に入った。

(今だ！)

アクアは目を見開き、宙に飛び上がるとサファイアアローを放った。サファイアアローは、見事にアロンの足下をかすめ、アロンの体勢が崩れた。

「グウウウウウ!」

完全に動きが止まったアロンに対し、アクアは再びジャンプすると、

「今よ！プリキュア！サファイア……!」

アクアは、このチャンスを逃さないよう、再びサファイアアローを放とうとするも、何故かアクアの動きが止まった。

(何故……矢を放たない!?)

アロンはアクアの行動を訝りながらも、体勢を崩しながらアクア目掛け矢を射った。矢はアクアのサファイアアローを消滅させ、アクアはそのまま地面に倒れ込んだ。

「キヤアアアア！」

『アクアアアア！』

ドリーム達がアクアの身を心配し叫ぶと、アクアは仲間達に無事だと知らせるよう  
に、

「クツ・・・だ、大丈夫よ。でも・・・」

アクアは、サファイアアローを消滅させられた。アロンはアクアに矢を向け、何時でもアクアに止めを刺せる態勢を取っていた。アクアは、アロンとの勝負に敗れた事を悟り言葉が途切れ、仲間達の期待に応える事が出来ず思わず俯いた。

（何故あのプリキュアは・・・矢を放たなかったのだ!?!）

アロンはアクアの行動に疑問を持ち、何気なく背後を振り返った時、アクアが矢を放たなかった真相に気付いた。アロンの背後には、レモネードの姿があった事から、アクアは、アロンがサファイアアローを躲す事態を考え、矢を放つのを躊躇った事を悟った。アロンは、矢の構えを解くと、

（そういう・・・事か。敵ながら、仲間を思うその心は・・・正に戦士！だが私は、奴の仲間を利用し・・・私は、戦士失格だ・・・グウウウウ）

アロンは、頭を抱えて苦しみ呻き出した。アクアはハツとし、思わずアロンの方を見た。医者を目指して居るアクアとしては、例え今まで戦った敵とはいえ、相手の異変を



目の当たりには、放って置く事は出来なかった。アクアは立ち上がり、アロンに駆け寄ると、

「ど、どうしたの!?!何処か具合でも悪いの?」

「グウウウウ……ウオオオオオオオオ!」

アロンは、心の中のどす黒い感情を吐き出すかのように雄叫びを上げると、心の中のモヤモヤが晴れて行くのを感じた。アロンは、心配そうにアロンを見つめるアクアを、穏やかな表情で見つめた。

「い、今の勝負は……私の……負けだ」

「エッ!?!」

アロンの敗北宣言に、虚を突かれたアクアも、ドリーム達も驚くも、尚もアロンは話を続け、

「わ、私は……カインの術に逆らえず……卑怯にもお前の仲間達を人質同然にして、お前に勝負を挑んだ。あの時、私に勝利するチャンスだったお前が、思わず攻撃を躊躇したのは、私の背後に居た仲間を思いやっつての事であろう?」

「そ、それは……」

アクアは、思わず言葉に詰まった。確かにアロンの言う通り、あの時アロンの背後にはレモネードが居た。もしもアロンがサファイアアローを躲したらと考えると、勝負と

仲間への危険度を考えた時、アクアは勝負よりも仲間の身の安全を優先したが、それを口にするのはいい訳に思えた。アロンは頷き、そんなアクアの心情を改めて理解した。

「お前のその心……まさに戦士！」

アロンは、ドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、ローズの周囲の矢を破壊すると、解放された一同が身体を動かし、互いの無事な姿を見て安堵した。アロンは五人に近付くと、

「カインに操られ、心の中に命じられるまま、お前達を利用した事、何と詫びればよいか……申し訳ない」

アロンはそう言うのと五人に頭を下げた。ドリーム達は、穏やかな表情で顔を見合わせると、

「ウウン、気にしてないよ。悪いのはあなたを操ったカインだし……ねえ、みんな？」  
「「「ウん」」」

ドリーム達五人はそう言うのと、アロンに笑みを浮かべた。アロンは、アクア、ドリーム、ルージュ、レモネード、ミント、ローズ、そしてココとナッツ、順番に一人ずつ顔を見つめると、

「改めて詫びを言わせて貰おう。私の名前は、アロン！人馬宮を守る十二の魔宮の戦士だ。奥の扉を見てくれ……先程の戦いの後、扉の横の光が消えた。普段は消えた事な

ど無いのだが・・・カインは、お前達プリキュアの力を、何かに利用しようと考えているから、くれぐれも用心してくれ。何かあれば、及ばずながら私も今回の借りを返す為に、お前達の力になろう」

アロンはそう言うと、アクアに右手を差し出し出した。アクアも笑みを浮かべながら、右手を出してアロンと握手を交わすと、

「エエ、あなたの言葉、感謝するわ」

アクアとアロンは、互いに頷き合うと右手を解いた。アロンは奥の扉を凝視し、「では、奥の扉を進むが良い。きつとお前達の仲間なら、他の宮を出て居るだろう」

「ウン、行こうみんな！」

ドリームの声に他の一同が頷き返し、プリキュア5とローズは、奥の扉目指して歩き出した。

#### 4、磨羯宮・・・光と闇の精霊

磨羯宮へと突入したブルーム、イーグレット、ブライト、ウィンディは、巨大な扉を開き中へと入った。だが・・・

「キヤアアアアアア!!」

室内に入った四人は、獣の咆哮を聞いた瞬間、真横の壁に激しく叩きつけられ悲鳴を

上げた。一体何が起こったのか、四人は軽く頭を振りながら室内を見わたすと、中央に仁王立ちする魔物から、物凄いプレツシャーが浴びせられた。その魔物は、頭部の左右から二本の大きな角を生やし、下半身は茶色い毛に覆われた屈強な体軀をして居た。十二の魔神と言われる者の中でも、四神の一人に数えられる古の魔獣・・・アモン！

「クツ・・・あ、あんたがこの宮の!? その姿・・・もしかして、アモン!」

険しい表情をしたブルームは、目の前で仁王立ちするアモンを見た。嘗てシーレインから聞いた話では、アモンは厳つい風貌ながら、弱者を庇う義に熱い人物で、シーレインが心を許す同志と聞いていた。だが、今目の前に居るアモンは、戦いに荒れ狂う魔獣のようであった。イーグレットは、説得するかのようにアモンに話し掛け、

「あなたがアモンなら・・・聞いて！ 私達はプリキュアと言って、シーレインとは友・・・」  
だがアモンは、イーグレットの言葉が終わる前に、その場で腕を振り、衝撃波を繰り出して再び攻撃を仕掛けて来た。ウインディは、イーグレットの身体を抱きながら、横っ飛びでアモンからの攻撃を躲した。

「あ、ありがとう、ウインディ」

「エエ・・・どうやら問答無用ってみたいなようね」

ウインディとイーグレットが、態勢を整えるのをフォローするように、二人の前にブルームとブライトが立つと、

「ブルーム、あれがアモンなら、シーレインから聞いた話とは、大分違うのが少し気に掛かる」

「ウン、あたしも気になってた」

「あれでは、まるで感情をぶつけてくる獣のよう・・・来るわよ」

ブライトは話を中断し、仲間達に注意を促しながら身構えた。ブルームと、態勢を整えたイーグレットとウインディも身構え、アモンからの攻撃に備えた。アモンは突進し、四人目掛けて太い丸太のような右腕を振って攻撃した。四人は咄嗟に両腕を出してアモンの右腕を受け止めたものの、アモンは構わず右腕を振り切った。四人はその威力に後ろに押されるも持ち堪えた。

「このままじゃ・・・」

「エエ、私達の身が持たないわ」

「やるしかないようね」

「こつちも本気で行くわよ」

ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディの目付きも変わり、四人もアモンに対し攻撃を開始したものの、アモンは、まるで掛かって来いとばかり腕組みした。ブルームは拳を握ると、

「バカにしてるの!?!ハアアアアア!」

ブルームの渾身の右パンチがアモンのボディに炸裂するも、アモンは動じなかった。更にアモンの頭上からイーグレットとウインデイが同時に踵落としを、ブライトが勢いを付けアモンの腿に蹴りを放つも、アモンはびくともしなかった。ブルームは険しい表情を浮かべ、

「何て頑丈なの!？」

「ウオオオオオオオオ！」

「「「「キヤアアアアア！」」」」

アモンがその場で咆哮した瞬間、四人は何か体当たりされたかのように吹き飛ばされた。何とか態勢を立て直して着地すると、四人が見つめ合い、ブルームとイーグレット、ブライトとウインデイがそれぞれ手を繋いだ。

「精霊の光よ！命の輝きよ！」

イーグレットとウインデイが同時に叫び、

「希望へ導け！二つの心！」

それに応えるように、ブルームとブライトが同時に叫ぶ。

「プリキュア！スパイラル・ハート……」

「プリキュア！スパイラル・スター……」

「「「「スプラ〜ッシュ!!!」」」」

精霊の力を凝縮させた、四人のプリキュアが同時に放った合体技が、アモン目掛け炸裂した。

「ウオオオオオオオ！」

アモンの眼光が金色に輝き、アモンは両腕を一旦後ろに引くと、四人の技に合わせるかのように、一気に前に突き出した。アモンの両腕が四人の技に接触すると、アモンは更なる雄叫びを上げた。

「グウウオオオオオオオ!!」

アモンは咆哮と共に、前に突き出した両腕を左右に開くと、あろう事か四人の必殺技は、アモンの目の前で掻き消された。

「そ、そんな!?!」

「嘘?!」

「わ、私達のスパイラルスターとスパイラルハートを!?!」

「掻き消したの!?!」

ブルームが、イーグレットが、ブライトが、ウインデイが、目の前の光景を信じられず、呆然とした表情を浮かべた。アモンは、呆然として隙が出来た四人に、失望したかのように咆哮すると、四人目掛け突進し、両腕を水平にしながら、右腕にブルームとイーグレットの首を、左腕にブライトとウインデイの首を捉え、そのまま勢いよく壁際まで

運び、四人の身体を激しく壁に激突させた。

「「「キヤアアアア!!」」」

「ウオオオオオオオ！」

アモンは咆哮し、四人に対してまるで地獄の炎のような火炎を口から浴びせた。激しい爆発音で宙に吹き飛ばされ、四人はその勢いのまま地面に叩きつけられた。

「ブルーム、しつかりするラピー！」

フラツピのそんな励ましも、ブルームの耳には届かず、ブルームの意識は次第に遠のいていった。

（あいつ・・・強い・・・歯が・・・立たない）

そんなブルームの脳裏に、ダークフォールの戦士達やアクダイカーン、そして、真の黒幕ゴーヤーンと戦った時の記憶が流れた。

（負け・・・られない・・・あの時のように・・・）

ブルームは発奮し、何とか身体を動かそうとするも、手の指先を動かす事がやっとだった。それは他の三人も同じで、花鳥風月の四人は、アモンの前に敗れ去ろうとしていた。アモンは、そんな四人に止めを刺そうとするかのように、ゆっくり近づき始めたその時だった。花鳥風月四人の耳に、何かの声が聞こえて来た。

（アモン、止めて！）



(アモンは、本当は優しい人・・・)

(お願い、アモンを助けて!)

花鳥風月の四人にはそう聞こえていた。最初は幻聴かとも思ったが、確かに自分達に話し掛けているようだった。

(フラッピ!?)

(チョッピなの!?)

(ムープ!?)

(フープ!?)

最初はフラッピ、チョッピ、ムープ、フープ、自分達のパートナーの声だと思ったが、意識が段々戻って来ると、それがフラッピ達とは違う何かの声だと認識出来た。ブルームは、声に問うように話し掛け、

「あなた達は・・・誰!?’

(私達は、この魔界に住む精霊)

(アモンは、私達を何時も助けてくれたの)

(でも、アモンは最近急に変わってしまった・・・)

(お願い、アモンを助けて!!)

嘗てのプリキュア合宿での成果か、四人には魔界に住む精霊の助けを求める声が聞こ

えた。魔界に住む精霊達の助けを求める声が、花鳥風月四人の気力を、再び奮い立たせた。何とか起き上がろうとする四人の姿に、思わずアモンの歩みが止まった。アモンのあれだけの攻撃を受けて立ち上がれる者など、この魔界においてもそうそう居るものは無かった。

「負け……られない……あたし達は、こんな所で」

「負け……られない……みんなと再び会う為にも」

「負け……られない……私達に協力してくれたキャミーや大蛇達」

「負け……られない……バハムート達が力を貸してくれた事を、無駄にしない為にも」

「『魔界の精霊達の為にもおお!!』」

「又ウウウウ!!」

花鳥風月の四人は、ヨロヨロしながらも、再び立ち上がった。その瞳の闘志は先程以上に燃え上り、思わずアモンが唸った。

『私達の力も使つてえ!』

魔界に住む精霊達が、花鳥風月に今新たなる力を与えた!

「す、凄い力を感じるラピィ」

「こんな感じ、初めてチョピ」

「チョッピ、ムーブ、フープ、力を解放するラピ」

フラツピの合図と共に、フラツピ、チョツピ、ムーブ、フープの光の精霊達が、体内に宿った精霊の力を解放しようとしていた。

「月の力」

「風の力」

「大地の力」

「大空の力」

フラツピの言葉を合図に、体内に宿る力を解放した時、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインデイが、目を瞑って手を繋ぎ合い、四人の身体を凄まじい光が覆うと、四人の背に黄金の天使の羽が付き、四人の衣装は光輝き続いていた。

「凄い力を感じる」

「エエ、私達に新たな力が・・・」

「協力してくれた魔界の精霊達の為にも」

「私達は負けられない」

「」「アモンを必ず救う！」「」

「又ウウウウウ!!？」

驚愕するアモンの前で、スプラッシュブルーム、スプラッシュイーグレット、スプラッシュユウインデイとして覚醒し、光と闇の精霊の力を解放した花

鳥風月の四人から、目映い光が弾け続けた。まるで体内に漲る精霊の力が、体内に収まりきらないかのように・・・

スプラッシュブルーム、スプラッシュユীগレット、スプラッシュブライト、スプラッシュウインディと化した四人は、ゆっくり目を見開くと、アモンは咆哮して四人を先程同様、両腕を水平にしながら、右腕にブルームとユীগレットの首を、左腕にブライトとウインディの首を捉えようとするも、四人はその攻撃を左手で受け止め、アモンに対し悲し気な視線を向けた。

「「「ヤアアア！」「」」

四人は気合いと共に、残った右腕でアモンの身体に右パンチを浴びせると、アモンの巨体が吹き飛んだ。

「ウオオオオオオ!?」

アモンは壁に激突する寸前で何とか態勢を整えるも、さっきまで瀕死だった四人が、まるで別人のように変わった事に驚きを隠せなかった。アモンは激高し、雄叫びを上げて尚も四人に突進してくると、四人は向かって左からブライト、ブルーム、ユীগレット、ウインディの順に並び、扇形の陣形を取って左手を重ね合った。

「光と闇の精霊よ!」

ユীগレットが・・・

「奇跡の力を！」

ウインディが・・・

「今、プリキュアと共に！」

ブライトが・・・

「解き放て！」

ブルームが・・・

「プリキュア！スターライトオオオ・・・スプラアアアッシュ!!」

四人が右手を前に突き出すと、星の輝きのような弾ける光が膨れ上がり、やがて弾けながら、突進してくるアモンの身体を飲み込んだ。アモンの巨体はその勢いのまま、まるで天ノ川を流れていくかのように、激しく壁に激突した。

「ウオオオオオオ!?」

スターライトスプラッシュの光の中で、アモンの心の中に植え付けられた負の感情が、星の輝きで照らされ、弾ける様に消えて行った・・・

（俺は・・・俺は、今までどうして居たのだ!?! 双児宮でアベルと戦い・・・俺は・・・）  
そうだ！俺は、シーレインに・・・）

アモンの意識が活性化されていくと、カインに操られ、シーレインの処刑に賛成した時の悔恨が思い返されていた。

（俺は・・・俺は・・・）

アモンの巨体が、壁から力なく崩れ落ち、実体化した魔界の精霊達が、そんなアモンを心配してアモンの側に近付いて行った。アモンは、そんな精霊達を穏やかな目で見つめながら、

「俺は、お前達をも威嚇し続けて居たのだな・・・済まぬ」

『アモン！』

アモンが元に戻ったと知り、魔界の精霊達は嬉しそうにアモンに纏わりついた。そんな様子を、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウィンディの四人も、目を細めて見守り、四人のスプラッシュフォームは解除され、何時もの姿に戻った。アモンはゆっくり起き上がり、四人に近付いて来た。

「お前達が・・・プリキュアか？」

「ウン！あたしはキュアブルーム」

「私はキュアイーグレットよ」

「キュアブライト」

「キュアウィンディだ」

四人はアモンに対し、簡潔に自己紹介をすると、アモンは頷き、

「俺はアモン！この磨羯宮を守護するものだ。お前達の手・・・見事だった！そして、俺

をカインの呪縛から解き放つてくれた事・・・礼を言う」

「ウウン、魔界の精霊達があたし達に力を貸してくれたから、あたし達はあなたを元に戻せたんだよ」

ブルームはそう言うとニンマリ微笑み、イーグレット、ブライト、ウインデイも笑みを浮かべた。

（不思議な奴らだ・・・今まで自分達の事を殺そうとして居た俺に、そんな顔をみせるとはわなあ）

アモンはそう言うと、自分でも自然と顔が綻んだ。だが、元々厳つい顔のアモンの笑みは、ブルーム達には少し不気味に見えるのだった。

「さあ、門を抜けるが良い！カインとアベルが、何を企んで居るかは俺にも分からんが、お前達を利用しているのは確かなようだ。お前達が魔宮を抜ければ、何か動きがあるかも知れん」

「分かった！イーグレット、ブライト、ウインデイ、行こう」

「「エエ」」

四人は、アモンに別れを告げ、磨羯宮を後にしようとして居た・・・

巨蟹宮・・・

「バカな!?あのアモンを倒しただと?」

カインは目を見開くと、思わずブルーム達があモンに勝利した事が信じられなかった。ソドムはゆっくり目を開くと、

「不思議ではあるまい・・・今までの奴らの戦いを見ればなあ」

「ムウウ・・・まあいい、磨羯宮に施されていた光の封印は解けたのだからな。だが、プリキュア・・・此処までとは・・・」

カインは、ただ利用するべき存在と見ていたプリキュア達だったが、自らの予想を超える力を示すプリキュア達に、一層警戒感を深めた・・・

##### 5、魔王を待つ者

魔王はモグロスに連れられ、魔王の正体を知る人物に会うべく、魔界を歩き続けたものの、中々その人物は現れなかった。雪山、火山群を抜けると、再び大きな森に出て歩き続けた。

「おい、何時になつたら着くカゲ?」

「オオホホホ、もう直ぐですよ」

「その言葉は何度も聞いてるカゲエ!」

魔王は、何処か小馬鹿にするようなモグロスにイライラしながらも、自分の事を知つ



て居ると言う者に会う為グツと我慢をしていた。自分が何者なのか？という疑問がようやく分かると思えば、これぐらいの事は耐えねばとは思った。森を抜け、拓いた場所に出ると、モグロスは足を止めた。

「着きましたよ、魔王さん……此処が癒しの大樹！この大樹の上にこそ、あなたが来るのを待ち侘びている方がいらっしやいます」

「癒しの大樹!? ……何か聞いた事がある気がするカゲ？」

魔王は、癒しの大樹という言葉を聞くと、プリキュア達と別れる前の出来事を思い出して居た。プリキュア達は、魔界シンドルームに掛かったベリー達を治癒する目的で、癒しの大樹の側の癒しの泉に向かった事を思い出した。見る見る魔王の目付きが鋭くなり、

「お前ええ！俺を騙したカゲエエ!!」

「おやおや、何の事でしょうか？」

惚けるモグロスを見て、益々魔王は目を吊り上げ、

「惚けるなああ！みゆき達が向かったのは、癒しの泉カゲ……つまり、この大樹の側カゲエエ!!」

「まあ、反対側ですけどね」

「うるさいカゲ！よくも俺を騙したカゲなああ!!」

激高する魔王を落ち着かせるように、モグロスは両腕を前に突き出して軽く手を振った。魔王の怒りが、そんな事で収まる筈も無かったが、モグロスは、まだ文句を言おうと言う魔王を制し、

「まあまあ、魔王さん落ち着いて下さい。あなたを遠回りさせてまで、この魔界を案内した事には理由があるのです。それは魔王さん、あなたはこの魔界の王に・・・なる資格があるからなのですよ」

「俺が!?魔界の王?・・・興味無いカゲ」

モグロスに、魔界の王になれる資格を持つと言われた魔王だったが、魔王は心底そんな事に興味は無かった。絵本の世界のニコや、プリキュア達と共に過ごした日々の方が、魔王には楽しかったし大事だった。モグロスは、そんな魔王を見てニヤニヤしながら、

「まあそれは、あなたを待つ方と出会ってからお決めになればよろしいでしょう・・・では魔王さん、プリキュアの皆さんは、どうやら十二の魔宮に無事到着したようですよ、名残惜しいですが、わたくしとは此処でお別れです」

「待つカゲ!まだ話は終わって・・・」

魔王が慌てて話を続けようとするも、珍しく真顔のモグロスを見て押し黙った。モグロスは、十二の魔宮の方角に視線を向けると、

「もう直ぐ地獄門が開くでしょう。この魔界のみならず、人間界をもその視野に捕らえたある者達が、真の力を取り戻し、人間界に災いもたらし時、五人のプリキュア達の中に……いや、止めておきましょう」

モグロスは話を途中で中断し、帽子を深く被り直した。魔王は、モグロスの言葉を聞いて思わず驚いた表情を浮かべると、モグロスに思わず問いかけた。

「おい！今気になる言い方したカゲなあ？五人のプリキュア達って……みゆき達か？のぞみ達か？それとも、闇の五人組の事カゲ？」

魔王はモグロスの言葉が気になった……

みゆき達やのぞみ達、ダークプリキュア5の事なのか、それともプリキュア達の中の五人の身に何かが起こるのか、気になって仕方なかった。モグロスは涼しい顔で背後を向き、モゾモゾ身体を動かして振り向くと、モグロスの手には大きなハンマーが握られていた。魔王の顔から汗が流れ、脳裏に嫌な予感が漂った。

「おい！それは一体何の為に取り出したカゲ？」

「さあ、お行きなさい！あなたを待つ者の場所にいいいい！！」

モグロスはそう言うと、ハンマーを後方に大きく振り、勢いを付けて一気にアッパースイングで、魔王の身体を思いつきり上空に打ち上げた。

「カゲエエエエエ！覚えてろおおおおお！！」

魔王は涙目浮かべ、捨て台詞を穿きながら上空高く消え去った。モグロスはハンマーを下ろし、額に右手を付けて上空を見上げると、

「オッホッホッホッホ！飛びましたねえ．．．さて、私も魔王城に向かいますか．．．オッホッホッホッホ」

モグロスは、笑い声を響かせながらその場を去って行った．．．

「イテテテテ．．．あいつ、次に会ったら絶対許さないカゲエー！」

癒しの大樹の上は、蔦が入り組み、曇が周囲を包み込んで居た。癒しの大樹の上に到着した魔王は、モグロスの行為に怒っていると、

「フッフ、ようやく会えたね」

「カゲ!?!」

魔王に何者かの声が聞こえて来た。何処か優しそうな声でもあり、哀しそうな声にも聞こえた。魔王は思わず振り返ると、そこにはゆっくり魔王に近付いて来る、黒髪の少年の姿があった。背中からは、片側五枚ずつ十枚の黒い翼を持つ少年の姿を．．．

「お前が．．．!?!」

そう少年に話し掛けようとした魔王は、思わず言葉を失った。何故なら、その少年の姿は透けて居たのだから．．．

「お前は、一体誰カゲ!？」

気を取り直した魔王は、少年に声を掛けると、少年は微笑を浮かべながら自己紹介を始めた。

「僕の名前は・・・ルーシエス!この世界の者達は、僕の事をこう呼んで居るよ・・・魔王ルーシエスとね」

「カゲエエエ!？」

魔王は、自分の記憶の事を知って居る人物が、この魔界の王ルーシエスだと聞き、驚きを隠せなかった・・・

第三百三十二話：十二の魔宮（前編）

完

## 第三百三十三話：十二の魔宮（中編）

## 1、魔王ルーシエス

魔王は癒しの大樹の上で、ようやく自分の事を知って居る人物と出会う事が出来た。その人物は、魔界の王ルーシエスと名乗り、魔王は改めてルーシエスを見た。魔王が見た限り、ルーシエスは少年のような風貌をしていて、とてもこの魔界の王には見えなかった。

「お前が魔界の王!?とてもそうは見えないカゲ・・・」

「だろうね、自分でもそう思うよ」

ルーシエスは、魔王の失礼な言葉にも、微笑み交じりに頷いた。何時もの魔王ならば、このようなタイプはあまり好きにはなれなかったが、どこかルーシエスには親近感が湧いていた。

「お前、もしかして怪物に変身したりするカゲ?」

「いや、僕は常にこの姿だよ・・・もつとも、今の僕は肉体を失った残留思念だけだね」  
「残留思念!?!」

魔王は、ルーシエスの身体が透けている事には気付いていたが、肉体を失った残留思

念というルーシエスの言葉には驚いた。残留思念とは、超常現象や精神世界、スピリチュアリティなどで使われている用語で、一説には強く何かを思った時に、その場所に思考や感情などが残る事と言われていて、俗にいう幽霊なども含まれていた。魔王も人間界で暮らす内に、色々な事を学び、残留思念の事も知って居た。

「残留思念って事は……つまり、お前は死んでいるという事カゲ？」

「そうとも言えるし、違うとも言えるかなあ……君という存在は実在しているしね」  
「俺がお前と何の関係あるカゲ？」

ルーシエスのどこか哲学的な言葉に、魔王は思わず意味が分からず困惑した。ルーシエスは口元を緩め、

「そうだね、君にも分かるように説明しないとね。これから話す事は、君とも関りがあるプリキユア達にも関係する事何だ」

ルーシエスはそう言うのと、魔王に昔話を始めた……

「そもそも、僕がこの魔界にやって来たのは、この魔界を支配していた三顔の悪鬼、悪魔王ゼガンと、バハムート達竜族が戦っていた頃の話何だ。後にそれは、魔界大戦と呼ばれる戦いの真つ只中だったんだけど、僕は、この魔界を監視する為に訪れたんだ。だけど、ゼガンに怯える魔界の民達や、それを助けてゼガンに立ち向かって殺されそうなるアモンを哀れに思い、僕はゼガンとの戦いに参戦して墮天し、この魔界で暮らす事を決め

「ただ」

ルーシエスは、光の天使である身を捨て、悪魔王ゼガンと対峙した。ゼガンを屠る力を持ちながら、ルーシエスはゼガンを殺す事はせず、その力を三つに分け、ゼガンの本体を封印した事を魔王に話した。魔王は不思議そうに、

「お前、そのゼガンって奴を何で倒さなかったカゲ？」

「確かに、僕はゼガンを殺す事も出来たよ……だけどゼガンの体内には、この魔界を消滅させられる規模のコアが埋め込まれてあったんだ。何故ゼガンの体内に、そんな危険な物があつたのかは、僕にも分からないけどね。そして僕は、ゼガンの肉体を地獄に封じ、地獄門の上に居城を建てたんだ。僕は、地獄門が簡単には開かぬように、光と闇の二重の結界で封印し、更に星空界の中心で全宇宙の均衡を保つ、スターパレスに居る十二星座、十三人のプリンセス達を参考にして、この魔界に十二宮と、それを守護する戦士達を配置したんだ」

「星空界!? みゆきとやよいが喜びそうな……」

「最も、巨蟹宮に戦士は居なかったけどね」

「何でその宮には、門番を置かなかったカゲ？」

「元々は居たんだよ……でも、巨蟹宮の守護を命じた者は、奇妙な死に方をしてね。僕は薄々、カインとアベルが何か裏で手を回していると思っていたよ。三つに分けた筈の



彼らの一人が、行方不明だったからね。僕も密かに探ってはいたけど、遂にその存在は分からなかったんだ。だから僕は、巨蟹宮に戦士を配置する事を止め、四神と呼ばれるシーレイン、アモン、そしてカインとアベルに管理させる事にしたんだ」

魔王には、ルーシエスが警戒しているカインとアベルに、何故そんな権限を与えて居るのか理解出来なかった。

「お前、何でそいつらを好きにさせておくカゲ？」

「一つは、カインとアベルを僕の手元に置き、彼らを監視する意味、もう一つは、僕は彼らが改心してくれば幸いと思ったから何だけど、それは僕の浅はかな考えだったようだね」

ルーシエスは、自虐の意味も込めてか、少し笑みを浮かべたが、魔王にはその笑みが寂しそうに見えた。

「けど、お前の話はよく分からないカゲ?!お前は何で残留思念に何かなったカゲ？」

魔王は、ルーシエスの話についていけず、ポカンとした表情を浮かべた。ただ分かった事は、悪魔王ゼガンという存在が危険であり、その分身であるカインとアベルもまた、危険な者達だとは魔王にも理解出来た。

「そうだね・・・ちよつと話が逸れてしまったね。僕がこの姿になったのは・・・」

ルーシエスも、話が少し遠回りしたのに気づき、苦笑しながら本題に入った。

ルーシエスが魔界の王として君臨してから、永い年月が経ったある日の事、それは起こった……

人間界において、プリキュア達が闇の救世主を名乗るバロムと戦った頃、バロムによつて強制的に目覚めさせられたカオスは暴走し、全てを深淵の闇へと飲み込もうとしていた。無論、この魔界も例外では無かったが、ルーシエスは早くカオスの暴走に気付き、自らを触媒にして魔界に結界を張り、カオスの侵攻を防いだ。だがその代償は大きく、ルーシエスは自らの肉体を闇に蝕まれた。

「僕は、まだ死ねないと思ったんだ。かつてこの魔界を支配していたゼガンの分身、カインとアベルが居たからね。僕が死んだと分かれば、彼らは僕が封印した真の肉体を取り戻そうと、必ず野心を露にする事は分かっていたからね。そこで僕は、僕の影から肉体を作ろうと考えたんだ」

ルーシエスの話を聞き、魔王の脳裏にある疑問が湧き上がった。自分の存在に関するある疑問が……

「も、もしかして、お前の影から生まれたって言うのは……」

「そう……君の事だよ！」

ルーシエスは魔王を指差し、魔王は呆然とルーシエスを見つめた……

## 2、白羊宮・・・心優しき魔獣を救え

カインの策略により、再び十二の魔宮の一つ、白羊宮の前へとやって来たピーチ、ベリ、パイン、パッションの四人は、白羊宮の中に入った。白羊宮の内部は、至る所壁が壊れていて、四人の耳には、獣のような声がずっと聞こえて居た。

「何かこの奥から嫌な感じがする・・・」

「エエ、用心しましょう」

ピーチとベリは互いの目を見て頷き合い、更に歩を進めた。パインは思わず立ち止まり、パッションはそんなパインを訝った。

「パイン、どうしたの?」

「ウン・・・あのねえ、この声・・・とても哀しそう」

「「エツ!」」

パインの思わぬ発言に、ピーチ、ベリ、パッションは思わず驚いた表情を浮かべた。この声の主が、哀しそうとはどういう意味なのか分からず、パインからの次の言葉を待った。パインは、三人の顔を交互に見ると、

「この声の主は、何かを訴えたいんだと思うの・・・私にこの声の主と話をする時間をくれないかなあ?」

パインは、ちよつとおねだりする様な視線を仲間達に向けた。ピーチ、ベリ、パッ

シヨンは思わず見つめ合い互い頷き合おうと、

「パインがそう言うなら．．．ねえ、ベリー、パッション」

「エエ、戦わないで済むのなら、その方があたし達も助かるし」

「でもパイン、気を付けてよ？」

「ウン！ピーチ、ベリー、パッション．．．ありがとう」

パインは三人が許可してくれた事で、心の底から嬉しく、天使のような微笑みを浮かべた。四人はシフォンとタルト共に、哀しそうな獣の声が響く、室内へと通じる扉を開けて中に入った。一同の視界に、全身をモコモコした白い毛皮で覆われ、顔が何所にあるかも分からない異形な魔物が映った。その者の名は、白羊宮を守護する顔無しのおロンであったが、パイン達が知る由も無かった。パインは一歩前に出ると、キルンを呼び出してオロンに話し掛けてみた。

「こんにちは！私達はプリキュアって言うの．．．私の名前はキュアパイン！あなたは？」  
「ブウオオオオオ！」

パインは話し掛けるも、オロンは不気味な咆哮を上げてその場で暴れ、思わずピーチ、ベリー、パッションが身構えた。パインは慌てて三人を制止し、

「待って！大丈夫だよ．．．大丈夫」

パインはオロンに対し、そう優しく話し掛けながら近付いていった。タルトは心配そ

うに、

「パインはん．．．大丈夫かいなあ？」

「パインなら．．．大丈夫」

タルトに聞かれたピーチは、パインを見守りながらそう呟いた。動物が大好きで、常に慈愛の眼差しで見つめるパインなら、絶対に大丈夫だという気持ちだがピーチにはあつた。オロンに優しく手を触れたパインに、オロンは最初こそビクリとして暴れようとするも、パインはそんなオロンを落ち着かせるように、オロンを優しく撫で、自分の顔をオロンの毛むくじやらの身体に密着させた。

「大丈夫．．．大丈夫だよ」

パインは目を瞑りながら、優しくオロンの白い毛むくじやらの身体を撫で続けると、次第にオロンの興奮は治まってきた。まるでパインの優しい心が、自分の中で湧き上がって来る破壊の衝動を、パインが癒してくれるかのように．．．

「ブウウウウン」

「そう、オロンさんって言うのね？私はキュアパイン！こっちの三人は、私の大切な仲間なの、ピーチ、ベリー、パッション、それに、こっちがシフォンちゃん、こっちがタルトちゃん」

オロンは、パインに甘えるかのように声を発し、パインは、オロンが自分に心を開い

てくれた事が嬉しくなり、仲間達の事もオロンに紹介した。ピーチ、ベリー、パツションには、オロンのそんな声の意味は分からなかったが、オロンはチラリと一同を見ると、再び何かをパイんに訴えた。

「ブウオブウオオオオ！ブウウウン」

パインは、キルンを通じてオロンの声を聞くと、表情が見る見る曇って行つた。カインに怪しげな技を掛けられてから、オロンの心の中で、全てを破壊したい衝動が沸き起こる事、オロンはそんな事はしたくないのに、まるで自分の身体じゃないかのように、暴れてしまう事をパイんに伝えた。

「何て酷い事を．．．大丈夫だよ、私達があなたを．．．」

パインがそうオロンに話し掛けた時、オロンの心にカインの心の声が聞こえて来た。

（どうした、オロン!?プリキュアは、敵だ！奴らに光の技を使わせ．．．殺せ!!）

「ブウウウン．．．グウウオオオオオ!!」

オロンは激しく身体を揺すり抵抗しようとするも、再び心に湧き上がって来る破壊の衝動を感じ、パインを突き飛ばした。だが、突き飛ばされたパインには、オロンの声がハッキリと聞こえていた。オロンは確かに、パイン達を攻撃するくらいなら、いつそのまま殺して欲しいと．．．そんなオロンの心情を知ったパインは、見る見る涙目になると、

「そんなの駄目えええ！ピーチ、ベリー、パッション、お願い力を貸して！オロンさんを助けたいの!!」

パインの必死な顔を見て、三人は即座に頷き、パインの申し出を承知した。咆哮するオロンに、ピーチ、ベリー、パッションが飛びつき、暴れるオロンを必死に押さえつけた。

「「「パイン！」」」

「ウン！」

ピーチ達の合図に、パインは返事を返すとパインフルートを取り出し、オロンの前へと歩き出した。

「オロンさん、今あなたの心に巣くう闇を追い払うからね・・・悪いの、悪いの、飛んでいけ！プリキュア！ヒーリンググプレアー・・・フレ〜ッシュ!!」

パインが、オロンの至近距離から放ったヒーリンググプレアーが、オロンの身体を優しく包み込んだ。オロンの心の中に潜む破壊の衝動が、見る見る消えていくようにオロンには感じられ、オロンは心地良い気持ちのまま意識を失った。数分後、意識を取り戻したオロンは、慌てて毛むくじやらの身体を動かすと、白い体毛の中から、梟のような顔を出した。

「ブウオ!?!」

「もう大丈夫だよ」

オロンの視線の先には、しゃがみ込みオロンの顔を見て、天使のような微笑みを浮かべるパインと、その背後で笑顔を浮かべながら立つピーチ、ベリー、パッション、シフォンとタルトの姿があった。オロンは一同に飛び付き、嬉しさを表現するかに、四人の顔に頬擦りを始めた。

「フッフ、オロン嬉しそうだね？」

「エエ、助ける事が出来て何よりだよ」

「これもパインのお陰ね」

ピーチ、ベリー、パッションは、今回の立役者であるパインを褒め称え、タルトとシフォンも同意したように頷いた。パインは恥ずかしそうに、

「ウウン、みんなが協力してくれたから・・・キャッ！オロンさん、くすぐった〜い」

オロンに顔を舐められ、パインは苦笑しながらオロンの身体を摩り続けた。この宮だけは、十二の魔宮とは思えない和やかさを醸し出していた。

### 3、金牛宮・・・ミノタウロスの謎

用心しながら金牛宮の扉へと歩くメロディ、リズム、ビート、ミュージック、ハミイとピーちゃん、そしてキャミー達、扉の前には、三メートルはありそうな巨体の牛神の石像が



祭られていた。

「これが、この宮の魔神つて事かなあ？」

「多分ね・・・ギリシア神話に出て来るミノタウロスのイメージにそっくりだし」

メロデイに聞かれたリズムがそう答えると、一同の視線が石像に向けられた。仁王立ちをしたその猛々しい姿は、これから戦うであろうミノタウロスの強さが伝わって来るかのようにだった。

「此処が、ミノタウロス様が守護する金牛宮ニャ・・・キャミーも中に入るのは初めてニャ」

ビートも思い出したようにリズムに話し掛け、

「音吉さんの本で読んだけど、そのギリシア神話に出て来るミノタウロスつて、迷宮の奥深くに閉じ込められて居たんでしよう？」

「ギリシア神話ではそう書かれてるわね」

ビートの問いに、リズムは小さく頷きながら同意した。リズムやビートが読んでギリシア神話によれば、クレータ島のミノノース王は、後に生贄を捧げる約束をポセイドンと交わし、美しい雄牛を得た。その牛は白とも一説には黄金だったとも言われていた。雄牛の美しさの虜になったミノノース王は、ポセイドンとの約束を違え、別の雄牛を生け贄として捧げてしまい、白い雄牛をあるうことか我が物にしてしまった。約束

を破られ激怒したポセイドーンは、ミーノース王の後であるパーシパエーに呪いをかけた。それは后が、白い雄牛に性的な欲望を持つ事だった。悩んだ后は、名工と誉れ高いダイダロスに密かに命じて、雌牛の模型を作らせた。彼女は何と、自ら模型の中へと入って雄牛に接近し、目論見通り欲情した雄牛と性交渉を遂げた。その結果、神の天罰か、過ちの代償か、后は何と牛の頭をした子供であるミーノータウロスを産む事となった。ミーノータウロスは、成長するにしたがい、荒ぶる雄牛のように乱暴になり、次第に手におえなくなっていくた。ミーノース王は、名工ダイダロスに命じて迷宮を建造し、そこにミーノータウロスを閉じ込めた。ギリシア神話の内容は凡そこんな話だった……

ミューズは改めて金牛宮を凝視しながら、

「じゃあ、この宮も迷宮になってるって事かなあ？キャミー、何か知ってる？」

「さあ!? キャミーは聞いた事ニヤいのニヤ……でも、この魔界のどこかの島には、迷宮があつたって話は聞いた事あるニヤ」

キャミーの話を聞き、一同は改めて金牛宮を見つめた。再び歩き始めた一同、ビートは、ミノタウロス像の横を通る瞬間、もの凄いプレッシャーを感じた。ビートは思わず立ち止まり、少し怯えた表情でチラリとミノタウロス像を流し見たその時、ミノタウロス像の目が光った気がして、ビートは思わず悲鳴を上げた。

「キヤアアア！」

「「ビート!?!」」

「い、今、この石像の目が光ったような……それに、この石像から物凄いプレッシャーを感じたの」

「「エツ?!」」

ビートの怯えた表情を見て、顔色を険しくしたメロディ、リズム、ミュージクも、ミノタウロス像の前に来るとミノタウロス像を確認した。三人が念入りに調べてみるも、特にミノタウロス像に異常は見当たらなかった。

「ただの石像のようだけど?」

「本当に目が光ったの?」

「気のせいじゃないの?」

メロディ、リズム、ミュージクに改めて問われると、ビートも自分の勘違いだった気がしてきた。ビートはばつが悪そうに、

「そう言われると……私の気のせいかも知れないかも」

「アハハハハ、ビートったら、ハミイとピーちゃん連れて、一人で魔界に乗り込んだ割に、相変わらず怖がり何だからあ」

「やつかましいわああ!」

メロディにからかわれ、ビートは目を吊り上げながら怒り、一同から笑い声が響いた。（けどあの石像から、確かにもの凄いプレッシャーを感じただけだなあ・・・）

ビートは、今一度ミノタウロス像を振り返って首を捻った。一同は用心しながら金牛宮の重い扉を開いた。見た限りでは、中は迷宮ではなく、一直線に奥に続いているようで、一同はホッと安堵した。ゆっくり歩を進める一同は、奥の扉の中から威圧感を感じて、思わず歩みを止めた。メロディは険しい表情で、

「凄い・・・ここまで威圧感を感じる」

「ウン・・・用心しましょう」

「扉を開けた途端攻撃されかねないね」

メロディ、リズム、ミューズは、顔色変えながら再びゆっくり奥の扉目掛け歩き出すも、ビートは再び首を捻り、

（確かに、奥の扉からプレッシャーを感じるけど、さっきの石像の横を通った時の方が・・・）

「セイレーン、どうしたニヤ？」

「まだ震えてるのかニヤ？」

ハミイとキャミーに声を掛けられ、ハッと我に返ったビートは、

「だ、大丈夫よ、震えは・・・って、最初から震えて何か無いわよお！」

ビートは思わずキャミーに大声で反論し、先を歩くメロデイ、リズム、ミューズが背後を振り返って、鼻の前に人差し指を出して静かにするように合図を送り、ビートは慌てて両手で口を塞いだ。奥の扉の前に到着すると、メロデイが右側の、リズムが左側の扉に手を掛け、正面にビートとミューズが立つて、中からの攻撃に備えた。メロデイとリズムは、一同とアイコンタクトすると、最後に二人は目で合図をし、

「せええの！」

メロデイとリズムは、掛け声と共に奥の扉を開いた。ギイイイと軋みながら開かれる扉、金牛宮の室内は、まるで闘技場のようになっていて、観客席もあるようだ。その中央には、巨大な銀の斧を右手で持つ、まさに牛神と呼べるような、黒く猛々しい姿をしたミノタウロスが居た。

「来たか！本来ならば観客達の前で、貴様達を処刑する様を見せつけ、俺様の強さを見せる所だが……」

自信満々に四人を見下すミノタウロスが、ギロリと一度を睨み付け、一同はプレッシャーを受けた。だがメロデイは怯まず、

「そうやすやすやられますかって言うの……ハミイ、ピーちゃん、キャミー、私達から離れてて」

メロデイは、ハミイ、ピーちゃん、キャミーを観客席に避難させた。

ビートは、目の前に居るミノタウロスが発するプレッシャーに、違和感を覚えていた。さっきのミノタウロス像から感じたプレッシャーとは、明らかに違っていた。

（どういう事!? さっきは勘違いかも知れないと思ったけど、やっぱり・・・）

ビートの脳裏に、ミノタウロスに対しある疑念が浮かび上がった。ビートは周囲を警戒するように見渡し、再びミノタウロスを睨むと、

「あなた、本当にこの宮の魔神なの？ ひよつとして・・・ミノタウロスの偽物じゃないの？ 本物は、別の場所で私達を監視してるんじゃないの？」

「「エツ!」」

ビートが、矢継ぎ早にミノタウロスにした問い掛けをし、思わずメロディ、リズム、ミュージックが、驚きながらミノタウロスを凝視した。

「何だとお!」

ミノタウロスは、ビートの問いを聞くや、見る見る全身がワナワナ震えだした。それは、怒りのあまり震えているようで、思わずビートはその迫力の前に一步後退った。

「この俺が・・・この俺が、偽物だとおおお!! 黙れええ!! この俺が、俺こそが、ミノタウロスだああ!! ウウウウオオオオオ!!」

ミノタウロスは、右手に持った巨大な銀の斧を地面に叩きつけ、怒りの咆哮を上げた。

ミノタウロスの怒りに呼応したかのように金牛宮が震えた。そして、その震えに呼応したかのように、金牛宮の入り口に聳え立つミノタウロス像に亀裂が走った……

メロディは、少し狼狽えながらビートに話し掛け、

「ちよ、ちよつとビート、戦う前から相手を怒らせてどうするのよ？」

「ゴ、ゴメン……でも、さっきの石像から感じたプレッシャーの方が凄かったから、本物は他に居るんじゃないかと思って……」

「でも、さっきビートは勘違いかもしれないって……」

「ウン……でも、この場所に来てハッキリ確信したわ。あれは、勘違い何かじゃないって」

ビートは険しい表情でハッキリと言い切った。思わずメロディ、リズム、ミュージスは、顔を見合わせて困惑の表情を浮かべた。それは、ミノタウロスがもう一人居るかも知れない事を意味して居た。リズムは、今一度ビートに確認するかのよう問い掛け、

「じゃあ、もう一人ミノタウロスが居るって事？」

「エエ、もう一人居ると思う」

「そんな!？」

「事実だとすれば……ちよつと厄介ね」

メロディとミュージスは、唸り声を上げ続けるミノタウロスを見て思わず眩いた。ミノ

タウロスは、持っている銀の斧を激しく振り回すと、前方に小型の竜巻のような物体が浮かび上がった。

「この俺様を偽物呼ばわりした報い・・・貴様らに味合わせてやるううー！」

ミノタウロスが力を込めて銀の斧を振ると、小型の竜巻が勢いよく放たれるも、その攻撃はメロディ達とは見間違いの方向へと向かった。メロディは少し呆気にとられ、

「何処狙ってるのよ!? どうやらビートの言うように、このミノタウロスは偽物のようだね。さつき私達が戦ったベレルの偽物のように・・・」

「違うわ！あれは私達を狙ったんじゃない!!」

「ハミイ、ピーちゃん、キャミー、逃げてええー！」

メロディがそう仲間達に話し掛けるも、メロディの考えを即座にリズムが否定し、ミューズは妖精達に逃げるように叫んだ。気付いたビートは、即座に妖精達の前に移動して、ラブリターロッドを取り出しバリアを張った。ビートはバリアを破られながらも、何とか攻撃を相殺する事が出来た。ビートは険しい表情でミノタウロスを睨み付け、

「何て奴・・・ハミイ達を狙う何て・・・」

「「「絶対、許さない!!」」」

四人の険しい視線がミノタウロスを射るも、ミノタウロスはプリキュア達を狙わず、



妖精達を集中して攻撃を繰り返した。

「止めなさい！」

メロデイとリズムは、咄嗟にミノタウロス目掛け駆け出し、ミノタウロスにパンチとキックで攻撃をし、ビートとミュージックがミノタウロスからの攻撃から妖精達を守り、戦力が分散されていった。

「邪魔だ！」

「キヤッ！」

ミノタウロスに右腕で払われ、メロデイとリズムが吹き飛ばされ、ミノタウロスは尚も執拗に妖精達目掛け攻撃を繰り返した。ビートはミノタウロスを嫌悪の表情で睨み付け、

「何て奴……何故私達と戦わないで、ハミイ達を狙うの？」

「フン……貴様らなど何時でも殺せるが、この俺様を偽物扱いした屈辱を、貴様らにも味合わせてやる。自らの仲間を守れない己の無力さを嘆くがいい！」

ミノタウロスはそう言うと、尚も執拗に妖精達を狙い攻撃してきた。ビートとミュージックは、妖精達を庇い続け、メロデイとリズムは、何度も吹き飛ばされながらも、ミノタウロスに向かっていった。

「邪魔だあ！グレート・ハリケーン!!」

ミノタウロスは、銀の斧を大きく振り回して巨大な竜巻を発生させると、妖精達目掛け放った。ビートは咄嗟にバリアを張るも、呆気なく破られ、ビートとミューズは巨大な竜巻に飲み込まれながらも、何とか妖精達を逃がした。

「キャアアアア」

「ビート！ミューズ！」

ビートとミューズは、悲鳴を上げながら竜巻に飲まれ上昇し、メロディとリズムが二人の身を案じて心配そうに名を呼んだ。二人はその勢いのまま天井に叩き付けられ、そのまま地上に落下するのを、メロディがビートを、リズムがミューズを辛うじて受け止めた。だが、ミノタウロスはその隙を逃さず、妖精達目掛け再びグレート・ハリケーンを放った。

「ハハハハハ！ピーちゃん！キャミー！」

「クククク、自らの仲間を守れぬ、己の無力さに嘆くが良い！ハハハハハ」

四人が険しい表情で妖精達の名を叫び、ミノタウロスの嘲笑が金牛宮に響き渡った……

ピーちゃん、ハミイとキャミーの前に出て、グレート・ハリケーンを自ら受け止めようとしたその時、妖精達の前に巨大な何かが現れ、グレート・ハリケーンを両手で受け止め消滅させた。

「「エツ!」」

メロディ達は、妖精達の前に現れた人物を見て、思わず呆然とした。何故ならそこには、もう一人ミノタウロスが立って居たのだから・・・

「あ・・・兄者!」

「愚か者め!」

攻撃を放ったミノタウロスは、もう一人のミノタウロスを見て呆然としながら兄と眩き、新たに現れたミノタウロスは、そんなミノタウロスを愚か者と一喝した。メロディ達は、思わず両者を見比べながら困惑した。

「エツ!?どうなってるの?」

「二人居るとはビートに聞いていたけど・・・」

「どうしてもう一人のミノタウロスは、ハミイ達を助けてくれたの?」

「もう一人は・・・私達の味方って事?」

メロディ、リズム、ビート、ミューズは、新たに現れたミノタウロスの真意が分からず呆然としていると、二人のミノタウロスが会話を始めた。

「兄者・・・どうやって元に!」

「馬鹿め!メデューサの石化など、その気になれば何時でも解除出来た」

「じゃ、じゃあ、なぜ今まで!」

「お前の今までの苦難を思えばこそ……カインとアベルに唆（そそのか）され、迷宮から出たお前を哀れに思い、貴様らの企てを知りながら、この身をメデューサによつて石にさせ、ルーシエス様に悪いと思いつながら、お前にこの宮の門番を譲つた。お前ならば、カインとアベルの甘言など直ぐに払拭し、立派にルーシエス様に仕えるミノタウロスとして覚醒し、この金牛宮を任せられると思つてなあ……」

「兄者……だ、だが、俺はちゃんと……」

「しているか？ 貴様はバルバスと同じだ！ 長き迷宮で過ごした憂さ晴らしを、弱者に対してしているに過ぎぬ。魔王城を守護すべき金牛宮を、くだらぬ道下の舞台に変えおつて……」

兄ミノタウロスはそう言うのと、室内を見回し観客席まで作つた行為を嘆いた。弟ミノタウロスは激しく動揺しながら、

「じゃ、じゃあ……兄者は俺を殺しに来たのか？」

「違う！」

「では、俺と共にプリキュアを！」

弟ミノタウロスの話には、思わずメロディ達四人の表情が険しさを増した。二人のミノタウロスを相手にしては、勝てるかどうか思わず不安な心が芽生えて来た。だが、兄ミノタウロスはギロリと弟を睨み付けると、

「二人では戦えぬか？」

「バ、バカな!?俺はミノタウロス……こんな小娘共など、兄者の力を借りる間でもない。俺一人で倒して見せる！」

弟ミノタウロスがそう叫ぶと、兄ミノタウロスは小さく頷き、

「ならば、妖精達など狙わず、堂々とプリキュアという者共と戦うが良い！この俺が直に見届けてやる……お前達、俺の隣に座ってる！」

「ハ、ハイニヤ！」

そう言うのと兄ミノタウロスは観客席に移動して座り、妖精達にも隣に座れと命じた。ハミイとキヤミーは、ロボットのようになぎこちない動きで、驚愕しながらも言われるまま隣に座った。ピーちゃんは、そんな兄ミノタウロスの真意を探ろうとするかのように、ジイと観察すると、ハミイの隣に降り立った。ビートは、そんな兄ミノタウロスを見ると、

（あの人……ひよつとしてハミイ達を庇って……）

「ビート、行くよ！」

「エツ!?エエ、分かってる」

メロディに話し掛けられたビートは、ハツと我に返り三人の下に移動した。再び対峙するスイートプリキュアの四人とミノタウロス、兄ミノタウロスは、腕組みしながらそ

んな弟を複雑な表情で見つめていた。

（あの者達からは、どこかルーシエス様に似たものを感じる……プリキュア達との戦いで、弟が戦士とは何かを悟れば良いのだが……）

兄ミノタウロスが見つめる中、再びメロディ達とミノタウロスの戦いが始まった。今度は妖精達に見向きもせず、四人を鋭い視線で睨み付けた。

「行くぞ、プリキュアア！ウウウオオオオオ！！」

「リズム、ビート、ミューズ、行くよ！」

「「「エエー！」」」

ミノタウロスが吠え、メロディの合図の下、四人が一齐にミノタウロス目掛け駆け出し、戦いが始まった。

先ず最初に仕掛けたのは、メロディとリズムだった。二人は抜群のコンビネーションで宙に飛び、スイートハーモニーキックをミノタウロスに放った。ミノタウロスは、二人の攻撃を銀の斧で完全に防ぎ、銀の斧を振ってメロディとリズムを吹き飛ばす。ミューズはその間隙を縫い、モジュールにシリーを装着すると、

「シ、の音符のシャイニングメロディ！プリキュア！シャイニングサークル！！」

ミューズは、まるで分身の術を使ったかのように、四人の幻影を出すと、五芒星のようなサークルを描き、ミノタウロスの動きを封じに掛かった。だがミノタウロスは、銀

の斧を地面に激しく叩きつけると、その衝撃によってミューズの幻影が消滅させられ、ミューズはその威力の前に吹き飛ばされた。ビートは、ミューズと入れ替わるかのよう  
に宙に飛び、ラブギターロッドを弾いて、光の音符を複数出現させると、

「これはどう？ビートソニック！」

ビートはラブギターロッドを弾き、光の音符を矢の形に変えてミノタウロス目掛け発  
射した。

「又ウウウウウ！」

ミノタウロスは銀の斧を盾代わりにして、ビートソニックの猛攻を耐えきり、お返し  
とばかりグレート・ハリケーンをビート目掛け放ち、ビートは咄嗟にラブギターロッド  
を弾き、正面に向けて大きな円状のビートバリアを張って、辛うじてグレート・ハリケ  
ーンの直撃を免れた。ミノタウロスは、口元をニヤリとさせると、

「ほう、耐えたか・・・やるな、プリキュア！」

「あなたもね！あなたをさつき偽物と呼んだ事は謝るわ・・・でも、私達は負けない!!」  
そうミノタウロスに話すビートの下に、メロディ、リズム、ミューズが集うと、メロ  
ディはミラクルベルティエを、リズムはファンタステイクベルティエを、ビートはラ  
ブギターロッドを、ミューズはシリーをセットしたモジューレを手を取った。

「翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア！ミュージッククロンド!!」

メロディはオレンジ色の、リズムは黄色のミュージッククロンドを同時に、ミノタウロス目掛け放った。

「チェンジ！ソウルロッド！駆け巡れ、トーンのリング！プリキュア！ハートフルビート・ロック!!」

ビートは、ラブギターロッドをソウルロッドに変形させると、緑色のトーンのリングをセットしたソウルロッドのトリガーを引き、ソウルロッドから勢いよくミノタウロスに向けて射出した。

「シの音符のシャイニングメロディ！プリキュア！スパークリングシャワー!!」

ミュージズは、モジューレの力で大量の音符型の泡を生み出し、それらをミノタウロス目掛け発射した。メロディとリズムのミュージッククロンドが、ビートのハートフルビートロックがミノタウロスを捉え、三重のリングがミノタウロスの動きを制限し、ミュージズのスパークリングシャワーが、止めとばかりミノタウロスに命中する。だが・・・

「ウオオオオオオ!!」

ミノタウロスは大きく息を吸い込んで吠ええると、両腕に力を込め拘束して居た三重のリングを消し去り、スパークリングシャワーを耐えきった。

「フハハハハ！良いぞ、プリキュアアア！こんなに燃えて来たのは何時以来か・・・こんどは俺の番だな」



ミノタウロスはそう言うと、手に持っていた銀の斧を投げ捨て、銀の斧は見る見る只の石の斧に変化して地面に突き刺さった。ミノタウロスが武器を捨てた事で、メロディ達が動揺するも、兄ミノタウロスは満足そうに頷き、

(やはり、プリキュア達との戦いで、戦士としての誇りに目覚めたか……見せて貰うぞ、お前の真の力を)

「ハアアアアアアアアア！」

ミノタウロスは、そんな兄の気持ちに応えるかのように、両手に力を込め始めると、金牛宮が震えた。ミノタウロスの両手から、時折火花が飛び散り、メロディ達の顔から冷や汗が流れ落ちて行く。

「喰らえー！グレエト……バクン!!」

ミノタウロスが両手を一気に前に突き出すと、凄まじい拳圧がメロディ達を襲った。

「「「キヤアアアアアア!!!」」」

四人は為すすべなくその風圧に吹き飛ばされ、壁に激しく激突して減り込み、力なく地面に崩れ落ちた。

「ビートーメロディー！リズムー！ミュージー！」

心配顔のハミイが思わず立ち上がって四人に駆け寄ろうとするのを、兄ミノタウロスがハミイの身体を右手で掴み引き戻した。ハミイはジタバタ暴れ、

「離すニヤアア！」

「落ち着け！まだ勝負は付いて居らん」

「ニヤ!?」

ハミイは兄ミノタウロスの言葉にハツとなり、改めてメロデイ達を見ると、四人はヨロヨロしながらも、その目には闘志を宿したまま立ち上がった。

「ここで決めなきや・・・女がすたる」

メロデイが・・・

「私の気合のレシピは・・・まだまだこれからよ」

リズムが・・・

「エエ、私達の実力・・・見せて上げましょう」

ビートが・・・

「ウン・・・このままじゃ終われない」

ミュージズが・・・

「二」絶対、負けない！出でよ、全ての音の源よ!!「二」

四人のハーモニーが一つになり、今クレッシエンドトーンを召喚した四人を見て、ハミイとピーちゃんが目を輝かせ、キャミーと兄ミノタウロスが驚愕の表情を浮かべた。

「何だ、あれは!?!」

「あれは、全ての音の源、クレツシエンドトーンニャー！」

ハミイは、キャミーと兄ミノタウロスに簡潔な説明を始めた。

「クレツシエンドトーン？」

「すべての音の源、クレツシエンドトーンだと?!」

キャミーと兄ミノタウロスは、驚きながらもメロディ達に視線が釘付けにされて居た。ミノタウロスは右口角を上げると、再び両手に力を込めた。

「来い、プリキュア！俺のグレートバーンが優るか、貴様らの技が優るか……勝負だ！」  
メロディ達は、ミノタウロスの叫びに応えるかのように宙に飛び上がり、

「『届けましょう、希望のシンフォニー!』」

四人は、両腕をクロスしたまま、クレツシエンドトーンの金色の光の炎と一体化した。

「『プリキュア！スイートセツション・アンサンブル・クレツシエンド!!』」

「グレエエト……バ〜ン!!」

「オオオオオオ!?!」

スイートプリキュアのスイートセツションアンサンブルクレツシエンドと、ミノタウロスのグレートバーン、互いの渾身の力を込めた技と技が激突し、兄ミノタウロスは思わず立ち上がったて身を乗り出した。

「『ハアアアアアアア!!!』」

メロディ達四人の叫びと共に、スピードを上げたスイートセツションアンサンブルが  
 レッシエンドが、勢いを増しグレートバーンの拳圧を物ともせず、ミノタウロス目掛け  
 突撃した。ミノタウロスを包み込む黄金の輝きが、ミノタウロスの心を満たして行っ  
 た……

（俺の……負けだな……。だが……。清々しい！こんな気分は……。初めてだ）

「「「ファイナール!!!」」」」

四人の掛け声と共に、ミノタウロスの身体が光に包まれ地面にゆっくり倒れ、兄ミノ  
 タウロスは、巨体を揺らしながら弟ミノタウロスに駆け寄った。

「見事だったぞー！」

「兄者……。ハハハ、負けた！俺は、金牛宮の門番失格だな」

「何を言う、今のお前の戦い、この金牛宮を治めるミノタウロスとして何ら恥じる事は無  
 いぞ！お前こそが……。この金牛宮の主、ミノタウロスだ!!」

「あ、兄者……」

兄と弟、兄弟の絆を見たリズムは、思わず弟の奏太の事を思い出し、メロディ、ビー  
 ト、ミュージズは目を細めて見守った。だが……

「フン、役立たずが……。だが、金牛宮の封印は解けた。プリキュア共々、死ね！エクス・  
 プロ〜ジョン!!」

突然カインの声が金牛宮に響き渡り、まるで金牛宮の上で大爆発があったかのような衝撃が起き、金牛宮の天井が崩れ落ちて来た。二人のミノタウロスは険しい表情で宙を睨み素早く立ち上がった。

「クツ！」

「「「キヤアアアア！」」」

「「「ニヤアアアア!?」」」

力を使い果たし、動きが鈍っていたメロデイ達の頭上に、観客席に居たハミイ達の頭上に、金牛宮の崩壊した天井が降り注いで来た。咄嗟に腕で頭をガードするも、何故か瓦礫が一同に命中する事は無かった。恐る恐る目を開けたメロデイ達四人とハミイとキャミーだったが、ハミイ達の前には、崩壊した天井を右腕で払い除けた兄ミノタウロスが、メロデイ達の前には、自分達を庇う様に巨大な瓦礫を弟ミノタウロスが受け止めた。だが、弟ミノタウロスは先程の戦いの傷口が悪化し、大量の紫色の血を流して苦悶の表情を浮かべて居た。

「「「ミノタウロス！」」」

「「「ぶ、無事か!?!」」」

「「「ど、どうして、私達を」」」

メロデイは、敵である筈の自分達を庇い、重傷を負ったミノタウロスを心配そうに見

つめながら問いかけると、弟ミノタウロスは必死に笑みを浮かべ、

「お前達は……正々堂々と俺に勝ったんだ。俺も、お前達と戦い、兄者が俺に求めて居た事が、今更ながら分かる事が出来た。お前達のお陰だ……ウツ」

「「「ミノタウロス!!」」」

弟ミノタウロスは、声を振り絞つてメロデイ達に感謝の言葉を述べて居たが、ついに力尽き瓦礫の下に沈んだ。メロデイ達は、目に涙をためながら必死に瓦礫を退かすも、ミノタウロスは静かに横たわりその生涯を終えた……

「……弟よ……眠れ……ミノタウロスの名はお前と共にある。帰ろう、我らが生まれ育つた地に……」

兄ミノタウロスは、弟の屍を前にし、昔の事を思い出して居た……

ミノタウロスは、双子としてこの世に生を受けた。ルーシエス光臨前の魔界は、力こそが正義、それはこの兄弟においても例外では無かった。当時の魔界の王ゼガンは、力を持つ者を優遇しては居たが、徒党を組まれる事を恐れた。ミノタウロス兄弟は、生まれながら潜在的な力を秘めて居た。当時ゼガンの腹心だった巨人族の魔將軍ザンコックは、自分の地位を危うくさせそうなミノタウロス兄弟を危険視した。ザンコックはゼガンに進言し、ミノタウロス兄弟がゼガンに反旗を翻させないよう、弟ミノタウロスを迷宮に幽閉した。

（お前を人質に取られては、あの時の俺には、ゼガンの言い成りになるしかなかった…）  
兄ミノタウロスは、ザンコックからゼガンの為に尽くせば、何れ弟を解放する約束を条件に、ゼガンの配下として戦った。ルーシエスが参戦した事で、魔界大戦は終息した。弟の身を案じた兄ミノタウロスだったが、迷宮は先の魔界大戦において崩壊し、中に入る事も困難だった。弟の身を案じながらも、ミノタウロスの力は魔界中に広まって居て、ルーシエスにその力を見込まれた兄ミノタウロスは、金牛宮の戦士として仕えた。

（死んだと思つて居たお前が、カインとアベルと共に現れた時は、俺も驚いたものだ…）  
弟ミノタウロスは、魔界大戦後も生き延びて居て、金牛宮に居る兄と入れ替われば、お前はミノタウロスとして自由を得られるとカインとアベルに唆され、あらゆる生物を石化させるといふ魔物メデューサを利用し、金牛宮の兄ミノタウロスの下を訪れた。

（お前がカインとアベルと共に現れた事で、俺はすべてを悟つた。幽閉されていたお前の今までの事を思えば、この金牛宮をお前に任せてもとな…）

ミノタウロスは、弟の屍を抱え込んで立ち上がった。

「ミノタウロス…私達を庇つてくれてありがとう！」

「あなたの事、忘れない」

「最初は卑怯な奴つて思つたわ…でも、あなたは立派な戦士」

「助けてくれてありがとう」

メロディ、リズム、ビート、ミュージズの四人は、弟ミノタウロスの亡きがらに、深々と頭を下げながら手向けの言葉を送った。兄ミノタウロスは、四人を穏やかな表情で見つめながら、

「プリキュアよ、お前達のお陰で弟は戦士としてその生涯を終える事が出来た。俺は、弟と共に生まれ育った地に戻ろうと思う。だがその前に・・・カイン！貴様は、貴様だけは・・・」

「私達も・・・」

「「絶対には許さない!!」」

金牛宮に居る戦士達は、カインに対し憤りを露にして居た・・・

4、獅子宮・・・この荒ぶる獅子に鉄拳を！

獅子宮に突入したのは、ムーンライトを先頭に、ブロッサム、マリリン、サンシャインのハートキャッチプリキュアの四人、四人は、獅子宮の通路に描かれた獅子の壁画に見向きもせず、奥の扉へと走り続けた。奥の扉は全開に開いていて、思わずムーンライトは口元に笑みを浮かべると、

「どうやら、向こうもやる気満々のようよ」

「ハイ。凄い殺気ですね」



ムーンライトの言葉に、サンシャインも小さく頷いて同意した。ブロッサムはちよつと緊張した表情を浮かべ、

「私……ちよつと緊張してきました」

「ブロッサム、気合い出して行くよ！」

マリンは、そんなブロッサムの背中を押し励ますと、ブロッサムはマリんに笑み返し、

「オオオ！」

「フフフ」

ブロッサムとマリンの二人は、右腕を上にあげて気合を込め、思わずムーンライトとサンシャインが笑みを浮かべた。

獅子宮の守護者バルバスは、全身を禍々しい鎧で包み込み、目を瞑り腕組みをしていたが、駆け寄って来る足音を聞き、口角を上げると、

「来たか、プリキュア！魔法界での借り……何だ、貴様らは！」

バルバスは目を見開いたものの、目の前に現れたのはブラックとホワイトではなく、ハートキャッチプリキュアの四人だった事で、バルバスは四人を睨みながら、吐き捨てるように問いかけた。マリンは口を尖らせると不満そうに、

「今あんたが言ったでしょうが、プリキュアよ、プ・リ・キュ・ア！」

マリンは変顔浮かべながら、バルバスに自分達がプリキュアだと名乗るも、バルバス

は不機嫌そうにイライラしだした。バルバスにとつてのプリキュアとは、自分を追い込んだ二人組、ブラックとホワイトの事しか頭の中にはなかった。

「テメエらじゃねえええ！黒と白のプリキュアはどうしたあああ!?!やつらを連れて来い!!」

「成程・・・あなたが魔法界で、ブラックとホワイトに追い返された魔界の魔神という訳ね」

ムーンライトは、バルバスを挑発するかのようには話すと、バルバスは唸り出し、

「グウルルルルルウ・・・黙れ！カインからの撤退指示が無ければ、俺があいつらに勝つていた!!」

「それはどうかしら!?!ブラックとホワイトの手を煩わせないわ。あなたの相手は・・・私達よ!」

サンシャインはそう言うのと身構え、ムーンライト、ブロッサム、マリンも身構えた。バルバスは、ジロリと四人を睨み付け、

「だったら・・・テメエら四人の首を撥ねて、獅子宮の門前に晒し、黒と白のプリキュアを誘き出す餌にしてやるよ!」

バルバスは両腕をクロスさせると、十本の爪を鋭く伸ばして四人を威嚇した。マリンは少しドヤ顔を浮かべながら、

「そう易々やられますかって言うの」

「ハイ！行きますよお・・・」

ブロッサムと言葉を合図にしたように、ムーンライトを先頭に、サンシャイン、ブロッサム、マリンの順にバルバスに対し攻撃を開始した。ムーンライトの怒涛の攻撃が、サンシャインのパンチが容赦なくバルバスに浴びせられるも、バルバスは余裕の表情を浮かべていた。

「何だあ!?そんな攻撃じゃ、俺様の鎧に傷一つ付けられないぜ?」

バルバスはそう言うと、ムーンライトとサンシャインに衝撃波を浴びせるも、二人は腕をクロスさせて衝撃を和らげ、数メートル後方に身体をもって行かれるだけで堪えた。そんな二人と入れ替わるように、ブロッサムとマリンがバルバスに挑んで行った。

「マリン、行きますよ・・・ブロッサムウウ・・・シャワー!」

「合点承知の助!マリイイン・・・シユート!!」

ブロッサムの手から、無数の桜の花びらが花吹雪のような舞いが、マリンの手から無数の水の塊が、バルバス目掛け飛んで行くも、バルバスが両腕をクロスすると、

「甘いぜ!シャドウナイツ・・・ウエーブ!!」

バルバスがクロスした両腕を勢いよく開くと、真空波がブロッサムとマリンの攻撃を掻き消した。バルバスはニヤリと笑むと、

「そんなもんか、プリキュア!? やはりテメエらじや、俺の相手をするには力不足だなあ・・・今から黒と白のプリキュアを連れて来い!」

「余計なお世話よ! あなたのその慢心・・・私達がへし折ってあげるわ。サンシャイン!」  
「ハイ!」

ムーンライトは、ムーンタクトを取り出しサンシャインに合図を送ると、サンシャインは大きく頷き、シャイニータンバリンを取り出した。

「プリキュア! フローラルパワー・・・フォルテツシモオ!!」

ムーンライトとサンシャイン、二人が前方にフォルテツシモ記号を描くと、ムーンライトは赤紫色のエネルギーを身に纏い、サンシャインは金色のエネルギーを身に纏って上昇した。それを見たマリンは、ブロッサムを見ると、

「あたし達も行くよ!」

「ハイ!」

「集まれ、二つの花の力よ! プリキュア! フローラルパワー・・・フォルテツシモオ!!」

ブロッサムとマリンの二人が手を繋ぎながら、前方にフォルテツシモ記号のような形をした、ピンクとブルーのエネルギーを描くと、二人はそのエネルギーを身に纏い上昇した。

「何いいいい!？」

四人のハートキャッチプリキュアが、二組に分かれて時間差でバルバス目掛け、右側からムーンライトとサンシャインが、左側からブロッサムとマリリンが、フォルテツシモで突撃した。これにはバルバスも反応出来ず、時間差のフォルテツシモがバルバスを貫き、爆発と共にバルバスの鎧が粉々に吹き飛んだ。

「バ、バカな!?この漆黒の鎧を破壊しただと?」

「どんなもんよ!あたし達がちよいと本気を出せば、これくらい、軽い軽い」

マリリンがドヤ顔を浮かべバルバスを挑発するも、バルバスは鎧を破壊され最初こそ驚いていたものの、口元に笑みを浮かべた。バルバスは、兜を脱ぎ捨てると、茶色いたてがみを靡かせながら、首を前後左右に動かして体を解した。

「クククク、鎧というハンデが無くなったぐらいで、随分図に乗りやがって・・・こつちもちよいと本気を出してやろう」

バルバスがそう言ったかと思うと、突然四人の視界からバルバスの姿が忽然と消えた。

「「エッ!?!」」

(速い!?)

ブロッサム、マリリン、サンシャインは、突然姿を消したバルバスに激しく動揺し、辛

うじて目でバルバスの動きを見たムーンライトも、バルバスの残像を残すだけの素早いスピードを目の当たりにして、険しい表情を浮かべた。

「そらそらそら！どこを見てやがる？」

バルバスの姿を目で追えず、足音だけが聞こえる中で、バルバスは容赦なく、ブロッサム、マリン、サンシャインに攻撃を仕掛けた。三人の身体には次々に傷が付けられ、

「「キヤアアアア！」」

「クツ・・・三人共、油断しないで！」

ムーンライトは、悲鳴を上げる三人を庇う様に三人の前に出るも、バルバスの動きを捉える事は出来ず、思わず焦りが生じた。

「ブロッサム、頑張るですう！」

「マリン、何やってるんですかあ！」

「サンシャイン！」

シプレ、コフレ、ポプリが、それぞれパートナーに声を掛けると、バルバスは今気づいたかのように三人の妖精を見て口元をニヤリとさせた。

「ククク、テメエらの弱さを身に持って思い知らせてやるよ。仲間が無残に切り刻まれる姿をなあ？」

バルバスはそう言うと、攻撃目標を三人の妖精に切り替えた。ブロッサム、マリン、サ

ンシャインは顔色を変え、

「な、何を!？」

「コフレ、シプレ、ポプリ、逃げてえええ!」

「クツ、ポプリ達を狙う何て」

バルバスは、容赦なく三人の妖精目掛け攻撃を放つも、ポプリは咄嗟にバリアを張ってシプレとコフレを守った。バルバスは軽く舌打ちすると、

「チツ、小賢しい! シャドウナイツ・・・クロウ!!」

バルバスが両腕を前に突き出すと、バルバスの両手の爪が伸び、ポプリが張ったバリアを突き破り粉碎した。妖精達は、辛うじて宙に浮いて逃げ延びると、バルバスは狂気のお笑みを浮かべながら、妖精達目掛け両腕を振り続け、衝撃波を浴びせ続けた。

「ヒヤハハハハ! 死ぬ、死ぬ、死ぬえ!!」

バルバスの衝撃波を妖精達が辛うじて躲すも、衝撃波が獅子宮の天井を破壊し、屋根が崩れ落ちてくる。それにも構わず、バルバスは容赦なく妖精達目掛け攻撃を執拗に続け、ムーンライトが飛び蹴りでバルバスに突っ込み、何とか攻撃を止めさせた。ムーンライトは、この宮の門番である筈のバルバスが、守護宮を自ら破壊する行為に表情を曇らせた。

「自分が守護すべき場所を・・・」

「ケツ、そんな事俺様が知るか！黒と白のプリキュアと戦えねえなら、その妖精共をいたぶるのは、ちよつとした憂き晴らしになるぜ」

バルバスは、オマケとばかりもう一度妖精達目掛け衝撃波を放った。何とか躲したものの、シフレ、コフレ、ポプリは、その衝撃で地上に落下し、それぞれのパートナーが身体で受け止めた。追撃しようとするバルバスを、再びムーンライトが割って入って防いだ。ムーンライトは三人をチラリと見ると、紫色のマントを出現させながら、

「プロツサム、マリン、サンシャイン、シフレ、コフレ、ポプリを……」

「「ハイ！」」

ムーンライトの言葉を最後まで聞かずとも、三人にはムーンライトの真意が伝わっていた。妖精達を真っ先に狙うバルバスから、妖精達を匿う最善の方法は、妖精達にマントに変化してもらい、自分達が身に纏う事だという事だった。三人は妖精達に話し掛け、妖精達は無言で頷き、マントになってプリキュア達と一緒にになった。バルバスは鼻で笑い、

「フン、それで匿ったつもりか？そのマントを……切り刻んでやる！」

「そうはさせません！シフレ達を狙うだ何て……私、堪忍袋の緒が……切れましたあああ！！」

プロツサムは、妖精達を執拗に狙うバルバスに対し堪忍袋が切れた。マリンとサン



シャインもブロッサムに同意したかのように、

「全くだよ、海より広いあたしの心も、こころが我慢の限界だよ！」

「あなたのその心の闇、私の光で照らしてみせる！」

三人は、ブロッサム、マリリン、サンシャインは、互いにアイコンタクトをすると、サンシャインが真つ先にバルバスに仕掛けた。

「サンフラワー！イージス!!」

サンシャインは、ひまわりの花のような、巨大シールドを前方に出現させると、バルバス目掛け押し付けようとする。バルバスはニヤリと笑むと、

「甘えな！脇が・・・ガラ空きだぜ！」

バルバスは、瞬時にサンフラワーイージスの弱点、発動中は前方以外が無防備になるという事を見抜き、サンシャインの脇に回り込んだ。だが、それを待ち構えたかのように、ブロッサムとマリリンが居た。

「甘いのは・・・」

「あんたの方だよ！」

「ダブルプリキュア・・・パアアンチ！」

「グウウウ!!」

ブロッサムとマリリンは、バルバスに対して同時にパンチを繰り出し、油断して居たバ

ルバスを吹き飛ばした。バルバスは直ぐに受け身を取って立て直すも、直ぐにムーンライトが動き、

「プリキュア！シルバーインパクト!!」

ムーンライトは、銀色のエネルギーを拳に込めると、バルバスに対して掌底を叩きつけた。思わずバルバスは吹き飛び片膝を付いた。

「や、野郎・・・」

「相手の動きが止まったわ。プロツサム、マリン、サンシャイン、一気に決めるわよ」  
「ハイ!!」

ムーンライトの合図に三人が大きく頷くと、四人は、スーパープリキュアの種をハートキャッチミラーージュにセットした。

「鏡よ鏡、プリキュアに力を！世界に輝く一面の花：ハートキャッチプリキュア！スーパーシルエツト!!」

四人は、背中にハートの形をした光る帯のような物を身に着けた姿は、どこか天女をイメージさせた。バルバスは思わず驚き、

「な、何だ!?!変身しやがったのか?だが、そんなコケ脅し、俺様には通じねえよ!」

四人目掛け駆け出したバルバスだったが、自ら破壊した獅子宮の瓦礫に遮られ、自慢のスピードが制限されていた。

「花よ、咲き誇れ！」

四人がハートキャッチミラーージュを上空に掲げると、ハートキャッチミラーージュが崩壊した獅子宮の上空に浮かんで行つた。そして、その輝きと共に、ハートキャッチミラーージュから純白の衣を纏つた巨大な女神が現われた。バルバスは、その巨大さに思わず上を仰ぎ見て驚愕し、

「な、何でデカさだ!? あれは一体?」

ムーンライト、サンシャイン、マリリン、プロツサムの掛け声と共に、巨大な女神像はバルバス目掛け愛の拳を振り下ろした。

「ウツ!? ウオオオオオオオオオオ?」

巨大なる愛の女神の鉄拳を受け、バルバスの身体が宙に浮かび上がっていく。

「ハアアアアア!!」

それに合わせるかのように、プロツサム、マリリン、サンシャイン、ムーンライトが、タクトとタンバリンを回転させた。荒ぶっていたバルバスだったが、次第にバルバスの表情が朗らかになっていった。

「ポワワワアアン!」

バルバスは、悦を浮かべたような表情で、その荒ぶる魂を浄化され、穏やかな表情で倒れ込んだ。マリリンは思わずガッツポーズを取り、

「シヤアア！」

「フウウ、何とか勝てましたね」

「エエ、自らの力に過信しなければ、私達も危なかったわね」

ブロッサムは汗を拭いながら、隣に居るサンシャインに話し掛けると、サンシャインも同意しながら、半壊した獅子宮の様子に眉をしかめた。ムーンライトは、尚も用心を怠らず、倒れたバルバスを険しい表情で見つめて居ると、バルバスがピクリと動いた。

「三人共、まだ油断しないで！」

「「エツ!」」

ゆっくり起き上がったバルバスは、チラリと四人を見ると、内股走りで駆け寄つて来た。

「アラア、何か色々酷い事してゴメンなさいねえ」

「「エツ!」」

「あたし、あなた達の愛の鉄拳を受けて・・・愛に目覚めたワアア！」

身体をクネクネ動かしながら、四人の攻撃で愛に目覚めたと語るバルバスの姿は・・・オカマっぽかった。四人は、その不気味な姿に只呆然と立ち尽くした。

「あなた達なら、あたし奥の扉を抜けて行くの・・・認めちゃうわあ」

バルバスはそう言うのと四人にウインクし、ブロッサム、マリン、サンシャイン、ムー  
ンライトは、思わずその不気味さに精神的ダメージを受けた。サンシャインは呆気に取  
られながら、

「き、牙を抜かれた獅子……って事かなあ？」

「牙と言いますか、玉を抜かれて去勢された獅子と言いましようか」

ブロッサムが変顔浮かべながら眩くと、マリンはどこかで聞いた事があるようで、首  
を傾げながらブロッサムに問いかけ、

「去勢!? って、聞いた事あるけど何だっけ？」

ムーンライトは、ぼつが悪そうな表情になると、軽く咳払いをして三人の注意を引い  
た。

「さあ、三人共、行くわよ」

「アツ!? ま、待ってください」

「ねえ、サンシャインは知ってる？」

「後でブロッサムに聞いて……」

ムーンライトは、この場から一刻も早く出たいかのように、足早で奥の扉に歩き出し、  
ブロッサム、マリン、サンシャインも慌ててムーンライトの後を追った。

「お達者でええええ！」

バルバスは、そんな四人に投げキッスしながら見送り、四人は思わず背筋にゾツと鳥肌が立った・・・

第百三十三話：十二の魔宮（中編）

完

## 第三百三十四話：十二の魔宮（後編）

## 1、双児宮・・・キャンデイの異変

双児宮の内部を、ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコー、そしてキャンデイとグレル、エンエンが駆け続けた。一同には、此処がどこの宮かは分からなかったが、奥から伝わるプレッシャーが、ハッピーに緊張感を持たせた。先頭を走るハッピーの視線の先に、開け放たれた奥の部屋の中から明りが漏れてきた。

「みんな、奥の部屋に明かりが点いてるよ」

「扉が開いてるっちゆう事は、何時でも来いちゆう訳やな」

「何か自信満々だね」

「上等！」

「油断しないで下さい」

「ウン・・・何か嫌な感じがするよね」

ハッピーの声を聞いたサニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコーもまた、奥の部屋から漂うプレッシャーを感じて居た。ハッピーは、心に湧き上がって来る不安を払拭するかのよう、仲間達に声を掛けた。

「みんな、行くよおおー！」

「「「ウン！」」」」

ハッピーの合図と共に、一同が一気に奥の部屋へと突入した。部屋の中で腕組みしながら待ち構えていたのは、白い軍服を着て、背中まで伸びた銀髪を靡かせた目付きの鋭い男、カインと共に双児宮を守護する者・・・アベル！

「あ、あの人は・・・」

ハッピーに更なる緊張が起こっていた。今日の前に居るアベルは、嘗てバッドエンドピースやバッドエンドマーチを翻弄した事があり、その実力の片鱗は、ハッピー達も目の当たりにしていた。アベルは口元をニヤリとさせると、

「ここまで来た事は褒めてやろう・・・だが、貴様らは些か調子に乗り過ぎたようだ」

サニーは、そんなアベルをキツと睨み付け、

「アンタらが、ウチらにチョツカイ掛けて来たからやろう」

「そうだよ、バッドエンドピースに酷い事したし」

「バッドエンドプリキュア達の分まで、あたし達が戦う」

サニー、ピース、マーチが、険しい表情でアベルを見つめながら身構えた。エコーは妖精達を見ると、

「グレル、エンエン、キャンデイ、私達から離れてて」



「危険を感じたら、この場を離れて下さい」

ビューティも妖精達を心配して優しい声で囁いた。思わず顔を見合わせたグレルとエンエンは、

「オ、オウ・・・エンエン、キャンデイ、少し離れてようぜ」

「ウ、ウン、みんな、気を付けてね」

グレルとエンエンは、ハッピー達に声を掛け、一同から距離を取るも、キャンデイはロイヤルクロックを抱えたまま首を振った。

「イヤクル・・・キャンデイもみんなと一緒に居るクル」

ハッピーは、キャンデイが自分は除け者にされるんじゃないかと思っているのかも知れないと考えた。

「キャンデイ・・・大丈夫だよ。私達、キャンデイを除け者にしようだ何て思っただけ無いから」

ハッピーは、そう言うのとキャンデイにニッコリ微笑みかけ、直ぐにアベルに険しい表情で向き直った。慌てて戻ってきたグレルとエンエンに両腕を掴まれ、キャンデイも少し離れた場所に避難した。それでもキャンデイは、不安そうな表情でハッピー達六人を見つめ続けて居た。アベルは、少し口元をニヤリとさせると、

「ほう、貴様ら俺に勝つつもりか？」

「当たり前やろ！マーチ、行くでえ！」

「了解！」

「プリキュア！サニーファイヤー!!」

「プリキュア！マーチシユートオオ!!」

サニーは、マーチに話し掛け、同意したマーチと共に、アベルに対して先制攻撃を放った。炎の光球と緑の光球がアベル目掛け飛んで行くも、アベルは左手の人差し指を前に突き出すと、サニーファイヤーとマーチシユートを雷が襲い、雷に触れられた瞬間、二人の技は消滅した。

「何やお!?」

「掻き消したの!?!」

「どうした、こんなものかプリキュア?」

思わず動揺するサニーとマーチ目掛け、アベルから二人目掛けて雷が降り注いだ。だが、そんな二人を庇う様にピースが前に出ると、両手でピースサインをするかのように前に突き出し、そのまま頭上に両手を掲げた。まるでピースの人差し指と中指が避雷針になったかのように、サニーとマーチ目掛けて降り注ぐ雷をその身に受けた。

「キャアアア！」

「」「」「ピース!」「」「」

心配して声を掛ける仲間達の声を励みに受け、苦悶の表情を浮かべながらも、ピースはその身に浴びた雷を、両手の指先に集中させた。

「ま、負けないもん．．．プリキュア！ピース．．．サンダー!!」

アベルの雷をも取り込んだピースサンダーは、何時も以上の力を得て、アベル目掛け炸裂した。

「ほう、俺の雷を．．．ならば、こちらと同じ事をしてやろう．．．」

アベルはそう言うと、右手の人差し指を避雷針代わりにして上に掲げ、ピースサンダーを吸収し、アベルの身体から放電が起こり始めた。ピースは驚愕し、

「嘘お!?!ピースサンダーが吸収されちゃった．．．」

アベルは、口元をニヤリとさせると、

「中々の威力だ．．．さあ、自らの攻撃をその身に受けろ!」

「アツ!?!アアアア．．．」

アベルの放った特大の雷がピース目掛け飛び、ピースが動揺したその時、ビューティは険しい表情を浮かべるも、直ぐに行動に動いた。

「プリキュア!ビューティブリザード．．．フリージング!!」

ビューティは、咄嗟にピースの周辺にビューティブリザードで氷の壁を作った。だが、雷の威力の前に氷の壁を粉々にされるも、何とかピースの窮地を救った。ピースは、

「ホッと安堵した表情でビューティに話し掛け、

「ビューティ・・・あ、ありがとう」

「どういたしまして・・・ですが、さすがに手強いですね」

「そうだね・・・ねえ、エコー」

「何、ハッピー?」

ハッピーは劣勢の状況を打破するかのように、エコーと何か小声で話し、エコーは軽く頷くと、ハッピーは右に、エコーは左に分かれて走り、同時にアベルに対し横から肉弾攻撃を仕掛けた。

「ヤアアアア!」

「フン」

アベルは、同時に左右からパンチで攻撃を仕掛けたハッピーとエコーの腕を掴み、そのまま振り回すかのように左右の壁に二人を投げ飛ばすも、ハッピーとエコーは空中で態勢を整えると、

「プリキュア! ハッピー~~~~. . . シャワ~~~~!!」

「プリキュア! ハートフル・エコー~~~~!!」

空中からアベルに対しハッピーがハッピーシャワーを、エコーがハートフルエコーを放った。アベルは口元をニヤリとさせると、

(ククク、良いぞ！これで光の封印も・・・何!?解除されないだとお?)

アベルはチラリと奥の扉を見るも、光の輝きが消える事は無かった。アベルは軽く舌打ちすると、

「チツ・・・ルーシエスめ、双児宮の光の封印を多重にでもしていたのか?」

スマイルプリキュア達が数々の技を放つも、双児宮に施された光の封印が解除されず、アベルを苛つかせた。

「プリキュア共、俺を失望させるなあああ!!」

アベルの身体が光り輝き、ハッピーとエコー目掛け巨大な雷を放った。雷は、ハッピーシャワーとハートフルエコーを掻き消し、ハッピーとエコーは雷をその身に浴びて吹き飛んだ。

「キヤアアアア!」

「ハッピー!エコー!」

仲間達の声を受け、辛うじて壁との激突を逃れたハッピーの下に、サニーとピースが、エコーの下にマーチとビューティが駆け寄った。

「お前達の技はそんなものか?」

アベルがスマイルプリキュアの六人を見下し、ビューティは、二人が無事なのを確かめると、直ぐに頭の中で次なる手段を考えた。このまま同じように戦い続けても、嘗て

横浜で戦った三人の魔人、デイクレ、ベガ、サデイスと戦った時のように、不利な状況を崩せないと感じたビューティは、仲間達に話し掛けた。

「現状を打破する為にも・・・ロイヤルレインボーバーストを放ってみませんか？」

「そうだね・・・やってみようよ」

「「「ウン！」」」

ビューティの提案に、ハッピーも同意して仲間達に提案すると、サニー、ピース、マーチ、エコーも同意した。今の自分達にとつての最強の技とは、ロイヤルレインボーバーストしか残されてはいなかった。六人のスマイルプリキュアが、険しい表情で横一列に並び、アベルは警戒しながらも、口元には少し笑みを浮かべた。

（何か仕掛けてくるつもりのようなな・・・ククク、ようやく本気になったか、これでこの双児宮の光の封印も・・・）

「「「「ペガサスよ・・・」」」」

ハッピー達五人がキャンドルを合わせてペガサスに願いを託し、

「鳳凰よ・・・」

エコーがプリンセスキャンドルを宙に向けて掲げると、六人は声を合わせ叫んだ。

「「「「私達に力を!!」」」」

ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコーの姿が変化を遂げていく・・・

「プリンセスハッピー！」

「プリンセスサニー！」

「プリンセスピース！」

「プリンセスマーチ！」

「プリンセスビューティ！」

「プリンセスエコー！」

ハッピー達六人は、まるでドレスのような衣装を纏い、頭には天使の輪のような光のリングが装着された。

「こ、これは!?ここまでの光の力とは……」

アベルは少し度肝を抜かれた表情で、プリンセスフォームになったスマイルプリキュア達の容姿に驚愕した。アベルが凡そ想像した光の力を、ハッピー達は凌駕していた。

「今クル！みんなの力を合わせるクルウウ!!」

キャンディは、ロイヤルクロックの上に付いているボタンをカチリと押した。針は動き、数字の10に合わさると、ロイヤルクロックからフェニックスが舞い上がり、エコーの身体を包み込み上昇させた。エコーはプリンセスキャンドルをスマイルプリキュアに向けて構えると、エコーの背後に、巨大なフェニックスのシルエットが浮かんだ。

「集え！五つの希望の光!!」

「……羽ばたけ、光輝く未来へ……」

ハッピー達五人は、五色のペガサスに跨るや、エコーに導かれるように上空高く舞い上がった。五色のペガサスは、上空でフェニックスと合わさると、フェニックスは命を宿したかのように咆哮を上げた。

「……プリキュア！ロイヤルレインボー・バースト……！！！！」

咆哮したフェニックスの口から、強烈な虹のエネルギー波がアベル目掛け放たれた。

「クツ……」

アベルは、慌てて両手を前に突き出し、強大な虹のエネルギー波を受け止めた。だが、その威力に身体が徐々に後退し、アベルからは完全に先程までの余裕の表情が消えて居た。

「……これ程とは!?グウウウウウ……ウウウオオオオオオ!!」

アベルの両方の瞳が金色に輝き、アベルの両手により一層の力が加わった。アベルの着ていた軍服のような衣装はボロボロになっていき、今度は逆にスマイルプリキュアの六人の表情が驚愕に変わった。

「ロイヤルレインボーバーストが!?!」

「クツ、負けるかいなあ!」

ハッピーが驚愕し、サニーが更なる気合を込めるも、ロイヤルレインボーバーストは、



徐々に威力を落として完全に沈黙した。ハッピー達は、目の前の光景が信じられず、思わず呆然と立ち尽くしていた。アベルは何とかロイヤルレインボーバーストを耐え抜いたものの、ボロボロになった衣装からは、ソドムとおなじような鱗のような身体が見えて居た。それに気づいた瞬間、アベルの表情が憤怒の表情に変わった。

「貴様らああ！この俺に、この俺に、このおぞましい偽りの肉体を見せやがったなあああ!!許さん・・・絶対に許さんぞおおお!!」

アベルから発せられる怒りのエネルギーに、思わずハッピー達が怯んだ。アベルにとって、いや、カインとソドムにとっても、ルーシエスに敗北し、肉体を三つに分かれ、偽りの身体を与えられたこの鱗のような模様は、彼らにとっては屈辱の象徴だった。怒りに我を忘れたアベルは、双児宮の光の封印が解けた事にも気づく事は無かった。

「あ、あの姿は・・・妖精学校で見たソドムって言う人と同じ・・・」

エコーの脳裏に、妖精学校で見たソドムの姿が過ぎったものの、激高したアベルは、両腕を高々と掲げて組むと、

「ダククネス・・・フレイム!!」

アベルが両腕をふりおろすと、強大な黒き炎がハッピー達目掛け放たれた。

「「「「「キヤア!」」」」」

ハッピー達は辛うじて黒炎を躲すも、黒炎に触れた双児宮の壁が、飴細工のように溶

けていった。

「許さん！許さん！許さん！許さん！虫けらがああああ!!」

アベルは狂ったように叫び、ダークネスフレイムをハッピー達目掛け放ち続けた。その爆風は、ハッピー達六人を容赦なく襲い、六人が激しく壁に吹き飛ばされた。

「ハッピー！みんなああ!!」

キャンデイが慌ててハッピー達に駆け寄ろうとするも、グレルとエンエンは、必死にキャンデイの両腕を捕まえて引き留めた。自分達がハッピー達の下に行っても、返つて彼女達の足手纏いになるのは目に見えて居た。

「キャンデイ・・・大丈夫だよ」

ハッピーは、そんなキャンデイを心配させまいと、足を震わせながらも立ち上がると、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコーも、そんなハッピーに続けとばかり立ち上がった。

「私達は・・・負けない！みんな、キャンデイ、もう一度やるよ!!」

「「「ウン！」「」」」

「分かったクル」

ハッピーの合図に他の五人も頷き、ハッピー達の瞳に再び光が宿った。キャンデイが再びロイヤルクロックの上に付いているボタンをカチリと押すと、針は動き数字の11

に合わさった。ロイヤルクロックから再びフェニックスが舞い上がり、

「「「プリキュア！ロイヤルレインボー・バースト!!!」」」

咆哮したフェニックスの口から、強烈な虹のエネルギー波が再びアベル目掛け放たれた。アベルも両腕を高々と掲げて組み、

「ダクネス・・・フレイム!!」

アベルが両腕をふりおろすと、強大な黒き炎がハッピー達目掛け放たれた。

「「「ハアアアア!!」」」

「死ねえええ!」

互いの雄叫びが響く中、ロイヤルレインボーバーストとダクネスフレイムが、空間でぶつかりあい激しい閃光を放ちあつた。その威力は互角・・・空間でくすぶり合い拮抗する両者の技が耐えきれず、その衝撃にハッピー達もアベルも後方に吹き飛んだ。だが、両者共踏みとどまる。ハッピーは、険しい表情を浮かべながらも、

「今の私達には・・・ロイヤルレインボーバーストに掛けるしかないのお!」

「せや、何度でもぶつ放してやろうや」

「ウン、今度こそ決めよう!」

「あたしたちの力・・・アベルに見せつけてやろう」

「そうです。ここで挫ける訳には行きません」

「キャンデイ、もう一度力を貸して」

「クルウ」

サニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコーもハッピーに同意し、キャンデイもコクリと頷いた。キャンデイが再びロイヤルクロックの上に付いているボタンを力チリと押すと、針は動き数字の12に合わさった。その瞬間、キャンデイの身に異変が生じた。

（ドクンドクンドクン・・・）

キャンデイの心臓の鼓動が急激に早まり、次第にキャンデイの意識が遠のいて行った。キャンデイは、初めて体験するこの現状に激しい恐怖を覚えて居た。

（みゆき、あかね、やよい、なお、れいか、あゆみ、エンエン、グレル・・・お、兄ちゃん・・・）

キャンデイは一同に、そしてメルヘンランドに居るポップに、何とか助けを求めようと必死に右腕を伸ばすも、そのまま倒れ込み意識を失った。だが、そんなキャンデイの姿に、ハッピー達も、エンエンとグレルも、アベルとの戦いに気を取られ気づく事は無かった。

ロイヤルクロックから三度フェニックスが舞い上がり、エコーの身体を包み込み上昇させ、エコーの背後に巨大なフェニックスのシルエットが浮かんだ。

「集え！五つの希望の光!!」

「[[[[[[羽ばたけ、光輝く未来へ!]]]]」

「[[[[[[プリキュア!ロイヤルレインボー・バクスター!!!]]]]」

ハッピー達は、三度ロイヤルレインボーバーストをアベル目掛け放ち、アベルも再びダークネスフレイムで迎え撃った。再び激突する両者の技と技、互いの力は再び拮抗するも、

「私達は、こんな所で負けない・・・か・が・や・けええー!」

「[[[[[[スマイルプリキュアアア!!]]]]」

ハッピーは険しい表情を浮かべながら叫び、仲間達がハッピーの気持ちに伝える様に声を合わせた。その瞬間、ロイヤルレインボーバーストの勢いが一気に増した。

「な、何だとお!?ウオオオ?」

ロイヤルレインボーバーストは、その勢いのまま一気にアベルのダークネスフレイムを押し切り、アベル目掛け突き進んだ。

「お、おのれえええ!こ、こんな奴らにいい!!」

アベルは両腕を付きだし、ロイヤルレインボーバーストを堪えようと試みるも、最初に受けた時よりも、その威力は格段に増していて、アベルの身体が後方に押され出した。

「グウウウ・・・あ、悔った。プリキュア、これ程までとは・・・だ、だがなあ、双児宮

の光の封印は解けたああ！俺は、俺達は、まだ・・・」

アベルはそう強がるも、ロイヤルレインボーバーストは一気にアベルを飲み込み、アベルは最後の力を振り絞って、嘗てのソドム同様、自らの首を撥ねてその姿を何処かに消した。ハッピー達六人は、キャンドルの炎を吹き消し、キャンドルをクルクル回してアベルに背を向けポーズを決めると、

「一二三！輝け！ハッピースマイル！！一二三」

ハッピー達の背後で爆発が起こり、ロイヤルレインボーバーストがアベルの身体を浄化し、双児宮に沈黙が起きた。

「シヤアアア！」

サニーは沈黙を破るように、右手を高々と上げて自分達の勝利を祝い、ハッピー達からも笑顔が零れた。グレルとエンエンも満面の笑みを浮かべながら喜び合い、

「やったなあー！」

「ウン！キャンデイ、良かった・・・キャンデイ!?」

エンエンは、笑みを浮かべながらキャンデイに話し掛けたものの、キャンデイが倒れ込んでいる姿を見ると、見る見る泣きそうな表情で悲鳴を上げた。

「キャンデイ！ど、どうしたのおお？」

「おい、キャンデイ、しっかりしろよ！」

エンエンとグレルが心配そうにキャンディに駆け寄り、ハッピー達もようやくキャンディの異変に気付き、見る見るハッピー達六人の顔は青ざめた。

「キャンディ!?!どうしたの?キャンディイイ!!」

ハッピー達も慌ててキャンディに駆け寄り、ハッピーは自らの太股にキャンディを乗せて声を掛けるも、キャンディはグツタリしながら、ただ荒い呼吸を繰り返すだけだった。

アベルに勝利した事も束の間、一同は悲しげにキャンディの身を案じ続けて居た：

## 2、巨蟹宮・・・ルミナスの危機

ハッピー達がアベルに勝利したものの、カインの思惑通りに事は進み、十二の魔宮の封印も残すは巨蟹宮ただ一つになった。その巨蟹宮では、カインはアベルをも倒したプリキュア達に脅威を感じて居た。カインの背後では、生首となったソドムとアベルが目を見つめ、沈黙して居た。

(プリキュア・・・まさか、ソドムに続きアベルまでも退けるとは・・・だが、残る封印はこの巨蟹宮のみだ。そしてそれも・・・)

カインは、巨蟹宮の内部を歩く一人の足音を聞き、口元をニヤリとさせた・・・

一方、魔宮を無事に抜けたプリキュア達は……

真つ先に魔宮を抜けたのはプリキュア5とローズ達、魔宮を抜けた彼女達が目にするわ、魔王ルーシエスの居城である巨大な黒き塔だった。

「あの塔が魔王城って事かなあ!？」

「以前にシーレインに聞いた話や、キャミーの話を聞く限りはそのようね」

ドリームに話し掛けられたアクアがそう答えるも、一同には不安な気持ちが沸いていた。レモネードは、そんな不安を少しでも和らげようとするかのように、

「魔宮を抜けたのは良いんですけど……他のみんなの姿が見えませんか?」

「エエ……でもみんなの事だからきつと大丈夫」

ミントも心の中では一抹の不安を感じては居たが、レモネードをこれ以上不安にさせない為にも、そう言うのとレモネードに微笑み、レモネードも少し不安が晴れた気持ちになった。ルージュは魔王城をジツと見つめると、

「あそこにビートが居るなら、あたし達だけでも先に魔王城に向かう?」

「魔王城に向かうにしろ、みんなを待ってから向かった方が良いんじゃない?」

ルージュは、ビートがメロディ達と合流した事を知らず、仲間達に提案してみるも、ローズは自分達だけで向かうよりも、他のプリキュア達と合流してから向かう事を提案した。アクアもローズの提案に同意するかのようになり、



「エエ、さっきの爆発音もちよつと気になるし．．．」

アクアが気にした爆発音とは、ちよつどカインの攻撃が金牛宮に炸裂した事だった。ちよつどその時、見知つた声がドリーム達に話し掛けて来た。

「ドリーム、みんな、無事で良かった」

「ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディ、あなた達も無事で良かった」

ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディは、ドリーム達の姿を見つけるや、手を振りながら駆け寄つて来た。ドリームは嬉しそうに両腕を上げ、ブルームもニンマリしながら両腕を上げて、二人は両手でハイタッチして互いの無事を喜び合い、仲間達もそんな二人を、目を細めて見守つた。

「ブラック達やピーチ達、ムーンライト達やメロディ達、ハッピー達の姿が見えないけど？」

「ウン、私達以外はまだみたい．．．」

ブルームに聞かれたドリームが、少し愁いを浮かべながら語ると、再び見知つた声が聞こえて来た。

「オオオイ！ドリーム達も、ブルーム達も無事で良かったあ」

そう言いながら両手を振つて駆けて来たのは、ピーチ、ベリー、シフォンを抱いたパイン、パッション、少し遅れてタルトが、笑顔を浮かべながら駆け寄つて来た。

「ピーチ、ベリー、パイン、パッション」

ピーチ達も合流し、ドリーム達から先程までの不安な気持ちが消えようとして居た。

巨蟹宮・・・

静寂なる室内を、一人の少女が奥を目指し歩いていった。奥へと続く通路には、これから死地に赴くかのように、頭蓋骨が壁に埋め込められていて、ルミナスは思わずその表情を険しくするも、その瞳には静かなる闘志を宿しているかのようだった。

（この先にカインが・・・ブラックとホワイトなら、きつと無事で居る筈）

ルミナスは、カインの策略で次元の狭間に送られたブラックとホワイトを心配しながらも、二人の無事を信じ続けた。奥の室内に近付くにつれ、ポルンとルルンは今にも泣き出しそうな表情で怯え始め、

「怖いポポ・・・」

「怖いルル・・・」

「ポルン、ルルン、大丈夫よ」

ルミナスは、パートナー妖精であるポルンとルルンを励ますように優しく声を掛けるも、それは奥から感じるカインのプレッシャーに、自ら押し潰されそうになる自分への鼓舞でもあった。ルミナスは再び一步一步奥へと歩を進め、遂に扉の前に辿り着いた。

気味の悪い三つ顔の悪魔らしきオブジェが扉に描かれていて、ルミナスは意を決して扉を開いた。不気味な音を立てて扉は開くと、室内は薄暗く、ルミナスは用心するように室内を観察した。

(カイン・・・だけじゃない!?まだ誰かの気配がする)

ルミナスはカイン以外の気配も感じ、注意深く中の様子を窺っていると、

「ククク、そんな所でコソコソしてないで、堂々と中に入って来たらどうだ?折角この俺が、この巨蟹宮に貴様を招待してやったんだぞ?」

カインは、ルミナスを少し小馬鹿にするかのように、室内に入って来るように話し掛けた。ルミナスの表情は強張るも、意を決して室内に入ってよく室内を見てみると、両側の壁には恐怖に怯えたような動物や魚介類の魔物、更には動植物と昆虫が合わさったような異形な姿をした魔物のデスマスクが浮かんで居た。

「この者達が気になるか?この者達は・・・嘗てこの巨蟹宮を守護して居た者達の哀れな末路だ」

「何ですって!?!」

ルミナスは思わず動揺し、今一度魔のデスマスクを見た。デスマスクからは、無念さがにじみ出ているようで、ルミナスは思わず視線を外してカインをキツと睨んだ。

「どうしてそんな酷い事を・・・」

カインを問い詰めたルミナスだったが、ルミナスの質問に答えたのは、ルミナスが予想しなかった者達だった。

「ククク、この巨蟹宮は地獄に通じていると言われていてなあ。嘗ての我らが配下共と連絡を取り合うのに、この巨蟹宮は都合が良かったのさ」

「そう．．．だからこの巨蟹宮を我らが管轄出来るように、闇に溶け込む事が出来るソドムを使い、不要な輩を排除したまでの事」

ルミナスの問いに答えたのは、カインの背後で生首のまま置物のようにしていたソドムとアベルだった。

「あ、あなた達は．．．ソドムとアベル!?その姿は．．．」

ルミナスは、生首と成り果てたソドムとアベルを見て、一瞬憐みの表情を見せるも、ソドムとアベルは口元をニヤリとさせると、不気味にルミナスに話し掛けた。

「俺達をこのような姿にしたのは、お前の仲間達だぞ?」

「お前もなつてみるか?．．．生首になあ!」

「ハハハハハ」

ソドムとアベルがそう言って笑い合った瞬間、カインの右手の人差し指が煌いた。それを見た瞬間、ルミナスは自分の頭部が落下し、自らの首の無い身体が無残に横たわる姿を見た。

「イヤアアアアアアアアア!!」

ルミナスは思わず絶叫し、ハツと我に返ると、ルミナスは思わず全身を触つて身体の異常を確認するも、特に身体に異常は見られなかった。ホツと安堵したルミナスだったが、顔から大量の脂汗が流れ、精神的ダメージを受け思わず膝から崩れ落ちた。ルミナスは、息を整えるように荒い呼吸を続けた。

「ハア、ハア、ハア、ハア……い、今のは、一体何?」

ルミナスは、少し落ち着きを取り戻し、ゆっくり立ち上がると、今一度思わず自分の身体を確かめた。カインはそんなルミナスを見て笑みを浮かべ、

「ククク、安心しろ……幻覚だ!ちよつと貴様をからかっただけだが……お前の返答次第によっては……今の姿が現実になるぞ?」

「返答次第ですつて?」

「そうだ。俺達に協力するならば、貴様の命は保証する。もつとも、他のプリキュア共はもう用済みなので消えて貰うがなあ」

「ふざけないで!私は、あなた達に協力何かせません」

ルミナスは、気丈にカインの申し出を拒否した。自分達の住む世界を、魔界を、弄ぶカインに協力する事など、ルミナスは心の底から嫌だった。カインは右の口角を上げ、「そうか……だが、無理やりお前を我らが軍門に下らせる事も出来るぞ?さあ、我が操

り人形になるが良い！マリオネット・コンパルション!!」

カインは、嘗て双児宮でビート、ニクス、リリスの三人にしたように、ピアノを弾くように指を動かすと、ルミナスは自分の意思と関係無く頭が動き、カインの顔をマジマジと見せられた。

「か、身体が勝手に!?!じ、自分の意思で・・・う、動けない?」

カインは、親指と中指をルミナスの顔に狙いを定めると、ルミナスの表情が困惑する。カインは自分に何をしようとするのか、ルミナスには分からず激しく動揺した。

「さあ、直ぐ自分の考えなど不要にしてやる・・・魔幻!」

（ブラック! ホワイト!）

ルミナスは、心の中でブラックとホワイトの顔が浮かんだ瞬間、二人に助けを求めるかのように、心の中で二人の名を呼んだその時・・・

「・・・・・・・・マックス!」

突如巨蟹宮の室内に雄叫びが響いたかと思うと、ルミナスとカインの間の空間が歪み、白と黒の雷撃が空間の亀裂から床に叩きつけられ、そのすぐ後を黒と白の衣装を身に纏った二人の戦士が舞い降りた。

「ブラックウ! ホワイトオ!」

ルミナスは、自分の窮地に駆け付けてくれたブラックとホワイトを見て、思わずその

目にジワリと涙が浮かんだ。

3、二年後の世界に繋がると信じて

ルミナスの窮地に、時の狭間に飛ばされたブラックとホワイトが戻って来た。二人は、同じように着地と同時に片膝付き、凜々しく顔を上げると立ち上がった。ブラックとホワイトは、ルミナスの無事な姿を見るとホッと安堵し、

「ルミナス、無事で良かった」

「何とか間に合ったようね？」

「ハイ！お二人も無事で良かった・・・本当に、良かった・・・」

ルミナスはそう言うと、堪えて居た感情が爆発したかのように、目から涙が零れ落ち、右手で涙を拭いた。ブラックとホワイトは、思わず顔を見合わせて微妙な表情を浮かべると、ブラックは、頭を掻きながら変顔を浮かべ、ルミナスに話し始めた。

「まあ、無事といえば無事だったんだけどねえ・・・」

「私達、この前は過去に飛ばされたんだけど、今回はどうやら・・・」

ホワイトが困惑気味にそう話し掛けた時、二人の会話を遮るかのように、カインが苛立ちながらブラックとホワイトに話し掛けた。

「貴様ら、俺のデッドエンド・ホールを受けて時の狭間に送られた筈・・・しかも、この

巨蟹宮には結界が張られているのに、一体どうやってここまで来た!？」

「そんな事私達を知るかあ！あんたのせいで、私達未来に行つちやつて大変だったんだからねえ」

「それに私達は、以前にも時の狭間に迷い込んだ事がある。それが幸いしたのかも知れない」

ブラックとホワイトの話を聞き、カインはハツとすると、

「何だ?!?そうか・・・俺がこの巨蟹宮から、宝瓶宮に向けてデッドエンド・ホールを使った事で、時の狭間でこの巨蟹宮の一部と繋がっていたという事か？それを故意か偶然か、お前達は利用した・・・そういう事か・・・俺とした事が」

カインは、自分のしくじりに気付き、思わず険しい表情でブラックとホワイトを睨み付けた。

「邪魔な奴らめ・・・いいだろう、この俺自ら貴様達を葬ってやろう」

「そうはさせない！行くよ、ホワイト」

「エエ」

「ダアアアアアア」

戦闘態勢に入ったブラックとホワイトが、カイン目掛け突進し攻撃を始めた。

「ダダダダダダダダ」



「ヤアアアアアアアア」

ブラックとホワイトが、雄叫び上げながらパンチの連打をカインに対し浴びせるも、カインは、二人の攻撃を見切って居るかのように躲し続け、二人の攻撃が緩んだ隙を見逃さず、両腕に力を溜めると反撃に転じた。カインが右腕、左腕を順に振ると、ブラックとホワイト目掛け拳圧が飛び、二人が後方に吹き飛ばされる。

「ブラック、ホワイト」

ルミナスが心配そうに声を掛けるも、ブラックとホワイトは、宙でクルクル回転して勢いを弱めて着地すると、ルミナスの側に合流した。ブラックはホワイトに話し掛け、「ホワイト、私達未来であの変なおじさんとの戦いで消耗してるし、ここはルミナスの力も借りて一気に行くこう」

「カインに何か魂胆がありそうなのは気になるんだけど・・・そうね、ここはブラックの言う通りにやってみましょう」

「OK！ ホワイト、ルミナス、行くよ!!」

「ウン！」

「ハイ！」

ホワイトとルミナスがブラックに返事を返し、バトンを手にしたルミナスから発せられた虹の光が、ブラックとホワイトを包み込んだ。カインは目を見開いて驚き、

（凄い光の力だ！ククク、これならば、最後の封印であるこの巨蟹宮の光の封印も……）  
「漲る勇氣！」

カインがほくそ笑む中、ブラックは手を回転させながら構え、

「溢れる希望！」

ブラックと同じように手を回転させホワイトが構えた。

「光輝く、絆とともに！」

ハーティエルバトンを構えたルミナスが、そして足を広げ踏ん張るブラックとホワイトが気合いを込め、ブラックとホワイトの前方に巨大なハートが浮かび上がると、

「エキストリ〜ム!!」

「ルミナリオオオ!!」

ブラックとホワイトの叫び声がハモリ、気合いを込めたルミナスの叫びが響き渡り、前方に浮かんだ巨大なハートから、虹色の光が一気にカイン目掛け照射された。

「オオオオ!?! 良いぞ、この力ならば……ハアアアアア!!」

カインは、両腕を前に突き出しバリアを作り出し、ルミナリオを耐え続けた。だが、ルミナリオの威力を目の当たりにし、カインからは余裕の表情が消え去った。

「……これ程までとは……ウオオオオオオ！」

カインが作り出したバリアは砕け散ったものの、カインの両方の瞳が金色に輝き、両

腕を前に突き出したまま一層気合を込めた。ルミナリオの勢いが徐々に弱まり、カインはアベル同様、着ていた軍服のような衣装はボロボロにされながらも、ルミナリオを耐えきった。

「ルミナリオが!?」

「そんなあ!?!」

ブラックとホワイト、そしてルミナスが困惑する中、カインは鱗に覆われた両腕を頭上に高々と上げてクロスさせると、

「遂に十二の魔宮全ての封印が解けた・・・もう、貴様らプリキュアは用済みだ！俺のこの姿を見たのを後悔しながら、粉々に砕け散るが良い・・・」

カインの両腕がどす黒く変色していき、そのどす黒い色が、カインの両手に集中されていく、

「な、何あれ!?!」

「カインからもの凄い負の力を感じます」

「ま、不味いわ・・・あれをまともに受ければ、私達といえただではすまないわ」

ブラック、ルミナス、そしてホワイトの表情が険しくなる中、カインは両腕を一気に振り下ろすと、

「死ね、プリキュア！エクス・プロ〜ジョン!!」

「「キヤアアアアアア！」」

三人の悲鳴と共に、カインの前方で大爆発が巻き起こった……

魔王城……

シーレイン、ベレル、ニクス、リリスは、表情を険しくしながら、眼下に見える十二の魔宮を見つけて居たが、金牛宮の爆発に続き、突如姿を現し大爆発を起こした巨蟹宮に驚愕した。シーレインは、ベレルに確認するかのようには、

「ベレル、今の爆発は、カインの?!」

「さよう、カインのエクスプロージョン。カインがあれを放ったとあれば、カインと戦って居たプリキュア達は、残念ながらおそろくもう……」

ベレルはそう言うのと押し黙り、リリスとニクスは顔を青ざめた。

「そんな!」

「プリキュア達には、大きな借りがありません。シーレイン様、私達も加勢に参りましょう」

「そうですね……ベレル、何か?」

ニクスの提案に同意したシーレインだったが、ベレルが魔王城真下を見て押し黙り、その姿を見て気になり話し掛けた。

「……感じるのです。この魔王城地下深くに封じられし地獄門より、この魔界に災いが再び舞い戻る気配を……」

「「災い!?!」」

「この魔王城も無事では済みません……他の魔神達の手も借りねばならんかも知れませぬ。行きましょう」

ベレルの提案に、シーレイン、ニクス、リリスも頷くと、四人は魔王城のバルコニーから一気に飛び降りた。

巨蟹宮の異変は、他の魔神達も感じて居た……

「ムウ!?今のはカインの……先程も感じたが、カイン、何を企む?そうはさせんぞ!」  
アモンは、巨体を揺らしながらブルーム達の後を追った……

「プリキュアは、私に戦士の誇りを取り戻してくれた。彼女達に危害を加えるのなら……」

アロンは愛用の弓と矢を手に持ち、プリキュア5とローズの後を追った……

「プウウウオオオオオオ!?!」

オロンは、パインに優しくされた事を思い出し、パインの力になろうと身体を丸めて転がるように後を追った・・・

「これは、先程金牛宮を攻撃したカインの!?!おのれ、カイン！先に行かせたプリキュア達が心配だが、弟の亡骸をこのままには・・・」

ミノタウロスは、弟の亡骸をこの崩壊した金牛宮に放置する事を躊躇っていると、突如金牛宮に笑い声が響き渡った。

「オッホッホッホ！ミノタウロスさんご安心ください。わたくし、こんな事もあるうかとお邪魔させて頂きました」

「モグロス!?! 貴様、どうしてここに?」

「まあまあ、そんな事はどうでもいいじゃありませんか。ミノタウロスさん、弟さんを戦士として目覚めさせてくれたプリキュア達が心配何でしょう?」

「貴様、どうしてその事を!?!」

ミノタウロスは、弟ミノタウロスが兄ミノタウロスと入れ替わっていた事実を、何故か知って居たモグロスを険しい表情で睨み付けた。モグロスは、コミカルな表情で両手を前に突き出し手を振ると、

「そう怖い顔で睨まないで下さいまし、これでもわたくし、予言者みたいな事をやってま

すから・・・オッホッホッホ！」

モグロスは笑い声を発しながらも、金牛宮内部に空間を発生させ、何処かと繋げた。

「（ハ、ハ）は、俺達の生まれた・・・」

ミノタウロスは思わず驚きの声を発し、モグロスが自分達の生まれ故郷すら知って居る事に警戒した。モグロスは、そんなミノタウロスの心情を知ってか知らずか、更に気さくに話を続け、

「ハイ、わたくしが責任をもって弟さんを葬りましょう。ミノタウロスさんは、プリキュアさんの力になってあげて下さい」

「ムウウウ、お前は些か信用出来ぬが・・・プリキュア達の身も・・・仕方あるまい！モグロス、弟を頼むぞ！俺はプリキュア達の後を追う」

「ハイ、お任せください」

モグロスは、巨体を揺らしながら駆け出したミノタウロスに手を振ると、弟ミノタウロスの巨体を軽々と両手で抱えニヤリと笑んだ。

「もつとも、あなた方魔神だけでは、ブラックさん達の足を引っ張るだけかも知れませんがどねえ・・・オッホッホッホ！」

モグロスは、笑い声を響かせながら、弟ミノタウロスを葬る為に、ミノタウロス兄弟の生まれ故郷へと消えて行った・・・

「なぐに、今の爆発音は!? あたし一人ここに残るのも怖いわよねえ…そうだ! プリキュアちゃん達に守ってもらいましょう」

バルバスは身体をクネクネさせ、内股走りしながらムーンライト達の後を追った…

そして、爆発音はプリキュア達にも聞こえて居た…

ブルームは、一同に確認するように話し掛け、

「何!? 今の爆発音?」

「さつきもしたよね?」

ピーチも同意し、隣に居るアクアに確認すると、アクアは険しい表情で先程の爆発音と今の爆発音を比べると、

「今のは、前のは比べ物にならないわ」

「ウン、まだ来てないみんなも気になるし、行ってみよう!」

ドリームは、険しい表情で一同に進言し、仲間達も頷くと、巨蟹宮目掛け駆け出した。

「メロディ、今の…」

「ウン、さつき金牛宮に落ちて来たのと同じ攻撃みたい」



「じゃあ、他のプリキュアの誰かがカインと戦ってるって事ね」  
「急いで加勢に向かわなきゃ」

金牛宮を抜けたリズム、メロディ、ビート、ミューズの四人は、爆発音が聞こえた巨蟹宮目掛け駆け出した。

「ムーンライト、今のは!？」

顔を青ざめたプロツサムが、ムーンライトに問うと、

「エエ・・・プロツサム、マリン、サンシャイン、急ぐわよ」

「合点！コフレ、遅れんじやないよ」

「ポプリ、行くよ！」

「シプレ、行きますよ！」

マリン、サンシャイン、プロツサムは、駆け出しながら妖精達に声を掛け、妖精達もその後を、宙を浮かびながら追った。

ハッピー達は、まだ双児宮内で倒れ込み、苦しそうにし続けるキャンデイの姿に動揺して居た・・・

「キャンデイ・・・私のせいだ。私が、ロイヤルレインボーバーストを何回も使わせたか

ら・・・ゴメンね・・・キャンディ」

ハッピーは、俯きながら今にも泣きそうな声でキャンディに謝った。ビューティは、ハッピーの右肩にそつと手を置き、

「それを言ったら、ロイヤルレインボーバーストを提案したのは私です」

「誰のせいや無い！ロイヤルレインボーバーストを撃たなあ、ウチらはアベルには勝てんかった。それはキャンディも分かってくれとるでえ」

サニーは、ハッピーを、自分を含めた仲間達を励ますように声を掛けると、ピースとマーチもサニーの言葉に頷いた。

「そうだよ・・・それに、私になつたみたいにな、キャンディも魔界シンδροームに掛かったのかも知れないよ？」

「今の爆発音も気になるし・・・ここに居ても埒が明かないよ」

マーチは顔を上げると、今聞こえた爆発音の方向を見て険しい表情で話した。ビューティも頷き、

「そうですね、それにインさんや他のプリキュアの皆さんなら、キャンディの症状を何かご存知かも知れませんか」

「ハッピー、行こう！みんなの所に」

エコーはしゃがみ込んでハッピーの両肩に手を乗せ、優しくハッピーに声を掛けた。

ハッピーは頷き、

「・・・ウン、そうだね」

(キャンデイ、もう少し我慢してね)

ハッピーは立ち上がると表情を引き締め、ハッピー達はようやく双児宮を抜けた。

カインの目の前では、崩壊した巨蟹宮から土埃が舞い起こり、辺りの視界を塞ぎ、カインは勝利を確信し笑い声を上げた。

「フハハハハハ！これで後は邪魔な魔王城を消し去り、地獄門を開くだけ・・・何?！」  
巨蟹宮から立ち上る土煙が収まり始めた時、カインは思わず驚愕の声を発した。何故なら、崩壊した巨蟹宮で倒れ込んだブラックとホワイトを、ルミナスは二人を庇う様に前に出て両手を付き出し、両足を震わせながらも、カインのエクスプロージョンを防いだのだから・・・

「バ、バカな!?!俺のエクスプロージョンを防いだのか?！」

カインは、信じられないといった表情で呆然とルミナスを見た。

「お、お二人に手出しはさせない」

ルミナスはそう強がるも、カインによつて先程受けた精神攻撃や、今のエクスプロージョンの威力は、ルミナスに堪えて居た。ルミナスのブラックとホワイトを思う気持ち

が、辛うじてエクスプロージョンを防ぐ事は出来ても、もうルミナスの肉体は限界を迎えようとして居た。ルミナスは、力を使い果たしたかのようにその場に座り込み、荒い呼吸を続けた。

「ハア、ハア、ハア……」

ゆっくり瓦礫を押しのかけたブラックとホワイトは、半身を起こすと、自分達を庇ったルミナスを見て心配そうに声を掛けた。

「ルミナス！大丈夫？」

「ハ、ハイ……でも、もう力が……」

「ルミナス、ありがとう。後は私達が……」

ブラックは、そう言いながら立ち上がるとうとするも、爆風で地面に叩きつけられたダメージがあった。カインは、そんなブラックとホワイトを見て嘲笑いながら、

「ククク、そんな姿でまだ俺と戦う気か？死ぬのが少し遅くなったただけだぞ？」

「うるさいー！」

ブラックは、自分達を見下すカインの声を遮った。そんなブラックの脳裏に、時空の狭間で飛ばされた先で出会った、一人の少女の姿が思い描かれた。時が止まった世界中、赤ちゃんを抱えながら二体の猛オシマイダーと呼ばれる怪物と戦う、たった一人の少女の事を……

ブラックはホワイトに話し掛け、

「ねえ、ホワイト・・・こんな時あの娘なら、二年後の世界で出会ったはななら、エールなら何て言うかな?」

「そうね、はなさんならきつとこう言うわよね」

ホワイトはそう言うと、ブラックと顔を見合わせながら小さく頷き合った。二人の脳裏に浮かぶ一人の少女が、仲間達を、そして自分を励ます姿が思い出されてくる。

「フレール!フレール!わ・た・しいいいい!!」

ブラックとホワイトの心からの感情が爆発した時、二人の身体が黄金に輝いた。その姿は、嘗て妖精学校でソドムと対峙した時を彷彿させた。

「も、物凄い力を感じるメポ!」

「これは、妖精学校の時と同じミポ!」

「ブラック!? ホワイト!? これは、あの時妖精学校で見た・・・」

困惑するメツプルとミツプル、ルミナスも二人が妖精学校で変化した姿だと気が動き揺れた。ブラックとホワイトは、大きく息を吸い込み深呼吸すると、光の輝きは増し、二人の背中から大きな光の翼のオーラが現われた。カインは目を見開いて驚き、

「な、何だこの光の力は!? この力、ルーシエスに優るとも劣らんだと?」

ホワイトはキツとカインを睨み付け、

「こんな所で、倒れて何て居られない」

「この戦いは、きつとはな達と出会った二年後に繋がってる」

ブラックも、鋭い視線をカインに浴びせながら言葉を発し、二人はカインを指差すと、  
「だから私達は……絶対に負けない！」

「黙れ、プリキュアアアア！」

カインは激高し、両目を金色に輝かせると、ブラックとホワイト目掛け突進を始め、二人はそれを受けて立つかのように突進した。きつきとは段違いの動きを見せるブラックは、雄叫びながらパンチの連打をカインに浴びせた。

「ダダダダダダダ……ダアアア！」

「グウウウ」

カインはブラックの連打を見切れず、ブラックの渾身の右ストレートを受けたカインが吹き飛ばされるも、辛うじて態勢を整えた。だが、高速回転したホワイトが回し蹴りの追い打ちでカインを再び吹き飛ばした。カインは無様に地面に叩きつけられ、顔を醜く歪ませた。

「おのれええ！この俺を、この俺を……許さんぞおお！！」

カインは鱗に覆われた両腕を、再び頭上で高々とクロスさせると、カインの両腕が再びどす黒く変色していき、そのどす黒い色がカインの両手に集中され、カインは両腕を

一気に振り下ろした。

「今度こそ粉々に砕け散れええ！エクス・プロ〜ジョン!!」

ブラックとホワイトは、カインを睨み付けると、大きな光の翼が片側三枚ずつ、計六枚の翼に変わった。

「ブラック、サンダー！」

「ホワイトサンダー！」

「プリキュアの、美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「プリキュア！マーブルスクリュー！」

ブラックが右手に、ホワイトが左手に力を込めて一旦引いた手に光の力を蓄えると、ブラックとホワイトの手が更なる発光を遂げた。そんなブラックとホワイトの心の中に、何者かが話し掛けた。

「マーブルスクリューシャイニングは・・・撃つてはダメエ！」

その声は、ブラックとホワイトに似て居た。だが、今のブラックとホワイトに、心に話し掛けて来た声は届かなかった。

「シャイニイイイング!!」

二人の掛け声と共に、二人が光の力を蓄えた手を前に突き出すと、マーブルスク

リユーは強大な光のエネルギーとなり、一気にエクスプロージョンの威力を消し去り、カインの全身を飲み込んだ。

「バ、バカなああああ!!ソ、ソドムウウウ!時を、時を止めるおお!!」

カインは必死の表情でソドムの名を呼ぶと、ソドムの両目が金色に輝いた。ルミナスの動きが止まるも、

「ヤアアアアアアア!」

ブラックとホワイトは、時が止まった中でも雄叫びを上げ、マーブルスクリーチャーイニングを放ち続けた。

「バ、バカな!!奴らは時が止まった中を動けるのか!?こ、この俺が・・・この俺が負けるだど!?だが、だが、この頭だけは・・・」

カインは必死に右手を動かすと、自らの首を撥ねた。その瞬間、止まった時間は再び動き出し、カイン、アベル、ソドムの生首が宙に浮き、マーブルスクリーチャーイニングは、カインの肉体を跡形もなく消滅させた。更には後方に聳える巨大な魔王城に直撃し、魔王城は轟音と共に崩れ始めた。

三体の生首は、ブラックとホワイトを見下ろすと、ブラックとホワイトも生首を睨み返した。

「この勝負は・・・貴様らの勝ちだ。だが、貴様らはミスを犯した!」



「我らは負けた訳では無いぞ！貴様達が魔王城を崩してくれたお陰で、我らの手間が省けた」

「もう直ぐだ！もう直ぐ我らは真の肉体を取り戻す」

「「それまで、束の間の勝利を味わうが良い！フハハハハハハ！！」」

カイン、アベル、ソドムの生首はそう言い残し、何処かへと姿を消した・・・

#### 4、地獄門・・・開く

ブラックとホワイトが放った圧倒的な光の技、マーブルスクリューシャイニング、その光の力に魔神達は驚きを隠せなかった。シーレインは思わず立ち止まると、強大な光の気配を感じて思わずルーシエスが現われたのではと思った。

「今の力は!?ルーシエス様?」

「いや、ルーシエス様とはまた違う力でござった・・・おそらくは、プリキュア達の誰かかと」

ベレルは、そんなシーレインの声に軽く首を振った。ベレルが見る心眼では、ルーシエスとは感じられなかった。ニクスとリリスは、魔王城を見て指さすと、

「み、見て下さい！ま、魔王城が、魔王城が・・・」

「崩壊していくわ!」

シーレインは、谷底に崩れ落ちて行く魔王城を見ると、全身をワナワナ震わせた。拳を強く握りしめると、

「カイン……よくもルーシエス様の居城を！」

シーレインの目が金色に輝くも、ベルルは首を捻り、

（いや……カインのイクスプロージョンでは、十二の魔宮の加護を受けた魔王城を破壊するのは不可能……プリキュアの誰かが放った技が影響しているとは思いますが、何故魔王城を攻撃したのだろうか？）

ブラックとホワイトに悪意は無かったのだが、魔王ルーシエスに心から忠誠を誓うシーレインは、烈火の如く怒りを露わにした。魔王城を崩壊させたのが、ブラックとホワイトとも気付かず……

他の魔神達も異変を感じ、皆巨蟹宮へと歩を速めた。

ブラックとホワイトは、カインを倒した事で我に返り、二人の光の翼は消え去った。だが、カイン、アベル、ソドムが残した言葉が少し気になったが、今は自分達を庇い疲勞しきっていたルミナスの事を気に掛けた。

「ルミナス、大丈夫？」

「どこも怪我は無い？」

「ハイ、大丈夫です」

ルミナスは二人に笑みを浮かべ、ブラックとホワイトはホッと安堵し、ブラックは右手を、ホワイトは左手をルミナスに差し出すと、ルミナスは嬉しそうに、二人の手を握って起き上がった。

「オオオイ！ブラック、ホワイト、ルミナス、大丈夫!？」

「加勢に来たよ！」

「アハハ、どうやらその必要は無かったみたい」

ピーチ、ブルーム、ドリームの三人が、手を振りながら駆け寄って来て、その直ぐ後をイーグレット、ブライト、ウインディ、ルージユ、レモネード、ミント、アクア、ローズ、ベリー、パイン、パッションが、更にその後をココとナッツ、シフォンを背負ったタルトが駆け寄って来た。更に数分後、ムーンライト、ブロッサム、マリン、サンシャインに、途中で合流したメロディ、リズム、ビート、ミューズも駆け寄り、一同は再会を喜び合った。ブラックは、一同の中にビートを見付けて近付くと、ホッと安堵したようにビートの頭を軽く撫で、

「ビート、無事で良かった・・・もう、みんな心配してたんだからね」

ビートは、軽く一同に頭を下げると、

「心配させてゴメンなさい・・・みんなも無事で良かった。シーレインも無事だったから

安心して」

「そう、良かったわ」

ホワイトは、シーレインも無事だった事を知りホッと安堵するも、背後から物凄いプレッシャーを感じ、思わず緊張が走った。一同は一斉に振り返ると、大声で叫びながら、カインの名を叫ぶシーレインと、それを宥めるベレル、オロオロしながら後に続くニクスとリリスの姿があった。

「カイン！ルーシエス様の居城をよくも破壊してくれたわね・・・今度はこのシーレインが相手よ！姿を見せなさい!!」

（ギクツ!?）

ブラックとホワイトは、シーレインが激昂している理由が、自分達が破壊した魔王城の事と知り、思わず激しく動揺した。ベレルは、そんなブラックとホワイトに気付いたのか、二人に近付き小声で話し掛けた。

「貴公ら、かなり動揺して居るが、ルーシエス様の居城を破壊したのは・・・貴公達か?」

ブラックとホワイトは、トホホ顔を浮かべると、ベレル、ニクス、リリス、そしてシーレインに拝む様なジェスチャーをしながら、

「ゴ、ゴメン！カインとの戦いに夢中で・・・」

「悪気はなかったの・・・」

「何ですつてええ!?あなた達の仕業だったのおおお?」

「ゴメンなさああい!」

シーレインは、謝り続けるブラックとホワイトに、目を金色に光らせるとハープを取り出した。慌ててビートがシーレインを背後から羽交い絞めにし、ニクスとリリスも必死にシーレインを宥めた。

「シ、シーレイン、落ち着いて!」

「シーレイン様!」

「離して!」

シーレインの怒りは収まりそうにもなく、他のプリキユア達も困惑していると、そんなシーレインを正気に返らせる一喝が轟いた。

「落ち着け、シーレイン!」

「オオオ、アモン殿!」

ベレルは、ブルーム達とアイコンタクトして近付いて来た巨体を心眼で感じ、それがアモンだと分かる嬉しように声を掛けた。アモンは正気に戻っているようで、ベレルはホッと安堵した。

「エッ!?アモン?」

シーレインは、アモンの名を聞き思わずアモンを見つめると、アモンはシーレインに

ゆっくり近づくと、シーレインの目の前で両膝突いて土下座を始めた。

「すまん、シーレイン！俺は、俺は、カインに操られていたとはいえ、俺はお前を裏切り……」

「アモン……頭を上げて！あなたのせいじゃないわ……ベレル達やビートに聞いたわ。悪いのはカインよ。あなたに魔幻とかいう精神を操る技を掛けたからだし」

「許してくれるのか？」

「当たり前でしょう！」

シーレインはそう言うのとアモンに笑みを見せた。ベレルは、シーレインが冷静さを取り戻した事に気付き、

「ですなあ……シーレイン殿、この者達がルーシエス様の居城を破壊してしまったのも、元はといえばカインとの戦いの成り行きでござろう」

「そうですね……私も些か取り乱してしまいました」

シーレインの怒りも収まり、ブラックとホワイトはホツと胸を撫で下ろし、成り行きを見守って居た他のプリキュア達も安堵した。ちょうどそんな最中に、ミノタウロス、アロン、オロンも駆け付け、ミノタウロスはメロディ達に、アロンはアクアに話し掛け、オロンは嬉しそうにパインの顔を舐めた。そんなブラックとホワイトの背後から、突然声が掛かった。

「アラア、黒と白のプリキュアちゃん、許して貰えて良かったじゃない」

「ウン……」

「本当に……」

ブラックとホワイトは、そう言いながら声を掛けて来た人物を振り返ると、思わず変顔を浮かべた。そこにはクネクネ身体を動かしながら佇むバルバスの姿があった。ブラックとホワイトは、バルバスに似て居るとは思いながらも、明らかに別人だと思うと、

「あのう……どちら様ですか!?!」

「イヤアねえ。あたしよ、あたし、バ・ル・バ・ス・よおん!」

「エエエ!?バルバス?」

バルバスは、そう言うブラックとホワイトにウインクし、二人は呆然としながら口をポカんと開けた。ブラックとホワイトが知るバルバスとは、魔法界で戦った荒ぶる獅子のように気性が激しい魔神だったのだから……

「嘘おお!?!」

今尚信じられないブラックとホワイト、更には仲間である筈の他の魔神達も驚きの声を思わず発した。

「エエッ!?!」

シーレイン、ニクス、リリスが……

「何!?」

アモン、ベレル、ミノタウロス、アロンが・・・

「ブオ!?!」

オロンが・・・

皆信じられないといった表情でバルバスを見た。ブロッサムは、困惑気味に一同に説明を始め、

「あのう・・・信じられないかも知れませんが、本当何です」

「バルバスと戦ったあたし達が、こうして言うんだから間違いないよ」

「私達のハートキャッチオーケストラを受けたバルバスは・・・」

マリンとサンシャインも苦笑しながらバルバスを見て話すと、バルバスは嬉しそうに話し始め、

「あたし、あの子達との戦いで愛に目覚めたの・・・ねえ?」

「私に話を振らないでくれるかしら?」

バルバスにウインクされて、話を振られたムーンライトは、困惑しながら視線を外した。バルバスは、他の魔神達にもウインクし、

「つていう訳で、生まれ変わったあたしを、これからもヨロシクねえん!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』



魔神達は、どう反応すれば良いのか分からず、皆困惑の表情を浮かべた……  
「牙を抜かれた獅子つて事!？」

メロデイが首を捻りながら呟くと、ブラックは微妙な表情でバルバスを見ながら、  
「去勢された獅子かも?」

ミュージズは、去勢という言葉に反応し、ブラックをジツと見ながら話し掛け、

「ねえ、去勢つて何?」

「後でプロツサムに聞いて」

ブラックは、言葉の意味が分からず純粹な目で聞いて来るミュージズに困惑し、視線に映ったプロツサムの名を出した。ムーンライトとホワイトはちよつと呆れたように、

「どうしてプロツサムなのかしら!？」

「動物の事は、パインの方が詳しいと思うんだけど……」

ブラックは二人に突っ込まれ、苦笑しながら頭を掻いた。

「いやあ、プロツサムはイケメン好きでしょう?下ネタ系も得意かなあ……何て思ったりして」

「プロツサムが怒るわよ?」

「知らないわよ?」

ムーンライトとホワイトは、再び呆れたようにブラックを見ながら話し、思わず溜息

を付いた。ブラックは、堪忍袋の緒が切れて、ブラックに文句を言うプロツサムの姿が目に見え、少し動揺すると、

「プロツサムに言わないでね？」

「別に言わないけど・・・」

そのプロツサムは、得意気にマリんとミューズに去勢の説明を始め、ブラック、ホワイト、ムーンライトは、思わず苦笑を浮かべた。カインを撃破し、集結して居た一同は和やかな雰囲気をしていたが、そこによりやくハッピー達がゆつくり現れた事で、その場の状況は一変した。ハッピーに気付いたドリームは、

「良かった。ハッピー達も無事だった・・・オオオオイ！ハッピー!!」

ドリームは、笑顔で両手を振ってハッピーに声を掛けるも、ハッピーは特に反応を見せずドリームは困惑した。何時ものハッピーなら、笑顔でドリームに手を振り返し、嬉しそうに駆け寄って来たのだから・・・

「ハッピー、何かあったの？」

今にも泣きそうな表情で近付いて来た、スマイルプリキュアの面々と、グレルとエンエンを見て、ドリームが心配そうに声を掛けると、

「ウン・・・キャンデイが、キャンデイが・・・」

ハッピーはそう言うのと、この場に居る一同に双児宮での出来事を語った・・・

「そんな事が・・・」

メロディも見る見る沈痛な表情を浮かべ、苦しむキャンディを見た。ハッピーは、縫るような視線でパインを見ると、

「パイン、キャンディどうしたんだろう？」

「見てみないと何とも・・・」

ハッピーからキャンディを受け取り、太股の上に愛しそうに寝かせたパインは、キャンディの様子をしてみるも、特に異常は見当たらなかった。

「キャンディちゃんは熱も無いし、見た所は異常が見当たらないんだけど・・・」

パインは、愛しそうにキャンディの身体を優しく撫でながら、困惑の表情で一同に語った。

「あのう、私達みたいに魔界シンドロームに掛かったとか？」

そうピースが告げた時、シーレインが首を振りながら即座にその説を否定した。

「それは無いわね。魔界シンドロームに掛かって、このような症状になった事は聞いた事も無いわ」

「じゃあ、キャンディを癒しの泉に連れて行くって言うのはどうかな？」

「そうね、あたし達も癒されたし・・・」

サンシャインの提案にベリーも癒しの泉で癒された事を思い出して同意した。ベレ

ルは腕組みしながら考え込むと、

「ウ〜ム．．．魔界の瘴気が少なからず影響しておるやも知れぬなあ。癒しの泉に効果があるか分からぬ以上、この者は出来るだけ早く魔界から、元の世界に連れ帰った方が良いかも知れんぞ？」

ベレルの提案に一同が沈黙した。シーレインは苦しむキャンディを見て、慈愛の表情を浮かべると、

「私には、この子を治す事は出来ないけど、苦しみを和らげるぐらいなら．．．」

ハッピーは思わずシーレインの顔を見て、

「本当!?!お願い」

「分かったわ．．．サイレント・スリープ」

シーレインは、ハープを取り出して演奏を始めた。その癒されていくメロディに、プリキュア達も魔神達も思わず聞き耳を立て、苦しんで居たキャンディの表情が見る見る柔いでいき、一同はホッと安堵した。だが、その静寂を打ち破る激しい揺れが一同を襲った。

「何?!?!地震?！」

ブルームは足を踏ん張りながら、地震かと思いきや驚いた表情を見せるも、アモンとベレルは即座に否定し、

「違うー！」

「ベレル、これはまさか!？」

「ウム、何者かが．．．地獄門を抉じ開けようとしておるようです」

『地獄門!?!』

ベレルから告げられた地獄門という言葉に反応し、思わずプリキュア達が聞き返した。アモンは頷き、

「そうだ、その名の通りこの魔界と地獄を繋ぐ門．．．」

「じ、じ、地獄!?!地獄って本当にあったの?」

ルージュは思わず顔を真っ青にしながら驚愕の声を上げた。その間にも激しい揺れは続いた。巨蟹宮に続き、残った十一の魔宮が地響きで音を立てて崩れ落ちた。魔王城が崩壊した谷から、凄まじい音を立てて何かが抉じ開けようとしていた。

「来るぞおおおお！」

思わずアモンが絶叫し、一同は思わず身構えた。何かが勢いよく開いた瞬間、その場に居た一度は、谷底から上がって来る何かが発する強大なプレッシャーを感じて居た。それが徐々に谷底から近付いて来るだけで、プリキュア達の全身から鳥肌が立った。イーグレットが、遂に姿を見せた巨大な何かを見ると、

「な、何!?!あれは．．．口? 巨大な口だわ！」

イーグレットの言うように、それは肉体に牙を上下に生やした巨大な口だけが付いた不気味な魔物、更に谷底からは無数の呻き声が聞こえて来て、その不気味な声は一同を戦慄させる。

「フハハハハハハ！遂に、遂にこの時が来た！！」

そう言いながら巨大な口の魔物の前に現れたのは、カイン、アベル、ソドムの生首だった。魔物は大きく口を開けると、あろう事かカイン、アベル、ソドムの生首を舌で絡め取り、ムシヤムシヤ食べ始めた。そのグロテクスな光景に、思わず数名のプリキュアが視線を外した。魔物がゴクリと飲み込むと、直ぐに魔物に異変が起こった。肉体が蠢き盛り上がり、それは次第に人のような容姿へと変貌していった。

「あ、あれは!?!」

アモンが、ベレルが、ミノタウロスが、ガタガタ震えだした。シーレインはそんな三人を訝り、

「アモン、ベレル、ミノタウロス、あなた達あの怪物を知って居るのですか？あれは一体!?!」

シーレインが三人にそう問う間にも、魔物の姿は次第に完成形へと近づきつつあった。腹部の巨大な口はそのままに、正面に一本角を生やした巨大なカインの顔が、左側に二本の角を生やした巨大なアベルの顔が、右側に三本角を生やした巨大なソドムの顔

があつた。魔物は大きく両腕を広げると、蝙蝠のような巨大な羽を広げ、三つの顔が同時に喋り出した。

「我が名はゼガン！この魔界の王・・・悪魔王ゼガン!!」  
『キヤアアアアア!』

悪魔王ゼガンを名乗る者からの圧倒的威圧感に、思わず十数人のプリキュア達から悲鳴が起こつた・・・

モグロスは、弟ミノタウロスの墓を作り葬り終えると、ゼガンの気配を感じ、魔王城があつた方角に顔を向けた。

「おやおや、どうやらゼガンさんが復活なさつたようですねえ・・・ゼガンさんはさぞ幸せの絶頂といった所でしようなあ」

モグロスはそう言うのとニヤリと笑み、

「ですが・・・大蛇、並びに五人のプリキュア消滅時、プリキュア達の中で覚醒した九人の天使が、あなたの前に立ち塞がる事でしょう・・・オクホツホツホツホ!」

モグロスはそう言うのと、笑い声を響かせながら何処かへと姿を消した・・・

第三百三十四話：十二の魔宮（後編）

完

## 第三百三十五話：悪魔王ゼガン

1、・悪魔王ゼガン、四つ葉町強襲

嘗て魔界を支配し者、悪魔王ゼガンが遂に復活した！

ゼガンの禍々しい姿は、頭部正面に一本角を生やした巨大なカインの顔、左側に二本の角を生やした巨大なアベルの顔、右側に三本角を生やした巨大なソドムの顔、全身を固い針金のような焦げ茶色の毛で覆い、腹部には牙の生えた巨大な口が蠢いていた。大きく両腕を広げると、蝙蝠のような巨大な羽が露になり、ゼガンの禍々しさをより一層際立てていた。

復活した悪魔王ゼガンの圧倒的威圧感、魔界全土を恐怖に包み込もうとしていた……

魔王とルーシエスも、遂に復活したゼガンの禍々しい気を感じて居た……

ルーシエスは、ゼガン復活を察知すると、険しい表情を浮かべた。

(遂に復活してしまったか……)

「オイ！この禍々しい気が、お前の言ってるゼガンカゲ？」



「そう．．．もう時間がない。今話した通り、君は僕の影から生まれた存在何だ。君に記憶が無いのも、何れは僕と一つになる筈だったから．．．でも、君には自我が芽生えてしまった」

ルーシエスはそう言うと、魔王の瞳をジイと見つめた。魔王もルーシエスの瞳を見つめ返し、両者の間に暫しの沈黙が流れた。ルーシエスは、そんな魔王を見て少し口元に笑みを浮かべると、

「単刀直入に聞くよ．．．ゼガンが復活した今、君が大切に思っているプリキュア達もどうなるか．．．魔王、君はどうしたい？」

「俺は．．．」

魔王は、何かを決意し、ルーシエスの問いに答え始めた．．．

悪魔王ゼガンの禍々しい気を受けたプリキュア達も、魔神と呼ばれる者達も、蛇に睨まれた蛙になったかのように、身動き出来ず、その姿を凝視する事しか出来なかった。三つ顔の悪鬼ゼガンは、まるで三つの顔が、同じ意思を持って居るかのように同時に喋り出し、

「フハハハハハ！礼を言うぞプリキュア共、忌々しき封印より我は目覚めた!!そして、

我が配下達もなあ．．．」

『ゼガン様ああああ!!』

挟じ開けられた地獄門の下から、無数のゼガンを称える声が聞こえてくる。ブラックは、恐怖心を飲み込むように生唾を飲み込むと、ゼガンに対し気丈に話し掛けた。

「あんだ、またこの魔界を滅茶苦茶にする気なの？」

「魔界か？・・・フハハハハ、ルーシエスの居らぬ魔界など、バハムートさへ警戒して居れば、何時でも取り戻す事は出来る。それより我は、中々面白い余興を思い付いてなあ・・・」

「余興ですって？」

ホワイトは、ゼガンの語る余興という言葉に引つ掛かりを覚えた。何を企んで居るのか分からず、一層の警戒心を深めた。ゼガンは、三つの顔でプリキュア達を一人一人見つめると、見つめられたプリキュア達は、ゾッと鳥肌が立った。

「そうだ。プリキュア共よ、我がお前達が此処に來られるよう、人間界と魔界を繋ぐゲートを開いたのは知って居るな？」

「当然よ！それを利用して、こうして私達は魔界に來たのだから」

ゼガンの問いに、パッションが答えた。カインの策を利用し、アカルンの力を解放し、プリキュアの仲間達と共にこの魔界に乗り込んで來た。ゼガンは含み笑いを浮かべ、

「ククク・・・だったら、逆も可能だとは思わんか？」

『エッ!?!』

ゼガンの問い掛けに、プリキュア達は何の事か分からず虚を突かれた。ゼガンは、そんなプリキュア達を愉快そうに眺めながら、

「我と、我が腹心であるザンコックとバルログ、他に数名の配下の者は、ルーシエスによつて肉体のまま地獄へと封じられたが、その他の我が配下のほとんどは、戦いに敗れて肉体を失つて居てなあ・・・人間界には、我が配下共の新たなる肉体となる糧が、ウヨウヨしておるとは思わんか?」

「な、何を言っているの? そんな事・・・」

ムーンライトの脳裏に、ゼガンは人間を、配下の魔物達の餌にしようと考えて居るのではと考え、思わずゾツした。だが、ベレルの考えは違っていた。

「ゼガン! お主まさか、人間共の肉体に、地獄に堕ちた亡者共を憑依させよう? させんぞおお!」

『エッ!?!』

「「ま、まさか!?!」」

ベレルは、ゼガンの企みに気付き、思わず刀の柄を握りしめた。プリキュア達は、ベレルの発した言葉の意味が、最初はよく分からなかった。だが、ホワイトやムーンライト、アクア達は、頭の回転を素早くさせると、ベレルの言葉の意味を理解し、そして恐

怖した。ゼガンは、そんなベレルを一睨みすると、ベレルはゼガンの気に飲まれ、身動き出来なくなつた。

「グッ……奴の気に飲まれたか……不覚」

「さて、お前達の世界と繋がつて居たのは……確か、四つ葉町とか言つたなあ？」  
「エッ!?!……嘘……でしよう?」

ゼガンが四つ葉町という地名を出した時、ピーチは思わず呆然と眩き、ベリー、パイン、パッションから、思わず血の気が一斉に引いた。思わずよろめいた四人、ピーチをブラックとドリームが、ベリーをマリンとアクアが、パインをハッピーとビューティが、パッションをブライトとビートが咄嗟に支えた。

「フハハハハ！さあ我が配下達よ、我に続け!!プリキュア達の住む人間界に赴き、奴らの世界を、戦いに明け暮れる素晴らしい世界に変えようではないか!」

『オオオオオオ!!』

ゼガンの考えに同調したかのように、再び地獄門の下から無数の雄叫びが響いた。

「ガアアアアア!!」

ゼガンは満足そうに上空に向けて吠えようと、曇天の空に魔法陣のような逆五芒星が描かれたゲートが浮かび上がった。

「行くぞおお!!」

『オオオオオオ!!』

ゼガンの合図に、地獄門から無数の雄叫びが響き渡り、ゼガンは巨大な蝙蝠のような羽を羽ばたかせ、上空に浮かぶゲート目掛け飛翔した。プリキュア達の目に、ゼガンの禍々しい全身が露になった。下半身も鋼のような焦げ茶色の毛に覆われ、尻尾は意思を持った黒い蛇で、大きく揺れながらプリキュア達を威嚇した。ゼガンの身体がゲートに吸収されたかのように消え失せた。

「行くぞ、者共！ゼガン様に続けええ!!」

それにくよくように、新たな魔物が地獄門から現れた。全身が青く、頭部から巨大な角を生やし、大きな金棒を右手に持った一つ目の巨人、キユクロプス族でゼガンの腹心魔將軍ザンコックが現われた。

「久々に暴れてやるぜええ！」

ゼガンにその功を称えられ、ゼガンと同じ漆黒の翼を与えられ、身体から炎を揺らがせ、炎の悪魔と呼ばれ恐れられた魔將軍バルログが、ザンコックに続きプリキュア達の前を通り過ぎて行つた。

『ウオオオオオオ!』

二人の腹心を筆頭に、その後から、ゼガン、ザンコック、バルログを追いかけるように、猪のような頭部から、大きな二本の角を回転させながら空を駆ける獣エアール、双

頭の大蛇アスパエナが、ゲートへと突入し消えて行く、更に揺らめく蜃気楼のような大勢の魍魎魍魎の類が、雄叫び上げながら、我先に地獄門からゲート目掛け飛翔する。まるで目に見えない闇の道が、道標のように照らして居るかのようにな……

「アツ……アアアアア」

ゼガンの気に飲まれ動けなかったプリキュア達、ブラックは、その姿を呆然としながら見つめ、一同は皆何も出来なかつた事に悔しそうな表情を浮かべていた。

「いかん！このままでは……人間界は滅びるぞ!!」

アモンが……

「何とか地獄門を閉じなければ、人間界も、この魔界も終わりだわ」

シーレインが……

「ムウウウ……ザンコックやバルログまで……拙者達が揃って何も出来ぬとは……」

ベレルが……

「プリキュア達よ、お前達は人間界に戻れ！」

ミノタウロスが……

「地獄門は我らで何とかする」

アロンが……

「ブオオオ」

オロンが……

「何かヤバイ事になったわねえ……」

バルバスが……

「ゼガンを……お願い」

ニクスが……

そして、リリスもプリキュア達に何か声を掛けようとした時、リリスの心に話し掛ける者が居た。

（あなた方だけでは、とても地獄門を閉じる事は不可能ですわねえ……）

「誰?！」

リリスは、突然心に話し掛けられ、思わず声を発した。シーレインは、そんなリリスを訝りながら声を掛け、

「リリス、どうしました?」

「いえ、誰かが私の心に……」

（リリスさん、確かに地獄門を再び閉じる事も重要ですが、今は人間界へと向かう魑魅魍魎達を阻止する事が先決ですよ……オッホッホッホ）

そうリリスに忠告を与えたのは、自らを魔界の予言者と名乗るモグロスだった。リリスは、自分の心にだけ話し掛けて来たモグロスに驚き、

「その笑い声はモグロス卿!? 何故私に?」

(ハイ・・・魔界と地獄が繋がった今、七つの大罪と呼ばれし色欲の悪魔、アスモデウスの子孫であるリリスさんなら、あの魑魅魍魎達を操る事も可能かと思ひまして、声を掛けさせていただきました)

「私に・・・出来るの!?!」

リリスも、自分が七つの大罪と呼ばれ、色欲の悪魔の子孫だという話を、カインから聞いて知っては居たが、一人二人なら兎も角、あの集団を操る事が出来るとは思えなかった。モグロスは、そんなリリスの不安を見通したかのように、

(出来なければ・・・無数の魑魅魍魎達が、肉体を求め次々とプリキュアさん達が住む人間界目掛け、群がり続ける事でしょう・・・しかし、リリスさんが魑魅魍魎達を操る事が出来れば、彼らを地獄門が閉じる間、壁として利用する事も可能だと思いますよ)

モグロスの忠告を受け、リリスの中に闘志が湧き上がって来た。リリスは意を決すると、

「やるしかないわね・・・プリキュア! 大蛇に乗って人間界に戻ってえ!! あいつらは、私を抑える!! 大蛇いい! この場集い、プリキュア達と共に人間界に向かいなさい!!」

『シヤアアアアア!』

リリスの叫びに共鳴したかのように、四方から大蛇達の雄叫びが聞こえ、巨体を揺ら



しながら七匹の大蛇達が近付いて来た。

「リリス!？」

シーレインとニクスが思わずリリスを見つめ、

「出来るのか!？」

アモンも驚きながら、あの魑魅魍魎の群れを抑えると言ったりリリスを見つめた。

「やるしかない……」

リリスはそう言うのと、目を閉じ精神を集中させた。リリスは、何者かが自分を見ている気配を感じた。不思議と嫌悪感は無く、どこか懐かしさを感じられるかのようだった。

（力が……溢れてくる!？）

リリスは、自分を何処からか見ている人物が、モグロスが言ったアスモデウスだと確信し、子孫である自分に力を貸してくれた事を感じ取った。

（今の私なら……出来る!）

リリスは確信し、上空に浮かぶゲートをキツと見上げた。だが、既にゲートを通過して行った、数百にも及ぶ魑魅魍魎達を、再び地獄門に呼び戻す事は不可能だとしても、自分の視線に映る魑魅魍魎だけは、何としても阻止しなければならないと、リリスは大きく息を吸い込み叫んだ。

「聞けえ、魑魅魍魎共よ！我が名はリリス、私の命令に従いなさい・・・チャーム!!」  
リリスは、ゲート目掛け群がる魑魅魍魎目掛け、精神を操る技であるチャームを放つた。地獄と繋がり、アスモデウスの力の加護を受けたリリスのチャームは、何時も以上の効果を上げ、ゲート目掛け飛翔して居た魑魅魍魎達の動きが止まった。リリスは、魑魅魍魎達に指示を出し、

「お前達、地獄門より湧き出る輩を、壁となつて塞ぎなさい！」

『ハイ！リリス様ああ!!』

リリスの命を受け、魑魅魍魎の精神体の群れが、目をハートにしながら今這い上がつて来た地獄門目掛け降下して行つた。ゲートに群がっていた魑魅魍魎が居なくなつた事で、リリスはそれを見ると、直ぐにプリキュア達に視線を向けて指示を出した。

「今よ、プリキュア！大蛇に乗つてゲートを通り、急いで人間界に戻つてえ!!」

『分かつた!』

プリキュア達は、リリスの申し出に頷くと、大蛇目掛け駆け出した。それを見たベレルは、傍に居るキャミーを振り返り、

「キャミー、お主も一緒に行つて力になつてやれ」

「分かりましたニヤ」

赤の大蛇の上に頭の上に、ブルーム、イーグレット、ブライト、ウインディが・・・

紫の大蛇の頭の上には、プリキュア5とローズ、ココとナッツが・・・

黄の大蛇の頭の上には、ピーチ、ベリー、パイン、パツシヨン、シフォンとタルトが：

青の大蛇の頭の上には、ムーンライト、ブロッサム、マリン、サンシャイン、シフレ、

コフレ、ポプリが・・・

茶の大蛇の頭の上には、メロディ、リズム、ビート、ミューズ、ハミイ、キャミー、フェ

アリートーン達が・・・

緑の大蛇の頭の上には、スマイルプリキュアの六人と、ハッピーに抱かれたキャン  
ディ、エコーに抱かれたグレル、エンエンが・・・

黒の大蛇の頭の上に先ずルミナスが乗り、ブラックとホワイトも乗ろうとした時、二  
人の心にモグロスの声が聞こえて来た。

（ブラックさん、ホワイトさん、あなた方はこのまま魔界に残り、地獄門を閉じる役目に  
回った方が宜しいと思いますよ）

「エッ!？」

突然モグロスに心の中に話し掛けられた事で、思わずブラックもホワイトも戸惑つ  
た。仲間達を見ても、どうもモグロスの声が聞こえているのは、自分達二人だけのよう  
に思われた。モグロスは話を続け、

（元々地獄門は、ルーシエスさんが片側ずつ地獄門に、闇と光の二重の結界で封じ込めて

居ましたし、ベレルさん達闇の魔神達だけで地獄門目掛け技を放つても、仮に闇の封印の扉半分は閉じる事が出来たとしても、封印は直ぐに破られ、再び地獄門は開く事になるでしょう」

「どうして私とホワイトだけに、あんたは話し掛けたの!？」

ブラックは、自分とホワイトだけに心の中に話し掛けたモグロスを警戒しながら問うと、モグロスはその事について語り始めた。

（お二人には、先程放ったような秘められた力がありそうですし、ゼガンさんを追う人数は、多い方が良いでしょうねえ）

ホワイトは、モグロスの話に納得がいったようで小さく頷き、

「そういう事・・・私達のマールブルスクリューシャイニングを、もう片側の扉に放てどあなたは言っているのね?でも私とブラックは、さっきの力を何時でも出せる訳では無いわ」

ホワイトが困惑気味に語ると、ブラックは、ホワイトに話かけ、

「ルミナスも大分疲れてるし、ルミナリオを放つのも無理だよねえ・・・そうだ!ねえホワイト、だったらムーンライトにも残ってもらって、三人でエクスクラメーションを放つのはどうかな!？」

「そうね・・・必要最低限の人数でやるなら、それしかないわね」

ホワイトも同意し、二人の視線が、青の大蛇の上に居るムーンライトへと向けられた。

「ムーンライト！ 私達と一緒に魔界に残って、地獄門を閉じるのを手伝って!!」

「エッ!？」

ブラックとホワイトに話し掛けられたムーンライトは、思わず困惑の表情を浮かべた。今まさに、四つ葉町目掛け進軍するゼガンの事が気に掛かっていた。ブラックとホワイトも、そんなムーンライトの思いを分かち居た。自分達も同じ気持ちなのだから。だが、今は自分達が出来た事を最優先しようと、ブラックとホワイトは、ムーンライトに魔界に残る意味を説明し始めた。

「どうやら、地獄門を封印するには、闇の力だけじゃなくて、光の力も必要何だって」「ゼガンを追う人数を減らさない為にも、私達のプリキユアエクスクラメーションなら、三人だけでも何とかかなりそうだと思うの」

「そういう事・・・良いわ」

ブラックとホワイトの申し出を、ムーンライトは快諾して青の大蛇から飛び降りて、ブラックとホワイトに合流した。三人は、大蛇に乗った仲間達を見渡し、

「みんな、私達も地獄門を閉じたら直ぐに戻るから!」

「私達が戻るまで、何とか持ち堪えて!」

「頼んだわよ!」

ブラック、ホワイト、ムーンライトが、一同にゼガンとの戦いを託し、一同が力強く領いた。ルミナスは、固い表情をしながら三人に話し掛け、

「ハイ、三人も気を付けて！」

「「「エエ」」」

ピーチは、険しい表情のまま大蛇に話し掛けると、

「大蛇、急いで四つ葉町までお願い！」

『シヤアアアア！』

七匹の大蛇は、分かったとばかり雄叫びを上げると、黄、赤、紫、緑、青、茶、黒の大蛇の順に、ゼガンが作り出したゲートに突入して行つた。仲間達を見送つたブラックは、ブルーから貰つたあるアイテムの存在を思いだした。

「そうだ！神様に貰つたこのアイテムで、ソード達に知らせなきゃ」

ブラックは、ブルーから貰つたペンダントを握りしめると、四つ葉町に居るブルーへと連絡を試みた……

四つ葉町……

四つ葉町公園に移動したソード、ダークプリキュア5、ブルー、シロップ達、ソードは、プリキュアの仲間達の無事を祈り、空を見上げていると、突然空に魔法陣が現われ、

異様な逆五芒星のマークが浮かび上がった。ソードは一同に知らせるように空を指差しながら、

「見て下さい！な、何なの!? あれは一体?」

「エッ!? 何かしら・・・凄く嫌な感じがするわ」

ダークドリームも表情を顰めながら、空に浮かぶ魔法陣を見て呟いた。ブルーが表情を険しくしたその時だった。

「神様、聞こえますか? 神様?」

「その声は・・・なぎさ! 無事で良かった」

「ハイ! 無事っていうか・・・何か色々ヤバイ事になって・・・」

ブラックは、ホワイトやムーンライトにフォローされながら、魔界で起こった出来事を、ブルーやソード達に知らせた。見る見るソードの顔は青ざめ、

「そんな!? 悪魔王ゼガンがこの町に? 私達だけで、そんな者達と戦う何て・・・」

ブラックは、ソードの不安を感じると、気休めかも知れないと思いつつも励ますように、

「直ぐにみんなが後を追ったから、ソード、ダークプリキュア5、お願い! みんなが来るまで何とか持ち堪えて!! 私達も、地獄門を閉じたら直ぐ戻るから」

ブラックからの通信は、そう言う途絶えた。その間にも、魔法陣のゲートから漂う

圧倒的な威圧感が増し続け、遂にゲートから巨大な足がゆっくり姿を現した。

「みんなあー！悪魔王ゼガンが．．．来る!!」

ブルーが叫び、ソードとダークプリキュア5が見上げたゲートから、悪魔王ゼガンがゆっくりとその全貌を露にした。その禍々しい姿を見た者は、恐怖に顔が引き攣り、思わず絶叫せずには居られなかった。

『キヤアアアア!』

「ウワアアアア!バ、化け物だああ!!」

ゼガンを見た四つ葉町の人々が、慌てて逃げ始める。それは未知なる生物に恐怖する、人としての本能かも知れなかった。ゼガンは薄ら笑いを浮かべると、そんな逃げ惑う人々に、逃げる事は出来ないとばかり、直接心に語り出した。

「聞けええ、人間共!我が名はゼガン!悪魔王ゼガン!!この世界に災いをもたらす者なり!!」

悪魔王ゼガンの叫びが、ソード達に、四つ葉町の人々に轟いた!

## 2、・ソードの危機

突如現れた巨大な怪物悪魔王ゼガン、更にザンコックやバルログなど、続々と怪物が姿を現し、四つ葉町の人々は益々パニックになっていた。悲鳴があちらこちらから沸き



起こり、車のクラクションの音が木霊し続けた。ブルーは、険しい表情で顔から冷や汗を流しながら、

「何という禍々しい気を放つんだ・・・」

ブルーは、ゼガンから放たれる禍々しい気に戸惑いを見せた。嘗て戦った大いなる闇の軍勢ともまた違う、邪悪なる気を間近で感じ焦りを感じて居た。ダークドリームは、ゼガンの軍勢を険しい表情で睨むと、ブルーに進言を始めた。

「神様、私達はソードと共に、悪魔王ゼガンと戦いに行きます。いいわね、みんな？」

「「もちろん！」」

「ハ、ハイ・・・」

ダークドリームの問い掛けに、仲間達は二つ返事で承諾し、ソードは緊張気味ながらも同意した。だが、ブルーは慌てて彼女達に話し掛け、

「君達六人だけでは無茶だ！」

「そうかも知れません・・・それでもやるしかない」

ダークミントが・・・

「ブラックも、みんなも直ぐ戻って来るって言ってたし」

ダークサニーが・・・

「私達とソードで、何とか時間を稼ぎます」

「ダークレモネードが・・・」

「それに・・・私達の妹達もきつと駆け付けてくれるわ」

「ダークアクアは、そう言う宇宙を見つめた。ブルーはハツとした表情を浮かべると、妹達!?!ひよつとして、バッドエンドプリキュア達の事かい?」

「[[[[ハイ!]]]]」

「エエエ!?!」

「ダークプリキュア5は、バッドエンドプリキュア達を妹同然に思つて居た。そんな妹達なら、このゼガン軍団が発する禍々しい気を感じれば、きつとこの場に駆け付けてくれる事を信じて居た。それとは逆に、ソードは、思わず頭の中にバッドエンドピースの顔を思い浮かべると、思わず顔を顰めた。ダークドリームは、ブルーに話し掛け、

「生まれた場所も違うけど、私達と同じように、闇から生まれた妹達なら必ず・・・」

「ダークドリームは、そう言いながら少し穏やかな表情を浮かべた。直ぐに表情を引き締めると、

「みんな、行くわよ?」

「[[[[エエ!]]]]」

「ダークドリームの合図に、ダークルージュ、ダークレモネード、ダークミント、ダークアクア、ソードが返事を返し、ゼガン率いる軍団目掛け駆け出した。ブルーは、そん

な六人の後姿を見つめながら、

「すまない・・・僕には君達と共に戦う力が無い。もう直ぐみんな戻って来る・・・無茶はしないでくれ」

ブルーは、無力な自分に嘆きながらも、ソードとダークプリキュア5の無事を祈る事しか出来なかつた。ゼガンは、そんな彼女達の存在に目もくれず、腕組みするとザンコックとバルログに指示を始めた。

「ザンコック、バルログよ、我はこれより瞑想を行い、人間界の様子を窺う。後の事は任せて良いな？」

「ハ・・・ハハアア」

ゼガンにジロリと睨まれ、思わずザンコックとバルログは、片膝付いて畏まった。ゼガンは頷き、三つの顔に付く六つの目を閉じると、人間界の様子を探る為に瞑想を始めた。立ち上がったザンコックとバルログからは、何故か焦りが見受けられた。

「バルログ、急いでこの町の者共を、亡者達の肉体に変えねば・・・」  
「ウム、ゼガン様が瞑想を終わられる前に片を付けねば・・・」

「我らの身が危うい！」

ザンコックとバルログは、ゼガンの性格を熟知していた。ゼガンの意に添わぬ者、ゼガンの命を実行出来なかつた者達の末路を、嫌という程自分達の目で見て居た。バルロ

グはゲートを仰ぎ見ると、中々人間界にやって来ない魑魅魍魎達に苛立ちを覚えた。

「遅い！奴らは何をモタモタしてやがる・・・ン!?何だ、貴様ら?」

バルログは、自分達目掛け駆け寄って来る六つの影に気付くと、忌々し気に問いかけた。六人を代表するかのようには、ダークドリームは宙に飛ぶと、

「ピーチ達に託されたこの町を、あなた達の好きにはさせないわ！プリキュア！ダークネス・・・スター!!」

黒き流星が、バルログ目掛け急降下するも、その行く手を遮るかのようには、空を駆ける獣エアールと、双頭の大蛇アスプバエナが立ち塞がった。ダークドリームを援護するかのようには、ソードもまた宙に飛ぶと、

「援護します。閃け！ホーリーソード!!」

ソードはホーリーソードを放ち、右手から無数の剣の形をしたエネルギー弾を飛ばし、二体の魔物を牽制するも、エアールは頭部の二本の角を回転させると、まるで前方にバリアを張って居るかのようには、ホーリーソードを次々と弾き飛ばして消滅させて行った。ザンコックは、六人のプリキュアを見て舌打ちすると、

「チツ、邪魔者共めがあ！エアール、アスプバエナ、その目障りな奴らを血祭りに挙げろ!!」

ザンコックの命を受け、奇声を上げたエアールとアスプバエナが、六人のプリキュア

に対して攻撃を始めた。アスプバエナは、その蛇のような身体を上手く使って、ソードとダークプリキュア5を分断すると、待つてましたとばかり、ソードに狙いを絞ったエアールが、頭部の二本の角を回転させてソードに執拗に体当たりを試みた。

「キヤア！」

ソードは、猪突猛進に突っ込んで来るエアールの体当たりを辛うじて躲すも、直ぐに態勢を直したエアールは、何度もソード目掛け体当たりを試みた。

「調子にのらないで！閃け！ホーリーソード!!」

ソードは、再びホーリーソードをエアール目掛け放つも、エアールは先程同様頭部の二本の角を回転させて前方にバリアを張り、ホーリーソードを弾き返しながら尚も突進して来た。

「ホーリーソードが・・・」

ソードは、ホーリーソードを弾き返されて動揺し、突進する度にスピードが上がるエアールに、次第に追い詰められて行った。必死に躲し続けるソードに気付き、ダークプリキュア5達もソードの援護に向かおうとするも、その都度アスプバエナが五人の前に立ち塞がり、行く手を遮った。躲し続けて居たソードだったが、バランスを崩した隙に逃さず、エアールはその勢いで突進し、ソードを上空に弾き飛ばした。

「キヤアアアア！」

ソードは、悲鳴を上げながら弾き飛ばされ、ソードの落下してくる身体目掛け、エアールは巨体を揺らしながら飛び、鋭利な二本の角でソードを刺し殺そうと迫った。

「「「ソードー」」」

ソードの身を案じたダークプリキュア5が、ソードの名を叫んだその時・・・

「邪魔」

「エッ!？」

突如ソードは何者かに蹴り飛ばされ、地上に落下したものの、エアールの攻撃を回避する事が出来た。

3、参戦！バッドエンドプリキュア

ソードは、自分を蹴り飛ばした人物を見ると、思わず頬を大きく膨らました。何故ならそこに現れたのは・・・

「私のパシリちゃんに、何してるのかなあ?」

「バッドエンドピース！」

バッドエンドピースは、エアールとすれ違いざまに、エアールに雷を浴びせて痺れさせた。ソードは、蹴り飛ばされた事を根に持っているのか、目でバッドエンドピースに抗議するような視線を送ると、バッドエンドピースはやれやれといった表情を浮かべ、

「やれやれ、助けて上げたのになあ」

「助けてくれた事には礼を言うわ・・・でも、蹴り飛ばさなくてもいいでしょう?」  
「いやあ、蹴らなきや間に合わないかなあつて思つて」

「絶対嘘よ!」

ソードは、尚も頬を膨らまして抗議するも、バッドエンドピースは軽くソードに舌を出した。ホッと安堵したダークプリキュア5達に、声を掛ける者達が居た。

「苦戦してるね?」

バッドエンドハッピーが・・・

「あんたらやつたら、特別に手を貸したるか?」

バッドエンドサニーが・・・

「まつ、暴れられるならそれも良いね」

バッドエンドマーチが・・・

「禍々しい氣を追つて来て正解だったようね」

バッドエンドビューティが、笑みを浮かべながら合流し、ソードを助けたバッドエンドピースも合流した。

「フフフ、来てくれると思つてたわ」

「ダークドリームは、思わず五人に笑みを浮かべるも、直ぐに表情を引き締め、

「手を貸して！他のみんなが戻って来るまで、何とか私達だけで食い止めましょう」

ダークドリームに声を掛けられ、今更ながらブラック達がこの場に居ない事に気付いたバッドエンドプリキュア達、バッドエンドハッピーは、ダークドリームに確認するよ  
うに話し掛け、

「エッ!?!ハッピー達やブラック先輩達居ないの?」

「実は、みんなは今魔界に行ってる・・・」

「「「「エエエ!?!」」」」

ダークドリームから、ブラック達は魔界に乗り込んだ事を聞き、バッドエンドプリキュア達は思わず驚きの声を上げた。魔界に乗り込むのならば、アベルとは些か因縁があるバッドエンドプリキュア達も、魔界に行きたかったようで、些か不満そうな表情を浮かべた。

「カインって者に、この四つ葉町を魔界から攻撃されて、それを阻止する為に、みんなは魔界に乗り込んだわ。でも、状況は最悪なようで・・・」

ダークドリームは、簡潔にブラック達から聞いた話を、バッドエンドプリキュア達に聞かせると、険しい表情で前方を見た。バッドエンドプリキュアの五人も、ダークドリームに釣られるように正面を見た。そこには、瞑想して沈黙しながらも無言の圧力を発するゼガン、バッドエンドプリキュア達も現れた事で、益々苛々を募らせたザンコツ



クとバルログの姿があった。

「成程、禍々しい気の出所は・・・あの怪物なようね」

バッドエンドビューティは、瞑想しているゼガンの姿を見た瞬間、禍々しい気を放つ存在が何なのか理解した。バッドエンドピースとバッドエンドマーチは、ゼガンの巨大な顔がアベルに似て居る事に気付き、表情を険しくした。

「アアア!?あの顔アベルそっくりいい!」

「確かに・・・だが、アベルにしては顔がデカすぎる」

「ブラツクの話によれば・・・あれこそが、カイン、アベル、ソドムって言う者の真の姿で、悪魔王ゼガンと言うらしいわ」

「[[[悪魔王ゼガン?]]]」

ダークドリームの話を聞き、バッドエンドプリキュア達はゼガンを凝視した。

「フウウン、あの怪物がアベルでもあるなら、話は簡単だよな?」

バッドエンドピースが・・・

「アア、あいつを倒せば、あたしとピースが受けた借りも返せるってもんだ」

バッドエンドマーチが・・・

「じゃあ、私達はゼガンと戦う?」

バッドエンドハッピーが・・・

「せやな、一気に行つたらうやないか」

バッドエンドサニーが・・・

「でも、用心なさい。あの者から放たれる気は尋常じゃ無いわ」

バッドエンドビューティが・・・

バッドエンドプリキユア達五人の心が一つになるも、直ぐにダークアクアが五人に話し掛け、

「それは得策じゃないわ。あのゼガンが何を考えて居るのかは分からないけど、下手に刺激してゼガンまで相手にする事になっては、今の人数では不利よ」

「ウン・・・私も先にあの動き回る怪物達や、指示を出すあの二体を先に倒す方が得策だと思う」

ダークドリームもそう進言すると、不服そうにする仲間達を宥めたバッドエンドハッピーが小さく頷き、

「それもそうだね・・・みんな、ここはダークドリーム達の言う通りにしようよ」

「ハッピーがそう言うんやったら・・・ウチはエエで」

「二「分かった」」

バッドエンドサニーも同意し、バッドエンドピース、マーチ、ビューティも同意した。十人の闇のプリキユア達が横一列に並ぶと、忌々しそうにザンコックとバルログに睨み

付けた。

「エアーレ！アスプバエナ！何をもたもたしている。さっさとそいつらを血祭りに上げろ!!」

バルログの叱責を受け、エアーレとアスプバエナが左右から十人の闇のプリキュア達に攻撃を仕掛けて来た。エアーレをバッドエンドプリキュアが、アスプバエナをダークプリキュア5が迎え撃った。数度の小競り合いをした後、再び合流した両チーム、バッドエンドピースは、一同に話し掛け、

「ねえねえ、一々相手するの面倒だから、この前みたいに私達のバッドエンドバーストと、ダークプリキュア5のダークローズ何たらで、一気にあの怪物達やつつけない？」  
「私達は構わないけど、そう上手く誘導出来るかしら？」

バッドエンドピースの提案に、ダークドリームは仲間達とアイコンタクトして同意するも、ザンコック、バルログ、エアーレ、アスプバエナを、合体技で一気に倒すのは中々難しいのではないかと率直な意見を述べた。バッドエンドピースはニンマリしながら、  
「大丈夫だよ、**囧**を使えば・・・」

『**囧**?!』

バッドエンドピースを除いた闇のプリキュア達が一齐に首を傾げると、バッドエンドピースは、加勢にやって来たソードを手招きし、

「ソード！ちよつと、ちよつと」

「エツ!? 私に何か用?」

ソードは、訝りながらもバッドエンドピースの側に近付くと、バッドエンドピースはゲスイ表情を浮かべ、

「エイ！」

「エツ!? キヤアアア！」

バッドエンドピースに突き飛ばされたソードは、哀れエアーレとアスパエナの囹にされ、群れから逸れた子羊を狙うかのように、エアーレとアスパエナが、先ずソードを餌食にしようとソード目掛けゆっくり近付いた。

「な、何考えてるのよおおお!!.....エツ!?」

ソードは、何かの気配を感じ、ゆっくり背後を振り返ると、エアーレが前足を何度も地面に擦り付け、アスパエナが二つの頭から舌をチロチロ出すや、ソード目掛け襲い掛かって来た。

「キヤアアアアアア！」

ソードは慌てて逃げ出し、そのソードを執拗に二体の魔物が追い駆けまわした。バルログとザンコックは呆れた表情を浮かべながら、

「何だ!? 仲間割れか?」

「何を考えて居るのか分からん奴らだな？」

バルログとザンコックは、まるで仲間を見捨てた様な行動をした闇のプリキュア達に、その真意が読めず首を傾げた。

「イヤアアアアア！」

ソードは、二体の魔物に追い駆けられ、悲鳴を上げながら必死に右に左に逃げ続けるも、バッドエンドピースは涼しい表情で、

「ソード、そつちじゃないよ・・・そつちでもない」

「み、見てないで・・・助けてくれても良いでしょう〜うー！」

「ベエエエエー！」

「覚えてなさいよおおおお！」

ソードは、舌を出して挑発するバッドエンドピース目掛け駆け寄って来ると、バッドエンドピースは、仲間達を見てニンマリしながらVサインをし、

「エヘヘ、上手く行ったよ」

「ウワアアア・・・ちよつとドン引きしたかも」

「後でソードに謝りなさいよ？」

バッドエンドハッピーとダークドリームは、ジト目でバッドエンドピースを見つめるも、バッドエンドピースは我関せずといった表情で、

「いいから、いいから、今だよ」

バッドエンドピースの合図に頷き、十人の闇のプリキュア達が行動に移った。ダークプリキュア5は目を閉じ、精神を集中させ、

「「「「我らがマスター！ダーククイーン・・・私達に力をお貸し下さい！！」」」」  
そんなダークプリキュア5の心に、気高き声が聞こえてくる。

（親愛なるダークプリキュア5！例え離れていようと、あなた方の声は私に聞こえています！！さあ、あなた方に力を授けましょう・・・）

ダークプリキュア5の頭上が輝くと、五人の手に黒いフルーレが装着される。五人は軽くフルーレを振ると、

「5つの闇にー」

「「「希望を乗せてー」」」

「「「プリキュア！ダーク・ローズ・エクスポーション！！」」」

五人のフルーレの先端に、黒い薔薇が姿を現わした。一方のバッドエンドプリキュアも右手を合わせ、

「「「ドラゴンよ！私達に力を！！」」」

バッドエンドプリキュア五人の思いが一つになった時、五人の身体から黒いオーラが沸き上がった。黒いオーラは竜へと代り、竜から放たれた黒い光が、バッドエンドプリ

キュア五人の手に注がれた。五人の手には、先端に竜の顔を象ったロッドが握られ、見る見るバッドエンドプリキュアの姿を変えていった。

「ダークプリンセスハッピー！」

「ダークプリンセスサニー！」

「ダークプリンセスピース！」

「ダークプリンセスマーチ！」

「ダークプリンセスビューティ！」

「バッドエンドプリキュア！ダークプリンセスフォーム！！」

バッドエンドプリキュアが、ダークプリンセスフォームに変化すると、

「轟け！絶望の闇！！」

「墮ちよ！闇の世界へ！！」

「プリキュア！バッドエンド・バクスト！！」

巨大な闇の竜の背中に乗ったバッドエンドプリキュア達は、巨大な闇の竜の口から黒いブレスを放った。ダークプリキュア5は、嘗てと同じようにバッドエンドプリキュアと呼吸を合わせるように、

「ハッ！！」

五人がフルーレを前に突き出すと、フルーレから放たれた黒い薔薇が合わさり、巨大

な黒薔薇となつて、前方に向かって飛んでいった。ソードは目を見開いて驚き、

「嘘おおお!!」

ソードは涙目になりながらも、慌てて上空にジャンプして逃れ、バッドエンドバーストとダークローズエクスプロージョンから距離を取った。

ソードが躲した事で、巨大な黒薔薇がエアールとアスパエナを飲み込んで動きを封じ、黒いブレスがエアールとアスパエナを直撃し、二体は悲鳴を上げながら消滅し、更にはザンコックとバルログ目掛けて、黒いブレスが飛んで行った。

「何だ?!」

ザンコックとバルログは油断して居たものの、辛うじて攻撃を回避した。ソードは目を吊り上げて一同に抗議し、

「酷い!死んじやうと思つたでしよう!!」

『ソードなら躲すと思つたから』

苦笑気味にそうかたる九人の闇のプリキュア達に、ソードは大きく頬を膨らませた。バッドエンドピースは、そんなソードの両頬を指で押しながら、

「良いじゃん、二体の怪物もソードが困なつてくれたから倒せたようなもんだし：：ねえ?」

『そつそつ』



「ウウウウ・・・」

十人の闇のプリキュア達に丸め込まれながらも、ソードは恨めしそうに一同を見つめた。

「おのれ、小娘共があああ！」

「調子に乗りおつてえええ！・・・ン!? ようやく来たか」

ソードが無理やりされたアシストによつて、闇のプリキュア達の合体技によつてエアールとアスバエナを倒され、ザンコックとバルログが激高したその時、逆五芒星の紋章ゲートから、魑魅魍魎達が地上目掛け降下して来た。

#### 4、魔の町

ソードと十人の闇のプリキュア達は、突如現れた半透明の得体の知れない物体の群れに、皆一様に顔を顰めた。ソードは、その醜い姿を見ながら、

「また新手が来たの!?!」

「でも、何か透けてない?」

バッドエンドハッピーは、目を凝らして新たに現れた魔物を見つめると、魔物の群れの身体が透けて見えた。そんな魔物の群れが、逃げ惑う人々に次々触れ、一瞬人の動きが止まったその時・・・

『エッ!?!』

ソードと十人の闇のプリキユア達は、目の前の光景が信じられず、思わず驚きの声を発した。彼女達の視線の先には、あろう事か魑魅魍魎に触れられた人々が、人と動物が合わさった肉体は骨だらけの魔物、昆虫と植物が合わさった魔物、動物と植物が合わさった魔物など、突如醜い姿の怪物へと次々に変化して行ったのだから・・・

「な、何がどうなってるのよ?」

「どうして、人が怪物に!?!」

ダークルージュが、バッドエンドビューティが、目の前の信じられぬ光景にポツリと眩き、

「急いで助けなきゃ!」

ダークドリームが今救出に向かおうとするも、ダークミントは右手を広げて静止した。

「待つて!先ずは様子を見ましょう・・・ダークネスプラズマ!」

ダークミントはダークネスプラズマを放ち、黒き閃光が半透明の魑魅魍魎達に輝くも、魑魅魍魎達にダメージを与える事は出来なかった。

(な、何というおぞましき光景何だ。あの魔物の群れに憑依された人々が、まさか魔物になるとは・・・それに、今プリキユアの攻撃がすり抜けたような・・・)

ブルーはこの状況を見ると表情を歪めた。ソードと闇のプリキュア達も大いに動揺して居た。

「嘘!?!攻撃がすり抜けちゃったよ」

バッドエンドハッピーが・・・

「あの魔物の群れは・・・実態ではなく精神体とでもいうの?」

ダークアアアが・・・

「じゃあ、あの実体化した怪物を先に倒そうよ」

「駄目よ!あれは元々この町の人達だもの、攻撃する何て・・・」

バッドエンドピースの提案を、慌ててダークミントが否定した。

「ほな、どないすんねん?」

バッドエンドサニーがそう告げた時、魑魅魍魎達は闇のプリキュア達目掛け近付いて

来た。バッドエンドマーチは慌てて、

「ゲツ!?!何かこつちに向かつて来たぜ!」

「攻撃が効かないんじゃない、私達も手の打ちようが無いよ」

ダークレモネードが、攻撃が効かない魑魅魍魎達を前に、どうする事も出来ず狼狽えた。ソードは悲鳴を上げる人々の声を聞き、ギユツと拳を握ると、

「それでも・・・守らなきゃ!」

「ソード、待ってー!」

ソードがまだ魔物化していない人々を守る為に駆け出し、ダークドリーム、ダークレモネード、ダークミントが慌てて声を掛けたものの、何故か魑魅魍魎の群れはソードに襲い掛かる事は無く、逆に闇のプリキュア達目掛け近付いて来た。

「ダークプリキュア5とバッドエンドプリキュアの方に向かつてるロプ」

新たに現れた魑魅魍魎達に、ブルーとシロップも動揺し、シロップは不安そうに表情で更にブルーに話し掛け、

「か、神様、どうすればいいロプ?」

「クツ……何故ソードに目をくれず、ダークプリキュア5やバッドエンドプリキュア達に……そうか!」

ブルーは何かに気付くと、右手を地面に触れ何かを唱えると、ブルーの周辺に光が満ち溢れた。ブルーは慌てて叫び、

「ダークプリキュア5!バッドエンドプリキュア!急いでこの光の中に入るんだ!!」

『エツ!』

「ソードは?」

バッドエンドピースは、さつきは囀りに使いながらも、真つ先にソードの身を案じて声を掛けるも、

「ソードは大丈夫！だが、君達があの魔物の群れに憑依されたら、もう万事休すになる。詳しい事はこの中で話す！急いで!!」

ブルーに急かされ、ソードを気に掛けながらも、十人の闇のプリキユア達は、ブルーに言われるまま駆け出し、ブルーが作り上げた光の結界の中へと逃げ込んだ。

「神様、どういう事でしようか?」

ダークドリームは、ブルーの真意が読めず問いかけると、ブルーは険しい表情のまま話し始めた。

「あの半透明の魔物は、負の力に導かれる習性があるよう何だ。君達は元々闇から生まれたプリキユアだと聞く。あの魔物達は、そんな君達と波長が合い、君達の身体を自分の物にしようとする群がろうとしたんだ」

「じゃ、じゃあ、私達もあの魔物達に憑依されたら……」

バッドエンドハッピーはそう言うのと、思わず変顔を浮かべた。ブルーは小さく頷き、「この町の人々と同じような目に遭っただろうね……残念だけど、今の僕の力では、この町全体に結界を張る事は出来なかった……」

ブルーは力なく俯き、思わず拳を震わせた。目の前で叫び逃げ惑う人々を救う事さへ出来ず、神とは名ばかりのような自分の不甲斐無さに打ちのめされた。十人の闇のプリキユア達は、ブルーに掛ける言葉が見付からなかった。

「閃け！ホーリーソード!!・・・どうして!?どうしてホーリーソードがすり抜けてしまうの?。」

ソードは、人々を救おうと何度もホーリーソードを放つも、その都度ホーリーソードは空しく魔物達をすり抜け、次々と人々を醜い魔物へと変えて行った。

「もう、もう止めてええええ!」

『シヤアアアアア!』

ソードの叫びが空しく響いたその時、四つ葉町上空に浮かぶ逆五芒星のゲートから、獣の咆哮が聞こえた。

「そ、そんなあ・・・また新手が来たの?」

ソードが悲痛な表情で上空に浮かぶ逆五芒星のゲートを見上げると、ゲートの中から順番に七匹の大蛇が姿を現した。ザンコックとバルログは驚愕し、

「大蛇だ?!」

七匹の大蛇は、悪魔王ゼガンの存在に気付くと皆一様に震えだし、近づく事を恐れているようだった。ピーチは、黄の大蛇の頭を優しく撫でながら、

「大蛇、四つ葉町まで送って来てくれてありがとう。あなた達は少し離れて居て」

ピーチはそう言うと、ベリー、パイン、パッションにアイコンタクトをし、三人も頷き返した。更にピーチは、仲間達に大声で声を掛け、

「みんな・・・行くよ!」

ピーチの合図と共に、低空飛行で飛ぶ大蛇から、ルミナスが、ブルーム達四人が、プリキュア5とローズが、ブロッサム、マリリン、サンシャインが、メロディ達四人が、ハッピー達六人が飛び降り、ソードに合流した。ココとナッツ、シフォンとタルト、シプレ、コフレ、ポプリ、キャミーとハミイ、ピーちゃん、エンエンとグレル、眠ったままのキャンディは、大蛇の頭の上に残って居たものの、シロップが迎えに来て、妖精達はシロップの背に移動した。

「おのれええ、また邪魔者が増えおった」

「これだけの人数が来るとは・・・」

ザンコックとバルログは、大勢のプリキュア達がゲートを利用して四つ葉町にやって来た事に、激しい苛立ちを覚えた。

「みんなあ・・・」

ソードは、少し涙目になりながら一同を見渡し、ドリームは力強く頷くと、

「ソード、大丈夫!?!ダークプリキュア5は?」

「はい、ダークプリキュア5は、バッドエンドプリキュア達と一緒に神様の側に居ます」

「エッ!?!バッドエンドプリキュア達も来てくれたの?」

バッドエンドプリキュア達も駆け付けてくれたと聞き、思わずハッピーの表情が和ら

ぐも、

「ハイ……でも……この町の人達が……」

「『エツ!』」

ソードは返事を返しながらも俯き、思わずピーチ、ベリー、パイン、パツシヨンの表情が変わった。自分達が住む四つ葉町に、ゼガンを始めとした魔物の群れが、我が物顔にしている事が許せなかった。

「よくも四つ葉町を……」

ピーチは拳をギユツと握りしめると、傍に居る巨大な一つ目の犬のような怪物を、鋭い視線で睨み付けた。ピーチが攻撃しようとしたその時、ソードは慌ててピーチを止め、

「待って! その怪物は……元々四つ葉町の人だったの!!」

『エツ!』

ソードの話に、プリキュア達は皆一斉に驚きの声を上げた。ソードは、哀しげな表情を浮かべながら話を続け、

「あの半透明の怪物に憑依された町の人達が、次々に魔物に……」

「『そんなああ!?!』」

ピーチ達の表情が凍り付いたその時、四人の視線の先に、逃げ惑う人々の中に見知っ



た顔を見た。クローバータウンストリートの人達、大輔とその姉ミュキ、そして、四人の大切な家族、ピーチの母あゆみと父圭太郎、ベリーの母レミとその手を引いて逃げる弟和希、パインの母尚子と父正の姿があつた。

「お父さん！お母さん！」

「ママ！和希！」

「助けなきゃ！」

ピーチ、パイン、ベリー、パッションは、慌てて大切な者達の下へと駆け出し、他のプリキュア達も、人々を助ける為に駆け出した。

だが……

『ワアアアア！』

クローバータウンストリートの人々の悲鳴が響き、イボや吹き出物に覆われた狼のような怪物、全身からキノコを生やしたキノコ人間のような怪物、腐った肉体のような怪物などに変化して行つた。

「ウワアアアア！」

「キヤアアアア！」

大輔とミュキの悲鳴が響き渡つた。見る見る二人の容姿は、無残にも醜い怪物へと変化して行つた。大輔は、顔は馬のように長く、頭には角が生え、背には黒い翼、手には

蹄、尻から槍のように尖った尾を持った怪物に、ミユキは、額から大きな角を生やし、木の幹に覆われた身体から、両手が鎌になった悪鬼のような怪物へと変貌した。

「大輔ええええ！ミユキさあああん！」

ピーチの叫びも空しく、更には襲い掛かる半透明の魔物から、あゆみ、レミ、尚子を庇った圭太郎、正、和希にも魔物は憑依し、三人の容姿が醜い怪物へと変わって行った。圭太郎は、薄い皮で張られた翼と長い腕とかぎ爪を持ち、頭部から生えた毛は地面に付く程長く、身体の半分以上が尻尾の怪物に・・・

和希は、巨大な耳のような身体から赤い大きな目が付き、地面に付くような細長い腕と、長い脚を持った怪物に・・・

正は、頭部は狼、身体はゴリラ、背中にはコウモリのような翼、全身を灰色の毛で覆われた筋骨隆々とした怪物へと変化した。

「イヤアアア！あなたああ!!」

「和希いいい!!」

「あなた！あなたあ！返事してええ!!」

あゆみが、レミが、尚子が、逃げるのも忘れて大切な家族を救おうと声を掛けるも、無情にも怪物化した三人に身体を押しえられ、あゆみ、レミ、尚子の身体にも、魔物が憑

依しようとしていた。

「「「止めてええええええ!!!」」」

ピーチが、ベリーが、パインが、パッションが、全力で駆けながら手を伸ばす先で、無情にもあゆみ、レミ、尚子の肉体にも直ぐに異変が起こり、醜い魔物の姿へと変貌していった。

あゆみは、頭部は蝶のようで、腹部に狂った笑みを浮かべる女の顔が、下半身は茶色い毛で覆われた怪物に・・・

レミは、上半身は熟女で両胸には牙を生やした口が、下半身は蛸、腹部からは三匹の犬が生えた異形の怪物に・・・

そして尚子は、頭部は女、身体は豹のようで、背中から一つ目をしたミミズのような物体を蠢かせた怪物へと変化した。

「「「ヒイイイイイ!・・・イヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」」」

ピーチ、ベリー、パイン、パッションは、両手で顔を覆いながら、その場で狂ったような絶叫を上げ、魔の町と化した四つ葉町に空しく響き渡った・・・

完

## 第百三十六話：シャイニールミナスとミルクイローズ

1、希望は捨てない

悪魔王ゼガンとその配下を追い、四つ葉町へと戻つて来たプリキユア達だったが、四つ葉町の人々は、無残にも魔に憑依され魔物化し、その中には、ピーチ、ベリー、パインの家族も居た。魔物と化した大切な家族を、目の前で救う事が出来ず、泣き叫ぶピーチ、ベリー、パイン、パッションの精神は、崩壊寸前だった・・・

「「イヤアアア！イヤアアア・・・」」

四人が力なく崩れ落ちそうになるのを、ブルームとドリームがピーチを、アクアとマリリンがベリーを、ミントとレモネードがパインを、ルージュとビートがパッションを、両脇からギュツと力強く抱きしめた。自分達が側に居る事を、彼女達四人に知らしめるかのように・・・

ピーチは泣きじやくり、縋るような視線をドリームに向けながら、

「お、お母さんが、お父さんが・・・私、私・・・」

「ウン・・・」

ドリームは小さく頷くと、ピーチの顔を優しく引き寄せた。今の自分達に、ピーチ達

に掛ける言葉は見付からない。それでも、抱きしめずには居られなかった。

『ゴアアアアアアアアア！』

魔物と化した四つ葉町の人々が、獣のような咆哮を上げ続け、ブルーは膝から崩れ落ちると、

「な、何という事だ・・・僕の目の前で・・・僕はこの町の人々を救う事も出来ず・・・」  
ブルーは拳を強く握りしめ、不甲斐無い自分を嘆き、拳を地面に叩き続けた。

「「「神様・・・」」」

「アアア、もう！まだ私達出ちや駄目なの？」

ダークプリキュア5は、そんなブルーを見て困惑し、バッドエンドハッピーは、魔に憑依され兼ねない、自分達十人の闇のプリキュア達が、この場から出られず、只この状況を見るだけの状況に痺れを切らした。

『ゴアアアアアアアアア！』

そんな中、ベレルの命を受け、プリキュア達と共に四つ葉町に来ていたキャミーは、魔物と化した四つ葉町の人々が、ある言葉をさつきから発しているのに気づき、よく言葉を聞いてみると、見る見るキャミーは驚愕の表情を浮かべ、思わずピーチ達を見た。それに気付いたビートは、キャミーに話し掛けると、

「キャミー、どうしたの？」

「魔物にされたこの町の人達は、さつきから同じ言葉を喋ってるニヤ・・・」  
「「「エツ!」」」

キャミーの言葉に、ピーチ、ベリ、パイン、パッションは、ハツと我に返ると、一斉にキャミーを見つめ、キャミーの言葉の続きを待った。キャミーは、そんなピーチ達の視線を直視出来ず、思わず俯くと、

「この町の人達は・・・こう言ってるニヤ・・・殺してって・・・」

キャミーは言葉を選ぶかのように、途切れ途切れ言いくそうにしながらも、一同に四つ葉町の人々の発して居る言葉の意味を伝えた。

『そんなあああ!』

キャミーの言葉に、傍に居たプリキュア達も呆然と呟いた。ピーチは思わずよろめき、

「アツ・・・アアアアア」

「「ピーチ!」」

ドリームとブルームが、慌てて両脇から再びピーチを必死に支えた。魔物となった自分達の現状を嘆き、必死に殺してくれと叫ぶ、魔物と化した四つ葉町の人々の切実なる声に、プリキュア達の心は悲しみに満ち溢れて居た。

(キャミーの言う通りだとすれば・・・)

だが、只一人ブルーは、キャミーの話を聞くと、ハツとして立ち上がった。ブルーは確認するかのようには、魔物と化した四つ葉町の人々を見つめ終えると、今にも精神が崩壊しかねない、ピーチ、ベリー、パイン、パッションを見つめながら叫んだ。

「ピーチ！ベリー！パイン！パッション！諦めるなああ!!まだこの町の人々は救える!!」

「!!?!?!」

ブルーの叫びに、ピーチ達四人は、一斉に縋るような視線をブルーに向けた。他のプリキュア達の視線も、一斉にブルーに注がれた。

「か、神様、本当ですか?」

ダークドリームは、思わず側に居るブルーを仰ぎ見ると、ブルーは大きく頷き、

「ウン・・・僕は、魔に憑依され魔物と化したこの町の人々に、もう自我は無いと思いついで居た。だが、キャミーの言う通りだとすれば・・・まだ、この町の人々には自我が微かに残って居る。完全に自我を失っていない今なら・・・君達プリキュアなら、この町の人々を・・・必ず救える!」

ブルーはそう断言した!

ブルーの言葉に、心が折れそうなプリキュア達に、再び希望の灯を灯した。ブルーは、そんなプリキュア達に念を押すように、



「だが、時間はない……何とかこの町の人々の動きを止め、少しでも魔との完全なる融合を遅らせる時間を稼がねば……」

「それは、私に任せて下さい！」

ブルーにそう言つて進言したのは、シャイニールミナスだった。

「「ルミナス！」」

ピーチ達四人は、思わず継るような視線をルミナスに向け、ルミナスも力強く頷き返し、他のプリキュアの仲間達を見渡すと、

「私が四つ葉町の人達の動きを止めます。皆さんは、その間にこの町の人々を浄化し、憑依した魔を祓つて下さい」

「無茶よ……ルミナス、あなたもうフラフラじゃない」

ローズは、そう言いながら心配そうにルミナスを見た。魔界において、カインとの戦いで受けたルミナスのダメージは大きかった。それでもルミナスは気丈に振舞い、

「大丈夫です。ブラックやホワイト、ムーンライトだつて魔界に残つて頑張つてる。私も、

三人の分まで頑張ります」

ルミナスはそう言うと、自分の身を案じてくれたローズに笑みを浮かべた。

「そう……無理はしないでね？」

「ハイ」

ルミナスは大きく頷き、ローズも小さく頷き返した。

ルミナスとローズは、この二人は、他のプリキュア達とは違う共通点があった。本来ルミナスとローズは、プリキュアとはまた違う、別なる光の力を授けられた者だった。ルミナスは光の園のクイーンの命の化身で戦闘は苦手、それでもブラックとホワイトのサポートをして二人を支え、ローズは奇跡の青いバラの力で、プリキュア5の五人と同等の力を持った戦士として、闇の戦士達と戦って来た。だが、ブラックとホワイトも、プリキュア5の五人も、ルミナスとローズを、自分達と同じプリキュアの仲間だという、共通した意識を持って居た。

（私の中に残っている全ての力を使っても・・・クイーン！この町の人達を救う力を・・・私に貸してえ!!）

ルミナスは、ハーティエルバトンを手を持ち身構えると、目を閉じて光の園のクイーンに祈りを捧げた。ルミナスは直ぐに目を見開き、キツと凜々しい表情を浮かべると、身体に再び力が湧き上がって来るように感じた。

「感じるポポ・・・暖かい光の力を感じるポポ」

「ルルンも感じるルル」

「ポルン、ルルン、あなた達の力を・・・私に貸して！」

光の園の妖精であるポルンとルルンは、ルミナスから発せられる強大な光の力を感じて居た。そのルミナスの異変は、他のプリキュア達にも分かった。

「み、見て！ルミナスの身体が……」

ルミナスの異変に気付いたローズが一同に知らせ、ルミナスを見たエコーは、その姿に見覚えがあつた。

「あれは、妖精学校でソドムと戦つた時の、ブラックとホワイトと同じ姿なの？」

ルミナスの身体は一層光り輝き、ハーティエルバトンもまた聖なる光を放ち続けた。ルミナスの背中には、大きな光の翼が生えたかのように一同には感じられた。

「光の意思よ、私に勇気を！希望と力を!!」

ルミナスは、バトンをクルクル回転させると、

「ルミナス！シャイニンググウウ……アंकシオン!!」

ルミナスが上空高くハーティエルバトンを飛ばし、両腕を上げたままハーティエルバトンを操り、ルミナスの意思を表すかのように、クルクル回転しながら四つ葉町の空を何度も周り、ハーティエルバトンから四つ葉町目掛け、光の輝きが舞い降りた。

「グウウウ……な、何だ!?か、身体の動きが鈍く……」

「あ、あいつの仕業か!?お、思うように動けん?」

バルログが、ザンコツクが、ルミナスのシャイニングアंकシオンを浴びて動きが

鈍った。だが、悪魔王ゼガンは一瞬不快そうな表情を見せるも、今尚瞑想を続けて居た。魔と化した四つ葉町の人々も、その光の輝きを身に受けて動きが止まるも、何処か喜びを表して居るかのようにも感じられた。

「調子にいい……乗るなあああ！ウオオオオオオオ！！」

バルログが吠え、ルミナスが放ったシャイニングアークシヨンの影響下を、強引に振り解いた。

「ハアハアハア……この俺が、ここまで力を使う羽目になるとは……」

バルログは荒い呼吸をしながら、忌々し気にルミナスを凝視した。バルログは、小賢しいとばかりルミナスに火炎を放つも、光のオーラがバリアのようにバルログの攻撃を掻き消した。

「何だ?!……さつきから小賢しい真似をしやがってええええー!」

バルログは、攻撃を掻き消された事で更に怒り、大きく息を吸い込むと、ルミナス目掛け、口から紅蓮の炎を吐いた。

「ダメ！今シャイニングアークシヨンを止めたら、四つ葉町の人達が……」

だがルミナスは、険しい表情のまま、その場でバルログからの攻撃に微動だせず、両腕を上げたままシャイニングアークシヨンを放ち続けた。

「ルミナス！」

慌ててブライトとウインデイが、ルミナスを庇うように前に出て、両手を握り合つてバリアを張り、紅蓮の炎を防ぎに掛かるも、その威力に後方に押され出した。ブルームは、ピーチの事をドリームに託すと、イーグレットにアイコンタクトを送り、両手を握り合つて駆け出し、ブライトとウインデイと共に、より強固なバリアを張つてバルログの攻撃を防いだ。ローズはそれを見届けると、他の仲間達に指示を出し、

「ドリーム達は、ピーチ達の側に居て上げて！ブルーム達は、そのままルミナスを守つてあげて！ブロッサム達、メロデイ達、ハッピー達やソードは、四つ葉町の人達を浄化して救つてあげて！魔さへ払えれば、ダークプリキュア5やバッドエンドプリキュア達も戦える。私は……」

ローズの視線の先は、バルログを捉えて居た。ローズは駆け出すと、バルログが忌々しそうにローズを睨み付けた。ローズは戸惑う事無く、そのままバルログ目掛け加速すると、

「あなたの相手は……私よ！ハアアア!!」

「小娘ええええ！」

ローズの強烈な肘撃ちを、バルログが両手で防いだ。両者はパンチや蹴りなど、激しい攻防を仕掛け、ローズはバルログに押されながらも、巧みに誘導してルミナスからバルログを引き離した。

「みんな、今だああ！」

ブルーは、ゼガンは瞑想を続け、バルログをローズが抑え、ザンコックの動きが鈍い今を好機とみると、プリキュア達に合図を送った。マリンは、チラリとベリーを見ると、マリンの心に激しい闘志が湧き上がる。

「アクア、美希姉えをお願い……」

「エエ、四つ葉町の人達をお願い」

アクアは頷き、まだ精神的ダメージが残るベリーを労わりながらも、マリンや他のプリキュアの仲間達に、四つ葉町の人々の事を託した。

「よくも美希姉え達のお母さん達を……海より広いあたしの心も、ここらが我慢の限界だよ！プロツサム、サンシャイン、行くよ!!」

「ハイ！必ず皆さんを助けましょう」

「ウン！魔界に残ったムーンライトの分まで、私達で四つ葉町の人達を救おう」

マリ、プロツサム、サンシャインは、素早くタクトとタンバリンを取り出すと、

「花よ、煌け！プリキュア！ブルーフォルテウエーイブ!!」

「花よ、輝け！プリキュア！ピンクフォルテウエーイブ!!」

「花よ、舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト!!」

マリとプロツサムはフォルテウエーブを、サンシャインはフォルテバーストを放

ち、四つ葉町の人々を浄化した。

「リズム、ビート、ミュージズ、私達も続くよ」

「「OK！メロディ」」

メロディの合図に、直ぐにリズム、ビート、ミュージズが同意する。四人は素早く散ると、メロディはミラクルベルティエを、リズムはファンタステックベルティエを、ビートはラブギターロッドを、ソウルロッドへと変化させ、ミュージズはモジューレにシリートを装着した。

「「翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア！ミュージッククロンド!!」」

メロディとリズム、二人は呼吸を計ったかのように、互いにミュージッククロンドを放ち、

「翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア！ハートフルビート・ロック!!」

「シ、の音符のシャイニングメロディ！プリキュア！スパークリング・・・シャワー!!」

ビートはハートフルビートロックを、ミュージズはスパークリングシャワーを放って、四つ葉町の人々を浄化した。

ハッピーは、動きの止まった魔物の群れを悲しそうに見つめ、

「ゴメンね・・・今の私達には、レインボーデコルも無いから、レインボーヒーリングを使えない・・・でも、みんなの笑顔、私達を取り戻して見せるよ。みんなあー！」

ハッピーの合図に、サニー、ピース、マーチ、ビューティ、エコーが領き、四方に散った。

「今、元の姿に戻して上げるからね？プリキュア！ハッピーくくく．．．シャワーくくく!!」

「プリキュア！サニーファイヤー!!」

「プリキュア！ピース．．．サンダー!!」

「プリキュア！マーチ．．．シュートオオ!!」

「プリキュア！ビューティブリザード!!」

ハッピー、サニー、ピース、マーチ、ビューティがそれぞれの技を放ち、

「世界に響け！みんなの想い!!プリキュア！ハートフル・エコーくく!!」

エコーの叫びと共に、光輝く胸のブローチから発射された光が、四つ葉町の人々目掛け放った。

「この町のみんなを．．．今度こそ救ってみせる！閃け！ホーリーソ〜ド!!」

ソードが険しい表情を浮かべながらも、魔物と化した四つ葉町の人を救うべく、ホーリーソードを放った。

プリキュア達の技を受け、四つ葉町の人々に憑依し、その肉体を奪おうとした魔の精神体の群れが、聖なる光に包まれ浄化され、次々に四つ葉町の人々が、元の姿へと戻って行った。その姿は、ピーチ、ベリー、パイン、パッションに、再び立ち上がる気力を



湧き起こした。

「ドリーム、ルージユ、レモネード、ミント、アクア、ありがとう．．．私達は、もう大丈夫。ベリー、パイン、パッション、私達もみんなを．．．救うよ！」

「「エエ！」」

ピーチの言葉に、ベリー、パイン、パッションも大きく頷いた。四人の視線に、魔物化した家族を映すと、ピーチ達は一斉に駆け出した。その力強い走りを見たプリキュア5の五人は、心の底からホッと安堵を浮かべた。

「もう、ピーチ達は大丈夫だね」

ドリームは、仲間達に話し掛けると、

「エエ、なら今私達がするべき事は一つね」

「ハイ、ローズがあのだの魔物を押さえてくれるなら．．．」

「私達は、あの大きな一つ目の巨人を止めましょう」

「あいつまで動き出したら．．．不味いからね」

アクア、レモネード、ミント、ルージユが、今自分達がするべき事を確認するように話し、五人の視線がザンコックへと向けられた。

「お父さん、お母さん．．．今、元に戻して上げるからね．．．パッション！」

「エエ、救いましょう・・・私達の大切なお父さんとお母さんを」

ピーチの言葉に、パッションも同意して頷いた。ピーチは、凛々しい表情を浮かべながらピーチロッドを手に取ると、

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！プリキュア！ラブサンシャイン・・・フレ〜ッッシュュ!!」  
「歌え！幸せのラブソング！パッションハープ!!」

パッションもまたハープを取り出し、

「吹き荒れよ！幸せの嵐！プリキュア！ハピネス・ハリケーン!!」

ピーチとパッション、二人の技が合わさり、魔物と化した圭太郎とあゆみを包み込んだ。  
だ。

「ママ、和希、待ってて・・・今あたしが助けるから！」

ベリーの視線の先に、母レミ、弟和希が魔物と化した姿が映り、ベリーは、ベリーソドを取り出した。

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！プリキュア！エスパワールシャワー・・・フレ〜ッッシュュ!!」

ベリーが放ったエスパワールシャワー、青いスペード型の光弾が、魔物と化したレミと和希を包み込んだ。

「お父さん、お母さん、必ず、必ず元の姿に戻してあげるからね」

パインの瞳にジワリと涙が滲むも、パインは指で涙を拭いさると、パインフルートを手に持った。

「悪いの、悪いの、飛んでいけ！プリキュア！ヒーリングブレイア！フレ〜ッシュ！！」

パインが放った黄色いダイヤ型の光弾が、魔物と化した正と尚子を包み込んだ。ピーチ、ベリー、パイン、パッションの技を受け、四人の大切な家族も元の姿を取り戻した。その姿を、涙交じりに見ていたピーチ達四人は、堪えきれないように大粒の涙を流しながら、大切な家族に抱き付いた。

「お父さん！お母さん！！」

「ラブ！せつちゃん！」

「ママアア！和希いい！良かった・・・本当に・・・」

「姉さん!？」

「まあ、美希!?!泣いたりしてどうしたの?」

「もう、ママ・・・覚えて無いの?」

「エツ!?!そう言われると、怪物が現われて・・・」

「お父さん！お母さん！」

「祈里！」

泣きじやくるピーチ達四人を、四人の家族は慈愛の表情で受け止め、その頭を撫でながら優しく労わった。ルミナスは、四つ葉町の人々が、魔の憑依から解放されたのを見届けると、張り詰めていた糸が切れたかのように、

「ま、間に合って、良かった・・・」

ルミナスはホッと安堵してその場にしゃがみ込み、ルミナスが発して居た光の翼は消え失せた。

(クイーン・・・ありがとう)

ルミナスは、今無意識の内に開放した光の力を、クイーンが授けてくれたと思い、心の中でクイーンに感謝の言葉を述べた。ブルームとイーグレットは、そんなルミナスの前に移動すると、

「ルミナス、お疲れ様」

「少し休んでて」

「ハイ」

ブルームとイーグレットに称えられ、ルミナスは二人にニッコリ笑んだ。バルログは、魑魅魍魎達を浄化されるといふ大失態を犯した事で、怯えるようにゼガンの様子を横目で確認するも、ゼガンはまだ瞑想を終えては居なかった。

「お、おのれええ！亡者共をよくもおおお!!」

「それはこつちのセリフよ！よくもこの町の人達を!!」

バルログの身体から、怒りを表すかのように炎が噴き出し、ローズも険しい表情を浮かべると、両者が激しく交差した。

「キヤアアア!」

ローズは吹き飛ばされるも、空中で態勢を整えると地上に着地し、ミルキイパレットを手を持った。

「これでも受けてみなさい！邪悪な力を包み込む、バラの吹雪を咲かせましょう！ミルキイローズ・ブリザード!!」

ローズの攻撃は、青い薔薇の花吹雪となってバルログ目掛け飛んで行くも、

「フーン！小賢しい!!」

バルログは、大きく息を吸い込むと口から紅蓮の炎を吐いて、ミルキイローズブリザードを掻き消した。更にその勢いのままローズ目掛け紅蓮の炎が迫り、ローズは、バルログの攻撃をジャンプして躲すも、その動きをバルログは予見し、更に紅蓮の炎をローズ目掛け放った。

「しまった!?!」

ローズは、無駄だとは思いつつも、ミルキイパレットを盾代わりにするかのように前に出ずも、バルログの攻撃はローズ目掛け届く事は無かった。何故なら、ローズの危

機を見たルミナスは、疲労が残る身体で駆け、バリアを張ってローズの身を守って居た。

「大丈夫ですか？」

「ルミナス！ありがとう」

着地したローズは、ルミナスと並び立ち互いに笑みを浮かべると、二人はキツとバルログを睨み付け、バルログも二人を睨み返した。そんなルミナスとローズを心配したのか、黒と紫の大蛇が、建物を器用に避け、地を這いながらルミナスとローズに近づいて、二人を心配そうに見つめて居た。

ローズは、視線の先にナッツを見付けると、

「ナッツ様！力をお貸しください!!」

「ナツ！ミルキイローズに力を!!」

ナッツは、ローズの合図を受けると頷き、ミルキイノートの力を授けた。ミルキイパレットは、ミルキイノートの力の加護を受けミルキイミラーへと変化すると、ローズは目を瞑り、バルログ達が四つ葉町の人々を苦しめた行為を思い浮かべ、激しい闘志を一層燃やしたその時、ローズの身体から先程のルミナスと同じように、強大な光が沸き起こった。ルミナスは、ハツとしてローズを見つめる中、

「これならどう!?!邪悪な力を包み込む、煌くバラを咲かせましょう!ミルキイローズ・メタル・ブリザード!!」

「今度こそ黒焦げにしてやるううう！二人纏めて死ねえええ!!」

バルログは再び大きく息を吸い込み、先程以上の紅蓮の炎を吐き出した。紺色のバラの花吹雪がバルログ目掛け飛び、紅蓮の炎がそれを再び燃やし尽くすかに見えた。

「クツ・・・バラの吹雪は・・・こんなものでは燃え尽きないわ！ピーチ達の町を滅茶苦茶にしたあなた達は何か・・・絶対負けない!!ハアアアアア!!」

ローズは、雄叫びと共に心の中に溢れる力を出し尽くすかのように解放した。ローズの背に巨大な光の翼のオーラが出現し、ミルクイミラーは黄金に輝きを発した。

「邪悪な力を包み込む、輝くバラを咲かせましょう！ミルクイローズ・シャイニング・ブリザードオオ!!」

「小賢しいー!」

バルログは再び紅蓮の炎を放つも、光り輝くバラの吹雪は、紅蓮の炎を物ともせず、バルログ目掛け飛び続けた。

「バ、バカな!?!こ、この俺が?この俺があああ」

ローズが放ったシャイニングブリザードは、バルログを巨大な光輝く黄金のバラの形に包み込み消滅させた。

「やりましたね」

「エエ、何とかね」

ルミナスに話し掛けられたローズは、ルミナスに笑み返すと、光のオーラが消え去った。

(今のルミナスとローズから発せられた光は一体?!)

ブルーは、今ルミナスとローズが発した光の力に戸惑って居た。当のローズとルミナスは、バルログを倒した事でホッと安堵し、互いに笑みを浮かべ合ったその時、

「調子に・・・乗るなよ!」

「シャアアアア!」

「エツ!」

突如野太い声が上空から聞こえ、それに気づいたのか、黒と紫の大蛇が叫んだ。ルミナスとローズが動揺した時、一つ目の巨人ザンコックは、手に持った巨大な金棒を大きく振りかぶって居た。

「[[「ローズ!ルミナス!逃げてええええ!!」]]」

ザンコックと交戦して居たプリキュア5の五人が絶叫し、ルミナスとローズの頭上に金棒が振り下ろされた。

「[[「キヤアアアアア!!」]]」

ルミナスとローズの悲鳴と、巨大な地響きと共に、ザンコックが振り下ろした金棒を上げた。その下には無残なクレーターが起き、ルミナスとローズの姿は跡形も無く消え



て居た。ザンコックは金棒を肩に担ぐと、

「先ず・・・二匹!」

『ローズウウウ! ルミナスウウウ!!』

プリキュア達が、必死に二人の名を叫ぶ絶叫が、空しく四つ葉町に響いた・・・

## 2、地獄門を閉じろ

魔界に残ったブラック、ホワイト、ムーンライトは、シーレイン、アモン、ベレル、ニクス、リリス、ミノタウロス、オロン、アロン、バルバスと共に、地獄門を閉じるべく行動を起こそうとしていた・・・

「じゃあ、私達は反対側の扉を閉めればいいんだよねえ?」

ブラックの視線が、反対側の開かれた扉を見つめた。禍々しき漂う黒き不気味な門が、時折ブラックに圧迫感を与えてくる。ホワイトとムーンライトは小さく頷き、

「そのようね。でも、谷を回って行つては遠回りになるし・・・」

「そうね・・・私が二人を順番に、向こう側に運んだ方が良さそうね」

ムーンライトは、そう言うと言とマントを取り出した。シーレインはゆっくり首を振ると、

「残念だけど、それは無理よ・・・」

「「エツ!?!」」

シーレインからの忠告に、ブラック、ホワイト、ムーンライトが困惑の表情を浮かべると、アモンとベレルも会話に加わり、

「シーレインの言う通りだ。この谷は、普段から暴風が吹き荒れていたが、今は地獄門が開かれて居る」

「さよう・・・地獄の暴風を直に浴びれば、貴公らの身体は、ズタズタに切り裂かれるであらう」

アモンとベレルの忠告に、ブラック達三人は返す言葉無く、無言のまま地獄門が開かれた谷を見つめた。三人の言う通り、谷からは暴風が吹き荒れ、三人の助言が的を射るのを痛感した。ニクスとリリスも申し訳なきように、

「ルーシエス様の結界が施された時なら兎も角、私達でも、この谷を飛んで抜けるのは無理なの」

「遠回りでも谷を回るしか・・・」

リリスがそう言葉を発した時、上空より凄まじい咆哮が発せられ、一同は思わず上空を見上げた。ブラックは、その声に聞き覚えがあった。ブラックは、ホワイトとムーンライトに確認するように、

「ねえ、今の声って・・・バハムートだよね?」

「エエ・・・見て！」

ホワイトが上空を指差し、その場に居た一同がその指差した位置を見上げると、一同の下に、上空から白い物体が猛スピードで近付いて来た。魔神達は、上空から急接近してきたのが竜王バハムートだと知ると戦慄した。

「りゅ、竜王バハムート・・・」

「ま、まさか、十二の魔宮が崩壊した事で結界が無くなったから、この機に乗じて私達と戦いに？」

アロンとニクスが、思わぬ竜王バハムートの出現に戸惑い、自分達に戦いを仕掛けに来たのではないかと警戒した。

「エエエエ!? イヤだあ、あたし怖い」

「お前は少し黙ってろ」

バルバスが身体をくねらせながらアモンの背に隠れると、困惑気味にアモンがバルバスを黙らせた。ベレルは、心眼でバハムートを見つめるも、バハムートからは一切自分達への敵意を感じられなかった。

「どうやら、拙者達に敵対する意思は無いようだが・・・」

それでも、ベレルにもバハムートの真意が読めず困惑して居た。上空より急降下して近付いて来たバハムートは、大きく息を吸い込むと、

「貴様らああ！地獄門が決じ開けられたというのに、雁首揃えて何をしているうう!!」  
『エツ!!』

バハムートの予想しなかった一言に、ブラック、ホワイト、ムーンライトと、シーレイン達魔神は思わず虚を突かれた。バハムートもまた、先程からの十二の魔宮の異変を感じ、更には悪しきゼガンの気配を感じて居た。バハムートは、魔王ルーシエスが施した結界が破られ、地獄門が開かれた事を悟ると、様子を見る為にやって来た。バハムートは、そんな一同をジロリと見つめ、

「フン・・・さつさと地獄門を閉じるぞ」

「そ、それは分かかってるんだけど、どうやら向こう側にある扉が光の結界だったらしくて、私達は向こう側に行きたいんだけど・・・」

「この谷を飛び越えるのは無理なようなの」

ブラックとホワイトが、困惑気味にバハムートに現状を知らせた。バハムートはギロリと谷を睨み付け、

「何だ!!貴様達そんな事で戸惑って居たのか?・・・ならばそんな戸惑いは不要。プリキュア、私の背に乗れ!」

「「エツ!!」」

「我ならば、このような暴風を飛び越えるなど容易いわ」

『エッ!』

バハムートはそう言うのと身体を横たわらせて、ブラック、ホワイト、ムーンライトの三人に背中に乗れと告げた。バハムートの行動に、魔神達は一齐に驚きの声を上げた。何故ならば、誇り高き竜族が同族ならば兎も角、他者に背中を預ける事など皆無だった。(竜王が背を貸す何て……)

シーレインは、呆然とバハムートが取った意外な行動を見つめた。戸惑いながらも、ブラック、ホワイト、ムーンライトの三人は、バハムートの背に乗ると、バハムートは思わず一万年前の事を思い出して居た。自ら認めた存在であるキュアマジシャンの事を……

「ククク、あの時を思い出す……我は少々荒つばいぞ。プリキュア達よ、振り落とされないように、しっかりと我が背に捕まって居れ」

「「エエ」」

三人は体勢を低くしてバハムートの背にしがみ付いた。バハムートの背中は大きく、その肌触りは毛布のようだった。バハムートは上体を起こすと、魔神達をギロリと見つめ、

「こっちの半分の扉は、お前達で閉じろ」

「言われるまでもない……我らに任せて貰おう」

バハムートの言葉に、腕組みしたアモンが力強く返答し、バハムートは背中の中を翼をゆつくり羽ばたかせると、ブラックは安堵の表情でホワイトとムーンライトに話し掛けた。

「バハムートが来てくれて助かったねえ？」

「エエ、でも四つ葉町の方が気掛かりだわ」

「地獄門を早く閉じて、私達も直ぐに戻りましょう」

「フン・・・行くぞ！」

バハムートは背中の中を翼を更に速く羽ばたかせると、その巨体が宙に浮かび上がり、一気に反対側の扉を目指して飛び立った。袂が開けられた地獄門から、容赦なく暴風がバハムート目掛け暴風が吹き荒れるも、バハムートは言葉通り、まるで涼風の中を飛ぶかのようにだった。

（ルミナス!?!）

ブラックは、一瞬ルミナスの事が頭に過ぎった。突如思考が停止したかのようなブラックに、ホワイトが気づき話し掛けた。

「ブラック、どうしたの？」

「ウウン、何か向こうに居るルミナスの事が気になって・・・」

「そうね・・・大分疲れて居たようだし」

ホワイトもブラックに同意し、ルミナスの身を案じた。ブラックは、話題を逸らすかのように、ムーンライトに話し掛け、

「いやあ、私達カインと戦う前に、また時の狭間に飛ばされちゃってさあ・・・ねえ、ホワイト?」

「ウン」

「エッ!？」

ブラックの話にホワイトも頷き、ムーンライトは思わず驚きの声を発した。ブラックは更に話しを続け、

「私とホワイトは、どうやら二年後の世界に飛ばされて、そこでエール達HUGとプリキュアのみなどと、私達成り行きで一緒に戦ったりしたんだけど、その前に飛ばされた時の狭間で、私とホワイトは、また色々不思議な体験しちゃってさ」

「不思議な体験?」

「ウン。私とホワイトを含むもう一組のみんなを何度か見たんだけど、その中には・・・  
ダークプリキュアや見慣れないプリキュアも、大勢居たんだよねえ」

「エッ!?!ダークプリキュアが?」

ムーンライトは、ブラックが見たというダークプリキュアの話聞き、思わず脳裏にダークプリキュアの容姿を思い描いていた。宿敵として出会い戦い、そして、自分の妹

同然の存在となったダークプリキュアの事を……

「そう……別の世界の話かも知れないけど……そんな世界があるのね」

ムーンライトは、口元に笑みを浮かべるも、バロムとの戦いで共闘し、再び光の粒子となつて消え去つたダークプリキュアの事を思うと、フと寂しさも生まれた。それでも、ダークプリキュアと共に戦う世界があるのなら、それは自分にとつても嬉しい事のように感じた。ブラックは、更に話を続け、

「何となく、ブルースカイ王国のヒメルダ姫や、魔法界のリコちゃんに似たプリキュアが居たり、お姫様のような姿や、何か動物の耳や尻尾、触覚生やしたプリキュアも居たっけえ。気になったのは、声しか聞こえなかつたけど、グレースっていう名前のプリキュアが、何かヤバイ状況になつてたようで……」

「下らない話はそこまで……見ろー」

ブラックは、その時を思い出しながら話を続けるも、バハムートの一言がブラックを黙らせ、ホワイトとムーンライトに緊張感を与えた。

竜王バハムートは背中の中を羽を飛ばたかせながらその場に停止すると、ブラック達三人に下を見ると促した。言われるまま下を覗き込んだ三人は、大きく開け広げられた巨大な地獄門の半扉を見た。半扉には、何かの模様が描かれているようであつたが、それが何を意味するかまではブラック達には分からなかつた。



「あれが・・・地獄門の半分の扉」

「あの扉に私達の技を放ち・・・」

「光の封印を施せば良いのね？」

「そういう事だ・・・お前達だけで出来るか？」

「「エエー」」

ブラック、ホワイト、ムーンライトが力強く頷き、バハムートは再び口元に笑みを浮かべた。バハムートは当初、自分一人でもホーリーブレスを放つて、地獄門の半扉を封じる気でここまで来たが、ブラック、ホワイト、ムーンライトの三人を見た時、三人に託してみたい気持ち芽生えて居た。バハムートは両手で水をすくうかのように、手柄（てび）杓（しゃく）するようにさせると、

「プリキュアよ、わが手に移れ。背からでは体勢が安定しまい」

ブラック達三人は、バハムートの忠告に素直に頷くと、バハムートの背から飛び降り両手に移動した。ブラックは、ちよつと困惑気味にバハムートの顔を見上げると、

「絶対・・・落とさないでね？」

ブラックの確認に思わずバハムートは笑い出し、

「フハハハハ！安心しろ、どんな事が起きようと、この手は離さん」

ブラックはホッと安堵の吐息をして、思わずホワイトとムーンライトが苦笑するも、

三人は直ぐにキツと表情を引き締め、地獄門の開かれた半扉を見た。

「合宿の時はまだ未完成だったけど……いくよ、ホワイト、ムーンライト」

「エエ」

ブラックの合図に、ホワイトとムーンライトが力強く頷いた。ブラックとホワイトは、バハムートの巨大な掌の中で、背中合わせにしゃがみながら構えると、二人の後方でムーンライトがムーンタクトを取り出し、ムーンタクトを前方に向けながら両手を付き出した。

「ブラック、サンダー！」

「ホワイトサンダー！」

ブラックとホワイトは、激しい風に靡かれた髪を物ともせず、黒と白の雷をその身に受けると、二人の身体が虹色に包まれた。ブラックは右手、ホワイトは左手でムーンタクトを握むと、ムーンタクトが虹色の輝きを発し始めた。

「ハアアアアアアア！」

ブラック、ホワイト、ムーンライトが雄叫びを上げると、バハムートは思わず唸り、「グウウウウ……凄まじい光の力を感じる」

その間にも虹色の輝きは増していき、バハムートが思わず目を背ける程、三人の身体が一層虹色の光を放ち始めた。

「プリキュア！エクスクラメーション!!」

三人の叫びと共に、ムーンタクトから目映い光が一気に解放され、地獄門の開かれた半分の扉に、凄まじい閃光が直撃した。その威力に、一気に地獄門の半分の扉が轟音と共に閉じられた。

「オオオオオ!!?これ程の威力とは・・・」

バハムートは、思わず目を見開いて驚きの声を上げ、三人の実力を目の当たりにした。ブラックは、ホッと安堵した表情をみせ、笑顔でホワイトとムーンライトに話し掛けた。  
「成功したね」

「ウン。上手く行つて良かった」

「以前は、今ほどの威力じゃ無かったから連射は出来ても、コントロールするのも大変だったわね」

三人は、閉じられた半分の地獄門を見て安堵した。その轟音は、反対側に居たシーレイン達にも轟いていた。

「どうやら、プリキュア達と竜王があちらの扉を閉じてくれたようね」

「ウム、では俺達も始めよう」

シーレインの言葉にアモンも同意し、二人の視線が他の魔神達に向けられた。崖の側まで近づいたシーレイン、アモン、ベレル、ニクス、リリス、ミノタウロス兄、アロン、

オロン、そしてバルバスの9人が眼下に見える地獄門の半分を見下ろした。

「いくぞおおお！」

アモンの号令の下、魔神達が一斉に地獄門目掛け技を放つと、地獄門に衝撃音が響き渡った。

だが……

「又ウウウウ!?これだけの技を一斉に受け、ビクともせぬとは……」

思わずベレルが動揺し、アモンは困惑の表情を浮かべながらも一同に檄を飛ばし、「クツ……もつと力を込めるぞおお！」

『ハアアアアアアアア！』

魔神達は、より一層気合を込めるも、地獄門が閉じる事は無かった。そんな魔神達の姿を、岩場に隠れながらほくそ笑んで見つめる者が居た。

（オウホホホホ、カインさんとアベルさん、宝瓶宮の魔神だったバルガンさんが居ない今、十二の魔神として機能されていないあなた方の力だけでは、闇の封印など出来る訳ありませんよねえ？オウホホホホ）

動揺する魔神達を愉快そうに覗いて居たのは、魔界の予言者を自称するモグロスだった。モグロスは、扉が閉じず動揺する魔神達を、愉快そうに眺め続け、

「わたくしが力を貸せば済む話何ですけど、それじゃ面白くありませんからねえ」

モグロスは、バハムートが戻って来たのを見ると、口元をニヤリとさせた。

「貴様らあ、雁首揃えて何をしておる！プリキュア達は我の力を借りずとも、たつた三人で扉を閉めたというのに、貴様らの何と不甲斐無い事か・・・恥を知れえええ!!」

バハムートの一喝を受けるも、魔神達に返す言葉は無かった。

「バ、バハムート、そう怒鳴らなくても」

「みんなも頑張ってくれてるし」

「エエ、もう少し様子を見ましよう」

戻って来たバハムートは、烈火の如く怒りを露わにして、魔神達を怒鳴り付け、ブラツク、ホワイト、ムーンライトが魔神達をフォローした。アモンは不甲斐無い自分達の姿に思わず唖り、

「グウウウウ・・・ま、まさか、俺達だけでは力が足りぬとは・・・」

「それでも、何とかしなきゃ・・・」

「エエ、プリキュア達がせっかく施してくれた光の封印が、無に喫してしまう事だけは・・・」

必死の表情のニクスとリリスは、自分を奮い立たすように発した。魔神達は、雄叫びを上げ、残った力の全てをぶつけようと試みるも、地獄門が閉じる事は無かった。

「どうやら、限界のようですねえ・・・ですが」

モグロスは、魔神達の力の限界を見抜くも、何故か背後の上空を振り返った。

(ルーシエス様……も、申し訳ありません)

シーレインは力を使い果たし、今にも倒れそうな自分を恥じ、心の中でルーシエスに謝罪したその時、

「みんな……よく持ち堪えてくれたね。ハッ！」

突如上空から声が聞こえたかと思うと、上空からの掛け声と共に、あれだけビクとしなかった闇の結界の地獄門が、轟音と共に閉じられ、地獄門に光と闇の二重の五芒星のマークが浮かび上がると、地獄から轟いていた呻き声が全く聞こえなくなっていた。魔神達は、今自分達に掛けた声を聞き、思わずハツとした。

「い、今の声は!?!」

「ま、間違いござらん……我らが王」

シーレインが、ベレルが、そして残りの魔神達が、

『ルーシエス様あああ!』

魔神達が一齐に声がした上空を見上げ、バハムートとブラック達も見上げた。そこには、背中から片側五枚ずつ、計十枚の黒い翼を生やした全身黒い少年の姿があった……

「ルーシエス……様!?!」

シーレインは、容姿だけ見れば確かに魔王ルーシエスそのままだが、全身が黒い姿に

驚きを隠せなかつた。

第三百三十六話：シャイニールミナスとミルキイローズ

完